日本大辭典

言泉

し—ち

書名覚録　第六五三三七號

の如く、一列に眞直になりて飛べ、又鉤の形に折れ曲りて飛べ。〔諺語〕

棹の歌【句】**ふなうた**〈船唄〉に同じ。本朝三國誌「この追風に千早振、神通丸は加藤が船、辭帆に上げて棹の歌」炭俵〈續猿蓑〉「棹の歌はやうら涼しめじか船」

棹の雁【句】一列に眞直に飛びゆく雁行。俳諧新選〈柳浪〉「棹の雁行くへは雲となりにけり」

棹の先で星を打つ【句】『無門關に「棹棒打レ月、隔レ靴爬レ痒有二法廢交涉一ことあるに本づく』不可能なることの譬。

棹の先へ鈴を附けたやう【句】喧しきことの譬。

棹の長〈サヲ〉【句】船を行る棹を執る人。夫木「棹のをさ棹なすめそ高瀨船みやこに我れはさせる身ならず」

棹は三年、艪は三月【句】棹をあやつるは、艪をおすよりも習熟するに難きをいふ。〔諺語〕

さを眞麻【名】『さ〈匹〉は接頭語』■を〈麻〉に同じ。〔古語〕■麻を束ねたる如き粗衣。〔古語〕萬葉「眞間の手古名が麻衣に青おび著けひたさを裳には織りきて」

さを眞青【名】『さ〈眞〉は接頭語』あを〈青〉■に同じ。〔古語〕源氏「色は雪はづかしく白うて、さをに、額つきこよなうはれたるに」

眞青なる君【句】顏の色の青き君。〔古語〕萬葉「人だまのさをなるきみがただひとりあへりし雨夜は久しく思ほゆ」

眞青の馬〈マ〉【句】青毛の馬。あをうま。〔古語〕催馬樂〈青馬〉「さをのま放れば取繫げ」

さを棹・竿【助數】■旗を數ふるに用ふる語。旒。■『棒をその鐶〈ワ〉に通してかつぐよりいふ』長持・簞笥などを數ふるに用ふる語。■羊羹又は蒸物菓子の長きまなるを數ふるに用ふる語。

さをいし棹石【名】石塔又は石燈籠などの臺石の上に建つる、柱狀の細長き石。

さをいれ棹入【名】間竿〈ザヲ〉にて、地積をはかること。檢地。

さをうた棹歌【名】**ふなうた**〈船歌〉に同じ。夫木「淡路船霧がくれ漕ぐ棹歌の聲ばかりこそ瀨戸わたりけれ」

さをうち竿打【名】間竿〈ザヲ〉にて測量すること。檢地うち。

さをかぢ棹舵・篙櫂【名】船の棹と、かぢと。萬葉「行き出でて漕ぎにし船はさをかぢもなくてさぶしも漕がむと思へど」

棹舵干〈ホ〉**さず**【句】船の絕えず通航する形容。〔古語〕觀興寺青海原〈ハラ〉は棹舵干さず、船の艫〈ヘ〉の至り留まる極み、大海〈オホウミ〉の原に船滿〈チ〉續けて」

さをがね棹金【名】次條に同じ。

さをきんぎん棹金銀【名】德川時代に、金座にて、貨幣鑄造の材料として、金銀を鎔解し、竹の筒に流し込みて、棒形とせるもの、卽ち現時、造幣局にて金棒・銀棒と呼ぶもの。棒金。

さをこ棹子【名】投網船〈フトアミ〉の艫〈モト〉に居て棹さす人。かぢこ。

さをさす棹差す【動四他】船を漕ぐために、棹を水に突入る。

さをしか小牡鹿・棹鹿【名】『さ〈小〉は接頭語』をじか〈牡鹿〉に同じ。拾玉「絲薄よりあはせたる山路かなさをしかのれに蟲のこゑごゑ」

さをしかまと小牡鹿的【名】射的の一種。草鹿〈カシシ〉の類。

さをしぐれ竿時雨【名】生菓子〈ナマガシ〉の一種。青餡のそぼろの上に、白餡の餡棒を横たへ、簀にて捲き、蒸籠にて蒸し、適宜の長さに切りたるもの。

さをしやちつぎ竿車知繼【名】**さをつぎ**竿〈ザヲ〉に同じ。

さをしだか竿鷹【名】隼〈ハヤブサ〉を養ひて、鳧〈カモ〉などを捕ふること。

さをだけ竿竹・棹竹【名】■竿に造るべき竹。■竿としたる竹。竹の竿。一代男「棹竹をわたし、とびさやの脚布〈アシヌノ〉袋懸けてありしは」

さをだち棹立【名】馬の、後足にて、眞直に躍り上ること。ぼうだち。

さをちがひひき竿違引【名】江戸時代に於ける減租の一。檢地の時、丈量を誤りたるを、後に至りて發見せし際、その租を減ぜしこと。

さをつぎ竿繼【名】〔建〕竿枘〈ホゾ〉を枘穴に差込みたる上、車知〈チシャ〉にて固むる繼手。さをしやちつぎ。

さをつけのを竿附緒【名】旗を棹に結び附くるための紐。つけを。平家「さをつけのをのさはるほど」

さをつつじ竿躑躅【名】つつじの花を竿頭に附けしもの。昔、京都にて、四月八日に、家家にて建てたり。

さをつり竿釣【名】釣魚法の一種。釣竿の端に綸〈イト〉と釣鉤〈ツリバリ〉とを著けて釣るもの。

さをとこしさ一昨年【名】『さは接頭語』をとこし〈一昨年〉に同じ。一說に、さをととし〈先昨年〉の略なりと。〔古語〕竹取「さをととしのきさらぎの十日ごろに」

さをとめ早少女・早乙女【名】■『さつき〈皐月〉を見よ、乙女の字は、實は正しからず』田植をする少女。植女。顯季集「種蒔きし早苗の稻や生ひぬらんしづ心なく見ゆるさをとめ」■〔動〕あそびさり□に同じ。□〔動〕みづまをしを云ふ。〔加賀國の方言〕

さをとめ眞少女【名】『さ〈眞〉は接頭語』をとめ〈少女〉に同じ。〔古語〕山家「磯菜摘むあまのさをとめ心せよ沖吹く風に波高くなる」

さをとめかづら早少女葛【名】〔植〕へくそかづら〈屁糞葛〉に同じ。

さをとめぐさ早少女草【名】〔植〕はなあやめ〈花菖蒲〉□を云ふ。〔東國の方言〕

さをとめばな早乙女花【名】〔植〕ふたりしづか〈二人靜〉に同じ。

さをとり竿取【名】間竿〈ザヲ〉にて測ること、又その間竿を執る人。

さをとり棹取【名】かぢとり〈楫取〉に同じ。

さをとるさ踊る【動四自】『さは接頭語』をどる〈踊る〉に同じ。〔古語〕萬葉「すぎの野にさをどる雉子〈キギシ〉いちじろく音にしも泣かんこもりづまかも」

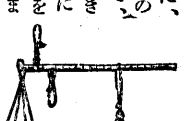
さをのぞき竿除【名】檢地の外に、別に掲げ記すべき地所。高札場・墓地・溜池の類。

さをのび竿延【名】檢地の時、從前の地積よりも廣がり延びたる丈量を得ること。〔江戸時代の語〕

さをのぼり竿登【名】竿を眞直ぐに立て、これに攀〈ヨヂ〉登りて、頂端に達する輕業。

さをのま眞青の馬【句】さを〈眞青〉の條下を見よ。

さをばかり棹秤【名】秤の一種。金屬・象牙・木製等の棹の一端に、皿又は鉤〈カギ〉を有し、その近くに下緒〈サゲヲ〉ありて、これを支とし、量るべき物を皿に載せ、又は鉤に吊り、棹の他端に分銅を掛け、棹の水平になるまで、分銅を左右に移動せしめ、棹の目盛によりて、その物の重量を知るもの。


（りかばをさ）

さをばし眞小橋【名】『さ〈眞〉は接頭語』小さき橋。〔古語〕紀「朝霜のみけのさをばしまへつ君い渡らすも」「部。

さをばしり棹走【名】船の水押〈ミヲ〉の一人〈イリ〉の事を掌りし乘行。

さをばしり竿奉行【名】江戸時代に、竿口の矩形をなせるもの。

さをぶち竿緣【名】〔建〕細長き角材の、切

さをぶちてんじやう竿緣天井【名】〔建〕天井の、板を押ふるために化粧とのために、一尺五寸ほどづつ間隔をおきて、板と直角に竿緣を打附けたるもの。

さをぶね眞小船【名】『さ〈眞〉は接頭語』をぶね〈小舟〉に同じ。〔古語〕萬葉「彦星の河瀨をわたるさをぶねのとゆきてはてむ川津しおもほゆ」

さをもの棹物【名】次條の畧。

さをものぐわし棹物菓子【名】すべて、棒狀に作りて、小口切にする菓子。さをもの。

さをろ棹櫓【名】櫓の一種。櫓の腕と櫓脚とを繼がず、一本の木にて造れるもの。まくちろ。

さをを眞小峰【名】『さ〈眞〉は接頭語。を〈峯〉を見よ』小さきみね。〔古語〕記「こもりくのはつせの山のさををには、はたはり立て」

し

發音 ■しはさ行第二の音。もとは他のさ行音と同じく、sが子音なりしなるべけれども、今は子音shが母音iに結び附きて發す。shは舌尖を下の前齒の裡面に隱し、舌面の前部を硬口蓋の前方より、上門齒の裡面齒槽突起に至る全部面に接近せしめ、その間に殘る狹隘なる空隙より、聲帶の振動を伴はざる聲音を軋ませて發する摩擦音にして、これが母音iと結び附けば、shi即ちしとなり、母音a・u・e・oと結び附く時は、拗音sha shu she shoしゃ・しゅ・しぇ・しょとなる。じはしの濁音にして、しと同樣に、もとはziなりしなるべけれども今はロオマ字のjiに相當し、ただ聲帶の振動を伴はふ點において、しと異なるのみ。なほ秋田・山形等の東北地方の方言中には、si及びziの音も存在せり。■長音は、しいじいと書くとし・じと書くとの兩法あれども、本書は前者に依れり。■拗音しゃ・しゅ・しぇ・しょにつきては、すでに㈠に記したるが、その長音も、本書に於てはしゃあ・しゅう・しぇえ・しょおと記す方法に依れり。濁音の場合、亦これに準じて知るべし。■直下にう・ふの來る時は、相合して拗長音シュウ・ジュウの發音となる。例へば、しうさ(羞)・しうさい(秀才)・しふくわい(集會)・すさまじ、(凄じう)・じうるゐ(獸類)・じふ(十)における しう・じう・しふ・じふの類。但し動詞の語尾のふの場合、例へばをしふ(敎ふ)・まじふ(交ふ)等においては、シュ・ジュの如く二音節に分ちて發音す。■しゃう・じゃうはしょう・じょうと同じくお列の拗長音に發音す。■東北地方の方言にては、し・じをすとすに混用することあり。例へば、なし(梨)となす(茄子)と同じく發音し、しし(獅子)となすし(鮪)とを、すし(鮓)と同じく發音するが如し。■山陰・山陽の東部、四國の愛媛邊にては、しをひに誤る癖あり。例へば、しち(七・質)をヒチといふ類。これsiよりs音の脫落せるに外ならず。

字源 平假名しは漢字「之」(漢呉音共にシ)の草體より出で、「志」(漢・呉音共にシ)の草體志は變體平假名として用ひらる。萬葉假名にては、清音をあらはすに、「之」・「志」の外「芝」・「斯」・「此」・「師」・「始」・「試」・「旨」・「指」・「至」・「司」・「子」・「死」・「糸」・「資」・「玆」・「滋」・「施」・「私」・「四」・「矢」・「次」(以上、漢・呉音共にシ)・「士」・「事」・「詞」・「嗣」・「侍」・「時」・「自」(以上、漢音シ)・「色」・「式」(以上、呉音シキ)・「新」・「進」・「信」(以上、漢・呉音共にシン)・「石」(訓イシ)・「磯」(訓イソ)等、濁音については「事」・「自」・「寺」・「時」・「慈」(以上、呉音ジ)・「兒」・「爾」・「貳」(以上、漢音ジ)等あり。片假名のシは、平假名と同源にて、「之」より出でたり。

し 尿【名】『しと(尿)の略』ゆばり。小便。〔「古語」〕

尿の箱【句】『しは私にて、左傳の襄公十五年の條に「師盡過二宋朝一將レ私」とありて、註に「謂二小便一」とある意かともいふ』べんき(便器)に同じ。〔古語〕和名清器、「師乃波古」

し 師【名】■學問・技藝などを敎ふる人。師匠。先生。源氏「ひとへに心にいれて、師も弟子も、いとどはげみましたまふ」■支那の古の軍制にて、旅(ヨ)の五倍、即ち二千五百人の稱。又、師の五倍を軍(グン)といへり。■いくさ。軍隊。■舊工部省の判任の技術官。明治四年設置、同十年廢止。初は上・中・少の三等に分ちしが、後に上・中・少の三等に改められたり。■海軍省の技術官の、尉官相當の判任官たりしもの。明治五年設置、同十七年廢止。初は大・中・少の三等に分ちしが、後に一等より五等までとせられたり。

師は三世の契【句】師と弟子との關係は、現世はもとより、來世も、その次の世も絶えぬほどに深し。「主從は三世」參照。〔諺語〕

好んで、人の師となる【句】『孟子の離婁上篇に「孟子曰、人之患、在二好爲一人師一」とあるに本づく』物知り顏して、何かにつけて、人の師たるを好む。

三人行へば、師有り【句】さんにん(三人)の條下を見よ。

七尺去って、師の影を踏まず【句】弟子は、師を敬ひて、路を行くにも、七尺退りて歩み、師の影をだに踏まず。〔諺語〕

し 詩【名】■支那の韻文。古詩・律・排律・絶句等、その體種あり。一句は五字又は七字、一定の平仄(ヒヤウソク)を用ひ、句の末毎に、韻を踏むを定とす。からうた。漢詩。言志。源氏「まづかたき詩の心を思ひめぐらし」■〔文〕『書』しきやう(詩經)の略。『英 Poem』美くしき思想・感情等を諷詠に適するやうに敍せる辭章。和歌・今樣等の如きも、その一なり。うた。詩歌。韻文。

詩は別才あり【句】『滄浪詩話に「詩有二別才一非レ關レ書也」とあるに本づく』詩才は、學問の淺深に關係せざる、別種のものなり。〔諺語〕

詩を作るより田を作れ【句】實利主義を執れ。〔諺語〕

し 支【名】■わかれ。分派。「本支の別」■しはらひ。支出。「收・支相償はず」

し 肢【名】えだ。手足。「肢體」

し 私【名】■わたくし。私意。私慾。■ないしょごと。陰事。■一身・一家に關することは。おほやけのことにあらざること。■女子が、その姉妹の夫を呼ぶ稱。和名私、禰雅云、女子謂二姉妹之夫一爲レ私、今案、公私之私字也、和名與レ聟同」

し 將【名】〔天〕二十八宿の一。とろき。

し 祀【名】まつること。まつり。祭祀。

し 緇【名】■黑き色。■黑色の衣。すみぞめ衣。■僧侶。

し 雌【名】めす(雌)に同じ。

し 至【名】〔天〕『英 Solstice』太陽の赤經又は黃經の九十度(夏至)及び二百七十度(冬至)に等しき時を合はせていふ稱。

し 史【名】■世の中の出來事を記したる書・歷史。■記錄を掌る官。■歷史を書く人。ふびと。■古の神祇(ヂギ)官及び太政官の主典。神祇官の史は、文案の勘署・稽失の檢出等を掌りて、大・少の二等に分れ、太政官の史は、文案の勘署・稽失の檢出、內外諸司より上申せし庶務を取扱ひ、左右大少に分れ、各二人づつなりしより、八史とも稱せられたり。まつりごとびと。

史に三長あり【句】『唐書の劉知幾傳に「禮部尙書鄭惟忠嘗問、自レ古文士多、史才少何耶。對曰、史有二三長一、才・學・識、世罕レ兼レ之、故史者少」とあるに本づく』歷史を書く人は、才・學・識の三長所を備へざるべからず。〔諺語〕

し 氏【名】うぢ(氏)に同じ。

し 旨【名】おほせ。むね。

し 視【名】みること。「視・聽・言・動」

し 仕【名】つかふること。つかへ。官職に就くこと。しゆうとり。仕官。

し 子【名】■こ。こども。■しゝゃく(子爵)の略。■孔子の尊稱。「子曰はく」■四部書分類の一目。自說を述べたる書。「經・史・子・集」

し 士【名】■學びて、位に居る者。仕官して、人民の上流に立つ人。■支那周代の貴族中の最下位に在りし者、即ち大夫の下にありて、四民の上に立ちしもの。上士・中士・下士の三等に別れたり。■支那周代の制にて、戰場に將校を助けて、辛伍を帥ゐし者。■もののふ。さむらひ。武夫。士族。■道理に通じて尊敬すべき人。賢人。

【君子】君子の通稱。「文雅の士」「權變の士」
士は己を知る者のために死す【句】『史記の豫讓傳に「士爲二知レ己者一死、女爲二悅レ己者一容」とあるに本づく』士たる者は、知己者のためには、生命を棄ててもなほ悔いず。〔諺語〕 故に士はおのれを知る者のために死ぬ」
士を好めば、士至る【句】『新序に「今君苟好レ士、則賢士至矣」とあるに本づく』一國の君主たる者、賢人を得んと欲せば、これを好愛すべし。〔諺語〕
し志【名】■事柄をしるしたる書。記錄。〔誌〕 ■紀傳體の歷史にて、本紀・列傳の外に、天文・地理・神祇・禮樂などに關する沿革を記しこる記錄。
し誌【名】記錄。文書。
し使【名】■つかひ。使者。 ■けびし(檢非違使)ほうべいし(奉幣使)などの略。「使の宣(セン)」「使の宣旨(センジ)」
使の宣(セン)【句】次條の略。盛裝せる使の宣を蒙って、九郎判官と申しける」
使の宣旨(センジ)【句】古、奉幣使又は檢非違使(ケビシ)を任命せらるる時、賜ひし宣旨。職原抄「即ち二使宣旨一也」
使の廳(ツカサ)【句】けびしちやう(檢非違使廳)に同じ。
し試【名】しけん(試驗)に同じ。
し弑【名】長上殊に君父を殺害すること。しいすること。弑逆。
し獅【名】〔動〕し(獅子)に同じ。
し刺【名】めいし(名刺)に同じ。
刺を通ず【句】面會を求めんがために、名刺を差出す。
し肆【名】みせ(店)に同じ。「肆を開く」
し死【名】■死ぬること。 ■しざい(死罪)の略。「死一等を減ず」
死の別(ワカ)【句】しにわかれ(死別)に同じ。 字治「をのこ・女ご生みなどして、死のわかれにぞ別れにける」
死を致す【句】「命(イノチ)を致すに同じ。 太平記「落重なりて、手を負ひ、死を致すもの、一日が中に五六千人に及べり」
死を賜はる【句】自殺を命ぜらる。
死を賜ふ【句】自殺を命じたまふ。
死を視ること生くるが如し【句】『莊子また漢書の鼂錯傳等に見ゆ』死を懼れざる形容。
死を視ることこ歸するが如し【句】『韓非子また大戴禮(レイ)等に見ゆ』前條に同じ。
し尸・屍【名】かばね。しかばね。死屍。
し梓【名】『康熙字典に「俗謂レ上書文於板一曰レ梓」とあり』梓(サヅ)の木を刻みて、書籍を出版すること。
梓に上(ノボ)す【句】書籍を出版す。版行す。剞劂(キケツ)に附す。上梓す。
し鷙【名】しとう(鷙鳥)に同じ。 謠曲「望月」「鷙といふ小鳥は、小さけれども、虎を害する力あり」
し司【名】■つかさ。官職。 ■つかさどる人。役人。 ■古の省の被官。寮の次に位し、正(カミ)・佑(スケ)・令(リヤウ)等の職員ありたり。「主膳司」 ■明治初年の官又は省の被管。局又は寮の次に位したり。「出納司」
し詞【名】〔文〕■樂府(ガフ)より出でたる一種の詩體。例へば、「木蘭詞」の類。辭。 ■てんし(填詞)に同じ。
し嗣【名】■あとつぎ。後嗣。嗣子。
し祠【名】■やしろ。ほこら。神社。 ■まつること。まつり。
し市【名】■まち。いち。市街。 ■市町村制度によりて、市制を施行する土地。町・村と同じく、地方自治團體中の最下級に位すれども、町・村のごとく、郡の區域に屬せず。郡と共に直接に府又は縣を構成し、市會と市參事會とをその機關とし、市長は市會の選擧によりて定む。
市に虎あり【句】「三人市虎を成す」を見よ。
し躓【名】〔動〕『英 Contourfeather』羽毛の一種。中央に羽軸あり、その兩側に羽枝を生ず。
し資【名】■たすくること。 ■『助けとなるものの義』材料。資料。「研究の資に供す」 ■もとで。資本。資財。「資を投ず」 ■うまれつき。性質。資質。「聰明の資」
し食【名】たべもの。しよくもつ。「一簞の食、一瓢の飲」
し屨【名】くつ。はきもの。
屨を倒にして迎ふ【句】『三國志中、魏志の王粲傳、又、北史の朱瑞傳に出づ』來客を歡び迎へんとて、あはてて屨を倒に穿つ。「を獻る」
し贄・贄【名】會見の時、携へゆく禮物。「贄を執る【句】『儀禮の鄭玄註に「君子見二於所一尊敬一必執レ贄、以將二其厚意一也」とあり』進物を携へて往く。
贄を委(ユダ)す【名】『國語の晉語に「委レ質爲レ臣」とありて、韋註に「質贄也」とあり』進物を差出して、先方に身をまかす。仕官す。
し羊蹄【名】〔植〕ぎしぎし(羊蹄)に同じ。〔古語〕 和名、羊蹄菜。之布久佐。一志之」
し四【數】二と二とを合はせたる數よつ。
四の五の【句】なんのかの。とやかう。〔俚語〕 春花五大力「それゆゑ、四の五のと申すのでござらう。いっそぶち放して」
四も五も無い【句】彼れこれいふべき餘地なし。
し子【代】同輩に對する第二人稱。そなた。きみ。汝。
し【代】■『そ(其)の義』中稱の指示代名詞。それ。〔古語〕 記「さしぶの木しが下に生ひたてる葉廣ゆつま椿しが花の照りいましし」が葉のひろりいますは大君ろかも」 ■第二人稱。そち。なんぢ。〔古語〕 落窪「あなわかわかしの晝寢や、しが身のほど知らぬこそ、いと心うけれ」
し【助】■語調を整へ、又は强むるに用ふる辭。 萬葉「あれをおきて人はあらじとほころへど寒くしあれば麻衾ひきかがふり」 ■口語の動詞に接して、過去又は將來を推量するに用ふる辭。天の網島「侍も、町人も、客は客、なんぼ插いても、五本・六本は、插すまいし、よう插いて、刀わきざし、たった二本」
さり【句】〔前條 ■の助詞と動詞あり(有り)との約〕云云にてあり。云云となる。(將然形と已然形との外、用例なし)〔古語〕 萬葉「大君のみことにされば父母をいはひべとおきてまゐて來ましを」「夕さらば」「秋されば」
し【感】叱る時、戒むる時、止むる時などに、發する聲。しっ。
し師【接尾】■す(爲)の連用形しより轉じたるもの。 ■その技術の專門の人たる意。「醫師(クスシ)」「いかものし」「寫眞師」
し子【接尾】■男子たる意を示すに用ふる語。「才子」「遊子」 ■姓氏に添へて、後世より、その人を尊びていふに用ふる語。「孔子」「孟子」「莊子」「嗚呼忠臣楠子之墓」 ■名に添へて、親しみの意を示すに用ふる語。四十八癖「これこれ好助子、もうちっと待つがいい」 ■姓氏に添へて、子爵の身分を示すに用ふる語。「榎本子」
し秒【助數】兆の萬倍。一說に、京の萬倍。
し絲【助數】小數の單位。毛(ゲ)の十分の一、忽(コツ)の十倍。
し枝【助數】細長き物を數ふるに用ふる語。「長刀一枝」「大柄の傘二枚」
し錙【助數】支那の重量の單位。兩の四分の一。銖の六倍。
し字【名】■聲音又は言語を、書表はすしるし。もんじ。もじ。 ■かんじ(漢字)の特稱。 ■錢を紅白の紙に包み、楊弓・雙六等の賭物(カケモノ)に用ふるもの。松風村雨束帶鑑「綾錦にていろいろに飾りし錢をぞ出さるる…これは楊弓・雙陸の勝負にかくるおのおのしならんとありければ、司の前聞き給ひ、いやいや宇にて候はず」
字の思召(オボシメ)【句】身のたけ低き遊客。
〔昔の江戸吉原遊廓の隱語〕
人生字を識るは憂患のはじめ【句】『蘇軾の詩に出づ』文字を學び、學問をなすは、人生に對して不平煩悶を起す種子なれば、何事も知らざるが却って安寧なり。〔諺語〕
じ時【名】■じ(時)に同じ。〔古語〕 源氏「このわたりにとまりて、初夜のじ果てんほどに」 ■〔哲〕じかん(時間)。 ■の略。
じ慈【名】いつくしむこと。あはれみいとほしむこと。慈悲。慈愛。 論の門松「人の父としては、慈にとどまり」

じ

じ 磁【名】 ㊀すえもの（陶器）に同じ。㊁じき（磁氣）の略。

じ 辭【名】 ㊀ことば。辭令。文句。㊁〔文〕し詞）㊀に同じ。㊂てにをは。助辭。㊃大寶令の制規にて、雜任の初位以上及び庶人が事を錄して、諸司に申達せしこと。その式、解（げ）に比して大差なく、年月日の下に、位、姓、名、辭の四字を記し、次にその事を錄し、文の末尾に、謹辭の二字を加ふることと定められたり。

じ 辭【名】 辭は達するのみ【句】『論語の衞靈公篇に「子曰、辭達而已矣」とあるに本づく』文辭は意義の通達するを本旨とすべく、徒に富麗なるは取らず。〔諺語〕

じ 辭【名】 辭を卑くす【句】『史記に「齊懼必卑レ辭重レ幣以事レ秦」とあり』「言葉を卑くす」に同じ。

じ 璽【名】 『支那にて、秦以來の用例に倣へるもの。秦以前は、上下の差別なく、ただ印章の意に用ひたり』天子の印章。玉璽。國璽。

じ 瓷【名】 次條を見よ。

じ 瓷【名】 瓷の器物（もの）【句】じき（瓷器）に同じ。〔古語〕 和名瓷、之乃宇豆波毛乃、瓦器也」

じ 瓷の坏（つき）【句】 前條に同じ。〔古語〕 字鏡集「瓷、ジノウツハモノ・ジノツキ」

じ 兒【代】 男兒の、親に對する第一人稱。

じ 次【接頭】 〔化〕主に酸名に添へて、酸類と酸素との割合を同じくし、化合價の割合一つ多き意を表はすに用ふる語。「次硝酸蒼鉛」「次硫酸」

じ 不【助動】 未來を推量して打消す意に用ふる語。まじに似て、その意すこし弱し。ざらん。（動詞の將然形に續けて用ふ）「行かじ」「見じ」

じ 字【助數】 ㊀もん（文）に同じ。 冥途飛脚「いかやうとも仕遂って、一錢、一字損かけまじ」 ㊁もんめ（匁）に同じ。（藥量にいふ）

じ 時【助數】 時間の單位。一晝夜二十四分の一。分（ぶ）の六十倍。

じ 次【助數】 ㊀くわい（回）に同じ。「數次の問答」「大正第三次の春」 ㊁〔數〕『英Degree』

しあい

代數學にて、項を形成する文字の因數を示すに用ふる語。例へば x^2、x^3 において、x に關しては四次、x^2 に關しては三次、x^3 に關して二次、x^4、x^5、x^n のすべてに關しては九次なる類。また方程式にては、未知數の最高次數を、多項式にては最高次の項の次數をもって、その式の次數とす。「三次方程式」

しあい 絲鞋【名】 しがい（絲鞋）に同じ。

しあい 至愛【名】 この上なく愛すること。「わの愛。至大の愛。

しあい 私愛【名】 依怙（えこ）の愛。かたておし

しあい 四愛【名】 『虞伯生の四愛題詠序に見ゆ』支那の陶潛の菊を愛し、周茂叔の蓮を愛し、林逋の梅を愛し、黃魯直の蘭を愛せしことの併稱。

じあい 慈愛【名】 いつくしみ。めぐみ。

じあい 自愛【名】 ㊀自らその身を大切にすること。自重。 ㊁（己）に同じ。 盛衰記「鹿毛なる馬の太き逞しきが、曲進退にして、逸物なり。…木の下といふ名をつけて、自愛して飼ひけるほどに」

じあい-しゅぎ 自愛主義【名】〔哲〕りこしゅぎ（利己主義）に同じ。（他愛主義に對して）

じあい-せつ 自愛說【名】〔哲〕前條に同じ。（他愛說に對して）

じあえんそさん 次亞鹽素酸【名】〔化〕『英Hypochlorous acid』酸類の一。極めて分解しやすきが故に、ただ溶液として得らるるのみ。必要の生じたる場合に、その鹽類に酸を加へて、その水溶液を得、直ちに使用するを常とす。酸性は弱けれど、酸化力強きにより、酸化劑又は漂白用に供せらる。殺菌力も强し。

じあえんそさん-かるしうむ 次亞鹽素酸カルシウム（英Calcium hypochlorite）【名】〔化〕漂白粉クロオルカルキ（Chlor kalk）の主成分。鹽素に類する臭氣と收斂（しう）するが如き不快の味とを有し、アルカリ性の反應を呈す。酸化力强きが故に、脫色、漂白、殺菌等の用に供す。

じあえんそさん-なとりうむ 次亞鹽素酸ナトリウム（英Natrium hypochlorite）

しあがり

【名】〔化〕酸化劑の一。苛性曹達の冷溶液に鹽素を通じて製す。その水溶液は常に鹽素を發生し、日光に當り、又は溫度稍高き時殊に著し。漂白劑、殺菌劑、染色、製紙等に用ひらる。

しあがり 仕上【名】 しあがること、又その結果。しあげ。落成。

しあがる 仕上る【動四自】 仕事終はる。できあがる。落成す。「ること。

しあき 爲飽【名】 しあくこと。しあきた

しあく 至惡【名】 最大なる罪惡。極惡。

しあく 四惡【名】〔佛〕『論語の堯曰篇に「子張曰、何謂二四惡一、子曰、不レ敎而殺、謂二之虐一、不レ戒視レ成、謂二之暴一、慢レ令致レ期、謂二之賊一、猶之與レ人也、出納之吝、謂二之有司一」とあるに本づく』國を治むるにつきて、四つの惡事。即ち豫め敎ふることを爲さずして殺すこと、初に戒めず、急にその成績を檢視して責むること、前に命令を緩慢にして、急に期限を刻定し、これに背けば、刑を加ふること、民に與ふべきものなるに、これを出すに吝なること。ごく（五美）參照。津國女夫池國家の政道四惡を退け」 ㊁〔佛〕しあくしゅ（四惡趣）の略。「同じ。

しあく 四惡十惡【句】よめとをめ（四目十目）に

しあく 爲飽く【動四自】 事をなして飽く。あくまでなす。

しあぐ 仕上ぐ【動下二他】 ㊀仕事を終ふ。出來上るやうにす。 ㊁前よりは良くなしむ。 出世繁昌御身も、ずんと女房を仕上げたり」 ㊂じりあぐ（入上ぐ）に同じ。 丹波與作與作といふ博打の盜人めに、有りたけしあげて」

しあくしま 鹽飽島・塩飽島【名】〔地〕しあくしたう（鹽飽諸島）を見よ。

しあくしゅ 四惡趣【名】〔佛〕六道の中、地獄、餓鬼、畜生、修羅の四つ、即ち三惡趣に修羅を加へたるもの。四惡道。四趣。

しあくしたう 鹽飽諸島・塩飽諸島【名】〔地〕讃岐國丸龜市の北方に散在せる群島。その中、大なるは本（ほん）島・與（よ）島・櫃石（ひついし）島・瀨居（せい）島・廣島・高島・佐柳（さなぎ）島にて、これを鹽飽の七島といひ、その他、長島・向笠（むかさ）・羽佐島等の屬島ありて、讃岐國仲多度（なかたど）郡に屬す。

しあくだう 四惡道【名】〔佛〕しあくしゅ（四惡趣）に同じ。

しあく-の-しちたう 鹽飽七島・塩飽七島【名】〔地〕しあくしたう（鹽飽諸島）を見よ。

しあくむ【動四自】 しわぶ。あつかひ煩ふ。もてあます。

しあげ 仕上【名】 しあぐること、又その結果。できあがり。成果。

しあげ-かんな 仕上鉋【名】 仕上に用ふる鉋。鉋刃にして刃（は）薄し。精鉋。

しあげ-こう 仕上工【名】 粗製品を更に加工して完全ならしむること、又その人。

しあげだかばらひ-ちんぎん 仕上高拂賃銀【名】〔經〕勞働時間の長短に拘らず、實際成遂げたる仕事の出來高に應じて、賃銀を仕拂ふこと。出來高拂賃銀。箇數拂賃銀。仕上拂賃銀。

しあげばらひ-ちんぎん 仕上拂賃銀【名】〔經〕前條に同じ。

しあげ-ぼり 仕上彫【名】 一とほり彫刻したる物に、更に仕上の加工を施すこと。うはぼり。

しあげ-もの 仕上者【名】 ㊀更に加工して完成すべきもの。 ㊁貧賤より身を起して、富貴となりたる人。なりあがりもの。

しあごん 四阿含【名】〔書〕次條に同じ。

しあごんきゃう 四阿含經【名】〔書〕四種の阿含經、即ち增一阿含經・長阿含經・中阿含經・雜阿含經。共に、釋迦の、瞿曇經を說きし後に、十二年間を費して、鹿野苑（ろくやおん）にて說けるもの。小乘敎の根本經典にして、四諦（したい）・十二因緣・八正道等の法門を明かにせり。

しあさって 明明後日【名】 明後日の翌日。「を見よ。やのあさって。

じあすたあぜ（獨Diastase）【名】おあすたあぜ

しあつ 仕當つ【動下二他】 事をなして好結果を得。思ひ通りに事を爲遂ぐ。 日本武尊吾妻鑑や、さては男かわが戀しあてた」

しあつかふ 爲扱ふ【動四他】 なしあつかふ。處置に窮す。もてあつかふ。 宇治「ま

ことに驚ぎまどひて、しあつかふを見て」

しあつ-き 指壓器【名】『英Indicator』蒸氣機關又は瓦斯機關などの汽筒内の壓力の變化を自記する裝置。

しあつ-づ 指壓圖【名】『英Indicator diagram』指壓器の自記する線圖。

し-あつむ 爲集む【動下二他】なしあつむ。【古語】源氏「つれづれなる月日を經て、はかなくしあつめたまへる」

し-あはせ 詩合【名】詩人集りて、左右に分れ、その詠詩を合はせて、判者に優劣の沙汰を乞ひ、勝負を爭ひしこと。天德三年八月十六日、村上天皇清涼殿の孫廂(ヒサシ)に出御あり、既望の月を賞し、この企ありしを始とす。圓詩。(歌合に對して)

し-あはせ 仕合【名】一『爲(ス)合はせたる偶然の結果の意』てあひ。機會。間拍子(ヒヤウシ)。うん。運命。天運。丹波與作「この仕合の上なれば、心は關とまかりなる」二もやう。やうす。仕儀。始末。心中萬年草「久米樣のお仕合またお聞きなされぬか」今國姓爺「ほう早かりし歐陽哲、して仕合は何と何と」三運のよきこと。さいはひ。

仕合致す【句】 運よくなる。幸が向來る。狂言「盜人連歌」「ただ今、なんぞ取って參りたと、ままよ。しあはせいたしたら、また返しましよ」

しあはせ-と 仕合と【副】幸に。折よく。長町女腹切「嵯峨へ下(オ)りたりや、仕合と、釋迦樣の開帳のお伴やら、おこごやら」

しあはせ-びやうし 仕合拍子【名】調子よく好運に向ふこと。間拍子(ヒヤウシ)よき運命。幸運。壽の門松「手拍子に、口拍子、仕合拍子の三三九度」

しあはせ-ぶくろ 仕合袋【名】『四合袋の義』底の四角形をなせる括袋(クヽリ)。きんちやうぶくろ(巾着袋)參照。

しあはせ-もの 仕合者【名】しあはせのよきもの。幸福なる人。幸運者。果報者。

しあはせ-よし 仕合善【名】運のよきこと、又その人。丹波與作「小萬が戀もとほり町、しあはせよして」「を比ぶること。

し-あひ 仕合。試合【名】武術の技量の優劣を爭ふこと。

じ-あひ 時合【名】その時ごろ。ころあひ。心中及は氷の朝日「仕直(シナヲ)にやったらば、多分晩の時、合にならう」

しあひ-にん 仕合人【名】擊劍などの仕合をする人。角技者。

し-あふ 爲合ふ【動四他】互にする。互に行ふ。はりあひてなす。

し-あふ 爲敢ふ【動下二他】することをはたす。しとげる。(古語)源氏「いつのまにしあへけんと見えたり」

じ-あまり 字餘【名】和歌、俳諧などにて、一定の字數より多きこと。字餘の音は、母音または半母音に限れり。例へば、二條院讃岐の「わたつ海の沖つ汐あひにかづくあまの息(イキ)もつきあへず物をこそ思へ」のごときは、上下兩句字餘なり。

し-あん 私安【名】(法)私人の安全、即ち各人の生命・身體・財產・名譽・自由などの安全。(公安に對して)

し-あん 思案・思按【名】一おもひ。かんがへ。工夫。重輕子「元元、思案する程ねたましい」二ものおもひ。心配。

思案投首(ナゲクビ)【名】 思案に餘りて、首をかしぐること。太功記「思案投首しほるるばかり」

思案に餘る【句】 思案しても、よき考浮ばぬに困ず。心に餘る。おもひあまる。

思案に落つ【句】 考へつく。合點がゆく。腑に落つ。狂言(ごちかぐれ)「どなたへ參らうぞと、とやかうと、思案に落ちませぬ」井筒業平河内通「思ひもよらぬ使者の口上をかう思案に落ちざる所に」

思案に暮る【句】 思あまりて、心暗くなる。「しづむ。

思案に沈む【句】 深く考へ込む。おもひ思案に行當る【句】考ゆきつまる。よき分別出でず。心中及は氷の朝日「平兵衛は、あと吐息をつき、はてさて思案に行きあたった」

思案の場【句】 思案の際。考慮を要する場合。薩摩歌「武門の名折れ、勘忍の場思案の場」

思案の外(ホカ)【句】 思慮分別の及ばぬところ。俳諧新選(樓川)「鼠とる思案の外や猫の戀」諺「色は思案のほか」

し-あん 【名】【化】しやんを見よ。

し-あん-がほ 思案顏【名】思案をめぐらす時の顏つき。天の網島「死なずに事の濟むやうに、どうぞどうぞ賴みやすと、語ればうなづく思案がほ」

し-あん-けいさつ 私安警察【名】つうじやうけいさつ(通常警察)に同じ。(公安警察に對して)

し-あん-どと 思案事【名】一思案をめぐらすべき事件。二俳優の、物思の樣を演ずること。女殺油地獄「やつしは盆左衛門、幸左衛門が思案事、四郎三が憂事(ウキヒ)」

じ-あんし 自暗示【名】(哲)『英Autosuggestion』自ら己れを催眠狀態若しくはこれに類似せる暗示的狀態に變ぜしむること。自己暗示。(他暗示に對して)

し-あん-どころ 思案所【名】思案すべき點。思案を要するところ。源氏烏帽子折「一生の思案所」

し-あん-なみだ 思案淚【名】思案の餘に出づる淚。思案にくれて落る淚。心中及は氷の朝日「思案淚に胸つまり」

し-あん-ばし 思案橋【名】(地)東京市日本橋區小網町一丁目と二丁目の間に架れる橋。江戸時代、吉原遊廓及び堺町の芝居共にこの邊に在りしより、その何れに行かんかと、この橋にて、思案せし意にて名づけし由。柳樽「どの道に歸る思案の橋でなし」

し-あんぶ 思案麩【名】生麩(フ)と豆腐とに、山の芋を擂りまぜ、茹(ユ)でて製したる食品。

し-あやまち 爲過【名】しあやまつこと。(古語)落葉「しあやまちせさせたまへること、おはしまさざめるを」

し-あやまつ 爲過つ【動四他】なす事をあやまつ。しそこなふ。

し-あやまり 爲誤【名】しあやまること。しあやまち。

し-あやまる 爲過る【動四他】しあやまつ(爲過)に同じ。(古語)源氏「かくいふにつけても、げにしあやまりたることと思へば」

じ-ありう 【名】【化】ちおりうさんこうりう(チオ硫酸ナトリウム)に同じ。

し-ありく 爲行く【動四自】事をなしつつ行く。事をなしつつ日を送る。(古語)宇治「もののゆかしければ」

じ-ありん 次亞燐【名】【化】次條に同じ。

じ-ありんさん 次亞燐酸【名】【化】『英Hypophosphorous acid』酸類の一。次亞燐酸バリウムを稀硫酸にて分解して得るもの。純粹のは無色の結晶塊をなし、水に溶けやすく、一分子中に三つの水素原子あるに拘らず、一鹽基性の弱酸にして、還元性強く、酸素を得れば、直ちに燐酸に變ず。

じ-ありんさん-かるしうむ 次亞燐酸カルシウム(英Calcium hypophosphite)【名】【化】次亞燐酸の鹽類の一。石灰乳を黃燐と共に煮て得る白色結晶性の粉末、又は板狀の物質。病後の衰弱、佝僂(クル)病等に効ありとして用ひらる。

じ-ありんさん-ばりうむ (英Barium hypophosphite)【名】【化】次亞燐酸の鹽類の一。水酸化バリウムに黃燐と共に煮て得る可溶性の物質。次亞燐酸を製取するに用ふ。

し-い 紫衣【名】しえ(紫衣)に同じ。

し-い 緇衣【名】黑色の衣。黑染の衣。僧衣。「衣。

し-い 司醫【名】いし(醫師)の唐名。

し-い 四夷【名】一支那にて、自國を中國又は中華など稱し、その四方にある國國を未開・野蠻なりとして呼びなせるもの。即ち東の九夷、南の八蠻、西の六戎、北の五狄の總稱。二四方の服せざる民。盛衰記「日ごろは四夷を退けし大將軍」

し-い 私意【名】一自分の意見。我が見こみ。私見。二ひそかに心にたくむこと。私慾を貪る心。私心。

し-い 志意【名】いし(意思)に同じ。

し-い 指意【名】すぢ。旨趣。

し-い 詩意【名】詩の意味。

し-い 徒移【名】うつること。わたまし。移轉。

しい 徒倚【名】たちやすらふこと。たちどまること。

しい 小便【名】『こ』(小供の語)『しし』の延言』

しい 蒿雀【名】〔動〕あをじ(蒿雀)に同じ。

しい 【名】■〔動〕鯡(ティ)に似たる怪獣。昔、筑紫及び周防國に棲みて、馬牛を害せしといふ。■〔植〕きじむし(羊蹄)に同じ。

しい 【感】■あざ笑又は苦笑する時の聲。〔古語〕平治「しいと笑ひける」■馬方の、馬を追ひたつる時の掛聲。丹波奥笹「しいといふ馬追聲も聞かぬわいの」■犬猫などを追拂ひ、立退かしむる時の聲。■制止または警蹕(ケイヒツ)の聲。

じい 時衣【名】じふく(時服)に同じ。

じい 侍醫【名】■貴人に侍して、その診療に從事する者。■大寶令の制規にて、内藥司(後に典藥寮)に屬し、天皇御不豫の時、御脈を診驗し、醫藥を供奉することを掌りしもの。定員四人、初は正六位下相當、中世以後、多くは、和氣(ワケ)・丹波の兩氏これに任ぜられ、後には四位・五位の任となれり。禁秘抄「著二倚子一召二侍醫於小板敷一令レ見二用所一上古例也」■侍醫局に屬して、診候・醫藥及び宮中衛生の事を掌る勅奏任官。明治八年に大典醫・中典醫・少典醫・大侍醫・權大侍醫・少侍醫・權少侍醫を廢してこれを置く。

じい 辭意【名】■ことばの意義。■ことばと意志と。■辭らんとする心。辭職の意向。

しいう 四友【名】■四種の文房具、即ち硯・筆・紙・墨。■雪中に花ある玉梅・臘梅(ラウバイ)・水仙・山茶(サンチャ)の四種。

しいう 死友【名】■『しかう(死交)を見よ』生死を共にせんとするほどの極めて親密なる友。■死にし友。

しいう 詩友【名】詩を以て交る友。

しいう 師友【名】■師として尊敬するほどの友。■師と友と。

しいう 市有【名】地方自治體たる市の所有。

しいう 私有【名】一私人の所有。

しいう 子游【名】〔人〕支那周代の學者。孔子の門人。本名は言偃、子游はその字なり。武城の宰となり、學を以て、孔子に稱せられたり。

じいう 事由【名】■事のわけ。「事實上の原由。■〔法〕事實上の原由。

じいう 自由【名】■『みづから由る義』■わが心のまま。おもひのまま。きまま。かって。■他の制肘束縛を受けず、自己の單獨意思にて行動すること。■〔法〕法律の範圍に於ける隨意の行爲。「言論の自由」「信教の自由」

憲法上の自由【句】〔法〕憲法によりて保證せられたる臣民の自由、即ち居住・移轉の自由、言論・著作・印行・集會・結社の自由、信教の自由の類。

じいういし 自由意志【名】『英Free of the will』■〔哲〕一一の行動が、毫も止むを得ずして爲せりとは感ぜず、意志の自由なる發動より生ずとの感を有すること。意志の自由。選擇の自由。■〔法〕爲不爲の自由ある精神狀態。人は、一定の年齢に達すれば、精神に異狀ある者、又は精神發達の不十分なる者に非ざる以上は、善を爲し、惡を避くる自由を有するものにて、犯罪行爲の處罰せらるるは、この自由意思の發動なるによりてなり。〔自由意思〕

じいういしき 自由意識【名】〔哲〕『英Consciousness of freedom』決意・選擇は自己より起り、自己以外の者によりて規定せらるるにあらずとの意識または感情。自由感情。

じいういしろん 自由意志論【名】〔哲〕『英Libertarianism』自由意志の解釋上、意志を自律的のものとし、その活動に因果律の適用を拒む說。自由論。意志自由論。非定命論。非定道論。

じいういみん 自由移民【名】殖民地に要する勞働が、勞働者の自由意志に依りて供給せらるること。(强制移民に對して)

じいうえいげう 自由營業【名】〔法〕法律の禁止なく、又は官廳の許可を得ずして、何人も營み得る營業。現今營業の多くは、皆これに屬す。

じいうかう 自由港【名】じいうぼうえきかう(自由貿易港)に同じ。

じいうからざ 自由講座【名】講義すべき順序・法式等を設けず、時に應じ機に臨みて、特殊の問題を自由に提出して講義する組織。

じいうからだう 自由行動【名】他の都合の如何に關せず、隨意に行動すること。

じいうかって 自由勝手【名】じいう(自由)■に同じ。

じいうがね 自由曲尺【名】折疊み得るやうに製作せる曲尺(カネジャク)。

じいうかんじやう 自由感情【名】〔哲〕じいういしき(自由意識)に同じ。

じいうききう 自由氣球【名】『英Free balloon』推進器も繫留索も有せずして、空氣の流動に任する氣球。形大きくして、娯樂・探險・學術等の用に供す。

じいうきげふ 自由企業【名】〔經〕政府の關與せざる一私人の企業。

じいうきんこ 自由金庫【名】〔法〕勞働者が疾病・老衰・解職等の場合に備ふるために、任意に設けし財團(强制金庫に對して)

じいうきやうさう 自由競爭【名】〔經〕『英Free competition』生存競爭の一種。經濟社會に存在する各個人又は各團體が、法律の範圍内にて、自己の利益を謀らんがために、他人を排斥して、獨占權を得んとする情態。

じいうぎよげふ 自由漁業【名】行政官廳の許可又は免許を要せざる漁業(許可漁業に對して)

じいうけい 自由刑【名】〔法〕『獨Freiheitsstrafe』犯罪者を一定の獄内に留置して、その身體の自由を奪ふ刑罰。我が國の舊刑法にては、徒刑・死刑・徵役・禁獄・禁錮・拘留・監視の七種とせしが、新刑法にては、懲役・禁錮・拘留の三種とせり。

じいうげいじゆつ 自由藝術【名】〔美〕『英Free arts』實用上の束縛を受くることなき藝術、即ち繪畫・彫刻・文學・音樂・演劇・建築など。建築は住むといふ實用的分子を含めりとも見ゆれど、工藝美術に比して、自由の領分多く、また住むに心地よきは、即ち一種の美たるに外ならざるが故に、これに加ふ。自由美術。純正美術。(對:純粹藝術に對して)

じいうげきぢやう 自由劇場【名】『佛Théâtre libre』藝術の自由を主とし、利益又は演出法等の關係上、一般の劇場に於て公演するに不適當なる作を、自由に演出せんとする組織の劇場。西曆第十九紀の後期に佛蘭西のアントアンヌ(A.Antoine)これを創む。我が國にては、明治四十二年小山内(オサナイ)薰・市川左團次等の試みしを始とす。

じいうけっこん 自由結婚【名】■男女とも、父母・兄弟・後見人等の承諾を得ず、相互の合意によりて結婚すること。■できあひ。くっつき。野合。

じいうけん 自由權【名】〔法〕『獨Freiheitsrecht』人格權の一。不法に、その身體の自由を害せられざる各人の權利。■公權の一。所定の法規に依る外は、國家の干渉を受けざる個人の權利、即ち居住・移轉の自由、信教の自由、信書祕密の自由等の類。

じいうけんきう 自由研究【名】じいうたうきう(自由討究)に同じ。

じいうけんぱふ 自由憲法【名】〔法〕なんけんぱふ(軟憲法)に同じ。(固定憲法に對して)

じいうさい 自由財【名】〔經〕次條に同じ。

じいうさいくわ 自由財貨【名】〔經〕じいうてきさいくわ(自由的財貨)に同じ。

じいうさいさん 私有財産【名】一個人又は私立團體の所有する財産。(公有財産に對して)

じいうさいさんせい 私有財産制【名】〔法〕私人の所有權を公認する制度。

じいうし 自由市【名】『英Free city 又Free town』じいうし(自由市府)に同じ。

じいうし 自由詩【名】〔文〕『英Free poetry 佛Vers libre』形式の束縛を脱し、内心の動くがままにみづから形式を作る詩。

じいうしさう 自由思想【名】自由の活動を主張する思想。自由の範圍を擴張せんとする思想。

じいうざんまい 自由三昧【名】勝手氣ままなること。勝手しほうだい。

じいうしふ 自由市府【名】『英Free cities』

中世、伊太利及び獨逸の、市府の商業上の富によりて貴族僧侶の束縛を受けず、獨立の政治を行ひしもの。伊太利のベニス(Venice)・ゼノア(Genoa)・フロオレンス(Florence)、獨逸のリュウベック(Lübeck)・ハンブルヒ(Hamburg)・ブレエメン(Bremen)など有名なりき。自由市。

じいう-しんしよう 自由心證 【名】〔法〕自己の理解力を以て事實を推理し、これを眞實なりと認識する主觀的作用。(制限證據に對して)

じいう-しんしようしゅぎ 自由心證主義 【名】〔法〕裁判に必要なる事實の認定に關し、その證據の取捨及び判斷を裁判官の自由なる心證に一任する主義。(制限證據主義に對して)

じいう-しゅぎ 自由主義 【名】■他より掣肘拘束を受けざらんとする主義。■國民の自由を、政治上に擴張せんとする主義。

じいう-しゅざう 自由鑄造 【名】〔經〕自由貿易又は自由放任の主義。

じいう-しゅざう 自由鑄造 【名】〔經〕貨幣鑄造制度の一。地金を造幣局に提出して、本位貨幣の鑄造を請ふ者ある時、何等の制限なく、その地金の價格に相當する貨幣を交附すること。(制限鑄造に對して)

じいう-しよ 事由書 【名】事由を記したる書面。事柄を認めたる書面。

じいう-しよくみんち 私有殖民地 私有植民地 【名】■その土地の所有權を私人に與ふる殖民地。■私人の經營する殖民地。

じいう-しよとく 自由所得 【名】〔經〕『獨 Freies Einkommen』『收入者の自由意思を以て處分し得る所得の義』純所得の中より、生計費を控除せる殘額。(不自由所得に對して)

じいう-せつりつ-しゅぎ 自由設立主義 【名】〔法〕法人の設立に關し、設立者の自由意志に依りて設立するを、法律の特許、行政廳の免許、法定の準則等に依るを要せずとする說。

じいう-せんぱく 自由船舶 【名】〔法〕『英 Free ship』戰時國際法上、中立性を有し、交戰國にて捕獲するを得ざる船舶。

じいうた 自由黨 【名】明治三十年に板垣退助等首唱し、もとの愛國社を解きて、設けたる政黨。佛蘭西流の政論を鼓吹し、民權の擴張を政綱とし、同三十一年に進歩黨と合同して、憲政黨となりしが、同三十九年更に分裂して、政友會となれり。

じいうたうきう 自由討究 【名】從來の習慣又は政治・宗教などの束縛を受けずして、自由自在に眞理を研究すること。自由研究。

じいうたん 紫遊丹 【名】古の丹藥の一。「和名抄「紫遊丹」」

じいうち 私有地 【名】■私有の土地。■〔法〕人民の所有に係る田畑・宅地など。(明治初年の名稱にて、同七年に民有地と改稱せらる)

じいうてき-ざいくわ 自由的財貨 【名】〔經〕『英 Free goods』勞力又は報酬を要せずして、使用又は占有し得る財貨。日光・空氣等の如く、或場合の外は、勞力・報酬を要せざるもの、時と處とに依りて、勞力・報酬を要する、例へば土地の如きものとの別あり。自由財貨。

じいうてき-らうどう 自由的勞働 【名】〔經〕『英 Free-Labour』勞働者が自己の意思に從ひて、自由に勞働すること。自由勞働。(不自由的勞働に對して)

じいうてつだう 私有鐵道 【名】私人の經營せる鐵道。(國有鐵道に對して)

じいうど 自由度 【名】〔化〕『英 Degree of freedom』物質が溫度・壓力等の變化に拘らず、同一の相(ᵴᵗ)を保ちて變化せざる程度。

じいうとかう 自由渡航 【名】制限束縛を少しも受けずして、任意に海外に航し得ること。(制限渡航に對して)

じいうとし 自由都市 【名】じいうしゐ(自由市府)に同じ。

じいうはいげふ 自由廢業 【名】藝娼妓が、その雇主との契約年限中に拘らず、警察署に屆け出でて、任意に廢業すること。

じいうはうにん 自由放任 【名】■制限又は拘束を附することなく、思のままに任すること。■〔經〕國家が、國民の經濟的活動に對して、毫も保護・干涉をなさず、個人をして、各自好む所に從ひて、自由に活動せしむること。

じいうはうにん-しゅぎ 自由放任主義 【名】自由放任を主張する主義。(保護干涉主義に對して)

じいうはっかうはふ 自由發行法 【名】〔經〕兌換券發行法の一。私人の自由競爭に任せ、制限又は拘束を附せずして發行せしむるもの。(制限發行法に對して)

じいうはふ 自由法 【名】〔法〕にんいはふ(任意法)に同じ。

じいうびじゅつ 自由美術 【名】〔美〕じいうげいじゅつ(自由藝術)に同じ。

じいうべんご 自由辯護 【名】〔法〕訴訟において、辯護人を附すると否とを、被告人又は裁判所の意見に一任すること。輕罪事件につきて行はるるものにして、我が刑事訴訟法も、この主義を採用せり。(强制辯護に對して)

じいう-ぼうえき 自由貿易 【名】〔經〕『英 Free trade』產業保護の目的により、外國貿易を個人の自由に任せ、國家は何等の干涉をも加へざること。(保護貿易に對して)

じいうぼうえき-かう 自由貿易港 【名】『英 Free port』產業保護の目的にて、貨物の輸出入に對して、關稅を課せず、また貨物の加工・包裝等をなすも、稅關において何等の干涉をなさざる港。自由港。(保護貿易港に對して)

じいうぼうえき-しゅぎ 自由貿易主義 【名】〔經〕自由貿易を主張する主義。(保護貿易主義に對して)

じいうほけん 自由保險 【名】加入するとせざるとは、一に加入者の任意なる保險。保險契約は、すべてこれに屬す。

じいうみん 自由民 【名】正當の行爲によりて、自己の權利を自由に行使し得る人民。

じいうゆしゅつ 自由輸出 【名】〔經〕『輸の字の音、正しくはしゅ』國家が制限又は拘束を設けず、自由に貨物を輸出せしむること。

じいうゆにふ 自由輸入 【名】〔經〕『輸の音、正しくはしゅ』輸入稅を課せず、又は輸入の稅を課するも、他に何等の拘束を設けず、自由に貨物を輸入せしむること。

じいうらうどう 自由勞働 【名】〔經〕じいうてきらうどう(自由的勞働)に同じ。(不自由勞働に對して)

じいうりっぱふ-じかう 自由立法事項 【名】〔法〕法律にて定むるも、命令にて定むるも、憲法上自由なる事項、卽ち立法事項又は大權事項ならざる事項。例へば貨幣の鑄造、度量衡の制定、國境の變更、營業の自由など、法令共同事項。「森林。

じいうりん 私有林 【名】個人の私有する林。

じいうれんあい 自由戀愛 【名】『英 Free love』男女相愛して、しかも結婚の束縛なく、扶養の義務なきこと。

じいうろん 自由論 【名】〔哲〕じいういしろん(自由意志論)に同じ。

しいか 詩歌 【名】しか(詩歌)の音便。

しいかあはせ 詩歌合 【名】歌合に倣ひ、詩と歌とを左右に相對せしめて、優劣を判ずる會。(續後撰)「江上春望といへる題にて、詩歌を合せられ侍りしついでに」(增鏡)「元久の頃、詩に歌を合はせられしも」

しいかう 至孝 【名】しかう(至孝)の音便。

しいぎやく 弑逆 【名】しぎやく(弑逆)の音便。

しいきよく 侍醫局 【名】■明治十九年に宮內省に置かれし局。診候及び宮中衞生の事を掌りしところ。長官侍醫・醫員・藥劑師等の職員を置く。■明治四十一年一月以前に於ける侍醫寮の稱。

しいく 慈育 【名】いつくしみて養ふこと。

しいごく 至極 【名】しごく 至極)の音便。

しいし 獅子 【名】しし(獅)に同じ。

しいじ 四時 【名】しじ(四時)の音便。

しいしい 【感】しいの重言。心中萬年草「これしいしいと袖を引く」

しいしいえすしき-たんゐ C G S 式單位 【名】〔理〕『C·G·S は佛 Centimètre-Gramme-Seconde の首字の略』單位制の一。基本單位たる長さ・質量・時間を表はすに、それ

ぞれ任意の單位を用ふるは煩しきを以て、長さにはサンチメエトル、質量にはグラム、時間には秒を以て表はす式。理論上の計算に用ふる諸量の單位は、すべて、この三種の基本單位より適當に組立つべきものとす。しいじいえす法。「同じ。

しいじいえす-はふ 【名】CGS法 前條に

しいじい-もんもん 【名】文字紋紋 文字と繪畫。「幼兒の語」

じ-いしき 自意識 【名】〔哲〕『英 Self-consciousness』心理上、自己は何を意識するかを知る意識。自ら自己の心の狀態を反省すること。これを論理・宗教の上に用ふる時は、自覺と同義に歸す。自識。自己意識。

し-いしくわい 市醫師會 【名】一市内に於ける醫師によりて組織せられし醫師會。

しいじん 西淨 【名】せいちん(西淨)に同じ。

しいじんぐ (英 Sheasline) 【名】船底の腐蝕し、又はこれに海草の附著するを防ぐために、水線以下を薄き銅又は黃銅板又は木板などにて包被すること。

し-いしゆ 旨趣 【名】ししゆ(旨趣)の音便。

しいす 弑す 【動佐變他】『しいは弑の字の音の音便』君父を殺す。「る鞘。

しいす (英 Sheath) 【名】萬年筆などを入

しいそお (英 Seesaw) 【名】細長き板を中央の臺に載せ、その兩端に一人づつ相對して跨り、かはるがはる力を込めて壓すれば、一方は上り一方は下るを、繰返して行ふ遊戲。天秤あそび。べたんこ。

し-いだす 爲出す・仕出す 【動四他】■なしいだす。つくりいだす。しいづ。十訓「我れとしいだしつる事は、いかにも、くやしきかた多かりなん」

しいちはん 四一半 【名】雙六(ロク)より轉じたる一種の博奕(バク)。四一半錢。東鑑「以二田地一爲二博奕賭事一……大宮三郎盛員興二豐島又太郎時光一相論武藏國豐島庄大倉名一大宮有忠打二四一半一事起也」

しいちはん-うち 四一半打 【名】四一半を打つ人。東鑑「籠二置惡黨並四一半打一」

しいちはんせん 四一半錢 【名】しいちはん(四一半)に同じ。東鑑「雙六者、於レ侍者可レ被レ許之、至二下臈者一、永可レ令レ停二止之一四一半錢目勝以下、種種品態、不レ論二上下一一向可レ被二禁制一」

しいつ (英 Sheet) 【名】しいとに同じ。

し-いづ 爲出づ・仕出づ 【動下二他】しいだす(爲出す)に同じ。〔古語〕源氏「しいでたるわざ、いひいでたることの中に」

しいと (英 Sheet) 【名】しきふ(敷布)に同じ。

し-いとう 【貌】牛馬を使役する時の掛聲。進め促すには、しい、止むるには、どうといふ。

しいとく 至德 【名】しとく(至德)の音便。

しいね 羊蹄 【名】〔植〕ぎしぎし(羊蹄)に同じ。

じいのかみ 侍醫頭 【名】侍醫寮の長官。勅任官にして、寮務を掌理し、侍醫を統ぬるもの。

じいはり 【貌】じはりに同じ。

し-いふ 私邑 【名】一個人の領地。

しいぶ (英 Sleeve) 【名】海底電線布設船の舳(ヘ)又は艫(モ)に取附けたる大なる鐵車。

じいほ 侍醫補 【名】侍醫寮の職員。侍醫を助くる奏任官。侍醫の定員内において置かる。

じいめんとう ジイメン燈 (英 Siemen) 【名】瓦斯燈の一種。燃燒產物を室外に導く裝置を施したるもの。

し-いん 子音 【名】〔語〕■父音と母音との配合によりて、成れる音。即ち、五十音中、「あ・い・う・え・お」の五母音を除きたるもの。音節・熟音。■ふいん(父音)に同じ。

し-いん 私印 【名】一私人の用ふる印形。かいん(官印・公印等に對して)

し-いん 市隱 【名】『晉書の劉惔傳に「隱之爲道、朝市可レ隱、市亦可レ隱、隱初在レ我、不レ在二於物一」とあるに本づく』山林などに隱るることなく、市中に住みて、隱者となること。「大隱は市に隱る」參照。

し-いん 資蔭 【名】父祖の勳功のお蔭にて、官吏となること。おんね(蔭位)參照。

しいん (英 Scene) 【名】光景。場面(ジヤウ)。

じいん 寺印 【名】寺院の印章。寺判。

じ-いん 自印 【名】自己の印章。

じ-いん 自因 【名】〔哲〕じこげんいん(自己原因)に同じ。

しいんぎざう 私印僞造 【名】〔法〕他人の印章を僞造すること。

しいんぎざう-ざい 私印僞造罪 【名】〔法〕行使の目的にて、他人の印章、若しくは署名を僞造し、又は他人の印章若くは署名を不正に使用し、又は僞造の印章、又は署名を使用せるに依りて成立する罪。

しいん-しよくぶつ 嗜陰植物 【名】〔植〕『英 Shade plants』陰濕の地を好む植物の總稱。羊齒(シ)植物の多くは、これに屬す。(晴光植物に對して)

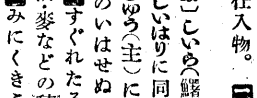
しいん-ぞうよ 死因增與 【名】〔法〕贈與者が死亡せるに因りて、效力を生ずる贈與。遺贈の規定に從ふものとす。

しいん-たうよう 私印盜用 【名】〔法〕他人の印章を盜捺して、不正に使用すること。

じいん-ほふしんわう 慈胤法親王 【名】〔人〕後陽成天皇第十三の皇子。清宮・常修院宮、また梶井宮といふ。天台の座主。元祿十二年薨ず。年八十二。

しいんり 紫隱里 【名】横井也有の庵名。親友けぶの無馳走は、紫隱里の掟にして」

しいら 鱪・勒魚・鮹金山・寄魚・鬼頭刀 【名】〔動〕硬骨類に屬する海魚。南海に產し、大さ二三尺に至る。頭、方形にて、身は扁く、色は背部青黑色にして紫色の光輝あり。且つ暗藍色の斑點散在し、腹部は銀白色に微黃を帶ぶ。脊鰭は頭上より、臀鰭は體の中央下部より起りて、共に尾鰭の附近に達す。皮厚く、肉白し。群居を好み、一群、萬を以て數ふべしと。まんびき、とうやく。ひうを。にんさく。ねこづら。ひいを。



(らいし)

しいる 【名】〔動〕前條の轉訛。

しいる 仕入る 【動下二他】商人が、轉賣の目的にて、生產者又は卸賣商より、商品を買入る。

しいれ 仕入 【名】仕入るること。商品の元仕込。

じいれう 侍醫寮 【名】宮内省の被管。頭(カミ)一人(勅任・主事三人(奏任)・侍醫二十五人(勅任又は奏任)・侍醫補(奏任)・醫員十人(判任)・藥劑師長一人(奏任)・藥劑師三人(奏任)・藥劑生八人(判任)の職員ありて、拜診・進藥・調劑及び衞生に關する事務を掌る。じいきよく(侍醫局)□參照。

しいれ-がかり 仕入掛 【名】しいれかた(仕入方)に同じ。

しいれ-がき 仕入書 【名】商品の仕入に關する事項を記載せる書面。

しいれ-かた 仕入方 【名】商店にて、商品の仕入を擔當する者。しいれがかり。

しいれ-げんか 仕入元價 【名】かひいれねだん(買入値段)に同じ。

しいれ-こさく 仕入小作 【名】〔農〕我が國の小作法の一。地主より、肥料その他の必要品を、小作人に給するもの。

しいれ-ち 仕入地 【名】商品を仕入れし地。

しいれ-ちやう 仕入帳 【名】しやうひんしいれちやう(商品仕入帳)に同じ。

しいれ-ねだん 仕入値段 【名】かひいれねだん(買入値段)に同じ。

しいれひん 仕入品 【名】次條□に同じ。

しいれもの 仕入物 【名】■仕入れたる商品。買入品。仕入物。□出來あはせの粗惡なる品。

しいわり 【名】〔動〕しいら(鱪)の轉訛。

しいわり 【貌】じいはりに同じ。

しう 主 【名】しゆう(主)に同じ。然しいさかしうにものいはせぬこそ美ましけれ」

しう 秀 【名】■すぐれたること。ひいでたること。□稻・麥などの穗。

しう 醜 【名】■みにくきこと。醜惡。□惡しき所爲。缺點。□はぢ。汚辱。その醜を忘る【句】「愛しては、その醜を忘るるを見よ。

しう 州 【名】■くに。□支那の行政區劃の一。郡・縣の上に位す。□『英 State 又 Province』歐米諸國の行政區劃の一。例へ

ば亞米利加合衆國のカリフオルニヤ州、鑛西亞の沿海州など。

しう 周 【名】■めぐり。まはり。■(數)『英 Perimeter』直線形の境界線の長さ、また多角形の各邊の總和。■支那の國號の一。武王を祖とし、殷に次いで起り、三十七王、八百六十七年(西曆前一一二二年より同二五六年まで)にして亡ぶ。四こうしう(後周)を見よ。

しう 週 【名】■日・月・火・水・木・金・土の七曜日の總稱。■七日間の稱。

しう 洲 【名】(地)■す(洲)に同じ。■地球上の大陸を分ちたる名稱。ごだいしう(五大洲)參照。

しう 岫 【名】■山にある穴。いはあな。ほら。くき。■山のいただき。峰。

しう 囚 【名】牢舍に囚はるること、又その人。とらはれ人。めしうど。

しう 繡 【名】ぬひとり。ぬひもやう。

しう 臭 【名】■にほひ。かほり。■惡しきにほひ。くさみ。■あしき名聲。

しう 羞 【名】はにかむこと。羞恥。

しう 四有 【名】(佛)『有は、五蘊の色身の、中陰を經て、因果酬報し、輪轉して息まざる意』生有(シヤウ)・本有(ホンヌ)・死有(シウ)・中有(チウ)の總稱。

しう 死有 【名】(佛)前條を見よ。

しう 絲雨 【名】絲の如き雨。霧の如き雨。ささめ。ぬかあめ。細雨。

しう 積雨 【名】せきう(積雨)を見よ。

しう 紫芋 【名】(植)たうのいも(唐芋)に同じ。

しう 子羽 【名】(人)支那列仙傳中の人物。嘗て玉を携へて河を渡りしに、鮫に妨げられしかば、これを斬りて、河神を驚かしたりといふ。

しう 爲得 【動下二自】爲し得。しおほす。しとぐ。竹取翁、しえたりとのたまひて」

しう 州 【接尾】■國名を支那風に略していふ時附くる語。「上州」「薩州」■人名を國名めかして呼ぶ時に附くる語。(俚語)「旗本城色三昧錄」源州幕方より無常心になりて」色男十八三文「船州いざ言問はん、首尾の松はとうに過ぎたか」

しう 周 【助數】或地域の外延をめぐる度數。「公園を一周す」

しう 週 【助數】しうかん(週間)に同じ。「一週に二回の發行」

じう 獸 【名】けもの(獸)に同じ。

じう 獸を逐ふ者、目に太山を見ず 【句】『淮南子の說林訓に「逐レ獸者目不レ見二太山一」とあり』「鹿追ふ者は山を見ず」に同じ。(諺語)

じう 柔 【名】やはらかきこと。力よわきこと。

柔も亦茹(ク)はず、剛も亦吐かず 【句】『詩經大雅の烝民篇に出づ』弱きとて侮らず、強きとて怖れず。(諺語)

柔能く剛を制す 【句】『三略に「軍機曰、柔能制レ剛、弱能制レ強」とあるに本づく』おとなしき者は、却りて強き者に勝つ。(諺語)

じう 時雨 【名】■ほどよき時に降る雨。■しぐれ(時雨)に同じ。

時雨の化 【句】『孟子盡心の章に「有下如二時雨化一之者上」とあるに本づく』君の敎化を、時雨の萬物を成育するに譬へていふ語。

仰いで時雨の化に沾(ウル)ふ 【句】師に對して、學業の成るを謝する義。

じう-あく 醜惡 【名】みにくく、よからぬこと、又その物。

じう-あふ 周亞父 【名】(人)支那漢の武將。勃の次子。軍紀嚴肅惡も假さず、文帝大いに之を賞す。景帝の時功を以て丞相に至る。のち誣告せられて獄に下り、遂に食はずして死す。

じう-い 醜夷 【名】みにくきえびす。しこのえびす。

じう-い 縕衣 【名】ぬひとりのある衣服。

じう-い 秋意 【名】秋の氣もち。秋の感じ。

じう-い 愁意 【名】ものおもひの心。うれふる心。うれひ。

じう-い 獸醫 【名】■獸類の疾病を治療する醫師。■陸軍獸醫部の士官部の事務を掌るもの。明治十八年に設けられ、一等より三等に至る。

じう-いう 舟遊 【名】ふなあそび。

じう-いう 周遊 【名】諸處をめぐりて遊ぶこと。回遊。

じういう-くわん 脩猷館 【名】筑前國の舊福岡藩の學校。天明四年藩主黑田齊隆(ナガリ)の創立。明治三年廢せらる。

じう-いがく 獸醫學 【名】獸畜の衛生・治病・蕃殖等を研究する學問。

じう-いがくかう 獸醫學校 【名】■獸醫學を敎授する學校。■りくぐんじういがくかう(陸軍獸醫學校)の略。

じう-いがくし 獸醫學士 【名】大學農學部の獸醫科を卒業したる人の稱號。

じういがく-はくし 獸醫學博士 【名】博士の一。獸醫學の蘊奧を極めたる者に授くるもの。

じう-いかん 獸醫監 【名】■明治十八年に置きたる陸軍獸醫部の上長官。■りくぐんじういかん(陸軍獸醫監)の略。

じう-いげふ 獸醫業 【名】獸醫たる業務。

じう-いせき 獸醫籍 【名】農商務省に備へ附けて、獸醫免狀を有する者の氏名・本籍を登錄する帳簿。

じう-いつ 秀逸 【名】■すぐれてあること、又その物。■(文)かんぎん(感吟)四に同じ。

じう-い-ぶ 獸醫部 【名】■陸軍の馬醫部に代りて、明治十八年設けられたる一部局。馬匹及び軍人の食料に供する諸獸の治療を掌りし所。獸醫監・獸醫・看馬長などの職員ありき。■りくぐんじういぶ(陸軍獸醫部)の略。

じう-いん 收陰 【名】しふくぢよせい(織女星)に同じ。

じう-いん 秋陰 【名】秋のくもり。

じう-いん-めんきよしよう 獸醫免許證 【名】臺灣にて、臺灣總督より獸醫に下附する免許證。

じう-いん-めんじやう 獸醫免狀 【名】農商務大臣が獸醫に下附する免許狀。

じう-う 驟雨 【名】にはかに降りくる雨。にはかあめ。ゆふだち。

じう-う 秋雨 【名】秋降る雨。あきさめ。

じう-う-う 愁鬱 【名】うれひて氣のふさぐこと。憂鬱。

じう-うん 秋雲 【名】秋空の雲。

じう-うん 愁雲 【名】愁の氣の滿ちこもること。うれへのくも。

じう-えい 修營 【名】家などを造り營むこと。

じう-えき 就役 【名】囚人が苦役に服すること。

じう-えき 囚役 【名】囚人の苦役。

じう-えき 獸疫 【名】『英 Animal plague』■家畜に發する流行病。■獸疫豫防法にて、牛・馬・羊・豚・犬の流行病。

じう-えき-かかく 收益價格 【名】(經)『英 Revenue value』經濟上の財貨が間接に利益を生ずる場合の價格。(使用價格に對して)

じう-えき-けいさつ 獸疫警察 【名】(法)衞生警察の一。獸疫の防止を目的とするもの。

じう-えき-けっせい-せいさくしよ 獸疫血清製造所 【名】臺灣總督府殖産局に附屬し、

獣疫の血清を製造することを掌る所。

しうえきざいさん 收益財産【名】〔法〕ざいせいざいさん(財政財産)に同じ。

しうえきぜい 收益稅【名】〔經〕收益その物又は收益を生ずる物件に課する稅。地租家屋稅營業稅はその主なるものなり。收入稅。

じうえきてうさじょ 獣疫調査所【名】農商務省農務局の一部をなし、家畜に關する疾病の調査及び試驗、並びに血清等の製造配附に關する事項を掌る所。

しうえふわかしふ 秀葉和歌集【名】〔書〕烏丸資慶(スケノリ)の歌集。附錄に、三行記とて、高野の紀行文あり。二卷。

しうおん 喙音【名】〔語〕しびらんとに同じ。

しうおんさい 酬恩祭【名】〔基〕しやおんさい(謝恩祭)に同じ。

しうか 秀歌【名】秀逸なる和歌。よきうた。平家秀歌と覺しきを、百餘首書き集められたりける卷物を」「め。

しうか 秋稼【名】秋のとりいれ。あきをさ

しうが 周雅【名】〔文〕詩經に載せたる大雅と小雅との總稱。「界。

しうかい 州界【名】くにざかひ。州境。國

しうかいだう 秋海棠【名】〔植〕秋海棠科に屬する多年生の草。庭園に植ゑて、花を賞す。春、地下莖より芽生じて、高さ二尺ほどに達し、枝を分ち、葉莖、共に柔軟多漿にして、莖枝の節は赤色を帶び、葉は不正形の卵狀にして、先端鋭く光る。秋、淡紅色なる花を開き、蒴果(サクカ)を結ぶ。寛永十八年に支那より渡來せりといふ。やうらくさう。べにいとばな。

(うだいかうし)

しうかいだうくわ 秋海棠科【名】〔植〕顯花植物被子類雙子葉門離瓣花區に屬する一科。草本又は多少の木質を帶び、多漿なり。熱帶における濕潤諸地に廣く分布す。秋海棠、ベコニヤ等、これに屬す。

しうかう 酒肴【名】しゅかう(酒肴)に同じ。

しうかう 舟行【名】船にて行くこと。

しうかう 舟航【名】ふなたび。ふなぢ。航海。海路。「ること。

しうかう 周航【名】ある地點を一巡航す

しうかう 醜行【名】みにくき所行。恥づべきおこなひ。「際(ハリ)。

しうかう 醜交【名】男女のみだらなる交

しうかう 修好・修交【名】『好(ヨシ)を修めただす義』國と國と親しく交際すること。國際間の交誼を善くすること。

しうかう 修行【名】をさめおこなふこと。執行すること。身に踐(ヲ)行ふこと。しゆぎやう。

しうかう 讎校【名】他と對照して校(カウ)へ正すこと。

しうかう 周耕【名】〔人〕大和國多武峯(タフノミネ)に住みし畫僧。雪舟に學び、水墨の山水、人物を巧にせり。永正頃の人。

しうかう 秋郊【名】秋の郊野。

しうがう 秋毫【名】■秋に至りて脫けかはりたる獸の毛の、末細く銳きもの。■きはめて微細なること。

秋毫の末【句】『孟子の梁惠王上篇に「明足二以察一秋毫之末一とあるに本づく』前條(一)を強めていふ語。

じうかう 獸行【名】■人としてあるまじき行爲。■獸慾を遂ぐる所行。

じうがう 柔剛【名】がうじう(剛柔)に同じ。

じうかうてうやく 修交條約【名】〔法〕『佛 Traité d'amitié』未だ完全に國際法の原則を守らざる國と交際するために締結する條約。

しうがく 收額【名】收入の金額。とりいれだか。みいりだか。

しうがく 就學【名】學校に入り又は師に就きて、學問を始むること。

しうがく 修學【名】學問をならふこと。

じうがく 獸革【名】獸の皮のなめしたるもの。なめしがは。

しうがくぎむ 就學義務【名】學齡に達せる兒童を、保護者が小學校に入學せしむる義務。

しうがくじどう 就學兒童【名】小學教育を受けをる學齡兒童。

しうがくしやうしよ 修學證書【名】或學術を修了したる者に、該學校より交附する證書。

しうがくせい 修學生【名】■修學せる生徒。■〔佛〕東寺の住侶。

しうがくぢ 就學地【名】就學せる土地。

しうがくりよかう 修學旅行【名】學問の實地研究のため、敎師が生徒一同を伴ひて催す旅行。

しうがふ 收合【名】をさめあはすること。あつめあはすること。

しうかん 收監【名】■ひとやに入るること。■〔法〕監獄に拘禁すること。

しうかん 醜漢【名】■醜惡なる男子。■「物。

しうかん 醜行【名】醜行をなす男子。

しうかん 週刊【名】一週日に一回の刊行

しうかん 週間【名】一週日の間。

しうかん 週間【助數】週を單位として、期間を示すに用ふる語。週。「三週間」

しうがん 秋雁【名】秋わたり來る雁。

しうがん 岫巖【名】〔地〕支那滿州盛京省の南部、新開嶺の西にある地。日清日露の兩役によりて著る。又、大理石に富み、岫巖石と稱し、諸種の裝飾品を細工す。

しうかんしんぶん 週刊新聞【名】各一週間に一回づつ發行する新聞。

しうかんじやう 收監狀【名】〔法〕檢事より收監を命令する文書。

しうがんせき 岫巖石【名】〔鑛〕しうがん(岫巖)を見よ。

しうき 週期【名】■ひとまはりの時期。■〔理〕『英 Period』一定の時間ごとに、同一の現象の起る場合の、その一定の時間。例へば振動體の一振動に要する時間、一の天體が他の天體の周邊を運行して、再び前と同一の關係的位置に復するまでの時間の類。

しうきうんどう 週期運動【參照】■【數】『英 Period』自變數が、一定の値を增すごとに、それと等しき値を函數が取る時、その自變數の一定の增量。f(x+a)=f(x)なる時のa。これなり。

しうき 周忌【名】くわいき(回忌)に同じ。新古今「覺快法親王かくれ侍りて、周忌のはてに、菜所にまかりて」

しうき 臭氣【名】わるき臭。くさみ。惡臭。

しうき 秋氣【名】秋のけしき。秋のけはひ。「節。

しうき 秋季【名】■秋の末。■秋の時

しうき 溲器【名】病人老人などの、室內にて、小便を排泄するに用ふる器。しびん。

しうぎ 修技【名】技術ををさむること。

しうぎ 祝儀【名】『祝の字の音、正しくはしゅく』■祝の儀式。賀儀。■祝賀としての贈る金錢又は品物の稱。ひきで物。■はな。纏頭(テンタウ)。心附。孝經緯(キヤウケツヰ)八十八勘の馬追に祝儀取らせて」

しうぎうた 祝儀歌【名】昔、藝妓が一座を納むる時に歌ひし唄。淨瑠璃にては「老松(オイマツ)」、長唄にては「菊慈童(キクジドウ)」の類にて、結曲の一節を歌へり。

しうきうんどう 週期運動【名】〔理〕『英 Periodic motion』一定の時間を經れば、常に同一の狀態に復歸する連續的の運動。その一定の時間を週期といふ。

しうきえんしふ 秋季演習【名】〔兵〕秋季行はるる軍事上の各種の演習。中にも機動

演習をその主なるものとす。軍隊運用の能力を發達せしむるは、一にこの演習にありとす。

しうきかんすう 周期函數【名】〔數〕『英Periodic function』周期[二]の性質を有する函數。三角函數は、その正弦・餘弦・正割・餘割は2πの周期を有し、正切・餘切はπの周期を有するが故に、これに屬す。

しうーきく 秋菊【名】あきぎく(秋菊)に同じ。

しうーきく 蹴鞠【名】『しうは蹴の字の音しゆくの訛』けまり(蹴鞠)に同じ。

蹴鞠の家【名】蹴鞠を世業として、朝廷に仕へし諸家。飛鳥井・冷泉・難波・綾小路のごとき、これなり。

蹴鞠の三神【句】さんじん(三神)の條下を見よ。

じうーきく 獣畜【名】[一]『獣類を畜(カ)ふと同樣に取扱ふ義、即ち養ふ意』ただ愛するのみにて、尊敬せぬこと。[二]じうちく(獣畜)を見よ。

しうきくわうれいさい 秋季皇靈祭【名】

しうきくわうれいさい 秋季皇靈祭【名】

しうきさとう 祝儀座頭【名】徳川時代に、町家に祝儀・不祝儀のある時、座頭ども、中には薄目明も交りて、綿服に見苦しき袴を著け、その家に赴きて、金錢を強請せしもの。おめでたざとう。紅葉宇都谷峠「同じ盲人のその中でも、祝儀座頭は撿挍や勾當なぞが貸金の催促に歩くゆゑ、意地の悪いものとはきけど」

しうきしんでんさい 秋季神殿祭【名】しんでんさい(神殿祭)を見よ。

しうぎじよ 修技所【名】陸軍測量部に置き、陸地測量の技手を養成する所。

しうきすゐせい 週期彗星【名】〔天〕『英Periodic comet』一定の週期を以て、吾人の視界内に復歸する彗星。すべて太陽の周圍に楕圓狀軌道を畫きて運行す。雙曲線狀の軌道を畫く彗星は永久に歸來することなし。

しうぎぢやうちん 祝儀提燈【名】昔、劇場にて、顏見世興行の前、看板の出揃ふまで、木戸の右側の上窓に、吊出しし長き提燈。赤地にて、役者の定紋と名前とを記したり。

しうーきつ 臭橘【名】〔植〕からたち(枸橘)に「同じ。

しうきつていりつ 週期定律【名】〔化〕しうきりつ(週期律)に同じ。

しうきどめ 臭氣止【名】便所その他惡臭ある處に撒布して、その臭氣を消すに用ふる、一種の藥品。アルボオス・片腦油等の類。防臭劑。

しうぎふくさ 祝儀紱紗【名】祝儀の贈物などにする時用ふる紱紗。色彩の華やかなるもの、又は日出度き圖樣あるものを用ふ。精進紱紗に對して)

しうきふーでん 賑急田【名】『急を賑(スク)ふ田の義』不輸租田の一。王朝時代、凶荒に窮する者を賑救するために、諸國に充て置きし田。「じ。

しうぎぼう 祝儀棒【名】ほいたけぼうに同

しうーきん 就擒【名】とらへらるること。とりことなること。「と。

しうーきん 囚禁【名】とらへて禁獄すること。

しうーきん 囚擒【名】とりこにすること。とらへらるること。「牧入の金錢。

しうーきん 收金【名】金を取入るること。

しうーきん 繡衾【名】錦のふすま。ぬひとりの飾ある美しき夜著。

しうーきん 鰍筋【名】鯨の腹腔背部にある筋を、清水に浸して、脂油を去り、また粘膜を除きて吊下げ、下端に重き石を吊して、伸長せしめ、日に乾したるもの。その色、黃なると、赤褐なるとあり。我が國にては、弓弦に使用し來りしが、支那にては、貴重の料理品として、食用に供す。鯨筋(ケイキン)。

しうーぎん 秀吟【名】[一]秀逸なる詩歌。[二]〔文〕かんぎん(感吟)[四]に同じ。

しうぎん-はふ 收銀法【名】鑛石又は鈲(カス)に含める銀分を抽收する濕式製煉法。沈澱法に屬す。「じ。

しうーきやう 州境【名】しうかい(州界)に同

じうーぎやう 獣形【名】獣類の形象。

獣形の帽額(モカ)【句】もかう(帽額)の條下を見よ。

じうぎやうーまん 獣形幔【名】前條に同じ。

しうきゆう 秋宮【名】ちやうしうきゆう(長秋宮)の略。

しうーきよ 收去【名】とりさること。

しうきよう 秋興【名】秋の感興。

しうきよく-せい 周極星【名】〔天〕『英Circumpolar stars』恒見圏内に在りて、地平線の下に沒せずに、常に見ゆる星の總稱。極星。

しうきりつ 週期律【名】『英Periodic law』[一]反復的に繰返されて示す一定の規律。[二]〔化〕げんそしうきりつ(元素週期律)の略。

しうーく 秀句【名】[一]詩歌などの中の、秀逸なる語句。[二]秀逸なる詩歌。[三]たくみなる洒落(シヤ)。いひかけ。かるくち。すく。徒然「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは、ほふしとこそ申さめといはれけり。いみじきしうくなりけり」榮花物語「中古、口合を秀句と改め、秀句を地口とあらたまる」

しうーくう 愁苦【名】うれひ。苦痛。

しうーくう 秋空【名】あきのそら。秋天。

しうくーがらかさ 秀句傘【名】次條に同じ。

しうくーだいみやう 秀句大名【名】能(ノウ)の狂言の一。大名、秀句を巧にする者を抱へんとて、太郎冠者に命じて、一人を連來らせ、秀句とて、譯もなき雜言を陳べしを、感心したる樣子をなし、衣類も刀も、皆褒美に與へ、終に秀句は寒いものぢやと獨語する事を作りしもの。

しうーぐん 舟軍【名】ふないくさ。舟師。海軍。水師。「方。

しうーぐん 州郡【名】[一]州と郡と。[二]地

しうーくわ 繡花【名】ぬひとりの花模樣。

しうーくわ 秋果【名】秋に熟する果實。

しうーくわ 蠶花【名】〔植〕しうくわじよ(蠶花序)に同じ。「同じ。

じうーくわ 蘗果【名】〔植〕かんくわ(柑果)に

しうくわ-あんもにうむ 臭化アンモニウム(英Ammonium bromide)【名】〔化〕鹽類の一。アンモニヤに臭化水素酸を化合せしめ、もしくは臭素をやや過剰のアンモニヤ水に作用せしめて製する、無色の結晶或は白色の結晶性粉末。一・五分の水、一五〇分の酒精に溶解し、久しく空氣に接すれば、やや酸化して微黃色を帶ぶ。醫藥として、臭化カリウムと同樣の効を奏す。臭素あんもにうむ。ぶろおむあんもにうむ。

しうーくわい 周回【名】まはり。めぐり。

しうーくわい 醜怪【名】みにくく奇怪なること。

しうーくわい 秋懷【名】秋の感想。秋思。

しうーくわい 愁懷【名】うれひおもふこと。愁思。「と。しうそ。

しうーくわい 臭穢【名】くさくきたなきこと。

しうくわ-えちる 臭化エチル(英Ethyl bromide)【名】〔化〕酒精と硫酸とに臭化カリウムを徐徐に加へ、蒸溜して製する揮發性の液體。純品は無色・透明にして、エエテル樣芳香と灼(シヤク)がごとき味とを有し、麻醉藥に用ひらる。ぶろおむえちる。ぶろおむえたん。ぶろおむえてる。

しうくわ-えん 臭化鹽【名】〔化〕臭素と化合して生じたる鹽(エン)。

しうくわ-かりうむ 臭化カリウム(英Potassium bromide)【名】〔化〕臭素酸カリウムを分解して得る、白色・方形の結晶物。水に溶け易く、臭化鹽中、最も要用の品にして、臭化物を造る原料となり、また催眠鎭痙等の目的にて、醫藥に用ひらる。臭素加里。臭素かりうむ。ぶろおむかりうむ。臭化ぼたしうむ。臭剝(ボウ)。

しうくわ-ぎん 臭化銀【名】〔化〕『英Silver bromide』硝酸銀の溶液に臭化カリウムの溶液を加へて得る、帶黃白色の沈澱物。光線に遇へば變色する故、寫眞術の乾板に用ひらる。

しうーくわく 收穫【名】作物を刈取りて收納すること。かりいれ。とりいれ。

收穫遞減【句】〔經〕『英Diminishing return』土地の生産力には限度ありて、これを超ゆれば、資本・勞力を增加するとも、生産力これに比例して增加せず、却りて比較上減少する傾あるものなりといふこと。英國の經濟學者リカアド(David Ricardo)の唱導に依る。地力漸減。收益遞減。

しうくわく 秋穫【名】秋になりて、作物を刈取ること。秋收。

しうくわくき 收穫期【名】收穫の時期。とりいれどき。

しうくわくき 收穫器【名】收穫に用ふる農具。例へば稻扱(こき)・萬石通(まんごく)など。

しうくわくづき 收穫月【名】〔天〕『英 Harvest moon』北溫帶以北において、秋分の頃、毎夕殆ど同時刻に滿月の昇るを見るもの。地平線に對する黃道の傾斜最も少なき時なるに因る。

しうくわくはいぶんほふ 收穫配分法【名】〔農〕地主は土地或は資本を出し、小作人は勞力或は資本を出して耕作し、一定の割合によって、粗生產・純生產を分配する法。分益農法。つくりわけ(作分)參照。

しうくわじょ 蠶花序【名】〔植〕『羅 Gomphrena』總狀花序の一種。本科植物の花穗の一部を構成する小花穗即ち小花群の稱。その外部は、二枚の顎(がく)によりて被はる。蠶花。

しうくわすゐそ 臭化水素【名】〔化〕『英 Hydrogen bromide』鹽化水素に酷似し、刺戟性の臭氣を有する無色の氣體。燐と水とに臭素を作用せしめ、又は臭素と水素とを混じ、熱したる白金の上を通じて製す。極めて水に溶け易く、その水溶液は、酸性強く、鹽素に遇へば直ちに臭素を遊離す。ぶろおむ水素酸。臭化水素酸。

しうくわすゐそさん 臭化水素酸【名】〔化〕『英 Hydrobromic acid』前條に同じ。

しうくわそぢうむ 臭化ソヂウム《英 Sodium bromide》【名】〔化〕しうくわなとりうむ臭化ナトリウム)に同じ。

しうくわつ 柔滑【名】なめらかにして、やはらかきこと。

しうくわなとりうむ 臭化ナトリウム《英 Natrium bromide》【名】〔化〕鹽類の一。白色の結晶性粉末。製法、臭化カリウムに類し、一二分の水、一〇分の酒精に溶解す。醫藥に用ひて、臭化カリウムと同樣に神經を鎭靜する効あり。臭素なとりうむ。臭化そぢうむ。ぶろおむなとりうむ。

しうくわぶつ 臭化物【名】臭素と化合して生じたる物、即ち臭化カリウム・臭化銀等の總稱。

しうくわへいげつ 羞花閉月【句】『その美貌に對して、花もはぢらひ、月もかくるとの義』婦人の容貌の極めて美なるに譬へていふ語。沈魚落雁。

しうくわぼたしうむ 臭化ボタシウム《英 Potassium bromide》【名】〔化〕しうくわかりうむ(臭化カリウム)に同じ。

しうくわん 秋官【名】『しうけい(秋刑)を見よ』裁判官。司法官。

しうくわん 州官【名】州を治むる官。地方官。

しうくわんめちる 臭化メチル《英 Methyl bromide》【名】〔化〕アルコールと燐とを混合したるものに、臭素を加へ、熱して得る液。無色にして、クロロホルムに似たる臭氣あり。

しうけい 收繫【名】獄屋に收容してつなぐこと。

しうけい 囚繫【名】とらへ繫ぐこと。

しうけい 秋景【名】秋の景色。秋光。

しうけい 秋刑【名】『秋は草木の凋(しぼ)む時なるより、刑罰に譬ふ』しおき。刑罰。本卒此「一人づつ大名に預けらる。その秋刑を待つほどに」

しうげう 秋曉【名】秋のあかつき。

しうけうくわん 修敎館【名】江戸幕府領内の學校の一。文政八年佐渡國相川廣間町に設け、明治六年縣學とす。

しうげつ 周閱【名】『閱はをはる義』一周年のをはり。一回忌。東鑑「迎二故幕下將軍周閱御忌辰一」

しうげつ 秀傑【名】ひいでてすぐれたること、又その人。

しうげつ 脩潔・修絜【名】行をさまりて、潔白なること。「夜の月。

しうげつ 秋月【名】■秋の季節。■秋の夜の月。【名】〔人〕畫僧。長門國の人。俗姓は高城、名は等觀。雪舟に學ぶ。永正・大永頃の人。

しうげつ 醜業【名】醜行を職業とすること。即ち淫賣の類。

しうげふ 就業【名】■仕事にとりかかること。■業を成就すること。

しうげふ 修業【名】學問・藝術を修め習ふこと。しゅげふ。

しうげふくわん 修業館【名】舊龍岡藩の學校。安政六年に藩主松平乘謨(のりかた)江戸麻布に創建し、明治に至り、信濃國佐久郡田野口村に移し、のち廢す。

しうげふしやうしよ 修業證書【名】或學術・技藝を修了したる者に付與する證書。

しうげふふ 醜業婦【名】淫賣婦。ぢごく。

しうけん 州縣【名】州と縣と、又は地方。

しうげん 祝言【名】『祝の字の音、正しくはしゅく』■祝賀のことば。婚禮。■祝言能の略。

しうげんのう 祝言能【名】武運を祈り、國家の泰平を祝ふ作意の謠曲。「岩船」・「猩猩」などの類。祝言。「江戸時代の語」

しうご 秋後【名】秋季に入りしのち。

しうこう 收公【名】官府に取上ぐること。じゅこう。もっしゅ。ぼっしう。東鑑「河村三郎義秀、被二收公河村郷輔一」盛衰記「末寺庄園及彼寺僧等私領、仰二諸國之宰吏一、早可レ令二收公一」

しうこう 周公【名】〔人〕支那の政治家。周の文王の子。武王の弟。名は旦。武王を輔けて紂を滅し、魯に封ぜられ、成王を佐けて、禮樂を作し、康王立つや、また召公とこれを輔けて、文武の業を修む。周代の美績、多くはその經綸に成れり。

しうこうこし 周興嗣【名】〔人〕支那南北朝時代の梁の文人。字は思纂。高祖武帝に用ひられて、給事中に至り、普通二年歿す。その撰に係るもの、皇帝實錄・皇德記・起居註・職儀等百餘卷、文集十卷あり。又、命を奉じて、王羲之書千字文に次韻し、今に行はるるところの千字文を作る。

しうこく 州國【名】くに。州。

しうごく 收獄【名】捕へて獄に入ること。「ひとや。

しうごく 囚獄【名】罪人を入れおく處。投獄。

しうごくし 囚獄司【名】■しゅごくし(囚獄司)に同じ。■明治二年刑部省中に設けられ、同四年後、司法省の所管となりし役所。正・權正・大令史・權大令史・中令史・權中令史・少令史・權少令史の職員ありて、囚獄の事務を掌り、四年廢せられたり。

しうさ 收差【名】〔理〕『英 Aberration』光學器械において、光の束線の、一點に集らざる缺點のために、映象の鮮明を缺くこと。その主なるものは、色(しき)收差と、球面收差となり。

しうさい 秀才【名】■すぐれたる學才。才氣の秀でてあること。■古、支那にて、科擧の秀でてあること。■古、支那にて、科擧の第一次試驗に及第せし者の稱號。官職を得る資格とはならず。科擧廢止後、高等小學の卒業者にこれを與ふることとなれり。雅稱を孝廉といふ。茂才。■我が國大寶令の制規にて、中古の大學・國學より送られし貢人と學人との科試のために、定められし四科目中の一。博學高才の者を取り、品行方正にして、名行相副ふ者をこれに當て、その科試には、方略策二條を以って、しその出身者は、正八位上または正八位下に敍せられたり。然るに、天平二年文章(もんじょう)得業生の置かれてより、後世に至るまで、これを稱し、令制の名義とはやや趣を異にするに至れり。

しうさい 周歲【名】まる一年。滿一年。

しうさい 秋齋【名】〔人〕多田義俊の雅號。

しうさい 秋材【名】〔植〕木質部の、秋の間に生育するもの。秋季は材の生長のやや衰へたる時期なるを以て、年輪中の細密なる部分を形成す。(春材に對して)

しうさいかんご 秋齋閒語【名】〔書〕多田義俊(秋齋)の隨筆。各種の考證を記したる

もの。四巻。

じうさい-せい 秀才生【名】しゅんし(俊士)[二]を見よ。

じうさう 秋草【名】あきぐさ。

しう-さう 秋霜【名】[一]あきのしも。[二]『霜のごとく光り輝くよりいふ』刀剣の異名。[三]刑罰の威厳、又は志操・権威のおごそかなる譬。「琨玉(コンキ)秋霜」参照。「秋霜の威」

秋霜烈日【句】[一]秋の霜と夏の太陽と。[二]志操・権威のおごそかなる譬。

しうさう 周桑【名】〔地〕伊豫國十三郡の一。明治二十九年もとの周布(スフ)・桑村二郡を合したるもの。

しう-ざう 繍像【名】ぬひとりにしたる佛像。繍織したる肖像。「丈六繍像等成」

しう-ざう 修造【名】つくろひ。修復。平造「大内は久しく修造せられざりしかば」

しう-ざう 收藏【名】[一]とりいれて收めおくこと。[二]秋の收穫と、冬季その收穫物を藏め蓄ふることと。しう(四氣)参照。

しう-さく 搜索【名】そうさく(搜索)に同じ。

しう-さく 繍錯【名】[一]彩絲をまじへて刺繍すること。[二]入りまじへて文采を作ること。

しう-さふ 周匝【名】[一]めぐりまはること。とりまくこと。[二]あまねく行きわたること。

しう-さん 蓚酸【名】〔化〕『英Oxalic acid』有機酸の一。酢漿草(カタバミ)酸模(スイバ)その他種種の植物に、酸性カリウム鹽又は結晶狀の蓚酸カルシウムとなりて含まれ、また砂糖・脂肪、その他種種の有機物を硝酸にて酸化する際に、屡生成す。工業上にては、鋸屑を苛性ソオダにて分解して得たるものを、更に硫酸にて扱ひて製出し、また近來、蟻酸鹽より蓚酸鹽を製する法も用ひらる。有毒なる無色・柱狀の結晶物にして、硫酸を加へて熱すれば、炭酸ガスと酸化炭素とに分解す。往往眞鍮を磨くに用ひられ、その鹽類も有毒にして、色素の製造、インキ消に用ひらる。

しう-さん 秋蠶【名】秋に養ふ蠶。あきご。

しう-さん 秋山【名】秋季の山。あきやま。

じう-さん 蓚酸【名】たんにん(單寧)に同じ。

しうさん-えん 蓚酸鹽【名】〔化〕蓚酸を含める鹽類。蓚酸カルシウム・中性蓚酸カリウム・蓚酸第一鐵カリウム・蓚酸第二鐵カリウム・蓚酸アンチモンカリウム等これなり。何れも有毒なり。しうさん(蓚酸)参照。

しうさん-かるしうむ 蓚酸カルシウム(英Calcium oxalate)【名】〔化〕蓚酸鹽の一。カルシウム鹽の溶液に蓚酸を加へて得る、白色の物質。天然に植物體中に存在し、鋸屑より蓚酸を得る時の中間物にして、水に溶けがたし。

しうざん-たう 舟山島【名】支那浙江省寧波府に屬する島。寧波を距ること四十浬。清の咸豐帝の時、英佛聯合軍の根據地。

しう-し 祝詞【名】[一]神に告ぐる詞。のりと。[二]いはひの詞。賀詞。

しう-し 舟子【名】せんご(船頭)に同じ。

しう-し 舟師【名】ふないくさ。海軍。水戰。水師。

しう-し 收支【名】收入と支出と。

しう-し 歷史【名】歷史を編修すること。

しう-し 秀士【名】[一]勝れたる士人。[二]支那周代の制にて、地方の鄉より推薦せられ、司徒の試驗を經て擧に上せられたるもの。

しう-し 周子【名】〔人〕しうどんい(周敦頤)の尊稱。

しう-し 秋思【名】秋のものおもひ。秋懷。

しう-し 愁思【名】うれひおもふこと。思ひわづらふこと。愁懷。

しう-し 愁死【名】愁ひて死ぬること。うれへじに。太平記「料り知りぬ。我れ遂に謫居に愁死して歸ることを得じと」

しう-じ 修辭【名】[一]辭をととのへをさむること。[二]詩歌・文章の技巧を練ること。

しう-しう 秋收【名】秋になりて、作物をとりいるること。秋穫。

しう-しう 啾啾【貌】[一]勢なくあはれげに泣く聲。しくしく。「鬼哭啾啾」

しう-しう 颼颼【貌】[一]風の聲の形容。[二]銃丸などの空(クウ)を切て飛ぶ音の形容。

しうじ-がく 修辭學【名】『英Rhetoric』修辭に關する法則を敎ふる學問。美辭學。

しうしき 秋色【名】〔人〕江戸の女流俳人。名は、お秋。日本橋照降(テリフリ)町の菓子屋大月某の妻。其角の門人。菊後亭と號す。十三歳の時、上野山清水(キヨミヅ)堂の後なる櫻を見て、「井戸ばたの櫻あぶなし酒のゑひ」の詠あり。享保十年歿す。年五十七。

しうしき-ざくら 秋色櫻【名】俳人秋色に由りて名を得たる、東京上野清水堂の後なる井戸端の櫻。但し今存するは、後世植ゑつぎしものなり。前條參照。

しうしきだう 修式堂【名】平安京大内裡なる八省院の十二堂の一。永寧堂の北にありしもの。しゆしきだう。すしきだう。北ノ堂。卯酉ノ堂。

しうしき-きよく 修史局【名】明治八年に設置せられ、總裁・副總裁・局長・總閲・修撰等の職員ありて、修史の事を掌りし役所。もと正院(シヤウヰン)歷史課の改稱にして、同十年廢せられたり。

しうしきよく-そうさい 修史局總裁【名】修史局の長。修史の體裁を定め、その是非・筆削等の重大なるものは上奏・取裁し、兼ねて職員の進退を總掌せしもの。

しうしきよく-ちやう 修史局長【名】修史局の職員。局中の事務を處分し、編修各員の勤惰を監視することを掌りしもの。

しうしき-くわん 修史館【名】明治十年設けられ、總裁・編修官掌記・繕寫館長・幹事・監事の職員ありて、修史の事を掌りし役所。同十九年廢せられ、臨時修史局これに代れり。

しうしきくわん-そうさい 修史館總裁【名】修史館の職員。結文を總掌し、祕閣を管せしもの。勅任官。

しうしきくわん-ちやう 修史館長【名】修史館の職員。庶務を總理し、編修各官の勤惰を監視し、また祕閣の圖書を管せしもの。一等編修官、月番にて兼任せり。

しうしき-けいさん 收支計算【名】一定の期間における收入と支出との勘定。

しうしき-けっさん 收支決算【名】けっさん(決算)に同じ。

しうしき-しまつ 修史始末【名】〔書〕水戸藩の修史事業の始末を紀年的に詳錄したるもの。二卷。藤田幽谷の著。

しうし-そうさい 修史總裁【名】明治二年假に設けて、向後開かんとする各局の事務を總裁せしめたる職。

しう-じつ 週日【名】一週間の日、即ち七日間。

しう-じつ 秋日【名】秋の日。あき。

じう-しつ 柔質【名】やはらかなる質。柔順なる性質。

じう-じつ 柔日【名】『禮記の曲禮に「內事以二柔日一」とあり』十干の中の乙・丁・己・辛・癸に當る日、即ち陰の日。(剛日に對して)

しうじ-はふ 修辭法【名】修辭上の法則。

しう-しふ 蒐集・蒐輯【名】あつめよすること。寄せ集むること。

しう-しふ 收拾【名】ひろひ集むること。とりて纏むること。

しう-しふ 收輯・收集【名】收め集むること。まとめあつむること。

しう-しふ 修習【名】をさめならふこと。

しう-しふ 舟楫・舟檝【名】船とかぢと。舟楫の利【句】次條に同じ。

しう-じふ 舟楫の便【句】船に依る交通運搬の便利。舟楫の便。

しう-じふ 鏽澁【名】(ヰ)びて、ざらざらとなること。

しう-しん 修身【名】『禮記の曲禮に「修レ身踐レ言、謂二之善行一とあり』身ををさめ、行を正しくすること。

しう-しん 就寢【名】ふしどに入ること。眠ること。就蓐。「じ。

しうしん 周信【名】〔人〕ぎたう(義堂)に同じ。

しう-じん 州人【名】州の人。くにびと。

しう-じん 舟人【名】ふなびと。せんどう。かこ。舟子(コナ)。

しう-じん 愁人【名】ものおもひのある人。

しう-じん 囚人【名】めしうど。囚徒。

しう-じん 狩人【名】かりうど。獵師。役人。

しう-じん 獸心【名】道理を辨ぜずして、殘忍卑劣なる心。虎狼の心。

じゅうじん 柔靭【名】柔かにして固きこと。しんなりづよきこと。

じゅうじんがく 修身學【名】修身に關する事を研究する學問。倫理學の理論に傾けるに對して、平易にて、日常に實踐し得るを主とす。實踐倫理。

じゅうじんがさ 囚人笠【名】囚人の冠る一種の編み笠。

じゅうじんくわん 修身館【名】羽後國由利郡本荘町にありし舊本荘藩の學校。天明中、藩主六鄕政速の創立、明治四年に廢す。

じゅうじんしや 修身舍【名】豐後國玖珠(クス)郡森町にありし舊森藩の學校。天保中藩主久留島通嘉創始し、明治四年に廢す。

じゅうじんせい 柔靭性【名】〔理〕固體の、これを引張して破壞せんとする力に抵抗する性質。その强さは、物質によりて、同一ならず。

じゅうじんだう 修身堂【名】近江國大島郡大溝町にありし舊大溝藩の學校。天明五年藩主分部光實の創立、明治初年に廢す。

じゅうしや 秋社【名】しゃじつ(社日)を見よ。

じゅうしや 舟車【名】船と車と。「舟車の便」

じゅうしや 收捨【名】しゅしゃ(取捨)に同じ。

じゅうしや 愁傷【名】憂ひいたむこと。嘆き悲しむこと。愁嘆。

愁傷の舞【句】能(ノウ)の替(カヘ)の形(カタ)の一。舞の半ばに愁傷の態をなすもの。「仲元」の曲にあり。

じゅうしゃく 繡匠【名】ぬひとりをする職人。

じゅうしゃく 周章【名】あわつること。急ぎ惑ふこと。狼狽。

じゅうじゃう 愁狀【名】㊀そじゃう(訴狀)に同じ。㊁懇願の意を疏陳したる訴狀。

じゅうじゃう 醜狀【名】みにくきありさま。醜態。

じゅうじゃう 州壤【名】くに(國土)に同じ。

じゅうじゃき 秋二燒【名】陶器の一。尾張國海部(アマ)郡津島町の人、大橋秋二の創めしもの。五條燒に類す。

じゅうしゃく 周尺【名】支那周代の尺度。現今の約七寸五分に當るといふ。

じゅうじゃく 柔弱【名】㊀やはらかにして、つよからぬこと。㊁身心のよわよわしきこと。にうじゃく。

じゅうしやくやく 秋芍藥【名】〔植〕しうめいぎく(秋冥菊)に同じ。

じゅうしゅ 收取【名】とり入るること。

じゅうしゅ 袖手【名】手を袖にさし入れてゐること。みづから手を下す勞をいとふこと。ふところで。「ること。

袖手傍觀【句】手を下さずして傍觀すること。

じゅうしゅ 舟首【名】船のへさき。船首。

じゅうしゅ 收受【名】うけをさむること。受納。領收。

じゅうしゅう 騶從【名】車馬に隨行すること。ともまはり。ともぞろへ。

じゅうしゅく 收縮【名】ちぢまること。ちぢまること。

じゅうしゅく 收熟【名】穀類の實のりたるを取入るること。

じゅうしゅつ 秀出【名】ぬきんづること。傑出。拔群。

じゅうじゅつ 柔術【名】柔(ジウ)の理を應用して、對手を制御する術。柔道。

じゅうじゅん 周諄【名】くりかへして、手落なく、ものいふこと。

じゅうじゅん 柔順【名】ものやはらかにして、おとなしきこと。やさしくしてすなほなること。溫順。從順。「れたること。

じゅうじゅん 柔馴【名】おとなしく馴らされたること。

じゅうしょ 洲嶼【名】㊀洲(ス)と小島と。㊁小さき島。

じゅうしょ 洲渚【名】すのなぎさ。

じゅうしょ 酬書【名】返事。返翰。

じゅうしょ 愁緒【名】愁ひの心。愁の緒。

じゅうしょ 周書【名】〔書〕㊀書經中、周代に關せる諸篇。今文にては牧誓・洪範・康誥・酒誥・金縢・大誥・君奭(クンシヤク)・多方・多士・梓材・召誥・洛誥・立政・無逸・顧命・呂刑・文侯之命・費誓・秦誓の十九篇、古文にては、更に秦誓上中下篇・武成・旅獒(ガウ)・微子之命・蔡仲之命・周官・君陳・康王之誥・畢命・君牙・冏命(イウメイ)の十三篇を加へ、都合三十二篇、㊁前記以外に、漢代に單行せる七十一篇の書。周の史記なりとも、周代の諸誓・號令なりとも、孔子の序でたる書經百篇の餘なりともいへど、當時の野史・私乘なるが如しといふ。今に存せるは五十九篇にして、合せて逸周書と稱せり。㊂こうこうしょ(後周書)に同じ。

じゅうしょく 秋色【名】秋のけしき。秋氣。秋意。秋景。

じゅうしょく 秀色【名】ひいでたる景色。

じゅうしょく 修飾【名】㊀かざりつくろふこと。㊁〔語〕『英 Modify』或語句が、他の語に係屬して、その意味を限定すること。じゅうしょくご(修飾語)參照。

じゅうしょく 就職【名】職務に就くこと。

じゅうしょく 收贖【名】金を出して罪をつぐのふこと。「じ。

じゅうじょく 就蓐【名】じゅうじん(就寢)に同じ。

じゅうしょくぐち 就職口【名】つとめぐち(勤口)に同じ。

じゅうしょくご 修飾語【名】〔語〕『英 Modifier 又 adjunct』文の各成分、即ち主語・目的語・補足語・述語又は他の修飾語等を修飾する語句。別へば、「二十日の夜の月出でにけり」の「夜の」は、主語「月」の修飾語、「二十日の」は「夜」の修飾語、また「月、海より出づ」の「海より」は說明語、「出づ」の修飾語なる類。

じゅうしょくさき 就職先【名】つとめさき(勤先)に同じ。

じゅうしょくち 就職地【名】就職する土地。

じゅうしょくなん 就職難【名】適當なる就職口を求むるに困難なること。

じゅうしょさん 收支豫算【名】或期間の收入と支出との見積、又その文書。「じ。

じゅうすね 酋帥【名】しうちやう(酋長)に同じ。

じゅうすね 秋水【名】㊀秋の出水。㊁刀の光芒(バウ)の譬。「きばれ。

じゅうせい 秋晴【名】晴れたる秋の日。あ

じゅうせい 秋聲【名】秋風の音。

じゅうせい 秋成【名】秋になりて、穀物の成熟すること。

じゅうせい 醜聲【名】しうぶん(醜聞)に同じ。

じゅうせい 周正【名】陰曆十一月の異稱。

じゅうせい 修成【名】修正して成就すること。

じゅうせい 修正【名】㊀改めなほすこと。㊁品行の修まりて正しきこと。

じゅうせい 修整【名】㊀修正して整理すること。㊁寫眞原板の缺點を、加筆或は削除してなほし整ふること。

じゅうせい 修齊【名】修身と齊家と。

じゅうせい 修省・脩省【名】身を修めて反省すること。

じゅうせい 鏽鑄・銹鑄【名】金屬のさび。

じゅうぜい 收稅【名】稅を取立つること。租稅を徵收すること。

じゅうせい 輮成【名】皮をなめすこと。

じゅうせい 獸性【名】㊀獸類の性質。㊁人間の有する、他の動物にも共通せる性質。肉慾。獸慾。「獸性を發揮す」

じゅうせい 柔脆【名】やはらかくもろきこと。「の號。

じゅうせいあん 修靜庵【名】〔人〕蒲生君平

じゅうせいあん 修正案【名】原案に修正を加へたる議案。(原案に對して)

じゅうぜいくわんちやう 收稅官廳【名】收稅に關する事を取扱ふ官廳。

じゅうぜいくわんり 收稅官吏【名】歲入徵收官の一。租稅を徵收するもの。普通、稅務署長・稅關長これに任じ、その發する納稅告知書によりて、金庫又は收入官吏に納稅せしむ。收稅吏。

じゅうせいけう 修成教【名】神道の一派。造化の三神を尊信し、吾人は肉體を父母に受くれど、三神より受けたる至善の心魂こそ一身の根本なれば、これを修理固成するを主とせざるべからずと說くもの。多少儒佛を加味せり。教祖は新田邦光(クニ)。明治九年獨立す。修成派。

じゅうぜいしょ 收稅署【名】ぜいむしょ(稅務署)の舊稱。

じゅうぜいぞく 收稅屬【名】收稅長の指揮の下に、その主務に從ひし判任官。明治十七年に設置せられたり。

しうせいーちか 修正地價【名】地價を修正せる場合に於けるその地價。

しうせいーちやう 收稅長【名】府縣官の一。府知事・縣令の命を承けて、租稅及び徵稅費の賦課徵集に關する事務を執りし奏任官。明治十七年の設置。しうせいぶちやう(收稅部長)參照。

しうせいーは 修成派【名】しうせいけう(修成教)に同じ。

しうせいーひ 收稅費【名】收稅に要する經費、卽ち收稅官廳を設け、收稅官吏を置き、又は納稅上の調査委員を定むる等に要する費用。徵收費の一種。

しうせいーぶ 收稅部【名】明治三十八年四月以前、府縣廳の一部として、國稅の賦課・徵收及び間接國稅犯則者の處分などに關する事務を掌りし所。

しうせいぶちやう 收稅部長【名】收稅部の長。知事の命を承けて、部下を監督し、所部の事務を掌理せしもの。

しうせいーり 收稅吏【名】しうせいくわんり(收稅官吏)に同じ。

しうーせう 秋宵【名】秋のよひ。秋の夜。

しうーせき 秋夕【名】秋のゆふべ。

しうーせき 臭石【名】〔鑛〕石灰石の一種。石油の臭氣を含むもの。

しうーせき 囚籍【名】囚人の名を記したる「帳簿。

しうーせき 就籍【名】無籍者が、戶籍を有するに至ること。

しうせきーち 就籍地【名】就籍をなしたる「土地。

しうせつ 醜褻【名】みにくくけがらはしきこと。

しうーぜつ 愁絕【名】この上なく愁ふること。

しうーぜつ 秀絕【名】この上なく秀でたること。秀逸。

しうーせん 鞦韆【名】ぶらんこ(鞦韆)に同じ。

しうーせん 周旋【名】一たちめぐること。たちゐ。進退。動作。「周旋、禮に中(アタ)る」二ういう(周遊)に同じ。三事を處置するためにたちめぐること。奔走。四とりもち。世話。斡旋(アツセン)。「周旋の勞を執る」五〔法〕『英Good office』國際間に紛議生じて、談判不調に歸したる時、第三國がその間に立ちて、一旦中絕したる交涉の再開を勸告し、雙方これに同意すれば、第三國は手を引き、雙方をして、直接に談判せしむること。

しうーせん 舟船【名】ふね。

しうーせん 秋扇【名】一秋になりて、人に顧みられざる扇。二寵の衰へたる婦人の譬。あきのあふぎ。

しうーせん 修撰【名】一編輯・撰述すること、又その事を掌る役。二修史局の職員。修纂、又は文辭の結撰を掌り、檢討の事を兼ねし奏任官。

しうーせん 宿善【名】〔佛〕しゆくぜん(宿善)に同じ。

しうーせん 宿善開發(カイハツ)【句】〔佛〕「宿善(シユク)開發」に同じ。御文章「宿善開發して、善知識にあらずば、往生はかなふべからざるなり」

しうーぜん 秋蟬【名】あきぜみ。

しうーぜん 修繕【名】つくろひ。修復。

しうーぜん 愀然(シウ)【貌】憂ひ懼るるさま。悚(ソウ)れ動くさま。

じうーせん 蹂踐【名】ふみにじること。ふみあらすこと。

じうぜん 柔然【名】蒙古種なる遊牧民族の一部落。支那の東晉時代より史上にあらはれ、西曆五五五年、その部下たる突厥(トツケツ)に滅さる。

しうせんーかた 周旋方【名】一周旋をなすこと。二周旋する人。きもいり。〔江戶時代の語〕

しうぜんーかふう 修繕加封【名】郵便物の包裝不完全のため、途中にて毀損したる時、郵便局にて、修理を加ふること。

しうせんーぎふ 周旋業【名】周旋を營業とすること、又それを營む人。きもいりとせい。かれこれや。周旋屋。

しうせんーぐわいしや 周旋業【名】公(オホヤケ)なる周旋業【句】土地・家屋の貸借又は賣買、その他、商行爲にあらざる他人間の取引の媒介・周旋を目的とする營業。

しうせんげふーてすうれう 周旋業手數料【名】廣く人事百般の周旋をなして得る「をなす所。「船舶の修繕

しうせんーおやう 修船場【名】船舶の修繕をなすための船渠。

しうぜんーどっく 修繕船渠【名】船舶の修繕をなすための船渠。通常、海岸の地を掘鑿して造る。

しうせんーにん 周旋人【名】周旋四をなす人。周旋業を營む人。周旋屋。

しうせんーぶぎやう 舟船奉行【名】鎌倉幕府の職制の一。舟船に關する件を取扱ひしもの。東鑑「依レ爲二當國舟船奉行一歟」數十艘」

しうせんーや 周旋屋【名】一しうせんげふ(周旋業)に同じ。二しうせんにん(周旋人)に同じ。

しうせんーれう 周旋料【名】賣買・貸借・雇傭その他の取引の成立を媒介・周旋せる者に、報酬として支拂ふ金。

しうーそ 愁訴【名】憂ひ歎きて訴ふること。事情をうちあけて憫を乞ふこと。

しうーそ 酬酢【名】一酒杯のとりやり。獻酬。二あしらひ。應對。

しうーそ 祝詛【名】神に祈りて、己が憎める者に災を加ふること。呪咀(ジユ)。

しうーそ 臭素【名】〔化〕『英Bromine』ハロゲン類の元素の一。常溫においては、黑赤褐色の液をなし、揮發しやすく、蒸氣は赤褐色を呈す。鹽素に似て、化學性活潑なるが故に、自然に遊離存在することなく、始ど常に鹽素に伴ひて存す。されど鹽素に比すれば、その量甚だ少なし。また蒸氣は、やや鹽素と異なる特異の劇臭を有す。臭化カリウムと二酸化マンガンとに硫酸を加へ、熱して製す。ぶろおむ。

しうそーあんもにうむ 臭素アンモニウム【名】〔化〕しうくわあんもにうむ(臭化アンモニウム)に同じ。

しうそーかり 臭素加里【名】〔化〕しうくわかりうむ(臭化カリウム)に同じ。

しうそーかりうむ 臭素カリウム【名】〔化〕前條に同じ。

しうーそく 收束【名】まとむること。集めてたばにすること。

しうーぞく 俗醜【名】みにくき風俗。醜風。

しうーぞく 州俗【名】一地方の風俗。くにぶう。

しうそーさん 臭素酸【名】〔化〕『英Bromic acid』酸の一。甚だ鹽素酸に似、且つそれよりも分解しやすきため、その鹽(エン)に相當する化合物を得、それより誘導して、水溶液として得らるるのみ。酸化力に富むことも、鹽素酸に同じ。ぶろおむ酸。

しうそさん-えん 臭素酸鹽【名】〔化〕『英Bromates』臭素酸の鹽(エン)。酸化力に富むこと、鹽素酸鹽に似たり。

じうーそしき 柔組織【名】〔植〕『英Parenchyma』植物の細胞組織の一。薄き細胞膜を有する球形・楕圓形・多角形等をなせる數多の細胞の、その廣く隣き面において相結合せるもの。組織中最も普通なるものにして、質柔く、又その細胞には原形質を含めるによりて、代謝機能以外、諸種の運動・刺戟に對する感應をも司り、種種の營養作用も、その諸部に行はる。扁平組織。蜂窩組織。柔軟組織。

しうそーじやう 愁訴狀【名】愁訴のために差出す書狀。うれへぶみ。

しうそーすゐ 臭素水【名】〔化〕『英Bromine water』臭素の水溶液。

しうそーちやう 臭素錠【名】『英Bromoids』臭化カリウム・臭化ナトリウム・臭化アンモニウムの三種を含める錠劑。主として癲癇(カン)を治するに用ふ。

しうそーなとりうむ 臭素ナトリウム【名】〔化〕しうくわなとりうむ(臭化なとりうむ)に同じ。

じうーだ 柔懦【名】いくぢなし。柔弱。

じうーたい 醜態・醜體【名】みぐるしきさま。醜狀。

じうーたい 獸帶【名】〔天〕『英Zodiac』くわうだたい(黃道帶)に同じ。

じうたいーくわう 獸帶光【名】〔天〕くわうだうくわう(黃道光)に同じ。

じうーたう 周到【名】よく行屆くこと、よく行きわたること。緻密。綿密。

じうーだう 修道【名】道德を修むること。

じうだう 柔道【名】一『易經の下經に「繫二于金柅一柔道牽也」とあり』柔の道。陰の道。二じうじゅつ(柔術)に同じ。

じうだう-くわん 修道館【名】一安藝國廣島市に在りし舊廣島藩の學校。慶應二年學問所及び洋學傳習所を併はせて改名せしもの。明治四年に廢す。二出雲國松江市に在りし舊松江藩の學校。舊稱、文明館。明治の初年に廢す。三敎館、文武館。明治の初年に廢す。三河國幡豆(ハヅ)郡西尾に在りし舊西尾藩の學校。嘉永中、藩主松平乘全(ノリマサ)創立す。明治の初年に廢す。四美作國西北條郡津山にありし舊津山藩の學校。藩の城内に在りしもの。明和中、藩主松平康哉(ヤスチカ)創立して、學問所と稱し、明治三年に修道館と改稱し、次いで廢す。五下野國宇都宮市にありし舊宇都宮藩の學校。城中に在りしもの。文化中藩主戸田忠延の創立。明治四年廢す。六大和國添下郡小泉にありし舊小泉藩の學校。天保五年藩主片桐貞信創立し、明治五年奈良縣に引繼ぎたり。七越後國高田市に在りし舊高田藩の學校。慶應二年榊原家敬(タカ)建造し、明治四年廢す。八陸奥國白河郡白河會町に在りし舊白河藩の學校。文政八年藩主松平正篤の創立に係り、慶應の末に廢せり。

じうだうし 修道士【名】〔基〕『英 Monk』天主敎にて、公に服從することと、貞潔と、貧窮との三誓願を立てて、共同的宗敎生活をなす人。

じうだうゐん 修道院【名】『英 Monastery』修道士が共同的生活をなす建物。「じ。

じうたん 修短【名】ちやうたん(長短)に同じ。

じうたん 愁歎・愁嘆【名】憂ひなげくこと。いたみ悲しむこと。

じうたん 獸炭【名】一『晉書に出づ』支那晉の王琰の、家奢を好み、炭を粉にして、獸の形を作りし故事。洛陽豪貴の輩、これに倣ひて、一時の流行となれりといふ。二粉骨を練りて、獸の形に作り、中に香を入れて、煙(ケム)しものもの。明月記、被レ尋二獸炭一、求而送之」三〔化〕『英 Animal charcoal』動物の毛皮・爪・凝血・骨などを蒸燒にしたるもの。骨炭。動物炭。

じうたん-ば 愁嘆場【名】芝居にて、愁嘆の仕打を演ずる場面。

じうち 仕打【名】一行ふ狀。しかた。しわざ。二舞臺に於ける役者の動作。こなし。三芝居の興行者。〔京・阪地方の語〕

じうち 羞恥【名】はづること。はぢ。

じうち 痩地【名】そうち(痩地)を見よ。

じうち 周知【名】世人のあまねく知りてあること。公知。「つくろひ。

じうち 修治【名】をさめととのふること。

じうち 修築【名】をさめ築くこと。つくろひづくること。「河堤を修築す」

じうちく 修竹【名】長き竹。

じうちく 獸畜【名】『畜の字の音、正しくはきく又はきう』けもの。けだもの。野獸。家禽。じうきく(獸畜)參照。

じうちく-えいせい 獸畜衛生【名】畜類、殊に家畜飼養に關する衛生。飲水・飼料・畜舍・運動等はその主要なる事項なり。

じうちん 袖珍【名】袖又は袂などに入れて携へ得る程の小形なること。ぽっけっと形。

じうちん-ぼん 袖珍本【名】袖珍づくりの本。ポケット形の册子。

じうちやう 繡腸【名】文學の才情に富める心情。

じうちやう 愁腸【名】愁をもつ心。

じうちやう 繡帳【名】刺繡を施せる美しきとばり。

じうちやう 酋長【名】酋夷のかしら。蠻民の長。酋師。

じうちやう 州長【名】州のかしら。

じうちやく 祝著【名】『祝の字の音、正しくはしゅく』よろこぶこと。大機短、種種の獻物祝著せり」「とのなか。

じうちゆう 袖中【名】そでのうち。たもと。

じうちゆう 舟中【名】ふねのなか。船中。舟中も敵國【句】『史記の吳起傳に「君不レ修レ德、則舟中之人盡敵國」とあるに本づく』味方の者も背きて、敵となる。

じうちゆう-しようかしふ 袖中證歌集【名】〔書〕二十一代集・六家集・三玉集、その他、家集・歌合などにつきて、題ごとに一首の證歌をあげたるもの。十六卷。撰者詳かならず。

じうちゆう-せう 袖中抄【名】〔書〕萬葉集・古今集より堀川百首までの諸歌集中にある難解の歌詞を解釋せるもの。二十卷。釋顯昭の著。

じうちゆう-わかろくてふ 袖中和歌六帖【名】〔書〕古今六帖・新撰六帖の中にある歌を選びて、題ごとに、五首を載せたるもの。二卷。小澤蘆庵の著。

じうちよ 醜女【名】容貌のみにくき女。惡女。醜嫗。

じうちよく 修飭【名】をさめいましむること。身持よく用心ぶかきこと。

じうてい 舟底【名】船のそこ。ふなぞこ。船底。

じうてい 秋底【名】秋季の庭。「と。

じうてい 修定【名】修正して考定すること。

じうてい 柔荑【名】一『詩經衞風碩人篇に「手如二柔荑一膚如二凝脂一」とあり』萌出でたる茅の柔かなるもの。つばな。二『祕傳家鏡に「柳・初春生二柔葉一、粒如レ筋」とあり』草木の芽の柔かなるもの。「じ。

じうてい-くわ 柔荑花【名】〔植〕次條に同じ。

じうてい-くわじよ 柔荑花序【名】〔植〕『英 Ament 又は Catkin』柔荑は穗狀花序の一變態。無瓣の單性花のみを著生する、脫落性のもの。花軸短く、小苞相鱗次す。即ち栗・榛(ハシバミ)・柳・樺・胡桃(クルミ)・楤(ウド)などに見るもの。

じうてう 秋潮【名】秋季の潮水。

じうでうじ 秋篠寺【名】あきしのでら(秋篠寺)に同じ。

じうてき 讎敵【名】あだかたき。仇敵。

じうてん 周天【名】『左傳の隱公三年の條に「日有二食レ之」とありて、杜預の註に「日行遲、一歲一周天、月行疾、一月一周天」、禮記の疏にも「二十七日、月行一周天」とあり』日・月・星の同一位置に復歸するに要する日數。

じうてん 秋天【名】秋のそら。秋空。蕪村「鳴立つて秋天ひきき眺めかな」

じうてん 周轉【名】〔天〕『こうてん(公轉)に同じ。

じうと 舅【名】一しうと(舅)の音便』夫の父。おや。和名「舅。夫之父曰レ舅。之宇止」二妻の父。しうとおや。外舅。其「しうとにほめらるるむこ」

じうと 姑【名】しうとめ(姑)の略。

じうと 囚徒【名】しうじん(囚人)に同じ。

じうと-いり 舅入【名】婿入(ムコイリ)の後、吉日を卜して、舅が聟の家を訪ふこと。曾我五人兄弟「聟は大名、舅は浪人、人の用ももてなしもそぐはぬ聟入舅入」

じうとおや 舅親【名】しうと(舅)に同じ。狂言「水論聟」「身どもは舅おやというて、親同然ぢや」

じうとく 宿德【名】一『しゅくとく(宿德)の音便』老成にして德高き人。〔古語〕源氏「それは、形もいと麗はしうきよらに、しうとくにて、きはことなるさまぞしたまへる」二老成にして威望あること。〔古語〕榮華「いとおとなしう、しうとくなる聟にて」

じうとく 酬德【名】德にむくゆること。太平記「犬は……報恩・酬德の心あるにや」

じうとく 修得【名】習修して會得すること。

じうとく 周德【名】〔人〕畫僧。惟馨と號す。雪舟に學び、殊に人物・山水を巧みにす。天文頃の人。

じうとく-しようめいしよ 修得證明書【名】一定の學術・技藝を修得したる證明書。

じうとご 舅御【名】しうと(舅)の敬稱。博多小女郎波枕「壁一重彼方の、舅御の御面體見ることもかなはぬか」

じうとご 姑御【名】こうとめご(姑御)の略。生玉心中「姉御樣を姑御と宮仕へせうものと」

じうとん 柔嫩【名】わかくやはらかなること。

じうとんい 周敦頤【名】〔人〕支那宋代の哲學者。字は茂叔、濂溪(レンケイ)と號す。大極圖說の著あり。謂はゆる宋儒性理の學を大成す。熙寧六年歿す。年五十七。

じうとめ 姑【名】一夫の母。しひとめ。し

うと。和名「姑、夫之母曰レ姑。之字斗女」㊁妻の母。外姑。

姑の涙汁(ナミダ)【名】『姑は、嫁に對する同情の涙少なしといふ意にていふ』些少なる物事の譬。〔諺語〕

姑の場塞(ババフサ)【句】嫁(ヨメ)の、老いたる姑を邪見あかつひにすること。〔諺語〕

姑の前の見せ廁桶(ババ)【句】姑に對する嫁の見せ働。〔諺語〕

しうとめ-ご 姑御【名】しうとめ(姑)の敬稱。しうとご。國姓爺後日合戰「しやれも座興も年により、人による、姑御が休んでぢや」

しうとめ-ざり 姑去【名】姑の、嫁を逐出すこと。心中二つ腹雪「お留守のうちに、思はずも、姑左の、力なく、せう事なさに、すごすごと、里へもどりて」

しう-なふ 收納【名】㊀收め納(イ)ること。取入ること。㊁〔法〕他より受取りて、自己の所有と確定すること。

しうなふ-き 收納器【名】農產物を容るる器具。種類多し。

しうなふ-きって 收納切符【名】〔商〕次條に同じ。

しうなふ-てんぺう 收納傳票【名】〔商〕現金を收納したる場合に、その受附係の作成する傳票。收入傳票。收納切符。入金票。入金切符。

じう-なん 柔軟・柔輭【名】やはらかきこと。しなやか。

じうなん-おぶらあと 柔軟オブラアト(獨Die weichenoblaten)【名】水にて濕さず、直ちに藥物を包み得るやう、しなやかに製したる、半透明のオブラアト。

じうなん-そしき 柔軟組織【名】〔植〕にうそしき(柔組織)に同じ。

じうなん-たいそう 柔軟體操【名】『身體練育の一般目的と共に、各機關の凝硬を解溶することに注意したるものなるによりていふ』さしいたさう(徒手體操)の舊稱。

じう-にく 獸肉【名】獸類の肉。

しう-にふ 收入【名】をさめ入るること。手に入ること。とりいれ。所得。(支出に對して)

しうにふ-いんし 收入印紙【名】印紙稅・登錄稅・骨牌(カルタ)稅・狩獵免許稅・賣藥印紙稅・訴訟及び非訴訟事件諸種免許及び手數料等の租稅及び料金を納附するにあたりて、貼用すべき印紙。從來、證券印紙・訴訟用印紙・賣藥印紙・煙草印紙・登記印紙の別ありしが、明治三十一年にこれらの種別を廢し、單一なる收入印紙を以て、何れの場合にも使用せしむることに改定せり。一厘・二厘・三厘・五厘・一錢・二錢・三錢・五錢・十錢・五十錢・一圓・五圓・十圓・五十圓・百圓の十五種あり。

しうにふ-がかり 收入係【名】收入の事務を扱ふ役員。「りだか。」

しうにふ-がく 收入額【名】とりだか。いしうにふ-くわんり 收入官吏【名】㊀租稅以外の收入を徵收する歲入徵收官の一。大方は、各官廳の長官これに任ず。㊁金庫と納入との中間に關として、現金を收納する官吏。

しうにふ-しゅぎ 收入主義【名】〔經〕自國の產業を保護するを目的とするにあらずして、政府の收入を得るを目的として、關稅を課する主義。

しうにふ-ぜい 收入稅【名】〔經〕しうえきぜい(收益稅)に同じ。

しうにふ-てんぺう 收入傳票【名】〔商〕しうなふでんぺう(收納傳票)に同じ。

しうにふぼ 收入簿【名】收入に關する事項を記載する帳簿。(支出簿に對して)

しうにふ-めいれい 收入命令【名】きんせんしふにふめいれいしょ(金錢收入命令書)を見よ。

しうにふ-やく 收入役【名】市町村收入の受領、發用の支拂、その他、會計事務を掌理する、市町村の有給職員。各市町村に一名を置き、任期は、市にありては六箇年、町村にありては四箇年とす。

しう-にん 就任【名】役につくこと。勤にしう-ねし 執念し【形ク】しふねし(執念し)の音便。源氏「いみじきげんざにも從はず、しうねきけしき、おぼろげのものにあらず」

しうねん 周年【名】しうさい(周歲)に同じ。

しう-は 秋波【名】㊀秋のなみ。㊁『秋の水は澄明なるより轉へていふ』美人のすずしき眼もと。媚を呈する目つき。いろめ。秋波を送る【句】次條に同じ。秋波を寄す【句】いろめを使ふ。

しうは 周波【名】〔理〕『英 Cycle』交流發電機にて、コイルに起る電流の一回轉中に起る規則的の變化。卽ち發電子の前の半回轉の間にありては、零より次第に强さを增し、また次第に强さを減じて零に至り、後の半回轉にありては、反對の方面に流れて、同一の變化をなすこと。

しう-はい 臭敗【名】惡臭を放ちて、物の腐敗すること。

しう-はう 酬報【名】はうしう(報酬)に同じ。

しう-はう 週報【名】一週間ごとに出す報告又は報道。

しう-はう 州邦【名】くに。邦國。州。

しうばう 醜貌【名】みにくき顏つき。醜姿。醜容。「と。

しう-ばく 收縛・囚縛【名】捕へらるること。

しうばく 就縛【名】縛に就くこと。捕縛せらるること。

しうはすう 周波數【名】〔理〕『理 Frequency』一秒間における周波の度數。場磁石の極の數をP對とし、發電子の回轉數をnとすれば、その周波數はnpにて示さる。

しう-はつ 秀發【名】人品の秀でたること。

しう-ばつ 舟筏【名】ふねと、いかだと。

しう-ばつ 秀拔【名】すぐれたること。ずぬけたること。拔群。

しうばん 秋晩【名】ばんしう(晩秋)に同じ。

しう-ばん 週番【名】㊀一週間ごとに交番すること。㊁〔兵〕平時、屯營內における軍隊の風紀、軍紀の維持、業務の執行を監視するために、隊內若干の將校と下士とをして、一週間交替を以て當る任務。聯隊週番と大隊週番とあり。

しうばんかし 週番下士【名】週番㊁の任務に當れる下士。

しうばん-しくわん 週番士官【名】週番㊁の任務に當れる士官。

じうはり【貌】じばりに同じ。

じう-び 醜美【名】㊀みにくきと、うつくしきと。美醜。㊁醜女と美女と。

しう-び 秀美【名】すぐれて美しきこと。

しう-び 秀眉【名】ひいでたる眉。美しき眉。

しう-び 愁眉【名】憂を帶びたる眉つき。憂へのおももち。しかめがほ。うれへの眉。愁眉を開く【句】うれひの顏附なくなる。

しう-び 周備【名】手落なく仕度の揃ふこと。ゆきとどくこと。

しう-び 臭鼻【名】ある鼻糞及び鼻涕(ハナミヅ)を分泌する一種の病。

じう-ひ 獸皮【名】獸類の皮。

じう-ひ 柔皮・鞣皮【名】皮をなめすこと。なめしがは。

じう-び 柔媚【名】たをやかなること。綽約。「法。

じうひ-はふ 鞣皮法【名】獸皮をなめす方

じう-びん 秋旻【名】秋の空。秋天。

しう-ふ 囚俘【名】ふしう(俘囚)に同じ。

しう-ふ 臭腐【名】くさくくさること。くさりたるくさみ。「とこ。

しうふ 醜夫【名】容貌のみにくき夫。ぶをしうふ 醜婦【名】顏のみにくき女。みめのわろき女。ぶをんな。醜女。惡女。

しう-ふう 醜風【名】しうぞく(醜俗)に同じ。

しう-ふう 秋風【名】秋の風。あきかぜ。

しうふう-らく 秋風樂【名】〔音〕盤涉(バンセフ)調の雅樂。もと唐樂。嵯峨天皇の時、換歌二帖を加へ、元歌と合はせて三帖とす。

しうふう-れい 秋風嶺【名】〔地〕朝鮮慶尙北道にある一山道。阪路緩かならざれども、舊時の要害たりし處にて、今は鐵道京釜線これを通過し、山中に停車場あり。

じうふ-き 揉布機【名】手ざはりの硬きもの又は糊料のために硬くなりたる織物を柔くするに用ふる機械。「に同じ。

しう-ふく 修復・修覆【名】しゅふく(修復)に同じ。

しう-ぶつ 繡佛【名】刺繡にてあらはしたる佛像。

る佛像。

しう-ぶん 醜聞【名】聞苦しき噂。恥となるべき評判。醜名。醜聲。

しうぶん 周文【名】〔人〕一『周の文王の義』文王)を見よ。著聞『式部大輔在良朝臣、御侍讀にて、始めて御前へ參りたりけるに、まづ朗詠をしたる、幸逢二堯舜一無爲化一德是北辰、太公望遇二周文一等の句なり』

しうぶん 秀文【名】〔人〕禪宗の畫僧。明國の歸化人。人物花鳥山水を善くす。世に唐秀文と稱せらる。天授弘和頃の人。

しう-ぶん 繡文【名】ぬひとりの模樣。

しう-ぶん 秋分【名】〔天〕『英Autumnal equinox』二十四氣の一。秋の半に當りて、太陽の、正東より上りて、正西に入り、地球の赤道を直射し、晝夜殆ど平分なる時。卽ち太陽の黃經百八十度に達したる時刻。佛敎にては彼岸の中日といひ、舊曆にては八月中、太陽曆にては九月二十一日頃。(春分に對して)

しうぶん-くわん 修文館【名】一伊勢國三重郡菰野村に在りし舊菰野藩の學校。文化中創立し、明治四年廢す。二大和國添上郡柳生村に在りし舊柳生藩の學校。明治三年開設し、翌年廢す。

しうぶん-さう 秋分草【名】〔植〕菊科に屬する草。所在の山地、陰濕の處に自生し、莖は二三尺に達す。葉は被針形にて、鋸齒あり。夏秋の交、葉腋に、綠色の花、頭狀花序に排列す。

しうぶん-てん 秋分點【名】〔天〕太陽が黃道上を週行して、赤道の北より南に移る途中、赤道上を通過して、これを直射する位置。春分點を距ること百八十度。(春分點に對して)**しうぶん**(秋分)參照。

しうぶん-は 周文派【名】〔美〕日本畫の一派。東山時代に流行せし畫風。周文を祖とす。

しう-へい 鍬兵【名】〔兵〕戰場にて、堡壘の造築に從事する兵。

しう-へき 皺襞【名】一しわ。ひだ。二山谷の高低を生じて、ひだの如き狀したるところ。

しう-へん 周徧・周遍【名】ゆきわたること。あまねきこと。

しう-へん 週邊【名】まはり。へり。ふち。めぐり。

しうへん-ほっかい 周遍法界【名】〔佛〕法身の功德の、無邊の法界に及び滿つること。太平記『佛は、元來本有常住、周遍法界の妙體なれば』「いれ。修理。

しう-ほ 修補【名】をさめおぎなふこと。

しう-ほ 收捕・囚捕【名】めしとること。おさへとらふること。「俘。

しう-ぼく 州牧【名】地方の長官。知事。諸侯。

しう-ぼつ 收沒【名】罪人の資財又は犯罪用の具を、官府に取上ぐること。

しう-ぼつ 周勃【名】〔人〕支那前漢の功臣。沛の人。高祖の沛に起るや、これに從ひ、所在に轉戰して功あり。また韓信の叛を擊ち、呂氏の亂を平げ、文帝を位に卽かしめ、漠室を安んじ、丞相に任ぜらる。文帝の十一年歿す。

しう-ぼつ 臭剝【名】〔化〕**しうくわばたしうむ**(臭化ボタシウム)の略。

しう-まい 燒賣【名】**せうめい**(燒賣)に同じ。

しう-まつ 週末【名】一週間の終。

しう-み 臭味【名】一ぐさみ。くささ。二『同臭味の義』なかま。黨類。同臭。

しう-みつ 周密【名】周(アマネ)く行きわたり、緻密なること。周到。「こと。

しう-みん 愁眠【名】物思をしながら眠ること。

しう-みん 就眠【名】ねぶりにつくこと。

しうみん-うんどう 就眠運動【名】〔植〕『英Cyclitropic movement』或種類の植物の葉の、日沒に際して、相閉合し、翌朝に至りて、再び開展する運動。合歡(ネムノキ)・含羞草(オジギサウ)・萩を始め、種種の莖(クキ)科植物、及び酢漿草(カタバミ)科植物、また隱花植物にありては、蘚(ゼンダイ)科に見らる。

しう-む 州務【名】一州の事務。

しう-む 秋霧【名】あきぎり。

しう-む 愁夢【名】物思のゆめ。

しう-ん 紫雲【名】一紫色の雲。古、瑞兆なりと稱せられ、佛敎にても、念佛行者の臨終に、佛・菩薩この雲に乘りて來迎したまふと說く。むらさきのくも。出世景遇、風に嘯く浪間より、紫雲をまいて上り龍」

紫雲鬢(ビン)く【句】〔佛〕念佛行者の臨終の殊勝なる形容。

じうん 時運【名】時代のなりゆき。時勢。

じうん 似雲【名】〔人〕安藝國廣島の歌僧。一說に、播磨國姬路の人なりと。本名は如雲。藤原實陰に學び、西行法師を慕ひて遊歷を事として、世に今西行と稱せらる。伊達吉村に聘せられ、また時に靈元上皇に召さる。寶曆三年寂す。年八十六。

じうん 慈雲【名】〔人〕一高僧。名は妙意。信濃國の人。十二歲にして、越後國の國分寺に入り、嘉慶二年後醍醐天皇に召され、清泉禪師の號及び紫衣を賜はり、同寺を勅願所たらしめらる。興國六年寂す。後光明院、更に惠日聖光國師と諡せらる。二眞言宗の高僧。伊藤東涯に就きて、儒學を學び、更に奈良に於て顯・密二敎を究む。河內國生駒山の長尾の濫の上に庵し、自ら葛城(カヂキ)山人と號し、寬政九年河內國高貴寺に住す。これより先、正法律を制定して、後代の標式とせしが、幕命に由りて、高貴寺を正法律派の本山とせり。十善法語・梵學津梁・方服圖儀等の著あり。文化元年寂す。年八十七。世に慈雲尊者又は慈雲比丘と敬稱す。

じうん-さう 【名】〔植〕あきちやうじ(秋丁字)

じうん-そんじや 慈雲尊者【名】〔人〕じうん(慈雲)二を見よ。「稱。

じうん-たい 紫雲堆【名】ちや(茶)二の異

じうん-てん 試運轉【名】船體・蒸氣機・電氣鐵道又はその車輛などの完成に際し、出來ばえを見るために、初めて運轉すること。

じうん-どう 視運動【名】〔天〕『英Apparent motion』地球上より視たる諸天體の運動。例へば太陽は、恆星に對しては、運動せざれども、吾人には、日日、東より出でて、西に入るが如く見ゆる類の現象。

じうん-びく 慈雲比丘【名】〔人〕じうん(慈雲)二を見よ。「名。

しうめい 醜名【名】みにくきこえ。臭聞。

しうめい-ぎく 秋冥菊・秋牡丹【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。山野に自生し、また園養せらる。高さ二三尺に達し、葉は複葉にて、三裂もしくは數裂せる數小葉を有し、秋、莖頂に紅紫色なる多數の美しき苞片を有せる花を著く。かぶろぎく。きぶねぎく。くわんおんぎく。しうしやくやく。

(くぎいめうし)

しう-もしゆく 周茂叔【名】〔人〕**しうとんい**(周敦頤)を見よ。「煩悶。

しう-もん 愁悶【名】うれへもだゆること。

しう-や 秋野【名】秋季の野。

しう-や 秋夜【名】秋の夜。秋霄。

しう-やう 秋陽【名】秋の日ざし。

しう-やう 收養【名】他人の子をひろひあげて養ふこと。

しう-やう 修養【名】をさめやしなふこと。學業を修め、德性を養ふこと。

しう-やく 修譯【名】ほんやく(飜譯)に同じ。

しう-ゆ 周瑜【名】〔人〕支那三國の時の吳の謀臣。字は公瑾。曹操を赤壁に邀擊して大勝し、また北方を圖らんとして、途に歿す。年三十六。

しうよう 醜容【名】みにくき容貌。醜貌。

しう-よう 愁容【名】うれはしげなる容子。「き。心配がほ。

しうよう 秋容【名】秋のすがた。秋げしき。

しうよう 收用【名】一とりあげて用ふること。二〔法〕公用徵收の一。公用のため、特定物の所有權又はその他の權利を強制徵收して、國家もしくは第三者の所有に移すこと。**ちしうよう**(土地收用)參照。

しう-よう 收容【名】一とりをさむること。二〔兵〕前方部隊をして、退却を得しむる

ために、後方部隊が敵兵を拒扼すること。

しうよう-くわぶつ 收容貨物【名】〔法〕船積のため送致し、又は陸揚したる上、七十二時間内に引取發送船積、又は保稅倉庫に庫入せざるため、稅關に一時收容せられたる貨物。收容の日より六箇月を經過したる後、なほ收容の解除を申告する者なき場合には、稅關より競賣又は處分せらるべきものとす。

しうよう-しんさくわいねん 收用審査會【名】土地收用法に依りて收用又は使用せらるべき土地に付き、起業者の申請に因りて裁決する、合議制の機關。內務大臣の監督に屬し、會員は會長一人、委員六人より成り、中、三名は、內務大臣の任命に係る高等文官、他の三名は府縣名譽職參事會員中より互選す。

しうよう-しんさくわいねん 收用審査會員【名】收用審査會を組織する會長及び委員。前條參照。

しうよう-ちんち 收容陣地【名】〔兵〕收容(二)の目的を以て、一時占據する陣地。

しうよう-はふ 收用法【名】⇨しうようはふ(土地收用法)の略。

しうよう-ぶたい 收容部隊【名】〔兵〕一定の場所に收容したる一部分の軍隊。

しうよう-ほしやうきん 收用補償金【名】〔法〕土地收用法を適用せられたる者に交附する、損害の補償金。

じう-よく 獸慾【名】『獸類と共通なる慾の意』肉慾。色慾。

しうらい-くわん 修來館【名】上總國市原郡姉崎村にありし舊鶴牧藩の學校。天保中、藩主水野忠韶創立し、維新に至りて廢す。

しう-らん 秋嵐【名】■秋の山氣。■秋の蘭(植)するがらん(駿河)【名】〔植〕

しう-らん 秋蘭【名】〔植〕

しう-らん 周覽【名】へめぐりて見ること。周遊して觀覽すること。

しう-らん 收攬【名】收め持つこと。集めて握りたもつこと。「人心を收攬す」

しうり 修理【名】つくろひをさむること。つくろひ。ていれ。しゆり。修復。修繕。

しうり 收利【名】利益を得ること。

しうり 州里【名】■支那の周の代に、家數二千五百を州、二十五を里と稱せし行政區劃。■州と里と。一州一村をなせる處。村里。

じうり 【名】『じうりがっぱ(じうり合羽)を見よ』あまがっぱ(雨合羽)を云ふ。〔伊勢國の方言〕

しう-りう 周流【名】■めぐり流ること。回流。■へめぐること。周歷。周遊。

じうり-がっぱ じうり合羽【名】あまがっぱ(雨合羽)を云ふ。〔大和國の方言〕

しう-りん 秋霖【名】秋の長雨。

じうりん 【名】『じうりがっぱ(じうり合羽)を見よ』あまがっぱ(雨合羽)を云ふ。〔肥後國の方言〕

じう-りん 蹂躙・蹂躪【名】ふみにじること。ふみちらすこと。蹂躙。

しう-りやう 秋涼【名】■秋のすずしさ。■〔同じ。〕

しう-りやう 酋領【名】⇨しうちやう(酋長)に同じ。

しう-りよ 囚虜【名】とらふること。とらはること。とらはれ人。とりこ。

しう-りよ 醜虜【名】■えびす(虜)を卑しめていふ語。しこのえびす。蠻夷。醜夷。外國人を卑しめていふ語。■ろじこ(虜)を卑しめていふ語。

しう-るゐ 醜涙【名】うれひの涙。

しう-るゐ 醜類【名】わるもの仲間。

じう-るゐ 獸類【名】けだものの類。學術上、哺乳類と呼ぶものと殆ど相一致すれども、その龜鼈やや狹く、鯨のごとく、形の魚に似たるもの、穿山甲(センザン)のごとく、皮膚に角鱗を被る類は除外していふ。

しう-れい 秀麗【名】秀でて、くすしく妙なること。

しう-れい 秋冷【名】秋の冷かなる氣候。

しう-れき 周歷【名】へめぐること。遍歷。周流。

しうれふ 狩獵【名】野生の鳥獸を狩ること。しゆれふ。

しう-れん 聚斂【名】■■集めをさむること。■人民よりむごく取立つること。

しう-れん 收斂【名】■■しめちぢむること。收縮。■とりをさむること。收穫。■租稅を取立つること。■〔數〕『英Convergency』一定の法則に從ひて、遂次に數を算出しゆきて止まることなく、且つ遂次算出せらるる數が、次第に或定まれる數、卽ち極限に近迫しゆきて、その差が遂にはいかほどにても小さくなる時の狀態。例へば、公比が1より小なる無限等比級數の和の類。(發散振動に對して)

しう-れん 秋斂【名】秋、五穀の收穫ありたる時、租稅を取りたつること。

しう-れん 修鍊・修煉【名】ねること。修養・鍛鍊すること。

しうれん-きふすう 收斂級數【名】〔數〕『英Convergent(又Converging) series』級數の若干項を取り、その項數を增すに從ひて、その和が一定の數に接近するもの。(發散級數に對して)

しうれん-さい 收斂劑【名】澁味ありて、收縮せしむる効ある藥劑。例へば胃腸を收斂して、下痢を止め、皮膚を收斂して、腫脹を止むる等にて、五倍子酸(タンニン)・單寧(タンニン)酸・硝酸銀などを用ふ。收斂藥。

しうれん-やく 收斂藥【名】前條に同じ。

しうれん-れんず 收斂レンズ(英Converging lens)【名】〔理〕『平行光線、凸レンズを照す時は、屈折して、これを通過したる後、一點に集交するによりていふ』しうれんず(凸レンズ)に同じ。

しう-ろ 袖爐【名】そでがうろ。てあぶり。

しう-ろ 舟路【名】ふなぢ(船路)に同じ。

しう-ろ 秋露【名】秋のつゆ。

しうろ-き 修路機【名】『英Road-roller』道路面又は道路の基礎を固むるに用ふる機。重さ一噸乃至十五噸ある回轉式の槌を以て、その重量に由りて、路面等を押固むるもの。人力又は蒸氣力に依りて回轉せしむ。轉壓機。ろおらあ。

しうろく 收錄【名】取りいれて載錄すること。

しうわい 收賄【名】賄賂を受くること。

しうわい-ざい 收賄罪【名】〔法〕一定の職務又は一定の選擧もしくは議決に關し、賄賂を要求・約束・收受するに由りて成立する犯罪。

じう-わう 獸王【名】〔動〕百獸の王といふよりいふ』しし(獅子)の異稱。

じうわり 【貌】じうはりに同じ。庭訓往來「親分・子分柔和理」

しう-ゐ 鰓胃【名】〔動〕『英Abomasus』反獸の胃腑の四番目に在る、鰓の多き部分。

しう-ゐ 秀偉【名】秀でて大柄(がら)なること。すぐれて魁偉なること。

しう-ゐ 周圍【名】■ぐるり。めぐり。まはり。四面。周邊。環周。■四境に接する外邊。四周。環境。■〔數〕『英Perimeter』多角形の各邊の長さの和、又は圓周の長さ。

しう-ゐん 囚員【名】罪囚のかず。

しう-ゐ 臭穢【名】しうくわい(臭穢)に同じ。隔曲(安達原「臭穢は滿ちて肪脹し、膚膩(ニク)悉く瀰壞せり」

しう-ゐん 周淵【名】道路を前後に控へて、張りたる陣容。

じう-ゐん 柔婉【名】柔和にして婉曲なること。しなやかなること。

しう-を 羞惡【名】羞ぢて惡むこと。

しうえ 紫衣【名】位ある僧の、勅許を得て著る紫色の袈裟。我が國にては、榮西及び道元を始とす。

しうえ 繻衣【名】しい(繻衣)に同じ。

しうえい 四裔【名】『裔は衣の裾の義より轉用せられたるもの』四方の國のはて。四疆。

しうえい 詩詠【名】詩を作ること、又その作詩。吟詠。

しうえい 私營【名】個人にて營むこと。

しうえい 市營【名】市の事業として營むこと。「と。

じうえい 自營【名】獨立して事業を營むこと。

しうえい-くわん 思永館【名】豐前國小倉市舊城内に在りし舊小倉藩の學校。寶曆中、藩主小笠原忠基これを起し、天明中この館

名を稱す。維新の際、これを豐津に遷し、育德館と改稱す。

しえいでん 私營田【名】營田の一。中古、荒廢地・閑田等を、官許を得て、私に營作せしもの。(公營田に對して)こんでん(墾田)參照。

しえう 至要【名】極めて大切なること。

しえう 四要【名】『薛文清の讀書錄に「公則不レ偏、慈則不レ刻、明則能照、剛則能斷」とあり』公平と慈悲と明智と剛氣との、四種の肝要なる行の稱。

しえき 私益【名】己れのみの利益。私利。(公益に對して)

しえき 使役【名】他を遣使ふこと。役使。【語】しえきさう(使役相)に同じ。

しえき 賤役【名】めしつかひ。こもの。しもべ。奴僕。下男。

しえき 祇役【名】つつしみて職を勤むること。【地】四箇の驛。

しえき 四驛【名】江戸時代に、江戸の四隅に在りて、五街道の出發點たりし驛、卽ち千住(センジュ)驛・板橋驛・品川驛・四谷(ヨツヤ)驛。ごかいだう(五街道)參照。

じえき 滋液【名】滋味ある液。

じえき 時疫【名】はやりやまひ。ときのけ。流行病。

しえきさう 使役相【名】(語)他を使役して、或動作をなさしむる意をあらはす語法。「打たす」「記きさす」「行かしむ」等のごとく、動詞にすさしむの三助動詞中の一を添へてあらはす。使役。右三助動詞の各條參照。

しえつ 私謁【名】私事のための謁見。表むきにあらずして謁見すること。內謁見。

しえつ 刺謁【名】名刺を呈出して、會見を申し込むこと。

しえな (英Sienna)【名】『伊太利亞のシエナ(Sienna)市の產有名なるよりいふ』美しき黃赤色の粘土。細かに碎き、水簸(スヒ)して、洋畫の繪具に用ふ。

しえふ 枝葉【名】【植】樹木の枝と葉と。えだは。【事】事の主要ならぬ部分。すゑ。えだは。末節。謠曲「熊野」「盜も命のありてこそ、あら枝葉や退かんとて」

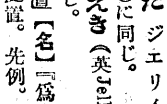
しえふ 子葉【名】(植)『英 Cotyledons 又は Seed leaves』植物の胚に著生する、最初の葉。植物の種類によりて、その數、一枚なると二枚なると、多數なるとあり。

しえふ 子孫枝【句】『子孫枝葉の義』子子孫孫。東鑑「子孫孫枝、永可レ候二門下一之由申レ之」

しえふ 子葉【名】(人)おほたかげんご(大高源吾)の雅號。「略。

しえふ 四葉【名】【植】四枚の葉。【事】次條の

しえふさ 四葉座【名】四箇の葉より成れる座金(カナ)。四葉。


(しえふざ)

じえむ (英Gem)【名】(美)裝飾用として、彫刻を施せる寶石。ぢえむ。

しえん 紫烟【名】紫色に見ゆる烟。

しえん 資緣【名】たすけ。てがかり。盛衰記「笛は今生一旦の翫物、經は當來得脫の資緣なり」釋迦如來誕生會、林丹が妻瑠璃仙女、藥師が資緣貰きのため、緣を求めて、下司奉公」

しえん 紙鳶【名】たこ。いかのぼり。

しえん 詞筵【名】文人の會合の席。文章・詩歌・俳句などの會。

しえん 肆筵【名】さかもり。酒宴。

しえん 賜宴【名】貴人より酒宴を賜はること、又その酒宴。

じえん 侍宴【名】酒盛の席に列なること。宴席に侍ること。

じえん 慈延【名】(人)歌人。天台宗の僧。信濃國善光寺の人。俗姓は塚田。京都に出でて、澄月と同じく、洛東岡崎に閑居し、大愚また吐屑庵と號す。歌は冷泉爲村に學びて、おのづから新趣を帶ぶ。澄月・小澤蘆庵・伴(バン)高蹊と併はせて、平安の四天王と稱せらる。文化二年歿す。

しえんくびいる (英Golienk beer)【名】『Golienk は酒場(バ)の意の獨逸語』一種の獨逸製のビイル。原料も製法も普通のと大差なけれど、それよりも酒精分少なくして、エキス分多く、醱酵約一箇月にして飲用に供せらる。主として、冬季用なり。

しえんくわはくきん 四鹽化白金【名】(化)白金を王水に溶し、その溶液を蒸發せしめて得る、赤褐色の結晶塊。白金鍍金・寫眞術などに用ふ。

しえんはふ 施鹽法【名】(醫)皮の腐敗を防ぐために、食鹽を生皮に施す方法。

じえらちん (英Gelatine)【名】ぜらちんに同じ。

しえらっく (英Stellor)【名】らっくを見よ。

じえりい (英Jelly)【名】ぜりいに同じ。

じえりいがた ジエリイ型【名】ぜりいがた(ぜりい型)に同じ。

じえりいけえき (英Jelly cake)【名】ぜりいけえきに同じ。

しおき 仕置【名】『爲(シ)置の義』【事】しおくこと。處置。先例。【事】とりしまり。警戒。警備。【事】刑にあつること。罪すること。成敗(セイ)。處罰。刑罰。大鏡「もしおきに遇ふ身なり」【四】小供の惡戲を懲し戒むること。

しおきずみものやう 仕置濟帳【名】江戸時代に、訴訟或は處分の裁許のすでに濟みたる者を記載せる帳簿。

しおきば 仕置塲【名】刑を行ふところ。刑場。

しおきもの 仕置者【名】【事】取締をなす人。新可笑記「古代、河內の國守に仕へて、その家の仕置者なり。萬人この下知を受くるは、正道自然とあらはれ」【事】處刑を受くべき人。成敗者。罪人。

しおく 仕置く【動四他】『仕は爲(シ)の義』してをく。なしのこす。しのこす。處置す。源氏「國のつかさにて、しおきたることなければ」

しおくり 仕送・爲送【名】『仕は爲(シ)の義』しおくること。春花五大力「家賃から、米鹽、まきまで、しおくりの催促がようござりやす」

しおくる 仕送る・爲送る【動四他】『仕は爲(シ)の義』生計を助くるため、金錢・品物などをみつぎて送る。

しおち 仕落【名】『仕は爲(シ)の義』しそこない。しそんじ。てぬかり。ておち。國姓爺合戰「あんまり酷いつれない、何の見落・仕落がある」

しおとす 仕落す【動四他】劣れるものとす。おしつく。ないがしろにす。用明天皇職人鑑「われわれを仕落しておのれ一人が錢とらう、やああたたかなかすわっぱ」

しおほす 爲果す【動下二他】なしとげ、成就す。川中島合戰「はは嬉し、今日こそしおほせたり」

しおん 子音【名】(語)しいん(子音)に同じ。

しおん 齒音【名】(語)【事】支那の音韻學上における五音又は七音の一。我が國の佐行音及びこれに近似せる音を發するもの。例へば心・邪・照・禪などの音の類。【事】『英 Dental』ぜったんおん(舌端音)に同じ。

しおん 師恩【名】師よりうけたる恩。

しおん 四恩【名】(佛)『釋氏要覽と心地觀經とに見ゆ』父母の恩と、師友の恩と、國王の恩と、施主の恩との併稱。一說には、父母・衆生・國王・三寶の四者の恩なりと。盛衰記「世に四恩と云ふことあり」

しおん 私恩【名】【事】特にその人にのみ施す恩惠。【事】自己の地位を利用して、恩を賣ること、又その恩。

しおん 至恩【名】この上なき恩。

しおん 慈恩【名】いつくしみ。なさけ。

じおん 字音【名】漢字の發音。古來我が國に入り、國語化して存する、支那の字音、吳音・漢音・唐音・又は宋音)などの區別あり。おん。各その條參照。

じおんかなづかひ 字音假字用格【名】(書)字音の假字遣を正したるもの。一卷。本居宣長の著。

じおんじ 慈恩寺【名】【事】ぎんかくじ(銀閣寺)に同じ。【事】羽前國西村山郡醍醐村大字慈恩寺にある天台眞言兼宗の寺。本尊は彌勒菩薩。聖武天皇の勅願所にて、行基の開基といふ。末寺三十餘あり。【三】武藏國南埼玉(サイタマ)郡慈恩寺村にある天台宗の寺。坂東巡禮第十二番の札所にして、華林山最上院と號す。本尊は千手觀音。天長中、僧圓仁の開基。

じおらま（英 Diorama）【名】ぢおらまを見よ。

しか 鹿【名】■一【動】反芻偶蹄類に屬する獸。四肢長くして瘠せ、頭部割合に小さく、雄は叉狀の雙角を有す。毛色、夏は赤褐にして、白斑あれども、冬期は一般に灰褐色なり。我が國の特產にして、往時に北海道に多かりしかど、今は甚だ少なし。かせき。かせぎしか。かのこ。か。かのしし。錦馬。古は牝を「めか」といひ、牡の方のみを「しか」といへり。■二はなしか（話家）の略。〔東京の俚語〕

鹿の上毛（ウハゲ）**の星**【句】秋に至りて、鹿の毛に生ずる白き斑紋。

鹿の柵（シガラミ）【句】〔植〕『鹿は萩を折敷きて、柵のごとくにして伏すよりいふとぞ』はぎ（萩）の異稱。新古今「川水に鹿のしがらみかけてけり浮きて流れぬ秋萩の花」

鹿の角伐（ツノキリ）【句】毎年、秋の彼岸に、奈良春日神社の神鹿の角を伐る行事。京阪地方より見物群集す。

鹿の角を蜂が螫（サ）**す**【句】痛痒を感ぜぬ譬。無關心なる狀。〔諺語〕

鹿の妻【句】〔植〕「鹿の柵」に同じ。

鹿の花妻（ハナツマ）【句】〔植〕「鹿の柵」に同じ。「萩が花妻」參照。

鹿待つ處の狸【句】良き獲物せんとて待居れば、劣りたる意外の物を獲しことの譬。〔諺語〕 盛衰記「思ふ敵にはあらずして、岡部彌次郎なり。あな無慚や。鹿待つ處の狸とは、この事にや。なにしに來って、義貞に討るらんとて」

鹿を爭ふ【句】「中原に鹿を爭ふ」を見よ。

鹿を逐ふ【句】「中原に鹿を逐ふ」を見よ。

鹿を逐ふ者は山を見ず【句】『淮南子に「逐レ鹿者、不レ見二太山一」とあるに本づく』ある事に熱中する時は、他を顧ることなし。〔諺語〕

鹿を追ふ獵師、山を見ず【句】前條に同じ。〔諺語〕 謠曲（善知鳥）「鹿を逐ふ獵師は山を見ずといふことあり。身の苦しさも悲しさも、忘れぐさの追鳥」

鹿を指（サ）**して、馬と言ふ**【句】『史記の秦始皇本記に「趙高欲レ爲レ亂、恐二群臣不一レ聽、乃先設レ驗、持レ鹿獻二於二世一曰馬也、二世笑曰、丞相誤邪、謂レ鹿爲レ馬」とあるに本づく』事を設けて、人を欺き、愚弄するに譬へていふ語。鹿を馬。

秋の鹿は笛に寄る【句】秋の鹿は夫を戀ふる情甚しき故、笛の聲に慕ひ寄る。〔諺語〕

五色の鹿【句】『九色鹿經に見ゆ』九色の鹿の誤にて、昔、水中に陷り漂ひし人、角白く毛の九色なる鹿に救はれしが、後、國王この鹿の棲める山を、その救はれし者に敎へられ、山を圍みてこれと獲んとせしが、救はれし者の忘恩の事實を知り、却って鹿を助け、その者を死罪に處したりといふ傳說。宇治「五色の鹿の事」

五十坊主に、鹿の角【句】「二十坊主（ハタチバウズ）に牛の睾丸（フグリ）、五十坊主に鹿の角」を見よ。

鳴く鹿も夢合（ユメアハセ）**のままに**【句】『仁德紀に「牡鹿謂二牝鹿一曰、吾今夜夢レ之、白霜多降之、覆二我身一、是何祥焉。牝鹿答曰、汝之出行、必爲レ人見レ射而死、即以二白鹽一塗二其身一、如二霜素一之應也、…未レ及二昧爽一、有二獵人一、以射二牡鹿一而殺、是以時人諺曰、鳴牡鹿矣隨相夢也（ナクシカモイメアハセノママニ）」とあるに本づく』夢合は疎かにすべからず。〔諺語〕

し‐か 師家【名】師匠の家。

し‐か 枝柯【名】木のえだ。

し‐か 史家【名】れきしか（歷史家）に同じ。

し‐か 私家【名】自己の家又は私人の家。

し‐か 詩家【名】詩を作る人。詩人。

し‐か 詩歌【名】詩と歌と。しいか。韻文。

し‐か 賜暇【名】官吏に休暇を賜ふこと、又その休暇。

し‐か 知客【名】〔佛〕『漢字の宋音』禪宗の役僧の一。住持に隨從し、四來の僧衆・賓客を接待する役。典客。

し‐か 嗜痂【名】『宋書の劉穆之傳に「邕嘗詣二孟靈休一、靈休先患二灸瘡一、瘡痂落在二牀上一、因取食レ之、靈休大驚、痂未レ落者、悉褫取以飴レ邕、邕去、靈休與二何勗書一曰、劉邕向顧見レ噉、遂擧レ體流レ血」とあるに本づく』即ち痂（カサ）を嗜む意。普通の人と異なる嗜好。「嗜痂の癖」

し‐か 四下【名】あたり。四方。

し‐か 四家【名】最古の歌學書を著はしし四人、即ち濱成・喜撰・孫姬・石見女（イハミ）の併稱。わかしき（和歌四式）參照。

四家の式【句】わかしき（和歌四式）に同じ。

し‐か 市價【名】市場にて賣買する値段。さうば。時價。

し‐か 紙價【名】紙のあたひ。

洛陽の紙價、これがために貴し【句】『晉書の文苑傳に「左思字太仲、齊國臨淄人、貌寢口訥、而辭藻壯麗、造二齊都賦一、一年乃成、復欲レ賦二三都一、構レ思十年、及レ賦成一、時人未二之重一、張華見曰、班・張之流也、於レ是競相傳寫、洛陽爲レ之紙貴」とあるに本づく。班・張は、兩都賦の作者班固と二京賦の作者張衡とをいふ』著書の盛んに世に行はるる狀。〔諺語〕

洛陽の紙價を貴からしむ【句】『前條を見よ』名著・傑作を世に出す。〔諺語〕

し‐か 子夏【名】〔人〕孔子十哲の一人。卜商の字。衞の人なりといふ。孔子より少きこと四十四歲。文學に長ず。魏の文侯に聘せられ、國政に與かる。經書の傳、この人に俟つこと多し。

しか【名】〔植〕獨活（ドウ）の大なるもの。〔西國の方言〕

しか 志珂【名】〔地〕しかのしま（志賀島）を見よ。

しか 然【副】その如く。さやうに。然（サ）。源氏「うちよりかとのたまへば、しか、まかりて侍るままなり」大鏡「しかの如くに入道殿の御さかえを申さん」

云爾（シカイフ）【句】『爾（シカ）云ふ。即ち然言ふの義』漢文の末尾。

然・然【句】■一然あり然あり。然（サ）なり然（サ）なり。いかにもその通りなり。〔古語〕大鏡「しかしか、さはべりしことなり」■二さらさら思ふやうに。それ程までに。夕霧阿波鳴渡「氣色もしかじかはかどらねど、先づ和子樣を見たさに」今宮心中「私が氣色もしかじかとはなけれども」

云云（シカジカ）【句】『然然の義。云云の字は云云爾爾即ち云爾（シカイヒ）云爾（シカイフ）の略』云云（ウンヌン）。芭蕉「ああ春や大なるかな春と云云」

然なれ【句】されど。しかれども。

然なれこそ【句】『然なればこその意』然あるがゆゑに。されば。〔古語〕萬葉「いにしへもしかなれこそうつせみも妻爭ふらしき」

然なれば【句】されば。しかれば。〔古語〕

然申す【句】「云爾（シカイフ）」の敬語。

然のみならず【句】それのみならず。なほ又。その上に。〔加之〕

然はあれど【句】然れども。されど。〔古語〕古今「年經ればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし」

しか 聢・確【貌】■一たしか（確）に同じ。萬葉「しかとあらぬ鬚かき撫でてあれをおきて人はあらじと誇ろへど」狂言（花子）「しかと然（サ）らか」■二すきまなきさま。多きさま。ぎっしり。びっしり。太平記「その國の某と名乘って、廻廊にしかと並みゐたり」

し‐が 齒牙【名】■一齒と、きば。■二口さき。口のはし。■三〔植〕『英 Dentate』葉緣の鋸齒の鋭く尖りて、外方に直出せるもの。齒牙緣。

齒牙に挂（カ）**くるに足らず**【句】『史記の叔孫通傳に「此特群盜鼠竊・狗盜耳、何足レ挂二之齒牙一」とあり』かれこれと言ふだけの價値なし。

しが 志賀【名】■一〔地〕次條■一を見よ。■二姓氏の一。漢主劉協より出でしもの。姓（カバネ）は忌寸（イミキ）。■三謠曲の一。官人、花見のために、志賀の山に赴きしに、大伴黑主の靈なる山賤（ヤマガツ）の翁が、歌語することを作れるもの。古名、黑主（クロヌシ）・志賀黑主。

しが 滋賀【名】〔地〕■一四十三縣の一。近江國全部を管轄す。縣廳を大津市に置く。■二上

古の志賀の地域に當る。㊁近江國十二郡の一。郡役所を大津市に置く。

じーか 時下【名】このごろ。この節。目下。

じーか 寺家【名】㊀寺院の内にて、弟子の僧の住する家。㊁じけ(寺家)を見よ。

じーか 自家【名】おのれ。自分。

じーか 時價【名】その時の相場。一定の時における市價。

じが 爾雅【名】〔書〕『爾は邇にて、近の義、雅は正しき義、即ちその言近くして用多く、正を取る意にて名づけしものといふ』主として、經典の訓語を記載したるもの。著者明かならず。二卷。もと二十篇なりしも、現今は釋詁・釋言・釋訓・釋親・釋宮・釋器・釋樂・釋天・釋地・釋丘・釋山・釋水・釋草・釋木・釋蟲・釋魚・釋鳥・釋獸・釋畜の十九篇を存するのみ。

じが 似我【名】〔動〕**じがばち**(似我蜂)の略。

じが 自我【名】〔哲〕『英 Ego 又は Self』思惟し、經驗する吾人自身、即ち主觀的自己。知の方面よりいへば、認識の主體、情の方面よりいへば、利害を感ずる主體、意志の方面よりいへば、活動の主體たるもの。小我。

自我の分裂【句】〔哲〕『英 Division of self』一個人の精神活動が二分し、その分れたる精神活動は、各一箇の系統を作りて、連續を有しながら、相互の間は少しも調和の保たるることなく、甚しきに至りては、二者互に相爭ふことあるもの。その結果として生起する人格の障害を二重人格といふ。人格の分裂。

自我の變換【句】〔哲〕『英 Alternations of self』「人格の變換」に同じ。

しがあ《英 Cigar》【名】葉卷の煙草。

しかあくにち 四箇惡日【名】壬子・乙卯・戊午・辛酉の四箇の惡日。辛酉殊に凶日なりといふ。〔陰陽家の語〕

しかーあはせ 詩歌合【名】**しいかあはせ**(詩歌合)に同じ。

じかーあはせ 自歌合【名】自作のもののみを左右に番(つが)へて、他人にその優劣を判ぜしむる歌合。遠鏡和尚自歌合その始なるべしといふ。

じかあんじ 自家暗示【名】〔哲〕**じあんじ**(自暗示)に同じ。

しーかい 四海【名】㊀四方の海。㊁『博物志に「七戎・六蠻・九夷・八狄・形類不レ同、總而言レ之謂二之四海一、言皆近二于海一也」とあり』四方の夷狄の國國。㊂『四方の海の内の義』天下。國内。海内。〔國姓爺合戰「君今四海を保ち、民を治めたまふと」〕㊃〔佛〕須彌山(シュミセン)を圍繞せりといふ四方の外海。

四海兄弟(ケイテイ)【句】『論語の顏淵篇に「君子敬而無レ失、與レ人恭而有レ禮、四海之内、皆兄弟也、君子何患乎無二兄弟一也」とあるに本づく』世の中の人人は、皆互に兄弟の如く親しむべきものなり。

四海同胞【諺語】

四海同胞【句】前條に同じ。

四海波靜かなり【句】天下泰平なり。〔諺語〕

四海を家とす【句】「天子は四海を以て家とす」を見よ。

しーかい 四界【名】㊀『群書拾唾に見ゆ』天界・地界・水界・陽界の併稱。㊁〔佛〕『俱舍論の界品頌に「大種謂二四界一、即、地・水・火・風」と見ゆ。四者おのおの自性を持して改めざるによりて界といふ』しだい(四大)に同じ。

しーかい 四戒【名】㊀四つの戒。㊁劍道における驚・怖・疑・惑の四つの戒。驚とは相手の擧動を見て、覺えず心の動くをいひ、怖とは怖氣(オヂケ)の生ずるをいひ、疑とは已れに一定の胸算なく、相手の動作によりて變動するをいひ、惑とは相手に瞞着・愚弄せられて、度を失ふをいふ。㊂〔佛〕解脫戒・定共戒・道共戒・斷戒の稱。

しーかい 史海【名】田口卯吉の主筆せる史學の雜誌。明治二十四年創刊、一時中止の後、二十九年第三十八號を以て廢刊す。

しーかい 詞海【名】ことば又は詞藻の豐富なることを海に譬へていふ語。ことばのうみ。

しーかい 死海【名】〔佛〕「生死(シャウジ)の海」に同じ。

しーかい 斯界【名】この一つの社會。

しーかい 視界【名】㊀〔醫〕しや(視野)に同じ。㊁〔兵〕陣地の前方の通視し得べき區域。また眼鏡を以て眺望する區域の、その鏡内に象影し得べき濶度。

しーかい 支解【名】身體・手足などを切りはなすこと。

しーかい 尸解【名】㊀仙家にて、肉體を地上に殘して昇天するに及び、後に殘れる肉體の少しも生時に異ならずといふこと。㊁神仙となりて化し去ること。

しーかい 使介・使价【名】『介は人又は下男の義』しや(使者)に同じ。

しーかい 豕喙【名】長く突出でて尖れる脣。〔佛〕鳥喙(イカ)。

しーかい 市街【名】まち。まちなか。ちまた。

しーかい 死骸・屍骸・尸骸【名】㊀しかばね。なきがら。㊁肝心の物の無くなりたる殘部。例へば酒を飲みたる後の瓶など。〔俚語〕

しーかい 紫蓋【名】山氣を紫のきぬがさに譬へていふ語。著聞『ちひさかりける筆を執らせたまひて、紫蓋之峯風疎と、三句を大文字にて、四枚に書きみてさせ』

しーかい 絲鞋【名】絲を編みて作れる履。純(ジュン)の緒ありて、幼帝・皇太子の御料。また老人及び舞人舞樂の際に著用す。和名抄「絲鞋、仲止乃久都。今案、俗云二之加伊一」

しーかい 鰭鷹『兵部卿隆親は、絲鞋をはきて、鳩の杖をつきて』

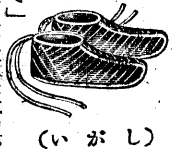
しーかい 耳介【名】みみ。外耳。耳殼。耳翼。

しーかい 字解【名】文字の解釋。文字の意味の說明。

しーかい 磁界【名】〔理〕じりょく(磁場)に同じ。

しーかい 磁界の強さ【句】〔理〕「磁力の強さ」に同じ。

じーがい 自害【名】自ら生命を絶つこと。自殺。〔太郎なりけるをのこは、南殿の御帳の内にて自害しぬ〕



(いがし)

しがい-かんせん 市街幹線【名】各需要家に供給するため、市街に網狀に架設したる電線。

しがい-せん 市街戰【名】市街の中にて行ふ戰鬪。

しがい-たくち 市街宅地【名】〔法〕地租條例による、有租地第一日に屬する地目。市街又は繁華なる町村にある宅地。

しがい-だて 四階建【名】家を四階に建築すること、又その家。しかいづくり。

しがいだん 四戒壇【名】〔佛〕三戒壇に延曆寺の戒壇を併はせて呼ぶ稱。かいだん(戒壇)参照。

しがい-ち 市街地【名】市街をなせる土地。

しがい-づくり 四階造・四階作【名】㊀しがいだて(四階建)に同じ。㊁船側に四段に板を張りたる船。

しがい-てつだう 市街鐵道【名】『英 Street railway』市街交通の目的にて敷設したる鐵道。動力の種類は、現時は殆どすべて電車なれども、以前は馬車も行はれたり。

しかい-なみ 四海波【名】婚姻の席上にて、謠曲「高砂」の「四海波靜かにて、國も治まる時つ風、…君の惠ぞありがたき」の小謠を獨吟すること。德川時代には、正月三日の謠始めに、觀世太夫の獨吟するを、吉例としたり。

しかいはふ 私海法【名】〔法〕海法の一。私法に屬するもの。即ち海商法の類。

じがい-わらじや 自害往生【名】自害して往生すること。法然上人行狀畫圖「自害往生・燒身往生・入水往生・斷食往生等の事」

しかう 思考【名】㊀おもひ。かんがへ。思案。㊁〔哲〕しこう(思惟)に同じ。思考の原理【句】〔哲〕「思想の原理」に同じ。

しかう 私考【名】已れ一個の意見。私見。

しかう 詩稿【名】詩の草稿。

しかう 至巧【名】極めて巧みなること。

しかう 至幸【名】極めて幸なること。

しかう 至高【名】極めて高きこと。最高。

しかう 至孝【名】極めて孝行なること。しいかう。

しかう 四向【名】〔佛〕しくわ(四果)を見よ。

しかう 四郊【名】四方の郊野。

しかう 四更【名】夜の八つどき。丑の刻。今の午前二時より四時までの間。丁夜。

しかう 四行【名】一『管子に「孝悌者仁之祖也、忠信者交之慶也」とあり』人の行ふべき四つの道、即ち孝・悌・忠・信。二『曹大家の女誡に見ゆ』しこく(四徳)一に同じ。

しかう 施行【名】一實地にとり行ふこと。執行。施爲。二政令を實施すること。せぎやう。三〔法〕『獨 Ausführung』法律の公布後、一定の期限の到來を待ちて、その拘束力を發現せしむること。しかうきげん(施行期限)參照。

しかう 私行【名】一内密の行爲。二私人としての行爲。

しかう 私交【名】うちうちのまじはり。個人としての交際。

しかう 恣行・肆行【名】ほしいままに行ふこと。氣ままなる行爲。

しかう 死交【名】『しいう(死友)を見よ』事ある折は、死を共にせんと誓ふ交はり。

しかう 家交【名】『孟子の盡心上篇に「食而弗愛、豕交之也」とあるに本づく。豕のごとくに交る意』人を待遇するに、禮を缺てせざること。

しかう 脂膏【名】一肉體のあぶら。二勞役して得たる收益などの譬。膏血。

しかう 嗜好【名】たしなみこのむこと。すきこのみ。

しかう 志行【名】一こころがけと身持と。二志と行とのよろしきこと。

しかう 志向【名】一こころざしの向ふかた。こころざし。意向。二〔哲〕『英 Intention』動機と行爲とを成遂する上は、生ずるならんと豫期せらるる結果の總稱。

しかう 歯腔【名】〔醫〕しくう(齒髓腔)に同じ。

しかう 絲膠【名】絹絲の本體たる絲素を圍繞する膠質物。炭・酸・水・窒の四元素より成り、その性、膠(ニカワ)に類す。

しかう 支考【名】〔人〕かがみしかう(各務支考)を見よ。

しかう 四皓【名】「商山の四皓」を見よ。

しかう 諡號【名】おくりな(諡)に同じ。

しかう 師號【名】高僧に賜ふ法師・禪師・大師等の稱號。「紫衣(エ)・師號を賜ふ」

しがう 氏號【名】うぢと、なと。

しがう 試毫【名】かきぞめ。試筆。

しがう 絲毫【名】『絲も毫も小數の稱』極めて僅かなること。

しがう 詩豪【名】すぐれたる詩人。詩伯。

しがう 至剛【名】極めてこはきこと。

しかう 侈傲【名】おごること。

じがう 事項【名】事がら。箇條。

じかう 時効【名】〔法〕『英 Prescription』一一定の期間或事實狀態の繼續したる經過と、その他法定の要件とに因る、權利の取得又は消滅の方法。取得時効と消滅時効の二種あり。各その條を見よ。二みんじじかう(民事時効)の略。

じかう 時効の利益【句】〔法〕當事者の、時効によりて受くる利益。

じかう 侍講【名】一君主に侍して、書を講じ奉る人。侍讀。二明治十九年宮内省官制改正以前、同省に置かれし職員。天皇に侍して、書を講じ奉りたり。三東宮職に置かれ、東宮に侍讀・進講して、御學德を涵養することを掌りし高等官。始は東宮侍講と稱し、後單に侍講と稱せられしも、大正元年東宮職官制中を改正し、侍講の條を削除せらる。

じかう 時好【名】時のはやり。時代のこのみ。

じがう 寺號【名】寺の名號。

じがう 次號【名】新聞雜誌などの、遞次に發行する號。

じがう 字號【名】活字の大小の號。

じがう 時號【名】當時に名あること。その時の評判。東鑑・長房・保教等、本自義鳩、得"時號"」

じかうおんぶ 次高音部【名】〔音〕『英 Mezzo-soprano』人聲の區域を大分したる中の、第二の高き區域、即ち高音部と中音部との中間に位するもの。女又は少年の中位に高き聲。

しかうき 試硬器【名】鑛物の硬度を精密に計る器械。

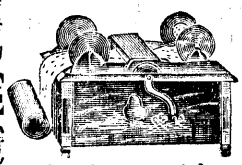
「次條の略。

しかうき 施行期【名】一施行する時。二しかうきげん 施行期限【名】〔法〕法令がその拘束力を實際に發生する期日。我が國にては、公布の日より起算し、滿二十日後とし、特別の期限を定めたる者は、この限にあらずと規定せらる。施行期日。施行時期。いじしかうしゅぎ(異時施行主義)とうじしかうしゅぎ(同時施行主義)參照。

しかうきじつ 施行期日【名】前條に同じ。

しかうきそく 施行規則【名】特定の法律又は命令の施行に關する事項を定めたる規則。執行規則。

しかうきん 紙腔琴【名】長方形の匣の中に一弦を張すべき裝置を設け、別に樂譜を刻みたる厚紙ありて、これを匣に插み、把手を取りて廻せば、自然に樂譜通りの音を發するやうに仕掛けたる洋樂器。蓄音器の輸入以前に流行せり。



(しかうきん)

しかうくわつどう 思考活動【名】〔哲〕しねん(思惟)二に同じ。

じかうくわんせい 時効完成【名】〔法〕時効が、一定の期間繼續し終りて、その實効を生ずるに至りたること。

しかうこもんふ 至高顧問府【名】さいかうこもんふ(最高顧問府)に同じ。

しかうさいそく 施行細則【名】特定の法律又は命令の施行に關する事項の細則。

しかうさよう 思考作用【名】〔哲〕しねん(思惟)二に同じ。

しかうじき 施行時期【名】〔法〕しかうきげん(施行期限)に同じ。

しかうして 而して【接】『然しての音便』さて。さうして。しかして。

しかうじやう 施行狀【名】しぎやうじやう(施行狀)を見よ。

「書」に同じ。

しかうしよ 施行書【名】しぎやうしよ(施行書類)【名】〔哲〕さいかうぜん(至高善)【名】〔哲〕さいかうそ(最高善)に同じ。

しかうそ 嗜好素【名】脅養素とは別にして、食品に美味を與へ、また消化力を補助し、なほ神經系を興奮せしむる食料及び飲料。最も普通なるは酒精飲料にして、その他、珈琲・茶・カカオ・煙草など。嗜好料。

しかうち 施行地【名】法規・命令の施行せらるる土地。

じかうちゆうだん 時効中斷【名】〔法〕『英 Interruption of prescription』時効の進行中、時効の要素と兩立すべからざる事實の發生したるため、その既に經過せし期間の利益を消滅せしむること。

しかうつうしん 視號通信【名】〔兵〕彼此兩地點に在りて、互に目視し得る器具を用ひ、符號又は相圖をなしつつ行ふ通信法。即ち手旗信號・回光傳信器・火箭など。

じかうていし 時効停止【名】〔法〕『英 Suspension of prescription』法律に定めたる原因によりて、一時、時効の進行を中止すること。時効の進行中における停止と時効の完成期における停止との二種あり。

しかうど 視高度【名】〔天〕『英 Apparent altitude』地球上の地平面より視たる高度。しんかうど(眞高度)參照。

しかうにちげん 施行日限【名】〔法〕しかうきげん(施行期限)に同じ。

じかうはうき 時効拋棄【名】〔法〕『英 Renunciation of prescription』時効の進行中、既に經過せし期間に對する利益を拋棄すること。

しかうひん 嗜好品【名】人類各自の嗜好に投ずる食品、即ち各嗜好素の混合物、或は嗜好素と食素との混合物の總稱。

しかうらう 鹿占【名】古の占法の一。鹿の肩骨を燒き、その割れ方によりて、吉凶を判ぜしもの。

じかうらん 事項欄【名】文書中事項を記す部分。

しかうるゐ 趾行類【名】〔動〕食肉類の一亞目。行くに趾尖を以てし、蹠を地上に觸ることなきもの。犬・猫・鼬鼠(イタチ)などの類、これに屬す。

「に同じ。

しかうれう 嗜好料【名】しかうそ(嗜好素)

しがえん 歯牙縁【名】〔植〕しが（歯牙）㊂に同じ。

しかおどし 鹿威【名】弓矢などの形を作りて、鹿の畠など荒すをおどし防ぐこと、又そのもの。一代男「あらけなき男、四五人竹の尖鑓（ヤリガン）鹿おどしの弓・山杓（ヤマガラ）振上げて」

しかかくげん 四箇格言【名】日蓮上人が、他宗折伏のために唱道せし「眞言亡國律國賊・念佛無間（ムケン）・禪天魔」の四句。眞言宗は國を亡す邪教、律宗は小乗教を末法に弘めて、大乗の地を奪へるが故に、國賊に等しく、念佛宗は法華經を誹謗せるが故に、同經の明文に照して、その行者は無間地獄に墮すべく、禪宗は教外別傳・不立文字を立て、釋迦の教を奉ぜざるが故に、天魔の所爲なりとていへるもの。

しかがくれゆり 鹿隠百合【名】〔植〕うばゆり（姥百合）に同じ。

しかかすげ 鹿糟毛【名】馬の毛色の一。白きさし毛のある鹿毛（カゲ）。

しかがは 鹿革【名】鹿の鞣皮（カハ）。柔軟にして、精密なる機械の研磨、又は時計を包む等の目的に多く用せられ、その他、袋物類にも使用せらる。

しかかり 仕掛・仕懸【名】しかかること。

しかかる 仕掛る・仕懸る【動四他】『仕は爲（シ）の義』㊀なし始む。著手す。しかく。㊁著手して、半に至る。

しかぎ 鹿木【名】『一説に鹿垣（カキ）の略、しがきなりともいふ』狩人の隠れ居て、鹿の来るを待つところ。高木の股に、横木を結びつけて、向よりは見えぬやうに造る。「古語」夫木「ますらをのしかぎの影もあらはれて忍ぶ隈なき秋のよの月」

じかきてい 自家規定【名】〔哲〕『英 self-determination』内的原理、即ち主觀に供ばる原理に基づく規定・決定。自己規定。

しかきてう 賜暇歸朝【名】外國在勤の官吏の、休暇を得て、本國に帰ること。「く。

しかく 刺客【名】暗殺を行ふ人。せきかく。

しかく 詩客【名】しじん（詩人）に同じ。

しかく 詩格【名】詩の法式また品格。

しかく 紙格【名】紙にて張りたる格子。

しかく 資格【名】身分・地位、又その要件。

しかく 四角【名】㊀四つの角（カド）ある形。方形。矩形。㊁四方の隅よすみ。四隅。㊂かどかどしき性行。性行の圓轉・滑脱ならぬこと。嚴格。四角四面。

しかく 死角【名】〔兵〕銃砲の射界の内にて、しかも彈丸の達し得ざる處。

しかく 視角【名】〔理〕『英 Visual angle』物體の兩端より見る人の眼の水晶體の、光心を通過する二光線のなす角度。光角と相俟ちて、眼が物體の大小・遠近を認識する要素をなす。但し光角をも、視角と呼ぶものあり。

しかく 視覺【名】〔哲〕『英 Visual sensation』眼に依りて生ずる感覺。特種感覺中の主要なるものにて、眼球の網膜に分布せる視神經に光線の觸るるに因りて、意識に一種の變化の起るもの。分ちて光覺・色覺の二とす。視感。

視覺の中心【句】してん（視點）を見よ。

しかく 始覺【名】〔佛〕三覺の一。佛道を修行して、成佛するに至るまでの間に練磨する智慧。本覺の内藏と師教の外緣とに由りて發達す。（本覺に對して）盛衰記「始覺本覺、身を離れず」

しかく 仕掛く【動下二他】㊀しかかる。仕掛る）に同じ。㊁動作を仕向く。榮華「いつしかと、きたなきわざをしかけ奉らせたまへれば」㊂飯をたき、又は湯をわかす仕度をなす。懐八卦柱曆「奥の臺子もしかきや、庭の小座敷も掃除しや」㊃裝束をなす。工夫を施す。「仕懸く」

しかく 爾く【副】そのやうに。しか。

しがく 詩學【名】㊀詩に關する學問。㊁『英 Poetics』詩を教ふる學科。詩㊁の内容と形式とに關する學問。

しがく 四學【名】しじゅつ（四術）に同じ。正統記「古には、詩書・禮樂を以て、國を治むる四術とす。金・石・絲・竹の樂は、四學の一にて、專ら此をする本なり」

しがく 史學【名】歴史の學問。

しがく 死學【名】實用に適せぬ學問。しにがくもん。

しがく 斯學【名】この學問。「斯學の大家」

しがく 仕學【名】『論語の子張篇に「子夏曰、仕而優則學、學而優則仕」とあるに本づく』官事と學事と。官に仕へて、功績を擧ぐると學術と。

しがく 志學【名】㊀學問に志すこと。㊁『論語の爲政篇に「吾十有五而志于學」とあるに本づく』男子の十五歳。

志學の歳【句】前條㊁に同じ。太平記「志學の歳の始めより、六義の道に長ぜさせたまへり」

しがく 視學【名】㊀教育事業の視察。㊁北海道廳及び各府縣廳に屬し、視學官の指揮を受けて、管内における學事の視察、その他學事に關する庶務に從事する判任官。また郡に郡視學、各島廳に島廳視學あり。㊂文部省に置かれ、大・中・小の三等に分れて、學事を掌りし判任官。明治六年設置、同八年大視學は奏任となりしが、同十年廢せられたり。

しがく 私學【名】㊀『史記の李斯傳及び秦の始皇本記などに出づ』私の考へより出でし説。私説。㊁私立の學校。私學校。（官學に對して）

しがく 四嶽・四岳【名】㊀古、支那にて、四方の諸侯の事を掌りし官。平安、四岳・八元の民を撫づる」㊁（地）山城國の加意嶽・愛宕（オタギ）山・比叡山及び日向國高千穂峯の併稱。

しがく 試樂【名】音樂をまづ試むること。古、御賀・行幸等の時、當日の舞樂を、期に先だち試奏すること、又、賀茂・石清水（イハシミヅ）の兩社にて行はるる音樂を、豫め禁中にて試奏する等にいへり。てうがく（調樂）參照。源氏「行幸近くなりて、しがくなどのしる頃ぞ、命婦は參れる」

しがく 仕覺【名】用意。準備。才覺。一代女「何始末して、緣に附くべきしがくもなく、年月酒に暮れて」

じかく 自覺【名】㊀みづからさとること。己れの價値・分際などを意識すること。㊁〔佛〕みづから大悟徹底して、安心を得ること。㊂〔佛〕三覺の一。阿羅漢の具有せるもの。㊃〔哲〕『英 Apperception』論理上、自己のいかなるものにして、社會にいかなる關係を有するかを了解し、また宗教上、宇宙の實在たる神佛等といかに關係するかを了解すること。宇宙の眞理を知りて、自己の行のその眞理と合一すること。少我を捨てて、大我に歸すること。じじつ（自意識）。てうかく（統覺）參照。

じかく 寺格【名】寺の格式、即ち門跡本山末寺・別院などの類。

じかく 時角【名】〔天〕『英 Hour angle』時圈と子午線とのなす角の稱。春分點の時角を恒星時、眞太陽の中心の時角を眞太陽時、平均太陽の中心の時角を平均太陽時といふ。

じかく 磁殻【名】〔理〕『英 Magnetic shell』きはめて薄き煎餅狀の磁石の、その附磁の方向がその面に直角なるもの。即ち一面は北極にして、他面は南極なるもの。

磁殻の強さ【句】〔理〕磁殻の厚さとその受磁の强さとの相乘積。

じかく 耳殻【名】〔醫〕『獨 Ohrmuschel』外耳の一部。左右顳顬（コメカミ）部の下に位し、外皮の皺襞と軟骨とより成りて、貝殻狀をなし、一端は遊離し、外部より來る高聲を反射して、耳孔に入りやすからしむ。人類以外にても、哺乳動物は概ねこれを具ふ。俗に、これを耳と呼ぶ。耳翼。「よ。

じかく 慈覺【名】〔人〕えんにん（圓仁）を見よ。

じがく 耳學【名】書物を見ずに、ただ耳にその説を聽くこと。うけがく。ききおぼえ。みみがくもん。ききがくもん。耳食。

じがく 字學【名】文字の構造・組織などを研究する學問。説文（セツモン）學。

しかくあんどん 四角行燈【名】方形なる行燈。（丸行燈に對して）懐八卦柱曆「臺所には、有明の四角行燈」

しかくうゑ 四角植【名】〔農〕苗を移植するに、四角播（シカク）と同樣の方法を取ること。その利もまた四角播に同じ。方形植。

しがくかう 私學校【名】しがく（私學）㊁に同じ。

しがくかうたう 私學校黨【名】西郷隆盛の職を辭して、鄉里鹿兒島に歸りし後に建てたる私學校の生徒の仲間。のち隆盛を擁して、西南の亂を起すに至れり。

しかくき 視覺器【名】〔醫〕『獨 Sinnesorgan 又 Sehwerkzeug』視覺を司る器官、即ち眼の類。視器。視官。

しがくくわん 視學官【名】一北海道廳及び各府縣廳に屬し、上官の命を受けて、管內における學事の視察、その他學事に關する事務を掌りし奏任官。明治三十二年設置。同三十八年廢止。二文部省に屬して、學事の視察を掌り、また省內の事務を執りし奏任官。今は督學官と改稱せらる。三朝鮮總督府及び臺灣總督府に屬して學事に關する視察及び事務を掌る奏任官。

じかくくわん 時角環【名】〔天〕『英 Hour circle』赤道儀において時角を示す環。

しかくけい 四角形【名】しへんけい(四邊形)に同じ。

しかくしかいのまつり 四角四堺祭【名】次條に同じ。二中歷「公家被行二四角四堺之祭一」立正安國論「天地神祇を拜して、四角四堺の祭祀を企て」

しかくしきやうのまつり 四角四境祭【名】一古、朝廷より使を發して、病人の家の四隅と國の四境とにて、疫神を祭りしこと。鎌倉幕府にても、これに倣ひて、鎌倉の地にこれを行ひたり。四角四堺の祭。四方四角の祭。東鑑「被二行四角四境祭一「御所及角・異角…坤角・乾角・小袋坂…小壺・六浦・固瀨河」二神年朝廷にて、六月三十日に行はれし鎮火祭道饗祭の稱。公事根源「鎮火道饗の祭をば、四角四境の祭と申也」

しかくしんさゐゐん 資格審査委員【名】貴族院及び衆議院における委員の一。貴族院にありては、該院議員の資格及び選擧に關する爭訟を審査する常任委員。衆議院にありては、該院議員の資格の異議を審査する特別委員。衆議院における選擧に關する爭訟判決の權は、司法裁判所に屬せしめ、委員はこれを有せず。

しかくしめん 四角四面【名】一しかく(四角)二に同じ。二至極まじめなること。しかつめらしきこと。春花五大力「日頃より、四角四面な源五兵衞どの、かやうな遊所なぞへ參るやうな仁ではないが」

じかくしや 自覺者【名】自覺したる人。大悟徹底したる人。安心を得たる人。覺者。

しかくしやうめいしよ 資格證明書【名】その資格を證明する文書。

しかくすゐ 四角錐【名】〔數〕『英 Square pyramid』底面の四角形をなせる角錐。

しかくせいねんぞくかく 視覺性音續覺【名】〔哲〕おんぞくかく(音續覺)を見よ。

じかくだいし 慈覺大師【名】ゑんにん(圓仁)を見よ。野守鏡「慈覺大師は、獨行に如法法花を修して、儀軌のなじみの壓を、儀法の妙典にとどめ」

しかくたう 四角塔【名】〔數〕『英 Square cylinder』底面の四角形をなせる角壔。

しかくだけ 四角竹【名】〔植〕しはうちく(四方竹)に同じ。

しかくはちめん 四角八面【名】すべての方面。

しかくはっぱう 四角八方【名】前條に同じ。太平記「四角八方に走りまはって」

しかくばる 四角張る【動四自】一四角の形になる。かどばる。二殊更に威儀を裝ふ。しかつめらしく振舞ふ。うちとけず。

しかくび 鹿首・鹿頸【名】琵琶の一部。上端の、後方へ斜に屈折したる部分。

しかくまき 四角播【名】〔農〕方形を畫きて、その四隅に種子を播くこと。種子の相互の間隔相等しく、且つ規則正しきため、管理に便なり。方形播。しかくうゑ(四角植)參照。

しかくむぎ 四角麥【名】〔植〕大麥の一種。穗の縱に四條に列なれる粒より成れるもの。四條麥。「に同じ。

しがくろぬし 志賀黑主【名】しが(志賀)三に同じ。

しがぐわいまく 齒牙外膜【名】〔醫〕しとんまく(齒根膜)に同じ。

しかくゐ 四角藺【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。莖は高さ一二尺、細長、綠色にして、ほぼ方形をなす。所在の原野・水濕の地に自生す。葉は莖の下部に、小鱗片となりて存するのみ。八九月頃、莖頂に淡褐色長楕圓形の穗を著く。

しがくゐんん 視學委員【名】文部大臣の命を承けて、特に指示せられし學事を視察する委員。

しかけ 仕掛・仕懸【名】一しかくること。爲しはじむること。孕常盤「白柄の長刀橫手に橫はし、仕掛を待てば」二爲しはじめて、半ばなること。三事を行ふための手段。もちかかた。かまへ。手くだ。策略。一代男「すゑらしき男ははまらせ、初心なる人には泪こぼさせ、喜ばし、一度に仕懸のかはること、うろたへたる神もだまされたまふべし」心中宵庚申「手の中つまむも一昔、古い仕掛が田舍なり」四飯をたき、又は湯をわかす仕度。生島朝顏話「されば、これから、湯のしかけと云ひつつ、あたり見まはして」五裝置。からくり。螢生隅川「此の筒は龍星と申す花火、水に入り、雲に入り、樣樣の仕掛あり」六芝居にて、早變(ハヤガハリ)・幽靈などの役を勤むる者の、道具又は衣裳に施す、特種の裝置。またこれに要する道具又は衣裳を仕掛物といふ。七(商)あらたに賣建(カヒタ)又は買建をなすこと。(取引所の語)八さぐり(探)三に同じ。九かいどり。うちかけ。かけ。〔補遺〕

十しかけはなび(仕掛花火)の略。赤い仕掛【句】若き遊女の、赤きうちかけを裝ひたる姿。又、若き遊女。俗謠「赤い仕掛に迷はめ者は木佛(キブツ)金佛(カナブツ)石ぼとけ」「ざる鮫。

しかけぐら 仕掛鞍【名】切附(キリツケ)を附けて、使用する小道具の中、特に機巧の設あるもの。

しかけごと 仕掛事【名】たくみたる事。吉野忠信「萬端かうしたは、仕懸事」

しかけさうば 仕掛相場・仕懸相場【名】相場の居すわりたる時、計略をめぐらして、これを動かし、高下を附くること。

じかしけってい 自家決定【名】〔哲〕じこけってい(自己決定)に同じ。

しかけはなび 仕掛花火【名】或形に模して組立てたる花火。點火すれば、次第に摸擬せる全形を現出す。しかけ。しかけもの。(打上げに對して)

しかけぶんこ 仕懸文庫【名】〔書〕『しかけ(仕懸)三を見よ』山東京傳の著したる洒落本。遊女の手管を記したるもの。一卷。

しかけもの 仕掛物【名】一しかけたるもの。二しかけ(仕掛)六を見よ。三しかけはなび(仕掛花火)に同じ。

しかご 零餘子【名】むかご(零餘子)を云ふ。(甲斐の方言)〔語〕

しかさま 然樣【名】さやうなる有樣。(古

しかざる 鹿猿【名】安藝國宮島にて作り賣る玩具。鹿の上に猿の乘りたる形に作り、又は鹿と猿を別別に作りたるものあり。宮島は鹿と猿との名物の地なるが故なり。

しかし 倘【接】しかしながら(乍併)の略。

しかしか 【貌】毒蟲に螫されなどしたる局部の痛む感じ。ちくちく。しかほか參照。

しかしか 然然【句】しか(然)の條下を見よ。

しかしか 云云【句】しか(然)の條下を見よ。

しかしき 四家式【名】わかしき(和歌四式)に同じ。

しかしさう・こつまく 齒牙齒槽骨膜【名】しこんまく(齒根膜)に同じ。

しかしちろん 紫家七論【名】〔書〕才德兼備七事共具修撰年序・文章無雙作者本意・一部大事・正傳誤脫の七項を設けて、紫式部と源氏物語とに就きて論述せるもの。一卷。安藤爲章(アキ)の著。一名、紫女七論。

じかじつげん 自我實現【名】〔哲〕『英 Self-realisation』自己の本來具有する諸性能を圓滿に實現・發揮すること。自己實現。自我發展。自我充實。

じがじつげん・しゅぎ 自我實現主義【名】〔哲〕次條に同じ。

じがじつげん・せつ 自我實現說【名】〔哲〕『英 Theory of self-realisation』自我實現を吾人の道德的行爲の最高目的となす倫理學說。この學說を大成せるものは、英人グリイン(T. H. Green)なり。

しかして 然して・而して【接】しかうして

(而して)に同じ。

しかし-ながら 乍併【副】さりながら。さはいへど。されど。しかし。盛衰記「衆徒の咎には非ず。しかしながら天魔の所爲にこそ」

じか-じやうざう 自家釀造【名】酒・醬油などを、自家にて釀造すること、又その酒・醬油など。家釀。

じが-じゆうじつ 自我充實【名】〔哲〕『英 Self-fulfilment』**じがじつげん**(自我實現)に同じ。

しかしよの-かいだん 四箇所戒壇【句】しかいだん(四戒壇)に同じ。

しかす 敷かす・布かす【動四他】しく(敷く)五の敬語。しきます。治めたまふ。しろしめす。ふとしかす(太敷かす)參照。〔古語〕

しか-ず 若かず【句】しく(若く)の條下を見よ。

しかすが 然菅【名】〔地〕三河國寶飯(ホイ)郡にありし村。明治三十九年下地(シモヂ)町の一部となる。**しかすがのわたり**(然菅渡)參照。萬葉「ありそ越す浪はかしこし然菅に海の玉藻のにくくあらずて」

しかすが 【貌】さすが(流石)に同じ。〔古語〕萬葉「かきくらし雪はふりつつしかすがにわぎへの園に鶯ぞ鳴く」

しかすが-の-わたり 然菅渡【名】〔地〕王朝時代に、三河國寶飯(ホイ)郡然菅村にありし吉田川(一名、豊川)川口の渡津。古來、歌の名所たり。**しかすが**(然菅)參照。枕「渡は、しかすがのわたり」金葉「屏風の繪に、しかすがの渡、行く人立ちわづらふかた書ける所を詠める」

しか-ずゐなう 四家髓腦【名】〔書〕無名抄・綺語抄・奧義抄・童蒙抄の四部の歌學書の併稱。

じか-せん 耳下腺【名】〔醫〕『羅 Glandula parotis』唾液線の一。外聽道の下前部に在りて、下顎後窩を充塡し、上顎の第二小臼齒の所に開口す。三種の唾液線中最も大なり。

じか-せんえん 耳下腺炎【名】〔醫〕『羅 Parotitis』耳下線の腫る病。流行性と續發性の別あり。前者は、專ら小兒を襲ふ。俗に阿多福風(オタフクカゼ)といふ。後者は、口內・顏面の炎症及び腸チプス・猩紅熱等の傳染病に來る。症候は、その部位の緊張性腫脹と疼痛とを起し、從って開口・咀嚼の困難を來す。大抵一・二週間にして治癒す。

しかせん-づ 示荷線圖【名】『英 Load diagram 又 Load curve』示荷は負荷を示す義。ふか(負荷)を見よ』發電所又は配電所における供給力の變化を示す曲線。

し-かた 仕方【名】『仕は爲(シ)の義』一なす手だて。ふるまひ。方法。芭蕉「さをとめに仕方望まん信夫摺」吉野忠信「さりとは聞えぬ御仕方」二身のこなし方。身ぶり。〔仕形〕

しか-だいじよう 四箇大乘【名】〔佛〕しけだいじよう(四家大乘)に同じ。

しかた-なし 仕方無し【形一】『仕は爲(シ)の義』せんかたなし。止むを得ず。

しかた-なし-に 仕方無しに【副】すべきやうもなくて。せんかたなく。やむをえずに。

しかた-のう 仕形能【名】江戸時代に、社地その他にて、能の眞似を演じたる一種の興行物。

しかた-ばなし 仕方咄・仕形話【名】一手まね・身振に由りてはなす話。小町踊「おもしろきしかたばなしや富士の雪」二萬治・寛永の頃行はれし笑話。今の落語に似て、粗朴・儞雅なるもの。

しかた-ばなし 私可多咄【名】〔書〕笑話を集めたるもの。仕方咄の祖と稱せらる。五卷。中川喜雲の著。

しかた-まひ 仕方舞【名】所作をまじへたる舞。

じか-たん 時價單【名】『單は、紙片に記載せる事物の稱』その時の相場づけ。相場表。

し-がち 仕勝【名】一爲すだけ勝となること。用明天皇職人鑑「手柄は仕勝の、いくさの場(バ)」二とかくに爲す癖あること。

しかちいぶ (英 Siccative)【名】油繪を書きて、早く乾かすために用ふる油、卽ち乾性油。その條を見よ。

じか-ちゆうどく 自家中毒【名】〔醫〕『獨 Autointoxikation』自體內に生ぜる毒物のために起る中毒。體內の或臟器の異常に基づくものにして、例へば腎臟病の結果、尿毒症を發する類。

しが-つ 志賀津【名】〔地〕**しがのつ**(志賀津)に同じ。續後撰「みるめなきしがつの蜑のいさりぶね君をばよそにこがれてぞ經る」

しかっし-ところ 然っし處【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しか-つづみ 鹿鼓【名】**そうづからうす**(添水唐臼)を云ふ。〔上野國の方言〕

しか-づの 鹿角【名】鹿の角。ろくかく。

しかつべ-の-まがほ 鹿都部眞顏【名】〔人〕**きやうかだうまがほ**(狂歌堂眞顏)に同じ。

しかつべ-らし 【形二】一然るべきさまなり。もっともらし。しかつめらし。二ようだいぶりてあり。まじめなり。しかつめらし。

しか-つめ 【名】まじめ。眞摯(シンシ)。「さうしかつめに出られては困る」

しかつめ-がほ しかつめ顏【名】しかつめらしき顏。孔子がほ。まがほ。

しかつめ-らし 【形二】しかつべらしに同じ。

じか-でんせん 自家傳染【名】〔醫〕『獨 Autoinfection』健康體の消化器・呼吸器、その他の粘膜に附著せる病原菌の、宿主體の强壯なる間は潛伏し、發病素因强盛となるに及びて、發育・蕃殖し、發病せしむること。その病原菌は、もと外界より來りしものにて、體內に自生せしにはあらざれども、侵入するや、直ちに發病せしむる普通の傳染と區別して、特にいふ。

しが-でら 志賀寺【名】天智天皇の七年、勅に由りて、近江國志賀郡に建てし寺。今の大津市の北方にありて、本稱は崇福寺、志賀山寺ともいへり。十五大寺の一。天喜・承保の間、堂塔再興の擧ありしが、その後衰へて、今は存せず。枕「寺は壺坂・笠置(カサぎ)・法輪、高野は、弘法大師のおんすみかなるが、あはれなるなり。石山・粉川・志賀」

じか-どうちやく 自家撞著【名】『もと禪家の語にて、禪林類聚の看經門に「南靜堂云、須彌山高不レ見レ嶺、大海水深不レ見レ底、簸レ土揚レ塵無レ處レ尋、回頭撞二著自家底一」とあり』同一の人の言論・行爲などが、前後背反すること。

しが-とき 己時【名】わが心のままなる時。わが得意の時代。わがよ。〔古語〕萬葉「やましろの久世の社の草な手折りそしがときたち榮ゆとも草な手折りそ」

しかど-へい 四箇度幣【名】新年(トシゴヒ)・月次(ツキナミ)・例幣・新嘗(ニヒナメ)の四度に神に獻る幣帛。

し-がな 【助】がなを見よ。

しかな-がほ 無然顏【名】そしらぬ顏。

しか-ながら 然ながら【副】さながらに同じ。〔古語〕大和「物かきふるひいにし男なん、しかながら運びかへして」

しか-ながら 然ながら【句】しか(然)の條下を見よ。

しかなく-くさ 鹿鳴草【名】〔植〕はぎ(萩)の異稱。〔古語〕敎長集「都にも咲き匂へども鹿の鳴く名に負ふ草は秋の山里」

しかな-ぐさ 鹿鳴草【名】〔植〕前條に同じ。〔古語〕

しが-なし 【形一】まづし(貧し)に同じ。

しか-なれ 然なれ【句】しか(然)の條下を見よ。

しか-なれこそ 然なれこそ【句】しか(然)の條下を見よ。

しか-なれば 然なれば【句】しか(然)の條下を見よ。

しか-ぬ 鹿奴【名】〔地〕しかの(鹿野)を見よ。

しか-ぬ 仕兼ぬ【動下二他】『仕は爲(シ)の義』爲さじとはいはれず。或は爲すやも知れず。

し-がね 【名】〔植〕こんぶ(昆布)を云ふ。〔渡島國松前の方言〕

しかの 鹿野【名】〔地〕因幡國氣多(ケタ)郡にある町。池田氏の支封三萬石の館ありし地。古稱、鹿奴(シカヌ)。

しか-の-うら 志珂浦・志賀浦【名】〔地〕筑前國志賀島の海岸。萬葉「しかのうらにいさりするあま家人の待ちこふらむにあかしつるかも」

しが-の-うら 志賀浦【名】〔地〕近江國志賀の湖岸。後拾遺「小夜ふくるままに汀や氷るらん遠ざかりゆくしがのうらなみ」

しがのおほつのみや 滋賀大津宮【名】天智天皇の皇居。近江國滋賀郡滋賀村にありしもの。天皇の六年大和國飛鳥(アスカ)より移り給ひ、天皇の崩後、壬申の亂起り、弘文天皇崩じて遂に廢す。存續僅かに五年。大津宮。志賀の宮。

しがのおほわた 志賀大輪田・志賀大和太【名】〔地〕『輪田は渡(ワタ)の義』古、志賀の都の地より對岸草津へ渡る琵琶湖の渡津。今の唐崎邊なりしなるべしといふ。萬葉「ささなみの志賀の大わたよどむともむかしの人にまたあはめやも」

しかのしがらみ 鹿の柵【句】しか(鹿)の條下を見よ。

しかのしま 志賀島・鹿島【名】〔地〕筑前國糟屋郡に屬し、福岡灣の東側を擁する島。周回五里二十八町。干潮の際は南東角、陸地に接續し、海中道(カイチヤ)又は志賀の鼻と呼ばれ、景勝の地なり。島の南に方れる鐵島村といふは、古は志珂鄉といひ、「資可」「然」などとも書き、支那書には「世加」、韓書には「世界大明浦」と記し、神功皇后征韓の節、碇泊したまひしことあり。弘安の役にも、蒙古の來襲を受けて、古來その名著る。しか志珂〉參照。

しかのその 鹿苑【名】〔佛〕ろくやをん(鹿野苑)に同じ。〔古語〕 夫木「鹿の園になかめし花の色ながら霜もかはらぬ春のみやまぢ」

しかのそのふ 鹿苑生【名】〔佛〕前條に同じ。〔古語〕 續千載「みな鹿の園生の風の音」「(大事)を見よ。

しかのだいじ 四箇の大事【句】だいじ

しがのたかあなほのみや 志賀高穴穗宮【名】景行及び成務二天皇の六十年間の皇居。近江國滋賀郡穴太(アナホ)村に在りしもの。志賀の宮。

しかのたま 鹿玉【名】〔植〕深山の朽木に生ずる花紋ある菌。食ふべしといふ。

しがのつ 志賀津【名】〔地〕しがのうら(志賀浦)に同じ。

しかのつま 鹿の妻【句】しか(鹿)の條下を見よ。

しがのは 志賀鼻【名】〔地〕しがのしま(志賀島)を見よ。

しかのはなづま 鹿の花妻【句】しか(鹿)の條下を見よ。

しかのはなもん 鹿野武左衛門【名】〔人〕江戸辻講釋の祖。通稱は安次郎。日本橋の塗師。中橋廣小路の見世物場に出でて、仕形噺をなして名あり。事に坐して、伊豆國大島に流され、のち赦されて歸り、元祿十二年歿す。年五十一。鹿の卷筆、鹿野武左衛門口傳噺の著あり。

しかのほふえう 四箇の法要【句】ほふえう(法要)の條下を見よ。

しかのまきふで 鹿卷筆【名】■色色の毛にて、螺旋形に卷きたる筆。大和國奈良の名產。一代男「難波江の……三軒屋に著きぬ。昔は、ここも遊女ありて、淡路に通ふ鹿の卷筆とうたひしが」■〔書〕鹿野武左衛門の笑話集。五卷。

しかのみならず 然のみならず【句】しか(然)の條下を見よ。

しがのみや 志賀宮【名】■しがのおほつのみや(滋賀大津宮)に同じ。■しがのたかあなほのみや(志賀高穴穗宮)に同じ。

しがのみやこ 滋賀都【名】近江國の滋賀大津宮の在りし處。しがのおほつのみや(滋賀大津宮)參照。千載「ささなみやしがの都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな」

しがのやまごえ 志賀山越【名】〔地〕しがやま(志賀山)を見よ。後撰「櫻花道見えぬまで散りにけりいかがはすべき志賀の山ごえ」「の條下を見よ。

しかはあれど 然はあれど【句】しか(然)

しかはかり 然許【副】さばかり(然許)に同じ。〔古語〕 萬葉「うはべなきものかも人はしかばかり遠き家路をかへす思へば」

じがばち 似我蜂・蠐螬【名】〔動〕膜翅(ハクシ)類に屬する昆蟲。體長七八分、黑色にして、頭胸に粗生せる黑褐色の細毛あり。腹部の前端は細長なる柄をなし、第二腹節の末端の兩側、及び第三腹節は赤黃色なり。翅は透明にして、やや黃色を帶ぶ。じが、さすりばち。さすれむし。さそり。腰細蜂。

じがはってん 自我發展【名】〔哲〕『英 Self-development』じがじつげん(自我實現)に同じ。

しかはごう 四側胴【名】くっけい(屈曲)に同じ。

しかばね 屍・尸【名】『死(シ)かばねの義』死にたる人のむくろ。なきがら。かばね。屍骸。

しかばねをになふつむじ 負屍旋毛【名】ふしづむじ(負屍)に同じ。

しかばねをはさむつむじ 挾屍旋毛【名】けふしづむじ(挾屍)に同じ。

しかふ 指甲【名】ゆびの爪。

しかふ 紫甲【名】しえ(紫衣)に同じ。

しかふ 仕替ふ【動下二他】『仕は爲(シ)の義』なしあらたむ。なしかふ。しかへす。

しかふ 四合【名】■一合の四倍。■香爐の灰を四方より壓附けたること。五合・六合といふも、これに準ず。

しがふ【動四他】草などを束ねて結び合はす意なりといふ。〔古語〕 山家「みま草に原の小薄しがふとてふしどあせぬとしか思ふらん」

しかぶえ 鹿笛【名】牝鹿の鳴く音に擬したる笛。獵師の鹿を呼集むるに用ふるもの。鹿の耳の皮、鹿のはらごもりの皮、又は蝦蟇(ガマ)の皮を張りて作る。俗說には片方を女のはける足駄、片方を牝鹿の頭の骨にて作るといひ傳ふ。しぶえ。 臆斷「樹水」「鹿笛の上手を壽すあはれさよ」

(えぶかし)

しかぶる 仕被る【動四他】『仕は爲(シ)の義』なしあやまつ。しそこなふ。しくじる。

じかへう 時價表【名】〔商〕さうばづけ(相場附)■に同じ。

しかへし 仕返【名】しかへすこと。

しかへしのたま 死返玉【名】十種神寶(トクサノカンダカラ)の一。〔古語〕

しかへす 仕返す【動四他】『爲(シ)返すの義』■再びなす。しかふ。しなほす。■仇に報ゆ。報復す。復讐す。「同じ。

しかほ 新河淨【名】雅樂の曲名。壹越(イチコツ)調の高麗樂。

しかほか【貌】毒蟲に螫(サ)されなどしたる局部の痛み、且つほてる感じ。しかしか參照。

じかほけん 自家保險【名】〔商〕『英 Self-insurance』保險法の一。保險料を保險者に支拂ひて、損害塡補の資に任ぜしむる代りに、その保險料を別途に積立金として貯藏し、損害を被りたる時、その積立金の中より塡補するもの。即ち一人にて、保險者・被保險者・保險契約者の三者を兼ぬる仕組にて、積立つる保險料は、損害發生の統計上より算定す。自己保險。

じかほぞん 自家保存【名】〔生哲〕『英 Self-preservation』生物が、自己の生命を保護し、存續せしめんとすること。自我保存。自己保存。「同じ。

じがほぞん 自我保存【名】〔生哲〕前條に同じ。

しかほふえふ 四箇法要【名】〔佛〕大法會の時、必ず行ふべき肝要なる四つの佛事。即ち梵唄(ボンバイ)・散華(サンゲ)・梵音・錫杖。

しかま 飾磨【名】〔地〕■播磨國十三郡の一。郡役所を姫路市に置く。■播磨國飾磨郡にある町。船場(センバ)川支流の河口に位する港にて、即ち古の飾磨津(マツ)なり、姫路市の南五十町。古はその細江町に紺屋ありて、褐(カチ)染に名ありき。「鹿間」・思賀麻」などとも記せり。家隆卿集「しかながらしかまの市のかんびさし久しき御代につくりかさねよ」

しかまいろ 飾磨の褐(カチ)【句】『褐は假借の字。かちいろ(褐色)を見よ』飾磨町名產の褐(カチ)染。しかまごう。しかまこん。前條參照。詞花「我が戀はあひそめてこそまさりけれ飾磨のかちの色ならねども」

しかま 色【名】〔地〕陸前國舊郡の一。延喜式時代の陸奥三十五郡中、當國に屬する十七郡の一にて、今は當國賀美(カミ)郡の村名に殘れり。

しがま【名】たるひ(垂氷)を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

しかまごう 飾磨紺【名】次條の音便。

しかまこん 飾磨紺【名】「飾磨の褐(カチ)」に同じ。

しかまつ 飾磨津【名】〔地〕しかま(飾磨)(二)を見よ。

しかまのうみ 飾磨海【名】〔地〕播磨國飾磨郡の南方にある海。

しかまぶね 飾磨船【名】播磨國飾磨より、常に薪炭を載せて、大阪に通ふ小船。播磨うはに。いぬころし。

しかみ 顰【名】■〔建〕木鼻(ナバナ)・柄振板(エブリ)・猿頭(サルガシラ)などにある唐草などの模様の出合ひて決れたる部分。■能(ノウ)の假面(カメン)の一。「羅生門」・「紅葉狩」・「大江山」・「土蜘蛛」などの曲に用ふ。

(三)みかし

しかみ 獅噛【名】兜の眉庇(マビサシ)の上、火鉢の足などに、飾として用ふる獅子の顔。

しかみおほばこ しかみ車前【名】〔植〕おほばこ(車前)に同じ。

しかみがほ 顰顔【名】しかみづら(顰面)に同じ。 ※八卦柱暦「助右衛門にいふたらば、又例の顰顔」

しかみぐさ 鹿見草【名】〔植〕しらはぎ(白萩)を云ふ。〔駿河國の方言〕

しかみせん 顰錢【名】質の粗悪なる錢。〔徳川時代の語〕

しがみつく 【動四自】力を込めてつかみかかる。強く取附く。 著聞集「敵にしがみつきて、刀を奪ひとりて」

しかみづら 顰面【名】しかみたる顔。しかみがほ。しかめづら。齷齪。

しかみひばち 獅噛火鉢【名】金屬製の丸火鉢の足に、獅噛の飾あるもの。 俳諧奇談(秋色)「ひとりゐやしかみ火鉢も夜半の冷」

しかむ 顰む・蹙む【動四自】額の皮ちぢむ。眉の根に皺よる。しわむ。「しわむ。

しかむ 顰む・蹙む【動下二他】しかましむ。

しかん 支監【名】監獄の支所。

しかん 支干【名】かんし(干支)に同じ。今國柱鑑 誕生の支干・年月をいふて見せん」

しかん 支柱【名】しちゅう(支柱)に同じ。

しかん 枝幹【名】■えだとみきと。幹枝。■木と本と。ほんまつ。幹枝。

しかん 視感【名】しかく(視覺)に同じ。

しかん 私憾【名】わたくしのうらみ。我が遺恨。

しかん 四妄【名】『左傳の僖公二十四年の條に出づ』四神の惡德、即ち饕(トウ)とて、耳に五聲の和を聽かぬことと、昧とて目に五色の章を別たぬことと。頑とて心德義の禮に則らぬことと、嚚(ギン)とて、口に忠信の言を道(イ)はぬこととの併稱。

しがん 此岸【名】こなたの岸。 釋迦如來誕生會「彼岸・此岸の柳の髪は長く亂るれど、南枝・北枝の梅の花」

じかん 兒干【名】昔、惡瘡の治療に用ひし藥。 今昔「身に惡しき瘡出でたりければ……兒干といふを求めて治すべきなり」

じかん 時間【名】■時刻と時刻との間。■時刻。時限。刻限。とき。■〔哲〕『英Time』すべての狀態變化の繼起及び連續の關係を決定する直觀世界の一成因。變遷と連續との二要素ありて、始めて、この概念を生ず。(空間に對して)

じがん 慈眼【名】じげん(慈眼)に同じ。

じがん 字眼【名】詩文の句中にある眼目の文字。

じがん 鰤岩【名】〔鑛〕『英Oolite』圓き小粒狀の岩石片の集合して成れる岩。武藏國五日市(イツカイチ)附近の中生層石灰岩、信濃國高瀬川の礫石(ジリ)の集合體、越中國立山(タテヤマ)の玉滴石(ギョクテキセキ)など、その例なり。

じかんきふ 時間給【名】一時間の勞力に對し、仕拂ふ報酬。

じかんきろくき 時間記錄器【名】じかんとうきろく(時間登錄記)に同じ。「外」

じかんぐわい 時間外【名】一定の時間以外。

じかんぐわいでんぱう 時間外電報【名】電信局所の電報取扱時間の外、特にその取扱を要する內國電報。略符號は、和文ならば「ララ」、歐文ならば「ZZ」。

じかんぐわいとりあつかひれう 時間外取扱料【名】時間外電報の料金。

しかんさい 止汗劑【名】『羅Antihydrotica又Antihydrotica』發汗を止むる作用ある藥品。即ち冷汗・盜汗(ネアセ)などを防止するに用ふるもの。例へばアトロピン・樟腦酸など。止汗藥。(發汗劑に對して)

しかんたう しかん糖【名】砂糖を煮固めて作れる菓子。

しかんちやう 支監長【名】支監の事務を掌理する者。

しかんぢやう 死勘定【名】〔商〕『英Dead account』取引關係終り、最早記入すべき必要なき勘定。口座、即ち貸借相平均して、殘額なきに至れるもの。(活動勘定・睡眠勘定に對して)

じかんてきげいじゆつ 時間的藝術【名】『美』『獨Zeitkunst』時間美に由りて成立つ藝術、即ち音樂・文學など、演劇はこれと空間藝術とに跨れり。時間美術。(空間的藝術に對して)

じかんとうろくき 時間登錄器【名】『英Time register又Time recorder』各人の出勤・退散の時刻又は取引の時刻等を精密に記錄する器。時間記錄器。

じかんばらひ 時間拂【名】次條に同じ。(仕事高拂に對して)

じかんばらひちんぎん 時間拂賃銀【名】〔經〕仕事の出來高如何に關係なく、勞働の時間に應じて支拂ふ賃銀。時間ばらひ。(仕事高拂賃銀に對して)

じかんび 時間美【名】〔哲〕時間の連續によりてあらはるる美、即ち音樂・文學などの美。(空間美に對して)

じかんびじゆつ 時間美術【名】〔美〕じかんてきげいじゆつ(時間的藝術)に同じ。

しかんへう 時間表【名】時間の配當を記したる表。「割」に同じ。

しかんやく 止汗藥【名】しかんさい(止汗劑)に同じ。

じかんわり 時間割【名】學校にて、諸教科を每週の各時間に割當つること、又その割當てたるもの。

しかめっつら 顰面【名】次條の音便。

しかめづら 顰面【名】しかみづら(顰顏)に同じ。

しかも 然も【副】そのやうにも。さやうにも。

しかも 然も【接】確かに然る意をあらはすにいふ語。その上にも。

しかやき 志賀燒【名】對馬國下縣(シモアガタ)郡嚴原(イヅハラ)町大字久田道(クタ)町字志賀にて製出せし陶器。享保十一年早田惠作の創めしものにて、慶應元年途に廢す。器底に「志賀」又は「シカ」の二字を銘す。

しかやき 直燒【名】炭火の上に、燒くべき物を直接に置きて燒くこと。 續猿蓑「じか燒や麥からくべてやなぎ鮠」

しがやま 志賀山【名】〔地〕近江國滋賀郡滋賀村の山嶺。比叡山脈を受け、南、長等(ナガラ)・逢坂の諸嶺に亙る。同郡山中村を經、この山を越えて、山城國白河に通ずるを、志賀の山越また山中越また白河越といふ。 六帖「さざなみや志賀の山路のつづらをりくる人たえて荒れやしぬらん」

しがやま 志賀山【名】江戸劇場の振附を專門とせし家。

しがやまごてら 志賀山寺【名】しがでら(志賀寺)に同じ。

しがやまながれ 志賀山流【名】踊の流儀の一。志賀山萬作の創めしもの。

じかよう 自家用【名】他人の用に供するにあらずして、自用に供するもの。

じかようしやうゆ 自家用醬油【名】政府の免許を得て、自家用に供する醬油。

じかようれう 自家用料【名】自家のみの所用に供すること。

しがらき 信樂【名】■〔地〕近江國甲賀郡東南の山谷の地。同國栗太(クリモト)郡田上(タナカミ)谷と連亙し、大戸(オオド)川の水源をなす。東西三里、南北五里、伊賀・山城二國と山嶺を以て相隔つ。古來茶を以て名あり。大戸川は信樂川ともいひ、末は勢多(セタ)川に注ぐ。 新勅撰「村雲の外山の峯にかかるかと見れば、しがらきの里」 猿蓑(正秀)「信樂や茶山にしにゆく夫婦づれ」 ■しがらきやき(信樂燒)の略。

しがらきがさ 信樂笠【名】古、近江國信樂より製出せしかぶり笠。 新六「雨過ぐる外山のみちのしぐれより信樂笠ぞ見えがくれする」

しがらきがは 信樂川【名】〔地〕しがらき(信樂)□を見よ。

しがらきちや 信樂茶【名】近江國信樂より出だす葉茶。品位、宇治茶に次ぐ。

しがらきてら 信樂寺【名】聖武天皇の信樂宮の附近に建てられし大佛殿。奈良の大佛は、もとここにて著手せられ、後、天平勝寶四年東大寺成るに及びて遷りしものなり。その邊の野を、今も內裡野又は寺野と呼べり。一名、甲賀寺。

しがらきのみね 信樂峯【名】〔地〕近江國信樂にある山。六帖「しがらきの嶺たちならす春霞はれずもものを思ふ頃かな」

しがらきのみや 紫香樂宮 信樂宮【名】聖武天皇の離宮。その址は、今の近江國甲賀郡雲井村大字黃瀨(ヰセ)なりといふ。しがらきてら(信樂寺)參照。

しがらきやき 信樂燒【名】近江國信樂より出だす陶器。創始はめて古く、弘安、嘉曆の間なるべしといふ。茶技行はるるに及びて、多く茶器を製し、紹鷗・利休・遠州等、みなこれを賞用せり。茶器以前の貯藏壺等雜器の製出に止まりし時代の古信樂といひ、質粗にして、砂を帶び、濁黃色に淡青の模樣を畫く。しがらき。「を見よ。

しからす 然らず【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しからずば 然らずば【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しからば 然らば【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しがらみ 柵・簗【名】■流れの砂土を洗ふを防ぐために、杭を打並べて、横に粗朶又は竹を亙したるもの。萬葉「あすか川しがらみわたしせかませば流るる水ものどけからまし」■〔植〕次條の略。

しがらみ 字絡【名】〔文〕詩歌の句又はその句中の字を句眼として、俳句を作ること。

しがらみかへて 簗槭【名】〔植〕『古今集』の春道列樹(キラ)の歌「山川に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり」より名を取りたるもの』槭の培養的變種。葉は中形にして、長さと幅とはいづれも二寸ほどあり。七深裂をなし、裂片は卵狀披針形にして、先端長く尖り、邊緣に微鋸齒あり。しがらみ。

しがらみこうじ 柵工事・簗工事【名】護岸工事の一。杭を二三尺、ことに打込み、竹丸太・叢などにて、崩壞を防ぐもの。

しがらみせき 柵關・簗關【名】杭を打ち、柵を打ちわたして、堰きとむる關。

しがらむ 簗む【動四他】■からみつかしむ。萬葉「さをしかのをへに啼ける秋萩をしがらみへぬる年ぞ知られぬ」■簗にて流水を遮り止む。「燒」に同じ。

しがらやき 信樂燒【名】しがらきやき(信樂燒)に同じ。

しかり 叱【名】■しかること。「呵」■德川時代の刑罰の一。正刑の最も輕きもの。庶人に科するを例とし、白洲(シラス)に呼出して、その罪を叱りしものにて、まづ宣告し、與力請書(ウケガキ)を取り、差添人これに連印する定なりき。そのやや重きを急度叱(キツトシカリ)といひ、溜場(タメバ)內の鳥を捕へたる者、村の組頭、田畠を永代賣買・質入せる者の證人等には叱を科し、隱鐵砲を有せる村方、三箇附(ヅケ)・博奕(バクチ)を犯せる者の地主等には、急度叱を科する等の例なりき。

しかり 然り・爾り【動變自】しかあり。その如くなり。

しかし 然りし處【句】然りし所の音便。出世景淸「千手觀音の御首と變じたまひける、りやくこふ不思議ぞ有りがたし。しかし所へ、淸水寺の大衆達、われもわれもと走參じ」

しからず 然らず【句】「然(サ)らず」に同じ。

しからずば 然らずば【句】「然(サ)らずば」に同じ。

しからで 然らで【句】「然(サ)らで」に同じ。

しからば 然らば【句】「然(サ)らば」に同じ。

しかりて 然りて【句】「然(サ)りて」に同じ。〔古語拾遺〕「しかりとて月の心もまたしらず思へばうとき秋のねざめを」

しかる間 然る間【句】然ある時に。さるほどに。

しかる上は 然る上は【句】然あるからは。さるによりて。「ゆゑに。

しかるが故に 然るが故に【句】然あるが故に。かるがかるに。

しかるに 然るに【句】「然(サ)るに」に同じ。

しかるべう 然るべう【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しかるべき 然るべき【句】「然(サ)るべき」に同じ。

しかるべき物 然るべき物【句】■相當なるもの。適當なるもの。■選良なる刀劍の稱。〔足利時代の語〕

しかるべく 然るべく【句】宜しきように。適宜に。「然るべく計らはれたし」

しかるべくば 然るべくば【句】差支なくば。出來る事ならば。

しかるべし 然るべし【句】「然(サ)るべし」に同じ。宇津「然るべくて、已には見えさせたまへるなり」保元「然るべしとぞ勸め申されける」

しかれども 然れども【句】「然(サ)れども」に同じ。萬葉「梓弓したはしらずしかれどもまさかは君によりにしものを」

しかれば 然れば【句】■「然(サ)れば」に同じ。手紙の文にて、前文と本文との接續に用ふる語。扨(サテ)・陳者(ノベバ)・「然者」

しかる 叱る・呵る【動四他】怒りてさとす。罵を勵まして戒む。枕「いみじうはらだちしかりて、かんがへて」

しかるあひだ 然る間【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しかるうへは 然る上は【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しかるがるた 詩骨牌【名】しはい(詩牌)■に同じ。「を見よ。

しかるに 然るに【句】しかり(然り)の條下

しかるべう 然るべう【句】しかり(然り)の條下を見よ。

しかるべし 然るべし【句】しかり(然り)の

しがれっと (英 Cigarette)【名】紙卷の煙草。まきたばこ。

しかれども 然れども【句】しかり(然り)の條下を見よ。「を見よ。

しかれば 然れば【句】しかり(然り)の條下

しがわたり 志賀渡・志加渡【名】氷を渡ることなりといふ。東鑑「打二融志加渡一之間、氷俄消」

しき 敷【名】■器物の下にしく物。榮花「その箱のしきに、大納言どの書かせたまふ」■しきいた(敷板)■の略。■いた(板)〔一〕に同じ。■しきがね(敷金)の略。■〔商〕しようこきん(證據金)に同じ。■しきち(敷地)の略。■下等なる淫賣宿。〔俚語〕■雛山の坑の一區。一採鑛區。〔坑夫の語〕

しき 表(オモテ)の敷【句】こなほし(小直)〔一〕に同じ。

しき 棧【名】牛車(ギツシヤ)に乘降する際に用ふる梯子。「止自支」

しき 【名】しき(閾)の略。〔古語〕字鏡「梱、

しき 式【名】■定の形狀・體裁・方法など。かた。形式。儀式。作法(サホウ)。法式。千載「やまと歌のしきをつくれりける」■王朝時代に、官職に關する事務章程を記載せるもの。りつりやうさやくしき(律令格式)參照。■ことがら。事情。太平記「この程の式をば、身に替へても申し宥むべく候」■しきがみ(式神)の略。宇津「陰陽師を語らひて、しきを伏せたりけるなり」■しきしやう(式正)に同じ。〔足利時代の語〕「式の立文(タテフミ)」「式の引出物」■〔數〕『英 Expression』數學の、記號によりて、連結せられたる數或は文字の集合。

しきがみ 式の神【句】しきがみ(式神)に同じ。

しきのかず 式の數【句】〔數〕式の中の文字に數値を與へ、演算の符號の示せる計算を行ひて得たる數。

しきのかたち 式の簷【句】たいいきゆう(太平弓)を見よ。〔四季の簷〕

しき 職【名】■大寶令の制規における官司の名目の一。大夫(タイフ)・亮(スケ)・進(ジヨウ)・屬(サカン)の四等官を置くを常とし、その官位の差等上より臺の下、寮の上に班せしめたり。例へば中宮職・大膳職・左右京職・攝津職の類、又、令制以外にも、修理(シユリ)職・造宮職など設けられたり。■ちゆうぐうしき(中宮職)の略。枕「しきの御ざうし」の異の隅」■しきのざうし(職曹司)の略。

しき 識【名】■物事に對して、徹底して見分くる能力。みわけ。見識。識見。眼識。「識高し」「識淺し」■演を見識りてあること。しりあひ。ちかづき。みしりごし。「一面の識あり」「半面の識」■〔佛〕『梵 Parijñāna(婆呬惹儞)の譯語。了別の義』心境に對して了別すること。衆生はただ一識を有するのみにて、一識、六根に依りて、六境を緣するなりと立つる小乘の成實(ジヤウ)宗等の說もあり。また二識・三識・六識・八

識・九識等に分つ諸説もあれど、眼識(ガンシキ)・耳識(ニシキ)・鼻識・舌識・身識・意識と分つ六識説は、大小乗通説の法門たり。【四】〔佛〕『梵 Vijñāna（毘若那）の譯語』十二因緣の一。その條を見よ。

しき 色 【名】〔佛〕『梵 Rupa の譯語。礙壞・變碍・質碍の義。色は示現の義』■五蘊(ゴウン)中の色蘊。即ち物質。森羅萬象。**しきしん(色身)**參照。■五境中の色境、即ち有色又は有形の物。

色、即(ソク)是(ゼ)空(クウ) 【句】〔佛〕『梵 Rūpāṇi śūnyatā の譯語。色は即ちこれ空なりとの意』法界の萬有は假合(ケガフ)にして、空なり。物質と見ゆるは、顚倒の妄見にして、實にその體あるにあらず。空即是色に對して) 謠曲(山姥)「色則是空そのままに、佛法あれば世法あり」

しき 旨歸 【名】おもむき。旨趣。

しき 雌器 【名】〔植〕『英 Archegonium』隱花植物の雌性生殖器官。內に一つの卵球を有す。(雄器に對して)「し。

しき 視器 【名】〔醫〕**しかくき(視覺器)**に同じ。

しき 子器 【名】〔植〕『英 Sporocarp』地衣類の生殖器。その中に胞子を藏す。

しき 死期 【名】死ぬる時期。死ぬべき時期。しご。

しき 屍櫃 【名】くわん(棺)に同じ。

しき 始期 【名】或事の始まる時期。初期。(終期に對して)

しき 士氣 【名】■士たる者の氣質。■一般の人士の意氣。

しき 志氣 【名】こころざし。意氣ぐみ。

しき 紫氣 【名】紫の雲氣。

しき 至貴 【名】■この上なく貴きこと、又その人、又その物。■有德の人。

至貴は、爵を待たず【句】『淮南子に出づ』有德の人は、人爵を待たずとも、おのづから貴し。【諺語】

しき 四季 【名】■『品字箋に「俗曰二四時一爲二四季一、指二四時末月一」とあり』陰曆の四時の末月、即ち三月・六月・九月・十二月。■春・夏・秋・冬の稱。四時。謠曲(殺生石)「面白や、四季をりをりは樣樣なれど」四季の籬(カキ)【句】「式の籬」に同じ。

しき 四氣 【名】天地間に消長する四つの氣、即ち生(春溫)・長(夏熱)・收(秋涼)・藏(冬寒)。「ち規・矩・準・繩。

しき 四器 【名】事物を正す四つの道具、即ち取籠らしやれて、讀ませらるる物の本の內に」

しき 指揮・指麾 【名】『指は指示、揮は手使の義、又麾は旌旗の屬を用ひて指圖するにいふ』さしづ。下知。

しき 瀉器 【名】じき(磁器)■に同じ。

しき 恣睢 【名】ほしいまま。わがまま。

しき 廁鬼 【名】廁(カハヤ)の神。雪隱の神。

しき 蓍龜 【名】『蓍は「めどぎ」、龜はその甲を燒きて、吉凶を判ずるに用ふるよりいふ』うらなひ。卜筮。

しき 私記 【名】私人の記錄。私乘。

しき 史記 【名】■『春秋の序に「春秋者魯之史記之名也」とあり』記錄したる物。歷史。史錄。■〔書〕黃帝より漢の武帝までの事を記したる紀傳體の支那史。本紀十二卷、年表十卷、書八卷、世家三十卷、列傳七十卷、合はせて一百三十卷。漢の司馬遷の著。

しき 紙器 【名】厚紙にて作りたる箱などの類。

しき 子規 【名】■〔動〕ほととぎす(子規)に同じ。■〔人〕まさをかしき(正岡子規)を見よ。

しき 志紀 【名】■〔地〕河內國の舊郡の一。明治二十九年南河內・中河內の兩郡に分屬せしめらる。■姓氏の一。神武天皇の皇子神八井耳(カムヤヰミミ)命より出でしもの。姓(カバネ)は、宿禰(スクネ)と首(オビト)と縣主(アガタ)とあり。

しき 磯城・城 【名】石を積みなどして、堅固に築きたる城。〔古語〕紀「遣二三百七十人於百濟一助二築城(キノ)於得爾辛一」

しき 磯城 【名】■〔地〕大和國十郡の一。明治二十九年もとの十市(トヲチ)・式上(シキジヤウ)・式下(シキゲ)の三郡を合はせたるもの。上古の磯城の縣(アガタ)の地に當る。郡役所を三輪(ミワ)町に置く。域內に、陵墓・宮址その他名所多し。■姓氏の一。饒速日(ニギハヤヒ)命より出でしもの。大和國磯城の地名に本づきしものにて、姓(カバネ)に、連(ムラジ)と縣主(アガタ)とあり。

しき 敷 【助數】室の廣さを、疊の數にて示すに用ふる語。狂言(ひめのり)「四疊半じきへ

しき 醜 【接頭】『しこ(醜)の轉』きたなき。みにくき。〔古語〕萬葉「しきかりいほ」同「しき手」同「しき屋」

しき 式 【接頭】式正(シキシヤウ)の。正式の。式の。「式三朱奧」「式能」

しき 頻 【貌】しきり(頻)に同じ。〔古語〕萬葉「日ざらしの腕手づくりをしきもなすしきに取りしき」

しき 接尾 ほど、くらゐ。ばかり。(輕侮していふ)〔俚語〕日本武尊吾妻鑑「我れ等しきの中上ぐるも憚多く」

しき 鴫・鷸 【名】〔動〕『鴫は田に居る鳥の意の和字』涉禽類中の一屬。田鷸・小鷸・山鷸・青鷸など種類多けれど、概ね中形の鳥にして、每脚四趾ありて、前方に向へる三趾は長く、嘴は細長くして、軟皮を被る。

鴫の看經(カンキン) 【句】鴫の羽搖(ハバタ)などせずに、田澤に徒らに佇(タヅ)み立てる狀。善隣我鑒「羽根がきの數を所作にやうば鴫の看經をする曉のころ」

鴫の羽搖(ハバタ) 【句】羽蟲を取らんとして、鴫のしばしば嘴にて羽を扱(コ)くこと。古今「曉の鴫の羽がき百はがき君がこぬ世は我れぞ數かく」

鴫の羽返(ハガヘ)し 【句】婚禮その他祝儀の式の膳部に、鴫を羽返にし、紙を折りて、蜻蛉の形に作りたるものを、その口先に挾みて据うること。

しぎ 仕儀 【名】事のさま。事のなりゆき。

しぎ 四儀 【名】〔佛〕行・住・坐・臥の四つの作法。平常の起居動作。四法。四威儀。盛衰記「行・住・坐・臥を嫌はねば、四儀の稱念に煩なく」

しぎ 志木 【名】〔地〕武藏國北足立(キタアダチ)郡にある町。新河岸(シンガシ)川の東南岸。舊稱、引又(ヒキマタ)。

しぎ 旨義 【名】意義。旨趣。

しぎ 至義 【名】この上なく正しき條理。

しぎ 私議 【名】■私に批評をなすこと。■自己一人の意見。「相談。

しぎ 諮議 【名】諮問して評議すること。

しぎ 刺議 【名】かれこれと刺(ソシ)ること。

しぎ 思議 【名】考へて評議すること。

しぎ 藝儀 【名】そなへもの。にへ。

じき 食 【名】くひもの。食物。奈遇「山のほとりにかかりくるけだものは、阿修羅(アス)のじきとせよとあてられたり」植込に括附け、敵にせめらるる時もあり、食(ケ)をとめられ、撲蔽きは常のこと」

じき 食 【名】ばば器(ハツ)に同じ。〔諺語〕

じき 兒嬉 【名】小供の嬉戲すること。

じき 時期 【名】とき。をり。期。心中萬年草「とめに往かるる時期でもなし、必ず死ぬるな、死ぬまいぞ」

じき 次期 【名】次の時期。次の期間。

じき 次規 【名】的の三重の黑圈の內、中間に在るもの。(內規外規(ゲキ)に對して)

じき 侍姬 【名】そば近く仕ふる女。こしもと。

じき 磁氣 【名】〔理〕『英 Magnetism』磁石の如く、鐵を吸引する性質。その本質については、電氣と同樣にエテルの作用なりともいひ、物質內の電子の相互作用より派生するものにて、電氣と並べ考ふべきものにあらずともいひ、未だ定說無し。**でんじき(電磁氣學)**參照。

磁氣の嵐 【句】〔理〕『英 Magnetic storm』地磁氣の三要素の上に、不時に起る、急激なる變化。太陽の黑點の出現及び地震・極光等との關係に基づくものの如しといふ。磁氣風。磁力の變動。

磁氣の誘導 【句】〔理〕次條に同じ。

磁氣の感應 【句】〔理〕『英 Magnetic induction』磁界に持來されたる物體が、磁氣を帶ぶること。鐵を磁石の附近に持來す時、これに吸引せらるるも、この作用に因る。感應磁氣。**じきかんおう(磁氣感**

應)參照。

じき 磁氣の廻路【句】〔理〕じろ(磁路)に同じ。

じき 磁氣の子午線【句】〔理〕『葉 Magnetic meridian』磁氣の子午面が、地球の表面と交はりて生ずる線。一般に地理學上の子午線とは一致せず。

じき 磁氣の子午面【句】〔理〕『英 Magnetic meridian plane』磁針が指示する方向を含む垂直面。一般に地理學上の子午面とは一致せず。

じき 磁氣の赤道【句】〔理〕『英 Magnetic equator』地球磁力の方向が、水平面と爲す角、即ち伏角の零度なる諸地點を連結したる線。地球の赤道とほぼ一致せり。

じき 磁氣の能率【句】〔理〕『英 Magnetic moment』磁石の一極の强さと兩極間の距離との相乘積。「受磁の强さ」參照。

じき 磁器【名】一じしゃく(磁石)に同じ。二燒物の一種。地質堅緻にして、概ね白色なるを普通とし、透明性を帶ぶ。例へば瀨戸燒・伊萬里燒・清水燒・九谷燒の類。いしやき。(土器・石器・陶器に對して)

じき 自記【名】一みづから記すこと。みづから記せるもの。二自動的に記すこと。

じき 自棄【名】自ら身を棄てて顧みぬこと。すてばち。自暴自棄。

じき 自欺【名】みづからあざむくこと。

じき 辭氣【名】ことばと、いきと。ことばづかひ。物いひぶり。語氣。

じき 時機【名】一適當なる機會。ころあひ。をり。しほ。時宜。二〔佛〕時季と衆生の根機生の根機。

時機純熟【句】〔佛〕時季と衆生の根機と相合して、教法の化益(ケヤク)を得るに最も都合よき狀態にあること。

じき 鋤基【名】農具の一。鋤の類。

鋤基ありと雖も、時を待つに如かず【句】『孟子の公孫丑上篇に見ゆ。農具ありても、適當なる農時を待ちて使用せざれば、功を奏する能はざる意』智能ありても、時勢に乘ぜざれば、功名を成す能はざる譬。〔考語〕

じき 貳疑【名】きぎ(疑貳)に同じ。

じき 兒戲【名】小供のたはむれ。兒戲に等し【句】次條に同じ。兒戲に類す【句】次條に同じ。兒戲の如し【句】稚氣を帶びたる形容。兒戲に等し。兒戲に類す。

じき 事宜【名】事の次第。

じき 時宜【名】一時にとりて宜しきこと。程よき頃。平當我れ等打負けば、平家に與(クミ)せんと、時宜を計ると覺ゆるぞ」二に同じ。

じき 時儀【名】一時候の挨拶。二次條一に同じ。

じき 辭儀・辭宜【名】一遠慮。辭退。辭讓。心中及び氷の朔日「ひらにお一つ上りませ。何しにお辭儀申しましよ、兩人ながらお茶は得たべませぬ」二頭を下げて敬禮すること。あいさつ。ゑしやく。「時儀時宜」傾城反魂香「男でもない奴原に、侍の辭儀無用の沙汰」俳諧古選(合本)「蟻二四時宜する花の樗かな」三挨拶の言葉。狂言きんじ聟「聟入には、じぎが有ると承ってござる」

じき 辭義【名】ことばの意義。

じき 字義【名】文字の意義。

むつかし假名遣やな、字義に害あらずんば、ああ、ままよ。梅咲きぬどれがむめやらうめぢややら」

しきあくにち 四季惡日【名】九星にて、春・夏・秋・冬の各において、百事に用ふべからざる惡日なりといふ日。春は、甲子・乙亥の日、夏は丙子・丁亥の日、秋は庚子・辛亥の日、冬は壬子・癸亥の日。

じぎあひ 辭儀合・辭宜合【名】互に辭儀一をなすこと。會釋しあふこと。手習鑑「あひ嫁同士が門出の辭儀あひ」

しきあみ 敷網【名】魚網の一種。形多くは方形なれど、長方形・圓形などのもあり。全部又は大部分を水中の上層に近く張りて、魚のその上を遊行するを待ち、又は火光もしくは餌にて誘導し、又は威して、この中に驅入れたる後、水中にある部分を引揚げて漁獲するもの。山家「しら繩に小鮎ひかれてくだる瀨にもちまうけたるこめのしきあみ」「に同じ。

しきあみ 鴫網【名】しぎつきあみ(鴫突網)に同じ。

しきあん 四季庵【名】昔、江戸日本橋の中洲(ナカス)にありし料理屋。じふはちだいつ(十八大通)參照。「じ。

じきあらし 磁氣嵐【名】「磁氣の嵐」に同じ。

じきいうだう 磁氣誘導【名】〔理〕「磁氣の誘導」に同じ。

しきいし 敷石【名】人の歩む所に敷並べたる石。

しきいた 敷板【名】一下に敷く板。二ふみいた(踏板)(二)に同じ。三〔建〕根太(ネダ)の上に張りたる板。即ち廐の尿板(ユバリ)の類。四〔建〕おいた(地板)に同じ。五船の底板。略して、敷とのみもいひ、後部にあるを後敷(アトジキ)といふ。かはら。どうがはら。「印。

しきいん 職印【名】職(キ)にて用ふる官印。

しきう 屍柩【名】かばねを入るるひつぎ。萬葉「葬二送屍柩一」「じ。

じきう 時球【名】へうじきう(標時球)に同じ。

しきうしき 始球式【名】ベエスボオル試合開始の際、主催者又は來賓中の一人投手に代りて、第一球を投ずること。この際、ボオルの正否に關らず、ストライクとすべきものなり。「同じ。

しきうつし 敷寫【名】すきうつし(透寫)に同じ。

しきうん 色蘊【名】〔佛〕ごうん(五蘊)を見よ。

しきうん 識蘊【名】〔佛〕ごうん(五蘊)を見よ。

しきうんれい 獅球嶺【名】〔地〕臺灣基隆(キイルン)市街の西北隅にある山。嶺上に砲臺を設けて、港内の防備に充つ。

しきかい 色界【名】〔佛〕『梵 Rūpadhātu の譯語』三界の一。欲界の上に位し、欲界よりは貪欲うすけれども、なほ色法、即ち現象界に染著する境界。色界天。色天。有色天(ウシキテン)。じぜんてん(四禪天)參照。「じ。

しきかいてん 色界天【名】〔佛〕前條に同じ。

しきかく 色覺【名】〔醫〕『英 Colour sensation』視覺の一。色彩即ち分解せられたる光に對する感覺。その著しきものは、太陽のスペクトラムにして、光覺に比すれば、その發達後るるを常とす。

しきがね 敷金【名】一しきぎん(敷金)に同じ。二しきぎん(敷銀)に同じ。五十年忌歌念佛「しきがねに日がくれて、嫁にとらうと、いやらしい」

しきがは 敷皮【名】むかし陣中などにて、將士の芝居の座に敷きたる毛皮。鹿の秋毛の皮一枚にて作り、白毛を殘すを本儀となし、また虎・熊・豹・鹿等の毛皮にても作り、すべて一枚皮を用ひ、裏は黑漆にて塗り、柿色の布を附くることもあり。

しきがは 敷革【名】一靴の底の、靴足袋に接觸する部分に敷く革。二こがは(苔革)に同じ。

しきがはら 敷瓦・甃【名】いしだたみの代りに、地に敷並ぶる瓦。支那より傳來し、今も禪宗の寺院等に用ひらる。

しきがみ 敷紙【名】一物の下に敷く紙。詞花「硯のふたに、雪を入れて出だされたりけるしきがみに書きつけはべりける」一代女「手づから燈火細め、枕に敷紙して、嘉太夫節のなづむ所を語りけして」二疊を保護するために、勝手の間などに敷く、厚く貼合はせたる澁紙。

しきがみ 式神・識神【名】陰陽師に使役せられて、不可思議のわざをなすといふ神。この神は常人の目には見えざるも、その道の者には、正しく一人の人間とあらはれて、その命令に從ひて、人家に出入し、或は物を捕へ、或は人を殺し、變幻自在なりといふ。しき。しきのかみ。しきじん。

しきがみ 御爲に、仰をそむかじとて、しきふせて、既に式神かへりて、おのれただ今しきにうてて、死にはべりぬ」

しきかん 識鑒【名】かんしき(鑒識)に同じ。

しきかんおう 磁氣感應【名】〔理〕「磁氣の感應」に同じ。

しきかんだんけい 自記寒暖計【名】『英 Self-registering thermometer』寒暖計の一。溫度の變化を連續的に紙上に自記するもの。佛蘭西人リシアル(Richard)のもの、普通に用ひらる。

しきかりいほ 醜假廬【名】『しき(醜)は接頭語』一見苦しき假の住居。〔古語〕二假の世の譬。うきよ。塵の世。〔古語〕萬葉「世の中のしきかりいほに住み住みて至らむ國のたづき知らずも」

しきーき 敷木【名】すきぎ(透木)に同じ。

しきーぎ 鋪著・敷著【名】鐵夫が入坑する時に著る衣服。「同じ。

しきーきう 色球【名】〔天〕さいきう(彩球)に

しきーぎっぷ 四季切符【名】『英 All season ticket』汽車の乗車券の、或一定の期間は、何回にても、或一定の驛間を往復し得るもの。その期限は、普通、一箇月・三箇月・六箇月・十二箇月とす。定期乗車券。

しきーきん 敷金【名】■保證のため、擔保として預け置く金。しきがね。しきせん。■契約保證金の一種。通常、家屋など賃貸借の際、賃貸人が賃借人をして、借賃その他、賃貸借の關係より生ずる債務を擔保するために交附せしむる金額。しき。

しきーぎん 敷銀【名】■前條に同じ。■ちさんぎん(拵參金)に同じ。一代玄、見よく大かたなる娘に、敷銀附けての緣組」

しきーきん-こさく 敷金小作【名】敷金を地主に納めて、小作すること。

しきーきやう 識境【名】〔佛〕心識の對象、即ち萬象。

しきーきやう 色境【名】〔佛〕五境の一。五根の一なる眼根の對象。

しきーくきやう-てん 色究竟天【名】〔佛〕『梵 Akaniṣṭha (阿迦尼吒天)の譯語』うちやうてん(有頂天)に同じ。

しきーぐさ 四季草【名】〔書〕春草二卷・夏草一卷・秋草三卷・冬草一卷の四部に分ち、武家の禮法・故實などを、假名にて記したるもの。伊勢貞丈の撰。

しきーくしふ 子規句集【名】〔書〕正岡子規の句を集めたるもの。一卷。河東(かはひがし)碧梧桐・高濱虛子の著。

しきーぐち 鉚口・敷口【名】かまのくち(釜口)に同じ。

しきーぐに 醜國・繁國【名】『しき(醜)は接頭語』くにがらのあしき國。きたなき國。〔古語〕「曷この二神は、彼のきたなきしき國に至りましし時の汚によりて」

しきーぐわい 式外【名】しきげ(式外)に同じ。

じきーくわいろ 磁氣廻路【名】〔理〕じろ(磁路)に同じ。

しきーくわん 指揮官【名】全隊の指揮をつかさどる役。陸軍にては、全部隊の指揮を執る者を總指揮官といひ、高等司令部を有する大兵團の司令官以上を高等指揮官といひ、海軍にては、艦船・軍隊の指揮に任ずる者、及び艦隊軍艦又は拿捕(だほ)船・船に乘組みて、これを監督するものをいふ。

しきーけ 式家【名】『宇合(うまかひ)は參議・式部卿・大宰帥(だざいのそち)なりしによりていふ』藤原氏の四家の一。鎌足の子・不比等(ふひと)の第三子宇合の流。「て」

しきーげ 式外【名】次條の略。(式内に對し式外の社【句】延喜式の神名帳に記されてあらざる神社。延喜式撰進以前の古社にても、男山八幡宮・香椎(かしひ)宮などはこれに屬せり。(「式内の社」に對して)

しきげ 式下【名】〔地〕大和國の舊郡の一。もと城下(きのした)郡といひしを、後世、式下の字を用ひ、また下の字を音讀するに至りしもの。明治二十九年式上・十市(とをち)の二郡と合して、磯城(しき)郡となる。

しきーげた 敷桁【名】〔建〕柱上又は煉瓦壁上などに、壁に沿ひて横へ、小屋梁(こやばり)又は根太などの端を承けしむる横木。

しーきげふ 私企業【名】〔經〕私人又は私法人の經營する企業。(公企業に對して)

しきーけん 識見【名】けんしき(見識)に同じ。

しきーげん 式言【名】しきじ(式辭)に同じ。

しきげん-せう 職原鈔【名】〔書〕しよくげんせう(職原鈔)に同じ。

しきけん-もん 式乾門・式建門【名】平安京大内裏の内郭十二門の一。内裏の西北、朔平門の西にあり。一名、西廂(さいしやう)僻伏門。

しきげゆ 式解由【名】正式に作られたる解由。〔古語〕

しきーこう 四季講【名】比叡山横川(よかは)の定心房の彌勒像の前にて、毎年四季に諸大乘經を講ずること。

しきーごたつ 敷炬燵【名】おきごたつ(置炬燵)に同じからんか。太祇「あてやかにふりしゑや敷豆燵」

しきーこまた 【名】相撲(すまひ)の手の一。我が股の内より相手の足を取るもの。

しきーさい 色彩【名】■いろ。いろどり。いろつや。■『英 Colour』やうす。けいろ。けなみ。「社會主義的色彩を帶ぶ」

しきさい 飾西【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治二十九年飾東郡と合して、飾磨(しかま)郡となる。「形相。

しきーさう 色相【名】〔佛〕肉眼にて見得る

しきーざう 四季咲【名】■春・夏・秋・冬共に花の咲く植物。長春花。■〔植〕山茶(さんちや)の一品種。「條に同じ。

しきざき-いばら 四季咲薔薇【名】〔植〕次

しきざき-ばら 四季咲薔薇【名】〔植〕かうしんばら(庚申薔薇)に同じ。

しきーざくら 四季櫻【名】〔植〕■びよざくらに同じ。■こざくら(辛夷)に同じ。

しきーさはふ 式作法【畑】儀式。ならはし。孕産婦、平産ありても婆が祝ふが式作法」

しきーさん 信貴山【名】〔地〕大和國生駒(いこま)郡の西南隅、平群(へぐり)村字志貴畑にある山。河内國との境界に當る。高さ七〇三尺。頂上の眺望佳く、また松永久秀の據りし城址を存す。

しきさん 信貴山の毘沙門【句】信貴山の東腹にある眞言宗の寺。本名は觀喜院朝護國孫子寺。延喜中、明蓮上人の開基。本尊は毘沙門天。又、俗に信貴山寺といふ。

しきさん-えんぎ 信貴山緣起【名】〔書〕次條に同じ。

しきさんえんぎ-まきもの 信貴山緣起繪詞【名】次條に同じ。

しきさんえんぎ-まきもの 信貴山緣起繪卷【名】〔書〕信貴山の觀喜院朝護國孫子寺の緣起を描ける繪卷。太子軍の卷・飛倉の卷(一に山崎長者の卷)・尼公の卷・延喜加持の卷の四卷あり。最初の一卷は土佐刑部大輔の筆といひ、後の三卷は、藤原時代末期の作とも鎌倉時代の作ともいひ、また烏羽僧正の筆なりともいふ。寫生的にして、哀情と活動とに富み、繪卷中の一異彩と稱せらる。

しきーさんこん 式三獻【名】三獻の儀式。一獻とは、酒盃一巡して、肴核これに伴ふをいふ。獻數は種種あれども、三獻を正しき儀式とす。津國女夫池「新御臺樣の御輿入、町町の辻がため、館の内は式三獻の御用意」

しきさん-じ 志貴山寺【名】「沙門」を見よ。「信貴山の毘

しきさんば 式三番【名】『次條の略。しき(式)は接頭語』昔、劇場にて、毎年初春三箇日に興行せし翁・千歳(せんざい)・三番叟の舞。おきなわたし。「じ。

しきーさんばそう 式三番叟【名】前條に同

しきーさんばん 式三番【名】『前條を見よ』

おきな(翁) 四の古語。天智天皇」みたりの翁の舞樂を表し、式三ばんとはこの因緣」

しきーざる 敷笊【名】煮物を爲す際、材料を盛りて、鍋中に入れて煮るに用ふる笊。日笊の如く編みたるもの。

しきーし 色紙・式紙【名】■短册と同じく、歌を書く料の厚紙にて、正方形に近き形のもの。表面には、金銀の砂子又は種種の模樣あり。始は大小一定せざりしが、後世、大色紙・小色紙の二種に分ち、大色紙は竪六寸四分・幅五寸六分、小色紙は竪六寸・幅五寸三分と定まりたり。奈良「中納言の君、紙もがなのたまへば、黄ばみたる色紙一卷、白き色紙一卷、硯の蓋に入れて出されけり」■しきがた(色紙形)の略。蕪村「苗代の色紙に遊ぶ蛙かな」「法師。

しきーし 式師【名】法會の時、式文を讀む

しきーじ 職事【名】■藏人所(くらうどどころ)の職員中、頭(とう)及び五位・六位の藏人の總稱。落鐵「御門のかみの殿のけいし・しきじども」■しきじくわん(職事官)の略。

しきーじ 式事【名】儀式の行事。節會(せちゑ)等の類。ぎしきごと。

しきーじ 式辭【名】式場などに述ぶる言葉。式上の挨拶。式言。

しきし-がた 色紙形【名】■屏風・障子などに、色紙の形を畫きて、彩色などを施し、それに詩・歌などを書くもの。しきし。大鏡「御障子に歌繪ども書かせたまひしに、色紙形を、この大貳に書けとのたまはするを」■料理にて、野菜類を、薄く方形に切ること。しきし。■苗代(なはしろ)の、正方形もしくはそれに近き形のもの。しきし。(短册形に對して)

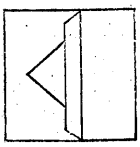
しきじ-くわん 職事官【名】家司(ケイシ)にて、職務あるもの。一定の職務ある常任の官。(散事官に對して)

じき-しごせん 磁氣子午線【名】〔理〕「磁氣の子午線」に同じ。

じき-しごめん 磁氣子午面【名】〔理〕「磁氣の子午面」に同じ。

しき-じつ 式日【名】㊀儀式のある日。㊁執務すべき定まれる日。ある事務を執るべき定例の日。

しきしづつみ 色紙包【名】折形の一。下の圖を見よ。



(みつづしきし)

しきじつ-ないだん 式日内談【名】室町時代に、引附頭人の第に、毎月集會して、用務を相談せしこと。

しきじつ-よりあひ 式日寄合【名】江戸時代に、最高裁判所なる評定所に、關係吏員の集會せし日。毎月四日・十二日・二十二日に三奉行・大目附・目附出席し、老中もその中の一日には出席して、奉行の捌方(サバキカタ)を見たりといふ。

しきしないしんわう 式子内親王【名】〔人〕後白河天皇第三の皇女。御母は從三位藤原成子。平治元年第三十一代賀茂齋院となり、嘉應元年病により退下、薙髪して、法名を承如法といふ。和歌に秀で、式子内親王歌集の著あり。建仁元年薨ず。高倉宮。大炊御門齋院。萱(カヤ)齋院。

しき-しのぶ 頻忍ぶ【動四自】しきりに思ひ忍ぶ。〔古語〕萬葉「庭に立ち廻をかりほししき忍ぶあづまをみなを忘れたまふな」

しきし-ばこ 色紙箱【名】色紙を入るるに用ふる箱。詩繪を施し、優雅なるもの多し。

しきし-ばり 志喜志針【名】縫針の一種。絹の絎針(クケバリ)に似たる細きもの。專ら繼物(ツギモノ)をするに用ふ。

しきしま 磯城島・敷島【名】〔地〕㊀大和國磯城郡にありて、崇神・欽明の兩天皇の久しく都したまひし處。今は城(キ)島と書き、村名となれり。㊁大和國の別稱。㊂「にほんこく(日本國)」の別稱。㊃「敷島の道」の略。會我庇が歎「わが數島もその通り、日に見えぬ鬼神も、三十一字に和ぐる」

しきしまの 敷島の道【句】『敷島の大和歌の道の略。

しきしまの 敷島の【枕】大和國の敷島は、崇神・欽明兩天皇の都したまひしより、その名國中に著れしためなるべし。**やまと**(大和)にかけていふ。萬葉「しきしまのやまとの國の石(イシ)の上(カミ)ふるの里に紐とかずまろねをすれば」

しきしまの-おほみや 磯城島大宮【名】次條に同じ。

しきしまの-かなさしの-みや 磯島金刺宮【名】欽明天皇の皇居。今、大和國磯城郡三輪村大字金屋の東南、山崎のしきしまの垣内と呼ぶ地、その址なるべしといふ。金刺宮。磯城島宮。

しきしまの-みや 磯城島宮【名】前條に同じ。月清「やまとかもしきしまの宮しき忍ぶむかしをいとど霧やへだてん」

しき-しん 色心【名】〔佛〕有形の物質(色)と無形の精神(心)と。物と心と。賀古教信七墓廻「色心の當體皆是阿彌陀佛」

しき-しん 色身【名】〔佛〕『しき(色)を見よ』四大・五塵等の色法より成れる身。肉眼にて見るを得べき形體。相貌。肉體。賀古教信七墓廻「魂は色身にかへると覺えて蘇り」

しき-じん 式神・職神【名】**しきがみ**(式神)に同じ。盛衰記「吉凶の橋占を尋ね問へば、必ず職神、人の口に移りて」

しき-しんがう 四旗信號【名】四箇の旗を連綴して示す信號。

しき-しや 識者【名】知識識見を有する人。ものしり。

しき-しや 式社【名】「式内の社」に同じ。

しき-しや 指揮者【名】指圖する人。

しき-しやう 式正【名】本式。正式。しき。〔足利時代及び江戸時代の語〕一代男「しきしやうの庖丁人」

しきしやうの簸【句】**さかつらえびら**(逆頬簸)に同じ。

しき-じやう 職掌【名】㊀大膳式左右京職などの職の律事を扱ふもの。太政官の官掌(カンジョウ)の類。㊁寺社などに出仕し、神樂などの役を勤むる俗形のもの。㊂明治二年に皇太后宮職・皇后宮職に置かれたる判任官。候人を通じ、書疏を達し、使部を檢することを掌りたり。同十年廢せられたり。

しき-じやう 式狀【名】貞永(ジョウエイ)式目と今川狀と。狂言・文藏「それ、讀物によりては、庭訓(テイキン)か、式狀か、古今・萬葉・伊勢物語・論語・朗詠」

しき-じやう 色情【名】いろけ。色慾。

しき-じやう 式上【名】〔地〕大和國の舊郡の一。もと城上(カジョウ)郡と呼びしを、後世、式上の字を用ひ、また下の字を、音讀するに至りしもの。明治二十九年式下・十市(チヂ)の二郡と合して、磯城(シキ)郡となる。

しきじやう きやう 色情狂【名】精神に異狀を生じ、色情に關して、常態を失ひたる擧動をなすこと、又その人。

しきしや-こでん 職寫戸田【名】次條に同じ。

しきしや-でん 職寫田【名】王朝時代の不輸租田の一。左右京職にて、毎年定例の六月三十日までに計帳の手實を奉らざる戸は、逃亡の例に準じ、舊籍に據りて、その手實を寫し、その口分田を沒入して、不輸租田とし、これを他人に賃租せしめ、その地子を職の公用に充てしもの。國に在りては、同樣の田地を國寫田と稱したり。

しき-じやばら 敷蛇腹【名】籠手(コテ)・鹿當(ムカバキ)などの、蛇腹編に作りたるもの。

しきしやに 式叉尼【名】〔佛〕**しきしやまなに**(式叉摩那尼)の略。

しきしやまな 式叉摩那・式沙摩那・式叉摩拏【名】次條の略。

しきしやまなに 式叉摩那尼・式沙摩那尼(梵Śikṣamāṇā)【名】〔佛〕『學法女又は正學女と譯す』七衆の一。沙彌尼にて、具足戒を受けんとして、十歲より二十歲までの滿二年間、一定の法を學ばしめらるる者。

しき-しゆ 色衆【名】〔佛〕㊀『ごしゆ(五衆)を見よ』㊁**しきうん**(色蘊)に同じ。㊂『色は色目の義』法會の時、梵唄(ボンバイ)・散華(サンゲ)等の各職務を帶びて、一座に參する僧衆の總稱。正統記「法皇御灌頂の時、色衆につらなりて」

しき-しゆ 識衆【名】〔佛〕前條㊁に同じ。

じき-しりよくせん 磁氣指力線【名】〔理〕**じりよくせん**(磁力線)に同じ。

しき-す 敷寳【名】敷物にする簀。

しき-す 軾す【動佐變他】㊀車中にて禮を行ふ。

しき-ずな 敷砂【名】砂を庭などに敷散らすこと、又その砂。

しき-すゐせん 四季水仙【名】〔植〕**たまだれ**(玉簾)㊁に同じ。

しきせ 爲著・仕著・四季施【名】主人より、奉公人に季節に應じて、著物を與ふること、又その著物。會我五人兄弟「古手といふ物見て置いて、下女やはしたの仕著には會我を頼んで買給へ」㊁江戸幕府時代に、毎年正月・四月・五月・九月・十二月に同朋頭・數寄屋坊主等に時服を賜ふこと、又その時服。

しきせ-だい 四季施代【名】江戸幕府が、四度(ド)の仕著【句】主人より、一年四回の仕著を給すること。(町家の仕著は、夏・冬の二回を普通とせしたり)「代女「われ、四度の御仕著に八十目に定め、一とせ勤めし初の月、きさらぎ二日に、曙早く、その御屋形にまかりしに」

じきせいうけい 自記晴雨計【名】氣壓の變化を自記によりて示す裝置の晴雨計。構造種種あれども、大別すれば、空盒(クウゴウ)を用ふるものと水銀を用ふるものとの二種となる。廣く行はるるは前者にして、中にも、佛蘭西のリシャアル(Richard)式と呼ぶもの、實用せらる。

じき-せきだう 磁氣赤道【名】〔理〕「磁氣の赤道」に同じ。

正月・四月・五月・十二月の四回に、衣服代として、右筆・同朋等に與へし金。「じ。

しき-せん 敷錢【名】しきん(敷金)㊀に同じ。

じき-ぜめ 食攻【名】ひやうらうぜめ(兵糧攻)に同じ。太平記「ただ食攻めにすべしとぞ議せられける」

しき-そ 色素【名】㊀『英 Pigment』生物の皮下に在りて、外面の色を呈する根源となる小粒狀の物質。動物の羽毛・皮膚、植物の花・葉などの色は、皆この物の存在するに因る。㊁〔化〕『英 Colouring matter』物體に色を附與する成分。ある色に染著せしむる材料となるもの。その種類に、鑛物性・動物性・植物性及び人造等の別あり。各その特性に隨って、用法・用途を異にす。

しき-そく-ぜ-くう 色即是空【句】しき(色)の條下を見よ。

しきそ-ぼはん 色素母斑【名】〔醫〕ほくろ〔黑子〕に同じ。

しきたい 色對【名】〔文〕和漢・漢和にて、對句を立つるに黑に白、青に丹等のごとく、色を用ひて、對を取ること。〔俳句の語〕

しきたい 色諦【名】〔佛〕けたい(假諦)に同じ。

しきたい 色代・式退・式體・色體【名】㊀『式は法、退は、しりぞく義にて、禮法を正し、辭退して、人を先に立て、我れはあとへ退くなりとも、また事の軈に依る體にて、體を前方に屈し、禮を行ふ義ともいふ』禮儀。挨拶。じきあひ。しきれい。〔武家時代の語〕㊁挨拶。會釋(エシヤク)。じきれい。盛衰記「あながちに驚き思召すべからずなんど、色代しければ」㊂世辭。追從(ツヰシヨウ)。著聞「おもしろう候ひつるものかなと色退したりけるを」㊃物物交換すること。庭訓往來「現物色代之儀」㊄江戸幕府以前にありて、布・帛・麻・絲などを租米に代用せること。

しきたい 敷臺・式臺【名】玄關さきの板敷、地上より五六寸の高さに張れり。德川時代には、駕籠をこの上におろして、上下したり。國姓爺後日合戰「まだ八歲の初元結、父母の育ての日本風、式臺に手をついて」じ。

しき-せん 敷錢【名】しきん(敷金)㊀に同じ。太平記「ただ食攻めにすべしとぞ議せられける」

しき-そ 色素【名】㊀『英 Pigment』生物の皮下に在りて、外面の色を呈する根源となる小粒狀の物質。動物の羽毛・皮膚、植物の花・葉などの色は、皆この物の存在するに因る。㊁〔化〕『英 Colouring matter』物體に色を附與する成分。ある色に染著せしむる材料となるもの。その種類に、鑛物性・動物性・植物性及び人造等の別あり。各その特性に隨って、用法・用途を異にす。

しき-そく-ぜ-くう 色即是空【句】しき(色)の條下を見よ。

しきそ-ぼはん 色素母斑【名】〔醫〕ほくろ〔黑子〕に同じ。

しきたい 色對【名】〔文〕和漢・漢和にて、對句を立つるに黑に白、青に丹等のごとく、色を用ひて、對を取ること。〔俳句の語〕

しきたい 色諦【名】〔佛〕けたい(假諦)に同じ。

しきたい 色代・式退・式體・色體【名】㊀『式は法、退は、しりぞく義にて、禮法を正し、辭退して、人を先に立て、我れはあとへ退くなりとも、また事の軈に依る體にて、體を前方に屈し、禮を行ふ義ともいふ』禮儀。挨拶。じきあひ。しきれい。〔武家時代の語〕㊁挨拶。會釋(エシヤク)。じきれい。盛衰記「あながちに驚き思召すべからずなんど、色代しければ」㊂世辭。追從(ツヰシヨウ)。著聞「おもしろう候ひつるものかなと色退したりけるを」㊃物物交換すること。庭訓往來「現物色代之儀」㊄江戸幕府以前にありて、布・帛・麻・絲などを租米に代用せること。

しきたい 敷臺・式臺【名】前條に同じ。夕霧阿波鳴渡「左近親子送って出で、色代(シキ)あれば」平家女護島「白洲を土にすらせて式臺し」

しきたい 敷臺・式臺【名】玄關さきの板敷、地上より五六寸の高さに張れり。德川時代には、駕籠をこの上におろして、上下したり。國姓爺後日合戰「まだ八歲の初元結、父母の育ての日本風、式臺に手をついて」

しきたい-けゆ 式代解由【名】前司以往の過怠は不與解由狀に注して上申したれども、當任者には過失なきによりて、解由を支ふること。朝野群載「式代解由」

しきたう 指揮刀【名】將校が指揮するため、平時佩用する刀。(軍刀に對して)

しきだう 色道【名】いろごとに關する事。女色の道。五人女「そのさまうるはしく、女の好きぬる風俗、十四の秋より色道に身をなして」一代女「東そだちの末の女は、…心底まことはありながら、かって色道の慰にはなりがたし」

じきだう 食堂【名】寺院の食堂(ジヨクダウ)。多くは伽藍の東廊に接續し、廊に魚板を懸け、堂内に食卓を列ぬ。齋堂(ジヨウ)。奥の細道「鍾板鳴って、食堂に入る」

しきだたみ 敷疊【名】たたみ(疊)㊁に同じ。〔元祿時代の語〕若風俗「しき疊の上に坐して」

しきたつ 敷立つ【動下二他】『しく(敷く)㊄を見よ』宮殿の柱をいかめしく立てて、その宮殿を知らしめす。ふとしきたつ(太敷立つ)參照。〔古語〕新古今「宮柱下の岩根にしきたてて露もくもらぬ日の御影かな」

しぎたつ-さは 鴫立澤【名】〔地〕相模國大磯町の西端、國道の左傍にある丘地。今その傍に鴫立庵(アンリツ)あり。寛文の初、小田原の人崇雪の設けしものにて、元祿中俳人大淀三千風ここに閑居せり。もと西行の山家集に「秋、ものへまかりける道にて、「心なき身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮」と云ふ歌あるに本づける名にして、本來地名にあらず、西行物語には「相模國大庭(オホバ)といふ所、砥上(トガミ)ケ原を過ぐるに云云」とありて、この歌を擧げたるが、大庭・砥上ケ原は、今の鵠沼(クゲヌマ)の邊なるのみならず、西行物語も後世のものなれば、信じがたけれど、その舊跡のこの地と定まりしも、由來久し。

しきたへ 敷妙【名】㊀寢床に敷くものと

しきたつ 敷立つ【動下二他】『しく(敷く)㊄を見よ』宮殿の柱をいかめしく立てて、その宮殿を知らしめす。ふとしきたつ(太敷立つ)參照。〔古語〕新古今「宮柱下の岩根にしきたてて露もくもらぬ日の御影かな」

しぎたつ-さは 鴫立澤【名】〔地〕相模國大磯町の西端、國道の左傍にある丘地。今その傍に鴫立庵(アンリツ)あり。寛文の初、小田原の人崇雪の設けしものにて、元祿中俳人大淀三千風ここに閑居せり。もと西行の山家集に「秋、ものへまかりける道にて、「心なき身にもあはれは知られけり鴫立澤の秋の夕暮」と云ふ歌あるに本づける名にして、本來地名にあらず、西行物語には「相模國大庭(オホバ)といふ所、砥上(トガミ)ケ原を過ぐるに云云」とありて、この歌を擧げたるが、大庭・砥上ケ原は、今の鵠沼(クゲヌマ)の邊なるのみならず、西行物語も後世のものなれば、信じがたけれど、その舊跡のこの地と定まりしも、由來久し。

しきたへ 敷妙【名】㊀寢床に敷くものとも、織目細かき帛ともいふ。〔古語〕遊君三無相「上著を脫いで敷妙に、卒塔婆枕のうたたねは、哀にも又物凄し」㊁まくら(枕)㊀を云ふ。〔女の語〕

しきたへ-の 敷妙の【枕】敷妙は、寢床に敷くものなるより、その(床)・まくら(枕)にかけ、轉じて、ころも(衣)・たもと(袂)・そで(袖)にかけ、更に轉じて、夜寢ぬる意にて、いへ(家)にかけていふ。萬葉「しきたへの床のべさらず立てれども」同「さ夜ふけていもを思ひいでてしきたへの枕もよそに嘆きつるかも」同「玉藻なすなびきわがねしきたへのいもがもとを」同「敷妙のそでかへし君たまだれのをち野にすぎぬまたもあはめやも」同「とどめえぬ命しあればしきたへの家をばいでて雲がくりにき」

しきたり 爲來・仕來【名】以前よりのならはし。先例。因習。

じぎたりす 實芟答利斯【名】〔植〕ぢぎたりす(實芟答利斯)を見よ。

じぎたりすえふ 實芟答利斯葉【名】ぢぎたりすえふ(實芟答利斯葉)を見よ。

しきたる 仕來る・爲來る【動四自】以前より今までひきつづきて爲す。慣例として爲しきたる。

しきち 敷地【名】ある用途に充てたる土地。しき。東鑑「以二御敷地一」

しきち-てん 識智天【名】〔佛〕しきむへんしよてん(識無邊處天)に同じ。

しきぢん 色塵【名】〔佛〕ろくぢん(六塵)の一。眼に經卷を讀みて、佛道を脩し、佛果を得ること。「見よ。

しきぢん-とくだう 色塵得道【名】〔佛〕得道の一。

しきちやう 色頂【名】〔佛〕しきくきやうてん(色究竟天)に同じ。

しきちやう 四季帳【名】古、課役の微否を四季に調査して記入せし帳簿。續紀「四季帳」

じきづ 磁氣圖【名】〔理〕『英 Magnetic chart』地表上における磁氣の偏角・伏角・磁力等を圖上に記載したるもの。英國の天文學者ハアレ(E. Halley)始めてこれを作れりといふ。

しぎつき-あみ 鴫突網【名】鳴を捕ふるに用ふる竿網。しぎあみ。

しきつ-て 仕切って【副】切に。かたく。をりいって。門出入島「菊王しきってすすむれば」

しきつ-の-うら 敷津浦【名】〔地〕攝津國にありし浦。今、攝津國東成(ヒガシナリ)郡敷津村の地。或は大阪市西區九條町安治(アヂ)川口江子(コエ)島の總稱なりともいふ。拾玉「もしほ草しきつの浦に船とめてしばしと聞かん磯の松風」

しきつひこたまてみのすめらみこと 磯城津彥玉手看天皇【名】〔人〕あんねいてんわう(安寧天皇)に同じ。「の語」

しきつぼ 【名】ゆずみそ(柚味噌)を云ふ。〔女の語〕

しぎつぼやき 鴫壺燒【名】燒茄子の上に、枝にて、鴫の頭の形を作りておく料理。

しきて 敷手・志岐手・志岐傳【名】雅樂の曲の一。壹越(イフエツ)調。古昔、天皇元服の時などに奏せしものにて、四人にて舞ふ。番舞は青海波。渤海國より傳來せしものなるべしといふ。

しきて 醜手【名】『しき(醜)は接頭語』よごれたる手。〔古語〕萬葉「かきをらむしこのしきでをさしかへてねなむ君ゆゑ」

じきていかう 磁氣抵抗【名】〔理〕『英 Reluctance』磁力線の通過に反抗する性質。

しきてい-さんば 式亭三馬【名】〔人〕小說家。姓は菊池、名は泰助、字は久德、通稱は西宮太助。また遊戲堂・酒落齋・喙囀哩樓・本町庵・四季亭・四季山人等の別號あり。書店に奉公して、稗史・小說を耽讀し、つひに作者を以て立つ。浮世床・浮世風呂の二作最も著はる。文政五年歿す。年四十八。

(ばんさいてきし)

しきてう 色調【名】〔美〕『英 Colour tone』色彩の調子。色彩の強弱・寒暖・濃淡の調子。いろあひ。

しきでう 式條【名】しきもく(式目)に同じ。

しきてん 色天【名】〔佛〕しきかいてん(色界天)に同じ。

しきでん 職田【名】しきぶんでん(職分田)に同じ。田令「凡應給二職田位一人」

しきど 識度【名】Ⅰ見識と度量と。Ⅱ見識高く、度量廣きこと。

しきとう 飾東【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治二十九年飾西(シカ)郡と合して、飾磨(シカ)郡となる。

しきどく 色讀【名】Ⅰ書を讀みて、文字のままに、その意義を解すること。(體讀に對して) Ⅱ〔佛〕日蓮宗にて、法華經を如法に修業すること。自讀。

しきな【名】〔植〕がま(蒲)に同じ。

しきない 式内【名】次條の略。(式外に對して)

しきない 四幾内【名】〔地〕大倭(ヤマト)・河内(カフチ)・難波(ナニハ)・山背(ヤマシロ)の四國の併稱。後、和泉より河内を分ちて、一國とするに及び、五畿内の稱起れり。「内部。

しきない 鋪内・敷内【名】鑛山の鑛穴の犯罪者を鑛穴に閉込めおくこと。〔江戸時代の語〕

しきないおひこめ 鋪内追込【名】鑛夫の

しきながる 布流る【動下二自】普及す。ゆきわたる。流布す。〔古語〕起「政令流行(ハヤリオコナハレ)。」

しきなく 頻鳴く【動四自】しきりに鳴く。〔古語〕萬葉「春しすぐればほととぎすいやしき鳴きぬ一人のみ聞けばさぶしも」

しきなのうら 敷名浦【名】〔地〕次條に同じ。平家女護島「船は備後のしきなの浦沙待してこそ居たりけれ」

しきなのとまり 敷名泊【名】〔地〕備後國沼隈郡千年村に在る入江。島嶼海水を抱きて出入の口見えざるより、古は口無(クチナシ)の泊ともいへり。敷名の浦。平家「御船厳島より返り、備後の國しきなの泊に著かせたまふ」

しきなぶ 敷並ぶ【動下二他】『しく(敷)Ⅴを見よ』おしわたして治めたまふ。〔古語〕萬葉「そらみつ大和の國はおしなべてあれこそ居れしきなべてあれこそませ」

しきなみ 頻浪・重波【名】頻りに寄せ來る波。しくなみの(頻波の)參照。〔古語〕萬葉「沖見れば しき浪たち へ見れば白浪さわぐ」

しきなみ 敷並【貌】しきり(頻)に同じ。平「宣旨として、内裏より、しきなみに召されければ」

しきなみぐさ 敷並を打つ【句】しきりに馳す。

しきなみぐさ 重波草【名】〔植〕すすき(薄)Ⅱの異稱。〔古語〕篠目抄「水はなし風こそは立て波はたてしきなみぐさに露ぞこぼるる」

しきなみのせき 敷浪關【名】〔地〕古、播磨國にありし關。堀太「追風にいたてに走れ筑紫舟しきなみの關せきとどむとも」

しきにく 食肉【名】にくしょく(肉食)に同じ。〔僧侶の語〕

しきにん 識認【名】識(シキ)認むること。認

じきにんき 食人鬼【名】〔佛〕人を食ふ鬼。羅刹(ラセツ)。

しきね 敷寢【名】下敷にして寢ぬること。太平「あふぎける團扇を腕に敷寢かな」

しきねじま 式根島【名】〔地〕伊豆七島の一。新(ニヒ)島の屬島にて、その南方、海上一里にある島。周回三里。

しきねん 式年【名】歴代の天皇又は皇后の、祭祀を行ふと定められたる年、即ち崩御の日より三年・五年・十年・二十年・三十年・四十年・五十年、爾後は毎百年とす。

しきねんさい 式年祭【名】歴代の天皇又は皇后の式年の、その崩御の日に相當する日、皇靈殿にて行ふ祭祀。先帝以前三代までのとは先后のと皇妣たる皇后のとは大祭、その他の天皇のは小祭とし、神武天皇のと先帝のとは、陵所にても行ふ。

しぎの 鴫野・鷸野【名】〔地〕攝津國東成(ヒガシナリ)郡北新開莊(イマシンカイ)村の大字。大阪城の東半里。大阪冬陣に、上杉景勝この地に城兵と戰へり。

しきのう 式能【名】江戸時代に、將軍宣下・勅使下向・普請祝などの大禮行はれし時に催しし祝能。觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五座を、城中松の廊下側の廣間に召して、技を演ぜしめ、市人の拜觀をも許せり。

しきのかみ 式の神【句】しき(式)の條下を見よ。

しきのかみ 城上【名】〔地〕しきじやう(式上)を見よ。

しきのざうし 職曹司・式曹子【名】平安京大内裏における大臣・公卿の職曹。皇后宮職の東に位せしより、后宮職東院ともいひ、また職院とも、職御曹司ともいひ、單に職とのみもいひ、皇居火災の折、假の御在所となり、また一時、皇妃の宮殿となりしこともあり。「を見よ。

しきのしも 城下【名】〔地〕しきげ(式下)

しきのたてぶみ 式の立文【句】たてぶみ(立文)の條下を見よ。

しきのたまがきのみや 磯城玉垣宮・師木玉垣宮【名】まきむくのたまがきのみや(纏向珠城宮)に同じ。

しきのとう 式藤・四季籐【名】弓に、鎬籐(カクドウ)・矢摺籐(ハヤズリ)・鏑扣籐(カブラガケ)を捲けるもの。太平弓。

しぎのはがへし 鴫の羽返【句】しぎ(鴫)の條下を見よ。

しぎのはがへし 鴫羽返【名】『その樣、料理の「鴫の羽返」に似たるよりの名なるべし』相撲(スマヒ)の手の一。兩手を差し、相手の首を胸に附け、差したる手にて締附くるもの。

しきのはな 四季花【名】三味線に合はせてうたふ小唄の一。

しぎのはねがき 鴫の羽掻【句】しぎ(鴫)の條下を見よ。

しぎのはねがき 鴫之羽掻【名】〔書〕『鴫の羽掻』を見よ』三體・三夕・四季・四隅・五行・五色・八景・十如是・十二月花鳥廿一代集卷頭卷軸の歌九十賀歌等、數を以て、次第して記せるもの。三卷。著者詳かならず。

しぎのはもり 鴫羽盛【名】料理の一。鴫にて作る。はもり(羽盛)參照。

しきのひきでもの 式引の出物【句】ひきでもの(引出物)の條下を見よ。

しきのびやうぶ 四季屏風【名】清涼殿内に設けたる屏風。四季十二箇月の風景を畫き、それに歌を書連ねしもの。

しきのみづがきのみや 磯城瑞籬宮・磯城水垣宮【名】崇神天皇の皇居。大和國磯城(シキ)郡城島(シキ)村の邊にありき。

しきのみや 磯城宮【名】前條に同じ。

しきのわうじ 施基皇子【名】〔人〕天智天皇第三の皇子。光仁天皇の御父。靈龜二年薨ず。田原天皇又は春日宮天皇と追尊す。「司)に同じ。

しきのねん 職員【名】しきのざうし(職曹

じきは 磁氣波【名】〔理〕『英 Magnetic wave』導線中に於ける電流は、電氣波と同じ週期を以て方向を變ずるが故に、その周圍に磁場の週期的變化を生じ、この變化より起る波動。磁氣波は、必ず電氣波と同時に相伴ひて傳播す。でんきは(電氣波)參照。

しきばう 式帽【名】儀式の時に用ふべく定まりたる帽子。

しきはだ 敷膚【名】下鞍(シタグラ)の二三枚重なれるものの最も下なるもの。はだづけ。

しきばつ 識拔【名】技倆を見拔きて登用すること。

しきはふ 式法【名】正しき儀式・作法。正しき方法。文武五人男「俄かに式法恭しく、坊主頭に立烏帽子上段に著坐ある」春花五大力「大切な呼子のせんぎ、證據をもって出さすが式法」

しきはむ 爲極む【動下二他】爲しつくす。

しきばら 敷腹【名】殿の御前、よろづをしきはめさせたまひて」

しきばらひ 四季拂【名】借りたる金を、四季の末ごとに拂ふこと。

しきばり 敷梁【名】〔建〕床梁(トコバリ)又は小屋梁(コヤバリ)を受くる大梁。

しきび 式微【名】しよくび(式微)に同じ。
しきび 樒【名】〔植〕しきみ(樒)に同じ。
しきひやうおやうしゆう 式評定衆【名】評定衆の中、引附頭・政所・問注所の執事及び評定奉行等の職を兼務せず、例式の評定にのみ與かりしもの。
しきひら 敷平【名】〔建〕軒先唐草瓦の下に敷込みたる平瓦。
しきふ 支給【名】渡し與ふること。あてがひ。支出給與。
しきふ 至急【名】■極めていそぐこと。おほいそぎ。■電報の指定事項の一。至急電報なることを示すもの。その略符號は、和文にてはウナ、歐文にてはRU。
しきふ 死急【名】〔佛〕火急の大事。〔禪宗の語〕「と。
しきふ 資給【名】あてがふこと。與ふること。
しきふ 職封【名】太政大臣より大納言にいたるまで賜はる課戸。じきふ(食封)參照。
しきふ 職符【名】古、京職より下しし符。
しきふ 敷布【名】寢布團の上に敷きて用ふる白布。しいつ。しいと。
しきぶ 式部【名】■古の式部省の職員たる者。■式部局に屬して、內外の儀式の事を掌り奏任官。大・少の二階級ありたり。■式部寮に屬して、庶務に從事せし判任官。明治十三年設置、同十九年廢止。
じきふ 自給【名】自己の力にて生活すること。みづから支給すること。
自給自足【句】〔經〕『英Self-sufficiency』國民經濟上、凡そ一國內に要する貨物は、外國との貿易に依らずして、悉くその國內に於て生産供給すること。自足自給。**しんちゆうしやうしゆぎ**(新重商主義)參照。
じきぶ 食封【名】古、皇族・諸臣の勳功・位階・職分ある者に賜はりし課戶。位階に對しては位封、職官に對しては職封、勳功に對しては功封と呼び、その課戶をすべて封戶(コ)といへり。また封戶より輸するところの調・庸は、全部その主に納め、租は官と主とに半ばづつ納むる規定なりき。
しきふがく 支給額【名】支給すべき金額。

しきぶきよく 式部局【名】太政官中の一局。長・助・大式部・少式部の職員ありて、內外の議式及び圖書に關する事務を掌りし所。明治四年設置。翌年式部寮と改稱し、頭・權頭・助・權助・大屬・權大屬・中屬・權中屬・少屬・權少屬・大舍人(オホトネリ)・權大舍人・中舍人・權中舍人・少舍人・權少舍人・大伶人・中伶人・少伶人の職員を置きしが、同八年宮內省の所管より正院(シヤウ)に屬し、同十年復び宮內省の所管に歸し、禮典・陵墓・任敍の事務を掌り、同十七年廢せられ、式部職これに代れり。
しきぶきよくはう 至急局報【名】至急電報なる局報。至急官報に次ぎ、その他の諸電報に先だちて送達す。
しきふく 式服【名】儀式の時に著用すべく定まりたる衣服。
しきぶくわん 式部官【名】式部職に屬する高等官。**しきぶしき**(式部式)[二]參照。
しきふくわんばう 至急官報【名】至急電報なる官報。他のすべての電報に先だちて送達す。
しきふさいそく 支給細則【名】給與金錢の支給に關する細則。
しきぶしき 式部職【名】■明治十七年式部局に代りて置かれたる宮內省中の一局。帝室の祭典・禮式を掌り、及び雅樂の事を管理したるもの。その職員は式部長官・式部次官・式部官屬・掌典長・掌典以下及び雅樂長・雅樂屬以下これに屬す。■宮內省中の一局。帝室の祭式・交際の事を掌る所。式部長官・式部次官・式部官舍人長・舍人の職員あり。
しきぶしきくわん 式部職【名】■式部職[一]の職員。式部長官を輔くる勅任官。■式部職[二]の職員。式部長官を輔くる勅任官。

しきふしきやう 至急私報【名】至急電報なる私報。至急官報及び至急局報に次ぎ、その他の電報に先だちて送達するもの。
じきふじそく 自給自足【句】じきふ(自給)の條下を見よ。
じきふじそく-しゆぎ 自給自足主義【名】〔經〕『獨Princip der selbstgenügsamkeit』一國の商業政策上、その國內に要する貨物は、外國との貿易に依らず、悉くその國內に於て生産供給せんとする主義。**じきふじそく**(自給自足)參照。
しきふしんてん 至急親展【名】電報の指定事項の一。他人の披見を憚る至急電報なることを示すもの。その略號は、和文にてはウニ、歐文にてはUC。
しきぶしやう 式部省【名】古の八省の一。國の典章・禮儀・六位以下の文官の奏任・奏擬の事、貢擧・考課などを掌りし所。卿一人、大・少輔各一人、大・少丞各二人、大錄一人、少錄三人、史生(ヤジヨウ)二十人及び省掌・使部・直丁(ヤヂヤウ)若干等の職員あり。卿は大抵親王を以て任ぜらるる例なりき。のりのつかさ。解司(ゲ)。「職」に同じ。
しきぶしよく 式部職【名】**しきぶしき**(式部職)に同じ。
しきぶすま 敷衾【名】下に敷く夜具。しきぶとん。小町繪「上は下に助けられけり敷きぶすま」
じきふせい 次急性【名】〔醫〕急性病の持續時間の刺合に長きに亙るもの。およそ廿八日乃至四十日以內に及ぶ。亞急性。
しきふせん 四級船【名】船舶檢查規定に因りて制定せられたる、第四級即ち最下級に屬する船。その船路は、平水航路區域內に限らる。
しきぶたい 敷舞臺【名】■座敷を板張にして、假に設けたる能舞臺。■**おきぶたい**(置舞臺)に同じ。
しきぶちやうくわん 式部長官【名】■式部職[一]の長官。帝室の祭典・禮式・雅樂等を總管せし勅任官。■式部職[二]の長官。帝室の祭典・禮式等を總管するもの。親任官又は勅任官とす。
しきふつうわ 至急通話【名】電話の通話の一。普通通話に先だちて取扱ふもの。
しきふつうわ-れう 至急通話料【名】至急通話の料金。普通通話料の二倍とす。
しきふ-でんぱう 至急電報【名】特別電報の一。通常電報に先だちて發するもの。至急官報・至急局報・至急私報の三種に分つ。

しきふでんぱうれう 至急電報料【名】至急電報の料金。官報と私報とによりて、その金額に差あり。官報は通常電報料の二倍、私報はその三倍とす。
しきぶとん 敷蒲團【名】■寢床に敷く蒲團。三布又は四布にて、長方形をなす。(掛蒲團に對して)■**ざぶとん**(座蒲團)に同じ。「を見よ。
しきふなばり 敷船梁【名】**ふなばり**(船梁)
しきぶの-たいふ 式部大夫【名】式部の丞にて、五位に敍せられしもの。**ぢ**式部の大夫」
しきふひん 四級品【名】〔商〕運送貨物の、五級品の下、三級品の上に位するもの。毛織物・鮮魚・生絲・器械の類。
しきぶぶし 式部節【名】東(アヅマ)派淨瑠璃の一派。薩摩土佐の門人(一說に薩藩外記の門人)廣瀨式部太夫の始めたるもの。式部太夫、後、姓を岸澤と改めしが、流末、常磐津(トキハヅ)に屬するに至り、その三味線彈の岸澤を名乘るもの、これに基づく。
しきぶん 識文【名】しもん(識文)の誤讀。
しきぶん-しじん 職分資人【名】古、大臣・大納言に賜ひて、その奬衞及び驅使に供せし資人。太政大臣に三百人、左・右大臣に二百人、大納言に一百人とし、位分資人と同じく、外八位以下の子及び庶人を取りし外、內八位以上をも取ることを得しめたり。(位分資人に對して)令集解「職分資人」
じきぶんしせつ 磁氣分子說【名】〔理〕鐵その他、磁性體の各分子が、それぞれ一個の小磁石なりとの假說。
しきぶんでん 職分田【名】古、大臣・大納言及び太宰府の官人、國司・郡司又は諸道の博士等に賜ひし田地。太政大臣は四十町、左・右大臣は三十町、大・中納言は二十町など、職の輕重に應じて、等差あり。輸租田の一。職田。**しきふ**(職封)參照。
しきふる 頻降る【動四自】しきりに降る。【古語】萬葉「春の雨はいやしきふるに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも」
しきぶ-れう 式部寮【名】**しきぶきよく**(式部局)を見よ。

しき-べつ 識別【名】見わくること。甄別。

しき-ほふ 色法【名】〔佛〕一切諸役の中、物質に屬するもの。(心法に對して)

しき-ま 色魔【名】自己の色慾を滿足せしむるため多くの婦女を誘惑する者。

しき-まう 色盲【名】〔醫〕『英 Colour-blindness』物の色を判然と見分け得ざる病。赤色盲・綠色盲の如く、一部の色に對してのみのものと、すべての色に對してのものとあり。後者は萬物、悉く灰白色に見ゆ。

しき-まき 重播・頻蒔【名】穀物の種子を、一旦蒔きたる上に重ねて蒔き、その生長を害するごと。上古、素盞嗚(スサノヲ)尊これを犯し、天つ罪の一に數へられたり。〔古語拾遺〕「天つ罪とは、畔放(アハナチ)・溝埋(ミゾウメ)・樋放(ヒハナチ)・頻蒔(シキマキ)」

しき-ます 敷座す【動四他】しく(敷く)【五】の敬語。治めたまふ。しろしめす。しかす。〔古語〕萬葉「高ひかる日のみこしきます大殿の〜に」

しき-まつば 敷松葉【名】霜よけのために、庭に敷く、枯れ松葉。重體千「路地の飛石・敷松葉」

しきみ 樒・梻・莽草【名】〔植〕木蘭(モクレン)科に屬する常綠樹。山地に自生し、高さ一丈餘。周圍二尺に達し、樹皮は黑色にして、褐色を帶び、やや平滑なり。葉は鷄木(モチ)のに似て、深綠色を呈し、四月淡黃白色の小花開き、後、實を結ぶ。根・枝・葉・實共に香氣ありて、毒を帶ぶ。枝葉は佛前に供へ、葉と樹皮とは、乾して抹香又は線香に製す。しきび。かうのき。はなのき。和名「樒、之岐美、香木也」萬葉「奥山のしきみの花の名のごとやしくしく君に戀ひわたりなむ」

しきみ 閾【名】門戸の下、左右の柱の間に横たへたる木。また室の出入口に敷き、多くは溝を穿ちて襖・障子を設けたる横木。おしき。とじきみ。しき。しきゐ。和名「閾、門限也、兼名苑云、閾、一名閫、和名、之岐美、俗云度之岐美」

しきみそ 敗味噌【名】料理法の一。酢取の魚肉を小皿に合はせ、味噌を敷き、その上に載せて出すもの。

しきみん (英 Sikimin)【名】樒に含める有毒成分。水に溶解せざる結晶體をなす。

しぎ-むし しぎ蟲【名】〔動〕鞘翅(サヤバネ)類に屬する昆蟲。體は暗黃色を呈し、口吻(クチバシ)細長く、幼蟲は桑を害す。

しきむへんしよ-ちやう 識無邊處定【名】〔佛〕識無邊處天に生ずる禪定(ゼンヂヤウ)。

しきむへんしよ-てん 識無邊處天【名】『梵 Vijñānāṇcāyatana の譯語』三界諸天の一。無色界の第二天。色相を離るると同時に、空をも超越して、無邊なる心識に住する境界。壽四萬劫なりといふ。識智天。

しきん 至近【名】きはめて近きこと。

しきん 紫禁【名】『紫は紫微宮の義』皇居。禁裡。內裡。紫宸。

しきん 試金【名】地金・合金又は鑛石を試驗して、その品質・品位を決定し、鑑識すること。〔同じ。

しきん 紫金【名】〔鑛〕しやくどう(赤銅)に同じ。

しきん 賜金【名】朝廷又は政府などより金を與へらるること、又その金。

しきん 資金【名】㊀資本の金。もとで。もときん。㊁特定の用途に充てらるる金。㊂爲替手形又は小切手の振出人が、その手形の支拂用に供せんがために、支拂人に提供する金錢的對價。手形資金。〔て〕

しきん 私金【名】私有の金。(公金に對し

しぎん 齒齦・齒斷【名】〔醫〕口腔粘膜の一部にして、血管に富める軟組織。齒根膜及び齒槽と共に、直接に齒牙支持の組織たり。はぐき。

じきん 自謹【名】自ら謹むこと。謙遜(遁成寺)「哀愍・自謹のみぎんなれば」

しきん-からまつ 紫金唐松【名】〔植〕しきんからまつさう(紫金唐松草)の略。

しぎん-からまつ 紫銀唐松【名】〔植〕しぎんからまつさう(紫銀唐松草)の略。

しきんからまつさう 紫金唐松草【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、莖の高さ二三尺、葉は卵形。夏季、紫萼にして、雄蕊の淡黃色なる花を開く。しきんからまつ。

しぎんからまつさう 紫銀唐松草【名】〔植〕毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は複葉にて、小葉は廣卵形。初夏の頃、帶黃白色の花を圓錐花序に開く。山野に自生す。しぎんからまつ。

しきんぎう 紫金牛【名】〔植〕やぶかうじ(紫金牛)に同じ。

しきんぎう-くわ 紫金牛科【名】〔植〕やぶかうじくわ(紫金牛科)に同じ。

しきんぎむしや 資金義務者【名】〔法〕『手形資金を供給する義務者の義』小切手の振出人。

しきん-くわん 紫巾官【名】舊琉球藩三司の一。即ち親方と稱せしものの一。

しきん-くわんけい 資金關係【名】〔商〕手形資金に就き、振出人と支拂人との間に存する關係。

しきんこ 支金庫【名】本金庫又は中央金庫に統轄せらるる下級の金庫。本金庫の設置なき地方に置かれ、日本銀行代理店長、又は出張所長、これが事務を取扱ふ。

しきん-じゆじゆ-きよくはう 資金受授局報【名】局報の一。郵便爲替金・郵便取立金・郵便貯金の取扱に要する資金の受授に關して、相互の金庫間に往復する電報。

しきん-じゆつ 試金術【名】鑛物の主要成分を、定量分析する術。乾式と濕式との二法あり。前者は、火熱又は融劑を用ひ、目的とする成分を抽收して定量するもの。後者は、試料鑛物の溶液を作り、試藥又は電流を用ひて、目的とする成分を沈澱せしめて定量するもの。試金法。

しきん-しやうけん 資金證券【名】資金を表はせる有價證券。即ち大藏省證券・公債證書・會社株券・社債など。これを所有する者は利子又は配當を受くるが故に、投資の目的物として取引せられ、又、擔保物件となすを得。

しきん-せき 試金石【名】㊀〔鑛〕かねつけいし(金附石)に同じ。㊁他の事物の價値を判定する試驗となるべきものの譬。

しきん-たい 紫金苔【名】〔植〕川苔の一種。筑後國の壽仙苔の小なるもの。高價なり。

しきん-ちやう 紫金錠【名】麝香・龍腦・薄荷などにて製したる煉藥。方形にて、金銀箔を附け、氣附(キツケ)などに用ふ。

しきん-ちやう 【名】〔植〕まんりやう(硃砂根)に同じ。

しきん-とう 紫金藤【名】夾竹桃(キヤウチク)科に屬する蔓性灌木。莖枝は紫黑色、葉は披針形又は長楕圓形の全緣にして、平滑なり。初夏、聚繖花序又は圓錐花序の淡黃の花を綴る。暖國の海邊の山地に生ず。さかきかづら。

しきん-どう 【名】〔植〕つるまをに同じ。

し-きんなら 四緊那羅【名】〔佛〕次條の略。

しきんならわう 四緊那羅王【名】〔佛〕緊那羅の四王、即ち法緊那羅・妙法緊那羅・大法緊那羅・持法緊那羅の併稱。

しきん-はふ 試金法【名】しきんじゆつ(試金術)に同じ。

しきんばり 試金針【名】試金石に擦附けたる條痕により、品位を推定する場合に、對照比較のために用ふる、品位既知の金針。

しきん-もんく 資金文句【名】〔商〕手形振出の資金の性質を手形面に指示する文句。

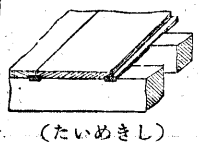
しきん-ろ 試金爐【名】乾式の試金術を行ふ際に、試料鑛物を熱し、又は溶すに用ふる爐。

しきん-わかさう 紫禁和歌草【名】〔書〕じゆんとくゐんごしふ(順德院御集)に同じ。

しきめ 敷目・重目【名】しきめをとし(敷目綴)の略。太平記「火縄の曽の、敷目に捲へたるを」

紅(クク)の敷目【句】しきめをとし(敷目綴)を見よ。

しきめいた 敷目板【名】〔建〕板の繼目の下に取附けたる目板。


(たいめきし)

しきめいれい 指揮命令【名】〔法〕上級官廳が、職權又は要求により、下級官廳に、その職務上の事項に關して下す命令。官廳内部にのみ効力を有す。訓令と指令とに分つ。各その條を見よ。

しきめす 頻召す【動他】頻りに召す。〔古語〕萬葉「藤原の大宮仕あれつげやを

とめがともはしきめさるかも」

しきめ-ぬひ 敷目縫【名】敷目織の縫方。

しきめ-をごし 敷目織・重目織【名】鎧の縅の一種。二色の絲にて、袖と草摺とに斜に色を變へて縅せるもの。白と紅との絲を用ひたるを紅の敷目といふ。或は小さき札(サネ)に、絲目を細かく縅せるものともいふ。かしごり(樫鳥縅)に同じともいふ。

しきも 敷裳【名】寢床などに敷きて用ふるもの。しとねの類。「古語」萬葉「日ざらしの麻手づくりをしきもなすしきに取敷き」

しきも-あふ 敷裳合ふ【枕】敷裳を敷合はせて寢ぬといふ意より轉じて、いへにかけていふ。萬葉「そこゆゑになぐさめてけるしきもあふいへと思ひてたまだれのをちの大野の」

しきもく 式目【名】『式は法式、目は條目の義』制度の箇條書。法律。式條。「武家時代の語」太平記「貞永に五十一箇條の式目を定めて」

しきもく-げんかい 式目諺解【名】「書」しきもくせう(式目抄)に同じ。

しきもく-しんぺんつゐか 式目新編追加【名】「書」しんぺんつゐか(新編追加)を見よ。

しきもくせう 式目抄【名】「書」貞永式目の註釋書。天文三年清原環翠軒が、祖父常忠の說に據りて記したるもの。寛文九年の刊本には、式目諺解と題せり。

しきもす 【動自】『しくを見よ』繁り合ふ。「古語」紀「井上有二湯津杜樹一枝葉扶疎、エダハシキモシ」

じきもつ 食物【名】しよくもつ(食物)に同じ。保元「食物なければ、忽ち命盡きぬ」

しきもの 敷物【名】坐るために、下に敷く物。即ち座蒲團・ケットなど。

しきものがたり 四季物語【名】「書」一年中の公事・節物どもを、假名文にて記せるもの。一卷。鴨長明の著といふ。徒然「四季物語にも、玉だれに、後の奏はとまりけりとぞ書ける」

しきもん 識文【名】しもん(識文)の誤讀。

しきもり 式守【名】相撲(スマヒ)の行司の家柄の一。

しきもり-こだいふ 式守五太夫(式守五太夫)參照。

しきもり-くわぎう 式守蝸牛【名】「人」相撲(スマヒ)の行司。初名は伊之助。相撲の赤房を創製す。寛政・文化頃の人。

しきもり-ごだいふ 式守五太夫【名】「人」相撲(スマヒ)の行司。式守氏の元祖。名は義則。伊豆國下田の人。力士伊勢海五太夫の弟子。後、木村庄之助に從ひ、行司となる。天明頃の人。

しきや 醜屋【名】きたなき家。「古語」萬葉「さし燒かむをやのしきやにかき捨てむやれごもを敷きて」

しきや 識野【名】「哲」『英 Field of consciousness』現在覺醒せる意識の全範圍。

しきやう 詩經【名】「書」五經の一。殷代より春秋時代までの詩三百十一篇を、風・雅・頌の三部門に大別して、孔子の纂輯したるもの。古は、單に詩と稱せしが、宋の朱子に至り、これを詩經と稱す。まうし(毛詩)・りくぎ(六義)參照。

しきやう 四境【名】四方のさかひ。

しきやう 死境【名】しゐ(死地)に同じ。

しきやう 市況【名】市の商業の現狀。市場の景氣。

しきやう 執行【名】しゅぎやう(執行)に同じ。節用集「執行、シギヤウ」

しきやう 四行【名】「佛」菩提(ボダイ)・福德・智慧・羯磨(カツマ)の四種の行。「四隅・四行の薩埵」參照。

じきやう 自強・自彊【名】『易經の上象傳に「天行健、君子以自彊不レ息」、禮記の學記篇に「然後能自强也」とあり』みづから强めて休息せざること。「撰字鏡」の略。

じきやう 字鏡【名】「書」しんせんじきやう(新撰字鏡)參照。

じきやう 耳鏡【名】「醫」『獨 Ohrspiegel』耳の內部の狀態を檢視するに用ふる器。

じぎやう 自行【名】「佛」■じり(自利)■に同じ。■自己の修行。(化他(ケタ)に對して)

自行・化他(ケタ)【句】「佛」「自利・利他」に同じ。御文章「いよいよ信心を決定(ケツヂヤウ)して、眞實報土の往生を遂げんと思はん人こそ、まことにその身の德ともなるべし。これまた自行化他の道理にかなへりと思ふべきものなり」

じぎやう 事行【名】瀧口(タキグチ)の第四藏(イヅクラ)の者の稱。職原抄「瀧口…四藏號二事行一」

しきやう-さい 四境祭【名】しかくしきやうのまつり(四角四境祭)を見よ。

じきやう-しふ 字鏡集【名】「書」漢字を天象・地儀・植物等の部門に分ち、更に各部を偏旁によりて排列したる字書。二十卷。菅原爲長の著。

しぎやう-じやう 施行狀【名】武家時代に幕府の執政者が、將軍の御敎書(ミヲシヘガキ)を承けて、その施行を命令せし副狀。鎌倉時代には、執權より六波羅に、又は執權・六波羅より守護に下し、室町時代には、管領より守護に下したり。

しきやうせい 市行政【名】市の自治行政。市參事會の擔任に屬す。

しきやう-ゆうずゐ 四強雄蕊【名】「植」『英 Tetradynamous stamens』一箇の花の中に六雄蕊ありて、その中、四蕊は長く、二蕊は短きもの。油菜・大根・齊(ナヅナ)等、十字科の植物に常に見るところなり。にきやうゆうずゐ(二強雄蕊)參照。

しぎやき 鴫燒【名】茄子を油にていため、味を附けたる捕味噌(ミソ)を塗りし料理。

しぎやく 弑逆【名】臣下の君を殺すこと。しいぎやく。

しぎやく-にち 四逆日【名】九星にて、往くと歸るとに忌むべしといふ日。即ち七日に往かず、八日に歸らず、又、申の日に往かず。酉の日に離れずといふ。

じきやすみ 食休【名】しよくやすみ(食休)に同じ。「語」

しきやみ 敷闇【名】非常にくらき夜。「古語」

しきゆう 梓宮【名】『支那にて、古、梓の材にて作りしよりいふ』屍體ををさめた棺。「略」

しきゆう 紫宮【名】しびきゅう(紫微宮)の略。

しきゆう 子宮【名】女性の生殖器の一部。胎兒のやどる所。小骨盤の中央、膀胱及び大腸の間にあり、形壓平せられたる茄子に似たる筋質性の空洞器管にして厚壁を有し、その頸部は膣の上部に表はる。こつぼ。こぶくろ。

しきゆう-えん 子宮炎【名】「醫」しきゅうじょうえん(子宮實質炎)に同じ。

しきゆう-かいこうき 子宮開口期【名】「醫」出産の際、陣痛のある前後の時期。

しきゆう-かう 子宮腔【名】「醫」子宮壁に圍まれたる空處。

しきゆう-かすゐ 子宮下垂【名】「醫」しきゅうたい(子宮脫)に同じ。

しきゆう-がん 子宮癌【名】「醫」子宮內に生ずる癌腫。婦人の癌腫中、その三分一を占むといふ。

しきゆう-きんそう 子宮筋層【名】「醫」子宮壁の中層、即ち子宮の主部を成すものにして、外層及び內層(子宮粘膜)より厚きこと、四倍に達す。

しきゆう-きやう 子宮鏡【名】「醫」子宮腔部の視診及びその手術に際し、使用する器械。種類多し。

しきゆうぐわい-にんしん 子宮外姙娠【名】「醫」受胎せる卵子の、子宮腔以外に發育すること。

しきゆう-けい 子宮頸【名】「醫」子宮の最下部にして、最も細く、後下方に向ふ部分。腟の上部に圍繞せられ、その尖端腟內にあらはる。

しきゆう-じっしつえん 子宮實質炎【名】「醫」子宮筋層に起る炎症。多くは內膜炎と併發す。子宮炎。しきゅうびやう(子宮病)參照。

しきゆう-たい 子宮體【名】子宮の中央の長くして、下部に至るに從ひ、細き部分。

しきゆう-だつ 子宮脫【名】「醫」子宮の常位より垂下すること。子宮下垂。

しきゆう-てい 子宮底【名】「醫」子宮の最上部の、廣く且つ厚く膨出せるところ。

しきゆう-ないまくえん 子宮內膜炎【名】「醫」子宮粘膜に起る炎症。原因は痲毒・感冒・月經時及び產褥時の不攝生・急性傳染病等による。しきゅうびやう(子宮病)參照。

しきゆう-ねんまく 子宮粘膜【名】「醫」子宮內面を蔽ふ、薄く軟弱なる皮膜。灰赤色

にして、數多の腺を有し、透明・アルカリ性の粘液を分泌す。妊娠の際は卵珠を支持し、被包する官能を有す。月經は、この膜の脫離に伴ひて、小血管破裂するに因る。

しきゆうびやう 子宮病【名】子宮に發する疾病の總稱。大別すれば、畸形・炎症・腫瘍位置及び形狀の異常の四種となり。中にも最も多きは、炎症にして、子宮内膜炎と子宮實質炎との二種あり。婦人病。

しきゆうぶ-ふくまくえん 子宮部腹膜炎【名】〔醫〕子宮の外面を蔽へる腹膜に起る炎症。發熱して、下腹に疼痛を覺ゆ。

しきゆう-へき 子宮壁【名】〔醫〕子宮の腔の側壁。

しきゆうみん 四窮民【名】「鰥寡(クワン)孤獨(クワ)」に同じ。

しきよ 死去【名】死にて、この世を去ること。

しきよ 四虛【名】〔文〕律詩の前聯・後聯の四句を、いづれも景物を寫さずして、情思を述べたるもの。(四實に對して)

じぎよ 侍御【名】君主のそばに近く仕ふること、又その人。「を儆すこと。

しきよう 詩興【名】詩情の動くこと。詩思

しきよ-ぎ 視距儀【名】『英 Tachymeter又 Telemeter』距離及び高差を側定するに用ふる器機。構造は、轉鏡儀と殆ど同じ。すたちや。

しきよく 支局【名】本局の管理下に、本局と分離して、事務を取扱ふ局。

しきよく 私曲【名】不平公にして、邪曲なること。よこしま。わたくし。

しきよく 四極【名】四方の極めて遠き國。

しきよく 紫極【名】『紫微北極の義』天子の居らるる處。皇居。

しきよく 枳棘【名】枳(カラタチ)と棘(イバラ)と。枳棘は鸞鳳の棲む所に非ず【句】『後漢書の循吏傳に出づ』賢能の士は、小地位に居らざる譬。

しきよく 色欲・色慾【名】男女性交の慾。色情。性慾。

しきよく 矢玉【名】やだま(矢玉)に同じ。國雄倉戰「鐵砲・石火矢すきまなく、しきよくを飛ばせて戰ひける」

じきよく 時局【名】現在の時勢。時事の現狀。世局。

じきよく 事局【名】事件のなりゆき。

じきよく 磁極【名】〔理〕『英 Magnetic pole』磁石の鐵を吸引する力の最も強き部分。通常その兩端近くに在り。磁石を自由に動き得るやうに支へたる時、北に向ふ端なるを、指北極又は正極又は赤極といひ、南に向ふ端なるを、指南極又は負極又は青極といひ、同名の二極は相斥け、異名の二極は相引く。指北極は符號Nにて表はし、指南極はSにて表はすを常とす。

磁極の作用【句】〔理〕磁石の同名の極は相衝き、異名の極は相引く作用。その强は、距離の自乘に反比例す。

じきよく 食慾【名】しょくよく(食慾)に同じ。

しきよく-ちやう 支局長【名】支局の長。

しきよ-そくりやう 視距測量【名】視距儀を用ひて測量すること。

しきり 【名】頻に產氣を儆すこと。出產の間際の陣痛。右大將鎌倉實記「申し早くお出なされませ、靜樣のしきりが」

しきり 仕切【名】Ⅰさかひ。かぎり。Ⅱ〔商〕帳面又は取引の決算。Ⅲ〔商〕定期取引にて賣買せし物を、その受渡日の到來以前において、轉賣又は買戻をなし、受渡をせずに、始末すること。四しきりきん(仕切金)の畧。船頭深話「江戸の問屋へ仕切を取に來りた、逗留中のしやれなり」

しきり 尻切【名】しりきれ(尻切)に同じ。

しきり 頻・蓐【貌】續けて行はるるさま。しばしば。たびたび。かさねがさね。しきしきなみ。

頻の年【句】近ごろ引續きての年。比年。累年。頻年。平家「しきりの年より以降、平氏王化を蔑如し、政道に憚る所なし」謠曲「木會」「頻の年より以來、平相國といふ者あって、四海を掌にし」

じ-きり 自切【名】他人に關する費用を自分より出すこと。自腹(ジバラ)を切ること。

しきり-がね 仕切金【名】次條に同じ。天の網島「紙どひやのしきりがね」

しきり-きん 仕切金【名】仕切りたる金。賣主が買主より受取るべき代金。立替金。諸入費などの總金額。しきり。しきりがね。

しきりじやう(仕切狀)參照。

しきり-ぎん 仕切銀【名】しきりきん(仕切金)に同じ。「元祿時代の語」天の網島「この十七日、岩國の紙の仕切銀に、才覺はしたれども」

しきり-じやう 仕切狀【名】〔商〕Ⅰ賣主が、賣渡したる貨物の品質・數量・荷印・番號・代價及び買主のために立替へ支拂ひたる諸掛(カケガ)等、即ち仕切金の全部を計上ど、その貨物に添へて、買主に送附する明細書。おくりじやう。Ⅱうりあげかんぢやうしよ 賣上勘定書)に同じ。

しきり-しよ 仕切書【名】前條に同じ。

しきりしよ-ふくほん 仕切書副本【名】〔商〕仕切書紛失の場合に備ふるため、荷受人に宛てて別に送附する仕切書副本。

しきり-ちがひだな 仕切違棚【名】上下二組の違棚を、一本の束(ツカ)にて貫き支へたるがごとくに見する違棚。「なす帳簿。

しきり-ちやう 仕切帳【名】取引の決算をしきり-に 頻に・蓐に【副】しばしば。たびたび。かさねがさねに。

しきり-のう 仕切能【名】明治維新前、社地その他にて、能の眞似を行ひしもの。

しきり-ば 仕切場【名】Ⅰ昔の芝居にて、金主・座元・會計方・奥役など、俳優以外の役員の詰所。鼠木戸入口の傍に在りたり。Ⅱ座元の手代。前記の仕切場に詰めて、雜事に使はる。

仕切場の平(ヒラ)【句】芝居の仕切場の在る處。「

しきり-ば 仕切羽【名】仕切矧に合はせて、矧(ハ)ぎたる矢羽。新勅撰「しきりばの矢といふことを、人のよませはべりけるに」

しきり-はぎ 仕切矧【名】矢羽を矧ぐに、黑羽と白羽と繼合はせて、中黑中白又は端黑白などにすること。

しきり-ばん 仕切判【名】仕切をする時の證に捺(オ)す印。

しきり-ます 仕切枡【名】芝居の見物人の居る場所を、木材にて區劃すること。ます。

しきり-まるる 頻參る【動四自】しきりに參る。「古語」榮花「さるべき御使ども、數知らずしきり參りつるものでたくぞ」

しきりやう 識量【名】識見と度量と。

しきりよ 識慮【名】識見と思慮と。

しきりよく 識力【名】識別する能力。

じきりよく 磁氣力【名】〔理〕じりよく(磁力)に同じ。「男。

しきり-をとこ 仕切男【名】仕切場に居るさかひを立つ。區劃す。かぎる。Ⅱ結末をつく。Ⅲ〔商〕轉賣又は買戻によりて、取引を完結す。仕舞ふ。四帳面の決算をなす。五相撲(スマヒ)を行ふ前に、準備の身構をなす。

しきる 仕切る【動四他】『仕は爲の義』Ⅰ

しきる 頻る【動四自】しばしば至る。たび重なる。しく。源氏「まうのぼり給ふにも、あまりうちしきるをりをりは」孕常盤「產の氣しきって、誕生の初聲高く聞えけり」

しきれ 尻切【名】Ⅰ『しりきれ(尻切)の略』革にて作りたる昔の履物。道の濕ひたる時に用ひしものにて、雪踏(セッタ)はこれより轉ぜしものといふ。しきり。尻切草履(ゾウリ)。Ⅱ昔、女の、夏、腰に卷きしもの。冬は、その上に、緋の袴を著用したり。「古語」

しきれい 式禮【名】しきたい(色代)(一)(二)に同じ。川中島合戰「急かね信玄、血氣の輝虎、一散に馬乘通め、兩方鑓踏放し、馬上に式禮」

しきれう 敷料【名】〔商〕くらしきれう(倉敷料)に同じ。

しきれんぐわ 敷煉瓦【名】『英 Paving brick』煉瓦鋪道に使用せらるる煉瓦。鋪用煉瓦。

じきろう 食籠【名】食物を盛るに用ひし一種の器。青銅又は堆朱などにて製し、多くは蓋ありて、上下ともその形圓し。

食籠の物【句】食籠に酒の肴を盛りて出すこと。

しぎ-わな 鴫羅【名】鴫を捕ふるためのわな。「宇陀のたかきにしぎわな張る」

しき-わら 敷藁【名】敷物に充つる藁。しきぐさ。じよく。

しきね 敷居・閾【名】Ⅰ地上に布きて、座

に充つる物。蓐などの類。㊁しきみ(闕)に同じ。

しきねが高い【句】不義理又は面目なきことなどありて、その人の家に行きかぬ。

しきねかう 子規遺稿【名】〔書〕正岡子規の文章、及び俳句を集めたるもの。一巻。

しきねき 識域【名】〔哲〕『英 Threshold of consciousness』意識の起る境域。刺戟の強、弱いづれにしても、その度を超ゆる時は、感覚意識の生ずることなきものになるより、その感覚の生ずる適度の場合をいふ。

しげきねき(刺戟閾)参照。

しきねぎ 敷居木・閾木【名】敷居㊁に用

しきねごし 敷居越・閾越【名】㊀敷居を隔ててあること。㊁すこしの間隔。小町踊「夫の戸の去年と今年としきねごし」

しきねん 敷居・敷尹【名】**しきね**(敷居)の音便。〔古語〕公事根源「内辨、しきねんをおほす。しきねんは、敷居なり。堂上に敷きたる座に居よといふ心なるべし」

しきねん-りやう 職員令【名】大寶令の中、官職上の規定を示したる部分。

しく 蹴【名】昔、長崎に行はれし小供の遊戯。地面に筋を引きて區劃をし、その中に小石を積みて、守る者一人あり。これを前後左右より來りて、取らんとする衆兒の手を擽ねて、取られずに守り得たるを勝とす。

しく 宿【名】**しゅく**(宿)の訛。

しく 四苦【名】〔佛〕四種の苦痛、即ち生・老・病・死。「内法の四相」**ごく**(五苦)・**はっく**(八苦)参照。

四苦八苦【句】『四苦は八苦の中に包含せられてあれども、語調の上より重ねていふ』非常なるくるしみ。心中胃庚申「咽の呼吸も亂るる辺、思ひ切っても四苦八苦、手足をもがき、身をもがき」

しく 四句【名】㊀四箇の句。㊁〔佛〕『四句より成るによりていふ』**げ**(偈)に同じ。

四句の偈【句】〔佛〕前條㊁に同じ。＋調「六文字の四句の偈ばかり、この紙に顯現(ケン)せり」

四句の偈文(ゲモ)【句】〔佛〕前條に同じ。

しく 詩句【名】詩の句。

しく 死句【名】㊀〔佛〕禪宗の語句の、未だ拘泥する所あるもの。(活句に對して)㊁〔文〕俳諧にて、言外に餘韻を有たぬ句。(活句に對して)

しく 死苦【名】㊀死ぬるほどの苦痛。㊁人間として免れ得ざる死の苦。謡曲「歌占」「天仙なほ死苦の身なり。況や下劣貧賤の報に於てをや」

しく 市區【名】㊀市と區と。㊁市街の廣げ置く。のべひろぐ。記「すが疊いやさやしきて」㊂一面に並ぶ。まきちらす。後撰「秋の野におく白露をけさ見れば玉やしけると驚かれつつ」㊃敷物とす。下敷にす。「藉く」「草を藉きて坐す」㊄一般に廣く及ぼす。弘む。「法令を布く」㊅占む。領す。治む。知る。〔古語〕萬葉「しづめてし瑞穂の國をかむながらふとしきまして」

しく 頻く【動四他】しきる。かさなる。〔古語〕萬葉「うらがなし春のすぐればほととぎすいやしき鳴きぬ」

しく 敷く・鋪く・布く【動四自】㊀一面に並ぶ。散らばる。「落花地にしく」㊁ひろがり覆ふ。一面にかかる。わたる。新勅撰「霞しく木の芽はるさめ降るごとに花の袂はほころびにけり」㊂四方に及ぶ。弘まる。

しく 若く・如く・及く【動四自】㊀追ひつく。到りとどく。及ぶ。達す。〔古語〕記「追ひしきて」㊁比するに足る。くらぶ。及ぶ。(多くは打消又は反語の形に用ふ)萬葉「錦綾のなかに裏めるいはひ子も妹に及(カ)めやも」

若かず・如かず【句】次條に同じ。

若くは無し・如くは無し【句】『若く物事は無しの意』及ぶものなし。しかず。若くは筋は五月にしくはなし」

しく【動下二自】雨意を催す。しける。しぐる。〔古語〕紀「忽然天陰而(テシテ)

しぐ 至愚【名】極めておろかなること。

しぐ 資具【名】使用する器具。什器。

しぐ 四弘【名】〔佛〕**しぐせいぐわん**(四弘誓願)の略。

じく 塾【名】**じゅく**(塾)の訛。

じく 慈救【名】〔佛〕㊀慈悲心を以て、衆生を救ふこと。㊁**じぐ**(慈救偈)の略。

慈救の偈(ゲ)【句】〔佛〕**じぐ**(慈救偈)に同じ。謡曲(道成寺)「不動の慈救の偈、明王の火焔の黒煙を立ててぞ祈りける」

慈救の三洛叉(サンシャ)【句】〔佛〕『洛叉は梵 Lakṣa にて、十萬の意』慈救偈を三十萬遍唱ふること。平家「この瀧に三七日打たれて、慈救の三洛叉を滿てうと思ふ大願あり」

じく 字句【名】文字と語句と。

しくう 司空【名】支那の三公の一。土地と民事とを掌りしもの。「み。

しぐう 四隅【名】四つかどのすみ。よすみ。

しぐう 四宮【名】三宮に中宮を加へたる併稱。中宮は令制以後に生じたるもの。

しぐうしき 四宮職【名】太皇太后職・皇后職・中宮職の總稱。前條參照。

しくきん 四九吟【名】〔文〕『四と九との乘積三十六なるによりていふ』かせん(歌仙)㊁に同じ。

しくくわつ 志久活【名】〔語〕形容詞の「しく・し・しき・しけれ」と變化する活用。例へば、「美しく・美し・美しき・美しけれ」の類。(久活(クワツ)に對して)「に同じ。

しくぐわん 宿願【名】**しゅくぐわん**(宿願)に同じ。

じくげ 慈救偈【名】〔佛〕『大日經に出づ』不動明王の呪文(ジュモン)の一。即ち曩莫(ナウマク)三曼多(サンダ)(普遍の義)嚩日羅赦(バザラ)(諸金剛杵の義)戰拏(セン)(暴惡の義)、摩訶路灑拏(マカロシャナ)(大忿怒の義)、薩破吒也(サハタヤ)(破壞の義)、吽(ウン)(恐怖の義)、怛羅佗(タラ)(堅固の義)、憾賜(カン)(種子)。これを誦すれば、災難を避け、所願を成就すといふ。慈救呪。慈救眞言。慈救の偈。「同じ。

しくごふ 宿業【名】〔佛〕**しゅくごふ**(宿業)に同じ。

しぐさ 仕種【名】『爲種の義』㊀行ひかた。しぶり。しうち。㊁俳優の舞臺に於ける表情・動作。しうち。〔科〕

しくし 宿紙【名】**しゅくし**(宿紙)に同じ。

しくしく 頻頻【副】打續きて。絶えず。しきりに。しくしくに。〔古語〕萬葉「山吹は日に日に咲きぬうはしとあがもふ君はしくしくおもほゆ」

しくしく【貌】㊀しをれてあはれげなるさま。右京大夫集「たへがたく悲しくて、しくしくと泣くよりほかの事ぞなき」㊁刺戟せられて痛むさま。ちくちく。

じくじく【貌】水分の多きさま。

しくしくなみだ しくしく涙【名】しくしくと泣きて流すなみだ。丹波與作「ふびんや、三吉、しくしく涙、頬かぶりして、目をかくし」

しくしくに 頻頻に【副】**しくしく**(頻頻)に同じ。〔古語〕萬葉「しふたにのさきのありそに寄する波いやしくしくにいにしへ思ほゆ」「に同じ。

しくしふ 宿習【名】〔佛〕**しゅくしふ**(宿習)に同じ。

しくしふ 宿執【名】〔佛〕**しゅくしふ**(宿執)に同じ。「じ。

しくしん 肅愼【名】**しゅくしん**(肅愼)に同じ。

じくしんごん 慈救眞言【名】〔佛〕**じぐげ**(慈救偈)に同じ。盛衰記「光明眞言・尊勝陀羅尼・慈救眞言・寶篋印火界咒」

じくじゅ 慈救呪【名】〔佛〕**じぐげ**(慈救偈)に同じ。＋調「涙を流して、一たび慈救呪を滿てたまひければ、女房、本心になりにけり」

しくじり 【名】『仕は爲(シ)の義』しくじること。しそこなひ。失敗。敵討記「孚敬「さあさあ、とんだしくじりをやらかした」

しくじる【動他他】『仕は爲(シ)の義』㊀あやまつ。しそこなふ。失敗す。㊁解傭せらる。雇を解かる。「じ。

しくせ 宿世【名】〔佛〕**しゅくせ**(宿世)に同

しぐぜいぐわん 四弘誓願【名】〔佛〕次條の略。(弘誓)㊀を見よ。「に同じ。

しくぜん 宿善【名】〔佛〕**しゅくぜん**(宿善)

しくたびる 仕草臥る【動下二自】『仕は爲(シ)の義』事をなして疲る。太平記「何者ぞ、人の軍にしくたびれて、晝寢したるを驚かすは」

しくち 仕口【名】〔建〕木材を接合する時に、切彫みたる面。枘(ほぞ)を附け、或は目違(メカヒ)などを立つることあり。㊁漆器の製作の方法。

しくち 紫口【名】〔動〕次條の略。堀文「しくちひくあこの濱屋に年ふりていやみにましはしめられにけり」

しくちぼら 紫口鯔【名】〔動〕めなだ(赤目魚)に同じ。

しくつ 試掘【名】試みに鑛物を採掘すること。鑛床の採掘に値(アタ)するや否やを調査するために行ふ採鑛。

じくつく 【動四自】じくじくとす。濕潤してやはらかなり。

しくつくわらく 試掘鑛區【名】試掘權の登錄を得たる鑛區。

しくつけん 試掘權【名】〔法〕鑛業權の一。特定の鑛區内にて、或鑛物を試掘する權利。現行法にては、その存續期間を登錄の日より二箇年とし、その期間は、鑛區の增減又は改正のために變更せらるることなしと定めらる。さいくつけん(採掘權)參照。

しくつげんぼ 試掘原簿【名】鑛業原簿の一。試掘に關する事項を登錄する者。

しくつこうてい-へう 試掘工程表【名】試掘權者が、試掘鑛區圖と共に、その鑛業事務所に備へおきて、一箇月ごとに、開坑に關する狀況、鑛産物の數量、行業日程及び工數を記載すべき帳簿。

しくづし 四崩【名】織物の縞柄の、四條の細かき縞を、堅・横共に同一の長さに編みたるがごとく織出したるもの。

しくつ-しゆつぐわんち 試掘出願地【名】鑛物を試掘せんために、鑛山監督署長に出願する目的の土地。

しくづす 仕崩す【動四他】『仕は爲(シ)の義』やりそこねて、惡しくなす。くづす。御側名代抵衣「世帶持たせ、仕崩したら、その身の不運」

じくーない 【形】がまんなし。辛抱なし。「甲斐國の方言」

しくなみーの 頻波の【枕】頻く波は頻波(ナミ)と同じく、頻りに打寄する波の義にて、しくしく又はしばしばにかけていふ。萬葉「ほととぎすとばたの浦にしくなみのしばしば君を見むよしもがな」同「すみの江の岸の浦みにしく波のしくしく妹を見るよしもがも」

しぐなる 《英 signal》【名】あひづ。信號。

じくねる 【動下一自】すねる。ねぢけたる擧動をす。天智天皇「じくれねるならば、かたっぱし海へとっぱめ、鯨の餌食とならすべきぞ」

しーくはす 爲合す【動四自】㊀互になす。同時になしあふ。㊁打合はす。素人狂言紋切形「すっかり仕くはせた事が、その場になると、とちるからいかねへ」

しーくはせ 爲合【名】しくはすこと。うちあはせ。素人狂言紋切形「こうこう、しくはせをして置いてな、あいつがやくの時すかまたを食はせやう」「下を見よ。

しくはっく 四苦八苦【句】しく(四苦)の條「下を見よ。

しくはふ 爲加ふ【動下二他】なし加ふ。つくり加ふ。「古語」源氏「廚子(ヅシ)二階など、あやしきまでしくはへて」

じくばり 字配・字行【名】文字の排列。

しぐふ 【動四自】よきぐあひに組みあふ。そぐふ。「古語」萬葉「うまじものいづくあかぬをさかとらが角のふくれにしぐひあひにけむ」

しくぶんげふ 市區分業【名】〔經〕國内分業の一。市内の各區に行はるる分業。

しくーほく 【貌】しくしく(一)に同じ。浮世床「蟲氣で久しうしくほく致して居りましたが」

しぐま 羆【名】〔動〕『南留別志に「羆をしぐま」といふは、何者の附けたる訓ならん」羆の二字を四熊の二字に分解したるものなるべしといふ』ひぐま(羆)に同じ。字鏡「罷志久萬」

しくまーさいこ しくま柴胡【名】〔植〕おきなぐさ(翁草)(一)に同じ。

しくみ 仕組【名】『仕は爲(シ)の義』㊀くみたつること。こしらへ。くはだて。設計。計畫。結構。㊁芝居又は小説などの趣向。脚色。

しくみーえ 仕組繪【名】紙を切抜きて、組立て得るやうに作れる繪。おこしゑ。

しくむ 仕組む【動四他】『仕は爲(シ)の義』㊀工夫して爲す。構へ造る。くみたつ。㊁くは、たづ。たくらむ。雙生隅田川「主の後家と仕組んで、吉田の家を丸呑に」㊂小說・脚本などの趣向を立つ。脚色す。

しぐむ 【動四自】はぢらふ。はにかむ。

しくん 使君【名】㊀支那の州郡の長官。㊁支那にて、天子の命を奉じて、國外に使する者の敬稱。㊂こくしゆ(國守)の唐名。

しーくん 師君【名】師匠の敬稱。師の君(キミ)。

しーくん 嗣君【名】㊀あとつぎの君主。㊁し(嗣子)の敬稱。

しーくん 師訓【名】師の教訓。

しーくん 此君【名】〔植〕『晉書の王徽之傳に「令レ種レ竹、或問二其故一、但嘯永指レ竹曰、何可二一日無二此君一耶」とあるに本づく』たけ(竹)の異稱。このきみ。

しーくん 司勳【名】支那にて、古、賞典を司りし官。

じーくん 字訓【名】漢字の訓讀。

じくん 貳君【名】二人の主君。にくん。

しくんし 四君子【名】植物の氣品あるもの四つ、即ち梅・菊・蘭・竹の併稱。文人畫にては、これを初歩の畫題とす。ごいう(五友)㊁參照。

しくんし 使君子【名】〔植〕使君子科に屬する攀緣性常綠灌木。原産地はマライ地方。廣く熱帶地方に培養せられ、我が國にても、琉球、臺灣に圍養せらる。高さ二丈内外に達し、葉は卵形にして對生し、夏秋の際、莖頂及び葉腋に、五瓣の美花、穗狀花序をなして數個簇り開く。その色、初は白色、次第に紅變し、更に紫色を帶ぶるに至る。からくちなし。

(しんくし)

しくんしーわ 使君子科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。熱帶諸地に産す。使君子・訶梨勒(カリ)など、これに屬す。

じくやう 事供養【名】〔佛〕瑜伽(ガ)境上にて、本尊に供獻すべき六種の供物、即ち閼伽(カ)・塗香(ヅカ)・華鬘(ケマ)・焚香・飯食(ハンジ)・燈明。事供。(理供養に對して)

しくらう 宿老【名】しゅくらう(宿老)に同じ。

じーくらべ 字競【名】數人にて、書籍の或箇所を開き、某字何行並(ナラ)び・某字斜に何箇並・假名何字並等の題にて、同一の文字の相並べるを發見することの遲速を競ふ遊戲。

しくり 【貌】㊀しくしくに同じ。㊁程よく組みあるさま。折りあひのよきさま。しっくり。

じくり 【貌】じくじくに同じ。

しくり-ふ 仕繰夫【名】しろゆふ(支柱夫)を云ふ。「九州の方言」

しくる 【動下二自】顏がしかみたるやうに見ゆ。「古語」宇治「いただきはげたる大童子の、まみしくれて」

しぐる 時雨る【動下二自】㊀しぐれが降る。源氏「秋霧にたちおくれぬと聞きしよりしぐるる空もいかがとぞ思ふ」㊁涙を催す。泣きて落涙せんとす。源氏「眉のあたりうちしぐれて、ひそみゐたり」

しぐれ 時雨【名】㊀『頻(シキ)忄(ノ)の義とも、小雨のためにしばし昏るる義とも、しはただ添へたるまでなりともいふ』秋冬の交に降る雨。㊁小督局(コゴウノツボネ)の用ひし琴。㊂名物唐物茶入の一。小川手の耳附にして、釉藥(クスリ)の色黑きもの。胴の高さ二寸八分。周圍二寸二分。もと和泉國堺にありしを、中頃牡丹花肖柏の有に歸し、後、北政所(キタノマンドコロ)の所藏となれりといふ。㊃しぐれかん(時雨羹)の略。

しぐれ 時雨の秋【句】しぐれの降る秋季。落葉雲間なきしぐれの秋は人戀ふる心のうちもかきくらしけり」

時雨の雨【句】しぐれ(時雨)(一)に同じ。「古語」萬葉「しぐれのあめもまなくしふれば槇の葉もあらそひかねて色づきにけり」

時雨の色【句】時雨のために色づきたる木の葉の色。謡曲「花筐」「時しも、頃は長月や、まだき時雨の色うすき、紅葉の行幸の道のほとりに」

秋の時雨【句】秋の末に降る雨。(時雨は冬のものなるにより特にいふ) 古今

「をしむらん人の心を知らぬまに秋の時雨と身ぞふりにける」

しぐれ-かん 時雨羹【名】赤小豆の餡を、そぼろにして、蒸して製したる菓子。しぐれ。

しぐれ-き 時雨忌【名】ばせを(芭蕉忌)に同じ。

しぐれ-ごころ 時雨心地【名】㊀時雨の降りげなる空模様。〔古語〕㊁涙を催す心地。〔古語〕

しぐれ-ぐも 時雨雲【名】時雨の降りげなる空模様。〔古語〕大空はくもらざりけり神無月しぐれごころはわれのみぞする」

しぐれ-づき 時雨月【名】陰暦十月の異稱。〔古語〕

しぐれ-の-ちゃ 時雨茶【名】豊臣秀吉が伏見城中に築造せし茶亭。今は、傘亭と共に移されて、京都の高臺寺内に存す。

しぐれ-はまぐり 時雨蛤【名】㊀時雨煮にしたる蛤。伊勢國桑名の名産。㊁やきはまぐり(燒蛤)に同じ。改元紀「辰の半ばに桑名に著く。…城門を出でて、…町屋川の橋を渡りて、おぶけといふ所を見れば、家家の女、松の毬を焼きて蛤を蒸して勘む。…富田の立場に到れば、ここにも焼蛤を賣ぐ。…初冬の頃の味のことに佳しければ、時雨蛤といふ」

しぐれ-まんぢゅう 時雨饅頭【名】時雨羹にて包みたる饅頭。

しぐれ-みそ 時雨味噌【名】蛤の時雨煮に味噌を加へて煮詰め、これに刻山椒を撒布したるもの。

しぐろく 雙六【名】すごろく(雙六)の轉訛。

しくわ 紙花【名】紙の造花。

しくわ 史科【名】歷史の科目。歷史科。

しくわ 史禍【名】歷史を書きたるために受くる筆禍。

しくわ 四科【名】『論語の先進篇に「德行、言語、宰我、子貢、政事、冉有、季路、文學、子游、子貢」とありて、朱註に「程子曰、四科乃從二夫子於陳蔡一者爾」と見え、又、後漢書の鄭玄傳に「康成曰、仲尼之門、考以二四科一」とあり』孔子の四種の學科目、即ち德行、言語、政事、文學。

しくわ 詞華【名】華やかなる言葉。詞藻。詞華-言葉【句】前條に同じ。

しくわ 止戈【名】戰をやむること。

しくわ 歯科【名】醫術の一科。專ら齒の衞生療治をなす。

しくわ 死火【名】㊀消え果てたる火。(活火に對して)㊁(佛)死を劫末の大火災に譬へていふ語。さんさい(三災)參照。

しくわ 死貨【名】用をなさぬ財貨。「じ。

しくわ 資貨・貲貨【名】しくら(資財)同に

しくわ 雌花【名】〔植〕『英 Pistillate 又 Female flowers』雌蘊のみを有する花、即ち單性花の一。柳・楽・樹・松・公孫樹などに見るものの類。(雄花に對して)

しくわ 紫花【名】紫色の花。

しくわ 翅果【名】〔植〕『英 key』果皮の延長して、翅狀をなし、風に乘るに便なる形をなせる乾果。楡・槭・欅などの果實はこれなり。

しくわ 四くわ【名】『花・瓜・菓・火の四字、いづれもくわの音なるによりていふ』季節に應じて、來客をもてなすに必要なる物、即ち春は花、夏は瓜、秋は菓、冬は火。

しくわ 指畫【名】〔美〕長く伸ばしたる小指の爪に鞘を含ませて描く繪。支那より傳はりて、池大雅・黒川龜玉等これを善くせりといふ。指頭畫。手畫。指畫。

じくわ 自科【名】自分の犯したるとが。太平記「主從向背の自科依レ難レ遁。その身已に逐電仕りぬる上は、御勢を被レ向までも候まじ」

じくわ 自火【名】㊀己れの家より發したる火事。(類燒に對して)㊁己れの神經より起りたる苦惱。盛衰記「臆病の自火に攻められて絶入りたりけるにや」

じくわ 耳科【名】醫術の一科。專ら耳を療治するもの。

じくわ 自畫【名】己が描きたる畫。

しくわい 市會【名】市會議員が、市の意思機關、即ちその自治權内に屬する一切の事を議決し、兼ねてその執行を監督するもの。市會議員を以て組織す。

しくわい 死灰【名】㊀火氣の失せたる灰。寒灰。冷灰。㊁生氣無き物の譬。

死灰再燃【句】次條に同じ。

死灰また燃ゆ【句】『史記の韓長孺傳に「安國坐レ法抵レ罪、蒙獄吏田甲辱二安國一、安國曰、死灰不二復然一乎。甲曰、然卽溺レ之」とあるに本づく。蒙は縣名。然は燃に通ず』勢を失ひし者、再び熾んになる。一たび落著せし事がまた起る。死灰再燃。

しくわい 詩會【名】詩人を會して、詩を作る會。作文會。

しくわい 私會【名】わたくしの集會。

しくわい 歯科醫【名】㊀齒科の醫術。㊁齒科の醫師。內務大臣の免許を受くるを要す。齒科醫師。

しくわい 市外【名】市街の外。(市内に對して)

しくわい 次回【名】次のたび。

しくわい 次會【名】次回の會合。

しくわい 時晦【名】時に應じて、その才能を隱すこと。

しくわい 自晦【名】自ら晦を裝ふこと。自ら韜晦すること。

じくわい 寺外【名】寺のそと。

しくわい-かうくわんき 市外交換機【名】『英 Toll board』市外通話を取扱ふ電話交換機。市外臺。

しくわい-ぎゐん 市會議員【名】市の公民中より、三級選擧法によりて、選擧せられて、市會を組織する名譽職。

しくわい-さいねん 死灰再燃【句】しくわい(死灰)の條下を見よ。

しくわい-し 歯科醫師【名】しくわい(齒科醫)㊁に同じ。

しくわいし-くわい 歯科醫師會【名】公共組合の一。齒科醫師の設立して、齒科の醫事衞生に關して、官廳の諮問に應じ、又は建議をなすを得るもの。

しくわいし-めんきょしょう 歯科醫師免許證【名】內務大臣が齒科醫師に授與する免許證。

しくわ-いじゅつかいげふめんじゃう 歯科醫術開業免狀【名】明治三十九年十月以前、內務大臣が齒科醫師に下附せし齒科醫業の免許狀。

しぐわい-せん 紫外線【名】〔理〕きんくわいせん(菫外線)に同じ。

しぐわい-だい 市外臺【名】しぐわいかうくわんき(市外交換機)に同じ。

しぐわい-だるき 枝外極【名】〔建〕おったてだるき(押立棰)に同じ。

しぐわい-わゆうけいだい 市外中繼臺【名】『英 Toll switching section』電話加入者圈線を市外電話線に接續するにあたり、その市外電話線を取附けある市外交換臺より來れる中繼線と該加入者圈線とを直接に連結せしむる交換機。

しぐわい-つうわ 市外通話【名】『英 Toll call 通話ごとに、料金を徵收する通話の義』市外電話線を經由する通話。大抵、度數料金制に依る。(市内通話に對して)

しぐわい-でんわせん 市外電話線【名】『英 Toll line』異なる電話加入區域に在る二箇の電話交換局又は一の電話交換局とその加入區域外の公衆電話所とを連絡する電話線。

しくわう 脂光【名】〔鐵〕脂ぎりたる光澤。

しくわう 四荒【名】『漢書の文帝紀に「四荒之外」とありて、顏註に「戎狄荒服、故曰二四荒一言其荒忽、去來無レ常也」とあり、又、爾雅に「四方昏荒之國」、小學紺珠に「四荒、北、觚竹、南、北戸、西、王母、東、日下」とあり』四方のえびすぐに。盛衰記「天馬に乘りて、四荒・八極に到り」

しくわう 四光【名】花ガルタの場役にて、松・櫻・桐・月の四枚の併稱。さんくわう(三光)參照。

しくわう 師曠【名】〔人〕支那春秋時代の音樂者。字は子野。晉の平公に用ひらる。その技、神に入り、瑟を鼓して、玄鶴を喜ばしめ、また大風を起し、白雲を誘へりと傳へらる。

じくわう 慈光【名】㊀太陽の光。㊁〔佛〕諸佛の大慈の光明。

じくわうじ 慈光寺【名】姓氏の一。本姓は宇多源氏。五辻(イツヂ)氏の支族。五辻遠兼の次子従四位上加賀守仲清の後。明治維新後、子爵を授けらる。

じくわうしょくぶつ 嗜光植物【名】〔植〕『英Light plants』日光のよく照る地を好む植物。(嗜陰植物に對して)

じくわうせき 脂光石【名】〔鑛〕『英Elaolite』霞石の一種。深造岩の合分となるもの。

じくわうてい 始皇帝【名】〔人〕支那秦の第一世皇帝。姓は嬴氏、名は政、莊襄王の子。十三歳にして、秦の主となり、即位後二十六年にして六國を亡して、天下を一統し、三十二年に匈奴を伐ち、翌年に萬里の長城を築く。また書を焚き、儒生を坑にせり。三十七年歿す。

しくわ-がく 齒科學【名】〔醫〕『英Dentistry又Dental surgery』醫學の一分科。齒牙及び口腔の疾患を研究するもの。

しくわく 指畫【名】㊀指にてゑがき示すこと。㊁指示し畫策すること。さしづ。「口講指畫」など。

じくわく 字畫【名】漢字を構成する點畫。

しくわげん 四和絃【名】和絃の一。三和絃の第五度の上に、三度を隔てて、一音を添へたるもの。七度の和絃。

しくわ-くわんもん 四火關門【名】人體の腰部の上の稱。〔灸點の話〕女重寶記「盜汗出でぬまに、四花患門といふ穴に灸をしまふべし」道行風の妹背節「千手の御手に、つくづくと、杖とたのみし七九のさと、四火關門をうち越えて」

しくわざん 死火山【名】〔地〕『英Extinct volcano』噴出せし痕跡あれども、その事實の口碑又は史上に傳はらざる火山。赤城山・男體山の類。その噴火口は、湖水をなすもの多し。消火山。熄火山。やけやま。(活火山・休火山に對して)

じぐわさん 自畫讃【名】じぐわじさん(自畫自讃)㊁の略。

しくわし 私窩子【名】淫賣婦。ぢごく。

じぐわ-じさん 自畫自讃【名】㊀己が描きたる畫に、己が讃をすること。自畫讃。㊁じまん(自慢)に同じ。

じくわ-しふ 詞花集【名】〔書〕しくわかしふ(詞花和歌集)の略。

じくわ-じせい 自花受精【名】〔植〕『英Autogamy又Self-pollination』同一の花の雌蕊と雄蕊とにて生殖作用を營むこと。例へば檀特(ダク)・亞麻(アマ)等の花に見る類。但し動物の近親結婚と同樣の性質に屬するが故に、この作用を營む者は多からず。自花受粉。(他花受精に對して)へいくわ(閉花)參照。

じくわ-じゅふん 自花受粉【名】〔植〕前條に同じ。(他花受粉に對して)

しくわつ 死活【名】㊀死ぬると生くると。㊁亡ぶると興ると。

しぐわつ 四月【名】年の第四にあたる月。四月八日(カ)〔句〕〔佛〕ぶつしやうにち(佛生日)を見よ。

じくわつ 自活【名】獨立して衣食すること。

しくわつぢやう-まつり 死活杖祭【名】古、京都三條、猪熊の禍速(マガヤ)神社にて、每年八月行ひし祭。もとこの地にて、處刑を行ひしが故に、その刑死者を祭るといふ。死杖祭。

しぐわつ-まめ 四月豆【名】〔植〕そらまめ(蠶豆)に同じ。

しくわつ-もんだい 死活問題【名】亡ぶると興るとの分れなる、急要なる問題。

しくわふ 紫花布【名】支那江南地方に產する棉花、即ち紫花にて織りたる綿布。その巾一尺前後にして、多くは、衣服に用ふ。江蘇湖北福建邊の產名あり。

しくわん 史官【名】㊀歷史を編修する官吏。記錄を掌る官。㊁明治元年に置かれたる總裁局・議定官・行政官及び明治二年に置かれし公議所の職員。議定官には、文案の勘署、太政官日誌を造ることなどを掌り、行政官には、詔奏の交勘、稽失を檢するなどを掌り、共に奏任官なり。㊂明治元年に置かれし鎭將府の職員。詔奏を勘へ、文案を勘署するなどの事を掌りし奏任官。㊃明治八年に太政官の正院に置かれし大史・權大史・少史の職員。詔勅・官位・勳記等を作り、公文案を草し、文書・記錄などの事を掌りたり。大史は勅任、その他は奏任なりき。

しくわん 史館【名】歷史を編修する役所。

しくわん 死關【名】〔佛〕しもん(死門)に同じ。

しくわん 弛緩【名】ゆるむこと。ゆるぶ。

しくわん 指環【名】ゆびわ。

しくわん 詩卷【名】詩を記したる書卷。

しくわん 絲管【名】くわんげん(管絃)に同じ。

しくわん 始冠【名】男兒の成人して、始めて冠を著くること。加冠。元服。

しくわん 視官【名】〔醫〕しかんき(視覺器)に同じ。

しくわん 祠官【名】㊀神社に仕ふる神人。かんぬし。㊁しやし(社司)の舊稱。

しくわん 試官【名】しけんくわん(試驗官)に同じ。

しくわん 仕官・仕宦【名】官途に就くこと。

しくわん 士官【名】㊀兵士を指揮する、武官。㊁陸・海軍の尉官と尉官相當官との稱。

しくわん 齒冠【名】〔醫〕『獨Zahnkrone』齒の口腔に露出せる部分。琺瑯質に被はる。齒頸・齒根に對して)

しくわん 尸官【名】しくわん(尸位)に同じ。

しくわん 四患【名】㊀四つの患ふべき事。㊁『後漢書の荀悅傳に出づ』政を爲すに患ふべき四つの事、即ち僞・私・放・奢の併稱。

しくわん 師管【名】㊁〔佛〕しく(四苦)に同じ。陸軍管區の最高なるもの、即ち各師團長の管轄區域。

しくわん 飾官【名】〔植〕『英Sieve-vessels又Sieve-tubes』導管の一種。細長き細胞從に連なりて、その中間の細胞膜の處處に孔ありて、篩狀に相通ずるもの。

しくわん 止觀【名】〔佛〕㊀『梵Samatha(奢摩他)Vipasyna(毘鉢舍那)の譯語』散亂する心を止め、靜寂なる明智を以て、萬法を觀照すること。〔天台宗の語〕今鏡「止觀の明靜なること、前代にいまだ聞かず」㊁〔書〕まかしくわん(摩訶止觀)の略。平治「禪鞠と申し俠ふ、止觀の第四卷に見えたり」㊂てんだいしゅう(天台宗)の異稱。今鏡「眞言・止觀兼ね學びたらん僧」增鏡「或時は止觀の談義、或時は眞言の深き沙汰、淨土宗の旨などをも尋ねさせたまひつつ」

しくわん 止觀不二(ニ)【句】〔佛〕止は明鏡止水のごとく、觀は明鏡止水に影像の映るがごときものにて、畢竟不二一體なり。

しくわん 芝翫【名】〔人〕なかむらしくわん(中村芝翫)を見よ。

しぐわん 志願【名】のぞみ。ねがひ。

しぐわん 私願【名】ひそかに願ふこと、又その願。「又その願。

しぐわん 至願【名】しきりに願ふこと、

しぐわん 始願【名】始よりの願。

しぐわん 四願【名】〔佛〕しぐぜいぐわん(四弘誓願)の略。

しぐわん 只丸【名】〔人〕俳人。靈松關また鴨水子と號す。京都の人。椎本(シヒモト)才麿に學ぶ。正德六年歿す。年七十。

じくわん 耳環【名】みみわ。

じくわん 寺官【名】寺院の役員。寺院の事務を掌るもの。盛衰記「十月二十四日山門衆徒社司・寺官等を以て、解狀を捧げ」

じくわん 寺觀【名】㊀寺即ち僧の居る處と、觀即ち道士の居る處と。㊁寺院の堂舍。

じくわん 字貫【名】〔書〕四類四十部に分ちて、音義相同じきものを一所に集め、その音と義とを下に註せるもの。每部を千字文に配して天より霜に至る。その意、康熙字典の誤を駁正するにありたりといひ、燒棄せられて、出版發賣を禁ぜられたり。四十卷。清の平錫侯の撰。

じくわん 次官【名】㊀長官の次の官人。㊁大臣の次位にありて、太臣を輔佐する高級輔佐官。

しくわん-がくかう 士官學校【名】りくぐんしくわんがくかう(陸軍士官學校)の略。

しくわん-ぎやう 四卷經【名】〔書〕『四卷

に分れたるよりにふ』こんくわうみやうきやう（金光明經）の異稱。

しくわんぎやうじや 止觀行者【名】〔佛〕『しくわん（止觀）を見よ』天台宗の修行者。盛衰記「これは、止觀行者、四種三昧の大意を釋しける絕句とかや」

しくわんくわがふぶつ 脂環化合物【名】〔化〕『英 Alicyclic compounds』有機化合物の二大部類たる脂肪屬と芳香屬との中間の性質なる物質。

しくわんげんもん 止觀玄文【名】〔書〕まかしくわん（摩訶止觀）に同じ。盛衰記「止觀玄文の窓の前には、一乘圓融の玉を磨き」

しくわんこうほせい 士官候補生【名】中央幼年學校本科及び中學校又はこれと同等以上の學校の卒業者と一年志願兵にして、隊長の保證を得たる者と、陸軍現役各科の下士中、隊長又は所屬長官の保證を得たる者との更に召募試驗に合格して、陸軍士官の補充に任ぜらるべき者。任命後、軍隊に入りて、兵卒・下士の實地勤務と軍事とを學び、更に陸軍士官學校に入り、卒業後歸隊して、見習士官を命ぜられ、更に詮衡の上、少尉に任ぜらる。

しくわんじふじよう 止觀十乘【名】〔佛〕じじじよう（十乘）に同じ。平家「止觀十乘の梵風は、かんりよを和朝の外にはらひ、瑜珈三密の法雨は、時俗を堯年の昔に還さん」

しくわんしや 志願者【名】志願する人。のぞみて。ねがひて。

しくわんじやうじよう 止觀上乘【名】〔佛〕止觀〔一〕を最上無上の法として讃へたる稱。盛衰記「止觀上乘の窓の前に螢雪の勤めを」

しくわんしゆう 止觀宗【名】〔佛〕てんだいしゆう（天台宗）に同じ。文德實錄「叡山最澄大法師、心持二慈悲一傳二止觀宗一」

しくわんすぢ 芝翫筋【名】にはんぐま（二本隈）に同じ。

しくわんそうぜん 止觀窓前【名】〔佛〕止觀〔一〕の行を修する道場の雅稱。太平記「止觀窓前雖レ弄二天眞獨明之夜月一」

しくわんちやう 四灌頂【名】〔佛〕東寺・觀音院・尊勝寺・最勝寺の四箇寺の灌頂の總稱。拾芥抄「東寺灌頂…觀音院灌頂…尊勝寺灌頂…最勝寺灌頂…」

しくわんちようへいくわん 師管徵兵官【名】徵兵官の一。師管內の徵兵のことを統轄する官。師團長・府縣知事（北海道にては北海道長官）を以てこれに充て、師團長を首座とす。

しくわんふぶやう 止觀輔行【名】〔書〕まかしくわんぶぎやう（摩訶止觀輔行）の略。

しぐわんしへい 志願兵【名】みづから志願して、兵役に服する兵卒。即ち一年志願兵・海軍志願兵などの類。

しくわんめいわ 史館茗話【名】〔書〕漢文にて皇朝の詩話・文論を集めたるもの。一卷。林泰輔の著。

しくわんろん 止觀論【名】〔書〕まかしくわん（摩訶止觀）に同じ。

しくわんゐん 止觀院【名】いちじようしくわんゐん（一乘止觀院）の略。太平記「止觀院の外陣（ゲヂン）にして、一乘讀讃の竪義を執行ふ」

しくわんゑんじつ 止觀圓實【名】〔佛〕止觀〔一〕を圓滿眞實の法として讃へたる稱。盛衰記「或は止觀圓實の學窓あり」

しくわわかしふ 詞花和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。天養元年、左京大夫藤原顯輔の崇德上皇の院宣を承りて撰進せるもの。十卷。所收の歌、僅に四百餘首。

しけ 絓【名】一けいと（絓絲）の略。二しけいおり（絓絲織）の略。

しけ 絓の絲【句】しけいと（絓絲）に同じ。名義抄「絓、シケノイト」

しけ 濕氣【名】一しめりけ。水氣。濕氣（シツキ）。二暴風雨の纏き、海上の穩かならぬこと。「時化」三漁獲物なきこと。不漁。

しけ 四華【名】〔佛〕『法華經の序品に出づ』法華六瑞の一として空より降るといふ四種の花、即ち曼陀羅華即ち白色の蓮華と摩訶曼陀羅華即ち大なる白色の蓮華と曼殊沙華即ち赤色の蓮華と摩訶曼殊沙華即ち大なる赤色の蓮華と。一說に、分陀利（ブンダリ）即ち白蓮華と優鉢羅（ウバラ）即ち青（シヤウ）蓮華と鉢特摩（パドマ）即ち赤蓮華と拘物投（モクヅ）即ち黃蓮華といふ。龍曲「憂宿各也「天より四華降り、大地六種も震動し」

しけ 四家【名】一藤原氏の分れて、四氏となりたるもの、即ち南家・北家・式家・京家の併稱。二（佛）般若家・諦家・捨煩惱家・苦情家の總稱。

四家の大乘【句】だいじよう（大乘）の條下を見よ。

じけ 寺家【名】一寺院の家人（ケニン）。寺院に使役する奴婢（ヌヒ）。盛衰記「今聞、諸國寺家多不レ知二法一」二寺中に在る弟子、僧の住する家。三じったう（執當）に同じ。

じけ 寺解【名】寺より役所に奉る公文。

じげ 自解【名】〔佛〕師の教を待たず、みづから悟ること。

しけい 死刑【名】一しざい（死罪）に同じ。太平記「死刑の罪を免して、嶺て本國へぞ下だりける」二（法）犯人の生命を斷つ刑罰。その生命を斷つ方法によりて、斬罪・絞罪・火刑などの別あり。生命刑。

しけい 私刑【名】私人が恣に犯罪者に加ふる制裁。（公刑に對して）

しけい 私計【名】自己の考の謙稱。「じ。

しけい 雌型【名】〔美〕あふけい（凹型）に同

しけい 紙型【名】組版を鐵枠の內に締め、厚皮紙一枚を充て、その上に糊と膠との調合物を附けたる紙を、二三枚別に截ひ、一枚ごとに毛刷毛にて、丁寧に敲き、十分に敲き上りたる時、普通の紙一枚を裏打のごとく貼附け、機械にて、壓搾乾燥せしめたるもの。組みたる活字を取崩したる後も、これによりて、鉛版を作れば、原版と同一の印刷を爲し得。紙型版。

しけい 嗣繼【名】けいと（繼嗣）に同じ。

しけい 支系【名】一わかれ。えだ。二ばうけい（旁系）に同じ。

しけい 枝莖【名】枝と莖と。

しけい 詩形【名】詩の形式。詩格。律格。

しけい 四計【名】『月令廣義に「一日之計在レ晨、一年之計在レ春、一生之計在レ勤、一家之計在レ身」又、「一年之計在レ春、一月之計在レ寅、一家之計在レ和、一身之計在レ勤」とあるに本づく』人の一生における四つの計畫。さんけい（三計）參照。

しけい 四經【名】〔書〕四部の經書、即ち易經・書經・詩經・春秋の併稱。一說に、左氏傳・穀梁傳・書經・詩經なりと。

しけい 師兄【名】師匠と兄と。

しけい 司契【名】司契課の職員。一等・二等に分れ、前者は中佐相等、後者は少佐相當なりしが、明治十六年廢せられたり。

しけい 司計【名】地方官會議院の職員。司計長に屬し、用度を掌りしもの。明治十一年廢せらる。

しけい 齒頸【名】〔醫〕『獨 Zahnhals』齒の一部やや狹窄して、齒齦の緣に觸るる部分。（齒冠・齒根に對して）

しけい 詞兄・詩契・詞契【代】同輩の文人。詩人などを指していふ敬稱。

しげい 四藝【名】四つの技、即ち琴・碁・書・畫の併稱。

しげい 詞藝【名】詩文の藝。

じけい 字形【名】文字のかたち。

じけい 時景【名】その時のありさま。

じけい 耳形【名】〔植〕『英 Auriculate』葉脚の形狀の一。兩側端が殊に外方に突出して、耳朶の形をなすもの。

じけい 耻形【名】耳を切り去る刑罰。

じけい 慈惠【名】いつくしむこと。恩惠。

じけい 慈兄【名】慈愛深き兄。

じけい 次兄【名】つぎの兄。

じけい 自剄【名】我れと、わが首を切ること。自刎。

じけいゐん 慈惠醫院【名】一貧民施療のために設立したる醫院。慈惠病院。二朝鮮の各地に置き、疾病の診療、兼ねて朝鮮總督の指定によりて、醫術の養成に關する事を掌る所。

しけいくわ 司契課【名】明治六年陸軍に設けたる會計部の一課。一等司契・二等司契・副司契以下三等書記に至る職員を置きたり。同十六年に廢せられたり。

しけいさ 淑景舍【名】しげいしや（淑景舍）の約。

しけいざい 私經濟【名】〔經〕『英 Private economy』私人又法人の營む經濟行爲、即ち個人經濟・會社經濟・組合經濟の類。(公經濟に對して)

しけいしや 死刑者【名】■死刑の宣告を受けたる人。■死刑に處せられたる人。

しけいじや 淑景舍【名】古の大內裡の五舍の一。紫宸殿の東北、昭陽舍の北に在りしもの。桐樹の前庭にあるを以て桐壺と稱す。南北に並び二宇ありて、南なるを單に淑景舍といひ、北なるを淑景北舍といひ、渡廊にて、連絡を取りたり。

しけいせん 視形線【名】〔地〕とうかうせん(等高線)に同じ。

しけいちやう 司計長【名】地方官會議院の職員。用度のことを總管せしもの。

しけいと 絲綸【名】繭の外側より繰りたる粗なる絹絲。しけ。くづいと。和名抄絲、之介以度。惡絲也」

しけいとおり 絲綸織【名】しけ絲にて織りたる織物。しけおり。しけぎぬ。しけ。

しけいばん 紙型版【名】しけい(紙型)に同じ。

じけいびやうゐん 慈惠病院【名】じけいゐん(慈惠醫院)[1]に同じ。

しけう 四敎【名】〔佛〕■四箇條の敎。■『論語の述而篇に「子以レ四敎、文・行・忠・信」とあるに本づく』孔子の四箇條の敎、即ち文(典籍・辭義)と、行(德行)と、忠(人のために謀りて、その心を盡すこと)と、信(僞を言はぬこと)と。■じじつ(四術)に同じ。■『干寶晉紀の論に見ゆ』婦人の敎の四箇條、即ち婦德(貞順)と婦言(辭令)と婦容(婉娩)と婦功(絲麻)と。■〔佛〕天台宗にて立つる四箇條の敎。化儀(ケ)の四敎と化法(ケホ)の四敎とあり。はっけう(八敎)參照。平家「四敎・五時の花もにほはず」秋の夜長物語「內には、玉泉の流を汲んで、四敎・三觀の月をすまし」

しけう 四敎【名】〔佛〕天台宗の四敎と、眞言宗の三密の理と、即ち天台眞言兩宗の敎。盛衰記「四敎・三密の紹隆、其儀不レ恥」

しけう 始敎【名】〔佛〕『始は大乘の初步の意』五敎の一。大乘に屬すれども、未だ法理を盡さざる敎。

しけう 指敎【名】しだう(指導)に同じ。

しけう 師敎【名】師の敎。

しけう 示敎【名】■示し敎ふること。■先輩より受くる說明。「敎。

しけう 至敎【名】この上なき敎。至極の敎。

しけう 司敎【名】〔基〕『佛 Evêque』天主敎にて、大司敎の次、司祭の上にある僧。新敎の監督に相當するものにて、一敎區の支配權を有す。

しけう 鴟梟・鴟鴞【名】■ふくろふ(梟)に同じ。■鴟(ヒ)と梟(ケウ)と。■奸惡雄傑の人の譬。

じけう 耳竅【名】耳の孔。

しけうぎ 四敎儀【名】〔書〕てんだいしけうぎ(天台四敎儀)の略。

しけうだう 四敎堂【名】豐後國南海郡佐伯城內に在りし舊佐伯(キ)藩の學校。もと學習所と稱し、寶永元年に開き、安永六年頭書の名に改めて、明治四年に廢す。

しけうち 繁打【名】打紐の打目の、繁く細かきもの。一代女「名古屋の帶、しげうちの下緒」「略。

しけおり 絓織【名】しけいとおり(絓糸織)の略。

しけかく 繁【名】しげきところ。古語「萬葉、梓弓よらの山べのしげかくにいもろを立ててさねど拂ふも」

しげかなもの 繁金物【名】しげく打附けたる金物 本朝三國志「菊に紅葉のしげ金物打ったる鎧」

しげき 繁木・茂木・茂樹【名】繁りたる木。〔古語〕 靴詞「繁木、シゲキ」

しげき 刺戟・刺激【名】■はげますこと。精神を興奮せしむること。■〔哲〕意識を起し、又その變化を誘起する神經激動の原因。「閾」に同じ。刺戟の界限【句】〔哲〕しげきねき(刺激閾)に同じ。

しげき 史劇【名】〔文〕『英 Historical play』歷史上の事實を材料としたる劇。

しげき 刺擊【名】刺し擊つこと。

しげきうんどう 刺戟運動・刺激運動【名】〔植〕『英 Paratonic(又は Irritable)movements』植物の或機官が、外界の狀態即ち光線・溫度・重力・電氣・接觸・衝突・摩擦等の原力又は水・酸素・養分、及び諸般の物質の刺戟により誘起せらるる運動。例へば向日性・向地性等、又は卷鬚の他物に繞ひ附く類の作用。誘起運動。

しげききよく 刺戟極・刺激極【名】〔哲〕これ以上に上れば、意識を起さずといふ强度の限界。

しげきさよう 刺戟作用・刺激作用【名】刺戟の影響によりて、末端機官に起れる作用。

しげきせい 刺戟性・刺激性【名】神經を刺戟する性質。「に同じ。

しけきぬ 絓絹【名】しけいとおり(絓絲織)

しげきひれう 刺戟肥料・刺激肥料【名】肥料の一種。直接肥料としては効なけれども、作物の生理的機能を刺戟して、生育をよくし收穫を增加せしむるもの。滿俺(マンガン)・銅・鐵・硼素・臭素・沃素等の化合物、これに屬す。

しげきぶつ 刺戟物・刺激物【名】神經系統に甚大なる刺戟を誘起せしむるもの。飮食物に於ける酒類・茶・煙草など、これなり。

しげきねき 刺戟域・刺激域【名】〔哲〕『英 Limen (又は Threshold) of stimulation』これ以下にては意識を起すこと能はずといふ最小最低の限度。刺戟の界限。しきねき(識閾)參照。

しげけし 蘩けし【形一】しげし(繁し)に同じ。古語「萬葉、人ごとのしげけき時にわぎも子が衣にありせばしたに著ましを」

しげこ 茂子【名】〔人〕江戶の歌人。土岐賴房の室。賀茂翁三才女の一人。「筑波山はやましげやましげれど思ひ入るにはさはらざりけり」といへる歌によりて、一に、つくば子と呼ぶ。

しけこし 醜し【形一】みにくし。きたなし。古語「葦原のしけこきをやにすがだたみいやさや敷きてわがふたりねし」

しけこむ しけ込む【動四自】入りこむ。(遊廓・酒樓、その他、遊場所に入込むにいふ)

しげざま 繁狹間【名】〔建〕組子(コ)の數を繁く立てたる狹間(サマ)。

しげし 繁し【形一】■草木など繁りてあり。萬葉「つくばの繁き木の間よたつ鳥のめゆかなを見むさねざらなくに」■數量多し。度かさなりてあり。萬葉「心には忘るる日なく思へども人のことこそしげき君にあれ」心中胸廣し「軒の玉水とくとくごされ、しげくごされば名の立つに」

しげし 字消【名】文字を消すために用ゐるゴム又は白蠟の類。

じげじき 時下食【名】九星にて、食初(ハジメ)種蒔・俵物と開くこと。沐浴・剃髮・伐木・栽植等に凶なりといふ時刻。正月は未の日の亥の時、二月は戌の日の子の時、三月は辰の日の丑の時、四月は寅の日の寅の時、五月は午の日の卯の時、六月は子の日の辰の時、七月は申の日の巳の時、八月は酉の時の午の時、九月は巳の日の未の時、十月は亥の日の申の時、十一月は卯の日の酉の時、十二月は卯の日の戌の時。

しげしげ 繁繁【副】しきりに(頻に)に同じ。

しげしだ しけ羊齒【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。濕地に自生し、根莖は細長くして葡萄し、葉の長さ七八寸、羽狀複葉をなす。

しけぞら 濕氣空・時化空・時氣空【名】濕氣(シケ)[二]を催す空模樣。手習鑑「時氣空も吹晴れて、下り日和に直った」

しげたいっく 重田一九【名】〔人〕じっぺんしゃいっく(十返舍一九)に同じ。

しげだいふぶし 繁太夫節【名】淨瑠璃節の一派。宮古路(ミヤコヂ)豐後掾の門人繁太夫の創めたるもの。大阪島內(シマウチ)に行はれしが、その曲風は、今、京唄の內に、繁太夫物と呼ばれて、纔かに存するのみ。「よ。

しげたいふーもの 繁太夫物【名】前條を見よ。

しげたていいち 重田貞一【名】〔人〕じっぺんしゃいっく(十返舍一九)に同じ。

しげだるき 繁棰【名】〔建〕しげもの(繁物)に同じ。

しげ-お 繁道【名】草などの繁く生ひてある道。〔古語〕萬葉「大野路(オホ)はしげちはしげぢしげくとも君しかよはば道はひろけむ」

しげつ 四傑【名】㊀四人のすぐれたる人。㊁支那明代の詩人の李夢陽(リボウヤウ)・何景明・徐禎卿・邊貢の四人の併稱。**しちさいし**(七才子)㊁參照。唐の四傑【句】支那唐の世の王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王の四人のすぐれたる文人。

しげつ 四穴【名】笛の一種。孔は四箇ありて、その内の一箇は、三箇と反對の側にあり。また管の一端は閉ぢて、一端は開放す。三橋檢挍の發明といふ。

しげつ 死結【名】㊀**こまむすび**(小間結)に同じ。㊁香道にて、磯したる木の數十年を經て、香氣を發するもの。(生結に對して)

しげつ 詩訣【名】詩を作る祕訣。

しげつ 止血【名】出血・下血・喀血等、すべて血をおさへ止むること。ちどめ。

しげつ 巳月【名】陰曆四月の異稱。

じげつ 辭訣【名】『辭にて訣(カケ)るる義』別れのことばをのぶること。いとまごひ。

じげつ 時月【名】『時は三箇月、月は一箇月の義』㊀三箇月と一箇月と。㊁僅かの月日。

しげつ-ざい 止血劑【名】止血の目的にて用ふる藥劑。ちどめぐすり。ちどめ。止血藥。

しげつ-めん 止血綿【名】『羅 Gossypium styptieum』僅少の出血を止むるに用ふる綿劑。過鹽化鐵液と酒精との混合液を綿に浸して、陰乾にして作る。

しげつ-やく 止血藥【名】**しけつざい**(止血劑)に同じ。

しげ-とう 重籐・滋籐・繁籐【名】間を少しづつおきて、細き籐にて幾箇所も巻きたる弓。大將などの持つもの。**村(ムラ)重籐・本(モト)重籐・中(カミ)重籐・末(スエ)重籐・白(シラ)重籐・鏑(カブラ)重籐・追(オヒ)重籐・千段重籐・句(ニホヒ)重籐・段(ダン)重籐・吹寄(フキヨセ)重籐・矢摺(ヤズリ)重籐・節籠(コブシ)重籐・引兩(ヒキヤウ)重籐**などの種類あり。四足弓。平造・左衛門佐重盛は、生年二十三、今日の軍の大將なれば、…切文(キリ)の矢負ひ、重籐の弓持ちて」

しげ-ぬ 繁野【名】草木のしげりたる野。〔古語〕萬葉「馬なめてみ狩ぞたたす春の茂野に」

しげぬひ 繁縫【名】細かに縫とりたること、又そのもの。孕常盤「五色の糸の繁縫の直垂」曾我五人兄弟「唐絲ぐくみの八重織に繁縫縫うたる打帶の」

しげの 滋野【名】姓氏の一。神別にして、神皇産靈(カムムスビ)神五世の孫天道根命より出でしもの。姓(カバネ)は朝臣(アソン)と宿禰(スクネ)とあり。その族に海野・支流に眞田・望月・根井等の諸氏あり。

しげの-いと 絓の絲【句】**しけ**(絓)の條下を見よ。

しげの-さだぬし 滋野貞主【名】〔人〕學者・文章生より起り、東宮學士となり、諸儒と祕府略一千卷を撰し、淳仁天皇の勅を受けて、經國集二十卷を撰す。官、宮内卿に陞る。仁壽二年卒す。年六十八。

しげの-せいさい 重野成齋【名】〔人〕**しげのやすつぐ**(重野安繹)に同じ。

しげの-だいじょう 四家の大乘【句】〔佛〕**だいじょう**(大乘)の條下を見よ。

しげのぶ-がは 重信川【名】〔地〕『慶長四年加藤嘉明の臣足立重信の、堤を築きて、水害を防ぎしよりいふ』伊豫國の中部を流るる川。周桑(ハンダ)郡徳田村の西方に發源し、諸流を合はせ、松山市の西南約一里半の所にて伊豫灘に注ぐ。上流は久米川といふ。舊稱、森松川。

しげの-やすつぐ 重野安繹【名】〔人〕學者。舊鹿兒島藩士。昌平黌に學び、國史及び漢文に通じ、成齋と號す。東京文科大學教授となり、文學博士を授けられ、帝國學士院會員・史學會長たり。その史論前哲を抹殺する癖あるを以て、世に抹殺博士の稱あり。明治四十三年薨す。年八十四。

しげの-ぬし 滋野井【名】姓氏の一。姓は藤原、三條内大臣公教の子實國を祖とす。神樂を世業とし、羽林家にて、大納言を極官とす。明治維新後、伯爵を授けらる。

しげはら 重原【名】〔地〕三河國碧海(ヘキカイ)郡にありし村。板倉氏の舊藩地。明治三十九年刈谷(カリヤ)町に合併せらる。

しげひと-しんわう 重仁親王【名】〔人〕崇徳天皇の皇子。近衛天皇崩ずるに及び、親王統を承くべきに、後白河天皇立ちて、中外望を失ふ。保元の亂實にこれに崩せり。軍敗れて仁和寺に入り、雜髪して空性といふ。應保二年薨ず。年二十三。

しげびやくじやう-さう 四牙白淨相【名】〔佛〕**さんじふにさう**(三十二相)を見よ。

しげ-ひら 重衡【名】『平重衡が奈良の大佛殿を燒きしことあるにより、奈良内茶飯に勝るといふ酒落(シヤレ)』握飯(ニギリ)に茶をかけて食ふこと。

しげふ 施業【名】業務を施行すること。

しげふ 志業【名】學業に志すこと。

しげふ 司業【名】㊀**こくしじやう**(國子司業)の略。㊁**がくかい**(學階)を見よ。

しげふ 試業【名】學業又は業務に對して行ふ試驗。

しげふ 始業【名】業を始むること。

しげふ 四業【名】㊀四種類の家業。㊁講談の四種、即ち神道講釋・心學・軍書講談・昔噺の併稱。

じげふ 事業【名】しごと。しわざ。わざ。新可笑記「過ぎにし世世の歌人の魂入れかはり。世上の事業は嘗て知らざりき」

しげふ-あん 施業案【名】施業の考案。

じげふ-か 事業家【名】事業を起し、又これを經營する技能ある人。

じげふ-こうさい 事業公債【名】㊀『獨 Unternehmungsschuld』或事業を起して、收入又は收益を得んがために募集する公債。㊁我が國債の一。明治二十九年より額面二億三百五十萬圓を限度として、漸次に募りたるもの。官線鐵道の改良建設、製鋼事業電話擴張及び國防事業の費用などに充てんがためなりき。

しげふ-しき 始業式【名】始業の儀式。學校にては、每學期の始に、全生徒を一堂に集めて、校長の訓話などあるを常とす。

じげふ-しほん 事業資本【名】『英 Business capital』事業に投じ了り、もはや金融市場において、需要・供給の因となることなき資本。

じげふ-しや 事業者【名】事業を起す人。

じげふ-しゆ 事業手【名】北海道廳における判任官待遇の雇員の一。土地の處分に關する事業及び土木・水産・農業の事業に從事せしむるもの。

しげぶち 重縁【名】**しじ**(四五)に同じ。

じげふ-ねんど 事業年度【名】〔法〕事業を營むに當り、業務及び決算の便宜上、設けたる期節。例へば一年を前半期と後半期との二期に分つ類。

じげふ-はうこく 事業報告【名】産業組合・相互保險會社等、營利を目的とせざる組合・會社にて、決算季ごとに、その期間に於ける事業の成績・財産の狀況等を記述して、その關員又は主務官廳に報告すること。即ち營利會社の營業報告に相當するもの。「業報告の書面。

じげふ-はうこく-しよ 事業報告書【名】事業の經營方法を記載せる書面。

じげふ-はうはふ-しよ 事業方法書【名】事業林【名】播種・植樹・伐採また天然生稚樹の保護のごとき人工を加へたる森林。(原生林に對して)

しげ-ぼね 繁骨【名】障子の棧の間こまかきもの。

しげみ 繁【名】しげりたるところ。しげり。萬葉「夏の野のしげみに咲ける姫百合のしらえぬ戀はくるしきものを」

しげ-むし 濕氣蟲【名】〔動〕**しみ**(蠹魚)に同じ。

しげ-む 試驗【名】㊀こころみ。ためし。㊁學生の學業・才能の優劣を試み判ずること。考試。試業。「その所。

しげん 至險【名】至って險阻なること、又至って健剛なること。

しげん 至健【名】至って健剛なること。

しげん 思軒【名】〔人〕**もりたけん**(森田思軒)を見よ。

しげん 私見【名】㊀おのれ一己の意見。

私考。私案。二自己の意見の謙稱。

しーけん 私權【名】〔法〕『英 Private right』私法上の權利、即ち非統治關係における權利。人格權(身分權)財產權の三者に分つ。また人格權と親族權とを合はせて、人身權と呼ぶことあり。(公法に對して)

しーげん 旨言【名】旨を得たる言。最もなること。

しーげん 至言【名】道に協ひたる至極のことば。格言。金言。

しーげん 卮言【名】『莊子の寓言篇に「卮言日出、和以二天倪一」とあるに本づく。卮は四升を容るる酒器にて、言の善なるを酒味に譬へていへるもの。一說に、酒器は滿つれば傾き、空しければ仰ぐにより、言の物に因り、變に從ふに譬へしなりと』すぐれたることば。

しーげん 始元【名】げんし(元始)に同じ。

しーげん 始原【名】げんし(原始)に同じ。

じーけん 事件【名】二こと。ことがら。二〔法〕そしょうじけん(訴訟事件)の略。

じーけん 時圈【名】〔天〕天『英Hour circle』天球の兩極を通過する無數の大圓。天球その或一點を通過する時は、これをその點の時圈といふ。天球の子午線と呼ぶものも、このものの一なり。

じーげん 耳言【名】じご(耳語)に同じ。

じげん 字源【名】或文字の構成せられたるもと。例へば漢字の「明」の字は「日」と「月」との會意により構成せられ、片假名時圈といふ。天球の子午線と呼ぶものも、このものの一なり。赤緯圈赤緯度。

じげん 通言【名】『詩經小雅の小旻篇に「維邇言是聽、維邇言是爭」、中庸の第六章に「舜好レ問、而好察二邇言一」とあり』淺近なることば。野人また俗人の言。

じーげん 示現【名】二(佛)佛菩薩の、機緣に應じて、種種の身を現ずること。例へば觀音の三十三身の類。げんじ(現示)參照。二神佛の靈驗を示すこと。盛衰記「方便示現の形、全く本地の眞身にあらじと」

じーげん 時限【名】時間の限界。時のかぎり。刻限。

じーげん 慈眼【名】〔佛〕佛・菩薩の、慈悲の心にて、衆生を視る眼。盛衰記「その時に、觀世音金冠を動し、慈眼をまじろがしたまひて」

慈眼を垂る【句】 あはれみを掛く。慈悲心を以て見る。

慈眼視(シ)衆生(シュジョウ)【句】〔佛〕『法華經の普門品(觀音經)に出づ』觀音菩薩が、慈悲の眼を以て、一切衆生を平等に觀ること。謠曲「誓願寺」「慈眼視衆生あらはれて」

じげん 慈眼【名】〔人〕てんかい(天海)を見よ。

しげん-かいい 始原界【名】〔地〕しげんそう(始原層)に同じ。

しげん-かうね 私權行爲【名】〔法〕私權の變更を目的とする法律行爲。

しげん-かかり 試驗掛【名】試驗の事を擔當する人。

しげんかく 視幻覺【名】〔哲〕『英 Optic hallucination』視覺器に發する幻覺。幻視。

しげん-きじつ 試驗期日【名】試驗を行ふべき期日。

しげん-きん 四絃琴【名】形、三味線の如く、棹は三尺二寸ほどにて、絃の四筋ある樂器。

しけんくわん 試驗管【名】〔化〕『英 Test tube』或物質の少量を入れて、その性質・反應等を試驗するに用ふる、底ある硝子管。試管。

(管驗試)

しけんくわん 試驗官【名】試驗を施行する官吏。

しけん-くわん 司檢官【名】船舶司檢所の職員の一。所長の指揮を承けて、事務を分掌せし奏任官。

しけんくわん-ほ 司檢官補【名】船舶司檢所の職員の一。司檢官を助け、遞信省管船局に彙勤し、臨時に事務を助けし奏任官。

しげんけう 四言教【名】支那明の王陽明が、その教學の主義を表明せる四箇條の言、即ち一に「無レ善無レ惡心之體、二に「有レ善有レ惡意之動」、三に「知レ善知レ惡是良知」、四に「爲レ善去レ惡是格物」。

しけんけんてい 試驗檢定【名】試驗により行ふ檢定。(無試驗檢定に對して)

しけん-し 試驗紙【名】〔化〕『英 Test-paper』濾紙のごとき紙に指示藥を塗り、溶液又は氣體の酸性なるか、アルカリ性なるか、又はいかなる物質を有するかを檢するに用ふるもの。最も普通なるは、リトマス紙・姜黃(キャウワウ)紙・オゾン紙・硫化水素紙等。

しげんし 【名】〔植〕ちやうじざくら(丁子櫻)に同じ。

しけん-しん 試驗針【名】或金屬に、他の金屬の混合せる分量を量るに用ふる針。

じげん-しんくわん 時限信管【名】えいくわんくわん(曳火信管)に同じ。

しけん-じよ 司檢所【名】檢閱の事務を取扱ふ所。

しけん-ぜんしふ 思軒全集【名】〔書〕森田思軒の著、探偵ユウベル・使者等を輯めたるもの。一卷。

しげん-そう 始原層【名】〔地〕『英 Archæan Group』始原代の地層。地盤の最下部を構成し、主として片麻岩・雲母片岩・綠泥片岩・角閃片岩・千枚岩等より成り、明かなる化石の產物なく、また時代最も古きため、變動を受くることまた最も甚しく、複褶及び斷層多し。始原界。太古界。

しげんだい 始原代【名】〔地〕『英 Archæan era』地質時代の四大別の一。始原層の時代。生物未だ地上に出現せざりきと見え、岩石中に確かなる化石を發見することなし。太古代。

じげんだいし 慈眼大師【名】〔人〕てんかい(天海)を見よ。

しけんぢやう 試驗場【名】試驗を行ふ場所。

しけん-ばいばい 試驗賣買【名】『英 Trial sales』二〔法〕買主の意に適するや否やの試驗を經たる上にて、行ふ賣買。三〔商〕これまで取引なかりし顧客に對し、又は從來取扱はざりし商品につきて、賣買を試むること。視察賣買。

しけん-ばこ 試驗函【名】『英 Test box』電信回線の活用もしくは試驗に際し、手配上の便宜を計りて、設計せられたる裝置。構造は、木製の函に、數多の眞鍮製タアミナルを取附けたるに過ぎず。本線・地氣線・電池線等は、直ちに通信機に接續せしむることなく、途中必ずこの函に引込みおき、回線の切斷・接地・交叉・直通もしくは環線等の應急處置及び電池の取換・增減等に便ならしむ。

しけんばん 試驗盤【名】『英 Test board』試驗函の改良せられたるもの。

しけん-ぶんせんばん 試驗分線盤【名】『英 Test and cross board』單式交換器を使用する電話交換局にて、加入者の電話線を交換機に至る局內ケエブルに接續する接續盤。

しけん-もんだい 試驗問題【名】試驗に出す問題。試驗の課題。

じげん-りう 自源流【名】劍術の一派。島津氏の臣瀨戶口備前守の創めたるもの。自源坊と稱する者に遇ひて、その術を得たりと稱せらる。

しげん-りん 始原林【名】げんせいりん(原生林)に同じ。

しけん-れう 試驗料【名】試驗を受くるにつきて納むる手數料。

しげんれんりつはうていしさ 四元聯立方程式【名】〔數〕聯立方程式の一。未知數四つを含むもの。

しけんろんぶん 試驗論文【名】試驗問題に應じて作る論文。

しけんゐゐん 試驗委員【名】試驗執行のために設けたる委員。

しげめゆひ 繁目結・滋目結【名】目結の目の繁きもの。目の細かき鹿子絞。めゆひ(目結)參照。吉野忠信「時に忠信しげめ結の直垂に」

しけーもの 濕氣物【名】海難のために損傷せる貨物。海損貨物。

しげ-もの 繁物【名】(徒)種割の一。種あきを、その幅に等しくなしたるもの。しげだるき。

しげ-やま 繁山【名】■草木の茂りたる山。古今「つくば山はやましげやましげけれど思ひ入るにはさはらざりけり」■(地)陸中國にありといふ山。新六「しげやまのそがひの道の谷あひは夏とて風の吹かぬ日ぞなき」

しげやま 蕃山【名】(地)備前國和氣(ワケ)郡伊里(イリ)村の大字。舊名寺口。寛文中改稱す。熊澤了介の一時退隱せし處。了介依って、蕃山(ヤマ)息遊軒と號す。

しげやまれうかい 蕃山了介【名】(人)くまさはばんざん(熊澤蕃山)に同じ。

しげゆき-しふ 重之集【名】(書)源重之の歌集。一卷。群書類從に收む。

しげよし 重義【名】(人)京都の新刀の鍛工。埋忠(ウヅ)明壽の子。のち明眞といふ。寛永頃の人。

しげり 繁【名】しげみ。鬱茂。萬葉「藤なみのしげりはすぎぬ足曳の山ほととぎすなどか來鳴かぬ」

しげり 【名】男女、閨中にて、しめやかに物語りなどして、樂しむこと。俗曲「隆達節」「ゆふべの床のおしげりに、御目がさめぬか、ええ、じれったい」

しげり-あふ 繁合ふ【動四自】互にしげる。拾遺「おほあらき森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」

しげり-ば 茂葉【名】茂りてある葉。俳諧新選「尺布」「しげり葉や青女房の加茂詣」

しける 濕氣る【動下自】■濕氣を帶ぶ。しめる。しっける。■海上荒れ、雨風つづく。一目玉鉾「四日市。此所より桑名に乘行く船あり。しけたる日和に乘るまじき海なり」

しげる 繁る・茂る【動四自】しげくなる。さかんに生ひたつ。生ひさかる。生ひさかなる。繁茂す。

しげる 【動四自】男女睦しく語り合ふ。今宮心中「盆には在所へいて、粟畑でしげろ」五十年忌歌念佛「お夏樣と清十郎樣と、この蚊帳で

しげらしゃんしたらば」

しげ-をか 茂岡【名】(地)大和國にある岡。今、生駒(イコマ)郡富雄(トミヲ)村より郡山城址に連なれる鳥見岡(トミヲカ)の古稱なるべしといふ。夫木「いにしへの子の日幾代になりぬらん神さび立てるしげをかの松」

しげをか-かはひこ 滋岳川人【名】(人)陰陽家。本姓は刀岐(ト)。宿曜・遁甲術に精し。仁壽・天安頃の人。

しこ 醜【名】■物事を憎みののしりていふ語。「古語」萬葉「ますらをや片戀せむやとなげけども鬼(シコ)のますらをなほ戀ひにけり」■自身の上を卑下していふ語。「古語」萬葉「今日よりはかへりみなくて大君のしこのみたてと出でたつ我れは」

しこ 鰋【名】(動)ひし(鰋)の略。

しこ 【名】しこのき(しこの木)を見よ。

しこ 飼戸【名】大寶令の制規にて、左右馬寮の牧馬を飼ふために充てし戸。この戸より出だす役丁は、飼丁及び獲丁といひ、毎年、番組を分ち、左右馬寮に上直して、役に從はしめ、調として、正丁には二百圍、次丁には一百圍、中男に五十圍の草を課し、また不輸租田を班給し、これを飼戸田と呼べり。馬戸。

しこ 尻籠・矢籠【名】『矢壺の字の音』■つぼやなぐひ(壺胡簶)の異稱。■後世、壺胡簶(ツボヤナグヒ)に似て、粗略なる製のものをいへり。

(二) こし

しこ 市賈【名】市場の商人。

しこ 市虎【名】『市中の虎の義。「三人虎を成す」を見よ』無實の風說。うはさ。

しこ 指呼【名】■指して呼ぶこと。■呼べば答ふるほどの近距離。

指呼の中(ナカ)【句】呼べば答へんとするほどなる近き距離にあること。指顧の中。

しこ 指顧【名】指さしながら、ふりむく指顧の中(ナカ)【句】「指呼の中」に同じ。浦島年代記「三萬里の蓬萊指顧の中」

しこ 四股【名】あし(足)を云ふ。「相撲(スマヒ)の語」

しこを踏む【名】片足をかはるがはる高く揚げて、力を込めて地を踏占む。力足を踏む。傾城酒呑童子「虎引っからげ、しこを踏み」

しこ 四顧【名】■四邊を顧みること。見まはすこと。■あたり。附近。四邊。

しこ 四庫【名】『天庫四星に象(カタド)りしものといふ』支那唐の玄宗の時、長安洛陽の兩都に、書を經(經書)・史(歷史)・子(諸子)・集(詩文集)の四部に大別し、庫を分ちて、保存せしめしその庫。

四庫の書【句】あらゆる漢籍。

しこ 四鼓【名】しかう(四更)に同じ。

しこ 司鼓【名】鼓を打つことを司ること。

司鼓の本位【句】「司鉦の本位」を見よ。

しこ 醜【接頭】みにくく憎むべき意。しき。「古語」「しこ時鳥(ホトトギス)」

しこ 【接尾】しきの轉。「關西の方言」「あれしこの事」

しこ 仕事【名】掃除洗濯などをすること。「周防國・長門國の方言」

しこ 四五【名】船の荷轉(ニヅミ)の上に打つ押棒。大四五、小四五、登(ノボ)四五等あり。すぢ。しげぶち。たまぶち。

しこ 枝梧・支吾【名】『枝は小柱、梧は斜柱の義』さからふこと。くひちがふこと。抵梧。さしうご(左支右吾)參照。

しこ 市語【名】市中のうはさ。

しこ 詩語【名】詩に用ふることば。

しこ 私語【名】ひそひそばなし。ささめごと。耳語。耳言。

私語千里(センリ)【句】「私語三里」に同じ。「諺語」

しこ 死語【名】今日全く使用せられざる古語。廢語。(活語に對して)

しこ 死期【名】しにぎは。死にどき。いまは。末期。(對して)

しこ 死後【名】死にし後。歿後。(生前に死後強直【句】動物の死後、或時間を經れば、身體剛直となること。この期を過ぐれば、再び柔軟となる。

じ-こ 事故【名】■じけん(事件)に同じ。■事のわけがら。しさい。

じ-こ 似虎【名】(動)『形貌、虎に似たるよりいふ』ねこ(猫)の異稱。

じ-こ 自己【名】われ。おのれ。自身。

自己の計算【句】みづから利益・損失の責任を負ふこと。

じ-こ 自語【名】自己の發したる言語。

じ-こ 耳語【名】じこ(私語)に同じ。

じ-こ 事後【名】事の果てたる後。(事前に對して)

じ-ご 爾後【名】この後。その後。以後。

じご-あんじ 自己暗示【名】(哲)じあんじ(自暗示)に同じ。

じご-いうだう 自己誘導【名】(理)じこかんおう(自己感應)に同じ。(相互誘導に對して)

じこいうだう-さよう 自己誘導作用【名】(理)前條に同じ。(相互誘導作用に對して)

じこ-いしき 自己意識【名】(哲)じいしき(自意識)に同じ。

じこ-いん 自己因【名】(哲)じこげんいん(自己原因)に同じ。

じこう 至厚【名】極めて厚きこと。至って厚きこと。薄からざること。

じこう 至公【名】極めて公平なること。

じこう 伺候【名】『伺(カガ)ひ候(サブラ)ふ義』■かたはらに侍り居ること。奉仕。■機嫌をたづぬること。御機嫌伺。

じこう 祇候【名】つつしみて左右に奉仕することゝつつしみて伺候すること。東鑑「祇候關東二之輩」

じこう 試工【名】土木寮の工員。上・中・下の三等に分れ、上試工と中試工とは判任、下試工は等外吏たり。明治七年廢せらる。

じこう 司寇【名】上古、支那にて、刑罰及び警察の事を掌りし官。

じこう 篩孔【名】(植)『英Sieve-pores』篩板の有する篩狀の孔。

じこう 子貢【名】(人)孔門十哲の一。衞の人。姓は端木、名は賜。子貢はその字。孔子より少きこと三十一歳。言說を以て著はれ、魯・衞に相となり、齊に歿す。

じ-こう 耳孔【名】耳のあな。耳門。耳竅。

じ-こう 時候【名】四時の氣節。氣候。季候。

じ-こう 事功【名】事の成功。

じこう-がり 自紅狩【名】自紅坊(毛蟲)を狩殺すこと。和泉國堺などにては、笠深く身を固め、竊(そ)にてさし取る。

しこう-ざくろせき 紫紅柘榴石【名】〔鑛〕柘榴石の一種。これを研き上ぐる時は、濃紅なる光を放ち、恰も紅玉(イルビ)の如く見ゆるもの。東洋柘榴石。

しこう-しき 伺候式【名】陸軍禮式の一。兩陛下又は高貴の人が、軍隊屯在の地に御著發のとき、行在所又は旅館に將校の參伺すること。

しこう-にち 四絢日【名】九星にて、その人により萬事に愼むべしといふ凶日、即ち酉の年の人は子の日、戌の年の人は丑の日、亥の年の人は寅の日、子の年の人は卯の日、丑の年の人は辰の日、寅の年の人は巳の日、卯の年の人は午の日、辰の年の人は未の日、巳の年の人は申の日、午の年の人は酉の日、未の年の人は戌の日、申の年の人は亥の日。しくにち。

じこう-ばう 自紅坊【名】■〔動〕けむし(毛蟲)を云ふ。〔和泉國堺の方言〕■〔植〕べにたけ(紅簞)を云ふ。〔九州の方言〕

じこう-はづれ 時候外【名】普通の時候に先だち、又は後るること。しゆんはづれ。

し-こうみん 市公民【名】市の公民。

じこうりう【名】じこう(自己流)の訛。

しこうろくみん 四公六民【名】江戸時代の始、その年の收穫の四割を官に納れ、六割を農民の所有とせし租法。**ごこうごみん**(五公五民)參照。

し-ごかうね 死後行爲【名】〔法〕法律行爲の一。當事者の死後に、その效力を生ぜしむべきもの。例へば、遺言などの類。(生前行爲に對して)

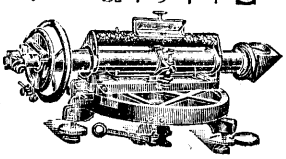
じこ-かんおう 自己感應【名】〔理〕『英Self-induction』輪道自身の電流の變化により、輪道に感應電流の起る現象。感應電流は輪道内の磁場の變化によりて起るものなるがためにして、その電流を絕ち、又は弱むる時は、元の電流と同一の方向なる感應電流起りて、その減少を妨げ、又、電流を急に通はしめ、又はこれを强むる時は、これを反對なる方向の感應電流起りて、その增加を妨ぐ。自己誘導。(相互感應に對して)

じこ-かんじやう 自己感情【名】〔哲〕『英Self-feeling』專ら自己を評價するによりて起る感情。その評價、正當なれば、勇氣となり、自信となり、高きに過ぐれば、倨傲となり、高慢となり、低きに過ぐれば、恐怖となり、怯懦となる。自己感動。

じこ-かんどう 自己感動【名】〔哲〕前條に同じ。

しごき 扱【名】■しごくこと。■しごきおび(扱帶)の略。

しごき 子午儀【名】『英Meridian transit instrument』天體の子午線經過の時刻を測定するに用ふる機器。子午線面内に動く望遠鏡を、水平軸によりて、二箇の架臺に支持せしめたるもの。**しごくわん**(子午環)參照。



(ぎ ご し)

しごき-おび 扱帶【名】一幅の布を、一丈ばかりの長さに切り、そのまま扱きて用ふる帶。かかへおび。こしおび。しごき。

じこ-ぎせい 自己犧牲【名】〔哲〕『英Self-sacrifice』**けんしん**(獻身)に同じ。

しごき-ぞめ 扱染【名】友禪染などの際、模樣の型糊(ノリ)を置きたる後、その地色(ロイ)を染出さんがために、適當の染料を混じたる糊を、篦にて、その布面一體に塗附くること。(引染浸染に對して)

じこ-きてい 自己規定【名】〔哲〕じかきてい(自家規定)に同じ。

しごき-ぶき 扱拭【名】細長き物の一端を、片手に持ち、他方の手にて扱き拭ふこと。

しごき-もとゆひ 扱元結【名】こきもとゆひ(扱元結)に同じ。

じこ-きやうめい 自語響鳴【名】〔醫〕『獨Autophonie』己れの發したる言語の、己れの耳に響鳴すること。

し-こく 司剋【名】ろうこくはかせ(漏剋博士)の庶名。

し-こく 紫黑【名】しこくよく(紫黑色)に同じ。

し-こく 詩國【名】『自居易の、敍蘇杭勝事詩に「壻牽二吟詠一眞詩國、興入二笙歌一好醉鄉」とあるに本づく』詩趣に富める國。

し-こく 仕國【名】『孟子の滕文公下篇に出づ』仕進に適せる國。

し-こく 四國【名】■四つ國。■〔地〕山陽道の南方の海中に位する大島、即ち讃岐・伊豫・土佐・阿波の四箇國より成り、南海道の一部たり。

四國を廻りて、猿となる【句】四國猿といふ語あるよりいでし語。〔諺語〕放屁論・鳳來「一つ長屋の佐次兵衞殿、四國をめぐりて、猿となる人」

しこく-ざる 四國猿【名】■〔動〕さる(猿)の庶名。■四國の人を卑しめて云ふ。〔俚語〕

しこく-しよく 紫黑色【名】黑みかがりたる紫色。

しこく-すぢ 四國筋【名】〔地〕四國の方面。四國の地方。〔方言〕

しごく-だま【副】しごたまに同じ。〔遠江國の所】

しこく-はちじふはっかしよ 四國八十八箇所【名】はちじふはっかしよ(八十八箇所)を見よ。

しこく-びえ 四國稗・龍爪稗・鳴脚稗・穆子・田桂【名】〔植〕禾本科に屬する一年生の草。原野に自生し、又は陸田に耕作せられて、家畜の飼料となる。高さ二三尺、葉は細長く、夏季小穗花を開く。のらひえ。からひえ。こうぼふひえ。かもまたきび。

しこく-まゐり 四國參【名】四國八十八箇

「時刻をめぐらさず西光法師父子が命を召取りたまへや」

じ-こく 二黑【名】九星の一。土星にて、未申を本位とす。この星に當る者は、溫柔にて決斷に乏しく、また懶惰なるものありといふ。にこく。

じごく-いろ 至極色【名】濃き紫の染色。

じごく-くわん 司獄官【名】臺灣總督府監獄職員の一。監獄の事務を掌る者、即ち監吏及び看守。

じごく-くわんり 司獄官吏【名】監獄の事務を取扱ふ官吏、即ち典獄・看守長の類。

しこく-さ 醜草【名】わるき草。みにくき草。〔古語〕〔萬葉〕わすれぐさわが下紐につけたれどしこのしこくさなほ戀ひにけり」

しこく-さぶらう 四國三郎【名】〔地〕阿波國吉野川の異稱。〔坂東太郎・筑紫二郎に對して〕

しこく-さんみやく 四國山脈【名】〔地〕四國■の脊梁をなす山脈。その主軸は石槌山脈と稱し、陷落地帶なる豐後水道を隔てて、九洲南部の山脈を承け、佐田半島に起りて、南西西より北東東に向ひ、同じく陷落地帶なる紀伊水道を隔てて、紀伊山脈と相呼應す。なほ主軸の北側に讃岐山脈、南に劍山脈等並走す。

所を巡拝すること、又その人。おしこく。しこくめぐり。

しこく-むぎ 四國麥【名】〔植〕はとむぎ(鳩麥)に同じ。

しこく-めぐり 四國巡【名】しこくまわり(四國巡)に同じ。

じこ-くわつどう 自己活動【名】『英Self-activity』個人が外部の命令・規則等に從ふにあらずして、全く自己の意志に從ひて動作すること。

しこ-くわん 子午環【名】〔天〕『英Meridian circle』子午線觀測、即ち天體の子午線を經過する時刻、及び高度の測定に用ふる器械。子午儀に、分度環と測微鏡とを附したるもの。

じこ-くわんさつ 自己觀察【名】〔哲〕『英Mental(又Self又Inner)observation』自己の心的現象を省察して、心理上の智識を得ること。自ら吟味・檢査せんとの目的よりする反省。

じこ-けってい 自己決定【名】〔哲〕じかきてい(自家規定)に同じ。

じこ-げんいん 自己原因【名】〔哲〕『羅Causa sui』自己の存在が他の者に制約せられざること、即ち自ら自己の原因となれること。自己因。自因。

しこ-ごと 醜事【名】わろき事。みにくき事。〔古語〕 醜紀かかる醜事は聞えじ」

じこ-じつげん 自己實現【名】〔哲〕じがじつげん(自我實現)に同じ。

じこ-しやうげふ 自己商業【名】〔商〕自分の勘定にてする商賣、即ち損益を自己が負擔するもの。例へば賣買業・銀行業・保險業などの類。(代理商業に對して)

じこ-しゆぎ 自己主義【名】〔哲〕りこしゆぎ(利己主義)に同じ。

じこ-しようだく 事後承諾【名】承諾を得たる後に爲すべきを、これを經ずして爲したる處置に對し、承諾權者がその處置の適當なりしを承認すること。〔法〕帝國議會が政府の爲したる緊急勅令の發布、財政上の緊急處分又は豫算外の支出もしくは豫算超過の支出の適當なりしことの

決議をなすこと。この場合、議會が承諾をなせば、政府の處置は、豫め議會の決議を經て爲したると同一に見做さるれど、承諾をなさざる時は、國務大臣はその行爲に就きて、責任を負ひ、緊急勅令は、勅令を以て、將來その効力を失ふべきことを公布せざるべからず。

じこ-しよぶん 死後處分【名】〔法〕處分行爲の一。死後にその效力を生ぜしむべきもの。例へば遺贈の類。(生前處分に對して)

しこごらかす 【動四他】次條に同じ。

しこごらす 【動四他】しこじるやうにす。なほし損ふ。しじこらかす。こじらす。

しこしらへ 仕拵【名】『仕は爲(ス)の意』料理などの支度。俳諧新選(赤羽)「寒食や長者の夜のしこしらへ」 心中萬年草「今宵の物入仕拵、こちには一文入れさせず、娘を裸で請取る聲は」 「こじれる。

しこごる 【動下二自】病なほりそこなふ。

しこ-ごん 子午線【名】〔天〕『英Meridian』十二支を方角に配すれば、子は北、午は南なるにより、子午は即ち南北の義』天頂と天極とを通過する天球上の大圓、また或地點と地球の兩極とを通過する地球上の線。前者を天球子午線といひ、後者を地上子午線といひて區別す。各その條を見よ。じめん(子午面)・じけん(時圈)參照。

しこせん-かうど 子午線高度【名】〔天〕『英Meridian altitude』天體が子午線を經過する時の高度。

しこせん-くわんそく 子午線觀測【名】〔天〕『英Meridian observation』子午線經過における時刻、及び高度の觀測。主として、子午環にて行ふ。

しこせんけいくわ 子午線經過【名】〔天〕『英Meridian transit又Culmination』天體が日週運動によりて、天球の子午線を經過すること。同一の天體は、平均一恒星日に、二回子午線を經過す。

しこ-ぜんしよ 四庫全書【名】〔書〕『しこ(四庫)を見よ』支那清の高宗が蒐輯したる一大叢書。その文庫を四書全書館といふ。次次條參照。

しこぜんしよ-かんめい-もくろく 四庫全

書簡明目錄【名】〔書〕支那清の乾隆三十八年、于敏中等の勅を奉じて、四庫全書總目提要に就きて、節略を加へ、簡明に記したる者。二十卷。

しこぜんしよ-くわん 四庫全書館【名】しこぜんしよ(四庫全書)を見よ。

しこぜんしよ-そうもくていえう 四庫全書總目提要【名】〔書〕支那清の高宗の朝に設置せられし四庫全書館にて、宗永濟等勅を奉じて撰定し、紀昀(ウン)主任となりて、內府に聚まれる一萬餘部の書を、校訂整理の上、分類解題したるもの。三百卷。內一百卷は考證なり。しこ(四庫)參照。

しこ-たま 【副】おびただしく。たくさんに。しごくだま。〔東國の方言〕

しこたん 色丹【名】〔地〕千島國九郡の一。

しこたんたう 色丹島【地】參照。

しこたん-さう 色丹草【名】〔植〕虎耳(コジソウ)科に屬する多年生の草。高山に自生す。莖の高さ三四寸、葉は披針形、夏季、黃色の小花を開く。

しこたん-たう 色丹島・醜丹島【名】〔地〕千島列島の一。溫禰古丹(コタンネ)島の西南の海中にあり。長さ八里餘、幅四里乃至六里、周回二十二里。一島を以て一郡を立て、色丹郡と稱す。根室支廳の管轄。

しこたん-はこべ 色丹繁縷【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。高山に自生す。莖の高さ五六寸、葉は卵狀披針形、夏季、白色の小花開く。なぎはこべ。ねむろはこべ。

しこたん-まつ 色丹松【名】〔植〕松柏科に屬する落葉喬木。落葉松(カラマツ)の類。千島の一部及び北支那・滿洲・蒙古等に生じ、幹は五六丈に達す。枝條多く、小枝は下垂す。材は家屋建築又は橋梁用に供す。ちしまらくえふしょう。

しこたん-よもぎ 色丹艾【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。北地に產す。全體に白色の毛ありて、莖は直立し、葉は卵形、羽狀分裂をなす。きくよもぎ。

しこ-ため 【名】しこたまに同じ。 軍井簡「そちに、大事の物やらう、火をとぼして、奥へ來いといふより早く、あいあいあいあいさらば、しこため來らうと」

しこつ 肢骨【名】手足の骨。

しこつ 指骨【名】〔醫〕『羅Phalanges digitorum manus』手の指の中軸をなせる骨。掌骨に連接し、第一指骨(即ち拇指の骨)より第五指骨に至る五箇あり。第一指骨は二節より、その他は三節より成る。

しこつ 趾骨【名】〔醫〕『羅Phalanges digitorum pedis』足趾の中軸をなせる骨。蹠骨に連接し、第一趾骨(即ち蹠趾の骨)より第五趾骨に至る五箇あり。第一趾骨は二節より、その他は三節より成る。

しこつ 篩骨【名】〔醫〕『羅Os ethmoideum』頭蓋骨の一。左右兩眼窠の間に介在して、形蜂窠の如く、蝶骨・前頭骨・鼻骨・淚骨・上顎骨・下甲介骨・鋤骨の七骨に接續す。

しこつ 死骨【名】死人の骨。太平記「死骨滿ちて、屠所の如く」

しこつ 齒骨【名】齒ぐきの骨。

しこづ 譖づ【動上二他】そしり告ぐ。讒言す。よこす。〔古語〕 字鏡「譖、毀也、讒也、志己豆」

しこつ-おきな 醜翁【名】しこの老人。みにくき翁。〔古語〕 萬葉「たぶれたるしこつ翁のことだにも我れには告げず」

しこつ-こ 支笏湖・醜津湖【名】北海道膽振國千歲(チトセ)郡にある湖。周回約十里。

しこ-づかさ 飼戸田【名】王朝時代に、飼戸に班給せし田。不輸租田の一。

しごと 仕事【名】『仕は爲(ス)の義』すべて業はたらくこと。勞務。職務。〔理〕『英Work』一定の(針仕事)の略。物體が、力を他の物體に働かして、これを動かしたる効果を示す量。力とその力を受けたる物體が、その力の方向に動きたる距離との相乘積にて測定す。

仕事の絕對單位【名】〔理〕C.G.S法に依りて表はす仕事の單位。しいじいえす法參照。

仕事の單位【名】〔理〕普通に瓲(キログラム)又は磅(ポンド)にて、力の單位を表はし、米(メートル)又は呎(フィート)にて、力の距離の單位を表はす。また貫と尺とを表はすもあり。

單位の仕事【句】〔理〕物體が、單位の力によりて、その力の方向に、單位の距離だけ動きたる場合の仕事。

しごとうた 仕事唄【名】仕事をしながらうたふ唄。日本振袖始「三に早苗(サナ)唄、四に仕事唄」

しごとぎ 仕事著【名】勞働の際に著用する衣服。

しごとし 仕事師【名】㊀消防夫などにして、平生土木の人夫として働く者。㊁巧に事業を計畫し、經營する人。〔俚語〕

しごとだか 仕事高【名】仕事の出來あがりだか。

しごとだかばらひ-ちんぎん 仕事高拂賃銀【名】〔經〕仕事の出來高の多少を標準として支拂ふ賃銀。仕事高拂。箇數拂。出來高拂。箇數拂賃銀。出來高拂賃銀。〔時間拂賃銀に對して〕

しごとば 仕事場【名】仕事する場所。工場。工作場。

しごとばこ 仕事箱【名】仕事に用ふる道具を入るる箱。針箱又は大工の道具箱の類。

しこな 醜名【名】㊀あしき名。あだな。〔古語〕名義抄「諢、シコナ・イミナ」㊁自己の名の謙稱。大鏡「大納言どの聞かせたまひて、朝理の亂行に行成がしこ名呼ぶべきにあらず」

しこなし 【名】しこなすこと。ふるまひ。身ごなし。大磯虎稚物語「ちと親共等がしこなし見よ」

しこなす 【動四他】『仕は爲(シ)の義』程よく振舞ふ。たくみにす。

しこのき しこの木【名】荒削りにて、丈夫なる木。出世景清「しこの木をもって、蜘手格子に切りくんで」

しこふ 四劫【名】〔佛〕世界の變遷の四大時期。即ち世界成りて、人畜草木生ずるを成劫(ジョウコウ)といひ、人類の安住するを住劫(ジュウコウ)といひ、世界の壞滅するを壞劫(エコウ)といひ、世界の空虛となるを空劫(クウコウ)といひ、連稱して、成住壞空といふ。こふ(劫)ごろ(五濁)・さんさい(三災)參照。

じごふ 自業【名】〔佛〕みづから作る善惡の業(ゴウ)。それを因緣として得る苦樂の果報を、自業自得といふ。(但し多くは、惡しき方にいふ)

じごふじとく 自業自得【句】〔佛〕前條を見よ。

じごふじばく 自業自縛【句】〔佛〕前條に同じ。和狩劍本地「自業自縛の因果歷然、おのれが刀に切りさきし簑子の破れに、兩足ぐっと踏込んだる地獄落しと謂つべし」

しごふ 四業【名】〔佛〕三業(サンゴウ)に順不定業(ジュンフジョウゴウ)を加へたるもの。順不定業とは、善惡の行爲に對する苦樂の應報を、未來不定の時において受くるもの。四種の業。

じごふじとく 自業自得果【名】〔佛〕自業自得によりて招きたる果報。

しこぶち 色弊【名】品柄の卑しきことなりといふ。〔古語〕參遷「しこぶちにふるめきたる箱二つに、あづまぎぬ一疋」

しこへい 【名】〔植〕がかいも(蘘荷)に同じ。

じこほけん 自己保險【名】〔商〕じかほけん(自家保險)に同じ。

じこほぞん 自己保存【名】〔生哲〕じかほぞん(自家保存)に同じ。

しこほととぎす 醜時鳥【名】時鳥(ホトトギス)を卑めていふ語。〔古語〕萬葉「うれたきや醜時鳥今こそはおとのかるかに來鳴きとよまめ」

しこみ 仕込【名】㊀仕込むこと。㊁もとで。しほんきん。〔芝居の語〕㊂次條の略。

しこみづゑ 仕込杖【名】心(シン)に、刀又は槍を仕込みたる杖。しこみ。

しこむ 仕込む【動四他】㊀敎へ訓らす。しつく。會我五人兄弟「幸ひこの狩屋を揚屋と名附け、まだうら若き大盡殿、粹に仕込んで貰ひたし」㊁準備として貯ふ。春花五大力「飯は、がうぎに仕込んでござりまするな」㊂しいる(仕入る)に同じ。㊃中に入れて造る。

しこむ 仕込む【動下二他】『仕は爲(シ)の義』園みて溝へ造る。〔古語〕源氏「葦垣しこめたる西おもてを」

しこむ 【動四他】しごむに同じ。〔東國の方言〕

しこん 私恨【名】心ひそかにうらむこと、又その恨(ウラ)。

しこん 紫根【名】㊀紫草(ムラサキ)の根の乾したるもの。その皮、深紫色にして、昔はその煎汁を、紫色を染むるに用ひたり。㊁じこんいろ(紫根色)の略。〔紫紺〕

しこん 紫金【名】しまごん(紫磨金)の略。用明天皇職人鑑「この鐘の濫觴は、龍宮の紫金を取って」

しこん 支根【名】〔植〕『英 Rootlet』主根より分れたる根。

しこん 齒根【名】〔醫〕『獨 Zahnwurzel』齒の最低部、即ち齒齦(シグ)に嵌はるる部分。(齒冠・齒頸に對して)

じこん 耳根【名】にん(耳根)を見よ。

じこん 自今・前今【副】今より後。このち。爾後。以後。向後。「條に同じ。

じこん-いご 自今以後・自今已後【副】前條に同じ。

しこん-いろ 紫根色・紫紺色【名】紫根にて染めたると同樣なる紫色、即ち、やや鈍き帶赤紫色。しこん。

じごんじ 【名】いひわけをいふこと。曉峨天皇甘露圓「何のかのとじごんじは、敵討が恐しいな」

しこんでん 私墾田【名】墾田の一。荒地又は閑地を百姓に賜ひ、開墾せしめて、私有とせしめしもの。

しこんまく 齒根膜【名】〔醫〕『獨 Zahnwurzelhaut』齒根と齒槽の窩壁との間に介在する纖維樣結締組織の膜。齒嚢の遺殘より成り、白色・强靱にして、白聖質の骸嚢を司り、齒根をして、齒槽に聯接せしむ。齒牙外膜。齒槽齒膜。齒牙齒槽骨膜。白聖質外膜。

しこめ 醜女【名】㊀『しこめき物の義』形おそろしく醜き怪物。おに。ここめ。〔古語〕紀「醜女、此云志許賣」和名「醜女。一說云、黃泉之鬼也、世人爲恐二小兒一稱許許女者、此語之訛」㊁みにくき女。醜女。

しこめ 醜【貌】しこめきさま。またなく見にくきさま。一說に、醜なる目を見ることなりと。〔古語〕記「吾(ア)は、いなしこめ、しこめき、きたなき國にいたりてありけり」

しこめし 醜し【形ク】醜(シコ)なるさまなり。またなく見にくし。〔古語〕記「しこめき穢(アヰヅキ)き國」

しこめん 子午面【名】〔地〕『英 Meridian plane』地球の兩極を通過して、その赤道面に直交する平面。又その地球の表面と交はりて生ずる線は、即ち地上午線なり。ごごせん(子午線)參照。

しこり 繁凝・瘕【名】筋肉の凝固まりて塊狀をなすこと、又その塊狀の筋肉。

じこりう 自己流【名】他の流儀によらぬ、己れ一個の流儀。我流。

しこりばくち 繁凝博打【名】博奕(バクエキ)に凝り固まること。丹波與作「しこりばくちのわる遊。

しこる 頻る【動四自】しまる(頻る)の轉訛。〔東國の古の方言〕萬葉「わがせこが來むと語りし夜は過ぎぬしえやさらさらしこり來めやも」

しこる 繁凝る【動四自】しこりを起す。

しころ 鍾・鍛鍾【名】㊀兜の鉢の頸を被ふやうに作れるもの。背後より鉢附板に接して垂れ懸り、多くは撓革(カイタ)又は鐵板にて作り、普通三五枚、多きは八九枚を、絲又は革にて綴合はせたること縅(シタド)に同じ。或は全部を廣き板一枚にしたるもあり。その三枚なるを三枚兜、五枚なるを五枚兜と呼ぶ。また形狀によりて、一文字割(シンモン)鍾・饅頭鍾・日根野鍾などの名あり。㊁〔建〕しころびさし(鍛庇)の略。㊂〔建〕しころぬき(鍛屋根)の略。

しころ 【名】〔植〕きはだ(黃蘗)㊁に同じ。

しころ 【接尾】しきに同じ。〔西國の方言〕「これしころのこと」

しころ-うち 鍾打・鍛打【名】㊀槌にて衣を打つこと。㊁昔、京阪の芝居にて、二の替(カハ)に、狂言了りて打出(ダシ)の時、振袖を著て、阿多福(オフク)の面をかぶりたると、頭巾及び羽織にて、鹽吹の面をかぶりたると、二人にて、「評判、評判」の聲に連れて浮れ踊りしこと。

しころ-ざう 鍾草【名】〔植〕しゅろさう(棕櫚

草)に同じ。

しころ-づきん 鉦頭巾【名】そうじふうづきん(宗十郎頭巾)に同じ。其角」童はしころ頭巾や煤拂」「同じ。

しころ-づけ 鉦附・鍬附【名】こ(腰)巻に

しころ-びき 鉦引・鍬曳【名】源平屋島(ヤシマ)の戰の時、平景清が、源家方の箕尾谷(ミヲヤ)十郎國俊と格闘して、國俊の兜の鉦をつかみて、引きちぎりきと云傳ふる故事。芝居にては、丸本物「一谷(イチノ)嫩(ワカ)軍記」の發端なる一幕として書加へ、天保四年始めて上演せられたり。

しころ-びさし 鉦庇【名】〔建〕『形、兜の鉦の如くなるによりていふ』普通の屋根の軒下より少し離して、片流(カタナガ)に取附けたる庇。しころ。

しころ-ぶき 鍬葺【名】屋根の勾配を、中途より變じて葺きたるもの。行基葺。

しころ-やき 志戸呂燒【名】古、遠江國より産出せし、一種の陶器。

しころ-やね 鍬屋根【名】〔建〕普通の屋根の軒下に少し離れて、片流(カタナガ)に取附けたる屋根。雪隱押入(イオシン)などの屋根に多し。しころ。

しこ-を 醜男【名】■見にくき男。■男を罵りていふ語。

し-さ 視差【名】『英 Parallax』二つの異なる場所より同一點を見たる方向を示す二直線間の角。ちがいさ(地平視差)・「天體の視差」參照。

し-さ 斉嗟【名】なげくこと。

し-さ 四座【名】足利將軍義政の頃に定められし猿樂の四家。即ち觀世・竇生(ヤマヒ)・金春(コンパル)・金剛。かみがかり(上掛)・しもがかり(下掛)。ござ(五座)參照。

じ-さ 時差【名】■『英 Equation of time』平均太陽時より眞太陽時を減じたるもの、即ち平均太陽時を得んがために、眞太陽時に加ふべき補正數。時差率。■兩地方の時間の差。經差十五度毎に、一時間の差を生ず。地球上の時角は、經度と一致するに因る。

じ-さ 自差【名】『英 Deviation』羅針儀の指す方位と磁氣子午線の指す方位との間に生ずる差角。艤裝に鐵材を用ひ、又は鐵類を滿載したる船の羅針に、磁氣の感應するに因りて發生す。

じ-ざ 侍坐【名】傍に侍り坐すること。

し-さい 詞采・詞彩【名】詞のうるはしきこと。詞の花。

し-さい 詩債【名】他より贈られたる詩に對して、我れよりも詩を作りて挨拶を返すべきに、いまだ返さずにあること。又、詩に作るべき材料あり、もしくはこれを作るべき境遇に臨みながら、作らずにあること。

し-さい 詩才【名】詩を作る才。

し-さい 史才【名】歴史を編述する才。

し-さい 四塞【名】四方にある要塞。

し-さい 四祭【名】古、支那の四季の祭事。即ち春は祠、夏は禴、秋は嘗、冬は烝。

し-さい 四載【名】『書經の益稷篇に「予乘二四載一」とあり』四種の乘物、即ち船・車・橇(ソリ)・樏(カンジキ)の併稱。

し-さい 司祭【名】■祭式を掌る人。■『基』『英 Priest』天主教及びギリシャ教の僧官の一。天主教にては司教の次、ギリシャ教にては主教の次に位し、教會の儀式・典禮を司る。新教の教師に相當す。

し-さい 司宰【名】つかさどること、又その人。宰領。

し-さい 市債【名】地方債の一種。市の負債。

し-さい 私債【名】自己一人の債務。(公債に對して)

し-さい 齊衰【名】『儀禮の喪服篇に「疏衰裳齊」とありて、傳に「齊者何、緝也」、鄭註に「疏猶レ麤也」、賈公彥疏に「三升正服斬、不レ得レ麤名、至レ此四升始見レ麤也、造衣之法、衰裳既就、乃始緝レ之」とあり』支那にて、喪中の服の、麻にて造りたるもの。

し-さい 子細・仔細【名】■くはしきこと。こまかく綿密。■くはしきいはれ。事のわけ。事のもと。字音「事の子細いはせて聞かせんとて」「謡曲(雨月)「われ宿願の子細あるにより」■差支となるべき事柄。平道平氏の一類を滅さんこと、何の仔細かあるべき」

し-さい 詞采【名】詞のうるはしきこと。

し-さい 資財【名】■たから。資産。財産。【貲財】■資本にある財産。もとで。資貨。■『漢書の貨殖傳に「資財不レ下二五帝一」とあり』うまれつき。資質。

し-さい 史材【名】歴史の材料。史料。

し-さい 詩材【名】詩の材料。詩料。

し-さい 死罪【名】■死に當る罪。死刑。霜刑。十訓「わが朝には、嵯峨天皇の御時より死罪をとどめられてけり」■『史記の馮唐傳に「臣誠愚觸二忌諱一、死罪・死罪」とあり』臣が君に對する、自己の言行を謙遜していふ語。

し-さい 私罪【名】〔法〕■私人が自ら手を下して一私人を害する所爲。■官吏が賄賂を受けて、正當ならぬ行爲をなしたる罪。(公罪に對して)

し-さい 時齋【名】〔佛〕さいじき(齋食)に同じ。

じ-さい 自裁【名】自ら命を裁(タ)つこと。「自殺。

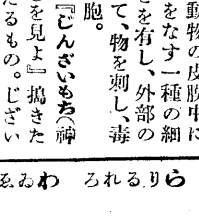
じ-さい 【名】〔植〕くぬぎ(櫟)に同じ。

じ-さい 自在【名】■心のままなること。自由。■じざいかぎ(自在鉤)の略。一代男「初紅葉の陰に自在をおろし、金(カネ)の大燗鍋(オオガ)」■じざいもち(自在餅)の略。

じ-ざい 自罪【名】〔基〕自己の意志・言行の怠によりて犯す罪。(原罪に對して)

じざい-あんぎょく 自在庵祇徳【名】〔人〕江戸の俳人。通稱は來藏。竹隱士・遲日園の別號あり。稻津祇空の門人。寶暦四年歿す。年六十四。

じざい-かぎ 自在鉤【名】竹筒に鉤形をなせる枝木を插入し、鉤の上に横木を置きて



(ぎかいざじ)

これを竹筒に結びつけ、その鉤に鍋・鐵瓶などを懸けて、爐上に下げ、自在に上下し得るやうに裝置したる鉤。じざい。俳諧新選(嘯山)「蜻蛉の四羽うちゆく自在かぎ」

じざい-がし じざい樫【名】〔植〕くぬぎ(櫟)に同じ。

しさい-がほ 子細顔・仔細顔【名】子細ありげなる顔。日本振袖始「鼻に鍬よせ仔細顔」

じざい-きちじょう 自在吉祥【名】〔佛〕自在の德を備へたる吉祥天女。盛衰記「自在吉祥の化現(ケゲン)」

しさい-くわ 芝菜科【名】〔植〕しばなくわ(芝菜科)に同じ。

じざい-ぐわ 自在畫【名】コンパス・定木等の器具を用ひず、手指のみにて描く畫。(用器畫に對して)

しさい-せうこんしや 私祭招魂社【名】政府の公認の下に、民間有志にて奉祀する招魂社。下附金なし。(官祭招魂社に對して)

じざい-だけ 自在竹【名】竹にて造りたる自在鉤。

しざい-ちやう 資財帳【名】古、寺にて、その資財を記入し、住持・檀家等相連署して、その保管の責任を明かにせし帳簿。類聚三代格「應レ停二定額寺資財帳進一官事」

しさい-づら 子細面・仔細面【名】しさいがほ(子細顔)を罵りていふ語。持統天皇歌軍法「物をも言はぬ子細づらは、心得ず」

じざい-てん 自在天【名】〔佛〕だいじざいてん(大自在天)を見よ。

しさい-に 仔細に・子細に【副】くはしく。詳かに。「に同じ。

じざい-に 自在煮【名】じざいもち(自在餅)

し-さいはう 刺細胞【名】〔動〕『英 Nematocyst 又 Nematophore』腔腸動物の皮膜中に存し、保護及び攻撃の用をなす一種の細胞。その中に蛛絲と毒汁とを有し、外部の刺戟により、刺絲を伸ばして、物を刺し、毒液を注入す。刺絲胞。毒絲胞。

じざい-もち 自在餅【名】『じんざいもち(神在餅)・ぜんざいもち(善哉餅)を見よ』搗きたての軟き餅に餡をつけたるもの。じざい

に。じさい。

しさいょもの 子細者・仔細者【名】■仔細のあるらしき人。■策略をめぐらすに巧なる人。「一くせありげなる人。一代玄人此の亭主子細者にて、數銀つく女房もよばず」

しさいらし 子細らし・仔細らし【形シク】■仔細あるが如し。■もったいらし。物めかし。分別あるらし。（岡城佛の原門外に、七十許の侍謹んで畏まる。やい、あの親父は子細らしい、訴訟ならば家老八郎左衛門にいへ」

しさいるゐ 四鰓類【名】〔動〕頭足類の一亜目。外套膜腔中に四箇の鰓を備ふるもの。多くは化石として存し、現存するは鸚鵡貝の類あるのみ。

しさう 思想【名】■心に思ひ浮ぶこと。かんがへ。■〔哲〕『獨 Gedanke 英 Thought』思惟の結果産出せられ、又は發見せられたるもの。

思想の原理【句】〔哲〕『英 Principles of thought』論理學にて、思想上、自明の原理とするもの。通常、自同律・矛盾（ムジュン）律・排中律の三を數ふ。思惟の原理。

思想の三法則【句】〔哲〕前條に同じ。

思想の流（ナガ）【句】〔哲〕『英 Stream of thought』個人の意識活動・意識生活の、時時刻刻に推移しながら、しかも相連續するを、河川の流に譬へたる語。亞米利加合衆國の哲學者ジェエムス（W. James）の唱導せしもの。

しさう 指爪【名】指のつめ。

しさう 歯槽【名】〔醫〕『羅 Alveoli』各歯根の相並びて候入する顎骨の窩（カ）。上顎にてはその歯槽突起に、下顎にてはその歯槽縁に存す。歯根膜及び歯齦と共に、直接に歯牙支持の組織たり。

しさう 芝草【名】■しばくさ。しば。■瑞草。靈草。

しさう 詩草【名】詩の草稿。詩稿。

しさう 死草【名】枯れたる草。

しさう 死相【名】■死にてある顔つき。しにがほ。■死ぬべき人相。

しさう 四草【名】生花にて、八つの嫌の一。草のみを四種生くること。「照。

しさう 四相【名】四種の相。次の各條參照。

しさう 四相【名】〔佛〕■外法（ゲホ）の四相に同じ。■人の一生に起る四種の相、即ち生・老・病・死。しく（四苦）はっさう（八相）參照。出世景迦「斯う申す景清は二相をさとり候へども、重忠は四相をさとる」

有爲の四相【句】〔佛〕云條に同じ。

有爲法（ウヰホ）の四相【句】〔佛〕「内法の四相」に同じ。

外法（ゲホ）の四相【句】〔佛〕しほふ（四劫）の四相に同じ。

しさう 四相【名】〔佛〕■外法（ゲホ）の一期（イチゴ）の四相【句】〔佛〕識境の四相【句】〔佛〕衆生が心識の對象たる萬象の虚假（ケ）なるを知らずして、妄に起せる四種の相、即ち我相・人相・自生相・壽命相の併稱。この四者は迷の根本にして、これを破すれば、即ち佛なり。

内法の四相【句】〔佛〕萬物の變化を示す四種の相、即ち生相・住相・異相・滅相の併稱。天地間の萬物、この四相に囚りて、生滅無常の姿を呈す。これを有爲法といひ、この四相を超越せるを無爲法といふ。無爲法は、即ち涅槃（ネハン）なり。

しさう 四三【名】■雙六にて、二箇の采の目に三と四の出づること。■花あはせの手役（テヤク）の一。同じ札四枚と同じ札三枚とが、同時に手札となるもの。

しさう 四葬【名】〔佛〕天竺に行はるる四種の葬法、即ち江河に投じて魚鼈に食はしむる葬と、薪を積みて焚く火葬と、岸傍に埋めて朽ちしむる土葬と、林野に曝して、禽獣に食はしむる林葬と。かんりん（薬林）■參照。

しさう 市葬【名】その市に功勞ありし人などを、市費にて葬ること。

しさう 詞藻【名】■言葉のあや。修辭上のかざり。文藻。辭藻。■詩歌又は文章。

しさう 志操【名】志の堅きこと。みさを。

しさう 宍粟【名】〔地〕播磨國十三郡の一。郡役所を山崎町に置く。古は「しさは」といへり。

しさう 歯相【名】歯牙にあらはるる人相。

しさう 死藏【名】徒に所藏するのみにて、使用せぬこと。「その物。

しさう 私藏【名】個人の所藏すること、又

しさう 四藏【名】〔佛〕經藏・律藏・論藏（以上を三藏といふ）・呪藏の四種の佛典。呪は陀羅尼（ダラニ）なり。「經。

じさう 時裝【名】流行のよそほひ。時勢

じさう 辭藻【名】しさう（詞藻）に同じ。

じさう 侍曹【名】じし（侍吏）に同じ。

じさう 兒曹【名】小兒のともがら。こどもたち。兒輩。

じさう 自葬【名】神佛式に依らず、自家にて勝手に執行ふ葬式。

じさう 事相【名】〔佛〕教理よりも、修行を主とすること。〔眞言宗の語〕

しさうか 思想家【名】思案に耽り、又は思想に富む人。

しさうかい 思想界【名】『英 Range of thoughts』思想の活動する範圍。

じさうき 示相器【名】『英 Phase indicator 又 Phasometer』電氣交流の位相を示す器。

しさうくわ 思想化【名】〔哲〕りさうくわ（理想化）に同じ。

しさうくわ 紫草科【名】〔植〕むらさきくわ（紫草科）に同じ。

しさうげき 思想劇【名】『佛 Dramedes Iles』遊戯的に看客の目先を樂しましむるよりも、一定の思想を傳達するを主とする演劇。文學上にも、智の要素を重んずるに至れる近代の產物にて、社會劇・問題劇などいふものも、殆ど同一のものなり。

しさう-しまく 歯槽歯膜【名】〔醫〕しこんまく（歯根膜）に同じ。

じさう-たうばん 児像蠶蟲【名】じたうばん（児蠶蛸）に同じ。

じさう-どうりつ 自相同律【名】〔哲〕じどうりつ（自同律）に同じ。

じさう-ふじゃう 自相不淨【名】〔佛〕五種の不淨の一。小兒には穢緣中にありて、その身臭く、老年には相好醜惡となり、又一身九穴を有して、常に不淨を排出する等の不淨。

しさう-りう 思想流【名】〔哲〕「思想の流」に同じ。

しさう-かんだんけい 示差寒暖計【名】『英 Differential thermometer』相近き二點の温度の差を示す器械。U字形をなしたる玻璃管の兩頭部に、同質の兩球を附し、管内には少量の液體を入れ、球狀部には空氣を保たしめたるもの。兩脚所在の温度相等しければ液面の高さ等しく、これを零度とし、兩者の温度相異なれば、高温度なる球の空氣膨脹して、液を低温度の方に押遣るにより、目盛によりて、温度の差を知ることを得。

しさく 思索【名】理路を辿りて、思想をめぐらすこと。考へ求むること。

しさく 紙索【名】こより。かんぜより。

しさく 支索【名】■支ふる索（ツナ）。■『英 Stay』帆船にて、帆檣を前方に維持する大索。

しさく 詩作【名】詩をつくること。さくもの。

しさく 試作【名】試みに作ること、又その作れるもの。

しさく 試策【名】支那の策四の一種。國家の命じたる試驗官の、時事に關する問題を出して、士を試み、士のこれに對ふるもの。（制策・進策に對して）

しさく 史策【名】『史は文書の義、策は冊に通じ、同じく文書の義』記錄。文書。

じさく 時策【名】その時世に處すべき雷策。

じさく 自作【名】■自ら作ること、又その物。てづくり。てせい。曾我虎が壓虎が自作の替唱歌」■自己の所有地を自ら耕作すること。（小作に對して）

しさくかく 視錯覺【名】〔哲〕『英 Optic Illusion』視覺に生ずる錯覺。錯視。

じさくさんえん-えき 次錯酸鉛液【名】〔化〕甘味ありて、無色・透明なる收斂性の液。醋酸鉛三と酸化鉛一とに蒸溜水を加へて製す。劇藥にて、腐蝕藥として、丹毒・打傷・火傷等に外用し、又、痲疾・白帶下の注射料に供す。

じさく-のう 自作農【名】自己の所有地を

自ら耕作する農業法、又その農夫。(小作農に對して)

し-さし 爲止【名】しさしたること。しかけ。釋迦如來誕生會「昨日の仕さしを仕舞はうとする」

じ-さし 字指【名】じづき(字突)に同じ。

し-さす 爲止す【動四他】なし果さずに、止めて置く。しのこす。中止す。宇治陰陽師、心えず仰天して、祓をしさして、これをいかにといふ」

し-さつ 視察【名】見とどくること。見きはむること。

し-さつ 伺察【名】伺ひ見ること。「狀。

し-さつ 使札【名】使者に持たせて遣す書さしころすこと。

し-さつ 刺殺【名】目上の人を殺すこと。

し-さつ 弑殺【名】しだすり(下刷)に同じ。

し-さつ 試刷【名】『周逸書に「四察:一、目察維極二、耳察維聲三、口察維言四、心察維念」とあるに本づく』目・耳・口・心の四にて察すること。

し-さつ 四察【名】「刹。

じ-さつ 寺刹【名】てら。じせつ。寺院。梵

じ-さつ 自殺【名】自ら死ぬること。引決。自害。(他殺に對して)

し-さつ-ばいばい 視察賣買【名】〔商〕しけんばいばい(試驗賣買)(二)に同じ。

じ-さつ-ほうじょざい 自殺幇助罪【名】〔法〕他人の自殺行爲に助力し、そのために自殺の目的を達せしめたるに依りて成立する罪。

し-さ-てんりうけい 示差電流計【名】さしでんりうけい(差示電流計)に同じ。

しさは 宍粟【名】〔地〕しさう(宍粟)を見よ。

し-ざま 爲樣【名】事を行ふさま。なしたるありさま。源氏「物のしざまなどぞ、きよらをつくしたまへりける」

し-さん 紙傘【名】紙にて貼りたるさしがさ。からかさ。

し-さん 死産【名】子の、死體となりて生ること。死胎を生むこと。

し-さん 私産【名】しいうざいさん(私有財産)に同じ。

し-さん 資産・貲産【名】(一)所得を蓄積したるもの。しんだい。財産。資財。財物。(二)〔經〕或者に屬する經濟上の財貨の總計。財産。(三)〔法〕或者に屬する金錢上の價格あるものの總稱。財産。(四)〔法〕民法にて、資本たる財産、又は資本としての力を有する財産。或事業に對し、資本として、その効力を發揮する財産。

し-さん 試鑽【名】『英 Boring』基礎工事を行ふ場合に、地質調査のために、地盤に小孔を貫鑿すること。

し-さん 試算【名】(一)試みに行ふ計算。かりに行ふ計算。(二)〔數〕けんさん(檢算)に同じ。

し-さん 齒算【名】年齒。よはひ。年齒。

し-さん 四散【名】四方に散亂すること。ちりぢりばらばら。「に同じ。

し-さん 子産【名】〔人〕こうそんけう(公孫僑)

し-ざん 雌山【名】產物の多き山。(雄山に對して)「山)を見よ。

し-ざん 芝山【名】〔人〕ごさうしざん(後藤芝山)を見よ。

し-ざん 茨山【名】上皇の居所。

じ-さん 自讚・自讃【名】(一)己れ自らほむること。自慢。著聞「あまりに學問をして、四季をだに知らぬやさしさといふさだにこそ乘りて候へ、と自讃しければ」(二)じぐわじん(自畫自讃)に同じ。

じざん 慈山【名】〔人〕高僧。比叡山天台宗安樂院の開山第一世。俗姓は和田、字は妙立。唯忍子と號す。美作國の人。元祿三年寂す。年五十四。

しさん-うりあげかんぢやうしよ 試算賣上勘定書【名】〔商〕委託販賣品として、或商品を積送らば、幾何の手取金を得べきかを豫知し、取引上の參考に供せんがために、問屋に請求して、假に計算作成せしむる勘定書。形式は、試算のために作れる旨を附記する以外、通常の賣上勘定書と異なる所なし。試算賣上計算書。豫算賣上計算書。

しさんうりあげ-けいさんしよ 試算賣上計算書【名】〔商〕前條に同じ。

しさん-おくりじやう 試算送狀【名】〔商〕商品を賣渡したりとせば、その仕切金は何程となるべきかを豫知し、取引上の參考に供せんがために、賣主に請求して、假に計算作成せしむる送狀。形式は、試算のために作れる旨を附記する以外、通常の試算送狀と異なる所なし。試算仕切書。豫算送狀。豫算仕切書。

じさん-か 自讚歌【名】(一)自らよしと思ふ歌。(二)〔書〕後鳥羽院・式子內親王・後京極攝政良經・大僧正慈圓・權大納言源通具・藤原俊成・俊成女・宮內卿・藤原有家・同定家・同家隆・源通光・同具親・藤原雅經・寂蓮・藤原秀能(ハヒデ)・西行の自讚の歌、十首づつを集めたるもの。一卷。選者詳ならず。

じさんか-あすかゐせう 自讚歌飛鳥井抄【名】〔書〕まづ自讚歌(二)の宗祇の註を記し、更に著者の註を加へたるもの。一卷。著者は、飛鳥井家とあるのみにて、詳ならず。

じさんか-くわんちゆう 自讚歌管註【名】〔書〕自讚歌(二)を註せるもの。一卷。空華庵惠南の著。

じさんか-せう 自讚歌抄【名】〔書〕自讚歌を註せるもの。一卷。東常緣(ネヨリン)の著。

じさんか-ちう 自讚歌註【名】〔書〕自讚歌(二)を註せるもの。一卷。宗祇法師の著。

しさん-かんぢやう 資產勘定【名】〔商〕簿記にて、金錢・家屋・貸附金等、金錢に見積り得る權利を總括する勘定。(負債勘定に對して)

しさんさんくわ-えん 四三酸化鉛【名】えんたん(鉛丹)に同じ。

しさんさんくわ-てつ 四三酸化鐵【名】〔鑛〕黑光の黑澤を有し、磁性を帶ぶる灰黑色・八面體の結晶物。天然に多量に產する、貴重なる鐵鑛。釜石鐵山より產するものの如きはこれにして、砂鐵は、その粒狀をなせるものなり。人工的には、鐵を酸素中に熱し、又は熱したる鐵屑上に、水蒸氣を通じて得。磁鐵鑛。

しさんさんくわなまり 四三酸化鉛【名】〔化〕えんたん(鉛丹)に同じ。

しさんさんくわ-まんがん 四三酸化滿俺【名】〔化〕酸化滿俺を大氣中にて灼熱して得る、赤褐色の粒子。酸化第一第二滿俺。

しさん-しきりしよ 試算仕切書【名】〔商〕しさんおくりじやう(試算送狀)に同じ。

し-さんじくわい 市參事會【名】市の合議制度の執行機關。市參事會員を以て組織し、市を代表して、市の行政を執行ず。

しさんじくわい-ゐん 市參事會員【名】市參事會を組織する吏員。市長・助役及び名譽職參事會員とす。

しさん-しやうしよ 死產證書【名】死產を證明する文書。

しさん-ぜい 資產稅【名】〔經〕ざいさんぜい(財產稅)に同じ。

しさん-の-ほし 四三星【名】〔天〕ほくせい(北斗星)を云ふ。〔東國の方言〕

しさんふさい-かんぢやう 資產負債勘定【名】〔商〕資產勘定と負債勘定との併稱。借方は資產を表はし、貸方は負債を表す。

しさんふさい-へう 資產負債表【名】〔商〕たいしやくたいせうへう(貸借對照表)に同じ。

しさん-へう 試算表【名】〔商〕簿記にて、仕譯帳より元帳への轉記の正否を試驗するため、元帳の各口座の貸借の各合計、或は殘高を記入せる表。この表の借方と貸方とは、必ず平均すべきものにて、もし平均せずば、誤謬あるためなり。

し-ざや 尻鞘【名】しりざや(尻鞘)の略。

じ-さり 字去【名】〔文〕連句における去(ヤ)の一種。同じ文字の句句に引續きて出づるを嫌ふこと。例へば、天象の月に十二箇の月、木枯に木の字などは、三句去にすべき類。「に同じ。

じさ-りつ 時差率【名】〔天〕じさ(時差)(二)に同じ。

し-さる 退る【動四自】しざる(退る)に同じ。太平記「北山やしさりしさりて殘る雪」

し-さる 爲さる【句】す(爲)の條下を見よ。

し-ざる 退る【動四自】『後(リ)去るの略轉』あともどりす。退く。蜻蛉集「みちのくの白川越えてひあひつしざるしざるも行けどはるけき」

し-さわぐ 爲騷ぐ【動四自】騷ぎて、事をなす。源氏「修法などしさわげど」

しし 尿・小便【名】小便。小用。しし。〔小供の語〕五人女「お子を清十郎にいだかせ、膝へししかけさせ」

しし 父【名】ちち(父)を云ふ。〔東國の古の方言〕萬葉「旅ゆきにゆくと知らずてあもししにこと申さずて今ぞくやしき」

しし 肉・宍【名】にく。ししむら。〔古語拾遺〕和名「肉、之之、肌膚之肉也」起「牛酒、シシサケ」

しし 獣【名】『前條の語の意より轉ぜしものならん』■けもの。けだもの。獣類。〔古語〕起「鳥獣、トリシシ」■〔動〕猪(イノシシ)又は鹿(シカ)の類。〔古語拾遺〕萬葉「あたたらのねにふすししのありつつもあれは到らむねとな去りそね」■しかり(獣狩)の略。曾我「馬の上、徒立(カチダチ)ならぶ人なし。ことにししの上手にて」

ししくひ 食った報(イヒ)【句】『猪・鹿は伊勢神宮にて忌みしによりていへる語かといふ』惡事をなしたる報。特に女色に祟りて、梅毒に罹るなどにいふ。蝦食うた報。〔諺語〕

ししこ 射ゆ鹿(シシ)を繋ぐ【句】射られて逃れし鹿の跡をもとめ行く。〔古語〕萬葉「いゆししをつなぐ河邊の若草の身のわかがへにされし子らはも」

ししし 指使【名】指圖して使ふこと。手指。

ししし 粢食【名】神にささぐる飯米。

ししば 四駟【名】しば(駟馬)に同じ。四駟も追ふ能はず【句】「駟馬も追ふ能はず」を見よ。

ししゅう 四師【名】華嚴宗にて、七祖以後の傳統者たる支那の子容・海源・義和・李通玄の四人の併稱。「七祖・四師」

ししょ 四子【名】■四人の子。■四番目の子。四男。■『小學紺珠に見ゆ』孔子・孟子・曾子・子思の四人の併稱。

ししょ 四子の書【句】〔書〕『大學は曾子の著と稱せられ、中庸は子思の著、孟子は孟軻の著、論語は孔子の言行を記せるものなるよりいふ』ししよ(四書)に同じ。

ししょ 士子【名】さむらひ。士人。

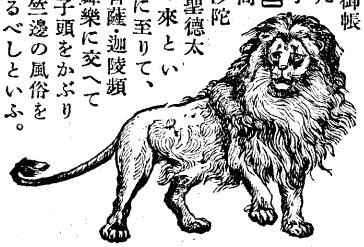
ししょ 死子【名】■死にたる子。■園墓にて、死にたる碁石。あげいし。

ししょう 嗣子【名】家督を相續すべき子。

ししょう 私子【名】ててなし子。私生兒。

ししょう 背子【名】くわっし(活嘴)に同じ。

ししょう 獅子【名】■〔動〕食肉類に屬する哺乳類動物。熱帶地方に産す。全身黃赭にて、長き頷毛を有し、頭大く、尾長く、四脚強く、脹圓く、腰細く、牡には鬣あり。性猛烈、百獣の王と稱せらる。からしし。らいおん。〔師子〕■こまいぬ(狛犬)〔一〕を見よ。禁秘抄「南殿御帳如レ恒、無二獅子帳一、有二獅子狛犬一」■雅樂の一。高麗樂にて、沙陀調に屬す。聖德太子の時の傳來といふ。平安朝に至りて、佛會の時、菩薩・迦陵頻(カリョウビン)等の舞樂に交へて奏せり。獅子頭をかぶりて舞ふ。天竺邊の風俗を移せるなるべしといふ。■しゃくけう(石橋)〔二〕の古稱。■能(ノウ)にて、諧謔、嘯子(シャ)のみにて、獅子舞を行ふもの。■ししまひ(獅子舞)の略。太平記「獅子・田樂を召され、日夜に舞ひうたはせ」■ししがしら(獅子頭)の略。



(二) し し

ししの 獅子身中の蟲【句】『梵網經に「如下獅子身中蟲、自食二獅子肉一、非中餘外蟲上、如レ是佛子自破二佛法一、非二外道・天魔能破壞一」とあり。獅子は、百獣の王とも云はれて、敵するものなければ、却りて、その身中に生ずる蟲のために、肉を食はるといふ意』內部より發する禍、また或人より恩義を蒙りながら、却りて、その人に害を與へんとする者の譬。假名手本忠臣藏「獅子身中の蟲とは已れがこと、我が君より高知をいただき、莫大の御恩を被りながら」出世景清「我慢愚痴の猿智慧を、獅子身中の蟲にたとへて」

ししの 獅子に鰭【句】「鬼に金棒」に同じ。〔諺語〕國姓爺後日合戰「獅子に鰭あるその姿、むかふ敵こそなかりけれ」

ししの 獅子に牡丹【句】配合よき物の譬。梅に鶯、竹に虎などの類。〔諺語〕出世景清「松にから竹、牡丹に獅子」

ししの 獅子の中の蟲【句】「獅子身中の蟲」に同じ。〔諺語〕野守鏡「獅子の中の蟲の獅子を食むに譬へき」

ししの 獅子の頭(カシラ)【句】ししがしら(獅子頭)に同じ。

ししの 獅子の狛【句】獅子の形に類せる狛犬。出世景清「山門には獅子の狛」

ししの 獅子の駒【句】獅子に駒のごとく乘ること。曾我會稽山「本地大聖文殊菩薩のししの駒、御手の如意は鞭となり」

ししの 獅子の座【句】ししざ(獅子座)に同じ。謡曲(石橋)「獅子の座にこそ直りけれ」

ししの 獅子の齒噛(ハガ)【句】怒り猛る狀のおそろしき形容。〔諺語〕太平記「いよいよ獅子の齒噛をして、降人(コウニン)に出でんと思ふ者はなかりけり」

ししの 獅子の丸(ガン)【句】獅子〔一〕の形を圓く畫きたる模様。平治「紺地に、色色の絲を以て、獅子の丸を縫ひたる直衣(ノウシ)」

ししの 獅子の丸の革(カワ)【句】獅子〔一〕の形を丸く染抜きて模様としたる革。

ししの 獅子の床(カマ)【句】〔佛〕ししざ(獅子座)に同じ。

ししの 獅子奮迅【句】『法華經の從地涌出品に「諸佛師子奮迅之力」、大盤若經に「師子王自在奮迅」、大智度論に「譬如二獅子奮迅大吼一などあり』猛進する動作の譬。

ししの 金毛(モウ)の獅子【句】〔佛〕毛色の黃金色をなせる獅子。文殊菩薩これに乘るといひ、また釋迦、因位の時、この物に身を變じて、獵師のために、身を捨てたりと傳へらる。

ししの 四肢・四支【名】兩手と兩足と、又は「じ。前肢と後肢との併稱。

ししの 四肢の張身(ハリミ)【句】てよう(手四)に同じ。

ししの 四至【名】四方のさかひ。續紀「以二四至別爲二一院一置二僧一口一」

ししの 四始【名】『歲の始、時の始、日の始、月の始の義』ぐわんじつ(元日)の異稱。さんし(三始)〔二〕參照。

ししの 四詩【名】〔文〕■詩經に載せる四種の詩體。國風・大雅・小雅・頌。■支那前漢の學者なる齊人轅固生・燕人韓嬰・魯人申培・魯人毛亨の傳へたる四派の詩。即ち轅固生の傳へたる齊詩、申培の傳へたる魯詩、韓嬰の傳へたる韓詩、毛亨の傳へたる毛詩の總稱。まうし(毛詩)參照。

ししの 志士【名】己れを犧牲にして、國家又は世道のために盡さんとする志を有する者。「けの勇士。

ししの 死士【名】死を決して戰ふ士。命がけの勇士。

ししの 始士【名】〔佛〕『始めて發心する者の意』ぼさつ(菩薩)〔二〕に同じ。

ししの 死屍【名】しかばね。かばね。死體。死骸。

死屍を鞭つ【句】『支那にて、伍子胥が、父兄の讐を復すとて、楚の莊王の屍を鞭ちし故事』■深き怨を報う。■死したる人の言行を批難す。

ししの 刺史【名】■『秦・漢の代、監察御史ありて、三輔及び郡治を察せしが、文帝の時、御史に不法の事ありしため、丞相史を置きて州を分刺し、併はせて御史を監督し、武帝の時、初めて部刺史置かれ、詔を奉じて、十二州の州治を監察し、成帝以後或は州牧といひ、或は刺史といひ、後漢以後、專ら刺史を以て呼ぶに至れり。刺は周禮に「司刺掌三三刺一一訊二群吏一、二訊二群臣一、三訊二萬民一」とありて、訊(ト)ふ義』支那にて、前漢以後唐代に亙りて、州を監せし官。郡守。大守。■こくしゅ(國守)の唐名。

ししの 史史【名】〔書〕『史記を馬史(司馬遷の著はしたる歷史)と稱する等に倣ひ、紫式部の著なるによりていふ』けんじものがたり(源氏物語)の異稱。

ししの 紫芝【名】紫色の萬年茸(マンネンタケ)。

ししの 私資【名】自分の資產。私財。自資。

ししの 師資【名】『師は道を傳ふる者、資は學を師に資(ト)る者の義』してい(師弟)に同じ。

師資相承(ソウショウ)【句】道を、師より弟子へ、次第に傳ふること。娘歌加留多「おもを乙ねわ ろれるりら よゆや もめむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

へば、父はわが師なり。師資相承のこの三衣」

しゝ 恣肆【名】 ほしいままにして、おごれること。專肆。

しゝ 市肆【名】 市街にある店。市店。

しゝ 史詩【名】〔文〕『獨 Histisches epik』敍事詩の一。歷史上の事實に基きて作るもの。

しゝ 私積【名】 一個人の貯蓄。私人のたくはへ。

しゝ 詞姿【名】〔文〕『英 Figures of speech』單純に思想を表現するに止らず、その文章をして、神彩あらしむるために、思想・結構の上に施す文飾。詞品。辭藻。詞藻。詞態。

しゝ 詩思【名】 しじやう(詩情)に同じ。

しゝ 子史【名】 諸子と歷史との書籍。し(四庫)參照。

しし 子思【名】〔人〕支那戰國時代の學者。孔子の孫。伯魚の子。名は伋。子思はその字。曾子の門人。孟子の師。衞に事へ、のち退きて中庸を作り、年六十二にして歿す。

ししゝ 偲偲【副】『論語の子路篇に「朋友切切偲偲」とあり』つとめはげむさま。勉强するさま。

しゝ 施施【副】『詩經の王風丘中有麻篇に「其來施施」とあり』進まんとして進みがたきさま。『孟子の離婁下篇に「施施後ノ外來、驕ル其妻妾」とあり』喜悅のさま。いそいそ。「ま。

しゝ 攻攻・孳孳【副】 つとめて倦まざるさま。

しゝ【感】 前駈のかげごゑ。警蹕(ケイヒツ)の聲。喧しきを制し禁むる時に發する聲。

しゝ 四四【數】 四と四とを掛合はすること、卽ち十六。黃金の、曲尺一寸立方にて、重量一百六十匁なるもの。卽ち純淸にして、品位の最上なるもの。一說に、昔、百匁の黃金を晝夜燒きつめて純淸ならしめしに、四十匁に至りしより、四十四匁の位とも、四四の位ともいへるなりと。「四四の金(キン)」

しゝ【名】 小供の陰莖。新撰狂歌「女院の御まへの廣くなることは敎月坊がしじの入るゆゑ」女子の陰部。〔伊豆國の方言〕

しじ【名】『貌詞のしじを見よ』草木の生繁れる處。〔古語〕萬葉「二上のをのへのしじにこもりにししはほとどぎすいまだ來鳴かず」

しじ 進士【名】 しん(進士)に同じ。參考 學生(ガクシヤウ)ども、御前四人、すさいふたり、しじふたり」

しゝ 四時【名】 春・夏・秋・冬の併稱。四季。しいじ。一晝夜の中の晦・朔・弦・望・夜の併稱。さんじ(三時/一)にじ(二時)參照。四〔佛〕一日の中の早晨・晡時・黃昏・後夜の併稱。さんじ(三時)ろくじ(六時)參照。「四時の坐禪」「四時の勤(ツトメ)」

しじ 四事【名】〔佛〕四種の供養の方法、卽ち房舍・衣服・飮食・湯藥。

しじ 師事【名】 師と崇めて仕ふること。

しじ 子事【名】 親に對する子の如くに仕ふること。

しじ 私事【名】 自身一個又は自分の一家に關したる事柄。うちむき。(公事に對して) 盛衰記「朝家の重事をこそ大事とは申せ、これは私事なり」秘密の事柄。

しゝ 至事【名】 至極の事がら。

しゝ 指事【名】 漢字の六書(リクショ)の一。一定の形なきものを、その位置又は數量に本づきて、符標にて表示するもの。例へば、「一」「二」「三」「三四の古字」・「二上の古字」・「二下の古字」・「四」・「凸」の類。

しゝ 四耳【名】〔植〕四箇の耳狀をなして淺く分裂する形。例へば紫蘇の子房及び果實に於けるがごとし。

しじ【貌】『名詞のしじを見よ』草木などの生繁れるさま。〔古語〕萬葉「ありその上に打靡きしじに生ひたるなのりそも」度數の重なるさま。〔古語〕萬葉「大船にまかぢしじぬき海原を漕出て渡る月ひと男」

じゝ 寺司【名】 上古、寺院の監督を掌りし役所。我が國における佛法に關する官衙の最初のものにて、推古天皇の三十二年始めて設置せられ、長官を法頭といひ、阿曇(アヅミ)連これに任ぜられたり。

じゝ 耳屎【名】 みみくそ。みみあか。

じゝ 貳志【名】 ふたごころ。二心。

じゝ 自資【名】 自己の資本。私資。

じゝ 自恣【名】 みづからの精神と肉體とを放縱にすること。〔自肆〕

じ【佛】『梵 Pavāraṇā(鉢剌婆剌拏)の譯語。恣に己が犯せる罪を擧ぐる意にて、新譯に、了隨意といふも同一の意』夏安居(ゲアン)の終りたる時、會集の僧が、互に自己の罪過を懺悔・告白して、他の僧より訓戒を受くること。また夏安居の最終の日を自恣日といふ。隨意。公事根源「七月十五日に自恣の僧を供養せば、解脫を得んと說きたまひし由、孟蘭盆經に見えたり」

じゝ 字子【名】〔語〕支那の音韻學にて、字母以外のすべての文字。(字母に對して)

じゝ 兒子【名】 こども。小兒。

じゝ 次子【名】 二番目の子。

じゝ 侍子【名】 じじ(侍兒)に同じ。

じゝ 侍史【名】〔傍に侍る書役(カキヤク)。祕書。右筆。手紙の脇附(ワキヅケ)として、先方の人に直接にあてぬ意を示すために用ふる語。侍曹。

じゝ 璽至【名】 私年號の一。應神天皇の年號なる由、舊事大成本紀に見ゆれど、後世の僞作なりといふ。

じゝ 慈氏【名】〔佛〕『梵 Maitreya(梅垣麗耶、卽ち彌勒)は慈の意なるよりいふ』みろく(彌勒)(ミ)に同じ。平家「慈氏の化生(ケシヤウ)を待つ」「對して」

じゝ 慈子【名】〔佛〕彌勒の弟子。(釋子に對して)

じゝ 自寺【名】 わが寺。おのが寺。(他寺に對して)

じゝ 事事【名】 この事。かの事。あらゆる事。

じゝ 事事物物【句】『事物・事物の義』すべての事物。

じゝ 時事【名】 當時の世事。

じゝ 侍兒【名】 貴人の傍に侍りして、小用などを辨ずる小供。こまがかひ。侍童。

じゝ 時時【名】 ときどき。をりをり。

じゝ 爾時【副】 その時。

じゝ【貌】 蟬などの啼聲。「じ。

じゝあし しし足【名】 だくあし(跑足)に同じ。

ししあし【名】〔植〕しゆろさう(棕櫚草)に同じ。

ししあな 猪穴・鹿穴・獸穴【名】 獸をおとしいるる穴。〔古語〕紀「穿、シシアナ」

ししあひ 肉合【名】『にくあひ(肉合)に同じ。參考 我曾祖山「ほう、むっちりと、抱心地よい甘さうな肉合」盛りたる肉の上を研出したる高蒔繪。卽ち高蒔繪と研出蒔繪とを結合したる蒔繪。蒔繪中、手數を要すること頗る多く、その製作殊に困難なり。

ししあひぼり 肉合彫【名】 うすきぼり(薄淺彫)に同じ。

ししあん 獅子庵【名】〔人〕かがみしかう(各務支考)の屋號。

ししあんろげん 獅子庵盧元【名】〔人〕ろげんばう(盧元坊)を見よ。

ししあらひ 鹿砦【名】 ししやひ(鹿砦)の轉訛。

ししいち 肉市【名】 鳥獸の肉を商ふ市。〔古語〕

ししいでん 紫宸殿【名】 ししんでん(紫宸殿)に同じ。

ししぬひ 刺繡【名】『刺は針にて縫ふ、繡は衣に采を施すをいふ』針に絲を通じて、布帛を表と裏とより刺し、その表又は裏兩面に、その絲にて、綺紋又は模樣をあらはすこと。ぬひ。縫取(ヌヒトリ)。

ししば 死囚【名】 死罪に行ふべき囚徒。

ししばい 私離【名】 一個人のあだ。私のかたき。盛衰記「兵衞の佐宣ひけるは、趙武擧するに、私讎を以てし、祈奏鷹むるに、己が子を以てせり」

ししまう 四洲【名】『四つの洲。』『梵 catuṛdvīpa の譯語』〔佛〕須彌山(シユミセン)の四方にある大洲、卽ち南贍部(ナンセンブ)洲・東勝身(トウシヨウシン)洲・西牛貨(サイゴケ)洲・北鞞盧(ホクビロ)洲の併稱。四大洲。謠曲(楊貴妃)「須彌の四州のさまざまに、北州の千年つひに朽ちぬ」

ししま 志州【名】〔地〕しま(志摩)に同じ。

ししむら 四獸【名】『朱書の符瑞志に出づ』虎・豹・熊・羆の四つの獸の總稱。『小學紺珠に見ゆ』朱鳥・玄武・靑龍・白虎の總稱。四神。

ししむら【名】〔動〕あゆなめ(鮎並)を云ふ。〔佐渡國の方言〕

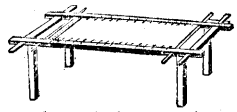
ししむら 時差【名】 その時節の食物。

ししむら 自修【名】 自ら修むること。

じしょうじかん 自修時間【名】自修に充つる時間。

じしょうしょ 自修書【名】自修に充つる書籍。ひとりまなび。獨學書。獨案内。

ししょうだい 刺繍臺【名】刺繍すべき切地を張るに用ふる臺。木製にて、長方形をなすを普通とす。一に、縫臺ともいふ。



（ししうだい）

じじょうでん 仁壽殿【名】じじゅうでん(仁壽殿)に同じ。

ししょうご 獨活【名】〔植〕いぬさど(犬獨活)に同じ。

ししょうを ししうを 鹿【名】〔動〕あゆなめ(鮎並)に同じ。

ししらえびら 鹿簏【名】かりやなびら(狩胡籙)に同じ。

ししらおき 肉置【名】肉附の有樣。肥瘦の工合。にくづき。一代女「裸身のししおき、女は美しき肌を白地になし」

ししらかがまる 蹙る【動四自】『蹙(ジ)み屈(カガ)まるの略』ちぢむ(蹙む)に同じ。

ししらがき 猪垣、鹿垣【名】竹木の枝にて粗く結べる垣。太平記「嶮岨に鹿垣を結ひ、要害逆木を引いて」

ししらがくれゆり 鹿隱百合【名】〔植〕うばゆり(姥百合)に同じ。

ししらがしら 獅子頭【名】■木にて、獅子の頭に擬して作りたるもの。後方に長き布を添へて、體軀に擬し、獅子舞に用ふ。日本武尊吾妻鑑、白木綿かけし唐櫃に、泰山魔軍の獅子頭、皆一樣の花笠著つれ打ちつれ荷ひつれ」■ししまひ(獅子舞)に同じ。增鏡「田樂、獅子頭・やぶさめなど、さまざま所にしつけたる事どもおもしろし」■児の、獅噛(シガ)を眉庇(マビサシ)としたるもの。太平記「獅子頭の冑に、目の下の頬當して」四【動】金魚の一品種。頭上に肉の疣起を生じて、頭部に物を頂けるが如く、體肥大にして圓く、尾は通常分裂して、下方に彎曲す。五【植】水龍骨(スヘラシダ)科に屬する多年生の有毒草。山地に自生し、又觀賞用として、園藝せらる。葉は根莖より叢生し、羽狀に細かく分裂す。

ししらがれ 獅子舞【名】〔動〕ししまひ(獅子舞)に同じ。

ししらがれゆり 鹿隱百合【名】〔植〕うばゆり(姥百合)に同じ。

ししらがれゆり 鹿隱百合【名】〔植〕うばゆり(姥百合)に同じ。

ししらえびら 鹿簏【名】かりやなびら(狩胡籙)に同じ。

ししらおき 肉置【名】肉附の有樣。肥瘦の工合。にくづき。一代女「裸身のししおき、女は美しき肌を白地になし」

ししらかがまる 蹙る【動四自】『蹙(ジ)み屈(カガ)まるの略』ちぢむ(蹙む)に同じ。

ししらがき 猪垣、鹿垣【名】竹木の枝にて粗く結べる垣。太平記「嶮岨に鹿垣を結ひ、要害逆木を引いて」

ししらがくれゆり 鹿隱百合【名】〔植〕うばゆり(姥百合)に同じ。

ししらがしら 獅子頭【名】■木にて、獅子の頭に擬して作りたるもの。後方に長き布を添へて、體軀に擬し、獅子舞に用ふ。日本武尊吾妻鑑、白木綿かけし唐櫃に、泰山魔軍の獅子頭、皆一樣の花笠著つれ打ちつれ荷ひつれ」■ししまひ(獅子舞)に同じ。增鏡「田樂、獅子頭・やぶさめなど、さまざま所にしつけたる事どもおもしろし」■児の、獅噛(シガ)を眉庇(マビサシ)としたるもの。太平記「獅子頭の冑に、目の下の頬當して」四【動】金魚の一品種。頭上に肉の疣起を生じて、頭部に物を頂けるが如く、體肥大にして圓く、尾は通常分裂して、下方に彎曲す。五【植】水龍骨(スヘラシダ)科に屬する多年生の有毒草。山地に自生し、又觀賞用として、園藝せらる。葉は根莖より叢生し、羽狀に細かく分裂す。

ししーがーたに 鹿谷【名】〔地〕京都市上京區洛東淨土寺町と南禪寺町との間に在る町。如意ケ嶽の西麓。古は山東三井寺より續きたる城郭なりきといふ。俊寛僧都が藤原成親・僧西光等を會同して、平家を滅さんと圖りし山莊のありし處。その山莊跡の地、今は談合ケ谷といふ。

ししーがたにーたろなす 鹿谷南瓜【名】〔植〕さいきやうとうなす(西京南瓜)に同じ。

ししーかまる 蹙る【動四他】『ししじかまる(蹙る)の略』ちぢむ(縮む)に同じ。著聞「この時、くちなはえよらで、ししかまりたり」

ししーかむ 蹙む【動四自】『蹙(ジ)み屈(カガ)むの略』ちぢむ(縮む)に同じ。杜「ししかみたる髪に、簪附けたる」

ししーからし【形ク】 むごし。殘酷なり。〔古語〕名護屋「醜、シシカラシ」

ししーがり 獣狩【名】獸を狩取ること。

ししーがり 猪狩【名】猪を狩取ること。

ししーき 四職【名】左京職・右京職・大膳職・修理(シュリ)職の併稱。ししょく(四職)參照。

ししき 【名】〔植〕ひじき(鹿尾菜)の訛。

じーしき 自識【名】〔哲〕じいしき(自意識)に同じ。

ししーじき 四食【名】〔佛〕『毘羅三昧經に出づ』釋迦が法慧菩薩のために說きたりといふ、食事を取る四つの時。一に、旦時(ジ)即ち曉は、諸天の食事する時にて、天食といひ、二に、午時即ち正午のは、佛及び僧の食事する時にて、法食といひ、三に、午後は寄生の食物、四に、夜は鬼類の食時とせらるるもの。

ししきーたくぼく 四色啄木【名】鎧の縅(オドシ)方の一。啄木縅の一種。紺・白・朽黃・紫の四色を取合はせて縅したるもの。

ししきゆう 獅子宮【名】〔天〕黃道の十二宮の一。獅子座。

ししぎる ししきる 【動四他】しきりに切る。きりに切る。信濃奇原蛙合戰「一世の大事と、噛切り噛切り、しし切る念力」平家女護島「三刀・四刀しし切る引切る、首切って立上れば」

ししーく 獅子吼・師子吼【名】〔佛〕『梵Siṃhanāda の譯語。獅子吼ゆれば、百獸の怖ぢ懼くるるより譬へていふ』■釋迦の說法によりて、惡魔・外道(ゲダ)の怖れ伏すこと。太平記「ともに、これ獅子吼・無畏の說にあらずといふことなし」■邪道・異端を排撃して、眞理・正道を發揮すること。

ししーこく 獅子國・師子國【名】〔地〕『梵Siṃhala(僧伽羅)の譯語。Siṃha(獅子の義)はその發見者』今の印度錫蘭(セイロン)島の古稱。執師子(シッシ)國。盛衰記「獅子國の餓鬼は、恒伽河(ガンヂス)の、七度山となり、海となるまで、飲食(オンジキ)の名を聞かず」

じじーこくこく 時時刻刻【副】『時刻・時刻の義』時を追ひて次第に。

ししーこつ 四肢骨【名】〔醫〕『羅Ossa extremitatum』上下兩肢の諸骨の總稱。

ししこらかす【動四他】 病を直しそこなふ。病を療せんとして、却りて重くす。しこじらす。〔古語〕源氏「ししこらかしつる時は、うたて侍るを」

ししざ 獅子座、師子座【名】〔佛〕■『梵Siṃhāsana の譯語。大智度論に「是號師子、非實師子也、佛爲人中師子、佛所坐處、或床、或地、皆名師子座」如三今者國王坐處亦名師子座」とあり』釋迦如來の座席。猊座(ゲイザ)。猊床。獅子座。獅子の床(トコ)。■高僧の座席。猊床。猊座。獅子の座。獅子の床(トコ)。しさゆう(獅子宮)に同じ。**ししか(猊下)**參照。■〔天〕しさゆう(獅子宮)に同じ。

ししさき 鼈先【名】鷹の嘴の一部。

ししさん 四時散【名】古の散藥の一。和名散藥四時散」

ししざる 獅子猿【名】〔動〕『英Milae』鉤爪猿類の一種。長き頷毛(ゲヒ)を有し、尾は長く、外觀獅子に似、蟲類・鳥卵・果實等を食す。南米に產す。

ししじま 獅子島【名】〔地〕薩摩國の西北方にある島。周回八里二十町餘。出水(イヅミ)郡東長島村に屬し、同郡長島の北に位す。

ししーしんきん 示指伸筋【名】〔醫〕『羅Musculus extensor digiti indicis』尺骨の示指の背側筋膜にかけて、その薄き膜を以て移行する、三角形の小さき筋肉。

ししじーもの 鹿自物・獸自物【枕】『しもの

ししーがーたに 鹿谷【名】〔地〕京都市上京區洛東淨土寺町と南禪寺町との間に在る町。如意ケ嶽の西麓。古は山東三井寺より續きたる城郭なりきといふ。俊寛僧都が藤原成親・僧西光等を會同して、平家を滅さんと圖りし山莊のありし處。その山莊跡の地、今は談合ケ谷といふ。

ししがたにーたろなす 鹿谷南瓜【名】〔植〕さいきやうとうなす(西京南瓜)に同じ。

ししーかまる 蹙る【動四他】『ししじかまる(蹙る)の略』ちぢむ(縮む)に同じ。著聞「この時、くちなはえよらで、ししかまりたり」

ししーかむ 蹙む【動四自】『蹙(ジ)み屈(カガ)むの略』ちぢむ(縮む)に同じ。杜「ししかみたる髪に、簪附けたる」

ししーからし【形ク】 むごし。殘酷なり。〔古語〕名護屋「醜、シシカラシ」

ししーがり 獣狩【名】獸を狩取ること。

ししーがり 猪狩【名】猪を狩取ること。

ししーき 四職【名】左京職・右京職・大膳職・修理(シュリ)職の併稱。ししょく(四職)參照。

ししき 【名】〔植〕ひじき(鹿尾菜)の訛。

じーしき 自識【名】〔哲〕じいしき(自意識)に同じ。

ししーじき 四食【名】〔佛〕『毘羅三昧經に出づ』釋迦が法慧菩薩のために說きたりといふ、食事を取る四つの時。一に、旦時(ジ)即ち曉は、諸天の食事する時にて、天食といひ、二に、午時即ち正午のは、佛及び僧の食事する時にて、法食といひ、三に、午後は寄生の食物、四に、夜は鬼類の食時とせらるるもの。

ししきーたくぼく 四色啄木【名】鎧の縅(オドシ)方の一。啄木縅の一種。紺・白・朽黃・紫の四色を取合はせて縅したるもの。

ししきゆう 獅子宮【名】〔天〕黃道の十二宮の一。獅子座。

ししぎる ししきる 【動四他】しきりに切る。きりに切る。信濃奇原蛙合戰「一世の大事と、噛切り噛切り、しし切る念力」平家女護島「三刀・四刀しし切る引切る、首切って立上れば」

ししーく 獅子吼・師子吼【名】〔佛〕『梵Siṃhanāda の譯語。獅子吼ゆれば、百獸の怖ぢ懼くるるより譬へていふ』■釋迦の說法によりて、惡魔・外道(ゲダ)の怖れ伏すこと。太平記「ともに、これ獅子吼・無畏の說にあらずといふことなし」■邪道・異端を排撃して、眞理・正道を發揮すること。

ししーこく 獅子國・師子國【名】〔地〕『梵Siṃhala(僧伽羅)の譯語。Siṃha(獅子の義)はその發見者』今の印度錫蘭(セイロン)島の古稱。執師子(シッシ)國。盛衰記「獅子國の餓鬼は、恒伽河(ガンヂス)の、七度山となり、海となるまで、飲食(オンジキ)の名を聞かず」

じじーこくこく 時時刻刻【副】『時刻・時刻の義』時を追ひて次第に。

ししーこつ 四肢骨【名】〔醫〕『羅Ossa extremitatum』上下兩肢の諸骨の總稱。

ししこらかす【動四他】 病を直しそこなふ。病を療せんとして、却りて重くす。しこじらす。〔古語〕源氏「ししこらかしつる時は、うたて侍るを」

ししざ 獅子座、師子座【名】〔佛〕■『梵Siṃhāsana の譯語。大智度論に「是號師子、非實師子也、佛爲人中師子、佛所坐處、或床、或地、皆名師子座」如三今者國王坐處亦名師子座」とあり』釋迦如來の座席。猊座(ゲイザ)。猊床。獅子座。獅子の床(トコ)。■高僧の座席。猊床。猊座。獅子の座。獅子の床(トコ)。しさゆう(獅子宮)に同じ。**ししか(猊下)**參照。■〔天〕しさゆう(獅子宮)に同じ。

ししさき 鼈先【名】鷹の嘴の一部。

ししさん 四時散【名】古の散藥の一。和名散藥四時散」

ししざる 獅子猿【名】〔動〕『英Milae』鉤爪猿類の一種。長き頷毛(ゲヒ)を有し、尾は長く、外觀獅子に似、蟲類・鳥卵・果實等を食す。南米に產す。

ししじま 獅子島【名】〔地〕薩摩國の西北方にある島。周回八里二十町餘。出水(イヅミ)郡東長島村に屬し、同郡長島の北に位す。

ししーしんきん 示指伸筋【名】〔醫〕『羅Musculus extensor digiti indicis』尺骨の示指の背側筋膜にかけて、その薄き膜を以て移行する、三角形の小さき筋肉。

ししじーもの 鹿自物・獸自物【枕】『しもの

Pāli の譯語。獅子吼ゆれば、百獸の怖ぢ懼くるるより譬へていふ』■釋迦の說法によりて、惡魔・外道(ゲダ)の怖れ伏すこと。太平記「ともに、これ獅子吼・無畏の說にあらずといふことなし」■邪道・異端を排撃して、眞理・正道を發揮すること。

ししーこく 獅子國・師子國【名】〔地〕『梵Siṃhala(僧伽羅)の譯語。Siṃha(獅子の義)はその發見者』今の印度錫蘭(セイロン)島の古稱。執師子(シッシ)國。盛衰記「獅子國の餓鬼は、恒伽河(ガンヂス)の、七度山となり、海となるまで、飲食(オンジキ)の名を聞かず」

じじーこくこく 時時刻刻【副】『時刻・時刻の義』時を追ひて次第に。

ししーこつ 四肢骨【名】〔醫〕『羅Ossa extremitatum』上下兩肢の諸骨の總稱。

ししこらかす【動四他】 病を直しそこなふ。病を療せんとして、却りて重くす。しこじらす。〔古語〕源氏「ししこらかしつる時は、うたて侍るを」

ししざ 獅子座、師子座【名】〔佛〕■『梵Siṃhāsana の譯語。大智度論に「是號師子、非實師子也、佛爲人中師子、佛所坐處、或床、或地、皆名師子座」如三今者國王坐處亦名師子座」とあり』釋迦如來の座席。猊座(ゲイザ)。猊床。獅子座。獅子の床(トコ)。■高僧の座席。猊床。猊座。獅子の座。獅子の床(トコ)。しさゆう(獅子宮)に同じ。**ししか(猊下)**參照。■〔天〕しさゆう(獅子宮)に同じ。

ししさき 鼈先【名】鷹の嘴の一部。

ししさん 四時散【名】古の散藥の一。和名散藥四時散」

ししざる 獅子猿【名】〔動〕『英Milae』鉤爪猿類の一種。長き頷毛(ゲヒ)を有し、尾は長く、外觀獅子に似、蟲類・鳥卵・果實等を食す。南米に產す。

ししじま 獅子島【名】〔地〕薩摩國の西北方にある島。周回八里二十町餘。出水(イヅミ)郡東長島村に屬し、同郡長島の北に位す。

ししーしんきん 示指伸筋【名】〔醫〕『羅Musculus extensor digiti indicis』尺骨の示指の背側筋膜にかけて、その薄き膜を以て移行する、三角形の小さき筋肉。

ししじーもの 鹿自物・獸自物【枕】『しもの

ししけふーわう 師子頬王【名】〔人〕『梵Siṃhahanu の譯語』古の印度の王。迦毘羅(カビ)城主。淨飯(ジョウボン)王の父、釋迦の祖父。釋迦如來誕生會、民主王より八萬餘代、師子頬王の御子淨飯大王と申すなり」

ししこく 獅子國・師子國【名】〔地〕『梵Siṃhala(僧伽羅)の譯語、Siṃha(獅子の義)はその發見者』今の印度錫蘭(セイロン)島の古稱。執師子(シッシ)國。盛衰記「獅子國の餓鬼は、恒伽河(ガンヂス)の、七度山となり、海となるまで、飲食(オンジキ)の名を聞かず」

じじーこくこく 時時刻刻【副】『時刻・時刻の義』時を追ひて次第に。

ししこつ 四肢骨【名】〔醫〕『羅Ossa extremitatum』上下兩肢の諸骨の總稱。

ししこらかす【動四他】 病を直しそこなふ。病を療せんとして、却りて重くす。しこじらす。〔古語〕源氏「ししこらかしつる時は、うたて侍るを」

ししざ 獅子座、師子座【名】〔佛〕■『梵Siṃhāsana の譯語。大智度論に「是號師子、非實師子也、佛爲人中師子、佛所坐處、或床、或地、皆名師子座」如三今者國王坐處亦名師子座」とあり』釋迦如來の座席。猊座(ゲイザ)。猊床。獅子座。獅子の床(トコ)。■高僧の座席。猊床。猊座。獅子の座。獅子の床(トコ)。しさゆう(獅子宮)に同じ。**ししか(猊下)**參照。■〔天〕しさゆう(獅子宮)に同じ。

ししさき 鼈先【名】鷹の嘴の一部。

ししさん 四時散【名】古の散藥の一。和名散藥四時散」

ししざる 獅子猿【名】〔動〕『英Milae』鉤爪猿類の一種。長き頷毛(ゲヒ)を有し、尾は長く、外觀獅子に似、蟲類・鳥卵・果實等を食す。南米に產す。

ししじま 獅子島【名】〔地〕薩摩國の西北方にある島。周回八里二十町餘。出水(イヅミ)郡東長島村に屬し、同郡長島の北に位す。

ししーしんきん 示指伸筋【名】〔醫〕『羅Musculus extensor digiti indicis』尺骨の示指の背側筋膜にかけて、その薄き膜を以て移行する、三角形の小さき筋肉。

ししじーもの 鹿自物・獸自物【枕】『しもの

(じ物)を見よ』■鹿といふものの如くといふ意にて、鹿は膝を折りて伏すより、ひざをる(膝折る)・はふ(這ふ)にかけていふ。萬葉「ししじもの膝折伏せたわやめのおすひとりかけ」同「ししじものいはひもとほり」■鹿を捕るには、弓矢を用ふるより、ゆみや(弓矢)にかけていふ。萬葉「ししじものゆみやかくみて大君のみことかしこみ」■猪(シヽ)の水に潰(ヤン)隠るといふ意にて、みづくこもり(水隠)にかけていふ。紀「ならのはさまにししじものみづくへこもり」

じゞじゆう 次侍從【名】■正員の侍從の外に、八省その他の諸官より、四位五位の中にて、年勞ある者の選任せられ、殿上を許されて、御前に候し、雜事を辨ぜし者。■宮内省の職員。宮中に交番宿直し、行幸の時、左右に分衞したるもの。明治三年に置かれ、翌年廢せらる。■侍從職の定員中よりこれに補し、侍從を助くる奏任官。

ししせいくわ 子史精華【名】〔書〕清の張廷玉等、康熙帝の命を奉じて撰す。子史二部の中より、名言・佳句を三十類に分ちて採錄し、各條下に分註ありて、首尾を詳にせり。百六十卷。

じしそん 慈氏尊【名】〔佛〕『じし(慈氏)』を見よ』**みろく**(彌勒)(ミ)の敬稱。盧舍那等覺補處(ショ)の慈氏尊、因圓の月滿ちなんとす」

ししそんじや 獅子尊者【名】〔人〕『梵 Siṁha bhikṣu の譯語』古の印度の高僧。釋迦滅後の傳法第二十三祖。

ししそんそん 子子孫孫【句】『子孫子孫の義』子孫のするずる。子孫代代。

ししだ 猪田・獸田【名】猪鹿などの踏荒したる田。〔古語〕萬葉「あらき田のししだの稻を倉につみてあなうたうたし我が戀ふらくは」

ししだいめいし 指示代名詞【名】〔語〕『英 Demonstrative pronoun』事物・場所・方位等を指し示すに用ふる代名詞。近稱・中稱・遠稱・不定稱の區別あり。各條を見よ。

ししたらがらし 猪唐辛【名】〔植〕茄(ナス)科に屬する一年生の草。唐辛に類し、果實は短小にして紅色、食用に供せらる。

ししたけ 猪茸・茅蕈【名】〔植〕**かうたけ**(香茸)に同じ。

ししたん 四時丹【名】**はっせきたん**(八石丹)に同じ。和名「八石丹。一名、四時丹」

ししちほん 四七品【名】〔書〕『二十八品より成れるによりていふ』**ほけきやう**法華經(ケイ)の異稱。謠曲(身延)「鬼命妙法蓮華經一部八卷四七品」

ししつ 齒質【名】〔醫〕**さうげしつ**(象牙質)に同じ。

ししつ 資質【名】うまれつき。天資。天性。

ししつ 紙質【名】紙の性質。紙のたち。

ししつ 摯實【名】まじめ。

じしつ 史實【名】歷史上の事實。

じしつ 至日【名】冬至の日。

じしつ 死日【名】九星にて、各人の性によりて深く禁忌すべしといふ日。木性の人は甲午の日、火性の人は丁酉の日、土性の人は己卯の日、金性の人は庚子の日、火性の人は癸卯の日を忌むといふ。

じじつ 四實【名】〔文〕漢詩にて、律の前聯・後聯ともに、景物を寫詠したるもの。(四虛に對して)

じしつ 自失【名】我れを忘るるほどに感じ驚くこと。氣ぬけ。

じじつ 事實【名】實際の事柄。ことがら。事實が事實を語る【句】事實にまさる證據なし。〔諺語〕事實は却つて小說よりも奇なり【句】『亞米利加のエマアソン(R. W. Emerson)の語 Fact is often more wonderful than fiction に本づく』世の中には、往往にして、作話よりも奇妙不思議なる事件あり。〔諺語〕

じじつ 時日【名】■ときと、ひと。をり。■『一時(イチジ)と一日との義』すこしの間。「時日も共に處(ヲ)るべからず」

ししつき 肉附【名】**にくづき**(肉附)に同じ。

ししつき 猪突【名】冬季、山中に入りて、野猪を槍にて突捕ふること。

ししつきやり 猪突槍【名】野猪を突くに用ふる槍。本朝三國志「ひっそぎ竹槍猪突槍」大閤記「武士の命を斷つ刃も多いに、此の樣な引そぎ竹の猪突槍」「同じ。

ししづく 肉豆蔻【名】**にづく**(肉豆蔻)に同じ。

じじつくわんけい 事實關係【名】〔法〕事實上に於ける人と人、又は人と物との關係(權利關係に對して)

じじつさんかうにん 事實參考人【名】〔法〕さんかうにん(參考人)に同じ。

じじつちやうだて 四十挺立【名】關船(セキ)の一。櫓の數四十梃を用ふるもの。

じじつてきくわがく 事實的科學【名】**たいしやうてきくわがく**(對象的科學)に同じ。

ししっぱな 獅子鼻【名】**ししばな**(獅子鼻)■の訛。

じじつぶんぺん 事實文編【名】〔書〕天文以來の史實・傳記・碑銘・雜文等を集めたるもの。四十六卷。五弓(ユミ)久文の編。

ししつりん 齒質鱗【名】〔動〕『英 Ganoid scale』魚類の鱗中、骨質を有するもの。例へば、てふ鮫の鱗の類。また往往琺瑯質を以て被はるるによりて、琺瑯鱗ともいふ。硬鱗。

ししど 宍戸【名】■〔地〕常陸國西茨城(ニシ)郡にある町。松平氏の舊藩地。■姓氏の一。本姓は源。八田(ハッタ)知家の四男左衞門尉家政、常陸國宍戸邑を領して、宍戸四郎と稱せしに始まる。家政五世の孫朝家、安藝國吉田郡に移り、朝家八世の孫隆家、毛利元就の女を娶りて、子孫備中國後月(シリ)郡を領し、蜘ヶ原の役後、周防國三尾(ミヲ)莊一萬石を食み、明治維新後、男爵を授けられ、又その別家たる幾(キヽ)は、勳五等の功を以て、子爵を授けらる。

ししどしせん 宍戸司前【名】〔人〕貫心流劍法の祖。通稱は又四郎。名は家俊。文明中の人。備中國に住す。

ししどたまき 宍戸璣【名】〔人〕明治維新の功臣。舊長州藩士。慶應元年德川幕府の再び長州問罪の師を擧ぐるや、藩主の命を承け、藩主父子に代りて、廣島に使して功あり。維新の際、國事に奔走し、子爵を授けられ、貴族院議員となり、明治三十四年薨ず。年七十三。

ししとび 鹿跳【名】〔地〕次條の略。

ししとびだに 鹿跳谷【名】〔地〕『兩岸迫りて、鹿も一跳に越ゆるを得との意にて名附く』近江國栗太(モヽト)郡大石村の谷。勢多川の最も狹窄せる所。左右、山峠ち、水白沫をなして流る。川幅二十八間。

ししない 四座内【名】延曆寺の七座の公人(シヽ)の一。無職の衆徒、これに當る。

ししにち 自恣日【名】〔佛〕じし(自恣)■を見よ。

ししぬく 繁貫く【動四他】しげくつらぬく。しばしばつらぬく。〔古語〕萬葉「大船にまかぢしじぬき海原を漕出て渡る月ひと男」

ししのおもて 獅子面【名】染革の一。赤・白・藍などの色を用ひて、獅子の面を染め出したるもの。

ししのくび-き 【名】〔植〕次條に同じ。

ししのくびくさ 【名】〔植〕**しゆろさう**(棕櫚草)に同じ。

ししのくび-のき 【名】〔植〕前條に同じ。〔古語〕和名「藥盧、夜末宇波良、一名、之乃久比能岐」

ししのけぐさ 【名】〔植〕**ほたるを**(螢蘭)に同じ。

ししのねば 【名】〔植〕**ひかげのかづら**(石松)に同じ。

ししのはばき 【名】〔植〕**こばいけい**(蒜藜蘆)の條下を見よ。

ししのひたひぐさ 鹿額草【名】〔植〕**たがらし**(田芥子)に同じ。

ししのまる 獅子の丸【句】し(獅子)の胞に同じ。

ししはじかみ 秦椒【名】〔植〕**さんせう**(山椒)

ししばな 獅子鼻【名】■低くして、小鼻のひろがりたる鼻。あまうけばな。ししっぱな。■〔建〕獅子の鼻を彫刻したる木鼻(ハナ)。

ししはばき 【名】〔植〕**こばいけい**(蒜藜蘆)に同じ。

ししばりき 指示馬力【名】『英 Indicated horse power』馬力の一。蒸氣が汽筒内に於て出す動力の額を、指壓器に由りて測定す

るもの。實馬力。

しし-びしほ 醢肉醬【名】肉のひしほ。今の、しほからの類。〔古語〕和名醢、之之比之保、肉醬也」

ししびと 宍人【名】魚肉などを料理する人。〔古語〕起「以鳥爲宍人(ししびと)者」

ししびと-べ 宍人部【名】宍人のむれ。その長官は、宍人朝臣なり。〔古語〕起「貢狹穗子鳥別爲宍人部」

しーしふ 私集【名】一私人の詩・歌集。

しーしふ 詩集【名】詩を集めたる書物。

しーしふ 詩什【名】■詩を十篇づつ集め編みたるもの。■詩編。詩稿。

しーじふ 四十【數】■十の四倍。よそぢ。■四十歳。

四十・五十にして聞ゆるなきは畏るるに足らず【句】『論語の子罕編に「子曰、後生可レ畏、焉知二來者不一レ如レ今也、四十五十而無レ聞焉、斯亦不レ足レ畏也已」とあるに本づく』身を立て、道を行ふ時期なる四五十歳の頃に至りても、令聞・令望の實なき者は庸人にして、たとひ悔改むとも、年すでに過ぎ、氣力すでに衰へて、爲すある能はざるが故に、畏るるに足らず。〔諺語〕

四十にして、心を動さず【句】『孟子の公孫丑上篇に「孟子曰、否我四十不レ動レ心」とあり』道を知ること明かなるが故に、四十歳よりして、心を動すことなし。〔諺語〕

四十にして惑はず【句】『論語の爲政篇に「吾十有五而志二于學一、三十而立、四十而不レ惑」とあり』年四十に至りて、事理を體認し得たるにより、疑惑を起さず。〔諺語〕

じ-しふ 時習【名】『論語の學而篇に「學而時習レ之、不二亦説一乎」とあるに本づく』時時復習すること。

しじふいち-お 四十一地【名】〔佛〕菩薩が佛果に達するまでの十住・十行・十回向・十地及び等覺の四十一の階段。四十一位。

四十一地の瓔珞(ヤウラク)【句】〔佛〕四十一地の修行の功德によりて、佛果を莊嚴するを、瓔珞に譬へていふ語。平家「八萬四千の相好は秋の月早く四重の雲に隱れ、四十一地の瓔珞は、夜の星空しう十惡の風に漂ひ」

しじふいちね 四十一位【名】〔佛〕前條に同じ。

しじふうて 四十腕【名】人四十歳頃に至りて、折折腕に疼痛を感ずること。

しし-ふえ 鹿笛【名】しかぶえ(鹿笛)に同じ。

しじふから 四十雀・莊雀【名】〔動〕燕雀類に屬する鳥。雀ほどの大いさにて、頭上と喉とは黒く、頬白く、脊上、肩の邊は黄緑なれども、後方に至るに從ひて、灰蒼色となる。腹は白くして、中央に黒條通じ、尾羽は黒くして、多少灰蒼色を帶び、翼羽も黒けれど、一條の白色帶これを横斷し、なほ白色乃至灰青色の緣邊を有す。我が國到る處に見らる。春季樹木の空洞に巢を作り、秋より冬にかけて、群をなす。禁止鳥の一。しじふからめ。

(らかふじし)

しじふからがん 四十雀雁【名】〔動〕游禽類に屬する鳥。黒雁(カリ)よりやや大きく、カムチャッカ地方に産し、我が國にも渡來す。全身黒くして、頬のみ白く、腹部は灰色を呈す。

しじふから-め 四十雀【名】〔動〕しじふから(四十雀)に同じ。夫木「朝まだきしじふからめぞたたくなる 冬ごもりせる蟲のすみかを」

ししふき-さう ししふき草【名】〔植〕べんけいさう(辨慶草)に同じ。

しじふく-おゆう 四十九重【名】四十九層。まにでん(摩尼殿)の條下參照。「四十九重の如意殿」「四十九重の摩尼殿」

しじふく-にち 四十九日【名】〔佛〕■中陰の間の日數。■人の死後四十九日目に當る日、即ち中陰の滿ずる日。中陰の四十九日間における七度の生死を經て、各果報を感じ、三界・六道に生ずる日なりとて、この日、殊に僧を請じ、佛事を修す。なななぬか。しちしちにち。源氏「かの人の四十九日、忍びて、比叡の法華堂にて事そがず、さうぞくより始めて」

四十九日の忌(キ)【句】〔佛〕中陰の四十九日の間、精進潔齋して、不淨を忌むこと。蜻蛉「四十九日の忌たがへんとて、ありしありきの所にわたりたるに」

しじふくねん-の-ひ 四十九年の非【句】(ひ非)の條下を見よ。

しじふくらがり 四十闇【名】人、四十歳比に達すれば、視力の衰ふること。

じーしふくわん 時習館【名】■舊熊本城内二の丸に在りし舊熊本藩の學校。寶曆五年藩主細川重賢開校す。■當時國西茨木郡笠間町字大和田に在りし舊笠間藩の學校。文化中、藩主牧野貞喜創立す。明治に及んで學制を更改し、小學とす。■加賀國大聖寺町字八間道に在りし、舊大聖寺藩の學校。安政中、藩主前田利義創立し、明治に及ぶ。■三河國豐橋市八町に在りし舊豐橋藩の學校。寶曆中、藩主松平信復創立し、明治に至りて廢す。■下野國那須郡太田原町にありし舊太田原藩の學校。嘉永中、藩主太田原慶清創始し、明治に及んで廢す。

しじふく-ねん 四十九院【名】■〔佛〕『彌勒上生經に見ゆ』欲界の第四天なる兜率天の内院にある四十九の宮殿。もと「四十九重の摩尼殿(マニデン)」の説に見えたる數の層數を、後世横に排列して、各箇の寺院と見做すに至れるものといふ。太平記「かの谷堂(タニダウ)と申すは、…奇樹・怪石の池上には、都率の内院を移して、四十九院の樓閣を並ぶ」■〔佛〕平安朝以後、一の寺院の境内に、四十九の堂宇を設けたるもの。■〔佛〕足利時代以後、墳墓の前面に六基、左右に各十四基、後面に十五基、都合四十九基の塔婆を建てたるもの。

しじふさん-けん 四十三縣【名】〔地〕我が國の縣數、即ち神奈川・兵庫・長崎・新潟・埼玉・群馬・千葉・茨城・栃木・奈良・三重・愛知・静岡・山梨・滋賀・岐阜・長野・宮城・福島・鳥取・手・青森・山形・秋田・福井・石川・富山・島取・島根・岡山・廣島・山口・和歌山・德島・香川・愛媛・高知・福岡・大分・佐賀・熊本・宮崎・鹿兒島・沖縄各縣の總稱。

しじふし-さう 四十歯相【名】〔佛〕三十二相の一。四十齒を具ふるもの。

しじふしち-し 四十七士【名】〔人〕あかほぎし(赤穂義士)を見よ。

しじふしちやう-だて 四十四挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數四十四挺を用ふるもの。

しじふし-まだ 四十島田【名】女の、四十歳頃になりても、なほ色めきたる心ありて、島田髷に結べること。しじふふりそで(四)を見よ。

しじふし-もんめ 四十四匁【數】しじ(四四)

しし-ふしゆせつ 止止不須説【名】〔佛〕『法華經の序品に見ゆ』舍利弗(シャリフツ)の請に對して、釋迦が容易に法華經を説くことを肯ぜずして言ひし語。「止みなん、止みなん、説くべからず」といふ意。但し、三たび請ふに及びて、つひにこれを説かれたりと傳ふ。狹衣「かかればこそ佛も止不須説とのたまひけれ」

しし-ふせぎ 鹿防【名】猪鹿など、獸類の田園を荒すを防ぐこと、又そのための設備。

じじ-ぶつじ 事事物物【句】じじ(事事)の條下を見よ。

しじふにしやう-ぎやう 四十二章經【名】〔書〕支那、後漢の明帝の永平十二年に、中印度の僧迦葉摩騰(カシャマトウ)竺法蘭の二人、勅を奉じて譯せし經典。大小乘の諸經の要文四十二章を抜きて編纂せしもの。一卷。梵本漢譯の最初の書。最明寺殿百人上藏「天に向つて唾すと、四十二章經には説かれたり」

しじふにちやう-だて 四十二挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數四十二挺を用ふるもの。

しじふはち 四十八【數】■しじふはっ(四十八手)■を見よ。一代男「その身一生のうちのいたづらを語らせ聞くに、…總じて、かやうのくら事、かれこれ四十八ありける」■〔數〕阿彌陀佛の誓願の數。しじふはちがん(四十八願)參照。太平記「多くとも四十八にはよも過ぎじ阿彌陀が峯にと

もすかが弓火」

しじふはちぐわん 四十八願【名】〔佛〕『大無量壽經に見ゆ、阿彌陀佛、未だ法藏比丘と稱せし因位の昔、一切衆生を救はんがために、世自在王佛の前に在りて、五劫の間思惟して立てたりといふ四十八の誓願。その中の至心信樂(シジンシンギョウ)願は第十八位にあるを以て、十八願ともいひ、淨土門にては、これを根本の誓願を解し、立教の基礎とし、他の四十七願はこれに附隨せる枝葉的誓願に過ぎずとなす。弘誓(グゼイ)。六八弘誓。選擇本願(センチャクホンガン)。五劫(ゴコウ)思惟(シュ)の本願。「至心信樂」參照。

しじふはちぐわんしやうごん 四十八願莊嚴【名】〔佛〕法藏比丘の四十八願に由りて成就したる西方極樂の莊嚴。菩薩「中臺は四十八願莊嚴の地なり」

しじふはちぐわんじやう 四十八願所【名】阿彌陀佛の四十八願に因める、その靈像を安置せる四十八箇の寺院。信徒はこれを巡拜すること、觀音の三十三箇所、弘法の四十八箇所に異ならず。

しじふはちまいみだのちかひ 四十八枚彌陀の誓【句】〔佛〕みだ(彌陀)の條下を見よ。

しじふはっくせ 四十八癖【名】〔書〕種種の人の奇癖を描き出したる戲著。四卷。式亭三馬の著。

しじふはっくせ 四十八癖【句】「無くて七癖、有って四十八癖」を見よ。

しじふはったか 四十八鷹【名】■鷹の類の、鷲、熊鷲、隼(ハヤブサ)等、四十八ありといふ概數。■諸役人の打揃ひてあること。

しじふはったき 四十八瀧【名】〔地〕■肥後國上益城(カミマシキ)郡東部なる矢部(ヤベ)と稱する地方の、瀑布甚だ多きことの俗稱。■なちのたき(那智瀑)の俗稱。

しじふはったな 四十八棚【名】床脇(トコワキ)の棚の違棚袋戸棚地袋(ジブクロ)の三種を種種に配合して生ずる、四十八の式樣。また五十二棚などとも稱す。

しじふはっちやうだて 四十八挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數四十八梃を用ふるもの。

しじふはって 四十八手【名】■相撲(スマヒ)の手を四十八に分ちたるもの。反(カヘ)捻(リネ)投(ナゲ)掛(カケ)の四手に、各十二づつの變化あるを總稱せるもの。■種種なる手段。かけひき。

四十八手の裏表(ウラオモテ)【句】■四十八手の各表と裏との變化。■種種なるかけひき。諸種の變化ある手段。

しじふふりそで 四十振袖【名】四十歳になりて、振袖の若作(ワカヅク)をなすこと。しじふしまだ(四十島田)參照。日本武尊吾妻鑑「四十振袖、投島田、男えらみに年たけて」

ししふんじん 獅子奮進【句】しし(獅子)の條下を見よ。

しじふろくちやうだて 四十六挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數四十六梃を用ふるもの。

しじふをこ 四十男【名】四十歳を超え四十男と七下(ナナクダ)の雨【句】四十歳以上の男の、女色に耽ると、七つさがり即ち午後二時すぎに降出したる雨とは、共に止まぬものなり。「諺語」

ししへ【名】『ししは肉の義ならん』はだへ(肌)に同じ。「古語」名義抄「肌、シシヘ、ハダヘ」

ししぼさつ 慈氏菩薩【名】〔佛〕みろくぼさつ(彌勒菩薩)に同じ。

ししぼね 肉骨・宍骨・骸【名】曝(サラ)れたる骨。露骨。「古語」

ししまひ 獅子舞【名】■獅子頭を被りて行ふ舞。もと舞樂より出でしものなるべしといふ。後世は、太神樂などに行ひて、惡魔を祓ふと稱す。しし。かぐらじし。

ししまひ 獅子舞【名】■獅子頭を被りていやうなう、しし申し」

ししまろし 【句】人を呼びかくる言。狂言「いくたびか君がしじまにまけぬらん物なしじまの鐘【句】人を制して靜かならしむる相圖の鐘。「古語」尤草子踊のおんど、しじまのかね」

ししまろし 【句】人を呼びかくる言。狂言「いやなうなう、しし申し」

ししみ 【名】〔動〕しじみふ(小灰蝶)に同じ。

ししみうり 蜆賣【名】蜆を荷ひて賣歩く者。■る漁具。

しじみかき 蜆掻【名】蜆を掻集めて捕ふ

しじみがは 蜆川【名】〔地〕■大阪市北區なる曾根崎新地の南に沿ひて東流し、末は淀川に注ぎし小川。明治三十六七年頃の火災の後、埋められたり。天の網島「これかや、戀の大海を、かへもほされぬ蜆川」■『蜆川その北を流ればいふ』**そねざきしんち**(曾根崎新地)の俗稱。曾根崎心中「蜆川の天滿(テンマ)屋の初(ハツ)めとやらと廢りあひ」

しじみがひ 蜆【名】〔動〕■しじみ(蜆)に同じ。和名「蜆貝、之之美加比、似レ蛤而小黑

(みしじし)

者也」■蜆の介殼。■女兒の異稱。

しじみかる 蜆汁【名】蜆を殼の附きたるまま、味噌汁の中にて煮たる羹。俳諧新選「曉山「曉湖水を汲んでそちこちとしてしじみ汁」

しじみてふ 小灰蝶【名】〔動〕小形なる蝶の一類の總稱。翅は紫・赤・白・灰色等を交へて、何れも美しく、紫色の光澤を有するもの多し。觸角と眼との周圍に白斑あり。前肢は著しく短く、幼蟲は卵形にして、腹部扁し。嫗しじみ・紅(ベニ)しじみ・大和しじみ・瑠璃しじみ等の種類あり。しじみ。

しじみとり 蜆取【名】笊(ザル)等にて、蜆をすくひ取る人。俳家奇人談「秋色」「蜆取早苗にならぶ女かな」

しじみばし 蜆橋【名】〔地〕大阪市蜆川の下流なる天滿川に注ぐ處に架れる堂島橋の別稱。天の網島「元はと問へば分別の、あのいたいけな貝殼に、一杯もなき蜆橋」

しじみばな 蜆花【名】こごめざくら(小米櫻)に同じ。

しじみぶね 蜆船【名】蜆を捕ふる船。

しじむ 縮む【動四自】ちぢむ(縮む)に同じ。

しじむ 縮む【動下二他】ちぢむ(縮む)に同じ。「古語」源氏「その御勢をも、ひきしじめたまひてこそは」

ししむし 【名】〔動〕夏秋の間に生じ、形きりぎりすに似て青く、羽鬚あり。夜、しいしいと鳴く蟲なりといふ。「古語」袋草紙「し蟲はここにはな鳴きそししらはばかししにしづが戸にゆきて鳴きをれ」

しじむし しじ蟲【名】〔動〕かなへび(金蛇)に同じ。

ししむら 肉團・肉叢・臠【名】截りたる肉塊。宇治「そのししむらを食ひなどするものは」

ししむらくわんおん 師子無畏觀音【名】〔佛〕■音の字、觀の韻に引かれてノンと發

普す。摩訶止觀に、畜生道の三障を破する能化(ケ)者として呼べるもの』**ばとうくわんおん**(馬頭觀音)に同じ。

しーしん 始審 【名】〔法〕訴訟の最初の裁判。現行法にては、これを取扱ふものは、普通地方裁判所と區裁判所となれども、皇族に對する民事訴訟の一部は、東京控訴院にて取扱ひ、大審院の特別權限に屬する刑事訴訟、卽ち天皇以下諸皇族に危害を加へ、又は加へんとしたる者、朝憲紊亂の罪を犯したる者、又その豫備行爲ありし者、及び禁錮以上の刑に處すべき罪にして、皇族の犯したる者に對する訴訟のは、大審院のみその始審の裁判權を有す。一審。初審。

しーしん 四箴 【名】『論語の顏淵篇に本づく』視聽言動に關する四つの戒、卽ち非禮視る勿れ、非禮聽く勿れ、非禮言ふ勿れ、非禮動く勿れといふこと。

しーしん 指針 【名】■磁石盤の針。■轉導案內となるべき物事。方針。

しーしん 使臣 【名】君主又は國家の命を承けて、外國に使する者、卽ち大使公使などの類。

しーしん 史臣 【名】**しくわん**(史官)に同じ。

しーしん 私信 【名】私用を報ずる通信。一私人の通信。(公報に對して)

しーしん 私親 【名】■自分の親族。■親しき私交。個人として親しき間柄。

しーしん 私心 【名】■自己の考。私意。■私欲を遂げんとする心。(公心に對して)

しーしん 至心 【名】〔佛〕三心の一。至誠・眞實なる心。至誠心(シジヤウ)。盛衰記「南無懺悔、至心懺悔、六根罪障と」

至心信樂(ギヤウ)【句】〔佛〕眞實心を以て佛の誓願を信じて、疑慮なきこと。**しじふはちぐわん**(四十八願)參照。

しーしん 至神 【名】甚だ神靈たること。

しーしん 至親 【名】■至って親しきこと。■至って血統の近きこと。

しーしん 至信 【名】至って誠實なること。太平記「道を三軍の陣に開かしめたまへと、至信に祈念し」

しーしん 仕進 【名】官に仕へて立身すること。

しーしん 詩讖 【名】作りし詩が、たまたま後日の所爲の前表となること。

しーしん 紫宸 【名】『紫は紫微星、宸は帝王の居處の義』天子の御殿。皇居。禁中。紫宸殿。太平記「紫宸・北極の高きに坐して」

しーしん 司辰 【名】**ろうこくはかせ**(漏刻博士)の唐名。

しーしん 四神 【名】■四柱の神。■『青・白・朱・玄(黑)は四方の色なること。**ごしき**(五色)(二)を見よ』四方の神、卽ち東は青龍、西は白虎、南は朱雀(又は朱鳥)、北は玄武。各條を見よ。四獸。■支那にて、四季を神に配したるもの、卽ち春は句芒(コウバウ)、夏は祝融、秋は蓐收、冬は玄冥。

四神の旗 【句】**しじんき**(四神旗)に同じ。

四神相應 【句】地相の、四神(二)に相應すること。正面なる南に汙地あるは朱雀、左方なる東に流あるは青龍、右方なる西に大道あるは白虎、後方なる北方に丘陵あるは玄武にして、官位・福祿・無病・長壽を併せ得る最も貴き地相なりといふ。我が國の平安京は、この地相を有するものとせり。四地相應。平家「左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、四神相應の地なり」

しーしん 至仁 【名】至って仁慈なること。この上なきいつくしみ。

しーじん 至人 【名】道德の至極せる人。

しーじん 詩人 【名】詩を作る人。詩に巧なる人。詩客。

しーじん 資人 【名】大寶令の制にて、朝廷より位官ある人に賜ひて、雜用に供せしめし者。舍人(トネリ)の類。位分資人・職分(シキブン)資人の別ありき。つかひと。

しーじん 士人 【名】さむらひ。をとこ。

しーじん 使人 【名】君命を奉じて、四方に使する者。つかひ。

しーじん 私人 【名】國家又は社會に對して、一個人の稱。

しーじん 市人 【名】■市街に住む人。■商業を營む商人。あきうど。

しーじん 矢人 【名】矢を作る職人。

しーじん 梓人 【名】大工の棟梁。

しーじん 矢刃 【名】■矢と刃と。■ぶき(武器)に同じ。

しーじん 漸盡 【名】『漸は水の盡くる義』盡きて無くなること。

しーじん 指神 【名】次條を見よ。

指神の方(ホウ) 【句】九星にて、造葬鬪爭等に忌むといふ方角。子の日は辰の方、丑の日は酉の方、寅の日は亥の方、卯の日は未の方、辰の日は申の方、巳の日は戌の方、午の日は丑の方、未の日は子の方、申の日は卯の方、酉の日は午の方、戌の日は寅の方、亥の日は巳の方なりといふ。

しーじん 紫參 【名】〔植〕**はるさらのを**(紫參)に同じ。

しーじん 自身 【名】わが身。おのれの身。自己。

自身自佛 【句】〔佛〕「卽身成佛(ソクシンジヤウブツ)」に同じ。譬曲(故下僧)「自身自佛はさていかに」

じーしん 自信 【名】わが能力を信ずること。

自信・教人信(キヤウニンシン) 【句】〔佛〕『教人信は、人をして信ぜしむと訓ず』「自覺覺他」に同じ。

じーしん 自新 【名】自ら過を悔改むること。

じーしん 貳臣 【名】貳心を抱く臣。叛臣。

じーしん 貳心・二心 【名】ふたごころ。にしん。「心。

じーしん 慈心 【名】なさけぶかき心。慈悲の心。

じーしん 慈親 【名】いつくしみの深き親。

じーしん 磁針 【名】〔理〕**じしやくしん**(磁石針)に同じ。

じーしん 時新 【名】果物野菜などの初物(ハツモノ)。

じーしん 時辰 【名】とき。時刻。「ばん。

じーしん 侍臣 【名】君の側に仕ふる臣。おそばづき。

じーしん 侍人 【名】近侍の人。

じーしん 時人 【名】その時代の人。

じーしん 寺人 【名】■『周禮の天官篇に「寺人掌三王之內人之事」となりて、註に「寺之言侍也」とあり』支那にて、上古近侍の臣。■**くわんぐわん**(宦官)に同じ。「と。

じーじん 自刃 【名】自ら刃を以て死すること。

じーじん 自盡 【名】じさつ(自殺)に同じ。

じーじん 慈仁 【名】じんじ(仁慈)に同じ。

しーしん-おん 二齒脣音・齒脣音 【名】〔語〕『英Labio-lental』呼氣の上齒と下脣との間の僅少の空隙より軋み出づるによりて發する摩音。例へば、英語のf・vの類。**しんおん**(脣音)參照。

しーじん-き 四神旗 【名】仗旗の中、青龍朱雀白虎玄武の四神をあらはしたる四本の旗。四神の旗。しじんけん。

じーしん-ぎ 時辰儀 【名】■**とけい**(時計)に同じ。■**くろのめえるき**に同じ。

しーじん-きくわん 私人機關 【名】〔法〕一個人又は私法人が、その事務を行ふために設くる機關。例へば理事・監事・使用人の類。

じーしん-ぎ-けいごほふ 時辰儀經度法 【名】クロノメエトルにて、經度を測定する法。

しーじん-きよくせつ 詩人玉屑 【名】〔書〕五十六門を立て、諸家の詩話を選集せるもの。二十卷。宋の魏慶之の撰。

しーしん-くわいぎ 使臣會議 【名】一國に駐在する各國の大使・公使の、その駐在國に關係せる外交問題につきて行ふ會議。

しーしん-けい 視神經 【名】〔醫〕『羅Nervus opticus』腦神經の十二對より成れる中の第二對、卽ち眼球の網膜に分布せるもの。大腦の視神經交叉部より起り、眼窩に出で、白膜及び脈絡膜を穿ちて網膜に達し、視覺を掌る。

しーじん-きよくせつ 詩人玉屑 【名】〔書〕五十六門を立て、諸家の詩話を選集せるもの。二十卷。宋の魏慶之の撰。

しーしん-くわいぎ 使臣會議 【名】一國に駐在する各國の大使・公使の、その駐在國に關係せる外交問題につきて行ふ會議。

しーしん-けい 視神經 【名】〔醫〕『羅Nervus opticus』腦神經の十二對より成れる中の第二對、卽ち眼球の網膜に分布せるもの。大腦の視神經交叉部より起り、眼窩に出で、白膜及び脈絡膜を穿ちて網膜に達し、視覺を掌る。

しーじん-きよくせつ 詩人玉屑 【名】〔書〕五十六門を立て、諸家の詩話を選集せるもの。二十卷。宋の魏慶之の撰。

しーしん-けい-しやう 視神經床 【名】〔醫〕『羅Thalamus opticus』四疊體の上方にありて、ほぼ卵形をなせる隆起。上面は側腦室の下底、中央部は第三腦室の上蓋、內面は第三腦室の側壁をなす。

じーしん-けう-にんしん 自信敎人信 【句】じしん(自信)の條下を見よ。

しーしん-けん 使臣權 【名】外交官がその駐在國及び第三國に對して有する特權。不可侵權と無責任權(治外法權)これなり。

しじん-けん 四神劍 【名】『柄の頭に劍を附したるよりいふ』**しじんき**(四神旗)に同じ。

しーしん-さいばんしよ 始審裁判所 【名】明

治二十三年十一月以前の第一審裁判所の稱。現今の地方裁判所に當る。

しじんさうおう 四神相應 【句】しじん(四神)の條下を見よ。

しじん-じぶつ 自信自佛 【句】じしん(自身)の條下を見よ。

し-しんじん 至信心 【名】至極の信心。

し-しん-しんげう 至心信樂 【句】しし(至心)の條下を見よ。

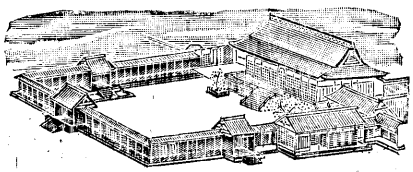
ししんせい 始新世 【名】〔地〕しそんだい(始新代)に同じ。

ししんそう 始新層 【名】〔地〕『英 Eocene series』始新代の地層。始新統。

ししんだい 始新代 【名】〔地〕『英 Eocene epoch』地質時代中、近生代の第三紀に屬し、その最底部地層の生じたる時代。始新世。

しじん-たん 四神丹 【名】古の丹藥の一。和名、四神丹、一名神變丹、一名重耀丹」

ししん-でん 紫宸殿 【名】『ししん(紫宸)を見よ』■支那にて、唐代より起り、後周及び宋の世にもその名を襲用せしも禁中の殿舍。■京都舊內裏の正殿。仁壽殿の前方にありて、南面し、もと朝賀、公事等を行はるる所なりしが、後世、大極殿の類廢後は、即位等の大儀をも行はれたり。正面階下の左右に、左近の櫻、右近の橘あり。儀式は前庭にて行はれたり。數度の火災に遭ひ、御造營毎に規模も漸次縮少せしが、安貞元年以後、つひに廢し、德川時代に至り、天明の災上後、松平定信舊制を案じて、今の地に清涼殿と共に造營し奉り、現存せるは安政二年の造營に係る。ししいでん。南殿。前殿。正殿。南大殿。正寢。拾芥抄「紫宸殿。俗云、南殿」



(ししんでん)

ししんとう 始新統 【名】〔地〕しそんそう(始新層)に同じ。

ししんどり 自身捕 【名】自身番の捕へし罪人。〔德川時代の語〕

ししんばん 自身番 【名】德川時代に、市中警戒のために、市中各所の四辻に設けし番所。町內の家主、各番組を定め、交番して、ここに詰めたり。**ばんたらう**(番太郎)參照。「代男」「用心時の自身番にも、人だのみすることそあれ」

ししんばん-おやかた 自身番親方 【名】次條に同じ。

ししんばん-かきやく 自身番書役 【名】江戸時代に、自身番に詰めたる書役。自身番親方。

ししんばんや 自身番屋 【名】自身番の者の詰所。

ししんりよく 自信力 【名】自己を信ずる意志の力。

し-しんわうけ 四親王家 【名】伏見宮、有栖川宮、桂宮、閑院宮の四家の併稱。伏見、有栖川、桂の三家の嫡流は、特別の宣下を經ずして、代代親王たること、德川時代以前よりの制なりしが、新井白石の議に基づき閑院宮も、世襲親王家の列に加はるに及び、この稱あるに至れり。後、桂宮家は斷絕し、他の三家の世襲親王の制も、明治に至りて廢せられたり。

じじん-ゑんるゐ 似人猿類 【名】〔動〕るゐじんゑん(類人猿)に同じ。

ししめ 雀 【名】〔動〕すずめ(雀)の轉訛。〔古語〕 散木「畠生(ハタフ)に黍はむししめしじめきてかしましきまで世をぞ恨むる」

ししめ 蜆 【名】〔動〕しじみ(蜆)の轉訛。

ししめ-かす 【動四他】しじめくやうにす。〔古語〕 兒教訓「腹を立てはやしじめかしからひて」

ししめ-がひ 蜆貝 【名】〔動〕しじみがひ(蜆貝)の轉訛。

ししめ-めく 【動四自】やかましくさへづる。ささめく。〔古語〕 散木「畠生(ハタフ)に黍はむししめしじめきてかしましきまで世をぞうらむる」

ししめ-っ-かひ 蜆貝 【名】〔動〕しじめがひ(蜆貝)の轉訛。

しじめばな 蜆花 【名】〔植〕しじみばな(蜆花)の轉訛。

ししもん 獅子門 【名】〔文〕『派祖渡邊支考の號を獅子庵と稱せしに本づく』支考の風を學ぶ俳諧者流。獅子門統。「同じ。

ししもん-とう 獅子門統 【名】〔文〕前條に同じ。

ししゐ 獵矢・鹿矢 【名】狩獵に用ふる矢。のや。〔古語〕 紀「如下中二獵箭一之雀鳥上焉(ヤウナルヤ)」

かのまとや 鹿矢の征矢(そや) 【句】征矢の鏃(やじり)を野矢(のや)に用ひたるもの。

ししや 使者 【名】使すること、又その人。つかひ。 俳諧古選「淡淡」「使者奏者ともに飛びこむ蛙かな」

ししや 支社 【名】■ぶんしや(分社)に同じ。■會社または團體のわかれ。「吟社。

ししや 詩社 【名】詩人の組織したる團體。

ししや 侈奢 【名】しやし(奢侈)に同じ。

ししや 死者 【名】死にたる人。

ししや 仕者 【名】仕ふる者。使役せらるる者。 盛衰記「これ清水寺の夢想の驗なり」「じ。鼠は大黑大神の仕者なり」

ししや 輜車 【名】しちようしや(輜重車)に同じ。

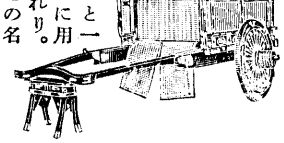
ししや 施舍 【名】『左傳に「施舍不レ倦」とあり。舍も施す義』普く恩德を施すこと。

ししや 紫紗 【名】紫色の紗。 國姓爺後日合戰「懷中に嗜みし紫紗の冠」

ししや 紫麝 【名】『海紫の色を呈する故にいふ』じやかう(麝香)に同じ。

ししや 貳車 【名】ふくしや(副車)に同じ。

ししや 輜車・輜車 【名】『漢書王莽傳に「此似二輜車一非二僊物一也」とあり』柩(キビツ)を載せて運ぶ車。大化二年の制には、王以上に許されしが、大寶令以後は、親王四品以上と一位の諸臣と大臣とのみに用ひしめらるることとなれり。明治天皇の大葬にも、この名稱の葬車を用ひられき。きぐるま。喪車。



(ししや)

じ-しや 辭謝 【名】辭退。謝絕。

じ-しや 侍者 【名】■貴人の傍に控へ居る者。おつき。■〔佛〕長老の左右にありて、その給仕に任ずる者。禪宗にては、燒香侍者、書狀侍者、請客侍者、湯藥、衣鉢侍者の五種に分ち、これを五侍者といふ。侍者御中 【句】『僧徒に送る書狀に、その侍者を經る意より起る』書狀の宛名の脇附に書く語。

じ-しや 寺社 【名】てらと、やしろと。神社佛閣。社寺。

し-しやう 詞章 【名】詩歌又は文章。

し-しやう 志尚 【名】『尚はこひねがふ意』こころざし。志向。

し-しやう 師匠 【名】『匠は技術を業となす者の義』■學術技藝などを教ふる人。先生。■遊藝を教ふる人。

し-しやう 梓匠 【名】梓人と匠人と。

し-しやう 支障 【名】さはり。さしつかへ。さしさはり。故障。障礙。

し-しやう 四障 【名】〔佛〕■正道を修する四つの障害。即ち惡障とて、物に迷ふ障と、業(ゴフ)障とて、諸の善法を勤行することを能はざる障と、報障とて、地獄、餓鬼、畜生の三惡道の報を感ずる障と、見障とて、諸の邪見を起す障との併稱。■「四種の生死(シヤウジ)」に同じ。

し-しやう 四象 【名】■四つの物象。■日、月、星、辰の併稱。■『易の繫辭上傳に「易有二太極一、是生二兩儀一、兩儀生二四象一、四象生二八卦一」とあるに本づく』少陽(陽中の陰卽ち春)、大陽(陽中の陽卽ち夏)、少陰(陰中の陽卽ち秋)、大陰(陰中の陰卽ち冬)の併稱。地の四象 【句】地中に存せる四つの物象、卽ち水、火、土、石。

し-しやう 四聖 【名】〔佛〕■十界の中、佛、菩薩、緣覺、聲聞(シヤウモン)の併稱。(六凡に對して)■阿彌陀佛、觀世音菩薩、大勢至菩薩、大海衆菩薩の併稱。大海衆菩薩とは、西方淨土の諸菩薩をいふ。〔禪宗の語〕■〔人〕東大寺における本願の聖武天皇、開基の良辨、勸進の行基、導師の菩提僊那の四人。

しせい(四聖)参照。

什門(ジフモン)の四聖【句】鳩摩羅什(クマラジフ)の弟子なる道生・僧肇(ソウデフ)・道融・僧叡の四人の併稱。

しーしやう 四姓【名】古代の印度における社會上の四種の階級。即ち婆羅門(バラモン)・刹帝利(クシヤトリヤ)・吠舍(ベイシヤ)・首陀羅(シユダラ)の併稱。各その條を見よ。しせい(四姓)参照。

しーしやう 四生【名】〔佛〕『梵 Caturyoni. の譯語』胎生、即ち人類のごとく、母の胎内に體を成して後生ずるもの、卵生、即ち鳥類のごとく、卵殻内に體を成して後出生するもの、濕生、即ち蟲類のごとく、濕氣に依りて形を受くるもの、化生(ケシヤウ)、即ち諸天と地獄及び劫初の衆生とのごとく、依託する所なく、ただ業力(ゴフリキ)によりて忽ち起るものと併稱。太平記、六道四生の間、いかなる所に生れておはしますぞ

四生の苦輪(クリン)【句】〔佛〕一切の衆生が四生(一)の間に輪廻して苦しむこと。盛衰記「重ねて永く四生の苦輪を廻らす」

四生・百劫(コフ)【句】〔佛〕緣覺乘の人の道果を得るに、極めて速かなるものは四生(二)の加行(ケギヤウ)に於てし、極めて遲きものは、百劫の加行に於てすること。

しーしやう 私娼【名】公に許可せられざる淫賣婦。(公娼に對して)

しーしやう 私償【名】内内にて、債務などを償ふこと。

しーしやう 死傷【名】死ぬると傷つくと。また死者と傷者と。「同じ。

しーしやう 死生【名】〔佛〕しやうじ(生死)に同じ。

しーしやう 死生不知【句】いのちしらず。著聞「死生不知の村人ども、評定して」

しーしやう 史生【名】ししやう(史生)に同じ。

しーしやう 使掌【名】開拓使・宣教使・按察使の各使に置かれし判任官。何れも、明治二年設置、宣教使と按察使とは、その廢止と共に、開拓使のは、同十年廢せられた。「稱。

しーしやう 祠掌【名】しやしやう(社掌)の舊稱。

しーしやう 司掌【名】■つかさどること、又その人。■中古時代の諸司の雜仕・官掌(クワンシヤウ)の類。

しーしやう 司鉦【名】鉦を鳴すことを司ること。

しーしやう 司鉦の本位【句】即位式の時、合圖のため、庭上に鉦と鼓とを備ふその鉦を司りし者の地位。鼓を司りし者の地位は、司鼓の本位といへり。古は、兵庫寮の官人奉仕したり。登極令「大禮使、高等官左右各一人、同判任官各六人を率ゐ、司鉦・司鼓の本位に就く」

しーしやう 泗上【名】■(地)支那の泗水の上(ホトリ)。泗水は、山東省袞(コン)州府にある川。■『孔子、泗水の上に教授せしより』孔子の門。しゆし(洙泗)参照。「泗上の弟子」

しーしやう 史生【名】『和名鈔に「史生、俗二音如レ貨」とあれど、ししやうとも稱へしものの如し』古、太政官・八省にて、四部官の下に位し、公文を繕寫し、上官の所に至りて、文案の署を取ることを掌りし者。ふみびと。ふんびと。一分(フヂ)。

しーしやう 私情【名】■わたくしのなさけ。私人としての情誼。■しじん(私心)(二)に同じ。「ろ。

ししやう 至情【名】至極の人情。まごころ。

ししやう 詩情【名】詩の興味。詩趣。

ししやう 姿情【名】〔文〕俳諧にて、句の姿とこころばへと、即ち句の外形と内容と。俳諧寂莫「姿情の事、昔より論多し。姿を先に情を後にすといふも、初學の事なり。情を先に姿を後にすといふは、最もいはれなき事なり。姿情は天地の如く、姿情の論に惑はず、例の如く、物に應ずる事を思ふべし」

ししやう 姿狀【名】すがたかたち。

ししやう 支狀【名】しよたふじやう(初答狀)に同じ。

ししやう 支城【名】支(カ)れの城。でまる。(本城に對して)

ししやう 燼盛【名】しせい(燼盛)に同じ。太平記「慾燼盛にして、君臣・父子の道をも辨へず」

ししやう 紙上【名】紙の上。紙面。

ししやう 市上【名】まちなか。街頭。

じーしやう 時正【名】『晝夜の時正しき義』ちゆうにち(中日)に同じ。徒然「花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず」

じーしやう 自性【名】■(佛)諸法各自に備ふる不變不改の生。その物、本來の性質。本性。■まことの性。ほんしやう。鰮山「御太刀影に驚きて自性を現はしさうらふぞや」

自性の月【句】自性の清澄なるを月に譬へていふ語。謠曲(淡路)「實相の色をあらはし、自性の月の花を添へて」

自性の本佛【句】〔佛〕固有の佛性。盛衰記「自性の本佛、己身(コシン)に備はる」

じーしやう 自傷【名】自己の身體を傷害する罪。「見よ。

じーしやう 事障【名】〔佛〕にしやう(二障)を次將【名】■大將の次に立つ者。■せうしやう(少將)(二)に同じ。(淳仁天皇の御宇の一時の改稱)

じーしやう 次生【名】〔佛〕次の生(シヤウ)。生れかはること。わうじやう(往生)(二)参照。

じーしやう 時尚【名】その時代の人の一般に好みしこと。

じーしやう 自淨【名】〔佛〕三自の一。禪を修すること。「自調・自淨・自度」参照。

じーじやう 辭讓【名】辭退して、他人に讓ること。辭宜。

じーじやう 事情【名】事のわけ。事の心。

じじやう-きん 絲狀菌【名】〔植〕『獨 Schimmelpilze』黴菌の一。食物その他の有機物に附著し、分岐ある長菌絲と高く直立せる果梗とより成り、白・灰・黄・綠等の毛樣・纖維樣の膜を形成す。白癬(クモシラ)・癜風(ハタムラ)等の原因となる病原性のものもあれど、多くは非病原性にして、麴・ヂヤスタアゼ等を發生せしむるものの如き、その一なり。

じじやう-きん 耳上筋【名】〔醫〕『羅 Musculus auricularis superior』耳翼の後部にある筋。頭蓋の帽狀腱膜の側部より起りて、耳軟骨の前上部に終り、軟骨を上方に牽く作用あり。」

じーしやう 燼盛【名】〔佛〕しじやうくわうによらい(燼盛光如來)の略。盛衰記「堂はこれ祕密眞言の靈場、金胎兩部・燼盛光等の大曼陀羅を安置せり」

燼盛光の御修法(ミヅホ)【句】〔佛〕じじやうくわうぶつちやうほふ(燼盛光佛頂法)に同じ。枕「燼盛光の御修法」

じじやうくわうによらい 燼盛光如來【名】〔佛〕次條の略。

じじやうくわう-ぶつちやう-によらい 燼盛光佛頂如來【名】〔佛〕『その毛孔より燼盛の光明を放つといふによりていふ』こんりんぶつちやうそん(金輪佛頂尊)に同じ。

じじやうくわう-ぶつちやう-はふ 燼盛光佛頂法【名】〔佛〕天台宗にて行ふ四箇の大法の一。燼盛光佛頂尊を本尊とし、曼陀羅を懸けて、息災・除難を祈る。

じーしやうけん 四正見【名】〔佛〕三界の眞相を見る正しき見解。「苦空・無常・無我」参照。

じじやう-しん【名】至誠心【名】〔佛〕しじん(至心)に同じ。野守鏡「至誠心を表したまひける上は」謠曲(雲雀寺)「至誠心・深心・回向發願の心の歎、耳に染みて」

じじやう-しんによ 自性眞如【名】〔佛〕宇宙萬物の自性は、不變不滅・不增不減のもの、即ち眞如なること。謠曲(御裳濯)「御寶、佛も同じ御心の自性眞如の月讀の神とも示現したまへり」

じじやう-ぜん 至上善【名】〔哲〕さいかうぜん(最高善)に同じ。

じじやう-ぜんけい 耳狀箭形【名】〔植〕耳形を呈せる箭形。

ししやうたい 四聖諦【名】〔佛〕したい(四諦)に同じ。

じじやう-たい 絲狀體【名】〔植〕『英 Protonema』蘚類の胞子の發芽して生ぜる綠色の絲狀體。後その一部に眞の幼芽發生して、遂に一箇の成體となる。

ししやう-てん 支撐點【名】〔兵〕據守して、全陣地を支へ得る如き地點。據點。

じじやう-ふうさ 紙上封鎖【名】〔法〕『英 Paper blockade』實力を以てせず、ただ書面によりて、港灣の封鎖を關係諸國に通知

すること。西曆一八五六年の巴里列國會議の宣言以來、封鎖は實力封鎖ならざるべからざることとなり、紙上封鎖は、その効を失ふに至れり。(實力封鎖に對して)

じしやう-ふじやう 自性不淨【名】〔佛〕じしゆふじやう(五種不淨)に同じ。

じじやがた 寺社方【名】寺社奉行及びその部下。

ししやき-ぐさ ししやき草【名】〔植〕㊀ちやんばぎく(古婆菊)に同じ。㊁きんみづひき(金水引)㊂に同じ。

ししやく 子爵【名】しやく(爵)を見よ。

ししやく 指示藥【名】『英Indicator』特種の化學性を鋭敏に感じ、もしくは化學反應の終を鋭敏に表示する性質の藥品。しけん(試驗紙)參照。

じしやく 字釋【名】字義を解釋すること、又その解釋したるもの。

じしやく 磁石【名】〔鑛〕㊀『英magnet』磁氣を有する天產鑛物、即ち磁鐵鑛の稱。今は弘く同樣の性能を、鋼鐵片に、他の磁石或は電流の作用等にて賦與したるものをもいふ。從つて、天然磁石・人造磁石の稱あり。各條を見よ。ぎしやく。じせき。玄水石。㊁じしやくばん(磁石盤)の略。㊂能(ノウ)の狂言の一。遠江國見附(ミツケ)の者、京見物の途次、人賣と路伴となり、共に宿に投ず。人賣、宿主と相談して、この見附の者を賣らんと約す。見附の者、人賣の眞似して、宿主より金を受けて、太刀を預かる。見附の者、太刀を呑まんとす。かくて終に磁石の精は失神するを、人賣蘇生せしめ、見附の者の近ぐるを追ひかくる筋のもの。

磁石に針【句】接近しやすき譬。〔諺語〕

磁石の極【句】〔理〕じきよく(磁極)に同じ。

磁石の軸【句】〔理〕じじく(磁軸)に同じ。

磁石の能率【句】〔理〕「磁氣の能率」に同じ。

磁石の方向【句】〔理〕磁軸の方向。

一時の磁石【句】〔理〕いちじじしやく(一時磁石)に同じ。

永久の磁石【句】〔理〕えいきうじしやく(永久磁石)に同じ。

じじやく 示寂【名】〔佛〕佛・菩薩又は高德の死去すること。

じじやく 自若【貌】『自は自然のままなる意、若は接尾語』泰然事に當りて、擧動の平素にかはらぬさま。自如。

ししやく-ぎゐん 子爵議員【名】貴族院の華族議員の一。子爵を有して、滿二十五歲に達したる者の中より、同爵の互選により て選出せられしもの。

ししやく-しき 磁石式【名】『英Magneto-system』電話交換方式の一。磁石發電機と磁石電鈴とを用ひて、信號裝置としたるもの最も普通に用ひらる。(電池信號式・共同電池式に對して)

じしやく-しん 磁石針【名】棒狀磁石の小さきもの。中央部を支へて、水平面內に自由に働き得るやう裝置して、方位を知るに用ひ、また電力計・磁力計等に用ふ。磁針。

じしやく-はつでんき 磁石發電機【名】『英Magneto generator』馬蹄狀永久磁石の兩極に、ジイメンス形の發電子を迅速に回轉せしむるやうに裝置せる發電機。發電機中、最も簡單なるもの。發電子の回線は、平常は切斷すれども、把子の回轉によりて始めて連絡し、交番電流を發生す。

じしやく-ばん 磁石盤【名】圓盤の周圍に方位を目盛し、その中に磁石針を橫たへて、方位を測るに用ふる器。じしやく。

ししやく-びやうぶ 四尺屏風【名】高さ四尺ほどの屏風。(雞八卦柱曆「四尺屏風をおしのくれば」

じしやくぶんしせつ 磁石分子說【名】〔理〕ぶんしじしやくせつ(分子磁石說)に同じ。

ししやござふね 使者御座船【名】大名の使者の乘る船。

ししやごにふ 四捨五入【名】算用の時、所要の最低の桁の次の數、四又は四以下なる時は、これを捨て、五又は五以上なる時は、十と見做して、一をその所要の桁に加ふること。

ししやだまり 寺社溜【名】江戶時代に、勸進相撲興行の時、場內を取締るために、寺社方の出張して詰め居りし所。

じしやてんそう 寺社傳奏【名】室町・江戶兩幕府時代に、寺社に關することを執奏せし役。室町時代には稻荷・南都・大德寺等に別別に置かれたれど、江戶時代には、數社・數寺を一人にて統管するを常とし、また伊勢・賀茂・石清水の三社には、兩時代を通じて、各別に置かれ、公卿の兼職たりき。

じしやとりつぎ 寺社取次【名】江戶幕府の職制の一。寺社奉行に屬して、訴訟その他の雜務を掌りしもの。

じしやぶぎやう 寺社奉行【名】㊀鎌倉幕府以後、神社・佛寺に關する雜事、または聽訟の事を掌りし職。㊁江戶幕府の三奉行の一。神社・佛寺・神職・僧侶・陰陽師・連歌師等に關する事を掌りたり。〔㊀に同じ。

ししやぶね 使者船【名】くぢらぶね(鯨船)

ししやみ 肉病【名】肥滿する病。

ししやらひ【名】『獸(ジウ)遊(ユウラ)の義』ろくさい(鹿柴)に同じ。

じしやりやう 寺社領【名】佛寺又は神社の領地。

ししやをとこ 使者男【名】使者の男。つかひの男。(狹歌加留多「瀧口はきのふけふ前髮とて十九歲、お小性立の使者男」(艷狂狹本地「五十ばかりの使者男」

ししゆ 積聚【名】積み貯ふる糧秣。

ししゆ 咨諏【名】問ひはかること。

ししゆ 詩趣【名】詩歌に歌ふべきほどの面白味。詩的趣味。

ししゆ 詩酒【名】㊀詩と酒と。㊁詩を作りて酒を飮むこと。

ししゆ 巵酒【名】巵(サカヅキ)に盛りたる酒。

ししゆ 旨酒【名】うまき酒。美酒。(太平記「山海の珍物を盡し、旨酒泉のごとくに湛へて」

ししゆ 旨趣【名】しゆし(趣旨)に同じ。

ししゆ 死守【名】命がけにて、城寨などを守ること。

ししゆ 鎖鍊【名】『古、支那の量目にて、十黍(ジヨ)を銖(ル)、十銖を錙、四十四銖を兩、八兩(一說に六兩)を鎖とせしによりていふ』僅かなる量。鍊鎖。「鎖鍊を計較す」

ししゆ 指趣【名】〔哲〕『英Denotation』ぐわいえん(外延)に同じ。

ししゆ 四趣【名】〔佛〕しあくしゆ(四惡趣)に同じ。(平家「修羅の三惡・四趣は深山・大海のほとりに在り」

ししゆ 四衆【名】〔佛〕㊀比丘・比丘尼・優婆塞(ソク)・優婆夷(イ)の併稱。四部衆。四部の弟子。しゆし(七衆)參照。(太平記「四衆の佛弟子驚き見て、これを留めんとしたまひけるに」㊁發起(キ)衆・影向(カウ)衆・當機衆・結緣衆の併稱。發起衆とは、如來を擊揚發動して、所說あらしむる者、當機衆とは、正しく當座の機衆にて、諸聖聞(ショウモン)のごとき、正しく本經を聞きて、證悟の益を得る者、影向衆とは、文殊・觀音のごとき、他方より來至して、佛の敎化を助け、法座を莊嚴する者、結緣衆とは、薄福の衆生、今は證悟の益なきも、見佛聞法の因緣を結び、未來得道の因緣を作す者。〔天台宗の語〕

ししゆ 四種【名】四つの種類。

四種三密【句】〔佛〕「四曼・三密」に同じ。(太平記「東寺の長者、醍醐の座主に補せられて、四種三密の棟梁たり」

四種の花【句】ししゆけ(四種花)に同じ。(觸廻如來誕生會「四種の花にて產屋を葺き」

四種の佛土【句】ぶつど(佛土)の條下を見よ。

四種の物【句】禪鞠・禪林・助老・頭子(ジ)の併稱。(平治「禪鞠…禪林…助老…頭子…これらを四種の物といふなり」

ししゆ 指授【名】さし示すこと。さしづすること。

ししゆ 師授【名】師匠より傳授せらるること。

ししゆ 紫綬【名】紫色の璽綬(ジジユ)。「金印紫綬」「金(キン)を懷き、紫(シ)を垂る」參照。

ししゆ 師儒【名】人に師たる儒者。

ししゆ 私鑄【名】官の許を得ずして私に鑄造すること。(續紀「頃者私鑄稍多」

ししゆ 斯須【副】しばらく。暫時。須臾。

じしゆ 自守【名】自力にて守ること。

じ-しゅ 自首 【名】 一 自ら罪を、官に訴へ出づること。自訴。 二 〔法〕犯罪の未だ發覺せざる前に、犯罪者自ら犯罪捜査に從事する公務員に對して、自己の犯罪を告知すること。舊刑法にては、絶對に刑罰減輕の原因たりしも、新刑法にては、一般に減輕の事由たると同時に、また免除の事由となるものとす。じゅふく(首服) 四 參照。

じ-しゅ 自主 【名】 一 他の力を俟たず、自己に關する一切の事を、自己の力にて處理すること。 二 〔法〕自己を權利の本體となすこと。

じ-しゅ 寺主 【名】 三綱の一。寺中の庶事を掌り、法會の時は、執蓋の役を勤むるもの。てらじゅ(寺主) 參照。〔天台宗の語〕

じ-じゅ 璽綬 【名】 印璽に附けたる組紐(ひも)。太平記「越の璽綬を頸に懸け、自ら吳の下臣と稱して」

じ-しゅう 四宗 【名】〔佛〕支那齊の曇隱が佛一代の所說を、因緣宗・假名宗・不眞宗・眞宗の四種に判別せしこと。芭蕉「黃光寺にて、月かげや四門・四宗もただ一つ」

じ-じゅう 始終 【名】 もとすゑ。はじめをはり。ほんまつ。

じ-じゅう 始終 【副】 一 始より終まで。終えずに。常に。いつも。終始。 十訓「人の數訓にてしたれば、いかがと、時の人おもひけるに、始終たふとくて」 二 つひには。結局は。太平記「寄手は大勢なり。城の構へ未だ拂へず、始終如何あるべからん」

じ-じゅう 時宗 【名】『晝夜六時に往生禮讃を功行として修し、往生の因とするによりていふ』淨土門の一派。一遍上人の創めしもの、淨土門の諸宗中、融通念佛宗と共に、我が國にて開かれしものにて、淨土の三部經を正依(シヤウ)とする中にも、殊に阿彌陀經に重きを置き、法華・華嚴經を傍依とす。阿彌陀佛を本尊とし、極樂往生を旨とする點は、他の淨土門と共通なれど、一切の萬行を排斥することなく、萬行は念佛の中に攝在すとて、念佛と萬行とは同事なりと說く。本山は相模國藤澤町の淸淨光寺。六時往生宗。遊行(ユギヤウ)派。

じ-じゅう 侍從 【名】 一 君側にかしづき仕ふること、又その人。 二 大寶令の制度にて、常に天皇に近侍して諫を上り、遺を拾ひ、獻替を行ひし役。中務省に屬し、一に正侍從といひ、別に次(シ)侍從、擬(ギ)侍從・出居(デヰ)の侍從・非(ヒ)侍從あり。おもとびと。まちぎみ。 三 宮內省侍從職の職員。君側の事を分掌する奏任官。 四 名香の一種。源氏「わざとめきよしある火桶に、侍從をくゆらかして」

じじゅう-きょく 侍從局 【名】 侍從の詰所。おもとびとめうちぎみ。

じじゅう-しき 侍從職 【名】 官內省の一局。侍從長・侍從職幹事・侍從・次侍從等の職員ありて、天皇の御近側の事を掌る所。

じじゅう-しょく 侍從職 【名】 前條に同じ。

じじゅう-せうなごん 侍從少納言 【名】 少納言にて、侍從の職を兼ねたる人。

じじゅう-だい 侍從代 【名】 公事(クジ)の時、臨時に侍從の事を攝行せし者。多くは少納言を任ずる例なりき。

じしゅう-だいじょう 四宗大乘 【名】〔佛〕「四家の大乘」に同じ。

じじゅう-ちやう 侍從長 【名】 一 明治四年制定せられたる宮內省の職員。天皇に常侍規し、兼ねて侍從を監することを掌りし勅任官。同十年廢せらる。 二 明治十一年設けられたる宮內省の職員。天皇に常仕し、侍從を監することを掌りし奏任官。同十七年次項の如く改めらる。 三 宮內省侍從職の長官。親任官又は勅任官。

じじゅう-てん 仁壽殿 【名】 內裏に於ける皇居の一殿。內裏の中央に位し、初は天皇常御の殿なりしが、のちには內宴・御遊などを行はせらるる所となりたり。中殿。東殿。じんじゅでん。

じじゅう-ばんちやう 侍從番長 【名】 宮內省の職員。天皇に常侍奉仕したる奏任官。明治五年制定、同十年廢せらる。

じじゅう-ぶくわん 侍從武官 【名】 侍從武官府を組織する職員。陸・海軍の將校これに補せられ、天皇に常侍奉仕し、軍事の奏上・奏答及び命令の傳達に任じ、觀兵・演習その他公然の儀式に扈從し、又軍事上の視察のために差遣せらるることあり。定員は、陸軍の中・少將佐官及び大尉五人、海軍の中・少將佐官及び大尉三人。

じじゅうぶくわんちやう 侍從武官長 【名】 侍從武官府の長官。陸軍の大・中將これに親補せられ、侍從武官と同じく、參謀とし、侍從武官を監督す。

じじゅうぶくわん-ふ 侍從武官府 【名】 侍從武官長及び侍從武官を以て組織する官府。明治四十一年の創設。

じじゅう-をどりねんぶつ 時宗踊念佛 【名】 毎年二季の彼岸中、京都五條西の御影堂にて、踊念佛を修すること。

じじゅ-かう 十種香 【名】 じっしゅかう(十種香)に同じ。

じ-しゅく 私淑 【名】『孟子の離婁下篇に「予私二淑諸人一」とあるに本づく。私(カ)に淑(ヨ)くする義』欽慕する人に直接に就きて學ぶこと能はずして、ただその道を聞きて、私かに自らを善くすること。

じ-しゅく 尸祝 【名】 一 神主(カンヌシ)と神前に向ひて祭文を讀む者と。 二 『莊子の逍遙篇に「子胡不下相與尸二而祝一之上乎」とあるに本づく。尸も、祝も、祭時の先に立つ者なるによりていふ』崇拜して、その風に倣ふこと。

じ-しゅく 止宿 【名】 とどまり宿ること。寄宿。留宿。

じ-じゅく 私塾 【名】 個人の經營する塾。

しじゅく-じょ 止宿所 【名】 止宿するところ。寄宿所。

しじゅう-け 四種花 【名】〔佛〕しけ(四華)に同じ。

しじゅう-けん 自主權 【名】 團體が、その團體限りに行はるる法規を自ら制定する權。法規制定の權は主權者の有する所なれども、法令の範圍內において、概括的に或團體に附與することあるによりて發生す。例へば、地方自治體中の市・町・村の如き、また法人にあらざるも、貴族院・衆議院及び有爵者の如きもこれを有し、前者が內部の整理に必要なる諸規則を定むる權を有し、後者が家範を定むる權を有する類。

じしゅう-げん 自首減 【名】〔法〕 じしゅげんとう(自首減等)の略。

じしゅ-げんけい 自首減刑 【名】〔法〕減輕の一。犯人の自首を諒として、その法定の刑を輕減すること。

じしゅ-げんとう 自首減等 【名】〔法〕犯人の自首を諒として、本刑より輕減せらるる等級。自首減。

じしゅ-けんのう 自主權能 【名】〔法〕個人が、その身體・財產の維持・發達を計るために、法律に規定せる範圍內にて、自己の意志を決行し得る權能。

じしゅ-げんめん 自首減免 【名】〔法〕犯人の自首を諒として、その刑を輕減又は全免すること。

じしゅ-さんまい 四種三昧 【名】〔佛〕天台宗にて修行する四種の三昧。即ち常行(ジヤウギヤウ)半座三昧・半行(ハンギヤウ)半座三昧・非行非座(ヒギヤウヒザ)三昧。常座三昧とは、九十日を一期として、淨室に孤坐し、口に名號を唱へて、心を法界に止むること、半行半座三昧とは、或は行道(ギヤウダウ)して經文を誦し、或は安坐して實相を思惟する三昧法、非行非座三昧とは、行・住・坐・臥の四威儀に關せず、一切の事に通じて、意の起るに從ひて修する三昧法。盛衰記「これは止觀行者・四種三昧の大意を釋しける絕句とかや」

しじゅ-さんみつ 四種三密 【名】〔佛〕「四曼・三密」に同じかるべし。しまん(四曼)參照。太平記「東寺の長者醍醐の座主に補せられて、四種・三密の棟梁たり」

じしゅ-じいう 自主自由 【名】 自己の事は、自己の自由に屬し、他人の干涉をゆるさぬこと。

しじゅ-しやうじ 四種生死 【名】〔佛〕『四種の生死』に同じ。

しじゅ-せん 私鑄錢 【名】 官の許可を得ずして、私かに鑄造せる錢。官錢。(座錢に對して) 續紀「私鑄錢」

しじゅせん-しや 私鑄錢者 【名】 官の許可を得ずして、私かに錢を鑄造せる者。 續紀「私鑄錢者斬」

じしゅ-ぜんめん 自首全免 【名】〔法〕犯人

の自首を諒として、その刑を免除すること。

しゅつ 支出【名】㊀『支(カ)れ出づる義』一定の目的のために、金銭を支拂ひ、又は物品を消費すること。しはらひ。つかひはらひ。(收入に對して) ㊁妾腹の兒女。庶出。

しゅつ 四出【名】四方へ出づること。

しゅつ 施術【名】醫者などの、手術を施すこと。

しゅじゅつ 師術【名】人の師となる道。

しゅじゅつ 四術【名】『禮記の王制に「樂正崇二四術一、立二四教一、順二先王詩・書・禮・樂一、以造レ士、春秋教以二禮樂一、冬夏教以二詩書一」とあるに本づく』詩(詩經)・書(書經)・禮(禮記)・樂(樂記)の四つの道。四教。正統記、古には、詩・書・樂を以て、國を治むる四術とす。本朝は、四術の學を立てらるることなからざれども、紀傳・明經・明法の三道に詩・書・禮を攝すべきにこそ、算道を加へて、四道といふ」

しゅつ 支出簿【名】支出に關することを記入する帳簿。(收入簿に對して)

じしゅてきぐわいかう 自主的外交【名】國家が自主權を行使して、他の國家の意思を羈束する外交。また一國が國際事件の主動者となりて、行動する外交。

じじゅほふらく 自受法樂【名】〔佛〕自身が實驗する最上最勝の法樂。太平記「大菩薩の御前にして、潛かに自受法樂の法施をぞ被レ奉ける」

ししゅまんだら 四種曼陀羅【名】〔佛〕しまん(四曼)に同じ。

しじゅん 諮詢・咨詢【名】とひはかること。相談。諮問。

しじゅん 視準【名】〔理〕望遠鏡の軸を、望むべき物體の方向に平行ならしむること。

じじゅん 耳順【名】『論語の爲政篇に「六十而耳順」とあるに本づく』六十歲の異稱。

耳順の年【句】前條に同じ。

しじゅんぎ 視準儀【名】子午環又は子午儀の視準常數を求むるため、子午線の一方又は兩方に設置する固定の望遠鏡。視軸儀。

しじゅんきくわん 諮詢機關【名】〔法〕自ら進んで發案するを得ず、諮詢を待ちて議決する機關。例へば樞密院・元帥府の類。諮問機關。

しじゅんきやう 視準鏡【名】〔天〕天體望遠鏡に附屬する小さき望遠鏡。觀測せんとする天體の方向を知るに用ふ。

しじゅんけい 四閑刑【名】鎌倉時代以後、文官に課せし召籠(コメン)・勤勘解官(ゲカン)・除籍、庶人に課せし剝牛鼻(シンピン)・捺火印(ナカヒ)・闕所過料、徳川時代に庶人に課せし叱(シカ)過料・閉戸(トジ)・手鎖(テヂヤウ)、又、僧徒に課せし退院(シリゾ)・追院(ヲヒヰン)・擯(カツ)の四種の刑の併稱。

しじゅんごさ 視準誤差【名】〔理〕視準の正しからざる時に起る誤差。望遠鏡の視準線とその回轉軸とのなす角と直角との差。視準常數。

しじゅんじやうすう 視準常數【名】〔理〕前條に同じ。

しじゅんせつ 四旬節【名】〔基〕『英 Lent』

しじゅんせん 視準線【名】望遠鏡の對物對眼兩レンズの光心と、その筒の內部にありて、十字狀に交叉せる蜘蛛の線の交點とを連結せる直線。視準軸。

しじゅんぢく 視準軸【名】前條に同じ。

じじゅもくてき 自主目的【名】〔法〕自己の生存發達を遂げんとする目的。自存自的。

じじゅやうど 自受用土【名】〔佛〕ほうど(報土)に同じ。

ししゅるゐ 四手類【名】〔動〕『四肢皆手の用をなすによりていふ』さるるゐ(猿類)に同じ。

しし 死所【名】しにばしよ。しにどころ。

ししょ 支所【名】本所に屬して、しかもそれと分離して事務を取扱ふ所。

ししょ 支庶【名】えだはの血すぢ。

ししょ 支署【名】本署に屬して、しかもそれと分離して、事務を取扱ふ役所。分署。

ししょ 趑趄・次且【貌】進まんとして進み難き貌。ためらふ有樣。しそ。

ししょ 士庶【名】士分の人と平民と。

ししょ 私書【名】私用を認めたる手紙、又は書類。私文書。

ししょ 市署【名】いちのつかさ(市司)の庶名。

ししょ 私署【名】一私人として署名すること。

ししょ 司署【名】㊀書籍を司る役。㊁公立圖書館の職員。奏任文官又は判任文官と同一の待遇を受く。㊂帝國圖書館及び帝國大學附屬圖書館の職員。上官の命を承けて、圖書記錄の整理・保存及び閱覽に關する事務に從事する判任官。

ししょ 史書【名】しせき(史籍)に同じ。太平記「史書に書置きて、前王の是非を後王の誡に備ふるものなり」

ししょ 賜書【名】君王より賜はりし信書。

ししょ 試書【名】かきぞめ(書初)に同じ。

ししょ 詩書【名】㊀(書)詩經と書經と。㊁道義の書籍。

ししょ 四書【名】〔書〕大學・中庸・論語・孟子の四部の併稱。

ししょ 歯序【名】年齡によりて、順序を立つること。としじゅん。

ししょ 絲絮【名】絲と綿と。

ししょ 璽書【名】君主の御璽のすわりてある文書。

じしょ 辭書【名】㊀言葉を集めて一定の順序に排列し、發音・意義等を說明したる書物。じびき。辭典。辭彙。㊁じへう(辭表)に同じ。榮花「この頃、大貳辭書奉りたれば、有國をなさせたまへれば」

じしょ 字書【名】漢字を集めて、一定の順序に排列し、その發音・意義等を說明したる書物。じびき。字彙。字典。

じしょ 時處【名】時と處と。時間と空間と。

じしょ 自署【名】自ら姓名又は華押を書くこと。「書」

じしょ 自書【名】みづから書くこと。親書。

じしょ 自助【名】他の力に依賴せず、自己の力に依りて、向上發展を遂ぐること。

じじょ 自序【名】著者自ら書きたる序文。

じじょ 時序【名】時の順序。四季變遷の次第。

じじょ 次序【名】じよ(序次)に同じ。

じじょ 爾汝【名】『孟子の盡心上篇に「人能充二爾汝之實一、無二所レ往而不レ爲レ義也」とあり。爾も汝と同じく「なんぢ」の義』人を輕んじ賤みて呼ぶこと。

爾汝の交(マジハリ)【句】互に爾(ナンヂ)汝と呼びあふほどの親しき交。

じじょ 自如【貌】じじやく(自若)に同じ。

ししょう 恣縱【名】ほしいままなること。「師傳。わがまま。

ししょう 師承【名】師より承傳ふること。

ししょう 刺衝【名】㊀刺し衝くこと。㊁しげき(刺戟)に同じ。

ししょう 支證【名】事理を支ふるに足る證據。しようこ。本朝文粹「朝廷にくみせざる支證、分明に候ふ」謠曲(鷺坂)「あさましき世を捨て者の所存候ふ。支證なき手柄、似合はぬ僧の腕立」

支證の出後(クレヲ)【句】「證文の出後」に同じ。〔諺語〕

ししょう 市承【名】いちのつかさのはうぐわん(市司判官)・いちのじよう(市佑)の庶名。

ししょう 仕承【名】㊀仕へ從ふこと。奉仕。本朝文粹「大刀使ふ者とだに申せば、忠無くして、厚恩に下され、左右・前後に仕承す」㊁あんないしや(案內者)に同じ。

ししょう 試乘【名】試みに乘ること。

ししょう 史乘【名】『乘は記錄の義』れきし(歷史)に同じ。「歷史。

しじょう 私乘【名】『前條を見よ』私撰の

じしょう 自稱【名】㊀自ら稱すること。自ら名乘ること。㊁自身を譽めたたふること。盛衰記「資永は、かねての自稱、今の振舞、げに一人當千とぞ嘆めたりける」㊂(語)じしようだいめいし(自稱代名詞)の略。(對稱・他稱に對して)

じしょう 自證【名】㊀みづから自己を證明すること。㊁(佛)ごしよう(己證)に同じ。

じじょう 自乗【名】〔數〕『英Square』同數を二度掛けあはすこと。二乘。平方。

じじょう 自縄【名】次條を見よ。

自縄自縛【句】『自己の縄にて自己を縛る意』自己の心、又は行爲によりて、自己を苦しむること。煩惱のために自ら苦しむこと。

じじょうくわんぢやう 自證灌頂【名】〔佛〕三種灌頂の一。自己みづからを菩薩位に置きて、灌頂すること。(結緣灌頂、傳教灌頂に對して)

じじょうこん 自乘根【名】〔數〕『英Square root』或數を自乘したる積に對して、その或數の稱。平方根。二乘根。

じじょうすう 自乘數【名】〔數〕『英Square number』或數を自乘したる積。二乘數。

じじょうだいめいし 自稱代名詞【名】〔語〕自己の名に代へて用ふるもの。われ・やつがれの類。第一人稱。(對稱代名詞、他稱代名詞に對して)

じじょうひ 自乘比【名】〔數〕『英Duplicate ratio』相等しき二つの比の相乘比。二乘比。

じじょうべき 自乘冪【名】〔數〕『英Second power』同一の數を自乘したる積の、その數に對する稱。これを記すに、例へば5の自乘冪は5^2、nの自乘冪はn^2のごとく記す。二乘冪。

ししよかいだん 四所戒壇【名】〔佛〕古、勅許ありし四箇所の戒壇、即ち三戒壇に更に山城國の延曆寺の戒壇を加へたる稱。さんかいだん(三戒壇)參照。

ししよかん 私書函【名】〔郵便私書函〕の略。

ししよぎざう 私書僞造【名】〔法〕權利・義務又は事實證明に關する文書・圖畫を僞造し、又は變造すること。

ししよぎざうかし 私書僞造行使【名】〔法〕私書僞造をなして、これを行使すること。

ししよぎざうざい 私書僞造罪【名】〔法〕しぶんしよぎざうざい(私文書僞造罪)に同じ。

ししよく 姿色【名】みめかたち。容色。

ししよく 紫色【名】むらさきいろ。

ししよく 試食【名】試に食ふこと。

ししよく 紙燭【名】しそく(脂燭)に同じ。曾我扇八景「無明の紙燭を照らし」

ししよく 四職【名】■しき(四職)に同じ。■室町時代に交互に侍所の所司に補せらるべく定まりたりし四家。即ち山名・一色(シキ)・細川・畠山の四家の併稱。四殿衆。さんくわんりやう(三管領)參照。

ししよく 辭職【名】務をことわること。職務を辭すること。

ししよく 耳食【名】『耳にて食ふ義、即ち自ら直接に味ふことなく、人の言ふ所に從ひて、味を說くといふ意。史記の六國表に「此與二以レ耳食一無レ異」とあるに本づく』じがく(耳學)に同じ。

ししよく 侍食【名】貴人の側に侍りて食事すること。陪食。御相伴。

ししよく 辭色【名】ことばづかひと顏いろと。

ししよく 自色【名】〔鑛〕『英Idiochromatic』各鑛物の固有の色。眞色。

ししよくきん 紫色金【名】〔化〕金七十八分にアルミニウム二十二分を加へたる合金。裝飾に用ひらる。

ししよくしゆう 四職衆【名】四職■の人たち。尊女五枚羽子板「僞らば繩をかけ、四職衆の白洲に引据ゑ、一家一門の恥を見るか」

ししよくばん 四色版【名】三色版に黑の一色を加へたる製版。さんしよくばん(三色版)參照。

ししよくり 司職吏・司職更【名】『史記の孔子世家に「孔子嘗爲二司職吏一而畜蕃息」とあり。職を司る義にて、職は牛を繫ぐ杙(クヒ)。職は職に通ず』古、支那にて、犧牲を繫ぎ養ふことを掌りし役。

ししよくわん 司書官【名】帝國大學附屬圖書館及び帝國圖書館に於ける圖書・記錄及び閱覽に關する事務を掌る奏任官。

ししよしやうしよ 私署證書【名】一私人の手にて署名・捺印などして作れる證書、即ち受取證・借用證書の類。

じじょしえん 時處所緣【名】〔佛〕『往生要集に「只是男女・貴賤不レ簡二行住座臥一、不レ論二時處所緣一、修レ之不レ難、願求二往生一、得二其便宜一不レ如二念佛一」とあり』時間(時)と空間(處)と時處の間において、主觀の精神作用を發動せしむる客觀の諸現象(所緣)と。平家「行住座臥、時處所緣をきらはず」

じじょたい 自紋體【名】作中の人物が自ら敍ぶる體に作れる小說・詩歌。

ししよだいぜん 四書大全【名】〔書〕四書を註釋せるもの。明の胡廣等、太宗の勅を奉じて撰す。三十六卷。

ししよちやう 支署長【名】支署の長。

ししよちやう 支所長【名】支所の長。

じじよでん 自敍傳【名】じてん(自傳)に同じ。

ししよやく 市助役【名】市參事會員の一。市長の職務を補助し、市長故障ある時、その代理をなす有給吏員。市會にて選擧し、任期は六箇年とす。

ししら 縞【名】縮緬に似て、地の縮み方疎(アラ)き絹物。經絲(タテ)に張力又は太さの異なるものを用ひて織る。ししらおり。ししらのあや。縮綾。鬢斗目(ハシ)に對して)

ししら 縞絖【しじらの薄色の指貫、人よりは少し用ひたり」

ししらう 時仕郎【名】せうそろく(少初位下)の唐名。くらう(位)■參照。

ししらおり 縞織【名】しじら(縞)に同じ。

ししらき 縞【名】絹の皺文。〔古語〕和名「縞、此間云二之良岐一」

ししらく 縮らく【動四自】ちぢる(縮る)に同じ。〔古語〕

ししらくわんとん 縞廣東【名】名物切の一。白地に黑茶の細き格子縞ありて、地合縮める、廣東織のもの。

ししらお 縞地【名】しじらの地質。

ししらふぢ 【名】〔植〕あをつづら(木防已)に同じ。徒然「枝の半に鳥をつく。つくる枝踏まする枝あり。しじら藤の割らぬにて、二所つくべし」

ししらん 【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)

ししをり 鹿折【名】〔地〕陸前國本吉(モトヨシ)郡鹿折村にある鑛山。金銀を產し、往往大なる金粒を出す。慶長中より採掘を初めて、現在に至る。

しす 【名】〔動〕いぼだひ(疣鯛)に同じ。

しす 四種【名】料理にて、味噌・醢・醉酒の稱。造寺錄「四種事。女房の中、醉を御しすといふ心いかん。御膳に四種といふこ

科に屬する多年生の草。陰濕の地に自生す。葉は細長くして、根莖より生じ、長さ一尺內外に達し、漸次下垂す。いはひげ。いはほや。ささげらん。

ししらんじよ 獅子亂序【名】龍(ノ)の獅子舞の出づる時の囃子。

ししりよくへう 試視力表【名】白紙に大小種種の文字圖畫又は符號を記して、壁上等に掛け、その前面適當の距離に人を立たせ、その人の視力を檢するに用ふるもの。文字・符號は通常六七段に排列せられ、最上段最も大きく、下に至るに從ひて、大いさを減ず。符號には、四字形・山字形・缺環狀を用ひ、その開口の方向を上下・左右一樣ならざらしむ。

しーしる 爲知る【動四他】爲(シ)て知る。なし試みて知る。〔古語〕萬葉「みちのなか園の御神は旅ゆきもしらぬ君を惠みたまはな」

しじる 縮る【動下二自】ちぢる(縮る)に同じ。〔古語〕

ししろん 獸論・鹿論【名】狩獵の獲物に附きての爭論。曾我會盟山「鹿一匹に矢二筋、祐經太腹、本多は草分、六分の勝に候へども、鹿論(ロクロン)未だ落居せず」

ししわう 獅子王【名】■〔動〕し(獅子)の美稱。■〔古〕古の名劍の一。鳥羽天皇より二條天皇に傳へたまひ、源賴政の、鵺(ヌエ)を射し時、賴政に賞せられしもの。備前助平の作。平家「主上、御感のあまりに、獅子王と申す御劍を下さる」

ししわき 膕【名】〔古語〕和名「膕、之之和岐」

ししをどり 獅子踊・鹿踊【名】江戶時代に、一節切(ヒトヨギリ)に合はせたる曲名。手事にして、前歌あり。

ししをりくわうざん 鹿折鑛山【名】〔地〕

とあり。味噌・醤・酢・酒の四なり。これを、各一器に入れて参らすべきなり」

しす 死す【動ナ二他】死ぬるやうにす。ころす。「古語」記「命は、なしせ給ひそ」紀「みまきいり彦はやおのが夫を死せんと、ぬすまくしらに媛なそひすも」

しす 死す【動佐變自】しぬ。命をはる。死して後已む【句】死なざるかぎりは中止せず。斃れて後已む。死せる孔明、生ける仲達を走らす【句】こうめい(孔明)の條下を見よ。

しす 弑す【名】しいす(弑)を見よ。

しす 資す【動佐變自】一たすく。「敵國に資す」「研究に資す」二費用を給す。もとでを與ふ。

じす 寺主【名】じしゅ(寺主)の約。

じす 侍司【名】〔佛〕方丈に專屬して、親炙(シン)の勞を採る者。寺者司。

じす 侍す【動佐變自】貴人の傍に在りて奉仕す。はべる。さぶらふ。

じす 辭す【動佐變自】一言葉もて挨拶す。二暇申す。まかる。退出す。然「今しづかに御局參らんと、辭していぬれば」

じす 辭す【動佐變他】いなむ。ことわる。辭退す。空穗「春宮の大夫にものしたまふを、じしたまふ表つくらせたまふとて」

じす 次す【動佐變自】一『左傳の莊公三年の條に「凡師一宿爲レ舍、再宿爲レ信、過レ信爲レ次」とあり』軍隊が三日以上同一の場所に留宿す。二やどる。とまる。

しすう 指數【名】一〔數〕『英Exponent又Index』數または文字の累乘冪を表はすために、その數または文字の右肩に附記せられる數字または文字。例へば5^3、x^nの3・nがらの三乘冪、xのn乘冪を示す類。二〔鑛〕『英Index』結晶面が晶軸を切りたる長さの逆數。

しすう 爲据う【動ナ二他】すう。すわらす。「古語」源氏「ひひなをしすゑて」

じすう 字數【名】文字の數。

じすう 次數【名】〔數〕『英Degree』一の項にありては、その各因數の冪を示す指數の和、方程式又は代數式にありては、式中にある未知數の最高冪の指數。

しすう-かんすう 指數函數【名】〔數〕『英Exponential function』自變數が指數に含まるる函數。

しすう-きふすう 指數級數【名】〔數〕『英Exponential series』指數函數を展開したる無限級數。

しすう-ていり 指數定理【名】〔數〕『英Exponential theorem』指數函數を指數級數に展開し得る定理。

しすう-はうていしき 指數方程式【名】〔數〕『英Exponential equation』未知數を指數とせる項を含める方程式。例へば$a^x=b$の類。

しすごし 仕過【名】しすごすこと。天の網島「紋日遁れて顏かくし、仕すごしせじと忍び風」

しすごす 仕過す【動四自】度をこえてなす。程を過ぐるまでなす。

しすてむ (英system)【名】一事物を系統的に組立つること。二秩序ある構成法に依ること。次第。

しすまし-がほ 爲濟顏【名】しすましたりと思へる顏つき。したりがほ。井筒業平河内通「惟高主從しすまし顏、ゑつぼに入って見給へば」

しすます 爲濟す【動四他】なしとぐ。なし果す。盛衰記「兵衞佐は、千手に向ひて、さても賴朝が娘こそしすまして覺ゆれ」

しすみ 四隅・四垂【名】四方の邊地。

しすみ 四睡【名】〔美〕畫題の一。豐干(ブカン)和尚と寒山と拾得と虎とが共に睡れるもの。但城反魂香「豐干禪師が四睡の虎」

しすみ 試錐【名】地下の深造鑛床を探知せんがために、垂直の小孔を地中に穿ち、これに依りて、岩石を柱狀又は砂狀となしたるものを採出すること。石炭等のごとく傾斜少なく、鑛床全部に亙りて、鑛質のやや均一なる物に對して、最も輕便なる探究法なり。しすゐき(試錐機)參照。

しすみ 止水【名】一ながれぬ水。動かぬ水。二直信流柔道の組の基形(カタ)。

しすみ 死水【名】注口のなき水。たまり水づ。止水。

しすみ 脂水【名】脂粉を洗ひ落したる水。本朝三國志「關羽のかをりよこ折れて、脂水を流す堀江川」

しすみ 酒酒井【名】〔地〕下總國印旛(インバ)郡の町。成田鐵道の一驛。

しすみ 雌蘂・雌蕊【名】〔植〕『英Pistil』花の雌性の生殖器。花の中央にありて、絲狀をなす。その頂上を柱頭といひ、膨れたる下部を子房といひ、その中間は花柱といふ。柱頭には粘液ありて、雄蕊の花粉を受くるに適し、子房は果實となる。めしべ。(雄蕊に對して)

しすみ 齒齦【名】〔醫〕齒齦腔內にある柔軟赤白色の物質。神經・血管多く分布せられ、從ひて感覺殊に銳敏に、齒根膜と共に、象牙質の知覺と營養とを營む。

じすみ 自炊【名】自身に飯を炊ぐこと。

じすみ 自水【名】みづから水に投じて死ぬること。みなげ。入水。

しずみ-えん 齒齦炎【名】〔醫〕齒齦に發する炎症。痛み激し。これに化膿するものと然らざるものとあり。

しずみ-かう 齒齦腔【名】〔醫〕齒の中央に位する小腔。その形、凡そ齒形に類し、中に齒髓を容る。齒腔。

しすみ-かくへき 支水隔壁【名】かくすゐへき(隔水壁)に同じ。

しすみ-き 試錐機【名】試錐を行ふに用ふる器機。鋼錐の衝動に由りて、岩石を粉碎したる後、砂喞筒を用ひて、その粉碎せる岩片を掬ひ取る裝置のものと、數箇の金剛石を嵌入せる鋼管の錐を旋回して、岩石を棒狀に截取る裝置のものとあり。

しすみこ 私出擧【名】私稻の出擧。

しすみ-せん 止水栓【名】『英Sluice valve』給水管に設くる小さき蓋。水の流出を止むる際に使用す。

じすみらく 拾翠樂【名】〔音〕水調五曲中の一。我が國にて作れる樂なり。拾遺樂。

しすゑ 尻居【名】けいし(擊子)に同じ。

しせい 四聲【名】〔語〕支那語の四種の音聲。もと百六韻の聲調の相似より類別して、平(ピン)・上・去・入の四種とし、平聲三十、上聲二十九、去聲三十、入聲(ヤッシ)十七を數へたり。支那語は單綴語に屬するがため、同音語の數多く、これが紛雜を避くる必要より發生せるものとす。また平聲を上平・下平に分ち、この二者に屬する文字を平字といひ、平聲以外の三者に屬する文字を仄字といふ。然るに、現代の支那語にては、前記の四聲は、讀書の上に存する外は、浙江・南京以外の地の口語には多少の變化を來し、標準語とせらるる北京官話のごときは、入聲は、その節末なるk・t・pを脫落して、それぞれ他の三聲中に分屬し、上平・下平・上聲・去聲を四聲と立つ。をこと(乎古止點)參照。

しせい 死聲【名】歌謠などのかなしげなる聲調。哀音。「死聲多し」

しせい 死生【名】せいし(生死)一に同じ。死生は命なり【句】『荀子に「遇不遇者時也、死生者命也」とあるに本づく』次條に同じ。「諺語」

しせい 死生、命あり【句】『論語の顏淵篇に「子夏曰、死生有レ命、富貴在レ天」とあるに本づく』人の生死は皆天命にして、人力を以て左右すべきにあらず。「諺語」

しせい 四姓【名】一四つの名族。二『しのやう(四姓)を見よ』源・平・藤原・橘の四つの姓。源(ゲン)・平(ヘイ)・藤(トウ)・橘(キツ)。南留別志「四姓といふことは天竺にある事なり。源・平・藤・橘を四姓といひたるは、佛法を信ずるあまりに、何事も天竺の事をよしと思ひて、それに擬していへるなり。三『源氏の四姓』を見よ。

しせい 四姓の使【句】中世以後、伊勢神宮へ遣られし奉幣使の稱。先づ使王と稱し、王氏の五位以上の者を卜定して使とし、これに中臣(ナカトミ)・忌部(イムベ)・卜部(ウラベ)の三姓の人を隨從せしむる例なりしによりていふ。

しせい 氏姓【名】せいし(姓氏)に同じ。

しせい 姉婿・姉壻【名】あねのむこ。

しせい 子婿・子壻【名】『子とし婿とする義』娘のむこ。女婿。

しせい 施政【名】政を施行すること。

しーせい 市制【名】■市の組織權限等を定めたる規則。■市に自治制度を施くために、市及びその機關の組織權限などを定めたる法律。明治二十一年の發布。

しーせい 市政【名】市の自治行政。市行政。

しーせい 市井【名】『井(即ち井田)にもとづきて、市を爲すによりていふとも、市に至りて、物を賣らんとする者、まづ井上に洗ひ潔めて赴くによるとも、また市中の道は四達にして、井のごとくなるによるともいふ』まち。いち。坊間。

市井の臣【句】『孟子の萬章下篇に「在レ國曰二市井之臣一、在レ野曰二草莽之臣一、皆謂二庶人一とあるに本づく』しせいん(庶民)に同じ。

市人の人【句】『史記の刺客傳に出づ』市中の俗人。

しーせい 詩聖【名】秀でたる詩人。詩仙。

しーせい 私生【名】内緣の夫婦の間に生れること、又は私通して子を生むこと。

しーせい 私誓【名】私のちかひ。

しーせい 私製【名】一私人の製作。

しーせい 試製【名】試に製作すること、又その製作したる物。

しーせい 紙製【名】紙にて作れるもの。

しーせい 至性【名】至って善良なる性質。

しーせい 至正【名】きはめて正しきこと。

しーせい 至精【名】至って精妙なること。

しーせい 至靜【名】至って靜かなること。

しーせい 至聖【名】この上なく聖明なること、又その人。

しーせい 至誠【名】至極のまこと。

至誠、神の如し【句】『中庸に「至誠之道、可二以前知一、國家將レ興必有二禎祥一：不善必先知レ之、故至誠如レ神」とあるに本づく』至誠の力は神のごとし。至誠の感通することは神のごとし。

しーせい 粢盛【名】『粢は黍稷、盛は器に盛る意』神に供ふる飯米。

しーせい 熾盛【名】火の燃えあがる如くさかんなること。

しーせい 資性【名】うまれつき。天性。天質。女性。(雄性に對して)

しーせい 姿勢【名】身體のすがた。なり。

しーせい 司成【名】朝鮮經學院の職員。上官の命を承けて、院務に從事するもの。

しーせい 刺青【名】しぶん(刺文)に同じ。

しーせい 師生【名】師匠と生徒と。

しーせい 四聖【名】四人の聖人。ししゃう(四聖)■■參照。

支那の四聖【句】伏犧(ヰフ)・文王・周公・孔子の四人の併稱。

世界の四聖【句】釋迦・孔子・基督・ムハメッド(又はソクラテス)の四人の併稱。

「世界の三聖」參照。

しーせい 雌性【名】『英 Female』雌たる性

しーせい 蓍筮【名】『蓍は、「めどき」といふ草。古、支那にて易を占ふに用ひしもの』うらなひ。卜筮。本草記「還幸の吉凶を蓍筮に就けてぞ御覽ぜられける」

しーぜい 市稅【名】自治團體たるその市が、市民に賦課する租稅。まづ國稅・府縣稅の附加稅を課し、なほ必要ある場合に限り、別に稅目を起して徵收することを得。

じーせい 自制【名】自己の感情・意識を抑制して、理性又は良心に從ふこと。

じーせい 自生【名】自然に生ずること。

じーせい 自製【名】みづから製すること。てせい。てづくり。

じーせい 辭世【名】■この世を去ること。死ぬること。■この世を去る時、遺しおく詩歌。最後の一句。絕命の辭。「質。

じーせい 磁性【名】磁石に作用せらるる性

じーせい 事勢【名】事の形勢。

じーせい 字勢【名】文字のいきほひ。

じーせい 時勢【名】世の形勢。時運。「代。

じーせい 時世【名】ときよ。よのなか。時

じせい-おくれ 時勢後【名】世の中の進歩に後るること、又その物事。時代おくれ。

じせい-おん 次清音【名】〔語〕支那の音韻學にて、音の清濁を五種に分ちたるものの一。その名、もと悉曇(シッ)學に出づ。例へば、牙音の上につきていへば、見(k)に對する溪(k即ちkh)の類にて、今日の聲音學における有氣音に相當すべきもの。我が國の聲音には、これを缺く。(清音・濁音・次濁音に對して)■『我が國德川時代の音韻學者は、支那の次清音の性質を併せ ざりしより、半濁音の別稱として用ひたり』はんだくおん(半濁音)に同じ。

しーせいきやう 四聖經【名】〔書〕■儒敎の四書、佛敎の大藏經、基督敎の聖書、ムハメッド敎のコオランの併稱。■しせいだ(四吠陀)に同じ。

しーせいくわん 司稅官【名】稅務管理局に屬し、內國稅に關する事務を掌りし奏任官。明治三十五年に同局廢せられ、稅務監督局の置かるるに當りて、廢官となれり。

しーせいげんそ 雌性元素【名】〔生〕らんし(卵子)に同じ。

しーせいさいばんしよ 市政裁判所【名】明治の初年、東京に設置せられて、市政を裁判せし役所。

じーせいさう 時勢粧・時世妝【名】その時代に流行せるよそほひ。はやりの風俗。太平記「天下時勢粧の事」

じーせいさんくわてつ 磁性酸化鐵【名】〔化〕しさんさんくわてつ(四三酸化鐵)に同じ。

しーせいし 私生子【名】■夫婦にあらざる男女の間に生れたる子。ててなしご。おやなしご。ないしょうご。私生兒。■〔法〕正式の婚姻を經ざる男女の間に出生したる子の、その父の認知を得ざるもの。母方の戶籍に編入せらる。父の認知を得れば、庶子となる。

しーせいじ 私生兒【名】前條に同じ。

しーせいしき 示性式【名】〔化〕『英 Rational formula』分子式に基づき、化學性を一目瞭然たらしめんがために、分子式中の諸元素記號の按配を試みたる式。化學性質の縮圖たるがごときもの。例へば、エチルアルコオルに水酸基の存在することを示すために、その一原子を分ちて、C_2H_5OH 又は $(C_2H_5)OH$ と記す類。また一物質の全化學性を表示せんと試みたる示性式は、別に構造式といふ。その條を見よ。

じーせいしよくぶつ 自生植物【名】〔植〕『英 Native plants 又 Indigenous plants』一國又は一地に自然に生ずる植物。(培養植物に對して)

しーせいせきばん 紙製石盤【名】かみせきばん(紙石盤)に同じ。

じーせいたい 磁性體【名】〔理〕『英 Magnetic substance』磁氣感應によりて、磁性をあらはすべき物體。鐵・ニッケル・コバルト等のごとき、磁極に近き端に異極を生じて、互に吸引するものと、蒼鉛・アンチモン・鉛等のごとき、同極を生じて、互に反撥するものとあり。前者を常磁性體又は强磁性體といひ、後者を反磁性體といふ。

しーせいだう 施政堂【名】磐城國石城(イハキ)郡平町に在りし舊平(タヒラ)藩の學校。寶曆中、藩主安藤信成の創設、明治四年に廢す。

しーせいだう 詩聖堂【名】〔人〕おほくぼしぶつ(大窪詩佛)の號。

しーせいとふ 市制都府【名】市制を布かれたる都府。

しーせいはがき 私製葉書【名】民間にて、印刷・製造する葉書。我が國にては、明治四十二年遞信省令私製葉書製式規則に基づきて作製す。

しーせいわう 四世王【名】くわうげんそん(皇玄孫)に同じ。

しーせう 詩鈔・詩抄【名】詩を抜書きしたる書物。

しーせう 私消【名】公の金品を私人として勝手に消費すること。

しーせう 嗤笑【名】あざけり笑ふこと。笑嗤。

しーせう 至小【名】きはめて、小さきこと。

しーせう 翅鞘【名】〔動〕『英 Elytrum』甲蟲類の前翅。角質强硬にして、鞘狀をなし、飛翔の用に當る膜質軟弱の後翅を、その飛翔せざる時に、覆ひて保護す。

じーせう 自笑【名】〔人〕はちもんじやじせう(八文字屋自笑)を見よ。

じーせうさん・さうえん 次硝酸蒼鉛【名】〔化〕雪白色の重き結晶性粉末。水に溶けず。蒼鉛と硝酸とにて、硝酸蒼鉛を造り、熱湯に撓(ヂ)交せて加水分解せしめ、集め乾燥して製す。收斂劑として、胃腸病に用ひ、また消毒の効あり。白粉(ロオ)に配しても用ふ。硝酸第一蒼鉛。

じーせう-じ 慈照寺【名】■ぎんかくじ(銀閣

寺)に同じ。[甲]甲斐國中巨摩(コマ)郡龍王寺村にある曹洞宗の寺。有富山と號す。武田信玄の創建。宗見の開山。

じせうゐん 慈照院【名】〔人〕あしかがよしまさ(足利義政)の諡。

しーせき 咫尺【名】『咫は周尺の八寸』[一]短き距離。近き距離。「咫尺を辨ずる能はず」平家「策を帷幕の中に運らして、勝つ事を咫尺のもとに得たり」[二]貴人などに接近すること。太平記「硃に龍顏に咫尺し奉って」

しーせき 士籍【名】さむらひの分限。士分。

しーせき 史籍【名】歴史に關する書籍。史書。

しーせき 指斥【名】『斥も指す意』指ざすこと。

しーせき 矢石【名】[一]矢と彈石と。やだま。「矢石を蒙る」[二]矢石の飛び來る所。

しーせき 齒石【名】齒牙の表面に、唾液を介して沈著する物質。主として、石灰鹽類より成る。はいし。唾石。

じーせき 次席【名】[一]次の席。[二]首席のつぎ。

じーせき 事蹟・事跡・事迹【名】事のあと。事實の形跡。あとかた。

じーせき 事績【名】事のいさを。成したる事柄。

じーせき 磁石【名】〔鑛〕じしゃく(磁石)に同じ。

じーせき 耳石【名】〔動〕『英 Otolith』下等動物の聽器、即ち耳嚢内の液中に存する石。液の動搖と共に動搖して、耳嚢壁の感覺毛を刺戟すると稱せらる。多くは耳嚢壁の皮膜より分泌せられて生ずるものにて、その成分は、炭酸石灰もしくは燐酸石灰なれど、海鼈(スッポン)のごとく、殆ど石灰なるもあり。また蝦蟹のごとく、單に外界の砂粒を收めて代用するものあり。聽石。

しーせきえい 柴石英【名】〔鑛〕むらさきずいしゃう(紫水晶)に同じ。

じーせきさん 慈石散【名】古の散藥の一。和名抄「散藥……慈石散」

しーせきしふらん 史籍集覽【名】〔書〕塙保己一の群書類從に倣ひて、國史に關係ある書册を編纂せるもの。全部を前集・後集に分ち、各集を通記類・纂錄類・別記類等に類別し、四百四十五種を收む。近藤瓶城の編。後これを增補し、改訂史籍集覽と稱す。

しーせきねんぺう 史籍年表【名】〔書〕神武天皇より後陽成天皇の元和二年までの、各年の史實を知るべき書目を擧げたるもの。一卷。伴信友の著。

しーせきめいしよーてんねんきねんぶつーほぞんはふ 史蹟名勝天然記念物保存法【名】史蹟・名勝・天然記念物に關する事項に就き、各省大臣の諮問に應じて、意見を開陳し、また同事項につき、主務大臣に建議する機關。大正八年の設置。

しーせきめいしよーてんねんきねんぶつーてうさくかい 史蹟名勝天然記念物調査會【名】內務大臣の監督の下に、會長一名、委員二十八名以內及び幹事一名を以て組織し、史蹟・名勝・天然記念物に關する事項の調査、各省大臣の諮問に應じて、意見を建議する機關。大正八年の設置。

しーせつ 施設【名】構へ設くること。

しーせつ 使節【名】『古、支那にて、他國に赴く使者には、符節を賜はりしよりいふ』[一]君命を奉じて、他國に使する官人。[二]地方官となりて、地方に赴任する者。

しーせつ 士節【名】士人としての節義。

しーせつ 志節【名】せっさ(節義)に同じ。

しーせつ 支節【名】支體と關節と。

しーせつ 雌節【名】『淮南子の「聖人守清道而抱雌節」とあるに本づく』柔順なる節義。

しーせつ 四節【名】「鞍の四節」の略。

しーせつ 肢節【名】〔地〕『獨 Gliederung』陸地の軀幹より分岐せる半島・岬角・山嶽等の部分。

しーせつ 柴雪【名】紫色の雪。謠曲「氷室」「仙家に、紫雪・紅雪とて、藥の雪あり」

しーせつ 死絕【名】[一]死ぬること。[二]その家の人人、死に絕ゆること。

しーぜつ 四絕【名】四つのすぐれたる物事。

しーぜつ 齒舌【名】〔動〕『英 Odontophore』多くの軟體動物の有する咀嚼器。咽喉の下壁の隆起して、中に軟骨を含み、且つ筋肉に富みて、舌狀をなし、その表面に數多の小齒列を有する角質の膜、即ち齒板を被れるもの。

じーせつ 自說【名】自分の意見。

じーせつ 時節【名】[一]時候。季節。[二]ときよ。時世。[三]をりあひ。時機。[四]よき時機。好機會。(頓城反魂香)「又平、時節と、女房を先へ押出し、背をつき、我が身も手をつき、頭をさげ、訴訟ありげに見えければ」

じーせつ 時節【名】時候。季節。[一]ときよ。時世。[二]をりあひ。時機。[三]よき時機。好機會。(頓城反魂香)「又平、時節と、女房を先へ押出し、背をつき、我が身も手をつき、頭をさげ、訴訟ありげに見えければ」

じーせつ 時節【名】『時節を待てよ柿の種』[句]『徐に待てば柿の種も實を結ぶ日あるべしとの意』何事も時節を待てよ。(俚語)

じーせつーがら 時節柄【副】時節につれて。時節相應に。時分がら。

じーせつーしじやう 私設市場【名】個人相集りて設立したる市場。(公設市場に對して)

しーせつーたん 紫雪丹【名】古の丹藥の一。和名「紫雪丹」

しーせつーてつだう 私設鐵道【名】個人又は個人團體の經營せる鐵道。(官設鐵道に對して)

しーせつてつだうーはふ 私設鐵道法【名】私設鐵道設立に關する諸種の事項を規定したる法律。

しーせつーでんしんーでんわ 私設電信電話【名】私人の經營にかかる電信・電話。我が國にては、一邸內もしくは一構內における專用に供し、また電報送受の目的にて、一人の專用に供するため、電信官署との間に敷設する等の特別の場合にのみ許可せらる。

しーせつーほぜいさうこ 私設保稅倉庫【名】『英 Private bonded warehouse』政府の特許を得て私人の經營する倉庫。

じーせふ 侍妾【名】こしもと。そばめ。

じーせふーだいし 慈攝大師【名】〔人〕しんじやう(眞盛)に同じ。

しーせん 詩仙【名】詩に秀でたる人。詩聖。

しーせん 詩箋【名】詩を書く料紙。種種の模樣あり。吟箋。

しーせん 指尖【名】ゆびのさき。

しーせん 子錢【名】りそく(利息)に同じ。(母錢に對して)

しーせん 紙錢【名】かみぜに(紙錢)[一][二]に同じ。

しーせん 紙線【名】かみより(紙縒)に同じ。

しーせん 視線【名】『獨 Gesichtslinie 英 Line of vision』眼の中央小窩と外界の注視點とを連結する直線。また兩眼の視線の過ぐる面を視面と呼ぶ。凝視線。

しーせん 視線上の運動【句】『英 Motion in the line of sight』物體が觀測者より遠ざかり又はこれに近よる運動。

しーせん 視線上の速度【句】『英 Radial velocity』視線上の運動の速度。分光器にて測定するを得。

しーせん 支線【名】[一]えだはに分れたる線。(幹線に對して)[二]『英 Spur』電柱を支ふるための鐵線。

しーせん 支戰【名】前哨又は分遣隊など、小部隊の間に行はるる戰鬪。(本戰に對して)

しーせん 支川【名】支流の川。えだがは。(本川に對して)

しーせん 死線【名】『英 Dead wire』架空線に於て使用せざる饒線、又は磁界を通じて發電子を廻轉せしむる時、磁力を發せざる線の部分。(活線に對して)

しーせん 死戰【名】けっせん(血戰)に同じ。

しーせん 四戰【名】地形上、何れの方面よりも、敵の攻擊を受くべきこと。「四戰の地」

しーせん 私戰【名】[一]個人間の戰。私鬪。[二]國際上の戰にあらずして、私人又は私團體が他國に對して起す戰。

しーせん 私賤【名】古の賤民の一。私人に使役せられし奴婢。物品と同じく、交易・賣買せられたり。(公賤に對して)令義解「公私奴婢、婢公賤爲レ輕、私賤爲レ重」「して」

しーせん 私船【名】私有の船舶。(官船に對して)

しーせん 私擅【名】氣まま。自分勝手。

しーせん 絲腺【名】蜘蛛類の腹部にありて粘液を分泌する線。

しーせん 紫髯【名】紫色のひげ。あかひげ。大平記「紫髯の老將は解二錦纏一」

しーせん 四善【名】『舊唐書の職官志に見

え、我が國にても、これに做へるもの』古、支那及び我が國にて、官吏勤勉の成績を考査する標準とせし四つの善行、即ち德義の著しきもの、清愼の著しきもの、公平の稱すべきもの、恪勤にして懈らぬもの。

しぜん 至善【名】Ⅰ最上の善。Ⅱ〔哲〕

さいかうぜん(最高善)に同じ。

しぜん 自然【名】『自(ヲ)ら然る意』Ⅰ人爲の加はらざる狀態。じねん。てんねん。Ⅱ造化の力。造化の道。Ⅲ人力にて左右するを得ざる狀勢。Ⅳ本性。天性。Ⅴ『英 Nature』宇宙の萬象中、人類以外の全部。自然物と自然力とに分つ。各その條を見よ。「自然と人生」

自然崇拜【句】〔哲〕『英 Nature worship』自然物又は自然力を、神と思惟して崇拜すること。天然崇拜。

自然に反れ【句】『佛蘭西のルソオ(J. J. Rousseau)の語 Return to nature に本づく』社會の因襲的制度より受けたる惡影響を脫して、人性自然の無垢なる狀態に反れ。〔諺語〕

しぜん 自然の齊一(イツ)【句】〔哲〕「天然の齊一」に同じ。

自然の法則【句】〔哲〕「しぜんりつ(自然律)」に同じ。

自然の摸倣【句】『英 Imitation of nature』自然界の事物を材料とし、これを摸倣して、藝術品を作り出すこと。

しぜん 自然【副】偶然に事の發生するさま。萬一。〔足利時代の語〕 狂言記〔盜人連歌〕「自然見えあたりとも、別の事も有るまい」 謠曲(鉢の木)「自然の事も候はば」

じぜん 自擅【名】わがまま。きまま。

じぜん 自撰【名】自己の撰述。

じせん 自選【名】Ⅰみづから行ふ選定。「して」Ⅱ自己の選擧。

じぜん 事前【名】事の起る前。(事後に對す)

じぜん 寺前【名】寺院の前。

じぜん 慈善【名】めぐみ。あはれみ。いつくしみ。「じ。

しせん-か 子錢家【名】かねかし(金貸)に同じ。

じぜん-か 慈善家【名】慈善を行ふ人。

しぜん-かい 自然界【名】『英 Natural world』人間界、又は生物界以外の、天地間にある萬物。てんねん。

しぜん-がくくわ 自然學科【名】『英 Natural lessons』自然界の現象を研究する學科。理科の類。

しぜん-がす 自然瓦斯【名】てんねんがす(天然瓦斯)に同じ。

しせん-かんきん 私擅監禁【名】〔法〕ほしいままに人を私家に監禁すること。

しぜん-きん 自然金【名】〔鑛〕『英 Native gold』天然に產する金。通常、多少他物を混じ、粒狀・鱗狀・毛狀等をなす。岩石中にあるものを山金、河床中にあるものを砂金といふ。

しぜん-ぎん 自然銀【名】〔鑛〕『英 Native silver』天然に產する銀。銀鑛脈中に菅狀又は樹枝狀をなして存在し、新鮮なるは銀白色なれど、多くは表面變化して、黑色の銹を有す。但し我が國の鑛山にては稀に產出す。

じぜんきん 耳前筋【名】〔醫〕耳殼の前側部に存する小筋。その收縮によりて、耳翼軟骨を前擧す。

じぜん-くわい 慈善會【名】貧民・孤兒・癈疾者・病者・罹災者等を救恤する目的にて設けたる會。

しぜんくわがく 自然科學【名】『英 Natural science』自然の物質的現象を研究する科學。即ち天文學・物理學・化學・動物學・植物學の類。(精神科學に對して)

しぜんけい 自然形【名】自然のままの形。

しぜんけいざい 自然經濟【名】〔經〕『獨 Naturalwirtschaft』Ⅰかぞくけいざい(家族經濟)に同じ。Ⅱじつぶつけいざい(實物經濟)に同じ。

しぜんけいざい-じだい 自然經濟時代【名】〔經〕自然經濟の行はれし時代。

しぜんけう 自然敎【名】〔哲〕しぜんしゅうけう(自然宗敎)に同じ。

しぜん-けん 自然權【名】〔法〕『英 Natural right』自然法により認められし權利。

しぜん-し 自然死【名】〔醫〕『英 Natural death』負傷・病氣等のためならで、自然に壽命盡きて死ぬること。

し-せんじ 使宣旨【名】檢非違使(ケビヰシ)別當を補する宣旨。

し-せんじ 指宣旨【名】『その人の指す所に從ふ宣旨の義なりといふ』一分官を求むる者が、一二國の缺を載せ、その中にて望む國の傍に、印を點じて出だしたる申文に從ひて命ずる宣旨。「の唐名。

しぜん-じ 司善寺【名】だいぜんしき(大膳職)

じぜん-じげふ 慈善事業【名】慈善を目的として營む事業。

しせん-しふ 私撰集【名】多くの歌人の歌を個人にて撰したる歌集。(敕撰集に對して)

しぜん-じん 自然人【名】〔法〕一個の人類にて、權利の主體たるもの。(法人に對して)

しぜん-しんがく 自然神學【名】〔基〕『英 Natural theology』天啓の與ふる所によらず、自然界にあらはれたる材料に基づきて、神の存在・性質・關係等の問題を系統的に研究する學。(超自然神學に對して)

しぜん-しんけう 自然神敎【名】〔哲〕次條に同じ。

しぜん-しんろん 自然神論【名】〔哲〕『英 Deism』神は世界を創造せしかど、その後の進行に對しては、自然の法則を以て支配するのみなりと主張し、奇蹟・豫言・天啓等を排斥し、理性を以て、宗敎の軌範となす思想。自然神敎。超然神敎。超然神論。理神論。理神敎。

しぜん-しんわ 自然神話【名】てんねんしんわ(天然神話)に同じ。

しぜん-しゃくわい 自然社會【名】『英 Natural society』平等にて、服從關係の未だ生ぜざる狀態にある社會。自然の集會の結果として生じたる社會。(政治社會に對して)

しぜん-しゅうけう 自然宗敎【名】〔哲〕『英 Natural religion』自然崇拜によりてのみ發生せる原始的宗敎。この宗敎における神は、未だ道德的なる心情と行動とを有するに至らず、只管その意に承順し、その慈善によりて、幸福を享けんとするものにして、自然力の數は甚だ多きため、多くは多神敎的なり。自然敎。

しぜん-しゅぎ 自然主義【名】Ⅰ『英 Naturalism』〔哲〕しぜんせつ(自然說)に同じ。Ⅱ〔文・美〕『英 Naturalism』一切の技巧を排し、宗敎・道德等を脫して、直ちに人生の現實を描出せんとする主義。その極端なるは、往往肉慾・野性等を寫して得意とするに至る。第十九世紀の半頃、ロオマン主義の反動として起れるもの。しゃじつしゅぎ(寫實主義)參照。Ⅲ男女間の性慾を遠慮なく滿足せしむる主義。(俚語)

しぜん-すう 自然數【名】〔數〕『英 Natural number』より順次に一つづつ增して得る數、即ち 1・2・3・4・5・6 等。

しぜんすうはい-せつ 自然崇拜說【名】〔哲〕しぜんそうはいせつ(自然崇拜說)に同じ。

しぜんすゐぎん 自然水銀【名】〔鑛〕『英 Native mercury』天然に產する水銀。小滴狀を呈して、辰砂と共に發見せらる。

しぜん-せうどく 自然消毒【名】自然に行はるる消毒。例へば、人の唾液及び胃液は、黴菌撲殺の効力を有して、胃を强壯ならしむる類。

じせんせき 二千石【名】Ⅰにせんせき(二千石)に同じ。Ⅱ能(ノウ)の狂言の一。一冠者が主人の許を請はず京見物に行きしが、諫を習ひ來れりとて、主人に問はるるままに、二千石の松にこそ云云の曲を謠ひ、却りて主人の怒に觸れて、手討にせられんとして危く助けらるる筋のもの。

しぜんせつ 自然說【名】〔哲〕『英 Naturalism』Ⅰ精神的出來事を考察するに、物質的出來事の類推に依るか、或はまた單にこれが連續に過ぎざるものと見る傾向。唯物論と殆ど同義なるもの。又その形而上的原理を排するは、機械論に似たり。物理觀。自然論。自然主義。Ⅱ道德の起源を、人類の自然的衝動に歸せしむる說。自然論。自然主義。Ⅲ宗敎より、一切の超自然要素を排斥し、徹頭徹尾、自然的にこれを說明せんとするもの。自然神論のごとき、これな

り。自然論。自然主義。

しぜん-そうはい 自然崇拜【句】しぜん(自然)の條下を見よ。

しぜんそうはい-せつ 自然崇拜說【名】〔哲〕『英 Naturism』宗教の最も原始的の形は、自然崇拜なりと說くもの。

しぜんたいすう 自然對數【名】〔數〕『英 Natural logarithm』。卽ち 2.7182 8 ……なる不盡數を底數とする對數。

しぜんたいほ 私擅逮捕【名】〔法〕私人が、ほしいままに人を逮捕すること。

しせんだう 詩仙堂【名】京都比叡山の西麓一乘寺村にある、石川丈山の遺跡。丈山この閑居に、支那漢代より宋代までの詩家三十六人の詩を選び、探幽をして、その像を畫かしめて、これを楣上に掲げたり。今も、その像と丈山遺愛の品とを藏す。さんじふろくせん(三十六詩仙)參照。

しぜん-たうた 自然淘汰【名】〔生〕『英 Natural selection』すべての生物は、その生存する場所の境遇に適應して、種種の障礙に打克ち得る物のみ能く生存繁殖し、然らざる物は、自然に退歩絶滅に至ること。これを主張する進化論上の一假說を、自然淘汰說といひ、西曆一八五八年英人ダーウヰン(C. R. Darwin)・ウレエス(A. R. Wallie)二人の唱導に係る。(人爲淘汰に對して)てきしやせいそん(適者生存)・しゆうたうだ(雌雄淘汰)參照。

しぜんたうた-せつ 自然淘汰說【名】〔生〕

しぜんたうとく 自然道德【名】『英 Natural morals』原始時代より、人類相互の間に自然に存在する、人間の行爲の自然的規則。

じぜん-たんたい 慈善團體【名】慈善事業のために設立せる團體。

しぜん-ち 自然智【名】〓本來具はれる智。鎌田兵衛名所盡「幼けれども賴朝の、凡慮の及ばぬ自然智を知らぬぞ後の悔みなる」〓〔哲〕『英 Light of nature』啓示を待たずして、眞理を知ることを得べき人性自然の能力。(神惠智に對して)

しぜん-ちゆうたん 自然中斷【名】〔法〕『獨 Naturlisobe unterbrechung』時效中斷の一。占有の喪失によりて、所得時効の中斷すること。

しぜん-ちりがく 自然地理學【名】〔地〕ちもんがく(地文學)に同じ。

しぜん-つうふう 自然通風【名】『英 Natural ventilation(又は draught)』船の汽罐の焚方の一。汽罐の火爐内へ、自然に空氣の吸込まるる裝置。(强壓通風に對して)

しぜんてき 自然的【貌】自然なるさま。人爲の加はらぬさま。

しぜんてき-いし 自然的意志【名】〔哲〕『英 Natural will』心理學にて、衝動・欲望の如く、自然的もしくは本能的に發動する意志。これに思慮の加はりて、その發動を決定する時は、悟性的意志といふ。

しぜんてき-こくきやう 自然的國境【名】『英 Natural boundary』山川・海湖等によりて、自然に定まれる國境。

しぜんてき-じつざいろん 自然的實在論【名】〔哲〕『英 Natural realism』實在論中の最も單純なるものにして、吾人が外界に對する知覺によりて、外物の存在を認め、また內界の內省にて、精神の存在を認むといふ事實に基き、これを正確なる認定と見做して、外物及び精神の存在を承認する見解。自然的二元說。そばくてきじつざいろん(素朴的實在論)參照。

しぜんてき-わえき 自然的地役【名】〔法〕『羅 Servitutes juris gentium naturales』國際地役の一。一國が、國際法上、他國にその領域を使用せしめざるべからざる場合のもの。

しぜんてき-にげんせつ 自然的二元說【名】〔哲〕『英 Natural dualism』しぜんてきじつざいろん(自然的實在論)に同じ。

しぜんてき-はふそく 自然的法則【名】〔哲〕しぜんはふ(自然法)に同じ。

しぜんてき-ひつぜん 自然的必然【名】〔哲〕『英 Natural necessity』一定の出來事が、自然法に從ひて生起せざるべからざる場合。

しぜんてき-らうむ 自然的勞務【名】〔經〕むほうしうてきらうむ(無報酬的勞務)に同じ。

しぜん-てつ 自然鐵【名】〔鑛〕『英 Native iron』遊離して、天然に存在する鐵。

しぜん-てつがく 自然哲學【名】〔哲〕『英 Natural philosophy』哲學の一部門。物的自然を對象とするもの。(精神哲學に對して)

しぜん-てつだう 支線鐵道【名】支線に通ずる鐵道。

しぜんてん 四禪天【名】〔佛〕色界(しきかい)の十八天を、四天に大別したるもの。卽ち梵衆・梵輔・大梵の三天を初禪天、少光・無量光・光音の三天を第二禪天、少淨・無量淨・遍淨の三天を第三禪天、無雲・福生・廣果・無煩・無熱・善見・善現・色究竟(きやうく)の八天を第四禪天といふ。四禪。

しぜんと 自然と【副】しぜんに(自然に)に同じ。

しぜんどう 自然銅【名】〔鑛〕『英 Native copper』遊離して、天然に存在する銅。殆ど純粹なるものにて、通例、樹枝狀又は苔狀をなす。きりめいし。じねんどう。

しぜん-とうへう 自選投票【名】みづから自己を選擧する投票。

しぜん-なべ 慈善鍋【名】歲末に、人通繁き辻に吊して、その中に任意の喜捨を乞ふ鐵鍋。その喜捨を以て、餅その他の物品を賻ひ、貧困者に贈與する救世軍の施設。

しぜんに 自然に【副】おのづから。じねんに。天然に。しぜんと。

しぜんは 自然は【副】遂には。ひとりでに。

し-せんばい 私專賣【名】その主體が一私人たる專賣。

しぜんはっせいせつ 自然發生說【名】〔哲〕むせいぎげんせつ(無生起源說)に同じ。

しぜんはふ 自然法【名】『英 Natural law』〓〔哲〕天地間の事物の、存在し且つ變化するに就きて、それぞれ支配せらるる、一定不易の法則。卽ち齊一律及び因果律。天然の法則。自然的法則。自然の法則。自然律。〓〔法〕時代と同情とを超越したる千古不易萬邦普通の大法。その起原に關しては、原始的社會に行はれし法律の意に解するものと、純思辨的に發見せんとする理想的のものとする說と、人性に基づける法の意に解せらるるものとあり。普通には第三の意に解せらるるが故に、一名、性法といひ、また理想的のものとする意にて、理性法ともいふ。(人定法に對して)

しぜんび 自然美【名】〔哲〕『英 Natural beauty』自然界の美觀。卽ち風景の美、動植物の美など。(藝術美に對して)

じぜん-びやういん 慈善病院【名】慈善のために設けたる病院。

しぜん-ぶつ 自然物【名】〔經〕『英 Gratuities』〓自然界に存する有形物。〓自然の一。生産の材料を供給するもの。物質的なる自然。卽ち禽獸・魚介・草石・鑛物など。天然物。天產物。

しぜんぶんるゐ 自然分類【名】〔生〕『英 Natural classification』生物分類法の一。その系統の遠近・親疎を標準としたるもの。主として、進化論の究明に伴ひて發達し來れり。自然分類法。(人爲分類に對して)

しぜんぶんるゐはふ 自然分類法【名】〔生〕前條に同じ。(人爲分類法に對して)

しぜん-ぺうしや 自然描寫【名】〔文〕〓山川・草木の如き自然物を描寫すること。〓技巧を弄せざるありのままの描寫。

しぜん-べんごにん 私選辯護人【名】被告人の自由に選定したる辯護人。(官選辯護人に對して)

しぜん-ぼく 自然木【名】栽培によらず、天然に生長したる木。てんねんぼく。甲陽軍鑑「果報生れついたる人は、たとへば自然木のごとし。自然木は風にあたりても枯ること稀なり」

じせん-まんぎんしふ 自撰漫吟集【名】〔書〕僧契沖の詠歌を自ら撰したるもの。一卷。

しぜん-めんえき 自然免疫【名】〔醫〕『獨 Natürliche immunität 又 Angekorene immunität』動物中、體質により、生來或種の傳染病の病毒に感染せざること。例へば人類・猿類以外の諸動物の、徽毒に對しては感染せざる類。

しぜん-やみ 自然止【名】〔商〕帳合米の相場の、火繩の燃えつくるまでに、直段成

立せずして終ること。ひなはねだん(火繩直段)参照。

しぜん-ゆわう 自然硫黄【名】〔鑛〕『英Native sulphur』火山・温泉等に天然に産する硫黄。多くは土を混ず。

しぜん-りつ 自然律【名】〔哲〕しぜんはふ(自然法)〔二〕に同じ。

しぜん-りょく 自然力【名】『英Natural agent』〔一〕自然界に行はるる作用。〔二〕〔經〕生産要素の一。人の勞力を補ふ自然の力。非物質なる自然。即ち風力・水力・日光・蒸氣力・電力などの類。天然力。

しぜん-ろん 自然論【名】〔哲〕しぜんせつ(自然説)に同じ。

しそ 嗜素【名】食官を刺戟して、その分泌物を增し、腸の運動を助くる、香味ある食物。

しそ 尸素【名】『尸位素餐の略』無能にして、官に在り、祿を受くること。

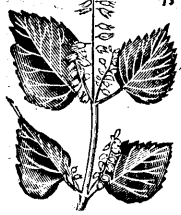
しそ 縞素【名】『縞は黑衣の義にて、僧衣をいひ、素は染めざる衣の義、俗人の衣をいふ』僧と一般の人と。僧俗。平家「貴賤手を束ね、縞素足を蹙く」

しそ 始祖【名】せんぞ。そせん。

しそ 私訴【名】〔法〕犯罪行爲が同時に私法上の結果を生じたる場合に、その私法上の請求のために、公訴に附帶して提起する訴訟。即ち犯罪行爲より蒙りたる損害の賠償、又は財物の反還を求むる場合等の類。(公訴に對して)

しそ 絲素【名】『英Fibroin』絹絲の本體。

しそ 紫蘇【名】〔植〕脣形(シンケイ)科に屬する一年生の草。園圃に培養せらる。高さ二尺餘、葉は鋭頂を有する廣卵形にして、長さ約二寸、表面は暗紫褐色、下面は紫紅色を帶び、七・八月の頃、白色又は淡黃色の花を開く。變種に縮緬紫蘇・青紫蘇などあり。ちそ。いぬえ。のらえ。



(そ し)

じ-そ 自訴【名】みづから訴訟を提起すること。

じ-そ 辭書【名】じしょ(辭書)の約。〔古語〕「かかるほどに、大貳のじそといふもの、公に奉りたりければ」

しそう 馳走【名】すみやかに走ること。

しそう 使僧【名】使の僧。太平記「使僧に對面もなく、一言の返事にも及びたまはねば」

しそう 詩僧【名】詩を作る僧。

しそう 師僧【名】師匠の僧。能化。

しそう 詩宗【名】『詩の宗匠の義』〔一〕詩に秀でたる人。辭宗。〔二〕文人又は學者に對する敬稱。詞兄。

しそう 指嗾・使嗾【名】そそのかすこと。けしかけること。さしづ。

しぞう 祇承【名】『祇承(ヨウ)の約』古、勅使下向の時、途次の饗應、その他種種のことを司りしこと。〔古語〕

祇承の官人【句】祇承のことを掌りし役人。伊勢「ある國のしぞうの官人の妻(メ)にてなんある」

じそう 寺僧【名】その寺の僧。

じそう 辭宗【名】しそう(詞宗)〔一〕に同じ。

しそ-がゆ 紫蘇粥【名】乾したる紫蘇を入れたる粥。正月これを食すれば、邪氣を拂ふといふ。

しそ-きせき 紫蘇輝石【名】〔鑛〕斜方輝石の一種。輝石安山岩中に産す。小粒狀又は扁粒狀をなして、黑・黑褐又は黑綠等の色を呈し、劈開著しくして、やや金屬光澤あり。

しそく 脂燭・紙燭【名】古、室内にて、蠟燭の如く、火を燈すに用ひしもの。松の木を、長さ一尺五寸、太さ徑三分ほどの棒狀に削り、先の方を火にあぶりて黑く焦し、その上に油を引きて炙り乾し、下を紙屋紙(カミヤ)にて卷きたり。即ち小さき松明(タイマツ)の如きもの。また紙撚(コヨリ)を油に浸して代用せしもあり。和名「紙燭、俗音、之曾久」蜀村「紙燭して廊下すぐるや五月雨」

脂燭の歌【句】脂燭の幾寸燃ゆる間にと、時間の制限を立てて詠む歌。

脂燭の詩【句】前條と同樣にて、歌の代りに詩を作るもの。

しそく 子息【名】むすこ。せがれ。

しそく 四足【名】〔一〕よつあし。獸類。〔二〕机などの、四本の足のあるもの。よつあし。

しそく 四則【名】〔數〕『英Four fundamental operations又Four species』算術の加・減・乘・除の四法。

しそく 四塞【名】四方に山川の險阻ありて、隣國との交通ふさがりたること。「四塞の地」「四塞の國」

しそく 私屬【名】一家に隸屬せる者。

しそく 親屬【名】しんぞく(親族)の略。源氏「藤つぼの御方のしそくたちの」

しそく 氏族【名】一つ氏のやから。うからやから。

しぞく 士族【名】〔一〕士分の家柄。〔二〕族稱の一。華族の下、平民の上に位す。明治維新の際、公家・武家・寺社の世襲の家臣に與へ、各その地方廳に貫屬せしめしもの。但し家祿を奉還する者は、一時金を與へて平民とし、後、士族の分家の者も、華族の分家と同じく、平民たらしめたり。

士族の商法【句】明治維新後、士族の家祿を奉還して得たる金を資本として、馴れぬ商法を營み、多くは失敗に終りしこと。

しぞく 支族・枝族【名】分れたる一族。分家。

しぞく 指嗾・使嗾【名】しそう(指嗾)に同じ。

しぞく 矢鏃【名】やじり。

しぞく 嗣續【名】跡をつぐこと。あとつぎ。相續。

しぞく 退く【動四自】しりぞく(退く)の略。〔古語〕源氏「うけたまはりながらしぞきて」

じぞく 賦足【名】あぶらあし。

じぞく 自足【名】みづから滿足してあること。みづから足れりとすること。

自足自給【句】〔經〕「自給自足」に同じ。

じぞく 自則【名】じりつ(自律)に同じ。

じ-ぞく 時俗【名】その時代の人情・風俗。

しそく-いろ 脂燭色【名】〔一〕經(タテ)は紫、緯(ヨコ)は紅なる織色。火色に同じといふ。〔二〕襲(カサネ)の色目の一。表は紫、裏は濃き紅。

しそく-きゆう 四足弓【名】しげぞう(重籐)に同じ。

しそく-くわげん 次屬和絃【名】〔音〕『英Subdominant』音階の第四音。主音の上方四度即ち下方五度の音。

じそく-けいざい 自足經濟【名】〔經〕『英Self-sufficing economy』かぞくけいざい(家族經濟)に同じ。

じそくけいざい-じだい 自足經濟時代【名】〔經〕自足經濟にて滿足せる時代。

しそく-ざん 四則算【名】〔數〕算術の、四則のみを用ひて計算するもの。

しそく-さんびやう 四仄三平【名】〔文〕漢詩にて、古句平仄法の一。一韻到底の古詩押韻の句の、上の四字に仄聲、下の三字に平聲を用ふるもの。

じそく-じきふ 自足自給【句】じそく(自足)の條下を見よ。

じそく-にん 嗣續人【名】さうぞくにん(相續人)に同じ。

しそく-まち 士族町【名】昔の城下の地の士族の集まり住める處。

しそく-わんけいにん 私訴關係人【名】〔法〕私訴上の民事原告人及び民事擔當人。

しそ-けん 私訴權【名】〔法〕私訴の訴權、即ち犯罪に因りて生じたる損害の賠償、贓物(ゾウブツ)の返還を求むる訴權。

しそこなひ 爲損【名】しそこなふこと。しそんじ。

しそこなふ 爲損ふ【動四他】しそんず(爲損ず)に同じ。梁塵「心から、わが娘をしそこなひつる嘆をしけり」

しそ-しゆ 紫蘇酒【名】燒酎に紫蘇・桂皮・茴香(ウイキヤウ)等の浸出液を混じたる芳香甘味の銘酒。また近來は、味醂に紫蘇を混じても製造す。備後國鞆津(トモノウラ)の名產。

しそ-ず 爲損ず【動佐變他】しそんず(仕損ず)に同じ。〔古語〕源氏「老い人どもは、しそじつと思ひて」

しそつ 士卒【名】■士分と雑卒と。■つはもの。さむらひ。兵士。

しそてう 始祖鳥【名】〔動〕『英 Archæopteryx』古生物の一。世界最古の鳥。爬蟲類と鳥類との間に位する形態を有し、嘴には歯あり、前肢は羽毛を具へて、翼に似たれども、三指を有し、爪を備ふ。蜥蜴(トカゲ)様の尾を有す。祖先鳥。蛇尾鳥。

しそなはかす 爲損かす【動四他】しそんず(仕損ず)に同じ。〔古語〕撰集抄「さるほどの、いみじき人を、親しき方にもちたらば、いつしか、後世をもしそなはかすべき」

しそば 紫蘇葉立浪【名】〔植〕唇形(クチビル)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ四五寸、葉は心臓形にして、裏面は紫色を帯び、夏季、紅紫色の花を開く。

しそびしほ 紫蘇醤【名】赤紫蘇の葉の細かに刻みたるを入れて製したるひしほ。

しそまき 紫蘇巻【名】■味を附けたる味噌に、麻の實を加へ、紫蘇の葉に巻きたる食品。■梅干・唐辛などの、紫蘇の葉にて巻きたるもの。

しそまきうど 紫蘇巻独活【名】二寸ほどに切りたる独活に味を附け、千枚漬の紫蘇の葉にて包み、更に煮たるもの。取肴の附合はせに用ふ。

しそむ 爲初む【動下二他】なしはじむ。源氏「むつかし事も、しそめてけるかな」

しそむし 紫蘇蒸【名】食品の一。白身の魚類に、細かに刻みたる青紫蘇を撒布して蒸したるもの。

しそん 子孫【名】■子と孫と。兒孫。後昆。■血すぢのする〻ゑ。末孫。

しそん 至尊【名】■きはめて尊きこと。

■てんわう(天皇)に同じ。

じそん 慈尊【名】〔佛〕『じし(慈氏)を見よ』

みろくぼさつ(彌勒菩薩)■の敬稱。慈氏尊。著聞「和尚受二持佛法一、至二子慈尊出世一爲二護持一來向也」

じそん 自尊【名】自らたかぶること。自重。

じそん 自存【名】■自己の存在。■〔哲〕『英 Self-existent』存在するにつきて、他の原因に制約せられざること。

じそん 耳孫【名】『耳とは、ただ耳にて聞く義とも、仍と音相通ずるによりて用ふともいふ。じようそん(仍孫)參照』曾孫の孫。玄孫の子。

じそん 兒孫【名】子と孫と。子孫。兒孫の計【句】『宋詩紀事に、天台道士守信の詩なりとて掲げたる「汲汲光陰似二水流一、隨時得レ過便須レ休、兒孫自有二兒孫計一、莫下與二兒孫一作中馬牛上」とあるに本づく。癸辛雜識には、葉李(ヨウ)の作とし、紀夢と題して、計を禍に作れり』子孫の生活上の計畫。

じそん-さんゑ 慈尊三會【名】〔佛〕りゅうげさんゑ(龍華三會)に同じ。謡曲(高野物狂)「慈尊三會の曉」

しそんじ 爲損【名】しそんずること。しそこなひ。失錯。

しそんず 爲損ず【動佐變他】やりそこなふ。しそこなふ。失錯す。

じそん-もくてき 自存目的【名】〔法〕じしゆもくてき(自主目的)に同じ。

しそめ 爲初【名】しそむること。てはじめ。しはじめ。

しそめ 仕初【名】『前條の語の義』徳川時代に、正月元日、芝居にて行ひし儀式。初め翁渡(オウタケ)を演じ、次ぎに一座の役者悉く舞臺に出でて祝言を述べ、後に吉例の見得(エ)をなし、一同に辭儀を行ひしこと。

しそめし 紫蘇飯【名】紫蘇の葉を鹽にて揉み、細かに刻み、飯の半熟の頃交ぜて炊ぎたるもの。

しそらくがん 紫蘇落雁【名】干菓子の一。ゆかり紫蘇・梅酢漬の紅粉(コフン)を混じて製したる落雁。

じぞり 自剃【名】みづから鬚・髪などを剃ること。一代女「小才覺らしき顔つきをして、出額(デビタ)のかしらを自剃して居る所」

した 舌【名】■(體)口腔の下底にある肉質にして、扁平・長楕圓形なる器官。言語を發し、咀嚼・嚥下作用を補助し、且つその粘膜には味覺器を有す。舌尖・舌背・舌根の三部より成る。■ことば。言語。

舌が足りない【句】言葉づかひ流暢ならず。言葉どもり勝ちなり。

舌がまはる【句】よく物言ふ。口巧者なり。

舌三寸の喙に、五尺の身を果す【句】言葉を愼まざりしために、身を滅す。口禍に罹る。〔諺語〕

舌存す【句】「歯亡び、舌存す」を見よ。

舌長し【句】多辯なり。多言なり。おしやべりなり。

舌に塵も附けぬ【句】のべつに喋喋と語る。一説に、巧なる言譯などを即座になすことをいふと。〔諺語〕

舌の劍は命を絶つ【句】「口の虎は身を破る」に同じ。〔諺語〕

舌の根【句】舌の根もと。舌根。稱遍如來經生會「二言と吐かば、舌の根引抜いて捨てんず」

舌の根乾かず【句】前言の終るか終らぬ程に。前言を發してより程へず。

舌延ぶ【句】「舌長し」に同じ。稱遍如來經生會「どれどのの口で、舌の延びたる奴ぞ」

舌は禍の根【句】『老子に「夫舌禍福之門」とあるに本づく』「口は禍の門」に同じ。〔諺語〕

舌も引かず【句】言ふ處いまだ終らず。雁山縦「たった今辱めた舌も引かぬに無分別」平家女護島「笑止笑止と、舌もひかぬに、六波羅より早使」

舌柔かなり【句】言葉の自由に言ひ得るに任せていふ。平家「忝くも、舌のやはらかなる儘に、口に任せて申し語りける事の淺增しさよ」

舌を咋む【句】『後漢書の馬援傳に「姜勝咋レ舌」とあり』憤(カイ)りて口を結び、舌端をかむ。

舌を喰ふ【句】自らわが舌を喰切りて、自殺をはかる。丹波與作「侍ならぬ馬かたを、刃で死なすは、勿體ない。舌を喰ふか身を投げるか、似合うたやうに、在郷馬の口取繩で、首くくれ」

舌を出す【句】陰にて嘲る。紅舌三寸。

舌を捲く【句】『詩經の大雅抑篇に「無レ易二由言一、無レ曰レ苟矣、莫レ捫二朕舌一、言不レ可レ逝矣」とあるに本づく』舌を執り持つがごとくにして、言語の過失なからしむ。

舌を二枚に使ふ【句】言實を重んぜずして、前後異なりたる言葉を發す。二枚舌を使ふ。

舌を抜く【句】「閻魔に舌を抜かる」を見よ。一代女「もはや五十九になりて、十七といふことは、四捨二の大うそ。世の後に鬼が咎めて、舌を抜くべし」

舌を翻(カヘ)す【句】大いに驚く狀にいふ。

舌を振る【句】「舌を巻く」に同じ。平家「妹尾太郎兼康恐れいりてぞ候ひける。その外の侍どもは、舌を振ってぞ感(ミ)合ひける」

舌を振ふ【句】■『史記の淮陰侯傳に「酈生一士、伏軾掉二三寸舌一、下二齊七十餘城一」とあり』雄辯を奮ふ。■次條に同じ。保元「この矢を見る者、皆舌を振ってぞ恐れける」

舌を巻く【句】『漢書の揚雄傳に「禮官博士、咨二其舌一而不レ談」とあり』驚き怖れて、言葉を發する能はず。舌を掉ふ。用明天皇職人鑑「命にかけが〻へらばこそと、舌を巻いてぞかぶり振る」

舌を結ぶ【句】『世説の徳行篇に「恐子綱不レ能レ結二兒輩舌一」とあり』發言すること能はざらしむ。

閻魔に舌を抜かる【句】虚言をなしたる者は、閻魔に、釘抜にて、舌を抜取らるるとの俗説。

した 簧【名】『した(舌)の義』吹奏樂器の要部の一。金屬・竹片又は葦の莖などを薄く切り、その一端は固定し、他端を遊離せしめ、吹きて空氣の流を送る時、振動して、或高さの音を發するやうにしたるもの。音舌。和名「笙……其中受レ簧、俗云二之太一」

した 下【名】■低き方。しも。(上(カミ)に對して)■そこ。うら。(上(カミ)に對して)

集「うはせ川したの心も知らなくに深くも人のおもほゆるかな」 三 劣ること。又その人。しもも。したやく。めした。 四 少なきこと。としした。 五 相場の安きこと。下落。 六 陰部。しも。

下に 【句】 次條を見よ。

下に下に 【句】 土下座(ドゲザ)せよ。下に居よ。(江戸幕府時代に、將軍諸侯の行列が庶民に土下座を促せし掛聲) 二 茶「黒門や下に下にと雉子の聲」

下に出す 【句】「下に遣る」に同じ。

下に取る 【句】 下に出せし物を受く。

下に待つ 【句】 したまつ(下待つ)に同じ。 拾遺「來ぬ人を下に待ちつつ久方の月をあはれといはぬ夜ぞなき」

下に遣る 【句】 物を買ふ時、代金の一部に充つるために、不用品を拂ひ渡すこと。 浮世風呂「あれを下に遣って、插込のある簪と取替(トリ)へたがの」

下に居る 【句】 土下座(ドゲザ)をなす。

下へも置かず 【句】 鄭重に取扱ひて、下位にも在らしめず。下座にもおかず。

下結ふ紐 【句】 したひも(下紐)に同じ。 新勅撰「思へばや下結ふ紐の解けつらん我れをば人の戀ひしものゆゑ」

下よはよふ 【句】『よは 助辭、よりに同じ』忍び忍びに思をかけて妻どふ。〔古語拾遺〕 大和へに行くは誰(タ)がつまこもりづのしたよはへつつゆくは誰がつま」

下行く水 【句】 物に蔽はれたる下を流るる水。 萬葉「したひ山下ゆく水の上に出でずわがもふ心」

下結(ヒ)ふ紐 【句】 したひも(下紐)に同じ。 古今「花薄穗にいで戀ひば名を惜み下結ふ紐の結ぼほれつつ」

下より這ふ 【句】「商人は腹を實り、客は下より這ふ」を見よ。

した心 【名】『した(下)の義。うら(心)を見よ』こころ。心中。心底。〔古語〕 古今「言に出でていはぬばかりぞ水無瀬川したにかよひて戀しきものを」

した 【名】 こんにやく(蒟蒻)を云ふ。〔女の語〕

した 【名】『歯(シ)るる物の義』歯茎。羊齒(シ)類に屬する植物の通稱。

した 【植】 羊齒(シ)類に屬する植物の通稱。

した 【植】 うらじろ(裏白)四に同じ。 三 紋所の一。「だきしだ」等の種類あり。

した 志田 【名】〔地〕 陸前國十三郡の一。郡役所を古川町に置く。

した 志太 【名】〔地〕 駿河國五郡の一。郡役所を藤枝町に置く。

した 信太 【名】〔地〕 常陸國の舊郡の一。霞浦の西岸一帶を占めしもの。明治二十九年河内郡と合して、稻敷郡となれり。

した 【接尾】 しなに同じ。〔東國の古の方言〕 萬葉「ひなぐもり春日の坂を越えしだにいもが戀しく忘らえぬかも」

した 自他 【名】 一 己れと他人と。彼我。 二 彼れと此れと。彼此。 保元「自他の記錄に暗からず」 三 〔佛〕 自力と他力と。 四 〔語〕 自動詞と他動詞と。

した 耳朶 【名】 一 みみたぶ。 二 みみ。耳朶に觸る 【句】 耳に入る。聞及ぶ。次條に同じ。

したあぎ 下腭 【名】 次條に同じ。

したあご 下腭 【名】 下方のあご。したあぎ。(うは腭に對して)

したあまし 舌甘し 【形】 一 物言やさし。言葉やさし。 二 言葉巧なり。口さき上手なり。

したい 支提・支帝 【名】〔佛〕『梵Stūpa』たふ(塔)の異稱。

したい 死胎 【名】 死したる胎兒。

したい 死體 【名】 しかばね。しがひ。(活體に對して)

したい 施體 【名】 身體の上に加へ行ふ施體の刑 【句】〔法〕 しんたいせい(身體刑)に同じ。

したい 詩體 【名】 詩歌の體裁。

したい 肢體・支體 【名】 一 身體の四肢、即ち手足。 二 四肢と五體と。身體と手足と。

したい 四堆 【名】 陣形の一。四方に取擴げ、敵もしその一方を攻破りて、中に入る時は、四方より取圍みて擊つもの。「四堆の陣」

したい 四體 【名】 一 頭と胴と手足との總稱。していぇ。こだい(五體)參照。 二 〔文〕 俳諧の四種の體裁、即ち雅體・野體・俗體・鄙體の併稱。

したい 四諦 【名】〔佛〕『梵Āryasatyāni 又 Āryāṇisatyāni 又 Tchatursatya の譯語』苦諦・集諦・滅諦・道諦の併稱。苦とは迷界の果報、即ち吾人凡夫の身體等、集とは苦果を招き集むる過去の煩惱、滅とは悟界の果報、即ち迷の苦果を滅して、中道實相の悟に入ること、道とは滅度の因たる正道、即ち戒(カイ)・定(ヂヤウ)・慧(エ)の三學の修行。即ち苦・集の二者は迷の因果、滅・道の二者は悟の因果にして、この四諦の理によりて道果に至るを、聲聞(シヤウモン)といふ。四聖諦。苦集滅道。

したい 枝隊・支隊 【名】 本隊より分れたる隊。

したい 歯帶 【名】〔動〕 しほん(四板)に同じ。

したい 姿體・恣體 【名】 すがた。かたち。

したい 詞態 【名】〔文〕 し(詞姿)に同じ。

したい 詩題 【名】 作詩の題。

したい 次第 【名】 一 上下・前後のならび。ついで。順序。 枕「事のしだいもなく、まづまづと」 增鏡「三の宮を次第のままに思はれけるに」 二 手つづき。由來。事情。 保元「過たぬ次第を辨へ申せば」 三 能(ノ)にて、役者の舞臺に現れて、まづその現れる次第・由來を述ぶる時、又は」番の中、特別なる舞の始まらんとする時に謠ふ七五・七・五の字數の文句。前者の場合には必ず地取(ヂトリ)を用ひ、後者の場合には、地謠(ヂウタ)に謠ひ、又は更に低音に地取を謠ふ。 四 能(ノ)にて、まづその次第・由來を述べ謠ふ役者の、舞臺に現るる時の囃子(ハヤシ)。大鼓・小鼓を用ひ、笛はあしらひを吹く。

次第不同(ダイフドウ) 【句】 順序の整はぬこと。

したい 進退 【名】 しんたい(進退)の略。〔古語〕 源氏「元より、しだいならぬ人の御事なれば」

したい 四大 【名】 一 〔佛〕『圓覺經に「四大謂二人身一、攬二外地水火風四大一而成二內身四大一、因對二色香味觸微一故稱爲二四大一」とあり』なまみ。人の身。心身。 增鏡「四大本無レ主、五蘊本來空」 二 『老子の第二十五章に「道大・天大・地大・王亦大、域中有二四大一、王處二其一一焉人法レ地、地法レ天、天法レ道、道法二自然一」とあるに本づく』道・天・地・王の四つの併稱。四界。

四大歸空 【句】〔佛〕『假に形を成せる四大の、本の空に歸する義』形消え失す。死す。四大空に歸す。

四大空(クウ)に歸す 【句】 前條に同じ。 太平記「五蘊假成形、四大今歸空」

四大の四苦 【句】 人間の身に於ける生・老・病・死の四つの苦惱。 頓城反魂香「四大の四苦を、この身一つに重ね重ねて、空より空に入る」

四大本來空 【句】〔佛〕 四大種は因緣によりて成れるものなれば、その當體は空なること。

したい 至大 【名】 極めて大なること。(至小に對して)

したい 次第 【接尾】 一 事の成行に任する意。 蘆庵歎「お墓の花も枯れ次第、持佛の香も消え次第」 二 その物事の如何による意。「返答次第に」「出來あがり次第」

したい 事體・事態 【名】 事のさま、ことがら。

「讓退。拒障。

したい 辭退 【名】 へりくだりて否むこと。

したい 字體 【名】 一 文字の書きかた、即ち楷書・行書・草書など。 二 文字の形。

したい 自體 【名】 自分のからだ。

したい 自體 【副】 いったい。ぜんたい。もとより。じたいは。 冥途飛脚「昨今の者は知るまいが、じたいはこれの實子でなし」

したい 自大 【名】 自ら尊大にかまふること。

したい 事大 【名】『孟子の梁惠王篇に「惟智者能以小事大」とあるに本づく』 一 小弱國が、大國に依賴して、その存立を維持せんとすること。 二 弱者が勢力の强き方に附隨ひて、己れの安全を保たんとすること。

じたい 時代 【名】 一 その頃の世。ときよ。年代。時節。 井筒業平河內通「道を守るも時代による」 二 ふるくさきこと。陳腐。

じたいもの (時代物)の略。 三 じだいぎれ(時代切)の略。 丹波與作「長刀・袋傘袋、時代の金襴、鶴菱たすき」

時代が附く【句】道具など、何時頃の時代の品なりといひはやさるる程に、古びて價値生ず。時代物らしくなる。

したいあん 施耐庵【名】〔人〕水滸(スイコ)傳の作者なりと稱せらるる人。元初の武林の人なりといふ。經歴は詳かならず。

じだいおくれ 時代後【名】**じせいおくれ**(時勢後)に同じ。

じだいおやお 時代親父【名】老人を時代おくれの者として輕しめていふ稱。圖入

したいかい 四大海【名】〔佛〕須彌山(シュミセン)の四方にある四つの海。四海。榮花「この御志、須彌山よりも高く、四大海よりも深し」

したいがき 次第書【名】一理由又は由來を書きたる文書。二順序を書きたるもの。順序書。

したいがら 次第柄【名】わけがら。なりゆき。仕儀(シギ)。

「の條下を見よ。

したいきくう 四大歸空【句】しだい(四大)

したいきしょ 四大奇書【名】〔書〕支那の戯曲小説中、水滸(スイコ)傳・三國演義・西廂記・琵琶記の併稱。後には、西廂記・琵琶記を除き、西遊記・金瓶梅を加へていへり。

じだいきやうげん 時代狂言【名】衣冠・甲冑・上下(カミシモ)など著けたる古昔の時代に取材して、脚色したる芝居狂言。時代物。(世話狂言に對して)

じだいぎやうれつ 時代行列【名】往時に行はれし行列。大名行列の類。

じだいぎれ 時代切【名】**こだいぎれ**(古代切)に同じ。世間子息形氣「時代切の表具にて珍しき掛物を」

したいけんあん 死體檢案【名】醫師の治療を受けずして死亡したる場合、又は治療を受けし醫師の不明なる場合、その死體に就きて、醫師が外表檢査を行ふこと。

したいけんあん 死胎檢案【名】死胎を檢案すること。檢案する者は、死産に關係なき醫師又は産婆なることを要す。

したいけんあんしょ 死體檢案書【名】醫師が死體檢案の次第を記して作る證書。死亡檢案書。

したいけんあんしょ 死胎檢案書【名】醫師又は産婆が死胎檢案の次第を記して作成する證書。

したいこじき 次第乞食【名】〔佛〕次條に同じ。孕常盤「なかにも次第乞食とは……次第次第の門並を請うて通る法なれば」

したいこつじき 次第乞食【名】〔佛〕一頭陀(ズダ)の行(ギョウ)に十二種ある中の一。身に著せず、衆生を輕んぜず、貧富を擇ばず、次第に食を乞ふこと。二門並に乞食する者。しだいこじき。

じだいこんじやう 事大根性【名】事大主義の根性。事大を重んずる心。

じだいさくご 時代錯誤【名】『英 Anachronism』時代遲れの思想・感情を以て、現代のすべてを律せんとすること。

じだいし 次第紙【名】大和國より産する一種の厚紙。

じだいし 次第司【名】儀式などの時、身分などの次第を立てて、亂れぬやうにするを務むる人。〔古語〕新古今「むかし見ける人、賀茂の祭の次第司に出でたちて」

したいし 四大師【名】大師の號を賜はりたる四人の僧、即ち傳教大師(最澄)・慈覺大師(圓仁)・弘法大師(空海)・智證大師(圓珍)の併稱。

したいじ 四大寺【名】我が國の古代に、朝廷の祈願所たりし四箇の大寺、即ち藥師寺・元興寺・興福寺・大安寺、又、後には、東大寺・興福寺・延曆寺・園城寺の併稱。四箇の大寺。

したいしう 四大洲【名】一四つの大なる洲。四つの大陸。二〔佛〕しし(四洲)(二)に同じ。正統記「この海中に四大洲あり」

じだいしさう 時代思想【名】**じだいせいしん**(時代精神)に同じ。

じだいしてう 時代思潮【名】前條に同じ。

じだいじゃうるり 時代淨瑠璃【名】時代物を仕組みたる淨瑠璃。

したいしゅ 四大種【名】〔佛〕一地大・水大・火大・風大の併稱。古、印度にて、四者共に、その體・相・用共に大にして、一切の色法(シキホフ)を構成する因種(成分)なりと考へられしもの。即ち地大は、すべての堅性の屬する所にして、堅凝を性とし、物を任持するを用とし、水大は、すべての濕性の屬する所にして、濕潤を性とし、物を收攝するを用とし、火大は、すべての溫性の屬する所にして、煖熱を性とし、物を成熟するを用とし、風大は、すべての動性の屬する所にして、動轉を性とし、物を長養するを用とす。この四種は萬物の元素なり。二しだい(四大)(二)に同じ。

じだいしゅぎ 事大主義【名】一定の主義を有せず、勢力の强大なる者に事ふる主義。

じだいせいしん 時代精神【名】『英 Spirit of the age』或時代において、社會人心の大體を支配せる思想。時代思想。時代思潮。

じだいせわ 時代世話【名】芝居狂言の、半ばは時代物にして、半ばは世話物なるもの。(き世話に對して)

じだいたう 事大黨【名】事大主義を標榜して、「する黨派。

じだいだか 次第高【名】順順に高くなりゆくこと。一代玄「鼻の間(アヒ)せはしからず、次第高に、口ちひさく」

じだいだな 次第棚【名】床間(トコ)書院などの脇に設くる棚。押板の代りに用ひてよしといふ。

じだいちがひ 時代違【名】一時代を異にせること。五人玄「かかる美女のあるべきものか。業平に、時代違にて見せぬことの口惜し」二その時代に同化せぬこと。その時代の流行と背反すること。

じだいつき 時代附【名】時代が附くこと。

じだいてんわう 四大天王【名】〔佛〕しててんわう(四天王)(二)に同じ。

じだいな 次第名【名】順序を逐ひて附けたる人名。太郎・次郎・三郎又は與一・吉二・虎三などの類。

じだいに 次第に【副】つぎつぎに。段段に。順に。漸次に。增鏡「この事次第に、六波羅にて尋ね沙汰するほどに」

じだいはばき 次第脛巾【名】脛巾の一種。下賤の者の用ふるもの。その製詳かならず。盛衰記「次第脛巾に編笠を著」

したいびり 下臈【名】目下の者を虐待すること。

下臈の上詔(カウセウ)【句】目下を虐待して、目上に詔ふこと。〔諺語〕

したいふ 士大夫【名】支那にて、士と大夫との併稱。士夫。

したいぶきやう 四大部經【名】〔書〕華嚴(ケゴン)經・涅槃(ネハン)經・寶積(ホウシャク)經・般若(ハンニャ)經の併稱。四經通じて八百四十一卷。これを五千四十八卷の大藏經に對し、俗に小藏經といふ。

したいほ 下庵【名】山陰・木の下などに在る家。併語新選(宗專)「下庵の暮るるを知らぬ紅葉かな」

じだいまうけ 時代儲【名】一代まうけに同じからん。世間娘氣質「これ、みな、唐へなげがねして、時代まうけの分限」

じだいまつり 時代祭【名】山城國京都に鎭座する官幣大社平安神宮の私祭。十月二十五日に行ふ。鳳輦を先として、時代祭これに隨ふ。延曆遷都以來、文物の變移せし各時代の行裝をなし、市中を巡(メ)り、御目還御す。行裝は古くは、延曆武官出陣式より藤原・鎌倉を初め、明治維新の際の行陣に擬するなど、目のあたりに、各時代を偲ぶに足る。明治二十八年始めて執行す。

じだいめく 時代めく【動自四】古代らしく見ゆ。古風に見ゆ。

じだいもの 時代物【名】一多くの時代を經たる物。古き物。二歴史上の事柄を仕組みたる脚本・小說。(御家物・世話物に對して)

じだいもやう 時代模樣【名】昔行はれし

したいやう 親太陽【名】〔天〕『英 Apparent sun』しんたいやう(眞太陽)に同じ。

じだいやせ 次第痩【名】時を經るにつれて、身體の痩衰ふること。五人玄「戀にせめられ、次第やせに、あたら姿の曉りゆく」

したいれ 下入【名】**したかはらけ**(下土器)に同じ。

したいろ 下色【名】一下の色。下地の染色。二物事の末となり、衰へたる形勢。

じだいをとこ 時代男【名】㊀その時代に、勢力熾んなる男。その時代の流行男。㊁年老いて、現代に遠ざかりたる男。老夫。若風俗。この主人時代男にて」

したう 至當【名】至極適當なること。あたりまへ。もっとも。

したう 私稻【名】官稻にあらざる稻。(官稻に對して)〔古語〕續紀「出二擧私稻一」

したう 私黨【名】一私人の黨與。私の仲間。わたくしのくみ。

したう 支黨【名】わかれの仲間。餘類。

したう 紫糖【名】くろざたう(黑砂糖)に同じ。

したう 四倒【名】〔佛〕してんだう(四顚倒)に同じ。

したう 指導・指道【名】教へみちびくこと。

したう 祠堂【名】㊀祖先の靈位を安んずる場處。たまや。廟。㊁ほこら。みや。

したう 至道【名】人道の至極なるもの。まことのみち。

したう 四道【名】㊀四つの國。四つの道路。〔古語〕㊁四方の部面。㊂古の大學寮に置かれし、紀傳・明經・明法・算道の併稱。正統記「古には詩書・禮樂を以て、國を治むる四術とす。本朝は、四術の學を立てらるること、儘かならざれども、紀傳・明經・明法の三道に、詩・書・禮を攝すべきにこそ、算道を加へて四道といふ」

したう 師道【名】師の弟子に對する道。師範たるべき道。

したう 市道【名】㊀利益を爭ふ商人の道。「市道を以て交る」㊁『漢書の劉輔傳に「天人之所レ不レ予、必有レ禍而無レ福、市道皆共知レ之」とあり』市道の交をなす人。市中の人。㊂公道の一。市の費用にて維持するもの。

市道の交【句】利あれば交り、利害相反すれば、離叛する交際。

したう 私道【名】㊀公明ならざる道。㊁私人の專用に供する道路。私有の通路。

したう 詩道【名】詩に關する學術。作詩の術。

したう 士道【名】士人の履踐すべき道。

したう 斯道【名】『論語の雍也篇に「誰能不レ由レ戸、何莫レ由二斯道一也」、孟子の萬章上篇に「予將下以二斯道一覺中斯民上也」など見ゆ。しぶん(斯文)參照』この道。仁義の道。

じーたう 自黨【名】わが黨。みかた。

じーたう 珥璫【名】支那にて、冠より垂れ下ぐる耳ふたぎの飾珠。

しだう-ぎん 祠堂金【名】菩提寺に寄附して、先祖代代の供養に充つる金。祠堂銀。長生錢。しだうち(祠堂地)・しだうぶつ(祠堂物)參照。

しだう-ぎん 祠堂銀【名】前條に同じ。心中萬年草「祠堂銀五百枚奉納致され候」

したうけ 下請【名】次條の略。

したうけおひ 下請負【名】他人の請負ひたる仕事の全部又は一部を、更にその人よと請負ふこと。したうけ。

したうけにん 下請人【名】下請負をなす人。

しだう-けん 志道軒【名】〔人〕奇人。姓は深井、初名は政七。京都の人、江戸に住す。僧形より還俗して、酒色を縱にし、劒口に窮して、淺草觀音堂脇、三社權現前に軍談をなし、木製の陰莖を手にし、節を擊って語り、よく人の頤(おとがひ)を解きしより、世に摩羅坊と呼ばれたり。明和二年死す。年八十三(一に、八十四)。

しだう-しやうぐん 四道將軍【名】崇神天皇の朝、四方に、近親の皇族一人づつを、將軍として遣されしもの。即ち大彥命を北陸に、武停川別(ハケタカハワケ)命を東海に、吉備津彥(キビツヒコ)命を西道に、丹波道主(タニハノミチヌシ)命を丹波に、西道は後世の山陽道、丹波は山陰道にして、一說に、丹波に遣されしは丹波道主命の父君(即ち崇神天皇の皇弟)彥坐(ヒコイ)王なりと。

したう-せん 四當錢【名】江戸時代に、一箇が當時の通用錢四文にあたりし錢、即ち鐵四文錢と眞鍮四當錢との總稱。

しだう-せん 祠堂錢【名】しだうきん(祠堂金)に同じ。

したうち 舌打【名】舌を上顎に中てて彈き鳴らすこと。物を味ふ時、又は思ひのままにならぬ時などに行ふ。したつづみ。

したうち 舌打つ・咤つ【動四自】舌打ちす。

したうづ 襪【名】したぐつ(襪)の音便。〔古語〕增鏡「したうづはく事いかにも叶ふまじとて」

しだう-ち 祠堂地【名】㊀祠堂の敷地。㊁寺院に寄付してその收入によりて先祖代代の供養に充つる土地。しだうきん(祠堂金)・しだうぶつ(祠堂物)參照。

したうち-きかい 下打機械【名】織物の織地を打ちて平かにする機械。軸を回轉せしめて、木又は鐵製の杵を上下し、土石もしくば鐵棒の上に在る織物を打つ。布打機械。

したうつ 舌打つ・咤つ【動四自】「をなす。

したうづ-かた したうづ方【名】『下つ方の音便』下の方。〔古語〕宇治「築地をつき出して、その角は、したうづ方にぞありける」

しだう-は 師堂派・志道派【名】琵琶の一方(カタ)の分派の一。正田(セキ)仙一を祖とす。仙一、また相一とも傳へられ、康正元年歿す。

しだう-ばうえんきやう 指導望遠鏡【名】『英 Guiding telescope』天體を寫眞に撮映する時、寫眞望遠鏡に固著して、露出時間の間、正しくその方向を指導するために用ふる肉眼望遠鏡。

じーたうばん 兒纛幡【名】纛幡の一。朝賀・即位式の時、衞門の陣に樹つるもの。兒像纛幡。

しだう-ぶつ 祠堂物【名】寺院などに寄付して、先祖代代の供養に充つる品物。しだう(祠堂)・しだうきん(祠堂金)・しだうち(祠堂地)參照。

したうへ 舌上【名】くちさき。口上。十訓「かやうの事、舌上のよき人も力及ばぬ事なり」

したえ 下枝【名】次條に同じ。

したえだ 下枝【名】草木の下方にある枝。したえ。しづえ。

したおかんぢやうしよ 上御勘定所【名】したかんぢやうしよ(下勘定所)に同じ。(うち座に對して)

したおさへ 舌押【名】㊀おふし(嘔)に同じ。㊁金屬又は硝子製の篦(ヘラ)にて、舌を抑へ、咽喉・口腔を見るに用ふる診察用器具。「壓舌子」

したおし 下押【名】〔商〕相場の下落すること。おし。「三圓餘の下押を示す」

したおび 下帶【名】㊀裝束の下、小袖の上に締むる帶。したひも。(うは帶に對して)㊁ふんどし(犢鼻褌)に同じ。盛衰記「さらぬだに寒きに、褌計りに裸なり」

下帶の祝【句】始めて、下帶を締むる祝。男になりたるを祝ひてする事なりといふ。

したおほめ 【名】舵の一部、舵板(カヂ)を貫く孔。

したおもて 下面【名】能(ノウ)にて仕手(シテ)の、假面(メン)をかぶらぬ場合。芭蕉「月やその鉢の木の日のしたおもて」

したおもひ 下思【名】心の中にて思ひながらも、外に出さぬものおもひ。萬葉「みなとあしに交れる草のしりくさの人みな知りぬわがしたおもひ」

したが 【接】であるが。けれども。だが。狂言(實驗)「此方には、をな上萬と云うて、娘子がござらうが。なかなか、御座る。したが、それに就いて參りましてござる」

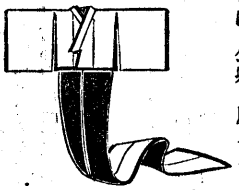
したがき 下書【名】㊀草案。草稿。案。下書(ガキ)。心中萬年草「國許の狀をも人だのみするなと、下書書いて渡せしが」㊁淸書の前に試に書くこと。㊂人に書狀を贈る場合に、上所(カタ)の下に官名を書くこと。げしよ。「進上何官殿」の類。

したがき 下搔【名】したぞめ(下染)に同じ。〔古語〕出觀集「梅の花うすくれなゐのしたがきをむらむら染むる春霞かな」

したかげ 下蔭【名】樹木などの下の暗き所。新千載「風わたる横川の杉の下蔭に心の水を手に結ぶかな」

したがさね 下襲【名】㊀古、束帶の時、下著とせし衣。半臂(ハンピ)の下に著するを當とし、その背後の裾(スソ)を裾(キヨ)と呼び、長くして袍の下に出だし、曳きたるまま歩みしが、後には、裾を胴より切放し、また下襲の代りに、大帷(オホヒラ)を著、裾と下襲の襟と

をこれに添へ、その上に袍を著ることとなれり。地紋と色目とは、公卿と殿上人とにより、また夏と冬とによりて差別あり。しが、中古、服色の法度廢れし後は、裾の長さによりて、大臣・納言・參議等の階級を差別したり。源氏「したがさねの色、うへのはかまの紋」 ㊁したぎ(下著)に同じ。


(し)ねさがたし(ロ)

したがさね 下襲 【名】 ㊀束帶の時、袍の下に著る衣。裾を長く曳く。源氏「小袖のしたまへ。」

したがざり 齒朶飾 【名】 新年に、裏白を七五三縄(ナハ)に插みなどして飾ること。類聚雜要抄「花に來て齒朶飾見る杜かな」

したかぜ 下風 【名】 木などの下を吹く風。千載「秋のくるけしきの森のしたかぜに立ちそふものはあはれなりけり」

したかた 下方 【名】 ㊀しもつかた(下つ方)に同じ。 ㊁はやしかた(囃子方)に同じ。 素人狂言紋切形「素人狂言があるから囃子方をどうぞおたのん申て〳〵てったあ」

したがた 下形 【名】 ㊀形木(カタ)。摹型(モケ)。源氏「物のしたがた。ゑやうなどをも御覽じ入れつつ」 ㊁したぢ(下地)に同じ。源氏「おほやけの御後見となるべかめるしたかたなる」

したがって 從つて 【副】 「の音便。

したがひて (從ひて)

したがね 下金 【名】 ㊀下地に用ふる金屬。ちがね。 ㊁ふるかね(古金)に同じ。

したがねや 下金屋 【名】 ㊀したがね㊁を賣買する商、又その人。 ㊁江戸時代に、幕府より特許を得たる金銀地金を賣買する家、又はその人。買集めたる地金は、金座出張所に賣込むべき義務を有したり。

したかは 齒朶革 【名】 藍地に齒朶を白く抜きたるなめし皮。しながは。

したがはらけ 下土器 【名】 酒を呑みて、したみを乘らし入るる土器。凝濁(ギョウ)の土器(カハラケ)。したいれ。

したがひ 下交 【名】 したまへ(下前)に同じ。 〔古語〕 蜻蛉「唐衣馴れにしつまをうちかへしわがしたがひになすよしもがな」

したがひて 從ひて 【接】 それによりて。つけて。よりて。それ故に。したがつて。

したがふ 從ふ・隨ふ 【動四自】 『下がふの義』 ㊀あとに附きて行く。 ㊁下に附く。服從す。さからはず。「順ふ・遵ふ」 ㊂まかす。ままになる。應ず。 後撰「秋の夜に雨ときこえてふりつるは風にしたがふもみぢなりけり」

したがふ 從ふ・隨ふ 【動下二他】 したがはす

したがへ 下交 【名】 したまへ(下前)に同じ。 〔古語〕 袋草子「たまは見つぬしは誰れとも知らねどもむすびとどめつしたがへの つま」

したがへ 下がへ 【名】 したがさね(下襲)に同じ。

したかま 志田窯 【名】 陶器の一種。肥前國志田・小田志・吉田等より製出する陶器。明曆年中に開窯し、專ら皿・茶碗等を作る。小田志窯。

したがまへ 下構 【名】 したぐみ(下組)に同じ。

したかんぢやうしよ 下勘定所 【名】 江戸幕府時代に、大手門內に在りし役所。組頭以下の吏員ここに執務す。下御勘定所。

したがり 下刈 【名】 幼木を保護する目的にて、下草を刈除すること。年に一二回行ふを宜しとす。

したき 下木 【名】 下方に在る木。一說に、葉の散り落ちんとするきざしのある木。

したきり雀 舌切雀 【名】 御伽話の一。爺の愛したる雀、糊を舐めたりとて、婆怒り、その舌を切りて放つ。爺悲しみ、その宿を尋しかば、雀大いに喜び、土產として大小の葛籠(ツヅラ)を出す。爺小さきものを貰ひて歸れば、中より種種の珍寶出づ。婆羨みて、雀の宿を訪ひ、大きなる葛籠を貰ひしに、歸途その中より妖怪出でたりといふもの。

したく 支度 【名】 ㊀『たく(度支)を見よ』はかること。見つもること。「路程を支度す」 ㊁用意。準備。「仕度」 ㊂他出せんとして、衣服を著かふること。「仕度」 ㊃他出の際又は途中にて、食事をすること。「仕度」

したく 私宅 【名】 私の住家。自己の家。

したく 四澤 【名】 『陶潛の四時の詩に「春水滿二四澤一、夏雲多二奇峰一、秋月揚二明輝一、冬嶺秀二孤松一」とあるに本づく』 四方の澤。

したく 拉く 【動四他】 踏みくだく。にじる。あらす。 古今「わがやどの花ふみしだく鳥打たん野はなければやここにしもくる」

したく 自宅 【名】 我が宅。自己の家。

したく-おん 次濁音 【名】 〔語〕 支那の音韻學にて、音の清濁を五種に分ちたるその一。その名もと悉曇(シッ)學に出でたるものにて、支那にも、この音聲なく、我が國もこれを缺く。喉音につきていへば、清音kに對する gの類。即ち次清音の無聲有氣音なるに對して、有聲有氣音なるもの。音韻學者中、清濁音を次濁音と呼びて、次清音に對せしめしもあれど、もとより誤れり。(清音・濁音・次清音・清濁音に對して)

したく-かんち 私宅監置 【名】 精神病者を、その監護義務者が私宅に監置すること。

したくかんちしつ 私宅監置室 【名】 私宅監置をなす室。

したく-きん 支度金 【名】 支度㊁に要する金。

したぐくり 下括 【名】 げぐくり(下括)に同じ。 太平記「布衣に下括して」

したぐさ 下草 【名】 木の下蔭にある草。千載「うらやまし雪のしたぐさかきわけて誰れをとぶひの若菜なるらん」

したぐさえい 下草永 【名】 次條に同じ。

したぐさ-ぜに 下草錢 【名】 江戸時代に、官有の山林原野の下草を特許して刈らしめ百姓より取立てし稅金。

したぐち 下口 【名】 しもの入口。

したぐちびる 下唇・下脣 【名】 下の方の脣。(うは脣に對して)

したぐつ 下沓・襪 【名】 裝束の時、靴の下にはくもの。白き平絹(ギヌ)の張りたるにて製す。今の靴下の類にて、足袋のごとく、拇趾と他の四趾との間を開くることなし。あしぶくろ。したうづ。 和名鈔、之太久豆、足衣也」

したぐづる 下崩る 【動下二他】 ㊀下の方が崩る。 〔古語〕 ㊁我執を折りて、他に從ふ。 〔古語〕 狹衣「いとど、この御ものがたりどもに、したぐづれたる心地しはべる」

したぐび 下頤・胡 【名】 頤(オトガヒ)の下にある垂れたる肉。 〔古語〕 和名「胡、釋名云、咽下垂皮胡、之太久比」

したぐみ 下組 【名】 ㊀本組(クミ)の準備として組立つること、又その物。したごしらへ。したじくみ。したづくり。 ㊁假の用意。したがまへ。したごしらへ。したじくみ。準備。支度。 竹取「さしこめて、守り戰ふべきしたぐみしたりとも」

したぐ-めし 支度飯 【名】 飯屋・小料理屋などにて食事を認むること、又その食事。煙嵐色三味線「伏見へ朝飯時に著いて、京橋にて支度飯」

したぐも 下雲 【名】 下方にある雲。萬葉「對馬のねはしたぐもあらなふかむのねにたなびく雲を見つつしぬばも」

したぐゆる 下薰る 【動四自】 『火となりて燃上らずに薰る義』 ㊀下焚く煙に薰る。 ㊁表面にあらはさず、人知れず戀慕ふ。 〔古語〕 增鏡「したくゆる心地にもいと嬉しきものから」

したぐら 下鞍・轡 【名】 鞍の下に布きて、馬の背の處を被ふもの。藁にて作り、革にて覆ふ。一枚或は二三枚重ぬることもあり。一枚なるは唐切附(カラキレ)といひ、二枚なる場合には、上のを上(ウハ)切附上(ウハ)、下鞍、又は左筆(サヒ)といひ、下のを膚附(ハダ)・下(シタ)切附・下(シタ)下鞍

(らぐたし)

又は屢脊(バサ)といひ、三枚なる場合には、上のを上切附、中のを下切附又は中切附、下のを膚附又は敷膚(ハジキ)といふ。きっつけ。しづくら。和名抄「鱸。之太久良。鮫鱸」

したぐら 下倉【名】したの方の倉。十訓抄「右近府のしたぐらに召籠められる」

したぐるし 下苦し【形二】心の中に、苦しく思はれてあり。〔古語〕曾丹集「をしどりのみなるるほどはつれなきをしたぐるしとは知るらめや人」

したぐるま 舌車【名】くちぐるま(口車)に同じ。聖徳太子繍像記「自慢の舌事」

したげいこ 下稽古【名】練習のために、あらかじめなす稽古。豫習。

したけんさ 下検査【名】本検査の前に、あらかじめ行ふ検査。したけんぶん。

したけんさ-しょ 下検査書【名】下検査の始末を記したる文書。

したけんぶん 下検分【名】したけんさ(下検査)に同じ。

じ-だこ 字凧【名】太き文字或は籠字にて、月龍魚などの文字を書きたる凧。(繪凧に對して)

したごがる 下焦る【動下二自】心の中に思ひこがる。したもゆ。

したごがれ 下焦【名】心のうちにこがること。したくゆること。したこひ。したもえ。〔古語〕千載「難波江のすくもたく火のしたこがれ上はつれなきわが身なりけり」

したごき 舌扱【名】舌のあかをこきおとす具。齒みがき楊枝などに附屬す。

したごころ 下心【名】㊀心のそこ。心のうち。枕「下心には、いと嬉しけれど」㊁心のそこの考。狂言(六地藏)「したごころ有って申した事でござる」㊂かねて思ひ設けたること。豫期せること。豫想。㊃漢字の脚部の一。思、怒などのごとく、日或は奴の下に在る心の字の稱。

したごしけ 【名】〔植〕しきびばな(死人花)を云ふ。(大和國の方言)〔同じ。〕

したごしらへ 下拵【名】したごみ(下組)に同じ。

したごはし 舌強い【形一】舌がこはばる。盛衰記「舌強くして、思ふことをも言ひおかず」

したこひ 下戀【名】心のうちに戀ふること。したこがれ。〔古語〕萬葉「青丹よし奈良のわぎへにぬえ鳥のうらなげしつつ下戀に思ひうらぶれ」

したごろも 下衣【名】したぎ(下著)に同じ。〔古語〕萬葉「白妙のあが下衣うしなはずもてれわがせこただにあふまでに」

したざいく 下細工【名】下ごしらへ、又は下請(シタウケ)の細工、又これをなす職人。

したさうだん 下相談【名】本相談の前に、あらかじめなす相談。

したさき 舌先【名】㊀舌のさき。舌頭。舌端。㊁くちさき。口頭。言葉。口上。㊂和製の鑑の舌の端。

したさく 下作【名】こさく(小作)に同じ。

したさしあみ 下刺網【名】さしあみ(刺網)を見よ。

したさつ 試刷【名】こころみに印刷すること。ためしずり。〔さん。〕

したさん 下棧【名】舵(カヂ)の一部。のぼりも、修營の事に關せしより並べていふ。

したさんぶぎやう 下三奉行【名】『いづれも、修營の事に關せしより並べていふ』江戸時代に於ける普請奉行・小普請奉行・作事奉行の併稱。

したざや 下鞘【名】㊀太刀の鞘袋ならん。㊁〔商〕當月限より翌月限の相場の方低きこと。(上鞘(ウハザヤ)に對して)

したし 親し【形二】㊀血緣近し。㊁睦しへだてなし。うとからず。

したしあ 親しき仲には垣をせよ【句】あまり親密に過ぐるは、却りて、不和の本なれば、親密なる中にも、守る所あれかし。思ふ仲には垣をせよ。(諺語)

したしき-なかにも 親しき仲は遠くなれ【句】前條に同じ。(諺語)

したしだし 仕出【名】㊀しだすこと。造り出すこと。㊁新しき流行。新工夫。一代男「これは變った仕出と、樣子を問へば」一代女「小袖の紋がらも、この程の仕出に、縫切の櫻鹿子」㊂誂に應じて、料理を誂主へ送ること。でまへ。調進。㊃芝居の幕あきなどに、本筋に關係なくして、一寸舞臺に現はるる人物。狂言の筋を實り、又はその場の氣分などを現はすために用ふる輕き役。多くは、稻荷町(イナリヂヤウ)の役者、これを勤む。㊄煮出したる汁。すまし。今宮心中「なんの料理につかうても、しだしがうまい」

したしだし-いしやう 仕出衣裳【名】新流行の衣裳。五人女「すみ所は室町通、仕出衣裳の物このみ、當世女のただ中、廣い京にも又あるべからず」

したしき 下敷【名】物の下に敷く物。

したしく 親しく【副】みづから。まのあたりに。直接に。

したしぐみ 下仕組【名】したごみ(下組)に同じ。「の仕事。

したしごと 下仕事【名】下拵又は下請負取附けたる細工。

したしごころ 下心【名】したごころ(下心)に同じ。

したしぞめ 仕出染【名】新案の染かた、又その染物。曾我五人兄弟「縫箔・鹿子物好の思ひ思ひの仕出染」

したした 【副】萎へしだるるさま。しなしなと。〔古語〕宇治「今はねりぎぬのやうに、したしたとなりたるものを」

したした 【副】㊀濕潤・滑澤なるさま。じとじと。㊁ねばりて引寄せらるるさま。狂言(膏藥練)「膏藥の强いに引かれて、駈けいでたる馬がじたじたじったと吸寄せた」を見よ。

したしたくら 下下鞍【名】したくら(下鞍)

したしば 下柴【名】物陰に生ふる柴。夫木「した柴の枯れゆくほどにふりぬれば爪木こりつむしがらきの里」

したしぶり 下澁【名】〔商〕相場の下落せんとして、容易に下落せざること。

したしべんたら 仕出辨當【名】新しく案じいだしたる調味の辨當。一代女「女ながら美食好み、鶴屋の饅頭、…椀屋の蒲鉾、棟木(ムナギ)筋の仕出辨當」

したしべんたら-や 仕出辨當屋【名】仕出辨當を賣る家。また辨當の仕出をなす家。五人女「祇園町の仕出辨當屋の藏に、附紙(ツケガミ)且印に鍬と鋸を書きおきしが」

したしみ 親【名】したしむこと。懇親。

したしむ 親しむ【動四自】したしくなす。睦じくなす。むつむ。「愛す。

したしむ 親しむ【動四他】いつくしむ。親まだ一人前にならぬ者。

したしんざう 下新造【名】遊廓の新造の

したしんず 親んず【動佐變自】『親みすの音便』

したしんず 親しんず【動佐變他】『親しみすの音便』したしむ(親しむ)に同じ。

したじめ 下締【名】女の、帶の下に締むる細き紐。

したしもの 浸物【名】ひたしもの(浸物)の訛。兒童「たんぽぽや五柳親父がしたしもの」

したしもやう 仕出模樣【名】新流行の模樣。一代女「幽禪綉もふるされ、當流の仕出模樣(隱綉(シノビヌヒ)の獨りわらひ」

したしや 仕出屋【名】仕出㊂をする家。

したじよく 下職【名】下仕事をなす職人。

したじよくぶつ 羊齒植物【名】〔植〕蘚花植物の一類。この類に屬するものは世代交番にして、その特徴は、莖は葉に比して短く、概ね腋芽より發生し、葉は分裂し、又は複葉をなすもの多し。葉の緣邊又は裏面に子嚢ありて胞子を有す。羊齒類。

したしらべ 下調【名】豫備の調査。したげいこ。「調へたる料理。

したしり-れうり 仕出料理【名】仕出屋にて

したす 仕出す【動四他】㊀なし始む。著手す。㊁作り出す。㊂誂に應じて、料理ならはす。しはじむ。丹波與作「おとましい事しだしやって、主に厄介かける」㊃立派なる事をなす。でかす。平治「右衞門の督の座上に著く人一人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ」㊄働きて、身代をふやす。稼ぎ出す。㊅船を雇して出發す。〔船乘の語〕

したすがた 下姿【名】冠も袍も著けざる髮を結ぶ準備に、よく髮を梳きおくこと、又これをなす女、即

したすき 下梳【名】

ち髪結(カヒ)のすきて。

したすずみ 下涼【名】下陰にて涼むこと。芭蕉「命なりわづかの筆の下涼」 曠野(俊)「飛石の石龍(ナガ)や草の下すずみ」

したすだれ 下簾【名】古、牛車(ギッシャ)の簾の内に懸垂せし帳。多くは生絹(スズ)を末濃(スソ)に染めて作り、長さ約九尺餘、簾の下より外へ出して長く垂れたり。(上簾(カハス)に對して) 枕「簾うちあげ、したすだれひきあげて乗せたまふ」

(れだしだし)

したずり 下摺・下刷【名】活版又は版木の出來あがりたる時、試に行ふ印刷。

したぞめ 下染【名】本染の前に、先づその補色たる或色に染むること。古今「耳なしの山のくちなしえてしがな思の色のしたぞめにせん」

したそり 下剃【名】本剃の前に、先づあらかじめ粗略に剃ること、また散髪屋の弟子のこれをなす者。

したた 【說】しのびしのび。ひそか。〔古語拾遺〕「あまだむ輕(カル)のをとめしたたにもより寢てとほれかるをとめども」

したたか 健【說】形態・體格・程度・數量などのいかめしく十分なるさま。源氏「したたかにいふ聲の、さだすぎたるも」 太平「したたかな櫻かたげて夜道かな」 蓉の門松

したたかもの 健者【名】容易に人に屈せぬ者。えらもの。 平家 猪俣は八箇國に聞えたる健者也」

したたく 下焚く【動四自】下より、火を焚く。〔古語〕 續千載「かりにだにうへにな立てそ廬の家のしたたく烟おもひきゆとも」

したたて 下立【名】次條の略。

したたていた 下立板【名】牛車(ギッシャ)の車箱の一部。したたて。

したたな 下棚【名】和船棚板の一部。棚合二枚の場合に於いて、下位にありて、舳、前艫に接合する板。加敷。

したたまる 認まる【動四自】認めたるきまになる。ととのふ。〔古語〕 大鏡「この殿御後見もしたまはば、天の下のまつりごとはしたたまりなんとぞ思ひ申したりしかども」

したたみ 細螺・小螺【名】〔動きさご(細螺)に同じ。〔古語〕 萬葉「つくゑの島のしただみをいひろひもちき」

したたみ 認【名】したため(認)に同じ。 聖徳太子繪傳記「片岡山の飯に餓ゑ行き惱みたる旅の者……主は他參り、珍重珍重、したたみして立退かんと」

したたむ 認む【動下二他】一とりまかなふ。ととのふ。支度す。 源氏「みあかしの事どもしたためいでて、いそがせん」 幕遊抄 來臨生貪捉婆奇計を廻らし、橋の行桁に埋火をしたため、橋板踏めば燃出るやうにしつらひ」 二食事をなす。食ふ。 義經記「菓子ども……、男子やうにしたためて」 三書く。しるす。 四みとむ(認む)に同じ。

しただむ 舌訛む【動四自】囁にごる。ことばなまる。物いひさはやかならず。 拾遺「あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ」

したため 認【名】一したたむること。調ふること。二食事をすること。 源氏 冷泉院「六尺どもと呼ばはれど、皆したために歸って」 同じ。

したたらかす 滴らかす【動四他】次條に同じ。

したたらす 滴らす【動四他】したたるやうにす。したたらかす。

したたらず 舌不足【名】物いひの自由ならぬこと。舌のまはらぬこと。したつき。したったらず。

したたり 滴【名】垂れ落つる液類。しづく。點滴。滴歷。

したたる 滴る【動四自】『下垂るの義』液類、下に垂る。雫となりて落つ。 子鱶「淋、志太太留」

したたるし 舌たるし【形一】物いひざま、甘えたるやうなり。 五人女「舌たるき獨言

したたる 滴積りて、淵となる【句】「塵積りて、山となる」に同じ。〔諺語〕

したたるし 下地窓・助枝窓【名】壁下地(カベヂ)の表はれたるが如く見せて作りたる窓。斑竹・葭などを縦横に取附け、つづら藤の蔓などにて絡(カラ)げ。懸障子(カケザシ)等を用ひたるもあり。 一代男「戸明くるをも晉せず、下地窓より外を覗かず」

したぢもの 下地物【名】あつもの(羹)を云ふ。〔駿河國の方言〕

したつ 四達【名】四方に通ずる道路。四達・八通【句】「四通・八達」に同じ。

したつ 滴つ【動下二他】したたらしむ。〔古語〕 太平記「百官、罪なくして、涙を配所の月に滴て」 同「百官泪を滴てて、葬事の御迹に順ひ」

したつ 仕立つ【動下二他】一作りこしらふ。こしらへなす。調ひよそほふ。 枕「車きよげにしたてて見に行く」 二布帛を裁ちて、衣服に縫ふ。 源氏「臨月(ミツキ)の御さうぞくなど、……いときよらにしたてたまへるは」 三教ふ。しこむ。 源氏「舞ならはしなどは、さとにて、いとようしたてて」 四さし送る。さしたつ。

したつ-いはね 下岩根【名】そこついはね(底磐根)に同じ。〔古語〕 祝詞「したつ磐根に宮柱ふとしり立て」

したづかさ 下司【名】一地位ひくき官吏。げし。げす。 二したやく(下役)に同じ。

したづかひ 下使【名】雜事に使ふこと、又その使はるる人。 孕常盤「下使の下部」

したつき 譖言【名】したたらず(舌不足)に同じ。〔古語〕 和名「譖言、之多都岐、舌不正也」

したつき 舌附【名】舌のさま。物いふくせ。

したつぎ 舌接【名】接木法の一。臺木と接穗(ツギキ)とを二つながら斜に削り、その削りたる面の一部を割きて、舌狀を作り、兩舌を插合するもの。

したつ-くに 下津國【名】よみ(黃泉)に同じ。(うはつ國に對して)〔古語〕 紀「泉中、シタツクニ」 「じ。

したづくり 下作【名】したぐみ(下組)に同じ。

したづくろひ 下繕【名】本繕(クロヒ)の前になすつくろひ。

したづくゑ 下机【名】机の下に更に据ゑおく机。 源氏「右はぢんの箱に、せんかうのしたづくゑ」

したづけうるし 下附漆【名】繪漆の一種。梨子地粉蒔に塗るもの。普通の繪漆よりは、紅殻の量少なし。

したつ-たらず 舌不足【名】したたらず(舌不足)の音便。 浮世風呂「舌っ足らずの眞似をする兒」

したつづみ 舌鼓・舌皷【名】したうち(舌打)に同じ。 源平布引瀧「うまいうまいと、したつづみ」

したっ-ぱ 【名】階級の低き者。下級のもの。「役者のしたっぱ」「したっぱの役人」

したっ-ぱら 下腹【名】(したはら(下腹)に同じ。

したっ-つぼね 下局【名】女官が當に住める局。(うは局に對して)

したっ-づま 下褄【名】下前の褄。 植城島原蛙合戰「二人は小袖の下褄おし切り、筆がほしい、硯がな」

したっ-づみ 下積【名】■他の物の下に積むこと、又その下に積みたる物。 鄰遊如來藏生寶「先づ兩舌の婆將軍、汝們が死骸の下積と、兩足摑んで、二つにさっと引裂き」■船の吃水を深くせんがために、木石を船底に積むこと。

したっ-つみち 下道【名】地下を掘りて作りたる道。〔古語〕起「地道、シタツミチ」

したっ-ゆ 下露【名】木の下のつゆ。

したて 仕立【名】■仕立つること。■衣を縫ふこと。裁縫。■しこみ。をしへ。■支度して送ること。さしたつること。

したて 下手【名】■下の方。下流。下風。■他より劣れる地位。■相撲(スマヒ)にて、組みて下にさしたる手。 文武五人男「左手右手に相付、下手に下ってむんづと組む」■犬追物(イヌオウモノ)にて、我が馬の後に立ちたる射手。(うは手に對して)

したて 下手に立つ【句】他人の下に附く。下風(カフ)に立つ。下手に附く。 太平記「その心闕如として、人の下手に立たん事を思はざりければ」

したて 下手に附く【句】前條に同じ。 慈八卦柱暦「奉公を出過ぎぬ氣立て、朋輩の下手につくも」

したて 下手に出(ヅ)る【句】相手に對して、謙遜の態度を取る。

したて 下手【名】したて(下手)に同じ。

したて-あがり 仕立上【名】■仕立てて、出來上がりたること。■新調して間も無きこと。

したて-おろし 仕立下【名】衣服を新たに仕立てて著ること。

したて-がほ 仕立顔【名】殊更めくこと。わざとがましきそぶり。〔古語〕源氏「心しらひのさまも、あなづるとはなけれど、何かは、ことごとしう、したてがほならんも、なかなか覺えなく、見咎むる人やあらん」

したて-ぎは 仕立際【名】■仕立てあげんとするきは。■仕立てたる手きは。 五人玄「若い者、あつまって、頭(アタマ)つきの吟味、木綿著物の仕立ぎはをあらためける」

したて-ぐち 仕立口【名】裁縫の仕立てさま。 今宮心中「南京縮の上べには、手のないやうに仕立口」「に同じ。

したて-だい 仕立代【名】したてちん(仕立賃)に同じ。

したて-で 下手代【名】地位の低き手代。

したて-ちん 仕立賃【名】仕立てたる賃金。仕立料。

したて-なげ 下手投【名】相撲(スマヒ)の手の一。四手(ヨツ)に組み、下手にて、相手の褌(フンドシ)を取り、腰を入れて投ぐるもの。

したて-ひねり 下手捻【名】相撲(スマヒ)の手の一。四手(ヨツ)に組み、相手の褌(フンドシ)を締め、又その差手を抱へて、下手に捻ること。

したて-まはし 下手廻【名】『英 Wearing』帆船が航海中、逆風のために、指路を所定の地に向くる能はざる時に、梶と帆とを繰作して行ふ方法。初に船首を風下に向け、船尾を風位に廻過せしめて、他の舷より風を受くるに至らしむるもの。順轉。(うは手廻に對して)

したて-もの 仕立物【名】■仕立つる物。仕立てたる物。■ぬひもの(縫物)に同じ。

したて-や 仕立屋【名】仕立物を業とする家、又その人。

したて-やぐら 下手矢倉【名】相撲(スマヒ)の手の一。下手に力を籠め、吊上げて廻りながら、上手にて、相手の膝を拂ひて、投倒すこと。

したて-ゆばり 臨瀝【名】『したつ(滴つ)を見よ』しばゆばりの類。小便のしたたる病。〔古語〕和名「臨瀝、之太天由波利、小便滴瀝也」

したて-る 下照る【動四自】地まで照りかがやくほどに、花又は葉赤く色づく。〔古語〕萬葉「春の園くれなゐにほふ桃の花下照る道に出でたつ少女」

したてる-ひめ 下照姫【名】〔人〕次條に同じ。 芭蕉「影は天の下照姫か月の顏」

したてる-ひめの-みこと 下照姫命【名】大國主命の女、高彦根命の妹、天稚彦(アメワカヒコ)命の妃。一名、高姫、稚國玉。

したど 舌疾【名】したはや(舌早)に同じ。 源氏「のたまふけはひの舌どにあはつけきを」

したどぎ 鷲口瘡【名】『舌に薬(ヤク)の如き物の生ずる義』がこうそう(鷲古瘡)に同じ。

したどし 舌疾し【形一】舌鋭し。物いひはやし。〔古語〕源氏「小賽小賽といふ聲ぞいとしたどきや」

したどころき 下瞰【名】底の方にて烈しくひびき鳴ること。 心中二枚繪草紙「散らし太鼓のしたどころき」

したどひ 下問【名】忍びて、女の許に通ふこと。〔古語〕起「したどひにわがとふ妹を」

したどほり 下通【名】下の方にある街路。

したとも 下供【名】供の中の下廻りのもの。

下供を略す【句】下供を省く。下供を略す。 曾我物語「二人の中間覆のかかりし挾箱を擔ぎ、茶瓶持一人附きて出で來る、總て下供を落したる行列の模樣」

したとり-しやくし 下取杓子【名】爐中を均(ナラ)す時、灰を取る杓子。そことり。〔茶道の語〕

したとり-はうろく 下取焙烙【名】爐中を均(ナラ)す時、火灰を取入るる土皿。底取焙烙(ホウロク)。〔茶道の語〕

したな 下名【名】よびな。通稱。假名。

したなし 尻棚【名】船の艫(モト)の方に附けたる板。

したなか 【名】〔植〕こぶし(辛夷)に同じ。 字鏡「辛夷、志太奈加」

したなが 舌長【名】自慢してしやべること。 續膝栗毛「戀聞とは舌長な、ほっとう野郎め」

したなが-あぶみ 舌長鐙【名】舌先(サキ)の長く出でたる鐙。(舌短鐙に對して)

したながし 下流【名】ころばし根太の如く地上に設けたるながし。

したながし 舌長し【形一】舌長なり。廣言なり。 用明天皇職人鑑「撿非違使勝舟がそさうとは、舌長し、と爭ふうちに」

したなき 下泣【名】窃かに泣くこと。心にて泣くこと。〔古語〕宇治「殿上の人人、下泣をして、皆笑ふまじきよし、いひあへりけり」

したなげ 下投【名】先に茶を入れて、後に湯を注(サ)すこと。

したなげし 下長押【名】〔建〕廣居の下に、別材にて横に長く亙すもの。(うは長押に對して)

したなみ 下波【名】人知れず、心を動かすこと。(うは波に對して)〔古語〕素性集「松山の水はかずとも思ほえず戀しき君に下波ぞたつ」

したなめずり 舌嘗【名】脣を嘗めまはすこと。宇治「目をいからかして、舌なめずりをして」「同じ。

したならし 下馴【名】うちならし(内馴)に同じ。

したに 下荷【名】下積(シタヅミ)の荷。

したぬき 下貰【名】他人を迷はして、利を得ること。〔江戸時代の語〕 蟻蟻天皇廿篇雨「わごりよが親仁は村一番下貰の名人、そんな悪い根性で、釋迦所へ行くことか」

したぬひ 下縫【名】かりぬひ(假縫)に同じ。

したぬり 下塗【名】上塗の準備に、下地を塗ること、又その塗物。(上塗中塗に對して)

したね 下直・下値【名】■今までより安き直段。低き價。■貰りたる品の代金の一部として、受取る古物の直段。下(シタ)に取る品物の直段。

したね 下根【名】下の根。根の下。〔古語〕後拾遺「田鶴のすむ澤べの蘆のしたねとけ汀もえいづる春は來にけり」

したの-うきしま 信太浮島【名】〔地〕常陸國稻敷郡に屬し、霞浦の東南に在る島。周回三里二十七町。物部信太連の子孫の城を築きて居りし處。天正中、佐竹氏に滅

さる。今、浮島村と呼ぶ。實道集「常陸の國までに、四十日餘りにまかり至りぬ。至らんとする所は、志太の浮島となん申す」

したのーおび 下帶【名】**したおび**(下帶)に同じ。江戸生艶氣樺燒「涙にまじる水はなに濡らさん袖はもたぬ故、下の帶をぞしぼりける」

したのーたふさぎ 下褌【名】たふさぎ(犢鼻褌)を見よ。〔古語〕字鏡「褌、之太乃太不佐伎」

したのーはかま 下袴・褌・褌【名】**したばかま**(下袴)に同じ。字鏡「褌褌、志太乃波加萬」

したのーひ 下帶【名】**したのおび**(下帶)の略。

したのーむすび 下結【名】**したおび**(下帶)に同じ。「こと。〔馬術の語〕

したのり 下乘【名】他人の馬を乘馴らすこと。〔馬術の語〕

したば 下葉【名】草木の下枝にある葉。(うは葉に對して)萬葉「天雲に雁ぞ鳴くなるたかまどの萩の下葉はもみちあへむかも」

したば 下齒【名】下の方の齒ぐきに生じたる齒。(うは齒に對して)

したば 下端【名】下の方。下の部分。

したばかま 下袴【名】■あかおほぐち(赤大口)に同じ。■たふさぎ(犢鼻褌)に同じ。

したばき 下穿【名】■ずぼんした(洋袴下)に同じ。■はかま(袴)に同じ。■下に重ねて穿く物。四家の中などを歩むに對して、地を歩むとき、足に穿く物。履、下駄の類。

したはし 慕し【形二】思ひはなれがたし。

したばた 【貌】取りおさへられんとする者などの、手足・身體を烈しく働かして、抵抗するさま。文武二道萬石通「わるくじたばたすると芋さしだぞ」

したばたらき 下働【名】■他人の下につきて働くこと、又その人。■炊事など下廻(ばたら)の雜事を働くこと、又その人。

したばなれ 下放【名】〔商〕從來の直段より遙かに下落すること。

したばふ 下延ふ【動下二他】心の中に、深く慕し思ふ。したくゆる。〔古語〕萬葉「こもりぬのしたばへおきてうちなげき妹がいぬれば」

したばへ 下延【名】したばふること。〔古語〕萬葉「足柄のみ坂かしこみくもり夜のあがしたばへをこちでつるかも」

したばん 下盤【名】〔地〕或鑛脈又は鑛層の下に直接する地層。

したばや 舌早【貌】物いひの疾きさま。くちばや。はやくち。舌疾(したジク)。

したはら 下原【名】武藏國の刀工の一派。周重・康重・照重以下新刀に至るまで、數十人あり。

したばら 下腹【名】■腹の下の方。ほそした。ほがみ。こがみ。このかみ。したっぱら。■馬の太腹(またバラ)。

下腹に毛が無い【句】老狼は下腹に毛無しと言傳ふるより、姦黠老猾なる人を評していふ語。〔諺語〕

したばら-せついん 下腹雪隱【名】外露次(ロジ)にある雪隱。

したはらまき 下腹卷【名】狩衣・直垂(ヒタレ)。水干などの下に腹卷(一)を卷くこと。(うは腹卷に對して)

したはらーもの 下腹者【名】貳心のある人。

したはらーもの 下原物【名】下原一派の者の手に成りたる刀。

したばり 下張【名】下地として貼ること、又その物。(上張(ウハバリ)に對して)萬葉千紅「宇宙第一の書も、壁の中の下張より出で」

したはるのーみこと 下春命【名】**あめのこやねのみこと**(天兒屋命)に同じ。

したはれ 【名】〔植〕まさき(正木)を云ふ。〔上總國の方言〕

したひ 慕【名】したふこと。戀慕。

したひ 下樋【名】■箏の琴の腹部、即ち甲と裏板との間の空虛なる部分。〔古語〕萬葉「琴取れば、嘆きさきだつけだしくも琴のしたびに妻やこもれる」■地中に設けたる樋。うづみひ。〔古語〕萬葉「水鳥の鴨の住む池の下樋なみいぶせき君をけふ見つるかも」

したひ 下火【名】■勢の衰へかけたること。■茶道にて、爐又は風爐へ炭を加ふる時、前より殘り居る火。

したびえ 下冷【名】秋冬の頃、しんより冷ゆるやうに感ずること。そこびえ。一茶「したびえの兒と寢かはりて添乳かな」

したひげ 下鬚【名】口の下に生ひたる鬚。あごひげ。(うは鬚に對して)

したひさま 慕樣【名】しきりに慕ふ樣子。源氏「したひさまに思したりつる年月は」

したひば 慕葉【名】普通の葉のもとの方に、別に附きたる小さき葉。托葉。〔古語〕

したひも 下紐【名】■裝束の下、小袖の上に結ぶ帶。したおび。(うは紐に對して)起「長大如二衣紐一(ナガサワタノゴトシ)」■下袋(シタブクロ)。又は下袴の紐。萬葉「わすれ草わがしたひもにつけれどしこのしこぐさことにしありけり」■ゆもじ。又その紐。したおび。蘆屋物「女のすなる緋縮緬足まとひぞと高からげ、男の下紐あらはなる」

下紐解く【句】■男女を論ぜず人に戀ひらるる時は、その下裳の紐自ら解くといふ傳說。萬葉「わぎもこが我をしぬぶらし草枕たびのまろねに下紐とけぬ」古今「思ふとも戀ふともあはんものなれやゆふ手もたゆく解る下紐」■全く隔なくうちとく。露の門松「いつか思の下紐とけて」日本武尊吾妻鑑「今まで結ばれし心の下紐、さあ解けて寢けて下され」

下紐を許す【句】女、男に身を打任す。堀川波の鼓「去りとは御内儀、曲がない、人には許す下紐の我れにはなぜつれないぞ」

したひも 下紐【名】〔書〕『衣といふ語の緣にて、また狹衣物語が戀物語の書なるより名づけしもの』狹衣物語を註釋せるもの。著者詳かならず。四卷。本文に附刻す。

したひもの 下紐の【枕】發音同じきより、したにかけていふ。新續古今「さのみまた恨みしもせじ下紐のしたの心の解けぬかぎりは」

したひもーのーせき 下紐關【名】古、坂上田村麻呂が、蝦夷を防がんがために、今の岩代國伊達郡に置きし關。その址、今の六木戸村、國見山の西北麓なりといふ。後、蔵原泰衡が伊達大木戸を設けて、源頼朝を防ぎしも同じ處なり。後拾遺「東路のはるけき道を行きめぐりいつかとくべき下紐の關」

したひよる 慕寄る【動四自】跡つけて、ひそかに近寄る。丹波與作「夜まはり、ちらりと、氣を附けて、したひよれば」

したびらめ 舌平目・舌鮃・鞋底魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。我が國の東海及び西南海に達す。體は平扁にして舌狀をなし、左側は濃き橙色にして、黑色の斑點散布し、右側は白色を呈し、頭小さくして、眼は左側にあり。うしのした。くつぞこ。くつぞこがれひ。けんちよ。

したふ 慕ふ【動四他】■なつかしく思ふ。戀しく思ふ。離れがたく思ふ。源氏「おくれじと空ゆく月をしたふかなつひにすむべきこの世ならねば」■あとを追ふ。後より追隨す。續千載「したひくる影は袂にやつるとも面がはりすな故郷の月」

したぶ 【動上二自】『したにを見よ』しなやかに麗しく見ゆ。〔古語〕萬葉「秋山のしたぶる妹なゆ竹のとをよる子らは」

したふ 綱納【名】■ころも。綱衣(コウイ)。納衣(ノウエ)。■僧。綱徒。

したぶし 下臥【名】物の下蔭に臥すこと。夫木「露はらふ葛のしたぶし夢たえて鹿の音近き宇津の山風」

したふたふーち 死場塲地【貌】『地は接尾語』氣力の衰へたるさま。(活潑潑地に對して)

したぶところ 下懷【名】うちぶところ(內懷)に同じ。心中二枚繪草紙「二包の白銀をしたぶところへ押込んで」

したぶり 舌風【名】物いふ口つき。〔古語〕源氏「胸に手をおきたるやうに侍りと申したまふ舌ぶり、いと物さやかなり」

したぶるひ 舌振【名】『『舌を振ぶ』を見よ』非常に驚き怖るること。盛衰記「舌振して進まざりければ」

したべ 下方・下邊【名】『『下の方(へ)の義』』黃泉(ヨミ)。根の國。〔古語〕萬葉「わかければ道ゆき知らじまひはせむしたべの使召ひて通らせ」

したまがり 舌曲【名】〔植〕しびとばな(死

人花」を云ふ。〔尾張國の方言〕

したまち 下町【名】㊀下手(シモテ)にある町。低き所にある町。(山手(ヤマテ)に對して) ㊁東京市の低き部分にある淺草・下谷・神田・日本橋・京橋・芝・本所・深川などの稱。(山手(ヤマテ)に對して)

したまち-しき 下町式【名】次條に同じ。

したまち-ふう 下町風【名】『東京の下町は、山手(ヤマテ)の邸多きに對して、町家多く、その風俗・習慣も江戸の面影を存せるもの多きよりいふ』下町の婦女の風俗。澁くいきなる趣味風俗。〔東京の語〕

したまつ 下待つ【動四自】心の内にて待つ。〔古語〕大和「おはしましやすると、したまちたまうけるに」

したまはり 下廻【名】㊀したばたらき(下働)に同じ。 ㊁いなりまち(稻荷町)(三)に同じ。

したまぶた 下瞼【名】下の方のまぶた。(うは瞼に對して)

したまへ 下前【名】衣服の前を合はする時、下にかさなる方。したがへ。したがひ。したんまへ。(うは前に對して)

したみ 滑・醪【名】㊀したむこと。 ㊁したみざけ(滑酒)の略。

したみ 籬・笓【名】『滑(スベ)むに用ふる物の義』㊀底の角にして、口の圓きざる。和名「籬。之太美」 ㊁目のなき籠。

したみ 下見【名】㊀したよみ(下讀)に同じ。 ㊁入札又は競(セリ)賣買を爲すに當り、豫め希望者が、その目的物を見分すること。 ㊂風雨を防ぐために、家の外部の壁を蔽ひて、板を横に羽重(ハガサ)に取附け、その上に、薄き木を、これと直角に、一尺五寸乃至三尺ほどづつ隔てて打附けたるもの。はめ(羽目)(二)參照。 ㊃うぐひすのき(鶯木)を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

したみ 下身【名】俎上に置きし魚肉の、俎に接したる片側。(うは身に對して) 狂言「鱧包丁」「一の刀にて、魚頭をつき、……さひはひ上身(カミ)下身がある」「同じ。

したみ-いた 下見板【名】したみ(下見)(三)に同じ。

したみ-ざけ 醪酒・滑酒【名】醪などより滴りて溜りたる酒。

したみじか-あぶみ 舌短鐙【名】舌の短き鐙。(舌長鐙に對して)

したみだれ 下亂【名】心の中にて思ひみだるること。新千載「穗にいでし蘆の伏葉のしたみだれ入江の浪に朽ちはつとも」

したみち 下道【名】山かげ木かげ・花かげなどにある道。物の下にある道。

したみづ 下水【名】物の下を流れゆく水。したゆく水。千載「御室山谷にや春の立ちぬらん雪のしたみづ岩たたくなり」

したむ 醪む・滑む【動四他】㊀汁を澁(シブ)し出だす。字鏡「澁酒。佐介志太牟」 山家「見るもうきは鵜繩に逃ぐるいろくづをのがらかさでもしたむもちあみ」 ㊁水などを、布帛などに浸込ませて拭取る。一代男「我が脫ぎおきし黑茶宇の著物(キモノ)にて殘らずしたみ、かいやり捨てける」

したむき 下向【名】㊀下方を向くこと、又下方を向きたるもの。(うは向に對して) ㊁物の値のさがること。下落。(うは向に對して)

したむすび 下結【名】下方にて結ぶこと、又その結びたる紐。

したむせび 下咽【名】ある物の下にてむせぶこと。世繼「かがり火に鰍(カジカ)や波のしたむせび」 「こと。

したん 指彈【名】つまはじきして、嫌ふこと。嗤嘆。

したん 吝嗇【名】なげくこと。嗟嘆。

したん 四端【名】『孟子の公孫丑上篇に「側隱之心、仁之端也、羞惡之心、義之端也、恭敬之心、禮之端也、是非之心、智之端也、人之有是四端一也、猶其有四體一也」とあるに本づく』仁・義・禮・智の發する端緒、即ち側隱・羞惡・辭讓・是非の四心の併稱。

したん 紫壇【名】〔植〕荳(マメ)科に屬する喬木。熱帶產にして、高さ數丈に達し、葉は三小葉より成る複葉にて、互生し、花は蝶形・淡黃色にて、總狀花序をなし、實は球形。材は堅くして、紫赤色をなし、種種の細工に用ひらる。

したん 師檀・師旦【名】師匠と檀那と。師弟。盛衰記「坂上田村麿、東山遊獵の次(ツイ)に、種種の瑞異に驚きて、賢心と師檀の契を結びつつ」 謚號天皇甘露圓「空海に法力の超えられたるを憤り、大海原王子の師旦となり、天下を覆へし、恨を空海に報ぜんと」

したん 詞壇【名】詩人の社會。

したん 史談【名】歷史のものがたり。

したん 師團【名】『師は、支那周代の制度にて、二千五百人を團とする軍隊』陸軍編制上の一名目。平時は、多くは司令部及び歩兵二旅團・騎兵・野砲兵各一聯隊・工兵・輜重兵各一大隊より成れども、騎兵の一旅團、野砲兵の一・二旅團、重砲兵一聯隊又は一旅團、山砲兵一大隊、交通兵一旅團の加はれるもの等、多少の相違あり。各要地に配備せられ、戰時に際しては、なほ大小架橋縱列各一箇隊・航空隊・野戰衞生部これに加はる。 **ちんだい**(鎭臺)參照。

じたん 事端【名】事柄のいとぐち。事件の端緒。「事端を滋(シゲ)くす」

じたん 自嘆【名】自ら嘆くこと。太平記「御方の勢は助かるまじき處ぞと自嘆して」

じだん 示談【名】爭又は訴訟事などを、雙方の相談にて、解決すること。和談。

じだん 寺壇【名】寺院と壇家と。

じだん-えんしふ 師團演習【名】師團長の統監・指揮の下に師團の行ふ機動演習。

じだん-かんとくぶ 師團監督部【名】師團司令部所在地に置き、近衞と第一師團とには、陸軍糧餉部、第七師團には陸軍經營部、その他には、陸軍糧餉部と陸軍經營部とを管理し、軍隊の會計事務を監視し、金品の收支・出納等を檢査し、その管轄區域内の軍吏部・士官・下士の人事を掌りし官廳。明治三十五年に廢せられたり。

じだん-かんぶえんしふりよかう 師團幹部演習旅行【名】師團長の指名を以て、師團中の各兵科佐・尉官及び衞生部將校相當官より組織し、師團長自ら統裁するか、又は特に師團長の指名せる將校をして統裁せしめ、隔年一回擧行するもの。

じだん-ぐんばふくわいぎ 師團軍法會議【名】軍中にて師團に設け、その師團所屬佐官以下の軍人の犯罪を裁判する所。

じだん-ぐり じだん栗【名】〔植〕くぬぎ(櫟)に同じ。

じだん-けいりぶ 師團經理部【名】師團司令部内の一部、その師團管内に於ける給養出納等一切の經理事務を監督する所。師團長に隸屬して、師團經理部長之を統ぶ。

じだん-しちよう 師團輜重【名】師團において、輜重として編成する部隊、即ち彈藥大隊・架橋縱列・糧食縱列・馬廠衞生隊及び野戰病院。

じだん-しれいぶ 師團司令部【名】師團長が、その職務を執る處。參謀部・副官部・法官部(近衞師團にてはこれを除く)・經理部・軍醫部・獸醫部より成る。

じだん-ちやう 師團長【名】師團の長官。陸軍大中將これに親補せられ、天皇に直隸し、部下軍隊の統率、師管内の聯隊區司令部の管轄、軍事上の諸件の統理、その主管に係る各部團隊の動員計畫、及び師管内徵兵事務、並びに召集の統轄に任ず。近衞師團長は、その外、宮闕守衞の事にも任ず。

じだん-ぬり 紫檀塗【名】紫檀の木理に擬したる漆塗。

したん-まへ 下前【名】したまへ(下前)の訛。

したんろう-ふるき 紫檀樓古喜【名】〔人〕江戸の狂歌師。通稱は蔦間古吉。烟管のらをのすげかへを業とす。貧に安んじて、狂歌を樂しむ。天保三年歿す。

しため 下目【名】㊀下方を見る目つき。(うは目に對して) ㊁他人を悔り見下ぐること。蔑視。

下目に見る【句】見くだす。輕んず。西遊記「奴婢よりは、反って主人を下目に見て、つとめてやると心得」

しため 【名】櫪(クヌギ)の木の實。

したも 下裳【名】㊀女のしたおび。ゆもじ。湯具。(うは裳に對して)〔古語〕 ㊁ゆまき(湯巻)に同じ。〔古語〕爲家集「對の宮をいはひたてまつりて、御湯ひかせおはしまし侍るときに、浪よする松のしたもに萬代となれきてなくや友鶴の聲」

下裳の紐【句】したひも(下紐)に同じ。拾玉「人知るや下裳の紐を解きそめて君と契を結ぶ夜はとは」

したもえ 下萌【名】地下に芽ざすこと。

したもえ 下萌の少将【句】〔人〕すはうのないし(周防内侍)に同じ。

したもえ 下燃【名】したもゆること。したこがれ。古今「夏なれば宿にふすぶる蚊遣火のいつまでわが身したもえにせん」賀古教信七墓廻「火屋の烟の下燃も涙にしめるばかりなり」

したもち 下持【名】ねだかけ(根太掛)に同じかるべしといふ。曾我「盤板敷切りとほし、したもちまでぞ打入りける」

したもつれ 舌縺【名】言語のさわやかならぬこと。語調の澁滞すること。

したもと 舌元【名】舌のもと。ろれつ。狂言(鑓底下)「十二盃飲うだらば、……舌元も立つまいし、足元も定まるまい」

したもの 下物【名】下等にして安價なる物。だもの。(うは物に對して)

したもひ 下思【名】したおもひ(下思)の略。〔古語〕萬葉「こもりこひいきづきわたりしたもひになげかふわがせ」

したもみぢ 下紅葉【名】■末葉のもみぢ。詞花「下紅葉一葉づつ散る木のもとに秋とおぼゆる蟬の聲かな」■物の下の方にあるもみぢ。慶生「しら浪やゆらつく橋のしたもみぢ。」■〔植〕菊科に屬する多年生の草。高さ七八寸、葉は根生して、やや圓形掌狀に淺裂し、秋、白色の花を開く。きっかふはぐま。さじはぐま。

したもゆ 下燃ゆ【動下二自】したがる(下焦る)に同じ。澤花「下燃ゆる嘆をだにも知らせばや類のかみのしるしばかりに」

したもゆ 下萌ゆ【動下二自】地中より萌出づ。(歌に、前條の語の意を兼ねしめて用ふ)新古今「春日野のしたもえわたる草の上につれなく見ゆる春の泡雪」

したや 下家【名】母屋に附屬せる小さき家。曾根崎心中「男はしたやに顏出し」

したや 下谷【名】〔地〕東京市十五區の一。宮城の艮位に方る。

下谷一番【句】『江戸時代の鞠唄に「おらの姉さん三人ござる。一人姉さん鼓が上手、一人姉さん太鼓が上手、一番(ティン)よいのは下谷にござる。下谷一番伊達者でござる。五兩で帶買って、三兩でくけて、くけ目くけ目に七總(ナナサ)下げて……といふ詞あるに本づく』華美なる服裝をなす者の譬。一茶「下谷一番の顏して衣がへ」

下谷の三人の姉樣達【句】前條の鞠歌中の三人の女。八代目桃太郎「閻王桃八へのは馳走とて、島の千歳和歌の前に踊らせて、下谷の三人の姉樣たちに靜御前をまぜて、下方を勤めさせ」

したやか 下館【名】しもやしき(下屋敷)に同じ。

したやかた 下屋形【名】二階作もしくは三階作なる屋形船の、下層の屋形。

したやく 下役【名】上役に支配せられて働く小役、又その人。「下吏。

したやくにん 下役人【名】下級の官吏。

したやぐみ 下谷組【名】『多くは下谷根岸の邊に住めりしよりいふ』德川時代の末に、放縱荒醉を以て世に名を得たる鯰田鵬齋・大窪詩佛・菊池五山・太田蜀山人・谷文晁・市河米庵・酒井抱一・春木南湖などの如き、詩人・文人・書家・畫家などの仲間。

したやぐら 下矢倉【名】相撲(スマフ)の手の一。四手(ヨツ)に組み、吊上げて廻りながら、手にて、相手の膝を拂ひて投倒すこと。

したやすし 下安し【形一】心のうちやすし。安心なり。〔古語〕六帖「水鳥の下やすからぬ思にはあたりの水も氷らざりけり」

したやど 下宿【名】げしゅく(下宿)に同じ。若風俗「大吉彌がしたやど」

したやは 志田野坡【名】〔人〕俳人。通稱は半次郎、後、彌助と改む。越前國の人。芭蕉の門人。江戸三井兩替店に勤む。附合(アヒヅケ)をよくす。元文五年歿す。年七十八。

したやみ 下闇【名】このしたやみ(木下闇)の略。風雪「下闇や地むしながらの蟬の聲」

したやり 下槍【名】敵と槍を交ふる時、相手を突くに先ちて、我が槍の柄に抑(サ)へつけ、いれたるその槍。(うは槍に對して)

したゆひ 下結【名】化粧元結などの下に掛くる元結。

したよふ 下よふ【句】した(下)の條下を見よ。

したよみ 下讀【名】豫め講讀をして、調べおくこと。したみ。

したら 下【接】したらば の略。狂言(きんじ聖)「したら、斯う參りまする」狂言(貰聖)「おおしたら、えいは」

したら 設樂【名】〔地〕三河國の舊郡の一。明治十三年南設樂・北設樂の兩郡に分たる。

したら 【名】■兩手を相拍つこと。■兩手を相拍ちてなす兒童の遊戲。〔拌遊〕■しまつ。ていたらく。生玉心中「願事叶はぬのみか、このしだら、及ばぬ願の逆罰か」

しだら しだらが無い【句】しまりなし。だらしなし。放恣なり。浮世風呂「しだらもなく醉って來ての、とぼ口を跨くがはえ、犬の字にふんぞべって」

したらか 【貌】しだれたるさま。しだらなきさまに。

じたらく 自墮落【名】身を持ちくづしてしまりなきこと。亂りがはしきこと。ふしだら。放縱。猿蓑(宗次)「じだらくに寢れば涼しき夕かな」今宮心中「こちらが居た時分と違ひ、自墮落になったな」

じだらくせかい 自墮落世界【名】自墮落なる世の中。ふしだらなる世の中。東海道名所記「今自墮落世界に、三代の禮わづかに傳を殘し」

したらでん 震動雷電【名】■大風雨のある日。■どよめき噪ぐこと。「し。

したらなし 【接】【形一】しまりなし。亂りがはしきこと。狂言(ぬけがら)「よい酒か。いや、なにと御坐ったも、覺えませなんだ。したらば、ま一つ飲め」

したり 【感】■しすましたりといふ意の聲。狂言(枕物狂)「おおしたりしたり。とくにも出でさせたまふならば」聖徳太子繪傳記「それそれそれ、そこにも餅花、したりしたり

しだり柳■矢策したりと感ずる時に發する聲。しなしたり。

しだり 垂【名】しだるること。しだれ。

したり がほ 爲たり顏【名】爲おほせたりと、得意なる顏つきこわりがほ。でかしがほ。えたりがほ。しすましがほ。枕「われはと思ひて、したり顏なる人はかりえたる」

しだりざくら 垂櫻【名】〔植〕しだれざくら(垂櫻)に同じ。

しだりは 垂葉【名】しだれは(垂葉)に同じ。〔古語〕夫木「みわそそぐみつのかしはのしだりはのながながし世を祝ひきにけり」

しだりん 尸陀林・屍陀林【名】〔佛〕『梵 Śītavana 尸多婆那』の譯語』かんりん(寒林)■に同じ。

しだりもも 垂桃【名】〔植〕しだれもも(垂桃)に同じ。

しだりやなぎ 垂柳【名】〔植〕しだれやなぎ(垂柳)に同じ。萬葉「春さればしだりやなぎのとををにも妹が心にのりにけるかも」

しだりを 垂尾【名】垂れ下りてある尾。〔古語〕萬葉「足引の山鳥の尾のしだりをのながながし夜をひとりかもねむ」

しだる 垂る【動四自】次條に同じ。〔古語〕枕「たるひの、いみじうしだり」

しだる 垂る【動下二自】『しづ(垂づ)の變化して、自動詞となれるもの』垂れ下る。なびく。長く垂る。

したるし 【形一】しなだれたり。甚しく萎えたり。〔古語〕夫木「しづのめも大ちゐづつに夕すずみしたるき廂の衣すすぎて」

したるね 羊齒類【名】〔植〕しだよぶつ(羊齒植物)に同じ。

しだれ 垂・枝垂【名】しだるること。しだり。狂言(二瞼)「青柳のしだれや鯉のすみどころ」

しだれいと 垂絲【名】垂下りたる絲。薩摩歌「素鑓のかぎに垂絲」

しだれいとすぎ 垂絲杉【名】〔植〕絲杉の一種。枝のしだれたるもの。

しだれうめ 垂梅【名】〔植〕梅の一種。枝の垂れさがりたるもの。多くは紅梅なり。

しだれざくら 垂櫻・枝垂櫻【名】〔植〕櫻の一種。枝の垂れさがりたるもの。花は多

く單瓣なり。しだれひがん。

しだれとりげ 垂鳥毛【名】鳥毛の垂下りたるもの。薩摩歌「しだれ鳥毛の大小は、これ南部殿」

しだれは 垂葉【名】しだれたる葉。しだりは。

しだれひがん 垂彼岸【名】〔植〕しだれざくら(枝垂櫻)に同じ。

しだれひば 垂檜葉【名】〔植〕いとひば(絲檜葉)に同じ。

しだれもも 垂桃・軟條桃【名】〔植〕桃の一品種。枝のしだれて、恰も柳のごとき觀を呈するもの。主として、觀賞用に供せらる。しだりもも。

しだれやなぎ 垂柳【名】〔植〕『枝の上に向ひて生ずる、かはやなぎ(水楊)・こりやなぎ(行李柳)などと區別していふ』やなぎ(柳)㊀に同じ。

したわらび 下蕨【名】物の下蔭に生ずる蕨。杜「このしたわらびは、手づから摘みつるなどいへば」

したゑ 下繪【名】㊀したがきの繪。繪の上部に詩文などを書添ふる料とする繪。〔古語〕禁秘「したゑして、さるべき心ばへある事どもを、大納言さまざまに書き給へり」㊁物の下地に供するために描く繪。

したおます 下御座【動四自】下笑みたまふ。〔古語〕萬葉「明石潟しほひの道をあすよりはしたゑましけむ家ちかづきぬ」

したおむ 下笑む【動四自】心の中にてゑむ。心のうちに、うれしく感ず。〔古語〕

したを 下夫【名】以前つれそひたる夫。前夫。(上夫(カミヲ)に對して)〔古語〕和名「前夫、和名之太乎、一云、毛止乎止故」

したを 下尾【名】尾の下部。盛衰記「栗毛の馬の下尾白かりけるに」

したをる 下折る【動下二自】折れて下に垂る。千載「おしなべて草葉の上を吹く風にまづしたをるる野邊のかるかや」

したをれ 下折【名】したをること。玉葉「吹きはらふ嵐はよわる下折に雪にこゑある窓の呉竹」

しち 室【名】しつ(室)に同じ。〔古語〕

しち 失【名】射術にて、的に對へる間に起れる過失。弓折(ユミヲレ)・弦切(ツルキレ)などの生じたる場合。

しち 質【名】㊀約定を守るべき證として、物を預けおくこと。竹取「もしこがね賜はぬものならば、裘の質返したべ」鎌田兵衛名所盡「一人質に渡しなば、二人の命助かる道理」㊁借金の抵當として、預けおく物品。博多小女郎波枕「質を取らずば金貸すな」㊂〔法〕質權の目的物。動產質・不動產質・權利質に分つ。

質に置く【句】質物を質屋に預く。質八を置く。祭禮「この節會にはきたまふ御はかしを質におかん」

質に取る【句】質物として預る。

質八を置く【句】『質の香七に同じきより、八と續けて、語呂を強めていふ』「質に置く」に同じ。浮世風呂「この頃は生憎商が隙で、…高くは云はれねえが、質八を置いて暮らしてゐる所だ」

質を置く【句】質物を質屋に預く。

しち 剛地・廁地【名】肥料を貯へおく處。

しち 死地【名】㊀死ぬべき場所。㊁逃れて生くべき望の絕えたる場所。九死一生の境遇。「死地に陷る」

しち 私地【名】私有の土地。(官地に對して)

しち 至治【名】至ってよく治まること。

しち 至智【名】至極の智慧、又その人。

しち 四知【名】『後漢の楊震が王密に對して、「震曰天知、神知、我知、人知、何謂レ無レ知、密愧而出」とあるに本づく』二人にて密かに行ひ、誰れも知らずと思ひても、その實、天も地も相手も自分もこれを知りてあること。「天知る、地知る、我れ知る」參照。

しち 四智【名】〔佛〕佛の具備する四つのすぐれたる智慧、即ち大圓鏡智・平等性(ビヤウドウ)智・妙觀察智・成所作(ジヤウサ)智。四智心品(ホン)。ごち(五智)參照。

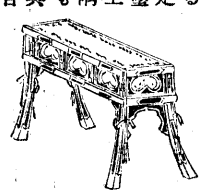
しち 詞致【名】詞のおもむき。言葉の姿なつ。なな。

しち 七【數】三と四とを合はせたる數。

しち 差池・紫池・此池【貌】『紫池・此池の字面は、司馬相如の上林賦に見ゆ』齊しからざるさま。揃はぬさま。互違にするさま。

しち【接頭】 頗雜なる意。「しちくどい」「しち面倒くさい」「しちむづかしい」

しち 榻【名】牛車(ギツシヤ)の牛をはづしたる時、轅(ナガエ)の轅(ナガエ)を支へ、又は乘降の踏臺とするに用ふる具。形、机に似、鷺足(アシギ)にて、漆にて塗り、金具を施し、上には錦を押し、四隅に總角(アゲマキ)あるもの。大臣のは、金具に黃金を用ひ、納言よ大將とのは、散金具(サンカナグ)、納言以下のは、鐵を用ひたり。和名「牀、之知、牀也」



(ち し)

榻の端書(ハシガキ)【句】百夜通ひ來て、榻に伏したらば逢んと女の言ひしを、男信じて、夜毎に來りて、榻に書きつけ、九十九夜は過ぎて、百夜に方りて、障り出で來て、事破れたりといふ傳說。一說に、古今集の「曉の鴫の羽がき百夜かき君が來ぬ夜はわれぞかずかく」とあるを、「榻のはしがき」と誤れるものあるより出でしともいふ。千載「思ひきや榻のはしがきかきつめて百夜は同じまろねせんとは」

榻の役(ヤク)【句】榻を持ちて牛車(ギツシヤ)に隨ふ役。

しち 支持【名】ささへ保つこと。

しぢ 止持【名】〔佛〕『止は制止、持は持戒の義』功果の消極的なる戒。積極なる作持といふ。例へば諸惡莫作(サ)は止持、衆善奉行(ヤウ)は作持なる類。

じち 實【名】まこと。じつ。〔古語〕源氏「さればこそ、じちの御心ばへは、いとあはれに、うしろ安くぞ思ひきこえたまひける」

じち 自治【名】㊀己が身を自(ミヅカ)ら治むること。己れの事は、己れにて處理すること。㊁自(ミヅカ)ら治まること。無爲にして化すること。㊂〔法〕國家が、法律により、公共團體を認めて、これに特定の事務を委任し、團體をして、その範圍に於て、自らその事務を處理せしめ、以て間接に國家行政の目的を達すること。(官治に對して)

じち 自地【名】自己所有の土地。

しちあくにち 七惡日【名】九星にて、その人の生年によりて萬事に愼むべしといふ凶日、即ち午の年の人は子、未の年の人は丑、申の年の人は寅、酉の年の人は卯、戌の年の人は辰、亥の年の人は巳、子の年の人は午、丑の年の人は未、寅の年の人は申、卯の年の人は酉、辰の年の人は戌、巳の年の人は亥の日。

しちいん 七音【名】㊀〔語〕支那の音韻學にて、脣音・舌音・齒音・喉音の五音と半舌音・半齒音との併稱。七聲。㊁〔音〕支那の音樂にて、角・羽・商・徵(チ)・宮の五音と半徵・半商の二音との併稱。もと前記音韻學上のを、音樂の調子に配せるもの。七聲。

しちいれ 質入【名】㊀金を借る抵當として、物品を質屋に預くること。㊁〔法〕質權設定の目的にて、物又は權利を質權者に提供すること。

しちいれうらがき 質入裏書【名】〔法〕手形質入證券、その他の指圖債權に、質權を設定する目的にてなす裏書。

しちいれしょうけん 質入證券【名】〔商〕くらにしちいれしょうけん(倉荷質入證券)の略。

しちいれにん 質入人【名】質入をなしたる人。しちおきぬし。質權設定者。

しちうち 私鑄【名】しゐ(私鑄)に同じ。

しちうち 史籀【名】〔人〕支那周の宣王の時の太史。一說に、秦の代の卜士なりと。漢字の一體を創始し、籀文と稱せらる。

しちえう 七曜【名】『曜は燿と同じく、光りかがやく義』㊀日・月と、火・水・木・金・土の五星との併稱。七曜星。七星。くえうせい(九曜星)參照。㊁前記の七曜が一日毎に交代して支配すとの考に基づきて、古來これを各日に配當し、八日目毎に、復歸循環すと定めたるもの、即ちその第一日を日曜といひ、以下順に月曜・火曜・水曜・木曜・金曜・土曜といひ、合はせて一週といふ。七値(チ)。㊂紋所の一。九曜より二曜少なきもの。

七曜の御曆(ゴヨミ)【句】**しちえうのきう**(七曜曆)の敬稱。古、元日の節會の時、中務(ナカツカサ)省の官人、陰陽寮をして、これを天

皇に奉らしむる儀式行はれ、これを七曜の御暦の奏といひ、毎年十一月一日の御暦の奏と共に、一種の盛儀たりしが、後には、共に廃せられて、専ら内侍所に附せられたり。〔公事根源〕諸司の奏とは、七曜の御暦、氷(ひ)のため し、腹赤(かはら)の奏などの事なり。七曜の御暦をば中務省より奉る」

七曜の星 【句】 ■ほくとしちせい(北斗七星)を云ふ。〔東京の方言〕 ■ひち(昴)に同じ。

しちえうく 七曜供 【名】〔佛〕七曜■に物を供へて祭る法。

しちえうせい 七曜星 【名】 ■しちえう(七曜)■に同じ。 ■ほくとしちせい(北斗七星)に同じ。

しちえうれき 七曜暦 【名】七曜■の位置を記載したる、古の一種の天文上の暦。〔七陽の御暦(ごよみ)〕参照。

しちえふじゆくわ 七葉樹科 【名】〔植〕とちのきくわ(七葉樹科)に同じ。

しちおきぬし 質置主 【名】しちいれにん(質入人)に同じ。

しちおん 七音 【名】しちいん(七音)に同じ。

しちかいそう 七階草 【名】〔植〕くりんそう(九輪草)に同じ。

しちかざん 七高山 【名】〔地〕『拾芥抄に出づ』山城國の愛宕(あたご)山、大和國の金峰山(きんぷせん)・葛城(かつらぎ)山、近江國の比叡山、比良山、美濃國の伊吹山、摂津國の神峰(かみね)山の併稱。

しちかざん-あじやり 七高山阿闍梨 【名】前條七高山の七寺に、春秋二季御祈禱の勤命を受けたる高僧。

しちかそ 七高祖 【名】『親鸞上人の自ら定めしもの』釋尊以後、親鸞上人の開宗まで、彌陀他力の本願に歸依して、これを宣傳し、明かに西方淨土の往生を勸めたるにより、淨土眞宗の相承傳統とせらるる高僧七人、即ち龍樹・世親(以上印度)・曇鸞・道綽・善導(以上支那)・源信・源空(以上日本)の併稱。七祖。

しちかく 七覺 【名】〔佛〕智慧をもって法の眞僞を簡擇する擇法覺と、勇猛の心をもって、眞法を行ずる精進覺と、心に善法を得て歡喜を生ずる喜覺と、身心を輕利・安適ならしむる輕安覺(除覺ともいふ)と、定慧を明記する念覺と、心を散亂せしめざる定覺と、一切の法を捨てて、平心坦懐なる行捨覺との併稱。〔釋迦如來誕生會、太子は七覺を表して七歩み、左右の御手を獅子吼して、天地に指し〕

しちかくいなづま 七角稻妻 【名】紋所の一。稻妻を七角形になしたるもの。

しちかじ 七箇寺 【名】しちだいじ(七大寺)に同じ。

しちかぶ 質株 【名】質屋の株。

しちかふ 仕遠ふ 【動下二他】『仕は爲(し)の義』しそこなふ(仕損ふ)に同じ。〔太平記〕「合戰仕遠へて引返しなば」

しちきおち 七騎落 【名】■謠曲の一。源頼朝、石橋山に敗戰の際、主從七騎にて、相模國眞鶴(まなづる)ケ崎より安房國に渡海する事を作れるもの。 ■能(のう)の狂言の一。前記謠曲のと同一の事實を材料として作れるもの。

しちきくわん 自治機關 【名】〔法〕自治團體が、自治行政を行ふ機關、即ち府縣會・郡會・市町村會・府縣郡市參事會・市長・町長・村長等の總稱。

しちきやうおち 七卿落 【名】文永三年八月十八日に三條實美・三條西季知・四條隆謌(たかうた)・東久世通禧(みちとみ)・壬生基修(みぶもとなが)・錦小路頼徳・澤宣嘉の七卿、長州藩士と共に京都を遁れて、長門に退去せし始末。

しちぎやうせい 自治行政 【名】〔法〕地方自治團體が、國家の委任を受けて處理する政務。(官治行政に對して)「本」を見よ。

しちぎやうぼん 七行本 【名】しちみぼん(甚七出(しちだ)す)。さんふきよ(三不去)・ごぶしゆ(五不取)參照。

しちきよ 質擧 【名】質物として出擧(すいがり)すること。

しちきよく 七局 【名】明治元年に設置せられし中央官廳たる七箇の事務局。即ち神祇事務局・内國事務局・外國事務局・軍防事務局・會計事務局・刑法事務局・制度事務局の併稱。

しちく 絲竹 【名】いとたけ(絲竹)に同じ。

しちく 絲竹 【名】〔植〕かんちく(寒竹)■に同じ。 大槻文彦『龍神いさめの絲竹のしらべ』

絲竹・管絃 【句】絲竹と管絃とは、同意なるを、特に重ねていふ語。

しちく 紫竹 【名】〔植〕かんちく(寒竹)■に同じ。 『紫女五枚羽子板』「殿はな、笛吹の、や、家で紫竹・寒竹埃をささっと拂うて」

しちく 刺竹 【名】〔植〕竹の一種。鳳凰竹の類にて、節に刺を有す。

しちく 七九 【數】七と九とを掛合はすこと。「七九、六十三」

じちく 自治區 【名】自治制を行使したる區域。

しちく 視軸 【名】〔理〕じちゆく(視軸)に同じ。

じちく 磁軸 【名】〔理〕じちゆく(磁軸)に同じ。

しちくぎ 視軸儀 【名】〔理〕しちゆくぎ(視軸儀)に同じ。

しちくさ 質種 【名】質に置くべき料の物。しちだね。質物。典物。

しちくづゑ 紫竹杖 【名】紫竹にて作りたる杖。 『曾我虎が鬘』つまみ股立紫竹杖、格子格子に立ちかかり」

しちくどし 【形ク】『しちは接頭語』非常にくどし。 丹波與作「しちくどい、盜んでいらずば、棄ちやいの」

しちくら 質倉 【名】質物を入れおく倉。

しちくらん 【名】〔植〕さねっぷ(沙列布)に同じ。

しちくわいき 七回忌 【名】七年目の回忌。七周忌。七年忌。

しちくわつ 七月 【名】一年の中の第七にあたる月。ふみづき。ふづき。

しちくわん 七官 【名】明治元年閏四月、七局の改名せられしもの、即ち議政官・神祇官・行政官・會計官・軍務官・外國官・刑法官の併稱。

しちくわんおん 七觀音 【名】『音の字、觀の韻に引かれて、ノンと發音す』■〔佛〕千手觀音・馬頭觀音・十一面觀音・聖觀世音・如意輪觀音・準胝(じゅんてい)觀世音・不空羂索(ふくうけんじゃく)の總稱。 ■京都の革堂(かうだう)・河崎・吉田・寺・清水寺・六波羅密寺・六角寺・蓮華王院の七箇所の觀音の併稱。

しちくわんおん-ゐん 七觀音院 【名】『音の字、觀の韻に引かれて、ノンと發音す』京都下京區下河原(かはらまち)南町にある眞言宗の寺。如意輪山と號す。勅號は護持院。

しちくわん-て 七官手 【名】慶長・元和ごろに支那人七官の齎らし來りし青磁器の類。

しちけ 七華 【名】七つのはなびら。

しちけ 七裂 【句】〔佛〕裂破して、七となりハとなること。

しちけい 七經 【名】〔書〕七種の經書、即ち詩經・書經・易經・禮記・春秋左氏傳・春秋公羊(くやう)傳・春秋穀梁傳の併稱。一說に、易經・書經・詩經・春秋と三禮となりともいふ。(五經)・きうけい(九經)・じふしちけい(十一經)・じふさんけい(十三經)參照。

しちけいおち 七卿落 【名】しちきやうおち(七卿落)を見よ。

しちけいやく 質契約 【名】質權を設定する契約。

しちけう 七教 【名】『禮記の王制篇に出づ』人倫の七つの教、即ち君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友・長幼・賓客に關する道義。(五教)參照。

しちけん 質券 【名】質のてがた。しちふだ。

しちけん 七賢 【名】■七人の賢人。七賢

しちけん-ぎやうにん 七加行位 【名】〔人〕しちけん(七賢)■に同じ。

しちけん-げふ 質業 【名】しちやえいげふ(質屋營業)に同じ。

しちけん-しや 質業者 【名】質屋を營む人。

しちけん 質權 【名】〔法〕債權者が、債權の執行を確實ならしむるため、債務者又は第三者より受取りたる物件を占有し、且つその物件につき、他の債權者に先だちて債權の辨濟を受くる權利。

人。㊀支那周の世の七人の賢人、即ち伯夷・叔齊・虞仲・虞逸・朱張・少連・柳下惠の併稱。㊁『晉書』の裴康傳に出づ』支那晉代の一種の厭世家七人、即ち裴康・阮籍・阮咸・向秀・劉伶・山濤・王戎の併稱。この七人は、隱逸放曠にして、世と交はらず、共に竹林に遊びしを以て、竹林の七賢また竹林の七子といふ。七賢人。**せいだん**(清談)㊁參照。

七賢花(しちけんげ)【名】(植)「七軒(しちけん)花(げ)」に同じ。

七賢七聖【句】七賢と七聖と。各條を見よ。

七賢の杯【句】支那晉の世の七賢の名を蒔繪にしたる杯。京都の銀閣寺にあり。

竹林の七賢【句】**しちけん**(七賢)㊁を見よ。

しちけん【名】(地)新吉原遊廓の大門内より、江戸町一丁目までの右側の俗稱。

しち-けん 七見【名】(佛)邪見・我見・常見・斷見・戒盜見・非盜見・疑見の併稱。

しち-げん 七絃【名】㊀七すじの絃。㊁次條の略。

しちげん-きん 七絃琴【名】琴の七本ある琴。しちげん。

しち-けんじん 七賢人【名】㊀**しちけん**(七賢)㊀に同じ。㊁**しちけん**(七賢)㊁に同じ。

しちけん-じゃ 質權者【名】(法)質權を有する人。質取主(シチトリヌシ)。

しちけん-せっていしゃ 質權設定者【名】(法)**しちいれにん**(質入人)に同じ。

しち-こ 七古【名】(文)**しちごんこし**(七言古詩)の略。

しちこう-さんみん 七公三民【名】田租の上納の割合の稱。その年の出來の七分を年貢として納め、三分を作德とすること。**しちろくみん**(四公六民)參照。

しち-こく 七國【名】㊀七つの國。㊁支那戰國時代の六國と秦との併稱。七雄。

しちこく-しょうぎ 七國將棋【名】朝鮮より渡來せる一種の將棋。普の七雄將、取合はせの駒組にて、盤の大いさ三間四方、駒の數多く、七人にて、腰を掛けて、杖の如き竹を用ひて行ふ。

しち-ごさん 七五三【名】㊀祝儀に用ふる數。一・三・五・七・九の奇數を陽の數にてめでたきものと定め、その中より、三つを取りたるもの。㊁饗應にて、まづ三獻とて、膳三つ、五獻とて、初獻に烹雜(ニヤウザツ)・添肴(カンナサ)、二獻に饅頭・添肴、三獻に羹、四獻に蒸麥(ムシムギ)・添肴、五獻に羊羹・添肴、且つづれにも、組附物(クミツケモノ)あるもの、又七獻とて、飯を七の膳まで出すもの。傾城反魂香「男は今日の七五三、嫁入ごとせし戲も、今は誠と嬉しげに」㊂**しめなは**(注連繩)に同じ。

七五三の足洗(シチゴサンのアシアラヒ)【句】酒造用の白米を桶に入れ、足にて攪拌するに、最初七十回にて水を替へ、次に五十回にて、最後に三十回にて、また替ふること。七五三の祝【句】男子は三歲と五歲とに、女子は三歲と七歲とに行ふ祝儀。その年の十一月の十五日に行ひ、新衣を著け、氏神に參詣せしむ。男女共三歲の時の髮置、男兒五歲の時の袴著、女兒七歲の時の帶解(ヒモトキ)の名殘として行はるるものなり。

しち-ごん 七言【名】(文)七文字にて、一句を成す漢詩の一體。

しちごん-きんたい 七言近體【名】(文)**しちごんりつ**(七言律)に同じ。

しちごん-こし 七言古詩【名】(文)漢詩の一體。古詩の七言なるもの。七古。

しちごん-ぜっく 七言絕句【名】(文)漢詩の一體。絕句にて七言なるもの。七絕。

しち-こんせん 七金山【名】(佛)**てつねせん**(鐵圍山)を見よ。

しちこん-の-ひきでもの 七獻の引出物【句】**ひきでもの**(引出物)の條下を見よ。

しちごん-はいりつ 七言排律【名】(文)排律の七言なるもの。「なるもの。七律。

しちごん-りつ 七言律【名】(文)律の七言

しち-ざ 七座【名】㊀七つの座位又は座席。㊁鎌倉時代及び室町時代に、商人の株とせしもの七つ、即ち絹の座・炭の座・米の座・千朶積(センダツミ)座・相物(アヒモノ)座・馬商座の併稱。一說に、魚・米・器・鹽・刀・衣・藥なりと。庭訓往來「諸材七座之店」

七座の公人(シチザのクニン)【句】延曆寺にて、四至内(シイナイ)維那(ナヅナ)・鍮取(トカリ)・出納(スイトウ)・庫主(クス)・政所(マンドコロ)・專當の七職の併稱。

しち-ざい 質材【名】抵當物。質物。續紀「强責二質材一」

しち-さいし 七才子【名】㊀「鄰下の七子」に同じ。何景明・徐禎卿・邊貢・康海・王九思・王廷相の七人の併稱。七子。**じっさいし**(十才子)參照。㊁支那明代の詩人、李夢陽(リボウヤウ)・李攀龍・謝榛・宗臣・梁有譽・徐中行・吳國倫の七詩人の團體。七子。李王七子。**ごし**(五子)參照。

じち-さう 實相【名】(佛)**じっさう**(實相)㊁に同じ。

しち-さうおう 四地相應【句】**しじんさうおう**(四神相應)に同じ。盛衰記「左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、一つも闕けず、四地相應の靈地なり」

しちざさん-じんじゃ 七座山神社【名】羽後國北秋田郡七座(シチザ)村大字小繫(コツナギ)に鎭座せる縣社。祭神は國常立(クニノトタチ)神・豐斟渟神(トヨクムヌ)神・宇比地邇(ウヒヂニ)神。

しち-さぼん 止持作犯【名】(佛)殺生・偸盜等の惡法に對しては、止は持戒にして、作は犯戒(ボンカイ)なること。(佐持止犯に對して)

しち-さん 七三【名】蠶者の祝儀・玉などを、抱へ主と本人と七分三分に頒つこと。

しち-し 七紙【名】七枚の紙。

七紙の禮(イ)【句】禮紙の最も正式なるもの。紙三枚重ねて狀を書き、禮紙二枚・表卷二枚を用ふること。**らいし**(禮紙)參照。

しち-し 七支【名】(佛)『七惡支分せる義にて、支といふ』殺生・偸盜・邪淫・妄語・綺語・惡口・兩舌、即ち十惡中の身三・口四の業(ワザ)の併稱。

しち-し 七子【名】㊀七人の子。㊁七人の有名なる人。㊂次條に同じ。

竹林の七子【句】「竹林の七賢」に同じ。

しち-じ 七寺【名】**しちだいじ**(七大寺)に同じ。今鏡「うちより、故中宮の御ために、七寺に御誦經せさせたまふ」

しち-じ 七事【名】**しちじしき**(七事式)に同じ。

しち-しうき 七周忌【名】**しちくわいき**(七回忌)に同じ。

しちじ-しき 七事式【名】茶の湯にて、花月・二三(ニサン)・廻炭(クワイタン)・員座(カヅザ)・廻花(クワイクワ)・茶かぶき・數茶(カズチャ)の七を行ふこと。千家の名匠の選定せるもの。しちじ。

しち-じち 七七【名】**しちしちにち**(七七日)の略。大平記「七七の忌日に當るごとに、一日經を書きて、供養して、追孝の作善(ツヒカウ)をぞ致しける」

しち-しち 七七【數】七と七を掛けはすること。

しちしち-にち 七七日【名】**しじふくにち**(四十九日)に同じ。

しち-じふ 七十【數】㊀十の七倍。㊁七十歲(なゝそぢ)。人生七十、古來稀なり【句】『こき(古稀)を見よ』人の生命の短きこと。七十の賀【句】七十歲に達したる時に行ふ祝賀。

しちじっちゃうだて 七十挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數、七十挺を用ふるもの。

しちじふいちばんうたあはせ 七十一番歌合【名】(書)次條に同じ。

しちじふいちばん-しょくにんうたあはせ 七十一番職人歌合【名】(書)月と戀との題を設けて詠みたる七十一番の職人歌合。二卷。七十一番歌合。職人盡歌合。

しちじふに-こう 七十二候【名】㊀陰曆にて、五日を一候とし、一箇月を六候に分ち、一年十二箇月(三百六十日)の時候の變化を示したるものとし、七十二候にて、一年となる。**にじふしき**(二十四氣)參照。㊁(文)連句の法式の一。百韻の初折(ショリ)・二の折・名殘の折の三折にて、句數七十二なるもの。その中に花三つ、月五つあるべきものとす。

しちじふにちやうだて 七十二挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數、七十二挺を用ふる

もの。

しちじふはっちやう-だて 七十八挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數、七十八挺を用ふるもの。

しちじふろくちやう-だて 七十六挺立【名】關船(セキブネ)の一。櫓の數、七十六挺を用ふるもの。

しちしみやく 七死脈【名】〔醫〕漢法にて、命を絕つべき原因となるといふ、七つの脈搏、即ち彈石脈・解索脈・雀啄脈・魚翔脈・屋漏脈・鍛遊脈・釜佛脈の併稱。

しちしんぼん 四智心品【名】〔佛〕『四智は心の品類なるによりて、心品といふ』しち(四智)(一)に同じ。

しちしや 七社【名】さんわうしちしや(山王七社)を見よ。太平記「天台の教法、七社の繁昌、ひとへに安危を朝廷と共にす」

しちしやう 質商【名】しちやえいげふ(質屋營業)に同じ。

しちしやう 七生【名】〔佛〕七度うまれかはること。太平記「正季からからと打笑ひて、七生まで、只同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存候へ」

しちしやう 七傷【名】身體・精神を損傷する七種のもの。即ち大飽は脾を、大怒は肝を、久しく濕地に坐すれば腎を、寒飲は肺を、憂愁思慮は心を、風雨・寒暑は形を、大恐懼節なければ志を損ふことの併稱。

しちしやう 七星【名】〔佛〕しちせい(七星)(二)に同じ。

しちしやう 七聖【名】〔佛〕小乘教における聖者。即ち見道以上を、根性の利鈍により差別せる七種の階級、即ち隨信行・隨法行・信解見至・信證・慧解脫・俱解脫の併稱。七賢・七聖」

しちじやう 七情【名】(一)七つの情。『禮記の禮運篇に出づ』喜・怒・憂・思・悲・恐・驚の併稱。また喜・怒・哀・樂・愛・惡・欲の七つの情の併稱。ごじやう(五情)・ろくじやう(六情)參照。平家女護島「是れぞと名づけん御病氣無く、只七情に破られ給ひ、御氣の疲れ、御心の結ぼれ深く見えさせ給ふ」(二)〔醫〕漢法にて、藥物の七種の作用、即ち單行するもの、相須(ソウ)つもの、相使ふもの、相惡むもの、相畏るるもの、相反するもの、相殺すものの併稱。

しちしやく 七尺【名】一尺の七倍。本朝三國誌「琴柱を律に立てかへて、七尺の屏風をこえしからもも」

七尺去って、師の影を踏まず【句】し(師)の條下を見よ。一茎節季候や七尺去って小節季候」

しちしゆ 七衆【名】〔佛〕佛の弟子たる七種の人、即ち比丘(ビク)・比丘尼、沙彌(シャミ)・沙彌尼・式沙摩那(マナ)・優婆塞(ウバソク)・優婆夷(イ)の併稱。この中、初の二衆は在家、後の五衆は出家者。在家の二衆は三歸十善五戒を守り、出家五衆の中、沙彌・沙彌尼はその上に沙彌の十戒を持し、式沙摩那は六法六隨法を守り、比丘は二百五十戒、比丘尼は三百四十八戒を守る。ごしゆ(四衆)(一)參照。

しちしゆう 七宗【名】〔佛〕『八宗の内の俱舍(クシャ)・成實(ジョウ)兩宗を略き、禪宗を加へたる、我が國中世佛教の七つの宗派、即ち律宗・法相宗・三論宗・華嚴宗・天台宗・眞言宗・禪宗。正統記「本朝流布の法、今は七宗なり」(一)「五家(ケ)・七宗」を見よ。

しちじゆう 七縱【名】次條を見よ。

七縱八橫【句】『七八縱橫の義。七八は七たび・八たび從も橫もほしいままの義』幾度も思ふがままになすこと。太平記「七縱八橫に破られて」「の條下を見よ。

しちしゆのーふね 七種の船【句】ふね(船)

しちしゆふじやう 七種不淨【句】〔佛〕ふじやう(不淨)の條下を見よ。

しちしゆほう 七種寶【名】〔佛〕しちほう(七寶)(一)に同じ。

しちしよ 七所【名】「山王七所」に同じ。領城反魂香「對の金鍔、毛彫は波に山王祭、七所御物、蒔繪の印籠」

しちしよ 七直【名】七種の漬物。即ち、韮・菁・芹・筍・茄(ナス)・葵・浴(ミョウガ)の總稱。

しちしよ 七書【名】〔書〕支那の七部の兵書、即ち孫子・吳子・司馬法・尉繚(ウツリョウ)子・三略・六韜・太宗問對の併稱。最明寺殿百人一首「合戰勝負の理非を述べたる七書をよくよく御得心あり」

しちしよう 七證【名】〔佛〕次條に同じ。

しちしようし 七證師【名】〔佛〕比丘(ビク)の具足戒を受くる時、これを證明する七人の僧。しちしょう。

しちしよく 七色【名】青・紅・紫・緋・黃・綠・白の稱。

しちしよびやうまん-さう 七處平滿相【名】〔佛〕さんじふにさう(三十二相)を見よ。

しちしゆごろく 七雙六【名】雙六の一種。

しちすん-の-わらぢ 七寸の草鞋【句】わらぢ(草鞋)の條下を見よ。

しちすん 七出【名】しちきよ(七去)に同じ。萬葉「無二七出一輒棄者、從二一年半一」「じ。

しちせい 七生【名】しちしやう(七生)に同じ。

しちせい 七星【名】(一)『書經の舜典を見よ』しちえう(七曜)(二)に同じ。「七政」(三)ほくとしちせい(北斗七星)に同じ。

しちせい 七聲【名】しちいん(七音)に同じ。

じちせい 自治制【名】〔法〕地方自治團體又は地方公共組合を設け、國家の政務の中、或行政をこれに委任し、みづから處理せしむる制度。自治制度。(官治制に對して)を見よ。

しちせいぐわ 七清華【名】せいぐわ(清華)

じちせいど 自治制度【名】〔法〕じちせい(自治制)に同じ。

しちせき 七夕【名】五節句の一。陰曆七月七日の夜。たなばた(棚機)(三)參照。

しちせき 七赤【名】九星の一。金星にて、西方を本位とす。この屬星の人は柔和なれども、性急にて、忍耐力に乏しといふ。

しちぜつ 七絕【名】〔文〕しちごんぜつく(七言絕句)の略。

しちせん-の-ちぎり 七世契【名】〔佛〕夫婦の契は七世の過去・現在・未來まで絕えずといふこと。

しちせん-やしや 七千夜叉【名】〔佛〕藥師十二神將の眷屬の總稱。盛衰記「十二神將七千夜叉、東西滿山護法聖衆(シャウ)、山王七社兩所三聖(サンジョウ)、時刻を廻らさず召捕りたまへ」

しちそ 七祖【名】(一)華嚴宗の相承傳統者とせらるる馬鳴(マメ)・龍樹(以上印度)・帝心尊者杜順・雲華尊者智儼・賢首大師法藏・清涼大師澄觀・圭峰大師宗密(以上支那)の七人の併稱。「七祖四師」(二)しちかうそ(七高祖)に同じ。

しちそう 七僧【名】〔佛〕法會の時、これを勤むる七つの役僧、即ち講師・讀師・呪願師(シュジ)・三禮師(サンライ)・唄師(バイ)・散花師(サンゲ)・堂達(ダウタツ)の併稱。一說に、呪願師・道師・唄師・散花師・梵音師・錫杖師・堂達なりと。

くそう (九僧)參照。狹衣「七僧などもすべてならぬをそせさせたまひける」

しちぞく 七族【名】(一)支那にて、七つの親族、即ち父の一族・姑の子・姉妹の子・女の子・母の一族・從子・妻の父母の併稱。きうぞく(九族)參照。(二)支那にて、曾祖より曾孫に至る七代の稱。

しちだい 七大【名】〔佛〕五大に見識の二大を併はせたるもの。ごだい(五大)參照。

じちたい 自治體【名】〔法〕じちだんたい(自治團體)の略。

しちだいじ 七大寺【名】奈良に於ける七つの大なる寺、即ち東大寺・興福寺・西大寺・元興寺・大安寺・藥師寺・法隆寺の併稱。七箇寺・ごしふだいじ(十大寺)・じふだいじ(十二大寺)・じふごだいじ(十五大寺)參照。大鏡「奈良は、七大寺十五大寺などを見くらぶるに」

しちたう 七島【名】(一)七つの島。(二)〔地〕いづしちたう(伊豆七島)を見よ。(三)しちたうおもて(七島表)の略。(四)しちたうがもて(七島表)の略。

しちだう 七道【名】(一)「武藏の七黨」を見よ。

しちだう 七道【名】(一)七つの道。(二)能樂にて、手・足・面・身・意・眼・舌の併稱。(三)〔地〕日本全國の七大區劃、即ち東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道の併稱。現今は、北海道を加へて、八道とす。「五畿七道」

しちだう 七堂【名】しちだうがらん(七堂伽藍)

しちだう-おもて 七島表【名】しちたう(七島藺)を見よ。

しちだうがらん 七堂伽藍・悉堂伽藍【名】古の寺院の七箇の堂宇、即ち唐様のは、東方丈・西方丈・鐘樓・鼓樓・方塔・佛殿・山門の併稱、眞言宗のは金堂(コンドウ)・講堂・五重塔・大

門・經藏(また鼓樓)・中門・鐘樓の併稱なりともいへど、七の數に拘らず、單に堂宇の規模の悉く典型に適ひて具足せるをいへるもの如し。最も古き百濟様のは、例へば攝津國の四天王寺、大和國の法隆寺の如く、南大門より中門を經て、金堂と塔と中央にあり、廻廊これを繞り、その北に講堂、講堂の東に鼓樓・東室、西に鐘樓・西室、北に北室あり。唐様のは、例へば大和國の東大寺・招提(ダイイン)寺・興福寺の如く、塔は廻樓の外に、二基相對し、金堂は廻樓の後邊中央にあり。禪宗のは、例へば京都の五山の如く、三門・佛殿・法堂・方丈一列に前後に相並び、禪堂・經藏・鐘樓・浴室・東司(スト)等、その左右に適宜に配置せらる。天台・眞言兩宗のには、一定の典型なかりしものの如し。芭蕉「奈良七重七堂伽藍八重櫻」

しちたう-なだ 七島洋【名】〔地〕薩摩國寶七島(タカラジマ)の間にある海。

しちたう-むしろ 七島莚【名】次條を見よ。

しちたう-ゐ 七島藺・七目【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。莖は大藺(オホヰ)に似て大きく、三稜あり。夏秋の際、莖の末に綠褐色なる花、穗をなして開く。水田に培養し、莖は乾し裂きて、疊表又は莚に製す。これを琉球表又は青莚(シヤウム)といひ、また寶七島(タカラジマ)にても製するより、七島表・七島莚といひ、豐後よりも多く製出するより、また豐後表の名もあり。りうきう。なしまさう。しちたう。しったう。

しちだし 七出【名】帳合米(チヤウアヒマイ)にて、問屋が七分の附合(アヒヅケ)をなすこと。

しちだね 質種【名】しちぐさ(質種)に同じ。

しちだん 悉曇【名】しったん(悉曇)に同じ。

しちだん 七壇【名】七つの壇。

七壇の修法(シホ)【句】〔佛〕密敎にて、七佛藥師の各に一つづつの祭壇を設けて、安產・息災等を祈るために行ふ修法。七佛藥師法。

七壇の御修法(ミシホ)【句】〔佛〕前條の敬稱。禁花「七壇の御修法・長日御修法、おほやけ方・宮方と行はせたまふ」

しちだんぐさ 七段草【名】〔植〕次條に同じ。

しちだん-くわ 七段花【名】〔植〕紫陽花(アヂサヰ)の培養的變種。夏、莖の頂に大形の無性花と小形の有性花と、聚繖花序をなして開き、額狀花は變じて數多の長隋圓形の萼片をなし、相重なりて菊花狀をなし、花心より更に抽きて、また花を開き、五七層に及ぶ。しちだんぐさ。

じちだんたい 自治團體【名】〔法〕■ちはうじちだんたい(地方自治團體)に同じ。■公共の團體。公共團體。

しちだん-の-そなへ 七段の備【句】そなへ(備)の條下を見よ。

しちたらじゆ 七多羅樹【名】〔佛〕『法華經の藥王品、智度論の卷二などに見ゆ』高さ七多羅樹の高さを七倍せるほどの高さ。日本振補始「恐れて虛空に飛上り、その高さ七多羅樹」

しちち 七値【名】しちえう(七曜)■に同じ。

しちち 七質【名】土地を質入すること、又その質入したる土地。

しちぢ 悉地【名】〔佛〕しぢ(悉地)に同じ。

しちぢん 七珍【名】しっちん(七珍)を見よ。

じぢ-ちやうにん 自地町人【名】自己の所有地に居住せる町人。〔江戸時代の語〕

しちぢおう 七重【名】七層をなして重なること。

しちぢゆう-さう 七重草・旌節花【名】〔植〕くりんさう(九輪草)に同じ。

しちぢゆう-ぎやうじゆ 七重行樹【名】〔佛〕『阿彌陀經に「極樂國土、七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是周帀・圍繞」とあり。七重に行列せりといふによりて名づく』次條に同じ。

しちぢゆほうじゆ 七重寶樹【名】〔佛〕『觀無量壽經に「一總之、作七重寶樹想」とあり』極樂淨土の莊嚴の一として、七重に列べりといふ七種の寶樹、即ち金樹・銀樹・瑠璃樹・玻璃樹・珊瑚樹・瑪瑙樹・硨磲樹。七重行樹。寶の植木。平家「軒に並べる植木をば、七重寶樹とかたどり」

しちづかん 資治通鑑【名】〔書〕支那周の威烈王より、五代に至るまで、百十三主一千三百六十二年間の歷史を、編年體に編纂せるもの。二百九十四卷。宋の司馬光の奏宗の勅を奉じて撰びしもの。

しちぢ-でう 七條【名】■七つの條(ヂヤウ)。■「七條の袈裟」の略。

しちぢでう 七條【名】■〔地〕京都市の東西の通路の一。■姓氏の一。本姓は藤原。水無瀨(ミナセ)氏の支族。水無瀨隆脩を祖とす。明治維新後、子爵を授けらる。

七條の袈裟(ケサ)【句】三衣(サンエ)の一。七幅(シチフク)にて作りたる袈裟。七條衣。七條衣。曠多羅僧(カツタラソウ)。上衣(ジヤウエ)。太平記「七條の袈裟を取出して」「同じ。

しちぢでう-え 七條衣【名】「七條の袈裟」に同じ。

しちぢでう-げさ 七條袈裟【名】前條に同じ。

しちぢでう-せん 七條錢【名】享保十年に、京都の七條にて鑄造せし寶永銅錢。

しちぢでう-ねん 七條院【名】〔人〕ふぢはらまするこ(藤原殖子)を見よ。

しちてん-はったう 七顚八倒【句】しってんばったう(七顚八倒)を見よ。

しちと-いり 七斗入【名】五斗入より三まはり大きく、十斗入より三まはり小さき土器。

しちとう 七等【名】■七つの等級。■七番目の等級。■勝れたる人の七つの階級。即ち五人にすぐるるは義、十人にすぐるるは選、百人にすぐるるは俊、千人にすぐるるは英、二千人にすぐるるは傑、萬人にすぐるるは聖。■孫曾孫・玄孫・來孫・昆孫・仍孫(ジヨウソン)・雲孫の併稱。

しちとう 七頭【名】足利時代に、三管領に次ぎて頗る重き家柄、即ち山名・一色(イツシキ)・土岐・赤松・京極・上杉・伊勢の七家の併稱。

しちとく 七德【名】■七つの德。■『左傳の宣公十二年の條に見ゆ』武道の七の德、即ち一に暴を禁じ、二に兵を戢(オサ)め、三に大を保ち、四に功を定め、五に民を安んじ、六に衆を和せしめ、七に財を豐にすること。■次條の略。

七德の舞【句】『武道の七德を表象せるものなる義。前條■參照』じんわうはちらく(神王破陣樂)に同じ。徒然「樂府の御議論の番にめされて、七德の舞を二つ忘れたりければ」

しちど-やき 七度燒【名】幾度も燒附けて精製したる鍍金(メツキ)。

しちとり-ぬし 質取主【名】〔法〕しちけんしや(質權者)に同じ。

しちなん 七難【名】■七種の災難。法華經の普門品に依れば、火難・水難・羅刹難・刀杖難・鬼難・枷鎖難・怨賊難の併稱。藥師經に依れば、人衆接難・他國侵逼難・自界叛逆難・星宿變怪難・日月薄蝕難・非時風雨難・過時不雨難の併稱。盛衰記「三災・七難殘る事なし」■十八番「七難即滅、七福即生」■種種の非難すべき點。(主に女の容貌の上にいふ)■色の白いは七難隱す」

七難・九厄【句】人の七と九とに當る歲には、災厄に遇ふといふ迷信。〔諺語〕

しちなんそくめつ-にち 七難即滅日【名】九星にて、萬事に用ひて吉なりといふ日。正月は巳の日、二月は午の日、三月は未の日といふ順序に配して、十二月の辰の日に終る。

しち-に 七二【數】く(九)に同じ。〔遊廓の隱語〕丹波與作「や、それについて、小女郎、そなたの敵、松板のしちには、何として見えぬぞ…むむ、そのしちにとは、九郎助の事か」

しちにん-がっしやう 七人合唱【名】〔音〕しちがっしやう(七部合唱)に同じ。

しちにん-さるがく 七人散樂【名】「賀茂の水無月(ミナヅキ)の能」に同じ。

しちにん-ばり 七人張【名】六人にて押したわめ、他の一人これに弦を掛くるほどの强弓。三人張・四人張・五人張の類。

しちねん 失念【名】しつねん(失念)に同じ。

しちねんき 七年忌【名】しちくわいき(七回忌)に同じ。今宮心中「來月は母の七年忌」

しちの-じ-づくし 七字盡【名】七の字の附く詞を多く連ぬること、又その詩歌文章。七十の賀の祝などに書く。萬葉手紙「馬老人、人生七十古來稀なる賀筵を開く。われ四十年來の知己なれば、世の人のもてはやす七の字づくしでも書かねばな

らぬところなれど」

しちのへ 七戸【名】〔地〕陸奥國上北(カミキタ)郡にある町。奥州街道に當り、郡役所を置く。南部氏の舊藩地。

しちはいず 七杯酢【名】醋一杯、酒半杯、食鹽少量を加へて煮たるもの。

しちはうべん 七方便【名】〔佛〕次條に同じ。聖德太子繪傳記「五乘・三乘・七方便、諸天善神加被を垂れたまへ」

しちはうべんゐ 七方便位【名】〔佛〕しちけん(七賢)㈢に同じ。

しちはん 七半【名】博奕(バクエキ)の一種。ちよぼいちの類。著聞「若きも、老いたるも、七半を打ちて」

しちばり 質針【名】著物の裏をくける時、誤りて、そのくけ目の絲の表にあらはるること。

しちぶがっしやう 七部合唱【名】〔音〕『英 Septet』七人の聲音にて歌ふ曲。七人合唱。

しちぶがっそう 七部合奏【名】〔音〕『英 Septet』七箇の樂器にて合奏する曲。

しちふく 七福【名】〔佛〕『仁王經』に「七難卽滅、七福卽生」とあり』七つの幸福。四十八雜「七難卽滅、七福卽生」

しちふくじん 七福神【名】世俗に、福德の神として崇敬する七人の神仙、卽ち夷三郎大黑天・辨財天・毘沙門天・壽老人・布袋和尚・福祿壽の併稱。神佛混淆の時代に、仁王經に「七難卽滅、七福卽生」とあるに本づき、日本・支那・印度三國の古傳說中より、七個の神仙を見立てて作り出でしものなるべしといふ。足利時代以來の流行なるべく、能(ノウ)の狂言に「七福神」の曲あり。また德川時代には、これを一艘の船に乘合へる狀を描きて、めでたきものとする習慣も生じたり。

(しちふくじん)

また古くは、壽老人に代ふるに、吉祥天又は猩猩を以てせるもあり。

しちふくじんまうで 七福神詣【名】新年に、七福神の一神づつを祭れる七箇處の社寺を巡拜すること。しちふくまうで。しちふくまゐり。

しちふくたうぞく 七福盜賊【名】七福神の行裝をなして忍び入る盜賊。足利時代の末の俗に、かくして忍び入れば、いづれの家にても、福神來れりとして、思ふがままに財物を出し與ふる迷信ありきといふ。

しちふくまうで 七福詣【名】しちふくじんまうで(七福神詣)の略。

しちふくまゐり 七福參【名】前條に同じ。

しちぶしふ 七部集【名】〔書〕はいかいしちぶしふ(俳諧七部集)を見よ。

しちぶだ 質札【名】質契約の際、質屋より質置主に交附する證標。新版歌祭文「その置主さへ知れたれば、質札を買取り、此方へ受戻したき」

しちぶつ 七佛【名】「過去七佛」を見よ。

七佛の阿闍梨【句】〔佛〕七佛藥師法を修する時の七人の阿闍利。增鏡「いみじき願ども立てさせたまふしるしにや、七佛の阿闍梨まゐりて」

しちぶつあじやり 七佛阿闍梨【名】〔佛〕「七佛の阿闍梨」に同じ。

しちぶつつうかいげ 七佛通戒偈【名】七佛を通じて、敎行の根柢としたる偈(ゲ)。「諸惡莫作(サク)・諸善奉行(ブギヤウ)、自淨其意、是諸佛敎」の四言四句より成る。「諸惡は作(ナ)す莫く、諸善は、奉(ウケ)行ひて、自らその意を淨くする。是、諸佛の敎なり」との意。諸佛出世の初は、弟子淸淨なりしため、煩瑣なる禁戒を要せず、ただこの一偈を通戒として、事足りしなり。通戒。略戒。

しちぶつやくし 七佛藥師【名】■藥師如來が、衆生を濟度せんがために、分身して現ずる七佛體、卽ち善名稱(ミヤウシヨウ)吉祥(キチジヤウ)王如來・寶月智嚴(ゴン)光音自在王如來・金色(コンジキ)寶光妙行(メウギヤウ)成就如來・無憂(ウ)最勝吉祥如來・法海雷音如來・法海勝慧(ヱ)如來・藥師瑠璃光如來の併稱。この七佛、この世界の東方に、各一淨土を構へて住すといひ、また北斗七星はこの七佛の化現(ケゲン)なりとも說かる。■京都及びその附近の七箇寺、卽ち祇園の觀覺寺、八幡(ヤハタ)の護國寺、大秦(ウヅマサ)の廣隆寺、藝倉の法雲寺及び延曆寺珍重寺・平等寺なる藥師の併稱。室町千疊敷「五大明王・六觀音・七佛藥師の御座の守」

七佛藥師五壇の御修法(ミシホ)【句】〔佛〕七佛藥師法と五壇の修法との敬稱。增鏡「大法祕法殘なく行はる。七佛藥師・五壇の御修法普賢延命・金剛童子・如法愛染など、すべて數知らず」

七佛藥師・熾盛光の法【句】〔佛〕七佛藥師と熾盛光法と。太平記「七佛藥師・熾盛光……の法」

七佛藥師の法【句】〔佛〕しちぶつやくしほふ(七佛藥師法)に同じ。盛衰記「根本中堂にして七佛藥師の法…金堂にして北斗尊星王(ソンジヤウ)の法、…內法・外法(ゲホフ)、數を盡して行はる」

しちぶつやくしほふ 七佛藥師法【名】〔佛〕「七壇の修法(シユホフ)」に同じ。

しちぶりつきぐわいこくこうさい 七分利附外國公債【名】ぐわいこくこうさい(外國新公債)に同じ。

しちへい 視地平【名】ちへいせん(地平線)に同じ。

しちへい 七廟【名】支那にて、天子の太祖の廟と三昭三穆との併稱。さんべう(三廟)・ごびう(五廟)・せうぼく(昭穆)參照。

しちへん 七辨【名】左右の大辨、左右の中辨、左右の少辨の六人に、中・少のうちにて、權官に補せられし人を合はせての稱。太平記「大中納言八座・七辨・五位・六位內外の諸司」

しちへんげ 七變化【名】あおさね(紫陽花)

しちへんじん 七偏人【名】〔書〕江戶柳橋に能樂亭といふ一戶を構へたる喜次郎といふ若隱居を主人として、茶目吉・虛呂松等の同氣相求むる道樂者七人相集まりて、茶番狂言に浮世を弄びしさまを描きたる滑稽小說。五篇・十五冊。瀧亭鯉丈の著。

しちべゑ 七兵衛【名】尻の隱語。〔蠻人の語〕

しちほ 七步【名】步數七つ。ななあゆみ。七步の才【句】■『世說の文學篇に見ゆ』支那魏の曹植、詞才に富み、その兄丕(卽ち魏の文帝)と善からず。丕、植に命じて、七步の中に句を作らしむ。成らざれば法に行はんといふ。植、聲に應じて「煮レ豆持作レ羹、漉レ鼓以爲レ汁、萁在二釜底一、然、豆在二釜中一泣、本是同根生、相煎何太急」と應ふ。丕深く慙ぢたりといふ故事。ななあゆみ。■詞藻の才の勝れたること。太平記「萱少將、…詩は捲二盛唐波瀾一、先二七步才一」

七步の詩【句】前條㈠にある曹植の作りし詩。「五步の詩」參照。

しちほう 七寶【名】しっぽう(七寶)㈡に同じ。

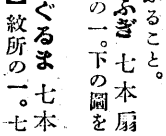
しちほうたふ 七寶塔【名】七重の寶塔。

しちぼだい 七菩提【名】〔佛〕次條の略。

しちぼだいぶん 七菩提分【名】〔佛〕佛道を覺る七種の智、卽ち擇法覺分とて、對象の眞僞を擇擇する智、精進覺分とて、無益の苦行を爲さず、眞の法にかなへる行をなす智、喜覺分とて、美く覺りて、眞の歡喜に住する智、除覺分とて、諸の虛僞を除き、眞の美根を失はざる智、捨覺分とて、執著を全く捨てて、永く追憶せざる智、定覺分とて、禪定(ゼンヂヤウ)に住して、妄想を生ぜざる智、念覺分とて、定と慧とを均等ならしむる智の併稱。七菩提。菜花「池の浪も五根・五力・七菩提分・八聖道を逃ぶと呵え」

しちほんだて 七本立【名】本膳に、七種の菜を供ふること。

しちほんあふぎ 七本扇【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(ぎふあんほんしち)

しちほんやぐるま 七本矢車【名】紋所の一。七本の矢より組立てたる矢車。

しちほんやり 七本槍【名】ある戰場にて、槍を以て高名を擧げし七人の武者の併稱。賤(シヅ)ケ嶽の七本槍・小豆坂(アヅキザカ)の七本槍・蟹江の七本槍・眞田の七本槍等あり。各そ

の條を見よ。

しちほんろ 七本絽【名】緯絲(ヨコイト)を七筋づつ合はせて、一つの絽目を現はしたる絽織。

しちまいぎしやう 七枚起請【名】遊女などの、數多の客に對して、數多く出す起請文。(一枚起請などに對して) 長町女腹切「いく夜いく夜の憂きつとめ、七枚起請・そら誓文」

しちまん 七慢【名】〔佛〕七種の慢心。即ち慢とて、同類の間に做ること、過慢とて、相似たる者の中にて、自己が他に勝るとして做ること、慢過慢とて、他の勝れたるに關らず、强ひて自己を勝れたりとすること、我慢とて、自己の無力に關らず、自己を恃みて、他を凌ぐこと、增上慢とて、未だ增上緣を得ざるに、既に得たる如くに誤認して跨ること、不劣慢とて、自己の無能に關らず、同類に跨ること、邪慢とて、邪見に執して、他を凌ぐことの併稱。

しちまんぼう 七萬寶【名】「七珍(チンノ)萬寶」の約。 文武五人男「しちまんぼうにも換へがたく、いとしうゆかしく」

しちみせ 質店【名】質屋の營業所。

しちみたうがらし 七味唐辛【名】なないろたうがらし(七色唐辛)に同じ。

しちみやう 七名【名】〔文〕連句の附け方の七種、即ち有心(ウシン)とて、附句(ツケク)にて前句(マヘク)の姿をあらはすこと、拍子とて、前句が噂なる時、附句にて、その噂せらるる物の姿をあらはすこと、色立(イロダテ)とて、連句の上に色彩に關する語を用ひて、上下を引立つること、起情(キジヤウ)とて、前句に情なきを、附句にて、その情をあらはすこと、向附(ムカフ)とて、前句の中より趣向を求めずして、別方面の事を捕へ來り、しかも前句と連ね得るやうに附句すること、應答とて、前句と附句と自問・自答の心なるもの、遁句(ニゲク)とて、あまり前句に拘はらず、さらりと附けて、次の句の附きやすきやうにすること。各務(カガミ)支考に始まるといふ。

しちむつかし 七六箇敷【形ニ】『しち(七)』は接頭語』こみいりてむづかしきこと。手數多くしてむづかしきこと。

しちん 繻珍・朱珍【名】しゆちん(繻珍)を見よ。

しーおん 市塵【名】■市中のちりほこり。

しーおん 市廛【名】■市中の賑しきこと。

しーおん 紫塵【名】むらさき色のちり。

じおん 慈鎭【名】〔人〕高僧。藤原忠通の子。初名は道快。大僧正に敍せられて、慈圓と號す。學、和漢佛を兼ね、また西行に從ひて和歌に名あり。天台座主となり、嘉祿元年寂す。嘉禎三年、慈鎭と諡せらる。

じおんくわしやう 慈鎭和尚【名】〔人〕前條の敬稱。 盛衰記「慈鎭和尚の末だ慈圓阿闍梨にておはしける時」 「に同じ。

じおん-つう 兒枕痛【名】あとばら(後腹)(二)に同じ。

じぢめ 實目【名】まじめ。かたぎ。 世間娘氣質「じぢめなる奉公はとてもせぬ心なれば」

しーめん 七面【名】しちめんだいぼさつ(七面大菩薩)の略。

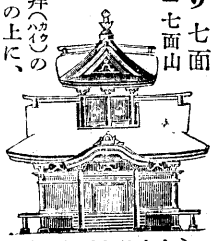
しちめんさん 七面山【名】〔地〕甲斐國南巨摩(コマ)郡にある山。白根山脈の東方の支脈に屬し、春氣川を隔てて、身延山に對す。高さ五二〇〇尺。山上に日朗の祀りし七面大菩薩の本祠及び拜殿等ありて、身延山久遠(クヲン)寺の鎭守たり。

しちめんだいぼさつ 七面大菩薩【名】日蓮宗の守護神。甲斐國七面山に鎭坐す。七面大明神。前條參照。

しちめんだいみやうじん 七面大明神【名】前條に同じ。

しちめんだう 七面倒【名】『しち(七)は接頭語』甚だ面倒なること。 浮世風呂「おめえが嫁て、嫁を姑のやうにあしらふ氣になれば、七面倒なことはねえ」

しちめんづくり 七面造【名】〔建〕七面山上なる七面大菩薩の堂の建築に用ひたる樣式。入母屋(イリモヤ)造に向拜(ハイ)の附きたる屋根の上に、更に一種の樓を載せたるもの。



(りくづんめちし)

しちめんとくさい 七面倒臭い【形】『しち(七)は接頭語』甚だ面倒くさし。

しちもつ 質物【名】質にあづかりたる品物。質權の目的物。 太平記「家中に每事行儉約、一切の質物共も、古き物を用ふ」

しちもつぎんかう 質物銀行【名】主として、質物を擔保に金錢を貸附くる銀行。

しちや 七夜【名】子女の生れてより七日目にあたる夜。うぶたち。この夜祝儀を行ふ。 源氏「しちやは、うちより、それも、おほやけざまなり」 榮花鬱「七夜の內は、橫寢さへさせぬもの」

しちやのいはひ 七夜の祝【句】七夜に行ふ祝儀。うぶたちのいはひ。

しちや 質屋【名】質屋營業をなす家、又その人。典舖。 天の網島「この風呂敷も氣遣と、引きほどき、とり散らし、さればこそそれ是れも質屋へ飛すのか」

しーちやう 廳丁【名】■めしつかひ。こもの。■古、仕丁・舍人・使丁のために、水汲炊を辨じたる者。しおよ(廳女)參照。 續紀「諸司仕丁舍人・使丁等則丁」

しーちやう 仕丁・使丁【名】■古、五十戶每に一人づつを徵し、諸司の雜役に服せしめし賤吏。中世以後、院司・親王家・攝關家・大臣家等にも置かれたり。つかへのよぼろ。しおよ(仕女)參照。■江戶時代に、御臺所にて、御輿舁その他諸事の使役に供せし者。■明治の初、各官廳に置き、廳中の雜役に從事せしめし等外吏。明治十年廢止。

しーちやう 使廳【名】けびねしちやう(檢非違使廳)の略。しのちやう。〔古語〕 徒然「この法師をとらへて、所より使廳へ出だしたりけり」

しーちやう 視聽【名】してい(視聽)に同じ。

しーちやう 支廳【名】出張の役所。派出の役所。 同じ。

しーちやう 市廳【名】しやくしよ(市役所)に同じ。

しーちやう 市長【名】■町の長。■市を代表する有給吏。內務大臣が、市會をして候補者三人を選擧推薦せしめ、その中より上奏裁可を經て任命す。任期は六箇年。また市參事會を組織する一員として、その議長となる。

しーちやう 師長【名】師匠と長上と。

しーちやう 仕長【名】仕所(ツカドコロ)の長。

しーちやう 止長【名】してう(翔鳥)に同じ。 謠曲(善)「夕顏の宿に葛を打てば、……絕ゆまじき筋を尋ねし玉かづら、止長にいざや掛けうよ」

しーちやう 紙帳【名】■紙を張合はせて作りたるとばり。■紙を張合はせて作る蚊屋。 持統天皇歌軍法「その家貧しく、蚊帳も紙帳もなつの夜に」

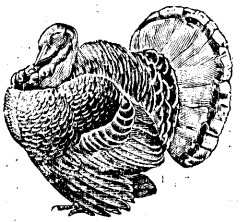
しーちやう 弛張【名】■ゆるぶることと、强く張ることと。■緩かにすることと、嚴にすることと。

しーちやう 詞場【名】文雅の場所。文垣。文場。 太平記「對策及弟して、自ら詞場に折桂給ふ」

しーちやう 市場【名】『英 Market』■〔經〕商品の需要供給の關係を集注する一定の經濟範圍。その範圍の廣狹によりて、地方市場・一國市場・世界市場等の名あり。國の內外によりて、內國(內地)市場・外國(海外)市場の別あり。またその性質によりて、金融市場・運賃市場・株式市場等の種類あり。■實物若しくは金錢の賣買取引の行はるる場所。營業者・供給者が貨物・商品等を提供して、その需要者を求めんがために、定時に會合する場所。その取扱ふ商品の種類によりて、綿物市場・魚市場・青物市場・家畜市場等に別たる。いちば。

しーちやう 視場【名】しや(視野)に同じ。

【名】■雞類に屬する鳥。北米の原產。體重七貫目に達するものあり。羽毛種種の色をなす。咽には、鷄冠の如き懸肉あり。時に尾を團扇のごとくに擴ぐ。人家に畜ひ、その肉を賞美す。からくんてう。うみきじ。かるくん。■變り易き心の人に譬ふ。



(■うてんめちし)

じちやう 支場【名】出張所。でばりしよ。

じちやう 次長【名】長官の次に位して、これを補佐する職。「參謀次長」

じちやう 次丁【名】大寶令の制度にて、老丁と殘疾の者との總稱。(正丁・少丁・老丁に對して)

じちやう 耳聽【名】じてい(耳聽)に同じ。

じちやう 磁場【名】〔理〕『英 Magnetic field』磁石の磁力の及ぶ場所。磁界。

じちやうのつよさ 磁場の強さ【句】〔理〕『英 Intensity of magnetic field』磁場の或點における强さ。單位の磁氣量を持來したる時、これに作用すべき磁力の强さを以て表はす。

じちやううり 紙帳賣【名】昔、紙帳を賣りあるきし者。

じちやうかかく 市場價格【名】『英 Market value』市場にて交易せらるる時の貨物の價格。客觀的價格。

じちやうそん 市町村【名】市と町と村と。

じちやうそんくわい 市町村會【名】市會と町會と村會との總稱。

じちやうそんせい 市町村制【名】市と町村との制度。市制と町村制と。

じちやうそんのうくわい 市町村農會【名】市農會と町農會と村農會との總稱。

じちやうだう 腸杖堂【名】江村北海の詩社。

じちやうだて 四挺立【名】小早(こばや)の、總の數四挺用ふるもの。

じちやうちやう 支廳長【名】支廳の長官。「北海道支廳長」「樺太支廳長」

じちやうねつ 弛張熱【名】〔醫〕かんけつねつ(間歇熱)に同じ。

じちやうまつり 死杖祭【名】しくわつちやうまつり(死活杖祭)に同じ。

じちやうれい 支廳令【名】北海道廳及び樺太廳の支廳長が發する行政命令。

じちやえいげふ 質屋營業【名】質物を取りて、金を貸し、利子を收むる營業。

じちやえいげふしや 質屋營業者【名】質屋營業をする人。

じちやかまし 七嘴し【形ニ】『じち(七)は接頭語』うるさくやかまし。こめんだうにやかまし。

じちやのくら 質屋庫【名】〔書〕むかしがたりじちやのくら(昔語質屋庫)の略。

じちやまち 七夜待【名】〔佛〕密敎の俗諦(ゾクタイ)門の一部として、毎月十七日夜より二十三日夜までの七夜の間、千手觀音・正觀音・馬頭觀音・十一面觀音・準胝(ジユン)觀音如意輪觀音・勢至菩薩を、順次に毎夜の本尊とし、その印明(インミヤウ)を結誦(ケツジユ)して、所願成就を祈ること。にじふろくやまち(二十六夜待)參照。

じちやう(英 Stew)【名】西洋料理の一。牛肉・雞肉又は豚肉の類に野菜を加へ、バタその他の藥味を加へ、シチユウ鍋に入れ、文火(ぶんくわ)にて、長時間煮詰めたるもの。

じちやう 支柱【名】柱を立てて支ふること、又その柱。つっぱり。

じちゆう 七雄【名】■七つのすぐれたるもの。■じちこく(七國)[二]に同じ。

じちゆう 死中【名】死地にあること。死中に活を求む【句】『後漢書の岑彭傳に「男子當二死中求レ活、可二坐窮一乎」とあるに本づく』次條に同じ。〔諺語〕

死中に生を求む【句】『晉書の呂光載記に「死中求レ生正在二今日一」とあり』死するばかりの位置に陷りて、生くべき手段を求む。死中に活を求む。〔諺語〕

じちゆう 市中【名】市のうち。まちなか。

じちゆう 四仲【名】『書經の周官篇に出づ』仲春・仲夏・仲秋・仲冬の四つの併稱。

じちゆう 四注【名】〔建〕よせむねづくり(寄棟造)に同じ。

じちゆう 仔蟲【名】〔動〕さなぎ(蛹)に同じ。

じちゆう 至忠【名】至って忠誠なること。純忠。

じちゆう 四重【名】〔佛〕じぢゆうきんかい(四重禁戒)の略。徒然「圍碁・雙六好みて明し暮す人は、四重・五逆の罪よりもまされる惡事とぞ思ふ」

じちゆう 止住【名】きよぢゆう(居住)に同じ。平家「山門いよいよ荒れはてて、十二禪衆の外は、止住の僧侶稀なり」

じちゆう 自注・自註【名】自身にて註すること、又その註。

じちゆう 次忠【名】忠義は忠義なれども、至極の忠義とは稱しがたきもの。晉我虎が麾下伍子胥が夫差における、管仲が桓公におけるの、次忠・下忠と謂つべし」

じちゆう 寺中【名】■寺院の中。寺内。■大寺の總門の內にある、配下の小寺。塔頭(たつちう)。子院。地中(ぢちう)。

じちゆう 侍中【名】『事物紀源に「來往殿中二奏事一、故謂二之侍中一」とあり』古代の支那にて、君主の侍從たる官。もと宰相に屬せしが、後には宰相と並びて、權力を有するに至りたり。

じちゆう 時中【名】『中庸の第二章に「君子之中庸也、君子而時中」とあるに本づく』何時にても、その時に當りて、中道を制すること。

じちゆうおん 次中音【名】〔音〕てのるに同じ。

じちゆうきん 四重禁【名】〔佛〕次條に同じ。

じちゆうきんかい 四重禁戒【名】〔佛〕■最も重大なる四つの禁戒、卽ち殺生戒・偸盜(ちたう)戒・邪淫戒・妄語戒の併稱。これを犯したる僧は再び僧となることを得ずと定めらる。四波羅夷。四重禁。四重罪。四重。ごかい(五戒)・じっかい(十戒)參照。■密敎にて、不捨正法(ふしやしやうぼふ)戒とて、如來一切の聖敎(しやうげう)を正しく行ふべきこと、不捨離菩提心戒とて、菩薩萬行の幢旗たる菩提心を喪失すべからざること、不應慳悋(けんりん)法戒とて、釋尊の遺訓なる諸の勝法を惜みて與へざるが如きを爲すべからざること、不饒益行(ぎやうぎやう)戒とて、普く一切衆生を攝して、入道の因緣たらしむべきことの併稱。四婆羅夷。四重禁。四重。四重罪。

じちゆうぐんえう 侍中群要【名】〔書〕藏人の役の事を詳記せるもの。十卷。橘廣相(ひろみ)の著。

じちゆうくわげん 次中和絃【名】〔音〕『英 Submediant』音階の基調音の上方六度に位する音。上屬和絃。

じちゆうさい 四重罪【名】〔佛〕じちゆうきんかい(四重禁戒)に同じ。

じちゆうじゆう 始中終・始衷終【名】『始衷終の字面は左傳の衰公七年の條に見ゆ』はじめと、なかと、をはりと。御文章「人間の浮生(ふしやう)なる相をつらつら觀ずるに、おほよそはかなきものは、この世の始中終(しちゆう)幻(まぼろし)のごとくなる一期(いちご)なり」

じちゆうそしき 支柱組織【名】〔醫〕人體の諸機關を支持・聯結する組織。結締織・軟骨・骨の三に分つ。

じちゆうでんしんはふ 四重電信法【名】『英 Quadruplex telegraphy』一條の電信線にて、同時に四個の電報を送受する電信法。二重電信法の二倍、單信法の四倍の作用をなすもの。その原理は二重電信法の重複せるものに外ならず。

じちゆうなべ シチユウ鍋《英 Stew pan》【名】シチユウを煮るに用ふる鐵製の鍋。深くして長き取手あり。

じちゆうふ 支柱夫【名】鑛山にて、坑道を巡回・視察して、巖石・土塊の缺損など、萬も危險と認むる所ある時は、木材を橫たへ、とめ木を施して、その陷落を未然に防ぐことを掌る者。

じちゆうぶち 四重緣【名】へうほそ(表補)に同じ。

じちゆく 視軸【名】〔醫〕■『英 Visual axis』凝視點と眼の網膜の中央小窩とを連結する直線。視線。■『英 Optical axis』眼球の後壁まで延長せられたる直線。

じちゆく 磁軸【名】〔理〕『英 Magnetic axis』磁石の兩極を連結する直線。

じちゆくぎ 視軸儀【名】じじゆんぎ(視準儀)に同じ。

じちよ 子女【名】じぢよ(兒女)に同じ。

じちよ 士女【名】紳士と婦女と。をとこをとめなと。

じちよ 仕女【名】女子の仕丁。女丁。仕女丁。膂力婦女。力婦。

じちよ 四女【名】■四人の女。■四番目のむすめ。

じちよ 紫女【名】〔人〕むらさきしきぶ(紫式部)の女。

しおよ 嬬女【名】女子の賤丁。

じおよ 侍女【名】そばつかへの女。こしもと。侍婢。 國姓爺合戰「腰元の侍女共より集まり」

じおよ 兒女【名】Ⅰ女の子。をなご。女子。Ⅱ男兒と女子と。子女。

じおよ 次女【名】Ⅰ二番目のむすめ。長女の次。Ⅱ大寶令の制度にて、男子の中男(ナンヨウ)と老丁(ラウテイ)とに相當する女。

じーちよう 輜重【名】『輜は衣物を載する車、重は荷車の義』Ⅰ旅行者の荷物。遠行する人の途中に要する物資。Ⅱ軍隊に附屬せる被服・彈藥・兵器・食糧等、一切の軍需品。しぢんしちよう(師團輜重)參照。

じーちよう 至重【名】Ⅰ極めてをもきこと。Ⅱ極めて大切なること。至要。

じぢーよう 實用【名】まめやかにして、おとなしきこと。正直。律義。〔古語〕伊勢「昔、男ありけり。いとまめに、じちようにて、あだなる心なかりけり」

じーちよう 自重【名】Ⅰ己れの行を謹みて、輕輕しくせぬこと。自愛。持重(ヂヂウ)。Ⅱ〔哲〕『英Self-esteem』自己の價値を意識し、自ら卑下せざること。自愛。

しちよう-しや 輜重車【名】輜重に用ふる車。輜車。

しちよう-へい 輜重兵【名】陸軍兵種の一。輜重の運搬と監視とに任ずるもの。下士は軍刀と拳銃と、兵卒は軍刀と騎銃とを携帶し、いづれも乘馬す。 「見よ。

しちようへいかんぶ 輜重兵監【名】次條を見よ。

しちようへいかんぶ 輜重兵監部【名】教育總監部の一部局。教育總監に隸し、當該兵科教育に關する一切の事項を掌る所。部長を輜重兵監といひ、中將もしくは少將これに任ぜられ、部員これに從屬す。

しちようゆそう 輜重輸卒【名】陸軍輜重大隊に屬し、戰時・事變に際し、輜重兵の監視の下に、輜重諸般の用に使役せらるる兵卒。練習事項簡單なるがために、現役期限は二年四箇月なれど、三箇月在營の後、歸休せしむ。

しーちよく 司直【名】Ⅰ法律の正準をつかさどること。法によりて、正しく裁判すること。Ⅱ〔だいはんじ(大判事)の唐名。

司直の吏【句】裁判官。司法官。

しちよく-きよじ 司直許事【名】だいはんじ(大判事)の唐名。

しちよくけい 視直徑【名】(天)『英Apparent diameter』天體の見懸(ミカケ)上の直徑の兩端と觀測地點とを連結して生ずる角、即ちその直徑の視角。

じぢよけういく-ほけん 子女教育保險【名】子女の教育の費用に供するため、積金をなさしめ、その契約上の年齡に達せし時、契約の金額を交付するもの。

じぢよこ 【名】にんぎやう(人形)を云ふ。〔磐城國の方言〕

しぢよ-しちろん 紫女七論【名】〔書〕しかしちろん(紫家七論)に同じ。 「同じ。

しぢよ-ちやう 仕女丁【名】しぢよ(仕女)に同じ。

しぢーらい 失禮【名】しつれい(失禮)に同じ。〔古語〕 盛衰記「天下のしちらいをつかうまつりあへり」

しぢらう-ねずみ 七郎鼠【名】鼠の子。こねづみ。 風俗文選「とこの乙子を七郎とは申す」

しちり 七里【名】〔地〕しちりなだ(七里灘)の略。 芭蕉「桑名に遊びて、熱田に到る。あそび來ぬ河豚釣りかねて七里まで」

しちり-がはま 七里濱【名】〔地〕『關東道六町一里にて數へたる長さによりて名づく』相模國鎌倉郡腰越(コシゴエ)と稻村ケ崎との間にある海濱。濱邊に極樂寺・津・腰越の三村あり。東方は由比ケ濱に接す。袖ケ浦。

しちり-けつかい 七里結界【名】Ⅰ〔佛〕七里四方を結界すること。Ⅱ嫌ひて、近づけぬこと。決して寄せつけぬこと。しちりけんばい。 轉訛。

しちり-けつぱい 七里結界【名】前條Ⅱの轉訛。

しちり-けんばい 七里結界【名】しちりけつかい(七里結界)Ⅱの訛。 津國女夫池「諫言申す人は七里けんばい」ト養狂歌集「七里けん梅花によきよ春の風」

しちりつ 七律【名】〔文〕しちごんりつ(七言律)の略。

しちり-つぎやど 七里繼宿【名】しちりやくしよ(七里役所)に同じ。

しちり-なだ 七里灘【名】〔地〕伊勢國桑名港より尾張國熱田に至るまで、凡そ七里の間の航路。七里の渡。さや(佐屋)參照。

しちりのり 七里乘【名】七里の間、船に乘ること。前條參照。 膝栗毛「いや、明日は船でござりますか、また佐屋廻(マハリ)をなされますか。……船はよいが、おいらあどうも船では、なぜか、小便をするがこはくて、そして、ねっから出ねえには困る。七里乘といふもんだから、こらへては居られず」

しちりのわたし 七里渡【名】七里洋の渡海。 東行記「桑名。海上七里を渡りて、尾張の宮驛に至る。伊勢・尾張の境なり」

しちりびきやく 七里飛脚【名】しちりやくしよ(七里役所)を見よ。

しちりぼっけ 七里法華【名】僧日泰、曾て關東に下り、一夕の說法にて、上總國東海岸七里の間の住民をして、皆法華宗信者たらしめしこと。 八犬傳「俗にいふ上總の七里法華、安房七浦(ナナウラ)の經宗(シキヤウ)とて、大かた題目宗なれども」

しちーりん 七厘・七輪【名】『火のおこり易きがために、炭の價僅かに七厘にて、物を煮ることを得といふ義』煖爐の類。多くは土製にして、形は大小方圓一ならず。今は鐵製のもあり。

しちり-やくしよ 七里役所【名】江戸時代、尾州家及び紀州家にて、東海道筋七里毎に設け、中間(ヂウゲン)を置きて、江戸よりの急便に備へし所。その中間を、七里飛脚と呼びたり。おしちり。七里繼宿。

じちりりん 自治吏員【名】地方自治團體の吏員、即ち市長・町長・村長・助役など。

しちゐ 七位【名】くらゐ(位)を見よ。

じちーゐき 日域【名】じついき(日域)に同じ。 平治「汝生身觀音を拜まんと思はば、日域に行きて、那智山といふ所に赴け」

しつ 失【名】Ⅰあやまち。過失。 釋迦如來誕生會「若し誕生の御子に失あって、御世繼にかなはぬ時、汝等夫婦は國の滅亡を悅ぶか」Ⅱ品行又は藝術上の作品などの缺點。

しつ 室【名】Ⅰへや。ざしき。房。Ⅱ『しつか(室家)を見よ』貴人の妻。奥方。內室。室家。けいしつ(繼室)・こうしつ(後室)・そくしつ(側室)參照。 十訓「その室を取りて、我がきさきにしたまひ」Ⅲ刀劍の鞘。Ⅳ二十八宿の一。はつぴほし。

室に入りて、戈を操る【句】相手の利器をわが物として、却って、その相手を攻撃す。〔諺語〕

室に入る【句】Ⅰ部屋に入る。Ⅱ〔佛〕禪宗にて、弟子、師の部屋に入りて、道を參問す。(久參の弟子にあらざれば許されざる規定なり)にふしつ(入室)參照。 平家「我れ悲母の胎內に出で、師匠の室に入りしよりこの方」Ⅲ『論語の先進篇に「子曰、由也升レ堂矣、未レ入二於室一也」とあるに本づく。堂は表座敷、室は奥座敷の意』學問・技術の蘊奥を極む。にふしつ(入室)參照。

しつ 室【名】Ⅰ〔室間、シツノマ〕室の間(ノ)【句】しつ(室)Ⅰに同じ。 節用

室を受く【句】『左傳の桓公六年の條に見ゆ』妻を娶る。

室を通ず【句】『左傳の召公十八年の條に見ゆ』妻を交換す。

室を盡す【句】『左傳の成公二年の條に見ゆ』家族の全部をとりまとむ。

室を正す【句】室家を正しく齊ふ。

しつ 瑟【名】琴と共に支那最古の絃樂器。形狀詳かならず。箏の前身ならんかといふ。長さは七尺二寸乃至八尺一寸、幅は一尺八寸、絃の數は、三十六・二十七・二十五・三十三・十九など種種あり。おほごと。

しつ 質【名】Ⅰ內容。本體。實體。實質。「量よりも質を以て勝る」Ⅱしたぢ。きぢ。Ⅲまこと。まごころ。Ⅳうまれつき。性質。資質。素性(スヂヤウ)。Ⅴすなほ。じみ。淳撲。質素。「文、質に勝つ」

しつ 濕【名】Ⅰうるほひ。濕氣。 徒然「風にあたり、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは」Ⅱしっさう(濕瘡)の略。

しづ 賤【名】『した(下)・しづ(垂づ・しづむ(沈む・鎭む)等と語源を同じくす』いやしきこと、又その者。身分の輕き者。

賤が家(ヤ)【句】いやしき者の住居。續千載「しづが家に圍ふや柴の假の世は住みうしとてもあはれいつまで」

賤の家(ヤ)【句】しづがや(賤が家)に同じ。夫木「しづのやはもとは蓬のかたびさしあやめばかりを今日はふかなん」

賤の子【句】いやしき者の小供。芭蕉「しづの子や稻すりかけて月を見る」

賤の女(メ)【句】いやしき女。記「この沼の邊に、ある賤のめひるねしたりき」

賤の男(ヲ)【句】いやしき男。記「またある賤の男、その狀を怪しと思ひ」

賤の鞍【句】賤しき者の用ふる鞍なるべしといふ。或は、しづくら(下鞍)に同じきか。〔古語〕今昔「草刈馬の中に、强からん馬に賤の鞍置きて」

しづ 鎭子【名】おもし。おもり。鎭子(シヅ)。一代男「帶…結び目、うしろに、縮目(クヽ)の隅に鉛のしづを入れ」

しづ 倭文【名】■古の織物の一種。穀(カヂ)・麻などにて、縞を織出せるもの。あやぬの。あらたへ。しづおり。しづはた。しどり。萬葉「照る鏡しづに取添へ」■姓氏の一。神皇產靈(カムムスビ)神ののち大味(オホ)宿禰より出でしものと、角凝魂神(ツヌコリ)命より出でしものとあり。姓(カバネ)は、前二者は宿禰(スクネ)、最後のは連(ムラジ)。

倭文の苧環(ヲダマキ)【句】倭文を織る材料の麻のたまき。しづたまき(倭文環)參照。伊勢「いにしへの倭文のをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」

しづ 垂づ【動下二他】『しだる(垂る)を見よ』附けて垂らす。しだらす。〔古語〕拾遺「いそのかみふるやをとこの大刀もがなくみのをしてみやぢ通はん」「しづ歌」

しづ 賤【代】第一人稱の謙稱。緋縅縅卯月の紅葉「君さへ合點なさるれば、しづが聲になるぢやげな」

しづ 靜【接頭】しづかなる意。「しづごころ」「しづ歌」

じつ 實【名】■僞ならぬこと。まこと。眞實。事實。(虛に對して)異途贅疣「そちに虛ついて何の德、實ぢや實ぢやといひければ」■軍陣の進退にて、十分に用意せること。(虛に對して)■本體。內容。實質。「名ありて實なし」■事業の結果。功果。功績。できばえ。「實、擧(カ)る」■じつい(實意)の略。「實のある人」■じつごと(實事)の略。浮世風呂「今は敵も立役も白い面や、薄肉とやらでする故、どれが實か惡かわかりませぬ」■〔數〕ひじょうすう(被乘數・ひだよすう(被除數)に同じ、「意。

じつ 實【接頭】〔佛〕方便ならざる眞實の。

じつあう 執拗【名】かたくな。かたいぢ。しぶときこと。

じつあく 實惡【名】俳優の、實方(ジツカタ)をも惡ねたる者。

じつい 執意【名】■かたくなに自己の意見を守ること。我執。■〔哲〕『英 Volition』能動的に或目的を取り、或行爲をなさんとする決意・決行の作用。意志を動機・思慮・選擇・決定の二者に當る。

じつい 失意【名】のぞみの叶はざること。あてのはづるること。失望。(得意に對して)

じつい 實意【名】深切なる心。まごころ。じつ。誠實。「つ(父執)參照。

じつーいう 執友【名】同志の友。親友。ふじつーいう 實有【名】〔哲〕じつざい(實在)に同じ。じついうろん(實有論)參照。

じついうろん 實有論【名】〔哲〕じつざいろん(實在論)に同じ。

じついてき 執意的【貌】〔哲〕『英 Volitional』行爲・動作の執意(一)より起るさま。有意的といふよりは狹き意に用ふ。

じついてききしつ 執意的氣質【名】〔哲〕『英 Volitional temperament』能動的に或目的を取り、或行爲を爲さんとする氣質。活動的氣質。意志の强き氣質。

じつーいん 實印【名】一人一箇に限りて所有するを得る、重要の印章。官廳に屆けたる上にて使用す。

じつーつう 齒痛【名】齒のいたみ。はいたみ。

じつーつう 私通【名】みっつう(密通)に同じ。

じつーつう 四通【名】道路の四方へ通ずること、又その處。

四通・五達【句】道路の四方と中央と、何れへも通ずること。四通八達。

四通・八達【句】前條に同じ。

じつーう 實有【名】〔佛〕衆生の妄情によりて、萬象を實際に存在せるものと誤認すること。(假有(ケ)に對して)じついう(實有)參照。徒然「怒り、悲しび、樂しむも、皆虛妄なれども、誰れか實有の相に著せざる」

じつうた 靜歌【名】靜かにうたふ歌なるべしといふ。〔古語〕記「志都歌、シヅウタ」

じつえ 下枝【名】下の方の枝。したえ。したえだ。じつえだ。〔古語〕記「ほつえは鳥の枯らしじつえは人とり枯らし」

じつえう 疾天【名】疾病のために早死すること。盛衰記「犯レ神者有二疾天之禍一」

じつえう 執拗【名】しつあう(執拗)に同じ。

じつえき 疾疫【名】はやりやまひ。流行病。疫病。えやみ。しつやく。

じつえき 實益【名】實際の利益。

じつえき 實役【名】陸・海軍の武官の現役に服すること。

じつえき-ていねん 實役停年【名】陸・海軍の現役武官が、同一の官等に在りて服務すべき年限。敵前にて殊勳を奏し、首將これを全軍に布告せしもの、戰時に際し、人員缺乏したる場合等の外は、その最下年限を經過したる後、進級す。進級停年。

じつえだ 下枝【名】じつえ(下枝)に同じ。〔古語〕字鏡集「條、シツエダ」

じつおり 倭文・倭文織【名】しづ(倭文)(一)に同じ。記「倭文、此云二之頭於利一」

じつーか 室家【名】■いへ(家)に同じ。■『左傳に「女有レ家、男有レ室」、また孟子の滕文公下篇に「丈夫生而願二爲レ之有一室、女子生而願二爲レ之有一家」とあるが如く、妻は夫の家の一室に居る意にていふ』夫婦。一家。家庭。■しつ(室)(二)に同じ。「側。

じつーか 膝下【名】■ひざもと。■父母のしつか 靜【名】〔人〕京師の白拍子。舞妓磯禪師の女なりといふ。容姿艷麗にして、歌舞をよくす。源義經の妾となり、貞操を以て世に稱せらる。

しづか 靜【貌】■鎭まりて動かぬさま。落著きたるさま。おだやか。おもむろ。しづやか。■騷しからぬさま。しづやか。靜寂。閑靜。

じつーか 實家【名】■實の父母の家。わが生れし家。さと。生家。■〔法〕婚姻又は養子緣組によりて去りたる家。生家即ち實家なること多けれど、甲家より乙家に婚嫁し、更に丙家に轉嫁したる場合に、乙家は生家ならざれども、實家なる類。里方(サト)。(婚家・養家に對して)「たひ。

じつーか 實價【名】眞の値。かけねのなきあたひ。

じつーかい 執蓋【名】蓋(カ)をさしかくる役。太平記「二階堂丹後三郎右衞門、執蓋」

じつーかい 悉皆【副】みな。のこらず。悉く。謠曲〔知章〕「草木國土・有情・非情も悉皆、成佛の彼岸の海ぎはに浮び出でたる」

じつーかい 十戒【名】■〔佛〕十の戒、即ち不殺戒・不盜戒・不邪婬戒・不妄語戒・不飮酒戒・不說過罪戒・不自讚毀他戒・不慳戒・不瞋戒・不住戒・無悔恨戒・無違諍戒・不惱害戒・不雜戒・不貪求戒・無過失戒・無毀犯戒、一說に、不殺戒・不盜戒・不婬戒・不妄語戒・不飮酒戒・不食肉戒・不邪見戒・不毀戒・不誇戒・不欺誑戒の併稱。とをのいましめ。じかい(五戒)・じちゆうきんかい(四重禁戒)・じふぜんかい(十善戒)參照。大鏡「十戒の中に、妄語をばたもちて侍る身なれば」■〔基〕シナイ(Sinai)山にて、神がモオゼ(Moses)に與へたりといふ十箇條の命令。即ちエホバ(Jehovah)以外に眞の神なきこと、偶像を拜すべからざること、エホバの名を妄に口にすべからざること、安息日を淸淨に過すべきこと、爾(ナン)の父母を敬ふこと、殺生すべからざること、姦淫すべからざること、盜むべからざること、隣人に對して、虛妄の證據を立つべからざること、隣人の妻・僕婢・牛・驢馬等、すべてその所有物を貪るべからざること。

十戒・持律【句】〔佛〕十戒を受けて、よ

く保持すること。太平記「多年趨拜の儒官を解きて、十戒持律の法體に成りたまひけり」

じっかい 十界【名】〔佛〕佛界・菩薩界・緣覺界・聲聞(シャウ)界(以上悟界、即ち出世間にして、四聖(シャウ)といふ)天上界・人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄界(以上迷界にして、六凡といふ)の併稱。ろくだう(六道)・ごかい(九界)參照。

十界一心【句】〔佛〕十界の差別を生ずるは、一心の所作にして、外界に實在するには非ず。〔諺語〕大乘起「十界一心平等大念、有無(ウ)の間の中道實相」

十界能化(ケ)【句】〔佛〕十界を能く敎化すること。入大乘「十界能化の菩薩」

十界の權實(ジャウ)【句】〔佛〕天台宗にて、十界中の佛界のみを實とし、その他を權とすること。

十界の圖【句】十界の光景を畫きたる「畫。

しっかいこつ 膝蓋骨【名】〔醫〕膝關節の前側に位し、四頭股筋の腱中に包まれたる扁平の楕實狀の小骨。ひざさら。

しっかいや 悉皆屋【名】■衣服の染模樣・小紋無地又は洗張等を請負ひて、京都に遣るを業とせし家、又その人。〔江戸時代の大阪の語〕■染物・洗張を業とする家、又その人。〔京都・大阪の語〕

しっかう 疾行【名】早足にゆくこと。

疾行には善迹なし【句】『西京雜記に出づ』急ぎて爲したる事には、善き結果なき譬。〔諺語〕

しっかう 失効【名】効力を失ふこと。

しっかう 失行【名】正道にはづれたる行。ふみもち。

しっかう 質行【名】著實なる行。

しっかう 膝行【名】貴人の前に出づる時、體を屈し、膝にて進み、體拜の後、また膝にて退くこと。立ちて進退するは、無禮なればなり。盛衰記「重代之家君卻致二膝行之禮一」

膝行三度【句】膝行の作法として、まづ左の膝、次に右の膝、次に左の膝と、三度に進み出づること。玉葉「著二裝束一膝行三度、先左、次右、次左、合三膝。但最末レ引二寄右膝一、齊二左膝一也」

しっかう 執行【名】■とりおこなふこと。實際に施行すること。■〔法〕きやうせいしっかう(强制執行)の略。

しっかう 執綱【名】天蓋より垂れさがれる綱を手に執りて、左右に引くこと。太平記「二階堂丹後三郎左衞門執蓋・島津常陸前司・佐佐木三河守兩人執綱にて」

執綱の役【句】大嘗祭の時、菅笠の綱の端を左右に分けて執る役。

じっかう 實行【名】■實際に行ふこと。實施。■〔法〕險詐・豫備・著手を經て、已にその目的の犯罪を實施する所爲。

じっかう 實効【名】實際に顯れたる効能。まことのしるし。

じっかう 實講【名】諸講の意を含まぬ講釋。狂講ならぬ講釋。

しっかういうよ 執行猶豫【名】〔法〕「刑の執行猶豫」を見よ。

しっかうかうゐ 執行行爲【名】〔法〕債權者の委任によりて、執行機關が强制執行を實施する行爲。

じっかうかうゐ 實行行爲【名】〔法〕或事を爲さんとする意志、或事を爲し得る權利等、すべて或潛勢力を具體的に實現せしむる一切の行爲。刑法上にては、犯罪の本體として、重要視せらる。

しっかうきくわん 執行機關【名】〔法〕■法人の意思、即ちその議決機關の意思を執行するために設けたる機關。例へば民法上の法人にありては、理事、また市にありては、市參事會、町村にありては、町村長の類、郡府縣にありては、國家の機關たる府縣知事・郡長これを兼ぬ。■强制執行を行ふ國家機關。即ち執達吏・執行裁判所の類。

しっかうきそく 執行規則【名】■或處分の執行に關する規則。■〔法〕しっかうきそく(施行規則)に同じ。

しっかうきろく 執行記錄【名】强制執行を行ひたる執達吏が、これに關する一切の始末を記載せる書面。

しっかうくわん 執行官【名】執行機關たる官吏。檢事・執達吏の類。「同じ。

しっかうくわんり 執行官吏【名】前條に

じっかうけう 實行敎【名】『實行は實踐・躬行の義にて名づけしもの』神道の一派。主として、造化三神を祭り、賢所(カシコドコロ)を遙拜し、富士山を祟祀し、皇統・國運の無窮を祈り、惟神(カムナガラ)の道を章明することを敎旨とするもの。本部は東京市牛込區にあり。諸國に分局あり。管長は柴田氏世襲し、その下に大敎正等の職員あり。

しっかうけん 執行權【名】〔法〕きやうせいけん(行政權)に同じ。

しっかうさいばんしよ 執行裁判所【名】〔法〕强制執行の機關の一たる裁判所。强制執行の機關は、通例執達吏なれども、執行行爲の全權を執達吏に附與するを不適當とし、また執達吏の職權にのみ委ぬることは能はざる事由あるによりて、この裁判所の必要を生ずるものにして、その執行をなすべき、又はこれをなしたる地の區裁判所、これに當る。

しっかうしきしよ 執行指揮書【名】犯罪人に刑を言渡したる裁判所、又は上告裁判所より命を受けたる裁判所の檢事が、刑の執行を指揮する書面。

しっかうしょぶん 執行處分【名】〔法〕■さいけつしょぶん(裁決處分)に同じ。■强制執行の處分。

じっかうちゆうしはん 實行中止犯【名】〔法〕中止犯の一。犯罪の實行中、他よりの障礙等に基かず、犯人自ら犯罪の結果を妨げたるもの。

しっかうていし 執行停止【名】〔法〕强制執行の全部に就き、その進行を禁止すること。「條に同じ。

じっかうでんあつ 實效電壓【名】〔理〕次

じっかうでんりう 實效電流【名】〔理〕電氣の交壓又は交流の一周波間の、各時刻に於ける値の自乘冪を、平均せるものの平方根。實效電壓。

しっかうばうがい 執行妨害【名】〔法〕執行官の職務を執行するに當りて、暴行・脅迫を加へ、或は公務員をして、或處分を爲さしめ、若しくは爲さざらしめんがために、暴行・脅迫を加ふること。

しっかうばうがいざい 執行妨害罪【名】〔法〕執行妨害をなしたるに依りて成立する罪。

しっかうばつ 執行罰【名】〔法〕行政處分に對する臣民の違由を强制する目的にて、その處分に違はざる場合に、官廳の課する罰。將來を强制する性質のものにして、既往の法規違反の行爲に科する、刑法上の刑罰とは異なれり。强制罰。

しっかうはんけつ 執行判決【名】〔法〕强制執行をなさんがために、外國裁判所にてなしたる判決又は仲裁判斷に基きて、その判決又は判斷の果して正當なりや否やを、我が國の裁判所が判決すること。この判決を求むる訴は、債務者の普通裁判權を有する地の區裁判所、又は地方裁判所にて受理し、普通裁判籍なき時は、その財產又は訴の目的物の所在地の裁判所にて受理す。

じっかうばりき 實效馬力【名】しやうみばりき(正味馬力)に同じ。

しっかうぶん 執行文【名】〔法〕裁判所の判決に、執行權を生ぜしむる要件たる文。判決の正本の末尾に附記す。

じっかうみすゐはん 實行未遂犯【名】〔法〕未遂犯の一。犯罪は實行したれども、他よりの障礙のために遂行し得ざるもの。

しっかうめいれい 執行命令【名】〔法〕■法令を執行するために、必要なる事項を規定する目的にて發する命令。施行命令。施行令。■裁判所が支拂命令を執行せしむるために附する命令。執行令。

しっかうりよく 執行力【名】〔法〕强制執行をなし得る効力。

しっかうれい 執行令【名】〔法〕しっかうめいれい(執行命令)に同じ。

しっかうねにん 執行委任【名】〔法〕債權者が執達吏に强制執行を委任すること。

しづかえぼし 靜烏帽子【名】能(ノ)に用ふる烏帽子の一。立烏帽子にて、靜などの白拍子に用ふるもの。

しっかく 失格【名】資格を失ふこと。合格せぬこと。

じつがく 實學【名】實際に役立つ學問。濟世・民福に必要なる學問。

しっかくきん 膝關筋【名】〔醫〕下腿筋側深在層の一筋。下腿を屈折・内轉し、囊狀靱帶を伸張する作用を有す。

じっかくけい 十角形【名】〔數〕『英 Decagon』十箇の直線にて圍まれたる平面圖形。

しっかくこうみゃく 膝關動脈【名】〔醫〕股動脈の連續部にして、膝關部を占めたるもの。「面。

しっかくぶ 膝關部【名】〔醫〕膝關節の後

じっかくわへい 實價貨幣【名】〔經〕貨幣の價格が、その地金の價格と殆ど差異なき貨幣。實貨幣。本位貨幣。(名目貨幣に對して)

しっがけ 【名】〔植〕こでまりさう(小手鞠草)を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

しっかけもの 尻懸物【名】大和刀工の一派。建治頃の人則弘を祖とす。

しつかごぜん 靜御前【名】〔人〕しづか(靜)の敬稱。

しっかしっかと 確確乎・聢聢乎【貌】しっかと(聢と)を重ねていへる語。本朝二十四孝「これ、しっかしっかと採ましやれ」

じつかた 實方【名】實家の屬せし血族の、他に婚姻・養子緣組をなさざりし以前の關係。實家は家族關係に就きていひ、實方は血族關係につきていふ。例へば實家に在りし兄弟・姉妹にして、他家に養子となり、又は婚嫁せし者は、もはや實家に屬するとはいひ得ざれども、實方の血族といふを妨げざる類。(養方(かた)に對して)

じつかた 實方【名】じつごと(實事師)に同じ。(惡方に對して)

しづがたけ 賤ヶ嶽【名】〔地〕近江國伊香(かご)郡、餘吾・伊香具の二村に連なり、餘吾湖と琵琶湖との間に挾まれる山。賤ヶ嶽の役【句】天正十一年に、近江國賤ヶ嶽にて、羽柴秀吉が柴田勝家を破り役。次條參照。

しづがたけしちほんやり 賤ヶ嶽七本槍【名】賤ヶ嶽の戰に、羽柴氏の臣、福島正則・加藤清正・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・糟屋武則の七士が、槍を提げて、柴田勝家の陣に突破せしこと。しちほんやり(七本槍)參照。

しっかと 確と・聢と【貌】しかと(聢と)に同じ。丹波與作「乘物の戸をしっかと押へ」

しつかのを 【名】鎧の袖に附けたる緒の一。肩上(かた)の袖附緒に繋き懸く。

しづがはわん 志津川灣【名】〔地〕陸前國本吉(もとよし)郡にある海灣。

しづがは 志津川【名】〔地〕陸前國本吉(もとよし)郡にある町。志津川灣の西北岸。入谷(いりや)川に沿ふ。郡役所を置く。蠶業地たり。

しづかはま 志津川濱【名】〔地〕陸前國本吉(もとよし)郡にある町。志津川灣の西北岸。入谷(いりや)川に沿ふ。郡役所を置く。蠶業地たり。

しつかへ 師仕【名】師匠に就くこと。盛衰記「鞍馬寺に師仕させて」「よ。

じっかん 十干・十幹【名】えと(干支)を見

じっかん 實感【名】〔哲〕『獨 Realis gefühl』實在體そのものにつきての觀念より起る實際的感情。假感よりも、強度の刺戟を與ふ。(假感に對して)

じつかんてき 實感的【貌】〔哲〕にくかんてき(肉感的)に同じ。

じづがや 賤が家【句】しづ(賤)の條下を見よ。

しっかり 確乎【名】たしかなること。強固。

しっかり 確乎【貌】たしかなるさま。確實なるさま。鬼貫「風が吹く梅の蕾はしっかりと」

しっかる 爲疲る【動下二自】なしたるために疲る。源平布引滝「老武者の悲しさは、軍にしつかれ、風にちぢめる古木の力も折れん」

しっかり 確乎【貌】たしかなるさま。確實なるさま。鬼貫「風が吹く梅の蕾はしっかりと」

しっかり 十分。たんまり。澤山。浮世風呂「三番目の兄などは、……草雙紙がでる度に買ひますが、袋籠にしっかり溜りました」

しっかりもの 【名】人言などに惑はぬ強固の意志を持てる者。したたかもの。

しっかる 爲疲る【動下二自】なしたるために疲る。源平布引滝「老武者の悲しさは、軍にしつかれ、風にちぢめる古木の力も折れん」

しっき 【名】賤ヶ嶽の戰に、羽柴氏の臣、福島正則・加藤清正・加藤嘉明・平野長泰・脇坂安治・片桐且元・糟屋武則の七士が、槍を提げて、柴田勝家の陣に突破せしこと。しちほんやり(七本槍)參照。

しっき 蟄【名】蟄居。

しっき 漆器【名】漆ぬりの器物。ぬりもの。

しっき 濕氣【名】うるほひ。しめりけ。しっけ。

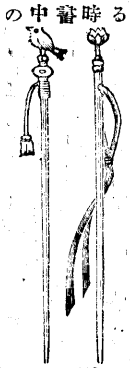
しっき 質義【名】『漢書の劉歆傳に「質二問大義一」とあるに本づく』義理をただし問ふこと。「すこと。

しつぎ 質疑【名】疑しきことを問ひただ

しつぎ 後月【名】〔地〕備中國八郡の一。郡役所を井原町に置く。

しづき 志筑【名】〔地〕淡路國津名郡にある町。洲本町の北三里、淡路島東岸の一海驛。志筑神社あり。

じつき 字突【名】初學の人などの讀書する時、書中の文字を指すに用ふる木竹又は金屬製の具。じさし。かくひつ。



じっき 實記・實紀【名】飾りなくして、ありのままに記せるもの。實錄。

じつぎ 實義・實儀【名】親切の心。まごころ。信實。實意。正しき義。眞實の道理。大原問答書簡「寂滅無常の實義をも逃べずして、僅に欣求淨土の行を至極大乘とは心得ず」「倆。

じつぎ 實技【名】實際の技術。實際の技

しっき 濕球【名】乾濕器の球の、布などにて包みたる方のもの。(乾球に對して)

しつきかます 志筑梭魚・志筑鯔【名】淡路國志筑に產する梭魚。

じっきく 十菊【名】「十日の菊」に同じ。

しづきじんじゃ 志筑神社【名】淡路國津名(なな)郡志筑町に鎭坐せる神社。式内の古社にて、祭神は國常立尊。祭日は三月中の申の日。俗稱、田井ノ天神・申ノ宮。

しっきすのかんだんけい シッキス寒暖計【名】〔理〕『英 Six's thermometer』最高最低寒暖計の一。U字狀に彎曲せる硝子管內に酒精と水銀を充たし、酒精中に弱きばねを附したる目標を入れたるもの。右管は最高溫度、左管は最低溫度を示す。

しっきどめ 濕氣止【名】濕氣を防止する方法。

じっきん 十錦【名】茶碗などの、十箇を一揃として、一箇づつ色又は模樣の異なれるもの。十錦手。

しっきんご 執金吾【名】『金吾を執るといふ義。漢書の百官公卿表の顏師古の註に「金吾鳥名也、主辟二不祥一、天子出行、職主二先導一以禦二非常一、故執二此鳥之象一以名レ官」とあり』古、支那にて、皇宮警察に相當する職を掌りし者。金吾。ぎもんふ(衞門府)の唐名。金吾。

じっきんせう 十訓抄【名】〔書〕教訓となるべき箇條十目を擧げ、鎌倉時代の見聞の事實二百五十餘件を、各項目の下に分載せるもの。三卷。著者詳かならず。但し建長四年の作なること序に見ゆ。

じっきんて 十錦手【名】じっきん(十錦)に同じ。

じっきやう 實況【名】まことの狀況。

しっきやく 失脚【名】足の滑りて倒ること。足を踏みはづすこと。立場を失ふこと。しくじり。

しっきやく 失却【名】『きやく(却)は接尾語』うしなふこと。消失。

じっきやくるゐ 十脚類【名】〔動〕甲殼類中の一目。頭胸部に衞脚用の五對の脚を具ふ。これを更に長尾類と短尾類とに分つ。蝦は前者に屬し、蟹は後者に屬す。

しっきよ 失據【名】根據を失ふこと。

しっきりざうり 尻切草履【名】しきれ(尻切)に同じ。東海道名所記「ふたつぐりの席駄をぬぎて、尻切草履かたかたはきて」

しっきりやう 濕氣量【名】〔理〕しつど(濕度)に同じ。

しっく 疾苦【名】なやみ。くるしみ。

しっく 疾驅【名】早く車馬を走すること。

しーつく 仕附く【動下二他】『仕は爲(し)の

義』[一]『つく(附く)は接尾語』す(爲)を強めていふ語。[謡]「今すこし珍しからん事しつけて」[二]常になして馴る。手馴る。馴る。今宮心中「私は幼い時より大阪に育ち、手いたい事は仕つけず」[三]作りつく。したつ。[四]禮儀作法を教へ習はす。躾(シツケ)を施す。[五]絲附く。かたづく。心中及は氷の朔旦「あの子ばかりを大阪へ、伯母を便りに何方へも仕附けてくれと上されしが、薬屋歌「琉球屋ともいはるる我れ我れが、娘一人を仕附けかね、長持一つ送らぬと、外聞わるい沙汰もいや」[六]やりこむ。打勝つ。冥途飛脚「こなさん拳の上手、脊からちよとせ様に仕附けられて無念な、敵とって下んせ」[七]田植をなす。

しづく 雫 【名】水のしたたり。點滴。萬葉「足引の山のしづくに妹待つとわれたちぬれぬ山のしづくに」

雫も 【句】雫ほど僅かも。つゆほども。淨瑠璃世繼曾我「ちめんづくで頼むからは、雫もこれに僞りない」

雫もよよ 【句】たらたらと雫を落して。〔古語〕源氏「たからなを、つと握りもちて、しづくもよよと食ひぬらし」

本(モト)の雫 【句】『遍照集に「末の露もとのしづくや世の中のおくれさきだつためしなるらん」とあるより出づ』人の命のはかなき譬。〔古語〕榮花「御涙のつくづくともり出でたるほど、もとのしづくやと、あはれにおろかならず」

しづく 【動四自】水中にある物透きて見ゆ。水に映じて見ゆ。〔古語〕萬葉「水底にしづく白玉たがゆゑか心つくしてわが思はなくに」

しづくあふ 雫合ふ 【動自】雫が落ちあふ。露滴り合ふ。〔古語〕萬葉「足曳の山の紅葉にしづくあひてちらん山路をきみがこえまく」

しっくい 漆喰 【名】『石灰の字の唐音』石灰(イシバヒ)又は蠣灰(カキバヒ)を、布苔(フノリ)を煮たる汁に入れ、苧(ヲ)を交へて溶したるもの。白色なるが常なれど、著色をせるもあり。石瓦・煉瓦等の接合、また壁・天井等の上塗、又は下塗等に用ふ。いしうるし。

じっくいあ 石灰畫 【名】鏝を用ひて、石灰にて描きたる畫。泥鏝畫。

しっくぐう 室隅 【名】部屋のすみ。

しっくけう シック教(英 Sikh 又 Sikhism) 【名】『Sikh は印度語にて、教徒・門徒の義』印度教の一派。教祖をナナク(Baba Nanak)と稱し、第十五世紀末にパンジャブ(Panjab)の地に起る。のち軍隊制度を採用し、第十九世紀以來、英人の印度經略に極力反對せしが、終に東印度會社に屈伏せり。

じっくし 字盡 【名】文字を集め並べたること、又その書。小町踊「字盡のこゑや囀り鳥の跡」

じっくじく 【貌】踊るさま。狂言(若市)「じっくじくと踊りつれて」

しっくす 爲盡す 【動四他】殘らずなし終ふ。なしはつ。

しづくす 雫す 【動佐變自】しづく滴る。

しっくす-の-かんだんけい シックスの寒暖計 【名】〔理〕『しっきすのかんだんけい(シッキスの寒暖計)』に同じ。

しづく-の-やま 志筑山 【名】【地】常陸國にある山。筑波山脈の一支峯にして、新治(ニヒバリ)郡志筑村に屬する閑居(カンキョ)山の古稱。なるべしといふ。懷中抄「妹により夜半にや越ゆる志筑山なかも露けくなりまさるらん」

じっくん-せう 十訓抄 【名】〔書〕『じっきんせう(十訓抄)』に同じ。

しづくら 下鞍 【名】『しだぐら(下鞍)』に同じ。〔古語〕萬葉「さつ弓をたにぎりもちて赤駒にしづくらうちおき」

しっくり 【貌】物事のよくくひあひ、又は事の穩かに治まりととのふさま。ぴったり。

しっくわ 失火 【名】過ちて火事を起すこと、又その火災。火失。

しっくわ 漆畫 【名】うるしゑ(漆繪)に同じ。

じっくわ 實貨 【名】せいくわ(正貨)に同じ。

じっくわ 實科 【名】實用に缺くべからざる教科。

しっくわい 室外 【名】室のそと。「じ。

じっくわい 日外 【副】いつぞや(日外)に同じ。

じっくわ-かうとうぢよがくかう 實科高等女學校 【名】主として家政に關する學科目を修めしむる高等女學校。修業年限は、尋常小學卒業程度を入學資格とする者は四箇年、高等小學第一學年修了程度を入學資格とする者は三箇年、修業年限二箇年の高等小學卒業程度を入學資格とする者は二箇年もしくは三箇年とす。

しっくわ-ざい 失火罪 【名】過失に因りて火災を生じ、自他の建造物その他の物件を燒燬し、或は自己の所有なるも、その燒燬のために、公共の危險を生ぜしめたるに由りて成立する罪。

しっくわ-しや 失火者 【名】失火をなした人。

じっくわへい 實貨幣 【名】〔經〕じっくわい(實價貨幣)に同じ。

しっくわん 漆冠 【名】漆にて塗れる冠の總稱。天武天皇の御代に、紗の冠に漆を施しに初まる。

しっくわん 疾患 【名】やまひ。病氣。

じっくわん-しやう 十卷章 【名】〔書〕眞言宗にて重んずる十部の書。卽ち空海の卽身成佛義一卷、辯顯密二敎論二卷、祕藏寶鑰三卷、般若心經祕鍵一卷、龍樹菩薩の菩提心論一卷の併稱。

しっくわんせつ 膝關節 【名】〔醫〕大腿骨の下端・脛骨の上端及び膝蓋骨の間を連接する可動關節。膝の屈伸作用を營み、且つ小腿に僅少の回轉運動を起さしむ。

しっけ 仕附 【名】[一]したて(仕立)に同じ。[二]馴らすこと。訓練。[三]こらしめ。日本武尊吾妻鑑「以後の仕附、それ嚴速、その松の木に搦め置けと、引っかんで投出す」[四]禮儀・作法を教へ習はすこと。〔躾〕[五]たうゑ(田植)に同じ。[六]衣服を縫ふ時、仕立(シタ)に狂の生ぜぬやうに、緣を絲にて粗く縫ひおくこと。[七]しつけいと(仕附絲)の略。[八]しつけばり(仕附針)の略。

しっけ 濕氣 【名】しっきに同じ。

しづけ 尻附 【名】敍位・除目(ジモク)の大間書(オホマガキ)に、當日敍任せられる人人の官位姓名の下に、注意のために、內給・年給・賽

辭などを記入せる細書。

じっけ 實化 【名】〔佛〕佛・菩薩が眞實の身を示現して、衆生を化度(ケド)すること。(權化(ゴンゲ)に對して)盛衰記「能く彼の權化實化の納受を仰ぐ」

しっけい 失計 【名】計略をあやまること。

しっけい 執啓 【名】執達して啓上すること。盛衰記「以二此旨一可レ被二執啓一」

しっけい 失敬 【名】[一]敬意に戻ること。失禮。[二]別るる時に發する挨拶。失敬・もっけい・はなもっけい。【句】表面は敬意に戻りしことを謝する意にて、實は嘲弄していふ時の語。〔俚語〕

じっけい 實系 【名】自然の血緣の系統。直系と傍系とに分つ。各その條を見よ。

じっけい 實兄 【名】父母を同じくする兄。まことの兄。(義兄などに對して)

じっけい 實景 【名】まことのけしき。

じっけい 實形 【名】實際のかたち。

しっけいす 失敬す 【動佐變自】[一]歸る。別れまる。[二]盜み去る。〔俚語〕

しっけいと 仕附絲 【名】仕附五のために縫ふ、假の絲。しつけ。

しっけう 漆橋 【名】漆にて塗りたる橋。日光山の神橋を始とし、德川時代に、大名の園池に多く架したり。

じっけう 十敎 【名】じふきゃう(十敎)を見よ。

じっけう 實敎 【名】〔佛〕大乘の敎法。一實圓頓の敎。(權敎に對して)太平記「天台法相互に權敎實敎の奧旨を究む」大原問答書簗「凡て大乘眞實の理を明むるこれを實敎と名く」

しっけかた 仕附方・躾方 【名】禮儀作法の訓練。しつけのしかた。

じっけき 實擊 【名】我が實を以て、敵の實を攻むる戰法。正攻。

しづけし 靜けし 【形ク】しづかなり。萬葉「いざ子どもあへてこぎでむにはもしづけし」〔躾〕

しっけそ 仕附苧 【名】仕附五に用ふる麻ひ。[二]年月。つきひ。歲月。光陰。

日月明かならんと欲すれば、浮雲これを蔽ふ【句】■人の本性の我欲のために迷亂するに譬へていふ語。■君主の聰明を、姦臣の蔽ふに譬へていふ語。

日月と光を爭ふ【句】功業道德日月の如くに盛んなり。

日月の旗【句】日月の紋をゑがきたる旗。日本振袖始「日月の御旗眞先押立、御迎の諸軍勢野に滿ち、山に嶽島の」

日月を戴く【句】「天を戴く」に同じ。正統記「神國なれば、神道に違ひては、一日も日月を戴くまじきいはれなり」

じつげつごろう-の-はた 日月銅烏幢【句】象幢・月象幢・銅烏幢の三種の幢。御即位式の時、四神旗と共に、殿前に樹立するもの。

じつげつ-もも 日月桃【名】〔植〕げんぺいもも(源平桃)に同じ。

じつけばり 仕附針【名】仕附(五)に用ふる縫針。しつけ。

じつ-げふ 失業【名】職業を失ふこと。

じつ-げふ 實業【名】農・工・商など、經濟生産に關する生業。

じつげふ-か 實業家【名】實業にたづさはる人。殊に經濟生産に關する人。

じつげふ-かい 實業界【名】實業家の社會。實業の範圍。

じつげふ-がくかう 實業學校【名】實業教育を施す學校。工業學校・農業學校・商業學校・商船學校及び實業補習學校に分つ。又、蠶業學校・山林學校・獸醫學校・水產學校は農業學校と見做す。又その程度により、高等・中等・初等の三種に分つ。

じつげふがくむきよく 實業學務局【名】文部省の一局。實業學校及び實業教育に關する事務を掌るもの。大正二年廢止。同八年復活。

じつげふけういく 實業教育【名】實業に從事すべき者に須要なる知識・技能を授くる教育。

じつげふ-しや 失業者【名】職業を失ひし者。

じつげふ-せんもんがくかう 實業專門學校【名】實業學校の一、又專門學校の一。實業に關する高等の學術・技藝を教授する學校、卽ち高等商業學校・高等工業學校・高等農業學校の類。

じつげふ-だんたい 實業團體【名】實業に關する團體。實業家の組織する團體。

じつげふ-おとよがくかう 實業女學校【名】養蠶・裁縫・商業・手藝・裁縫等の實業を授くる女學校。

じつげふ-ほしふがくかう 實業補習學校【名】實業學校の一。尋常小學卒業者又は學齡を過ぎて、これ同等以上の學力ある者に對して、その智能を補修し、兼ねて簡易なる方法を以て、實業上の學術・技藝を授くるを目的とするもの。修業期は土地の狀況に由りて一定せず。

じつ-けん 執權【名】■政權を執ること、又その人。盛衰記「平大納言時忠卿は…主上の御外戚にて、內外に附きたり。執權の臣とぞ振舞ひける。彼位・除目偏にこの卿の沙汰なりければ」■院の廳の別當。■鎌倉時代に將軍を補佐し、政務を總統せる職。執權職。後見職。■くわんりやう(管領)■に同じ。■應仁・文明以降、幕威衰へしために、管領の陪臣又は大名の家臣の僭稱。曾我會稽山「秩父殿の執權本田の次郎近經」

じつ-けん 失權【名】權利の喪失。權力を失ふこと。

じつ-げん 失言【名】ことばのあやまち。いひそこなひ。過言。

じつげん 疾言【名】早口にものいふこと。はやくち。

じつ-けん 實見【名】實際のありさまを見ること。

じつ-けん 實檢【名】實否を檢査すること。實檢の間(マヽ)【句】武家にて、首實檢のために設くといふ室。式臺の側に設け、外面に窓ありて、これを實檢窓と呼ぶ。

じつけんまど(實驗窓)參照。

實檢の窓【句】じつけんまど(實驗窓)に同じ。

じつ-けん 實驗【名】■實際に試むること。實地の試驗。■『英Experiment』故意に或現象を生ぜしめて、その觀察を容易にし、或は觀察の誤を正す目的に供すること。卽ち觀察の補助的方便たるもの。(理論に對して)

じつ-げん 實現【名】實際にあらはし出だすこと。實際にあらはれ出づること。

じつけん-かい 實驗界【名】實驗の範圍。

じつけん-くわがく 實驗科學【名】〔哲〕『英Experimental method』實驗的方法に依る科學。自然科學の全部はこれに屬し、精神科學にても、心理學・教育學のごときは、この研究範圍中に適用するを得。

じつけん-けういくがく 實驗教育學【名】〔哲〕『英Experimental pedagogy』教育學の一部。實驗的方法を適用するもの。

じつけん-し 實檢使【名】鎌倉・室町兩幕府及び戰國時代の諸侯の、評闕などの起りたるとき、糾明のために、臨時にその場に赴きし役。

じつけん-しき 實驗式【名】〔化〕『英Empirical formula』實驗の結果を示す化學式。化合物の組成を最も簡單に示すもの。例へば、過酸化水素をHO・ベンゾオルをCH・と記す類。ぶんしし(分子式)參照。

じつけん-しんりがく 實驗心理學【名】〔哲〕『英Experimental psychology』心理學の一部。實驗的方法を適用するもの。廣義にては、生理的心理學・精神的心理學及び狹義の實驗心理學を包含す。狹義の實驗心理學は、精神の內省的研究に實驗の助を借るをいふ。

じっけん-しよく 執權職【名】しっけん(執權)に同じ。

じっけん-せうせつ 實驗小說【名】〔文〕『佛國の小說家ゾラ(Emile Zola)の論文の題目『Le Roman Expérimental の譯語』架空の想像又は作爲を全然除外し、作家の實驗・觀察を經たる事件・人物を基礎として、現實の事實・現象そのままに精密に描き出だしたる小說。

じっけん-だな 十軒店【名】〔地〕『昔は十間店と書きたれど、柳樽にも「十軒が十軒ながら公家の宿」などとありて、もと人形を賣る店十軒ありしよりの名なるべしといふ』東京日本橋區の本町(ほんちやう)と本石町(ほんこくちやう)との間に沿へる大通の通稱。昔より節句の人形を賣る家多きを以て名高し。

じっけんぶつりがく 實驗物理學【名】『英Experimental physics』專ら實驗を行ひて新しき現象を探究する物理學。理論物理學と相提携して、進歩するものとす。(理論物理學に對して)

じっけんまど 實檢窓【名】實檢の間(マヽ)の外面に設けたる窓。寢殿造の中門の廊に設けたる連子窓を、後世、實檢窓と呼び、首實檢の時、首將この窓より見るを法とすとの俗說行はれしより、つひに中門なき家作にも、これを設くるに至りしものといふ。

じっけんろん 實驗論【名】〔哲〕じっしやうろん(實證論)に同じ。

しっけめ 濕氣眼【名】濕瘡のために起る眼病。一代女「むかしの惡病、…寄る年にしたがひて、上(カミ)へ取上げて、しっけ目をわづらひ」

しっける 濕氣る【動下一自】しける(一)に同じ。

しっ-こ【名】『しっは、親が幼兒を抱きて、小便を排出せしむる時の掛聲、こは添へたるもの』せうべん(小便)を云ふ。(小供の語)

しっ-こ 疾呼【名】口早に呼ぶこと。あわただしく呼ぶこと。「失錯。

しつ-ご 失誤【名】あやまち。しそこなひ。

しつ-ご 失語【名】物言ふはたらきを失ふこと。しつごしやう(失語症)參照。

しつ-ご 實語【名】〔佛〕■顯教にては、語の實にかなひ、また行のよく語と相應すること。■密教にては、眞如を說く言語。

しっ-こう 漆工【名】漆を扱ふ職人。ぬりもの師。ぬし。漆匠。

じっ-こう 實功【名】實際の功力。實效。

じっ-こう 十講【名】〔佛〕ほけじっこう(法華十講)の略。

しっ-こく 桎梏【名】手かせと足かせと。「錠と足錠。

しっ-こく 漆黑【名】『漆のごとく黑き意』黑くして光澤あること、又その色。

じっこく-たうげ 十石峠【名】〔地〕信濃國南佐久郡と上野國北甘樂(キタカンラク)郡との界に在る峠。上下四里に亙る。

じっこく-たうげ 十國峠【名】〔地〕『十州・五島を望見し得べきを以て、この名あり』ひがねさん(日金山)に同じ。

じつごーけう 實語教【名】〔書〕經傳中の格言を錄し、「山高故不レ貴、以レ有レ樹爲レ貴」などの如く、五字づつ九十六句に排列して、諷誦に便ならしめたる教訓書。一卷。作者詳かならず。德川時代に、寺子屋の教科書として弘く用ひられたり。最明寺殿百人上藏「先づ物よみの始めるは實語經、童子經」

じづーこころ 靜心【名】おちつきたる心。しづかなる心。〔古語〕古今「久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん」

しづーこころばせ 靜心走せ【名】前條に同じ。〔古語〕＋詞「樣樣の藝能も、しづごころばせ調へての上の事なり」

しっーこし 尻腰【名】物に堪ふる氣力。忍耐力。根氣。〔俚語〕浮世床「遊戲に身を入れたもんだから、なに事もしっこしがねいのだ」

しつこし【形ク】㊀濃厚なり。こってりしたり。㊁厭くほど甚し。くどし。うるさし。㊂執念ぶかし。しぶねし。

しつこーしやう 失語症【名】〔醫〕腦中言語發生に關する一定部位の疾患によりて發する病。發言機關の健全なるに拘らず、發言・書寫すること能はざるもの、聽力・視力の完全なるに拘らず、他の言語・書畫を了解すること能はざるもの、物體を目擊しても、その名稱を忘却するもの等種種あり。

じつーごと 實事【名】㊀まじめなる事。御佛名代紙衣「そんな實事言はしに、連れては來ぬ」㊁芝居にて、篤實善良なる人物に扮する役がら。これを演ずる俳優を、實事師または實方、または略して實といふ。

じつごと-し 實事師【名】前條㊁を見よ。世上剛親子錢獨禁「さあさあ、早う皆皆樣御館へ御供致しませう、と眞面目なる實事師になる」

しつこ-どり 暖子鳥【名】〔動〕ほととぎす（時鳥）の異稱。〔古語〕

じっーこふ 十劫【名】〔佛〕劫の十倍。

じっこふ 十劫に正覺（ジカク）を唱ふ【句】〔佛〕阿彌陀如來が、十劫の過去において、正覺成就を宣言せるをいふ語。

じつ-ごふ 實業【名】〔佛〕眞實に善惡の業果（ガフ）を得ること。盛衰記「實業の衆生」

じっーこん 實根【名】〔數〕『英Real root』方程式の根の實數なるもの。（虛根に對して）

じつ-こん 入魂【名】じゅっこん（入魂）の略。

しつ-こんがう 執金剛【名】〔佛〕次條の略。

しつこんがう-じん 執金剛神【名】〔佛〕しふこんがうじん（執金剛神）に同じ。

しっーこり【貌】堅くねばりづよきさま。手ざはりの柔にして、しんの硬きさま。

じっさ 實査【名】實際に檢査すること。

じっさい 十齋【名】〔佛〕『地藏本願經の如來讚嘆品に出づ』每月一・八・十四・十五・十八・二十三・二十四・二十八・二十九・三十の十日間、日ごとに十齋佛を順次に祀りて、八齋戒を持（モ）つこと。

じっさい 實際【名】㊀まことの場合。㊁まことの有樣。まこと。事實。㊂〔佛〕『實は眞實。際は諸の際極なる意』眞如の實理を究めて、その際極に至ること、また眞如法性の理。

じつ-ざい 實在【名】〔哲〕『英Being 又 Reality』㊀すべての思惟せられ得る事物の總稱。實有（ジツウ）の有（ウ）。㊁思惟せられ得るのみならず、吾人の思惟または認識を離れて存在する事物、即ち主觀以外に存在する宇宙の事物の總稱。客觀的存在。實有。有。㊂狹義には、思惟そのもの（即ち精神）に對する事物、即ち心的實在に對する物的實在、又はなほ廣き意味にて、自然現實などと同意義なる事物。實有。有。㊃當に存在して、生滅變化なき實體。認識を離れ、現象の外に存在する本體。實有。有。

じっ-さいし 十才子【名】㊀支那明の洪武・永樂の間に生存せし詩人、林鴻・鄭定・王褒・唐泰・高棅・王恭・陳亮・王偁（ショウ）・周元・黃元の併稱。㊁支那明の弘治年間の詩人、李夢陽（ボウヤウ）・何景明・徐禎卿・邊貢・朱應登・顧璘・陳沂（ギン）・鄭善夫・康海・王九思の併稱。

しちさいし 七才子參照。

じっさい-しんがく 實際神學【名】〔基〕じっさいてきしんがく（實際的神學）に同じ。

じつ-ざい-し 實在子【名】〔哲〕『英Realist』實在論を主張する學者。

じつざい-しゅぎ 實際主義【名】〔哲〕ぷらぐまちずむに同じ。

じつざい-たい 實在體【名】〔哲〕じったい（實體）に同じ。

じっさい-ちんぎん 實際賃銀【名】〔經〕『英Real wages』その貨幣により、享受し得べき生活の必需品、快樂及び奢侈の總體。

じつざいてき-くわんねんろん 實在的觀念論【名】〔哲〕『英Realidealism』くわんねんてきじつざいろん（觀念的實在論）に同じ。

じつざいてき-けいけんろん 實在的經驗論【名】〔哲〕『英Realistic empiricism』吾人は知覺によりて、客觀的事物の眞相を知り得といふ論。

じつざいてき-こくかがく 實際的國家學【名】國家の事實上の關係を說明するもの。政治史と政治統計とに分つ。

じっさいてき-しんがく 實際的神學【名】〔基〕じっせんてきしんがく（實踐的神學）に同じ。

じつざいてき-しゅりろん 實在的主理論【名】〔哲〕次條に同じ。

じつざいてき-ゆりろん 實在的唯理論【名】〔哲〕『英 Realistic rationalism』事物の眞想を知るは、知覺によるにあらずして、理性即ち純粹思考によるといふ說。

じっさい-にち 十齋日【名】〔佛〕十齋を行ふ十日間の日。

じっさい-ふうたい 實際風袋【名】〔商〕『英Real tare』貨物の總重量中より差引くべき包裝物即ち俵・箱・鐵などの實際の重量。

じっさい-ぶつ 十齋佛【名】〔佛〕十齋の各日に配して祀る佛。菩薩、即ち定光（ジャウクワウ）如來・藥師如來・普賢菩薩・阿彌陀如來・觀音菩薩・勢至菩薩・地藏菩薩・毘盧遮那（ビルシャナ）佛・藥王菩薩・釋迦如來の併稱。

じっさいぶつ 十齋の佛（ブツ）【句】〔佛〕じっさいぶつ（十齋佛）に同じ。榮花「十齋の佛を、等身に造らせたまひ」

じっさいり-ど 實際理地【名】〔佛〕眞如・無相の境界。眞諦（シン）・平等の理。俗諦差別ならぬこと。鶴岡合戰「實際理地には、一塵をも受けず」

じっさい-ろん 實在論【名】〔哲〕『英Realism』㊀じつねんろん（實念論）に同じ。㊁認識の對象は、客觀世界に實在する或物、即ち意識以外の實在なりと主張する說。實有論。（觀念論・現象論に對して）

しっ-さう 漆瘡【名】うるしかぶれ。

しっさう 濕瘡【名】かいせん（疥癬）に同じ。

じっ-さう 實相【名】㊀實際のありさま。㊁〔佛〕生滅變化の相を離れたる萬有の眞實の相。眞如。法性（ホッシャウ）。本體。涅槃（ネハン）。眞諦（シンタイ）。實性（ジッシャウ）。實諦（ジッタイ）。實際。一實。一如。（假相に對して）

實相の風【句】〔佛〕天台の諸法實相の妙理の、凡夫の迷妄を拂ふを、風に譬へていふ語。謠曲「鵜飼」「實相の風、荒く吹いて、千里が外も雲はれて」

實相の花【句】〔佛〕天台の諸法實相の妙理の美くしさを、花に譬へていふ語。謠曲「嵐山」「筐の岩屋の松風は實相の花ざかり、開くる法の聲たてて」

實相の門【句】〔佛〕諸法實相の法門、即ち天台宗の教。謠曲「東岸居士」「萬法皆一如なる實相の門に入らうよ」

じっ-さう 實像【名】〔理〕『英Real image』物體より發する光線が、鏡・レンズなどのために、反射もしくは屈折して生ずる像の內、光線が實際に集中して生ずる像。（虛像に對して）

じっさう-じ 實相寺【名】㊀日蓮宗四十箇本山の一。駿河國富士郡岩松村岩本に在り。もと天台宗の巨刹なりしが、正嘉二年日蓮が當寺の藏經を閱覽せし緣に由りて、全山日蓮宗に改宗す。日蓮の入藏して、立正安國論を著述せる姿を本尊とす。㊁臨濟宗の關東十刹の一。岩代國若松市馬場町に在り。安居山と號す。元德中に復庵宗己の開基せしところ。

じっさう-ちゆうだう 實相中道【名】〔佛〕諸法の眞實の相、即ち眞理を悟りて、中正の道を守ること。用明天皇職人鑑「これぞ實相中道の佛、神の法」

じっさう-むろ 實相無漏【名】〔佛〕諸法實相の妙理を悟れる心は淸淨にして、煩惱（ボンナウ）の塵を著けざること。

實相無漏の大海【句】〔佛〕實相無漏の

功徳を大海に譬へていふ語。十訓「實相無漏の大海に、五塵・六欲の風は吹かねども」

じっさうゐん　實相院【名】山城愛宕(オタギ)郡岩倉の西に在る天台宗の寺。園城寺の別院。鷹司家の出なる静基僧正の開基。實相院門跡。「一條に同じ。

じっさうゐんもんぜき　實相院門跡【名】前項に同じ。

じっさく　失策・失錯【名】しそこなふこと。やりそこなひ。こころあやまり。著聞「禰大納言行成卿、その失錯を扇にしるして」

じっさつ　十刹【名】臨済宗に於ける十箇の巨刹。異説あれども、圓覺寺文書に據れば、京都の十刹は、鳳凰山等持寺・靈龜山臨川寺・萬年山眞如寺・神雞山安國寺・龜雄山寶鐘寺・淩霄山普門寺・大明山廣覺寺・正覺山妙光寺・龍寶山大德寺・瑞鳳山龍翔寺とし、關東の十刹は、福源山禪興寺・錦屏山瑞泉寺・青龍山東勝寺・乾明山萬壽寺・靈松山大慶寺・功臣山興聖寺・瑞鹿山竹園山法泉寺・良田山長樂寺・海雲山萬福寺とす。ござん(五山)参照。

じっさんていたう　實産抵當【名】〔法〕具體的財産、即ち動産もしくは不動産のごときものの抵當。

しっざや　尻鞘【名】しりざや(尻鞘)の音便。

しっしん　失志【名】〔哲〕さうしん(喪心)に同じ。

しっし　疾視・嫉視【名】にくみて見ること。にらむこと。にらみつくること。

しつし【形ー】しつこに同じ。

しつじ　執事【名】一貴人の左右に在りて、事を執る者。その貴人を直接に指すを憚りて、敬していふ場合に用ふ。即ち侍史などの類。二院廳の長官。大別當の次に位して、事を執行ふもの。三朝廷より、攝政・關白に附けて、家司の長官たらしめしもの。四政所(マンドコロ)にて、別當に次ぎし役。五鎌倉時代には、幕府の執權の異稱、また諸大名の老臣。六鎌倉・室町幕府の職制の一。鎌倉時代には、政所の次官また問注所の長官、室町時代には、政所及び問注所の長官。七くわんりやう(管領)三・くわんりやう(關東管領)を見よ。

しつしつ　蟋蟀【名】〔動〕しっしゅつ(蟋蟀)

しっしっ　叱叱【感】一物を逐ひのくる時に發する聲。二喧騒をおさふる時に發する聲。おさへのかけごゑ。

しつしつ　瑟瑟【貌】一秋風の音の形容。二波の起つさま。

じっしつ　實質【名】實際の性質。正味。本質・實體(外形に對して)

じっしつ　十室【名】十戸。十軒。

十室の邑【句】『論語の公冶長篇に「子曰、十室之邑、必有忠信如丘者一今」とあるに本づく』家の十戸ある邑、即ち狹小なる土地。

しづしづ　靜靜【貌】一擧動の靜かなる狀。そろそろ。徐徐。蒲村「しづしづと五德すゑけり藥ぐひ」二甚だ靜寂たる狀。狹衣「み堂の内しづしづとしてのどかなるに」

じっしつてき　實質的【貌】『英Substantive』實質を基とするさま。(形式的に對して)

じっしつてきけんぽふ　實質的憲法【名】〔法〕統治權の主體・客體・範圍と、獨立機關の參與すべき統治作用とに關する原則を定めたる憲法。例へば我が國にて、皇室典範中の皇位繼承・攝政の規定、衆議院議員選擧法中の衆議院組織の規定、議院法中の兩議員に共通なる法則等は、これに屬すべきものなると同時に、憲法中の會計上の法則の如きは、實質よりいへば、行政法に屬すべきものなる類。(形式的憲法に對して)

じっしつてきはふりつ　實質的法律【名】〔法〕國家及び臣民の權利・義務の範圍を定めたる法律。(形式的法律に對して)

じっしつはふ　實質法【名】〔法〕『英Substantive law』權利・義務の規定をその實質としたる法令。民法・刑法・商法の類。實體法。主法。(形式法に對して)

じっしふ　實習【名】實際につきて學ぶこと。

じっじつつう　實字對【名】〔文〕漢詩にて、一句中に實字を主として對したるもの。例へば、「消水故都秦二世・咸陽秋草漢諸陵」の如きこれなり。

じっしび　十死日【名】送葬又は墓所を營み、死者を弔ふ等に忌むべしといふ日。正・四・七・十の四箇月は酉の日、二・五・八・十一の四箇月は己の日、三・六・九・十二の四箇月は丑の日なりといふ。十死。

じっしふ　什襲【名】『什は十の義、襲は布帛を襲(カサ)ぬる義。闕子に「宋之愚人、得二燕石一藏レ之以爲レ寶、革匱十重、緹巾什襲」とあり』寶物を祕藏すること。

しっしん　濕疹【名】〔醫〕皮膚病の一種。順當に經過する場合には、皮膚紅色に腫上り、漸次、水疱・膿疱と變じ、或は破壞し、或は乾燥し、遂に黃色の痂皮を生ずるもの。多くは頭部・顏面・陰部・股間に發す。俗に氣觸(カブ)と呼ぶは概ねこれに屬し、然らざるものは蕁麻疹(ジンシン)に屬す。

しっしん　失神・失心【名】正氣を失ふこと。きぬけ。喪心。

じっしん　實親【名】まことの親。生(ウ)の親。新版歌祭文「不義間男の惡名受け、實親の名を汚すばかりか、世間の義理も主の恩も」

じっしん　十身【名】〔佛〕佛陀が衆生濟度のために、十種に權化する身。即ち衆生身・國土身・業報身・聲聞身・緣覺身・菩薩身・如來身・智身・法身・虛空身。續紀「三檀福田窮二成際一十身藥樹蔭二區塵一」

じっしんーはふ　十進法【名】〔數〕限りなき多くの整數に、一一命名する煩雜を避くるために、或位の數を十合はせたるものを、その上位の一として數へ、一より起りて、十・百・千・萬等に至る累進の算法。

しっしや　漆車【名】漆にて塗れる車。

じっしや　實者【名】〔佛〕本體のままなる佛又は神。(權者(ゴンジャ)に對して)盛衰記「實者の神と申すは、惡靈・死靈等の現はれ出で、衆生に出示を爲す者なり」

じっしや　實寫【名】實際のままを寫眞に撮し取ること。

しっしやう　漆匠【名】しっこう(漆工)に同じ。

しっしやう　濕生【名】〔佛〕しっしやう(四生)を見よ。稱讚淨土經「濕生・化生はいざ知らず、體を受けて生るるもの、人間も畜生も出生の門はただ一つ」

じっしやう　實性【名】一實際の性質。二〔佛〕じっさう(實相)二に同じ。

じっしやう　實正【名】まことなること。眞

實。 艦賊大皇甘露雨「病死とも刃の死とも取沙汰あり、實正を知らぬ故、問ひ弔ひもせざりしに」

じっしやう 實正 【副】まことに。實際に。 春花九九力「然らば、その方は實正知らぬか」

じつ-じやう 實情 【名】一まことの心。まごころ。 二まことの事情。情實。

しっ-しゆ 執守 【名】しふしゅ(執守)に同じ。

じっ-しゆ 十手 【名】十人の手。多くの人の手。

十手の指(サヒ)す所 【句】「十目の見る所、十手の指す所」を見よ。

じっしゅう 十宗 【名】〔佛〕八宗と禪宗・淨土宗との併稱。じふいっしゅふ(十一宗)・じふにしゅう(十二宗)・じふはっしゅう(十八宗)參照。

しつ-じゃう 執銃 【名】銃を執ること。

しつじゅう-けうれん 執銃教練 【名】體操の一種。銃を執りて行ふ教練。(徒手教練に對して)

じっしゅ-かう 十種香 十灶香 【名】十種の組香。志野宗信の案になるものは、古十組、米川常白の案になるものは中古十組といひ、新十組は選者を詳かにせず。じっしゅかう。

じっしゅ-くやう 十種供養 【名】『法華經の法師品に見ゆ。故に法華經を、一に十種供養經とも呼ぶ』華籠・瓔珞(エウラク)・抹香・塗香・燒香・幡蓋・衣服・伎樂・飲食・合掌の十種の供具によりて、法華經を供養すること。 古記「於東北院、行二十種供養」

十種供養の御經 【句】「書」ほけきやう(法華經)の別稱。 增鏡「十種供養の御經二部」

しつじゅ-くわ 漆樹科 【名】〔植〕うるしくわ(漆樹科)に同じ。

じっしゅ-くわんぼふ 十種觀法 【名】〔佛〕じふじょうくわんぼふ(十乘觀法)に同じ。

しつ-しつ 蟋蟀 【名】〔動〕こほろぎ(蟋蟀)に同じ。

蟋蟀のきりぎりす 【句】〔動〕『蟋蟀のきりぎりすとの重言』前條に同じ。(こほろぎ(蟋蟀)を見よ)平家「渚によする浪の音、袖に宿る月影、千草にすだくしっしゆつのきりぎりす」

しつ-しゆつじざい 失出人罪 【名】〔法〕過失によりて、有罪を無罪と判決し、又は重罪を輕罪と判決すること。(失入人罪に對して)

しつ-じゅん 濕潤 【名】しめること。

しつじゅん-しうかい 濕潤周界 【名】河川の橫斷面にて、水面以下の水に接する部分。

しっ-しよ 濕沮 【名】水に浸りたること、又その土地。沮洳(ジョ)。「じ。

しっ-しよ 漆書 【名】うるしがき漆書)に同

しつ-じよ 疾徐 【名】ときことと、遲きことと。緩急。

じっ-しよう 實證 【名】一實際の證據。事實の證明。確證。 二じっけん(實驗)に同じ。 三(佛)眞實の證語。

じっしよう-くわがく 實證科學 【名】〔哲〕じっけんくわがく(實驗科學)に同じ。

じっしよう-てき 實證的 【貌】〔哲〕『英 Positive』研究法上、確實なる事實に基き、推理の法則に從ひて歸納・演繹するさま。積極的。

じっしよう-てつがく 實證哲學 【名】〔哲〕『佛 Philosophie positive』實證論の創唱者にして又その代表者なる佛蘭西の哲學者コント(A. Comte)が、その哲學體系に名づけたる稱呼。

じっしよう-はふ 實證法 【名】〔哲〕『英 Positive method』實證的なる研究法。じっしょうてき(實證的)參照。

じっしよう-ろん 實證論 【名】〔哲〕『英 Positivism』吾人の知得するは、現象及びその間の關係のみなるが故に、科學の結果と綜合して、現象間の齊一なる法則を發見するが哲學の職能なりとする說。即ち抽象思辨より實驗觀察を學び、消極的なるよりは積極的なるを主張し、すべて直接の自明的なる直接經驗と實證とを第一義となすもの。實理論。積極論。實驗論。じっしょうてつがく(實證哲學)參照。

じっしゅ-もんぜき 實乘院門跡 【名】〔佛〕天台宗門跡の一。淨嚴坊成圓を祖とす。成圓は參議成賴の子にて、青蓮院の慈鎭に仕へ、建仁元年西塔院主となる。本院は洛東粟田郷岡崎に在るを以て、岡崎坊と稱す。

しっ-しよく 失職 【名】職業又は官職に離るること。

しっ-しよく 濕蝕 【名】濕氣のために生ずる木材の腐蝕。

しつ-じよく 叱辱 【名】しかりはづかしむること。

しっしよく-ほけん 失職保險 【名】勞働者が職業を失ひ、收入の途を絕たれたる時、家計を維持するために、一定の金を支給するを目的とする保險。

しっ-ず 叱す 【動佐變他】しかる。

しっ-す 執す 【動佐變他】深く心に掛く。執心す。執著す。 盛衰記「法住寺殿は、さしも執し思しめし、造り琢かれたり」

しっ-す 失す 【動佐變他】一うしなふ。ほろぼす。無くす。 二忘る。

相(ヒ)失す 【句】互に見失ふ。はぐる。

しっ-す 失す 【動佐變自】うす。ほろぶ。無くなる。

じっ-す 實す 【動佐變自】中に充つ。充實す。

しっ-すい 直歲 【名】〔佛〕『漢字の宋音。直は當る意』禪家にて、一歲の幹事に當る僧職。

じっ-すう 實數 【名】〔數〕『英 Real number』虛數以外のすべての數。(虛數に對して)

しづ-すげ 靜菅 【名】小さき菅もしくは一種の菅なるべしとも、石著(キッ)菅の義にて、石に著きたる菅なるべしともいひ、詳かならず。〔古語〕 萬葉「はしたてのくらはし川の川の靜菅あが刈りて笠にもあまず

しっ-せい 叱正 【名】詩文の添削を乞ふ謙稱。「と。

しっ-せい 失政 【名】治國の方法を誤ること。

しっ-せい 執政 【名】一政をとり行ふ職、又その人。 盛衰記「隨身を召具して、執政の人のごとし」 二參議以上の稱。 三らうちゆう(老中)に同じ。 四明治元年十月に各藩に置き、朝政を體して、藩主を輔け、一藩の政事を總統したる職。翌年七月制度改革のために廢せり。

じっ-せい 日星 【名】日と星と。

しっ-せう 失笑 【名】笑をもらすこと。ふきだすこと。

じっ-せうてん 實焦點 【名】〔理〕『英 Real focus』しゅせうてん(主焦點)に同じ。(虛焦點に對して)

しっ-せき 叱責 【名】しかり責むること。しかりなじること。

しっ-せき 失跡 【名】跡方の知れずなること。行方不明。

じっ-せき 實績 【名】實際の事績。

じっ-せき 實積 【名】實際にある坪數。

じっ-せき 實跡・實蹟 【名】たしかなる形跡。實際の事跡。 「ぬ說。

じっ-せつ 實說 【名】まことの話。虛言なら

じっ-せつ 實接 【名】〔文〕漢詩の絕句の轉句に、實事を用ひて、起・承の二句に接すること。(虛接に對して)

じっ-せつ 十刹 【名】じっさつ(十剎)に同じ。

じっ-せん 十千 【數】『易林に「水中大賈、求レ利十千、商人不レ至、市空無レ有」などあり』一萬錢。

じっ-せん 實踐 【名】實際に履行すること。實踐躬行 【句】自身に實際履行すること。躬行實踐。

じっ-せん 實線 【名】『英 Full line』圖上の線の、長く接續せるもの。

じっ-せん 實戰 【名】まことのいくさ。實際の戰爭。 「略。

じっせん-ぎんくわ 十錢銀貨 【名】次條のじっせん-ぎんくわへい(十錢銀貨幣)【名】明治四年の新貨條例、及び三十年の貨幣法に基づきて發行せる十錢の補助銀貨。

じっせん-さつ 十錢札 【名】一めいちつうさつ(明治通寶)を見よ。 二大正七年に補助貨の不足を補はんがために發行せられる紙幣の一。十錢銀貨と同一の價格なるもの。十錢紙幣。

じっせん-しへい 十錢紙幣 【名】前條に同じ。 「條に同じ。

じっせん-しんがく 實踐神學 【名】〔哲〕次じっせんてき-しんがく(實踐的神學)【名】

【哲】『英 Practical theology』神學の一部。敎會の共同生活に於ける管理・說敎・傳道・禮拜・勤行等のことを研究するもの。實際的神學。實際神學。實踐神學。

じっせんてきゆぶつせつ 實踐的唯物說 【名】【哲】『英 Practical materialism』實物質的快樂・肉慾上の滿足等を以て、正當なる人間戮力の目的なりとなす說。物質主義。實利主義。

じっせんてつがく 實踐哲學 【名】【哲】『英 Practical philosophy』主として倫理學・法理學・政治學等、すべて善意志・行爲等に關する哲學。(理論哲學に對して)

じっせんりんり 實踐倫理 【名】【哲】『英 Practical ethics』こうしんがく(修身學)に同じ。

じっせんろん 實踐論 【名】【哲】ぶらぐまちず(むに同じ。

じっそ 質素 【名】かざらぬこと。儉約にして、奢らぬこと。つづまやかなること。

しっそう 失踪 【名】Ⅰ踪跡を失すること。行くへの知れぬこと。出奔。Ⅱ【法】從來の住所もしくは居所を去りて、七年間生死分明ならざる場合、又は出征などの死亡の原因となるべき事實に際會したる後、三年間生死分明ならざる場合に、利害關係者の請求に依りて、裁判所が宣告して、死亡者と見做すこと。

しっそうの宣告 【句】【法】失踪者の利害關係人の請求により、その失踪者の住所地の區裁判所が、失踪として宣告すること。

しっそう 執奏 【名】取次ぎて奏上すること。

しっそう 疾走 【名】早く走ること。疾馳。

しっそうしゃ 失踪者 【名】Ⅰ失踪せる人。かけおちもの。しっそうにん。Ⅱ【法】失踪の宣告を受けたる人。

しっそうにん 失踪人 【名】前條に同じ。

しっそく 疾足 【名】Ⅰはやあし。かけあし。Ⅱいっそく(逸足)に同じ。「高材・疾足」

しっそく 疾速 【名】はやきこと。ときこと。汎速。

じっそく 實測 【名】實地の測量。

じっそくつぼすう 實測坪數 【名】實際に測量せる現在の坪數。(臺帳坪數に對して)

しった 叱咤 【名】怒りて叱ること。怒氣あらはれて、大聲を發すること。いきまいて舌打をなすこと。

しった 悉達・悉多・悉陀 (梵 Siddha 又 Siddhārtha) 【名】【人】一切義成と譯す』釋迦の、淨飯(ジョウボン)王の太子たりし時の名。悉達太子。盛衰記「悉達誕生の伽毘羅(カビ)城」

しったい 失體 【名】體裁をそこなふこと。不體裁。

しったい 膝退 【名】膝にて退くこと。跪きて退くこと。しっかう(膝行)參照。

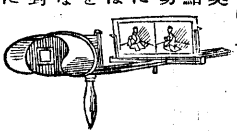
じったい 十體 【名】漢字の十種類の書體、即ち古文・大篆・籀文(チウ)・小篆・八分(ハップン)・章草・隸書・行書・飛白・草書。一說に、古文・大篆・八分・小篆・飛白・倒薤・散隸・懸針・鳥書・垂露なりと。さんたい(三體)・ごたい(五體)・はったい(八體)參照。

じったい 實體 【名】Ⅰまことのすがた。實質。本質。本體。正味。內容。Ⅱ【哲】『英 Substance』性質又は作用を支持し、箇箇の性質又は作用を統一する本體。精神實體と物質實體とに分たる。Ⅲ【哲】『英 Substance』他に依存せず、それ自身において存在するもの。Ⅳ【哲】『英 Substance』箇箇の物を、通性その中に存在して、その本質を成せりと見て名づけたる稱呼。

じったい 實諦 【名】【佛】しんたい(眞諦)に同じ。(理諦に對して)

じったい 實大 【名】實際の大きさ。

じったいきやう 實體鏡 【名】同一物體を左右兩眼にて、同時に別別に見たるごとく、二つに撮影せる寫眞を奧の方に置き、前方に、焦點距離小なる凸レンズを切半したるものを、兩眼にあてはまるやうに組合はせ、これを透して、寫眞を見る時、二箇の像の重なり合ひて、實物實景に對すると同じく、立體的に見ゆるやうに裝置したるもの。



(うやきいたつじ)

じったいじょうけう 實大乘敎 【名】【佛】方便を帶びざる大乘敎、即ち天台・眞言・華嚴・禪等の敎。

じったいせつ 實體說 【名】【哲】じったいろん(實體論)に同じ。

じったいてきぐはつ 實體的俱發 【名】【法】いうけいぐはつ(有形俱發)に同じ。

じったいはふ 實體法 【名】【法】じっしつはふ(實質法)に同じ。

じったいろん 實體論 【名】【哲】『英 Ontology』精神の性質に關する學說の一。恒常不變にして、破壞すべからざる精神的實體を假定し、精神現象をその實體の性質に過ぎずとするもの。佛國のデカルト(Descartes)始めてこれを唱ふ。

じったう 執刀 【名】外科手術のために、刃物を持つこと。

じったう 失當 【名】道理にあたらぬこと。不當。「同じ。

じったう 七島 【名】【植】しちたう(七島)に同じ。

じったう 執當 【名】『執事・別當の義』延曆寺にて、その諸堂を司り、諸役の補任をなす職。三綱交代して、これに當る。寺家(ジケ)。盛衰記「執當法眼御房へとぞ有りける」

じったう 濕道 【名】しっぱふ(濕法)に同じ。

じったうはふ 濕道法 【名】水中にて行ふ魚類の人工受精法。

じったうせん 十當錢 【名】『一箇の價が當時の通用銀十文に當るよりいふ』はうえいつうほう(寶永通寶)に同じ。

じったいし 悉達太子 【名】【人】しった(悉達)に同じ。謠曲(大原御幸)「悉達太子は、淨飯(ジョウボン)王の都を出で」

じったつ 執達 【名】上の意を承けて、下に通達すること。盛衰記「依二廻宣之狀一、執達如レ件」

じったつじやう 執達狀 【名】『その終に「執達如レ件」の句あるによりていふ』みげつじょ(御敎書)に同じ。(室町時代の語)

じったつり 執達吏 【名】裁判所職員の一。區裁判所に屬し、訴訟書類の送達及び裁判の執行・令狀の執行等をなすもの。司法大臣これを任補す。

じったん 悉曇 悉談・悉旦・悉檀・悉曇・七旦・七曇(梵 Siddhaṃ) 【名】『成就又は所成と譯す。文章・句法を成就する義』Ⅰ梵語の母韻。Ⅱぼんじ(梵字)に同じ。Ⅲぼんご(梵語)に同じ。さんすくりと(散斯克栗多)參照。

悉曇切纔(ハサリ) 【句】【語】梵語の字母(母音)と子音とを配合して、綴音を作ること。

悉曇五十字門 【句】【語】悉曇の字母四十七字より體文(即ち子音)の中の濫字(Ilm)を除き、哩(リ)・哩引(リー)・里(リ)・里引(リー)の四字を加へたる五十字。

悉曇十二章 【句】【語】次條に同じ。

悉曇十二韻 【句】【語】悉曇の字母四十七字の中なる摩多(a ā 即ち母音)の十二韻。

悉曇十八章 【句】【語】悉曇の字母四十七字中の體文(即ち母音)と摩多(即ち子音)とを本として生ずる十八箇の文字。

しったん 【貌】 水音又は鼓・太鼓の音などの形容。(舞女五枚羽子板「太鼓の上手でしったんにしったんしったん七段作る御百姓」)(慈入弁柱曆「軒のつららも解けわたり、谷の水音しったんしったん、ぼんぼんと鳴る鼓」)

じったん 實彈 【名】銃砲に、彈丸を裝填

しつたにくわう 閑谷黌 【名】舊岡山藩の私學。池田光政の和氣(ワケ)郡伊里村字木谷に建てしもの。寬文十年假校舍成り、地勢靜閑、讀書に適すとて、閑谷と呼ぶ。明治維新後荒廢せしが、再興して、今縣立中學たり。閑谷學校。

しづたまき 倭文手纏・賤手纏 【枕】賤しき人の手纏の義にて、數ならぬものなるより、かずにもあらずいやしにかけていふとも、倭文布(シヅノヌノ)を織る苧環(ヲダマキ)の意にて、その數多きより、かずにかけ、倭文(シヅ)と賤(シヅ)とは同音なるより、いやしにかけていふともいふ。萬葉「しづたまき數にもあらぬ身にはあれど千とせにもがと思ほゆるかも」同「しづたまきいやしきわがゆゑますらをのあらそふ見れば」

したること、又その彈丸。

じつだん 實談【名】Ⅰ實際の事を語る談話。Ⅱ實際に聞きし談話。

じつだんえんしふ 實彈演習【名】實彈射撃を行ふ演習。

しったんさんみつーせう 悉曇三密鈔【名】〔書〕梵字の意義・梵語の文法を述べて、眞言祕密の教義に說き及ぼしたるもの。三卷。僧覺彥の著。

しったんーしやう 悉曇章・悉檀章（梵 Siddhirastu）【名】〔書〕梵語の字母を列ね、その結合法を述べて、初步の科本に用ふるもの。

じつだんーしやげき 實彈射撃【名】實彈丸を込めて、行ふ射撃。

しったり【貌】垂れさがりたる狀。重畳子「尾は青柳のじったりしたりしたした」

しっち 悉地（梵 Siddhi）【名】〔佛〕『妙成就と譯す』祕法を修して、眞言の妙果を成就すること。盛衰記「八は悉地の成ずる數なり」「ること。

しっち 悉知【名】知りつくすこと。よく知

しっち 濕地【名】濕氣の多き土地。水氣のある地。（乾地に對して）

しっーち 執持【名】しふぢ（執持）に同じ。

じっち 實地【名】實際の場合。まことのところ。

じっち 實智【名】〔佛〕こんぽんち（根本智）に同じ。濕土。（礒ぢ）地に對して）

じっち 十地【名】〔佛〕じふぢ（十地）に同じ。

じっちーえんしふ 實地演習【名】實地に就きて演習すること。「に同じ。

じつーぢき 質直【名】〔佛〕じっちよく（實直）

しつーぢき 質直是（ぜ）淨土【句】〔佛〕衆生本有（ぼんぬ）の天眞に悟達するが、佛道の本旨なり。

じっーちく 實竹【名】〔植〕竹の一種。幹の中空ならぬもの。陸前國松島の一なる福浦島の名産にして、印材などに用ふ。

じっちけいざいがく 實地經濟學【名】〔經〕おうようけいざいがく（應用經濟學）に同じ。

じっちけいれん 實地教練【名】〔兵〕秋季演習の一。重砲兵が、その操典の示す所の原則を、實地に應用すること。野戰砲兵の野外教練と同樣なる性質のもの。

じっーちしうしふ 實地修習【名】實地に臨みて習ふこと。

じっーちしけん 實地試驗【名】Ⅰ實地に就きて行ふ試驗。Ⅱ實際に於ける技術の試驗。（學說試驗に對して）

しっちーじやうじゆ 悉地成就【名】〔佛〕しっち（悉地）に同じ。

しっちーしよくぶつ 濕地植物【名】〔植〕水中・濕地などに生ずる植物。卽ち浮草・藻・水草等の總稱。體は概して軟弱、葉は常に薄し。

じっちーてんもんがく 實地天文學【名】天文學の一科。天文學用器械の種類と、その使用法及び觀測の方法とを說明し、又これ等の事項の研究を目的とするもの。

しっーちん 繻珍【名】しゅちん（繻珍）の訛。

しっーちん 七珍【名】〔佛〕しっぽう（七寶）Ⅱに同じ。

七珍萬寶（ばんぽう）【句】〔佛〕七珍及びその他のあらゆる珍寶。平家「七珍萬寶、一として闕けたることなし」

しっちんまんぼう 七珍萬寶【名】〔人〕戲作者。通稱は福島仁左衞門、南湖子と號す。江戸芝の菓子舖翁屋の主翁なり。二世森羅亭萬象の門に學び、その三世を襲ぐ。また狂歌を四方眞顏に學びて、竹杖爲輕（ルスガ）と稱し、四方側の判者として名あり。天保二年歿す。年七十。

しっちやう 執杖【名】刑具の名ならん。出世景清「樟の木にて、あげほだしを打たせ、しっちやうつめがね、たうたうぐるる」

じつーぢやう 實定【名】たしかにきまりたること。新可笑記「一方は詠筆正筆にして、太刀は復拵（ごしらへ）に實定」

じっちやうーこばや 十挺小早【名】次條に同じ。

じっちやうーだち 十挺立【名】次條に同じ。

じっちやうーだて 十挺立【名】小早（こばや）Ⅱの、櫓の數十挺を用ふるもの。じっちやうこばや。じっちやうだち。「じ。

じっーちやく 實著【名】じっちよく（實直）に同じ。

しっちやくご 漆著語【名】〔語〕ねんちやくご（粘著語）に同じ。

しっちゆうかく 室中隔【名】〔醫〕心臟の左右兩室の中間なる縱隔。

しつーぢよ 失除【名】とりのくこと。除去。

しつーぢよ 悉除【名】ことごとく除去すること。「病難悉除」「衆病悉除」

しつぢよきゆう 室女宮【名】〔天〕黃道十二宮の一。をとめ。

しっーちよく 質直【名】質撲にして、正直なること。きまじめ。眞摯。

じっーちよく 實直【名】誠實にして、正直なること。信實。律義。

じっちーれんしふ 實地練習【名】實地に臨みて練習すること。

しっーつう 疾痛【名】いたみなやむこと。

しっーつう 漆桶【名】〔佛〕無明（むみやう）の堅厚なるに譬へていふ語。眼識なく、分明なきこと、又その人。黑漆桶。無眼子（むげんじ）。

じつーづく 實盡【名】實意をつくすこと。親切盡。浮世床「この位に深切をつくして、實づくでしてやるぜ」

しっつこし【形Ⅰ】しつこしの音便。

しっつる 失墜【名】Ⅱとりおとすこと。失ふこと。Ⅱ徒らに費すこと。浪費。

じって 十手【名】德川時代に、捕吏の携へし具。長さ一尺五寸餘の鐵製の棒にて、犯人に抵抗の樣子見ゆる時、まづその右腕に打ちて、利腕を扼したる後、捕縛したりといふ。又、手元近くに鉤ありて、刀劍にて切込みくるを防ぐやうにし、柄には總紐（ふさ）を結びて垂れ、その紐の色に紫・赤・黑等の區別を設けて、捕吏の所管を明かにしたり。手木（てぎ）。

しって【貌】砧（きぬた）を打ち、また機（はた）などを織る音。

じって 實體【名】實直なること。實直。

じって 實弟【名】まことの弟。父母を同じくする弟。

じっていーけいやく 實定契約【名】〔法〕その効力が契約の當時より確定せる契約。卽ち實貫契約・賃貸借契約の類。（射倖契約に對して）

じつーてつ 十哲【名】十人のすぐれたる人物。或人の門下の高弟十人の併稱。「孔門の十哲」「蕉門の十哲」「木門の十哲」參照。

しっーてん 質點【名】〔理〕『英 Material point 又 Material particle』物體の運動を論ずるに當りて、大いさなく、ただ質量のみを有すと假想する點。大いさある物體にても、その運動につきて、大いさを考へざる場合の、力學上の假想にして、この點の集團がその物體なりと見るなり。

しっーてん 失點【名】けってん（缺點）に同じ。

しつーてん 濕田【名】地勢のため、又は排水不良のために、常に水濕多き田。（乾田に對して）

じつーてん 實傳【名】眞實の傳說、又は實際の經歷の傳記。

しつーてんき 濕電氣【名】〔理〕『液を用ふる電池より發生するによりていふ』どうでんき（動電氣）に同じ。（乾電氣に對して）

しってんぱっき 七顚八起【句】數度の失敗を經て、遂には成功すること。ななころびやおき。

しってんぱったう 七顚八倒【句】『七たび八たび顚倒する義』苦痛に堪へずして、此方彼方に伏しまろぶこと。

じつーてんらく 十天樂【名】〔音〕唐樂の一。聖武天皇、笛師常世（つねよ）弟麿（おとまろ）に勅して作らしめ、自ら傳ふ。盛衰記「伶人等にはかに十天樂を作り、始めて是れを奏しき」

しっーと 嫉妬【名】ねたみ。そねみ。りんき。うはなりねたみ。

しっと【貌】Ⅰことの音便。狂言「續虎」「すっぱと切っては、しっと打ちつけて」當流小栗判官「門・蝦錠しっとおろし」最明寺殿百人上臈「低き波にはしっとと當て、手綱を繰つて乘下し」Ⅱこっそりの略。女殺油地獄「しっとと逢瀨の波枕」

しつーど 濕度【名】〔理〕『英 Humidity』大氣中に含める水蒸氣の割合。これを表はす二法あり。大氣の單位立積中に含まる水蒸氣の量を以てするを、絕對濕度と稱し、現在大氣中に存する水蒸氣の量と同立積中にある同溫度に於ける飽和水蒸氣の量との比を以てするを、關係濕度又は比較

濕度と稱す。單に濕度といへば、通例後者を意味し、百分を以て表はすを普通とす。

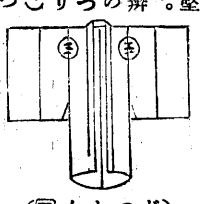
しつ-ど 濕土【名】しっち(濕地)に同じ。

じっと 熟と・凝と【副】周章せず、こらへて沈著にせる狀。源氏十二段長生島鶯「御しはぶきを聞きけるが、胸にこたへて、じっとして、今におなかを這ふやうな、ああぞろぞろとこそばいと」

しっ-とく 失德【名】身の修まらぬこと。おこなひのきず。

しつ-どく 濕毒【名】かさ。黴毒。

じっ-とく 十德【名】■(佛)十箇條の德行。法師の十德、卽ち善知法義・能廣宣說・處衆無畏・無斷辯才・巧方便說・法隨法行・威儀具足・勇猛精進・身心無倦・成就忍力、また弟子の十德として、灌頂を受けんとする弟子の具ふべきもの、卽ち信心・種姓清淨・恭敬三寶・深慧嚴身・堪忍無懈怠・戶羅淨無缺・忍辱・不慳惜・勇健・堅願行等の種類あり。野守鏡「因果…を辯へざる十德・五逆の罪人」■『おきさつ(直綴)の轉訛なりといふ』素襖(スアヲ)に似て、裾を縫ひつけたる衣服。近世の平士以下の著用せしものにて、侍は絹にて作りて胸紐を附け、下衆(スヂ)は布にて作りしが、德川時代には、士分の者は用ひず、專ら醫師・畫師・同朋等、黍頭の公服となり、絽・紗等の薄物にて、無地無紋・羽織のごとく打掛けて著、帶はせず、下に袴を略するもありき。



じっ-とく 拾得【名】〔人〕支那唐の奇僧。天台國清寺の僧。豐干(ブカン)に拾ひ養はる。寒山と親友たり。豐干去りて、二人亦行方を失へり。かんざんじっとく(寒山拾得)參照。

しつどく-しん 漆毒疹【名】漆の刺戟に因りて生ずる赤疹。皮膚に發して、痒(カユ)を覺ゆ。うるしかぶれ。

しつどく-しやう 失讀症【名】〔醫〕『獨Alexie』しつごしやう(失語症)を見よ。

しつど-けい 濕度計【名】〔理〕『英Hygrometer』大氣の關係濕度を測定する器。ダニエル濕度計・吸收濕度計・毛髮濕度計・レニョオ濕度計等の種類あり。檢濕器。

しつ-どっく 濕船渠【名】『英Wet dock又Basin』船渠の一種。港の一部に岸壁を築きて、船を著け、荷物の積卸に便ならしむ。(乾船渠に對して)

しっとん 【副】物を押しつくるやうに打ち、又は押すさまなどにいふ語。又その拍子。女殺油地獄「船は新造の乘り心…圖に乘った乘って來た、しっとんとんとんしととんとん」

しっとり 【副】■じとじとと濕を含める狀。しっぽり。じたじた。■沈著にてしづかなる狀。夕霧阿波鳴渡「せめて一年しっとりと、一つ寢ふしも仕たいぞと」

しづ-とり 賤鳥【名】〔動〕ほととぎす(時鳥)の異稱。「古語」「しづ鳥。ほととぎす也。名にもの山里に鳴くしづ鳥は卯の花ばかり都とや思ふ」

じっとり 【副】しっとり■に同じ。浮世風呂「徐りはすはでない、じっとりとした女子があったら、世話してくだんせ」

しづな 指綱【名】しりづな(尻綱)に同じかるべし。又、てなは(手繩)に同じかるべしともいふ。

しつ-ない 室内【名】室の内。房中。

しづない 靜内【名】〔地〕日高國七郡の一。北海全道部の內にて、アイヌ人の居住者最も多し。

しつない-いうぎ 室內遊戲【名】居室內にて行ふ遊戲の總稱。例へば碁・將棊・歌カルタ・玉突などの類。(戶外遊戲に對して)

しつない-さうしよく 室內裝飾【名】家の各室を見にくからぬやうに裝ふこと。

しつない-しやてき 室內射的【名】室內にて行ふ一種の遊戲。小形の空氣銃に、コルクの丸を詰め、飾りつけたる種種の的を狙ひ擊つもの。

じつ-なし 術無し【形ク】じゅつなし(術無し)の訛。

しつどく-しやう 失讀症【名】〔醫〕『獨Alexie』しつごしやう(失語症)を見よ。

しつど-けい 濕度計【名】〔理〕『英Hygrometer』大氣の關係濕度を測定する器。ダニエル濕度計・吸收濕度計・毛髮濕度計・レニョオ濕度計等の種類あり。檢濕器。

しつ-どっく 濕船渠【名】『英Wet dock又Basin』船渠の一種。港の一部に岸壁を築きて、船を著け、荷物の積卸に便ならしむ。(乾船渠に對して)

しっとん 【副】物を押しつくるやうに打ち、又は押すさまなどにいふ語。又その拍子。女殺油地獄「船は新造の乘り心…圖に乘った乘って來た、しっとんとんとんしととんとん」

しっとり 【副】■じとじとと濕を含める狀。しっぽり。じたじた。■沈著にてしづかなる狀。夕霧阿波鳴渡「せめて一年しっとりと、一つ寢ふしも仕たいぞと」

しづ-とり 賤鳥【名】〔動〕ほととぎす(時鳥)の異稱。「古語」「しづ鳥。ほととぎす也。名にもの山里に鳴くしづ鳥は卯の花ばかり都とや思ふ」

じっとり 【副】しっとり■に同じ。浮世風呂「徐りはすはでない、じっとりとした女子があったら、世話してくだんせ」

しづな 指綱【名】しりづな(尻綱)に同じかるべし。又、てなは(手繩)に同じかるべしともいふ。

しつ-ない 室内【名】室の内。房中。

しづない 靜内【名】〔地〕日高國七郡の一。北海全道部の內にて、アイヌ人の居住者最も多し。

しつない-いうぎ 室內遊戲【名】居室內にて行ふ遊戲の總稱。例へば碁・將棊・歌カルタ・玉突などの類。(戶外遊戲に對して)

しつない-さうしよく 室內裝飾【名】家の各室を見にくからぬやうに裝ふこと。

しつない-しやてき 室內射的【名】室內にて行ふ一種の遊戲。小形の空氣銃に、コルクの丸を詰め、飾りつけたる種種の的を狙ひ擊つもの。

じつ-なし 術無し【形ク】じゅつなし(術無し)の訛。

「稱。

じつなん 日南【名】〔地〕今の安南地方の古稱。

じつ-に 實に【副】げに。まことに。

しつ-にふじんざい 失入人罪【名】〔法〕過失によりて、無罪を有罪と判決し、又は輕罪を重罪と判決すること。(失出人罪に對して)

しづ-ぬさ 倭文幣【名】しづぬのにて造りたるぬさ。「古語」萬葉「しづぬさを手にとりもちて」「古語」

しづ-ぬの 倭文布【名】しづ(倭文)に同じ。

じつ-ねつ 實熱【名】病氣その他の理由によらずして、本來その體の具有せる熱氣。日本振袖始「父母愛に溺れ、さなきだに實熱深き種子を、絹に包み、綿に捲き」

しつ-ねん 失念【名】■ものわすれ。忘却。遺忘。柳樽「失念といへば立派なものわすれ」■(佛)心を散亂せしめ、所緣の境において明記すること能はざらしむる、一種の煩惱。

じつねんろん 實念論【名】〔哲〕『英Realism』概念は客觀的に實在すと主張する說。これに二種あり。一は極端實念論と呼び、普遍は個物に先だちて存する實在なりとするものにして、プラトン(Platon)哲學の影響の下にあるものなるより、プラトン風の實念論ともいひ、他の一は、穩和實念論又は概念論とも呼び、普遍は個物の內に存する實在なりとするものにして、アリストテレス(Aristoteles)の影響を受けしものなるより、アリストテレス風の實念論ともいふ。實在論。(唯名論に對して)

しづ-の-いはや 志津岩屋・靜岩屋【名】石見國邑知(オホチ)郡邇摩(ニマ)郡靜間(シヅマ)村大字岩屋と同國邇摩(ニマ)郡靜間(シヅマ)村の海岸とに在る洞窟、また播磨國印南(インナミ)郡阿彌陀村龍山(リウザン)の西北腹なる縣社生石子(イクシ)神社の社殿。但馬國のは兩所共に大己貴(オホナムチ)命の隱れし處なりと言傳へ、播磨國の大石神社は大己貴命・少彦名(スクナビコ)の二神を祭る。

たつやまいし 龍山石)參照。萬葉「おほなむちすくなひこなのいましけむしづのいはやは幾代經ぬらむ」見よ。

しづ-の-め 賤の女【句】しづ(賤)の條下を

しづ-の-や 靜廼舍【名】〔人〕加藤宇萬伎の家號。

しづのや-かしふ 靜廼舍歌集【名】〔書〕加藤宇萬伎の歌集。一卷。見よ。

しづ-の-を 賤の男【句】しづ(賤)の條下を見よ。

しづ-の-をだまき 倭文の苧環【句】しづ(倭文)の條下を見よ。

しつば 濕婆(梵 Śiva)【名】〔佛〕まけしゅら(摩醯首羅)を見よ。

しっ-ぱ 叱罵【名】しかりのしること。叱しっぱ【副】■十分にたわたる狀。百合若大臣野守鏡「しっぱとたもつて放つ矢」大鏡問答青葉笛「枝も鳴さぬ春風に靡けや靡け、しっぱと靡け」■すっぱに同じ。他地やれ出かいた小太郎、しっぱと討て、小太郎と、力をつけて拜み討と」

じっ-ぱ 十派【數】■十の支派。■(佛)臨濟宗の十の流派、卽ち相國寺派・建仁寺派・南禪寺派・天龍寺派・建長寺派・本願寺派・大洽寺派・圓覺寺派・永源寺派・妙心寺派の併稱。■(佛)眞宗の十の流派、卽ち本願寺派・大谷派・高田派・佛光寺派・興正寺派・專照寺派・證誠寺派・毫攝寺派・錦織寺派・專修寺派の併稱。

じっ-ぱ 十把【數】一把の十倍。十把一絡(ヒトカラ)【句】數は多くとも、極めて價値なきものとして取扱ふこと。一束つかまへ。

しっ-ぱい 失敗【名】しそこなひ。しくじり。

しつ-ばう 失望【名】のぞみの叶はぬこと。あてのはづれたること。失意。

しつ-ぱう 失亡【名】ばうしつ(亡失)に同じ。

じっ-ぱう 十方【名】東・西・南・北・東南・東北・西南・西北・及び上・下の併稱。しほう(四方)■えくはう(六方)■はっぱう(八方)參照。■(佛)眞宗の十の流派、卽ち本願寺派・大谷派・高田派・佛光寺派・興正寺派・專照寺派・證誠寺派・毫攝寺派・錦織寺派・專修寺派の併稱。

じっぱう-くう 十方空【名】〔佛〕十方世界

の悉く空なること。蜂丸「悟る時んば十方空、迷ふがゆゑに、三界じやう」

じっぽうぐれ 十方闇・十寶暮【名】陰暦にて、甲申より癸巳までの十日の間。この間は、十方の氣がくらがりゐて、何事の相談もととのはずといふ。六十日にて一巡し、一年に六回來復す。

じっぽうごふげんしきしん 十方業普現色身【名】〔佛〕十方衆生の意業(イゴフ)に隨ひて、普く示現する佛・菩薩の色身。妙音菩薩・觀音菩薩の類。盛衰記「妙音大士は、十方業普現色身の證を得」

じっぽうせかい 十方世界【名】〔佛〕『東・西・南・北・東南・東北・西南・西北世界及び上・下世界の併稱。十方に有情(ウジヤウ)の世界の存すること、無量・無邊なりといふ』全世界。世界全體。大千世界。謠曲(羽衣)「それ久堅のあめといつぱ、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに」

じっぽうぶつど 十方佛土【名】〔佛〕十方に在る諸佛の淨土。朗詠集「十方佛土之中以二西方一爲レ望」

しっぱく 質薄【名】『ひっぱく(逼迫)』の訛か』けんやく(儉約)に同じ。

しっぱしっぱ【貌】眼又は喉などの潤滑ならずして、不快なる感じ。〔俚語〕

しづはた 倭文機【名】しづ(倭文)に同じ。〔古語〕起「大君のみおびのしづはた結び垂れ誰れやしびともあひ思はなくに」

しづはたおび 倭文機帶【名】しづはたにて仕立てたる帶。〔古語〕萬葉「いにしへのしづはた帶を結びたれたれちふ人も君にはまさじ」

しづはたごろも 倭文機衣【名】しづはたにて仕立てたる衣。〔古語〕夫木「み山吹く秋風さむみ東屋のしづはた衣いまぞ打つなる」

しづはたに 倭文機に【枕】しづはたの如くにの意にて、その綾は亂れて見ゆるより、みだる(亂る)にかけていふ。後撰「しづはたに思ひみだれて秋の夜のあくるも知らず嘆きつるかな」

しづはたやき 賤機燒【名】昔、駿河國賤機山の麓より産せし陶器。交趾(カウチ)燒を摸したるもの。白土に萌黄色の釉藥(ウハグスリ)を用ひ、賤機の二字を印せり。我が國の樂燒(ラクヤキ)にて、德川家康のこの地に移り住みし頃、尾張國瀨戸の工人の從ひ來りて創めしものならんといふ。

しづはたやま 賤機山・倭文機山【名】〔地〕駿河國安倍郡にある山。安倍川の東岸をなせる龍爪(リユウサウ)山の地脈の漸次低下したる末端にして、高さ約二八〇尺、その麓に淺間(センゲン)神社あり。別稱、青葉岡。枕「古今「けさ見れば霞の衣おりかけてしづはた山に春はきにけり」

じっぱひとからげ 十把一絡【句】じっぱ(十把)の條下を見よ。

しっぱふ 濕法【名】〔化〕鑛物の成分を知るに、試藥又は電流を用ひて行ふもの。濕式。濕道。化學分析法。(乾法に對して)

しつ-ばん 濕板【名】『英 Wet plate』寫眞撮影に用ふる感光板の一。硝子板をよく磨き、その一面にコロヂオン液と沃化物とを交へたるものを流して、薄き膜を作り、これを硝酸銀の溶液に浸して、感光性を與へたるもの。長き曝露時間を要すと、製法に熟練を要すとのために、現今は使用減少の傾あれども、精密なる圖畫・文書の複寫等には多くこれを用ふ。(乾板に對して)

じっぱん 十判【名】十箇の捺印(オシ)。

じっぱんうらがき 十判裏書【名】江戸幕府の評定所の目安裏書の、三奉行十人の捺印(オシ)あるもの。

しつばんはふ 濕板法【名】濕板を用ひて、寫眞撮影をなすこと。(乾板法に對して)

しっぱらひ 尻拂【名】しんがり(殿)㊀に同じ。

しっぱり【貌】㊀『じばりの音便』じばじば㊁に同じ。浮世風呂「おお、あつつ、つつ、つつつ、しっぱりだ、しっぱりだ」㊁次條に同じ。聖徳太子繪傳記「君がため鐵しっぱりと撓める露に戀をもつ」

じっぱり【貌】木の枝などの撓む音の形容。しっぱり。「力」に同じ。

しっぱりき 實馬力【名】じばりき(指示馬力)に同じ。

しっぱりもの しっぱり物【名】浴湯の熱さの、しっぱりと身にしむこと。浮世風呂「子供衆には、ちとしっぱり物でござりませう」

しっぴ 失費【名】にふひ(入費)に同じ。

しっぴ 櫛比【名】『櫛の齒の如く比(ナラ)ぶ意。詩經の周頌良耜篇に「其崇如レ墉、其比如レ櫛、以開二百室一百室盈止」とあるに本づく』殆ど隙間なくならぶこと。建物のこみあへること。密接。連接。

しっぴ 實費【名】實際に要したる費用。

じっぴ 實否【名】『否の字の音、正しくはふ』實なると實ならぬと。じっぷ。

じっぴがく 實費額【名】實際に費消したる高。

しっぴつ 執筆【名】㊀筆を執りて書くこと。㊁藏官を書立て置き、除目(ジモク)の當日、官に任ぜられたる人名を、その官名の下に書加ふること、又その人。著聞「その樣、除目の執筆の定なりけり」㊂連歌・俳諧の會の時、文臺の前に坐りて、人の句を懷紙(クワイシ)に書く役。「ふこと。

じっぴばらひ 實費拂【名】實費額を支拂ひ、實費を辨償すること。

じっぴべんしやう 實費辨償【名】實費額を辨償すること。

しつぷ 濕布【名】㊀濕へる布。㊁しっぷあんぽふ(濕布罨法)の略。

じっぷ 實父【名】實の父。血を分けたる父。(養父などに對して)

じっぷ 實否【名】じっぴ(實否)に同じ。「たしかに實否見て參りなんや」

しっぷあんぽふ 濕布罨法【名】しっぷはうたい(濕布繃帶)に同じ。

しっぷう 疾風【名】㊀疾く吹く風。烈風。㊁〔地〕『英 Strong wind』風級の一。毎秒六乃至十メートルほどの速力を有するもの。陸上にては、木の枝を動かす程度なり。

疾風に勁草を知る【句】『後漢書の王霸傳に「光武曰、潁川從レ我者、皆逝、而子獨留努力、疾風知二勁草一」とあるに本づく』困難を經て、始めて節操のすぐれたるを知る譬。〔諺語〕

しっぷう 櫛風【名】次條を見よ。

櫛風沐雨【句】『風に櫛(クシ)り、雨に沐すといふ義。唐書の狄仁傑傳に「文皇帝櫛レ風沐レ雨、冒二鋒鏑一以定二天下一」とあるに本づく』雨風に曝されて、辛苦艱難を嘗むること。

しっぷか 執深【名】熱心深きこと。多情。好色。無事志有意娘の手と取違へて、わたしが手を握るといふは、をへねえ、お前もしつぶかな人だ」

じっぷくぢや 十服茶【名】茶道にて、三種の茶を、各四服づつに裹みて、各の一服を試み、殘九服に他の一種(これを客といふ)を加へて、その十服を飲みあつること。後には茶三種を以て、各三服づつに裹みて、客を加ふるもあり。回茶。こうちや(貢茶)參照。

じっぷつ 實物【名】實際の物體。現物。

じっぷつかうくわん 實物交換【名】〔經〕『獨 Naturaler tausch』貨幣の媒介に依らず、直接に貨物と貨物とを交換して、交易を營むこと。物物交換。

じっぷつけいざい 實物經濟【名】實物交換によりて總の取引の行はるる經濟狀態。自然經濟。(貨幣經濟・信用經濟に對して)

じっぷつけいざいじだい 實物經濟時代【名】〔經〕實物經濟の行はれし時代。(貨幣經濟時代・信用經濟時代に對して)

じっぷつけうじゅ 實物教授【名】〔哲〕『生徒に實物を示して教授する義』ちよくわんけうじゅ(直觀教授)に同じ。

じっぷつじゅんびはふ 實物準備法【名】〔經〕『英 Rial property reserve method』紙幣發行法の一。不動產を引換準備として發行するもの。スコットランド人ロオ(J. Law)氏の發案に係る。

じっぷつぜい 實物稅【名】〔經〕貨幣以外の物品を以て納稅すること。主として、實物經濟時代に行はれたり。こくぜいひん(國稅品)參照。(貨幣稅・課役等に對して)

じっぷつだい 實物大【名】實物と同等なる大きさ。

しっぷはうたい 濕布繃帶【名】木綿ガアゼの類を水に浸して、局部にあて、その上

に油紙を被ひて、繃帯にて全部を巻くこと。濕布。濕布罨法(ヒフ)。

じっぷん 實聞【名】實際に聞くこと。(虚聞に對して)

しっぺい 疾病【名】やまひ。病氣。

しっぺい 執柄【名】■政治の權柄を執ること。執政。■攝政と關白との異稱。平家「執柄の息、英才が輩も」

しっぺい 竹篦【名】■『漆篦の音なりといふ』禪家にて、人を打戒むるに用ふる具。竹を割りて扁くせるものを合はせて作る。長さ三尺ばかりにして、弓形をなす。■遊戯の名。片方の手の指を、他の手の指にて反(ソ)らせて、人の手を打つこと。

しっぺいがへし 竹篦返【名】■竹篦にて打たれたる時、また竹篦にて打返すこと。■他の攻撃に對して返報すること。

しっぺいけ 執柄家【名】せっけ(攝家)に同じ。平家「平家亡び、源氏の世盡きなん後、大織冠の御末、執柄附の公達(クギ)たちの、天下の將軍になりたまふべきか」

しっぺいしょうしょ 疾病證書【名】或人の疾病に對し、醫師がその狀態を證明するために作製する文書。

しっぺいほけん 疾病保險【名】疾病に罹りたる場合に、罹病者並びに家族を扶助する目的にて設くる保險。獨逸のごときは、政府より強制して、下級民をこの保險に入らしむるに努めたり。

しっぺん 執鞭【名】■鞭を手に執ること。■鞭を執りて、馬を御すること。

執鞭の士【句】論語の述而篇に「富而可レ求也、雖二執鞭之士一吾亦爲レ之」とあるに本づく』御者。太平記「手を垂れて、廊に入る、宛も執鞭の士に同じ」

しっぺんしゃいっく 十返舍一九【名】〔人〕江戸の戯作者。通稱は重田貞一。駿府町同心重田與八郎の第二子。放縱、不羈にして、更務を屑しとせず、職を弟に讓りて、大阪に遊び、近松餘七と號して、淨瑠璃作者となり、寛政六年江戸に出で、後專ら戯作を事とす。東海道中膝栗毛最も世に名あり。天保二年歿す。年六十七。

しっぽ 疾歩【名】はやく歩むこと。はやあし。

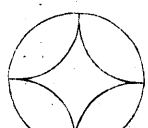
しっぽ 尻尾【名】■動物の尾。しりを。しりっぽ。一茶「大猫の尻尾でなぶる小蝶かな」■垂れたる尾。物の端。■失策の結果。ぼろ。

尻尾を出す【句】『人に化けたる狐の、尻尾をあらはす意』隱したる事、あらはる。化(ケ)の皮あらはる。ぼろを出す。

しっぽ【貌】**しっぽり**に同じ。用明天皇職人鑑「二人しっぽと臥し給ふ」

じっぽ 實母【名】實の母。生みの母。

しっぽう 七寶【名】〔佛〕■七種の珍重すべき寶。金・銀・瑠璃・頗梨(リ)・珊瑚・碼碯・硨磲(シャコ)の總稱。また珊瑚を除きて、赤眞珠を數へ、或は頗梨・珊瑚を除きて、水精(スイショウ)・赤眞珠を擧ぐるなど、諸説一樣ならず。七種寶。七珍。■しっぽうやき(七寶燒)の略。■模樣の一。七寶つなぎを菱形に擬し、輪違の四隅に、小さき玉を加へたるもの。■紋所の一。右の圖を見よ。


(四)うぽっし

七寶の池【句】〔佛〕『阿彌陀經に出づ』極樂にある池。底には金砂散布し、四方の階道は金・銀・瑠璃・玻璃等より成り、池上の樓閣は七寶にて作られ、また池中に、大きき車輪の如く、青色青光・白色白光・黄色黄光・赤色赤光等の蓮の花ありて、妙香を放つといふ。

七寶の樹林【句】〔佛〕**しちほうじゅ**(七重寶樹)に同じ。野守鏡「七寶の樹林」

じっぽう 實報【名】〔佛〕**じっぽうむしょうげど**(實報無障礙土)の略。盛衰記「實報・寂光(ジャクコウ)常在不滅」平家「實報・寂光の生身(シャウジン)の御佛」

じっぽう 實法【名】**じっぽふ**(實法)に同じ。

しっぽう 七寶【名】〔佛〕『阿彌陀經に出づ』極樂にある池。底には金砂散布し、四方の階道は金・銀・瑠璃・玻璃等より成り、池上の樓閣は七寶にて作られ、また池中に、大きき車輪の如く、青色青光・白色白光・黄色黄光・赤色赤光等の蓮の花ありて、妙香を放つといふ。

七寶の樹林【句】〔佛〕**しちほうじゅ**(七重寶樹)に同じ。野守鏡「七寶の樹林」

じっぽう 實報【名】〔佛〕**じっぽうむしょうげど**(實報無障礙土)の略。盛衰記「實報・寂光(ジャクコウ)常在不滅」平家「實報・寂光の生身(シャウジン)の御佛」

じっぽう 實法【名】**じっぽふ**(實法)に同じ。

しっぽう 七寶【名】〔佛〕『眞實の道に報いし無碍(ゲ)自在の國の義』四佛土の一。方便有餘(ウヨ)土の上に、更に一分中道の理を證悟せし人の果報土。眞實の法を行(ギョウ)じ、勝法を感得し、色心(シキシン)相妨げざる處にて、菩薩の居る處なりといふ。

しっぽう-やき 七寶燒【名】『七寶(一)を鏤めたるが如く美しとの意にていふ』普通には銅、時には、銀・金を下地とし、その表面に描出すべき圖樣に從ひ、その輪廓を眞鍮・銀等にて作りたる細き針金を糊附にし、その針金の間には、種種の色を現はすべき琺瑯を塗込みて燒附けたるもの。出來上りたる後まで、針金を殘して、表面に現はしたるものと、燒附きたる後、針金を除き去るものとあり。前者を有線七寶、後者を無線七寶といふ。七寶ながし。しっぽう。

しっぽく 賓朴・賓樸【名】信實にして、飾のなきこと。衒氣・矯飾のなきこと。素朴。

しっぽく 卓袱【名】■『字の唐音なりといふ』支那風の食卓。四方を朱にて塗り、高さ三尺、幅四尺ばかり、四脚ありて、周邊に布を垂る。しっぽくだい。**ちゃうぶく**(卓袱臺)參照。■**しっぽくれうり**(卓袱料理)の略。■蕎麥・饂飩の汁の中に、蒲鉾・椎茸・麩・野菜などを加へたる吸物。もと支那料理を折衷したるもの。[一]に同じ。

しっぽくだい 卓袱臺【名】**しっぽく**(卓袱)

しっぽくれうり 卓袱料理【名】古く長崎地方より流行し初めし支那風の料理。材料は、主として魚類を用ひ、各種の器皿に盛りて、中央の食卓の上に置き、各人取分けて食ふ。長崎料理。普茶料理に對して)

しっぽこ【名】**しっぽく**(卓袱)の轉訛。

じっぽふ 實法【名】■〔佛〕實體ある法、即ち五蘊(ウン)(假法(ケホ)に對して)■節のなき心。きまじめ。信實。盛衰記「實法の者には、物仰せにくければ」

じっぽん 實犯【名】〔佛〕實際に罪を犯しこと。保元「かの大納言は、實犯にて、同じき九月二十二日終に伊豆國へぞ流されける」

しっぽり【名】男女のしっぽりと契ること。次條參照。今國姓爺「毎夜毎夜のしっぽりが重なつたら、孕ふた子より前に抱いた大王樣、いとしいとしといはせて見しよ」

しっぽり【貌】■**しんみり**に同じ。本朝二國誌「二階の物音立ちぎけば女はしっぽり打ちとけ聲」■男女の情愛の濃かなるさま。しっぽと。傾城佛の原「今の男に、遂にしっぽりとしたことはござんせぬ」■『十分に潤ふ義』多きさま。娥歌加留多「七日迄留の用意とれば、金銀はしっぽり」

しっぽる【動四自】『**しっぽり**を動詞形に用ひたる語』しっぽりと睦み語る。打解けて男女の交りをなす。娥歌加留多「あれ人が見るはいの。あの舟借つて、沖中で、人目いとはずしっぽつては何とあろ」

しづ-まき 倭文纏【名】倭文を纏きたること、又その物。「古語」起「玉まきのあぐらに立たしし づまきのあぐらに立たし」

しづ-まつき 賤染月【名】陰暦五月の異稱。「古語」藏玉集「いかがしてわが宮の小笠をさして行かんしづまの空のさみだれの頃」

じつ-まん 實滿【名】十分に滿つること。

充實。

しづまり 鎭【名】しづまること。

しづまりう 志津摩流【名】書道和樣の一。入木道より出でたる佐佐木志津摩の創めたるもの。

しづまりかへる 鎭返る【動四自】この上なく鎭る。極めて靜かなり。

しづまる 鎭る【動四自】一しづかになる。騷動止む。おちつく。玉葉「浮雲に早くちかひてゆく月のはれまになれば風ぞしづまる」二靜謐なり。治まる。起「是以西州既謐(シヅマ)」三その地に鎭坐す。起「うながけりて今に鎭ります」四ねむる。ねいる。源氏「かりなるやうにて大殿ごもれば、人人もしづまりぬ」五勢力衰ふ。源氏「そこら所せかりし御勢のしづまりて、この君をたのもし人におぼしたる」六心浮きたたず。輕輕しからず。貴著なり。狹衣「年のほどよりも、こよなく大人びしづまりたまへるけにや」

しづみ 七美【名】〔地〕但馬國の舊郡の一。和名抄に志豆美、文祿帳に七味、郡區編制に七味と見ゆ。明治二十九年二方(カタ)郡と合はせて美方(ミカタ)郡を立つ。

しづみ 沈【名】一沈むこと。二ぢん(沈)(沈子)に同じ。

しづみうを 沈魚【名】常に水の下層に棲息せる魚類。鯛・黒鯛・石伏・河豚(フグ)の類。

しづみぎ 沈木【名】うもれぎ(埋木)に同じ。〔古語〕拾遺「泯川春の月なみたつごとに身はしづみぎの下に朽ちつつ」

しづみや 鎭宮【名】神を鎭め奉る宮。〔古語〕「志津宮にしづめ仕へまつりて」

じつみやう 實名【名】まことの名。本名。なのり。(假名(カナ)に對して)

じつみやく 【名】馬の脚の附根と膝との中間の部分の稱。

しづむ 爲集む【動下二他】なしあつむ。取りあつむ。あつむ。〔古語〕「百草」年頃かきつめさせたまひける繪物語など皆燒けにし後こそ今年のほどに、しづめさせたまへるも、いみじう多かり」

しづむ 執務【名】事務を執ること。

しづむ 沈む【動四自】一水中へ深く入る。萬葉「なには潟しほひなありそねしづみにし妹が姿を見まくくるしも」二心が浮立たず。思ひ込む。思ひ屈す。うんず。源氏「御おば、北の方慰むかたなくて、思ししづみて」三身分賤しくなる。零落す。おちぶる。沈淪す。源氏「もとの品たかくまれながら、身はしづみ、位みじかくて」四くだる。おつ。さがる。風雅「浦の松木の間に見えて沈む日のなごりの浪ぞしばしうつらふ」五弱く微かになる。衰ふ。「脈しづむ」六亡佛する。源氏「いかで彼のしづみたまふらん罪救ひたてまつることをせん」七涙にしづむ。なきしづむ。源氏「宮はしづみ入りて、そのままに起上りたまはず」八身の丈(タケ)をちぢむ。かがくぐる。浮世床「打ってかかる奴を、しづんで、足の親指を取って、ぐいとひったてると」

沈む瀨あれば、浮む瀨あり【句】人の零落する時もあれば、繁昌する時もあり。榮枯定りなし。〔諺語〕

沈めば浮む【句】前條に同じ。

しづむ 沈む【動下二他】一水中へ深く入らしむ。二賤しき境遇に置く。新古今「老いにける渚の松の深綠しづめる影をよそにやは見る」三眠らしむ。寢入らしむ。しづまらしむ。〔古語〕伊勢「女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに來りけり」

しづむ 鎭む【動下二他】一心を抑へつく。氣を落ちつかす。萬葉「まき柱ふとき心はありしかどこのわが心しづめかねつも」飢陣六作「いや先づしづめて聞き給へ」二治む。源氏「世のまつりごとをしづめさせたまへることも」三神をいつきまつる。神を鎭坐せしむ。

じつむ 實務【名】實際の事務。

じつむ 實夢【名】實際の事實となる夢。まさゆめ。(虛夢に對して)百合若大臣野守鏡「百合若さては實夢にて、きやつが胸にも徹したりと」

じつむか 實務家【名】一實務に當る人。二實務に練達したる人。

じつむじかん 執務時間【名】執務すべき「時間。

しづめ 沈【名】一沈むること。二沈むるためのおもり。おもり。

沈に掛く【句】おもりを附けて、人を水中に沒入せしむ。松風村雨東帝鑑「最早科は極ったり、夜に入って、切戸の沖へ簀卷にして沈にかけよ」

しづめ 鎭【名】しづむること。おさへ。鎭護。萬葉「日の本のやまとの國のしづめともいます神かも」

じつめ 實目【名】まじめ。實體。

じつめ 字詰【名】文字の詰方。文字の並べ方。

しつーめい 失明【名】めしひ。盲目。喪明。

しつーめい 失名【名】姓名の判然せぬこと。失名氏。

じつーめい 實銘【名】じっちょく(實直)に同じ。

じつーめい 實名【名】じつみやう(實名)に同じ。

しつーめいし 失名氏【名】『名氏卽ち氏名を失する義』しつめい(失名)に同じ。

じつーめいし 實名詞【名】〔語〕めいし(名詞)に同じ。(代名詞に對して)

しづめに 沈荷【名】海難の場合に、船脚を輕くせんために、海中に投棄したる貨物。その價格は共同海損とす。

しづめーわく 沈枠【名】堤の根止又は潰決せる堤防の再築などに使用する枠形の防水設計。太き丸太を四隅に柱とし、横貫にて連ね、それに沿ひて、小材を檣のごとくに並列し、底部にも小材を敷並べ、その中に丸石を塡めて、水中に沈下す。

しづめーをり 靜折【名】『来廣の先端の折目の締ぬに區別していふ』末の方まで疊まりてある扇、卽ち普通の扇の折方。

しつーもん 質問【名】とひただすこと。說明を求むること。質疑。

しつもんーがき 質問書【名】次條に同じ。

しつもんーしょ 質問書【名】質問の趣旨を記載せる書面。しいもんがき。

しつもんーせん 質問戰【名】議場にて、激烈なる質問をなすこと。

しづや 閑野【名】一水づける低地なりとも、地名なりともいふ。〔古語〕千載「さみだれの日數へぬればかりつみしづやの小菅朽ちやしぬらん」二神樂歌の一。神樂「しづやの小菅鎌もてからば生ひむや生ひむや小菅」

しづーやか 靜やか【貌】しづか(靜か)に同じ。源氏「さまかたちは、めでたくをかしげにて、しづやかになまめいたまへれば」

しつーやく 疾疫【名】しっえき(疾疫)に同じ。盛衰記「永祚の風、承平の煙塵、正暦の疾疫」

しつーやみ 濕病【名】濕毒をわづらふこと。かさかき。〔京都大阪の語〕

じつゆう 實融【名】〔人〕高僧。俗姓は藤原。證道と號す。圓照及び圓珠に從ひて學び、また高野山に登り賴賢に就いて傳法灌頂を受け、金剛三昧院に補せらる。足利尊氏深く歸依して供給を絕たず。三學兼備の名あり。延元四年寂す。年九十。

しつーよう 失容【名】〔醫〕失語症の徵候として、身振その他身體の態度を以て、思想を發表する力を失ふこと。

じつーよう 實用【名】實際に必要なること。

じつようーしんあん 實用新案【名】〔法〕既存の物品につきて、その形狀・構造・組合(ヲ)等に新工夫を加へ、實用上の利便を與ふること。創造的工夫にあらざる點において、發明と區別せられ、美術的考案にあらざる點において、意匠と區別せらる。

じつようしんあんーけん 實用新案權【名】〔法〕實用新案の登錄によりて發生する私法上の權利、卽ちその登錄を受けし物品を製作・使用・販賣又は擴布するを得る權利。

じつようしんあんけんーしゃ 實用新案權者【名】〔法〕實用新案權を專有する人。

じつようしんあんーとうろく 實用新案登錄【名】特許局に出願して、實用新案原簿に實用新案の登錄を受くること。

じつようしんあんとうろくーしょう 實用新案登錄證【名】實用新案原簿に登錄したる證に下附する文書。

じつようしんあんとうろくーほふ 實用新案登錄法【名】〔法〕實用新案に同じ。

じつようしんあんきろく-ひん 實用新案登錄品【名】實用新案の登錄を受けたる物品。

じつようしんあん-はふ 實用新案法【名】實用新案に關する事項を規定したる法律。明治三十八年制定、同四十二年改正。

じつよう-しやう 失用症【名】〔醫〕精神作用の障碍によりて、日用の事物の用法を誤ること。

じつよう-しゅぎ 實用主義【名】〔哲〕ぷらぐまちずむに同じ。

じつよう-たんゐ 實用單位【名】〔理〕『英 Practical unit』CGS 法に依る單位の或倍數をして、實用に適せしむる大きさに變ぜしめしもの。

じつよう-てき 實用的【貌】實用に適するさま。實際に役立つさま。

じつよう-むき 實用向【名】體裁よりも、實用に適するを主としたること。

しつら【名】わらびづな(蕨綱)に同じ。

しつ-らい 失例【名】ふれい(不例)に同じ。

しつ-らい 疾雷【名】じんらい(迅雷)に同じ。

しつら-ふ【動四他】『爲(ス)つらふの義なるべし。つらふは接尾語』設け裝ふ。ととのふ。とり繕ふ。裝置す。源氏「そこに迎へてんと思して、しつらひおきて」

しつ-らん 濕爛【名】〔醫〕發汗・摩擦などのために、皮膚の赤くなりて爛(ヴ)るること。ただれ。

しつらん 執蘭【名】支那鄰國の古俗にて、三月の上巳(ジヤウシ)に、溱(シン)洧(ヰ)二水の邊にて、魂魄を招き和(サ)め、不祥を攘(ハラ)ふために、禊を執りて、祓をなしし もの。

しづり 垂【名】しづれ(垂)に同じ。〔古語〕萬葉集「いささらば木の下道はよきてゆかん嵐にたへぬしづりひまなし」

しづり 倭文【名】しづおり(倭文織)の略。〔古語〕起倭文神、此云斯圖梨俄未二

じつ-り 實利【名】現實の利益。實際の効用。

じつ-り 實理【名】實際上より得し道理。

じつり-しゅぎ 實利主義【名】〔哲〕『英 Utilitarianism』■實利を標準とする主義。現實主義。■〔法〕刑罰は社會の安寧幸福を保全するを目的とする社會防衛の手段にして、社會の必要と實益とに起因すといふ主義。

しづり-は 垂葉【名】しだりは(垂葉)に同じ。

しつ-りやう 質量【名】〔理〕『英 Mass』物體の含有する物質量。普通物體の重量とほぼ一致す。これを重量と區別して考ふるは英國人ニュウトン(Newton)に始まり、氏はこれに定義を與へて、物體の密度とその容積との乘積にして、密度は物體の單位容積の質量なりといへり。その他、諸學者の定義あれども、物質の觀念容易ならざるがために、根本的明瞭なる定義を得ること難し。されど物理學上の計算の基礎としては、現在の諸定義にて、差支を見ず。しってん(質點)參照。

しつりやう 質量不變の定律【句】〔化〕『英 Law of constancy of mass』化學變化に依る諸物質の量の總和は不變なり、即ち物質は化學變化のために增減することなしといふ、化學の根本たる定律。水素一量と酸素一量とを化合せしむる時は、常に水の九量を生ずるがごとく、物質は化合する時、その性質の全く一變するに拘らず、質量は化合前の總和に同じく、また反對に分解して生じたる物の質量の總和は、元の化合物の質量と同一なるによりて、この定律の誤にあらざるを知るべし。物質不生不滅の定律。

質量保持の定律【句】〔化〕『英 Law of conservation of mass』前條に同じ。

しつりやう 濕量【名】〔商〕水分を含めるままの重量。

しつりやう-けいげん 濕量輕減【名】〔商〕運送中濕氣を含みて、重量を增したる貨物に對し、濕量に相當するだけの代價を輕減すること。

しづり-ゆき 垂雪【名】しづり落つる雪。萩風「疾て起きぬ戸をこそぐるやしづり雪」

じつ-りよく 實力【名】實際の力量又は技倆。

じつりよく-ふうさ 實力封鎖【名】實際の武力を用ひて、封鎖■を行ふこと。現時の封鎖は、皆これなり。紙上封鎖に對して

じつり-ろん 實理論【名】〔哲〕じっしょうろん(實證論)に同じ。

しづる【動下二自】木などに積りたる雪なだれ落つ。〔古語〕萬葉百首「あさまだき松のうらばの雪は見ん日かげさしこばしづれもぞする」

しづる【動四他】前條に同じ。〔古語〕

しづれ【名】しづれて落つること。しづり。〔古語〕散木「雪を重みしだれるみきの枝なればさはる小笠にしづれ落つなり」

しつ-れい 失禮【名】禮義を缺くこと。しちらい。無禮。失敬。闕禮。亡狀。

しつ-れい 疾癘【名】えきれい(疫癘)に同じ。

じつ-れい 實例【名】實際にある事例。

じつ-れう 實料【名】〔哲〕『英 Matter』形式を待ちて、始めて個體となる素質。これを重んずるものは、即ち唯物論なり。けいしき(形式)■參照。

じつ-れき 實歷【名】實地の經歷。

じつれきだん 實歷談【名】實地に經歷したる事につきての談話。

しつ-れん 失戀【名】成就せぬ戀。

しつ-ろ 失路【名】■進路を失ふこと。■失意の地位に立つこと。〔記錄。

じつ-ろく 實錄【名】事蹟のありのままの

じつろく-もの 實錄物【名】德川時代の小說の一種。歷史を根據とし、これを潤色附會し、讀者の興を惹くを主としたるもの。復讐譚・御家騷動・俠客譚等の類にして、文體概ね質實平易、大抵作者の署名なく、寫本にて行はれたり。

し-づ-わ 後輪【名】『後(シリ)つ輪の略』鞍骨(クラボネ)の後部の高くなりたる部分。しりつは。あとわ。しりわ。(前輪に對して)

じつ-わ 實話【名】じったん(實談)に同じ。

じつ-わん 漆椀【名】漆ぬりの椀。

しつゐ 室韋【名】支那興安嶺の山地より嫩江(ドン)の流域にかけて住せしツングス、及び蒙古兩民族の總稱。

じつ-ゐき 日域【名】〔地〕日本國の異稱。じちゐき。にちゐき。

じつゑ 實惠【名】(人)眞言宗の高僧。俗姓は佐伯。讃岐國の人。弘法大師に侍して、兩部の密教を受け、その奧旨を究む。河內國に觀心寺を創起し、嵯峨・淳和兩天皇の歸信を辱くす。承和十四年寂す。年六十三。普通「じちゑ」と呼ぶ。

しづゑ-の-まつり 死杖祭【名】刑死せしもののために、社を建てて、その靈を祀ること。活速祭(イクハヤマツリ)。

しつ-ゑん 漆園【名】■漆の樹を植ゑたる園。■(人)『曾て漆園の公吏たりしことあるによりていふ』さうし(莊周)に同じ。漆園の學【句】莊子の學。

しづを 賤男【名】「賤(ヅ)の男(ヲ)」に同じ。〔古語〕萬葉「堀江よりみをびきしつつみ船さすしづをのともは川の瀨まうせ」

しづをか 靜岡【名】〔地〕■伊豆(七島を除く)・駿河・遠江の三國の全郡を管轄する縣。縣廳を駿河國靜岡市に置く。■駿河國にある市。安倍川の左岸に近く、中古、國府所在の地なりしにより、府中又は駿府と呼ばれ、明治維新の際、今の名に改めらる。市制施行以前は、安倍郡に屬したり。

しづをかざいく 靜岡細工【名】するがざいく(駿河細工)に同じ。

しつ-をく 漆屋【名】漆にて塗れる建築物の總稱。宇治の鳳凰堂・中尊寺の金色(コンジキ)

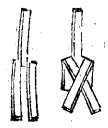
堂、京都の金閣寺、日光の東照宮など。

して 仕手 【名】『仕は爲(ス)の義』 Ⅰ おこなふ人。する人。 Ⅱ 巧になす人。やりて。 Ⅲ 能樂及び狂言にて、主要なる技を行ふ役、又その人。一曲のうちに、中入(ナカイリ)ある場合には、その前の方を前仕手、後の方のを後(ノチ)仕手と呼ぶ。(脇(ワキ)連(ツレ)に對して)

して 【接】『然しての略』しかして。そして 饗撃歌 して、切米は何程ほしい」して見れば 【句】かくのごとき理由なるが故に。されば。

して 【助】 Ⅰ ありて。 萬葉「吉野なるなつみの川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして」 Ⅱ を以て。源氏「こぎみして、西にかへり思ふ心はしりたまへりやと、いひつかはす」 Ⅲ にて。古今「ひとりして物をおもへば秋のよの稻葉のそよといふ人のなき」 Ⅳ に因りて。狂言「きやつめが、酒にゑひて、臥してをるからして、遲うござる」

して 四手 【名】『しづ(垂づ)の假體言』 Ⅰ 七五三繩(ナハ)・玉串(タマグシ)などに附けしだらするもの。古は木綿(ユフ)四手(シデ)を用ひて、木綿四手とも呼びしが、今は紙を用ふ。新古今「けふまつる神の心やなびくらんしでに波立つ佐保の川風」 Ⅱ 白熊(ハグマ)の毛にて作りたる小さなる拂子(ホッス)のごときもの。槍の柄につけて、槍印とす。 Ⅲ 〔植〕しでやなぎ(四手柳)に同じ。



して 死出 【名】 Ⅰ 〔植〕いぬでに同じ。 Ⅱ 〔動〕せぐろいわし(背黒鰯)の異稱。

して 師弟 【名】師匠と弟子と。

して 師弟 【名】師匠と弟子と。師弟の緣は三世の間つながること。「主從は三世」參照。〔諺語〕 謠曲(雷電)「眞實の志の深きことは、

して 子弟 【名】 Ⅰ 子と弟と。 Ⅱ 年少者。(父兄に對して)

してい 私邸 【名】自分のやしき。(官邸に對して)

してい 賜邸 【名】拜領の邸。恩賜の邸宅。

してい 指定 【名】 Ⅰ それとさし定むること。 Ⅱ 〔法〕行政官廳が、法令の範圍内に於て、或事實を調査し、これに特定の資格を與ふること。また一私人がある者を指定して、權利を取得せしむること。 Ⅲ 〔語〕助動詞の、事物及びその動作狀態を指定する意のもの。即ち「大なり」「行くなり」「善きなり」の如く、名詞・動詞・形容詞に添はるなり、及び「父、父たらずとも、子は子たるべし」の如く名詞に添はるたりこれなり。

してい 仕丁・使丁 【名】しちやう(仕丁)に同じ。

してい 視聽 【名】視ると聽くと。しちやう。

してい 紫庭 【名】『紫は紫微星の意』だいり(內裏)に同じ。

してい 【貌】鼓の音の形容。 してい 參照。

してい 紫泥 【名】紫色の泥土。紫泥の封 【句】『漢舊儀に「天子六璽、皆以二武都紫泥一封」、史記高祖紀の正義に「天子六璽、皆以二武都紫泥一封」、一說に、印色紫泥に似たるよりいふと』支那漢の代の詔書。

じてい 耳底 【名】耳のそこ。耳のおく。

じてい 耳聽 【名】耳にて聽くこと。

じてい 次帝 【名】 Ⅰ 次の帝。 Ⅱ 次に帝となるべき人。皇太子。狂言(橫座)「惠亮なづきを打てば、次帝位にそなはる」

していかう 指定港 【名】船積・陸揚又は積替をなすべく指定せられたる港。

していがくかう 指定學校 【名】文部省がその卒業生に對して、或特別の資格を有する者と認むる學校。

していかくさうそくにん 指定家督相續人 【名】〔法〕法定の推定家督相續人なき場合に、被相續者の指定せる家督相續人。

していこうけんかんさくにん 指定後見監督人 【名】〔法〕最後に財產管理權を有する親權者が、遺言に依りて指定せる後見監督人。

していこうけんにん 指定後見人 【名】〔法〕未成年者に對し、最後に財產管理權を有する親權者が、遺言を以て指定したる後見人。

していさうぞくにん 指定相續人 【名】〔法〕指定家督相續人と指定遺產相續人との總稱。

していし 志手石 【名】木などの化石。東海道名所記「木の葉の跡ある石、山中より取りきたる、色黑うして縱理(ジュリ)あり。志手石と名づく」

していじかう 指定事項 【名】 Ⅰ 指定したる事項。 Ⅱ 電報の取扱に就きて、發信者の指定する事項。即ち至急・至急親展・返信至急・追尾・再送・同文・留置・扇待の類、これなり。

していしやう 指定商 【名】特に指定せられたる商人。御用商人。

していち 指定地 【名】指定する場所又は「土地。

していちわたし 指定地渡 【名】〔商〕賣買せられたる物品の受渡を、賣主又は買主の營業地以外の、買主の指定したる場所にて行ふこと。運搬上の諸費用は、賣主の負擔に屬す。

していてい 【貌】鼓の音の形容。 してい 參照。

していねだん 指定値段 【名】〔商〕さしね(指値)(二)に同じ。

していめいだい 指定命題 【名】〔哲〕『英Definite proposition 主語によりて言表はされたる範圍が、明かに指定確定せられたるに由りていふ』全稱命題と單稱命題との總稱。確定命題。

していんさうそくにん 指定遺產相續人 【名】〔法〕被相續者の指定したる遺產相續人。

してう 詩調 【名】詩の調子。

してう 市朝 【名】『市場は朝開くによりていふ』まちなか。市中。太平記「我が首を刎ねて、市朝に被レ曝歟」

してう 駛潮 【名】〔地〕きやうてう(競潮)に同じ。

してう 思潮 【名】『英Current thought』その時代の人人の間に通有する思想。時代思潮。

してう 鷙鳥 【名】他の鳥類を捕へて食ふ猛禽、即ち鷲・鷹などの類。

してう 翅鳥 【名】極めて早く飛ぶ鳥。飛鳥。 Ⅱ 圍碁にて、遁ぐる石を斜に追詰むること。園姓參合鑑「四つ目殺しに中手を入れて、してうにかけて打切って」

してう 四鳥 【名】四羽の鳥。

四鳥の別 【句】『孔子家語の顏回篇に「回聞、桓山之鳥、生四子一焉、羽翼既成、將分二于四海一、其母悲鳴而送レ之」とあるに本づく』四羽の鳥が、その母鳥に別るること。親子の悲しきわかれ。保元「人界に生を受けながら、鳥にあらねども、四鳥の別を致し」謠曲(歌占)「四鳥の別、親と子に、二度逢ふぞ不思議なる」

してう 施條 【名】 Ⅰ 物に筋を附くること。 Ⅱ 銃身又は砲身の內部に、螺旋狀の筋を刻みつけて、彈丸の飛行を强むること。

してう 枝條 【名】えだ。樹枝。

してう 四條 【名】 Ⅰ 四本のすぢ。よすぢ。 Ⅱ 〔地〕京都市の東西の街道の一。

してう 時鳥 【名】 Ⅰ 時節に應じて鳴く鳥。例へば春における鶯の類。 Ⅱ 〔動〕ほととぎす(子規)に同じ。

してう 慈烏 【名】〔動〕からす(烏)に同じ。

してう 自調 【名】〔佛〕三自の一。戒を持つこと。

自調・自淨・自度(ド) 【句】〔佛〕自己一人の煩惱を滅盡して、自己一人のみ宇宙の眞理に徹底すること。小乘の菩薩の、自利的に悟道して、利他的に慈悲を行ふ意志なきこと。三自。

自調・自度(ド) 【句】〔佛〕前條に同じ。野守鏡「自調・自度の二乘心」

してう-おほはし 四條大橋 【名】〔地〕京都四條通の東方に方りて、加茂川に架れる鐵橋。長さ五十四間、幅四間。

してう-こうろん 四條後院 【名】しゆじゆく

ん(朱雀院)に同じ。

じてうさい 耳鳥齋・二鳥齋【名】〔人〕徳川時代の漫畫家。通稱は松屋平三郎(一説には、平三また平兵衛)。別號は、蝙蝠齋。大阪の酒造家、のち骨董を業とす。畫風卑俗なれども、獨創に富む。別に戯作を試み、また道化浄瑠璃を善くして、その藝名を松平(ヘイカ)と稱す。安永頃の人。

じてうじじやうじど 自調自淨自度【句】じてう(自調)の條下を見よ。

じてうじど 自調自度【句】じてう(自調)の條下を見よ。

じてうじゆう 施條銃【名】すないどるに同じ。

じてうたいしやう 四條大將【名】〔人〕みなもとさだ(源定)に同じ。

じてうだいなごん 四條大納言【名】〔人〕ふぢはらきんたふ(藤原公任)に同じ。

じてうだうぢやう 四條道場【名】こんれんじ(金蓮寺)を見よ。

じてうたかすけ 四條隆資【名】〔人〕勤王家。隆實の子。後醍醐天皇に仕へて倒幕の擧に參し、建武中興の政に與る。次いで足利尊氏の叛するや、新田義貞と力を合はせて攻伐し、正平三年後村上天皇を奉じて賀名生(アナフ)に避け、同七年足利義詮と戰ひて陣歿す。

じてうち しで打【名】しでうつこと。

じてうちゆうなごん 四條中納言【名】〔人〕■ふぢはらきんたふ(藤原公任)に同じ。■じてうたかすけ(四條隆資)に同じ。

じてうつ しで打つ【動四他】『しでは、砧(キヌタ)の聲。また繁き意なりともいふ』砧を打つ。〔古語〕後拾遺「小夜ふけて衣じてうつ聲きけば急がぬ人もねられざりけり」

じてうてんわう 四條天皇【名】〔人〕第八十七代の天皇。御名は秀仁(ヒデヒト)。後堀河天皇第一の皇子。御母は藻璧門院藤原蟲子(コウシ)。在位十年(紀元一八九三年—一九〇二年)。仁治三年崩ず。壽十二。

じてうど 自調度【名】〔佛〕「自調・自度」に同じ。

じてうなはて 四條畷【名】〔地〕河内國中河内郡枚岡(ヒラカ)南村大字四條より北方飯盛(イヒモリ)山麓にかけての廣野。正平三年楠木正行同正時の、高師直と戰ひて陣歿せしところ。

じてうなはてごじんじや 四條畷神社【名】河内國北河内郡甲可(カフ)村大字南野飯盛(イヒモリ)山麓に鎭坐せる別格官幣社。祭神は楠木正行。

じてうのみや 四條宮【名】■山城國京都四條の南、西洞院の東に在りし藤原賴忠及び公任の邸宅。■〔人〕ふぢはらひろこ(藤原寛子)の稱。

じてうは 四條派【名】『吳春の住所は京都の四條通なりしよりいふ』日本畫の一派。松村吳春を祖とす。四條流。

じてうはう 施條砲【名】砲身の内部に施條ある大砲。線條砲。

じてうふう 四條風【名】四條派の畫風。

じてうむぎ 四條麥【名】〔植〕しかくむぎ(四角麥)に同じ。

じてうりう 四條流【名】■築山・造庭法の一派。後嵯峨天皇より創まるといふ。■じてうは(四條派)に同じ。

じてうれい 市條例【名】市がその自主權に由りて、市の事務及び市民の權利・義務を定めたる事項。その事項は、法律命令に抵觸せざるを要す。

じてがさ 四手笠【名】武具の指物(サシモノ)の一。笠の緣より細く裂きたる紙を垂れたるもの。

じてかす 爲出來す【動四他】しいだす(爲出す)に同じ。「を見よ。

じてかへす 爲而返す【句】す(爲)の條下

じてき 四敵【名】四方の敵。謠曲(編形)「たとひ四敵の寄せ來るとも、この旗をさし上げば」

じてき 指揮【名】■さししめすこと。■あばき出だすこと。摘出。摘發。

じてき 詩的【貌】『英 Poetical』詩趣を含めるさま。現實を離れて、感想に入るさま。

じてき 史的【貌】『英 Historical』歷史に記載せらるるほどに有名なるさま。歷史上の。歷史としての。

じてき 自適【名】『自らその意に適へりとする意』他の制縛を受けず、心のままに樂しむこと。「悠悠自適」

じてきくうさう 詩的空想【名】〔哲〕次條に同じ。

じてきさうざう 詩的想像【名】〔哲〕感想上に馳せ、現實とかけ離れたる思想。その心像必ずしも客觀的實在と契合するを要せず。ダンテの冥界の想像の類。詩的空想。藝術的想像。

じてぐるま 四手車【名】武具の指物(サシモノ)の一。車の輪に細き紙を垂れたるもの。

じてこい 爲而來【句】よしきた。いざ來れ。丹波與作「これ、この馬を知ったか。池鯉鮒(チリフ)の市で九兩一歩、親方の物なれど、十六貫のかはりに、五百目の馬なら、してこいと」

じてこぶし 四手辛夷【名】〔植〕木蘭科に屬する落葉喬木。葉・花形ともに辛夷に似、ただ花瓣の數多く、紫條を有するを異なりとす。ひめこぶし。

(しぶこでし)

じてこまぜう 【句】す(爲)の條下を見よ。

じてござら 四手櫻【名】〔植〕ざいふりぼく(采振木)に同じ。

じてして 【接】してを重ねて意を强めたる語。狂言(采ひらがり)「してして、言ひつけた末廣がりを求めて來たか」

じてしやじん 四手沙參【名】〔植〕桔梗(キキヤウ)科に屬する多年生の草。山野に自生し、莖の高さ二三尺、葉は長卵形、夏秋の際、紫色又は白色の花開く。觀賞用とす。やうらくしゃじん。ちやうじぎきやう。

じてたをさ 死出田長【名】〔動〕してのたをさ(死出田長)に同じ。〔古語〕催馬樂(妹之門)「ひぢかさの雨も降らなむしてたをさあまやどり宿りてまからむして田長」

じてつ 磁鐵【名】〔鑛〕次條の略。

じてつくわう 磁鐵鑛【名】〔礦〕『英 Magnetite』しさんさんくわてつ(四三酸化鐵)を見よ。

じてづれ 仕手連【名】能樂及び狂言にて、仕手の補助をする役。つれ。

じてつい 【名】『次條の意より轉じていふ』鼓を打つこと。また鼓の異稱。盛衰記「この知康は、究竟のしてついの上手にて、鼓判官と、異名に呼びける」

じてつい 【貌】『じてうつ(して打つ)を見よ』鼓の音の形容。しとい。しといとい參照。

じてど 下手渡【名】〔地〕岩代國伊達(ヲダテ)郡小牛(コウシ)村にある字。立花氏の舊藩地。

じてどの 仕手殿【名】その道にかけての老功者。やりてもの。一代女「鹿子(カノコ)屋の仕手殿も見えける」

じてのき 四手木【名】〔植〕しでやなぎ(四手柳)に同じ。

じてのく 【句】す(爲)の條下を見よ。

じてのたび 死出の旅【句】して(死出)の條下を見よ。

じてのたをさ 死出田長【名】〔動〕『くわんのうてう(勸農鳥)を見よ。一說には死出は賤(シヅ)の意なりと』ほととぎす(時鳥)の異稱。「名のみ立つしてのたをさはけさぞ鳴くいほりあまたとうとまれぬれば」

じてのやま 死出山・死天山【名】〔佛〕『別譯阿含經の四に「老山能壞・壯年盛色、病山能壞・一切强健、死山能壞・一切壽命、衰耗之山能壞・一切榮華富貴」とある死山に本づきて、十王經に「閻魔王國境死天山南門、亡人重過、兩莖相逼、破レ藤割レ骨折レ膚湯鑊、死天重レ死、故言二死天一」とあるに出づ。死天山は死の險難を山に譬へしなり』死後たどり行くべき山路。さんづのかは(三途川)參照。拾遺「しでのやま越えて來つらん時鳥こひしき人の上語らなん」

じてのやまぢ 死出山路【名】死出の山の山路。〔發錢〕かくながらは、死出の山路も越えやるやうも侍らぬなんなど」

じてばしら 仕手柱【名】■能舞臺と橋掛(カケリヤ)との間の角にある柱。仕手の所作の起點とも終點ともなる所。■昔の芝居の

舞臺の上手(カミ)にありし柱。仕手の倚りかかりし所。

じてふ 寺牒【名】寺院より官廳に上る文書。又は寺と寺との間に取交はす牒書。

してふたい 試帖體【名】〔文〕『支那唐の代に、進士に科したるによりていふ』ごとんはいりつ(五言排律)に同じ。

して-むし 死出蟲【名】〔動〕鞘翅(シャウ)類に屬する昆蟲。前翅短く、その端恰も切斷せられたるがごとき形をなし、腹部の末端裸出し、體黒色にして、三條の赤褐紋あり。好みて動物の屍體に集まる。

(しむでし)

してん 絲轉【名】昔の小銃のねぢまき。

してん 支店【名】■本店のわかれ。でみせ。分舖。■〔法〕本店監督の下に、必要なる場所に設けたる營業所。

してん 肆店【名】みせ。商店。店舖。

してん 市店【名】まちのみせ。市肆。

してん 祀典【名】祀るべきものを記載せる書物。

してん 趾點【名】〔數〕『英Foot又はTrace』垂線又は斜線が直線若しくは平面と交はる點。「示。

してん 指點【名】ゆびさし示すこと。指

してん 視點【名】〔美〕『英Point of sight』繪畫の遠近法にて、人の目と直角をなせる地平線上の假定の一點。人がこの點を注視して、道路に立つ時、地面と並行する諸線は、皆この一點に集中・消失するが故に、視覺の中心とも稱す。せうてん(消點)參照。

して-てん 支點【名】〔理〕『英Fulcrum』槓桿を支ふる固定せる點。(重點・力點に對して)

してん 司天【名】てんもんはかせ(天文博士)に同じ。盛衰記「件輩在二繫囚中一免二遠流之罪一、今度會レ赦、殊蒙二司天之奏一」

してん 至點【名】〔天〕『英Solstitial point又Solstices』夏至點と冬至點との總稱。

してん 四天【名】■四季の天、即ち蒼天(春)・昊天(夏)・炎天(秋)・上天(冬)の併稱。■〔佛〕てんわう(四天王)の略。太平記「多聞・持國・增長・廣目の四天、須彌の四方に住んで」

してん 四天【名】四天王と日天子・月天子との併稱。鎌田兵衞名所盡「四天・二天の金剛力」

してん 四天の座【句】次條に同じ。

してん 四天の鋲(カナヅ)【句】兜の前後・左右に一箇づつ打附けたる鋲。四天の座。四天の星。

してん 四天の星【句】前條に同じ。

してん 史傳【名】歷史と傳記と。

してん 師傳【名】師匠より傳授せること。

してん 賜田【名】古、功田と同じく、官職・位階に拘はらず、特旨によりて賜ひし田、また林野・牧場などを賜ひしこともあり。私田の一にて、輸租田の一なり。別勅賜田。

してん 私田【名】私有の田地。令制にては、位田・職(シキ)田・賜田・口分(クブン)田、その他各種の雜色、及び墾田の總稱にして、通例輸租田なるを法としたり。(公田に對して)

してん 紫殿【名】彩(イロド)りたる宮殿。太平記「水中に入ること五十餘町、一の樓門あり。……朱樓紫殿、玉の欄干」

してん 紫電【名】■紫色を呈する電光。■人の鋭き目つき。紫電一閃【句】■事の火急なる譬。■刀劍の閃く形容。

してん 紫電・清霜【句】『王勃の滕王閣序に見ゆ。光輝の閃くこと紫電のごとく、節操の凜たること清霜のごとくなる意といふ』凜然たる節操の譬。

じてん 辭典【名】じしよ(辭書)に同じ。

じてん 字典【名】じしよ(字書)に同じ。

じてん 自轉【名】■おのづから轉ずること。■〔天〕『英Rotation』天體が、その中心を通過する一の直線を軸として、回轉すること。(公轉に對して)

じてん 次點【名】■次に記せる點數。■第二位の得點。

じてん 寺田【名】寺院の所有せる田地。令制にては不輸租田の一にして、善隆戒本田・出家得度田・放生田・長生田等の種類ありたり。寺領。太鏡「水を寺の田に入れしかば、…寺田は燒くることなかりしかば」

じてん 自傳【名】自分にて書ける自分の傳記。自敍傳。「見よ。

してんか 四天下【名】してんげ(四天下)を

してんかん 司天監【名】陰陽頭(カミ)即ち陰陽寮の長官の唐名。

してんかんぢやう 支店勘定【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。本店と支店との間の總勘定。

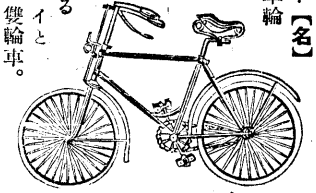
してんき 指點器【名】彫刻家が、石膏にて作れる原型を、大理石その他の材料に移す時に用ふる器械。木製の基盤目の枠の、四邊を同じ數に割附け、移動し得る鍾絲を下げたるもの。基盤枠と鍾絲とにより、假定の並行面體をなすやう作られたるを以て、原型とこれを移さんとする材料との上に、その一箇づつを置きて使用す。從って、その二箇が大・小互に比例をなすものを用ふれば、原型より大きくも小さくも自由に移すことを得。

してんげ 四天下【名】〔佛〕しだいし(四大洲)に同じ。正統記「黒風海を吹きて、日月二輪を漂出す。須彌の半腹におきて、四天下を照さしむ。これより、始めて晝夜・晦朔・春秋あり」

じてん-けう 侍天敎【名】朝鮮の拜天主義の一徒黨。舊一進會の首領李容九の組織せしものにて、その敎徒も、多く舊一進會員なり。てんだうけう(天道敎)參照。「人。

じてんしや 次點者【名】次點■を得たる

じてんしや 自轉車【名】


(やしんてじ)

乘人自ら足にて、車輪を回轉せしめて走らする裝置の車。一輪・二輪・三輪などあれど、二輪のもの最も普通なり。また近時、自動機を取附けて、回轉せしむるもありて、オオトバイと呼ぶ。その條參照。雙輪車。

してん-しゆう 四殿衆【名】四職の人人。

してん-しゆぼ 司天主簿【名】陰陽屬(サクワン)即ち陰陽寮の第四等の官の唐名。

してん-じよう 司天丞【名】陰陽允(ジヨウ)即ち陰陽寮の第三等の官の唐名。

してんせうかん 司天少監【名】陰陽助(ジヨウ)即ち陰陽寮の次官の唐名。

してん-だい 司天臺【名】■てんもんだい(天文臺)に同じ。■江戸時代に、天文・曆數の事を掌りし役所。天明二年江戸淺草片町に設置し、天保十三年麴町九段坂上に、文化中、江戸城吹上(フキア)苑内にも增設せり。

してんだう 四顚倒【名】〔佛〕四種の顚倒。凡夫のと二乘のとの二種あり。前者は、世間の實相に對するものにて、その無常を常とする常顚倒、その非樂を樂とする樂顚倒、その非我を我とする我顚倒、その非淨を淨とする淨顚倒の併稱。後者は涅槃(ネ)の實相に對するものにて、その常を無常とする無常顚倒、その樂を無樂とする無樂顚倒、その我を無我とする我顚倒、その淨を無淨とする無淨顚倒の併稱。じやうらくがじやう(常樂我淨)參照。釋迦如來誕生會「世間の榮華を樂むと雖、四顚倒の憂少時も離れず」

してんちやう 支店長【名】支店を管理する人。

してんのざ 四天の座【句】してん(四天)の條下を見よ。

してんのびやう 四天の鋲【句】してん(四天)の條下を見よ。

してんのほし 四天の星【句】してん(四天)の條下を見よ。

してんば 【名】〔植〕しやじん(沙參)を云ふ。〔九州の方言〕

してんばしら 四天柱【名】〔建〕塔の心(シン)柱の四方にある四本の柱。更にその外方に側柱(カハバシラ)あり。

してんばつたう 四顚八倒【句】してんばつたう(七顚八倒)の訛。釋迦如來誕生會「四顚八倒狂ひ死に」「洗」に同じ。

じてんりう 二天流【名】にたうりう(二刀)

し-てんわう 四天王【名】■〔佛〕『梵Caturmahārājakāyikas の譯語』須彌山の中腹なる四方に城を構へ、上は三十三天の主なる帝釋(タイシャク)天に仕へ、下は八部鬼神を支

配して、佛教及び佛法歸依の人を守護するといふ持國天王(東方)・廣目天王(西方)・增長天王(南方)・多聞(タモン)天王(北方)の併稱。又その居る所を、四天王天又は四王天といひ、六欲天の一にして、三界諸天の最低に位す。四天。四王。護世四王。吉野都女纏「須彌の四方の四天王」[二]武將の部下中、特に秀でたる者四人の併稱。「德川家康の四天王」「義經の四天王」等。

してんわうーじ 四天王寺【名】大阪市南區天王寺町にある天台宗の寺。我が國最古の寺にて、聖德太子の創立に係り、初は玉造(クダマツ)の岸上(今の大阪城の在る處)に在りしを、推古天皇の時、現地に移ししもの。本尊は、太子の物部守屋を攻むる時、彫刻せしめて髮裏に藏め、戰勝を祈りし四天王の像。その地も荒陵(アラハ)丘と呼びしより、山號を荒陵山と稱す。現時の堂宇は德川時代の建造にて、東大門は足利時代のものなり。難波寺(ナニハデラ)・三津寺(ミツデラ)・堀江寺(ホリエデラ)・天王寺。

してんわうーじゅ 四天王樹【名】杉・樟(クス)・欅(ケヤキ)・公孫樹(イチヤウ)の四種の大木の併稱。

してんわうじーりう 四天王寺流【名】我が國寺院の建築法の一派。攝津國四天王寺の法式に準據せるものにて、建仁寺流と相並びて行はれたり。

してんわうーてん 四天王天【名】〔佛〕してんわう(四天王)[二]を見よ。

してーやなぎ 四手柳【名】〔植〕さいかりやなぎ(柴振木)に同じ。

してーやる 爲而遣る【句】す(爲)の條下を見よ。

してーわ 四手輪・垂輪【名】武具の指物(サシモノ)の一。輪の周邊より多くの細き紙を垂らしたるもの。

してーをけ 四手桶・垂桶【名】武具の指物の一。桶の底より、多くの細き紙を垂らしたるもの。

してーをしき 四手折敷【名】武具の指物の一。折敷より細き紙を垂らしたるもの。

しと 濕【名】『しとる(濕る)の意』せうべん(小便)に同じ。榮花「御しとなどにぬれても、うれしげにぞおぼされたる」

しーと 緇徒【名】『緇は墨染の衣の義』そうと(僧徒)に同じ。

しーと 司徒【名】支那上代の官職の一。堯の代よりその稱見え、周代には六官の一として、文敎及び地方行政・農政・租稅等を掌り、大司徒・小司徒に分れ、漢代には大尉・司空と共に、三公の一たりき。

しーと 使徒【名】〔基〕『英 Apostle 後世、傳道者の意に用ひらる』キリストの弟子にして、キリストの生涯と死と復活とを目擊し、これを世に傳へんがために、キリストに選ばれしペテロ(Peteros)・ヤコブ(Jacob)以下十二人の者。初は基督敎を迫害せしユダヤ敎の學者パウロ(Paule)は、十二人の數には入らざれども、使徒たる權威を授けられて、外國に宣敎せり。十二使。聖使。

しーと 斯徒【名】こもの。めしつかひ。斯徒(しと)【貌】しっとに同じ。今宮心中「戶棚の錠前しととおろし」狹衣加留多「今こそ前に抱かれうと、しととともたれて身を寄せて」

しど 志度【名】〔地〕讃岐國大川郡にある町。その海灣は志度浦と呼び、甕の如き形をなす。高松市の東三里半。文治元年における源平二氏の古戰場。志度浦は、古、玉の浦とも房前(フササ)の浦ともいへり。じど(志度寺)參照。

しーど 四土【名】〔佛〕しぶつど(四佛土)に同じ。

しーど 私度【名】〔佛〕古、官許を得ずして、私に僧尼の形を眞似せしこと。自度。

しど 【名】しだら。しまり。紀律。

しどなし 【句】じどなしに同じ。春花五大力「客にくどかれ、返事に困り、駈落せうとは、しどのないところか」

しどもなし 【句】前條に同じ。盛衰記「尻頭(シド)もなき小人ども」一代男「かの御出家の筆とは知れて、しどもなく」

しど 磁土【名】磁器を作るに用ふる粘土。高嶺土。

じど 自度【名】〔佛〕[一]自然のままの土地、即ちこの世界。盛衰記「自土の外に、淨土なし」[二]智慧。「自調・自淨・自度」參照。[三]しど(私度)に同じ。

しーとう 指頭【名】指のさき。ゆびさき。

しーとう 市頭【名】まちなか。市中。

しーとう 枝頭【名】板の先端。

しーとう 絲桐【名】こと(琴)[二]の異稱。

しーとう 紫藤【名】紫色の花を開く藤。

しーとう 私鬪【名】私怨によりて鬪ふこと。私戰。

しーとう 紙燈【名】あんどん(行燈)[一]に同じ。

しーとう 齒痘【名】〔醫〕小兒の齒の生ずる時期に發する扁豆大の赤き斑點にして、中央に白き水胞ある發疹物。多くは胴又は脚の前側に、一定時を隔てて、無數に發し、疼痒甚し。

しーとう 四等【名】〔佛〕しむりやうしん(四無量心)に同じ。

しーとう 四等【名】【句】〔佛〕「弘誓(グゼ)の船」に同じ。

しーどう 紫銅【名】〔鑛〕せいどう(青銅)に同じ。

しーどう 磁頭【名】じどう(神頭)に同じ。

しーどう 太平記「金磁頭を一つ抜出し」

しーどう 兒童【名】こども。わらべ。童兒。

しーどう 慈童【名】[一]きくじどう(菊慈童)[二]の略。貞德「慈童かや菊水鉾の鞘鼓打つ」[三]『菊慈童』の曲に用ふるによりていふ』能樂の假面(ヘ)の一。童子の顏に擬したるもの。「菊慈童」の曲の外、「田村」の前仕手(シテ)「天鼓」の後(ノチ)仕手などに用ふ。

じーどう 待童【名】側に仕ふるわらべ。

じーどう 自動【名】[一]おのづから動くこと。『自働』[二]〔語〕『英 Intransitive』動詞の性質の一。他の事物に關係を及ぼさざる動作。(他動に對して)

じどうーがく 兒童學【名】『英 Paidology』兒童の胎生の始より、成年に至る間の身體と精神との生長發達を研究する學問。

じどうきかい 自動機械【名】直接に人間の手を煩さず、自ら種種の運動を爲し得る機械。

じどうーきふたんーき 自働給炭機【名】火室中に、自動的に、石炭を供給する機械。鐵片を螺旋形に卷附けたる回轉軸を、火口の中心に設定し、鐵片の兩節間にある石炭の、軸の回轉に連れて、火室中に送り出さるる裝置。

じどうーきふまうき 自働給毛機【名】羊毛の一定量を開毛しつつ、自動的に次の機械に供給する機械。

しどうーぐわん 指頭畫【名】しぐわ(指畫)に同じ。

しどうーくわん 四等官【名】大寶令の制にて、諸省の官吏を、長官(カミ)・次官(スケ)・判官(ジョウ)・主典(サクワン)に分ちたるものの併稱。官署の種類により、文字を異にす。各その條を見よ。四分(シブ)官。四分(シブ)官。

じどうーげんしやう 自動現象【名】〔哲〕人格以外に潛在せる精神能力が、或刺戟に應じて、働き出す心的現象。

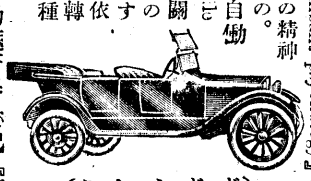
しどうこーきん 四頭股筋【名】〔醫〕『羅 Musculus extensor cruris quadriceps』大腿筋の前側なる深在層の一筋。下腿を伸展する作用をなし、直股筋・內大股筋・外大股筋・中大股筋に細別せらる。

じどうーし 自動詞【名】〔語〕『英 Intransitive verb』自動[二]の意を示す動詞。(他動詞に對して)

じどうーじてんしや 自動自轉車【名】おかぼ(乘物)及びしどうしん(等親)を見よ。

じどうーしんりがく 兒童心理學【名】『英 Child psychology 又 Infant psychology』心理學の一分科。兒童の精神現象を對象とするもの。

じどうーしや 自動車・自働車【名】『英 Automobile 又 Motor-car』石油機關もしくは蒸氣機關等の動力に由りて、運動する車。前部の車輪に依りて、任意に方向を轉換し得。構造・形狀は種種あり。



(やしらどじ)

じどうーしやだんき 自働遮斷器【名】『英 Automatic circuit breaker』自動的に電流を遮斷して、危險を防止する機械。單に遮斷器と稱するもの、多くはこれに屬す。その條參照。

じどう-じゅしんき 自働受信機【名】『英 Automatic receiver』自働的に受信する機械。

じどう-そうしんき 自働送信機【名】『英 Automatic transmitter』自働的に送信する機械。

じどう-そうはき 自働送波機【名】『英 Automatic reversal transmitter』自働的に波形符號を送信せしむる海底船用通信機。

じどう-たいりょうき 自働體量器【名】臺上に立ちて、規定の料金を指定の小孔に入るれば、裝置せられたる計量器の指針は自ら動きて、その人の體量を示す器械。

じどう-ちゆうけいばん 自働中繼盤【名】『英 Repeater 又 Repeater board』自動的に電信の中繼をなす機械。

じどう-てき 自動的・自働的【貌】『英 Automatica 又 Automatical』他の力を借らずに。おのづと動くさま。

じどう-てつだう 自働鐵道【名】レエルに波狀の高低を設け、車輛はその習慣性により て自ら走るやうにせる裝置。

じどう-てんきよくばん 自働轉極機【名】次條に同じ。

じどう-てんきよくばん 自働轉極盤【名】『英 Pole-changer』直流電流を自働的に交番電流に變ずる機械。自働轉極機。

じどう-てんくわんき 自働轉換器【名】『英 Automatic switch』自働的に電流を轉換する器械。單信高速度自働中繼盤に裝置せらる。

じどう-でんわ 自働電話【名】次條の略。

じどうでんわき 自働電話機【名】『英 Automatic telephone』市中適當の位置に設置して、公衆の通話に供する電話機。設備は普通の電話機に同じく、ただ使用するに當りて、交換局を喚出し、所要の接續を行はしめて後、交換手の通知により、規定の料金を現金にて、差入口に投じ、然る後に通話す。

じどう-にんぎょう 自働人形【名】人形の體内に、一種の裝置ありて自働するもの。

じどう-はんばいき 自働販賣器【名】『英 Automat 又 Penny-in-the-slot machine』或特種の賣品につき、代價相當の金錢を指定の小孔に投入すれば相應じて、これに對する物品の現出するやうに裝置したる器械。

じどう-やうすゐき 自働揚水機【名】『英 Hydraulic ram』水の落下する勢を利用し、自働的に高所に水を揚ぐる裝置の機械。

じどう-れんけつき 自働連結器【名】列車の車輛と車輛とを自働的に連結する器。種種あり。

じどうろ 自動路【名】地下に通ずる道路などに設け、通行人を乘せゆく一種の器械。車輪をその下部に附け、恰も調革(ベルト)の滑車を回轉するが如き狀態を以て、運行する裝置。

しどか-ない【形】『しどけなしの訛か』幼稚なり。をさなし。〔大阪の語〕

しどが-なし【句】しどの條を見よ。

しどき【名】〔植〕こあつもりさう(小敦盛草)を云ふ。〔下野國日光の方言〕

しとぎ 粢・粢餅・糈【名】古、糯米(もちごめ)を蒸し、少し舂きて、楕圓狀の餅とし、神に供へしもの。一說には、粳米(うるしね)の粉にて作ると。〔古語〕 和名「粢餅、之度岐、祭餅也」

しとぎ-つば 粢鍔【名】楕圓形をなせる刀の鍔。本朝三國誌「兵庫鎭の粢鍔」

しとぎやうてん 使徒行傳【名】〔書〕『英 Acts of the apostles』新約聖書の一部。使徒等の言行を記したるもの。

しとく 四德【名】■『易經の乾卦に「乾、元亨利貞」、文言傳に「元者善之良也、亨者嘉之會也、利者義之和也、貞者事之幹也、君子體仁足二以長一レ人、嘉會足二以合一レ禮、利物足二以和一レ義、貞固足二以幹一レ事、君子行二此四德一者、故曰二乾元亨利貞一」とあり。即ち元亨利貞の四字は、もと占辭なるを、孔子の文言傳を作るに及びて、四德と呼びしなり』天地に流行する四つの自然の德、即ち元(春)と仁とに配せらる)亨(夏と禮とに配せらる)利(秋と義とに配せらる)貞(冬と智とに配せらる) ■『禮記の昏義篇に「婦人先レ嫁三月、敎以二婦德一婦言一婦容一婦功一」、周禮の天官篇に「九嬪掌二婦學之法一以敎二九御一、婦德・婦言・婦容・婦功」とありて、鄭玄(ジャウ)の註に「婦德謂二貞順一、婦言謂二辭令一、婦容謂二婉娩一、婦功謂二絲枲一」とあり。曹大家(ジャウ)の女誡には四行といへり』婦人に重んずる四つの德。即ち言・德・容・功。 ■〔佛〕じゃうらくがじゃう(常樂我淨)を見よ。 盛衰記「伏して惟ふに、四德疎なりと雖も、六行闕くと雖も」

しとく 四德の樂邦【句】〔佛〕四德■を具する安樂世界、即ち涅槃(ネ)の都。太平記「三界の苦輪を出でて、直ちに四德の樂邦に到りたまふらん」

しとく 至德【名】この上なき德。しいとく 至德【名】後小松天皇の御代の年號(紀元二〇四四年―二〇四六年)。

しとく 齒德【名】■年齡と德行。 ■高齡の人。としかさ。

しとく 私德【名】『英 Private virtue』一身・一家に屬する道德。(公德に對して)

しとく 私匿【名】かくれたる惡行。ひそかに行ふ惡事。

しとく 舐犢【名】『後漢書の楊彪傳に「猶懷二老牛舐犢之愛一」とあり』 ■老牛が兒牛を愛し、舌もてねぶること。 ■人のその兒を愛するに譬へていふ。

しとぐ 爲遂ぐ【動下二他】なしはつ。しおふす。しはたす。

しとく 屍毒【名】動物の屍の腐敗に隨ひて生ずる毒分。

しとく 自得【名】■自ら悟ること。自ら會得すること。 ■自ら滿足すること。

じとく 侍讀【名】■君側に侍して、讀書を敎へ奉る役、又その人。 ■天皇の側に侍して、書を講ずること、又その職。じかう(侍講)■參照。

じとくきりう 自得記流【名】槍術の一派。江戸幕府初期の人、攝津國高槻の城主土岐賴行を祖とするもの。

しとくせい 私德政【名】室町時代に、大名等の私に行ひし德政。

じとくくもん 四度公文【名】四度使(シ)の扱ふ帳簿、即ち大計帳・調庸帳・正稅(シャウ)帳・朝集帳の併稱。四度(ド)の公文。四度使(シ)帳。四度(ド)帳。

じとくりう 自得流【名】砲術の一派。大野宇右衞門久義を祖とす。久義その技を以て、八代將軍吉宗に仕へたり。

しどけ-なし【形ク】■しだらなし。しまりなし。みだりがはし。しどなし。源氏、御びんつきのしどけなきを、つくろひたまふ」 ■をさなげなり。幼稚なり。 增鏡「稚きわらはべなどのしどけなく語りしままなり」

しところ 尻所【名】他官に轉任したる者ある時、太政官にて、執筆の人、その官名の下に闕官と書くこと。

しどし 四度使【名】大計帳使・正稅帳使・貢調使・朝集使の併稱。しどのつかひ。じどくもん(四度公文)參照。

しどし-ちやう 四度使帳【名】しどくもん(四度公文)に同じ。

しとしと【貌】■靜かに。しっとり。しとやか。 俳諧新選「夏過ぎて「夫の權威に、榮御前、しとしとと、上座になほり」 ■しとる(濕る)を見よ。濡れうるほふさま。しっとり。じっとり。しとと。じめじめ。しぬぬ。しのの。しっぽり。

じとじと 濕濕【名】前條■に同じ。

しとたち 章斷【名】しりくめなは(注連)に同じ。 「べき樽。

しとだる 四斗樽【名】酒四斗ほどを入れる

しどーちやう 四度帳【名】しどくもん(四度公文)に同じ。

しとう 絁納【名】しだふ(絁納)の誤讀。

しとーづつ 尿筒【名】古、東帶著用の場合に、小便をしこむため、從者に携へしめし筒形の便器。

しどーてら 志度寺【名】讃岐國志度町に在る眞言宗の寺。藤原不比等の建立、同房前(フサ)の再興。本尊は十一面觀音。四國八十八箇所中、八十六番の札所。保元の亂後、崇徳上皇讃岐に遷幸の時、この寺に御せられたり。花十野響の石碑「戀する海士が家までも、一目に近き志度寺は、志度の浦浪名に高き、丸龜殿の御菩提所」

しとーと【貌】じとじとに同じ。 枕「ひたひ髪もしととに泣き濡らし」

しとど 鴫【名】【動】一ほしぢろ(頬白)に同じ。二あかしとど(赤鴫)即ちほほあか(頬赤)。**あをしとど**(青鴫)。**くろしとど**(黒鴫)。**ほほじろ**(頬白)等の總稱。紀「攝津國貢二白巫鳥一巫鳥此云二芝苔苔一」

しとーと【貌】じとじと二の略。【古語】萬葉「朝霧にしとどはぬれてよぶこどり三舟の山に鳴きわたる見ゆ」

しとーどり 鴫【名】【動】しとど(鴫)に同じ。古語拾遺「片鴫、志止止鳥」

しとーめ 鴫目【名】『形、鴫の目に似たる意にていふ』刀の栗形(カチグリ)、又はその他の器物の紐を通す孔の緣に嵌むる金具。

しどーなし【形一】じだなしに同じ。

しとね 褥・蓐・茵・裀【名】すわり又は寢ぬる時、下に敷くもの。しきもの。ふとん。ざぶとん。むしろ。枕「武部丞忠隆御使に參りたれば、茵さしいだし、物などいふに」和名茵、之止禰」

蓐に臥す【句】病に臥す。

しどーの-うら 志度浦【名】【地】しど(志度)を見よ。

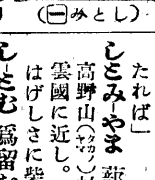
しどの-つかひ 四度使【名】しどし(四度)に同じ。

しどーはい 四度拜【名】りやうだんさいはい(兩段再拜)に同じ。

しとーべら 四斗俵【名】米俵の、四斗入りてあるもの。地方によりては、五斗入なるもありて、五斗俵と呼ぶ。

しとべーわらは 僮竪【名】『しとべはしとりべ(檐從)の略』とものわらは。〔古語〕紀「僮竪、シトベハラハ」

しとみ 蔀【名】一古、高貴の家にて、又今も神社・佛閣などにて、日光又は雨風を防ぐに用ふる戸。上端は蝶番(テフバン)にて固著し、下端を、金物にて外方に吊上げて、水平に開くやうにしたるを、吊(ツ)部又は揚(ア)部と呼び、又これを作る材料の種類により、竹部・板蔀などいふ。高貴の家にては、格子の上に板・竹・蓆などを被ひて造りたれど、賤者の家のは、格子を用ひざるもありたり。**こじとみ**(小蔀)・**はじとみ**(半蔀)參照。源氏「かどはしとみのやうなるを押しあげたる、見いれのほどなく、物はかなきすまひ」二和船にて、飛沫などを防ぐために立つる戸。三城郭にて、外部より見通さるる處を遮蔽する戸。



(一)

しとみ-いた 蔀板【名】しとみ(蔀)(二)の立てずに、取外しあるもの。

しとみ-がね 蔀金・鉸【名】蔀のかきがね。

しとみ-ぐさ しとみ草【名】【植】へうたん(瓢箪)に同じ。

しとみ-くわんげつ 蔀關月【名】【人】大阪の畫家。名は德基、字は子溫、通稱は厚二、一に院二、蕉楊齋と號す。月岡雪鼎に學ぶ。人物・山水に長じ、法橋に敍せらる。伊勢參宮名所圖會及び山海名所圖會を著す。寛政九年歿す。年五十一。

しとみ-ど 蔀戸【名】一しとみ(蔀)(一)に同じ。二關東地方の商店にて、夜間その店頭の入口に立つる、上下二枚の横戸。晝間は、引上げて蔀梁(カケトモ)の外方なる戸決(トジキ)に納め置く。

しとみ-ばし 蔀橋【名】らうかばし(廊下橋)に同じ。

しとみ-ばしら 蔀柱【名】戸溝を有して、取外(トリハヅ)し得る柱。店前の敷居の中央に立て、晝間は取外して置く。

しとみばめ 蔀羽目【名】基盤目の棧を取附けたる羽目。

しとみばり 蔀梁【名】店の柱の上部に取附けたる大梁(オホバリ)。ひとみばり。ひとみ。

しとみまど 蔀窗・蔀窓【名】基盤目の格を取附けたる窓。

しとみや 蔀屋【名】蔀にて圍ひたる假屋。【古語】辨内侍日記「しとみやより見わたしたれば」

しとみ-やま 蔀山【名】【地】備後國比婆郡高野山(カウヤ)村大字新市(イチ)にある山。出雲國に近し。堀文「しとみやまおろす嵐のはげしさに柴の扉も明けぬころかな」

しとむ 爲留む【動下二他】息(ヤ)の根を留む。殺し終はる。源氏「冷泉帝「すは伏猪よ、我れ仕留めんと駈寄れば」

しとむ【動四自】ひたる(浸る)に同じ。盛衰記「水しとまば、さうづに乘りさがり」

しとん 子曇【名】【人】支那宋の僧。文永年中、我が國に來り、一旦歸國し、正安元年寧一山と共に渡來して、鎌倉圓覺寺に居る。畫を善くす。德治元年寂す。大通禪師を諡す。

しどめ 槽子【名】【植】しとみ(槽子)の轉訛。

しどーもなし【句】しどの條下を見よ。

しとーやか【貌】『しとしと二を見よ』言語動作の落著きて上品なるさま。

しどーやき 志度燒【名】讃岐國大川郡志度浦にて、平賀源内の燒出しし陶器。茶器類多く、その甥源吾は種種の器物を製出せしが、後その製法終に廢せり。

しとり【名】機(ハタ)の縦絲を卷く時、その隔に入るるもの。くさ。〔西國の方言〕

しとり 濕【名】しとること。しめり。うるほひ。

しどり 倭文布【名】『しづおり(倭文織)の約』しづ(倭文)に同じ。〔古語〕紀「倭文神、此云二斯圖梨能俄未一」

しどり-じんじや 倭文神社【名】伯耆國東伯(ハク)郡舍人村に鎭坐する國幣小社。祭神は下照姫(シタテルヒメ)命。

しどり-べ 儕從【名】『しとべわらは(僮竪)を見よ』ともびと。從者。〔古語〕紀「名二健人(チカウド)一曰二東方儕從者(アヅマシトベ)一」

しとる 濕る【名】『しとしと二(一)』しっり(一)を見よ』しめる。うるほふ。

しどろ【貌】しだらなく亂れたるさま。千載「ふみしだき朝ゆく鹿や過ぎぬらんしどろに見ゆる野邊のかるかや」堀山越「形見と思へば胸せまり、物言ふ聲もしどろなり」

しどろ 拍子【句】拍子のしどろに亂れてあること。拍子を亂すこと。天神記「機取がゑいゑい聲、しどろ拍子に波を切り、十町ばかりぞ漕出たり」

しどろ-あし しどろ足【名】しどろなる足つき。整はぬ足つき。平家女護島「こぶしを握り、牙を噛み、しどろあしにて歸る浪」

しどろん (英 Citron)【名】佛手柑より製したる一種の清涼飲料。

しどろ-もどろ【貌】甚しくしどろなるさま。源氏「わが心しどろもどろになりにけり袖より外に涙もるまで」

しどろ-やき 志戸呂燒【名】遠江國榛原(ハイバラ)郡五和(ワ)村大字志戸呂にて製する陶器。大永年間に始り、寛永中小堀遠州の勸に由り、再興して、今に及ぶ。專ら茶器のみを作れり。質輕く、淡赤色の土に、黒味ある黄色の釉(クスリ)を施すを以て、特色とす。種類。品種。品類。神樂弓といへばしなきものを梓弓まゆみ・つき弓しなもものとめず」二くらゐ。地位。身分。種姓(シヤウ)。〔古語〕源氏「しな高く生れぬれば」三きだはし。階段。だん。坂路。〔古語〕和名「堦、俗爲二階字一、波之、一訓二之奈一、登二堂級也一」四たち。しながら。品質。枕「卯の花は品おとりてなにとなけれど」五ひとがら。ひん。人品。品格。源氏「父おとどのすぢさへ加ればにや、しな高く、美しげなり」六愛敬(アイキヤウ)。風情(フゼイ)。つやつやしきこと。日本武尊妻弟橘姫「はっと言葉に品附けて」堀山越「品よくまはれ風車」七次第。ことがら。事情。事態。當流小栗判官「兄弟はっと當惑し、何とやらん品わるく」大礒虎稚物語「父郡司の最後のしな語りもあ(ぬ)に」青野都女「遮「それを品に勘當許し」八品物。もの。

しろもの。貨物。

品無し【句】Ⅰ愛想氣なし。にべなし。雙生隅田川「班女、品なく振りまはし」Ⅱ品(ヒン)なし。下卑たり。盍「そばの木、品なき心地すれども」

品を爲る【句】Ⅰ上品ぶる。氣どる。しなす。Ⅱ言語・動作を特にしとやからしくなす。【俚語】

品を作る【句】前條に同じ。

品を付ける【句】もったいをつける。巧に言譯をつくる。室町千疊敷「酢の蒟蒻のと品付けて、膳病第一のけづり廻し」

品を遣る【句】きどりて巧に行ふ。あぢな眞似をす。【俚語】

五つの品【句】〔佛〕ごほん(五品)に同じ。【古語】拾玉「急ぎゆく宿しかはらぬ道なれや五つの品の四つのまことを」

しな 科【名】〔植〕しなのき(科木)の略。

科の皮剝(カハギ)【句】科の木の皮にて作りたる綱。しなつな。太平記「棟木を揚げんとしける揩卷(カハキ)の綱に、信濃皮むき千束入るべしと」

しな 支奈【名】〔植〕菊科に屬する半灌木。中央亞細亞に自産し、高さ二尺許。全體に白色の毛茸生じ、葉は羽狀に分裂して五生す。花は細小にて、三乃至五六むらがりて、小さき頭狀花序をなす。せめしな。しなくわ(支奈花)參照。

しな 支那【名】〔地〕亞細亞洲の東部に位する國。直隸・山東・山西・河南・江西・陝西(サイセイ)・甘肅・江蘇・安徽・湖北・湖南・雲南・貴州・四川・福建・浙江・廣東・廣西の十八省を本部と稱し、滿洲・蒙古・西藏等これに附屬す。首府を北京(ペキン)と稱す。もろこし。唐土。震旦。

しな【接尾】ついで・際・場合・段取などの意。「歸りしな」「寢しな」「もどりしな」

しなあひる 支那鴨【名】〔動〕たうがん(唐雁)に同じ。

しない 市内【名】市のうち。市街のうち。まちなか。(市外に對して)「して」

じない 寺内【名】寺院の境内。(寺外に對じない【名】〔動〕鵐(ツグ)類の總稱。

しないいうびん 市内郵便【名】しないとくべつとりあつかひいうびん(市内特別取扱郵便)の略。

じないしよう 自内證【名】〔佛〕自己の内心に於ける證悟の相(サウ)。内證。

しないつうわ 市内通話【名】電話の通話の、同一市内の兩地點間に行はるるもの。(市外通話に對して)

しないとくべつ 市内特別【名】市内特別取扱郵便物として取扱はるべき郵便物を郵便局に差出す時、その表面見やすき場所に表記すべき語。

しないとくべついうびん 市内特別郵便【名】次條の略。

しないとくべつとりあつかひいうびん 市内特別取扱郵便【名】郵便物特殊取扱の一。同一郵便區市内に發著する通常郵便物に對し、料金の低減等特殊取扱をなすもの。内容の同一なるもの、百箇以上を差出す場合に限る。市内特別郵便。

しないはいたつ 市内配達【名】Ⅰ配達を一市内に限りて扱ふ一種の運送業、又その人。Ⅱ停車場内に於て、鐵道小荷物として著せし荷物を、荷主の依頼に應じて、送り屆くる一種の運送業、又はその人。

しなり 詩嚢【名】詩稿を入るる袋。

しなり 子嚢【名】〔植〕『羅Sporangium』隱花植物の繁殖器官。嚢狀をなして、内部に多數の胞子を生じ、成熟すれば、破裂して胞子を散布するもの。形態一樣ならず。芽胞嚢。

じなり

動物の聽器。一の嚢狀物にて、壁は皮膜組織より成り、中に透明液を有し、液中に、一箇乃至數箇の耳石と稱するものを含有す。また皮膜中の一定所に、知覺細胞あり。これより數多の毛樣突起を出す。聽胞。

しなり・きん 子嚢菌【名】〔植〕次條に同じ。

しなりきん・るゐ 子嚢菌類【名】〔植〕菌類の一。體は菌絲より成り、その大きさ、小なるものは顯微鏡的、大なるものは尺餘に達す。生殖は有性なると無性なるとの兩法によりて營まれ、無性生殖の場合には、菌絲の一部より棍棒狀の子嚢發生し、中に八箇の胞子生ず。これに屬するものには、酵母菌・麴黴(カウジカビ)の如き有用なるものと、靑黴(アヲカビ)の如き有害なるものとあり。嚢子菌類。

しなりぐん 子嚢群【名】〔植〕『羅Sorus』數多の子嚢の、相集りて、葉の裏に著生するもの。羊齒(シダ)類において見るもの、これなり。子嚢堆。

しなりすゐ 子嚢穗【名】〔植〕『英Cone』上部に子嚢の著生する穗狀の莖。例へば土筆(ツクシ)の上端にある穗狀體のごとき、これなり。

しなりたい 子嚢體【名】〔植〕『羅Sporocarpium』蘚類の子器。中に胞子を藏む。

しなうたい 子嚢堆【名】〔植〕しなうぐん(子嚢群)に同じ。

しなうちは 支那團扇【名】支那にて製造する團扇。臺灣團扇に似て、紗絹などにて面を飾り、或は籐にて枠を作り、紗・絹を張りて、端を反らせたるもの、また鳥の羽にて飾れるもの等、種種あり。

しなかき 品書【名】品物の名を書きしるすこと、又その書きしるしたるもの。しなづけ。目錄。

しなかたち 品形【名】人がらと、かほかたちと。徒然「品形こそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも移さば移らざらん」「同じ。

しながどり 息長鳥【名】〔動〕にほ(鳰)に同じ。

しながどり 階長取【名】神樂歌の曲の一。神樂「しながどり猶名の湊にあいぞ入る船のかぢよくまかせ船傾くな船傾くな」

しながとり 息長鳥【枕】ねな又はあはにかけていふ。萬葉「しなが鳥ねな山とよみゆく水の名にのみ寄せしこもり妻はも」同「しなが鳥あはにつぎたる梓弓」

しながのかほみささぎ 磯長大陵【名】しながのやまだのみささぎ(磯長山田陵)に同じ。

しながのたいしのみささぎ 磯長太子陵【名】しながのみささぎ(磯長陵)に同じ。

しながのなかのみささぎ 磯長中陵【名】しながのはらのみささぎ(磯長原陵)に同じ。

しながのなかをのみささぎ 磯長中尾陵【名】敏達天皇の御陵。河内國南河内郡磯長村大字葉室にあり。

しながのはか 磯長墓【名】しながのみささぎ(磯長陵)に同じ。

しながのはらのみささぎ 磯長原陵【名】用明天皇の御陵。河内國南河内郡磯長村にあり。

しながのみささぎ 磯長陵【名】聖德太子の墓。河内國南河内郡磯長村大字太子叡福寺境内にあり。

しながのやまだのみささぎ 磯長山田陵【名】推古天皇の御陵。河内國南河内郡山田村大字山田に在り。「じ。

しなが 品革【名】しだがは(齒朶革)に同じ。

しながは 品川【名】〔地〕武藏國荏原(エバラ)郡にある町。東京市の南端に接し、東京灣に臨む。東海道五十三驛の第一程。續猿蓑「品川に富士の影なき汐干かな」

しながは・のり 品川海苔【名】〔植〕『武藏國品川にて多く採るるよりいふ』あさくさのり(淺草海苔)に同じ。

しながは・はぎ 品川萩・草木樨【名】〔植〕萱(カヤ)科に屬する二年生の草。沿海の地に自生し、牧草とす。莖の高さ二尺ばかり、葉は三小葉より成り、夏季、黃色の蝶形花を開く。きはぎ。

しながは・びやうし 品川拍子【名】神樂太鼓の拍子の一。鎌倉拍子の類にて、武藏國品川町の鎭守なる天王社より創りしもの。

しながはかばん 支那鞄【名】『支那より產出したるによりていふ』木にて作り、その外側を革又は紙にて貼りたる、櫃形の鞄。

しながは・やじらう 品川彌二郎【名】〔人〕政治家。舊長州藩士。尊攘堂主人又は念佛庵と號す。吉田松陰の門人。王政復古に盡瘁し、子爵を授けられ、樞密顧問官・内務大臣に至り、明治三十三年薨ず。年五十六。

しながは・をどし 品革縅・此奈韋縅【名】品革にて鎧を縅すこと、又その鎧。川中島合戰「品革縅の糸毛の鎧」「な。

しなが・ら 品柄【名】品物の性質。品質。し

しなぎれ 品切【名】賣りつくして、商品の無くなること。

しなくだり 差降【名】しな。等級。〔古語〕

しなくな 【貌】くなくなに同じ。

しなくる 【動下二自】しなぶ(萎ぶ)に同じ。

しなくれ 【名】しなくること。

しなくわ 支奈花【名】撫綿支奈(ナデシコ)の末開の頭狀花序。往時これを煎じて、蛔蟲驅除の藥としたり、今はその花序より、サントニンと稱する物質を採取して服用す。

じなけう 耆那教【名】じゃいなけう(耆那教)に同じ。

しなご 支那語【名】支那人の用ふ國語。

しなごぞく 支那語族【名】〔語〕語族の一。支那語及びこれと親近の關係を有する安南・暹羅(タイ)・緬甸(ビルマ)・西藏(チベット)等の諸國語、並びに支那内地の蠻族なる苗(ミヤオ)族等の使用する言語を包含す。各語詞は箇箇獨立に並置せられ、何等語形上の變化を取らざるによりて、孤立語の名あり、又その語詞の多くは、一シラブルより成れるによりて、單綴語とも呼ばる。

しなごん 四納言【名】一條天皇の頃、納言の官に在りて、文藝の道に達せし四人の者、即ち大納言藤原齊信(ナリノブ)・中納言藤原公任(キンタウ)・權中納言源俊賢・中納言藤原行成の併稱。十訓抄中にも、四納言と聞えしは、齊信・公任・俊賢・行成なり」

しなさかる 【枕】『しなは山坂の意。さかるは遠ざかるの意にて、越の國は京より遠く隔たれるによりていふとぞ、ひなさかる(鄙遁る)を見よ』こし(越)にかけていふ。萬葉「しなさかるこしに五年すみすみてたち別れまくをしきよひかも」

しなさだめ 品定【名】品がらの善惡の評定。品評。品隲(ヒンシツ)。

しなし 爲做【名】しきたり。習慣。

しなしたり 爲做したり【句】しなす(爲成す)の條下を見よ。

しなしな 【貌】物のしなひ撓むさま。しなやか。したした。釋迦如來誕生會「咲きしなだれてしなしなと、品よく慕へ慕ふとて」

しなじな 品品【名】一さまざまの品。いろいろ。源氏「三尺のみづし一よろひに、しなじなしつらひすゑて」二しな。それぞれの差等あること。等級。豐生隅田川「人界の果報は品品」三あれこれの事ども。いろいろ。心中及び氷の朔日「座敷に出てしなじなささやき」

しなじなし 品品し【形二】ひんよし。上品なり。〔古語〕学造「けだかくしなじなしう、をかしげなること、田舍人の子といふべからず」

しなじん 支那人【名】支那の國民。主要の地位を占むるものは漢人と滿人とにして、殊に文化の中堅は漢人なり。

しなじゃかう 支那麝香【名】支那に産める麝より採取せし麝香。良品を以て聞ゆ。

しなしやら 【貌】『ひやしやらを見よ』態とめきてしなやかに振舞ふさま。氣取りてなまめかしう振舞ふ狀。

しなしゅ 支那酒【名】支那にて釀造する酒。最も普通なるは紹興酒と燒酒(シヤウチウ)とにして、その他は概ね混成酒なり。

しなしらべ 品調【名】現在する商品の數量の調査。たなおろし。

しなす 【動四自】身體をしなやかに動かす。いやみなる姿に振舞ふ。品を爲(ス)る。

しなす 【動四他】ねさす。臥さす。〔古語〕袖中抄「みちのくのとふのすがごも七ふには君をしなして三ふにわれねん」

しなす 爲做す【動四他】なす。つくりなす。源氏「池の心ひろくしなして、めでたくつくりのしる」

爲做したり【句】失敗したり。しまったり。狂言(鬼養子)「油斷して、打ちこかされた。さても、しなしたり。しなしたり」太功記「やあこは母人か、しなしたり、殘念至極とばかりにて」

しなずがひ 死なず甲斐【名】『死なぬがまだしも仕合せがひありとの義』甚しき不運。曾根崎心中「理窟につまって、擧句には、しなずがひな目にあうて」

しなすけ しな助【名】『しなの(信濃)を人名めかしていへる語』しなのもの(信濃者)に同じ。柳樽「しな助やおはちの底をならしやるな」

しなせ-ことば しなせ言葉【名】昔、藝人又は花柳社會に用ひられし言葉。粋なる言葉。東海道名所記「祠堂の丁銀は、しなせことばの參らせものになす」

しなせ-ぶり しなせ振【名】なまめきて媚ぶる狀。嬌態。東海道名所記「或はかこちて、口說をしかけ、又はしなせぶりの情を語りなど」

しなぜめ 品攻【名】〔商〕取引の目的物の少なきに乘じて、多額の買物を出し、相場の暴騰を待って利益を得んと計ること。〔取引所の語〕

じなぞ 字謎【名】文字を離合して作りたる謎。折字の類。例へば、「爲其人也君子」といひて「僞君子」と解する類。

しなたつ 坂立つ【動四自】地勢起伏す。〔古語〕萬葉「しなたつつくまさぬかたおきながのをちの小菅」(しなたつは原歌「師名立」と記せるを、古くはしなてると訓じて枕詞としたり)

しなだま 品玉【名】一玉を空中に投上げては、手に受けとめて弄ぶ技。弄丸。二てじな。てづま。

品玉も種(タネ)から【句】材料あればこそ品玉遣も爲なり得なれ、もととなるべき材料なくば、手の下しやうなし。〔諺語〕

しなだま 支那卵【名】支那より輸入せる鶏卵。

しなだま-づかひ 品玉遣【名】一品玉の技、又これを演ずる人。たまとり。二てじなつかひ。てづまし。

しなたゆふ 【枕】しなは坂、たゆふは平らならぬことにして、近江國ささなみは、大和國より行けば、坂路を經るより、ささなみにかけていふ。記「しなたゆふささなみぢをすくすくとわが行けば」

しなたり 篠垂【名】しのだれ(篠垂)に同じ。

しなたり-くぼ 【名】『くぼ(窪)二を見よ』いんもん(陰門)に同じ。〔古語〕豐葦記聞、シナタリクボ」

しなだる 撓垂る【動下二自】一しなひ垂る。釋迦如來誕生會「摩訶芬陀利華咲きみだれ、咲きしなだれてしなしなと」二媚びて人に寄りそふ。あまへて人に凭(ヨ)る。生玉心中「こなたも憎かろ管がないと、しなだれ寄って、手を把れば」

しなだれ 撓垂【名】一しなひ垂ること、又その物。二くさずり(草摺)二に同じ。三しのだれ(篠垂)に同じ。

しなだれ-かかる 撓垂懸る【動四自】あまへて人に凭(ヨ)りかかる。

しなだれ-をこ 撓垂男【名】しなだれかかる男。あまへ男。淀鯉出世魚藍「立田の藤と云ふしなだれ男」

しなづけ 品附【名】しながき(品書)に同じ。

しなつな 科綱【名】しなの木の皮の纖維にて作れる綱。松前地方より産す。しなのかはむき。

しなつひこの-かみ 志那津比古神・級長津彦神【名】伊弉諾(イザナギ)神の御子。志那津姫神と共に、風を掌る。一名、しなとべの神。

しなつひめの-かみ 志那津姫神【名】伊弉諾(イザナギ)神の女。前條參照。

しなてる 坂立る【枕】一坂の立てる意にて、坂は斜に傾けるものなるより、かた(片)にかけていふ。一説に、しなひ撓みて片より立てる意とも、又しなやかに屈伸する肩の意ともいふ。しなたつ(坂立つ)參照。紀「しなてる片岡山に飯(イ)に飢(ウ)てこやせるそのたびとあはれ」二しなたつ(坂立つ)を見よ。

しなてる-や 坂立るや【枕】一前條に同じ。拾遺「しなてるや片岡山に飯(イ)に飢(ウ)て臥せる旅人あはれ親なし」二しなたつの條に引ける萬葉集の歌なる、つくま(筑摩)もおきなが(息長)も近江國の地名なるよ

り、轉用せるならんといふ』近江國琵琶湖の別名なる、**にほのみづうみ**(鴈湖)にかけていふ。源氏「しなてるやにほの湖漕ぐ船のまほならねどもあひ見しものを」

しなとのかぜ 級長戸風 科戸風 【名】『級長津彦(ヒコ)神は風を掌るといふによりていふ』**かぜ**(風)[一]に同じ。〔古語拾遺〕源氏「その身の罪は、皆しなとの風にたぐへてき」

しなとべのかみ 志那斗辨神・級長戸邊神 【名】しなつひこのかみ(志那津比古神)に同じ。

しなぬの 志奈布 【名】科木(シナ)の內皮の纖維にて織りたる布。布目甚だ粗く、色は赤黑くして、水濕に堪ふ。まだぬの。しなぬの。さよみ(貢布)參照。

しなの 信濃 【名】[一]〔地〕東山道の一國。東土の中央高原を占む。四方、海に面せず、長野・松本の二市及び南佐久・北佐久・小縣(ヲガタ)・諏訪・上伊那・下伊那・東筑摩・西筑摩・南安曇(アヅミ)・北安曇・更級(サラシナ)・埴科(ハニシナ)・上高井・下高井・上水內(カミミヌチ)・下水內の十六郡に分たれ、全部長野縣の管轄に屬す。信州。[二]**しなのもの**(信濃者)の略。〔江戸時代の語〕柳樽「安すものの米うしなひは信濃なり」

しなのいも 信濃芋 【名】〔植〕**じやがたらいも**(馬鈴薯)に同じ。

しなのうめ 信濃梅 【名】〔植〕**こうめ**(小梅)に同じ。川中島合戰「信濃梅の梅干」

しなのおとぎり 信濃弟切 【名】〔植〕**みやまおとぎりさう**(深濃弟切草)に同じ。

しなのがき 信濃柿・君遷子 【名】〔植〕柿樹科に屬する落葉喬木。高さ二三丈に至る。葉は長楕圓形にて互生し、秋になれば、紅葉せずに落葉す。花は淡黃色、果は徑六七分の漿果にて圓く、熟すれば黃色となり、食ふべし。小澁柿。さるがき。まめがき。ひながき。こがき。

しなのがは 信濃川 【名】〔地〕信濃國にある川。千曲(チクマ)川と犀川との合流。越後國に出で、新潟港に注ぐ。水程約九十四里。

しなのき 科木・級木 【名】〔植〕田麻(ノカラズ)科に屬する落葉喬木。山地に自生して、高さ二三丈に達す。葉は鋸齒を有する心臟形にて、葉柄長く、花は黃白色にて、香氣あり。材は器具又は薪となり、樹皮の纖維は、繩或は袋に作る。

(きのなし)

しなのくつわ 信濃轡 【名】信濃國より產する轡。

しなのげんじ 信濃源氏 【名】清和源氏より出でて、信濃に居りし氏族。源經基の孫甲斐守滿國の一門、及び源義光の遺裔小笠原氏など、その主なるものなり。

しなのこう 信濃公 【名】〔人〕『惡後に信濃公に封ぜられしよりいふ』**ふぢはらただひら**(藤原忠平)の異稱。

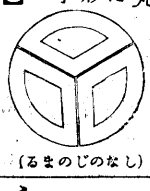
しなのごま 信濃駒 【名】信濃國より產する馬匹。

しなのざか 信濃坂 【名】〔地〕比叡山の麓、眼(ガン)堂のうしろの坂路。柳樽「叡山の謀坂は信濃坂を下り」

しなのささぎ 信濃豆豉 【名】〔植〕**いんげんまめ**(隱元豆)に同じ。

しなのささげ 信濃豆豉 【名】〔植〕前條に同じ。

しなのじのまる 品字丸 【名】紋所の一。開きたる扇、卽ち末廣がりの形三箇を組合はせて、品字に擬したるもの。



(るまのじのなし)

しなのそ 信濃苧 【名】〔植〕**つなそ**(黃麻)に同じ。

しなのたらう 信濃太郎 【名】[一]夏の雲を云ふ。〔近江國・越前國の方言〕[二]〔動〕**けむし**(毛蟲)を云ふ。〔武藏國の方言〕

しなのぢ 信濃路 【名】信濃國の道路。謠曲木賊「信濃路遠き旅衣、日も遙遙の心かな」

しなのつむぎ 信濃紬 【名】信濃國より產する紬。生玉心中「信濃紬の絲よりも、心が細く、氣も弱く」

しなのとくさ 信濃木賊 【名】信濃國より產する木賊。狂言「天廣がり」「信濃木賊をかけて磨いたによって、すべすべ致す」

しなのなし 信濃梨子 【名】〔植〕梨の一種。信濃柿の類にて、實の小さきもののなるべし。參照「むすび袋に、しなのなし・ほしなつめなど入れて」

しなのなでしこ 信濃撫子 【名】〔植〕**ふぢなでしこ**(藤撫子)に同じ。

しなのぬの 信濃布 【名】『信濃國より產するよりいふ』**しなぬ**(志奈布)に同じ。

しなのの 信濃野 【名】『久しく信濃國に在りて、附近の官軍を統督せられしによりていふ』**むねながしんわう**(宗良親王)に同じ。

しなのはごいた 信濃羽子板 【名】むかし信濃國より出だしし羽子板。夫婦の姿を畫けり。

しなのふじ 信濃富士 【名】〔地〕**くろひめやま**(黑姬山)の異稱。

しなのまめ 信濃豆 【名】〔植〕**いんげんまめ**(隱元豆)に同じ。

しなのめし 信濃飯 【名】**だいこんめし**(大根飯)に同じ。

しなのもの 信濃者 【名】信濃國に生れたる者。同國は雪國なるより、冬季、江戸に出でて、唐日を踏み、又は米穀商の下男に雇はれ、又は薪炭(シンタン)など賣りあるきたり。一般に大食なるものとせらる。しな助。おしな。柳樽「脾胃虛さと藪醫見立てる信濃者」同「信濃者江戸と國とは雪と曇」

しなのやき 品野燒 【名】尾張國春日井(スガ)郡品野村より產する燒物。

しなのやま 信濃山 【名】信濃國の山。一蓁寒さにも慣れてあるくや信濃山」同「信濃者江戸と國とは雪と曇」

しなのを 信濃苧 【名】〔植〕[一]**いちび**(苘麻)に同じ。[二]**つなそ**(黃麻)に同じ。

しなはく 支那白 【名】『英 Chinese white』「箱。

あえんくわ(亞鉛華)に同じ。

しなばこ 品箱 【名】釣道具を仕舞ひおく支那蓮 【名】〔植〕蓮の一變種。根莖太く、節間短きもの。

しなばす

しなばち 支那鉢 【名】支那燒の植木鉢。

しなひ 撓 【名】[一]しなふこと、又その狀。

な へ。蔦藤の花のしなひ長く、色よく咲きたる」[二]武具の指物(サシモノ)の一。幟の形のもの。

しなひ 竹刀 【名】『しなひ撓むよりいふか』劍術を稽古する時、刀に代用するもの。割竹を四箇合はせ束ねて造る。しなひだけ。ちくたう。

しなび 萎 【名】しなぶること。

しなひ 【名】〔動〕鼈(スッポン)類の總稱。

しなひうち 竹刀打 【名】[一]竹刀にて擊ちあふこと。[二]手掌(テノヒラ)を反(カヘ)して、相手の手などを打つこと。小町踊「風の手のしなひうちする柳かな」

しなひさかゆ 撓榮ゆ 【動下二自】枝もたわわに茂る。〔古語〕蔦葉「春山のしなひ盛えて」

しなひだけ 竹刀 【名】[一]竹刀を造るに用ふる竹。[二]**しなひ**(竹刀)に同じ。

しなひづる 撓弦 【名】新調の弓にしなひを作るために、懸くる弦。

しなひづる 竹刀弦 【名】刀背に擬して、竹刀に附くる弦。

しなひぶくろ 竹刀袋 【名】竹刀を入るる袋。

しなふ 撓ふ 【動四自】[一]しなしなと撓む。撓みまがる。しなゆ。起秋垂穎八握莫莫然(カノトニシノビテ)」[二]逆はず隨ふ。平家「曲(カネ)に渡いて押落さるな。水にしなうて渡せや渡せと」「しをる。

しなぶ 萎ぶ 【動上二自】生氣衰ふ。萎靡す。

しなぶ 匿ぶ 【動下二他】かくす。つつむ。しなむ。〔古語〕字鏡「匿、取レ物而藏、志奈夫」

しなふく 支那服 【名】支那人固有の衣服。

しなぶくろ 志奈袋・科袋 【名】志奈布にて作り、米穀などを入るるに用ふる袋。

しなぶん 支那文 【名】**かんぶん**(漢文)に同じ。

しなぶれ 品觸 【名】警察官が、盜品又は紛失品などの發見を容易ならしめんがために、その品目及びその特異の點を記して、古物商・質屋などに觸ること。芭蕉「は れ物に柳のさはるしなへかな」太祇「しな

へよく盤へおくや藤の花」㊂刀身に、横に一文字に、又は半月形に現はれたる疵。

しなへ-づる 撓弦【名】しなひづる(撓弦)に同じ。

しなほし 爲直【名】しなほすこと。

じ-なほし 字直【名】数人相集まり、先づ一人或字を書きて、次の人に渡せば、その人この字に加筆し、かくして順次に綺様を造り出す遊戯。筆数最も少なくして、最もよき図柄となりたるを優れりとす。筆手(テヂ)より出でしものならんといふ。

し-なほす 爲直す【動四他】改めてなす。再び作る。やりかへす。落莫ざふしきどころ・まんどころなど定めて、所所など、しなほさせはべる」「の方言」

じなみ【名】多た(穢多)を云ふ。〔越後國長岡古語〕紀「匿(ヒソカニ)袍中二(ヒトヘニ)而自佩レ之」

しなむ 匿む【動下二他】しなぶ(匿ぶ)に同じ。

し-なん 指南【名】『しなんしゃ(指南車)の義より出で、方向を示して導く意にていふ』をしへ導くこと。教授。指導。井筒業平河内通」菜に和歌の指南を請ひ」

し-なん 至難【名】至極かたきこと。

し-なん 四難【名】〔佛〕『法華文句記の五に出づ』人間の四つの難事、即ち諸佛の出世に値ひ難く、人身を感受して、この世に生れ出づるは得難く、平穏の治世には逢ひ難く、大善の功徳は修し難きことの併稱。

し-なん 四男【名】㊀四番目のむすこ。㊁四人のむすこ。四郎。

じ-なん 次男・二男【名】二番目のむすこ。二郎。次郎。

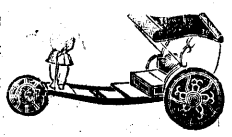
し-なんきよく 指南極【名】〔理〕磁石の針の南に向ふ端。

しなん-さよう 指南作用【名】〔哲〕『英Orientation』肉體が、その圍繞界に對して、順正の位置及び空間的の關係を保つこと。自己の圍繞界、及び自己に關係する個人的、及び社會的の事情を認むることを得る順正の能力。指南力。

しなん-し 指南使【名】指南のために遣されたる使者。夫木「東漸のみのりの舟の指南使は西の方よりきたるなりけり」

しなん-しん 指南針【名】らしん(羅針)に同じ。

しなん-しゃ 指南車・司南車【名】『古今註に「大駕指南車起レ黄帝與二蚩尤一戰中涿鹿之野一蚩尤作二大霧一、兵士皆迷、於是作二指南車一、以示二四方一、遂擒二蚩尤一、舊説周公所レ作也、越裳氏重レ譯來貢二白雉一、使者迷二其路一、周公錫以二輒事五乘一、皆爲二指南之制一、越裳氏載レ之以南、暴年而至二其國一』とあり』支那にて、車上に木偶を据ゑ、車の回轉にかかはらず、人形の手は常に南を指すやうにし、遠行者をして、道に迷はざらしめんがために造りし事。周公の創製に係るといふ。磁石を應用せしものなるべし。今も支那官員の馬車には、磁石を備へ附けたるものあり。薫材「指南車を胡地に引去る霞かな」



(やしんなし)

しなん-じょ 指南所【名】物事を指南する。

しなん-ばん 指南番【名】昔、大名に仕へて、武藝の指南をなしし者。指南役。

しなん-やく 指南役【名】㊀前條に同じ。㊁事物の差圖・案内をする役。

しなん-りょく 指南力【名】〔哲〕しなんよう(指南作用)に同じ。「目(ジ)」

しなめ 品目【名】物品の名目。いろめ。品。

しなめく 品めく【動四自】品よく見ゆ。上品に見ゆ。古語」枕「言葉しなめきなどいへば」

しなもじ 支那文字【名】かんじ(漢字)に同じ。「じ。

しなもじ 品文字【名】ひんじ(品字)に同じ。「品。

しなもの 品物【名】しなもの。物質。物。

しなもの-ひきかへしょう 品物引換證【名】くわぶつひきかへしょう(貨物引換證)に同じ。

しなもの-ひきかへばらひ 品物引換拂【名】くわぶつひきかへばらひ(貨物引換拂)に同じ。(正金引換渡に對して)

しなもんじ 支那文字【名】しなもじ(支那文字)に同じ。

しなやか【貌】㊀しなしな。柔か。たわやか。たをやか。㊁やさしく見ゆるさま。源氏「いと清げにしなやかなる童の」

しなやき 支那燒【名】支那製の陶磁器の總稱。

しなゆ 撓ゆ【動下二自】しなしなとなる。しなふ。萬葉「君に戀ひしなえうらぶれわがをれば秋風吹きて月かたぶきぬ」

しなよし 品好【名】品位のよきこと。上品。枕草子「公季ときこゆるは、…ゆゆしきじなよしなり」

し-ならひ 爲習【名】しならふこと。

し-ならふ 支那蠟【名】いぼたらふ(疣取蠟)に同じ。

し-ならふ 爲習ふ【動四他】しばしば行ふ。源氏「よろづ右近ぞそらごとしならひける」

じ-なり 字態【名】文字の形。文字の姿又は意のまま。賀古教信七墓廻「もじと書きたる字態をば高燈籠に表はして無明の闇を照すべく」

し-なる 爲慣る【動下二自】業に慣れて、よくなす。熟練す。

しなれりょう 支那料理【名】支那固有の料理。その調理法は、世界第一と稱せらる。

しなわけ 品別【名】品のわかち。類別。

しに 死【名】死ぬること。萬葉「しにも生きも同じ心と結びてし友はたがはじ我れもよりなん」古今「こひしきに命をかふるものならばしには易くぞあるべかりける」日本武尊吾妻鑑「人に變つた死にをする御身の果のいたはしや」

しに 死【接頭】罵る意。いき。いけ。「しに奇生」「しに女郎(ヂラ)」

じ-に 耳朶【名】耳の外聽道にある脂肪腺より排泄せらるる脂垢。

しにあと 死後【名】いにあと(去後)を見よ。

しにいき 死生【名】㊀死ぬること。

しにいきも 死生も【名】『死に生きも出來かねまいと思へば、胸も塞がって」

しにいき 死息【名】殆ど死なんとするほどの息。たえだえなる呼吸。

しにいくさ 死軍【名】決死の軍。死を決したる戰爭。鎌田兵衛名所車「爲義が死にいくさ、いでもの見せんと」

しにいし 死石【名】『しぬ(死ぬ)㊂を見よ』圍碁にて、打ちたる効力の無き石、又は敵に殺されたる石。

しにいでたち 死出立【名】しにしゃうぞく(死裝束)に同じ。太平記「兼ねての死出立に、皆曼陀羅を書いてぞ附けたりける」

しにいる 死入る【動四自】『いる(入る)は接尾語』しぬ(死ぬ)を強めていふ語。源氏「しにいるたまの、やがてこの御からにとまらなん」

しにうま 死馬【名】死にたる馬。死馬(バ)。(いき馬に對して)

死馬が屁を放(ひ)る【句】到底見込なしと思はれし物事の、意外に回復せし譬。「諺語」

死馬に針を刺す【句】『針を刺すは、鍼治を施す義』いかに手だてを用ひても、到底無効なる譬。「諺語」

しにうを 死魚【名】死にたる魚。死魚(ヨナキ)。(生魚に對して)

しにおいぼれ 死老耄【名】老いぼれて、殆ど死ぬばかりなること。しにぞこなひ。(老人を罵る時にいふ)

しにおくる 死後る【動下二自】㊀死ぬべき時に後る。㊁しにのこる(死殘る)に同じ。

しにおくれ 死後【名】死におくるること、又その人。

しにかかる 死懸る【動四自】死に近づく。

しにかくご 死覺悟【名】死ぬる覺悟。天の網島「名殘の文の言ひかはし、毎夜・毎夜の死覺悟」「間。死學。

しにがくもん 死學問【名】活用せざる學。

しにかけ 死掛【名】死なんとすること。瀕死。垂死。

しにかさなる 死重なる【動四自】死體、

重なり合ふ。保元「骸(ザ)が上に死に重なって戦ふとぞ聞く」

しにがて 死粮【名】死に臨みて食ふ粮。盛衰記「これや、この下臈のいふなる死粮とは」

しにがね 死金【名】㊀死ぬる時の費用のために貯ふる金。㊁貯蓄するのみにて、利用せぬ金。㊂使用せしだけの効力なき金。

しにかは 死皮【名】㊀死にたる動物の皮。㊁死者の著たる衣類。死人の遺物、即ちその衣服・携帯品など。

しにかばね 死屍【名】しかばね(屍)に同じ。〔古語〕霊異記「屍骸。シニカバネ」

しにかはる 死変る【動四自】㊀死にて、形変る。㊁死にて、再び生れかはる。「生きかはり、死にかはる」

しにかへる 死返る【動四自】㊀幾度も死ぬ。落葉「思ふにし死にするものにあらませば千度ぞわれはしにかへらまし」 芭蕉「俗:あさがほいく死にかへる法(ノリ)の松」 ㊁『かへる(返る)は接尾語』死なんとするほどに堪へがたくなる。「死ぬばかり」「死ぬべく」参照。〔古語〕落窪「ましてほの聞く若き人は、しにかへり笑ふ」

しにがほ 死顔【名】死にたる顔。死人の顔色。(死顔(ガホ)に)対して) 手習鑑「生顔と死顔は相好のかはるもの」

しにがみ 死神【名】人を死に誘ふといふ、想像の神。 天の網島「死ね死ねとくる死神の」

しにぎは 死際【名】死なんとするきは。今はのとき。さいご。しにめ。命の際。臨終。

しにぎらひ 死嫌【名】死ぬることを嫌ふこと。俳諧古選(乙由)「老僧に死嫌あり涅槃像」

しにくるし 爲悪し【形一】爲すにむづかし。太平記「敵の大将と見知らぬ程こそ葉武者に逢ひて組んで勝負はせじと、軍はしにくかりし」

しにくじ 死闘【名】多くの闘の中にて、死に當るべき闘。

しにくち 死口【名】巫女(ミコ)の神おろしによりて、死人の神がかること。死靈の口寄(ヨセ)をなすこと。(生口(イケ)に対して) 緋縅縅別月の紅葉「まづ御用の事ありとは、生口か死口かといへば、いや、さればよ」

しにぐるひ 死狂【名】しにものぐるひ(死物狂)に同じ。 太平記「これこそ敵の運の盡くる處の死狂よとて」

しにこごしらへ 死拵【名】しにじたく(死支度)に同じ。 天の網島「首しめくくる畏むすび、われと、わが身のしにごしらへ、見るに、目もくれ、心もくれ」

しにごふ 死業【名】〔佛〕過去の業報(ゴウホウ)によりて死ぬること。 太平記「この人、死業や来らざりけん」

しにごもり 死籠【名】蠶兒の、繭の中にて死にて、蛹(サナギ)に化せざるもの。

しにざま 死様【名】死ぬるありさま。

しにしだい 死次第【名】他人の死にしを、そのままに捨ておくこと。 天の網島「重悪人のこの治兵衛、死次第とも捨ておかれず、跡が跡まで御厄介」

しにじたく 死支度【名】死ぬる支度。しにごしらへ。しまうけ。しにやう。

しにしに 死死【貌】死ぬべきほどに、生氣なきさま。

しにしやうぞく 死装束【名】死ぬる時のいでたち。しにいでたち。 許六「一竿は死装束や土用ぼし」

しにす 死す【動佐變自】しぬ(死ぬ)に同じ。〔古語〕 狭衣「誠に、物おもひにしにするものとは」

しにすがた 死姿【名】死ぬる時の姿。今宮心中「ゆきたけ揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて」

しにせ 老舗・老鋪【名】『しにせる(爲似せる)の假體言』先祖代代に傳來せる家業又は店。古き店。 天の網島「所がらなり、しにせなり」

しにせぜに 死錢【名】しにがね(死金)に同じ。

しにせる 老舗る・老鋪る【動下二他】賣りこみて老舗となる。 今宮心中「店一軒の主になり、商ひもしにせて」

しにそこなひ 死損【名】㊀死にそこなふこと。㊁老人を罵りていふ語。しにおいぼれ。

しにそこなふ 死損ふ【動四自】死なんとして、死にかぬ。死ぬべき時に死ぬるを得ず。 蒲冠「西行は死にそこなうて袷かな」

しにたゆ 死絶ゆ【動下二自】一人も殘らず死ぬ。廢絶す。しにはつ。

しにちくしやう 死畜生【名】いきちくしやう(生畜生)に同じ。 今宮心中「生畜生の死畜生と」

しにっくは シニック派《英 Cynic》【名】〔哲〕けんじゅがくは(犬儒學派)に同じ。

しにづら 死面【名】しにがほ(死顔)に同じ。 今宮心中「親・兄弟に難義をかける、笆太い奴と、死顔をまぶられ」

しにでたち 死出立【名】しにいでたち(死出立)の略。 曾根崎心中「初(ハジ)は、白無垢、死出立、戀路の闇を黒小袖」

しにてま 死手間【名】死ぬるに就きての手數又は時間。 釋迦如來誕生會「ええ、死手間のいる罪人、火が嬉ひなら、水飲ません」

しにとき 死時【名】死ぬる時。死ぬべき時機。

しにどこ 死處【名】次條に同じ。

しにどころ 死處【名】しにば(死場)に同じ。

しにのこり 死殘【名】死にのこること、又その人。生きのこり。

しにのこる 死殘る【動四自】われのみ死なずに生きて居る。生きのこる。しにおくる。ながらふ。

しにば 死場【名】死ぬる場所。さいごところ。さいごば。しにどころ。しに場所。往生場。死處(シショ)。 太平記「蓬(ヨモギ)くも見えたまひつる死場かな」 丹波與作「しにばへ、馬も引くまいか」

しにばしよ 死場所【名】前條に同じ。

しにはだ 死肌【名】死人の肌。

しにはだたち 死膚斷【名】死骸を切裂くこと。(生肌斷(イキハダタチ)に対して) 祝詞「生膚斷・死膚斷」

しにはぢ 死恥【名】死後に殘る恥。(生恥(イキヂ)に對して) 重井筒「女先立ち、男は跡に死にそこなひ、見苦しき沙汰に逢ふ、無念の上の死恥ぞや」

しにはつ 死果つ【動下二自】㊀死に終はる。全く死ぬ。 狭衣「いと死果る心地せさせたまへば」 ㊁悉く死ぬ。しにたゆ。

しにばな 死花【名】㊀死にぎはの名譽。死後のほまれ。㊁生花(イケバナ)にて、一季經過したる花。會席等には、これを忌む。

死花が咲く【句】死したるがために、名譽生前にまさる。

死花を咲かす【句】死後に譽を揚ぐ。

しにびかり 死光【名】しにばな(死花)㊀に同じ。 女殺油地獄「他人の野送(ノオク)り、兄弟のをのこ子に、さき輿・あと輿鼻かれて、あっぱれ死光やらうと思うたに」

しにびき 死曳【名】曆の上にて、忌葬・關事・他行等に忌むといふ方角。子・辰・申の日は申の方、丑・巳・酉の日は巳の方、寅・午・戌の日は寅の方、卯・未・亥の日は亥の方。

しにびと 死人【名】しにん(死人)に同じ。〔古語〕記「亡者、シニビト」

しにびと-さばき 死人捌【名】死人を取扱ふこと。 賀古教信七墓廻「ええ、なんぼうの亡者にも出あはふが、今から怖うてなるものか、ちと叔父坊主が死人さばきを見習へと」

しにぶし 死節【名】木材の朽ちたる節。

しにぼくろ 死黒子【名】人の死ぬ前に身體に出來るといふ黒子。 俳諧金砂子「死黒子・物著黒子をうらやまん」

しにまうけ 死儲【名】しにじたく(死支度)に同じ。〔古語〕 榮花「まだしにまうけをせよと、夢に見たまひければ」

しにみ 死身【名】㊀死ぬべき身體。何時死ぬるか分らぬ身。(生身(ショウジン)に對して) 心中丸は氷の朔日、八年拜まぬ親の顔、見たうなうて何とせう。生身は死身もしひよつと」 ㊁死にたる氣になりて、力の續く限り働くこと。 傾城島原蛙合戰「一期の浮沈とひっくるめ、死身になってぞ居たりける」

しにみづ 死水【名】死にぎはに口に注ぎ入るる水。末期(マツゴ)の水。

死水を取る【句】死水を逝く人の口に

注ぎ入る。臨終の世話をなす。傾城反魂香「死水を誰れにとられん淺ましと」

しに-むしや 死武者【名】決死の武者。當流小栗判官「死武者の惡黨ら」

しにん 死人【名】死にし人。しにびと。しびと。亡者。

死人に口無し【句】死後、その人の事をとかく批難すれども、死人は、これを辯解すること能はざるものなれば、是非を定めがたし。〔諺語〕

しにん 至人【名】〔佛〕しやか(釋迦)の尊稱。

じにん 神人【名】神社に奉仕する下級の役人。神人(シンジン)。

じにん 自認【名】自分一個にて、その物事を是認すること。

じにん 自任【名】自分の才能・容貌を誇るに足ると思ひこむこと。うぬぼれ。

じにん 辭任【名】任務を辭すること。

じにん 慈忍【名】〔佛〕慈悲と忍辱(ニンジョク)と。

しにめ 死目【名】しにぎは(死際)に同じ。心中萬年草「昨日にも著くならば、死目にあはうもの」

しにめらう 死女郎【名】女を罵りていふ語。〔德川時代の京都・大阪の語〕丹波與作「死女郎のふりはりめ」

しにもの-ぐるひ 死物狂【名】死ぬる覺悟にて狂ふが如く働くこと。しにぐるひ。吉野都女楚「宗徒の兵抜きつれ、抜きつれ、死物狂の拜み打ち」

しに-やう 死樣【名】しにかた。しにざま。太平記「武士たる人は、平生の振舞はよしやともかくもあれ。…最後の死樣をこそ執することなるに」

しに-やまひ 死病【名】命の助かりがたき病。しにやみ。死病(シビョウ)。嚴蟾天學甘露雨「現在親の死病、寵いて悲む子の心、可愛とも思うて下されぬ」心中刀は氷の剱「もしひよっと、死病うけたりとも、母樣の懷しさに、臨終もしそこなひ」

しに-やみ 死病【名】前條に同じ。

しに-よい 死用意【名】しにじたく(死支度)に同じ。義經歌「こちの用意は死用意」

しに-よく 死慾【名】死が近づきたるために、ますます慾深くなること。

しに-わかる 死別る【動下二自】一方は死に、一方は生殘りてわかる。死別をなす。永訣す。(いき別るに對して)

しに-わかれ 死別【名】しにわかること。(いき別に對して)

しぬ 篠・小竹【名】〔植〕しの(篠)に同じ。〔古語〕萬葉「池のべの小槻が下のしぬな刈りそねそれをだに君がかたみに見つつしぬばむ」

篠の目(ノ)【句】『めは群(ムラ)の義』篠の叢り生えたるもの。しぬのめ(篠目の)參照。

しぬ 死ぬ【動奈變自】『息(ソク)去(イ)ぬの略』■息終ゆ。命をはる。この世を去る。死す。殺す。■活氣あらず。勢あらず。力あらず。「この畫は、死んで居る」■圍碁にて、石を圍まれて取らる。ごにし(死石)參照。

死なばもろこも【句】死ぬる時は共に死せん。

死にぬらう【句】死にぬらんの音便。沙石集「けうにしにぬらうとぞいひける」

死ぬばかり【句】死ぬほどに堪へがたし。しにかへる(死返る)■參照。〔古語〕源氏「死ぬばかりわりなきに」岡「死ぬばかり思へるがいとほしければ」

死ぬべく【句】前條に同じ。〔古語〕源氏「かんの君はわれかの心地して、しぬべくおぼさる」

死ぬ者貧乏【句】活きてあらば、他と同樣の幸を受けんものを、死したるがために、その幸にありつき得ず。

死ぬる瀨【句】死ぬべき場合。心中萬年草「子を一人育つるに生る瀨か死ぬる瀨が七度あるとは稚い內」

死んでの長者より、生きての貧人【句】死して富者とならんよりは、貧しくとも、活きてあらん方好もし。〔諺語〕

死んでは、一文にもならぬ【句】死ぬといふはつまらなきことなり。〔諺語〕

死んで花實が咲くものか【句】死にては、萬事休す。いかなる場合にも死なざるに如かず。〔諺語〕

死んで花實が生(ナ)るものか【句】前條に同じ。〔諺語〕

しぬ【貌】 しぬに同じ。〔古語〕萬葉「夜くだちにねざめてをれば川瀨とめ心もしぬに鳴く千鳥かも」

しぬき 仕抜【名】芝居にて、多勢の捕手にて、一人を取卷きて、一同聲を掛けつつ、たてをすること。

しぬく 偽抜く【動四他】十分になす。しつくす。しとぐ。

しぬぐ 凌ぐ・凌ぐ【動四他】しのぐ(凌ぐ)に同じ。〔古語〕萬葉「高山のすがの葉しぬぎ降る雪の消ぬとかいはも戀のしげけく」

しぬ-すすき 篠薄【名】しのすすき(篠薄)に同じ。〔古語〕萬葉「いもがりと我が通ひちのしぬすすきわれ通はずばなびけしぬ原」

しぬぬ【貌】 しのに同じ。〔古語〕萬葉「朝霧にしぬぬにぬれてよぶこ鳥みふねの山ゆきわたるみゆ」

しぬ-の-め 篠の目【句】しぬ(篠)の條下を見よ。

しぬのめ-の 篠目の【枕】しぬといふ語の相同じきより、しぬぶ(忍ぶ)にかけていふ。萬葉「あきがしはうるや川べの小竹(シヌ)のめのしぬびて寢(ネ)れば夢に見えけり」

しぬばく【動他】 しぬぶ(忍ぶ)の延。〔古語〕萬葉「年のはに來鳴くものゆゑほととぎす聞けばしぬばくあはぬ日を多み」

しぬばす 忍ばす【動四自】しぬぶ(忍ぶ)の敬稱。〔古語〕萬葉「玉だすきかけてしぬばし」「を見よ。

しぬばゆ 忍ばゆ【句】しぬぶ(忍ぶ)の條下を見よ。

しぬ-はら 篠原【名】しのはら(篠原)に同じ。〔古語〕萬葉「妹がりと我が通ひぢのしぬすすきわれし通はばなびけしぬ原」

しぬひ 私奴婢【名】古、一私人に使役せられたる賤民。物品と同じく、交換・賣買せられたり。私賤。捕亡令「凡官私奴婢、逃亡經二一月以上一捉獲者、廿分賞レ一」

しぬび【名】■ しぬぶ材料。しぬびぐさ。〔古語〕萬葉「わがせこがしぬびにせよと」

しぬび-ぐさ 忍草【名】しぬぶぐさ(忍草)に同じ。

しぬびごと 誄【名】しのびごと(誄)に同じ。

しぬびづま 忍妻【名】しのびづま(忍妻)に同じ。〔古語〕萬葉「ここだくも思ふごとならぬしぬびづまかも」

しぬぶ【動四他】 しのぶ(忍ぶ)に同じ。〔古語〕萬葉「まきの葉のしなふせの山しぬばずてわが越えゆけばこの葉知りけむ」

忍ばゆ【句】『ゆは助動詞る四の轉。ゆを見よ』おのづから忍ぶやうになる。〔古語〕萬葉「瓜はめば子ども思ほゆ栗食めばましてしぬばゆ」

しぬぶ 忍ぶ【動上二他】前條に同じ。〔古語〕萬葉「人目多み目こそしぬぶれすくなくも心のうちにわがもはなくに」

しぬぶ-ぐさ 忍草【名】慕ひ思ふ材料。〔古語〕萬葉「磯に生ふる菅の根取りてしぬぶぐさはらへてましを」

しぬぶらふ【動四他】 しぬぶ(忍ぶ)に同じ。〔古語〕萬葉「さす竹の舍人男(トネリヲ)もしぬぶらひ返らひ見つつ」

しぬ 纈【名】しぬいと(纈絲)の略。

しぬ 稻【名】〔植〕いね(稻)に同じ。(主に熟語として用ふ)〔古語〕記「十握稻(トツカノ)」祝詞「にごしねあらしねに」

しぬ-いと 纈【名】布を織る時、織餘したる絲。はたじね。しね。倉鑑「纈、殘絲織餘也、志禰絲」

しぬち 之遠【名】しんぬう(之遠)に同じ。きもの。

しぬ-くり【名】 蟇目(ヒキメ)の箭の異稱。

しぬ-しね【貌】■ しなしなに同じ。■強靱なる物を噛む時の感じ。

しぬん 思念【名】おもふこと。心に常にかくること。

じねん 次年【名】次の年。翌年。

じねん 自然【名】しぜん(自然)■■■に同じ。

自然の法衣(ホフエ)【句】人力を假らずに、自然と出來たる法衣。盛衰記「尊惠自然の法衣、身に纏へり」

じねん 慈念【名】〔人〕高僧。名は延昌。慈念はその諡(おくりな)。加賀國の人。比叡山に登りて、顯密の奥義を究め、補陀落(ふだらく)寺に居る。朱雀・村上兩天皇の門師たり。年八十五。

じねん 自然【副】しぜん(自然)に同じ。

じねんかい 自然界【名】しぜんかい(自然界)に同じ。

じねんがう 私年號【名】朝廷にて定めしものの外、私に設けたる年號。我が國の未だ年號なかりし時代に、渡居せる僧が、彼の土に倣ひて、假作したるに始まるといふ。例へば繼體天皇の代の定和、欽明天皇の代の貴樂など、後世の僞作に係るもの、また中世以後、地方の勢力ある者の私稱に係るもの等あり。逸年號。異年號。

じねんがう 自然薤【名】次條に同じ。

じねんご 自然杭【名】熊笹又はすず竹等に結ぶ種實。飯に炊き、又は粉として食す。ささみどり。猿蓑(野童)「じねんごの藪吹く風ぞ暑かりし」

じねんこじ 自然居士【名】■〔人〕優婆塞(うばそく)。和泉國日根(ひね)郡自然田村の人。始、法相を修め、後に禪に歸して、南禪寺の大明國師に師事し、京都東山の雲居(うんご)寺に往す。頭を剃らず、法衣を著せず、時に或は袈裟を纏ひて、高座に登り、或は鼓を擊ち、扇を取りて舞ひ、以て佛道に誘引せんがための方便としたり。■謠曲の一。說法の場に、諷誦(ふじゅ)を上げに來れる女兒の、無情なる人買に連れ行かれんとするを、自然居士が、さまざまの恥を忍び、力を盡して、遂に助けかへすことを作る。

じねんごだう 自然悟道【名】〔佛〕他の敎を待たず、本覺の內藏に依りて、自然に開悟すること。

じねんごじ 自然慈【名】〔佛〕師に依らずして、自然に發する菩薩の慈悲心。

じねんじやう 自然生【名】〔植〕やまのいも(薯蕷)に同じ。

じねんじよ 自然薯【名】〔植〕前條の註。

じねんじやう 自然生【名】じねんばえ(自然生)に同じ。

じねんせき 自然石【名】■人工を加へぬ、天然のままなる石。■天然に出來たる石。(人造石に對して)

じねんち 自然智【名】〔佛〕師授によらず自然に備はれる智。功用を假らずして、自然に生ずる佛の一切種智。法身の妙智。本覺の智。太平記「その法忽に成就して、自然智を得たまひて」

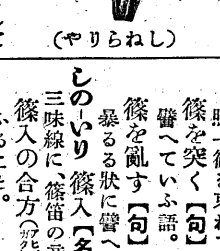
じねんどう 自然銅【名】〔鑛〕しぜんどう(自然銅)に同じ。

じねんに 自然に【副】しぜんに(自然に)に同じ。源氏「じねんに、心をさめらるるやうになん」

じねんばえ 自然生【名】草木の、播種せずに、自然には生ひ出づること、又その草木。自生。じねんせい。

じねんりよく 思念力【名】〔哲〕がいねんさよう(概念作用)に同じ。

しねらりや (英Cineraria)【名】〔植〕菊科に屬する二年生の草。高さ約一尺。葉は大形にして、やや三角形をなし、缺刻・鋸齒あり。花は初夏、莖頭に頭狀花序をなして開き、その色、紫紅・黑紫・淡紅など種種あり。觀賞用として栽培せられ、園藝變種多し。


(やりらねし)

しねわる 【名】心しねしねとして、わるきこと。根性わる。

しの 篠【名】〔植〕■しのだけ(篠竹)の略。新古今「河やしろしのにをりは〳〵乾す衣いかにはせばか七日ひざらん」蟬丸「清貫は篠の小籔に走り入り」■篠金物にて造りたる鎧。■しのぶえ(篠笛)の略。四しのまき(篠卷)の略。〔越後國の方言〕

篠突く雨【句】篠にて突く如き勢の雨。

篠に折延ぶ【句】六月祓(みなづきばらへ)の時、贖物(あがもの)としたる衣などを、篠に折掛く。これに、麻の葉にて、水をそそぎ、清むるなり。新撰遠今日はまた篠にをりはへ祓してあさの露ちる蟬の羽衣

篠の網戸【句】篠竹を編みて作りたる扉。堀杰「山里のしの網戸の隙をあらみ明けてぞ見つる朝顏の花」

篠の衣【句】篠竹の間に身を置くこと。夫木「草枕しのの衣の夕しぐれいかなる色をわきて染むらん」

篠の小笹(ささ)【句】しの(篠)に同じ。新古今「ふしわびぬ篠の小笹の假枕はかなの露や一夜ばかりに」

篠の小薄(すすき)【句】しのすすき(篠薄)に同じ。金葉「今はしも穗にいでぬらん東路の岩田の小野の篠の小薄」

篠の小吹雪(ふぶき)【句】篠を亂して、雪交りに風の烈しく吹くこと。また篠を吹きなびかす風ともいふ。をふぶき參照。「古語」催馬樂「あふみぢのしののをふぶきはやひかずこもりましやせぬらんしののをふぶきやさきんだちや」

篠を束ぬ【句】大雨の形容。次條參照「篠を束ねて降る雨」

篠を突く【句】雨の勢烈しく降る狀に譬へていふ語。

篠を亂す【句】篠をつく雨に、風の交り暴るる狀に譬へていふ語。

しのいり 篠入【名】芝居にて、囃子(はやし)の三味線に、篠笛の音を交へたるもの。

篠入の合方(かたゐ)【句】篠入の鳴物を用ふること。

しのうくわい 市農會【名】市の域內に耕地・牧場・原野などを所有する者、及び農業を營む者より組成する農會。

しのうくわい 司農卿【名】くないきやう(宮內卿)の唐名。拾芥抄「宮內卿、司農卿」

しのうこうしやう 士農工商【句】しみん(四民)に同じ。心中二枚繪草紙「實にや、士農工商の品數數のその中」

しのうつはもの 叢の器物【句】じ(叢)の條下を見よ。

しのおぼしめし 字の思召【句】じ(字)の條下を見よ。

しのおりべ 志野織部【名】『織部燒に似たる點あるによりていふ』志野燒の半面に、綠色の釉藥を施したるもの。

しのがき 篠垣【名】篠竹にて作りたる垣。

しのがなもの 篠金物【名】『篠竹の立ちたる狀に似たればいふ』鐵の細き板を並べて、金具としたるもの。鎌田兵衛名所盡「大荒日に篠金物打ったる鎧」

しのぎ 凌・凌【名】しのぐこと。

しのぎ 鎬【名】■刀の身の、背(むね)と刃との間に隆起せる線。みね。保元「手先六寸、鎬を立てて、前一寸には、峰にも刃をぞ附けたりける」■〔建〕『形、前記の鎬に似たるよりいふ』隅木(すみき)などの脊峰(せみね)。

鎬を削る【句】■『切合ふ時、互に鎬の部分の强く擦るるによりていふ』刀にて、烈しく戰ふ。聖德太子繪傳記「大勢に渡り合ひ、鎬を削り戰ひける」■烈しく爭ふ。孕常盤「今にも源平軍となれば、兄弟鎬を削る中」

しのぎさがり 鎬下【名】刀劍の鎬の、穗先より遙かに下の方にあるもの。太平記「備前長刀のしのぎさがりに、菖蒲形なるを脇に挾み」

しのぎづくり 鎬作【名】刀劍に鎬を附くること、又その刀劍。「る造。

しのぎづくり 鎬造【名】刀身に鎬を有すること。

しのぎのみ 鎬鑿【名】中央に鎬を附したる鑿。

しのぎざし 凌羽【名】遠き方へ飛ぶよき矢。一說に、古の一種の矢羽の名より出で、その羽にて刎(は)ぎたる矢なるべしと。「古語」萬葉「梓弓ゆばらふりおこしのぎばを二つたばさみ」

しのぎぼり 鎬彫【名】中央に鎬を附して彫刻すること。

しのぐ 凌ぐ・凌ぐ【動四他】■抑分けて行く。しひて通る。しぬぐ。千載「いづも八雲の底をしのぎ、敷島大和の境に入りすぎにたり」■たわましむ。しなはす。しぬぐ。古今「おく山のすがのねしのぎ降る雪の消(け)ぬとかいはん戀のしげきに」■上を犯す。あなどる。反抗す。孛藝侮傲志乃久」四辛抱して過ぐす。こらふ。堪ふ。その日、その日を凌ぐ。娥歌加留多「向後色の道ふつりと存じ切り、恥をしのぎ御奉公仕らん」女殺油地獄「未だ肌寒き川風を酒に

ぎてそそりゆく」

しのぐり 篠括【名】括袖(クヽリ)の、細かに縫ひたるもの。

しのこ 磁粉・地粉【名】土器又は瓦の破片より作れる粉末。漆に混ぜて、漆器の下地に用ふ。

しのこし 篩残【名】しのこすこと。しのこしたること。

しのこす 篩残す【動四他】なしつくされずして、餘りを生ず。やりあます。

しのごて 篠籠手【名】一の腕と二の腕とに、篠(ササ)金物(カナモノ)を取附けたる籠手。

しのごの 四の五の【句】し(四)の條下を見よ。

しのざきさんたう 篠崎三島【名】〔人〕大阪の儒者。名は應道、通稱は長兵衛、郁州とも號す。伊豫國の人。初は、商たりしが、四十歳の時、儒となり、宋學を唱ふ。詩・書・天文・卜筮に通ず。文化十年歿す。年七十七。

しのざきせうちく 篠崎小竹【名】〔人〕大阪の儒者。三島の義子。名は弼、字は承弼、通稱は長左衛門、一に畏堂と號す。詩文を善くす。嘉永三年歿す。年七十一。

しのざきとうかい 篠崎東海【名】〔人〕江戸の儒者。名は維章、字は子文、通稱は金吾。宏覽博識にして、著書頗る多し。元文五年歿す。年五十四。

しのざさ 篠笹【名】〔植〕しのだけ(篠竹)に同じ。

しのじ しの字【名】女の髪の結ひ方の一。形しの字の如く見ゆるもの。

しのじま 篠島【名】〔地〕尾張國知多郡に屬する島。師崎(モロザキ)の南、海上約一里にあり。全島を一村とす。周回一里半餘。延元三年義良(ノリナガ)親王(後村上天皇)伊勢より東國に志したまふ時、颶風に遇ひて、漂著せられし處。

しのすがき 篠簀掻【名】篠竹を綴り合はせたる簀子。たかすがき。『國葉』五月雨はしづのしのやのしのすがきふしどころまで水は來にけり」

しのすすき 篠薄【名】〔植〕穂の無き薄。しぬすすき。源氏「穂にいでぬ物おもふらししのすすき招く袂の露しげくして」

しのすだれ 篠簾【名】篠竹を編みて作りたる簾。夫木「だつれどまばらに編める篠すだれ忍ぶ人めも得こそかくれね」

しのすねあて 篠臑當【名】しのだてすねあて(篠立臑當)に同じ。

しのせん 使の宣【句】し(使)の條下を見よ。

しのぜん 四膳【名】よのぜん(四膳)に同じ。「を見よ。

しのせんじ 使の宣旨【句】し(使)の條下

しのそうしん 志野宗信【名】〔人〕志野流香道の祖。通稱は三郎右衛門。三條西實隆に從ひて、香道の蘊奥を究め、足利義政に仕ふ。大永二年歿す。年八十一。

しのだ 信太【名】〔地〕和泉國泉北郡の村。古は、その附近一帶を信太郷と呼び、有名なる信太森ありたり。今、村内大字中村にある同名の森は、即ちその遺跡なるべしといふ。又、古歌に葛の葉を詠合はせたるもの多きによりて思へば、當時は、葛の名所たりしなるべし。六帖「和泉なる信太の森の樟(クス)の木の千枚に分れて物をこそ思へ」

しのだいふ 史大夫【名】大夫の特に從五位下に敍せられたる者。大夫の使。

しのだたう 私黨【名】きさいたう(私市黨)を見よ。

しのだおほはしりう 篠田大橋流【名】せきぐちきんけい(關口金鷄)を見よ。

しのだきんけい 篠田金鷄【名】〔人〕せきぐちきんけい(關口金鷄)に同じ。

しのだけ 篠竹【名】〔植〕細くして、叢生し、その葉の細かなる竹の總稱。しのざさ。しの。しぬ。萬代「しの竹のふしはあまたに見ゆれどもよに疎くもなりまさるかな」

しのだずし 信田鮨【名】『狐は油揚を好むといふによりて、信太森の狐の傳説を取りて名づけしなるべし』いなりずし(稻荷鮨)に同じ。

しのだていかう 篠田定考【名】〔人〕江戸の書家。名は養、字は子浩、通稱は五郎藏。明浦と號す。大橋流より出でて、明浦流を創む。また畫をよくし、星岳と號す。安永九年歿す。

しのだてすねあて 篠立臑當【名】鎧の臑當の、表に細き鐵板を縱に並べ附けたるもの。しのすねあて。

しのだのもり 信太森・篠田森【名】〔地〕しのだ(信太)を見よ。

しのだまき 信田卷【名】『しのだずし(信田鮨)を見よ』油揚を半分に切り、その中に、芝蝦の茹でて皮を剝きたるものを容れ、口を干瓢にて結へ、砂糖醬油・味淋にて煮古めたる食物。

しのたまはく 子曰【名】『四書などの中に、「子曰(イハク)く」と書起したる文句の多きよりいふ』儒教の學問。漢學。俚語「すこしは、子のたまはくを習った御藝で」

しのだれ 篠垂・篇垂【名】兜の鉢の上に、八幡座より垂れたる筋板。古のは劍形、後世のは銀杏形(ギンナンガタ)・蝟頭(ハリカケ)にして、銀又は白鑞(ハクラフ)にて飾れり。しなだれ。「見よ。

しのちやう 使の廳【句】し(使)の條下を見よ。

しのづかいがのかみ 篠塚伊賀守【名】〔人〕次條に同じ。

しのづかしげひろ 篠塚重廣【名】〔人〕武將。伊賀守と稱す。武藏國の人。自ら畠山重忠六世の孫と稱す。新田義貞の四天王の一人、又その十六騎の一人。驍勇にして、功勞多し。終る所を知らず。

しのづき 叢の坏【句】し(叢)の條下を見よ。

しのづけ 鮓【名】ふしづけ(柴漬)(二)に同じ。

しのづづみ 四鼓【名】鼓の一種。中大鼓をいふといふ。

しのて 眞手【名】『て(手)は雄蹟の義。しんよ(眞書)を見よ』かいしよ(楷書)に同じ。參考「色紙に書きて、山吹に附けたるはしの手、春の詩」「見よ。

しのとなぞ 字の謎【句】なぞ(謎)の條下をしれんばかりに。しなひて。しなしなと。しののに。しぬのに。〔古語〕

しのに 篠に【副】新古今「あふことは片野の里のささのいほしのに露散る夜はの床かな」

しのに 四二【名】ろく(六)に同じ。〔遊廓の隱語〕會我虎が摩「朝日奈殿といふまいぞ、秩父の六郎重保と身が名も無用、四の二といへば合點」

しのにむ《英Synonym》【名】〔語〕語形異なりて、意義の相同じき又は相似たる語。例へば、國語の家と家屋と。支那の見と視と看との類。類語。同義語。同意語。

しのね 羊蹄【名】〔植〕『羊蹄(シ)の根の義』ぎしぎし(羊蹄菜)に同じ。「に同じ。

しのねだいこん 羊蹄大根【名】〔植〕前條

しののめ【枕】濡れそぼつさま。しとど。しっとり。しぬぬ。〔古語〕散木「誰れ聞かんこせのさ山の杉のうれに雨もしののにくきら鳴くなり」

しのはぐさ 篠葉草【名】〔植〕しの(篠)に同じ。〔古語〕新古今「散らすなよしののはぐさのかりにても露かかるべき袖の上かは」

しのめ 東雲【名】『枕詞しののめの(東雲の)の轉用せられしもの』あかつき。あけがた。あけぼの。古今「東雲のわかれを惜しみわれぞまづ鳥よりさきに鳴きはじめつる」日本振袖始「未だ東雲の晴がりよりも引出す牛の犒や」(二)名香の一。にほひ涼やかにて薄し。

しののめぐさ 篠目草【名】〔植〕『しののめに開くよりいふ』あさがほ(朝顏)の異稱。

しののめの 篠目の【枕】しぬのめ(篠目の)に同じ。新勅撰「朝がしはぬるや河邊のしののめのしのびてぬれば夢に見えつつ」

しののめの 東雲の【枕】明く・ほがらぼがら等にかけていふ。古今「しののめのほがらほがらとあけゆけばおのがきぬぎぬなるぞ悲しき」後撰「東雲にあかでわかれし袂をぞ露やわけしと人やとがむる」

しののめ 篠井【名】〔地〕信濃國更級(サラシナ)郡鹽崎(シホザキ)村の大字。川中島の内に屬す。明治維新以前は盛んなる宿場なりしも、今は隣村布施村に篠井停車場設けられ、當時の面影なし。停車場は、信越線と中央線との

連絡驛なり。「よ。

しのはこ 尿の箱【句】し(尿)の條下を見

しのばし 忍ばし・偲ばし【形二】したはし。忘れがたし。撰集抄「そのあともしのばしく」

しのばずのいけ 不忍池【名】〔地〕東京市下谷區上野の岡と本郷臺との間にある池。東西約三町、南北約四町、周圍十二町餘、多くの蓮を植う。古は神田川・淺草川・荒川と相通じて、一面廣大なる沼澤なりきといふ。寛永元年僧天海池中に、一小島を築き、辯才天を安置す。上野の岡を比叡山に擬して、東叡山と呼びしに對し、琵琶湖の竹生(ちくぶ)島に擬せるなりといふ。

しのばずぶんこ 不忍文庫【名】屋代弘賢の書庫。三宇ありき。

しのはちてんだ 篠原【名】〔植〕いたちしだ(鼬齒)に同じ。

しのはら 篠原【名】篠の生えてある原。しぬはら。催馬樂「わが衣は野原しのはら萩の花ずりやさきんだちや」

しのはら 篠原【名】〔地〕近江國野州(やす)郡の村。中仙道中の古驛、野州村の東北に接す。元暦二年平宗盛の斬られし處。栗太(くりもと)郡野路(のぢ)に接せり、「野路の篠原」と續けたる古歌多し。東關紀行「野路といふ處に至りぬ。篠原といふ所を見れば、西東へ遙かに長き堤あり」

しのはら-くにもと 篠原國幹【名】〔人〕武將。舊鹿兒島の藩士。明治維新の際、軍功を以て、陸軍少將近衞兵長官となりしが、征韓の議協はずして、故山に還り、明治十年西鄉隆盛に從って、兵を擧げ、吉次越(きちじごえ)にて戰死す。

しのび 忍【名】一しのぶこと。內證。內密。起「奉二承密旨一(うけたまはりてひそかにおほせをうけ)」二**しのびあるき**(忍歩)に同じ。大鏡「御供廻かろがろと、わざと忍の町乘物」三身を隱して、敵陣又は人家などに、密かに入込むこと。忍術。國姓爺後日合戰「韃靼の伯達多といふ忍の上手を相具し」四**しのびもの**(忍者)の略。太平記「或夜の風雨に紛れて、逸物の忍を八幡山へ入れて」五**せったう**(竊盜)の異稱。

しのびあし 忍足【名】他人に氣づかれぬやうに、こっそりと歩むこと。ぬきあし、さしあし。天の網島「治兵衞は、つっと往ぬるかほ、又ひきかへすしのびあし」

しのびあひ 忍逢【名】男女の密會。一代女「これを珍重がりて好く人ありて、仕著(しぎ)・合力にて、しのび逢の男絶えず」

しのびあふ 忍逢ふ【動四自】しのびあひをなす。生玉朝顏話「若氣のあやまり、奥女中としのびあひ、御手討にあふ所を」

しのびあみがさ 忍編笠【名】昔、吉原の遊廓へ通ひし者の、身を忍ぶため被りて行きし編笠、又それを借りて被ること。淺草泥町(どろまち)、即ち今の田町邊にありし編笠茶屋にて借るを常とす。又己が家より被り行くを、手あみ笠又は手前編笠といへり。吉原がよひに、編笠被る風習は、享保より稀になり、元文に至りて、全く止めり。また京都の島原遊廓の入口にも、江戸に倣ひて、編笠茶屋出來たることありといふ。

しのびあるき 忍行【名】次條に同じ。源氏「六條わたりの御しのびありきのころ」

しのびいる 忍入る【動四自】しのびこむ(忍籠む)に同じ。源氏「いみじくしのびいりたまへる御ねくたれのさまを」

しのびおひ 忍追【名】夜中に、船にて、敵前などを通る時、帆を捲へて乘ること。

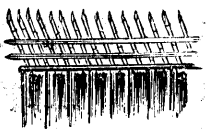
しのびがき 忍垣【名】こまちがき(小待垣)に同じ。

しのびかく 忍書く【動四他】ひそかに書く。源氏「あながちにしのび書きたまへらん御心はへもにくからねば」

しのびかご 忍駕籠【名】人に知られぬやうに乘りたる駕籠。一代男「科なき身にはしのび駕籠、四人がかりに乘りざまに」

しのびがたな 忍刀【名】隱して所持する刀。ふところ刀。

しのびがへし 忍返し【名】一盜人の侵入を防がんために、塀の上に、尖りたる鐵又は竹などを繁く斜に打並らべたる設備。やぎり。用明天皇職人鑒「大門變じて、鐵門の忍びがへしは劍の山」二形、花鋏に似て大なる釘拔形。



(一)しへがびのし)

しのびかへす 忍返す【動四自】甚しくかくす。深くつつむ。源氏「かかるけしきをも見えたてまつらんと、しのびかへしつつ聞きも入れぬさまにて」「じ。

しのびくぎ 忍釘【名】かくしくぎ(隱釘)に同

しのびぐさ 忍草【名】その物事をしのぶくさはひ。思のたね。元輔集「行くさきの忍草にもあるやとて露のかたみも置かんとぞ思ふ」

しのびぐみ 忍組【名】忍の者の仲間。伊賀者甲賀者の類。

しのびぐるま 忍車【名】一人目に立たぬやう忍びて乘りゆく車。夫木「さ夜ふかすしのび車のうはしろに霜ふるまでもとに立てれとや」二人に隱れて車を挽くこと。藷曲「伝風」「影はづかしき我が姿、忍事を引く汐の」

しのびけんどん 忍慳貪【名】慳貪蕎麥を特選ぶに用ひし箱。內部に仕切ありて、狹き方へ、汁つぎ及び藥味などを入れたり。

しのびごと 忍事【名】忍びてなすこと。祕密の事柄。密事。源氏「かかる御しのびごとにより」

しのびごと 忍言【名】『しのぶ(忍ぶ)三を見よ』ひそひそばなし。ささめごと。私語。〔古語〕狹衣「ありつる忍言どもは、耳とどまることやまじりたりつらん」

しのびごと 誄【名】『忍言の義。しのぶ(忍ぶ)一を見よ』死人をいたみて、その平生の德などを述べたつる言葉。しぬびごと。誄辭(るいじ)。紀「佩刀而誄(ヲビテタチテシヌビゴトヲノル)」

しのびごま 忍駒【名】三味線の駒の、特に調子を低くするために用ふるもの。長町女腹切「思の色をしのびごま」

しのびこむ 忍込む【動四自】忍びて入りこむ。侵入す。しのびいる。

しのびこむ 忍籠む【動下二他】源氏「今までかくしのびこめさせたまひける怨も」

しのびごゑ 忍聲【名】忍びて物をいふ聲。ひそひそごゑ。盛衰記「念珠おし揉み、忍聲にて」

しのびさんぢゆう 忍三重【名】淨瑠璃の手の一。忍音(しのびね)に彈きかすむる三重。

しのびしのびに 忍忍に【副】人に知れぬやうに。ひそかに。古今「みちのくのあだちのまゆみわが引かば末さへよりこしのびしのびに」

しのびすげ 忍菅【名】地中に根の這廣がりたる菅。夫木「下根さすしほの入江のしのびすげ忍びもあへずからき世なれば」

しのびずまひ 忍住【名】忍びて隱れて住まふこと。五人女「昔のよしみの人を賴みて、わづかなる板庇を借りてしのび住、何か渡世のたよりもなく」「同じ。

しのびだ 忍田・隱田【名】おんでん(隱田)に同じ。

しのびぢ 忍路【名】隱れて忍びて行く路。藷曲「鞘丸」「足弱車忍路を、雲井のよそに廻らして」

しのびぢやうちん 忍提灯【名】外部より覆ひかけて、光の洩れぬやうにしたる提灯。丹波與作「主なき馬の、夜中といひ、繫がれあるは、いぶかしし、提灯立てよと呼ばはって、忍提灯鞘はづせば、萬燈會の如くなり」

しのびづきん 忍頭巾【名】忍歩(しのび)にかぶる頭巾。新版歌祭文「非道の刀さすがよ』ひそひそばなし。ささめごと。私語。〔古語〕狹衣「ありつる忍言どもは、耳とどまることやまじりたりつらん」

しのびごと 誄【名】『忍言の義。しのぶ(忍ぶ)一を見よ』死人をいたみて、その平生の德などを述べたつる言葉。しぬびごと。誄辭(るいじ)。紀「佩刀而誄(ヲビテタチテシヌビゴトヲノル)」

しのびごま 忍駒【名】三味線の駒の、特に調子を低くするために用ふるもの。長町女腹切「思の色をしのびごま」

しのびこむ 忍込む【動四自】忍びて入りこむ。侵入す。しのびいる。

しのびこむ 忍籠む【動下二他】源氏「今までかくしのびこめさせたまひける怨も」

しのびごゑ 忍聲【名】忍びて物をいふ聲。ひそひそごゑ。盛衰記「念珠おし揉み、忍聲にて」

しのびさんぢゆう 忍三重【名】淨瑠璃の手の一。忍音(しのびね)に彈きかすむる三重。

しのびしのびに 忍忍に【副】人に知れぬやうに。ひそかに。古今「みちのくのあだちのまゆみわが引かば末さへよりこしのびしのびに」

しのびすげ 忍菅【名】地中に根の這廣がりたる菅。夫木「下根さすしほの入江のしのびすげ忍びもあへずからき世なれば」

しのびずまひ 忍住【名】忍びて隱れて住まふこと。五人女「昔のよしみの人を賴みて、わづかなる板庇を借りてしのび住、何か渡世のたよりもなく」「同じ。

しのびだ 忍田・隱田【名】おんでん(隱田)に同じ。

しのびぢ 忍路【名】隱れて忍びて行く路。藷曲「鞘丸」「足弱車忍路を、雲井のよそに廻らして」

しのびぢやうちん 忍提灯【名】外部より覆ひかけて、光の洩れぬやうにしたる提灯。丹波與作「主なき馬の、夜中といひ、繫がれあるは、いぶかしし、提灯立てよと呼ばはって、忍提灯鞘はづせば、萬燈會の如くなり」

しのびづきん 忍頭巾【名】忍歩(しのび)にかぶる頭巾。新版歌祭文「非道の刀さすが

世を忍頭巾の浪人に」

しのびづま 忍夫【名】公ならぬ夫。しのびをとこ。しのびのつま。かくし男。密夫。月前集「しのびづまおきつる後はささぬ戸を叩くに知りぬ水雞なりけり」

しのびづま 忍妻【名】公ならぬ妻。かくしをんな。かこひもの。しのびをんな。領城酒香童子「若かりし時、忍妻の腹に、男子一人設けしを」

しのびでかけ 忍出掛【名】忍びて外出すること。しのびあるき。曾我虎が磨「今日の非番の徒然と、朝日奈の三郎同道にて、忍出掛の至り風」

しのびところ 忍所【名】■人に知られぬやうに、忍び隠れて居る處。かくれが。■なつかしく思ふ所。「古語」源氏「ここら年へたまへる御住所の、いかでか忍びどころなくはあらん」

しのびとだな 忍戸棚【名】男女の密會する戸棚。「代男」しのび戸棚と申すは、これも、内證より通路仕隠けて、男を入れおき、逢はすることなり」

しのびとり 忍取【名】夜中に忍び寄りて、敵城を乘取ること。

しのびながし 忍流・隠流【名】退けて、遠所の官に左遷すること。「古語」起「隠流、シノビナガシ」

しのびなき 忍泣【名】聲を立てずに、ひそかに泣くこと。しのびねに泣くこと。

しのびなぐさみ 忍慰【名】忍び隠れて慰むこと。一代女「石垣町にありし時は、色白にして、全盛の男、しのび慰の花車(ケシャ)座敷、伽羅で固めし御肌豐かなる風情」

しのびなみだ 忍涙【名】ひそかに涙をながして泣くこと。忍泣の涙。先代萩「君おもひ、わが子を思ひ、心のおくのしのぶ山、しのびなみだの折からに」

しのびに 忍に【副】人知れず。ひそかに。「古語」源氏「しのびに御ふみかよはしなどして」

しのびね 忍音【名】■ちひさき音。こごゑ。■しのびて泣く聲。新古今「時鳥まだうちとけぬしのび音はこぬ人をまつ我れのみぞなく」■『おぼつかなき音にて鳴くよりいふ』時鳥(ホトトギス)の初音。源氏「しのびねや君もなくらんかひもなきしでのたをさに心かよはば」

しのびねいき 忍音泣く【句】しのびなきをす。大鏡「火たきや陣屋など破らせけるほどにこそえ堪へず、しのびねなく人人侍りけれ」

しのびね 忍寢【名】人目を憚りて、隠れて寢ぬること。本朝三國誌「しのびねもせぬ妻ごめの」

しのびねを 忍根緒【名】「忍の緒」に同じ。

しのびのこす 忍殘す【動四他】隠くして出さずに置く。「古語」源氏「かくしのび殘されたる事ありけるをなん思ひぬると」

しのびのを 忍の緒【句】しのび(忍)の條下を見よ。

しのびのをか 忍岡【名】(地)しのぶがをか(忍岡)に同じ。廻國雜記「霜ののちあらはれにけり時雨をば忍の岡の松もかひなし」

しのびはだつけ 忍膚附【名】移鞍(カラシ)に用ふる鞦附。

しのびび 忍火【名】音をたてずに、打つ切火(キリ)。若風俗「小者にしのび火を打たせ」

しのびびと 忍人【名】■人目をしのびて通ふ男又は女。しのびづま。「古語」祭穂「かうしのびびと設けたまへる人をも、二つなくおぼしさわぐ」■世に隠れしのぶ人。隠者。

しのびぶね 忍船【名】人目をしのびて漕ぐ船。

しのびまはり 忍廻【名】次條に同じ。

しのびめつけ 忍目附【名】主命によりて、ひそかに或地方に至り、地勢・消息等を、他に氣附かれぬやうに視察する武家の臨事の役。しのびまはり。

しのびもとゆひ 忍元結【名】外部より見えぬやうに結ぶ元結。一代女「島田に忍元結三筋まはし、その上に、長平紙(ナガヒラ)の幅廣を掛け」

しのびもの 忍者【名】變裝して、敵地に入込み、樣子を探る人。かんじや。かんてふ。しのびのもの。しのび。

しのびものみ 忍物見【名】主命により、忍び隠れて、敵狀をうかがふ者。足輕など、この役に當る。かまりものみ。かまり。しばみ。くさ。くさかまり。

しのびやか 忍やか【貌】忍び隠れたるさま。ひそか。源氏「しのびやかに、心にくきかぎりの女房の四五人さぶらはせたまひて」

しのびわらひ 忍笑【名】しのび笑ふこと。

しのびわらふ 忍笑ふ【動四自】しのびやかに笑ふ。平治「皆忍びわらひけり」

しのびをとこ 忍男【名】しのびづま(忍夫)に同じ。一代女「月に六齋のしのび男」

しのびをんな 忍女【名】しのびづま(忍妻)に同じ。一代男「左に天の川、磯島といへるにも、船子の瀬祝、しのび女あるがごとし」

しのぶ 綴納【名】しだふ(綴納)に同じ。

しのぶ 忍【名】■(植)しのぶぐさ(忍草)(一)(二)の略。伊勢「わすれ草生ふる野べとは見らめどもこはしのぶなりのちも賴まん」■(植)小蘭骨(ショウラン)科に屬する多年生の草。山地に自生し、黒褐色の鱗毛を有せる根莖、長く匍匐して、處處より葉を生ず。葉は數回の羽狀複葉にて、葉裏に多數の子嚢群を有す。「惠海州骨碎補」■襄(カヤ)の色目の一。表は萌黄、裏は青。秋用ふ。

しのぶ 信夫【名】■(地)岩代國十郡の一。郡役所を福島市に置く。上古、今の伊達(ダテ)郡と合して一國を成し、信夫國と呼び、大化の改新に郡となりて、石背(イハセ)國に屬し、のち陸奥國の一部となれり。後撰「君をのみしのぶの里へ行くものを會津の山のはるけきやなぞ」■しのぶずり(信夫摺)の略。(主として思ひ忍ぶ意に言掛けて、歌に用ふ)「惠」夫木「知られじなしのぶの衣濃き摺の人目ばかりに亂れわぶとは」

しのぶ 忍ぶ【動四他】■思ふ。したふ。しぬぶ。「偲ぶ」古今「忘られん時しのべとぞ濱千鳥ゆくへも知らぬあとをとどむる」薩摩歌「互にしのびしのばれて、物三年は夜晝なし」■堪ふ。こらふ。しのびこらふ。しぬぶ。新葉「狩人のいるののきぎす妻戀にしのばれぬねはわれもたてつつ」■人目にかくれてなす。ひそかになす。しのびかくる。新勅撰「しのぶ山しのびて通ふ路もがな人の心の奥もみるべく」

しのぶ 忍ぶ【動上二他】前條に同じ。古今「思ふにはしのぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしものを」

しのぶ 忍ぶ【動四自】■かくる。人目にかからず居る。文武五人男「人にしのぶの檜ふかき」山家「葉がくれに散りとどまれる花のみぞしのびし人にあふ心地する」■隠れて通ふ。詞花「しのびたる男、鳴りけるきぬをかしがましとて押しのけければ」孕常盤「六十九になるしわんぼうの隠居が、玉といふ飯焚にたった一夜しのんで」

しのぶ 忍ぶ【動上二自】前條に同じ。「物へだてて聞くに、人の忍ぶるが、夜中などうちおどろきていふ言は聞えず」

しのぶうり 慈菰【名】常磐津淨瑠璃に合はせて演ずる踊。本外題は「垣衣(シノブ)」

しのぶえ 篠笛【名】篠竹にて造りたる横笛。里神樂又は俗曲の囃子などに用ふ。しの。

しのぶがをか 忍岡【名】(地)東京市下谷區上野公園地の舊稱。しのびのをか。柳檀「出合茶屋忍が岡は尤もな」

しのぶぐさ 慈草・忍草【名】(植)■のきしのぶ(軒忍)に同じ。和名「垣衣。一名、鳥韭、之乃布久佐」■わすれぐさ(萱草)に同じ。伊勢「忘草をしのぶぐさとやいふとて」■しのぶ(忍)■に同じ。

しのぶくろ 志野袋【名】『志野流にて用ふるよりいふ』香包を入るるに用ふる、圓き袋。

しのぶじょけん 信夫恕軒【名】(人)漢學

(えぶのし)

者。舊鳥取藩士。名は榮。海保漁村芳野金陵・大槻磐溪等に從學し、詩文に通ず。明治四十三年歿す。年七十六。

しのぶずり 信夫摺・忍摺・慈摺【名】陸奥國信夫郡より出だし摺模樣の絹。模樣の法目正しからぬによりて、「信夫捩摺(ノヂリヅモ)ともいへり。一說に、源融(トホル)の歌に「陸奥(ミチノク)のしのぶもぢずり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに」とあるは、惑といはんために、陸奥の信夫の地名を言掛けたるに過ぎざれば、信夫郡の產物とするは誤にて、惑草の莖と葉とを打亂して、摺附けたるものをいふと。後世も、その莖葉を、深綠その他の色にて染出したる布帛をいひ、今も福島市の一名產として、布呂敷半襟等に應用せり。草の綟摺。伊勢「この男、しのぶずりの狩衣をなん著たりける」

しのぶのくさ 慈草・忍草【名】〔植〕**しのぶぐさ**(惑草)〔一〕に同じ。古今「ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶの草ぞ生ひける」

しのぶのもり 信夫森【名】〔地〕岩代國信夫郡にありし森。千載「いづくより吹きくる風の散らしけんたれもしのぶの森のことの葉」

信夫森の言の葉【句】『思ひ忍ぶ意にかけて、人に見すべからざるものといふ義。森は、葉の緣語』隱してなしたる歌合の批評。

しのぶの-やま 信夫山【名】〔地〕**しのぶやま**(信夫山)に同じ。夫木「鳴けや鳴け信夫の山の呼子鳥つひに止らぬ春ならずとも」

しのぶの-をか 信夫岡【名】〔地〕■**しのぶやま**(信夫山)に同じ。續古今「何事をしのぶの岡の女郎花思ひしをれてつゆけかるらん」■河內國北河內郡甲可(カフ)村大字岡山の舊稱。新後撰「待つ人もなどかたらはで時鳥ひとりしのぶの岡に鳴くらん」

しのぶまんぢゆう 忍饅頭【名】**かすがのまんぢゆう**(春日野饅頭)に同じ。

しのぶ-みづ 忍水【名】鷹を飼ふために、人の尿に浸けし餌なりといふ。鷹三百首「紅葉する垣のもとなる忍水とりてあかふの鷹にかふらん」

しのぶもぢずり 信夫捩摺・忍綟摺・慈綟摺【名】〔植〕**れせだ**に同じ。

しのぶ-もぢずり 信夫捩摺・忍綟摺・慈綟摺【名】『**もぢ**は、**もぢる**(捩る)・**もつる**(縺る)・**みだる**(亂る)等の意。**すりもどかす**(摺斑す)を見よ』**しのぶずり**(信夫摺)に同じ。〔古語〕千載「ともしする宮城が原の下露にしのぶもぢずりかわく世ぞなき」

しのぶ-やま 信夫山【名】〔地〕岩代國信夫郡にある岡。福島市の正北約十五町、阿武隈川の左岸に在り。高さ約五百尺。但し古歌に詠めるは、信夫郡一帶の諸山の概稱なるべしともいふ。**しのぶのやま**(信夫山)・**しのぶをか**(信夫岡)參照。新勅撰「しのぶやま忍びてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく」

しのぶわげ 忍髷【名】芝居の鬘(カヅラ)の一種。

しのべ-だけ 忍竹【名】**しのめだけ**(篠芽竹)に同じ。新六「うきふしをおもひも入れず忍竹しのべとねこそまづ泣かれけれ」

しの-まき 篠卷【名】**あめ**(綿筒)を云ふ。〔西國及び土佐國・武藏國の方言〕

しのまき-うを 篠卷魚【名】三枚におろしたる小魚を、二本の金串に卷附けて燒きたるもの。口取などの附合(ツケアハセ)に用ふ。

しのみや 四宮【名】〔地〕山城國宇治郡山科(ヤマシナ)村の大字。櫃(ヒツ)川の水源地。この邊、四宮河原の稱あり。仁明天皇第四の皇子人康(ヤスヤス)親王の館地なりしによりて呼ぶ。

しのみや-がは 四宮川【名】〔地〕**ひつがは**(櫃川)に同じ。

しのみや-がはら 四宮河原【名】〔地〕**しのみや**(四宮)を見よ。盛衰記「三條を東へ、賀茂川・白川打越えて、粟田口・松坂・四宮河原を通るには」

しのみや-まつり 四宮祭【名】近江國大津市の鄕社天孫神社(舊稱、天孫第四宮)の祭禮。もと陰曆九月十日に行はれ、今は十月十日に行はる。大津祭。

しの-め 篠芽【名】■遲く生じて、色青く味苦き筍。和名「長間笋、之乃米」■〔植〕次條の略。

しのめ-だけ 篠芽竹【名】節の間長く、葉の小さき一種の竹。しのべだけ。しのめ。

しのや 篠屋【名】篠にて葺きたる家。新千載「時鳥かたらふ聲を聞きしよりあしのやにいこそねられね」

しの-やき 志野燒【名】『志野宗信の特に嗜好せしによりて名づくといふ』足利義政の頃、尾張國瀨戸にて、茶器用として、將軍の命を承けて造りたる陶器。肉厚く質粗にして、白色の釉藥(クスリ)を施し、龜甲の破痕を生ぜしめ、花卉を畫きたり。「ふ。

しのや-まき 【名】〔動〕**たぬき**(狸)に同じといふ。

しの-りう 志野流【名】香道の一流。志野宗信を祖とす。

しのり-がも しのり鴨【名】〔動〕游禽(ユウキン)類に屬する鳥。冬季我が國北部に渡來す。體は暗褐色、腹部は赤褐色を呈し、また眼前と耳邊とに、擬白色の部分あり。おきのけんてう。

しの-を 鬼絃【名】琵琶の絃の名。『涅槃色要集』琵琶鬼絃也、昔以二鬼鬚一作レ之、故如レ此書也』

しは 支派【名】本流より別れたる一流派。えだは。わかれ。

しは 志波【名】〔地〕次條を見よ。

しば 紫波【名】〔地〕陸中國三十二郡の一。郡役所を日詰(ヒヅメ)町に置く。この邊の地區、上古は子波・志波・志和・斯波等とも書き、斯波城を置かれ、弘仁二年に至りて、斯波郡の名始めて見ゆ。

しば 斯波【名】■〔地〕前條を見よ。■姓氏の一。足利氏の支流。足利泰氏の子尾張守家氏を祖とす。室町幕府時代には、三管領の一として、權勢盛んなりしが、家督相續の內訌生じて衰へたり。

しば 芝【名】■〔植〕禾本科に屬し、原野に自生する小草。葉は細小にして尖り、根莖は匍匐して、各節より根を生ず。庭園・堤防などに廣く植ゑて、土の崩壞を防ぎ、且つ美觀を添へしむ。しばくさ。のしば。「結縷草」■**れいし**(靈芝)に同じ。■**しばみ**(芝見)の略。■〔地〕東京市十五區の一。芝の砌(ミギリ)【句】靈芝の生ずる邊。聖帝の御住居。續古今「芝の砌の露も、色深くむすばれたるのみにあらず」

しば 柴【名】山野に生ずる小さき雜木。そだ。しばぎ。新古今「思ひ出づる折焚く柴の夕けぶりむせぶも嬉し忘れだたみに」

しば-の-いほ 柴の庵(イホ)【句】次條に同じ。

しば-の-と 柴の戸【句】■柴にて葺きたる庵。柴の戸。柴の樞(トボ)。新古今「いづくにも住まれずばただ住まであらん柴のいほりのしばしなる世に」■我が家の謙稱。

しば-の-と 柴の戸【句】前條に同じ。千載「わがためのむ日吉のかげはおく山の柴の戸までもささざらめやは」

しば-の-とま 柴の樞(トボ)【句】前條に同じ。

しば 萊草【名】荒地に生ずる雜草。菱(サヽ)の類。しばくさ。和名「萊草、之波、一名類草」

しば 駟馬・四馬【名】馬車を挽く四頭の馬。四駟。

駟馬も追ふ能はず【句】『說苑の說叢篇に「口者關也、舌者機也。出レ舌不レ當、駟馬不レ能二追也一、また文子に「出レ言不レ當、四駟不レ能レ追」とあり』一たび口に出して過つ時は、駟馬にて追ふとも及ばず。〔諺語〕

しば 司馬【名】■支那國の周代に、六官の一として、軍事・交通等の事を掌りし官。漢の代には、司徒・司空と共に三公の一たりき。■古の地方官の掾(ジヨウ)の唐名。

しば 死馬【名】死にたる馬。しにうま。

死馬に鍼を刺す【句】「死馬(シバ)に針を刺すを見よ。

死馬の骨【句】戰國策の燕國の條に「郭隗曰、古之人君、有下以二千金一使二涓人求上二千里馬一者上、馬已死、買二其骨五百金一而歸云云、涓人對曰、死馬且買二之五百金一、況生馬乎、不レ能二朞年一、千里馬至者三」とあるに本づく』■先づさほどにもなき人を優待すれば、他の賢者自ら來り集まる。■駿馬の骨に同じ。

死馬の骨を買ふ【句】前條を見よ。

しば 仔馬【名】こうま。幼駒。

しば 滋婆(梵 Śiva)【名】婆羅門敎にて、萬物を破壞して、また再造する威力ありとし

て、崇拝せし神。

しば 暫【副】**しばし**(暫)の略。〔古語〕古今「今しばとわびにしものをささがにの衣にかかりわれをたのむる」謡曲「山姥」「しばさせ給へ」

しば 屢【副】しばしば。しきりに。繁く。〔古語〕「しば鳴く」「しば立つ」「じ。

じーば 磁場【名】〔理〕**じば**(磁場)に同じ。

しばあおさぎ 柴蒼鷺【名】〔植〕**こあおさぎ**(小紫陽)に同じ。「〔古語〕

しばあめ 屢雨【名】**むらさめ**(村雨)に同じ。

しばい 支配【名】一取締ること。管轄。二**しはいにん**(支配人)の略。

しーばい 詩牌【名】一詩を記したるふだ。二作詩の際、小さき札に、韻字一箇を記して、各人に配布し、その當りたる文字にて、詩を作らしむるもの。三歌がるたの如く、漢詩を起・承と轉・結と二句づつに分ち記し、前者を誦みて、後者を取るやうにしたるもの。しがるた。

しーばい 紙牌【名】紙のふだ。紙箋。

しーばい 紙背【名】一紙の裏。二文章の裏面に含まれる意義。「眼光、紙背に徹す」

しーばい 四配【名】孔子の廟に配祠せられし四人。顔子・子思は右に、曾子・孟子は左に配せらる。

しーばい 試賞【名】試験的に貨物を賣却すること。

しばーい 司馬懿【名】〔人〕支那三國時代の名將。字は仲達。魏の文帝に仕へ、漢の孔明と屢戰ふ。後に宰相となり、國政を專にす。嘉禾三年歿す。「兒曹。

じーばい 兒輩【名】こどもたち。こどもら。

じーばい 時輩【名】當時の人人。

じーばい 次配【名】**じさい**(後妻)に同じ。

しばいーかんぢやう 支配勘定【名】江戸幕府の職制の一。勘定奉行に屬し、幕府の領地及び財用等を掌りしもの。算筆に長ぜる者これに補せらる。

しばいかんぢやうーしゆう 支配勘定衆【名】支配勘定に屬せる人人。「下。配下。

しばいーした 支配下【名】支配のもと。部下。

しばいーじょ 支配所【名】江戸時代に、遠國奉行及び郡代・代官の治めし幕府の領地、各部内に役所又は陣屋、及びその出張所を置きて、民政を掌りたり。

しばいーにん 支配人【名】〔商〕主人に代りて、その營業に關する一切の裁判上及び裁判外の行爲を爲す商業使用人。主人の營業のために、その全力を盡すべき者なるを以て、自己が商業を營み、或は第三者のために商行爲をなし、或は無限責任社員たることは、主人の許諾あるにあらざれば、行爲するを得ず。

しばいにんーとうきぼ 支配人登記簿【名】支配人の選任・解任及びその代理權の消滅などを登記するために、本店又は支店所在地の裁判所に備ふる商業登記簿。

しばーいほ 柴庵【名】柴を結びて作りたる庵。〔古語〕夫木「秋風になびく稻葉のたえまよりほのかに見ゆる賤がしばいほ」

しばーいも 【名】〔植〕**すずめのひえ**(二)に同じ。

しばう 紙砲【名】**かみはりづつ**(紙張砲)に同じ。

しーはう 至寶【名】最も貴き寶。

しーはう 四寶【名】四種の貴重なる物。文房の四寶【句】『明一統志に「新安志云、歙縣文房四寶、謂二紙・墨・筆・硯一也」とあり』筆と墨と紙と硯との併稱。

しーはう 師保【名】師匠と保母と。

しーはう 四方【名】一東と西と南と北と。二諸方。世上。天下。「四方を經營す」はうばう。ぐるり。まはり。四かく。四角。五三方に似て、孔の四つある臺。六四方に使す【句】『論語の子路篇に「子曰、行已有レ恥、使二於四方一不レ辱二君命一可レ謂レ士矣」とあるに本づく』國のために四方の外國に至りて、折衝の任に當る。

四方の志【句】『「桑弧蓬矢」を見よ』天下諸國を遊歷し、又は經營せんとする志。

四方四維【句】四方と四維と。津國女夫池「四方四維に地響して、ほっかり打拔く槻の扉」

しーはう 四方・八面【句】次條に同じ。

しーはう 四方・八方【句】四方と八方と。あらゆる方面。四方八面。

しーはう 肆放・侈放・恣放【名】**はうし**(放肆)に同じ。

しーはう 私報【名】**ししん**(私信)に同じ。(官報・局報に對して)

しーはう 市坊【名】まち。市街。

しーはう 四望【名】四方を眺むること。四方の眺望。

しーはう 志望【名】心がけ。のぞみ。

しーはう 思望【名】思ひしたふこと。思慕。

しーはう 資望【名】門地と人望と。

しーはう 姿貌・姿望【名】すがた。かたち。姿容。

しーはう 死亡【名】死ぬること。

しーはう 脂肪【名】動物の體中に在るあぶら。成分は炭素・水素・酸素にして、多くは二種以上の脂性化合體、卽ちパルチミン、ステテリン、オイレン等のエステルとなりて混在し、不揮發性なり。パルミチンとステアリンとに富むものは、牛脂・羊脂・豚脂の如く固狀を呈し、オイレンに富むものは、肝油・鯨油の如く液狀を呈す。すべて燃燒して、體溫・體力の原となる。また植物の種子・果實より採取する油をもいふことあり。**しばうさん**(脂肪酸)參照。

しーばう 子房【名】〔植〕『種子の房室の義』雌蕊の最下部の成熟して果實となるべき部分。膨大して、嚢狀をなせるを常とし、內に一室乃至數室を有し、胚珠を藏す。

しばう 子房【名】〔人〕**ちやうりやう**(張良)に同じ。吉野都女插「子房が祕藏、孔明が骨髓」

じーはう 時報【名】その時時の知らせ。

じーばう 自暴【名】我れを我れとそこなふこと。やけ。次條參照。

自暴自棄【句】『孟子の離婁上篇に「自暴者不レ可二與有一レ言也、自棄者不レ可二與有一レ爲也。言非二禮義一謂二之自暴一、吾身不レ能二居仁由一レ義、謂二之自棄一也」とあるに本づく』我れと我が身を廢棄すること。やけになること。

じーばう 寺坊・寺房【名】てら。僧庵。平家「二人の從僧、二人の童子、十人の下僧、七寶の大車、寺房の前に現ず」

じーばう 時望【名】時人の希望。

しはう-おもだか 四方澤瀉【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(かだもおうはし)

しはう-がき 仕方書【名】〔商〕商品を注文する時、その品の名・種類・形狀などを明細に書きて送る書附。

しはう-がみ 四方髮【名】撫附髮(ナデツケガミ)をかき、手拭にて包みたるもの。

しはう-がや 四方櫃【名】〔植〕**てうせんがや**(朝鮮櫃)に同じ。

しばう-かね 子房下位【名】〔植〕『英 Inferior ovary』子房の、萼片より下に位するもの。花托が子房の側壁に沿ひて伸長し、これを癒合せる結果にして、例へば胡蘿蔔(ニンジン)・胡瓜(キウリ)などの花に於ける類。(子房上位に對して)

しはう-き 視方器【名】測量上直角線を定むるに用ふる器械。直徑一寸五分・高さ六七分許の圓筒より成り、周圍に三箇の穴ありて、その最小なるを窺けば、自己に對して、直角の方向にある物體を同時に見ることを得。

しばう-き 始紡機【名】紡錘機械の一。普通三機より成る內の、最初の工程に用ふるもの。

しばう-きうじょ 死亡救助【名】職務のために受けたる傷痍又は傳染病等に原因して死亡せる巡査・看守の遺族に與ふる給助金。弔祭料。

しはう-ぎん 四寶銀【名】**しはうまめいたぎん**(四方豆板銀)と「同じ。寶丁銀)と

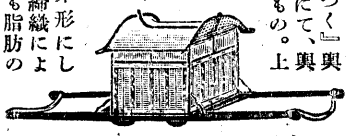
しばう-くわた 脂肪過多【名】〔醫〕次條に

しばうくわたーしやう 脂肪過多症【名】〔醫〕『羅 Aspositas universalis』脂肪の過殖して、甚しく肥滿する病。多くは飽食・渴飲し、安坐・逸居して運動不足なるより起り、歩行困難・發汗・蛋白尿等を呈し、同時に心

臓の肥大等を來し、脈搏・呼吸等異狀を生ず。肥胖病。

しばう-けんあんしよ 死亡檢案書【名】したいけんあんしよ(死體檢案書)に同じ。

しばう-ごし 四方輿【名】『四方より任意に乘り下りし得る故に名づく』輿の一種。屋は四方卸(シヤ)にて、輿の四方に簾を掛けたるもの。上皇・攝政以下公卿・僧侶の遠行に使用す。鎌倉以前には見えず。


(しどうはし)

しばう-さいばう 脂肪細胞【名】『獨 Fettzelle』結締織細胞の變じて、多量の脂肪を含むに至れるもの。圓形又は卵形にして、葡萄狀に集合し、結締織により纖絡す。核も原形質も脂肪のために壓せられて、胞壁に偏在す。身體の諸部に存す。**しばうそしき**(脂肪組織)參照。

しばう-さん 脂肪酸【名】(化)『英 Fatty acid』化學組成が一般式 $C_nH_{2n+1}CO_2H$ に合する一鹽基酸類。例へば蟻酸・酢酸・酪酸・パルミチン酸・ステアリン酸・オレイン酸等の類にて、その炭素原子多きものは、グリセリンとのエステルとなりて、動植物の脂肪を形成す。

しばうさん-なとりうむ 脂肪酸ナトリウム(英 Natrium salts of fatty acids)【名】(化)脂肪酸のナトリウム鹽にして、$C_nH_{2n+1}CO_2Na$ なる一般式を以て表はさるるもの。例へばパルミチン酸ナトリウム・ステアリン酸ナトリウム等の總稱。

しばう-しかく-の-まつり 四方四角祭【名】しかくしきやうのまつり(四角四境祭)に同じ。「條下を見よ。

じばう-じき 自暴自棄【句】じばう(自暴)の條下を見よ。

しばう-しきみ 四方榊【名】逆修の時、棺の外、四隅に竹筒を立てて、榊を插すこと。

しばう-しきん 死亡賜金【名】在官在職中に死亡したる官吏の遺族に對して、一時に給與する金錢。高等官は年俸の三分の一、判任官は月俸三箇月分を給せらる。

しばう-しつ 脂肪質【名】成分が脂肪なる物質。多量に脂肪を含める物質。

しばう-しんだんしよ 死亡診斷書【名】醫師が、その取扱ひたる患者の死亡したる時作る證明書。

しばう-しや 翼芳舍【名】かみなりのつぼ(雷壺)に同じ。

しばう-しや 四望車【名】牛車(ギツシヤ)の一。箱の四方に簾をかけたるものかといふ。太上天皇又は攝政・關白などの用ひしもの。

しばう-しや 死亡者【名】死亡せる人。

しばう-しや 忘望者【名】志望する人。希望者。

しばう-しやうめん 四方正面【句】しばう(四方)の條下を見よ。

しばう-じやうね 子房上位【名】(植)『英 Superior ovary』子房の、萼片より上に位するもの。例へば蓮(ハス)・百合(ユリ)などの花に於ける類。(子房下位に對して)

しばう-しようしよ 死亡證書【名】或人の死亡を證明して、醫師の作る文書。

しばう-しようめいしよ 死亡證明書【名】前條に同じ。

しばう-しゆ 脂肪腫【名】(醫)『羅 Lipoma』圓形に座取りて、隆起せる惡性ならぬ腫。發育緩かなれども頗る巨大となる。

しばう-じろ 四方白【名】兜の鉢の、前後左右に、銀又は白鑞(スヅ)を張りたるもの。(片白・二方白・三方白に對して)

じ-はうぜき 次寶石【名】(鑛)寶石に次ぎて貴重せられ、裝飾用に供せらるる鑛物。例へば、水晶・瑪瑙などの類。

しばう-せん 脂肪腺【名】(醫)ひしせん(皮脂腺)に同じ。

しばう-そう 脂肪層【名】(生)『獨 Fettschicht』或動物の體の皮下にありて、脂肪より成れる層。鯨などこれを有す。

しばう-そしき 脂肪組織【名】(醫)『獨 Fettgewebe』粗鬆(ソシ)なる結締織にして、脂肪細胞の多數の集合より成るもの。廣く皮下に亙りて存し、また各臟器の周圍、及びその間にも存す。

しばうだけ-の-ゆみ 四方竹弓【名】弓身の、木を中心として、四方より竹を合はせたる弓。普通の弓は、前後の兩側より竹を合はせたるに止まる。

しばう-だな 四方棚【名】方形の板二枚を、二本の柱にて支へたる棚。茶席にて用ふ。

しばう-ち 芝打【名】■物の端の、地面に觸るること。しばすり。本朝三國誌「錦革の物の具、同じ毛の袖草摺・冠の板より芝打迄、金具打つたる忍草」■幕の裾、卽ち上より數へて、その第五の幅(ノ)。くつの。

しばう-ちく 四方竹【名】(植)竹の一種。幹は徑七八分にて、四角なるもの。肌にざらつきあり。多くは杖に用ひらる。しかく竹。

しばうち-なが 芝打長【貌】物の端の、地面に觸るるほどに垂れたるさま。會我「連雀の擬(ナゾラ)への山吹色なるを、芝打長にかけきせ」

しばう-ちやうぎん 四寶丁銀【名】江戸時代の通貨の一。正德元年・二年に亙りて鑄造せられ、享保七年まで通用せし丁銀。縱二寸九分・橫九分强・重量四十一匁、品位銀二十分・銅八十分。寶の字四箇を極印として記せり。

しばうつり 屢移【名】たびたび所を變ふること。一說に、鳥の忍びて立つこと。(古語)山家「片岡にしばうつりしてなくきぎすたつ羽音とて高からぬかは」

しばう-とどけ 死亡屆【名】死亡者のあり し時、その旨を戶籍吏に屆け出づること、又その屆書。

しばう-とどけいでぎむしや 死亡屆出義務者【名】死亡屆を差出す義務ある者。第一、戶主、第二、同居者、第三、家主・地主又は土地もしくは、家屋の管理人。

しばう-どり 四方取【名】四方・普平地にて、敵の取附きやすき城。

しばう-ながれ 四方流【名】(建)寄棟造(ムネヅクリ)又は方形造(ハウギヤウヅクリ)の屋根に用ふるもの。

しばうぬき 四方貫【名】柱の四方に貫(ヌ)を差込むやうにしたるもの。

しばう-の-つじ 四方辻【名】よつつじ(四辻)を云ふ。(信濃國の方言)

しばう-はい 四方拜【名】元日の早朝に、天皇の清涼殿(古は、清涼殿)の東庭に出御あり て、天地四方及び山陵を拜したまひ、天下泰平・萬民安寧・五穀豐穰・寶祚長久を祈りたまふ儀式。今は三大節の一と定めらる。百合若大臣野守鏡「はや新玉の四方拜・節會・藥子・小朝拜」

しばう-はなびし 四方花菱【名】紋所の一。扁き花菱より厚味のあるもの。卽ち略、方形をなす。

しばう-びき 四方引【名】しへきびき(四壁引)に同じ。

しばう-ぶん 脂肪分【名】脂肪を有する量。

しばう-へう 死亡表【名】『英 Mortality table』死亡率を算定したる表。

しばう-へき 子房壁【名】(植)子房の側壁。

しばう-ほけん 死亡保險【名】生命保險の一。保險者が被保險者の死亡したる時、一定の保險金額を支拂ふもの。終身保險。

しばう-まさ 四方柾【名】柱の四面が柾目を現はせるもの。

しばうまめいたぎん 四寶豆板銀【名】江戸時代の通貨の一。四寶丁銀と同時に鑄造し、また同時に通用し、また同じく寶の字の極印四箇ある豆板銀。縱六分・橫六分・重量四匁二分、品位銀二十分・銅八十四分。

しばう-ゆ 脂肪油【名】液狀をなせる脂肪。

しばう-りつ 脂肪率【名】(地)東京市芝區の東京灣に沿ひたる處。俳諧古選附錄(趣旨)「芝浦や東の上にはつ霞」

しばうら 芝浦【名】柴賣【名】柴を賣りあるくこと、又その人。一代男「八王子の柴賣」

しばうりつ 死亡率【名】死亡數の百分率。

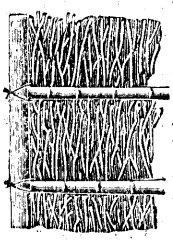
しばうゐ 四方位【名】四つの方位。東西南北。

しばえび 芝蝦【名】(動)『東京の芝浦に產する者最も名有るよりいふ』蝦の一種。大さ四寸ばかり、遠海に棲息し、體色淡黃にて、細かき絲斑あり。尾は稍綠色を帶ぶ。しろえび。

しばかうかん 司馬江漢【名】(人)江戶の洋畫家。名は峻、字は君岳、春波樓、また西洋道人と號す。鈴木春信・谷文晁に從ふ。

後、長崎に赴きて、洋畫を學び、油繪及び銅版繪を描く。花押に洋字を用ふ。我が國洋畫家の祖と稱せらる。文政元年歿す。年七十二。

しばがき 柴垣【名】㊀柴をゆひ合はせたる垣。ふしがき。しまがき。源氏「ゐなかだつしばがきして」㊁しばがきぶし(柴垣節)の略。㊂しばがきをどり(柴垣踊)の略。卜養狂歌集「奴柴垣を打つ所を畫に書いて」



(一)しばがき

しばがきの-みや 柴籬宮【名】たぢひのしばがきのみや(丹比柴籬宮)に同じ。

しばがきぶし 柴垣節【名】明曆の頃流行せし小唄。その元唄は、柴垣、柴垣、柴垣ごしに、雪の振袖ちらと見た。振袖へ、雪のふり袖ちらと見た。絲竹初心集の北國の米春唄に出づといふ。初は、この唄に伴ひて、二人立並びて、手を打ち胸を打ちて踊るを、柴垣踊といひ、これを行ふを、柴垣を打つといひしが、後には、ただ比丘尼などの拍板(ヒヤウヂ)に合はせて唄ふものとなれり。

しばがきをどり 柴垣踊【名】前條を見よ。一代男「柴垣踊は知ってかと尋ねけるに、夢にも知らずと申す」

しばかぐら 柴神樂【名】元日に奈良春日の若宮社前にて、里人集まり、束ねたる柴を捧げて、神樂を奏すること。

しばかはのり 芝川苔【名】〔植〕『駿河國富士郡芝川に産するよりいふ』かはあをのり(川青海苔)に同じ。

しばかぶ 柴株【名】斉藤なるたち、又そのかぶ。

しばからど 柴唐戸【名】園中に設くる兩開の門扉。高さ四尺・幅さ一尺四寸許なるを普通とし、煤竹(スス)にて、周圍の框(カマチ)を造り、上半は割竹の菱組とし、下半は萩を騅列して、扉の兩側より煤竹にて押縁したるもの。

しばかり 柴刈【名】柴を刈取ること、又その人。芻蕘。川中島合戰「我れとても、胎内から柴刈ではなけれども」

しばかり-わらは 柴刈童【名】小供の柴刈。萬葉十五「むしろ柴刈童となるとも、大工わらはとなる事なかれ」

しばがる 嗄る【動下二自】咳のために、聲かれたる如くなる。しやがる。

しばがれ 嗄【名】しはがること。かれ。

しばがれ-ごゑ 嗄聲【名】しはがれたる聲。しやがれごゑ。しやがれっこゑ。しほからごゑ。平家「しはがれ聲の事。…虛空に、しはがれたる聲を以て、…と、三聲呼びて」

しばき 柴木【名】しば(柴)㊀に同じ。保元「小舟を借りて、柴木を上に取掩ひ」

しばぎ 【名】〔植〕あかめがしは(赤芽柏)に同じ。

しばぎり しば桐【名】〔植〕むさしあぶみ(武藏鐙)㊁に同じ。

しばく 柴陌【名】うつくしき道路。都の市街。

しばく 紫白【名】紫と白と。

しばく 四白【名】家畜の四肢の下端に白毛ありて、その部の皮膚も、白色を呈せること。よつじろ。

しばく 詩伯【名】漢詩の大家。

しばく 詞伯【名】詩文の大家。

しばく 死魄【名】『魄は月の輪廓の光輝なき部分。朔日より少しづつ光を生ずるによりていふ』太陰曆の朔日。

じばく 自白【名】『自(カ)ら白(カ)す義』㊀自己の行爲・心術を自ら申すこと。まうしひらき。白狀。㊁〔法〕刑事にては、刑事被告人が、檢事の事實上の陳述を是認すること。民事にては、原告もしくは被告が、相手方の事實上の陳述を自認すること。

じばく 自縛【名】㊀みづから己が身を縛ること。おのれと自由を束縛すること。㊁我れと己が行動を檢束すること。

しばくさ 萊草【名】〔植〕しば(萊草)に同じ。新古今「花ぞ見る道のしばぐさ蹈分けて吉野の宮の春のあけぼの」

しばくさ 芝草【名】〔植〕しば(芝)㊀に同じ。

しばくし 市舶司【名】支那唐・宋・元・明時代に、亞剌比亞人の貿易を行ふ諸港に置きし役所。管船局を兼ねたる稅關の如き事務を執りたり。提擧市舶司。

しばく-しよ 止泊所【名】しこうくしよ(宿泊所)に同じ。

しばくらべ 芝競【名】㊀草原にて、馬を驅け競ぶること。一說に、野飼の馬を乘競ふことならんと。夫木「駒放つ野べのうなゐが芝くらべ長き日くらしこれやなぐさめ」㊁小供などの、葦・茅花(ツバナ)を摘み集めて、長さを比ぶる遊戲。

しばくり 柴栗【名】しばくれあめ(柴棟雨)の粒の小さきもの。さゝぐり。拾玉「しばぐりの色づく秋の山風に梢を去らぬこのはざるかな」

しばくりげ 柴栗毛【名】馬の毛色の一。栗毛の一種ならんといふ。

しばぐるま 柴車【名】しばつみぐるま(柴積車)に同じ。夫木「峯高き牛の尾山に入る人は柴車にて歸るなりけり」

しばくれあめ 柴棟雨【名】『俄かの大雨を利用して、拙人などの伐採りたる棟に、柴などをも載せて、河に流し下す意にていふとぞ』甚しく降る雨。おほあめ。しばくり。〔古語〕

しばくわう 司馬光【名】〔人〕支那宋の政治家また學者。字は君實、涑水(ソクスヰ)と號す。仁宗・神宗に歷任し、王安石の施政に反對す。曾て勅を奉じて資治通鑑を編す。元祐元年歿す。世に司馬溫公と呼ぶ。

しばこうゑん 芝公園【名】〔地〕東京市芝區にある公園。坪數十六萬八千坪。もと德川氏の廟所にて、老樹多し。

しばさい 芝菜・芝旌【名】矢を射る時、矢先の芝地に人多く居て、采配を振りて、矢の飛ぶごとに聲を立つること。

しばざかな 芝魚【名】『もと、江戸芝邊の漁夫の海より獲たるばかりの雜魚を賣りたるよりいふ』種種取交ぜたる小魚。雜魚(ザフギョ)。一代女「長屋ずまひの侍衆に召使はれて、朝の買物、しばざかなを籠に入れ」晉明朝路の記「この邊より品川まで、海邊、小家つづき、獵師まちといふ。小肴を取りて、江戸に出す。これを芝肴といふ」

しばし 呑し【形ク】けちなり。やぶさかなり。吝嗇なり。

しばし 暫時【副】少しの間。しばらく。ざんじ。しまし。しましく。源氏「しばしうちながめたまふ」「に同じ。

しばし-しで 柴四手【名】〔植〕さはしば(澤芝)

しばし-しば 屢【副】繁く。たびたび。どど。萬葉「住吉(スミ)の粟のうらみにしく波のしばしばいもを見るよしもがな」

しばし-しば 暫暫【副】『しば(暫)を重ねたるもの』しばしばし。暫く待て、暫く待て。〔古語〕拾「いつのまにか裝束しつらん。帶は道のままに結ひて、しばしばと追ひくる」

しばしば 【貌】次條に同じ。心中宵庚申「父も不憫に目をしばしば」

しばしば 【貌】涙出づる時、又は眼の球邊に濕き感ありて、繁く目ばたきするさま。しばしば。

じばしば 【貌】㊀水分の浸出するさま。㊁徐徐に事のはかどるさま。㊂當(アタ)は强からねど、深く身にこたふるさま。じいはり。浦島年代記「宇屋を見るもぞかみたち、身柱元からじばしばは、瘧病みたる如くなり」

しばしばめ 屢目【名】『しばたく(屢叩く)を見よ』悲しさをこらへて、しばたたく目附。喬の門松「せきあげせきあげ泣きければ、淨閑もしばしば目」

しばしむ 爲始む【動下二他】なしはじむ。行ひはじむ。

しばしん 司馬晉【名】せいしん(西晉)に同じ。(石晉に對して)

しばしんめい 芝神明【名】次條に同じ。

しばしんめいぐう 芝神明宮【名】しばだいじんぐう(芝大神宮)に同じ。「じめ。

しはじめ 爲始【名】しはじむること。てはじめ。

しはじやう 志波城【名】陸中國紫波(シバ)郡日詰(ヒヅメ)町の東方に在りし城。延曆二十二年の創設。安元年中藤原秀衡の弟樋爪太郎俊衡この城に居りしより、一に樋爪の館ともいへり。

しばしやうじよ 司馬相如【名】〔人〕支那前漢の詩人。字は長卿。卓王孫の女文君を

妻とす。子虚賦を作りて、武帝に知らる。元狩六年歿す。

しはす 師走・四極・極月【名】『年果つの義』陰暦十二月の異稱。極月(ごくげつ)。

しはすあぶら 師走油【名】師走の月の油。この月に油をこぼせば、火に祟(たた)らるとて、こぼしたる者に水をあびせて呪(のろ)ふ俗習ありしより特にいふ。今宮心中、世にひろがりし仇し名を…しはす油が身の上にかかる涙とこぼれそひ」

しはすぎつね 師走狐【名】師走の頃の狐。その辻殊に冴えて聞ゆとぞ。狂言(末ひろがり)「地紙よくとは、この紙の事でおりやる。師走狐の如く、こんこんといふほど張ってござる」

しはすごき 師走時【名】しはす(師走)に同じ。

しはすばうず 師走坊主【名】姿の見すぼらしくて、たよる處もなきが如き者の譬。用捨箱「姿やつやつしく、便りなげなる者をさして、師走坊主・師走浪人といふ諺の昔ありしゆゑに」

しはすびくに 師走比丘尼【名】おちぶれて、姿の見すぼらしき比丘尼。醒睡「しはすびくにの歌の裏さよ」

しはすらうにん 師走浪人【名】姿のやつれて、たよる處もなきが如きものの譬。夕霧阿波鳴渡「師走坊主、師走浪人昔は鎗が迎に出る」

しばずり 芝摺【名】『しばうち(芝打)・しばつき(芝突)・しばひき(芝曳)を見よ』■鎧の草摺(くさずり)の最下の板。■しばうち(芝打)に同じ。甲陽軍鑑「それ幕は、軍旅の實器なり。狩の幕、事をば五幅(の)にあてがひ、芝摺と地の上の間、三寸に打つなり。…軍陣の時は芝打といふ。常の時は芝摺といふなり」

しばずりごろも 柴摺衣【名】山などを分けゆくとき、柴に觸れたる衣。〔古語〕夫木「岩根ふむ山のたつきの夕されば柴摺衣うちしをれつつ」

しばせん 芝錢【名】寛永年間、江戸芝にて鑄造せし寛永銅錢。

しばせん 司馬遷【名】〔人〕支那前漢の歴史家。字は子長。事に因りて宮刑に處せられ、憤激して父談の遺志を紹ぎ、史記を作り、史家の模範となる。世に太史公と稱す。のち中書令に任じ、歿年詳かならず。

しばぜんかう 芝全交・司馬全交【名】〔人〕徳川時代の戯作者。通稱は山本藤十郎、交遊と號す。江戸芝に住し、大藏流の狂言師を業とす。佳作多く、毎年に新作を出だし、一時山東京傳とその盛名を競ふ。寛政五年歿す。

しばた 柴田【名】■〔地〕陸前國十三郡の一。郡役所を大河原(おほがはら)町に置く。■姓氏の一。足利氏の一族斯波(しば)氏より出づ。越後國新發田(しばた)城に據りしを以て、柴田と稱す。

しばた 新發田【名】〔地〕越後國北蒲原(きたかんばら)郡にある町。新潟を距る七里。溝口氏の舊藩地。郡役所を置く。

しばだいじんぐう 芝大神宮【名】東京市芝區宮本町に鎮坐する府社。祭神に伊勢大神宮の御分靈。寛弘二年の創立といふ。陰暦九月十六日を祭日とし、土生姜を商ふ。露店殊に多し。世に生姜祭・生姜市の稱あり。芝神明。

しばたかついへ 柴田勝家【名】〔人〕武將。通稱は權六。修理亮と稱す。尾張國の人。織田信長に仕ふ。勇武にして、智略あり。越前國に封ぜられ、北陸を定む。信長の薨後、信孝と謀りて、秀吉を除かんとし、天正十一年兵を擧げて大敗し、越前國北莊(きたのしやう)に自殺す。年五十四。

しばたかつね 斯波高經【名】〔人〕あしかがたかつね(足利高經)に同じ。

しばたきうをう 柴田鳩翁【名】〔人〕心學者。名は享、字は陽方、通稱は謙藏。京都の人。その講話の妙に感じて、道に入る者甚だ多し。天保十年歿す。年五十七。

しばたぎとう 柴田義董【名】〔人〕四條派の畫家。通稱は喜太郎、字は威仲。琴海また琴緒と號す。備前國の人。人物を巧みにす。文政二年歿す。年四十。

しばたげき 柴田外記【名】〔人〕仙臺藩の家老。本姓は佐竹、柴田宗朝に養はる。名は朝意。中務(なかつかさ)また内藏介と稱す。伊達宗重と、伊達式部との郡境の爭よりして、寛文十一年原田甲斐のために、訟廷にて殺さる。年六十三。

しばたぜしん 柴田是眞【名】〔人〕畫家また蒔繪師。初名は龜太郎。江戸の人。古溝(こみぞ)寛哉に蒔繪を學び、後、鈴木南嶺の門に入り、四條派の畫を學び、遂に一家をなす。明治二十四年歿す。年八十五。

しばたたく 屢叩く【動四他】『しばしばめ(屢目)を見よ』頻りにまたたきをなす。宇治拾「血のなみだを垂れて、目をしばたたきて」著聞「目ばかりしばたたきけり」

しばたたちと 司馬達等【名】〔人〕彫刻家。支那南梁の人。繼體天皇の十六年に來朝して、大和國高市郡坂田に住みたり。その子多須奈、その孫鞍作(くらつくり)止利(とり)、共に佛像彫刻家として著る。さかたでら(坂田寺)參照。

しばたつ 屢立つ【動四自】■音などしきりに聞ゆ。〔古語〕萬葉「堀江漕ぐいづての舟の梶つくめ音しば立ちぬ水脈(みを)早みかも」■波しきりに立つ。金葉「島風にしば立つ波のたちかへり恨みてもなほたのまるるかな」

しばたふぢ 柴田藤【名】紋所の一。下藤(さがりふぢ)の内に、一の字を容れたるもの。柴田氏の所用なり。

(しばたふぢ)

しばたぶんれい 柴田文嶺【名】〔人〕江戸の書家。名は央、字は子華、通稱は清八郎。また脩芝とも號す。寛政十三年歿す。年四十六。

しばたん 司馬談【名】〔人〕支那前漢の史家。司馬遷の父。世世太史たり。武帝に仕ふ。元封元年歿す。

しばたらう 吝太郎【名】吝き者を罵りていふ稱。

しばち 芝地【名】しばふ(芝生)に同じ。

しはつ 四極・四八津・磯歯津【名】〔地〕四極(よきは)山(一)のある處。萬葉「千沼回(ちぬわ)より雨ぞ降りくるしはつのあまあみて繩ほせりぬればたへむかも」

しーはつ 爲果つ【動下二他】なしおふす。しつくす。源氏「御はらへもしはてず、さわぎたり」

じーはつ 自發【名】他の力を俟たず自ら發動すること。自然に起ること。

じーばつ 自伐【名】■『自(みづ)ら伐(う)る義』己れの功にほこること。■『自(みづ)ら伐(う)る義』つ義。孟子の離婁上篇に「國自伐而後人伐之」とあり』自ら他より攻められて滅亡するやうにすること。自滅を招くこと。

しばついぢ 芝築地【名】芝を植ゑたる土の垣。盛衰記「燒内裏の芝築地の陰より、…刀二つ持ちて、海へ入る」

しばつかみ 芝摑【名】楊弓にて、食指を伸べて、矢をつまむこと。

しばつき 芝突【名】『しばうち(芝打)(一)・しばずり(芝摺)・しばひき(芝曳)を見よ』空穂(うつぼ)の底。

しーばつけ 柴附【名】四方手(よもで)の内、前輪(まへわ)の右方に著けたるもの。

しばづけ 柴漬【名】■ふしづけ(柴漬)(二)に同じ。蕪村「柴漬の沈みもやらで苺の雨」■茄子を薄く楕形に切り、茗荷の子と蕃椒の粒切(ぎりぢ)とに、鹽の穂を多量に入れ、鹽を薄く振掛けて漬けたる漬物。ふしづけ。

しばづけうま 柴附馬【名】柴を載運ぶ馬。傾城酒呑童子「二人談合とりどりの折に折焚く柴附馬」

しはっさう 四八相【名】〔佛〕さんじふはっさう(三十二相)に同じ。著聞「四八相値遇の勝因」

しーはつす 爲外す【動四他】しそこなふ。蒙古「われ、まことの天地(てんぢ)にうけられる國の親ならばしはづさじと思して」

しはつ-すゐらい 視發水雷【名】『英Observation mine』布設水雷の一種。適當の位置に沈設し、電線を以て、陸上の看守所に連ね、敵艦その上に來るを見定めて、直ちに電流を通じて、爆發せしむる裝置のもの。(觸發水雷に對して)

じはつ-すゐらい 自發水雷【名】『英Self-active mine』じよくはつすゐらい(觸發水雷)に同じ。

じはつてき-じやうしよ 自發的情緒【名】

〔哲〕『英 Spontaneous emotion』いうきてきじやうしよ(有機的情緒)に同じ。

しばつなぎ 芝繋【名】馬を芝地にとどめ置くこと。當流小笠掛宣「雲雀の床の芝繋ぎとある所に乗りしづめ」「晉便。

しばつばら 芝原【名】しばはら(芝原)の**しばつぶて** 屢礫【名】迅速につづけざまに、礫を飛ばすこと。

しばつみぐるま 柴積車【名】■刈取りたる柴を積みたる車。しばぐるま。蜻蛉日記「春ごりのしばつみぐるま牛をよはみ誰がふるさとのかきねしめしぞ」■柴を束ねて、山より落すこと。しばぐるま。

しばつみぶね 柴積船【名】刈取りたる柴を積みたる船。しばぶね。しばをぶね。源氏「柴積船の、ところどころに行きちがひたるなど」

しはつやま 四極山【名】〔地〕■攝津國住吉の邊の坂路なるべしといへど、今の何れの地に當るか明かならず。四八津山。磯嶋津山。萬葉「しはつ山打越えくれば笠縫の島漕ぎかくるたななし小舟」■豐後國大分・速見兩郡の境なる海岸にある山。高さ二三四〇尺。山頂平夷にして、眺望よく、高城山城址あり。一名、柴津山。高崎山。しばつやま(芝津山)參照。夫木「荒熊のなれてすむなるしはつ山もいかにかはげしかるらん」

しばつやま 柴津山【名】〔地〕前條■に同じ。

しばつやま 芝津山【名】〔地〕豐前國企救(キク)郡芝津村の西南にある山。山頂平地をなし、人家・陸田あり。古歌に詠めるは前前條■の四極(シハツ)山にあらずして、この山なるべしともいふ。一名、貫(ヌキ)山。しつやま(磯津山)參照。

しばて 芝手【名】芝を植ゑたる土手。しばてい

しばてい 司馬貞【名】〔人〕支那唐の史家。字は子正。自ら小司馬と號す。史記索隱及び補三皇本紀の著あり。

しばでんがく 芝田樂【名】芝生にて、田樂の舞を演ずること。平家「芝田樂百番、百番の一つもの」盛衰記「芝田藥踊らせて見せ奉るべし」

しばとり 屢鳥【名】『屢鳴き鳥の義』■にはとり(雞)に同じ。〔古語〕山家「もの思ひはまだ夕ぐれのままなるに明けぬと告ぐるしばどりの聲」■しばどり(雞)に同じ。

しばどり 芝土居【名】しばて(芝手)に同じ。

しばな 芝菜【名】〔植〕芝菜科に屬する草。濕地に生じ、葉は宿根より叢生し、やや韮に類し、莖の先に、帶黃綠色の細花、總狀花序をなして簇生す。その葉は、酢味噌に和して食用す。うみぜりやう。うみにら。萬葉「さほ川の岸のつかさのしばな刈りそね在りつつも春し來らば立ちかくるがね」

しばながしどう 柴流銅【名】ささぶき(笹吹)に同じ。

しばなきどり 屢鳴鳥【名】にはとり(雞)に同じ。

しばなく 屢鳴く【動四自】しばしば鳴く。しきりになく。萬葉「御園生の竹の林に鶯はしばなきにしを雪は降りつつ」

しばなくわ 芝菜科【名】〔植〕顯花植物。被子類單子葉門の一科。草本にして、沼澤に生ず。しさいくわ。

しばなつ 爲放つ【動四他】爲しかけたるままにて捨ておく。源氏「屏風の袋に入れこめたる所によせかけ、何かあらかなるきまにしはなちたり」

しはに 底土【名】底の方にある土。〔古語〕はつにはは赤らけみしはにはにぐろきゆゑ三つ栗のそのなかつにを」

しばの 芝野【名】芝の生えてある野。枕冊侍日記「しば野の中より鳥の立つを」

しばのう 芝能【名】たきぎのう(薪能)に同じ。

しばのの 芝の野の【枕】頭音の同じきより、しばしば(屢)にかけていふ。萬葉「くず人の若菜つまむとしばののしばし ば君を思ふころかも」

しばのへきかい 柴野碧海【名】〔人〕儒者。讃岐國の人。栗山の弟。名は允升、字は應登、阿波侯に仕ふ。詩文に長ず。天保六年歿す。年六十三。

しばのりつざん 柴野栗山【名】〔人〕德川幕府の儒官。名は邦彥、通稱は彥輔、古愚軒とも號す。讃岐國高松の人。昌平黌の教官となり、尾藤二洲・古賀精里の二人と共に、世に寛政の三博士と稱せらる。程朱の學を唱ふ。文化四年歿す。年七十二。

(んざつりのばし)

しばはぎ 芝萩【名】〔植〕■ひめはぎ(姫萩)に同じ。■くさはぎ(草萩)■に同じ。

しばばし 柴橋【名】柴にて造りたる橋。池上などに架して、雅致を添ふるに用ふ。太平記「橋柱落ちて見るも危き柴橋あり」

しばはふ 司馬法【名】〔書〕七書の一。兵法を論じたるもの。支那周の司馬穰苴の說をその門弟の追撰せしものといふ。一卷。

しばはゆし 鹹し【形ク】しほはゆし(鹹し)に同じ。〔古語〕名義抄「鹹、シハハユシ、シホハユシ」

しばはら 芝原【名】芝の生えてある原。しばっぱら。

しばび 潮合【名】しほあひ(潮合)の約。

しばび 柴火【名】柴を焚きたる火。

柴火の會(クワイ)【句】山野に遊山して、その場にて催す茶の湯。のがけ。

しばひき 芝引・芝曳【名】『芝の上に曳きずる部分の意なるべし。しばうち(芝打)しばぐり(芝摺)・しばつき(芝突)を見よ』太刀の金具の一。鐺(コジリ)と胴金との間に伏せたるもの。

しはひこ・じんじや 志波彥神社【名】陸前國宮城郡鹽竈町に鎭坐せる國幣中社。祭神は志波彥神。式内の古社にて、古來、鹽竈神社の末社と稱し、明治七年その本社に合併し、二社共に同格なり。

しばびと 柴人【名】柴を刈取る者。一代男「庭山吹・みつとてこの三人、その比柴人のすさみにもうたふほどの女とて」五人女「柴人一荷(ニカ)をおろして、鎌を握りしめ」

しばひめ 芝姫【名】よたか。淫寶處。〔京都の語〕

しはふ 死法【名】『英 Dead letter』實際に利用しがたき法。實用に適せぬ法。

しはふ 詩法【名】詩を作る方法。

しはふ 師法【名】人の師たる道。師道。

しはふ 私法【名】〔法〕『英 Private law』私人の間に起り得べき平等の關係を規定したる法律。商法・民法の大部分は、これに屬す。(公法に對して)

しはふ 仕法【名】さはふ。しかた。方法。

しはふ 司法【名】〔法〕裁判の形式にて、法律を適用する統治作用。民事・刑事の裁判。(立法・行政に對して)

しはふ 諡法【名】おくり名を附くる法。

しはふ 四法【名】〔文〕漢詩の作法にて、起句・承句・轉句・結句の併稱。

しはふ 子法【名】〔法〕法の繼受において、摸倣によりて成立ちたる方の法律。(母法に對して)けいじゆはふ(繼受法)參照。

しばふ 芝生【名】芝の生えてある場所。しばち。千載「今宵ねて摘みてかへらんすみれ咲く小野のしばふは露しげくとも」

じはふ 寺法【名】寺院の法度。太平記「ちさき禁酒はからき寺法かな」

じはふ 字法【名】〔文〕文字・語辭に就きての法則。(句法・章法などに對して)

しはふがく 私法學【名】〔法〕私法の法理を研究する學。

しはふがくしや 私法學者【名】〔人〕私法學に精通せる學者。

しはふかふ 咳ふ・欬ふ【動自】しはぶく(咳く)の延。〔古語〕源氏「うちしはぶかひたまへれば」

しはふかんとく 司法監督【名】財政監督の一。歲計豫算の施行後、その行爲が正當なりや否やを調査し、若し不當ならば、財務行政の長官の責任を問ふもの。我が國にては、會計檢査院の調査により、帝國議會この權を行ふ。

しはぶき 咳・欬【名】しはぶくこと。せき。和名「欬嗽、欬字亦作咳、之波不岐、肺塞則成也」

しばぶき 柴葺【名】屋根を柴にて葺くこと、又その屋根。

しはふ-きくわん 司法機關【名】〔法〕司法權を行ふ國家の機關、即ち裁判所。(行政機關・立法機關に對して)

しはふ-きやう 司法卿【名】明治十八年の官制改革前に於ける、司法大臣の稱。

しはふ-ぎやうせい 司法行政【名】〔法〕司法權の行使を圓滿ならしむるために、その準備又は補助として行ふ行政。即ち訴訟手續以外の裁判所の事務及び恩赦・復權等に關する政務。司法大臣これを統轄し、合議裁判所長・區裁判所の判事(判事二人以上なる時)もしくは監督判事(判事一人なる時)・檢事總長・檢事正、各その權限内において、これが機關の一部たり。法務行政。

しはぶきやみ 咳病・欬病【名】しはぶく病。せきの病。〔古語〕源氏「この曉より、しはぶきやみにやべらん」

しはふ-きよく 司法局【名】海軍省の一局。海軍に關する司法事務を扱ふ所。

しはぶく 咳く・欬く【動四自】しはぶきをなす。せきをなす。しはぶかふ。しはぶる。堤中納言物語「しはぶきつつ出できたる」

しはふ-くわん 司法官【名】司法事務を扱ふ官職。即ち判事・檢事の總稱。(行政官に對して)

しはふくわん-しけん 司法官試補【名】判事試補及び檢事試補の總稱。

しはふ-くわんちやう 司法官廳【名】司法事務を取扱ふ官廳、即ち裁判所・檢事局等の總稱。(行政官廳に對して)

しはふ-くゐき 司法區域【名】司法事務の取扱に關して定めたる土地の區域。

しはふ-けいさつ 司法警察【名】〔法〕刑事裁判の準備として、犯罪人の逮捕・捜索を目的とする警察。現行法にては、司法大臣の監督に屬す。(行政警察に對して)

しはふ-けいさつくわん 司法警察官【名】司法警察の職務を行ふ權限ある官吏及び公吏。即ち地方長官・警視總監・警視・警務長・警部・警部補・憲兵將校及びその下士・島司・郡長・林務官・市長・町長・村長など。

しはふけいさつほじよくわん 司法警察補助官【名】〔法〕司法警察官を補助して、司法警察の事務執行に任ずる官吏又は公吏、即ち巡査・憲兵など。

しはふ-けん 司法權【名】〔法〕統治權の一部。法律を適用する權力。裁判所にては、天皇の御名によりて、これを行ふ。(行政權・立法權に對して)

しはふ-さいばん 司法裁判【名】〔法〕民事及び刑事の裁判。司法事件を扱ふ裁判。(行政裁判に對して)

しはふ-さいばんくわん 司法裁判官【名】司法裁判を行ふ裁判官。

しはふ-さいばんけん 司法裁判權【名】〔法〕司法裁判を行ふ權限又は權力。

しはふ-さいばんしよ 司法裁判所【名】■司法裁判を行ふ權限ある裁判所。通常司法裁判所と特別司法裁判所とに分ち、通常司法裁判所は區裁判所・地方裁判所・控訴院・大審院に、特別裁判所は軍法會議・領事裁判等に分つ。■明治五年より同八年まで、全國數箇所に置かれし裁判所の一。今の控訴院に相當す。次級裁判所の裁判に對する控訴と、次級裁判所の決しがたき訴訟とを受理し、また司法卿の命を受けて、高等官と華族との犯罪を取調べしもの。

しはふ-じけん 司法事件【名】〔法〕司法事項を內容とする事件、即ち民事事件と司法事件との總稱。(行政事件に對して)

しはふ-じむ 司法事務【名】司法裁判と司法行政との事務の總稱。(行政事務・立法事務に對して)

しはふ-じん 私法人【名】〔法〕法人の一。財產權の主體たるもの。その目的により、公益法人と營利法人とに分ち、その組織によりて、社團法人と財團法人とに分つ。各その條を見よ。(公法人に對して)

しはふ-しやう 司法省【名】各省の一。司法大臣の統轄の下に、その行政事務を取扱ふ中央官廳。大臣官房の外、民事局・刑事局・監獄局を置く。

しはふしやう-さいばんじよ 司法省裁判所【名】明治五年より同八年まで設置せられし司法裁判所の一。次級裁判所の裁判に對する控訴及び次級裁判所の決し難き訴訟を受理し、また高等官及び華族の犯罪につきて、取調をなしもの。

しはふしやう-れい 司法省令【名】司法大臣の發する省令。

しはふ-だいじん 司法大臣【名】各省大臣の一。司法省の長官。裁判所・檢事を監督し、民事・刑事戶籍等に關する事項、その他各廳の司法行政事務を管理す。

しはふ-てすうれう 司法手數料【名】司法機關が個人の請求により、特別にその事務を執る時、徵收する手數料。(行政手數料に對して)

しばふね 柴船【名】しばつみぶね(柴積船)に同じ。新古今「暮れてゆく春の湊は知らねども霞におつる宇治の柴船」源平布引瀧「折から比叡の山おろし、柴船の助もなく、水に溺るる不便さよ」

柴船の胄捧(ショジヤウ)【句】手廻(テマハ)しの過ぎたることの譬にいふ語。

しはふ-はふ 司法法【名】〔法〕公法の一。司法に關するもの、即ち刑法・刑事訴訟法・民事訴訟法・破產法の總稱。

しはふ-はん 司法犯【名】〔法〕普通の犯罪の稱。(行政犯に對して)

しはふ-ぶ 司法部【名】明治十三年より同十四年にかけて、太政官に置かれし六部の一。恩赦及び行政裁判、その他司法上の事務執行の方法を査理し、その主務官廳の事務を監視せしもの。

しはぶる 咳る・欬る【動四他】しはぶく(咳く)に同じ。〔古語〕源氏「このもかのもしはぶる人ども、すずろはしくて、濱風を引きありく」

しはぶる 咳る・欬る【動下二自】前條に同じ。〔古語〕蔓葉「蟲がくれかくれいにきと歸りきてしはぶれ告ぐれをくよしのそこになければ」

しはぶる-びと 【動四他】しやぶるに同じ。

しはぶる-びと しはぶる人【名】しはぶかひ人の譬にて、咳(ガイ)をする人なるべしと。皺ある老人の意といふ說もあれど、假名遣違へり。**しはぶかふ**(咳ふ)參照。〔古語〕源氏「このもかのもにあやしきしはぶるひ人どもあつまりゐて」

しばべや 柴部屋【名】たき木を入れおく部屋。ものおき。一代男「柴部屋にしのびきて、物の蔭より駒けば」風流軍配團「捕へおきて、柴部屋に、羽がひじめにして」

しばまた 柴又【名】〔地〕武藏國南葛飾(シカツ)郡金町(カナマチ)村の大字。帝釋天を祭れる題經寺あるによりて名高し。於染久松色戀真「あれが在所は、葛西(カサ)の柴又村」

しばまつ 柴松【名】小松なりとも、また柴木の間に生えたる松なりともいふ。西行物語「柴松のくずのしげみにつまこめてとがみが原に牡鹿なくなり」

しばみ 柴見【名】しのびものみ(忍物見)に同じ。

しばみる 屢見る【動上一他】しばしば見る。〔古語〕萬葉「あからびく數妙の子をしば見れば人妻ゆゑにわれ戀ひぬべし」

しはーむし 吝嗇【名】しはき人を卑しめていふ語。しはんぼう。蜀葵「せむし吝嗇は名のみにして、蟲ならず」

しばむら 芝村【名】〔地〕大和國磯城(シキ)郡織田村の大字。德川時代に、織田氏の陣屋ありし處。

しはん 師範【名】■てほん。模範。標式。平家「太政大臣は、一人に師範として、四海に儀刑せり」■學問・技藝を敎授する役。

しはん 四半・幟半【名】■布帛の正方形に裁ちたるもの。■鎧の指物の一。幅と長さとを二尺と三尺との割合にて、竪長に作れる幟。二寸四方の板の的。■射術にて、二寸四方の板の的。**くはん**(九牛)參照。

しはん 私版【名】一私人の出版、又はその書物。(官版に對して)

しはん 私犯【名】〔法〕債權の原因となる不法行爲。「ち。

しはん 紫斑【名】紫色のまだら。紫色のぶつぶつ。

しはん 紫癜【名】傷癒えて、なほ紫色の痕跡をとどむるもの。

し-はん 屍斑【名】〔醫〕人の死後、漸次皮膚に變化を呈し、通常六時間乃至十二時間後、下垂する部分に生ずる斑點。下垂部の毛細管及び靜脈に、血液の多く集合するに因る。

し-はん 詩伴【名】詩を作る仲間。

し-はん 齒板【名】〔動〕軟體動物の咽喉に存する咀嚼器。

し-ばん 篩板【名】〔植〕『英Sieve-plates』篩管の横隔膜。所所に篩孔あり。

じ-はん 自判【名】自身に書きたる華押又は捺したる印。

じ-はん 寺判【名】寺院の印。寺印。

じ-はん 兒斑【名】〔醫〕小供の皮膚に存する青色の斑。臀部・腰部に多し。

じ-はん 事犯【名】〔法〕刑罰又は懲罰に處せらるべき所爲。

じ-ばん 襦袢【名】じゅばん(襦袢)の訛。

しはん-おん 四半音【名】〔音〕『英Quarter tone』一音卽ち全音の四分の一。

しはん-がくかう 師範學校【名】小學校教員となるべき人を養成する學校。北海道及び各府縣に、一校又は數校を置く。舊稱、尋常師範學校。また女子師範學校・高等師範學校・女子高等師範學校あり。各その條を見よ。

しはん-ぎん 四半斤【名】こはんぎん(小半斤)に同じ。

しはん-け 師範家【名】中古以來、學問・技藝を以て、代代師範として立ちたる家。例へば、和歌における二條家・冷泉(レイゼイ)家・飛鳥井(アスカ井)家・三條西家、蹴鞠における飛鳥井家・難波(ナンバ)家の類。

し-はんけい 視半徑【名】〔天〕『英Apparent radius』觀測者より天體の表面に引ける切線と、その天體の中心へ引ける直線とのなす角。しちよくけい(視直徑)參照。

しはん-けういく 師範教育【名】初等教育及び中等教育の教員を養成する目的の教育。

しはん-せき 四半石【名】〔建〕角形の石を、接目を斜にして、敷石としたるもの。玄關・車寄・正門前等に敷く。

しはん-だい 師範代【名】師範二に代りて、門弟を教授するもの。

しはん-ねつ 紫斑熱【名】〔醫〕けっぱんねつ(血斑熱)に同じ。

しはん-ばう 吝坊【名】しはき人。しはむし。けちんばう。しはんぼ。〔俚語〕

しはん-びやう 紫斑病【名】〔醫〕皮下の溢血より進んで、内臟に出血を起す病。

しはん-ぶん 四半分【名】四つに分ちしその一部。半分の半分。よついち。四分の一。

しはん-ぼ 吝坊【名】しはんばう(吝坊)の訛。

しはん-やく 師範役【名】師範二たる役。

しば-や 芝矢【名】屋外の芝生などにて、矢を射ること。

しば-や 柴屋【名】一柴葺の家。〔古語〕 壬二「暮れかかる峯のしばやの夕霜にたれしら雲の衣打つらん」 二柴を積みおく家。

しば-や 芝居【名】しばゐ(芝居)三四の訛。

しば-やま 柴山【名】柴の生えたる山。雜木山。後拾遺「いかばかり降る雪なればしながどりゐなのしばやま道まよふらん」

しばやま 芝山【名】一〔地〕上總國山武(サンブ)郡二川村の大字。觀音寺ありて、その本尊なる十一面觀音(俗に厄除大士といふ)に參詣する者多し。二姓氏の一。藤原姓にて、勸修寺家の支流。權大納言宣豐を祖とし、明治維新後、子爵を授けらる。

しばやま-がた 柴山潟・芝山潟【名】〔地〕加賀國江沼・能美二郡に跨る潟湖。周回三里二十三町。

しば-ゆばり 痳病・淋病【名】『屢(シ)尿(ユバリ)の義』りんしつ(痳疾)に同じ。〔古語〕 和名「淋、字亦作痳、之波由波利、小便數也」

しば-よしかど 斯波義廉【名】〔人〕足利氏の臣。武藏國蕨(ワラビ)城主澁川義鏡(ヨシカネ)の子。斯波義敏と同義健の家督を爭ふ。應仁の亂、山名宗全に黨し、亂後、尾張國に赴き、清洲(キヨス)城に卒す。一說に、文明二年陣中に卒すと。次條參照。

しば-よしとし 斯波義敏【名】〔人〕武將。大野義鐃の子。斯波持種に養はれ、義健の嗣となる。然るに、將軍義政、義廉を斯波氏の嗣をなししより、これと家督を爭ふ。應仁の亂、細川勝元に黨し、延德二年卒す。年六十一。前條參照。

しば-よしまさ 斯波義將【名】〔人〕武將。足利高經の四男。義滿の時、宿將の望を負ひて、細川賴之に代りて、執事となる。世に管領と稱す。管領の名これに始まる。義滿の薨後、義持を擁立し、應永十七年卒す。年六十一。

じ-ばら 自腹【名】一自分の腹。二自分の財布。

自腹を切る【句】わが金錢を出して支拂をなす。身錢(ミゼ)を切る。自切(ジギリ)をなす。

し-はらい 四波羅夷【名】〔佛〕次條に同じ。

しはらい-ざい 四波羅夷罪【名】〔佛〕『波羅夷は梵Pārājika』しぢゅうきんかい(四重禁戒)に同じ。

しばらく 暫【名】歌舞伎十八番の一。荒事の忠臣が、揚幕より暫く暫くと聲を掛けつつ出來り、花道にて、つらねを演べ、主君の危急を救ひて、惡公家の張本を挫くことを演ずるもの。本外題は種種あり。從って、その役名も、不破伴左衞門・鎌倉權五郎景政・泉小次郎・石山源太・安倍宗任・巴御前等、場合によりて變更す。

しばらく 暫・須臾・霎・霎時【副】一少しの間。しばし。しまらく。萬葉「吉野川ゆく瀨をはやみしばらくも絕ゆることなくありこせぬかも」 二當分の間。かりに。「姑く」 三長らく。久しく。ややしばらく。

し-はらひ 支拂【名】一支拂ふこと、又その金。二國庫又は金庫より、金圓を拂ひ渡すこと。

しはらひ-いうよ 支拂猶豫【名】一支拂を一時延期すること。二〔法〕商人が、商業上の債務につき、天災・事變によりて、支拂を果す能はざる場合に、債權者の過半數以上の承諾を得て、營業所の所在地又は住所地の裁判所に申請して、一年を超えざる範圍內の期間、支拂の延期を受くること。

しはらひ-がかり 支拂係【名】支拂の事務を扱ふ人。

しはらひ-かんぢやう 支拂勘定【名】一債權と債務とを差引きて勘定すること。二〔商〕外國爲替の支拂に、外國の貨幣を以てすること。

しはらひ-きじつ 支拂期日【名】〔商〕手形の金額を支拂ふべき期限の日。定期日拂・日附後定期拂・一覽拂・一覽後定期拂の四種あり。

しはらひ-きっぷ 支拂切符【名】〔商〕しはらひでんぺう(支拂傳票)に同じ。

しはらひ-きん 支拂金【名】支拂ふ金錢。

しはらひきん-ひかへちやう 支拂金控帳【名】支拂金を記入する帳簿。

しはらひ-きよぜつ 支拂拒絕【名】〔法〕支拂人が、手形所持人より支拂を請求せられたるに拘らず、正當の理由ありて、その支拂を拒むこと。

しはらひきよぜつ-しようしよ 支拂拒絕證書【名】〔商〕こばみしようしよ(拒證書)に同じ。

しはらひ-けいさんしよ 仕拂計算書【名】仕拂に要する貨額を計算せる文書。

しはらひ-しようけん 支拂證券【名】〔商〕金錢として、流通せしむる目的にて作られ、又は金錢として、流通することを、その券面に記載せる、一種の證券。

しはらひ-せいきうしよ 支拂請求書【名】一支拂を請求する書面。二支拂命令官にあらずして、歲出豫算の一部の執行を命ぜられたる官吏が、金庫に對して、歲出の支出を請求する書面。その請求及び取扱上の手續は、大體において、支拂命令に同じ。

しはらひそうきん-かはせてがた 支拂送金爲替手形【名】〔商〕或銀行が、他の支店銀行より、我が銀行を支拂人として振宛て來りし、送金爲替手形の總稱。かかる一種の形式を具有する手形あるにあらで、支拂銀行より見たる送金爲替手形の稱呼に過ぎず。

しはらひ-たてかへきん 支拂立替金【名】自己に支拂を負擔すべき義務なけれども、他の仕拂をなすべき人に代りて仕拂ひたる金錢。

しはらひ-たんたうしや 支拂擔當者【名】一〔法〕他人の支拂を引受くる人。二手形の支拂地が、支拂人の住地と異なると

き、支拂地に於て、支拂人に代りて、手形面の金額を支拂ふべく、その手形に記載せられたる者。

しはらひ-ち 支拂地【名】〔法〕手形面記載の金額を支拂ふべく定めたる土地。しはらひばしよ(支拂場所)參照。

しはらひ-ていし 支拂停止【名】〔法〕商人又は會社が、總債務の辨濟をなすこと能はずして中止するに至りたる狀態。

しはらひ-てがた 支拂手形【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。當方に於て、直接に支拂ふべき義務ある手形の總稱。

しはらひてがたかんぢやう 支拂手形勘定【名】〔商〕簿記にて、支拂手形の受渡及び支拂に關する始末を整理する勘定。

しはらひてがたきにふちやう 支拂手形記入帳【名】〔商〕支拂手形勘定を記入する帳簿。支拂手形帳。

しはらひ-てがたちやう 支拂傳票【名】〔商〕銀行會社などにて、現金の支拂をなしたる場合に、その受附掛の作製する傳票。支拂切符。支拂票。

しはらひ-にん 仕拂人【名】㊀支拂をなす人、又なすべき人。㊁〔法〕振出人の委託に應じて、爲替手形又は小切手の金額を支拂ふべき義務ある者として、その手形に記されたる者。氏名又は商號を記載するを要す。

しはらひばしよ 支拂場所【名】〔商〕手形の支拂地内に於ける一定の場所。卽ち支拂人の營業所、或はその住所、或はその居所など、これなり。

しはらひ-ふのう 支拂不能【名】〔商〕債務者が債務を完濟する能はざる狀態。ふさいてうくわ(負債超過)參照。

しはらひ-へいきんきじつ 支拂平均期日【名】〔商〕支拂期限の異なる數箇の債務を一口として、同時に支拂ふ場合に、債權者にも債務者にも公平なるべき支拂期日。その數箇の債務中、支拂期日の最も早きものの支拂期日を起算日とし、その翌日より、他のすべての債務の支拂期日に至る日數を計算し、これをそれぞれ各債務額に乘じ、その各乘積の和を、債務金額の和にて除し、得たる商を、初に定めし起算日に加ふれば、これを算出するを得。

しはらひ-へう 支拂票【名】〔商〕しはらひてんぺう(支拂傳票)に同じ。

しはらひほしやう-こぎって 支拂保證小切手【名】宛名銀行がその支拂保證をなしたる小切手。この場合、その銀行は、その小切手面に「支拂保證何何銀行」なる證印を捺(ナ)す。

しはらひほしやう-れう 支拂保證料【名】〔商〕仲買商が、その荷主に對して、販賣を委託せられたる貨物の賣先の支拂を保證する場合に、普通の販賣手數料以外に受くる口錢。賣先資力保證料。代金支拂保證手數料。

しはらひ-まんきじつ 支拂滿期日【名】〔商〕手形の支拂はるべき日、卽ち手形金額の支拂を請求し得べき日。

しはらひみさい-はいたうきん 支拂未濟配當金【名】〔商〕銀行會社又は商店が各株主又は資本主に未だ配當せざる純益金の總額。

しはらひむじゆんびてがた 支拂無準備手形【名】〔商〕手形面に記載せる金額を支拂ふ資力なくして發行せる手形。

しはらひめいれい 支拂命令【名】〔法〕㊀區裁判所の督促手續において、債務者に對し、債務の辨濟を促すため、裁判所の發する命令。債務者は、この命令送達の日より、一定の期間内に義務を履行するか、又は裁判所に異議を申立てざる時は、この命令により、强制執行を受くるものとす。㊁仕拂命令官が、その官署に屬する豫算を使用する際、國庫をして、現金の支出をなさしむる證書。

しはらひめいれい-くわん 仕拂命令官【名】〔法〕仕拂命令を發する權限を有する官吏。卽ち各省大臣、及びその委任を受けたる官吏。

しはらひ-もとうけだか 仕拂元受高【名】特別會計にて、歲出の支出に充つる資金。

しはらひもとうけだか-さしひきぼ 仕拂元受高差引簿【名】特別會計に於ける仕拂元受高・仕拂請求書受領濟額・仕拂額を登記するために、金庫出納役の備ふる帳簿。

しはらひ-よさん 仕拂豫算【名】各省大臣が、每年度決定の豫算定額に基き、仕拂命令官の仕拂命令を發し得べき限度額を定めて、大藏大臣及び會計檢査院に送付する文書。仕拂豫算書。「條に同じ。

しはらひよさん-しよ 仕拂豫算書【名】前條に同じ。

しはらふ 支拂ふ・仕拂ふ【動四自】金錢を拂ひ渡す。しはらひを爲す。

しはらみつ 四波羅蜜【名】〔佛〕次條の略。

しはらみつ-ぼさつ 四波羅蜜菩薩【名】〔佛〕金剛波羅蜜(東方)、寶波羅蜜(南方)、法波羅蜜(西方)、羯磨波羅蜜(北方)の四菩薩の稱。

しばり 縛【名】㊀縛ること、又その物。㊁〔商〕借主に一部返濟の能力生じても、約定の期限に全部を返濟するまでは、これを許さざる貸附金。〔銀行の語〕㊂せったいば(絕體絕命)に同じ。〔花合の語〕

しばり【貌】 おもむろに壓迫するさま。じいはり。じうはり。

しばり-あぐ 縛上ぐ【動下二他】からみあぐ。くくりあぐ。

しばりきゆう 芝離宮【名】東京芝區濱松町にある離宮。明治維新前、紀伊藩の濱屋敷なりしが、明治四年有栖川宮捺印となり、同九年離宮に指定せらる。

しばり-くび 縛首【名】兩手を後方に縛りて、首を斬ること。女殺油地獄「主人の金四ツ寶三貫目餘り引負ひ、この節季に立てねば、切腹か縛首」國花萬士鑑「せめて親兄の敵縛首を討つぞと聲をかけて」

しばり-つく 縛附く【動下二他】縛りて、放れぬやうにす。

しばり-なは 縛繩【名】縛りたる繩。日本武尊吾妻鑑「すはといはば、縛繩はり切ってくれんものと」

しばり-め 縛目【名】縛りたる結び目。なはめ。天の網島「人だちすれば、侍立寄って、しばりめ解き」

しばる 縛る【動四他】㊀束ねむすぶ。括(クク)る。宇治「捕へしばられやせんずらん」㊁逃亡を防ぐために、繩にてくくりいましむ。捕縛す。㊂人の自由を束縛す。

しばゐ 芝居【名】㊀芝生(シバフ)に居ること。〔古語〕夫木「しばゐする山松かげのゆふすずみ秋おもほゆる日ぐらしの聲」甲陽軍鑑「御座敷の内、又芝居などならば」㊁しばふ(芝生)に同じ。湖月抄「利休の露地は芝居にて、飛石なし」㊂敵味方の對陣して、闘ふ場所。㊃出雲の阿國が、京都の四條河原の芝居にて演じ始めしよりいふ。歌舞伎。演劇。㊄しばゐや。劇場。きのふはけふの物語「日よし大夫、勸進能に、隅田川をして、芝居中を泣かせた。さりとては名人ぢや」㊅きやうげん(狂言)㊂に同じ。「ちよっと芝居をする」

しばゐ-いしやう 芝居衣裳【名】俳優が狂言中著用する衣裳。

しばゐ-いり 芝居入【名】俳優の芝居に通ふこと。若風爺「明くれば芝居入、暮には樂屋がへり」

しばゐ-うた 芝居唄【名】元祿前後に、上方の劇場にて、役者の舞踊に合はせて用ひし唄。後には、土方にても、江戸の劇場と同じく、杵屋一派の長唄を用ふるに至れり。

しばゐ-がかり 芝居掛【名】芝居がかること。

しばゐ-がかる 芝居掛る【動四自】芝居の狂言に似たる振舞を爲して爲す。

しばゐ-がへり 芝居歸【名】芝居を見に行きて歸ること、又その時。若風爺「芝居歸を濱の水茶のかかに呼びこませ」

しばゐ-かんばん 芝居看板【名】劇場の正面、櫓の下に列べて掲ぐる看板。

しばゐ-ぎ 芝居氣【名】芝居の狂言めさんとする心。事をたくみて興がる氣質。しばゐごころ。藝氣。

しばゐ-こ 芝居子【名】劇場に出づる若き俳優。〔元祿頃の語〕若風爺「芝居子銀一枚になる」

しばゐこ-ぐるひ 芝居子狂【名】芝居子に溺れて、遊蕩に耽ること。若風爺「戀はじま

り、芝居子狂、是れぞ出家に備はりし遊興」

しばねごころ 芝居心【名】しばねぎ(芝居氣)に同じ。

しばねごと 芝居事【名】■芝居の狂言。五人女「都にて見覺えし芝居事、種となりて、俄かに貌を作り」■芝居の興行。世間子息形氣「芝居事に加はって、年年の損」■芝居を眞似たる所作。

しばねごや 芝居小屋【名】芝居を演ずる建物。しばねざ。劇場。

しばねざ 芝居座【名】前條に同じ。

しばねさかもり 芝居酒盛【名】芝生の地にて、酒宴をすること。曾我「各ここかしこにおり居て、芝居酒盛をぞしたりける」

しばねすぎ 芝居過【名】芝居の狂言の終りたる時刻。五人女「芝居過より、松屋といへる水茶屋に居流れ」

しばねせん 芝居錢【名】芝居見物のとき仕拂ふ錢。劇場の木戸錢。醒睡笑「能を見物せんとて、芝居錢十文つかはし」■金剛太夫、勸進能に、芝居錢三十文づつ取りければ」

しばねちゃや 芝居茶屋【名】劇場の附近に在りて、看客の案内・食事、その他の用事を辨ずる茶屋。

しばねばなし 芝居噺【名】芝居道具並びに下座(ゲザ)鳴物を用ひて、世話物を講ぜし一種の講談。三遊亭圓朝の創意に係る。

しばねばんづけ 芝居番附【名】芝居の狂言の外題・役割・場面の圖等を記したるもの。綴りて冊子となせるものと、一枚摺なるものとあり。もんばんづけ(紋番附)やくわりばんづけ(役割番附)參照。

しばねもの 芝居者【名】■劇場にて、種種の事を勤むる人の總稱。■俳優。太平記「夜あるく春のなごりや芝居者」

しばをぶね 柴小舟【名】しばつみぶね(柴積船)に同じ。夫木「柴小舟まほにかけなせゆふしてて西の宮人風祭しつ」

しばをんこう 司馬溫公【名】〔人〕しばくわう(司馬光)に同じ。

しひ【名】〔動〕かめの(龜手)の異稱。

しひ 強・誣【名】しふること。こじつけ。

萬葉「まつがへりしひにてあれやも三つ栗の中すぎてこず待つといはむやも」

しひ 椎【名】■〔植〕殼斗(カクト)科に屬する常綠喬木。高さ三四丈に達し、葉は長楕圓形にて、淺き鋸齒あり。表は深綠、裏は黃褐色をなす。雌雄同株にて、雄花は黃なる穗狀をなし、實は槲のより細長くして、殼斗に包まれ、喰ふべし。かしひ。しひがし。■椎の實。燕村「椎拾ふ横川(ヨカハ)のちごのいとまかな」

しひ 施肥【名】肥料を作物に與ふること。

しひ 修靡【名】おごり。驕奢。

しひ 市費【名】市に關する費用。市の負擔すべき費用。

しひ 私費【名】■一私人のはらふ入費。(官費・公費に對して)■じひ(自費)に同じ。

しひ 是非【名】ぜひ(是非)に同じ。

しひ 鮪【名】〔動〕眞黑(マグロ)の大なるもの。萬葉「あらたへの藤江の浦にしび釣るとあま船とよみ」

しひ 鵐尾・鶉尾・蛍尾【名】〔建〕『張師正の倦游錄に「漢以二宮殿多レ災、術者言、天上有二魚尾星一、宜レ爲二其象一、冠二於屋一、以禳レ之、唐以來寺觀殿宇尙有下爲二飛魚形一尾指上者一、不レ知何時易レ名曰二鵐尾一」とあり』建築上の飾物の一。宮殿などの棟の端に取附けたるもの。鯱鉾(シャチホコ)の類。とびのを。くつがた。三代實錄「大極殿西鵐尾、半折而落焉」

しひ 紫薇【名】〔植〕さるすべり(紫薇)に同

しひ 紫微【名】しせい(紫微星)の略。太平記「紫微北辰の拱陣も斯くやと覺えて嚴重なり」

しひ 至微【名】極めて微細なること、又その物。

しひ 芝眉【名】『支那唐の大尉居瑨が元德秀(字は紫芝)を評して、その眉字を見れば、人をして名利の心を去らしむといひし故事に本づく』他人の顏色の美稱。はいし(拜芝)參照。

しひ 四美【名】四の美とすべきもの、卽ち良辰・美景・賞心・樂事。

しひ 次妃【名】正妃に次ぐ妃。

じひ 侍婢【名】側に仕ふる女。こしもと。

じひ 自費【名】自らまかなふこと。自辨。

じひ 慈悲【名】■〔佛〕他に樂を與ふる心と、他の苦を拔く心と。諸佛菩薩の一切衆生を愛念したまふ心。抜苦(バック)與樂(ヨラク)。だいじだいひ(大慈大悲)參照。源氏「佛のしたまふ方便は、じひをもかくして、かやうにこそはあなれ」■あはれみ。なさけ。女殺油地獄「親の始は皆人の子、子は親の慈悲で立ち、親は我が子の孝で立つ」

じひあしだ 慈悲具足【句】〔佛〕慈悲の心を備へたること。平家「慈悲具足の山王」

じひのしょうぞく 慈悲の裝(ショウゾク)【句】■僧となり、又は法衣を身に纏ふこと。盛衰記「放逸の利劍、慈悲の粧を使すこと」■僧侶。

じひ 箏尾【名】『書經の堯典に「鳥獸孳尾」とありて、註に「乳化曰レ孳、交接曰レ尾」とあり』動物の交尾すること。つるむ。

じび 耳鼻【名】耳と鼻と。

じびいんこうくわ 耳鼻咽喉科【名】醫學上の一分科。耳鼻咽喉に關する一切の醫術。

じびえ 慈悲衣【名】ころも。法衣。忍辱鎧。

じひがし 椎樫【名】〔植〕しひのき(椎木)に同じ。

しひがたり 強談【名】しひて爲すはなし。しひごと。『古語』萬葉「いなといへどしふるしひのがしひがたりこの頃聞かずてわれ戀ひにけり」

じひがひ 慈悲買【名】買ふべき必要はあらざれども、賣手に同情して買ふこと。一代玄「折節の秋の淋しき女郎數多、じひがひにして、太夫出羽を慰めける」

しひがもと-さいまろ 椎本才麿【名】〔人〕大阪の俳人。大和國の人、また和泉國の人ともいふ。名は則武、字は少文。甘泉庵・松笠軒・舊德翁などの號あり。井原西鶴の門に學ぶ。元文三年歿す。年八十三。

しひかわう 尸毘迦王(梵 Śibi)【名】〔佛〕しびだいわう(尸毘大王)に同じ。

じひき 字引【名】■漢字を集めて、その字義を說きたる書物。字書。■じしょ(辭書)に同じ。

しびきゆう 紫微宮【名】■しびぬん(紫微垣)に同じ。■ここのへ。皇居。

しひごと 強言【名】■しひがたり(強語)に同じ。『古語』萬葉「いなといへど語れ語れとのらせこそしひいは申せしひごとなのる」■無き事實を、有りといひなすこと。讒言。「誣言」

じひさう 慈悲相【名】〔佛〕佛・菩薩の備へし慈悲の相貌。榮花「慈悲相は眼にあり」

しひざを 椎榛【名】椎の木にて作りたる水桶なりと。紀椎橋・シヒヲヲ」

しひし 鎡【名】しんし(鍼)に同じ。

しひしば 椎柴【名】■叢生せる椎の木。新拾遺「位山まだしひしばの蔭にゐて我が登るべき道はいそがず」■喪服の色。つるばみ染。千載「もろ人の花咲く春をよそに見てなほしぐるるは椎柴の袖」■喪中。

しひしばがき 椎柴垣【名】椎柴の生垣(イケガキ)。太平記「椎柴垣の隙あらはなる山がつの庵」

じひしん 慈悲心【名】慈悲の心。なさけぶかき心。懸入卦柱曆「慈悲心あまって、身の難儀」

じひしんとう 慈悲心鳥【名】〔動〕『鳴く聲、じひしんといふやうに聞ゆとて名づく』ぶっぽうそう(佛法僧)に同じ。

しひせい 私費【名】じひせい(自費生)に同じ。(官費生・公費生に對して)

しひせい 紫微星【名】紫微宮に屬する星。紫微。

じひせい 自費生【名】教育費を自辨する生徒。私費生。(官費生・公費生に對して)

じひせいと 自費生徒【名】前條に同じ。(官費生徒・公費生徒に對して)

しひせまる 強迫る【動四自】しひて迫る。むりに迫る。強迫す。

しひた 椎田【名】〔地〕豐前國築上(ツキアゲ)郡に屬する町。中津街道の宿驛。鐵道宇佐線の一驛。溱町とも稱す。

しびだいわう 尸毘大王(梵 Śibi)【名】〔佛〕釋迦が前生(ゼンショウ)にて、王たりし時の稱呼。その時、菩薩の行を修したりしが、

鷹に逐はれたる鳩(ハト)を救ふために、おのが身の肉を割きて、鷹に與へしことあり。尸毘迦王。尸毘王。盛衰記「尸毘大王としては、鳩に代つて、命をも捨てたまひけり」

しひたぐ 虐ぐ【動下二他】しへたぐ(虐ぐ)に同じ。

しひ-たけ 椎茸【名】■(植)擔子菌類に屬する菌。椎・栗などの木に生ず。香氣高し。人工によりて、樫・柏・楢などにも生ぜしむ。傘の外面は紫黒色或は黒褐色にて、裏面と柄とは白し。生にても、乾しても食ふべし。「香蕈」■次條の略。

しひたけ-たぼ 椎茸髷【名】■『徳川時代の御殿女中の髪の髷を椎茸の傘のごとき形に張出ししよりいふ』かたはづし(片外)の異稱。■奥女中の異稱。

じびたひ 自額【名】芝居の鬘(カツラ)の一。自髪の額の如く、額帽子を用ひざるもの。

しひ-たれ【名】しみったれを云ふ。「奥州の方言」

しひ-ちゆうだい 紫微中臺【名】くゐうどうぐうしき(皇后宮職)に同じ。(孝謙天皇の御時、一時改められし稱呼)

しひつ 試筆【名】■こころみに書くこと。■かきそめ(書初)に同じ。俳家奇人談(正式)「庭訓は春の初の試筆かな」

しひつ 紙筆【名】紙と筆と。筆紙。

しひつ 史筆【名】歴史を書く筆づかひ。

じひつ 自筆【名】自ら書くこと、又その書きたる物。自書。大鏡「刀の先して、自筆に書かせたまへるなり」

しひつ-づく 強付く【動下二他】しひて說きつく。無理に勸む。

しひつ-ぐわ 紙筆畫【名】〔美〕紙を捻(ネ)りて筆に代へ、これを墨に浸して描く繪。支那より傳はれるもの。

しひて 強ひて【副】むりに。おして。古今「濡れつつぞしひて折りつる年の内に春は幾日もあらじと思へば」

しひ-ひと 舅【名】しうと(舅)に同じ。〔古語〕名義抄、婦翁、シヒト」

しひ-びと 死人【名】死にたる人。息の絶えたる人。死人(シニン)。

しひびといろ 死人色【名】青ざめて凄みを帶びたる色。

しひびと-かつぎ 死人擔【名】早桶などを擔ぐ(ものを罵りていふ語、又その擔ぎ方、即ち普通のと反對なる擔ぎ方。升鯉濁白猿「合點だ合點だ、死人擔をぶっぐりけ」

しひびと-がへり 死人返【名】芝居にて、俳優の立ちたるまま、うつむけに飜(ヒル)ること。

しひびと-の-まくら 死人枕【名】〔植〕うつぼぐさ(靱草)に同じ。

しひびと-ばな 死人花【名】〔植〕まんじゅしゃけ(石蒜)に同じ。「語」

しひ-とめ 姑【名】しうとめ(姑)に同じ。〔古語〕

しひな 粃【名】■穀の實の瘠せて、成熟十分ならざるもの。■果物の實の成熟せぬもの。

しひ-ないしやう 紫微内相【名】孝謙天皇の御代に置かれし官職の一。兵事を總轄せしもの。大臣に准ぜられ、大納言藤原仲麿これに兼任したれど、叛を謀りて誅せられし以後、つひに廢絶す。

しひな-せ 粃【名】しひな(粃)■に同じ。〔古語〕和名「粃、之比奈世」

しひな-つむぎ 椎名紬【名】河内國椎名より織出だしし紬。

しひ-なり 椎形・椎樣【名】兜の鉢の頂の尖りたる形のもの。

しひ-ね 瘤【名】こぶ(瘤)に同じ。〔古語〕和名「瘤、之比禰」

しひねつ-ひこ 椎根津彦【名】〔人〕神武天皇の御代の功臣。初名は珍彦(ウヅヒコ)。東征の際、嚮導となる。大和國造に任ぜらる。

しひ-の-き 椎木【名】〔植〕しひ(椎)■に同じ。

しひ-の-み 椎實【名】■椎の果實。■しひのみふで(椎實筆)の略。

しひのみ-ふで 椎實筆【名】穗の形、椎の實に似て、太書(フトガキ)に用ふる筆。「じ。

しひ-ぶし 鮪節【名】まぐろぶし(眞黒節)に同じ。

しひ-びん 四品【名】人を、年齢によりて、幼(六歳以上)・少(十六歳以上)・壯(三十歳以上)・老(五十歳以上)の四種に區別せしもの。

しひん 詞品【名】〔文〕しし(詞姿)に同じ。

しひん 尿瓶【名】しゆびん(溲瓶)に同じ。

じびん 自鬢【名】■自分の髪を、自分にて結ふこと。福山雅「行水いたし、髪もとき、自鬢に取上げ」■能(ヨク)にて、結髪せし時代に、役者の平生の結髪のままにて、登場すること。

じびん 慈愍【名】なさけ。あはれみ。慈悲憐愍。續日本紀「天皇甘露雨「大赦慈愍を垂れ、我れを誘ひたび給へ」」

しひん-せき 泗濱石【名】『書經の禹貢篇に「嶧陽孤桐、泗濱浮磬」とありて、傳に「泗水涯水中有レ石、可二以爲一レ磬」とあり』支那泗水の涯より出づといふ石。樂器の磬(ケイ)に用ふ。平家「焦熱地獄より取傳へし四濱石も、この山にありとこそ候へ」

しひんばいばい 試品賣買【名】〔商〕みほんばいばい(見本賣買)に同じ。

じびん-もの 自鬢物【名】能(ノウ)にて、自鬢のままにて登場する役。例へば、「烏帽子折」・「望月」・「鉢木」の類。

じびめ 次姫【名】大嘗會の時、御膳に奉仕する第一の采女に次ぎて、取次の役をなす第二の采女。しんどり。

しひや 椎谷【名】越後國刈羽(カリハ)郡にあり。今は、宮川町と合して、高濱町といふ。北陸街道の一驛。堀氏の舊藩地。

しひやう 詩評【名】詩歌を評すること、又その文。

しひやう 死病【名】必ず死ぬと定まれる病。なほらぬ病。しにやまひ。女殺油地獄「者婆でもいかぬ死病」

じひやう 時評【名】當時の出來事の評論、又その文。

じひやう 時病【名】その時の世の中の弊。「害。

しひやうし 四拍子【名】笛・太鼓・大鼓(オホツヅミ)・小鼓(コツヅミ)の四種の樂器にて、拍子を取ること。さんびやうし(三拍子)參照。

しひやうし 四拍子【名】〔音〕『英 Quadruple time 又 Common time』平等拍子の一。二拍子の重複せるものにて、一少節に拍數四を含み、第一拍は强聲、第二拍は弱聲、第三拍はやや强聲、第四拍は弱聲なるもの。

しひやく-わいき 四百回器【名】生絲の纖度を計る器械。一方に四百回捲きたる或長さのものをデニイル秤に掛けて、目方を計る裝置。てにいる計。

しひやく-さいみつ-さう 齒白齊密相【名】〔佛〕三十二相の一。四十齒皆白淨にして堅密なるもの。

しひやく-しひやう 四百四病【名】『大智度論の第六十五に見ゆ』佛說における人類の疾病の總數。人身は地・水・火・風の四大より成り、その四大互に侵害して、調和を失するがために、疾病となるものにして、一大ごとに、一百一種の病ありといふ。四百四病の病より、貧ほど辛(ツラ)い者は無い【句】病の苦しみよりも、貧の苦しみは更に堪へがたし。〔諺語〕大機虎稚物語「四百四病の病より貧ほどつらき物はなしと、朝暮母が心の迷」

しひやく-よ-しう 四百餘州【名】〔地〕『圖書編に「呂東萊紫微詩話云、李芳州贈二汝州太守一詩、安得二吾皇四百州一皆如二此邦二千石一」とあり』支那全國の州の概數。本朝三國誌「張良は石公が草履取、その張良につづく者四百餘州になかりし」

しひ-ゆく 強往く【動四自】しひてゆく。むりにゆく。貫之集「足曳の山のかひより何とてかしひゆく人を立ちかくすらん」

しひら 鰷【名】〔動〕しいら(鰷)に同じ。

しひら 楴【名】うはら(上裳)に同じ。〔古語〕源氏「白き衣の、いひしらずすすけたるに、きたなげなるしびらゆひつけたる」

しびらんと (英 Sibilant)【名】〔語〕齒音の摩擦音の一。即ち舌端を上齒に近づけ、その間に狹路を作りて、氣息を摩擦せしめて發する音。s, sh. 及び z, zh. の諸音はこれに屬す。嘶音。

しびり 痺【名】■しびれ(痺)の轉訛。博多小女郎波枕「しびのきれは痺の妙藥」■能(ヨク)の狂言の一。太郎冠者、淀鯉を買ひに行けと命ぜられ、作病して行かず、ふるまひの供と聞きて、直ちに病癒ゆることを作

れるもの。

しびり-くそ しびり糞【名】しばしば大便を催すこと。びりぐそ。

しびる【動下二自】 痩せちぢまる。縮小す。〔古語〕「桑花「みづづきもせずいできて、御腹ただしひれにしひれて、例の人の腹よりも、むげになりせたまひぬ」

しびる 痺る【動下二自】血液の循環鈍くなりて、神經の感覺を失ふ。

しびる【動他】 小便したる。〔豐後國の方言〕

しびれ 痺【名】しびるること。麻痺。

しびれ 痺が切れる【句】次條[一]に同じ。

しびれ 痺を切らす【句】[一]長く坐りゐて、足をしびれさす。[二]待ちくたびる。待ちどほに思ふ。[三]『貰ふ方の人が待ちくたびるる意にていふ』物惜みして、容易に渡さず。

しびれい 紫微令【名】紫微中臺の長官。(孝謙天皇の御宇、一時改められし稱呼)

しびれ-うなぎ 痺鰻・電鰻【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。形、鰻に似、大さ三尺乃至六尺に達し、全體黃綠にして、斑紋あり。神經中樞に發電組織ありて、強き電氣を發す。南米の淡水に產す。えれきうなぎ。でんきうなぎ。

しびれ-えひ 痺鰯・木勺鯛・臧魚【名】〔動〕軟骨類に屬する魚。形赤鱷(ワニ)に似、體色は黑灰。頭の兩側に、數多の六角柱狀物より成る發電機ありて、電氣を發し、攻防をなす。我が國暖地の近海に產す。

しびれ-ぐすり 痺藥【名】麻醉せしむる藥。麻醉劑。麻藥。

しびれ-なまづ 痺鯰・電鯰【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。亞弗利加洲ニイル河に產す。體の長さ二三尺、全身の皮下に發電器を有し、これに觸るれば、電擊を感ず。でんきなまず。

しびれ-こ 四尾連湖【名】〔地〕甲斐國西八代(ヤツシロ)郡蛭ケ嶽の中腹にある湖水。周回十七町半。富士八湖の一。

しびれ-め 癈目【名】視力を失ひたる眼。【古語】名義抄「瞎、シヒレメ・シヒタリ・カタメシヒ・メカチ・カタメシヒタリ」

しびわう 尸毘王【名】〔佛〕しびだいわう(尸毘大王)に同じ。

しびゃん 紫微垣【名】支那の天文學の星座の一。北極の周圍に位し、北極五星(太子・帝庶子・后宮・天樞)・北斗七星以下三十九の小星座を含み、三台星を含める太微垣及び天市垣と合はせて、三垣の稱あり。天帝の居る所と見做され、天子・天位に譬へられたり。紫微宮。

しふ 集【名】詩歌・文章を集めたる書物。(枕草子・物語集など書寫すに、本に墨つけぬ事」增鏡「集にもやさしき歌多く侍るべし」

しふ 濕【名】しめること。

しふ 濕を惡みて下(ひく)きに居る【句】『孟子の公孫丑上篇に「仁則榮、不仁則辱、今惡レ辱而居二不仁一是猶二惡一濕居レ下也」とあるに本づく』惡名を嫌ひながら、善行を爲さぬ譬。〔諺語〕

しふ 執【名】深く思ひこむこと。執著心。執念。源氏「この世にしふとまるべきことなしと、心づかひをせしに」

しふ 子婦【名】子の嫁妻。よめ。

しふ 氏譜【名】氏族の系譜。

しふ 師父【名】[一]師と父と。[二]父の如くもりそだつること、又その人。もり。かしづき。

しふ 師傅【名】

しふ 四府【名】左近衞府・右近衞府・左兵衞府・右兵衞府の併稱。

しふ 紫府【名】しふきゆう(紫府宮)に同じ。

しふ 詩賦【名】詩と賦と。

しふ 私夫【名】まをとこ。かくし男。

しふ 紙符【名】紙片に書きたる護符。

しふ 紙布【名】紙縒(コヨリ)を緯(ヨコ)とし、經(タテ)に瓦斯絲父は絹絲を用ひて織りたる織物。磐城國白石にては、天具帖(テンプク)を、伊豆熱海にては、雁皮紙縒を用ひたるものを產す。紙布織。

しふ 强ふ【動上二他】無理になす。押して行ふ。萬葉集「いなといへどしふるしひのがしひがたりこのごろ聞かずてわれ戀ひにけり」

しふ 諚ふ・罔ふ【動上二他】『前條の語の義』無きことを、ありといひなす。事實を曲げていふ。こじつく。附會す。

しふ 癈ふ【動下二自】器官の作用失す。萬葉「目しひたる龜の浮木にあふなれやたまたま得たる法のはしぶね」國性爺「御眼も暗みしか、御耳も聾(シ)ひたるか」

しふ【名】 あばた(痘痕)を云ふ。〔信濃國松本の方言〕

しふ 澁・澁【名】[一]しぶき味。[二]かきしぶ(柿澁)の略。[三]物よりしみ出づる赤黑き液。

しふ 使部【名】[一]古、太政官八省以下の官衙にて、雜事に使はれし小役人。左右あり、今の小使の如き類。その下に直丁と雇使丁とありき。つかはれべ。[二]明治元年より同十八年まで、各官署にて、公文の授受などに從事せし判任官、或は等外吏。

しふ 支部【名】本部の管理に屬し、本部と分離して、事務を取扱ふ所。(幹部に對して)

しふ 四分【名】[一]十分の四。四割。[二]しぶうくわん(四等官)に同じ。

しふ 四部【名】四種の部類。

四部の弟子【句】〔佛〕しぶし(四衆)に同じ。徒然「四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼は劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり」

しふ 四武【名】陣形の、四方に備へたるもの。太平記「四武の衝陣、堅を碎きて、百戰の勇力、變に應ぜしかば」

しふ 篩部【名】〔植〕『英 Phloem』木部と共に維管束の一部をなすもの。莖にありては、樹皮の內側、木部の外側に位し、根にありては、これと交互に放射狀をなして並列す。その中に篩管を有し、また時には、靱皮纖維ありて、これを强固ならしむるものあり。

しふ 祠部【名】じんぎくわん(神祇官)の屬。

しふ 市部【名】府縣內にて、市に屬する區域。(郡部に對して)

しふ 習【名】〔佛〕しふけ(習氣)に同じ。

しふ 璽符【名】印璽。御璽。太平記「天子の璽符を頸に懸け、白馬素車に乘って」

しふ 慈父【名】[一]いつくしみ深き父親。[二]父親の尊稱。

じふ 慈婦【名】[一]いつくしみ深き子婦(ヨメ)。[二]いつくしみ深き婦人。

じふ 姒婦【名】あによめ。あひよめ。

じふ 自負【名】『負は恃む意』じまん(自慢)に同じ。

じふ 十・拾【數】五と五とを合はせたる數。十が二(ニ)【句】十の中の一二。殘餘の僅少なること。

十中八九は【句】『漢書の朱博傳に「平處輕重十中八九」、三國志の周宣傳に「宣之敍レ夢、十中八九、世以比二建平之相一矣」などあり』次條に同じ。

十に八九は【句】『漢書の宣帝紀に「畜產大耗什八九」、同書丙吉傳に「至レ今什八九矣」などあり。什は十に同じ』十中の八九は。大方は。九分九厘は。

十の八九は【句】前條に同じ。

十の尻を曲げる【句】『十の字の末を曲ぐれば七の字になり、七は質と音の通ふよりいふ』質におく。まげる。(俚語)

じふあく 十惡【名】[一]支那唐の法律にて、大罪と定められし十種。卽ち謀反・謀逆・謀叛・惡逆・不道・大不敬・不孝・不睦・不義・內亂の併稱。はちぎゃく(八虐)ごあく(五惡)參照。[二]〔佛〕十戒を守らぬこと。十惡業(ゴフ)。

じふあく 十惡業【名】[一]十不善業。(十善に對して)しちし(七支)參照。盛衰記「九品蓮臺間雖二下品一應足、雖二十惡一令猶引接」

「同じ。

じふあくごふ 十惡業【名】〔佛〕前條[二]にじふあくにん 十惡人【名】十惡業(ゴフ)を犯せる人。極惡人。聖德太子繪傳記「佛法は僞と譏り嫉ひし五逆罪、十惡人とは我れ我れ親子」

「に同じ。

しぶ-あゆ 澁鮎・澁鮎【名】さびあゆ(錆鮎)に同じ。

しぶ-いた 四分板【名】長さ一間、厚さ四分(實際は三分位)にて、幅一尺內外なる杉材の板。下見(シタミ)板・天井裏板などに用ふ。

しぶ-いち 四分一【名】[一]よついち。四分の一。[二]〔化〕銅と銀との合金。四分の一の銀を含める意の名稱なれども、品位必ずしも然らず。

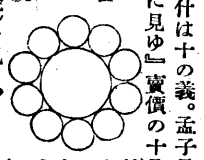
しも一定せず、或は少許の金を加へたるもあり。おぼろぎん。 ㊁〔建〕『一寸角の四分の一なるべしといふ』入隅(イリスミ)の部分に取附くる細き木。二分五厘角乃至四分角ほどのもの。

四分一の家【句】一町の四分の一の狭き邸宅。古、大臣の邸は、一町を占むる割合なりしにつきて、質素なるをいふ。〔古語〕大鏡「この大臣のみぞ御ぞうしうちに、六十よまでおはせし。四分一の家にて、大饗したまへる人なり」

じふいち 十一・什一【名】㊀十分の一。十が一。 ㊁〔動〕じひしんてう(慈悲心鳥)に同じ。

じふ-いち 什一【數】『什は十の義。孟子及び史記の越世家などに見ゆ』實價の十分の一。「什一の利」

じふいち-えう 十一曜【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(うえちいふじ)

じふいち-がう 十一號【名】〔佛〕じふがう(十號)を見よ。

じふいち-ぐわつ 十一月【名】年の第十一にあたる月。しもつき。

しふいちぐわつ-あ 十一月會【名】しもつきあ(霜月會)に同じ。

じふいち-けい 十一經【名】〔書〕じふいっけい(十一經)に同じ。

しふいちにんそく 四分一人足【名】次條に同じ。

しふいちにんそく-やく 四分一人足役【名】戰國時代に、諸侯の人民に課したる賦役の一。

じふいち-ぶん 十一分【名】十分(ジフブン)以上なること。普通以上又は豫期以上にて、滿足すべきこと。なほ强めて、十二分ともいふ。矢口渡「日ごとの注進に、一度のわるい沙汰もなく、十一分の味方の勝」

じふいち-めん 十一面【名】〔佛〕次條の略。賀古敎信七變考「抑當時の本尊は、聖德太子の前生、舍衞國にて作り給ひし十一面」

じふいちめん-くわんおん 十一面觀音【名】〔佛〕次條に同じ。

じふいちめん-くわんぜおん 十一面觀世音【名】〔佛〕『梵 Arya-cha ia-śa-mukha(阿利也噦迦娜舍目佉の譯語』六觀音の一。面十一あるもの。卽ち本體の面の外、頭上に、九面あり、その中央面の頂には又一面あり、面ごとに、慈悲・忿怒(フンヌ)・嘲笑などの相を現す。十一面觀音。

(んおぜんわくんめちいふじ)

じふいちめん-しんごん 十一面眞言【名】〔佛〕密敎にて、十一面觀世音を念ずる時に唱ふる呪文。大小の二呪あり。盛衰記「大日眞言百遍、十一面眞言百遍」

しふいちめん-たい 四分一面體【名】〔鑛〕『英 Tetartohedral form』〔鑛〕對稱の關係完全に現れずして、完面體の四分の一の面數にて圍まるる形。

しふいち-らふ 四分一鑞【名】四分一(二)を接合するに用ふる鑞。

じふいちね 十一位【名】㊀〔佛〕十地と妙覺位との總稱。 ㊁武家の格式の順序、卽ち第一に將軍の一族、第二に大名、第三に守護、第四に外樣(トザマ)、第五に評定、第六に御供衆、第七に申次(マウシツギ)、第八に番方、第九に國人(クニビト)、第十に奉行、第十一に未男(スエ)と立てし俗稱。

じふいっ-けい 十一經【名】〔書〕支那の十一部の經書。卽ち九經に孝經・論語を加へたるもの。じふさんきやう(十三經)參照。

じふいっ-しゆう 十一宗【名】佛敎の十一の宗派。卽ち俱舍・成實・律・法相・三論・華嚴・眞言・天台・釋論・禪・淨土の總稱。

じふ-いんえん 十因緣【名】〔佛〕十二因緣中、未來に屬する生(シャ)と老死とを除きたるもの。

しふ-いろ 澁色・澁色【名】澁柿のごとき色。うすがきいろ。

し-ふう 士風【名】士人の氣風。好尙。

し-ふう 詩風【名】詩の格調。

しふ-うちは 澁團扇・澁團扇【名】柿澁を塗りたる下等の團扇。かきうちは。風俗文選許六「なに思ふ長雪隱の澁團扇」

しふ-うん 濕雲【名】しめりたる雲。太平記「濕雲油然として雨を降らす事、國土に普し」

しふうるか 澁鰡・澁鰌【名】『うるかは、澁き味を賞するものなるよりいふ』うるか(鰡鰍)に同じ。

しふえい 集英【名】すぐれたる者を集むること。

じふえう 十曜【名】紋所の一。九曜に更に一つの星を加へたるもの。

しふおん-かん 集音函【名】『英 Sounder system』電信にて通信する際、數箇の音響が同時に起りし時、相互の混雜を防ぎ、また通信の祕密を保護するために、通信擔任者の一方に、音響符號を集中せしむる裝置。

しふかい 拾芥【名】『漢書の夏侯勝傳に「經術苟明、其取二青紫一、如二俛拾一地芥一耳」とあり』 ㊁塵芥をひろふこと。 ㊂自己の拾集したる物の謙稱。

しふかい 集解【名】數多き解釋を一所に集めたるもの。しふげ。

じふかい 十戒【名】〔佛〕じっかい(十戒)を見よ。

じふ-かい 十界【名】〔佛〕じっかい(十界)を見よ。

しふかい-せう 拾芥抄【名】〔書〕『しふかい(拾芥)㊁を見よ』漢文の雜錄にして、歲時・歲運・十二律・二十四氣・物忌等の事より音樂・經史・文筆・諸社寺・錢文・薫物・寶貨・五色・飮食・方角・養生等の類を記せるもの。六卷。藤原貞幹(サダモト)の著。一說に、祖父公賢の撰に基づきて增補せるものなりと。

じふ-がう 十號【名】〔佛〕佛德を讃歎して名づけし十種の尊號、卽ち如來・應供(クヤウ)・等正覺(トウシヤウガク)・明行足(ミヤウギヤウソク)・善逝・世間解(セケゲ)・無上士・調御丈夫・天人師・佛陀・世尊の併稱。この內、無上士・調御丈夫を、無上士と調御丈夫との二名目に分ち、世尊を除きて、總名とし、以て十の數に充つる說もあり。又、無上士と調御丈夫とを分ちたる上に、世尊をも加へて、十一號とも立つ。

しふがう-たう 集香湯【名】苦參(クジン)・肉桂・甘草・白朮(ビヤクジユツ)・蜀黍(コジツ)の粉を調合したる粉藥。昔、寺にて燒(タ)ンを出す前に、湯に入れて先づ變したり。

しふ-かがし 【名】〔植〕まてばしひに同じ。

しふ-かき 澁柿・澁柿【名】成熟しても、味の澁き柿。酣(タ)し、又は干して食ひ、又柿澁を取る原料に供す。しぶっかき。吉野都女楢「御所柿と澁柿とは皮むかいでも知れるもの」

しぶかき-はら 澁柿原・澁柿原【名】一面に澁柿の生じをる處。猿蓑(珍碩)「鳩吹くや澁柿原の薺麥ばたけ」

しふ-がく 習學【名】ならひまなぶこと。「學習。

しふかす 澁滓・澁滓【名】柿の澁を取りたるあとの滓。猿蓑(正秀)「澁滓や烏も食はず荒ばたけ」

しふかたびら 澁帷子・澁帷子【名】柿澁をひきたる帷子。元祿の頃まで流行せり。

しふがっしやう 四部合唱【名】〔音〕『英 Four-voiced chorus』四音部より成る合唱。合唱中の最も普通なる形式にして、男聲二組(一は低音、一は次中音)と、女聲二組(一は中音、一は高音)と、又は男聲四組、又時には、女聲四組より成る。

しふがっそう-きよく 四部合奏曲【名】〔音〕『英 Quartet』四箇の樂器にて奏する曲。第一バイオリン・第二バイオリン・ビオラ・セロの四箇を用ふる絃樂四部最も普通にして、又ホルン四箇・コルネット四箇などを用ふる吹樂四部もあり。

しふがつそう 澁河烏・澁河烏【名】雅樂左方の一。隋の煬帝、汴澁河にて作らしめしものといふ。我が國にては、中古の大法會に於ける行道に屢この樂を奏したり。舞なし。

しぶ-かは 澁皮・澁皮【名】㊀樹の幹又は果實の表皮。 ㊁垢ぬけせぬ顏の肌。柳樽「澁皮にまあだいそれた江戸の水」

しぶかは 澁川【名】㊀〔地〕上野國群馬郡にある町。高崎市の北四里。 ㊁〔地〕河內國の舊郡の一。明治二十九年廢せられて、

中河内郡の一部となる。㊂姓氏の一。足利氏の一族。足利泰氏の子義顯を祖とす。

しぶ-かはご 澁革子・澁革子【名】竹の網代(アジロ)の上を紙帳にして、澁を引きたるかはご。

しぶかは-すけざゑもん 澁川助左衛門【名】〔人〕しぶかはろくざう(澁川六藏)㊀に同じ。

しぶかは-ばんごらう 澁川伴五郎【名】〔人〕江戸の柔術家。名は義方。關口氏業(ナリワ)に學びて、遂に一家をなす。澁川流柔術の祖。寶永元年歿す。年五十一。

しぶかは-ふとおり 澁川太織【名】上野國群馬郡なる澁川町附近より製出する太織。

しぶかはりう 澁川流【名】柔術の一派。澁川伴五郎を祖とす。

しぶかは-ろくざう 澁川六藏【名】〔人〕天文家。㊀(初代)。本姓は保井(安井とも書く)、名は靜翁。春海と號す。通稱は六藏また助左衛門。曆學に精し。正德五年歿す。年七十七。㊁(三代)。字は敬直。和漢の學、及び蘭學に通ず。德川幕府の天文方見習となり、御書奉行を兼ぬ。小吏に嫉まれ、禁錮せらる。天保十年歿す。年三十五。

しふ-がふ 集合【名】㊀あつまること。より合はすること。㊁〔兵〕離散せる兵軍を集團すること。

しふ-がふ 習合【名】『習は積重ぬる義』㊀二つ以上の宗教の教理を折衷すること。㊁しふがふけう(習合教)の略。

しふがふ-いし 集合意志【名】〔哲〕『英(Collective will)』個人が團體を形成する時、その相互の關係より起ると考へらるる意志。卽ちその團體内の多數の個人の智識・經驗が、或は衝突し、或は融合し、或は同化して成立するものにして、その各個人は、又これによりて感化・支配せらる。

しふがふ-くわ 集合果【名】〔植〕ふくくわ(複果)に同じ。

しふがふ-けう 習合教【名】神佛兩教の調和折衷を圖れる教說。

しふがふ-さい 集合罪【名】〔法〕同種類の行爲を繰返し、又は繰返すを目的とするに由りて構成する犯罪。

しふがふ-さいがいほけん 集合災害保險【名】〔商〕同一事情の下にある多數の者を包括して、被保險者とする災害保險。

しふがふ-しんたう 習合神道【名】三部神道の一。神儒佛の三教を折衷して、立てたる神道の一派。

しふがふ-しゃしん 集合寫眞【名】多人數を一圖として撮影する寫眞。

しふがふ-しょ 集合所【名】くわいがふところ(會合所)に同じ。

しふがふ-せつ 習合說【名】〔哲〕こんせいせつ(混成說)に同じ。

しふがふ-たい 集合體【名】箇箇のものの集合して成立ちたる物體。

しふがふ-たい 集合隊【名】〔兵〕軍隊の運動發起前、若しくは戰鬪後、狹小なる地域中に集合する隊形。

しふがふ-ぶつ 集合物【名】箇箇の物體が集合して成れる物。

じふがふ-ます 十合枡【名】中古より近古に亙りて使用せられたる一種の枡。容量は使用地及び時代に依りて各異なれども、何れも今日の十合、卽ち一升枡よりは甚だ少量なり。

しふがふ-めいし 集合名詞【名】〔語〕『英(Collective noun)』箇箇の物件の集合して、一事物をなせる名詞。例へば英語の army(軍隊)・fleet(艦隊)・nation(國民)の類。西洋諸國の語にては、これが說明語たる動詞との關係上の規定あるが故に、特にこの名稱を立つる必要あれども、我が國語及び支那語の如きには、その必要なし。

しふがふれんず 集合レンズ(英 Converging lens)【名】〔理〕しうれんれんず(收斂レンズ)に同じ。

しふ-かみ 澁紙・澁紙【名】柿澁を塗りたる紙。敷紙又は包に用ふ。かきがみ。

しふき 習氣【名】從來の習慣。

しふぎ 集義【名】『孟子の公孫丑上篇に「是集義所レ生者、非二義而襲取一レ之也」とあるに本づく』義を積重ぬること。

しふぎ 集議【名】數多の人が集まりてなす評議。

しふ-ぶき 繁吹・頻吹【名】㊀しぶくこと。㊁しぶかれて飛散る水氣。飛沫。

しふ-ぶき 蕺菜【名】〔植〕どくだみ(蕺菜)に同じ。和名「蕺、之布木・菜名也」

しぶき 澁木・澁木【名】楊梅(ヤマモヽ)の皮。楊梅皮。ももかは。

じふき 什器【名】『史記の五帝記に「作二什器於壽丘一」とありて、註に「索隱曰、什器、什數也、蓋人家常用之器具非レ一、故以レ十爲レ數、猶三今云二什物一也」とあり。什は十の義』要用なる器物。必要なる道具。什具。什物。

じふぎ 十義【名】『禮記の禮運篇及び晏子春秋に見え、又、荀子には「立二大學一設二庠序一修二六禮一明二十敎一」とありて、註に「十敎卽ち十義」とあり』儒敎にて、父は慈に、子は孝に、兄は良に、弟は悌に、夫は義に、婦は聽に、長は惠に、幼は順に、君は仁に、臣は忠に、一說には、君は令に、臣は共に、父は慈に、子は孝に、兄は愛に、弟は敬に、夫は和に、妻は柔に、姑は慈に、姉は聽なるべきことの十箇條の德目の併稱。十敎。

しぶき-あめ 繁吹雨・頻吹雨【名】しぶきとなりて降る雨。

じふぎう-の-づ 十牛圖【名】悟道見性(ケンシャウ)の順序を、牧童の牛を索めて、家に歸るに譬へ、十種の圖に描きたるもの。卽ち尋牛、見跡、見牛、得牛、牧牛、騎牛歸家、忘牛存人、人牛俱忘、返本還源、入鄽垂手の十相。尋牛より騎牛歸家までは心法俱有の境界、忘牛存人は法空心有、人牛俱忘は、心法雙空、返本還源と入鄽垂手とは直空妙有の意を表せるものにて、各圖樣何れも圓輪の中に畫くが中に、人牛俱忘は、圓輪のみにて、何物も雲添へず、反本還源は、花笑ひ、水靜かなる狀を描く。支那宋の禪僧廓庵志遠(師遠とも書く)の作なりといふ。石鼓の夷和尙と壞納の璉和尙は、これに和を造り、天台の智旭はこれが註疏を作れり。

じふぎ-かんおう 什器勘定【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。商店・會社などの家具・什器を制理するもの。備品勘定。

しふぎ-ぐわいしょ 集義外書【名】〔書〕しふぎわしょ(集義和書)を見よ。

しふ-きん 集金【名】金錢を集むること、又その金錢。

じふ-きん 十錦【名】じっきん(十錦)を見よ。

しふきん-いうびん 集金郵便【名】郵便の一。差出人の要求により、指定せられたる人より現金を取集むるもの。差出人は現金受領書、又はそれに相當するものを添付するを要す。

しふきん-がかり 集金係【名】集金を掌ること、又その人。「を見よ。

じふきん-て 十錦手【名】じっきんて(十錦手)

しふきん-にん 集金人【名】自己又は他人の債權によりて、金錢を取集むる人。

しふぎやう 執行【名】しゅぎやう(執行)を見よ。

じふ-きゆう 紫府宮【名】仙人の居處。紫府。

しふ-きよく 褶曲【名】『褶の字の音一にてふ』㊀しわよりてまがれること。波の形をなすこと。ひだ。㊁〔地〕『英 Folding』地殼收縮の結果なる、造山力又は噴火等に因りて起りたる地層の波狀。

しふ-きよく 四部曲【名】〔文〕『英 Tetralogy』三部曲に、なほ滑稽を主とせるサチュロス劇(Satyrdrama)卽ち我が國の能(ノウ)に對する狂言の如きものを添へたる稱呼。四部作。四部劇。

しふきよく-こく 褶曲谷【名】〔地〕『英 Folded valley 褶の字の音、一にてふ』構造谷の一。褶曲の凹所なる谷。

しふきよく-さん 褶曲山【名】〔地〕『褶の字の音、一にてふ』次條に同じ。

しふきよく-さんがく 褶曲山嶽【名】〔地〕『英 Folded mountain 褶の字の音、一にてふ』構造山嶽の一。褶曲の隆起せる部分なる山嶽。褶曲山。

しふきよく-さんみゃく 褶曲山脈【名】〔地〕『英 Folded mountains 褶の字の音、一にてふ』褶曲の隆起せる部分の山脈。地球上の長大なる山脈は、大抵この層を成す。

しふぎよく-しふ 拾玉集【名】〔書〕慈鎭和

尚の歌集。七巻。

しふぎよ-とう 集魚燈【名】魚類を誘ひ寄するために燃す篝火。火を慕ふ魚類の習性を利用し、古くは松材を燃料としたが、近來石油燈又はアセチリン瓦斯を用ふ。

しふぎ-わしよ 集義和書【名】〔書〕『しふぎ(集義)を見よ』問答體書簡體の假名交文にて、文教殊に陽明學に關する自說、並びに廣く經世濟民に關する方法を述べたるもの。十六卷。熊澤蕃山の著。なほ同人の著にて、この書の續篇とも稱すべきものに、集義外書十六卷あり。

しふぎ-ゐん 集議院【名】明治二年に公議所を廢して、設置せし議政機關。公議を執りて、萬機を決する爲め、公議人を集めて會議せしめし所、同四年左院の所管となり、同六年廢せらる。

しふぎゐん 市部議員【名】府・縣會議員の一。市部より選出せられたるもの。(郡部議員に對して)

しふく 私服【名】私人常用の著物。(官服に對して)

しふく 私腹【名】我がはら。じばら。

しふく 私腹を肥す【句】公事にたづさはれるを利用して、私利を營む。

しふく 私福【名】しり(私利)に同じ。

しふく 紙幅【名】紙のはば。

しふく 至福【名】この上なき幸福。

しふく 雌伏【名】『後漢書の趙溫傳に「丈夫當レ爲二雄飛一、焉能雌伏」とあり』時機の到來を待ちつつ、他の人の下に屈伏してあること。雄飛に對して)

しふく 澀苦・澁苦【名】〔音〕音調などのなめらかならぬこと。〔味〕味澁くしてにがきこと。

しふく 集句【名】詩の一體。古人の句を集合融會して作る一篇の詩。

しふく 繁吹く・頻吹く【動四他】風頻りに強く吹く。宇治「部」風にしぶかれて」

しぶく 澀く・澁く【動四自】しぶる。とどこほる。進まず。〔古語〕 清輔集「霜枯の蘆間にしぶく釣舟や心もゆかぬわが身なるらん」

しぶく 【動四他】〔無〕無理に伴ふ。しよびく。

〔三〕行李などを外部を包み、繩にて括る。〔石見國の方言〕

じ-ふく 字腹【名】『英 Patrix』活字の字母を造る基となるべき、模型の文字。父型。

じ-ふく 時服【名】〔時〕時候に相應したる著物。時衣。〔三〕王朝時代に、皇親以下諸臣に賜ひし春秋もしくは夏冬の服料。また德川時代に、將軍諸侯より、春秋毎に臣下に賜ひし綿入の小袖。

じふぐ 什具【名】じふき(什器)に同じ。

じ-ふくいんしよ 四福音書【名】〔書〕新約全書中の馬太(マタ)傳・馬可(マコ)傳・路加(ルカ)傳・約翰(ヨハネ)傳の併稱。キリスト教教儀の本源たるもの。ふくいんしよ(福音書)參照。

しふぐさ 羊蹄菜【名】〔植〕ぎしぎし(羊蹄菜)に同じ。〔古語〕 和名「羊蹄菜、之布久佐、一云、志」

じふく-せっぽふ 十九說法【名】〔佛〕法華經普門品(フモン)の中に說かれたる、十九回の說法。平治「十九說法の秋の月、照らさぬ胸もなかるべければ」

しぶくち 澀口・澁口【名】慳貪(コンドン)なるもの。いひ。にくまれ口。 慈鎭和尚柱曆「重ねて屋根でさかったら、四足くくって、西の洞院へ流してくりよと……猫にまで澁口の」 重蛙「一首が落馬いたさうぞと、澁口いふも、茶の湯者を聲に持つたる身のならひ」

じふく-つう 兒腹痛【名】あさばら(後腹)〔二〕に同じ。

じふく-どよう 十九土用【名】夏の土用の特に十九日間なること。(十八土用に對して)どよう(土用)參照。 一代女「十九土用とて、人皆凌ぎかね、夏なき國もがな、汗かぬ里もありやと云うて叫はぬ處へ」 夫木 夏「夏の日絕えがたく、殊に十九土用にして、袋水・心太でもくれかねて」

じふく-にち 十九日【名】愚者の隱語。江戸時代、天明頃までの語) 只今御笑草「この頃赤城明神地内に山猫の茶屋ありて、此所の娼妓の方言、ばかの事を、十九日と隱語にいへり。ばかの字十九日に似たればなり」

じふく-ぬの 十九布【名】十九たば(一束は八十本)の經絲を用ひて織りたる布。即ち一幅の中に、經絲一千五百二十本ありて、組織きはめて緻密に、外觀美麗なり。主に弓袋などに用ひたり。

じふくもん-だな 十九文店【名】享保の頃、小間物・小道具などを、何れの品も現金十九文づつにて、安賣せし店。今も日本橋區日本橋通二丁目の西方の橫町に、十九文橫町とてあるは、その跡なり。

しぶくり 澀くり・澁くり【名】じぶくること。じぶくり。

しぶくり-や 澀くり屋・澁くり屋【名】じぶくる人。じぶくりやすき性質の人。

しぶくる 澀くる・澁くる【動四自】すねて怒る。わがままに、腹を立つ。「鬼になってじぶくる奴は、石垣盜んでどやされた」

じふく-れう 時服料【名】王朝時代に、春秋又は冬夏二季に賜はる衣服の料。

しふくわい 集會【名】あつまり。よりあひ。集合。會合。會集。

しふくわい 集會・結社の自由【句】〔法〕大日本帝國憲法が日本國民の上に認めたる自由權の一。法律の範圍内において、集會・結社をなすも、禁制せられざること。

しふくわい 集塊【名】かたまり。

しふくわい 市部會【名】市と郡との經濟を分別したる府縣にて、市部特別の經濟を議決するために、市部議員のみにて組織する府縣會。(郡部會に對して)

しふくわい-がん 集塊岩【名】〔地〕『英 Agglomerate』火山灰質又は熔岩質のために膠結せられたる火山岩塊より成れる一大岩塊。その近傍における火山岩塊以外、種種の岩片をも混ずるため、判明なる層理なし。火山附近に多し。この岩石所在の地方は、浸蝕によりて、奇勝を呈すること多し。我が國の妙義山・耶馬溪の類これなり。

しふくわい-おやう 集會場【名】集會する場所。

しふくわいらう 祠部外郎【名】神祇大副(スケ)の唐名。

しふくわ-しふ 拾菓集【名】〔書〕鄙曲を集めたるもの。一卷。僧明空の編。

しふげふ-しや 習業者【名】習業する人。

しふ-けん 集權【名】權力を一所に集むること。(分權に對して)「中央集權」

しふ-げふ 習業【名】職業又は學業を習ふこと。修業。

しふげき-たい 襲撃隊【名】〔兵〕敵を襲撃せんとする軍隊の一部隊。

しふ-げき 四部撃【名】〔文〕しぶきよ(四部)に同じ。

しふくわい-ぢやう 習慣性【名】〔理〕くわんせい(慣性)に同じ。

しふくわん-はふ 習慣法【名】〔法〕くわんしふはふ(慣習法)に同じ。

しふくわん-ふうたい 習慣風袋【名】〔商〕くわんしふふうたい(慣習風袋)に同じ。

しふくわん-わりびき 習慣割引【名】〔商〕くわんしふわりびき(慣習割引)に同じ。

しふ-げ 集解【名】しふかい(集解)に同じ。

じふ-けう 十教【名】じつげう(十教)に同じ。

じふ-げき 襲撃【名】おそひうつこと。不意討。

しぶ-げき 四部撃【名】〔文〕しぶきよ(四部)に同じ。

しふげき-たい 襲撃隊【名】〔兵〕敵を襲撃

たる月。かんなづき。

十月に、心無き人を賴むな【句】十月は、日の短き時なれば、思慮なき者に用事を賴むな。〔諺語〕

十月の小春【名】【句】十月は、氣候春に似たり。〔諺語〕 徒然「十月は小春の天氣、草も青くなり、梅もつぼみぬ」

十月の小六月【名】【句】十月は、六月頃の氣候にも似たるほどに暖きことあり。〔諺語〕 國姓爺合戰「秋も過ぎゆく十月の小六月とて、溫かや」

十月の投木【句】十月は、木を植うるに適したる月にて、投捨ておきても生育す。〔諺語〕

しふ-くわん 習慣・習貫【名】〔一〕ならはし。しきたり。風習。慣習。〔二〕〔哲〕『英 Habit』個人が常に同一の傾向を有する性情又は行爲。〔三〕〔法〕くわんしふ(慣習)〔二〕に同じ。

しぶ-くわん 四分官・四部官【名】しぶくわん(四等官)に同じ。

じふ-ぐわん 十願【名】〔佛〕「普賢(フゲ)の十願」を見よ。

しふくわん-せい 習慣性【名】〔理〕くわんせい(慣性)に同じ。

しふくわん-はふ 習慣法【名】〔法〕くわんしふはふ(慣習法)に同じ。

しふくわん-ふうたい 習慣風袋【名】〔商〕くわんしふふうたい(慣習風袋)に同じ。

しふくわん-わりびき 習慣割引【名】〔商〕くわんしふわりびき(慣習割引)に同じ。

しふ-げ 集解【名】しふかい(集解)に同じ。

じふ-けう 十教【名】じつげう(十教)に同じ。

じふ-げき 襲撃【名】おそひうつこと。不意討。

しぶ-げき 四部撃【名】〔文〕しぶきよ(四部)に同じ。

しふげき-たい 襲撃隊【名】〔兵〕敵を襲撃せんとする軍隊の一部隊。

しふ-げふ 習業【名】職業又は學業を習ふこと。修業。

しふげふ-しや 習業者【名】習業する人。

しふ-けん 集權【名】權力を一所に集むること。(分權に對して)「中央集權」

じふ-けん 執見【名】〔佛〕己が心に執持して離さざる見解。

じふ-こ 集古【名】古物を集むること。

じふ-ご 雜語・雜語【名】しふる言語。どもることば。

じぶ-と 什伍【名】■軍隊にて、十人又は五人の組合。■隊伍。軍隊。

じふ-と 十語【名】〔書〕竹取物語・空穗(ウツボ)物語・枕草紙・四季・御祓(ミソギ)の記・御湯殿の記の五書との總稱。德川時代には、高貴の人の間に、これを嫁入道具として、集棚に飾る風習ありき。

じふ-こう 十講【名】〔佛〕じっこう(十講)を見よ。

じふごかく-けい 十五角形【名】〔數〕『英 Quindecagon』十五邊より成る直線形。

しふこ-じっしゆ 集古十種【名】〔書〕我が國古代の器物・書畫・金石・刀銘などの、當時現存せしものを十七部門に分ち、谷文晁等にその形を模寫せしめ、寸尺・出所などを詳記せるもの。八十五卷。松平定信の著。

じふご-しやうぐわつ 十五正月【名】じふごにちしやうぐわつ(十五日正月)に同じ。じふごしやうぐわつ(十四日年越)參照。

じふご-しゆう 十五宗【名】〔佛〕佛教の十五箇の宗派、即ち十宗に大念佛宗・一向宗・時宗・日蓮宗・雜宗を加へたる稱呼。じふさんしゅう(十三宗)參照。

じふごしよ-ごんげん 十五所權現【名】熊野の新宮に祀れる十五社の神を、本地垂迹(ホンジヤクスヰジヤク)說に由り、權現として呼ぶ稱。本宮の十二所權現と同じ神に、伊勢・住吉・出雲の三神を加へたるもの。じふにしよごんげん(十二所權現)參照。

じふご-そん-くわんおん 十五尊觀音【名】〔佛〕正觀音・千手觀音・馬頭觀音・十一面觀音・准胝(シユンテイ)觀音・如意輪觀音・不空羂索(フクウケンジヤク)觀音・白衣觀音・葉衣觀音・水月觀音・楊柳觀音・阿摩提觀音・多羅觀音・青頸(シヤウキヤウ)觀音・香王羅觀音の總稱。

じふご-だいじ 十五大寺【名】『延喜式・拾芥抄及び塵添壒嚢抄に見ゆ』十五の大なる寺、即ち七大寺に藥師寺・大后寺・不退寺・法華寺・超證寺・招提(シヤウダイ)寺・宗鏡寺・弘福寺を加へたる稱呼。又、大后寺・不退寺・超證寺・宗鏡寺・弘福寺を除き、本元興寺・東寺・西寺・四天王寺・崇福(スウ)寺を加へてもいふ。しちだいじ(七大寺)・じふだいじ(十大寺)・にじふだいじ(二十五大寺)參照。大鏡・奈良は七大寺・十五大寺など見くらぶるに」

じふごにち-がゆ 十五日粥【名】正月十五日、年中の疫氣を除くとて食ふ小豆粥(アヅキガユ)。望粥(モチガユ)。

じふごにち-しやうぐわつ 十五日正月【名】正月十五日、即ち小豆粥(アヅキガユ)を食ふ日。

じふ-こふ 十劫【名】〔佛〕じっこふ(十劫)を見よ。

しふ-こんがう 執金剛【名】〔佛〕『何れも皆手に金剛を執ればいふ』■胎藏界の三部の中、金剛部の諸衆の稱。持金剛。金剛手。■諸天・諸佛を警護する夜叉(ヤシヤ)神。

しふこんがう-じん 執金剛神【名】〔佛〕手に金剛杵を執りて、帝釋天の宮門を護る夜叉(ヤシヤ)神。執金剛夜叉。金剛手。金剛力士。

しふこんがう-やしや 執金剛夜叉【名】〔佛〕前條に同じ。

しふこんがう-りきし 執金剛力士【名】〔佛〕前條に同じ。

じふご-や 十五夜【名】■陰暦十五日の夜。三五の夕。滿月の夜。望(モチ)の夜。■陰暦八月十五日の夜。秋は空氣中の水蒸氣漸く減じ、月光明かなる故に、この夜、觀月の宴を開く。仲秋。名月の夜。芋名月。じふさんや(十三夜)參照。■名香の一。明月よりも油强く、香風丸く强し。■ありあけ(有明)七に同じ。

じふ-ざ 十座【名】〔佛〕『十席に分ちて、法華經を講ずるよりいふ』ほっけじっこう(法華十講)に同じ。菜花「いはんや、五月・十座のほど、法華經の功德をいみじう說き盡す、いと尊し」

しふ-さい 拾採【名】拾ひ採ること。拾ひあつめること。

じふ-さい 十齋【名】〔佛〕じっさい(十齋)を見よ。

しふ-さう 四不像【名】〔動〕有蹄類に屬する哺乳動物。鹿の族にして、支那に產し、牡の角、先づ同長に二分岐し、その一方主幹に相當する枝の、更に同長に二分す。

しふ-さく 習作【名】『佛 Etude 英 Study』藝術家が、創作の練習として作ること、又その作れるもの。

しふ-さん 集散【名】集むると散ずると。集まると散ずると。

じふさん-がた 十三潟【名】〔地〕『岩木川を初めとして、十三の川注ぎ入るより名づく』陸奥國北津輕郡と西津輕郡とに跨る潟。東西二里・南北一里半・周回六里餘。湖の西部は鹹くして、東部は淡し。

じふさんがふ-ます 十三合枡【名】中古に用ひられし桝の一種。その容量は、今の一升二合五勺餘に相當すといふ。

じふさんぎやう 十三經【名】〔書〕易經・詩經・書經・周禮(シウライ)・儀禮・禮記(キ)・左傳・公羊傳(クヤウデン)・穀梁傳・孝經・爾雅・論語・孟子の總稱。また爾雅・孟子を除きて、老子・莊子を加へたる總稱。

じふさん-くわいき 十三回忌【名】人の死後、十三年目の正忌。十三年忌。十三年。

じふさん-ぐわつ 十三月【名】『十二月の次の月なればいふ』しようぐわつ(正月)の異稱。小町踏「心さへ十三月の春日かな」

じふさん-けい 十三經【名】〔書〕じふさんぎやう(十三經)を見よ。

じふさん-ごえ 十三越【名】〔地〕じふさんたうげ(十三峠)■に同じ。

じふ-さんじくわい 市部參事會【名】市部會・郡部會の區別を設くる府縣において、市部のみの經濟に關し、府縣參事會の職權を行ふために設くる會議機關。府縣知事・府縣高等官・參事會員及び市部會にて選擧したる府縣名譽職參事會員を以て組織す。

じふさん-しふ 十三州【名】〔地〕富士山の頂上より一目に見ゆといふ四方の十三箇國。野坡「富士おろし十三州の柳かな」

じふさん-しゆう 十三宗【名】〔佛〕■現に我が國に行はるる佛教諸宗、即ち華嚴(ケゴン)宗・天台宗・眞言宗・法相(ホツソウ)宗・律宗・淨土宗・臨濟宗・曹洞宗・黃檗(オウバク)宗・眞宗・日蓮宗・時宗・融通念佛宗の併稱。■支那の佛教の宗派なる毘曇(ビドン)宗・成實(ジヤウジツ)宗・律宗・三論宗・涅槃(ネハン)宗・地論(ヂロン)宗・淨土宗・禪宗・攝論(シヤウロン)宗・天台宗・華嚴(ケゴン)宗・法相宗・眞言宗の併稱。

しふさん-しゆぎ 集產主義【名】〔經〕そうがふしゅぎ(綜合主義)に同じ。

じふさんだい-しふ 十三代集【名】〔書〕二十一代集中、八代集を除きたるもの。即ち新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今の十三部の歌集。

じふさんだいゐん 十三大院【名】〔佛〕次條に同じ。

じふさんだいゐ 十三代會【名】〔佛〕胎藏曼陀羅の中央なる中臺八葉院、東方の遍知院・釋迦院・文殊院、西方の持明院・虛空藏院・蘇悉地院・南方の金剛手院・除蓋障院、北方の觀音院・地藏院に、更に二重にその外圍をなせる外金剛部院と四大護院とを加へたる稱呼。

じふさんだいゐ-ぼさつしやうじゆ 十三大會菩薩聖衆【名】〔佛〕十三大會の曼陀羅に現れたる菩薩。即ち中臺八葉院の九尊、遍知院の七尊、釋迦院の三十九尊、文殊院の二十九尊、持明院の五尊、虛空藏院の二十八尊、金剛手院の三十三尊、除蓋障院の九尊、觀音院の三十七尊、地藏院の九尊、外金剛部院及び四大護院における各東西南北の四尊との併稱。盛衰記「二聖(ニシヤウ)・二天・十羅刹女(ラセツニヨ)も、十三大會菩薩聖衆も、いかに哀れとおぼしけん」

じふさん-たうげ 十三峠【名】〔地〕■頂上に古塚十三あるによりていふ』大和・河內兩國間の七道の一。河內國中河內郡と大和國生駒郡とに跨る。山麓北高安村神立(カンダチ)より國界まで二十三町。伊勢物語に記されたる在原業平河內がよひの遺跡といふ。■十三越。■中仙道の中、美濃國土岐郡大湫(オホクテ)以東惠那(エナ)郡大井町まで三

里半の間の山路。難路なりしも、今は可兒(カニ)郡御嵩(ミタケ)町より大井町に出づる者多きため、この山路は殆んど廢絶せり。

じふさんぢゆう-のたふ 十三重塔【名】十三層の塔。朝鮮に多く、內地には少なし。

じふさん-ねん 十三年【名】次條に同じ。玉葉「俊成卿十三年の佛事に」

じふさんねん-き 十三年忌【名】**じふさんくわいき**(十三回忌)に同じ。謡曲「七つで別れた母樣の十三年忌」

じふさん-ぶつ 十三佛【名】(佛)不動・釋迦・文殊・普賢・地藏・彌勒(ミロク)・藥師・觀音・勢至・阿彌陀・阿閦(アシュク)・大日・虛空藏の十三佛。冥界にては、不動は秦廣王と名を變じて、死者の初七日を司り、釋迦は初江王と變じて、二七日を司り、文殊は宗帝王と變じて、三七日を司り、普賢は五官王と變じて、四七日を司り、地藏は閻魔王と變じて、五七日を司り、彌勒は變成(ヘンジヤウ)王と變じて、六七日を司り、藥師は泰山王と變じて、七七日を司り、觀音は平等(ビヤウダウ)王と變じて、百箇日を司り、勢至は都市王と變じて、一周忌を司り、阿彌陀は五道轉輪王と變じて、三回忌を司り、阿閦は蓮華王と變じて、七回忌を司り、大日は祇園(ギヲン)王と變じて、十三回忌を司り、虛空藏は法界王と變じて、三十三回忌を司るといふ。

じふさん-まゐり 十三參【名】京都にて、陰曆三月十三日、十三歲の童男・童女が山城國下嵯峨村の法輪寺の虛空藏菩薩に參詣して、幸福を祈ること。

じふさん-もんぜき 十三門跡【名】天台・眞言・淨土の三宗中に屬して、宮門跡(ミヤモンゼキ)たる十三寺。卽ち輪王寺・妙法院・聖護院・照高院・靑蓮院・梶井宮・曼殊院・毘沙門堂・圓滿院(以上天台)・仁和寺・大覺寺・勸修寺(以上眞言)・知恩院(淨土宗)の併稱。

じふさん-もんぱ 十三門派【名】(佛)**じふさんしゆう**(十三宗)に同じ。

じふさん-や 十三夜【名】■陰曆十三日の夜。吉野都女歌「よさ樣の寢姿窓から見れば、花ならば初櫻、月ならば十三夜、盛りまだしき闇の內」■陰曆九月十三日の夜。この夜、宇多天皇の御時より、十五夜に次ぎて、觀月の御宴ありたり。のちの「つき」のことよひ。栗名月。豆名月。季吟「とまる氣でひとり來ませり十三夜」

じふさん-や 十三屋【名】『九と四とを合はすれば、十三となるよりいふ』**くしや**(櫛屋)の隱語。

じふさん-り 十三里【名】(植)『栗(九里)より(四里)旨(ウマ)しといふ意』さつまいも(薩摩芋)の隱語。

じふ-じ 習字【名】文字を書きならふこと。かきかた。てならひ。

しぶし 志布志【名】(地)大隅國囘唫(クヒ)郡にある町。南は有明浦に臨む。

しぶし 澁し・澁し【形一】■澁の味あり。口中、收斂せらるるやうの感あり。■滑かならず。しぶりてあり。夫木「鷲の靡まだしぶく開ゆなり巢立ちの小野の森のあけぼの」■はでやかならず。くすみてあり。四心に不平ありげなり。「しぶい顏」

じふ-し 十指【名】**じつし**(十指)を見よ。

じふ-し 十師【名】(佛)**じつし**(十師)を見よ。

じふ-し 十死【名】**じつし**(十死)を見よ。

じふ-じ 十字【名】■十の字。十文字。■『晉書の何曾傳に「何曾適豪累世……蒸餅上不三斫作二十字一不レ食」とある故事に本づく』**むしもち**(蒸餅)又は**まんぢゆう**(饅頭)の異稱。東鑑「賜二十字一」■**じふじがい**(十字街)の略。四紋所の一。黑き方形の中に、十字を白抜にしたるもの。十の字。十文字。五『英 Cross』航海者の殊に注目する南方の星座。南小字。十字の習(ナラ)ひ。【句】昔の船軍にて、敵の船腹へ、我が船首を加へて、十字形に乘附くること。十字を切る【句】某督敎徒の間に行はるる儀式の一。手にて、胸に十字を描く。

じふじ-あがり 十時上【名】午後十時頃に霽るる雨。藝「十時あがりに、傘はなすな」

じふじい (英 Gipsies 又 Gypsies)【名】歐米に流浪する一種異風の種族。容貌體軀、印度人に似たり。蒙古の成吉思汗(チンギス)の西征の頃、印度を逐はれて、歐洲に入りし者の後裔なるべしといふ。馬車を住居とするものもあり。占術に巧みなりと信ぜらる。男は箒賣・鑄鹽(クヒ)などを業とし、女は俚謠を唄ひ、舞蹈などをなして生活す。

(いしぶじ)

じふじ-か 十字架【名】『英 Cross』■柱に橫木を添へて、十の字の形にし、罪人の手足を縛りつけて、磔刑に處したる刑具。くるす。■基督の磔にせられしより、紀念としてその敎徒の尊崇する十字形の標識。くるす。

じふじ-がい 十字街【名】**よつつじ**(四辻)に同じ。

じふじ-きやう 十字鏡【名】『英 Sauroso-』偏光器の一。一箇の平面鏡と二箇のニコル回轉鏡とより成り、結晶の薄片に平面偏光の平行線を通過せしめて、消光方位を驗するに用ふるもの。「雲鬢」に同じ。

じふじ-ぐつわ 十字轡【名】**いつもぐつわ**(出雲)に同じ。

じふじ-くわ 十字火【名】(兵)一方の軍の射線が、著彈點附近に於て相交叉する射擊。卽ち左右よりの射線が交叉して、十字形をなすこと。

じふじ-くわ 十字科【名】(植)顯花植物・被子類・雙子葉門・離瓣花區の一科。草又は稀に半灌木にして、十字形の花冠と、四强雄蕊とを有し、果實は莢(サヤ)をなす。分布きはめて廣く、種類もまた頗る多し。例へば大根・油菜・薺(ナヅナ)・山葵菜(ワサビナ)などの類。これに屬す。「に同じ。

じふじ-くわ-くわ 十字花科【名】(植)前條に同じ。

じふじ-けい 十四經【名】(書)十三經に大戴禮(ダイライ)を加へたるもの。源氏冷泉「大成論格致論・素問靈樞・十四經・入門難經・脾胃論・脈論・運氣論・萬卷の書に眼をさらしたこの坊主」

じふじ-けい 十字形【名】十の字の如き形。

じふじけい-くわ 十字形花【名】(植)花冠を有する花。

じふじけい-くわくわん 十字形花冠【名】(植)花冠が四片の花瓣より成りて、二片づつ相對し、恰も十字形をなすもの。卽ち十字科に屬する植物の花に見るもの。

じふじ-じ 十四事【名】武藝にて、射・騎・棒・刀・拔刀(ビツタウ)・擊劍・薙刀・劒・鎗・鳥銃・石火箭・火箭・捕縛(テウ)・拳(ケン)の併稱。

じふじ-せき 十字石【名】(鑛)『英 Staurolite』柱狀に結晶し、二箇十字形に相貫ける石。硬度は七度半、透明もしくは不透明なる赤色乃至黑褐色を呈す。我が國にては、肥前國に產す。斜十字石。

じふじ-たい 十字帶【名】十字形にかくる繃帶。

じふ-しち 十七【名】■十七歲。■妙齡の女子。をとめ。少女。蕪菜種の十七、大根畑の老女」俗謠(佐渡國の)「十七は竹に油を塗るごとし」

じふしちかでう-けんぱふ 十七箇條憲法【名】**けんぱふじふしちでう**(憲法十七條)に同じ。

じふしちくわい-き 十七回忌【名】人の死後十七年目の正忌。十七年。

じふしちけんぱふ 十七憲法【名】**けんぱふじふしちでう**(憲法十七條)に同じ。

じふしちし 十七史【名】(書)支那の十七部の歷史、卽ち史記・前漢書・後漢書・三國志・晉書・宋書・南齊書・梁書・陳書・後魏書・北齊書・周書・隋書・南史・北史・唐書・五代史の併稱。にじふいつし(二十一史)參照。「し。

じふしちぢ 十七字【名】**はいく**(俳句)に同じ。

じふしちでう-けんぱふ 十七條憲法【名】**けんぱふじふしちでう**(憲法十七條)に同じ。

じふしち-てん 十七殿【名】古の禁中にありし十七の御殿、卽ち紫宸殿・仁壽殿・承香(ジヨウキヤウ)殿・常寧殿・貞觀(ヂヤウクワン)殿・春興殿・宣陽殿・綾綺殿・溫明(ウンメイ)殿・麗景殿・宣耀(センエウ)殿・安福殿・校書(ケウシヨ)殿・淸涼殿・後涼殿・弘徽(コキ)殿・登華殿の併稱。

じふしち-もじ 十七文字【名】**じふしちじ**(十七字)に同じ。柳營「吉野山十七文字で譽めたらず」

じふしちや 十七夜【名】㊀陰暦の十七日の夜。㊁じふしちやまち(十七夜待)の略。五人女「十七夜代待(マタヒ)の通りしに、十二燈を包みて、我が身の事、末知れぬやうにと祈りける」 俳諧新選(休粮)「松が枝にまだ望あり十七夜」 「同じ。

じふしちや 十七夜の月【句】たちまちづき(立待月)に同じ。

じふしちや 十七屋【名】『十七夜の月を立待月(タチマチ)ともいふより、忽ち著きの意にとりなしていへるものといふ』ひきやくや(飛脚屋)の隠語。 狸権「夕立は十七屋から京へ知れ」 同「十七屋木綿合羽へ馬を入れ」

じふしちやうたて 十四挺立【名】小早(コバヤ)の、櫓の數十四挺を用ふるもの。

じふしちやまち 十七夜待【名】七夜待の最初の日の祈願なるべし。じふにたう(十二燈)参照。

じふじてふ 習字帖【名】習字の手本。又は習字の草紙。

しふしふ 拾集【名】ひろひあつむること。

しふしふ 集輯【名】よせあつむること。編輯。 「さま。

しふしふ 習習【貌】風のそよそよと吹くさま。

しふしふ 瀝瀝・瀝瀝【貌】しぶりながら爲すさま。いやいやながら、例のしぶしぶに、心も解けずものしたまふ」

しふしふがほ 瀝瀝顔・瀝瀝顔【名】不機嫌なる顔つき。瀝面。 日本振袖始「始の顔色引きかへて、しぶしぶ顔にて立出で」

しふしふきげん 瀝瀝氣嫌・瀝瀝氣嫌【名】不平ありげなる機嫌。 狗本太平記「しうとめのしぶしぶ機嫌」

じふしまい 十姉妹【名】㊀【動】燕雀類に屬する小鳥。四十雀(シジフ)に似て小さく、羽色は白と柿又は白と黒との班なるを普通とす。多くは籠中に飼養せられ、愛すべき鳴聲を發す。㊁【權】ぼさついばら(菩薩薔薇)に同じ。 「同じ。

しふしん 執心【名】(佛)しふねん(執念)に同じ。

しふしん 執心の波【句】執心を波に譬へていふ語。 謡曲(頼政)「今は何をかつつむべき、これは源三位頼政、執心の波に浮沈む」

執心の水【句】執心を水に譬へていふ語。 「見よ。

じふしん 十身【名】(佛)じっしん(十身)をじふしん-はふ(十進法)を見よ。

じふしん-はふ 十進法【名】「數」じっしんはふ(十進法)を見よ。

しふしん-ぶかし 執心深し【形ク】しふねんぶかし(執念深し)に同じ。 狂言「こんくわい」「はてさて、狐と申すものは、執心深いものでござりまする」 「同じ。

じふじ-もち 十字餅【名】じふじ(十字)㊁にしふしやう 執障【名】(佛)我執と煩惱障、また法執と所知障との併稱。

しふしやうしよ 祠部尚書【名】じんぎはく(神祇伯)の唐名。

しふじやのめ 瀝蛇目・瀝蛇目【名】瀝目傘の柿色なるもの。 「ること。拾ひとる。

しふしふ 拾取【名】ひろふこと。

しふしゅ 執守【名】執りて守ること。固く守ること。 「に同じ。

しふしゅ 四部衆【名】(佛)しゅ(四衆)

じふしゅ 十手【名】じっしゅ(十手)を見よ。

しふしゅう 集聚【名】しゅうじふ(聚集)に同じ。 「見よ。

じふしゅう 十宗【名】じっしゅう(十宗)を

じふしゅうかう 十種香【名】じっしゅかう(十種香)を見よ。

しふじゅく 習熟【名】習ひて熟練すること。なれて習性となること。

じふしゅくやう 十種供養【名】じっしゅくやう(十種供養)を見よ。

しふしやう 襲承【名】うけつぐこと。

じふじやう 十乘【名】(佛)じふじょうくわんぼふ(十乘觀法)の略。

十乘の風【句】(佛)十乘の觀法によって迷執を一掃するを、風の塵を拂ふに譬へていふ語。 盛衰記「傳教大師、點二江州比叡嶺一扇二十乘風於一天一」

十乘の床(ユカ)【句】(佛)十乘の觀法は、心の安住する所なるによりて坐する床に譬へていふ語。 謡曲(葵上)「十乘の床のほとりに、瑜伽の法水を湛へ」

じふじょうくわん 十乘觀【名】(佛)次條に同じ。

じふじょう-くわんぼふ 十乘觀法【名】(佛)『乘とは車乘の意、即ちこの觀法に乘りて、涅槃(ネハン)の寶所に到る意』三論(サンロン)の妙理を悟得するに至る十種の觀法、即ち第一觀不思議境・第二眞正發菩提心・第三善巧安心・第四破法遍・第五識通塞・第六道品調適・第七對治助開・第八知次位・第九能安忍・第十無法愛の併稱。もと天台宗の開祖智顗(チギ)の自ら工夫實踐せるもの。上根の者は、第一法のみにて悟了し、中根の者は、第六法までを用ひて悟了し、下根の者は、第十までを用ひて悟了す。止觀十乘。十乘觀。十乘。

しふしよく 襲職【名】職務を承けつぐこと。

じふすけ 十介【名】「尼子の十介」を見よ。

しふずみ 瀝墨・瀝墨【名】灰墨を瀝に交ぜたるもの、即ち黒き瀝。

しふずみぬり 瀝墨塗・瀝墨塗【名】瀝墨にて、板塀・下見(シタミ)などを塗ること、又これを業とする人。 「同じ。

しふせい 集成【名】しふたいせい(集大成)に同じ。

しふせい 習性【名】習慣となりたる性質。くせ。ならひ。

しふせい-くわん 集成館【名】相模國足柄下郡小田原町に在りし舊小田原藩の學校。文政五年藩主大久保忠眞の創立、明治五年廢せらる。

しふせい-りう 集成流【名】劍術の一派。波多野直好を祖とす。

じふ-せうこふ 十小劫【名】(佛)小劫の十倍の時間。こふ(劫)㊁・せうこふ(少劫)參照。 盛衰記「正覺を十小劫に成じて」

しふせつ 執節【名】節刀を執りて、大將となること。 謡曲(吉野静)「義經執節の勅を受け」

じふせつ 十刹【名】じっさつ(十刹)を見よ。

しふせん 集錢【名】㊀しゅせん(集錢)を見よ。㊁ぜにさし(錢差)を云ふ。(伊勢國の方言) 「たる糊。

しふ-せん 瀝煎・瀝煎【名】柿瀝にてねりしふせん 瀝扇・瀝扇【名】しぶうちは(瀝團扇)に同じ。

じふぜん 十全【名】『周禮の天官醫師篇に「歲終則稽二其醫事一、以制二其食一、十全爲上、十失一次之、……」呂氏春秋に「賢醫二十全不レ能レ成レ功」などあり』完全なること。全く危險なきこと。

じふ-ぜん 十善【名】(佛)十惡を行はぬこと。十善戒を持つこと。十善業(ジフゴフ)。

じふぜん 十善道。(十惡に對して) 保元「十善の戒行(カイギヤウ)重きに依りて」

じふぜん-ばんじよう 十善萬乘(バンジヤウ)【句】『ばんじよう(萬乘)を見よ』天子の位。 盛衰記「大慈大悲の君、十善萬乘の主として」

じふぜんのきみ 十善の主【句】次條に同じ。 增鏡「今上は二歲にぞならせたまふ。あさましきまでのおんいはけなさにて、いつくしき十善のあるじに定まりたまふ」

じふぜんのきみ 十善の君【句】『天皇は、前世に十善戒を持ちたる果報により生れたまへるなりといふ、佛者の說によりていふ』ていわう(帝王)の尊稱。十善の帝王。十善の王。 盛衰記「賴政色を失ひ、……思ひけるは、十善の君はかりなく思食さるる女を」

じふぜんのくに 十善の國【句】『前條を見よ』帝王のしろしめす國土。 太平記「善施太子は、鳩留(ルス)國の翁に身を與へて、檀施行を修したまふ。これは、皆、十善の國をあはせたる、十六の大國を保ちたまひし王位なれども」

じふぜんのくらゐ 十善の位【句】「十善の天位」に同じ。 增鏡「十善の位をも知るべき身が」

じふぜんのしほう 十善の正法(ボフヲ)【句】(佛)『道理に合へる正しき法なるよりいふ』じふぜん(十善)に同じ。 正統記「十善の正法を行ひて、國を治めしかば、人民これを敬愛す」

じふぜんのみかど 十善の帝王【句】「十善の君」に同じ。 盛衰記「年來の重恩を忘れ、十善帝王に向ひまゐらせて」

じふぜんのみかど 十善の帝位【句】次條に同じ。 平家「たとひ十善の帝位に誇りたらんといふとも、黄泉の旅に出でなん後は、牛頭馬頭の責をば免れたまはじものを」

じふぜんのみくらゐ 十善の天位【句】(佛)『「十善の君」を見よ』帝王の位の尊稱。十善の位。十善

の王位。十善の帝位。十善の位。太平記「十善の天位を捨てて、三明(サンミョウ)の覺路に趣かせたまふ」

十善の髮髮 【句】『「十善の君」を見よ』帝王の鬢髮の尊稱。盛衰記「十善の螺髮を落し、九品(クボン)の蓮臺を忘したまふ」

十善の床(ユカ) 【句】『十善修業の床の義』「十善の天位」に同じ。謡曲「十善の床を踐みたまふも、賤しき身の宮仕なりき」

十善の王 【句】「十善の君」に同じ。榮花「そこらの上達部・殿上人御送仕うまつりたまひて、御輿の捧げられたまへるほどこそ、なほ限りなき十善の王におはしますめれ」

十善の王位 【句】「十善の天位」に同じ。著聞「十善の王位を捨てて、一乘菩提の道に入らせたまひにけり」

じふぜん-かい 十善戒 【名】〔佛〕じっかい(十戒)に同じ。

じふせん-ぎんくわへい 十錢銀貨幣 【名】じっせんぎんくわへい(十錢銀貨幣)を見よ。

じふぜん-ごふ 十善業 【名】〔佛〕じふぜん(十善)に同じ。

じふせん-さつ 十錢札 【名】じっせんさつ(十錢札)を見よ。

じふ-ぜんじ 十禪師 【名】■十人の高德の、選ばれて內供奉(ナイグブ)を許されしもの。續起、或持律戒一足レ稱、或有病著レ靴、詔充二供養一並給二其身一、當時稱爲二十禪師一、其後有レ闕、擇二清行者一補レ之 ■次條の略。盛衰記「身吉といふ童御子の籠りたりけるが、十禪師の御前にて、俄かに狂ひ出でて舞ひかなでける」

じふぜんじ-ごんげん 十禪師權現 【名】『國常立尊以下天神七代を經て、地神五代中の第三代瓊瓊杵尊まで通算すれば、第十位に當るによりて、十禪師と呼ぶといふ』山王七社の一。地神第三の瓊瓊杵尊にて、地藏菩薩の權化(ゴンゲ)なりといふ。十禪師。平家「十禪師權現・客人(マラウド)・八王子三社の神輿を飾り奉って」

じふぜんじ-まつり 十禪師祭 【名】ししがたにまつり(鹿谷祭)に同じ。

じふぜん-だう 十善道 【名】〔佛〕じふぜん(十善)に同じ。

しふそん 集村 【名】〔地〕住家の各所に散在せずして、一部に密集せる村落。(街村・散村・環村・鏈村に對して) 「習慣。

しふたい 習諦 【名】しきたり。ならはし。

しふたい 集諦 【名】〔佛〕『梵Samudayaの譯語』四諦の一。吾人のこの世における苦痛を集起する原因たるもの。卽ち心の上に起る煩惱(ボンナウ)の惑と、これを身に行ふ業(ゴフ)と。この二つが、種種に集まりて、苦果を生起するなり。

しふたい 澁體・澁體 【名】〔文〕文章などの字句相通じ難き體。 「ほること。

じふ-たい 澁滯・澁滯 【名】しぶりとどこ

じふ-たい 十體 【名】じったい(十體)を見よ。

じふ-たいじ 十大寺 【名】桓武天皇の延曆十七年に定められし十箇所の官寺。卽ち七大寺に弘福寺・四天王寺・崇福(スウフク)寺を加へたるもの。

じふたい-しふ 十代集 【名】〔書〕八代集のうち、古今集を除き、新勅撰集・續後撰集・續古今の三集を加へたるもの。

しふ-たいせい 集大成 【名】『孟子の萬章下篇に「孔子之謂二之集大成一、集大成者、金聲而玉振之也」とあるに本づく』集めて、大いに完成すること。集成。

じふ-だいでし 十大弟子 【名】〔佛〕釋迦の弟子の中にて、特に有名なる十人、卽ち第一に摩訶迦葉(マカカセフ)、これを頭陀第一とし、第二に阿難多(アナン)、これを多聞(タモン)第一とし、第三に舍利弗(シャリホツ)、これを智慧第一とし、第四に目犍連(モクケンレン)、これを神通(ジンズウ)第一とし、第五に阿那律(アナリツ)、これを天眼(テンゲン)第一とし、第六に須菩提(スブダイ)、これを解空(ケクウ)第一とし、第七に富樓那(フルナ)、これを說法第一とし、第八に迦旃延(カセンネン)、これを議論第一とし、第九に優婆離(ウバリ)、これを持戒第一とし、第十に羅喉羅(ラゴラ)、これを密行(ミッギャウ)第一とす。十弟子。

しふたい-わかしふ 拾代和歌集 【名】〔書〕二十一代集・三玉集その他、家集・歌合等の歌を集めしもの。十二卷。惠藤一雄の撰。

じふたう-せん 十當錢 【名】じったうせん(十當錢)を見よ。

しふたぎなみや 後塞雙矢 【名】のちふたぎなみや(後塞雙矢)に同じ。

しふたに 澁溪・澁谷 【名】〔地〕越中國氷見(ヒミ)郡太田村の字。二上山(フタカミヤマ)の麓。溪間に楓樹多し。萬葉「澁溪の二上山に鷲ぞ子生むといふ」

しふたにごえ 澁谷越・澁谷越 【名】〔地〕しふたにごえ(澁谷越)の轉訛。

しふ-たん 集團 【名】あつまり。むれ。團

しふたん-しやげき 集團射擊 【名】〔兵〕數多の砲兵中隊を一戰場に布列し、同じ目標に向ひて、射擊を集中すること。

しふだんてい-さつ 集團偵察 【名】〔兵〕多人數が一團となりてなす偵察。

しふ-ち 習知 【名】習ひ知ること。ならひ覺ゆること。 「しつち。

しふ-ぢ 執持 【名】心にまもり操ること。執持名號 【句】阿彌陀如來の名を念ずること。

じふ-ぢ 十地 【名】〔佛〕『世間の大地が、草木等を生長せしめ、山河等を荷負して動かざるが如く、この地位に在る菩薩の、よく中道佛智を生成して住持し、また無緣の大悲を起して、一切衆生を擔荷し、これを出離せしむるによりて、地といふ』無明(ムミャウ)の惑を斷じて、眞如を證する十階段の地位、卽ち歡喜地・離垢(リク)地・發光地・燄慧(エンエ)地・難勝地・現前地・遠行地・不動地・善慧地・法雲地の併稱。菩薩この十地の位に入れば、決して退轉することなく、佛果に進趣するを得、十住・十行・十廻向の三十位の上、妙覺の下に位し、合はせて四十一位といふ。盛衰記「廬遮那佛の造立の志は、戒法興行のためなり。十地の階級によりて、報身能化の形異なれども」

十地苦行の大士 【句】「佛」『苦行を重ねて、十地の位地を踏破せる勇士の意味にていふ』ぼさつ(菩薩)の異稱。平家「萬德圓滿の世尊、十地苦行の大士たちも、力及ばせたまはぬ次第なり」

十地等覺の位 【句】〔佛〕『十地を經て、纖かに一品の無明(ムミャウ)を剩すのみなれば、佛の正覺(シャウガク)に準ずる意にて、等覺といふ。又、佛の正覺の極證位に對して、分證位ともいふ』菩薩の最上位。太平記「君御在位の間、外には五常を正しくして、仁義を專にし、內には五戒を守りて、慈悲を先としおはせしかば、いかなる十地等覺の位にも到らせたまひぬらん」

十地の菩薩 【句】〔佛〕菩薩の最上位に達したる菩薩。釋迦如來誕生會「十地の菩薩・五百羅漢」

しふぢ-かん 集治監 【名】舊監獄則における監獄の一種。徒刑・流刑及び舊法の終身懲役に處せられたる者を拘禁せし所。

しぶ-ぢや 澁茶・澁茶 【名】『香氣なくして澁きよりいふ』下等なる茶。

しぶ-ぢやう 支部長 【名】支部の長。

しふ-ぢやく 執著 【名】〔佛〕執心して思ひ離れぬこと。繫著(ケヂャク)。

しふぢやく-じし 執著獅子 【名】長唄にて演ずる踊。安永二年に、初代中村富次郎の森田座にて初演せしもの。堀越染陽書きおろし、中村兵次・杵屋作十郎振附をなす。

しふぢやく-しん 執著心 【名】執著する心。

しふぢやく-りよく 執著力 【名】執著して遂行せんとする意志の力。

しふ-ぢゆう 集中 【名】■或一點に集むること。■〔兵〕全兵力を指定の地點に集合すること。

しふ-ぢやう 集注 【名】一事物に集まりそそぐこと、また集めそそぐこと。

じふ-ぢゆう 十住 【名】〔佛〕『十種の重大なる禁戒の義。梵網經に見ゆ』じふぜんかい(十善戒)に同じ。盛衰記「その後、上人剃刀をとり、……初には三歸戒を授け、後には十重禁をぞ說きたまふ」

じふ-ぢゆうきんかい 十重禁戒 【名】〔佛〕じふぢゆうしん(十禁戒)に同じ。

じふ-ぢゆうしん 十住心 【名】〔佛〕眞言宗にて、衆生の有すといふ十種の心想、卽ち異生羝羊(テイヤウ)心・愚童持齋心・嬰童無畏心・唯蘊無我(ムガ)心・抜業因種心・他緣大乘心・覺心不生心・一道無爲心・極無自性心・祕密莊嚴心の併稱。この內、前の九つまでは、顯敎の域、無明の分際にして、未だ眞の成

佛を得るに至らず、最後の祕密莊嚴心に及んで、全く成佛すと說く。**じふぢ**(十地 參照。

じふぢゆうしんろん 十住心論【名】〔書〕**ひみつまんだらじふぢゆうしんろん**(祕密曼陀羅十住心論)の略。野守鏡理の成佛の義をば、十住心論には、徒に年劫を積みて、心身を苦すといへり」

じふちゆうはっく 十中八九【句】じふ(十)の條下を見よ。

じふちゆうりんけい 襲重鱗莖【名】〔植〕鱗莖の一。その鱗片の廣くして、相重なれるもの。

じふぢろんしゅう 十地論宗【名】〔佛〕ぢろんしゅう(地論宗)に同じ。

じふつ 四勿【名】『論語の顏淵篇に「非禮勿レ視、非禮勿レ聽、非禮勿レ言、非禮勿レ動」とあるに本づく』視聽言動に就きての四つの禁ずべきもの。

じふつ 死物【名】死にたるもの。生命なきもの。活動せぬもの。(活物に對して)

じふつ 詩佛【名】〔人〕おほくぼじふつ(大窪詩佛)を見よ。

じふつ 時物【名】時節に相應したる物。

じふつ 事物【名】ものごと。「の訛。

じふっかき 澁柿・澁柿【名】じふかき(澁柿)

じふつきげん 事物紀源【名】〔書〕天地生植・正朔曆數・帝王后妃等の五十五部に分ちて、普く事物の本原を記したるもの。十卷。支那宋の高丞の撰。

じふつきせい 死物寄生【名】〔生〕『英 Saprophytes』寄生生活の一。或生物が他の生物の死體又は生物などに寄生すること。例へば黴(カビ)の餅に生じ、菌類の朽木に生ずる類。(活物寄生に對して)

じふっく 四佛工【名】我が國における四人の有名なる佛工、即ち定朝(デウ)・運慶・安阿彌陀佛・湛慶の併稱。

じふつくわん 支佛觀【名】〔佛〕じふにいんえん(十二因緣)に同じ。

じふっくり 澁くり・澁くり【名】じぶっくること。じぶくり。浮世床「じぶっくり無しだよ」「るの訛。

じふっくる 澁くる・澁くる【動四自】じぶくる

しぶつど 四佛土【名】〔佛〕天台宗にて立つる四種の佛土、即ち凡聖同居(ボンジヤウ)土・方便有餘(ハウベンウヨ)土・實報無障礙(ジツパウムシヤウゲ)土・常寂光(ジヤウジヤククワウ)土。四種の國土。四土。

しぶっつら 澁面・澁面【名】次條の音便。

しぶつつら 澁面・澁面【名】不滿足らしき顏つき。しぶき顏。澁面(ジフメン)。

じふって 十手【名】じって(十手)を見よ。

じふでし 十弟子【名】じふだいでし(十大弟子)に同じ。桑苧「かくて佛、中の間の高きに中尊おはします。その御側に十弟子並みたり」

じふてつ 十哲【名】じってつ(十哲)を見よ。

しぶてぬぐひ 澁手拭・澁手拭【名】次條に同じ。

しぶてのごひ 澁手拭・澁手拭【名】かきのごひ(柿手拭)に同じ。

じふでふいっぽん 十帖一本【名】いっそくいっぽん(一束一本)に同じ。

じふでふがみ 十帖紙【名】おにすぎはらがみ(鬼杉原紙)〔日〕に同じ。

じふでふげんじ 十帖源氏【名】〔書〕源氏物語の卷卷の大體を、平易なる詞にて綴り、所所に註釋をも加へ、繪をも入れたるもの。十卷。野野口立圃の著。

しふてんくわん 集電瓊【名】〔理〕すりっぷりんくに同じ。

じふてりや 實扶的里【名】ぢふてりや(實扶的里)を見よ。

しぶと 死人【名】しびと(死人)の轉訛。

じふどいり 十度入【名】土器(カハラケ)の七度入より四まはり大なるもの、十度に十斗の意を顯く。海人藻芝「鐘(シユカ)は……近代、間(ヒ)の物五度入・七度入・十度入・塞鼻如」斯種種土器令二出來一酒興盛故也」

しふとく 拾得【名】おとし物を拾ふこと。

じふとく 習得【名】習ひて覺ゆること。

じふとく 十德【名】じっとく(十德)を見よ。

しぶとーぐさ 死人草【名】〔植〕しびとぐさ(死人草)の轉訛。

しぶとくしや 拾得者【名】ひろひ取ること。ひろひ得たること。

しふとくぶつ 拾得物【名】拾得せる物件。

しぶとし【形ク】強情(ガウジヤウ)にして屈せず。頑强なり。盛衰記「義貞は……未だ力づかずや侍らめども、心しぶとき奴にて」太祇「しぶとくも苦める色や枇杷の花」

しぶとを 鼻【名】しぶき(鼻)に同じ。〔古語〕

しぶな 【名】〔動〕たなご(鱮)を云ふ。〔關西の方言〕

しぶなは 澁繩・澁繩【名】柿澁のごとき色に塗りたる繩。

じふに 十二【數】十に二を加へたるもの。

じふにひとへ(十二一重)〔日〕に同じ。

じふにのつかさ【句】「後宮(コウキウ)十二司」に同じ。

じふにーいん 十二因【名】〔佛〕次條の略。

じふにーいんえん 十二因緣【名】〔佛〕『梵 Dvādasiṅga-pratītyasamutpāda の譯語。緣の字、因の韻に引かれてネンと發音す』緣覺の觀門。三世に涉りて、六道に輪廻(エリン)する緣起を、無明(ムミヤウ)・行(ギヤウ)・識・名色(シキミヤウ)・六處(ロクジ)・觸(ソク)・受・愛・取・有(ウ)・生(シヤウ)・老死の十二に次第したるもの。三世に配すれば、無明と行とは過去、識より有までは現在、生と老死とは未來、また無明と行とは、四諦(シタイ)中の集諦、識より受までは苦諦を詳かにせるもの、愛と取と有とはまた集諦、生と老死とは苦諦を分說せるもの、即ち十二因緣は集諦と苦諦との循環・連續する趣を示せるものと見ることを得。十二緣起。十二牽連。二六の緣。因緣觀。支佛觀。

じふにんえん(十因緣)參照。著園「十二因緣の心をめでたく說ききかせて敎化せられける」譚曲(江口)「それ十二因緣の流轉(ルテン)は事の庭に廻るがごとし」

じふにーえんぎ 十二緣起【名】〔佛〕じふにいんえん(十二因緣)に同じ。

じふにーかい 十二階【名】推古天皇の時代に定めたる十二等の冠位。即ち大德・小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智の併稱。冠は各、當色の絁(アシ)にて縫作り、その頂上を撮み、攝べて囊のごとくし、緣を著けたり。これを授けらるる者は、各氏によりて一定せしものの如く、後世のごとく、加階轉昇せし例殆ど無し。大化の新制以後、十三階・十九階・二十六階と漸次增加し、天武天皇の頃より、位冠に代ふるに、位記を以てするに至れり。

じふにーから 十二雀【名】〔動〕こがら(小雀)に同じ。

じふにーき 十二忌【名】〔美〕支那風の山水畫に忌む十二の缺點。即ち布置迫密なること、遠近分れざること、山に氣脈なきこと、水に源流なきこと、境に參差(シンシ)なきこと、路に出入なきこと、石の只一面なること、樹に四枝少なきこと、人物の傴僂(クル)なること、樓閣の錯離せること、濃淡宜しきを失すること、點染に法なきこと。元の饒自然の定めたるもの。

じふにーきやく 十二格【名】古の官省の十二種の區別、即ち神祇(ジギ)・中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮內・彈正・京職(ジキシキ)及び雜の併稱。

じふにーきゅう 十二宮【名】〔天〕『英 Signs of zodiac』春分點を起點として、黃道帶十二の星座に分ちたるもの。即ち白羊宮・金牛宮・雙女宮・巨蟹宮・獅子宮・處女宮(一に、陰陽宮)・天秤宮・天蝎宮・人馬宮・磨羯宮・寶瓶宮・雙魚宮の併稱。各星座に屬する星を、假線にて連結する時、それぞれ羊・牛・二人の女等の形をなすとて名づけしものにて、時計も曆もなかりし時代に、夜は星の位置によりて、時刻を判斷し、晝は十二宮中における太陽の位置によりて、季節を概知する必要より定められしもの。その名稱も支那・印度・ギリシャ等、大抵一致せるによりて、その名稱の出所の共通なるを知る。

に當るを有卦(ウケ)とし、衰以下の四つに當るを無卦(ブケ)とす。

じふにーえんぎ 十二緣起【名】〔佛〕じふにいんえん(十二因緣)に同じ。

じふにーかい 十二階【名】推古天皇の時代に定めたる十二等の冠位。即ち大德・小德・大仁・小仁・大禮・小禮・大信・小信・大義・小義・大智・小智の併稱。冠は各、當色の絁(アシ)にて縫作り、その頂上を撮み、攝べて囊のごとくし、緣を著けたり。これを授けらるる者は、各氏によりて一定せしものの如く、後世のごとく、加階轉昇せし例殆ど無し。大化の新制以後、十三階・十九階・二十六階と漸次增加し、天武天皇の頃より、位冠に代ふるに、位記を以てするに至れり。

じふにーから 十二雀【名】〔動〕こがら(小雀)に同じ。

じふにーき 十二忌【名】〔美〕支那風の山水畫に忌む十二の缺點。即ち布置迫密なること、遠近分れざること、山に氣脈なきこと、水に源流なきこと、境に參差(シンシ)なきこと、路に出入なきこと、石の只一面なること、樹に四枝少なきこと、人物の傴僂(クル)なること、樓閣の錯離せること、濃淡宜しきを失すること、點染に法なきこと。元の饒自然の定めたるもの。

じふにーきやく 十二格【名】古の官省の十二種の區別、即ち神祇(ジギ)・中務・式部・治部・民部・兵部・刑部・大藏・宮內・彈正・京職(ジキシキ)及び雜の併稱。

じふにーきゅう 十二宮【名】〔天〕『英 Signs of zodiac』春分點を起點として、黃道帶十二の星座に分ちたるもの。即ち白羊宮・金牛宮・雙女宮・巨蟹宮・獅子宮・處女宮(一に、陰陽宮)・天秤宮・天蝎宮・人馬宮・磨羯宮・寶瓶宮・雙魚宮の併稱。各星座に屬する星を、假線にて連結する時、それぞれ羊・牛・二人の女等の形をなすとて名づけしものにて、時計も曆もなかりし時代に、夜は星の位置によりて、時刻を判斷し、晝は十二宮中における太陽の位置によりて、季節を概知する必要より定められしもの。その名稱も支那・印度・ギリシャ等、大抵一致せるによりて、その名稱の出所の共通なるを知る。

じふにぐ

じふにくう 十二宮【名】〔佛〕『大集月藏經等に見ゆ』前條に同じ。

じふにくわうぶつ 十二光佛【名】〔佛〕阿彌陀佛の光明を十二種の德用に分ち、その各德用に因りて分たたる阿彌陀如來の十二の異稱。卽ち無量光佛・無邊光佛・無碍光(ムゲグワウ)佛・無對光(ムツイクワウ)佛・燄王光佛・淸淨光佛・歡喜光佛・智慧光佛・不斷光佛・難思光佛・無稱光佛・超日月光佛。盛衰記「一方の十二間に十二光佛を、一體づつ立て奉りければ、四方に四十八體の十二光佛御座しけり」

じふにぐわつ 十二月【名】年の第十二にあたる月。しはす。極月(ごくげつ)。

じふにぐわつわらい 十二月往來【名】〔書〕正月より十二月までの書翰文を載せたるもの。一卷。作者詳かならず。

じふにぐわん 十二願【名】〔佛〕「藥師の十二願」を見よ。

じふにぐわんわう 十二願王【名】〔佛〕『藥師の十二願』を見よ』やくしによらい(藥師如來)の異稱。太平記「十二願王陣を廻す故に、天下の治亂この寃應に懸らずと云ふこと無く」

じふにけい 十二經【名】〔醫〕漢法にて、手足に於ける十二の經脈、卽ち肺臟・大腸・心臟・小腸・心胞絡・三焦・膀胱・腎臟・膽臟・肝臟・脾臟の併稱。

じふにげっけん 十二月建【名】『をぎす(建す)を見よ』十二支を、一年十二月に配當したるもの、卽ち正月は寅、二月は卯以下、この順にて、十二月丑に至るまでの稱。

じふにげんきん 十二絃琴【名】絃の十二筋ある琴。

じふにけんれん 十二牽連【名】〔佛〕じふにいんえん(十二因緣)に同じ。「見よ。

じふにさい 十二齋【名】ろくさい(六齋)をじふにし 十二支【名】■えと(干支)を見よ。又、さんし(三支)・じふにじう(十二獸)參照。■〔佛〕『支は支分の義』じふにいんえん(十二因緣)に同じ。

じふにじう 十二獸【名】〔佛〕『大集經に見ゆ』一晝夜十二時を守護するといふ十二種の鳥獸、卽ち蛇・馬・羊・猴・雞・犬・猪・鼠・牛・獅子・兎・龍の併稱。支那相傳の十二支と相違せるは、獅子と虎とのみ。さんじふろくきん(三十六禽)參照。

じふにし

じふにしちやう 十二指腸【名】〔醫〕『十二指を並べたる程の長さなるよりいふ』小腸の一部。幽門より空腸までの間の最も幅狹く、馬蹄鐵狀に屈曲せる部分。全長三十サンチメートル。膽汁・膵液ここに注入す。

じふにしちやうかたる 十二指腸加答兒【名】〔醫〕十二指腸に發する加答兒。

じふにしちやうちゆう 十二指腸蟲【名】〔動〕圓蟲類に屬する蠕形(ぜんけい)動物。帶黃白色又は類赤色にして、長さ雌は三分乃至六分、雄はその半ばに過ぎず。頭に小鉤あり、人類の小腸殊に十二指腸内に懸着寄生して、血液を吸收し、大害をなす。

じふにしちちゆう 十二時中【副】『昔の時刻にて、晝六時・夜六時、合はせて十二時間の義。宋史の葛邲傳に「嘗日、十二時中莫レ欺二自己一、其實踐如レ此」とあり』晝夜いづれの時にも。二六時中。「見よ。

じふにしと 十二使徒【名】しと(使徒)をじふにしまはし 十二支廻【名】諸の會ののち、餘興として、首席者より順次に、十二支を誦中に讀込みて諷ひまはすこと。

じふにしん 十二神【名】〔佛〕次條の略。俳諧寄人談(きやくしんだん)「守りたまへ今年は藥師十二神」

じふにしんしやう 十二神將【名】〔佛〕『玄奘三藏譯の藥師經に見ゆ』藥師如來の十二願に應じて、晝夜の十二時を保護する十二の神。卽ち子の神なる宮毘羅(クビラ)大將・丑の神なる伐折羅(バサラ)大將・寅の神なる迷企羅(メキラ)大將・卯の神なる安底羅(アンチラ)大將・辰の神なる頞儞羅(アンダラ)大將・巳の神なる珊底羅(サンチラ)大將・午の神なる因陀羅(インダラ)大將・未の神なる波夷羅(ハイラ)大將・申の神なる摩虎羅(マコラ)大將・酉の神なる眞達羅(シンダラ)大將・戌の神なる招杜羅(トバラ)大將・亥の神なる毘羯羅(ビカラ)大將。十二夜叉(やしや)大將。十二神明(しんめう)。扶桑略記「並彩色八尺、十二神將等像」盛衰記「十二神將の冥罰も掲焉にして、一門終に亡びぬるこそ無慙なれ」

じふにし

じふにしんみやう 十二神明【名】〔佛〕前條に同じ。

じふにしやう 十二章【名】きうしやう(九章)を見よ。

じふにしやう 十二宗【名】〔佛〕十宗に、鎌倉時代新興の眞宗と日蓮宗とを加へたる稱。

じふにしゆてん 十二衆天【名】〔佛〕じふにてん(十二天)に同じ。

じふにしよ 十二所【名】〔地〕羽後國北秋田郡にある町。扇田(おうだ)町の東二里。

じふにじようぐわんいわうぜんせい 十二乘願醫王善逝【名】〔佛〕『善逝は諸佛ず號の一にて、如來といふに同じ』やくしによらい(藥師如來)に同じ。平家「仰ぎ願はくは、山王七社、王子・眷屬護法聖衆(しやう)、東西滿山十二乘願醫王善逝…、玄應を垂れたまへ」

じふにしよごんげん 十二所權現【名】熊野三山の一なる本山に祀れる十二社の神を、本地垂跡(ほんぢすいじやく)說に由り、權現として呼ぶ稱。卽ち證誠殿の國常立(くにのとこたち)尊は阿彌陀、中御前の伊弉諾(いざなぎ)尊は藥師、西御前の伊弉册(いざなみ)尊は千手觀音、若王子(にんぢ)の天照大神は十一面觀音、禪師宮の忍穗耳(おしほみみ)尊は地藏菩薩、聖(ひじり)ノ宮の瓊瓊杵(ににぎ)尊は龍樹菩薩、兒(ちご)宮の彦火火出見(ひこほほでみ)尊は如意輪觀音、子守(こもり)宮の鸕鷀草葺不合(かやふきあへず)尊は聖(しやう)觀音、一萬宮の國狹槌(くにさづち)尊は不動明王、十萬宮の豐斟渟(とよくむぬ)尊は普賢菩薩、觀請十二所の泥土煮(うひぢに)尊は釋迦如來、飛行(ひぎやう)夜叉の大戸道(おほとのぢ)尊は不動明王の權現なりといふも、この外、なほ來持金剛の面足(おもだる)尊等を毘沙門天王の權現なりとして、護法童子とし、十二所權現の使者として祀れり。異說多し。じふごよごんげん(十五所權現)參照。盛衰記「抑又十二所權現者、隨類應現之願、本迹濟度之誓」

じふにそ

じふにそう 十二社・十二所【名】〔地〕武藏國豐多摩郡淀橋町字角筈(つのはず)の宇。應永年間、熊野權現を勸請して、若王子以下十二所の神を祀れりといふ。境内に泉池あり。

じふにだ

じふにだいぐわん 十二大願【名】〔佛〕じふにぐわん(十二願)に同じ。菜花「藥師佛の御前の方の母屋の柱には、十二大願の心を繪に書かせたまへり」

じふにだいぐわんいわうぜんせい 十二大願醫王善逝【名】〔佛〕じふにじようぐわんいわうぜんせい(十二乘願醫王善逝)に同じ。

じふにだいじ 十二大寺【名】十大寺に法華寺と西隆寺とを加へたるもの。

じふにだいてんしゆ 十二大天衆【名】〔佛〕じふにてん(十二天)に同じ。

じふにだん 十二段【名】能(のう)にて、獅子舞を十二段に舞ふこと。

じふにだんざうし 十二段草子【名】〔書〕じやうるりじふにだんざうし(淨瑠璃十二段草子)の略。

じふにちやうたて 十貳挺立【名】小早(こばや)の櫓の數十二挺を用ふるもの。

じふにてう 十二調【名】〔音〕次條に同じ。

じふにてうし 十二調子【名】〔音〕支那にて定めたる、音樂の十二の調子。七音(しちいん)■の宮に當る音を黃鐘(わうしき)とし、これを絕對基音とし、徵(ち)に當る音を林鐘、商に當る者を太簇(たいそう)、羽に當る者を南呂、角に當る者を姑洗、變宮に當る者を應鐘、變徵(へんち)に當る者を雞賓(けいひん)とし、賓より上に、なほ大呂・夾鐘・無射(むえき)・仲呂の五階を設け、各調子の差を五度づつとしたるもの。漢代の五行說にては、これを十二支・一年十二箇月に配して、黃鐘は子・十一月、大呂は丑・十二月、太簇は寅・正月、夾鐘は卯・二月、姑洗は辰・三月、仲呂は巳・四月、蕤賓は午・五月、林鐘は未・六月、夷則は申・七月、南呂は酉・八月、無射は戌・九月、應鐘は亥・十月とし、また正・三・五・七・九・十一を六律といひ、二・四・六・八・十・十二を六呂といひ、合はせて律呂と稱し、律を陽に、呂を陰に配す。我が國にては、黃鐘を壹越(いちこつ)といひ、以下斷金・平調(ひやうでう)・勝絕・下無(しもむ)・雙調(そうでう)・鳧鐘(ふしやう)・黃鐘(わうしき)・鸞鏡(らんけい)・盤渉(ばんしき)・神仙・上無(かみむ)と呼び、下無調は龍吟調ともいへり。支那の黃鐘(こうしき)と我が

國の黃鐘(ワウシキ)とは、文字同一にして、調子は全く異なれり。十二律。

じふに-てん 十二天【名】〔佛〕上・下・八方を護る天部、即ち東方の帝釋天、東南方の火天、南方の焰摩天、西南方の羅剎天、西方の水天、西北方の風天、北方の毘沙門天、東北方の伊舍那天、上方の梵天、下方の地天と、二天即ち日天、月天との併稱。十二大天衆。十二衆天。 謡曲(善界)「狩迦羅(カシヤラ)・制多迦(セイタカ)・十二天」

じふに-とう 十二燈・十二灯【名】■『陀羅尼集經六千轉陀羅尼軌に、病人を救ふ法の供養物を掲げて、「果食十盤、燃二十二燈」とあり』神佛に供ふる十二本の蠟燭。三本・四本・五本と並べともすもの。藥師の十二神將に供ふる意に出でしなるべしといふ。■十二燈を供ふるための料金。五人玄。十七夜代待(マツヒ)の通りしに、十二灯を包みて、我が身の事、未来知れぬやうにと祈りける」 狭衣物語「社人にばけて、初穂・賽錢・十二燈をしてやれ」

じふに-どう 十二銅【名】神佛に奉る十二文の錢。

じふに-とき 十二時【名】子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二刻。即ち今の二十四時に當る。一晝夜。とき(時)參照。

じふに-はう 十二方【名】四方と八方とを合はせて、一切の方位を示す稱。 梁塵「今夜の燈火の光、十二方淨土佛世界に到るらんと見えて」

じふに-ひとへ 十二單【名】■女官の盛裝の時の裝束。重衣(ウハギ)を十二領重ねし下に、單(ヒトヘ)を著たるをいふに始まり、後世、五衣(イツツ)にても、唐衣(カラギヌ)・裳(モ)を打掛けたるをもいふ。十二のおんぞ。 盛衰記「藤重の十二單の御衣召されたり」 ■唇形科に屬する多年生の草。葦は方形にて、高さ五六寸。葉は長倒卵形にて、缺刻を有し、對生す。共に毛茸(マウジウ)密生す。花は白に薄紫を帶ぶるもの普通なり。うるき。うるひ。「十二一重筋骨草」

(じふにひとへ 日)

じふにふかけあみがさ 十二符掛編笠【名】『符は編む義』編笠の編目十二あるもの。 幸若舞曲(高館)「十二ふかけたる編笠をふかぶかとひっかうで」

じふにぶきやう 十二部經【名】〔佛〕じふにぶきやう(十二分經)に同じ。

じふに-ぶん 十二分【名】十分を越ゆること。普通の程度以上に達すること。

じふにぶん-きやう 十二分經【名】〔佛〕一切經を、釋迦の說法の樣式によりて、十二種に分てるもの、即ち一に修多羅(シタラ)、契經と譯す。二に祇夜(ギヤ)、重頌又は應頌と譯す。三に和伽羅那(ワカラナ)、授記と譯す。四に伽陀(カ)、不重頌・諷頌又は孤起頌と譯す。五に優陀那(ウダナ)、無問自說と譯す。六に尼陀那(ニダナ)、緣起又は因緣と譯す。七に阿波陀那(アバダ)、譬喩と譯す。八に伊帝目多伽(イチモクカ)、本事と譯す。九に闍陀伽(シヤタカ)、本生(ホンジヤウ)と譯す。十に毘佛略(ビブラウ)、方廣と譯す。十一に阿浮達摩(アブダマ)、未曾有(ミゾウ)と譯す。十二に優婆提舍(ウバダイシヤ)、論議と譯す。十二部經中の、方廣と授記と無問自說との三部は小乘教に缺くるところとす。十二部經。 梁花「十千の魚、十二部經の首題の名字を聞きて、皆忉利天(トウリ)に生れたり」

じふにほん-やぐるま 十二本矢車【名】紋所の一。十二本の矢羽よりなる矢車。

じふにん 十人【名】人のかず十。

じふにん 十人十色【句】人は、各異なるところあること。

十人十腹(ヨ)【句】人は、各考の同じからざること。

じふにん-ぐみ 十人組【名】五人組制の倍數なるもの。相互の非違を戒め、治安の機關たりしことは、五人組制に異ならず。五人組制の備はれる後までも、地方に依りては、本制に據りしものあり。

じふにん-どいろ 十人十色【句】じふにん(十人)の條下を見よ。

じふにん-とはら 十人十腹【句】じふにん(十人)の條下を見よ。

じふにん-なみ 十人並【名】容貌・技量などの普通なること。ひとなみ。 生玉心中「顏も十人並なれど、そなたをのけて此の世界に、女子があると思ふにこそ」

じふにん-もん 十二門【名】平安城の舊内裏にありし十二の門、即ち陽明門・待賢門・郁芳門・美福門・朱雀門・皇嘉門・談天門・藻壁門・殷富門・安嘉門・偉鑒(ヰカン)門・達智(タツ)門の併稱。

じふにん-もん-ちゃづけ 十二文茶漬【名】その價の十二文なる茶づけめし。 鹿遊笑覽「十二文茶漬は、傳通院前に、辰巳屋とて出でたるが初なりとぞ」

じふにん-もんめ 十二匁【名】江戸時代にありし、揚代十二匁の娼婦。 船頭深話「二朱にも、こんな德用向・結構なしろものもあるかいと、のろいまなこで見るほどなほ美くしく思はれ、こいつを十二匁にしたらどうだらう」

じふにもん-ろん 十二門論【名】〔書〕三論の一。羅什三藏の漢譯せるもの。一卷。三論宗の基礎となれるものにて、十二の法門を開きて、一切皆空の理を說けり。龍樹菩薩の著。

じふに-やくし 十二藥師【名】京都の十二の藥師、即ち石藥師・芝藥師・毘陽(ビヤウ)藥師・福昌藥師・誓願寺・蛸薬(タコ)藥師・威心院・雙林寺・因幡堂・布袋藥師・粉糠藥師・北野松德院藥師の併稱。

じふにやくしやだいしやう 十二藥叉大將【名】〔佛〕じふにじんしやう(十二神將)に同じ。

じふに-らいはい 十二禮拜【名】〔佛〕前條■に同じ。 梁花「かの龍樹菩薩の十二禮拜を思ひて」

じふに-らう 十二郎【名】『貞丈雜記に「十二郎は猿樂」なりと、年中恒例記に見えたりとあり』猿樂を演ずる者。

じふに-りつ 十二律【名】〔音〕じふにてふし(十二調子)に同じ。 野守鏡「則天皇后の時、十二律に定められにけり」

じふに-れっこく 十二列國【名】〔地〕支那の春秋時代に於ける十二の强國、即ち魯・晉・衞・鄭・曹・蔡・陳・燕・齊・宋・楚・秦の併稱。

しぶ-ぬき 澁抜・澁抜【名】■澁き味を除き去ること。 ■澁柿の澁を去りたる柿。

しぶ-ぬり 澁塗・澁塗【名】柿澁にて塗ること、また澁色に塗ること、又その塗りたる物。

しぶぬりえぼし 澁塗烏帽子・澁塗烏帽子【名】柿澁のごとき色の漆にて塗りたる烏帽子。 盛衰記「ややありて、兵衞佐、澁塗の立烏帽子に白直垂著して」

しぶ-ねがる 執念がる【動四自】しぶねく思ふ。 落窪「この向ひなる車すこし引きやらせよ。御車たてさせんといふに、しぶねがりて開かぬに」

しぶ-ねし 執念し【形ク】執念深し。執著强し。 源氏「かれは、しふねくとどめて、まかりにけるにこそ」

しふ-ねん 執念【名】〔佛〕深く思ひ込みて移らぬこと。執著心。執心。

じふ-ねん 十念【名】〔佛〕『阿彌陀の四十八願中の第十八願に出づ』六字の名號(ガウ)、即ち「南無阿彌陀佛」を十回唱ふること。十聲の念佛。 盛衰記「一念十念も正業となる」 同「最後の十念、高聲に唱へつつ、早くと宣ひければ」

じふ-ねん 十念・稱名【句】〔佛〕じふねん(十念)に同じ。 盛衰記「十念・稱名の聲絶えず、三尊來迎の雲霧えて」

じふねん-の-まくら 十念の枕【句】十念を授けられて、病床に横たはること。 曾我會稽山「臨終の一念

に接衆の光明を期し、十念の枕の上に聖衆の來迎を待つことも」

十念を授く【句】(佛)淨土宗にて、觀無量壽經中の「令聲不レ絕、具二足十念一稱二南無阿彌陀佛一」といふ文句に本づき、十回の唱名を、その信者に授けて結緣せしむること。他宗にて、三歸五戒等を授くるに擬したるなり。

最後の十念【句】(佛)次條に同じ。

臨終の十念【句】(佛)死際に行ふ十念。これを行へば、念念の中に、八十億劫生死の罪を除くを得て、極樂淨土に往生すといふ。最後の十念。

じふ-ねん 十年【名】一年の十倍。

十年一昔【句】十年の前と今日とを比ぶれば、變遷甚しく、さながら古き時代の如き感あり。

じふねん-じ 十念寺【名】京都上京區今出川寺町通に在る淨土宗の寺。本尊は大佛像。僧眞阿の開基。永享三年足利義敎の創建。

しふねん-ぶかし 執念深し【形ク】思ひ込むこと深し。執念甚し。しぶねし。

じふの 十能【名】次條の略。

じふの-のう 十能【名】『ごさく(五德)の類にて、効能多き器の義かといふ』炭火を載せて持運ぶに用ふる具。鐵・銅などにて造り、多くは木の柄を附く。おきかき。ひかき。

じふの-じ 十字【名】紋所の一。圓形中に十字を容れたるもの。十字。十文字。

じふのじ-せん 十字錢【名】寛永銅錢の一。元文元年に、江戸深川十萬坪にて鑄造せしもの。黃白色にして、徑八分のと七分のとあり。皆孔の上部又は廓内に十の字あり、又これを缺けるもあり。

じふの-じま 十島【名】『平假名のあほ(阿呆)は、これを分解すれば、「十のしま」の四字となるよりいふ』ばかもの(馬鹿者)を云ふ。(大阪の方言)

じふのじ-むすび 十字結【名】かなかむすび(叶結)に同じ。

じふのでし 四部の弟子【句】しぶ(四部)の條下を見よ。

じふは 十派【名】じっぱ(十派)を見よ。

しふはい 集配【名】一あつむると、くばると。集めて配達すること。二しふはいにん(集配人)の略。

しふはい-さんとうきよく 集配三等局【名】集配の事務を取扱ふ三等郵便局。(無集配三等局に對して)

しふはい-にん 集配人【名】いうびんしふはいにん(郵便集配人)の略。

じふ-はう 什寶【名】寶として祕藏する什具。たから物。

じふ-ばう 十方【名】じっぱう(十方)を見よ。

じふばう-ぐれ 十方闇【名】じっぱうぐれ(十方闇)を見よ。

しふはう-しや 襲芳舍【名】平安京大內裏の五舍の一。凝華舍の北にあり。この庭に霹靂木(いかなる木か明かならず)あり。きといふ。かみなりのつぼ。しはうしや。和名襲芳舍。在二凝華舍北一加美奈利乃豆保」

じふはう-じやうど 十方淨土【名】(佛)じっぱうじやうど(十方淨土)を見よ。

じふはう-せかい 十方世界【名】(佛)じっぱうせかい(十方世界)を見よ。

じふはち-かい 十八界【名】(佛)じふはちきやうがい(十八境界)に同じ。

じふはち-がゆ 十八粥【名】陰曆正月十八日に、大師供養のために作る小豆粥(あづきがゆ)。大師粥。

じふはち-きやうがい 十八境界【名】(佛)感覺の機官たる六根と、その對象となる六塵と、それらの二つに由りて生ずる意識作用の六識との總稱。十八界。

じふはち-けんじやう 十八賢聖【名】支那晉の高僧慧遠(えおん)の廬山の白蓮社に集まりて、念佛を修せる當時の名僧名士百二十三人の內、最も著名なる十八人。即ち慧遠・慧永・慧持・道生・曇順・僧叡・曇恒・道昺・曇詵・道敬・覺明・覺賢・劉程之・張野・周續之・張詮・宗炳・雷次宗の併稱。(太平記「十八賢聖を結びて長日に六時」「同じ。

じふはち-けんじゆ 十八賢衆【名】前條に同じ。

じふはち-こう 十八公【名】(植)『松の字を分割すれば、十八公の三字となるよりいふ』まつ(松)の異稱。(重雛士「松も女松の十八公、この年頃の振袖の」

じふはち-ささぎ 十八豆豉【名】次條の訛。(重雛士「甘いささかりの十八ささぎ、柔かなうちを一口食うて」

じふはち-ささげ 十八豆豉【名】(植)じふろくささげ(十六豆豉)に同じ。

じふはち-じんつう 十八神通【名】(佛)じふはちへん(十八變)に同じ。「條に同じ。

じふはち-じんぺん 十八神變【名】(佛)前條に同じ。

じふはち-だいし 十八大師【名】古來大師の號を勅諡せられたる十八人の高僧。即ち天台宗の傳敎大師(最澄)・慈覺大師(圓仁)・智證大師(圓珍)・慈惠(じゑ)大師(良源)・慈攝(じせふ)大師(天海)・眞言宗の弘法大師(空海)・本覺大師(益信)・興敎大師(覺鑁)・理源大師(聖寶)・道興大師(實惠)・法光大師(眞雅)・月輪(がつりん)大師(俊芿)・眞宗の見眞大師(親鸞)・慧燈(えとう)大師(蓮如)・曹洞宗の承陽大師(道元)・淨土宗の圓光大師(源空)・融通念佛宗の聖應大師(良忍)の併稱。

じふはち-だいつう 十八大通【名】天明の頃、世は華奢に流れ、人は遊興に耽りし中に、最も名高かりし、江戸の十八人の通人。多くは藏前の札差(ふださし)もしくは市中の豪商にて、十八人全部の姓氏は傳はらず、また時時の異同もありしが如し。(蜘蛛の絲巻「天明の比、花事・風流を事とする者を大通又は通人・通家など唱へて、この妖風世に行はる。その中にも、十八大通とて、十八人の通人ありけり。首長たる者は日本橋西河岸の(材木屋と聞ゆ)十鵆、御藏前なる(札差大口屋治兵衛)文魚なり」

じふはち-だんりん 十八檀林【名】くわんとうじふはちだんりん(關東十八檀林)を見よ。

じふはち-どよう 十八土用【名】夏の土用の十八日間なること。(十九土用に對して)

じふはち-の-きみ 十八公【名】じふはちこう(十八公)に同じ。(毛吹草「十八のきみは御門の飾かな」

じふはち-ばん 十八番【名】一かぶきじふはちばん(歌舞伎十八番)の略。二その人の得意として、言語行動にあらはす事柄。おはこ。

じふはち-べうはふ 十八描法【名】(美)支那風の繪畫にて、人物を描く十八種の法。即ち高古遊絲描・琴絃描・鐵線描・行雲流水描・混描・撅頭釘描・馬蝗描・釘頭鼠尾描・曹衣描・蚯蚓描・折蘆描・橄欖描・棗核描・柳葉描・竹葉描・戰爭水紋描・枯柴描・減筆描。

じふはち-へん 十八變【名】(佛)神通に由りて現はす十八種の變化。即ち右脇出水・左脇出火・左脇出水・右脇出火・身上出水・身下出火・身下出水・身上出火・履水如地・履地如水・從虛空沒而復現地・地沒而現空中・空住・空行・空坐・空臥・現大身・現小身。十八神通。(太平記「この時、舍利弗(しやりほつ)、慈悲・忍辱(にんにく)の意を發し、身を百千に化し、十八變を現じて、還りて大座に著きたまふ」

じふはち-まつだひら 十八松平【名】まつだひら(松平)を見よ。

じふはち-もつ 十八物【名】(佛)大乘比丘(びく)の常に身に隨ふべき佛制道具の十八種。即ち五衣(三衣と二衣と)・鉢・錫杖・佛像・菩薩像・經・律・火燧・香爐・香盒と香匙)・繩床・坐具・漉水囊・瓶・手巾・楊枝・澡豆(小豆・大豆などを乾して、粉にし、穢れたる手を洗ひ淨むるに用ふるもの、即ち洗粉)・刀子(剃髮・裁衣・截爪の用に供するもの)・鍼子(鼻毛を抜き、また刺(さ)を抜くに用ふるもの)の併稱。ろくもつ(六物)參照。

じふはち-らかん 十八羅漢【名】十八人の羅漢、即ち十六羅漢になほ二人を加へたるもの。慶友尊者と賓頭盧(びんづる)尊者とを十六羅漢の後に加へたるものと、迦葉(かせふ)尊者と軍徒鉢數尊者とを、その前に加へたるものとの二種あり。(高紫千紅「大明の所帶くづし羅漢の和尙たち、十八羅漢の圖をゑがきて」

じふはっしゆう 十八宗【名】(佛)十宗中の禪宗を臨濟・曹洞の二宗に分ち、なほ融通念佛宗・眞宗・日蓮宗時宗・普化宗・修驗宗・黃蘗宗を加へたる稱呼。

じふはっしゆもつ 十八種物【名】(佛)じふはちもつ(十八物)に同じ。

じふはっしりやく 十八史略【名】〔書〕十七史及び宋鑑の十八部の正史に就き、取捨折衷して、太古より宋時代までの事蹟を記述し、初學の教本に供せしもの。七卷。支那元の曾先之の撰。

じふはっちやうだて 十八挺立【名】小早(コバヤ)の櫓の數、十八挺を用ふるもの。二九挺。

じふはってん 十八天【名】〔佛〕三界諸天の一部。色界(シキカイ)にありといふ十八の天。即ち梵衆天・梵輔天・大梵天(以上初禪天)・少光天・無量光天・光音天(以上第二禪天)・少淨天・無量淨天・遍淨天(以上第三禪天)・無雲天・福生(フクシヤウ)天・廣果天・無想天・無煩(ムボン)天・無熱天・善現天・善見天・色究竟(シキクキヤウ)天(以上第四禪天)の併稱。約めて四禪天といふ。

じふはっぱん 十八般【名】『水滸傳の第一回に見ゆ』十八種の武技、即ち矛(ホコ)・鎚(ツチ)・弓・弩(イシユミ)・銃(テツパウ)・鞭(ムチ)・簡(ヤリ)・劍・鎚・杈(マタ)・斧・鉞(マサカリ)・戈(ホコ)・戟(ホコ)・牌(タテ)・棒・鎗・樐(ホコ)をいひ、また弓・弩(イシユミ)・鎗・刀・劍・矛・盾・斧・鉞・戟・鞭・簡・樐・叉・把・頭(デウズ)・叉・縛・繩・自打の稱。

じふばん 十番【名】じふばんじたて(十番仕立)の略。

じふばんうらがき 十判裏書【名】じっぱんうらがき(十判裏書)を見よ。

じふばんぎり 十番切【名】曾我兄弟の工藤祐經の館に斬入りて、復讐せし時、捕へん討たんとせし賴朝の臣十人を斬りしこと。重忠又人を呼ぶやら逃るやら、隣町八丁丸丁町、十番切の五月闇、夜討の入りたるごとくなり」

十番切の番士【句】江戸幕府の十番切の間(マ)に勤めし番士。

じふばんぎりのま 十番切間【名】江戸城中の間(マ)の一。曾我五郎時宗の十番切の繪を畫きたる所。

じふばんじたて 十番仕立【名】『江戸の廐布(シキ)』十番町に住みし馬乘の用ひ始めしに因るとも、麹町の十番町に、その仕立屋一軒ありしに因るともいふ』馬乘袴の一種。襠(マチ)甚だ高く、裾まはり濶し。じふばん。

じふばんちやら 史部番長【名】明治初年に太政官に置きて、書狀の發達を掌らしめし判任官。同十八年廢せらる。

じふはんりつきえいくわこうさい 四分半利附英貨公債【名】我が國債の一。日露戰爭による臨時事件費支辨のために、明治三十八年三月と同七月との二回に、三千萬磅づつ、國外にて募りし四分半利附の英貨公債。

じふはらみつ 十波羅密【名】〔佛〕一唯識論に十勝行と稱して、菩薩十地の行法とせるもの。即ち一に施波羅蜜、二に戒波羅蜜、三に忍波羅蜜、四に精進波羅蜜、五に靜慮波羅蜜、六に般若波羅蜜、七に方便善巧波羅蜜、八に願波羅蜜、九に力波羅蜜、十に智波羅蜜。二『眞言宗にて、印相をむすぶに、十波羅蜜を、十指の各に名づけたるよりいふ』十の指(ユビ)。

じふぶいちだいづぎんなふ 十分一大豆銀納【名】江戸時代に、總收穫高の十分一を當租として、石代にて納めしこと。

しふふく 集福【名】幸福を招き集むること。「服茶」を見よ。

じふぶくちや 十服茶【名】じっぷくちや(十服茶)を見よ。

じふふぜんごふ 十不善業【名】〔佛〕じふあくごふ(十惡業)に同じ。

じふぶつ 什物【名】じふもつ(什物)に同じ。

じふふにもん 十不二門【名】〔佛〕天台宗の六祖荊溪大師の著せる「法華玄義釋籤」の中に見えし觀心上の色心不二門・內外不二門・修性不二門・因果不二門・染淨不二門・依正不二門・自他不二門・三業不二門・權實不二門・受潤不二門の十門。荊溪の門人道邃(ダウスヰ)これを別錄せしより、一部の書目ともなり、天台學徒に重用せらる。

じふふん 十分・充分【副】物事完全す。不足なく。飽くまで。

しふへき 摺襞【名】〔植〕摺の字の音、正しくはせふ(左右より摺(タタ)みて、縱に襞(ヒダ)をなせるもの。

しふほ 襲歩【名】〔兵〕歩兵が敵陣に突喊する時用ふる歩法。要領は速歩に同じく、一分間に約百二十歩とし、敵に接近するに從ひて漸次に增加し、遂に疾驅に及ぶ。

じふぼ 十母【名】實母・出母・嫁母・庶母・嫡母・繼母・慈母・養母・乳母・諸母の併稱。

しふぼく 輔睦【名】やはらぎむつぶこと。

じふぼし 十星【名】紋所の一。大なる圓形を中央に据ゑ、その周圍に大なる圓形九つを畔べたるもの。

じふま 十魔【名】〔佛〕佛道修行を妨ぐる十種の魔、即ち蘊(ウン)魔・煩惱(ボンナウ)魔・業(ゴフ)魔・心魔・死魔・天魔・善根魔・三昧魔・善知識魔・菩提法智魔。

じふまいざさ 十枚笹【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(さざいまふじ)

じふまいづくり 十枚作【名】小判十枚を以て、一枚に作りたるもの。

じふまんおくせつのど 十萬億刹土【名】〔佛〕『阿彌陀經に「從レ是西方、過二十萬億佛土一有二世界一名曰二極樂一其土有レ佛號二阿彌陀一今現在說法」とあり。一佛土は、即ち三千大世界をいふ。億の字、萬の韻に引かれて、ノクとも發音す』次條に同じ。盛衰眞日、西山に沒る時は、遙かに十萬億刹の土を思ひ、風巖松を吹く折は、近く常樂我淨の觀を凝らす」

じふまんおくど 十萬億土【名】〔佛〕『典據は前條に同じ。億の字、萬の韻に引かれて、ノクとも發音す』娑婆世界より西方なる極樂淨土に到る間に在りといふ無數の淨土。

じふまんおくのくに 十萬億國【名】〔佛〕前條に同じ。源氏「西の方十萬億の國隔てたる、九品の上の望にたがひなく」

じふまんおくのこくど 十萬億國土【名】〔佛〕じふまんおくど(十萬億土)に同じ。十訓「十萬億の國土は、海山へだてて遠けれど、心の道の直ければ、つとめて到るとこそ聞け、と打出したりければ」

じふまんふげん 十萬普賢【名】〔佛〕無數に化身する普賢菩薩。十萬は大數を用ひて、無數を示せるなり。謠曲(巻絹)「十萬文殊…十萬普賢、滿山護法、數數の神神」

じふみ 澀味・澁味【名】一澁き味。二すみたる趣味。

じふみやう 十名【名】〔佛〕じふがう(十號)に同じ。

じふみやう 私慣【名】私事に關するいかり。私事のうらみ。私怨。(公憤に對して)

じふめん 脂粉【名】一紅(ベニ)と白粉(オシロイ)と。紅粉。二けしやう(化粧)に同じ。脂粉の氣【句】婦人らしき氣分。柔弱なる氣分。

じふめん 支分【名】細かに分つこと。

支分節解【句】『中庸章句の序に「支分節解、脈絡貫通」とあり』文章を解釋するに、支體を分ち、關節を解くがごとく、詳しく細かなること。

じふめん 死文【名】實際に効力なき文章、又は法令。

じふめん 斯文【名】『論語の子罕篇に「天之將レ喪二斯文一、後死者不レ得レ與於二斯文一也」とあり。斯の文の義。文學學問の義。しだう(斯道)參照』儒家にて、その奉ずる道。

じふめん 詩文【名】詩と文章と。「書。

じふめん 刺文【名】いれずみ。ほりもの。刺文(シブン)に同じ。

じふめん 識文【名】やうもん(陽文)に同じ。

じふめん 紫文【名】『支那にて韓愈の文章を韓文、柳宗元のを柳文いふ例に擬へていへるもの』紫式部の文章。源氏物語の文章。「らひぶん。

じふめん 士分【名】さむらひたる身分。さむらひぶん。

じふめん 自別【名】じべつ(自別)に同じ。

じふめん 自奮【名】みづから奮勵すること。

じふめん 時文【名】一當時の文。二支那にて、官吏登用の試驗に應ずる時に用ひし文體、即ち八股文。(古文に對して)三支那の近代の文體、即ち語錄・書牘文は官府の告諭、新聞の記事などに用ひらるるもの。同じく新聞紙上の文にても、論說は古文に近きを常とし、小說・戲曲等の文は、殆ど純然たる談話體にして、時文はその中間に立つ通俗の文體に外ならず。

じふん 時分【名】一とき。ころ。時期。女殺油地獄「こちの人か、子供がお喜の時分も忘れ、何處にどうして居さしやんした」二よきころ。百合若大臣野守鏡「夫婦は時分

と、三階の襖戸障子明け過ぎて、この間こそと指して」

じぶん 耳聞【名】耳にて聞くこと。耳聞は目見に如かず【句】『說苑の政理篇、又は魏書の崔浩傳等に見ゆ』耳にて聞くよりは、目にて見たる方明白にして覺りやすし。百聞は一見に如かず。〔諺語〕

じぶん 自分【名】おのれ。われ。

じぶん 自分【代】われ。おのれ。自身。

じぶん-あまのさへづり 紫文蠆之囀【名】〔書〕源氏物語の空蟬(ウツセミ)の巻までを、俗語に改作したるもの。五巻。多賀半七の著。

じぶん-えうりやう 紫文要領【名】〔書〕玉の小櫛の舊稿なるべしといふ。二巻。本居宣長の著。

じぶん-おんかい 四分音階【名】〔音〕半音階より更に小なる音階。一全音の距離にある二箇の音の上なる變を以て、半音階的半音下げ、下なるを嬰を以て、半音階的半音上ぐる時、その差は四分音階を成す。

じぶん-おんぷ 四分音符【名】〔音〕『英Crotchet』全音符の四分の一の長さなる音を示す音符。

じぶん-がって 自分勝手【名】己れのみの都合を計ること。てまへがって。みがって。

じぶん-がら 時分柄【副】時刻なれば。時節柄。淀鯉出世灘鰲「時分柄、心中の下地か、…行く人も絶えて、その夜も更けにけり」五人女「時分がらの世の中、金銀の入る事ならば、思ひながらなりがたし」

じぶん-ぎ 四分儀【名】〔天〕『英Quadrant』天體の高度を計量するに用ふる器。九十度の分度器に望遠鏡と指針との裝置あるもの。象限(ケンゲン)儀。**ろくぶんぎ**(六分儀)は**ろくぶんぎ**(八分儀)參照。

じぶん-きうしふ 四分休止符【名】〔音〕『英Quarter rest』全休止符の四分の一の長さだけ休止すべきことを示す休止符。

じぶん-ぎめ 自分極【名】ひとりぎめ。ひとりはんだん。獨斷。

じぶん-けん 支分權【名】〔法〕或權利作用の一部が他人に屬したる場合に、その他人に屬せる權利作用。

じぶん-これつ 四分五裂【名】『四五に分裂する義』ちりぢりに裂けて、順序なきこと。

じぶん-しごと 自分仕事【名】己れ一人の收益になる仕事。おのれのみの仕事。心中及は氷の朔日「それなら私が內證の自分仕事にしましやう」

じぶん-しよ 私文書【名】一私人の文書。私書。(公文書に對して)

じぶん-しよぎざう-さい 私文書僞造罪【名】〔法〕文書僞造罪の一。權利・義務又は事實證明に關する私人の文書、もしくは圖畫を僞造又は變造したるによりて成立する罪。私書僞造罪。

じぶん-たい 時文體【名】時分[二]の文體。

じぶん-てきひ 時文摘批【名】〔書〕擬古文の用語・語格などの古格に違へるを正したるもの。一卷。村田春海の著。

じぶん-と 自分ごと【副】おのれと。自分よりして。われから。自然に。

じぶん-どき 時分時【名】食事の時刻。

じぶん-ながら 自分乍【副】自分でさへも。われながら。じぶんと。みづから。

じぶん-はうし 四分胞子【名】〔植〕胞子細胞の分裂に因り、四箇となりて生ずる胞子。

じぶん-めんきよ 自分免許【名】**うのほれ**(己惚)に同じ。

じぶん-もち 自分持【名】自費にて事をなすこと。自辨。

じぶんりつ 四分律【名】〔書〕『四度に分ちて監修せるよりいふ』律宗所依(ショエ)の經典。佛滅後百年、曇無德羅漢の一切經中の上座部の律より抜萃・結集せるもの。聖武天皇の時、鑒眞來朝して、これを傳ふ。

じぶんれん 四分圓【名】〔數〕『英Quadrant』互に垂直をなす二つの直徑によりて、四つに分たれたる圓の一部。象限(ケンゲン)。

じふ-めい 襲名【名】親父は師匠などの名を襲ぐこと。

じふ-めん 澁面・澁面・十面【名】**しぶつら**(澁面)に同じ。川中島合戰「無念無念も十面ばかり、一言の返答なく」

じふ-もく 十目【名】數多の人の目。十目の視る所【句】『大學に「十目所、視、十手所指、其嚴乎」とあるに本づく』多數の人の一樣にしか思へる意。

じふ-もじ 十文字【名】**じふもんじ**(十文字)に同じ。

じふ-もつ 什物【名】[一]**じふき**(什器)に同じ。[二]**じふはう**(什寶)に同じ。

じふもん-いろ 十文色【名】總嫁をいふなるべし。冥途飛脚「心は蜘蛛手かくなはや、十文色も出て來るは、南無三寶日が暮れると、足を空に立歸り」

じふ-もんじ 十文字【名】[一]縱橫に交叉して、十字形をなすこと。盛衰記「太き馬を十文字に引きからげて」[二]轡の一部。鑣(ハガ)の中の十字形をなせる鐵材。[三]よき烏帽子。[四]**しんひろ**(新廣)に同じ。[五]**じふもんじやり**(十文字槍)の略。堀川波の鼓「素鎗・片鎌・十文字」[六]**よつつじ**(四辻)を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕

じふもんじ-ぐつわ 十文字轡【名】**いつぺぐつわ**(出雲轡)に同じ。

じふもんじ-した 十文字羊齒【名】〔植〕**しゆもくしだ**(撞木羊齒)に同じ。

じふもんじ-だすき 十文字襷【名】**しゆもくぞり**(撞木反)に同じ。

じふもんじ-つが 十文字栂【名】〔植〕**おほしらそ**(大白檜曾)に同じ。

じふもんじ-やり 十文字槍【名】穗先の十字形をなせる槍。十文字。

じふもん-せん 十文錢【名】[一]『その一枚は、當時の通用錢十文に當りしよりいふ』**はうえいつうほうせん**(寶永通寶錢)に同じ。

じふもん-は 仕門派【名】〔佛〕**けんぽんほつけしゆう**(顯本法華宗)の舊稱。

じふもん-もり 十文盛【名】一杯十文づつの一膳めし。丹波與作「酒が四升五合、十文盛が七十杯」

しぶや 澁谷・澁谷【名】〔地〕武藏國豐多摩郡にある町。東京市の西。鐵道山手(ヤマテ)線の一驛。玉川電氣鐵道の起點。

じふ-や 十夜【名】〔佛〕『觀無量壽經に「於此修ㇾ善十日・十夜、勝ㇾ於二他方諸佛國土一爲ㇾ善千歲」とあるに本づく。十夜は卽ち十日・十夜の略なるべし』淨土宗にて、陰曆十月の六日より十五日までの十日の間、夜ごとに行ふ別時念佛。信徒は、尊びて、御(オ)十夜と呼ぶ。太平「なまうだや十夜の道のあふれ者」

じふやがき 十夜柿【名】十夜の頃、京都黑谷などの路傍にて賣る柿。

しふ-やく 集約【名】[一]あつめてつづむること。[二](農)『英Intensive』農業の經營法の一。狹小なる土地に對して、割合に多くの資本を投入し、多くの勞力を用ひて營み、人力を以て、自然的地力を增加するを目的とするもの。集約耕作。集約農業。集約農法。(粗放に對して)「藥」に同じ。

じふ-やく 戎藥・十藥【名】〔植〕**とくだみ**(戎藥)

しふやく-かうさく 集約耕作【名】〔農〕**しふやく**(集約)[二]を見よ。

しふやく-のうぎふ 集約農業【名】〔農〕前條に同じ。

しふやく-のうはふ 集約農法【名】〔農〕前條に同じ。

じふやごもり 十夜籠【名】十夜に寺籠(テラゴ)りすること。太平「辻辻に十夜ごもりや遣手まで」

じふやねんぶつ 十夜念佛【名】〔佛〕**じふや**(十夜)に同じ。

しぶ-ゆ 澁湯・澁湯【名】〔地〕**しぶをんせん**(澁溫泉)を見よ。

じふ-ゆ 十喩【名】〔佛〕密敎にて、一切諸法はすべて因緣によりて生じ、自性無きものなることを譬したる十種の比喩。卽ち幻・陽焰(カゲロフ)・夢・影・乾闥婆(ケンダツバ)城・響・水月・浮泡・虛空華(妄見によりて見ゆる空中の義)・旋火輪(火繩を回轉して生ずる火輪)の併稱。觀想中、種種不思議の相の現出する時、それらの相に對し、執著の念想生じ、觀想の障碍となるを防がんがための方便たるもの。

じふよっか-どしこし 十四日年越【名】正月十四日の異稱。**じふこしやくわつ**(十五正月)參照。故實拾要「十四日年越御獻、是れ六日の御獻の規式に同じ」

しふ-らい 集來【名】らいしふ(來集)に同じ。盛衰記「その上、聽聞集來の人、乞丐・非人の族までも、大施行をぞ引かれける」

しふらい 襲來【名】らいしふ(來襲)に同じ。

しふらい 習禮【名】大儀の行はるる前に、掛の官員の、その禮式を豫習すること。うちならし。(古語)「著聞」白馬節會(ハクバノセチヱ)の習禮ありけり」

しふ-らうちゅう 祠部郎中【名】■じんぎはく(神祇伯)の唐名。■おんやうのかみ(陰陽頭)の唐名。

じふらうべゑ-ぶし 十郎兵衛節【名】いちのやぶし(一谷節)に同じ。

じふらく 十樂【名】(佛)極樂淨土にありといふ十種の快樂(ケラク)。即ち聖衆來迎樂・蓮華初開樂・身相神通樂・五妙塵界樂・快樂(ケラク)無退樂・引接結緣樂・聖衆俱會樂・見佛聞法樂・隨心供養樂・增進佛道樂の併稱。

じふらく-こう 十樂講【名】(佛)淨土の十樂を講讀する法會。

じふらく-ゐん 十樂院【名】じふらくゐんもんぜき・十樂院門跡)を見よ。

じふらくゐん-の-うへ-の-みささぎ 十樂院上陵【名】花園天皇の御陵。山城國上京區粟田口町青蓮(シャウレン)院の東南にあり。

じふらくゐん-もんぜき 十樂院門跡【名】『十樂院は京都に在りし里坊の院號』天台宗の門跡。東陽房覺慶を祖とす。その本房の東陽房は比叡山の西塔北谷にありたり。

じふ-らせつによ 十羅刹女【名】(佛)法華經の陀羅尼品(ダラニボン)において、法華行者を守護せんと誓ひし十の羅刹女。即ち一に藍婆(ランバ)、有結縛ともいひ、二に毘藍婆(ビラン)、離縛ともいひ、三に曲齒(ショク)、施積ともいひ、四に華齒(ケシ)、施華ともいひ、五に黑齒(コク)、施黑ともいひ、六に多髮、被髮ともいひ、七に無厭足(ムエン)、無著(ムヂャク)ともいひ、八に持瓔珞(ジヤウラク)、持華(ケゲ)ともいひ、九に皐諦(コウタイ)、何所ともいひ、十に奪一切衆生精氣といふ。すべて、その形體と性質とに依る區別にして、日蓮宗徒は、鬼子母神と共に尊崇す。平家「十羅刹女、十人の下僧に變じて、隨逐・給仕したまへり」

しぶり-かは 澁皮・澁皮【名】しぶかは(澁皮)に同じ。

澁皮が剝(ム)ける【句】「澁皮(カシブ)が剝げる」に同じ。一代男「しぶり皮のむけたる女は、心のまま甚寢して」

じふ-りき 十力【名】(佛)佛が十種の事を知る力、即ち是處非處力とて、是の處と非の處と、即ち從所の因緣の種類により、或果報を生ずと生ぜぬとの區別を徧く知る力、業報(ゴフ)力とて、一切の衆生の過去・現在・未來の善惡の諸業、受報の異相を知る力、定(ヂャウ)力とて、一切の禪定(ゼンヂャウ)を知る力、根力とて、他の衆生の諸根の上下如何を知る力、欲力とて、他の衆生の種種の欲樂を知る力、性(シャウ)力とて、世間種種無數の性を知る力、至處道力とて、一切の道の到る處の相を知る力、宿命力とて、種種の宿命を知る力、天眼(テンゲン)力とて、衆生の生死の時・端正と醜陋と墮惡と生善とを見知る力、漏盡力とて、有漏(ウロ)の煩惱(ボンナウ)を滅盡して、この生(シャウ)盡きたらん後は、更に後あらざるを知る力の併稱。

十力の數珠【句】(佛)佛の十力の功德を表徵せる數珠。謠曲(放下僧)「およそ沙門の形と謂つぱ、十力の數珠を手に纏ひ」

十力・無畏の相(ソウ)【句】(佛)十力と四無畏との相。各その條を見よ。榮花「十力・無畏の相は起居するにあり」

じふりしほう-てっぽう-あらためやく 十里四方鐵砲改役【名】江戸幕府の職制の一。日本橋を中心として、五里づつ東西南北に及ぶ十里四方の間の鐵砲改役。老中の所管にして、大目付の兼役。ただ一員あるのみ。

しぶり-しぶり 澁澁・澁澁【貌】しぶしぶ(澁澁)に同じ。夫木「世の中は秋になりゆく若葉のしぶりしぶりや笑みてすぎなん」

しぶ-りつ 四部律【名】■律を四分したる稱。即ち十誦律・四分律・僧祇律・五分律の八に持瓔珞(ジヤウラク)、持華(ケゲ)ともいひ、九に皐諦(コウタイ)、何所ともいひ、十に奪一切衆生精氣といふ。すべて、その形體と性質とに依る區別にして、日蓮宗徒は、鬼子母神と共に尊崇す。平家「十羅刹女、十人の下僧に變じて、隨逐・給仕したまへり」

しぶり-つき-えいくわ-こうさい 四分利附英貨公債【名】我が國債の一。明治三十二年に外國市場に募集せる鐵道公債事業公債、北海道鐵道公債と、日露役の當時募集せる六分利附第四回・第五回の國庫債券を償還整理するために、同三十八年に募集せる外國債との稱。利率年四分。

しぶりつき-ふっくわ-こうさい 四分利附佛貨公債【名】我が國債の一。五分利附の內國債償還のために、明治四十三年佛國にて募集せるもの。利率年四分。

しぶり-ばら 澁腹・澁腹【名】便意を催せども、澁りてよく通ぜざること。

じふ-りまつ 十里松【名】いきのまつばら(生松原)を見よ。

じふりんじ 十輪寺【名】■山城國乙訓(オトクニ)郡大原野村にある天台宗の寺。本尊は地藏菩薩。西國三十三箇所の最初の札所。小塩山と號す。■播磨國加古郡高砂町にある淨土宗の寺。初め眞言宗なりしが、源空住持たるに及びて、淨土宗に改む。圓光大師四十八箇所遺迹の一にて、寶瓶山と號す。

じふりん-ゐん 十輪院【名】奈良市十輪院町にある眞言宗の寺。聖寶の開基。空海も曾て住せしことあり。本尊は地藏菩薩。現在の本堂は鎌倉時代の建築に成る。

じふりやう-さつ 十兩札【名】太政官札の一。十圓の不換紙幣。

じふりやう-どり 十兩取【名】相撲(スマヒ)にて、幕下(マクシタ)の力士の內、首位より數へて、十名の者。もと給料十兩以上の者に非ざれば、この格に入る能はざる定なりしが、明治十七年以來、必ずしも然らざることとなれり。又この十名中の首位の者を、貧乏神と呼ぶ。貧乏閑などの貧乏と同じく、力量は幕の內の力士に劣らざるに拘らず、ここに取殘さるる者多きよりの稱なるべし。

じふ-りやう 十陵【名】昔、每年、荷前(ノサキ)の使を遣されし十箇所の陵。即ち天智天皇の山階(ヤマシナ)の陵、光仁天皇の田原の陵、桓武天皇の栢原(カシハラ)の陵、崇德天皇の八島の陵、仁明天皇の深草の陵、光孝天皇の後田原(ノチダハラ)の陵、醍醐天皇の後山階(ノチヤマシナ)の陵、その他、四條天皇の後月輪(ノチツキノワ)に在る、醍醐天皇の后穩子(オンシ)の陵、村上天皇の后安子の陵、白河天皇の母后茂子の陵の併稱。はちぼ(八墓)參照。

しぶる 澁る・澁る【動四自】■圓滑に捗取らず。滯る。■心進まず。資治「車よりおりて、しぶりゐたらんも、怪しかるべければ」■しぶり腹を病む。

しぶる-しぶる 澁る澁る・澁る澁る【貌】しぶしぶ(澁澁)に同じ。

しふれん 習練【名】れんしふ(練習)に同じ。

しぶ-ろく 四分六【名】十分の四と十分の六との割合にて分つこと。

じふろく 十六【名】■じふろくさし(十六六指)の略。(江戸近在の方言)■(植)じふろくさささげ(十六豆豆)の略。■能(ノウ)の假面(ノウ)の一。十六歲ほどの少年の顏に擬したるもの。「敦盛」・「知章」などの曲に用ふ。

じふろく-うち 十六打【名】打紐を作るに、八打(ヤウチ)の二倍、即ち十六條の絲を組合はすること。

じふろく-うらぎく 十六裏菊【名】紋所の一。十六瓣の菊花を裏面より看し狀にて、花托を中央に附くるもの。

じふろく-かさねぎく 十六重菊【名】紋所の一。大なる十六瓣の菊花の上に、小なる同一のものを重ねたるもの。「同じ。

じふろく-ぎく 十六菊【名】きく(菊)五に同じ。

じふろく-くわんぼふ 十六觀法【名】(佛)次條に同じ。

じふろく-さうくわん 十六想觀【名】(佛)『觀無量壽經に見ゆ』阿彌陀如來の淨土及び佛身を觀ずる十六種の法、即ち日想觀・水想觀・地想觀・寶樹觀・八功德水想觀(寶池觀)・總想觀・華座(ケザ)觀・想像觀・佛眞身觀・觀音觀・勢至觀・普想觀・雜想觀・上輩上生觀・中輩中生觀・下輩下生觀の併稱。十六觀法。榮花「觀無量壽經の十六想觀思ひ出でられて、よよへられたまふ」

じふろく-ささげ 十六豆豆【名】(植)豇豆の一種。莢(サヤ)極めて長く、豆の數、一莢に凡そ十六ばかりづつあり。若きは、莢ながら食用とす。十六ささげ。じふろく。

じふろく-さすがり 十六さすがり【名】じ

ふろくむさし（十六指）を云ふ。（上野國・下野國邊の方言）

じふろくしま 十六島【名】（地）利根川の注口、常陸國行方（ナメカタ）郡の南隅にある地方の泛稱。もと利根川の運び來れる砂泥の十餘の洲崎を成しものの、漸次地積を增加したるもの。今は島の形を存せず。

じふろくせうごく 十六小地獄【名】（佛）『大智度論に見ゆ』八大地獄（八熱地獄）に部屬せりといふ八寒氷地獄と八炎火地獄と。眷屬地獄。

じふろくせつ 十六節【名】曆の上における、一年中の十六の季節。二十四節より立春・春分・立夏・夏至（ゲシ）・立秋・秋分・立冬・冬至の八節を除きたるもの。

じふろくぜんじん 十六善神【名】（佛）大般若經を轉讀する時、釋尊と共に揭ぐる十六の佛法守護の神。即ち達哩底囉瑟吒大將・禁毘噜大將・縛日噜大將・迦毘羅大將・彌親羅大將・哆怒毘大將・阿儞噜大將・婆儞噜大將・印捺噜大將・波夷噜大將・摩虎噜大將・嬌尾噜大將・眞特噜大將・嚩吒・徒噜大將・尾迦噜大將・俱吠噜大將の總稱。何れも深く大王の子にして、七萬阿僧祇の眷屬を有すといふ。一說に、提頭擺吒善神・毘盧勒叉善神・摧伏毒害善神・增益（ゾウヤク）善神・歡喜善神・除一切障難善神・離一切怖畏善神・救護一切善神・攝伏諸魔善神・能救諸有善神・師子威猛善神・勇猛心地善神の併稱。その形體は多く甲冑を著用し、手に武器を持つ。佛敎大般若寫經に由りて、十六善神立添ひて加護したまひけるや」

じふろくだいあらかん 十六大阿羅漢【名】（佛）じふろくらかん（十六羅漢）の敬稱。

じふろくだいしやう 十六大將【名】（佛）じふろくぜんじん（十六善神）に同じ。

じふろくちやうだて 十六挺立【名】小早（コバヤ）の櫓の數、十六挺を用ふるもの。

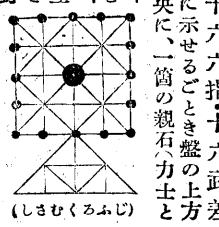
じふろくとう 十六藤【名】苗字の末に、藤の字のあるもの十六種。即ち近藤・加藤・内藤・安藤・春藤・後藤・伊藤・進藤・武藤・齋藤・佐藤・神藤・須藤・尾藤・工藤・遠藤の併稱。すべて藤原氏より出で、加賀に住みしは加藤、遠江に住みしは遠藤、齋宮寮に職掌ありしものは齋藤、木工寮に職掌ありしは工藤など、住地・職掌等の呼稱より起る。

じふろくにちがゆ 十六日粥【名】陰曆正月十六日に食ふ小豆粥（アヅキガユ）。

じふろくぶんおんぷ 十六分音符【名】〔音〕『英 Semiquaver』八分音符の二分の一。全音符の十六分の一の長さなる者を示す音符。

じふろくぶんきうしふ 十六分休止符【名】〔音〕『英 Semiquaver rest』八分休止符の二分の一。全休止符の十六分の一の長さの休止を示す休止符。

じふろくむさし 十六指・十六武差【名】遊戲の一。圖に示せるごとき盤の上方なる正方形の中央に、一箇の親石（力士と呼ぶ）を、周圍に十六箇の子石（卒と呼ぶ）とを配置し、親石と子石と交互に一劃づつ移動せしめ、親石は相對せる二つの子石の中間に入りて、これを取らんとし、子石は親石に取られざるやう警戒しつつ、これを下方の三角形内に追詰めて勝たんと、互に技を競ふもの。さすがり。十六さすがり。むさし。五花六直。辨慶むさし。**やすがり**（八道行成）參照。


（しさむくろふじ）

じふろくめ 十六目【名】敍所の一。かどたて四目を四つ合はせたるもの。

じふろくもつさう 四分六物相【名】米四合・麥六合の割に炊きたる飯。

じふろくや 十六夜【名】陰曆十六日の夜。いざよひ。既望。

じふろくやしや 十六夜叉【名】（佛）毘首羯摩夜叉・劫毘羅夜叉・法護夜叉・眉目夜叉・廣目夜叉・護軍夜叉・珠賢夜叉・滿賢夜叉・持明夜叉・阿吒縛夜叉・縛蘇松龍王・蘇摩那龍王・補沙毘摩龍王・訶利帝天佛・鬱羅縛蹉大天佛・雙目大天佛の併稱。一說に、**じふろくぜんじん**（十六善神）に同じと。

じふろくやへぎく 十六八重菊【名】紋所の一。十六菊の瓣と瓣との切れ目の部分に、纔に花瓣の先端を添加して、複瓣を現せるもの。

じふろくらかん 十六羅漢【名】（佛）『玄奘譯の法住記に見ゆ』釋迦の命により、一定の期間、この世に在住して、正法を護持するを任とすと信ぜらるる十六人の阿羅漢。即ち賓度羅跋囉墮闍（ビンドラバラダージャ）・迦諾迦伐蹉（カナカバサカ）・迦諾迦跋釐墮闍（カナカバリダージャ）・蘇頻陀（スビンダ）・諸詣羅（ナクラ）・跋陀羅（バダラ）・迦哩伽（カリカ）・伐闍羅弗多羅（バジャラプタラ）・戍博迦（シュバカ）・半托迦（パンタカ）・羅怙羅（ラゴラ）・那伽犀那（ナガセナ）・因揭陀（インギャダ）・伐那婆斯（バナバシ）・阿氏多（アジタ）・注荼半托迦（チュダパンタカ）の併稱。五百羅漢とは關係なきものなり。

じふろくらかんきやうへんじ 十六羅漢經變相【名】（佛）『阿彌陀經に見ゆ』釋迦の高弟十六人。即ち舍利弗（シャリフツ）・目犍連（モクケンレン）・迦葉（カセフ）・迦旃延（カセンネン）・倶絺羅（クチラ）・離婆多（リバタ）・周利槃陀伽（シュリハンドカ）・難陀（ナンダ）・羅睺羅（ラゴラ）・憍梵波提（ケウボダイ）・賓頭盧頗羅墮（ビンヅルバラダージャ）・迦留陀夷（カルダイ）・劫賓那（コウヒナ）・薄拘羅（ハクラ）・阿冕樓馱（アルリダ）の併稱。阿冕樓馱は十大弟子中の阿那律に同じ。十六善神。**じふはちらかん**（十八羅漢）參照。

しふわ 澀輪・澁輪【名】〔動〕さうだがつを（さうだ鰹）に同じ。

じふわう 十王【名】〔佛〕冥府にありといふ十人の王。即ち秦廣王・初江王・宗帝王・五官王・閻魔王・變成王・泰山王・平等王・都市王・轉輪王の併稱。中有（チウウ）の亡者、冥府に入るや、初七日に秦廣王の廳に至り、以下順次に二七日・三七日・四七日・五七日・六七日・七七日・百日・一周年・三周年に各王の廳を過ぎて、罪の裁判を受け、末世の生處を定めらるといふ。印度にては、冥府の王は閻魔のみなりしに、支那に入りて、道敎の思想混入し、十王の稱起れり、我が國にても、平安朝時代は閻魔のみなりしに、鎌倉時代、禪宗の渡來と共に、十王の思想も傳はるに至れり。**じふさんぶつ**（十三佛）參照。

じふわうがしら 十王頭【名】兜（カブト）の鉢の形の名。

じふわうきやう 十王經【名】〔書〕ぶつせつぢざうぼさつほつしんいんえんじふわうきやう（佛說地藏菩薩發心因緣十王經）の略。

しふゐ 拾遺【名】一遺漏を拾ひ補ふこと。二『史記の汲黯傳に「汲黯願出入禁闥、拾遺補闕」とあるに本づく』君主を輔けて、その過失を補ふこと。三じじゅう（侍從）の唐名。下學集『侍從、拾遺』四蔗物（モクモツ）の一。沈香・丁子香・甲香・甘松香・熟鬱金香・黠香の六味を煉合はせて作る。また麝香を加ふともいふ。五〔書〕**しふゐわかしふ**（拾遺和歌集）の略。六〔書〕**うぢしふゐものがたり**（宇治拾遺物語）の略。蕪村「君見よや拾遺の茸の露五本」

しふゐ 拾遺・補闕【句】**しふゐ**（拾遺）二に同じ。

しふゐぐさ 拾遺愚草【名】〔書〕藤原定家の歌集。四卷。

しふゐこうえふしふ 拾遺後葉集【名】〔書〕扶桑拾葉集の續集に擬して撰びたるもの。二十四卷。江田世恭の撰。

しふゐしふ 拾遺集【名】〔書〕**しふゐわかしふ**（拾遺和歌集）の略。

しふゐせう 拾遺抄【名】〔書〕**しふゐわかしふ**（拾遺和歌集）を見よ。

しふゐたいしつ 澁井太室【名】〔人〕儒者。名は孝德、字は子章、平左衞門と稱す、佐倉侯に仕ふ。擢でられて老職となり、天明八年歿す。年六十九。

しふゐわかしふ 拾遺和歌集【名】〔書〕『萬葉・古今・後撰の三歌集に續（ツ）ぎたるを拾ふとの義にて、名とす』三代集の一。歌數一千三百五十一首を收む。二十卷。別に拾遺抄と題するもの十卷ありて、歌數五百九十四首を收む。集・抄兩者の關係につきては、前者は花山法皇の勅選、後者は藤原公任（キンタウ）の撰なりとも、又はその反對なりとも、或は何れも法皇の勅撰なりともいひ、また抄は集より抄出せるなりとも、集は抄を基として增補せるなりともいふ。

しふゐゐんぐわい 拾遺員外【名】〔書〕藤原定家の家集。

しふゑ 集會【名】**しふくわい**（集會）に同じ。太平記『藏玉堂に集會して』

じふゑんきんくわへい 十圓金貨幣【名】貨幣法に基きて發行せられたる十圓の本位貨幣。品位は金九・銅一。

じふゑんさつ 拾圓札【名】明治通寶の一。十圓の不換紙幣。

しぶをんせん 澁温泉・澁温泉【名】〔地〕信濃國下高井郡平穩村に在る温泉。上野國に通ずる縣道に當り、高さ一六四三尺の高所に位す。泉質は酸性泉にして、慢痲質斯貧血などに効ありといふ。澁湯。

しべ 蕊・蕊蘆【名】〔植〕すいば(蘇)に同じ。和名藥、之倍、花心也」 太平「芍藥の藥の湧立つ日南(ダナ)かな」 ■總緒(ブサ)の飾。金の藥は、緒の端の總の附際に、金管を捲き、絲の藥は、緒の端の總の附際を、絲の中に心を入れて、卵形に脹らませたるもの。

しへ 稽【名】わらしべ(藁稽)の略。

しへい 紙幣【名】法貨として、硬貨と共に流通する紙札。金銀貨に兌換すると否とに由りて、兌換紙幣と不換紙幣とに別ち、發行者の異なるに由りて、政府紙幣と銀行紙幣とに別つ。札(サツ)。楮幣。紙錢(シセン)。軟貨。

紙幣消却【句】損傷紙幣又は不換紙幣を回收して、廢棄すること。

しへい 砥平【名】砥石(シイ)の面の如く平かなること。

しへい 貨幣【名】つかひもの。にへ。禮物。

しへい 使聘【名】使をやりて訪問すること。使を以て禮物を贈ること。

しへい 私兵【名】自分の兵。

しへい 支兵【名】支隊の兵。

じへい 時弊・時病【名】その時の弊害。

じへい 寺兵【名】そうへい(僧兵)に同じ。

じへい 辭柄【名】いひぐさ。口實。

しへいし 紙幣司【名】しへいれう(紙幣寮)の前稱。

しへいはっかうぎんかう 紙幣發行銀行【名】紙幣の發行權を有する銀行。我が國の日本銀行の類。

しへいはっかうほふ 紙幣發行法【名】紙幣の發行上に採るべき方法。

じへいへーべん 自閉瓣【名】〔醫〕『羅 Valvlae conniventes』小腸の內層なる粘膜に存する數多の横襞。養分の吸收面を增大する便に供す。

しへいるねじーしようけん 紙幣類似證券【名】紙幣に類似せる證券。主務大臣は、その發行及び禁止を命ずるを得。

しへいれう 紙幣寮【名】明治四年より同十三年まで、大藏省に屬して、紙幣製造に關する事を掌りし役所。

しへう 指標【名】〔數〕『英 Characteristic』一數の常用對數は、その數が一より大ならざれば正、小ならば負にして、常用對數を、その小數部の正なる樣に書きたる時の整數部の稱。

しへう 紙票【名】紙のふだ。かあど。

しへう 師表【名】『表は彼(ヒカ)を見るための表木』人の師となり、手本となること、又その人。

しへう 四表【名】こも。四方。天下。世間。

じへう 辭表【名】職務をやむる時、その旨を記して呈出する文書。いとまぶみ。辭書。

しへうーば 紫驃馬【名】黑鹿毛(クロゲ)の馬なるべしといふ。 續紀「獻二新羅國紫驃馬二疋一」

しへき 詩癖【名】詩を好むくせ。

しへき 四壁【名】■家の四方の壁。■あたり。きんぺん。四隣。合壁(ガツペキ)。

しへきーびき 四壁引【名】檢地の際、屋敷の四方に餘地を與ふること。四方引。

しへーと 藥粉【名】くわふん(花粉)に同じ。

しーべだ 四吠陀【名】〔佛〕古代に北西印度に移住せるアルヤ民族が當時の俗語を以て記せる四種の讃美歌。卽ち力荷吠陀(リグベダ)・娑摩吠陀(サマベダ)・阿闥婆吠陀(アタルベダ)・夜集吠陀(ヤジユルベダ)の四種。

しへたく 虐【動下二他】■むごく扱ふ。非道に扱ふ。虐待す。 徒然「人を苦しめ、物をしへたぐること」 ■無實の罪におとす。「古語」 續紀「制斷合レ理、獄訟無冤(グンベンコナク)。」

しへつ 死別【名】しにわかれ。永訣。死

しへつ 標津【名】〔地〕根室國五郡の一。根室支廳の所管。

じへつ 辭別【名】暇乞して別るること。告別。

しへつる 死別離【名】しべつ(死別)に同じ。

しへつろ 藥取【名】〔地〕千島國九郡の一。擇捉(エトロフ)島の北部。根室支廳の所管。

しへばうき 稽帶【名】藁簀(シノス)を束ねて作りたる帶。一代男「しべ簾にて、禿(カブロ)に背(カナ)をたたかせ」

しへへん 四邊【名】■四方の境。四方。あたり。近所。 ■四つの邊(ハシ)。四周。

しへへん 詩篇【名】■詩を記載したる書物。詩集。 ■『書』『英 Psalms』舊譯全書の一卷なる約五十篇の詩集。おほむね神德を讃美せるもの。

しへへん 紙片【名】かみきれ。

しへへん 支辨【名】■とりはからひ。わきまへ。 ■金錢を支拂ふこと。

しへべん 四辯【名】〔佛〕しむげべん(四無礙解)の略。 爲憲合戰「四辯八音の如來に親しみて」

しへべん 思辨【名】■思考して、道理を辨別すること。 ■〔哲〕『英 Speculation』經驗的知識を排斥して、徹頭徹尾思考すること。純粹思考。 ■觀察及び推理の範圍を逸して、疎漫に失する思考。

じへん 事變【名】■かはりたる出來事。 ■國家に於ける大事。戰爭までには至らざる騷亂。變事(ヘンジ)。

じへん 時變【名】その時時の變事。

じへん 自辨【名】自ら費用を支辨すること。じぶんもち。自費。「角形」に同じ。

しへんけい 四邊形【名】〔數〕しかくけい(四角形)に同じ。

じへんすう 自變數【名】〔數〕『英 Independent variable』或式又は方程式中にて、任意の値を取得る數。又その數によりて、値の定まる數を因變數といふ。

しへん-てつがく 思辨哲學【名】〔哲〕『英 Speculative philosophy』經驗的知識を排斥し、先天的思考のみによりて建設せんとする哲學。合理論に胚胎し、西曆第十九世紀の中頃、一時獨逸の哲學界を風靡せしフイヒテ(Fichte)・シエルリング(Schelling)・ヘエゲル(Hegel)一派の傾向なりしが、ヘエゲルの死後、漸次に科學者及び哲學者の反對する所となり、今は信ずる者殆ど無し。

しへんてん 四辨天・四辯天【名】我が國にて、名高き四つの辯才天。卽ち竹生島(チクブ)・江の島・嚴島(イツク)・箕面(モノ)の四箇所にあるもの。

しへりや 西比利亞・西伯里【名】〔地〕亞細亞洲の北部に位する露西亞の領地。さいべりや。

しほ 潮・汐【名】■うしほ(潮)に同じ。萬葉「なごの海にしほのはやひばあさりしに出でむとたづは今ぞなくなる」 ■『潮汐の意より轉じていふ』とき。をり。しほあひ。しほどき。機會。 ■『しほしを見よ』おもむき。情致。きよく。風致。愛嬌。 五十年忌歌念佛「なぜに、そなたは、しほがない」 平假名盛衰記「機嫌るがほのしほの目ほそめ」

しほあかふ 潮滿【句】潮時よし。夫木「しほかなふあさかの浦の追風に楫もとりあへずいづる舟人」

しほならぬ 海【句】みづうみ。あはうみ。太平記「沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれゆく、身を浮舟のうきしづみ」

しほのあわ 潮の泡(アワ)【句】潮水の上に生ずるあぶく。しほなほ。 記「小島皆是潮沫(シホアワ)凝成者矣」

しほのあひだ 潮の間(アヒダ)【句】潮の干滿の間。しほあひ。 新古今「しほの間によもの浦浦たづぬれど今はわが身のいふかひもなし」

しほのあめ 潮の目【句】愛嬌を含めて細くしたる目つき。 狂言「盜人」「まだ藝はないか、しほのめ、しほのめ」

しほのあわ 潮の八百會(アヒ)【句】潮の諸方より滿ちあふ處。**しほあひ**(潮合)參照。 祝詞「八鹽道の潮の八百會にまします速開都比咩と云ふ神」

しほのやほぢ 潮の八百路(ヂ)【句】海中に在る多くの島を。 祝詞「大海原に持出でなむ、かく持出でなば、荒鹽の鹽の八百道の」

しほのやへ 潮の八百重(ヘ)【句】廣大なる海上。 記「月讀尊者、可三以治二滄海原潮之八百重一也」

潮向ふ【句】潮のさし口に向ふ。新後撰「五月雨にゆふしほ向ふ湊川せかれていとど水まさりつつ」

潮を踏む【句】世間に出でて辛酸を嘗む。つらき目にあふ。一代男「いかにもこの浦のしほを踏んで、老いての咄にもと思ふぞ」世間子息形氣「懲らしめのため、親仁に、ちっとしほを踏ませうと」

潮を焼く【句】海水を煮て、鹽を製す。藻鹽草を焼きて、鹽を製す。しほやく。

しほ 鹽・塩【名】一しよくえん(食鹽)に同じ。起「取二其船材一爲レ薪而焼レ鹽」二しほけ。しほかげん。鹽梅(ハイ)。三江戸時代の大阪新町における娼妓の階級の一。つぼねの次、かげの上。

鹽が浸(シ)む【句】世の辛酸が身にしむ。世を渡る經驗がつむ。所帶じむ。しほじむ。浮世風呂「前方はちっと道樂だっけが、今では鹽がしみたか、それはそれは大人しうなって」

鹽にす【句】鹽漬にす。

鹽に焼く【句】「潮を焼く」に同じ。「枯野(カラ)をしほに焼き、其(シ)が餘(ノコリ)琴に造り」

鹽の位【句】しほ(鹽)三に同じ。「と。

鹽の光【句】海水の夜間、燐光を放つこ

鹽を出す【句】鹽出(ダシ)をなす。

鹽を附く【句】辛きめにあはす。

鹽を踏みに出す【句】世わたりの經驗のために、子女を奉公に出す。〔大阪の語〕

堅い鹽【句】かたしほ(固鹽)に同じ。差穂「はじかみ附けたるかぶら、堅い鹽ばかりして」

しほ 師保【名】君の師となりて教へ、且つ保育すること、又その人。

しほ 試補【名】或官に任命せらるるまで、官廳の事務を實地練習すること、又その者。文官試補判事試補の類。

しほ 入【助數】物を染汁にひたす度數。萬葉「わぎも子がかたみがてらと紅のやしほに染めて」後拾遺「色ふかき袖の涙にならふらし千しほ八千しほ染むる紅葉は」

しほ 皺【名】烏帽子・革・縮緬などに有する皺(シワ)。粗きを「正しぼ」、密なるを「小しぼ」といふ。

しほ 思慕【名】したひおもふこと。

しほ 師模【名】てほん。師表。模範。

しほ 四墓【名】藤原鎌足の墓と藤原冬嗣の墓と同冬嗣の妻の墓と同冬嗣の妾源氏の墓との併稱。また後に、藤原良房の墓を加へて、五墓とせり。ごぼ(五墓)參照。

じほ 侍補【名】宮内省の職員の一。天皇に常侍して、闕失を補益することを掌りしもの。明治十年創置、同十二年廢止せらる。

じほ 鯽魴【名】からすみ(鰡)に同じ。

じほ 字母【名】一〔語〕漢字の諸音の種類を代表する文字。普通には、幇滂並・明・非敷奉・微・端・透・定・泥・知・徹・澄・孃・來・照・穿・牀・審・禪・影・曉・匣・喩・來・日の三十六字母とし、見は牙音の清音(k)、溪は同次清音(k')、群は同濁音(g)、疑は同清濁音(ng)等のごとく、同種類の音を代表す。(字子に對して)二〔語〕あるはべっとに同じ。三ぼけい(母型)に同じ。

じぼ 慈母【名】一いつくしみの深き母。二は(母)を親愛していふ語。嚴父に對して)三〔儀禮の喪服篇に「慈母如レ母」とあり、傳に「妾之無レ子者、妾子之無母者、父命レ妾曰、女以爲レ子、命レ子曰、女以爲レ母。若是則生養レ之終二其身一如レ母、死則喪レ之三年」とあり』母に代りて保育する婦人。養母。保母。

慈母三遷の教【句】「三遷の教」に同じ。

しほあし 潮蘆・汐蘆【名】海岸に生ずる蘆。謡曲「知慈「松原の下枝にまじる汐蘆の」

しほあひ 潮合・汐合【名】一潮のさしひき。しほどき。二潮の滿合ふ處。「潮の八百會(ヤホ)」參照。古今「わたつみの沖つしほあひに浮ぶ泡の消えぬものから寄る方もなし」三しほ。ころあひ。しほどき。機會。今國姓爺「はね返さんと思ひしが、是れぞよき潮合と、ためらふ處を拆重なり」

しほあへ-もの 鹽和物・塩和物【名】鹽にてあへたる魚。

しほあへもの-やく 鹽和物役・塩和物役【名】足利時代に、鹽魚類に課したる雜稅の一種。

しほあん 鹽餡・塩餡【名】砂糖の代りに鹽を加へて、味を附けたる餡。

しほあんばい 鹽梅・塩梅【名】食物を調理する鹽の加減、又その味。しほかげん。しほめ。「を見よ。

しほあゆ 鹽鮎・塩鮎【名】あいきやう(鰥鰕)

しほあらし 鹽嵐・塩嵐【名】荒く吹く鹽風。「る鮑。

しほあわび 鹽鮑・塩鮑【名】鹽漬にしたあわび。

しほいか 鹽烏賊・塩烏賊【名】鹽干にしたる烏賊。

しほいり 潮入【名】池川田などに、海水の注き入ること、又その池川田など。

しほいり-いけ 潮入池【名】海魚を飼ふため、海水の通ふやうに作りたる池。

しほいり-いわし 鹽鰯・塩鰯【名】鹽づけにしたる鰯。

しほいり-ぜめ 鹽炒責・塩炒責【名】拷問の一種。炒りたる鹽にて體を熱して責めしもの。浪浦兜軍記「腹に子のある蝮蛇(カガ)の格、鹽炒責にしてくれう」

しほう 紙縫【名】紙のつぎめ。

しほう 士峯【名】〔地〕ふじさん(富士山)の別稱。芭蕉「まのあたり、士峯、地を拂って蒼天を支へ、日月のために雲門を開くかと」

しほう 支峯【名】えだの峯。分峯。

しほう 支封【名】分家の領地。

しほう 司封【名】支那にて、諸侯王の封爵を掌りし役。

しほうに 鹽雲丹・塩雲丹【名】海栗(ウニ)の卵巢に鹽を加へて練りたる食品。きうに。

しほうみ 潮海・汐海【名】鹽分を含みたる海、卽ち普通の海。うみ。(あは海に對して)土佐「いとあやしく、しほうみの邊にてあざれあへり」

しほうり 水鼈【名】〔動〕みづすまし(水鼈)を云ふ。〔西國の方言〕

しほうり-の-にようばう 水鼈女房【名】〔動〕あまがへる(雨蛙)に同じ。

しほうろく 士峯錄【名】〔書〕富士山に關する詩・歌・文章などを集めたるもの。六卷。士龐(ホウ)玄同の著。

しほうを 鹽魚・塩魚【名】鹽をふりかけたる、又は鹽漬にしたる魚。しほざかな。しほもの。狭衣(荷分)「鹽魚の齒にはさかふや秋のくれ」

しほおし 鹽押・鹽壓・塩押【名】茄子・瓜などを鹽漬にし、蓋の上に石などの重量物を載する漬方、及びこの漬物。しほづけ。しほし。浮世風呂「逃げやあがっても、面はてへげへ知れてらあ、鹽押の茄子を地獄落しへかけたといふひしやげた野郎と…」

しほおひかぜ 潮追風【名】潮のさしひく方向に吹送る風。謡曲(紅上)「由良の戸渡る早舟、汐追風の吹上や」

しほかかり 潮繋【名】潮時を待つために、船を泊むること。

しほかげん 鹽加減・塩加減【名】しほあんばい(鹽梅)に同じ。

しほがしら 潮頭【名】沖よりさし來る潮のさき。さししほ。芭蕉「名月や門にさし來るしほがしら」

しほかぜ 潮風・汐風【名】鹽氣を含める風。海上に起る風。うしほかぜ。新古今「須磨の蜑の袖に吹きこす鹽風のなるとはすれど手にはとまらず」「菊」に同じ。

しほかぜ-ぎく 潮風菊【名】〔植〕しまぎく(潮菊)に同じ。

しほかぜ-さう 潮風草【名】〔植〕くさたちばな(草橘)に同じ。「る鰹。

しほかつを 鹽鰹・塩鰹【名】鹽引にしたる鰹。

しほかは 鹽川・塩川【名】〔地〕岩代國耶麻郡にある村。若松市の北三里。鐵道磐越線の一驛。鹽川館址あり。

しほかは-ぶんりん 鹽川文麟【名】圓山派の畫家。京都の人。字は子溫、木佛道人と

號す。岡本豐彥の高弟。弘化年間に歿す。年七十餘。一說に、明治初年に歿すと。

しほ-がひ 潮間・汐間【名】しほま(潮間)に同じ。〔古語〕催馬樂「伊勢の海の清き渚のしほがひに神馬藻(サウ)や摘まん貝や拾はん玉や拾はん」

しほ-がひ 潮貝・汐貝【名】海に產する貝。古今「伊勢の海の浦の鹽貝ひろひあつめ」

しほ-がひ 鹽貝・塩貝【名】鹽漬にしたる貝の肉。一代女「酒より前に、しほ貝喰うてしまひ」俳諧新通「鹽山に「しほ貝の水の濁やや五月雨」

しほがま 鹽竈・塩竈【名】㊀潮水を汲入れて、鹽を製するかまど。㊁微塵粉(ハジン)を砂糖に和し、固めて、四角に切りたる菓子。陸前國の鹽竈神社附近にて製して賣初めしものといふ。〔鹽釜〕㊂〔植〕しほがまざくら(鹽竈櫻)の略。

しほがま 鹽竈・塩竈【名】㊀〔地〕陸前國宮城(キュウ)郡にある町。松島灣の南端に臨み、仙臺市より四里。沿岸一帶を千賀(ガ)浦又は鹽竈浦といふ。北方の丘上に鹽竈神社あり。㊁昔の笛の名。

しほがまがや 鹽竈萱・塩竈萱【名】〔植〕かるかや(苅萱)を云ふ。〔陸奥國の方言〕

しほがまぎく 鹽竈菊・塩竈菊【名】〔植〕玄參(ゲンジン)科に屬する多年生の草。山野に自生し、また園藝す。莖の高さ二三尺、葉は長楕圓。夏季、紅紫色の花を開く。しほがまさう。こましほがま。

しほがまさう 鹽竈草・塩竈草【名】〔植〕前條に同じ。

しほがまざくら 鹽竈櫻・塩竈櫻【名】〔植〕『葉まで(濱で)美しといふ義』櫻の一種。八重にて、花のみならず、葉まで美しきもの。しほがま。井岡藥牟河內通「烟となれや鹽竈櫻」

しほがまじんじや 鹽竈神社・塩竈神社【名】陸前國宮城郡鹽竈町に鎭坐する國幣中社。祭神は武甕槌(タケミカヅチ)命・經津主(フツヌシ)命・鹽土翁(シホツチノ)命。式內の古社、また東奧第一の社。

しほがまのうら 鹽竈浦・塩竈浦【名】し

ほがま(鹽竈)㊁を見よ。古今「陸奥(ムツ)はいづくはあれど鹽竈の浦こぐ船の綱手かなしも」

しほから 鹽辛・塩辛【名】魚介などの肉・子又は腸などにて、鹽からく造れる醬(ヒシホ)。今昔「このしほからなどづつしるほどに」

しほからごゑ 鹽辛聲・塩辛聲【名】しほがれごゑ(嗄聲)の轉訛。〔古語〕見欲調「うたひをばしほから聲にたてふしを拍子はづれにとくおそく、しどろもどろに諧ひなし」

しほ-からし 鹽辛し・鹹し【形ク】鹽氣强し。しほはゆし。しはゆし。

しほからとんぼ 鹽辛蜻蛉・塩辛蜻蛉【名】〔動〕蜻蛉の一種。雄性にて、體は蒼灰色にて、黑條を有す。雌性は、麥稈蜻蛉といふ。しほとんぼ。

しほ-がれ 潮涸・汐涸【名】しほひ(潮干)㊀に同じ。〔古語〕萬葉「しほがれの水に蜚人くぐつもて玉藻刈るらむ」

しほ-ぎ 鹽木・塩木【名】鹽を燒くに用ふる薪。新千載「いかにせん阿漕(アコギ)が浦に袖にぬれてつむやしほぎのからき思を」

しほ-ぎく 鹽菊・塩菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。海邊に多く、高さ一二尺。葉形は菊のに似、表は深綠、裏は蒼白色をなす。秋、菊に似たる黃又は綠色の花を頭狀花序に著く。いはぎく。いはこぎく。うらじろぎく。ききやうぎく。千年艾。

しほ-ぎぬ しほ絹【名】絹の一種なるべけれど詳かなず。〔古語〕宇治「しほぎぬのあをといふ物著て、帶して」

しほ-きり 潮切・汐切【名】㊀三月三日前後頃の、毎日曇れども、雨降らぬ天氣。㊁荷船の艙床の表に附くるもの。なみきり。㊂一本水押(ミヅオシ)の一部。

しほ-ぐ 司牧【名】『ぼくみん(牧民)を見よ』人民を治むること、又その官職。牧民。地方官。知州事。

しほ-ぐ 四木【名】㊀四種の木。㊁茶・桑・漆・楮(カウゾ)の四種の木。三草・四木」

しほ-ぐ 指爪【名】しぐめ(指爪)に同じ。

しほ-ぐ 死霊【名】〔美〕日本畫にて、靈の塗方の變化なきこと。(活靈に對して)

しほく-きよく 指北極【名】〔理〕ごきよく(磁極)を見よ。

しほ-くぐ 潮莎草【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。沿岸の半鹹半淡の地に生ず。葉は細長く、夏季、茶褐色の花を開く。うしげ。

しほ-くぢら 鹽鯨・塩鯨【名】鹽漬にしたる鯨。昔は元日の吸物の料に供せられたり。芭蕉「水無月や鯛はあれどもしほ鯨」

しほ-くび 鹽首・潮首【名】けらくび(螻蛄首)㊁に同じ。本朝三國誌「素槍(ソサウ)の鹽首、むづとつかんで」

しほ-くみ 潮汲・汐汲【名】㊀鹽に製すべき潮水を汲むこと、又その人。鬼貫「しほくみや千鳥のこして歸る海人」㊁〔動〕花の露を吸ひて、始終飛びめぐる蝶類。㊂長唄「常盤津掛合にて演ずる踊。謠曲の松風より饒案せるものにて、潮汲姿に烏帽子・狩衣を著て、在原行平を慕ふ狂態をなす。

しほくみ-ぐるま 潮汲車・汐汲車【名】潮水を汲みたる桶を運搬する車。謠曲(松風)「汐汲車わづかなる浮世にめぐるはかなさよ」

しほくみ-ぶね 潮汲船・汐汲船【名】潮水を汲取りて運ぶ船。會根崎心中「鹽竈の浦を都に堀江漕ぐ潮汲船の跡絕えず」

しほくもり 潮曇・汐曇【名】海上に漂ふ水氣のために、曇るが如く見ゆること。謠曲(融)「老人と見えつるが、潮曇にかきまぎれて」

しほ-ぐるま 鹽車・塩車【名】鹽を運搬する車。鹽車(エンシヤ)。蠹材「甲斐がねや穗蓼の上をしほぐるま」

しほ-け 潮氣・汐氣【名】うしほの氣。海上の水氣。萬葉「しほけ立つ荒磯にはあれど行く水のすぎにし妹がかたみとぞこし」

しほ-け 鹽氣・塩氣【名】しほからき味。鹹味。鹽分。

しほけぶり 鹽煙・塩烟【名】製鹽する時、竈より立ちのぼる烟。しほけむり。拾塵「浦風に燒くしほけぶり吹きまよひたなびく山の冬ぞさびしき」

しほけむり 潮煙・汐烟【名】潮水のしぶきの、烟の如く見ゆるもの。海水のしぶき。

しほ-けむり 鹽煙・塩烟【名】しほけぶり(鹽風)に同じ。

しほ-ごし 潮越・汐越【名】潮水を引導くこと、また汲込ること。散木「煤垂れるまやのあしよりもる雪や見し潮越の樋にもあるらん」

しほごし-の-まつ 汐越松【名】あたかのまつ(安宅松)㊁に同じ。西行「夜もすがら嵐に波をはこばせて月をたれたる汐越の松」奧の細道「越前の境吉崎(ヨシザキ)の入江を舟に棹して、汐越の松を尋ぬ」

しほ-ころも 潮衣・汐衣【名】潮水を汲む時に著る衣、また潮水にぬれたる衣。謠曲(融)「東からげの潮衣、くめば月をも袖に望潮の」

しほさい 【名】〔動〕次條の略。

しほさい-ふぐ 魚鯽【名】〔動〕ふぐの一種。近海に產す。皮膚平滑にして小刺なく、背部は黑褐色にして、白色の小點散在す。肉は味美にして、毒少なし。いそふぐ。

しほざかな 鹽肴・塩魚【名】しほうを(鹽魚)に同じ。一代女「それぞれの鹽肴取出だし、かりそめの樂しみ」

しほざかひ 潮境・汐境【名】潮水の流れ分るる境。國姓爺「唐と大和の潮ざかひ、ちくら者かと疑へり」

しほさき 潮先・汐先【名】㊀潮のさし來る時、又さし來る潮の波先。萬葉「風わたる浦のみなとのしほさきに波乘りこえて鴨鳴くなり」㊁變動し始むる場合。落窪「いで、このしほさきを借りて、なさくじりそ」

しほ-ざけ 鹽鮭・塩鮭【名】鹽引にしたる無邊菩薩・淨行菩薩・安立行菩薩の併稱。㊁普賢菩薩文殊菩薩觀音菩薩・彌勒菩薩の併稱。或は彌勒を除きて、勢至を加ふ。くそん(九尊)參照。謠曲(舍利)「然るに、佛法東漸とて、三如來・四菩薩も、皆日域に地を占めて」㊂數珠にて、百八箇の員數外にある四つの玉。

しほさば 鹽鯖・塩鯖【名】鹽を振りかけて

干したる鯖。

しほざは 鹽澤・塩澤【名】〔地〕越後國南魚沼郡にある町。魚野川の左岸、六日町の南一里。三國(ミクニ)の道路に當る。

しほ-さんま 鹽秋刀魚・塩秋刀魚【名】鹽漬にしたる秋刀魚。

しほさゐ 潮騒【名】上げ潮時に、海水の騒しく高まること。潮のさわぐこと。〔古語〕萬葉「うしまどの浪のしほさゐ島どよみ寄せてし君にあはずかもあらむ」略。

しほ-し 鹽押・塩押【名】しほおし(鹽押)の略。

しほ-しいら 鹽鰹・塩鰹【名】鹽漬にしたる鰹。その鹽乾にしたるを、九萬引(クマビキ)といふ。

しほ-しほ【皃】しほたる(潮垂る)を見よ』涙などに濡れそぼつさま。しほほ。源氏「しほしほと泣きたまふ」盛衰記「僧もしほしほとして、法會の儀式最と興醒めたりければ」「る狀。

しほ-じほ 鹽鹽・塩塩【皃】鹽氣の多量なる狀。

しぼしぼ【皃】しほしほに同じ。

しほ-じむ 潮染む・汐染む【動四自】潮氣に染みて濕ふ。(多く馴るる意を兼ねしめて用ふ)〔古語〕源氏「世をうみにこころしほじむ身となりて」物事に馴れしたしむ。なじむ。源氏「かかる住ひにしほじまざらましかば」

しほ-じり 鹽尻・塩尻【名】濱邊にて、砂を圓く塚の如くに積上げたるもの。これに潮水を注ぎかけ、日に晒して、鹽分を固著せしむ。〔古語〕伊勢「富士の山を見れば、形(ナリ)は、しほじりのやうになんありける」(動)にしの類。殻の形、前項のしほじりに似たり。

しほじり 鹽尻・塩尻【名】書)尾張藩の天野信景の隨筆。和漢の書を引證して、家系傳記より、神佛の由來、自家の詩文などを、何くれとなく書集めたるもの。もと運甕漫筆・壬申隨筆など、別別に名ありしを、伊勢物語中の鹽尻といふ語につきての創見、この書の巻頭にあるによりて、取りて總名とす。巻數もともとは確定せざりしを、天明二年名古屋の人西村常樂校訂して、百巻とせり。近年、活版に附して刊行す。五巻。(地)次條を見よ。本朝二十四孝「鹽尻指して急ぎ行く」

しほじり-たうげ 鹽尻峠・塩尻峠【名】〔地〕信濃國東筑摩(ヒガシチクマ)郡鹽尻村より諏訪郡諏訪町に通ずる坂路。高さ三三八二尺。犀川と天龍川との分水嶺をなす。天文年中武田晴信の小笠原・木曾の兩氏と戰ひし處。

しほ-じる 鹽汁・塩汁【名】しほみづ(鹽水)に同じ。〔古語〕續紀「飲二鹽汁一、シホジルヲノミテ」

しほ-すまし 鹽清汁・塩清汁【名】燒鹽にて味を附けたる煮汁。うしほ。

しほぜ 潮瀬・汐瀬【名】潮水の流るる筋。潮流。「しほぜのなをりを見れば遊びくるしびがはたでにつまたてり見ゆ」千載「いはおろすかたこそなけれ伊勢の海のしほぜにかかるあまのつりふね」

しほぜ 鹽瀬・塩瀬【名】絹織物の一。製絲精練等の方法は、ほぼ羽二重に同じく、經絲と緯絲との太さ、並びに組織の方法は、全く博多織に同じきもの。

しほ-せん 子母錢【名】『捜神記に出づ』ぜにの異稱。

しほ-せんべい 鹽煎餅・塩煎餅【名】米の粉を捏ねてふかし、押扁めて、方形又は圓形等に切りて乾し、醤油を附けて焼きたるもの。「同じ。

しほた 鹽田・塩田【名】しほはま(鹽濱)に同じ。

しほたうぢ 潮湯治・汐湯治【名】鹽湯に浴して、病氣をなほすこと。うしほたうぢ。

しほたき【名】〔動〕みづまし(水鬩)を云ふ。〔土佐國の方言〕

しほだし 鹽出・塩出【名】食物の鹽氣を抜去るため、水につけおくこと。

しほだし-かげん 鹽出加減・塩出加減【名】鹽出(シホダシ)の程合。

しほだち 鹽斷・塩斷【名】神佛への祈願の際、斎ひて、或時期の間、鹽氣のある食物を喰はぬこと。船頭深話「惣別、娼妓屋(シャウギヤ)のものは、神佛ばかりいちって、鹽斷だの茶斷だのと騒ぐけれど」

しほだひ 鹽鯛・塩鯛【名】鹽をふりかけて干したる鯛。鯛の干物。芭蕉「鹽鯛の歯ぐきも寒し魚のたな」

しほだま【名】〔植〕たぶの実(楠)を云ふ。〔上總國の方言〕

しほ-たまご 鹽蛋・塩蛋【名】ちいしんたん(七星蛋)に同じ。

しほ-だら 鹽鱈・塩鱈【名】鹽漬にしたる鱈。太平「鹽鱈や旅はるばるのよどれ面」

しほ-たる 潮垂る・汐垂る【動下二自】潮じみて濡れそぼつ。しほどく。〔古語〕夫木「しほたれば蜑にも袖をかしひ潟磯菜つみにと浪をわけつつ」『しほごほを見よ』涙のために、袖濡れとほる。しほどく。〔古語〕千載「しほたるるいせをのあまやわれならんさらばみるめを刈るよしもがな」悲歎に沈む。しほどく。〔古語〕源氏「前の世ゆかしうなんと、打ちかへしつつ、御しほたれがちにのみおはします」なく(泣)に同じ。〔齋宮の忌詞〕

しほだれ-やま 鹽垂山・塩垂山【名】〔地〕美作國勝田郡湯鄉(ユノガウ)村の北にある山。吉野川に臨み、風景頗る佳なり。名産「いつとなくしほたれ山のさざれ水暮れゆくままに音添へつなり」

しほ-ぢ 潮路・汐路【名】潮のさしひきする路すぢ。千載「霞しく春のしほぢを見わたせば絲をわくる沖つ白波」ふなぢ。うみぢ。海路。海上。拾玉「夕なぎに都はるかに眺むれば心のはてもなきしほぢかな」

しほ-ぢ【名】〔植〕はりぎり(刺桐)に同じ。

しほ-ぢち 新發地【名】『新(シン)發意(ホツイ)の約』新に發心して、佛道に入りたる人。しんぼち。今道心(ケダウシン)。〔古語〕小大君集「これなかの朝臣、病にわづらひて、三河のしほぢを呼びに」地藏「かのしほぢの御迎のやうなる釣舟も」

しほつ 鹽津・塩津【名】〔地〕近江國伊香(カガ)郡の村。琵琶湖に臨み、越前國敦賀に出づる要路たり。「じ。

しほ-つ 死歿・死沒【名】しぼつ(死亡)に同

しほ-ついぢ 鹽築地・塩築地【名】白筋の入りたる黄色の壁。

しほ-づけ 鹽漬・塩漬【名】野菜・肉類などを鹽に漬くること、又その漬けたる物。醃藏。

しほ-づけ 鹽附・潮附【名】鹽を踏ましめて、智慧づくること。

しほつ-しま 塩津島・志發島【名】〔地〕次條に同じ。

しほつ-しま 志發島・志勢島【名】〔地〕根室國花咲郡に屬する島。水晶諸島中の最大なるもの。周囲十二里。「じ。

しほつち-の-おきな 鹽土翁【名】次條に同じ。

しほつち-の-かみ 鹽土神【名】伊弉諾(イザナギ)の神の御子。鹽土翁ともいふ。

しほっぱし 鹹っぱし【形一】しほはゆし(鹹し)に同じ。

しほつめぐさ 潮塡草【名】〔植〕はまつめぐさ(濱塡草)に同じ。

しほつ-やま 鹽津山・塩津山【名】〔地〕近江國鹽津にある山。夫木「風吹けば空にひかたのしほつやま花ぞみちくる沖つ白波」

しほづる 鹽鶴・塩鶴【名】鹽づけにしたる鶴の肉。一代女「しほづるの骨すこし」

しほ-て 鞍・四方手・四方出・鹽手【名】鞍の前輪(マヘワ)と後輪(シヅ)との左右に著けて、鞦(シリガヒ)・鐙(アブミ)を止むる紐。鞍の四方手。かちつけ(勝附)・かれひづけ(餉附)・しばつけ(柴附)・とっつけ(取附)・むすびつけ(結留)・もっつけ(物附)参照。盛衰記「綴(キッ)が首をしほでの根に結付けて、馬に打乗り、弓杖つき」曾我會稽山「あの馬留めよといふ程に…鹽手を掻いつかみ」

しほて-とほし 鞍通【名】鞍の一部。前輪(マヘワ)・後輪(シヅ)の左右・兩端に近くして、鞍を通す孔。

しほて-の-まつり 潮出祭【名】常陸國多賀郡松原町大字安良川(カワ)にある八幡神社にて、毎年三月に行ふ祭禮。

しほ-どき 潮時・汐時【名】潮水の差引く時。もしほどき。『しほ。しほあひ。機會。

しほ-どく 鹽解く・塩解く【動下二自】しほだる(潮垂る)に同じ。〔古語〕榮花「夜より、雨こまやかに降出でて、その人々しほどけたらんは、さるものにて」

しほ-どけ　潮解・汐解【貌】しほどけきさま。〔古語〕千載「さみだれは苫の雫に袖ぬれてあなしほどけの浪のうきねや」

しほ-どけい　潮時計・汐時計【名】潮の滿干と月の出入との時刻を記したる表。

しほ-どけし　鹽解し・塩解し【形二】しほどけてあり。〔古語〕源氏「よる波にたちかさねたる旅衣しほどけしとや人のいとはん」

しほ-どころ　鹽所・塩所【名】鹽を取る所。鹽田。紀「壚地、シホドコロ」

しほ-どし　鹽解し・塩解し【形二】しほどけし(鹽解し)に同じ。〔古語〕相模集「早苗ひきもすそよごるといふ田子もわがごと袖はしほどからじな」

しほ-とび　鹽飛魚・塩飛魚【名】鹽漬にしたる飛魚(トビウヲ)。

しほ-とんぼ　鹽蜻蛉・塩蜻蛉【名】〔動〕しほからとんぼ(鹽辛蜻蛉)に同じ。

しほ-な　鹽菜・塩菜【名】鹽漬にしたる菜。

しほなめ-ゆび　鹽嘗指・塩嘗指【名】ひとさしゆび(人指指)に同じ。

しぼ-なゆ　凋萎ゆ【動下二自】しぼしぼと萎(ナ)ゆ。しぼみ萎(ナ)ゆ。しなぶ。〔古語〕蜻蛉「なりを見れば、いたらしぼなえたり」

しほ-ならぬ-うみ　潮ならぬ海【句】しほ(潮)の條下を見よ。

しほ-なる　潮馴る・汐馴る【名】しほじむ(潮染む)に同じ。〔古語〕後撰「鈴鹿山いせをのあまのすてごろもしほなれたりと人や見るらん」

しほなれ-ごろも　潮馴衣・汐馴衣【名】潮水に馴れしみたる衣。しほぐみたる衣。謡曲(融)「わが身の上とくみて知るしほなれ衣袖寒き」

しほ-なわ　潮泡・汐泡【名】「潮の泡」の約。〔古語〕祝詞「谷ぐくのさわたるきはみ、鹽沫(シホナワ)のとどまるかぎり」

しほ-に　鹽煮・塩煮【名】食物を煮るに、食鹽のみにて調味すること。

しほ-に　鹽荷・塩荷【名】荷造したる鹽。

しほ-ぬき　鹽拔・塩拔【名】ざるがけ(笊掛)に同じ。

しほ-のき　鹽木・塩木【名】〔植〕ふしのき(鹽膚木)に同じ。

しほ-のまつ　鹽松・塩木【名】香道に用ふる灰の一。土をよく煎りて造るといふ。

しほ-のみ【名】〔動〕みづすまし(水黽)を云ふ。〔越後國の方言〕・

しほ-のみさき　潮岬【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ヒガシムロ)郡串本(クシモト)町の南に突出せる上野(ウハノ)半島の西南端。本州の最南端をなす。岬角に燈臺及び無線電信局あり。

しほ-のめ　潮の目【句】しほ(潮)の條下を見よ。

しほのや　鹽谷・塩谷【名】〔地〕下野國鹽谷(シホヤ)郡氏家(ウヂヘ)町より喜連川(キツレカハ)町邊に亙る舊稱。回國雜記「宇都宮を立ちて行く道に、鹽屋といへる所あり」

しほのや-きざん　鹽谷簣山【名】〔人〕儒者。宕陰の弟。名は誠、字は誠之、通稱は修輔、晩翠園とも號す。後、幕府の儒官となり、明治二年大學教授に任ぜらる。明治七年歿す。年六十三。

しほのや-じやう　鹽谷城・塩谷城【名】下野國鹽谷(シホヤ)郡矢板町にありし城。正治・建仁の頃に、宇都宮業綱(ナリツナ)・鹽谷五郎朝業(トモナリ)の始めて築きしものなりといふ。

しほのや-たういん　鹽谷宕陰【名】〔人〕儒者。名は世弘、字は毅侯、九里香園とも號す。江戸の人。博覽にして、文章に長ず。濱松侯に仕へ、後に幕府の儒官となる。慶應三年歿す。年五十九。

しほ-のやま　鹽山・塩山【名】〔地〕㊀甲斐國東山梨郡七里(ナナサト)村なる鹽山(エンザン)の舊稱。平地に屹立せる一小丘にして、松樹繁茂す。古は鹽を産せりといひ、今も山下に鹽類泉湧出す。古今「鹽の山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をば八千代とぞ鳴く」㊁延喜式に見えたる上野國の牧場。今の北甘樂(キタカンラ)郡磐戸(イハト)村、西牧(セイモク)村邊なるべしといふ。東の牧・西の牧・南の牧・北の牧等の地名なほ殘れり。

しほ-のり【名】〔動〕みづすまし(水黽)を云ふ。〔越後國の方言〕

しほ-ば　鹽場・塩場【名】㊀しほはま(鹽濱)に同じ。㊁鹽を産する土地。

しほ-ばな　鹽花・塩花【名】不淨又は忌嫌ふべき事ある時、鹽を振掛くること。

じぼ-はふ　字母法【名】音字の、音素によりて、發音の通りに表はさるるもの。

しほ-はま　鹽濱・塩濱【名】海水を幾回も注ぎて、日光に乾し、濃き鹽分を殘留せしむる設備ある海濱の沙地。しほだ。しほば。しほはま。鹽田(エンデン)。

しほはま-うんじやう　鹽濱運上・塩濱運上【名】江戸時代に、鹽濱に課したる運上。しほはまねんぐ。

しほはま-ねんぐ　鹽濱年貢・塩濱年貢【名】前條に同じ。

しほ-はゆし　鹹ゆし【形二】しほからし(鹽辛)に同じ。

しほばら　鹽原・塩原【名】〔地〕下野國鹽谷(シホヤ)郡にある町。箒川の水源をなせる溪谷にして、溫泉湧出す。地境幽邃なるを以て、浴客絶えず、また秋季紅葉の美に富む。

鹽原の七湯【句】〔地〕鹽原の大網(オホアミ)・福渡戸(フクワタド)・鹽釜・鹽湯・畑下戸(ハタオリ)・門前(モンゼン)・古町(フルマチ)の七箇所の溫泉。福渡戸・門前・古町の三所、中にも最も繁昌す。この外、須卷(スマキ)・新湯(アラユ)・古湯本(フルユモト)にも湧出す。

しほ-ひ　潮干・汐干【名】㊀潮の引去ること。しほがれ。萬葉「あらつの海しほひしほみち時はあれどいづれの時かわが戀ひざらむ」㊁しほひがり(潮干狩)の略。

潮干の道【句】潮退きたる跡の通行し得るところ。萬葉「明石潟潮干の道を明日よりはしたゑましけむ家近づけば」

潮干の山【句】『生死(シヤウジ)の海の彼岸を山に譬へ、潮の麓まではさせども、山には達せざる意にていふなるべし』さとりの世界。涅槃(ネハン)。〔古語〕萬葉「生き死にの二つの海をいとひみてしほひのやまを忍びつるかも」

潮干の寬(ユタ)【句】潮の引きたるあとの靜けさ。萬葉「あせか潟しほひのゆたに思へらばうけらが花の色にいでめやも」

しほひ-がた　潮干潟・汐干潟【名】潮の引去りて、干潟となりたる處。新千載「沖つなみ吹上の濱の汐干潟まさご亂れて霰ふるらし」

しほひ-がり　潮干狩・汐干狩【名】潮干の時、干潟(ヒカタ)をあさりて、貝などを取ること。殊に陰曆三月三日の大潮を佳とす。しほひ。

（しほひがり）

しほ-びき　鹽引・塩引【名】㊀生魚を鹽漬にすること、又その魚。主として、鮭・鱒にいふ。㊁次條の略。

しほびき-ざけ　鹽引鮭・塩引鮭【名】鹽漬にしたる鮭。しほびき。

しほひ-ぶね　潮干船・汐干舟【名】潮干狩をするために漕出したる船。俗曲(汐干がり)「あれ潮がひる潮干舟、彌生のくせの曇りがち」

しほひる-たま　鹽乾珠・潮涸瓊【名】神代の神寶の一。潮を引かする効ありきといふ珠。しほひるに。干珠(カンジユ)。(潮滿瓊(シホミツタマ)に對して)〔古語〕記「愁ひ請(マヲ)さば、鹽乾珠を出していかして」

しほひる-に　鹽乾瓊・潮涸瓊【名】前條に同じ。〔古語〕

し-ほふ　四法【名】〔佛〕㊀しぎ(四儀)に同じ。㊁三寶の一なる法寶を四稱に分ちて、證果の次第を示したるもの。即ち法(佛教の法)・理(佛の教法中に說き現す道理)・行(前項の道理に隨って修行する戒・定(ヂヤウ)・慧(ヱ)の三等)・果(修業の結果なる證悟)の併稱。㊂「眞宗の四法」を見よ。㊃「法華の四法」を見よ。

し-ほふ　嗣法【名】〔佛〕弟子の、師僧の法を嗣ぐこと。でんぼふ(傳法)參照。〔禪家の語〕

じ-ほふ　實法【名】『實法(ジツボウ)の音便』じつぼふ(實法)㊁に同じ。〔古語〕空穂「をのこ

は、じほふにはあらぬものぞ。すべて、妻を思はぬか」

しほ-ふき 潮吹・汐吹【名】Ⅰりんせい(輪精)に同じ。Ⅱ〔動〕こしほふきがひ(潮吹貝)の略。Ⅲ里神樂の馬鹿踊などに用ふる、片眼小さく、口の尖り出でし、男性の醜き假面(メン)。しほふきめん。屠龍工隨筆「今、童の弄に、口の尖りたる面は、鎌倉鶴ケ岡の拜殿に、海よりあがりたるとて、しほ吹と名づけたる面あり。これを學びたるものと思はる」

しほふき-いは 潮吹岩・鹽吹岩【名】伊豆國田方(タガ)郡伊東の海岸にある岩。滿潮の時は波勢激して、數丈の潮烟を噴出す。

しほふき-がひ 潮吹貝・鹽吹貝【名】〔動〕蟶鰌(バカガヒ)類に屬する貝。大いさ一寸に滿たず。形はまぐり貝に似て、殻の外面には輪層脊出し、內面は紫色を帶ぶ。淺海泥砂中に棲む。しほふき。

しほふき-めん 潮吹面・鹽吹面【名】しほふき(潮吹)Ⅱを云ふ。〔九州の方言〕

しほ-ふく 潮吹・鹽吹【名】〔動〕しほふき(潮吹)Ⅱに同じ。

しほ-ぶた 鹽豚・塩豚【名】鹽漬にせる豚の肉。

しほ-ぶね 潮船・汐舟【名】潮路を漕ぎわたる船。〔古語〕萬葉「しほ船のこそ白浪にはしくもおふせたまほか思はへなくに」

しほ-ぶね 鹽船・塩舟【名】鹽荷を積む船。

しほぶね-きね 潮船宜禰【名】海上を船にて往來する神人。〔古語〕山家集「波につきて磯岡にいます荒神はしほぶねきねを待つにやあるらん」

しほぶね-づくり 鹽船制・塩舟制【名】荷船の形の一種。

しほぶね-の 潮船の・汐舟の【枕】船は港に並ぶ物なるより、ならぶ(並ぶ)にかけていふ。萬葉「をぐさをとをぐさすけをとしほぶねのならべて見ればをぐさ勝ちめり」

しほ-ふみ 鹽踏・潮踏【名】子女を他人の家の寄託して、世間を見しむること。〔關西の語〕

しほ-ぶり 鹽鰤・塩鰤【名】鹽漬にしたる鰤。對島の産、有名なり。また鰤の肉を四片に切り、その一片に、食鹽と糠とをまぜて撒布し、紙を覆ひ、藁にて包み、細繩を捲きたるを繩捲といふ。

しほ-ぶろ 鹽風呂・塩風呂【名】潮水を沸して浴する湯。しほゆ。

しほ-ほ【貌】しほしほの略。〔古語〕萬葉「葦垣のくまどに立ちてわぎもこが袖もしほほに泣きしぞもはゆ」

しほ-ぼし 鹽乾・塩乾【名】魚類を鹽漬にして乾したるもの。ひもの。

しほ-ほる【動四自】しほほに滿る。そぼつ。しぼぬる。しととにぬる。〔古語〕紀「衣被レ露(ニアラマツホツセ)何謂レ當乎」

しほま 潮間・鹽間【名】潮水の引きてある間。しほあひ。〔古語〕赤染衛門集「和歌の浦のしほまにあそぶ濱千鳥蹈みすさぶらんあとな惜しみそ」

しほ-まぐろ 鹽鮪・塩鮪【名】鹽漬にせしまぐろ。

しほ-ます 鹽鱒・塩鱒【名】鹽漬にしたる鱒。千鳥の産、有名なり。

しほ-まち 潮待・鹽待【名】潮のさしくるを待つこと。天神記「今宵船出と夕波に、潮待してぞ居たりける」

しほ-まつば 潮松葉【名】〔植〕櫻草(サクラ)科に屬する多年生の草。我が國北部の海濱に自生す。莖の高さ數寸、葉は卵形、夏季、紅色また白色の花開く。

しほ-まねき 望潮【名】〔動〕『干潮の際、大なる鋏を動かすさま、潮を招くに似たるより名を得たりといふ』十脚類に屬する節足動物。大いさ六七分。頭胸部扁平にして、前邊に廣く、殆ど後邊に二倍す。腹部、雄は狹くして、七環節あり。雌は廣し。雄の鋏は、左右何れか大なり。海濱の砂地に棲む。しようもんがに。

しほみ-がは 蒸革【名】ひきはだがは(鞣皮)の「革」に同じ。

しほみ-ぐさ 鹽見草・塩見草・塩見草【名】〔植〕うのはな(卯花)〔一〕の異稱。〔古語〕

しほみ-ざか 鹽見坂・塩見坂【名】〔地〕遠江國濱名郡白須賀(シラス)町の東南にある坂路。長さ約六町、南に大洋を望み、東北に富士山を跳め、古來佳景を以て知らる。富士紀行「立返りいく年なみか忍ばまし潮見坂にて富士を見し世を」

しほ-みち 潮道・汐道【名】潮の差引によりて烈しく流るる水脈。

しほみづ 潮水・鹽水【名】しほはゆき水。うしほみづ。海水。鹹水。

しほ-みづ 鹽水・塩水【名】鹽氣を含める水。鹽を交へたる水。

しほみつ-たま 鹽盈珠・潮盈珠【名】神代の神寶の一。潮を滿たしむるに効ありといふ珠。しほみつに。滿珠(ミツ)。(潮涸瓊(ルガヒ)に對して)〔古語〕記「攻めなば、鹽盈珠(ツタマ)をいだして溺らし」

しほ-みつ-に 潮滿瓊【名】前條に同じ。〔古語〕

しほみ-ばし 汐見橋【名】造庭法にて、汐船の底板一枚を利用して造れる橋。池尻の狹き處に架するを普通とす。

しぼむ 萎む・凋む【名】しなぶ。しをる。衰ふ。〔枕〕御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりてしぼみ」

しほ-むき 鹽剝・塩剝【名】淺蜊(リサ)などを、生きたるまま身剝(ムキ)にすること、又そのもの。

しほ-むし 鹽蒸・塩蒸【名】鹽氣を加へて、蒸籠(セイロ)などにて蒸したる食品。「鰹。

しほ-むつ 鹽縫・塩縫【名】鹽漬にしたる紙本【名】掛物などの書畫の紙地なるもの。(絹本に對して)

しほん 四品【名】Ⅰ親王の位階の一。ほん(品)參照。Ⅱしほ(四位)の俗稱。增鏡「殿の家司(ケシ)季頼四品ゆるさせたまふ」

しほん 資本【名】Ⅰもとで。もときん。もと。Ⅱ〔經〕『英 Capital 又 Share』特定の用途に充てらるる財貨。商法上の狹義にては、株式會社と株式合資會社とに限り、且もと醵出したる基金。この意味にては、株金を出す人。資本主。Ⅲ前項の資本の數額。「子。

しほん 子本【名】利子と本金と。元利。母

しほん-か 資本家【名】營利の目的にて、資本を出す人。資本主。

しほん-がかり 四本掛【名】蹴鞠の懸(カカリ)の立木の四本なるもの。かかり(懸)〔一〕參照。

しほん-かぶ 資本株【名】〔商〕株式會社又は株式合資會社が出資人に付與する株式又は株券。

しほん-かんぢやう 資本勘定【名】〔商〕かぶけんかんぢやう(株券勘定)に同じ。

しほん-きん 資本金【名】資本の金。資金。

しほんきん-かんぢやう 資本金勘定【名】〔商〕『英 Capital account』資本の投入及びその增減を計算・整理する勘定科目。投入の資本額を貸方に、資本の減出額を借方に記入す。普通の商店にては、資本主勘定ともいふ。株式會社には株金勘定ともいふ。

しほんしほ【名】〔動〕みづまむし(水蠶)を云ふ。近江國の方言」

しほん-しゆ 資本主【名】Ⅰしほんぬし(資本主)に同じ。Ⅱ〔商〕次條の略。

しほんしゆ-かんぢやう 資本主勘定【名】〔商〕しほんぬしかんぢやう(資本主勘定)に同じ。

しほん-しゆつし 資本出資【名】〔經〕金錢又は有價物の出資を目的とすること。(勞働出資・信用出資に對して)。

しほん-ぜい 資本稅【名】〔法〕『英 Capitation tax』各個人所有の資本價格を標準として賦課する租稅。「に同じ。

しほん-ぬし 資本主【名】しほんか(資本家)〔商〕しほんきんかんぢやう(資本金勘定)を見よ。

しほんぬし-かんぢやう 資本主勘定【名】

しほんばしら 四本柱【名】Ⅰ相撲(スマヒ)の土俵の四方に立つる柱。Ⅱけんさやく(檢査役)Ⅱに同じ。

しほんばり 四本張【名】あんどん(行燈)〔一〕を云ふ。〔加賀國の方言〕

しほんばりあみ 四本針編【名】四本の編棒を用ひて、編物をなすこと。手袋・靴下など、皆この編方に依る。

しほんぼね 四本骨【名】紋所の一。四本の骨の扇に、八の字を附したるもの。

しほんわう 四飯王【名】淨飯(ジヤウボン)王・白飯(ビヤクボン)王・斛飯(コクボン)王・甘露飯王の併稱。「釋氏の諸王」參照。

しほ-め 鹽目・塩目【名】Ⅰ鹽の分量。しほ

あんばい（鹽梅）に同じ。㊁次條に同じ。薩摩歌「下袴に蚤人が、袷羽織も塩目よき、大鯛・昆布柳樽」

しほ-め 潮目【名】しほのめをなすこと。愛嬌を含む樣子。

しほ-めぐろ 鹽目黒・塩目黒【名】鹽漬にしたる目黒。五人女「母は盃の用意とて、鹽目黒に、口の缺けたる酒德利を取りまはし」

しほ-もち 鹽餅・塩餅【名】食鹽を加へて味を附けたる餅。

しほ-もの 鹽物・塩物【名】魚類を鹽漬にし、又は海魚を日に乾したるもの。えんぎよ。

しほ-もみ 鹽揉【名】生の野菜に、鹽を振掛けて、鹽にて揉み和げたるもの。

しほ-や 鹽屋・塩屋【名】㊀鹽釜にて、鹽を煮る家。（古語）源氏「さるしほやのかたはらに」㊁鹽を賣る家、又その人。㊂「安政の頃、江戸深川に狂氣の鹽賣ありて、大石良雄は我が子なり、何の守は我が伯父などと大言するを常とせしより起るとも、京都に、だてなる鹽賣ありて、劇場の衣裳を貰ひ、これを著て賣りあるき、或高貴の姫君をそそのかして、自殺するに至りしより起るともいふ』うぬぼれ。自慢。（文化・文政頃の隱語）㊃夫婦以來鮒「芝居にて、見物が狂言をし役者かへって見物をする。…兎角己は己が鼎鼎だなと、口口に鹽屋をいふ」

しほや 鹽谷・塩谷【名】〔地〕下野國八郡の一。那役所を矢板町に置く。

しほやあぶ 鹽屋虻・塩屋虻【名】〔動〕雙翅（サウシ）類に屬する昆蟲。白毛寄生し、本邦産の虻の中にて最大なるもの。益蟲の一。むしひきあぶ。

しほ-やいと 鹽灸・塩灸【名】少許の鹽を盛りたる上に、灸を點じて、患部を溫むること。

しほ-やき 鹽燒・塩燒【名】㊀海水を煮て鹽を製すること、又その業に從ふ者。㊁魚肉に鹽を振りかけて、燒くこと、又その燒きたる魚肉。

しほやき-ぎぬ 鹽燒衣・塩燒衣【名】次條に同じ。（古語）源氏「須磨のあまのしほやきぎぬのふぢごろもまどほにしあればいまだ著馴れず」

しほやき-ごろも 鹽燒衣・塩燒衣【名】鹽を燒く人の著る粗末なる衣。しほやきぎぬ。（古語）萬葉「須磨の海人のしほやきごろもなれぬれど戀といふものは忘れかねつも」

しほやき-ば 鹽燒場・塩燒場【名】鹽燒㊀を行ふ處。しほば。

しほ-やけ 潮燒・汐燒【名】日光のために、海水の炎蒸して生ずる、赤味を帶びたる水蒸氣。

しほや-けぶり 鹽屋煙・塩屋烟【名】鹽屋にて鹽を燒くけぶり。門出八島「夜は燃え盡は消えつつ薄烟、鹽屋烟と立ちつづき」

しほ-ゆ 鹽湯・塩湯【名】㊀しほぶろ（鹽風呂）に同じ。金葉「しほゆあみに、西の海の方へまかりたりけるに」㊁白湯に食鹽を溶かしたる飲料。㊂鹽分を含める溫泉。夫木「わたつ海ははるけきものをいかにして有馬の山はしほゆ出づらん」

しほ-ゆあみ 潮浴・汐浴【名】海水溫浴または海水浴。

しほ-らし 【形シク】しをらしを見よ。

しぼり 絞・搾【名】㊀しぼること。㊁しぼりぞめ（絞染）の略。㊂花瓣の紅白などの斑あるもの。

しぼり-あぐ 絞上ぐ・搾上ぐ【動下二他】㊀帷幄などを、紐にて括りて、高く上ぐ。㊁苦しき聲を上ぐ。㊂極度にしぼる。

しぼり-えぞぎく 絞蝦夷菊【名】〔植〕さうまぎく（薩摩菊）に同じ。

しぼり-かす 搾滓【名】汁を搾り取りたる殘の滓。しめかす。

しぼり-がみ 絞紙【名】しぼりて、皺を寄せたる紙。

しぼり-ざき 絞咲【名】しぼり（絞）㊂の花瓣に咲くもの。

しぼり-しる 搾汁【名】物をつぶしなどして搾り取りたる汁。

しぼりぞめ 絞染【名】くくりぞめ（括染）に同じ。

しぼり-だし 搾出【名】細き錫管中に藏めたる絞具を、管の一端を壓搾して、他端より捻出せしむるもの。

しぼり-どう 絞銅【名】製銅法の一。金・銀・銅・鉛の合金を、南蠻絞法により、熔解分解せしめて、殘留せる銅。

しぼり-なき 絞泣【名】聲を立てず、腸を絞るが如くに泣くこと。「萩。

しぼり-はぎ 絞萩【名】〔植〕しぼり咲きの一。

しぼり-ばなし 絞放【名】㊀絞りたるままにしておくこと。㊁絞染の括りたる絲を解き、縮みたるままにして、斐（ひ）さぬもの。

しぼり-もん 絞紋【名】絞染の法によりて染出したる紋所。天明の頃流行したり。

しぼる 絞る・搾る【動四他】㊀強く壓して水分を出だす。古今「いつはりの涙なりせば唐衣しのびに袖はしぼらざらまし」源氏「大將の君も涙にくれて、目も見えたまはぬを、强ひてしぼりあけて見たてまつるに」㊁無理に出ださしむ。「稅をしぼる」「聲をしぼり出だす」㊂強く締括る。絞染をなす。㊃「脂（ラア）を絞る」の略。

しぼる 痲る【動四自】小便快く通ぜずして、滴り出づ。

しぼ-わけ 鹽分・塩分【名】俎（マナ）の上にて、庖丁を以て、鳥を撫づること。

しぼ-わた 潮曲・汐曲【名】潮の陸地に灣入したる處。（古語）山家「淡路島せとのなごろは高くともこの汐曲におし渡らばや」

しぼ-わり 【名】〔動〕みづまし（水黽）を云ふ。〔東國の方言〕

しま-をけ 鹽桶・鹽桶【名】鹽を入るる桶。

しま-をんじやく 鹽溫石・塩溫石【名】鹽を煎り、布に包みて、溫石に代用するもの。

しま 島・嶋【名】㊀四面水に圍まれたる陸地。㊁池などの中に設けたる築山。伊勢「しま好みたまふ君なり。この石を奉らん」㊂しまのおほおみ（島大臣）を見よ。㊃『大阪の米穀取引所の在る處、堂島（ダウジマ）の地名を略していふ』㊄『關西の語』

しま 島の神【句】㊀島に祀れる神。㊁『琉球を征服せしに基くか』諸島にて、鎭西八郎爲朝を祀りて呼ぶもの。

しま 繫（カ）る島無し【句】次條に同じ。

しま 取附く島無し【句】『船の沖に漂ひて、上陸すべき島も見つからぬに譬へていふ』全くたよるべき道なし。

しま 縞・島・嶋【名】『島物の略にて、中古南蠻諸島より、始めて渡りしが故にいふ』種種の色絲を、横縞に織りなして、布帛の模樣に、種種の筋を現はしたるもの。

しま 【名】しじま（無言）に同じ。花鳥餘情「童の諺に、無言を行ぜんと約束して、無言無言とうしまにかねつくといひて、何にても打鳴らしての後、ものいはぬことをするなり。しまといふはしじまなり」

しま 樣【名】さま（樣）に同じ。（熟語にいふ）「よこしま」「さかしま」

しま 四魔【名】（佛）四種の魔、卽ち煩惱（ボンナウ）魔・五陰（ウヲン）魔・天子魔・死魔の併稱。各その條を見よ。醫曲「放下座「方便の矢をつまよって、四魔の軍を破りたまふ」

しま 死魔【名】（佛）『死滅は吾人の佛道修行を障害するによりて、魔の一とす』四魔の一。死ぬること。醫曲（鉢六天）「煩惱（ボンナウ）の惡魔・陰魔（マヲン）・死魔・天子・業（ゴフ）魔、その外、從類、悟の道を障碍（シヤウゲ）の群鬼」

しま 揣摩【名】情を揣（カ）り、意を摩する義』おしあて。おしはかり。推測。

しま 詩魔【名】詩を好む病。

しま 總廂【名】支那の五服の一。三從伯叔・父母・舅姑・兄弟の喪に著用せしもの。

しま 紫麿【名】しまつごん（紫磨黃金）を見よ。

しま 紫磨忍辱（ニンヂヨク）【句】紫磨金色（シンジキ）の肌と慈悲柔軟の相と。共に佛の身に具はるもの。醫曲（源氏供養）「秋の風消えずして、紫磨忍辱の藤袴」

しま 四萬【名】〔地〕上野國吾妻郡にある溫泉場。澤田村に屬し、中之條（ナカノ）町の北方四里餘の山間なる、吾妻川の支流四萬川の溪流に沿ふ。泉質は鹽類泉に屬す。

しま 志摩【名】〔地〕東海道の一國。伊勢國の東南に斗出せる半島。古、伊勢島と稱す。文武天皇の時、一たび伊勢國に合し、養老三年再び分立す。もとは答志（トウシ）・佐藝

(サ)の二郡に分れ、のち佐藝は英虞(アゴ)と改稱せられ、明治二十九年更に合して、志摩郡を立て、三重縣の所管に入れり。志州。

Ⅱ前項の志摩國全部を占むる郡。郡役所を鳥羽町に置く。**Ⅲ**筑前國の舊郡の一。舊怡土(イト)郡の北に斗出せる半島の地。古は怡土郡との間に海水通じ、島をなせりといふ。明治二十九年廢して、怡土郡と合し、絲島(イト)郡を立つ。

しま【接尾】他の語に附して、はじめの意をあらはす語。〔江戸時代の俗語〕浮世風呂「元日しまから這入るところもあめえ」

しま-あそび 島遊・嶋遊【名】しまより(島寄)に同じ。

しま-あぢ【名】〔動〕游禽(ユウキン)類に屬する鳥。大いさ小鴨に似たり。脊は暗色、腹部は灰白を呈す。喉に黑し。冬期我が國に渡來す。

しまあぢ 縞鯵【名】〔動〕硬骨(コウコツ)類に屬する魚。鯵類の中にて、體高く狹く、背に黃に鼠色を帶び、腹部に至るに從つて、その色薄し。背側には銳き稜形の鱗あり。美味なり。こせ。じんがめあぢ。

しま-あひ 縞合【名】縞の色合。

しまあは 縞粟【名】おほあは(大粟)に同じ。

しまあをじ 縞青鵐【名】〔動〕**とうせんあをじ**(朝鮮青鵐)に同じ。

しーまい 姉妹【名】Ⅰあねと、いもとと。**Ⅱ**同じ系統に屬し、多くの類似點を有する二つのもの。「姉妹篇」「姉妹艦」

じーまい【名】じまへ(自前)に同じ。

しまい-がた 四枚肩【名】駕籠を、四人にて舁ぐこと。

しまい-かなどう 四枚金銅【名】鎧の胴の鐵の四枚胴なるもの。

しまい-かん 姉妹艦【名】『英 Sister-ship 原語は、普通の船舶にも用ふ』構造・大いさ・噸數などの稍相同じき二隻の軍艦。

しまい-かんばん 四枚看板【名】こなだい(小名題)に同じ。

しまいか 縞斑鳩【名】〔動〕燕雀(エンジャク)類に屬する鳥。普通の斑鳩よりはやや小さく、嘴は黃色にして、末端暗綠色を呈し、背部は灰褐色にして、雄は風切(カザ)の末端白し。我が國にては稀なれども、支那には少なからず。小斑鳩。

しまい-げいじゅつ 姉妹藝術【名】各種の藝術は、その表現の方法こそ異なれ、その目的が美の表示にある點に至りては共通なるより、その各種間の關係の稱。例へば、彫刻と建築と繪畫との類。

しまい-ご 姉妹語【名】〔語〕『獨 Tochter-sprache』同一の古代語より支れ出でたる二つ以上の國語。例へば佛蘭西語・伊太利語・西班牙語・葡萄牙語等の、何れも、ラテン語より出でし類。

しまい-さき【名】〔動〕硬骨(コウコツ)類に屬する魚。近海に產す。體形鯵魚に酷似し、黃綠灰色を呈し、側面に褐色の四條の縱線あり。

しまい-せん 姉妹船【名】しまいかん(姉妹艦)を見よ。

しまいた 四間板【名】和船の大立(オホボ)中立鎧立・小位の總稱。たつき(立木)參照。

しまい-だて 四枚楯【名】楯の一種。

しまい-どう 四枚胴【名】Ⅰくけい(屈繼)に同じ。**Ⅱ**鎧の胴の、四枚の革又は鐵板を重ねて作りたるもの。

しまう 縞鵐【名】〔動〕鵐の一種。羽に斑のあるもの。

しーまう 四孟【名】孟春(初春)・孟夏(初夏)・孟秋(初秋)・孟冬(初冬)の併稱。四季の孟月。

じーまう 二毛【名】にまう(二毛)を見よ。

し-まうく 爲設く【動下二自】まうけなす。準備す。〔古語〕宇治「くだものゝくひもの、しまうけて」

しまうしのした 縞牛舌【名】〔動〕**しまがれ**ひ(縞鰈)に同じ。

しまうたや 仕舞屋【名】『仕舞ひたる屋の義。**しまふ(仕舞ふ)四**を見よ』**しもたや(仕舞屋)**に同じ。一代男「浮世の事は仕舞うた家の金左衞門を誘ひて」

しまうま 縞馬【名】〔動〕奇蹄(キテイ)類に屬する哺乳動物。體形、耳・蹄・尾等は馬に酷似す。南亞非利加の平原に產し、體長六尺五六寸、牡は淡黃色、牝は白色にて、牝牡共に環狀に走る黑色又は赤褐色の縞ありて、虎の斑に類す。性質慓悍にして、飼養しがたけれども、驢馬に配して、雜種を生ぜしむることを得。まだらうま。ぜぶら。

しまうり 縞瓜【名】〔植〕**まくはうり(眞桑瓜)**を云ふ。〔陸奥國の方言〕

しまえび 縞海老【名】〔動〕**いせえび(伊勢蝦)**に同じ。

しまえびす 島夷・嶋夷【名】島に棲むえびす。

しまおり 縞織【名】次條に同じ。

しまおりもの 縞織物【名】縞のある織物。しまもの。

しまおろし 島風・嶋風【名】島より吹く荒き風。

しまか 縞蚊【名】〔動〕**やぶか(藪蚊)**に同じ。

しまかぎ 島陰・嶋陰【名】しまかげ(島陰)に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「曉のかはたれどきにしまかぎを漕ぎにし船のたづき知らずも」

しまがき 柴垣【名】しばがき(柴垣)Ⅱに同じ。紀「おみの子の八重のしまがき下どよみなるがよりこば破れむしまがき」

しまがくる 島隱る・嶋隱る【動四自】次條に同じ。〔古語〕萬葉「島がくりわがこぎくればともしかもやまとへのぼる眞熊野の舟」

しまがくる 島隱る・嶋隱る【動下二自】島の陰になる。島の彼方に見えずなる。萬葉「はしけやし妻も子どももたかたかに待つらむ君や島がくれぬる」

しまがくれ 島隱・嶋隱【名】しまがくること。島かげ。宇治「今宵はなほ御舟に具してあらんとて、島がくれなる處に具して泊りぬ」

しまかげ 島陰・嶋蔭【名】島に掩はれて視えぬ處。島のかげ。萬葉「照る月を雲なかくしそ島陰にわが舟はてむとまりしらずも」

しまかぜ 島風・嶋風【名】島に吹く風。島より吹來る風。金葉「島風にしばたつ浪の立ちかへりうらみてもなほ頼まるるかな」

しまかた 島形・嶋形【名】山水の景を摸して作れる置物。盆景。太平記「御前に、風流の島形を被居(スエ)たり」

しまかなきん 縞金巾【名】縞を置きたる金巾。

しまがに 島蟹・嶋蟹【名】〔動〕**たかあしがに(高足蟹)**に同じ。

しまがへ 島替・嶋替【名】江戸時代の刑罰の一。配流せられたる島にて、更に罪を犯したる者に對して、その配流の地を他の遠き島に替へしもの。

しまがへる 縞蛙【名】〔動〕**とのさまがへる(殿樣蛙)**に同じ。

しまかみ 島上・嶋上【名】〔地〕攝津國の舊郡の一。明治二十九年島下(シモ)郡と合して、三島郡となる。「なる上下。

しまがみしも 縞上下【名】縞地にて、無紋の上下。

しまがや 縞茅【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。草葭(ヨシ)の變種。莖の高さ三四尺。葉は細長く、白き斑ありて、甚だ雅致を呈するにより、觀賞用に供せらる。初夏、帶白褐色の穗を生ず。しますすき。しもくさ。しまよし。

しまがら 縞柄【名】織物の縞の模樣。

しまがれひ 縞鰈【名】〔動〕鰈の一種。形したびらめに類し、右側面には、十二條の黑線ありて、背より腹部に至る。しまうしのした。しました。つるした。

しまき 風卷【名】しまくこと、又その風。〔古語〕山家「瀨戸わたるたなし小舟心せよ霰みだるるしまきよこぎる」

しまき 石南草【名】〔植〕**しゃくなげ(石南)**に同じ。宇治「石南草、志磨木」**Ⅲ**ぺぬ(海桐)に同じ。

しまぎ 島木・嶋木【名】鳥居の笠木に添ひて、その下にある横木。「に同じ。

しまぎぎ 縞黃顙魚【名】〔動〕**ぎぎ(黃顙魚)**に同じ。

しまぎり 縞桐【名】桐の材の、絲柾(イトマサ)なるもの。最も貴重せらる。一代女「しま桐(ギリ)の掛物等より女繪を取出し」

しまく【動四自】烈しく吹きまく。夫木「くれ船よ朝妻わたりけさなせそ伊吹の嶽に雪しまくなり」

しまぐに 島國・嶋國【名】四面海に圍まれたる國土。海國。島國(コク)。

しまくばう 島公方・嶋公方【名】〔人〕『晩

年、阿波國に走り、撫養(ムヤ)にて薨ぜしより いふ』あしかがよしたね(足利義稙)に同じ。

しまくひな 縞秩鶏【名】〔動〕渉禽(セフキン)類に屬する鳥。秩鶏の類中最も少さく、わづかに雀ほどの大いさにて、背部は茶褐色にして、白點あり。腹部には、白と黒との横條多し。我が國には稀なり。

しまくまやま 島熊山・嶋熊山【名】〔地〕攝津國豐能(トヨ)郡にある山。熊野田(クマヌ)村の北方に聳え、山中奇岩・怪石多くして、佳景なり。一名、鬼ヶ嶽。萬葉「玉勝間しまくま山の夕暮にひとりか君が山路こゆらむ」

しまげら 縞啄木鳥【名】〔動〕きつつきの一種。羽に縞の模様あるもの。

しまごま 島駒・嶋駒【名】〔動〕燕雀(エンジャク)類に屬する鳥。駒鳥に近けれど、色は全く異なり、背部は茶褐色、下部は灰白色なれど、胸部と喉部との各羽は、暗色にて緑取られ、ために鱗のごとくに見ゆる。支那に産し、我が國には稀に見ることあり。

しまごん 紫摩金【名】しまわうごん(紫摩黄金)に同じ。 蘂花「紫摩金の尊容は、秋の月曇なく」

しまごんじき 紫摩金色【名】紫摩金の色。 著聞「その膚をねぶりたまふに、舌のあと摩紫金色となりぬ」

しまさき 島先・嶋先【名】嶋の斗出したる端。 新六「風吹けば波の來寄する島さきのいはぬ思ひぞくだけわびぬる」 狂言(節分)「あの島さきぞ、御手は掛くれ。渡らぬさきに、御手を掛くるでもなし」 「同じ。

しまざさ 縞笹【名】〔植〕ちござさ(兒笹)に同じ。

しまざらし 縞布・島晒・嶋晒【名】縞ある晒布(サラシ)。 一代女「かりそめを二夜の女は、それほどに、島曝のかたびら、薄玉子の帶やはらかに結び」

しまし 暫【副】しばし(暫)に同じ。〔古語〕 萬葉「などの海に 舟しまし貸せ沖に出でて波立ちくやと見て歸りこむ」

しましく 暫しく【副】前條に同じ。〔古語〕 萬葉「筑紫ぢのかたの大島しましくも見ねばこひしき妹をおきてきぬ」

しまじま 島島・嶋嶋【名】多くの島。

しましも 島下・嶋下【名】〔地〕攝津國の舊郡の一。しまかみ(島上)參照。

しましゆ 縞繻・島繻【名】次條の略。 女殺油地獄「桔梗ぞめの腰かはり、島縞の帶」

しましゆす 縞繻子・島繻子・嶋繻子【名】縞模様のある繻子。 一代男「色つくりたる女、肌には紅うこんの絹物、上にかちん染の布子・島繻子の二つわり、左の方に結び」

しましり 島尻・嶋尻【名】〔地〕琉球國五郡の一。沖繩本島の南端。郡役所を那覇區に置く。

しまず 島巣・嶋巣【名】〔動〕う(鵜)に同じ。

します 【名】〔動〕鱸(スズキ)の類なりといふ。

します 澄す【動四他】すます(澄す)に同じ。〔古語〕 撰集抄「尼、こころをしまして、念珠をすりはべり」 「に同じ。

しますすき 縞芒【名】〔植〕しまがや(縞茅)に同じ。

しますずり 島摺・嶋摺【名】島・洲崎などの形を摺出だしたる摺衣(スリゴロモ)。〔古語〕 盛衰記「島摺の直垂著て」

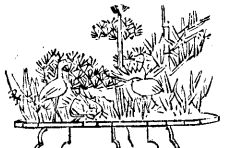
しまそだち 島育・嶋育【名】島にて生長したること、又その人。

しまぞめ 縞染・島染・嶋染【名】織りて後に、筋を染出したるもの。

しまぞろへ 縞揃・島揃・嶋揃【名】縞模様の著物を揃ふること。 若風俗「青茶・樺茶の島ぞろへ」

しまだ 島田・嶋田【名】■【地】駿河國志太(シダ)郡にある町。大井川を隔てて、遠江國金谷(カナヤ)町に對す。舊東海道五十三驛の一。鐵道東海道線の一驛。名所方角抄「かなやといふ宿あり、川の西は遠江なり。東向に島田といふ宿あり」 ■しまだまげ(島田髷)の略。 慶八卦柱曆「かかる苦患にわうもう日、島田亂れてはらはら」

しまだい 島臺・嶋田【名】洲濱(スハマ)の臺の上に、松・竹・梅及び尉(ジョウ)・姥(バア)・鶴・龜の形などを飾りたるもの。 宴



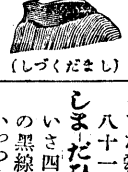
(いだましし)

客饗應又は婚禮などの時に用ふる裝飾の具。もと食物を盛りたるものにて、蓬萊山に擬したるものなりといふ。すはま(洲濱)■參照。 領城反惡書「中に立つたるこの松は、島臺持つての取結び」

しまだいじん 島大臣・嶋大臣【名】〔人〕しまのおほおみ(島大臣)を見よ。

しまだうしや 島道者・嶋道者【名】相模國鎌倉郡江島の辯才天に參詣する信者。巳(ミ)の日の道者。

しまだくづし 島田崩・嶋田崩【名】女の髪の結ひ方の一。島田髷の手を省きたるもの。粋者好みてこれを結ひ、また凶禮の時などにも結ふ。



(しづくだまし)

くさたばね。 浮世風呂「高慢なるかみ樣、はやりの島田崩しにて」 柳樽「嶋田くづしには、高尾は結はぬなり」

しまだくわうそん 島田篁村【名】〔人〕しまだちようれい(島田重禮)に同じ。

しまだけ 縞竹【名】〔植〕きんめいちく(金明竹)に同じ。

しまださこん 島田左近【名】〔人〕志士。名は龍章。美濃國の人。烏丸家及び九條家に仕ふ。和(ヌ)宮降嫁の事を斡旋し、また長野主膳と謀りて、幕府の傾倒を救はんとし、文久二年浪士に暗殺せられて、四條河原に梟せらる。

しまださうちやう 島田宗長【名】〔人〕連歌師。駿河國島田の人。字は久庵・柴屋軒と號し、宗祇に學ぶ。師の歿後、勅によりて、花の下宗匠の號を授かる。享祿五年歿す。年八十五。

しまだただおみ 島田忠臣【名】〔人〕字多天皇の御代の儒者。字は達音、自ら氏を略して田といふ。醫を能くし、兼ねて文藻あり。美濃介伊豫介を經て卒す。

しまだちようれい 島田重禮【名】漢學者。文學博士。字は敬甫、篁村と號す。武藏國の人。海保漁村・安積(アサ)艮齋に學び、また昌平黌に入り、助教に進む。明治の初、雙桂精舍を下谷に開く。文科大學教授・東京學士院會員となる。同三十一年歿す。年六十一。

しまだづくり 島田造・嶋田造【名】生絲の綛(カセ)を裝束する一法。綛を二つに折返し、兩端を島田髷の如くに束ぬること。

しまだて 島立・嶋立【名】碁石にてする一種の遊戯。

しまだな 島棚・嶋棚【名】四十八棚の一。床間書院などの脇に設くるもの。

しまだばんこん 島田蕃根【名】〔人〕漢學者。蒼徳山澤士。家は藩の家老格なりしも、夙く修驗道に入り、神儒佛教を究む。幕末に勤王論を唱ふ。維新後、大參事また教部省出仕たり。明治四十年歿す。年八十一。

しまだひ 縞鰭【名】〔動〕■鯛の一種。大いさ四五寸、體側には、横に並行せる五條の黒線を有す。我が近海に産す。いづたひ。いっとだひ。 ■いしだひ(石鯛)に同じ。

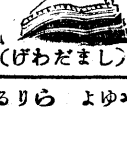
しまだまげ 島田髷・嶋田髷【名】しまだわげ(島田髷)に同じ。 國姓爺「唐子髷には薩摩櫛、島田髷には唐櫛と」

しまだまんきち 島田萬吉【名】〔人〕女歌舞妓の名人。近江國の人。島田髷は、この人の結ひはじめしものといふ。

しまだもの 島田物・嶋田物【名】駿河國島田の刀工、義助一派の鍛へし刀。相州傳より出でたるも、上工少なきより位卑し。

しまだゆば 島田湯葉・嶋田湯葉【名】島田髷の如き形に結びたるゆば。

しまだわげ 島田髷・嶋田髷【名】『しまだまんきち(島田萬吉)を見よ。一説に、駿河國島田驛の遊女の結ひはじめしなりともいふ』女の髪の結ひ方の一。一二の大小等により種種の形あり。天和・貞享の頃、十二三歳の少女より、若き女房。遊女などの間に行はれ、今も東京にては、未婚の女子これを結ふ。しまだ。しまだまげ。



(げわだまし)

しまだくづし 島田崩し【名】しまだくづし(島田崩)・つぶしまだ(潰島田)・ぶんきんたかまげ(文金高髷)・ゆひわた(結綿)參照。

しまちぢみ 縞縮・島縮・嶋縮【名】縞を織出したるちぢみ。 女殺油地獄「島縮に、帶、た

しかに、中(カ)の風と見た」

しまちどり 島千鳥・嶋千鳥【名】島に棲む千鳥。

しまちやう 縞茶宇・島茶宇【名】縮を織出したる茶宇。(紋茶宇に對して)

しまちりめん 縞縮緬【名】縞を織出したる縮緬。

しまつ 始末【名】Ⅰもとをする。はじめをはり。始終。首尾。Ⅱ事のわけ。顚末。事由。Ⅲ『始終を整ふる義』かたづけ。しめくくり。處理。『仕末』Ⅳけんやく(儉約)に同じ。一代女「この自由なる大坂にして、詫びてもかかる物ずき、これを思ふに、始末より起れり」傾城色三味線「人生七十古來稀なる世に、始末の二字に括られ、儲けためて使はぬ人の心が知りたし」始末に終へない【句】手にあまる。世話のしやうなし。をへない。(俚語)

しまづ 島津【名】姓氏の一。源賴朝の子豐後守忠久より出づ。建久年中、忠久、薩摩國島津庄の下司(ゲシ)職となり、尋いで日向・大隅・薩摩の守護職となり、子孫その職を世襲して繁榮し、明治維新後、本宗たる鹿兒島の藩主忠義は公爵、忠義の叔父久光も同じく公爵を授けられ、日向國佐土原(サドワラ)の藩主は一旦子爵、後、伯爵に陞敍せられ、薩摩國の宮之城(ミヤノジヤウ)・加治木(カジキ)・日置(ヒオキ)・今和泉(イマイヅミ)・大隅國の垂水(タルミ)・重富(シゲトミ)、日向國の都城(ミヤコノジヤウ)の七藩主は、何れも男爵を授けられ、別に宗家の嗣子忠重の二弟も、各男爵を授けらる。

しまづ-いへひさ 島津家久【名】〔人〕武將。義弘の第二子。征韓の役に、父と共に明軍を新塞に破る。慶長十四年琉球を征服し、幕府これを家久に附す。慶長十五年卒す。年六十三。

しまつ-がき 始末書【名】**しまつしよ**(始末書)に同じ。

しまづ-ごえ 島津越・嶋津越【名】〔地〕**そうこえ**(五僧越)に同じ。

しまつ-ごころ 始末心【名】儉約せんとする心。しまりぎ。五人女「萬の始末心を捨てて、大燒(オホヤケ)する竈を見ず」

しまつ しよ 始末書【名】事實の顚末を詳記せる公文書。しまつがき。

しまつす

しまづ-すおろし 島津巢下・嶋津巢下【名】『しまづどり(島津鳥)を見よ』鵜を、その島に營みたる巢よりおろすこと。謠曲鵜飼「鵜籠を開き、取出し、島つ巢おろし、荒鵜ども、この河波にばっと放せば」

しまづ-ただよし 島津忠義【名】〔人〕舊鹿兒島藩主。齊彬(ナリアキ)の子。叔父久光と明治中興の業を翼贊し、賞典祿十萬石を賜はり、尋いで毛利敬親(タカチカ)・鍋島直大(ナホヒロ)・山内豐範等と奏請して、版籍を奉還し、後に華族に列し、公爵を賜はる。明治三十年薨じ、特に國葬の儀を賜はる。

しまった 仕舞た【句】しまふ(仕舞ふ)の條下を見よ。

しまづたひ 島傳・嶋傳【名】しまづたふ

しまづたふ 島傳ふ・嶋傳ふ【動四他】島より島へと傳へゆく。萬葉「うな原のかしこき道を島づたひ漕ぎわたり」

しまったり 仕舞たり【句】しまふ(仕舞ふ)の條下を見よ。

しまづつみ 縞包【名】厚くして、多くは布帛などを包むに用ふる一種の和紙。紀伊國より産す。

しまつ-どり 島津鳥・嶋津鳥【名】〔動〕『島の鳥の義』う(鵜)の異稱。〔古語〕和名「鸕鷀、志麻都止利」

しまつ-どり 島津鳥・嶋津鳥【枕】島の鳥の義にて、う(鵜)にかけていふ。いつとり(家津鳥)・ぬつどり(野津鳥)參照。記「しまつどりうがひがとも」

しまつなぎ-まつり 島繋祭・嶋繋祭【名】**ちくぶしましまつなぎ**(竹生島島繋)に同じ。

しまづ-なりあきら 島津齊彬【名】〔人〕鹿兒島藩主。齊興の子。嘉永五年露艦の攝津に來るや、藩邸警衛を名として、禁闕を衛護す。六年皇居炎上の際、直に天機を伺ひ、數千兩を獻ず。夙に開國の意見を抱く。安政五年薨ず。年五十。その神祠を照國神社と崇められ、別格官幣社に列せらる。

しまづ-ひさみつ 島津久光【名】〔人〕勤王家。齊彬の弟、又次郎と稱す。大隅國重富(シゲトミ)の領主忠光の嗣子となり、後、宗家に復し、和泉久光と改む。公武の間に奔走斡旋し、明治維新の際、機務に參與し、從二位・左大臣に進む。同七年願堂諸公と、議協はず、鹿兒島に退隱す。十七年公爵を授けられ、次いで、從一位大勳位に敍せられ、薨ず。年七十一。

しまづ-ぼたん 島津牡丹・嶋津牡丹【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(島津牡丹)

しまつむぎ 縞紬【名】Ⅰ縞をなせる紬。Ⅱうへだつむぎ(上田紬)に同じ。

しまつ-もの 始末者【名】儉約なる人。右大將鎌倉實朝「始末者の權正が死んでから、君を始め、御所中は勘定なしの取っていけ」

しまつ-や 始末屋【名】Ⅰ始末なる人。儉約なる人。吝嗇なる人。しまりや。Ⅱ遊興費を支拂ふこと能はざる客を青樓より委托せられて、その辨償の方法を講ずるを業とする者。

しまづ-よしひさ 島津義久【名】〔人〕武將。貴久(タカヒサ)の長子。しばしば兵を起して筑前・筑後・肥前・豐前の諸國を定めしが、天正十五年秀吉に降り、改めて薩摩一國及び大隅・日向各二郡に封ぜられ、關ヶ原の役東軍に與す。慶長十六年卒す。年七十九。

しまづ-よしひろ 島津義弘【名】〔人〕義久の弟。兄と共に四隣を略定せしが、遂に豐臣秀吉に降り、征明の役に、殊功を以て封四萬石を加へられ、參議に任ぜらる。關ヶ原の役、石田三成に黨し、敗れ還りて、兄義久に因りて降を請ひ、封を子家久に讓り、剃髮、籠居して餘生を送り、元和五年卒す。年八十五。

しまつり-くわ 紫茉莉科【名】〔植〕**おしろいばなくわ**(紫茉莉科)に同じ。「本帳。

しまてほん 縞手本【名】織物の縞柄の見本。

しまど 島門・嶋門【名】島と他の陸地との間のせと。島の瀨戸。〔古語〕萬葉「大君のとほの御門とありがよふ島門を見れば神代しおもほゆ」

しまどりやう 縞鯛【名】〔動〕**たかのはぶどりやう**(鷹羽鮪)に同じ。

しまながし 島流・嶋流【名】刑名の一。罪人を島嶼又は僻地に遷し置くこと。流罪。遠島。

しまなひく【名】かぜ(風)の異名なりといふ。〔古語〕に同じ。

しまぬけ 島拔・嶋拔【名】**しまやぶり**(島破)

しまぬの 縞布・島布・嶋布【名】縞を織出したる布。一代男「朝妻には、いつの頃にか絕えて、賤の屋の淋しく、島布を織る男は、大綱を引きて、夜日を送りぬ」

しまね 島根・嶋根【名】しま。しまぐに。萬葉「やまとをも遠くさかりて弊が根の荒き島根にやどりする君」

しまね 島根・嶋根【名】〔地〕Ⅰ出雲、石見・隱岐三國の全部を管轄する縣。縣廳を出雲國松江市に置く。Ⅱ出雲國舊郡の一。明治二十九年秋鹿(アヰカ)・意宇(オウ)二郡と合して、八束(カ)郡となる。

しまねずみ 縞鼠・金華鼠・五道眉兒【名】〔動〕齧齒(ゲツシ)類に屬する小獸。我が國の北海道又は歐洲・亞非利加などに產し、穴居す。栗鼠(リス)に似、大いさ大なる鼠のごとく、尾は長からず。性活潑、上部は黃色にして、五條の縱線あり。下部は灰白、その毛皮はこれを數多連綴して、囊に製し、珍重す。とらふねずみ。

しまね-はんたう 島根半島・嶋根半島【名】〔地〕出雲國の北方にありて、西より東に突出する大半島。もと獨立の孤島なりしが、嶽(ダケ)と川平野の發達に起因して、本州と連なるに至りしなり。

しまの-うち 島之内・嶋之内【名】〔地〕大阪市南區の一部、南は道頓堀川より北は長堀(ナガホリ)川まで、東は東横堀川より西は西横堀川までの間なる、自ら島形をなせる地域。關取千兩鑑「いつでも、島の内の祭は、俄が多うて、賑かなこと」

しまの-おほおみ 島大臣・嶋大臣【名】〔人〕『その飛鳥(アスカ)河上の邸に池を穿ち、池中に島を築きしに因るとも、また今の大和國高市(タカイチ)郡高市村大字島ノ庄、卽ち古の橋の島の地に住みしに因るともいふ』そがうまこ(蘇我馬子)に同じ。

しまの-こ 島子・嶋子【名】〔人〕**うらしまのこ**(浦島子)の略。〔古語〕和泉式部集「あふこ

とを今はたのまぬなかなれどまたこそあけれ島の子が箱」

しまの-ごしょ 島御所・嶋御所【名】(八)『しまくぼう(島公方)を見よ』**あしかがよしたね**(足利義稙)に同じ。

しまの-じょ【名】〔動〕燕雀(エンジャク)類に属する鳥。欧洲及び亜細亜大陸の北部に産し、我が國には稀なり。頭の側面は黒色、頭頂より背面にかけて暗赤色、腹部は黄色、胸部に黒色及び赤色の條あり。雌は背面に數多の黒條あり。てうせんのじこ。

しまの-みや 島宮・嶋宮【名】天武天皇の離宮。今の大和國高市(イチ)郡高市村大字島ノ庄、即ち古の橘島に在りしものといふ。

しまの-みやっこ 島造・嶋造【名】上古の地方官の一。國造(クニノミヤツコ)と同じきものにして、島地を治めしもの。

じまはし 字廻【名】博奕(バクチ)の一種。文字を書きて、廻はして當(アタ)を定むるものならんといふ。

しまはぜ【名】〔動〕いしぶし(石伏)を云ふ。〔關西の方言〕

しまはちく 縞淡竹【名】〔植〕淡竹(ハチク)の一變種。葉に白き縞の斑(フ)あり。美濃國に産し、庭園に栽培せらる。

しまばと 縞鳩【名】〔動〕あをばと(青鳩)を云ふ。〔東國の方言〕

しまはぶたえ 縞羽二重【名】適宜の色に染めたる生絲を用ひて織りたる縞柄の羽二重。横縞など種種あり。

しまばへ 縞蠅・大麻蠅【名】〔動〕雙翅(サウシ)類に屬する昆蟲。形大きく、灰色を呈して、背に黒條を有す。夏日人家に多し。

しまはんたう 志摩半島【名】〔地〕伊勢國の東南に斗出して、志摩國を形成せる半島。

しまばら 島原・嶋原【名】〔地〕■肥前國南高來(ヒノカミ)郡にある町。長崎を距る陸路十八里。郡役所を置く。深溝松平氏の舊藩地。■〔地〕『もと今の京都市魚棚室(ウヲダナ)町にありしを、寛永十八年に今の地に移しなり。時恰も肥前國島原の亂に際せしかば、世人この廓に遊ぶを、賊の城郭を攻撃するに比せしよりいふと』京都市下京區丹波街道の南方、即ちもとの朱雀野にある遊廓。上の町・中の町・中堂寺町・太夫町・下の町・揚屋町の六坊あり。德川時代には、諸國の豪客來り遊びて盛んなりしが、明治維新後、衰退せり。西島(サイトウ)。にし。■〔地〕しんしまばら(新島原)の略。■しまばらきやうげん(島原狂言)の略。

島原の役【句】次條に同じ。

島原の亂【句】「天草(アマクサ)の亂」に同じ。

しまばら-かっせんき 島原合戰記・嶋原合戰記【名】〔書〕■肥前島原一揆(イッキ)の始末を記したるもの。五卷。遠山信春の著。■同上の合戰に從事せしものの見聞錄。三卷。著者詳かならず。一名、天草物語。

しまばら-きやうげん 島原狂言・嶋原狂言【名】■『京都の島原遊廓の名を取りて呼びしもの』傾城買の樣を演ずる一種の歌舞伎狂言。正保・慶安の頃、大いに京都に流行せり。■かぶきしばゐ(歌舞伎芝居)の異稱。

しまばら-さうどう 島原騒動・嶋原騒動【名】「島原の亂」に同じ。

しまばら-じやう 島原城・嶋原城【名】肥前國南高來(ヒノカミ)郡島原町に在りし城。天正中島津氏ここに營して、龍造寺氏と戰ひ、元和四年松倉重政初めて築城す。のち松平忠房の居城となり、寛延二年戸田氏これに封ぜられて、子孫相繼ぎ、明治維新に及べり。

しまばら-はんたう 島原半島・嶋原半嶋【名】〔地〕肥前國の東南に斗出する半島。東側に有明灣を抱く。**しまばら**(島原)□は、この灣岸の町なり。

しまばら-みなと 島原港・嶋原港【名】肥前國南高來(ヒノカミ)郡島原にある港。燈臺の設あり。

しまばら-むすび 島原結・嶋原結【名】婦人の帶の結び方の一。江戸時代に流行せり。

しまばら-もやう 島原模樣・嶋原模樣【名】總模樣の一種。肩より柳樓を下げたるやうに染出し、又は乳の邊もしくは襟の邊に模樣を置き、下はすべて高裾模樣にしたる、極めて派手好なる染方。

しまび 仕舞【名】■しまふこと。すむこと。する。はて。をはり。■けしやう(化粧)に同じ。■年の暮などの諸勘定を拂ひ了ること。狂言(米市)「今日は、早や大晦日になりてござる。世間を見まするれば、しまひようして、歳暮の禮などにありく人もあるに」■能(ノウ)の方法、即ち形(カタ)。■素舞(ヒムマ)の義』能樂の略式の舞。即ち囃子を伴はず、裝束を著用せず、仕手(シテ)一人、袴にて舞ふもの。地謠(ジウタヒ)は、後方に居並ぶ。

しまび 島邊・嶋邊【名】しまべ(島邊)に同じ。〔古語〕萬葉「春霞しまびに立ちてたづが音の悲しく鳴けば」

じまひ 字舞【名】舞樂の一。舞人が文字の形に立並びて舞ふもの。

しまひ-ぎしや 仕舞汽車【名】さいしゅうれっしゃ(最終列車)に同じ。

しまひ-ぐち 仕舞口【名】しまひにならんとする時。はてがた。終りがた。

しまひこ 島彦・嶋彦【名】〔植〕一種の蔓草の名。蔓草の總稱ともいふ。〔古語〕夫木「しまひこの繁みにはへる青つづらくるしきものは夕ざれの戀」〔語〕

しまひこ-くわし 【名】くわし(菓子)の異稱。〔女のこと〕打出太鼓に同じ。ケ踊阿波鳴門仕舞太鼓の音までも、寂滅爲樂と聽くなり」

しまひこ 島人・嶋人【名】■島の住民。

■しまもり(島守)に同じ。

しまひ-ね 【名】かすみ(霞)の異名なりといふ。〔古語〕

しまひ-ばしら 仕舞柱【名】昔の芝居にて、容より俳優に送りたる纏頭(テンタウ)などを插しおきし柱。甲陽軍鑑、樂屋入の事、…正面の橋よりは、太夫一人通ふ者なり。又、太夫に物を下さるる時、太刀を持つてあがるなり。仕舞柱より出入をすべし」

しまひ-ぶろ 仕舞風呂【名】終りになりて湯槽の中の湯を流し捨てんとする時の湯浴。しまひゆ。一代女「しまひぶろに入りて身を改め」

しまひ-みせ 仕舞店【名】しまひものみせ(仕舞物店)に同じ。

しまひ-もの 仕舞物【名】賣れのこりたる品物。店仕舞に殘りたる品物。生玉心中「ずんと安い仕舞物があると聞く」

しまひもの-みせ 仕舞物店【名】ふるだうぐや(古道具屋)に同じ。「呂」に同じ。

しまひ-ゆ 仕舞湯【名】しまひぶろ(仕舞風呂)に同じ。

しまひより-あきなひ 仕舞寄商【名】〔商〕帳合米(チャウアイマイ)にて、毎期精算期日の三日前に、新規の賣買を停め、轉賣・買戻のみを許して、取引を完了せしむること。

しまびる 縞蛭【名】〔動〕蛭の一種。體やや綠色にして、背面に五條の黄色線あり。人畜に吸著きて、血液を吸取るより、醫用に供す。一に醫用蛭ともいふ。

しまびろおご 縞天鵞絨・島天鵞絨【名】縞織にしたる天鵞絨。一代男「羽織はごろふくれん黒きに、島天鵞絨の裏を附け、町人ごしら〳〵」

しまひろ-やま 島廣山・嶋廣山【名】〔地〕下總國猿島(サシマ)郡岩井町附近の高地。天慶年中、平將門この地により て、平貞盛・藤原秀鄕の軍を拒ぎたりといふ。

しまふ 柳條布【名】縞織の上布(ジョウフ)。越後國小千谷(オヂヤ)地方より産す。

しまふ 仕舞ふ【動四自】をはる。すむ。しまはつ。■減入る。かたづく。■年の暮などの諸勘定を仕拂ひ終る。狂言(米市)「今日ははや大晦日になつてござる。歳暮の禮などにありく人もあるに、私は、しまふことはさておいて、何を一色、年とり物を調べも致さぬ。…かくのごとくにしまひ兼ねて、迷惑なことでござる」■〔商〕しまる(仕切る)■に同じ。■相手を殺し

て、事件の結末を附く。らちをあく。かたをつく。 佃城反魂香「まづ綿書(エカキ)めからしまはんと、太刀を抜かんとせしところに」 ▲遊女などの、他の客にも接すべきを、揚代金を出してせきとむ。 人心面道「先方でも、實はこの晩、他の客で仕舞ってゐる晩にて、身上りをしたといふにはあらず」

しまふぐ 縞河豚【名】〔動〕虎河豚の變種。身長一尺五寸に達し、數條の縦線あり。我が國近海に産す。すちふぐ。

しまふぐ 【名】ごぜんかご(御膳籠)を云ふ。〔備前國の方言〕

しまふくろふ 縞梟【名】〔動〕しまみみづく(縞木菟)に同じ。

しまぶし 島節・嶋節【名】いつぶし(伊豆節)に同じ。

しまぶた 島豚・嶋豚【名】琉球の田舎に飼養せらるる豚。顔面長く、口尖り、頭大きく、耳も大きくして垂れ、腹部特に肥えて下垂し、地上に觸るるものあり。

しまべ 島邊・嶋邊【名】島のほとり。しまび。 起「み吉野のえしぬの鮎鮎こそは島べもえき」

じまへ 自前【名】▣芝居にて、何の費用をも自辨すること。 ▣藝者が、自力にて營業すること。(かかへ・わけなどに對して)

しまへび 縞蛇【名】〔動〕蛇の一種。體長四五尺に達するものあり。形は青大將に似たれども、背面は褐色にして、四條の暗色なる縦條あり。その體色特に黒きを烏蛇(カラヘビ)といふ。無害なり。なめら。

しまほし 【名】つき(月)の異名なりといふ。〔古語〕 秘藏抄「小夜ふくる線の空に風吹けばいとどさえますしまぼしのかげ。しまぼしとは、月をいふなり」

じまま 自儘【名】わが思のまま。 俗曲春雨「身まま・自儘になるならば」

しままき 島牧【名】〔地〕後志國十七郡の一。平地に乏しく、海岸は險嶮を成す。壽都(ス)支廳の管轄。

しままつ 島松・嶋松【名】島に生ふる松。 夫木「秋風に吹きしかれたる島松の枝のいけにや波のこすらん」

しままはり 島廻・嶋廻【名】〔動〕ひびを云ふ。〔佐渡國の方言〕

しまみ 島回・嶋回【名】しまわ(島回)に同じ。 萬葉「春がすみしまみに立ちてたづかねの悲しくなけば」

しまみみづく 縞木菟【名】〔動〕木菟中の最大なるもの。耳角最も著しきを以て知らる。北海道に産す。おほみみづく。しまふくろふ。

しまむくどり 縞椋鳥【名】〔動〕こむくどり(小椋鳥)に同じ。

しまむらがに 島村蟹・嶋村蟹【名】〔動〕きめんがに(鬼面蟹)に同じ。

しまむらはうげつ 島村抱月【名】〔人〕文學者。通稱は瀧太郎。本氏は佐佐山、島村氏に養はる。東京專門學校文學部の出身。英・獨に留學し、歸朝後早稻田大學文學部の教授となり、文藝協會の幹事となり、又、文部省文藝委員に任ぜらる。大正二年藝術座を起し、新劇の爲に奮闘す。大正七年歿す。年四十八。のち抱月全集の刊あり。

じまん 自慢【名】あなどり笑ふこと。

しまん 四曼【名】〔佛〕一切の曼陀羅を四種に分類、解説せるもの。即ち一に、大曼陀羅とて、諸尊を總集せる壇場、及びその諸尊の形體、並びにその壇場の全體、又は諸尊を畫けるもの、二に、三昧耶(サマヤ)曼陀羅とて、諸尊の手に持する器杖及び印契(本誓の異なるに從ひて異なり)を畫けるもの、三に、法曼陀羅とて、諸尊の種字・眞言・呪文等にて、これらを口に唱へ、文字に記しなどするをもいひ、四に羯磨曼陀羅とて、諸尊の作用形相を鑄造し、又は彩畫する等の事業。この四者は、諸佛諸尊のみならず、宇宙間の一切の物、皆これを具有し、四者互に離れざるが宇宙の現相なりと說く。四種曼陀經。

しまん 四曼相即【句】〔佛〕四曼は互に融通して作用し、不離の關係にあるものなること。四曼不離。 太平記「いづくんぞ四曼相即の花を折らん」

しまんし 四曼・三密【句】〔佛〕四曼と三密との併稱。各その條を見よ。三密四曼。

しまんふり 四曼不離【句】〔佛〕「四曼相即」に同じ。 太平記「一度三密壇伽の道場に入りしより、永く三諦(タイ)即是(ゼ)の春の華、誰が袂にか薫はまし。四曼不離の秋の月、何れの扉をか照すべき」

しまん 四慢【名】〔佛〕七慢の中の四種。 平家「三毒・四慢」

じまん 滋蔓【名】しげりてはびこること。

じまん 自慢【名】われと、わが身をほめて、人に誇ること。自負。 俳諧古選附錄(長流)「肥えたとて自慢はさせぬ暑さかな」

じまん 自慢・高慢・馬鹿の内【句】自慢は愚者のすることなり。〔諺語〕

じまんがほ 自慢顔【名】自慢らしき顔附。

じまんくさし 自慢臭し【形ク】自慢めきてあり。ほこりかなり。

しまんと-がは 四萬十川【名】〔地〕土佐國第一の大川。水源三あり。一は高岡郡不入(イラズ)山より發し、仁井田川といひ、一は同郡西津野村より發し越智面(オチノモ)川といふ。相會し、吉野・目黒の二川を合はせて下田港に注ぐ。長さ四八里。一名、渡(ワタ)川。

じまんばなし 自慢話【名】自慢してはなす話。

しまんろくせんにち 四萬六千日【名】〔佛〕觀音の緣日。七月十日をいふ。その日に參詣したる者は、四萬六千日間參詣したる程の功德ありといふ。但し典故詳かならず。又、觀音以外の社寺にても、これに倣ふものあり。例へば東京芝愛宕(アタゴ)神社のごときは、毎年六月二十四日と定めらる。

しまめ 縞目【名】縞の色と色との堺目。二蓋織りかけの縞目にかかるはつ袷」

しまめぐり 島廻・嶋廻【名】▣島を巡廻すること。 ▣〔動〕ちゅうさぎ(中鷲)に同じ。

しまめだけ 縞女竹【名】〔植〕女竹の一變種。白色の縦縞なるもの。

しまめなう 縞瑪瑙【名】〔鑛〕『英Onyx』瑪瑙の一種。色を異にせる部分が並行して、相重なるもの。

しまもず 島鵙・島百舌【名】〔動〕りうきうもず(琉球鵙)に同じ。

しまもの 縞物・島物【名】▣南蠻諸島より舶來せし品物。 ▣(縞)參照。「徳川時代の語」

しまもの 縞物【名】しまおりもの(縞織物)に同じ。

しまもめん 縞木綿【名】縞を織りだしたる木綿織。

しまもやう 縞模樣【名】模樣の縞なるもの。

しまもり 島守・嶋守【名】島を守る人。島の番人。 萬葉「やほかゆく島の眞砂もわが戀にあにまさらじか沖つしま守」

しまや 島屋・嶋屋【名】江戸日本橋濱戸物町にありし飛脚屋。佐内町の和泉屋、室町の京屋、西河岸の大坂屋等と共に、江戸の飛脚屋の有名なりしもの。代代、主人の名を佐右衛門といへり。 柳樽「あざっては側(ソバ)で見ますと島屋いひ」

しまやせん 島屋錢・嶋屋錢【名】寛永銅錢の一。正德の初に、京都島屋某の鑄造せしもの。

しまやぶり 島破・嶋破【名】流罪に處せられたる者の、密かにその島より遁れ出づること、又その罪人。しまぬけ。〔徳川時代の語〕

しまやま 島山・嶋山【名】島にある山。 萬葉「しま山に赤き橘うづにさし」

しまやまばた 島山畑・嶋山畑【名】島山にある畑。 太平記「人住まぬ島山畑や落つる雁」

しまよしたけ 島義勇【名】〔人〕肥前國佐賀の人。字は國華、通稱は圖右衛門。海軍監軍・陸軍參謀、また山形縣令に歴任す。明治七年職を辭して、國に歸り、江藤新平と共に亂を起し、捕へられて刑せらる。

しまより 島寄・嶋寄【名】空中に多くの水氣を含めるため、島の近く見ゆること。しまあそび。

しまらく 暫く【副】しばらく(暫く)に同じ。〔古語〕 萬葉「しまらくはねつつもあらむを夢のみにもとな見えつつあをねしなくる」

しまり 締【名】▣ゆるみなくなること。ゆとりなきこと。緊張。 ▣放埒(ホウラツ)なる行の止みて、眞面目になること。 浮世風呂「爺さまに早く別れたのが、あれが身のしまりをゑゐわ ろれるり ら よゆや もめむみま ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

にもなったのさ」 三 とりしまり。監督。四 しまつ。倹約。 五 すべくくり。統御。 六 しまり(戸締)に同じ。 締が無し【句】しだらなし。だらしなし。放埒(ハウラツ)なり。

しまりぞなへ 締備【名】軍の最後陣を取締る隊。「や。

しまりや 締屋【名】倹約なる人。しまつ

しまる 締る【動四自】 一 ゆるみ無くなる。 二 かたく結ばる。 三 とざさる。ふさがる。「木戸が締る」 四 放埒(ハウラツ)なる生活を止めて、眞面目になる。かたくなる。 五 相場あがる。ひきしまる。

しまる 締る【動四他】 一 かたく結ぶ。しばる。記「おほ君のみこの柴垣やふじまりしまりもとほし」 二 統べくくる。とりしまる。

しまろ 縞紹【名】縞を織出したる紹。縞模様のある紹織。

しまわ 島回・嶋回【名】島の斗囲し、或は灣入せる處。島のまはりの海。しまみ。「古語」萬葉「ももづたふ八十のしまわを漕ぐ船にのりにし心わすれかねつも」

しまわうごん 紫磨黄金【名】〔佛〕『孔融の聖人優劣論に「金之精者、曰二紫磨一、猶二人之有一聖也」とあるに本づく。紫は紫色、磨は垢濁なき義』すぐれたる黄金。しまごん。しこん。

紫磨黄金の膚(ハダ)【句】〔佛〕紫磨黄金の色をなせる膚。佛身の形容。さんじふにさう(三十二相)參照。太平記「肉身忽ちに變じて、紫磨黄金の膚となり」

しまね-そうしつ 島井宗室【名】〔人〕筑前國博多の富家。名は茂勝、通稱は德太夫。薙髪して、虚白軒端翁と稱す。呂宋・暹羅・支那・朝鮮などと貿易して、巨利を博す。茶技を宗易宗休に學び、大いに信長・秀吉に優遇せらる。元和元年歿す。年七十七。

しまね 縞繪【名】 一 隈取(クマドリ)るべき所を、細筆にて筋を引き、縞模様の如くせしよりいふ舶來の銅版畫。「江戸時代の語」 二 細巧なる人物畫。

しまをこぜ 縞虎魚【名】〔動〕だるまをこぜ(達磨虎魚)に同じ。「萬」を見よ。

しまをんせん 四萬溫泉【名】〔地〕しま(四)

しみ 蠹・衣魚・紙魚・蠹魚【名】〔動〕彈尾類に屬する昆蟲。棒狀にして、長さ二三分ばかり。翅無く、全體銀白色の細鱗を被り、觸角長く、體の末端等長なる三箇の毛尾あり。衣服・書籍などの間に生じてこれを食害す。きらきむし。しみむし。源氏「しみといふ蟲のすみかになりて」

(みし)

しみ 染【名】 一 染(シ)むこと。色の染まること。 二 物に染み汚れたる斑點。汚染。汚點。 三 皮膚に生ずる一種の斑點。紫黒黝黒(コクアク)・淡褐色などあり。

しみ 凍【名】こほること。凍氷。「古語」堀次「夕暮はみぞれにしみやとけぬらん垂氷づたひに雫おつなり」

しみ 試味【名】ためしに物を味ふこと。

しみ 至味【名】味の極めてうまきこと、又その物。

しみ 旨味【名】うまき味、又その物。

しみ 茂【副】茂きによりて。茂きために。「古語」萬葉「山をしみ入りても取らず」

じみ【名】 一 はでやかならぬこと。おとなしみ。質素。 二 健康。達者。丈夫。「奥州の方言」

じみ 滋味【名】滋養分を含める味。

しみ-いる 染入る【動四自】しみこむ(染込む)に同じ。

しみ-かへる 染返る【動四自】『かへる(返る)は接尾語』強く染む。「古語」 蜻蛉「御けはひにほひなど、しみかへらせたまへる」

しみ-こほる 凍氷る【動四自】 一 甚しく氷る。しむ。氷結す。「古語」 堀次「衣手の薄きや春の關ならんわが身はいとどしみこほりつつ」 二 不安・悲哀などのためにめいる。心中萬年草「さゝ證據を出せとあちければ、家内の上下しみこほり、二階には逃場もなく」

しみ-こみ 染込【名】しみこむこと。滲入。

しみ-こむ 染込む【動四自】深く染(シ)む。染みいる。滲入す。浸潤す。

しみ-こん 凍蒟【名】『次條の略』こほりごんにやく(氷蒟蒻)を云ふ。「甲斐國の方言」

しみ-ごんにやく 凍蒟蒻【名】こほりごんにやく(凍蒟蒻)に同じ。

しみ-さぶ 茂寂ぶ【動上二自】木など茂りてものさぶ。「古語」萬葉「大和の青香具山(カグヤマ)は…春山としみさび立てり」

しみ-しう 四味臭【名】「四味の臭を和する物の義』じゃかう(麝香)に同じ。

じみ-したたるし【形一】 したたるしを強めていふ語。心中實庚申「男色立て抜く詞の優しさ、そのいき方に尚なづむと、しみしたたるく取廻せば」

しみ-じみ 染染【貌】深く心に感じて。しんみり。つくづく。徒然「さし入りたる月の光も、一きはしみじみと見ゆるぞかし」浮世風呂「もうもう、しみじみしやだ」

しみ-たつ 茂立【動四自】茂りて立つ。「古語」萬葉「いもらがりいまきの峰にしみたてるつま松の木は古人見けむ」

しみ-たれ【名】 一 しわきこと。又その人。吝嗇。 二 根性の小さきこと。氣意地なきこと、又その人。

しみち 爲道【名】しかた(仕方)に同じ。

しみづ 清水【名】 一 『澄(ス)水の約か』湧出づる清き水。清泉。 拾遺「逢坂の關のしみづに影見えて今や引くらん望月(モチヅキ)の駒」 二 豆腐を搾りたるあとの汁。

しみづ 清水【名】〔地〕 一 尾張國西春日井(スガノイ)郡にある町。南は名古屋市に接す。 二 駿河國安倍郡にある町。靜岡市の東二里餘。巴(エ)川の河口。その前面は清水港と稱し、開港場として、東海岸に於ける良港なり。 三 〔地〕『延喜式に見ゆ』信濃國に在りし古驛。今の北佐久郡小諸(コモロ)町の邊なるべしといふ。堀次「おりたちて清水の里に住みぬれば夏をばよそに聞きわたるかな」 四 姓氏の一。德川家の一門。德川九代將軍家重の子重好、寶曆八年邸を清水門の傍に營て、清水と稱す。明治維新後、伯爵を賜はりしが、後故ありて、爵位を失ふ。

しみづ-たれ【名】 しみたれの訛。

しみづ-はまおみ 清水濱臣【名】〔人〕國學者。村田春海の門人。通稱は玄長。江戸の人。醫を業とし、江戸不忍の池邊に卜居し、泊泊舍(サヤサヤ)と號す。歌文を以て聞ゆ。文政七年歿す。年四十九。

しみづみなと 清水港【名】〔地〕しみづ(清水)二 を見よ。

しみづ-むねはる 清水宗治【名】〔地〕武人。長左衛門と稱す。小早川氏に屬し、備中國高松の城主たり。天正十年羽柴秀吉に圍まれ、防戰甚だ努めしが、秀吉甲部川の

しみつく 凍附く【動四自】こほりつく(氷附く)に同じ。「古語」 壬二「さゝの葉にしみつく霜のよをへてはみ山もさやに衣ぬぎなり」 異途雜脚「今朝の姿をそのなりに、素足に雪駄しみつけば、空に冥の一曇」

しみつく 染附く【動四自】染まり附く。深くそまる。

しみ-づく【動四自】 ぬれてじとじとする。心中丸は水の朔旦「見送る道もしみづきし草鞋に編笠の二人連、やあ平兵衛殿いかい暑さでござるの」

しみづ-くわんじや 清水冠者【名】〔人〕みなもとよしたか(源義高)の異稱。

しみづ-だうかん 清水道閑【名】〔人〕石州流茶人の名家清水氏の初世。京師の人。名は宗治。傳習庵と號す。初め片桐貞昌に學び、のち伊達氏に仕へて、仙臺風呂屋町に住みしより、風呂の道閑と呼ばれ、また古道閑とも稱せらる。慶安元年歿す。年七十。

しみづ-たに 清水谷【名】 一 〔地〕東京市麴町區紀尾井(キヲヰ)町辨慶橋内にある地。明治十一年大久保利通の、島田一郎等に殺されしところ。今、公園となり、八重櫻多し。 二 姓氏の一。本姓は藤原氏。西園寺公經の子實有を祖とす。子孫相繼ぎて、明治維新後、伯爵を授けらる。

しみ-つ-たる【動下二自】 一 鄙吝なる樣をいふ。浮世風「きたねえけちな手柄に、水が汲んであって、しみったれた小盥さ」 二 心小さくあり。意氣地なくあり。

水をその城に灌(ソソ)ぐに及び、一死以て城中の衆に代らんことを請ひ、秀吉の檢監使を迎へて、自刃す。年四十五。

しみづ-もん 清水門【名】〔地〕『昔、この邊より清水湧出でしによりていふとぞ』江戸城諸門の一。飯田町一丁目に在り、大手門の西北十一町、竹橋門の西北四町。

しみづ-りうけい 清水隆慶【名】〔人〕彫刻家。京都の人。寛永頃法眼に敍せらる。

しみづ-ろくべゑ 清水六兵衛【名】〔人〕陶工。攝津國嶋上郡五百住(イホヅミ)村の人。京都五條坂の清兵衛に學び、また信樂(シガラキ)の陶業をも修む。明和中、窯(カマ)を五條坂に開きて、茶器を製せり。應擧・吳春等と交遊す。寛政十一年歿す。年六十二。

しみ-どうふ 凍豆腐【名】こほりどうふ(氷豆腐)に同じ。

しみ-とほる 染徹る【動四自】■染込む。深く染み入る。しみわたる。■深く感ず。『萬葉』「戀しくにいたき我が身ぞいちじろく身にしみとほり」

しみぬき 染抜・汚點抜【名】織物等に附著せる汚點を取去りて、清淨にすること。

しみばいばい 試味賣買【名】〔商〕しけんばいばい(試驗賣買)に同じ。

しみみ 茂み【貌】しげくひまなきさま。しみら。〔古語〕『萬葉』「見まくほりわが待ちこひし秋萩は枝もしみみに花咲きにけり」

しみむし 蠹蝨【名】〔動〕しみ(蠹)に同じ。

しーみん 嗜眠【名】〔醫〕『羅 Sopor』病勢進みて、絶えず眠氣を催すこと。この一層重くして、意識を失へるを昏睡といふ。

しーみん 四民【名】人民の四階級、即ち士・農・工・商。

四民を外(ハヅ)る【句】士・農・工・商以外の遊民にてあり。『御所樣、四民をはづれ、野に遊びのほててんがう』

しーみん 士民【名】■士と庶民と。■士族と平民と。

しーみん 市民【名】市の中に住居せる人民。

しみ-もち 凍餅【名】氷らせたるかき餅。湯にひたし、砂糖などを掛けて食ふ。かきもち。こほりもち。

じーみやう 自名【名】おのれ。自分。『東鑑』「自名之課役、一切不レ致二其勤一」

じみやう-き 慈明忌【名】じふしちねんき十七年忌に同じ。

じみやうじ-やま 慈明寺山【名】〔地〕うねびやま(畝傍山)の俗稱。

しーみやく 支脈【名】■わかれたるすぢ。支線。■〔植〕『英 Veins』葉の中脈より分れ出でたる脈。『枝脈』

しーみやく 死脈【名】■死に近き脈搏。■不用物のみにて成れる鑛脈。

じーみやく 自脈【名】自ら已れの脈を取りて、病を察すること。『源氏十二段長生島臺』「自脈取るやら、もだくだと」

しみら 茂ら【貌】しみ(茂み)に同じ。〔古語〕『萬葉』「あかねさす晝はしみらにぬばたまの夜はすがらに」

じみる 染みる【接尾】その物事によく似寄る意。「年寄じみる」「學者じみる」

しみわたる 染渡る【動四自】しみとほる(染透る)に同じ。

しーむ 私務【名】一私人の仕事。(公務に對す)

しーむ 至務【名】至極のつとめ。

しむ 凍む【動四自】こほる(凍る)に同じ。『狹衣』「ひろごり降る雪、消えやるべくもあらずしみわたる」

しむ 染む【動四自】■そまる。そむ。『貫之集』「雨なれど時雨といへば紅に木の葉のしみて散らぬ日はなし」■深く入る。附著す。〔滲む〕『拾遺』「もみぢ葉に衣の色はしみにけり秋の山からめぐり來しまに」■深く感ず。思ひ込む。『源氏』「わが心ながら、いとかく人にしむ事はなきを」■身にこたふ。とほる。「親の意見と霜夜の鐘は五臟六腑にしみわたる」

しむ 染む【動上二自】前條に同じ。『源氏』「朝夕すずみもなき頃なれど、身にしむるここちして」

しむ 染む【動下二他】染(シ)むやうにす。〔古語〕『杜』「かうの香いみじうしめたる匂、いとをかし」

しむ 占む【動下二他】■わが物となす。領有す。■我が思ふままにす。占取す。占めた【句】次條の略。

占めたり【句】十分しとげたり。我が思ふままなり。しめた。

しむ 締む【動下二他】■ゆるまぬやうにす。堅く結ぶ。■塞ぐ。閉づ。『源氏』「やんごとなき御かたがたの、物見たまふとて、この戸口はしめたまへるなるべし」■おしつく。逼壓す。■きびしく監督す。きびしく取締る。■おさへ苦しむ。捉へてさいなむ。『浮世風呂』「今度、おめへが江戸詞を笑ったら、一番しめてやらうと思って、待ってたはな」■鳥などの喉を強く壓して殺す。くくる。■數をまとむ。合計す。■手を打つ。『素人狂言綾切形』「さあ、しめやせう。シャンと手を打ち…」

しむ 使む・令む【助動】他を使役して、動作せしむる意。す。さす。

じーむ 時務【名】當世に急要なる務。時勢に適應せる經世策。

じーむ 事務【名】取扱ふ仕事。しわざ。つとめ。

じーむ 寺務【名】■寺院の庶務。■興福寺の上首。大乘院と一乘院との住持、交番に補せらる。■大なる寺の統領の稱。『職原抄』「僧官位、寺務」

じむきてい 事務規定【名】じむしやうてい(事務章程)に同じ。

じむ-きよくはう 事務局報【名】局報の一。事務上に關して、電信局、その他郵便・官署相互間に往復するもの。

しーむく 仕向く【動下二他】『仕は爲(シ)の義』■相手をさし向く。しかく。■商品を、買人または賣人に向って發送す。

じむくわん 事務官【名】■長官に隷屬して、庶務を扱ふ補習官。奏任にて、樺太廳・北海道廳・府縣及び朝鮮總督府・臺灣總督府・關東都督府に各數名を置く。北海道廳の第一部長、府縣の警察部長たる事務官は、特に警務長と稱す。■規定せる法規の範圍内にて、行政事務を扱ふ官職。即ち内閣大臣と進退を共にせぬもの。(政務官に對して)

じーむけ 仕向【名】■しむくること。あつかひ。待遇。『俳諧古選(來山)』「わせ・おくて皆こちからの仕向なり」■商品等を先方へ宛てて送ること。

しむけ-かう 仕向港【名】航海業者に於ける、貨物・商品等を送り屆くる港。

しむけ-ぐち 仕向口【名】〔商〕簿記上、支店勘定の一。自店より勘定を起すこと。當方勘定。(被仕向口に對して)

しーむけげ 四無礙解【名】〔佛〕じむけち(四無礙智)に同じ。

しむけ-ち 仕向地【名】商品を仕向くる土地。注文品の發送先。

しーむけち 四無礙智【名】〔佛〕佛の有する四種の智、即ち一に法無礙智とて、一切法において、自在に分別了知する智、二に義無礙智とて、一切の義理に通達して、礙滯することなき智、三に辭無礙智又は詞無礙智とて、一切の言辭、即ち讀方の方言に通達する智、四に樂說無礙智とて、巧に言說を使用し、他をして、その說法を樂求愛敬する念を起さしむる智。この四無礙智を言說に表はす時は、四無礙辯又は四辯といふ。

じーむげべん 辭無碍辯【名】〔佛〕前條を見

じむくわん-ほ 事務官補【名】事務官の次位にありて、所管事務を掌る官吏。

じむくわんり 事務管理【名】〔法〕法律上の義務を有せずして、他人のために、事務を管理すること。民法上、契約不法行爲等と共に、債權發生の原因の一にして、本人の意思に反せずしてなしたる場合に、有益なる費用を出したる時は、本人にその償還を請求し、本人のために、有益なる債務を負ふ時は、本人にその辨償をなさしめ、又は擔保を供せしむるを得べく、この本人の意思に反してなしたる場合には、本人が現に受くる利益の限度において、償還又は辨濟をなさしむるを得。

じむくわんり-ちやう 事務管理長【名】その事務を管理する權限ある官廳。

じむくわんり-ちやう 事理管理廳【名】その事務を管理する權限ある官廳。

しーむけ 仕向【名】■しむくること。あつかひ。待遇。『俳諧古選(來山)』「わせ・おくて皆こちからの仕向なり」■商品等を先方へ宛てて送ること。

しむけ-かう 仕向港【名】航海業者に於ける、貨物・商品等を送り屆くる港。

しむけ-ぐち 仕向口【名】〔商〕簿記上、支店勘定の一。自店より勘定を起すこと。當方勘定。(被仕向口に對して)

しーむけげ 四無礙解【名】〔佛〕じむけち(四無礙智)に同じ。

しむけ-ち 仕向地【名】商品を仕向くる土地。注文品の發送先。

しーむけち 四無礙智【名】〔佛〕佛の有する四種の智、即ち一に法無礙智とて、一切法において、自在に分別了知する智、二に義無礙智とて、一切の義理に通達して、礙滯することなき智、三に辭無礙智又は詞無礙智とて、一切の言辭、即ち讀方の方言に通達する智、四に樂說無礙智とて、巧に言說を使用し、他をして、その說法を樂求愛敬する念を起さしむる智。この四無礙智を言說に表はす時は、四無礙辯又は四辯といふ。

じーむげべん 辭無碍辯【名】〔佛〕前條を見

じ-むげん 時無間【名】〔佛〕「五種の無間」を見よ。

じむ-しつ 事務室【名】事務を取扱ふ室。

じむ-しゃうてい 事務章程【名】各官廳に於ける事務取扱の手續を定めたる規程。事務規定。

しむしゅ-かいけふ 占守海峽【名】〔地〕『峽の字の音、正しくはかふ』占守島の東北端なる國端崎と露領カムチヤツカ(Kamchatka)の南端ロパトカ(Lopatka)岬とに挾まれたる海峽。古利留(クリル)海峽。

しむしゅ-たう 占守島【名】〔地〕千島列島の北端に在る島。我が領土中の最北端に位し、他の九島と共に占守郡に屬す。島形長方形にして、長さ七里半幅五里あり。臙虎(コウ)・膃肭獸(オツト)・黑狐を産す。

じむ-しょ 事務所【名】事務を取扱ふ所。

じむ-しょ 寺務所【名】寺務を取扱ふ所。

し-むしょね 四無所畏【名】〔佛〕**しむね**(四無畏)に同じ。

じむそうちやう 事務總長【名】關東廳に屬する高等官の一。民政部長を兼ね、關東長官を佐け、長官事故あるときはその職務を代理す。

しむそんせん シムソン線(英 Simson's line)【名】〔數〕『この連結線が必ず直線をなすことを初めて證明せし、英人シムソン(R. Simson)の名を冠らせしといふ』圓周上の一點より、これに內接する三角形の各邊に下せる垂線の足を連結する直線。

じむ-たんたうしや 事務擔當者【名】或事務を擔當する人。

じむ-ちやう 事務長【名】事務員を指揮して、その事務を總轄する人。「用。

じむひ 事務費【名】事務取扱に要する費

じむひきつぎ 事務引繼【名】後任者が前任者より、その擔當に屬する事務を受繼ぐこと。

しむら-にんじん しむら人參【名】〔植〕繖形(カサ)科に屬する二年生の草。濕地に自生す。莖の高さ二三尺、葉は細長く、夏季、白色の小花を開く。

し-むりやうしん 四無量心【名】〔佛〕十二門禪中の四禪。即ち一に慈無量心とて、能く樂を與かる心、二に悲無量心とて、能く苦を拔く心、三に喜無量心とて、人の離苦得樂を見て歡悅を生ずる心、四に捨無量心とて、如上の三心これを捨して心に存著せざること。四等。

し-むね 四無畏【名】〔佛〕佛又は菩薩が大衆の中に說法するにあたりて、畏るる所無き四種の事。佛の、一に一切智無畏(正等覺無畏)とて、佛自ら一切の智を具足するが故に、一切の智を畏れざること、二に漏盡無畏(漏永盡無畏)とて、煩惱(ナウ)を斷じ盡せるが故に、煩惱に對して畏れざること、三に說障道無畏(說障法無畏)とて、一切の邪法を畏れざること、四に說盡苦道無畏(說出道無畏)とて、一切の苦惱を畏れざること。菩薩のは、一に總持不忘說法無畏とて、よく教法を聞持し、衆義を憶持して忘れざるがためなること、二に盡知法藥及智衆生根欲性心說法無畏とて、藥に世間法・出世間法の一種あり、衆生の根欲性に種種あり、菩薩能くこれを了知するが故なること、三に善能問答說法無畏とて、一切の異見皆能く摧破し、一切の正法(シャウ)悉く能く成立し、無量の衆生一時に來って難問するも、悉く能く一時に酬對するが故なること、四に能斷物疑說法無畏とて、衆生間難するに、意に隨って、法如法に解說し、能く巧に衆生の疑を斷つ(これを能斷疑と名く)が故なること。四無所畏。

じむゐん 事務員【名】事務を取扱ふ者。

しん 神【名】一かみ。かみさま。鬼神。神明。狂言(こんくわい)「狐と申すは、みな神におはします」二靈妙なる威德。三こころ。精神。「神、相通ず」四神聖なること。五神道。

神飛び、魂驅す【句】恍惚として、心ここにあらず。**しんわう**(神往)參照。

神を驚かし、鬼(キ)を泣かしむ【句】鬼神をも感動せしむ。

しん 紳【名】支那にて、高貴の人の、朝服著用の時、腰を束ね、その餘を垂れて飾とする、幅廣き帶。おほおび。

紳に書す【句】『論語の衞靈公篇に「子張書二諸紳一」とあり』固く忘れざらんがために、紳に書附けておく。

しん 心【名】一こころ。二**しんざう**(心臟)の略。三むね。胸部。四物の中心となること、又その物。中心。中央。「筆の心」「心のある飯」五根幹。主要部。基礎。六その中の立物。「眞」船頭樣馬。おめへなんぞは、まあここの內での眞といふもんだから」七生花(イケバナ)の中心となる草木。狂言(心替)「今日は、東山へ花の心を取りに行かう」八**しんうち**(心打)の略。九二十八宿の一。東方にあるもの。なかご。大火。十眉に引く黛(マユズミ)。十一ランプ等の火を點ずるための、糸又は編みたる紐。

心も戀も無い【句】「性(サガ)も戀も無い」に同じ。〔諺語〕

しん 信【名】一欺かぬこと。まこと。信實。二五常の一。朋友の情の親密にして、相手を信じて疑はず、約したる義務を重んずること。本草「これ、仁・義・禮・智・信の法にはづる」三疑はぬこと。四信仰心。信心。五しるし。効驗。六たより。おとづれ。てがみ。書信。七あひづ。信號。八わりふ。符契。九つかひ。使者。十『左傳の莊公三年の條に「一宿爲レ舍、再宿爲レ信」とあり』二夜の宿泊。再宿。

心を打つ【句】寄席(ヨセ)などにて、心語(シンゴ)をなす。終末を勤む。

信あれば、徳あり【句】信仰心ある者は、徳行あり。〔諺語〕

信は莊嚴より起る【句】信仰心は莊嚴美より生ず。〔諺語〕

信を致す【句】「信を爲す」に同じ。大鏡「御心い、とどうるはしくおはします人の、信を致させたまひしかば」

信を措く【句】信用す。

信を起す【句】一信用す。徒然「あまりに深く信を起して」二信仰心を生ず。信仰す。徒然「おのおの拜みて、ゆゆしく信を起したり」

信を傳ふ【句】『穀梁傳の桓公四年の條、史記の三代世表等に見ゆ』信ずべき事を、現在未來の人に傳へ示す。

信を取る【句】『漢書の楚元王傳に「無レ所レ取レ信」とあり』信證とす。

信を爲す【句】信仰す。誠とす。信を致す。大鏡「信をなして聞きゐたり」

しん 新【名】一新しきこと。新しき物事。舊に對して)二今年あらたに收穫・發生・製造などしたること、又その物。「新茶」「新米」三**しんれき**(新曆)の略。(舊に對して)四(商)**しんかぶ**(新株)の略。(取引所の語)五支那の朝廷の名。前漢と後漢との間に、一時、王莽の漢土を簒奪して、天子と號せし時代。十六年間(我が國紀元三七—五二)にして滅ぶ。**わうまう**(王莽)參照。

しん 識【名】未來を判ずること、又その記錄。豫言。未來記。

しん 臣【名】君主に仕ふる者。「い。しんか。

臣を知るは君に若(シ)くは莫し【句】『韓非子に「知レ臣莫レ若レ君、知レ子莫レ若レ父」とあるに本づく』臣下の眞否を辨別するは、君主にまさる者なし。〔諺語〕

しん 箴【名】一**しんげん**(箴言)に同じ。二〔文〕漢文の一體。箴言を記したるもの。韻を踏むを例とす。

しん 眞【名】一いつはりにあらぬこと。實にてあらぬこと。まこと。夫子集「螢火で撫子見せよしんの闇(ヤミ)」二まじりけのなきこと。純粹。純眞。三常住不變なること。(假に對して)四天然自然のままなること。五眞實の道理。眞理。六道家にて、修行積りて、その道の成就すること。七眞書。楷書。「眞行(ギャウ)草(サウ)」八生花の形の一。最も形の正しく整ひたるもの。行(ギャウ)・草(サウ)に對して)九(美)日本畫にて、嚴格なる勾勒描法。「眞行草」

しん 簀【名】一**しんげん**(箴言)に同じ。二

眞の漆【句】まぜ物なき漆。幸若舞曲 景清「こつがい人のまなびをし、しんのうるしをかい取って、つぎの五體にしっかとさす」

眞の飾【句】重き祝日などに、書院に花瓶・燭臺・香爐の三具足及び喚鐘(シュシン)・拂子(フッス)を飾ること。

眞の建仁寺垣【句】垣と同じ竹にて、兩袰を附けたる建仁寺垣。(草の建仁垣に

對して）

眞は立つが如し【句】『東坡志林に「眞生レ行、行生レ草、眞如レ行、行如レ草、草如レ走」とある事に本づく』眞書は、その勢、人の立てるに似たり。〔諺語〕

眞を保つ【句】『楚辭の卜居篇、漢書の藝文志等に見ゆ』天より付與せられし眞性を失はぬやうにす。天眞を保持す。

しん 瞋【名】〔佛〕三業(サンゴウ)の一。いかり。うらみ。にくみ。嗔恚(イ)。

しん 親【名】■したしきこと。したしき交。■おや。父母。■みうち。親族。

親は泣寄(ナキヨセ)【句】次條を見よ。〔諺語〕長町女腹切「佛神のお蔭ぞと意見に、親は泣寄の二人が肝に應へつつ」

親は泣寄、他人は食寄(クヒヨセ)【句】凶事の場合は、親身の者は、哀悼のため寄り集るも、他人はこれと反對にて、樂しき時より外、寄りつくものでなし。〔諺語〕

しん 身【名】■からだ。み。身體。■〔佛〕

しんごふ(身業)を見よ。

身・口(ク)・意の三業【句】〔佛〕**さんごふ**(三業)を見よ。

身・言・書・判【句】身體と言辭と筆跡と文章と。支那唐代に、官吏登庸の標準とせしもの。

しん 寢【名】いぬること。ねること。ねどこ。寢處。「寢に就く」

しん 辛【名】十干の一。かのと。

しん 申【名】十二支の一。さる。

しん 辰【名】十二支の一。たつ。

しん 進【名】皇太后宮職・皇后宮職・春宮坊の判官。大と少とに分てり。

しん 脣・唇【名】くちびる(脣)に同じ。「じゅんを反(カヘ)す【句】「脣(ジュンシ)を反す」に同じ。

しん 軫【名】■車の床縛(バトラシ)の上に加へたる横木。■二十八宿中の一。みつつち。

しん 參【名】二十八宿の一。からすき。

しん 震【名】八卦の一。その符號は☳。

しん 疹【名】〔醫〕皮膚に特發性又は續發性に生ずる一小部の異常物。その色・光澤及び隆起の狀により、丘疹・斑疹・水疱疹など、種種の區別あり。

しん 晉【名】■支那の朝廷の名。分れて、西晉・東晉の二となる。各その條を見よ。■**こうしん**(後晉)を見よ。

しん 秦【名】■支那の朝廷の名。西戎より起り、その王、政の時、次第に六國を平げて、天下を一統し、三十六郡を置き、中央集權の政を行ひ、始皇帝と稱せしが、僅かに三世にして、楚漢に滅さる。我が國紀元四〇年より四五五年まで。贏秦(エイシン)。■**ぜんしん**(前秦)を見よ。■**こうしん**(後秦)を見よ。

しん 清【名】支那の朝廷の名。滿洲長白山下より興り、明の萬曆四十四年に皇帝の位に卽き、十一世に傳へて亡ぶ。(我が國の紀元二二七六年より二五七九年まで)

しん 臣【代】君主に對する家來の自稱。

しん 【貌】靜まりかへりたるさま。ひっそり。森閑。

じん 仁【名】■博く愛する心。めぐみ。あはれみ。仁愛。同情。■孔子の、最高至善の德とせしもの。愛の理體。■じんじゃ(仁者)に同じ。■ひと。にん。「人」盛衰記「東大寺の大勸進の仁、誰れにか仰せ附くべき」

宋襄の仁【句】『左傳の僖公二十二年の條に見ゆ』■支那春秋の世に、宋の襄公の、敵國楚を憐み、その備無きに乘ずるの、敵國楚を憐み、その備無きに乘ずるは仁にあらずとて、攻めざりしため、却つて大敗せし故事。■無益なる慈悲。

じん 腎【名】じんぞう(腎臟)の略。

じん 杜松子酒(英 Gin)【名】ブランデエの一種。大麥又は麥芽・馬鈴薯・果實を醱酵せしめ、杜松子(トショウシ)の搾汁と少量のテレピン油及びホップをも加へて、香味を添へしもの。和蘭(オランダ)にて、多量に製せらる。

じん 仞【助數】『釋文に「仞七尺也」、小爾雅に「四尺曰レ仞、倍レ仞謂二之尋一」、漢書の應邵傳の註に「五尺六寸曰レ仞」とあり』高さ又は深さの單位。尺の七倍。一說に、尺の四倍なりとも、五尺六寸なりともまた八尺なりともいふ。

じん 尋【助數】『周禮地官媒氏註に「八尺曰レ尋、倍レ尋曰レ常」とあり』長さの單位。尺の八倍。ひろ。

しんあい 親愛【名】したしみいつくしむこと。極めて睦しきこと。「こと。

しんあい 信愛【名】信用していつくしむこと。

しんあい 深愛【名】深く愛すること。

じんあい 仁愛【名】めぐみいつくしむこと。

しんあう 新鶯【名】初春に囀る鶯。

しんあう 深奥【名】おくぶかきこと。容易に窺ふべからざること。蘊奥。

しんあう 神奥【名】神祕にして、深奥なること、又そのもの。

しんあう 震央【名】〔地〕『英 Epicentrum』震源の直上に當る、地表の一部。通常、震動を感ずること最も早く、且つ最も強く、又主として、上下動を感ず。

しんあん 診案【名】診察して、その病狀を調ぶること。

しんあん 新案【名】新しき工夫。「味。

しんあん 審案【名】しらべだすこと。吟井白石と安積(アサカ)澹泊との往復の手簡を集めたるもの。二卷。立原(ハタチ)翠軒の編。

しんあんしゅかん 新安手簡【名】〔書〕新

しんあんとくきよ 新案特許【名】こっちょう

しんあんそろく(實用新案登錄)の俗稱。

しんあんりゅう 新安流【名】〔佛〕じゃうどん(淨嚴)を見よ。

しんい 新意【名】新しき意義。新しき「意匠。

しんい 宸意【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の御意。宸旨。

しんい 深意【名】ふかきわけ。

しんい 眞意【名】まことの心。

しんい 心意【名】■こころ。精神。■『英 Mind』個人の意識作用、及びこれを制約する性向の併稱。精神。

しんい 鍼醫【名】はりい(針醫)に同じ。

しんい 神醫【名】治術の神の如き効驗ある醫師。名醫。

しんい 神異【名】人間業ならぬこと。ふしぎ。正統記「渡唐の時にも、或は五筆の蠻を施し、樣樣の神異ありしかば」

しんい 神意【名】神のおぼしめし。神の「心。

しんい 新衣【名】新しき衣服。

しんい 深衣【名】『禮記に「朝玄端、夕深衣」とあり』儒者の衣服。

しんい 寢衣【名】ねまき。

しんい 襯衣【名】はだぎ。襦袢。

しんい 嗔恚・瞋恚【名】■いかり。いきどほり。■〔佛〕『梵 Krodha (訖羅陀)の譯語。恚は、瞋の字の韻に引かれて、ニと發音することあり』三毒の一、また十種煩惱の一。怒り又は恨むこと。謠曲(朝長)「いまだ嗔の甲冑の御有樣ぞいたはしき」

瞋恚の角(ツノ)【句】瞋恚の恐ろしきさまを形に譬へていふ語。室町千鳥數「迷に迷ふ瞋恚の角の枝高き、梅が枝なにと」

瞋恚の毒蛇【句】〔佛〕嗔恚の、己が心を苦しむるを、毒蛇の嚙むに譬へていふ語。傾城佛の原「戀の一念、盃の影暗き夜に、嗔恚の毒蛇くるくるくるくる」

瞋恚の炎(ホムラ)【句】〔佛〕瞋恚の身心を熱惱して苦しむることを、炎に譬へていふ語。嗔火。

瞋恚の角(ツノ)【句】〔佛〕前條に同じ。謠曲(葵上)「今の恨はありし報。瞋恚のほむらは身を焦す」

瞋恚を燃やす【句】嗔恚を炎に譬ふるよりいふ。前條參照。蘆葉數「われも嗔恚を燃やしたり」

じんい 人意【名】人のこころ。人心。

人意を強くす【句】人に氣强き思をせさす。

しんいう 深憂【名】深き憂。非常の心配。

しんいう 神佑・神祐【名】神の助。天佑。「と。冥助。

しんいう 神遊【名】精神の拔けいづること。

しんいう 親友【名】したしき友だち。

しんいう 心友【名】同心の親友。心の友。(面友に對して)

しんいう 宸憂【名】天皇の御心配。

しんいう 宸遊【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の御遊。

しんいう 軫憂【名】『軫は楚辭九章に「心

鬱結而紓軫」とある軫にて、隠曲の義。また楚辭九章の「甾二國門一而軫懷」とある條の王逸の註に「軫痛也、懷思也」とあり。**しんたう**【軫悼】**しんねん**【軫念】參照』心にわだかまるうれひ。心いたみうれうること。

しんい-くわがく 心意科學【名】〔哲〕**せいしんくわがく**(精神科學)に同じ。

じんい-しゃくわい 人意社會【名】**せいしゃくわい**(政治社會)に同じ。

しんい-せつ 神意說【名】『英 The theory of divine institution』國家又は法律は神意によりて成立すといふ學說。猶太(ヤダ)教の教ふる所は、その最も著しき例なり。

しんい-ちぶぎん 新一分銀【名】■新に發行したる一分銀。■**あんせいいちぶぎん**(安政一分銀)に同じ。

しんい-ちぶばんきん 新一分判金【名】■新に發行したる一分判金。■**まんえんいちぶばんきん**(萬延一分判金)の別名。

しんい-っしゅぎん 新一朱銀【名】■新に發行したる一朱銀。■**かえいいっしゅぎん**(嘉永一朱銀)に同じ。

しんい-ふ 深揖【名】禮式の一。手に笏を執り、腰を折りて、俯伏すること。(閑揖に對して)

しんいん 眞因【名】眞實の原因。

しんいん 親姻【名】■親族と姻族と。■えんつづき。姻戚。

しんいん 信印【名】しるしの印。

しんいん 浸淫・浸婬【名】■ひたること。ひたすこと。■おぼれすさむこと。恥溺。

しんいん 心印【名】〔佛〕『禪宗にては、不立文字を主意とする心が直ちに佛法の實義を印可する意にていふ』眞理に徹底したる、內心の實證。佛心印。(主に禪宗にていふ) 書簽箚 心印は摩訶迦葉(マカカ)に

しんいんぎん 新印銀【名】正德年間に改鑄し、寶曆十年まで通用せし印銀。その一匁は三十六文(一に四十八文)に通用せり。

しんいんぐわものがたり 新因果物語【名】〔書〕『これより先、鈴木正三の因果物語あるによりていふ』**ほんてうにじふかう**(本朝二十不孝)を見よ。

しんいん-さう 浸淫瘡・浸婬瘡【名】初はあせものの如く小さくして痒く、後に痛みて、液流れいでて、肌を浸潤し、終に全身に擴がる瘡。しんみざう。 伊呂波字類 浸淫瘡(シンヨウ)

しんいも 新芋【名】その年に植ゑて、その年に收穫したる薩摩芋・里芋など。

じんう 甚雨【名】**おほあめ**(大雨)に同じ。

じんう 腎盂【名】〔醫〕『英 Pelvis』腎門の內方に存する腔所。腎細管より生ずる尿は、ここに集まりたる上、輸尿管によりて、膀胱に送らる。腎腔。腎盞。

しんうすゆきものがたり 新薄雪物語【名】淨瑠璃の一。寬永頃の假名草紙薄雪物語によりて作れるもの。五に相手の子と娘とを落しやりたる園都兵衛と幸崎伊賀守とが薩腹を切り、兵衛の妻梅の方と三人にて悲痛なる笑をなす一齣。三人笑と稱して、名あり、文耕堂・三好松洛・小出雲等合作。

しんうち 心打・眞打【名】『心は中心の義、打はうつ(打つ)㊥を見よ』落語・講談などの一座の中にて、技倆最もすぐれ、一座の最後に出演する主腦者。しんとり。

しんうん 進運【名】進みゆく機運。進みゆく世運。

しんえい 眞影【名】まことのすがた。寫眞。

しんえい 神影【名】神の影像。みえい。

しんえい 宸影【名】天皇の御畫像。天皇の御寫眞。

しんえい 心影【名】〔理〕**ほんえい**(本影)に同じ。

しんえい 神裔【名】神の子孫。神の血統。神孫。

しんえい 神詠【名】神の詠みたまひし歌。

じんえい 人影【名】人の姿。ひとかげ。

しんえう 深窈【名】**しんおう**(深奥)に同じ。

しんえう 心要【名】〔佛〕法門の極致。

しんえき 津液【名】■津津とにじみ出づる液。■つばき。唾液。

しんえき 宸掖【名】『**しんきん**(宸襟)を見よ』天皇の御催しの酒宴。太平記・清涼殿にして、和歌の宸宴これありと雖も」

じんえん 人烟・人煙【名】■人家の竈より立つ烟。炊煙。■人家。戶數。

じんえん 腎炎【名】〔醫〕**じんさうえん**(腎臟炎)に同じ。

しんえんげき 新演劇【名】■現代を寫實的に演ずる旨を標榜して起りたる芝居。新派劇。(舊演劇に對して) ■新しき脚本によりて行ふ演劇。「略。

しんおほしま 新大島・新大嶋【名】次條の如き新大島絣・新大嶋絣【名】大島絣に似せて織りたる木綿まじりや。水驛。

しんえき 神易【名】神意によりて現るるもの。

じんえき 尋繹【名】たづねしらぶること。調査し研究すること。

しんえつ 親閱【名】親しく檢閱すること。

しんえふ 新葉【名】新しく生じたる葉。わかば。嫩葉。

しんえふ 心葉【名】**こころば**(心葉)に同じ。日本振袖始「錦のきせなが・銀の心葉鬢づらに取って附け」

しんえふ 針葉・鍼葉【名】〔植〕針形の葉、卽ち松・杉などの葉。(闊葉に對して)

じんえふ 腎葉【名】〔植〕腎臟形の葉。

しんえふじゅ 針葉樹・鍼葉樹【名】〔植〕針葉を有する木の總稱。卽ち松・杉などの類。(闊葉樹に對して)

しんえふじゅし 針葉樹脂【名】〔植〕針葉樹の脂。

じんえふすいば 腎葉酸模【名】〔植〕**まるばぎしぎし**に同じ。

しんえふわかしふ 新葉和歌集【名】〔書〕弘和元年宗良親王の撰みたまひし歌集。二十卷。元弘以後弘和まで、殆ど五十年間の歌を集めたるものにて、後龜山天皇、これを勅撰集に準ぜられたり。

しんえふわかしふさくしやぶるゐ 新葉和歌集作者部類【名】〔書〕新葉和歌集の作者を部類して、その略傳を掲げたるもの。一卷。榊原忠次の編。

しんえん 親緣【名】■親類の緣。■近き血統。「血統。

しんえん 宸宴【名】『**しんきん**(宸襟)を見よ』天皇の御催しの酒宴。太平記・清涼殿にして、和歌の宸宴これありと雖も」

じんえん 人烟・人煙【名】■人家の竈より立つ烟。炊煙。■人家。戶數。

じんえん 腎炎【名】〔醫〕**じんさうえん**(腎臟炎)に同じ。

しんえんげき 新演劇【名】■現代を寫實的に演ずる旨を標榜して起りたる芝居。新派劇。(舊演劇に對して) ■新しき脚本によりて行ふ演劇。「略。

しんおほしま 新大島・新大嶋【名】次條の如き新大島絣・新大嶋絣【名】大島絣に似せて織りたる木綿まじりの織物。しんおほしま。

しんおほはん 新大判【名】次條の略。

しんおほばんきん 新大判金【名】■新に發行したる大判金。新大判。■**まんえんおほばんきん**(萬延大判金)に同じ。

しんおん 神恩【名】**しんけい**(神惠)に同じ。

しんおん 新音【名】あらたなる音。新聲。

しんおん 心音【名】〔醫〕『英 Sounds of heart』心臟の鼓動の音。心室の收縮期と同時に發する筋音と、半月瓣閉鎖の際に生ずる瓣音との二種ありて、心臟部に耳を觸るれば、前者は鈍くして長く、後者は淸くして短く聞ゆ。

しんおん 脣音【名】〔語〕■音韻學上、七音の一。悉曇(シツ)には淸音 p・次淸音 p'(ph)・濁音 b・次濁音 b'(bh)・淸濁音 m の五種ありて、すべて破裂音なれど、支那には、P(字母は幫)・P'(字母は傍)・b(字母は並)・m(字母は明)の破裂音以外、なほ淸音 f(字母は奉)・淸濁音 m(字母は微)なる摩擦音の脣音ありて、前者を脣音重、後者を脣音輕として區別す。■『英 Labial』讀音學上、氣息が兩脣の間を通過する時に生ずる破裂音。卽ち、ば行・ば行兩者の子音の類。また脣的鼻音なる、ま行の子音をも包含していふ。兩脣音。**しんおん**(脣脣音)參照。

じんおん 仁恩【名】仁を垂れ、恩を施すこと。なさけ。

しんおんめし 新御召【名】御召縮緬に似せて織りたる木綿まじりの織物。

しんか 臣下【名】家來。臣。㊟『臣下といふものは、君の若くおはします御心の、おろそかにおはします時こそはべれ』

しんか 神歌【名】■**かみうた**(神歌)に同じ。■平安朝の末より鎌倉・室町時代頃まで存せし謠物の一種。三謠曲にて、翁の曲の稱。

しんか 身價【名】■身を賣ふ代金。みのしろ。■技倆の價値。手腕の價値。

しんか 新家【名】新に建築したる家。新屋。

しんか 心下【名】〔醫〕**しんくわ**(心窩)に同

しんか 眞個・眞箇【名】しんこ(眞箇)に同じ。「りと。

しんか 眞假【名】眞と假と。まことと、かり。

しんか 眞價【名】眞實の價値。

しんか 親家【名】しんるゐ(親類)に同じ。

しんか 請假・請暇【名】〔佛〕『請は漢字の宋音』暫く暇を請ひて外出すること。〔禪宗の語〕

しんが 新芽【名】新しき芽。じんめ。

しんが 神我【名】〔佛〕『我體常眞にして、靈妙なればいふ』外道所執の實我。

しんが 眞我【名】〔佛〕まことの我(ガ)。涅槃(ネハン)の我德。(妄我に對して)

じんか 人家【名】人の住む家。井筒業平河内通「人家の煙道絶えて、朝來一片の霞をのむ」

しんかい 神階【名】朝廷より神に授くる位階又は勳位。位田を寄せらるるを例としたり。かみかうぶり。神位。「簽規。

しんかい 箴誡【名】いましめ。こころえ。

しんかい 心界【名】心の範圍。心の世界。

しんかい 身界【名】〔佛〕『界は分の意にて、佛の身分の義』ぶっしゃり(佛舍利)に同じ。

しんかい 深海【名】ふかき海。〔地〕『英 Deep sea』海中の臺原より一層深度を增したる處。凡そ深さ二百メエトル以上をいふ。(淺海に對して)

しんかい 申解【名】申(ノ)べ解くこと。いひわけ。『駿耕錄に「有二脇路申解一到レ省誤漏聖宇一褒吏指爲二不敬一」とあり』天子に地方の事狀を申し上ぐる書。

しんかい 新戒【名】〔佛〕新に戒を受けて剃髮すること。運歩色葉集「新戒、シンカイ」

しんかい 新開【名】新に開墾すること、又「その土地。

しんかい 信海【名】〔佛〕信心の功德の廣大無邊なるを海に譬へていふ語。

しんかい 信海【名】〔人〕京都の清水寺成就院の勤王僧。兄月照の後を繼きて、同院に住す。安政中、外船の事起るや、法を修して、攘夷を祈り、事天聽に達し、寢感を辱うせしが、幕府に聞えて捕へられ、安政六年獄中に寂す。年三十九。

しんがい 津涯【名】水きは。きし。ふなつき。淳涯。

しんがい 震駭【名】ふるひおどろくこと。

しんがい 侵害【名】〔法〕他人の權利を無視して、その範圍内に踏入り、損害を蒙らしむること。

じんかい 人界【名】人間の世界。にんがい。「じ。

じんかい 滓涯【名】しんがい(津涯)に同

しんかいがく 心界學【名】せいしんくわがく(精神科學)に同じ。(物界學に對して)

しんかいぎょ 深海魚【名】〔動〕大洋の深所に棲息する魚類の總稱。例へば銀鮫・ばらむつ・あかうめぬけ等の類。

しんかいせん 深海線【名】海底電線の一種。深海に用ふるもの。(淺海線に對して)

しんかいたいせきそう 深海堆積層【名】〔地〕深海の底に堆積して生ぜし地層。

しんかいち 新開地【名】〔法〕新に開墾したる土地。新に開けたる市街地又は町村。

しんかいめんそねんき 新開免祖年期【名】〔法〕官有の水面を埋め立てて、民有としたる土地に許可する、五十箇年以內の免租年期。

しんかう 深坑【名】底の深き穴。

しんかう 深更【名】よふけ。深夜。盛衰記「夜は深更になりぬ。人は、鳴をしづめたり」

しんかう 深谷【名】奥深きたに。

しんかう 深耕【名】田畑を深く耕すこと。

しんかう 深交【名】ふかき交際。

しんかう 進講【名】『講を進むる義』貴人のために、書を講ずること。御前講義。

しんかう 神幸【名】神のいでますこと。神體を他所に遷し奉ること。太平記「神幸に恐を成し奉る故なり」

しんかう 神交【名】精神と精神との感應すること。「進。

しんかう 進行【名】すすみゆくこと。行

しんかう 信仰【名】〔佛〕信心の功德の廣大無邊なるを海に譬へていふ語。

しんかい 信海【名】〔人〕京都の清水寺成就院の勤王僧。兄月照の後を繼きて、同院に住す。安政中、外船の事起るや、法を修して、攘夷を祈り、事天聽に達し、寢感を辱う

じんかい 滓涯【名】しんがい(津涯)に同

しんかいがく 心界學【名】せいしんくわがく(精神科學)に同じ。(物界學に對して)

しんかいぎょ 深海魚【名】〔動〕大洋の深所に棲息する魚類の總稱。例へば銀鮫・ばらむつ・あかうめぬけ等の類。

しんかいせん 深海線【名】海底電線の一種。深海に用ふるもの。(淺海線に對して)

しんかいたいせきそう 深海堆積層【名】〔地〕深海の底に堆積して生ぜし地層。

しんかいち 新開地【名】〔法〕新に開墾したる土地。新に開けたる市街地又は町村。

しんかいめんそねんき 新開免祖年期【名】〔法〕官有の水面を埋め立てて、民有としたる土地に許可する、五十箇年以內の免租年期。

しんかう 深坑【名】底の深き穴。

しんかう 深更【名】よふけ。深夜。盛衰記「夜は深更になりぬ。人は、鳴をしづめたり」

しんかう 深谷【名】奥深きたに。

しんかう 深耕【名】田畑を深く耕すこと。

しんかう 深交【名】ふかき交際。

しんかう 進講【名】『講を進むる義』貴人のために、書を講ずること。御前講義。

しんかう 神幸【名】神のいでますこと。神體を他所に遷し奉ること。太平記「神幸に恐を成し奉る故なり」

しんかう 神交【名】精神と精神との感應すること。「進。

しんかう 進行【名】すすみゆくこと。行

しんかう 信仰【名】〔佛〕信心の功德の廣

信。〔宗〕宗教上の客體を信ずること。宗教に歸依(エ)すること。信心。

しんかう 信向【名】『漢書の韓延壽傳、後漢書の寂衡傳等に見ゆ』他人を信じ尊びて、その道に歸向すること。

しんかう 親交【名】親しき交際。

しんかう 親幸【名】親近して、寵愛すること。「こと。

しんかう 親好【名】親しくして、仲の好き

しんがう 信號【名】あひづの符號。合圖。

しんがう 神號【名】神の名稱。嚴峨天皇甘露雨「願主の名字なければ、綸旨にもあらず〻神號ならねば、額共見えず」

しんがう 深濬・深壕【名】ふかきほり。

じんかう 仁孝【名】〔儒〕仁惠と孝行と。〔じ。

じんかう 仁心ありて、孝行なる と。

じんがう 賢腔【名】〔醫〕じんう(腎盂)に同じ。

じんがう 人豪【名】器量のすぐれたる人物。人傑。

しんがうき 信號機【名】列車の運轉に際し、危害の有無を知らしむる機械。種種あれども、構內信號機・構外信號機・出發信號機などに區別す。

しんがうき 信號旗【名】信號として用ふる見物席の一。東西の下桟敷(シタザヂキ)。外籬(ソト)の次。「心。

しんかうしん 信仰心【名】信仰する心。信

しんかう-ていし 進航停止【名】平時に海賊船の疑ある船舶、又は戰時に封鎖違反・禁制品輸送等の疑ある中立船、又は或船舶が、敵船として捕獲すべきものにあらざるかを檢査するために、停船を命ずること。

しんかう-てつがく 信仰哲學【名】『獨 Glaubensphilosophie』獨逸にて、啓蒙時代に於ける、理性を偏重する哲學の反動として、信仰に基きて、根本眞理を立てんとせし一派の哲學。その代表者は、第十八世紀末における獨逸のハマン(J. G. Hamann)・ヘルデル(J. G. Herder)・ヤコビ(F. H. Jacobi)など。

しんかうど 眞高度【名】〔天〕『英 True altitude』地球の中心より見たる天像の高度。視高度に視差及び濛氣差の加正を加へたるもの。

しんがう-はう 信號報【名】船舶通報の一。船舶所有者、又はその代理人と船長との間に行はるる通信。特に指定する燈臺にて、その沿海を通過する船舶と、信號によりて送受せらる。

しんがう-はうち 信號報知【名】信號を用ひて報知すること。

しんがうふ 信號夫【名】信號に從事せし海軍卒。明治十五年置かれ、同十七年廢せられたり。

しんがう-へい 信號兵【名】信號に關する事務に從事する海軍卒。一等より五等までの階級あり。「しるし。

しんがう-へう 信號標【名】信號に用ふる

しんがう-らっぱ 信號喇叭【名】信號のために吹奏する喇叭。

しんがう-れう 信號料【名】信號報の料金。

しんがき 眞書【名】細字の楷書を書くに用ふる筆。しんかきふで。

しんかきふで 新書筆【名】前條に同じ。

しんかく 新客【名】しんきゃく(新客)に同じ。「て。

しんかく 新格【名】新しく定めたるおきて。

しんかく 眞角【名】能樂(ノウ)の假面(メン)の一。「鐘馗」「鵜」などに用ふ。

(くかんし)

しんかく 眞覺【名】〔佛〕佛の究意(クウ)の覺悟。(相似覺・隨分覺に對して) 「と。

しんかく 審覈【名】くはしく取調ぶること。

しんかく 秦樂【名】秦の歸化人の傳へたりといふ雅樂。

しんがく 清樂【名】せいがく(清樂)に同じ。

しんがく 深窒【名】しんこく(深谷)に同じ。

しんがく 進學【名】學問を勵まし進むること。

しんがく 新學【名】〔佛〕新しき學問。〔支那隋唐の代の音樂。(古樂に對して)

しんがく 新樂【名】〔佛〕しんぼっち(新發意)に同じ。

しんがく 新樂【名】〔佛〕あたらしき音樂。

しんがく 晨嶽・晨岳【名】『晨は朝日の出づる方。即ち東の義』東方の山。盛衰記「日、晨岳に出づれば、龍樓・竹園の莚しき興を忘れず」

しんがく 心學【名】㊀心より學ぶこと。㊁享保年中に、石田梅巖の創めたる通俗なる道徳説。陽明學を基とし、神道・儒道の教旨を融化して、平易に説きたるもの。天明中、手島堵庵・中澤道二により て、盛んに行はるるに至れり。道話。道學。

しんがく 神學【名】『英Theology』㊀神を、組織的に研究する科學。㊁〔基〕キリスト教を組織的に研究する科學。

じんがく 人格【名】㊀人がら。人品。㊁〔哲〕『英Person又Personality』意識の、内容は時時變化するに拘らず、智的又は感情によりて統一せられ、道徳上、責任ある行動をなす個體。**じが**(自我)參照。㊂〔法〕『英Person又Personality』各人が社會の一分子として、侵すべからざる自由・自存・獨立の目的を達し得る權利の主體。

人格の障害【句】〔哲〕『英Disorders of personality』記憶の連續及び人格統一の意識の、多少侵害・破壞せられたる狀態。

人格の分裂【句】〔哲〕『英Division of personality』『自我の分裂』に同じ。

人格の變換【句】〔哲〕『英Alternation of personality』人格の障害の一。一定時期の間と他の一定時期の間との意識又は精神流動の狀態の全く相異なりて、これらの二時期の交互に起ること。自我の變換。

しん-がくかう 神學校【名】『英Theological seminary』神學を教授する學校。

じんかく-か 人格化【名】〔哲〕『英Personification』人間以外の事物に、人格の特性中の或物、若しくは、その全部を歸すること。人類以外の事物を、人類の如く情意あるものと見做すこと。

じんかく-けん 人格權【名】〔法〕『獨Persönlichkeitsrecht』人身權の一。自己の人格に伴ふもの。生命權・身體權・自由權・名譽權・氏名權・肖像權に分つ。各その條を見よ。

じんかく-さりつ 人格差律【名】『英Personal equation』㊀〔天〕天文の觀察の際、人人によりて、時間の計定に一定の差誤あること。㊁〔哲〕個人の性癖又は特殊性に基いて、觀察したる結果と眞實との差異あること。

じんかく-しんけう 人格神敎【名】〔哲〕いうしんけう(有神敎)に同じ。

じんかく-せい 人格性【名】〔哲〕『英Personality』人格の有する屬性、即ち理性・自己意識・自己決定の類。

じんかく-せつ 人格說【名】〔哲〕『英Personalism』すべてを人格的に解して、あらゆる現實體は、人格性を有すと說く學說。スエエデンのボストレエム(Bostrom)の說のごとき、これなり。

じんかく-てき 人格的【貌】〔哲〕『英Personal』人格の性質を有するさま。

しんかげりう 神陰流【名】上泉秀綱を祖とする劍法の一派。

しんかげりう 新陰流【名】柳生(ヤギフ)宗嚴(ムネヨシ)より出でたる劍法の一派。

しんかげりう 眞陰流【名】天野忠久を祖とする劍法の一派。

しんか-しゃ 請客侍者【名】〔佛〕『しんか』は請客の宋音』禪寺にて、住持の私客に接待する役僧。

しん-かせうき 新可笑記【名】〔書〕『これより先、如儡子の可笑記あるによりて名づく』武道傳來記・武家義理物語と同じく、士人の心掛となるべき小話を記したるもの。五卷。井原西鶴の著。

しん-がた 新形【名】新しき樣式を具へたるもの。

しん-かたかな 眞片假名【名】楷書の漢字に片假名を交へたる書法。「ること。

しん-がだり 心語・眞語【名】心打(シンダ)の語(ゴ)う(澁河烏)に同じ。

しんかーてう 澁河烏・澁河鳥【名】しふかてう(澁河烏)に同じ。

しんかーでん 神嘉殿【名】宮中にて、社稷の神を祭る所。古は大內裡の中和殿の正殿をいへり。

しんかは 新川【名】〔地〕東京市京橋區靈巖島の一部。攝津國灘(ナダ)の酒を賣捌く酒問屋多く住せり。柳樽「新川は上戶の建てた藏ばかり」

しん-がひ 眞貝【名】〔動〕あこやがひ(阿古屋貝)に同じ。「じ。

しん-かふ 親狎【名】したしみ狎(ナ)るること。親近。「略。

しん-かふ 新甲【名】しんかふきん(新甲金)の略。

しん-かふ 新株【名】株式會社又は株式合資會社が、その資本を增加する場合に、新に募集する株式又は株券。これを募集する場合には、舊株の所有者に、これを引受くる優先權を認むべきものとす。こかぶ。(舊株に對して)

しん-がふ 蜃蛤【名】〔動〕はまぐり(蛤)に同じ。

しんかふ-おち 新株落【名】〔商〕しんかぶはいたうけんおち(新株配當權落)に同じ。

しんかふきじふはちばん 新歌舞伎十八番【名】俳優市川團十郎の七代・九代の當藝(ワザ)を選みて名づけたるもの。十八番と稱すれども、實は十八番以上あり。即ち虎の卷・往柄問答・地震加藤・高時・酒井の太鼓・文覺勸進帳・紅葉狩・大森彦七・吉備大臣・重盛諫言・釣狐・仲光・山伏攝待・伊勢三郎義浪・左小刀・素袍落・鏡獅子・新七つ面・二人袴・吹取妻等は著名なるものにして尙ほ澁坊主・中山問答など數多あり。

しん-かふきん 新甲金【名】元祿以後の甲州金、即ち甲安金・中金・甲重金・甲定金の類。新甲。

しん-かぶけん 新株券【名】〔商〕新株に對して發行する株券。

しんかぶ-つき 新株附【名】〔商〕しんかぶはいたうつき(新株配當附)に同じ。

しん-かぶぬし 新株主【名】新株の所有主。

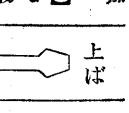
しんかぶ-はいたうけんおち 新株配當權落【名】〔商〕株券の定期賣買にて、賣方が新株の配當を受くべき權利を自己に留保して、買方に讓り渡さざること。新株落。【取引所の語】

しんかぶはいたうつき 新株配當付【名】〔商〕株券の定期賣買にて、舊株に對して、賣方が、その株に附屬せる新株の配當を受くる權利をも、買方に讓り渡すこと。新株附。【取引所の語】

しん-かべ 眞壁【名】普通の家にある土塗の壁。

しん-がほ 新顏【名】新に加入せる人。

しんかま-つき 眞鍮繼【名】【建】繼手の一法。土臺桁などの如く、その下に支承物ある時に用ふるもの。



(ぎつまかんし)

しん-かん 宸鑑【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇のみそなはすこと。

しん-かん 宸翰【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の書きたまへる文書。宸筆。右大將縁

しん-かん 震撼【名】ふるひうごかすこと。ふるひうごくこと。

しんかん 辰韓【名】〔地〕三韓の一。今の慶尙南道の東北部に占據せしものの如く、その一部より興りたる新羅國に滅さる。

しん-かん 神鑒【名】神の照鑒。平家「志のいたり、神鑒、空(ソラ)にあり」

しん-かん 身幹【名】からだ。軀幹。身軀。

しん-かん 辛艱【名】つらくなやむこと。

しん-かん 審勘【名】つまびらかに考ふること。勘審。

しん-かん 神感【名】神の感應すること。

しん-かん 心肝【名】㊀心臟と肝臟と。㊁こころ。きもだま。重盛子御親子の御懇意心肝に徹し添し」

心肝を披(ヒラ)く【句】心中をうちあく。肝膽を披瀝す。

しん-かん 簡諫【名】いましめ。いさめ。

しん-かん 新刊【名】新なる出版。新版。

しん-かん 深閑・森閑【貌】物音聞えず、さびしきさま。しん。ひっそり。

しん-がん 眞贋【名】ほんものとにせもの。眞物と贋物と。

しん-がん 神龕【名】ほこら。神殿。

しん-がん 心眼【名】形示上の事物を辨別する心の働。眞理趣味などを見わけ味ふ力。(肉眼に對して)

じん-かん 甚寒【名】甚しく寒きこと。厄寒。
しんかん-しょ 新刊書【名】新刊の書物。
しんかん-もの 新刊物【名】前條に同じ。
じんがめ-あぢ じんがめ鰺【名】〔動〕しま あぢ(縞鰺)に同じ。
しん-から 心から【副】こころから。心のそ こから、底から【句】心底(シンジン)から。しんから。
しんがら 新柄【名】新なるがら。今までになきがら。
しんがり 殿・尻狩【名】■一軍の退く時、列の最後にありて、追及する敵を防ぐこと、又その軍隊。しっぱらひ。殿後。最殿。■二事のあとおさへ。おさへ。しりおし。
しんがり-いくさ 殿軍【名】後軍に居りて戦ふこと。
しんがり-ぞなへ 殿備【名】陣の最後に立つ軍隊。
しん-き 心悸【名】〔醫〕左胸廓前面第五肋間の一小部、乳腺の内方に起る運動。心臓の運動によりて誘起せるものにして、觸知また目撃するを得。俗に、動悸といふ。心搏。
しん-き 心鬼【名】「心の鬼」に同じ。
しん-き 心機【名】心の發動。心のはずみ。心のはたらき。「き一變す。
心機一轉【句】心がはりす。心のはたらき又その軍隊。しっぱらひ。殿後。最殿。■二事のあとおさへ。おさへ。しりおし。
しんがり-いくさ 殿軍【名】後軍に居りて戦ふこと。
しんがり-ぞなへ 殿備【名】陣の最後に立つ軍隊。
しん-き 心悸【名】〔醫〕左胸廓前面第五肋間の一小部、乳腺の内方に起る運動。心臓の運動によりて誘起せるものにして、觸知また目撃するを得。俗に、動悸といふ。心搏。
しん-き 心鬼【名】「心の鬼」に同じ。
しん-き 心機【名】心の發動。心のはずみ。心のはたらき。「き一變す。
心機一轉【句】心がはりす。心のはたらき。
しん-き 振起【名】ふるひ起すこと。ふるひ起ること。さかんにすること。さかんになること。
しん-き 蜃氣【名】蜃(ガイ)の吐く氣。しんきろう(蜃氣樓)參照。太平記「蜃氣忽ちに乾達婆城を吐出せるかと怪しまる」
しん-き 晨起【名】朝早く起くること。はやおき。早起。
しん-き 簀規【名】いましむること。規戒。
しん-き 識危【名】馬の旋毛(ツムジ)の一。馬の前肩の下にあるもの。
しん-き 晨暉【名】朝の日光。あさひ。朝暉。
しん-き 神機【名】靈妙なるはたらき。測り知るべからざる機略。
しん-き 神鬼【名】きしん(鬼神)に同じ。
しん-き 神氣【名】■一天地間の萬物を組成する原氣。■二不思議なる運氣。■三物事の説明すべからざる趣。韻致。■四精神と氣象と。
しん-き 神龜【名】不思議なる龜。卜占に用ふる龜。津國女夫池「古の伏義氏の天下に王たる時、神龜龍馬出現せしより」
しんき 神龜【名】聖武天皇の御代の年號(紀元一三八四年—一三八八年)。
しん-き 新規【名】■一新しきこと。新規蒔直し【句】さっぱりと、新たに初よりやり直すこと。
しん-き 心氣【名】■一こころもち。きもち。精神。神氣。■二心のはれやかならぬこと。もだえじれること。しんく。陰氣。悒鬱(ユウウツ)。「辛氣」文武五人男「ええ、齒痒や辛氣や、と頭を掻いてぞ留りける」■三しんきびやう(心氣病)の略。庭訓往來「心氣腹病・虚勞」
心氣湧く【句】心湧きたつごとく惱む。重雙子「女子でさへ辛氣がわく」
心氣を碎く【句】種種心を勞す。種種心配す。謡曲「あらぬ女の眞似をして、五年七年しんきを碎くも、大事を思ひ立つたる故」
心氣を燃やす・辛氣を燃やす【句】じれったく思ふ。生玉心中「辛氣もやして待つ宵に」
しん-き 新奇【名】新しく珍しきこと。
しん-き 新禧【名】新年のよろこび。新年の祝賀。
しん-ぎ 信義【名】■一信と義と。■二人の行ふべきまことの道。まことの筋道を守ること。
しん-ぎ 心木【名】■一心棒となる木。■二活動の中心となるもの。
しん-ぎ 身木【名】みき(身木)に同じ。
しん-ぎ 眞義【名】まことの意義。
しん-ぎ 清規【名】〔佛〕『漢字の宋音』禪宗における寺院と僧侶との法規。
しん-ぎ 新義【名】■一新しき意義。新しき見解。■二〔佛〕眞言宗中、根來(コンゴウ)の僧覺鑁(カクバン)の教義を奉ずる一派。新義眞言宗。(古義に對して)しんぎは(新義派參照。
しん-ぎ 新儀【名】あらたなる儀典。あたらしき禮。
しん-ぎ 宸儀【名】『しんき(宸襟)を見よ』
天子の御身。天子。平家「宸儀南殿に出御して、近衞階下に陣を引き」
じん-ぎ 辭宣・辭義【名】じき(辭宣)の訛。曾我物語「何となきじんぎにいひなして靜まりぬ」
しん-ぎ 眞偽【名】まことと、いつはりと。
しん-ぎ 信疑【名】信ずると、うたがふと。信ずべきことと、疑ふべきこと。
しん-ぎ 審議【名】つまびらかに議すること。委しき相談。
しん-き 人氣【名】世間又は或地方一般の景氣又は氣風。にんき。
じん-ぎ 神器【名】■一神より受傳へ來れる寶物。■二次條の略。
三種の神器【句】我が國にて、天孫降臨の時、天照大神の手づから授けたまひしより後、代代の天皇の繼承したまふ三箇の寶器、即ち八咫(ヤタ)鏡・天叢雲劍・八尺瓊勾玉(ヤサカニノマガタマ)の併稱。各その條を見よ。三種(サン)の神寶(カンダカラ)。
じん-ぎ 臘儀【名】はなむけ。餞別。
じん-ぎ 神祇【名】天つ神と國つ神と。天神と地祇と。盛衰記「神祇の威光たのもしや」
神祇・釋教・戀・無常【句】『勅選和歌集の分類より起りたる語』神と佛と戀愛と無常と。世の中に起る種種の事相を總括していふ語。心中又は氷の朔日「戀草の種うゑんと固めしは、神か佛の堂鳥を…法華長屋の名を立てて神祇・釋教、戀無常、中にこめたる中町や」
神祇の家【句】神祇の事を掌る家柄の家。吉田・白川・萩原三家の稱。
じん-ぎ 仁義【名】■一仁と義と。■二道德。道義。徒然「君子に仁義あり。僧に法あり」
しんき-あへ 新茄和【名】料理の一。茄子をあへたる食品。しんこあへ。
しん-きう 賑救・振救【名】にぎはしすくふこと。賑恤。「きこと。
しん-きう 眞舊【名】まことにて、且つふるきと。新古。■一新暦と舊暦と。太陽暦と太陰暦と。
しん-きう 親舊【名】親戚と故舊と。
しん-きう 申救【名】種種にいひなだむること。
しん-きう 審糺・審糾【名】つまびらかに問ひただすこと。「ること。
しん-きう 審究【名】つまびらかに研究すること。
しん-きう 鍼灸【名】はりときうと。鍼治と灸點と。雄略天皇甘露圀「藥療鍼灸手をつくし」
しん-きう 神丘【名】『莊子に「鼷鼠深二穴乎神丘之下」以避二熏鑿之患一とあり』神を祭りてある丘。備後國原蛙合戰「鳥は高く飛んで繒弋の害を避れ、鼷鼠神丘の下穴掘りて、人の薫ぶる患を免るとかや」
じん-きう 尋究【名】たづねきはむること。
しんきう-てん 賑救田【名】王朝時代に、窮民の賑救にあてし田。後紀「置レ名爲二賑救田一」
しんき-からしん-しやう 心悸亢進症【名】〔醫〕官能的心臓病の一種。即ち俗に動悸の激しく打つ病。
じんきかうしやう 神器考證【名】〔書〕三種の神器を詳かに考證せるもの。二卷。栗田寛の著。
しん-きかく 晉其角【名】〔人〕えのもときかく(榎本其角)を見よ。
しん-きく 審鞫・審鞫【名】罪狀をつまびらかに糺問すること。
しん-ぎく 【名】〔植〕しゅんぎく(茼蒿)の訛。
じん-ぎく 訊鞫・訊鞫【名】きくじん(鞫訊)に同じ。
しんき-くさい 心氣臭し【形ク】心浮たたしんきくさい

ず。くさくさとしてあり。

じんぎ-ぐみ 神祇組【名】江戸時代の男伊達の一。旗本水野十郎左衛門を首領とし、部下もまた多くは旗本奴なりき。

しんき-くわせいがん 新期火成岩【名】〔鑛〕**くわさんがん**(火山岩)に同じ。

じんぎ-くわん 神祇官【名】■古、太政官の上に位し、伯(カミ)・副(スケ)・祐(ジョウ)・史(サカン)の四部官及び神部(カンベ)・卜部(ウラベ)・使部・直丁(アタヒ)等の職員ありて、祭祀を掌り、全國の神職を總轄せし官廳。即ち太政官と並びて、祭政の二事を分掌せしもの。かみづかさ。■明治元年設置の七官の一。知官事・副知官事・判官事・權判官事・書記の職員ありて、神祇・祭祀・祝部(ハフリ)・神部(カンベ)を總管せしもの。同二年太政官の上に列し、伯・大副・少副・大祐・權大祐・少祐・權少祐・大史・權大史・少史・權少史・史生・官掌の職員を置かれて、祭典・諸陵・宣教・祝部・神部を管掌することとなり、四年神祇省と改稱せられ、各省と共に、太政官の下に列することとなれり。

神祇官の八神【句】古、神祇官の八神殿に祀りし八社の神。**はっしんでん**(八神殿)參照。

じんぎくわんねんぢゆうぎやうじ 神祇官年中行事【名】〔書〕正月より十二月までの間における諸社の祭禮神馬・神饌等の事を記せるもの。一卷。著書詳かならず。

しんきざみ 眞刻【名】烟草などを、正しく細かく刻むこと、又その刻み方の物。

しんぎし 新義州【名】〔地〕朝鮮平安北道義州郡に在る都會。鴨綠江の右岸にありて、安東縣と相對す。京城の西北十二里。

じんぎ-じむがかり 神祇事務掛【名】神祇事務課の職員。參與職を以て補し、課務を處す。

じんぎ-じむきよく 神祇事務局【名】明治元年設置の八局の一。督(カミ)・輔(スケ)・權輔・判事・權判事・書記の職員ありて、神祇・祭祀・祝部(ハフリ)・神部(カンベ)の事を掌りし所。同年閏四月廢止、神祇官これに代れり。

じんぎ-じむくわ 神祇事務課【名】明治元年に設置せられし七課の一。神祇・祭祀・祝部・神戸の事を掌りしもの。翌年廢止せられたり。

じんぎ-じむそうとく 神祇事務總督【名】神祇事務課の長官。議定職を以て補し、事務を統轄せるもの。

しんぎ-しんごんしゆう 新義眞言宗【名】〔佛〕新義派に屬する眞言宗。(古義眞言宗に對して)**しんぎは**(新義派)參照。

しんき-しやう 心氣症【名】〔醫〕**ひぽこんでりい**に同じ。

じんぎ-しやう 神祇省【名】明治四年神祇官を改稱せし中央官廳。卿・大輔・少輔・大丞・少丞・大錄・權大錄・中錄・權中錄・少錄・權少錄・宣教長官・宣教次官・宣教判官・宣教權判官・大掌典・中掌典・少掌典・大神部・中神部・少神部の職員ありて、祭祀・諸社・宣教・祝部(ハフリ)・神戸(カベ)に關することを掌りしが、同五年廢止、教部省これに代れり。

じんぎだて 仁義立【名】親切らしき風を裝ふこと。〔異土樂觀〕「いやいや、仁義立、措いてくれ」

しんきちく 新機軸【名】新しき機軸。新規なる方法。

しんきちざんは 新義智山派【名】〔佛〕**しんぎは**(新義派)を見よ。

しんきづ 新木津【名】〔地〕山城國相樂(サガラ)郡に在る地。關西鐵道奈良ノ宮線の一驛。

しんきつれう 秦吉了【名】〔動〕**きつくわんてう**(九官鳥)に同じ。

じんき-とり 人氣取【名】人望を得んとする方法、又その方法に巧みなる人。にんきとり。

しんき-なき 心氣泣【名】こころ鬱して泣くこと。〔五十年忌歌念佛〕「これほど思ひ合うた中、なぜに女夫(メオト)になられぬと、しんき泣にぞ泣きゐたる」

しんきぬ 新絹【名】その年に、新に取りたる絲にて織りたる絹。

じんぎ-のかみ 神祇伯【名】**しんぎはく**(神祇伯)に同じ。

しんぎは 新義派【名】〔佛〕眞言宗中、新義の學說、即ち根來(ネゴロ)の僧覺鑁(カクバン)の所說を遵奉する一派。覺鑁の歿後百餘年を經、天正十三年根來の本山、豐臣氏の兵火に罹りて後、更に二分派を生じ、大和國なる豐山(ブザン)長谷寺(ハセデラ)に立籠りし專譽は、豐山派の祖となり、京都大佛の一隅に智積(チシヤク)院を起しし玄宥は、智山派の祖となり、明治三十三年眞言宗各派分立以來、共に一派を公稱して、各自の管長を戴くに至り、根來は祖廟の地として、單に總本山の空名を有するのみ。(古義派に對して)

じんぎ-はく 神祇伯【名】古の神祇官の長官。かみづかさのかみ。かむつかさのかみ。

しんきびやう 心氣病【名】〔醫〕**ひぽこんでりい**に同じ。

しんき-ふ 審級【名】〔法〕訴訟に對する審理の繫屬すべき裁判所の階級。例へば第一審・第二審・第三審の類。「こと。

しんき-ふ 進級【名】等級又は學級の進むこと。惠み與ふること。■**しんごふ**(賑給)を見よ。

しんき-ふ 賑給【名】■施しにぎはすこと。**しんごふ**(賑給)を見よ。

じんき-ふ 迅急【名】早くしてはげしきこと。速かなること。迅速。

じんぎ-ぶくろ 仁義袋【名】〔俳優袋の義か〕はかま(袴)を云ふ。〔信濃國木曾の方言〕

しんぎ-ぶざんは 新義豐山派【名】〔佛〕**しんぎは**(新義派)を見よ。「を見よ。

しんきふ-し 賑給使【名】**しんごふし**(賑給使)

しんきふ-ていねん 進級停年【名】**じつえきていねん**(實役停年)に同じ。

しんきふ-でん 賑給田【名】**しんごふでん**(賑給田)を見よ。「金。

しんきん 眞金【名】純粹の黃金。眞實の黃

しんきん 新金【名】■新たに發行したる金貨。(古金に對して)。■**まんえんきん**(萬延金)に同じ。

しんきん 曠金【名】布施(ホドコシ)の金。〔俗用集「曠金。布施也、曠施也」〕

しんきん 親近【名】■したしみ近づくること。■側近く召使ふ親しき家來。

しんきん 愼謹【名】**きんしん**(謹愼)に同じ。

しんきん 仲筋【名】手掌部にある筋肉。

しんきん 辛勤【名】つらきつとめ。

しんきん 神襟【名】神の思召。陛下の思召。盛衰記「一國賞罰未レ任二神襟一」

しんぎん 宸襟【名】〔品字箋に「宸、室之深奥者、又帝居曰レ宸、取二北辰之義一、加レ山、象二宮室一也、又宸極・宸衷・宸翰・宸遊等、不三敢直指一至尊一、稱二其居一也」とあり〕天皇の御心。おほみこころ。寂虚。〔太平記「君の宸襟を休め奉りたる者は」

しんぎん 岑嶮【名】極めてけはしき峰。

しんぎん 呻吟【名】うなること。うめくこと。うめき。

しんぎん 新銀【名】新に發行したる銀貨。(古銀に對して)〔吉野都女藝「いや義貞が二人あるものか、新銀・古銀同じ通用」女殺油地獄「このうちかひに新銀五百八十匁」

しんきん-えん 心筋炎【名】〔醫〕心臟の壁をなせる筋肉層の炎症。

しんきん-おほぼん 新金大判【名】**きやうほぼんきん**(享保大判金)に同じ。(古金大判に對して)

しんきんぎん 新金銀【名】新に發行したる金銀貨。(古金銀に對して)

しんきん-るゐ 眞菌類【名】〔植〕菌類の一部。普通の菌蕈と黴(カビ)とを指すもの。通常、單に菌類といふ。「愛者。

じんぎ-もの 仁義者【名】なさけ深き人。博

しんき-やう 伎境【名】他國におかし入る「る處。

しんき-やう 進境【名】進む地位。すすみたること。

しんき-やう 親兄【名】**しんけい**(親兄)に同じ。〔謠曲(船辨慶)「我が君、親兄(シンケイ)の禮を重んじたまひ」

しんきやう 新京【名】あらたなる都。(古京に對して)〔催馬樂(淺繩)「玉光る下光る新京雀のしだりやなぎ」

しんきやう 神饗【名】酒食を供へて神を祭ること。〔盛衰記「去る十一日に、神祇官にして神饗あり」

しんきやう 震驚【名】ふるひ驚くこと。震駭。

しんきやう 震恐【名】ふるひ恐れること。震駭。

しんきやう 神鏡【名】■神前に立ててある鏡。神の鏡。■やたのかがみ(八咫鏡)に同じ。

しんきやう 心鏡【名】心の萬象を寫すを、

鏡に譬へていふ語。

しんぎやう 心經【名】〔書〕**はんにやはらみつたしんぎやう**(般若波羅蜜多心經)の略。水鏡「一夜、心經をよみ奉りて」狂言(たこ)「佛事は樣樣多けれど、心經を以て弔ひけり」

じん-きやう 人境【名】人の住めるところ。人寰(ジンクワン)。

しんきやう-きたん 神境紀談【名】〔書〕伊勢兩宮の門垣・殿舍・別宮・攝社より、山川・木名に至るまでを記せるもの。七卷。出口延貞の撰。

しん-きやうごく 新京極【名】〔地〕京都市の、加茂川を西三四町隔てて、三條より四條までの間の道路の通稱。もと京極(今の寺町通)以東の地を新に開きて設けし地にて、飲食店・興行物等櫛比し、京都第一の繁昌地なり。單に京極ともいふ。

しん-ぎやう-さう 眞行草【句】漢字の書體・日本畫・生花(イケバナ)などの眞と行と草と。

じんきやう-つう 神境通【名】〔佛〕**じんによいつう**(神如意通)に同じ。

しんぎやう-あ 心經會【名】般若波羅蜜多心經を讀誦する法會。

しん-きやく 新客【名】新來の客人。しんかく。

しんき-やせ 心氣瘦【名】心氣のために瘦すること。風村雨東帶鑑「その仲のよさ隱れなく、聞いて美む心氣瘦、この君ゆゑと、洛中に肥えた女や絕えけらし」

しん-きゆう 深宮【名】奥深き宮殿。深殿。

しんきゆう 賑窮・振窮【名】貧民をめぐむこと。窮民をにぎはすこと。

しんきゆう 審窮【名】つまびらかにきはむること。

しんきゆう 寢宮【名】みたまや。おたまや。

しんきゆう 神宮【名】神を祀れる宮殿。じんぐう。神殿。「と。

じんきゆう 尋窮【名】たづねきはむること。

しんきよ 寢居【名】『しんきん(宸襟)』を見よ』天皇の居たまふこと、又その所。

しんきよ 深居【名】奥深き所に住むこと、又その所。太平記「茅舍を移して入二深居一」

しんぎよ 新居【名】あたらしきすまひ。(舊居に對して)

しんぎよ 侵漁【名】他の領域に侵入して、魚を捕ふること。おかしかすむる「と。

しん-ぎよ 寢御【名】天子の寢ねたまふこと。

しん-ぎよ 進御【名】天子の進み出でたまふこと。いでまし。おでまし。

じん-ぎよ 腎虛【名】〔醫〕精液の盡きたるより起る病。陰虛。拜鷄仁玉參「腎虛したる者に、水を無性に飲ませ給へば、たかぶる火を消し、腎の臟へ水がたまり、忽ち快氣しける」

しん-きよう 心胸【名】むね。こころ。

しん-きよう 震恐・振恐【名】ふるひおそること。震驚。

しん-きよう 申供【名】まうしのぶること。陳述。供述。「に同じ。

しん-きよう 神興【名】〔哲〕**れいかん**(靈感)

しん-きよく 宸極【名】『しんきん(宸襟)』を見よ』天子の位。帝位。

しん-きよく 新曲【名】新しく作りたる曲。(舊曲に對して)「まくま。

しん-きよく 心曲【名】心中の委曲。心のく

しん-きよみづ 新清水【名】きよみづでら(清水寺)に同じ。

しん-きり 心切・心剪【名】蠟燭の燃えがらを剪み切る具。しんきりばさみ。燭切。

しん-ぎり 新切【名】廿膾にして、輕く日に乾したる魚肉。『鰺(アヂ)の新切』

しん-ぎりしやしき 新希臘式【名】〔美〕『英 Neo-greek style』古代希臘の藝術の樣式を復興して、近代の思想感情を表現せんとする藝術。第十八世末より第十九世紀にかけて、歐洲に流行せり。

しんきり-ばさみ 心切鋏・心剪鋏【名】しんきり(心切)に同じ。

しんき-ろう 蜃氣樓【名】〔理〕『蜃は、蛤なりとも、蛟の屬にて、形龍蛇に似たりともいひ、そのものの吐きたる氣の樓臺・城郭となりて見ゆとて呼びし名』海邊又は沙漠等にて、空氣の密度均しからざるがために生ずる光線の屈折又は全反射作用に由りて、遠方の地物又は船艇の空中に浮びて見ゆる現象。かひやぐら。きつねだな。などのわたり。海市。貝樓。蜃樓。空中樓閣。乾闥婆(ガンダルバ)城。「樓。

しん-く 辛苦【名】くるしみ。なんぎ。苦

しん-く 深紅・眞紅【名】極めて濃きくれなゐ色。まあか。曾我會稽山「眞紅の總打ったるは鎧の總卷」

しん-く 震懼【名】ふるひ懼るること。

しん-く 身軀【名】からだ。身體。

しん-く 親句【名】〔文〕俳諧連句附方の一。前の句の言語に因みて附くる句。(疎句に對して)

しん-く 【名】氣の毒なること。うるさきこと。長町女腹切「しんくな仕事でござりまんす」

しん-ぐ 寢具【名】寢ぬる時の道具、即ち夜具・布團・枕など。ねだうぐ。臥具。

じん-く 甚句【名】『謠ひ初めし人の名より出づとも、神供(グ)の歌より出でて、その轉訛なりともいふ』俗謠の一。歌は、都都逸(ドドイツ)などと同じく、七音・七音・七音・五音の四句より成り、調子は、地方によりて、同じからず。木更津甚句・米山(ヨネヤマ)甚句・名古屋甚句・相撲(スマフ)甚句などあり。

じん-く 神供【名】神に供ふる供物。「佛」護摩の時、道場外に別に壇を設けて、十二天並びに曠野の諸鬼神を祭ること。

しん-く-いこふ 身口意【名】〔佛〕次條に同じ。

しん-く-いこふ 身口意業【名】〔佛〕身と口と意との業。身語意。三業(サンゴフ)。雅城酒香筆「心に思ひ、身に忍び、口に戀しと焦るるも、身口意業の三ごふの」

しん-くう 眞空【名】〔理〕『英 Vacuum』エーテルと名づくる一種の想像上の氣體の外は、何もなき空間。空氣の存在せざる空虛。「〔佛〕諸法の實相の眞實に空なること。

しん-ぐう 神遇【名】時代又は方處を隔てたる人の精神の、不思議に一致すること。珍しきめぐりあはせ。

しん-ぐう 新宮【名】本宮より新に神靈を分ちて祀れる神社。いまみや。

しんぐう 新宮【名】〔地〕紀伊國東牟婁(ムロ)郡にある町。熊野川の河口に位し、熊野三山の一なる新宮權現ありて、南紀第一の市場なり。水野氏の舊藩地。「同じ。

じん-くう 人空【名】〔佛〕**がくう**(我空)に

じん-ぐう 神宮【名】神の御宮。しんきゆう。いせのじんぐう(伊勢大神宮)の略。官幣大社の中にて、特に尊崇する神社の稱。熱田神宮・橿原神宮の類。

じん-ぐう 神供【名】**じんく**(神供)に同じ。

じんぐう-かいかふ 神宮開闢【名】室町幕府の職制の一。伊勢內外兩宮に關する事務を專當せしもの。

じんぐう-がは 新宮川【名】〔地〕**くまのがは**(熊野川)に同じ。

じんぐう-かんべしよ 神宮神部署【名】**かんべしよ**(神部署)に同じ。

じんぐう-きねんさい 神宮祈年祭【名】伊勢大神宮にて、年穀の豐穰を祈らるる祭典。上古は、每年二月十二日に行はれ、後、九日に改められ、明治維新後十七日に定められ、當日勅使參向して、幣帛を獻ず。じんぐうとしごひまつり。としごひまつり(祈年祭)參照。

じんぐう-くわうがくくわん 神宮皇學館【名】神宮司廳の下にありて、皇國の道義を講じ、國典を教授する官立學校。本科・專科・選修科の三科を置く。伊勢國宇治山田市に在り。

しんくう-くわん 眞空管【名】〔理〕『英 Vacuum tube』殆ど眞空に等しきほどの稀薄(氣壓二ミリメエトル以下)なる氣體の存留せる硝子管。例へばガイスレル管・クルウラス管・レントゲン管の類。

しんくう-けい 眞空計【名】〔理〕『英 Vacuum gauge』眞空內の氣壓を測るに用ふる壓力計。

じんぐう-けう 神宮教【名】神道の一派。天照大神を主神として、皇祖の遺訓を奉じ、國體を講明して、風敎を益するにあり。明治三十二年宗敎の管轄を脫し、神宮奉齋會を組織せり。

しんくう-けっしやうくわん 眞空結晶罐【名】『英 Vacuum crystalizer』眞空を利用して、砂糖を結晶せしむるに用ふる汽罐。

じんぐう-ごんげん 神宮權現【名】くまのはやたまじんじや(熊野速玉神社)に同じ。

じんぐう-じ 神宮寺【名】古、神社に附屬せし寺院。本地垂跡(スイジヤク)の説によりて寺内に神を祀り、又、神社内に神宮寺を立つ。明治維新の際、神佛分離の事ありてより廢せり。この僧を社僧と呼びたり。みやでら。神宮院。神供寺。神願寺。神護寺。

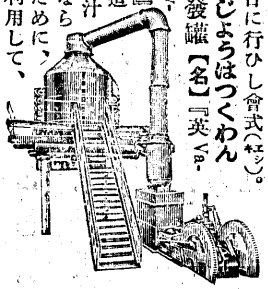
じんぐうじ 神宮寺【名】〔地〕羽後國仙北(センボク)郡にある町。御物(オモノ)川の北岸。大曲(オホマガリ)町の西北四里。鐵道奥羽線の一驛。戊辰の古戰場。

じんぐう-しちやう 神宮司廳【名】伊勢大神宮の祭祀を司る所。祭主、皇族これに補せらる)以下、大宮司・少宮司・禰宜(ネギ)・權禰宜・宮掌(クジ)等、これに屬す。

じんぐう-じやうけい 神宮上卿【名】じんぐうてんそう(神宮傳奏)の舊稱。

じんぐうじ-やくしこう 神宮寺藥師講【名】攝津國住吉社の北なる神宮寺にて、正月八日に行ひし會式(エシキ)。

しんくう-じようはつくわん 眞空蒸發罐【名】『英 Vacuum evaporator』



(しんくうじようはつくわん)

砂糖製造の際、糖汁を濃厚ならしむるために、眞空を利用して、水分を蒸發せしむる汽罐。

じんぐう-てんそう 神宮傳奏【名】昔、公卿の中より選ばれて、伊勢神宮の事を奉仕・執奏せし職。舊稱、神宮上卿。

じんぐう-とうにん 神宮頭人【名】室町時代、伊勢大神宮の事を掌りし職。神宮奉行。

じんぐう-とこしひまつり 神宮祈年祭【名】じんぐうきねんさい(神宮祈年祭)に同じ。

じんぐう-とりゐ 神宮鳥居【名】紋所の一。輪の中に鳥居を描きたるもの。

しんくう-はうでん 眞空放電【名】〔理〕『英 Vacuum discharge』稀薄なる氣體中に於ける放電。眞空管を用ひて行ふ。管内に電流を通ずれば、管内の氣體の種類に依り、その氣體特有の種種の色の光を發し、また稀薄の度合に依りて、發光の模様を異にす。

じんぐう-ばらひ 神供祓【名】じんぐうばらひ(神供祓)に同じ。

じんぐう-ふぎやう 神宮奉行【名】じんぐうとうにん(神宮頭人)に同じ。

じんぐう-へい 神宮幣【名】紋所の一。下の圖を見よ。

(じんぐうへい)

しんくう-まつり 神宮祭【名】三井寺の山中にある新羅(シラギ)明神の祭禮。五月五日に行はる。

じんぐう-ねん 神宮院【名】じんぐうじ(神宮寺)に同じ。

じんぐう-ねじ 神宮衛士【名】伊勢大神宮の職員。神宮の警衛に從事する判任待遇。

じんぐう-ねじちやう 神宮衛士長【名】伊勢大神宮の職員の一。上官の指揮を受けて、神宮の警衛に從ふ判任官待遇。

じんぐう-ねじふくちやう 神宮衛士副長【名】伊勢大神宮の職員の一。神宮衛士長を補佐する判任官待遇。

じんぐう-わうごう 神功皇后【名】〔人〕仲哀天皇の皇后。諱は息長足(オキナガタラシ)姫尊。氣長宿禰(オキナガスクネ)王の女。御母は葛城高額(カヅラキタカヌカ)媛。仲哀天皇の二年皇后に立ち、天皇の崩後、攝政して、三韓を征し、六十九年崩ず。御年百。じんぐうくわうごう。

しんぐ-じ 神供寺【名】しんぐうじ(神宮寺)に同じ。

しんく-しまだ 深紅島田・眞紅嶋田【名】深紅の手がらを掛ける島田髷。諸國盆踊歌「眞紅島田に今朝結(こうた髪を、さまが亂しやる、是非もない」

しんく-つ 深窟【名】深きいはや。

しんく-ぐん 新公方【名】新に任ぜられたる征夷大將軍。

じんく-ばん ジンク版(英 Zinc plate)【名】あえんばん(亜鉛版)に同じ。

じんぐ-ばらひ 神供祓【名】神に供ふる神饌を祓ひ清むる式。ごぜんばらひ。

しんくひ-むし 心食蟲・蘊蟲【名】〔動〕果實又は樹木の枝中に寄入して蝕害する害蟲の總稱。種類あり。

しんく-ん 眞君【名】しんさん(眞宰)に同じ。

しんく-ん 神君【名】■『史記の封禪書に見ゆ』かみ(神)に同じ。(道家の語)■(人)ごがはいへやす(徳川家康)の敬稱。

しんく-ん 神郡【名】神領の郡。神社に隷屬せる郡。即ち神戸の大なるもの。

しんぐん 神軍【名】神又は君主の自ら統率する軍隊の敬稱。

しんぐん 進軍【名】軍隊を進むること。

しんぐん 親軍【名】天子の親兵。近衞(コノエ)。

じんくん 仁君【名】いつくしみ深き君。

じんくん 人君【名】きみ。君主。

しんぐんしよるゐじゆ 新群書類從【名】〔書〕徳川時代に編纂著述せるもの、及びその時代の文藝・風俗に密接の關係ある書籍二百種を蒐めたる叢書。演劇・歌曲・書目・舞曲・狂歌の五部に分つ。十冊。國書刊行會の編輯。

しんく-らうど 新藏人【名】六位の藏人の中にて、氏の藏人に次げる新任のもの。

しんく-れなゐ 新紅【名】〔植〕かうほね(河骨)に同じ。

しんくろだに 新黒谷【名】〔地〕くろだに(黒谷)■を見よ。大原問答雨薬箱「都新黒谷といふ處にて、蓮生坊と尋ね給へ」

しんくわ 新花【名】新に開きたる花。朗詠「霜逢老鬢三分白、露菊新花一半黄」

しんくわ 新菓【名】新に工夫して製造したる菓子。「略。

しんくわ 新貨【名】しんくわへい(新貨幣)の略。

しんくわ 心火【名】■嫉妬又は忿怒の情の烈しく起りたるを、火に譬へていふ語。心の火。胸の炎。平家女護島「業火の寛、心火の瀧」■星の一。心星。

しんくわ 心花【名】〔植〕頭狀排列の花序に於て、外方の花と内方の花とが、その形狀を異にする場合の内方の花。(緜花に對して)

しんくわ 心窩【名】『窩の字の音、正しくはわ』みぞおち(鳩尾)に同じ。

しんくわ 噴火【名】〔佛〕「噴恚の炎(ホムラ)」に同じ。

しんくわ 秦火【名】支那秦の始皇帝が、天下の書籍を收めて、燒燬せしこと。

しんくわ 親和【名】親しみ和(ヤハ)ぐこと。仲よくすること。しんわ。和熟。

しんくわ 進化【名】■進歩に伴ひて、漸次、物事の狀態の變りゆくこと。發展。■『生』『英 Evolution』同一生物が、その體制、おのづから簡單より複雜の域に進みて、次第に變化すること。今日見るがごとき地球上の生物の千差萬別の種類を有するも、これが結果に外ならず。

しんくわ 神火【名】不思議なる火。火山の噴出する火烟など。

しんくわ 神化【名】■不思議なる變化。■神の化育。神の德化。神の靈化。十訓「神化潛通、無爲而治、德之上也」■德積りて、神たる境に至ること。神になること。

しんくわ 心書【名】『人はその書きたる文字に精神の發露する故にいふ』文字。書。

しんくわ 清書【名】支那清代の書。南齊最も多く行はれたり。

しんくわ 寢臥【名】寢ぬること。

じんくわ 人和【名】人心の和合。

しんくわ 神怪【名】あやしきこと。不思議。奇怪。神奇。

しんぐわい 心外【名】■一心の外。心の外。■思のほかなること。意外。■甚しく殘念に感ずること。

心外無別法【句】〔佛〕われらの一切の對境たる世界は、皆自身の心より作り出すものにて、心を離れて、別に諸法あるにあらざること。聖德太子繍帳「心外無別法、佛も法も心にて、夫婦も亦心なり」

しんぐわい 身外【名】身體の外。一身の外。

じんくわい 燼灰【名】■もえさしと灰と。灰燼。■火に燒けて消失すること。

じんぐわい 人外【名】にんぐわい(人外)に同じ。

しんくわう 晨光【名】朝日の光。旭光。

しん-くわう 秦皇 【名】〔人〕支那秦の始皇帝。「秦皇漢武」

しん-くわう 神光 【名】神變不思議なる光。神佛の身より發するといふ光明。著聞「神光、室を照す」

しん-くわう 身光 【名】〔佛〕佛・菩薩の身より發するといふ光明。

じん-くわう 人皇 【名】天皇。にんのう。

じん-くわう 神光 【名】〔佛〕しんくわうに同じ。

しんくわうみやう-じ 信光明寺 【名】三河國額田(ヌカタ)郡岩津村にある寺。文明十年松平入道信光の創建。本尊は、慈覺大師の造りたる彌陀如來の坐像。

しんくわう-しゆぎ 進化主義 【名】〔哲〕しんくわせつ(進化說)に同じ。

しんくわせい-がん 新火成岩 【名】〔地〕くわざんがん(火山岩)に同じ。

しんくわ-せつ 進化說 【名】〔哲〕㊀しんくわろん(進化論)㊁に同じ。㊂しんくわろんてきくわいらくしゆぎ(進化論的快樂主義)に同じ。

しんくわ-ぞめ 親和染 【名】しんわぜめ(親和染)に同じ。

しん-ぐわち 四月 【名】しぐわつ(四月)の訛。

しんくわてき-くわいらくせつ 進化的快樂說 【名】〔哲〕しんくわろんてきくわいらくしゆぎ(進化論的快樂主義)に同じ。

しん-くわへい 新貨幣 【名】新に鑄造したる貨幣。新貨。

しん-くわん 信管 【名】『英 fuse』發射せる彈丸を炸裂せしむるための發火裝置。彈頭又は彈底に附著す。目標に達著せる際、發火作用を起すものと、或要求する時機に、發火作用を起すものとの二種あり。

しん-くわん 神官 【名】かんぬし。祝部(ハフリ)。盛衰記「近日住僧・神官等、捧二神輿一」

しんくわん 心觀 【名】〔佛〕㊀觀心の法。㊁天台宗の一心三觀の法。新千載「心觀談義の後に詠みて遣しける」

しんぐわん 心願 【名】佛神に對する心中の願。ねがごと。ぐわん。 持統天皇獻玉法「春彦方夏仁方思ひ思ひの心願」

じん-くわん 人寰 【名】じんきやう(人境)に同じ。

じん-ぐわん 神官 【名】しんくわん(神官)に同じ。 徒然「大人しく物知りぬべき顏したる神官を呼びて」

しん-くわんえい 新寬永 【名】寬永通寶の、寬文以後に鑄造せしもの。

しんぐわん-き 新願忌 【名】「初七日(ショナヌカ)の忌」に同じ。

しんくわん-けうだうしよく 神官教導職 【名】明治初年に、神官にて、教導職を兼ねし者。東西兩部に分たれ、各部に管長・代理人一人づつ任命せられしが、同六年神道教導職と改稱す。

じんぐわん-じ 神願寺 【名】㊀じんぐうじ(神宮寺)に同じ。㊁しんごじ(神護寺)を見よ。

しんくわん-りう 心貫流 【名】丸女(マルメ)藏人太夫(クラウド)を祖とする、劍道の一派。神蔭(シンカゲ)流に出づ。

しんくわ-りよく 親和力 【名】〔化〕くわがくてきしんわりよく(化學的親和力)に同じ。

じんくわ-るゐ 仁果類 【名】〔植〕果樹類中、多漿にして、食すべき部は、萼又は花托より成り、その中に子房を藏して、核をなせるもの。

しんくわ-ろん 進化論 【名】㊀〔哲〕『英 Evolutionism』理想は現實の終極點として存在するものにして、自然は理性に向ひて進歩しつつあるものなりとの見解。古代にありては、アリストテレス(Aristoteles)これを代表し、近世にありては、英國の學者は、概してこの說明法に傾けり。進化說。創造論。㊁〔生〕『英 Evolution theory』生物はみな外圍の諸狀態の影響を受けつつ、次第に下等より高等に進むものにて、すべての生物は、悉く同一の祖先より分化し來れるものなりといふ學說。佛國のビュッフォン(Buffon)・ラマルク(Lamarck)等、多少この說を鼓吹し、英國のダアヰン(C. Darwin)及びワレエス(A. R. Wallace)の自然陶汰說出づるに及びて、大成せらる。また英人スペンサア(H. Spencer)は精神的にこの說を主張し、心理的・社會的倫理的の諸現象をも、この說によりて說明せんとし、いはゆる綜合哲學の大成を企圖するに至れり。

しんくわろんてき-くわいらくしゆぎ 進化論的快樂主義 【名】〔哲〕『英 Evolutionistic hedonism』活力の廣く且つ長くして、健全强壯なる生物は、よくその生命を維持し、然らざるものは消滅の悲運に際會すべきと同じく、人も社會の法則と宇宙の法則とに順應して、その活力を廣く且つ長からしむる者、即ち快樂は人生の目的にして、これに合する行爲は善なりとする見解。即ち生物進化の理法を道德の研究に應用したるもの。この說の代表者は英のスペンサア(H. Spencer)なり。進化的快樂說。進化主義。

しん-け 新家 【名】㊀べつけ。分家。㊁公家(クゲ)の慶長以後、新に一家を立つるに至りしもの。絕家を再興せしもの、清華家の二男・三男等にして、別家せしもの等ありて、官位は大納言・參議等に至るを先途とせしがごとく、日野西・岩倉・久世・東久世・武者小路・三室戸(ミムロド)・東辻・千種(チグサ)等五十餘家ありて、明治維新後、多くは伯爵子爵に列したり。

しん-げ 心外 【名】しんぐわい(心外)㊀に同じ。

しんげ-むべつぼふ 心外無別法(ハッパフ) 【句】〔佛〕次條の略。

しんげむべつぼふ-じんぐわいむべつぼふ 心外無別法(ハッパフ)・心外無別法に同じ。蟬丸「己心の彌陀、唯心の淨土なれば、心外無別法、卽心成佛」 謠曲(柏崎)「三界は一心なり心外無別法」

しん-げ 信解 【名】㊀信仰と了解と。㊁鈍根は信じ、利根は解すること。㊂信仰より入りたる悟。

しんけい 親兄 【名】わが兄。親身(シン)の兄。しんきやう。實兄。

しんけい 親系 【名】〔法〕親族關係の系統。直系・傍系及び尊屬・卑族等の區別あり。その條を見よ。

しんけい 心計 【名】こころづもり。もくろみ。かんがへ。

しんけい 身計 【名】一身上のはかりごと。

しんけい 眞景 【名】まことのありさま。實際の景色。實景。

しん-けい 深閨 【名】奥深き所にある寢室、又は女子の部屋。

しんけい 神恵 【名】㊀神のめぐみ。㊁〔基〕おんちよう(恩寵)に同じ。

しん-けい 神契 【名】神の引合はせたる不思議なる緣。

しんけい 神經 【名】㊀動物體における感覺・運動・分泌・營養等を掌る器官。神經細胞と神經纖維とより成り、神經中樞より起りて分岐し、全身に分布して、末端は、五官・筋肉・腺等に終る。㊁知覺。㊂神經の過敏なること。神經質なること。

しんけい 針形 【名】〔植〕『英 Acerose又 Aciculer』葉形の一。葉身極めて狹く、先端の尖銳なるもの。例へば松の葉の類。

しんけい 脣形・唇形 【名】〔植〕『英 Labiate』花形の、脣の形をなすもの。即ちその五個の花瓣のうち、二瓣は、合して上脣を成し、三脣は、合して下脣をなすもの。例へば續斷(ゾクダン)・桐胡麻などの花の類。

しん-けい 晨鷄 【名】曉に鳴く鷄。曉鷄。

しん-けい 箴警 【名】いましめて忠告すること。

しんけい 榛荊 【名】㊀いばら。荊棘。㊁いばらの生ひ茂れる處。

しんけい 親兄 【代】しんみの兄。實兄。

しんげい 眞藝 【名】〔人〕げいあみ(藝阿彌)を見よ。

しん-げい 親迎 【名】㊀したしく出で迎ふること。㊁支那にて、結婚に際して、妻を迎ふるために、夫みづから出向くこと。

じん-けい 仁恵 【名】めぐみ。あはれみ。恩惠。

じん-けい 仁兄 【代】きくん(貴君)に同じ。

しんけい-えん 神經炎 【名】〔醫〕神經の炎症。多くは神經の損傷、又は附近の器官に於ける炎症の傳播等に原因し、知覺異常及び疼痛を呈す。急性慢性の別あり。

しんけいか-かんしつ 神經膠質 【名】〔生〕神經組織の一。支柱物質にして、細胞並びに微細なる纖維より成り、結締織に類似す。

しんけい-がく 神經學【名】『英Neurology』神經系統につきて論究する學問。

しんけい-きう 神經球【名】〔醫〕心臟の實體内に存在して、その鼓動を掌る血球。

しんけい-きゆう 神經弓【名】〔醫〕脊椎骨の背側に突起して、弧狀をなす部分。

しんけい-くわ 脣形科・唇形科【名】〔植〕顯花植物・被子類・雙子葉門・合瓣花區の一科。分布區域きはめて廣く、殊に溫熱兩帶に多くして、脣形花を開く。薄荷・藿香草・香薷(カウジユ)・紫蘇・胡麻・斷續(コヾロ)等、これに屬す。

しんけい-くわい 神經塊【名】〔動〕しんけいせつ(神經節)に同じ。

しんけい-くわくわん 脣形花冠・唇形花冠【名】〔植〕合瓣不整齊花冠の一種。脣形をなせる花冠、卽ち脣形科の植物に見るもの。

しんけい-くわびん 神經過敏【名】〔醫〕神經の脆弱・不鞏固にして、聊かの刺戟にも、動かされやすく、從つて思想・感情・行爲すべて動搖しやすき狀態。

しんけい-くわん 神經管【名】〔醫〕軀幹の背側にありて、神經中樞卽ち腦脊髓を包容する部位。動物性管。(內臟管に對して)

しんけい-けい 神經系【名】〔醫〕次條に同じ。

しんけい-けいとう 神經系統【名】〔醫〕動物の全身に分布する神經性の器管。動物性神經系統及び植物性神經系統に別つ。神經系。

しんけい-さいはう 神經細胞【名】〔醫〕主として、神經中樞部に存在し、傳導・通信の用をなす細胞。形狀・大小は均しからず一箇又は數箇の突起を生じ、その一箇は眞直に延びて、神經纖維となる。**しんけいそしき**(神經組織)參照。

しんけい-しつ 神經質【名】㊀〔哲〕氣質の一。精神の興奮は緩けれども、强度にして、且つその持力に富めるもの。憂鬱質。氣鬱質。黑膽質。(多血質・膽汁質・粘液質に對して)㊁神經の過敏にて激しく感動し、又能く物を氣にする性質。

しんけい-しん 神經針【名】齒科醫の、齒髓を抽出し、或は齒根管内の異物を清掃するに用ふる鋼鐵製の針。形狀は種種あり。

しんけい-しゆ 神經腫【名】〔醫〕腫物の一。多くは神經の切斷後、その遊離端に生ずる腫物。疼痛甚し。

しんけい-すゐじやく 神經衰弱【名】〔醫〕心神の過勞・手淫・房事過度・睡眠不足等に起因して、神經系統の過敏を來し、頭痛・眩暈・不眠等を伴ひ、記憶力衰へ、瑣末の事を氣に掛け、怒り易き等の症候を呈する病。

しんけいすゐじやく-しやう 神經衰弱症【名】〔醫〕前條に同じ。

しんけいせい-つつう 神經性頭痛【名】〔醫〕精神の過勞又は感情の興奮等の後に來る頭痛。

しんけいせう 神經鞘【名】〔醫〕數多の神經纖維を集束する結締組織。

しんけいせつ 神經節【名】〔動〕神經細胞の集合より成り、神經系統の所所に、一箇もしくは數箇存在して、神經纖維を導く節狀物。人體においては、交感神經系統において特に著しく、他動物においては、昆蟲類・環蟲類・甲殼類等これを有す。神經塊。

しんけいせんゐ 神經纖維【名】〔醫〕神經細胞の一突起の特に長く伸びて、纖維狀を呈せるもの。次條參照。

しんけい-そう 神經叢【名】〔醫〕神經の側枝を出だし、隣接神經と連交して、網狀をなせるもの。

しんけい-そしき 神經組織【名】〔醫〕神經系統を構成する組織。神經細胞・神經纖維・神經膠質の三に分つ。

しんけい-ち 神恵智【名】〔哲〕『英Light of grace』神恵の智力。(自然智に對して)

しんけい-ちゆうしんけいけいとう(中心神經系統) 神經中樞【名】〔醫〕同じ。

しんけいちゆうすうき 神經中樞器【名】〔醫〕神經中樞の機能を有する器官、卽ち腦・脊髓・神經節等の類。

しんけい-つう 神經痛【名】知覺神經又はその分枝の分布區域内に限りて、發作的に不定移動性の激しき疼痛を感じ、數分間乃至數日間持續し、或は久しく去らざることある病。その發する部位に依りて、坐骨神經痛・肋間神經痛・三叉神經痛・顏面神經痛・乳腺神經痛等の種類あり。

しんけい-びやう 神經病【名】〔醫〕神經系に屬する一般の疾病。

しんけい-まつせう 神經末梢【名】〔醫〕まつせうしんけい(末梢神經)に同じ。

しんけい-まつせう-き 神經末梢器【名】〔醫〕神經末梢の機能を有する器官。卽ち五官器の類。

しんけい-やく 神經藥【名】神經過敏又は神經痛等に用ふる藥。例へば臭素加里・安知必林(アンチピリン)の類。

しんけい-らい 神經癩【名】〔醫〕癩病の一種。神經を浸せるもの。主として、紅斑と白斑とを生じ、神經肥厚す。斑紋癩。麻痺癩。(結節癩に對して)

しんけう 親教【名】したしく教ふることを。

しんけう 信教【名】宗教を信ずること。

信教の自由【句】『我が國の憲法にては、第二十八條に見ゆ』安寧秩序を妨げず、且つ臣民たる義務に背かざる範圍内において、いかなる宗教を信ずとも、政府はこれに關渉せざること。こうにんけう(公認教)參照。

しんけう 眞教【名】まことのをしへ。

しんけう 心教【名】〔佛〕ぜんしゆう(禪宗)に同じ。

しんけう 新教【名】〔基〕『英Protestantism』基督教の一派。獨逸のルウテル(M. Luther)等の唱道したる宗教改革の主義を奉ずるものの總稱。ぷろてすたんと。(舊教に對して)

しんけう 神橋【名】神嚴に架する橋。また神社の境内にありて、神輿の渡御する橋。

しんけう 心教【名】〔人〕京都翠護院の住僧。權大僧都に至り、また連歌を巧みにす。文明七年寂す。「に同じ。

しんげう 蓁艽【名】〔植〕はかりぐさ(蓁艽)

しんげう 信樂【名】〔佛〕佛に歸依し、愛樂すること。淨土和讃「信樂まこと時いたり」

しんけう-し 親教師【名】〔佛〕じゆじふし(受業師)に同じ。

しんけうは-しやくわいしゆぎ 新教派社會主義【名】〔經〕基督教社會主義の一。個人の共濟的團結により、基督教社會主義を實行すべしと主張するもの。

しんげき 侵撃【名】敵地に侵入して攻撃すること。

しんげき 進撃【名】進みて攻撃すること。

しんげき 新劇【名】在來の演劇に滿足せずして起りたる新らしき演劇。新らしき芝居。(舊劇に對して)

しんげき-たい 進撃隊【名】進撃する軍隊。

しんげき-ぶたい 進撃部隊【名】進撃する軍隊。

しんけだい 新華臺【名】新しき華臺。三代功何左衞門と呼びし名も、新華臺と位牌に殘れば、やる方なく悲しさ」

しんけつ 宸闕【名】『しんきん(宸襟)を見よ』

しんけつ 心血【名】精神。氣魂。「心血を傾注す」

しんけつ 審決【名】審判の決定。

しんけつ 鍼穴【名】けいけつ(經穴)を見よ。

しんげつ 親月【名】『この月、人人が親の墳墓に詣づるよりいふ』陰曆七月の稱。下學集「親月、シンゲツ」

しんげつ 新月【名】㊀その夜、東天に上りそめて、光のあざやかなる月。㊁みかづき(三日月)に同じ。㊂〔天〕さくげつ(朔月)に同じ。

三五夜中、新月の色【句】『白居易の八月十五日夜、禁中獨直對レ月憶二元九一と題する詩の句中に、「三五夜中新月色、二千里外故人心」とあるに本づく』十五夜の月色。

じん-けつ 人傑【名】衆人にすぐれたる人。

しんげつ-あん 心月庵【名】東京市淺草區向柳原なる松浦伯爵邸内にある茶室の名。

しんけつ-しよ 進決所【名】けつだんしよ(決斷所)に同じ。

じん-けふ 任俠【名】にんけふ(任俠)に同じ。

しんげぼん 信解品【名】〔書〕法華經二十八品の中の第四品。梵花「かの信解品の窮子のやうなる召集めては、今おのおのに衣など賜はすべし」

しん-けん 審檢【名】つまびらかに取調ぶること。

しん-けん 神譴【名】神の譴責。神罰。

しん-けん 神劍・神劍【名】㊀神より授かり又は神に供へたる神聖なる劍。㊁靈妙なる劍。㊂くさなぎのつるぎ(草薙劍)に同じ。

しん-けん 神權【名】『英 Divine right』㊀神の威權。㊁神より授かり、又は委任せられたる權力。**ていわうしんけんせつ**(帝王神權說)參照。

しん-けん 神驗【名】神の靈驗。不思議なること。

しん-けん 新檢【名】㊀慶長・元和以後の檢地。方六尺を一步とし、六尺一分の檢地竿を用ひ、三百步を以て、一段となしたもの。天和・貞享より元祿までの間に、制定せられたり。(古檢に對して)**こくなほし**(石直)參照。㊁**さやうはうけんち**(享保檢地)に同じ。

しん-けん 眞劍・眞劍【名】㊀まことの刀劍。(木刀などと區別していふ) 雪女五枚羽子板「おっつけ大小調へて、眞劍の勝負せん」㊁まじめ。ほんき。

しん-けん 進獻【名】**けんじやう**(獻上)に同じ。

しん-けん 親眷【名】㊀親しみて目を掛くること。㊁みうち。みより。親族。「と。

しん-けん 親見【名】したしく引見すること。

しん-けん 親權【名】〔法〕『英 Parental authority』父又は母が、その父又は母たる身分に基き、法律の規定により、その家に在る未成年の子を監護・教育し、及びその財產を管理する權利と義務との集合。母がこれを行ふは、父の知れざる時、死亡したる時、家を去りたる時、又はそのこれを行ふこと能はざる時に限る。

しん-けん 信驗【名】㊀しるし。あかし。信證。㊁ききめ。効驗。

しん-けん 審檢【名】つまびらかにしらぶること。

しん-げん 箴言【名】修身處世上のいましめとなる格言。

しん-げん 讖言【名】**ざんげん**(讖言)に同じ。

しん-げん 進言【名】意見を申し上ぐること。建言。

しん-げん 信言【名】㊀信用すべき言葉。㊁約束の言葉。

しんげん 信玄【名】〔人〕**たけだしんげん**(武田信玄)を見よ。

しん-げん 申嚴【名】申(サル)ねて嚴戒すること。

しん-げん 森嚴【名】秩序正しく、おごそかなること。

しん-げん 震源【名】〔地〕地下における地震の起點。即ちこの點に彈所生じて、地殼に波動を生ぜしむるなり。

じん-げん 仁賢【名】㊀仁心ありて賢きこと。㊁仁者と賢者と。

じん-けん 人權【名】〔法〕㊀**じんかくけん**(人格權)に同じ。㊁『佛 Droit de l'homme』人の生れながらに有する自由及び平等の權利。**てんぶじんけん**(天賦人權)參照。㊂**さいけん**(債權)に同じ。

じん-げん 人言【名】㊀人の言語。人語。㊁世人のうはさ。他人の言語。人語。

しん-けんさき 新劍先【名】劍先船の一種。

しん-けん-じや 親權者【名】〔法〕親權を有する人。

しん-けん-しやうぶ 眞劍勝負【名】㊀白刃を執りて、斬りあふこと。㊁まじめにな勝負。

しん-げん-しよはん 身言書判【句】**しん(身)**の條下を見よ。

しんけん-せつ 神權說【名】**ていわうしんけんせつ**(帝王神權說)に同じ。

しんげん-ち 震源地【名】〔地〕震源に當れる地。「る土地。

しんげん-ぶくろ 信玄袋【名】多くは布帛にて作り、底を設け、口を紐にて締め括るやうにしたる手提(ヂサ)の袋。

しんげんりう 信玄流【名】かぶとりう(甲州流)に同じ。 國姓爺後日合戰「兵庫鎖の丸柄に、信玄流の腕抜結下げ」

しん-こ 新戶【名】新に一戶を立てたるもの。

しん-こ 新古・新故【名】あたらしきと、ふるきと。新舊。

しん-こ 新香【名】㊀あたらしき香物(カウノ)。㊁かうのもの。かうかう。つけもの。

しん-こ 振古【名】『爾雅の釋言に「振古也」とあり』おほむかし。太古。往古。

しん-こ 糝粉【名】粳(ウルチ)の粉を水にて捏ね、蒸して、餅の如くにせるもの。しんこもち。粉餈。

しん-こ 神湖【名】〔地〕上野國榛名(ハルナ)湖

しん-こ 神庫【名】**じんこ**(神庫)に同じ。

しん-こ 眞個・眞箇【副】まことに。全く。

しん-こ 神語【名】㊀神の言語。神託。㊁めづらしく巧妙なる言語。

しん-こ 清語【名】清國の言語。支那語。

しん-こ 新語【名】あたらしき語。

しん-ご 身後【名】**しご**(死後)に同じ。

しん-ご 振古【名】『爾雅の釋言に「振古也」とあり』おほむかし。太古。往古。

しん-こ 糝粉【名】粳(ウルチ)の粉を水にて捏ね、蒸して、餅の如くにせるもの。しんこもち。粉餈。

しん-こ 神湖【名】〔地〕上野國榛名(ハルナ)湖

しん-こ 神庫【名】**じんこ**(神庫)に同じ。

しん-こ 眞個・眞箇【副】まことに。全く。

しん-こ 神語【名】㊀神の言語。神託。㊁めづらしく巧妙なる言語。

しん-こ 清語【名】清國の言語。支那語。

しん-こ 新語【名】あたらしき語。

しん-ご 身後【名】**しご**(死後)に同じ。

しん-ご 身後の諫【句】『蘇洵の管仲論に「以レ不レ能レ進二遽伯玉一而退二彌子瑕一故有二身後之諫一」とあり』我が死後に、君に上る諫言。

身後の名【句】『晉書の張翰傳に「使我有二身後名一不如即時一杯酒」とあり』我が身死したる後の名譽。

しん-ご 讖語【名】未來の效驗を說きたる語。未來記のことば。讖言。

じん-こ 神庫【名】神社の寶物を納め置く庫。ほぐら。

じん-こ 神戶【名】**かむべ**(神戶)を見よ。

じん-こ 人戶【名】㊀人家。民家。㊁人民。

じん-ご 盡期【名】物事の盡くる時期。

じん-ご 壬午【名】みづのとうま、又その年。

壬午の變【句】明治十五年に起りし朝鮮事變。國王李熙の父大院君、王妃閔氏一族の權を擅にするを惡み、漢城の兵を煽動して、亂をなさしめ、且つ我が公使館を燒かしめしより、公使花房義質(ヨシモト)嚴談して、償金と駐兵權とを得たり。

じん-ご 人後【名】人のした。他人のしり。他人の下風。

人後に落つ【句】『李白の詩に「風流豈肯落二人後一」とあり』事を爲して、人に後れを取る。

じん-ご 人語【名】**じんげん**(人言)に同じ。

しんこあへ 糝粉和【名】『形しんこに似たるよりいふとぞ』**しんきあへ**(新茄和)に同じ。

しん-ごい 身語意【名】〔佛〕**しんくい**(身口意)に同じ。

じんごいずむ(英 Jingoism)【名】國際間の事件に關して、不正の理屈を主張して、他國を侵略せんとする主義。侵略主義。腕力的征服主義。「ど。

しん-こう 鍼孔・針孔【名】はりのあな。め

しん-こう 鍼功【名】**さいほう**(裁縫)に同じ。

しん-こう 鍼工【名】はりを製造する職工。

しん-こう 診候【名】**しんさつ**(診察)に同じ。

しん-こう 新功【名】新しき手柄。盛衰記「遂に新功を立て、譽を四方に彰し」

しん-こう 新工【名】新なる工事。

しん-こう 侵寇【名】おかしあだすること。「と。進擊。入寇。

しん-こう 進攻【名】進みて敵を攻むること。

しん-こう 進貢【名】貢物を進獻すること。

しん-こう 神工【名】㊀神の製作。天製地作。㊁靈妙なる製作。

しん-こう 神功【名】㊀神の功德。㊁神の如き靈妙なる功力。

しん-こう 愼厚【名】つつしみぶかく篤實なること。謹厚。

しん-こう 振興【名】ふるひおこすこと。

しん-こう 深紅【名】㊀**しんく**(深紅)に同じ。㊁**くりむそんえき**に同じ。

しん-こう 深厚【名】㊀深く厚きこと。㊁旨ふかく篤實なること。

じん-こう 人口【名】㊀人の口さき。太平記「名を天下の人口に殘す」㊁人の數。ひとかず。

人口に膾炙す【句】『林嵩の周朴詩集序に「一篇一詠、膾二炙人口一」とあり』世人に賞揚せらる。名高くなる。**くわいしや**(膾炙)參照。

じん-こう 人工【名】人の力にて作り出だすこと。(天工に對して)

じん-こう 仁厚【名】なさけ深く誠實なること。「略。

じんこうかいはう 神功開寶【名】次條の

じんこうかいはうせん 神功開寶錢【名】

天平神護元年に鑄造せし銅錢。面に神功開寶の文字を刻す。神功開寶。神功錢。

じんこう-かうしん-はふ 人工更新法【名】〔農〕前伐の林を伐採して、次伐のものを造る造林法。專ら人力に依りて、苗木を植附け、又は種子を播附く。

じんこう-かんみりつ 人工甘味質【名】サッカリンその他これに類する化學的製品にて、含水炭素にあらざるもの。これを用ひて味を附けたる食品は、販賣することを許されず。

じんこう-きそ 人工基礎【名】〔建〕人工によりたる基礎。(天然基礎に對して)

じんごう-くわうごう 神功皇后【名】〔人〕

じんぐうくわうごう(神功皇后)に同じ。

じんこう-こきふ 人工呼吸【名】疾病急激なる打撃・溺水などのために、呼吸の停まりたる時、人工を以て再起せしむる應急手當。

じんこうこきふ-はふ 人工呼吸法【名】人工呼吸の方法。

しんこう-こくはつ-そけん 新工告發訴權【名】〔法〕舊民法における占有訴權の一。占有の妨害となるべき隣地の新工事を廢止・變更せしむる訴權。即ち現行法における占有保持の訴の一種。

しん-こうさい 新公債【名】我が國の國債の一。明治元年より同五年までの間、舊諸縣にて借用せし債務を、改めて政府の公債とし、年利四分にて、明治二十九年を償還期限と定めしもの。

じんこう-さいくわう 人工採光【名】さいくわう(採光)を見よ。(天然採光に對して)

しんこうさい-しょうしょ 新公債證書【名】新公債に對して發行せる證書。五百圓・三百圓・百圓・五十圓・二十五圓の五種あり。

しんこう-じ 秦公寺【名】くわうりうじ(廣隆寺)の別稱。

じんこう-じしゃく 人工磁石【名】じんざうじしゃく(人造磁石)に同じ。

じんこう-しんじゅ 人工眞珠【名】人工によりて產出したる眞珠。

しんこう-せん 進貢船【名】古、琉球より、圖書及び方物を載せて、支那に到りし船。

じんごう-せん 神功錢【名】じんごうかいはうせん(神功開寶錢)に同じ。

じんこう-たんさんすゐ 人工炭酸水【名】砂糖を加味せる水に、炭酸瓦斯を飽和せしめたる飲料。

じんこう-ちく 人工竹【名】人工にて、粧飾を加へたる竹。例へば斑紋を附して、虎斑(トラフ)竹に擬し、燒色を附けて、煤竹(スス)に擬したる類。

じんこう-てうさ 人口調査【名】一國一地方、又は一階級に於ける人口の增減、及びその現況を調査すること。

じんごう-はおうらく 神功破陣樂【名】しんくわうはおうらく(秦王破陣樂)に同じ。

じんこう-ひんけつ 人工貧血【名】〔醫〕人工を加へて、貧血せしむること。多くは外科手術の際、出血を少なからしめんがため、腕・脚等の局部に行ふ。

じんこう-ふくわ 人工孵化【名】人工に依りて、魚卵を孵化せしむること。鯉・金魚・鮭・鱒などに行ふ。ふらんき(孵卵器)參照。

じんこうふくわ-はふ 人工孵化法【名】人工孵化の方法。

じんこう-ぶんぽう 人工分封【名】人工にて、蜜蜂の分封を行ふこと。

しんこーうま 糠粉馬【名】馬の形を、糠粉にて作りたる小供の玩弄品。毛吹草「しんこ馬も今やひくらんもちつき夜」

じんこう-やうしょく 人工養殖【名】人工に依りて、魚卵に雄魚の精を注ぎて、孵化せしむること。

じんこう-りうざん 人工流產【名】人工を以て流產せしむること。姙娠によりて、母の生命の危險なる場合などに行はる。

じんこう-りん 人工林【名】播種・植林等の人工によりて成立したる森林。人造林。(天然林に對して)

じんこう-ゑっとうはふ 人工越冬法【名】人工を以て、冬寒及び春溫の溫度を與へ、蠶卵をして、その年內に孵化せしむる法。

しん-こく 深刻【名】㊀きはめて切實なること。㊁きはめて殘忍なること。刻深。

しんこく 深く刻み附くること。

しんこく 辰刻【名】じこく(時刻)に同じ。

しんこく 親告【名】㊀みづから告ぐること。自己の報告。㊁〔法〕被害者の告訴。

しんこく 深谷【名】底の深き谷。深壑。

しんこく 新穀・新穀【名】新に收穫したる穀物。

しんこく 新國【名】新に建てたる國。

しんこく 深刻【名】㊀きはめて切實なること。㊁きはめて殘忍なること。刻深。㊂深く刻み附くること。

しんこく 辰刻【名】じこく(時刻)に同じ。

しんこく 親告【名】㊀みづから告ぐること。自己の報告。㊁〔法〕被害者の告訴。

しんこく 深谷【名】底の深き谷。深壑。

しんこく 新穀・新穀【名】新に收穫したる穀物。

しんこく 新國【名】新に建てたる國。

しんこく 神國【名】㊀〔地〕『神の開きたまひし國の義』わが日本國の美稱。神州。皇國。正統記「大日本は神國なり。」㊁〔基督教〕『英 Kingdom of God』天國の、この世に實現せられたるもの。ユダヤ人の期待したるオシヤの王國のごとき、これなり。

しんこく 清國【名】しん(清)に同じ。

しんこく 深黑【名】極めて黑きこと。

しんこく 申告【名】申し上ぐること。役所に申し出づること。

しんこく 新刻【名】新に木版に刻むこと。「新版。

じん-こくうかい 盡虛空界【名】〔佛〕一切の空間を包容せる廣さ。(盡未來際に對して)

しんこく-かかく 申告價格【名】役所に申告したる價格。

しんこく-ざい 親告罪【名】〔法〕『獨 Antragsdelikte』被害者または被害者の最近親族より告訴するにあらざれば、これを問はざる犯罪。例へば、猥褻姦淫罪・過失傷害罪または親族・家族間における竊盜・詐欺・恐喝・橫領の類。

しんこく-しや 申告者【名】申告する人。

しんこく-しょ 申告書【名】申告のために調製したる書類。

しんこく-せうせつ 深刻小說【名】深刻なる材料を、それにふさはしき描寫により現はしたる小說。(光明(コウミヤウ)小說に對して)

しんこく-はふ 申告法【名】〔法〕納稅義務者をして、その義務を定むるに必要なる所得・財產・職業などを届け出でしむる方法。

じんごけいうん 神護景雲【名】稱德天皇の御代の年號(紀元一四二七年—一四二九年)。

しんござ 新五左【名】田舍ざむらひ、又は物馴れぬ屋敷者を嘲りていふ語。(明和・天明頃の遊里の語)大盡詞「しよては、ものふやかた者、これ新五左の始めなり」

しんこ-さいく 糠粉細工【名】糠粉を用ひて、花鳥その他種種の形を作ること、又その作りたる物。

じんごーじ 神護寺【名】山城國葛野(カヅノ)郡高尾山にある眞言宗の寺。東寺に屬す。和氣清麿の創立。延曆中、清麿河內國に神願寺を建てしが、のち奏請して、この地に遷

し、次いで勅して、空海に住持せしめ、名を神護國祚眞言寺と改め、勅願寺とす。後、僧文鷲その荒廢を慨し、つひに源頼朝を檀越(ダンヲツ)として再興す。

じん-ごじき 神今食【名】古、六月と十二月との十一日、即ち月次(ツキナミ)祭と同日の夜、天照大神を神嘉殿に勸請し、御飯を供へ、天皇親しく祭りたまひ、また御親らもきこしめしし儀式。その儀式、大かた新嘗祭に同じく、ただこれには新穀を用ひず、舊穀を以てしたり。靈龜二年始めて行はれ、應仁以後廢絶す。じんごんげ。かむいまけ。〔拾芥抄〕六月十一日、月次祭・神今食」

しん-ごしふゐ-わかしふ 新後拾遺和歌集【名】〔書〕次條の略。

しん-ごしふゐ-わかしふ 新後拾遺和歌集【名】〔書〕二十一代の一。藤原爲遠圓融院の勅を奉じて撰せしが、中途にして薨じ、天授元年藤原爲重續成せり。二十卷。

しんごしんしよう-じ 神護新勝寺【名】下總國印旛(インバ)郡成田町にある新義眞言宗の寺。本尊は、弘法大師の造れる不動尊。成田山明王院を號す。僧寬朝の開山。

しん-ごせん-わかしふ 新後撰和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。正安三年藤原爲世の撰進せしもの。二十卷。

しん-ごだいし 新五代史【名】〔書〕ごだいし(五代史)を見よ。

しん-こつ 心骨【名】精神と骨髓と。

じん-こつ 人骨【名】人間のほね。平当人骨の念珠も、この箱にありとかや」

しんこばな 糝粉花【名】〔植〕もぢずりぐさ(捩摺草)を云ふ。〔筑前國の方言〕

しん-こばん 新小判【名】■新に鑄造したる小判。■まんえんこばん(萬延小判)の別稱。

しん-ごばん 新御番【名】江戸幕府の職制の一。寛永二十年に初めて四組を置きしが、後には、八組となれり。平時は交番し、將軍外出時には、前驅をなす。「の頭。

しんごばん-がしら 新御番頭【名】新御番

しん-こばんきん 新小判金【名】■新に發行したる小判金。■まんえんこばんきん(萬延小判金)の略。

しん-ごふ 身業【名】〔佛〕三業の一。身體より生ずる業。例へば十惡中の殺生・偸盜(ヂユタウ)・邪淫の類。

しん-ごふ 心業【名】〔佛〕いごふ(意業)に同じ。

しん-ごふ 賑給【名】『しんごふと讀むべき由は、年中行事祕抄に見ゆ』古、每年五月、日を擇びて、京中の貧民に米鹽を給ひし儀。豫め廳院・大膳職等の米鹽數を計算せしめ、足らざれば、左右兩京の義倉に存する錢額をも計算せしめ、當日、大臣陣に著きて事を行ひ、檢非違使承りて、各條里を巡行して給與したり。〔公事根源〕賑給。これは、いやしき民に、米鹽など給ふなり」〔後起〕近江・紀伊二國飢、遣使賑給」

しんごふし 賑給使【名】古、天災ありし地方に、救恤のため、派遣せられし臨時の官。〔三代實錄〕賑給使」

しんごふちやう 賑給帳【名】賑給に關することを記したる帳。

しんごふ-てん 賑給田【名】賑給に供する田地。〔後起〕所費巨多、功遂不レ成、私墾田一百町、在二備前國一永爲二賑給田一」

しんごふ-ぶん 賑給文【名】賑給に關する事を記したる文書。〔朝野群載〕賑給文」

しん-こまつ 【名】〔植〕松杉(シヤウ)科に屬する常綠喬木。北海道及び樺太に産す。樹皮は赤褐色を呈し、針葉細く、枝に直角に著生す。あかえそ。あかえぞまつ。あかまつ。

しん-こん 身根【名】〔佛〕五根の一。外物に接して、知覺を起す機官。

しん-こん 信根【名】〔佛〕五根の一。確く佛教を信じて、他のために迷はざること。

しん-こん 心根・神根【名】『根は一身の根本たる義』こころ。こころね。精神。

しん-こん 心魂・神魂【名】たましい、靈魂。

しん-こん 新墾【名】荒蕪の地を新しく開墾すること。にひはり。「と。

しん-こん 新婚・新昏【名】新に結婚すること。

しん-こん 晨昏【名】■あさばん。朝夕。■朝夕仕ふること。〔禁花〕「雖二至孝鍾愛之子孫一不レ能二晨昏一」

しん-ごん 眞言【名】〔佛〕『梵Mantra(曼怛羅)の譯語。眞實の言說、即ち法身大日如來の意』■方便・假說の語にあらざる言說。佛の言語。〔保元〕「眞言妙典の御法樂」■呪文。陀羅尼。〔源氏〕「しんごんの深き道をだに、かくしとどむることなくひろめ仕うまつり侍り」■しんごんしゆう(眞言宗)の略。〔增鏡〕眞言の深き妙法」

眞言の三部經【句】〔書〕さんぶきやう(三部經)の條下を見よ。

眞言の七祖【句】〔佛〕印度・支那・日本に亙りて、眞言宗を傳へたる七人の祖師。即ち龍猛・龍智・金剛智・不空・善無畏(以上印度)・慧果(支那)・弘法(日本)。

眞言の十二流【句】〔佛〕我が國眞言宗の事相上の系流の十二派。即ち空海の高弟の一人なる眞雅の弟子原仁の下に、仁和寺の開基益信と醍醐寺の開基聖寶との二傑あり。益信は廣澤流を始め、聖寶は小野流を始めしが、兩派より、各更に六派に分れ、併せて十二派となれるもの。敎相上よりは、古義・新義の二派に分る。

眞言上乘の祕法【句】〔佛〕眞實を說きたる最上の祕密の法。眞言宗の敎義を讚歎していふ語。〔盛衰記〕「眞言上乘の祕法の中に、如何なる法が、箇樣の在家の者の行ひ奉り、揭焉の利生にあづかる」

眞言止觀【句】〔佛〕眞言宗と天台宗と。〔今鏡〕「眞言止觀兼ね學びたらん僧」太平記「天子本命の道場は、偏に眞言止觀の繁興にあり」

眞言の八祖【句】〔佛〕眞言の七祖の上に、なほ大日如來を加へたる稱。

眞言の八家【句】東密・台密二宗の祖師にして、前後入唐せし傳敎・弘法・慈覺・惠運・智證・常曉・圓行・宗叡の八人。

眞言二國【句】〔佛〕しかくげん(四箇格言)を見よ。

三流の眞言【句】〔佛〕眞言宗の三派。即ち東密と台密中の山門派・寺門派との併稱。「山門の三流」參照。〔正統記〕「三流の眞言いづれといふべきならねども、眞言を以て、諸宗の第一とすることも、むねと東寺によれり」

しん-ごん-けう 眞言敎【名】しんごんみつけう(眞言密敎)に同じ。

しん-ごん-さくもつ 深根作物【名】〔農〕萱科に屬する作物の總稱。

しんごん-さんぶきやう 眞言三部經【名】〔書〕さんぶきやう(三部經)を見よ。

しんごん-し 眞言師【名】〔佛〕眞言宗の法に依りて、加持祈禱を修する僧。〔大鏡〕「住僧はやんごとなき智者あるは持經者。しんごんしどもなり」〔盛衰記〕「大納言阿闍梨祐眞とて、貴き眞言師あり」

じん-ごん-じき 神今食【名】じんごじき(神今食)に同じ。〔禁祕抄〕「二季月次、神今食、自二一日一至二十一日一也」

しんごんじき-さう 身金色相【名】〔佛〕三十二相の一。身體黃色を呈せるもの。

しんごん-しくわん 眞言止觀【句】〔佛〕しんごん(眞言)の條下を見よ。

しんごん-しちだう 眞言七堂【名】眞言宗の寺院における七堂、即ち金堂・講堂・五重塔・大門・經藏・仲門(鼓樓ともいふ)・鐘樓。

しんごん-しゆう 眞言宗【名】〔佛〕佛敎の一宗。大日經・金剛頂經を所依とし、祕密陀羅尼の加持力によりて、即身成佛することを敎義とするもの。釋迦の滅後七百年、龍猛これを金剛薩埵より受け、龍智・金剛智・不空・善無畏等の祖師を經て、支那に傳ふ。我が國の空海、入唐し、惠果より傳へて、高野山金剛峰寺及び敎王護國寺(東寺)を根本道場として弘む。のち覺鑁(カクバン)紀伊國根來(ネゴロ)に大傳法院を開き、新義を唱へしより、前者を古義と稱す。現今、古義派は、總本山敎王護國寺の外に、高野派・醍醐派・大覺寺派・御室(オムロ)派の四派ありて、新義派もまた豐山(ブザン)派・智山派の二派に分る。なほ外に、修驗(シユゲン)道あり。相應宗。密宗。陀羅尼宗。眞言陀羅尼宗。眞言祕宗。「眞言の十二流」參照。

しんごん-しよ 眞言書【名】〔佛〕眞言宗の敎義を說きたる經文の總稱。從然ある眞言書の中に、呼子鳥鳴く時、招魂の法をば行ふ次第あり」

しんごん-だらに 眞言陀羅尼【名】〔佛〕しんごん(眞言)㊀に同じ。●だらに(陀羅尼)參照。徒然「この經のたしかなるにつきて、この眞言陀羅尼をば申しつるなり」

しんごんだらに-しゆう 眞言陀羅尼宗【名】〔佛〕しんごんしゆう(眞言宗)に同じ。

しんこん-ち 新墾地【名】新に開墾したる土地。新開地。

しんごん-ひしゆう 眞言祕宗【名】〔佛〕『眞言祕密の宗旨の義』しんごんしゆう(眞言宗)に同じ。

しんごん-ひみつ 眞言祕密【名】〔佛〕眞言宗の敎義は、大日如來の三密を本旨とする幽妙祕奧の敎義なること。金剛乘敎。心中萬年草「土はまた土砂の功德の眞言祕密」

しんごん-みつけう 眞言密敎【名】〔佛〕『大日如來の三密を旨とする祕密・幽妙の敎の義』眞言陀羅尼の敎法。金剛乘敎。眞言敎。金剛瑜伽敎。

しん-ごんみやうぶ 新權命婦【名】命婦の一。權命婦の次、御差(シオサ)の上に位せしもの。明治二年置かれ、同四年廢せられたり。

しんごん-めうてん 眞言妙典【名】〔書〕しんごんさんぶきやう(眞言三部經)の尊稱。保元「これを限りと御心ぼそく、眞言妙典の御法樂にも」

しんごん-りつしゆう 眞言律宗【名】〔佛〕律宗にて眞言宗を兼ぬる宗敎。もと空海入唐の際傳へし律宗にして、慶長の頃、明忍これを唱へ、慶安中淨嚴これを盛んにし、寛政の頃、慈雲律師に至りて大成し、河内國高貴寺を本山とし、のち眞言宗に屬せしが、明治二十八年獨立して、大和國西大寺を本山とするに至れり。

しんごん-りやうぶ 眞言兩部【名】〔佛〕胎藏界と金剛界と。理性と智性と。金胎(コンタイ)兩部。

しんこん-りよかう 新婚旅行【名】新に結婚したる新夫婦の相携へてなす旅行。西洋の風俗より移り來れるもの。ほねいむん。密月。

しんごん-ゐん 眞言院【名】㊀古、內裏の八省院の北、皇居の西に在りて、僧侶參集して修法せし所。天長六年空海の、唐の內道場に準じて、宮中において祕法を修せんことを奏請せしによりて、毎年これを行はれしが、承和元年空海再度の奏請により、勘解由(カゲユ)廳をこれに充てられしを、その初とす。修法院。曼陀羅道場。拾芥抄「眞言院、在二八省北一僧綱八侯、勤二御修法念誦等一」㊁大和國東大寺中の一院。弘法大師の造立にして、その影像あり。

眞言院の御修法(ミシホ)【句】古、毎年正月八日より七日間、眞言院にて、國家鎭護・五穀豐熟の祈禱を行ひ、また玉體平安のために、天皇の御衣をも祈禱せしこと。東寺の一の阿闍梨これに參し、金剛・胎藏兩界の法を隔年交互に修したり。安元三年眞言院燒失の後は、東寺において修することとなり、永享四年再興して、長祿年中までこれを行ひ、後また荒廢して、寛政以後、紫宸殿にて行ひ、明治十四年以來、復び東寺の灌頂院にて行ふ。後七日の法。公事根源「眞言院の御修法、これも今日より七日行はる。今年金剛界なれば、明年は胎藏界、年年にかはるがはる修せらる」

しんこ-もち 糝粉餅【名】しんこ(糝粉)に同じ。

しんごらう-は 新五郎派【名】小鼓の流派「の一。

しん-ごりやう 新御靈【名】ごりやうしや(御靈社)㊁に同じ。

新御靈の夏神樂(ナツカグラ)【句】前記新御靈社にて、六月十七日の例祭に行ふ神事。

しん-さ 辰砂【名】㊀〔鑛〕しんしや(辰砂)に同じ。㊁『その色の辰砂に似たるより名づく』支那にて、宋明代に亙りて製出せし磁器。銅にて著色したる血紅色の釉(ウハグスリ)を用ふ。靑磁と共に支那磁器特種の彩飾として、世に珍重せらる。

しん-さ 參差【名】しんし(參差)を見よ。

しん-さ 審査【名】くはしく檢査すること。

しん-ざ 新座【名】㊀新に設けたる座。太平記「新座・本座の田樂を呼びくだして」㊁あらたに役に就くこと。あたらしく召抱へらるること。しんざん。〔足利時代の語〕狂言(文相撲)「一人にては使ひ足らぬ程に、新座の者をだいぶ抱へようと存ずる」

しんざ 新座【名】〔地〕にひくら(新座)を見よ。

しん-ざ 神座【名】れいゐ(靈位)に同じ。盛衰記「大日本國武州太守平重盛神座と過去帳に入れられて」

しん-ざ 陞座【名】〔佛〕しんぞ(陞座)を見よ。

じん-さ 人差【名】〔哲〕『英 Individual difference』各個人の精神作用の諸方面に於て、他人と異なる特種の點。じんさしんりがく(人差心理學)參照。

しん-さい 薪柴【名】たきぎ。しば。

しん-さい 薪菜【名】たきぎと菜蔬と。

しん-さい 神采【名】心となりふりと。精神と風采と。

しん-さい 神祭【名】神道の式にて行ふ祭。

しん-さい 神齋【名】ものいみ。

神齋の札(フダ)【句】神社にて、齋(イモヒ)の前日より、不淨の輩入るべからずと書きて、門戶に立つる札。

しん-さい 眞宰【名】宇宙の主宰者。造化の神。眞君。太平記「眞宰の臂を掣(ヒ)いて、壺中の天地を藏し」

しん-さい 親祭【名】天皇が御自身に神を祭りたまふこと。

しん-さい 親裁【名】貴人の自ら裁決せらるること。

しん-さい 新歲【名】㊀しんねん(新年)に同じ。㊁〔佛〕『比丘(ビク)にとりては、新年元旦のごときものなるよりいふ』夏安居(ゲアンゴ)の終りし翌日、即ち七月十六日。

しん-さい 新妻【名】新に娶りたる妻。新婦。にひづま。

しん-さい 震災【名】地震のわざはひ。

しん-さい 心齋【名】『心の齋(イモヒ)の義。莊子の人間世篇に見ゆ』心を虛しくすること。虛心・坦懷。

しんさい【名】〔植〕しぶくさ(羊蹄菜)を云ふ。〔出雲國の方言〕

しんさい 眞濟【名】〔人〕高僧。俗姓は紀。京師の人。弘法大師に從ひて、密敎の奧祕を究め、傳法阿闍梨となる。承和年中、仁明天皇の勅を奉じて、唐に遊學す。貞觀二年寂す。年六十一。

しん-ざい 心材【名】〔植〕『英 Heart wood』樹木の幹の木質(モクシツ)部の內層、卽ち比較的早く成れる部分にて、腐敗を防ぐべき物質を含める、堅硬なる部分。色は紅・黃・黑褐など、樹の種類に依りて異なれども、褐色なるもの最も多し。あかみ。堅牢木質。中心木質。(液材に對して)

しん-ざい 身材【名】からだ。體格。身幹。

しん-ざい 浸劑【名】〔醫〕『羅 Infusa』內用藥劑を均等の粗末に製し、沸湯を注ぎ、時時振盪しつつ、五分時ほど、重湯煎上に置き、冷えたる後、濾過して製したるもの。

じん-さい 人才・人材【名】才ある人物。秀才の人。

人材登用【句】人才を採用して、官職に就かしむること。

じん-ざい 神在【名】じんざいに(神在煮)の略。〔土佐國・出雲國の方言〕

じんさい 神西【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治二十九年神東郡と合して、神崎郡となる。

しんさい-ぐ 神祭具【名】神を祭る時に用ふる道具。

じんさい-くわん 腎細管【名】〔醫〕さいねうくわん(細尿管)に同じ。

しんざい-こ 神在湖【名】〔地〕出雲國簸川(ヒカハ)郡にある湖。周回一里二十町餘。古稱、神門(カンド)湖。

しんざい-しきん 深在指筋【名】〔醫〕前膊筋前側深在層の一筋。四條の腱を有し、各指を屈折することを司る。

じんざい-とうよう-しけん 人材登用試驗【名】人材を登用するために行ふ試驗。

しんざい-なべ 浸劑鍋【名】銅或は黃銅にて作り、內面に錫を鍍きたる深く圓き鍋。木の柄と重き蓋とを有し、底部に至るに隨って次第に狹小となる。浸劑を作るに用ふ。

じんざい-に 神在煮【名】『じざいもち(自在餅)・ぜんざいもち(善哉餅)を見よ』小豆に餅を入れ、醬油にて煮、砂糖をかけて食ふもの。〔土佐國の方言〕

しんさい-ばし 心齋橋【名】〔地〕大阪市南區の島之內と南船場(ミナミセンバ)の堺なる長堀川

に架れる鐵橋。長さ二十間餘、幅二間餘。橋の南北に通ずる街路を心齋橋筋と稱し、最も繁華の地なり。

しんさいほけん 震災保險 【名】〔商〕損害保險の一。土地又は建築物等の、地震のために破壞せらるる損害の塡補を目的として付するもの。

じんざいもち 神在餅 【名】じんざいに(神在煮)の轉。〔出雲國の方言〕

しんさいよばうてうさくかい 震災豫防調査會 【名】文部大臣の監督の下に、震災豫防に關する事項を攻究し、その施行方法を審議する合議制の機關。會長・幹事各一人、委員二十五人を以て組織す。

しんさう 晨粧 【名】朝の化粧。太平記、佳人晨粧を飾りし弘徽殿の前には」

しんさう 身相 【名】すがた。かたち。太平記「不動明王、金色(コンジキ)の身相を現じて」

しんさう 心想 【名】おもはく。おもひ。

しんさう 心喪 【名】喪期終りたる後も、なほ心だけは喪に服すること。

しんさう 心操 【名】心のみさを。志操。盛衰記「心操落居して、柔和を性に備へたり」

しんさう 深窓・深窗 【名】奥深き窓の内。太平記「祕して、深窗に在りしかば」

しんさう 深草 【名】深く生ひ茂れる草。

しんさう 眞草 【名】㊀眞書と草書と。㊁眞物の草書。

しんさう 眞相 【名】實際のありさま。

しんさう 神草 【名】㊀ふしぎなる草。㊁〔植〕にんじん(人參)に同じ。

しんさう 神葬 【名】神道の儀式を用ひて葬ること。(佛葬などに對して)

しんさう 新造 【名】㊀新に造ること。㊁『婚禮に先だちて、新にその妻の居所を造るよりいふとぞ』新婦人の稱。また人の妻の敬稱。しんぞ。㊂十三四歲より二十歲位までの處女。しんぞ。㊃新しく造りたる和船。「新艘」㊄『新造の船の義といふ』江戸吉原の遊廓にて、姉女郎に附屬し、使役せられて、遊女の見習をなす少女。禿十三四歲に至れば、新造として出し、帶は前結に改む。初めは振袖新造、稍長ずれば袖を留めて留袖新造といふ、又番頭新造といへるもあり。しんぞ。「新艘」 番の門松

「新造つきだし、出立ちばえ」

しんさう 神造 【名】㊀神の造りたること、又その物。㊁巧妙なる造作その物。

しんさう 深造 【名】深く造詣すること。深造自得 【句】『孟子の離婁下篇に「君子深造之、以道欲其自得之也」とあるに本づく』深造して、道を體得したること。

しんさう 神像 【名】神の肖像。神のかたち。

しんさう 心臟 【名】〔醫〕血管系統の中心器。動物の種類によりて、形狀大小等一樣ならざれども、人類のは、胸腔内、左右兩肺の間に在り。ほぼ倒圓錐形なる中空の筋肉質物にして、内腔は、中隔によりて、全く二分せられ、その各半も横隔膜によりて、上下に二分せられ、上部を心耳、下部を心室といふ。しんぞう(心耳)・しんしつ(心室)參照。

しんさう 心像 【名】〔哲〕しんしやう(心象)に同じ。

じんさう 刃創 【名】かたなきず。金創。

じんさう 人造 【名】人力によりて造ること、またその造りたる物。人工。人作。(天造に對して)

じんさう 腎臟 【名】〔醫〕尿の排泄器官。人類のは、腹腔の背部、脊柱の兩側に一箇づつありて、腺より成り、各蠶豆形をなし、灰赤色を呈す。

じんさう-あすふあると 人造土瀝青 (英 Artificial asphalt) 【名】石油及コルタアルの蒸溜殘渣をアスファルトに混和したるもの。

じんさう-あゐ 人造藍 【名】コルタアルより得たるナフタレンを原料とし、數回の化學的處理法を經て製造したる藍色素。その性質、植物の藍と同一なり。(天然藍に對して)

しんさう-えふ 心臟葉 【名】〔植〕心臟形の葉。

じんさう-えふ 腎臟葉 【名】〔植〕腎臟形の葉。

じんさう-えん 腎臟炎 【名】〔醫〕腎臟の炎症。發熱して、腰部に疼痛を覺え、手足陰囊等に水腫を發するに至る。腎炎。

しんさう-おろし 新造下・新艘下 【名】しんさう(進氷)に同じ。

しんさう-がひ 新造買 【名】遊廓の新造を買ふこと。

しんさう-がん 深造岩 【名】〔地〕火成岩の一。岩漿が、地下の深處において凝固して、成りたるもの。高壓の下に、徐ろに冷却したるがため、鑛物成分は悉皆結晶して、粒狀の石理を呈し、また岩瘤・餅盤をなして現出す。花崗岩・閃綠岩・斑糲岩等これに屬す。深成岩。(火山岩・脈岩に對して)

じんさう-ぎうらく 人造牛酪 【名】動物性或は植物性脂肪に人工を加へて、乳脂樣に製したるもの。(天然牛酪に對して)

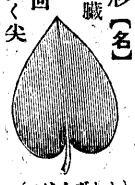
じんさう-ぎぬ 人造絹 【名】じんさうけんし(人造絹絲)に同じ。

しんさう-きん 心臟筋 【名】〔醫〕心臟壁を構成する筋肉。橫紋筋の一種にして、他の骨格筋のごとく、橫紋を有し、細長なれども諸所側枝を出し、隣接側枝と連なる。

じんさう-きん 人造金 【名】がふせいきん(合成金)に同じ。

しんさう-ぐ 神葬具 【名】神葬に用ふる道具。

しんさう-けい 心臟形 【名】〔植〕『英 Cordate』心臟の如き形。即ち下部は内方に彎入して、凹處をなし、上部は銳く尖れるもの。


(いけうざんし)

じんさう-けい 腎臟形 【名】〔植〕『英 Reniform』腎臟の如き形、即ち下部は心臟形と同樣にして、上部の鈍圓なるもの。

(いけうざんじ)

じんさう-けんし 人造絹絲 (擬絹絲)に同じ。

じんさう-こほり 人造氷 【名】じんさうひやう(人造氷)に同じ。

じんさう-ごむ 人造護謨 【名】せるろいどに同じ。

じんさう-ざうげ 人造象牙 【名】前條に同じ。

じんさう-さんご 人造珊瑚 【名】あかこだま(明石珠)に同じ。

しんさう-しき 神葬式 【名】神道によりて葬る儀式。

じんさう-しきそ 人造色素 【名】人工を加へて製造したる色素。即ち人造の染料・顏料などの類。(天然色素に對して)

じんさう-じしやく 人造磁石 【名】〔理〕人工によりて、鋼鐵片に磁性を與へたるもの。鋼鐵片を電流を通じたるコイルの中に暫時入れおき、もしくはこれを强き棒磁石の一極にて、その一端より他端に向ひて、數回摩擦するか、又は二本の棒磁石の異なれる極を、その中央におきて、左右に反復摩擦すれば、磁性を付與することを得。人工磁石。(天然磁石に對して)

じんさう-じっしつえん 心臟實質炎 【名】〔醫〕しんさうにくしつえん(心臟肉質炎)に同じ。

じんさう-しやうなう 人造樟腦 【名】鹽酸ピネンの結晶、即ちテレビン油に乾きたる鹽化水素を通じて得るもの。

じんさう-じやかう 人造麝香 【名】人工に依りて作りたる、麝香に等しき香氣を有する物。黃白色の針狀結晶物にて、原料は、ブランディ等の中に存する一種の炭化水素。

じんさう-せき 人造石 【名】砂礫・石灰・セメント等を混合して、石の如く固めたるもの。(自然石に對して)

じんさう-せんれう 人造染料 【名】人工によりて製出せられたる染料。在來のものには、コルタアルを原料として製造するものと、鑛性藥劑とを以て製造するものとの二種あり。(天然染料に對して)

じんさう-せめんと 人造セメント 【名】『英 Portland cement 原語は、亞米利加のポオトランド産の石に似たるよりいふ』石灰石と粘土との混合物を窯に入れて灼熱(シンク)したるものを、更に粉碎せるもの。種種の用に供す。

しんさうち 新相知 【名】新しきしりあひ。

じんさうといし 人造砥石 【名】人工に依りて作りたる砥。セルラックを溶し、硅砂を混和して、型に入れて作る。また金剛砂も代用品となる。

しんざう-にくしつえん 心臓肉質炎【名】〔醫〕心臓病の一種。心臓の筋肉に發する炎症。心臓實質炎。

しんざう-はれつ 心臓破裂【名】〔醫〕心臓の動脈に病あるか、又は心臓實質炎等ある者の、身體過勞を致せる際等に、心臓の破裂すること。破裂の部位は左室前壁又は心尖部に多く、大抵頓死す。

しんさう-ひせう 深窓祕抄【名】〔書〕服飾の事を記せるもの。一卷。撰者詳かならず。

しんざう-びやう 心臓病【名】〔醫〕心臓の作用常態を失し、動悸はげしく、脈搏の不齊になる病。心臓瓣膜病・心臓肉質炎・心嚢炎・心臓神經痛等の種類あり。

じんざう-びやう 腎臓病【名】〔醫〕腎臓の作用常態を失ひて、濾過(ロクワ)排泄十分ならず、尿中に蛋白質など種種の物質を含む病。急性・慢性の腎膜炎・尿毒性等に分たれど、結局同病なり。

じんざう-ひよう 人造氷【名】人爲により、低溫度を生ぜしめて、水を氷結せしめたるもの。二重の槽を造り、外槽に水、内槽に氷らすべき水を盛り、外槽水中に、急劇に結晶硝酸アンモニヤを投じ、又は鹽水槽に凍らすべき罐を懸垂し、水槽中を通過して、罐底に開口せる管より壓搾空氣を送入して、水中の熱を奪ひ去りて造る。(天然氷に對して)

じんざう-ひれう 人造肥料【名】種種の原料を集め、これを工業的機械力により製造したる肥料。例へば過燐酸石灰・骨粉等の類。

しんざう-べんまくびやう 心臓瓣膜病【名】〔醫〕心臓病中、最も多く發するもの。瓣膜の開閉十分ならず、もしくは瓣口に狹窄を來すものにて、通常左心に發す。僧帽瓣最も多くこれに罹り、大動脈瓣口これに次ぎ、三尖瓣に發するは稀なり。原因は種種なれども、殊にレウマチスと密接なる關係あり。

じんざう-まし 人造麻絲【名】木綿絲を蠟油等の混合液に浸し、摩擦して、麻絲の如き光澤を生ぜしめ、又は綿絲に膠質の糊を附け、これをフオルマリンもしくは重クロム酸加里液のごときものにて酸化せしめ、水に對して、不溶解ならしめたるもの。人造麻布の原料となる。

しんざうまひ 心臓痲痺【名】〔醫〕心臓筋の筋肉痲痺して、その收縮力を失ひ、作用全く停止すること。

じんざうまふ 人造麻布【名】人造麻絲を用ひて織製したるもの。一見麻布のごとくなれども、折目を生ずる缺點あり。

じんざうりん 人造林【名】じんこうりん(人工林)に同じ。

しんさく 神策【名】■巧妙不思議なる謀計。神算。■『史記の封禪書に「寶鼎神策」とあり』■めどぎ(筮)に同じ。

しんさく 新作【名】あらたに作りたるもの。新しき時代の製作。(舊作・古作に對して)

しんさく 新築【名】■新規なる策略。■しんあん(新案)に同じ。

しんさく 振作【名】振ひ作(オコ)すこと。振興。振起。作興。

しんさく 浸削【名】侵して削り取ること。

しんさく 進策【名】策四の一種。士庶の、時務に關する意見を述べて上るもの。

じんさく 人作【名】じんさく(人造)に同し。

しんさく 新朔本門院【名】〔人〕仁孝天皇の女御。孝明天皇の御生母。藤原政熙(マサヒロ)の女。御名は祺(サチ)子。弘化四年皇太后となり、同年崩ず。御年三十七。

しんさ-くわん 審査官【名】或物事の審査を司る官吏。例へば特許局審査官・恩給局審査官の類。

しんさくわんほ 審査官補【名】審査官の職務を補助する職。

しんさし 尻刺【名】■しりさし(尻刺)の音便。■しんばりぼう(心張棒)に同じ。

しんさしき 新座敷【名】新築の座敷。

じんさ-しんりがく 人差心理學【名】〔哲〕こせいしんりがく(個性心理學)に同じ。

しんさつ 新札【名】新に發行したる紙幣。新紙幣。

しんさつ 振刷【名】さっしん(刷振)に同じ。

しんさつ 審察【名】つまびらかに視察すること。

しんさつ 神察【名】神の如く明かに察すること。きはめて銳敏に洞察すること。

しんさつ 診察【名】醫師が患者の病症を見分くること。

しんさつ-じよ 診察所【名】醫師が患者を診察する所。

しんざつ-ぼう【名】『しんざつはしんざし(尻刺)の訛か』しんばりぼう(心張棒)に同じ。

しんさ-はうこくしよ 審査報告書【名】審査したる事柄につきての報告書。

しんさん 身三【名】〔佛〕十善業・十惡業の中、身にて行ふ三つの事、即ち不殺生・不偸盜(ウヅチウ)・不邪淫及び殺生・偸盜・邪淫の總稱。謠曲「和泉式部」「人間の身三・口四(シク)意三の十の道多かりき」

しんさん 神算【名】巧妙なるはかりごと。妙術。神策。

しんさん 心算【名】心中の計算又は計畫。心計。胸算。心匠。

しんさん 辛酸【名】『味の酸きと辛きとに譬へていふ』しんく(辛苦)に同じ。辛酸を嘗む【句】辛苦に逢ふ。

しんさん 深山【名】奥ふかき山。みやま。深山大澤龍蛇を生ず【句】非常の地には非常のものを生ず。

しんさん 新參【名】■主人に、新に仕ふること、又その人。しんざ。いままゐり。(古參に對して)■新しく加入すること、又その人。しんいり。

しんさん 進山・晉山【名】『山に進む義』僧が新に一寺の住職となること。

しんさん 神山【名】■神を祀れる山。■神又は仙人の住める山。蓬萊山。■くすしくけだかき趣のある山。靈山。■ひじ。

じんさん 腎盞【名】〔醫〕じんう(腎盂)に同じ。

しんさんぎよくわかしふ 新三玉和歌集【名】〔書〕後水尾院の勅撰集、中院通茂の老槐集、烏丸光榮(ミツヒデ)の榮葉集の三集中の歌を撰抄して、類題としたるもの。二卷。

しんざんしき 進山式・晉山式【名】僧侶が一山の住持となりて、入寺する法式。進院。進寺。

しんさんじふろくかせん 新三十六歌仙【名】■後鳥羽院・土御門院・順德院・後嵯峨院・雅成(マサナリ)親王・宗尊親王・道助入道親王・式子內親王・藤原良經・同道家・同公經・久我通光・藤原實氏・源實朝・藤原基家・藤原家良・嘉鎭和尙・前大僧正行意・源通具・藤原定家・八條院高倉・俊成卿女・宮內卿・藻壁門院少將・藤原爲家・同雅經・同家隆・同知家・同有家・同光俊・同信實・同隆祐・同具親・源家長・鴨長明・藤原秀能(ヒデヨシ)の三十六人の歌人。■〔書〕前條の歌仙の和歌十首づつ凡て三百六十首を集めたるもの。

しんざんまひ 新參舞【名】昔、大名旗本などに新に仕へたる者が、儀式としてなしたる舞。

しんざん-もの 新參者【名】新參の人。しんざんもの(新參者)に同じ。新可笑記「家中に人もありしに、しんざものの某を人がましく思召されでや」

じんざ-もみ 甚三紅【名】承應の頃、京都長者町に住みし桔梗屋甚三郎の染めし染色。色は、紅梅に同じく、茜を用ひて染めしものにて、婦人の衣服の胴裏に用ひたり。

しんさやしきつきのあまがさ 新皿屋舖月雨傘【名】脚本の一。「播州皿屋舖」を換骨奪胎したるもの。魚屋宗五郎の妹お蔦、奸臣岩上典藏の意に從はず、讒せられて主人磯部主計介に井戸に斷捨てらる、宗五郎酒の勢に乘じて、磯部邸へ暴れ込み、終に理非明白になるといふ筋。河竹默阿彌の作。

しんさ-ゐん 審査委員【名】審査を行ふ審査委員の會議。

しんさゐん-くわい 審査委員會【名】

しんし 伸子・簪・簇【名】布帛を洗張(アラヒバリ)し、又は染むる時、布帛の兩緣に刺留めて、弓形に撓め張り、皺・襞などを伸すに用ふ

る、細き竹串。しいし。はばだし。狂言、鐘鋳「紺屋に足らぬ物ならば、簀細張のやうな物ではなかったか」

しんし 眞摯【名】實直にして、事に當りて撓まぬこと。まじめ。摯實。

しんし 愼思【名】つつしみて思ふこと。

しんし 脣脂・唇脂【名】脣に紅(ベニ)をさすこと、又その紅。

しんし 脣齒・唇歯【名】Ⅰくちびると齒と。Ⅱ密接なる利害關係を有する間柄の譬。國姓爺合戰、大明・韃靼、向後脣齒の因をなし」

脣齒の國【句】利害關係の深密なること、恰も脣と齒とのごとき國。國際關係の親密なる國。「ことの使者。

しんし 信使【名】Ⅰつかひ。使者。Ⅱまことある士。Ⅲ【佛】在俗のまま、佛法を信じて、受戒せる男子。しんじ。清信士。信男。優婆塞(ウバソク)。在家人(ザイケ)。(信女に對して)Ⅳ佛葬して、たる男子の法名の下に添ふる語。しんじ。(信女に對して)「意志。

しんし 心志【名】こころざし。おもはく。

しんし 心思【名】おもふこと。おもひ。こころ。かんがへ。

しんし 心師【名】我が心の師たるもの。

しんし 信使【名】Ⅰ神の子。Ⅱ(基)『英Son of God』救世主。キリスト。神の子。

しんし 神姿【名】Ⅰ神のすがた。Ⅱすぐれたる容姿。からがうしき姿。

しんし 神祠【名】神を祀れる祠堂。神社。

しんし 深思【名】深く思ふこと。

しんし 深紫【名】濃き紫色。

しんし 深旨【名】深き旨意。深意。

しんし 浸漬【名】水にひたすこと。水につくること。

しんし 浸死【名】水にひたされて死ぬること。

しんし 新死【名】あらたに死にたること。「し。

しんし 新死の姿美麗若風盆

しんし 新紙【名】しんぶんし(新聞紙)に同じ。

しんし 新誌【名】新しき雜誌。

しんし 新詩【名】Ⅰ新作の詩。Ⅱ新體の詩。

しんし 新司【名】信任の國司。後撰「忠房朝臣津の守にて、新司はるかたが、まうけに屏風調じて」

しんし 進止【名】Ⅰ進むと止まると。Ⅱたちゐ、ふるまひ。坐作進退。擧止。Ⅲ進退許否の命令。さしづ。Ⅳ進退許否して、思ふままに支配すること。さしづ。盛衰記「一國田地、帝皇進止實少、皆爲二三寮之領」

しんし 進士【名】Ⅰ支那にて、科擧に及第せし者の稱號。周禮の王制には、五士の一とし、隋に至りて、始めて一科目となり、唐・宋も亦この科目を存して、他の科目よりも重要視し、明・清に至りては、本科目のみとなり、清朝滅後は、外國大學卒業者に就きて試驗を課し、及第したる者に與ふる稱號となりたり。Ⅱ我が國にて、支那の制に倣ひ、古、式部省にて試驗を行ひ、諸官に登用するため、諸國より選抜したる才學ある人。神龜五年に始まる。菅ふるきしんしなどに侍らずば」

しんし 進仕【名】進みて仕官すること。

しんし 紳士【名】『神を身に著ける士の義。しん(紳)・しんし(搢紳)を見よ』身がらのよき人。上流に位する人。

しんし 親子【名】おやと子と。おやこ。

しんし 臣子【名】臣たり子たる者。

しんし 宸旨【名】『しんき(宸襟)を見よ』天皇の御意。宸意。「と。

しんし 震死【名】雷に打たれて死ぬること。

しんし 嚫資【名】【佛】『嚫はだし(嚫施)の略』布施せられたる物。

しんし 鍼師【名】典藥寮の職員。鍼術の事を奉仕せしもの。

しんし 侲子【名】『善童の義』古、追儺(ツイナ)の式を行ふ時に、方相氏に隨ふ小兒。朱衣・紺布・未額(ベツカン)を附く。小儺(セウダ)。内裏式「侲子二十人」

しんし 振子【名】【理】『英 Pendulum』物體の重心外の一點を中心とし、重力の作用によりて、振動せしむる裝置。普通にいふは單振子にて、伸縮することなく、また重さなき絲の一端に、質點即ち重さのみありて、體積無き錘を吊したるもの。(但し、實際においては、小さくして重き錘を吊して造る外、方法なし)また一の剛體の重心外の點を過ぐる眞線を軸として振動し得べきやう造りたるを、複振子といふ。これも長さの異なる無數の單振子の集合せるものと考ふるを得。ふりこ。さげふり。

振子の周期【句】【理】『英 Period of pendulum』振子の錘の、その振幅を一回往復するに要する時間。

振子の等時性【句】【理】『英 Isochronism of pendulum』振子のその振幅小なる間は、地球上一定の場所においては、その周期が、錘の質量及び振幅の如何によりて變ずることなき性質。西曆一五八三年伊太利のガリレヲ(Galileo)の發見に係れり。

振子の長さ【句】【理】『英 Length of pendulum』單振子の支長と重點との間の長さ、即ちその絲の長さ。

しんし 晉子【名】【人】榎木其角の雅號。

しんし 身子【名】【人】しゃりほつ(舍利弗)の譯名。太平記「昔、天竺に、身子と申しける聲聞(シャウモン)」

しんし 參差【形】長短齊しからず、又は互に交錯するさま。

しんし 神璽【名】Ⅰ天子の御印。玉璽。Ⅱやさかにのまがたま(八尺瓊曲玉)に同じ。正統記「內侍所・神璽も芳野におはしませば」

しんし 心字【名】漢字の「心」といふ字。

心字の池【句】「心」といふ字形に造りたる園池。

しんし 信璽【名】天子の御信印。

しんし 信士【名】【佛】しんし(信士)Ⅰ・Ⅱに同じ。

しんし 深慈【名】ふかきなさけ。

しんし 心事【名】Ⅰ心に思ふ事。心の中に計畫せる事。Ⅱ心に思ふ所と實際の事柄と。考と事實と。

しんし 神寺【名】しやじ(社寺)に同じ。

しんし 神庫【名】かんだち(神館)に同じ。

しんし 神事【名】神を祭ること。かむわざ。かみごと。じんじ。盛衰記「恒例之神事・佛事」

しんし 臣事【名】臣として仕ふること。

しんし 眞事【名】まことの事柄。

しんし 眞字【名】楷書に書きたる文字。

しんし 進寺【名】【佛】しんざんしき(晉山式)に同じ。

しんし 新字【名】Ⅰ新しく製作したる文字。Ⅱ天武天皇の時、壁部石積(イハヅミ)等に命じて、漢字に擬して、新に造らしめし文字。皇・神などの類。

しんし 審事【名】陸軍裁判所及び陸軍軍法會議の職員の一。豫審に從事せし勅任官又は奏任官。明治十五年設置、同十九年廢止。しんじ(審事補)參照。

しんし 眞時【名】【天】『英 true time』しんたいやうじ(眞太陽時)に同じ。

しんし 心耳【名】Ⅰ精神と耳と。Ⅱ(動)脊椎動物の心臟內腔の上半。魚類にありては一箇にて、諸體部より還り來る靜脈血を受け、肺を用ひて呼吸する脊椎動物にありては、左右二室に區別せられ、右側なるは、靜脈血を諸體部より受け、左側なるは、動脈血を肺より受く。しんしつ(心室)參照。

心耳を淸す【句】精神と耳とを淨らかにす。

じんし 迅駛【名】はやきこと。

じんし 尋思【名】よく考ふること。

じんし 仁祠【名】衆民に仁惠を與ふる社寺。平家、叡岳に至りては、帝都東北の仁祠として、國家靜謐の請祈を致す」

じんし 仁慈【名】いつくしみぶかきこと。

じんし 人事【名】Ⅰ人の爲すべき事柄。Ⅱ人間社會の事柄。Ⅲおくりもの(贈物)Ⅰに同じ。Ⅳ男女の交接。いろごと。Ⅴ人の一身上に關する事項、又、人の身分能力に關する事項。「人事相談所」「人事局」

人事を解せず【句】人事を盡して、天命を待つ【句】『支那唐の柳時が戒子書に「盡人事聽於天命一可也」とあり』人力の及ぶ限りは事を忘らずして、その成否は天運に任す。【諺語】

じんじ

じんじ 神事【名】じんじ(神事)に同じ。
しんしう 神秀【名】神の如く、靈妙に秀づること。秀靈。
しんしう 新秋【名】秋の初。はつあき。
しんしう 新愁【名】あらたなるものおもひ。あらたなるうれひ。
しんしう 深愁【名】ふかきうれひ。
しんしう 神州【名】〔地〕㊀大日本帝國の美稱。神國。皇國。㊁支那人が自國を指していふ尊稱。
しんしう 信州【名】〔地〕しなの(信濃)㊀に同じ。
信州の四頭【句】武田信玄の時代に於ける信濃國の四侯、卽ち村上・小笠原・諏訪・木曾の四氏。
じんじう 仁獸【名】〔動〕『公羊傳に「麟者仁獸也、有二王者一則至」とあるに本づく』きりん(麒麟)の異稱。百日會式、麟は仁獸にして、生けるを喰はず、生草を踏まずともいへり」
しんしう-くわん 進修館【名】豐前國下毛(シモ)郡中津町に在りし、舊中津藩の學校。藩主奧平昌高創立し、廢藩の際廢す。
しんしう-だんじ 神州男兒【名】日本國の男兒。
しんしう-ななこ 信州斜子【名】信濃國松代(マツシロ)附近より產出する斜子。
しんしう-りう 信州流【名】をがさはらりう(小笠原流)㊁に同じ。
しんしおん 脣齒音・唇齒音【名】〔語〕『英 Labio dental』上齒と下脣とを用ひて發する子音。國語には、この音なし。英語の f・v は、これなり。
じんじ-かさがけ 神事笠懸【名】神社の祭祀に興行する笠懸。的には鹿・雉・鶉・鯉などの贄(ニヘ)を用ふ。八幡社・諏訪社などにて行はる。
しんしき 深識【名】ふかき智識。ふかき見識。(淺識に對して)
しんしき 新式【名】あたらしき法式。新樣。(舊式に對して)
しんしき 審識【名】つまびらかに識ること。

しんしき

しんしき 心識【名】〔佛〕心と識と。小乘俱舍にては、兩者を同體異名とし、大乘唯識(シユイシキ)にありては、別體と見る。
一團の心識【句】〔佛〕㊀『古、心臟を意識の存する處と考へしよりいふ』しんざう(心臟)に同じ。㊁心王と心所との總稱。
しんしき 身識【名】〔佛〕五識・六識また八識の一。身根によりて、外物を知覺すること。
しんしき 眞識【名】〔佛〕㊀妄念を離れたる心識、卽ち六識中の意識の淨心。㊁生滅の相を離れたる眞心。
しんしき 神識【名】精神。靈魂。
しんしき 身色【名】身體の色。謠曲「歌占」「されば父は山、そめいろとは風病の身色」
しんじきん 眞字金【名】『眞字にて「文」の字の添極印あるよりいふ』げんぶんきん(元文金)に同じ。
じんじぎやうせい 人事行政【名】〔法〕公益行政の一。人の法律上の地位を明かにするを目的とするもの。
じんじきよく 人事局【名】陸・海軍兩省にある一局。陸海軍武官・文官の進退、任免、補職・命課・賞俸・休職・停職・豫後備役その他人事に關する一切の事務を掌る所。
しんしくわんけい-じけん 親子關係事件【名】親子の身分關係にかかる訴訟事件。
しんじ-こばん 眞字小判【名】げんぶんこばんきん(元文小判金)に同じ。
じんじ-さう 人字草【名】〔植〕『花瓣の並列せる形、人の字に似たるよりいふ』虎耳草(ユキノシタ)科に屬する多年生の草。山間に自生す。葉は根生、花莖は葉間を出で、夏季に、白色の小花を開く。
じんじ-しふ 壬二集【名】〔書〕みにしふ(壬二集)を見よ。
しんじ-ぜい 神寺稅【名】古、神田・寺田より、その神社・佛寺に納めし稅。
じんじ-そしよう 人事訴訟【名】〔法〕人の身分・能力に關する事件。卽ち婚姻事件・養子緣組事件・親子關係事件・相續人廢除事件・隱居事件・禁治產・準禁治產及び失踪等につきての訴訟。

じんじそ

じんじそしようてつづき-はふ 人事訴訟手續法【名】〔法〕人事訴訟の手續を規定せる法律。明治三十一年の公布。
じんしたな 神祀棚【名】棚の一種。床の間・書院などの脇に設け、その內部に神を祀るもの。
しんじち 眞實【名】しんじつ(眞實)に同じ。〔古語〕㊀遷「しんじちにはあらねど、うれしくこそあれ」㊁源氏「しんじちの親のやんごとなく思ひ掟てたまへらんを」
じんじちやう 人事長【名】鎭守府司令長官の幕僚の一。麾下の職員の人事に關する事務を掌るもの。
しんしつ 秦室【名】支那の秦の王室。保元「秦室七世の風に歸りき」
しんしつ 寢室【名】睡眠する室。ねま。
しんしつ 淸室【名】支那の淸朝の王室。
しんしつ 新室【名】㊀あたらしき室。新につくりたるへや。㊁あたらしき妻。にひづま。はなよめ。新婦。
しんしつ 心室【名】〔動〕心耳と共に、脊椎動物の心臟の一部をなすもの。心耳の下に位し、魚類にありては、ただ一室ありて、血液を鰓(エラ)に送り出し、氣化の後、動脈血となりて、身體諸部を循環せしむる用をなし、肺にて呼吸する脊椎動物にありては、一室乃至左右二室より成り、一室なる時は、動脈・靜脈兩種混合の血液を肺及び身體諸部に送出し、二室なる時は、右側のは、同側の心耳より移る靜脈血を肺に、左側のは、同側の心耳の受けたる動脈血を全身に送出す用をなす。
しんしつ 心疾【名】心のやまひ。きもがひ。
しんしつ 滲濕【名】しみうるほふこと。
しんじつ 信實【名】まめやかにして、いつはりなきこと。正直。
しんじつ 親昵・親暱【名】したしみ睦むこと。親近。
しんじつ 眞實【名】㊀いつはりにあらぬこと。ほんたう。まこと。心中曾戾卑眞實の子を持つたと思召せ」㊁忠實。誠實。㊂〔佛〕絕對の眞理。眞如。眞諦。

じんじつ

眞實中道一如(諦)の法【名】〔佛〕虛妄ならず、偏僻ならず、平等にして差別無く、常住にして變らざる法界の眞理。野守鏡「眞實中道一如の法、なほ以て空假の二法を具足して」
じんじつ 迅疾【名】じんそく(迅速)に同じ。
じんじつ 人日【名】『東方朔の占書に、元日には雞を、二日には犬を、三日には猪を、四日には羊を、五日には牛を、六日には馬を、七日には人を占む由記せるよりいふ』五節句の一。陰曆正月七日。ななくさ。人の日。
じんじつ 盡日【名】㊀月の末日。晦日。㊁年の末日。大晦日。
じんじつ 盡日【副】ひねもす。終日。
しんじつ-たい 眞實體【名】じったい(實體)に同じ。
しんじつ-てがた 眞實手形【名】〔商〕『英 Bonnable Bill』債權債務の實際に發生又は存在する際に、作成する手形。(空手形に對して)
しんじつ-はうおん 眞實報恩【名】〔佛〕眞實に四恩を感じて、報謝すること。保元「眞實報恩の道」
じんじつ-ばう-むげくわうによらい 盡十方無碍光如來【名】〔佛〕あみだによらい(阿彌陀如來)の異稱。
しんじつ-はうど 眞實報土【名】〔佛〕じっぽふど(實法土)に同じ。
しんしときんじゆつ 浸漬鍍金術【名】物品を單に各種鍍金液に浸して、附著せしむる鍍金法。
しんじ-にぶきん 眞字二分金【名】次條に同じ。「略」
しんじ-にぶばん 眞字二分判【名】次條の
しんじ-にぶばんきん 眞字二分判金【名】江戸時代の通貨の一。文政元年より同十一年までに發行し、天保六年廢止せられし二分判金。眞字にて「文」の字の極印あり。草字二分判金と合はせて、文政二分判金と呼ばれたり。眞文二分判金。眞文二分金。
じんじ-のう 神事能【名】古、春日神社の神

事に興行せし舞曲。春日神社に仕へし猿楽師圓満井(エンマイ)といふ者、田楽より工夫して、新曲を作り、振付(フリ)を創意せしに始まり、後弘く諸社の神事に用せらるるに至れり。

じんじばしより 神事端折【名】ちんちばしより(ちんぢ端折)を見よ。

じんじはふ 人事法【名】〔法〕人の能力及び身分に關する法規。

じんじびや (英 Ginger beer の訛)【名】清涼剤の一。生薑(ショウガ)を潰して、熱湯を注ぎ、酒石酸・砂糖・麥麹を加へて製したる沸騰性飲料。じんじんびや。

しん-しふ 震悼【名】しんせふ(震悼)に同じ。

しん-しぶ 新澁・新澁【名】今年新にしぼりたる柿澁。

じんじ-ぶぎやう 神事奉行【名】毎年の放生會の時、八幡宮の神事を奉行せし職。

しんしふけう 神習教【名】神道の一派。唯神の道不言の教を遵奉し、國典を修明し、實祚の無窮・國運の隆盛を祈り、國民の本分を全うするを主旨とす。明治十七年に芳村正秉(ハイヤウ)の唱へしもの。

じんじ-ふせい 人事不省【名】全く知覺を失ふこと。喪神。

しん-しふはちばん 新十八番【名】しんかぶきじふはちばん(新歌舞伎十八番)の略。

しん-しふゐ 新拾遺【名】〔書〕次條の略。

しん-しふゐ-しふ 新拾遺集【名】〔書〕次條の略。

しん-しふゐ-わかしふ 新拾遺和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。藤原爲明の、後光厳院の命を奉じて、撰進せし歌集。爲明中途にして歿せしかば、戀雜の部は、頓阿法師これを撰みたり。二十卷。

しん-しへい 新紙幣【名】新しき紙幣。新札。

しん-しべっさいしふ 清詩別裁集【名】〔書〕ごてうしべっさいしふ(五朝詩別裁集)を見よ。

しんじほ 審事補【名】陸軍裁判所又は陸軍軍法會議の職員。審事の事務を見習ひし判任官。

しん-しまばら 新島原【名】〔地〕『京都の島原に擬して命名せしもの』今の東京市京橋區新富町に、明治元年遊廓を設けし時の稱。徳川時代の本多隱岐守及び堀長門守の屋敷跡にて、明治四年吉原遊廓内へ移轉せし後は、新富町と改稱せらる。島原。

しん-しまり 眞締【名】表面はしまりなきが如くなれども、心底にしめくくりのあること。

しん-しん 信臣【名】■信賴する臣。寵臣。■信使として遣はされし臣。

しん-しん 親臣【名】したしき臣。信賴すべき臣。

しん-しん 親信【名】親近して、信用すること。

しん-しん 搢紳・縉紳【名】『笏を紳(大帶)に搢(サ)む人の義。縉は搢と同じく、下の紳の字に引かれて、偏の變化せるもの』官位自分の高き人。

しん-しん 眞信【名】まことの信心。眞の信仰。

しん-しん 眞心【名】■まことの心。まごころ。■〔佛〕眞實にして妄ならざる心。

しん-しん 新進【名】あらたに世に進み出でたること。又その人。「新進の後生」

しん-しん 心神【名】こころ。精心。 畑城島原雙合墨「文章に案じ疲れ果てし夜の夢に、五臟六腑を吐くと見て、その朝より、心神疲れ果てしとかや」

心神喪失【句】衰弱のため、或は他に原因して、精心の活力を缺くこと。きぬけ。

心神耗弱(カウジヤク)【句】心神喪失より輕けれど、心神衰へて、行爲の利害を識別する力の乏しきに至れること。

しん-しん 心身【名】心と身體と。心身相關【句】〔哲〕心理と生理とは、その作用・活動の直接に關係あること。例へば心に怒を生ずれば、身體にもそれに適應せる狀の現るる類。

しん-しん 神心【名】神の心。

しん-しん 身心【名】身體と心と。

しん-しん 眞身【名】■眞の肉體。(畫像・木像等に對して) ■〔佛〕理智冥合の法身。

しん-しん 身神【名】身體と精神と。からだとこころと。

しん-しん 振振【貌】■鳥の群り飛ぶさま。■盛んなるさま。■信厚なるさま。

しん-しん 森森【貌】■木の高く聳ゆるさま。こんもり。■威ありて、奥深く重みあるさま。川中島合戰「森森たる人品千丈の松の如く」

しん-しん 蓁蓁【貌】桃の葉の盛んに茂るさま。

しん-しん 榛榛【貌】種種の草木の亂れ茂れるさま。

しん-しん 岑岑【貌】肉體のうづき痛む感じ。

しん-しん 涔涔【貌】■雨のしげきさま。■汗・涙などの垂るるさま。

しん-ぢん 津津【貌】さかんに湧出づるさま。「趣味津津たり」

しん-しん 駸駸【貌】■『詩經の小雅四牡篇に「駕彼四駱、載驟駸駸」とあるに本づく』馬の速かに走るさま。■物事の進歩するさま。

しん-しん 深深・沈沈【貌】■夜の靜かに更けゆく狀。百合若大臣野守鏡「湯口の燈明しんしんと眠れば人も寢入るらん」■奥深くしづかなるさま。一代女「風しんしんと、杉村のこなたは、稻荷の鳥居のほとりにて」■憂さの身に沁みわたるさま。

しん-しん 申申【貌】ゆったりしたる狀。神身のくつろげる狀。「ま。

しん-しん 新新【貌】次第に新しくなるさま。

しん-じん 神人【名】■神と人と。■神のごとき人。神通力を得たる人。仙人。■神に奉仕する人。かんぬし。じにん。 保元香椎(カシヒ)宮の神人等」

しん-じん 眞人【名】『莊子の天下篇に見ゆ』道德の高き人。まことの道を體得したる人。道家にて、儒教における聖人と同樣の意に用ふ。しんにん(眞人)參照。

しん-じん 新人【名】■新しく娶りたる妻。■〔基〕『英 new me』悔い改めて、靈の生活に入れる人。新生の人。

しん-じん 津人【名】わたしもり。

しん-じん 深仁【名】ふかきめぐみ。

しん-じん 深潭【名】ふかきふち。深淵。

しん-じん 審訊【名】つまびらかに訊問すること。

しん-じん 信心【名】■信仰する心。信念。大織冠「愚痴の衆生信心さめ、佛法を疑ひ」■信仰して祈念すること。祈願。■〔佛〕阿彌陀如來の他力本願にのみ歸依して、自力の心を拋つこと。あんじん。〔眞宗の語〕

信心決定(ケツジヤウ)【句】〔佛〕疑念をさしはさまざる信心。 御文章「この三首の歌の心は、初は一念歸命の信心決定の姿を詠みはんべりぬ」

信心過ぎて、極樂を通り越す【句】宗教に凝りすぐるを誡めたる語。〔諺語〕

信心の家には、惡魔來らず【句】信心する者の家には、佛神加護するゆゑに、惡魔入り來らず。〔諺語〕

信心も德の餘(アマリ)【句】信心するも、生活に餘裕ありての上の事なり。後生は德の餘。〔諺語〕

しん-じん 信神【名】神を信仰すること。かみしんじん。

しん-じん 盡心【名】『孟子の盡心上篇に「盡其心者知其性也、知其性則知天矣」とあるに本づく』心のほどを盡すこと。

じん-しん 蓋臣【名】『詩經の大雅文王篇に出で、その疏に「蓋忠愛之篤、進退無已也」とあり。蓋は進の義。蓋忠なる臣』ちゅうしん(忠臣)に同じ。

じん-しん 人臣【名】けらい。臣下。

じん-しん 人身【名】■人のからだ。人の身體。■個人の身の上。「人身攻撃」

じん-しん 人心【名】■人のこころ。■『書經の太禹謨篇に「人心惟危、道心惟微」とあり』本善の性にあらぬ心。私心。人慾。人心は測り難し【句】『史記の淮陰侯傳に「蒯通說韓信曰、常山君成安君、二人相與、天下至驩也、然而卒相禽者、患生於多慾、而人心難測也」とあり』人の心は測り知るべからず。〔諺語〕

人心の同じからざること、その面(ツラ)の如し【句】次條に同じ。

人心は面の如し【句】『左傳の襄公三十一年の條に「人心不同如其面焉」とあり』人各心の同じからざるは、その面貌

の異なれるがごとし。〔諺語〕「心。

じん-しん 仁心【名】めぐみ深き心。仁慈の心。

じん-しん 深信【名】〔佛〕深固の心を以て、法を信ずること。

じん-しん 深心【名】〔佛〕三心の一。深く佛の教を信じて、疑ひ變ずること無き心。

じん-しん 甚深【名】甚だ深きこと。教義のきはめて深遠なること。大鑑「この翁どもの命はまれなること、甚深甚深希有(ケウ)なりとは、これを申すべきなり」

じん-しん 壬申【名】十干の壬(ミヅノエ)と十二支の申(サル)とに當れる年。壬申の亂【句】天智天皇の崩後壬申の歳における、弘文天皇と大海人(オホアマ)皇子(天武天皇)との爭亂。弘文天皇敗れて、近江の山前(ヤマザキ)に崩ず。

じん-じん 仁人【名】同情深き人。仁者。

じん-じん 人人【名】ひとびと(人人)に同じ。

しんじんか 信心家【名】信心する人。信心者。

じんしんきうりがく 人身究理學【名】せいりがく(生理學)に同じ。

しんじんぎやくとく 信心獲得【名】〔佛〕あんじんけつじやう(安心決定)に同じ。〔眞宗の語〕

じんしんけん 人身權【名】〔法〕人格權と身分權との總稱。

じんしんこうげき 人身攻撃【名】一個人の行爲を發(オコ)きて、その人の身の上を攻撃すること。

しんしんさうくわん 心身相關【句】しんじん(心身)の條下を見よ。

しんしんさうしつ 心神喪失【句】しんじん(心神)の條下を見よ。

しんしんさうしつ-しや 心神喪失者【名】心神喪失の狀況にある人。

しんじん-しや 信心者【名】しんじんか(信心家)に同じ。

じんしんしんぜい 人身稅【名】各個人の存在事實を基礎として、課稅の單位に定むる稅。

じんしん-せいりがく 人身生理學【名】せいりがく(生理學)に同じ。

しん-しんだうりう 眞神道流【名】柔術の一派。揚心流より出でたる山本英昌(ハナヂ)を祖とす。

しんじんどうけい-せつ 神人同形説【名】〔哲〕きじんせつ(擬人説)に同じ。

しんじんどうけい-ろん 神人同形論【名】〔哲〕前條に同じ。

しんじんどうじやう-せつ 神人同情説【名】〔哲〕『英Anthropopathism』擬人説の一。神が人間同樣の感情及び情慾等を有すといふ説。希臘(ギリシア)古代の多神教の類。

しんしんは 眞心派【名】〔佛〕日蓮宗の一派。不受不施派に類するもの。

じんしんばいばい 人身賣買【名】人身を賣買すること。

じんじんばしより 神事端折【名】じんじばしより(神事端折)の訛。

じんじんびや 【名】じんじびやに同じ。

しん-じんぶつ 新人物【名】新進の人物。

しんしん-へいかう 身心並行【名】〔哲〕せいしんぶつりてきへいかう(精神物理的並行)に同じ。

しんしんへいかう-せつ 心身並行説【名】〔哲〕次條に同じ。

しんしんへいかう-ろん 心身並行論【名】〔哲〕せいしんぶつりてきへいかうろん(精神物理的並行論)に同じ。

しんしんりう 新心流【名】せきぐちりう(關口流)に同じ。

しんじんりやうせい-せつ 神人兩性説【名】『英Dopoplitities』基督は神人の兩性を俱有すと唱ふる神學上の立脚地。神人兩性論。基督兩性論。

しんじんりやうせい-ろん 神人兩性論【名】前條に同じ。

しんしん-ろん 信神論【名】〔哲〕いうしんろん(有神論)に同じ。

しん-しや 親炙【名】『親近して薫炙せらるる義』親しく接して薫陶せらるること。弟子が直接に先生に就きて學ぶこと。

しん-しや 辰砂【名】〔鑛〕『支那辰州の産、最も良品なるよりいふ』水銀の硫化物。多くは塊狀又は土狀をなし、小結晶又は粒狀をなす。透明乃至不透明にして、深紅色、金剛光澤を呈し、比重重し。水銀の原鑛として、重要なり。我が國にては、大和・肥前・伊勢・阿波の諸國より少量を産す。

しん-しや 眞蛇【名】龍(タツ)の假面(カメン)の一。「紅葉狩」・「羅生門」等の鬼物に用ふるもの。

しん-じや 信者【名】宗教を信仰する人。信心者。

じん-しや 人車【名】■じんりきしや(人力車)に同じ。■人車鐵道の車輛。

じん-しや 仁者【名】めぐみ深き人。仁心のある人。

仁者は憂へず【句】『論語の子罕篇に「仁者不レ憂」とあり』仁者は心寛にして、命を知るが故に、往くところとして自得せざること無きゆゑに、憂ふるところなし。〔諺語〕

仁者は敵無し【句】『孟子の梁惠王上篇に「仁者無レ敵」とあるに本づく』博愛の者には、敵對する者なし。〔諺語〕

仁者は山を樂しむ【句】『論語の雍也篇に「仁者樂レ山、…仁者靜」とあり』仁者は義に安んじ、命を知るがゆゑに、重厚にして遷らざること山の如し、故に山を樂む。〔諺語〕

じん-じや 神社【名】神の鎭坐せる所。神を祀り、公衆の參拜の用に供したる建物。かみのみや。かみのみやね。やしろ。ほこら。みや。

じんじやあ-ええる (英Ginger ale)【名】一種の混成酒。生薑(ショウガ)を加へたる黃褐色の夏季飮料。炭酸瓦斯及び少量の砂糖を含む。

しん-しやう 眞性【名】〔佛〕宇宙の眞實の本質たる道理、又これを受けたる吾人本來の心體。眞如の理。

しん-しやう 眞症【名】〔醫〕まことの病症。(類似症に對して)

しん-しやう 新粧【名】あらたなる化粧。

しん-しやう 新嘗【名】『禮記の少儀篇に「未レ嘗不レ食レ新」とあり。嘗は、支那にて、秋新穀を廟に薦めて、神を祭ること』■新穀を神にささぐること。■天子の、新穀を食せらるること。にひなめ。にひなめさい(新嘗祭)參照。

しん-しやう 信賞【名】賞すべき功勞ある者は、必ずこれを賞すること。

信賞必罰【句】『後漢書の宣帝紀贊に「孝宣之治、信賞必罰」とあり』賞罰の嚴重なること。

しん-しやう 神漿【名】■神に供ふる飮物。■不思議に湧出て、靈驗ある飮物。

しん-しやう 神牀【名】神を安置する床。

しん-しやう 針匠【名】針を作る人。

しん-しやう 心匠【名】■工事の見積を、心中にて定むること。■事を心の中でたくむこと。心計。心算。

しん-しやう 紳商【名】身柄よき商人。上流の商人。

しん-しやう 紳章【名】臺灣の住民中、學識・名望ある者に、總督府より授くる徽章。

しん-しやう 身上【名】■一身に關する事柄。みのうへ。しんじやう。■資産。身代。財産。■その人の價値・長所。「あれが彼の身上だ」〔俚語〕■俳優の給金。

身上が廻(マハ)る【句】豐かなりし家のくらしむきが苦しくなる。身代がまはる。

しん-しやう 心象【名】〔哲〕『英Image』感覺もしくは感覺的要素の、心中に再生したるもの。

しん-しやう 心性【名】〔佛〕不變の心體。吾人本有(ホンイウ)の清淨なる心。眞心。盛衰記「心性みなもと清ければ、衆生すなはち佛なり」〔に同じ。〕

しん-しやう 眞正【名】〔佛〕しんせい(眞正)に同じ。

しん-しやう 眞情【名】いつはりのなき心。まごころ。

しん-しやう 心狀【名】心のありさま。

しんじやう 心情【名】心の趣。こころもち。

しんじやう 心上【名】心のうち。こころ。國姓爺合戰「心上の須彌山是れに在り」

しんじやう 親情【名】親しむ心。

しんじやう 身上【名】一しんしやう(身上)(二)に同じ。女殺油地獄「不孝の塗上、身上の破滅」二身體の上。からだ。みうち。太平記「身上の衣」

しんじやう 申狀【名】原告の訴狀。「鎌倉、室町時代の語」

しんじやう 進上【名】一たてまつること。まゐらすること。進呈。獻上。二長者に上る書翰の上書に用ひて、敬意を表する語。庭訓往來「進上。栄女正殿」

しんじやう 審祥【名】〔人〕高僧。我が國華嚴宗の開祖。もと新羅の人。唐に遊學して、賢首大師に華嚴を受け、天平年間我が國に來りて、大安寺に留まり、良辨の乞により、華嚴經を講じ、天平十二年より十四年に至りて講を終り、同年に寂す。

しんじやう 眞盛【名】〔人〕高僧。我が國天台宗眞盛派の開祖。俗姓は紀。比叡山に在ること二十年。後、黒谷の青龍寺に隱れて、大藏經を閲し、西教寺を再興す。また足利義政及び土御門天皇に圓頓戒を授く。明應四年寂す。年五十三。永正三年圓戒國師、明治十六年慈攝大師の諡號を賜はる。

しんじやう 新庄【名】〔地〕一羽前國最上(モガミ)郡にある町。最上川平原の一部なる新庄平野の中心地。郡役所を置く。戸澤氏の舊藩地。二大和國北葛城(キタカヅラギ)郡の村。永井氏の舊藩地。三姓氏の一。藤原氏より出で、駿河守直賴の後なり。足利氏の末に、近江國坂田郡新庄城に居る。慶長九年常陸國麻生に封ぜられ、明治維新後、子爵を授けらる。

じんじやう 尋常【名】一八尺と一丈六尺と。二僅かなる尺度。「尋常の布」三極端ならぬこと。なみ。普通。通常。四『普通なるは、卽ち惡しからぬ意なるより轉じていふ』すぐれたること。殊勝。上品。立派。平治「年ごろ、この御所へ參るとは、皆人知れりとて、尋常に出でたたせて」太平記「敵ながらも、弓矢取って、尋常に死したる者哉と譽めぬ人こそ無かりけれ」五かどかどしからぬこと。すなほ。保元「大男のおそろしげなるが、さすがに尋常げなり」

じんじやう 尋常一樣【句】普通と異なるところなきこと。なみひととほり。

じんじやう 盡淨【名】〔佛〕執著を脫して、身心の全く淨きこと。眞空にして、一切の情執を留めざること。

盡淨虛融(コユ)の演說【句】〔佛〕『諸法皆空にして、自性(ジシヤウ)なきが故に、虛通融鎔して同一如なる意』釋迦の一代五時の說法中の第四、卽ち磐若經の所說。この經の所說は、二乘の人の免れがたき法執を斷ちて、つひに法華の中道實相に入らしむる階段にして、釋迦は二十二年間にこれを說けりといふ。じじけう(五時敎)參照。太平記「釋尊…正覺を成じし後、頓大三七日、遍小十二年、盡淨虛融の演說三十年、一實無相の開顯八箇年」

じんじやう-えふ 尋常葉【名】〔植〕『英Ho-liogo leaf』針形、卷鬚などに變形せぬ普通の葉。

しん-しやうがい 新生涯【名】從前と異なりたる生活。新しき處世法。しんせいがい。

じんじやう-かうとう-せうがくかう 尋常高等小學校【名】尋常小學校の敎科と高等小學校の敎科とを一校に併置するもの。

しんしやう-がき 身上書【名】『しんしやう(身上)四を見よ』俳優の一年間の給金を記して、興行主と俳優との間に取りかはす契約書。

しんじやう-ぎむ 身上義務【名】〔法〕身體上又は精神上の勤勞を目的とする義務、例へば兵役義務の類。

しん-しやうぐん 新將軍【名】新に任命せられたる將軍。

じんじやう-けいさつ 尋常警察【名】〔法〕ふつうけいさつ(普通警察)に同じ。

しん-しやうご 眞正午【名】〔天〕『英Apparent noon』太陽がその地の子午線上に來れる一刹那、卽ち南中せる時刻。(平時正午に對して)

しんじやう-ごくらくじ 眞正極樂寺【名】しんによだう(眞如堂)に同じ。

しんしやう-これら 眞症虎列拉【名】〔醫〕眞症の虎列拉病。類似虎列拉(コレラ)に對して)

しんじやう-さい 新嘗祭【名】にひなめまつり(新嘗祭)に同じ。

しんじやう-さい 神嘗祭【名】かんなめまつり(神嘗祭)に同じ。

しん-じやうさい-もんゐん 新上西門院【名】〔人〕靈元天皇の中宮。東山天皇の准母。御名は房子。正德二年崩ず。御年六十。

しんじやうじ 新掌侍【名】しやうじ(掌侍)二を見よ。

じんじやう-しほんがくかう 尋常師範學校【名】しはんがくかう(師範學校)の舊稱。

しんじやうじゆ 信成就【名】〔佛〕信心の確定して疑ふ心なきこと。

信成就の句【句】〔佛〕一佛敎經典の方式として、開卷第一に必ず記す「如是我聞(ニョゼモン)」の四字。經典結集(ケツジフ)の時、結集者自身の聞信する所かくの如しと表白する意。卽ち佛說を聞きて、信仰を獲たりとの意。二自己の傳聞せる事などを記し、又は語らんとする時の發端の語。

信成就の文【句】〔佛〕前條に同じ。

しんじやう-しよ 進上書【名】上書(ジヤウしよ)參照。

じんじやう-せうがくかう 尋常小學校【名】學齡兒童に國民敎育を施す處。現制度にては、六年を修業年限とし、主要なる學科は修身、國語、算術、日本歷史、地理、理科、圖畫、唱歌、體操、その外、女兒のためには裁縫を加へ、また土地の情況によりて、手工を加ふることを得。

しんじやう-だい 進上臺【名】進上物を載せたる臺。堀川波の鼓「進上臺を差出だせば、下人は受取り、腰屈め」

じんじやう-ちゆうがくかう 尋常中學校【名】ちゆうがくかう(中學校)の舊稱。

じんじやう-てつだう 尋常鐵道【名】普通の軌幅を有する鐵道。我が國にては三呎六吋、西洋にては四呎八吋半を有するもの。

しん-じやうとう-もんゐん 新上東門院【名】〔人〕誠仁(ヒトヒト)親王の御息所(ミヤスドコロ)。後陽成天皇の御母。內大臣藤原晴右(ハルスケ)の女。御名は秀子、一說に晴子。阿茶(アチャ)の局と稱し、三宮に准ぜられ、元祿六年薨ず。御年七十六。

しんじやう-によい 新成如來【名】〔佛〕本地より垂跡(スイジヤク)、化現(ケゲン)せる如來。垂跡の佛。

しんじやう-は 眞盛派【名】〔佛〕天台宗三派の一。眞盛を祖とし、近江國滋賀(シガ)郡坂本村なる西敎寺を本山とす。

しんじやう-ばこ 進上箱【名】進物を入るる箱。若風俗「是れを二階の各樣へと、進上箱一つわたして」

しんじやう-ひしんけい 針狀披針形【名】〔植〕針形を帶びたる披針形。

しんじやう-ひつばつ 信賞必罰【句】しんしやう(信賞)の條下を見よ。

しんしやう-ふしやう 眞性不生【名】〔佛〕眞如の道理は、萬有の不滅を意味すること。論語(放生川)「それ諸佛出世の本來空、眞性不生の道を示し」

じんじやうみやく 腎靜脈【名】〔醫〕腎臟內にて、老廢物、卽ち尿を吸取られて、淸淨になりたる血液を、下行大靜脈に入らしめ、その內を流るる血液と共に心臟に歸らしむるもの。(腎動脈に對して)

しんじやう-まめ 眞盛豆【名】『眞盛寺の尼の創製せしによる』黑大豆を炒(イ)り、靑苧子の葉を揃りて、水に溶き、衣としたる菓子。こけのむすまめ。こけまめ。

しんしやう-もち 身上持【名】しよたいもち(所帶持)に同じ。

しんじやう-もの 進上物【名】進上する品物。進物。狂言「何方へ進上物になさるるとあっても」

しんじやう-やき 新庄燒【名】羽前國最上(モガミ)郡新庄町より產出する陶器。天保中、涌井(ワクヰ)彌瓶(ヤヘイ)が製出せるに創り、次第に聲價を得て、多額を產出するに至れり。最上燒。

しんじゃうゆわう 針狀硫黃【名】〔化〕針狀に結晶せる硫黃。熔けたる硫黃の固まりはじめたる時、殘部の液を流出せしむる時に得。

しんじゃうれんがふ 身上聯合【名】〔法〕『獨 Personalunion』二箇以上の國家が、同時に同一の君主を戴き、各獨立の領土を統御するもの。

しんじゃうれんがふこく 身上聯合國【名】〔法〕身上聯合をなせる國。君合國。

しんじゃうろく 新嘗會【名】にひなめまつり（新嘗祭）に同じ。

じんじゃーかう 神社考【名】〔書〕漢文にて、二十二社をはじめ、著名の神社及び靈異方術などを記せるもの。三卷。林道春の撰。一名、本朝神社考。

じんしゃく 人車記【名】〔書〕『人車は信範の二字の省文』兵部卿平信範の記錄。近衞天皇の久安五年より高倉天皇の嘉應元年までの事を記せるもの。寫本三十四册。一名、兵範記・平信記・平兵部記・平洞記・北隣記。

じんじゃーきよく 神社局【名】內務省の一局。神社・神官・神職に關する事項を取扱ふ所。

しんしゃく 新釋【名】あらたに解釋すること、又その解釋したるもの。

しんしゃく 斟酌【名】㊀水又は飲料などを酌みわけ、また酒などを酌みかはすこと。㊁照らし合はせて取捨すること。事情・場合などをくみわけて、計らふこと。太平記「かかる事には、謀計などもあるぞかし。幸爾には、いかが申し入るべきと斟酌して」㊂控目にすること。遠慮。辭退。讀史歌「阿呆な斟酌仕過いて、湯の辭儀は水になる」

じんしゃく 人爵【名】『孟子の告子上篇に「有二天爵者一、有二人爵者一、…公卿・大夫此人爵也」とあるに本づく』爵・位階など、すべて人間社會の作り設けたる肩書。（天爵に對して）

じんじゃく 仁弱【名】なさけ深くして、柔弱なること。

しんしゃくがほ 斟酌顏【名】斟酌する顏附。ひかへ目にする樣子。聖德太子繪傳「あぶないことをと斟酌顏」

しんじゃくほふしんわう 眞寂法親王【名】〔人〕高僧。宇多天皇の皇子。俗名は齋世（ときよ）。母は橘廣相（ひろみ）の女。園城（おんじょう）寺、又、法三宮と稱す。出家して、眞言宗の奧旨を究む。延長九年薨ず。

じんじゃくけいもう 神社啓蒙【名】〔書〕全國數百社の緣起・行事などを考說したもの。八卷。白井宗因の著。

じんじゃくけんちく 神社建築【名】〔美〕神社に關する建築。大社造・神明造・大鳥造・住吉造・春日（かすが）造・流造・八幡造・日吉造・權現造等の種類あり。

じんじゃくさいさん 神社財產【名】神社に屬する不動產及び寶物の、地方廳保管の神社財產登錄臺帳に登錄せられたるもの。

じんしゃだいじゃう 深沙大將【名】〔佛〕佛敎の守護神の一。玄奘三藏渡天の時、流沙河にて遇ひし神なるより、深沙と呼ぶといふ。太山府君の化身（けしん）なりとも、多聞（たもん）天の一名なりともいふ。

じんしゃてつだう 人車鐵道【名】人力にて押動かして、軌道を運轉せしむる車。

じんじゃべんらん 神社便覽【名】〔書〕諸國の神社のことを、見易く記せるもの。一卷。白井宗因の著。

じんじゃます 神社枡【名】神社にて、使用する枡。各神社によりて種種あり。宮中枡・供用枡等は伊勢にて、神供枡は春日にて用ふるが如し。

しんしゅ 神主【名】㊀『史記の夏紀に「爲山川神主」とあり』神となりて、その地を主るもの。㊁儒敎にて使用する位牌。官位・姓名を書き、祠堂に安置す。

しんしゅ 神酒【名】神に供ふる酒。みき。

しんしゅ 新主【名】新しき主君。著聞「主殿司（とのもづかさ）、新主の御用を勤むとて、參らぬ由申しけるに」

しんしゅ 新酒【名】今年釀したる酒。ことしざけ。（古酒に對して）壽の門松「新酒の醉紛れ」

しんしゅ 進取【名】㊀進みて取ること。㊁『取は功名を取る義』進みて、事をなすこと。敢爲。

しんしゅ 深趣【名】ふかき趣味。

しんしゅ 身首【名】からだと、くびと。身首、所を異にす【句】首を斬らる。

しんしゅ 浸種【名】〔農〕發芽を促進し、且つ齊一ならしむる目的にて、種子を水にひたして、水分を吸收せしむること。蠶種も、この法を用ふることあり。

しんしゅ 愼守【名】つつしみて守ること。

しんしゅ 眞趣【名】まことの趣味。

しんしゅ 眞儒【名】まことの儒者。儒道を體得したる儒者。

しんしゅ 眞珠【名】貝殼の內面を形づくる眞珠質が、貝殼內に入れる砂粒などを核として、その周圍に盛んに分泌し、やがて粒狀を形づくれる物。眞珠貝より出づるを最上品とし、鮑（あわび）・蛤（はまぐり）などよりも出づ。半透明にして、銀色の光澤あり、裝飾又は藥用に供せらる。あこやがひ。あこやだま。貝の玉。珠母。

しんしゅ 神授【名】神よりさづかること。

しんしゅ 神儒【名】神道と儒敎と。

しんしゅ 神樹【名】しんぼく（神木）に同じ。

しんしゅ 神呪【名】神祕の呪文。太平記「行者いかりて、神呪をもちて、このひとことぬしの神をしばりて」

しんしゅ 親受【名】手づから受くること。

しんしゅ 親授【名】親しく授くること。

しんしゅ 心受【名】心に領會すること。よく。得心。了解。

しんしゅ 信受【名】〔佛〕佛命に信順して、これを受持すること。太平記「佛…宣はく、善哉、今來二此會場一、我有二治國法一、汝欲レ受持一否。穆王曰く、願はくば信受・奉行して、理民・安國の功德を施さん」

しんしゅ 新鑄【名】あらたに鑄造すること。しんふき。

しんじゅ 新樹【名】若葉の萌出でたる時の樹木。

しんじゅ 森鬱【名】『森然として鬱（ウツ）つ』毛髮などのさか立つこと。

じんしゅ 人主【名】きみ。王。人君。君主。

じんしゅ 人種【名】㊀『法苑珠林に「無量盡衆生時、有二人合二集閻浮提內男女一、唯餘二萬一部爲二當來人種一」とあり』人類のたね。ひとだね。㊁『英 Human race』骨格・皮膚の色・言語などの異同により、分ちたる地球上の人類の種類。種種の分類あれど、最も普通には、黃人種・白人種・黑人種、又は亞細亞人種・歐羅巴人種・馬來人種・亞弗利加人種・亞米利加人種などとす。

じんしゅ 人壽【名】人の壽命。「こと。

じんしゅじゅあん 仁壽【名】仁德ありて長命なること。

しんしゅじゅあん 眞珠庵【名】京都紫野大德寺內に在る茶室。僧一休の所用せしもの。

しんしゅしゅ 新衆【名】しんざん（新參）に同じ。甲陽軍鑑「御小人或は新衆なんど」

しんしゅしゅ 眞宗【名】〔佛〕㊀眞實の宗旨。（各自信ずる所の宗旨を指していふ）㊁じゃうどしんしゅう（淨土眞宗）の略。

しんしゅしゅ 眞宗の五派【句】〔佛〕本願寺派・大谷派・佛光寺派・高田派・木邊（ベ）派の併稱。ごは（五家）〔一〕參照。

しんしゅしゅ 眞宗の四法【句】〔佛〕眞宗の開祖親鸞の立敎の範疇たる敎・行・信・證の併稱、即ち釋迦の敎、殊にその大無量壽經の所說と、その敎に基づきたる修行、即ち南無阿彌陀佛の名號を唱ふること、阿彌陀佛を信じて、一點も疑はざる心と、極樂に往生して、涅槃の證果を得ることと。けうぎやうしんしょう（敎行信證）參照。

しんしゅしゅ 臣從【名】臣下となりて從屬すること、又その人。

しんしゅしゅう 人衆【名】ひとかず。にんず。

しんしゅしゅうーかなーしゃうけう 眞宗假名聖敎【名】〔書〕國語に記せる眞宗の聖典三十九部を稱めたるもの。內容は本願寺派の眞宗法要と同じくして、序次の次第のみ異なり。大谷派の法主の命に依り、僧慧琳等の撰集せしもの。

しんじゅうく わう さう 身縱廣相【名】〔佛〕三十二相の一。頭より足に至る高さと、左右の手を張りし長さと齊しきもの。

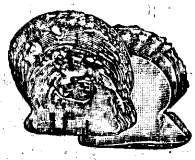
しんしゆうぜんじ 眞宗禪師【名】〔人〕ゑのう(慧能)を見よ。

しんしゆうほふえう 眞宗法要【名】國語にて記せる眞宗の聖典三十九部を輯めたるものにて、本願寺に限りて、この稱を用ふ。本願寺派の法主法如が派内の學匠をして編輯せしめしもの。しんしゆうかなしやう(眞宗假名聖教)參照。

じんしゆ-かいりやうろん 人種改良論【名】ゆうせいがくに同じ。

じんしゆ-がく 人種學【名】『英 Ethnology』人種に關する研究を總括したる稱。人種及びその繫屬たる種族の身心上の諸性質を調査し、その結果を對照し、各地方住民の由來を考定するを本領とす。人類學の主要なる一部をなす。

しんじゆ-がひ 眞珠貝・珠母【名】〔動〕辨鰓(ベンサイ)類に屬する軟體動物。介殼はやや方形をなし、兩殼は少しく不同にして、その外面は暗褐色を呈し、粗縐にして、數多の薄層を重ねたるがごとき狀をなし、内面は眞珠色を呈して、閃光を帶ぶ。しんじゆ(眞珠)參照。



(いがゆじんじ)

しんじゆ-がん 眞珠岩【名】〔鑛〕玻璃質の暗褐色なる流紋岩。共心的割目(ワレ)を有す。

しんしゆく 振肅【名】衰へたるを、振ひ起して、おごそかにすること。

しんしゆく 森肅【名】おごそかなること。森嚴。

しんしゆく 伸縮【名】のぶると、ちぢむと。のばすとちぢむると。のびちぢみ。

しんしゆく 參宿【名】しん(參)に同じ。

しんしゆく 心宿【名】しん(心)に同じ。

しんしゆく 軫宿【名】しん(軫)[四]に同じ。

しんしゆく 信宿【名】『左傳の莊公三年に「凡師一宿爲レ舍、再宿爲レ信」とあり』二夜宿すること。二晩どまり。再宿。

しんしゆく 辰宿【名】せいしゆく(星宿)に同じ。

しんじゆく 新宿【名】〔地〕東京市四谷區の町。もと内藤新宿と稱し、甲州街道の第一驛にして、青梅街道の分るる所たりしが、のち府下豐多摩郡に屬し、大正九年市内に編入せり。

しんじゆく ぎよゑん 新宿御苑【名】東京市四谷(ヨツヤ)區新宿町に在る帝室御苑。ぎよくせんゑん(玉川園)參照。

しんしゆく-しろ 申叔舟【名】〔人〕朝鮮李朝の學者。字は泛翁、保閑齋と號す。世宗の命を奉じて、我が國に來聘せり。諺文(ヲンモン)の製作に預り、日本語にも通じ、海東諸國記を著はし、我が國の歷史・地理を誌せり。世宗十三年歿す。

しんしゆく-せいげんはふ 伸縮制限法【名】〔經〕せいげんくつしんはふ(制限屈伸法)に同じ。

しんじゆ-くわい 眞珠灰【名】〔化〕『英 Pearl ash』木灰の水浸液より蒸發・精製せる炭酸カリウム。

しんじゆ-くわう 眞珠光【名】『英 Pearly luster』眞珠に似たる光澤。「に同じ。

しんじゆ-くわうたく 眞珠光澤【名】前條

しんじゆ-けい 眞珠鷄【名】〔動〕うみきじ(海雉)に同じ。

じんしゆ-しんりがく 人種心理學【名】〔哲〕『英 Race psychology』心理學の一。各人種に特殊なる心理學上の狀態を研究するもの。民族心理學よりも研究の範圍廣く、精神上の進化の最簡單・最低度なる形式の者をも對象とす。種族心理學。しやくわいしんりがく(社會心理學)參照。

しんしゆ-しよく 神主職【名】神主(カムヌシ)の職。〔太平記・賀茂の社の神主職は、神職中の重職として〕

しんじゆ-せき 眞珠石【名】〔鑛〕質は松香石に同じくして、眞珠光を放つ寶石。

しんじゆ-そう 眞珠層【名】〔動〕『英 Pearly layer』貝殼の内面にある薄き層。眞珠質より成り、美麗なる光澤を帶ぶ。

しんじゆ-たんぱくせき 眞珠蛋白石【名】〔鑛〕寶石の一種。葡萄或は鍾乳狀にして、眞珠の如き光澤を有す。

しんしゆつ 進出【名】進み出づること。

しんしゆつ 神出【名】次條を見よ。

しんしゆつきぼつ 神出鬼沒【句】鬼神の如く、忽ち顯はれ、忽ち隱るること。出沒の巧なること。

しんしゆつ 滲出【名】しみ出づること。

しんしゆつ 心術【名】心の由る所の道。こころだて。性術。

しんしゆつ 賑恤・振恤・振卹【名】金品をめぐみ施すこと。

しんしゆつ 鍼術・針術【名】鍼醫の行ふ醫術。支那古代の醫術の傳はれるものにて、細き鍼を、人の身體の患部に插入して、治癒す。はり。

しんじゆつ 神術【名】不思議なる術。

じんじゆつ 仁術【名】『孟子の梁惠王上篇に「無レ傷也、是仁術也」とあり』仁を行ふ方法。「醫は仁術」を見よ。いじゆつ(醫術)に同じ。

しんじゆつ-きん 賑恤金【名】軍人恩給の一。陸・海軍の下士以下にて、公務のために傷を受け、又は病に罹りて、現役を離れ、免除恩給を受けざる者に給するもの。

しんじゆつ-まい 賑恤米・振卹米【名】すくひまい(救米)に同じ。

しんしゆ-てき 進取的【貌】われより進み出でて、事をなすさま。

じんじゆ-でん 仁壽殿【名】じじゆうでん(仁壽殿)に同じ。

しんしゆ-ながし 神酒流【名】東京の伊島(シマ)にて、例年一月十七日頃、白魚の獵期に住吉神を祀る神事。當日神木の灰及び神酒・洗米を備へて、神官・漁夫同舟し、濱御殿の邊まで漕進み、積める神供を海に流し、宴を船中に張りつつ月島・伊島を一周す。

しんしゆ-ぶつ 神儒佛【名】神道と儒道と佛道と。

しんしゆん 新春【名】■新なる春。はつはる。改春。■陰曆にて、新年。〔宗因「新春の御慶はふるき言葉かな」〕

しんしゆん 浸潤【名】■しみとほりて濕ること。■次第にしみこむこと。浸潤の譖(ヲン)【句】『論語の顏淵篇に「浸潤譖、膚受之愬、不レ行焉、可レ謂レ明也已矣」とあり』水の物を漸次に浸すが如く、徐徐に人を讒することの。〔太平記「浸潤之譖、膚受之愬、事起二于小禍一、皆遂大」〕

しんじゆん 信順【名】〔佛〕所聞の法を信受して、これに隨順すること。

しんしゆんをけ 神酒桶【名】神酒を盛る桶。

(神酒桶)

しんしよ 心緒【名】心のはたらくこぐち。心の緒。

しんしよ 寢處【名】ねどこ。ふしど。寢室。しんじよ。

しんしよ 深阻【名】深くけはしきこと。

しんしよ 神所【名】神社のある所。〔謠曲(加茂)「加茂三所の神所とかや」〕

しんしよ 神書【名】■神に關する事を記したる書籍。■神靈なる書物。

しんしよ 信書【名】個人間の意思消息を通ずる文書。てがみ。書狀。信書祕密の自由【句】〔法〕憲法上の自由の一。信書は、國家が刑事上又は行政警察の目的のためにする場合にても、法律に依るに非ざれば、差押へ又は開封するを得ざること。

しんしよ 眞書【名】■かいしよ(楷書)に同じ。■眞實の事を記したる書籍。「眞書太閤記」

しんしよ 識書【名】未來記。豫言書。讖書。

しんしよ 新書【名】新に撰述し、又は出版したる書。

しんしよ 親書【名】貴人のみづから書く「こと。

しんしよ 親署【名】天皇陛下が親しく署名したまふこと。

しんしよ 晉書【名】〔書〕二十一史の一。唐の太宗が房玄齡・李延壽等に命じて撰ばしめしもの。西晉四代五十四年間の事と、東晉十一代百二年間の事とを記せるもの。百三十卷。十紀・二十志・七十列傳・三十載記より成る。載記は五胡十六國の事を記す。

しんしよ 臣庶【名】けらい。人民。臣民。

しんしよ 心所【名】〔佛〕對境によりて、貪瞋(シン)等の情を起す心法。(心王に對して)

しんじよ 寢所【名】しんしよ(寢處)に同じ。

東鑑「毎夜可レ候二于御寝所之近邊一」

しん-じょ 糝薯【名】擂りつぶしたる魚肉に捏薯(イモ)又は饂飩粉などを加へて固め、湯煮にしたる食品。吸物の實として用ふ。

しん-じょ 神助【名】神のたすけ。天助。天佑。太平記「爲レ仰二和光之神助一」

しん-じょ 新所【名】新に造りたる所。新所の旬【句】内裏造營終りて、初めて陛下紫宸殿に出御ありて、郡臣に酒を賜ひ、政事を聞かせらるる儀式。公事根源「おほよそ旬には色色あり。内裏新しく造られて後、はじめて南殿にて行はせたまふをぞ、新所の旬と申す」

しん-じょ 新書【名】〔書〕買誼の本傳中に載せたる文を取りて割裂し、五十六篇としたるもの。十卷。漢の賈誼の撰。

しん-じょ 新序【名】〔書〕支那、百家の傳説を集めて分類せるもの。唐以前は三十卷なりしが、宋以後は十卷となれり。漢の劉向の著。

じん-しょ 甚暑【名】甚しき暑氣。大暑。酷暑。

じん-じょ 尋所【名】じんじょう(尋承)に同じ。平家「八嶋へ參る案内を知らぬぞ。じんじょせよ」

じん-じょ 仁恕【名】あはれみ深くして、他の罪過を問はざる心。

しん-しょう 申證【名】しょうこ(證據)に同じ。

しん-しょう 新訟【名】新しき訴訟。

しん-しょう 晨鐘【名】曉に撞く鐘。朝の鐘。あけのかね。曉鐘。

しん-しょう 信證【名】あかし。しるし。信。

しん-しょう 眞證【名】■まことの證據。明證。■〔佛〕眞實の證悟。

しん-しょう 震悚【名】ふるひおそるること。震怖。

しん-しょう 心證【名】〔法〕『獨Absicht』訴訟事件に對して、裁判官の心中に惹起せられたる推定。

しん-じょう 眞乘【名】〔佛〕『ぶつじょう(佛乘)を見よ』眞實の教法。

じん-しょう 人證【名】〔法〕裁判所にて、證人の申立を、證據とする法。

じん-じょう 晨鐘【名】じんしょう(晨鐘)に同じ。

同じ。謡曲(老松)「晨鐘・夕梵の響絶ゆることなし」

じん-じょう 尋承【名】案内すること、又その人。尋所。盛衰記「親家を西國の案内者に憑む。屋島の尋承せよ」

しん-じょうえふめいしょ-わかしふ 新撰名所和歌集【名】〔書〕古き名所和歌集に洩らせる名所、又は近世、名所となれるものを集めたるもの。二卷。尾崎雅嘉(ミヤサ)の撰。

しんじょう-じ 新勝寺【名】しんごこんじょうじ(神護新勝寺)に同じ。

じんじょう-だいめいし 人稱代名詞【名】〔語〕じんだいめいし(人代名詞)に同じ。

しん-じょうとく 進宿德【名】〔音〕雅樂の一。高麗樂に屬し、臺越(コチ)調。進走德。拾芥抄「進宿德」「こと。

しん-じょく 寢食【名】ねむることと、食ふこと。

しん-じょく 侵蝕【名】漸次にをかして、そこなふこと。

しん-しょく 浸蝕【名】〔地〕『英Erosion』漸次に水のしみこみてそこなふこと。水蝕。

しん-しょく 神職【名】■神社に奉仕するもの。かんぬし。神官。太平記「賀茂の社の神主職は、神職の中の重職として」■官國幣社以下、府・縣・鄉・村社及び神部署(カンジョ)の職員の總稱。しんくわん(神官)(二)參照。

しん-しょく 神色【名】精神と顏色と。

しん-しょく 眞色【名】〔鑛〕じしょく(自色)に同じ。

じん-しょく 人色【名】人の通常の顏色。人色無し【句】『漢書の李廣傳に「吏士無二人色一」とあり』恐怖して、顏色を變ず。顏色を失ふ。

じん-しょく 紙織【名】はたをおること。

しんしょく-こく 浸蝕谷【名】〔地〕『英Erosion valley』浸蝕作用のために生じたる谷。水蝕谷。

しんしょく-さんがく 浸蝕山嶽【名】〔地〕『英Erosion mountain』浸蝕谷の生ずると共に、その間に挾まりたる部分の殘りて、山嶽をなすもの。水蝕山嶽。

しんしょく-さよ 浸蝕作用【名】〔地〕『英Erosion』浸蝕する作用。動搖する水が土地・岩石を劘摩・破壞する作用。

しんしょく-しけん 神職試驗【名】官・國幣社の神職たる資格の有無を定むる試驗。奏任待遇の神職たらんとする者を試むる高等試驗と、判任待遇の神職たらんとする者を試むる尋常試驗との別あり。前者は、内務省に委員を設けて施行し、後者は各地方廳に委員を設けて施行ふ。

しんしょく-だいち 浸蝕臺地【名】〔地〕『英Erosion tableland』皺曲(シュウキョク)せる山脈などの、風雨に劘摩せられて平になれる臺地。

しん-じょよたい 新所帶・新世帶【名】あらじょたい(新所帶)に同じ。

じん-しらう 甚四郎【名】たうぞく(盜賊)を云ふ。〔東京の語〕

しんしる 新知【名】〔地〕次條を見よ。

しんしる-しま 新知島【名】〔地〕千島群島の一。千島國得撫(ウルプ)島の東北の海中にある新知・計吐夷(イトク)・牛知(ウシ)・羅處和(ヨヨシ)・松輪(マツワ)・雷公計(ライコタン)等の諸島の總稱。相合して、一郡を立て、新知郡といひ、根室支廳の管轄に屬す。

しんず 信ず【動佐變他】■まことと思ふ。疑はず。源氏「しんじがたき事と思うたまへしかど」■信仰す。

しんず 進ず【動佐變他】■すすむ。たてまつる。さしあぐ。■昔の軍陣にて、旗を後方に返す。(鐲(ザツ)すに對して)

じんすけ 甚助【名】『腎助の意か。助は、人名めかすために添へたるもの』淫亂又は嫉妬深き性質、又その性質の男子。

しんすな 浸水【名】水にひたすこと、又侵し入る水。

しんすな 進水【名】新に建造の船を、造船臺より滑らせ下して、水に浮ぶること。ふなおろし。しんさうおろし。

しんすな 晨炊【名】早朝にかしぐこと。

しんすな 深水【名】深き水。

しんすな 深邃【名】奥ふかきこと。幽邃。

しんすな 滲水【名】しみこみたる水。

しん-すな 薪水【名】■薪と水と。■薪を採ることと、水を汲むこと。飯をたくことと、水を汲むことと。「薪水の勞」

しん-すな 神水【名】■神に供ふる水。太平記「一足も引かず、討死すべしと、神水を飲みてぞ打ちたちける」■靈驗ある水。

しん-すな 心醉【名】『酒に醉ひたるがごとくに迷ふ意』物事に深く耽りて、心の奪はるること。

しん-ずな 神瑞【名】神のしるし。靈妙なる祥瑞。

しん-すな 神髓【名】その道の奥義。「羅奥。

しん-すな 心髓【名】■中心の髓。■中心。中樞。骨髓。

じん-すな 蓋痒【名】『痒は病み勞るる義』心を盡し、力を勞すること。ほねをり。

じん-すな 腎水【名】『腎臟より分泌せらるるものと誤信せしよりいふ』せいえき(精液)に同じ。一代男「らなるよりこの方、腎水をかへほして、さても命はあるものか」

しんすな-しき 進水式【名】新造船の進水を行ふ儀式。

しんすな-だい 進水臺【名】新造船の造船臺より滑りて、水中に進む間の經路。

しんすな-ち 浸水地【名】浸水せる土地。

しんすな-をけ 神水桶【名】神事に用ふる水桶。

しん-せ 信施【名】〔佛〕信者より三寶に捧ぐる布施。盛衰記「若干の法勝寺領を知行し給ひながら、修理造營を恣に三寶の信施を受け」

信施無慚【句】〔佛〕僧侶が信施を受けながら、放逸無慚なる振舞をなすこと。平家「彼の信施無慚の罪に依って」

しん-せ 囁施【名】〔佛〕『囁はだっしん(嗤囁)の略』ふせ(布施)に同じ。

しん-せい 申請【名】〔法〕私人が官府に申し出で、或事柄を請ひ求むること。

しん-せい 神性【名】■こころ。精神。■神の屬性。

しん-せい 神制【名】神の制定したる事物。

しん-せい 神聖【名】神神しく貴きこと。

しんせい 神政【名】『英Theocracy神の統治の義』政權を宗教權に從屬せしめ、宗教の首長が、神意を代表して、政治の統領となる制度。

しんせい 參星【名】しん(參)に同じ。

しんせい 軫星【名】しん(軫)㊀に同じ。

しんせい 心星【名】㊀しん(心)㊁に同じ。

しんせい ㊁しんくわ(心火)㊀に同じ。

しんせい 辰星【名】㊀こうせい(恆星)に同じ。㊁ほし(星)に同じ。

しんせい 新星【名】㊀新に發見したる星。㊁【天】變光星の一。突然現出する恒星。急速に光度を增し、數日ならずして極大に達し、爾後次第に光度を減ずるを常とす。

しんせい 新政【名】政治又は政令を新にすること、又その政治・政令。

しんせい 新製【名】新に製すること。新造。

しんせい 新制【名】新なる制度又は體制。

しんせい 新聲【名】あたらしき歌曲。

しんせい 新正【名】新年の正月。

しんせい 新壻・新婿【名】あたらしきむこ。はなむこ。

しんせい 新生【名】【基】『獨Neugeburt』信仰によりて、心の一變せるありさま。新しき生涯に入れること。しんじん(新人)參照。

しんせい 新晴【名】あらたに晴るること。

しんせい 晨星【名】夜明の空に殘る星。よあけぼし。

晨星落落【句】㊀まばらなるさま。まれなるさま。㊁知人の漸く減ずる狀。

しんせい 親政【名】天皇が自ら政を行はせたまふこと。ふこと。

しんせい 親征【名】天皇自ら出征したまふこと。

しんせい 深井【名】深きゐど。

しんせい 深穿【名】深きゐとしあな。

しんせい 深省【名】心中に深く省みること。深く省み悟ること。

しんせい 鍼生【名】古、典藥寮に奉仕し、鍼術の教を受けし者。

しんせい 眞性【名】㊀【醫】他の物のまじらざる性質。純粹。(假性に對して)㊁天賦の性。天性。㊂現象の本體。眞如。

しんせい 眞誠・眞成【名】まこと。眞實。

しんせい 身世【名】この身とこの世と。現身と現世と。

身世を辭す【句】『溫子昇の常山公主碑に「奄辭身世」「從二亡妃於伊洛一」とあり』この世を去る。死ぬ。

しんせい 眞正【名】まことにして正しきこと。

しんせい 心性【名】しんじやう(心情)に同じ。

しんせい 信西【名】ふぢはらみちのり(藤原通憲)に同じ。

しんせい 眞濟【名】【人】眞言宗の高僧。山城國神護寺の第二祖。姓は紀氏。京都に生る。空海に師事し、命によりて、神護寺を嗣ぐ。承和三年小野篁の一行に加はりて、唐に赴かんとし、海上颶風に遇ひて果さず。齊衡三年僧正に敍し、貞觀二年寂す。年六十一。著作多し。世に高雄僧正又は紀僧正といふ。

しんせい 仁聖【名】仁德ある聖人。

しんせい 仁政【名】なさけ深き政治。

しんせい 人世【名】人の世の中。このよ。うきよ。世間。

じんせい 人性【名】㊀『孟子の告子下篇に「人性之無二分於善一不善一也、猶二水之無一分於東西一也」とあり』人の本然の性。㊁人の性質。

じんせい 人生【名】㊀人類の生命。人類の生存。㊁人のこの世に生き長らふる間。人の一生。

人生、意氣に感ず【句】『唐の魏徵の詩に「人生感二意氣一、功名誰復論」とあり』人は富貴功名よりも、意氣の投合するを尊ぶ。

人生、意を得ば、須く懽(クヮン)を盡すべし【句】『唐の李白の句に「人生得レ意須レ盡レ懽、莫レ使二金樽空對一レ月」とあり』得意の時には、歡樂を盡すべし。

人生七十、古來稀なり【句】『唐の杜子美の句に「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」とあり』七十まで生くる者は稀なり。(諺語)

人生字を識るは、憂患の始【句】『宋蘇軾の句に「人生識レ字憂患始、粗記二姓名一可二以休一」とあり』なまじ文字學問あるは、苦勞を招く種なれば、むしろ知らざるが心安し。(諺語)

人生のための藝術【句】げいじゅつ(藝術)の條下を見よ。

人生は行樂のみ【句】『漢書中の楊惲の詩に「田二彼南山一、蕪穢不レ治、種二一頃豆一、落而爲レ箕、人生行樂耳、須二富貴一何時、淫荒無レ度、不レ知二其不可一也」とあるに本づく』人の世にあるは、僅少の間なれば、ただ樂しみて、一生を送るに若かず。

人生は朝露の如し【句】『漢書の蘇武傳に「人生如二朝露一、何久自苦如レ此」とあり』人生の短きことは、朝日の出づる前の露のごとし。(諺語)

人生は白駒の隙を過ぐるが如し【句】「白駒隙を過ぐ」を見よ。(諺語)

人生は風燈の如し【句】『遊史の耶律和尙傳に「顧二人生如一風燈一、石火不レ飲將何爲」とあり』人生の期すべからざることを風前の燈に譬へていふ。(諺語)

じんせい 人聲【名】人の聲。ひとごゑ。

じんぜい 人稅【名】人を課稅の目的とする稅。例へば人頭稅の類。(行爲稅・物稅に對して)

しんせいかい 新生界【名】【地】『英Cainozoic group』新生代を、地質系統の上より見たる名稱。近世界。

しんせいかはせ 眞正爲替【名】【商】『英Real exchange』需要・供給の關係より生ずる爲替相場。(名稱爲替に對して)

しんせいがん 深成岩【名】【地】しんざうがん(深造岩)に同じ。

じんせいくわん 人生觀【名】【哲】『獨Lebensanschauung』人生の起原・目的・價値等に關する見解。壓制主義・樂天主義・禁欲主義・幸福主義など、種種あり。せかいくわん(世界觀)參照。

しんせいくわんせつ 眞正關節【名】【醫】二或は數箇の諸骨の互に相連接して、諸種の運動を營むもの。單軸・二軸・螺旋・三軸・囊合に分つ。何れも關節軟骨にて被覆せられ、關節囊・滑液膜・關節腔を有し、分泌する滑液により て、運動に便す。

しんせいし 申請人【名】申請する人。

しんせいしょ 申請書【名】申請の旨を記載したる文書。

しんせいそう 新生層【名】【地】『英Cainozoic strata』新生代の成生に係る地層の總稱。

しんせいたい 眞聲帶【名】【醫】『羅Ligamenta glottis vera』せいたい(聲帶)を見よ。(假聲帶に對して)

しんせいだい 新生代【名】【地】きんせいだい(近世代)に同じ。

しんせいちやう 神稅帳【名】古、神田の收稅を記入せし帳簿。

じんせいてつがく 人生哲學【名】【哲】『獨Lebensphilosophie』人生の目的・價値・手段等につきて研究する哲學。

しんせいにん 申請人【名】申請する人。申請者。

じんせいは 人生派【名】【文・美】「人生のための藝術」を主義として奉ずる一派。(藝術派に對して)

しんせいふ 神政府【名】『神の政府の義』神政を行ふ政府。

しんせいふさくぬはん 眞正不作爲犯【名】【法】『獨Echtes unterlassungsdelikt』不作爲に依る不行犯、卽ち不作爲に依る命令違反の罪。(不眞正不作爲犯に對して)

しんせいへうぐ 神聖表具【名】掛物の表裝の一種。天地・四方を金襴等の華文ある帛を用ひ、象牙・紫檀・鐵力木(サクラ)・角・水晶・寶石等の軸を用ふるもの。主に佛畫の表裝とす。

しんせいめい 新生命【名】あたらしき生涯。新らしきいのち。

しんせいめん 新生面【名】せいめん(生面)㊀に同じ。

しんせいもくえうび 神聖木曜日【名】【基】『英Holy Thursday』しようてんさい(昇

天祭)に同じ。

しん-せいわてん 新清和院【名】〔人〕光格天皇の中宮。仁孝天皇の御養母。後桃園天皇の皇女。御名は欣子内親王。弘化三年崩ず。

しん-せう 新梢【名】新に生じたる梢。

しん-せう 秦椒【名】〔植〕さんせう(山椒)に同じ。

しん-せう 薪樵【名】薪を採ること、又その人。「の薪。

しん-ぜう 侵擾【名】侵しみだすこと。

しんせう-ぼうだい 針小棒大【句】針ほどのことを棒ほどにいひ立つること。物事を誇張して、大袈裟にいふこと。

しん-せかい 新世界【名】■新しく發見せる國土。■南北亞米利加及びオオストラリヤ兩大陸の總稱。(舊世界に對して)

しん-せき 臣籍【名】■臣民たる身分。國民の分限。臣民籍。■皇族以外の臣民籍。

しん-せき 親炙【名】しんしや(親炙)に同じ。

しん-せき 親戚【名】親族と緣家と。みうち。しんるゐ。

しん-せき 眞蹟・眞跡・眞迹【名】その人のまことの筆蹟。親筆。

しん-せき 晨夕【名】朝と夕と。あさばん。朝夕。日暮。朝暮。

しん-せき 新關【名】新に造り構へたる關所。文武五人男「さては新關にて候ふな」

じん-せき 神石【名】〔地〕備後國七郡の一。蘆品(アシ)郡役所の衆會に屬す。

じん-せき 社席【名】しやせき。しきもの。ふとん。

じん-せき 人跡・人迹【名】■人のあしあと。■人の往來。「見よ。

じん-せき 腎石【名】〔醫〕ねうせき(尿石)を

しん-せつ 親切【名】懇にいたはること。まめやか。

しん-せつ 深切【名】甚だ切實なること。

しん-せつ 臣節【名】人臣の節操。

しん-せつ 深雪【名】高く積りたる雪。

しん-せつ 信節【名】信義ある節操。詐りなきしるし。

しん-せつ 新雪【名】新年となりて初めての降雪。新年の雪。

しん-せつ 新說【名】■あらたに聞く話。■あらたに立てたる意見。(舊說に對して)

しん-せつ 新設【名】新に設くること。

しん-せつ 臣妾【名】■臣下と妾と。■屈從すること。屈服。

しん-せふ 震慴・震懾・震攝【名】おそれをのくこと。震怖。

しん-せん 神饌【名】神に供ふる飲食物。「ること。

しん-せん 神占【名】神に祈りて疑を決すくもつ。

しん-せん 神泉【名】■神いますといふ泉。■靈妙なる泉。

しん-せん 神仙・神僊【名】せんにん。かみ。

しん-せん 深泉【名】水底ふかき泉。

しん-せん 深淺【名】■深きと淺きと。

しん-せん 進戰【名】進みて戰ふこと。

しん-せん 賑贍【名】にぎはしめぐむこと。賑恤。

しん-せん 新選【名】新にえらぶこと。

しん-せん 新撰【名】新に撰述すること。新に著作すること。

しん-せん 新鮮【名】■あたらしき魚。なまうを。■鮮魚。

しん-せん 新船【名】新造の船。

しん-せん 新錢【名】新に鑄造通用する錢。(舊錢に對して)

しん-せん 針線・鍼線【名】■針と絲と。■さいほう(裁縫)に同じ。

しん-せん 針氈【名】針のむしろ。針氈に坐す【句】不安・畏怖の地位に在り。

しん-ぜん 震戰【名】ふるひおののくこと。

しん-ぜん 震顫【名】〔醫〕『羅 tremor』身體の或部分の震ふ狀態。俗に「ふるへ」といふ。

しん-ぜん 神前【名】神の御前。やしろの御前。ひろま。「見よ。

しん-ぜん 神仙【名】じふにりつ(十二律)を寢膳【名】寢ぬることと食事と。盛衰記「御寢膳も御倦(ウト)き程なりけり」寢食。

しん-ぜん 襯染【名】■しんしや(親炙)に同じ。■しんでふ(襯貼)に同じ。

しん-ぜん 浸染【名】■しみそまること。■漸漸に感化せらるること。

しん-ぜん 浸漸【名】■ひたりうるほふこと。■漸漸にその程度の進行すること。

しん-ぜん 親善【名】親しみて仲よきこと。

しん-ぜん 森然【貌】■深く茂りたるさま。こんもり。■嚴かなる、又は鋭きさま。

じん-ぜん 驀錢【名】はなむけすること。

じんぜん 仁川【名】〔地〕朝鮮京畿道に在る府。京城の西約十里。朝鮮第一の貿易港なれども、港内狹少、且つ海水の干滿甚しく、大船の繫泊に適せず。鐵道京仁線は、此所より起り、永登浦に至りて、京釜線に會す。舊名は濟物浦なれども、この地の東南約二里にある邑名を取りたり。

じん-ぜん 荏苒【貌】■歲月などの長びくさま。■物事の漸漸に移り行くさま。

しんせん-かん 深淺桿【名】深さ十五尺以下の深淺を測量するに用ふる桿。

しんせん-ぐみ 新選組【名】明治維新の際、幕士近藤勇の率ゐたる一隊。新徵組の一部なり。しんちようぐみ(新徵組)參照。

しんぜんくわうじ 新善光寺【名】■みえいだう(御影堂)を見よ。■近江國栗太(クリト)郡葉山村にある淨土宗の寺。仁治中、小松宗定(重盛の後裔といふ)の、信濃の善光寺を信仰し、平氏一門の冥福を修せんがために建立せるものといふ。

しんせん-ざい 浸染劑【名】〔醫〕浸劑と煎劑とを混合せる藥劑。

しんせんざい-わかしふ 新千載和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。後光嚴院の勅を奉じて、京極爲定の撰せしもの。二十卷。

しんせん-じきやう 新撰字鏡【名】〔書〕我が國最古の字書。漢字を扁旁によりて類聚し、その音訓・解釋を示せるもの。寬平四年の夏草案を終へ、なほ見聞に從ひて拾集し、昌泰中、玉篇・切韻を得て、更に修補を加へ、また小學編及び本草の文字を選入せりといふ。僧昌住の著。

しんせん-しやうじろく 新撰姓氏錄【名】〔書〕神武天皇より嵯峨天皇までの間の姓氏一千一百八十二を神別・皇別・蕃別に類別し、各その本原を討(タヅ)ねたるもの。嵯峨天皇の勅を奉じて、萬多親王・右大臣藤原園人・參議藤原緒嗣(ツグ)など撰す。今存するものは抄本なるべしといふ。三十卷。

しんせん-ずなう 新選髓腦【名】〔書〕歌學に關したる事を記したるもの。一卷。藤原公任の著。

しんぜん-てう 神仙調【名】じんぜん(神仙)に同じ。徒然「中と六との間に、神仙調あり」

しんせん-つくば-しふ 新撰菟玖波集【名】〔書〕二條良基の菟玖波(ツクバ)集に倣ひて、連歌を集めたるもの。二十卷。宗祇法師の著。

しんせん-てん 神仙傳【名】〔書〕神人・仙人の傳記を記せるもの。十卷。支那晉の葛洪の撰。

しんせん-ねんぺう 新撰年表【名】〔書〕我が國の年表。一卷。清宮秀堅の著。安政年間始めて刊行し、明治に至りて、增補・訂正して改刻したり。

しんせん-はくどう 心尖博動【名】〔醫〕しんき(心悸)に同じ。

しんせん-ばんしやらく 神仙萬秋樂【名】ばんしやらく(萬秋樂)に同じ。

しんせん-へいはくれう 神饌幣帛料【名】へいはくしんせんれう(幣帛神饌料)に同じ。

しんせん-まんえふしふ 新撰萬葉集【名】〔書〕寬平年中の后宮の歌合の歌を、眞字にて載せ、旁に七言絕句を添へたるもの。二卷。菅原道眞の撰。菅家萬葉集。

しんせん-もん 神仙門【名】平安城の大內裏清涼殿の南庇、殿上の西南向、即ち殿上の小板敷と賢所との間に在りし門。

しんせん-もんゐん 神仙門院【名】〔人〕後堀河天皇第二の皇女。御名は體子(カタリ)。建長八年內親王となり、三宮に准ぜられ、弘長元年尼となりて、妙智覺と號し、正安三年薨ず。御年七十一。

しんせん-らうえいしふ 新撰朗詠集【名】〔書〕公任の和漢朗詠集に倣ひて、同じ題にて、詩・歌・文章を撰び集めたるもの。二卷。藤原基俊の編。

しんせんろんじゅわらい 新撰類聚往来【名】〔書〕四季十二月の所用の書簡文を輯め、その間に日常の通用字を類聚したるもの。三巻。丹峰和尚の著。

しんせんろくでふ 新撰六帖【名】〔書〕源家長(イヘナガ)・藤原爲家・同知家・同信實・同光俊の五歌人が、古今和歌六帖の假名題にて詠める歌どもを記せるもの。五巻。

しんせんわかしふ 新撰和歌集【名】〔書〕古今集中の秀歌三百六十首を集めたるもの。紀貫之、勅を奉じて選定せり。自己の作四十四首、その中にあり。四巻。

しんせんゑん 神泉苑【名】王朝時代の天子の遊覽場たりし地。相撲・射術・雨乞・菊花宴等の事を行はれし事もあり。正殿を乾臨閣と呼びたり。京都二條城の南に、今もその址ありて、東寺の所管となれり。

しんせんゑんまつり 神泉苑祭【名】神泉苑の善女龍王社にて、八月一日に行ふ祭。前條參照。

しんそ 讖訴【名】ざんそ(讖訴)に同じ。

しんそ 神訴【名】神の訴。太平記「神訴忽ちに落居して、八月二十二日神木御歸座あり」

しんそ 辛楚【名】『辛は辛(カラ)き味、楚は人を笞(ムチ)つ義』いたみ苦しむこと。

しんそ 親疎【名】したしきと、うときと。

しんそ 神祖【名】■功德の偉大なる祖先。■あまてらすおほみかみ(天照皇大神)の尊稱。■〔人〕さくがはいへやす(德川家康)の尊稱。〔江戸時代の語〕

しんそ 陞座【名】〔佛〕『漢字の宋音』高座に登りて說法すること、又その高座。〔禪宗の語〕

しんぞ 新造・新艘【名】■しんざう(新造)㊁の訛。皇都午睡「女の惣名をたぼと云…十三四より二十頃迄を新造といふ」■しんざう(新造)㊀㊁に同じ。

しんぞ 眞ぞ・神ぞ【副】しんに。ほんに。まことに。淨瑠璃世話澁團「しんぞ一切れ振る舞ひたい」「送呈。

しんそう 進送【名】送りまゐらすること。

しんそう 申奏・進奏【名】申し上ぐること。奏上。

しんそう 宸聰【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天子の御きき。叡聞。

じんそう 迅走【名】しっそう(疾走)に同じ。

じんそう 賫送【名】旅立つ人にはなむけすること。賫錢。

しんそうけんもんゐん 新崇賢門院【名】〔人〕東山天皇の宮人。名は賀子。中御門天皇及び諸皇子を生む。寶永六年薨ず。年三十五。

しんそうりう 進走流【名】〔音〕しんしょうさく(進宿德)に同じ。

しんそく 神足【名】神の如く不思議に早き足。釋迦如來義生寶「六通自在の神足に、魔軍筵のごとく捲いて」

しんそく 神速【名】不思議なるほど速かなること。

しんぞく 親族・親屬【名】■みより。うから。やから。緣家。親類。(疎族に對して)■〔法〕『英 Relationship』民法にて、六親等内の血族、配偶者及び三親等内の姻族の總稱。

しんぞく 臣屬【名】臣下として隷屬すること、又その人。臣從。臣下。

しんぞく 眞俗【名】〔佛〕■出世間の法と、世間の法と。眞實平等の理と、世俗の差別の理と。超社會的の眞理と、社會的の道德及び事實と。佛法と世法と。眞諦と俗諦と。徒然「眞俗につけて、必ず果し遂げんと思はん事は」■僧侶と俗人と。僧俗。太平記「眞俗道備はって尤可レ然」

じんそく 迅速【名】すみやかなること。極めてはやきこと。迅疾。

しんぞくくわい 親族會【名】〔法〕後見機關の一。或人若しくはその家の利害に重大なる關係ある事件を協議決定するために、親族會員にて組織するもの。

しんぞくくわいぎ 親族會議【名】〔法〕前條に同じ。

しんぞくくわいゐん 親族會員【名】〔法〕親族會を組織する會員。三名以上とし、親族その他、本人又はその家に緣故ある者の中より裁判所の選定するを通例とすれども、後見人指定の權利ある者も、遺言によりて、これを選擧することを得。

しんぞくくわんけい 親族關係【名】親族たる關係。

しんぞくけっこん 親族結婚【名】親族關係を有する男女の結婚。親族婚。(交叉結婚に對して)

しんぞくけん 親族權【名】〔法〕私權の一。親族上の身分に伴ふ權利。卽ち親權・戶主權・後見權の類。身分權。

しんぞくこきん 新續古今【名】〔書〕次條の略。

しんぞくこきんわかしふ 新續古今和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。後花園天皇の永享五年、飛鳥井雅世の勅を奉じて撰せしもの。多く北朝君臣の詠を採る。二十卷。

しんぞくこん 親族婚【名】しんぞくけっこん(親族結婚)に同じ。

しんぞくさうたう 親族相盜【名】〔法〕直系血族・配偶者及び同居の親族又は家族が、互にその財產を竊取すること。その刑を免除す。

じんそくさくぶん 迅速作文【名】題を課して、一定の短時間に、文章を作らしむること。

しんぞくだいりんわかしふ 新續題林和歌集【名】〔書〕新題林和歌集以後の歌を集めたるもの。十六卷。撰者詳かならず。

じんそくつう 神足通【名】〔佛〕六通の一。山海を飛行し、動作意の如くなること。神境通。

しんぞくにたい 眞俗二諦【名】〔佛〕眞諦と俗諦と。眞俗。鷄鶩合氣「眞俗二諦、內外の兩典、形の如く存知す」

しんぞくにだち 眞俗二道【名】〔佛〕前條に同じ。

しんぞくはい 親族拜【名】古、禁中にて、敍位の儀了りたる後、敍者の親族の堂上にある者の殿を下りて行ひし拜禮。

しんぞくはふ 親族法【名】〔法〕親族に關する事柄を規定したる法律。

しんぞくれい 親族例【名】〔法〕親族の範圍を定めたる通則。

しんそこ 心底【名】しんてい(心底)に同じ。

しんそつ 眞率【名】天眞に任せて飾らず、率直なること。まじめ。眞摯(シン)。

しんそつ 新卒【名】新しき兵卒。あら手の兵。

しんそん 神孫【名】神の血統をひきたる人。神裔。

しんそりこ 進曾利古・進蘇利古【名】〔音〕雅樂の高麗壹越(コイツ)調の一。拾芥抄「進曾利古」

じんだ 糂汰【名】■〔佛〕『梵 Pāramitā(波羅末陀)の譯語』印度の高僧。西天竺の人。梁の大同年中、三十餘歲にして支那に來り、武帝の優遇を受く。次いで國難に遭ひ流離の間、金光明經・攝大乘論・起信論等六十四部の經(二百七十八卷)を漢譯し、陳の大建元年寂す。年七十一。

しんたい 新體【名】あたらしき體。あたらしきかたち。

しんたい 神體【名】神のみたましろ。

しんたい 進退【名】■進むと退くと。進

しんたい 眞諦【名】〔人〕『梵 Paramārtha(波羅末陀)の譯語』印度の高僧。西天竺の人。梁の大同年中、三十餘歲にして支那に來り、武帝の優遇を受く。次いで國難に遭ひ流離の間、金光明經・攝大乘論・起信論等六十四部の經(二百七十八卷)を漢譯し、陳の大建元年寂す。年七十一。

しんたい 身體【名】からだ。體軀。

しんたい 身體の自由【句】〔法〕憲法上の自由の一。卽ち憲法第二十三條に「日本臣民は法律に依るに非ずして、逮捕監禁審問・處罰を受くることなし」とあるもの。

しんたい 賑貸【名】貸して利を取らざること。借貸。救荒「賑貸之」

しんたい 眞諦【名】■〔佛〕『梵 Paramārtha-satya の譯語。虛妄(コマウ)を離れたるが故に、眞といふ。諦は眞理の義』二諦の一。眞實平等の理。實相。眞如。實體。法性(ホッシャウ)。涅槃(ネ)。(俗諦に對して)■成佛の法。佛法。(俗諦に對して)太平記「大慈・大悲の薩埵に知遇(グ)し奉らば、眞諦俗諦、善願の望を達せん」■眞の法則。眞の道理。眞の妙所。

しんたい 進退【名】■進むと退くと。進

むると退くると。今萱いかさまにも、これは、わが進退にかからんずるものなめり」㊂かけひき。㊂たちゐ。ふるまひ。やうす。盛衰記「容貌美麗にして、進退見つべかりければ」㊃職務に就くことと、これを去ることと。去就。㊄心のままに扱ふこと。茲小法師ばらのもたぐべくもあらぬ屏風などの高き、いとよく進退し、疊などをうち置くと見れば」

しんたい 心體【名】㊂しんしん(心身)に同じ。㊂心象の本體。

しんだい 新題【名】新に課せる題。

しんだい 審題【名】題に對して、文を作る時、まづ題意を審かに辨へて後、筆を取り、稿を起すこと。

しんだい 寢臺【名】ねだい(寢臺)に同じ。

しんだい 身代【名】㊂『白居易の詩に「早年以二身代一、直赴道遙篇」とあり』しんせい(身世)に同じ。㊂家の財産。しんしやう。家資。

身代打つ【句】身代をうちこむ。

身代が蒲鉾になる【句】身代がゆがむ。「じ。

身代が廻(マ)る【句】「身上が廻る」に同

身代の尾が見ゆ【句】多かりし財産減じて、人より數へらるるほどになる。心中及は氷の朔旦病の根を抜き、このやうに身代の尾も見せず」

身代を棒に振る【句】あることのために身代を無くなす。

身代を破る【句】身代を無くなす。身代限をなす。天の網島「身代破り女夫別れする時は、男ばかりの恥ぢやない」柳樽

じんたい 人體【名】㊂人のからだ。「人體にとりて琵琶湖は臍の穴」㊂にんてい(人體)に同じ。「仁體」

じんたい 靱帶【名】〔動〕『羅 Ligamenta』關節の骨と骨との間にありて、その兩骨の衝突を防ぐ彈力のある筋、また貝類の殼片を繋ぎとむる、彈力ある筋、即ち貝の柱の稱。

じんだい 神代【名】かみよ(神代)に同じ。

じんだい 神代の四弓【句】後世、神道家の說に依れば、大日靈(オホヒルメ)尊の持ちたまひし、坐陣弓、高皇産靈(タカミムスビ)尊の天稚彦(アカメワ)命に賜ひし發向弓、瓊瓊杵(ニニ)尊に隨從せし諸神の持ちたまひし護持弓、彦火火出見(ヒコホホデミ)尊の持ちたまひし治世弓の併稱。

しんたい-うかがひ 進退伺【名】官吏が過失ありし時、責を引きて、自己の進退を上長官に仰ぐこと、又そのために差出す文書。

じんだい-かうじゆつせう 神代講述抄【名】〔書〕出口延佳(ノブヨシ)の講說を聞書せるもの。五卷。山本廣足の編。

じんだい-かうだんしよ 神代講談書【名】〔書〕日本書紀神代卷を、俚言にて註釋せるもの。十卷。撰者詳かならず。

しんだい-かぎり 身代限【名】身代全部を債權者に差出して、債務に充つること。現時の家資分産と破産との併稱。

じんだい-き 神代紀【名】〔書〕日本書紀の神代の卷の稱。

じんだいき-あしかび 神代紀葦芽【名】〔書〕日本書紀神代卷を註釋せるもの。三卷。本居大平(オホラ)の著。

じんだいき-ひかい 神代紀祕解【名】〔書〕日本書紀神代卷の上卷を、片假名にて註せるもの。十七卷。源雅胤の著。

じんだい-くけつ 神代口訣【名】〔書〕日本書紀神代卷を註釋せるもの。その說、多く佛意を交ふ。五卷。忌部(イムベ)正通の著。

しんたい-けい 身體刑【名】〔法〕たいけい(體刑)㊂に同じ。

じんだい-けいづ 神代系圖【名】〔書〕天之御中主神より天種子命に至る神代の系圖。一卷。平田篤胤の著。

しんたい-けうせいじゆつ 身體矯正術【名】徒手にて、種種の單運動を反復して、惡姿勢を矯正するもの。もと我が國の學校體操の基礎法として行はれしが、今は各箇演習の行はるるにつれ、その必要を見ざるに至れり。矯正術。

しんたい-けん 身體權【名】〔法〕人格權の一。人が、不法に、その身體を害せられざる權利。

しんたい-けんさ 身體檢査【名】身體をあらためしらぶること。

しんたい-けん-もんゐん 新待賢門院【名】〔人〕後醍醐天皇の妃。藤原公廣の女。後村上天皇の御母。御名は廉(カド)子。興國年中、皇后となり。正平十四年崩ず。

じんだい-さんそ 神代纂疏【名】〔書〕にほんぎさんそ(日本紀纂疏)に同じ。

しんたい-し 新體詩【名】明治十八九年頃西洋の詩風を參酌して起りたる、從來の歌と形式を異にせる長歌。

じんだい-じ 深大寺【名】武藏國北多摩(キタタマ)郡神代村大字深大寺にある眞言宗の古刹。天平五年福滿童子の創建。同國荏原(エバラ)郡世田谷(セタガヤ)なる吉良氏再興し、亘刹たりしが、今は薈萃の小堂を存するのみ。

しんたい-し-じん 新體詩人【名】新體詩を作る人。

しんたい-じ-そば 深大寺蕎麥【名】昔、武藏國深大寺の邊の名產なりし蕎麥。

じんだい-じま 神代縞【名】織物の縞柄の古代なるもの。

しんたい-しや 寢臺車【名】鐵道列車の內部に寢臺の設備をなしたるもの。

じんだい-しやうご 神代正語【名】〔書〕神代の事を、古事記にもとづき、その遺漏を日本書紀に取り、假名にて記せるもの。二卷。本居宣長の著。

じんだい-しゆ 神代酒【名】にごりざけ(濁酒)に同じ。

じんだい-すぎ 神代杉【名】數百年の間、地中に埋もれる杉の材。淡黑色にして、木理美し。

しんたい-せいりがく 人體生理學【名】せいりがく(生理學)㊂に同じ。

じんたい-そくていがく 人體測定學【名】人體の尺度、比例及びその他の物質的特性を研究する科學。

しんたい-つきれっしや 寢臺附列車【名】寢臺の設備ある鐵道列車。

じんだいのまき-うずの-やまがけ 神代卷髻山蔭【名】〔書〕日本書紀神代卷を讀む者の心得をしるせるもの。二卷。本居宣長の著。

じんだいのまき-ひえうせう 神代卷祕要抄【名】〔書〕日本書紀撰述の事、舊事記、古事記の事、日本書紀私記の事、日本書紀を講ずる式、竟宴の事などを記せるもの。十二卷。多田義俊の著。

じんだいのまき-ふうえふしふ 神代卷風葉集【名】〔書〕日本書紀神代卷につき、種種の書を引きて、專ら自說を述べたるもの。八卷。山崎垂加の著。

じんだい-ひやうちゆう 神代評註【名】〔書〕神佛習合の說を記せるもの。四卷。龍(リウ)熙近(キンジ)の著。

しんたいぶつ-じ 新大佛寺【名】伊賀國阿山(アヤマ)郡阿波村にある眞言宗の寺。建久七年俊乘坊重源の開基。寺號は神龍寺。

しんたい-むし 寢臺蟲【名】〔動〕『兵營の寢臺にて、この蟲に苦しめらるること多きよりいふ』なんきんむし(南京蟲)に同じ。

じんだいめいし 人代名詞【名】〔語〕人の名に代へて用ふる代名詞。自稱(第一人稱)、對稱(第二人稱)、他稱(第三人稱)の三種に分つ。各その條を見よ。人稱代名詞。

じんだい-もじ 神代文字【名】神代に用ひたりと言傳ふる文字。即ち日文(ヒフミ)、秀眞(ホツマ)、天名地鎭(アナナ)等の總稱。何れも、後人作爲の形跡あるのみならず、字母の配列に止まり、これを用ひて記載せる文書存在せず、容易に信ずるを得ず。かみよもじ。

じんだい-もでる 人體モデル【名】人間をモデルとして用ふること。もでる參照。

しんたいや 新金剛石【名】無色透明なる鋼玉石を、ブリリヤント形に切りしもの。

しんたいやう 眞太陽【名】〔天〕『英 True solar time』眞太陽日の二十四分の一。こうせいじ(恒星時)參照。

しん-たいやうじつ 眞太陽日【名】〔天〕『英 True solar day』太陽の一南中より次の南中までを、一日二十四時間と定むるもの。地球公轉の結果、吾人の目には、太陽は黄道上を東方に運動するごとく見え、且つその速度、冬速かに夏遲きため、一日の長さ、從って一分・一秒の長さに長短あり。太陽日。眞時。こうせいじつ(恒星日)・へいきんたいやうじつ(平均太陽日)・じさ(時差)參照。

しん-だいりん-わかしふ 新題林和歌集【名】〔書〕諸歌人の詠を、題によりて類聚したるもの。作者は、大かた新明題和歌集のに同じ。十六卷。撰者詳かならず。

しんたう 神道【名】一我が國に發達せる敬神・尊王を骨子とせる道德思想。かみのみち。かんながらのみち。(儒道・佛道に對して)二神道教派の一。惟神(かむながら)の大道を擴張し、我が國固有の神教を世界に宣揚するを教義とし、その教務を主管する所を神道本局といひ、現時これを東京市麻布區笄町に置く。もと神道事務局と稱せしが、明治十七年に太政官・教導職を廢し、教師の任免・黜陟を管長に委せしより、神道教派の一となり、同十九年に現名に改む。

しん-たう 侵盜【名】侵し盜むこと。

しん-たう 震蕩【名】怖しきほどふるひうごくこと。ゆりうごかすこと。

しん-たう 宸悼・軫悼【名】『しんぎん(宸襟)を見よ』天子の哀悼せらるること。

しん-たう 深悼【名】深くいたむこと。

しん-たう 新刀【名】一新に鍛へたる刀。時勢あらみ。二慶長以後に鍛へたる刀。時勢漸く泰平に向ひし頃の作なるが故に、次第に實用に遠ざかりて、刀文の美を重んずるに至れり。(古刀に對して)

しん-たう 新道【名】新に開きし道路。しんみち。新路。(舊道に對して)

しん-たう 臣道【名】人臣たる者の守るべき道。

しん-たう 神道【名】一『易經の觀卦彖傳に「聖人以二神道一設レ教、而天下服矣」とあり』靈妙なる道。二神祇。天道。太平記「末代のしるし、王法を神道棄てたまふ事と知るべし」三しんたう(神道)に同じ。四墓前に通ずるために開きたる道。墓門。

神道の碑【句】しんだうひ(神道碑)に同じ。

じん-だう 人道【名】一人の往來すべき道。(車馬道に對して)二人たる者の行ふべき道。人たる道。人倫。三とつぎの道。交合の道。「道。

じん-とう 仁道【名】仁の道。人のふむべき道。人たる道。

じん-だう 笹竜【名】じんとう(笹竜)を見よ。

しんだう-いっしんりう 神道一心流【名】劍法の一派。稻淵彌兵衛宣根を祖とす。

じんだう-がくは 人道學派【名】〔哲〕じんだうしゅぎ(人道主義)に同じ。

しんたう-かた 神道方【名】江戸幕府の職制の一。寺社奉行の所管にて、神書を講修し、神祇の故實、祭事の舊典を掌りしもの。吉川惟足(これたり)の子孫世襲せり。

じんだうけう 人道教【名】じんるゐけう(人類教)に同じ。

しんだうけうだうしょく 神道教導職【名】明治六年神官教導を改稱せしもの。同九年三部に分ち、每部に管長を置き、次いで四部に改め、同十一年四部の區分を廢し、同十四年神道教導職總裁及び副總裁の職を設け、翌年神官を教導職に兼補する例を廢し、有栖川熾仁(たるひと)親王總裁に、議官岩下方平副總裁に就職せしが、後任の人を闕き、同十七年廢止す。

しんだうけうだうしょく-そうさい 神道教導職總裁【名】前條を見よ。

しんだうけうだうしょく-ふくそうさい 神道教導職副總裁【名】前前條を見よ。

しんたう-ごぶしょ 神道五部書【名】〔書〕倭姫(やまとひめ)命世紀・天照座(あまてらす)伊勢二所皇太神宮御鎭座次第記・豐受皇太神宮御鎭座本紀・伊勢二所皇太神御鎭座傳記・造伊勢二所太神宮寶基本紀の五部の神書。

しんたうごぶしょ-せつ 神道五部書抄【名】〔書〕神道五部書を、片假名にて註釋せるもの。六卷。岡田正利の著。

しんたうごぶしょ-せつべん 神道五部書說辨【名】〔書〕神道五部書の、何れも後世の僞書にして、世俗を惑はすものなる由を說明せるもの。十二卷。吉見幸和(よしみさちかず)の著。

しんたう-しうせいけう 神道修成教【名】しうせいけふ(修成教)に同じ。

しんたう-しふ 神道集【名】〔書〕神道の由來・八幡・鳥居などの事項、五十箇條ほどを記せるもの。八卷。僧聖覺の著。

しんだう-しふがふけう 神道習合教【名】しふがふけう(習合教)に同じ。

しんだう-しふせい 神道集成【名】〔書〕神道に關する一切を集めたるもの。十二卷。德川光圀の編。

しんたう-じふにぶしょ 神道十二部書【名】〔書〕倭姫世紀・御鎭座次第記・御鎭座本紀・御鎭座傳記・寶基本紀・天口事書・古老口實傳・御奉社記・御鎭座本紀・機殿規式帳・心御柱記・神鳳鈔の十二部の神書。十二卷。

しんたう-じむきょく 神道事務局【名】しんたう(神道)二を見よ。

しんたう-じや 神道者【名】神職又はその類の人。色男十人三文、あの人は神道者か知らん、鈴を落して來たのだらう」

じんだう-しゅぎ 人道主義【名】一人道を旨とする主義。二〔哲〕『英 Humanism』歐洲の中世紀に、教權の拘束に反對して起りたる主義。即ち人の理想とする人生の粹は、古典的學科にありとし、これによりて、高尚雅致ある品性を養成するを旨とし、物質的要求を重要視せざりしもの。人文主義。

しん-たうしょ 新唐書【名】〔書〕舊(く)唐書を改修せしもの。二十二卷。即ち本紀十卷、志五十卷、表十五卷、列傳百五十卷。列傳は宋の宗祁(そうき)の作、その他は歐陽修の作。(舊唐書に對して)

しんたう-すみこでん 神稻水滸傳【名】〔書〕しゅけつしんたうすみこでん(後傑神稻水滸傳)を見よ。

しんたう-そうげん 神道宗源【名】〔書〕次條に同じ。

しんたう-たい 新道大意【名】〔書〕卜部家神道の大意を、假名にて記せるもの。一卷。卜部兼直の著。一名、神道宗源。

しんたう-どくご 神道獨語【名】〔書〕神職に非ずして、神道を弄ぶ人の心得を論辨せるもの。一卷。伊勢貞丈の著。

じんたう-のさね 神道札【名】わたがみ(綿噛)に同じ。

しんだう-ひ 神道碑【名】神道即ち墓門に建つる碑。神道の碑。

しんたう-べんわく 神道辨惑【名】〔書〕伊勢兩宮・神道五部書・その他、神道に關する、種種の論を記せるもの。二卷。持寶院聖應の著。

しんだう-ほんきょく 神道本局【名】しんだう(神道)二を見よ。

しんたう-みやうもくるゐじゅせう 神道名目類聚鈔【名】〔書〕宮社・神社・祭器・幣帛・冠履及び社司の職などの事を、分類して記せるもの。三卷。野殿某の著。

しんたう-むねんりう 神道無念流【名】劍法の一派。福井兵右衛門嘉平を祖とす。

じんだう-もんだい 人道問題【名】人道上の問題。道德上の問題。

しんたう-やへがきでん 神道八重垣傳【名】〔書〕天にも地にも、皇帝にも、國司にも、八重垣あることを述べて、百官・農・工・商の敎になるべき事どもを記せるもの。五卷。藤原齋延(ときのぶ)の著。

しんたう-ゆゐいちりう 神道唯一敎【名】ゆゐいちしんたう(唯一神道)に同じ。

しんたう-りう 神當流【名】一劍道の一流。塚原卜傳を祖とす。鹿島新當流。二馬術の一流。神尾織部を祖とす。

しんたう-りう 神道流【名】劍法の一派。飯篠家直を祖とす。

しん-たかね 新高直【名】〔商〕今までにき高直。(取引所の語)

じんだ-がめ 糀麩甕・甚太瓶・糝麩瓶・秦太瓶【名】糠味噌を入るる瓶。徒然糀麩瓶なりとも、執心とならんものは捨つべし」

しん-たく 信託【名】一信用して委託すること。二〔法〕しんたくしげふ(信託事業)に同じ。

しんたく 神託【名】神の託宣。おつげ。かみごと。かみよせ。盛衰記「還三神託驚二示現一」

しんーたく 新宅【名】㊀新しく造りたる家。㊁分別。別家。

しんたく-ぐわいしゃ 信託會社【名】認可を得て、信託業を營む一種の會社。多くは社會上最も信用ある財産家を以て組織す。

しんたく-けいやく 信託契約【名】〔法〕擔保附社債の信託につき、委託會社と受託會社との間に締結したる契約。

しんたく-さうこ 信託倉庫【名】有價證券その他貴重品の特別保護預のために設けたる倉庫。安全倉庫。

しんたく-じげふ 信託事業【名】或會社と信託契約を結び、その債券又は株券の發行に關する事務を取扱ひ、又は擔保品を管理して、債權者のために、債權の辨濟に必要なる處置をなす等の外、信託によりて、個人の財産又は遺産の管理等をなすこと。

しんたく-しゃ 信託者【名】他人に財産の管理を信託したる人。

しんたく-しょうしょ 信託證書【名】信託契約の證書。委託會社並びに受託會社の商號、社債の總額、利率、償還の方法及び期限、各社債の金額等を記載し、委託受託の兩會社の代表者署名して、各會社に一通づつ保存すべきもの。

しんたく-はふ 信託法【名】たんぽつきしゃいしんたくほふ(擔保附社債信託法)を見よ。

しんたく-びらき 新宅開【名】新築の家の落成祝。

しんたく-よきん 信託預金【名】信託の目的を以て、信託業務を營める個人會社又は銀行になす預金。

しんだけ 新竹【名】今年生じたる竹。ことしだけ。わかたけ。

しんーたつ 進達【名】㊀人を薦めて出世せしむること。㊁官署への上申を取次ぐこと。「と。

しんーたつ 侵奪【名】侵入して奪ひ取ること。

しんたつ-しょ 進達書【名】㊀官府へ進達する書類。㊁官府への上申書などの添狀。〔江戸時代の語〕

じんだみそ 糂粁味噌・甚太味噌・糝粁味噌【名】じんだ(糂粁)㊀に同じ。隣の糂粁味噌【句】つまらぬ物にても、他人の物は美しく思はるるが人情なり。「膽。

〔諺語〕

しんたん 心膽【名】こころ。きもだま。魂心膽を寒からしむ【句】ぞっとせしむ。恐怖を懷かしむ。

しんたん 深潭【名】しんじん(深潭)の誤讀。

しんたん 薪炭【名】まきと炭と。

しんたん 震旦・神丹・眞丹・振旦【名】〔地〕しな(支那)に同じ。盛衰記「就中、大唐震旦に於て、天台山長安城の艮なり」

しんたん 宸斷【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の御裁斷。

しんーだん 診斷【名】診察して、病の性質、原因などを判斷すること。

しんーだん 神壇【名】神を祭る壇。かみどこ。かむとこ。祭壇。「別稱。

しんーだん 眞檀【名】〔植〕せんだん(旃檀)の

しんたん-しゃう 薪炭商【名】薪炭をあきなふ商店、又その商人。

しんだん-しょ 診斷書【名】診斷の旨を書きたる書。

しんだん-しょうしょ 診斷證書【名】醫師が診斷の旨を記したる證書。

しんたんおき-さう 身端直相【名】〔佛〕三十二相の一。身軀端正にて、屈まらざる相。

しんたらう-せうしやう 新太郎少將【名】〔人〕『新太郎はその通稱、左近衞少將に任ぜられしによりていふ』いけだみつまさ(池田光政)に同じ。

しんだら-だいしやう 神達羅大將(梵 Ciṃ-ara)【名】〔佛〕十二神將の一。本地は普賢。十二支中の酉に配せらる。

しんーたる 新樽【名】新しき樽。新酒の樽。堀川波の鼓「新樽の酒ざんざや」

しんーち 新地【名】㊀新しく開きたる土地。新開地。㊁『遊廓は、新開の地に設くること多ければなり』くるわ。いろざと。遊廓。例へば京都の祇園新地、大阪の北の新地。南新地等の類。〔關西の方言〕天の網島「新地への御出でか。御せいが出まする」㊂新しき領地。〔新知〕狂言「ひめのり」「この中、御前につめてあれば、新地をくわっと下された。何とめでたい事ではないか」

しんーち 新知【名】㊀あたらしき知りあひ。(舊知に對して)㊁あらたに受けたる知行。〔新地〕

しんーち 心地【名】『心の善惡を生ずること、恰も大地の五穀を生ずるが如くなる義』心の狀態。こころもち。心境。

しんーぢ 深智【名】ふかき智慧。

しんーち 眞智・眞知【名】〔佛〕㊀こんぽんち(根本智)に同じ。㊁しやうち(聖智)に同じ。

しんーち 神智【名】くすしき智慧。

しんーち 神地【名】神のおはします處。宗廟・山陵・神社などの在る土地。社地。

しんーち 侵地【名】侵略したる土地。

しんーち 鍼治【名】鍼にて、病をなほすこと。はり療治。「の方言」

しんーぢ 【名】しんるゐ(親類)を云ふ。〔薩摩國

じんーち 人智・人知【名】人間の知識。

しんーちう 神廚【名】神饌を調理するくりや。御供所。

しんーちう 神籌【名】神の如く靈妙なる計略。神謀。神策。

しんーちう 新鑄【名】しんしゅ(新鑄)の誤讀。

じんちえろく 仁智要錄【名】〔書〕箏曲に關せる事を記せるもの。十三卷。藤原師長の著。

しんちおんじ 新知恩寺【名】東京市下谷區にある淨土宗の寺。關東十八檀林の一。本尊は阿彌陀如來。一名、幡隨院。

しんちがよひ 新地通【名】遊廓に通ふこと。くるわがよひ。しんち(新地)㊁參照。天の網島「ぬしの新地がよひも」

しんーちき 新知己【名】新しき知人。

しんーちく 新築【名】新に築き造ること、又その築き造りたる物。

しんーちく 人畜【名】㊀人間と畜類と。㊁

にんちく(人寄)に同じ。

しんちく-がい 新竹街【名】〔地〕臺灣の北部にある都會。臺北を距ること十七里半餘。清朝時代には、新竹縣といへり。

しんちくわんぎやう 心地觀經【名】〔書〕だいじやうほんしやうじんちくわんぎやう(大乘本生心地觀經)の略。盛衰記「心地觀經に悲母恩深如大海と說きたまへるも、今こそ思ひ知られけれ」

しんぢけえと (英 Syndicate)【名】〔經〕企業家が、共同の目的のために結合せる組合團體。その加入組合員の私經濟上の獨立活動を制限して、共同の義務の下に、利益の調和を計り、且つ自由競爭の狀態を避くるを目的とするもの。けふどうきげふ(協同企業)參照。

しんぢ-こ 宍道湖【名】〔地〕出雲國松江市及び八束(やつか)・簸川(ひかは)二郡に跨れる淡水湖。大橋川・天神川の兩路によりて東流して、中海(なかのうみ)に通じ、また佐陀川によりて外海に通ず。周回十三里。松江湖。

しんーちしき 新知識【名】進歩したる新しき知識。

しんーちぶ 新秩父【名】秩父縞に似せて織りたる木綿織物。

しんーちぢり 新松子【名】青きまつかさ。〔大阪の語〕

しんーちつ 親昵・親暱【名】したしみむつぶこと。昵懇。方丈記「或は妻子・眷屬のために造り、或は親昵・朋友のために造る」

しんーちん 深沈【名】㊀おちつきて物事に驚かぬこと。沈著。㊁夜の更けゆくこと。

しんーちん 新陳【名】新しきとふるきと。さらとひねと。

新陳代謝【句】㊀次第に古き事物は滅び去り、新しき事物の代ること。㊁〔生〕生物が生存する作用の現象、即ち外界より攝取する物質を、自己の體質に同化せしめて、自體の一部となし、一定の生理的作用を呈したる後、分解排泄する現象。

しんーちや 新茶【名】㊀新葉を製したる茶。その年に製したる茶。(古茶に對して)㊁

あおえういかきくけこさしすせそたちつてとなにぬねのはひふへほまみむめもやゆよらりるれろわゐゑを

初めての遊女。〔元祿時代の語〕 浮世親仁形気「新茶なれども、門前に、白人野郎の駕籠絶えず」

しん-ちやう 身長【名】身のたけ。身の長さ。體長。

しん-ちやう 伸長【名】ひきのばすこと。

しん-ちやう 伸張【名】のばし張ること。

しん-ちやう 振張【名】ふるひはること。擴張すること。振起。

しん-ちやう 深長【名】奥深くして、含蓄の多きこと。深奥。

じん-ちやう 腎腸【名】㊀腎臓と大小腸と。㊁心中に思ふこと。「じ。」

じん-ちやう 訊杖【名】昔、囚人を拷問する時、背又は臀部を打つに用ひし杖。

しん-ちやく 進著【名】進みて著座すること。太平記「殿上には著座したまはで、直ちに御前に進著せらる」

しん-ちやく 新著【名】新に到著すること、又その物。

しん-ちやく 新註【名】㊀新に註釋すること、又その註釋。㊁宋儒の手に成れる經書の註釋。(古註に對して)「じ。」

しん-ちやう 宸衷【名】しんきん(宸襟)に同じ。

しん-ちやう 臣忠【名】臣下の忠義。盛衰記「各守二帝猷一、抽二臣忠一、自今以後、莫レ信二浮譖一」

しん-ちやう 神忠【名】神に忠誠を盡すこと。謡曲(鐵輪)「御神託にまかせて、なほも神忠を致さん。有りがたや」

しん-ちやう 身中【名】からだのうち。からだぢゆう。

しん-ちやう 心中【名】心のうち。心底胸中。盛衰記「忘二護法之誓於心中一」

しん-ちやう 眞鍮・鎭鍮【名】〔鐵〕『もと天然の鍮石をいひ、人造のを假鍮といひしに對せし語なりしが、後に人造をも、一般に呼ぶに至りしものといふ』銅と亞鉛との合金。特種の黄色を呈す。銅の分量は百分の六十乃至七十にして、その分量の增すに從ひて、赤色を帶び、亞鉛の分量多きに從ひて、白味を帶ぶ。器械・用器具・裝飾品等の製造に用ふ。黄銅。

しん-おう 心中【名】㊀心中だてをすること。人に對して義理を立つること。㊁男女の情交の末かけて變らぬことを、證據によりて示すこと。その證としては誓紙、斷指・入墨・放爪・斷髪など行はれたり。あひたいに。けしずみ「ある男、女へ云ひかけたるには、われを思さば心中をし給へ、女いかにも何事なりとも望み給へといらへければ」㊂情交ある男女の、周圍の事情のために合意的に共に死すること。あひたいに。情死。「同じ。」

しん-おう 深重【名】しんちよう(深重)に同じ。

じん-ちやう 蓋忠【名】まごころ。まこと。「こと。忠誠。じんしん(蓋心)參照。

じん-ちやう 盡忠【名】眞心を君に捧ぐること。人中の麒麟【句】『南史の徐勉傳に見ゆ』傑出したる人の譬。

じん-ちやう 人中【名】人のなか。人中の獅子【句】『釋氏要覽に引きたる治禪經後序中の語』前條に同じ。人中の龍【句】『晉書の宋纖傳に見ゆ』非凡にして測るべからざる人の譬。

じん-ちやう 腎蟲【名】〔動〕寄生蟲の一。線蟲類中の最大なるものにて、雌は長さ三尺に及び、雄はその三分の一に達す。肉食獸、特に魚類を食ふ獸類の腎臓に寄生す。

じん-おう 淨頭【名】〔佛〕『漢字の朱音』厠の掃除を掌る役。〔禪宗の語〕 庭訓往來「淨頭」

しんおう-いろ 眞鍮色【名】眞鍮の如き色。かないろ。

しんおう-かさねぞづつ 心中重非筒【名】淨瑠璃の一。養子なる紺屋德兵衛は、實兄なる重井筒屋藤十郎の抱(かゝ)へおさに迷ひしが、實兄は二人の間を割かんとして强意見をなし、それらが因となりて、心中せる次第を作りしもの。三齣より成る。近松門左衛門の作。

しんおうゆう-くわ-もんゐん 新中和門院【名】〔人〕中御門天皇の女御。藤原家熙の女。櫻町天皇を生む。御名は尙子(ひさこ)。准三宮。享保五年薨ず。年九十。

しんおう-げんじせん 眞鍮元字錢【名】『背孔の上部に、元の字ある故にいふ』寛保の初年に、京都の商人が官に請ひて鑄造せし寛永眞鍮錢。

しんおうざ 眞鍮座【名】江戸幕府の眞鍮錢を鑄造せし役所。安永元年設置、天明七年廢止。

しんおう-しもんせん 眞鍮四文錢【名】くわんえいしんちゆうせん(寛永眞鍮錢)に同じ。

しん-おうしやう-しゆぎ 新重商主義【名】〔經〕『英 New mercantile system』他國との通商貿易を個人の自由活動に任せず、關稅政策によりて、外國貨物の輸入を妨げ、國内の需要は、他國の給與を待たずして、自辨に依り、生産し得ざるべからずとなす主義。

しんおう-せん 眞鍮錢【名】㊀眞鍮にて鑄造したる錢。㊁くわんえいしんちゆうせん(寛永眞鍮錢)の略。

しんおう-だて 心中立【名】人と契りたることを守りとほすこと。俗曲(逆成寺)「誰れに見せうとて紅・鐵漿附けよぞ、みんな主への心中だて」

しんおう-てん-の-あみじま 心中天網島【名】『天網恢恢疎にして漏さず』の意なる天の網を、地名の網島に言掛けたるもの』淨瑠璃の一。紙屋治兵衛といふ者、蜆川(しじみがは)の遊女小さんに迷ひ、女房の苦節、小さんとの義理立などより、終に治兵衛・小さん、網島大長寺にて最後を遂ぐることを作れるもの。近松門左衛門の作。

しんおう-ときん 眞鍮鍍金【名】しんちゆうめつき(眞鍮鍍金)に同じ。

しんおうゆう-ときんえき 眞鍮鍍金液【名】眞鍮を鍍金するに用ふる溶液。硫酸銅三〇、硫酸亞鉛二六、青化加里六〇、水一〇〇より成る。

しんおうゆう-にまいゑざうし 心中二枚繪雙紙【名】淨瑠璃の一。遊女お島の情夫市郎右衛門は、弟の善次のために、冤罪を受けて、勤當せられて、相思の二人情死せんと約す。かくてお島は、主人天滿屋夫婦にそれとなく死別の意を表するを立聞きしたる善次は、儼然悔いて、心中後、兄の死體を肩に擔ひて立去るといふ筋。近松門左衛門の作。

しんおうゆう-はく 眞鍮箔【名】眞鍮を紙の如く薄く展ばしたるもの。金箔に代へ、粗末なる器具に用ふ。

しんおうゆう-ふたつはらおび 心中二腹帶【名】淨瑠璃の一。近松門左衛門の作なる心中宵庚申と同事實を作りしもの。三齣より成る。紀海音の作。

しんおうゆう-ぼたん 眞鍮釦【名】㊀眞鍮製の釦。㊁『學生の制服は、眞鍮釦を用ふること多きよりいふ』學生の隱語。

しんおうゆう-まんねんさう 心中萬年草【名】淨瑠璃の一。高野山吉祥院の小姓成田久米之助と、商人雜賀(さいか)屋與治右衛門の女お梅とが、女人堂にて情死せしことを作りしもの。近松門左衛門の作。

しんおうゆう-みがき 眞鍮磨【名】眞鍮を磨くに用ふる調劑、卽ち酸化鐵を油にて煉りたるもの。

しんおうゆう-めっき 眞鍮鍍金【名】眞鍮を或金屬の上に鍍金すること。

しんおうゆうやいばはこほり-の-ついたち 心中刃は氷の朔日【名】淨瑠璃の一。鍛冶屋平兵衛と平野屋小勘とが、寶永七年曾根崎の神明の森にて心中せしことを作りしもの。近松門左衛門の作。

しんおうゆう-よし 心中善【名】心意氣よきこと。情の厚きこと。天の網島「心中よし、意氣方よし、床よしの小春どの」

しんおうゆう-よひからしん 心中宵庚申【名】淨瑠璃の一。侍出口半兵衛は、八百屋伊左衛門の養子となり、不在中に、姑のために妻千代を離別せらる。旅の途中、妻の家に立寄りたる半兵衛は、深く舅にたしなまれ、再び妻を連れて、養家に歸る。歸れば養母に苛(さいな)まれ、終に夫妻奈良東大寺の大佛殿の勸進所にて心中することを作れるもの。近松門左衛門の作。

しんおうゆう-らふ 眞鍮鑞【名】銅・眞鍮・鐵などの接合に用ふる鑞(ろう)。眞鍮屑に亞鉛を加へ、或は少量の錫をも加へたるもの。泥狀とし、所要部に塗りたる後、吹管にて

加熱して用ふ。

しんちよ 新著【名】あたらしき著書。

しんぢよ 神女【名】女性の神。女神。天女。しんによ。

じんちよ【名】〔動〕すいさ(渉雛)を云ふ。〔豐後國の方言〕

しんちよう 深重【名】■奥ゆかしくおもおもしきこと。どっしりとして輕躁ならぬこと。■幾重にも重なれること。

しんちよう 愼重【名】つつしみぶかく、おもおもしきこと。

しんちようぐみ 新徴組【名】江戸幕府が、文久三年浪士の才幹ある者を召集して、組織したる警備隊。從來の旗本の士の多くは太平に慣れて、用ふるに足る者稀なるにより、新に編成せしものなりしが、隊士中に、名を攘夷に藉りて、凶暴の行をなす者生ずるに及び、元治元年廢止せり。

しんちようぐみしはい 新徴組支配【名】新徴組の頭。

しんーちよく 眞直【名】少しも曲りてあらぬこと。まっすぐ。

しんーちよく 神勅【名】しんたく(神託)を一層敬ひていふ語。「よ。

しんーちよく 進捗【名】しんぽ(進捗)を見る。

しんちよくせんしふーせう 新勅撰集抄【名】〔書〕新勅撰和歌集の中のある歌の本歌を考へ、同類の歌を擧げ、或は難註を加へたるもの。僧契沖の著。一名、難勅撰、又、新勅撰難註。

しんちよくせんーせう 新勅撰抄【名】〔書〕新勅撰和歌集を註せるもの。二十卷。僧堯眞の著。

しんちよくせんなんちゆう 新勅撰難註【名】〔書〕しんちよくせんしふせう(新勅撰集抄)に同じ。

しんーちよくせんーわかしふ 新勅撰和歌集【名】〔書〕二十一代集の一。後堀河天皇の貞永元年、藤原定家の撰進せしもの。二十卷。うぢがはしふ(宇治川集)參照。

しんちよくせんわかしふせう 新勅撰和歌集抄【名】〔書〕新勅撰和歌集を註せるもの。難波の神田正業(マサナリ)の草稿ありしを取捨して、自說を加へたるもの。八卷。僧祖龍の著。

しんーちよもんしふ 新著聞集【名】〔書〕忠孝慈愛、酬恩等の十八門に分ちて、見聞の事どもを記せるもの。十八卷。著者詳かならず。

しんーちりめん 新縮緬【名】瓦斯絲を交ぜて織りたる縮緬。

しんーつう 身痛【名】身體のいたむこと。

しんーつう 心痛【名】■きようつう(胸痛)に同じ。■心のいたみ。しんばい。

しんーつう 心通【名】外部に現れたる狀態にて、內容を神解すること。

じんーづう 神通【名】じんづうりき(神通力)の略。盛衰記「神通自在而、誘二難化之衆生一」

神通の鏑矢(カブラ)【句】じんとう(神頭)に同じかるべし。

じんづうーがは 神通川【名】〔地〕越中國にありて、富山灣に注ぐ川。飛驒國の宮川と高原川とこれに合流し、流勢急なるがため、舟揖を通ずるは、下流數里のみなれども、その河谷を通ずる道路は、飛驒越中間の主要なる交通線なり。

じんづうーじよう 神通乘【名】〔佛〕『如來神變の加持力に依りて說きし敎なるよりいふ、又人を乘せて、佛果に到達せしむるよりいふ』しんごんけう(眞言敎)に同じ。正統記「東寺は、…弘法に賜ひて、永く眞言の寺とす。…この宗を神通乘といふ」

じんづうーりき 神通力【名】神變不可思議なる無碍(ムゲ)の作用。神通。ろくじんづう(六神通)參照。

しんーづか 眞束【名】〔建〕小屋組の中央にある束(カヅ)。

しんーづけ 新漬【名】新に漬けたる漬物。

しんづーしづ 靜靜【副】しづしづ。そろそろ。狂言(ひめのり)「梶原が二度の駈(カケ)と呼ばはって、しんづしづと引いて入りたる」

しんーづな 尻綱【名】しりづな(尻綱)の音便。

しんーつむぎ 新紬【名】綿絲をまぜて織りたる紬。

しんーつゐ 眞椎【名】〔醫〕脊椎の中、頸椎・腰椎のごとく、各別に分離し得べきもの。

しんづーわ 後輪【名】しづわ(後輪)に同じ。

しんてい 心體【名】こころざま。こころだて。

しんてい 心底【名】こころ。心のおく。今國姓爺「但し職人が嬶ひか、心底聞かしや」

しんてい 審廷【名】はふてい(法廷)に同じ。

しんてい 眞諦【名】〔佛〕しんたい(眞諦)に同じ。

しんてい 眞弟【名】實子にて、その法嗣たるもの。眞弟子。

しんてい 進呈【名】さしあぐること。進上。

しんてい 進程【名】進行のみちすぢ。進歩の程度。

しんてい 新帝【名】新に位に卽かせたまへる天皇。盛衰記「新帝の供奉の人人、つれづれを慰みわづらひ」

しんてい 新邸【名】新造の邸第。

しんてい 新定【名】新にさだむること。

しんてい 新訂【名】新に訂正すること。

しんてい 新泥【名】■雨にて新に生じたるぬかるみ。■あらかべ。

しんてい 深泥【名】どろ深きところ。ぬかるみ。太平記「玉趾を深泥濕土の黯めるに汚れさせたまひ」

しんてい 人丁【名】ひとかず。人口。

じんてい 人定【名】『人定まる、卽ち寢靜まる義』今の八時頃。一說に、今の十時頃なりと。にんぢやう。「ぎき。

じんてい 人聽【名】人の聽くこと。ひとしんてい-きねん 神廷紀年【名】〔書〕天武天皇元年より後桃園天皇の安永七年までの、伊勢兩宮に關せる事柄を、年代順に記せるもの。六卷。石崎文雅の編。

じんてい-けん 人定權【名】〔法〕人定法によりて、定められたる權利。(天賦人權に對して)

じんてい-だうとく 人定道德【名】〔哲〕『英 Positive morality』或社會において、現に行はれつつある道德律、現に行はれつつある道德說のごときものの總稱。

しんてい-づく 心底盡【名】相手の心底の如何によりて事を爲すこと。淀鯉出世瀧德「見るから互の心底づくと、きれはなれたる詞の末」

じんてい-てき 人定的【名】人工の加はるさま。人爲的。

しんてい-ばなし 心底話【名】心の底をうちあけての話。若風爺「誰がいふともなく、無用の心底話」

じんてい-はふ 人定法【名】〔法〕『英 Positive Law』主權者の直接もしくは間接に制定、もしくは承認したる法、卽ち成文法と慣習法との總稱。人爲法。制定法。(自然法に對して)

しんてう 亂髮【名】『亂は齒の抜けかはることと。髮は結髮の後に垂れたる義』をさなき頃。をさなき者。髮亂。

しんてう 新調【名】■新にととのふること、又その物。川中島合戰「裃も新調、御會釋に及ばず御著座あるやうに仰せ上げられい」■あたらしき調子。

しんてう 秦朝【名】支那の秦代の朝廷。しん(秦)參照。

しんてう 晉朝【名】支那の晉代の朝廷。「ん(晉)參照。

しんてう 清朝【名】■支那の清代の朝廷。しん(清)參照。■しんてうくわつじ(清朝活字)の略。

じんてう 晨朝【名】あさ。あした。

しんてう 信條【名】『英 Creed』敎會の公認して、一般の信者に信仰せしむる敎義。敎條。

じんてう 晨朝【名】〔佛〕■しんてう(晨朝)に同じ。■朝の勤行(ゴンギヤウ)。朝の行。あさじ。蜂丸「じんてうのひびきは生滅滅已」

しんてう-くわつじ 清朝活字【名】漢字の活字の一種。字體は楷書にて、畫の橫細くして、縱太きもの。清朝。「偐文。

じんてう-げ 晨朝偈【名】〔佛〕朝となふる

しんてう-たい 清朝體【名】清朝活字の體。(明朝體に對して)

しんーてき 清笛【名】清樂に用ふる笛。その律、明笛より半音づつ高し。

しんーてき 神笛【名】『尊ら神樂に用ふるよりいふ』ふえぶえ(太笛)に同じ。

しんーてき 神敵【名】神の敵となるもの。

太平記「これは佛敵・神敵の最たれば」

しんてき 神鏑【名】神の射たまふかぶらや。不思議のかぶら矢。太平記「神鏑擧を添へて、王城を差して鳴りて行く」

しんてき 心的【貌】『英 Mental』心に關するさま。

じんてき 人的【貌】『英 Personal』人に關するさま。

しんてきくわてい 心的過程【名】【哲】『英 Mental process』意識作用もしくは精神的性向、又はこれらの者の連續的變化。

しんてきさよう 心的作用【名】【哲】『英 Mental activity 又 Action』精神・意識の作用。こころの作用。

じんてきちえき 人的地役【名】【法】ぢゑき(屬人地役)に同じ。

しんてし 眞弟子【名】しんてい(眞弟)に同じ。

しんてつ 沁徹【名】しみとほること。滲透。

しんてふ 申牒【名】官廳の間にて、相互に、或事項を通ずること、又その文書。

しんてふ 襯貼【名】〔文〕『襯の意はしんく(襯句)を見よ。貼は附著の義』文章上、露骨なる言辭を避けて、婉曲に思想の妙を感ぜしむること。

しんてん 振天【名】一『孔子家語に「子路曰、願得二白羽若レ月赤羽若レ日、鐘鼓之音振二於天一、旌旗繽紛、下蟠二於地一」とあり』音聲の天空にひびくこと。二武名を天下に揚ぐること。

しんてん 進轉【名】進みゆくこと。進めうつこと。「と。

しんてん 進展【名】進歩し、發展すること。

しんてん 秦篆【名】せうてん(小篆)に同じ。

しんてん 親展【名】一手紙の脇附(わきづけ)の一。名宛の人の開封せられんことを請ふ意の語。二電報にて、受信人の外、披見すべからざる意を表示するもの。その略符號は、和文はニカ、歐文はCLとす。

しんてん 神典【名】神事に關する書物。神代の事を記したる書物。

しんでん 神田【名】神社に附して、その用途に充つる田地。不輸租田の一。おほみだ。神田(かんだ)。御戸代(みとしろ)。社田。盛衰記「宮宮ばらの御領、神田・佛田をいはず」

しんでん 新田【名】新に開きたる田地。

しんでん 新殿【名】新に造營したる御殿。

しんでん 深殿【名】奥ぶかき殿。深宮。

しんでん 親電【名】天皇の御署名にて發信したまふ電報。

しんでん 寢殿【名】一せいでん(正殿)(二)に同じ。二我が國中古の貴族の家の表座敷。寢殿造における邸内の主要なる建物。玄關・床間(とこのま)など無く、床上には疊なく、緣側には雨戸なき等、全く現今の家屋と異なり、母屋(もや)の外方に、一段低き廣廂(ひさし)を設け、その外方に、更に低き簀子緣(すのこ)あり、正面には階あり。その左右と緣先とには勾欄を附し、また廂の周圍には格子及び蔀(しとみ)を設け、四隅に妻戸あり。屋根は四阿(あづまや)造とす。書院造よりは古き建築法にて、神社・寺院等のこれに依れるもの多し。源氏「さすがに、寢殿の内ばかりは、ありし御しつらひにかはらず」

しんでん 神殿【名】一神を祀れる殿舍。かみどの。かむどの。二宮中にて、舊く八神殿に祭りし八神と天神・地祇とを祀れる所。八神と天神・地祇と別別に鎭坐せしも、明治五年合祀せられたり。しんでんさい(神殿祭)參照。

しんでん 神傳【名】しんじゅ(神授)に同じ。

じんでん 人天【名】人と天と。人間と天道と。神人。にんてん。てんじん。平家「沙羅雙樹の下にて、かりに滅度を唱へたまひしかば、人天共に悲しみき」

しんでんかいほつ 新田開發【名】こんでん(懇田)に同じ。

しんでんかかた 新田方【名】江戸幕府の職制の一。下勘定所の分課、勘定衆の任にして、新田開發吟味、新田地代金の徵收檢地、石盛(こくもり)・高入(たかいり)などの事を掌りしもの。

しんでんさい 神殿祭【名】春季皇靈祭及び秋季皇靈祭と同日に、舊く八神殿に祀りし八祇と天神・地祇とを祭りたまふこと。春季のを春季神殿祭、秋季のを秋季神殿祭といふ。皇靈祭は夙に親祭なりしが、神祭は明治十二年始めて親祭と定まるに至れり。しんでん(神殿)(二)參照。

しんでんじ 新典侍【名】典侍の下級なるもの。明治二年設置、同四年廢す。

しんでんしょ 親展書【名】親展の旨を記したる書面。

しんでんおだいきん 新田地代金【名】江戸幕府時代に、私人の開墾せる新田畠に就き、天領・私領の別なく、領主又は地頭に上納すべき地代金。

しんでんづくり 寢殿造【名】【建】一中古の貴族の家の建築法。中央に寢殿ありて、その前に庭を造り、左右に、對屋(ついのや)を建て、對屋と寢殿との間は、廊ありて、通はるるやうにせるもの。宮殿造。しょいんづくり(書院造)參照。二屋根を四阿(あづまや)の式に造ること。四阿造(あづまづくり)。寄棟造(よせむねづくり)。

しんでんぬま 新田沼【名】【地】いづぬま(伊豆沼)に同じ。

しんでんびき 神田引【名】江戸幕府時代に、神社に喜捨せし田畠に對して行ひし地租の免除。

しんでんふ 振天府【名】『しんてん(振天)二を見よ』宮城内吹上御苑の入口に建設せられ、明治二十七八年役及び臺灣役の戰利品、又は戰死者の寫眞等を藏めたまへる總白木造の御府庫。

しんてんをう 信天翁【名】【動】あほうどり(信天翁)に同じ。

しんと 新都【名】あたらしき都。新京。方丈記「古郷はすでに荒れて、新都は未だ成らず」

しんと 新渡【名】一あらたに渡來したること、又その物。(古渡(こわた)・中渡(なかわた)などに對して)太平記「新渡の唐物など美を盡して」二新に設けたる渡船場。

しんと 信徒【名】神佛などの信仰者。信者。敎徒。

しんと 津渡【名】わたし。津頭。渡津。

しんと 身圖【名】一身上の計畫。

しんと 神茶【名】うぢちゃ(鬱悒)を見よ。

しんと 神都【名】一みやこ(都)の尊稱。しんとう(神州)(二)參照。二〔地〕うぢやまだ(宇治山田)を見よ。

しんど 嗔怒【名】いかること。

しんど 震怒【名】『詩經の大雅常武篇に「王奮二其武一、如レ震如レ怒」とあるに本づく』天子の腹立。逆鱗。

しんど 神怒【名】神のいかり。

しんど 神奴【名】神社に隷屬せる賤民。

しんど 進度【名】進行の程度。學課の進度」「同じ。

しんど 眞土【名】〔農〕じやうど(壤土)(二)に同じ。

しんど 心土【名】表土の下に在る土層。底土。

しんど 伸度【名】〔天〕「月の伸度」を見よ。

しんど 信度(梵 Sindhu)【名】〔地〕いんど(印度)の古稱。信毒。

しんど 【貌】『しんとし』の語幹』しんどきさま。

しんど いんでん 新渡印傳【名】中渡(なかわた)の莫臥爾(モゴル)に類する、印傳革の一種。

しんとう 針筒【名】雲水僧などが携ふる裁縫道具を容るる具。

しんとう 眞痘【名】【醫】疱瘡の重きもの。殆ど全身發疹し、初は赤色の斑點を呈し、後には、その頂に水疱を生じ、遂に體熱の加はると共に、膿疱に變ず。

しんとう 心頭【名】こころ。こころの上。心頭を滅却すれば、火も亦涼し【句】【佛】『唐の杜荀鶴の夏日題悟空上人院の詩に「安禪不レ必須二山水一、滅二却心頭一火自涼」とあるに本づく』心機を滅すれば、火といへども涼し。

しんとう 神燈【名】一神の照す燈火。二神に供ふる燈火。

しんとう 神統【名】神の系統。

しんとう 津頭【名】わたしば。わたし。渡頭。渡津。

しんとう 脣頭・唇頭【名】くちびるのさき。くちさき。ことばのさき。

しんとう 親等【名】〔法〕親族の間柄の遠近・親疎を示す等級。直系親のは、親族間の世數に依りて定め、傍系親のは、その一人

又はその配偶者より同始祖に遡りたる上、その始祖より、他の一人に下るまでの世数に依りて定む。我が國の民法にては、六親等以内の血族を親族と定む。又或親等に當る親族その者を指しては、何等親といふ。例へば、某と予とは二親等なりといふは、某は予の二等親なりといふと同一なるが如し。とうしん(等親)參照。

しんとう 滲透【名】■しみとほること。心徹。■〔理〕『英Osmose』素燒の膀胱の如き、しみとほり易き障壁を隔てたる、異なる二つの液體もしくは氣體の、その障壁を通じて、相混ずるに至る現象。

しんとう 振動【名】■ふるひうごくこと。ふるひうごかすこと。■〔理〕『英Oscillation又Vibration』物體が定まれる位置を、週期的に、前後左右に運動すること。振子の運動のごとき、その一例なり。しんぷく(振幅)參照。■〔理〕たんいつげんうんどう(單一弦運動)に同じ。■〔數〕一定の規則に從つて逐次に算出せらるる數が、或限界を超えざると共に、また敢へて一定の極限に近づかざること。

しんとう 震動【名】ふるひ動くこと、又ふるひ動かすこと。

六種の震動【句】〔佛〕ろくしゅしんどう(六種震動)を見よ。謠曲『葛六天』「にはかに大空冴えかへり、風雨雷電肝を消し、六種の震動おびただしや」

しんとう 神童【名】■才智の非常にすぐれたる童。■支那の科擧の名目の一。少年にして、奇才ある者。

十歳で神童、十五で才子、二十歳過ぎればただの人【句】十歳にして、神童と稱せられし者も、十五歳になれば單に才子と云はるるに止まり、二十歳を過ぐれば、毫も普通の人と異なるところなきに至る。〔諺語〕

じんとう 神束【名】〔地〕播磨國の舊郡の一。明治廿九年神西郡と合して、神崎郡となる。

じんとう 人頭【名】■人のかしら。人のかうべ。■ひとかず。人口。人別。

じんとう 腎臟【名】〔醫〕腎門と交通せる臟。血管・神經の通路なり。輸尿管。

じんとう 笹筥【名】細き竹を編みて、河中に立て、魚を追入れて捕ふるもの。

(うどんじ)

じんとう 神頭・鎗頭・磁頭・矢頭【名】『實頭の音の轉じたるならん』矢じりの一種。形鏑矢(かぶらや)に似て、中を刳(く)らず、長さ二寸許、黒漆にて塗る。十訓「じんどうをはげて射おとして侍る、と申しければ」

しんとうじ 神童寺【名】山城國相樂(さがら)郡高麗村に在る、眞言宗新義派の寺。北吉野山と號し、金剛藏院とも稱す。本尊は千手觀音。既月皇子の草創と傳ふ。行基・真辨・鑑眞等の高僧修行をここに積めり。

しんとうすう 振動數【名】〔理〕『英Frequency』振動體が單位時間中に振動する數。周期の逆數、即ち周期を以て、一を除したる商に等し。また波動をなせる物體にありては、波の長さを波長にて除したる商に等し。

じんとうぜい 人頭稅【名】直接人に賦課する租稅。

しんとうぶんせき 滲透分析【名】〔理〕とうせき(透析)に同じ。

じんどうみゃく 腎動脈【名】〔醫〕大動脈の枝にて、大動脈を通過する血液の一部を、左右の腎臟に導き入るるためのもの。(腎靜脈に對して)

しんどうらいでん 震動雷電【名】しだらでんを見よ。

しんどーかう 心土耕【名】〔農〕深く心土のみを鋤きて軟かならしめたる耕作法。作土の惡變を妨ぎ、生産物を多からしむるに効あり。

しんとく 神德【名】神の威德。

しんとく 信德【名】■信心の功德。■佛法を信ずる德者。

しんとく 眞讀・信讀【名】佛典の文句を省略せずして、全部讀むこと。轉讀に對して)平家「八幡に百人の僧を籠めて、眞讀の大般若を、七日讀ませられたりける」

しんとく 進讀【名】進講すること。貴人の前に進み出でて、讀書すること。

しんとく 身毒【名】■身體にある毒。■身體を害する毒物。

しんとく 愼獨【名】『大學に「所謂誠二其意一者、毋二自欺一也、所レ惡二惡臭一如レ好二好色一、君子必愼二其獨一也」とあるに本づく』他人の居らぬ處にても、己れの身を愼しむこと。「に同じ。

しんとく 身毒・信毒【名】〔地〕しんど(信度)に同じ。

じんとく 仁德【名】仁愛の德。

じんとく 人德【名】その人におのづと備はりたる德望。(金德に對して)

しんとく-くわん 進德館【名】■信濃國伊那郡高遠城内に在りし舊高遠藩の學校。萬延元年藩主内藤賴直の創立。■越前國今立(いまだち)郡鯖江中小路に在りし舊鯖江藩の學校。文化十一年の創設。■丹波國何鹿(かじか)郡綾部屋敷町に在りし舊綾部藩の學校。正德五年の創立。

しん-とくせん 沈德潛【名】〔人〕支那清朝の詩人。歸愚と號す。高宗に仕へて、太子太傅(たいふ)・禮部尚書に至る。唐宋八大家文集・古詩源・五朝別裁詩集等の著あり。乾隆三十五年歿す。

しんとく-だう 振德堂【名】丹波國多紀郡篠山(ささやま)に在りし舊篠山藩の學校。明和三年藩主青山忠朝の創立。

しんとく-まる 信德丸【名】傳説の一。河内國高安の長者延年の子。瘡及び、盲となりて、家を逐はれしが、和泉國藤山の長者の女に救はれて、その婿となる。その後生家の衰へしを聞きて、大施行を天王寺に行ふ。時に延年は後妻の子を連れ來りて、信德丸に迎へられ、その孝養を受けたりといふ。淨瑠璃「播州合邦が辻」にては、俊德丸に作れり。

しんとく-ねん 愼德院【名】〔人〕德川家慶

しんど-けい 深度計【名】『英Depth indicator』發射せられし魚形水雷が、進行中、進路の各點に於て、如何なる深さを有せしかを示す裝置。

しんどし【形ク】かひたるし。くたびれたり。〔關西の方言〕長町女腹切「ああ、しんどうと、腰かけて」春花五大力「わたしも、年よりの眞似で、しんどうてならぬわい」

しんとにい 同調法《英Sintony》【名】無線電信法にて、相互通信局間に、共鳴的受信裝置を備ふること。

しんとめ 心止【名】きしん(摘心)に同じ。

しんとり 後取【名】■古、宮中にて、大酒の人の選ばれて、新年の御齒固(はがた)に伺候し、天盃の餘瀝を飲むことをせし者。榮花「殿上に、しんどりとかいひて、こちたく醉ひののしりて」■じひめ(次姫)に同じ。

しんとりそ 新鳥蘇【名】〔音〕雅樂の一。高麗(こま)樂にて、壹越(いちこつ)調に屬す。こそり(古鳥蘇)參照。拾芥抄「新鳥蘇」

しんない 心内【名】心の中。心中。内心。(心外に對して)「の略。

しんない 新内【名】しんないぶし(新内節)の略。

しんない 脣内・唇内【名】〔語〕次條の略。

しんない-おん 脣内音・唇内音【名】〔語〕悉曇(しったん)學の三音の一。脣を用ひて發する音。P・B・M の類。(舌内音・喉内音に對して)

しんない-ぶし 新内節【名】淨瑠璃の一種。寶曆の頃、富士松薩摩掾(さつまのじょう)の門人鶴賀新内の語り出だしもの。常盤津の諸分派中、最も新しく、曲節悽愴、語るところ男女の心中を主とし、その流行は、世上に情死者を增加せしめたりといふ。新内。

しんない-まく 心内膜【名】〔醫〕心臟の内面を被へる膜。

しんない-なし 心嚢【名】〔醫〕心臟の外面を被へる二枚の薄くして强靱なる半透明の膜。肋膜の續にして、二枚の中間に心嚢液と稱する水樣液を有し、心臟の運動を容易ならしむ。

しんなう-すゐしゅ 心嚢水腫【名】〔醫〕心嚢の空所に水の溜る病。心臟病或は腎臟

病より起る。

しん-なし 心無し【名】内部の空虚なるもの。しんを入れざるもの。一代女「しんなしの大幅帯」

しんな-ぞめ 親和染【名】**しんわぞめ**(親和染)に同じ。

しんな-なつめん 新七つ面【名】新歌舞伎十八番の一。曾呂利新左衛門七つの面により、邯鄲・維生門・頼政・羽衣・殺生石・碇潜(イカヅキ)等の上の所作事を演ずるもの。福地櫻痴の作。

しんなふ 進納【名】すすめ納むること。

しん-なん 信男【名】〔佛〕しんし(信士)[二]に同じ。

しん-なんぴん 沈南蘋【名】〔人〕支那清朝の畫家。名は銓、字は衡齋。筆法精緻、著色妍麗、花卉・鳥獣を善くす。享保十六年(一説に同六年)長崎に來り、居ること二年にして歸る。爾來我が國の畫風一變せりといふ。

しんなり 靱【稀】たわたわ。しなやか。嫋にして強し。

しんなり-づよし 靱強し【形ク】しなやかにして強し。ねばりづよし。「よ。

しんに 嗔恚・瞋恚【名】しんい(瞋恚)を見よ。

しんに 心耳【名】心と耳と。【論曲(鏡引)】「その聲心耳をすまし」

しんに 眞に【副】まことに。じつに。

しんに-しゆきん 新二朱金【名】[一]新に鑄造したる二朱金。[二]まんえんにしゅばんきん(萬延二朱判金)に同じ。

しんに-しゆぎん 新二朱銀【名】[一]新に鑄造したる二朱銀。[二]あんせいにしゅぎん(安政二朱銀)に同じ。

しんにち 信日【名】〔人〕高僧。弘法大師の弟子。紀伊國新宮の人。最も律藏に精し。高野山八傑の一人。祕密傳法中興の祖。德治二年寂す。

しんにふ 滲入【名】しみこむこと。しみいること。

しんにふ 侵入【名】[一]無理して入りこむこと。[二](天)『英 Ingress』太陽面又は木星面經過の始。

しんにふ 浸入【名】ひたり入ること。ひたし入ること。

しんにふ 進入【名】すすみいること。

しんにふ 深入【名】深く入ること。ふかいり。

しんにふ 新入【名】しんいり(新入)に同じ。

しんにふきん 新二分金【名】[一]新に鑄造したる二分金。[二]まんえんにぶきん(萬延二分金)の略。

しんにふ-けん 侵入權【名】〔法〕かいにふけん(介入權)に同じ。

しんにふ-せい 新入生【名】新に入學したる生徒。

しんにふばんきん 新二分判金【名】[一]新に發行したる二分判金。[二]まんえんにぶきん(萬延二分金)に同じ。

しん-にん 眞人【名】〔佛〕あらかん(阿羅漢)の譯語。

しん-にん 信認【名】信じて疑はぬこと。疑問なしと認むること。

しんにん 信任【名】その人を信じて、事をまかすること。

しんにん 新任【名】新に官に任ぜらるること、又その人。

しんにん 親任【名】[一]親しみて萬事を任ぜらるること。[二]天皇が、御自身にて、親しく官に任じたまふこと。親任式に依る任命。[三]しんにんくわん(親任官)の略。

しんにん 神人【名】しんじん(神人)に同じ。

しんにん-くわん 親任官【名】勅任官中、何等の機關を經由せず、親任式によりて、天皇の親しく任命したまふもの。官吏中最上級に位し、一般高等官の官等以外に獨立し、天皇に直隷す。內閣總理大臣・各省大臣・宮內大臣・樞密院議長・同副議長・同顧問官・陸海軍大將等、その主なるものなり。

しんにんくわん-たいぐう 親任官待遇【名】親任官にあらずして、親任官と同一の待遇を受くること。親任待遇。

しんにん-しき 親任式【名】親任官を任ずる儀式、卽ち天皇親署の後、內閣總理大臣・首座の國務大臣・宮內大臣又は內大臣がこれに副署したる官記によりて任ぜらるるもの。

しんにん-じやう 信任狀【名】『英 Letter of credence 又 Credentials』外交官を派遣する時、派遣國の元首より、駐在國の元首に宛てて送る文書。その外交官の氏名・官職・爵位・勳等及び差遣の目的と權限とを明記して、これを携帶せしむるもの。正副二通を作り、正本は國璽を鈐(オ)して、元首に捧呈し、副本は捧呈式に先だち、駐在國の外務省に提出す。親書。國書。

しんにん-たいぐう 親任待遇【名】**しんにんくわんたいぐう**(親任官待遇)に同じ。

しんにん-とうへう 信任投票【名】『英 Vote of confidence』[一]或人を信任すべきや否やを決定するために行ふ投票。[二]議會が、內閣に對する信任の如何を決するために行ふ投票。

しんにん-ほふしんわう 眞仁法親王【名】〔人〕典仁(スケヒト)親王の御子。花園天皇の猶子。時宮と稱す。妙法院の門主、天台の座主たり。文化二年薨ず。年三十九。

しんにゆう 之繞【名】**しんにゅう**(之繞)の訛。

しんにゅう 之繞を掛ける【句】事を、實際よりも大げさに言ふ。輪を掛ける。

しんによ 神女【名】**しんぢよ**(神女)に同じ。

しんによ 眞如【名】〔佛〕『梵 Bhūtatathatā. (部多多他多)の譯語。眞實如常の義』宇宙萬有の實體本性。永劫に變ぜず、平等無差別なる絕對眞理。佛の三身中の法身は、これに名づけたるもの。虛空無爲。實相。涅槃(ネハン)。空性。法性(ホツシヤウ)。如來藏。**えいち**(叡智)參照。【論曲(山姥)】「月眞如の光をかかげ」

眞如の月【句】〔佛〕眞如の理が衆生の迷妄を破るを、明月の夜の闇を照すに譬へていふ語。【論曲(班女)】「眞如の月はくもらじを、知らでほどへし人心」

眞如の光【句】〔佛〕眞如の理が衆生迷妄の闇を破るを、光に譬へていふ語。

眞如の都【句】〔佛〕眞如は諸佛の證處なるによりて、都に譬へていふ語。

しんによ 眞如【名】〔人〕**たかおかしんわう**(高岳親王)に同じ。

しんによ 信女【名】〔佛〕『うばい(優婆夷)の譯語』[一]在家の婦人にして、佛門に入りたるもの。[二]佛式によりて葬られたる婦人の戒名につくる語。(信士に對して)赤い信女【句】『生前墓石に名を刻む時は、その刻みたる文字に朱を塗りおく習なるよりいふ』夫に先だたれたる女。ごけ。未亡人。【柳多留】「廓詞綴若赤い信女がまた孕み」

しんによ-いちにち 眞如一色【名】〔佛〕萬物の本體の一如にして、無差別なること。

しんによ-いつう 眞如意通【名】〔佛〕しんそくつう(神足通)に同じ。

しんによ-えんぎ 眞如緣起【名】〔佛〕萬有が緣に由りて眞如より生ずること。(阿賴耶(ヤラ)緣起に對して)

しんによ-じ 眞如寺【名】[一]京都市の北部衣笠(キヌガサ)山の麓にある臨濟宗の寺。相國寺の末寺。十刹の一。無著如大尼のその師佛光國師の爪髮を奉じて、この地に塔所を營みしを、高師直その地に就き、夢窓を請じて、住持とせしもの。後水尾天皇再興し、爾來皇女寶鏡寺尼宮歷代の菩提所となる。[二]上總國君津(クヅ)郡馬來田(クヌタ)村大字眞里谷(ヤツ)にある曹洞宗の寺。本尊は三體彌陀如來。寬正五年城主武田信興の祈願、正嚴禪師の開基。

しんによしさう 眞如相【名】〔佛〕眞如が、萬有の眞の本體なること。

しんによ-じやくめつ-さう 眞如寂滅相【名】〔佛〕一切差別の妄想を離れたる眞如のすがた。

しんによ-だう 眞如堂【名】京都市吉田神樂岡(カグラヲカ)にある天台宗の寺。鈴鹿山眞正極樂寺と號す。本尊は、慈覺大師の造りたる阿彌陀佛。戒算上人の開基。

しんによ-びやうどう 眞如平等【名】〔佛〕眞如の理の平等にして、衆生の差別的妄想を解脫(ゲダツ)せること。

しんによ-ほふしん 眞如法身【名】〔佛〕佛の本體、卽ち法身は、眞如その物なること。

しん-ぬり 眞塗【名】黑漆にて塗ること、又その塗りたる物。

しん-ねう 之繞【名】『しんにう(之繞)の音便』漢字の偏の一。迎・迫・逢・邂などの字の左に

あるこの字。字書にては走の部に屬す。しねう。

しんねこ 眞猫【名】人目をよけて、極めてしめやかに男女の語らふこと。

しんねっちたい 新熱地帶【名】〔地〕中央亞米利加以南の西大陸全土の稱。

しんねん 新年【名】新しき年。新歳。

しんねん 加日(カニチ)【句】〔天〕かにち(加日)の條下を見よ。

しんねん 深念【名】深く思ふこと。深慮。

しんねん 心念【名】㊀おもひ。こころ。㊁〔佛〕心に佛を念ずること。念佛。平家「心念口唱(クショウ)を忘れたまはずば」

しんねん 軫念【名】『しんいう(軫憂)を見よ』憂ひ思ふこと。痛念。心配。

しんねん 信念【名】㊀宗教を信ずる心。信仰心。㊁自信の心。

しんねん-えんくわい 新年宴會【名】㊀一月五日新年の祝として、宮中にて、親任官、外國使臣等に賜ふ宴。㊁新年を祝するための宴會。「(年賀狀)に同じ。

しんねん-じやう 新年狀【名】ねんがじやう

しんねん-ねり【貌】粘著力ありて、離れがたきさま。しねしね。

しんねり-むっつり【名】胸中を吐露せず、決斷の鈍きこと、又その人。

しんのう 神農【名】〔人〕支那上古三皇の一。姓は姜。火德の王たりしより、炎帝ともいひ、民に耕作を教へしより、神農氏といふ。また草木を嘗めて醫藥を製せり。初め陳(今の河南省陳州府)に都し、後、曲阜(今の山東省袞州府曲阜縣)に居り、子孫相傳ふること三代、五百三十年。物類「神農の屁は本町(ホンチヤウ)を通るやう」

しんのう 親王【名】しんわう(親王)の音便。

しんのう-さい 神農祭【名】漢方醫が醫藥の祖神農氏を祭りしこと。冬至の日に行ひたり。

しんのう-だ【句】くたびれたり。疲れたり。〔信濃國上田(ウヘ)の方言〕

しんの-ざう 心臟【名】しんざう(心臟)に同じ。今國姓爺「二つの乳の間に心の臟と

て、魂のある處」「に同じ。

じんのざ 腎臟【名】じんざう(腎臟)に同じ。

しんのだいす 眞臺子【名】たいす(臺子)を見よ。

しんのとんぼむすび 眞蜻蛉結【名】緒の結び方の一。輪を三つ作り、中央を結び目とするもの。

しんのはしら 心の柱【句】はしら(柱)の條下を見よ。

しんのほうじゆむすび 新寶珠結【名】緒の結び方の一。下の圖を見よ。

(新寶珠結)

しんのまはり【名】〔植〕いぬむぐら(犬木賊)

しんば 神馬【名】㊀しんめ(神馬)に同じ。㊁瑞相を有する馬。しんめ。

しんば 新場【名】〔地〕東京市日本橋なる魚河岸の一部。

新場の犬【句】『新場に居る犬は、常に生魚を食ふため、毛の抜けたるによりていふ』毛の抜けて醜き犬。「め、若葉。

しんば 新葉【名】新に出でたる葉。

しんば 新派【名】㊀舊來の學說、技藝などに憐(ケン)らずして、新に起りたる一派。(舊派に對して)㊁〔佛〕我が國に流布せる佛教中、鎌倉以後に勃興せるもの、即ち禪宗淨土宗淨土眞宗法華宗時宗の稱。㊂しんばげき(新派劇)、又はしんばはいいう(新派俳優)の略。(舊派に對して)

しんば 枕波【名】顏などに印する枕の痕。謠曲「枕波の斜紅の、世に類なき姿かな」

じんば 人馬【名】人と馬と。

しんばあ【副】しばらく。暫時。〔土佐國の方言〕「酒。

しんばいい 新醅【名】新に釀したるもろみ

しんばいい 信牌【名】證據とすべきしるしのふだ。

しんばいい 神拜【名】㊀神を拜むこと。天智天皇「思無邪の三字は神拜の元本、毋二不敬一の三字は祭典の至用」㊁國司が、その管内の神社を參拜すること。更科「あづまより來り、神拜といふわざして、國の内あるきしに」

しんはいいう 新俳優【名】しよせいやくしや(書生役者)に同じ。(舊俳優に對して)

しんばい-がほ 心配顏【名】うれへがほ(憂顏)に同じ。

しんばい-ごと 心配事【名】心配になる事柄。氣がかりなる事件。

しんばう 榛莽【名】亂れしげりたる草木。しんまう。榛蕪。

しんばう 寢房【名】ねや。ふしど。寢室。

しんばう 深房【名】奥ふかき部屋。内房。

しんばう 辛抱【名】㊀こらへしのぶこと。忍耐。㊁勤先を變へず、勤め續くること。辛抱する木に金がなる【句】『木に氣を通はしていふ』辛抱强きものは、金持になる。〔諺語〕辛抱の棒が大事【句】『辛抱を、車の輪などの心棒に通はしていふ』物事には、忍耐が大切なること。〔諺語〕

しんばう 神寶【名】神聖なる寶物。神社の寶物。かんだから。

三種の神寶【句】「三種の神器」に同じ。

しんばう 申報【名】㊀つげしらせ。報告。㊁しんぶん(新聞)に同じ。

しんばう 新報【名】㊀新しき知らせ。㊁しんぶん(新聞)に同じ。㊂さっし(雜誌)に同じ。

しんばう 信砲【名】信號の砲聲。號報。

しんばう 進報【名】進みて報告すること。盛衰記「縱ひ浪の底に消えうせぬと…後の世を御弔あれかしと思ひければ、進報しけるにこそ」「法。

しんばう 新方【名】あたらしき方法。新

じんばう 人望【名】㊀人の希望。保元「神慮にも叶ひ、人望にも背かじものを」㊁世人の思ひつき。人に信賴せらるること。人氣。

じんばう 尋訪【名】尋ね訪ふこと。

じんばう-かた 神寶方【名】江戸幕府の職制の一。下勘定所の掛にて、日光上野の東照宮・增上寺等諸國の名社・大寺の修繕、及び伊勢神宮遷座の際、神寶・諸調度の類を取扱ひしもの。

しんはうじゆ-むすび 新寶珠結【名】しんのほうじゆむすび(新寶珠結)に同じ。

しんばう-づよし 辛抱强し【形ク】よく辛抱してあり。がまんづよし。

しんばう-にん 辛抱人【名】辛抱づよき人。

しんばう-ぶぎやう 神寶奉行【名】鎌倉諸奉行の一。神宮に奉幣ある時、臨時に名家の輩に命じて、奉幣使に副へ、奉納の寶物を沙汰せしめしもの。

しんはかせ 針博士【名】王朝時代の職制の一。典藥寮に屬し、針生等に鍼術を敎授することを掌りしもの。

じんばきゆう 人馬宮【名】〔天〕黃道十二宮の一。また星座の名。射手。騎射宮。

しんばく 心搏【名】〔醫〕しんき(心悸)に同じ。

しんばけい 深波形【名】〔植〕『英 Crinite』葉などの邊緣の內外に彎曲して、强き波狀をなせるもの。「芝居」に同じ。

しんばげき 新派劇【名】さうしばね(壯士芝居)

じんばさし 人馬指【名】宿場にて、人夫・傳馬の指圖をなしし人。

しんばし 新橋【名】〔地〕㊀東京市芝區芝口と京橋區出雲町との間、汐留(シホドメ)川に架れる橋。㊁同上の橋の南方に在りし汽車驛。鐵道東海道線の起點なりしが、明治四十五年東京驛を設くると同時に本驛を廢し、新に芝區烏森町に同名の驛を置く。

しんばしら 心柱・樑【名】殿堂などの建築の際、最初に立つる、しんとなるべき中央の大柱。しんのはしら。「城反逆者、政道正しき御家老樣、お屋形の心柱と」

しんはせでら 新長谷寺【名】㊀美濃國武儀(ムギ)郡吉田(ヨシダ)村にある眞言宗の寺。金剛院と稱す。本尊は、大和國長谷寺十一面觀世音。㊁相模國鎌倉の長谷(ハセ)にある眞言宗の寺。坂東第四番の札所。本尊は大和國長谷寺の觀音と同木異工の作といふ。十一面觀音。しんちやうこくじ。

しんはた 新畑【名】新に開墾したる畑。畑

新田(シンデン)。

しんばだこ 新場鮨【名】江戸新場に荷揚せし鮨。千紅萬紫、この鮨は新場鮨とは思はれず三河町にて見たやうな顔」

しんはちてうりう 新八條流【名】馬術の一派。八條流より出でたる關口信重(德川頼房に仕ふ)を祖とす。

しんはちまん 新八幡【名】ごくはちまん(護國八幡)を見よ。

しんばつ 侵伐【名】侵し伐つこと。

しんばつ 神罰【名】神のばち。神のとがめ。神譴。

しんばつ 髪髪【名】もつれたる髪。もつれ髪。

しんばつ 黴髪【名】黒くつやよき髪。

しんばつ 進發【名】發足すること。戰爭などに出でたつこと。出發。盛衰記「宜レ待二我等進發之告一者」

しんはつめい 新發明【名】新しき發明。

しんばなま 新バナマ【名】たんすばなま(淡水バナマ)に同じ。

しんばひ 心奪【名】能(よ)の狂言の一。大名、冠者を連れて、京都の東山に生花の心(コツ)を取りに行き、途中にて、他人の携ふる花を奪ひ取ることを作りたるもの。

しんばふ 新法【名】㊀あたらしき法令。㊁あたらしき仕方。新方。

しんばふ 眞法【名】まことの法。

しんばふ 心法【名】心を修練する法。大原問答青葉笥「おお見事なる心法、佛意にかなひ給はんと、彌彌殊勝に覺え候」

じんばふ 人法【名】人間ののっとるべき道。人間の法。浦島年代記「ええ、人法に背きし悖が噴、聞く耳も穢るる」

しんばん 新番【名】江戸幕府の職制の一。番組を編成して、營中に勤仕し、將軍出行の時、前驅をなす等の事を掌りしもの。初は四組なりしが、漸次增して八組に至り、各組大抵二人の組頭と一人の番頭とありて統轄し、若年寄に屬したり。近習番。新御番。

しんばん 鍼盤【名】◎しんばん(羅針盤)の

しんばん 侵犯【名】㊀をかし入ること。㊁(法)自己の權利を超えて、他人の權利内に立入ること。

しんばん 親藩【名】㊀君主と親族の關係ある藩屏、又同族の諸藩。㊁德川時代に、德川家の近親たりし大名、即ち三家と越前家とにて、會津の保科家・甲府家及び館林(タテバヤシ)家も、これに準ぜられたり。

しんばん 審判【名】或事件を審理して、判決又は判斷を下すこと。物事の優劣又は訴訟などの判斷。さばき。最終の審判【句】㊀しゅうしん(終審)に同じ。㊁(基)『英Day of judgement』こうしんばん(公審判)に同じ。

しんばん 新版【名】新に出版すること、又その物。

しんばん-うたざいもん 新版歌祭文【名】淨瑠璃の一。大阪東横堀瓦屋橋なる油屋のお染とその丁稚久松との情事を脚色したるもの。菅專助の作なる「染模樣妹背門松(ソメモヨウイモセカドマツ)」より脫化して、野崎村の段、最も有名なり。近松半二の作。

しんばん-がしら 新番頭【名】新番の番頭。新番の各組に一人づつありて、その下に大抵二人づつの新番組頭ありたり。

しんばん-くみがしら 新番組頭【名】新番の組頭。前條參照。

しんばん-くわん 審判官【名】㊀審判する官吏。㊁次條に同じ。

しんばん-じけん 審判事件【名】審判すべき事件。「じ。

しんばん-しや 審判者【名】あんばいやに同

しんばん-ちやう 審判長【名】審判事件の事務を統ぶる役、又その人。

しんばんもの 新版物【名】新版の著作物。

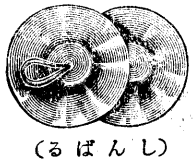
しんばんろ 青番羅【名】『番は番にて、異國より渡來の品なるを示すなるべしといふ』青地にて、同色の模樣ある舶來のうすもの。庭訓往來「素羅(ス)・青番羅・花番羅並黄草布」

しんばり 締張・心張【名】しんばりぼう(締張棒)の略。

じんばり 腎張【名】淫亂なること、又その人。腎勢の强きもの。

しんばりぼう 締張棒・心張棒【名】戸じまりに用ふる棒。せんばりぼう。せんばり。しんばり。しんざつぼう。

しんばる (英Cymbal)【名】西洋の樂器の一。金屬にて盤狀に造り、表に革紐を附したるを、二箇一組とせるもの。即ち錻鉱(ハガネ)と同樣のものにて、一つづつ兩手に持ち、上より下へ、或は下より上へ向けて打當て、同時に摺合はせて音を發せしむ。一種の噪音を發するにより、管絃樂に用ひて、狂喜の情を表すに適す。大太鼓と共に、一人の奏者によりて奏せらるること多し。



(るばんし)

しんび 審美【名】美と醜とを識別すること。

しんび 深微【名】深くして微妙なること。

しんび 親披【名】しんてん(親展)に同じ。

しんび 神嬪【名】【基】『英Handmaid of God』神僕と同樣にて、女性の死後に用ふる語。

しんび 心皮【名】【植】『英Carpel』複雌蕊を組成せる各箇の雌蕊。

しんび 眞否【名】まことと、まことならざるとと。「ざると。

しんび 信否【名】信ずべきと、信ずべからざると。「と。

しんび 深秘・深秘【名】ふかき祕密。

しんび 眞皮【名】【動】『羅Corium』皮膚の内外二層あるうちの内層。

しんび 神祕・神秘【名】㊀神事(カミ)として、祕密にすること。持統天皇歌「常陸帶の緌定めとて、鹿島の神の結び給ひし神祕あり」㊁人智にて窺知ること能はざる祕密。㊂(哲)『英Mystery』普通の理論・認識の外に超越したる事柄。「と。

しんび 信飛【名】【地】信濃國と飛驒國。

しんび 靱皮【名】【植】外皮の下にある柔かなる内皮。

じんび 秦皮【名】とねりこ、又その皮。

しんび-がく 審美學【名】びがく(美學)に同じ。

じんび-さいはう 靱皮細胞【名】【植】細長くして纖維狀をなし、先端の尖れる細胞、即ち靱皮纖維を形成するもの。

しんび-しゅぎ 神祕主義・神秘主義【名】【哲】次條に同じ。

しんび-せつ 神祕說・神秘說【名】【哲】『英Mysticism』事物の眞相とこれを支配する大法とは、人智の上に超絶せるを以て、これを會得するには、冥想思索して、神靈の祕密に接觸し、默會するを要すとする學說。即ち現實の智力・形式を用ひず、理性を超絶し、自己と絶對とを接觸する祕密の狀態に進入せんとするもの、また主觀と客觀とを對立せしむることをなさず、直ちに現象の中に實在を發見せんとするもの。

じんび-せんゐ 靱皮纖維【名】【植】靱皮細胞の聚合して形成する纖維。篩管及び柔組織と共に、靱皮部の一部をなし、その質强靱なるにより、植物體を强固ならしむ。麻・亞麻・楮・三椏(ミツマタ)等、纖物又は製紙の原料となる纖維は、即ちこれなり。

しんび-つ 新筆【名】新しくかきたること、又そのもの。當世の人の書きたるもの。紐城反覈者「名筆の繪に魂入って顯れ出でし極ったり、然も新筆、今是程にかかんず人は…元信ならでは覺束なし」

しんび-つ 親筆【名】自ら筆を執りて認めたる筆蹟。

しんび-つ 眞筆【名】その人自身の筆蹟。眞蹟。正筆(シヤウ)。(僞筆に對して)

しんび-つ 宸筆【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の眞筆。「じ。

しんび-てき 審美的【貌】びてき(美的)に同じ。

しんび-てき 神祕的・神秘的【貌】普通の理論又は認識の外に超脫したるさま。

しんびてき-かんじやう 審美的感動【名】【哲】びてきへうじゅん(美的感動)に同じ。

しんびてき-へうじゅん 審美的標準【名】びてきへうじゅん(美的標準)に同じ。

しんひはん-せつ 新批判說【名】【哲】第十九世紀にカントの批判說の復興したるもの。新批評說。

じんひやう-せつ 新批評說【名】【哲】前條に同じ。

じんひ-ぶ 靱皮部【名】【植】雙子葉植物の維管束の一部。根部においては本質部と交

錯して存し、莖幹においては、木質部及び形成層の外圍、即ち莖心に遠き周邊部に存し、靱皮纖維・篩管・柔組織の三部より成り、年年その内方に在る形成層より增生せらるるため、年輪を形成すれども、木質部の年輪に比すれば、不分明なるを常とす。

しんぴん 神品 【名】最もけだかく勝れたる品位、又その品物。

じんぴん 人品 【名】■人の品質。品性。ひとがら。 ■人の風采。なりふり。

しんぴょう 信憑 【名】信じてたよること。信賴。

しんぴょうきゃう 神憑狂 【名】〔哲〕まひょうきゃう(魔憑狂)を見よ。

しんぴろ 新廣 【名】紙子を製するに用ひし、一種の厚紙。

しんぴろん 神秘論・神秘論 【名】〔哲〕しんぴせつ(神秘說)に同じ。

しんぷ 神武 【名】神の如く勝れてたけきこと。じんむ。

しんぶ 振武 【名】『國語に「振二武子外一こととあり』武力を振ひおらはすこと。

しんぷ 侵侮 【名】おかしあなどること。見下ぐること。

しんぷ 榛蕪 【名】亂れ茂りたる草木。榛莽。

しんぷ 神符 【名】神社より出だす守り札。「御符。

しんぷ 神巫 【名】みこ(巫)に同じ。

しんぷ 親父 【名】ちち。ておや。おやぢ。(親母に對して)

しんぷ 親附 【名】親しみて附從ふこと。

しんぷ 新婦 【名】はなよめ。にひよめ。(新郎に對して)

しんぷ 新符 【名】次條を見よ。

しんぷ 新符括責(クワツセキ) 【句】無籍の人を官より勘出して、新に戸籍に編入すること。

三代實錄「新符括責之輩」

しんぷ 新附 【名】あらたに附從ふこと、又その者。「新附の民」

しんぷ 心附 【名】しんぷく(心服)に同じ。

しんぷ 心腑 【名】■むねと臟腑と。 ■こころ。心中。盛衰記「今樣・朗吟して、心腑に銘ず」

しんぷ 心府 【名】精神のやどるところ。こころ。靈府。盛衰記「不レ如抽二心府之志一、重欲レ企二斗藪之行一」

しんぷ 震怖・振怖 【名】ふるひおそるること。震慄。

しんぷ 信孚 【名】『孚は、信の內に在る者。說文に「孚、卵孚也、一日信也」とあり』まこと。

じんぶ 仁武 【名】■仁愛と武勇と。 ■仁愛にして、武勇あること。

じんぶあんてる (英 Zinfandel) 【名】米國產の赤葡萄酒。甘味なくして、澁味强し。

しんぷう 信風 【名】〔地〕きこうふう(氣候風)に同じ。

しんぷう 晨風 【名】朝吹く風。あさかぜ。

しんぷう 秦風 【名】■支那周の代の秦(今の甘肅省秦州)の地に行はれて、その地固有の風俗のあらはれたる詩。詩經に、その數首を收載せり。新井白石の書圖「秦風に興レ子同レ袍と申すは、この事に候」 ■にしかぜ(西風)に同じ。

しんぷう 神風 【名】かみかぜ(神風)に同じ。

じんぷう 仁風 【名】■仁惠のあまねく及ぶを、風の吹きわたるに譬へていふ語。盛衰記「この君、仁風率土に覆ひ」 ■晉書の文苑傳に「袁弘字彦伯、謝安常賞二其機對辯速一、臨レ別執二其手一、顧就二左右一取二扇一而授レ之曰、聊以送レ行、弘應レ聲答曰、輒當レ奉レ揚二仁風一慰二彼黎庶一」とあるに本づく』

あふぎ(扇) の異稱。

しんぷうれん 神風連 【名】明治八年の頃、肥後國熊本に起りて、神道を奉じ、泰西の文物制度を忌みたる、一種の頑固なる黨派。同九年十月大野鐵平(太田黑伴雄)・加屋霽堅(カルカ)等、二百餘人熊本の鎭臺及び縣廳を襲ひて、殺傷を逞しくせしが、翌日討平せられたり。敬神黨。

しんぷおにい (英 Symphony) 【名】〔音〕各樂器の特性を保持し、形式美を主として作られたる大管絃樂。

しんぷき 新吹 【名】新しく鑄造すること。新鑄。 稗狩鍬本地「くわっと見出す兩眼は新吹の白銀を研ぎ出せる如くなり」

しんふき-いちぶぎん 新吹一分銀 【名】しんいちぶぎん(新一分銀)に同じ。

しんふき-いっしゅぎん 新吹一朱銀 【名】しんいっしゅぎん(新一朱銀)に同じ。

しんぷく 申覆 【名】申(マウ)ねてつまびらかにすること。「覆診。

しんぷく 診腹 【名】腹部を診察すること。

しんぷく 信服・信伏 【名】信じて服從すること。盛衰記「今は信伏して、切って纖きる禮義をかしく」

しんぷく 震服 【名】おそれて服從すること。「心附。

しんぷく 心服 【名】心から服從すること。

しんぷく 心腹 【名】■こころとはらと。 ■心の中。まごころ。胸中。心腹に落つ【句】合點がゆく。腑に落つ。國姓爺後日合戰「北京を此方へ賜はらんとの文章、曾て以て心腹に落ち難し」心腹の友【句】胸中をうち明くる友。親密なる友。心腹の疾【句】心腹にある疾は除き難きもの故に除き難き敵に譬へていふ語。

しんぷくしんぷ 臣服・臣伏 【名】臣下となりて服從すること。

しんぷく 振幅 【名】〔理〕『英 Amplitude』物體が、靜止せる位置より振動を起して、その右又は左の極點に至る距離。

しんぷく 震幅 【名】〔地〕地震のために、地盤のゆれ動く幅、即ち地震計の波の幅となりて表はるるもの。

しんぷく 神服 【名】さいふく(祭服)に同じ。

しんぷくじ 眞福寺 【名】尾張國名古屋市門前町に在る新義眞言宗の寺。僧能信の創立。本尊は正觀音。世に大須の觀音と稱す。次條參照。

しんぷくじぼん 眞福寺本 【名】前條の眞福寺に藏せる古典籍。その內、國寶に指定せられし者、漢書食貨志・古事記・將門記(殘缺)・日本靈異記・本朝文粹・和名鈔(殘缺)等二十餘種あり。

しんぷしいと 新節絲 【名】木綿絲を用ひて、節絲織に似せて織りたる織物。

しんぶしやう 信部省 【名】なかつかさしやう(中務省)に同じ。(淳仁天皇の時、一時改められし名稱)

しんぶしやう 新府城 【名】武田勝頼、織田信長と長篠に戰ひ、敗れ還りて、甲斐國北巨摩(コマ)郡中田村七里岩の上に築きし城。天正九年城未だ完からざるに、織田氏に攻められて、勝頼出奔し、天目山に死す。

じんぶしやう 仁部省 【名】にんぶしやう(仁部省)を見よ。

じんぶしる 准麩汁 【名】じゅんぶしる(准麩汁)に同じ。

しんぶそわやう 神封租帳 【名】稅帳枝文の一。政事要略「神封租帳」

しんぶつ 神物 【名】靈妙なる物。「天、神物を生ず」

しんぶつ 心佛 【名】〔佛〕■心と佛と。 ■華嚴十種佛の一。心に依らずして、佛を成(ジヤウ)ずる稱。 ■心中に現るる佛。この心、これ卽ち佛なること。

心・佛・衆生(シヂヤウ) 一體【句】〔佛〕『華嚴經に「心佛及衆生是三無二差別一」とあり』眞如の一心より、萬法を緣起するものなるが故に、その本體より見れば、佛も衆生も、共に差別なきものなり。盛衰記「三界一心と知りぬれば、地獄・天宮外に無し。心佛衆生一體と悟りぬれば、始覺・本覺身を離れず」

しんぶつ 眞佛 【名】〔佛〕■ほうしんぶつ(報身佛)に同じ。(化身佛(ケシン)に對して) ■無相の法身。

しんぶつ 信佛 【名】佛を信ずること。

しんぶつ 神佛 【名】■かみと佛と。 ■神道と佛教と。神佛混淆【句】神佛同體說に基きて、神と佛とを配祀すること。例へば奈良の春日神社と興福寺と、京都の清水寺と地主(ヂシ)權現との類。明治の初、これを禁じて別つこととせり。

しんぶつ 新物 【名】新らしきもの。あらもの。今宮心中「昨日今日前髮取って下手代、まだ新物の二郎兵衞、おきさと深き中入の一」「物。ぼんもの。

しんぶつ 眞物 【名】まことの物。僞ならぬ

じんぶつ 人物【名】㊀『中庸の第二十二章に「能盡二人之性一則能盡二物之性一」とあり』人と物と。人事と萬物と。㊁人の姿。人。(畫などにいふ)㊂ひとがら。人品。人格。㊃才能ある人。人材。

じんぶつ-ぐわ 人物畫【名】〔美〕人間を主として描きたる繪畫。

しんぶつ-どうたい-せつ 神佛同體說【名】我が國の諸神は印度の佛の垂跡(スヰジヤク)せるものにて、もと同一體なりといふ說。聖武天皇の代に、僧行基の唱へしもの。本地(ホンヂ)垂跡說。

しんぶつ-みせ 新物店・新物見世【名】衣類を新しく仕立てて商ふ店。〔大阪の語〕今宮心中「本町や新物見世の若衆は、女とも見えず男なりけり、女子交りの針仕事」

しんぶつ-めんびき 神佛免引【名】江戸時代の免租の一。社寺附屬の田畑・森林等の內、三畝もしくは五畝の地租を除きしこと。八幡免・阿彌陀免等の名目あり。

しんぶね-うはに 新船上荷【名】上荷船の一種。

しんぶん 深文【名】深刻なる法文。

しんぶん 眞文【名】しんもん(眞文)を見よ。

しんぶん 讖文【名】將來を豫言したる文書。しんもん。未來記。

しんぶん 新聞【名】㊀新しく聞きたる話。新しき知らせ。新報。㊁しんぶんし(新聞紙)の略。

しんぶん 脣吻・唇吻【名】こうふん(口吻)に同じ。

じんぶん 人文【名】㊀『易經の賁辭山火賁に「觀乎天文、以察二時變一、觀二乎人文一、以化二成天下一」とあるに本づく』人倫の序次。㊁人物と文物と。㊂『張懷瓘の文字論に「日月星辰天之文也、五嶽四瀆地之文也、城闕朝議人之文也」とあり』ぶんくわ(文化)に同じ。

じんぶん 神分【名】〔佛〕法事の初に、惡魔・邪氣を除き、善神の擁護を請はんがために、般若心經一卷を讀誦すること。大鏡「まづは神分心經、表白のたまひて、鐘打ちたまへりしに」

じんぶん 人糞【名】人類の糞。

じんぶん-がくは 人文學派【名】〔哲〕じんだうしゅぎ(人道主義)に同じ。

しんぶん-きしや 新聞記者【名】新聞紙の記事の任に當る人。

しんぶん-し 新聞紙【名】一定の題號を用ひ、社會の新しき出來事、並びに一般の新知識を報道する定期刊行物。日刊を普通とすれど、週刊・半週刊などもあり。新聞。

しんぶん-じぎん 新文字銀【名】ぶんせいぎん(文政銀)に同じ。

しんぶんし-はふ 新聞紙法【名】新聞紙に關する、保安警察の目的のためにする取締の規定。卽ち新聞發行につきての屆出、保證金の納入、新聞紙の差押、その發行禁止等の事項を定めたるもの。明治四十二年の公布。

しんぶんしや 新聞社【名】新聞紙を發行する社。

じんぶん-しゅぎ 人文主義【名】〔哲〕じんだうしゅぎ(人道主義)に同じ。

しんぶんじきん 眞文字金【名】『添極印の「文」の字、眞字なるによりていふ』げんぶんきん(元文金)に同じ。

しんぶんじぎん 眞文字銀【名】げんぶんぎん(元文銀)に同じ。(草文字銀に對して)

しんぶんじぎん 眞文二分判金【名】しんぶんにぶばんきん(眞文二分判金)の略。

しんぶん-にぶばんきん 眞文二分判金【名】しんぶんにぶばんきん(眞字二分判金)に同じ。

しんぶん-ぼっく 新聞發句【名】『新派の俳句は、新聞紙を機關として發表すること多かりしによりいふ』新派の俳句を、月並發句の宗匠連の嘲りていひたる語。書生發句。

しんぶんや 新聞屋【名】㊀新聞を賣る店、又その人。㊁しんぶんきしや(新聞記者)を卑しめていふ稱。〔俚語〕

しんぺい 親兵【名】㊀主君に親近して、これを護衞する兵。禁兵。㊁明治四年以後、鹿兒島・山口・高知の三藩より出でし、兵部省にて管轄したる禁衞の兵士。歩騎砲の三兵種に分れしが、翌年廢せられたり。

しんぺい 新兵【名】㊀新に兵士となりたる者。㊁入營より第一期末の檢閱を終はるまでの現役兵の稱。(古兵に對して)

しんぺい 新幣【名】しんくわへい(新貨幣)に同じ。

しんぺい 神兵【名】神の遣したまふ兵。神の冥護ある兵。盛衰記「神兵の力ありと、寂信を被レ垂ければ」

しんぺい-けんれん 新兵教練【名】〔兵〕しゅけんれん(徒手教練)を見よ。

しんぺいみん 新平民【名】明治四年八月以後、あらたに平民籍に列せられたる非人・穢多(エタ)の俗稱。

しんぶんだね 新聞種【名】新聞紙の記事となるべき材料。殊にその三面記事の材料。

じんぶん-ちり 人文地理【名】『獨 Kulturgeographie』主として、人文の方面、卽ち人種・生業・交通・政治等を敍べたる地理。

しんぶん-でんぱう 新聞電報【名】『英 Press telegram』新聞紙に掲ぐるために、その關係通信者が、新聞社に宛てて發する電報。

しんぶん-にぶきん 眞文二分金【名】しんぶんにぶばんきん(眞文二分判金)の略。

しんぶん-にぶばん 眞文二分判【名】次條の略。

しんぶん-にぶばんきん 眞文二分判金【名】しんじにぶばんきん(眞字二分判金)に同じ。

しんぺい-けんれん 新兵教練【名】〔兵〕しんぺいけんれん(徒手教練)を見よ。

しんぺいみん 新平民【名】明治四年八月以後、あらたに平民籍に列せられたる非人・穢多(エタ)の俗稱。

しんぺう 神妙【名】しんめう(神妙)㊁に同じ。盛衰記「綺羅誠に神妙にして、言語殊に鮮かなり」

しんぺう 神廟【名】㊀神のみたまや。神祠。神社。㊁伊勢の大廟。

しんぺう 寢廟【名】㊀いへ。家屋。㊁みや。宮室。

しんぺき 深碧【名】濃き碧色。紺碧。

しんぺこ 新部子【名】未だ修業中の少年の歌舞伎役者。

しんぺつ 神別【名】我が國古代における氏族類別の一。神代の有勳の臣民、卽ちその族の祖先の、神代の諸神より出でたるもの。例(ば藤原氏は、天兒屋(アメノ)命なるを以て、神別に屬する族人なる類。(皇別・蕃別に對して)

しんぺに 新紅【名】かいりやうべに(改良紅)に同じ。

しんぺん 審辨【名】つまびらかに辨別すること。

しんぺん 脣瓣・唇瓣【名】〔動〕『英 Oral-arm』水母(クラ)類の口の周圍に存する長き瓣狀の器官。その數、種類によりて、四箇もしくは八箇あり。口腕。

しんぺん 脣邊・唇邊【名】くちびるのあたり。

しんぺん 針砭・鍼砭【名】㊀『漢書藝文志の顏師古の註に「砭、以二所刺一病也。石謂二砭石一、卽古作レ砭、石鍼也。古者攻レ病、別有レ砭石、今其術絕矣」とあり』針と石針と。砭針。㊁『針も砭も病を治するに用ふるものなるによりていふ』人を戒めて、その過を正すこと。いましめ。規箴。砭針。

しんぺん 新編【名】新に編纂すること、又その編纂したる書。新著。

しんぺん 新篇【名】新しき詩歌などの作。

しんぺん 神變【名】人間の力にては測り難き變化。じんぺん。

じんぺん 身邊【名】身體のまはり。

じんぺん 神變【名】しんぺん(神變)に同じ。

しんぺん-かまくらし 新編鎌倉志【名】〔書〕保元種種の神變を現じ」相模國鎌倉及びその附近の地理誌。河井恒久、及び力石忠一の水戸光圀の命を奉じ、實地踏査して編みしもの。八卷。

しんぺん-じゅつ 神變術【名】神變不思議の術。（徳川反魂香）次第に消えて失せるは神變術ともいひつべし」

しんぺん-たん 神變丹【名】しじんたん（四神丹）に同じ。

しんぺん-つぬか 新編追加【名】〔書〕貞永式目の補遺として、その後の官符・下文・評定書等を集め、神社・佛舎・政所・侍所・雜務の五篇に分類したるもの。二卷。

しんぺん-むさしのくにふどきかう 新編武藏國風土記稿【名】〔書〕武藏國の地誌。林衡の幕府に建議し、間宮士信・松崎純庸等をして、文化七年より起稿せしもの。二百六十五卷。

しんぺゑ 新兵衛【名】■事をなして敗るる者を云ふ。〔大阪の語〕■小さくして、小供の用ふる藁靴を云ふ。〔陸奥國津輕の方言〕■げんすけ（源助）に同じ。

しんぺゑ-やき 新兵衛燒【名】加藤新兵衛の窯（カマ）にて造りし陶器。新兵衛はじめ瀨戸に住し、のち京都・備前・信樂（シガラキ）等の地に轉住し、所在に窯を開き、子孫業を繼ぎて今に至る。

しんぼ 親母【名】養母・繼母などならぬ、まことの母。（親父に對して）

しんぼ 宸謨【名】『しんぎん（宸襟）を見よ』天皇のはかりごと。皇謨。宸猷（シンユウ）。

しんぼ 新募【名】新に募集すること。

しんぼ 親補【名】天皇親ら官吏に官職を授くること。

しんぼ 新甫【名】〔商〕月賦りて、新しき期限の先物（サキモノ）が始めて賣買にかけらるること。（取引所の語）

しんぽ 進歩【名】■足を進むること。あゆむこと。■物事の次第に善き方に移りゆくこと。（退歩に對して）

しんぽ 進捗【名】はかどること。進みゆくこと。しんちょく。

しんぽ 新補【名】■新に補任すること。■承久の亂以後に、幕府が一部の朝臣の領邑を沒收して、戰功の士を、その地頭とせしもの。（本補に對して）太平記「年來進止の地に於ては、只承久以後新補の卒法」

しんぼう 深謀【名】深きはかりごと。深きたくみ。遠慮。後勘。

しんぼう 神謀【名】■神のはかりごと。■巧妙なるはかりごと。鬼策。

しんぼう 身謀【名】一身上の都合を謀ること。

しんぼう 心棒【名】しんぎ（心木）に同じ。

しんぼう 進奉【名】たてまつること。まゐらすること。進上。

しんぼう 親朋【名】親しき朋友。

しんぼく 神木【名】■『班固の西都賦に「神木叢生」とあり』不思議なる樹木。■神社の境内に在りて、その神社に緣故ある樹木。一社一木を普通とし、常に注連（シメ）を張りなどして、特に敬畏す。かみき。神の木。

神木入洛（ジンボクジュラク）【句】次條に同じ。太平記

「神木入洛の事」

神木動座【句】中世以後、奈良の興福寺の衆徒が、春日神社の神人と共に、朝廷に敬訴する時、春日の神木なる榊を捧持して、京都に入りしこと。神木入洛。

神木の杉【句】かみすぎ（神杉）に同じ。

春日の神木【句】かすが（春日）の條下を見よ。

しんぼく 親睦【名】親みて中よくすること。むつまじきこと。

しんぼく 臣僕【名】公衆に仕ふる下部と、私家に仕ふる下部と。しもべ。けらい。

しんぼく 神僕【名】『英 Servant of God』基督教信徒の男の卑稱。（神婢に對して）

じんぼく 人牧【名】地方の人民を治むる者。即ち地方官・諸侯又はその地の豪族など。牧民者。太平記「遠境の人牧までも、これを聞傳へて」

しんぼく-くわい 親睦會【名】親しみを結ぶための會合。懇親會。

しんぼくたい 新北帶【名】〔地〕中央亞米利加を除きて北亞米利加全體。

しんぼくわん 親補官【名】親補せらるる官。

じんぼけん 人保險【名】『獨 Personenver sicherung』保險の一。偶然の事故により、人體に及ぼす經濟的損害を塡補するを目的とするもの。即ち死亡保險・生存保險・養老保險・產兒保險・傷害保險・徵兵保險などの總稱。（物保險に對して）

しんぼしだいこん 新干大根【名】十一・二月頃の干大根。

しんぼち 新發意【名】〔佛〕『ぼちはほつい（發意）の約轉』■發心して、新に佛門に入りたるもの。しぼち。今道心（ドウシン）。（菜花）

「この二位の新發意、心をまどはして」■四位以下の者の出家。（入道に對して）■一寺の住職の子にして、僧となれる若き男子。〔眞宗の語〕

しんぼついぼさつ 新發意菩薩【名】新に菩薩の證果を得たる人。

しんぼとけ 新佛【名】佛葬せられて、未だ日かずの經ぬ人。

しんぼはっくわい 新甫發會【名】新甫の立會のはじめ。〔取引所の語〕

しんぼふ 眞法【名】〔佛〕眞如・實相の法。

しんぼふ 心法【名】〔佛〕一切諸法の內、無質碍にして、緣慮の用あり、又は諸法を緣起する根本たるもの。顯敎にては無色無形なりとし、密敎にては有色有形なりとなす。（色法（シキホウ）に對して）

しんぼん 新本【名】新しき本。

しんぼん 眞本【名】ほんものの本。

しんぼんなうしやう 心煩惱障【名】〔佛〕三障の一。無明より生ずる煩惱にして、菩提の障となるもの。

しんぼり 新堀【名】地を掘りて、新に水を通はしたるところ。新しきほりわり。

しんぼりずむ《英 Symbolism》【名】〔文・美〕

しやうちやうしゐぎ（象徵主義）に同じ。

しんぼる《英 Symbol》【名】**しやうちやう（象徵）**に同じ

しんま 心魔【名】〔佛〕ぼんなうま（煩惱魔）に同じ。孕婦鑒・惡魔・天魔・邪魔・心魔四魔の首領の僧正坊」

しんまい 神米【名】神に供ふる精米。あらひよね。くましね。かしよね。洗米。

しんまい 新米【名】あたらしき米。今年出來たる米。ことしごめ。ことしまい。（古米に對して）

しんまい 新前【名】しんまへ（新前）の訛。

しんまう 榛莽【名】しんぼう（榛莽）に同じ。

しんまうじやうみ-さう 身毛上辭相【名】〔佛〕三十二相の一。身毛の頭右旋し、上に向ひて偃伏（エンプク）するもの。

しんまか 新靺鞨【名】〔音〕雅樂の一。高麗（コマ）樂に屬し、壹越（イチコツ）調の一。拾芥抄「高麗・壹越調新靺鞨（シンマツカ）」

しんまく 愼莫・身莫【名】物事の始末をなすこと。身の處置をなすこと。じんまく。みじんまく。（栴檀・樑の子嫗）しんまくにしかねてる」

愼莫に終へぬ【句】手のつけやうなし。始末にこまる。（浮世風呂）「しばらく取組んで居たが、身が重くて、しんまくにをへなんだを、漸く足を引っ倒して」

じんまく 愼莫・身莫【名】前條に同じ。

じんまくわ 蕁麻科【名】〔植〕いらくさくわ（蕁麻科）に同じ。

じんまーしん 蕁麻疹【名】〔醫〕急性なる一種の皮膚病。赤色又は白色の扁き大豆大に發疹し、癢痒灼熱し、往往浮腫を來すもの。蕁麻（イラクサ）に觸れたる時、蚊・蚤などに螫（サ）されたる時、藥劑の中毒等によりて發す。

じんまーしん（濕疹）（シッシン）參照。

しんまち 新町【名】〔地〕■伊勢國安濃（アノ）郡にある町。津市の西に接續す。もとその一部たりしが、のち分離せり。郡役所を置く。■上野國多野郡にある町。前橋より四里餘。中仙道の一驛。有名なる紡績所あり。■大阪市西橫堀川に架れる新町橋の西方にある遊廓地。寬永中に創始す。今は新町通・新町北通・新町南通・裏新町に分れ、もとは瓢箪町・佐渡島町・吉原町・新橋町・新堀町・九軒町・佐渡屋町に分れゐたり。淀鯉出世瀧鑒「新町ばかりが傾城町でもあらばこそ」

しんまへ 新前【名】新にそのことに從ひて未だ慣れざるもの。

しんまるさすしゆぎ 新マルサス主義【名】『英 Neo-Malthusianism』〔經〕人工避姙によりて、母體の早老、多産に因りて生ずる生活上の困難を避けんとする主義。西曆一八二二年英人ブレェス氏の唱道せるもの。**まるさすしゆぎ**(マルサス主義)參照。

しんみ 親身【名】■極めて近き血統、又その人。■最近き親族のごとく親密なること。生玉心中「涙ぐみたるしんみの詞、更に勤と思はれず」

しんみ 辛味【名】からきあぢ。からみ。

しんみ 新味【名】■あらたなるあぢはひ。■新規の飲食物。

しんみ 眞味【名】■まことのあぢはひ。■まことの意味。

しんみさう 浸淫瘡【名】熱病などに伴ひて、肌に生ずる、たむしの如き皮膚病。始は、甚だ小さく、痒く痛み、次第に大きくなりて、液出で、全身に廣がる。和名「浸淫瘡、俗云心美佐宇、風熱發二於肌膚一也」

しんみせ 新店【名】新に開きたる店。

しんみだい 新御臺【名】新に迎へたる御臺所(ドコロ)。

しんみち 新道【名】■新しく開きたる道。しんだう。■こうち(小路)を云ふ。〔東京の語〕

しんみつ 縝密【名】つつしみ深きこと。

しんみつ 愼密【名】心を用ふること細かにして、ぬけめなきこと。「見よ。

しんみつ 身密【名】〔佛〕さんみつ(三密)を

しんみつ 親密【名】極めて親しきこと。したしみあつきこと。

しんみつ 深密【名】思慮の深きこと。

しんみん 神民【名】神社に附屬する民。盛衰記「疵を蒙る神民六人」

しんみん 臣民【名】統治權の客體としての人民。「附の民。

しんみん 新民【名】新に服從せる人民。新

じんみん 人民【名】社會を組織する一員。たみ。たみくさ。蒼生。國民。

しんみん-しゆけん 臣民主權【名】臣民を統治する側より見たる國家の主權。(領土主權に對して)

しんみん-しゆけんせつ 臣民主權說【名】〔法〕統治權の主體は臣民にして、君主はその機關に過ぎずとする學說。(領土主權說に對して)

しんみんせき 臣民籍【名】〔法〕こくせきせう籍)に同じ。

しんみん-とん 新民屯【名】〔地〕支那盛京省の西部、遼河の右岸に在る都會。奉天府の西。關外鐵道支線の終點。商業盛んなり。

しんみん-ぶんげん 臣民分限【名】〔法〕しんみんせき(臣民籍)に同じ。

しんみや 針妙【名】しんめう(針妙)の誤。無名抄「さるほどになるなましんみやうの、きぬぬすみて」

しんみやう 神名【名】しんめい(神命)に同じ。

しんみやう 神冥【名】神の冥助。神の加護。冥助。盛衰記「本朝守護之神冥尙在二本宮一」

しんみやう 神明【名】〔佛〕■衆生の識性。■しんめい(神明)に同じ。

しんみやう 身命【名】しんめい(身命)に同じ。盛衰記「暫く身命を繼がんとて」

じんみやう-ちやう 神名帳【名】■諸國の神社の名、又は位記などを記したる帳簿。太平記「神名帳に載する所の三千七百五十餘社」■〔書〕えんぎしきじんみやうちやう(延喜式神名帳)の略。

じんみやうちやう-かうしよう 神名帳考證【名】〔書〕■延喜式の神名帳を考證したるもの。八卷。慶會(ケイエ)延經の著。■上に同じ。伴(バン)信友の著。

しんみやうぶ 新命婦【名】命婦の一。三命婦の下、權命婦の上に位せしもの。明治二年創置、同四年廢止。

しんみやく 診脈【名】脈搏を診察すること。脈をとること。

じんみらい 盡未來【名】次條の略。

じんみらいざい 盡未來際【名】〔佛〕『未來の際限を盡す意』法の永續して、未來永劫に際限なきこと。(盡虛空界に對して)平家女護島「最後の一念盡未來際、生生世世放れじ退かじ」

しんみり【脫】心靜かに落附きたるさま。しめやか。しっぽり。しみじみ。しんめり。

じんむ 神武【名】神の如くたけきこと。この上もなく武勇なること。しんぶ。

神武この方【句】『神武天皇以來の意』昔より。開闢以來。異途飛脚「神武この方無いこと」

じんむ-てんわう 神武天皇【名】〔人〕第一代の天皇。御名は狹野(サヌ)尊・若御毛沼(ワカミケヌ)尊。彦波瀲武鸕鷀草葺不合(ヒコナギサタケウガヤフキアヘズ)尊の第四の皇子。御母は玉依姫。在位七十六年、崩位三年。即位の七十六年崩ず。壽百〇三、一說に百二十七。

じんむ-てんわう-さい 神武天皇祭【名】皇靈殿にて、神武天皇の神靈を祭り、且つその山陵に奉幣せしめらるる皇室の大祭。崩御の三月十一日を陽曆に改算して、四月三日に行ふ。萬延元年より始まる。

しんめ 新芽【名】新に生じたる芽。わかめ。嫩芽。

しんめ 神馬【名】神の乘用に供する意にて、神社に獻りたる馬。これを獻ること能はざる者は、繪馬(エマ)などを奉納して、これに代ふ。しんば。かみうま。かみこま。神の駒。盛衰記「御神馬を曳かるること、太神宮・石清水より嚴島まで、八社」

しんめ 心馬【名】〔佛〕いば(意馬)に同じ。

しんめい 身命【名】身體と壽命と。しんみやう。軀命。

しんめい 身名【名】身體と名譽と。

しんめい 神明【名】■神の鏡のごとく明かなる知識。■かみ(神)に同じ。大鏡「この堂に影向(ガウ)したまふらん神明」■天照大神を祀れる宮。

神明に橫道なし【句】神は非道を行ふことなし。〔諺語〕

しんめい 神名【名】神の名。神の稱呼。

しんめい 神命【名】神のいひつけ。神の命令。神勅。

しんめい 晨明【名】■あけがた。あかつき。■「明(アケ)の明星(ミヤウジヤウ)」に同じ。

しんめい 申明【名】くりかへして固く盟ふこと。

しんめい 審明【名】つまびらかにすること。あきらかにすること。

じんめい 人名【名】人の名。

じんめい 人命【名】人のいのち。

じんめい 尋盟【名】ふるき盟をあたたむること。舊約を溫むること。

じんめい-かんおやう 人名勘定【名】〔商〕『英 Personal account』簿記にて、取引先の人名を口座(クヂ)をして、その者との取引上の貸借を處理すること。借方には、當方の權利、當方より返濟したる高を記入し、貸方には、當方の義務、當方へ返濟し來れる高を記入す。掛金貸借勘定。信用貸借勘定。帳簿貸借勘定。

じんめい-きうじよきしやう 人命救助記章【名】自己の危難を顧みずして、人命を救助したる者に賜ふ記章。即ち我が國の紅綬褒章の類。

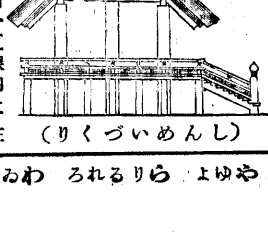
しんめいだい-わかしふ 新明題和歌集【名】〔書〕後水尾院・御西院・靈元院などの御製を始めとして、その頃の人人の歌を集めたるもの。十卷。撰者詳かならず。しんごめいだいわかしふ(新後明題和歌集)參照。

じんめい-ちやう 人名帳【名】じんめいぼ(人名簿)に同じ。

じんめいちやう 神名帳【名】じんみやうちやう(神名帳)に同じ。

じんめいちやう-かうしやう 神名帳考證【名】〔書〕じんみやうちやうかうしやう(神名帳考證)に同じ。

しんめい-づくり 神明造【名】〔建〕神社の建築式の一。すべて白木を用ひ、柱は圓くして、皆堀立(ホリタテ)とし、屋蓋・棟梁皆直線より成り、切妻造(キリヅマ)にて、千木(チギ)と破風(ハフ)とは、同一直線内に在



(りくづいめんし)

かにすること。

しんめい 申盟【名】くりかへして固く盟ふこと。

しんめい 審明【名】つまびらかにすること。あきらかにすること。

じんめい 人名【名】人の名。

じんめい 人命【名】人のいのち。

じんめい 尋盟【名】ふるき盟をあたたむること。舊約を溫むること。

じんめい-かんおやう 人名勘定【名】〔商〕『英 Personal account』簿記にて、取引先の人名を口座(クヂ)をして、その者との取引上の貸借を處理すること。借方には、當方の權利、當方より返濟したる高を記入し、貸方には、當方の義務、當方へ返濟し來れる高を記入す。掛金貸借勘定。信用貸借勘定。帳簿貸借勘定。

じんめい-きうじよきしやう 人命救助記章【名】自己の危難を顧みずして、人命を救助したる者に賜ふ記章。即ち我が國の紅綬褒章の類。

しんめいだい-わかしふ 新明題和歌集【名】〔書〕後水尾院・御西院・靈元院などの御製を始めとして、その頃の人人の歌を集めたるもの。十卷。撰者詳かならず。しんごめいだいわかしふ(新後明題和歌集)參照。

じんめい-ちやう 人名帳【名】じんめいぼ(人名簿)に同じ。

じんめいちやう 神名帳【名】じんみやうちやう(神名帳)に同じ。

じんめいちやう-かうしやう 神名帳考證【名】〔書〕じんみやうちやうかうしやう(神名帳考證)に同じ。

しんめい-づくり 神明造【名】〔建〕神社の建築式の一。すべて白木を用ひ、柱は圓くして、皆堀立(ホリタテ)とし、屋蓋・棟梁皆直線より成り、切妻造(キリヅマ)にて、千木(チギ)と破風(ハフ)とは、同一直線内に在

り、屋根は茅葺にして、上に鰹木を置きたるもの。大社造(オホヤシロヅクリ)と共に、神社建築の最も古き様式にして、伊勢の大廟の内外宮及び熱田神宮は、この式の最たるものにして、これを唯一(ユヰヰツ)神明造といひ、その他、破格の神明造は實例甚だ多し。

じんめい-とりゐ 神明鳥居【名】〔建〕鳥居の一種。最も古き簡素なる様式にて、專ら白木を用ひ、圓柱二本を掘立(クヒタテ)とし、その上に圓き笠木を載せ、その下方に斷面の矩形をなせる貫(ヌキ)を取附け、貫は柱外へは突抜けざるもの。伊勢大廟の鳥居は、この式を用ふ。

じんめいぼ 人名簿【名】人名を書留めたる帳簿。人名帳。

じんめいりやくき 神名略記【名】〔書〕内外二宮を始として、その別宮神社の所在、祭神等を漢文に記したるもの。一卷。一名、伊勢神名略記。二所(ニジョ)大神宮神名略記。

じん-めう 針妙【名】縫物を以て奉公する女。おはり。

針妙の片袖【句】針妙の、片袖を縫ふことの容易なるを、事物のたやすく爲し得るに譬へていふ語。〔諺語〕

じん-めう 神妙【名】■『神は不測、妙は不可思議の義』人類の智力を超絶したる現象。靈妙。■けなげ。しんべう。殊勝。奇特。保元「遠慮のほどこそ神妙なれ」■すなほ。おとなしきこと。「こと。

しん-めう 眞妙【名】眞實にして微妙なること。

じん-めう 深妙【名】〔佛〕甚深にして、微妙に同じ。

しんめつ-ふずゐしや 身滅不隨者【名】〔佛〕人の死後に伴ふことを得ざるもの。即ち財寶・名譽・權勢・爵位などの總稱。

じんめ-ぶぎやう 神馬奉行【名】室町幕府の職制の一。日吉(ヒエ)神社に將軍の參拜する日、將士の獻ずる馬を掌りしもの。社司・社僧この役に當る。

じん-めん 仁免【名】あはれみて罪過をゆるすこと。

じん-めん 人面【名】人の顏。

人面獸身【句】『史記の五帝記の註に「魑魅、人面獸心、四足、好惑レ人」とあり』■一種の怪物。■『史記の匈奴傳、列子の黃帝篇等に見ゆ』人情なき者を罵りていふ稱。にんめんじうしん。

じんめん-ちく 人面竹【名】〔植〕ほていちく(布袋竹)に同じ。

しん-めんぼく 眞面目【名】次條に同じ。

しん-めんもく 眞面目【名】■ありのままのすがた。しんめんぼく。本體。■まじめ。ありてい。しんめんぼく。天眞。

しんめり 【貌】しんみりに同じ。浮世風呂「しんめりとして、枕丹前(シンタンマヘ)をうたへば」

しん-も 森茂【名】はんも(繁茂)に同じ。

しん-もく 瞋目【名】目をいからすこと。

しん-もく 深目【名】深くくぼめる目。

しん-もく 心目【名】心と目と。

じん-もく 人目【名】■人の目。■他人の視ること。人のみるめ。ひとめ。みえ。外見。

しん-もす 新毛斯【名】瓦斯絲にて、モスリンに似せて織りたる織物。

しん-もつ 神物【名】神社の什物。著聞「非二神物一敵、只有レ名更無レ術」

しん-もつ 曠物【名】〔佛〕齋後の供物。

しん-もつ 進物【名】■進上する物品。おくりもの。つかひもの。獻上物。■天皇・上皇・親王・大臣などに獻上する物品。〔鎌倉時代の語〕

しんもつ-がた 進物方【名】武家にて、進物を扱ふ役、又その人。

しんもつ-ぎって 進物切手【名】てうだつぎって(調達切手)に同じ。

しん-もって 神以て【副】神に誓ひて。かみかけて。膝栗毛「密通を致せし事、神もて存ぜず」

しんもつ-どころ 進物所【名】古、宮中・院・女院・御所その他貴人の家に附屬して、膳部の調進を掌りし所。宮中の、月華門外の南掖に在りて、內膳司に屬し、別當・預(アヅカリ)・執事・膳部等の職員ありて、天皇の供御(グヨ)を調進せり。

しんもつ-とりつぎばん 進物取次番【名】江戸幕府の職制の一。留守居の支配にて、諸侯その他よりの獻上物を進達する事を掌りしもの。小普請(コブシン)より補せらるる番頭(バンガシラ)三人ありて、諸員を統べたり。

しんもつ-ばん 進物番【名】江戸幕府の職制の一。大名・旗本などよりの進獻物を周旋し、式によりて布置することを掌り、また賜與物の事にも關係せしもの。若年寄の所管なり。

しんもつ-ぶぎやう 進物奉行【名】鎌倉幕府の諸奉行の一。朝廷又は貴族への進物の事を掌りしもの。

しん-もの 新物【名】新しきもの。今までになき物ごと。今宮心中「桁丈揃ひし死姿、刃に伏すは古手にて、これ心中の新物と聞く人、回向をなしにける」

しん-もん 讖文【名】しんぶん(讖文)に同じ。太平記「不思議なりし讖文なり」

しん-もん 神文【名】神明に對して盟を立つる文。誓文。

しん-もん 眞文【名】梵字の經文。梵文。平當法華の眞文を講じたまひしかば」

しん-もん 眞門【名】〔佛〕上根の人に對して說く、眞實の法。

しん-もん 審問【名】■つまびらかに問ふこと。■審理のために問ひただすこと。

じん-もん 尋問【名】たづねとふこと。

じん-もん 訊問【名】■問ひ糺すこと。吟味。■〔法〕權力的に事實の審査又は糺問をなすこと。とりしらべ。審理。

じん-もん 腎門【名】〔醫〕『英 Hilum』腎臟の內緣の、腰椎(ヨウツイ)の方へ凹みこめるところ。腎動脈の腎臟の實質內に入り、腎靜脈及び輸尿管の腎臟を出づるは、皆この部分において。

じんもん-しよ 訊問書【名】訊問及び答辯を記せる書類。

じんもん-じよ 訊問所【名】訊問を行ふために設けたる場所。

しんもんぜき 新門跡【名】■あらたに門跡號を許されし僧。■けうによ(敎如)を見よ。

じんもん-でんぽう 尋問電報【名】課金電報の一。電報の發信者が、その發したる電報に關して、又は受信者が、その受取りたる電報につき、電信局に尋問の請求をなすに應じて、その局が發する尋問の電報。

しんもん-りう 眞門流【名】〔佛〕ほんもうほつけじゅう(本妙法華宗)の舊稱。

しん-や 晨夜【名】朝より夜ふけまで。夙夜(シュクヤ)。

しん-や 深夜【名】よふけ。よなか。深更。

しん-や 新家【名】■新築の家。■分家。別家。

しんや 【名】

心矢【名】土木工事にて、杙(クヒ)を打つ一種の器械。

しん-やう 新樣【名】新しき樣式。いまやう。

しん-やう 新陽【名】新しき春。はつはる。

しんやうめい-もんゐん 新陽明門院【名】〔人〕龜山天皇の妃。藤原基平の女。御名は位子(カヒコ)。建治元年女御となり、三宮に准ぜられ、のち尼となり、法名を覺隆と稱す。永仁四年薨ず。御年三十五。

しんやく 神役【名】かんぬし。神官。若風「當社西の御門に、神役の家高き大中井兵部太夫」

しんやく 神藥【名】不思議の効能ある藥。

しんやく 神約【名】神の約束。盛衰記「神約なれば、子孫までも守るべし」

しん-やく 信約【名】誓約すること。ちぎり。ちかひ。やくそく。

しん-やく 震厄【名】しんさい(震災)に同じ。

しん-やく 新藥【名】新に發見せし藥。

しん-やく 新譯【名】■あたらしき飜譯。■漢譯佛經の、唐代以後に譯せられしもの。玄奘・義淨の二人、譯者中において、最も著はる。

しん-やく 新約【名】■新しき約束又は條約。■〔書〕しんやくぜんしよ(新約全書)の

略。(舊約に對して)

しんやく 新役【名】あたらしき役目。

しんやく 針藥・鍼藥【名】針醫の療治と投藥と。

しんやく 沈約【名】〔人〕支那南北朝の學者。字は休文。梁の武帝に仕ふ。晉書・宋書・齊紀・四聲韻譜の著あり。

じんやく 腎藥【名】腎勢を強くする藥。腎虛の藥。素人狂言絞切形「それそれお前の後を通る、第一の腎藥。え、と振返るとたんに、夜商人、たまごたまごウ」

しんやくし 新藥師寺【名】大和國奈良市高畑町に在る華嚴宗の寺。東大寺の末寺。天平中、聖武天皇の眼病平癒を祈り給ふため、光明皇后の御願により、行基の開基せしもの。本尊は藥師如來にて、十二神將これに附屬し、共に名作たり。香藥寺。

しんやくしょ 新約書【名】〔書〕次條の『新約聖書』に同じ。(舊約聖書に對して)

しんやくせいしょ 新約聖書【名】〔書〕次條に同じ。(舊約聖書に對して)

しんやくぜんしょ 新約全書【名】〔書〕『英 New testament 約とは、神と人との『約の義』ユダヤ教の教徒の毎土曜日、教會に集合して、舊約全書を讀むに倣ひ、キリスト教徒の間に、キリスト昇天の日を記念せんがために、使徒の書翰を讀むこと行はれ、遂にその一書の編成せらるるに至りしもの。西曆第二世紀の終に、大體一書の形をなしたれども、なほ全く今日存するが如き形には至らざりしものの如し。二十七卷より成り、原文はギリシャ語にて書かれ、福音書四卷と書翰二十三卷とに大別するを得。(舊約全書に對して)

しんやしき 新屋敷【名】〔新に開きたる屋敷地。讀野「夢夢」「營に馴染もなきや新屋敷」〕新に築きたる屋敷。

しんやすね 新安直【名】〔商〕これまでになき安直。〔取引所の語〕

しんゆ 新湯【名】〔新に開設したる浴湯。

あらゆ(新湯)に同じ。

じんゆう 仁勇【名】仁心と勇氣と。

じんゆう 仁心と勇氣とを兼ねたること。

しんよ 眞譽【名】〔人〕眞言宗の高僧。仁和寺の寬恕に學び、持明院を起し、奏して御願寺とす。保延元年金剛・傳法二寺の座主となる。

しんよ 宸輿【名】『しんきん(宸襟)を見よ』天皇の召したまふ輿。

じんよ 神輿【名】みこし(御輿)に同じ。

じんよ 燼餘【名】もえのこり。もえさし。餘燼。

しんよう 信用【名】『左傳の宣公十二年の條に「非王日、其君能信用其民乎」とあり』信じて任用すること。信任。信じて疑はぬこと。盛衰記「人の讒言に侍るか、信用に及ぶべからず」人より信ぜらるること。〔經〕『英 Credit』將來に於て、義務を必ず履行すべきを信ずること。或人の給付に對し、直ちに現金にて反對給付をなさずとも、若干の時日を隔てて、これが給付をなすべしと約する場合に、その人が必ずその反對給付の約束を守るべしと信認すること。對人信用と對物信用、有期信用と無期信用、短期信用と長期信用等の區別あり。

しんよう-がし 信用貸【名】〔商〕『英 Fiduciary loan』貸主が借主を信用して、無抵當・無保證にて、金錢・物品を貸すこと。(擔保貸・保證貸に對して)

しんよう-かしきん 信用貸金【名】金錢を信用貸に貸すこと、又その金錢。

しんよう-かしつけ 信用貸附【名】信用貸にて貸附くること。

しんよう-きくわん 信用機關【名】〔經〕信用を利用して、金錢の融通をなす機關、即ち與信所・手形仲買人・銀行・金貸業者・質屋・信用組合など。

しんようくみあひ 信用組合【名】〔經〕信用機關の一、また產業組合の一。勞働者その他の細民が相團結して、各小額の資金を醵出し、組合員中に、資本の必要ある際、對人信用によりて、低利に貸附くる組合。

しんよう-けいざい 信用經濟【名】〔經〕全然貨幣の使用を除外したるにあらざれども、主として信用を利用し、帳消法又は小切手・手形等の信用證券によりて、取引の行はるる經濟界の狀態。

しんよっけいざい-じだい 信用經濟時代【名】〔經〕社會が、貨幣經濟時代より一進歩をなし、貨幣を使用するよりも、主に信用によりて、經濟事業を經營する時代。(貨幣經濟時代・實物經濟時代に對して)

しんよう-けん 信用券【名】〔商〕**しんようしょうけん**(信用證券)に同じ。

しんようざい 信用罪【名】〔法〕虛僞の風說を流布し、又は僞計を用ひて、人の信用を毀損したるによりて成立する犯罪。

しんよう-じやう 信用狀【名】〔商〕『英 Letter of credit』銀行又は商人が、その本・支店又は取引銀行に宛てて、一定期間內に、一定の金額を限り、これを所持する人の請求に應じて支拂ふべきことを依賴せる書狀。支拂ひたる銀行等は、その都度支拂金額を裏書として記入し、後の支拂者に、その信用殘高を知らしむ。

しんようじやうつき-てがた 信用狀附手形【名】〔商〕信用狀によって振出さるる手形。專ら外國爲替手形にその例を見る。

しんよう-しゅっし 信用出資【名】〔法〕信用を會社又は組合の目的とすること。(資本出資・勞働出資に對して)

しんよう-じゅんくわんきせつ 信用循環期說【名】〔經〕次條に同じ。

しんよう-じゅんくわんせつ 信用循環說【名】〔經〕『英 Theory of credit cycles』經濟界の信用は、十箇年を一期として生滅するものにて、恐慌後三年間は、信用衰へて、事業振はざれども、次の三年間において、漸次回復し、第三次の三年間において、再び隆盛に赴き、貸出盛んに、企業心・投機心の勃興し、信用擴闊の濫用となり、次の一箇年即ち十箇年目には恐慌を生じ、かくのごとくにして、恐慌期は十箇年毎に到來すといふ說。英人ジョン・ミル(J. Mill)及びジュエムズ・ミル(J. Mill)等の主張せし說。後日に債務を履行すべきことを信認して受取る證券、即ち信用取引に使用する證券。例へば貸借證文・公債證書(以上は、非貨幣的なるもの)・紙幣・諸手形(以上は貨幣的なるもの)などの類。信用券。

しんよう-たいしやく-かんぢやう 信用貸借勘定【名】〔商〕じんめいかんぢやう(人名勘定)に同じ。

しんよう-てがた 信用手形【名】〔商〕手形の形式によりて發行せらるる信用證券。爲替手形・約束手形・小切手の類。

しんよう-とりひき 信用取引【名】〔商〕一方の給付とその反對給付との間に、相當の時日の猶豫を存する取引。物品を購求して、その代價を後日に拂ひ、勞働者が勞務を提供して、報酬を後日に受取る類、又、信用證券の授受に依る一切の取引、皆これに屬す。

しんよう-ほけん 信用保險【名】〔商〕損害保險の一。使用人又は代理人の不正行爲に基き、主人又は本人が被りたる損害の塡補を目的とするもの。損害保險の一。卸賣商人又は製造業者が、得意先の賒掛代金の不拂、手形の不渡によりて被りたる損害の塡補を目的とするもの。

しんよう-やくそく 信用約束【名】〔法〕他人に信用を與ふる約束。

しんよう-りよからけん 信用旅行券【名】旅費及び入用の金員を、銀行に預け置き、旅行先にて、その銀行の取引銀行より、入用だけの金子を受取り得る證券。

じんよく 人欲・人慾【名】人間の慾心。人の欲望。心の本體をくらます雜念。

しんよしのおり 新吉野織【名】吉野織に似せて織りたる木綿織物。

しんよしはら 新吉原・新芳原【名】〔地〕よしはら(吉原)三を見よ。

しんよね 新米【名】米澤(ヨネ)絲織に擬して、武藏八王子附近にて製出する織物。地合薄く、品質佳ならざれども、光澤あり。諸絲織の代用に供せらる。

しんら 森羅【名】森然として羅列すること。多くならぶこと。

森羅萬象【句】天地の間にありとあ

るすべての物。宇宙間に存在するあらゆる現象。㊁〔人〕しんらていばんしやう(森羅亭萬象)㊀㊁㊂に同じ。

しんら 新羅【名】〔地〕しらぎ(新羅)に同じ。

しんらい 新來【名】あらたに來ること。新來の菩薩【句】〔佛〕極樂に新に往生せる菩薩。(「舊住(ジウヂウ)の菩薩」に對して)

しんらい 信賴【名】信じて依賴すること。

しんらい 親賴【名】親みてたよること。

しんらい 神來【名】『英 Inspiration』不思議なる感興を感得すること。いんすぴれえしよん。靈感。「神來の興に驅らる」

しんらい 神籟【名】㊀神の聲。㊁靈妙なる感興を惹きおこす韻致。(音樂・詩歌などにいふ)

じんらい 人籟【名】人の吹きて發する聲、卽ち笛などの聲。(天籟・地籟に對して)

じんらい 迅瀨【名】流のはやき瀨。はやせ。急湍。

じんらい 迅雷【名】烈しきかみなり。疾迅雷耳を掩ふに暇あらず【句】次條に同じ。〔諺語〕

迅雷耳を掩ふに及ばず【句】『晉書の石勒戰記に「迅雷不レ及レ掩レ耳」とあるに本づく』事あまりに急にして、禦ぐに暇なし。疾雷耳を掩ふに及ばず。〔諺語〕

しんらいはいこう 新禮拜講【名】らいはいこう(禮拜講)を見よ。

しんらう 新郎【名】はなむこ(花婿)に同じ。(新婦に對して)

しんらう 辛勞【名】きくらう。苦勞。辛苦。

しんらう 心勞【名】心をつからすこと。しんぱい。㊟憂。病氣をなんもてはべりて、かしこく心勞しはべるなん」

しんらごと 新羅琴【名】しらぎごと(新羅琴)に同じ。

しんらさぶらう 新羅三郎【名】〔人〕『賴義の第三男にて、新羅明神の社壇にて元服を加へしより云ふ』みなもとよしみつ(源義光)に同じ。

しんらぜんじん 新羅善神【名】しんらみやうじん(新羅明神)に同じ。

しんらつ 辛辣【名】㊀味のひりりとからきこと。㊁極めてきびしきこと。

しんらていばんしやう 森羅亭萬象【名】〔人〕㊀ひらがげんない(平賀源内)に同じ。㊁狂歌師。蘭學桂川甫周の弟。名は中眞、字は廣臣、通稱は萬藏、のち森島氏を繼ぎて、甫齋といふ。桂林と號す。平賀源内に學びて、森羅亭萬象の號を讓られ、また二世風來山人と號す。狂歌を善くし、蘭學にも通ず。文化五年歿。年五十五。㊂しっちまんぱう(七珍萬寶)に同じ。

しんらばんしやう 森羅萬象【句】しんらばんしやう(森羅)の條下を見よ。

しんらまるくせつ 新ラマルク說(英 Neo-Lamarckism)【名】〔生〕てきおうせつ(適應說)を見よ。

しんらみやうじん 新羅明神【名】近江國園城(ヲンジヤウ)寺の守護神。園城寺の中興圓珍、唐より歸朝の船中にて靈夢を感じて祀りしもの。域内、金堂(コンダウ)の北方に鎭坐す。東海道名所記「膳所(ぜ)…右の方に八幡の宮あり、又、新羅明神の祠あり。この御神は、三井寺の鎭守なり。智證大師入唐して歸朝ありける時に、舟の中に一人の翁あらはれて曰く、我れはこれ新羅國の神なり、佛法守護のために、日本國に渡らんとのたまひけり。大師すなはち三井寺の鎭守としたまへり」

(しんらんし)

しんらん 進覽【名】親覽に供するために進上すること。「と。

しんらん 親覽【名】したしく見たまふこと。

しんらん 親鸞【名】〔人〕高僧。淨土眞宗の開祖。日野有範の長子。母は源義親(一說に爲善)の女吉光。幼にして父母を喪ひ、伯父範綱に養はる。九歲の時慈鎭の門に入り、のち法然に從ひ、名を綽空と改む。僧侶の肉食・妻帶を禁ずるを患へ、在家往生の實を示さんがために、藤原兼實の季女を娶りて、名を善信(ヨシザネ)と改む。師法然の事に坐して越後に流さる。この間、愚禿(グトク)と自稱し、名を親鸞と改む。勅免の後、關東に在ること二十年、弘長二年京都西洞院に寂す。年九十。明治九年に見眞大師の諡號を勅賜せらる。

しんらん 深藍【名】かちいろ(褐色)に同じ。

じんらん 人卵【名】〔生〕成熟せる卵巢より生じ、喇叭管を通りて、子宮内に來るもの。約十箇月間生活す。

しんらんき 親鸞忌【名】ほうおんこう(報恩講)に同じ。

しんり 心裡【名】こころの中。胸裡、

しんり 心理【名】㊀精神界の現象を支配する理法。㊁しんりがく(心理學)の略。

しんり 眞理【名】㊀まこと。との道理。天理。㊁〔哲〕『英 Truth』想念と事物との契合。(聽見に對して)㊂〔佛〕無爲の眞如。眞理の玉【句】〔佛〕眞理の尊く清きを玉に譬へていふ語。平家「至極信心の床(カマ)の上には、眞理の玉を研くらん」

しんり 深理【名】深遠なる道理。太平記「須レ有二非一之深理一矣」大鏡「この玉は佛法の深理にて、誠の玉の體ありともなしとも終に箱の中拜したる者なし」

しんり 審理【名】㊀道理・理由を審かにすること。㊁〔法〕裁判官が判定に要する取調につきての一切行爲。

しんりう 新柳【名】若葉の萌え出でたる柳。浦島年代記「風新柳の髮は倒れども、手にも取られぬ九十九髮」

しんりう 進流【名】〔佛〕醍明(ダイミヤウ)の一流。紀伊國高野山を本山とす。

しんりーがく 心理學【名】『英 Psychology 譯語は西周が、明治の初年ヘブン(Hepburn)の斯學の著書を飜譯せし時、始めて用ひしもの』精神の作用を研究する科學。古くは哲學の一部なりしも、近代は獨立せる科學として、研究せらるるに至れり。用明天皇職人鑑「世にほだされぬ信力の佛意にや叶ひけん」

しんりき 神力【名】㊀しんりよく(神力)に同じ。㊁〔植〕しんりきいね(神力稻)の略。

しんりき 信力【名】信仰の力。

じんりき 神力【名】㊀しんりよく(神力)に同じ。㊁〔佛〕じんづうりき(神通力)の略。

じんりき 人力【名】㊀じんりよく(人力)に同じ。㊁じんりきしや(人力車)の略。

しんりきいね 神力稻【名】晩稻(オクテ)の一種。明治十年兵庫縣人圓尾重次郎の「ほどよし」より選出せしものにて、實は芒無くして、形圓し。しんりき。

じんりきしや 人力車【名】人を乘せ、人の力にて輓く二輪車。一人乘と二人乘とあり。明治の初年、和泉要助・高山幸助・鈴木德次良等の創製せしもの。くるま。腕車。人車。人力。

じんりきしやふ 人力車夫【名】人力車を輓くを業とする勞働者。車夫。

しんりきよく 審理局【名】明治十四年二月に置かれ、同十月に廢せられし太政官の被官。府知事・縣令と府縣會と法律の見解を異にし、又は權限の爭を生じたる場合に、臨時に委員長委員を特選して、その件を合議裁定せしめし所。

しんりく 神戮【名】神の誅戮。盛衰記「就中去比、鹿島大明神御上洛之由、神戮不レ空者歟」

しんりーけう 神理敎【名】神道敎派の一。豐前國の人佐野經彥の主唱せしもの。饒速日(ニギハヤヒ)命の遺敎を奉じ、言靈(コトダマ)を明かにし、神理の敎義を傳ふるを本旨とす。大敎臨を福岡縣企救(キク)郡企救町に置く。

しんりーしゐぎ 心理主義【名】〔哲〕しんりせつ(心理說)に同じ。

しんりーせうせつ 心理小說【名】〔文〕『英 Psychological novel』事件の發展、人物の外面的活動を重んぜず、主として作中の中心人物の心理的經過の解剖をなさんとする小說。

しんりーせつ 心理說【名】〔哲〕『英 Psychologism』吾人の內的經驗を以て、あらゆる認識の發足點とし、心理學を哲學及びその各部門の根本學とする主張。心理主義。

しんりつ 震慄【名】ふるへわななくこと。戰慄。

しんりつ 新律【名】新に制定したる法律。

しんりつ 新立【名】新に設立すること。

しんりつ 森立【名】森然として立てること。いかめしく並び立てること。

じんりつ 人立【名】獣などが、人の如くに立つこと。

しんりつ-かれい 新律綱領【名】明治三年頒布せられし刑法。名例(上・下)・職制・戸婚・盗賊・人命(上・下)・闘毆・罵詈・訴訟・受贓・詐偽・犯姦・捕亡・断獄の十四編・八國百九十二條より成れるもの。かいていりつれい(改定律令)参照。

しんり-びょうしゃ 心理描寫【名】〔文〕小説にて、人物を描寫するに、單にその外部にあらはれたる行爲又は會話のみを以てせずして、その人物の心理狀態を描くこと。

しんりん 親臨【名】貴人の親しく臨場せらるること。

しんりん 森林【名】樹木の密生せる所。

しんりん 深林【名】深きはやし。

しんりん 申稟・申禀【名】『稟の字の音、一にひん』申し上ぐること。稟申。⇨下級の官廳が上級の官廳に對し、また人民が政府に對して、或事項を申し立てて、指令を仰ぐこと。うかがひ。

じんりん 人倫【名】一人のともがら。人類。十訓「六畜は主といふことを辨へねども、あはれを知りてむつる。いはんや心ある人倫をや」徳山建「人倫はなれし山に籠れば」二人の行ふべき道。

しんりん-がく 森林學【名】りんがく(林學)に同じ。

しんりん-かんしゅ 森林監守【名】北海道廳の職員の一。上官の指揮を受けて、官林保護に從事する判任待遇のもの。

しんりん-きこう 森林氣候【名】森林内に於ける氣候。風速の小なること、雨量の多きこと、濕度の高きこと、年内平均温度の低きこと、寒暑共に酷烈ならざること等の特徴あり。

しんりん-ぎょうせい 森林行政【名】〔法〕經濟行政の一。森林の發達・保存・廢滅に關するもの。

しんりん-くみあい 森林組合【名】國土保安のため、森林の荒廢を防止又は回復のため、森林利用上に必要なるため等にて、一定の區域内の森林所有者の連合を必要とする場合に、地方長官の許可を得たる上にて設立して、これらの目的を達するための行爲をなす社團法人。

しんりん-くわん 森林官【名】次條に同じ。

しんりん-くわんり 森林官吏【名】森林の保管・經營・利用及び監督に直接に當る官吏。林區署長・林務官・林務官補・林務技師など、これなり。森林官。

しんりん-けいさつ 森林警察【名】〔法〕行政警察の一。森林に關する危害を防ぐためのもの。

しんりん-しょいうしゃ 森林所有者【名】森林を所有せる者、又は森林・竹木を所有せるために、地上權・賃借權、その他、土地に關する使用、若しくは收益の權利を有する者。

しんりん-しょくぶつたい 森林植物帶【名】〔地〕各區域内に自生せる特殊の植物を、林業上の樹木に依って區別したる植物帶。熱帶林(榕樹帶)・暖帶林(亞熱帶林又は檳榔帶)・温帶林(枹(ナラ)帶)・寒帶林・白樺(ベツラ)帶・松(マツ)帶の四帶に分つ。森林帶。

しんりん-せったう 森林竊盜【名】森林に入込みて、その産物を窃取すること、又その人。

しんりん-せん 森林戰【名】〔兵〕森林中に行はるる戰闘。多くは小戰闘に過ぎざれども、不意に敵に遭遇する場合に起り易く、白兵戰往往に行はる。

しんりん-たい 森林帶【名】〔地〕しんりんしょくぶつたい(森林植物帶)に同じ。

じんりん-ばいばい 人倫賣買【名】じんしんばいばい(人身賣買)に同じ。

しんりん-はふ 森林法【名】森林に關する一般的規定の法律。明治三十年の公布。

しんりゃう 新涼【名】しよりゃう(初涼)に同じ。

しんりゃう 津梁【名】一渡場と橋と。二みちびき。てびき。三『世説の言語篇に「廬公嘗入二佛閣一見二臥佛一曰、此子疲二於津梁一、於レ時以爲二名言一」とあり』さいと(濟度)に同じ。

しんりゃう 神領【名】神社に附屬せる領地。孕當盛「神領社領・御供領一萬町を寄せ奉り」「同じ。

しんりゃう 酌量【名】しんしゃく(斟酌)に同じ。

しんりゃう 伸量【名】彫刻家が、原型を他に擴大して移す時、尺度を伸ばすに必要なる器具。「う。智略。

しんりゃく 心略【名】心中の工夫。くふう。

しんりゃく 侵略・侵掠【名】侵入して掠め取ること。「こと。

しんりゃく 進略【名】進入して奪ひ取ること。

しんりゃく-しゅぎ 侵略主義【名】他を侵略して、その領域を擴張する主義。

しんりゅうじ 神龍寺【名】しんだいぶつじ(新大佛寺)に同じ。

しんりょ 臣虜【名】『臣として虜にせらるる義』生捕せられて服從すること。

しんりょ 愼慮【名】つつしみて思慮すること。

しんりょ 宸慮【名】『しんきょ(宸襟)を見よ』天子の御心。叡慮。聖慮。

しんりょ 神慮【名】一神の御心。かみごころ。盛衰記「叶二天地之神慮一」二前條に同じ。

しんりょ 心慮【名】おもひ。かんがへ。おもんばかり。「深意。

しんりょ 深慮【名】ふかきおもんばかり。

しんりょ 振旅【名】『振は整、旅は軍旅の義』がいせん(凱陣)に同じ。

しんりょう 神陵【名】みささぎ。陵墓。太平記「驪山の神陵忽ちに、灰塵と成りしこそ悲しけれ」

しんりょう 眞龍【名】まことの龍。(蟷龍などに對して)眞龍も勢を失へば、蚯蚓(ミミズ)に同じ【句】英雄も權勢を失へば、凡人と同じになることの譬。〔諺語〕盛衰記「眞龍失レ勢同二蚯蚓一といへり。この諺まことなり」

しんりょう 侵凌・侵陵【名】をかししのぐこと。慢りて、恥かしむること。

しんりょく 心力【名】一心と體力と。二心のはたらき。精神の活動力。「き。

しんりょく 神力【名】神の威力。しんりき。

しんりょく 深綠【名】深きみどり色。ふかみどり。

しんりょく 新綠【名】新に生じたる葉の色。若葉のみどり。わかみどり。「き。

じんりょく 人力【名】人のちから。じんりき。

じんりょく 盡力【名】有りたけ力を出して働くこと。ほねをり。はたらき。

しんりょうはふ 心理療法【名】『英Mind cure』せいしんれうはふ(精神療法)に同じ。

しんるゐ 親類【名】一同じ血統を引きたる一族。血族及び姻族。親戚。親族。二男系の血族。像家。遠くの親類より近くの他人【句】『韓非子に「遠親不レ如二近隣一」とあり』一遠方にある親類よりも、近所に住める他人の方が、火急の場合に頼となる。二疎遠なる親類よりは、親密なる他人の方が、たよりとなる。〔諺語〕

じんるゐ 人類【名】一人のたぐひ。(他の動物と區別していふ)二じんしゅ(人種)に同じ。

しんるゐあづけ 親類預【名】江戸幕府時代に、犯人が幼者或は病者なるために、刑に處し難き時、生長又は平癒するまで、その者の親族に預けおきしこと。

しんるゐがき 親類書【名】親類の關係を記したる書類。

じんるゐがく 人類學【名】『英Anthropology』人種の起原・發達・異同・自然に於ける人類の地位、人類相互の關係などを研究する學問。

じんるゐけう 人類教【名】『英Religion of humanity』人類のために盡す愛他の情を、根本要義となす宗教。佛人コント(A.Comte)の創唱せしもの。人道教。

しんるゐすぢ 親類筋【名】一親類としての關係ある者。二藝妓などと、夫婦同樣の關係を重ねたる情交。

しんるゐだいおちぼしふ 新類題落穗集【名】〔書〕新類題和歌集に、題のみを擧げ

て、歌の缺けたるを補ひたるもの。四卷。撰者詳かならず。

しんるゐだいわかしふ 新類題和歌集【名】〔書〕靈元法皇の勅によりて、烏丸光榮(ミツ)・三條西公福(キンミ)・水無瀬(ミナセ)氏成・高松重季・武者小路實陰の五人の撰みたる歌集。二十卷。

しんるゐづきあひ 親類附合【名】【一】親族間の交際。一代女「しんるゐづきあひ、かれこれ暇なく」【二】親類にあらざる他人同士が、互に親族の如き交際をなすこと。

しんるゐながあづけ 親類永預【名】江戸時代に、犯罪人にて、心神を喪失し、本刑に處することを能はざるため、終身間、その親族に附托して、禁錮せしこと。

しんるゐぶん 親類分【名】かりに親類と定めたる門地。

しんれい 新令【名】あらたに發布せられたる命令又は法令。

しんれい 新例【名】あたらしき例。

しんれい 心靈【名】意識の本體。精神の根元。こころ。靈魂。

しんれい 神靈【名】【一】前條に同じ。【二】神のみたま。靈德。徒然「風に當り、濕に臥して、病を神靈に訴ふるは」【三】靈妙なる智識。

しんれい 振鈴【名】鈴を振鳴らすこと、又振鳴らす鈴。

しんれい 臣隷【名】けらひ。臣下。

しんれい 秦隷【名】れいしよ(隷書)を見よ。

しんれい 浸禮【名】〔基〕ばぷてすまを見よ。

しんれいきやう 神靈狂【名】〔哲〕ぜんれいきやう(善靈狂)に同じ。

しんれいけうくわい 浸禮教會【名】〔基〕浸禮派の教會。ばぷてすと教會。

しんれいは 浸禮派【名】〔基〕『英 Baptist』其督教の新教の一派。その信徒となる儀式に浸禮を用ふるもの。ばぷてすと。

しんれい-やぐちのわたし 神靈矢口渡【名】淨瑠璃の一。新田義興の歿後、御靈筑波前は一子德壽丸を連れて落人となり、由良兵庫德壽丸の身代に我が子友千代を討つこと、義興の子義峰矢口渡にて、渡守頓兵衞の娘お舟に助けらるることなどを仕組みたるもの。四段目の切(キリ)なる頓兵衞宅の一齣は、殊に名なり。福内鬼外(平賀源内)の作。

しんれう 臣僚【名】けらひ。臣下。

しんれう 診療【名】診察と治療と。

しんれき 新曆【名】【一】新しく制定したる曆。【二】たいやうれき(太陽曆)に同じ。(舊曆に對して)

しんれきかう 新曆考【名】〔書〕我が國、上代の曆法を論じたるもの。一卷。本居宣長の著。

しんれこおど 新記錄【名】新に出來たる一。葉の裏と中軸まで深く分裂せること。(淺裂・全裂に對して)

しんれつ 深裂【名】〔植〕『英 Parted』缺刻

しんれん 心蓮【名】〔佛〕顯教にては自性(ジシヤウ)心の淸淨、密教にては心臟の實形の譬。しやくにちやうだい(赤肉中臺)參照。

しんろ 新路【名】新に開きたる路。新道。

しんろ 進路【名】【一】進みゆく路次。【二】進み行くさきの方の路。ゆくて。前途。前程。進路を開く【句】立身し易きやうにする。立身の便を與ふ。

しんろ 神路【名】神社に通ずる道路。

しんろ 針路【名】『針はほうしん(方針)の義』船の進むべき路。

しんろ【貌】しんぞの轉訛。牛玉心中「さぞ小辨もしんろかろ」「同じ。

しんろう 蜃樓【名】しんきろう(蜃氣樓)に同じ。

しんろう 寢陋・侵陋【名】容貌の見にくくして、ひきたたぬこと。

しんろう 滲漏【名】もれにじむこと。にじみだすこと。

じんろく 甚六【名】【一】おろかなる人。〔俚語〕【二】そうりやう(總領)の隱語。

しんろくかせん 新六歌仙【名】六歌仙の外に、後世あらたに選みたる六人の歌仙、卽ち後京極攝政藤原良經・慈圓・藤原俊成・同定家・同家隆・西行の總稱。りくかしふ(六家集)參照。

しんろつ 眞肋骨【名】〔醫〕ろくこつ(肋骨)を見よ。

しんろ-てい 振鷺亭【名】〔人、江戸の小說家。【一】(初世)。本名は猪刈貞吉、通稱は與兵衞、酒落本・草雙紙の戲作多し。晩年落魄して、東海道川崎在に手習師匠を業とし、文化四年醉ひて玉川の分流に溺死す。【二】(二世)。ためながしゆんすゐ(爲永春水)の初名。

しんろん 新論【名】あらたなる議論。

しんわ 親和【名】しんくわ(親和)に同じ。

しんわ 神話【名】神代の傳說。神代のいひつたへ。こうけ(口碑)【二】參照。

じんわ 人和【名】衆人の和合。じんくわ。

しんわう 親王【名】『唐六典に「皇兄弟・皇子・皆レ國謂二之親王一」とあり。天皇に最も親しき王の義。王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』皇族の稱號の一。大寶令の制度には、皇兄弟・姉妹・皇子女を親王・內親王と稱し、淳仁天皇の時より、皇子・皇孫・諸王の何れを問はず、すべて宣賜により て附する稱號となり、足利時代頃より、某宮等と稱する世襲の親王家特定せられ、世襲の親王は、必ず天皇の猶子又は養子となりたる上、宣下により、親王號を稱せらるるを例とし、德川時代には伏見・桂・有栖川の三家を三親王家とし、寶永七年に新に閑院宮家を加へて、四親王を稱し、大統を繼ぎたまふべき御家柄と定められたり。明治以後は、世襲親王の制廢せられ、皇子より皇玄孫、卽ち四世までの男子の汎稱となり、なほ天皇、支系より入りて大統を承くる時、特にこの稱號を宣賜せられたる皇兄弟の王、及び現在の皇族の五世以下にして、舊制度によりて、この稱號を宣賜せられし場合に限らる。ないしんわう(內親王)・にふだうしんわう(入道親王)・ほふしんわう(法親王)・おうぢょわう(女王)參照。

しんわう 出家の後の親王【句】ほふしんわう(法親王)に同じ。今參「仁和寺に覺行法親王と聞えたまひしは、白河ノ院のみこにおはす。…白河ノ院、內親王といふこともあれば、法親王もなどかなからんとて、はじめて法師の後、親王ときこえたまひしなり。かくて後ぞうちつづきいつにも、出家の後の親王と聞えたまふめる」

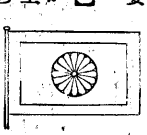
しんわう 神往【名】『精神の往く義』風景などをあくがれ慕ふこと。「神飛び魂馳す」參照。「人として神往に堪へざらしむ」

しんわう 心王【名】〔佛〕『王は、心の字の韻に引かれて、ナウと發音す』心の主なる作用。對境を悟る心。(心所に對して)

じんわう 人皇【名】『皇は、人の字の韻に引かれて、ナウと發音す』てんわう(天皇)に同じ。

しんわう-がしら 親王頭【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』芝居の髮(カツラ)の一種。皇子の姿を寫せるもの。

しんわう-き 親王旗【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』親王の儀仗通行の際に擎げらるる旗。內親王・親王妃の御旗も、明治二十二年制定せられたり。


(きうわんし)

しんわう-け 親王家【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』親王の稱號を許されたる皇族家。

じんわう-しやうとうき 神皇正統紀【名】〔書〕『皇は、神の字の韻に引かれて、ナウと發音す』神武天皇より後村上天皇までの事蹟を記し、吉野朝の正統なる由を陳べたるもの。一卷。北畠親房の著。ぞくじんわうしやうとうき(續神皇正統記)參照。

じんわう-しやうとうろく 神皇正統錄【名】〔書〕『皇は、神の字の韻に引かれて、ナウと發音す』神代より後鳥羽天皇の建久九年までの事を記せるもの。三卷。著者未詳。續群書類從に收む。

しんわう-せんげ 親王宣下【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』皇兄弟・皇子・皇女・皇孫などに、親王と稱することを許さるる宣旨。しんわう(親王)參照。

しんわう-だい 親王代【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』古、大禮の日、適當なる人の選ばれて、親王に代りて勤めし臨時の官。

じんわう-はおん-らく 秦王破陣樂【名】『王は、秦の字の韻に引かれて、ナウと發音す』雅樂の一。唐樂・大食(タイ)調に屬す。唐制三大舞樂の一。唐の太宗秦王たりし時、劉武周を討つ狀に象りしもの。四人立の舞にて、甲冑を帶し、戟(ホコ)を執りて舞ふ。後世は、舞曲共に絶ゆ。七德の舞。

しんわう-ひ 親王妃【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナウと發音す』皇族の一。親王の配偶者。その敬稱を殿下とす。

しんわう-もんぜき 親王門跡【名】『王は、親の字の韻に引かれて、ナと發音す』寛文の頃流行せし染模樣。唐樣(カラ)の書家三井孫之允親和の書を染出ししもの。

しんわ-がく 神話學【名】『英 Mythology』神話を研究する文學。

しんわ-かめ 新若布【名】〔植〕あをさ(石蓴)「に同じ。

しんわかるゐ-しふ 新和歌類句集【名】〔書〕二十一代集の歌を第一句より第五句に至るまでの何れの句によりても索引し得るやう次第して、集めたるもの。百卷。撰者詳かならず。一名、五句類句。

しんわ-ぞめ 親和染【名】『和は、親の字の韻に引かれて、ナと發音す』寛文の頃流行せし染模樣。唐樣(カラ)の書家三井孫之允親和の書を染出ししもの。

しんわ-わら 新藁【名】■刈りたての稻より得たる藁。正月の注連(メ)・輪飾等を作るに用ふ。 芭蕉「しんわらの出そめて早きしぐれかな」 ■植附に適するほどに生長したる早苗に熱湯を注ぎて、乾したるもの。淺綠色にして、女の髮を束ぬるに用ふ。

しんわらうり 新藁賣【名】新藁■を賣りあるく女。

しんわりびき 眞割引【名】〔商〕『英 True discount』手形などを、未だ支拂期日に至らざる以前に支拂ふ時、その時より支拂期日に至る間に於て、現に支拂ふ金高より生ずべき利息の割引を行ふこと。外割引。(銀行割引に對して)

しんわ-りよく 親和力【名】〔化〕くわがくてきしんくわりよく(化學的親和力)に同じ。

しんゐ 神威【名】神の威光。 盛衰記「失ニ神威與佛法ニ」

しんゐ 神位【名】■しんかい(神階)に同じ。■こんじゆ(神主)■を見よ。

しんゐ 臣位【名】臣下の位階。

しんゐ 震位【名】『易(エキ)』にて、震は皇太子に配せらるる卦なるよりいふ。東宮の位。

しんゐ 身位【名】身分と位地と。

しんゐ 讖緯【名】次條を見よ。

しんゐ-の-がく 讖緯の學【句】『讖は未來の効驗を說くこと、緯は經(經書)に對する語』日蝕・月蝕・地震などの天變・地妖によりて、人間の運命を豫測する說。支那にて、前漢時代より起り、後世、弊害少なからざりしを以て、禁ぜられたり。「して」

じんゐ 人爲【名】人のしわざ。(天然に對して)

じんゐ 人位【名】人と人との身分の等級。

じんゐ 神域【名】■神社の境內。■〔佛〕眞證の境界の不可思議なること。

しんゐき 畛域【名】■田と田とのさかひ。あぜさかひ。■さかひ。へだて。分界。境界。「畛域を撤す」

しんゐき 震域【名】〔地〕地震の際、その震動を感ずる範圍。

じんゐ-たうた 人爲淘汰【名】〔生〕『英 Artificial selection』生物の變異性と遺傳性とを利用し、その幾分の變異を生じたる種を選み、保護を加へて繁殖を遂げしめ、ますますこの特性を發揮せしむること、卽ち人爲によりて、種を生ぜしむること。ダアヰン(C. Darwin)の自然淘汰說によりて、生物の進化を說明し得るに至りしも、全くこの人爲淘汰の現象を深く研究せし結果なり。(自然淘汰に對して) 「的」に同じ。

じんゐ-てき 人爲的【貌】じんていてき(人定)(人定法)に同じ。

じんゐ-はふ 人爲法【名】〔法〕じんていはふ

じんゐ-ぶんるゐ 人爲分類【名】〔生〕『英 Artificial system of classification』生物分類法の一。自然の關係に依らず、ただ外部の特性に基きて、人爲的に分類すること。例へば鯨を魚類に入れ、蝙蝠(カウモリ)を鳥類に入るる類。(自然分類に對して)

じんゐぶんるゐ-はふ 人爲分類法【名】〔生〕人爲分類の方法。(自然分類法に對して)

しんゐん 神韻【名】すぐれたる韻致。

しんゐん 新院【名】同時に、上皇の二三人まします時、その最後に上皇となりたまひしもの。 增鏡「今おりさせ給へるを新院ときこゆれば、御兄の院を中の院と申し、父御門を本院とぞ聞ゆる」

しんゐん 進院【名】〔佛〕しんさんしき(晉山式)に同じ。

じんゐん 人員【名】ひとかず。にんず。あ

じんゐん-きよく 人員局【名】明治十二年より同十四年まで、陸軍省內に設けし一局。將官參謀・步兵・騎兵・憲兵・輜重兵の各科、及び馬醫部・軍樂部の人員調査を掌りし所。

しんゐんごしよ-ごでうもく 新院御所御條目【名】承應四年江戶幕府が、明正上皇の御所のために制定したる法規。五條より成れり。

じんゐん 仁惠【名】じんけい(仁惠)に同じ。 平治「民、唐堯・虞舜の仁惠に誇り」

しんゐん 親衞【名】■天皇の御身邊、又は皇居の守護。 ■このゑふ(近衞府)の唐名。

しんゐん-かうゐ 親衞校尉【名】しやうげん(將監)の唐名。

しんゐん-たい 親衞隊【名】親衞の軍隊。

しんゐん-たいしやうぐん 親衞大將軍【名】たいしやう(大將)■の唐名。

しんゐん-ちゆうらうしやう 親衞中郎將【名】ちゆうじやう(中將)■の唐名。

しんゐん-らうしやう 親衞郎將【名】せうしやう(少將)■の唐名。

しんゐんいろくじ 親衞錄事【名】しやうさう(將曹)の唐名。

しんゐんつ 心越【名】〔人〕こうち(興儔)に同じ。

しんゐんつ-せん 信越禪【名】上野國高崎を起點として、越後國直江津より新潟を連ぬる官線鐵道。

しんゐんつは 心越派【名】〔佛〕曹洞宗の一派。明僧心越を祖とす。「き。

しんゐん 神垣【名】神社のかき。みづが

しんゐん 深怨【名】深く怨むこと、又その怨。

しんゐん 深淵【名】ふかきふち。深潭。深淵に臨みて、薄氷を踏むが如し【句】恐怖して安んぜざる譬にいふ語。 盛衰記「高きも賤しきも、安き心なし。ただ深淵に臨みて、薄氷を踏むがごとし」

しんゐん 神苑【名】神社の境內にある庭園。

しんゐん 心猿【句】〔佛〕『心地觀經の八に「心如二猿猴一、遊二五欲樹一、暫不レ住故」とあり』心の欲情を猿に譬へての稱。

心猿意馬【句】〔佛〕「意馬・心猿」に同じ。

しんゐん 深遠【名】深く遠くして、容易に測り知るべからざること。「猿」に同じ。

じんゐん 人猿【名】〔動〕るゐじんゑん(類人猿)

じんゐん-どうそせつ 人猿同祖說【名】〔生〕人類は猿類と共に靈長類に屬し、猿類と祖先を共にするものなりとする學說。進化論の創唱者ダアヰン(C. Darwin)の主張にして、現今は殆ど定說となれり。

じんをく 人屋【名】人の住む家屋。いへ。人家。

じんをん-わん 深遠音【名】〔佛〕八音の一。佛の音聲は、遠近の差、音調を妨げず、聽く者遠きにあるも、能くその化を受くるもの。

しめ 標【名】■場所を示す等のために、木を立て、又は繩を張りなどして、標(シルシ)とするもの。標識。 萬葉「山高み夕日かくれぬ淺茅原のち見むためにしめゆはましを」 ■しめなは(標繩)の略。注連(メ)七五三 ■注連(メ)を引きわたしたる內。神社の域內。 ■まつのうち(松內)に同じ。 新勅撰「かぞふれば八十の春になりにけりしめの內なる花をかざして」

しめ 標の內人(ビト)【句】■神社に奉仕する人。 ■宮中に奉仕する人。

しめ 標の外(カヒ)【句】■神社の境內の外。 鯨「たのみずな御垣をせばみ葵葉はしめの外にもありといふなり」 ■男女の關係の疎くなりて逢ひ難くなりたること

に譬へていふ語。源氏「身こそかくしめの外なれそのかみの心の中を忘れしもせず」

標の程【句】注連を張れる邊。神社の附近。源氏「たいめしたまふ事などはいと難けれども、近きしめの程にて、おほかたも渡りたまふに」

しめ 埴【名】砂に似て、粘り氣のなき土。濕地を築立つるなどに用ふ。

しめ 締【名】■幾つかの數を一つに合はすること。しめだか。こゑじめ。合計。總計。■手紙の封じ目に書く〆の字。

しめ 鴲・蠟嘴【名】〔動〕燕雀(エンジャク)類に屬する鳥。形、雀に似て小さく、頭上は淡焦色、その他上面は灰色もしくは焦茶色、眼の前部と喉とは黒く、胸腹は灰色を帶び、翼に大なる白色部あり。腹部は黄色にして、嘴は太く短く、淡肉色を呈し、脚は淡黄色なり。四季共に我が國に居る。

(めし)

しめ 四目【名】神頭(ジンヅ)の一種。竹の根又は木にて作り、長さ約一寸五分、三箇所に金捲を施し、目三つありて、赤漆又は黒漆にて塗りたるもの。

しめ 占【助數】紙の數を示すに用ふ。束(ソク)の百倍、帖(デフ)の十倍。

じーめ 神馬【名】じんめ(神馬)の略。

じーめ 神馬の屋(ヤ)【句】神馬をつなぎおく厩(ウマヤ)。

しめあけ 締明【名】音のせぬやうに加減をしながら、障子・襖などを明くること。源女房裝分手鑑「覗けば、母も、泊人も、すやすや鼾、首尾よしと、障子をそっとしめあけに取出すは、藤まき柄(カ)の大脇指」

しーめい 指命【名】指定して命ずること。

しめい 四明【名】〔地〕■『山上に方石あり、四面臨(ヒ)のごとく、中は日月・星宿の光を通ずるによりて名を得たりといふ』支那浙江省寧波府にある名山。府城の西南に位す。古來道教にて、靈山の一とし、佛僧も來りて幽棲する者多く、宋初の高僧知禮は、山中に天台の教を講じ、學徒數百に及べりといふ。■『支那の四明山に擬して名づくといふ』比叡山の最高峰。山城・近江兩國に跨り、高さ二七二三尺、展望に富む。■ひえいざん(比叡山)の異稱。平家「三台・槐門の家を出でて、四明・幽谿の窓に入りしより以來」

四明の教法【句】〔佛〕天台宗の教法。平家「四明の教法を此所に弘めたまひしより以降」

四明の教【句】〔佛〕前條に同じ。

四明の洞(ホラ)【句】四明■にある方石の洞。文武五人男「唐土の天台四萬八千丈の四明の洞をうつし」

しーめい 示命【名】訓示して命令すること。

しーめい 氏名【名】せいめい(姓名)に同じ。

しーめい 指名【名】名をさして、その人を定むること。なざし。

しーめい 使命【名】■使者として命ぜられたる用向。使に立つ任務。■『宋史の宗景威傳に「性鄙吝、毎二使命至一、惟設二肉一器一」とあり』つかひ。使者。

しーめい 司命【名】■星の名。■權力を握ること。生死の命をつかさどること。

しーめい 師命【名】師匠のいひつけ。

しーめい 詩名【名】詩に長じたる名。

しーめい 詩盟【名】詩人のまじはり。詩人の仲間。

しーめい 司盟【名】盟約をつかさどること、又その役。

しーめい 尸盟【名】『盟を尸(カタドル)る義』同盟

しーめい 死命【名】死ぬるいのち。

しーめい 死命を制す【句】他人の急所を握る。咽喉を扼す。

じーめい 自明【名】■何等の證明を要せず、その物事自身にて、すでに明白なること。■直覺に由りて、明白なること。

じーめい 自鳴【名】おのづから鳴ること。

じーめい 寺名【名】寺の名。寺號。

じーめい 辭命【名】ことば。辭令。

じーめい 耳鳴【名】みみなり(耳鳴)に同じ。

しめい-がく 四明學【名】〔佛〕しめいてんだい(四明天台)に同じ。

しめい-がたけ 四明嶽【名】〔地〕しめい(四明)■に同じ。

じめい-きん 自鳴琴【名】おのおとごと■に同じ。

しめい-きやうさう 指名競爭【名】指名したる人にのみ競爭せしめて、契約を締結すること。

しめいけ 四明家【名】〔佛〕四明學の系統を嗣ぐ者。山家(サンケ)。

しめいけん 氏名權【名】〔法〕人格權の一。人がその氏名の專用を不正に害せられざる權利。

しめい-こくさい 指名國債【名】『英Registered national bond』權利者の確定せる國債、即ち權利者の名義を國債帳簿に登錄し、且つその證券にも記入したるもの。記名國債。

しめい-さいけん 指名債權【名】〔法〕特定の人に辨濟すべき債權。(無記名債權に對して)

しめい-さん 四明山【名】〔地〕しめい(四明)に同じ。太平記「四明山の上」

しめい-さんか 指名參加【名】〔法〕第三者の名を以て、物を占有することを主張する者が、その物の占有者として、訴訟の被告となりたる場合に、被告の指名により、その第三者が、被告に代りて、訴訟を引受くること。「名式」に同じ。

しめい-しき 指名式【名】〔法〕きめいしき(記傍山)の別稱。

じめいじやま 慈明寺山【名】うねびやま(畝

じめい-しよう 自鳴鐘【名】『おのづから鳴りて、時を報ずるよりいふ』とけい(時計)に同じ。

しめい-しようけん 指名證券【名】〔法〕きめいしようけん(記名證券)に同じ。

しめい-しようしよ 指名證書【名】〔法〕前條に同じ。

しめい-しよおにんばらひ-の-さいけん 指名所持人拂債權【名】〔法〕債權の證書に、債權者を指名せるに拘らず、その證書の所持人にも辨濟すべき旨を附記したるもの。仕拂命令の類。

しめいた 〆板【名】〔建〕緣側の鴨居上と、軒桁との間を塞ぐ横羽目板。

しめい-てんこ 氏名點呼【名】氏名を順次に呼上げて行ふ點呼。

しめい-てんだい 四明天台【名】〔佛〕支那宋の代に、四明山に居りし四明尊者知禮法師の系統を引きたる天台學。四明學。(我が國の天台と區別していふ)

しめい-にふさつ 指名入札【名】〔法〕無制限の競爭に附するを不利とする場合に、或適當と認むる數人を選みて、入札せしむること。(公衆入札に對して)

しめいろ-づき しめいろ月【名】陰曆三月の異名なりといふ。〔古語〕

しーめう 至妙【名】至つて妙味あること、又その物事。極妙。

しめうり 締賣【名】■物を買占め、商利あるべき時に賣出すこと。■鎬くまで亙利を貪りて賣ること。

しめ-かざり 標飾・注連飾・七五三飾【名】正月などに、標繩を門戸に掛けて飾ること、又その標繩。かざり。

しめ-かす 搾滓【名】魚胡麻などより油を搾り取りし殘滓。肥料として用ふ。壓搾肥料。

しめ-がね 締金【名】帶紐などの端に附けて、引締めて止むるに用ふる金具。

しめ-がひ 締買【名】一括して悉く買取ること。かひしめ。

しめ-ぎ 搾木【名】油などを締めて搾り取る機械。回轉する圓木二箇を上下に竝列して、僅少の間隙を作り、その隙に材料を挾み、喰合はする裝置。一代男「山崎の秋の初風はげしく、しめ木にあらそひ、衣打つ槌の音、ものかましう」

しめ-きり 締切【名】しめきること。しめきりたる處。

しめ-きる 締切る【動四他】■塞ぐ。鎖す。■終結せしむ。しめくくる。とじむ。

しめ-くぎ 鉸釘【名】材料の接合固著に用ふる鉄材料の大小・形狀・強度に應じて、その形狀大小を異にす。

しめ-くくり 締括【名】しめくくること。

しめ-くくる 締括る【動四他】Ⅰ引締めて括る。引締めて鎖す。Ⅱ取締る。支配す。總轄す。Ⅲしめきる(締切る)(二)に同じ。

しめこの-うさぎ 縮子兎・縮子兎【名】次條に同じ。

しめこの-うさぎ 縮子兎・縮子兎【名】『兎を狩りて、締殺す意に言ひかけたるもの』「占めたり」に同じ。入代目桃太郎「思ふままに百兩といふ金が出來、よっぽど古いがしめこの兎と喜び」

しめ-ころす 締殺す【動四他】首を締めて殺す。絞死す。

しめ-ころも 染衣【名】そめたる衣。〔古語〕虱「そめきがしるにしめごろもを」

しめし 示【名】Ⅰ示すこと。提示。Ⅱ見せしめ。さとし。をしへ。示教。佛遺教來經生鳶飛鳥懷に入る時は狩人も是れを取らぬとは、情を知れとの世のしめし」

しめし 濕【名】Ⅰぬらすこと。Ⅱ小供の小便を拭ひ取る布。おしめ。むつき。

しめじ 【名】なつ(夏)の異名なりといふ。

しめし-あはす 示合はす 諜合はす【動下二他】私かに相談し合ふ。合圖などして知らせ合ふ。話しあふ。諸國物語「四人ながら悦び、しめしあはせて」

しめ-じめ 【貌】Ⅰしめり濕ふさま。じめじめ。順集「しぐれつつうつろふ見れば菊の色をしめじめと降る雨にざりける」Ⅱしめやかに同じ。源氏「火たきやかすかに光りて、人氣なくしめじめとして」Ⅲつくづくに同じ。十訓「此の侍從の君をしめじめとけさうしけれども」

じめ-じめ 【貌】前條(一)に同じ。

しめ-しや 四馬車【名】支那にて昔用ひし、小さき車。和名四馬車、論語註云、小車四馬車也」

しめす 示す【動四他】Ⅰあらはして見す。萬葉「しほひなば玉藻苅らさむ家のいもがはまづとこはば何をしめさむ」Ⅱ指して教ふ。指示す。續紀「尙これは、大神のいつくし示したまへるものなり」Ⅲ懲らしめに行ふ。みせしめになす。Ⅳしめしあはす。室町千疊敷「豫てしめし置きたりけん松永彈正突立ち、召人の首水も溜らず打落す」

しめす 濕す【動四他】Ⅰぬらす。うるほす。Ⅱ火をけす。きやす。けす。

しめす-へん 示偏【名】漢字の偏の一。社・神・祈・祝などの字の左にある示の字。

しめた 占めた【句】しむ(占む)の條下を見よ。

しめ-だいこ 締太鼓【名】鼓の如く造り、胴は鼓より短く、麻の緒をからみて、兩面の革を締めも弛めも爲しうるやうにした太鼓。近世の製作に係り、能樂及び俗樂に用ふ。

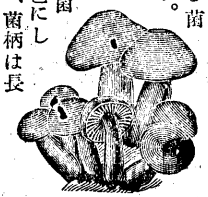
しめ-だか 締高【名】締合はせたる結果の數。合計の高。總高。總額。

しめ-だし 締出【名】締出すこと。

しめ-だす 締出す【動四他】人を外に追出だし、戸を締めて入れず。

しめたり 占めたり【句】しむ(占む)の條下を見よ。

しめぢ 濕地・占地・玉蕈【名】(植)擔子菌類(キン)類に屬する菌類。山地に自生す。菌體は絲狀をなし、秋の頃、菌傘と菌柄とを具ふる繁殖體を出す。菌傘は白色又は灰色にして、圓錐狀をなし、菌柄は長さ二三寸に達す。また傘の紫色なる紫濕地(シメヂガサ)また簇生する千本濕地(センボンシメヂ)等あり。味美なり。



（しめじ）

しめぢ-がはら 標茅原【名】〔地〕下野國にありし名所。今、下都賀(シモツケ)郡栃木町の北方なる郊野を白地(シヂ)ケ原といふは、その訛れるものといふ。伊吹山の麓なるが故に、古歌には艾草に配して詠ず。近江國の伊吹山の麓なりといふ說は誤なりといふ。新古今「なほ頼めしめぢが原のさしもぐさ我世のなかにあらんかぎりは」夫木「下野やしめぢが原のさしも草おのが思ひに

しめ-おから 締力【名】締附くる力。

しめおぢたけ 濕地茸【名】〔植〕しめぢ(濕地)に同じ。

じめつ 自滅【名】Ⅰ自然と滅ぶること。Ⅱわが所作によりて、自ら滅ぶること。

しめ-つく 締付く【動下二他】束ねて堅く締む。

じめ-つく 濕付く【動四自】じめじめとす。濕氣を感ず。

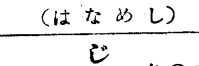
しめつけ-しまだ 締附島田【名】髷(マゲ)を長く出さぬ島田まげ。元祿曾我物語「しめつけ島田は髮先も跡も長み同じ程にして、中程より元結を二筋かけ」

しめ-づな 締綱【名】駄馬に荷物を附くる時、その荷物を締括るに用ふる綱。

しめ-っぽい 濕っぽい【名】『ぽいは接尾語』しめりけあり。

しめ-なき 締泣【名】聲を立てじとつとめつつ泣くこと。夕霧阿波鳴渡「聞えぬ人じゃとしめ泣に、恨み口說くぞ不憫なる」

しめなは 標繩・注連繩・七五三繩【名】『しりくめなは(尻久米繩)の略といふ』內外の境界の標として引きわたす藁の繩。特に神前に引延べ、又は新年の飾物として、門戸に張り、穢災を禦ぎて入らしめぬ意を示す。左捻(ヒダリヨリ)を削とし、三筋五筋七筋と順次に藁の莖を捻り放して垂れ、その間間に紙四手(シデ)を垂る。牛蒡標(ゴバウ)・輪標(ワ)などの種類あり。しめ。萬葉「はふりらがいはふ社の紅葉もしめなはこえて散るといふものを」



（しめなは）

しめの 標野・占野【名】きんや(禁野)(一)に同じ。〔古語〕堀杰「わがものとしめの」に飼ひし春駒の手にもかからず荒れまさるかな」

しめ-の-きぬ 染衣【名】そめぎぬ(染衣)に同じ。〔古語〕紀綵帛、シメノキヌ」

しめ-の-せきづる しめの關弦【句】せきづる(關弦)の條下を見よ。

しめ-のみ 古飲【名】已れ一人にて占有して、酒を飲むこと。

しめん 四面【名】Ⅰよも。四方。四邊。Ⅱまはり。ぐるり。四面楚歌【句】『支那楚の項羽が、漢の高祖に、垓下(今の安徽省鳳陽府靈壁縣の南)に圍まれし時、漢軍は、項羽の心を亂さんがために、楚人に眞似て、楚國の歌をうたひしを、項羽果して眞に楚人の歌と思ひ、四面の漢軍中、かく多數の楚人あるに至れるかと驚きし故事に本づく』孤立して、味方のなきこと。

しめん 紙面【名】Ⅰ紙のおもて。紙上。Ⅱてがみ。書面。

しめん 視面【名】しせん(視線)を見よ。

じめん 字面【名】熟語・成句を作る各字の配合の具合。じづら。

しめん-こうげき 四面攻撃【名】Ⅰ四方より敵を圍み擊つこと。Ⅱ或人に對して、諸方面より反對すること。

しめん-ざん 四面山【名】〔地〕駿河國富士山の別稱。

しめん-たい 四面體【名】『英 Tetrahedron 又 Tetracdron』Ⅰ〔數〕四つの平面にて局(キク)られたる立體。三角錐。Ⅱ〔鑛〕正三角の面四箇にて圍みたる形、卽ち等軸晶系八面體の半面體。

じめん-づく 自面盡【名】面と向ふこと。ぢかに座對すること。泥鰌出世瀧鯊「勝二郎樣の女房になる程の吾妻ぢや、じめんづくに願むからは、雫もこれに爲はない」

しめ-もらひ 標貰・注連貰・七五三貰【名】正月十五日に、取去りたる門松及び飾の類を、小供等の貰ひ集めて、左義長にて燒くこと。

しめ-や 四目矢【名】四目の鏃(ヤジリ)を用ひたる矢。

しめ-やか 【貌】しづかに打沈みたるさま。物靜かなるさま。しめしめ。しっとり。

しめ-やかた 染屋形【名】『從來はそめやかたとも訓じたり』彩色したる屋形船。〔古語〕萬葉「沖つ國しらす君が染屋形黃しめのやかた神のと渡る」

しめ-やき 締燒【名】陶器の素地を固く燒

締めて後、低温度の釉(ウハグ)を施すこと。

しめ-やぐ 【動四自】 しめやかにあり。しめる。「古語」 落窪」など、惟成は、いたうしめやぎたる。物や失ひたるとて笑ひたまふ」

しめ-よす 締寄す 【動下二他】 ㊀締めて、ひとところに寄集む。 ㊁引締めて、寄添はしむ。だきしむ。しかと抱く。 天の網島「許して下されとだきよすれば、いや、わしゆゑと、しめよせて」

しめら 【貌】 しめら(繁に)に同じ。「古語」 蜻蛉「この夜すがらにいもねずにけふもしめらに戀ひつつぞをる」

しめらふ 濕らふ 【動四自】 しめる(濕る)の延。「古語」 散木「秋來ては風ひやかなる暮もあるを暑さしめらひむづかしの世や」

しめり 濕 【名】 ㊀うるほひ。しとり。濕氣。 鳳雛「山險や夜のまの霧のしめりより未だ落ちやまぬ木木のしたつゆ」 ㊁雨の降ること。 ㊂出火の消ゆること。 ㊃しめりばん(濕半)の略。

しめり-ごゑ 濕聲 【名】 悲しみのために沈みたる聲。涙にしめりたる聲。 先代萩「ええ、鈍な子ではあるわいと、呵られて、おろおろ涙、しゃくりながらのしめり聲」

しめり-たけ 濕茸 【名】 〔植〕 しめぢ(濕地)の類なるべしといふ。

しめり-ちゃうす 濕茶臼 【名】 『重くて廻轉しがたきにつきていふ』 うるほひたる茶臼。 尤草子「しめり茶臼に鮨のおし」

しめり-なき 濕泣 【名】 ひそひそと泣くこと。めそめそと泣くこと。 傾城酒呑童子「聲を呑んだるしめりなき」

しめり-ばん 濕半 【名】 出火のしめりを報ずる聲鐘。鎭火を知らする半鐘。しめり。

しめる 濕る 【動四自】 ㊀うるほふ。濡る。しめらふ。 源氏「狩衣姿のいとぬれしめりたるほど」 ㊁火、水に消ゆ。鎭火す。 鯖魚「火しめりぬめりとて」 明和誌「小川町土屋家に少かの出火あり、直ちに濕る」 ㊂しめやかになる。衰ふ。しづまる。しめやぐ。 源氏「曉がたに風すこししめりて、村さめのやうに鉾り出で」 ㊃心陰氣になる。思に沈む。 源氏「うちしめりて、思ふことありがほなり」

しめ-を 締緒 【名】 物を締むるための緒。 諸國盛謳唱歌「近江の笠は形(ナリ)がようて著ようて、しめ緒が長うて著よう御ざる」

しも 下 【名】 ㊀した。すそ。(上(カミ)に對して) 枕「もかうのしもは、ただ厨子そある」 ㊁臣民。たみ。 源氏「かみはしもに助げられ、しもはかみになびきて」 ㊂地位の低きこと、又その人。賤しき人。 古今「身はしもながら言の葉をあまつ空まできこえあげ」 ㊃禁中又は貴人の家にて、天皇又は主人の居室を遠ざかり、女房などの詰めをる處。つぼね。 枕「右近ぞ見知りたる、呼べとて、しもなるを、まづとみの事とて召せば」 ㊄召使又はそれらの人の居る所。五人女「飯焚の梅が、下(モ)の茶碗にくみて、久七にさし出しければ」 ㊅「下(モ)の句」に同じ。 ㊆帝都を遠ざかれる土地。地方。 ㊇城下の町の、城に遠き方。 ㊈山の麓の町などにて、山に遠き方。(上(カミ)に對して) ㊉身體の腰部より以下。「下の病」 ㊊便所。また大小便。糞。 ㊋月經。

しも 霜 【名】 ㊀寒夜、地上の物體の上にあらはるる白色、細小の氷片。その成生の原因はほぼ露と同じく、地上の物體の冷却して、零點下に降る時、その含有せる水蒸氣の急に氷結するに因る。時夜は、地面の熱の放散甚しきがために、これを生ずること殊に多し。 ㊁白髪に譬へていふ。頭(カシ)の霜。 新千載「年を經て星をいただく黒かみの人よりしもになりにけるかな」

しも 霜の翁 【句】 白髪の老人。 篇曲(氷室)「霜の翁のとどしに氷室の御調守るなり」

しも 霜の衣(コロモ) 【句】 ㊀霜の白くふり敷きたる、衣を著たるに譬へていふ語。 新拾遺「消えわぶる霜の衣をかへしても見し夜まれなる夢の通路」 ㊁寒き夜の衣。 新千載「長き夜の霜の衣を打ちわびて寢ぬ人しるき淺茅生の宿」

しも 霜の下道(シタミチ) 【句】 霜におほはれたる道。 新後撰「たのめおく故郷人の跡もなし深き木の葉の霜の下道」

しも 霜の經(タテ) 【句】 霜を經絲(タテ)に譬へていふ語。 古今「霜のたて露のぬきこそ弱からし山の錦のおればかつ散る」

しも 霜の翼 【句】 霜のごとく白き翼。

しも 霜の鶴 【句】 霜のごとき白き鶴。 新千載「和歌の浦や入江の葦の霜の鶴かかる光に逢はんとや見し」

しも 霜の劍 【句】 霜の草木を枯殺するを劍に譬へていふ語。

しも 霜の花 【句】 置きたる霜の白く美しきを花に譬へていふ語。「雪の花」參照。 芭蕉ひづち「田に霜の花見る朝かな」 也有「飛石や梅に引けじと霜の花」

しも 霜の眉 【句】 白髪の眉。老人の眉。白眉。

しも 霜の枕 【句】 霜夜に寢ぬること。 芭蕉「藥飲むさらでも霜の枕かな」

しも 霜の蓬(ヨモギ) 【句】 ㊀霜に枯れたる蓬。 ㊁白髪の亂れたるに譬へていふ語。 後拾遺「見るもうし向ふ鏡の秋の影衰へまさる霜の蓬は」

しも 霜を履んで、堅氷至る 【句】 『易經の坤卦に「初六、履霜堅氷至」とあるに本づく。なほその象傳に「履霜堅冰、陰始凝也、馴致其道、至堅冰也」とあり』 憂息の次第に近づくに譬へていふ語。 〔諺語〕 正統記「少しの事も、心にゆるす所あれば、大いに誤る本となる。周易に霜を履んで堅氷至るといふ」

しも 秋の霜 【句】 ㊀しうさう(秋霜)に同じ。 新古今「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐かな」 太平記「河より引上げられたれども、秋の霜肉を破り、曉の氷膚に結びて、生くべしとも見えざりけるを」 ㊁つるぎ(劍)の異稱。〔古語〕 草庵集「秋の霜かけける松もあるものを結ぶ契の色かはるらん」

しも 【助】 強辭のしに感嘆辭のもの添ひたるもの。「折しも」「時しもあれ」

じも 字母 【名】 〔佛〕 『諸字を生ずる母の意』 悉曇(シッタン)の摩多(マタ)と體文(タイブン)と。

しもあがた 下縣 【名】 〔地〕 對島國二郡の一。對島上島の全部を占む。

しもあさ 霜朝 【名】 霜の降りたる朝。〔古語〕 源氏「寒しもあさに」

しもあさふ 下麻生 【名】 〔地〕 美濃國加茂郡にある町。飛騨川の西岸。南は川邊(カハベ)町に接す。舟筏の便あり。

しもいしづ 下石津 【名】 〔地〕 美濃國の舊郡の一。もと單に石津郡と呼びしを、明治維新後、下の字を加へ、同二十九年海西(カイサイ)郡と相合して、海津(カイヅ)郡を立つ。

しもいち 下市 【名】 〔地〕 大和國吉野郡にある町。吉野川の南岸。奈良市の南十一里。吉野鮎及び吉野蠶を產ぐ。かみいち(上市)□參照。

しもいちだん 下一段 【名】 〔語〕 次條に同じ。

しもいちだんくわつよう 下一段活用 【名】 〔語〕 五十音圖のエ列のみに活用する動詞の變化。文語にては「蹴る」の一字あるのみなれども、口語にては、文語における下二段活用は、すべてこの活用に轉ず。下一段活。下一段。

しもいな 下伊那 【名】 〔地〕 信濃國十六郡の一。郡役所を飯田町に置く。

しもかうべながる 下河邊長流 【名】 〔人〕 國學者。本姓は小崎、初名は具平、通稱は彦六。大和國宇田の人。古體の和歌を善くし、

また漢籍に精し。萬葉集を註釋せんとして、果さず。貞享三年歿す。年六十三。

しもがかり 下掛【名】■『この三流は、もと奈良に住み、時時召されて上京せしよりいふ』能樂の金春(こんぱる)・金剛・喜多の三流。大和がかり。(上掛(かみがかり)に對して) ■しもがかること。

しもがかり-はうしやう 下掛寶生【名】『もと金春(こんぱる)より出でて、寶生の座附となりしよりいふ』能樂の脇師の寶生流。脇寶生。

しもがかる 下掛る【動四自】腰部以下の事物に關す。「下掛った話」「じ。

しもがこひ 霜圍【名】しもよけ(霜除)に同じ。

しもかぜ 下風【名】婦人の腰下より引く風邪。(多く產後の風邪にいふ)

しもかぜ 霜風【名】霜氣を帶びたる寒風。

しもがた 下方【名】下の方。

しもかないは 下金石【名】〔地〕かないは(金石)を見よ。

しもかんぢやうしよ 下勘定所【名】江戸幕府の職制の一。二の丸に在りて、組頭・勘定支配等の役員あり。御取箇方(おとりかた)・中之間の別ありて、御取箇方を更に差出方・廻米方・御普請方・新田方・道中方・知行割の六局に分ち、中之間を伺方・運上方・御廐方・帳面調・證文調・林方・國役方以下の十局に分ちたり。

しもがも 下鴨【名】次條の略。

しもがも-じんじや 下鴨神社【名】かものみおやのじんじや(賀茂御祖神社)の俗稱。

しもかもしや 下鴨社【名】前條に同じ。

しもかやあけづ 【名】〔動〕しほからとんぼ(鹽辛蜻蛉)に同じ。

しもがる 霜枯る【動下二他】草木霜にあひて枯る。(續古今)「何れぞと草のゆかりもとひわびぬしもがれはつる武藏野の原」

しもがれ 霜枯【名】■霜がるること、又その物。(蜻蛉)霜枯の草のゆかりぞあはれなるこま歸りてもなつけてしがな」■次條の略。

しもがれ-どき 霜枯時【名】■草木の霜枯るる時候。草木の凋落する時節。しもがれ。一茶「人足も霜枯時や王子道」■景氣の惡しき季節。しもがれ。

しもきた 下北【名】〔地〕陸奥國九郡の一。斗南半島全部を占め、郡役所を田名部町に置く。

しもきたはんたう 下北半島【名】〔地〕となみはんたう(斗南半島)に同じ。

しもぎやう 下京【名】〔地〕なかぎやう(中京)を見よ。凡例「下京や雪積む上の夜の雪」

しもぎやう-もの 下京物【名】京都の下京より製出する物。上京物に比すれば、下品なる傾ありしによりて、特にいへり。

しもく 四木【名】しぼく(四木)に同じ。

しもく 撞木【名】しゅもく(撞木)に同じ。

しもく 齒木【名】やうじ(楊枝)を云ふ。(僧侶の語)

しもく 指目【名】指して見ること。人目をひくこと。注目。

じもく 耳目【名】■みみと、めと。■聞くと見ると。見聞。視聽。■上の意を承け、諸方の事情を知りて告ぐること、又その人。「耳目となる」

耳目見聞【句】耳に聞き、目に見ること。みきき。

耳目の官【句】■監察の官。■耳は聽を司り、目は視を司りて、各職とする所あること。

耳目の慾【句】耳や目より生ずる慾。

耳目を長ず【句】細心に注意して、視聽きたりす。

耳目を屬す【句】耳目を鍊てて注意す。

耳目を引く【句】人の注意を惹起す。

しもぐさ 霜草【名】〔植〕かるかや(刈萱)に同じ。

しもくさめ 撞木鮫【名】〔動〕しゅもくざめ(撞木鮫)に同じ。

しもぐち 下口【名】家のうしろにある入口。うらぐち。平家「女房の局のしもぐち邊にたたずんで」

しもぐち 霜朽【名】しもやけ(霜燒)に同じ。〔古語〕(蜻蛉)わらはべ、夜べの姿ながら、しもぐちまじなはんとて」

しもくづれ 霜頽【名】霜柱の解け消ゆること。

じもくてき 自目的【名】〔哲〕じもくてき(自己目的)に同じ。「同じ。

しもく-の-つむじ 【名】しゅせい(壽星)■に

しもくぶが 撞木鯱【名】〔動〕しゅもくざめ(撞木鮫)に同じ。

しもぐもり 霜曇【名】霜の降らんとする前に、空の曇ることなりとも、大いに降霜のありたる曉の空の曇りたることとともいふ。(古語)(蔗葉)「しもぐもりせむとにかあらむ久方の夜わたる月の見えぬおもへば」

しもけ 【名】きたかぜ(北風)に同じ。(かみけに對して)

しもげ 下毛【名】〔地〕豐前國六郡の一。高瀨川の流域。郡役所を中津(なかつ)町に置く。

しもげいし 下家司【名】家司の下役。武家にては、政所の案主(あんじゅ)・知家事(ちかじ)などの職掌に當りたり。下の家司。(かみ家司に對して)(古語)「源氏「隱じきしもげいしにて、殿にも仕うまつるものなり」

しもげる 【動下一自】霜氣る。野菜など、寒氣にあひて腐る。

しもご 下五【名】俳句の下の五文字。下五文字。

しもごえ 下肥【名】人糞を肥料として用ふるもの。こえ。

しもごかんぢやうしよ 下御勘定所【名】しもかんぢやうしよ(下勘定所)の敬稱。(內座に對して)

しもこしきじま 下甑島【名】〔地〕薩摩國の西方にある島。周回二十里餘。薩摩郡に屬す。

しもごしよ 下御所【名】『ごしよ(御所)■を見よ』將軍家又は大臣家以上の公卿の隱居したるもの、一家に同時に二三人ある時、その最も年若きもの。(上御所・中御所に對して)

しもごりやう-しや 下御靈社【名】ごりやうしや(御靈社)を見よ。

しもざ 下座【名】下方に位する座席。げざ。(末座・上座に對して) 猿蓑「去來「振舞や下座になほる去年の雛」

しもさうぢ 下掃除【名】厠の糞尿をさらひ取ること。さうぢ。

しもさうぢ-や 下掃除屋【名】厠の糞尿をさらひ取る人。おわいや。さうぢや。

しもさかわ 下賢輪【名】檜の賢輪の、下部にあるもの。

しもさき 霜先【名】寒くならんとする前。霜の降らんとする頃の始。一代男「千鮭(かぶ)は霜先の藥喰ぞかし」

しもさと 下里【名】ゐなか。むらざと。邊鄙。一代男「後は、二人の女も、花薗山のしも里に、まことの髮剃りて、世に棄てられ」

しもざぶらひ 下侍【名】清涼殿の殿上の南にありて、侍臣の遊宴する處。さぶらひ。

しもざま 下方【名】■しもかた(下方)に同じ。(上方に對して) 枕狩衣の前、しもざまにまくり入れて」■したこと。しもじも。下民。室町千疊敷「はねのくる猿の下、下樣ならぬ女の風情」

しもざむらい 下侍【名】格式の低き侍。津國女夫連「味方は纔かお小姓・お茶道・下侍五十騎ばかり」

しもしぐれ 霜時雨【名】北國にて、冬季霜多く、朝靄(あさもや)の如く立籠むること。

しもじにん 下神人【名】下役の神職。

しもじも 下下【名】したじた(下下)に同じ。薩摩歌「戸を敲き、下下わめけば」

じもじり 字綴【名】もじりの一種。「丸かぶり」を題にて、「好きか甜瓜(劒鎌・鉞)を持つ土民」といふ類。

しもじれる 仕縒れる【動下一自】紛糾して終に破る。しこじる。傾城色三味線「生國は都にて、身代ももじれ、大阪へ稼ぎのため罷下る」

しもすがた 下姿【名】■直衣(なほし)を著たる姿。■武家にて、上下(かみしも)を著たる姿。

しもすは 下諏訪【名】〔地〕信濃國諏訪郡にある町。諏訪湖の北岸。中仙道甲州路・伊奈路(參州路)の交會點。鐵道中央線の一驛。羅紗及び紡績業のために殷賑なり。溫泉湧出し、諏訪神社の下社あり。

しもすぼり 下すぼり【名】淫を貪ること、又その人。淫亂。

しもせ-くわやく 下瀨火藥【名】工學博士

下瀬雅允(ガサ)の發明したる火藥。黃色・微細の結晶をなせる粉末にして、主として彈丸の炸藥に用ひらる。長年月の貯藏を經ても變質せず、水に浸しても、發火に妨なし。日露戰役に用ひて、大いに効力を發揮したり。

しもせ-まさちか 下瀬雅允【名】〔人〕工學博士。廣島の人。工科大學を卒へ、印刷局に奉職して、黑色捺色インキを發明し、後、海軍に技師となり、明治二十六年謂はゆる下瀬火藥の發明あり。帝國學士院會員たり。同四十四年卒す。年五十三。

しもだ 下田【名】〔地〕伊豆國賀茂郡にある町。國の極南にして、太平洋に臨み、港を下田港と稱し、水深二十三四尋に及ぶ。橫濱及び清水港へ汽船の便あり。安政元年米國の軍艦この港に來りて通商を求め、由つて開國の端を開く。郡役所を置く。

しもだい 下代【名】次條の略。

しもだいくわん 下代官【名】武家の職制の一。代官に次ぎて、年貢のとりたて等を掌りしもの。しもだい。

しもだいどころ 下臺所【名】貴人の家にて、下下の人の食物を調ふる所。(かみ臺所に對して)

しもたかね 下高井【名】〔地〕信濃國十六郡の一。明治十三年に高井郡を二分し、その北方を以て、この郡を立つ。郡役所を中野町に置く。

しもだたみ 霜疊【名】霜の一面におきわたせること。

しもだて 下館【名】〔地〕常陸國眞壁(マカ)郡にある町。石川氏の舊藩地。郡役所を置く。

しもだていた 下立板【名】牛車(ギシヤ)の箱の側面、前後の袖の間、物見の下なる板の部分。

しもだ-てうやく 下田條約【名】江戸幕府が、安政元年露國の全權委員、プウチヤチン(E. Poutiatine)と幕吏筒井肥後守政憲・川路左衞門尉聖謨(トシアキラ)と訂結せる通好條約、及び安政四年に北米合衆國の全權委員、ハリス(T. Harris)と下田奉行井上信濃守・中村出羽守との間に結びし通商條約の併稱。

しもだて-じよう 下館城【名】常陸國眞壁郡下館町に在りし石川氏の居城。もと藤原秀鄕が城きしものといふ。後に伊佐氏・水谷勝氏ここに居り、德川氏に至りて、數氏を更へて、享保十七年石川總茂の居城となり、子孫に傳へて、明治に至る。

しもだ-ぶぎやう 下田奉行【名】江戸幕府の職制の一。老中の管下にして、伊豆國下田港に駐在して、出入の船舶・貨物を監査し、兼ねて地方の庶政を掌りしもの。元和二年始めて置かれ、定員は一人或は二人。享保五年浦賀奉行の置かるるや、廢せられ、天保・嘉永の間、時に置廢ありしが、六年また設置、萬延元年遂に廢止に歸せり。

しもだ-みなと 下田港【名】〔地〕しもだ(下田)を見よ。

しもたや 【名】『仕舞うた屋の訛』一商家の、商をやめたるもの。二商業を營まずして、生活せる家。

しもだらひ 下盥【名】身體の腰部以下に著くるもの、卽ち、ふんどし・腰卷の類を洗ふに用ふる盥。

しもぢ 下地【名】〔地〕三河國寶飯(ホイ)郡にある町。吉田川の北岸。一橋を以て、南岸の豐橋市と接す。

しもぢよちゆう 下女中【名】臺所などの用を辨ずる女中。(かみ女中に對して)

しもつ-え 下枝【名】淡條に同じ。「古語」紀「下枝(シモツエ)懸二青和幣一、白和幣一」「たせること。

しもつえだ 下枝【名】下方の枝。(上つ枝・中つ枝などに對して)

しもつが 下都賀【名】〔地〕下野國八郡の一。明治十二年もとの都賀郡を二分し、その南方の地に、もとの寒川郡を合はせ立てしもの。郡役所を栃木(トチギ)町に置く。

しもつ-かた 下方【名】一しもかた(下方)に同じ。(上方(カミガタ)に對して)源氏「しもつかたの京極わたりなれば」二したじた(下下)に同じ。(上方(カミガタ)に對して)

しもづかへ 下仕【名】院・宮・親王家・攝家などの、下ざまの事などを務むる女房。枕「しもづかへ四人してもて參るめり」

しもつき 霜月【名】陰曆十一月の異稱。「日前の暴風雨。

しもつき-あれ 霜月荒【名】霜月の二十三

しもつき-びらめ 霜月鮃【名】霜月の頃に捕ふる、大きなるひらめ。

しもつき-ぞら 霜月曇【名】山城國比叡山にて、天台大師の正忌、卽ち十一月十四日より十日間修する法會。法華經の論議を行ひ、學徒の力を試む。延曆二十年同寺止觀院にて行ひしを始とし、後に大講堂にて行ふこととなり、大同四年以來御齋會(イツサエ)に准ぜらる。十一月會。法華會。山門の大會(ダイエ)。(六月會に對して)

しもつけ 繡線菊【名】〔植〕薔薇(ライバ)科に屬する落葉灌木。諸國山地に自生し、又觀賞用として園藝せらる。高さ四五尺に達し、葉は長卵形にて鋸齒あり。淡紅又は白色の美花を繖形花序に著く。

(けつもし)

しもつけ 下野【名】〔地〕『もと上野(カミツケ)と相合して、一國を成し、毛野(ケヌ)と呼びしを、仁德天皇の時、上下に分ち、なほ大化の改新に、那須國(今の那須郡)を下毛野に合し、和銅年間、地名はすべて二字を用ふべき詔下るに及びて、毛の字を省きしもの』東山道に屬する一國。宇都宮市と河內・上都賀(カミツガ)・下都賀(シモツガ)・鹽谷(ヤシホ)・那須・安蘇・足利の八郡に分ち、全國栃木縣の所管たり。野州(ヤシウ)。

しもつけ-さう しもつけ草【名】〔植〕薔薇(ライバ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、また觀賞用として園藝せらる。莖の高さ約二尺、葉は鋸齒牙を有し、夏日、紅色又は白色なる五瓣の小花を開く。くさしもつけ。

しもつけぬ 下毛野【名】姓氏の一。崇神天皇の皇子豐城入彥命より出でたるもの。朝臣・君・國造の數氏あり。

しもつせ 下瀨【名】下方に在る瀨。(上つ瀨・中つ瀨に對して) 「上つ瀨にい杭を打ち、下つせにまぐひを打ち」

しもつ-ひげ 下髭【名】しにひげ(下髭)に同じ。(上(カミ)つ鬚に對して)「古語」和名「鬚、之毛豆比介、頤下毛也」「の音便。

しもつ-ぶくれ 下脹【名】しもぶくれ(下脹)

しもつま 下妻【名】〔地〕一筑後國の舊郡の一。明治二十九年上妻(カミツマ)郡及び生葉(イクハ)郡星野村と合して、八女(ヤメ)郡となる。二常陸國眞壁(マカベ)郡にある町。下館(シモダテ)町の南三里半餘。井上氏の舊藩地。

しもつま 下間【名】姓氏の一。源賴政の曾孫宗重を祖とす。宗重、親鸞に仕へて、蓮信房と號し、子孫本願寺の執事たり。

しもつま-じやう 下妻城【名】常陸國眞壁(マカベ)郡下妻に在りし城。鎌倉の初小山朝長この地に居り、子孫に傳ふ。のち多賀谷氏ここに居りて、豐臣秀吉に屬す。慶長五年石田三成に黨して、所領を沒收せられ、正德二年井上氏封ぜられて、明治維新に及ぶ。

しもつみち 下道【名】〔地〕古の吉備國の一部。後世の備中國下道(シタミチ)郡の地。下道郡は、明治三十三年賀陽(カヤ)郡と合して、吉備郡となれり。

しもつみち-の-あそみ 下道朝臣【名】〔人〕きびまきびの(吉備眞備)に同じ。

しもつ-やみ 下闇【名】その月の下旬のやみ。くだりやみ。『古語』賴政集「かいくだす鵜舟にかかるかがり火の見えぬ夜もなきしもつやみかな」

しもつ-ゆみはり 下弓張【名】かげん(下弦)に同じ。(上(カミツ)弓張に對して)

し-もつらかす 爲縋らかす【動四他】なしてみだれしむ。

しもづる 下津井【名】〔地〕備前國兒島郡にある町。瀨戸內海に臨み、山陽四國交通の要津たり。

しも-て 下手【名】一下の方。しもかた。下位。(上手(カミテ)に對して)二芝居又は能(ノウ)の舞臺の、見物人の方より指したる左の方。(上手(カミテ)に對して)三綱の右の方の綱。(上手(カミテ)に對して)

しもと 薪・楛【名】立木の直くして若き枝【古語】和名「薪、之毛止、木細枝也」

薪の棚【句】しもとを集めて、柳筥(やなぎ)のごとき形に編みたる、高さ二三寸、廣さ二尺の棚。上に薦を敷き、祭祀の際、器物を置くに用ふ。江次第「東茅一間、立二楛棚一置二祭物一」

しもと 笞【名】人などを打つに用ふる杖、むち。萬葉「しもと取る里長が聲はねやとまで來立ち呼ばひぬ」

しもと-かき 薪垣・楛垣・蕃【名】しもとを、そのまま結びつけて造れる垣。名義抄「蕃、シモトカキ」

しもと-づくゑ 薪机・楛机【名】しもとを結び束ねて造りたる祭祀用の机。

しもとば 下鳥羽【名】【地】山城國紀伊郡の村。加茂川を隔てて、上鳥羽の南にあり。古稱、草津(クサヅ)。「じ。

しもと-ばやし 薪林・楛林【名】次條に同

しもと-ばら 薪原・楛原【名】しもとの生ひ茂れる原。起「茂林、シモトバラ」

しもと-どひや 下問屋【名】取次をする問屋。(せどみ問屋に對して)

しもと-どほり 下通【名】市街の下の方にある街路。(かみ通に對して)

しもと-まつり 薪祭・楛祭【名】うさかしんじや(鵜坂神社)を見よ。

しもとめ-ひでのしん 下戸米秀之進【名】【人】さうまだいさく(相馬大作)を見よ。

しもと-ゆふ 薪結ふ・楛結ふ【枕】しもとを結ふには、苅(カリ)などを用ふるより、かつらぎやま(葛城山)にかけていふ。古今「しもとゆふかつらぎ山に降る雪の間なく時なく思ほゆるかな」

しもに-し 下西【名】西北より起る風を云ふ。【越後國の方言】

しもにた 下仁田【名】【地】上野國北甘樂(キタカラ)郡にある町。附近、養蠶・製絲の業盛んにして、高崎市より輕便鐵道通ぜり。

しもにた-ねぎ 下仁田葱【名】上野國北甘樂(キタカラ)郡下仁田附近より産する葱。良品を以て聞ゆ。一名、上州の一本葱。

しもに-にだん 下二段【名】【語】次條に同じ。

しもにだん-くわつよう 下二段活用【名】【語】動詞の、五十音圖中のウ列とエ列とにのみ活用するもの。口語にては、すべて下一段活用に轉ず。下二段活。下二段。

しもにひかは 下新川【名】【地】越中國九郡の一。明治十三年もとの新川郡を三分し、早月(ハヤツキ)川以北を以て立てしもの。郡役所を魚津(ウヲヅ)町に置く。「方言」

じもね 【名】ふれい(無禮)を云ふ。【薩摩國の】

じもの 自物【接尾】名詞の下に添へて、「といふ物」の意を表す。「ししじもの」「いぬじもの」

しもの-さんよ 下の參與【句】さんよ(參與)の條下を見よ。

しもの-しま 下島【名】【地】對馬國の一部たる島。周回五十里。

しものせき 下關【名】【地】長門國の市。豐浦(トヨラ)郡の南に接し、この國第一の都會たり。豐前國門司と相對して、關門海峽を挾む。もと赤間關と稱し、俗に馬關(バカン)の稱あり。周防國上(カミ)關・中關と對稱して、下關と呼ぶ。港は、我が國開港場の一にして、內外船舶の出入頻繁なり。

下關の戰【句】文久三年五月攘夷黨なる長州藩は、米・蘭・佛等の船舶を下關に砲撃せしめ、これら諸國及び英國の四箇國は聯合艦隊を作りて、復讐戰を挑み、終に長州藩の諸砲臺を陷れ、陸戰隊を上陸せしむるに至り、長州藩力屈して、和を乞ひ、幕府は償金三百萬弗を支拂ひて、局を結ぶに至りし戰。

しものせき-かいけふ 下關海峽【名】【地】『峽の字の音、正しくはかふ』本州と九州との間に通ずる海峽。日本內海の咽喉を扼し、その最狹部なる早鞆瀨戸は、幅員僅かに六百メエトルにて、通航容易ならず。長豐(チヤウホウ)海峽・馬關(バカン)海峽。

しものせき-でうやく 下關條約【名】ばくわんでうやく(馬關條約)に同じ。

しもの-たいし 下太子【名】しやうぐうじ(勝軍寺)を見よ。

しもの-にだん 下二段【名】【語】次條の略。

しもの-へや 下部屋【名】江戸幕府の營中にて、若年寄の事務を執りし室。(上(カミ)の部屋に對して)「を見よ。

しもの-まち 下の町【句】しも(下)の條下

しもの-みや 下御井【名】伊勢の豐受(トヨウケ)宮の傍、下部阪の右にある井。上御井(カミノヰ)に變りありたる時、神饌調理の用水とす。

しもの-ゆみはり 下の弓張【句】ゆみはり(弓張)の條下を見よ。

しもばしら 霜柱【名】■霜の氷りて、柱の如くなり、表土を擡(モタ)げ立ちたるもの。■【植】『冬、その枯れたる莖裂けて、中に氷柱の結ぶによりていふ』脣形(シンケイ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。莖の高さ約二尺に達し、葉は鋸齒を有し、夏日、白色の脣形花を開く。しもばしらさう。ゆきよせさう。「同じ。

しもばしら-さう 霜柱草【名】【植】前條に同じ。

しもはた 下機【名】布などを織るに用ふる機。蜻蛉日記「布織る下機返し組みて、庭木の松にもたせかけ」

しもはぶ 下埴生【名】【地】下總國の舊郡の一。明治二十九年印旛(インバ)郡に併せらる。

しもばら 霜腹【名】霜などの降る寒き夜に催す腹痛。

しもばら-け 霜腹氣【名】霜腹の痛む氣味。

しもばれ 霜腫【名】しもやけ(霜燒)に同じ。

しもびさし 下廂【名】勝手の方にある廂の間(ま)。蜻蛉「袴引上げて、下廂よりめぐりて、いく」

しもびと 下人【名】■下櫓(ヤグラ)の人。下男。下女。源氏「知れるしもびとしてやりけり」■地下(ヂゲ)の人。(うへ人に對して)

しもぶくら 下脹【名】次條に同じ。

しもぶくれ 下脹【名】下の方のふくれたること。しもっぶくれ。(多くは、顏などにいふ)

しもふさ 下總【名】■【地】東海道十五國の一。千葉・印旛(インバ)・東葛飾(ヒガシカツシカ)・香取(カトリ)・海上(カイジヤウ)・匝瑳(ソウサ)の六郡は、利根川本流以南に位して、千葉縣に屬し、猿島(マシマ)・結城(ユフキ)・北相馬(キタサウマ)の三郡は、その以北に位して、茨城縣に屬す。總州。北總。

しもふさ-ごち 下總東風【名】『下總國は、東京の東方にあたるよりいふ』ごち(東風)を云ふ。【東京の語】

しもふり 霜降【名】■霜の降ること。■黑・紺もしくは鼠の捺揚(ヨリアゲ)絲を經緯として、白の微塵のごとき細點を織出したるもの。■鮭・赤貝などを湯がきて、醬油を附けたる料理。■牛肉の白き斑點あるもの。

しもふり-おり 霜降織【名】霜降■の織方、又その織方なる織物。

しもふり-かん 霜降燗【名】酒の燗の强くして、ちんちんと泡立つこと。

しもふり-ごえふ 霜降五葉【名】【植】はひまつ(這松)に同じ。

しもふり-づき 霜降月【名】しもつき(霜月)に同じ。

しもふり-ひば 霜降檜葉【名】【植】ひむろに同じ。

しもふり-まつ 霜降松【名】【植】しもふりごえふ(霜降五葉)に同じ。

しもふり-らしや 霜降羅紗【名】霜降の模樣を織出したる羅紗。

しもべ 下邊【名】しもの方。しもつべ。しもて。(かみ邊に對して)【古語】萬葉「しもべには蛙つま呼ぶ」

しもべ 下部【名】■地位の低きこと、又その人。【古語】起「下衆(ゲシユ)十二人」■身分低く、雜事に役せらるる者。めしつかひ。下男。奴僕。【僕】源氏「しもべなど遣して、よもぎはらはせ」■檢非違使(ケビヰシ)に屬して、盜賊を捕へ、獄囚を檢べ、罪人を配所に押送する等の事をなしし低き役。■鎌倉幕府の政所(マンドコロ)及び侍所に屬して、雜役に服せし賤しき職。足利時代に、公人(クニン)と呼びしものに當る。

しもへい 下閉伊【名】【地】陸中國八郡の一。郡役所を宮古町に置く。

しもべ-そだち 下部育【名】下等のそだち。身許のいやしきそだち。

しもべ-べや 下部屋【名】召使などの居る部屋。【蜻蛉「これ縫ひたまはずば、下部屋に

籠めたてまつらん」

しもぼふし 下法師【名】身分の卑くして、人に使はるる法師。中間(ヂウゲン)法師。下僧(ゲソ)。

しもまちき 下総城【名】〔地〕肥後國十二郡の一。郡役所を松橋(マツバセ)町に置く。

しもまち 下町【名】「下の町」に同じ。

しもまはり 下廻【名】船體の下半部。

しもまる 霜丸【名】〔植〕柿の一種。果は細長くして、縦に四條の溝あり。霜の降る頃熟して赤くなり、甘味強し。

しもみぐさ 霜見草【名】〔植〕■きく(菊)(一)に同じ。■ふゆぎく(冬菊)に同じ。〔古語〕「霜見草」冬菊。幾世へし松の木かげのしもみぐさ植ゑける時を誰れも知らねば」

しもみのち 下水内【名】〔地〕信濃國十六郡の一。郡役所を飯山町に置く。

しもむ 下無・下无【名】じふにりつ(十二律)を見よ。(かみ無に對して)

しもむてう 下無調・下无調【名】下無の調子。かくてう。(かみ無調に對して)

しもん 指紋【名】人の指先の皮膚にある紋樣。これを捺(オ)したるもの。絶對に同一なるものなしといふ。しもんはふ指紋法參照。

しもん 市門【名】市の入口にある門。

しもん 支文【名】公文(クモン、(二)に附帶して上つる帳簿。くもん(公文(二))參照。

しもん 識文【名】しぶん(識文)に同じ。

しもん 諮問【名】はかり問ふこと。問ひ尋ぬること。諮詢。

しもん 私門【名】個人の門地。私家。

しもん 四文【名】『四文錢の輕輕しきに譬へたるなるべし。又、四文店の、何でも四文といふより起りしならんともいふ』かるがるしく、何事にも差出づることの譬。細撰金秤目「それを四文と腰を抑す武兵衛さん一回わりやあぢな所へ四文と出て、さいこさいをいふが」

しもん 四門【名】■眞言陀羅尼の方位として、東を發心(ホツシン)門、南を修業門、西を菩提門、北を涅槃門とすること。菩場の四方の門などに、この名を命ずることあり。■〔佛〕『門は能通の義、この四に依りて、眞性實相の理に悟入するを得るより、門といふ』一に有(ウ)門とて、一切の現象を空なりと斷じやすき偏執(卽ち斷見)を治せんがための法門、二に空門とて、一切の現象を有なりと斷じやすき偏執(卽ち常見)を治せんがための法門、三に亦有亦空(ヤクウヤクク)門とて、斷見と常見との兩偏見を有する者のための法門、四に非有非空(ヒウヒク)門とて、非有非空の理を知り、常にこれを觀じ、迷妄を斷破し、眞理を證悟せしむる法門との併稱。〔天台宗の語〕芭蕉「月かげや四門四宗もただ一つ」

しもん 死門【名】〔佛〕『死はこの世よりあの世への關門なるよりいふ』死去。死。死關。

じもん 耳門【名】〔醫〕耳のあなの入口。

じもん 寺門【名】■寺の門。■近江國園城寺(卽ち三井寺の稱。■〔佛〕じもんは(寺門派)の略。(山門に對して)正統記「山門・寺門は、天台をむねとする故にや」寺門の三門跡【句】〔佛〕寺門派に屬して、門跡たる三箇寺、卽ち圓滿院・聖護院(シヤウゴ)院・實相院の併稱。(「山門の三門跡」に對して)「と。

しもん 自問【名】われとわが心に問ふこと。

しもんあん 諮問案【名】決定する前に、或機關に諮問する議案。

しもんきくわん 諮問機關【名】じもんきくわん(諮詢機關)に同じ。

しもんくわい 諮問會【名】諮問のために開かれたる會合。

じもんじとふ 自問自答【名】自らの疑問を、わが心にて判斷すること。

しもんしんか 四門親家【名】親類の親類。またえんじゃ。

しもんせん 四文錢【名】■『一箇が當時の通用錢四文に當りし錢』寛永錢の一種。青波錢。卽ち寛永錢。明治時代には、二厘に通用せり。■紋所の一。青波錢一箇をあらはしたるもの。

じもんは 寺門派【名】〔佛〕近江國の園城(ヲンジヤウ)寺、卽ち三井寺を本山とする天台宗の一派。智證大師を祖とす。寺門。(山門派に對して)

しもんはふ 指紋法【名】『英 Finger print』人の指紋を類聚して、犯罪人を鑑識するに便する法。西曆一八二〇年獨逸のプウルキンヘ博士の發見に係る。しもん(指紋)參照。

しもんみせ 四文店【名】次條に同じ。

しもんや 四文屋【名】江戸時代の末頃、四文錢一箇にあたひする程の物を賣りし大道商人。しもんみせ。

しもんゐ 司門衞【名】ゐもんふ(衞門府)に同じ。(淳仁天皇の御宇、一時改められし稱呼)

しもゝ 霜桃【名】ふゆもも(冬桃)に同じ。和名抄「冬桃、今案、俗云二霜桃一是也」

しもや 下屋【名】■「下(モ)の屋」に同じ。〔古語〕源氏「しもやにぞ繕ひて、やどり侍るを」■雜物を置き、雜事を執りし所。また此に浴場を設置せることあり。寢殿造の後方に設けたる屋舍。雜舍。

しもやかた 下屋形・下館【名】しもやかた。次のやかた。しもやしき。

しもやけ 霜燒・霜焚【名】さうしやう(凍傷)に同じ。

しもやしき 下屋敷【名】上屋敷の控屋敷。したやかた。したやしき。別邸。下館。(かみ屋敷・なか屋敷に對して)一代玄「この勤止めさせて、門前町の御下屋敷に置かれ」

しもよ 霜夜【名】■霜の降る寒き夜。霜夜(シモヨ)。■名香の名。ちんの一種。香閑かにて冴えたる所あり。雲井よりは濃く、少し苦き香あり。

しもよのかね 霜夜の鐘【句】霜の强く降りたる夜の鐘。音冴えて遠くに響く。

しもよけ 霜除【名】草木の霜に傷むを防ぐために、藁などにて作る覆。しもがこひ。一葉母親を霜除にして寢たるかな」

しもよのかね-じふじ-の-つじうら 霜夜鐘十字辻占【名】脚本の一。巡査の保護士族の乳貰・按摩の白浪・天狗の生醉・楠公の奇計などの題を與へられたる體にし、三題噺風にまとめたるもの。六浦正三郎なる者、天下のためにその師杉田氏を殺し、その子に仇を討たれんとすることを本筋とす。河竹新七の作。

しもり 沈【名】魚釣に用ふる小さき浮子(ウキ)の上に、青貝を附けて重くし、浮子を沈むやうにせるもの。

しもろくろ 下轆轤【名】傘の開閉を自由ならしむるため、その支骨の一端を把束する器具。

しもわらは 下童【名】雜事に召使ふわらは。〔古語〕源氏「かしこに侍りけるしもわらはの、ただこの頃の宰相が里に出でまうで來て」

しもわれ 霜割【名】急激なる寒氣のために、樹幹の外部は直ちに收縮するに拘はらず、內部は比較的溫かにして收縮せざるため、つひに中心に向ひて、縦條の割目を生ずること。

しもゐぢご 下越後【名】〔地〕越後國の阿賀野川の以北、卽ち北蒲原・岩船二郡の地。城(上越後・中越後に對して)

しもをとこ 下男【名】げなん(下男)に同じ。浮世風呂「洗粉の袋はぶんぶんと匂ひて、下男の鼻をうがち」

しもをなご 下女子【名】次條■に同じ。〔京都・大阪の語〕天の橋立「駕籠の衆、いたう更けたのと、上(カミ)の町から、下女子、迎ひの駕籠も大和屋の」

しもをんな 下女【名】■階級の低き女官。〔古語〕枕「主殿司こそなほをかしきものはあれ。しも女のきはは、さばかり美しきものはなし」■げぢよ(下女)に同じ。(かみ女に對して)

しもをれ 霜折【名】天氣の曇りて寒さこと。一說に、空曇りて、霜の降らぬことなりと。〔古語〕新六「今日はまた山の朝けのしもをれに空かき曇り雨は降りつつ」

しや 社【名】■支那にて、土地の神、又その神の祭典。しやじ(社日)參照。■やしろ。神社。祠祀。■古、支那にて、二十五戸を

一團とせし部落。四支那にて、五穀を生ずるものとして祭りし土の神。その廟、内には、土を積みて、上を平にし、樹木を植ゑ、又は石にて造りし主を立て、これを社壇といひ、外には、木を廻ね、土にて塗りたる高き壇(キ)、又その外に、更に低き土塀を繞らしたり。しゃしょく(社稷)參照。五臺灣の行政區劃の最も低く狹きもの。一社もしくは數社に、區長一人を置く。區長は、明治四十二年以前には、社長と呼びたり。六くみあひ。團體。結社。七くわいしゃ(會社)の略。

社未だ屋(ク)せず【句】『社に屋す』を見よ』國未だ亡びず。

社に屋(ク)す【句】『禮記の郊特牲篇に「天子大社必受二霜露風雨一以達二天地之氣一也。是故喪國之社屋之、不レ受二天陽也」とあり。古、支那にて、亡國の社稷には屋根を設けて、天光を受けしめざる習なりしよりいふ』國亡ぶ。

しゃ 斜【名】ななめ。はす。すぢかひ。

斜に構ふ【句】一剣術にて、兩手にて、刀の柄を持ち、その切先を上げ、斜にして構ふ。二固く身構をなす。

しゃ 紗【名】經(タテ)・緯(ヨコ)共に生絲を用ひ、緯絲一本を打込むごとに、經絲を搦ませて織りたる織物、即ち一種の搦織(からみおり)。薄くして輕く、帷又は夏羽織などに用ふ。和名「紗俗云レ射」

しゃ 舍【名】一かりのやどり。やど。客舍。二いへ。屋舍。三星のやどり。星座。四昔の支那の軍制にて、軍隊が一日三十里を行軍して宿すること。舍次。

しゃ 瀉【名】げり(下痢)に同じ。

しゃ 灸【名】火にかざして加熱したる肉。あぶり肉。

しゃ 者【名】それしや(夫者)の略。女殺油地獄「桔梗染の腰繩り、鳥縞の帶、しやじやわいの」

しゃ 射【名】弓射る技。弓術。射術。

しゃ 蔗【名】〔植〕さたうきび。甘蔗。

倒(サカ)に蔗を食ふ【句】「蔗境に入る」に同じ。

しゃ 赦【名】一罪過をゆるして問はざること。二昔古凶・禎祥の大變又は功德・追德などのために、罪人を赦すこと。三大赦と特赦との總稱。四特典にて、罪人をゆるすこと。常赦・大赦・非常赦の三種あり。

しゃ 視野【名】『獨Sehfeld』一頭をも眼をも動かさずして、同時に見得る面積。視界。視場。二望遠鏡・顯微鏡等にて、その中に見ゆる所。

しゃ 子夜【名】夜の子(ネ)の刻。夜半に中る午後十二時。

しゃ 四野【名】四方の野。宇治「しやくび斬って、犬にかひてん」

じゃ 蛇【名】一蛇の大なるもの。をろち。二大酒のみ。大酒家。淀鯉出世灘萬「どちらへ似ても蛇の子孫」三毎年六月朔日、東京淺草なる淺間神社(俗稱富士)の祭に、蟲除として賣る麥稈製の蛇の形。江戸時代には盛んに行はれたり。武玉川「江戸は蛇が出て暑い朔日」

蛇が蚊【句】次條の略。〔諺語〕

蛇が蚊を呑んだやう【句】飲酒の飽足らずして、更に需むるところある狀。

蛇が出さうで、蚊も出ぬ【句】大袈裟のものが出づるならんと豫想せるに、實は些少の物も出ぬ。〔諺語〕

蛇の鮨(スシ)でも食ふ【句】いかなる物をも貪り食ふ。〔諺語〕

蛇の道は蛇(ヘビ)【句】蛇の過ぎたる道は、他の蛇がよく知るごとく、その道に通ぜる人は、能くその道を知る。〔諺語〕

じゃ 麝【名】〔動〕じゃかうじか(麝香鹿)に同じ。

麝あれば香し【句】『金剛經・明心寶鑑等に見ゆ』才智あれば、おのづから世に知らるる譬。〔諺語〕

じゃ 邪【名】一よこしまなること、又その人。二症惡しき熱病。邪氣。邪熱。

邪は正に勝たず【句】『戰國策の秦國の條に「以レ邪攻レ正者亡」とあり』邪惡は正義に敵するを得ず。〔諺語〕

じゃ 時夜【名】鷄の夜間の時刻を告ぐること。

じゃ 次夜【名】次の夜。

じゃ【助動】ぢやの誤。

じゃあ【貌】じゃあじゃあに同じ。

じゃあく 捨惡【名】惡事・惡心を捨去ること。太平記「今日は佛生日とて、灌佛の水心に心を澄し、供花・燒香に經を翻して、捨惡修善を事とする習なるに」

じゃあく 邪惡【名】よこしまにして惡しきこと、又そのもの。

じゃあ-しゃあ【貌】一水などの流れ落る音、又水を注ぎかくるさま。二恥を恥とも思はぬさま。鐵面皮。

じゃあ-じゃあ【貌】前條(一)を强めていふ語。

じゃあ-つく【名】しやあしやあとせる人を罵りていふ語。恥しらず。鐵面皮。

じゃあなりずむ(英Communism)【名】新聞・雜誌に適合せる方式。

じゃあなりずむの文藝【句】新聞雜誌の雜報記事風の文藝。眞面目なる內心の要求より出でにあらずして、新聞・雜誌により、流行を作らるる文藝。

じゃあびん(英Shaping)【名】せえぴんぐまし「記號」に同じ。

**じゃあぶ(英Sharp)【名】〔音〕えいしゃあぷ(嬰いんの俗稱。

じゃあん 謝安【名】〔人〕支那晉の政治家。字は安石。司馬となり、後に、太保に進む。高潔を以て稱せらる。太元十年歿す。年六十六。

じゃあん【貌】鐘の音。狂言鐘音「さらば撞いて見よう。じゃあん、もん、もん、もん」

じゃある-の-ていりつ シャアルの定律【名】〔理〕『英Charles' law』佛蘭西人シャアル(J. A. Charles)の發見せる氣體の膨脹に關する法則。即ち氣體の種類如何を問はず、一定の壓力の下に於ては、その膨脹係數は皆等しといふもの。げえりゆさっくの定律。

じゃい 赭衣【名】一赤き色の衣服。二罪人の著る衣服。「意志。

じゃい 謝意【名】一感謝の心。二謝罪の寫意【名】繪畫にて、形似を主とせず、その內容・主觀を描出すること。

じゃい 邪意【名】よこしまなる心。邪心。

じゃい 社友【名】一同じ組合に屬する仲間。二社員以外にありて、社中の事を助くる徒。社中。「社の所有。

じゃいう 社有【名】一神社の所有。二會

じゃいう 赦宥【名】しゃめん(赦免)に同じ。

じゃいう-ほうしょ 赦宥奉書【名】鎌倉時代及び室町時代に奉行(ブギヤウ)の發したる赦令。

じゃいなけう 耆那教・闍伊那教(英Jainism)【名】『耆那は、一切世間苦を超脫せる勝者の義、即ち斯かる聖人の開きし宗教なりとて名づけしもの』佛教より少しく早く印度に起りたる宗教。或は佛教の一支派なりともいふ。數祖跋陀摩那(マハヴ)は中印度刹帝利(セツテイ)種の出なりじな教。

じゃいねすとく-ときふけい シャイネストク呼吸型(獨Cheynestokesches Atmen)【名】〔醫〕呼吸現象の一。腦疾患の固有症にして、肋膜腔、腹腔の滲出物又は腫瘍の爲に、壓迫的に息切(イキ)をなすこと。

じゃいん 車胤【名】〔人〕支那晉の學者。字は武子。家貧にして、油を得る能はず、螢を集め、その光によりて勉學し、官吏部尙書より司空に至る。元顯の過を奏せんとして、事泄れ、逼られて自裁す。けいせつ(螢雪)參照。

じゃいん 邪淫・邪婬【名】一よこしまにして、禮を失すること。二〔佛〕五戒の一。妻妾又は夫にあらざる者と淫事を行ふこと。邪婬戒。堀川波の鼓「邪淫の惡鬼は身を攻めて」

じゃいん-かい 邪婬戒・邪婬戒【名】〔佛〕前條二に同じ。

じゃいんさう 蛇茴草【名】〔植〕いぬいたり(犬虎杖)に同じ。

じゃいも【名】〔植〕かがいも(蘿蔔)に同じ。

じゃう 莊・庄【名】一城市外の一地區。二

じゃうえん(莊園)に同じ。源氏「領じたまふ御しやう・御牧(モク)」三莊園の制廢れたる後も、なほその名を存せし土地。四臺灣の行政區劃のうち、街よりは小さく、社よりは大きなるもの。

じゃう 牀・床【名】ゆか。とこ。床上。寢臺。

しやう 將【名】一軍隊の長。二古は近衛府の官名、今は陸海軍の官名。共に、大・中・少の三等あり。

將に將たり【句】大將分として、人を統ぶる度量技能あり。

しやう 漿【名】一味うまき飲み物。こんづ。二のみもの。しる。飲料。

漿を請ひて、酒を得【句】望むものより善きものを得。〔諺語〕

しやう 醬【名】ひしほ。味噌。

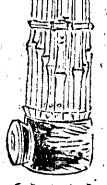
しやう 牆・墻【名】かき。かきね。「語」

牆に耳あり【句】「垣に耳」を見よ。〔諺語〕

牆に面す【句】『書經の周官篇に「不レ學牆レ面、莅レ事惟煩」、論語の陽貨篇に「人而不レ爲二周南・召南一、其猶二正面牆立一也焉」とあり。牆に對して立てば、一歩も進む能はざるよりいふ』無學の者の世に出でて活動する能はざる譬。〔諺語〕

しやう 檣【名】帆ばしら。

しやう 笙【名】支那及び我が國にて用ふる一種の管樂器。現今我が國にては、雅樂及び祭祀に用ふ。圓筒形なる空匣、即ち匏(ホウ)と稱する物の上に、十三・十七又は十九の竹管を圓形に立てて插入し、その各脚部、即ち根纔(ネザン)と稱する部分に、鐶銅(クワンドウ)の薄片より成る簧(クワン)を附し、空匣の側面に一の吹口ありて鳴らすやうにせるもの。匏は桐材にて製し、通常その横側に、時繪を施す。しやうのふえ。さうのふえ。さう。


（うやし）

しやう 生【名】一生きて居ること。生存。二いのち。生命。徒然『生を貪り、利を求めて」三いっしょう。生涯。四〔佛〕『梵(Jāti)(惹多)の譯語』有爲法(ウヰホフ)の現起すること。生ある者は皆死す【句】「生(セ)ある者は死あり」に同じ。〔諺語〕槃花「一切世間に生ある者は皆死す」

生・住【句】〔佛〕次條の略。

生・住・異・滅【句】〔佛〕「四法の四相」を見よ。徒然『生住異滅のうつりかはるまことの大事は、たけき河の漲り流るるごとし」

生を變ふ【句】うまれかはる(生變る)に同じ。狂言ぬけがら「鬼になるならば、生をかへてなりとも、ならいで」

生を引く【句】死にし後までも、この世に執心殘る。太平記「最後の一念に由って、善惡の生を引くといへり」

生を隔つ【句】死にて、あの世の人となる。幽明その界を異にす。平家『まことに存生の時ならば、大納言入道殿こそ如何にとも宣ふべきに、生を隔てたる習ほど恨めしかりけることはなし」

この生【句】この世における生涯。現世の生活。大鏡「この生には、御數珠とらせたまふことはなくて」「よ。

生・老・病・死【句】〔佛〕しく(四苦)を見よ。

しやう 性【名】一うまれつき。性分。天稟。資稟。二物のたち。しやうあひ。性質。維川民俗名所鑑『見たらばちやっと氣を通し、外づさうと思ふたが、性になりは、扨餘り早まって」三しやうね(性根)に同じ。四〔佛〕萬有の原因。本體。五陰陽家にて、人の生れたる年・月・日の干支を十二宮・二十八宿・九曜・五行等に配し、相剋(サウコク)相生(サウジヤウ)の理に由りて、禍福・吉凶などを定むるもの。

性も懲も無し【句】不注意のために同じ過失を繰返す。心(シン)も懲も無し。

しやう 姓【名】せい(姓)に同じ。〔古語〕枕「こと人の子になりて、平などいへど、ただもとの姓を、若き人人ことぐさにて笑ふ」

しやう 省【名】一『支那漢の元帝、その皇后の父の名を禁といひしより、禁中を改めて、省とせし由、漢書の註に見ゆ』禁中。禁裡。二『支那にて、禁中に設置せられしよりいふ』中央官署の名。例へば、六朝の梁・陳及び唐・宋時代の尚書・門下・中書の三省、我が國中古の八省、中務(ナカツカサ)・式部・治部・民部・兵部・大藏・刑部・宮內・現制の十一省(宮內・內務・外務・陸軍・海軍・大藏・司法・文部・農商務・遞信・鐵道)の類。三『支那の元の代に、宋代の三省中、尚書省をして、政務を統一せしめ、行中書省(略して行省)即ち中書省の出張所の如きものを地方に十箇所設け、中書本省の官を以て、出でて地方の行政を分掌せしめしに本づく』支那最高の行政區劃。

しやう 症【名】『この字、康熙字典に載せざれども、五雜俎・溫疫論・水滸傳等に見えたれば、新井白石の同文通考に、和字の部に收めたるは誤なり』病氣の質。病性。源氏冷泉帝「法眼かぶりを振って、いやいや輕き症にてなし」

しやう 賞【名】褒美として賜ふ物。褒美。

しやう 史生【名】ししやう(史生)に同じ。補名史生、俗二音如レ嘗」

しやう 章【名】一文章の中の大なる段落。二文章・文詞。三おしで。印。印章。四しるし。表識・徽章。五あや。いろどり。かざり。文飾。文采。六漢文の文體の一。天子に對して、謝恩又は慶賀を表するもの。漢代に行はれ、唐以後に廢れたり。七〔天〕めとんじゅくわんき(メトン循環期)に同じ。

章を斷ち、義を取る【句】「斷章取義」を見よ。

しやう 商【名】一『商(カ)る義。孟堅子に「商之爲レ言、商二其遠近一度二其有亡一、通二四方之物一故謂二之商一也」とあり』あきなひ。商業。商人。二〔數〕被除數を除數にて除したる結果の稱。三〔音〕五音または七音の一。四星宿の一。即ち二十八宿中の心(コヽロ)の別稱。西方に位す。商星。しんしやう(參商)參照。五『もと祖先契(ソセツ)が、唐虞の代に、商即ち今の陝西(セン)省商州に封ぜられしによりいふ』いん(殷)の舊稱。

しやう 正【名】一少しも違はぬこと。そのままなること。いきうつし。淨瑠璃『そのの中にある姑婆の口眞似は、あの婆に正だよ」二中古及び明治初年の諸司の長官。明治初年には、正の下に權正(ゴンシヤウ)をも置き、共に奏任としたり。「宰相。大臣。

しやう 相【名】一相(スケ)くる者。輔佐。二

しやう 祥【名】一めでたきしるし。古祥。瑞祥。二一周忌と二周忌との稱。

しやう 匠【名】たくみ。職人。工匠。

しやう 瘍【名】丁年に充たずして死ぬこと。夭死。

しやう 觴【名】さかづき(酒杯)に同じ。

しやう 償【名】ばいしやう(賠償)に同じ。

しやう 娼【名】しやうぎ(娼妓)に同じ。

しやう 象【名】一すがた。かたち。二易占にあらはれたるかたち。うらかた。

しやう 請【名】請ひ招くこと。翼古教信七遍週されば、若君は閻魔王の請によりて、黃泉に到り給ひしこと」

しやう 掌【名】一手のひら。たなごころ。二明治の初、各官署に置き、侯人を通じ、書疏を達し、使都を檢することを掌りし判任官。同十年廢せらる。「省掌」「官掌」「坊掌」

掌を反(ヘ)す【句】「掌(コヽロ)を返す」を見よ。

掌を指(サ)す【句】「掌(コヽロ)を指すを見よ。

しやう 鉦【名】雅樂用の鉦鼓より出でたる金屬製の擊樂器。形ふせがねに似、絲にて吊して、左の手に持ち、右手にせる槌形の桴(バチ)にて、すり、又は叩きて鳴らす。馬鹿囃子・芝居の囃子などに用ふ。かね。

しやう 唱【名】〔文〕古詩より出でたる漢詩の一體。

しやう 尙【名】姓氏の一。舊琉球藩王家の姓。琉球の王統はもと天孫氏なりしが、姓を易ふること五度、永享二年支那明宣宗より、尙姓を贈られ、始めて尙氏を稱す。明治維新後、侯爵を授けらる。

しやう 紫陽【名】『しやうしよゐん(紫陽書院)を見よ』しゅしがく(朱子學)の異稱。「その學、紫陽を主とす」

しやう 贓養【名】馬飼の如き賤しき身分の者。こもの。厩徒。

しやう 仕樣【名】しかた。方法。薩摩歌「泣かずに言はうと思へども、如何も涙がとめられぬ、出來た仕樣ぢやござんすまい」

仕樣・模樣【句】『意味も似、語路も同樣なる語を重ねてあやなしたるもの』前條に同じ。日本振袖始「仕樣・模樣もありさうな事」

しやう 飼養【名】かひやしなふこと。畜養。飼育。

しやう 章【助數】支那の古代の曆法にて、年月を數ふるに、十九年づつを一期として

いふ語。しやうどう(章動)参照

しやう 正【接頭】■『神の位には、清みて、しやうと唱へ、人の位には、濁りて、じやうと唱ふる舊慣あり』位の各階を上下に分ちたる、その上級のもの。(從に對して)■正しく、その時刻に當れること。生駒朝顔萬「いかさま、明日は、しやう七つの出立」物揃「人は武士正九つに女郎を買ひ」

じやう 上【名】■かみ。うへ。上等。■『支那にて、司馬遷の用ひはじめしもの』天皇。主上。■天皇に歌など奉るとき、作者の名の下に、やや片よせて、小さく書く文字。增鏡「制に應ずと、じやう文字載せられたるも、內宴のためしとかや」■上書などする時の包紙の上に記す文字。■書翰文の初、又は封皮に記す敬語。■(語)じやうしやう(上聲)の略。「平・上・去・入」

上の上【句】 最も上等なること。(「下の下」に對して)

じやう 常【名】■長さの單位。支那にては尋の二倍、即ち一丈六尺、我が國にては一丈三尺なりといふ。■おやう(定)を見よ。

じやう 情【名】■物事に感じて、心の動くこと。感動する心。感情。■なさけ。情愛。■男女間の情愛。■まごころ。誠意。■ことわり。條理。■まこと。事實。事情。情況。情勢。■おもむき。

情強(こは)し【句】 情を張ること甚し。強情(がうじやう)なり。

情を賣る【句】 「情(なさ)を賣る」に同じ。

情を情に立つ【句】 情を張り通す。

情を立てる【句】 人情をつくす。

情を通ず【句】■樣子を通知す。心を通はす。內通す。■男女ひそかに心を通はす。私通す。

情を張る【句】 『じやうばり(情張)を見よ』意地を張りとほす。我意を曲げず。

じやう 狀【名】■ありさま。やうす。狀況。事狀。■事狀を具して上申する文書。陳情書。■ふみ。てがみ。書簡。鬼貫「狀見れば江戸も降りけり恭の雨」

じやう 鎖【名】銅・鐵などにて造り、開閉すべき所に用ひて、締(しま)とする具。じやうをねぢて引きまへ。鉸(かすが)。字通「じやうをねぢて引きぬきて」

鎖を下(おろ)す【句】■鎖をさしかたむ。■しっかりと心を固む。堅く戒む。

じやう 城【名】しろ(城)に同じ。

じやう 淨【名】清淨。無垢(むく)。

じやう 成【名】【佛】次條を見よ。

成・住・壞(え)・空【句】【佛】じごふ(四劫)を見よ。

じやう 滋養【名】身體の養となること、又その食物。やしなひ。

じやう 侍養【名】かしづき養ふこと。

じやう 時樣【名】當世流行のすがた。

じやう 辭樣【名】■ことばづかひ。いひまはし。■し(詞姿)に同じ。

じやう 上【代】じやうさま(上樣)に同じ。

じやう 正【接頭】しやう(正)を見よ。

しやうあい 賞愛【名】ほめよろこぶこと。

じやうあい 情愛【名】なさけ。いつくしみ。愛情。

しやうあう 商鞅【名】【人】支那戰國時代の政治家。秦の王室の疎族にして、また公孫鞅として知らる。刑名の學を好み、秦國を富强ならしめし功多し。商於の十五邑に封ぜらる。惠文王立つに及び、讒せられて車裂せらる。

しやうし(商子)參照。

商鞅木を徙して、信を立つ【句】『史記の商君傳に見ゆ』商鞅、秦の孝公に用ひられて法律を制し、これを施行するに先だち、民をして己れを信ぜしめんがために、三丈の木を國都の南門に立て、これを北門に徙す者には、三十金を與へんといひしに、民、怪しみて徙す者なかりしかば、更に約するに五十金を以てせし時、これを徙しし者一人あり、直ちに五十金を與へ、欺かざるを明かにせしより、その令よく行はれたりといふ故事。

しやうあく 掌握【名】『掌(たなごころ)に握る義』我が物として自由に扱ふこと。

じやうあつ-りよく 上壓力【名】〔理〕『英 Upward pressure』液體の上方に壓す力。

しやう-あひ 性合【名】■しやう(性)■に同じ。■あひしやう(合性)■に同じ。■

くわりつ(貨率)に同じ。

じやうあひ 情合【名】人情の具合。浮世床「どうも情合をうまくいふぜえ」

しやうあん 正安【名】後伏見天皇の御代の年號(紀元一九五九年—一九六一年)。

じやうあん 上餡【名】上等なる餡。後柴門「花魁となると、竹村の上あんでもしきりはでも、まんと食はれるはさ」

しやう-い 傷痍【名】きず。創痍。

しやう-い 尙衣【名】『尙は主(つかさど)る義』支那にて、天子の御衣を掌りし職。

じやう-い 上意【名】君の御心。君のおぼしめし。傾城島原鮭合戰「殊に上意も伺はず、葛西の清重が娘と緣組の約束し」

じやう-い 攘夷【名】外夷を逐ひはらふこと。外國人を入國せしめぬこと。

じやう-い 情意【名】■感情と意思と。■こころもち。

じやう-い 常衣【名】常に著る衣。

じやう-い 淨衣【名】**じやうえ(淨衣)**に同じ。

じやう-い 上衣【名】表に著る衣服。うはぎ。

じやう-い 上醫【名】技術の巧みなる醫者。上醫は國を醫す【句】上手なる醫者は國家を治す。

こくし(國手)參照。〔諺語〕

しやう-い-いちじきん 傷痍一時金【名】臺灣總督府職員の警察事務に從ふ文官判任以下の者が、蕃地內にて、討伐・搜索等のために傷痍せる時、支給せらるる一時金。

しやう-いう 尙友【名】『孟子の萬章下篇に「頌二其詩一、讀二其書一、不レ知二其人一、可乎、是以論二其世一也、是尙友也」とあり。尙は上にて、進み上りて、古人を友とする義』書を讀みて、古人を友とすること。

しやう-いう 倡優【名】役者。藝人。俳倡。「じ。俳優。

しやう-いう 醬油【名】しやうゆ(醬油)に同

しやう-いう 奬誘【名】すすめいざなふこと。勸誘。

じやう-いう 情由【名】事のわけ。事情。事由。

じやう-いう 上游【名】■じやうりう(上流)に同じ。■上流に在る地。

じやう-いう-いき 生育【名】せいいく(生育)に同じ。盛衰記「妾、夫を助けんために、爭でか生育の父を殺させん」

じやう-いう-ごかし 上意ごかし【名】『ごかしは接尾語』上意をかこつけにすること。津國女夫池「うぬは、能う上意ごかしに打ったなあ」

しやういうさう 尙衣少監【名】縫殿助(ぬひどのノすけ)即ち縫殿寮の次官の唐名。

しやういうし 修する。聖一國師の忌。

しやういうし-こくし 聖一國師【名】〔人〕べんえん(辨圓)を見よ。

しやういう-しよくしやう 尙衣直長【名】縫殿允(ぬひどのノじやう)即ち縫殿寮の次官に次ぐ役の唐名。

じやう-いうふ 讓掖【名】いふじやう(掖護)に同じ。

じやういうふ 城邑【名】城市。都邑。都會の地。

じやう-いう-ふじよれう 傷痍扶助料【名】人民にて、巡査同樣の働をなして負傷したる者に給する金。一等傷・二等傷の別あり。前者は自用を辨ずること能はざる終身不具となりし者、後者は用を辨じ得るも、終身不具となりし者。

しやう-いう-ほうぎよ 尙衣奉御【名】縫殿頭(ぬひどのノかみ)即ち縫殿寮の長官の唐名。

しやういう-ほけん 傷痍保險【名】しやうがいほけん(傷害保險)に同じ。

しやう-いん 將印【名】將帥たるしるしの印。後紀「以二省印一印レ之」■我が國現

制度の各省を代表する印。

しやう-いん 請印【名】少納言が奏上して、太政官に内外印の押捺(オウナツ)を請ふこと。

しやう-いん 正因【名】〔佛〕正しく法を生ずる因種。

じやういんけん 常隱圈【名】〔天〕こういんけん(恒隱圈)に同じ。

じやういん-じやう 請印狀【名】請印の旨を記したる書狀。

しやういんぶつ-しやう 正因佛性【名】〔佛〕さういんぶつしやう(三因佛性)を見よ。

しやうい-れいし 尚衣令史【名】縫殿屬(ヌヒドノサクワン)即ち縫殿寮の四部官中の最下位の官の唐名。

しやう-う 瘴雨【名】瘴氣を含める雨。

瘴雨蠻烟【句】支那の南方蠻地における瘴氣を含める烟雨。

しやう-ぎやう 請雨經【名】〔書〕だいうんしやううぎやう(大雲請雨經)の略。

請雨經の法【句】〔佛〕旱魃の時、請雨經に說ける法により、曼荼羅を建立して、降雨を祈り、五穀成就を求むる密敎の大法。太平記「請雨經の法行はるるごとに、掲焉(エンチ)の靈驗なほ絶えず」

しやう-うつし 正寫・生寫【名】いきうつし(生寫)に同じ。世上洒落見繪圖「狂言は一向に止めにしてしまひ、舞臺で、役者の內を、その儘生寫にして見せれば、大入にて」

しやううつし-あさがほにっき 生寫朝顏日記【名】芝居芝叟・近松德三等の腹稿により、馬田柳浪の作れる繪本朝顏日記を脚色して、大阪の濱芝居にて演ぜし時の外題。駒澤次郎左衞門と深雪(ミユキ)といふ女との情話を中心とせるもの。作者は出來島千助。

しやううつし-あさがほばなし 生寫朝顏話【名】淨瑠璃の一。駒澤次郎左衞門と深雪とのことを作れるもの。山田案山子の作。

しやう-うん 祥雲【名】めでたき雲。

しやう-うん 商運【名】商賣上の運命。

しやう-うん 昌運【名】さかんなる運命。隆運。

じやううん-ぶし 淨雲節【名】淨瑠璃節の一。寬永の頃、隱摩太夫淨雲の語り初めしもの。薩摩節。

しやう-え 唱衣【名】〔佛〕『競賣する時、まづ幾許と價を定めて唱呼するよりいふ』こえ(估衣)に同じ。

じやう-え 淨衣【名】㊀白き色の衣服。㊁古、祭事に用ひし衣。白色又稀には黃色の絹又は布にて作り、狩衣に似て、少し約まりたる形に仕立つ。明衣。祭服。平造、大將以下、みな淨衣の上に鎧着」㊂僧の、祈請の時、著用する淸淨なる衣。修法の種類によりて、色は同じからず。源氏「僧の布施・淨衣などやうのこまかなるものをさへ奉りたまふ」

淨衣の袴【句】白き布の袴。

しやう-えい 將營【名】大將の居る陣營。本陣。

しやう-えい 唱咏【名】ぎんえい(吟咏)に同じ。

しやう-えい 觴詠【名】觴(サカヅキ)を擧げて吟咏すること。酒盛をしつつ、詩歌を作ること。

しやう-えい 障翳【名】㊀かさしおほふこと、又その物。㊁かげ。くもり。㊂眼球のくもり。

しやう-えいでん 省營田【名】王朝時代の官田の一。宮內省より、使部等を田司として掌らしめしもの。

しやう-えき 瘴疫【名】瘴氣にあたりて起る熱病。

しやう-えき 正役【名】さいえき(歲役)に同じ。

しやう-えき 漿液【名】〔醫〕漿液膜の分泌する液。極めて透明なり。

しやう-えき 生益【名】出生により、戶口の增益すること。令義解「謂其生益者」

しやうえき-まく 漿液膜【名】〔醫〕體腔の內面と諸內臟の外面とを被ふ膜。この膜は透明なる漿液を含べて、常に濕度を帶ぶ。

じやう-えつ 上謁【名】『謁は名刺にて、謁を上(タテマツ)る意』名刺を差出して、面會を乞ふこと。

しやう-えん 瘴烟【名】瘴氣を含むもや。

じやう-えん 情緣【名】男女のえにし。男女のなか。『同じ。

じやう-えん 上演【名】じやうぢやう(上場)に同じ。

しやうえん-じ 生臙脂・猩臙脂【名】㊀古來支那より舶來せる、紫紅・鮮美にして、耐久性に富める染料。絹に染めて乾かしたるものにて、湯に浸し、その汁を絞りて用ふ。我が國にては、繪畫の彩色及び特種の友禪更紗染などに用ひ、支那人は化粧用に供す。その原料につきては、紅花(ベニ)・蘇枋(スオウ)・花茣蓙(ハナゴザ)など種種の說あれども、實はスチックラックなるが如しといふ。胡臙。正味紅。㊁〔植〕あかびゆ(赤莧)に同じ。

しやう-おう 聖應【名】〔佛〕佛陀の感應。盛衰記「無窮(ムグ)の聖應、響の聲に應ずるが如し」

しやうおう 正應【名】伏見天皇の御代の年號(紀元一九四八年—一九五二年)。

しやうおう 聖應【名】〔人〕りやうにん(良忍)の諡號。

じやう-おん 淨音【名】きよき音聲。松風村雨東帶鏡「美妙淨音鮮かに」

じやうおん-く 盛陰苦【名】〔佛〕はっく(八苦)を見よ。

じやうおん-じ 淨恩寺【名】伊勢國三重郡羽津(ハヅ)村にある眞宗の寺。西本願寺の末寺。天延二年僧良源の創建。

しやう-か 上下【名】㊀うへした。㊁あがりさがり。㊂古より今までの間。

しやう-か 商家【名】商人のいへ。あきんどみせ。あきうどや。商買。

しやう-か 笙歌【名】笙に合はせて、歌をうたふこと。

しやう-か 唱歌【名】人聲を以て、或節(フシ)を唱ふること、又その歌曲。さうか。聲樂。

しやう-か 娼家【名】ちよらうや(女郎屋)に同じ。

しやう-か 牆下【名】かきのもと。

しやう-か 牀下・床下【名】ゆかの下。ゆかのほとり。

しやう-か 床架【名】ゆかだな。

しやう-か 莊家【名】㊀百姓の家。㊁莊園の事務を取扱ふ家。太平記「本所の雜掌を六波羅の沙汰として、莊家にしすゑんために」

しやう-か 掌家【名】家のとりしまりをする、頭だちたる人。支配人。

しやう-か 請暇【名】せいか(請暇)に同じ。

しやう-か 將家【名】武將の家柄。武家。將門。武門。

しやう-か 正嘉【名】後深草天皇の御代の年號(紀元一九一七年—一九一八年)。

しやう-が 唱歌【名】㊀しやうか(唱歌)に同じ。會我虎が鬘「只今の歌のしやうが、心なき身も哀知れとは、この重保が事なた」㊁譜を吟咏すること。さうが。「古語」源氏「あるひは歌をうたひ、あるひはしやうがをし」狹衣「いとわりなき聲を、おとしあげ、しやうがするにはやされて」

しやう-が 生薑・生姜・薑【名】㊀〔植〕薑荷(カ)科に屬する多年生の草。原產地は熱帶亞細亞。地下に根莖あり。地上莖は高さ二尺に達し、葉は全緣、披針形にして、平行脈を有し、長鞘を具へて、密に莖を包む。花は薑荷のに類し、夏秋の交開く。園圃に栽培し、根莖を香味料又は藥用に供す。あなはじかみ。くれのはじかみ。はじかみ。しやうが(生薑)參照。㊁癩を病みて、指の墮ちたるもの。しやうがで。㊂吝嗇なる人。あたじけなき人。からき人。浮世風呂「生姜の癖に、金びらながらをいふし」

生薑の市【句】しやうがいち(生薑市)に同じ。枕草子「小人島おかは生薑の市で買ひ」

しやう-が 齧牙【名】しやうげ(齧牙)に同じ。

じやう-か 情歌【名】㊀艷情をのべたる歌。こひか。㊁ラヴソング(都都逸)に同じ。

じやう-か 城下【名】㊀城の下。城壁の下。㊁大名の居城のある市街。城市。源氏十二段長生殿「然らば、それがし二三ケ所、城下城下を商賣し」㊂『戰國策の楚國の條に「使萬乘之國免其相、是城下之事也」とあり』次條の略。

城下の盟【句】『左傳の桓公十二年の條に見ゆ』敵に都城の下まで侵入せられて、なす降伏の約束。

じやう-か 滋養價【名】えいやうか(榮養價)に同じ。

じやうが

じやうが 嫦娥【名】つき(月)の異稱。

しやうかい 瘴海【名】瘴氣ある海。太平記「毒霧御身を侵して、瘴海の氣冷まじ」

しやうかい 詳解【名】つまびらかにときあかすこと。精解。

しやうかい 裳階【名】〔建〕普通の屋根の下に、小さき屋根を附けて、庇の用をなし、兼ねて建物を保護するもの。大和の藥師寺の三重塔の如きは、每層これを設けて、六層の觀を呈せり。もこし。ゆたづくり。

しやうかい 商界【名】商業界。商事社會。

しやうかい 生界【名】生物の仲間。いきものるゐ。

しやうかい 性戒【名】〔佛〕『自性(ジシヤウ)の戒の義』佛制を待たずして明かなる禁戒。例へば殺生偸盜の類。

しやうかい 性海【名】〔人〕一臨濟宗の僧。建長寺に得度し、圓頓二教を南都北嶺に學び、また南禪寺に虎關に從ふ。將軍義詮・義滿に優遇せられ、東福・南禪・天龍の諸名刹に住持す。應永三年寂す。二近江國圓照寺の住職。名は慈航。字は無涯。篤學を以て、世に名あり。享保十二年寂す。年八十四。

しやうかい 性海【名】〔佛〕眞如の理性(シヤウジン)の深廣なるを海に譬へていふ語。

しやうがい 傷害【名】きずつけそこなふこと。

しやうがい 戕害【名】きりころすこと。「殺害。」

しやうがい 生涯【名】命のかぎり。身を終ふるまでの間。一生。終生。終身。

しやうがい 生害【名】自ら死ぬること。じがい。じさつ。自刃。本朝三國誌「よつく武運に叢きたるな、城之介が生害只今」

しやうがい 障礙・障碍・障害【名】じやま。さまたげ。さはり。しやうげ。

じやうかい 上界【名】〔佛〕三界の中の、色界(シキカイ)と無色界と。上地。定地(ジヤウヂ)。(下界に對して)謠曲「楊貴妃」「我れも、そのかみには、上界の諸仙たるが、…假に人界に生れ來て」

じやうかい 上階【名】一上方にある階段。二三位以上の位階。太平記「津守國夏上階して、從三位になさる」

じやうかい 淨界【名】じやうど(淨土)に同じ。

じやうかい 淨戒【名】〔佛〕清淨なる戒行(カイギヤウ)。佛戒。

じやうかい 淨海【名】〔人〕たひらきよもり(平清盛)を見よ。

じやうかいうぎ 唱歌遊戲【名】唱歌を歌ひつつ、その拍子に足どりを合はせて行ふ、一種の遊戲。

しやうがいきやうさう 障礙競爭【名】競馬の一。障碍物を設けたる場所にて行ふもの。(平地競走に對して)

しやうがいさい 傷害罪【名】〔法〕他人の身體を傷害したるによりて成立する犯罪。

しやうがいし 生葦石【名】〔鑛〕形、生葦の如き石。うみしやうが。

しやうがいせん 障礙線【名】〔兵〕軍隊の行動を困難ならしむる濕地・密林・山嶽・河川等の線。

しやうかいち 敞開地【名】〔兵〕かいしやうち(開敵地)に同じ

しやうがいち 生葦市【名】每年九月十一日より二十一日まで行ふ東京芝區神明町の芝大神宮の祭禮に、境内にて生葦を賣ること。往昔、この附近、生葦畑なりしに基くといふ。また本朝醫方傳に、生葦は穢土を去り、神明に通ずといふ本文あるによりて賣るならんともいふ。この時また千木箱(チギバコ)をも商ふ。萬葉千紅「遊生姜市」秋風吹送葉生姜、賣出藤花千木箱、目腐市名無勿體、雨晴天照太神光」

じやうかいばう 淨海坊【名】〔動〕かげろふ(蜉蝣)に同じ。

しやうがいぶつ 障礙物【名】一障礙となる物。二〔兵〕ふくばうぎよ(副防禦)に同じ。

しやうがいぶつきやうそう 障碍物競走【名】陸上運動の競走に、その走りゆく途中に、種種の障碍物を置きて行ふもの。

しやうがいほけん 傷害保險【名】一〔商〕『獨 Unfallversicherung』不慮の災害のために、死亡又は身體の損傷を惹起したる場合に「じ。

じやうがい 城濠・城壕【名】城塞のほり。城隍。

しやうかいえんしふりよかう 將校演習旅行【名】〔兵〕陸軍將校のなす演習旅行。將官演習旅行・參謀演習旅行・幹部演習旅行の三種に分つ。各その條を見よ。

じやうかいぐん 常行軍【名】〔兵〕天候・道路等に格段の支障なき限は、每日の行程六里內外、四日ごとに、一日づつの休憩日を與ふる行軍。(急行軍・强行軍に對して)

しやうかいくわん 彰考館【名】『左傳の序に「彰レ往考レ今」とあるに本づきて名づく』德川光圀が江戸小石川なる藩邸內に建てし、史籍編輯の館舍。光圀致仕するに及び、水戸に徙り、光圀の薨後、館員の半は江戸に移りしが、文政十二年江戸のは閉鎖せられ、明治三十九年大日本史全部の編輯出版完成するや、水戸のもまた閉鎖せり。

しやうがいけん 商號權【名】〔法〕財產權の一。商號を專用する權利。商號登記簿に登記することによりて發生し、自由に相續・讓渡することを得。しやうがうとうき 商號登記)參照。

しやうかうさうたらくわん 將校相等官【名】將校にあらで、將校と同一に取扱はるる陸海軍の高等武官。軍醫主計の類。

しやうかうせいと 將校生徒【名】一陸海軍の學校にて、將校となるべき教育を受くる生徒。即ち陸軍士官學校・海軍兵學校などの生徒の類。二將校にて生徒たる者。

しやうかうせきこう 將校斥候【名】〔兵〕將校を斥候長として派遣する斥候。附屬する兵卒は、一小隊に上ることあり。

しやうかうていさつ 將校偵察【名】將校が部下を率ゐてなす偵察。

しやうがうとうき 商號登記【名】〔法〕自己の商號を登記すること。自然人たる商人にありては、ただ商號權を得んとする者のみその登記をなすを要すれども、法人たる商人、即ち會社にありては、その設立の登記は、當然商號の登記をも包含す。登記を經たる商號に對しては、他人が同一營業のために、同一商號を登記するを排斥し、且

つ不正の競爭の目的を以て、同一又は類似の商號を使用する者に對し、その使用の停止、且つ損害賠償を請求するを得しむ。

しやうがうとうきぼ 商號登記簿【名】〔法〕商號の登記番號、その商號、營業の種類、營業場所、その商號の使用者の氏名及び登記の年月日を記載するために、各市町村（東京市と大阪市とにては各區）に別冊として備ふる帳簿。

じやうかう-ばん 常香盤【名】常香を焚くに用ふる香爐。五人女「常香盤の鈴落ちて、ひびきわたることしばらくなり」

しやう-かうゐ 商行爲【名】〔法〕『英 Commercial transaction』貨物の運轉を媒介し、又これを輔助する營利行爲。絕對的商行爲、相對的商行爲、附屬的商行爲の三種に分つ。各その條を見よ。

しやうかうゐ-はふ 商行爲法【名】〔法〕商法法典の編纂法の一。商行爲を基礎として、私權關係を定むるもの。我が現行商法は、この方法を採る。

しやう-かく 商搉【名】『商ははかる義、搉はひく義』事物を引比べて論ずること。はかりただすこと。商量。「を見よ。

しやう-かく 掌客【名】まうどづかさ（掌客）

しやう-がく 正覺【名】〔佛〕『梵 Sambodhi（三菩提）の譯語』**しやうとうがく**（正等覺）に同じ。謠曲「弁生息」「悲願におこして、正覺年久し」

正覺を成（ジヤウ）ず【句】〔佛〕成佛（ジヤウブツ）す。

しやうかく 正覺【名】〔人〕くまやうまる（熊王丸）に同じ。

しやう-がく 倡樂【名】倡優又は倡女が音樂を奏すること、又その音樂。「と。

しやう-がく 奬學【名】學問を奬勵すること。

じやう-かく 城閣【名】城のものみ。

じやう-かく 上格【名】高貴なる格式。

じやう-かく 上客【名】**じやうきやく**（上客）に同じ。

じやう-かく 常格【名】常なみの格式。

じやう-かく 常客【名】**じやうきやく**（常客）に同じ。

じやう-かく 淨覺【名】〔佛〕清淨なる覺悟。

じやう-がく 常額【名】㊀一定の數量。㊁一定してある金高。

じやう-がく 上腭【名】うはあご。

じやうがく-こつ 上顎骨【名】〔醫〕顏面骨の一。口腔の前上壁、鼻腔下部の側壁及び眼窩（クワ）の下壁を形成し、下方に齒槽突起ありて、上齒列を具ふ。

しやうかく-し 掌客使・請客使【名】**しやうきやく**（掌客使）を見よ。

しやう-がくし 商學士【名】商科大學を卒業したる者、又は高等商業學校卒業後、更に同校研究科を卒へたる者の用ふることを得る稱號。後者のは、舊稱、商業學士。

しやうがく-ばう 正覺坊【名】㊀〔動〕あをうみがめ（青海龜）に同じ。㊁大酒を飲む人。大酒家。「發用。

しやうがく-ひ 奬學費【名】奬學に供する

しやうがく-くわ 生薑科・生姜科【名】〔植〕

めうがくくわ（蘘荷科）に同じ。

しやうがく-ゐん 奬學院【名】平安朝時代の私學校の一。初め在原行平、その子弟敎育のため、奏請して設けたるものなりしが、同氏衰ふるに及んで、大學寮の南曹となり、更に應和三年源高明に賜ひ、爾來、源氏の公卿にて、第一たる者、宣旨に依りて管理す。さうがくゐん。

しやうが-ざけ 生薑酒・生姜酒【名】おろし生姜を混ぜたる酒。熱燗にして、風邪の際などに用ふ。丹波與作「こよひちぎりの戀風は、生薑酒でも防がれず」

じやう-がしま 城島【名】〔地〕相模國三浦郡三崎町の前面に横たはれる島。周回一里半。西端に燈臺の設あり。

しやうが-しやりべつ 生薑舍利別・生姜舍利別【名】生姜丁幾に單舍利別を混和したるもの。

しやうがず 生薑酢・生姜酢【名】おろし生姜を混ぜたる酢。

しやうがせん 生薑煎・生姜煎【名】生薑を煎じ出だせる古の藥。

しやうがたう 生薑湯・生姜湯【名】古の藥の一。生薑を煎じ出だせる湯。和名、生薑湯」

しやう-がちや 生薑茶・生姜茶【名】おろし生薑を混ぜて煎じたる茶。重井筒「今も今、ある方で、生薑茶をくれたを」

しやうが-づけ 生薑漬・生姜漬【名】生薑の根莖を薄くへぎて、蜜漬にし、衣に砂糖をまぶしたる菓子。

しやうがて 生薑手・生姜手【名】**しやうが**（生薑）㊁に同じ。毛吹草「さえかへる頃やしやうがで初蕨」

じやうげ-どう 上下動【名】〔地〕**じやうげどう**（上下動）に同じ。

しやうが-なます 生薑膾・生姜膾【名】雪鹽の如く盛りて、上におろし生薑をかけたる料理。

しやう-かふ 閶闔【名】『楚辭の遠遊篇に「命二天閽一其開レ關兮、排二閶闔一而望レ予」とあり』始めて天に上る門。

しやう-かぶ 正株【名】〔商〕まことの株券。現在の株券。（空株（カラカブ）に對して）〔取引所の語〕

じやう-がふ 上合【名】〔天〕**じやうごふ**（順合）に同じ。（下合に退して）

しやうかふ-ふう 閶闔風【名】『**しやうかふ**（閶闔）を見よ。支那の地勢は、東方に低く、西方に高きより、西風を天門より吹來るものとしていふ。西方より吹來る風。

しやうがみそ 生薑味噌・生姜味噌【名】生姜を刻み、味噌に交へたる食品。

しやう-かん 相看【名】相互にまみゆること。面會。太平記「主上未だ御相看なき先に、御涙をぞ流させたまひける」

しやう-かん 檣竿【名】ほばしら。帆檣。

しやう-かん 商鑑【名】いんかん（殷鑑）に同じ。

しやうかん-とほからず 【句】『胡銓の上二高宗封事に見ゆ』「殷鑑遠からず」に同じ。

しやう-かん 傷寒【名】〔醫〕『寒さに傷けられたる疾の意』漢方にて、寒さのために起る重き熱病。今は主として、腸チブスをいふ。

しやう-かん 賞鑑【名】書畫・骨董などを賞翫して鑑定すること。

じやう-かん 上燗【名】酒の燗の、程よく出來たるもの。

じやう-かん 上間【名】佛堂に向ひて、左の室。（下間（ゲカン）に對して）「る人。

しやうかん-が 賞鑑家【名】賞鑑に長じたる人。

じやうかん-や 上燗屋【名】おてんかんざけや（御田燗酒屋）を云ふ。〔大阪の語〕

しやうかん-ろん 傷寒論【名】〔書〕傷寒に對する意見と、その療法とを述べたるもの。十卷。支那後漢の張仲景の著。建安年間傷寒流行して、死者多かりしより著しものにて、從來漢法醫の金科玉條とせしもの。今傳ふるものは、晉の王叔和の撰次に係ると傳ふれども、唐以後數次の校訂を經て、原著の本意を失せるものなきにあらず。

しやうかんろん-こくじかい 傷寒論國字解【名】〔書〕傷寒論を雲林院了解が和譯註釋したるもの。六卷。

しやうがゆ 生薑湯・生姜湯【名】㊀生薑をおろし、砂糖をまぜ、熱湯を注ぎて飲むもの。發汗の効あり。㊁**しやうがたう**（生薑湯）に同じ。

しやう-き 正氣【名】心のたしかなること。普通に物事を識別する心。常の精神。ほんき。用明天皇職人鑒「惡風を吹出し、人の正氣を奪ふ惡虎なり」

しやう-き 正忌【名】『正當なる忌日の義』死者の一周忌以後の當月當日。祥月命日。

じやう-き 掌記【名】㊀しよき（書記）に同じ。㊁院に置かれ、書記、計算等の事を掌る判任官。大掌記、中掌記、少掌記に分れ、各等更に正、權の二階に分れ、五年に設置、同十年に廢止。㊂修史館の職員の一。事實の分纂校錄、圖書の管理、出納往復などを扱ひし判任官。一等より八等まであり。

しやう-き 祥氣【名】めでたき前兆の氣。陽氣。瑞氣。

しやう-き 商機【名】商業上の機會又は機密。

しやう-き 匠氣【名】藝術上技巧を弄して、好評を博せんとする心。

しやうき 詳記【名】詳かに記すこと。
しやうき 相器【名】宰相たるに適せる器量。
しやうき 將器【名】將帥(シヤウスイ)たるに適せる器量。
しやうき 牀几・床几【名】支那にて、寢臺と脇息と。
しやうぎ 聖儀【名】〔佛〕そんぎ(尊儀)に同じ。
しやうぎ 象戲【名】一もんけつ(門闕)に同じ。二「古、支那にて、敎令をここに懸けて示せるよりいふ」けうれい(敎令)に同じ。
しやうぎ 床几・床机・將机・牀几・床木【名】「しやうぎ(牀几)を見よ」二古、軍陣・庭上の儀禮などに用ひし腰掛。脚を左右より打違(ウチチガ)に組み、尻のあたる處には、革を張り、疊みて携帶に便なるやうに作りたるもの。胡床。二細長き板の兩端に、やや高き足を著け、數人腰掛け得るやうに造れる臺。

(しやうぎ(一))

しやうぎ 將棊・象棋・象戲【名】一戰陣に擬したる盤面に、駒と稱する小木片を交互に活動せしめて勝敗を決する遊戲。大將棋・中將棋・小將棋等種種あり。今行はるるは小將棋にして、盤面に縱横共に九間、即ち八十一の目を盛り、駒の數は各二十。互に一定の用法を以て相闘はし、敵の王將を擒にすれば勝つ。この技を行ふをさすといひ、王將を擒にするをつますといふ。二次條(二)の略。
將棋の馬【句】次條に同じ。
將棋の駒【句】將棋をさすに用ふる小さき木片。王將(ギヨク)・金將(キン)・銀將(ギン)・桂馬(ケイマ)・飛車(ヒシヤ)・角行(カク)・香車(キヤウシヤ)・步兵(フ)の八種ありて、各その名を漆にて、その表又は表裏に記す。王將・角行・飛車の三種は一箇づつ、金將・銀將・桂馬・香車は二箇づつ、步兵は九箇づつ二組あり。各その一組づつを分ち、雙方同一なる一定の形に並べおき、一定の制規の下に、交互に移動せしむ。王將は一方のは玉將と記せり。

將棋は早馬、碁は牛の如し【句】勝負の決する遲速は、將棋は奔馬のごとく早く、碁は牛步のごとく遲し。〔諺語〕
しやうぎ 商議【名】はかり議すること。協議。評議。
しやうぎ 娼妓【名】ちよらう。うかれめ。
じやうぎ 淨几【名】きよらかなる机。
じやうぎ 上機【名】最上の機根。上根。上機根。(中機・下機に對して) 太平記「上機は、人我(ガ)無相なれば、心に懸ることもなし」
じやうき 上氣【名】一のぼせ。けあがり。ぎやくじやう。當流小栗判官「はっと上氣の紅に、はや男見る目遣ひあり」二氣のちがふこと。發狂。
じやうき 常軌【名】常に行ふべき道。普通に人の履むべき道。常直。
じやうき 常規【名】通常の規則。常例。曾我會稽山「鶴が岡の撞鐘を以って、御番諸役の常規とし」
じやうぎ 上儀【名】朝廷の大禮。大儀。
じやうぎ 情僞【名】まことと、いつはりと。實情とこれを蔽ひ飾ることと。
じやうぎ 常器【名】日用の器物、即ち椀・茶碗などを云ふ。〔中國・四國の方言〕
じやうぎ 情誼【名】人情の義理。よしみ。交誼。「と。恒久。
じやうきう 常久【名】常に久しく續くこと。
じやうきう 上九【名】易の卦(ケ)にて、陽爻(ヤウカウ)の終りに當るもの。
しやうぎ-がはり 床机替【名】敗軍して、大將先手に出陣する時、その不在の陣中にて、大將に代りて居ること。
しやうぎ-がへし 床机返【名】敗軍の時、大將の床机の廻に居る人數にて、合戰を盛返し、踏留まること。
じやうきく 上鞠【名】蹴鞠の上手。禁秘抄「京中上鞠者」と。
じやうきげん 上機嫌【名】機嫌のよきこと。
じやうきこん 上機根【名】機根のよきこと。太子傳「上機根にもするは手習(といふ句)に六十になれど心は若やぎて」

しやうぎさし 將棊指・將棋指・象棋指【名】一將棊を指す人。二江戸幕府の職制の一。將棊所の部下。十五人扶持乃至十人扶持切米を給せられたり。
しやうきさん 正氣散【名】散藥の一。源氏冷泉節「おっと肩を正氣散」
しやうぎーしや 精義者【名】〔佛〕たんだい(探題)(一)に同じ。
しやうぎせいしゆ 正儀正守【名】諮曲の一。正儀正守の刑せられんとするに臨みて、その母も、義のために爭ふことを作れるもの。
しやうぎたい 彰義隊【名】慶應四年德川慶喜の水戸に幽せらるるに及び、江戸上野の東叡山に據りて、官軍に抗したる幕臣の一隊。敗れて或は戰死し、或は奥羽に走りたり。
しやうぎたふし 將棊倒・將棋倒・象棋倒・象戲倒【名】一將棊の駒を立て並べて、端の一つを推倒せば、悉く次第に倒ることと。二順次に片端より倒しゆくこと。當流小栗判官「三郎が首捻切り、殘る奴ばら蹴殺して、將棊倒にせんずもの」三一方が崩るると共に、全體の崩れ果つること。
しやうぎだふれ 將棊倒・將棋倒・象棋倒・象戲倒【名】將棊だふしの如く倒ること。傾城色三味線「近所は云合ひし樣に、將棊倒れといふものにかたひしに倒る事、是れ皆傾城狂ひより事起れるなれば」
しやうぎどころ 將棊所・將棋所【名】將棋の技を以て、碁所と相並びて、江戸幕府に仕へし家柄。職員六人ありて、大橋・伊藤の二氏世襲し、二十石・十人扶持を給せられたり。
しやうぎばん 將棊盤・將棋盤・象棋盤・象戲盤【名】將棊をさすに用ふる盤。しやうぎ(將棊)參照。
じやうきふ 上級【名】一上位の階級。二學校にて、自己の級より上位の級。
じやうきふ-きくわん 上級機關【名】他の機關に對して、指揮監督の權ある機關。(下級機關に對して)
じやうきふ-ぎやうせいきくわん 上級行政機關【名】他の行政機關に對して、指揮監督の權ある行政機關。(下級行政機關に對して)
じやうきふ-ぎやうせいくわん 上級行政官【名】他の行政官に對して、指揮・監督の職權ある行政官。(下級行政官に對して)
じやうきふ-ぎやうせいくわんちやう 上級行政官廳【名】他の行政官廳に對して、指揮・監督の權ある行政官廳。上級行政官廳。(下級行政官廳に對して)
じやうきふ-ぎやうせいくわんふ 上級行政官府【名】前條に同じ。(下級行政官廳に對して)
じやうきふ-くわんちやう 上級官廳【名】他の官廳に對して、指揮監督の權ある官廳。上級官府。(下級官廳に對して)
じやうきふ-くわんふ 上級官府【名】前條に同じ。(下級官府に對して)
じやうきふ-くわんり 上級官吏【名】他の官吏に對して、指揮監督の權ある官吏。(下級官吏に對して)
じやうきふ-こうきようだんたい 上級公共團體【名】他の公共團體に對して、指揮監督の權ある公共團體。(下級公共團體に對して)
じやうきふ-さいばんしよ 上級裁判所【名】他の裁判所の判決に對する控訴又は上告につきての裁判權を有する裁判所。(下級裁判所に對して)
じやうきふ-じちたい 上級自治體【名】次條に同じ。
じやうきふ-じちだんたい 上級自治團體【名】じやうきふこうきようだんたい(上級公共團體)に同じ。
じやうきふ-しん 上級審【名】〔法〕上級裁判所の訴訟の審理。(下級審に對して)
じやうきふ-せい 上級生【名】同一學校中の上級の生徒。(下級生に對して)
じやうきふ-だんたい 上級團體【名】一他の團體に對して、指揮・監督の權ある團體。二じやうきふこうきようだんたい(上級公共團體)

に同じ。(下級團體に對して)

じやうきふ-ちはうきやうせいくわんちやう 上級地方行政官廳【名】他の地方行政官廳に對して、指揮・監督の權を有する地方行政官廳。(下級地方行政官廳に對して)

じやうきふ-ちはうきやうせいちやう 上級地方行政廳【名】前條に同じ。

じやうきふ-ちはうくわんちやう 上級地方官廳【名】他の地方官廳に對して、指揮・監督の權ある地方官廳。(下級地方官廳に對して)

じやうきふ-ちはうこうきやうだんたい 上級地方公共團體【名】他の地方公共團體に對して、指揮・監督の權ある地方公共團體。(下級地方公共團體に對して)

じやうきふ-ちはうじちたい 上級地方自治體【名】次條に同じ。(下級地方自治體に對して)

じやうきふ-ちはうじちだんたい 上級地方自治團體【名】他の地方自治團體に對して、指揮・監督の權ある地方自治團體。(下級地方自治團體に對して)

じやうぎ-ぶね 將几船【名】昔の船戰の時、大將の乘りし船。

じやうきん 賞金【名】賞與の金。褒美の「かね。

じやうきん 償金【名】つぐのひに出だす金。損害の賠償金。

じやうきん 正金【名】㊀げんきん(現金)に同じ。㊁硬貨、特に金銀の貨幣。正貨。

じやうぎん 正銀【名】寶永年間、江戸幕府が外國に與ふるために鑄造せし丁銀。

じやうきん 上金【名】品質上等の黃金。

じやうぎん 上銀【名】㊀品質の上等なる銀。㊁佐州銀の一種。

じやうきん-ぎんかう 正金銀行【名】普通の銀行業の外に、特に外國爲替・外國荷爲替及び貨幣の換算交換等を營み、專ら正金の取引を行ふ銀行。

じやうきん-だくわんしやうけん 正金兌換證券【名】大藏省正金兌換證券と開拓使正金兌換證券との總稱。

じやうきん-ばらひ 正金拂【名】〔商〕『英Specie payment』硬貨又は地金にて支拂ふこと。

じやうきん-ひきかへ-わたし 正金引換渡【名】〔商〕『英Cash on delivery』正金と引換に、賣買の目物を買主に引渡すこと。(品物引換渡に對して)

じやうきん-まめいたぎん 正金豆板銀【名】寶永年間、江戸幕府が外國に與ふるために鑄造せし豆板銀。

じやうきん-ゆしゅつてん 正金輸出點【名】〔經〕『英Export point 輸の音、正しくはしゆ』爲替相場が騰貴して、正金輸出の費用以上に達し、正金の輸出を利とするに至りたる限界。(正金輸入點に對して)

じやうきん-ゆそうてん 正金輸送點【名】〔經〕『輸の音、正しくはしゆ』げんきんゆそうてん(現金輸送點)に同じ。

じやうきん-ゆそうひ 正金輸送費【名】『輸の音、正しくはしゆ』正金を輸送するに際して要する費用、即ちその荷造費・運賃・保險料、その他船積陸揚の諸掛及び輸送期間の利子の類。

じやうきん-ゆにふてん 正金輸入點【名】〔經〕『英Import point 輸の音、正しくはしゆ』爲替相場が下落して、正金輸入の費用以上に達し、正金の輸入を利とするに至りたる限界。(正金輸出點に對して)

じやうきやう 商況・商況【名】商業取引の狀況。うれゆき。

じやうきやう 猖狂【名】たけりくるふこと。

じやうきやう 粧鏡【名】假粧(けさう)に用ふる鏡。

じやうきやう 生薑・生姜【名】生薑(しやうが)の根を乾固めたる藥物。芳香性健胃劑とす。

じやうきやう 辭境【名】〔佛〕五境の一。外物の耳に入りて、これを識別する境界。

じやうきやう 憍怩【貌】㊀羞心せるさま。うつとり。㊁失望又は失意せるさま。

じやうぎやう 正行【名】〔佛〕㊀正しき行。佛道に從ふ修行。(雜行(ざふぎやう)に對して)

じやうあじやり(阿闍梨)の譯語。

じやうきやう 聖經【名】〔佛〕おつきやう(佛經)に同じ。平家「聖經に値遇(ぐう)せし逆緣」

じやうきやう 常況【名】常に繼續せる狀況。情況【名】ありさま。やうす。景況。

じやうきやう 上京【名】京(きやう)へのぼること。きやうのぼり。出京。

じやうきやう 上卿【名】しやうけい(上卿)に同じ。千載「右大將兼長、春日の祭のじやうきやうに立ちはべりけるに」

じやうぎやう 淨行【名】〔佛〕清淨なる行を修すること。

じやうぎやう 上行【名】〔佛〕じやうぎやうぼさつ(上行菩薩)に同じ。「斷の行。

じやうぎやう 常行【名】〔佛〕平常の行。不

じやうぎやう-こつじき 常行乞食【名】〔佛〕頭陀(づだ)の十二行の一。常に食物を乞ひ歩き、與へられし食事に滿足すること。

じやうぎやう-ざんまい 常行三昧【名】〔佛〕常に專ら阿彌陀佛を信じて、その名を唱ふること。秋夜長物語「常行三昧の阿彌陀堂」

じやうぎやう-だう 常行堂【名】『常行三昧を修する堂の義』あみだだう(阿彌陀堂)に同じ。徒然「橫川常行堂のうち、龍花院と書ける古き額あり」

じやうぎやう-てん 上行天【名】〔佛〕ぢやうてん(忉利天)を見よ。

じやうぎやう-ぼさつ 上行菩薩【名】〔佛〕釋迦が靈鷲山(りやうじゆせん)にて、法華經の常不輕品(じやうふきやうぼん)を說き終へたる時、大地より涌現して、この經を弘通(ぐづう)せんことを誓ひたりといふ無數の菩薩の中、釋迦よりその宣傳を付囑せられたりといふ四菩薩の上首。日蓮は自らこの菩薩の再生なりと稱して、この宗旨を弘めたり。謠曲「身延」かく上人の此處に至りたまふは、上行菩薩の御再誕ぞと忝くて」

じやうぎやうきやく 掌客【名】まらうどづかさ(掌客)に同じ。

じやうぎやうきやく 正客【名】㊀正座(ざ)の客。おもなる客。㊁茶の湯にて、首席の客。

じやうぎやうきやく 償却【名】つぐのひ返すこと。返濟。償還。

じやうぎやうきやく 上客【名】㊀上座にすわるべき客。貴き客。貴賓。㊁商店にて、優遇すべき客。上華主。「顧客。

じやうきやうきやく 常客【名】常に來る客、又はやうす。景況。

じやうきやうきやく-し 掌客使・請客使【名】王朝時代に、大臣の大變の時、尊者を迎にゆきて、その前驅などをつとめし使者。

じやうきよ 常居【名】平常居ること、又そのところ。

じやうきよく 唱曲【名】歌曲をうたふこと、又そのうた、又そのふし。

じやうきよく 上局【名】㊀議政官中の一局。議定・參與・史官・書記の職員ありて、政體の創立、法制の制定、機務の決定、三等官以上の銓衡・賞罰、條約の締結、和戰の宣告等を掌りしもの。明治元年閏四月設置、同年九月姑く議政官を止めて、議定・參與・史官を行政官に移し、翌年四月舊制に復し、同五月議政官を廢し、更にこの局と下局とを開きて、議長・副議長・議員の職員を置きしが、同年七月廢せらる。㊁明治七年內務省の卿輔官房の稱。同九年に內局と改稱せり。「に同じ。

じやうきよく 淨曲【名】じやうるり(淨瑠璃)に同じ。

じやうぎ-ゐん 商議員【名】或事項を商議するために設置する委員。

じやうぎゐん 常議員【名】常設の議員。

じやうぎゐん-くわい 商議員會【名】商議員のみにて開く會議。

じやうぎゐん-くわい 常議員會【名】常議員のみにて開く會議。

じやうぎ-ゐん 商議委員【名】或事項を商議するための委員。

じやうぎゐん-くわい 商議委員會【名】商議委員のみにて開く會議。「の句。

じやうきやく 章句【名】㊀章と句と。㊁文章の句讀を尋ぬ【句】學問を活用するを知らず、徒らに字句の穿鑿にのみ拘泥す。

じやうく 生苦【名】〔佛〕しく(四苦)及びはく(八苦)を見よ。

じやうく 【名】次條を見よ。

しやうくも無い【句】「とてつもない」に同じ。〔遠江國の方言〕勝栗毛「とてつもないといふ詞は、遠州にはしやうく

もないといふ」

しやうぐ 聖供【名】三寶を供養する物。神佛の供物。大平記「三千の聖供の運送の道塞がって」

しやうぐ 星供【名】〔佛〕本命星(ホンミヤウジヤウ)を供養すること。

しやうぐ 餉供【名】〔佛〕佛前又は靈前に食膳を供ふること。

じやうぐ 上求【名】〔佛〕**じやうぐぼだい**(上求菩提)の略。(下化(ゲ)に對して)

じやうぐ 上供【名】佛前又は祖師の靈前に供物を奉ること、又その供物。「同じ。

しやうーくう 生空【名】〔佛〕**がくう**(我空)に同じ。

しやうーくう 性空【名】〔佛〕萬有の本性の空無なること。

しやうくう 性空【名】〔人〕天台宗の高僧。橘善根の子。三十六歳にて出家し、延曆寺に入り、良源の弟子となり、後、霧島山に背振(セブリ)山に苦行し、永延二年播磨國書寫山に登りて、圓敎寺を創建す。圓融上皇その法德を聞きて招きたまひしが、固辭して出でず。京洛の公卿貴女往いて敎を問ふもの多し。晩年通寶山彌勒寺を創して居り、寛弘四年寂す。年九十八。世に書寫上人と稱せらる。

しやうーぐう 賞遇【名】〔法〕改俊の狀ある囚人に、賞として與ふる待遇。接見及び信書發受の回數、または菜類を增加する類。

じやうぐう-き 上宮記【名】〔書〕聖德太子の國家に對する遺言。今は他書の引文となりて、その一部分の傳はれるのみ。

じやうぐう-しよ 上宮疏【名】上宮太子の法華・維摩(ユイマ)・勝鬘(シヨウマン)の三經に施したまひし義疏。

じやうぐう-たいし 上宮太子【名】〔人〕『用明天皇その聰明を愛して、宮南の上殿に居らしめたまひしよりいふ』**しやうとくたいし**(聖德太子)に同じ。

じやうぐうたいし-こう 上宮太子講【名】上宮太子の德を講讃する法會。天王寺等にて行はる。

じやうぐう-ほふわう 上宮法王【名】〔人〕聖德太子を民間にて、稱へし尊稱。

じやうぐうわうじ 上宮皇子【名】〔人〕**じやうぐうたいし**(上宮太子)に同じ。

じやうぐぼだい 上求菩提【名】〔佛〕菩薩の萬行(マンギヤウ)中、自利の方面、卽ち上に向ひて、菩提の道を求むること。自身、佛果を求むること。上求本來。(下化衆生(ゲケシユジヤウ)に對して) 盛衰記「受戒灌頂と云ふは、上求菩提・下化衆生の祕要なり」

じやうぐぼんらい 上求本來【名】〔佛〕『本來は本來の自性(ジシヤウ)卽ち衆生の眞性の義』前條に同じ。曲論「西行櫻」「それ春の花は、上求本來の梢にあらはれ」

しやうーくん 賞勳【名】勳功あるものを賞すること。

しやうーくん 湘君【名】〔人〕『湘は卽ち湘水。**しやうせ**(湘瀨)參照』支那の水神。堯の女、名は娥皇。妹女英と共に舜に嫁し、舜の蒼梧に歿するや、妹と共に江・淮の間に歿したりといふ。

しやうーくん 晶群【名】〔鑛〕結晶鐵物の雜然と集まれるもの。

しやうーくん 將軍【名】㊀一軍を將(ヒキ)ゐる職。又その職にある人。大將。將。㊁王朝時代・武家時代を通じての職制の一。古は臨時の職にて、四道將軍・騎兵大將軍・陸奥鎭東將軍・征越後蝦夷將軍・征狄將軍・左右將軍・撿校兵庫將軍・征隼人(ハヤト)大將軍・持節大將軍・征西大將軍の如く、その職掌を冠らせて呼び、多くは副將軍と併せ任ぜられ、又地方軍團の大將軍・將軍・副將軍などもあり、陸奥鎭守將軍に至りて常置職となり、征夷大將軍の名は、源頼朝追討のために平知盛任ぜられ、平氏追討のために源義仲の任ぜられしもの、及び建武中興の際、護良・成良(ナガヨシ)兩親王のこの職に任ぜられ、その他征西將軍・征東將軍・鎭守府將軍等の補任ありこれを除けば、鎌倉・室町・江戸の三時代を通じて、武門の主領たる者は、代代征夷大將軍の職名を帶ぶるを例とし、單に將軍とのみ呼ぶこと普通となるに至れり。㊂陸海軍の將官の人の敬稱。

じやうーぐん 上郡【名】大寶令の制度における郡の等級の一。十二里以上、十六里以下なるもの、卽ち大郡の次、中郡の上に位するもの。(中郡・小郡・下郡に對して)

しやうぐん-おび 將軍帶【名】古の武官が禮服の時に用ひし、金鈿にて飾りたる帶。

しやうぐん-かふ 將軍家譜【名】〔書〕京都鎌倉將軍より、織田信長・豐臣秀吉に至るまでその世系を、漢文にて記せるもの。七卷。林道春の著。

しやうぐんきよく 賞勳局【名】內閣に直屬する一局。勳位・勳章・年金・記章・褒章等、その他榮典に關する事務及びその被褒を掌る役所。總裁・書記官・局の職員を置く。

しやうぐん-け 將軍家【名】㊀征夷大將軍の家柄。㊁「職。

しやうぐん-しよく 將軍職【名】將軍たるの職。

しやうぐん-せんげ 將軍宣下【名】武將が征夷大將軍に任ぜらるるに就きて、朝廷より宣旨を下賜せられること。

しやうぐん-づか 將軍塚【名】京都の華頂山上峰にある塚。桓武天皇の御時、平安城主護の神として、八尺の土偶に、鐵甲を裝ひ、弓矢を携へしめて埋めたるもの。事變起らんとする前には、この塚必ず鳴動すといひ傳ふ。保元はうき星東の方に出で、將軍塚しきりに鳴動す」

しやうぐんづか-ざうえい-まき 將軍塚造營繪卷【名】〔書〕將軍塚造營の次第を記したる白描畫の繪卷物。鳥羽僧正の筆と傳ふれども、冷泉爲恭の手に成れるものなるべしといふ。將軍塚繪卷。

しやうぐんづか-まき 將軍塚繪卷【名】〔書〕前條に同じ。

しやうぐん-ぼく 將軍木【名】〔植〕**きささげ**(梓)に同じ。

しやうーくわ 樟科【名】〔植〕**くすのき**(樟科)に同じ。

しやうくわ 彰化【名】〔地〕臺灣臺化縣の所在地。本島の中部に位し、縱貫鐵道の一要驛たり。

しやうーくわ 漿果【名】〔植〕『英 Berry』閉果の一。外果皮は表皮をなし、內果皮と中果皮とは漿質となれるもの。例へば葡萄・すぐりの實の類。液果。

しやうーくわ 正花【名】〔文〕連併にて、「花の都」・「波の花」などのごとく、譬喩的に用ひたるものならで、眞の花を言ひあらはしたる言葉。「じ。

しやうくわ 唱和【名】**しやうわ**(唱和)に同じ。

じやうーくわ 上卦【名】六爻の卦の中の、上位にある三つの爻。(下卦(ゲクワ)に對して)

じやうーくわ 情火【名】熱烈なる感情を火に譬へていふ語。「に同じ。

しやうーくわい 商會【名】**しやうしや**(商社)に同じ。

しやうーぐわい 象外【名】俗を離れたる境界。常人の居らざる所。塵外。世外。

じやうーくわい 情懷【名】心に思ふこと。おもひ。

じやうーくわい 常會【名】〔法〕毎年又は毎月と、一定して開く會。(臨時會に對して)

じやうーぐわい 城外【名】㊀都を出でて、地方に行くこと。(古語) 大鏡「ある人、城外やしたまへりしといへば、遠國にはまからず、和泉國にこそ、貫之のぬしの御任に下りて侍り」

しやうーくわう 聖光【名】〔人〕**べんちやう**(辨長)に同じ。

じやうーくわう 上皇【名】天皇の讓位後の尊稱。おりゐのみかど。太上皇。太上天皇。

じやうーくわう 城隍・城堭【名】**じやうがう**(城濠)に同じ。

じやうくわう-でん 常荒田【名】常に荒地として、耕地の中に入れざる田。

じやうくわう-べう 城隍廟【名】支那にて、都邑の鎭守の神を祀れる祠。處在にあり。

じやうくわうみやう-じ 淨光明寺【名】相模國鎌倉郡鎌倉町扇ヶ谷(オフギガヤツ)に在る眞言宗の寺。もとは眞言・天台・律・禪四宗を兼學せり。本尊は足利直義寄付の矢拾地藏。建長三年北條長時の創建。後醍醐天皇の時勅願所となる。

じやうーくわく 城郭・城壕【名】㊀城とくるわと。城と外郭と。㊁城のくるわ。㊂「る菓子。

じやうーくわし 上菓子【名】品質の上等なしろ(城)に同じ。

じやうーぐわし 上菓子屋【名】上菓子を製し、又賣る家。

しやうーぐわつ 正月【名】**しやうぐわつ**(正月)

に同じ。【古語】 松頭はしやうぐわち・三ぐわち・四五月」

しやう-くわつ 生活 【名】 **せいくわつ**(生活)に同じ。徒然「生活・人事・伎能・學問等の諸縁を止めよ、とこそ釋迦も侍れ」

しやうくわつ 正月 【名】 ㊀陰暦にて、年の第一の月。 ㊁心樂しく遊ぶことの譬。【俚語】「何時も正月」。

正月の三つある時 【句】『陰暦にて、閏月ある年は、正月が二度あれども、その三度あることは全く無きによりていふ』永久にその時無き譬。【諺語】

唐(タウ)の正月 【句】『せうさい(小歳)を見よ』とうじ(冬至)に同じ。

春(シュン)王の正月 【句】春秋經に見ゆる句。單に正月といふに同じ。

しやうぐわつ-いふく 正月衣服 【名】 ㊀正月に著る衣服。 ㊁晴の時に用ふる衣服。はれぎ。

しやうぐわつ-がひ 正月買 【名】正月の女郎買。 夕霧阿波鳴渡「正月買の大大盡」

しやうぐわつ-ご 正月御 【名】 **せちご**(節御)に同じ。

しやうぐわつ-こそで 正月小袖 【名】正月に著る小袖。

しやうぐわつ-ことば 正月言葉 【名】うはべの上品なる應對のことば。 女五枕羽子板「折目正しく正月詞、嘸御窮屈と存じ」

しやうぐわつ-もの 正月物 【名】正月を迎ふる仕度の物品。 浮世風呂「正月物を拵へたいにも隙がなし」

しやうくわ-のだい 章華臺 【名】『左傳の昭公七年の條に「楚王成二章華之臺一、願下與二諸侯一落レ之」、漢書に「楚起二章花之臺一而黎民散、秦興二阿房之殿一而天下亂」とあり』支那周末に、楚の靈王が營みし王城の臺。東西九町、南北十町、高さ四十丈なりといふ。章臺。 平家「楚、章華の臺を立てて、黎民散(サン)け、秦、阿房殿を起しては天下亂るといへり」

しやうくわん 將官 【名】陸・海軍の上級の武官、即ち大將・中將・少將の稱。

しやうくわん 莊官 【名】 ㊀しやうじ(莊司)に同じ。 ㊁しやうや(莊屋)に同じ。

しやうくわん 商館 【名】 ㊀商人の營業を行へる家。 ㊁外國人の我が國に居住して、貿易を營める家。

しやうくわん 娼館 【名】 いうぢよや(遊女屋)に同じ。

しやうくわん 奬勸 【名】 くわんしやう(勸奬)に同じ。

しやうくわん 償還 【名】 ㊀しやうきやく(償却)に同じ。 ㊁(法)債權の目的たる給付をなして、債務を消滅せしむること。

しやうくわん 掌管 【名】 くわんしやう(管掌)に同じ。

しやうくわん 賞翫 【名】 ㊀めでもてあそぶこと。めではやすこと。もてはやすこと。 ㊁あぢはふこと。賞味。翫味。 ㊂重んずること。尊重。珍重。 太平記「再三感じて賞翫せられ」 ㊃(哲)かんしやう(鑑賞)に同じ。

しやうくわん 上幹・上浣 【名】『さんくわん(三澣)を見よ』

じやうくわん 上官 【名】 ㊀太政官の官人。【古語】 源氏「かゝる内記はじやうくわんなければ、おくれてぞ參れる」 ㊁太政官の官人中、辨・少納言・外記(ゲ)・史生(ノジ)の稱。 ㊂だじやうくわん(太政官)の略。

じやうくわん 淨官 【名】 寺院の執事。

じやうぐわん 情願 【名】 情實を申しのべて願ふこと。懇願。嘆願。

しやうくわん-えんしふ 將官演習 【名】將校演習旅行の一。參謀總長又は同次長の統裁の下に、高等兵術を實地に講究して、大作戰に關する機務を練習せしむるために、少將及び相當官(時として、大佐及び同相當官を加ふ)を演習員として行ふもの。

しやうくわんおん 聖觀音 【名】〔佛〕『音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』

しやうくわんおん-ぎやう 聖觀音經 【名】〔佛〕『音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』聖觀音を讃請する法會。

しやうくわんおんぼふ 請觀音法 【名】〔佛〕『音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』請觀音經に依りて觀音を祈禱する法。疫病の時行ふ。

しやうくわん-き 將官旗 【名】指揮權を帶びたる海軍將官の、軍艦上にある時は檣頭に、陸上にある時は廳下の一艦、又はこの官廳の旗竿に、又公務を帶びて、端艇上にある時は、艇首の旗竿に掲ぐる旗章。大將旗・中將旗・少將旗の三種あり。

しやうくわん-ききん 償還基金 【名】公債を起すと同時に、これが償還の準備として特に設定する基金。 償還積立金。

しやうくわん-こうさい 償還公債 【名】いうきこうさい(有期公債)に同じ。 「慣習。

しやうくわんしふ 商慣習 【名】商業上の

しやうくわんしふはふ 商慣習法 【名】〔法〕商業上の習慣法。

しやうくわん-せいきう 償還請求 【名】〔法〕手形を所持する者が、その手形を受くる能はざる時、自己にその手形を移轉したる者に對して、その手形の金員の償還を請求すること。

しやうくわんぜおん 聖觀世音 【名】〔佛〕『梵 Aryavalokiesvara (阿唎耶婆路枳帝濕縛)の譯語。聖は聖者の義にて、諸觀音の根本なるが故にいふ。又、正は六觀音中、千手・馬頭等の異相なき義といふ』六觀音の一。餓鬼道の能化(ノウゲ)にて、左手に、未敷(ミフ)蓮花を持ち、右手に大悲施無畏の印を結びて、開ける蓮華の形を示し、一切衆生の妙法蓮華未だ敷(ヒラ)かざるを、將に敷かんとする意を示せるもの。單に觀世音といふは、これを指す。大慈觀世音・大悲觀世音。聖觀音。 盛衰記「聖觀世音の化身(ケシン)なりと云うて隱れぬ」

(んおぜんわぐうやし)

しやうくわん-つみたてきん 償還積立金 【名】しやうくわんききん(償還基金)に同じ。

しやうくわんねんがく-きてい-こうさい 償還年額既定公債 【名】〔經〕一定の期限内年年に償還すべき最定額の定まれる公債。

しやうくわんむじゆんび-こうさい 償還無準備公債 【名】〔經〕償還の方法定まらず、また償還基金を設けずして募集する公債。

しやうけ 莊家・庄家 【名】莊園を支配するため、本主の設置せる事務所。

しやうけ 正化 【名】〔佛〕正道を以て、衆生を敎化すること。

しやうげ 象外 【名】〔佛〕しやうぐわい(象外)に同じ。 太平記「或は象外の選に當り、俗骨忽ちに蓬萊の香を踏み」

しやうげ 障碍・障礙 【名】〔佛〕しやうがい(障碍)に同じ。 盛衰記「爲二魔王一被二障碍一て、所願成就の者あるべからず」

しやうげ 生氣 【名】『しやうこく(生剋)を見よ』陰陽家にて、十二支を、(正月は子、二月は丑等の順に)十二箇月に配し、八卦の方位にあてて、その人のその年の吉凶を定むる、その吉の方位。

生氣の色 【句】生氣の方位に相當する色、即ち東は青、南は赤の類。ごしき(五色)(口)參照。 公事根源「主上、晝御座(ヒルノオマス)に出御ありて、生氣の色の御衣を、世のつねの御なほしの上に重ね召さる」

生氣の方 (ホウ) 【句】しやうげ(生氣)に同じ。

しやうげ 象牙 【名】 ㊀(カウ)の牙(キバ)。 ㊁『形・聲の牙に似たるよりいふ』しらげたる米。白米。 盛衰記「象牙百石」

じやうげ 淨家 【名】〔佛〕じやうどしう(淨土宗)に同じ。

じやうげ 上下 【名】 ㊀うへした。かみしも、又その人。しやうか。 五十年忌歌念佛「警固の上下緣もなき貴賤群集に至るまで」 ㊁のぼりと、くだりと。上京と下向と。 盛衰記「江戸へも上下三度笠」 ㊂ゆきとかへりと。往返。往復。(片道に對して) ㊃

袴(カヒ)の肩衣(カタギヌ)と袴と。

しやう-けい 晶形【名】結晶したる形。

しやう-けい 晶系【名】〔鑛〕けつしやうけい(結晶系)に同じ。

しやう-けい 象形【名】一かたち。形象。二〔語〕しやうけいもじ(象形文字)の略。

しやう-けい 商計【名】一考へ計ること。「こと。二商業上の計略。商略。

しやう-けい 詳計【名】つまびらかに計ること。

しやう-けい 祥慶【名】めでたきこと。吉祥。

しやう-けい 賞刑【名】褒賞と刑罰と。「賞。

しやう-けい 上卿【名】一支那周の代の王臣中、最上位に在りし卿を、更に二階級に分ちしうちの上位の者。二古、禁中の公事(クジ)の時、これを奉行せし官人の上首に位せる者。例へば大臣の奉行する公事ならばその大臣、大納言中納言の奉行する者ならばその納言。三すべて、その日の議事の長者となる者。**ないべん**(内辨)参照。四記錄所の長官。

しやうけい 祥啓【名】〔人〕**けいしよ**(啓書記)を見よ。

じやうけい 上刑【名】おもきしおき。重「刑。

じやうけい 上計【名】よきはかりごと。上策。

じやうけい 上啓【名】一けい(啓)に同じ。二古、諸司が、事を錄して、皇太子・皇后・皇太后・太皇太后に呈上せしこと。

じやうけい 上京【名】じやうきやう(上京)に同じ。「みち。

じやうけい 常經【名】平常從ふべきすぢ

じやうけい 常形【名】定まりたる形。

じやうけい 情景【名】一ありさま。光景。二感興と景色と。虛實。

しやうけい-もんじ 象形文字【名】〔語〕『英Pictograph 又 Hieroglyphic』物の形に象(カタド)りたる文字。即ち意字の一部、繪畫と同樣なるものにて、支那にては六書(リクショ)の一に數ふ。例へば、☉、𐂂、馬など。支那の外、エジプト・バビロニヤ・メキシコ等の文字にても、その原始においては、この存在を見たれども、後世に至り、發達して、音字となり了れり。象形。形象。文子。(音標文字に對して)

しやう-げう 聖教【名】〔佛〕『せいけう(聖教)を見よ』一佛のをしへ。佛道。二佛の教を書きたるもの。經文。太平記』或は金堂に走り入りて、猛火(モウクワ)の中に、腹を切りて臥し、或は聖教を抱きて、幽谷に倒れまろぶ」

しやう-げう 正教【名】〔佛〕說く所の正理にかなへる教。

じやうげう 常曉【名】〔人〕高僧。洛東法琳寺の住職。初、三論宗を學び、後、空海に就きて眞言宗に歸す。承和年中、唐に遊びて密教を受け、阿闍梨となり、歸朝後、朝廷に重んぜらる。傍ら狩野光信に學びて、畫を善くす。貞觀六年權律師に任ぜられ、同八年寂す。

じやうげ-かう 上下向【名】上向と下向と。都へ上り行くことと都より下り行くこと。

じやうげ-しん 上下震【名】〔地〕じやうげどう(上下動)に同じ。(波動震に對して)

しやうげ-せん 障礙山【名】〔佛〕『梵Vinātaka(毘那怛迦山)の譯語。象鼻山とも譯す』須彌山(シュミセン)の周圍にありしといふ七金山(シチキンセン)の一。「一。

じやうげだな 上下棚【名】四十八棚の

しやうけつ 猖獗【名】一たけりくるふこと。猖狂。二『猖は披猖の義、獗は蹶に通ず』傾き覆ること。「異稱。

しやうげつ 相月【名】しちぐわつ(七月)の

じやうけつ 淨潔【名】きよきこと。汚れなきこと。清淨。

じやうけつ 城闕【名】一支那にて、王城のしるしとして、その門外の兩傍に設け、上に樓觀を作りたる臺。宮闕。二みやゐ。宮城。宮闕。

じやうげ-どう 上下動【名】〔地〕『英Vertical motion』地震の震動する內にて垂直なる部分。水平動よりは一般に微弱なり。上下震。

しやう-けふ 商業【名】『しやう(商)を見よ』

しやうけい-もんじ 象形文字【名】〔語〕『英Pictograph 又 Hieroglyphic』物の形に象(カタド)りたる文字。即ち意字の一部、繪畫と同樣なるものにて、支那にては六書(リクショ)の一に數ふ。例へば、☉、𐂂、馬など。支那の外、エジプト・バビロニヤ・メキシコ等の文字にても、その原始においては、この存在を見たれども、後世に至り、發達して、音字

しやうげ-ぢん 上下棚【名】四十八棚の

しやうけつ 猖獗【名】一たけりくるふこと。猖狂。二『猖は披猖の義、獗は蹶に通ず』傾き覆ること。「異稱。

しやうげつ 相月【名】しちぐわつ(七月)の

じやうけつ 淨潔【名】きよきこと。汚れなきこと。清淨。

じやうけつ 城闕【名】一支那にて、王城のしるしとして、その門外の兩傍に設け、上に樓觀を作りたる臺。宮闕。二みやゐ。宮城。宮闕。

じやうげ-どう 上下動【名】〔地〕『英Vertical motion』地震の震動する內にて垂直なる部分。水平動よりは一般に微弱なり。上下震。

しやう-けふ 商業【名】『しやう(商)を見よ』

しやうけふ-かいぎしよ 商業會議所【名】一定の區域內における特定の商業家の、農商務大臣の認可を得て設立する公法人。議員五十人以下を選擧して、議決機關とし、又議員中より互選せる會頭及び副會頭その他必要なる役員(農商務大臣の認可を要す)及び事務員を置きて、その地方における商工業の發達を圖り、兼ねて商工業上の意見を官廳に開陳し、又その諮問に應答して、經濟行政を補助す。

しやうけふくわいぎしよはふ 商業會議所法【名】商業會議所の事項を規定せる法律。明治三十五年の公布。

しやうけふ-けういく 商業教育【名】商業家たるに必須の科目を課し、有爲の商人を養成するを目的とする教育。

しやうけふ-こぎって 商業小切手【名】〔商〕爲替手形と同樣の取引に基きて振出

適合せしめ、その價の差額に依りて、利益を收むる業。あきなひ。商法。二〔法〕商行爲を目的とする業務。

じやう-けふ 常業【名】日常の業務。

しやうけふ-か 商業家【名】商業に從事する人。商人。「商界。

しやうけふ-かい 商業界【名】商業の社會。

しやうけふ-がく 商業學【名】商業に關する原理・原則を講究する學問。

しやうけふ-がくかう 商業學校【名】實業學校の一。商業上の智識を養成する學校。高等商業學校・甲種商業學校・乙種商業學校の三種に分つ。

しやうけふ-がくし 商業學士【名】しやうがくし(商學士)を見よ。

しやうけふ-ぎんかう 商業銀行【名】〔商〕商業家の便宜を計るために設立し、主として要求拂の債務を負ひ、短期の資本放下に營業資金を利用する銀行。銀行中の最も普通なるものにて、預金・割引・貸付等を主なる業務とし、爲替・代金取立・公債株券及び地金の賣買・保護預等をも營む。

しやうけふ-くみあひ 商業組合【名】貨物の供給又は生產の人爲的獨占等を目的として組織したる商人の團體。

しやうけふ-けいざい 商業稅【名】しやうぜい(商稅)に同じ。

しやうけふ-せいさく 商業政策【名】〔經〕『英Commercial policy』國家又はその他の公共團體が國民經濟の完全なる發達を助成せしめんがため、商業に關して執る方法並びに施設。

じやうけふせいさく-がく 商業政策學【名】〔經〕商業政策を研究する學。

じやうけふせいど 商業制度【名】『英Commercial system』商業取引に關して設定せられたる一切の制度。

しやうけふ-ちやうぼ 商業帳簿【名】商法の規定により、商人がその財產の狀況を明瞭ならしむるために作成せざるべからざる帳簿。我が國の商法においては、日記帳・財產目錄・貸借對照表の三種とす。

しやうけふ-ちり 商業地理【名】『英Commercial geography』商業に直接の關係ある地理。即ち貨物の產出・製造・分配・交換など

す小切手。必ず一覽拂たるべく、その所持人はその日附より一週間內に呈示して、その支拂を求むるを要する點において、小切手の性質を有し、爲替手形とは同じからず。(銀行小切手に對して)

しやうけふ-さんじゆつ 商業算術【名】商業に關する數の計算法、又はその技術。

しやうけふ-じだい 商業時代【名】〔經〕『英Commercial age』社會の發達を生產の種類によりて區分したるものの一。農業時代より進歩して分業盛んに行はれ、商業ますます發達し、國民の經濟活動が有機的となれる時代。(漁獵時代・農業時代・牧畜時代・工業時代に對して)

しやうけふ-しほん 商業資本【名】商業を營むために用ふる元手。

しやうけふ-しようけん 商業證券【名】〔法〕『英Commercial paper』有價證券が一の有價物として、商取引の目的物たる場合の稱。

しやうけふ-しようにん 商業使用人【名】〔法〕雇傭契約によりて、主人の商業を補助する支配人・手代・番頭などの類。

しやうけふ-ぜい 商業稅【名】しやうぜい(商稅)に同じ。

しやうけふ-せいさく 商業政策【名】〔經〕『英Commercial policy』國家又はその他の公共團體が國民經濟の完全なる發達を助成せしめんがため、商業に關して執る方法並びに施設。

じやうけふせいさく-がく 商業政策學【名】〔經〕商業政策を研究する學。

じやうけふせいど 商業制度【名】『英Commercial system』商業取引に關して設定せられたる一切の制度。

しやうけふ-ちやうぼ 商業帳簿【名】商法の規定により、商人がその財產の狀況を明瞭ならしむるために作成せざるべからざる帳簿。我が國の商法においては、日記帳・財產目錄・貸借對照表の三種とす。

しやうけふ-ちり 商業地理【名】『英Commercial geography』商業に直接の關係ある地理。即ち貨物の產出・製造・分配・交換など

の有様を詳かにし、世界各國内又は各國間の交通などを研究するもの。

しやうげふ-つうしん 商業通信【名】〔商〕商業に關して、商人間又は商人と非商人間とに往復する通信。

しやうげふ-てがた 商業手形【名】〔商〕『單に融通のために振出したるものにあらずして、純然たる商取引上の支拂決濟のために振出したるものなる意』こじんてがた（個人手形）に同じ。

しやうげふてき-しよくみんち 商業的植民地【名】商業を目的とする植民地。

しやうげふ-とうき 商業登記【名】〔法〕商法の規定によりて登記すべき事項、即ち商號・未成年者又は妻の商業後見人の代理商業・商業使用人・支店・會社に關する事を、法定の手續に從ひ、裁判所にて登記すること。商人に關する事項を、一般世人に公示せしむるを目的とするものにして、その手續は非訟事件手續法に定む。

しやうげふ-とうきじよ 商業登記所【名】商業登記を管轄する登記所、即ち登記の申請をなす者の營業所所在地の區裁判所、又はその出張所。

しやうげふ-とうきぼ 商業登記簿【名】商業登記のために、商業登記所に備へ置く帳簿。商號登記簿・未成年者登記簿・妻登記簿・後見人登記簿・支配人登記簿・合名會社登記簿・合資會社登記簿・株式會社登記簿・株式合資會社登記簿・外國會社登記簿の十種に分つ。

しやうげふ-とし 商業都市【名】商業を以て立つ都市。

しやうげふ-はふ 商業法【名】商法法典を編纂するに、商業を基礎として、商事關係を定むるもの。

しやうげふ-ぼき 商業簿記【名】商業即ち小賣業・卸賣業・問屋營業等の會計整理に應用したる簿記法。

しやうげふ-ほしふがくかう 商業補習學校【名】實業補習學校の一。商業學校の程度最も低きもの。修身・國語・算術及び商業に關する科目、外國語の類を教授す。

しやうげふ-りよかうにん 商業旅行人【名】〔商〕じゅんくわいはんばいにん（巡回販賣人）に同じ。

しやうげふ-わりびき 商業割引【名】〔商〕ぎんかうわりびき（銀行割引）に同じ。

しやうけん 商權【名】商業上の權力。商業上の勢力。

しやうけん 請見【名】謁見を請ふこと。請謁。

しやうけん 正見【名】〔佛〕八正道の一。苦集滅道の四諦の理に分明なること。

しやうけん 彰顯【名】けんしやう（顯彰）に同じ。

しやうけん 聖憲【名】〔人〕眞言宗の學僧。字は定林。和泉國堺の人。紀州根來（ねごろ）山中性院の增喜に密教を學び、後、同院の學頭に推さる。元中九年寂す。年八十六。

しやうけん 詳言【名】詳かにいふこと。

しやうけん 象限【名】〔數〕一しぶんえん（四分圓）に同じ。二ちよくかく（直角）に同じ。

しやうげん 莊嚴【名】さうごん（莊嚴）に同じ。梨花「堂のしやうごん、例のいとめでたし」

しやうけん 將監【名】近衞府の判官。行幸の時、緋の裝束にて、馬に乘り、弓矢を持ちて、御劍の役に當り、また五月の賭弓（のりみ）をも勸めたりといふ。

しやうげん 正元【名】後深草天皇の御代の年號（紀元一九一九年）。

しやうげん 昌言【名】盛德の言葉。美言。

しやうげん 昌原【名】〔地〕朝鮮慶尙南道の東部昌原郡にある都邑。鐵道馬山線の一驛。馬山府の東北五哩餘。肥沃なる一大盆地の中心に位す。

じやうけん 情見【名】〔佛〕妄情の所見。

じやうけん 常見【名】〔佛〕二見の一。吾人は今世にて死すれども、後世にまた生き、相續して絶ゆることなしといふ妄見。うけん。（斷見に對して）盛衰記「愚に常見を成じて、怨念（オモヒ）を含む」

じやうけん 常憲【名】定まりたるのり。

じやうけん 上件【名】前に述べたる事項。前件。

じやうけん 上肩【名】一〔佛〕自分より上位に居る人。（下肩に對して）二自己の身の左。（下肩に對して）

じやうけん 狀元【名】『隋餘叢考』に「狀元之名、唐已有之、自武后初試貢士於殿前、別其等第、第一人下側有奏狀、其居首者、因曰狀類、亦曰狀元」とあり』支那明・清時代の科擧にて、會試即ち第二回試驗を通過したる者、更に宮中にて勅題を試みられ、上、進士となる時、成績によりて、三等に區別せられ、中の、第一等に列せし者。第二等を榜眼、第三等を探花といへり。魁星。

じやうけん 上弦【名】〔天〕新月後七日ほどにして、月面がその直徑を上方に向けて半圓形をなすこと。（下弦に對して）

じやうげん 上元【名】三元の一。陰曆正月十五日を節日としての稱。この日、小豆粥を煮、庭上の机の上に置きて、天狗を祭るに、その粥凝る時、東方に向ひて再拜長跪して服すれば、年中疫病に罹らずと云傳へたるによりて、古來亥の刻に小豆粥を食ふ風習なり。この日を節日とするは、支那の習俗の移れるなれど、支那には粥の事なし。（中元・下元に對して）げんせう（元宵）。もちがゆ（望粥）かゆづゑ（粥杖）參照。

じやうげん 淨眼【名】〔佛〕じやうざう（淨藏）一を見よ。

しやうげん-ぎ 象限儀【名】しぶんぎ（四分儀）に同じ。

しやうげん-くらまつり 將監鞍馬流【名】くらまつり（鞍馬流）に同じ。

じやうげん-けん 常現圈【名】〔天〕こうけん（恒見圈）に同じ。

しやうげん-さま 將監樣【名】『水軍の總統者向井將監の如く坐り居る意ならんといふ』乘合の釣船などにて、船首の最も前方に坐れるもの。〔德川時代の語〕

じやうげん-じつ 上元日【名】上元の當日。

しやうげん-まい 昌原米【名】朝鮮慶尙南道昌原附近より產する米。

じやうけん-ゐん 常憲院【名】〔人〕とくがはつなよし（德川綱吉）の諡（おくりな）。

しやうけ-ら 【名】『しやうはしやうめんこんがう（青面金剛）と關係あるか。けらは蠑螈の義か』庚申の夜、早く寢ぬる者に禍をなすといふ鬼。

じやうげ-らふ 上下臈【名】上臈と下臈と。十訓「ことかきすがきをかくに、拍子ばかりを打ちて、上下臈をいはず、堪能の者に讓りて、かれがうたふを待つなり」

じやうける 【動下一自】『じようをる』を見よ』たはむる。ふざける。浮世風呂「こりやこりや、じやうけるな、じやうけるな」

じやうげゐん 淨華院【名】しやうじやうけゐん（淸淨華院）に同じ。

じやうげ-ゑ 上下畫【名】上より見るも下より見るも、同一の形に見ゆる繪畫。圓幅畫。

しやうこ 庄庫【名】庄園の役所の米庫。鄕藏（クラ）「名。東鑑「或令レ納二置庄庫一」

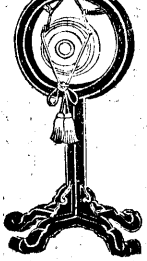
しやうこ 掌固【名】くわじやう（官掌）の唐名。

しやうこ 掌故【名】古、支那にて、禮樂の故事を掌りし官。「こと。

しやうこ 尙古【名】古の文物をたっとぶこと。

しやうこ 商賈・商估【名】『周禮の天官大宰に「商賈者通二貨賄一」とありて、鄭玄の註に「行曰レ商、坐曰レ賈」とあり。即ち行商（ギヤウシヤウ）と店商（ヅクリアキナヒ）となり』あきなふこと、又その人。

しやうこ 鉦鼓【名】一軍中にて用ふる鉦（カネ）と太鼓と。二雅樂に用ふる樂器の一。多くは靑銅製にて、形圓くして皿の如く、懸垂して打叩くやうにせるもの。和名鉦鼓、俗云三常古一」三佛敎の儀式に用ふる靑銅製の樂器。圓形にして、やや深き盆のごとく、臺に吊し、又は座臺を附して、念佛の際叩きて、その調子を取るに用ふ。



（二こうやし）

しやうこ 彰乎【貌】あきらかなるさま。彰彰。

しやうご 正午・晌午【名】『正午は正しき午（ウマ）の刻の義。晌は晝間の義』晝の十二

時、即ち正子(シヤウシ)と次の正子との中央に位する時刻。まひる。うまの時。

しやうご 正語【名】〔佛〕はっしやうだう(八正道)を見よ。

しやうご 聖語【名】〔佛〕『梵 Aryabhāsa の譯語』さんすくりっと(散斯克)に同じ。

じやうご 上古【名】■おほむかし。太古。門出入鳥』物の哀は多けれど、かかる例は上古にも又末代にもあるべからず」■歴史上の年代の大體の區分の一。我が國にては、神武天皇より大化の革新まで、西洋にては、有史以後、羅馬帝國の東西分裂まで。

じやうご 上戸【名】大寶令の制度における課戸の一。課丁六人以上八人以下なる戸(コ)。

じやうご 城狐【名】次條を見よ。

城狐社鼠【句】『城に棲む狐、社に棲む鼠は、これを除かんとすれば、その城を毀ち、社を損ふに至るがために、人これに手を下さざるよりいふ。韓非子の外儲說右上篇なる桓公と管仲との問答に見え、又、晏子春秋の問上篇、說苑善說篇等にも見ゆ』君側に在る姦邪の臣の譬。

じやうご 上戸【名】『經史摘語に世說に上頓、吳志に小戸、白詩に戸大とあるを引きて「按以飮酒爲二大小戸一、三國之時語也、今以レ喰レ酒號二上戸一、以三上頓與二戸大一幷言也、又、梁雨軒詩話に「唐元稹詩、病嗟酒戸年年減、清朱彝尊詩、休レ嘲酒戸年來減、勸レ客還能卷白波一、以上二詩是謂二酒量一也、我俗謂二多飮一酒者一爲二上戸一、不レ能二多飮一者爲二下戸一、猶下在漢土二稱中大戸小戸上也」とあり』酒を好みて飮む人。酒客。酒豪。大戸。(下戸に對して)

じやうご 上戸【名】■金屬又は木などにて製し、上は開き、底は細くすぼまりて笞となり、形恰も朝顏の花の如くして、液體を他の器に注入する時、他へ零れ出でぬやうに、注口に差入るる具。■穀類を俵に入るるに用ふる器。形は前記のに似、竹などにて編みて造れるもの。

じやうご 情語【名】情をふくめたる語。

じやうご 常語【名】平常いふ語。

じやうご 淨居【名】〔佛〕じやうごてん(淨居天)の略。

しやうこう 相公【名】さいしやう(宰相)■に同じ。平家「樂盡きて哀來る、と書かれたる江相公の筆の跡」

しやうこう 商工【名】商業と工業と、又あきうどと職人。

しやうこう 庄公・莊公【名】莊園と公田。

しやうこう 猩紅【名】猩猩緋の色に似たる色。

しやうこう 症候【名】〔醫〕病氣の際にあらはるる狀態、即ち熱・痛・膿(ウミ)など。これらは、病質によりて大抵一定せる故、診斷上の標準となる。症狀。

じやうこう 城溝【名】城のほり。城隍。

じやうこう 成功【名】『事功を成就せしむる意』王朝時代、紀綱廢弛するに及びて、朝廷に造營・造寺など臨事の公用ある場合に、私財を獻じて、これを辨じたる報酬に、官位を授けられしこと。盛衰記「成功の人を召し附けて、貫主に申しければ」

しやうこう-がくかう 商工學校【名】商業及び工業に關する學科を授くる學校。

しやうこう-きよく 商工局【名】農商務省の一局。商務局と工務局とを合併せられし名稱。各その條を見よ。

しやうこう-くわいぎしよ 商工會議所【名】しやうげふくわいぎしよ(商業會議所)の舊稱。

しやうこう-げふ 商工業【名】商業と工業。

しやうこうげふ-じだい 商工業時代【名】【經】商業時代と工業時代と。商工時代。

じやうこう-こうし 上工師【名】こうし(工師)を見よ。

じやうこう-じ 淨興寺【名】越後國高田市にある眞宗の寺。歡喜踊躍(クヨウ)山と號す。建保五年宗祖親鸞これを常陸國西茨城郡西山内(ウチ)村大字稻田に創建せしが、後、兵亂のために信濃國上水内(カミ)郡長沼村に移り、また武田・上杉兩氏の戰亂により、越後國春日山麓に移り、慶長中松平忠輝の高田城を築くや、更に今の地に移れり。

しやうこう-じたい 商工時代【名】【經】しやうこうげふじだい(商工業時代)の略。

じやうこうじは 淨興寺派【名】〔佛〕眞宗の一派。越後國高田市の淨興寺を本山とするもの。もと大谷派に屬せしが、近年故ありて獨立す。

しやうこう-しようじやう 掌工證狀【名】しやうこうれんしふせい(掌工練習生)を見よ。

じやうこう-こうせい 上工生【名】こうせい(工生)を見よ。

じやうこう-こうちやう 上工長【名】こうちやう「(工長)を見よ。

しやうこう-ちり 商工地理【名】商工業の方面より記述せられたる地理。

しやうこう-ねつ 猩紅熱【名】〔醫〕傳染病の一。初は突然發熱し、發育期は四日乃至七日なるを常とし、その終頃に至れば、無數の微疹まづ胸部に發して、忽ち全身に擴り、體紅色を呈す。かくて三四日繼續し、癒ゆるに隨ひて、皮膚剝脫す。小兒は最も感染しやすし。病毒は、皮膚の碎片等の中に存するものなるが故に、快癒後、第六週に至るまでは、傳染性ありとせらる。

しやうこう-はい 賞功牌【名】しやうはい(賞牌)に同じ。

しやうこう-こうはふ 商公法【名】〔法〕商法の一。商事に關する公法。即ち各種の行政法令・刑法・訴訟法中にて、商事に關する法規を一括して呼ぶもの。(商私法に對して)

しやうこう-へい 掌工兵【名】掌工練習生の卒業せる者。

しやうこう-れんしふせい 掌工練習生【名】海軍工機學校の練習生の一。海軍一等乃至三等機關兵及び進級停年を超過したる同四等機關兵にて、規定の資格に適せる者より選拔し、卒業者には掌工證狀を與へて、掌工兵と稱せしむ。

しやうこ-がいしよく-いちらん 尙古鎧色一覽【名】〔書〕鎧の絨毛(ジウモウ)を圖說せるもの。二卷。本間百里の著。故實叢書に收む。

しやうこ-がくは 商估學派【名】〔經〕おつうきんは(重金派)に同じ。「よ。

しやうこく 生剋【名】ごぎやう(五行)を見よ。

しやうこく 生國【名】生れたる本國。

しやうこく 相國【名】『國政を相(スク)くる人の意』■さいしやう(宰相)■に同じ。■だいじやうだいじん(太政大臣)とさだいじん(左大臣)とうだいじん(右大臣)との唐名。だいじやうこく(大相國)參照。

しやうこく 正五九【名】正月と五月と九月と。しやうごくぐわつ(正五九月)參照。

しやうこく 上刻・上剋【名】昔、一時(トキ)即ち今の約二時間を三分したる、その初の時。(中刻・下刻に對して) 丹波奧隹「刻限は、巳の上刻との定めにて」「城。

じやうこく 城國【名】■城と國と。■居

じやうこく 淨國【名】〔佛〕清淨なる佛國。

じやうこく 上國【名】■邊鄙の地より都の附近を指しての稱。かみがた。近畿。■大寶の制にて、國を四等に分ちたる、第二位のもの。山城・攝津などはこれに屬したり。(大國・中國・下國に對して)

じやうこく 上告【名】■上に申し立つること。上申。■〔法〕上訴の一。第二審の判決の違法なる點を指摘して、その判決を自己に有利なるやう變更せられんことを、第三審裁判所、即ち上告裁判所に要求すること。こうそ(控訴)參照。「じ。

じやうこく 讓國【名】じやうゐ(讓位)に同じ。

じやうこく-きかん 上告期間【名】〔法〕上告をなし得る一定の期間。刑事訴訟にては、判決言渡の日より三日間、民事訴訟にては、判決の送達ありし日より一箇月間とす。

しやうこ-ぐわつ 正五九月【名】さんちやうさいげつ(三長齋月)に同じ。俳諧續明月の紅葉「正五九月の神參り」

しやうこくさいはふ 商國際法【名】〔法〕商法の一。商事に關する國際上の法規。

じやうこく-さいばんしよ 上告裁判所【名】上告審の裁判所。即ち第三審級の裁

判所。控訴院又は大審院。第三審裁判所。

しやうこく-じ 相國寺【名】京都市上京區今出川(イマデガハ)通相國寺門前町に在る臨濟宗の寺。相國寺派の本山。京都五山の第二。永德三年足利義滿の建立に係り、春屋妙葩を開山とす。妙葩その師夢想疎石を第一世とし、自ら第二世となる。爾後しばしば火災に遇ひ、今存するは、天明以後に造立する所なり。七二職人歌合「我れ我れも、今朝は相國寺に又めされ候。暮れてぞ歸り候はんずらん」

じやうこく-じ 淨國寺【名】武藏國南埼玉郡柏崎村にある淨土宗の寺。關東十八檀林の一。世に岩槻(イハツキ)の淨國寺と呼ばる。天正十五年總譽清巖の建立。檀越は岩槻城主太田氏房。本尊は安阿彌作の阿彌陀の三尊。

しやうこくじは 相國寺派【名】臨濟宗の一派。春屋妙葩(普明國師)を派祖とし、相國寺を本山とするもの。

じやうこく-しん 上告審【名】〔法〕上告の審判。第三審。(控訴審に對して)

じやうこく-じやう 上告狀【名】上告裁判所に差出す上告の書狀。**じやうこくよなふきん**(上告豫納金)參照。

じやうこく-しゆいしよ 上告趣意書【名】【名】上告申立人が、その上告の趣意を記して、上告を申し立ててより五日以內に差出すべき文書。

じやうこく-にん 上告人【名】〔法〕民事訴訟の判決に對して、上告をなす人。

じやうこく-まうしたて-しよ 上告申立書【名】上告裁判所が上告をなすため、原裁判所に差出す書狀。

じやうこく-まうしたて-にん 上告申立人【名】〔法〕刑事裁判所の判決に對して、上告の申出をなす人。

じやうこく-よなふきん 上告豫納金【名】〔法〕上告の際、その上告人が、上告狀に添へて、上告裁判所に必ず豫納すべき金。**じやうこくじやう**(上告狀)參照。

じやうこ-し 上古史【名】上古の事蹟を記せる歷史。

しやうこ-しゆぎ 尙古主義【名】古代の文物を尙び、これに則らんとする主義。【文・美】**きこしゆぎ**(擬古主義)に同じ。

じやうごたけ 上戶茸【名】〔植〕『この茸を盃に持添ふれば、酒悉く茸に吸入れらるるよりいふとぞ』茸の一種。土佐國の山中に產し、形、椎茸(シヒタケ)に似たり。

しやうこつ 掌骨【名】〔醫〕『羅Ossa metacarpi』腕骨と指骨との間に羅列して、手掌を成す五箇の小骨。

しやうごつうはうれう 正午通報料【名】電鈴線を郵便電信局又は電信局に接續して、正午時の通報を受くる者の納むる料金。

じやうごつじき 常乞食【名】〔佛〕**じやうぎやうごつじき**(常行乞食)に同じ。

じやうごてん 淨居天【名】〔佛〕『梵Shuddhāvāsadeva の譯語』色界(シキカイ)四禪天の一なる第四禪天中の最上に位するもの。欲界第九品の煩惱を解脫(ゲダツ)して、不還果(フゲンクワ)を得たる聖者のみの生ずる處にして、故に不還天の別稱あり。又これに無煩天・無熱天・善見天・善現天・色究竟(シキクキヤウ)天の五等の差別あり。淨居。梨花「淨居天變じて、生老病死を現じて見え奉り」

しやうごと 仕樣事【名】**せうごと**(爲事)の誤。膝栗毛「りんきでも始られえ、どうもしやうことがねえはさ」

しやうこねんぺう 尙古年表【名】〔書〕古器古像古碑古文書等の年表。雄略天皇の元年より嘉永二年に及べり。七卷。山本隱倫の著。藤井貞幹・栗原柳庵等の考證を附するを以て、尙古學者に便する所多し。

じやうごは 情強【名】**じやうじやう**(強情)に同じ。狂言「宗論」「きやつは、家例の情ごはでおぢやる。道すがら爭ひませうず」

しやうごふ 正業【名】〔佛〕**はつしやうだう**(八正道)を見よ。

じやうごふ 成劫【名】〔佛〕**しこふ**(四劫)を見よ。水鏡「世のはじまる時をば成劫と申して、この中劫と申しつる程を、二十すぐすなり」

じやうごふせかい(劫成世界)に同じ。

じやうごふ 成業【名】學問を世襲(セシフ)せる家の人。(非成業に對して)〔平安朝時代の語〕名目抄「成業、ジヤウゴフ」

じやうごふ 淨業【名】〔佛〕淸淨なる業(ゴフ)。善業(ゼンゴフ)。

しやうこん 掌根【名】〔植〕『英Palmate root』塊根の更に變形して、恰も掌狀をなせるもの。蘭の種類にこれを認む。

しやうこん 傷痕【名】傷のあと。きずあと。傷痍。

しやうごん 莊嚴【名】**さうごん**(莊嚴)に同じ。梨花「堂のしやうごん例のいとめでたし」

しやうごん 聖言【名】〔佛〕**しやうご**(聖語)に同じ。

じやうこん 上根【名】〔佛〕すぐれたる根機。上機根。上機。(下根に對して)

じやうこん 淨根【名】〔佛〕淸淨なる六根。

じやうごん 淨嚴【名】〔人〕眞言宗の僧。俗姓は上田、字は覺彦、瑞雲山人・高求山人・虛白堂等の號あり。柳澤保明及び將軍綱吉の保護を得、江戶本鄕湯島に靈雲寺を建て、貞享十五年寂す。年六十四。安祥寺流の聖教を書改めて、新說明を加へしにより、世にその流を新安流と稱す。

じやうこんがらーぬん 淨金剛院【名】**てんりゆうじ**(天龍寺)を見よ。

しやうごん-ろん 莊嚴論【名】〔書〕**だいじようしやうごんろん**(大乘莊嚴論)の略。

しやうこり 性懲【名】懲るること。性懲も無し【句】少しも懲りず。性(シヤウ)も懲も無し。雙生隅田川「やあ性懲もなきお客達、今度の馳走の獻立見よと、景氣を水の深みへ投込み」

しやうごゐん 聖護院【名】『增譽・聖體護持の功勞によりて、白河上皇より住持せしめられし寺なるによりて、この名に改む』京都市上京區聖護院町にある天台宗の寺。同宗寺門派の大本山。世俗法親王の住職せし所にて、同派三門跡の一たりき。智證大師の開基。中興の祖なる增譽僧正、白河上皇の熊野行幸に先達を命ぜられ、その賞として、この寺に住持せし以來、代代三井寺の長吏、熊野三山の別當に兼知せられ、また修驗道(シユゲン)を兼ね、天台宗に屬する山伏を司管す。古稱、常光院。俗稱、森御殿。

しやうごゐん-かぶら 聖護院蕪菁【名】京都聖護院町原產の蕪菁。近江蕪菁の改良せられしものにて、根の形扁平・肥大、徑八九寸に及ぶ。煮食・鹽藏共に佳なり。

しやうごゐんだいこん 聖護院大根【名】京都聖護院町原產の大根。方頷大根の改良せられしものにて、根は楕圓形にして、根冠淡綠色を帶び、肉質脆軟にして、甘味に富み、煮食に適す。

しやうごゐん-の-みや 聖護院宮【名】法親王にして、聖護院の住職たりし方。

しやうごゐん-の-もり 聖護院森【名】〔地〕京都聖護院の境內にある森。古木生ひ茂りたり。近頃河原雉引「心の內の暇乞、あすの曉となりふりも、やつす姿の女夫(トフ)づれ、名を繪草紙にしやうごゐん森をあてどに辿りゆく」

しやうごゐん-もんぜき 聖護院門跡【名】**しやうごゐん**(聖護院)を見よ。

しやうさ 將佐【名】【一】將軍と佐官と。【二】近衞の中將少將及び衞門佐(ヱモンノスケ)・兵衞佐(ヒヤウヱノスケ)の總稱。

しやうざ 商座【名】現代の株式と同一なるもの。起原につきては、諸說あれども、足利時代に、各地の守護、神社佛閣等に商業の座を置きて專賣を許可し、座外の者には、一般に商業を禁じたるに基けるがごとし。「じ。

しやうざ 上座【名】**じやうざ**(上座)【一】に同じ。

じやうざ 常坐【名】〔佛〕常に趺坐(ヂザ)して、橫臥せぬこと。

じやうざ 常座【名】能舞臺の仕手柱(シテバシラ)より少し進み出でたる所。仕手の舞臺に入る時、止まりて謠ひ出す場所。

じやうざ 上座【名】【一】かみざ。かみくら。上席。(下座に對して)【二】〔佛〕『衆僧の上席を占むるよりいふ。梵Sthaviraの譯。悉智那

の譯語。上に更に人なき意にて、長老とも譯す』三綱の一。多く法臘(ホフラフ)を積みて才ある者任ぜられて、寺主・都維那(ツイナ)と共に寺務を執るもの、又その下に權上座もありたり。座首。座元。(中座・下座に對して) 〓〔佛〕寺院にて、食堂(ジキダウ)に安置せる文殊菩薩又は賓頭盧(ビンヅル)尊者の像。聖僧(シヤウ)。

じやうざ 上座【名】〔地〕筑前國の舊郡の一。明治二十九年下座・夜須(ヤス)の二郡と併せて、朝倉郡を立つ。

じやうさい 障塞【名】とりで。保塞。

じやうさい 詳細【名】くはしきこと。つぶさ。委細。

じやうさい 清齋【名】〔佛〕清淨なる持齋。

じやうざい 掌財【名】〓財貨を掌ること。

じやうざい 聚劑【名】〔醫〕『羅 Mucilago』亞剌比亞護謨・サレップ・根・澱粉・糊などのごとき植物質の物を、水にて煮て膨脹せしめ、粘液狀にしたるもの。多くは刺戟劑の包攝用に供せらる。

じやうさい 攘災【名】わざはひをはらひのくること。

じやうさい 常歲【名】平素のとし。

じやうさい 上裁【名】〓高貴なる人の裁決。盛衰記「被ㇾ下宣命並御下文云、宜ㇾ待聖斷上仰ニ上裁一」〓天皇の御裁可。勅裁。天裁。

じやうさい 城塞・城砦【名】しろと、とりで。

じやうさい 上顎【名】〔動〕『英 Mandible』節足動物の口器の上部に位するもの。

じやうさい 淨財【名】〓寺に寄付する金錢。〓慈善の義捐(ギエン)金。

じやうさいくわうゐん 常在光院【名】足利時代に、今の京都智恩院の所在地にありし禪宗の寺。華頂山と號し、五山長老の退隱の地として、當時に聞えたり。

じやうさいーもん 上西門【名】平安城の大內裡外郭の十二門以外の披門。西面に在りて、東門院と相對し、右衞門府これを護りたり。平當「上皇、…仁和寺の方へこそ思し召したためとて、…紛れ出でさせおはします。上西門の前にて、北野の方を伏し拜ませたまひて、それより御馬に召されけり」

じやうさいもんゐん 上西門院【名】〔人〕二條天皇の准母。鳥羽天皇の第二の皇女。御名は恂子。文治五年崩ず。壽六十四。

じやうさいりやうじゆせん 常在靈鷲山【名】〔佛〕『法華經の壽量品の偈(ゲ)』に「於ニ阿僧祇劫一常在ニ靈鷲山及餘諸處一衆生見ニ劫盡大火所ㇾ燒時、我此土安穩、天人常充滿」とあるに本づく』釋迦の肉身は入滅すとも、その報身、即ち實體はその法華經を說きし地なる印度の靈鷲山にありて、永久に說法すべきこと。禁花「壽量品の常在靈鷲山の有樣、すべていふべきにあらず」

じやうざいりやうぜん 常在靈山【名】〔佛〕前條の略。謠曲〈合利〉「常在靈山の秋の空」

じやうさう 傷創【名】**さうしやう**(創傷)に同じ。

じやうさう 傷愴【名】いたみ悲しむこと。

じやうさう 尙早【名】未だ早きこと。時機の熟せぬこと。

じやうさう 將曹【名】近衞府の主典(サクワン)。

じやうさう 生相【名】〔佛〕四相の一。未起の有爲法を現在に生ぜしむる法。

じやうさう 章草【名】漢字の書體の隸書をくづして、なほ隸の筆意を失はざるもの。支那後漢の章帝これを創む。

じやうさう 庄倉【名】庄の租稅を貯ふる倉。「官倉。

じやうさう 正倉【名】古、正稅を納めたる倉。

じやうさう 正像【名】〔佛〕正法と像法と。謠曲〈東岸居士〉「正像すでに暮れて、末法に、生(シヤウ)を受けたり」「院」の略。

じやうさう 正藏【名】**しやうざうゐん**(正藏院)を見よ。

じやうさう 性相【名】〔佛〕佛教にて、一切萬有の本體と現象とを分ち顯はす語。性は理性・本性等と熟して本體をいひ、相は事相・相貌等と熟して現象をいふ。

しやうさう 尙藏【名】〓藏めおくことを尙(カド)ること。金「尙藏一人、掌ニ神璽・關契・供御衣服・巾櫛・服翫…賞賜之事一」〓**くらのかみ**(尙藏)に同じ。

しやうざう 掌藏【名】**くらのかみ**(掌藏)に同じ。

じやうさう 情想【名】感情と思想。

じやうさう 情操【名】〔哲〕『英 Sentiment』智的作用の最も複雜なる關係に伴ひて生ずる感情。即ち情緒の更に發達したるもの。智的情操・倫理的情操・美的情操(即ち趣味)・宗教的情操等に分類す。

じやうさう 常操【名】常に操守する道。

じやうざう 淨藏【名】〔人〕〓『法華經の妙莊嚴王本事品に出づ』淨眼(ジヤウゲン)と共に過去の世の光明莊嚴國の妙莊嚴王の王子にして、早く佛道を修めて神通力を得、邪見なる父王を救はんがために、種種の奇瑞を以て、父王の心を飜さしめ、終に佛に就きて、法華の利益を得しめたりといふもの。太平記「これ又善性・善子の珊提嵐(サンダラン)國に仕へし孝にも過ぎ、淨藏・淨眼の妙莊嚴王を化(ケ)せし功にも越えたれば」〓天台宗の高僧。三善清行の第八子。天曆年間八阪寺(ヤサカ)に住し、咒を以て頓斜せる塔を起し、波斯(ペルシア)國より到れる僧の宿痾を治す。康保元年洛東雲居(ウンゴ)寺に寂す。年七十四。敬ひて淨藏貴所といふ。

じやうざう-き 淨藏忌【名】十一月二十一日、京都東山雲居(ウンゴ)寺にて、開祖淨藏のために修する忌。

じやうざう-きしよ 淨藏貴所【名】〔人〕**じやうざう**(淨藏)〓を見よ。太平記「淨藏貴所を請じ奉り」

じやうざう-まつ 正像末【名】〔佛〕正法と像法と末法と。ごぢやくねん(五五百年)・さんじ(三時)參照。謠曲〈現在七面〉「滅後の弘經(グキヤウ)も、正像末に對して、今、後五百歲(ゴヒヤクサイ)の時なれば」

しやうざうまつ-わさん 正像末和讚【名】〔書〕三帖和讚の一。正像末の三時に於ける衆生の機根を說明し、末法の衆生が彌陀釋迦二佛の慈悲に由りて救濟せらるることを讚歎せる四句百十六首の和讚。眞宗の祖師親鸞の作。

しやうざう-りつぶん 正藏率分【名】古、每年大藏省に納むる調・庸及び雜物の十分の二を、正藏率分所に別納して、公用に供せしこと。

しやうざうりつぶんじよ 正藏率分所【名】〓『正藏院の內なる率分所の義』**りつぶんじよ**(率分所)に同じ。

しやうざうゐん 正倉院【名】〓**しやうさう**(正倉)を見よ〓古、大藏省以下諸國の國府(コフ)・諸寺等にありて、倉庫の數多並列したりし一區域。〓大和國奈良市東大寺の境內、大佛殿の西南にある校倉(アゼクラ)。東大寺の寶藏にして、大佛に寄進せられし珍寶及び供養・儀式等に用ひし器具を收藏せし所。もと單に正藏といひ、古は一間四方の校倉二箇並び立ちしによりて雙倉といひ、後、雙倉を連結して、新に中間に一倉を加へしより、又三倉の稱あり。間口十八間餘・奥行五間餘・高き五間餘あり。三倉の中、北倉と中倉とは、代代勅封の寶藏とし、南倉は綱封藏とて、東大寺三綱の管掌に屬せしが、明治維新後、三倉共に勅封となり、帝室の直轄に歸し、今、帝室博物館總長の主管たり。もとこの寶藏の所在地域を正藏院といひしが、鎌倉時代頃より正倉院といひ、後には寶藏そのものの名稱たるに至りしもののごとし。

しやうざうゐん 正藏院【名】〓大藏省の正倉院。〓前條〔二〕を見よ。

しやうざうゐん-ぎよもつ 正倉院御物【名】正倉院に納められたる奈良朝の帝室の御寶物。大部分は聖武天皇の御遺物に屬す。天平勝寶八年天皇の御遺物を光明皇后より奉獻の願文と共に東大寺に獻ぜられ、勅封として、正倉院に保存せられしが、爾來千餘年の間に、少しく散逸せりされど、猶數千點の寶物を今日に傳へて、當時の文化を知るに最上の資料たり。

しやうさく 牀簀【名】ゆかとしたるすのこ。

しやうさく 匠作【名】**しやうしき**(修理職)の唐名。

じやうさく 城柵【名】城のさく。

じやうさく 上策【名】最上のはかりごと。上計。(下策(ゲサク)に對して)

じやうさく 上作【名】〓よきこしらへ。出來のよきもの。上できの。(下作(ゲサク)に對し

て) ‖穀物の豊作。豊稔。

しやうさく-かん 將作監【名】木工寮(モクノツカサ)の唐名。

しやうさく-けいし 匠作計史【名】修理職(シュリシキ)の唐名。

しやうさく-けいし 將作計史【名】木工寮の唐名。

しやうさく-しゅぼ 將作主簿【名】木工屬(モクノサクワン)の唐名。

しやうさく-じょう 將作丞【名】木工允(モクノジョウ)の唐名。

しやうさく-じょう 匠作丞【名】修理進(シュリノシン)の唐名。

しやうさく-せうゐん 匠作少尹【名】修理亮(シュリノスケ)の唐名。

しやうさく-たいしやう 將作大匠【名】木工頭(モクノカミ)の唐名。

しやうさく-たいゐん 匠作大尹【名】修理大夫(シュリノダイフ)の唐名。

じやうさく-もの 上作物【名】上出來の物。

しやうさく-ろくじ 匠作錄事【名】修理屬(シュリノサクワン)の唐名。

じやうざ-さんまい 常坐三昧【名】〔佛〕常坐して三昧に入ること。天台宗にて、常行三昧・半行半坐三昧・非行非坐三昧と共に、四種三昧の一とするもの。

じやうざ-さんまいだう 常坐三昧堂【名】**じやうぎやうだう**(常行堂)に同じ。

じやうざし 狀差【名】柱などに掛けて、來狀を差しおく具。手紙ばさみ。

じやうざ-せき 上座石【名】築山に据うる、厚くして扁き石。くわんおんせき。

しやうさつ 詳察【名】つまびらかに視察すること。審察。

しやうさつ 省札【名】**みんぶしやうさつ**(民部省札)の略。

しやうざふにぎやう 正雜二行【名】〔佛〕正行と雜行との併稱。

じやうさま 上樣【代】客人に差出だす勤定書などに、客人の名の代りに用ふる敬稱。うへさま。上。

しやうさん 生產【名】**せいさん**(生產)に同じ。盛衰記「生產より成人に至るまで、終に物言ふ事なし」

しやうさん 商算【名】**しやうぎやうさんじゅつ**(商業算術)の略。

しやうさん 賞讚【名】ほめたたふること。

しやうざん 商山【名】〔地〕支那陝西(セイ)省商州(西安府の東南)の東南に在る高峰。商洛山ともいふ。

しやうざん 常山【名】〔地〕支那直隸省定州曲陽縣の西北にある山。漢の宣帝以後、明以前には、これを五岳の一なる恒山なりとして、祭祀を行へり。

じやうざん 常山【名】‖〔人〕**ゆあさじやうざん**(湯淺常山)を見よ。

しやうさんかう 正三綱【名】〔佛〕上座寺主・都維那(ツイ)の總稱。(權(ゴン)三綱に對して)

じやうざん-きだん 常山紀談【名】〔書〕天文・永祿の頃より江戸幕府の初頃までの戰國武士に關する紀事四百七十條を集錄せるもの。十五卷。湯淺常山の著。

じやうざんげ 常懺悔【名】〔佛〕「念念稱名常懺悔」を見よ。

しやうさん-し 正算司【名】大藏省の一司。正・大令史・中令史・少令史等の職員を置きたり。明治四年設置、同八年廢止。

しやうし 尚子【名】總領の子。長子。

しやうし 章幟【名】定紋のある幟(ノボリ)。

しやうし 尚齒【名】『齒(ヨハヒ)を尚(トウ)ぶ義』老人を尊敬すること。

しやうし 嘗試【名】『嘗も試むる義』試みること。ためすこと。

しやうし 省試【名】‖支那の科擧の二回目の試驗、即ち一回目の鄉試を通過して、擧人の資格を得たる者を、京師に集めて試みしもの。これを通過すれば、進士の號を授けらる。但し唐・宋時代の名稱にて、後世、會試と改稱せり。‖王朝時代の文官任用法の一。大學の試問に合格したる擧人と、國學の試問に合格したる貢人とを集めて、式部省にて行ひし試驗。秀才・明經・進士・明法及び算道に分ち、及第せる者には、成績に隨ひて、出仕を定められたり。

しやうし 將士【名】大將と士卒と。

しやうし 將指【名】『將は他の指を統率する義。左傳の定公十四年の條に「闔廬傷將指」とありて、杜預の註に足の大指の斬らるるをいふとあり、又疏には、足には大指を、手には中指を將指とする由見ゆ』手の中指、また足の親指。

しやうし 賞詞【名】‖ほめことば。賞辭。‖警察賞與の一。言葉にて賞むるもの。最も輕き功勞ありし者に與ふ。

しやうし 賞賜【名】褒美に物を賜ふこと、又その物。

しやうし 生死【名】‖**せいし**(生死)に同じ。‖〔佛〕**しやうじ**(生死)に同じ。

しやうし 瘍死【名】**わかじに**(若死)に同じ。

しやうし 匠司【名】海軍に屬して、艦船・汽機等の兵器の製作に從事せし奏任の技術官。初は、大・中・少の三等、後には大・少・權大・權少・補の五等に分れたり。明治五年に設置、同十九年に廢止。

しやうし 匠氏【名】**しやうじん**(匠人)に同じ。

しやうし 匠師【名】宮內省內匠(タクミ)寮の舊職員の一。奏任の技術官にて、明治十九年に設置、同二十二年に廢止。

しやうし 正士【名】〔佛〕**ぼさつ**(菩薩)‖の譯語。

しやうし 正子【名】〔天〕『正しき子(ネ)の刻の義』某地點において、太陽がその子午線より百八十度隔れる地點の子午線を經過する時刻、即ち正午と次の正午との中央に位する時刻。眞夜中(ヨナカ)。(正午に對して)

しやうし 商子【名】〔書〕主として富國強兵の政策を論じたるもの。もと二十九篇。現今のものは二十六篇にして、而も目錄のみにて、文なきもの二篇あり。支那の周代の商鞅の著といへども疑し。

しやうじ 生死【名】〔佛〕生(ウ)・老・病・死の四苦の終始。死生。

生死出離【名】〔佛〕「生死を離る」に同じ。太平記「悲しいかな。未來無窮の生死出離、いづれの時ぞ」

生死卽(ソク)涅槃(ネハン)【句】〔佛〕生・老・病・死の四苦と、涅槃卽ち四苦を離れたる悟境とは、互に相容れざるが如くにして、而も生死の迷界を精神的に解脫したる佛の心境より觀察すれば、生死の差別相を離れて、涅槃なく、涅槃の平等心を離れて、生死なし。「煩惱(ナウ)卽菩提」參照。〔諺語〕秋夜長物語「天上の五衰を聞きて、淨土を求むる時は、生死卽涅槃となる」

生死長夜(ヂヤヤ)【句】〔佛〕長く生死の迷界に沈淪して、これを脫する智慧の光明を有せざることを、闇黑なる長夜に譬へていふ語。生死長夜の長き夢。盛衰記「悲しいかな。凡夫たることを。痛しいかな。二空の滿月を備へながら、生死長夜の迷情たることを」

生死長夜の長き夢【句】前條に同じ。謠曲(安宅)「生死長夜の長き夢驚かすべき人もなし」

生死長夜の夢【句】〔佛〕前條に同じ。

生死に住す【句】〔佛〕生死流轉(ルテン)の苦界を脫すること能はず。(「生死を離

る」に對して）

生死に離る【句】〔佛〕「生死を離る」に同じ。平家「この界の衆生の生死に離ることを惜しみ」

生死に輪廻(リン)す【句】〔佛〕「生死輪廻」に同じ。平家「妻子は、無始廣劫よりこのかた、生死に輪廻するきづなるが故に」

生死に流轉(ルテン)す【句】〔佛〕前條に同じ。宇治「生死に流轉するは、せんずる所、煩惱にひかれて、今にかくてうき世を出でやらぬにこそ」

生死の海【句】〔佛〕生死流轉(ルテン)の苦しみの深きを、海に譬へていふ語。生死(シヤウジ)の海。「邪見の山」參照。謠曲（人島）「西海の浪にただよひ、生死の海に沈淪せり」

生死の海を渡る【句】〔佛〕流轉(ルテン)の苦海を渡りて、悟の彼岸に到り著かんとす。謠曲（船橋）「生死の海を渡るべき船橋を作らばや」

生死の岸【句】〔佛〕生死の海の岸。此岸は迷界、彼岸は悟境即ち涅槃(ネハン)。

生死の到來【句】〔佛〕「生は輕く添へたる語」死ぬべき時の來ること。徒然「われらが生死の到來、ただ今にもやあらんと、それを忘れて、物見て日を暮す」

生死の眠【句】「生死の闇(ヤミ)」に同じ。平家「後夜(ゴヤ)・晨朝(ジンデウ)の鐘の聲には、生死の眠をさますらんとも覺えたり」

生死の淵(フチ)【句】〔佛〕生死の苦しみの、人を沈むるを淵に譬へていふ語。

生死の道【句】〔佛〕生死流轉(ルテン)の道程。謠曲（野宮）「神風や伊勢の內外(ウチト)の鳥居に出入る姿は、生死の道を、神は受けずや思ふらんと」

生死の暗(ヤミ)【句】〔佛〕煩惱のために、轉迷開悟の光明に接せず、生死流轉(ルテン)の苦界を脫する能はざること。生死の眠。長夜の夢。榮花「佛日すでに涅槃の山に入りたまひなば、衆生、生死の暗に惑ふべし」

生死は車の輪の如し【句】〔佛〕『智度論の五に「生死輪載レ人、諸煩惱浩業、大力自在轉、無二人能禁止一とあり』衆生(シユジヤウ)の生死に流轉(ルテン)する樣は、車輪の廻轉するが如く、始なく終なし。「諺語」水鏡「生死は車の輪の如くにして、始まりては終り、終りては始まり、いつを始、いつを終といふことあるべからず」

生死本來佛性(ブツシヤウ)【句】〔佛〕吾人は、今、生死の迷界に沈淪すれども、本來は涅槃(ネハン)の悟を開くべき佛性を具有せり。「諺語」鷄鶏合鬪「生死本來の佛性」

生死無常(ムジヤウ)【句】〔佛〕命ある者は、生死流轉(ルテン)を免れず、常住なるを得ざること。保元「生死無常の理(コトワリ)、あはれなり」「同じ。

生死輪廻(エリン)【句】〔佛〕りん廻(輪廻)に同じ。

生死流轉(ルテン)【句】〔佛〕前條に同じ。平家「佛日はやく沒して、生死流轉の衢(チマタ)冥冥たり」

生死流浪(ルラ)【句】〔佛〕生死の海にただよふこと。生死の苦しみを脫し得ぬこと。謠曲（源氏供養）「生死流浪の須磨の浦を出でて」

生死を出づ【句】〔佛〕次條に同じ。徒然「この世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君に仕へ、家を顧みるいとなみのいさましからん」

生死を離る【句】〔佛〕佛道を修め、轉迷開悟して、生死流轉(ルテン)の苦界より脫す。涅槃(ネハン)に入る。煩惱(ボンナウ)を脫す。成佛得脫す。生死出離(シユツリ)。出離生死。〔古語拾遺〕

しやうじ 尙侍【名】『侍御(ジギヨ)を尙(サシアヒ)る義』■ないしのかみ(尙侍)に同じ。■宮中の最上級の女官。勅任官。今は廢せらる。

しやうじ 掌侍【名】『侍御(ジギヨ)を掌る義』■ないしのじょう(掌侍)に同じ。■明治初年の第三等の宮中の女官。定員四人にて、勾當掌侍二掌侍三掌侍新掌侍の稱呼を設けたり。■現制度の宮中の女官中、典侍・權典侍に次ぐもの。なほその下に、權掌侍ありて、共に奏任とす。てんじ(典侍)參照。

しやうじ 莊司・庄司【名】莊園の所有主の命を受けて、その莊園內の雜務を掌りし職。莊官たる一切の事務を掌るために、本家又は領家より置きたる役。地頭置かるるに及びて、漸く衰へたり。莊官。太平記「八庄司が內の大力よと覺えて」

しやうじ 賞辭【名】ほめことば。賞詞。

しやうじ 聖侍【名】〔佛〕しやうそうじ(聖僧侍者)の略。

しやうじ 省字【名】くづしがき(崩書)に同じ。

しやうじ 正嗣【名】せいし(正嗣)に同じ。

しやうじ 精進【名】しやうじん(精進)に同じ。「古語」やうじの物いと清らにして」

しやうじ 商事【名】『獨 Handelssache』商人及び商行爲に關する事項、並びに商法の規定するその他の事項。法律上は、まづ商法を適用し、商法に規定なき時は、商慣習法に依り、又、商慣習法もなき時は、民法を適用す。

しやうじ 障子【名】『障は壅(フサ)ぐ、界(カサ)ふ、隔つ等の意、子は接尾語』■屋內の室と室との仕切に立つる建具。明(アカリ)障子、衝立(ツイタテ)障子、襖(フスマ)障子などの總稱。殊に古は多く襖障子にいひ、又古、宮中にありし馬形(マガタ)の障子、荒海の障子などは、衝立障子なり。明障子は平安朝時代の末頃より起り、鎌倉時代には廣く行はれ、後單に障子といへば、明障子のみを指すに至れり。さうじ。落葉「へだてのしやうじをあけて出づれば」■はんかう(半頭)[一]を見よ。

しやうじ 床子【名】机のごとき形の腰掛。椅子の類なれども、背後にも、左右にも、勾欄の取附けてあらぬもの。さうじ。だいしやうじ(大床子)參照。

じやうじ 城市【名】城のあるまち。まち。

じやうじ 都城【名】「あと。

じやうじ 城址【名】城の在りしあと。しろ

じやうじ 常師【名】定まれる師。

じやうじ 上師【名】工部省の師の三等に分れたりし中の上級の者。

じやうじ 上司【名】上級の官廳又は官吏。

じやうじ 上旨【名】上(カミ)たる者のおぼしめし。上意。上命。

じやうじ 上巳【名】じやうみ(上巳)に同じ。

じやうじ 上肢【名】〔醫〕人類の前肢、即ち手。(下肢に對して)

じやうじ 上士【名】■〔佛〕ぼさつ(菩薩)に同じ。■ひら侍より身分高き侍。

じやうじ 狀紙【名】書狀などを書くに用ふる紙。はんきれ。

じやうじ 狀師【名】『狀は、事實を敍べて上陳する意』くじし。辯護士。

じやうじ 情思【名】■人情のかんがへ。おもひ。■愛情の思。こひ。

じやうじ 情死【名】しんぢゅう(心中)に同じ。

じやうじ 情史【名】情事のいきさつを記したる書。艷史。

じやうじ 上梓【名】『梓(アヅサ)に上(サ)す義、即ち古、梓は版木(ハンギ)に用ひられしより、版下(ハンシタ)の紙を、その版木にのせて刻む意にていふ』しゅっぱん(出版)に同じ。

じやうじ 上使【名】徳川時代に、幕府より諸大名の許に遣りし使者。老中・奏者番・高家(カウケ)・小性(コシヤウ)・使番(ツカヒバン)等をこれに充て、これを受くる大名の資格に從ひて、使者の身分に高下の別ありたり。

じやうじ 常事【名】■一定の事柄。■通常の出來事。

じやうじ 情事【名】■實際の事柄。いつはりなき事柄。■男女間の人情にかかはりたる事。こひ。

じやうじ 常時【副】いつも。常に。

しやうじ あげ 障子上【名】攝政・關白、內覽の宣旨を蒙りて、執奏の文書を調する際、出座せし寢殿の一部。

しやうじ いる 請入る【動下二他】請ひ招きて入らしむ。竹取「まづしやうじ入れ奉らん」「じ。

しやうしう 唱酬【名】しやうわ(唱和)に同

しやう-しう 商秋【名】『商は、五音(ゴイン)の中、秋に配せらるる音なるよりいふ』あき(秋)に同じ。

しやう-しう 尚州【名】〔地〕朝鮮慶尚北道西邊にある一邑。釜山より京城に至る間の要驛。

じやう-しう 上秋【名】陰暦七月の異稱。

じやう-しう 上州【名】〔地〕かうづけ(上野)に同じ。

上州の長脇差(ナガワキザシ)【句】『昔、上野國には、常に長脇差をさす無頼の徒多かりしよりいふ』上野國の人を卑しめていふ語。

じやう-しう 城州【名】〔地〕やましろ(山城)に同じ。

じやう-しう 常州【名】〔地〕ひたち(常陸)に同じ。

じやう-しう-いつぽんねぎ 上州一本葱【名】〔植〕しもにたねぎ(下仁田葱)に同じ。

じやう-しう-ぎぬ 上州絹【名】上野國藤岡邊より産する絹。幅九寸・丈五丈四尺あり。

じやう-しう-さあや 上州紗綾【名】上野國より産出する紗綾。

じやう-しう-さいもん 上州祭文【名】歌祭文の一種。江戸には、上野國より出で來りて語る者多きよりいふ。

じやう-しう-どろばう 上州泥坊【名】上野國には、古來、無頼の悪漢多く、從ひて、盜賊も、その國より多く出でしこと。

じやうしう-は 常州派【名】〔美〕支那、清の花鳥畫家の一派。畫家惲(ウン)南田等を祖とす。純沒骨體を特色とし、大いに世に行はれて、寫生の正統とせらるるに至れり。

じやうしう-ふたのちりめん 上州二幅縮緬【名】上野國より産出する、一種の縮緬。幅二尺四寸ありて、地薄く、絲の縷(ヨリ)強し。

じやうしう-むしゆく 上州無宿【名】■上州生れの無宿者。■『昔、上野國には、無頼の徒多かりしよりいふ』上野國の人を卑しめていふ語。

しやうじかい 生死海【名】〔佛〕「生死(シヤウジ)の海」に同じ。

しやうじがうし 障子隔子【名】明(ミン)障子の骨組の如き形をなす模樣。

しやうじ-かぶしきぐわいしや 商事株式會社【名】株式組織の商事會社。

しやうじ-がみ 障子紙【名】明(ミン)障子を張るに用ふる紙。美濃紙をつぎあはせて卷きたるもの。

しやうじき 生色【名】〔纖〕こがね(黃金)の「異稱。

しやうじき 唱色【名】〔佛〕禪宗にて、僧の食膳に向ふ時に唱ふる偈(ゲ)。

じやうしき 常識【名】『英Common sense』普通の理解力ある人の有する程の知識見解。普通の人情・世態を理解し、常規を逸せざる穩健なる思想・識見。こんもんせんす。

じやうしき 常式【名】つねの方式。

じやうしき 常式【副】いつも。常に。

じやうじき 淨食【名】しやうじん(精進)に同じ。

じやうしき-てつがく 常識哲學【名】〔哲〕『英Common sense philosophy』すこっとらんどてつがく(蘇格蘭哲學)に同じ。「じ。

じやうしき-は 常識派【名】〔哲〕前條に同

しやうじ-きん 正字金【名】『正の字の極印あるよりいふ』安政小判金又は安政一分金の別稱。

じやうしきん 上肢筋【名】〔醫〕上肢を固定し、又これを動かす筋肉。肩胛筋・上膊筋・前膊筋・手筋の四に分つ。(下肢筋に對して)

じやうじきん 上字金【名】かりがねきん(雁金)に同じ。

しやうじぎやうせい 商事行政【名】〔法〕經濟行政の一。商事の保護・取締を目的とするもの。

しやうじぎやうせい-はふ 商事行政法【名】商事行政に關する法規。

しやうしくわい 尚齒會【名】■『しやうし(尚齒)を見よ』年老いたる人どもを招きて、宴を開き、詩歌を作りなどする會合。支那の風習に倣へるものにて、白樂天の行ひし七叟尚齒會に依り、數は七人を常とし、列座の順は、最も高年なる人を上とす。又、七人以外は、相伴として、垣下(カキ)に列せしめたり。元慶元年三月南淵(ミナミブチ)年名がその山莊にて行ひしを始とす。月詣集 清輔朝臣の、しやうしくわい行ひ侍りける、七叟にてよめる」■高野長英・小關三英・遠藤謹助等が知識交換のために結びたる社。

しやうじ-ぐわいしや 商事會社【名】〔法〕『英Commercial corporation 佛Société commerciale』商法に規定せる合名會社・合資會社・株式會社・株式合資會社の總稱。

しやうじ-くわん 掌璽官【名】昔、天皇の御印璽を掌りし官、即ち今の內大臣。

しやうじ-けいやく 商事契約【名】〔法〕『英Commercial contract』商業に關する契約、即ち賣買契約・交互計算契約・運送契約・受寄契約等の類。

しやうじけいやく-はふ 商事契約法【名】〔法〕商事契約の權利關係を定めたる法規。

じやう-じこ 上鉋【名】仕上(シアゲ)を倒るに用ふる鉋(カンナ)。(粗鉋(シアゲ)・中鉋(シカケ)に對して)

しやうじこ 精進湖・生死湖【名】〔地〕富士八湖の一。甲斐國西八代(シヤツ)郡に屬し、富士山の西北麓に位す。周回二里半弱。右は、本栖(モトス)湖・西湖(ニシ)と共に相合して、一水を成し、石花湖(セキカ)と呼びしに、貞觀六年富士山噴火の際、熔岩により中斷せられしなりといふ。

じやうじこうはふ 常時公法【名】〔法〕次條の「法」

じやうじこくさいこうはふ 常時國際公法【名】〔法〕へいじこくさいこうはふ(平時國際公法)に同じ。

しやうじこし 障子越【名】障子を隔てて事を傳し又は物言ふこと。會我「障子越にいひければ」

じやうしこつ 上肢骨【名】〔醫〕上肢を形成する骨。上膊骨・尺骨・橈骨(ケイコツ)・腕骨・掌骨・指骨に細別す。(下肢骨に對して)

しやうじさいばん 商事裁判【名】商事に關する裁判。佛國その他二三箇國にては、これがために特別の裁判所を設け、商人中より、國家の選任したる裁判官をして裁判せしむれど、我が國にては、通常の民事裁判所の管轄に屬せしむ。

じやうしし 淨師子【名】〔人〕ぜんむね(善無畏)に同じ。

しやうじ-じけん 商事事件【名】〔法〕商事に關する訴訟事件。

しやうじ-じんざえもん 庄司甚左衞門【名】〔人〕江戸吉原の創建者。相模國小田原の人。姉は北條氏政の妾。寛永中、官に請ひて、江戸市中に散在せる妓樓を一廓に集めて管理す。正保元年歿す。年六十九。

しやうじ-しゆつり 生死出離【句】しやうじ(生死)の條下を見よ。

じやうじぜい 常時稅【名】毎年度に繰返し、徵收せらるる租稅。(臨時稅に對して)

じやうじせいたい 常磁性體【名】〔理〕『英Paramagnetic substance』磁石に近づくれば、その磁石に近き方に異名の極生じ、遠き方の端に同名の極生じて、その磁石に吸收せらるる物體。即ち鐵・ニッケルなど。極性體。(反磁性體に對して)

しやうじ-そくねはん 生死卽涅槃【句】

じやうしたい 上肢帶【名】〔醫〕けんかふたい(肩胛帶)に同じ。

しやうじ-だんたい 商事團體【名】商事を目的とする團體。銀行・取引所の類。

しやうじ-ちやうや 生死長夜【句】しやうじ(生死)の條下を見よ。

じやうじ-つ 傷疾【名】きずつき疾(ヤマヒ)むし。

じやうじ-つ 詳悉【名】くはしきこと。詳かなること。委細。

じやうじつ 漿實【名】漿液狀の物質。

じやうじつ 淨室【名】きよめたる室。きよま。

じやうじつ 成實【名】〔佛〕じやうじつしゆう(成實宗)の略。正統紀「俱舍(クシヤ)・成實などいふは小乘なり」

じやうじつ 情實【名】■事のわけ。事情。■道理の外に、內內の事情あること。私情にからまりたる事實。

じやう-じつ 常日【名】通常の日。あたりまへの日。平日。

じやう-じつ 上日【名】■『書經の舜典篇に「正月上日受二終于文祖一」とあり』ついたち(朔日)に同じ。一說に、じやうじゆん(上旬)に同じと。■役所に出勤する日。上番の

日。(下日に對して) **じやうちやう**(上長)**ばん** 稚狩叙本地「内侍命婦のおもと人、上日の上達部、几帳の物見簾のつま覗きさざめき」 **じやう**(番上)參照。

しやうしつ-がん 晶質岩【名】〔地〕『英 Crystalline rock』破片の凝結より成らずして、結晶質粒の密接によりて成りたる岩石。例へば花崗石などの類。

じやうしつ-しやど 壤質砂土【名】〔地〕砂土と壤土との中間の土壤にして、砂土の方に近きもの。

じやうじつ-しゆう 成實宗【名】〔佛〕佛教の一派。白雉四年南都の僧道照、勅により入唐し、玄奘三藏より傳授せられしもの。成實論を基として、宗義を立つ。

じやうしつ-しよくど 壤質埴土【名】〔地〕埴土と壤土との中間の土壤にして、埴土の方に近きもの。

しやうしつ-はくがん 晶質剝岩【名】〔地〕

けつしやうへんがん(結晶片岩)に同じ。

じやうじつ-ろん 成實論【名】〔書〕『如來所說の經律論の三藏中の實義を釋成せんことを目的とするによりて名づく』三寶・四諦の理を說けるものにて、四阿含經の語句を引用すること多し。成實宗はこの書を正依(シヤウエ)とす。十六卷二百二品あり。印度訶梨跋摩(カリバツマ)の著。羅什三藏の譯。

しやうし-ないしんわう 章子內親王【名】〔人〕後一條天皇の皇女。後冷泉天皇の中宮。延久元年尼となる。二條院と稱す。長治二年崩ず、壽八十。

しやうじ-のいた 障子板【名】大鎧(オホヨロヒ)の一部。頸を射られぬやうに、半月形にして、綿上(カワク)の上に立てたるもの。保元「障子の板か、梅檀弦走(シウリバシ)か」

しやうし-はふ 商私法【名】〔法〕商法の一。商事に關する私法。單に商法といへば、普通これを指す。(商公法に對して)

じやうじ-はん 常時犯【名】〔法〕國事犯以外の、通常の犯罪の總稱。

じやうじ-ばんこくこうはふ 常時萬國公法【名】〔法〕へいじばんこくこうはふ(平時國際公法)に同じ。

じやうじ-はんにん 常時犯人【名】〔法〕常時犯の犯罪人。

じやうじ-しばゐ 常芝居【名】常に興行してゐる芝居。

しやうじ-ひじようじけん 商事非訟事件【名】〔法〕商事に關する非訟事件。(商事事件に關して)

しやうじ-びやうぶ 障子屏風【名】明(アカ)るくて作りたる屏風。

しやうし-しふ 翔集【名】鳥のかけり飛び集ること。

じやうじ-しふ 常習【名】つねの習慣。つねのならはし。

しやうじ-ふうさ 商事封鎖【名】〔法〕『英 Commercial blockade』戰時封鎖の一。敵の經濟を妨害する目的にて、その通商に必要なる港又は海岸を封鎖すること。軍事封鎖とは異にして、中立國の通商權に影響するところ大なるが故に、國際法においては、その効力に必要なる幾多の條件を定む。(軍事封鎖に對して)

しやうじ-ぼね 障子骨【名】一障子の骨。二凧の骨組を、障子の骨の如くに竪横に渡したるもの。

しやうじ-ぼり 障子堀【名】地面を、障子骨の如く、縱横に掘ること。

じやうじま 城島【名】〔地〕筑後國三潴(ミヅマ)郡にある町。柳河町の北三里餘。筑後川の左岸。

しやうじ-みの 障子美濃【名】障子を張るに用ふる美濃紙。

しやうし-しん 正信【名】〔佛〕正法(シヤウハフ)を信ずる心。眞正な信仰。「に同じ。

しやうし-しん 聖心【名】〔佛〕ぶっしん(佛心)に同じ。

しやうし-しん 詳審【名】つまびらかなること。「こと。

しやうし-しん 奬進【名】奬勵してすすむること。

しやうし-しん 傷心【名】心をいたむること。悲しく思ふこと。

しやうし-しん 正眞【名】**せいしん**(正眞)に同じ。狂言(粟田口)「正眞の粟田口を持たれた御方があるによって」 「工匠。

しやうし-じん 匠人【名】たくみ。大工(ダイク)。

しやうし-じん 生身【名】一【佛】衆生(シユジヤウ)の身。二しぜんじん(自然人)に同じ。

じやうじん 成尋【名】〔人〕天台宗の僧。藤原佐理(マスケ)の子。洛北岩倉の大雲寺に居り、延久三年入宋して、神宗皇帝に謁し、雨を祈りて驗ありしため、善慧大士の號を賜はり、優遇のあまり、歸國を許されず、元豐四年(我が永保元年)その地に寂す。年七十一。

しやうじん-あけ 精進明【名】**しやうじんおち**(精進落)に同じ。

しやうじん-あげ 精進揚【名】野菜類の揚物(モノ)。多く佛事などの時に用ふ。

しやうじん-おち 精進落【名】精進の期限了りて、魚鳥などの肉類を食すること。しやうじんあけ。

しやうじんがため 精進固【名】盂蘭盆(ウラボン)などの精進をなすに先だちて、魚肉を食すること。浮世風呂「今日は精進がためだから、本直(ホンネ)になりやあ、出入場へ持ってきてえが」

しやうしん-ぎ 正眞木【名】庭園に特に目立つやうに、一本いかめしく植ゑてある大なる木。

しやうじん-ぎよるゐ-ものがたり 精進魚類物語【名】〔書〕ぎよそうへいけ(魚鳥平家)に同じ。

しやうしん-げ 正信偈【名】〔書〕**しやうしんねんぶつげ**(正信念佛偈)の略。

しやうじん-こん 精進根【名】〔佛〕五根の一。雜念(ザフネン)を交へず、堅く正法(シヤウハフ)を信じて、勤修(ゴンシユ)すること。勤根(ゴンコン)。

しやうしん-し 聖眞子【名】山王七社(サンノウシチシヤ)の一。阿彌陀如來の垂迹(スヰジヤク)、八幡大菩薩の分身と稱せらる。太平記「聖眞子は九品安養界の化主(ケシユ)、八幡大菩薩の分身」

しやうしん-じ 清信士【名】〔佛〕うばそく(優婆塞)に同じ。(清信女に對して) 「書。

じやうじん-しよ 上申書【名】上申する文書。

しやうじん-すまし 精進清汁【名】鰹節などを用ひず、椎蕈或は昆布を煮出して作りたるすまし。

しやうしん-なん 清信男【名】〔佛〕しやうしんじ(清信士)に同じ。

しやうしんによ 清信女【名】〔佛〕うばい（優婆夷）に同じ。（清信士に對して）

しやうしんねんぶつげ 正信念佛偈【名】〔書〕『しやうしん（正信）を見よ』敎行信證（シヤウギヤウシンショウ）の行卷にある六十行百二十句の偈（ゲ）。本書以外に單行し、信徒、朝暮の勤行（ゴンギヤウ）にこれを讀誦す。一卷。親鸞の著。略稱、正信偈。

しやうじんばら 精進腹【名】菜食のみの腹。粗食したる腹。「一代男」あしたの豆腐賣さへ稀に、なほ精進腹の、どこやら物淋しく」同「精進腹では酒も飲まれず」

しやうじんはらみつ 精進波羅蜜【名】〔佛〕『梵 Vīryapāramitā の譯語。精進は六波羅蜜（六度）の一なるよりいふ』しやうじん（精進）㊀に同じ。

しやうじんび 精進日【名】精進を行ふべき日。若風俗「親仁の精進日は忘れず」

しやうじんふくさ 精進紱紗【名】佛事の贈物などする時に用ふる紱紗。赤色を交へず「白・淺葱（アサギ）などの色を用ひ、定紋または佛事に緣ある蓮華、寂しき草花などを附く。（祝儀紱紗等に對して）。

しやうじんもの 精進物【名】肉類又はそれを用ひて作りたるにあらざる食物。野菜の類。しやうじもの。さうじんもの。狂言「俄道心」「よう覺えさしませ。こなたは皆精進物の事ばかりおしやる」

しやうじんや 精進屋【名】佛道を修むるために籠る所。さうじんや。東鑑「御精進屋七條殿」

しやうじんれうり 精進料理【名】肉類を交へぬ、穀物・野菜の類のみを用ひたる料理。

しやうしや 商社【名】商事會社。商會。

しやうしや 掌事【名】もと宮內省主馬寮に置かれし、准判任の職員。明治四十一年廢止せらる。

しやうしや 廠舍【名】四方に圍（カコ）なき屋舍。こや。

しやうしや 傷者【名】きずつきたる者。ておひ。負傷者。「同じ。

しやうしや 生寫【名】いきうつし（生寫）に

しやうじや 青蛇【名】青色のへび。用明天皇職人鑑「呂洞賓が袖の中の青蛇をなげうって、黃龍に乘ぜしは」

しやうじや 盛者【名】盛んなる者。盛者必衰（ジヤウシヤヒツスイ）【句】〔佛〕『仁王經四の無常偈に「盛者必衰、實者必虛」、涅槃經の二に「大盛必有衰、合會有別離」とあり』盛んなる者は必ず衰ふる時あり。榮枯・盛衰は世の常態なり。〔諺語〕平家「娑羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」

しやうじや 聖者【名】〔佛〕無漏智（ムロチ）を發して、正理を證悟せし人。小乘にては、見道以上をいひ、大乘にては、無明（ムミヤウ）を斷破せる地上の菩薩をいふ。（賢者に對して）正統記「淨居天（ジヤウゴテン）とて、證果の聖者の住所なり」

しやうじや 精舍【名】『梵 Vihāra（毗訶羅）の譯語。譯語は、もと支那にて學舍・塾舍・校舍等の義なりしを、晉の孝武帝の代、僧を精舍に置きしより、その名を襲用して、佛寺の義に用ふることとなりしなり。**せいじや**（精舍）參照。』てら。がらん。精廬（シヤウロ）平家「祇園精舍の鐘の聲」

しやうじや 生者【名】生きてゐる者。

しやうじやひつめつ 生者必滅【句】〔佛〕『大涅槃經に「生者必滅、會者定離」とあるに本づく』生命ある者は、早晩死滅す。〔諺語〕保元「有爲無情の習、生者必滅の掟」

しやうしや 常赦【名】昔の赦の一種。八赦・故殺・謀殺・私鑄錢・强盜・竊盜の外は、皆赦すもの。（大赦・非常赦に對して）續紀「八虐常赦所不レ免者」

じやうしや 淨寫【名】きれいに書直すこと。淸書。淨書。「じ。

じやうしや 淨捨【名】きしや（喜捨）に同じ。

しやうしや 商聖【名】しやうそう（商僧）に同じ。

しやうしや 將相【名】大將と宰相と。將相寧（ソ）ぞ種あらんや【句】「王侯・將相寧ぞ種あらんや」を見よ。

しやうしや 省掌【名】■古の八省の雜任。官掌（クワンジヤウ）の類。■明治十年以前における各省の職員の一。候人を通じ、書疏を達し、使部を檢することを掌りし判任官。

しやうしやう 莊莊【貌】おごそかなるさま。さうさう。

しやうしやう 將將【貌】■さかんなるさま。おごそか。■玉などの鳴る聲の形容。

しやうしやう 鏘鏘【貌】さうさう（鏘鏘）に同じ。

しやうしやう 彰彰・章章【貌】あきらかなるさま。明白なるさま。彰乎。

しやうしやう 昌昌【貌】さかんなるさま。

しやうしやう 晶晶【貌】光明なるさま。

しやうしやう 症狀【名】〔醫〕しやうこう（症候）に同じ。

しやうじやう 商狀【名】商業のありさま。商況。商勢。

しやうじやう 象狀【名】かたち。さま。形。「象。

しやうじやう 掌狀【名】〔植〕『英 Palmate』指を開きたる掌（タナゴヽロ）の狀をなせること。

しやうじやう 掌上【名】掌（タナゴヽロ）の上。てのひら。

しやうじやう 上相【名】上位にある宰相。

しやうじやう 上生【名】〔佛〕極樂往生の階級なる上品（ジヤウボン）中品・下品（ゲボン）の各の上位なるもの。（中生・下生に對して）

しやうじやう 上姓【名】■種姓（シユシヤウ）の尊きこと、又その人。貴族の出。（下姓（ゲシヤウ）に對して）■生來の日本人の姓。（下姓（ゲシヤウ）に對して）

じやうしやう 上將【名】上位に在る將軍。

じやうしやう 城將【名】城を守る大將。

じやうしやう 城壘【名】城の上のかき。城雉。

じやうしやう 上章【名】上方に在る章句。

じやうしやう 上聲【名】〔語〕漢字の四聲の一。重・腫・講・紙・尾等の三十韻に分つ。

じやうじやう 上上【名】上の上。極めてよきこと。最上。「娥眉加留多」男の上上きつすゐとは、齋藤瀧口賴方」

じやうじやう 城上【名】城の上。

じやうじやう 情狀【名】まことの狀態。事情狀酌量（ジヤウシヤクリヤウ）【句】裁判官が、罪人の情

（■うやじうやし）

蔽され、闘大にして裸出し、帶銙色をなす。前肢長く垂るれば、殆ど足部に達し、後肢短く、立行巧ならず、常に森林中に棲む。牡は頸部に鬣鬚を有す。**おほしやうじやう**（大猩猩）・**くろしやうじやう**（黑猩猩）參照。■支那における想像上の怪獸。髮長くして赤く、面貌人に類し、その聲小兒の啼くがごとく、犬の吠ゆるにも似、また人語を解し、酒を好むといふもの。雲南の山谷に產すといふ。**せいけつ**（猩血）**しやうじやう**（猩猩緋）參照。■酒量の大なる人の譬。■〔動〕『酒酣などの中に發生するよりいふ』さし（蠛子）の異稱。■役者の隈取（クマド）の一種。赤く彩るもの。■講曲の一。かうふうと云ふ酒寶る男の孝心深きを愛して、猩猩來り、盡きせぬ酒泉を與へ、めでたく醉ひ戲れ舞ひ遊ぶことを作れるもの。

猩猩の火事見舞【句】「金時（キンドキ）の火事見舞」に同じ。〔諺語〕

猩猩よく言へども鸚鵡を離れず【句】「鸚鵡よく言へども飛鳥を離れず」を見よ。〔諺語〕

狀を酌取りて、減刑をなす。

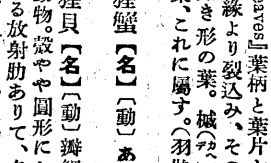
じやうじやう 常狀【名】常の狀態。

じやうじやう 常情【名】人生普通の情。

じやうじやう 常常【副】つねづね。ふだん。常常綺羅の晴著(ハレ)無し【句】常によき衣服を著るため、晴の時に著る衣服なし。常上著(ジヤウギ)の晴著なし。替著無(カヘキ)し。常常好(ヤウカウジ)の晴著無し。〔諺語〕

じやうじやう 瀼瀼【貌】露のしげきさま。太平記「さこそ袖より餘る荊棘の露も、瀼瀼として深からんずらめ」

しやうじやうあし 猩猩脚【名】花臺置物臺等の足の曲線狀をなしたるもの。その最も高きを鷲足、低きを猫足、花形あるを華足(クワソク)といふ。


(しあうやじうやし)

しやうじやういし 清浄石【名】手水鉢の傍に据うる石。のぞきいし。

しやうじやうえふ 掌狀葉【名】〔植〕『英 Palmate(又、Digitate)leaves』葉柄と葉片との接合部に向ひて、葉緣より裂込み、その狀恰も掌を擴げたる如き形の葉。槭(カヘ)。八角金盤(ヤツデ)などの葉、これに屬す。(羽狀葉に對して)

しやうじやうがに 猩猩蟹【名】〔動〕あさひがに(朝日蟹)に同じ。

しやうじやうがひ 猩猩貝【名】〔動〕蝦蛄(シヤコ)類に屬する軟體動物。殼やや圓形にして質厚く、六條の大なる放射肋ありて、各肋より數箇の長き突起を斜出す。肋間には大小の放射脈を有し、また鱗狀の小突起を密生す。表面は朱色、內面は微紅を帶ぶ。長さ二寸五分。我が國西南海に產す。

しやうじやうき 清浄忌【名】さんじふさんねんき(三十三年忌)の別稱。

しやうじやうぎ 常上著【名】次條を見よ。

常上著の晴著(ハレ)無し【句】「常常綺羅(ジヤウギ)の晴著無し」に同じ。〔諺語〕

しやうじやうぎく 猩猩菊【名】〔植〕菊の一種。花は紅にして、辨の尖れるもの。大輪なるを亂猩猩(ミダレシヤウジヤウ)といひ、小輪なるを小猩猩といふ。

じやうじやうきつ 上上吉【名】■この上なく吉なること。一茎元日や上上吉の淺黃空」■技藝などの位附の一。この上なく勝れたるもの。

じやうしやうぐん 上將軍【名】上級に位する將軍。全軍の首將。上將。太平記「この宮を上將軍と仰ぎ奉りて」

しやうじやうくわ 清浄光【名】〔佛〕阿彌陀佛の十二光の一。食る所無き佛の清浄なる心より出でて、清浄なる色相(シキソウ)を示し、よく衆生(シユジヤウ)の濁れる心を除く光明。この光明の本體たるに由りて、阿彌陀を清浄光佛ともいふ。清浄光明。

しやうじやうくわうじ 清浄光寺【名】ゆぎやうでら(遊行寺)に同じ。

しやうじやうくわうぶつ 清浄光佛【名】〔佛〕しやうじやうくわう(清浄光)を見よ。榮花「南無清浄光佛と申し、廊を渡りて大御堂に參れば」

しやうじやうくわうみやう 清浄光明【名】〔佛〕しやうじやうくわう(清浄光)に同じ。

しやうじやうくわうみやうしん 清浄光明身【名】〔佛〕『法華經の法師品に出づ』清浄光を放つ佛の眞身。清浄身。榮花「聞けば、法師品の清浄光明身のわたりをぞ讀むなる」

しやうじやうげねん 清浄華院【名】京都市上京區北邊(ハタ)町に在る淨土宗の寺。同宗鎭西派四箇本寺の一。本尊は阿彌陀佛。もと天台宗にて、清和天皇の勅願により、慈覺大師創建し、後白河天皇の勅により、源空住持して、今の宗旨に改む。淨華院。

しやうじやうこそう 猩猩小僧【名】昔の玩具の一種。猩猩の形をなせる人形、壺の中より出で、下なる臺にさしたる笛を吹けば、人形のまはるやうにせるもの。

しやうじやうさう 猩猩草【名】〔植〕大戟(タイゲキ)科に屬する一年生の草。原產地は、北は北米合衆國、南はブラジル・ペルウに至る間。近年舶來して觀賞せらる。高さ一二尺、葉は線形・卵形・圓形など種種の形を呈し、夏秋の交、鮮紅色の花瓣樣を呈す。花はその間に生じ、綠黃色にして著しからず。

しやうじやうさぎ 猩猩鷺【名】〔動〕あさぎ(尼鷺)に同じ。

しやうじやうじ 正精進【名】〔佛〕はつしやうだう(八正道)を見よ。

しやうじやうしん 清浄心【名】〔佛〕妄念を去りたる清きまことの心。疑ふ所なき信念。無垢(ムク)の心。信心。

しやうじやうしん 清浄身【名】佛の清浄なる眞身。清浄光明身。鷄貫合璧「鷺鷥の汀に立てる色、豈清浄身にあらずや」

じやうしやうじん 常精進【名】〔佛〕常に精進を行ふこと。根歌加留多「寺まゐりに月日を送る常精進」

しやうじやうしんじよ 生淨信處【名】〔佛〕そば(蕎麥)の譯語。

しやうじやうせかい 清浄世界【名】〔佛〕じやうど(淨土)■に同じ。

しやうじやうせき 清浄石【名】きよめいし(淨石)に同じ。

しやうじやうせぜ 生生世世【副】〔佛〕現世も、後世も。生れかはり、死にかはりて、末長く。平家「御恩に依りて、かひなき命を助けられまゐらせ候こと、生生世世にも報じつくしがたく」

じやうじやうだん 上上段【名】上段の間のつづきに、襖障子にて隔てたる小間。冠棚又は書緣などありて、床の如く作れるもの。

しやうじやうち 清浄智【名】〔佛〕むろち(無漏智)に同じ。

しやうしやうてい【名】うかれめ。女郎。「肥前國長崎の方言」博多小女郎浪枕、柳町のしやうしやうていども請出いて、上方さなへつづしる」

しやうじやうてん 清浄天【名】〔佛〕とうりてん(忉利天)を見よ。

じやうじやうてん 上上田【名】じやうでん(上田)を見よ。

しやうじやうとんぼ 猩猩蜻蛉【名】〔動〕蜻蛉の一種。全身赤きもの。

しやうじやうにもん 聖淨二門【名】〔佛〕聖道門と淨土門との併稱。

しやうじやうのみ 猩猩飲【名】猩猩の如く、多量の酒を一息に飲むこと。

しやうじやうのり 猩猩海苔【名】紅色に染めたる沖獨活(ウド)。

しやうしやうは 尚商派【名】〔經〕ちゆうしやうしゆぎ(重商主義)に同じ。

しやうじやうばかま 猩猩袴・粉熊兒榮・玉帶春苣【名】百合(ユリ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、高さ一尺餘。葉は萬年青のに似て、更に幅廣く、莖を圍んで叢生す。春、花莖を抽んでて、淡紅紫色の總狀花を著く。

しやうじやうひ 猩猩緋【名】『支那にて、印度人は猩猩の血を取りて、紅色の染料とすといふ說あるによりていふ。せいけつ(猩血)參照』少し黑みがかりたる紅色、又その色なる毛織物。丹波奧隹「猩猩緋の道中羽織」

しやうじやうふうろ 猩猩風露【名】〔植〕ひめふうろ(姬風露)に同じ。

しやうじやうふくえふ 掌狀複葉【名】〔植〕『英 Palmately compound leaves』各小葉が共同葉柄の先端より生ずる複葉。葉片の數は二・三・四・五・七・九等なるを普通とす。七葉樹(ナナハ)通草(アケビ)等の葉、これなり。又その再三同樣に分裂して、その先端に各一葉片を著くる時は、再出(又は二回)掌狀複葉・三出(又は三回)掌狀複葉等と呼ぶ。(羽狀複葉に對して)

しやうじやうぼく 猩猩木・一品紅【名】〔植〕大戟(タイゲキ)科に屬する灌木。高さ二尺乃至六尺許、葉は互生にして軟毛あり。卵狀楕圓形乃至披針形をなし、稍銳頂をなし、全緣又は鋸狀の淺裂をなす。枝の上部の葉は全緣にして、上面鮮紅色を呈す。冬季枝頭に帶綠黃色の小花聚繖花序をなして開く。原產地はメキシコの熱帶地方と中部亞米利加となれども、近年舶載して觀賞用に供す。猩猩草もその一種なり。

しやうじやうみだれ 猩猩亂【名】能(ノウ)の亂の「猩猩」の曲に行はるるもの。

しやうじやうみやく 掌狀脈【名】〔植〕網狀脈の一種。葉脚より射出せる數箇の大

脈より更に枝脈を支出せるもの。楓(カヘ)・胡爪(リキウ)・桐などの葉に見るもの、これなり。(羽狀脈に對して)

じやうじやう-みやくえふ 掌狀脈葉【名】〔植〕『英 Palmately (又 Digitately) veined leaves』掌狀脈を有する葉。(羽狀脈葉に對して)

じやうじやう-よし 常常好【名】次條を見よ。

じやうじやう-れつ 掌狀裂【名】〔植〕『英 Palmate』葉の、掌狀に裂開せる形。

(つれうやじうやし)

じやうじやきん 上斜筋【名】〔醫〕くわつしやきん(滑車筋)に同じ。

じやうしやきよく 尚舍局【名】このものれう(主殿寮)の唐名。

じやうじやく 常寂【名】〔佛〕『常は生滅の相を離れたること、寂は煩惱の相を絕ちたること』常住にして寂靜なること。法身と解脫とを。

じやうじやく-くわう 常寂光【名】〔佛〕一常住と寂靜と光明と、即ち法身と解脫と般若との德を備へたること。二じやうじやくくわうど(常寂光土)の略。梁北「その佛の所住のところを常寂光と名づく」

じやうじやくくわうど 常寂光土【名】〔佛〕四佛土の一。根本無明を全く斷ぜし者の居る、常住・寂靜・光明の國土。寂光淨土。寂光土。寂光。寂光の都。法性の都。本覺眞如の都。寂光の本土。(凡聖同居・方便有餘・實報無障礙土に對して)

じやうじやう-じよう 尚舍丞【名】主殿允の唐名。

じやうじやう-ちよくちやう 尚舍直長【名】主殿助の唐名。

じやうじやうほうぎよ 尚舍奉御【名】主殿頭の唐名。

じやうじやう-れいし 尚舍令史【名】主殿屬の唐名。

じやうしやう 將種【名】將家の子孫。

じやうしやう 聖種【名】〔佛〕一『聖者の種姓の義』入道して、三學を修する者。即ち三寶中の僧寶。二衆聖を生ずる行法・衣服・飲食・臥具につきて得る所に隨ひて喜足すると、惡を斷じ、善を修するを樂しむとを、四聖種と名づく。「る者。

じやうしやう-しゆ 賞首【名】第一等の賞を受くる者。

じやうしやう-しゆ 匠手【名】宮內省內匠寮の舊職員の一。判任の技術官にて、明治十九年設置、同二十二年廢止。

じやうじやう-しゆ 聖主【名】せいしゆ(聖主)に同じ。盛衰記「聖主より凡庶に至るまで、眞乘の結緣、萬方に普し」

じやうじやう-しゆ 聖衆【名】〔佛〕極樂淨土にある菩薩の總稱。(賢衆に對して)けんじやうじゆ(賢聖衆)參照。梁北「諸の菩薩・聖衆、奇聲・伎樂をして喜び迎へ取りたまふ」

聖衆の來迎【句】〔佛〕次條に同じ。平家「聖衆の來迎にてこそおはせば、などか引攝なかるべき」

聖衆來迎【句】〔佛〕『觀無量壽經に見ゆ』念佛行者の臨終に、阿彌陀佛の淨土より菩薩たちの來り迎ふること。梁北「これは聖衆來迎かと見ゆ」

じやうじやう-じゆ 正受【名】〔佛〕『梵 Samaya(三昧)の譯語。三は正、昧は受の義、即ち寂靜明徹の心に、諸法の實相を正受して諦觀する意』ぜんぢやう(禪定)に同じ。「じ。

じやうじやう-じゆ 樟樹【名】〔植〕くす(樟)に同じ。

じやうじやう-じゆ 城守【名】一城に據りて守ること、又その人。二次條に同じ。

じやうじやう-じゆ 城主【名】一城を守る主將。二戰國時代にて、一城に主たる者の稱。三江戶時代の、國持並びにこれに次ぎて居城を有するもの。

じやうじやう-じゆ 上酒【名】上等なる酒。よきろみ。趣致。情致。

じやうじやう-じゆ 上手【名】『顏氏家訓の雜藝篇に見ゆ』じやうず(上手)に同じ。

じやうじやう-じゆ 情趣【名】おもむき。おもしろみ。趣致。情致。「衆。

じやうじやう-じゆ 淨衆【名】〔佛〕清淨持戒の僧。

じやうじやう-じゆ 常主【名】定まれる主人。

じやうじやう-じゆ 上聰【名】〔佛〕三界の中、色界(カイ)と無色界(カイ)との總稱。

じやうじやう-じゆ 上首【名】〔佛〕一座の大衆(シユ)中の主位。一人なることあり、二人以上なることあり。

じやうじやう-じゆ 上壽【名】壽命の最も長きこと。(中壽・下壽に對して)太平記「不老不死の上壽を保てり」

じやうじやう-じゆ 成就【名】できあがること。成り調ふこと。成功。謠曲「松尾」「攝取の題望、おのおの成就圓滿の靈地」

じやうしやう-じゆ 正宗【名】〔佛〕正眞の宗旨。太平記「釋氏化導の正宗」

じやうじやう-じゆ 淨宗【名】〔佛〕じやうどしゆう(淨土宗)の略。

じやうしやうじゆ-ぶん 正宗分【名】〔佛〕さんぶんだん(三分段)を見よ。

じやうしやうじゆ-かく 城主格【名】城主と同樣の待遇を受くるもの。

じやうじやうじゆく 上宿【名】一『じやうばん(上番)を見よ』二しゆくちよく(宿直)に同じ。三古、天皇御寢の後、鬼の間に宿直すること。うへぶし。

じやうじやうじゆたら-しやう 常修多羅宗【名】〔佛〕『修多羅(Sūtra)は經(キヤウ)の意。涅槃經は涅槃・常住の義を說けるにより常修多羅といふ』ねはんしゆう(涅槃宗)の異稱。

じやうしやう-じゆつ 詳述【名】詳かに述ぶること。詳說。

じやうじやう-じゆつ 上述【名】上のくだりに述べたること、又そのもの。

じやうしやうじゆ-ほ 匠手補【名】宮內省內匠(ショウ)寮の舊職員の一。等外の技術官にて、明治十九年設置、同二十二年廢止。

じやうしやう-じゆん 奬順【名】『孝經の事君章に「奬二順其美一匡二救其惡一」とあり』奬(ススム)めて爲さしむることと、順ひて行ふことと。

じやうじやう-じゆん 上春【名】陰曆一月の異稱。

じやうじやう-じゆん 上旬【名】月の一日より十日までの稱。上澣。初旬。(中旬・下旬に對して)

じやうしやうじゆん-くわ 常春花【名】〔植〕きんせんくわ(金盞花)に同じ。

じやうしやうじゆ-らいがう 聖衆來迎【句】しやうじゆ(聖衆)の條下を見よ。

じやうしやうじゆらいがう-ぐわん 聖衆來迎願【名】〔佛〕阿彌陀佛の四十八願中の第十九願。念佛行者の臨終の時、大衆親しくその人の前に現じて引接せんとの願。

じやうしやうゆだう 正思惟【名】〔佛〕はつしやうだう(八正道)を見よ。

じやうしよ 尚書【名】一〔書〕『尚は上に通じ、上古の書の意。孔子の明鬼篇にその名はじめて見ゆ』しよきやう(書經)を見よ。二『文書を尚ぶる義』支那の官名。秦の始皇帝の設置に係り、當時は單に文書の受授に任ずる、地位卑き職なりしが、漢代には少府の屬官となり、尚書令・尚書僕射(ヤボク)・尚書丞・尚書郎の階級設けられ、後漢には、三公の上に立ちて、政務を主宰するに至り、六朝時代には政務を綜ぶる一省となし、梁はこれを六部に分ちて、事務を分掌せしめ、唐・宋代及び金に至りて、中央政府の首位に立ち、元は名を中書省と改め、尚書省若干これに隸して、省務を分掌し、明は中書省中に六部を設けて、各部の長官を尚書と呼びしが、後、中書省廢せられ、六部各獨立の行政府たるに及びて、尚書は中央行政府における長官の稱となり、清もまたこの制を襲用せり。三べんくわん(辨官)の唐名。

じやうしやう-じよ 象胥【名】『周禮の秋官に「象胥掌二蠻閩夷狄之國使一傳二王之言一而說二諭上焉」とあり』つうじ(通事)に同じ。

じやうしやう-じよ 生處・生所【名】〔佛〕『毗曇論に「趣二彼生處一」とあり』死後、樂土に生るる處。盛衰記「麻耶の生所を知らんとて、大菩提心を發し」賀古教信七墨廻「賽の河原とて童男・童女の生所あり」

じやうしやう-じよ 序序【名】『鄕校を、周にては庠といひ、殷にては序といひしに因る。庠は養にて、養老の禮を主として、人を敎育する意、序は射にして、射藝を習はす意といふ』がくかう(學校)に同じ。

じやうしやう-じよ 常處【名】一定の居處。

じやうしよ 上書【名】思ふ旨を書きて、官に奉るもの。たてまつりぶみ。

じやうしよ 上所【名】■昔、手紙の宛名の上に、上輩には「進上」同輩より少し上には「謹謹上」同輩には「謹上」と書く習なりし、その言葉。下輩には用ひず。■名宛の所。「じ。あげどころ。

じやうしよ 浄書【名】せいしよ(清書)に同じ。

じやうしよ 情緒【名】■思につれて起る種種の情。「情緒亂れて、絲の如し」■〔哲〕『英 Emotion』主として、利害の關係による認識に伴ひて生ずる情念。單純感情と情操との中間に位し、吾人の生活に關係すること最も多し。悲哀・怨恨・恐怖・憤怒等は利己的又は主我的情緒にして、愛情同情等は社會的(又は主他的)情緒といふ。

じやうしよう 上衝【名】のぼせ。けあがり。逆上。「同じ。

しやうじよう 相丞【名】だいじん(大臣)に同じ。

じやうしよう 上昇・上升【名】■のぼること。■〔植〕全部斜に上方に向ひ、又は基部のみ斜に上方に向ひ、上部は直立すること。

じやうじよう 上乘【名】■〔佛〕勝れて最上なる佛乘。曇鸞記、眞言上乘の法の中に、如何なる法か、箇樣の在家の者の行ひ奉り、揭焉(ケツエン)の利生にあづかること候」■勝れて最上なること。

じやうしようぐん 常勝軍【名】戰ひて常に敵に克つ軍隊。

じやうじようくわんぢやう 上乘灌頂【名】〔佛〕最上の灌頂。眞言宗の灌頂にいふ。

じやうしようけい 上昇莖【名】〔植〕自ら直立すること能はず、他物に依りて、その位置を保つ莖。攀緣莖・纏繞莖の二種に分つ。

しやうしようじ 成勝寺【名】六勝寺の一。崇德天皇の御願に因りて、他の五寺と共に、京都北白河に在りしもの。保延五年落成、承久元年燒失す。

じやうしようちゆうおゆく 上昇中軸【名】〔植〕植物體の中軸にして、通常上方に生長するによりていふ』くき(莖)■の異稱。上軸。

しやうしようほふしんわう 性承法親王【名】〔人〕後水尾天皇第六の皇子。名は承法。豐宮といふ。仁和寺の門跡。一身阿闍梨となり、延寶六年薨ず。年四十一。

じやうじようゐん 上乘院【名】もと山城國愛宕(オタギ)郡栗田(クリタ)郷に在り、後に葛野(カドノ)郡池裏村に移りきといふ寺。門跡の一にて、上乘院門跡又は下河原(ハラマチ)門跡といひ、始は眞言宗にて、御室(オムロ)仁和寺に屬し、御室隱居の後、この院に移る例なりしが、のち天台宗より入りて相續するに至り、足利時代に至りて廢絕せり。

じやうじようゐんもんぜき 上乘院門跡【名】前條を見よ。「に同じ。

しやうしよく 傷食【名】しよくしやう(食傷)に同じ。

しやうしよく 尚食【名】『食事を尚(ツカサド)る義』支那にて、古、天子の食膳を掌りし官。

しやうじよく 牀褥・床褥【名】しとね。ねどこ。

じやうしよく 淨拭【名】拭ひきよむること。

じやうしよく 常食【名】■日常の食物。■一定の食事。

じやうしよく 常職【名】■日常の職務、また職業。■一定の職務また職業。

じやうしよく 上職【名】■上位にある職員。■だいふしよく(太夫職)に同じ。〔德川時代の遊廓の語〕

しやうしよくきよく 尚食局【名】『支那唐宋時代の殿中省の一局。天子の常膳を供することを掌りし所なるによりていふ』

ないぜんし(内膳司)の唐名。

しやうしよくほうぎよ 尚食奉御【名】内膳正(ナイゼンノカミ)の唐名。

しやうしよさいうたいじよう 尚書左右大丞【名】『支那隋唐時代、尚書省、左右兩司に分れて、六部を分掌し、左右丞一人づつその事務を司り、門下省は我が國の太政官に當り、六部は八省に當るによりていふ』べんくわん(辨官)の唐名。

しやうしよさち 成所作智【名】〔佛〕四智の一。自利利他の二業を成ずる智。凡夫・二乘の類を利せんがために、種種變化の事を成す智。如來の化身(ケシン)・化土(ケド)を現ずる等、諸の神通の所作は、すべてこの智の作用なり。

しやうしよ-しゆじ 尚書主事【名】せうしよ(尚書)■を見よ。■だじやうくわん(太政官)の唐名。

しやうしよねん 紫陽書院【名】『府城の南門を距ること五淸里弱に當りて、紫陽山あるによりて名づく』支那南宋の朱熹がその生地なる安徽省徽州府に建てし學堂。因つて、又その學を紫陽の學ともいふ。

しやうじろく 姓氏錄【名】〔書〕しんせんしやうじろく(新撰姓氏錄)の略。

しやうしわ 尚齒會【名】しやうしくわい(尚齒會)に同じ。

しやうす 莊主【名】禪寺の役僧の一。寺田の耕作等の事を掌るもの。莊頭。

しやうす 賞す【動佐變他】ほむ。よみす。賞讃す。

しやうず 請ず【動佐變他】まねく。請待(シヤウダイ)す。〔請引す。竹取「かしこまりてしやうじいれてあへり」

しやうず 生ず【動佐變自】■はゆ。おふ。うまる。發生す。■おこる。出來す。發生す。

しやうず 生ず【動佐變他】■はえさす。おほす。うむ。■おこす。でかす。なす。

しやうず 唱ず【動佐變他】となふ。うたふ。平家「專唱名號至西方と釋して、專ら名號を唱ずれば「西方に至り」

じやうず 狀す【動佐變他】狀態を書きあらはす。めいじやう(名狀)參照。

じやうず 上手【名】■技藝などの巧者。(下手(ヘタ)に對して)源氏「いと物のじやうずなる女さへ、多くあつまりて」■碁將碁などの七段の位を有する人。助數詞のだん(段)■參照。■如才なきこと。口まへのうまきこと。おじやうず。

上手の猿が手を燒く【句】次條に同じ。〔諺語〕

上手の手から水が漏る【句】事に馴れたる人にても、思ひがけなく失敗することあり。弘法にも筆の誤。〔諺語〕

上手の猫が爪を隱す【句】「能(ク)ある鷹は爪を隱す」に同じ。〔諺語〕

じやうず 上手【名】〔古語〕源氏「おぼえいとやんごとなく、上ずめかしけれど」

じやうず 成ず【動佐變自】おのづから目的に達す。成る。野守鏡「內外の法、おのづから成ずるものなり」

じやうず 成ず【動佐變他】〔佛〕なし遂ぐ。完全に目的を達す。「無上菩提を成す」

じやうすう 常數【名】■ていすう(定數)に同じ。■一定の數量。■〔數〕『英 Constant』常に一定せる數。例へば圓周率の3.14159…なる、三角形の內角の和の二直角なる類。(變數に對して)■〔理〕『英 Constant』或物質において、一定の狀態の下にありては必ず一定する量。例へば比熱・比重・屈折率など。

じやうず-ごかし 上手倒【名】『じやうず(上手)■を見よ』口まへ・動作など如才なくして、相手をごまかすこと。今國姓爺「はあ、と飛退き跼り、頭を垂れて禮をなす。やあ盜人め、手並に怖ぢて、上手ごかし、くはぬくはぬと振上ぐる」

じやうずひき 上衆引【名】貴人のさまにてあり。上滿ぶりたり。〔古語〕源氏「とみにも動かれず。あまりじやうずめかしと思したり」

じやうずめく 上衆めく【動四自】貴人の如く見ゆ。〔古語〕源氏「やんごとなき人に、いたう劣るまじう、じやうずめきたり」

じやうずもの 上手者【名】他人に對して如才なくつきあふ人。御伽名代紙衣「この女郎、極めてじやうずものにて」

しやうすゐ 將帥・將率【名】軍を率ゐる總大將。

しやうすゐ 傷悴【名】悲しみて、やせかじけたること。

しやうずる 祥瑞【名】めでたき前兆。吉兆。吉瑞。瑞祥。

しやうずる 祥瑞【名】㊀〔人〕陶工。性は伊藤、一説に山田。通稱は五郎太夫、伊勢國松坂の人。後柏原天皇の御代に明國に赴き、磁器の製法を學びて歸り、肥前國伊萬里(イマリ)に窯(カマ)を開く。その作、質甚だ密に、釉藥(クスリ)白く光澤ありて、藍色の圖樣を描き、手法豪放にして、雅致に富み、「五瓦大輔吳祥瑞造」の銘あり。祥瑞は、支那音にて「しよんずる」とも呼ぶ。㊁前項祥瑞の作に係る陶器。

じやうする 上水【名】飲料に供するため、溝又は樋などにて導きたる水。(下水(ゲスイ)に對して)

じやうする 淨水【名】㊀清淨なる水。清水。㊁てうづみづ(手水)に同じ。

じやうずる 常隨【名】常に附隨ふこと。太平記「三年が間、常隨給仕申し候ひつつ、佛神三寶の御答をも蒙れ」

じやうするーがた 上水方【名】江戸幕府の職制の一。道方掛の一部にて、玉川・神田の兩水道の事を掌りしもの。

じやうするーち 淨水池【名】淨水場内又はその他に淨水(一)を蓄へ置く人造の池。塵埃の浸入、動植物の發生等を防ぐ設備を施す。淨水場にありては、濾過池より出で來れる水を、更にここに導き入れて、一層靜置せしむ。

じやうするーおやう 淨水場【名】水源より導き來りし所謂水道水を貯藏し、且つ淸淨ならしむる所。沈澄池・濾過池・淨水池又は喞筒機室・配水管等の廣大なる設備あり。

しやうすゐらいーちやう 掌水雷長【名】軍艦内の職員の一。水雷長の命を受けて、水雷長主管の兵備品中、機關長の管理に屬せざるもの一切を守衞し、水雷庫を整頓し、水雷術教授上の事務を分掌するもの。

じやうーぜ 淨施【名】〔佛〕きしや(喜捨)に同じ。

じやうーぜ 常是【名】㊀德川時代に、丁銀通用の際、銀位の一定を證するため、紙に包み、封印をなす特權を幕府より授けられたる家。慶長年間、堺の町人湯淺作兵衞常是、家康より大黒の名字を與へられ、この特權を得しに始まる。㊁德川時代に、座銀より發行したる丁銀の極印として用ひし二字。㊂德川時代に、銀位を檢定し、丁銀を包み封ぜし所。「を見よ。

しやうーせい 象聲【名】〔語〕りくしよ(六書)

しやうーせい 商勢【名】商業の形勢。商況。商狀。

しやうーせい 商星【名】しやう(商)㊃に同じ。

しやうーせい 將星【名】㊀支那にて、大將たる象(カタ)ありといふ星。㊁しやうぐん(將軍)の異稱。

しやうーせい 彰旌【名】せいへう(旌表)に同じ。

しやうーせい 昌盛【名】さかんなること。隆盛。「盛。

しやうーせい 昌世【名】さかゆる世。昌代。

しやうーせい 正稅【名】『せいぜい(正稅)を見よ』王朝時代の官稻の一。官倉に納めおきて、國用に充てしもの。おほちから。ふとぢから。(公廨(クガイ)稻・郡稻に對して) 後紀「混二合正稅一」盛衰記「正稅官物を打ち留め、人の心をたぶらかし」「商業稅。

しやうーせい 商稅【名】商業に課する稅。

しやうーせい 城西【名】都城の西の方。

しやうーせい 城勢【名】城の樣子。

しやうーせい 情性【名】㊀人の心情と性質と。こころ。性情。㊁〔哲〕じやうへき(情癖)に同じ。「古。

じやうーせい 上世【名】いにしへ。上代。上古。

じやうーせい 上製【名】上等の製造。

じやうーせい 情勢【名】じやうきやう(情況)に同じ。

じやうーせい 常勢【名】常のありさま。定まれる形勢。「庶。

じやうーせい 常制【名】常に定まりたる制

じやうーせい 常稅【名】經常の租稅。

しやうぜいーし 正稅使【名】しやうぜいちやうし(正稅帳使)に同じ。

じやうーせいたい 上聲帶【名】〔醫〕かせいたい(假聲帶)に同じ。

しやうぜいーたう 正稅稻【名】正稅として徵收する稻。

しやうぜいーちやう 正稅帳【名】四度公文(シドクモン)の一。地方の各國内の正稅の歲類及び雜用を記せる帳簿。稅帳。次條參照。

しやうぜいちやうーし 正稅帳使【名】四度使(シドシ)の一。毎年正稅帳を携帶して京都に上り、太政官に差出だしものし。國司これに任じ、九州にては、一旦太宰府に送り、太宰府より更に太政官に送る規定なりき。その帳簿は、太政官より民部省に下し、民部省は主稅寮にて檢閱・決算したり。正稅使。「の異稱。

じやうせいーどうじ 上淸童子【名】ぜに(錢)

しやうぜいーもくろくちやう 正稅目錄帳【名】正稅の目錄を記したる帳簿。

じやうせう 上焦【名】三焦の一。心臟の下にあるもの。

じやうせうじ 誠照寺【名】越前國今立郡鯖江(エサヾ)町にある眞宗の寺。同宗誠照寺派の本山。本尊は阿彌陀如來。親鸞の留錫せし處。俗に鯖江門跡又は鯖江御堂と稱す。

じやうせうじーは 誠照寺派【名】〔佛〕眞宗の一派。本山は越前國鯖江(エサヾ)の誠照寺、派祖は如覺。はじめ三門徒の一たりしが、明治維新後、一旦天台宗に屬し、また獨立して、眞宗十派の一となれり。

しやうーせき 掌跡【名】手のひらのあと。

じやうーせき 城蹟・城跡【名】城のあと。城址。しろあと。

じやうーせき 攘斥【名】はらひ退くること。

じやうーせき 讓責【名】せめとがむること。詰斥。呵斥。

じやうーせき 上席【名】㊀じやうざ(上座)に同じ。㊁階級の高きこと。「上席判事」

じやうーせき 常式【副】じやうしき(常式)の轉訛。(甲斐國の方言)「人。

じやうせきーしや 上席者【名】階級の高き人。

じやうーせつ 詳說【名】つまびらかに說きあかすこと。細說。

じやうーせつ 淨刹【名】㊀〔佛〕『刹は梵語kṣe-

tra にて、國土と譯す』清淨なる佛國。淨土。盛衰記「最後の十念を以て、淨刹の下品(ゲボン)に迎へ取りたまへ」㊁てら。寺院。梵刹。「と。

じやうーせつ 常設【名】常に設けてあること。

じやうせつーちゆうさいさいばんしよ 常設仲裁裁判所【名】歐洲大戰前、外交の手段にては處理すること能はざる國際紛議を、直ちに仲裁裁判に付するに便ならしむる目的にて、和蘭國海牙(ハイ)に常設せる仲裁裁判所。

じやうせつーゐゐん 常設委員【名】平素設け置く委員。常置委員。

しやうーせん 省錢【名】九六錢(クロク)八丸(ハチグ)等のごとき、その値百文に滿たざる錢を百文とすること。

しやうーせん 商船【名】商業上の目的を以て、航海の用に供する西洋形の船舶。商船。

しやうーせん 晶腺【名】〔醫〕しやうぞく(晶族)に同じ。「じ。

しやうぜん 生前【名】せいぜん(生前)に同じ。

しやうぜん 生善【名】〔佛〕「滅罪生善」を見よ。「同じ。

しやうーぜん 鏘然【貌】しやうしやう(鏘鏘)に同じ。

しやうーぜん 上僊・上仙【名】『天に昇りて、仙人となる義』とうせん(登仙)に同じ。

じやうーぜん 上宣【名】上卿より宣達する詞。江次第「上宣令候」「船。

じやうーせん 上船【名】船に乘ること。乘

じやうーせん 常饌【名】日常の食事。常餐。

じやうーぜん 【名】〔動〕みづまし(水澄)を云ふ。「西國の方言」

じやうーぜん 淨膳【名】精進(シヤウ)料理の膳部。素食。「よ。

じやうせん 成選【名】せいせん(成選)を見

じやうせんーかうろ 商船航路【名】通商貿易の目的を以て通航する海上の道程。

じやうせんーがくかう 商船學校【名】㊀遞信大臣管理の下に、船舶の航海運用・機關の學術・技藝を敎授して、高等なる船舶職員たるべき者を養成する學校。㊁實業學校の一。普通學並びに船舶の航海・運用・機關及び造船等に關する學術・技藝の大意を

教授する所。甲種と乙種とあり。

じやうせん-かよう 【名】〔動〕みづすまし(水澄)を云ふ。〔西國の方言〕

しやう-せんぐう 正遷宮 【名】神社の新築成りて、權殿(カリ)より本殿へ遷座すること。(假遷宮に對して)

しやうぜんけい 將然形 【名】〔語〕しやうぜんだん(將然段)に同じ。

しやうぜんげん 將然言 【名】〔語〕將然段の語。例へば「吹かず」「調べん」「善くば」「行くべからず」の「吹か」「調べ」「善く」「べから」の類。

しやうせんごそう 商船護送 【名】戰時、局外中立國軍艦が海洋航行の自國商船を護送して、交戰國の軍艦に對して、その商船の戰時法違犯のものにあらざることを證明して、その臨檢搜索の煩累と損失とを避くること。

しやうせん-しっぽう 省線七寶 【名】七寶燒の一。その輪廓を作る針金を、酸類にて腐蝕せしめたるもの。しっぽうやき(七寶燒)參照。

しやうぜん-たん 將然段 【名】〔語〕動詞・形容詞又は助動詞の、將然言として用ひらるる段、即ちその第一變化。未然段。將然形。

しやうせん-ちやう 商船長 【名】商船の船長。

しやうせん-ほくわく 商船捕獲 【名】敵國の商船を捕獲すること。

しやうせん-もくろく 商船目錄 【名】保險者・傭船者その他の利害關係人に對して、その船舶の性格及び狀態を知らしめんがため、世界各國商船の檢査成績及び等級別を記錄したる書册。

しやうぜん-もん 章善門 【名】八省院二十五門の一。西面の中門にして、宣政門と相對し、左右に敬法・顯親の二門あり。

しやうそ 障阻 【名】さまたぐること。さしつかへ。

じやうそ 上疏 【名】事由を疏陳して上(カミ)ること。上書。上表。

じやうそ 上訴 【名】一上に訴ふること。訴訟。二〔法〕裁判の正當なることを擔保し、完全に私權保護の目的を達せしめ、兼ねて法則の解釋を一定する目的にて、裁判所のなしたる未確定の裁判に對し、これに不服なる者より、一定の期間内に、その上級裁判所に、これが取消又は變更を申し立つること。即ち控訴・上告・抗告の總稱。

しやうそう 請僧 【名】法會などに招請せられたる僧。狹義「講師は、山の座主なりけり。しやう僧は六十人」

しやうそう 聖僧 【名】〔佛〕一斷惑證悟したる聖人。德行の最も勝れたる僧。二じやうざ(上座)三に同じ。三禪宗にて、僧堂の中央に祀る佛・菩薩・高僧の像等の稱。多くは、文殊菩薩或は憍陳如(ギョウニョ)・賓頭盧(ヒンヅル)・迦葉(カセフ)・須菩提(シュボダイ)等の何れかを祀る。

しやう-そう 商僧 【名】商業を營む僧。賈僧(コソウ)。商聖(シヤウ)。下學集「賈子、マイス。商僧也」

しやう-そう 裳層 【名】〔建〕しやうかい(裳階)に同じ。

しやう-そう 尚崇 【名】あがめたふとぶこと。尊崇。

しやう-そう 請奏 【名】古、諸司が、事件の起りし時、奏文を奉りて上請せしこと。

しやうそう 聖聰 【名】〔人〕淨土宗の僧。千葉氏胤の次男。字は酉譽。下總國の人。聖冏(ショウケイ)の弟子。江戸增上寺の開祖となる。應永二十四年寂す。年七十五。著書多し。

じやう-そう 上奏 【名】一意見を天皇陛下に奏聞すること。奏上。二〔法〕貴族院又は衆議院が直接に意見を、又、各省大臣・宮内大臣・朝鮮總督・臺灣總督・關東都督・會計檢査院長等が、直接又は內閣總理大臣を經て、所部の奏任官の進退、所部官吏の敍位・敍勳を、又、皇室例の制定・改正もしくは廢止を要するものある時、宮内大臣が案を具して、天皇に奏すること。又單に、勅語に奉答し、もしくは慶弔等の儀式上の表辭を上るに過ぎざることあり。

じやう-そう 上宗 【名】せんぞ。祖先。

じやう-そう 上層 【名】一上方の層。うはかは。上部。(下層に對して) 二じやうりう(上流)二に同じ。

じやうそう-あん 上奏案 【名】帝國議會に於て、上奏すべき意見を討議する案文。

しやうそう-こくし 正宗國師 【名】〔人〕はくいん(白隱)に同じ。

しやうそう-じしや 聖僧侍者 【名】禪宗の役僧の一。聖僧二に侍仕し、齋(キ)に飯(ソ)を鳴らし、中夜に燈を剔(カ)くなどの事をなすもの。聖侍。彼岸侍者。彼岸衆。

しやうそうじやう 正僧正 【名】そうじやう(僧正)を見よ。

じやうそう-しやくわい 上層社會 【名】じやうりうしやくわい(上流社會)に同じ。

じやうそう-おやぼ 上層醸母 【名】麥酒の醸母菌中、醱酵の際、溶液の上層に浮びて醱酵を起すもの。(下層醸母に對して)

しやうそう-もつ 聖僧物 【名】〔佛〕律僧の分に充てたる寺の物。

しやうぞく 戕賊 【名】『戕も、賊も、殘(ソコ)ひ殺す義』人を斬りころすこと。

しやうぞく 晶族 【名】〔鑛〕『英 Druse』或岩石の裂罅(レッカ)空隙の周圍に、多くの結晶の並列して集合せるもの。晶腺。

しやうぞく 裝束・裝束 【名】一室内・庭上・器物などを飾り裝ふこと。大鏡「一條院の御卽位の日、大極殿裝束すとて、人人集まりたるに」二衣冠を著くること。みじたく。盛裝。盛衰記「侍二三人はなやかに裝束せさせて」三きもの。衣服。みなり。服裝。

しやうぞく 裝束の家 【句】武家時代に、世世裝束上の事を業とせし家、即ち三條大炊御門(オホイカド)・山科(ヤマシナ)の諸家。

しやうぞくの-か 裝束の假(カ) 【句】王朝時代に、外官の拜命後に給せられし休暇。日數は、任地の距離に隨ひて差異ありき。

しやうぞくの-かさ 裝束の傘(カサ) 【句】武家時代に、裝束著用の際、從者に持たせし傘。廣さ八尺を本とし、弓を持ちて馬に乘る時、その弓の濡れぬほどに作りたりといふ。

しやうぞくの-かさ 裝束の傘(カサ) 【句】前條に同じ。太平記「裝束の唐笠ほどなる光物」

しやうぞく 裝束 【動四自】さうぞく(裝束)に同じ。

じやうそく 常則 【名】常の法則。通常の規則。

じやうそく 上足 【名】上席の門弟。高足。逸足。

じやうぞく 上族 【名】嬰兒の、すでに適度の發育をなしたる時、繭を造らするため、集めて、族(ゾク)にのぼすること。

じやうぞく-くわげん 上屬和絃 【名】じやうくわげん(次中和絃)に同じ。

じやうぞく-ざつじせう 裝束雜事抄 【名】〔書〕淨衣(ジヤウエ)・半尻・布衣・臣下袍・闕腋(ケツテキ)・小袖・下襲(シタガサネ)等のことを記せるもの。一卷。藤原永行の著。

しやうぞく-し 裝束司 【名】中古、天皇の行幸・大嘗會・御葬などに際し、臨時に設けられて、服飾の事一切を司りし職。定員なく、聖武朝より鎌倉時代まで斷續して行はれたり。

しやうぞく-しふせい 裝束集成 【名】〔書〕男女の裝束に關する一切を輯めて、その沿革の參考に資すべき古記錄を拔粹したるもの。十二卷。壺井義知もしくはその門人などの著ならんといへど、確かならず。

しやうぞく-しよくもんづゑ 裝束織文圖 【名】〔書〕裝束の種類を網羅し、その色目・織文をも圖解したるもの。一卷。松方辰方(カタ)の著。故實叢書に收む。

しやうぞく-づしき 裝束圖式 【名】〔書〕諸種の裝束の圖を示して、その大略を示したるもの。二卷。著者詳かならず。

しやうぞく-づつ 裝束筒 【名】しとづつ(尿筒)に同じ。

しやうぞく-の-あな 裝束孔 【名】ひひきのあな(響孔)に同じ。

しやうぞく-ばこ 裝束箱 【名】衣服を入るる箱。持統天皇歌軍法「それ裝束箱懷中刀入れさせよ」

しやうぞく-はじめ 裝束始 【名】一衣裳を始めて著くる儀式。持統天皇歌軍法「龍田明神の宮にて、裝束始の儀式を行ひ、男子の兄弟あるならば、公家になして冠させよ」二夏の休業期終りて、秋に入り、始めて行ふ能樂。(裝束納に對して)

しやうぞく-ばり 裝束針 【名】衣冠などの裝束を縫ふに用ひし針。

しやうぞくひき 裝束祕記【名】〔書〕主上の御束帶御服・院中の御束帶・御衣冠・御烏帽子・直衣(ナホシ)、臣下の衣冠・束帶及びその著用の事を記せる書。一卷。著者詳ならず。

しやうぞくびな 裝束雛【名】裝束を著けしめたる雛人形。

しやうぞくぶんしよくすゐだん 裝束文飾推談【名】〔書〕裝束の種種の紋につき、舊記を引き、且、自說を加へたるもの。一卷。壺井義知の著。

しやうぞくをさめ 裝束納【名】夏期に入るにつけて、能裝束を納むること、及びその期に行ふ能樂。(裝束始に對して)

じやうそけん 上訴權【名】〔法〕上訴をなし得る權利。ふたいじやうそけん(附帶上訴權)參照。

じやうそさいばんしよ 上訴裁判所【名】上訴審の裁判所。地方裁判所・控訴院・大審院の內これに當る。〔審判。

じやうそしん 上訴審【名】〔法〕上訴(二)の

しやうそつ 將卒【名】大將と兵卒と。

じやうそひよう 上訴費用【名】上訴の裁判費用。

じやうそまうしたてしよ 上訴申立書【名】〔法〕上訴をなすに要する書面、即ち控訴狀及び控訴申立書、上告狀及び上告申立書・抗告狀及び抗告申立書の總稱。

しやうそん 正尊【名】謠曲の一。賴朝の命にて、土佐坊正尊(昌俊)の、義經を討ちに向ひしことを作れるもの。

じやうそんそん 讓遜【名】そんじやう(遜讓)に同じ。〔略。

じやうだ 常蛇【名】「常山の蛇勢(ジヤセイ)」の

しやうたい 正體【名】■神佛などのまことのからだ。本體。著聞「かの御正體にたがふことなかりけり」■變化(ヘンゲ)せぬもとの姿。也有「化物の正體見たり枯尾花」■たしかなる精神。正氣(シヤウキ)。沙石集「時至らざりけるや、皆正體なき事にてありけれども」

しやうたいなみだ 正體なみだ【句】『正體無くの無を涙の「な」に言掛けたる語』正氣(シヤウキ)を失ひて泣く涙。心中宵庚申「愼み深き堅親仁、惡口交りの口說泣、二人の衆も正體なみだ」

しやうたい 昌泰【名】醍醐天皇の御代の年號(紀元一五五八年—一五六〇年)。

しやうたい 昌大【名】盛んに大なること。

しやうたい 昌代【名】しやうせい(昌世)に同じ。

しやうたい 唱題【名】〔佛〕經の題目を唱ふること。日蓮宗にて「南無妙法蓮華經」と唱ふる類。しやうだいしゆう(唱題宗)參照。

しやうたい 請待【名】『延請待遇の義』人を請じてもてなすこと。招待。

しやうたい 掌大【名】手のひらほどの大きさ。小さき地域又は物の譬にいふ語。

しやうたい 章臺【名】しやうくわのだい(章華臺)の略。

しやうたい 上腿【名】〔醫〕下肢の上部、即ち骨盤より膝までの間。大腿。(下腿に對して)〔部分。

じやうたい 上體【名】身體の、腰より上の

じやうたい 上帶【名】小銃の銃身を銃床に緊密せしむる環の、銃口に近き點にあるもの。(下帶に對して)〔を見よ。

じやうたい 上台【名】さんだいせい(三台星)

じやうたい 狀態【名】ありさま。なりふり。すがた。

じやうたい 情態【名】■心情と狀態と。■まことのありさま。

じやうたい 常態【名】つねのさま。

じやうたい 上代【名】■じやうせい(上世)に同じ。■古、上卿の事故ある時、これに代りて、事を執りし大辨。

じやうたい 城代【名】■君主に代りて、その居城を守る職。■次條の略。

じやうだいがらう 城代家老【名】るすがらう(留守家老)に同じ。

しやうたいけん 請待券【名】請待せし證として渡しおく書附又は切符。招待券。

しやうたいこく 請泰國【名】〔佛〕ごくらくじやうど(極樂淨土)に同じ。

じやうだいじ 城大寺【名】そうだいじ(東大寺)の異稱。

しやうたいじやう 請待狀【名】請待の通知書。招待狀。

しやうだいしゆう 唱題宗【名】〔佛〕『唱題を專要とする宗旨なるよりいふ』にちれんしゆう(日蓮宗)の異稱。(宗外の人より呼びていふ)

じやうだいそめ 上代染【名】更紗と小紋染との中間に位する染模樣。

しやうたいび 請待日【名】せうたいび(招待日)に同じ。

しやうだいふいも 清太夫芋【名】〔植〕『その物の栽培を奬勵せし武藏國秩父(チチブ)の代官河原清太夫の名を取りて呼びしものならんといふ』じやがたらいも(馬鈴薯)に同じ。

しやうたう 正當【名】■せいたう(正當)に同じ。■爲り飾らぬこと。實直。樸實。■正しく忌日に當れる日。葬花「御正當には、殿にて、經佛など」

しやうたう 傷悼【名】いたみかなしむこと。痛悼。哀悼。

しやうたう 商湯【名】〔人〕『しやう(商)㊀を見よ』たうわう(湯王)に同じ。

しやうたう 餉道【名】りやうだう(糧道)に同じ。

しやうだう 奬導【名】すすめみちびくこと。

しやうだう 唱道・倡道【名】『唱(ト)へ道(イ)ふ義』みづから魁となりてとなふること。廣く告げふらすこと。稱道(ダウ)。

しやうだう 唱導【名】〔佛〕■佛法を唱說して、衆生を化導(ケダウ)すること。■しやうだう(唱導師)の略。盛衰記「凡僧なれども、この澄憲を唱導に招じたる施主故に」

しやうだう 聖道【名】〔佛〕■證悟して、聖者となる道。■人間の中の智慧に富みたる賢聖(ケンジヤウ)が、この世に生存中、自力を以て、諸種の惑を解き、つひに成佛せんとする道。これを主張する敎を聖道門と云ひ、淨土門と對立す。この二門の對立は、支那唐の道綽禪師の安樂集に始めて唱へられしものにて、龍樹菩薩の難行道・易行(イギヤウ)道の區別に淵源す。■寺の稚兒(チゴ)。太平記「禪僧になりたらば、沙彌鳴食に指をさされ、聖道になりたらば」

しやうだう 聖道【名】〔佛〕自力を以て成佛せんとする修行、即ち四諦(イタイ)・十二因緣・六度萬行等の總稱。盛衰記「聖道の修行ならば、凡聖(ボンシヤウ)元より二なし」

しやうだう 正堂【名】〔佛〕禪寺の方丈の

しやうだう 正道【名】■せいだう(正道)に同じ。■〔佛〕正眞の道。

じやうだう 常套【名】『套は、物の重なりあふ意より轉じて、前例に倣ひて行ふのみなる意に用ふ。きうたう(舊套)參照』ありふれたること。きまり切りたること。

じやうだう 上堂【名】〔佛〕禪宗の行事の一。導師が、法堂の須彌座(シユ)上に登りて宗法を論ずるもの。「上京。

じやうだう 上道【名】都に上(ボ)ること。

じやうだう 上道【名】〔地〕備前國六郡の一。郡役所を西大寺(サイダイジ)町に置く。

じやうだう 成道【名】〔佛〕■悟を開くこと。大悟。成佛得道。■釋迦の八相の一。即ち釋迦が、佛陀伽耶(ガヤ)なる菩提樹下、金剛座上諸魔を降し、廓然大悟して、一切種智を得、無上菩提に感ぜし相。

じやうだう 常道【名】常に必ず由るべき道。尋常の道理。つねのみち。

じやうだう 淨道【名】〔佛〕淸淨なる佛道。

じやうだうき 成道忌【名】〔佛〕釋迦が成道したる日を緣として修する法會。その日に二月八日(因果經)・四月八日(方等泥洹經)・三月八日(西域記)・三月十五日(西域記)・五月八日等の異あれども、我が國にては、譬喩經に據りて、十二月八日と定め、この日も、佛生會(ブツシヤウエ)と同じく灌佛す。臘八(ラフ)・成道會。

じやうだうご 常套語【名】常套となれる語。くちぐせ。〔同じ。

しやうたうし 娼婦子【名】かげま(陰間)に

しやうたうし 唱導師【名】〔佛〕■說法を爲す人。唱導をなす人。■だうし(導師)(二)に同じ。

じやうたうしゆだん 常套手段【名】くわんようしゆだん(慣用手段)に同じ。

しやうだう-もん 聖道門【名】〔佛〕しやうだう（聖道）を見よ。（淨土門に對して）

じやうだう-ゑ 成道會【名】じやうだうき（成道忌）に同じ。

じやう-たつ 上達【名】學術・技藝などの進みて、上手になること。

じやう-だつ 攘奪【名】ぬすみ奪ふこと。

しやう-たふ 牀榻【名】こしかけ。ねだい。

じやう-たぼ 上髱【名】『上等の髱といふ義。たぼ（髱）㊁を見よ』びじん（美人）に同じ。

じやう-だま 上玉【名】㊀上等の寶玉。㊁上等なるしろ物。〔俚語〕

しやう-たん 唱彈【名】㊀歌ふことと彈ずること。㊁歌ひ且つ彈ずること。唱歌と彈奏と。

しやう-たん 嘗膽【名】「臥薪嘗膽」を見よ。

しやう-たん 傷嘆・傷歎【名】傷み嘆くこと。

しやう-たん 賞嘆・賞歎【名】感心して賞むること。讚嘆。嘆賞。

しやう-だん 章段【名】文章の段落。徒然「光聖の作れる内外の文にも、章段の缺けたる事のみぞ侍る」

じやう-たん 上端【名】上のはし。（下端に對して）

じやう-たん 情端【名】いろけ。情。春情。

じやう-だん 常談【名】㊀つねの話。普通なる話。平話。㊁たはむれていふ話。ふざけていふ話。ざれごと。㊂たはむれ。おどけ。滑稽。㊃みちくさ（道草）㊁を云ふ。〔京都の語〕

じやう-だん 上段【名】㊀上の段。高き段。㊁一室中に、床を一段高く造り構へたる所。㊂じやうざ（上座）に同じ。㊃劍法の構へ方の一。柄を兩手にて持ち、頭の上にふりかざすもの。（中段・下段に對して）㊄屋形船の一部。

上段の間（マ）【句】〔建〕書院造の建物にて、普通の座敷よりは特に床（ユカ）を一段高くして作れる座敷。貴賓を請待する時の席とす。

じやうだん-ぐち 常談口【名】おどけぐち。ざれごと。

じやうだん-ごと 常談事【名】たはむれごと。ざれごと、

しやう-たんじやうび 正誕生日【名】その人の誕生したる當月當日。

じやうだん-どこ 上段床【名】座敷よりは一段高く作れる床の間。

しやう-ち 聖智【名】〔佛〕眞如實相を知る智。眞智。

しやう-ち 正智【名】〔佛〕こんぽんち（根本智）に同じ。（俗智に對して）

しやう-ち 生地【名】せいち（生地）㊀に同じ。

しやう-ぢ 正治【名】土御門天皇の御代の年號（紀元一八五九年―一八六〇年）。

じやう-ち 上地【名】㊀上等なる土地。㊁土地を官に上納すること、又その土地。

じやう-ち 上知【名】知行（チギヤウ）を官に上納すること。

じやう-ち 上智【名】最もすぐれたる智慧、又その智慧を有する人。（下愚に對して）平家女護島「生死不定は上智・博識も辨ずべからず」

上智と下愚とは移らず【句】『論語の陽貨篇に「惟上智與二下愚一不レ移」とあるに本づく。顏氏家訓にも「上知不レ敎而成、下愚雖レ敎無レ益」とあり』普通の人の性はほぼ相同じきが故に、習慣の善惡によりて、賢とも愚ともなるべけれど、上智の者と下愚の者とは、性質固定して、習慣によりて變化することなし。〔諺語〕

じやう-ち 淨智【名】〔佛〕清淨にして、煩惱を絶ちたる智。

じやう-ち 淨地【名】『清淨なる土地の義』㊀寺などのある土地。㊁僧侶の鹽醬をおく處。

じやう-ち 城地【名】城と領地と。

じやう-ち 城池【名】㊀城と濠（ホリ）と。㊁城の周圍にある濠。

じやう-ち 常置【名】常に置くこと。常設。

じやう-ち 情致【名】おもむき。情趣。

じやう-ち 城雉【名】城上の墻。城墻。

じやう-ち 壤地【名】土地。土壤。

じやう-ぢ 上地【名】〔佛〕㊀じやうかい（上界）に同じ。（下地に對して）㊁菩薩の修行上の地位の高きもの。（下地に對して）

しやう-ぢき 正直【名】㊀正しくすなほなること。僞りなきこと。せいちよく。正當。㊁大きなる箍（タガ）。望一千句「正直の首（カウベ）を照す月のかげ（といふ句に）「秋の夜をかけ桶を結ふなり」㊂桶屋などの用ふる、長さ四尺の鉋。㊃建家の歪（ユガミ）を正す器械。長き木の上下に横木ありて、上の横木の一端より錘を垂らしたるもの。上下の横木の、錘を垂さざる方の端を柱に當て試むるに、錘を吊りたる絲の端、下の横木の端に觸るれば、柱に歪なきを知るべく、然らざる時は、歪あるを知るべし。㊄しやうぢきぢやや（正直茶屋）の略。柳樽「正直は四手（ヨツデ）萬八舟で見る」

正直の頭（カウベ）に神宿る【句】正直なる人には、神の擁護あり。〔諺語〕

正直捨方便（シヤウヂキシヤハウベン）【句】〔佛〕『法華經の方便品の偈（ゲ）に「於二諸菩薩中一、正直捨二方便一、但説二無上道一」とあるに本づく』法華經は、釋尊出世の本懷の經なるが故に、その説くところ、他の諸經におけるがごとき方便の權敎にあらずして、徹頭徹尾最上妙の一乘法なること。謠曲（身延）「正直捨方便、無上の道に至るべし」

正直の儲（マウケ）は身に附く【句】正直に儲けたる金錢は、永久に失ふこと無し。「惡錢身に附かず」の反對。〔諺語〕

正直は一生の寶【句】正直なる行は、一生身を離れざる無形の寶なり。〔諺語〕

正直は最上の政策なり【句】『亞米利加のフランクリン（B. Franklin）の語曰 Honest is the best policy に本づく』正直なる行動は、策略を用ふるよりも却りて好結果を奏するものなり。〔諺語〕

しやうぢき-かうべ 正直頭【名】『「正直の頭（カウベ）に神宿る」を見よ』正直なる性質。五人女「この男の正直かうべは人まかせ」

しやうぢき-ぢやや 正直茶屋【名】文化・文政時代に、江戸淺草馬道（ウマミチ）にありし蕎麥屋。吉原通ひの通路に當りしため、有名なりき。しやうぢき。

しやうぢき-もの 正直者【名】正直なる人。

しやう-ちく 湘竹【名】『博物志に「堯之二女、舜之二妃曰二湘夫人一、舜崩、二妃啼以レ涕揮、湘竹盡斑」とあり』斑文ある一種の竹。しやうれん（湘簾）參照。

しやう-ぢく 晶軸【名】〔鑛〕けつしやうぢく（結晶軸）に同じ。

じやう-ぢく 上軸【名】〔植〕じやうしようちゆうぢく（上昇中軸）に同じ。

じやうち-くわんりん 上地官林【名】社寺上地の官有林。

じやうち-じ 淨智寺【名】相模國鎌倉郡小坂（コサカ）村大字山之内（ヤマノウチ）にある臨濟宗の寺。金峯山と稱し、昔時、五山の第四に列したり。北條師時の開基、開山は兀庵普寧。今は一字の堂を存するのみ。

しやう-ちつ 緗帙【名】あさぎ色の絹にて造れる帙。

しやう-ぢん 聲塵【名】〔佛〕ろくぢん（六塵）を見よ。

しやうぢん-とくだう 聲塵得道【名】〔佛〕六塵得道の一。この世界の人類の、説法の聲を聞きて、佛道を覺ること。野守鏡「音律浮世の曲を傳へて、聲塵得道の業をなしはべりしかども」

聲塵得道の國【句】〔佛〕『娑婆世界の人の最大多數は、聲塵得道をなすによりていふ』しやばせかい（娑婆世界）の異稱。野守鏡「娑婆世界は聲塵得道の國なるが故に、音律正しければ、内外の法おのづから成ずるものなり」

じやうちん-ろくじ 上鎭錄事【名】ぐんさう（軍曹）㊀の唐名。

しやう-ちやう 正長【名】稱光天皇の御代の年號（紀元二〇八八年）。

しやう-ちやう 正丁【名】大寶令の制定にて、男子の二十一歳乃至六十歳以下にて、壯健なる者。せうちやう（少丁）・らうちやう（老丁）・しやうによ（正女）參照。

しやう-ちやう 庄長【名】㊀しやうじ（莊司）に同じ。〔莊長〕㊁臺灣にて、廳長又は支廳長の指揮・命令を承けて、庄内の行政事務を補助執行せしもの。明治四十二年廢止。

しやう-ちやう 省長【名】省㊂の民政長官。督軍と相並んで、一省を鎭撫す。

しやう-ちやう 省帳【名】『民部省にて調

製保證せしによりていふ』**づちやう**(圖帳)に同じ。東鑑「奥州羽州兩國省帳」

しやう-ちやう 匠丁【名】昔、匠人として役せられし正丁。飛驒國より毎年貢進せられたり。三代實錄「飛驒國年貢二匠丁一百人」

しやう-ちやう 正定【名】〔佛〕■**はっしやうだう**(八正道)を見よ。■**しやうぢやうじゆ**(正定聚)の略。

じやう-ちやう 上帳【名】蠟燭のつつみ紙。

じやう-ちやう 上聽【名】**じやうぶん**(上聞)に同じ。

じやう-ぢやう 上場【名】芝居にて、或狂言を舞臺にかけて演ずること。上演。

じやうちやうくわん 上長官【名】陸海軍の佐官と佐官相當官との稱。

しやうちやうこばん 正長小判【名】古金貨の一。楕圓形にして、縦二寸三分、横一寸一分、面の上部に「正長」の二字、中部に桔梗花、下部に花押の極印あり。正長は、鑄造の年代なりや、鑄造者の名なりや、詳かならず。

しやうぢやう-じゆ 正定聚【名】〔佛〕『正(サ)しく佛果を得るに定まれるよりいふ』三聚の一。不退轉の地位に入りたる菩薩衆。淨土門にては、信心を得たる者は、來世において必ず成佛すべしとするが故に、この中に入る。(邪定聚不定聚に對して)

しやう-ちやく 正嫡【名】**せいてき**(正嫡)に同じ。

じやうちやく-え 上著衣【名】〔佛〕**さんえ**(三衣)を見よ。

じやう-ぢゆ 常住【名】〔佛〕**じやうぢゆう**(常住)■に同じ。

しやう-ちゆう 掌中【名】■手のうち。たなごころのうち。掌裡。■領有の範圍。掌中に入る【句】『通鑑綱目に「劉裕伐二南燕一、過二大峴一、燕兵不レ出、裕舉レ手指レ天、喜形二於色一、左右曰、公未レ見レ敵而先喜、何也。裕曰、兵已過レ險、士有二必死之志一、餘糧棲レ畝、人無二還乏之憂一、虜已入二吾掌中一矣」とあり』先方の事情を明かに知了す。

しやう-ちゆう 掌中の珠【句】『杜甫の寄二漢中王一詩に「掌中探見一珠新」とあり』最愛の子に譬へていふ語。掌中の珠を失ふ

しやうちゆう 正中【名】後醍醐天皇の御代の年號(紀元一九八四年—一九八五年)。

しやう-ぢゆう 生住【句】**しやう**(生)の條下を見よ。

じやう-ぢゆう 城中【名】城のなか。城内。

じやう-ぢゆう 常住【名】■常に住めること。常に住みてあること。平家「常往の僧……御琵琶を奉る」■〔佛〕生滅(シヤウメツ)變化せずして、常に存在すること。眞如(シンニヨ)の理體。(無常に對して) 徒然「常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり」

常住如法(ニヨホフ)**の月**【句】〔佛〕眞如の理體の佛道修行者の證悟の目的物として仰がるるを、月に譬へていふ語。鴉鷺合戰「顛倒無明の妄雲、徒に常住如法の月輪を隱して」

常住の燈火(シンピ)【句】〔佛〕■眞如の理の凡夫の迷妄を照破するを、燈火に譬へていふ語。■「月、常住の燈火を挑(カカ)ぐ」を見よ。

常住不斷【句】常に斷えざること。ふだん。

常住不變【句】〔佛〕眞如の理體の變化なきこと。

常住不滅【句】「常住不斷」に同じ。平家「常住不滅、實報寂光の生身(シヤウジン)の御佛と思し召し准へて」

じやう-ぢゆう 常住【副】つねに。ふだん。じやうしき。

常住坐臥【句】坐するにも臥すにも。

しやう-ぢゆう-いつめつ 生住異滅【句】**しやう**(生)の條下を見よ。

じやう-ぢゆう-げぼん 上中下品【名】〔佛〕阿彌陀佛の淨土に往生すべき機類の三種、即ち上品と中品と下品と。**ぐぼん**(九品)參照。

上中下品の來迎(ライガウ)【句】〔佛〕臨終に、上中下三品の機類に應じて、それぞれ來迎を受くること。著聞「上中下品來迎の儀」「唐名。

じやう-ぢゆうこく 上柱國【名】正二位の勳(カウ)一等松尾村葉室(ハムロ)にある黄蘗宗の寺。もと律宗。葉室中納言入道定然の開山、叡尊の開基。僧鐵牛の中興。葉室家の菩提所たり。

じやうぢゆうじ 常住寺【名】山城國洛西(西堀川の西、一條の南)にありし天台宗の寺。本尊は藥師佛。平安遷都と同時に奈良より移轉せしもの。天慶以後の事跡詳かならず。一名、野寺。

しやうちやう-ぼん 掌中本【名】袖珍本の如き一種の小本。

じやうぢゆうゐん 常住院【名】山城國愛宕(アタゴ)郡にありし天台宗の寺。園城寺門跡の一。證空を開祖とし、爾來門跡相繼ぎて、應永年中の道意に及びしが、その後の事跡詳かならず。

じやう-ぢゆうゑ-くう 成住壞空【句】**じやう**(成)の條下を見よ。

しやう-ぢよ 商女【名】あきなひする女。

しやう-ぢよ 娼女【名】うたひめ。あそびめ。遊女。妓女。

じやう-ちよ 情緒【名】**じやうしよ**(情緒)「誤讀。

じやう-ちよう 象徴【名】『英Symbol. 形象を以て、符徴とする義』觀念・思想・感情等を代表する符號的表現の總稱。比喩の最も進みたるものにて、佛教に於ける「印」と同じ。例へば、色ならば、白を純潔、赤を情熱、革命、黑を悲哀、青を理想の象徴とし、花ならば薔薇を戀愛、菫を溫情・貞淑の象徴とする類にて、美學上、聯想の一種として說明せらる。しんぼる。表徴。表象。

しやうちやう-しゆぎ 象徴主義【名】『英Symbolism』■〔美〕宇宙・人生及び藝術を象徴として觀ずる美的態度、又象徴により て、思想及び感情の內容を表現する藝術上の樣式、又美的態度を批評し、或は說明するに當り、象徴を最上の原理となすもの。しんぼりずむ。■〔哲〕事物を宗教的意義の象徴として、宗教上に用ふること。しんぼりずむ。

しやうちやう-げき 象徴劇【名】或思想を、象徴を用ひて表現したる劇。

しやうちやうは 象徴派【名】〔美・哲〕『英Symbolism』象徴主義を主張する流派。

じやうちりん 上地林【名】菩薩時代に社寺領たりし森林の、明治四年政府に上地せしめられしもの。社寺上地林。

じやうちゐん 常置員【名】常置の委員。

じやうちゐゐん 常置委員【名】繼續して おく委員。常設委員。

じやう-づ 掌圖【名】〔兵〕略圖よりも精密にして、やや正則圖に近き圖。地圖を補修して、偵察したる景況を示し、或は諸種の築設・構造の設計を描くに必要なるもの。

しやうづ【名】**きめう**(奇妙)を云ふ。〔伊勢國富田の方言〕

じやう-つう 狀通【名】書狀をつかはすこと、又その書狀。用明天皇職人鑑「幼なじみの本妻さへ、皇子方のものなれば、狀通にて緣切ったり」

しやうづ-か 三途川・葬頭河【名】〔佛〕**さうづか**(三途川)の訛。

しやう-づき 祥月【名】『支那の小祥・大祥に做ひたるもの。**せうしやう**(小祥)參照』その人の死にし月と同じ月。命日の月。

しやう-づき 將附【名】敗軍して、大將の落ちゆく時、附添ふ者。

しやうつき-めいにち 祥月命日【名】**しやうき**(正忌)に同じ。

しやう-づけ 章附【名】淨瑠璃の稽古本に記せる、聲の抑揚・屈折等、すべて節を示す符號。例へば丿(上ぐる)・レ(下ぐる)・レ(跳ねる)の類を記入すること、又その記入ある稽古本。

じやう-っぱり 情張【名】**じやうはり**(情張)の訛。浮世床「婆ア、ふさげと呼ばれたる、じやうっぱりのかかあざゑもん」

じやう-づめ 常詰【名】■常に出勤して居ること。つめきり。■常に來ること。

じやう-づめる 常詰める【動下一自】常詰(ジヤウヅメ)をなす。つめきりにす。浮世風呂「髪は、髪結のお櫛さんが常詰める」

しやうてい 匠丁【名】**しやうちやう**(匠丁)に同じ。

しやうてい 祥禎【名】めでたきこと。めでたきしるし。吉祥。

しやうてい 章程【名】『程は法式の義』㊀文章に綴りあらはしたる法式。法度・規約の箇條書。㊁事務執行の細則。

しやうてい 障泥【名】あふり(障泥)に同じ。

しやうてい 上帝【名】天の神。天の主宰者。天帝。

じやうてい 上丁【名】上旬の丁(ひのと)の日。

じやうてい 上程【名】『道程に上(のぼ)る意』旅のかどで。發程。上途。發途。

じやうてい 常棣【名】㊀【植】實の形、櫻桃(ゆすら)のに似て、食用に供し得る、一種の樹なりといふ。棠棣(ていてい)。 右大將綠倉實記 ㊁『常棣の華鄂にして韡韡たらざらんや、兄弟臨に閱げとも、外侮を防ぐ』㊂『詩經の小雅に常棣篇ありて、兄弟の情を述べたるよりいふ』はらから。兄弟。

じやうてう 情調【名】㊀『杜牧の詩に「江南仲蔚多二情調一、悵望春陰幾首詩」とあり』感情に富めるしらべ。㊁〔哲〕きぶん(氣分)㊁に同じ。

じやうてき 上出來【名】すぐれたる出來。「上作。」

しやうてつ 正徹【名】〔人〕歌僧。姓は紀、字は清巖。東福寺の書記たりしより徹書記と稱す。和歌をよくす。その歌、諷世の意ありとて、山科(やましな)に謫せらる。長祿二年寂す。年七十九。

しやうてつものがたり 正徹物語【名】〔書〕みづからの歌、古人の歌論、その他、歌詞の註釋・議論・雜談等を記せるもの。二卷。正徹の著。又その上卷のみを單行せしめて、徹書記物語と題せる板本あり。

じやうてふ 城堞【名】城のひめがき。城壁。

しやうてん 商店・商廛【名】あきなひするみせ。

しやうてん 賞典【名】㊀褒美として賜ふ物。賞與。

しやうてん 掌典【名】㊀つかさどること。㊁明治以後の職制の一。祭事・神饌を掌るもの。四年始めて神祇官に設置せられ、大・中・少の三等に分れ、奏任もしくは判任と定められしが、神祇官の神祇省と改稱せらるるや、又これに屬し、翌年神祇省の廢止と共に式部寮に轉屬し、十年一旦大・中・少に各權官を設けて六等に、分れしが、同年一等・二等・三等・四等の四階に改められ、十七年式部寮の式部職となるや、同職掌典部の一職員となり、等級の差別撤廢せられ、すべて奏任たるに至れり。

しやうてん 聖天【名】だいしやうくわんぎてん(大聖歡喜天)の略。

しやうでん 詳傳【名】詳かなる傳記。

じやうでん 常典【名】常ののり。常例。

じやうでん 上點【名】えいじはふ(永字八法)を見よ。

じやうてん 上天【名】㊀そら。天。(下土に對して)㊁じやうてい(上帝)に同じ。㊂しやうてん(昇天)に同じ。㊃『爾雅の釋天篇に「冬爲二上天一」とあり』四天の一。冬の天。

じやうでん 上田【名】地味の肥瘠により田地に等級を設けたる中の、上等なるもの。その下に中田・下田・下下田を分ちて、合はせて四等とし、又は上田の上になほ上上田を設けて、五等とせしこともあり。(中田・下田に對して)「養する法。

しやうてんぐ 聖天供【名】〔佛〕聖天を供

しやうてんぐりう 正天狗流【名】劒法の一派。池原五左衞門正重の創めたるもの。「の法會。

判官流。

しやうてんこう 聖天講【名】大聖歡喜天

しやうてんじちやう 掌典次長【名】掌典長を助け、掌典長事故ある時、代理をなす掌典部の高等官。

しやうてんじます 正傳寺枡【名】中世以後行はれし一種の枡。正傳寺(所在不明)の領内に用ひられしものといふ。

しやうてんじん 聖天神【名】しやうてん(聖天)に同じ。

じやうてんだう 淨顚倒【名】〔佛〕してんだう(四顚倒)を見よ。

しやうてんちやう 掌典長【名】掌典部の長。部務を掌理する勅任官。

しやうてんぶ 掌典部【名】式部職の一部。掌典長一人(勅任)・掌典次長一人(勅任又は奏任)・掌典八人(奏任・名譽職となすを得)内掌典六人・掌典補八人(以上判任)の職員ありて、祭事を司る所。

しやうてんぶし 正傳節【名】淨瑠璃節の一。寬延・寶曆の頃、宮古路(みやこぢ)豐後の弟子春富士正傳の創めしもの。一說に、京都の人醬油屋傳兵衞江戸に下り、吉原に住して、語り初めしものなるより、醬傳の二字を正傳に改めしものなりと。一時上方に流行せり。

しやうてんほ 掌典補【名】明治十年神部(かう)を廢して、置きたる掌典部の職員。判任官にて、祭典に從事す。

しやうてんろく 賞典祿【名】明治二年國家に功勞ありし人に褒賞せし秩祿。總高百萬石の中、二十萬石を、大政復古の功臣に、八十萬石を武功の者に賜ひしものにて、同十年に至りて、金祿公債證書を發行し、石高を金高に換算して、一時に下賜せり。

しやうと 昌圖【名】〔地〕支那滿洲盛京省の北部にある都會。南滿洲鐵道の停車場あり。

しやうと 【名】せうとの誤。 穢人卦柱扈」下を覩ければとやみに、何のしやうどは見えねども」「土」の略。

しやうど 性土【名】〔佛〕ほつしやうど(法性土)に同じ。

じやうど 城都【名】みやこ。城市。

じやうと 上都【名】みやこ。 東鑑」早出二上都一」「じ。

じやうど 上途【名】じやうとい(上程)に同

じやうど 壤土【名】㊀つち。土地。土壤。㊁〔農〕『英 Loamy soil』埴土(ねばつち)よりも粘力少なく、砂土よりも濕潤にして、最も耕作に適する土。粘土に近きを粘質壤土といひ、砂土に近きを砂質壤土といふ。眞土。

じやうど 常度【名】㊀定まれる法度。㊁日常の態度。通常の程度。

じやうど 淨土【名】〔佛〕㊀清淨なる國土の意』佛の過去の修行圓熟せるによりて報い來れる國土。三毒・五濁(ごぢよく)の業(ごふ)を離れたる處なるよりいふ。毗盧舍那佛(びるしやなぶつ)の蓮華藏世界、大日如來の密嚴(みつごん)淨土、阿彌陀如來の極樂淨土、釋迦如來の靈山(りやうぜん)淨土、藥師如來の淨琉璃世界等、有名なるが中に、阿彌陀如來の極樂淨土殊に名高し。淸淨世界。佛界。佛國。淨界。淨國。淨刹。覺苑(かくをん)。(穢土(ゑど)に對して)落葉」よろづの事、淨土の心地するわが殿を打捨てて」㊁じやうごしゆう(淨土宗)の略。

じやうど 淨土の主(しゆ)【句】〔佛〕西方淨土のあるじ、即ち阿彌陀佛。

じやうど 淨土の五流【句】〔佛〕淨土宗の、その祖法然上人の弟子に由りて分立したる五種の流派、即ち聖光房辨長の鎭西流、善惠房證空の西山派、皆空房隆寬の長樂寺流、覺明房長西の九品寺(くほんじ)流、盛覺(かくがく)房幸西の一念義の併稱。

じやうど 淨土の八祖【句】淨土教の正統を繼承し來りし三國の八人の祖師、即ち馬鳴(めみやう)・龍樹・天親(以上印度)・菩提流支(ぼだいるし)(印度の人にして、唐朝武后の時、支那に來りし人)・曇鸞・道綽・善導(以上支那)・源空、即ち法然上人(日本)。淨土宗鎭西流にてこれを用ふ。三代男「淨土の八祖をはじめ、先祖の佛並べ書いて」

じやうど 生ける淨土【句】㊀まことの佛の居る淨土。(古語)源氏「いとかしこう生ける淨土の飾に劣らず」㊁現世の極樂。

しやうとう 正統【名】せいとう(正統)に同じ。 正統皇弘法、六人の中に瀉瓶(しやびやう)たり。…然れば、眞言の宗には正統なりといふべきにや」「に同じ。

しやうとう 莊頭【名】〔佛〕しやうず(莊主)に同じ。

しやうとう 聖燈【名】りゆうとう(龍燈)に

しやうとう 牀頭・床頭【名】床のほとり、

しやうとう 傷等【名】負傷の輕重により設けたる等差。

しやうとう 掌燈【名】古、宮中の節會(せちゑ)の時、主殿寮(とのもれう)の官人、片手に脂燭を持ち、これを他の片手に持てる小さき焙烙(ほうろく)のごとき土器(かはらけ)にて受けつつ、御階を昇り、主殿司(とのもづかさ)の女官これを受取りて、手に持ちたるまま座に居りしこと。

しやうとう 檣頭【名】ほばしらのかしら。

しやうとう 檣燈【名】船燈の一種。汽船に

限りて用ひ、航海中前檣に吊して、その船の前面を示す白色の燈火。光力五海里に達し、羅針盤の二十點間を照すべく製造せるものなるを要す。

しやう-どう 章動【名】〔天〕『英 Nutation』章動は支那天文學上の用語にして、その周期十八年六箇月約一章（十九年）に一回の割合なるによりていふ。黄道極の周圍に於ける天極の運動の週期的變化。太陰と太陽とが各一定の週期を以て、赤道の南北に往來するにより生ずる引力の變化のために起る。さいさ（歲差）參照。

じやうとう 上燈【名】げんせう（元宵）を見よ。

じやうとう 上冬【名】陰曆十月の異稱。

じやうとう 城東【名】都城の東の方。

じやうとう 常燈【名】㊀じやうとうみやう（常燈明）の略。㊁昔、海岸の要所要所に、夜分常に點じし燈火。今の燈臺の如きもの。たかとうだい。㊂じやうやとう（常夜燈）に同じ。

じやうとう 上等【名】㊀高き等級。上級。（中等・下等に對して）㊁最も勝れたること。優等。「昇。

じやう-とう 上騰【名】たちのぼること。上

じやうとう 常騰【名】〔人〕法相宗の學僧。俗姓は高橋。京都の人。大和國大安寺に住す。博學にして、唯識に精通す。少僧都に任ぜられ、崇福寺の撿挍となり、弘仁六年寂す。年七十六。著書多し。「じ。

じやう-とう 上棟【名】むねあげ（棟上）に同

しやうとう-がく 正等覺【名】〔佛〕さうしやうがく（等正覺）に同じ。

じやうとう-かんごちやう 上等看護長【名】りくぐんじやうとうかんごちやう（陸軍上等看護長）の略。

じやうとう-けいしゆ 上等計手【名】りくぐんじやうとうけいしゆ（陸軍上等計手）の略。

じやうとう-こうちやう 上等工長【名】りくぐんじやうとうこうちやう（陸軍上等工長）の略。

じやうとう-さいばんしよ 上等裁判所【名】府縣裁判所の裁判に服せずして控訴する者を覆審せし裁判所。明治八年設置、同十年廢止せらる。

しやうとう-じ 正燈寺【名】東京市下谷區龍泉寺町にある臨濟宗の寺。妙心寺の末寺。東陽山と號す。明治初年までは梅・紅葉の名所として名高く、又その地吉原遊廓に近きため、一層有名なりき。五郎兵衛商賈「放蕩の種には正燈寺の紅葉・御殿山の櫻・八幡の開帳等なり」柳樽「ここもとは疾うに御立と正燈寺」「同じ。

しやうとう-し 猩同子【名】かあみんれえき

じやうとう-じ 上童子【名】どうじ（童子）㊁「儀式。を見よ。

じやうとう-しき 上棟式【名】むねあげの

じやうとう-しつ 上等室【名】汽船などにて、上等客を容るる室。（中等室・下等室に對して）

しやうとうしやうがく 正等正覺【名】〔佛〕さうしやうがく（等正覺）に同じ。

じやうとうしやうがく 成等正覺【名】〔佛〕菩薩の因行（インギヤウ）を滿じて、等正覺を成（ジヤウ）ずること。妙覺の佛果を成就すること。成佛。平家「悉達太子は、…難行苦行の功によりてこそつひに成等正覺したまひき」謠曲・東北「すはや、火宅の門を、今ぞいづみ（出づ・和泉）式部は、成等正覺を得るぞありがたき」

じやうとう-そつ 上等卒【名】じやうとうへい（上等兵）の舊稱。

しやうどう-つばめ しやうごう燕【名】〔動〕燕雀（エンジヤク）類に屬する候鳥（コウテウ）。腹部は白色、背面と胸部とは暗褐色、尾の分岐極めて淺し。すなむぐり。すなむぐりつばめ。すなもぐりつばめ。

じやうとう-ていてつこうちやう 上等蹄鐵工長【名】りくぐんじやうとうていてつこうちやう（陸軍上等蹄鐵工長）の略。

じやうとう-ひん 上等品【名】上等の物品。（下等品に對して）

じやうとう-へい 上等兵【名】陸軍における最上級なる兵卒。伍長の次、一等卒の上に位す。

じやうとう-とうみやう 常燈明【名】神佛の前に、晝夜の區別なく絕えず燈しおく燈明。常燈。長明燈。續明燈。無盡燈。

じやうとう-もの 上等物【名】上等の品物。

じやうとう-もん 上東門【名】平安城の大內裡外郭門の一。外郭十二門の外なる脇門にて、上西門と共に、宮城の東西の北端の第一門たり。左衞門府これを衞る。土の門。

じやうとう-もんゐん 上東門院【名】〔人〕ふぢはらあきこ（藤原彰子）を見よ。

じやうど-かうそうわさん 淨土高僧和讃【名】〔書〕かうそうわさん（高僧和讃）に同じ。

じやうとき 常齋【名】時を定めて、始終變らず、齋（キト）を僧侶に供すること。狂言（ことちはぐれ）「じやうときを下さるる御方が有つて、毎月定めて、これへ來る。誠に粥から、御ときを下されて、その上に、結構なお菓子を下さるるが」

しやうとく 生得【名】㊀〔佛〕『仁王經の下に「衆生識初一念識異二木石、生得善、生得レ惡」、又、大乘義章の三に「生得善心などあり」』生れながらにして得たる所の法。（修得（シユトク）・報得（ホウトク）等に對して）〔性得〕㊁うまれつき。もちまへ。しやうぶん。天分。生分。せいとく（生得）參照。平治「この人は生得勢（イキホヒ）小さくおはしければ」

しやうとく 生得の報【句】〔佛〕しやうほう（生報）に同じ。盛衰記「たとひ何となけれども、生得の報とて、身一つ助くる分はあるぞかし。いはんや清盛が身においてをや」

しやう-とく 彰德【名】德を世にあらはすこと、又あらはれたる德。

しやうとく 正德【名】中御門天皇の年號（紀元二三七一年―二三七五年）。

しやう-どく 瘴毒【名】瘴氣の毒。

しやうとく-あひかはせん 正德相川錢【名】しやうとくさごせん（正德佐字錢）に同じ。

じやう-とくい 常得意【名】平常の得意。

しやうとく-いちぶばんきん 正德一分判金【名】『佐』の字の極印あればいふ』江戸時代の通貨の一。佐渡にて鑄造せし正德一分判金。佐渡判。

しやうとく-こばんきん 正德小判金【名】むさしこばんきん（武藏小判金）に同じ。

しやうとく-さごせん 正德佐字錢【名】しやうとくさごせん（正德佐字錢）の略。

しやうとく-さごいちぶばんきん 正德佐字一分判金【名】『『佐』の字の極印あればいふ』江戸時代の通貨の一。佐渡にて鑄造せし正德一分判金。佐渡判。

しやうとく-さごこばんきん 正德佐字小判金【名】『『佐』の字の極印あればいふ』江戸時代の通貨の一。佐渡にて鑄造せし正德小判金。佐渡判。

しやうとく-さごせん 正德佐字錢【名】江戸時代の通貨の一。正德四・五兩年に亙りて、佐渡國相川にて鑄造せし寛永銅錢。徑八分、黄褐色を呈し、背孔の上部に「佐」の字あり。正德佐字。正德相川錢。

しやうとく-たいし 聖德太子【名】〔人〕用明天皇の第二皇子。御母は天皇の異母妹

しやうとく-きん 正德金【名】江戸時代の通貨の一。武藏小判金と武藏一分判金との總稱。古金。武藏判。

しやうとく-ぎん 正德銀【名】江戸時代の通貨の一。正德丁銀と正德豆板銀との總稱。

しやうとく-きんぎん 正德金銀【名】正德金と正德銀との總稱。古金銀。

しやうとく-きゆう 昌德宮【名】㊀朝鮮京城にある李王家の居城。文祿の役に、日本軍の京城に入るに先だちてこれを燒く。のち再建す。域內廣大にして、博物館・動物園・植物園を設く。㊁李王家の宮號。「昌德宮李王」

しやうとく-くわう 聖德皇【名】〔人〕聖德太子の威德を追尊して、後世私に稱せし尊號。上宮法皇。高祖和讃「聖德皇のめぐみにぞ」

しやうとく-くわん 尙德館【名】因幡國鳥取市にありし舊鳥取藩の學校。寶曆六年藩主池田重寛の創建、明治三年廢す。

しやうとく-くわん 正德館【名】越後國三島（サン）郡與板（ヨイ）町に在りし舊與板藩の學校。明治四年廢す。

穴穂部間人(ハシヒトベ)皇后。[[厩戸皇子]]・豊聰耳(トヨトミミ)皇子また上宮(カミツミヤ)太子ともいふ。天性聰明なり。蘇我馬子等と物部守屋を誅し、推古天皇の即位したまふや、皇太子として政を攝し、始めて冠位十二階を制し、憲法十七條を制定す。好みて釋書を讀み、その註疏を作り、諸國に寺院を建立し、貧民を救助せり。推古天皇の二十九年、(一說に三十年)妃と同日に薨ず。年四十九。

(しいたくとうやし)

しやうとくたいしてんれき 聖徳太子傳曆【名】〔書〕聖徳太子の傳を記せるもの。二卷。平某親の著。一名、平氏太子傳。

しやうとくたいしえでん 聖徳太子繪傳【名】〔美〕聖徳太子の事蹟を描ける繪傳。古來種種あり。法隆寺に藏する二曲屏風二雙半に描けるもの(もとは同寺の壁畫)最も名高し。筆者は秦(ハタ)致眞なりといふ。

しやうとくたいしえでんき 聖徳太子繪傳記【名】淨瑠璃の一。聖徳太子の繪傳に據り、古淨瑠璃を增補したるもの。近松門左衞門の作。

しやうとくぢやうぎん 正徳丁銀【名】

しやうとくひら 正徳平【名】正徳年間に鑄出して流行せし絹織物。主として、夏の袴地に用ひられたり。

しやうとくほうさん 聖徳奉讃【名】親鸞上人が聖徳太子の恩徳を讃嘆して作りたる十一首の和讃。

しやうとくまめいたぎん 正徳豆板銀【名】きやうほうまめいたぎん(享保豆板銀)に同じ。

しやうとくもん 章徳門【名】八省院二十五門の一。會昌門の東に在り。左廂門。

じやうとくりんてん 成徳輪天【名】〔佛〕とうりてん(忉利天)を見よ。

しやうとくわう 聖徳皇【名】〔人〕しやうとくわう(聖徳皇)に同じ。

じやうとくゐん 常徳院【名】〔人〕あしかがよしひさ(足利義尙)の諡(オクリナ)。

じやうどしう 淨土教【名】〔佛〕淨土門の教。我が國にては、融通念佛宗に至りて始めて獨立して一宗を成し、續ぎて淨土宗・淨土眞宗及び時宗の開立を見るに至れり。

じやうどこ 上床【名】上等なる寢床。〔遊廓の語〕

じやうどさんぶきやう 淨土三部經【名】〔書〕さんぶきやう(三部經)を見よ。

じやうどじ 淨土寺【名】■備後國尾道(オノミチ)市の東の山腹にある律宗の寺。もとは眞言宗にて、高野山の末寺なりしが、今は京都泉涌寺に屬す。轉法輪山大乘院と號す。聖徳太子の創立と傳ふれども詳かならず。本尊は觀音菩薩。■播磨國賀茂郡小野村にある淨土宗の寺。もと東大寺領なりしが、建久年間東大寺再興の際、重源の奏上により、後白河法皇これを陳和卿に與へ、和卿更に東大寺に寄附し、重源の進上に任せしに、重源淨土教に歸依せしため、この寺を建つ。■洛東淨土寺町にありし天台宗の寺。今、銀閣寺のある所。後一條天皇の代、明救(ミヤウキウ)の建立。後、足利義政の請によりて、相國寺の西に移轉し、幾くもなく廢絕せり。

じやうどしんしゆう 淨土眞宗【名】〔佛〕『淨土宗中、殊に彌陀眞實の教を弘むとの意。眞宗の字面は支那唐の善導大師の散善義に「眞宗叵過」とあり、又同じく唐の法照禪師の五會法事讃に「念佛成佛是眞宗」とあるに本づく』淨土宗より分れたる佛教。親鸞上人の創めしもの。肉食妻帶を許し、別に持戒を要せず、所依(ショエ)の經典は淨土宗と大差なく、殊に無量壽經を重んじ、往生淨土の正因を、唱名にありとせずして、阿彌陀如來の願力を信ずるに在りとし、淨土宗中の頓教と稱す。今は十派に分れ、いづれも血統相續の制を取れり。一向宗。眞宗。門徒宗。門徒。

じやうどしんしゆう 淨土宗【名】〔佛〕圓光大師の開きし一派の佛教。大無量壽經・觀無量壽經・阿彌陀經及び往生淨土論を正依(シヤウエ)とし、善導の宗意を承けて開立せしものにて、專ら南無阿彌陀佛を唱へて極樂に往生するを主義とせるもの。宗祖寂後、五派に分れて、更に分れて、鎭西・西山の二流となる。前者は關東の三流、卽ち白旗・藤田。名越(ナゴエ)及び京都の三流、卽ち三條・一條・小幡の六流に分れ、智恩院を總本山とし、慶長以後、增上寺十八檀林を總轄せしが、明治維新後、一時東西二部に分れ、明治十七年知恩院・增上寺・淨華(ジヤウゲ)院・知恩寺・金戒光明(コンカイクワウミヤウ)寺を五箇の本山とし、輪次に管長を出すこととなり、後また知恩院を管長の本所とするに至れり。後者は淨土宗西山派と稱し、山城國の光明寺・禪林寺・誓願寺・廣福寺を四箇總本山と稱し、各寺交代に管長を出す。淨土專念宗。淨土。淨宗。淨家。念佛宗。白蓮(レンゲ)宗。

じやうどしゆうせいざんは 淨土宗西山派【名】〔佛〕前條を見よ。

じやうどすごろく 淨土雙六【名】道中雙六の未だ多く流行せぬ元祿の頃行はれし一種の雙六。人間より、或は上りて天上・聲聞(シヤウモン)・緣覺・菩薩等を經、天人、或は下りて阿修羅(アシユラ)・地獄・畜生道などを經めぐりて、つひに極樂に往生するを上(アガ)りとせるもの。賽の形も、道中雙六のとは異なり、木を削りて、六角の獨樂とし、それに「南無諸佛分身」の六字を、一字づつ書きて、一・二・三のしるしの代りにせり。二代男「或は手撲・火わたし・絲とり、淨土雙六心に罪なく浮れ遊ぶを」 今樣二十四孝「高下貧福、世間は淨土雙六を打つが如し」

じやうどせんねんしゆう 淨土專念宗【名】〔佛〕じやうどしゆう(淨土宗)に同じ。

じやうどまんだら 淨土曼荼羅【名】〔佛〕ごくらくまんだら(極樂曼荼羅)に同じ。

じやうどもん 淨土門【名】〔佛〕吾人が、この宇宙間に生存中は社會の羈絆のために淨行決心を得ざれども、如說のごとくに發願すれば、死後は阿彌陀如來の極樂淨土に生れて、佛果を得べしとする教門。末世下根の者に適すと稱せらる。(聖道(シヤウダウ)門に對して) 俚家育人談「西武」夜の明けて花に開くや淨土門」

じやうどもんるゐじゆせう 淨土文類聚鈔【名】〔書〕親鸞上人が、その著書教行信證(ケウギヤウシンショウ)中の大要を鈔出せしもの。一卷。けうぎやうしんしよう(教行信證)參照。

しやうとりひき 商取引【名】■〔法〕しやうかう(商行爲)に同じ。〔舊商法の語〕■商業上の法律行爲。

じやうどろん 淨土論【名】〔書〕■わうじやうじやうどろん(往生淨土論)の略。■西方往生の事を、九章に分ちて論述せるもの。三卷。支那唐の迦才の撰。

じやうどわさん 淨土和讃【名】〔書〕三帖和讃の一。百十八首より成り、淨土三部經の意に依りて、淨土の莊嚴及び往生の法門を讃歎せるもの。親鸞上人七十六歲の作。

しやうない 省内【名】省の内部。省の範圍内。

しやうない 莊内・庄内【名】莊園の內。領「土の域内。

しやうない 莊内・庄内【名】〔地〕羽前國の東田川・西田川の二郡及び羽後國飽海(アクミ)郡の舊稱。酒井氏の舊藩地。薩摩歌「大雁木打ったる印こそ庄内の主ぞと」

じやうない 城内【名】じやうちゆう(城中)に同じ。

しやうない・じんじや 莊内神社【名】羽前國西田川郡鶴岡町なる鶴岡公園に鎭坐せる縣社。祭神は舊藩主酒井氏の祖忠次・家次・忠勝の三世。

しやうなう 樟腦【名】樟の木を碎き、蒸餾して製したる白色結晶性の塊又は粉末。香氣强く、醫藥・驅蟲劑とし、又、火藥・セルロイドの製造に用ふ。かんふる。 俚諸新選「如江「星合や樟腦匂ふかし小袖」

しやうなうさん 樟腦酸【名】『羅 Acidum camphoricum』樟腦を硝酸にて酸化して得る無色無臭の板狀結晶。鼻腔・咽頭・喉頭等の炎症に、緩和收斂劑として用ひ、又、內服藥として、肺病患者の盜汗に適用す。

しやうなうせい 樟腦精【名】かんふるちんき(羯布羅丁幾)に同じ。

しやうなう-ぜい 樟腦稅【名】臺灣の樟腦及び樟腦油を政府の專賣とせし以前、卽ち明治三十二年八月以前、樟腦油の製造者に課せし稅。

しやうなう-ちんき 樟腦丁幾【名】かんふるちんき(羯布羅丁幾)に同じ。

しやうなう-の-き 樟腦木【名】〔植〕くすのき(樟)に同じ。

しやうなう-び 樟腦火【名】樟腦を燃やしたる火。觸れても熱からず。芝居にて、狐火などに用ふ。

(火腦樟)

しやうなう-ゆ 樟腦油【名】樟の木の細片に水蒸氣を通じて蒸溜し、その溜液を冷却して、固結せしめし樟腦を搾出、分離したる油狀の殘液。特殊の香氣ありて、シヤボンの製造用又は防臭用に供せらる。

じやうなし 情無【名】人情のなきこと、又その人。薄情。情無し苦無し【句】人情なきものは、苦勞もなし。

じやう-なふ 上納【名】官に金品を納むること。

しやうなん 湘南【名】〔地〕■支那の湘水の南方。しやうせう(湘瀟)參照。■『湘の字は、相模の相の字に、三水偏を添へたる字なるより、支那の湘南に準へて用ひたり』相模國の南部なる海岸地方、卽ち小田原・大磯・逗子(ヅシ)などの一帶の地。

じやう-なん 城南【名】都城の南。

じやうなん-じ 城南寺【名】『鳥羽は、京都の南方にあるよりいふ』山城國紀伊郡下鳥羽に在りし寺。創建・廢絕の年代共に詳かならず。城南神社に屬せしものなるべしといふ。せいなんじ。次條參照。

じやうなんじ-まつり 城南寺祭【名】■山城國鳥羽の城南寺の祭。流鏑(ヤブサ)などを行ひ、天皇の臨幸ありて、盛大なりしが如し。■『城南寺祭には、餅を搗きて、人に强ひ食はする習なりしよりいふ』滿腹すること。

じやうなん-じん 城南神【名】次條又は次次條の略。蕪村「腹あしき僧も餅くへ城南神」

じやうなん-じんじや 城南神社【名】山城國紀伊郡下鳥羽村に鎭坐せる府社。祭神は息長帶(オキナガタラシ)姫命及び八千戈(ヤチホコ)神に國常立(クニノトコタチ)神を配祀すといふ。式内の古社にて、もと眞幡寸(マハタキ)神社といへり。

じやうなんじん-まつり 城南神祭【名】じやうなんじまつり(城南寺祭)に同じ。

しやうなん-てい 湘南亭【名】山城國葛野(カヅノ)郡松尾村なる西芳寺の境內にある茶室。夢窓の選びし十景の一。千少庵再興す。

じやうなん-の-りきゆう 城南離宮【名】こばどの(鳥羽殿)に同じ。

じやうに 【副】多く、ぎやうに。膝栗毛「有あ、じやうにつん出して呉れさい」

しやうにち 正日【名】■喪にあたりてより四十九日目の日。四十九日。源氏「御法」事など過ぎぬれど、しやうにちまでは、なほこもりおはす」■年年の忌日。

じやうにち 上日【名】じやうじつ(上日)に同じ。〔古語〕平家「またさる日にもぞ逢ふとて、上日の者をあまた附けて」

しやうにん 商人【名】あきんど。商賈人。

しやうにん 聖人【名】〔佛〕『梵Ārya(阿離野)の譯語』■智慧廣大無邊にして、慈悲心を有する人。盛衰記「これ凡人に非ず、定めて聖人ならん」■高僧の尊稱。

しやうにん 上人【名】〔佛〕■『摩訶般若經に「何名二上人一、佛言、若菩薩一心行二阿耨菩提一心不二散亂一、是名二上人一」、禪林寶訓音義に「內有二智德一、外有二勝行一、在二人之上一、故稱二上人一」とあり』上德の人。■ほつけうしやうにんね(法橋上人位)の略。■そうりよ(僧侶)の敬稱。千載「あるしやうにんの來りける日」

伊勢の上人【句】伊勢國度會(ワタラヒ)郡宇治の慶光院に住する尼。紫衣を著し、世上人の位に進む恒例を有す。

しやうにん 生忍【名】〔佛〕忍辱(ニン)の一。諸の衆生の加ふる種種の惡害に對して、瞋恚(シン)せざること。人の供養に對して、憍慢・遊逸ならざると、人の罵詈・傷害に遭ひて、よく忍んで、怨恨・嗔恚せざるとの二種あり。衆生忍。(法忍に對して)

じやうにん 常任【名】■常に委任すること。■常にその任にあること。

じやうにん 淨人【名】〔佛〕在俗の儘にて寺に住み、衆僧に仕ふる信者。

じやう-にん 情人【名】じやうじん(情人)に同じ。

じやうにん 上人【名】■上流の人。女童寶記「都の風俗、上人は格別、中より下は衣裳の染樣・とりなり・帶の結びやうまで」■氣だてのよき人。

じやうにん 常忍【名】〔人〕僧。日蓮の弟子。名は日常、常修院と號す。因幡國富城鄉に住み、後に、下總國若節(カジカ)郡八幡(ヤハタ)の庄に移り、その地に大本山法華經寺を建立し、正安元年寂す。年八十四。

しやうにん-ぐんばいうちは 商人軍配團【名】〔書〕西鶴の永代藏の流を汲みて、當世の商人に關する巷談・俗話を小說風に記し集めたるもの。五册。江島屋其磧の著。

しやうにん-こんじやう 商人根性【名】しやうばいかたぎ(商賣氣質)を罵りていふ語。

しやうにん-はふ 商人法【名】〔法〕商法法典を編纂するに、商人を基礎として、商事關係を定むるもの。

じやうにん-ねんぐ 常任委員【名】常時その任にある委員。

しやうによ 正女【名】正丁(シヤウチヤウ)と同じき年齡の女子。

しやう-ね 性根【名】こんじやう(根性)に同じ。

じやうねい-てん 常寧殿【名】平安の舊內裏にありし殿舍の一。南面して、承香(ジヨウカウ)殿の後方、貞觀(ヂヤウクワン)殿の前方にありしもの。もと皇后の御座所なりしが、後世、弘徽(コキ)殿に代へらるるに至れり。きさきまち。きさいまち。せいねいでん。

しやうねだま 性根玉【名】こんじやうだま(根性玉)に同じ。

じやう-ねつ 情熱【名】感情の熱すること。熱したる感情。

しやうねば 性根場【名】芝居の狂言の、曲中の中心又は骨子たる場。正念場。

しやう-ねん 正念【名】〔佛〕■ほつしやうだう(八正道)を見よ。■淨土宗にて、正しく持觀して亂れざる信仰心。■しやうき(正氣)に同じ。

しやう-ねん 生年【名】よはひ。年齡。平治「嫡子惡源太義平は、生年十九歲」

じやう-ねん 情念【名】感情より起る念。

じやうねん-がたけ 常念嶽【名】〔地〕信濃國にある乘鞍嶽の一峰。安曇(アヅミ)郡に屬す。高さ一〇三二九尺。

しやうねん-ば 正念場【名】しやうねば(性根場)の訛。

じやうねん-ぶつ 常念佛【名】■絕えず念佛を唱ふること。■芝居の囃子(ハヤシ)の一。鐘の音を入れたる囃子にて、道行・心中などの場に用ふ。

しやう-の-いはや 笙岩屋【名】〔地〕大和國吉野山の奥、御嶽にある岩屋。行律の僧の居ることろ。太平記「いかなる笙岩屋の聖なりとも、心迷はであらじと、目もあやに覺えてこそ候ひしか」

しやうのう 商農【名】商人と農夫と。

しやうのうは 商農派【名】〔經〕ちゆうのうは(重農派)に同じ。

しやう-の-こと 箏【名】さう(箏)に同じ。和名箏、象乃古度」

じやう-の-すけ 城介【名】あきたじやうのすけ(秋田城介)の略。

しやう-の-ふえ 笙【名】しやう(笙)に同じ。和名笙、象乃布江」

しやうのふえ-ふき 笙笛吹【名】しやうふき(笙吹)に同じ。今鏡「時光といふ笙の笛ふきに習ひたまひけるに」

じやう-ば 上馬【名】上等の馬。じやうめ。細馬。(下馬に對して)榮花「世の中の六十餘國の上馬、これなん一なると奉り集めたるも」

しやう-はい 賞牌【名】■功勞・技能を賞するしるしとして與ふる記章。多くは金・銀・銅などにて扁き形に製し、その事項を記す。■くんしやう(勳章)の舊稱。

しやう-はい 賞盃【名】功勞又は善行を賞

して與ふる盃。金盃・銀盃・木盃の三種あり。

しやうばい 商賣【名】■商業。あきなひ。うりかひ。■なりはひ。よすぎ。營業。職業。■藝・娼妓などのよすぎ。

商賣忌敵(ジヤウバイキテキ)【句】『もと「朋輩忌敵」の訛』商人の、互に他の同業者をそしり合ふこと。〈諺語〉

じやうはい 上輩【名】■貴き身分の者ども。(下輩に對して)■自分より身分高き者。めうへ。先輩。(下輩に對して)

じやうはい 擯排【名】はらひしりぞくること。擯斥。

しやうばい-あがり 商賣上【名】『しやうばい(商賣)■を見よ』嘗て藝妓・娼妓・茶屋女などをして居たりしこと、又その人。江戸生艶氣樺焼「どれえにじみでも、耳のわきに枕だこのあるので、商賣上りは、それぢきに知れやす」

しやうばい-かたぎ 商賣方【名】商賣の方面。あきなひの方。

しやうばい-かたぎ 商賣氣質【名】商人特有の氣質。利益にさとき習慣など。

しやうばい-がたき 商賣敵【名】あきなひがたき(商敵)に同じ。

しやうばい-がら 商賣柄【名】その商人としての身柄、又その商賣によりて養はれたる習性。

しやうばい-ぎ 商賣氣【名】(ケ)を試みて、金儲をなさんとする心。

じやうはい-しやしん-さしよう 淨背捨身作證【名】〔佛〕八解脫の一。定中にて、地・水・火・風・青・黃・赤・白の八色を練習して、光明の清淨皎潔なること、妙寶の色の如くならしめ、從つて心既に明淨にして、樂漸く增長し、遍身ために怡悅すること。

しやうばい-て 商賣手【名】■營業の關係の及ぶ範圍。■しやうばいにん(商賣人)に同じ。

しやうばい-てつぱう 商賣鐵砲【名】商人の賣買する鐵砲。(江戸時代の語)

しやうばい-にん 商賣人【名】■商賣に從事する人。商人。■その事に專門なる人。くろうと。■藝妓・娼妓などの總稱。くろうと。(しらうとに對して)

しやうばい-もの 商賣物【名】■商賣の品物。商品。■職業として扱ふ物。

しやうばい-や 商賣屋【名】■商賣する家。あきんどや。商家。■藝者屋などの如く、重に客商賣をする家。

しやうはう 正保【名】後光明天皇の御代の年號(紀元二三〇四年—二三〇七年)。

しやうはう 詳報【名】くはしきしらせ。

しやうはう 尚方【名】■『漢書の百官公卿表の註に「尚方主レ作二禁器物一」とあり。尚は主(サヅ)る義、方は方法・藝術の義なるべし』支那秦・漢兩時代に、少府に屬して、天子の佩劍・玩好器物・玉器等の製作を掌りしもの。漢末分ちて、中尚・左尚・右尚とし、魏晉もこれに因り、唐に至るまで、或は三尚或は一尚を置けり。■『漢書の郊紀志に「爨大膠東宮人、故嘗與二文成將軍一同レ師、已而爲二膠東王尚方一とありて、註に「主二方藥一とあり。尚は主(サヅ)る義」支那漢代に、醫藥の調合を掌りし職。

尚方斬馬の劍【句】『漢書の朱雲傳に「願得二尚方斬馬劍一、斷二佞臣一人一、以厲二其餘一とあり』尚方(一)にて作り、馬をも一刀に斬り得る利劍。

しやうばう 障防【名】■しきり。おさへ。■つつみ。堤防。

じやうはう 上方【名】■うへの方。上部。(下方に對して)■山上の佛寺。■『その居る處、寺の最高深處に在るより轉じていふ』住持の僧。古事本節用集「上方(ジヤウハウ)當住持曰二上方一又呼二兒曰一上方一」

じやうはう 城堡【名】■城と小城と。■に同じ。

じやうはう 淨邦【名】〔佛〕じやうど(淨土)に同じ。

じやうばう 上房【名】〔地〕備中國八郡の一。郡役所を高梁(ハシカ)町に置く。

じやうばう 狀貌【名】かたち。すがた。

じやうばう 淨房【名】かはや(厠)に同じ。

しやうはうちやう 掌砲長【名】軍艦内に在りて、砲術長の命を受け、兵備品の守監・手入・掃除を督し、砲術の教授に關する事務を掌りし曹長相當官。明治五年に置かれ、同十七年に廢す。

しやうはく 商舶【名】しやうせん(商船)に同じ。

じやうはく 上白【名】上等の白米。(下白に對して) 天神記「朱椀の定器に、上白の飯盛つたやうなと見立も心一杯」

じやうはく 上膊【名】〔醫〕上肢の肘より上の方。(前膊に對して)

じやうはく-きん 上膊筋【名】〔醫〕上肢筋の一部。二頭膊筋・烏啄膊筋・內膊筋・三頭膊筋の總稱。

じやうはく-こつ 上膊骨【名】〔醫〕肩胛骨と前膊骨との中間に連接して、上膊を形成せる管狀の長骨。

じやうはく-だつきう 上膊脫臼【名】〔醫〕けんかんだつきう(肩胛脫臼)に同じ。

じやうはく-どうみやく 上膊動脈【名】〔醫〕動脈の一。腋窩動脈に連なり、上膊骨に沿ひて、肘に至るもの。

じやうばこ 狀箱【名】ふみばこ(文箱)に同じ。平家女護島「狀箱かたげ、飛脚の足」

じやうはたご 上旅籠【名】上等のはたご。丹波與作「泊らんせ。旅籠安うて、泊めませう。上旅籠中旅籠お望み次第」

じやうはちまん 正八幡【名】次條に同じ。領城酒吞童子「姫君のおはなしは正八幡のお託宣」

じやうはちまんぐう 正八幡宮【名】正眞の八幡宮。盛衰記「正八幡宮も必ず守護し奉るらん」

しやうはちまん-だいぼさつ 正八幡大菩薩【名】『佛教の本地垂跡(スヰジヤク)說により、菩薩といふ』前條に同じ。鎌田兵衛名所盃「祖父なる人の首打ち、正八幡大菩薩の神慮も納受あるべきか」

じやうはつ 淨髮【名】僧の髮を剃ること。

じやうはつ 淨髮【名】僧の髮を剃ること。半月に一度づつ行ふを定とすといふ。

じやうはな 城端【名】〔地〕越中國東礪波(トナミ)郡にある町。山田川の流域。中越鐵道の一驛。漆器・絲等を產す。

じやうはな 上花【名】次條の略。

じやうはなうるし 上花漆【名】黑漆立漆中の、上等の品。製法は生漆に研汁もしくは鐵汁を和し、又は醉に漬したる鐵汁、檳榔樹、五倍子粉、又は重クロム酸を用ふ。

しやうばつ 賞罰【名】賞すると罰すること。

じやうはな-でら 城端御坊【名】ぜんらくじ(善德寺)を見よ。

しやうはふ 章法【名】文章の章の組立方。(字法・句法などに對して)

しやうはふ 商法【名】■あきなひの仕方。あきなひ。商賣。■〔法〕『英 Commercial law』廣義にては、商事に關する法規の全部、卽ち商私法・商公法・商國際法の總稱なれど、商公法及び商國際法は未だ獨立の一系統を成すに至らざるが故に、普通に、狹義の商私法の意に用ふ。各その條を見よ。

じやうはふ 常法【名】■一定の法則。常例。■世間一般の法則。

じやうはふ-くわいぎしよ 商法會議所【名】しやうこうくわいぎしよ(商工會議所)の舊稱。

しやうはふし 商法司【名】會計官に屬して、商事に關する事項を掌りし所。明治元年に置かれ、翌年に廢せられたり。

しやうはふし-しかうはふ 商法施行法【名】〔法〕商法に附屬して、その施行に必要なる事項を規定したる法律。明治三十二年の公布。

しやうはん 墻藩【名】かき。まがき。

しやうはん 掌蹯【名】『禮雅の疏に「蹯掌也。此四獸之類、皆有二掌蹯一とあり』熊などのたなひろ。

しやうはん 商販【名】あきなふこと。販賣。

しやうばん 相伴【名】■饗應の席に、正客の相手となりて、同じく饗應を受くること、又その人。あひたけびと、伴食。陪食。■饗應の席を斡旋(アツセン)すること、又その人。接伴。■つきあひて共になすこと。つきあひ。今宮心中「やいとぎやうの相伴せうか」■それほどの價値なけれども、他に均霑し、その利益を分ち與へらるること、又その人。伴食。

じやうはん 上半【名】上の半分。(下半に對して)

じやうはん 上班【名】上の班次。

じやう-ばん 上盤【名】かむり(冠)(二)に同じ。
じやう-ばん 上判【名】こほうじよ(小泰書)に同じ。
じやう-ばん 上番【名】『日』杜甫の詩に「會須三上番看二成竹一」とありて、朱註に「上番…唐人方言」とあり』第一番。(二)役人の、役所に出勤すること。(下番に對して)
じやう-ばん 城番【名】(一)城に在番して、警固に任ずる兵士。在番衆。番手衆。(二)江戸時代に、二條城・大阪城及び駿府城に置きて、これを警固せしめし役。定番(ジヤウバン)。おほさかじやうばん(大阪城番)・すんぷじやうばん(駿府城番)・にでうじやうばん(二條城番)參照。
じやうばん-しゆう 相伴衆【名】武家の役名。室町時代に、大名の中より選び、將軍の、他家に御成の時、御相伴に與らしめしもの。初は、諸代大名中、山名・一色・細川・畠山・赤松・土岐・六角・京極・武田・佐佐木等の諸氏中より、少なきは數人、多きは二十人餘これに列せられ、平生は定職なく、歳首の賀正、その他、恒例・臨時の儀式に、管領に次ぎて、國持・外樣(マザ)御供衆の上に列するを例とせり。
じやうばんせん 常磐線【名】〔地〕東京の北部、北豐島(キタトシマ)郡日暮里(ニツポリ)驛より常陸國の土浦(ウラヂ)・水戸、磐城國の平・中村等の濱街道に沿うて、陸前國岩沼に至るもの。日本鐵道會社の建設に係り、今は國有に歸す。
じやうはん-ちやや 掌帆長【名】軍艦内にありて、副長及び航海長の命を受け、帆・綱・錨・鎖鎖等に關する一切を守監し、且その分擔する需品を受給する兵曹長又は上等兵曹。
じやうばん-にん 相伴人【名】相伴する人。
じやうはん-もくれん 常葉木蓮【名】〔植〕たいさんぼく(泰山木)に同じ。
じやうばら 庄原【名】〔地〕備後國比婆(ヒバ)郡にある町。廣島市の東北二十一里。西城(サイジヤウ)川に沿ふ。郡役所を置く。
じやうはらみつ 淨波羅蜜【名】〔佛〕『普賢觀經に「釋迦牟尼、名二毘盧遮那一遍二一切處一、其佛住處、名二常寂光一…淨波羅蜜滅二有相一處」とあり』四波羅蜜の一。一切差別の有相を滅して、感染なき波羅蜜。常樂我淨中の淨。じやうらくがじやう(常樂我淨)參照。
じやうび 常備【名】常に備へおくこと。
じやうび-ぐん 常備軍【名】常備兵を以て編成する軍隊。
じやうびくわ 薔薇科【名】〔植〕いばらくわ(薔薇科)に同じ。
じやうひ-さいはう 上皮細胞【名】相連接して、上皮組織を形成する細胞。境界判明にして、原形質及び核より成り、細胞膜を有せざること多く、一般に柔軟なるを以て、外來の壓力に逢へば、形態を變ずれども、扁平・圓柱の兩形に大別せらる。
じやうび-しん 薔薇疹【名】〔醫〕皮膚の一部に、卒に紅色を呈する發疹。
じやうび-すゐ 薔薇水【名】薔薇の花を蒸溜して取りたる香水。
じやうひ-そしき 上皮組織【名】〔醫〕『獨 Epithelgewebe』人體の外圍及び内腔の内面を被覆せる組織。上皮細胞の連接して成れるもの。皮膜組織。
じやうびたき 上鶲【名】〔動〕鶲の一種。山地に産し、形は駒鳥に似、雄は頭部灰蒼色、脊及び翼は黑くして、翼に純白の大形紋あり。胸腹部と尾とは焦茶色にて、上鶲及び照鶲の名は、この雄に宛てしものなり。雌は全身茶褐色、腰部以下は焦茶色にて、翼の白紋は雄より少きし。されば茶鶲又は馬鹿鶲の名あり。禁止鳥の一。てりびたき。
じやうひ-ちやう 城壁【名】城のひめがき。城墻。
じやうひ 上皮【名】表面の皮。表皮。
じやうひ 攘臂【名】らでまくりすること。
じやうひ 常費【名】平常の入費。經常費。
じやうび 常備【名】(一)常に備へおくこと。(二)じやうびへいえき(常備兵役)の略。
じやうびへいえき 常備兵役【名】現役及び豫備役の總稱。
じやうびへい 常備兵【名】(一)常備(二)の兵士。(二)常備兵役に服せる兵士。
じやうびへいせき 常備兵役【名】現役及び豫備役の總稱。
じやうひん 上品【名】(一)品質のよきこと。ひとがら。高尚。(下品に對して)
じやうひん 上賓【名】じやうかく(上客)に同じ。
じやうひん-ありだか 商品有高【名】商品の現在手許にある高。
じやうひんありだかちやう 商品有高帳【名】商品有高を記入する補助簿。商品毎に口座を設けて、その賣買數量・賣買相場・仕入金額・賣上金額、及び差引在庫高等を記す。在品控帳。
じやうひん-うけはらひちやう 商品受拂帳【名】じやうひんばいばいちやう(商品賣買帳)に同じ。
じやうひん-うりあげちやう 商品賣上帳【名】賣上げたる商品の明細を記入する帳簿。賣上の順序により、年月日・賣渡先・品名・數量・單價・金額・風袋・割引・諸掛、その他受渡・支拂に關しての一切を記入す。
じやうひんがく 商品學【名】商業經營の立場より、商品に關する種種の事項、例へば産地・産額・種類・製法・用途・賣買・慣習需要地等の類を研究する學問。
じやうひん-かひいれちやう 商品買入帳【名】〔商〕じやうひんしいれちやう(商品仕入帳)に同じ。
じやうひん-かんぢやう 商品勘定【名】〔商〕簿記の勘定科目の一。商品を整理するために、借方に仕入品、貸方に賣上品を記入するもの。
じやうひんかんぢやう-もとちやう 商品勘定元帳【名】〔商〕商品整理のために、その仕入・賣却、金額支拂などを記す帳簿。
じやうひん-きって 商品切手【名】記載せる金額の商品を持參人に渡すべき由を表示したる無記名式又は指圖式の證券。例へば呉服切手・鰹節切手の類。調達切手。進物切手。
じやうひん-しいれちやう 商品仕入帳【名】〔商〕商品を仕入れたる時、その受渡

に關する一切の要件、卽ち仕入先・品名・數量・代價及び代金支拂方法等を記入する帳簿。仕入帳。商品買入帳。

しやうひん-たなおろしへう 商品棚卸表【名】〔商〕たなおろしへう(棚卸表)に同じ。

しやうひん-ちんれつくわん 商品陳列館【名】㊀商品を陳列する建物。商品陳列所。㊁農商務省商務局に屬し、內外の商品見本及び參考品を蒐輯陳列して、公衆の觀覽・參考に供する所。

しやうひん-ちんれつじよ 商品陳列所【名】前條㊀に同じ。

しやうひん-とりひきじよ 商品取引所【名】取引所の一。商品を賣買取引するため、法律に據り、政府の許可を得て設立する一定の場所。とりひきじよ(取引所)參照。

しやうひん-ばいばいちやう 商品賣買帳【名】〔商〕商品の仕入及び賣上を併せ記する帳簿、卽ち商品仕入帳と商品賣上帳とを合併したるがごときもの。商品受拂帳。

しやうひん-みつもりだいきん 商品見積代金【名】〔商〕簿記上にて、總決算の時、現在品の代金を見積りたる總額。

じやう-ひやう 上平【名】〔語〕しやう(四聲)を見よ。(下平に對して)

じやうひやう-じやう 上平聲【名】〔語〕前條に同じ。

しやうびやう-へい 傷病兵【名】負傷兵と病兵と。

しやう-びやく 省百・省陌【名】しやうせん(省錢)に同じ。

しやうびゆ 薔薇油【名】『英 Attar』新鮮なる薔薇の花を水にて蒸溜して得る、淡黃色なる揮發油。淡黃色を呈し、價頗る貴く、香水の原料又は藥用に供す。

しやう-ふ 祥符【名】めでたきしるし。

しやう-ふ 省府【名】王朝時代に、民部省より諸國に下したし公文。(官符・國符に對して)

しやう-ふ 相府【名】しやうこく(相國)に同じ。

しやう-ふ 商布【名】商品たる布。

しやう-ふ 娼婦・倡婦【名】倡妓。遊女。妓

しやう-ふ 生麩【名】小麥の澱粉。小麥粉又は小麥精(マヽ)より製し、食料及び糊料とし、また染色上、型附(カタツケ)糊仕上糊等より用ふ。

しやう-ふ 尙父【名】〔人〕『武王がこれを尙(トク)びて、父とする義』たいこうぼう(太公望)の尊稱。

しやう-ぶ 尙武【名】武事をたふとぶこと。

しやう-ぶ 菖蒲【名】㊀〔植〕あやめ(菖蒲)㊁に同じ。㊂〔植〕はなしやうぶ(花菖蒲)に同じ。㊃〔植〕天南星科に屬する多年生の草。葉は劍狀、長さ三四尺に達し、平行脈を有す。花は小形、淡黃色にして、肉穗花序をなす。長き根莖を有し、特殊の香氣を具ふ。各地の池澤に自生す。觀賞用として栽培し、根莖は藥用又は香料とす。あやめ。うたかたぐさ。「水菖蒲・泥菖蒲・白菖」㊄

しやうぶがさね(菖蒲襲)の略。

しやうぶの-よい【句】「菖蒲(アヤ)の與」に同じ。

しやうぶの-しく【句】「菖蒲(アヤ)の節句」に同じ。

しやう-ぶ 象舞【名】支那周の武王の舞樂の一。戰時に於ける刺擊にかたどりたるもの。

しやう-ぶ【名】魚の鰭の一部。

じやう-ふ 城府【名】『支那にては、都府の周圍に城壁をめぐらしたるよりいふ』みやこ。都邑。都城。都府。

城府を設けず【句】『宋史の堯俞傳に「堯俞厚重言寡、遇人不レ設二城府一、人自不レ忍レ欺」とあり』人に對して、隔なく打解けて、心事を談ず。

じやう-ふ 情夫【名】いろをとこ。かくしをとこ。

じやう-ふ 情婦【名】いろをんな。かくし「をんな。

じやう-ふ 上布【名】亞麻又は苧麻(カラムシ)の絲にて織りたる上等なる麻布。越後上布・能登縮・薩摩上布・沖繩上布など有名なり。

じやう-ぶ 上部【名】上の方。上の部分。(中部・下部に對して)

しやうぶ-あはせ 菖蒲合【名】ねあはせ(根合)に同じ。共桑略記「有菖蒲合事」

しやうぶ-いんお 菖蒲印地【名】あやめいんお(菖蒲印地)に同じ。

しやう-ふう 商風【名】『五音を四季に配して、商を秋とするによりていふ』あきかぜ(秋風)に同じ。

しやう-ふう 正風【名】㊀〔佛〕正しき宗風(フウク)。「一宗の正風を擧揚す」㊁〔文〕松尾芭蕉の創めたる閑寂趣味の俳諧。蕉風。(古風・談林風などに對して)

じやうふう 上風【名】かざかみ(風上)に同じ。(下風に對して)

しやうふうたい 正風體【名】㊀正しき風體。㊁〔文〕しやうふう(正風)に同じ。

しやう-ふうち 菖蒲打【名】㊀あやめいんち(菖蒲印地)に同じ。㊁三本の菖蒲にて綯(ナ)ひたる條、又はその綯方。㊂絲にて㊀の如くに組みたる紐。

しやうぶ-がさね 菖蒲襲【名】あやめ(菖蒲)㊃に同じ。

しやうぶ-がた 菖蒲形【名】㊀刀身の形の、菖蒲の葉のごとくなるもの。㊁馬具の一。銀面(ハミ)に著けて、馬の額に當つるもの。

しやうぶ-がたな 菖蒲刀【名】あやめがたな(菖蒲刀)に同じ。

しやうぶかたびら 菖蒲帷子【名】あやめかたびら(菖蒲帷子)に同じ。

しやうぶ-がは 菖蒲革【名】㊀地を藍色に染め、一種の、圖案化したる菖蒲の花と葉との模樣を白くおきたるなめしがは。山城國八幡の神官が內職に染めしものの由にて、勝負又は勝武とその音相通ずとて、古は、好んで武具の製造に用ひたり。㊁布地を㊀の如く染めたるもの。錦山錦袴褶闕門見張所の體、袍に菖蒲革の足輕〇△□◎の四人床几に掛り、焚火にあたり居る」

しやうぶがは-ぞめ 菖蒲革染【名】菖蒲革のごとくに染むること。

しやうぶがは-の-つのじふもんじ 菖蒲革角十文字【名】旗標(ハタジルシ)の一。薩摩歌「菖蒲皮の角十文字、白頭の大禿、これ越前家」

しやうぶ-かぶと 菖蒲冑【名】㊀古、五月五日、髮にかざしし菖蒲。㊁古、端午の祝に、菖蒲にて、冑の形に作りしもの。あやめかぶと。かぶとのはな(冑花)參照。

しやう-ふき 笙吹【名】笙を吹くに巧みなる人。笙の笛ふき。盛衰記「時光といふ笙吹」

じやう-ふきやう 常不輕【名】〔佛〕『梵(Sadāparibhūta)の譯語』法華經の不輕品に、常に身に不輕の行をなし、口に不輕の數を宣べ、人に逢ふごとに、汝等いづれも菩薩の道を行じて、佛となるを得べきが故に、我れこれを敬ひて輕慢せずとて、悉くこれを禮拜・讚嘆し、衆人中に增上慢の比丘(クヒ)ありて、惡口・毒語して、輕侮すれども、常にこの言をなして、禮拜したりと記されたる比丘。源氏「このじやうふきやう、そのわたりの里・京までありきけるを」

じやうふきやうびく 常不輕比丘【名】〔佛〕前條に同じ。

じやうふきやう-ぼさつ 常不輕菩薩【名】〔佛〕前條に同じ。

じやうふきやうぼさつ-ぼん 常不輕菩薩品【名】〔書〕法華經の第二十品の稱。常不輕菩薩の事蹟を述べたるもの。

しやうぶ-きり 菖蒲切【名】古、五月五日に、小供が印地(イヂ)を行ひし後、菖蒲刀にて戰ひし遊戲。「同じ。

しやう-ふく 祥福【名】ふくしやう(福祥)に中古、天皇の讀書式の始に、侍讀の授け奉りし所につきての復習を掌りし役。

しやう-ふく 章服【名】徽章を附けたる服。紋服。

じやう-ふく 常服【名】平常の衣服。

しやうふく-じ 聖福寺【名】筑前國博多市に在る臨濟宗の寺。僧榮西の創建にして、我が國禪寺の最初なり。

じやうふく-じ 淨福寺【名】京都市上京區篠屋町に在る淨土宗の寺。もとは天台宗。本尊は三國傳來の釋迦佛。延曆年中、一聲の建立する所。一名、村雲寺。

じやうふくじ-なっとう 淨福寺納豆【名】納豆の一種。よく煮たる豆の中へ炒(イ)りたる小麥粉を和して、麴となし、別に煮たる食鹽水と煉合はせて、木臼にて搗き、日に乾すこと三十日にして、山椒の粉末を加

へ、再び木臼にて搗きたるもの。

しやうふくだう 昌福堂【名】平安城の内裏の大極殿の東南にありし堂。

しやうぶくはがた 菖蒲鍬形【名】兜(カブト)の鍬形の、菖蒲の葉の如く眞直に尖りたるもの。

じやうぶくろ 狀袋【名】手紙を入れて送る上袋。ふうづつみ。ふうとう。

しやうぶごし 菖蒲輿【名】「菖蒲(ハナ)の輿」に同じ。

しやうぶざけ 菖蒲酒【名】あやめざけ「菖蒲酒」に同じ。

しやうぶす 菖蒲酢【名】菖蒲の根を刻みて浸したる酢。古、端午の節に用ひたり。小町歌「菖蒲酢もまじるや軒の梅の雨」

しやうぶだ 正札【名】一正價を記して、商品に附けおく札。二かけねのなきこと。

しやうぶたたき 菖蒲叩【名】しやうぶうち(菖蒲打)に同じ。

しやうぶだち 菖蒲太刀【名】あやめがたな(菖蒲刀)に同じ。

しやうふだつき 正札附【名】一正札の附きたること、又その商品。二世人の定評を得てあること、又その物、又はその人。

じやうふだん 常不斷【副】いつも。つねに。ふだん。

しやうぶちや 菖蒲茶【名】菖蒲の根を加へて煎じたる茶。南歐秀言「菖蒲茶といふもの、五山の僧の詩集に見ゆ」と。

しやうぶつ 生佛【名】〔佛〕衆生(シユジヤウ)と佛生佛一如(ニヨ)【句】〔佛〕「凡聖(ボンジヤウ)一如」に同じ。 鑑鏡合璧「法身は生佛一如の理(ワリ)めいて」

生佛一體【句】〔佛〕前條に同じ。

生佛の假名(ケミヤウ)【句】〔佛〕生佛一如(ニヨ)にして、迷悟は二岐ならざれども、假にその相(スガタ)につきて、衆生と佛との名を設けたるに過ぎざること。平家「眞如廣大雖レ立二生佛假名一」

生佛不二(フ)【句】〔佛〕「生佛一如」に同じ。

しやうぶつ 正物【名】一似せならぬ物。ほんもの。(贋物に對して) 二げんぶつ(現物)(二)に同じ。

じやうぶつ 成佛【名】〔佛〕一佛果を成就すること。無上の悟を開くこと。成佛道。二死して佛となること。今國姓爺「これぞわが一期の灌頂、未來の血脈、疑なし。成佛します、水を水をと呼ぶ聲に」

成佛得脫(トクダツ)【句】〔佛〕佛果を成(ジヤウ)じ、解脫(ゲダツ)の德を得ること。

成佛の木實(コノミ)【句】〔佛〕ぶつくわ(佛果)の意なるべし。 鑑(道成寺)「げに有難や、草も木もみな成佛の木實まで、玉を連ぬる光かな」

じやうぶつ 滋養物【名】體の養分となるべき物質を、多量に含める食物。

しやうぶづくり 菖蒲作【名】刀の、切先より鎬(シノギ)に似たる條を有する作り方。一說に、櫛絲(イト)を菖蒲打にしたるもの。長町女腹切「菖蒲づくりの拵も、五月からの誂」

じやうぶつだう 成佛道【名】〔佛〕『佛道を成就する義』じやうぶつ(成佛)(二)に同じ。

しやうぶづつみ 菖蒲包【名】包の折形の一。端午の節句に、菖蒲を包むに用ひしもの。

(包菖蒲)

しやうぶたは 菖蒲繩【名】菖蒲にて綯(ナ)ひたる繩。昔、菖蒲打などに用ひしもの。

しやうぶねあはせ 菖蒲根合【名】ねあはせ(根合)に同じ。

じやうぶみ 狀文【名】じやう。ふみ。てがみ。 重帷子「主ある姿に執心かけ、たびたびの狀文」

しやうふん 詳氛【名】めでたき氣。祥氣。

しやうふん 漿粉【名】しやうふん(生麩)に同じ。 下學集「漿粉、シヤウフン」

しやうふん 性分【名】一うまれつき。性質。二(佛)諸法差別の自性(ジシヤウ)。

じやうぶん 滋養分【名】食物中の、滋養となる成分。養分。

じやうぶん 上分【名】古、國郡より、年貢以外に、每月の月末などに上納せし物といふ。 庭訓往來「月迫之上分」

じやうぶん 上聞【名】上(カミ)の御耳に入ること。上(カミ)への聞え。上聽。 雪女五枚羽子板「義敎公の上聞に達し」

じやうぶん 上文【名】前に記述したる文言。前文。

じやうふんべつ 上分別【名】すぐれたる分別。よき考。 千兩幟「あいつに勝を讓っておいて、その上で、のっぴきさせず頼むが近道。じやうふんべつ」

じやうぶんまい 上分米【名】その領地を通過する年貢米に對して、歩米を課すること。運上米。上米取(イタヾリ)。

しやうぶゆ 菖蒲湯【名】「菖蒲(ハナ)の湯」に同じ。 一代男「しの〳〵竹の人除(ヒトヨケ)に、筆屋島の帷子(カタビラ)、女の隱し道具をかけ捨てながら、菖蒲湯をかぶる由して」

しやうぶゆかた 菖蒲浴衣【名】昔、京都にて、端午の節に、奴僕に與へし浴衣。

しやうへい 障蔽【名】一おほひかくすこと、又その物。二しきり。へだて。

しやうへい 唱平【名】古、節會(セチヱ)の時などに、盃を勸めて、壽(コト)を祝せしこと。一說に、人に酒を勸むる時、相手の量に應じて、平均に飮むべしとの義なりと。 續後紀「乙。「跪唱レ平」

しやうへい 昌平【名】たいへい(泰平)に同じ。

しやうへい 正平【名】後村上天皇の御代の年號(紀元二〇〇六年—二〇二九年)。

しやうへい 傷兵【名】きずつきたる兵。てひのつはもの。負傷兵。

しやうへい 彰炳【貌】あらはにめだつさま。あきらか。

じやうへい 情弊【名】情實の弊害。

じやうへい 城兵【名】城中にある兵。

しやうへいかう 昌平校・昌平黌【名】しやうへいざかがくもんじよ(昌平坂學問所)に同じ。

しやうへいざか 昌平坂【名】〔地〕東京市湯島三町目なる女子高等師範學校昌平黌址前を、東方へ、昌平橋に下る坂路。

しやうへいざかがくもんじよ 昌平坂學問所【名】『昌平は、孔子の生地なる支那山東省兗州府曲阜縣昌平鄕の名を取りしもの』江戸幕府の外神田(ソトカンダ)に置き、今の女子高等師範學校の在る處に設立せし公學校。將軍綱吉の時、忍(シノバズ)ケ岡の弘文院を移して、規模を擴張せるもの。正殿を弘文院、學舍を弘文館と呼び、林氏世世祭酒に任じ、その下に、儒員・敎授方等ありて、幕臣及び諸藩士の子弟に專ら儒學を敎授せしが、明治維新後、政府の所管に歸し、今の東京帝國大學の前身となれり。昌平黌。せいだう(聖堂)參照。

じやうへいし 常平司【名】じやうへいしよ(常平所)に同じ。(陽成天皇の御代の一時の改稱) 三代實錄「東西京中置二常平司一」

じやうへいしよ 常平所【名】古、平安京の左京と右京とに置きて、穀價の廉き時に買ひし物を、高き時に原價にて賣出しし所。三代實錄「東西兩京始置二常平所一」

しやうへいぞめ 正平染【名】正平の革の染方。

しやうへいばし 昌平橋【名】〔地〕東京市神田川に架せる橋。お茶の水橋と萬世橋との間にあるもの。

しやうへいもん 昌平紋【名】きりつけもん(切部紋)に同じ。

地方へ糶(ウリ)して、常に米價の平均を得しむることを掌りし所。明治十三年設置、同十五年廢止。

しやうへいごめんがは 正平御免革【名】

しやうへいがは 正平革【名】

しやうへいさう 常平倉【名】民間の穀價を平均せんがために、淳仁天皇の天平寶字三年初めて設けられたる官設の米穀の貯藏所。相當の價を定め、豐年には、時價廉くとも、その價を以て買ひて、此所に貯へ、凶年には、時價高くとも、その價をもって賣り、高低過度の憂なからしめんとせし設備。

しやうへいざか 昌平坂【名】〔地〕東京市湯島三町目なる女子高等師範學校昌平黌址前を、東方へ、昌平橋に下る坂路。

しやうへいざかがくもんじよ 昌平坂學問所【名】『昌平は、孔子の生地なる支那山東省兗州府曲阜縣昌平鄕の名を取りしもの』江戸幕府の外神田(ソトカンダ)に置き、今の女子高等師範學校の在る處に設立せし公學校。將軍綱吉の時、忍(シノバズ)ケ岡の弘文院を移して、規模を擴張せるもの。正殿を弘文院、學舍を弘文館と呼び、林氏世世祭酒に任じ、その下に、儒員・敎授方等ありて、幕臣及び諸藩士の子弟に專ら儒學を敎授せしが、明治維新後、政府の所管に歸し、今の東京帝國大學の前身となれり。昌平黌。せいだう(聖堂)參照。

じやうへいし 常平司【名】じやうへいしよ(常平所)に同じ。(陽成天皇の御代の一時の改稱) 三代實錄「東西京中置二常平司一」

じやうへいしよ 常平所【名】古、平安京の左京と右京とに置きて、穀價の廉き時に買ひし物を、高き時に原價にて賣出しし所。三代實錄「東西兩京始置二常平所一」

しやうへいぞめ 正平染【名】正平の革の染方。

しやうへいばし 昌平橋【名】〔地〕東京市神田川に架せる橋。お茶の水橋と萬世橋との間にあるもの。

しやうへいもん 昌平紋【名】きりつけもん(切部紋)に同じ。

しやう-へう 商標【名】『英 Trade mark』營業者が自己の生産・製造・加工・選擇證明・取扱、又は販賣の營業に係る商品なることを示すために用ふる文字・圖形・記號又はそれらを結合せるもの。

しやう-へう 商颸【名】『しやうふう(商風)を見よ』秋の暴風。

しやう-へう 賞表【名】賞めあらはすこと。賞譽のしるし。

じやう-へう 上表【名】表を上(タテマツ)ること、又上りたる表。上書。

しやうへう-けん 商標權【名】〔法〕一定の期間、その商標を、出願の際指定したる商品につきて專用する權利。商標專用權。

しやうへう-けん-しや 商標權者【名】〔法〕商標權を有する者。

しやうへう-げんぼ 商標原簿【名】商標登錄のために、農商務省特許局に備ふる特定の官簿。登錄すべき事項は、登錄番號・商標・類別及び商品・登錄商標主の氏名・住所・登錄年月日等なり。

しやうへう-こうほう 商標公報【名】特許局より發行する公報。登錄商標及びこれに關する、必要なる事項を記載す。

しやうへう-せんよう-けん 商標專用權【名】〔法〕**しやうへうけん**(商標權)に同じ。

しやうへう-とうろく 商標登錄【名】商標權を得るため、二十年間を一期として、特許局に出願し、商標原簿に、登錄を受くること。登錄せられたる時は、登錄證を交付せらる。二十年後は、更に二十年づつを一期として、永續するを得。

しやうへうとうろく-しよう 商標登錄證【名】商標を商標原簿に登錄したる後、登錄出願者に交付する證。

しやうへう-はふ 商標法【名】商標專用者の權利を設定・保護するために設けし法律。明治三十二年の公布。

しやうへう-れう 商標料【名】商標又は商標權の更新の登錄をなす場合に納付する料金。

しやう-へき 障壁【名】へだてのかべ。しきり。かこひ。

しやう-へき 牆壁【名】牆(キ)と壁(ヘキ)と。へだて。

じやう-へき 城壁【名】城のかべ。しろ。

じやう-へき 情癖【名】〔哲〕感情の働が、慣習又は遺傳の結果、常住の性癖もしくは性向となれるもの。

じやう-べっかふ 上鼈甲【名】■上等の鼈甲。■『上等の鼈甲には斑(フ)無きを、腑抜(クヌケ)の意にかけていふ』愚者の隱語。〔京都・大阪の遊廓の語〕

じやう-へん 常篇【名】なみ。通常。太平記「事、常篇に絕えたり」

じやう-へん 上篇【名】最初の一篇。(中篇・下篇に對して)

じやうべん 淨辨【名】〔人〕歌僧。按察(アゼ)法印光成の子、慶運の父。法印に敍せらる。和歌を藤原爲世に學び、頓阿・兼好及びその子慶運と四天王の目あり。されど歌集も傳はらず。遺詠も多からず。

じやうべん 淨辨【句】〔人〕「湊江の氷に立てる蘆の葉に夕霜さやぎ浦風ぞ吹く」といふ歌によりて得し、淨辨の綽號。

しやうへん-がく 正偏覺【名】〔佛〕次條に同じ。

しやうへん-ち 正偏知【名】〔佛〕**とうしやうがく**(等正覺)に同じ。

しやうべゑ-りう 庄兵衛流【名】**おほもりりう**(大森流)〔二〕に同じ。

しやう-ほ 章甫【名】次條を見よ。

章甫の冠【句】『禮記の儒行篇に「魯哀公問二於孔子一曰、夫子之服、其儒服與、孔子對曰、丘少居レ魯、衣二逢掖之衣一、長居レ宋冠二章甫之冠一」とあり。章は明、甫は丈夫の美稱にて、丈夫を表明する意なりといふ。支那殷の世の冠。細布(フ)にて製せしものなるべしといふ。孔子これを冠りしより、儒者の冠となれり。雪女五枚羽子板、章甫の冠を沓に履かれんより、首陽山に蕨餅を練り、汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬られんには如かじ」

しやう-ほ 商舖【名】あきんどみせ。あきなひみせ。商店。

しやう-ぼ 賞募【名】懸賞にて募ること。

じやう-ほ 讓歩【名】■路を讓りて、人を先立たしむること。■自己の主張するところをまげて讓り合ふこと。

じやう-ほう 正報【名】〔佛〕『過去の業因(ゴフイン)に依りて感得せし果報の正體なるよりいふ』二報の一。衆生の肉體・精神。正果。(依報(エホウ)に對して)

しやう-ほう 生報【名】〔佛〕三時業(サンジゴフ)の一。この世にて爲せる善惡の業力(ゴフリキ)により、これに應ずべき善惡の果報を受くること。生得(シヤウトク)の報。順生業(ジユンジゴフ)。(現報・後報に對して)

しやうほう 聖寶【名】〔人〕高僧。洛東醍醐寺の開祖。葛野(カヅノ)王の子。理源・阿闍梨と號す。氣宇濶大にして、顯密二教を究む。仁和三年傳法阿闍梨の位を賜ひ、貞觀寺の座主となる。延喜九年寂す。年七十八。

じやう-ほう 穰豐【名】**ほうじやう**(豐穰)に同じ。

じやう-ぼく 城北【名】都城の北の方。城北の御所【句】德川氏のとき、江戸城の田安門と清水門との中に造りし殿舍。

じやう-ぼく 上木【名】**じやうし**(上梓)に同じ。

じやう-ほくめん 上北面【名】四位・五位の諸大夫にて、北面の侍となりて、院の昇殿を許されたるもの。(下北面に對して)盛衰記「上北面より殿上をゆるさるる者もありければ」

しやう-ほけきやう 正法華經【名】〔書〕法華經譯本の最初のもの。十卷。支那西晉の代、印度の僧竺法護の譯。

しやうほ-しゆぎ 償補主義【名】海關稅を徵收する政策として、外國製には、內國製と同等もしくは同等以上の課稅を爲すべしと唱道する主義。

じやうぼだいゐんの-みささぎ 成菩提院陵【名】白河天皇の御陵。山城國紀伊郡竹田村字塔塙(タフノホリ)と呼ぶ田間にあり。俗稱、塔壇(タフダン)。

しやう-ぼふ 正法【名】〔佛〕眞正の道法。正しき敎法。(外法(ゲボフ)に對して)**しやうぼふ**(正法時)參照。

じやうぼふ 正法【名】〔佛〕正法の行はるる時期、卽ち佛入滅後の五百年間。さんぽふ(三時)四參照。

じやうぼふ-じ 淨法寺【名】上野國多胡(コ)郡鬼石町大字淨法寺にある天台宗の寺。聖武天皇の朝に開創し、傳敎再建す。古名、綠野(ミドリノ)寺。

しやうぼふじ-わん 正法寺椀【名】南部塗の一。正法寺〔二〕にて製せしもの。

しやう-ぼふむ 正法務【名】〔佛〕**ほふむ**(法務)〔二〕を見よ。

しやうぼふ-りつ 正法律【名】〔佛〕眞言宗の高僧、慈雲の主唱せし眞言律宗。慈雲、二十七歲にして、河內國高井田の長榮寺に住

持たりし時、弟子親證・覺法等と相議し、正法の衰へたるを匡正せんとて創む。晩年に河内國高貴寺に遷るや、その寺を、正法律一派の本山と定めたり。

しやう-ほん 正本 【名】 ㊀根據とすべき正しき本。本書。 ㊁ⓘやくほん(脚本)に同じ。 ㊂小説本の一種。享保頃行はれしもの。辭闘戰新誌「爰に享保年中の頃まで出來たる江戸草雙紙の始り正本といふ物、俗にからかみ表紙といふ。この手下に鉢かつぎ・薄雲烏帽子折・公平・兜論その外、名高きもの勢し」 ㊃登記所の臺帳。

しやう-ぼん 生飯 【名】 さんぼん(生飯)を見よ。

じやう-ぼん 【名】〔佛〕ⓘくぼん(九品)㊀

じやうぼん 上品 【名】 ㊀〔佛〕ⓘくぼん(九品)㊀ ㊁〔地〕美濃國の地名。 ㊂次條の略。

じやうぼん 上品の絹 【句】 美濃國上品より産出する絹。盛衰記「上品の絹百疋」

じやうぼん 淨飯 【名】〔人〕『梵Śuddhodana』の譯語』中印度迦毘羅衛(カビラエ)の城主。釋迦の生父。淨飯王。

じやうぼん-げしやう 上品下生 【名】〔佛〕上品を三等に分ちたる中の下位。ⓘくぼん(九品)參照。

じやうぼん-じやうしやう 上品上生 【名】〔佛〕上品を三等に分ちたる中の上位。ⓘくぼん(九品)參照。 謠曲(遊行柳)「上品上生に至らんことぞ嬉しき」

じやうぼん-ちゆうしやう 上品中生 【名】〔佛〕上品を三等に分ちたる中の中位。ⓘくぼん(九品)參照。 盛衰記「上品中生の彌陀」

しやうぼん-まめ 【名】〔植〕かにめあづき(蟹眼小豆)に同じ。

じやうぼん-れん 上品蓮 【名】〔佛〕次條の略。

じやうぼん-れんだい 上品蓮臺 【名】〔佛〕上品極樂の七寶池中なる七寶の大蓮華。 謠曲(源氏供養)「上品蓮臺に心をかけて」

じやうぼん-わう 淨飯王 【名】〔人〕じやうぼん(淨飯)に同じ。

じやうぼん-わう 淨梵王 【名】〔佛〕『淨は梵の譯語なるを、梵語と漢譯とを重ねたること、ざんげ(懺悔)の類なるもの』ぼんじやう(梵天王)に同じ。

しやう-ほんね 飼養本位 【名】家畜の飼養に要する一定の滋養分の量また率。

しやう-まい 正米 【名】 ㊀現に存在する米。 ㊁現に存在する米の取引。(空米に對して)

じやう-まい 上米 【名】 ㊀上等米。 ㊁米を上(カミ)ⓘる義』德川將軍吉宗の時、一時各大名の在府期を半年に減縮すると同時に、萬石以上の者をして、萬石ごとに、百石づつの割合にて上納せしめし米。

じやう-まい 城米 【名】 ㊀城中に貯へたる米。 ㊁江戸時代に備荒のために、諸代の諸藩に命じて貯藏せしめし穀米。

しやうまい-いち 正米市 【名】次條の略。

しやうまい-いちば 正米市場 【名】正米の取引をなす市場。正米いち。正米しぢやう。

しやうまい-さうば 正米相場 【名】正米市場の米相場。

しやうまい-し 正米商 【名】正米の賣買を業とする人。

しやうまい-しぢやう 正米市場 【名】ⓘしやうまいいち(正米市場)に同じ。

じやうまい-ぶぎやう 城米奉行 【名】豊臣時代の職制の一。城米のことを掌りしもの。

しやうまく 漿膜 【名】〔醫〕しやうえきまく(漿液膜)の略。

じやうまへ 鎖前 【名】じやう(鎖)に同じ。

じやうまん 上慢 【名】〔佛〕ぞうじやうまん(增上慢)に同じ。

上慢の幢(ハタ)【句】上慢の心の高きを、旗ぼこに譬へていふ語。我慢のはたぼこ。 太平記「久しく山門の澆漓風に隨はば、上慢の幢高うして、遂に天魔の掌握のうちに落ちぬべし」

五千の上慢 【句】〔佛〕『法華經の方便品に見ゆ』釋迦が靈鷲山(ユキセン)にて、將に法華經を說かんとする時、聞くに足らずとて、俄かに立去りきといふ、增上慢なる五千人の聲聞(ショモン)僧。 十訓「五千の上慢は、佛だに、何ともしたてまつらず」

しやう-み 正味 【名】 ㊀せいみ(正味)に同じ。 ㊁物の皮・殼(カラ)などを去りたる、眞の實(ミ)の部分。非商業學河內通「表向の名前は祖母が夫、かんじんの正味はそなたの殿御」 ㊂〔商〕しやうみぢゆうりやう(正味重量)の略。 ㊃ほんしやうみねだん(正味値段)の略。「と。もの。しやうぶつ。

しやう-み 賞味 【名】賞美して食ひ味ふこと。

じやう-み 上巳 【名】 ㊀三月の初の巳(ミ)の日。元巳。上巳(ジヤウシ)。ちゆうみ(中巳)參照。 ㊁次條の略。

上巳の節供(クヤウ)【句】初は三月の初の巳の日、中世以後、陰曆三月三日に、女子の祝日として、雛祭を行ひしこと。重三(チヨウサン)。雛の節供。桃の節供。ごせつく(五節供)參照。

上巳の祓(ハラヒ)【句】古、上巳の日に行ひし祓。

じやう-み 情味 【名】あぢはひ。おもむき。

しやうみ-うりあげきん 正味賣上金 【名】商品を賣却して得たる金額中より、その商品に對して支拂ひたる諸費用を引去りたる殘額。

しやうみ-ぢゆうりやう 正味重量 【名】〔商〕『英Suttle weight』總量目中より風袋或は損減漏泄等を引去りたる純量目。正味。正目(ショウメ)。

しやうみつ 詳密 【名】くはしくてこまかなること。詳細。

しやうみ-ねだん 正味値段 【名】かけねなしの價。正味。 「㊁に同じ。

じやうみの 上美濃 【名】なかなはし(中直)

しやうみ-ばりき 正味馬力 【名】『英Brake horse-power』外部の仕事に使用し得べき正味の馬力。指示馬力より、各動部の摩擦のために減少して、その約七乃至八割內外なるを常とす。廻止又はその他の動力計によりて組織す。廻止(カケ)馬力。動力計馬力。

實効馬力。

しやうみ-べに 正味紅 【名】しやうえんじ(生臙脂)㊀に同じ。

しやうみん 商民 【名】商業を營む人民。

しやうみやう 正命 【名】〔佛〕はつしやうだう(八正道)を見よ。

しやうみやう 唱名 【名】〔佛〕しようみやう(稱名)に同じ。

しやうみやう 聲明 【名】〔佛〕 ㊀『梵śabda-vidyā(攝拖莎駄)の譯語』五明(ゴミヤウ)の一。讖訟(ユ)を研究して、音聲を調節する規則を立つるもの。 ㊁ぼんばい(梵唄)に同じ。

じやうみやう 常命 【名】人間の普通の壽命。非業ならぬ壽命。 「じ。

じやうみやう 淨名 【名】〔人〕次次條に同じ。

じやうみやう-きやう 淨名經 【名】〔書〕ゆゐまきやう(唯摩經)に同じ。

じやうみやう-こじ 淨名居士 【名】〔人〕『淨名は唯摩の漢譯』ゆゐまこじ(唯摩居士)に同じ。 大鏡「佛在世の淨名居士とおぼえはべるものかな」

しやうみやう-ごふ 聲明業 【名】眞言宗にて、聲明を學習する者。

しやうみやう-し 聲明師・聲明士 【名】聲明に通ずる人。

じやうみやう-だいし 淨名大士 【名】〔人〕じやうみやうこじ(淨名居士)に同じ。盛衰記「淨名大士は講堂に奄維圓を變じけり」

しやうみやう-ぶし 聲明節 【名】聲明の節。狂言・小傘「いつぞや、早少女(サヤメ)が、山田を植ゑる時、田植を歌うて植ゑたを、某も面白さに、よう覺えてゐるにより、これに聲明節を附けて、紛らかいておかうではあるまいか」

じやう-みやく 靜脈 【名】〔醫〕大循環にありては靜脈血を、小循環にありては動脈血を心臟に輸送する管。毛細管網に始まり、漸次集合して大管となり、大靜脈幹を經て

心房に入るもの。多くは皮膚直下にありて、外面より見ゆ。脈搏なく、血液の壓力も大ならざれば、これを切りても、一時に多量の血液出づることなし。(動脈に對して)

じやうみやく-くわん 靜脈管【名】〔醫〕靜脈を形成する血管。

じやうみやく-けつ 靜脈血【名】〔醫〕身體諸臟器の酸化作用によりて老敗し、多量の炭酸等の不用物を含める血。還元したるヘモグロビンを含めるため、暗赤色を呈す。くろち。ふるち。(動脈血に對して)

じやうみやく-とちやう 靜脈怒張【名】〔醫〕じやうみやくりう(靜脈瘤)に同じ。

じやうみやく-べん 靜脈瓣【名】〔醫〕靜脈內にありて、その內膜より成れる瓣膜。血液の逆流を防ぐ作用を營む。

じやうみやく-りう 靜脈瘤【名】〔醫〕靜脈の一部又は數箇所の擴張するもの。靜脈怒張。

しやうむ 商務【名】商業上の事務。

しやうむ 莊務【名】莊園の事務。

しやうむ 瘴霧【名】惡しき氣を含む霧。

しやうむ 省務【名】各省の事務。

じやうむ 常務【名】■通常の事務。□常に執る事務。

しやうむ-きよく 商務局【名】■明治十三年大藏省に置かれ、商事に關する事務を掌りし局。翌年廢せらる。□農商務省の一局。商事に關することを掌る。

しやうむくわうてい 聖武皇帝【名】**しやうむてんわう**(聖武天皇)に同じ。出世景瀧「この大伽藍と申すは、聖武皇帝が御建立」

しやうむ-くわん 商務官【名】商事視察のため、特に海外に派せらるる官吏。外交官又は領事官たる資格ある者、又は現にその職にある者より特に任命せらる。

しやうむてんわう 聖武天皇【名】〔人〕第四十五代の天皇。御名は首(おびと)。天璽國押開豐櫻彥(アメシルシクニオシヒラカスヒコ)また勝寶感神聖武皇帝の尊號あり。文武天皇の皇子。御母は藤原宮子。在位二十五年(紀元一三四四—一四〇八)。天平勝寶八年崩ず。壽五十六。

じやうむとりしまりやく 常務取締役【名】定まりたる事務を扱ふ取締役。

じやうむ-ゐゐん 常務委員【名】定まりたる事務を扱ふ委員。

しやうん 社運【名】社の運命。

じやうん 邪雲【名】禍を示す雲。邪法によりて現るるといふ雲。盛衰記「邪雲佛日の影を犯す」

しやうめ 正目【名】**しやうみちゆうりやう**(正味重量)に同じ。

じやうめ 上馬【名】じやうば(上馬)に同じ。源氏「世になき上馬どもを、調へさせたまへり」

しやうめい 正銘【名】■「正しき銘ある意」僞ならぬこと。又そのもの。まこと。正眞。薩摩歌「抜くと、鞘を叩き割り、再び指さず死ぬるが、これが薩摩の正銘」

しやうめい 將命【名】■「儀禮に「某固願聞二名于將命者一」とあり。命令を將(おこな)ふ義」命令の取次をなすこと。□さしづ。指揮命令。「と。詳細。

しやうめい 詳明【名】つまびらかなること。清淨微妙。盛衰記「淨妙無碍(げ)の歌を以て、如來大會(エ)を供養せしに」

じやうめう-じ 淨妙寺【名】■相模國鎌倉郡淨妙寺村にある寺。五山の一。臨濟宗十三派の本山の一。文治四年足利義兼の創建。行勇律師の開基。初、眞言宗に屬して極樂寺また法樂寺と稱せしが、義兼の子義氏これを禪宗に移し、のち足利尊氏、その父貞氏の法號を附して、今の名に改む。□紀伊國有田郡小豆島に在る臨濟宗の寺。大同元年平城天皇の御母乙牟漏(オトムロ)皇后の創立。唐僧如寶の開山。

じやうめき 上目利【名】上手のめきき。重非筒「私が惚れたのは……それそれその次のらむうげんだとぞ答へける。これは上物上目利と、豆板一粒はつとはづみ」

しやうめつ 生滅【名】〔佛〕萬有の現象の發生すると變滅すると。生あるもの必ず滅あるを有爲(ウヰ)法といひ、滅するもの必ずしも生あらざるを無爲法といふ。

生滅滅已(イッ)【句】〔佛〕『梵 Utpāj-jitvā-nirujjhanā の譯語。涅槃經に出でたる四句の偈(ゲ)の一句。**いろはうた**(伊呂波歌)を見よ』生滅の境を離れて、涅槃(ネハン)の證果に達すること。生滅の現象界に執著するを滅し盡すこと。盛衰記「生滅滅已は華嚴經の文なり」

しやうめん 正面【名】■正しく面を向くこと、又その方面。まむき。まおもて。まとも。□〔兵〕側面縱隊の先頭が右に位置する時の橫隊の前幅。□〔兵〕陣形に排列せる艦隊の前幅。四**しやうめんさじき**(正面棧敷)を見よ。

正面が切れぬ【句】舞臺にて、正面が向き得ぬ。芝居にて、役者が見物におもて、正面を向き得ぬ。

しやうめん 晶面【名】〔鑛〕『英 Crystal face』結晶體の平面。錐面・柱面・卓面の三種あり。面。各その條を見よ。

じやうめん 上面【名】上方の面。うはつら。表面。めん。

しやうめん-こうげき 正面攻撃【名】〔兵〕敵陣の正面の方より攻立つること。(側面攻撃・背面攻撃に對して)

しやうめん-こんがう 青面金剛【名】〔佛〕帝釋天の使者。體色青く、六臂を有して、手に弓箭・寶劍を執り、一鬼を足下に踏めるを像とす。**かうしんしやうめん**(庚申青面)參照。

しやうめん-さじき 正面棧敷【名】芝居の舞臺と相對する正面の階上。昔は棧敷といへば、見物席の左右の階上にのみ限り、正面はただ正面、又はつんぼさじきと呼ぶを常とせり。

しやうめん-しようとつ 正面衝突【名】車などの、正面と正面と衝突すること。

しやうもく 生木【名】**せいぼく**(生木)に同じ。

生木化佛(ケブ)【句】〔佛〕性空法師庵居の初、傍に櫻桃樹ありしが一日、天人降り來り、これに禮して、「稽首生木如意輪、能滿二有情福壽願一亦滿二往生極樂願一一切衆生心所念」といふ偈(ゲ)を作りしより、性空その枝を斬り、その根株にて、如意輪觀音の像を造り、安鎭行者に刻ましめたりといふ傳說(元亨釋書第二十八に出づ)によりていふ。或はいふ、單に地上に成育せる樹木が、そのままに法身佛陀の靈現なりとの意と。「草木・國土悉皆成佛」參照。太平記「生木化佛の觀世音、稽首生木如意輪、能滿有情福壽願、亦(マタ)滿往生極樂願、百千俱胝悉所念」と天人降下(クダ)供養し奉る像なり」

しやうもくから 【名】〔植〕うまのすずくさ(馬兜鈴)に同じ。

じやうもの 上物【名】上等の物。一代男「女郎は、うは氣らしく見えて、心のかしこきが上物と、くつはの又市と申せし人」重非筒「これは上物上目利」

しやうもん 相門【名】宰相の家がら。

相門必ず相あり【句】『史記の孟嘗君傳に「承二間問一其父嬰一曰、君用事相レ齊、門下不レ見二賢者一、又聞、將門必有レ將、相門必有レ相、於レ是嬰乃使レ待二賓客一。賓客日進」とあるに本づく』名家には、必ず名人出づ。(諺語)

しやうもん 將門【名】軍將の家がら。武家。武門。將家。

將門必ず將あり【句】『「相門必ず相あり」を見よ』大將の家には大將出づ。(諺語)

しやうもん 正文【名】表向へ出す書附。「本紙。

しやうもん 唱門【名】しやうもん(唱門師)の略。正章千句「いかにも耳のうときしやうもん」

しやうもん 聲聞【名】〔佛〕『梵 Śrāvaka(舍羅婆迦)の譯語。**せいぶん**(聲聞)を見よ』佛道を悟る程度の深淺に依る位の一。直接に佛の說法を聞きて、四諦(タイ)の理を悟り、見惑・思惑を斷じて、涅槃(ネハン)に入るもの。緣覺と併せて二乘といひ、菩薩をも加へて、三乘といふ中の最下位なるもの。緣覺と同じく小乘の範圍に屬し、その修行及び證果は、菩薩よりも小さく、自利のみありて、化他(ケタ)の大行なく、阿羅漢を極果とす。太平記「六波羅蜜の行、二時に破れて、破戒の聲聞とぞなりにける」

聲聞の四果【句】〔佛〕聲聞乘の聖果

(シャウ)の四つの等級。第一階は、須陀洹(シュダオン)果として、見惑を斷じて、初めて聖者の流類に入れるもの、第二果は斯陀含(シダガン)果として、思惑の過半を斷じたるもの、第三は、阿那含(アナガン)果として、思惑の殘餘をも斷じて、再び欲界に還來せぬもの、第四は、阿羅漢果として、一切の見思二惑を斷じ盡したる極果。須陀洹果は預流(ヨル)果と譯し、斯陀含果は、思惑未だ斷じ盡さざるため、欲界の人間と天界とに一度受生すべきが故に、一來果と譯し、阿那含果は不還(ファン)果と譯す。

しやう-もん 青門【名】〔佛〕**しやうれんなもんぜき**(青蓮院門跡)の略。

じやう-もん【名】『**せうもう**(燒亡)の訛かといふ』**くわじ**(火事)を云ふ。〔京都の語〕〔藤栗毛〕「じやうもんがいくとは、火事があるさうなといふことなり」

しやうもん-かい 聲聞界【名】〔佛〕十界又は九界の一。聲聞の境界。

しやうもん-こんじやう 聲聞根性【名】聲聞の境界を脫しえぬ、劣りたる心。〔萬葉十二〕「放下師の小刀のみこむ姿の聲聞根性、あな、これの羅漢や、羅漢や」

しやうもん-し 唱門師・唱文師【名】**一**昔、元朝の寅の刻、犬神人(イヌジニン)の禁裡の日華門に參りて、毘沙門經の文句を訓讀して祝の儀をなしし者。大黑。**二****おんやうじ**(陰陽師)を云ふ。〔京都の語〕

しやうもん-じん 聲聞身【名】〔佛〕十身の一。聲聞乘を得たる衆生身。

しやうもん-じやう 聲聞乘【名】〔佛〕『**えんがくじやう**(緣覺乘)を見よ』三乘又は二乘の一。聲聞の地位に達する教。(緣覺乘・菩薩乘に對して)

しやうもん-そう 聲聞僧【名】〔佛〕聲聞の證果を得んとして修行する僧。

しやうもんぢやう-しやう 聲聞定性【名】〔佛〕五性の一。決定(ケツジヤウ)して、聲聞の果のみを聞くべき種性。

じやうもん-らう 城門郎【名】**けんもつ**(監)

しやう-もやう 仕樣模樣【名】しやう(仕樣)に同じ。日本振袖篇「仕樣模樣もありそな事と、氣を揉めば」

しやう-や 莊屋・庄屋【名】江戸幕府時代の村の百姓の長。領主の命を受け、郡代又は代官の下にありて、その地の事を掌りしもの。一般に村内の舊家世襲して、大いに勢力あり、その數村又は數十箇村を支配するを大莊屋といへり。むらをさ。なぬし。里正。**しやうじ**(莊司)參照。

じやう-や 上夜【名】夜の上番。當直。

じやう-や 常夜【名】いつも夜のごとく暗きこと。賀古敎信七墓廻「何處あてどの五月闇、常夜の暗と目もくれて」

しやう-やう 賞揚【名】ほめたたふること。稱揚。稱譽。

しやう-やう 徜徉・徜佯・倡佯・相羊【名】『相羊は、楚辭に「聊逍遙以相羊」とあり』**せうえう**(逍遙)に同じ。

しやう-やう 獎揚【名】すすめあぐること。「獎譽。

じやうやう-ぐう 上陽宮【名】**じやうやうじん**(上陽人)を見よ。盛衰記「友無き宿に獨り居て、明し暮らす悲しさは、上陽宮の徒然(ツレ)斯くやと、互に語りつつ」

じやうやう-じん 上陽人【名】〔人〕『白居易の上陽白髮人と題する詩に「上陽人、紅顏暗老白髮新、綠衣監使守二宮門一、閉二上陽一多少春、玄宗末歲初選入、入時十六今六十、同時采擇百餘人、零落年深殘二此身一」とあり』支那唐の玄宗帝の代、楊貴妃寵を專にして、六宮の美人すべて進幸を得ざりし中に、殊に貴妃のために嫉妬の犧牲となり、徒らに年老いし上陽宮の一婦人。不遇の宮女の例に引かる。大鏡「上陽は、楊貴妃にそばめられて、みかどに見え奉らで、春のゆき、秋の過ぐるをも知らずして、十六にて參り、六十まで有りけり」

しやう-やく 請益【名】**せいえき**(請益)に同じ。江次第「示二請益之氣色一」

しやう-やく 尚藥【名】『尚は主(サドル)る義』**くすりのかみ**(尚藥)に同じ。

しやう-やく 生藥【名】〔醫〕『獨 Droge』草根・木皮に屬する藥品の總稱。卽ち動・植物及びその產生物中、それより有效成分を抽出製造しべき原料となるもの。

じやう-やく 滋養藥【名】**きやうさうやく**(强壯劑)に同じ。

しやうやく-きよく 尚藥局【名】**てんやくれう**(典藥寮)の唐名。

しやう-やくば 庄役場【名】臺灣の庄の役場。庄長がその行政事務を取扱ふ所。

しやうやく-ほうぎよ 尚藥奉御【名】**てんやくのかみ**(典藥頭)の唐名。

しやうやく-けん 庄屋拳【名】**きつねけん**(狐拳)に同じ。

じやう-やど 上宿【名】上等のやどや。

じやう-やど 常宿【名】**ちやうやど**(定宿)に同じ。

じやうやとう 常夜燈【名】一夜を通じて點火しておく燈明。常燈。辻の常夜燈【句】**がいとう**(街燈)に同じ。

しやう-ゆ 醬油【名】我が國固有の調味用嗜好品の一。普通、大豆を水に浸して、釜中にて煮、蒸(ム)りて粉末としたる小麥と混ぜて、麴に製し、鹽水中に入れ、一二年間醱酵せしめたる後、壓搾して製するもの。濃褐色又は淡褐色の液をなし、鹹味と甘味とを有し、一種特有の香氣あり。したぢ。むらさき。醬油で煮染(ニ)ため樣(ヤウ)【句】白き帶などの、古び色づきて、赤黑くなれる狀。

しやう-ゆ 醬油の實(ミ)【句】次條に同じ。

しやう-ゆ 醬油の諸實(ミ)【句】醬油製造の行程中、蒸(ム)りて粉末としたる大豆と小麥とを交ぜて麴とし、鹽水中に入れて、數十日間かきまぜたるもの。

しやう-ゆ 獎勵【名】すすめさとすこと。獎勵訓諭。

じやう-ゆ 上諭【名】**一**かみのおさとし。君主の諭命。**二**〔法〕法令・條約・豫算等を公布する時、その前文として、天皇の裁可を經たることをあらはす語。

しやうゆ-ざうこくぜい 醬油造石稅【名】醬油の造石數に應じて、その製造人に課する租稅。

しやうゆ-すまし 醬油澄汁【名】すましじる(澄汁)に同じ。

しやうゆ-ぜい 醬油稅【名】醬油造石稅と自家用醬油稅との稱。

しやうゆ-せいざうにん 醬油製造人【名】醬油を醸造する人。

しやうゆ-たき 醬油煮【名】「金時(キンとき)の醬油煮」を見よ。

じやう-ゆめ 上夢【名】上等のゆめ。吉夢。

しやうゆ-や 醬油屋【名】醬油を製造する家、又それを賣る家。

じやう-ゆるしきろん 成唯識論【名】〔書〕天親菩薩の著なる唯識三十頌の註釋中、護法論師の說を骨子とし、安慧・難陀等の九師の註釋を參酌譯出せるもの。十卷。玄奘三藏の譯。三藏の門人慈恩・窺基の註解せる述記二十卷あり。

しやう-よ 莊預・庄預【名】**しやうちやう**(庄長)に同じ。「獎揚。

しやう-よ 獎譽【名】すすめほむること。

しやう-よ 賞與【名】賞めて、金品を與ふること、又その金品。賞賜。

しやう-よ 賞譽【名】ほめたたふること。稱譽。

じやう-よ 讓與【名】ゆづり與ふること。

しやう-よう 商用【名】商賣上の用向。

しやう-よう 聖容【名】〔佛〕佛菩薩の容貌の尊稱。盛衰記「二十六丈の聖容必滅の燈、天にたなびく」

しやう-よう 請用【名】加持・祈禱などのために、僧侶・驗者どもを請じ入るること。盛衰記「おこり心地、もののけなどいひて、請用隙なし。向と向ひぬるに、空しき事はなし」

じやう-よう 常用【名】つねに使用すること、又そのもの。

じやうよう-じ 常用時【名】『英 Civil time』正子を日の始とし、正午まで十二時間を午前、正午より次の正午まで十二時間を午後として數ふる時。(天文時に對して)

しやうよう-たい 晶溶體【名】〔化〕『英 Mixed crystal』二種又は二種以上の結晶質が、種種の割合に混じ、溶解して結晶せるもの。

じやうよう-たいすう 常用對數【名】〔數〕

『英 Common logarithm』底數が一〇なる時の或數の對數。實地計算に弘く應用せらる。

しやうよう-ばりき 商用馬力【名】『英 Commercial horse power』蒸氣機關の、汽罐より蒸氣を供給して運轉する汽機の平均馬力數より規定せるもの。卽ち一時間に華氏百度の水三十封度を一平方吋につき、大氣壓以上七十封度の汽壓に對し、乾燥せる蒸氣に變化するものを、一馬力とす。

しやうようぶん 商用文【名】商業上の通信・取引等に關する日用文。

しやうようぶんしよ 商用文書【名】商取引に使用する文書。

しやうよう-ぶるひ 請用振【名】請用にあひて、驗の顯れしを誇ること。盛衰記「御驗者の請用振は、何れの日にて侍るべきぞ」

しやうよう-りやくご 商用略語【名】〔商〕『英 Commercial abbreviation』商業上に使用する一種の符牒。例へば B/L が Bill of lading(船荷證券)の略語なる類。

しやうよ-きん 賞與金【名】賞與の金。賞

じやうよく 情欲・情慾【名】〔佛〕情と慾と。

しやうよく 生來【名】(一)持ちて來ること。(二)いろごころ。色情。性慾。

しやうよひん 賞與品【名】賞與の品物。

しやうよ-らい 將來【名】(一)持ちて來ること。(二)「賞品。

しやうら-い 唱禮【名】法會に、表白終りたる後、唱禮師の、禮盤(ライバン)によりて、五悔・五大願等の文を唱ふること。盛衰記「唱禮し奉って」

しやうら-い 唱禮【名】〔佛〕佛の心境の安樂なるを、快き夢に譬へていふ語。謠曲(東北)「いさぎよき響は、常樂の緣をなすとかや」

じやうらく 上洛【名】『らくやう(洛陽)を見よ』都にのぼること。上京。當座小栗判官「則ち上洛、朝參あり」

じやうらく 常樂【名】〔佛〕常住にして安樂なること。じやうらくがじやう(常樂我淨)參照。盛衰記「九品淨土常樂の安養に生れんと欲するなり」

じやうらく-の-えん 常樂の緣【句】〔佛〕常樂の德を具足せる佛界に到る因緣。謠曲(東北)「いさぎよき響は、常樂の緣をなすとかや」

じやうらく-の-ち 常樂の地【句】〔佛〕常樂の德を具有せる地、卽ち淨土。盛衰記「步は近く常樂の地に運び」

じやうらく-の-ゆめ 常樂の夢【句】〔佛〕佛の心境の安樂なるを、快き夢に譬へていふ語。謠曲(山姥)「風、常樂の夢を破る」

じやう-らく-がじやう 常樂我淨【句】〔佛〕佛の證得する四德、卽ち常と樂と我と淨と。常は常住不變なることにて、無常の反對をいひ、樂は安樂なることにて、苦惱の反對をいひ、我は自在無碍(ゲ)なることにて、障碍の反對をいひ、淨は清淨なることにて、濁惡(ダクアク)の反對をいふ。眞如法性の境は、よく常住不變にして、清淨安樂なる心を持つこと。涅槃(ネハン)の四德。續千載「觀念の心し澄めば山風も常樂我淨とこそ聞ゆれ」盛衰記「風、嶺松を吹く折は、近く常樂我淨の觀を凝らす。六時の禮讚擧すみて」

じやうらく-じ 常樂寺【名】(一)相模國鎌倉郡小坂村大字大船の粟船山の麓にある臨濟宗の寺。北條泰時の創建なりといひ、その墓あり。支那宋の蘭溪道隆の渡來するや、まづこの寺に住せしめ、居ること七年にして、建長寺を建てて移らしむ。故にこの寺を建長寺の根本と稱す。(二)近江國甲賀郡石部にある天台宗の寺。元明天皇の和銅年中金藏菩薩の開基なりと傳ふ。近江巡禮第一番の札所。(三)けいそく(鷄足寺)の舊稱。

じやうらく-じ 常樂寺【名】(一)相模國鎌倉郡小坂村大字大船の粟船山の麓にある臨濟宗の寺。北條泰時の創建なりといひ、その墓あり。支那宋の蘭溪道隆の渡來するや、まづこの寺に住せしめ、居ること七年にして、建長寺を建てて移らしむ。故にこの寺を建長寺の根本と稱す。(二)近江國甲賀郡石部にある天台宗の寺。元明天皇の和銅年中金藏菩薩の開基なりと傳ふ。近江巡禮第一番の札所。(三)けいそく(鷄足寺)の舊稱。

じやうらく-やき 上樂燒【名】弘化年間、山城國京都紫野大德寺の塔頭(タッチュウ)常樂庵にて燒きたる樂燒。器底に「常樂」の二字を印す。

じやうらく-ゑ 常樂會【名】〔佛〕『じやうらく(常樂)を見よ』興福寺・四天王寺・金剛峯寺などにて修する涅槃會(ネハンヱ)。

じやうらく-ゑ 常樂會【名】〔佛〕『じやうらく(常樂)を見よ』興福寺・四天王寺・金剛峯寺などにて修する涅槃會(ネハンヱ)。

じやうらく-ゑ 常樂會の內梵【名】常樂會に奏する內梵音と稱する樂曲。盛衰記「常樂會の內梵、都率天より傳はれり」

じやうらふ 上臈【名】『らふ(臈)を見よ』

じやうらふ 上臈【名】(一)〔佛〕法臘(ホフラフ)を積むこと多き者。臈次の上位なる者。(下臈に對して)〔上臈〕榮花「この僧たちざるべき上臈僧綱などの」(二)多く年功を積みて、階級の上なる朝臣。(下臈に對して)平道信頼卿一座して、その座の上臈達、皆下にぞ附かれたる」(三)じやうらふにようばう(上臈女房)の略。(中臈・下臈に對して)源氏「上らふども、皆まうのぼりて」(四)身分よき女。(五)江戸幕府の大奥の女官の最上位なるもの。(年寄・中臈などに對して)(六)明治二年宮中に置かれたる女官。女房の次位。

じやうらふ-しゆ 上臈衆【名】上臈の人人。狂言「今日は聟樣のおいでちや。いつものやうに見苦しくして御ざらずとも、上臈衆も、身だしなみを肝要でおぢやる」

じやうらふ-すげ 上臈菅【名】(植)莎草(カサウリヤウ)科に屬する多年生の草。水邊に自生す。莖の高さ二三尺。葉は細長く、初夏、茶褐色の花穗を出す。

じやうらふ-にようばう 上臈女房【名】典侍にして、三位もしくは二位に敍せられもの。執柄大臣家の女、これに充てられ、多くは禁色(キンジキ)を許され、劍璽に候し、陪膳に仕へ、夜御殿に藏候す。また女房中、公卿等の女にして、未だ典に補せられず、二位・三位に敍せられざる者は、小女臈と呼び、これに對して、大上臈の名もありたり。院御所・攝關家等にも同樣の制度ありき。上臈。(中臈女房・下臈女房に對して)上臈の隨身(ズイジン)【句】ずゐじん(隨身)の條下を見よ。

じやうらふ-むこ 上臈婿【名】貴人を婿にすること、又貴人の婿。保元「茂光は上臈婿取りて」

じやうらふ-めん 上臈面【名】能狂言などにて、上臈にいでたつ者のかぶる假面。醒睡笑「それなる上らふめんを見たきよし乞ひければ」

しやうら-ん 詳覽【名】くはしく見ること。

じやう-らん 上覽【名】貴人の見たまふこと。

じやう-らん 諍亂【名】騷動すること。さわぎ。國姓爺「今に始めぬ韃靼の難題、すは諍亂の基ぞと」

しやうらん-ろう 翔鸞樓【名】大內裡八省院の四樓の一。應天門外の西南に突出し、瓦葺、四間四方にて、屋背に鴟鳥(シテウ)の飾ありしもの。**せいほうろう**(栖鳳樓)參照。

じやう-らん 淨裸裸【貌】せきらら(赤裸裸)に同じ。

しやうら-り 商利【名】あきなひの贏(エイ)。同じ。

しやうら-り 掌裡【名】しやうちゆう(掌中)に同じ。

しやうら-り 掌理【名】掌りて處理すること。

しやうら-り 牆籬・墻籬【名】かき。まがき。

じやうら-り 草履【名】ざうり(草履)の訛。

じやうら-り 情理【名】(一)事情と道理と。(二)事情のすぢみち。

じやうら-り 常理【名】普通の道理。

しやうら-り 牆柳・墻柳【名】かきに生じてある柳。

じやうら-り 上流【名】(一)みなかみ。川かみ。(中流・下流に對して)(二)上の階級。上の地位。上層。(中流・下流に對して)

じやうらり-しやくわい 上流社會【名】上流の人人の社會。上層社會。(中流社會・下流社會に對して)

しやうら-りく 商陸【名】商陸(シヤウリク)の根莖を採集して乾燥せる漢藥。利尿劑とす。

じやうら-りく 上陸【名】船を乘りすてて陸にのぼること。

じやうりくぜい 上陸税【名】『英Shorage』貨物を本船より陸揚するとき、その貨物に課する税金。

じやうりくーちてん 上陸地點【名】上陸する場所。

しやうりーしべつーにち 生離死別日【名】婚姻に大凶なりといふ日。即ち正月六日・二月五日・三月四日・四月三日・五月二日・六月朔日・七月六日・八月五日・九月四日・十月三日・十一月二日・十二月朔日を初として、この日より七日の間とす。裏不成就日ともいふ。

しやうりつ 商律【名】〔法〕しやうはふ(商法)[二]に同じ。

じやうりつ 常律【名】通常の法律。軍律以外の普通の法律。

じやうりつ 滋養率【名】生物の種類・年齢又は労働の如何に對する滋養分の割合。

しやうりん 瘴林【名】瘴氣ある林。

じやうりん 上林【名】[一]じやうりんゑん(上林苑)に同じ。

わざつ(果物)の異稱。東鑑「被レ副二送竹葉・上林巳下一」

じやうりんーざうひやう 上林藏氷【名】主水正(モンドノカミ)の唐名。

じやうりんーしよ 上林署【名】もんどのつかさ(主水司)の唐名。

じやうりんーじよう 上林丞【名】主水佑(モンドノジョウ)の唐名。

じやうりんゑん 上林苑【名】『史記の始皇記に「三十五年、作二朝宮渭南上林苑中一、先作二前殿阿房一」とあり』天子の園。上林。上苑。

じやうりーもち 草履持【名】ざうりもち(草履持)に同じ。貞丈雜記「草履取を、いにしへは、じやうりもちといふ」

しやうりやう 將領【名】しやうすゐ(將帥)に同じ。

しやうりやう 精靈・生靈・聖靈【名】〔佛〕『聖の字は精・生と同音にして、敬意を含む』死者の靈魂。なきたま。せいれい。しやうらう。亡靈。盛衰記「過去聖靈、往生極樂と手向けさせたまふもあはれなり」

しやうりやう 莊領・庄領【名】庄家の領。莊園。盛衰記「二十六箇國を相分つて、庄領國領をいはず」

しやうりやう 商量【名】[一]はかり考ふること。[二]〔佛〕學人の、參禪修行して問答すること。

しやうりやうーおくり 精靈送【名】〔佛〕精靈會(盂蘭盆會)の翌日、精靈の幽界へ歸るを送る儀式。おくりび(送火)參照。

しやうりやうーざん 清涼山【名】〔地〕ごだいさん(五臺山)[二]に同じ。

しやうりやうーしふ 性靈集【名】〔書〕『弘氏家訓の「原二其所レ積文章之體一、標二擧興廢一、發二引性靈一」といへるより名とす。性靈とは、人の習性・精靈をいふ』弘法大師の詩文集。弟子眞濟の編。十卷。一名、遍照發揮性靈集。

しやうりやうーだいし 清涼大師【名】〔人〕ちやうくわん(澄觀)を見よ。

しやうりやうーだな 精靈棚【名】精靈會の時、精靈を祀るために、佛前にしつらへて供物を呈する棚。亡者ここに來りて、饗を享(ウ)くといふ。たまだな。

しやうりやうーとんぼ 精靈蜻蛉【名】〔動〕[一]あかとんぼ(赤蜻蛉)に同じ。[二]きやんま(黃蜻蛉)に同じ。

しやうりやうーなし 精靈梨【名】〔植〕『精靈會に用ふるよりいふ』やまなし(山梨)に同じ。

しやうりやうーばった 精靈蝗蚱【名】〔動〕はたおり(機織)に同じ。

しやうりやうーばな 精靈花【名】〔植〕みそはぎ(千屈菜)に同じ。

しやうりやうーまつり 精靈祭【名】うらぼん(盂蘭盆)に同じ。

しやうりやうーむかへ 精靈迎【名】〔佛〕精靈會(盂蘭盆會)の日に、精靈を祭壇に迎ふること。むかへび(迎火)參照。

しやうりやうーやま 精靈蜻蛉【名】〔動〕[一]あかとんぼ(赤蜻蛉)を云ふ。〔京都・大阪の語〕[二]きやんま(黃蜻蛉)に同じ。

しやうりやうーゐん 聖靈院【名】えいふくじ(叡福寺)の別稱。

しやうりやうゑ 精靈會【名】[一]うらぼん(盂蘭盆)に同じ。[二]大阪四天王寺にて、聖德太子の忌日、即ち毎年二月二十二日(昔は二十一日より二十三日まで)に、その像を、聖靈院より六時堂に移して行ふ法會。涅槃(ネハン)會・念佛會と共に、同寺三大會の一なり。

しやうりやう-ゑんば 精靈蜻蛉【名】〔動〕しやうりやうやんま(精靈蜻蛉)に同じ。

しやうりやく 詳略【名】詳密と粗略と。

しやうりやく 將略【名】大將たるべき方略。大將たる器量。「に同じ。

しやうりやく 省略【名】せいりやく(省略)に同じ。

しやうりやく 商略【名】[一]はかること。[二]商賣上のかけひき。

しやうりやく 正曆【名】一條天皇の御代の年號(紀元一六五六—一六六〇)。

じやうりやく 上略【名】上に在る文句を略して、記さぬこと。(中略・下略に對して)

しやうりやくーきがう 省略記號【名】〔音〕せいりやくきがう(省略記號)に同じ。

しやうりやくーざん 省略算【名】〔數〕せいりやくざん(省略算)に同じ。

しやうりやくーじ 正曆寺【名】大和國添上(カフノ)郡五ケ谷(ゴカヤ)村にある眞言宗の寺。本尊は藥師佛。菩提山・華樹院と號し、別格本山たり。正曆三年僧正泰俊一條天皇の勅を奉じて建立し、建保六年大僧正信圓再興す。

しやうりやくーすゐろんしき 省略推論式【名】〔哲〕せいりやくすゐろんしき(省略推論式)に同じ。

しやうりやくーはふ 省略法【名】〔語〕せいりやくはふ(省略法)に同じ。

しやうりゅう 青龍【名】[一]『禮記の典禮篇に「左二青龍一、而右二白虎一」とあり』四神の一。東方に配し、龍をゑがきて、その象とす。せいりゅう。[二]『白虎・朱雀・玄武に對して)平安左青龍、右白虎、前朱雀、後玄武、四神相應の地なり』[三]りゅう(龍)に同じ。

しやうりゅうーき 青龍旗【名】青龍の象をゑがきたる仗旗。せいりゅうき。

しやうりゅうじ 青龍寺【名】[一]しやうりゅうじやう(勝龍寺城)に同じ。

しやうりゅうーわう 青龍王【名】龍屬の王。

しやうりよ 靜慮【名】〔佛〕ぜんやう(禪)に同じ。

しやうりよ 常綠【名】『英Evergreen』四時を通じて綠なること。ときは。

しやうりよくーえふ 常綠葉【名】〔植〕『英Evergreen-leaves』四時綠色にして、冬も枯落せざる葉。

しやうりよくーくわつえふじゆ 常綠闊葉樹【名】〔植〕『獨Immergrünes laubholz』常綠なる濶葉樹。椎・樟の如きこれなり。

しやうりよくーしんえふじゆ 常綠針葉樹【名】〔植〕『獨Immergrünes nadelholz』常綠なる針葉樹。檜・杉の如き、これなり。Evergreen-tree』常綠葉を有する樹木。即ち松・杉・交讓木(ユヅリハ)の類。ときはぎ。常綠木。

しやうりよくーぼく 常綠木【名】〔植〕前條に同じ。

しやうりよーはらみつ 靜慮波羅蜜【名】〔佛〕ろくはらみつ(六波羅蜜)を見よ。

しやうーるり 淨瑠璃【名】[一]〔佛〕清淨・透明なる瑠璃。梵語、青苔鋪設、自展二七淨瑠璃之菌一。[二]〔書〕じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)の略。[三]『じやうるりものがたり(淨瑠璃物語)を見よ』語物(カタリモノ)の一。足利時代の末葉すでにその名稱ありて、初は淨瑠璃物語を扇拍子などにて語り、慶長の頃、澤角(サヘ)・撿挍、平家琵琶に倣ひ、當時行はれ初めし三味線を伴奏することを案出し、のち西宮の傀儡師(クヮイライシ)淡路之丞、操(アヤツリ)人形をも併せ演ずることを創め、淨瑠璃物語以外の新作行はれ、上方より漸次に、江戸にも傳はり、薩摩節・義太夫節・金平節・大薩摩節・外記(ゲ)節・武部節・土佐節・手品節・近江節・半太夫節・一中節・常磐津節・富本節・清元節・新内節など、種種の流派を生じ、また或は歌舞伎芝居の相方となり、或は舞踊を伴ひ、或は全然獨立の音曲として行はるるに至れり。江戸に起りし諸流を東派、京都・大阪のを西派といひ、西派の義太夫節最も盛行す。竹本義太夫以後を新淨瑠

璃、その以前のを古浄瑠璃といふ。㊀ぎだいふぶし(義太夫節)に同じ。「上るり」

じやうるりかんばん 浄瑠璃看板【名】浄瑠璃の標題、及びそれを演ずる俳優太夫等の名を記したる劇場の看板。

じやうるりきやうげん 浄瑠璃狂言【名】義太夫節を用ひて演ずる芝居の狂言。即ち操(アヤツ)狂言のために作りたるものを、歌舞伎風に改めたるもの。

じやうるりげいこ 浄瑠璃藝子【名】義太夫節宮園節などの三味線を弾く藝妓。

じやうるりごぜんじふにだんのしらし 浄瑠璃御前十二段【名】〔書〕次條に同じ。

じやうるりごぜんじふにだんさうし 浄瑠璃御前十二段草紙【名】〔書〕**じやうるりものがたり**(浄瑠璃物語)に同じ。

じやうるりざ 浄瑠璃座【名】浄瑠璃を語る座。

じやうるりざかかたきうち 浄瑠璃坂仇討【名】**いちがやのかたきうち**(市谷敵討)に同じ。

じやうるりじ 浄瑠璃寺【名】山城國相樂(サガラ)郡當尾(トウノヲ)村に在る眞言宗の寺。西小田原山と號す。もと興福寺一乘院の末寺。行基、聖武天皇の勅を奉じて創建す。俗稱、九品寺・九體寺。

じやうるりしばゐ 浄瑠璃芝居【名】『元祿時代には稀なりしより、特にいふ』浄瑠璃の語物(モノガタリ)を交へて興行する芝居。(今は普通になれるより、單に芝居といふ)〔元祿時代の語〕

じやうるりじふにだんさうし 浄瑠璃十二段草紙【名】〔書〕**じやうるりものがたり**(浄瑠璃物語)に同じ。

じやうるりじやうど 浄瑠璃淨土【名】〔佛〕次條に同じ。來の浄瑠璃淨土は東にて、こち吹く風となしたまふ」

じやうるりせかい 浄瑠璃世界【名】藥師如來の浄土。この土を距ること東方十恒沙(ゴウガ)の佛土の外に在りて、瑠璃を以て大地となし、藥師因位の時、十二大願を發し、その願の成就して、正覺を取りし所といふ。語曲(自從)「時に東方より浄瑠璃世界の主(ヌシ)と藥師、忽然と出でたまひて」

じやうるりだい 浄瑠璃臺【名】芝居の舞臺に設くる浄瑠璃の床。音樂下五十三參「下手に、浄瑠璃臺、これに常盤津連中居並び、直ちに浄瑠璃になる」

じやうるりたいふ 浄瑠璃太夫【名】浄瑠璃節を語る人。

じやうるりひめものがたり 浄瑠璃姫物語【名】〔書〕**じやうるりものがたり**(浄瑠璃物語)に同じ。

じやうるりふ 浄瑠璃譜【名】〔書〕貞享より明和に至る八十餘年間の大阪竹本豐竹兩座の浄瑠璃の沿革を年代順に記したるもの。二卷。編者未詳。温知叢書に收む。

じやうるりぶし 浄瑠璃節【名】㊀浄瑠璃風の節まはし。狂言「昆布賣」「この度はうたひぶしに賣れ。…今度は浄瑠璃ぶしに賣れ。…今度は小うたぶしに賣れ」㊁ぎだいふぶし(義太夫節)に同じ。

じやうるりぼん 浄瑠璃本【名】ぎだいふぼん(義太夫本)に同じ。一代男「あくびしてはあがり、おりては浄瑠璃本など讀み、何の用もなきに、一座をさましぬ」

じやうるりものがたり 浄瑠璃物語【名】〔書〕牛若丸奥州へ下るとき、三河國矢矧(ヤハギ)の宿にて、長者の娘浄瑠璃姫と一夜の契を結びしが、その後駿河國吹上(フキアゲ)の濱にて病に罹り、眞砂の下に埋れたりしを、浄瑠璃姫尋ね出でて看病せしめ、病癒えて、奥州へ下る事を述べたるもの。一卷。小野お通の作といへど詳かならず。前篇を十二段に分つ。この物語を三味線に合はするに及び、浄瑠璃節の名稱も起るに至れり。別名、浄瑠璃姫物語。浄瑠璃十二段草紙。

じやうるりゑかんばん 浄瑠璃繪看板【名】浄瑠璃看板の内容を畫にて示せる劇場の看板。

しやうるゐ 生類【名】生きて命あるもの。いきもの。せいるゐ。動物。

生類憐(アハレ)みの令【句】徳川五代將軍綱吉の、家斉その他の禽獸・魚鳥の酷使・殺傷・捕獲等を禁じたる制令。綱吉、知足院の僧隆光の説を信じ、世嗣なきは、前世多殺の報なりとせしに基くものにて、その生年の戌年たりしがため、特に犬の保護を重んじたり。

じやうゐん 城壘【名】㊀城の土居(ドヰ)。㊁しろ。とりで。

しやうゐん 省令【名】各省大臣が、その職權又は特別の委任によりて發する行政命令。大臣、年月日を記入し、これに署名す。

しやうゐん 奬勵【名】すすめ勵ますこと。

しやうゐん 瘴癘【名】風土・氣候のために起る熱病、即ちマラリヤの類。

じやうゐん 常禮【名】つねの禮式。

じやうゐん 常例【名】常のしきたり。ならはし。常式。

しやうゐんどく 傷冷毒・瘴癘毒【名】沼澤などより生ずる濕氣の毒。リウマチス・風濕などの原因となる。

しやうれん 青蓮【名】〔佛〕**しやうれんげ**(青蓮華)に同じ。

しやうれんげ 青蓮華【名】〔佛〕「青蓮華の眼(マナコ)」に同じ。語曲(調伏曾我)「降三世明王は、青蓮の眦に、惡魔を降伏して」

しやうれん 湘簾【名】『湘はしやうちく(湘竹)の意』竹にて造りたる簾。

じやうれん 常連【名】㊀常に定まりて伴ふつれの者。㊁興行場に常に來る見物人。定連。

しやうれんげ 青蓮華【名】〔佛〕『梵 Utpala(優鉢羅)の譯語。法華經の妙音菩薩品に「是菩薩、目如二廣大青蓮華葉一」とあり』蓮の一種。その葉長くして廣く、青白分明なるより、經文中、佛・菩薩の眼の形容に用ふ。大原問答「菩薩も青蓮華の蕚を含み、内外共に清淨に、青蓮華の眼(マナコ)【句】〔佛〕前條を見よ。蕚花「青蓮華の眼は、四大海を滿へ」

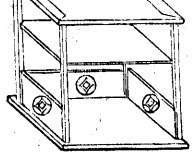
しやうれんゐん 青蓮院【名】京都市上京區粟田口町にある天台宗の寺。仁平三年鳥羽天皇の勅に由りて創建し、青蓮房行玄を開基とす。世世皇族の出家して、住持したまふ所にて、青蓮院門跡又は略して青門(セイモン)と稱し、門跡の隨一たり。一名、法華三昧院。

しやうれんゐんのみや 青蓮院宮【名】青蓮院門跡の稱號。前條參照。

しやうれんゐんは 青蓮院派【名】おいへり(御家流)㊁に同じ。

しやうれんゐん(ゐん)もんぜき 青蓮院門跡【名】しやうれんゐん(青蓮院)を見よ。

じやうろう 城樓【名】茶席に用ふる棚物の一。香道に用ふる袋棚を半分にしたるもの。天王寺屋宗及の創めたるより、宗及棚ともいふ。半切棚。



(なだうろうやじ)

しやうろう 傷姿【名】きずつきしぼむこと。

しやうろう 正位【名】位階の各階を二級に分ち、その上級のもの。(從位に對して)

じやうろう 上位【名】上のくらゐ。高き位。(下位に對して)

じやうろう 上位の薩埵(サツタ)【句】〔佛〕初地(ショ)以上の位地にある菩薩。

じやうろう 淨位【名】天武天皇の朝に制定せられし爵位の内、明位に次ぎ、四階ありて、毎階大廣の二つに分れ、明位と共に諸王以上に賜ひしもの。紀「淨位、ジヤウヰ」

じやうろう 譲位【名】天皇の御位を譲りたまふこと。みくにゆづり。譲國。脫屣(ダシ)。遜位。じゆゐん(受禪)參照。

じやうろうき 淨域【名】〔佛〕㊀じやうど(淨土)に同じ。㊁じやうち(淨地)㊀に同じ。

じやうろうくわしよくぶつ 上位花植物【名】〔植〕子房が花瓣底より上に位する花を有する植物、即ち子房上生の植物。例へば牡丹・福壽草・蓮・罌子粟(ケシ)・百合(ユリ)などの類。(下位花植物に對して)

しやうろうゐん 醫院【名】古の大膳職の別院。醫(イ)の事を掌りし處。

しやうろうゐん 省員【名】㊀官省の職員。㊁人員を減ずること。ひとべらし。

しやうろうゐん 正院【名】左院・右院と共に明

治四年七月に設けられし行政府。太政大臣・納言・參議・樞密大使・樞密權大使・樞密大史・樞密權少史・大使・權大使・少史・權少使（同年八月、太政大臣・左右大臣・參議・大内史・權大内史・少内史・權少内史・大外史・權大外史・少外史・權少外史に改めらる）大主記・權大主記・少主記・權少主記の職員あり。天皇親臨して萬機を總判せり。十年一月廢止。

じやう-ゐん 上院【名】『英Upper house』貴族又は勳功者等を組織したる議會。我が國の貴族院の類。（下院に對して）

じやう ゐん 常員【名】平常の員數。

しやう-ゑ 正繪【名】繪上げて後に顯るる模樣と全く同一の大さに、豫め描きたる下繪、即ち繪物上の圖案。「やうゑ」（正繪師）參照。〔德川時代の語〕

じやう-ゑ 淨穢【名】きよきと、けがれたると。清淨と汚穢と。

淨穢不二（ふに）【句】〔佛〕差別の迷相を解脫し、眞如平等の妙理を悟りて觀ずれば、清淨と汚穢との差別無く、無我無心の境に入ること。諺曲（放下僧ニ弓ト申スハ、本末ニ烏兎ノ姿ヲ象リ、日月ヲココニ顯シ、淨穢不二ノ祕法ヲ表ハス」

じやう-ゑ-くう 成・壞・空【句】じやう（成）の條下を見よ。

しやう-ゑ-し 正繪師【名】正繪を描くことを職とする人。

しやう-ゑん 牆垣・墻垣【名】かき。まがき。

しやう-ゑん 莊園【名】『田莊園地の義。莊は、田間に在る屋舍にして、荒地開墾の際、舍を設くるによりていひ、園は菜園なり』平安朝時代以後、皇族・公卿及び神社・佛閣の占有に屬し、租稅・課役を免れ、國司の治權以外に立ちし土地。さんせいいつしんはふ（三世一身法）參照。

じやう-ゑん 上苑【名】じやうりんゑん（上林苑）に同じ。朗詠「花明二上苑一輕軒馳二九陌之塵一、猿叫二空山一斜月瑩二千岩之路一」增鏡「兼行、花は上苑に明かなりと打出したるに、いとど物の音もてはやされて」

しやう-ゑん-きろくじよ 莊園記錄所【名】きろくじよ（記錄所）に同じ。

しやう-ゑん-けんけいじよ 莊園券契所【名】きろくじやうゑんけんけいじよ（記錄莊園券契所）に同じ。

じやう-をく 城屋【名】城と家と。

じやう-をん 常溫【名】■常に一定せる溫度。平溫。■平常の溫度。一年間の平均溫度。■通常の溫度。四〔理〕『英Common temperature』大氣のは攝氏十五度前後、身體のは三十七度前後の稱。

じやうをん-そう 常溫層【名】〔地〕こうをんたい（恒溫帶）に同じ。

じやうをん-たい 常溫帶【名】〔地〕前條に同じ。

しやうえい 舍營【名】〔兵〕軍隊が、屋内に入りて、休養宿泊すること。一舍營地の高級者を、舍營司令官と稱し、舍營に關するすべての命令權を有す。「と。

しやうえい 寫映【名】うつること。うつすこと。

しやうえい 斜映【名】光の斜にうつること。

しやうえい 斜影・斜景【名】ゆふひかげ。

しやうえい 射影【名】とうえい（投影）に同じ。

しやうえい-しれいくわん 舍營司令官【名】〔兵〕しやえい（舍營）を見よ。

しやえい-はふ 射影法【名】とうえいはふ（投影法）に同じ。

しやおしん-ちう 紹興酒【名】『漢字の支那音』せうこうしゆ（紹興酒）に同じ。

しやおん 謝恩【名】恩を有難がること。うけたる恩に對して禮を述ぶること。

しやおん-くわい 謝恩會【名】謝恩のために催す會合。

しやおん-さい 謝恩祭【名】〔基〕『英Peace offering』舊約時代に、神の恩惠を感謝せんがために行ひしもの。酬恩祭。

しやおん-もんじ 寫音文字【名】〔語〕おんじ（音字）に同じ。

しやか 斜下【名】ななめにさがること。

しやか 社家【名】數戸棲りたる家屋。しやけ（社家）參照。

しやか 瀉下【名】そそぎ下ること。

しやか 釋迦（梵 Śākya）【名】〔人〕しやかむに（釋迦牟尼）を見よ。

しやが 釋迦に經（くび）【句】次條に同じ。〔諺語〕小町踊「嵯峨野にて鳴く鶯や釋迦に經」

しやが 釋迦に說法【句】已にその事を知れる人に、その事を說聞かすること。釋迦に經。〔諺語〕

しやが 釋迦に提婆（だいば）【句】何にも敵のある讐。門出八島「釋迦に提婆、太子に守屋」

しやが 釋迦の十大弟子【句】じふだいでし（十大弟子）を見よ。

しやが 釋迦の手【句】「御釋迦の手」に同じ。

しやが 釋迦の八相【句】〔佛〕はつさう（八相）を見よ。

しやが 釋迦の遺弟子【句】釋迦の滅後に、佛法を信じたる者。平家「釋迦の遺弟子達なり」

しやが 胡蝶花・蝴蝶草・著莪【名】〔植〕『ひあふぎの漢字「射干」の音轉といふ』蕙尾（あやめ）科に屬する多年生の草。高さ一二尺に達し、葉は劍狀にして長さ一尺乃至一尺半ばかり、全緣、鮮綠色にして、扇子狀に排列す。春花莖の末に數花を著く。その形、蕙尾・溪蓀（かきつばた）などのに似て、やや小さく、色は白色に紫暈あり、中心に黃斑あり。陰地に自生し、また觀賞用として園養せらる。性强くして、繁殖速かなり。

しやが 車駕【名】■『漢書の景帝記に「夫吏者民之師也、車駕・衣服宜ノ稱」とあり』乘物。■『史記の韓嫣傳に「天子車駕、躡レ道未レ行」、漢書の高帝記に「車駕西都二長安一」とありて、顏註に「凡言二車駕一者、謂二天子乘レ車而行一、不二敢指斥一也」と、又、唐六典に「服御曰二乘輿一、行幸曰二車駕一」とあり』行幸の時に、天皇を間接に指していふ語。

しやが 沙界【名】〔佛〕『恒河沙世界の略』無數・無量の世界。為寿谷驢「有頂（うちやう）無間（むけん）鐵圍（てつゐ）・沙界蠢動含靈」

しやが 射界【名】彈丸の到達する區域内。「世界」の略。

しやかい 娑界【名】〔佛〕しやばせかい（娑婆世界）の略。

しやがい 車蓋【名】車の上の天蓋。

しやかいいちだい 釋迦一代【副】物の堅牢にて、久しく保つさま。〔德川時代の語〕「釋迦一代こらへる」

じやがいも 馬鈴薯【名】〔植〕じやがたらいも（馬鈴薯）に同じ。

しやかう 社交【名】■團體を組織して、互に交際すること。■社會の交際。世間のつきあひ。

しやかう 社羹【名】古、支那にて、社日に羹（あつもの）をつくりて、社神を祀りしこと。

しやかう 射倖【名】『しやり（射利）を見よ』僥倖を得んとして、事を爲すこと。徼倖。

しやかう 斜巻【名】狹斜のちまた。いろまち。いろざと。遊里。

しやかう 斜高【名】〔數〕『英Slant height』圓錐・角錐などの頂點より底面の周圍の一點までの距離。「道。

しやかう 斜坑【名】坑口より斜に下る坑

しやかう 赦降【名】赦免と恩降と。刑部省式「據二赦降出日一免罪」

しやかう 車行【名】車に乘りて行くこと。

しやがう 社號【名】■神社の稱號。某神社と稱すること最も普通なれども。鹿島（かしま）神宮のごとく神宮と呼ぶもの、金崎（かなさき）宮のごとく宮と呼ぶもの、稻荷（いなり）社のごとく社と呼ぶものなどあり。■社の名。會社の號。

しやがう 奢傲【名】奢侈と傲慢と。おごりたかぶること。

じやかう 蛇行【名】だかう（蛇行）に同じ。

じやかう 邪行【名】■『水經、註に「邪行五里、逆行三里」とあり、邪は斜に通ず』なめに行くこと。■よこしまなる行。

じやかう 麝香【名】■麝香鹿の牡（おす）の腹部に在る、雞卵大にして囊狀をなせる皮腺。香氣甚だ强く、香料又は藥用とす。紫麝。■じやかうじか（麝香鹿）の略。

じやかう-うし 麝香牛【名】〔動〕偶蹄（ぐうてい）類に屬する哺乳動物。形、綿羊に似、毛甚だ長く深く、特に頸背部には縮れたる長毛密生す。老いたる牡（おす）の角は、基部廣くして、前額の大分を蓋ひ、踵は不等形にて、その間に毛あり、氷上を步むに適す。肉は麝香樣の香氣を放つ。米國の北部に產す。じやぎう。麝香羊。

しやかう-けいやく 射倖契約【名】〔法〕効力の全部又は一部が、偶然の事實にかかる契約。例へば保險契約・終身定期契約の類。

じやかう-さう 麝香草【名】〔植〕■唇形(シンケイ)科に屬する多年生の草。方莖にして高さ二三尺、葉は長楕圓形にて、鋸齒を有し、葉脚凹形をなして對生す。秋季葉腋に淡紅紫色の唇形花を開く、芳香を有し、山地に自生す。えあらき。〔鈴子香〕 ■いぶきじやかうさう(伊吹麝香草)に同じ。

じやかう-じう 麝香獸【名】〔動〕次條に同じ。

じやかう-じか 麝香鹿【名】〔動〕偶蹄(グウテイ)類に屬する哺乳動物。大さ三尺內外にして、形體庶に類す。角無く、毛は通常暗褐色にて、時時變色し、薄き斑點を有す。麝香は、この獸の牡(オス)より得るなり。かをりじか。じや。

(かじうかやじ)

しやかう-しん 斜行進【名】ななめに進行すること。(直行進に對して)

じやかう-ずり 麝香磨【名】麝香を磨りこなすに用ふる、小さき茶碗のごとき物。

じやかう-ちどり 麝香千鳥【名】〔動〕みづちどり(水千鳥)に同じ。

じやかう-ちんき 麝香丁幾【名】麝香一分に、水及び稀アルコオル各二十五分を加へて浸出せしめたる藥品。

しやかうてき-どうぶつ 社交的動物【名】社交の本能を有する動物、卽ち人類など。

じやかうなでしこ 麝香撫子【名】〔植〕かあいしよんに同じ。

じやかうねこ 麝香猫【名】〔動〕食肉類に屬する哺乳動物。形及び大いさは鼬鼠(イタチ)又は猫に似、麝香の如き香氣を放つ。印度に產す。かをりねこ。

じやかう-ねずみ 麝香鼠【名】〔動〕食蟲類に屬する小獸。形鼠に似て、皮腺の分泌液に、麝香のごとき香氣あり。九州・沖繩島等に產す。

じやかうのーねこ 麝香猫【名】じやかうねこ(麝香猫)に同じ。

大織冠「麝香の猫、夢喰ひ獏」

じやかう-のーま 麝香間【名】■京都の舊皇居內の一室。小御所(ショ)に至る長廊下と南北の通廊との左方、一角に在るもの。將軍參內の時の便所に充てられ、天明八年炎上の際まで、麝香獸の描かれありきといふ。■東京の現皇居內の一室。祇候所(ショ)に充てらる。

じやかうのまーしつう 麝香間祇候【名】功勞ある華族又は官吏を優待する目的にて與へらるる資格。錦鷄間祇候の上に位し、職掌俸給なく、親任官の待遇を受く。

じやかう-ばら 麝香薔薇【名】〔植〕薔薇の一種。幹小さけれど、性甚だ强く、よく寒氣に堪ふ。花季やや遲けれど、花甚だ多し。

じやかうひつじ 麝香羊【名】〔動〕『英Mouflon』じやかうし(麝香牛)に同じ。

しやかうべ【名】『しやは接頭語』頭を罵りていふ語。孕常盤「淨海がこの握拳にて、しやかうべ微塵にはり碎かん」

じやかうぼね 麝香骨【名】扇の骨の丁子沈香などにて煮て、よき香をこめたるもの。毛吹草「薰りぬる風や扇のじやかう骨」

じやかう-ほほづき 麝香酸漿【名】〔植〕玄參(ゲンジン)科に屬する多年生の草。葉は對生、夏秋の交、淡黃色の花を開く。花冠の長さ萼片に二三倍す。全體に毛茸ありて、粘質をなし、麝香樣の芳香あり。北米合衆國の產にて、水濕の地に生じ、また園藝し、或は鉢植として、花を賞す。「油。

じやかうゆ 麝香油【名】麝香の匂ある香

じやかうれんりさう 麝香連理草【名】〔植〕萱(ワスレグサ)科に屬する草。長さ七八尺、兩側に翼を有す。複葉にして、小葉は披針形を呈し、また卷鬚に變ず。夏季、淡紅色の花を開く。ひろは。れんりさう。麝香豌豆。

じやかう-まめ 麝香豌豆【名】〔植〕前條に同じ。

しやーかく 斜角【名】〔數〕『英Oblique angle』銳角又は鈍角の如き直角ならざる角。

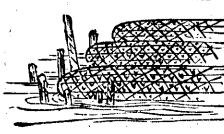
しやーかく 射角【名】彈丸の射線と水平線とのなす角。

しやーかく 社格【名】神社の格式、卽ち官幣大社・官幣中社・官幣小社・別格官幣社・國幣大社・國幣中社・國幣小社(以上官社)・府社・縣社・鄕社・村社及び無格社の種別。

しやかく-きん 斜角筋【名】〔醫〕頸部に存する筋肉。前・中・後の三に分つ。

しやかくたう 斜角壔【名】〔數〕『英Oblique prism』側稜と底面との直交せざる角壔。(直角壔に對して)

じやーかご 蛇籠【名】■『大蛇の臥せるに似たるより云ふ』大きく粗く編みたる長き竹籠。石を入れて、水勢を殺ぐ等に用ふ。■同上を竪にしたる如き形の指物。



(じやかご)

じやーかしら【名】『しやは接頭語』頭を罵りていふ語。字音「しや頭うち割らんとしつるものを」

しやかーせそん 釋迦世尊【名】〔人〕しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。

しやかーぜんぜ 釋迦善逝【名】前條に同じ。ぜんぜ(善逝)參照。野守鏡「釋迦善逝微妙法の聲」

しやかーそん 釋迦尊【名】〔人〕前條に同じ。太平記「善いかな、釋迦尊、この地に佛法を弘通したまはんこと」

しやかーだう 釋迦堂【名】釋迦の像を本尊として祀れる堂。太平記「西塔の釋迦堂を皇居となさる」

しやかーだう 釋迦堂の念佛【句】〔佛〕しやかねんぶつ(釋迦念佛)に同じ。

じやがたら 咬噌吧【名】■■〔植〕じやがたらいも(馬鈴薯)の略。■〔植〕じやがたらみかん(咬噌吧蜜柑)の略。■鮫皮の最鮫の一。五〔地〕じやがたらじま(咬噌吧島)を見よ。

じやがたら-いも 馬鈴薯【名】〔植〕『ジャガトラ(Jagatra)島を經て、我が國に傳はりしよりいふ』茄(ナス)科に屬する多年生の草。高さ二三尺。葉は羽狀複葉にして、大小の二種を有す。葉毛あり。花は淡紫白色、鐘狀にして五裂す。塊莖は謂はゆる芋にて群生し、皮の色は、薄く黃ばみ、又は薄く赤ばみたり。南米智利及び祕露等の原產。塊莖は食用とし、また澱粉を製し、酒精の原料とす。あつぷら。えぞいも。からしういも。じやがたら。

じやがたら-じま 咬噌吧縞【名】古、ジャガタラ島より渡來せしといふ一種の織物。じやがたら。

じやがたら-じま 咬噌吧島【名】〔地〕じやがらじま(咬噌吧島)に同じ。

じやがたら-すゐせん 咬噌吧水仙【名】〔植〕なつずゐせん(夏水仙)に同じ。

じやがたら-みかん 咬噌吧密柑【名】〔植〕ざぼん(朱欒)を云ふ。〔京都の語〕

しやかちら 沙羯羅【名】しやから(沙羯羅)に同じ。

じやかつ 沙喝【名】〔佛〕剃髮して沙彌となり、喝食(カツジキ)の服を著る者。〔禪宗の語〕

じやかつ 蛇蝎【名】だかつ(蛇蝎)に同じ。

しやかつら 沙羯羅【名】〔佛〕次條の略。

しやかつら-りゆうわう 沙羯羅龍王・娑竭羅龍王【名】〔佛〕しやからりゆうわう(娑伽羅龍王)に同じ。浦島年代記「娑伽羅龍王通天の冠、縫紗の袍」

じやがたら-じま 咬噌吧島【名】〔地〕『英Jaguta 又 Tjakatra』古、ジャワ(Java)島に在りし獨立國。同名の首府あり。じやがたら。

しやかによい 釋迦如來【名】〔人〕しやかに(釋迦牟尼)の敬稱。大鏡「陽成天皇：八十一にてかくれさせたまふ。御法事に願文には、釋迦如來の一とせのこのかみとは作られたるなり」

しやかによい-たんじやうゑ 釋迦如來誕生會【名】戲曲の一。釋迦牟尼一代の事蹟を脚色したるもの。近松門左衞門の作。

しやかーねんぶつ 釋迦念佛【名】〔佛〕せんぼんねんぶつ(千本念佛)に同じ。

しやかーのーたんじやう 釋迦誕生【名】享保の頃、小さき輿に茶を入れ、中に釋迦の

立像を安じ、屋根を各種の色紙にて拵へ、卵の花など附けて、物乞の持ちあるきたるもの。

しやかはっさう 釋迦八相【句】はっさう(八相)の條下を見よ。

しやかはっさう-やまとぶんこ 釋迦八相倭文庫【名】〔書〕釋迦一代の事蹟を脚色したる草雙紙。五十七篇。萬亭應賀の作。

しやがばな 胡蝶花【名】〔植〕しやが(胡蝶花)に同じ。

しやがひ 舍飼【名】家畜を畜舍内に飼養すること。「―する」

じやがひ 蛇貝【名】〔動〕腹足(フクソク)類に屬する軟體動物。海岸の岩石に附著す。その殻、管狀をなして長く、不規則なる螺旋狀を呈す。へびがひ。むしがひ。

じやがひでも 是が非でも【句】「是(ゼ)が非(ヒ)でも」の訛。

しやかぶつ 釋迦佛【名】〔佛〕しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。

しやかぶり 【名】『しやは接頭語』かぶり(冠)を罵りいふ語。平家「しや冠を打落し」

しやかま 【名】口やかましくうるさき人。〔伊豆國の方言〕「うづくまる。

しやがむ 【動四自】腰を低くしてかがむ。

しやかむに 釋迦牟尼(梵 Śākyamuni)【名】〔人〕『釋迦は印度の迦毗羅衛國に住せし刹帝利(クシャトリヤ)種の一種族の名、能力又は勇强の意。もと饗餐(コウ)氏と稱し、後、分れて釋迦氏と稱す。牟尼は寂默、仙人、智者などと譯し、內外諸聖の德行に對する敬稱。即ち釋迦牟尼は釋迦種族中の聖者の義』佛教の教祖。印度ヒマラヤ山麓なる迦毗羅(カビ)城の主、淨飯(ジョウボン)王の子。母を摩耶といふ。初名は悉達(シッタ)太子。二十九歳(或はいふ十九歳)の時、潛かに宮殿を遁れて苦學苦行し、三十五歳(或はいふ三十歳)菩提樹下に坐して正覺を得、鹿苑、祇園、王舍城、竹林等に法を說き、西曆紀元前約四八五年(或はいふ四八七年)八十歳にして入滅す。教主世尊。釋尊。

しやかむに-によらい 釋迦牟尼如來【名】しやかむに(釋迦牟尼)の敬稱。蜻丸「天笠の釋迦牟尼如來は佛といひ」

しやかむにぶつ 釋迦牟尼佛【名】しやかむに(釋迦牟尼)の敬稱。

しやかん 左官【名】さくわん(左官)の訛。

しやかん 舍監【名】寄宿舍の監督。

しやがん 砂岩【名】〔鑛〕さがん(砂岩)に同じ。

しやがん 赭顏【名】赤き顏。赭面。朱顏。

しやがん 斜眼【名】やぶにらみ。よこめ。

じやかん 邪姦・邪奸【名】邪智にして姦佞なること。奸邪。

じやがん-せき 蛇含石【名】〔鑛〕きんがせき(金牙石)に同じ。

しやがん-とう 遮眼燈【名】『相手の視線を遮るやうにせる物なるよりいふ』がんだうちやうちん(强盜提灯)に同じ。

しやかもん 釋迦文【名】〔人〕しやかむに(釋迦牟尼)の訛略。

しやかもん-ぶつ 釋迦文佛【名】〔人〕しやかむにぶつ(釋迦牟尼佛)の訛略。天智天皇「西天の釋迦文佛は、五穀を捨てたる罪業は、五逆に優ると說きしとかや」

しやがら 沙羯羅【名】〔佛〕次條の略。「沙竭羅娑誐羅」

しやがら-りゆうわう 沙羯羅龍王・婆伽羅龍王・娑竭羅龍王・沙誐羅龍王(梵 Sāgara)【名】〔佛〕『沙羯羅は鹹海と譯す』八大龍王の一。海に住すといふ。盛衰記「かの明神は沙竭羅龍王の娘を勸請して崇め奉る」

しやがれ-ごゑ 嗄聲【名】しはがれごゑ(嗄聲)

しやがれ-こゑ 嗄聲【名】前條の音便。

しやき 車騎【名】■兵車と騎馬と。■車馬に乘るつはもの。

しやき 車軌【名】車の軌道。

しやき 車旗【名】車と旗と。

しやき 斜暉【名】ゆふひ。夕陽。斜陽。

しやき 射騎【名】■弓術と馬術と。射御。■射手と騎手と。

しやぎ 射儀【名】射術に關する儀式。

しやぎ 謝儀【名】しやれい(謝禮)に同じ。

じやき 蛇木【名】〔植〕はひびやくしん(矮檜)に同じ。

じやき 邪氣【名】■疾病をなさしむる惡しき氣。妖氣。舞女五枚翁子「厄拂の詞をのべて咒へば、惡病、邪氣を除くと申す」■次條(一)に同じ。著聞「はじめ歩み來りつる者は邪氣なり」■ひきかぜ。風邪。感冒。

じやき 邪鬼【名】■もののけ。妖怪。怨靈。怨念。■たちをなす神。惡しき神。

じやぎ 邪義【名】正しからぬ教義。よこしまなる教義。聖德太子繪傳「現世安穩の佛說世に示さんとおぼせども、天下の貴賤未だ迷の邪義の罪、上一人の御腦となり」

じやぎう 砂丘【名】さきう(砂丘)に同じ。

じやぎう 騭牛【名】〔動〕じやかうし(騭牛)に同じ。

しやき-しやき 【貌】■齒切れよきさま。てきぱき。ちやきちやき。■快く物を切りなどする音。

じやき-じやき 【貌】■さくさくの、一層不快なるさまにいふ語。■物を剪る音の形容。じよきじよき。

しやきてん 射騎田【名】王朝時代に、射術奬勵のために、諸衞府の用に充てたりし不輸租田。射田。

しやきぬ 紗衣【名】紗にて仕立てたる衣

しやきん 紗巾【名】■紗のきれぢ。■紗の頭巾。

しやきん 謝金【名】謝禮として送る金。禮金。

しやきん 砂金【名】〔鑛〕さきん(砂金)に同じ。

しやきん-さいしゆ-ぜい 砂金採取稅【名】さきんさいしゆぜい(砂金採取稅)に同じ。

しやきん-せき 砂金石【名】〔鑛〕さきんせき(砂金石)に同じ。

しやきん-づつみ 砂金包【名】さきんづつみ(砂金包)に同じ。

しやきん-もち 砂金餅【名】さきんもち(砂金餅)に同じ。

しやきん-ろせき 砂金鹵石【名】〔鑛〕さきんろせき(砂金鹵石)に同じ。

しやきやう 寫經【名】〔佛〕經文を筆寫すること、又その寫したる經文。著聞「造塔・寫經の大願」

しやきやう 蔗境【名】かきやう(佳境)に同じ。蔗境に入る【句】『晉書に「顧愷之、每レ食二甘蔗一、常自レ尾至レ本、人或怪レ之、愷之曰、漸入二蔗境一」とあるに本づく』風景又は文章・談話などが、次第に面白くなる。佳境に入る。倒に蔗を食ふ。

しやきやう 舍兄【名】しやけい(舍兄)に同じ。心中曾戾甲「山脇小七郎の舍兄(ヤケイ)

じやぎやう 蛇形【名】へびの形。じやたい。松風村雨東帶鑑「蛇形退散の守をかけさせ、帝よりは日の御座の寶劍を枕刀に置かれし故」

じやぎやう-きゆう 蛇形弓【名】張弓の一。白木の弓。鬼を射るに用ふといふ。

じやきやう-し 寫經司【名】古、佛經を寫しむるために設けし役所、長官・次官等の職員を置く。寫經所。寫書所。「じ。

しやきやう-じよ 寫經所【名】前條に同じ。

しやきやく 斜脚【名】斜に行くこと。謠曲(鐵輪)「花は斜脚の嗳風に開けて」

しやぎよ 射御【名】弓を射、馬に騎ること。射騎。

しやぎよ 車御【名】車に乘ることと、馬を御することと。

じやぎよく 蛇曲【名】「長蛇(ヂヤダ)の陣」に同じ。

じやぎよく 邪曲【名】よこしま。わるだくみ。

しやぎり 【名】■手に持ちて敲き、笛・太鼓の囃子(ハヤシ)に合はせて鳴らす小形の鉦(カネ)の音。ちやんぎり。■芝居の囃子の一。鐘・太鼓を雜へて拍子をとるもの。昔は人寄・打出の際などに囃立つるを常とし、狂言の間にも用ひたり。かたしやぎり(片しやぎり)・たうちやくしやぎり(到著しやぎり)參照。

しやぎる 【動四自】しやぎりを行ふ。南水漫遊「人よせの內、樂屋にて、鐘・太鼓を交へ、拍子をとる、これを舍來留(シヤギル)といひしが、今はシヤギリと唱へ、幕明けに近づけば、甲(カン)太鼓を交ぜ勇しくなせり」

しやく 錫【名】〔佛〕しやくぢやう(錫杖)(一)の略。

錫を掛く【句】掛錫(カケ)す。
錫を飛ばす【句】飛錫(ヒセン)す。
錫を留(ト)む【句】留錫(リウ)す。

しゃく 爵【名】 ■『爵の字の音雀に通じ、その形雀に象れるによりていふ』さかづき。酒器。■古、支那にて、諸侯又はその臣僚の世襲の身分。周の代には、諸侯の、公・侯・伯・子・男の五等(五爵)、臣僚の、卿・大夫・士の三等に分ちたり。■華族令により、華族にその家格・身分を表はすために賜ひし階級。後、朝鮮貴族にも賜ふこととなれり。公・侯・伯・子・男の五等に分つ。

しゃく 赤【名】 ■せき(赤)に同じ。 狂言(雷士松)『青・黄・赤(シャク)・白・黒五色に闕はらず』

■**しゃくくにち(赤口日)**に同じ。

赤の日【句】しゃくくにち(赤口日)に同じ。 真言雑記『赤の日は赤口神といふ神の司る日にて、舞舌を用ふるにわろき日なりといふ』

しゃく 笏【名】 『笏の音、實は「こつ」なれど、骨と通ずるを忌み、又もと長さ一尺の物なるより、尺の音を借りていふとも、笏の字の音も「しゃく」なり(雅楽要義に據る)ともいふ』束帯の時、右手に持つもの。木・象牙などにて造る。元は事を記して、備忘に便ぜしが、後にはただ儀式用とのみなれり。初、唐制に基きて、五位以上は牙笏(ゲコツ)、六位以下は木笏に定められしが、中古以來は、禮裝の時のみ牙笏を用ひ、平常は木笏を用ふるに至れり。寸法も、位により區別を立てたれども、概して長さ一尺二寸・幅二寸ほどなりき。さく。こつ。 和名抄『笏、音忽、俗云尺、手板、長一尺六寸、濶三寸、厚五分也』

しゃく 癪【名】 『癪はしゃくしゆ(積聚)の積にずを加へ、積の字の異音に讀ませたる和字』■胸又は腹部に癪撃を感じて痛む病。甚しきは、人事不省となる。婦人に多し。胃癪撃。癪氣。積聚。 重修本草『おさるがことの日より、癌の病に胸いたみ』■氣に入らぬこと。しゃくにさはること。癇癪。■氣に入らぬ言葉。 浮世風呂『よせえ。しゃくをいふなえ。男なら、持ってみや』

癪に障(サワ)る【句】癇癪にさはる。憤懣の心をおこす。腹が立つ。氣に障る。

癪の蟲【句】■氣に障るもの。癇癪を起す對象。■癇癪を腹の中に在る蟲と見做していふ語。「癪の蟲が納まらぬ」

しゃく 酌【名】 ■酒をくみて、盃に盛ること、又それをなす人。■旅人宿の給仕女。酌婦。 越後國の方言『一代男』坂田といふ所に始めて著きぬ。…上方(カタ)のはすは女とおぼしき者皆、問屋の召仕の女にはあらず、銘銘に宿を持ちてありながら、旅人を見かけて、集る由。これを思ふに、このいたづらの國有馬の湯女(ユナ)に變ふる所なし。異名を、所言葉にて、しゃくといへり。人の心をくむといふことかと、そこの人に問へども、子細は知らず』

酌に立つ【句】酌をなす役をつとむ。

酌の舞(マヒ)【句】「能(ノウ)の一の舞の蒼(ソウ)の形(カタ)。曲水の宴にて、酌をなしつつ舞ふ意を示す。

酌は髭(ヒゲ)【句】酒の酌は、女ならざれば興味なし。 談語『酌を取る【句】酒の席にて酌の役をつとむ。きのふはけふの物まで しゃくとる女に、何と云ふ物ぞと問へば』

しゃく 杓【名】 ■ひしゃく(柄杓)に同じ。 五人女『住吉詣へのお初尾(ハツヲ)として、しゃく振って、また又頭數(カブス)よみて、飲むも飲まぬも、七文づつの集錢(シフ)出し』■植 纖形(クワイ)科に屬する多年生の草。高さ二三尺、葉は再出羽狀複葉にて、胡蘿蔔(ニンジン)に似たり。春、白色の小花を複繖形花序に開く。各地の山地に自生す。「根尾」

しゃく 尺【名】 ■ものさし(物指)に同じ。■せい。たけ。長さ。

尺を打つ【句】次條に同じ。

尺を取る【句】物指にて長さをはかる。尺を打つ。

しゃく 釋【名】 ■文義の解釋。註釋。■〔佛〕『釋迦の姓を紹(ツ)ぐ意。支那晉の道安の用ひ初めしものといふ。しゃかむに(釋迦牟尼)参照』僧侶の、釋迦の弟子たるを示すために、姓として用ひしもの。明治五年以後戸籍上には、僧侶も本姓を設くべきこととなれり。■〔佛〕淨土眞宗にては、死して一たび寺門に入れば、同じく釋迦の弟子となる意にて、戒名に冠して用ふ。 講釋父は講釋師の略。「俚話」 鏡山錦袍染『釋の方ではのんのんの南龍』

しゃく 借【名】 〔商〕簿記法における、かりかた(貸に對して)の「略。

しゃく 石南【名】 〔植〕**しゃくなげ(石楠)**の別名。

しゃく 周易【名】 〔書〕**しうえき(周易)**に同じ。 古語拾遺抄『周易、シャク』

しゃく 蝦蛄【名】 〔動〕**しゃこ(蝦蛄)**を云ふ。 豊後國の方言』

しゃく 試藥【名】 ■〔化〕『英 Reagent』或物質の存否を檢するに用ふる物質。例へば石灰水が炭酸瓦斯の存否を檢する試藥となる類。■或病に對して、適劑なりや否やを檢するために試用する新藥。

しゃく 私約【名】 わたくしに約束をなすこと、又その約束。

しゃく 尺【助數】 ■長さの單位。丈の十分の一。寸の十倍。現今のは、農商務省保管の白金イリヂウム合金製の原器に記せる標線間の攝氏零下一五度における長さ三十三分の十を尺と定む。これ從前の謂はゆる曲尺(カネジヤク)に相當するものにても建築上に用ひられ、支那唐の大尺に據れるもの、これに對して、同じく唐の小尺も用ひられ、上古は周尺(曲尺の七寸五分五厘に相當す)も行はれたり。せき。 杜詩『水際は只一尺ばかりだになき…松の木などの二三尺ばかりにて』■長さ。たけ。尺も短き所あり、寸も長き所あり 【句】『屈原の卜居に「尺有レ所レ短、寸有レ所レ長、物有レ所レ不レ足、智有レ所レ不レ明」とあり』物にはそれぞれ長短あること。尺を枉(マ)げて、尋を直(ナホ)ぶ【句】『孟子の滕文公下篇に「枉レ尺直レ尋、宜レ若レ可レ爲也」とあり』僅少のものをまげて、他の多くのものを正しくす。

しゃく 勺・夕【助數】 『夕は勺の字の草體より出でしものにて、俗に「せき」とも讀む』■量の單位。升の百分の一。■地積の單位。坪の百分の一。■材料の單位。通常、尺メ(シヤク)の十分の一。

じゃく 弱【名】 ■よわきこと、又その者。「強者を抑へ、弱を扶く」■二十歳又はその前後。**じゃくねん(弱冠)**参照。■いとけなきこと、又その者。

じゃく 寂【名】 〔佛〕■**じゃくめつ(寂滅)**に同じ。■僧の死ぬこと。入寂。

じゃく 餌藥【名】 養生に用ふる藥。 萬葉『依二餌藥事一』

じゃく 弱【接尾】 〔數〕『この數にはやや不足すとの義』運算して得たる數を、或桁にて切上げたる時、その得たる數に添へていふ語。例へば1.3869を1.387弱といふ類。(强に對して)「過の近似値(ソクチ)」参照。

しゃくあ 釋阿【名】 〔人〕**ふぢはらのとしなり(藤原俊成)**に同じ。

しゃくあふり 尺障泥【名】 長くして、裾廣き障泥(アフリ)なるべし。「封。

しゃくい 爵邑【名】 爵位と封邑と。爵

しゃくいん 酌飲【名】 のみもの。飲料物。

しゃくうちはう 射空砲【名】 『英 Anti-aircraft』航空機の射撃に使用する大砲。

しゃくうんせう 釋雲照【名】 〔人〕眞言宗の高僧。出雲國の人。慈雲上人を拜して出家す。明治十三年東京に出でて、目白僧園を開く、仁和寺宮長となり、大僧正に進む。同四十二年寂す。年八十三。

しゃくえ 赤衣【名】 あかき色の衣服。 平治『五位は赤衣を著ればこ』

しゃくえび 【名】 〔動〕あざえに同じ。

しゃくえん 錫鹽【名】 〔化〕鹽化第一錫の結晶。媒染劑として用ひらる。

しゃくか 借家【名】 しゃくや(借家)に同じ。

しゃくか 釋家【名】 ぶっか(佛家)に同じ。

しゃくかい 釋解【名】 かいしゃく(解釋)に同じ。「同じ。

しゃくかう 釋講【名】 かうしゃく(講釋)に

しゃくがう 爵號【名】 爵の名目、即ち公・侯・伯・子・男。

しゃくがう 綽號【名】 あだな。

じゃくかう 弱行【名】 實行力の弱きこと。

しゃくかうほんげ 迹高本下【名】〔佛〕天台宗にて、迹門(モンジク)を高しとし、本門を次位に置くこと。本下迹高。太平記「これ即ち迹高本下の成道(ジャウダウ)なり」

しゃくかく 尺角【名】木材の横断面の一尺四方なるもの。

しゃくかくわんばんき 釋家官班記【名】〔書〕僧家の官位の事を記したるもの。一巻。曾聞親王の著。

しゃくがみ 笏紙【名】朝廷にて、公事(クジ)を行ふ時、内辨などが、その次第を書きて、笏の裏面に貼附けおく紙。笏紙(クツシ)。江次第「令レ押二笏紙一」

しゃくかん 尺翰【名】せきかん(尺翰)に同じ。

じゃくかん 若干【名】『干の字、分解すれば一及び十となるより、一の若(ジャク)く十の若しとの意にていふ』そくばく。

じゃくがん 弱顔【名】『通鑑の陳宣帝紀の胡註に「見レ人輒自羞、而顔有二忸怩者一、爲二弱顔一」とあり』はにかむ顔。

しゃくがん 釋眼【名】次條を見よ。

しゃくがんじゅ 釋眼儒心【句】『佛のまなこ、孔子の心の義』慈悲仁愛の深きこと。

しゃくき 癪氣【名】癪の氣味。

しゃくき 爵記【名】授爵の證として、その授けられたる人に交付する文書。親署の後、御璽(ギョジ)を鈐(ケン)し、宮内大臣年月日を記入して、副署す。

しゃくぎ 笏木・杓【名】笏に造る樹。昔は、一位の材を用ひたり。さくぎ。〔古語〕拾遺「しゃくぎの、みなゐぼね、紅の紙にはりて持ちたる」

しゃくぎ 釋義【名】意義をときあかすこと。註解。解釋。解義。

しゃくきん 借金【名】金を借ること、また借りたる金。借財。借錢。

借金の山【句】借金の多きを山に譬へていふ語。借錢の山。

借金の山なして【句】借金を質に置くべき一物も無く、ただ有るものは借金のみなり。無理に金を工面することの譬。

しゃくぎん 借銀【名】銀子を借ること、又借りたる銀子。かりがね。

しゃくきん-こひ 借金乞【名】次條に同じ。

しゃくきん-とり 借金取【名】借金の催促に來る人。「じ。

しゃくきん-はたり 借金徴【名】前條に同じ。

じゃくきゅう 弱弓【名】力の弱き弓。

しゃくきょ 借居【名】借家にすまふこと。「同じ。

じゃくきょ 若許【名】じゃくかん(若干)に同じ。

しゃくきょく 積極【名】せききょく(積極)に同じ。

しゃくぐ 借區【名】借用の地區。鑛區の探掘權を得ること。「を見よ。

しゃくくう 綽空【名】〔人〕しんらん(親鸞)

しゃくくにち 赤口日【名】『しゃっくにち發音す』しゃくぜっにち(赤舌日)に同じ。

しゃくくにん 借區人【名】鑛區の探掘權を得たる人。探掘人。

しゃくくるとく 積功累德【名】〔佛〕『法華經の提婆品(ダイバ)に「釋迦如來、於二無量劫一難行苦行、積レ功累レ德、求二菩提道一」とあるに本づく。功德を累積する意』佛果を得るために、善根功德を積むこと。太平記「御國忌の日ごとに、種種の御作善(ゴサゼン)、積功累德せらる」「つ。

しゃくくわ 燔火【名】ともしび。たいまつ。

しゃぐくわいせん 社外船【名】我が國の汽船にて、社船以外のもの。

じゃくくわう 寂光【名】〔佛〕『寂は眞理の寂體(ジャクタイ)、光は眞智の光照の義、即ち寂理に即して、智慧の光の諸相を照す意』寂光の本土。

じゃくくわうど 寂光土【名】〔佛〕四土の一。ただ佛のみ住したまふ處。諸身所依(ショエ)の土。四土の區別は立つれども、寂光は法界に周徧する普遍の法體に外ならざるが故に、他の三土も、この寂光一理の上の顯現にあらざるはなし。故に、寂光の本土と稱し、また他の三土に比して、純淨の境なるによりて、寂光淨土ともいふ。寂光のみやこ。本覺眞如のみやこ。寂光。(實報土方便土・凡聖同居(ボンショウドウキョ)土に對して)太平記「釋尊これに由って、寂光土に歸らんとしたまひける處に」

じゃくくわうーぬん 寂光院【名】山城國愛宕(オタギ)郡大原村小野(オノ)山の麓にある天台宗の尼寺。壽永の亂後、建禮門院の閑居したまひ、次いで崩御せられし處。本尊は觀音。建禮門院の御甦像及び阿波内侍の像を安置す。

しゃくくわーえび しゃくくわ蝦【名】〔動〕『石南花蝦の略ならんといふ』しゃこ(蝦蛄)を云ふ。〔西國の方言〕

しゃくくわく 尺蠖【名】〔動〕せきわく(尺蠖)に同じ。

しゃくくわんぺうしきたんゐ 尺貫秒式單位【名】尺度にては尺を單位とし、重量にては貫を單位とし、時間にては秒を單位とすること。

じゃくけい 若契【名】若道のちぎり。男色の契。

しゃくけう 釋敎【名】釋迦の敎。佛敎。

しゃくけう 鵲橋【名】「鵲(カサギ)の橋」に同じ。

しゃくけうぎょくりんわかしふ 釋敎玉林和歌集【名】〔書〕代代の撰集及び傳記の中より、宗門の意にかなへる和歌を撰びたるもの。四卷。僧光啓の撰。

しゃくけうだいりんしふ 釋敎題林集【名】〔書〕經論・釋文を詠める歌どもを代代の撰集・家家の集より採集し、法數・法華の都・喜見城の樂も斯くやと」

じゃくくわうじ 石光寺【名】そめでら(染寺)を見よ。

じゃくくわうじ 寂光寺【名】京都市上京區北門前町にある顯本法華宗の寺。同宗二十一本寺の一。空中山と號す。天正六年日淵の開基。もと上京の室町にありしが、寶永年間火災に遭ひて、ここに移れり。ぼんいんぼう(本因坊)參照。下野國日光山中の寂光瀑の側に在りし寺。伽藍壯麗なりしが、明治十年に燒失して、今は寂光權現の一小祠を留むるのみ。

じゃくくわうじーせん 寂光寺錢【名】寛永銅錢の一。元文二年下野國日光の寂光寺にて鑄造せしもの。黑褐色を呈す。

じゃくくわうーじゃうど 寂光淨土【名】〔佛〕次條を見よ。盛衰記「法性不二の色身(シキシン)は寂光淨土に居すれども、和光同塵の座跡は、亙海の流頻に交れり」

じゃくくわうど 寂光土【名】〔佛〕四土の一。ただ佛のみ住したまふ處。諸身所依(ショエ)の土。四土の區別は立つれども、寂光は法界に周徧する普遍の法體に外ならざるが故に、他の三土も、この寂光一理の上の顯現にあらざるはなし。故に、寂光の本土と稱し、また他の三土に比して、純淨の境なるによりて、寂光淨土ともいふ。寂光のみやこ。本覺眞如のみやこ。寂光。(實報土方便土・凡聖同居(ボンショウドウキョ)土に對して)太平記「釋尊これに由って、寂光土に歸らんとしたまひける處に」

じゃくくわうーぬん 寂光院【名】山城國愛宕(オタギ)郡大原村小野(オノ)山の麓にある天台宗の尼寺。壽永の亂後、建禮門院の閑居したまひ、次いで崩御せられし處。本尊は觀音。建禮門院の御甦像及び阿波内侍の像を安置す。

しゃくくわーえび しゃくくわ蝦【名】〔動〕『石南花蝦の略ならんといふ』しゃこ(蝦蛄)を云ふ。〔西國の方言〕

しゃくくわく 尺蠖【名】〔動〕せきわく(尺蠖)に同じ。

しゃくけう 釋敎【名】「尺蠖の屈める(國姓爺後日合戰)」尺蠖の屈めるは伸びんがため」

しゃくけう 石橋【名】いしばし(石橋)に同じ。支那天台山にありといふ橋。溪流の落ちて瀑布となる處に架り、色青白にして、長さ七丈ばかり。晉の祕、天竺大那爛陀寺の沙門白道猷此所に至りて、親しく五百羅漢を見たりとの傳說あり。また天台山は文殊菩薩の淨土なるより、獅子を配して、文學上材料とせるものあり。

しゃくけう 石橋【名】本朝三國志「神祇・釋敎・戀無情」

しゃくけう 釋敎【名】釋迦の敎。佛敎。

しゃくけう 若契【名】若道のちぎり。男色の契。

しゃくけう 尺蠖【名】〔動〕せきわく(尺蠖)に同じ。

しゃくけう 鵲橋【名】「鵲(カサギ)の橋」に同じ。

しゃくけうぎょくりんわかしふ 釋敎玉林和歌集【名】〔書〕代代の撰集及び傳記の中より、宗門の意にかなへる和歌を撰びたるもの。四卷。僧光啓の撰。

しゃくけうだいりんしふ 釋敎題林集【名】〔書〕經論・釋文を詠める歌どもを代代の撰集・家家の集より採集し、法數・法華

「人生十年曰レ幼學、二十曰レ弱冠、三十曰レ壯有レ室、四十曰レ強而仕」とあるが如く、支那周代の制にて、男子二十歳にして元服せしより曰ふ。弱は若(カヅ)き意。二十歳の男。また年若きこと。大學或問「物に於てこの君弱冠の昔より軍術・劍術妙ありて」

しゃくくわん 借款【名】『款は、經費の義。もと條項の意に用ひられ、簿記の條項の意より、又轉じて經費の意となる。存款(預金)・出款(支出金)などいふ類。くわん(款)參照』しゃくきん(借金)に同じ。

しゃくくわんーはふ 尺貫法【名】我が國にて一般に用ふる、尺度の單位には尺、重量の單位には貫を用ふる度量衡。(めえとる法に對して)

しゃくくわんぺうしきたんゐ 尺貫秒式單位【名】尺度にては尺を單位とし、重量にては貫を單位とし、時間にては秒を單位とすること。

じゃくけい 若契【名】若道のちぎり。男色の契。

しゃくけう 釋敎【名】釋迦の敎。佛敎。

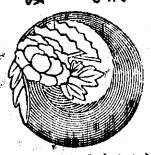
しゃくけう 鵲橋【名】「鵲(カサギ)の橋」に同じ。

しゃくけうぎょくりんわかしふ 釋敎玉林和歌集【名】〔書〕代代の撰集及び傳記の中より、宗門の意にかなへる和歌を撰びたるもの。四卷。僧光啓の撰。

しゃくけうだいりんしふ 釋敎題林集【名】〔書〕經論・釋文を詠める歌どもを代代の撰集・家家の集より採集し、法數・法華

經雜經諸集雜の五部門に分ちたるもの。八巻。僧淨惠の撰。

しやくげうぼたん 石橋牡丹【名】紋所の一。下の圖を見よ。



(んたぼうけくやし)

じやくげつ 若月【名】みかづき(三日月)に同じ。

しやくこ 借庫【名】藏敷料を支拂ひ、他より倉庫を借入ること、又その借入れたる庫。

しやくご 赤後【名】赤舌日(シヤクゼツ)の次の日。

しやくご 尺子【名】ものさし(物指)を云ふ。〔常陸國の方言〕

しやくこう-にち 赤口日【名】しやくにち(赤口日)に同じ。

じやくごき 寂語忌【名】じふさんねんき(十三年忌)の異稱。

じやくこく 弱國【名】兵備の完全せぬ國。「弱き國。」

しやくこつ 尺骨【名】〔醫〕せきこつ(尺骨)に同じ。

しやくこつ 尺笏【名】馬の額より鼻に達する白き斑毛(ブチ)。

しやくこつ-どうみやく 尺骨動脈【名】〔醫〕せきこつどうみやく(尺骨動脈)に同じ。

しやくさい 借債【名】ふさい(負債)に同じ。「同じ。」

しやくさい 借財【名】しやくきん(借金)に同じ。

じやくさう 弱草【名】わか草。

じやくざく 雜供雜供【名】ざくざくじる(雜供雜汁)に同じ。

しやくざし 尺指【名】馬の丈を量る具。尺。

しやくざし 笏差【名】扇を腰に差すに、少し脇の方へよせて差すこと。

じやくさん 弱酸【名】〔化〕『英 Weak acid』解離度の少なるがために、水溶液となりて生ずる水素イオンの量の、比較的少なきもの。例へば食醋中にある醋酸・炭酸及び硫化水素の類。(強酸に對して)

しやくさん-もめん 尺三木棉【名】臺灣に輸出する白木棉。その幅一尺三寸あるをもつて名づく。臺灣木棉。

しやくし 釋氏【名】■釋迦姓に屬する者。

しやかむに(釋迦牟尼)參照。太平記「瑠璃太子、少き心にも、安からぬ事に思し召しければ、我れ年長ぜば、必ず釋氏を滅して、この恥を濯ぐべし、と深く惡念をば起されける」■ぶつか(佛家)に同じ。太平記「釋氏化導(ケダ)の正宗(シヤウシウ)」

しやくけう 釋敎【佛】釋氏の敎(ヲシヘ)に同じ。太平記「今、慶騰法師等、釋氏の敎を傳へて、佛骨の舍利を說く」

しやくし 釋氏の諸王【句】印度にて、釋迦を氏とせし淨飯(ジヤウボン)・白飯(ビヤクボン)・斛飯・甘露飯の四王。太平記「釋氏の諸王、大臣これを見て」

しやくし 釋子【名】〔佛〕釋氏の弟子。(慈子に對して)「略。

しやくし 釋師【名】かうしやく(講釋師)の略。

しやくし 杓子【名】■『子は接尾語』■汁・飯などをすくひ取る具。木・貝・金屬などにて造り、小皿の如き形して、一端に柄を附けたる器。かひ。本朝三國誌「この大佛の側では杓子が耳かき」■しやくしがた(杓子形)の略。■杓子の頭の如く中凹なる形。杓子を渡す【句】姑が嫁に世帶を任す。杓子で腹を切る【句】■實行するを得ず、形式のみなる譬。■とても出來ぬことの譬。「諺語」

杓子は耳掻にならず【句】大なるものは、小さき所に用ひ難し。「諺語」「じ。

しやくし 笏紙【名】しやくがみ(笏紙)に同じ。

しやくし 石神【名】しやくじん(石神)の略。

しやくし 弱志【名】意志の弱きこと、又弱き意志。「わき小供。

じやくし 弱子【名】■年少の小供。■よじやくし 弱翅【名】つばさの力の弱きこと、また弱きつばさ。

じやくし 弱視【名】〔醫〕『羅 Amblyopia』視力障害の一。例へば夜盲の如く、眼鏡を用ひても視力出でず、又、屈折體及び眼底に視力障害を說明すべき何等の變化なくして、視力の弱きもの。その最も高度なるを弁內障とす。色盲も亦一種の弱視なり。

じやくし 寂室【名】〔人〕高僧。姓は藤原、名は元光、佛燈國師を師とす。元應二年入唐し、七年を經て歸朝し、永德寺及び永源寺を創立す。圓應禪師の號を賜はり、正平二十二年寂す。年七十八。「る面相。

しやくし-づら 杓子面【名】中央の凹みたる主義。

しやくし-な 杓子菜【名】〔植〕さじな(匙菜)に同じ。

しやくし-ふ 積集【名】〔佛〕たふ(塔)に同じ。

じやくし-しん 弱震【名】〔地〕何人にも感じ得て、戶障子鳴り、垂下物の動搖を來し、液體の振盪を起す等の程度の强さなる地震。輕震。(烈震・强震・微震に對して)「じ。

しやくじん 石神【名】いしがみ(石神)に同じ。

しやくじめ 尺締・尺〆【名】木材の賣買の單位。一尺平方にて長さ二間なるを尺締一本とし、奇零ある場合には、尺〆何本何勺何才といふ。ざいせき(材石)參照。

しやくしや 沙參【名】〔植〕つりがねさう(釣鐘草)を云ふ。〔越中國の方言〕

しやくしや 錫砂【名】〔鑛〕錫を含める岩石の崩壞して、雨水にあたりて、砂粒の如くなりたるもの。河床より產す。

じやくしや 弱者【名】よわきもの。(强者に對して)

しやくじやう 借狀【名】借りたる證據として、貸主に預けおく證書。借用證書。

じやくじやう 寂靜【名】■せいせき(靜寂)に同じ。■(佛)心身を空寂にして、靜かに觀念を凝したること。

じやくじやう 寂常【名】〔佛〕じやくじやく(常寂)に同じ。

しやくしやうくわ 雪淋科【名】〔植〕きつねのまくわ(雪狀科)に同じ。

じやくじやう-しゆぎ 寂靜主義【名】〔哲〕『英 Quietism』神祕主義の一。人力を以て自然を解脫征服するは不可能事なりとし、運命に安んじて、一切の活動を廢し、靜寂の觀念のみにより、神靈と合體せんとする主義。

しやくしやく 灼灼【貌】しやくせん(灼然)に同じ。

しやくしやく 灼爍爍爍【貌】あざやかなるさま、又光り輝くさま。「に同じ。

しやくしやく 綽綽【貌】しやくせん(綽然)に同じ。

しやくしやく 錫錫【貌】■『顧況の彈三絃篌歌に「珊瑚席一聲一聲鳴錫錫」とあり』琴の音の形容。■『しやくぢやう(錫杖)を見よ』錫杖の音の形容。

しやくしやく 寂寂【貌】しやきしやきに同じ。

じやくじやく 寂寂【貌】せきせき(寂寂)に同じ。

じやくじやく 【貌】さくさくに同じ。「じ。

しやくしゆ 借主【名】かりぬし(借主)に同じ。

しやくしゆ 積聚【名】〔醫〕『五臟・六腑に

毒物又は毒氣の聚積するによりて起れるものと思ひて名づけしもの』**しやく**(癪)に同じ。〔漢方醫書の語〕

しやく-しゆ 釋種【名】印度の釋迦の種族。**しやかむに**(釋迦牟尼)參照。

じやく-しゆ 寂主【名】わかき主君。幼弱なる君主。

し-やくしよ 市役所【名】市長がその事務を取扱ふ役所。市廳。

しやく-しよ 借書【名】**しやくようしよ**(借用書)に同じ。大牟記。借書を調べ、判形を加へて」

しやく-しよ 釋書【名】㊀ぶっしょ(佛書)に同じ。㊁〔書〕**げんかうしやくしよ**(元亨釋書)の略。

しやくす 釋す【動佐變他】釋(ト)く。說明す。大牟記。さなきだに重きが上の小夜衣我がつまならぬつまなかさねえといふ歌の意を以て、人目計を憚候物ぞとこそ覺えて候と、歌の心を釋しければ」

じやくす 寂す【動他變自】『じゃく(寂)を見よ』僧侶死す。入寂す。示寂す。「じ。

しやく-すん 尺寸【名】せきすん(尺寸)に同じ。

しやく-すゐ 杓水【名】一杓の水。大原問答雜載。千尋の堤に杓水を灑ぎて、洪水を漲らし、萬丈の巖より石を拋ちて、大敵を亡すの術」

じやく-せう 弱小【名】㊀弱くして小さきこと。小弱。㊁年齢の少なきこと。年少。弱年。少小。

じやくせう 寂昭【名】〔人〕天台宗の學僧。大江齊光(ナリ)の子。名は定基。參河守に任ぜらる。永延二年剃髮し、初め寂心を師とし、のち源信・仁海二師に學ぶ。長保四年入宋し、長元九年かの地に寂す。年七十三。

しやく-せき 錫石【名】〔鑛〕『英Cassiterite』錫の主要なる鑛石。薩摩國に產す。成分は酸化錫にして、半透明乃至不透明なる短柱狀の結晶をなし、褐色又は黑色を呈し、强き光澤あり。

しやくぜち-にち 赤舌日【名】**しゃくぜつにち**(赤舌日)に同じ。徒然「赤舌日といふこと、陰陽道には沙汰なき事なり。昔の人、これを忌まず。この頃の何者の言出でて忌みはじめけるか、この日あること、末通らずといひて」

しやくぜつ-じん 赤舌神【名】陰陽家にて、大歲西門の番神乃至第三番の羅刹(ラセツ)にて、極惡怨怒(ヲンヌ)、閻浮提(エンブヂ)の衆生を惱亂せしむといふもの。

しやくぜつ-にち 赤舌日・借舌日【名】陰陽家にて、赤舌神の司るといふ日。百事に凶なりといふ正月と七月とは、三日・九日・十五日・二十一日・二十七日、二月と八月とは、二日・八日・十四日・二十日・二十六日、三月と九月とは、朔日・七日・十三日・十九日・二十五日、四月と十月とは、六日・十二日・十八日・二十四日・晦日、五月と十一月とは、五日・十一日・十七日・二十三日・二十九日・六月と十二月とは、四日・十日・十六日・二十二日・二十八日。しゃくにち。「同じ。

しやく-せん 借錢【名】**しゃくきん**(借金)に同じ。

しやく-せん 借錢の山【句】「借金の山」に同じ。宿屋飯盛「世わたりの道に二つの追分や寶の山に借錢の山」「じ。

しやく-ぜん 積善【名】せきぜん(積善)に同じ。

しやく-ぜん 灼然【貌】㊀赤くかがやくさま。きらきら。灼灼。㊁あきらかなるさま。いちじるしきさま。

しやく-ぜん 綽然【貌】ゆるやかなるさま。ゆったりせるさま。「じ。

しやくぜん 釋然【貌】せきぜん(釋然)に同じ。

しやくぜん-こひ 借錢乞【名】**しゃくきんとり**(借金取)に同じ。世間息子氣質「且那の御蔭で、借錢乞の顏を見ずに」

しやく-せんだん 赤栴檀【名】〔植〕**どづせんだん**(牛頭栴檀)に同じ。謠曲「百萬」「毘首羯磨(カツマ)が作りし赤梅檀の尊容」

しやく-そう 錫僧【名】〔佛〕**しゃくぢやうし**(錫杖師)に同じ。「に對して。

じやく-そつ 弱卒【名】よわき兵卒。「强卒に對して。

しやく-そん 釋尊【名】〔人〕**しゃかむに**(釋迦牟尼)の尊稱。公事根源「天龍くだりて、水を注ぎて、釋尊に浴せ奉りしことなり」

しやくそん-ごうたんゑ 釋尊降誕會【名】**しゃくわんぶつゑ**(灌佛會)に同じ。

しやくそん-じ 釋尊寺【名】信濃國北佐久郡小諸(コモロ)町の西、川邊村布引山にある天台宗の寺。本尊は觀世音。天平二十年行基僧正の開基。千曲(チク)川に臨み、山水の勝を以て著はる。俗稱、布引山觀音。

しやく-たい 借貸【名】㊀**たいしやく**(貸借)に同じ。㊁古、國司が、民に官稻を貸して、その利息を收めざること。賑貸。

しやく-たい 釋提【名】〔佛〕**しゃくだいくわんいん**(釋提桓因)の略。「條の略。

しやくだい-きけん 釋提喜見【名】〔佛〕次條に同じ。平家「大梵高臺の閣の上、釋提喜見の宮の中」

しやくだい-きけんぐ 釋提喜見宮【名】〔佛〕**きけんぐてん**(喜見宮殿)に同じ。

しやくだいくわんいん 釋提桓因(梵Śakra devānām Indra)【名】**たいしやく**(帝釋)の梵名。「同じ。

しやく-たいげ 赤帶下【名】**ながち**(長血)に同じ。

しやくだい-ぜんけんぐ 釋提善見宮【名】〔佛〕**きけんぐてん**(喜見宮殿)に同じ。

じやく-だう 若道【名】『若衆道を、略して音讀せるもの』わかしゅだう(若衆道)に同じ。若風俗「おのれその身として、若道の心根やさし」

じやくだう-ぐるひ 若道狂【名】**わかしゅぐるひ**(若衆狂)に同じ。

じやくだう-さかり 若道盛【名】**わかしゅざかり**(若衆盛)に同じ。若俗風「若道盛の人のあるが中に」「じ。

しやく-たく 借宅【名】**しゃや**(借家)に同じ。

しやく-たて 杓立【名】茶杓を立て置く具。

しやく-たふ 積塔・石塔【名】次條を見よ。

しやく-たふゑ 積塔會・石塔會【名】昔、撿挍勾當等が毎年二月十六日に、京都高倉(クラ)綾小路(コウヂ)なる清聚庵にて、その祖神と稱する雨夜(アマヨ)尊を祭り、平家を語りし法會。當日、勾當三人、四條河原に至り、石を積みて塔形に模するを、積塔といふ。

しやく-たらう 尺太郎【名】〔動〕**かはづ**(蛙)を云ふ。「土佐國の方言」

しやく-たらず 尺不足【名】織物などの、一端又は一疋の長さの足らぬこと。

しやく-ち 借地【名】土地を借ること、又その土地。かりち。

しやく-ち 尺地【名】**せきち**(尺地)に同じ。

じやくち 蛇口【名】『蛇の口に似たるよりいふ』㊀銅・鐵・眞鍮等の金屬にて、龍蛇の形に造りたる裝飾物。湯水の注口の先端に附く。㊁蛇の口のごとく銳角をなして開きたる形。

しやくち-けん 借地權【名】〔法〕『英Lease』他人の所有する土地の使用・收益を目的とする權利。我が國の法律の用語にあらざるが故に、或は賃借權のみを指し、或は地上權をも含めていふ等、用法一定せず。

しやくち-にん 借地人【名】〔法〕借地をなしたる人。「じ。

しやく-ちやう 借賃【名】**かりちん**(借賃)に同じ。

しやくぢやう 錫杖【名】㊀『梵Khakkhara喫棄羅(キチ)の譯語。飜譯名義に「梵言二隙乘羅一此云二錫杖一由二振時作一錫錫聲一亦名二聲杖一」とあり』僧侶修驗者の用ふる一種の杖。十八物の一。上部は錫、中部は木、下部は牙又は角にて造り、頭は塔婆の形をなし、これに數箇の鐶(クワン)を附けたり。携へて歩むにつれ、鐶鳴りて、惡蟲毒獸などを警しむるためといふ。しやく。摩杖。攝祿抄「錫杖にてあればへりければ」㊁修驗者の手に持ちて振り鳴らす具。短くして㊀の頭部のみの如きもの。祭文語も、拍子を取るに用ひたり。女殺油地獄「いで一禱と、錫杖振りたて、いらたか數珠さらりさらりと押しもんだり」㊂四箇法要の第四。梵音の次に、一種の頌文(ジユ)を諷ひつつ錫を振ること。

(一)錫杖

錫杖を飛ばす【句】『手練の詩に「上人飛二錫杖一」とあり』錫を飛ばすに同じ。

しやく-ぢやう 尺丈【名】田地を測るに用ふる尺。長さ三尺或は三尺六寸あり。毎六寸に黑線を刻み、端尺を切るに用ふ。

しやくちやう 試薬場【名】内務省の所轄の下に、薬剤の試験證明等を行ひし所。明治九年設置、同十六年廢止せらる。

じやくちやう 寂場【名】〔佛〕じやくめつだうちやう(寂滅道場)の略。太平記、雪山に捨レ身、寂場樹下に端坐し給ふ」

じやくちやう 寂定【名】〔佛〕㊀妄心・妄想を離るること。㊁僧侶の死ぬること。入寂。入定。

しやくちやうがたけ 錫杖嶽【名】〔地〕飛驒國吉城(キツシキ)郡の東北境にある山。

しやくちやうさう 錫杖草【名】〔植〕㊀しやくちやうばな(錫杖花)に同じ。㊁ちやくさう(鹿蹄草)に同じ。

しやくちやうし 錫杖師【名】〔佛〕七僧また九僧の一。法會の時、錫杖を持ちて先行するもの。錫僧。

じやくちやうじゆ 寂場樹【名】〔佛〕釋尊が、その樹蔭を寂場として、正覺を得たる菩提樹。太平記「舍利弗(シヤリフツ)は、寂場樹下に端坐して」

寂場樹下の說法【名】〔佛〕釋迦が、寂場樹下にて、成道(ジヤウダウ)し、直ちに其所にて華嚴經(ケゴンキヤウ)を說きしこと。

しやくちやうばな 錫杖花【名】〔植〕鹿蹄(ノヂシヤ)科に屬する一年生の草。松・樫などの根に寄生す。莖の高さ五六寸乃至一尺、黃褐色又は帶赤色にして、夏季白色の小花を開く。しやくちやうさう。

しやくちやうまめ 錫杖豆【名】〔植〕いんげんまめ(隱元豆)に同じ。

しやくちやうゆう 借住【名】借家に住むこと。借居。僦居。

しやくちよ 錫紵【名】天皇の、二等以上の御親屬の喪の時に著用せらるる淺黑の闕腋(ケツテキ)の袍。喪葬令「錫紵者細布也、卽用二淺黑染一也」

しやくちれう 借地料【名】㊀〔經〕土地そのものの報酬にして、土地より生ずる純所得。㊁〔法〕借地人が、土地の使用料として、地主に支拂ふ金錢その他の物。民法には、借賃・地代又は小作料といひ、これらを總括せる名稱とす。

じやくづれ 蛇崩【名】『沙崩の義ならんといふ』崖(ガケ)などの崩るること。

しやくづゑ 尺杖【名】㊀大形のものさし。㊁馬の尺を指す杖。

じやくてい 弱弟【名】年若き弟。幼弟。

じやくてき 弱敵【名】よわき敵。(強敵に對して)

じやくてき 若敵【名】年齡の若老に拘らず、一度も功を立てざる大將。〔戰國時代の語〕

しやくてつ 尺鐵【名】せきてつ(尺鐵)に同じ。太平記「無二尺鐵之資一」

しやくてん 借店【名】たながり。かりだな。

しやくてん 釋典【名】ぶってん(佛典)に同じ。

しやくてん 釋奠【名】せきてん(釋典)に同じ。然しやくでんもいかならん。くじなどは、かけ奉りてする事なるべし」

じやくてん 弱點【名】よわみ。缺點。

しやくど 尺度【名】㊀せきど(尺度)に同じ。㊁ものさし(物指)に同じ。

しやくど 爵土【名】爵位と領土。

じやくとう 雀頭【名】じやくとうひつ(雀頭筆)の略。

しやくどう 赤銅【名】『せきどう(赤銅)を見よ』㊀〔化〕銅と黃金との合金。紫黑色にして、頗る重し。烏銅。烏金。紫金。㊁次條の略。

しやくどういろ 赤銅色【名】赤銅の如き色。

しやくどういろづくり 赤銅造【名】『こがねづくり(黃金造)を見よ』赤銅にて裝飾を施したること、又その物。貞丈「しやくどうづくりの太刀の、寸のびたるに」

しやくどうづくり 尺籐作【名】弓の籐を一尺おきに卷くこと。

じやくとうひつ 雀頭筆【名】穗を太く短く造りたる筆。

しやくとく 尺牘【名】せきとく(尺牘)に同じ。

しやくとり 酌取【名】宴會の時、酒の酌をなすこと、又その人。盛衰記「酌とりには、盡の女をいだして」

しやくとり 尺取【名】〔動〕次條の略。

しやくとりむし 尺取蟲・尺蠖【名】〔動〕『その前進の狀、尺を取るに似たるよりいふ』鱗翅類中、尺蠖蛾類の幼蟲の總稱。夏・秋の交、主に草木の枝葉に棲み、青・茶褐色、又は灰色等を呈し、形細長くして、首と尾と相應じ、中部を高く揚げて屈伸しつつ前進し、靜止する時は、尾端の足にて體を支へ、樹枝狀をなす。嫩葉を食するより、農林業の害蟲なり。成蟲は蛾となる。つゞりむし。

(しむりとくやし)

しやくとりをんな 酌取女【名】酒の酌をする女。酌婦。「同じ。

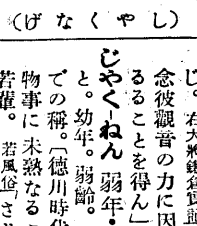
しやくなが 尺長【名】たけなが(丈長)㊀に同じ。

しやくなぎ 海馬【名】〔動〕たつのおとしご(龍落子)に同じ。

しやくなぎ 石南【名】〔植〕しやくなげ(石南)に同じ。

しやくなげ 蝦蛄【名】〔動〕しやこ(蝦蛄)を云ふ。「東國の方言」

しやくなげ 石南【名】〔植〕石南科に屬する常綠灌木。高さ七八尺。葉は楕圓形にして革質、表は滑澤にして、裏は褐色の毛茸(ジウ)を生ず。初夏、梢頭に淡紅色の合瓣花を集生し、十雄蕊と一雌蕊とを具へ、形やや躑躅(ツヽジ)に似たり。各地の深山に自生し、觀賞用として栽培せらる。うつぎばな。さくなげ。しまき。しやくなんげ。


(しやくなげ)

しやくなげくわ 石南科【名】〔植〕顯花植物被子類、雙子葉門、合瓣花區の一科。多くは灌木、半灌木又は多年生の草なれども、稀に喬木なるもあり。石南躑躅(ツヽジ)・八汐(ヤシホ)・梫木(ヒサキ)など、これに屬す。

しやくなん 石南【名】〔植〕しやくなげ(石南)に同じ。

しやくなんげ 石南花【名】〔植〕前條に同じ。

しやくにく 弱肉【名】次條を見よ。

弱肉強食【句】「強食弱肉」に同じ。

しやくにくぢやうだい 赤肉中臺【名】〔佛〕『三密瑜伽(ユガ)成就して、衆生の肉團心卽ち心臟の開敷せし相なりとていふ。古人は、心臟を精神・思考の腑なりと考へたり』人の心臟を八葉の蓮華と見なしたる、その中臺。心蓮(シン)。太平記「大師御入定の室の戸を開かせ給へば、嶺松含レ風、顯二瑜伽上乘之理一、山花籠レ雲、祕二赤肉中臺之相一」

しやくにち 赤日【名】しやくぜつにち(赤舌日)に同じ。

しやくにほんぎ 釋日本紀【名】〔書〕日本書紀の註釋書の存在せるものの中の最も古きもの。漢文にて記す。二十八卷。卜部兼永の校閱を經たり。

しやくにん 酌人【名】㊀酌取をする人。國姓爺後日合戰「見苦しき土の盃、酌人の起居動作も、大國中華の風儀にあらず」㊁特に、藝妓の稱。

しやくねつ 灼熱【名】燒きて熱くすること。燒けて熱くなること。

しやくねん 釋然【貌】せきぜん(釋然)に同じ。右大將鎌倉實記「手足に桎梏を被るとも、念彼觀音の力に因って、釋然として解き脫ることを得ん」

じやくねん 弱年・若年【名】㊀年わかきこと。幼年。弱齡。㊁十一歲より十七歲までの稱。〔德川時代の語〕㊂年若くして、物事に未熟なること。思慮の至らぬこと。若輩。若風情。さりとては若年の至なり、物じて詩歌は等類もあるものぞかし」

じやくねん 寂念【名】〔佛〕俗念を去りたる靜かなる心。寂靜(ジヤクジヤウ)なる心。禪定(ゼンヂヤウ)。謠曲「巻絹」「三難、耳絕えて、寂念閑定(カンヂヤウ)の床の上には」

じやくねん 寂然【貌】㊀せきぜん(寂然)に同じ。㊁〔佛〕『維摩經の弟子品に「法常寂然、滅諸相故」とありて、註に「生日、寂然者、寂靜無事之義也」とあり』寂靜(ジヤクジヤウ)

にして無事なるさま。

じゃくねん 寂念【名】〔人〕ふぢはらためなり（藤原爲業）を見よ。

じゃくねん 寂然【名】〔人〕ふぢはらよりなり（藤原頼業）を見よ。

じゃくねんほふしーしふ 寂然法師集【名】〔書〕寂然法師（藤原頼業）の歌集。一巻。

じゃくねんーもの 弱年者・若年者【名】としのゆかぬ者。わかもの。若輩。

しゃくーのーき 笏木【名】〔植〕いちい（一位）に同じ。

しゃくーのーらう 策労【名】『策は簡の意にて、文詞を書くこと』王朝時代の文官登用試験の一。文章得業生が、方略の宣旨を蒙りて對策し、及第せる時、官位を授けられしこと。多くは式部丞に任じ、五位に叙せらるるを常とす。

しゃくば 借馬【名】馬を借ること、又借りたる馬。かりうま。

じゃくはい 弱輩・若輩【名】㊀弱年の人。（山路）主君頼光、若輩なれども、御思案深く」㊁未熟なる人人。また未熟なる物事。至らぬものごと。弱年。

じゃくはいーもの 弱輩者・若輩者【名】年若き者、未熟なる者を輕んじていふ語。（世繼曾我）「いや某は若輩者のことなれば」

じゃくはいーわざ 弱輩業・若輩業【名】弱輩者のしわざ。未熟者の所爲。（曾我五枚羽子板）「遺恨を晴らすなどといふ若輩業のあるべきか」

しゃくはう 釋放【名】〔法〕公力に因る拘束を免じて、自由ならしむること。

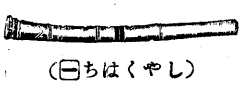
しゃくはう 借方【名】〔商〕かりかた（借方）㊂に同じ。（貸方に對して）〔簿記の語〕

しゃくはうーかんぢやう 借方勘定【名】〔商〕かりかたかんぢやう（借方勘定）に同じ。（貸方勘定に對して）〔簿記の語〕

しゃくはうーきんがく 借方金額【名】〔商〕かりかたきんがく（借方金額）に同じ。〔簿記の語〕

しゃくはうーしや 釋放者【名】釋放せられたる人。

しゃくはち 尺八【名】㊀竪笛の一種。淡竹（ハチク）の根元を、長さ支那唐代の小尺にて一尺八寸（我が國の曲尺（カネジャク）にて十尺四寸五分餘）に切り、表に四つ、背に一つの孔を穿ち、筒の上端を歌口とせるもの。今は寸法一定せざれども、曲尺一尺八寸を普通とす。右手を上にし、左手を下にし、食指及び無名指を孔に當てて奏す。さくはち。〔異名〕㊁紙絹絖などの幅一尺八寸の大いさなるもの。



（しゃくはち㊀）

しゃくはちがめ 尺八鼈【名】〔動〕やりいか（槍烏賊）に同じ。

しゃくはちばと 尺八鳩【名】〔動〕あをばと（青鳩）に同じ。

しゃくはちふき 尺八吹【名】尺八を巧に吹き、又これを吹くを業とする者。

しゃくはちむし 尺八蟲【名】〔動〕ごまふしびけい（胡麻斑飛蝱蛄）に同じ。「と。

しゃくーばつ 釈伐【名】刃物にて斷伐すること。

しゃくばつーあん 釈伐案【名】伐採すべき森林の面積、及び材積を豫定したる表。

じゃくーはん 雀斑【名】そばかす（蕎麥滓）に同じ。

しゃくばーや 借馬屋【名】馬を貸すことを生業とする家。「じ。

しゃくーひ 借費【名】しゃくれう（借料）に同

しゃくーひき 笏引【名】㊀ぎむしねり（尺蠖練）に同じといふ。江次第「練作法有レ二、謂二笏引一鼻高一也」「同じ。

しゃくーびたひ 笏額【名】さくつき（笏額）に

しゃくーびやうし 笏拍子【名】さくびやうし（笏拍子）に同じ。

しゃくーびやく 赤白【名】赤と白と。㊀姓（幕合戦）「赤白二つの川水に心を付けて」

しゃくーふ 酌婦【名】㊁酒の酌をなす女。しゃくとりをんな。おしゃく。㊂田舍の料理茶屋に雇はれて、客の酒の相手をする女。

しゃくふ 【動四他】汲取る。すくふ。

しゃくーぶく 折伏【名】『折の字の吳音、正しくはせちなれども、古來、折の字の吳音と混じて、しゃくと讀み來れり』㊁【佛】邪惡煩惱迷執の類を破折催伏すること。佛菩薩の衆生を濟度するに、この折伏と攝受（シャウ）との二法を用ふ。この二者は佛敎の大綱にして、不動尊は折伏を司り、地藏尊は攝受を主とす。㊂敵を挫きて從はしむること。

しゃくぶくーもん 折伏門【名】〔佛〕折伏の方法を以て、人を佛道に導くこと。（攝受（シャウ）門に對して）

しゃくーぶくろ 尺袋【名】ものさしを入る「る箱。

しゃくーほう 爵封【名】爵位と封邑と。爵止。爵邑。

しゃくーぼん 釋梵【名】〔佛〕帝釋天と梵天と。（釋梵感應を垂れて、日本地へ送り給ふなるべし」

しゃくほんりやうもん 迹本兩門【名】〔佛〕ほんじゃくにもん（本迹二門）に同じ。

しゃくーま 尺魔【名】「寸善尺魔」を見よ。

しゃーぐま 【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）㊀に同じ。

しゃぐーま 赤熊【名】㊁白熊の毛を赤く染めたるもの、又それに似たる髪。（浦島年代記）汐風にもまれて、髪は赤熊」㊂ちぢれ毛にて作りたる入毛。

しゃくまい 借米【名】米を借ること、又借りたる米。「じ。

じゃくまう 雀盲【名】とりめ（鳥目）に同

じゃくまく 寂寞【名】物しづかなること。せきばく。（新古今「じゃくまくの苔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき」

しゃくまくのもん 寂寞の扉（トビラ）【句】靜寂なる住居、又その門。（釋迦如來誕生會）「寂寞の扉を押開き、現れ出でし阿羅羅仙人」

しゃくまくむあいーさんまやー 寂寞無人聲（ムニンゴエ）【句】〔佛〕『法華經の法師品に「若說法之人、獨在空閑處、寂寞無人聲、讀誦此經典、我爾時爲現清淨光明身、若忘失章句、爲說令通利」とあるに本づく』靜かなる形容、斯かる處にて法華經を讀誦する時は、奇瑞ありとていふ。

しゃぐまーさいこ 赤熊柴胡【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）㊀に同じ。「同じ。

しゃぐまーさう 赤熊草【名】〔植〕前條に煩惱迷執の類を破折催伏すること。佛菩薩の衆生を濟度するに、この折伏と攝受（シャウ）との二法を用ふ。この二者は佛敎の大綱にして、不動尊は折伏を司り、地藏尊は攝受を主とす。㊂敵を挫きて從はしむること。

しゃくぶくーもん 折伏門【名】〔佛〕折伏の方法を以て、人を佛道に導くこと。（攝受（シャウ）門に對して）

しゃくぶくろ 尺袋【名】ものさしを入る「る箱。

しゃくほう 爵封【名】爵位と封邑と。爵止。爵邑。

しゃくーぼん 釋梵【名】〔佛〕帝釋天と梵天と。（釋梵感應を垂れて、日本地へ送り給ふなるべし」

しゃくほんりやうもん 迹本兩門【名】〔佛〕ほんじゃくにもん（本迹二門）に同じ。

しゃくーま 尺魔【名】「寸善尺魔」を見よ。

しゃーぐま 【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）㊀に同じ。

しゃぐーま 赤熊【名】㊁白熊の毛を赤く染めたるもの、又それに似たる髪。（浦島年代記）汐風にもまれて、髪は赤熊」㊂ちぢれ毛にて作りたる入毛。

しゃくまい 借米【名】米を借ること、又「じ。

じゃくまう 雀盲【名】とりめ（鳥目）に同

じゃくまく 寂寞【名】物しづかなること。せきばく。（新古今「じゃくまくの苔の岩戸のしづけきに涙の雨のふらぬ日ぞなき」

しゃくまくのもん 寂寞の扉（トビラ）【句】靜寂なる住居、又その門。（釋迦如來誕生會）「寂寞の扉を押開き、現れ出でし阿羅羅仙人」

しゃくまくむあいーさんまやー 寂寞無人聲（ムニンゴエ）【句】〔佛〕『法華經の法師品に「若說法之人、獨在空閑處、寂寞無人聲、讀誦此經典、我爾時爲現清淨光明身、若忘失章句、爲說令通利」とあるに本づく』靜かなる形容、斯かる處にて法華經を讀誦する時は、奇瑞ありとていふ。

しゃぐまーさいこ 赤熊柴胡【名】〔植〕おきなぐさ（翁草）㊀に同じ。「同じ。

しゃぐまーさう 赤熊草【名】〔植〕前條に

しゃぐまーはぎ 赤熊萩【名】〔植〕莧（ケン）科に屬する一年生の草。近年舶載せるもの。高さ一二尺。葉は三葉より成る掌狀複葉にして、各小葉は線形又は倒披針形をなし、鈍頭又は微凹頭にして、先端に齒牙あり。葉脚は楔形をなす。夏日、白色又は淡紅色の小さき蝶形花を開く。

しゃくーみ 曲見【名】能樂（ノウ）の假面（メン）の一。年やや長けたる女の顏をあらはせるもの。「柏崎」の曲などに用ふ。

しゃくーみやう 釋名【名】㊁經論を解釋するに、古來、二段に次第する內の第二段として、題名の意義を解きあかすもの。（梁花「例の大意・釋名・入文解釋（ニフモン）」よりはじめて」㊂【書】せきめい（釋名）を見よ。

しゃくむ 【動四自】中央くぼむ。

しゃーくん 斜暈【名】ななめに照らす夕日。ゆふひ。夕陽。斜陽。「明。

しゃくーめい 釋明【名】ときあかすこと。說

しゃくーめい 綽名【名】しゃくがう（綽號）に同じ。

しゃくーめい 錫命【名】命令をたまふこと。

しゃくーめつ 寂滅【名】㊁【佛】『その體、寂靜（ジャウ）にして、一切の相を離れたる義』ねはん（涅槃）の漢譯。（梁花「眞如・寂滅の相」㊂なくなること。死ぬること。

しゃくめつーだうぢやう 寂滅道場【名】〔佛〕化身（ケシン）佛の有餘涅槃（ウヨネハン）を證せし道場。釋尊にありては、摩竭陀（マカダ）國迦耶（カヤ）山頭、尼連禪（ニレン）河邊の菩提樹下なり」

しゃくめつーいん 寂滅印【名】〔佛〕三法印の一。涅槃（ネハン）の境に體達したることを表徵する印。

じゃくめつーだうぢやう 寂滅道場【名】〔佛〕化身（ケシン）佛の有餘涅槃（ウヨネハン）を證せし道場。釋尊にありては、摩竭陀（マカダ）國迦耶（カヤ）山頭、尼連禪（ニレン）河邊の菩提樹下な

る金剛座上をいふ。寂滅場。寂場。盛衰記「中天竺の摩訶陀國寂滅道場の金剛座、これなり」

じゃくめつ-ちゃう 寂滅場【名】〔佛〕前條の(寂滅)の條下を見よ。

じゃくめつ-ねらく 寂滅爲樂【句】じゃくめつ(寂滅)の條下を見よ。

じゃくもく 寂默【名】〔佛〕■靜かに眞想して言はざること。■むに(牟尼)の漢譯。

しゃくもち 癪持【名】常に癪の病になやむこと、又その人。傾城反魂香「常が癪持、ぶらぶらとしながら」「じ。

しゃくもん 借問【名】しゃもん(借問)に同

しゃくもん 迹門【名】〔佛〕『迹は垂迹の義。大藏法數に「法華經中前十四品名爲二迹門一、亦猶二足跡一、譬如三人之所居則有二行住之迹一也、蓋論釋迦最初成道已來、及中間施レ化節節、唱レ生唱レ滅以至二于今一、成佛度生、皆是從レ本垂レ迹、故名二迹門一」とあり』久遠(ジュラ)の古、既に成佛せる法身佛が衆生濟度のために、しばしばこの世に身を現し、その都度新に成佛の相をあらはすと見ての立場より說く法門、即ち權(ゴン)即(ソク)實の實相を說くもの。法華經全部二十八品の中、第一序品より第十四安樂行品までの前半十四品は即ちこれなり。(本門に對して)

しゃくもん 釋門【名】『釋迦の門下の意』佛門。僧侶。太平記「遠かに釋門の徒となりて、邊鄙に幽居を卜めんと」

しゃくもん 釋文【名】經論を解釋したる文句。俚諺「又天台の釋文にも、法華彌陀眼目の異名とて」

しゃくもん-さんじふろくかせん 釋門三十六歌仙【名】僧侶にして歌に巧なる三十六人、即ち達磨和尚・菩提僧正・大僧正行基・傳敎大師・弘法大師・慈覺大師・智證大師・沙彌滿誓・僧都玄賓・僧正遍昭・喜撰法師・僧正聖寶・素性法師・空也上人・日藏上人・蟬丸・性空上人・少僧都源信・惠慶法師・能因法師・良暹(リャウセン)法師・律師永覺・登蓮法師・大僧正行尊・僧正永緣・俊惠法師・道因法師・西行法師・大僧正慈圓・二品親王守覺・法橋顯昭・寂蓮法師・寂念法師・僧正行意・貞慶上人・高辨上人。正平元年勸修寺榮海の選みしもの。

しゃくもん-さんじふろくかせん-しふ 釋門三十六歌仙集【名】〔書〕前條の三十六歌仙の歌一首づつを集めたるもの。一卷。勸修寺僧正榮海の撰。

しゃくや 借家【名】借りて住む家。かりいへ。かりたく。かりや。借家(シャカ)。

しゃくや 借家【名】借家榮えて、母屋(オモ)倒る【句】する事の者繁盛して、却つて上の者の衰ふる譬。〔諺語〕

しゃくやく 芍藥・勺藥【名】毛茛(キンポウ)科に屬する多年生の草。もと支那より渡來せるものにて、高さ三四尺に達し、葉は牡丹のに似てやや小さく、夏開きて、色は紅白など種種あり。園藝して觀賞に供し、また根を藥用とす。えびすぐすり。かぼよぐさ。ぬみぐすり。やまざけ。紅藥。

芍藥の贈(オクリ)【句】『詩經の鄭風溱洧篇に「維士與レ女、伊其相謔、贈レ之以二芍藥一、古今註に「牛亭問曰、將レ離將レ別、贈以二芍藥一何耶、答曰、芍藥一名將離、故以レ此贈レ之」とあり』支那にて、古、男女の情を厚くするために、互に芍藥を贈りしこと。

芍藥の戲(タハ)【句】男女の情事。

じゃくやく 雀躍【名】『雀のごとく躍る意。雀百まで躍を忘れず』參照』こをとりして喜ぶこと。

しゃくやく 綽約・婥約【說】姿のしなやかなるさま。たをやか。

しゃくやくむし 芍藥蟲【名】〔動〕こがねむし(黃金蟲)に同じ。

しゃくやずまひ 借家住【名】借家にすむこと。かりやずまひ。しゃくやずみ。

しゃくやずみ 借屋住【名】前條に同じ。

しゃくやふだ 借家札【名】かしやふだ(貸家札)に同じ。俚諺古選附錄(文鳴)「夕顏や女の手にて借家札」

しゃくよう 借用【名】借りて用ふること。「金錢。

借ること。

しゃくようきん 借用金【名】借用したる

しゃくようきん-かんちやう 借用金勘定【名】〔商〕借用金を整理する勘定科目。貸方には借入金を記入し、借方には返却金を記入す。借入金勘定。

しゃくよう-ご 借用語【名】〔語〕ぐわいらいご(外來語)に同じ。「じ。

しゃくよう-しよう 借用證【名】次條に同じ。

しゃくよう-しようしよ 借用證書【名】金錢又は物品を借受けたるとき、その借主より貸主に差入るる證書。借用證文。借狀。

しゃくよう-しようもん 借用證文【名】前條に同じ。

しゃくよう-ひん 借用品【名】借用したる物品。かりもの。借用物。

しゃくよう-ぶつ 借用物【名】前條に同じ。

しゃくよう-れう 借用料【名】しゃくれう(借料)に同じ。

じゃくら 雀羅【名】雀を捕へんための網。とりあみ。

門前、雀羅を設く【句】『漢書の鄭當時傳贊に「翟公爲二廷尉一、賓客塡レ門、及レ廢門外可レ設二雀羅一」とあるに本づく』來訪者なきために、門外に鳥網を張り得るほどに寂し。〔諺語〕

門前、雀羅を張る【句】前條に同じ。〔諺語〕

しゃくらう 釋老【名】■釋迦(シャカ)と老子と。■佛敎と道敎と。

しゃくらん 灼爛【名】やけただること。

しゃくらん 借覽【名】書籍などを借りて閱覽すること。

しゃくり 噦【名】さくり(噦)の訛。盛衰記「夢ならば、覺めて後はいかがせんと、噦噎(シクリ)もしあへず泣語り」

しゃくり 疏決【名】■中くぼに刻(エ)ること。■しゃくふこと。すくふこと。■あやつること。■そそのかすこと。

しゃくり 赤痢【名】せきり(赤痢)に同じ。

しゃくり-あぐ 噦上ぐ【動下二自】さくりあぐ(噦上ぐ)の訛。

しゃくり-なき 噦泣【名】さくりなき(噦泣)に同じ。心中宵庚申「泣入り泣入り、しゃくりなき」

しゃくり-びき 疏引・決引【名】しゃくりつつひくこと。狂言脊樂継「鎌倉の方へ、しゃくり引に致さう」

しゃくり-ひく 疏引く・決引く【動四自】すくひ取るやうにして引く。浦島年代記「波も藻屑もこととも せず、引留めんとしやくり引く」

しゃくり-びやう 赤痢病【名】せきりびやう(赤痢病)に同じ。著聞「赤痢病を大事にして、存命殆どあぶなかりけるに」

しゃくり-もどす 疏戻す・決戻す【動四他】しゃくるやうにして戻す。狂言脊樂継「都の方へしやくりてもどさう」

しゃくりやう 酌量【名】くみとること。推量ること。酌酌。

しゃくりやうげんけい 酌量減輕【名】〔法〕裁判所が、犯罪の動機に同情すべき等の點あることを認め、酌量して、法定の刑を輕減すること。

しゃくりやうふ 赤靈符【名】せきれいふ(赤靈符)に同じ。「じ。

しゃくる 釋侶【名】そうりよ(僧侶)に同

しゃくる 噦る【動四自】■噦(シクリ)を爲す。■しゃくりあぐ(噦上ぐ)に同じ。撰集抄「しやくりもあへず泣くめり」

しゃくる 疏る・決る【動四他】『さくる(疏る)の訛なるべし』■中くぼに刻(エ)る。■杓子を使ふ。すくひとる。しやくふ。天の網島「氣をせけば、せくほどまはる車戶のあくるを人や聞きけんと、しゃくってあくれば、しやくって驚き」■からかひあやつる。操縱す。■おだつ。煽動す。敎唆す。

しゃくる-がいし しゃくる 碍子(英 Shackle insulator)【名】ちやだいがいし(茶臺碍子)に同じ。

しゃくれい 釋例【名】解釋の例。

じゃくれい 弱齡【名】じゃくねん(弱年)に同じ。

しゃくれう 爵料【名】古、錢を獻じて、爵位を請求せし料金。叙料(ジョ)。小右記「以二爵料一被二充三築垣料一」

しやく-れう 借料【名】かりちん。借用料。

じやく-れん 若戀【名】若道の戀。若風俗「若戀を忘れもやらず」

じやくれん 寂蓮【名】〔人〕ふぢはらさだなが(藤原定長)を見よ。

じやくれんほふし-かしふ 寂蓮法師家集【名】〔書〕寂蓮の歌集。一卷。

しやく-ろ 借廬【名】しやくや。かりや。

じやく-ろ 石榴・柘榴【名】〔植〕ざくろ(石榴)の訛。狂言(文藏)「榧か、椎か、榛(ハシバミ)か、じやくろか、くるみか、かち栗か」

しやく-ろく 尺六【名】幅又は長さの一尺六寸なるもの。

しやく-ろく 爵祿【名】爵と祿と。位と扶持と。

じやくろ-ぐち 石榴口・柘榴口【名】ざくろぐち(石榴口)の訛。

じやくろ-ぶろ 石榴風呂・柘榴風呂【名】ざくろぶろ(石榴風呂)に同じ。醒睡笑「たてあきの戸なきを柘榴風呂とは何ぞ」

しやく-ろん 釋論【名】㊀〔佛〕經文の文意を一一に解釋すること。(宗論に對して)ろん(論)參照。㊁〔書〕『大品(ダイボン)般若經を釋せし書なるによりていふ』だいちどろん(大智度論)の異稱。(顯敎の語)

しやくろん-しゆう 釋論宗【名】〔佛〕『類聚名物考に「釋論宗付二禪與一眞言、未レ別二立之一」とあり』十一宗の一。禪宗と眞言宗とに附屬して、別立するに至らざるもの。

しや-くわい 社會【名】㊀『荊楚歲時記に「社日四隣並結綜會レ社」とあり。しやさい(社祭)參照』支那にて、社日に鄕村の住民の會合せしこと。㊁『英 Society』多少恒久的なる關係における、二人以上の人の協同的生活の體。㊂同じ種類の人人の仲間。

しや-ぐわい 車外【名】車のそと。(車內に對して)

しやくわい-いうきたい-せつ 社會有機體說【名】〔哲〕『英 Theory of social organism』社會を一個の生物と比較して、單に集合・成立せるものにあらずとし、全體として、各部分相互に相關連せる一種の有機體なりとする見解。

しやくわい-いし 社會意志【名】『英 Social will』社會における集合意志。例へば我が國の武士道の類。社會精神。

しやくわい-いしき 社會意識【名】〔哲〕『英 Social consciousness』社會の成素たる衆人の意識の集合・統一せられたるもの。一般意識。社會心意。

しやくわい-がく 社會學【名】『英 Sociology 又 Social science』社會の組織・職能・進化などにつきて研究する學問。佛蘭西の哲學者コント(A. Conte)によりて始めて組織せられ、英吉利のスペンサア(H. Spencer)に至りて、體系備はる。

しやくわい-きようさん-しゆぎ 社會共產主義【名】〔經〕きようさんしゆぎ(共產主義)に同じ。

しやくわい-きようさん-たう 社會共產黨【名】きようさんたう(共產黨)に同じ。

しやくわい-きよく 社會局【名】內務省の一局。大正九年に同省地方局內の社會課を分離して、獨立せしめしもの。二課に分れ、第一課は罹災救助・窮民救助・軍事救濟・職業紹介・授產所等に關する事項、第二課は感化敎育・兒童保護・共濟組合及び社會敎化事業に關する事項を掌る。

しやくわい-くわ 社會化【名】〔哲〕『英 Socialization』個人又は群衆又は他の社會を化して、自己の社會の成分又は部分となす作用。

しやくわい-くわがく 社會科學【名】『英 Social sciences』社會組織に關係する事物を對象とする科學、即ち社會學・政治學・經濟學などの總稱。社會的科學。

しやくわい-けいざい 社會經濟【名】〔經〕『英 Social economy』人類の社會的結合をなして、互に貨物の交換をなす經濟。產業經濟。(孤立經濟に對して)

しやくわい-けいやく-せつ 社會契約說【名】『英 Social contract』人類が、原始生活より脫して、その間に社會の發生するに至りし起原を、一の契約にありとなす說。英吉利のホッブス(T. Hobbes)・ロック(J. Locke)等の唱道せしもの。みんやくせつ(民約說)參照。

しやくわい-けういく 社會教育【名】『英 Social education』㊀學校以外、即ち社會一般の人に施す敎育。民衆敎育。庶民敎育。(學校敎育・家庭敎育に對して)㊁社會主義に依る敎育。社會と個人との調和を目的として行ふ敎育。

しやくわい-げき 社會劇【名】『英 Social dramas』社會問題に關する思想を表現したる劇。イブセン(H. Ibsen)の作のごとき、殊に有名なり。しさうげき(思想劇)參照。

しやくわい-けふどう-せつ 社會協同說【名】〔哲〕『英 Social collaboration theory』社會的組織は單に摸倣・同情等のみにて組織せらるるものにあらずして、協力の結果なりとする說。

しやくわい-げんしやう-ろん 社會現象論【名】〔哲〕『英 Social phenomenology』社會學の一部。社會はいかなる狀態にあるかの問題を研究するもの。社會的現象。(社會存立論・社會進化論に對して)

しやくわい-しんい 社會心意【名】〔哲〕『英 Social mind』しやくわいいしき(社會意識)に同じ。

しやくわい-しんくわ 社會進化【名】〔哲〕『英 Social evolution』社會の進化、即ち生物進化の結果、人類の間に發生したる社會の、漸次文明の度を增進すること。社會的進化。

しやくわい-しんくわ-ろん 社會進化論【名】〔哲〕『英 Social teleology』社會學の一部。社會進化の概念・事實・法則・理想等を研究するもの。即ち社會はいかに在らんとするか、いかに在るべきかの問題を研究するもの。社會動學。(社會存立論・社會現象論に對して)

しやくわい-しんり 社會心理【名】〔哲〕民族といはず、人種といはず、弘く社會一般に亙りての心理現象。

しやくわい-しんりがく 社會心理學【名】〔哲〕『英 Social psychology』心理學の一分科。社會心理を研究する科學。人種心理學及び民族心理學に比して、一層普遍的・抽象的・主觀的なるもの。

しやくわい-しゆぎ 社會主義【名】『英 Socialism』㊀〔經〕現今の經濟組織は、私有財產制と自由競爭制と並び行はれ、隨って貧富の度著しく懸隔せるにより、これを根本より打破し、財の分配をして、宜しきを得しめんことを目的とする主義の總稱。個人主義と國家主義との調節を目的とするものにして、その方法に對する、學者の見解一ならず、隨って國家社會主義・共產主義・キリスト敎社會主義等種種の別あり。㊁〔經〕きようさんしゆぎ(共產主義)の特稱。㊂〔哲〕敎育上、社會と個人との調和を計り、公共的精神の涵養を目的とする主義。

しやくわいしゆぎ-しや 社會主義者【名】社會主義を唱ふる人。

しやくわい-せいがく 社會靜學【名】〔哲〕『英 Social statics』しやくわいげんしやうろん(社會現象論)に同じ。(社會動學に對して)

しやくわい-せいくわつ 社會生活【名】『英 Social life』孤立せずして、社會的團體をなして生活すること。社會的生活。

しやくわい-せいさく 社會政策【名】『英 Public policy 獨 Sozialpolitik』社會問題を解釋せんがために施行する國家の政策。現今實行せられ、若しくは學說として有力なるものは、相續法・租稅法・工場法等の改良、又は組合設置・普通敎育普及等、これなり。

しやくわいせいさく-がく 社會政策學【名】〔經〕社會政策を研究する學。

しやくわい-せいしん 社會精神【名】〔哲〕しやくわいいし(社會意志)に同じ。

しやくわい-せいど 社會制度【名】『英 Social institution』社會の財產又は階級等に要する國家の制度。

しやくわい-せうせつ 社會小說【名】〔文〕社會の狀態を描寫するを目的とする小說。

しやぐわい-せん 社外船【名】社船以外の船舶。

しやくわい-そんりつろん 社會存立論【名】〔哲〕『英 Social ontology』社會學の一部。社會はいかにしていかなる理法に基きて存立するかの問題を研究するもの。社會理學。(社會現象論・社會進化論に對して)

しやくわい-たう 社會黨【名】『英Socialistic party』社會主義(特に社會共產主義)を執る黨派。

しやくわい-てき 社會的【貌】社會と關聯せるさま。

しやくわいてき-かんじやう 社會的感情【名】『英 Social feeling』人類が社會を組織する自然の情、卽ち同情・愛情の類。

しやくわいてき-くわがく 社會的科學【名】しやくわいくわがく(社會科學)に同じ。

しやくわいてき-げんしやう 社會的現象【名】しやくわいげんしやう(社會現象)に同じ。

しやくわいてき-しんくわ 社會的進化【名】〔哲〕しやくわいしんくわ(社會進化)に同じ。

しやくわいてき-じやうさう 社會的情操【名】〔哲〕『英 Social sentiment』社會に關する情操。

しやくわいてき-じやうしよ 社會的情緒【名】〔哲〕『英 Social emotion』社會に關する情緒。

しやくわいてき-せいくわつ 社會的生活【名】しやくわいせいくわつ(社會生活)に同じ。

しやくわい-どうがく 社會動學【名】〔哲〕『英 Social dynamics』しやくわいしんくわろん(社會進化論)に同じ。(社會靜學に對して)

しやくわい-とうけいがく 社會統計學【名】『英 Demography』統計上より社會の現象を比較研究する學。

しやくわい-ぶんくわ 社會分化【名】〔哲〕『英 Social differenciation』社會が、その進化の一過程として、單純齊一なる狀態より、複雜・不齊なる狀態に進むこと。

しやくわい-みんしゆしゆぎ 社會民主主義【名】『英 Social democratism』民主政治の下に、社會主義の制度を實現せんとする主義。

しやくわい-みんしゆたう 社會民主黨【名】社會民主主義の黨派。

しやくわい-もんだい 社會問題【名】近世における一切の社會に關する問題、卽ち經濟・人口・人種・戰爭及び平和・宗敎・婦人・犯罪・階級・革命等の問題。近世の社會生活にありては、經濟問題がその基調を成すが故に、社會に於ける資本家及び企業家と勞働者との利害衝突に基く、貧富の懸隔を調和せんとすることに關する諸問題を指すこと、殊に多し。

しやくわい-りがく 社會理學【名】〔哲〕『英 Social logic』しやくわいそんりつろん(社會存立論)に同じ。

しやくわい-りんり 社會倫理【名】〔哲〕『英 Social ethic』個人と社會との間、又は社會相互の間における倫理關係。(個人倫理に對して)

しやくわいりんり-がく 社會倫理學【名】〔哲〕倫理學の一部門。社會倫理を究明するもの。

しやくわい-りよく 社會力【名】〔哲〕『英 Social force』社會的聯合中にはたらく一種の力。その實質につきては、學者中種種の說あり、或者は社會の原動力の義として、慾望を指し、或者は社會中に發生し、個人に對して、强制力を有する力の義として、法又は社會意志をその一に數へ、或者は社會化の力をも含めるものと解釋す。

しやくわう 砂鑛【名】さくわう(砂鑛)に同じ。

じやくわう-じ 石王寺【名】〔鑛〕丹波國石王寺山より產する、色黑くして、白狀・銀紋等ある石。硯などに造る。

じやくわうじ-すずり 石王寺硯【名】石王寺にて造れる硯。前條參照。

しや-くわん 舍館【名】宿舍。旅館。

しや-くわん 左官【名】さくわん(左官)の訛。

じや-くわん 蛇管【名】▭ほおすに同じ。▭『獨 Schlangenrohr. 螺線狀に蜷曲せる形の、蛇に似たるよりいふ』液體を蒸餾する時に、煮沸釜より噴出する蒸氣を通じて冷却・凝集せしむる裝置の管。相當に長さを要すれども、場處を塞がぬために、螺線狀に蜷曲せしめて造る。

しやく-ゐ 爵位【名】爵と位と。くらゐ。

しやく-ゐ 借位【名】▭高貴の人に謁見し、又は外國の使臣などに應接するために、無位の者に、一時假に位階を借すこと。▭國守が、その管內の神社に、假に授けたる位。後に更めて、勅許を受くべきものなり。

しやくゐ-きよく 爵位局【名】宮內省にありし一局。局長・主事・屬の職員ありて、爵位及び華族に關する事務を管理せし所。明治二十一年華族局を改稱せしものにて、同四十一年爵位寮と改稱せらる。

しやくゐ-の-かみ 爵位頭【名】爵位寮の長官。寮務を監督せしもの。

しやくゐ-れう 爵位寮【名】宮內省にありし一局。頭(カミ)・主事の職員ありて、爵位・華族及び有位者に關する事務を掌りし所。明治四十一年爵位局を改稱せしものにて、同四十三年廢止し、宗秩(ソウチツ)寮を設く。

しやく-ゑん 釋圓【名】〔人〕ゑいてう(榮朝)を見よ。

しやく-をう 釋雄【名】〔人〕『せゆう(世雄)を見よ』しやかむに(釋迦牟尼)の尊稱。

しやけ 鮭【名】〔動〕さけ(鮭)の訛。〔東京の語〕

しや-け 社家【名】かんぬし。神職。社司。しやか(社家)參照。

しや-け 捨家【名】家を捨てて佛門に入ること。僧侶となること。出家。しやしん(捨身)參照。

じや-け 邪氣【名】もののけ(物化)に同じ。源氏「例の御じやけの、久しく起らせたまはざりつるを」

しや-けい 舍兄【名】實の兄。しやきやう。家兄。(舍弟に對して) 盛衰記「舍兄鎌倉賴朝、深く此の旨を存ず」

しや-けい 寫景【名】風景を描寫すること。

しや-けい 斜景【名】たうけい(倒景)に同じ。

しや-けい 斜傾【名】けいしや(傾斜)に同じ。

しや-けい 斜徑【名】斜なる小路。

しや-けい 斜頸【名】〔醫〕生來、頸の一方に傾けること。

しや-げい 射藝【名】弓を射る術。射術。天神記「日本の射藝さぞ有るらんと見物す」

じや-けい 邪計【名】わるだくみ。惡策。姦謀。

じや-けい 邪徑【名】よこみち。こみち。

じや-けう 邪敎【名】正道に合はざる宗敎。

しや-げき 射擊【名】〔兵〕火砲及び小銃の發射。その目的・方法等に由りて、敎練射擊・戰鬪射擊、間接射擊・直接射擊・一齊射擊・各個射擊等に分つ。

しやげき-ばん 射擊板【名】〔兵〕攻城又は守城の射擊に使用するために調製せる地圖。

しやげき-へう 射擊表【名】〔兵〕しやへう(射表)に同じ。

しや-げざい 瀉下劑【名】〔醫〕單に便通を促すのみならず、その排泄物を液狀に變じて下痢せしむる下劑。(緩下劑・峻下劑等に對して)

しやけ-しん 社家神【名】次條の略。

しやけ-しんだう 社家神道【名】げぐうしんだう(外宮神道)に同じ。

しや-げつ 沙月【名】さげつ(沙月)に同じ。

しや-げつ 斜月【名】▭將に沒せんとして、斜に照らす月。▭名香の一。質は伽羅、香は立田の趣あり。

じや-けつ 蛇結【名】〔植〕じやけついばら(蛇結茨)の略。

じやけつ (英 Jacket)【名】じやけっとの訛。

じやけつ-いばら 蛇結茨・雲實【名】〔植〕『莖の狀、蛇のからみたるが如くなるよりいふ』荳(マメ)科に屬する有毒なる落葉灌木。山野に自生す。高さ約一丈に達し、葉は多數の小葉より成る二回羽狀複葉。莖にも葉にも刺あり。初夏黃色の不整齊花開き、實は莢果をなす。かはらふぢ。うんじつ。さるかけいばら。さるとりいばら。じやけつ。こばんのき。

じやけつと (英 Jacket)【名】洋服の上衣の、僅かに腰に達する程の短きもの。じやけつ。

しやけつ-はふ 瀉血法【名】〔醫〕『獨 Blutentziehung』一種の消炎法として、血液を瀉出せしむること。水蛭(ヒル)又は吸瓢(スヒフクベ)を用ひて行ふものは、その局部的にして、最も簡單なるもの、また鍼にて刺して行ふもの等あり。

しやけ-ぶぎやう 社家奉行【名】室町幕府の職制の一。神社に關する一切のことを掌

りしもの。じしやぶぎやう(寺社奉行)参照。

しやけん 謝遣 【名】 ことわりて去らしむること。

しやけん 奢倹 【名】 奢侈と倹約と。

じやけん 邪険・邪慳 【名】 むごく人を扱ふこと。殘忍。無慈悲。

じやけん 邪見 【名】 ㊀〔佛〕五見の一。自己の迷見を正しとして、正法(シヤウ)を誹謗し、善悪因果の理法の厳存するをも顧みずして、意に介せぬこと。盛衰記「さしもの邪見を改めて、菩提心を發し」 釋迦如來誕生會「後生を知らぬ邪見の家」 ㊁じやけん(邪險)に同じ。 太平記「申すも餘り邪見に無情候へ共」

邪見の網 【句】〔佛〕邪見の參差交絡して、人心を妨ぐるを網に譬へていふ語。

邪見の角(カク) 【句】〔佛〕邪見のかどだつを、角に譬へていふ語。

邪見の幢(ハタ) 【句】〔佛〕邪人の邪見を標榜するを、幢に譬へていふ語。

邪見の刃(ヤイ) 【句】〔佛〕邪見の鋭く烈しきを、刃に譬へていふ語。 井筒業半河内通「無惨の切先邪見の刃」

邪見の山 【句】〔佛〕邪見の高きを、山に譬へていふ語。

有無の邪見 【句】〔佛〕來世を有と見るも無と見るも、共に正しからぬ見解なること。

じやけん-しん 邪見心 【名】 邪見なる心。「むごき心。

しやけん-もの 邪見物 【名】 邪見なる人。むごき者。

しやーこ 車庫 【名】 電車・汽車・自働車などを入れ置く建物。

しやーこ 這箇・者箇 【名】〔佛〕『代名詞のしやこ(這箇)を見よ』禪の極致。箇中の消息。〔禪宗の話〕

しやこ 鷓鴣 【名】〔動〕鶉雞(クイン)類に屬する鳥、支那南方に産す。形、數珠掛鳩(クバトウ)に似て、頭は鶏の如く、腹部に丸く白き紋あり。常に南に飛ぶといふ。

(しやこ)

しやこ 蝦蛄 【名】 ㊀〔動〕甲殻類に屬する軟體動物。長さ三四寸乃至六七寸に達し、形、蝦(エビ)に似て、それよりも扁く、肢の黄色なると尾節の紅色なるとの外は、蒼灰色を呈する。我が國東部の淺海に産し、食用に供す。しやく。しやくくわえび。 ㊁しやこまげ(蝦蛄髷)の略。

蝦蛄で鯛釣る 【句】「蝦(エビ)で鯛釣る」に同じ。〔諺語〕

しやこ 車渠・硨磲 【名】 ㊀〔動〕しやこがひ(車渠貝)の略。 ㊁七寶の一。車渠貝の貝殻を磨きて、裝飾用に供するもの。 和名抄「硨磲、俗言謝古」

しやこ 這箇・者箇 【代】『支那の俗語。者は此の意、後、這と書くに至れり』この。この者。

じやこ 蛇籠 【名】 じやかご(蛇籠)に同じ。

じやこ 雜魚 【名】 ざこ、雜魚)の訛。

しやこう 藉口 【名】『口に藉(シ)くを見よ』いひわけ。せきこう。口實。

しやーこう 射侯 【名】 的のほし。「匠。

しやーこう 車工 【名】 車を製造する職人。車

しやーこう 瀉口 【名】〔地〕河口の、沙洲又は島などに圍まれて、灣を形づくれるもの。盤城國の宇多川における松川浦の類。

しやーこう 謝公 【名】〔人〕 **しやれいうん**(射靈運)の敬稱。

謝公の屐(ゲキ) 【句】『世説の任誕篇に「謝康樂嘗レ山陟レ嶺、必造二幽峻巖障一、千重萬レ不二遍歷一、登蹟一常著二木屐一、上レ山則去二前齒一、下レ山則去二後齒一」とあり』支那晉の謝靈運の、木屐を著けて、登山せし故事。

しやこ-がひ 車渠貝・硨磲貝 【名】〔動〕蝉鰓(ハン)類に屬する軟體動物。我が國にては、小笠原島・琉球・臺灣に産す。殻は長さ三尺餘・幅二尺餘・厚さ六七寸に達し、外面暗褐色、内面は淡黄色を帶び、上下兩殻共に強大なる五條の隆起を有し、殻縁は鋸齒狀をなす。足絲により、海中の岩石に固著す。殻は植木鉢又水盤として用ひられ、又、裝飾品の製造に供せらる。あふぎがひ。しやこ。しやこ(車渠)㊁参照。

しやーこく 赭黒 【名】 あかぐろき色。

しやーこく 車轂 【名】 車のこしき。

車轂撃つ 【句】『こくげき(轂撃)を見よ』

車馬の往來繁き形容にいふ語。

じやこ-くわ 蛇菰科 【名】〔植〕つちくりもちくわ(蛇菰科)に同じ。

じやーごけ 蛇苔 【名】〔植〕蘚苔(クワイ)類に屬する隱花植物。山野・濕地又は水邊の岩上に自生す。體は扁平不規則の葉狀をなし、長さ二寸半乃至五寸・幅二分乃至六分ほどにて、表面に蛇鱗狀の模樣あり。雌器と雄器とは、異株に生ず。

しやこ-さいたう 鷓鴣菜湯 【名】 昔、小供の蟲くだしに用ひし藥。「同じ。

じやこ-すぎ 【名】〔植〕やまごぼう(山牛蒡)にしやこたん 積丹 【名】〔地〕後志國十七郡の一。小樽支廳の管轄。

しやこたん-ざん 積丹山 【名】〔地〕後志國積丹半島にある山。積丹・美國(ビクニ)の兩郡に跨り、高さ四千餘尺。積丹川の水源なり。

しやこたん-だけ 積丹嶽 【名】〔地〕前條に同じ。

しやこたん-だけ 積丹竹 【名】〔植〕次條にしやこたん-ちく 積丹竹 【名】〔植〕 **しやこはんちく**(鷓鴣斑竹)に同じ。

しやこたん-はんたう 積丹半島 【名】〔地〕後志國美國(ビクニ)古宇・岩内・積丹四郡の日本海に突出してなれる半島。その最北端を積丹岬となす。「を見よ。

しやこたん-みさき 積丹岬 【名】〔地〕前條

じやーこつ 蛇骨 【名】 ㊀蛇の骨。 ㊁〔鑛〕『色白くして、蛇の骨に似たるよりいふ』硅華・沸石類などのごとき鑛物。

じやこ-ね 雜魚寢 【名】 ざこね(雜魚寢)を云ふ。〔甲斐國の方言〕

しやこ-はい 車渠盃・硨磲盃 【名】 硨磲にて造りし盃。 國姓爺後日合戰「玉盃・銀盃・硨磲盃なんども用ふべき所、見苦しき土の盃」

しやこ-ばん 硨鴣斑 【名】 名香の一。木質伽羅に近く、香少なく、且つ苦く輕し。

しやこ-はんちく 硨鴣斑竹 【名】〔植〕ねまがり竹の變種。北海道に自生す。稈の高さ一丈餘に達し、纔を蒙れる部分は紫黒色の雲紋あり。烟管・筆管・杖などに造る。しやこたんちく。瑇瑁竹。

(げまこやし)

しやこ-まげ 鷓鴣髷 【名】 女の髪の結ひ方の一。しやこに似たるもの。しやこ。おしやこ。

しやざ 謝座 【名】 古、朝廷にて賜宴の時、群臣の座を立ちて、謝禮を申しし儀式。公事根源「その後、謝座の儀ありて、階をのぼりて、堂上の朦かけに著く」

しやざ 且座 【名】 茶道の七事の一。客三人・頭・半頭の五人を定とし、おのおの花・炭・香・濃茶・薄茶の五伎を分擔するもの。

しやさい 車載 【名】 車につむこと。

車載・斗量 【句】 車に積み、斗にて量るほど數量の多きこと。

しやさい 社祭 【名】 社即ち土の神を祭ること。春・秋二回に行ふを例とし、その日を社日といふ。しやじつ(社日)參照。

しやさい 社債 【名】〔法〕『英 Debenture』公債の一。株式會社又は株式合資會社が商法の規定に從ひて、公募したる負擔に對し、發行する有價證券の示す債務。

しやさい 赦罪 【名】 罪をゆるすこと。

しやさい 謝罪 【名】 罪を謝すること。あやまること。わび。

しやさい 瀉劑 【名】 くだしぐすり。下劑。

じやさい 麝臍 【名】 麝香鹿の臍(ホゾ)より採れる香。麝香のほぞ。「る證券。

しやさいけん 社債券 【名】 社債を表示す

しやさいけん-しや 社債權者 【名】〔法〕社債上の債權を有する者。

しやさいげんぼ 社債原簿 【名】 株式會社又は株式合資會社に備へ置くべき、社債の原簿。株式における株主原簿に相當するもので、社債の金額・總額・利率・償還方法・償還期限・債券の番號・發行の年月日・社債權者の氏名・住所などを記入す。

しやさい-し 謝罪使 【名】 一國を代表して、他國に罪を謝するために派遣せらるる使。

しやさい-しやうきやくくじゆんびき

ん 社債償却資金準備金【名】〔商〕社債の償却資金に充つるため、毎決算期に利益金の一部を控除して設くる準備金。社債償却積立金。

しやさい-しやうきやく-つみたてきん 社債償却積立金【名】〔商〕前條に同じ。

しやーさう 紗窓・紗窗【名】紗を張りたる窓。太平記「紗窓に艶を閉ぢて」

しやーさう 社倉【名】ぎさう(義倉)に同じ。

しやーざう 寫象【名】〔哲〕しやしやう(寫象)に同じ。

しやさう-くわ 莎草科【名】〔植〕ささうくわ(莎草科)に同じ。

しやーさつ 射殺【名】射て殺すこと。

しやさゝ 斜插【名】■ななめにさすこと。■〔文〕漢文にて、文の一段落中に、文意を補ひ、精彩を加へんがために插入する一節。

しやーさん 社參【名】神社に參詣すること。

しやさん 柘蠶【名】〔動〕柘葉をもつて飼育する三眠蠶。繭は黄色にして、紡錘狀をなす。支那四川省地方にて多く飼育す。

しやーざん 赭山【名】草木のなき山。はげやま。

しやーざん 射山【名】『貌姑射山(ハコヤマ)の略』上皇又は法皇の異稱。東鑑「射山事尤可レ奉レ重」

しやし 遮止【名】【名】■さへぎり止むること。■〔佛〕えんま(閻魔)の漢譯。

しやーし 舍飼【名】禽獸を建物内に飼育すること。

しやーし 斜視【名】【動】ながしめに視ること。よこめ。邪視。■やぶにらみ(邪視)に同じ。

しやーし 社祠【名】やしろ。ほこら。

しやーし 社司【名】【歴】かんぬし。神官。神職。新古今「社司ども、貴船(キブネ)に參りて」■府社・縣社又は鄉社の社掌の上に立つ判任官待遇の神職。明治の初、祠官と稱したり。

しやーし 砂嘴【名】〔地〕さし(砂嘴)に同じ。

しやーし 奢恣・奢肆【名】おごりてほしいままなること。

しやーし 奢侈【名】身の程を超えて華美なる生活をなすこと。おごり。贅澤。驕奢。

しやーし 捨施【名】ほどこすこと。

しやーし 舍次【名】『左傳の莊公三年の條に「凡師一宿爲レ舍、再宿爲レ信、過レ信爲レ次」とあり』軍隊の宿泊。

しやーじ 射字【名】小供の遊戲の一。いろは四十七字を紙に書き、一人をして、その中の字に印(シルシ)を附けさせ、傍にて太鼓を打ち、その數を室を隔てて聞きて、その字の何なるかを知ること。

しやーじ 社寺【名】神社と佛寺と。寺社。

しやーじ 謝辭【名】■謝禮のことば。■謝罪のことば。わびごと。

しやーじ 寫字【名】文字をかき寫すこと。

じやーし 邪視【名】しやし(斜視)に同じ。

じやーし 邪思【名】よこしまなる意思。

じやーし 邪侈【名】よこしまにして、おごりたかぶること。

じやーじ 邪辭【名】よこしまなることば。

しやーじいうーりん 社寺有林【名】社寺の所有に屬する林。社寺林。「同じ。

しやーしろ 砂洲【名】〔地〕さしう(砂洲)に在りし一局。全國の神社・佛寺に關することを掌りし所。明治十三年設置、後に宗教局と改稱し、大正四年文部省に屬したり。

しやじ-じやうち 社寺上地【名】舊幕時代、社寺の領有せし朱印地・除地等を、明治四年に政府に上地せしめられしもの。

しやじじやうち-りん 社寺上地林【名】舊幕時代、社寺の領有せし森林を、明治四年政府に上地せしめられしもの。上地林。

しやじじやうち-ゐたくりん 社寺上地委託林【名】しやじほくわんりん(社寺保管林)に同じ。

しやし-しやしやう-しけん 社司社掌試驗【名】社司・社掌たらんとする者につきて、資格の有無を定むる試驗。これに及第したる者は、社司・社掌に補するを得。

しやしせい 奢侈稅【名】奢侈品の所有者、又はその消費者に賦課する稅。享樂稅。

しやーしせい 寫字生【名】■寫字を職とする人。■明治二年大學校に置かれ、公文の繕寫、書史の謄錄を掌りし職員。大・中・少の三等ありて、共に判任官たり。

しやーじつ 寫實【名】■實狀を寫すこと。■社會の實狀を文字に寫すこと。

しやーじつ 斜日【名】ゆふひ。斜陽。

しやーじつ 社日【名】支那にて、立春又は立秋の後の第五の戊の日に、社即ち土の神を祭ること。春の分を春社といひて、五穀の豐熟を祈り、秋の分を秋社といひて、報賽のためにす。しやさい(社祭)參照。

しやじつ-げき 寫實劇【名】現代の世相そのままを題材として演ずる劇。

しやじつ-しゆぎ 寫實主義【名】〔文・美〕『英 Realism』自然を完全なる模範となし、そのありのままを忠實に描寫して、作者の私意を挾まざる主義。(理想主義に對して)

しやじーてんそう 社司傳奏【名】昔、社寺の事を朝廷に執奏せし役。

しやーしひ 奢侈費【名】■奢侈の費用。■〔法〕物の改良又は保存のためにあらずして、裝飾などに供する費用。

しやしーひん 奢侈品【名】奢侈のために用ふる品。おごりの品。

じやーしふ 邪執【名】よこしまなる執念。

しやじふじ-せき 斜十字石【名】〔鑛〕じふじせき(十字石)に同じ。

しやじほくわんりん 社寺保管林【名】社寺の保管に屬する森林。即ち社寺の上地したる森林にして、農商務大臣の許可を得、十五箇年を一期として保管するもの。社寺委託林。

しやーしん 赦身【名】赦免せられたる身。

しやーしん 寫眞【名】■肖像畫をゑがくこと。寫生。■寫眞器械にて、物の形像を寫し取ること、又その寫し取りたる形像。

寫眞を撮(ト)る【句】寫眞器械にて、物の形像をうつしとる。

しやーしん 捨身【名】〔佛〕報恩のために、肉を割き、身を棄つる等の行。婆羅門教にて多く行ふ所なれども、佛教にては、却りてこれを誡む。しやけ(捨家)參照。

しやしん 身抖擻の行體は、山伏修行のたよりなり」

しやーしん 寫神【名】形態に止まらず、その神髓を寫すこと。傳神の筆。

しやーじん 藉甚【名】せきじん(藉甚)を見よ。

しやーじん 社人【名】■『春渚記聞に「因語二其詳於社人」とあり』一村里の人。■しやにん(社人)に同じ。

しやーじん 舍人【名】■『史記の廉頗藺相如傳に「臣舍人藺相如」とあり』門下。食客。めしつかひ。■とねり(舍人)に同じ。

じやーしん 邪神【名】禍を與ふる神。まがみ。賀古教信七箇條「邪神を祈る小忌衣」

じやーしん 邪心【名】よこしまなる心。

じやーしん 邪臣【名】よこしまなる臣下。

じやーしん 蛇心【名】蛇のごとき險險なる心。

蛇心佛口【句】險險なる心をもちながら、口先のみ親切らしくすること。

じやーしん 蛇身【名】蛇のすがた。蟬丸「角は忽ち蛇身となり、鱗を振ひ、炎を降らし」

じやーじん 邪人【名】よこしまなる人。

じやしん-あえんどっぱん 寫眞亞鉛凸版【名】『英 Photozincography』寫眞版の一。寫眞化學的作用によりて、亞鉛の板面に不溶解耐酸層の畫像を作り、次に硝酸にて腐蝕せしめて製する凸版。原圖の複製に適す。寫眞亞鉛版。亞鉛凸版。

しやしん-あえんばん 寫眞亞鉛版【名】前條に同じ。

しやしん-あふばん 寫眞凹版【名】『英 Photogravure』寫眞版の一。寫眞及び腐蝕法を應用して製せる銅凹版。寫眞版中最も優美に印刷するを得。「同じ。

しやしん-あみばん 寫眞網版【名】次條にしやしん-あみめ-どうばん 寫眞網目銅版【名】次條に同じ。

しやしん-あみめ-どっぱん 寫眞網目凸版【名】あみめばん(網目版)に同じ。

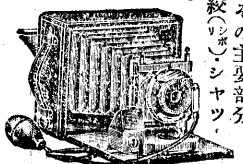
しやしん-あみめばん 寫眞網目版【名】前條に同じ。

しやしん-かん 舍人監【名】春宮坊の被

官。正(シヨウ)佑(ジヨウ)・令史(サカン)・史生(ショウ)・舎人(リヨウ)使部・直丁(サカチ)等の職員ありて、東宮の舎人の名帳(チヤウ)・禮儀・分番の事を掌りし所。みこのみやのとねりのつかさ。

しやしん-き 寫眞器【名】次條に同じ。

しやしん-きかい 寫眞器械【名】〔理〕寫眞撮影に用ふる器械。その主要部分は暗箱(バコ)・レンズ・絞(シボ)・シヤツタア・焦點硝子(グラス)・取枠(トリ)等にして、三脚臺を附するものと、附せざるものとあり。暗箱の前部に取附けたるレンズを通して、後壁に倒映せる畫像を感光板に印せしむるやうに造りたるもの。寫眞器。



(いかきんしやし)

しやしん-きやう 寫眞鏡【名】しやしん(寫眞)[二]に同じ。〔明治の初頃の語〕

しやしん-けっこん 寫眞結婚【名】寫眞の見合(ミアヒ)のみによりて結婚すること。海外の植民地等に在住せる者の、内地より妻を娶るに、多くこの法を用ひたり。

しやしん-げふ 寫眞業【名】寫眞を營業とすること。

しやしん-し 寫眞紙【名】寫眞の燒附に用ふる紙。

しやしん-し 寫眞師【名】寫眞を取る技術者。

しやしん-じゆつ 寫眞術【名】寫眞を取る方法及びその技術。卽ち寫眞器械により、焦點硝子(グラス)に焦點を結びたる畫像を、化學作用によりて、乾板・濕板又はフヰルム等に感光せしめ、暗室にて現像定著して、原板を作り、紙又はその他の材料に印畫せしむる方法。

しやしん-せきばん 寫眞石版【名】『英 Photolithography』寫眞版の一種。原圖たる寫眞を石版に轉寫し、藥品にて腐蝕せしめて、製版印刷するもの。

しやしん-せきばん-じゆつ 寫眞石版術【名】寫眞石版を作る技術。

しやしん-そくりやうじゆつ 寫眞測量術【名】『獨 Photogrammetrie』寫眞器械に經緯儀を裝置し、これによりて撮影したる寫眞によりて、地形圖を描畫する方法。

しやしん-ちよさくけん 寫眞著作權【名】寫眞術による著作物、又は寫眞術により適法に複製せる美術上の著作物の著作權。

しやしん-てふ 寫眞帖【名】寫眞を貼り、または插みおく帖。しやしんばさみ。

しやしん-てんきあふばん 寫眞電氣凹版【名】次條に同じ。

しやしん-てんきはふ 寫眞電氣法【名】製圖學の一科。寫眞及び電氣術を應用して、石版・銅版等に地圖をあらはし、且つ彫刻する方法。

しやしん-とうばん 寫眞銅版【名】寫眞版の中、寫眞網目凸版と寫眞凹版との總稱。

しやしん-ばうえんきやう 寫眞望遠鏡【名】『英 Photographic telescope』望遠鏡の焦點面に乾板を置き、遠方の物體を撮影するに用ふるもの。

しやしん-ばさみ 寫眞挟【名】しやしんてふ(寫眞帖)に同じ。

しやしん-ばん 寫眞版【名】[三]『英 Photomechanical process』有機物と重クロオム酸鹽類との混合物の、日光の作用を受くる時は、水に對する不溶解性に變じ、且つ耐酸性となることを利用して、硝子・銅・亞鉛などの面上に得たる印刷版の總稱。寫眞亞鉛版・寫眞網目版(以上凸版)・寫眞石版・コロタイプ(以上平版)・寫眞凹版・寫眞電氣凹版(以上凹版)等これに屬す。[三]しやしんあみめばん(寫眞網目版)の特稱。

しやしん-ばん 寫眞班【名】旅行などする團隊中の、途中・途中にて實狀を寫眞に取ることを掌る組。

しやしん-はんけん 寫眞版權【名】しやしんちよさくけん(寫眞著作權)の舊稱。

しやしん-ぶんくわうき 寫眞分光器【名】『英 Spectrograph』分光器に寫眞器を附したるもの、特に恒星のスペクトルを撮影するに用ふる裝置。

しやしん-まきゑ 寫眞蒔繪【名】蒔繪の一種。寫眞を漆器面に現したるもの。漆器面に感光性の液を塗り、寫眞原版と組合はせて日光に曝し、後、金屬粉を抹布し、漆の上塗を施して仕上ぐ。

しやしん-めっき 寫眞鍍金【名】寫眞術にて、種板を感光紙に燒附けたるものを、鹽基性としたる鍍金液に浸して、陰畫を陽畫となすこと。

しやしん-ようし 寫眞用紙【名】寫眞に使用する紙。

じやじや【貌】水などの流れ出づるさま。

しやしやしやう 車匠【名】車を製造する職工。車工。

しやしやう 斜檣【名】『英 Bowsprit』帆前船の船首の上部に突出せしめ、前檣よりの支索を繫ぐやうにせる材。木造又は鐵製。やりだし。

しやしやう 社掌【名】神職の階級の一。府社・縣社及び鄉社にては、社司の次位に列し、村社にては、第一位に列する判任待遇の者。明治の初には、祠掌と稱せり。

しやしやう 車掌【名】電車・汽車・乘合馬車・乘合自動車などの中にありて、車中一切の事をつかさどる役。

しやしやう 寫象【名】〔哲〕[三]くわんねん(觀念)[三]に同じ。[三]へうしやう(表象)[二]に同じ。

しやしやう 謝狀【名】[三]謝罪の書狀。わびじやう。[三]謝禮の書狀。書狀。

しやしやう 赦狀【名】[三]罪を赦すことの書面。赦面狀。赦書。赦書狀。[三]大赦又は特赦を命ずる書面。

しやしやう 車上【名】車の上。「すこと。

しやしやう 寫情【名】事情を書きあらはしやしやう 灑淨【名】〔佛〕眞言宗の修法にて、龍・海水を灑(ソソ)ぐと念じ、灑水器の香水を取りて、境場に灑ぐこと。鑁字(バン)の智水を一切衆生の心地に灑ぎ、淨菩提心の種子(シユ)を生長せしむる意にて行ふ。

じやしやう 邪正【名】よこしまなると、ただしきと。正邪(シヤウ)。[三]善惡鏡。邪正は法によらず心によるが故に、禪宗も正法なりといへども、誤れる心あるによりて、邪法となれるなるべし」

邪正一如(ニヨ)【句】〔佛〕「善惡不二(ニ)」に同じ。謡曲「山姥」「邪正一如と見る時は、色卽是空そのままに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり」

しやしやう-うなぎ しやしや鰻【名】〔動〕いかなご(鮹子)に同じ。

じやじやう-うま じやじや馬【名】[三]跳ねあばるる馬。釋迦如來誕生會「はね馬、じやじや馬、放れ馬心任せに跳ねまはれ」[三]傍若無人の振舞をなす人。あばれもの。

しやじやしや【名】〔植〕つりがねにんじん(鐘人參)を云ふ。〔越中國の方言〕

しやしやしやぜみ しやしや蟬【名】〔動〕くまぜみ(熊蟬)に同じ。

じやじやばる じやじや張る【動四自】傍若無人にふるまふ。おのれ一人の意を通さんと努む。「同じ。

しやしやび【名】〔植〕あきぐみ(秋茱萸)に

しやしやぶ【名】〔植〕前條に同じ。

しやしやらくらく 洒洒落落【貌】『洒落・洒落の義』甚だ洒落なるさま。

しやしやりいづ しやしやり出づ【動下二自】臆面もなく、人人の中へ出づ。のさばりいづ。でしやばる。夫婦葉質「上手なる醫者を呼び、見せらるれば、內儀しやしやり出で、これこの病體は、何と御らうじましたと問ふに」

しやしやう 社主【名】その社の持主。

しやしやう 射手【名】[三]弓又は銃砲を發射する人。いて。[三]〔天〕じんぎゅう(人馬宮)に同じ。

しやしやう 謝酒【名】朝廷にて、群臣に宴を賜ふ時、群臣が謝意を表する拜。

じやしやう 邪宗【名】[三]やそけう(耶蘇敎)の異稱。〔江戸時代の語〕

じやしやうもん 邪宗門【名】前條に同じ。

しやしやつ 射出【名】[三]矢・彈丸等を放つこと。發射。[三]一點より直線狀に迸出すること。

しやしやじゆつ 射術【名】矢又は彈丸を發射する術。射法。〔「髓緑」に同じ。

しやしやゆつずる 射出髓【名】〔植〕すわせん

しやしゆつ-みやく 射出脈【名】〔植〕『英 Radiated-veined』並行脈の一種。一點より他方に向ひて、數多の肋脈を直線狀に射出する葉脈。例へば棕櫚の葉の葉脈の類。

しやしゆつみやく-えふ 射出脈葉【名】〔植〕射出脈を有する葉。

しやしゆつ-ねくわんそく 射出維管束【名】〔植〕維管束の木質部と靱皮部とが、縱に畔列して、互に相交錯し、射出狀をなすもの。

しやーしよ 寫書【名】書籍をうつすこと、又その寫したるもの。「同じ。

しやーしよ 赦書【名】しやじよう(赦狀)㊀に

しやーじよう 車乘【名】くるま。車輛。

しやーしよく 赭色【名】あかいろ。赤色。

しやーしよく 社稷【名】■土地の神と穀物の神と。■國家の尊崇する神靈。盛衰記「宗廟社稷の天照太神」■『土地と穀物とは國民を養ふ最重要物なるよりいふ。しや(社)四及びしよく(稷)參照』くに。國家。「する臣。

朝廷。

社稷の臣【句】國家の安危を我が任とする人。

しやーしよじやう 赦書狀【名】しやじやう(赦狀)㊀に同じ。

しやしよ-しゆ 寫書手【名】昔の圖書寮の屬官。書籍を寫すことを掌りしもの。

しやしよ-しよ 寫書所【名】しやきやうしよ(寫經所)に同じ。

しやじ-りん 社寺林【名】社寺の所有する森林。社寺有林。

しやじ-ねたくりん 社寺委託林【名】しやじほくわんりん(社寺保管林)に同じ。

しやーす 謝酒【名】しやしゆ(謝酒)に同じ。

しやす 舍す【動佐變自】やどる。とまる。

しやす 謝す【動佐變自】■暇乞をなして去る。まかる。■しぼみ落つ。落ちる。「花謝して、實むすぶ」

しやす 謝す【動佐變他】■わぶ。あやまる。謝罪す。■禮を述ぶ。感謝す。■ことわる。謝絕す。「客を謝す」

しやす 瀉す【動佐變自】■そそぐ。瀉下す。■腹がくだる。下痢す。

しやーすき 沙漉【名】簀の目を隱さんがために、その上に紗を蔽ひて漉きたる紙。紗の經緯を紙面に殘す。「同じ。

じやーずし 蛇鮨【名】まつかはずし(松皮鮨)に

しやーすゐ 灑水・洒水【名】■水を灑(ソヽ)ぐこと。■〔佛〕眞言宗にて、灑淨用に供する香水。しやじやう(灑淨)參照。

灑水の印(ヰン)【句】〔佛〕眞言宗にて、灑水を標示する印。印を結びて、火を消すこと。論語(鄕黨)「僧正見たまひ、灑水の印を結んで、鑁字(バン)の明(ミヤウ)を誦せしかば、火焰は消えにけりやな」

じやーすゐ 邪推【名】ひがみて推察すること、又ひがみたる推察。「器物。

しやすゐ-き 灑水器【名】灑水㊀を容るる

しやすゐ-ぢやう 灑水杖【名】さんぢやう(散杖)に同じ。「念深し。

じやすゐ-ぶかし 邪推深し【形ク】邪推の

しやーせい 寫生【名】■實物を在りのままに寫し取ること。いきうつし。■繪畫・文章などにて、景色・狀態などをあるがままに寫すこと。「と。

しやせい 射精【名】精液を射出すること。

じやせい 邪正【名】せいじや(邪正)に同じ。「畫。

しやせい-ぐわ 寫生畫【名】寫生したる繪

しやせい-くわん 射精管【名】〔醫〕『羅 Ductus ejaculatorius』精巢より尿道までの稱。輸精管に續きたるものにて、破裂狀の小孔によりて、尿道に開口す。

しやせい-ご 寫聲語【名】〔語〕ぎせいご(擬聲語)に同じ。

しやせい-ぶん 寫生文【名】『正岡子規等の雜誌『ほととぎす』誌上に唱へ初めたる名稱』事物を、客觀的に、ありのままに微細の點まで寫しいだせる一種の文體。

しやせいよう-かさ 寫生用傘【名】長き接柄(エ)を有する洋傘。傘は外側に白布、內側に綠色の布を張るを普通とし、柄は關柄ありて、何れの方向にも傾け得るやうに造りたり。

しやーせう 斜照【名】ゆふひ(夕日)に同じ。

しやーせう 寫照【名】『照は鏡にて、鏡の照す所の面像を摸倣して寫し書く義』肖像を畫くこと。

しやせき 赭石【名】■赤色の石。あかいし。■にいし(丹石)に同じ。

しやーせき 砂石・沙石【名】させき(砂石)に「同じ。

しやーせき 砂磧・沙磧【名】させき(砂磧)に同じ。

しやせき-しふ 砂石集・沙石集【名】〔書〕させきしふ(沙石集)に同じ。

しやーせつ 社說【名】新聞・雜誌などに、その社の說として掲ぐる論說。

しやーぜつ 謝絕【名】いなむこと。ことわり。拒絕。

じやーせつ 邪說【名】よこしまなる說。

しやーせん 射戰【名】弓を射て戰ふこと。

しやーせん 射線【名】發射せる彈丸の進行線。

しやーせん 斜線【名】斜にひきたる直線。

しやーせん 社船【名】我が國の船舶中、政府の命令航路に從業せる會社、卽ち日本郵船會社・大阪商船會社等の所有に屬して、その航路に就航せるもの。その以外の船舶を社外船といふ。

しやーぜん 車前【名】■車の前。■〔植〕おほばこ(車前)に同じ。

しやーぜん 洒然【貌】あかぬけたる狀。さっぱりしたる狀。

しやぜん-くわ 車前科【名】〔植〕おほばこくわ(車前科)に同じ。

しやせん-しふゐ 謝選拾遺【名】〔書〕『文章軌範は謝枋得の選輯に係るより、その遺漏を拾ひ補ふ意にて名づけたるもの』賴山陽が、續文章軌範の採擇蕪雜なるを病へて選べる文集。韓退之・柳宗元・歐陽修及び三蘇の六家より選べり。七卷。

しやせん-とうし 斜線透視【名】〔美〕せいかくとうし(成角透明)に同じ。

しやせん-はいけい 斜線配景【名】〔美〕せいかくとうし(成角透視)に同じ。

しやーそ 社鼠【名】「城狐・社鼠」を見よ。

しやーそう 社僧【名】昔、神社に奉仕せし僧。神宮寺に在りて、神祇のために佛事を修せし僧。宮僧(クソウ)。神僧。

しやーそく 社則【名】會社の規則。

じやーそく 蛇足【名】だそく(蛇足)に同じ。

しやーだ 射墁【名】あづち(堶)に同じ。

しやーだ 借貸【名】罪をゆるすこと。假借。

しやーたい 車體【名】汽車・電車などの、一車として組上りたるもの。

しやーたい 車臺【名】■汽車などの車體を支へ、車輪に連結する鐵製の枠(ワク)。■汽車・電車その他の車の、旅客又は荷物を載する部分。

じやーたい 蛇體【名】蛇のすがた。蛇の形。

しやーたう 蔗糖【名】かんしやたう(甘蔗糖)に同じ。

しやーだう 車道【名】■車の通行する道。■道路の中にて、特に車の通行に充つるために設けたる道。(人道に對して)

じやーだう 邪道【名】よこしまなる道。邪敎。字音「今は、邪道に墮ちなんずる、うきことなりといふ」

しやーたつ 車立【名】和船にて、檣を立て、また帆を上下する等に用ふる綱を卷附くる杙(クヒ)。その存在の場所によりて、艫車立(トモクルマ)・舳車立(ヘクルマ)・筒挾車立(ツツハサミクルマ)・途間車立(アカクルマ)等の名稱あり。

しやーだつ 洒脫【名】俗氣を脫して、さっぱりとしてあること。

しやーたふ 社塔【名】神社と寺塔と。一代男「世之介は、思に限りありとて、金銀洛中に蒔散し、社塔の建立、常燈をとぼし」

じやーだま 蛇卵【名】水銀と硫黃との化合物にして、火を點ずれば、蛇の如くうねりて、甚しく長く伸ぶるもの。

しやーだん 社段【名】神社の階段。

しやーだん 遮斷【名】遮りとどむること。

しやーだん 社團【名】〔法〕『英 Association』■共通なる一定の目的のために結合せる人の團體。何何學會、何何慈善協會等の類。(財團に對して) ■しやだんほふじん(社團法人)の略。

しやだん 社壇【名】■『唐書の禮樂志に「郊社令、立壇於社壇四隅」とあり』支那にて、社即ち土の神を祭る壇場として、土を盛りて、上を平かにせる處。**しやしよく**(社稷)參照。■神を祀りたる處。やしろ。社殿。太平記「自餘の社壇には事替って」

しやだんき 遮斷器【名】『英 Circuit breaker 又は Cutout』開閉器の一。電流の通ぜる回路を切開くためのもの。多くは自働的なるが故に、單に遮斷器といへば、通常は自働遮斷器を意味す。

しやだんはふじん 社團法人【名】〔法〕『英 Corporation』私法人の一。法律上人格を有する社團。その目的により、公益法人と營利法人との別あり。(財團法人に對して)

しやち 鯱【名】■〔動〕さかまた(逆文)に同じ。■しやちほこ(鯱鉾)(二)の略。

しやち 社地【名】神社の地域。神領。神域。

しやち 砂地・沙地【名】さち(砂地)に同じ。

しやち 車知・車地【名】■重量ある物を動かすに用ふる器械。中央に堅固なる軸柱を備へ、その上端に四箇の腕木を有するもの。地上に固著せしめ、軸の腕木を押せば、中央の軸回轉して、次第に繩の一端軸部に卷附くを以て、繩の他端を以て縛せる移動せしむべき目的物は、漸次に曳寄せらるるに至る。絞車。神樂棧。■船具の一。綱を卷上ぐるためのもの。軸と轆との車立(シヤタツ)と筒挾(サツバ)とにて用ふ。「譯。

しやぢ 遮持【名】〔佛〕だらに(陀羅尼)の漢譯。

しやぢ 邪智【名】わるがしこき才智。わるぢゑ。奸智。

しやぢがはら 鯱瓦【名】鬼瓦と同樣に屋根の端に附くる瓦の、鯱の形に造れるもの。鯱鉾(シヤチホコ)と同じく、火災を防がんとの迷信に依るといふ。しやちほこがはら。「じ。

しやぢく 車軸【名】しやぢゆく(車軸)に同

しやぢくさう 車軸草【名】〔植〕しやぢゆくさう(車軸草)に同じ。

しやぢくも 車軸藻【名】〔植〕しやぢゆくも(車軸藻)に同じ。

しやちこばる 鯱張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)に同じ。

しやぢ-しよくぶつ 砂地植物【名】さぢしよくぶつ 砂地植物)に同じ。

しやぢ-ばる 鯱張る【動四自】しやちほこばる(鯱鉾張る)の略。今國姓爺「血まみれの劍提げ、しやち張りかへって歸りけり」

しやぢ-ほこ 鯱鉾・鯱【名】■想像上の海獸。全身黑く、ほぼ魚形にして、頭、虎の如く、背には刺ありといひ、海中の產なるため、火を防ぐ効ありとて、その形を金屬に鑄造しなどし、宮殿、樓門などの棟の兩端に附けて、裝飾の用をも兼ねしむること多し。もと支那の蛮吻(シフン)の變形なるべし。さちほこ。國姓爺「鯱鉾天に鰭振って、石疊高く築上げたり」■〔動〕さかまた(逆文)に同じ。■次條の略。

しやぢほこ-がはら 鯱鉾瓦・鯱瓦【名】しやぢがはら(鯱瓦)に同じ。

しやぢほこ-だち 鯱鉾立・鯱立【名】頭を下にし、兩手をつきて、足を上方に直立せしめて立つこと。さかだち。しやっちよこだち。さっちよこだち。

しやぢほこ-ばる 鯱鉾張る【動四自】■鯱の如くいかめしく構ふ。しやっちばる。■屈曲し得ぬやうに、固くなる。圓滑ならず。しやっこばる。しやっちきばる。しやっちよこばる。「同じ。

しやぢん 砂塵・沙塵【名】さぢん(砂塵)に同じ。

しやぢん 車塵【名】車の通過せし後に起つ塵(ヂン)。

しやぢやう 社長【名】■古、支那にて、一村里の長たる者。■臺灣の行政區劃の一たりし社の長。明治四十二年に區長と改稱せり。■社團などの代表者。會社の長。

しやぢやう 赦帳【名】江戸時代に寬永寺又は增上寺にて、幕府のために法事を行ふ際、刑に處せられたる者の親戚より、この兩寺に對して赦免を請ふ時、兩寺にて、その名を記して、幕府に差出したし帳簿。幕府にては、檢閱の上、赦すべき者に對しては、法事の場に召して、直ちに放免せり。

しやぢやう 舍長【名】■『史記の扁鵲傳に「爲入舍長」とありて、註に「守客館之師、故號云舍長也」とあり』舍の長。宿舍のかしら。■明治初年の大學の職員の一。同三年もとの寮長を改稱せしもの。同四年廢せられたり。「いば。

しやぢやう 射場【名】弓などを射る場所。

しやぢやう 寫場【名】寫眞を撮影するために設けたる場所。寫眞のうつしば。

しやぢやう 砂場・沙場【名】さぢやう(砂場)に同じ。

じやぢやう-じゆ 邪定聚【名】〔佛〕三定聚の一。つひに證悟することなくして、必ず地獄に入るべき人の位。(正定聚・不定聚に對して)

しやぢやう-せき 斜長石【名】〔鑛〕『英 Plagioclase』石灰と曹達とを含める長石。火成岩中に普通に存在し、三斜晶形に結晶し、往往聚片雙晶をなす。石灰と曹達との割合によりて、曹長石・曹灰長石・灰長石等に分つ。「に同じ。

しやぢやう 砂中・沙中【名】さぢう(砂中)に同じ。

しやぢやう 車中【名】車の中。車内。

しやぢやう 社中【名】社の仲間。組合のうち。なかまのうち。

しやぢやう-たい 斜柱體【名】〔數〕『英 Oblique prism』角壔(カクタウ)の側面が端面に直交せざるもの。

しやぢゆく 車軸【名】■車の心棒。しやぢく。■〔植〕しやぢゆくさう(車軸草)の略。車軸の雨【句】『次條を見よ』大雨の形容。

車軸の如し【句】『雨、車軸の如し』を見よ』大雨の譬。宇治拾遺物語「車軸のごとくなる雨降りて、天下忽ちにうるほひ」

車軸を下(クダ)す【句】前條に同じ。盛衰記「降る雨車軸を下して、鈴鹿(カシカ)川に洪水漲りありて」

車軸を流す【句】前條に同じ。大原問答「車軸を流す雨」

車軸を降らす【句】前條に同じ。太平記「大雨、車軸を降らす」

しやぢゆく-わんせつ 車軸關節【名】〔醫〕『羅 Trochoides』可動關節の一種。關節面は骨の縱軸と一致し、一方の骨が他の骨を中軸として、その周圍を廻轉するもの。例へば、第一頸椎が第二頸椎の齒狀突起の周圍を回轉する類。

しやぢゆく-さう 車軸草【名】〔植〕苣(ヂヤ)科に屬する多年生の草。北地又は高山に自生す。高さ約一尺に達し、葉は四乃至七箇の披針形なる小葉より成る掌狀複葉。秋季、葉脈の花軸上に、淡紅色又は白色の蝶形花數箇を著け、長楕圓形の莢を結ぶ。あみだがさ。しやぢゆく。

しやぢゆく-も 車軸藻【名】〔植〕輪藻類に屬する隱花植物。淡水、殊に清澄なる流水に生じ、形やや杉菜に類し、綠色にして細く、長さ尺餘に達することあり。夏盛んに生じ、冬に至れば枯死す。

しやぢゆく-も-しよくぶつ 車軸藻植物【名】〔植〕りんさうしよくぶつ(輪藻植物)に同じ。

しやぢゆく-も-るゐ 車軸藻類【名】〔植〕りんさうるゐ(輪藻類)に同じ。

しやちら-こはし しやちら强し【形】硬くこはし。日本武尊吾妻鑑「さぞ眞黑なしやちごはい肌へ、おおむくつけや、うるさや」

しやちら-さんばう しやちら三寶【副】手あたり次第に。心中刃は氷の朔旦「且那のかけも何もかもしやちらさんばう、近附中に、痛手を負はせ、動かれぬ身になりし故」

しやつ 襯衣(英 Shirt)【名】西洋風の襦袢。しやっつ。

しやつ【代】罵りていふ第三人稱の奴(ヤツ)。きやつ。平家「しやつこゝへ引寄せよと」に同じ。

しやづき 寫圖器【名】しやくづき(縮圖器)に同じ。

しやっき 【名】きりんに同じ。

しやっきやく【名】突張り又はしやちほこばること。〔室町時代の方言〕

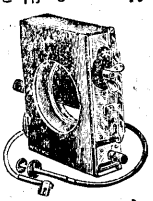
しやっきり【副】屹として突張るさま。しかと直立して動かぬさま。

じやっく(英 Jack)【名】トランプの牌(パイ)の一、僕又は兵士の姿を畫けるもの。

しゃっくり 噦【名】さくり(噦)の訛。 孕宿鑑「姫が閨へ忍んで、ぬっくりやらしゃっくりやら、疑しくば戸を明けうか」

しゃっくる-がいし シャクル碍子(英 Shackle-insulator)【名】しゃくるがいし(シャクル碍子)に同じ。

しゃったあ(英 Shutter)【名】寫眞術にて速寫を行ふ場合に、自動的にレンズの蓋(ふた)を迅速に開閉し得るやうに仕掛けたるもの。レンズの前面に插込むもの、レンズに取附けたるもの、又ビントグラスの前に裝置するもの等あり。構造は、これに附屬せるゴム球、又は紐の一端を押せば、直ちに開閉作用を爲す。


(あたつやし)

しゃっち 【副】しひて(強ひて)を云ふ。〔豐後國の方言〕

しゃっちきばる 鯱鉾張る【動四自】しゃちほこばる(鯱鉾張る)の訛。

しゃっちこばる 鯱鉾張る【動四自】しゃちほこばる(鯱鉾張る)の訛。

しゃっちょこだち 鯱鉾立【名】しゃちほこだち(鯱鉾立)の訛。

しゃっちょこばる 鯱鉾張る【動四自】しゃちほこばる(鯱鉾張る)の訛。

しゃっつ【名】しゃつの訛。

しゃっつら しゃつ面【名】しゃつら(しゃ面)の訛。本朝三國誌「ええ憎い奴め、誰れかある、それしゃっつらはれ」

じゃっぱん(英 Japan)【名】〔地〕『伊太利人マルコポオロ(Marco Polo)の紀行文中にZimgoa(「日本」の支那音の訛)と記して、初めて我が國を歐洲に紹介せしものの、更に轉訛したるもの』英國人によりて稱せらるる我が國の稱呼。じゃぱん。

しゃつ-ばら しゃつ原【代】きゃっぱら(彼奴原)に同じ。 文武五人男「何條しゃつばら來れよかし、搦め捕って、汝等に某が力の程を見せんずもの」

しゃっぷ 【名】しゃっぽの轉。〔俚語〕

しゃっぷり 【貌】さぶりに同じ。 曾我會稽山「ゆんでに廻はってしゃっぷり、めてへ廻はって」同じ。

しゃっぽ(佛 Chapeau)【名】ばうし(帽子)に同じ。

しゃつ-め しゃつ奴【代】きゃっめ(彼奴奴)に同じ。國姓爺合戰「しゃつめ共に遁がすな」

しゃ-つら しゃ面【名】顏を罵りていふ語。しゃつら。平治「やれおのれは義平が首討つ程の者か、…惡しく斬るならば、しゃつらに喰ひつかんずるぞ」

しゃ-てい 舍弟【名】實の弟。おとうと。家弟。(舍兄に對して)

しゃ-てい 沙底【名】さてい(沙底)に同じ。

しゃ-てい 沙汀【名】さてい(沙汀)に同じ。

しゃ-てい 射程【名】〔兵〕彈丸を發射したる時、その發射點と落點との直距離、又は落下して十分の効力を發揮し得る地點までの距離。後者を有効射程といひ、前者の到達し得る限度を、最大射程と稱す。

しゃ-てい 這底【名】しゃり(這裏)に同じ。

しゃ-てい 斜堤【名】〔兵〕塹前の死角を消滅し、内岸壁を掩護するために、外岸上に接して設くる積土。

しゃ-てき 射的【名】的に向ひて小銃を發射すること。

しゃてき-じゅう 射的銃【名】射的に用ふる、小形にして輕便に作りたる鐵砲。

しゃてき-ぢやう 射的場【名】次條に同じ。

しゃてきば 射的場【名】射的を行ふところ。しゃぢやう。しゃてきぢやう。

しゃ-てつ 車轍【名】車の走りすぎたるあと。わだち。

しゃ-てつ 砂鐵【名】〔鑛〕さてつ(砂鐵)に同じ。

しゃ-でも むて-でも 遮でも無でも【副】いやでもおうでも。しゃにむに。しゃうちむっち。「同じ。」

しゃ-てん 射田【名】しゃでん(射騎田)に同じ。

しゃ-てん 社殿【名】神社の神體を安置する殿堂。やしろ。「神田。」

しゃ-でん 社田【名】神社に附屬せる田地。

しゃ-ど 赭土【名】色の赤き土。主として、赤色酸化鐵を含む。あかつち。

しゃ-ど 砂土【名】さど(砂土)に同じ。

しゃ-とう 沙頭【名】さとう(沙頭)に同じ。

しゃ-とう 社頭【名】神社のほとり。神前。

しゃ-とく 謝德【名】德を謝すること。曾我五人兄弟「救恩救德のためなれば」

しゃ-とく 舍匿【名】かくまふこと。

じゃ-どく 邪毒【名】邪氣ある毒。太平記「惡念を發して、遂に三七日が中に、壇上にして死にける、その怨靈果して邪毒をなしければ」

じゃ-どく 蛇毒【名】だどく(蛇毒)に同じ。

しゃ-とる しや取る【動四他】とる(取る)を强めていふ語。

しゃな 遮那・沙那・舍那【名】〔佛〕■『びるしゃな(毘盧遮那)の略』だいにちによらい(大日如來)に同じ。 謠曲(參宰)「峯には、遮那の梢を並べ、麓に止觀の海をたたへ」■〔書〕しゃなきゃう(遮那經)の略。

しゃなきゃう 遮那經・止觀(ヂクワン)【句】■〔書〕遮那經は眞言宗、摩訶止觀は天台宗の敎義の由る所なるより、いふ。■眞言宗と天台宗と。太平記「遮那止觀の兩宗を置かる」

しゃな-ごく 遮那の果德【句】〔佛〕大日如來の具へたる佛德。野守鏡「大日如來不可德の因果を攝して、遮那の果德あらはし」

しゃな-ごく 遮那の果滿【名】〔佛〕大日如來の佛果の衆德圓滿なること。盛衰記「誠にこれ四隅四行の薩埵、因緣合成(ガッジョウ)して、中央中臺の遮那の果滿現じたまふ」

しゃな-ごく 遮那の大戒【名】〔佛〕ぼんまうかい(梵網戒)に同じ。平家「傳敎大師、入唐歸朝の後、圓頓の敎法を此所に弘め、舍那の大戒をその中に傳へてより以來」

しゃな 紗那【名】〔地〕千島國九郡の一。擇捉(エトロフ)島の中部。根室支廳の管轄。

しゃ-な 車內【名】車のうち。車中。(車外に對して)

しゃ-ない 社內【名】■社殿の內。社の境內。 生玉心中「今日は天滿の社內の茶屋で」■一會社の內。

しゃないど-ほふ シャナイド法(英 Cyanide process)【名】〔化〕せいくわほふ(靑化法)に同じ。

しゃな-きやう 遮那經【名】〔書〕だいにちきやう(大日經)の異稱。

しゃなぐる【動四他】かなぐるに同じ。 千兩幟「弱みをつけこむ厄病のかみ(神髮)もかしらも、ひきしやなぐり」

しゃな-けうしゅ 遮那敎主【名】〔佛〕しゃな(遮那)(二)の敬稱。 謠曲(天會)「遮那敎主の祕法を受け」

しゃな-ごふ 遮那業【名】〔佛〕每日、遮那經・孔雀王經・不空羂索(フクウケンジャク)經・佛頂經等の護國の眞言を長念すること。大戒を受けたる者に課す。

しゃな-しゃな 【貌】『じょなめくを見よ』しゃならしゃなら。すなすな。すならすなら。 續歐加留多「しゃなしゃな振りてぞ歸りける」

しゃなぶつ 遮那佛【名】〔佛〕しゃな(遮那)の敬稱。

しゃなら-しゃなら 【貌】しなやかに身をこなすさま。 日本武尊吾妻鑑「心に染まぬ歩みぶり、しゃならしゃならと蹴つまづく」

しゃ-に 沙尼【名】〔佛〕しゃみに(沙彌尼)の略。「條下を見よ。

しゃ-に-かまふ 斜に構ふ【句】しゃ(斜)のやう(大日經)の異稱。

しゃ-にち 社日【名】しゃじつ(社日)に同じ。

しゃ-にふきん 社入金【名】神社の收入金。卽ち國庫供進金・賽錢(サイ)・守札料・祈禱料・神樂料・境內外收得金など、神社に納入する一切の金額。

しゃに-むに 遮二無二【副】めちゃに。むやみに。むりに。しゃでもむでも。

しゃ-にん 社人【名】神社に仕ふる人。かんぬし。 吉野御幸「社人の烏帽子・淨衣を著せ」

じゃ-ねい 邪佞【名】よこしまにしてへつらふこと。

じゃ-ねん 邪念【名】よこしまなる考。純粹ならぬ念慮。

しゃのく 車匿(梵 Chandaka(闡釋迦))【名】■〔人〕『樂欲(ゴヨク)の義』悉達(シッタ)太子、卽ち釋迦が王宮を脫して、頭陀(ズダ)となりし時、太子を載するために、犍陟(ケンチ)といふ馬を牽出でし馭者。後出家して、比丘(ビク)に同じ。

しゃなぶつ 遮那佛【名】〔佛〕しゃな(遮那)

となり、悪口の性改まらず、悪口車匿とも悪性車匿ともいはれしが、佛涅槃(ネハン)に臨みて、阿難に命じて、默擯法を以てこれを治せしめ、後に果を證せり。車匿童子。車匿舎人。さのく。㊁馬丁。べったう。

しやのく-どうじ 車匿童子【名】〔人〕前條㊀に同じ。

しやのく-とねり 車匿舎人【名】〔人〕『舎人は馬丁の義』前前條㊀に同じ。平家、昔、悉達太子の檀特山へ入らせたまひし時、舎匿舎人こんでい駒を賜はりて」

じやーのこ 蛇子【名】〔動〕うみうま(海馬)に同じ。

しやのしやのころも 紗紗衣【名】傀儡師(クワイライシ)のうたふ、小唄(コウタ)の一なるべしといふ。一説に、しやのしやはしやなしやなに同じかるべしと。

じやーのすけ 蛇之助【名】『蛇は物を呑むといふより洒落(シヤレ)ていふ』のみすけ(飲助)に同じ。

しやのたいぶ 《英 Cynotype》【名】シャン化物を用ひて得たる寫眞畫。青色を呈し、繪圖面などの複寫に應用す。青寫眞。

じやーのひげ 蛇鬚・沿階草【名】〔植〕りゅうのひげ(龍鬚)に同じ。

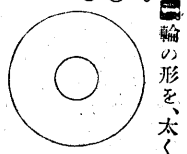
じやーのーめ 蛇目【名】㊀輪の形を、太く畳きたるもの。紋所とす。

じやののめがさ(蛇目傘)の略。㊁じやののめまはし(蛇目廻)の略。㊂肘壺の摩擦を減ずるため、その間に挿入せる輪。

蛇目の傘(カサ)【句】じやののめがさ(蛇目傘)に同じ。

じやののめがさ 蛇目傘【名】さし傘の紙を黒く又は赤く蛇の目の紋のごとく塗りたるもの。じやのめ。

じやののめ-ぐさ 蛇目草【名】〔植〕㊀褐色藻類中の海藻。形、扁平にして、上部は扇状に擴張し、下部はやや硬く、細き根状をなして、他物に附着す。全體褐緑色なれども、海中にありては、美しき碧色の光輝を放つことあり。うみうちは。みみたけ。㊁くじゃくさう(孔雀草)㊀に同じ。


(じやのめ㊁)

じやののめ-さう 蛇目草【名】〔植〕前條に同じ。

じやののめ-まはし 蛇目廻【名】廻舞臺の中央部は元のままとし、その外部の蛇目形の部分のみを廻轉すること。じやのめ。

しやーば 車馬【名】㊀車と馬と。㊁車に附けたる馬。

しやば 娑婆・娑婆《梵 Sahā》【名】〔佛〕㊀『Sahāは雜會(ザフ)の義にて、六趣の衆生の雜處』釋迦一佛の化境(クワケウ)たる三千大千世界。娑婆世界。娑婆。㊁この世。現世。薩摩訶(マカ)娑婆が冥土かいかにもと」㊂牢獄のそと。〔囚人の話〕㊃遊廓のそと。〔遊女の話〕

娑婆以來【句】『隔世の感あるよりいふ』久しく別れて後に逢ひたる時の語。

娑婆が無い【句】出牢の機なし。

娑婆往來八千度【句】〔佛〕『梵網經に出づ』娑婆は釋迦の化境なれば、その出世・降臨せしこと、久遠(クヲン)の過去より、幾千度にも及びたること。釋迦如來誕生會、我無量劫の昔より無邊の衆生を度せんがため、娑婆往來八千度」

娑婆示現(ジゲン)**觀世音**【句】〔佛〕『念佛往生安心の偈文(ゲモン)を見よ』觀世音菩薩の、大悲心を起して、娑婆世界に種種に應用して、衆生を救濟したまふこと。謡曲「羅生門」「娑婆示現觀世音、三世利益同一體」

娑婆で見た彌三郎【句】知り人を知らぬ人のやうにもてなす語。〔諺語〕一代男「此の世の人とも思はれず、娑婆で見た彌三郎殿の御體」

娑婆で見た彌次郎【句】前條に同じ。〔諺語〕

娑婆電光の境【句】現世の無常なるを譬へていふ語。津國女夫連、それ娑婆電光の境には恨むべき人もなく」

しやはう-けい 斜方形【名】〔數〕『英 Rhombus』二雙の相對する邊が、それぞれ平行なる四邊形の稱。平行四邊形。(矩形に對して)

しやはう-じふにめんたい 斜方十二面體【名】〔鑛〕『英 Rhombic dodecahedron』等軸晶形の完面體。斜方形の面十二にて圍める晶形。

しやはう-しやう 斜方晶【名】斜方形に結晶すること、又そのもの。

しやはう-しやうけい 斜方晶系【名】〔鑛〕『英 Rhombic system』結晶系の一。對晶面は三箇にして、三本の結晶軸に互に直角に交はり、且つ長さを異にするもの。硫黄の結晶のごとき、これに屬す。

しやばうさく 謝枋得【名】〔人〕支那宋の忠臣。字は君直、疊山と號す。理宗の時、進士に擧げられ、信州に知たり。宗亡びて後、元に徵されたれども仕へず、至元二十六年、囚はれ斷食して死す。文章軌範はその選なり。

しやはう-ふっせき 斜方沸石【名】〔鑛〕『英 Chabasite』沸石類の一種。菱面體に結晶し、雙開を有す。

しやばかった 娑婆揭多【名】〔佛〕ぜんぜ(善逝)の梵名。

しやばーかん 車馬監【名】主馬(シュ)寮の職員。車馬・裝具の管守、馬匹の飼養等に關する事務を掌る奏任官。

しやばき 娑婆氣【名】名聞(モンヤウ)・利慾を離れぬ心。俗氣。

しやばく 沙漠【名】〔地〕さばく(沙漠)に同じ。

しやばせかい 娑婆世界【名】〔佛〕しやば(娑婆)に同じ。蓮花、この娑婆世界は、苦樂ともなるところとは知らせたまひつらんものを」

しやばだう 車馬道【名】一條の道路の中、特に車馬のみ通行に宛つる所として區劃したるもの。

しやばっき 娑婆氣【名】しやばき(娑婆氣)の音便。

しやはふ 社法【名】神社の法度。〔じ。

しやはふ 射法【名】しやじゅつ(射術)に同じ。

じやはふ 邪法【名】正道に背ける教。じゃほふ。邪道。

しやばふさぎ 娑婆塞【名】次條に同じ。

しやばふさげ 娑婆塞【名】徒らに生きのびて居ること。しやばふさぎ。天神記、兄めが常常娑婆塞げとぬかすも道理」

しやばへ【名】東南より吹く風。〔西國の船人の話〕

じやばみ 蛇喰【名】㊀山野の一部に、徑二三間ほど圓形に草木の生えざる處。㊁〔動〕うばみ(蟒蛇)を云ふ。〔出雲國の方言〕

しやばん 這般【代】この。これらの。

しやばん 車盤【名】しやち(車知)㊀に同じ。「同じ。

じやばん《英 Japan》【名】〔地〕じゃっぱんに同じ。

じやばら 蛇腹【名】㊀じゃばらぶせ(蛇腹伏)の略。㊁蛇腹伏の模樣。㊂次條の略。㊃〔建〕軒又は天井胴部などにありて、蛇の腹に似たる刳形の連續せる裝飾。㊄暗箱(アンコウ)の側壁を、皮又は布にて造り、一種の襞(ヒダ)を附けて屈伸し得るやうせる部分。㊅提燈(チヤウチン)の屈伸する部分。㊆土藏の鉢卷。

じやばら-いと 蛇腹絲【名】普通の絹絲より太く、綾を強くかけ、蛇腹伏に用ふる絲。

じやばら-ぬひ 蛇腹縫【名】次條に同じ。

じやばら-ぶせ 蛇腹伏【名】左綾(サアヤ)の絲と、右綾の絲とを合はせて、伏縫(フセ)にしたる縫樣。じやばらぬひ。じやばら。

しやひ 奢靡【名】奢りてはでなること。

しやひ 社費【名】㊀神社の經費。㊁社團の經費。會社の費用。

じやひ 蛇皮【名】蛇の表皮。

じやびせん 蛇皮線【名】形、三味線に似て、胴を蛇皮にて張りたる清樂用の絃樂器。月琴のと大差なき義甲を用ひて彈く。三味線はこの形を眞似たるものにて、またその名稱も、蛇皮線の轉訛なりといふ。三絃子(サンセン)。

(じやびせん)

しやびやう 瀉病【名】瘧の軟化病の一。食慾減じ、不活潑となり、軟便より水瀉となり、死後黒褐色に變じて腐る。

しやびやう 瀉瓶【名】〔佛〕『瓶の水を他の瓶に移し入るるに譬へていふ語』佛法の奥義を師より弟子に傳へて、遺漏なきこと。傳燈。正統記、弘法六人の中に瀉瓶た

り。…然れば、眞言の宗には正統なりといふべきにや」

しやーふ 車夫【名】人力車を挽く人。くるまひき。くるまや。

しやふう 斜風【名】斜に吹きくる風。

じやふう 邪風【名】あしき風習。

しやーふく 車服【名】車と服裝と。「言」

しやふき【名】〔しはぶき(咳)の訛。〕關東の方

しやふくーもんだふ 車服問答【名】〔書〕車服のことに關し、新井白石の問に答へたるもの。その故實を記し、まま圖解をも示せり。三卷。野宮(ノミヤ)定基の著。

じやーぶくろ 蛇袋【名】■竿(サヲ)にて作り、管緒(クダヲ)の上に附け、帆をあぐる時、帆綱を擦りて引上ぐるもの。うなぎのかは。ふたの。ほずれ。よだれかけ。■指物の名。吹流(フキナガシ)の如くにして、圓筒形なるもの。

じやぶーじやぶ【貌】水中をかき亂す音。

しやーふつ 煮沸【名】煮ること。わかすこと。

じやぶんーじやぶん【貌】じやぶじやぶと同樣にしてやや重き音。

しやぶる〈英Shovel〉【名】しやべるに同じ。

しやぶる【動四他】『しはぶるの訛』ねぶる。なめまはす。

しやーへい 遮蔽【名】さへぎりおほふこと。

しやへいーおんち 遮蔽陣地【名】〔兵〕敵の觀望に對して、常に祕匿し得る位置に設けたる陣地。

しやーへう 射表【名】〔兵〕『英Range table』實戰の際、砲兵をして、極めて迅速且つ容易なる射法を以て、精確なる命中を得しめんがため、種種の場合に應ずる彈道を計算し、その數値を以て編成したる表。射擊表。

しやーへう 謝豹【名】〔動〕ほそおず(子規)の異稱。

じやーへき 邪僻【名】よこしま。ひずみたる心。邪曲。雙生隅田川「形は人に似たれども、奸曲邪僻の佞臣の」

しやべーくる 喋る【動四自】しやべる(喋る)に同じ。浮世風呂「若え者並(ナミ)にしやべくるからのことさ」

しやーべつ 差別【名】■さべつ(差別)に同じ。■〔佛〕萬法の箇箇の性類。(平等(ビヤウドウ)に對して)

しやべつーかい 差別界【名】〔佛〕箇箇の性類より見たる萬法、即ち現象界。(平等(ビヤウドウ)界に對して)

しやーへん 斜邊【名】■斜なる側邊。■〔數〕『英Hypotenuse』直角三角形の直角に對する邊。弦(ゲン)。■〔數〕『英Chord』直圓錐の母線。

しやべり 喋・饒舌【名】しやべること、又その人。五人女「しやべりのなるとて、隱れもなき仲人(ナカウド)がた」

しやべりーて 喋手【名】■しやべる人。■上手にしやべる人。

しやべる〈英Shovel〉【名】土砂を抄(スク)ふに用ふる具。鐵製の鍬に、木柄を附けたるもの。しやぶる。

(しやべる)

しやべる 喋る【動四自】■煩しく物言ふ。多辯をつひやす。さべる。■巧に話す。さべる。

じやぼ【名】〔植〕じやぼん(香欒)の略。

じやーぼう 邪謀【名】よこしまなる策略。わるだくみ。奸計。

しやぼてん 覇王樹・仙人掌【名】〔植〕さぼてん(仙人掌)の訛。

しやーほに【副】じやほんにの約。凱陣八島「しやほに見知らぬ人ぢやがと」金平法師淨瑠璃「しやほに面白さうに」

じやーほふ 邪法【名】正しからぬ教法。(正法(シヤウホフ)に對して)

しやほん 寫本【名】本を寫すこと、又その寫したる本。うつしぼん。(版本に對して)

しやぼん 石鹸〈葡Sabão 西Jabon 佛Savon〉■苛性アルカリと脂肪又は油とを原料として造り、化粧用洗濯用又は藥用に供するもの。水に入るれば、アルカリは徐徐に遊離して、皮膚・衣服などに附著せる脂肪を抱合し、それを地質より離れ易からしめ、化學的及び器械的に洗淨作用をなす。さぼん。せきけん。■白豆・無患子(ムクロジ)の皮など、總て油を洗ひ落すものの總稱。

じやぼん 香欒【名】〔植〕さぼん(香欒)の訛。

しやぼんさう 石鹸草【名】〔植〕『この植物の浸出液は泡立ちて、石鹸の溶液に似たるよりいふ』石竹(セキチク)科に屬する多年生の草。原産地は歐羅巴。高さ二尺ばかり、葉は對生にして、披針形又は卵形をなす。夏期梢頭に白色又は淡紅色の美花を開く。觀賞用として栽培せらる。さぼんさう。

しやぼんーだま 石鹸球【名】■石鹸を溶かしたる水、又は無患子(ムクロジ)を煎じたる汁を管の先端に含ませ、他の一端より息を吹きこみて生ぜしむる水泡の球。小供の遊戲に供す。さぼんだま。■現れて忽ち消ゆる物事の譬。

しやぼんだまーうり 石鹸玉賣【名】石鹸玉の原料たる溶液を、小供に呼賣する人。たまや。

しやほんに【副】『しやは接頭語』ほんに(本に)を強めていふ語。出世景清「しやほんにをかしいまで能い機嫌ぢや」

しやぼんーのーき 石鹸樹【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する常綠樹。原産地は亞米利加。高さ一丈餘。葉は卵形、帶黃綠色の小花、雌雄株を異にして開く。樹皮は石鹸の代用に供せらる。さぼんのき。

しやぼんーまめ 石鹸豆【名】〔植〕『洗粉に製するよりいふ』しろあづき(白小豆)に同じ。

しやーま【名】■牝(メ)の馬。■ませたる少女を罵りていふ語。おしやま。

じやーま 邪魔【名】〔佛〕正理に悖りたる妄見を說きて、菩提の正道を障ふる者。さはり。さまたげ。

邪魔を入る【句】さまたげをなす。故障を入る。

しやまうけい 車網形【名】和算にて、車の齒のごとき形、又は扇の地形の如き形。

しやまだるし しや間怠し【形ー】『しやは接頭語』まだるし(間怠し)に同じ。淀鯉出世灌漑「しやまだるい。最前に總兵衞め斬りそこなうたも女房故」

しやまに 樣似【名】〔地〕日高國七郡の一。浦河支廳の所管。

じやまん 邪慢【名】〔佛〕七慢の一。邪見を懷きて、心のおごれること。太平記「ここに我慢・邪慢の大天狗ども、如何にしても人の心中に依託して、不退の行學(ギヤウガク)を妨げんとしけれども」

しやまん-けう シヤマン敎【名】〈英Shamanism〉滿洲・蒙古等に行はるる一種の宗敎。神降(カウレイ)のごとき方法を取るものにて、精靈崇拜に屬するもの。我が國の巫女(ミコ)これに類す。

じやまーもの 邪魔者【名】妨となる者。

しやまら 遮摩羅・遮末羅〈梵Cāmara〉【名】〔佛〕『猫牛と譯す』須彌山(シユミセン)の四方に在りて、南方贍部(センブ)洲に屬する二中洲の一。他の一中洲は筏羅遮摩羅(バラシヤマラ)〈梵Aparacāmara〉といふ。正統記「南洲と東洲との中なる遮摩羅といふ洲なるにや」

しやーみ 沙彌〈梵śrāmaṇera(室羅末尼羅)〉【名】〔佛〕『息慈・息惡・行善など譯し、惡を息(ヤ)め、善を行ずる義。又勤策男とも譯するは、大僧のために勤めて策勵せらるるよりいふ』出家したれども、なほ比丘(ビク)の大成を受持するに堪へざる者。さみ。じやみ(沙彌尼)參照。

沙彌から長老【句】次條の略。〔諺語〕

沙彌から長老に飛ぶ【句】順序をふまず、一足飛に上位に昇ることの譬。沙彌から長老。〔諺語〕

沙彌から長老にはなれぬ【句】物事は順序ありて、一足飛には上り得ぬことの譬。〔諺語〕

沙彌の十戒【句】〔佛〕しやみかい(沙彌戒)を見よ。盛衰記「高祖大師は、……讃岐國多度郡の人、……二十の歲出家して、沙彌の十戒を受け」

しやみ 三味【名】しやみせん(三味線)の略。

じやみ【名】〔動〕いさざ(鮈)に同じ。

じやみ〈英Jam〉【名】じやむの轉訛。

しやみーかい 沙彌戒【名】〔佛〕『沙彌は十戒を受けざるべからざるよりいふ』じつかい(十戒)に同じ。

しやみーかつじき 沙彌喝食【名】〔佛〕禪宗又は律宗の寺院にて、食物の給仕などをする兒童。さみかつじき。沙喝(シヤカツ)。

しやみこ-をどり 遅羅子踊 【名】しやむをどり(遅羅踊)に同じ。

しやみ-せん 三味線 【名】『三線の字音の轉訛なりとの説もあれど、じやびせん(蛇皮線)の轉訛なりとの説、眞を得たるものなるべし』さみせん(三味線)を見よ。

しやみせんいと 三味線絲 【名】さみせんいと(三味線絲)に同じ。

しやみせん-がひ 三味線貝 【名】〔動〕めくわしや(女冠者)に同じ。

しやみせん-ぐさ 三味線草 【名】〔植〕『べんぺんぐさ(べんべん草)を見よ』なづな(薺)に同じ。

しやみせん-ごま 三味線駒 【名】さみせんごま(三味線駒)に同じ。

しやみせん-びき 三味線弾 【名】さみせんひき(三味線彈)に同じ。

しやみ-づる 三味づる 【動四自】三味線を彈く。七編人『下手公が三味づって、門附といふ趣向だが』

しやみ-に 沙彌尼(梵 śrāmaṇerikā 室利摩拏理迦)の【名】〔佛〕『勤策女と譯す』女性の沙彌。さみに。沙尼。

じやみ-ぱん ジヤミ麭包 【名】ジヤムを入れて燒きたるパン、又は食パンを切りて、ジヤムを附けたるもの。

じやみ-もなか ジヤミ最中 【名】餡の代りにジヤムを用ひたる最中。

じやみる 【動上一自】事成らんとして頓挫す。

しやむ 遅羅・沙室(英 Siam) 【名】〔地〕■亞細亞洲の東南部印度支那半島の中部にある王國。首府を盤谷(バンコク)といふ。しやむろ。さいあむ。■しやも(軍鷄)に同じ。■

しやむがは (遅羅革)の略。

しやむろ 沙室の雞 【句】〔動〕しやも(軍雞)に同じ。若風俗「沙室の雞合(ニハトリ)いさぎよく、…沙室の雞を集めて會を始めける」

しやむ 社務 【名】■神社の事務。■神社の事務を執行ふ者。■會社の事務。

しやむ 【動四自】しやくむ(疏む)に同じ。

じやむ (英 Jam) 【名】葡萄・杏子(アンズ)・覆盆子(ラヅ)などの如き果實に、砂糖を加へ、煮詰めて製したるもの。西洋菓子の材料に用ふ。じやみ。しろっぷ(果蜜)參照。

しやむ-がは 遅羅革 【名】德川時代に、遅羅より渡來し、專ら足袋などに用ひし革。

しやむ-むし しや蟲 【名】『しやは接頭語』むし(蟲)を罵りていふ語。

じやむし 蛇蟲 【名】環蟲類に屬する蠕形(セン)動物。沙蠶(イサカ)の類。北海道の沿海に產し、長さ三四寸乃至二尺ほど。全身、暗青色を呈し、疣足の背面に葉狀突起ありて、その色、前部は綠なれども、後部に至るに隨ひて、紅色に變ず。

しやむ-しよ 社務所 【名】神社の事務を執行ふ所。

しやむ-しよく 社務職 【名】しやむ(社務)■に同じ。東鑑「宇都宮社務職」

しやむ-せん 三味線 【名】しやみせん(三味線)の轉訛。

しやむせん-いと 三味線絲 【名】■しやみせんいと(三味線絲)の轉訛。■〔植〕かにくさ(蟹草)に同じ。■〔染〕に同じ。

しやむ-ぞめ 遅羅染 【名】さらさぞめ(更紗染)に同じ。

しやむ-ね しや胸 【名】『しやは接頭語』むね(胸)を罵りていふ語。盛衰記「しや胸突きて、眞仰(マツカウ)に突倒す」

しやむろ 遅羅 【名】■〔地〕しやむ(遅羅)■に同じ。■鮫皮の眞鮫の一。

しやむろ-ぞめ 遅羅染 【名】さらさぞめ(更紗染)に同じ。

しやむろ-だいこん 遅羅大根 【名】〔植〕あかぢさ(赤萵苣)に同じ。

しやむろ-どり 遅羅鳥 【名】〔動〕しやも(軍雞)に同じ。

しやむろ-ぶね 遅羅船 【名】遅羅國の船。

しやむ-をどり 遅羅踊 【名】遅羅國の踊にまねたる踊なるべし。天明頃行はれたるもののごとし。

しやん 青素(英 Cyanogen) 【名】〔化〕『青色の義。青色なる鐵化合物あるによりていふ』無色有毒の異臭ある氣體。空氣中にて點火すれば、赤紫色の焰を出して燃ゆ。高溫度の炭素と窒素と相逢ふ時に生じ、又シヤン化銀もしくはシヤン化水銀を熱して製す。しあん。せいそ。

しやん 【感】手を打つ音。心中萬年草「さあ、しやんと打ちませう、と手を廣げても」

じやん 【號】半鐘の音。

じやん 上 【名】〔音〕『漢字の支那音』清樂の音階の最下級に位する音譜。

じやん-か 【名】じやんこに同じ。

じやんか-づら じやんか面 【名】じやんこづら(じやんこ面)に同じ。

じやんく 戒克(英 Junk) 【名】『船の字、支那廈門(アモイ)の方言にてはChiun福州の方言にてはChiong と發音するに起因す』支那人が、乘客及び荷物を載せて、沿海、河川等に使用する船。細長くして、舷高く、帆又は櫓にて漕ぐ。「じ。

しやんぐ-しやんぐ 【號】しやんしやん(一)に同

しやん-くわがぶつ 青化合物 【名】〔化〕しやんくわぶつ(青化物)に同じ。「に同じ。

しやんくわ-かり 青化加里 【名】〔化〕次條

しやんくわ-かりうむ 青化加留母 【名】〔化〕『英 Potassium cyanide』白色固形の有毒なる結晶物。水に溶け易く、製鐵又は瓦斯製造の副產物として、多量に製せられ、化學工藝、冶金等にて、融劑及び還元劑として用ひ、その稀薄液は、金鐵より金を溶解するに用ふ。青化加里。

しやんくわ-ぎん 青化銀 【名】〔化〕『英 Silver cyanide』酸銀の溶液にシヤン化カリウムを加ふれば、沈澱して生ずる化合物。

しやんくわ-すゐぎん 青化水銀 【名】〔化〕同じ。

しやんくわ-だいにすゐぎん 青化第二水銀 【名】〔化〕『英 Hydrogen cyanide』酸類の一。極めて弱き酸にして、純粹なるは無色なる液體をなし、甚だ揮發しやすく、通例シヤン化カリウムもしくは黃血鹽に、稀硫酸を加へ、蒸溜して製するを便とす。無水のものは保存し得れども、水溶液は、日光及び大氣に觸るれば、自然に變質して、褐色物を分離するに至る。劇毒を有すれども、適度に用ふれば、鎭痙藥に供するを得。

しやんくわ-だいにすゐぎん 青化第二水銀 【名】〔化〕『英 Mercuric cyanide』美麗なる無色方形の結晶せる毒物。熱すればシヤンと水銀とに分解し、その水溶液は殆ど電離せず。

しやんくわぶつ 青化物 【名】〔化〕『英 Cyanide』炭素と窒素各一原子より成る原子團 NC を有する化合物の總稱。强烈の毒物にして、種類多し。青酸鹽。

しやんくわぼたしうむ 青化剝篤傻母 【名】〔化〕『英 Potassium cyanide』しやんくわかりうむ(青化加留母)に同じ。

じやん-けん じやん拳 【名】いしけん(石拳)を云ふ。〔東京の語〕

じやんけん-ぽん じやん拳ぽん 【名】前條に同じ。〔東京の語〕

じやんこ 【名】あばた(痘痕)に同じ。

じやんこ-づら じやんこ面 【名】あばたづら(痘痕面)に同じ。浮世床「じやんこ面には熊がなるっ」

しやん-さん 青酸 【名】〔化〕『英 Cyanic acid』有機酸の一。醋酸に似たる臭を有する無色の液體。シヤンヌ酸を熱して製す。せいさん。

しやん-しやん 【號】■鈴などの徐かに鳴る音。しやんぐしやんぐ。■身體壯健にて、よく立働くさま。丹波與作「すゑ風呂も、しやんしやん、かかり湯取って、加減見て」■景氣つけて、手を拍ちたたくさま。今宮心中「しやんしやん、さあ、これからが本ざけ」

じやん-じやん 【名】『次條の意より轉じていふ』はんじやう(半鐘)に同じ。

じやんしやん-こん 【名】拳の掛聲。

じやんじやん-もく 【名】〔植〕さちかがみ(水鼈)に同じ。

しやん-す 相思 【名】『漢字の支那音』こひびと。情人。〔肥前國長崎の方言〕 藤梨毛「よんにようしやんすと契らんす」

しやんす 【句】■す(爲)の條下を見よ。■す(令)の條下を見よ。

しやんだり (英 Chandelier) 【名】天井などに吊す枝形附の燈架。

しやんと (英 Stunt) 【名】〔理〕電路の中央に

作りたる岐路。本電路を通過する電流強きに失して、電流計の感ずる所強きに過ぐるか又は他に害を及ぼす恐ある時、強き電流を通過せしめざらんために附するもの。

しやんと 【副】正しくしまりあるさま。ちやんと。きちんと。たしかに。狂言「地白帷子…」「胸にしやんと結んで」一代女「五月の頃まで、冬の寝道具を、長持の上に積重ね、節句前をも、朔日(ツイタチ)・二日にしやんと仕舞うて」

しやんぬる-さん シャンヌル酸(英Cyanuric acid) 【名】〔化〕尿素を熱すれば得らるる固體。熱してシャン酸を作る。

しやんはい 上海 【名】〔地〕支那江蘇省の南部に在る開港場。同國第一の貿易場。

しやんはい-すゐみつたう 上海水密桃 【名】〔植〕水密桃の一種。實の形、長卵圓形にして大きく、上端尖り、暗紅色を呈す。果肉は柔軟多漿にして、味美なり。豐産なる特性あり。

しやんぱん 三鞭酒(佛Champagne) 【名】『佛蘭西の東北部なる一地方の名にて、その地方の産、眞實を以て聞ゆるに因る』一旦醱酵したる白葡萄酒を原料とし、これに糖分を加へ、瓶に詰めて密栓を施し、更に瓶中にて第二の醱酵を起さしめ、その際生ずる炭酸瓦斯を液中に飽和せしめたるもの。洋酒中最も高價なり。しやんぺん。

しやんぺん 三鞭酒 【名】前條に同じ。

しやんぺん-さいだあ (英Champagne cider) 【名】白葡萄よりシャンパンを造ると同樣の方法を、サイダアに施したるもの。多くは夏時の飲用に供す。

しやーめい 社名 【名】■神社の名稱。■結社又は會社の名稱。

しやーめん 赭面 【名】**しやがん**(赭顏)に同じ。

しやーめん 斜面 【名】『英Inclined plane』■〔理〕〔數〕水平面と或角をなせる平面。■物體を上下する時などに用ふる、水平と或角をなす平面。

しやーめん 赦免 【名】■罪をゆるすこと。盛衰記「六波羅殿より、赦免の御教書候ふ」■過失をゆるすこと。狂言「聆智」「ひまも得ませいで、遅なりましたるところ、御しやめん有らせられませい」

しやめん-じやう 赦免狀 【名】罪を赦すべき由を記したる書狀。赦狀。赦書。免狀。平家女護島「赦免狀は濟み候へ共、海上改の關所關所の通切手」

しやも 軍雞 【名】〔動〕『**しやむろどり**(還羅鳥)の義』鷄の一種。形大きく、冠頭小さく、尾短く、力強くして、最も鬪合を好む。羽色黑きもの多けれども、茶褐色・白色等のものもあり。肉味美なれども、産卵數少なし。今は我が國の特産なれども、馬來(マレー)邊の種類に近し。琉球に産するものは、體格更に大きく、産卵の數も優れり。

しやも (アイヌ語shamo) 【名】『人の義』日本内地の人を指していふ語。

しやもいり 軍雞入 【名】罪人を假牢(カリロウ)に入るること。

しやもじ 杓文字 【名】『もじ(文字)は接尾語』**しやくし**(杓子)を云ふ。「女の語」

しやーもつ 謝物 【名】謝禮の贈物。れいもつ。

しやもひば 軍雞檜葉 【名】偏柏(ヒバ)の變種。技葉の附き方、軍雞(シヤモ)の足の如くにして、枝太く、且つ數枝合著して成るもの多し。また斑入(フイ)なるもあり。かなあみひば。つくもひば。

しやもん 沙門(梵Śramaṇa) 【名】■〔佛〕靜志・淨志・乏道・貧道・功勞・勤勞・勤息・止息など譯す』出家の總稱。くはのとざし。くはのとぼそ。桑門。僧門。沙門(サモン)。■龍(カン)の裝束の一。高僧・貴僧の著くる頭巾。沙門帽子。

しやーもん 借問 【名】假に問ふこと。試に「問ふこと。

しやもん-おり 斜文織 【名】織物の斜に線を表せる織方。あやおり。

じやもん-がん 蛇紋岩 【名】〔鑛〕『英Serpentine』橄欖岩・飛白岩等の分解して生じたるもの。主に蛇紋石より成る。建築用・裝飾用の石材とす。武藏國秩父の鳩糞(ハト)及び常陸・肥後の兩國に産する斑石(マダラ)のごとき、その美麗なるものなり。

じやもん-せき 蛇紋石 【名】〔鑛〕『英Serpentine』結晶不明にて、緻密なる塊狀をなし、半透明乃至不透明にして、玻璃光澤脂肪光澤を有し、色は綠に黑みを帶び、黃綠の斑ありて、蛇皮に似たるもの。角閃石・輝石・橄欖石の變生せるものにて、成分は含水硅酸苦土なり。上品なるは寶石とせられ、普通品は石燈・硯などに造り、また石綿に代用するもあり。だもんせき。

しやもん-ばうし 沙門帽子 【名】**しやもん**(沙門)■に同じ。

しややう 斜陽 【名】ゆふひ(夕日)に同じ。

しややく 瀉藥 【名】**くだしぐすり**(下藥)に同じ。

しやーやくば 社役場 【名】臺灣に於ける社の社長が、その行政事務を取扱ひし所。

じやーやなぎ 蛇柳 【名】■〔植〕**くわつえふさん**(廣葉杉)に同じ。■高野山の奥の院路の溪流の側にある柳。大師の化度により、蛇得脫して、柳となれりと傳ふるもの。心中萬年草「微妙の橘のあぶなさも、後世の見せしめ蛇柳や」■歌舞伎十八番の一。本外題は「百千鳥大磯流通(ガヨイドウ)」。三勝といふ女、戀人なる丹波助太郎といふ男の他の女を伴ひ來るに嫉妬を起し、三勝の靈助太郎にのりうつりて、荒場を演ずることを作れるもの。淨瑠璃名題は「夏柳御玉川」といふ。金井三笑の作。

しやゆゐ 闍維・遶遺(梵Jhāpita) 【名】〔佛〕だび(荼毘)に同じ。盛衰記「遶遺の畑に香咽び」

しやーよ 車輿 【名】■車と輿と。■車の箱。

しやーよう 社用 【名】■神社の用語。■會社の用務。

じやーよく 邪慾 【名】■よこしまなる慾望。■にくよく(肉慾)に同じ。

しやら 娑羅(梵śāra) 【名】〔植〕『堅固・正確の義。常綠木の意』龍腦香(リウノウ)科に屬する喬木。印度に産し、高さ十丈に及ぶ。葉は全緣平滑にして、卵狀長楕圓形をなし、淡黃色なる五瓣の小花を開き、花にも花梗にも絨毛密生す。材は淡渦色を呈し、堅緻なるため、建築用・器具用として、チイク樹に次ぎて貴重せられ、樹脂は瀝青(ピツチ)に代用せられ、種子よりは油を搾取するを得。

しやら 洒落 【名】■しやらくさきこと。なまいき。こしやく。非箇樂平河内通「むう、しやらな、なまなか謎を解きたてて」曾根崎心中「洒落な、丁稚上りめ」■めかすこと。しやれ。いき。可笑記「薄化粧に花車めかしてしやらなる風情」■**いうおよ**(遊女)を云ふ。〔越前國の方言〕

しやーらい 射禮 【名】■**しやれい**(射禮)に同じ。■古、正月に、禁中にて、弓を射しめし公事。十五日に、兵部省にて、手番(テバン)を定め、射手を揃へて、十七日建禮門院にて行ひ、親王以下、五位以上、並びに六衞府の者どもこれに參加し、天皇親臨ありて、宴を賜ひ、能射の者には祿を給せられたり。又、臨御なき時は、大臣勅を奉じてこれを行ひ、正月が御忌月に當る場合には、三月十三日に行ひ、代始には豐樂(ブラク)院にて行ひたり。大射。

しやら-かう 【名】**いうおよ**(遊女)を云ふ。〔丹波國の方言〕「に同じ。

じやらかす 戲かす 【動四他】**じやらす**(戲す)

しやらく 洒落・灑落 【名】■深く事物に拘らぬ氣質。うちとけてあつさりしたる氣象。■**おしやらく**(御洒落)を見よ。

しやらく 謝落 【名】〔植〕一定の時期に脫落すること。(早落・宿存に對して)

しやらく 寫樂 【名】〔人〕浮世繪師。通稱は齋藤十郎兵衞、東州齋と號す。阿波侯の能役者たり。文化頃、雲母繪と稱する彩色摺を工夫す。俳優の似顏をよくし、寫實意表に出でたり。

しやらくさし 洒落臭し 【形ク】なまいきなり。こしやくなり。

じやらくら 【貶】たをやかに、あだっぽきさま。じゃらじゃら。 枹狩劍本地「これ、じゃらくらも好い加減、旅人衆が大勢門に立ってぢや」

しやらくわ 杪欏科 【名】〔植〕へごくわ(杪欏科)に同じ。

しやらけ 娑羅華 【名】〔佛〕■娑羅の花。

白き紙にて、娑羅の花に模して造れるもの。佛式の葬具に用ふ。

しゃらごゑ　しゃら聲【名】しわがれ聲。桂川連理柵「又鬼婆がしゃら聲は、長右衛門が戻ったかと」

しゃらしゃら【貌】雪駄などにて歩む時の音などにいふ語。ちゃらちゃら。

じゃらじゃら【貌】■じゃらくらに同じ。■くだらぬ。たはいなくばからし。

しゃらじゅ　娑羅樹【名】〔植〕しゃら(娑羅)に同じ。

じゃらす　戯す【動四他】じゃれるやうにす。じゃらかす。

しゃらそうじゅ　沙羅雙樹【名】■〔佛〕『雙樹は四方に雙生する義。涅槃(ネハン)經に見ゆ』釋迦の、拘尸那(クシナ)城外、跋提(バダイ)河畔に入滅せし時、その邊にありし娑羅の樹林中、特に高く相對して雙をなしし四木。入滅の際、枯凋して、白色に變じたりと傳ふ。さら。鶴樹。■〔植〕しゃら(娑羅)(一)に同じ。

じゃらつく【動四自】じゃらじゃらとす。じゃらくらとす。

しゃらくさし　洒落臭し【形一】しゃらくさし洒落臭しの訛。

しゃらどく　しゃら解く【動下二自】すらりと解く。當流小栗判官「引っしごき帯しゃら解けし、しどけなや、とて結ぶとすれば」

しゃらばらさう　遮羅婆羅草【名】〔植〕天竺に生じ、葉廣く、馬これを食ふときは、化して人となるといふ草。

しゃらへん　沙剌片【名】支那料理の一。鮪したる魚翅(ヒレ)。

しゃらほどけ【名】しどけなく解くること。五人女「枕取亂して、帶はしゃらほどけをそのままに」

しゃらん　遮欄【名】てすり(手摺)に同じ。

しゃらりん　娑羅林【名】■娑羅の木の茂れる林。さらりん。■〔佛〕『梵 Śālavana の譯語』特に、釋迦の入滅したる娑羅の木の林。つるのはやし。鶴林(カクリン)。しゃらそうじゅ(娑羅雙樹)(一)參照。盛衰記「如來入滅の娑羅林中に至るまで、一化(ケサ)早く極りて」

しゃり　闍梨【名】〔佛〕あじゃり(阿闍梨)の略。

しゃり　舍利(梵 śarīra(設利羅・室利羅・實利))【名】■『祕藏記の上に「天竺呼二米粒一爲二舍利一佛舍利亦似二米粒一、是故目二舍利一也」、彌勒上生經疏の下に「舍利者稱穀也、馱都者體也、佛體大小如二稻穀量一、故以爲レ名」とあり。馱都は梵 dhātu』こめ。米粒。■〔佛〕佛または聖者の遺骨。佛舍利。さり。骨身。■鑛の十分成長しても、絲を吐くことなく、白く固くなりて死ぬること。微菌の寄生に因る。おしやり。「白殭蠶」■陸奥國東津輕郡今別(イマベツ)平館(タイラダテ)兩村の海濱に產する、一種の白石。大なるは拳のごとし。■謠曲の一。足疾鬼といふ鬼の、泉涌寺の佛舍利を奪ひたるに、忽ちに、韋駄天といふ天神に取返さるることを作れるもの。

舍利が甲になる【句】長久なる年月を要する譬。骨が舍利になる。

骨が舍利になる【句】前條に同じ。

しゃり　這裏　這裡。者裏。【名】このうち。この事。這底。〔禪書などの語〕

しゃり　砂裏　沙裡【名】さり(砂裏)に同じ。東海道名所記「一寸の光陰は砂裏の金。」

しゃり　射利【名】『射は目標を定めて、これを射て取る義。この意の時は、正しくは「利」をのみ望むこと。

しゃり　瀉痢【名】はらくだり(腹下)に同じ。

しゃり　斜里【名】〔地〕北見國八郡の一。網走(アバシリ)支廳の管轄。

しゃり【名】〔鐵〕『齒にて噛む時の音によりていふとぞ』純粹の錫。

じゃり　砂利・沙利【名】砂まじりの小石。ざり。砂礫。猿蓑「土芳」「梅が香やじやりし き流す谷の奥」

しゃりう　者流【接尾】そのたぐひの人。仲間。「長袖者流」「操觚者流」

しゃりえん　瀉利鹽・舍利鹽【名】〔化〕りうさんまぐねしうむ(硫酸靱屈尼愛母)に同じ。

しゃりかうべ　髑髏【名】しゃれかうべ(髑髏)に同じ。

しゃりき　車力【名】荷車などを挽くを業として、賃錢を取ることを業とする人。

しゃりこう　舍利講【名】次條に同じ。

しゃりこうゑ　舍利講會【名】佛舍利を供養する講會。舍利講。舍利會。

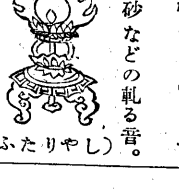
しゃりし　舍利子【名】〔人〕しゃりほつ(舍利弗)に同じ。

しゃりしゃり【名】〔植〕あせび(椴木)に同じ。

しゃりしゃり【貌】堅き細かきものをこする音。しよりしより。

じゃりじゃり【貌】小石・砂などの軋る音。

しゃりたふ　舍利塔(梵 Śarīra-stūpa)【名】〔佛〕佛舍利を納めおく小さき塔。



(しゃりたふ)

しゃりつ　赦律【名】赦に關する法規。

じゃりつち　砂利土・沙利土【名】砂利の多くまじりたる土。

しゃりてん　娑利天【名】〔佛〕とうりてん(切利天)を見よ。

しゃりでん　舍利殿【名】寺院の一部、佛舍利を安置せる殿堂。多くは正方形にして中央に舍利塔を安置す。

しゃりぶくろ　舍利袋【名】舍利を入れる袋。盛衰記「錦の御舍利袋」

しゃりべつ　舍利別【名】蔗糖を植物汁・植物煎乳劑類の內に溶解して得たる濃厚なる糖液の總稱。白糖六十五分を熱湯三十五分に溶解し、白糖中の蛋白分を除きたるを單舍利別、又略して單舍といひ、甘味强くして、味附の料に供す。しろっぷ。

しゃりべつざい　舍利別劑【名】或藥物に、白砂糖又は舍利別を溶和して煮沸したるを、絨布にて濾(コ)したるもの。藥物固有の効力を有するのみならず、調味藥を兼ぬ。大黃(ダイ)舍利別・撒涅瓦(サツ)舍利別・旃那(ダン)舍利別等の種類あり。

しゃりほつ　舍利弗(梵 Śāriputra)【名】〔人〕『Śāri は母の名、putra(弗多羅)は子の義。故に舍利子と譯す』印度の高僧。釋迦十大弟子の一。智慧第一の稱あり。十六羅漢の一。父は帝沙、母は舍利。釋迦に先だちて入寂す。盛衰記「舍利弗はなほ名に違はず、痩せたまへり」

しゃりほふ　舍利法【名】〔佛〕舍利を本尊として、密法を修すること。

しゃりむ　差理無理【副】しゃにむに(遮上無二)に同じ。

しゃりん　車輪【名】■車の輪。車のまはるところ。くるまわ。■『世界は車輪の如し』を見よ』一生懸命に立ちはたらくこと。しゃりんだま。■役者が非常に努力して、役を勤むること。

車輪に働く【名】車輪の廻轉するがごとくに、油斷なく働く。

車輪の如し【句】〔佛〕■『世界は車輪の如し』を見よ。■因果の循環するを車輪の廻轉に譬へていふ語。酉陽雜俎(酉陽)「殺(サツ)の報、殺の緣、たとへば車輪のごとく」

車輪の廻(メグ)るが如し【句】〔佛〕前條に同じ。宇當生死(シヤウジ)に流轉(シユテン)すること、車輪の廻るが如し。平家「夢の中の果報、また幻の間の樂、既に流轉(シユテン)無窮なり。車輪の廻るが如し」

車輪を埋む【句】『後漢書の張綱傳に「漢安元年遣二八使一循二行風俗一、綱獨埋二其車輪于陽亭一」とあるに本づく』事を停めて進まざること。

しゃりん-くわんせつ　車輪關節【名】〔醫〕くわいてんくわんせつ(廻轉關節)に同じ。

しゃりん-すゐしんき　車輪推進器【名】ぐわいしや(外車)に同じ。

しゃりんだま　車輪玉【名】しゃりん(車輪)(二)に同じ。人心眼機關、もうこれからはむだづかひせず、車輪玉でかせいで、思ふさま金溜めて」

しゃりんばい　車輪梅【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する常綠灌木。高さ三四尺。葉は楕圓形にして、鉾鋸齒緣を有し、夏季梅花に似て、香氣ある白色の花簇(ムラ)り開く。實は豆粒ほどの大きにて、熟すれば紫黑色に變じ、暗褐色の染料に供せらる。はまもくこく。

しゃりやう　車輛【名】■車のかず。■くるま。

しゃりやう　社領【名】神社につきたる領分。社地。

しゃりよう　斜稜【名】〔數〕『英 Slant edge』

角錐の側面の相交はりて成す稜。

じやり-り【稗】小石などやうの小さく堅き物の觸るる音。しよりり。

しやり-ゑ 舍利會【名】しやりこつゑ(舍利講會)に同じ。古今「雲林院のみこの、舍利會に、山にのぼりて歸りけるに」の詞。

しやる 曝る・晒る【動下二自】さる(曝る)の條下を見よ。

しやる【句】す(令)の條下を見よ。

し-やる 爲遣る【動四他】なす。取計らふ。落葉「しやらんやうもおぼえで」

じやるゐ 蛇類【名】へびるゐ(蛇類)に同じ。

しやれ 曝・晒【名】され(曝)の訛。

しやれ 洒落【名】氣のききたること。あくどくあらぬこと。㊁なまいきなること。きいたふう。㊂文句をもぢりて、他の意味に通はせいふ滑稽。ざれごと。㊃座興になすこと。たはぶれ。㊄華美に著飾ること。めかすこと。曾我虎が磨「雪にしやれたる白兎」

じやれ 戯【名】じやれること。たはむれ。堀川波の鼓「今のは、みなじやれぢや。嘘(ウソ)ぢや、嘘ぢや」

しやれ-い 射禮【名】弓術の禮式。しやらい(射禮)參照。

しやれ-い 奢麗【名】おごりて美麗にすること。

しやれ-い 赦例【名】赦免せられたる前例。

しやれ-い 赦令【名】赦免の命令。

しやれ-い 謝禮【名】㊁謝意を表するための贈物。おれい。

しやれいうん 謝靈運【名】〔人〕支那南北朝の詩人。康樂公を襲封し、謝康樂と稱せらる。性、豪奢を喜び、山川を跋渉し、詩を作つて自ら娯む。臨川内史に任ぜられしも、放縱にして、廣州に徙され、つひに棄市せらる。年四十九。

しやれい-ざん 車嶺山【名】〔地〕朝鮮白頭山脈の分嶺。忠清北道と南道とを横斷す。

しやれい-しき 射禮式【名】〔書〕家傳の射禮四十五箇條を詳かに述べたるもの。一卷。小笠原元長の著。

しやれ-いた 曝板・晒板【名】さいた(晒板)の訛。一代女「しやれいたの額かけて」

しやれう-たう 社寮島【名】〔地〕臺灣基隆(キイルン)港口の東門をなす島。周回一里七町。

しやれ-からべ 曝首・髑髏【名】されかうべ(髑髏)に同じ。

じやれ-がき 戯書【名】ざれふで(戯筆)に同じ。

じやれ-かく 戯掛く【動下二自】戯(ザレ)をしかく。戯れかく。持統天皇歌軍法「何でも是れにじやれかけなば、宿かしさうなものなりと」

しやれ-がひ 曝貝・晒貝【名】されがひ(晒貝)に同じ。

しやれ-き 砂礫・沙礫【名】されき(砂礫)に同じ。

しやれ-ぎ 曝木・晒木【名】されぎ(晒木)に同じ。

しやれ-こむ 洒落込む【動四自】しやれる(洒落る)㊃を強めていふ語。

しやれ-だて 洒落立【名】何彼につけてしやれんとすること。曾我虎が磨「この頃のうつせ貝、洒落立おけと」「じ。

しやれつ 車裂【名】くるまざき(車裂)に同じ。

しやれのめす 洒落のめす【動四自】大いにしやる。四天王大通仕立「その身は祇園の梅本で、前祝に洒落のめしける」「と。

しやれふ 射獵【名】弓矢にて獸をすること。

しやれ-ふう 洒落風【名】うきよふう(浮世風)に同じ。

じやれ-ぶかい 戯深い【形】好みて洒落などいひて、戯れ易し。關八州繁昌「殿達はじやれぶかい」

しやれぼん 洒落本【名】江戸時代に行はれたる小説の一種。主として、遊里の痴態を實的に寫せるもの。半紙を二つ折にせし製本にて、その形長方形をなせば、薄冊本、油揚本などともいふ。明和の末、田舍老人多田爺の作「遊子方言」に初まり、爾來多く行はれしが、寛政の初、幕府その出版を禁ず。作者には風來・京傳・田螺(シジミ)金魚・唐來三和・蓬萊山人等あり。

しやれ-もの 洒落者【名】㊁洒落なる人。俗風ならぬ人。㊁好みて、身なりを飾る人。おしやれ。今宮心中「おきさばかりが女房か、彼の樣な洒落者より、おむくむくむくの手入らずを抱かせうぞ」㊂くわはうもの(果報者)に同じ。

しやれ-もんく 洒落文句【名】しやれたる文句。秀句。

しやれる 洒落る【動下一自】㊁趣ありて、氣のききたる擧動をなす。㊂なまいきなる風をなす。㊃者飾る。めかす。㊄滑稽なる文句を言ふ。しやれを言ふ。

じやれる 戯れる【動下一自】ざる(戯る)の訛。趣入卦柱曆「じやれてそばへて手毬と」心中宵庚申「一蓮託生の閨の御同行と、じやれて機嫌を取りければ」

じやれ-わらひ 戯笑【名】たはむれて笑ふこと。持統天皇歌軍法「妬(ヨセ)などのじやれわらひ」

しやろ 車路【名】しやだう(車道)に同じ。

じやろ 邪路【名】よこしまなる道。邪道。太平記「落二邪路一」「同じ。

しやろう 砂漏・沙漏【名】さろう(砂漏)に同じ。

しやろく 窩錄【名】書きうつすこと。

しやろく 社祿【名】神社に屬する財産。

じやろん 邪論【名】じやせつ(邪説)に同じ。

じやわ 爪哇(英 Java)【名】〔地〕印度諸島の一。和蘭領中の最要島にて、東西約二六〇里、南北約一九里より四九里を有す。首府をバタヴィアと稱す。

じやわう 閻王【名】〔人〕あじやせ(阿闍世)に同じ。

じやわたう 爪哇糖【名】爪哇より輸出する砂糖。

じやわ-ぶね 爪哇船【名】爪哇國の船。

しやゐ 闍維・遮遺【名】〔佛〕しやゆゐ(闍維)に同じ。

しやゐん 社員【名】㊁新聞・雜誌社又は會社などの役員。㊂〔法〕『英 Member』社團を組織する人。

しやゐん-けん 社員權【名】〔法〕『獨 Mitglied-schaft』社員㊂が、社員たる資格において、その屬する社團法人に對して有する權利、卽ち法人の事務に參與する權と社員一個の利益のために存する權とより成る。

しやゐん-そうくわい 社員總會【名】〔法〕『獨 Mitglieder-versammlung』社團法人の最高機關。社員全部を以て組織し、その法人の意思を代表し、その業務を監督す。

しやゐん-めいぼ 社員名簿【名】社員の氏名住所資格その他必要の事項を記載したる帳簿。

しやゑ 舍衛(梵 Śrāvasti)【名】〔地〕『開者聞物・好道豐德仙人住處など譯す。多く名聲の人を出し、多く勝物を生ずる地の意』釋迦時代に、印度北方の强國たりし憍薩羅(サラク)國の都城。憍薩羅は、摩伽陀(マカ)國の北、迦毘羅衛(カビ)城の西、今のオオツ(Oude)地方にして、釋迦在世の時、波斯匿(パシ)王ここに都し、又この地の長者須達(スダ)は祇園精舍(ギヨンシヤ)を建て、信女毗舍佉(ビシヤキヤ)を建て、釋迦は、この二寺、殊に長く祇園精舍に在りて、多くの經を說きたり。野守鏡「舍衛の三億の家は、佛の出で給へることをなほ知らざりき」

しやゑ-こく 舍衛國【名】〔地〕前條を見よ。太平記「舍衛國の大臣須達(スダ)長者、この國に一の精舍(シヤウジヤ)を建て」

しやゑ-じやう 舍衛城【名】〔地〕しやゑこく(舍衛國)に同じ。

しゆ 衆【名】かたがた。ひとびと。人たち。「夫婦のしゆ」「おや子のしゆ」「若いしゆ」

しゆ 株【名】きりかぶ。くひぜ。株を削り、根を堀る【句】『戰國策の秦の條に「創レ株掘レ根、無二與禍鄰一禍乃不レ存」とあるに本づく』禍根を絶つ。〔諺語〕

しゆ 朱【名】㊁辰砂(シン)及び銀朱の總稱。松風村雨東帶鑑「主なき古墳を掘りかへし、太刀・鎧・朱などを盜み賣候」㊂やや黃ばめる赤色。あけ。㊃しゆずみ(朱墨)の略。朱に交はれば赤くなる【句】『論衡に「詩傳云、肇猶繩絲染二之藍一則青、染二之朱一則赤」とあり』白き物を、赤き物と共に置けば、おのづから赤き色に染む如く、人は交はる所の人に感化せられ易し。〔諺語〕朱を加ふ【句】他人の詩歌・文章を添削す。雌黃(シワウ)を加ふ。

しゅ 種【名】㊀たね。種子。㊁たぐひ。種類。㊂物事の生ずるもと。たね。原子。㊃罪業、種となりて」㊄〔生〕『英 species』分類上、生物の單位たるもの。種の特長は子孫に遺傳すれども、同時に絶えず變化するが故に、或學者の同一種となす者も、他の學者は別種と認むるもあり。されどその形質の大體において、相一致する者を、同一種と定む。**へんしゅ**(變種)**ぞく**(屬)参照。

しゅ 取【名】㊀取ること。「取捨」㊁〔佛〕じふにいんえん(十二因緣)を見よ。

しゅ 趣【名】〔佛〕衆生が自ら作り出し業(ごふ)に由りて趣き住むべき處。

しゅ 酒【名】さけ(酒)に同じ。 謡曲、舟辨慶

しゅ 手【名】㊀て(手)に同じ。「手足」㊁てくげふせい(得業生)㊂を見よ。

しゅ 主【名】㊀ぬし。あるじ。㊁きみ。君主。(從に對して) 大和「このしゅなるみやす所聞きて」㊂かしら。をか。㊃主なる物事。肝要なる物事。もとゐ。㊄ぬし。もちぬし。所有者。㊅行動を起す者。主動者。㊆〔基〕『英 Lord』きりすと(基督)の敬稱。

しゅ 守【名】㊀かみ(國守)又はしゅご(守護)の略。㊁位卑くして、官高きことを示す語。(行に對して)「從三位守大納言」

しゅ 首【助數】詩・歌又は文章の數。「一首」「二首」

しゅ 朱・銖【助數】㊀重量の單位。一兩の二十四分の一。㊁江戸時代の貨幣の金高の單位。歩(ぶ)の四分の一。銀目の三匁七分五厘、今の十二錢五厘に相當す。㊂一割の十分の一。分。

しゅ 種【助數】物の類別の箇數。いろ。「三種の神器」「松」

しゅ 株【助數】樹木の數。もと。「一株の長生」

しゅ 炷【助數】香(かう)を焚く度數。

しゅう 衆【接尾】しゅ(衆)に同じ。

しゅ 脂油【名】脂肪と油との總稱。

じゅ 頌【名】〔佛〕かだ(伽陀)に同じ。梵「倶舍のじゅをすこしいひつづけありくこそ、所につけてをかしけれ」

じゅ 壽【名】㊀ながいき。長壽。長命。㊁よはひ。年齢。㊂ことほぎ。いはひ。壽を上(たてまつ)る【句】『漢書の註に「凡言爲壽者、謂進二爵子尊者一而獻二無疆之壽上とあり』酒杯を尊者に進めて、限りなき壽を獻ず。長壽ならんことを祈る。壽を爲す【句】前條に同じ。

じゅ 儒【名】㊀『周禮の大宰に「以二九兩一繫二邦國之民一、三曰師、以レ賢得レ民、四曰儒、以レ道得レ民」とあり』支那周の世に、鄉里にありて、民に道藝を教ふることを掌りし者。㊁じゅきょう(儒教)に同じ。豐年屬田川「大聖釋尊は因緣生死の二つを教へ、儒には仁義の二柱」㊂じゅしゃ(儒者)に同じ。

じゅ 呪・咒【名】㊀のろひ。まじなひ。㊁〔佛〕だらに(陀羅尼)に同じ。

じゅ 樹【名】き(樹)に同じ。

じゅ 受【名】㊀受くること。受取ること。㊁〔佛〕『梵 Vedanā』じふにいんえん(十二因緣)を見よ。 榮華「受、想、行、識もまたかくの如し」

じゅ 授【名】㊀さづくること。㊁さづかること。

じゅ 綬【名】㊀いんじゅ(印綬)㊀に同じ。㊁古昔、禮服の時、乳の下より結び垂るる平緒の如き帶。白地に種種の色を組合はせたるもの。㊂勳章・徽章・記章等を佩用するに用ふる紐。綬を結ぶ【句】『顏延之の詩に「脫二巾千里外一、結レ綬登二王畿一」とあり。支那にて、官に就けば、印綬を結び垂るる習なりしよりいふ』官に就く。印綬を佩ぶ。

じゅ 從【接頭】主位に附隨すること。(正(しゃう)に對して)

しゅあら 主婇【名】一家の主なる婦人。

しゅあく 首惡【名】おもなる惡人。元兇。

しゅあふ 手押【名】つめいん。捺印。

しゅあん 朱殷【名】黑ずみたる赤色。

しゅい 主意【名】おもなる意味。本意。

しゅい 趣意【名】かんがへ。心ばせ。みこころ。趣旨。「別。

しゅい 殊異【名】他とことなること。差

しゅい 朱衣【名】あかき著物。

じゅい 授衣【名】㊀『詩經の豳風七月篇に「七月流火、九月授レ衣」とあり』寒冷の候に向ひて、冬の仕度をなすこと。㊁陰暦九月の異稱。

じゅい 壽衣【名】きやうかたびら(經帷子)に同じ。「もだち。

しゅいう 酒友【名】飲酒上の友人。のみとも。

しゅいがき 趣意書【名】次條に同じ。

しゅいしょ 趣意書【名】趣意を記せる書。しゅいがき。

しゅいせつ 主意說【名】〔哲〕『英 Voluntarism』感覺・表象・思考等の知的要素を他の精神作用の基となすに對して、慾動衝動・感動等、總ての意志現象を以て、內部經驗內容の基本及び本位となすの說。(主知說・主情說に對して)

しゅいそん 朱舜尊【名】〔人〕支那清朝の學者。字は錫鬯(しゃくちゃう)、竹垞と號す。明史及び一統志の編撰に與る。著すところ經義攷・明詩綜・文集等あり。康熙四十八年歿す。年八十一。

しゅいつ 主一【名】心を一方に集注すること。無適【句】〔哲〕『論語の學而篇に「敬レ事而信とありて、註に「敬者主一無適之謂也」とあり、二程全書に「程子曰、主一之謂敬、無適之謂レ一」とあり。無適は他に適(ゆ)かざる意。主一の字面は古文尚書、無適の語は文子に見ゆ』精神を純一ならしめて、他に移さぬこと。敬(けい)。〔程朱學派の語〕

しゅいん 酒淫・酒婬【名】酒と色事と。武道傳來記、歌道一入に心を寄せ、琵琶・琴の翫び、酒婬の種となりて」

しゅいん 手淫・手婬【名】己れの手にて、その生殖器を摩擦して、淫欲をもらすこと。

しゅいん 手印【名】㊀手の形を捺(お)したるもの。東鑑、申下御手印」㊁當人の直書、又は自ら署名・華押せるもの。惡論、里見誅せられて後、彼が謂度の中より、秀頼公の御手印を取出だす」㊂〔佛〕いん(印)㊃に同じ。平治「大師、手印を以て封ぜらる」

しゅいん 朱印【名】㊀朱肉を用ひて押す印。(黑印に對して)㊁室町時代又は江戸時代に、武將が、政務執行に關する文章に、朱肉を用ひて捺(お)したる印、又これを捺したる文書。こくいん(黑印)参照。

しゅいん 主因【名】おもなる原因。

しゅいん 修因【名】〔佛〕善因を修すること。十訓「おほむね後世の修因なりといへども、公請(くじゃう)に赴く日は、今生(こんじゃう)の能(のう)ともいふべし」 修因感果【句】〔佛〕善惡の因を行ふことによりて、苦樂の果を感ずること。盛衰記「修因感果究竟にして、彼の卿、寺邊に廻り來る」

しゅいん 衆陰【名】多くの陰の氣。國姓爺「一陽を以て、衆陰をすぶるといっぱ」

じゅいん 樹陰【名】樹木のかげ。こかげ。

じゅいん 儒胤【名】儒者の後胤。平治「儒胤を受けて、儒業を傳へずと雖も」

じゅいん 呪印・咒印【名】〔佛〕陀羅尼と印契(かいん)。

しゅいんじゃう 朱印狀【名】朱印㊁の文書。ごしゅいんじゃう。

しゅいんぶね 朱印船【名】しゅいんせん(朱印船)に同じ。

しゆいん-ち 朱印地【名】武家時代に、朱印狀によりて、社寺などに下付せられし土地。租税を免ぜられ、賣買を禁ぜられたり。ごしゆいんち。

しゆいん-てんま 朱印傳馬【名】傳馬の一。無賃なるもの。

しゆいん-ぶね 朱印船【名】徳川時代に、朱印狀を付與せられて、特に外國貿易に從事することを許されし船。ごしゆいんぶね。奉書船。

しゆう 主【名】しゆ。主君。主人。

主ご親には勝たれぬ【句】主と親とには服從せざる可らず。〔諺語〕

主の縁【句】主從の縁。三世の縁。

主の前ご辷道(スベリミチ)は早く通る【句】主人の前を已む得ず通る場合には、失禮を恐れて、急ぎ通るべし。〔諺語〕

主の威を借る虎【句】『「虎の威を借る狐」より轉化せしものなるべし』主人の威勢を賴みて、權柄顏をなす譬。〔諺語〕

しゆう 宗【名】㊀宗教。宗門。㊁宗教の流派。宗派。

しゆう 衆【名】㊀多くの人。おほぜい。㊁ところのしゆう(所衆)の略。

し-ゆう 雌雄【名】㊀めすと、をすと。牝牡。㊁かちまけ。まさりおとり。十訓「昔は、雌雄を決して、藝能あらはるるについて」

し-ゆう 鷙勇【名】鷙鳥の如く猛き勇氣。

しゆう 衆【接尾】一群の人數の下に添ふる敬稱。たち。しゆ。重帷子「御留守御家老衆より仰せつけらるる」

じゆう 從【名】㊀主たる物事に附隨せる物事。㊁けらい。めしつかひ。從者。(主に對して) ㊂主謀者に從ひて、罪を犯せるもの。(首に對して)

じゆう 縱【名】『この字の音、正しくはしよう』㊀たて(縱)に同じ。㊁南北。

じゆう 戎【名】㊀たたかひ。いくさ。戰爭。㊁つはもの。兵器。武器。

じゆう 銃【名】こづつ。小銃。銃器。

じゆう (英 Jew)【名】㊀ユダヤ人。㊁『ユダヤ人の性格に本づきていふ』吝嗇なる金持。

しゆう-あしらひ 主あしらひ【名】主人として待遇すること。● 一代男「我が女房を、常ならぬ出立(イデタチ)、やとひ腰元・やとひ下女、おのれも長七になって、主あしらひ」

しゆう-い 衆醫【名】多くの醫者。

しゆう-い 衆意【名】衆人の意見。多數の意向。

じゆう-い 絨衣【名】羅紗の衣服。

じゆう-い 戎衣【名】戰爭に出づる時の服、即ち甲冑の類。戎服。軍服。太平記「皆戎衣にて、前騎・後乘す」

じゆう-い 戎夷【名】えびす。夷狄。戎狄。太平記「戎夷の掌に墮つべき御悟無かりしかば」

じゆう-いう 從遊【名】隨從して遊びまはること。

しゆう-いしゆ 雌雄異株【名】〔植〕『英 Dioecious』雌花と雄花と、各別の株に開くもの。例へば柳・公孫樹(イテフ)・大麻(アサ)などにおけるが如し。雌雄別株。(雌雄同性に對して) たんせいくわ(單性花)參照。

じゆう-いつ 縱逸【名】『縱の字の音、正しくはしよう』はういつ(放逸)に同し。

じゆう-いつ 充溢【名】みちあふるること。

しゆう-いたい 雌雄異體【名】〔動〕『英 Dioecious』雌生殖器と雄生殖器との、別體に具はれるもの、即ち雌雄各個體を異にすること。高等なる動物は大抵これなり。雌雄別體。(雌雄同體に對して)

しゆう-いつたい 雌雄一體【名】〔動〕しゆうどうたい(雌雄同體)に同じ。

じゆう-えい 充盈【名】みつること。一杯になること。充滿。

しゆう-えん 終焉【名】㊀『國語の晉の條に「子犯知二文公之安一レ齊而有二終焉之志一也」、世說の棲逸篇に「浩然有二終焉之志一」とあり』身の落ちつき處とすること。㊁命の終。いまはの時。臨終。末期(マツゴ)。十訓「終焉の時、當生には、必ず今一度奉公の身たらんといへり」

しゆう-おもひ 主思【名】主人のためを思ふこと。主人おもひ。

じゆう-か 銃架【名】小銃を載せ置く臺。

じゆう-かいがん 縱海岸【名】〔地〕『英 Longitudinal coast 縱の字の音、正しくはしよう』山脈の主軸と平行せる海岸。(横海岸に對して)

しゆう-かう 崇高【名】すうかう(崇高)に同じ。

じゆう-かう 戎行【名】行軍又その通路。

じゆう-かう 銃腔【名】銃身に穿てる、銃丸の通過する腔。

しゆうかう-せん 聚交線【名】〔數〕『英 Concurrent lines 聚の字の音、正しくはしゆ』同一の點を通過する、多くの線。

しゆう-がく 宗學【名】〔佛〕各宗における各自の修學。

じゆうか-ぜい 從價税【名】〔法〕『獨 Wertzoll』物の價格を基として、一定の率によりて賦課する關税。(從量税に對して)

じゆうかぜい-ひん 從價税品【名】從價税を課せらるる物品。

じゆうかぜい-りつ 從價税率【名】從價税を課する一定の割合。

しゆうがふ-しずゐ 聚合雌蕊【名】〔植〕『英 Syncarpous pistil 聚の字の音、正しくはしゆ』複雌蕊の一。各雌蕊の多少相連合するもの。例へば煙草(タバコ)・瞿麥(ナデシコ)・百合(ユリ)における類。(分離雌蕊に對して)

しゆうがふ-ぢごく 衆合地獄【名】〔佛〕しゆがふぢごく(衆合地獄)を見よ。

しゆうがふ-ぶつ 聚合物【名】〔法〕『聚の字の音、正しくはしゆ』獨立せる數箇の物の聚合にして、經濟上、一物として取扱はるるもの。例へば圖書館内の書籍・倉庫内の荷物の類。これに對する所有權は、普通、各箇の物の上に存し、全體を一括したる上に存するものにあらずとの見解に從ふ。

しゆうがふ-めいし 聚合名詞【名】〔語〕『聚の字の音、正しくはしゆ』がふめいし(合名詞)に同じ。

じゆうがふ-ゑん 充洽園【名】日蓮宗の第二中興の祖と稱せられたる僧日輝の家塾。加賀國金澤市寺町立像寺に在りたり。

じゆうがふゑん-がくは 充洽園學派【名】充洽園の學系に屬する一派。

しゆう-かん 終刊【名】最後に刊行したること、又その物。

じゆう-がん 銃眼【名】身體を露出せずに、城外を窺ひ、又は射擊を行はんがために、城壁に穿ちたる孔。昔の狹間(サマ)と呼びしもの、これに相當す。

しゆう-き 終期【名】㊀或事の終る時期。末期。(始期に對して) ㊁〔法〕期限の消滅。

しゆう-き 宗規【名】宗教の規則。

しゆう-ぎ 衆議【名】多くの人の意見。群議。

しゆう-ぎ 宗儀【名】一宗の儀式。

しゆう-ぎ 宗義【名】各宗教の旨とする義。一宗の義理。

じゆう-き 銃器【名】小銃又は拳銃の類。

じゆう-き 戎器【名】へいき(兵器)に同じ。

じゆう-き 從騎【名】騎馬の從者。

じゆう-きう 從舅【名】母の從父兄弟。

じゆうき-けいさつ 戎器警察【名】〔法〕高等警察の一。戎器の取締に關するもの。

じゆう-ぎし 從儀師【名】じゆうゐぎし(從威儀師)に同じ。

しゆう-ぎはん 衆議判【名】しゆぎはん(衆議判)を見よ。

しゆう-きよく 終極【名】をはり。はて。

しゆう-きよく 終局【名】㊀『きよく(局)㊂を見よ』碁をうち終ふること。㊁はて。をはり。事の終。終結。

しゆうきよく-げんり 終局原理【名】〔哲〕『英 Last principle』こんぽんげんり(根本原理)に同じ。

しゆうきよく-しゆくしゆ 終局宿主【名】〔動〕しゆくしゆ(宿主)を見よ。

しゆうきよく-はんけつ 終局判決【名】〔法〕『英 Final judgment』判決の一。民事訴訟事件の全部又は一部を、各審級にて終局せしむるもの。(中間判決に對して)

しゆうぎ-ゐん 衆議院【名】帝國議會の一部。一般の人民より選擧したる議員によりて成立てるもの。(貴族院に對して)

しゆうぎゐん-きそく 衆議院規則【名】憲法第五十一條によりて制定したる衆議員内部の整理に關する規則。

しゆうぎゐん-ぎちやう 衆議院議長【名】

衆議院の議長。衆議院議員より三名の候補者を選み、その中より勅任せられ、衆議院の秩序を保ち、議事を整理し、院外に對して議員を代表し、議會閉會後に於ても、尚議院の事務を指揮す。

しゆうぎゐんぎゐん 衆議院議員【名】衆議院を組織する議員。庶民の公選によるもの。任期を四箇年とす。代議士。

しゆうぎゐんぎゐんせんきよはふ 衆議院議員選擧法【名】衆議院議員の選擧權、被選擧權、選擧區、選擧の方法等に關して規定せる法律。明治三十三年公布、後、同三十五年、四十一年、四十三年、大正八年の改正を經たり。

しゆうぎゐんじむきよく 衆議院事務局【名】衆議院の議事、記錄、筆記、印刷、會計等に關する庶務を掌理する行政機關。書記官長、書記官、屬、速記、技手、守衛長、守衛番長等の職員を置く。

しゆうぎゐんしよきくわんちやう 衆議院書記官長【名】衆議院事務局の職員の一。衆議院議長の指揮を受け、局中の事務を監督し、公文に署名する勅任官。

しゆうぐ 衆愚【名】多數の愚人。太平記「衆愚の愕愕たるは、一賢の唯唯たるに如かず」

じゆうぐ 戎具【名】いくさの用具。戎器。

しゆうぐん 終軍【名】〔人〕支那漢代の人。字は子雲、少にして學を好み、善く文を屬す。武帝の時、博士に擧げられ、のち諫議大夫に至る。

じゆうぐん 從軍【名】軍に從ひて、出陣すること。

じゆうぐんきしや 從軍記者【名】新聞社、雜誌社などの派遣員にて、從軍する記者。

じゆうぐんきしやう 從軍記章【名】凱旋後、すべての從軍者及び功績ある軍務幫助者に授くる記章。

じゆうぐんねんはい 從軍年牌【名】從軍せる年數(ねんすう)(從軍記章)の舊稱。

しゆうくわ 衆寡【名】人數の多きと少なきと。多勢と無勢と。

衆寡敵せず【句】多數に對する小數にて、勝目なし。

しゆうくわ 蕊花【名】〔植〕『英 Pistil』雌本科植物の穗の一部を構成する小穗。中央に總梗あり、これより一乃至數箇の小花を生ず。

じゆうくわ 銃火【名】彈丸の發する時に、銃口より迸(ほとばし)る火光。

銃火を交ふ【句】銃戰を開始す。

しゆうくわい 衆會・衆會【名】多人數の集會すること、又その集會。

じゆうくわん 縱觀【名】『縱の字の音、正しくはしやう』ほしいままに見物すること。自由に見ること。縱覽。

じゆうくわん 縱貫【名】『縱の字の音、正しくはしやう』竪につらぬくこと。南北につらぬくこと。

じゆうぐわん 銃丸【名】小銃に用ふる彈丸。鐵砲のたま。てっぽうだま。

じゆうくわんてつだう 縱貫鐵道【名】『縱の字の音、正しくはしやう』或地域を南北に貫通せる鐵道。

しゆうけい 崇敬【名】すうけい(崇敬)を見よ。

しゆうけい 崇敬【名】多くの藝。諸藝。

じゆうけい 銃刑【名】銃殺の刑。軍律に依りて銃殺する處罰。

じゆうけい 從兄【名】伯叔父の子にて、己れより年長なる者。年上の男のいとこ。從父兄。(從弟に對して)「語」を見よ。

しゆうけいご 崇敬語【名】すうけいご(崇敬語)

じゆうけいてい 從兄弟【名】從兄と從弟と。父又は母のをひ。男のいとこ。

しゆうけう 終教【名】〔佛〕五教の一。大乘終極の說法にして、眞如緣起の理を說けるもの。

しゆうけう 宗教【名】『宗は主要の義、自己の尊崇し主張する要旨をいふ』神、佛等、人生に超越せる崇高、偉大なる或物に對する畏敬の念を基とし、信仰、祭祀等を行ひて、慰藉、安心、幸福を得、以て人生の缺陷を補はんとするもの。神道、佛敎、耶蘇敎の類。しゅうし。しゅうもん。

しゆうけういしき 宗教意識【名】〔哲〕『英 Religious consciousness』宗敎的主體を認めて、畏敬尊崇し、服從、信賴する意識現象の總稱。宗敎心。

しゆうけうえんげき 宗教演劇【名】宗敎藝術の一。宗敎を題材としたる演劇。宗敎劇。

しゆうけうえんぜつ 宗教演說【名】宗敎に關する演說。

しゆうけうおんがく 宗教音樂【名】〔音〕宗敎藝術の一。宗敎を題材としたる音樂。

しゆうけうか 宗教家【名】宗敎を信ずる心篤き人。主として、宗敎のために盡し、又は宗敎を宣傳するを務とする人。

しゆうけうがく 宗教學【名】『獨 Religionswissenschaft 又 Religionslehre』宗敎に關する科學的研究をなす學科。

しゆうけうきやう 宗教狂【名】宗敎に狂熱すること、又その人。

しゆうけうぎやうせい 宗教行政【名】〔法〕公益行政の一。宗敎に關する取締を目的とするもの。

しゆうけうきよく 宗教局【名】文部省の一局。文部大臣の管理に屬し、宗敎各派に關する事務を取扱ふ所。もと內務省に屬し、社寺局の擴張されしもの。

しゆうけうくわ 宗教畫【名】〔美〕宗敎藝術の一。宗敎上の人物、事蹟を題材としたる繪畫。

しゆうけうげいじゆつ 宗教藝術【名】〔美〕宗敎上の人物、事蹟を題材としたる藝術。古代の藝術は多くこれに屬し、宗敎と共に消長せり。

しゆうけうけういく 宗教教育【名】宗敎によりて、敎育を施すこと。

しゆうけうげき 宗教劇【名】しゅうけうえんげき(宗敎演劇)に同じ。

しゆうけうしん 宗教心【名】宗敎を信ずる心。信心。

しゆうけうてうこく 宗教彫刻【名】〔美〕宗敎藝術の一。宗敎を題材としたる彫刻。

しゆうけうてつがく 宗教哲學【名】〔哲〕『英 Philosophy of religion 又 Religious philosophy』哲學說を以て宗敎を解釋說明し、宗敎の哲學的性質並びに必然性を明かにせんとするもの。

しゆうけうびじゆつ 宗教美術【名】〔美〕宗敎に關する美術。

しゆうけうろん 宗教論【名】宗敎に關する論說。

しゆうげき 銃撃【名】小銃にて射撃すること。

しゆうけつ 終結【名】㊀をはり。はて。結局。㊁〔數〕『英 Conclusion』假設より推理を經て、最後に達する結果。

しゆうけつ 終決【名】㊀全く決定すること。きまりの附くこと。㊁徴兵事務に關する裁決。卽ち現役兵の徴募、補充兵の編入、要員超過徴兵免除及び兵役免除等のことを裁決するもの。

じゆうけつ 充血【名】〔醫〕『羅 Hyperæmia』刺戟ありて、その部に、血液輻輳し、しかも白血球などの浸出せぬもの。(貧血に對して)うっけつ(鬱血)參照。

じゆうけつ 戎羯【名】えびす。戎狄。

しゆうけつしゆくしゆ 終結宿主【名】〔動〕しゅうきよくしゅくしゅ(終局宿主)に同じ。

しゆうげふ 終業【名】業を終ふること。

じゆうげふ 從業【名】業務に從ふこと。就業。

じゆうげふしや 從業者【名】㊀從業するもの。從業員。㊁〔法〕營業主、使用人等、直接に營業に從事する人。「じゅうげふいん」を見よ。

じゆうげふいん 從業員【名】前條㊀に同じ。

じゆうげふ 衆言【名】衆人のことば。

じゆうけん 戎軒【名】㊀戰場に用ふる大車。㊁いくさ。戰爭。「筆を棄てて、戎軒を事とす」

じゆうけん 銃劍【名】㊀こづとつるぎと。㊁兵卒の銃の先端に附くる劍。常に

は、腰に下ぐ。けん。 ㊂じゅうさう(銃槍)に同じ。

じゅうげん 縦言【名】『縦の字の音、正しくはしょう』しょうげん(縦言)に同じ。

じゅうけん-じゅつ 銃剣術【名】じゅうさうじゅつ(銃槍術)に同じ。

しゅうげん-せんじ 宗源宣旨【名】吉田卜部(うらべ)の両家より、私に宣旨と称して、神社に神位を授くる位記。

しゅうこ 終古【名】久しき年月。永遠。(過去にも将来にもいふ)

しゅうこう 衆口【名】多勢のことば。

衆口金を鎖す【句】次條に同じ。吉野忠信「衆口金を鎖し、積毀骨を流すなどと古き書にも申す如く」

衆口、金を鑠(とか)かす【句】『國語の周の條に「衆心成レ城、衆口鑠レ金」、戰國策の魏國の條に「臣聞積羽沈レ船、群輕折レ軸、衆口鑠レ金」とあり』多數の人のいふ言は驚くべき力あり。言葉の下に金を消す。〔諺語〕

じゅうこう 銃口【名】小銃の筒口。

じゅうこう-ちゃう 銃工長【名】りくぐんじゅうこうちゃう(陸軍銃工長)の略。

じゅうこく 戎國【名】えびすの國。太平記「華夷變態て、戎國の民と成りぬれば」

じゅうこく 縦谷【名】〔地〕『英 Longitudinal valley 縦の字の音、正しくはしょう』その地方の山脈の主軸の方向と平行して走れる溪谷。(横谷に對して)

しゅうころし 主殺【名】主君を殺すこと、又その人。しゅころし。叛逆。「涯。

しゅうさい 終歳【名】㊀一年中。 ㊁一生

しゅうさう 衆草【名】多くの草。

しゅうさう 衆相【名】多くの相好。衆花「所觀の衆相は、卽ち是れ三身卽一の相好光明なり」

じゅうさう 戎裝【名】出陣の出立。戎服。

じゅうさう 銃創【名】小銃にて擊たれたるきず。たまきず。銃傷。

じゅうさう 銃槍【名】㊀銃とやりと。 ㊁銃の先に劍を附けて、槍に代用するもの。劍つき鐵砲。銃劍。

じゅうさつ-じゅつ 銃槍術【名】銃槍を用ひて、己れを防ぎ、敵に當る技術。銃劍術。

じゅうさく-き 縦削機【名】『縦の字の音、正しくはしょう』しょうさくき縦削機に同じ。

じゅうざげん 従坐減【名】中古の法律にて、從犯により、罪に坐したる者の減等。

じゅうさつ 銃殺【名】小銃にて、罪人を殺すこと。多くは軍律による死刑なり。

しゅうさん 聚散【名】『聚の字の音、正しくはしゅ』あつまると散ると。集散。

じゅうさんか 従參加【名】〔法〕『獨 Nebenintervention』訴訟參加の一。他人間の訴訟の結果に利害關係を有する第三者が、原告もしくは被告を補助するために、その訴訟に參加すること。例へば債權者と主なる債務者との間の訴訟に、保證人もしくは保證人たりし者が參加して、債務者を補助し、父母の間に起れる離婚の訴訟に、子が參加する類。補助參加。(主參加に對して)

じゅうさんかにん 従參加人【名】『獨 Nebenintervenient』〔法〕從參加をなす人。(主參加人に對して)

しゅうさん-くわじょ 聚繖花序【名】〔植〕『英 Cymose inflorescences 聚の字の音、正しくはしゅ』花序の一。外觀は多少總狀花序繖形花序等のごとき無限花序に類すれども、實は有限花序の原式にして、各花梗は皆まづ頂花を著け、漸次その下方なる花芽の發達するもの。頂端は、扁平なると、凹形なることとあり。

しゅうさん-じょう 聚繖狀【名】〔植〕『聚の字の音、正しくはしゅ』聚繖花をなせる形。

しゅうし 衆士【名】多數の人士。諸士。

しゅうし 衆子【名】多くの子。

しゅうし 鍼斯【名】〔動〕 ㊀いなご。いなむし。 ㊁きりぎりす(鍼斯)の異稱。

鍼斯說說(シンシ)【句】『詩經の周南鍼斯篇に「鍼斯羽說說兮、宜爾子孫振振兮」とあるに本づく。說說は和ぎ集まるさま。鍼斯は嫉妬せざる蟲なるが故に、子孫衆多なりとの俗說によりていふ』子孫の繁榮する譬。

鍼斯の化(クワ)【句】前條を見よ。太平記「鍼斯の化行はれて、皇后元妃の外、君恩に誇る官女、甚だ多かりければ」

しゅうし 宗旨【名】㊀宗門の趣旨。宗教の教義。(主に佛教のにいふ)傾城反魂香「元ゆうもん(宗門)に同じ。 ㊁これの從事する職業、又己れの嗜好。

宗旨を變ふ【句】從來の主義方針を一變す。今まで崇拜せしところのものを變ふ。

しゅうし 宗師【名】〔佛〕『そうし(宗師)を見よ』 ㊀正法(シャウ)を傳へて、衆人に尊崇せらるる者。 ㊁各宗の宗義を開きし人を、その宗門にて尊びていふ語。例へば眞宗にて、支那唐の善導を指していふ類。

しゅうし 終止【名】をはりとまり。

しゅうし 終始【名】をはりはじめ。本末。始終。

終始一貫【句】次條に同じ。〔諺語〕

終始一(ツ)の如し【句】『荀子の禮論篇に「愼終如レ始、終始如レ一」とあるに本づく』始より終までかはらず。終始一貫。〔諺語〕

しゅうし 終始【副】常に。しじゅう。

しゅうし-きがう 終始記號【名】〔音〕樂曲を反復して奏し、中央にて終止すべきことを示す記號。二本の縦線の上に延長記號、卽ち(又はその代りに)Fineもしくは三の文字を書す。樂曲反復の場合に必要を生ずる記號なるが故に、反始記號又は連續記號に伴ひて用ひらる。

じゅうし 従子【名】をひ(甥)に同じ。

じゅうし 従士【名】從者たるさむらひ。

じゅうし 従姉【名】伯叔父の子にて、自分より年上なる女。年上なる女のいとこ。(從妹に對して)

じゅうし 従詞【名】〔語〕『從の字の音、正しくはしょう』せつめいご(說明語)に同じ。

じゅうし 従死【名】死にしあとを慕ひて死ぬること。

じゅうし 縦恣【名】『縦の字の音、正しくはしょう』ほしいまま。放縦。自恣。

じゅうし 戎士【名】兵士。軍人。

じゅうじ 戎事【名】軍事。兵事。

じゅうじ 充耳【名】㊀『詩經の國風淇奥篇に「充耳琇瑩」とあり』耳をおほふ飾。 ㊁『詩經の邶風旄丘篇に「叔兮伯兮、褎如二充耳一」とあり』耳のきこえぬさま。

じゅうじ 従事【名】その業をなすこと。その事にしたがふこと。

しゅうしう 聚收【名】『聚の字の音、正しくはしゅ』あつめて取入ること。

しゅうしがへ 宗旨變【名】『宗旨を變ふ』を見よ』從來の主義を變ふること。

しゅうしけい 終止形【名】〔語〕活用言の終止段の形。截斷形。

しゅうしげん 終止言【名】〔語〕活用言の終止形なるもの。斷止言。截斷言。

しゅうしじゅん 宗旨順【名】宗旨により て定まれる席順。

しゅうしじょうもん 宗旨證文【名】てらうけじょうもん(寺請證文)に同じ。

しゅうしだん 終止段【名】〔語〕活用言の語尾變化の、終止言として用ひらるる段、卽ち第三段。

しゅうしちがひ 宗旨違【名】 ㊀信仰する宗教の互に異なること。 ㊁人の嗜好の、互に異なること。例へば、酒を好むと菓子を好むとの類。

じゅうじつ 充實【名】すきまなく滿つること。

しゅうじつ 終日【名】朝より夕まで。ひねもす。

しゅうじつ 終日【副】朝より夕まで。「もす。

しゅうしてがた 宗旨手形【名】てらうけじょうもん(寺請證文)に同じ。

しゅうしにんべつあらため 宗旨人別改【名】江戸時代に、耶蘇教禁遏(アツ)の手段として、幕府の行ひし方法。人別帳に基きて、一家一人毎に調べ、各自印形を押捺(アツ)せしめ、更にその家の檀那寺をして、

その宗旨に屬する旨を證明せしめしこと。天草(クサ)の騒亂以後實施せられ、明治維新に至るまで繼續し、九州にては、殊に嚴密に行はれたり。

しゅうしにんべつあらためちょう 宗旨人別改帳【名】檀那寺の證明を經たる人別帳。毎年三月より六月頃までに、庄屋・名主・判元・見屆支配役所等に差出す定なりき。てらうけじょうもん(寺請證文)參照。

しゅうしはふ 終止法【名】〔音〕せいしほふ(靜止法)に同じ。

しゅうしふ 聚集【名】『聚の字の音、正しくはしゅ』あつむること。集聚。

しゅうしん 衆心【名】多くの人の心。衆心、城を成す【句】『國語の周語に「伶州鳩曰、衆心成城、衆口鑠レ金」とあるに本づく』多數の人の心合へば、堅きこと城の如し。〔諺語〕

しゅうしん 終身【名】死ぬるまでのあひだ。一生涯。

しゅうしん 終審【名】■最後の審問。■〔法〕或事件の終結を告ぐべき、即ち上訴の途無きに至りし裁判所の審判。通常、上告裁判所の審判が終審なれども、大審院の特別權限に屬するものは、始審にて終審となることあり。「よ。

しゅうしん 崇信【名】すうしん(崇信)を見よ。

しゅうしん 終身【副】死ぬるまで。終生。

しゅうじん 衆人【名】■多くの人。おほぜい。■なみなみの人。普通人。

衆人廣坐【句】『史記の信陵君傳に「自迎二贏於衆人廣坐之中一」とあり』大勢の坐する所。

じゅうしん 従臣【名】扈從する臣下。

じゅうしん 縦震【名】〔地〕『英 Longitudinal earth quake 縦の字の音、正しくはしょう』斷層地震に於て、その震源たる斷層線の方向が、その地方を作れる山脈の主軸と平行せる時のもの。山脈の傾斜急なる側面に多し。(横震に對して)

じゅうしん 銃身【名】小銃の主要部。銃床によりて支持せられ、彈丸をこめて、發射の際、通過せしむる圓筒形の部分。現時は、鋼を用ひて造る。

じゅうじん 充牣・充仞【名】『牣はみつる義』滿つること。

しゅうしん-ぎねん 終身議員【名】辭職せざる限は解職せらるることなき議員。即ち貴族院の皇族議員・公爵議員・侯爵議員及び勅選議員。

しゅうしん-くわん 終身官【名】有罪の宣告又は懲戒の處分の外、自ら辭職せざる限は免ぜらるることなき官。即ち裁判官及び陸・海軍武官。

しゅうしん-さん 終身産【名】或特定人の生存中を限りて、その所有を許し、これが繼承を許さざる財産。

しゅうしん-せいめいほけん 終身生命保險【名】しぼうほけん(死亡保險)に同じ。

しゅうしん-ちょうえき 終身懲役【名】〔法〕むきちょうえき(無期懲役)の舊稱。(改定律令の語)

しゅうしん-ていききん 終身定期金【名】〔法〕終身定期金契約の目的たる金錢その他の物。

しゅうしん-ていききんけいやく 終身定期金契約【名】〔法〕契約の一。當事者の一方が、自己相手方又は第三者の死亡するまで、定期に金錢又は物品を相手方又は第三者に給付することを約するもの。

じゅうしんどう 縦振動【名】〔理〕『縦の字の音、正しくはしょう』振動體、その物の各部の震動の方向が、その物體の長さの方向と一致せる振動。

しゅうしん-ねんきん 終身年金【名】或特定人に對し、死亡するまで給與する年金。

しゅうしん-ほけん 終身保險【名】〔商〕しぼうほけん(死亡保險)に同じ。

しゅうしん-ろく 終身祿【名】その者の死亡するまで給與せられたる家祿・賞與祿。(永世祿・年限祿に對して)

じゅうしや 従者【名】隨從する者。ともづれ。「に同じ。

しゅうしやう 終正【名】しゅうしゃう(式正)に同じ。

しゅうしやう 宗性【名】〔人〕華嚴宗の學僧。藤原隆兼の子。大和の東大寺に學び、大安寺に住す。後嵯峨上皇のために、華嚴を說き、權大僧都に任ぜらる。文應元年勁に依りて、東大寺別當に補し、住すること三年。寂年詳かならず。年七十。著作多し。

しゅうじやう 衆情【名】多くの者の心。

じゅうしやう 銃床【名】小銃の銃身を裝置し、これを支持する部分。現時は、多くは胡桃(クル)の材を用ふ。

じゅうしやう 銃傷【名】てっぱうきず。銃

しゅうしやく-にろん 宗釋二論【名】〔佛〕宗論と釋論と。

じゅうしやーむこ 従者聟【名】從者の聟。

慈八卦柱曆「これや三毛よ、悪い男持つなよ……このさんが從者聟、よい雄猫添はそへへ」「人。うちて。

じゅうしゅ 銃手【名】小銃にて射撃する人。

しゅうじゅう 主從【名】主君と從者と。主君と家來と。

主從は三世(ゼサン)【句】主從の關係は、來世の次の世までも、緣有り。三世の緣。(「親子は一世」「夫婦は二世」に對して)〔諺語〕

じゅうじゅん 従順【名】■正しきに從ふこと。順序の正しきこと。順從。■じうじゅん(柔順)に同じ。「同じ。

しゅうしょ 衆庶【名】しゅうじん(衆人)に同じ。

しゅうしょ 聚訟【名】『後漢書の曹褒傳に「帝曰、諺言作二舍道傍一三年不レ成、會禮之家、名曰二聚訟一」とあるに本づく。聚の字の音、正しくはしゅ』或事件に對し、議論區區に分れて、一定せざること。

しゅうしょう 衆證【名】■衆人の證據。多くの證人。■〔法〕特に、三人以上の證人。〔鎌倉時代の語〕

しゅうじょう 宗乘【名】〔佛〕『乘は大乘。小乘などの乘に同じ。だいじょう(大乘)參照』一宗の宗義及び教典。殊に禪門及び淨土門にて、自家を標榜していふ。宗典の學問。(餘乘に對して)

しゅうしよく 終食【名】次條を見よ。

終食の間【句】『論語の里仁篇に「君子無二終食之間違レ仁」とあり。一飯の時間の義』僅かの時間。片時。

しゅうすぢ 主筋【名】主人たる關係ある身分柄。

しゅうすゐ 衆水【名】多くの水流。衆流。

しゅうせい 衆聖【名】多くの聖人。

しゅうせい 衆星【名】多くの星。

しゅうせい 衆生【名】多くの生物。しゅじやう(衆生)參照。「就。

しゅうせい 終成【名】できあがること。成

しゅうせい 終生・終世【名】生命の終るまでの間。一生。終身。畢生。

しゅうせい 宗制【名】宗教上の制度。

しゅうせい 終生【副】生命の終るまで。

しゅうせい 終聲【名】小銃を發射する聲。

しゅうせい-やく 聚成葯【名】〔植〕『衆の字の音、正しくはしゅ』しゅうやく(衆約)に同じ。

しゅうせつ 衆少【名】少なきものの多く積り重なれること。

衆少多きを成す【句】『漢書の董仲舒傳に「衆少成レ多、積小致レ鉅」とあり』少なきものも、集まれば多數となる。

しゅうせつ 終宵【名・副】よもすがら。とばん。徹夜。終夕。終夜。

しゅうせき 終夕【名・副】前條に同じ。

しゅうせき 充積【名】みちかさなること。

じゅうせき 充斥【名】みちみつること。充滿。「見。

しゅうせつ 衆說【名】衆人の說。多數の意見。

しゅうぜん 衆善【名】多くの善事。

じゅうぜん 銃戰【名】小銃を用ひてする戰。小銃戰。

じゅうせん 縦線【名】『縦の字の音、正しくはしょう』■たてのすぢ。■〔音〕〔英 Bu〕譜表の五線を縦貫して、全曲を等一なる時間を屬する小部分に區劃し、併せて強弱を判明にする直線。一條より成る單縦線と二條より成る複縦線とあり。前者は、ただ樂曲を小分するに用ひ、後者は、樂曲の終結又は段落を示し、また拍子もしくは調子の變更する時に用ふ。

せうせつ 小節【名】〔音〕せうせつ(小節)參照。

じゅうぜん 従前【名】今より前。以前。

しゅうそ 宗祖【名】一宗の開祖。祖師。

じゅうそ 従祖【名】祖父の兄弟。おほをぢ。従祖父。

しゅうそう 衆僧【名】多くの僧侶。衆徒。

じゅうそう 従僧【名】僧綱三綱などの僧職に随従する僧侶。伴僧。平家、法衣、自然に身に纏ひて、肩にかかり、天より黄金の鉢下る。二人の従僧、二人の童子、十人の下僧」

しゅうそく 終速【名】〔理〕『英 Final velocity』らくそく(落速)に同じ。「と。

しゅうそく 終熄【名】をはり熄(や)むこと。みたしふさぐこと。

じゅうそく 充足【名】みちたること。みたしたすこと。「又その人。

じゅうぞく 従属【名】つきしたがふこと。

じゅうそく-げんゆりつ 充足原由律【名】〔哲〕次條に同じ。

じゅうそく-げんり 充足原理【名】〔哲〕『英 Principle of sufficient reason』一の事物は、その然有るにつきては理由なかるべからずといふ原理。この原理を單に論理的のものと見れば、根據と歸結との關係、客觀界に移して、實在の方面より見れば、原因と結果との關係を示すものといふべく、從って歸納論理の根據たる齊一律・因果律のごときは、この原理の一部と見做すべきものなり。充足原由律。原由律。

じゅうそ-けいてい 従祖兄弟【名】従祖父の子。いやいとこ。再從兄弟。

じゅうそ-そふぼ 従祖祖父母【名】父の伯叔父母。祖父母の兄弟姉妹。

じゅうそ-そつ 従卒【名】■つきしたがふ兵卒。■各將校に專屬して、その公務上の使役に服する兵卒。品行方正・成績良好なる者を選びて任ず。

じゅうそ-そふ 従祖父【名】父の従父兄弟。いとこをぢ。おほをぢ。

じゅうそ-そふぼ 従祖祖父母【名】従祖父母の兄弟姉妹。

じゅうそ-そぼ 従祖父母【名】従祖祖父母

じゅうそ-そぼ 従祖母【名】従祖父の妻。いとこをば。おばをば。

じゅうそん 従孫【名】兄弟姉妹の孫。

しゅうた 衆多【名】數の多きこと。許多。

しゅうたい 宗體【名】宗旨の立てかた。宗義の實體。譬曲〔放下僧〕「われらが宗體と申すは教外(ケウ)別傳にして、言ふも言はれず、說くも說かれず、言句に出せば、教に落ち、文字を立つれば宗體に背く」

じゅうたい 銃隊【名】■銃卒を以て組織せる軍隊。■江戸幕府の銃卒の軍隊。文久三年創設。老中の支配に屬し、小筒組とも鐵砲組とも呼びたり。■〔兵〕銃を執りて、隊伍を編成せる水兵。その陸戰のために上陸するを、海軍陸戰隊又は略して陸戰隊といふ。

じゅうたい 縦隊【名】『縦の字の音、正しくはじょう』縦列に組みたる隊形。軍隊には、行軍及び夜間の攻撃等に用ひ、行軍縦隊・途上縦隊・全距離縦隊等の別あり。(横隊に對して)

しゅうたいせき 終堆石【名】〔地〕『英 Terminal moraines』たいせき(堆石)を見よ。

じゅうたい-わりたい 縦隊横隊【名】『縦の字の音、正しくはじょう』縦隊を數箇竝列したる隊形。

じゅうたう 充當【名】■あてはまること。あてはむること。■〔法〕『佛 Imputation des paiements』同一の債權者と債務者との間に、同種の目的を有する數箇の債權存する場合に、債務者がその全部の債權を消滅せしむるに足らざる辨濟をなせる時、その數箇の債權の中、消滅すべきものを定むること。充當權を有する者は、第一に辨濟者にして、辨濟者これを行使せざる場合には、辨濟受領者これを爲すを得。兩者共にこれを爲さざる場合には、法定の順序に從ふ。

しゅうたうだ 雌雄淘汰【名】〔動〕『英 Sexual selection』自然淘汰の一種。雄が雌の愛を買ひ、又は他の雄を倒して、雌を獨占せんとする天性のため、永年間に、漸次淘汰せられて、雄の色彩・音聲・形狀等の殊更に優れたるものとなること。例へば鶏の雄の羽毛の美なる、鶯の雄の美聲なる、獅子の牝(メ)に鬣(タテガミ)ある類。英國のダアヰン(C. Darwin)の唱道に係る。

しゅうだふし 主倒【名】主人の家をほろぼすこと。主人に迷惑をかくること。

じゅうたん 絨毯【名】『英 Carpet』毛・麻・綿などの絲を用ひて、平地又は天鵞絨(ビロード)のごとく花紋を織出したる厚き織物。もと舶來品にて、床の敷物又は鞄(カバン)などに用ふ。段通(ダンツウ)のごときも、この一種なり。

じゅうだん 銃彈【名】小銃の彈丸。

じゅうだん 縦斷【名】『縦の字の音、正しくはじょう』たてに切斷すること。(横斷に對して)

じゅうだん-めん 縦斷面【名】『縦の字の音、正しくはじょう』縦斷したる物の斷面。(横斷面に對して)

じゅうちん 銃陣【名】銃隊にて組織したる陣。

じゅうぢん 縦陣【名】『縦の字の音、正しくはじょう』〔兵〕各艦の首尾線の一直線内にある陣形。その單列なるを單縦陣、各小隊又は分隊ごとに縦陣を作りて二列もしくはその以上なるを、小隊縦陣・分隊縦陣と呼ぶ。

じゅうちゃう 戎仗【名】古、軍隊にて用ひし鼓・吹・幡・鉦などの類。

しゅうちゅう 衆中【名】■多くの人人の中。「衆中に辱む」■なかま。同僚。曾我虎が磨所に當番の衆中はなきか」■江戸時代に、評定所に出でて事を議せし、三奉行・大目付・目付などの稱。

しゅうちょ 衆女【名】多くの女。

しゅうづら 主面【名】主らしきかほ。(主に罵りていふ)

じゅうてい 従弟【名】をぢの子の、自分より年下の男なるもの。年下の男のいとこ。従父弟。(從兄に對して)

じゅうてい 縦堤【名】『縦の字の音、正しくはじょう』ていぼう(堤防)を見よ。

しゅうてう 終朝【名】夜あけより正午までの間。朝の間。

しゅうてき 衆敵【名】多くの敵。

しゅうてき 戎狄【名】えびす。夷狄。

しゅうてき 戎翟【名】太平記、戎翟の旌旗、天を掠めて」

しゅうでし 衆弟子【名】〔佛〕しゅでし(衆弟子)を見よ。

しゅうてん 終點【名】■最終の箇處。はて。■電車などの、線路の盡くる處。

しゅうてん 宗典【名】〔佛〕一宗の教義を述べたる經文・典籍。

じゅうてん 充塡【名】つめふさぐこと。つまりふさがること。塡充。「に同じ。

じゅうてん 充電【名】〔理〕ちくでん(蓄電)

じゅうてん-かしゃう 充塡假晶【名】〔鑛〕『英 Pseudomorphism by infiltration』一鑛物のありし跡に塡充して生じたる假晶。

じゅうてん-くわしゃう 充塡鑛床【名】〔地〕岩石中の空所に充塡して成れる鑛床。

しゅうでん-くわん 聚電環【名】『聚の字の音、正しくはじゅ』〔理〕すりっぷりんぐに同じ。

しゅうと 宗徒【名】宗門の信者。信徒。

しゅうと 衆徒【名】〔佛〕しゅと(衆徒)を見よ。

しゅうど 衆怒【名】衆人のいかり。衆忿。

しゅうど 衆怒難犯【句】『左傳の襄公十年の條に「子產曰、衆怒難レ犯、專欲難レ成」とあるに本づく』〔諺語〕

じゅうとう 充棟【名】『牛に汗し、棟に充つ』を見よ』棟木に屆くほど、書物の多きこと。

しゅうとうしゅ 雌雄同株【名】〔植〕『英 Monœcious』雌花と雄花とを同株に著くるもの。例へば胡桃(クルミ)・榛(ハシバミ)・胡瓜(キウリ)などにおけるもの、これなり。(雌雄異株に對して)**たんせいくわ 單性花**參照。

しゅうとうたい 雌雄同體【名】〔動〕『英 Hermaphrodite』雌雄の兩生殖器を一箇體内に具備するもの。下等動物殊に寄生蟲に多く、脊椎動物中にては、盲鰻(ヤツメウナギ)その唯一の奇例にして、時期を異にして、同一個體より、或は精蟲を生じ、或は卵子を生ず。雌雄一體。(雌雄異體に對して)「じ。

しゅうとく 宿德【名】しゅく(宿德)に同

じゅう-とくぶん 主徳分【名】従者は己が仕ふる主人に徳分を附くべきこと。
じゅう-どり 主取【名】主人に仕ふること。
じゅうなん-ざん 終南山【名】〔地〕支那陝西(せんせい)省西安府城の南に在る山。秦嶺山脈中の一峰。南山。
じゅう-ねん 終年【名】㊀年の始より終までの間。一年中。㊁天年を終ふるまでの間。一生涯。
じゅう-は 衆葩【名】多くの花。
じゅう-は 宗派【名】㊀宗門の分派。㊁流儀。流派。
じゅう-は 銃把【名】銃床の四みたる部分、即ち照準・発射の際、右手にて握るところ。だいじり。
じゅう-は 縦波【名】『縦の字の音、正しくはしょう』㊀船の首尾に平行して打つ波。㊁〔理〕『英 Longitudinal wave』波動の伝播する媒質の各部の振動が、波の進行の方向に平行なるもの。この波は、その媒質中に、疎密の両部を生じ、この疎密相隔てたるものが、波動の源より擴り出づ。音波はその一例なり。疎密波。(横波に對して)
じゅう-ば 戎馬【名】戦争に用ふる馬。軍馬。「じ。
しゅう-はい 崇拝【名】すうはい(崇拝)に同
しゅう-はい 衆輩【名】多くのともがら。「花。群芳。
しゅう-はう 衆芳【名】多くのかうばしき数多のやから。
しゅう-はう 衆邦【名】多くの國。群邦。
しゅう-ばう 衆望【名】衆人の屬望。
じゅう-はう 銃砲【名】小銃と大砲と。
じゅうはうくわやくるゐ-とりしまり-はふ 銃砲火薬類取締法【名】明治三十二年法律を以て公布せられたる銃砲及び火薬類の取締に關する法規。
じゅうはう-しやう 銃砲商【名】銃砲を販賣すること、又その人。
じゅう-はふ 従法【名】〔法〕けいしきはふ(形式法)に同じ。(主法に對して)「同じ。
しゅう-はん 終判【名】しゅうしん(終審)に同じ。
じゅう-はん 従犯【名】〔法〕二人以上にて罪を犯す場合に、従たる地位に立つこと、即ち正犯を幇助(ほうじょ)すること、又その犯人。正犯を教唆(きょうさ)したる場合も、これに準ぜらる。(正犯に對して)
じゅうはん-しゃ 従犯者【名】犯罪に關し、従たる地位にある者。
しゅう-び 終尾【名】をはり。しまひ。
しゅう-び 崇美【名】すうび(崇美)に同じ。
しゅう-び 衆美【名】多くの美しき父はよき物事。「かひ女。
じゅう-ひ 従婢【名】隨従する下婢。めしつかひ女。
じゅう-び 戎備【名】ぐんび(軍備)に同じ。
じゅう-び 充備【名】みちそなはること。充分に具備すること。「こと。
じゅう-び 充美【名】充ち備はりて、美しきこと。
しゅう-ひてり 主旱【名】仕ふべき主人のなきこと。
しゅう-ひやう 衆評【名】衆人の批評。
しゅう-びやう 衆病【名】多くの病氣。しゅびやう(衆病)參照「の夫。
しゅう-ふ 衆夫【名】㊀多くの男。㊁多くのつま。
しゅう-ふ 衆婦【名】㊀多くの婦女。㊁多くのつま。
じゅう-ふ 従父【名】多くの父。衆人の父。
じゅう-ふ 従父【名】をぢ(伯父・叔父)に同じ。「同じ。
じゅう-ぶ 従部【名】せつめいぶ(説明部)に同じ。
しゅう-ふう 終風【名】終日吹く風。
しゅう-ふう 宗風【名】㊀その宗門又は宗師(シ)獨特の風儀。太平記「寺を立て、宗風を開基するに」㊁家元の流儀。
じゅう-ふく 銃腹【名】すあひに同じ。
じゅう-ふく 戎服【名】㊀じゅうい(戎衣)に同じ。㊁やうふく(洋服)に同じ。「同じ。
じゅう-ふく 従服【名】ふくじゅう(服従)に同じ。
じゅうふ-けい 従父兄【名】じゅうけい(従兄)に同じ。
じゅう-ぶつ 従物【名】〔法〕他物に附屬して、法律行爲の目的となる物。即ち或物の所有者が、その物の常用に供するために、これに附屬せしめたる、自己所有の他の物。(主物に對して)
じゅうふ-てい 従父弟【名】じゅうていい(従弟)に同じ。「怒。
しゅう-ふん 衆忿【名】衆人のいかり。衆
しゅう-ぶん 衆蚊【名】『衆の字の音、正しくはしゅ』群りたる蚊(カ)。
衆蚊雷を成す【句】㊀『南史の梁武陵王紀傳に「夏季煩暑、衆蚊成レ雷」とあるに本づく』多くの蚊のうなり、雷の如く聞ゆ。〔諺語〕㊁『漢書の景十三王傳に「中山靖王聞レ樂、對曰、夫衆口鑠レ金、衆讒成レ雷、朋黨執レ虎、十夫橈レ椎、是以文王拘二於羑里一、孔子囿二於陳蔡一」とあり。衆は蚊に同じ』群小の譏言に譬へていふ語。〔諺語〕
しゅう-ぶん 衆分【名】しゅぶん(衆分)を見よ。「よ。
じゅう-ぶん 充分【副】物の充ちたるさま。十分。
しゅう-へい 衆兵【名】多くの兵卒。
じゅう-へい 戎兵【名】武者。兵士。
じゅう-へい 従兵【名】つき従ふ兵。とものつはもの。従卒。手兵。
しゅう-べっしゆ 雌雄別株【名】〔植〕しゅういしゅ(雌雄異株)に同じ。
しゅう-べつたい 雌雄別體【名】〔動〕しゅういたい(雌雄異體)に同じ。
しゅうへん-さうしやう 聚片雙晶【名】〔鑛〕『英 Polysynthetic twin 聚の字の音、正しくはしゅ』雙晶の一種。多くの薄き結晶體が、一つおきに、同一方向に列べるもの。「の母。
しゅう-ぼ 衆母【名】㊀多くの母。㊁衆人
じゅう-ぼ 充補【名】㊀ほじゅう(補充)㊁に同じ。㊁缺員の官職に任ずること。
じゅう-ぼ 従母【名】母方のをば。
じゅうぼ-い 従母姨【名】前條に同じ。
しゅう-ぼう 衆峰【名】多くの峰。
しゅう-ぼく 衆木【名】多くの樹木。
じゅう-ぼく 従僕【名】召使の男。しもべ。下男。僕。
じゅうぼ-けい 従母兄【名】従母の兄。
じゅうぼ-けいてい 従母兄弟【名】従母の男子。
じゅうぼ-こんてい 従母昆弟【名】前條に同じ。「子。
じゅうぼ-しまい 従母姉妹【名】従母の女
じゅうぼ-てい 従母弟【名】従母の弟。
じゅう-ぼふ 宗法【名】宗門の法則。
じゅう-まい 従妹【名】をぢの子にて、自分より年下なる女。年下の女のいとこ。(従姉に對して)
しゅう-まう 衆盲【名】㊀多くの盲人。㊁多くの愚かなる者。衆愚。
衆盲、象を評す【句】「群盲象を評す」に同じ。
じゅう-まうふ 絨毛布【名】毛織の布。
しゅう-まつ 終末【名】をはり。はて。終結。
しゅうまつ-しけん 終末試驗【名】一定の學業を修了したる最後に行ふ試驗。
じゅう-まん 充満【名】満つること。充斥。
しゅう-みん 衆民【名】多くの民。群民。
しゅう-む 衆務【名】多くの事務。
じゅう-うん 受蘊【名】〔佛〕どうん(五蘊)を見よ。「じ。
しゅう-めい 主命【名】しゅめい(主命)に同じ。
しゅう-めう 衆妙【名】多くの妙理。
しゅう-もく 衆目【名】衆人の目。もろもろの人の觀察。
しゅう-もち 主持【名】主人に事へをる身。しゅじんもち。一代男「或は主持、さはりある人、歸るにまぎれて、出口のあんどんうるさく、横顔して走り出で」
しゅう-もん 宗門【名】㊀佛教に歸依(きえ)する人の進み入る門。教門。㊁その人、その家の信仰せる佛教。宗旨。㊂〔佛〕禪宗にて、自宗を眞正なる釋迦の教法を傳へたるものとして、自讚していふ語。
しゅうもん-あらため 宗門改【名】㊀しゅう

しにんべつあらため【宗旨人別改】(宗旨人別改)に同じ。㊁
しゅうもんあらためやく(宗門改役)の略。
しゅうもんあらためちょう【宗門改帳】【名】宗旨人別改を記して、幕府の寺社奉行に上申せしめし帳簿。天領・私領を論ぜず、寛文の頃より年毎に施行せり。
しゅうもんあらためやく【宗門改役】【名】江戸幕府の職制の一。各戸に就きて、その歸依せる宗門を調査し、耶蘇教徒の檢察を掌りしもの。舊稱、吉利支丹御支配・切支丹奉行・切支丹役。
しゅうもんうけあひ【宗門請合】【名】德川時代に、寺院にて、その檀家の一につきて、邪宗、卽ち耶蘇教・悲田宗・不受不施派等に屬せざる旨を證明せしこと。
しゅうや【宗夜】【名】夕より曉までの間。夜ほし。
しゅうや【終夜】【副】夕より曉まで。夜どほし。
しゅうやう【衆陽】【名】おほくの陽氣。衆陽の長(かみ)【句】『漢書の季尋傳に「日者衆陽之長」とあるに本づく』たいやう(太陽)の異稱。
しゅうやく【聚藥】【名】【植】『英Syngenesis 聚の字の音、正しくはしゅ』互に連絡して、一の筒狀をなせる蕊。聚成蕊。
じゅうやく【銃藥】【名】小銃の發射に用ふる火藥。たまぐすり。
しゅうやうゆうずゐ【聚蕊雄蕊】【名】【植】『英Syngenesious stamens 聚の字の音、正しくはしゅ』合生雄蕊の一。蕊は相連なりて環狀をなし、花絲の相分離せるもの。菊科に屬する花に見る。
しゅうよう【衆用】【名】多くの用事。
しゅうよう【主用】【名】しゅよう(主用)㊀に同じ。
じゅうよう【充用】【名】あてがひ用ふること。あてはめ使ふこと。「同じ。
じゅうよう【從容】【名】しょうよう(從容)に同じ。
じゅうらい【衆籟】【名】ばんらい(萬籟)に同じ。太平記「衆籟、曉寒うして、月、庭前の松にかかり」「以前。
じゅうらい【從來】【名】これまで。今まで。
じゅうらいのざ【衆來座】【名】室町幕府時代の評定衆の會所。また管領職の家の廣間にもいへり。
しゅうらく【聚落】【名】『聚の字の音、正しくはしゅ』一部落をなせる村里。むらざと。
じゅうらん【縱覽】【名】『縱の字の音、正しくはしょう』心のままに見ること。
しゅうり【衆吏】【名】多くの官吏。
しゅうりう【衆流】【名】㊀多くの河。衆水。「じ。㊁種種なる流儀。
しゅうりがひ【名】【動】いがひ(蛤貝)に同じゅうりつぜい【從率稅】【名】【經】隨時發生する事件を課稅の目的とし、一定の稅率に從ひて賦課せる租稅。例へば關稅・消費稅・相續稅の類。
じゅうりやう【從良】【名】藝者の、情夫に受けだされて、その妻となること。
じゅうりやうぜい【從量稅】【名】【法】『獨Specifische Zoll』關稅の一。貨物の大いさ・自方・箇數・枡目等すべて、數量を標準として賦課するもの。(從價稅に對して)
じゅうりやうぜいひん【從量稅品】【名】從量稅を課せらるる物品。
じゅうりやうぜいりつ【從量稅率】【名】從量稅を課する一定の率。
しゅうりやうせんくわ【雌雄兩全花】【名】【植】りやうせいくわ(兩性花)に同じ。
しゅうりよ【衆慮】【名】多くの人のおもんぱかり。
じゅうりよ【戎虜】【名】えびす。夷狄。戎狄。太平記「誘引戎虜」
しゅうりよく【衆力】【名】多くの人の力。
じゅうる【(英Joule)】【助數】『英人ジュウルの名に因めるもの』仕事の單位、エルグの千萬倍。約〇・二四カロリイの熱量に相當す。
しゅうるし【朱漆】【名】朱色の漆。
じゅうるのていりつ【ジュウルの定律】(英Joule's law)【名】【理】熱と電流のエネルギイとの關係を規定せる定律。卽ち輸道の各部にて、單位時間に發する熱は、その部分の抵抗と電流の强さの平方との相乘積に正比例すといふもの。英人ジュウル(J. P. Joule)の創定に係る。
じゅうるゐ【從類】【名】一族・家來の者ども。謠曲「望月」「あへなく射たれたまひし後に、多かりし從類も、ちりぢりになり」
しゅうれい【宗令】【名】【佛】宗門の命令。
しゅうれう【終了】【名】をはり。終來。終尾。
しゅうれう【衆寮】【名】【佛】關山派の學問僧。甲關東叢林洞家にては江湖僧といひ、關山派にては衆寮と申され候」
じゅうれつ【縱列】【名】『縱の字の音、正しくはしょう』㊀たてのならび。たて。(橫列に對して)㊁【兵】彈藥・糧食等を運搬する部隊。主に輜重兵の擔任に屬す。彈藥縱列・糧食縱列等の種類あり。
じゅうれつ【縱裂】【名】『縱の字の音、正しくはしょう』縱に裂開すること。
しゅうれっしや【終列車】【名】當日の最終に發する列車。
じゅうれふ【銃獵】【名】小銃にて鳥獸を獵すること。
じゅうれふぜい【銃獵稅】【名】銃獵者に課する稅金。遊獵・職獵及び身分によりて等級あり。
じゅうれふめんじやう【銃獵免狀】【名】しゅれふめんじやう(狩獵免狀)に同じ。
しゅうれん【聚斂】【名】一聚の字の音、正しくはしゅ』稅を多く取立つること。
しゅうろ【手爐】【名】しゅろ(手爐)の音便。
しゅうろ【櫻櫚・棕梠】【名】【植】しゅろ(櫻櫚)に同じ。名義抄「櫻櫚、シユウロ」
しゅうろん【衆論】【名】衆人の論。衆議。
しゅうろん【宗論】【名】㊀宗教上の各派の互に主義を述べて議論すること。宗門上の爭論。太平記「宗論の事は、三國の間、先例多く候ふを」㊁【佛】一經に就きて、宗旨を總括し、法義を建立すること。(釋論に對して)㊂能(の)の狂言の一。法華宗の僧と淨土宗の僧と宿を共にして、法門をなすことを作れるもの。
じゅうわ【縱橫】【名】『縱の字の音、正しくはしょう』㊀たてとよこと。よこたて。㊁勝手氣儘。思ふまま。㊂自由自在なること。池より拘束を受けぬこと。縱橫の變【句】支那戰國時代の縱橫家の唱へし說。次條參照。
じゅうわか【縱橫家】【名】『縱の字の音、正しくはしょう』史記の孟子傳に「天下方務於合從連衡」とありて、秦隱に「文顯曰、關東爲從、關西爲橫、高誘曰、關東地形從長、蘇秦相六國、號爲合從、關西地形橫長、張儀相秦、壞六國從、使事秦、秦合、號曰連橫」とあり』支那戰國時代に、國家と國家とを縱橫に分合して經營せんと企てし策士、卽ち蘇秦・張儀の類。がっしやう(合從)れんかう(連衡)參照。
じゅうわうむげ【縱橫無礙】【貶】『縱の字の音、正しくはしょう』四方・八方さはりなきさま。
じゅうわうむじん【縱橫無盡】【貶】『縱の字の音、正しくはしょう』四方・八方。むやみ。心のまま。
しゅうわしんがう【終話信號】【名】『英Clearing-off-signal』電話の通話を終りにすることを交換手に報ずる信號。電話機に附屬する把手を回轉し、又は受話機を懸金物に懸くるによりて、自動的に報ずるもの。
しゅうわへうじき【終話表示器】【名】『英Clearing-off-indicator』電話の終話信號ありたる時、交換機に、その信號を顯はす表示器。
じゅうゐ【從位】【名】【從】何位と呼ぶ位、卽ち位階の各等を更に正從の二等づつに分ちたるものの低き方。(正位に對して)
じゅうゐぎし【從威儀師】【名】【法會の時、威儀師に從ひて、衆僧の容儀を正すことを掌る役僧。定員八人。從儀師。
じゅうゐん【充員】【名】人員を補充すること、又その補充したる人員。
じゅうゐんせうしふ【充員召集】【名】【兵】陸軍又は海軍の召集の一。動員に當り、諸部隊の要員を充足するために、在鄉軍人を召集すること。召集中最も重要なるもので、迅速・機敏・緻密を要す。
じゅうゐんれいじやう【充員令狀】【名】充員召集に召應せしむるため、召員に交付する令狀。聯隊區司令官之を作成す。「じ。
しゅうゑ【衆會】【名】しゅうくわい(衆會)に同じ。
しゅうゑん【衆怨】【名】多くの人のうらみ。

じゆ-え 受衣【名】〔佛〕禪僧の弟子となり、僧衣を受けて著ること。傳衣。

じゆ-えい 輪贏【名】ゆえい(輸贏)を見よ。

じゆ-えい 樹影【名】木のかげ。こかげ。

じゆ-えい 孺嬰【名】じゅがい(孺孩)に同じ。

じゆえい 壽永【名】安徳天皇の御代の年號(紀元一八四二年—一八四三年)。

じゆえい-こばん 壽永小判【名】昔の金貨の一。縦二寸二分弱横一寸七分五厘强・重さ二十四匁あり。面に人の立てるが如き極印、背に壽永と花押との極印あり。壽永中の鑄造とも、北條泰時の所造とも言傳ふ。

じゆ-えう 主要【名】かなめ。主眼。必要。

じゆ-えう 需要【名】■もとむること。もとめ。■〔經〕『英Demand』財貨の交換力を有する者の、一定の財貨に對する慾望、即ち或財貨を得んと欲する願望と、これを購買する實力とを結合したるもの。(供給に對して)

じゆ-えう 壽夭【名】ながいきと、わかじにと。長壽と夭死と。

じゆえう-かぶはん 主要甲板【名】船の主要なる甲板。二層甲板を有する船は、その上甲板を、三層以上の甲板を有する船は、その第二甲板を稱す。

じゆえう-しか 需要市價【名】〔經〕貨物の需要に對して支拂ふ市價。

じゆえう-せいぶん 主要成分【名】主要なる成分。主成分。「同じ。

じゆえう-ちやう 主要帳【名】〔商〕次條に同じ。

じゆえう-ちやうぼ 主要帳簿【名】〔商〕次條に同じ。

じゆえう-ぼ 主要簿【名】〔商〕『英Main book』會計の始末をまとめ、全般の計算を明かにする帳簿。普通に、總勘定元帳・日記帳・仕譯帳の總稱。主要帳簿。

じゆえき 受益【名】利益を受くること。

じゆえき-しや 受益者【名】〔法〕利害關係人中の利益を受けたる者。

じゆえつ 守悅【名】〔人〕伊勢國宇治山田市慶光院の開山の尼。足利時代に、法嗣清順と共に神宮の造營を謀りて、中途に寂し、その嗣周養、遂にこれを完成す。功により、紫衣・上人號を許さる。

じゆ-えふ 樹葉【名】木の葉。このは。

じゆ-えん 酒宴・酒醼【名】さかもり。うたげ。三遍。醼飲。

じゆ-えん 珠艷【名】珠のごとくうつくしきつや。太平記「只珠艷尤態の獨り能く是を致すのみに非ず」「筵。

じゆ-えん 壽筵【名】長壽を祝ふ座席。賀

じゆ-えん 壽宴【名】長壽を祝ふ酒もり。

じゆえん-ぐるま 酒宴車【名】芝居の囃子(ハヤシ)の一。三味線と太鼓とを用ふ。

じゆ-おん 殊恩【名】特殊の恩惠。

じゆ-おん 主恩【名】主君より受くる恩。

じゆ-おん 主音【名】■〔理〕げんおん(原音)に同じ。■〔音〕しゅうそうおん(主調音)に同じ。「じ。

じゆ-おん 嘱音【名】〔語〕しびらんさに同

じゆ-か 主家【名】主人の家。

じゆ-か 酒家【名】■さかや。酒店。酒肆。■酒のみ。酒すき。酒客。

じゆ-か 首夏【名】■夏のはじめ。■陰暦四月の異稱。

じゆ-か 朱夏【名】『夏は、太陽の威盛んにして、色殊に赤きより、支那にては、古來赤色を夏に配す』な(夏)に同じ。(青春・白秋・玄冬に對して)

じゆ-か 酒價【名】酒の代價。さかて。

じゆ-か 手下【名】『三國志の甘寧傳に「權賜二米酒衆殺一寧乃料腸二手下百餘人一食」とあり』てした。部下。配下。

じゆ-が 主我【名】『英Egoism』〔哲〕■じが(自我)に同じ。■倫理上、他人の利害如何に關せず、ただ自己の慾情・願望を遂げんとすること。何事も自己の利害より割出すこと。自己。

じゆ-が 珠芽【名】〔植〕『英Bulbel』きうが(球芽)に同じ。「(樹下)參照。

じゆ-か 樹下【名】木の下。こかげ。じゅげ

じゆ-か 儒家【名】■儒者の家。■じゅしや(儒者)に同じ。

じゆ-が 儒雅【名】儒流にして文雅なること。太平記「身、儒雅の下より出で、望勳業の上に達せしかば」

じゆ-が 壽賀【名】がじゅ(賀壽)に同じ。

じゆ-かい 手械【名】てかせ。

じゆ-かい 酒戒【名】禁酒のいましめ。

じゆ-かい 酒海【名】■古、酒を容るるに用ひし器。和名抄「酒海」■酒量の多きこと。酒器。■本願寺にて、門主が正月元日に、宗祖親鸞の像の前に、酒肴を供する行事。

じゆ-かい 首鎧【名】かぶと。首甲。

じゆ-かい 受戒【名】〔佛〕得度を得たる者の「戒(イ)を受くること。これを受くれば男女・僧俗を問はず、佛・菩薩の徒となるを得といふ。

じゆ-かい 授戒【名】〔佛〕得度を得たる者に、戒(イ)を授くること。新拾遺「延曆寺の戒壇更に造りて、澄覺法親王、授戒行ひける時」「子。嬰兒。孺嬰。

じゆ-がい 孺孩【名】あかご。ちのみご。孺

じゆかい-え 授戒會【名】〔佛〕受戒の法會。盛衰記「授戒會を行ひ始められしより」

じゆ-かう 趣向【名】■おもむき。こころざし。趣意。■しくみ。かんがへ。工夫。

じゆ-かう 酒肴【名】酒と肴(サカナ)と、又その馳走。

じゆ-がう 首號【名】しょがう(初號)に同じ。

じゆ-かう 壽考【名】ながいき。長壽。

じゆかう-こくど 衆香國土【名】〔佛〕次條に同じ。

じゆかう-せかい 衆香世界【名】〔佛〕維摩經の香積佛(カウシヤク)品に、香積如來の淨土なりと記せる世界。一切の樓閣は香を以て造り、その國土の香氣、十方諸佛の世界に比して最もすぐれたりといふ。

じゆ-がき 朱書【名】■しゅしょ(朱書)に同じ。■楊弓にて、百手(モモ)即ち三百矢の内、五十矢以上、的に中ること。ていがき(泥書)參照。

じゆ-かく 手挌・手格【名】『手にて挌(カ)つ意』なぐりあふこと。なぐりあひ。挌鬪。

じゆ-かく 酒客【名】酒のみ。酒すき。上戸。酒家。

しゆ-かく 主格【名】■〔語〕『英Subjective case』名詞の格の一。主詞として用ひらるるもの。■〔法〕しゅたい(主體)に同じ。

しゆ-かく 主客【名】■主人と客と。■『客を主(ヤド)る意』古、支那にて、四方よりその朝廷に來る賓客を掌りし職。■〔語〕主格と賓格と。主語と客語と。

主客の座【句】一室中にて、主客の著く座席。(「通(ヨヒ)の座」に對して)

しゆ-かく 種殼【名】〔植〕『羅nucleus』ぐわいしゅひ(外種皮)に同じ。

しゆ-かく 種核【名】■たね。さね。■〔植〕『英Nucleus』種皮の内部に在るもの、即ち種子の實體。胚と胚乳とより成る。仁。

しゆ-がく 修學【名】〔佛〕しうがく(修學)に同じ。

しゆ-がく 朱學【名】しゅしがく(朱子學)の略。

しゆ-がく 手額【名】『宋史の司馬光傳に「衞士望見、以手加額曰、司馬相光也」とあるに本づく。「手を額に當つ」參照』額に手をあつること、即ち敬禮すること。

じゆ-かく 壽客【名】〔植〕きく(菊)の異稱。

じゆ-がく 儒學【名】儒教の學問。

じゆ-がく 鷲嶽【名】〔地〕りやうじゅせん(靈鷲山)■に同じ。

しゆ-がく-しや 修學者【名】〔佛〕學問を修めたるもの。平家「止事(ヤムゴト)なき修學者、智慧深き大先達に身き捧げられては」

しゆがく-ゐん 修學院【名】■山城國愛宕(オタギ)郡修學院村即ち比叡山の西麓にありし寺。平安朝の頃、播磨守佐伯(サヘキ)公行の、叡山の僧勝算のために建てしもの。吉野朝以後、戰亂のために廢滅して、田野と化し、寺號はただ村名となりて殘るのみ。■承應年中、江戸幕府にて、前項の修學院の舊地に建てて、後水尾法皇に獻進せし離宮。今は宮内省の所轄たり。

修學院の八景【句】修學院内の勝れたる八つの景、即ち修學院晩鐘・村落晴嵐・遠岫(エンシウ)歸帆・松崎(マツザキ)夕照・茅檐秋月・平田落鴈・臨雲夜雨・叡峰暮雪。

しゆ-がさ 朱傘【名】地紙を朱色に染めたるさし傘。室町時代に、貴人の間に用ひら

れたり。

しゅがしゅぎ 主我主義【名】〔哲〕りこしゅぎ(利己主義)に同じ。

しゅがせつ 主我説【名】〔哲〕前條に同じ。

しゅーかふ 首甲【名】かぶと。首鎧。

しゅーがふ 衆合【名】〔佛〕次條の略。太平記「衆合叫喚の罪人も斯くやとぞ見えたりける」

しゅがふちごく 衆合地獄【名】〔佛〕『梵Sañjīvaの譯語』八大地獄の第三。殺生・偸盗・邪淫等の惡業を造れる者の墮つる所。二大鐵山の間にありて、人これに墮つれば、二山合して壓し、流血河を成すといふ。又この地獄にある者の壽命は、二十一億四十萬歳なりと稱せらる。石割地獄。衆合。謡曲(綉重荷)「衆合地獄の重き苦」

しゅがふぶん 主合分【名】〔鑛〕『英Essential constituents』相合して、或岩石を構成する鑛物中の主要なるもの。火成岩において特に一定し、普通なるは石英・正長石・斜長石・雲母・角閃石・輝石・橄欖石等なり。例へば花崗岩の主合分が石英・正長石・雲母なる類。(副合分に對して)

しゅーかん 手簡・手翰・手柬【名】てがみ(手紙)に同じ。

しゅーかん 主幹・主監【名】もとじめ。とりしまり。主任。

しゅーがん 主眼【名】大切なるところ。かなめ。眼目。

しゅーがん 朱顔【名】①あかき顔。緋顔。②『載叔倫の詩「早春曲」に「朱顔未レ衰消息稀」とあり』血色の朱の如く麗(ウル)しき顔。紅顔。

じゅーかん 樹間【名】木と木との間。このま。

じゅーかん 樹幹【名】樹木のみき。

じゅーがん 入眼【名】成就すること。成功。にふがん。**じゅげん**(入眼)參照。愚管抄「女子入眼の國」

しゅーがらかさ 朱傘【名】しゅがさ(朱傘)に同じ。

しゅーき 珠璣【名】①『璣は方形のたま』たま。②玉の如き詞藻。

しゅーき 酒旗【名】さかばた(酒旗)に同じ。

しゅーき 酒器【名】酒を飲む時に用ふる器。即ち杯など。

しゅーき 酒氣【名】①酒のかをり。酒のあぢ。さかけ。②酒に醉ひたる氣分。(蟋八卦柱曇)「たった今歸り、少し酒氣もござれども、若し急な御用もや」

しゅーき 手記【名】手づからしるしつくること。おぼえがき。

しゅーき 主記【名】①明治初年の太政官の職員の一。書記・計算のことを掌りし判任官。明治三年設置、同四年太政官に正院(セイイン)・左院(サイイン)の設けらるるや、その職員として、大・權大・少・權少の四官に分れ、後に、中・權の二等を加へられしが、同十年正院と共に廢止せらる。②臺灣舊辨務署の職員。辨務署長又は辨務支署長の命を受けて、その主務に從事し、又は辨務支署長となりて、部内の行政事務を管理せし判任官。

しゅーき 朱器【名】①朱塗の器具。②すき(朱器)に同じ。

しゅーき 朱熹【名】〔人〕支那南宋の學者。字は元晦、又仲晦。晦庵・晦翁・滄洲・雲谷・紫陽等の號あり。十九歳にして進士に及第したれども、任官の期甚だ短く、力を專ら著述に盡し、經傳解・四書註・通鑑綱目・近思錄・小學等の著あり。慶元六年歿す。年七十一。後世尊稱して、朱子といふ。

しゅーぎ 手技【名】手にてするわざ。てわざ。手藝。

しゅーぎ 堅議【名】りふぎ(堅議)に同じ。(廣學に對して)下學集「堅議、シユギ」

しゅーぎ 主義【名】主張する見解。守持する見解。

じゅーき 壽器【名】ひつぎ。棺。

じゅーき 受寄【名】寄記を受くること。

じゅーき 受記【名】〔佛〕授記せらるること。受莂(ジュヒツ)。

じゅーき 授記【名】〔佛〕佛の、發心せる衆生に對して、來世は必ず佛と作(ナ)るべき旨の記別を授くること。謡曲「自圍」「迦葉(カセフ)世尊、西天(テン)に出世したまふ時、大聖釋尊その授記を得て」「守。

しゅーきう 守舊【名】舊習を守ること。保國。巡禮。托鉢。遊行(ユギヤウ)。すぎやう。

しゅーきう 種牛【名】たねうし。

じゅーきう 需求【名】もとめ。需要。

じゅーきざいぶつ 受寄財物【名】〔法〕寄託を受けて保管する財物。

じゅーぎし 從儀師【名】じゅうぎし(從威儀師)に同じ。

じゅーきしや 受寄者【名】〔法〕寄託契約によりて、その受取りし物を保管する人、又は保管の義務を負ふ人。(寄託者に對して)

しゅぎーはん 衆議判【名】歌合の時、普通の場合のごとく、一人の判者によりて優劣を定むる方法に依らず、多人數にて、互に論駁して判定すること。著聞「作者の名を隱して、衆議判にて侍りけるに」

しゅぎーひやう 衆議評【名】前條に同じ。

しゅーきふ 首級【名】『支那の秦代に、敵の首一つを斬りたるごとに、爵一級を得る制度なりしより、級の字を添へていふ』討ちとりたる首。しるし。

じゅーきふ 需給【名】需要と供給と。需供。

じゅきぶつ 受寄物【名】〔法〕受寄者が、保管のために受取りたる物。(寄託物に對して)

しゅーきん 手巾【名】てぬぐひ。てふき。はんけち。

しゅーきん 手巾【句】著衣の上に締むる手巾の帶。賀古敎信七墓廻「手巾の上帶くるくると…しるしの松の枝垂れし梢に、帶を結び下げ」

しゅーきん 手筋【名】〔醫〕手骨附屬の筋。拇指側・小指側・中央部の三に分つ。

じゅーきん 儒巾【名】支那にて、未だ及第せぬ進士のかぶりし帽子。

しゅきんおび 手巾帶【名】切地のままにてくるくると卷く帶。僧侶などの用ひしもの。今の兵兒帶の類。卯月の潤色「これは又白縮緬の手巾帶、衣の上によからうと、氣の付いた伯母御樣」

しゅーきやう 酒狂【名】酒に醉ひて、心の狂ふこと。さかがり。酒亂。酗酒(キユウ)。

しゅーぎやう 修行【名】①しうかう(修行)に同じ。②〔佛〕身・口(ク)・意の三業(サンゴフ)に通じて、佛法を修習し、作行(サギヤウ)すること。③藝術を修め研くこと。修學。稽古。④廻國。巡禮。托鉢。遊行(ユギヤウ)。すぎやう。五藝術稽古のために、諸國を遊歷すること。

しゅーぎやう 執行【名】①しっかう(執行)に同じ。狂言「愚僧は、懺法の執行樣(ヤウ)を知らぬが」②寺にて、事務を總理する職。しぎやう。③總攝按の下に隷する職。

じゅーきやう 誦經【名】〔佛〕聲に出して、經を讀むこと。ずきやう。讀經。

じゅーきやう 壽經【名】〔書〕むりやうじゅきやう(無量壽經)の略。「じ。

じゅーぎやう 儒形【名】あまがつ(天見)に同じ。

しゅぎやうじや 修行者【名】修行をなす者。すぎやうじや。すぎやうざ。

しゅぎやうだいほふしゐ 修行大法師位【名】天平寶字四年に設けられし僧位九階の一。修行位の上に位し、勅授に准ぜられしもの。

しゅぎやうぢゆうゐ 修行住位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。修行入位の上に位し、奏授に准ぜられしもの。

しゅぎやうにふゐ 修行入位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。その最下級に位し、奏授に准ぜられしもの。

しゅぎやうほふしゐ 修行法師位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。最上級に位し、勅授に准ぜられしもの。

しゅぎやうまんゐ 修行滿位【名】天平寶字四年に設けられし修行位の四階の一。その第二階に位し、奏授に准ぜられしもの。

しゅぎやうもん 修行門【名】〔佛〕しもん(四門)(二)を見よ。

しゅぎやうゐ 修行位【名】僧職の一。三綱に次げるもの。修行の僧に懈怠(ケタイ)・過失ある時は、僧綱に告げて、これを正すことを掌りしもの。

しゅーきやく 手脚【名】てとあしと。手足。

しゅーきゅう 朱宮【名】朱塗の宮殿。

しゅーきゅう 守宮【名】〔動〕①やもり(守宮)に同じ。②『事文類聚に「漢武帝時、以二端午日一取二蜥蜴一置二之器一飼以二丹砂一、至二明年端午一搗レ之以塗二宮人臂一有レ所レ犯消滅、不レ爾則如二赤痣一、故得二守宮之名一」とある』とかげ(蜥蜴)に同じ。

しゅーぎよ 守禦【名】守り防ぐこと。ふせぐこと。ふせを ろれる り よゆや もめむみ ほへふひは のねぬにな とてつちた そせすしさ こけくきか おえういあ

ぎ守ること。太平記「萬卒守禦の嚴(おごそ)しきに御心を惱され」

しゆ-ぎよ 狩漁【名】 かりと、すなどりと。鳥獸をとると魚をとると。漁獵。

じゆ-ぎよ 入御【名】 ■にふぎよ(入御)に同じ。

しゆ-ぎよ 酒興【名】 酒宴の興。酒に醉ひたる面白味、又そのためになすこと。酒の上。日本武尊吾妻鑑「酒興ならば助け置く、去りながら醉醒むるまで縛り上げん」

しゆ-きよう 足恭【名】『論語の公冶長篇に「子曰、巧言令色、足恭、左丘明恥之、丘亦恥レ之」とあり。足は、足(ゝ)し加ふる意あるより、過ぐる意に用ふ』恭敬に過ぐること。すきょう。

じゆ-きよう 需供【名】 需要と供給と。需給。

しゆ-ぎよく 珠玉【名】 ■水産の珠と鑛産の玉と。眞珠と玉と。■詩文を褒めていふ語。玉珠。

珠玉の瓦礫に在るが如し【句】『晉書の王衍傳に「衍雖二令望一、希心玄遠、未嘗論レ利、王敦過二江當一稱レ之曰、夷甫處二衆中一、如二珠玉在二瓦礫間一」とあるに本づく』英才の群俗中に在るに譬へていふ語。〔諺語〕

しゆぎよ-じだい 狩漁時代【名】〔經〕ぎょれふじだい(漁獵時代)に同じ。

しゆく 宿【名】 ■やどること。とまること。■たごや。旅宿。■しゅくば。うまや。宿驛。源氏十二段長生殿裏宿宿泊をば心がけてぞ上りける」■星座。星宿。■賤民の稱。普通の民より卑しきものをいふ語。〔畿内の語〕

しゆく 叔【名】 ■父母の弟妹。をぢ。をば。■兄弟姉妹中の第三番目のもの。(伯仲に對して)■夫の弟。和名、叔、爾雅云、夫之弟爲レ叔」

しゆく 肅【貌】 しゅくぜん(肅然)に同じ。

しゆく 柷【名】 漆桶の如き形をなせる、支那の古の樂器。方二尺四寸・深さ一尺八寸。中に椎柄ありて、底に連なり。一側面に孔あり、手を中に入れて擊ちしもの。

しゆく 縮【名】 身の鎧附を直すこと、又著ること。太平記「鎧一縮して、歩立(かちだち)に成つて」

しゆく 衆苦【名】〔佛〕多くの苦痛。太平記「衆苦充滿の穢土(えど)」

しゆく 宿【助數】 宿泊する夜の數。泊。

しゆく 縮【助數】 鎧を數ふる語。領(がしら)。太平記「只今仕立てたる鎧一縮」

しゆく 菽【名】〔植〕豆類の總稱。

菽を啜(すゝ)りて、水を飲む【句】『禮記の檀弓篇に「子路曰、傷哉貧也、生無二以爲一レ養、死無二以無一レ禮也、孔子曰、啜レ菽飲レ水、盡二其歡一斯之謂レ孝」とあるに本づく』貧しき生活の譬。

しゆ-ぐ 守愚【名】 自己の愚かなるに滿足せること。

じゆく 粥【名】 ■かゆ(粥)に同じ。〔僧徒の語〕■あさめし。朝食。〔禪僧の語〕

粥の十徳【句】 僧の食物たる粥の有すといふ、貧色・增力・益壽・安樂・辟邪・除風・消宿食・辭清・除饑・消渴の十種の利益。

じゆく 熟【名】 ■よく煮ゆること。熟すること。「不熟」■じゅくし(熟柿)を云ふ。〔女の語〕

じゆく 塾【名】 藝術を教ふる所。弟子を寄宿せしめて、學術を傳習する處。じく。

じゆく 受苦【名】〔佛〕苦難を受くること。

しゆくあ 宿痾【名】 久しき以前より癒えぬ病氣。持病。宿患。宿病。

しゆくあく 宿惡【名】 古き惡事。もとの惡事。舊惡。

じゆくあん 熟案【名】 つらつらと考へ案ずること。熟考。

しゆくい 祝意【名】 祝のこころ。賀意。

しゆくい 宿意【名】■ かねての意見。宿志。■かねてのうらみ。宿怨。

しゆくい 宿衣【名】しゅくえ(宿衣)に同じ。著聞「宿衣一領賜はせければ」

しゆくいん 宿因【名】〔佛〕前世よりの因緣。宿緣。

しゆくう 宿雨【名】 久しき以前、又は前日より降りつづきたる雨。

しゆ-ぐう 殊遇【名】 特殊の待遇。取りわけ鄭重なるあつかひ。

しゆくうん 宿運【名】 宿世より定まれる運命。宿命。

しゆくえ 宿衣【名】『内裏に宿直する時の衣服の義』しゅくしやうぞく(宿裝束)に同じ。

しゆくえい 宿營【名】■ 營所に宿泊すること、また宿泊する營所。■(兵)軍隊が、夜間一定地に駐在して、休養すること。舍營・村落露營・幕營・露營・廠營に分つ。

しゆくえう 宿曜【名】■ 二十八宿・十二宮(以上宮)と七曜・九曜(以上曜)との併稱。■二十八宿・九曜等の行度を察して行ふ占法。すくえう。宿曜道。

しゆくえうし 宿曜師【名】 宿曜(二)を行ふことを業とする人。すくえうし。

しゆくえうだう 宿曜道【名】しゅくえう(宿曜)(二)に同じ。

しゆくえき 宿驛【名】 しゅくば。しゅく。うまや。つきば。驛。

しゆくえん 祝筵【名】 いはひの席。賀筵。

しゆくえん 祝宴【名】 いはひの酒もり。

しゆくえん 宿緣【名】〔佛〕しゅくいん(宿因)に同じ。

しゆくおくり 宿送【名】 宿より宿へと順次に送ること。しゅくづき。賀古教信七戀廻「時づけの宿送、急げど急げと押立てて」

じゆくおん 熟音【名】〔語〕『母音には、一音にて一シラブルを形成するもあれど、概しては、他の母音もしくは子音と相合して成るよりいふ』しゅおんに同じ。

しゆくが 祝賀【名】 いはひことぶくこと。

しゆくか 宿好【名】 年來のこのみ。久しき前よりのたしなみ。

しゆくか 淑行【名】■ 正しき行。善行。■婦人の立派なる行(おこなひ)。貞淑なるふるまひ。

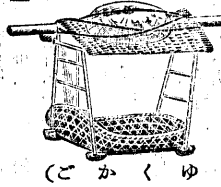
じゆくかう 熟考【名】 深く考ふること。熟慮。

しゆくがく 宿學【名】 老熟せる學者。宿儒。考學。

じゆくかく 熟客【名】 なじみの客。熟面の客。

しゆくがくわい 祝賀會【名】 祝賀のために催す會。

しゆくかご 宿駕籠【名】 雲助が旅人を乘せて、宿驛の間を往來せし、極めて粗末なる竹製の駕籠。くもすけかご。



(ごかくゆし)

しゆくがじやう 祝賀狀【名】 祝賀の意を述べたる書狀。賀狀。

しゆくかん 宿幹【名】 以前よりのうらみ。宿恨。

しゆくがよひ 宿通【名】 宿場の遊女に通ふこと。賀茂眞淵「下人一人持たずして、宿通のおかしさよ」

しゆくき 夙起【名】 朝はやく起くること。はやおき。

しゆくき 宿者【名】きしゅく(耆宿)に同じ。

しゆくき 宿忌【名】 たいや(逮夜)に同じ。(正忌(しょうき)に對して)

しゆくき 淑氣【名】 新春のめでたき氣。

しゆくぎ 祝儀【名】 しうぎ。いはひ。

しゆくぎ 宿疑【名】 かねての疑問。

じゆくぎ 熟議【名】 よく評議すること。評議のよくととのふこと。

じゆくくわ 熟果【名】 熟したる果物。

じゆくくわう 熟荒【名】 豐年にて、米價低きため、農民の窮すること。

しゆくくわん 宿患【名】■ かねてのうれへ。■しゅかん(宿痾)に同じ。

しゆくくわん 宿館【名】 宿泊するやかた。やど。やどや。旅館。

しゆくくわん 宿官【名】 王朝時代に、受領に任ぜらるべき資格ある者が、自己の任官の順の至るを待つ間、先づ諸國の權守權介に任ぜられしこと。やどりのつかさ。

しゆくけい 肅敬【名】 つつしみうやまふこと。

しゆくけい 肅啓【名】 つつしみて申しの

ぶること。拝啓。謹啓。(常に手紙の發端に用ふ)

しゅくけい 祝慶【名】いはひよろこぶこと。祝賀。「と。

しゅくけい 夙慧【名】幼時よりさときこと。

じゅくけい 熟計【名】よく計畫すること、又その計畫。

しゅくけいしゃ 淑景舎【名】しげいしや(淑景舎)を見よ。

しゅくけいえん 縮景園【名】廣島市上流川町にある庭園。藩主淺野氏の別墅。今も同家の所有に屬す。

しゅくけん 宿眷【名】昔からの恩顧。

しゅくご 夙悟【名】幼時より顯悟なること。

じゅくご 熟語【名】二つ以上の語の、相連なりて用ひらる語。(單語に對して)

しゅくこう 宿構【名】詩文などの構造を、豫て考へおくこと。懷句。

じゅくこく 熟穀【名】天明年中、江戸牛込若松町にありし切店(きりせ)。「きふ。

しゅくこつ 倏忽【貌】たちまち。にはか。

じゅくごはふ 熟語法【名】〔語〕動詞の語尾の變化の、他語と結合して熟語となるもの。連用形。「よ。

しゅくごふ 宿業【名】〔佛〕ごふ(業)を見

しゅくこん 宿根【名】〔佛〕前世より定まれる機根。【植】たねんこん(多年根)に同じ。「怨。

しゅくこん 宿恨【名】かねての遺恨。宿

しゅくこんさう 宿根草【名】〔植〕たねんせいさうほん(多年生草本)に同じ。

しゅくさい 祝祭【名】いはひのまつり。【祝】祝日と祭日と。

しゅくさい 宿債【名】以前よりの債務。

しゅくざい 宿罪【名】【佛】宿世よりのつみ。過去の罪障。【基】げんざい(原罪)に同じ。「と。

しゅくさいじつ 祝祭日【名】祝日と祭日

しゅくさう 宿草【名】宿根より生ずる草。

しゅくざうぶつ 宿藏物【名】まいざうぶつ(埋藏物)に同じ。

しゅくさつ 宿札【名】やどふだ(宿札)に同じ。「同じ。

しゅくさつ 縮刷【名】しゅくはん(縮版)に

しゅくさつ 肅殺【名】『肅は嚴厲又は寒冷の義、殺は接尾語』秋氣の草木をそこなひ枯すこと。

じゅくさつ 熟察【名】つくづくと考ふること。熟考。「同じ。

しゅくし 宿紙【名】かみやがみ(紙屋紙)に同じ。

しゅくし 宿志【名】常よりの志。宿望。

しゅくし 夙志【名】早くより立てたる志。

しゅくし 祝詞【名】【基】神に祈る詞。【し ゅくじ(祝辭)に同じ。「巫祝。

しゅくし 祝史【名】みこ。はふり。尸祝。

しゅくじ 宿次【名】【基】やどとり。宿泊。【基】しゅくば。宿驛。

しゅくじ 宿侍【名】宿泊し侍衞すること。『著聞』その僧どもは、東西の廊に宿侍したりけるに」

じゅくし 熟紙【名】礬水(どうさ)を引きたる紙。どうさびき。(生紙に對して)

しゅくじ 祝辭【名】祝の意を表することば。祝詞。

じゅくし 熟思【名】つらつら思ふこと。熟慮。「祝。

じゅくし 熟視【名】つらつら視ること。諦

じゅくし 熟柿【名】よく熟したる柿。きざはしの柿。『姓氏錄合鏡』「岩に熟柿を打つごとく、五體ひしげて失せにける」

じゅくじ 熟字【名】二つ以上の漢字の相連なりて、新に一語の意義をなすもの。漢字の熟語。(じゃ)。「同じ。

しゅくしう 縮收【名】しうしゅく(收縮)に

じゅくしき 熟識【名】【基】よく知りをること。【基】きはめて親しき知合(しりあひ)。

じゅくしくび 熟柿首【名】容易に落し易き首を罵りていふ語。『吉野都女樓』「熟柿首ゆすり落し、踏みつぶしてくれんと」

じゅくしくさし 熟柿臭し【形ク】熟柿の如く臭し。酒(さけ)臭し。『狂言』「茶壺」「ああ熟柿臭い、酒に醉うたと見えた」

しゅくじくわしょぶぎやう 宿次過書奉行【名】鎌倉室町兩幕府の諸奉行の一。路次往還過書などの事を掌りしもの。

しゅくしつ 宿疾【名】しゅくあ(宿痾)に同じ。

しゅくじつ 祝日【名】【基】めでたき日。いはひ。【國】國民の一般に祝ふべき日。天長節・紀元節の類。

じゅくしばらず 熟柿坊主【名】熟柿の如く赤き坊主。『吉野都女樓』「おのれこそ赤面の熟柿坊主」

しゅくしふ 宿執【名】【基】『執は志を同じくする者の義』かねてよりの友人。【基】『執は繋びて解けざる義』かねてよりの確執。【佛】宿世より心に執著して離れざる、善惡の性質。しくしふ。十劫前世の宿執にや、この事さりがたく心にかかりければ」

しゅくしふ 宿習【名】〔佛〕宿世より釀し來れる習氣。『盛衰記』「今生の災害は過去の宿習に報ゆべし」

しゅくしゅう 宿執開發(かいほつ)【句】〔佛〕『宿習(しゅじゅ)開發』の誤。『徒然』「河にて馬洗ふ男(をのこ)、「あし、あし」といひければ、上人立ちとまりて、「あなたふとや、宿執開發の人かな、阿字阿字と唱ふるぞや」」

しゅくしふ 宿習【名】ふるき風習。昔よりのならはし。しくしふ。舊習。

しゅくしゅく 宿習【名】〔佛〕宿世より釀し來れる習氣。『盛衰記』「今生の災害は過去の宿習に報ゆべし」

しゅくしゅう 宿習開發(かいほつ)【句】〔佛〕『天台別傳』に「宿習開發、煥若重敷」とあり』宿世に執りおこなひし善根・功德が、現世に開き現れて、善果を結ぶこと。宿善開發。

しゅくしん 肅愼【名】〔地〕今の滿洲吉林省の東部及び沿海州方面に於けるツングス民族(Tungusen)を指せる名稱。早く周代より知られ、漢代の挹婁(ゆうろう)、隋唐時代の勿吉(もつきつ)・靺鞨(まつかつ)も皆同じ民族なり。

しゅくしん 宿心【名】久しき以前よりの心。年來のねがひ。宿意。「人。

しゅくじん 淑人【名】德行ある人。よき

しゅくしんは 肅愼羽【名】『古、肅愼國より渡來せし故、この名ありといふ』角鷹(つのたか)の羽。二說に、しきば(仕切羽)に同じ。「き家。

しゅくしや 宿舍【名】宿泊又は宿直すべき家。

しゅくしや 縮寫【名】原圖又は原畫を縮めて小さく寫すこと。

じゅくしや 塾舍【名】塾生の寄宿舍。學寮。「將。

しゅくしやう 宿將【名】老功ある大將。老

しゅくしやうそぐ 宿裝束【名】宿直等に著る、衣冠直衣の裝(よそほ)ひの裝束。しゅくえ。

しゅくしやく 縮尺【名】『英 scale』縮圖を製する時の、縮少すべき一定の比例。通常、分子には1、分母は百・千・萬のごとき數字を用ふ。

しゅくしゅ 祝酒【名】いはひに飲む酒。

しゅくしゅ 宿主【名】(生)『英 Host』きしゅ(寄主)に同じ。

しゅくじゅ 宿儒【名】年功を積める儒者。「る人。

じゅくしゅ 熟手【名】そのことに熟練せる者。儒。

しゅくしゅ 踧踖【貌】『論語の鄕黨篇に「踧踖如有循」、禮記の玉藻篇に「拳」前曳踵踖如也」とあり』足を擧ぐるごとく忙しく狹きさま。ちよこちよこ。

しゅくしゅく 謖謖【貌】風の松に當る音。松風の音。

しゅくしゅく 肅肅【貌】【基】つつしみ敬ふさま。【基】靜かにひっそりしたるさま。【基】しまりたるさま。おごそか。【四】『世說に「嵇康肅肅如二松下風一」とあり』しゅくしゅく(謖謖)に同じ。

しゅくしゅく 祝祝【名】しゅくしゅく(祝捷)に同じ。

しゅくしょ 宿所【名】すまひ。やど。住所。

しゅくしょく 宿食【名】前日炊ぎたる飯。

しゅくしょく 熟食【名】よく煮たる食物、又これを食ふこと。

しゅくじろ 宿城【名】平地に構へて、城下を設けたる城。「ぐ。

しゅくす 祝す【動佐變他】いはふ。ことほ

しゅくす 宿す【動仲變自】やどる。とまる。

じゅくす 熟す【動佐變自】【基】よく煮ゆ。【基】よく實(な)る。【三】食物成熟す。【四】十分

になる。ととのふ。用明大皇職人鑑「時期いまだ熟せず、道ひかへされし彼の小舟」㊄馴れて、巧者になる。熟練す。熟達す。吉野都女楠「身にも熟せぬ武家まじはり」

しゅく-する 宿水【名】前日より汲置きる水。宵越の水。ねみづ。「に同じ。

しゅく-する 宿酔【名】ふつかゑひ(二日酔)

しゅく-する 淑水【名】㊀豆と水と。㊁質素なる食物。

しゅく-する 淑水の歓(クワン)【句】『禮記の檀弓下篇に「子路曰、傷哉貧也、生無二以爲一レ養、死無二以爲一レ禮也、孔子曰、啜レ菽飲レ水、盡二其歡一斯之謂レ孝」とあるに本づく』貧しくして、親に事ふること。

じゅく-する 熟睡【名】じゅくみん(熟眠)に同じ。

じゅく-する 熟酔【名】十分に酒に酔ふこと。

じゅく-せ 夙世【名】㊀前世の生死(シヤウジ)。前世。㊁前世の業因(ゴフイン)。善悪に通ずれども、多くは善き方にいふ。すくせ。宿縁。

しゅく-せい 宿成【名】年若くして、學業などの成就すること。早熟。(晩成に對して)

しゅく-せい 粛清【名】きびしく取締りて、不正を除くこと。「見よ。

しゅくせい 叔齊【名】〔人〕はくい(伯夷)を仲叔季といふ時の叔』する。の世。未世。

しゅく-せい 叔世【名】『兄弟の順序を伯・

じゅく-せい 塾生【名】塾に居る生徒。塾徒。「同じ。

じゅく-せい 熟成【名】せいじゅく(成熟)に同じ。

しゅく-せう 縮小【名】ちぢまりて小さくなること。ちぢめて小さくすること。

しゅく-せき 夙昔・宿昔【名】ふだん。平常。

しゅく-せき 蹙蹐【名】足をちぢめつまだてゐること。(怖る怖る振舞ふ形容にいふ)

しゅく-せき 宿夕【名】ひとよ。一夕。

しゅく-せき 宿碩【名】『碩は大の義』その道の老大家。

しゅく-せつ 宿雪【名】消え殘りたる雪。のこんの雪。殘雪。

しゅく-せつ 祝捷【名】戰捷をいはふこと。「祝勝。

しゅくせふくわい 祝捷會【名】祝捷のために催す集會又は宴會。

しゅく-ぜん 宿善【名】〔佛〕前世の善根。しくぜん。謡曲「国栖」「身は、宿善のかひぞ無き」

宿善開發(カイホツ)【句】〔佛〕宿善が現世に於て善き果報を實現すること。宿習開發。

しゅく-ぜん 粛然【貌】㊀げんぜん(嚴然)に同じ。㊁しづかなるさま。

しゅく-ぜん 倏然【貌】俄かなる貌。忽然。

しゅくせん-りょう 縮線綾【名】練絲(イト)にて織りたる綾。

しゅく-そ 宿訴【名】久しき以前よりつづきたる訴。盛衰記「寺門の宿訴といひ、頼豪が本意といひ」

しゅく-そ 叔祖【名】〔佛〕師翁の兄弟。

しゅく-ぞく 菽粟【名】『孟子の盡心上篇に「聖人治二天下一使下有二菽粟一如中水火上とあり』豆と米穀と、卽ち人の常食。

しゅく-そん 宿存【名】〔植〕果實の熟したる後、又は冬を凌ぎて後までも、なほ存すること。(謝落早落に對して)

しゅくそん-がく 宿存萼【名】〔植〕花の落ちたる後もなほ殘留する萼。

しゅく-そんつう 叔孫通【名】〔人〕支那前漢の學者。秦の時博士となり、項羽に從ひ、漢王劉邦に降る。漢王の爲に朝儀を定め、太常に拜せられ、太子太傅(タイフ)に移る。

しゅく-たい 縮退【名】たいしゅく(退縮)に同じ。

しゅく-たい 宿題【名】答案を考ふる餘裕あらしめんがために豫て與へおく問題。(卽題に對して)

しゅく-たう 宿禱【名】かねてよりの祈禱。

しゅく-たう 祝禱【名】㊀神に禱ること。㊁〔基〕『英 Benediction』禮拜の終において、祝福を求むること。

しゅく-だく 宿諾【名】一度承諾したることを履行せずに置くこと。

子路、宿諾無し【句】『論語の顔淵篇に見ゆ』孔子が、その門人子路の長所を讃めていへる語。「こと。

じゅく-たつ 熟達【名】熟練して上達すること。

しゅく-たふ 蹙沓【名】蹴かへすこと。蹴て踏むこと。

じゅく-だん 熟談【名】よく相談すること。相談のをりあふこと。

しゅく-ち 朱口【名】〔動〕めなだに同じ。

しゅく-ち 縮地【名】『神仙傳に「費長房從二壺公一有二神術一能縮二地脈一」とある故事に本づく』㊀仙術によりて、地域を縮め、距離を近くすること。㊁汽車・汽船等の便のために、遠距離の地も近き思のすること。「知ること。

じゅく-ち 熟知【名】委しく知ること。よくじゅく-ち 熟地【名】〔兵〕形勢を熟知せる地。(生地に對して)「じ。

しゅく-ちん 宿賃【名】やどせん(宿錢)に同じゅく-ちん 宿陣【名】留まりて、陣を取ること。宿營。

じゅく-ちやう 塾長【名】塾舍の長。塾頭。

しゅく-ぢょ 淑女【名】淑德を備へたる女。淑媛。

しゅく-ちよく 宿直【名】その勤務せる官衙などに、交番にて宿泊すること。

しゅくちよく-しつ 宿直室【名】宿直する室。宿直部屋。

しゅくちよく-じょ 宿直所【名】宿直をなす所。宿舍。

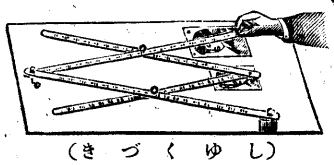
しゅくちよく-にん 宿直人【名】宿直をなす人。

しゅくちよく-べや 宿直部屋【名】しゅくちよくしつ(宿直室)に同じ。

しゅく-づ 縮圖【名】元の形を縮めて、小さくしたる圖。

しゅく-つぎ 宿次・宿繼【名】荷物などを、人足又は馬などにて、宿場より宿場へ送りつぐこと。郵傳。遞送。

しゅくづ-き 縮圖器【名】『英 Pantograph』縮圖を畫くに用ふる器械。



(きづくゆし)

しゅく-てい 宿醒【名】ふつかゑひ(二日酔)に同じ。「同じ。

しゅく-てい 粛呈【名】しゅくけい(粛啓)に

しゅく-てう 宿鳥【名】ねとり。

しゅく-てき 宿敵【名】かねてよりの敵。年來の敵。盛衰記「一門の宿敵を餘所に見るべきにあらず」

じゅく-てつ 熟鐵【名】よく鍛へたる鐵。きたひがね。鍛鐵。

しゅく-てん 祝典【名】いはひの儀式。

しゅく-てん 祝電【名】いはひの電報。

じゅく-でん 熟田【名】よく耕されたる田。こなた。

じゅく-と 熟圖【名】つらつら思ひはかること。深く考ふること。

じゅく-と 塾徒【名】じゅくせい(塾生)に同じ。「に同じ。

じゅく-とう 熟頭【名】じゅくちやう(塾長)

じゅく-どう 熟銅【名】よくきたへたる銅。(あら銅に對して)

じゅくとう-るゐ 菽豆類【名】豆科に屬する大豆・小豆・豌豆・落花生等の一類。

しゅく-とく 宿徳【名】㊀『宿は耆宿の義』年高くして、道德あること、又その人。しくとく。㊁〔佛〕宿世になせる福德。宿福。

しゅく-とく 淑慝【名】よしあし。善惡。

しゅく-とく 淑徳【名】婦人の令德。

じゅく-どく 熟讀【名】よくよむこと。よみなれること。よみこなすこと。

しゅく-どの 宿殿【名】むかし普通の民よりも卑しとせられたる穢多(エタ)・非人の類。三味線・鼓弓などを彈き、小芝居などをなせり。しゅくのもの。しゅく。

しゅく-ね 宿禰【名】すくね(宿禰)に同じ。「古語」

しゅく-の-もの 宿者・夙者【名】しゅうもんし(唱文師)㊀を見よ。

しゅく-ば 宿場【名】しゅくえき。うまや。えき。郵亭。宿驛。「づき。

しゅく-はい 祝杯・祝盃【名】いはひのさかづき。

しゅく-はい 粛拜【名】㊀つつしみてをがむこと。㊁『禮記の少儀篇に「不二手拜一

拝」とあり』手を下げ、地につけて行ふ敬禮。㊁書狀の末尾に記す語。頓首再拝。

じゅくばいう 熟梅雨【名】さみだれ(五月雨)に同じ。

しゅくはう 宿報【名】宿世の業因(ゴフイン)により感じたる果報。盛衰黙然るべき宿報にて、官位にこそ思ふさまなりとも」

しゅくはう 祝砲【名】祝意を表するためにうつ大砲。

しゅくばう 宿望【名】「宿願。かねてよりの希望。

しゅくばう 宿坊【名】㊀寄宿する坊舎。㊁その寺へ參詣に來れる人をやどす僧坊。宿院。㊂檀家より、その歸屬する僧寺を指していふ語。㊃自己の僧坊。

じゅくはう 熟煮【名】よく煮ること。

しゅくはう 粛白【名】しゅくはく(肅啓)に同じ。

しゅくはく 叔伯【名】㊀弟と兄と。㊁兄弟。

しゅくはく 宿泊【名】やどること。とまること。

しゅくばく 菽麥【名】大豆と麥と。

しゅくばく 菽麥を辨ぜず【句】『左傳の成公十八年の條に「周子有兄而無慧、不能辨二菽麥一」とあるに本づく』大豆と麥との區別をだに知らず。事理を辨別するを得ず。「諺語」

しゅくはくじょ 宿泊所【名】宿泊する場所。「所。

しゅくはくにん 宿泊人【名】宿泊する人。

しゅくはくれう 宿泊料【名】宿泊人の宿泊所に拂ふ料金。はたごちん。はたごせん。やどせん。宿料。

しゅくばおよよらう 宿場女郎【名】宿場に居る女郎。めしもりおよよらう。

しゅくはつ 祝髪【名】『列子の湯問篇に「南國人、祝髪而裸」とあり。祝は斷つ義』髪を剃りて、僧侶となること。剃髪。落髪。最明寺殿百人上臈德をかくして、權貴にほこらず、祝髪して最明寺殿」

しゅくはづれ 宿外【名】宿場の端のところ。宿驛の入口。ぼうばな。狂言(六地藏)「宿はづれに、堂を建ててござるが」

しゅくはん 縮版【名】書物などの版を縮小すること、又その縮小したるもの。縮刷。

じゅくばん 熟蕃【名】㊀やや王化に服せる野蠻人。(生番に對して)㊁臺灣の蕃族中、昔は支那の、又今は我が國の施政に歸附せるもの。風習・言語・體質など多くは支那人化して、純粋の血統を傳ふる者少數なるに至れり。(生蕃に對して)

じゅくび 熟否【名】熟することと熟せざることと。「同じ。

しゅくびやう 宿病【名】しゅくあ(宿痾)に同じ。

しゅくふ 叔父【名】父の弟。をぢ。

じゅくふ 熟布【名】ほそぬの(細布)に同じ。(粗布に對して)

しゅくぶぎやう 宿奉行【名】武家時代の職制の一。將軍出行の時、臨時に任ぜられて、宿割の事を掌りしもの。

しゅくふく 宿福【名】〔佛〕しゅくとく(宿徳)㊁に同じ。

しゅくふく 祝福【名】㊀前途の幸福を祈ること。㊁〔基〕『英 Blessing』神の恩惠。

しゅくふん 宿憤【名】豫てよりのいきどほり。積怒。

しゅくぶん 祝文【名】㊀神に祈る文。今國社等「三つの清火をきりかけきりかけ、祝文の詞を上げにける」㊁祝意を陳べたる文章。

しゅくへい 宿弊・宿病【名】古くよりの弊害。

じゅくべう 熟苗【名】移植に適當なる狀態となれる苗。「る糞便。

しゅくべん 宿便【名】腸内に長く停滯せ

しゅくぼ 叔母【名】父のいもうと。をば。

しゅくほう 縮縫【名】たてに縫ふこと。たてぬひ。

しゅくぼう 宿謀【名】かねての謀計。

しゅくぼく 宿墨【名】硯にて磨りて、一夜を經過したる墨汁。墨色惡しきと、粘りけのあるとを嫌ひて、書家畫家等は用ひず。

じゅくまい 熟米【名】米のよく煮たるもの。盛衰記「夕も、今朝も、御熟米をだにも御覽じ入れさせたまはず」

しゅくまう 宿望【名】しゅくばう(宿望)に同じ。著聞「宿望すでに遂げぬることを悦ぶといへども」

じゅくみん 熟眠【名】よく眠ること。じゅくすゐ。うまい。

しゅくみやう 宿命【名】しゅくめい(宿命)に同じ。

しゅくみやうつう 宿命通【名】〔佛〕六神通の一。自己及び他人の宿世における生命・行事を自在に知る通力。太平記「宿命通を得て、過現を見たまふ」

しゅくむ 宿霧【名】前夜よりの霧。太平記「宿痾相侵し、藥石驗を失ふ」

しゅくん 酒醺【名】酒に醉ひ、又は酒に醉ひて心地よきこと。

しゅくん 主君【名】きみ。しゅう。主人。君上。君主。枕「このなかのしゅくんにはおまへこそおはしませ」

しゅくん 殊勲【名】抜群の勲功。殊功。

しゅくめい 宿命【名】前世より定まれる運命。宿運。「同じ。

しゅくめいせつ 宿命説【名】〔哲〕次條にしゅくめいろん宿命論【名】〔哲〕『英 Fatalism』うんめいろん(運命論)㊁に同じ。

じゅくめん 熟面【名】よく見知れる顔。(生面に對して)「同じ。

しゅくもん 祝文【名】しゅくぶん(祝文)に同じ。

しゅくもん 宿問【名】久しき以前よりの問題又は疑問。

しゅくや 宿夜【名】たいや(逮夜)に同じ。

しゅくや 夙夜【名】㊀早朝と夜と。㊁早朝より夜に入るまでの間。明し暮すこと。太平記「鼎湖の雲を瞻望して、恨を天邊の月に添へ、覇陵の風に夙夜して、別を夢裏の花に慕ふ」

しゅくや 夙夜【副】朝早くより夜に至るまで。あけくれ。よるひる。あさゆふ。

しゅくやくにん 宿役人【名】昔、宿驛にありて、問屋場を管し、人馬差立(サシタテ)の事を掌りし役人。

しゅくゆう 祝融【名】㊀支那の火の神。㊁『左傳の昭公二十九年の條に「火正曰二祝融一」、禮記の月令篇に「孟夏之月、其神祝融」とあり』古の火正、即ち火を司りし官にして、民に功ありしより、後世火星に配し、神として祭るに至りしものなるべしといふ。獸身人面にして、兩龍に乘るなど記さ

れ、また顓頊(センギョク)の弟なりとも傳へらる。

しゅくよう 祝融【名】しゅくゆう(火災)に同じ。

しゅくらう 宿老【名】㊀年功を積みたる人。としより。しゅくろう。故老。㊁『宿老の者をこれに補せしよりいふ』ひゃうぢゃう(評定衆)の異稱。(中老に對して)〔鎌倉・室町幕府の語〕㊂らうちゅう(老中)又はからう(家老)の異稱。㊃町内の年寄役。

しゅくらく 宿落【名】「同じ。

しゅくらく 宿楽【名】㊀年功を積みたる人。としより。しゅくろう。故老。㊁『宿老の者をこれに補せしよりいふ』ひゃうぢゃう(評定衆)の異稱。(中老に對して)〔鎌倉・室町幕府の語〕㊂らうちゅう(老中)又はからう(家老)の異稱。㊃町内の年寄役。

しゅくらん 熟爛【名】熟覽【名】十分に見ること。よく見ること。

じゅくりょ 熟慮【名】つらつらと考ふること。熟思。「じ。

しゅくれう 宿料【名】やどせん(宿錢)に同じ。

じゅくれん 熟練【名】馴れて巧になること。熟達。練熟。

しゅくろ 朱黒【名】蠟色炭の粉末に、朱粉を混じたるもの。色蒔繪の材料とす。

じゅくろ 熟路【名】行きなれて、よく案内を知りたる路。

しゅくわ 鑄貨【名】貨幣を鑄造すること、又その鑄造したる貨幣。

しゅくわ 手畫【名】〔美〕しぐわ(指畫)に同じ。

じゅくわ 樹果【名】樹木の果實。このみ。

じゅくわ 熟和【名】こなること。消化。

しゅくわい 首魁【名】㊀さきがくること。㊁かしら。張本人。巨魁。魁首。

しゅくわいあん 朱晦庵【名】〔人〕しゅき(朱熹)に同じ。

しゅくわう 珠光【名】〔人〕茶道の祖。通稱は村田茂吉。獨慮軒・香樂菴、また休心法師と號す。奈良の人。奈良稱名寺の住職となりしが、三十餘歳にして、紫野大德寺に入りて、一休に從ふ。遂に茶式を定め、將軍足利義政に知られ、文龜二年歿す。年八十一。

しゅくわうあん 珠光庵【名】京都三條邊に在りて、珠光の居りし草庵。

しゅくわうはおんらく 主皇破陣樂【名】さんじゅはおんらく(散手破陣樂)に同じ。

じゅくわうばつ 受光伐【名】『獨 Lichtung』伐殘したる林木を強く光線に當らしめて、生長を促進せんがために行ふ强度の間伐。

じゅくわうひ 壽光被【名】澤胡桃(ヤマクル)の內皮。筥・盆などに捲合はせて飾とす。

しゅくわうもち 珠光餅【名】茶道の祖珠光の製し創めし餅。茶の會に用ふ。

しゅくわげん 主和絃【名】〔音〕しゅてうおん(主調音)に同じ。

しゅくわしつさう 手過膝相【名】〔佛〕三十二相の一。手長くして、膝を過ぐるもの。

しゅくわん 首卷【名】書物の最初の卷。第一卷。

しゅくわん 主管【名】主として、管轄又は管理すること、又その職名。

しゅくわん 主觀【名】〔哲〕『英 Subject』思惟し感動し又は意欲する自身、即ち認識の主。自然に對する精神、物質に對する心意、實在に存する思考等と同一視せらるるもの。(客觀に對して)

じゅくわん 入棺【名】にふくわん(入棺)に同じ。 (倭城鐸吾童子「じゅ棺も葬禮も手にかけんと思ふ筋に」

じゅくわん 儒冠【名】儒者の被る被物。 太平記 多年拜趨の儒冠を解いて、十戒持律の法體になり給ひにけり」

じゅくわん 儒官【名】儒學によりて任官すること、又その人。

じゅくわん 受灌【名】〔佛〕灌頂を受くること。

じゅくわん 樹冠【名】『獨 Krone』樹木の下枝より上方に於ける枝葉の總稱。

じゅくわん 呪願・咒願【名】〔佛〕佛・菩薩の前に呪文を唱へて、福德を祈願すること。 太平記 「權僧正導師、呪願仕うまつりたまひて」

じゅくわんくわ 樹冠火【名】森林火災の一。針葉樹林の樹冠を燒き拂ふこと。樹梢火。(地表火に對して)

しゅくわんけんげんさうぎ 主管權限爭議【名】〔法〕行政官廳と行政官廳と又は司法裁判所と司法裁判所との如く、同系統に屬する官廳が、或事項につき、互にその權限の屬否を主張すること。同一の監督下にある官廳間の場合は上級の官廳、監督同一ならざる官廳間の場合には內閣、これを裁決す。職權爭議。主管爭議。けんげんさうぎ(權限爭議)參照。

しゅくわんさうぎ 主管爭議【名】〔法〕前條に同じ。

しゅくわんし 主觀詩【名】〔文〕じょじょうし(敍情詩)に同じ。

じゅくわんし 呪願師・咒願師【名】〔佛〕七僧の一。咒願文を讀誦するもの。法會の最重要事なるが故に、必ず大導師これに當る。

しゅくわんしゃ 主管者【名】主管する人。

しゅくわんしゅぎ 主觀主義【名】〔哲〕次條に同じ。

しゅくわんせつ 主觀說【名】〔哲〕『英 Subjectivism』客觀的認識の可能を否定して、吾人の精神は自己の狀態を意識する以上に出づる能はずとなす說。即ち懷疑論の一種、又はその一要素たるもの。(客觀說に對して) 心意的方面のみを見て、物質的方面を無視する傾向ある說。(客觀說に對して) 道德の目的を快・不快の主觀的狀態に置く倫理說。(客觀說に對して)

しゅくわんだいじん 主管大臣【名】その事物を主管する大臣。

しゅくわんちやう 主管廳【名】その事物を主管する官廳。

しゅくわんてき 主觀的【貌】『英 subjective』自身を基礎とし、自身に對する關係にて、觀察するさま。(客觀的に對して)

しゅくわんてきかかく 主觀的價格【名】〔經〕『英 Subjective value』各人より見たる貨物の價格。(客觀的價格に對して)

しゅくわんてきしやうかうゐ 主觀的商行爲【名】〔法〕『英 Subjective commercial transaction』商法上に規定せる商人が、その行爲をなすにより初めて商行爲となるもの。例へば、運送に關する行爲、作業又は勞務の請負等の如し。關係的商行爲。相對的商行爲。

しゅくわんもん 呪願文・咒願文【名】呪願の意を述べたる文。

しゅくわり 宿割【名】宿處を割當つること、又その役。

しゅくわれう 鑄貨料【名】さうへいひ(造幣費)に同じ。

しゅくゐん 宿院【名】しゅくぼう(宿坊)に同じ。 醒睡笑 鳶が、魚をくはへ來り、宿院の內にてくらはんとするところに」

しゅくゑい 宿衞【名】宿直して、護衞すること、又その人。 「同じ。

しゅくゑん 淑媛【名】しゅくぢょ(淑女)に

しゅくゑん 宿怨【名】かねての恨。多年のうらみ。舊怨。

じゅげ 樹下【名】じゅか(樹下)に同じ。

じゅげ 頌偈【名】〔佛〕げ(偈)に同じ。

じゅけい 主計【名】會計をつかさどること、又その人。 〔兵〕陸・海軍にて、會計給與等の事項を掌る將校相當官。一等・二等・三等に分つ。

じゅけい 主刑【名】〔法〕『英 Principal punishments』獨立して科する刑罰。我が國の舊刑法にては、死刑・無期徒刑・有期徒刑・重懲役・輕懲役・重禁錮・輕禁錮・罰金・拘留・科料の十四種。新刑法にては、死刑・懲役・禁錮・罰金・拘留・科料の六種に分る。 「樹。

じゅげい 種藝【名】作物のうゑつけ。種

じゅげい 手藝【名】しゅこう(手工)に同じ。

じゅげい 受刑【名】〔法〕刑の執行を受くること。 「がた。

じゅけい 鑄型【名】鑄造する物の模型。い

じゅげい 樹藝【名】樹木を植付くること。

しゅけいがかり 主計係【名】かんぢやうかた(勘定方)に同じ。

しゅけいがくかう 手藝學校【名】手藝を敎授する學校。

しゅけいかん 主計監【名】海軍における佐官相當の主計吏、即ち主計大監・主計中監・主計少監の總稱。

しゅけいきよく 主計局【名】大藏省の一局。總豫算決算・特別會計の豫算決算・仕拂豫算・主計簿の登記、歲入・歲出現計書の調製、諸計算書の下檢查、その他、合計上の重要なる事項を取扱ふ所。

しゅけいくわ 主計科【名】明治六年海軍に設けられたる一科。乘艦四文官の一。主計大監・主計少監・大・中・小主計・艦內厨宰・艦內割烹・介病室厨宰等の職員ありしも、のち廢せらる。

しゅけいくわん 主計官【名】會計を司る官吏。主計の官吏。主計吏。

しゅけいこうほせい 主計候補生【名】りくぐんじゅけいこうほせい(陸軍主計候補生)の略。

じゅけいしや 受刑者【名】刑の執行を受けて居る人。

しゅげいしゅちゐん 綜藝種智院【名】『綜藝』とは衆藝を兼綜する意。儒佛を折せ授けしによりていふ』王朝時代の私學校の一。天長五年僧空海の京都九條坊門の南、油小路の西に創立せしもの。我が國最古の宗教學校にして、空海寂後の沿革は明かならざれども、承和の頃は、廢絕に歸したるものの如し。

しゅけいしよぶん 主刑處分【名】〔法〕主刑を科する行政處分。

しゅけいちやう 主計長【名】海軍に屬する部局、例へば造船部・鎭守府・水雷團・軍艦等にて、その部局內の會計・給與の事務を掌理する職。

しゅけいぼ 主計簿【名】大藏省にて扱ふ金銀出納帳。大藏大臣は、これに基づきて歲入・歲出現計書を調製す。

しゅげいゆ 鬚鯨油【名】鬚鯨に屬する鯨より採りたる油。鯨油中の眞品す。

しゅけいいん 主計吏【名】〔陸〕しゅけいくわん(主計官)に同じ。

しゅけいがくかう 手藝學校【名】手藝を敎授する學校。

しゅけいかん 主計監【名】海軍における佐官相當の主計吏、即ち主計大監・主計中監・主計少監の總稱。

しゅけいきよく 主計局【名】大藏省の一局。總豫算決算・特別會計の豫算決算・仕拂豫算・主計簿の登記、歲入・歲出現計書の調製、諸計算書の下檢查、その他、合計上の重要なる事項を取扱ふ所。

しゅけいくわ 主計科【名】明治六年海軍に設けられたる一科。乘艦四文官の一。主計大監・主計少監・大・中・小主計・艦內厨宰・艦內割烹・介病室厨宰等の職員ありしも、のち廢せらる。

しゅけいくわん 主計官【名】會計を司る官吏。主計の官吏。主計吏。

しゅけいこうほせい 主計候補生【名】りくぐんじゅけいこうほせい(陸軍主計候補生)の略。

じゅけいしや 受刑者【名】刑の執行を受けて居る人。

しゅげいしゅちゐん 綜藝種智院【名】『綜藝』とは衆藝を兼綜する意。儒佛を折せ授けしによりていふ』王朝時代の私學校の一。天長五年僧空海の京都九條坊門の南、油小路の西に創立せしもの。我が國最古の宗教學校にして、空海寂後の沿革は明かならざれども、承和の頃は、廢絕に歸したるものの如し。

しゅけいしよぶん 主刑處分【名】〔法〕主刑を科する行政處分。

しゅけいちやう 主計長【名】海軍に屬する部局、例へば造船部・鎭守府・水雷團・軍艦等にて、その部局內の會計・給與の事務を掌理する職。

しゅけいぼ 主計簿【名】大藏省にて扱ふ金銀出納帳。大藏大臣は、これに基づきて歲入・歲出現計書を調製す。

しゅげいゆ 鬚鯨油【名】鬚鯨に屬する鯨より採りたる油。鯨油中の眞品す。

(主計官)に同じ。㊁陸・海軍における會計・給與の事項を掌る官吏、卽ち主計・主計監の類。

しゅげいるゐ 鬚鯨類【名】〔動〕鯨類に屬する一類。齒なくして、鬚を有するもの。こくぢら・せみくぢら・ながすくぢらの類。

しゅけいれう 主計寮【名】かずへれう(主計寮)に同じ。

しゅげいゐん 綜藝院【名】しゅげいしゅちゐん(綜藝種智院)に同じ。

しゅけう 主敎【名】〔基〕『英Bishop』ギリシャ敎にて、總主敎の下、司祭の上に位する僧位。敎會の敎務を總轄し、司祭・輔祭等を監督す。

しゅけう 手敎【名】てがみ。書狀。下學集「手敎、シュケウ、書狀之義也」

じゅけう 受敎【名】敎を受くること。

じゅけう 授敎【名】敎を授くること。

じゅけう 儒敎【名】儒學の敎。孔子・孟子の說を奉じ、四書・五經等を經典とする敎。政敎の一致を主義とす。

しゅげき 手戟【名】小さきほこ。てぼこ。

じゅげざ 樹下坐【名】〔佛〕頭陀(ズダ)の行ふ十二の行の一。大樹の下に坐して、靜かに念じて、佛道を求むること。樹下。

しゅけつ 朱闕【名】『朱塗の闕の義。しゅもん(朱門)』參照』宮門。禁門。宮闕。

じゅけつ 授決【名】〔佛〕『決定の記別を授くる義』じゅき(授記)に同じ。

じゅけつ 受決【名】〔佛〕『前條を見よ』じゅき(受記)に同じ。

しゅげふ 修業【名】學藝を學ぶこと。稽古。「古。

じゅげふ 授業【名】學藝又は業務を敎ふること。敎授。

じゅげふ 受業【名】授業を受くること。

じゅげふ 儒業【名】儒者の業務。太平記「儒業の人かと見つる雲客」

じゅげふ-はふ 授業法【名】けうじゅはふ(敎授法)に同じ。

じゅげふ-れう 授業料【名】授業の料金。

しゅげん 朱硯【名】朱墨をする硯。しゅずり。

しゅけん 殊眷【名】特殊の眷遇。殊寵。

しゅけん 主權【名】㊀おもなる權力。㊁〔法〕こくちけん(統治權)に同じ。

しゅげん 修驗【名】㊀しゅげんじゃ(修驗者)の略。㊁しゅげんだう(修驗道)の略。盛衰記「三井の流の修驗の人ここそ嬉しく思ひけめ」

じゅけん 授權【名】〔法〕『獨Bevollmächtigung』他人に代理權を授與するを目的とする行爲。

じゅげん 入眼【名】敍位に、位階のみを錄したる位記、又は除目(ジモク)に、官のみを錄したる文書に姓名を加筆すること。じゅがん(入眼)參照。

しゅげん-か 修驗家【名】しゅげんじゃ(修驗者)に同じ。

しゅけん-こく 主權國【名】『英Sovereign state』㊀主權の完全なる國。卽ち獨立權並びに自治權の完全なる國。㊁或事件に對して、主權を有する國。卽ち日本の領域に於て犯罪の行はれたる場合、その事件に對する主權國は、日本なりといふが如し。

じゅけん-しかく 受驗資格【名】受驗に必要なる資格。

しゅけん-じや 主權者【名】〔法〕『英Sovereign』國家の最高權者、卽ち國家の最高機關。

しゅげん-じや 修驗者【名】修驗道を修業する人。被髮して、篠掛(カケ)・袈裟・頭巾(ズキン)を著け、大刀を佩き、金剛杖をつき、法螺を吹きて、諸國を巡回するもの。しゅげん。修驗家。山伏。おほみねいり(大峯入)。せんだつ(先達)參照。

じゅけん-じや 受驗者【名】試驗を受くる人。受驗人。

しゅげん-しゆう 修驗宗【名】〔佛〕しゅげんだう(修驗道)に同じ。

じゅけん-せい 受驗生【名】學校の入學試驗を受くる學生。

しゅけん-せつ 主顯節【名】〔基〕『英Epiphany』主顯とは、基督が神の子として、世に顯れたりとの意』基督の洗禮を受けたる日なりとて祝ふ日、卽ち每年一月六日。

しゅげん-だう 修驗道【名】『修驗の名は、聖不動經なる「欲レ驗二法成一者、入二山林寂靜處一求二清淨地一、建二立道場一、作二護摩事一、速得二成就一」、日本靈異記役優婆塞(エンノウバソク)傳なる「修二行孔雀之呪法一、證二得奇異之驗術一」に本づくといふ』多く敎理上の研究を爲さず、專ら實驗の行を修するもの、卽ち密敎の一部を修行するもの。開祖は役小角(エンノオヅヌ)、宇多天皇の頃、聖寶僧正再興せり。のち增譽僧正、天台の修驗道を開き、聖寶の眞言の修驗道と二派對立し、德川時代には、前者を本山派、後者を當山派と呼びたり。明治五年他宗派に隷屬せしむることとなりしが、同十八年復興を許し、天台眞言二宗に附屬せしめらる。兩部。雜宗。修驗。修驗宗。

じゅげん-ち 受驗地【名】試驗を受くる地。

じゅげん-にん 受驗人【名】じゅげんじや(受驗者)に同じ。

しゅげん-もん 崇賢門【名】すうけんもん(崇賢門)に同じ。

しゅげん-もんゐん 崇賢門院【名】〔人〕すうけんもんゐん(崇賢門院)に同じ。

じゅげん-れう 受驗料【名】受驗者の納むる手數料。

しゅご 酒庫【名】酒を入れおく庫。さかぐら。「つぼ。

しゅご 酒壺【名】さかつぼ。酒を入るる

しゅご 酒戶【名】㊀さかや(酒屋)に同じ。㊁『じゃうご(上戶)を見よ』飮酒の量。

しゅご 守戶【名】㊀古、山陵の陵戶なき場合に、附近の百姓をして、年を限り、調庸を免じて、これに充てしもの。㊁明治の初年に、山陵の酒掃を掌らしめしもの。

しゅご 主顧【名】とくい。花客。

しゅご 主語【名】『英Subject』㊀〔哲〕しゅじ(主辭)に同じ。㊁〔語〕一箇の文章中にて、主格をあらはしたる語。例へば、「花咲く」・「風涼し」の「花」・「風」の類。主辭。主詞。(客語に對して)

しゅご 守護【名】㊀まもること。けいご。㊁鎌倉・室町兩幕府時代の職制の一。文治二年源賴朝の諸國國衙に總追補使(サフシ)を置き、後、守護と改稱せしに起る。初は大番の催促、謀叛人の追補などを職とし、後ひに國內大小の事務に關渉するに至り、室町時代には、更に甚しく、數箇國を兼併して、諸侯の形勢をなし、遂に割據の世となるに至れり。守護職。守護役。「酒後」

しゅご 酒後【名】酒を飮みたる後。「茶前。

しゅご 手語【名】手眞似にてはなすこと。しかたばなし。

じゅご 頌古【名】〔佛〕古則を擧げて讚詠となし、その意を發明せるもの。

しゅごいし 守護石【名】庭園の景色の主眼となる石。「動。

しゅごこう 殊功【名】すぐれたる勳功。殊しゅごこう 首功【名】㊀敵の首を取りたる功勞。㊁第一番の功勞。

しゅごこう 首肯【名】『首にて肯(ウ)んずる義』うけばること。うなづくこと。承諾。

しゅごこう 手工【名】指先のはたらきにて行ふ工藝。手藝。手技。

しゅごこう 主公【名】㊀きみ。主君。㊁主人。主人公。

しゅごこう 趨候【名】すうこう(趨候)を見よ。

しゅごこう 珠孔【名】〔植〕『英Micropyle』胚珠の內被と外被とを通じて、外界と交通する小孔。

じゅごこう 收公【名】しっこう(收公)に同じ。東鑑「被レ收二公河村鄕一」

じゅごこう 准后【名】じゅさんごう(准三后)の略。著聞「この珠、准后(ジュゴウ)へ參らせて給はるべし」

しゅごこう-げう 手工業【名】小額の資本と簡易なる工具とに依り、主に人力を以てなす工業。(機械工業に對して)

しゅごこう-さん 酒功讚【名】しゅさくしゃう(酒德頌)に同じかるべし。一代男「折節、初紅葉の陰に、自在をおろし、金の大爐鍋、もろこしの酒功讚をうつすとて、遊女三十五人、おもひおもひの出立」

しゅごこうしょ 主工署【名】古、春宮(トウグウ)坊に屬し、首(カミ)・令史(サクワン)各一人、工部六人、使部・直丁(ヤヅカヒ)・雜使丁(ザフシヂヤウ)各若干等の職員ありて、東宮の土木の營造、雜件の事を掌りし役所。

じゅごこう-ちやう 授口帳【名】口分田(クブンデン)

を授くべき人員を記したる帳簿。

しゆごーさた 守護沙汰【名】鎌倉時代に、守護職に於て聽斷せし訴訟。東鑑「止二守護沙汰一爲二通信沙汰一」

しゆーこし 酒胡子【名】〔音〕雅樂の一。唐樂。壹越調二十五曲の一。唐人、讌飲の時用ひしものといふ。醉公子。酒飲子。拾芥抄「酒胡子、シユコシ、無舞」

しゆごーし 守護使【名】鎌倉室町兩幕府の職制の一。守護より派遣せられて、田畠の調査・年貢の未納の催促などをせし使。

しゆごーじん 守護神【名】守護する神。狂言「蛭子大黒殿」「この山に守護神なくてはかなはじ」

しゆごーたいくわん 守護代官【名】前條に同じ。

しゆごーたんせん 守護段錢【名】守護がその用途のために課する段錢。

しゆーこつ 手骨【名】〔醫〕手首より指頭までの骨の總稱。腕骨・掌骨・指骨より成る。

しゆごーにん 守護人【名】守護する人。

しゆごーぶぎやう 守護奉行【名】鎌倉室町兩幕府の職制の一。守護[二]の輔補・得替等、守護に關する一切の事を掌りしもの。

じゆごふーし 受業師【名】〔佛〕『梵Upādhyāya(鄔波陀耶)の譯語』得度の後、教を受くる師。親教師。

しゆごーふにふ 守護不入【名】守護の支配、租稅の徵收を免れ、武士の立入りて罪人を逮捕することを得ざること。

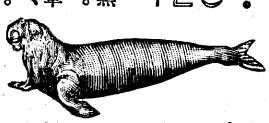
しゆごふにふち 守護不入地【名】守護不入の許可を得たる土地。即ち神社・佛寺・權門の領地。

しゆーこん 種根【名】たね。すじやう。盛衰記「師光は、阿波國の者、種根は、田舍人(カタナ)なりけり」

しゆーこん 酒痕【名】こぼれたる酒の染(シミ)みたる痕跡。

しゆーこん 主根【名】〔植〕『英Main root』植物の種子より萠發する時、莖の下端より初めて地中に下垂する根の、眞直に下方に伸ぶるもの。分岐せずして單根をなすものと、岐出して支根を生ずるものとあり。

しゆーこん 鬚根【名】[一]〔植〕主根より發生する、鬚のごとき根。[二]〔植〕『英Fibrous root』複根の一。數多の纖細なる支根を支出するもの。例へば稻麥その他の禾本科植物に見るものの類。



（じんこゆん）

じゆーこん 樹根【名】きのね。

じゆーごん 儒艮（英Dugong）【名】〔動〕『マライ語の訛』游水類に屬する海獸。海牛に近きものにて、體長さ一丈內外、色は紫色にして黑斑を帶び、全身に軟毛あり。頭はやや丸味を帶び、海草を食ふ。肉は食用に供し、脂肪よりは、油を採取す。紅海以東の熱帶の海洋及び河口に群棲し、我が國沖繩諸島の沿岸にも產し、沖繩にては「ざんのいを」といふ。海馬。

じゆーこん 入魂【名】懇意。懇親。親密。じゆっこん。じっこん。盛衰記「木曾殿の入魂の郎等にはよもあらじ」

じゆーごん 呪禁・咒禁【名】『呪、卽ち陀羅尼にて、禁厭(ナイジン)ふ義』まじなひをしたりを除きはらふこと。

じゆごんーし 呪禁師・咒禁師【名】〔佛〕印明(インミヤウ)を結誦して、加持・祈禱を爲す法師。じゆごんのし。ずごんのし。呪師。

じゆごんーせい 呪禁生・咒禁生【名】古、呪禁の事を學びし者。ずごんせい。

じゆごんのーし 呪禁師・咒禁師【名】じゆごん(呪禁師)に同じ。紀「呪禁師、ジュゴンノシ」

じゆごんーはかせ 呪禁博士・咒禁博士【名】古、呪禁生を敎ふることを掌りし職。

「同じ。

しゆごーやく 守護役【名】しゆご(守護)[二]にしゆーこん 主査【名】主となりて調査すること、又その人。

しゆーさ 酒鰤【名】しゆざ(酒鰤鼻)の略。

しゆーさ 朱砂【名】しんしや(辰砂)[二]に同じ。

しゆーざ 朱座【名】德川時代に、幕府の許を得て、朱及び朱盤を製造し、これを專賣せし所。慶長十四年始めて堺に設け、後、江戸・京都・長崎等にも設置せられたり。

しゆーざ 首座【名】[一]かみざ。首席。上席。[二]首席につくべき人。[三]〔佛〕しゆそ(首座)に同じ。[四]〔動〕たひ(鯛)の隱語。「僧侶の語」

しゆーさい 主宰【名】[一]人の上に立ちて一切を統治すること、又その人。かしら。[二]〔佛〕『事物を主宰する作用あるによりていふ』が(我)に同じ。

しゆーさい 殊才【名】ことにすぐれたる才、又これを有せる才。異才。奇才。

しゆーさい 酒債【名】酒代のかけ。

しゆーさい 首歲【名】さいしゆ(歲首)に同じ。

しゆーさい 主裁【名】主となりて事を裁判すること、又その人。

しゆーさい 主祭【名】[一]祭事をつかさどること、又その人。[二]希臘敎の敎職の名。

しゆーさい 主催【名】團體の中心となりて、或事を催すこと。主唱して開催すること。

しゆーさい 守歲【名】除夜に眠らずして、旦(タン)に達すること。「すること。

しゆーさい 修齋【名】〔佛〕齋會(サイエ)を執行

しゆーさい 衆罪【名】〔佛〕多くの罪業(ザイ)。一切の罪障。

衆罪、草露の如し【句】〔佛〕『普賢觀經』に「一切業障海、皆從二妄想一生、善欲二懺悔一者、端坐念二實相一、衆罪如二霜露一、慧日能消除」とあるに本づく。『思惟(サウ)懺悔(ザン)の功德により、一切の罪障忽ち消滅す。〔諺語〕謠曲「身延」「衆罪如霜露、慧日(チエ)の光に消えて、卽身成佛たり」

しゆーさい 首材【名】『英Stem』船艦の龍骨の前に立てて、舳(ヘサキ)にすべき材木。

しゆーさい 酒劑【名】〔醫〕藥物たる草根・木皮の成分を、白葡萄酒又はセリイ酒に浸出して得たる液。

じゆーさい 儒祭【名】儒禮を以て祖先等を祭ること。支那宋の朱熹の家禮に基き、我が國の風習を折衷して定めしものにて、季節は春夏秋冬の仲月、又は春秋を以てし、江戸時代に、儒學者の間に行はれたり。

じゆーさい 受齋【名】〔佛〕齋食の供養を受くること。

しゆさいーしや 主裁者【名】主裁する人。

しゆさいーしや 主宰者【名】主宰となりて事を行ふ人。

しゆーさう 酒槽【名】さかぶね。

しゆーさう 手爪【名】手のつめ。

しゆーざう 修造【名】しゅざう(修造)に同じ。平家「久しく修造無かりしかば、春は霞に立罩めて、秋は霧に交り」「じ。

しゆーざう 酒造【名】ざうしゆ(造酒)に同じ。

しゆーざう 鑄造【名】鑄て造ること。造鑄。「見よ。

じゆーさう 壽相【名】〔佛〕しさう(四相)を

じゆーさう 儒葬【名】儒敎の儀式によりて葬ること。本づく所は、支那周代の禮に在り、我が國にては、德川時代の儒者これに準據し、朱熹の家禮等を參照して執行せり。じゆしやすは儒者捨場)參照。

じゆーざう 受贓【名】贓物を受くること。

じゆーざう 壽藏【名】存命中に造りおく墓。生壙。壽塚。「の人の像。

じゆーざう 壽像【名】存命中に造りおくそ

しゆざうーか 酒造家【名】酒類を醸造する人、又その家。

しゆざうーきよく 修造局【名】〔佛〕禪寺にて、一山の造營・作事を掌る處。

しゆざうーくみあひ 酒造組合【名】酒造業者が各自の利益を增進し、且つ營業上の弊害を矯正せんとする目的を以て組織した

る公共組合。

しゆぞう-くわ 鑄造貨【名】『金屬貨幣は多くは鑄造せらるるによりていふ』きんぞくくわへい(金屬貨幣)に同じ。

しゆぞう-げふ 酒造業【名】酒類の釀造業。

しゆぞう-げん 主藏監【名】古、東宮坊に屬し、金玉錦綾裝束の裁縫及び甕具などを掌りし役所。くらのつかさ。

しゆぞうす 修造主【名】〔佛〕禪寺にて、修造を監督する職。庭訓往來「修造主(シユゾウス)」

しゆぞう-ぜい 酒造稅【名】造石稅の一種。酒類を課稅物件とし、その造石數に應じて徵收する稅金。酒稅。

じゆぞう-たうばん 鷲像蟠幡【名】鷲の像をゑがきたる蟠幡。御卽位の式の時、衞門府の軍旗として、會昌門外の陣頭に樹てしもの。

しゆぞう-ねんご 酒造年度【名】酒の製造につきて定めたる年度。十月一日より翌年九月三十日までとす。

しゆぞう-めんきよ-ぜい 酒造免許稅【名】北海道の地方にて、酒造を免許せられたる者が納むる免許稅。製造所一箇所毎に納めたるものにて、明治十九年酒造稅則施行以前のもの。

しゆ-さつ 手札【名】㊀てふだ。なふだ。㊁てがみ。手翰。「う。

しゆ-さつ 手冊【名】手控の帳面。てちやう。

しゆ-ざね 朱札【名】朱塗の鎧の札(サネ)。

しゆさ-び 酒皶鼻【名】〔醫〕ざくろばな(柘榴鼻)に同じ。「唐名。

しゆ-さん 主翼【名】おほひのすけ(大炊助)の

しゆ-さん 酒盞【名】さかづき。酒盃。

しゆ-さん 朱三【名】雙六(スゴロク)にて、簺(サイ)の目の二つとも三の數のあらはれたること。重三。

しゆ-さん 趨參【名】さんすう(參趨)に同じ。

しゆ-さん 聚散【名】しゆうさん(聚散)を見よ。太平記「聚散離合の有樣は」

しゆ-ざん 主山【名】〔美〕支那風の山水畫にて、主眼となる山。

しゆ-ざん 珠算【名】たまざん(珠算)に同じ。

じゆ-さん 授産【名】產業を授けて、生計を立てしむること。

しゆ-さんか 主參加【名】〔法〕『獨 Hauptintervention』訴訟參加の一。第三者が、他人間に權利拘束となりたる訴訟物の全部もしくは一部を、自己のために請求する訴、及び原告・被告が共請して、自己の債權に損害を及ぼすことを主張する訴。他人間の訴訟に參加するにはあらず、本訴訟の原告と被告とを、共同の被告とする獨立の訴なり。(從參加に對して)

しゆさんか-にん 主參加人【名】〔法〕主參加をなしたる人。(從參加人に對して)

じゆさん-きん 授産金【名】㊀授產の資金として貸附くる金。㊁明治維新の後、窮乏せる藩士に授產せしむる目的にて、各府縣に積立てたる金。

じゆ-さんぐう 准三宮【名】古、皇后にあらざる天皇の御生母・准母・女御等又は親王・法親王・攝政・關白・大臣等の勳功ある者に、特に授けられし稱號。三后に准じたる年官・年爵を授けられたり。じゆさんどう。じゆごう。

じゆ-さんごう 准三后【名】前條に同じ。

じゆさん-ば 授產場【名】貧民に產業を授けて、生計を立てしむる場所。

しゆ-さんぶつ 主產物【名】生產物品中の主要なるもの。

しゆ-ざや 朱鞘【名】朱漆にて塗りたる刀の鞘。又その刀。重雅王「そりにそったる朱鞘ぼっこみ」

しゆさ-ねん 主查委員【名】主となりて調査する委員。

しゆ-し 趣旨【名】しゆい(趣意)に同じ。

しゆ-し 主司【名】とりしまりをなす役、又その人。つかさ。

しゆ-し 主詞【名】しゅじ(主語)㊀に同じ。

しゆ-し 種子【名】〔植〕㊀受胎せる胚珠の成熟せるもの。種皮と種核との二部より成り、種核は種子の實質部にして、通常胚と胚乳とより成り、胚は卽ち幼植物なり。專ら顯花植物に見る所にして、隱花植物のこれに相當するものは、胞子と呼ぶ。たね。

しゆ-し 手指【名】手のゆび。

しゆ-し 手使【名】しし(指使)に同じ。

しゆ-し 朱四【名】雙六(スゴロク)にて、簺(サイ)の目が、二つとも四の數のあらはれたること。重四。

しゆさん(朱三)參照。

しゆ-し 洙泗【名】『支那山東省の洙水と泗水との義。洙水は泗水に合す。泗水は兗州(シユウ)府の東に在り。水源を泗水といひ、西流して、大運河に入る。孔子は同州曲阜縣昌平鄕に生れ、この二水の間に在りて、教を垂れしよりいふ』じゆがく(儒學)又はこうもん(孔門)の異稱。

しゆ-し 鉄鎚【名】しゅ(鎚鉄)に同じ。

しゆ-し 鬚髭【名】くちひげ。

しゆ-し 酒食【名】しゅしよく(酒食)に同じ。

しゆ-し 酒滓【名】酒のかす。

しゆ-し 酒幟【名】酒屋のしるしとして軒に立つる幟。さかばた。酒旗。

しゆ-し 酒肆【名】さかや。酒店。酒家。

しゆ-し 酒資【名】さかて。酒代。

しゆ-し 酒巵【名】さかづき。酒杯。酒盞。

しゆ-し 酒司【名】後宮十二司の一。釀酒の事を掌りし所。

しゆ-し 殊死【名】『殊は身首離析の意』㊀斷首の刑に處せらるること。死罪。㊁死を決して爲すこと。いのちがけ。「稱。

しゆ-し 朱子【名】〔人〕しゅき(朱熹)の尊

しゆ-し 朱字【名】㊀朱墨にて書きたる文字。㊁朱肉にて捺(オ)す時、文字の朱色にあらはるるやうに、凸字に刻りたる印。(白字に對して)

しゆ-し 主事【名】㊀事を主(ツカサド)ること、又その人。主任。㊁長官の命を受けて、一部の事務を掌理する職。皇后宮職・東宮職・皇室會計審查局・帝室林野管理局・學習院・造神宮使廳・宗秩寮・東京帝室博物館・鑒視廳官房等に置かれ、奏任官たり。㊂明治二年待詔局に屬せしめられたり。同年廢せられたり。㊃〔佛〕禪宗の都寺(スナ)・監寺(スナ)・維那(ナヅ)・副寺(スナ)・典座(テン)・直歲(スジ)の總稱。知事。執事。

しゆ-じ 主辭【名】『英 Subject』〔哲〕論理

㊀物の發生する基本となるもの。たね。

上、命題を組立つる三部の一。立言の主題となるもの。例へば、「秀吉は日本人なり」の「秀吉」の類。主語。主位。㊁〔語〕しゆご(主語)㊁に同じ。

しゆ-し 種子【名】〔佛〕『草木の種子(シユ)に譬へていふ』㊀阿賴耶(アラヤ)識中にありて、一切有漏(ウロ)・無漏(ムロ)の有爲(ヰ)法を生ずる功能。因緣の實體。〔法相宗の語〕㊁密教にて、發して諸の佛又は妙理となるといふ深祕の梵字。殊に阿(ア)字を尊ぶ。

じゆ-し 樹枝【名】樹の枝。「歌・文章。

じゆ-し 壽詞【名】賀壽の意を述べたる詩

じゆ-し 咒師・呪師【名】〔佛〕じゅごんじ(呪禁師)の略。

じゆ-し 儒士【名】㊀じゅや(儒者)に同じ。

じゆ-し 竪子・孺子【名】わらべ。

竪子の名を爲す【句】『史記の孫子傳中、魏の龐涓が齊の軍師孫臏に對していへる語に「遂爲二豎子名一」とあるに本づく』平生輕蔑せし者に、功名を爲さしめたるを殘念に思ふときの語。〔諺語〕

じゆ-し 竪子をして、名を爲さしむ【句】前條に同じ。〔諺語〕

じゆ-し 孺子敎ふべし【句】『史記の留侯世家に「良乃更二名姓一、亡匿二下邳一、良嘗閒從容、步遊二下邳圮上一、有二一老父一衣レ褐、至二良所一、直墮二其履圮下一、顧謂二良曰一、孺子下取レ履、良愕然欲レ毆レ之、爲二其老一彊忍下取レ履、父曰、履レ我、良業爲取レ履、因長跪履レ之、父以足受、笑而去、良殊大驚、隨目レ之、父去里許、復還曰、孺子可二敎矣一、とあるに本づく』この小供には敎育を施すことを得べし。

じゆ-し 樹脂【名】或種の樹木より分泌する液の、空氣に觸れて固まりたるもの。性質一定せざれども、概してテルペン屬炭化水素の酸化したるもの、また存在の狀態も、細胞膜内に含まるるもの、膜質の成分をなすもの、細胞間隙内に分泌せらるるもの等、種種あり。例へば松脂・漆の類。やに。

じゆ-し 壽死【名】天壽を全うし、草木の自然に枯死するが如く、安樂に死ぬること。

じゅーじ 受磁【名】〔理〕磁力を受くること。(附磁に對して)

受磁の強さ【句】〔理〕磁氣能率を磁石の體積に除したる商。

しゅしーかうくわん 種子交換【名】從來栽培せし種子を廢して、最も適當せる地方より、良種を求めて、播種用に供すること。

しゅしーがく 朱子學【名】儒學の一部。支那宋の朱熹の唱導せし經學。同じく宋の代の周茂叔程明道・程伊川等の說を承けて大成し、理氣の說、持敬の說、格物・致知の說等、その主要なるものなり。朱學。

じゅーしき 授職【名】〔佛〕じゅしきくわんちゃう(授職灌頂)の略。正統虹「淳祐、罪障の至を敷きて、卑下の心ありければ、弟子元杲僧都に、許可ばかりにて、授職を許さず」

じゅーじき 受食【名】〔佛〕比丘(ビク)が檀越(ダンヲツ)の施食を受くること。

じゅしきくわんちゃう 授職灌頂【名】〔佛〕てんげくわんちゃう(傳敎灌頂)に同じ。正統虹「勅定により、法皇の御弟子寬空にあひて、授職灌頂を遂ぐ」

しゅしきだう 修式堂【名】しうしきだう(修式堂)に同じ。

じゅしーくわうたく 樹脂光澤【名】〔鑛〕『英Resinous lustre』松脂又は獸脂に似たる光澤。琥珀の如き光澤。

しゅしーけい 手指形【名】〔植〕しゅしじゃう(手指狀)に同じ。

しゅしげさ 種子袈裟・呪字袈裟【名】〔佛〕わげさ(輪袈裟)に同じ。平家女護島「もなし衣に種子袈裟かけ、六尺ゆたかの大坊主」

しゅしーじゃう 手指狀【名】〔植〕葉の、手指を開きたるが如き形をなせるもの。手指形。

(うやじしゅし)

じゅしーせき 樹脂石【名】〔鑛〕『英Retinite』褐炭中より往往現るる琥珀に似し鑛物。

しゅしーせんちゃうさう 手指纖長相【名】〔佛〕三十二相の一。手指の細く圓く長きこと。

しゅーしつ 酒失【名】酒より生ずる過失。

しゅーじつ 手實【名】王朝時代に、一戶內の人數・容貌・年齡等を記して、戶主より國司に差出しし帳。

しゅしーにゅうざい 種子乳劑【名】〔醫〕『獨 Samenemulsion』種子を水に浸して軟化洗滌し、皮を脫して搗碎し、漸次に水を加へて濾過したるもの。

じゅしび 受死日【名】くろび(黑日)に同じ。

しゅじーふじゃう 種子不淨【名】〔佛〕「五種の不淨」を見よ。「に同じ。

しゅしま 須子摩【名】〔人〕すしま(須子摩)に同じ。

しゅーしん 酒箴【名】酒に關するいましめ。

しゅーしん 守辰【名】ぎゃうせいくわん(行政官)(二)を見よ。

しゅーしん 珠簪【名】眞珠・珊瑚珠などにて飾りたるかんざし。

しゅーしん 珠心【名】〔植〕『羅 Nucleus』胚珠中、內被の內部にありて、柔細胞より成れる部分。その中央に胚嚢あり。

しゅーしん 朱脣・朱唇【名】あかきくちびる。紅を附けたるくちびる。女のくちびる。丹脣。

しゅーしん 主神【名】(一)神明に奉仕すること。(二)かむづかさ(主神)に同じ。

しゅーじん 主人【名】(一)一家のあるじ。(二)わが仕ふる人。しゅう。かみ。

主人の鰭【句】鯉の口の兩脇にある鰭。太平記「二尺ばかりになる魚を、主人の鰭を喰んで」

じゅーしん 受信【名】音信又は信書を受くること。(發信に對して)(ジン)。

じゅーしん 樹心【名】樹木の中心。木の心。

じゅーしん 儒臣【名】儒學を以て仕ふる臣。「尊稱。

じゅーじん 孺人【名】支那にて、大夫の妻の尊稱。

じゅーじん 戍人【名】關所・城塞などを守る人。戍兵。番兵。

しゅじんーおもひ 主人思【名】(主恩)に同じ。

しゅじんーがは 主人側【名】主人方に關する人。

しゅしんーき 受信機【名】『英Receiving Instrument』電報を受信するに用ふる機械。普通に用ふるはモオルス形にして、電磁石の側に軟鐵片ありて、その端に槓杆を附し、槓杆の一端にペンありて、ぜんまい仕掛にて繰出さるる現字紙に、その端を接するやうに造れり。

しゅじんーこう 主人公【名】(一)しゅじん(主人)(二)の敬稱。(二)『英 Hero』小說・脚本などに現るる中心人物。

しゅしんし 主神司【名】伊勢齋宮の內院神殿に勤守し、大殿祭及び齋王の御禊祓の事に供奉することを掌りし役所。令外(リゲ)の官司にして、齋宮寮の被管十二司に對して、特殊の地位に置かれ、その所管不定のため、神祇官の兼攝に屬せしこともあり。職員は臣・忌部(イミベ)・宮主(ミヤジ)各一人。

しゅしんーじゅ 主針儒【名】はりはかせ(針博士)の唐名。

じゅしんーしゅぎ 受信主義【名】〔法〕『獨 Emphangstheorie』隔地者間の意志表示に於て、相手方が意思表示の通知を受くると同時に、その効力發生するとなす主義。例へば書面によりて契約の申込をなす場合に、その書面の被申込者に到達したる時に、効力發生するとする類。(發信主義・表白主義・了知主義に對して)

しゅしんーちゃう 守辰丁【名】陰陽寮の職員の一。漏刻博士に屬し、漏刻を候ひ、鐘鼓を擊ちて、時を報ずることを掌りしもの。

じゅしんーてんぱう 受信電報【名】特別電報の一。電報の發信人が、その電報の受信人に到達したる日時の報知を、郵便又は電信によりて受くることを得るもの。

じゅしんでんぱうーれう 受信電報料【名】受信電報の料金。電信受信報知料と郵便受信報知料との二種に分つ。各條を見よ。

じゅしんーにん 受信人【名】信書・電報などを受取るべき人。(發信人に對して)

しゅじんーもち 主人持【名】現在主人に仕へてゐる人。主人のある人。

じゅしんーらく 壽心樂【名】きしゅんらく(喜泰樂)の異稱。「じ。

しゅしーもん 手指文【名】しもん(指紋)に同じ。

しゅーしゃ 手寫【名】手づから寫すこと。

しゅーしゃ 守者【名】監守する人。番人。

しゅーしゃ 朱砂【名】〔鑛〕しんしゃ(辰砂)に同じ。

しゅーしゃ 趣舍【名】すてしゃ(趣舍)を見よ。

しゅーしゃ 取舍・取捨【名】(一)取ると捨つと。よきを用ひ、あしきを用ひぬこと。收捨。去取。(二)多くの中より入用なるを取り、不用なるを捨つること。えりどり。

じゅーしゃ 儒者【名】(一)儒學に長じたる人。ずさ。儒。(二)江戶幕府の職名。儒を以て仕ふるもの。林氏の家職とす。「くる者。

じゅーしゃ 受者【名】〔佛〕戒又は灌頂を受くる者。

じゅーしゃ 聚砂【名】砂をあつむること。

聚砂の年【句】〔佛〕『西域記鈔に「聚沙之年、蘭薰桂馥」とあり』せうねん(少年)の異稱。

じゅーしゃ 聚砂爲佛塔(ホットウ)【句】〔佛〕『法華經の方便品に「乃至童子戲聚レ砂爲二佛塔一、如レ是諸人等、皆已成二佛道一」とあるに本づく』童子の、戲に砂を聚めて、佛塔を作り、供養する眞似事を爲す。斯かるわづかの善事も、成佛の結緣となるといふ。平家「仄かに聞く、聚砂爲佛塔の功德(クド)、忽ちに佛因を感ず。況んや、一紙半錢の寶財においてをや」

じゅーしゃ 豎者【名】〔佛〕りふしゃ(立者)に同じ。「ろ。

しゅーしゃう 手掌【名】手のひら。たなごころ。

しゅーしゃう 酒觴【名】さかづき。

しゅーしゃう 干醬【名】古の大膳職の職員の一。種種の醬醋(シャウ)・未醬(ミソ)などを造ることを掌りしもの。

しゅーしゃう 主將・首將【名】そうだいしゃう(總大將)に同じ。「こと。

しゅーしゃう 主唱【名】主となりて唱ふること、又その人。先唱。

しゅーしゃう 首唱【名】はじめに唱へ出すこと。

しゅーしゃう 首相【名】ないかくそうりだいじん(內閣總理大臣)の異稱。

しゅーしゃう 修正【名】〔佛〕しゅしゃう(修正會)の略。著聞「法成寺の修正に、南門を

入りて參りて、退出の時、西門へまはされけるほど」

しゅ-しゃう 衆聖【名】〔佛〕多くの聖人

しゅ-しゃう 種性【名】〔佛〕個人發展の種子(シュ)と、その人本有(ホンウ)の性分(ショウブン)と。

すじゃう。

しゅ-じゃう 主上【名】てんわう(天皇)に同じ。平治、主上、御位をすべらせたまひて」

しゅ-じゃう 守城【名】城を守ること。

しゅ-じゃう 鬚狀【名】〔植〕**せんねじゃう**(纖維狀)に同じ。

しゅ-じゃう 衆生【名】〔佛〕『梵 Sattva(薩埵)の舊譯。新譯には有情(ウジョウ)といふ。しゅうせい(衆生)參照』一切の生物。動物。群機。薩埵。源兵「六道の衆生のために、六部書かせたまひて」

衆生濟度(サイド)【句】〔佛〕衆生を救濟して、生死海を度脫せしむること。頓成酒呑童子「中尊は釋迦牟尼佛、佛も我れも十九歳、それは衆生濟度の道、これは戀路の闇に入り、猶三界を出でやらず」

衆生の始(ハジ)【句】〔佛〕衆生のこの世に生ずるに至りし最初の時。「衆生界無始參照。謡曲・楊貴妃「それ過去遠遠(ハルカ)の昔を思へば、いつを衆生の始と知らず、未來永永(エイエイ)の流轉(ルテン)、更に生死(シャウジ)の終もなし」

衆生無邊誓願度(ムヘンセイグワンド)【句】〔佛〕しゅじゃうむへんせいぐわん(四弘誓願)を見よ。釋迦如來誕生會「衆生無邊誓願度の御機緣盡きたまひ」

衆生を度(ワタ)す【句】衆生を濟度す。槃花「佛ともなり給ひ、衆生をもわたし給へ」

縁なき衆生は度し難し【句】■〔佛〕佛法を聞くべき宿縁の熟せぬ者は、說法も効なく、濟度の道なし。〔諺語〕■頑冥固陋なる者に對しては、說得の方法なし。〔諺語〕

じゅ-しゃう 授賞【名】賞を授くること。

じゅ-しゃう 受賞【名】賞を受くること。

じゅ-しゃう 受章【名】勳章を授與せらること。

じゅ-じゃう 壽城【名】ひつぎ。棺。

しゅじゃう-おん 衆生恩【名】〔佛〕四恩の一。衆生が互に助け合ひて負へる恩。

しゅじゃう-かい 衆生界【名】〔佛〕生物の存在する世界。十界の中より佛界を除きたるもの、即ち九界。(己界に對して)

衆生界無始【句】〔佛〕衆生の天地間における存在は、宇宙と共に始なきこと、また終もなしと說く。

衆生界無盡【句】〔佛〕衆生界は、十方にわたりて、無限に存在す。鴛鴦合鷺「衆生界無盡なれば、終に成佛の期を知らず」

しゅじゃう-さう 衆生相【名】〔佛〕しさう(四相)を見よ。

しゅじゃう-しん 衆生身【名】十身の一。五蘊(ウン)が衆生と共に和合して成れるもの。有情(ウジョウ)世界の衆生の身。

じゅしゃう-しゃ 受章者【名】勳章を授與せらるる人。又授與せられたる人。

しゅじゃう-しゅぎ 主情主義【名】〔文・美〕しゅじゃうせつ(主情說)に同じ。

しゅじゃう-しょ 主漿署【名】春宮(トウグウ)坊に屬し、首(カミ)一人、令史(サウン)各一人、水部(スヰブ)十人、使部・直丁(チョウ)・厩使(ウマカヒ)・若干人等の職員ありて、東宮の饘粥(センジュ)・漿水・菓子の類を掌りし役所。大同二年主膳監に合併す。

しゅじゃう-せけん 衆生世間【名】〔佛〕さんしゅせけん(三種世間)を見よ。

しゅじゃう-せつ 主情說【名】〔文・美〕『英 Affectionism 又は Sentimentalism』吾人の精神を美的又は感情的に解釋せんとする見解。主として、第十九世紀の初頃より、ロマンチシズムに伴ひて流行したり。感傷主義。主情主義。(主意說・主知說に對して)

しゅじゃう-せんけい 鬚狀線形【名】〔植〕鬚狀を帶びたる線形。

しゅじゃう-ぢゃく 衆生濁【名】〔佛〕五濁の一。一切衆生が、末世になりて、邪見放逸を增長すること。

しゅじゃう-にん 衆生忍【名】〔佛〕しゃうにん(生忍)に同じ。

しゅじゃう-はう 守城砲【名】守城に使用する大砲。攻城砲に對抗するに足る威力と防禦地帶內における位置轉換の動作容易なるとを要す。

しゅしゃう-ゑ 修正會【名】〔佛〕中古、寺院に於て、元日に始めて三日・五日もしくは七日間、その年の災危を防ぐために修する法會。しゅにぐわつゑ(修二月會)參照。

しゅじゃか 朱雀【名】次條に同じ。平家「女護島」しゅじゃかの御所の築山に」

しゅ-じゃく 朱雀【名】■四神の一。南方の星象。すざく。(玄武・青龍・白虎に對して)■私年號の一。前後二回あり。一は弘文天皇の元年がその元年に當るもの、他は天武天皇の十三年がその元年に當るもの。水鏡「筑紫より足三つありし雀の赤きを奉りしかば、年號を朱雀元年とぞ申しはべりし」「こと。

じゅ-しゃく 授爵【名】華族に陞せらるること。

しゅじゃく-おほぢ 朱雀大路【名】〔地〕京都舊內裏の朱雀門より、南端の羅城門に至るまでの大路。今は、京都市の西端にて、千本通(センボンドホリ)といへり。しゅじゃくどほり。

すざくおほぢ。

しゅじゃく-き 朱雀旗【名】仗旗の一。

しゅじゃく-てんわう 朱雀天皇【名】〔人〕第六十一代の天皇。御名は寛明(ユタアケ)。醍醐天皇第十一の皇子。御母は藤原穩子。御在位十六年(紀元一五九一年—一六〇六年)。天曆六年崩ず。壽三十。

しゅじゃく-とほり 朱雀通【名】〔地〕しゅじゃくおほぢ(朱雀大路)に同じ。

しゅじゃく-の 朱雀野【名】〔地〕山城國京都の西の都の漸く衰へて、朱雀大路以西の、野の如くなりたる邊。すざかの。

しゅじゃく-もん 朱雀門【名】平安城の大內裡の外廓十二門の一。南面三門の中央、即ち美福門と皇嘉門との間に位し、外廓正門たりしもの。大門。大伴門。南門。すざくもん。

しゅじゃく-ゐん 朱雀院【名】■京都三條の南、朱雀の西にありて、方四丁に亙りし累代の後院。嵯峨天皇創めて造營せられ、天曆四年燒失し、後再び造營せらる。四條後院。■〔人〕しゅじゃくてんわう(朱雀天皇)に同じ。

じゅしゃ-さう 壽者相【名】〔佛〕じゅさう(壽相)に同じ。

じゅしゃ-すてば 儒者捨場【名】〔地〕『儒葬は儒學の盛時に唱へられ、寺も無き野邊に送り行くさまの見馴れぬによりて、この俗稱あり』東京市小石川區護國寺の背後に在りて、德川時代に、儒者の儒葬せられし處。室鳩巢・古賀精里・柴野栗山・尾藤二州・岡田寒泉・古賀侗菴等の墓あり。

しゅしゃ-ひきつけ 取捨引付【名】鎌倉時代に、引付方における裁判の時、文案の可否を取捨せし會議。

しゅしゃ-をん 衆車園・衆車苑【名】〔佛〕「帝釋の四苑」を見よ。曜斐武「衆車園の遊、歡喜園の戯」

しゅ-じゃ 首衆【名】〔佛〕しゅそ(首座)に同じ。

しゅ-じゃ 主首【名】〔佛〕かんす(監寺)に同じ。

しゅ-じゃ 守株【名】「株(シュ)を守る」を見よ』一事に泥みて、變通の才に乏しきこと。

しゅ-じゃ 朱之瑜【名】〔人〕しゅじゅんすゐ(朱舜水)に同じ。

しゅ-じゃ 手授【名】手づから授くること。

しゅ-じゃ 珠襦【名】珠にて飾れる短き衣。

しゅ-じゃ 侏儒・朱儒【名】■身のたけの低き人。■一寸法師。■梁の上に立つる短柱。うだち。

しゅ-じゃ 種樹【名】植物を種うること、又その人。うゑつけ。

しゅ-じゃ 種種【名】くさぐさ。いろいろ。

しゅ-じゃ 種種雜多【句】いろいろの種類一つに雜じりてあるさま。

じゅ-しゅ 壽酒【名】壽を祝ふ酒。

じゅ-しゅ 戍守【名】まもること、又その人。衞戍。守壽。

じゅ-じゅ 授受【名】授くると受くること。「りとり。

じゅ-じゅ 受授【名】受くると授くること。

じゅ-じゅ 誦呪・誦咒【名】〔佛〕修法にて、陀羅尼等を誦すること。

じゅ-じゅ 數珠【名】じゅず(數珠)を見よ。

しゅ-じゅう 主從【名】しゅうじゅう(主從)を見よ。

見よ。

しゅ-じゅう 首従【名】 主犯と従犯と。 事要略「相因爲二首従一」

しゅ-じゅう 趨従【名】 **すうじゅう**(趨従)に同じ。

しゅ-しつ 輸出【名】 **ゆしゅつ**(輸出)を見よ。

しゅ-じつ 手術【名】 ㊀醫術にて、患部を切開などして、療治すること。 ㊁手先にてなすわざ。手工。

じゅ-じつ 呪術・咒術【名】 ㊀まじなひ。呪咀。 ㊁まほふ(魔法)に同じ。

しゅしゅつ-おくりじやう 輸出送状【名】 **ゆしゅつおくりじやう**(輸出送状)を見よ。

しゅしゅつ-かう 輸出港【名】 **ゆしゅつかう**(輸出港)を見よ。

しゅしゅつ-くわぶつ 輸出貨物【名】 **ゆしゅつくわぶつ**(輸出貨物)を見よ。

しゅしゅつ-ぐわんしよ 輸出願書【名】 **ゆしゅつぐわんしよ**(輸出願書)を見よ。

しゅじゅつ-しつ 手術室【名】 醫者が手術を行ふ室。外科(クワ)室。

しゅしゅつ-しんこく 輸出申告【名】 **ゆしゅつしんこく**(輸出申告)を見よ。

しゅしゅつ-しんこくしよ 輸出申告書【名】 **ゆしゅつしんこくしよ**(輸出申告書)を見よ。

しゅしゅつ-しやう 輸出商【名】 **ゆしゅつしやう**(輸出商)を見よ。

しゅしゅつ-しやうげふ 輸出商業【名】 **ゆしゅつしやうげふ**(輸出商業)を見よ。

しゅしゅつ-しやうれいきん 輸出奨勵金【名】 **ゆしゅつしやうれいきん**(輸出奨勵金)を見よ。

しゅしゅつ-ぜい 輸出税【名】 **ゆしゅつぜい**(輸出税)を見よ。

しゅしゅつ-せいげん 輸出制限【名】 **ゆしゅつせいげん**(輸出制限)を見よ。

しゅしゅつぜい-てうくわ 輸出税超過【名】 **ゆしゅつぜいてうくわ**(輸出税超過)を見よ。

しゅしゅつぜい-もく 輸出税目【名】 **ゆしゅつぜいもく**(輸出税目)を見よ。

しゅしゅつ-ぜいりつ 輸出税率【名】 **ゆしゅつぜいりつ**(輸出税率)を見よ。

しゅじゅつ-だい 手術臺【名】 手術を施すに用ふる臺。

しゅしゅつ-てうくわ 輸出超過【名】 **ゆしゅつてうくわ**(輸出超過)を見よ。

しゅしゅつ-にふ 輸出入【名】 **ゆしゅつにふ**(輸出入)を見よ。

しゅしゅつにふ-ぜい 輸出入税【名】 **ゆしゅつにふぜい**(輸出入税)を見よ。

しゅしゅつ-ひん 輸出品【名】 **ゆしゅつひん**(輸出品)を見よ。

しゅしゅつ-ぼうえき 輸出貿易【名】 **ゆしゅつぼうえき**(輸出貿易)を見よ。

しゅしゅつ-めんじやう 輸出免状【名】 **ゆしゅつめんじやう**(輸出免状)を見よ。

しゅじゅつ-れう 手術料【名】 手術を施したる料金。

じゅ-じゅん 濡潤【名】 ぬれうるはふこと。

しゅ-しゅんすゐ 朱舜水【名】〔人〕水戸の客儒。名は之瑜。字は魯璵。支那明の人。萬治二年國難を避けて、わが國に歸化し、水戸侯光圀に聘せらる。鄭成功と議し、明の恢復を謀りしかど、遂に志を遂ぐる能はずして、天和二年歿す。年八十三。のち朱舜水全集の刊あり。

じゅじゅ-ゐん 受授員【名】 宮内大臣官房に屬する判任待遇の等外職員。文書受授の雜務に從事するもの。

しゅ-しよ 手署【名】 手づから署名すること。

しゅ-しよ 首書【名】 **かしらがき**(頭書)に同じ。

しゅ-しよ 手書【名】 手づから書くこと、又その書きたるもの。自筆のかきもの。自筆。

しゅ-しよ 朱書【名】 朱にて書くこと、又その書きたるもの。しゅがき。

じゅ-しよ 儒書【名】 儒學の書物。 正統記「儒書には、伏犧氏といふ王よりあなたをばいはず」

しゅ-しよう 殊勝【名】 ㊀〔佛〕最も勝(ス)れたること。最勝。 盛衰記「眺望も又殊勝なり」 ㊁けなげなること。神妙。奇特。

しゅ-しよう 修證【名】〔佛〕行を修し、理を證すること。

しゅしよう-がほ 殊勝顔【名】 奇特らしき顏つき。 醒睡笑「これの御影堂に、しゆしようがほしてゐらるる坊主の」

しゅしよう-ち 殊勝地【名】〔佛〕喜見宮城内、殊勝殿の前にありといふ池。

しゅしよう-でん 殊勝殿【名】〔佛〕**たいしやくぐう**(帝釋宮)に同じ。

しゅ-しよく 殊色【名】 婦人のすぐれたる容色。

しゅ-しよく 朱色【名】 朱のいろ。しゅいろ。

しゅ-しよく 手燭【名】 **てしよく**(手燭)に同じ。

しゅ-しよく 酒食【名】 酒と食物と。酒を飲み、物を食ふこと。 **しゅし**(酒食)參照。

しゅ-しよく 酒色【名】 酒と女色と。

しゅしよ-しよ 主書署【名】 春宮(シュウ)坊に屬し、令(リヤウ)・令史(サウ)各一人、使部・直丁(チヤウテイ)若干人等の職員ありて、東宮の書籍筆硯の類を供進する事を掌りし役所。大同二年主藏監に合併す。

じゅじ-りつ 受磁率【名】〔理〕〔英 Magnetic susceptibility 『磁性體を細長き棒となし、その長さを磁力線の方向と一致せしめて磁場に置く時、棒の感受する磁力と磁場の强さとの割合。

しゅし-りやう 種子量【名】〔農〕一定の地積に播種又は植附を行ふべき種苗の適當の量。

しゅ-す 繻子【名】 或一定の規則の下に、經絲(タテイト)及び緯絲(ヨコイト)の、長く表と裏とに浮く組織にして、從つて滑かにして光澤ある一種の織物。經緯の組織せる所少なきため、地質の堅牢ならざる缺點あり。天文年間、京都にて、支那の法に倣ひて織創めしものといふ。多く女の帶地・半襟等に用ふ。本繻子・毛繻子・觀光繻子・綿(メン)繻子などの種類あり。

しゅす 輸す【動佐變他】 **ゆす**(輸す)を見よ。

しゅす 修す【動佐變自】 をさむ。行ふ。學ぶ。 盛衰記「眞言上乘の祕法は、この伽藍に修せらる」

じゅす 誦す【動佐變他】 よむ。歌ふ。口ずさぶ。誦(ジュ)す。ずす。ずんず。 枕「そのからうたをじゅして、黒戸に殿上人いと多くゐたるを」

じゅす 呪す・咒す【動佐變他】 のろふ。まじなふ。 太平記「虚空に向ってしばらく呪したるに、三の太山出現して」

じゅず 數珠【名】 『梵 Japamālā(鉢塞莫)。じゅは數の字の吳音、ずは珠の字の吳音じゅを數ふる際に用ふるが本義なれども、今は導ら佛・菩薩を禮拜する時、手に懸け、又は採みて敬意を表するに用ふる具。小さき珠を數多く絲に貫きて、輪形に連ねたるもの。珠の數は一百八を根本とし、その他、一千八十・五十四・四十二・二十七・二十一・十四等のもあり。一百八の數は菩薩の本有(ホンヌ)の五十四位と修生(シュジヤウ)の五十四位とを表示し、一一に圓滿なるは斷惑證理の義なりと稱せられ、五十四づつに兩分したる中間に、親王(シンワウ)として、一箇づつの大珠あり、これに對して、一百八珠を子玉と呼ぶ。又、携帶に便せんため、念佛宗にては一百八の三分の一なる三十六珠、禪宗にては、その六分の一なる十八珠のを用ふ。ずず。ねんず。貫珠。

(ずゆじ)

じゅず 數珠を切る【句】 出家の志を破る。佛戒を破る。 一代女「住持、はや現になって、…後は酒に亂れ勝手なり、醒き風も通ひ、一夜づつの情代、金子二歩に定めおき、諸山の八宗この一宗を勸めまはりしに、いづれの出家も、數珠切らざるはなし」

じゅずかけ-ばと 數珠掛鳩【名】〔動〕**こばと**(白子鳩)に同じ。

じゅず-ぎく 數珠菊【名】〔植〕菊の一種。莖は高さ尺餘。枝多く分岐し、秋の末、花を開く。その色、黄・白・紅など種種あり、また大小も一樣ならず。

しゅず-けさ 種子袈裟【名】 **しゅじけさ**(種子袈裟)に同じ。 下學集「種子袈裟、シユスゲサ」

じゅず-だま 數珠子【名】 **じゅずだま**(數珠玉)に同じ。

じゅずこ-だま 數珠子玉【名】 **じゅずだま**(數

珠玉)に同じ。

じゅごなり 數珠子生 【名】數珠子玉の如く並び連なること。

じゅずすげ 數珠菅 【名】〔植〕莎草(カヤツリ)科に屬する多年生の草。高さ五六寸乃至一尺。花は單性・雌雄同株。山地に自生す。ひろばのやはらすげ。

しゅずすり 朱硯 【名】朱畫を研(ス)る硯。

じゅずだま 數珠玉 【名】■數珠に作る珠。香木・木槵(ムクロジ)・水晶などを材とす。じゅず。しゅずこだま。ずずだま。ずずごだま。狂言「鳥山伏」「この數珠は、むさとしたる數珠玉を繋ぎて、いらたかの數珠と名づく」

じゅずばな 數珠花 【名】〔植〕まんじゅしゃげ(曼珠沙華)[1]を云ふ。〔伊豫國の方言〕

じゅずひき 數珠挽 【名】珠數の玉を造ること、又その人。用明天皇職人鑑「琴屋・鏡屋・鳥帽子折・數珠ひき・烟管屋」

しゅすびん 繻子鬢 【名】■毛筋を透かさぬやうに美しく撫でつけたる髪。安永頃流行せり。長町女殺油「はれ、よい男の、江戸元結に繻子鬢」■「常に繻子の頭巾を被りしよりいふ」

じゅずぶくろ 數珠袋 【句】數珠を入るるための袋。持統天皇歌軍法「母樣の珠數袋を春日祭に落してや」

しゅずみ 朱墨 【名】辰砂と銀朱とを膠にて練りて造れる墨。卽ち朱色の墨。あかずみ。朱錠。

しゅすらん 繻子蘭 【名】〔植〕びろおどらん(天鵞絨蘭)に同じ。

しゅすん 主帥 【名】■軍隊の大將。■大寶の制、隊正と校尉との中間の階級なりし者。■大寶の制、馬部(ブ)の當番の者。

しゅすん 酒泝井 【名】〔地〕下總國印幡(インバ)郡にある町。成田鐵道の一驛。

しゅずね 主隨 【名】江戸時代に、江戸の秤座(ハカリザ)たりし家。天正年間、德川家康の江戸に入りし時、甲斐の武田氏の秤子たりし守隨兵三郎の、井伊直政に就き、願ひ出でて許されしに始り、慶長中、神善四郎の京の秤座たることを許されてより、兩氏相並びて、天下の權衡を專掌せり。

じゅすん 入水 【名】にふすゐ(投身)に同じ。平家女護島「女院・二位殿・一門以下、皆入水と聞えしかば」

しゅすゐき 酒水忌 【名】〔佛〕かうりき(孝力忌)に同じ。

しゅすゐし 主水司 【名】古の宮內省に屬し、正(カミ)・佑(スケ)・令史(サカン)各一人、水部(モヒトベ)・使部(ツカヒベ)・直丁(ヤトヒチャウ)・駈使丁(クジャウ)若干人等の職員ありて、供御(ゴ)の飯粥(イヒカユ)、水漿・氷室(ヒムロ)の事を掌りし役所。もひとりのつかさ。もとりのつかさ。もんどのつかさ。

しゅすゐせつ 主水說 【名】〔鐵〕『英 Werner』總ての岩石は、海底に沈澱して成れるものなりとの說。獨逸のヴェルネル(A. Werner)の唱道せしもの。

しゅせい 主政 【名】■政治をとる人。■王朝時代の諸國の郡の判官(ジョウ)。郡內を糾判し、文案を審署し、稽失を勘へ、非違を察することを掌りしもの。

しゅせい 守勢 【名】敵を引受けて防ぎ守る兵勢。(攻勢に對して)

しゅせい 酒精 【名】〔化〕『英 Spirit of wine 又 Spirit』酒の主成分をなすによりていふ』「じ。

あるこおるに 同じ。

しゅせい 種姓 【名】すじやう(種姓)[1]に同じ。

しゅせい 趨勢 【名】すうせい(趨勢)を見よ。

しゅせい 守成 【名】創業の後を承けて、その成業をかため守ること。「てせい。

しゅせい 手製 【名】みづから製すること。

しゅせい 修整 【名】しうせい(修整)に同じ。

しゅせい 酒稅 【名】しゅざうぜい(酒造稅)に同じ。

しゅせい 儒生 【名】儒學を學ぶ書生。儒者。

じゅせい 受精 【名】〔生〕『英 Fertilization』有性生殖の一法。雌性細胞が雄性細胞(雌性細胞より小さくして、運動性を有す)を受け、相合して、新しき生物の個體を生ずること。

じゅせい 壽星 【名】■なんきよくせい(南極星)に同じ。■陰曆八月の異稱。■馬の眉間にある旋毛(ツムジ)。しもくのつむじ。

しゅせいかんだんけい 酒精寒暖計 【名】同じ。

しゅせいかんていやく 主稅鑑定役 【名】明治十七年大藏省の鑑定役を改稱せる判任官。同十九年廢せらる。

しゅせいかんていやくみならひ 主稅鑑定役見習 【名】明治十七年大藏省鑑定役見習を改稱せる等外吏。同十九年廢せらる。

しゅせいかんり 主稅監吏 【名】大藏省主稅局の職員。海關輸出入稅品の監視を掌りし判任官。明治十七年に設置、同十九年に廢止せらる。

しゅせいきよく 主稅局 【名】大藏省の一局。國稅の賦課徵收、稅務の管理監督、その他租稅上の重要なる事項を取扱ふ所。

しゅせいくわん 主稅官 【名】大藏省主稅局の職員。主稅官長の命を受け、その主務を幹理せし奏任官。明治十七年に設置、一等より四等までの階級ありしが、後に廢止せらる。

しゅせいくわんちやう 主稅官長 【名】大藏省の舊制度における主稅局の長官。奏任にて、諸稅及び府縣徵稅費に關する一切の事務を管理せしもの。明治十七年設置、のち廢止せらる。

しゅせいこう 朱成功 【名】〔人〕ていせいこう(鄭成功)を見よ。

しゅせいし 酒吉司 【名】雅樂の一。壹越(イチコツ)調にして舞無し。拾芥抄「酒清司、シュセイシ」

しゅせいすゐじゅんき 酒精水準器 【名】すゐじゅんき(水準器)を見よ。

しゅせいぞく 主稅屬 【名】明治十七年大藏省に置かれたる主稅局の職員。その主務に從事するもの。判任官にて、一等より十等までにあり。のち廢せらる。

じゅせいなう 受精囊 【名】〔動〕『羅 Receptaculum seminis』無脊椎動物の生殖器の一部。雄器より精蟲を受けて、これを蓄ふる囊。蠕形(ゼンケイ)動物及び軟體動物中の雌雄同體のものと、節足動物とは、概ねこれを有す。

しゅせいぶん 酒精分 【名】酒精の成分。

しゅせいぶん 主成分 【名】或物質中のおもなる成分。主要成分。

しゅせいもん 壽成門 【名】八省院二十五「門の一。

しゅせいれう 主稅寮 【名】ちからりう(主稅寮)に同じ。「勅。

しゅせう 手詔 【名】天子の親筆の詔書。手

しゅせう 手鈔 【名】自ら書抜くこと、又書抜きたるその記錄。「ゑ。

じゅせう 樹梢・樹杪 【名】樹木の頂。こずゑ。

じゅせうくわ 樹梢火 【名】じゅくわんくわ(樹冠火)に同じ。

じゅせうくわん 樹梢館 【名】江村北海が、致仕後、京都室町(ムロマチ)に築きし家。

しゅせうてん 主焦點 【名】〔理〕『英 Principle focus』球面鏡又はレンズの軸に平行に受けたる平行光線が、反射又は曲折して後に集まる一點。正焦點。實焦點。

しゅせき 首席 【名】多くの席次の中の第一位、その位置にある人。

しゅせき 酒席 【名】さかもりの席。酒宴の席。宴會の席。

しゅせき 殊績 【名】ことに勝れたる功績。

しゅせき 酒石 【名】〔化〕『英 Argol 又 Tartar』葡萄酒を釀造するにあたり、醱酵樽の內面に皮層狀をなして固結する、汚白色又は赤蠻色の物。主に酒石酸水素カリウムより成り、なほ酒石酸カルシウム及び雜多の汚物を含む。藥用又は毛の媒染劑に供し、また精製して酒石英となし、或は酒石酸及びその他、化合物類製出の原料に供す。

しゅせき 手跡・手蹟 【名】書きたる文字。

筆跡。盛衰記「父の手跡を見給はんと思ひ」

じゆ-せき 樹石【名】木と石と。木石。

しゆせき-あらそひ 手跡爭【名】手跡の巧拙を爭ふこと。著聞集「その後は、御手跡爭もなかりけり」

しゆせき-えい 酒石英【名】〔化〕『英 Cream of tartar』主に酒石を精製して得たる白色の結晶性粉末。純粹なる酒石酸水素カリウムにして、醫藥として用ひらる。酸性酒石酸。

しゆせき-くんだう 主席訓導【名】主席にある訓導。

しゆせき-けうゆ 首席教諭【名】首席にある教諭。教頭。

しゆせき-さん 酒石酸【名】〔化〕『英 Tartaric acid』無色・透明の結晶體をなす一種の二鹽基酸。水に溶け易く、酸味強く、カルシウム又はカリウム鹽となりて、種種の果實中に存す。酒石英を分解して得べく、ラムネサイダア等清涼飲料の原料となる。

しゆせきさん-かりうむ 酒石酸加個母【名】〔化〕『羅 Kalium tartaricum』無色透明なる一斜粒狀の結晶または白色結晶粉末にて、水に溶け易く、酒精には不溶性なり。酒石又は酒石酸と炭酸カリウムとを煮、蒸發結晶せしめて製す。緩下劑・利尿等に用ふ。中性酒石酸かりうむ。酒石酸ぼたしうむ。

しゆせきさんすゐそ-かりうむ 酒石酸水素加個母【名】〔化〕『羅 Kalium hydrotartaricum』しゆせきさん-ぼたしうむ（酒石英）に同じ。

しゆせきさん-ぼたしうむ 酒石酸剝篤傻母【名】〔化〕『英 Potassium tartaric』しゆせきさんかりうむ（酒石酸加個母）に同じ。

しゆ-せつ 守節【名】節義を守ること。

しゆ-ぜつ 殊絕【名】他に勝れたること。

しゆ-せん 主戰【名】■戰爭を主張すること。■援軍に對して、その主軍の戰闘。

しゆ-せん 酒戰【名】互に酒量の優劣を比ぶること。すまふさかもり。すまふさけ。

しゆ-せん 酒饌【名】酒と食饌と。酒肴。

しゆ-せん 酒錢【名】酒を買ふ錢。さかだい。さかて。

しゆ-せん 酒仙【名】大酒家の稱。酒豪。

しゆ-せん 集錢【名】大勢集まりて、互に錢を出しあふこと。五人女「飲むも、飲まぬも、七文づつの集錢出し」一代女「隙の夜の集錢出し、萬に物の入ることのみ」

しゆ-せん 守戰【名】守ると戰ふと。

しゆ-せん 鑄錢【名】錢を鑄造すること。

しゆ-せん 首線【名】〔數〕『英 Initial line』一直線が其の一端を樞として廻轉し角を畫くとき其の直線の始の位置を云ふ。

しゆ-せん 手選【名】採鑛の過程中、鑛塊を外觀によりて、女工等の擇りわくること。

しゆ-せん 修繕【名】しうぜん（修繕）に同じ。

しゆ-せん 修禪【名】〔佛〕しゆぜんぢやう（修禪定）の略。太平記「修禪三百房」

しゆ-ぜん 衆善【名】〔佛〕しゆうぜん（衆善）に同じ。

衆善奉行（ブギヤウ）【句】〔佛〕しちぶつつうかいげ（七佛通戒偈）を見よ。

しゆ-ぜん 修善【名】〔佛〕善事をなすこと。太平記「今日は、佛生日とて、…供花（クワ）・燒香に經を繞して、捨惡修善を事とする習なるに」

しゆぜん 鬚髮【名】あごひげと頭ひげと。

しゆぜん 主膳【名】■かしはで（一三）に同じ。

しゆぜん 授洗【名】〔基〕洗禮を授くること。

じゆ-せん 受洗【名】〔基〕洗禮を受くること。

じゆ-ぜん 鷲山【名】〔佛〕りやうじゆせん（靈鷲山）の略。平家「それ高雄は、山堆（タカ）うして、鷲山の梢を表し」

じゆ-ぜん 受禪【名】前帝の禪讓を受けて、踐祚したまふこと。盛衰記「受禪沙汰の時」

しゆぜん-かん 主膳監【名】次條に同じ。

しゆぜん-げん 主膳監【名】春宮（トウグウ）坊に屬し、正（カミ）・佑（スケ）・令史（サウジ）各一人、膳部（カシハデ）六十人、使部・直丁（アタヒチヤウ）・駈使（クヒ）若干人等の職員ありて、東宮の飲食供膳の事を管し、進食の時、試嘗のことを掌りし役所。大同二年主殿署を併せ、令史一人を增す。後世、內膳司をして、東宮の供御をも掌らしめ、特にこの官を置かざりしこともあり。かしはでのつかさ。

しゆせん-し 主船司【名】兵部省に屬し、正（カミ）・佐（スケ）・令史（サウジ）各一人、及び使部・直丁を置き、官私の舟機・船具の事を掌り、また船舶の所載數量等を檢校せし官司。船戶若干を附したり。

しゆせん-し 鑄錢司【名】天武天皇の時、創めて置き、鑄錢の事を掌りし官廳。しゆせんのつかさ。鑄錢所。

しゆせん-し 鑄錢師【名】弘仁年間の鑄錢司の職員の一。長官・次官・判官・主典の四部官以外に置かれしもの。

しゆぜん-じ 修禪寺【名】■伊豆國田方郡修善寺村にある曹洞宗の寺。もと修善寺と書き、一に桂谷山寺といふ。延曆十七年空海の草創。源範賴幽閉等の事によりて、その名顯れ、建長中、臨濟宗に屬し、後北條氏の代、曹洞宗となりて、今に至る。■しゆぜんじがみ（修禪寺紙）の略。〔修禪紙〕下學集「修禪紙、シユゼンシ」

しゆぜんじ-がみ 修禪寺紙【名】伊豆國修善寺村より產する一種の和紙。薄紅又は柿色にて、橫に筋あり。しゆぜんじ。

しゆせん-じよ 鑄錢所【名】しゆせんし（鑄錢司）に同じ。

しゆぜんじ-をんせん 修善寺溫泉【名】〔地〕伊豆國田方郡修善寺村にある溫泉。大仁驛より一里八町。桂川に沿うて、獨鈷（トツコ）湯・河原湯・新湯・石湯等十數箇より湧出す。泉質は鹽類泉に屬す。

しゆぜん-だいし 修禪大師【名】〔人〕ぎしん（義眞）に同じ。

しゆぜん-ちやう 主膳長【名】大膳寮の職員。膳羞の事を掌る奏任官。

しゆ-ぜんぢやう 修禪定【名】〔佛〕禪定を修行すること。修禪。

しゆせん-ど 守錢奴【名】しはんぼ。しみったれ。守錢虜。有財（ウザ）餓鬼。

しゆせん-とうめい 守戰同盟【名】二箇以上の國家が兵力を以て、互に相救援せんことを約する同盟。

しゆせん-の-つかさ 鑄錢司【名】しゆせんし（鑄錢司）に同じ。

じゆせん-のり 壽仙苔【名】〔植〕川苔の一種。筑後國より產す。その小なるものは、紫金苔と稱して、高價なりといふ。

しゆせん-りよ 守錢虜【名】しゆせんど（守錢奴）に同じ。

しゆせん-れう 主船寮【名】海軍省に屬し、艦船及びその器具等の製造・修理等を司りし役所。頭・權頭・助・權助・大屬・權大屬・中屬・權中屬・少屬・權少屬・大匠司・中匠司・少匠司・大師・中師・少師等の職員あり。明治五年設置、同九年廢せらる。

しゆ-そ 首鼠【名】『穴より首を出して窺ふ鼠の意』迷ひて、去就の決せぬこと。首鼠兩端【句】『史記の灌夫傳に「與二長孺一共一老禿翁一、何爲二首鼠兩端一」とあるに本づく』いづれにもつかず樣子をうかがふ。どちらつかず。〔諺語〕

しゆ-そ 首座【名】〔佛〕『漢字の宋音』じやうざ（上座）に同じ。〔禪宗の語〕

しゆ-そ 手疏【名】手づから筆を執りて、疏陳すること。

しゆ-そ 輪租【名】ゆそ（輸租）を見よ。

じゆ-そ 呪咀・咒詛【名】のろふこと。まじなふこと。ずそ。祝詛（シユ）。字治「君をじゆそしたてまつりてさふらふ者を、道に埋みてさふらふ」

じゆ-そ 受訴【名】訴訟を受理すること。

しゆ-そう 主僧【名】住持の僧。「じ。

しゆ-そう 衆僧【名】しゆうそう（衆僧）に同じ。

しゆ-そう 輸送【名】ゆそう（輸送）を見よ。

しゆ-そう 趨走【名】すうそう（趨走）を見よ。

じゆ-そう 儒宗【名】儒學のおもだてる者。

じゆ-そう 從僧【名】じゆうそう（從僧）に同じ。

じゆ-そう 受贈【名】贈與を受くること。

じゆそう-しや 受贈者【名】〔法〕贈與を受けたる者。

しゆ-そく 手捉【名】手にて捉ふること。

しゆ-そく 首足【名】■首と足と。■首より足までの全體。

しゆそく 手足 【名】 ■手と足と。てあし。■おもなる補助者。股肱。手足の愛 【句】 ■『禮記に「骨肉之恩、手足之愛」とあり、又、後漢書の袁譚傳に「兄弟者左右手也」などあり』兄弟の愛。手足を措くに所なし 【句】『論語の子路篇に「刑罰不レ中、則民無二所レ措二手足一」とあり』身を容るるの地なし。

しゆ-ぞく 種屬 【名】 たぐひ。ともがら。やから。主種郎屬。

しゆ-ぞく 種族 【名】 ■たぐひ。ともがら。人種。■『漢書の高帝紀に「種二族其家一」とあり』一族を誅戮すること。

しゆ-ぞく 殊俗 【名】 特殊の風俗。

しゆそく-くわん 數息觀 【名】〔佛〕『梵Gaṇanā-anusmṛti(阿那波那)の譯語。俱舍論の二十二に「言二阿那者一、謂持二息入一是引二外風一、令レ入二身義一、阿那波者、謂持二息出一是引二內風一、令レ出レ身義」とあり』五停心觀の一。心想の散亂を止むるために、出入の息を數ふること。すそくくわん。

しゆぞく-しんりがく 種族心理學 【名】〔哲〕じんしゆしんりがく(人種心理學)に同じ。

しゆそく-にうなんさう 手足柔軟相 【名】〔佛〕二十二相の一。手足の柔なること。

しゆそく-まんもうさう 手足縵網相 【名】〔佛〕三十二相の一。手足とも、その指と指との間に、縵網の纖緯ありて、鵝鴨などのそれの如きもの。

じゆそ-さいばんしよ 受訴裁判所 【名】〔法〕訴訟の提起を受理せる裁判所。訴の現に繫屬せる、又は嘗て繫屬したる裁判所。

しゆ-そつ 守卒 【名】守備する兵卒。番兵。

じゆ-そつ 戍卒 【名】衞戍の兵卒。まもりの兵。守卒。番兵。特殊天皇敕軍法「高仁祐も天孫を受嗣いで、戍卒の爲に、今一命を殞さんとす」 ■を見よ。

じゆそ-でん 輸租田 【名】ゆそでん(輸租田)

じゆ-そん 酒樽 【名】酒を入れおく樽。

しゆそりやうたん 首鼠兩端 【句】しゆそ(首鼠)の條下を見よ。

しゆだ 首陀 【名】すだ(首陀)に同じ。 賀古

敎信七箋鈔「大名高家の公達も、土民貧家の手實でも、此處に來りて隔なく、せつりもしゆだもかはらざりけり」

しゆ-たい 主體 【名】〔法〕主格を有するもの、又その團體。(客體に對して)

しゆ-だい 主題 【名】おもなる題目。

じゆ-だい 首題 【名】〔佛〕佛經の題目。佛經の首に題したるもの。首題名字。 槃花「十千の魚、十三部經の首題の名字を聞きて、皆、忉利(リ)天に生れたり」

じゆ-たい 受胎 【名】くわいたい(懷胎)に同じ。

じゆ-たい 濡滯 【名】とどこほること。遲滯。

じゆ-たい 樹態 【名】樹の狀態。きぶり。

じゆ-だい 入內 【名】『內裡に參入する義』女御又は皇后の、儀式を具へて、內裏に參らるること。 平家「きさき御じゆだいあるべきよし」

しゆだい-みやうじ 首題名字 【名】〔佛〕しゆだ-みやうじ(首題)に同じ。

しゆ-たい 手套 【名】てぶくろ(手套)に同じ。

しゆ-たい 酒盜 【名】しほから(鹽辛)に同じ。

しゆ-たい 酒鐺 【名】かんなべ(燗鍋)に同じ。

しゆ-たい 主當 【名】古、公設の牧場にて、牛馬の飼養、牧場の雜事を擔當せし役。

しゆ-だう 衆道 【名】わかしゆだう(若衆道)の略。五人女「衆道・女道(ダウ)を、晝夜のわかちもなく、さまざま遊興盡きて」

じゆ-だう 儒道 【名】■儒者の道。孔孟のをしへ。神道、佛道に對して) 大鏡「儒道を學んで、五倫の道を守り」 ■儒教と道教と。「儒道の二」

しゆだう-ごころ 衆道心 【名】衆道の慾。若風俗「この程、衆道心を移し、芝居がへりの太夫たちに目を附けはべる」

じゆたう-とねり 授刀資人・授刀舍人 【名】授刀舍人寮の舍人。

じゆたう-とねり-れう 授刀舍人寮 【名】授刀舍人を掌りし役所。元明天皇の朝、親衞の舍人を掌りし役所。元明天皇の朝に置かれ、天平神護元年改めて近衞府と稱し、大同三年左近衞府となり、中衞(ヱ)府を改稱せし右近衞府と相對することとなれり。帶劍寮。授刀寮。授刀衞。

じゆたう-のれう 授刀寮 【名】前條の略。萬葉「皆散二禁於授刀寮一」

じうたう-れう 授刀寮 【名】前條に同じ。

じゆたう-れい 授刀衞 【名】前條に同じ。

しゆ-たく 手澤 【名】『こうたく(口澤)を見よ』用ひ古して生じたるつや。てあか。

じゆ-たく 受託 【名】■囑託を受くること。たのまるること。 ■寄託を受くること。あづかること。

じゆ-だく 受諾 【名】受くることを承諾すること。引受くること。

じゆたく-さいばんしよ 受託裁判所 【名】〔法〕他の裁判所の囑託により、その管內に於ける證據調・訊問・送達などの訴訟行爲をなす裁判所。

じゆたく-しや 受託者 【名】次條に同じ。

じゆたく-にん 受託人 【名】寄託又は囑託を受くる人、又それを受けたる人。受託者。

じゆたく-はんじ 受託判事 【名】〔法〕他の裁判所の囑託により、その管內に於ける證據調・訊問・送達などの訴訟行爲をなす判事。

じゆたく-はんばい 受託販賣 【名】他人の委託を受けて、その商品を販賣すること。(委託販賣に對して)

じゆたく-はんばいひん-かんちうや 受託販賣品勘定 【名】〔商〕たくひんかんぢやう(委託品勘定)に同じ。

じゆたく-ぶつ 受託物 【名】〔法〕寄託を受けて保管する品物。

じゆたくぶつ-せうひ 受託物消費 【名】受託物をひそかに消費すること。

しゆたくぼん 手澤本 【名】或人の愛讀して、その人の手澤の存する書籍。

しゆたせつ 主他說 【名】〔哲〕あいたせつ(愛他說)に同じ。

しゆ-たち 須達 (梵 Sudatta(須達多・蘇達多)) 【名】〔人〕『善施・善與・善溫・善授・樂施等の義』釋迦時代の印度舍衞城の富豪。波斯匿(ハシノク)王に仕へて、大臣となる。釋迦の教を信じ、ために祇園舍(ギヲンシヤ)を建つ。慈悲心に富みて、孤獨の人に財物を給與せり。

しゆたち-ちやうじや 須達長者 【名】〔人〕前條の敬稱。 槃花「かの須達長者の祇園精舍(シヤウジヤ)造りけんも、かくや有りけん」

しゆ-たん 手段 【名】てだて。方法。

しゆ-だん 手談 【名】ねご(圍碁)の異稱。 下學集「圍碁又云二手談一」

しゆたら 修多羅 (梵 sūtra) 【名】〔佛〕■『契經の義。說く所、よく理に契ひ、機根に合する意。きやう(經)(一)參照』佛書。經(キヤウ)。 ■倉圖「修多羅の教は、月をさす指とて、これを嫌ひ」 ■袈裟(ケサ)の上に附したる一種の裝飾。四筋の色紐を華鬘結(ケマンむすび)又は袍結などに七結し、鉤紐の代用として、袈裟の上に投げ垂るるもの。

(■)らたゆし)

しゆだをん-くわ 須陀洹果 【名】〔佛〕「聲聞(シヤウモン)の四果」を見よ。

しゆ-ち 酒池 【名】池のごとくに酒を湛ふること。

酒池・肉林 【句】『史記の殷紀に「以レ酒爲レ池、縣レ肉爲レ林」とあり』酒を湛へたる池と肉を懸けたる林と。豪遊の形容。

しゆ-ち 趣致 【名】おもむき。風情。

しゆ-ぢ 主持 【名】主となりて執行すること。 太平記「作二主持之人一」

しゆ-ぢ 主治 【名】主として治療すること。

じゆ-ぢ 受持 【名】〔佛〕■受けたもつこと。守ること。 ■信力を以て領受して心に存し、念力を以て憶持して忘れざること。

しゆぢ-い 主治醫 【名】主任となりて治療する醫者。

しゆ-ちく 種畜 【名】蕃殖用に供する家畜。

しゆ-ちく 主軸 【名】■中心となる軸。樞軸。 ■〔理〕『英Principal axis』レンズの兩面をなす球の中心を連ぬる直線。

しゆ-ぢく 朱軸 【名】朱塗の軸。 用明天皇職人鑑「黃卷・朱軸の經傳を、七寶莊嚴の莊車

に盛り積んで」

しゅちく-ぼくぢやう 種畜牧場【名】種畜に關する事務を掌る所。農商務大臣の管理に屬し、主として、家畜・家禽の改良・蕃殖・種付・配付・飼料の栽培、及び試驗・畜産物の製造及び試驗等の事に從事す。場長・技師・技手の職員を置く。

しゅち-せつ 主知說【名】〔哲〕『英 Intellectualism』■哲學上思考を感情・意志以上のものとし、精神又は實在の本質は、或種の思想又は理性なりと說くもの。■心理學上、情意の作用の基礎又は根原を、知覺・表象・思考等の知的作用なりと說くもの。

しゅぢ-の-ふし 珠持節【名】馬の後脚の中の骨節。かはなのほね。

しゅちん 繻珍・朱珍【名】『もと七絲緞の唐音しゅちんの轉訛にして、葡 Setim 佛 Satin 蘭 Satijn 等もその轉訛せるものなるべし』絹の紋織繻子の一種。緯絲(ヨコ)に、紋樣となるべき色絲と地合となるべきものとを用ひたるもの。主として、女の帶に用ひ、羽織の裏にも用ふ。また綿(ワタ)繻珍といふものあり。經絲(タテ)もしくは緯絲の一方は木綿を用ひたるをいふ。しちん。もんじゆす(紋繻子)參照。

しゅちん-そん 朱陳村【名】白居易の作に見えたる詩の題名。一村ただ朱氏と陳氏との兩姓のみにて、世世親類の好誼厚く、虛禮のみにて、裏面の交情却りて冷薄なる世上の常態と遙かに異なる趣を敍せり。無村、寒き日のゆきゝは近し朱陳村」

しゅ-ちやう 腫脹【名】はれふくるること。むくみ。

しゅ-ちやう 守長【名】■番人の長。■もと山陵を掌りし等外吏。明治十七年設置、同四十一年廢せらる。

しゅ-ちやう 守丁【名】明治七年設置せられたる後島羽・土御門・順德の三帝の御火葬所の洒掃等の事を掌りし役。初め府縣の所屬なりしが、のち宮內省の所管に移され、同十七年廢せらる。

しゅ-ちやう 首長【名】長たる者。主宰する者。かしら。

しゅ-ちやう 主長【名】主たる者。かしら。

しゅ-ちやう 主帳【名】■古の諸國の郡の主典(サクワン)。文案を勘へ、公文を讀むことを掌りたり。■古、軍團にて、文書を造ることを掌りし役。

しゅ-ちやう 主張【名】■己が說をいひはること。■『韓愈の送窮文に「各有二主張一」とあるに本づく』持論。■『莊子の天運篇に「天其運乎、地其處乎、日月其爭二於所一乎、孰主張是、孰綱二維是一、孰居二無事一推而行レ是」とあるに本づく』主宰すること。

しゅ-ちやう 珠帳【名】珠玉を飾りたる美しきとばり。

しゅ-ちやう 朱錠【名】しゅぢやう(朱墨)に同じ。

しゅ-ちやう 拄杖・手杖【名】■僧の用ふる杖の總稱。印度にて、釋迦が特に老いもしくは病める比丘(ビク)に用ひしめし、小拄杖は、六朝時代より用ひしものの如く、別に禪宗にて、行脚(アンギヤ)の際の跋涉に便するものは、長さ六尺ほどありて、大拄杖といひ、佛制にあらずして、支那唐代の禪僧の創めしものの如し。謠曲(敍下倒)「見申せば、拄杖に圓扇を添へて持たれたり」■龍(カン)の狂言の一。拄杖を誂へたる僧、拄杖屋へ行き、亭主の請に任せて、剃髮せしむるを、女房怒りて追出すといふもの。

しゅちやう-ちやう 主帳丁【名】古、主帳より出せる仕丁。

しゅちやう-づきん 首丁頭巾・出頂頭巾・出長頭巾【名】鎌倉・室町兩時代の頃、剃髮の僧又は法師武者の被りし頭巾。紺布にて製し、後方を廣くし、中一所ほど縫ひたるもの。■『土佐坊この日の裝束には、かちの直垂に黑革縅の鎧著て、出長頭巾をぞ著たりける」

しゅぢやう-や 拄杖屋【名】拄杖を造ることを職業とする家。狂言「拄杖」「やあ、參る程に、彼の拄杖屋はこれでござる」

しゅ-ちやう 手中【名】手の中。

しゅ-ちやう 主廚【名】『廚を主(サヅカ)る義。廚の字の音、正しくはちゆ』炊事に關する軍務に從事する海軍卒。一等より五等までの等級あり。

しゅ-ちゆう 酒中【名】酒杯のうち。

酒中の趣【句】『世說の言語篇に「孟萬年好レ飮、喜酣暢、桓宣武嘗問、酒有二何好一而卿嗜レ之、孟答曰、公未レ知二酒中趣一耳」とあるに本づく』酒に醉ひたる心もち。醉中のおもしろみ。

酒中の仙【句】『杜甫の飮中八仙歌に「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不レ上レ船、自稱臣是酒中仙」とあるに本づく』酒を飮みて、無聊を忘れ居る人。

しゅ-ちゆう 朱中・銖中【名】■江戶時代、駿河國にて、黃金を量りし呼稱。一朱の二分の一に當れり。■甲州金の名目。一朱の二分の一、卽ち兩の三十二分の一。

しゅちゆう-くわ 酒中花【名】山吹の莖の髓にて、花鳥の形などを縮めて作り、簡單に彩りなどし、水に泛ぶれば、展れ開くやうにしたる玩具。(盧照鄰が「長安古意」の詩に「雜佩聲中連理帶、羅裙香裏合歡襠、御史府中烏夜哭、廷尉門前雀可羅、白馬驕來青絲絡、黃金勒裂紫遊韁、娼樓北對南山起、妓館東臨御溝開、羅帷送上七香車、寶扇迎歸九華帳、龍銜寶劍去辟惡、鳳舞金釵來合歡、春窗曙滅九微火、羽帳晨開百和香、香車寶馬共喧闐、七貴五侯相追逐、雄雞一鳴天下白、萬國衣冠拜冕旒」とあるおとなしく(といふ句に「うきをすがりの酒中花の時」

しゅ-ちやう 殊寵【名】特別の寵愛。殊眷。

しゅ-ちやう 守冢【名】墓の番人。はかばもり。「じ。

じゅ-ちやう 壽塚【名】じゅざう(壽藏)に同じ。

しゅちやう-ほふしんわう 守澄法親王【名】〔人〕後水尾天皇第三の皇子。俗名は幸敎。今宮と稱す。天台座主となる。慈賀院門跡の祖。明曆八年薨ず。年四十七。

しゅ-ちやく 手勅【名】天子の親筆の勅書。手詔。

しゅつ 出【名】■その處より出でたるもの。■その人の腹より出でたるもの。

じゅつ 術【名】■わざ。藝。■てだて。はかりごと。手段。■修驗者・陰陽師などが呪詛に施す法。四〔數〕和算にて、割算の割られる數。被除數。

じゅつ 戌【名】十二支の一。いぬ。

じゅつ-いう 出遊【名】出でて遊ぶこと。故鄕を出でて遠く赴くこと。「こと。

じゅつ-いう 鄒憂【名】あはれみられふること。

しゅつ-えう 出要【名】〔佛〕『止觀の七に「如レ救二頭燃一、以來出要二、十地義記に「出要者、謂果爲レ出、因爲二要道一」などあり』出離の要道。解脫(ゲダ)の道。盛寧師生前の一善なければ、沒後の出要にまどへり」

しゅつ-えん 出演【名】出席して、藝を演ずること。

しゅつ-えん 出捐【名】〔法〕法律上の義務あるにあらで、他人に財產を給付すること。「同じ。

じゅつ-えん 述演【名】えんじゅつ(演述)に同じ。

しゅつえん-きん 出捐金【名】出捐せる金。

しゅつ-が 出芽【名】はつが(發芽)に同じ。

しゅつ-が 出駕【名】はつが(發駕)に同じ。

しゅつ-かう 出行【名】いで行くこと。

しゅつ-かう 出港【名】船の港を出づること。ふなで。出帆。(入港に對して)

しゅつかう-ぜい 出港稅【名】島地より、內地へ移出する目的にて出港する物品に課する稅金。(內消稅の一種にして、輸出稅とは異なり。例へば沖繩縣酒類出港稅の類。(入港稅に對して)

しゅつかう-てすう 出港手數【名】船舶が碇泊港を去らんとする場合に、當該官廳になす、出港報告の手續。

しゅつかう-とどけ 出港屆【名】出港せんとする船舶より、その由を當該官廳に報告すること、又その屆書。

しゅつかう-とどけしよ 出港屆書【名】船舶が碇泊港を去らんとするに當り、當該官廳にその旨を記して差出す屆書。

しゅつかう-にもつ-めんじやう 出港荷物免狀【名】船舶が、荷物を積みて出港するを許可する免狀。

しゅつかう-めんじやう 出港免狀【名】船舶出港の免許狀。

しゅつ-かく 出格【名】掟に拘らぬこと。別格。

しゅつ-がはふ 出芽法【名】はつがはふ(發芽法)に同じ。

しゅつ-かん 出檻【名】檻(カン)又は牢獄を出づること。「と。

しゅつ-かん 出監【名】監獄より出づること。

じゅつ-きう 鄒救・恤救【名】きうじゅつ(救鄒)に同じ。

しゅつ-きん 出勤【名】勤務に出づること。

しゅっきん 出金【名】金錢を支出すること、又その金錢。出銀。

しゅっぎん 出銀【名】前條に同じ。

しゅっきんぼ 出勤簿【名】官衙・會社などに備へ附けて、その役員の、各自出勤するごとに捺印(ナツ)する帳簿。

しゅっきゃう 出京【名】【自】京を出でて、田舍へゆくこと。【反】じゃうきゃう(上京)に同じ。

しゅっきゃう 出鄉【名】【自】故鄉を出づること。【佛】住持の、寺を出で、人里に行きて勸化(クワン)すること。「同じ。

しゅっきゃく 出格【名】しゅっかく(出格)に同じ。

しゅっきょ 出擧【名】する(出擧)を見よ。

しゅっきょ 卒去【名】卒(シュツ)すること。

しゅっぎょ 出御【名】天皇が、常の御殿より朝堂もしくは御儀式等を行はるる殿舍に出立でたまふこと。(入御に對して)百練抄「出二御南殿之間一」

しゅっきょにん 出擧人【名】出擧の借受人。盛衰記「出擧人に借しちらして、德附き、公名附きなんどして、以ての外に過分になり」

しゅっく 出句【名】〔文〕出韻の句。(多く古詩のにいふ)

じゅっくう 【名】きまま。勝手。浮世風呂「人間といふものは自由(ジユ)につくうな事ばっかりいふ物よ」

しゅっくん 出軍【名】【自】戰場に向ふこと。【他】軍隊をくりいだすこと。

しゅっくん 出群【名】ばっくん(拔群)に同じ。

しゅっくわ 出火【名】くわじ。火災。失火。

じゅっくわ 術科【名】〔兵〕軍事教育上、戰鬪に必要なる事項を實施教習する科目。即ち操典教範その他に示す課目の實踐するものにして、學科と相待つべきもの。

しゅっくわい 出會【名】であふこと。面會。

じゅっくわい 述懷【名】胸中の思を言出すこと。くりごと。

しゅっくわごごん 出過語言【句】〔佛〕玄妙不思議にして、言語にて表現しがたきこと。言語を超越せること。言語道斷。盛衰記

起「自性(ジシヤウ)の本佛もとより己身(コシン)に備ふと觀ずれば、無窮の聖應(シヤウオウ)、響の聲に應ずるが如し。生死(シヤウジ)斷絶の親門、出過語言の要路なり」

しゅっくわん 出棺【名】死人の遺骸を納めたる棺を、その家より送り出すこと。

しゅっぐわん 出願【名】公官署に願ひ出づること。

しゅつぐわんしょ 出願者【名】出願せる人。出願人。「面。

しゅつぐわんしょ 出願書【名】出願の書

しゅつぐわんにん 出願人【名】しゅつぐわんしゃ(出願者)に同じ。

しゅっけ 出家【名】【自】『梵 Pravrajita の譯語』在家(ザイケ)の生活を出離して、沙門の淨行(ギヤウゴウ)を修すること。父母の家を離れ出でて、僧となること。出塵。脫塵。(在家に對して)【他】僧侶の通稱。にふだう(入道)參照。

出家・士(ケシ)・夫・畜生【句】農・工・商の三民より、相手になし難きものを並稱せし語。〔諺語〕

一人出家すれば、九族天に生る【句】出家の功德の廣大なるをいふ語。

じゅっけい 術計【名】てだて。はかりごと。權宜。

じゅつげい 術藝【名】『列子に「魯之君子、多二術藝一」、後漢書の班固傳に「文之兩二術藝一」などあり』げいじゅつ(藝術)に同じ。

しゅっけおち 出家落【名】僧侶の墮落。還俗(ゲンゾク)したる僧。

しゅっけげき 出擊【名】出でて敵を擊つこと。

しゅっけごと 出家事【名】能(ノウ)の狂言の、出家の事を作れるもの。例へば、「宗論」・「呂蓮(リヨレン)」・「泣尼」など。

しゅっけつ 出血【名】血の出づること、又血を出すこと。

しゅっけつせいなまくえん 出血性腦膜炎【名】〔醫〕かうなまくえん(硬腦膜炎)に同じ。

しゅっけつぼ 出缺簿【名】しゅっせぼ(出「帳簿」に同じ。

しゅっけとくどてん 出家得度佃【名】王朝時代、人民が僧となりたる時、官に收むる、その人の口分田(クブン)位田・賜田など。

しゅっげん 出現【名】【自】出であらはるること。【佛】佛・菩薩の實身より、化身(ケシン)の世に出であらはるること。【天】『英 Dimension』掩蔽の終了をいふ。

しゅっこ 出庫【名】くらだし(庫出)に同じ。

しゅっこ 崒乎【雜】高くけはしきさま。

しゅっご 出期【名】〔佛〕生死(シヤウジ)の苦を出離する期限。

じゅつご 述語【名】〔語〕せつめいご(說明語)に同じ。

じゅつご 術語【名】『英 Technical term 又 Technicals 又 Technics』特殊の意味を以て、學術上にのみ用ひらるる語。專門語。

しゅつごく 出獄【名】罪を赦され、又は刑期滿ちて、牢獄を出づること。出牢。

しゅつこぐわんしょ 出庫願書【名】稅關倉庫、又は官設保稅倉庫に入庫したる貨物を出庫せんとする時、稅關に差出す願書。

しゅっこはうこく 出庫報告【名】にわたしきっぷ(荷渡切符)に同じ。

しゅっこん 【名】『種根又は宿根の訛か』種性。うまれ。平家、成景は京の者、しゅっこん賤しき下臈なり」

じゅっこん 入魂【名】じゅこん(入魂)に同じ、

しゅっさ 出差【名】〔天〕『英 Transit』太陽が地球の周圍に畫く軌道の形の變化より起る、太陽の運動の變差。太陽の影響を受くるに因るものにして、周期的に變化し、その變差の極大値は、約一度四分の一。

しゅっさ 出座【名】その座に出づること。

しゅっさい 出塞【名】『史記の周紀に「今又將兵出レ塞攻レ梁」とあり。塞は支那の北方なる夷狄の界限をいふ』塞を越ゆること。

しゅっさい 出妻【名】『孔子家語に「舜參後母遇之無レ恩、而供養不レ衰、及二其妻以レ梨烝不一レ熟、因出之、終身不レ取レ妻」とあり。

しゅっさく 述作【名】【他】前人のせし事を述べ明らむることと、己れ自ら作ることと。【反】ちょじゅつ(著述)に同じ。

じゅっさく 術策【名】はかりごと。計略。

しゅっさつじょ 出札所【名】切符を賣出す處。

しゅっさん 出産【名】【自】さんしゅつ(產出)に同じ。【他】子の生ること。さん。出生(シュツシヤウ)。

しゅっざん 出山【名】山を出づること。出山の釋迦【句】〔佛〕六年の苦行を終へて、尼連禪河の西岸なる苦行林を出づる時の釋迦牟尼。釋迦如來誕生會「出山の釋迦牟尼佛、四八の相好八十種好」

しゅっし 出仕【名】【自】出でて官に仕ふること。【自】勤務すべき場所へ出づること。出勤。【自】明治の初年に、新に官吏に登用すべきものの才能を試みんが爲に置きたる試補官の稱。【自】明治四年以後、事務の繁忙なる場合に置きたる員外官の稱。

しゅっし 出資【名】資本を出だすこと。

しゅっし 出自【名】『何何自(ヨリ)出づの義』でどこ。出所。「祖先の出自を尋ぬ」

じゅつし 術士【名】巧に謀を弄する人。

しゅっしぎむ 出資義務【名】出資をなす義務。例へば株式會社又は株式合資會社の株主が株金を拂込むべきの類。

しゅっしうかう 出仕將校【名】陸海軍にて、或事務につき、定員外にその事務を掌らしむる將校。例へば海軍軍令部におけるものの類。

しゅっじつ 出日【名】【自】出づる日。あさひ。「『書經の君奭に「丕冒海隅出日、罔レ不二率俾一」、同書の堯典に「寅賓二出日一、平二秩東作一」とあり』日の出づる處。

しゅっしん 出身【名】【自】支那にて、鄉貢進士の、吏部の撰に及第せしこと。【自】その土地又はその地位より立身したること。出身を賜ふ【句】官署に出仕の命を蒙る。

しゅっしゃ 出象【名】〔天〕內惑星が太陽面を經過する終の時。

しゅっしゃ 出生【名】【自】しゅっさん(出產)に同じ。【自】その土地より生れ出でたること。

しゅっしゃうし 出生子【名】出生せる子。

しゅっしゃうち 出生地【名】出生の地。うまれどころ。

まれ故郷。

しゆっしやうち-しゆぎ 出生地主義【名】〔法〕父母の國籍に拘らず、その人の出生地によりて、國籍を定むる主義。

しゆっしやう-とどけいで-ぎむしや 出生屆出義務者【名】〔法〕戸籍吏に子の出生の屆出をなす義務を負ふ人。即ち嫡子の場合には第一に父、父これをなす能はざる時は母、庶子の場合には父、私生子の場合には母、もし是れ等の者が屆出をなす能はざる場合には、戸主・同居者・分娩に立會たる醫師・産婆・介抱人等がその順序に從ひ、屆出の義務を負ふ。

しゆっ-しよ 出處【名】㊀出でて仕ふと退きて野に處(を)ると。㊁事の起りたるところ。でどころ。〔出所〕曾我五人兄弟「出所も知れぬ京童の俗談」

しゆっ-しよく 出色【名】他に勝れたる所のあること。「近來出色の文字」

じゆつ-しよく 述職【名】我が職事に就き、參內して申し上ぐること。諸侯の參內。

しゆっ-す 卒す【動佐變自】しす(死す)の敬語。四位・五位の人、支那にては、大夫の死にいへり。(崩ず・薨ずに對して)

じゆっ-すう 術數【名】㊀算數の術。㊁はかりごと。策略。

しゆっ-すゐ 出水【名】みづで。でみづ。大水。洪水。

しゆっ-せ 出世【名】㊀〔佛〕諸佛の、衆生を濟度せんがために、淨土を捨てて、假にこの人間界に現出すること。如來の出現。太平記「慈尊出世の曉」㊁〔佛〕『前項の意に譬へていふ』隱退したる高僧の、再び大小の寺院に住持すること。㊂世に立ちて榮ゆること。立派なる身分となること。立身。㊃〔佛〕僧侶の役名。延曆寺のは、持佛堂の法事を勤むるものにて、公卿の子これに補せられ、仁和寺のは、御室の近習、これに補せらるる習なりき。㊄〔佛〕世間を超脫して、淨行(じやうぎやう)を修すること、又その人。出家。出塵。太平記「中納言僧都經超・二位寺主淨勝二人より外は、出世・坊官、一人も候はずと申しければ」

しゆっ-せい 出精【名】精を出すこと。奮發。勵精。

しゆっ-せい 出征【名】㊀『易經の上經に「王用出征、有レ嘉」とあり』出で行くこと。㊁戰場目ざして出發すること。

しゆっせい-ぐん 出征軍【名】戰鬪に從事するために、戰地に派遣せられたる軍隊。

しゆっせい-ぐんじん 出征軍人【名】出征軍に編入せられたる軍人。

しゆっせい-じやうだう-らく 出世成道樂【名】ばんしうらく(萬秋樂)の異稱。

しゆっせ-うを 出世魚【名】成長するに從ひて、名の變りゆく魚。例へば、ぼら(鯔)・すずき(鱸)・ぶり(鰤)の類。

しゆっせ-かげきよ 出世景淸【名】淨瑠璃の一。惡七兵衞景淸の賴朝を窺ひて、終に捕へられ、首を討たれんとせしが、觀音の身代にて、赦免となり、日向國宮崎の庄を賜はりしも、尙賴朝を恨む心已まず、自ら眼球を拔きて盲目となりて、日向に赴きしことを作れるもの。近松門左衞門の竹本義太夫の爲に作りし淨瑠璃の最初の作。

しゆっ-せき 出席【名】その席に出づること。(缺席に對して)

しゆっせき-ていし 出席停止【名】貴・衆兩院議員の懲罰の一。貴族院にては一箇月以內、衆議院內にては二週間以內、その議院の會議にも委員會にも、出席を停止するもの。

しゆっせき-ぼ 出席簿【名】學校などに備へて、生徒の出席せるものを記すための帳簿。出缺簿。

しゆっせ-くわ 出世果【名】〔佛〕ねはん(涅槃)に同じ。

しゆっせ-けん 出世間【名】㊀〔佛〕無爲・涅槃の境界。四諦(したい)の中の滅諦と道諦とは、これに屬す。(世間に對して)㊁俗人の、世事を捨てて、佛門に歸すること。

しゆっせ-ばり 出世張【名】たぬまばり(田沼張)に同じ。

しゆっせ-ひやうぢやうしゆう 出世評定衆【名】ひやうぢやうしゆう(評定衆)を見よ。

しゆっ-せん 出船【名】船の港を出づること。ふなで。出港。

しゆっ-そ 出訴【名】訴へ出づること。起訴。

しゆっ-そう 出走【名】しゆっぽん(出奔)に同じ。八犬傳「淫婦夏引等が密謀の洩れきこえしに驚きて、出訴せばやと思ひしかども」

しゆつ-ぞく 出俗【名】だつぞく(脫俗)に同じ。

しゆっ-たい 出來【名】しゆつらい(出來)の音便。

しゆっ-たい 出胎【名】母胎を出づること。生るること。

しゆっ-たい 出隊【名】〔佛〕禪寺にて、住持の、大衆の隊を率ゐて、出でて、財糧を勸化(くわんげ)すること。すゐたい。出鄕。

しゆつ-だい 出題【名】題を提出すること。

しゆつ-だう 出道【名】〔佛〕世間を出離する道。

じゆつ-だう 術道【名】修驗又は禁厭(まじなひ)などの道。盛衰記「伏しまろびて冷したまへども、猶助かる心地し給はず、療治も術道も驗を失ひ、佛神の祈誓も空しきが如し」

しゆっ-たつ 出立【名】いで立つこと。たびだち。發足。

しゆっ-たん 出炭【名】石炭を掘出すこと。

しゆっ-ち 出離【名】〔佛〕しゆつり(出離)㊀を見よ。

じゆつ-ぢ 術治【名】まじなふこと。庭訓往來「湯治・術治」

しゆっ-ぢん 出陳【名】出品陳列すること。

しゆつ-ぢん 出陣【名】㊀戰場に出づること。(入陣に對して)㊁〔佛〕『法戰の義に取りていふ』禪客の、衆中より出でて、陞座(しんざ)の人と問話すること。(入陣に對して)

しゆつ-ぢん 出塵【名】〔佛〕煩惱(ぼんなう)の塵垢(ぢんく)を出離すること。塵の世をのがれて、僧となること。出家。脫塵。太平記「時の難をのがれんがために、出塵の身となりて、天下の人に指をさされんこと」

じゆっ-ちん 繻珍【名】しゆちん(繻珍)の音便。

しゆっ-ちやう 出張【名】用務ありて、他處へ出向くこと。でばること。「こと。

しゆつ-ぢやう 出場【名】或場所に出づること。

しゆつ-ぢやう 出定【名】〔佛〕僧が、修行のために籠りゐたりし場所より出づること。禪定を出づること。(入定に對して)盛衰記「今日は出定の日也とて、又國中の男女雲霞の如くに集って拜まんとす」

しゆつぢやう-こうご 出定後語【名】〔書〕『しゆつぢやう(出定)を見よ』漢文にて、大乘の佛說に非ざる旨を論じたるもの。一卷。富永仲基の著。

しゆっちやう-じよ 出張所【名】出張して事務を執る所。

しゆっぢやう-せうご 出定笑語【名】〔書〕『しゆつぢやう(出定)を見よ』佛教を論駁したるもの。六卷。平田篤胤の著。平田篤胤全集に收む。

しゆっちやう-てん 出張店【名】本店より出張したる店。

しゆっちやうてん-ちやう 出張店長【名】出張店の長。

しゆっ-つ 出津【名】船舶の津(みなと)を出づること。「と。

しゆっ-てい 出廷【名】法廷に出頭すること。

じゆっ-てき 怵惕【名】おそれあやぶむこと。賀古敎信七墓廻「怵惕惻隱は仁の端」

しゆっ-てん 出典【名】故事・成語などの出處たる書籍。典據。

しゆっ-と 出途【名】㊀しゆったつ(出立)に同じ。㊁費用の出みち。

しゆっ-と 出雲【名】〔地〕出雲國の舊郡の一。明治二十九年楯縫(たてぬひ)・神門(かんど)の二郡と合して、簸川(ひかは)郡となれり。

しゆっ-とう 出頭【名】㊀自らその場所に參ること。㊁要路に在りて、政務を見る者。君側にありて、特に威勢あるもの。君主の寵を專にするもの。新可笑記「流石一方の家老職にもなりぬべき出頭、時を得たれば」

出頭の天【句】『「天」の字の中の斜なる一畫を上に貫けば、「夫」の字となるによりていふ』夫(をつと)の撥語。

しゆつ-どう 出動【名】出でて活動を起すこと。

しゆっとう-しゆ 出頭衆【名】しゆっとうにん(出頭人)に同じ。

しゆっ-とうち 出頭地【名】『支那宋の歐陽

修、蘇軾の應舉文を見て「老夫當レ避、此出二一頭地一」、故事成語考に「士人超拔、謂二之一頭地一」とあり。地は接尾語』他より拔出でたること。

しゅっとうにん 出頭人【名】『しゅっとう(出頭)[二]を見よ』武家時代に、譜代・新參の別なく、器に應じ、登用せられて主君に近侍し、政務に與りし者、即ち幕府の三管領・四職・奉行人など、大名の家の老臣・奉行の類。職・奉行人など、大名の家の老臣・奉行の類。曾我兄弟が鬱結は出頭人、與する武士も多ければ」

じゅつながる 術無がる【動四自】術なく思ふ。せんかたなく思ふ。切(サ)ながる。困る。傾城色三味線「生れ付いて吝い奴にて、じゅつながる銀(ネ)共を箱へ押入れ押入れ、内藏へつめるを樂にして」

じゅつなし 術無し【形二】爲すべき方法なし。困る。せんかたなし。すべなし。すぢなし。困却す。

しゅつなふ 出納【名】『すゐたふ(出納)の誤讀』[一]藏人所に屬して納殿(ドノ)の出納及び藏人所一切の雜事を掌りし役。定員三人。攝關の家司(ケシ)にもありたり。禁祕抄「出納三人、是藏人方一切奉行者也、夜陰外不二衣冠一、又候二御壺一體事、無二先例一堀河院御時、如三鳥羽院一被二召連一、猶不二甘心一事也、出納者、上古親王大臣など擧申、藏人下知、下名簿、學生、明法生諸國目等補之」[二]延曆寺の七座の公人(クニン)の一。被物(カヅケモノ)・祿物の出納を掌りし賤しき役。

しゅつにふ 出入【名】出づると入ること。出ずと入ること。でいり。だしいれ。

しゅつにふかう-ぜい 出入港稅【名】出港稅と入港稅との併稱。

しゅつば 出馬【名】貴人の、馬に乘りて出立すること。

しゅつばい 出梅【名】梅雨の終る日。(入梅 對して)

じゅつばきや 術婆伽・術婆迦・術婆訶【名】(人)『大智度論』の卷十四に見ゆ』古の印度の漁夫。某國の王女なる牟羅(梵 Kuna-la)に戀し、その望の遂げがたきに及びて、身より火を發して燒死せりといふ。盛衰記「天竺の術婆訶

じゅつばきや 術婆伽・術婆迦・術婆訶【名】(人)『大智度論縛迦(梵 Śilākara)』古の印度の漁夫。某國の王女なる牟羅(梵 Kuna-la)に戀し、その望の遂げがたきに及びて、身より火を發して燒死せりといふ。盛衰記「天竺の術婆訶

しゅつぶ 述部【名】[語]せつめいぶ(說明部)に同じ。

しゅつぺい 出兵【名】兵を出すこと。

しゅつぼつ 出沒【名】出づることと隱ること。或は見え、或は隱ること。

しゅつぼん 出奔【名】[一]逃げて跡をくらますこと。かけおち。逐電。出走。亡命。[二]江戸時代に、徒士(カチ)以上の者の踪跡をくらますこと。

しゅつぼん-しゃ 出奔者【名】出奔したる人。

しゅつぼん-とどけ 出奔屆【名】出奔せることを屆け出づること、又その屆出の書面。

じゅつみん 恤民【名】人民をあはれめ「ぐむこと。

しゅつもん 出門【名】門を出づること。

しゅつやく 出役【名】出張して、執務すること。赴任。

しゅつらい 出來【名】[一]『世說の文學篇に「問云、公何處來、答云、今日與二謝孝一劇談一出來」とあり』物事の或處より出できたること。事件の發生すること。平道「定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ難儀の勤定にて候へ」[二]物のなりととのふこと。物のできあがること。しゅったい。成就。

しゅつらう 出牢【名】しゅつごく(出獄)に同じ。

しゅつらん 出藍【名】『青は藍より出でて藍より青し』を見よ』子弟の、却りて師父よりも上達すること。『出藍の譽(ホマレ)』參照。

しゅつり 出離【名】[一][佛]厭ふべき迷界を脫離すること。平家「出離の道さまざまなりとは申せども」[二][天]『英 Egress』惑星が太陽面又は木星面を經過する終。出離生死【句】[佛]生死苦痛ある迷界を脫離して、常住安樂の涅槃(ネハン)界に入ること。盛衰記「即ち後佛の

じゅつ-ぺい 恤兵【名】物品・金錢などを寄付して、兵事に從へる兵士を慰むること。

じゅつぺい-きん 恤兵金【名】恤兵のために寄付したる金員。

じゅつぺいぶ 恤兵部【名】恤兵の事務を取扱ふ所。

しゅつぼ 出母【名】『禮記の檀弓上篇に「孔子之不レ喪二出母一、自二子思一始也」とあり。しゅっさい(出妻)參照』父と離緣したる實母。

しゅつぼつ 出沒【名】出づることと隱ること。或は見え、或は隱ること。

しゅつぼん 出奔【名】[一]逃げて跡をくらますこと。かけおち。逐電。出走。亡命。[二]江戸時代に、徒士(カチ)以上の者の踪跡をくらますこと。

しゅつぼん-しゃ 出奔者【名】出奔したる人。

しゅつぼん-とどけ 出奔屆【名】出奔せることを屆け出づること、又その屆出の書面。

じゅつみん 恤民【名】人民をあはれめ「ぐむこと。

しゅつもん 出門【名】門を出づること。

しゅつやく 出役【名】出張して、執務すること。赴任。

しゅつらい 出來【名】[一]『世說の文學篇に「問云、公何處來、答云、今日與二謝孝一劇談一出來」とあり』物事の或處より出できたること。事件の發生すること。平道「定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ難儀の勤定にて候へ」[二]物のなりととのふこと。物のできあがること。しゅったい。成就。

しゅつらう 出牢【名】しゅつごく(出獄)に同じ。

しゅつらん 出藍【名】『青は藍より出でて藍より青し』を見よ』子弟の、却りて師父よりも上達すること。『出藍の譽(ホマレ)』參照。

しゅつり 出離【名】[一][佛]厭ふべき迷界を脫離すること。平家「出離の道さまざまなりとは申せども」[二][天]『英 Egress』惑星が太陽面又は木星面を經過する終。出離生死【句】[佛]生死苦痛ある迷界を脫離して、常住安樂の涅槃(ネハン)界に入ること。盛衰記「即ち後佛の

じゅつ-ぺい 恤兵【名】物品・金錢などを寄付して、兵事に從へる兵士を慰むること。

じゅつぺい-きん 恤兵金【名】恤兵のために寄付したる金員。

じゅつぺいぶ 恤兵部【名】恤兵の事務を取扱ふ所。

しゅつぼ 出母【名】『禮記の檀弓上篇に「孔子之不レ喪二出母一、自二子思一始也」とあり。しゅっさい(出妻)參照』父と離緣したる實母。

しゅつぼつ 出沒【名】出づることと隱ること。或は見え、或は隱ること。

しゅつぼん 出奔【名】[一]逃げて跡をくらますこと。かけおち。逐電。出走。亡命。[二]江戸時代に、徒士(カチ)以上の者の踪跡をくらますこと。

しゅつぼん-しゃ 出奔者【名】出奔したる人。

しゅつぼん-とどけ 出奔屆【名】出奔せることを屆け出づること、又その屆出の書面。

じゅつみん 恤民【名】人民をあはれめ「ぐむこと。

しゅつもん 出門【名】門を出づること。

しゅつやく 出役【名】出張して、執務すること。赴任。

しゅつらい 出來【名】[一]『世說の文學篇に「問云、公何處來、答云、今日與二謝孝一劇談一出來」とあり』物事の或處より出できたること。事件の發生すること。平道「定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ難儀の勤定にて候へ」[二]物のなりととのふこと。物のできあがること。しゅったい。成就。

しゅつらう 出牢【名】しゅつごく(出獄)に同じ。

しゅつらん 出藍【名】『青は藍より出でて藍より青し』を見よ』子弟の、却りて師父よりも上達すること。『出藍の譽(ホマレ)』參照。

しゅつり 出離【名】[一][佛]厭ふべき迷界を脫離すること。平家「出離の道さまざまなりとは申せども」[二][天]『英 Egress』惑星が太陽面又は木星面を經過する終。出離生死【句】[佛]生死苦痛ある迷界を脫離して、常住安樂の涅槃(ネハン)界に入ること。盛衰記「即ち後佛の

は、后宮に契をなし、夢路を恨みて、煙と昇り」

しゅっぱつ 出發【名】しゅったつ(出立)に同じ。

しゅっぱつ-しんがう 出發信號【名】停車場より出發せんとせる列車又は通過列車に對して、信號現示點以外に、進行の可否を示す信號。

しゅっぱつ-てあて 出發手當【名】外國駐在官が本邦を出發する際、特に給與せらるる手當金。

しゅっぱつ-てん 出發點【名】『英 Starting point』[一]事を始むる動機又はそれが動作に現るる時。[二]出發せんとする地點。

しゅっぱん 出帆【名】船の港を離るること。ふなで。開帆。解纜。拔錨。

しゅっぱん 出版【名】文・圖畫などを、版木に彫りて、世にいだすこと。版行。印行。刊行。

しゅっぱんけいさつ 出版警察【名】高等警察の一。出版に關し、公安保持のために、人民の自由を制限するもの。

しゅっぱんけん 出版權【名】(法)ちょさくけん(著作權)に同じ。

しゅっぱん-とどけ 出版屆【名】出版をその管轄官廳に屆け出づること、又その屆書。

しゅっぱん-はふ 出版法【名】出版に關する行政上の制限につきて規定せる法律。明治二十九年發布。

しゅっぱん-ぶつ 出版物【名】出版せる文書圖畫。

しゅっぴ 出費【名】費用を出すこと、又その費用。かかり。いりめ。

じゅつひ 恤悲【名】あはれみかなしむこと。不幸に思ふこと。

しゅっぴん 出品【名】賣店・陳列場などに、『と。品物を出すこと。

しゅっぷ 出府【名】地方より都に出づること。

しゅっぷ 出婦【名】『史記の張儀傳に「出婦嫁二於鄒曲一者、眞婦也」とあり』しゅっさい(出妻)に同じ。

じゅつぶ 述部【名】[語]せつめいぶ(說明部)に同じ。

しゅつぺい 出兵【名】兵を出すこと。

じゅつ-ぺい 恤兵【名】物品・金錢などを寄付して、兵事に從へる兵士を慰むること。

じゅつぺい-きん 恤兵金【名】恤兵のために寄付したる金員。

じゅつぺいぶ 恤兵部【名】恤兵の事務を取扱ふ所。

しゅつぼ 出母【名】『禮記の檀弓上篇に「孔子之不レ喪二出母一、自二子思一始也」とあり。しゅっさい(出妻)參照』父と離緣したる實母。

しゅつぼつ 出沒【名】出づることと隱ること。或は見え、或は隱ること。

しゅつぼん 出奔【名】[一]逃げて跡をくらますこと。かけおち。逐電。出走。亡命。[二]江戸時代に、徒士(カチ)以上の者の踪跡をくらますこと。

しゅつぼん-しゃ 出奔者【名】出奔したる人。

しゅつぼん-とどけ 出奔屆【名】出奔せることを屆け出づること、又その屆出の書面。

じゅつみん 恤民【名】人民をあはれめ「ぐむこと。

しゅつもん 出門【名】門を出づること。

しゅつやく 出役【名】出張して、執務すること。赴任。

しゅつらい 出來【名】[一]『世說の文學篇に「問云、公何處來、答云、今日與二謝孝一劇談一出來」とあり』物事の或處より出できたること。事件の發生すること。平道「定めて狼藉出來せんか、火失なからん條こそ難儀の勤定にて候へ」[二]物のなりととのふこと。物のできあがること。しゅったい。成就。

しゅつらう 出牢【名】しゅつごく(出獄)に同じ。

しゅつらん 出藍【名】『青は藍より出でて藍より青し』を見よ』子弟の、却りて師父よりも上達すること。『出藍の譽(ホマレ)』參照。

しゅつり 出離【名】[一][佛]厭ふべき迷界を脫離すること。平家「出離の道さまざまなりとは申せども」[二][天]『英 Egress』惑星が太陽面又は木星面を經過する終。出離生死【句】[佛]生死苦痛ある迷界を脫離して、常住安樂の涅槃(ネハン)界に入ること。盛衰記「即ち後佛の

引導に漏るべくば、現在未來の一切衆生出離生死の期を失ふべし」

しゅつるゐ 出類【名】同類よりぬきんでたること。出群。

しゅつれふ 出獵【名】狩獵に出づること。

しゅつれん 出輦【名】天皇の御他出。いでまし。行幸。

しゅつろ 出路【名】出づる路。でみち。

しゅつろ 出廬【名】『孔明が、玄德のために草廬を出でて仕へし故事』隱遁の生活より出でて、社會の事業に從ふこと。

しゅつ-ゐん 出韻【名】(文)漢詩にて、韻を押すべき句に、韻を踏まぬこと。ふみおとし。しゅっく(出句)參照。

しゅつ-でい 朱泥【名】支那に產する赤褐色の陶器。水差・急須などに多し。

しゅてう 朱鳥【名】持統天皇の御代の年號(紀元一三四六年—一三六一年)。

しゅてう-おん 手調音【名】[音]『英 key-note』音階の第一音。音階の名は、この音の音名を取りて呼ぶ。例へば、主調音ハなる時はハ調音階、トなる時はト調音階と稱する類。きいのおと。主和絃。基音。基調音。

しゅてき 酒敵【名】酒を飲む時の相手。

しゅでし 衆弟子【名】[佛]世間衆多の人を、皆佛の弟子なりとしての語。

しゅでつ 鑄鐵【名】[鑛]せんてつ(銑鐵)に同じ。

しゅでん 主典【名】[一]さくわん(主典)に同じ。[二]官國幣社に於ける神職の一。定員各社に二人。判任官待遇にして、地方長官より命ぜられ、禰宜(ネギ)の下に位して、祭儀及び庶務に從事す。「肆。

しゅてん 酒店【名】さかや。さかみせ。酒

しゅてん 朱點【名】赤き色の點。

しゅてん 主點【名】おもなる箇所。

しゅでん 主殿【名】[一]表向の座敷。しんでん。おもてごてん。正殿。[二]大禮の時、點火をなす役。

しゅでん-りょ 主殿署【名】春宮(トウグウ)坊に屬し、首(カミ)・令史(サクワン)・殿掃部(トリモ)使部・直丁(ヤヅカヒ)・駈使丁等の職員ありて、東宮の汴

湯・燈燭・洒掃・鋪設等の事を掌りし役所。

しゅてんだい 主典代【名】『朝廷の主典と區別するために、代の字を附したるもの』院廳の主典(サクワン)。

しゅてんどうじ 酒呑童子・酒顛童子・酒天童子【名】■昔丹波國大江山に棲めりといふ鬼神。時時都に出でて、美女を掠め、財寶を奪ひ、淫酒に耽りしを、頼光勅命を受けて、保昌・四天王等と共に退治したりと傳ふ。■おほえやま(大江山)(三)の古稱。

しゅてんどうじまくらことば 酒呑童子枕言葉【名】淨瑠璃の一。酒呑童子の傳説を基として脚色せるもの。近松門左衛門の作。

しゅでんれう 主殿寮【名】■とのもづかさ(主殿寮)に同じ。■宮内省の一寮。頭(カミ)・主事・皇宮警視長・皇宮警視・皇宮警部の職員ありて、宮殿及び廳舎の警察を掌る。

しゅと 酒徒【名】酒を飲む仲間。

しゅと 首途【名】かどで。たびだち。

しゅと 衆徒【名】〔佛〕中古以後、諸大寺の僧の學侶以外に、武技を講習し、雜役、驅使その他の非精神的方面に從事せしもの。すと。僧兵。『太平記』「さては衆徒の心も變じぬるにやと、叡慮を惱まされける所に」

しゅど 手弩【名】石弓の小なるもの。三代實録「手弩一百具」

しゅど 朱土【名】日本繪具の一。黄土を焙熱して作りたる暗赤色のもの。板狀なると塊狀なるとあり。乳鉢にて磨り、膠を加へて用ふ。

しゅとう 種痘【名】天然痘豫防のために、痘苗(ビョウ)を人體に接種して、その病症に對する免疫性を得しむること。第十八世紀の終に英人ジェンナア(E. Jenner)の創めしものなれども、支那印度にては、不完全ながら古くよりこの法行はれきといふ。うゑぼうさう。牛痘。

しゅとう 殊鬪【名】殊死して鬪ふこと。必死のたたかひ。「こと。

しゅどう 主動【名】主になりて行動すること。

しゅどう 朱銅【名】銅器の表面に現れたる色の名。朱色の斑點あるもの。古銅器には自然に現るるものなれども、近世は人工を以て傳色す。

じゅとう 樹頭【名】木の上。木の枝の上。

じゅとう 受筒【名】水を高處に貯ふる設備。配水池を設くるに適したる高地なき場合に使用するもので、鋼製の竪立せる圓筒中に水を充し、これより配水す。

じゅどう 受動【名】■他の動作を受くること。■〔語〕じょどう(所動)に同じ。(役動(エキドウ)に對して)

じゅどう 豎童【名】召使の少年。

しゅとうい 種痘醫【名】種痘をなす醫師。

しゅとうきょく 種痘局【名】明治四年種痘館を廢して、東校の中に設けたる、種痘醫の免許狀、並びに痘苗の分與等の事を扱ひし所。同七年廢せらる。

しゅとうくわん 種痘館【名】安政五年伊藤玄朴・大槻俊齋等、江戸に開業せる諸藩の西洋醫數名が幕府に請ひて、內神田に設けし醫學校。明治四年廢せらる。

しゅとうけいくわしょう 種痘經過證【名】醫師がその診療したる種痘患者の全治せる時、その經過を記して、交付する證書。「ある人。

しゅどうしゃ 主動者【名】主動の地位にある人。

じゅどうしゃ 受動者【名】受動の位地に施したる者に對し、これを檢診したる醫師の交付する證書。

しゅとうしょう 種痘證【名】定期種痘を受け、檢診を經たるものに、市町村長の交付する證書。

しゅとうずみしょう 種痘濟證【名】種痘

じゅどうせいげんどう 受動性幻動【名】〔哲〕『英Passive hallucination of motion』他に動かされざるに、動かさるるが如く感ずる幻覺。

しゅとうていき 種痘定期【名】種痘を行ふにつきて定めたる期間。出生より翌年六月に至る間を第一期とし、爾へ年十歳を第二期とす。第一期に不善感なる時は翌年六月に至る間、第二期にて不善感ならざる時は翌年十二月に至る間に更にこれを行はしむ。定期前二箇年以內に善感したるものは、第二期の種痘と見做す。

じゅとうぼさつ 儒童菩薩【名】■〔佛〕釋迦、昔、菩薩にて燃燈佛を供養せし時の名。■『辨正論に「大乃、本庶寐大士、仲尼、卽儒童菩薩、先遊二茲土一權行漸化、懿二斉五濁一宣二布五常一」とあり』佛家より孔子を指していふ語。

しゅとく 修得【名】〔佛〕修行・功により得たること。(生得・報得に對して)

しゅとく 取得【名】うること。取ること。その所有とすること。

しゅとく 主德【名】〔哲〕『英Virtue』『他の德の依屬する主要なる德。元德。

しゅどく 酒毒【名】酒の毒。

じゅとく 樹德【名】恩德を施すこと。

しゅとくじかう 取得時效【名】〔法〕『英Acquisitive prescription』時效の一。ある期間、他人の物を占有したるによりて、自然に權利取得の效果を生ずるもの。(消滅時效に對して)

しゅとくち 取得地【名】■取得したる土地。■或物或は權利を取得せる土地。

じゅとくは 壽德派【名】木村壽德を祖とする、射術の一派。

しゅなう 主腦【名】主要なるもの。主眼。

しゅなう 酒囊【名】次條を見よ。

酒囊飯袋【句】『荊湖近事に「馬氏寄僧、詩院王子僕從煊赫、文武之道未二嘗留一意、時謂二之酒囊飯袋一」とあるに本づく』多く酒を飲み、飯を食ふのみにて、何の能もなき人を罵りていふ語。

しゅなふ 收納【名】うなふ(收納)に同じ。

じゅなふ 受納【名】受けをさむること。受けとること。

しゅにく 朱肉【名】朱色の印肉。(黑肉に對して)

しゅにく 酒肉【名】酒と肉と。さけさかな。「な。

しゅにくぐわつ 修二月【名】〔佛〕しゅにぐわつ(修二月會)の略。

しゅにぐわつほふ 修二月法【名】〔佛〕次條に同じ。

しゅにぐわつゑ 修二月會【名】〔佛〕奈良東大寺の二月堂にて、每年二月の一日より十四日までの間、本尊觀世音の尊前にて修する法會。天竺の法、建卯の月を歲首とし、支那唐代の二月に當るにより、天竺の年始を祝する意にて行ふ。卽ち修正會(シャウシヤウヱ)の類。僧實忠はじめてこれを行へり。修二月法。修二會。

しゅにふ 輸入【名】ゆにふ(輸入)を見よ。

しゅにふかう 輸入港【名】ゆにふかう(輸入港)を見よ。

しゅにふしゃう 輸入商【名】ゆにふしゃう(輸入商)を見よ。

しゅにふぜい 輸入稅【名】ゆにふぜい(輸入稅)を見よ。「品」を見よ。

しゅにふひん 輸入品【名】ゆにふひん(輸入品)

しゅにふぼうえき 輸入貿易【名】ゆにふぼうえき(輸入貿易)を見よ。

しゅにん 主任【名】主として、その事を擔任すること、又その人。

じゅにん 受任【名】■任務を受くること。■〔法〕委任契約により、委任せられたる事務を處理する義務を負ふこと。

しゅにんくわん 主任官【名】主として、その任にあたる官吏。主任官吏。「同じ。

しゅにんくわんり 主任官吏【名】前條に

しゅにんしゃ 主任者【名】主として、その任に當るもの。

じゅにんしゃ 受任者【名】〔法〕委任契約により、委任事務を處理する義務を負ふ者。(委任者に對して)

しゅにんだいじん 主任大臣【名】主として、その任務を掌る大臣。

じゅにんゆう 授乳【名】母親が、その生兒に乳を飲ましむること。

しゅにゑ 修二會【名】〔佛〕しゅにぐわつゑ(修二月會)の略。

しゅぬり 朱塗【名】■朱色に塗ること、又その物。■朱漆にて塗ること、又その物。

じゅねつめん 受熱面【名】『英Heating surface』汽鑵に於て、燃料の燃燒によりて發する熱を直接に受けて、これを水に傳ふる表面。傳熱面。

しゅーのう 主能【名】おもなる能力。

じゅのお(英Juno)【名】羅馬神話中の主たる女神。ジュピタアと配して、天を司る。

しゅーば 種馬【名】繁殖用に供する牡馬(ウマ)。たねうま。

しゅーば 手馬【名】〔兵〕騎兵の徒歩戰闘をなすために下馬したる鞍馬。若干の乘馬者に保持せしめ、所要に應じて、行動又は停止せしむ。

しゅはい 酒杯【名】さかづき(盃)に同じ。

しゅはい 酒肆【名】しゅき(酒旗)に同じ。

しゅはい 手背【名】手のうら。手の甲。

しゅはい 趨拜【名】すうはい(趨拜)を見よ。

しゅばいくせいじょ 種馬育成所【名】馬政局に屬し、種馬牧場にて生れたる幼駒を育成する所。成長後、種馬となすべきものは、種馬牧場又は種馬所に送る。現今、陸中國巖手郡滝澤村に設く。

しゅばいしん 朱買臣【名】〔人〕支那漢代の吳人。字は翁子。家貧にして、薪を賣りて自ら給し、行く行く書を誦す。妻恥ぢて去る。後、會稽の大守となるに及び、故郷を過ぎしに、前妻の夫と共に途に迎ふるを見、伴ひて扶持せしが、前妻愧ぢて縊死せり。のち武帝の意に合はずして、元鼎元年自殺す。

しゅはう 主砲【名】一隻の軍艦に裝置せる火砲中にありて、最大威力を有する大口徑なるもの。口徑八吋より十吋・十二吋・十四吋・十五吋・十六吋等に及ぶ。

しゅはう 殊邦【名】ことなる國。外國。

しゅはう 酒房・酒坊【名】さかや。酒肆。

しゅばう 守防【名】ばうしゅ(防守)に同じ。

しゅばーしょ 種馬所【名】馬政局に屬し、馬匹改良の目的にて、民間の需要に應じて配合せしむべき種馬を繫ぎ置く所。現時、嚴手・熊本・宮城・秋田・福島・宮崎・島根・愛知・石川・長野・鹿兒島・青森・栃木・高知の十四縣と北海道とに一箇所づつ設置せらる。

じゅばつ 受罰【名】罰を受くること。

じゅばつしゃ 受罰者【名】罰を受けたる者。

しゅはふ 手法【名】『英Treatment又Manner又Technic』〔美〕藝術品製作上の表現の技巧。技巧。

しゅーはふ 主法【名】〔法〕■じっしつほふ(實質法)に同じ。(從法に對して)■皇漢醫が、その病症に對して用ふる主治藥。

しゅばーぼくぢやう 種馬牧場【名】馬政局に屬し、種馬を管理・飼養する牧場。青森縣に二箇所、北海道に二箇所設けらる。

しゅはん 酒飯【名】酒と飯と。酒食(シュ)。

しゅはん 酒伴【名】酒を飲む仲間。

しゅはん 手板【名】しゃく(笏)に同じ。

しゅはん 首班【名】一番の上席。首席。

しゅはん 主犯【名】〔法〕せいはん(正犯)に同じ。

じゅばん 襦袢【名】肌につけて著る短き衣。あかとり。はだぎ。

しゅひ 手臂【名】手とひぢと。

しゅひ 種肥【名】作物の下種の際に、種子と併せて播く肥料。肌肥。

しゅひ 種皮【名】〔植〕種子の外部にありて、その實體たる種穀を包む皮膜。內種子・外種子の別あり。各その條を見よ。

しゅび 麈尾【名】『麈は大なる鹿の義、群鹿のこれに臨ふより、聽衆を指導する意を含めたるもの』麈の尾毛に柄を著けたる物。ほっす。

しゅび 守備【名】城又は陣地を守り、敵を拒ぐ準備をなすこと。

しゅび 須眉・鬚眉【名】ひげとまゆげと。

しゅび 首尾【名】■首(シ)と尾と。頭尾。■はじめをはり。終始。■(文)文章の始と終と、相應じてあること。■事のなりゆき。都合。■事を都合よくまとむること。成立せしむること。■男女の都合よく密會すること。諸國物語「心のたけをくどいて、首尾させて上げませう」太功記「ことに、今宵は、君のとのゐ、又の首尾をと振切るを」

しゅび 首尾相衝(モ)る【句】『晉書の溫恭傳に「嶋重輿二倪書一曰、僕與二仁公一、當レ如二常山之蛇、首尾相衝一」とあるに本づく』次條に同じ。(諺語)

しゅび 首尾俱に救ふ【句】『戰國策に「有レ蛇三於此一、擊二其尾一、其首救、擊二其首一其尾救、擊二其中身一、首尾俱救」とあるに本づく』同盟の國國が、長蛇の形をなして、互に救ふ。「常山の蛇勢」參照。(諺語)

じゅーひ 樹皮【名】きのかは。

じゅーひ 壽碑【名】生前に建つる碑。

しゅーびき 朱引【名】■朱色の線を引くこと。■『江戸時代、江戸の地圖に、府內・府外の境界を作るために、朱線を引きしによりていふ』府內と府外との區域の別。■(文)俳諧にて、支那の固有名詞を相對せしむること。東坡と山谷と、雲谷と龍門とを對せしむる類。

しゅびきうち 朱引內【名】『前條■を見よ』江戸の府內。

しゅびきそと 朱引外【名】『しゅびき(朱引)■を見よ』江戸の府外。

じゅぴたあ(英Jupiter)【名】羅馬諸神の主宰者。オリンプス山に位を占め、宇宙の森羅萬象を心のままに支配す。希臘にてはゼウスと稱す。ゆぴてる。

しゅびーたい 守備隊【名】守護のためにおく軍隊。

しゅーひつ 手筆【名】じひつ(自筆)に同じ。

しゅーひつ 主筆【名】新聞社又は雜誌社等にて、記者中の主位にありて、社說その他主要なる記事・論說を擔當するもの。

しゅーひつ 執筆【名】しっぴつ(執筆)■に同じ。太平記「執筆十二人、夜晝三日間、筆をも置かず注せり」

しゅび-のまつ 首尾松【名】東京淺草區藏前(クラマヘ)片町の、大川に面せる所にありし松。昔、吉原がよひの嬉客の、柳橋より猪牙(チヨキ)に乘り、この松を左に、松浦家の鄙內なる稚の大木を右に見て、大川を溯り、山谷(サン)に著岸せしより、その夜の首尾よからんことを思ひて呼びなしし名稱なりといふ。俗出淺草名所「うれしの森や花川戸(ハナカハド)、庵崎(イホマヘ)、戀し墨田川、二つ並べし枕橋、その首尾の松、待乳山(マツチ)」

しゅびーへい 守備兵【名】守備隊に屬する兵士。

しゅーひん 主賓【名】■主人と賓客と。主客。■來客中の主なる人。上客。

しゅーびん 溲瓶【名】『漢字の唐音』寢所の附近に置きて、小便の用に供する陶製の器。おまる。しびん。

しゅーびん 鬚鬢【名】ひげとびんづら。

しゅびん 守敏【名】〔人〕眞言宗の高僧。勤操等に師事して、顯密二教を修め、當時空海と名を等しくす。弘仁天皇、東西の鴻臚館を東寺・西寺となし、東寺を空海に、西寺を守敏に賜ふ。禁中に出入して、屢眞言の修法をなせり。

じゅーひん 需品【名】需要の物品。「庫。

じゅひんこ 需品庫【名】需品を入れ置く

しゅびんづか 守敏塚【名】僧守敏の塚。西寺(シヤ)の舊址に在り。太平記「御影供(イエ)や人の問寄る守敏家」

じゅーひやう 衆病【名】〔佛〕しゅびやう(衆病)に同じ。

じゅひやう 樹氷【名】『英Silver thaw』氷點以下に冷却せし雲霧の、樹枝その他の地物に凝結し、水晶にて包みたるが如く見ゆるもの。その氷層不透明にして粗面なるを、凝霜と異なりとす。北越地方にては、木花(キバナ)といふ。

しゅーふ 主婦【名】■主人の妻。■その家の女主人。

しゅーふ 主父【名】『史記の蘇秦傳に「欲レ勿レ言乎、則恐二其殺一主父一也」とあり』その家の主人。(主母に對して)

しゅーふ 首府【名】獨立せる國家の政治の中心地。その國の中央政府の所在の都會。

しゅーぶ 主部【名】■主要なる部分。(支部に對して)■〔語〕『英Logical subject』文章中の主語と、これに屬する修飾語との總稱。(說明部に對して)

しゅーぶ 首部【名】はじめの部分。頭部。

しゅーぶ 守部【名】宮內省諸陵寮に屬し、守長の指揮に從ひて、諸陵を守りし等外吏。明治十七年設置、同四十一年廢止。「與。

じゅーふ 授付【名】さづけわたすこと。付與。

じゅーふ 受不【名】受くると受けざると。

じゆ-ふ 呪符・咒符【名】まじなひのふだ。

じゆ-ぶ 鷲峯【名】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)に同じ。

じゆ-ぶつ 鷲峯【名】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)に同じ。

しゆ-ふく 修復・修覆【名】つくろひ直すこと。しうふく。

しゆ-ふく 修福【名】福徳を修め行ふこと。

しゆ-ふく 首服【名】㊀首の服飾。㊁けんぶく(元服)㊀に同じ。

じゆ-ふく 壽福【名】ふくじゆ(福壽)に同じ。

じゆ-ふく 儒服【名】儒者の著る衣服、又それを著用すること。

じゆふく-じ 壽福寺【名】相模國鎌倉郡鎌倉龜谷(カマガヤ)にある臨濟宗の寺。關東五山の一。開山は榮西、開基は源實朝。本尊は釋迦文殊普賢。

しゆふく-どき 修復時・修覆時【名】修復すべき時。凡童「稻妻やとなりの藏も修復どき」

しゆぶ-せん 鷲峯山【名】〔地〕山城國相樂(サガラ)・綴喜(ツヅキ)兩郡の境にある山。高さ二一三五尺。頂上に金胎(コンタイ)寺あり。

しゆ-ぶつ 主物【名】〔法〕『英 Chief matter』獨立して、法律行爲の目的となる物。(從物に對して)

じゆ-ぶつ 儒佛【名】儒教と佛教と。

しゆ-ふで 朱筆【名】朱墨に染めて用ふる筆。

しゆ-ふん 朱粉【名】朱の粉末。

しゆ-ぶん 主文【名】㊀一文章中の主要なる部分。㊁〔法〕はんけつしゆぶん(判決主文)の略。

しゆ-ぶん 守文【名】『始祖の君は、武を以て國を興し、繼承の君は、文を以て國を守るよりいふ』祖業を繼承して、國を治め守ること、又その主君。太平記「是則所下以草創雖レ弁二天一、守文不レ越中三載上也」

しゆ-ぶん 衆分【名】㊀紀伊國高野山金剛峯寺にて、僧侶を三階級に分ちたる中の最下級。(阿闍梨・入寺に對して)㊁江戸時代、盲官の四等の階級中の最下位。即ちその上に座頭・勾當・撿挍の三階あり。

じゆ-ふん 受粉【名】〔植〕『英 Pollination』雄蘂の花粉が雌蘂の柱頭に附著すること。

しゆぶん-てん 衆分天【名】〔佛〕さうりてん(忉利天)を見よ。

しゆ-へい 珠柄【名】〔植〕『英 Funiculus 又 Podosperm』胚珠の胎座に著生する所にして、多少柄狀をなす部分。但し、これを缺き、胚珠の直ちに胎座に著くもあり。

しゆ-へい 守兵【名】㊀守護の兵。まもりの兵。㊁海軍にて、僕使又は警戒のために守所に配置する兵。

しゆ-へい 酒餅【名】酒と餅と。

しゆ-へい 酒瓶【名】酒を盛る瓶。

じゆ-へい 戍兵【名】衛戍の兵。

しゆへい-しよ 主兵署【名】昔、春宮(トウグウ)坊に屬し、首(オサ)・令史(サウジ)各一人、使部・直丁(ヤウチ)若干等の職員ありて、東宮の兵器及び儀仗等の事を掌りし役所。大同二年主藏監に合併せしめらる。

しゆ-へう 酒瓢【名】酒を容るる瓢簞。

しゆ-へき 酒癖【名】酒に醉ひて起る癖。さかくせ。酒に醉ひて起る惡しき癖。

しゆ-べつ 種別【名】しなわけ。類別。

じゆ-べつ 受別【名】〔佛〕じゆき(受記)に同じ。

しゆ-ほ 酒脯【名】さけとほしじし。

しゆ-ほ 酒鋪・酒舖【名】さかや。酒肆。

しゆ-ほ 酒保【名】㊀酒屋の傭人。㊁軍隊内にありて、酒・煙草・菓子・日用品などを安價に販ぐ所。賣品はその隊にて自ら調辨し、又は請負人をして調辨せしむ。

しゆ-ぼ 珠母【名】〔動〕あこやがひ(阿古屋貝)に同じ。

しゆ-ぼ 主母【名】『史記の蘇秦傳に「其夫果至、妾使下妾擧レ藥酒一進レ之、妾欲レ言二酒之有レ藥、則恐二其逐一主母一也、欲レ勿レ言乎、則恐二其殺一主父一」とあり』その家の主婦。(主父に對して)

しゆ-ぼ 主簿【名】㊀主要なる帳簿。㊁『簿を主(ツカサ)る義』帳簿を取扱ふ人。㊂支那唐宋時代の官職の一。㊃王朝時代に於ける諸國の目(サクワン)の唐名。㊄明治初年の大學校の職員。文案を勘署し、出づるを撿し、失を稽ふることを掌る判任官。初め大主簿少主簿のみなりしが、のち大少權大權少の四となり、大學と改稱するに及びて、この職名を存せしが、同四年大學廢せらるるに及び、全く廢せらる。

しゆ-ぼ 酒母【名】からぼ(醉母)に同じ。

じゆ-ぼ 壽母【名】『詩經の魯頌閟宮篇に「魯侯燕喜、令妻壽母」とあるに本づく。即ち壽考の母の意』人の母。

じゆ-ぼう 首謀【名】主となりて、事を企つる者。(多く惡事にいふ)

しゆぼう-しや 謀謀者【名】主謀たる人。張本人。發頭人。

しゆぼ-さん 酒母菌【名】〔植〕かうぼきん(酵母菌)に同じ。

しゆ-ぼく 主僕【名】主人と僕と。主從。

じゆ-ぼく 儒墨【名】儒教と墨子の教と。

じゆ-ぼく 入木【名】次條を見よ。

じゆぼく-だう 入木道【名】『支那晉の王羲之は、頗る能書にして、その筆跡ある木版を削りしに、墨痕三寸もしみこみゐたりといふ故事(書斷)に出づ』より出でたる語』㊀しよだう(書道)の異稱。㊁弘法大師の流を汲みたる書道の一派。

しゆぼだい 須菩提(梵 Subhūti)【名】〔人〕『善吉・空生又は善業と譯す』印度の高僧。釋迦十大弟子の一。十六羅漢の一。舍衛(シヱ)の長者たり。天性慈悲に富みて、人と諍はず、出家して常に善業を行へり。すぼだい。

しゆ-ほふ 修法【名】〔佛〕密教にて、國家又は個人のために、災禍を攘ひ、現世・來世の幸福を祈り、又は怨敵を降伏する目的にて、加持・祈禱を行ふこと。大日・不動・聖天(シヤウデン)・藥師・熾盛光(シジヤウクワウ)・鬼子母・觀音等を本尊とし、前に壇を構へ、護摩を焼き、口に眞言を唱へ、手に印を結び、心に佛・菩薩の相を觀じつつ行ふ。ずほふ。御修法(ミシ)。修法の阿闍梨【句】〔佛〕修法を行ふ阿闍梨。

じゆ-ほふ 呪法・咒法【名】〔佛〕呪師が呪文を唱ふる法式。じゆし(呪師)參照。

じゆ-ほふ 受法【名】〔佛〕師の僧より弟子が法を受くること。

じゆほふ-くわんぢやう 受法灌頂【名】〔佛〕天台・眞言兩宗にて、弟子に密法を授くる時に行ふ灌頂。嵯峨「寬忠僧都は、寬平法皇の御孫兵部卿敦固親王の子、法皇入室、石山内供受法灌頂の弟子なり」

しゆほふ-ゐん 修法院【名】しんごんゐん(眞言院)㊀に同じ。

しゆほ-ゐゐん 酒保委員【名】酒保の事務を掌る將校。

しゆ-ま 朱間【名】田畝丈量の時、實測の間數を手帳より野帳に轉載し、縄心にて計算せし間數を、朱書に副記すること。

じゆまう 蛛網【名】蜘蛛のあみ。

じゆまう-らん じゆまう蘭【名】〔植〕いそぎん(絲蘭)㊀に同じ。

しゆまつ 朱抹【名】朱色に文字を抹消すること。

しゆ-み 麈尾【名】しゆび(麈尾)に同じ。

しゆ-み 酒味【名】酒のあぢはひ。

しゆ-み 趣味【名】㊀人の感興を惹起すべきもの。おもしろみ。おもむき。あぢはひ。雅致。風韻。㊁『英 Taste』美を鑑賞する力。㊂ある物に對して、興味を感ずること。「略。

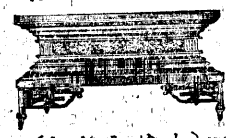
しゆみ 須彌【名】〔佛〕しゆみせん(須彌山)の須彌の髮(タバ)【句】とりがみ(取髮)に同じ。太平記「頸は雞の如くにして、須彌の髮膝を過ぎ」

しゆ-みん 朱明【名】『明の國祖は朱元璋なるより、その姓を冠らせていふ』みん(明)に

同じ。

しゅみ-ざ 須彌座【句】[梵]しゅみだん(須彌壇)に同じ。[仏]ほちまんざ(八幡座)に同じ。

しゅみ-せん 須彌山(梵 Sumeru 蘇迷盧 修迷樓)【名】[仏]『妙高山・妙光山・安明山・善積山・善光山など譯す』一小世界の中心たる山。印度の神話における世界觀を示せるものにて、水を出づること八萬四千由旬、日月これを廻りて出沒し、三界二十八天これに依りて層層相重なり、その周圍には七金山(シチセン)ありて、外方に至るに從ひて、漸次高さを減じ、七金山の一一の間には各大海あり、その外圍に鹹海あり、鹹海の四方に四大洲あり、この全部を繞りて更に鐵圍山あり、これらの全部は金輪(コンリン)の上に位し、金輪の下には水輪・風輪ありて、金輪以上の海水の深さは、須彌山の高さと同じく八萬四千由旬、水輪の深さ三千三十由旬、風輪の深さ六千四十由旬なりといふ。しゅみ。すみせん。すみのやま。そめいろ。[比]「北は黄に、南は青く、東白、西くれないにそめいろの山」といふ歌の如く、みなみ(皆實・南)は青しといふ意』菜と豆腐とを細かに切りて作りたる味噌汁。



(しゅみせん)

しゅみ-だん 須彌壇【名】[佛]『須彌山に象(カタ)れるよりいふ』寺院殿堂内に設けて、佛像を安置するための臺。須彌座。

しゅみ-たれ 【名】しみたれに同じ。

しゅみ-たれる 【動下一自】しみたれる。線縒粟毛「荷物が無い上、そないにしゅみたれたなりをして」

じゅ-みやう 壽命【名】[比]いのち。よはひ。「に同じ。[比]物の損傷せずに保つ時間。壽命の藥【句】じゅみやうぐすり(壽命藥)

じゅみやう-あめ 壽命飴【名】ちとせあめ(千歲飴)に同じ。

じゅみやう-いも 壽命芋【名】〔植〕じゃがいも(馬鈴薯)に同じ。

じゅみやう-がみ 壽命神【名】人の壽命を保護するといふ神。

じゅみやう-きやう 壽命經【名】〔書〕密敎の經典。詳しくは「一切如來金剛壽命陀羅尼經」といふ。支那唐の金剛智の譯。一卷。藥王・大般若・觀音經・藥師經・壽命經などの御讀經、おのおの不斷に始めさせ給ふ」

じゅみやう-ぐすり 壽命藥【名】よはひの藥。長命のくすり。浮世親仁形氣「世に閑にするほど、壽命藥は無し」

じゅみやう-たう 壽命糖【名】ちとせあめ(千歲飴)に同じ。

じゅ-む 主務【名】專ら掌る業務。

じゅむ-くわん 主務官【名】その事務を主管する官。

じゅむ-くわんしよ 主務官署【名】その事務を主管する官署。

じゅむ-くわんちやう 主務官廳【名】その事務を主宰する官廳。例へば敎育に關する主務官廳は文部省なる類。

じゅむ-しやう 主務省【名】主務大臣がその事務を取扱ふ所。

じゅむしゅ 占守【名】〔地〕[比]しゅむしゅたう(占守島)を見よ。[比]千島國九郡の一。千島の最北なる牟知(ムチ)・知林古丹(チリンコタン)・捨子古丹(シャシコタン)・越軽磨(エカルマ)・加亞連古丹(カアレンコタン)・温禰古丹(オンネコタン)・波羅茂知(ハラモシリ)・阿頼度(アライト)・占守の諸島より成る。根室支廳の管轄。

しゅむ-しゅ-かいけふ 占守海峽【名】〔地〕『峽の音、正しくはかふ』次條を見よ。

しゅむしゅ-たう 占守島【名】〔地〕千島群島の一。千島國占守郡に屬す。我が國の最東北端を占め、長さ七里半・幅五里。占守海峽を隔てて、露領カムチャツカと對す。占守海峽は一にクリル海峽ともいふ。

しゅむだいじん 主務大臣【名】その權限・職務の專屬する大臣。

しゅん 春【名】はる(春)に同じ。春・夏(ナツ)・秋(アキ)・冬(フユ)【句】春と夏と秋と冬と。四時。四季。

しゅん 皴【名】〔美〕文人畫にて、山を形成する岩の紋理。その形により、斧劈・荷葉・披麻等十餘種の名稱あり。

しゅん 旬【名】[比]古の禁中の公事の一。もと毎月朔、後には四月と十月との朔日にのみ行はれしもの。四月のを孟夏の旬といひ、十月のを孟冬の旬といひ、併せて二孟の旬といふ。その時、庭立の奏と稱し、監物(ケンモツ)の御鎰(ギヨ)奏、史の官奏、六府の番奏等の諸奏事あり。勸盃・賜祿並びに歌舞の儀あり。諒闇・御忌日等には行はれず。日蝕に際すれば、翌日に延引し、天皇出御ある時は、王卿以下南殿の兀子(ゴシ)に著き、出御なき時には、宜陽殿の平座(ヘイザ)に著きて行はれ、孟夏の旬には、扇を群臣に拜賜せられ、孟冬の旬には、氷魚(ヒヲ)を賜へり。なほ恒例の旬以外、卽位の後政事を聞しめし始むるを、萬機の旬といひ、十一月十一日冬至にあたる時の旬を、朔旦の旬といひ、內裏新築の後、始めてその披露を南殿にて行はるるを、新所の旬といへり。旬儀。旬政。[比]魚野菜などのよく熟して、味のよき季節。

旬の鞠(マリ)【句】鎌倉時代に、每月上・中・下三旬に一回づつ、公家(クゲ)・武家などの蹴鞠に堪能なる者を選びて、その事を演ぜしこと。

じゅんのおまりぶぎやう(旬御鞠奉行)參照。

しゅん 舜【名】〔人〕五帝の一。顓頊(センギヨク)七世の孫。堯に繼ぎて卽位し、天下を治む。その先、虞(グ)卽ち今の山西省蒲州府に國せしより、國號を虞と稱す。在位三十九年、位を禹に讓りて歿す。[諺]舜爲驕を學ぶは驕の たぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり」

舜も人なり、我れも人なり【句】『孟子の離婁下篇に見ゆ』舜も我れも同じく人類なれば、志を高尚にして奮勵せば、舜のごとき聖人の地位に至ることも難きにあらず。〔諺語〕

じゅん 閏【名】[比]うるふ(閏)に同じ。[比]じゅん(閏位)に同じ。

じゅん 準【名】四器の一。みづもりをなす。

じゅん 醇【名】[比]酒のまじりけなくして味の濃きこと、又その酒。醇酒。[比]じゅん(純)[比]に同じ。

じゅん 純【名】[比]他の物の少しもまじらぬこと。純粹。[比]もつぱらなること。純一。[比]完備せること。よきこと。[四]自然のままにて、つくりかざらぬこと。

じゅん 旬【名】一箇月を十日づつに三分して、上旬・中旬・下旬といふ。十日間。旬日。

旬の雨【句】十日目に一日降る雨。

旬の試(ココロミ)【句】王朝時代に、大學・國學にて、十日ごとに學生に對して行ひし試業・帖試。

じゅん 殉【名】じゅんずること。殉死をなす。

じゅん 順【名】[比]正道にしたがふこと。(逆に對して)[比]順序。次第。順番。[三]順序を違へぬこと。[四]したがふこと。おとなしきこと。しとやかなること。[五]『英 Favourable』じゅんがはせ(順風參)を見よ。

順に守る【句】「逆に取つて順に守る」と見よ。

順の峰入【句】おほみねいり(大峰入)を見よ。

順の舞【句】舞を順次に舞ふこと。

順の輪【句】太平樂の舞にて、急の段を奏する時、劍を拔きて、右に旋(メグ)ること。(逆の輪に對して)

じゅん 準・准【接頭】他の語に上に付して、なぞらふる意に用ふ。「準强盜」「准士官」

じゅん 巡【助數】一めぐりの意をあらはす語。

じゅん 旬【助數】[比]『書經の堯典に「朞年三百有六旬有六日」とあり』十日間づつを一期として、日數を示す語。[三]十年間づつを一期として、年齡を示す語。[四]じゅんじん(由旬)の略。

しゅん-あい 春靄【名】はるがすみ。

しゅん-あう 春鶯【名】春季の鶯。

しゅんあうてん 春鶯囀【名】〔音〕雅樂の一。壹越(イツ)調の唐樂。唐の太宗の作といふ。六人立又は四人立にて舞ひ、答舞には新鳥蘇又は古鳥蘇の曲を用ふ。一名、天長寶壽春鶯囀・天壽樂・長壽樂。

じゅんあん 順安【名】〔地〕朝鮮平安南道の都會。平壤の北約七里。京義鐵道の一驛。

しゅん-い 俊異・儁異・俊異【名】すぐれたること、又すぐれたる人物。

しゅん-い 春衣【名】春著る衣服。はるぎ。

じゅん-い 鶉衣【名】うづらごろも(鶉衣)に同じ。

じゅんい 春意【名】春さきののどかなる感じ。春心。自然皆春意あり【句】『程明道の語。近思錄に出づ』我が心靜かなる時は、天地間の萬物おのづから春意あるがごとくに感ず。〔諺語〕「由。」

じゅんい 準依【名】したがひよること。準依。

じゅんいう 準由【名】したがひよること。

しゅんいう 春遊【名】春、郊外などに行き遊ぶこと。「と。」

じゅんいう 巡遊【名】〔めぐりあそぶこと。

じゅんいう 淳祐【名】〔人〕眞言宗の學僧。菅原淳茂の子。道眞の孫。般若寺の觀賢を師とし、近江國石山寺に住み、專ら著述と密觀とを事とす。元暦七年寂す。年六十四。

じゅんいく 馴育【名】ならしそだつること。

じゅんいち 純一【名】〔佛〕じゅんいつ（純一）に同じ。

じゅんいちゐ 准一位【名】さんいちゐ（散一位）に同じ。

しゅんいつ 俊逸【名】すぐれてするどきこと、又その人。

しゅんいつ 駿逸【名】馬の足の極めて早きこと、又その馬。駿足。

じゅんいつ 純一【名】■まじりなきこと。きっすぐ。純粹。■うはべを繕ふ心なきこと。

しゅんいん 春蚓【名】■春になりて、地上に這出づる蚯蚓（ミミズ）。■字體のつたなき形容。

春蚓・秋蛇（ダ）【句】『晉書の王羲之傳に「子雲近世摠二名江表一、然僅得レ成レ名、無二丈人之氣一、行行如レ縈二春蚓一、字字若レ縮二秋蛇一」とあるに本づく』字態の細くして、骨力なきに譬へていふ語。蚯蚓（ミミズ）ののたくったやう。「め。」

しゅんう 春雨【名】はるのあめ。はるさめ。

しゅんう 峻宇【名】軒高き家。高屋。

じゅんう 淳于意【名】〔人〕支那前漢の名醫。齊の太倉長たりしを以て、太倉公、又倉公といふ。臨菑の人。扁鵲と併稱せらる。

じゅんう-こん 淳于髡【名】〔人〕支那戰國時代の辯者。齊の人。博聞强記にして、親相を導くす。梁の惠王卿相の位を以て遇せんとせしも謝して去り、仕へずして終る。

じゅんう-せう 春雨抄【名】〔書〕和歌・連歌等の詞を、いろはわけにして、その義を註釋せるもの。十卷。鰲（キョ）重常の著。

しゅんう-うん 春雲【名】■春の雲。■ちや（茶）の異稱。

しゅんえい 春榮【名】諸曲の一。增尾春榮丸といふ少年の、敵に囚はれて、高橋權頭（カミ）といふ者に預けられゐたりしを、兄の種直尋ね來りて、弟の身代りに殺されんとし、春榮は、兄たる事を隱さんとすれど、事つひに破れ、兄弟ともに首座に直りし處に、早打來りて、赦免せられ、春榮は、めでたく高橋の養子となることを作れるもの。

じゅんえい 爲永【名】『爲は肥肉の義』言論の甘美にして、深長なること。

しゅんえい 俊英【名】すぐれたる人。英俊。賢才。

じゅんえい 準穎【名】王朝時代に、物の價を、穎稻に準じて、換算したること。

じゅんえき 純益【名】總收入の中、諸費用を除きたる餘。純粹の利益。まるまうけ。純收益。純利。

じゅんえき 潤益【名】『隋書の經籍志に「毛詩序、子夏所レ創、毛公及衞敬仲、又加二潤益一」とあり』潤色し、增益すること。

じゅんえつ 巡閱【名】巡廻して檢閱すること。みまはり。

しゅんえふ-しふ 春葉集【名】〔書〕荷田（カ）春滿（マロ）の家集。二卷。

じゅんえん 旬宴【名】旬政の日、群臣に賜ふ酒宴。本朝世紀に有二旬宴事一」

じゅんえん 順延【名】期日を順にくりのばすこと。「雨天順延」

じゅんえん 順緣【名】〔佛〕■情に順ひて、佛緣を結ぶこと。積極的に佛緣を結ぶこと。（逆緣に對して）■老いたる者より順次に死すること。

じゅんおう 順應【名】『應は、順の字の韻に引かれて、ノウと發音す』■遘遇に順ひて、これに適應すること。■〔哲〕おうくわ（應化）〔二〕に同じ。

じゅんおくり 順送【名】順に次へ次へと送り遣ること。

じゅんおん 準蔭【名】蔭位に准ずること。太平記、四月には、五日は…、同日準蔭の位記七日は擬階の奏なり」

しゅんか 春夏【名】春と夏と。

しゅんか 春霞【名】春のかすみ。

しゅんかい 峻改【名】かいしゅん（改悛）に同じ。

しゅんがい 俊乂【名】『俊も乂も賢才の義』すぐれたる人。俊英。賢才。

じゅんかいそん 準海損【名】〔法〕じゅんようどうかいそん（準共同海損）に同じ。

しゅんかう 春郊【名】春の郊野。はるの。

しゅんかう 春江【名】春の川又は湖。

しゅんがう 俊豪【名】器量の人にすぐれたること、又その人。俊傑。「じ。」

じゅんかう 純孝【名】しかう（至孝）に同じ。

じゅんかう 循行【名】徧くめぐること。

じゅんかう 巡航【名】一定の航路を一巡すること。

じゅんかう 順行【名】■順序を逐ひてめぐり行くこと。■〔天〕『英Direct motion』地球の軌道の北方無限の距離より視て、時針と反對の方向に廻る運動。すべての惑星、天王・海王兩星以外の惑星に屬する衞星、ハリイ彗星以外の週期彗星は、皆この運動をなす。（逆行に對して）■〔天〕『英Direct Motion』天球に於ける、黃經の增加する視運動。惑星及び彗星は、時に順行をなし、時に逆行をなす。（逆行に對して）

じゅんかう 順孝【名】『禮記に「崇二祀宗廟一、祉稷一、則子孫順孝」とあり。じゅんそん（順孫）參照』孫のよく祖父に事ふること、子のよく親に事ふること。

じゅんかう 遵行【名】■したがひ行ふこと。守り行ふこと。■幕三代實錄、奉レ勅依レ請者、事施二國、遵行有レ便」■じゅんかうじやう（遵行狀）の略。

じゅんかう 巡行【名】〈めぐり歩くこと。

じゅんかう 巡幸【名】天皇の御巡行。

じゅんかう 順講【名】■りんかう（輪講）に同じ。■一中節のおさらひ。

じゅんかう 準行【名】或物事を標準として行ふこと。準據すること。なぞらへ行ふ。

じゅんかう-いちやう 巡行開帳【名】諸所を巡行して、開帳すること。

じゅんがうかん 準强姦【名】〔法〕婦人の心神喪失もしくは抗拒不能に乘じ、又は精神を喪失せしめ、或は抗拒不能ならしめて姦淫すること。强姦に準じて處罰せらる。

じゅんかう-じやう 遵行狀【名】鎌倉・室町兩幕府時代に、諸國守護より代官に下したる命令文書。遵行。

じゅんがうたう 準强盜【名】〔法〕竊取したる財物の返還を拒み、又は逮捕を免れ、或は藥酒等を用ひて、人を昏迷せしめて、財物を盜むこと。强盜の罪を以て處罰せらる。

じゅんがき 順書【名】一座の俳優の名簿。地位の順によりて認めたるもの。

じゅんがく 峻嶽・峻岳【名】けはしき山。峻山。

しゅんかくし 春閣寺【名】さうんじ（早雲寺）の舊稱。

じゅんがはせ 順爲替【名】〔商〕『英Favourable exchange』或國にて、他の一國よりの爲替手形の供給、需要に超過し（その國との取引關係において負債額多き結果）たるため、爲替相場が手形の額面以下に下落せる場合における爲替。順適。

じゅんがふ 準合【名】江戸時代に、飛地又は新田などの歩刈を、本田の歩刈合毛の割合に準じ、又は數村入込みたる田を、或一村にて坪刈しその合毛を以て、餘の村にも準ずること。

じゅんがふ 順合【名】〔天〕『英Superior Conjunction』合の一種。天體が、軌道を運行し、地球と太陽とを結ぶ直線上に來りて、太陽がその天體と地球との間にある場合を、その天體につきて呼ぶ稱。從って、この場合、地球とその天體との兩動徑のなす角度は百八十度なり。上合。外合。（退合に對

して）

しゅん-かん 瞬間【名】またたくひま。極めて僅少の間。瞬息の間。瞬時。瞬頃。瞬刻。

しゅんかん 筍干筍干【名】料理の一種。筍などをよく煮て、種種に切り、小鳥・鮑・蒲鉾などを入れ、たまり・だしにて煮たるもの。

しゅん-かん 春寒【名】春のさむさ。

しゅん-き 春季【名】■『班固の文に「三春之季、孟夏之終」とあり』春のすゑ。■春の季節。はるさき。春期。

しゅんき 春記【名】〔書〕小野宮春宮權大夫資房の記錄。丹鶴叢書本・舊和學講談所本の異本ありて、卷數も一定せず。一名、資房卿記・野房記。

しゅん-き 春機【名】男女間の情慾。いろけ。

しゅん-き 春期【名】春の時期。春時。

しゅん-き 春氣【名】春の氣。はるげしき。

しゅん-き 俊器【名】すぐれたる器量。

しゅん-ぎ 旬儀【名】しゅん(旬)に同じ。

じゅん-き 準規【名】準據すべき規則。

じゅん-き 順氣【名】■順正なる氣候、又は氣象。■氣分を順調にすること。

じゅん-ぎ 順義【名】道義に順ふこと。訓廵八島「殊に順義と申し、姉を申し入れて給はれ」

じゅん-ぎ 巡儀【名】じゅんばん(順番)に同じ。東鑑「次第可レ爲二巡儀一之由被二仰出一」

じゅん-ぎ 準擬【名】なぞらふること。

しゅん-ぎう 駿牛【名】すぐれたる牛。

じゅん-きかん 準軌間【名】〈うじゅんきかん(標準軌間)に同じ。

しゅんぎく 春菊・茼蒿【名】菊科に屬する一年生又は二年生の草。原産地は歐羅巴地中海の沿岸。葉形も、香氣も、しろよもぎに似て、初夏、葉の間に莖を生じ、黃色にして、大きさ約一寸の頭狀花を開く。又、舌狀花の本は黃に、末白く、管狀花は黃なるもの本白く、先端帶紫色なるもあり。若き莖と葉とは、生食または浸物として食ふ。しんぎく。きくさい。かうらいぎく。

しゅんきくわれいさい 春季皇靈祭【名】くわれいさい(皇靈祭)を見よ。

しゅんきしんでんさい 春季神殿祭【名】しんでんさい(神殿祭)を見よ。

しゅんきにんわうゑ 春季仁王會【名】毎年二月に行はれし仁王會。

しゅんきはつごろ-き 春機發動期【名】情慾の念の發動する時期。色氣のつきはじむる時。人種・氣候・社會的地位等によりて多少の相違あれども、一般に、男子は十四歳乃至十六歳、女子は十三歳乃至十五歳。

じゅん-きふ 巡給【名】王朝時代に、各親王に順番に給ひし年給。その順序は、年齢に依れりとも、當代の親王・先皇の親王等の差別に依れりともいひて、明かならず。

じゅん-きん 純金【名】純粹の黃金。きんく。

じゅん-ぎん 純銀【名】純粹の銀。ぎんむく。

じゅん-きんおさん 準禁治産【名】〔法〕心神耗弱者・聾者・唖者・盲者・浪費者は、心神を喪失せるにあらざれども、十分に產を治むる目的を達し得ざる者として、法律上自由に治產することを禁ぜらるること。準禁治產の宣告【句】〔法〕準禁治產者たることを明かにするため、本人が普通裁判籍を有する區裁判所のなす宣告。本人・配偶者・四等親以内の親族・戸主・後見人、又は檢事の請求によりて行ふ。

じゅんきんおさん-しゃ 準禁治產者【名】〔法〕準禁治產の宣告を受けたる者。ほさにん・保佐人參照。

じゅん-きやう 荀況【名】〔人〕支那戰國時代の趙の學者。齊に遊學し、三たび祭酒となり、讒に遇ひて、楚の春申君に依り、蘭陵の令となりしが、去って趙に之き、楚に還りて、前職を奉じ、春申君の歿後、任地に隱れ終る。性惡說を唱ふ。敬稱して、荀卿また荀子といひ、又通音によりて孫卿ともいふ。

じゅん-きやう 順境【名】得意の境遇。〈逆境に對して）

じゅん-きやく 隼脚・準脚【名】はやびきやく(早飛脚)に同じ。東鑑「平新左衞門尉盛時、應二其準脚一」

じゅん-きやく 順逆【名】■したがふとさからふと。■正道に從ふことと、さからふことと。恭順と反逆と。

順逆の二緣【句】〔佛〕順緣と逆緣と。大平記「順逆の二緣、何れも濟度利生の方便なれば」

じゅん-きゆう 春宮【名】■『離騷に「濫吾遊此春宮兮、折瓊枝以繼佩」とありて、註に「春宮、東方青帝舍」とあり』春の神の宮殿。■『竹書紀年に「周穆居二春宮一」とあり』とうぐう(東宮)に同じ。

しゅんぐう 春宮【句】しゅんぐわ(春蛙)に同じ。

しゅん-きょ 峻拒【名】はげしくこばむこと。

じゅん-きょ 準許【名】ゆるすこと。許可。

じゅん-きょ 準據【名】のっとること。したがふこと。太平記「準二據富寺一」

じゅん-きょ 鶏居【名】『莊子の天地篇に「聖人鶏居而鼠處」とあるに本づく』居處の定まらざること。

しゅんきよう-てん 春興殿【名】しゅんとうでん(春興殿)に同じ。

じゅんきよう-どう-かいそん 準共同海損【名】〔法〕『英Quasi average』船舶が不可抗力により、出發港又は航海の途中にて碇泊をなすに要したる費用。我が商法にては、共同海損の規定を準用して、各利害關係人に分擔せしむ。

じゅんきよ-はふ 準據法【名】〔法〕『獨Gesetz』國際私法、外國との交涉事件に適用せられたる內國法にて、又は外國法を、その事件の法律關係に對して呼ぶ稱。

じゅんぐ 蠢愚【名】『蠢は、蠢蠢として、蟲類の動作のごとくなる義』おろかなること。おろか。

じゅんくにもち 准國持【名】次條の略。

じゅんくにもちしゅう 准國持衆【名】室町幕府時代の職制に、その封土門地又は席次の、國持衆に次ぎし者。准國持。

じゅんくんだう 准訓導【名】市町村立小學校の准教員。

じゅんぐり 順繰【名】次第を追ひてなすこと。順番。

じゅんくわ 蕣花【名】■むくげの花。■あさがほの花。

しゅん-くわ 春花【名】春の花。

しゅんぐわ 春畫【名】男女交合の態などを書きたる畫。わらひゑ。まくらざうし。まくらゑ。おそぐつのゑ。春宮の圖。

じゅん-くわ 醇化・淳化【名】■邪念の全くなくなること、又そのやうに敎化すること。化醇。■〔哲〕『英Purify』りさうくわ(理想化)に同じ。「まはり。

じゅん-くわい 巡廻【名】見めぐること。みまはり。

じゅん-くわい-けうし 巡回敎師【名】巡回して、到る處に或事を敎授する者。

じゅんくわい-さいばん 巡廻裁判【名】明治初年に、上等裁判所より、判事及び判事補をその管下に巡廻せしめて、府縣裁判所の權限に屬せざる死罪の刑を裁判せしめしこと。同十年廢止。

じゅんくわい-さいばんくわん 巡廻裁判官【名】上等裁判所より派出せられて、巡廻裁判を行ひし判事及び判事補。員數は兩者おのおの一人。明治十年廢止。

じゅんくわい-さいばんしょ 巡廻裁判所【名】〔法〕『英Circuit courts 又 Circuit』各地方を巡廻して、隨處に開廷する裁判所。即ち巡廻判事の開廷するもの。英國に行はる。

じゅんくわい-しんようじやう 巡廻信用狀【名】〔商〕『英Circular letter of credit』一通にて、世界各國の欲する處において、銀行に宛てて、手形又は小切手を振出し得る信用狀。旅客の便宜のために、銀行にて發行す。旅行信用狀。

じゅんくわい-としょくわん 巡廻圖書館【名】じゅんくわいぶんこ(巡廻文庫)に同じ。

じゅんくわい-はんじ 巡廻判事【名】■『英Circuit judge』じゅんくわいさいばんしょ(巡廻裁判所)を見よ。■上等裁判所よりその管下の府縣に派出せられ、府縣裁判所の上席に列して、結審の權を行ひし判事。巡回裁判官の一。明治十年廢止。

じゅんくわい-はんばいにん 巡廻販賣人【名】會社又は商店等より注文接受の目的を以て、見本を携へて派遣せらるる者。商業旅行人。

じゅんくわい-ぶんこ 巡回文庫【名】會員

組織として、期日を定め、會員の家を巡回して、順次に圖書・雜誌等を配本し、貸付くるもの。巡廻圖書館。

じゅんくわう 春光【名】春の景色。春景。九十の春光【句】春季三箇月、即ち九十日の間。

じゅんくわう-づきん 順光頭巾【名】『順光といふ坊主が品川遊廓へ通ふに、高祖日蓮上人の冠物より思附きしものなるよりいふ』おこそづきん(御高祖頭巾)に同じ。

じゅんくわかうがん 純花崗岩【名】〔鑛〕花崗岩の一種。黑雲母と白雲母との二種を含有せるもの。純正花崗岩。複雲母花崗岩。

じゅんくわ-たん 春花丹【名】げんわうたん(玄黃丹)に同じ。

じゅんくわん 俊寛【名】■〔人〕法勝寺の執行(シュギャウ)たりし僧。法印寛雅の子。平清盛の專横を惡み、藤原成親、その子成經・平康頼等と後白河法皇を擁して、平氏を滅さんと謀り、事洩れて、治承元年成經・康頼と共に鬼界島に流され、翌二年他二人の赦されて召還せられし時、首謀の罪を惡まれて、ひとり島に殘されて寂す。年三十七。■謠曲の一。俊寛法師の島流のことを作れるもの。一名、鬼界ケ島。

じゅんくわん 巡觀【名】じゅんし(巡視)に同じ。

じゅんくわん 循環【名】■めぐりめぐりて、元に戻り來ること。■〔醫〕「血液の循環」の略。

じゅんくわん-き 循環器【名】〔動〕『英Circulatory organs』身體を營養する血液を全身に運搬し、同時に身體の各部に生じたる老廢物を收集する器官の總稱。人類にあっては、心臟と血管とこれに屬し、な㆓淋巴系及び脾臟等の血腺これに伴ふ。血行器。

じゅんくわん-き 循環期【名】〔天〕『英Cycle』自然的現象又は人爲的に定めたる期日の循還する週期。

じゅんくわんき-けいとう 循環器系統【名】〔動〕じゅんくわんけい(循環系)に同じ。

じゅんくわん-きすう 循環級數【名】〔數〕『英Recurring series』無限級數の一。同一の項が數項を隔てて常に現るるもの。

じゅんくわんけい 循環系【名】〔動〕循環器の相互間の作用の組織。循環器系統。循環系統。

じゅんくわん-けいとう 循環系統【名】〔動〕じゅんくわんけい(循環系)に同じ。

じゅんくわん-さく 循環作【名】〔農〕りんさく(輪作)に同じ。

じゅんくわん-しょうめい 循環證明【名】〔哲〕じゅんくわんろんぱふ(循環論法)に同じ。

じゅんくわん-すう 循環數【名】〔數〕じゅんくわんせつ(循環節)に同じ。

じゅんくわんせつ 循環小數【名】〔數〕『英Recurring decimal又Circulating decimal』小數點の直後もしくは或桁(ケタ)より先は、同じ數字のみ限なく繰返して、現るべきもの。例へば2.414141……の類。これを記すに2.4̇1̇のごとき方法を以てす。

じゅんくわん-せつ 循環節【名】〔數〕『英Recurring period又Repetend』循環小數の、同じ數字の繰返さるる部分。即ち0.3̇の35.7234̇の2344̇の類。循環數。

じゅんくわんそうづ-しまものがたり 俊寛僧都島物語【名】〔書〕俊寛僧都の鹿谷(シシダニ)山莊の會合より、鬼界ケ島に流されたること、牛若丸の入洛、鬼一法眼の會見等を記したる繪入讀本(ホン)體の小說。十册。曲亭馬琴の作。

じゅんくわんてき-ていぎ 循環的定義【名】〔哲〕『羅Circulus』『圓とは圓き場所に限れるものをいふ』のごとく、定義せんとする語を定義中に用ひたるもの、又苦樂を以て、感情を定義し、感情を以て、苦樂を定義する類の定義。定義としては、無意義に歸す。

じゅん-くわんり 准官吏【名】■本來官吏にはあらざれども、官吏と同樣の取扱を受くる者。■じゅんくわん(准官)■に同じ。

じゅんくわんりう 循環流【名】〔地〕くわんりう(環流)に同じ。

じゅんくわんろんしょう 循環論證【名】〔哲〕次條に同じ。

じゅんくわんろんぱふ 循環論法【名】〔哲〕『羅Circulus in probando』斷案を立證せんがために擧ぐる前提中に、既に斷案の眞なるを假定せる謬論。即ち斷案を豫想せざれば成立しがたき前提より、斷案を導くもの。例へば「人は賢し。故に人は合理的なり」といふ類。循環證明。循環論證。

しゅんくわ-もん 春華門・春和門【名】平安城の內裏の外廓七門の一。內面せる三門中の最東、建禮門の左にあり。一名、白馬(アヲマ)陣・枇杷陣。

しゅんくわ-もんゐん 春華門院【名】〔人〕しょうしないしんわう(昇子內親王)を見よ。

じゅん-げ 巡化【名】僧侶が巡廻して、說敎し、化導(ケダ)すること。

じゅん-げ 順化【名】『世法に順ひて、死を示す義』僧侶の死去。順世。示寂。

しゅんけい 春景【名】はるげしき。春光。

しゅんけい 瞬頃【名】しゅんかん(瞬間)に同じ。

しゅんけい 春慶【名】■〔人〕和泉國堺の漆工。後龜山天皇の御代の人。姓氏不詳。春慶塗を發明す。■〔人〕かとうさうしらう(加藤藤四郎)の號。■しゅんけいぬり(春慶塗)の略。■しゅんけいやき(春慶燒)の略。

じゅんけい 閏刑【名】武家時代に、正刑に代へて行ひし刑罰。贖罪(ショクザイ)・禁錮など、主として士人有僧者又は僧徒・婦女・老幼・癈疾などに適用せしもの。「に同じ。

しゅんげい 狻猊【名】〔動〕しし(獅子)■

じゅんけい 荀卿【名】〔人〕じゅんきやう(荀況)の敬稱。

じゅんけい 楯形【名】〔植〕『英Pelta』葉片の圓形にして、その下面に葉柄の附著し、楯の如くなる形。

じゅん-けい 巡警【名】■巡廻して警戒すること。■支那の警察吏。我が國の巡査に當る。

しゅんけい-うるし 春慶漆【名】漆の一種。朱合漆と同樣にて、ただ油量多きもの。

じゅんけい-ちやう 順慶町【名】〔地〕大阪市西區に屬する町。新町遊廓の大門の正面なる東西の通路に當り、一丁目より五丁目までありて、古來夜店の賑を以て有名なり。一代男、宿に歸りて見るまでに遲し、順慶町の辻行燈に立忍び、讀めぬ事どもありける」

しゅんけい-ぬり 春慶塗【名】和泉國堺の漆工春慶が創めたる漆塗。檜材に少量の荏油を混じたる透明なる漆を用ひて、地の文の見ゆるやうに、淡黃褐色に塗るもの。春慶。

しゅんけい-やき 春慶燒【名】茶褐色の質に、黃色の釉(スハク)を斑(マダラ)にかけたる磁器。尾張國瀨戸の陶祖加藤藤四郎(春慶と號す)の支那より歸りて創めしもの。その子二代藤四郎またその後を繼ぎて造れり。

じゅん-けいやく 準契約【名】〔法〕債權發生の原因たる事務管理及び不當利得の總稱。

じゅんけい-よさん 純計豫算【名】〔經〕歲出には歲入に關せざる支出のみを揭げ、歲入には歲出の支出を控除せる純收入のみを載する豫算。(總計豫算に對して)

じゅんけい-りう 順慶流【名】『筒井順慶の故事によりていふ』二心を抱くこと。

じゅんけい-るゐ 鶉鷸類【名】〔動〕鳥類分類上の一類。多くは山野・草原に棲み、體は肥大、嘴短く、翼は短小にして飛翔に適せず。爪よく發達し、地を掘り、蟲を探し、穀粒を食ふ。羽毛は雄美なり。「きじ」・「うづら」・「にはとり」等、これに屬す。にはとり類。搔爬(ハ)類。

しゅんげう 春曉【名】春のあかつき。春のあけぼの。

じゅんけう 殉敎【名】『敎に殉(シタ)ふ義。じゅんこう(殉國)參照』宗敎のために、生命を犧牲にすること。

じゅんけう-しや 殉敎者【名】殉敎したる者。

じゅんけうゐん 准教員【名】小學校の教員の一。本科正教員を補助するもの。

しゅんげざい 峻下劑【名】〔醫〕『英Purgative』下劑の一。激しく腸の粘膜を刺戟し、腹痛に伴ひて、反覆下痢を催さしむる程度のもの。(緩下劑・潟下劑に對して)

しゅんけつ 俊傑【名】衆に秀でたること、又その人。豪傑。俊豪。

しゅんけつ 春月【名】㊀春の季節。㊁春の夜の月。

じゅんけつ 純潔【名】㊀まじりけなく、いさぎよきこと。㊁慾念なく、心の極めて潔白なること。

じゅんけつ 純血【名】動物の、同種の者の雌雄の間に生れたるもの。(混血に對して)

じゅんげつ 旬月【名】㊀十日と一月と。㊁十箇月。㊂わづかばかりの日數。

じゅんげつ 閏月【名】『書經の堯典篇に「以二閏月一定二四時一」とあり』うるふづき(閏月)に同じ。

しゅんけつしんたうするこてん 俊傑神稻水滸傳【名】〔書〕稻葉小僧・新刀德次郎など、義賊と唱へ、俠客と稱せしものの名を假りて、水滸傳風に綴りたる繪入讀本。全篇百五十册。初篇より四編までの二十册は、岳亭丘山の畫作。五編以後は、知足館松旭の畫作なり。

じゅんけつしゅ 純血種【名】純血なる種類。(雜種に對して)

じゅんけつぞく 準血族【名】〔法〕『佛Parenté fictive』血緣の連絡なけれども、法の擬制によりて、血族と同一の親族關係を生ぜしむるもの。即ち養子緣組に基く養子と養親、及びその血族との間の關係、父母の再婚によりて、繼父母と繼子との間に生ずる關係、及び庶の父子が妻を有することによりて、嫡母と庶子との間に生ずる關係の類。法定血族。

じゅんげふ 巡業【名】巡回して興業すること。

しゅんけん 峻險・峻嶮【名】けんしゅん(險峻)に同じ。

しゅんけん 春暄【名】しゅんだん(春暖)に同じ。

しゅんげん 俊彦【名】しゅんし(俊士)に同じ。

じゅんこう 醇厚・淳厚【名】質朴にして、人情に厚きこと。敦厚。「じ。

しゅんげん 峻嚴【名】げんしゅん(嚴峻)に同じ。

じゅんけん 巡見【名】巡回して見ること。みまはること。

じゅんけん 巡檢【名】見まはりて取調ぶること。巡察。

じゅんけん 順見【名】順順に見ること。

じゅんげん 順現〔佛〕じゅんげんごふ(順現業)の略。平家「業(ゴフ)」に橫綴あり。順現・順生・順後業といへり」

じゅんげんかうはん 準現行犯【名】〔法〕現に犯罪と認むるに足るべき狀況あるのみならず、現行犯と同じく速に處分するを要する事情により、現行犯と同一の手續處分をなすもの。例へば兇器・贓物その他の物件を携帶し、又は身體・被服に顯著なる犯罪の痕跡ありて、犯人と思料すべきものの類。

じゅんげんごふ 順現業【名】〔佛〕じゅんげふ(順現受業)の略。

じゅんけんし 巡檢使【名】鎌倉幕府の諸使の一。定時に指定の國内を巡視し、民間の苦樂を察し、年の豐凶を檢することを掌りしもの。

じゅんけんし 巡見使【名】江戸幕府時代に、臨時に設けし職名。諸國に派遣して、民政・風俗を察せしめたるもの。元和元年牧野正成を諸國に遣しし初とし、爾來將軍一代毎に、一度行はれしが如し。

じゅんげんじゅごふ 順現受業【名】〔佛〕四業の一。現世にて行ひたる事の、現世にて果報を受くるもの。順現業。順現法受業(順生受業・順後受業・順不定受に對して)

じゅんけん-じゅんふ 準絹準布【名】絹布に準じて、金錢を官に納むること。庭訓往來「準絹・準布濟例」

じゅんげんほふじゅ-ごふ 順現法受業【名】〔佛〕じゅんげんじゅごふ(順現受業)に同じ。

じゅんこ 純乎・醇乎【貌】まじりなき貌。

しゅんこう 竣功・竣工【名】『事功を竣(ヲ)ふる義』できあがること。成功。落成。

じゅんこう 醇厚・淳厚【名】質朴にして、人情に厚きこと。敦厚。「じ。

じゅんこう 准后【名】じゅこう(准后)に同じ。

しゅんこう-てん 春興殿【名】平安城の大内裡の殿舍の一。日華門の南、宣耀殿の右にあり、西面して、安福殿に對せり。

しゅんこく 峻酷・峻刻【名】きびしきこと。峻烈。

しゅんこく 瞬刻【名】しゅんかん(瞬間)に同じ。

じゅんこく 純黑【名】まっくろ。

じゅんこく 殉國【名】『國に殉(シタ)ふ義。殉は身を以て物に從ふ義』國のために身を殺すこと。

じゅんこくしゅ 准國主【名】江戸時代の大名の、國持に次ぎしもの。

じゅんごごふ 順後業【名】〔佛〕次條の略。會我「順罪業とて、生死報ありと、佛もこれを說きたまふ」

じゅんごじゅ-ごふ 順後受業【名】〔佛〕三業の一。現世に行ひたる事の、二生以後に果を受くるもの。順業次受業。(順現受業・順生受業に對して)

じゅんごじゅ-ごふ 順後受業【名】〔佛〕四業の一。果報を未來永遠の中に漸く受くべき因業(インゴフ)。順後業。(順現受業・順生受業・不定受業に對して) 平家「業(ゴフ)」に橫綴あり。順現・順生順後業といへり」

じゅんごごじゅ-ごふ 順後受業【名】〔佛〕じゅんごじゅごふ(順後受業)に同じ。

じゅんさ 巡査【名】警部の次に位する、判任待遇の警察官。おまはり。査公。

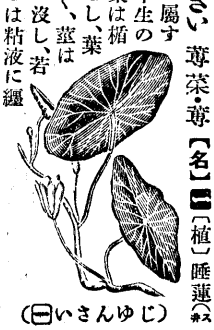
しゅんさい 俊才【名】すぐれたる才智、又その才智ある人。英才。賢才。

しゅんさい 春材【名】〔植〕『英Springwood』春夏の間に生育せる、植物の木質部。秋材と共に、年輪をなす。即ち年輪中の疎大なる部分。疎大なるは、材の成長の旺盛なる春期の發育に係るに因る。(秋材に對して)

じゅんさい 旬歲【名】『漢書の翟方進傳に「方進句歲間、免二兩司隸一」とありて、顏註に「句、徧也、滿也、句歲猶言二歲滿一也、若二十日之一周一」とあり』滿一年。

じゅんさい 旬祭【名】『旬は十日間の義、この場合、漢音にて、淸音に讀む慣例なり』宮中の賢所(カシコドコロ)・神殿・皇靈殿の三殿にて、毎月一日・十一日・二十一日の三回に行はせらるる祭典。

じゅんさい 蓴菜・蓴【名】㊀〔植〕睡蓮(スイレン)科に屬する多年生の草。葉は楯狀をなし、葉柄長く、莖は水中に沒し、若きものは粘液に纏はる。夏、紫紅色の花を葉腋に開き。池沼に自生す。葉は食用に供せらる。うきぬなは。ぬなは。ねぬなは。ぬなはくり。㊁他人の機嫌を見はからひて、言葉巧に、調子を合はすること。(京都大阪の語)



(一)いさんゆじ

蓴菜の羹(アツモノ)【句】『鱸魚(スヾキ)の膾(ナマス)』を見よ』支那晉の張翰、官に仕へて、遠國に赴任してありしが、秋風吹きそむる頃、故鄕の蓴菜の羹と鱸魚の膾とを思ひ出して、官をやめて歸りし故事。謠曲「國栖」「蓴菜の羹、鱸魚とても、これには、いかでまさるべき」

じゅんさいごふ 順罪業【名】〔佛〕罪業の報が、順次にめぐり來ること。會我「われらが父も、狩場の歸さに死にたれば、敵も、狩場の歸さは、定(ヂヤ)のものなり。順罪業とて、生死、報有り」

じゅんさいもの 蓴菜物【名】他人の機嫌を見はからひ、言葉たくみに、その人と調子を合はする人。(京都大阪の語)

しゅんさう 春草【名】春生ずる草。はるくさ。

しゅんさく 峻削【貌】絕壁などの削りたるがごとく峻しきさま。

じゅんさく 旬朔【名】㊀十日と朔月と。㊁『南史の謝靈運傳に「遨二遊山水一、動盈二旬朔一」とあり』十日間。

じゅんさけうしふじょ 巡査教習所【名】內務省に屬し、巡査に任用すべき者に必要なる學術を教授せし所。明治十三年設置、同十四年廢せられたり。

じゅんさそうちやう 巡査總長【名】じゅんさ

さほんぶ(巡査本部)を見よ。

じゅんさ-ちやう 巡査長【名】じゅんさほんぶ(巡査本部)を見よ。

じゅん-さつ 巡察【名】■巡廻して、諸事を観察すること。巡検。巡視。■明治初年の弾正臺の職員。同二年に設置、同四年に弾正臺と共に廃止せらる。

じゅんさつ-し 巡察使【名】■諸國を巡察せし官使。■古、諸國を巡廻して、政務の善悪などを観察しあるきし臨時の職。大同元年廃せられ、観察使これに代れり。三明治二年岩代・三陸・南羽に置きて、その地方の政績を巡察せしめたる職。その年の中に廃せらる。翌年又豊後國及び信濃國に設けられしも、程なく廃せられたり。

じゅんさつ-ぞく 巡察屬【名】明治初年の弾正臺の職員。巡察の下にありて、巡察と同様の事を掌りし判任官。設置・廃止の年月も巡察に同じ。

じゅんさつ-だんじやう 巡察弾正【名】■古の弾正臺の職員。巡察して、非違を糺すことを掌りしもの。■明治初年の弾正臺の職員。府藩縣を巡察して、非違を糺弾することを掌りしもの。明治二年五月設置、同年七月に廃止せられたり。

じゅんさ-ぶちやう 巡査部長【名】■次條を見よ。■巡査の長として、部下の巡査を監督するもの。

じゅんさ-ほんぶ 巡査本部【名】もと警視廳内の一部として、巡査を管攝して、東京府下の警邏査察の事を掌りし者。明治四年に設置、同十九年に廃止せられたり。職員は、初は巡査總長・巡査副總長・方面監督・巡査長・巡査副長・巡査部長・巡査とし、同十八年本部長・本部次長(以上警視・本部員(警視・警部・警部補)とせり。

じゅんさほんぶ-ちやう 巡査本部長【名】前條を見よ。

しゆん-さん 春衫【名】春著る單衣。

しゆん-さん 春蠶【名】春孵化する蠶。はるご。

春蠶の絲を吐くが如し【句】『圖畫寶鑑に「閻之博學有二才氣一丹青亦造二其妙一筆法如二春蠶吐一絲」とあるに本づく』畫筆の輕妙なる譬。

しゆん-ざん 峻山【名】けはしき山。峻嶽。

しゆん-ざん 春山【名】春の山。

春山笑ふが如し【句】春の山の諷詠として穏かなるさまを譬へたる語。

じゅん-さんぎ 准參議【名】古、四位の人にして、參議に准ぜられし者。

じゅん-さんぐう 准三宮【名】じゅさんぐう(准三宮)に同じ。

じゅん-さんこう 准三后【名】前條に同じ。

じゅん-さや 順鞘【名】〔商〕定期賣買にて、受渡の期日の近き物より遠き物の高きこと。さや(鞘)參照。

しゆん-し 春思【名】しゅんし(春心)に同じ。

しゆん-し 俊士【名】■すぐれたる人。俊彦・俊髦士。俊髦。■中古、文章生(モンジヤウシヤウ)の科試に應ぜる者の、成績やや優れたる者。また俊士の優秀なるを、秀才生と稱したり。弘仁十一年俊士五人を置きたれども、政途に益なきため、天長四年廃せられたり。

しゆん-じ 春時【名】■しゅんき(春期)に同じ。■種蒔の時節。

しゆん-じ 蠢爾【貌】■うごめくさま。蠢蠢。蠢然。■『詩經の小雅に「蠢爾蠻荊」とあり』蒙昧なるさま。「じ。

しゆん-じ 瞬時【名】しゅんかん(瞬間)に同じ。

しゆん-し 殉死【名】『じゅんこく(殉國)を見よ』主君の死にしあとを追ひて、自殺すること。おひばら。

じゅんし 荀子【名】■〔人〕じゅんきやう(荀況)の敬稱。■〔書〕子夏の流を汲みて、聖人の道を述べたるもの。書中の非十二子及び性悪篇は後の學者の譏を招きたり。初め三百二十二篇ありしも、唐の楊倞(ヤウリヤウ)に至りて、二十卷三十二篇となす。

じゅん-し 旬試【名】「旬の試(シ)」に同じ。

じゅん-し 巡視【名】巡回して視察すること。巡覩。巡察。

じゅん-じ 順次【名】■次第に順ひて爲すこと。じゅんぐり。じゅんじゆん。■〔佛〕この次の生。次生(シジヤウ)。菩提。順次の往生、まことに以てありがたきことなり」

じゅんし 俊秀【名】才智の秀でたること、又その人。

しゆん-しう 春愁【名】春季に精神のふさいふ。魯の隱公より哀公までの十二公・二百四十二年間の事蹟を收め、褒貶の意を寓せり。(なほ春秋の名は、當時、魯國に限らず、周の春秋・燕の春秋・齊の春秋等ありきといふ)四褒貶の意を寓したる歷史。五

しゆんじうじだい 春秋時代)に同じ。

春秋盛んなり【句】『漢の書賈誼傳に「天子春秋鼎盛」とあり』壯年の頃なり。

春秋高し【句】『戰國策の秦國の條に「王之春秋高」とあり』齢つもりてあり。年老いてあり。春秋長ず。

春秋長ず【句】『漢書の劉澤傳に「太后春秋長」とあり』前條に同じ。

春秋富む【句】『史記の齊悼惠王世家に「皇帝春秋富、未レ能レ治二天下一」とあり』年いまだ若し。生先(サセ)長し。

春秋に義戰無し【句】『孟子の盡心下篇に出づ』支那春秋時代の諸侯の間の戰爭は、皆各自の利益の爭より出でしものにて、王命に依りたるものなし。〔諺語〕

春秋に富む【句】「春秋富む」に同じ。菅家文章「君富二春秋一臣漸老」蜀山人「春秋に富む士(ヂシ)の山なればいつもはたちの心地こそすれ」

春秋の五覇【句】支那にて、覇業をなしたる五人のもの。即ち齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・宋の襄公・楚の莊王。以上は趙臺卿の說なれども、顏師古は齊の桓公・宋の襄公・晉の文公・秦の穆公・吳の夫差といひ、白虎通の一說には、齊の桓公・晉の文公・秦の穆公・楚の莊公・吳の闔閭(カフリヨ)といひ、荀子には、齊の桓公・晉の文公・楚の莊公に勾踐(コウセン)・闔閭を加へて五伯とせり。

じゅん-しう 巡狩・巡守【名】じゅんしゆ(巡狩)に同じ。

しゅんじうあん-しらを 春秋庵白雄【名】〔人〕かやしらを(加舍白雄)に同じ。

じゅん-しうえき 純收益【名】じゅんえき(純益)に同じ。

しゅんじう-くやうてん 春秋公羊傳【名】〔書〕春秋三の事實を敷衍したるもの。十一卷。支那周の公羊高の著。

しゅんじう-こくりやうてん 春秋穀梁傳【名】〔書〕春秋三の事實を敷衍したるもの。十一卷。支那周の穀梁赤の著。

しゅんじう-さしでん 春秋左氏傳【名】〔書〕春秋三の事實を敷衍したるもの。三十卷。支那周の左丘明の著といふ。

しゅんじう-さんでん 春秋三傳【名】〔書〕春秋公羊傳・春秋穀梁傳・春秋左氏傳の併稱。春秋には、その他、夾氏・鄒氏の傳ありしが、漢末に亡失し、後、胡安國出でて、謂はゆる胡氏傳を作り、三傳と併せて、四傳と呼ばる。

しゅんじう-じだい 春秋時代【名】『ほぼ春秋三に記載せる年代なるよりいふ』支那周の王室東遷後、王權ますます衰へ、五覇互に興りて、諸侯の會盟を司りし時代。西曆前七二二年より同四八一年に亙る。せんごくじだい(戰國時代)參照。「と。

しゅんじう-ぶん 春秋分【名】春分と秋分

じゅん-しくわん 准士官【名】士官と下士との間に位して、士官の待遇を受くる陸海軍の判任武官、即ち陸軍にては特務曹長・上等工長・上等計手・上等看護長・軍樂長補、海軍にては上等兵曹・上等信號兵曹・軍樂師・船匠師・上等機關兵曹・看護師・上等筆記。

じゅんじ-ごふ 順次業【名】〔佛〕じゅんじやうごふ(順次生受業)の略。

しゅんじ-じかう 瞬時時効【名】〔法〕正當に且つ公然に、動産の占有を始めし者が、善意に且つ過失なき時、即時にその動産の上に行使する權利を取得すること。即時時効。

じゅんじしやう-ごふ 順次生業【名】〔佛〕

じゅんじ

じゅんじゅしゃうじゅごふ(順次生受業)に同じ。
じゅんじしゃうじゅ-ごふ 順次生受業【名】〔佛〕じゅんじゃうじゅごふ(順生受業)に同じ。
しゅん-じつ 春日【名】春の日。遅日。
春日遅遅【句】『詩經の國風七月篇に「春日遅遅、采レ蘩祁祁」、又、同書の小雅出車篇に「春日遅遅、卉木萋萋、倉庚喈喈、采蘩祁祁」とあるに本づく』春の日のびりと麗(うら)しきさま。
じゅん-じつ 旬日【名】十日間。
じゅん-しはん 準私犯【名】〔法〕不法行爲の一。債權發生の一原因たる惡意に出でたるもの。
しゅん-しん 春心【名】春らしき風情。春思。春意。春情。㊁いろけ。春情。
しゅん-しん 春信【名】春のたより。花信。
しゅん-じん 春盡【名】春のをはり。
じゅん-しん 純臣【名】純忠の臣。
じゅんしんゐん 淳信院【名】〔人〕さくがはいへもち(徳川家茂)の諡。
しゅん-しゃ 春社【名】しゃつ(社日)を見よ。
しゅん-じゃう 春情【名】しゅんじん(春心)に同じ。
じゅん-しゃう 順生【名】〔佛〕次條の略。平家「業(ごふ)に樣樣あり。順現・順生・順後業といへり」
じゅん-しゃう-ごふ 順生業【名】〔佛〕次條の略。平家「然れども交契忽ち純熟して」
じゅんしゃうじゅ-ごふ 順生受業【名】〔佛〕四業の一。現世にて行ひたる事に對し、次の世にて、直ちに果報を受くるもの。順生業。順次生受業。順次生業。生報。(順現受業・順後受業・順不定業に對して)
しゅんしゃう-まきゑ 春正蒔繪【名】京都の蒔繪師山本春正、及びその子孫の製作したる蒔繪。
(掛錫)參照。

じゅんし

しゅん-しゅ 春首【名】しゅんしょ(春初)に同じ。
しゅん-しゅ 春酒【名】春に釀したる酒。
しゅん-じゅ 春樹【名】春の樹。
春樹暮雲の情【句】『杜甫の春日憶李白二詩に「白也詩無敵、飄然思不レ群、清新庾開府、俊逸鮑參軍、渭北春天樹、江東日暮雲、何時一樽酒、重與細論レ文」とあるに本づく』親友互に相思ふさま。
じゅん-しゅ 巡酒【名】酒を飲みまはすこと。本草記「毎日の巡酒を振舞はせけるに」
じゅん-しゅ 巡狩・巡守【名】『書經の舜典に「五載一巡狩」、孟子の梁惠王下篇に「天子適二諸侯一曰二巡狩一、巡狩者、巡レ所レ守也」とあり』昔、支那にて、天子が諸侯の國を巡視せしこと。
じゅん-しゅ 遵守【名】まもりしたがふこと。
じゅん-しゅ 順守【名】『逆に取りて、順に守る』を見よ』道理に從ひて守ること。
じゅん-しゅ 醇酒【名】味の濃き酒。まぜ物なきよき酒。
じゅん-じゅ 醇儒・純儒【名】『漢書の賈山傳に「涉二獵書記一、不レ能レ爲二醇儒一」、後漢書の鄭康成傳に「稱爲二純儒一」とあり』專ら儒道を修むる學者。
じゅん-じゅう 順從【名】じゅうじゅん(從順)に同じ。
じゅん-じゅく 純熟【名】全く熟(う)ること。平家「然れども交契忽ち純熟して」
じゅん-じゅく 順熟【名】順ひ熟(う)ること。やはらぎ睦むこと。新可笑記「男女の心中ままならぬは、これ惡緣にや。諸事順熟せざれども、疎み果て、古里へ遂る程にもあらず」
じゅん-じゅん 蠢蠢【貌】㊁しゅんじ(蠢爾)に同じ。㊁『左傳の昭公二十三年の條に「今王室實蠢蠢焉」とあり』動き擾(みだ)るるさま。
じゅん-じゅん 逡巡・逡遁【名】『逡と巡と疊韻をなせる熟語。逡は巡に通ず』あとじさり。しりごみ。
じゅん-じゅん 純純・肫肫【貌】『中庸の第三十二章に「肫肫其仁、淵淵其泉、浩浩其天」、莊子の山木篇に「純純常常、乃比二于狂一」とあり』懇にして誠なるさま。
じゅん-じゅん 諄諄【貌】ねんごろに說くさま。くどくど。
じゅん-じゅん 惇惇【貌】ねんごろなるさま。純厚なるさま。
じゅん-じゅん 恂恂【貌】まめやかなる狀。
じゅん-じゅん 惇惇【貌】智慧少なきさま。
じゅん-じゅん 醇醇【貌】自ら樂しむさま。
じゅん-じゅん 循循【貌】秩序あるさま。
じゅん-じゅん 眴眴【貌】柔和なるさま。
じゅん-じゅんくわんせうすう 純循環小數【名】〔數〕『英Pure recurring decimal』小數點下第一の數字が循環節の第一位をなせる循環小數(混循環小數に對して)
じゅんじゅん-に 順順に【副】じゅんに(順に)同じ。
じゅん-しょ 春初【名】春のはじめ。春首。
じゅん-じょ 順序【名】しだい。ついで。
じゅんじょう 準繩【名】㊁準(もと)と繩(なは)と。「規矩準繩」㊁のり。てほん。規則。
じゅんじょう 俊彿【名】〔人〕律宗の學僧。京都泉涌(せんにう)寺の開祖。字は我禪、不可棄と號す。肥後國の人。建久十年宋に航して、留ること十二年、歸朝して京都仙遊寺に居る。高倉後鳥羽・順徳三上皇に崇敬せられ、勅に依り、仙遊寺を泉涌寺と改め、官寺に編入せらる。含律の中興と稱せらる。安貞元年寂す。年六十二。著書多し。
じゅんじょう-ばう 俊乘坊【名】〔人〕法然上人の弟子重源の坊號。
じゅん-しょく 春色【名】春げしき。春光。
じゅん-しょく 潤色・潤飾【名】㊁光澤を添ふること。美しく修飾すること。いろづけ。いろあげ。㊁事柄をつくろひ飾ること。
じゅんしょく-うめごよみ 春色梅曆【名】〔書〕江戸吉原の青樓唐琴屋の養子肇なり丹次郎といふ好男子を中心とし、深川藝妓米八(よねはち)・同仇吉(かたき)・唐琴屋の娘お蝶・同家抱の遊女此糸(いと)などの競ひて、これに思を運ぶ趣を記したる人情本。十二冊。
じゅん-しょとく 純所得【名】總所得より出費を差引きたる殘額。
じゅんず 殉ず【動佐變自】㊁殉死をなす。㊁その物事のために命を棄つ。
じゅんず 準ず【動佐變自】なずらふ。のっとる。よそふ。
じゅんすず 純錫【名】鉛を雜へざる純粹の錫。しやり。唐錫。
じゅんすゐ 春水【名】春季氷雪融けて流るる水。蕪村「春水や四條五條の橋の下」
しゅんすゐ 春水【名】〔人〕ためながしゅんすゐ(爲永春水)を見よ。
じゅんすゐ 純粹【名】㊁まじり物のなきこと。きっすい。㊁もっぱらなること。專一。純一。㊂まったきこと。完全。完備。
じゅんすゐけっさん 純粹決算【名】〔商〕へいけふけっさん(閉業決算)に同じ。
じゅんすゐ-しかう 純粹思考【名】〔哲〕しべん(思辨)㊀に同じ。
じゅんせ 順世【名】じゅんけ(順化)に同じ。
しゅんせい 春晴【名】春の日の晴れたる時。
じゅんせい 旬政【名】じゅん(旬)㊀に同じ。
じゅんせい 純正【名】㊁純粹にして正しきこと。㊁理論を專らとして、應用に及ばざること。
じゅん-せい 順正【名】順序正しきこと。
じゅんせい 準正【名】〔法〕『佛Legitimation』庶子又は私生子に、嫡出子と同等の身分を與ふること。即ち庶子又は私生子が嫡出子と同一の身分を取得すること。我が民法にては、庶子又は私生子の父母が結婚し、認知することによりて生ず。準嫡。
じゅんせい-きかがく 純正幾何學【名】〔數〕『英Pure geometry』そうがふきかがく(綜合幾何學)に同じ。
じゅんせい-くわかうがん 純正花崗岩【名】〔鑛〕じゅんくわかうがん(純花崗岩)に同じ。
じゅんせい-くわがく 純正科學【名】經驗科學に對して、經驗を混ぜざる科學。即ち數學及び自然科學の類。
じゅんせい-けいざいがく 純正經濟學

じゅんずる

じゆんせ

【名】〔法〕『英 Theoretical economy』經濟的現象に關する理論を考究する科學。理論經濟學。(應用經濟學・理論經濟學に對して)

じゆん-せいさん 準清算【名】〔商〕會社が事業に著手せる後、その設立が無効又は取消となりたる時、解散に準じてなす清算。

じゆんせいしゃくわいしゅぎ 純正社會主義【名】〔法〕『英 Pure socialism』社會主義の一派。佛國人サンシモン(St. Simon)の創說にして、世界の平和・人類の幸福を增進せしむるために、產業的國家なる新社會を現出するを以て理想とするもの。

じゆんせいただのり 俊成忠度【名】謠曲の一。岡部六彌太、平忠度を討ちて後、その自筆の短册を見出し、これを携へて、俊成の許に至りしに、忠度の靈あらはれて、千載集に作者の名をあらはさざりし妄執を述べ、修羅道の苦患(クヮン)を現ずることを作れるもの。古名、五條忠度。

じゆんせいてう 純正調【名】〔音〕『英 Just intonation』理論上、完全なる方法に由りて構成せられたる樂音の調子。

じゆんせいてつがく 純正哲學【名】『英 Pure philosophy』實在に關する究極問題の體系的攻究。形而上學。本體哲學。超物理學。

じゆんせいびじゆつ 純正美術【名】〔美〕じいうげいじゆつ(自由藝術)に同じ。

じゆんせつ 春宵【名】はるの夜。春夜。

春宵一刻直(アタ)千金【句】『蘇軾の春夜と題する詩に「春宵一刻直千金、花有二清香一月有レ陰、歌管樓臺人寂寂、鞦韆院落夜沈沈」とあるに本づく』春の夜を賞すること。

じゆんせつ 巡哨【名】巡回して、敵を見張ること。

じゆんせつすう 純小數【名】〔數〕『英 Pure decimal』小數のみより成る數。(帶小數に對して)

じゆんせつ 浚渫【名】泥土をさらひて深くすること。

じゆんせつ 浚節【名】けだかき節操。

じゆんせつ 春雪【名】春に降る雪。

じゆんせつき 浚渫機【名】『英 Dredger』河底・港灣などを浚渫するに用ふる機。蒸氣力によりて廻轉せしめ、人力の及ばざる水底を掘りて、任意の深さに至らしむる機械。汲揚(クミアゲ)式・掘揚(ホリアゲ)式・吸揚(スヒアゲ)式・拘揚(カヽヘアゲ)式の四種あり。

じゆんせつしやう 准攝政【名】古、陛下の御惱その他の故障のため、政務・儀式の中の或部分を、攝政に准じて行ふべき宣旨を下されし者。一定の職名にあらず。

じゆんせつせん 浚渫船【名】『英 Dredger』浚渫機を裝置したる船。

じゆんせつたう 準竊盜【名】〔法〕他人の占有に屬し、又は公務所の命によりて、他人の看守せる自己の所有物を竊取する行爲。竊盜を以て論ぜらる。

じゆんぜん 春前【名】春のはじめ。はるさき。

しゅんぜん 蠢然【貌】しゅんじ(蠢爾)に同じ。

じゅんぜん 純然【貌】■純粹なるさま。純乎。■全く同一なるさま。

じゆんせんいう 準占有【名】〔法〕『英 Quasi possession』權利の占有、即ち自己のためにする意思にして、財產權の行使をなすこと。財產權につきてのみあるものにして、占有の規定を準用せらる。

じゆんせんいう-しや 準占有者【名】〔法〕準占有をなせる者。

じゆんせんしう 准撰修【名】せんしう(撰修)(ニ)を見よ。

しゅんそ 春蔬【名】春に生成せる蔬菜。

じゅんそ 淳素【名】質朴にしてつくりかざりのなきこと。淳朴。素朴。

じゅんそ 笋蔬【名】『笋(ジュン)と蔬菜との類を食し、肉食せざる義』佛家の生活。「笋蔬の氣を帶ぶ」

じゆんそうにん 准奏任【名】奏任官にあらずして、奏任官と同一の待遇を受くるもの。奏任官待遇。

じゆんそう-びん 順送便【名】郵便物遞送の一。始點局より遞送人を繼立て、順次その極端局に送るもの。

しゅんそう-ろうわ 春湊浪話【名】〔書〕歷史・物語・諸藝の考證及び雜事を記したる隨筆。二卷。土肥經平の撰。

しゅんそく 瞬息【名】『一回まだたきをなし、また呼吸する義』次條に同じ。

瞬息の間【句】しゅんかん(瞬間)に同じ。

しゅんそく 駿足【名】しゅんば(駿馬)に同じ。

じゅんそく 準則【名】或行爲をなすに當りて準據すること、又その準據すべき法則。のっとるべき規則。

じゅんぞく 醇俗【名】■醇朴なる風俗。■醇醪と卑俗と。

じゅんそく-しゅぎ 準則主義【名】〔法〕『獨 System der Normativbedingungen』法人の設立に關し、豫め一定の準據すべき法則を設け置き、設立者がこの條件に從ひて、意思を表示すれば、これが成立を認むる主義。個個の設立ごとに法律を發布し、勅許を仰ぎ、又は行政官廳の許可を受けしむる等の煩を避くるためのものにて、特許主義・免許主義に比すれば寬大なれど、自由主義に比すれば嚴正なり。

じゅんそつ 准卒【名】海軍にて、艦船に限りて傭役せしもの。即ち製綗夫・造麵夫・裁縫手・造靴手等の類。明治十八年廢せらる。

じゅんそん 順孫【名】『漢書の黃霸傳に「貞婦順孫」とあり』孫のよく祖父に事ふること。

しゅんたい 春臺【名】次條を見よ。

しゅんたい 春臺之戲(ギ)【句】『清嘉錄に「二三月間、里豪市俠搭二臺曠野一、醵レ錢演レ戲、男婦聚觀、謂二之春臺戲一」以祈二農祥一とあり』古、支那の農村にて、春、豐作を祈るために行ひし芝居。春さきの村芝居。

しゅんだい 春臺【名】〔人〕だざいしゅんだい(太宰春臺)を見よ。

じゅんだいじん 准大臣【名】古、勳勞ある大納言を、大臣に準ぜんとすれども、闕官なき場合に、暫く大臣の祿を賜ひて、內大臣の次に列せしめ、大方は政務に與らしめずして優待せられし者。儀同三司。

じゅんたい-ゑん 潤體圓【名】元氣を補ふに用ひし古の藥。〔下學集「潤體圓」〕

じゅんたう 笋刀【名】たかうながたな(笋刀)に同じ。

じゅんたう 順當【名】道理に順ひて適當なること。「せること。

じゅんたう 順道【名】■順當なる進路。順路。〔盛衰記〕又順道なり、且は祝の京入なればとて」■順當なる道理。〔月の潤色〕「御葬提を弔ひてまつるこそ順道とも、順道とも申すべけれ」

じゅんたうき 巡島記【名】〔書〕あさひなじゅんたうき(朝夷巡島記)の略。

じゅんたく 潤澤【名】■うるほひ。つや。■ゆたかなること。〔澤山。「生產潤澤」■まうけ。利潤。

じゅんたつ 順達【名】廻狀などを順順に送達すること。

じゅんたて 順立【名】順序を定むること。

しゅんだん 春暖・春煖【名】春の暖かなる時候。春暄。

じゅんち 馴致【名】■なじましむること。なれしむること。■漸を逐ひて、或狀態に至らしむること。「正」に同じ。

じゅんちやく 準嫡【名】〔法〕じゅんせい(準正)に同じ。

じゅんちゆう 純忠【名】私慾なき純粹の忠義。誠忠。

じゅんちよくさいしや 准勅祭社【名】明治元年東京に都を奠(サダ)め給ひし時、勅使を派して、幣帛を賜ひし十二社。即ち日枝神社・根津神社・神田神社・芝神明社・龜戸天神社・白山神社・品川神社・富岡八幡宮・氷川神社・王子神社・鷲(トリ)神社・總社六所神社。

しゅんていくわ 春庭花【名】〔音〕しゅんていらく(春庭樂)に同じ。

じゅんていくわおん 準胝觀音【名】〔佛〕『準胝は清淨と譯し、心性の清淨を讃嘆せる稱。音は、觀の字の韻に引かれて、ノンと發音す』六觀音の一。三面十六臂を有し、未敷(イマダサ)蓮華を三昧耶形(サンマヤケイ)とするもの。六觀音を六道に配する中、主として、人道の衆生を濟度すといふ。

しゅんていし 春庭子【名】〔音〕しゅんていらく(春庭樂)に同じ。

じゅんていほふ 準胝法【名】〔佛〕準胝觀音を本尊として祈禱する修法。

しゅんていらく 春庭樂【名】〔音〕かふうら

く(夏風樂)に同じ。

じゅんてう 春潮【名】春のうしほ。

じゅんてう 順潮【名】■『元史の張弘範傳に「李恆等順レ潮而退」とあり』うしほに從ふこと。潮流に逆はざること。■物事の調子よく進むこと。

じゅんてき 順適【名】■したがひかなふこと。氣に入るやうにすること。迎合すること。■〔商〕『英 Favourable』じゅんがはせ(順爲替)を見よ。【句】〔商〕じゅんがはせ(順爲替)に同じ。

じゅんてき 準的【名】まと。標準。

じゅんてつ 純鐵【名】まじり物なき鐵。

じゅんてん 春天【名】春のそら。春空。

じゅんてん 順天【名】天道に順ふこと。

じゅんてん 順轉【名】しにてまはし(下手廻)に同じ。

しゅんてんわう 舜天王【名】〔人〕琉球の國王。初名は尊敦。父は源爲朝、母は同國島尻大里按司の妹なりと傳ふ。國王天孫氏の二十五世の時、權臣利勇位を簒ひて自立す、尊敦これを討ち、衆望を負ひて、文治三年即位す。在位五十一年。

しゅんとう 蠢動【名】■蟲などのうごめくこと。物のむくむくと動くこと。■無智の者の騷ぐこと。

しゅんとう 俊童【名】才智のすぐれたる小供。神童。

じゅんとう 閏統【名】正統にあらざる系統。

じゅんとう 順痘【名】症の善き疱瘡。

じゅんとう 準等【名】■なぞらへひとしくすること。■相當なる等級。

じゅんとう 純銅【名】まじり物なき銅。

じゅんとう 準同【名】ひとしきこと。

じゅんとうぐわい 準等外【名】等外に準ずる官吏。

しゅんとく 俊德【名】すぐれて高き德。大德。

しゅんとく 潤德【名】まうけ。利潤。

じゅんとく 順德【名】『易經の升卦象傳に「君子以順レ德積レ小以高レ大」とあり』すなほなる德。

じゅんとく-てんわう 順德天皇【名】〔人〕第八十四代の天皇。御名は守成(もり)。後鳥羽天皇第二の皇子。御母は修明門院藤原重子。在位十一年(紀元一八七一年—一八八一年)。承久の亂後、佐渡國に遷され、仁治三年同國にて崩ず。壽四十六。

しゅんとく-まる 俊德丸【名】〔人〕しんとくまる(信德丸)を見よ。

じゅんとくゐん-どしふ 順德院御集【名】〔書〕順德天皇の御製の歌集。一名、紫禁和歌草。

じゅんとひや 準問屋【名】〔法〕自己の名を以て、他人のために、販賣又は買入にあらざる行爲をなすを業とする者。

じゅんとんすう 純噸數【名】とうきじゅんとんすう(登記純噸數)の略。

しゅんとめ しゅん止【名】あかとめ(淦止)「を見よ。

じゅんなしやうがくりやうゐんのべったう 淳和奬學兩院別當【名】じゅんわしやうがくりやうゐんのべったう(淳和奬學兩院別當)を見よ。

じゅんなてんわう 淳和天皇【名】〔人〕じゅんわてんわう(淳和天皇)を見よ。

じゅんなん 殉難【名】『じゅんこく(殉國)を見よ』國家の危難に殉ずること。國難にしたがひ死すること。

じゅんなゐん 淳和院【名】じゅんわゐん(淳和院)を見よ。

じゅんに 順に【副】順を追ひて。次第次第に。順番に。順順に。

じゅんにんてんわう 淳仁天皇【名】〔人〕第四十七代の天皇。御名は大炊(おほい)。舍人(とねり)親王の御子。御母は大夫人山背(やましろ)。在位六年(紀元一四一九年—一四二四年)。のち淡路に流され、淡路の廢帝といふ。天平神護元年崩ず。壽三十三。

じゅんねん 閏年【名】うるふどし(閏年)に同じ。

じゅんねん 旬年【名】十箇年。十年。

しゅんの-おまりぶぎやう 旬御鞠奉行【名】鎌倉時代に、旬の鞠の當日、その事を奉行せし役。殿上人北條家の一族及び奉行の中、その技に巧なる人の中にて選抜任命せられたり。「旬(シュン)の鞠」參照。

しゅんの-し 旬の試【句】じゅん(旬)の條下を見よ。

しゅんの-まり 旬の鞠【句】じゅん(旬)の條下を見よ。

じゅんの-みねいり 順の峰入【句】じゅん(順)の條下を見よ。

じゅんの-わ 順の輪【名】じゅん(順)の條よき馬。しゅんめ。駿足。駿逸。

しゅんば 駿馬【名】すぐれてよく走る馬。

駿馬、癡漢を駄(シュ)せて走る【句】君臣夫婦などの配遇宜しきを得ざるに譬へていふ語。〔諺語〕

駿馬の骨を買はずやある【句】『死馬の骨を買ふ』を見よ』清少納言の年老いて零落してありし家の前を、年若き殿上人數多同車して通行し、これを嘲りしに、少納言、簾を掻上げ、現れ出でて答へきといふ語。(古事談に見ゆ)

しゅんば 春葩【名】春の花。

じゅんばい 巡拜【名】神社佛閣をへめぐりて、禮拜すること。「廻すこと。

じゅんばい 順盃【名】宴席にて、盃を順にとうぐうばう(東宮坊)の唐名。■春の神の宮。

しゅんばう 俊髦【名】『髦は長き髪の義。秀でたるに譬へていふ』ひいでたる人。俊士。髦士。

じゅんばう 詢訪【名】とひ尋ぬること。

じゅんばう 巡方【名】■石帶(せきたい)に飾る、四角なる玉又は石。ずんぼう。■次條の略。

巡方の帶【句】いしのおび(石帶)を見よ。

增鏡「俊定・經繼などは、巡方の帶をさしたり」

じゅんはうくわさい 準放火罪【名】〔法〕火藥・汽罐等の如きものを爆發せしめて、放火の目的物となるものを損壞すること。

じゅんはく 純白【名】まじりけのなき白色。ましろ。

じゅんはくねつてんとう 準白熱電燈【名】『英 Nernst lamp』アルカリ土類の稀有(ゆう)金屬にて造れる圓棒に電流を通じて、之を發せしむるもの。一燭光につき、一・八ワットの電力を要し、約三百時間の使用に堪ふ。ねるんすとらんぷ。

じゅんはちやうしやく 巡八聖跡【名】〔佛〕天竺にて、釋尊誕生の地、得道轉法輪の地、入涅槃の地など、八相に關係ある舊跡を參詣しあるくこと。わが邦の巡禮も、これに倣へるなりといふ。

しゅんばつ 峻拔【名】山などのけはしくそびゆること。「ること。

しゅんばつ 俊拔【名】性質のすぐれてあること。

しゅんばづれ 旬外【名】野菜魚類などその季節にはづれてあること。味おほかた佳ならず。時候はづれ。

しゅんばふ 皴法【名】〔美〕皴(シュン)により て、山の岩石の紋理をあらはす法。

じゅんばふ-しよぶん 準法處分【名】〔法〕さいけつしよぶん(裁決處分)に同じ。

しゅんばん 春盤【名】ほうらいかざり(蓬萊飾)に同じ。

しゅんばん 峻坂・峻阪【名】けはしき坂。「險坂。

しゅんばん 春半【名】春のなかば。

じゅんばん 準飯【名】〔兵〕砲架の前後に裝置して、方向照準を定むるに用ふる具。

じゅんばん 順番【名】順を追ひて、事に當ること、又その順序。巡儀。

じゅんはんざい 準犯罪【名】〔法〕惡意に基かざる不法行爲。

じゅんはんにん 準判任【名】判任官にあらずして、判任官と同一の待遇を受くるもの。判任官待遇。

じゅんび 準備【名】目的に副ふやうに設備をなすこと。そなへ。よい。支度。

じゅんび 淳美・醇美【名】■『晉書に「播二醇美之化一杜二邪枉之路一」とあり』あつく美しきこと。■すなほにして美しきこと。■味の濃厚にしてうるはしきこと。

じゅんび 純美【名】■まじりけなく美しきこと。■〔哲〕『英 Beauty』美的情操のみを惹起さしむる美。(壯美に對して)

じゅんびきん 準備金【名】將來の必要に應ぜんために積立ておく金。

じゅんびしよめん 準備書面【名】〔法〕『獨

Vorbereitende Schriftstück』合議裁判所における民事訴訟の當事者が、相互に口頭辯論に於て申し立てんとする事項を、豫め裁判所及び相手方に知らしめ、審理を進捗せしめんがために作る一切の書面、即ち訴狀・證據書類の寫、その他答辯書等を含む。

じゅんぴつ 潤筆【名】『筆を潤(うるほ)す義』他人の、書畫など書くことの敬稱。

じゅんぴつ-れう 潤筆料【名】潤筆を頼みたる謝禮金。揮毫料。

じゅんび-てづゞき 準備手續【名】■準備のためになす手續。■〔法〕受訴裁判所が、受命判事に本案の辯論及び判決の準備をなさしむる手續。

しゅんぴょう 春氷【名】春の氷。

春氷を渉る【句】『書經の君牙篇に「心之憂危、若下踏二虎尾一、涉中于春氷上」とあるに本づく』危險なる譬。〔諺語〕

じゅんぶ 巡撫【名】■巡行して、人民を撫綏(ぶすい)すること。■支那明・清時代の各省の行政長官。明代には總督又は提督これを兼ね、清代には、總督は一省もしくは二省ごとに一人、巡撫は省ごとに一人なりしが、のち總督一人にて、二省を管轄する場合には、總督駐在の巡撫の事務は、總督これを兼ぬることに改められたり。

じゅんぷ 準布【名】奈良朝より平安朝に渉りて行はれし估價方法の一。物の價を、布に準じて換算せしこと。

しゅんぷう 春風【名】はるかぜ。

春風・春水一時に來る【句】『白居易の律府西池と題する詩に「柳無二氣力一枝先動、池有二波紋一氷盡開、今日不レ知誰計會、春風春水一時來」とあり』風も水も一時に春めき來る。

春風の中(うち)に坐するが如し【句】『宋名臣言行錄に「朱光庭見二明道先生於汝州一、歸語レ人曰、某在二春風中一坐了一月」とあるに本づく』春風は物を生育するものなるが故に、弟子が師に從ひて、益を受くるさまを譬へていふ語。〔諺語〕

じゅんぷう 順風【名】おひかぜ。おひて。(逆風に對して)

順風の帆懸船(ほかけぶね)【句】物事の思ふままに進み行くさまの譬。得手(えて)に帆。

じゅん-ぷう 淳風・醇風【名】醇厚の風俗。淳風・美俗【句】淳美なる風俗。

しゅん-ぷく 春服【名】春著る衣服。はるぎ。春衣。

じゅん-ぷく 順服【名】すなほに服すること。

じゅん-ぷく 馴服【名】『史記の秦紀に「鳥獸多馴服」とあり』馴れ服すること。

じゅん-ぷく 巡覆【名】『覆は二度も三度も審かに察する義』じゅんさつ(巡察)に同じ。

じゅん-ふしる 準麩汁【名】麩になぞらへて、茄子を入れたる味噌汁なりといふ。

じゅんふおやうじゅ-ごふ 順不定受業【名】〔佛〕次條に同じ。

じゅんふおやうじゅ-ごふ 順不定受業【名】〔佛〕四業の一。現世にて行ひたる事の、いづれの生(しゃう)に果報を受くべきか定まらぬもの。順不定業(順現受業・順生受業・順後受業に對して)

しゅんぶん 春分【名】〔天〕二十四氣の一。太陽が春分點にある時。今は、大抵三月二十一二日頃にて、秋分におけると同じく、この日、太陽は正東より上り、正西に入るため、晝夜等分にして、且つ太陽は地球の赤道を直射す。(秋分に對して)

じゅんぶん 純分【名】金・銀貨又は地金の中に含める金・銀の分量。

じゅんぶんがく 純文學【名】〔文〕『英Pure literature』純粹の文學、即ち人の感情に訴ふる美しき思想を表出したる文學。詩歌・戯曲・小説など。これらを科學的に說明・批評するをも文學といひ、また多少讀者の趣味に訴へたる論說・歷史の類も、廣義に解すれば、文學の一部とせらるるものあるによりて、特に區別していふ。

じゅんぶん-こうさ 純分公差【名】貨幣の公差の一。法定の貨幣の純分と、實際に鑄造する貨幣の純分との差違。本來は二者差違なき筈なるも、實際に於ては、鑄造技術如何により、僅少の差違あるを免れざるが故に、我が國貨幣法に於ては、本位貨(金貨は千分の一、補助貨(銅貨は千分の三を純分公差と定む。

しゅんぶん-てん 春分點【名】〔天〕『英Vernal equinox』天球上における、黃道と赤道との交點にして、太陽が南半球より北半球に移動するに際し、通過する點。(夏至點・秋分點・冬至點に對して)

しゅん-ぷらん 花卉【名】〔植〕油菜の一種。根葉は羽狀に深く裂け、各裂片にまた羽狀の細かき缺刻あり、梢葉は缺刻少なし。ちりめんな。「ること。

じゅん-べつ 峻別【名】かっきりと區別すること。

じゅん-ぼ 准母【名】■天皇の御母に准ぜらるる資格。內親王に多く、稀には中宮にもあり、皇后又は女院の稱を賜はんがために、この資格を與へられしなり。■皇親の御母に准ずること。「山。

しゅんぽう 峻峰・峻峯【名】けはしく高き

じゅんぽう 遵奉【名】し。したがひ奉ずること。したがひ守ること。

しゅん-ぼく 瞬目【名】しゅんもく(瞬目)に同じ。太平記『滅亡を瞬目の中に得たる』

じゅん-ぼく 淳朴・醇朴【名】すなほにしてかざりけのなきこと。淳素。素朴。

じゅん-ほけんれう 純保險料【名】〔商〕『英Pure premium』保險金支拂の原因たる事故發生の平均率に基きて、純粹に計算せられたる保險料。

じゅん-ほんゐせい 純本位制【名】〔經〕『獨Reinen währung』單本位制の一。無制限法貨たる本位貨幣のみを用ひて、他に法貨を有せざるもの。單一法貨制。

しゅん-まい 俊邁【名】するどくすぐれたること、又その人。英邁。

しゅん-まく 瞬膜【名】〔動〕『英Nictitating membrane』多くの脊椎動物に存する眼の保護器官。眼瞼の內側に存せる半透明の膜にして、上下兩眼瞼の間に伸展して、眼球の前面を被ふを得。鳥類・爬蟲類・無尾兩棲類等に最もよく發育し、哺乳類これに次ぎ、魚類にありては、鰾類に存するのみ。人類のは、上部の眼瞼速かに運動して、眼球の前面を拭ふがために、眼の內角に痕跡を存するのみ。第三眼瞼。

じゅん-み 醇味【名】まじりけなく濃厚なる味。

しゅん-みん 春眠【名】はるのねむり。

春眠、曉を覺えず【句】『孟浩然の春曉の詩に「春眠不レ覺レ曉、處處聞二啼鳥一、夜來風雨聲、花落知多少」とあるに本づく』春の寢心地よきさまをいふ語。「民。

じゅん-みん 順民【名】敎化に從ふ民。良

しゅん-む 春夢【名】■春の夜夢。■人生のはかなきさまを譬へていふ語。

しゅん-むさう 春夢草【名】〔書〕牡丹花肖柏の歌集。三卷。

しゅん-め 駿馬【名】しゅんば(駿馬)に同じ。

しゅん-めい 峻命【名】■きびしき命令。嚴命。■くんめい(君命)の敬稱。

じゅんめい-くわん 惇明館【名】丹波國天田郡福知山町にありし舊福知山藩の學校。

しゅんめいてんわう 俊明中澤主栃木鋪綱創立し、明治四年に閉鎖す。天明中澤主栃木鋪綱創立し、明治四年に閉

じゅんめい-ふ 惇明府【名】日獨戰役記念のために、その戰利品、又は戰死者の寫眞等を藏めたまへる宮城內の御府庫。

しゅんめい-ゐん 浚明院【名】〔人〕とくがはいへはる(德川家治)の諡(おくり)。

しゅん-も 俊茂【名】才學のすぐれたること、又その人。俊才。茂才。

しゅん-もく 瞬目【名】■めばたきをすること。■一回めばたきするほどの僅かの時間。瞬間。

じゅん-もん 詢問【名】たづね問ふこと。

じゅん-もんぜき 准門跡【名】門跡にあらずして、門跡の待遇を受くる寺格。後柏原天皇、本願寺第九世光兼の獻金に對して、光兼にこの資格を與へられしに始まり、東西兩本願の外、眞宗諸派の本山たる興正寺・專修寺・佛光寺・錦織寺の四箇寺も、この資格を授けられたり。脇門跡。

しゅん-や 春夜【名】はるの夜。春宵。

しゅん-やう 春陽【名】■春の日かげ。■しゅんじつ(春日)に同じ。

じゅん-やう 遵養【名】「ふこと。世につれて、夢を養

じゅん-やう 馴養【名】ならし養ふこと。

じゅんやう-かん 巡洋艦【名】『英 Cruiser』軍艦の一種。速力と航續力とを主なる要素とし、專ら偵察の任務に當りて、主戰艦隊の耳目となり、時に敵の運送船・商船を捕獲して、敵國の商業を妨ぐるを目的とす。我が國にては、その噸數に應じて、一等・二等・三等に分ち、裝甲の有無によりて、裝甲巡洋艦・非裝甲巡洋艦に分つ。

じゅん-やうし 順養子【名】弟に兄の後を繼がせ、兄の子に又その後を繼がするなどの類。

しゅん-よ 餕餘【名】『餕は食ひ殘しの義』「竹輿。くひあまし。くひのこし。

じゅん-よ 筍輿【名】竹にて造りたるこし。

じゅん-よ 旬餘【名】一旬よりあまれること。十日あまり。

じゅん-よ 閏餘【名】曆面の一年の時日より、實際の一年の時日の方多きこと。うるふのあまり。「光。

しゅん-よう 春容【名】春の景色。春景。春

じゅん-よう 遵用【名】したがひもちふること。

じゅん-よう 準用【名】或規定を標準として、他の類似せるものに適用すること。

じゅん-ら 巡邏【名】『巡行して偵察すること、又その人。』江戸時代、尊王攘夷の說行はれて、世情穩かならざる際、設置せられ、市中巡廻・警衛の任に當りし者。還卒・巡査の前身なり。

しゅん-らい 春雷【名】春の雷鳴。太平記「春雷一たび動く時、蟄蟲萌蘇する心地し」

じゅん-らう 醇醪【名】まじりけなく濃厚なるにごり酒。

しゅん-らん 春嵐【名】春の山氣。

しゅん-らん 春蘭【名】〔植〕蘭科に屬する常綠多年生の草。高さ七八寸、葉は狹くして長く、春、根際より花莖を抽き、莖頭に淡黃綠色にして、六片の花蓋より成る不整齊の一花を著く。山地の樹陰に自生し、又、觀賞用として栽培す。地下莖は藥用となり、花を醃漬とし、櫻湯の如くにして飲用することあり。古來、四君子の一に數へらる。くさらん。はくり。ほくろ。

じゅん-らん 巡覽【名】みめぐること。みまはり。巡見。回覽。

じゅん-り 巡吏【名】『巡回する吏員。』海軍省の造船所に屬して、巡警に從事せし等外吏。明治九年設置、一等乃至四等の階級ありしが、同十七年廢止せられたり。

じゅん-り 循吏【名】循良なる官吏。

じゅん-り 醇醨【名】『酒の濃厚なると淡泊なると。』人情の淳良なると輕浮なると。「し。

じゅん-り 純利【名】**じゅんえき**(純益)に同じ

じゅん-り 純理【名】經驗を交へずして、專ら理論にのみ依ること。

じゅん-りう 春柳【名】春のやなぎ。

じゅん-りう 順流【名】水の地勢にしたがひて流るること、又水の流るるに連れて下りゆくこと。

じゅん-りし 純利子【名】〔經〕『獨 Reinen-Zins』資本の使用料なる利子。(總利子に對して)「と。

しゅん-りつ 恂慄【名】おそれをののくこと。

じゅん-りつ 準率【名】準據すべき割合。

じゅん-りん 純林【名】一種類の樹木のみより成れる林。**單純林**。(混林に對して)

じゅん-りやう 純良【名】純粹にして、善良なること。

じゅん-りやう 循良・順良【名】道理に循ひて、善良なること、又その人。すなほ。

じゅん-りやう 馴良【名】馴れて善良なること。「なること。

じゅん-りやう 淳良【名】淳厚にして善良なること。

じゅん-りろん 純理論【名】〔哲〕『英 Rationalism』『吾人の知識は、感覺のみによりて發生するものにあらず、吾人の先天的に付與せられたる理性の純然たる作用によりて生ずるものにして、理性は知識の淵源なりと主張する說。合理說。主理說。唯理說。理性論。(感覺論に對して)』認識論上、吾人は先天的に合理的なる概念を有し、その他の諸概念はそれより演繹的に抽出し得る者なりとする說。合理說。主理說。唯理說。理性論。(經驗論に對して)**ひはんろん**(批判論)參照。『普通の論理上の規定と研究法とを宗教上の事項に適用して、その正否を決定すべきものとし、吾人の理性を以て、合理的に說明し得ざる者は、妄想なりとして排斥する主義。合理說。主理說。唯理說。理性論。

しゅん-れい 峻嶺【名】けはしきたうげ。

しゅん-れい 峻厲【名】人の性質のするどくはげしきこと。

じゅん-れい 醇醴【名】まじりけなく濃厚なる酒。醇酒。

じゅん-れい 準例【名】標準とすべき例。

じゅん-れい 順禮【名】『國語に「君補二王闕一以順レ禮也」とあり』人が禮儀に從ふこと。『諸方の社寺を禮拜しあるくこと、又その人。「巡禮」著闘「竹生(ブク)島へ參りたりけり。巡禮果てて、今は歸りなんとしける時」平家「瀧口入道を先達にて、堂塔順禮して、奥の院へぞ參られける」』さいこくじゅんれい(西國巡禮)の略。「巡禮」

(三いれんゆじ)

じゅん-れい-すがた 巡禮姿・順禮姿【名】巡禮のいでたち。平假名盛衰記「運ぶ歩の巡禮姿、背に國名をおひずるの」

じゅん-れい-みち 巡禮道・順禮道【名】巡禮すべき道。巡禮してあるく道。

じゅん-れい-やど 巡禮宿・順禮宿【名】巡禮の人を宿泊せしむる木賃宿。「屋。

じゅん-れき 巡歷【名】へめぐること。遍勅して、同院を寺とし、諸國の莊園を寄附せしより、始めて別當を置き、源氏にして公卿の上首たるもの、主に補せられたり。

しゅん-れつ 峻烈【名】きびしくはげしきこと。酷烈。

じゅん-れつ 順列【名】〔數〕『英 Permutation』數多の物の中より或箇數だけ選びて、種種の順序に一列に列ぶること。例へば、a・b・c の中より二箇づつ取りたる順列の數は ab・ba・ac・ca・bc・cb の六種なる類。相異なる n 箇の物より r 箇づつ取りたる順列の數を示すに、通例 nPr を以てす。

じゅん-ろ 峻路【名】けはしき路。

じゅん-ろ 春露【名】春のつゆ。

じゅん-ろ 順路【名】『順序よき路筋。順道。』道理に順ふこと。順道。

じゅん-ろく 馴鹿【名】〔動〕**となかい**(馴鹿)に同じ。

じゅん-わ-しやうがく-りやうゐん-の-べつたう 淳和奬學兩院別當【名】『和は、淳の字の韻に引かれて、ナと發音す』淳和院・奬學院の二つの別當を兼ぬること。兩院は源氏の公卿の第一たるもの宣旨を蒙りて之に補せられ、その人、納言の時は兩院を兼ね、大臣に昇る時は、淳和院別當を源氏の次位のものに讓るを例とせり。中院雅定大臣に昇るに及びて、尙兩院の別當を兼ねしより、子孫之を襲ひ、源氏長者と稱せしが、足利義滿源氏たるの故を以て、兩院別當と稱し、爾後足利歷代の將軍これを襲ひ、德川氏また源氏たるの故を以て、代代兩院の別當を兼ぬるを例とし、恰も將軍特授の官號の觀をなすに至れり。

じゅん-わ-てんわう 淳和天皇【名】〔人〕『和は、淳の字の韻に引かれて、ナと發音す』第五十三代の天皇。御名は大伴、また日本根子天高譲彌遠(カムヤマトネコアメノタカユルヤトホノ)天皇。桓武天皇の第三皇子、御母は贈皇太后藤原旅子(タビコ)。在位十年(紀元一四八四年—一四九三年)。承和七年淳和院に崩ず。御年五十五。西院(サイイ)の帝。

じゅん-わ-ゐん 淳和院【名】『和は、淳の字の韻に引かれて、ナと發音す』淳和天皇の天長年中造營せられたる離宮。平安京四條の北、西大宮の西にありしより西院とも稱す。貞觀中火災に罹りて燒失し、元慶中勅して、同院を寺とし、諸國の莊園を寄附せしより、始めて別當を置き、源氏にして公卿の上首たるもの、主に補せられたり。

じゅん-ゐ 閏位【名】『閏は閏月の義より轉じて、剩餘の意に用ふ』正統にあらざる天子の位。

じゅん-ゐ 順位【名】『順序を追ひたる地位。』〔法〕民法上、權利者の地位を占むべき順序。

じゅんゐ 准尉【名】大正八年に設けられたる陸軍の少尉相當官。陸軍各兵科の特務曹長の年功者中より選抜し、士官學校に於て、短期の教育を經て任ぜられたるもの。同九年廢せらる。

じゅんゐんけ 准院家【名】院家に准ぜらるる資格の寺院。例へば聖光院の類。

じゅんゑ 俊恵【名】〔人〕歌僧。源俊頼の子。京都の人。歌學に長じ、歌苑鈔を著す。鴨長明はその門人なり。

しゅんをく 春屋【名】〔人〕■めうほ(妙葩)を見よ。■そうゑん(宗圓)を見よ。

しゅーめ 主馬【名】しゅめれう(主馬寮)の略。

しゅーめい 主命【名】主人の命令。しゅうめい。君のいひつけ。

しゅーめい 朱明【名】『樂雅に「夏爲二朱明一」とありて、註に「氣赤而光明」と見ゆ』しゅか(朱夏)に同じ。(立夏・青陽・白龍に對して)

じゅーめい 受命【名】■命令を受くること。■天命を受くること。「受命創制の君主」

じゅめいーさいばんくわん 受命裁判官【名】〔法〕合議裁判所の部員たる裁判官が、その裁判所の指命により、單獨に特定の訴訟行爲をなす時の稱。

じゅめいーしんばんくわん 受命審判官【名】〔法〕海員審判所の審判官が、審判長より下調の命を受けて、證據調訊問等をなす時の稱。

じゅめいーはんじ 受命判事【名】〔法〕特に、一定の事項に就きて、裁判所より調査を命ぜられたる判事。

しゅめいーもん 修明門【名】內裏外郭七門の一。內裏の南、建禮門の右にあり。うまのぢん。すめいもん。

しゅめいーもんゐん 修明門院【名】〔人〕すめいもんゐん(修明門院)に同じ。

しゅめーしょ 主馬署【名】古、春宮(トウグ)坊に屬し、首(カミ)・令史(サカン)・馬部(ブ)・使部・直丁(ヂヤウ)の職員ありて、東宮の御馬の事を掌りし役所。首は、後世、馬寮(メリヤウ)の助に兼任せしめ又は重代の侍を任ずる例となりたり。しゅめのつかさ。「官。

しゅめーのーかみ 主馬頭【名】主馬寮の長官(主馬署)に同じ。

しゅめーのーつかさ 主馬署【名】しゅめしょ(主馬署)に同じ。

しゅめーのーはうぐわん 主馬判官【名】主馬署の判官。平家「主馬判官盛國」

しゅめーれう 主馬寮【名】■宮內省の舊制度における諸寮の一。頭(カミ)・勅任・權頭(ゴンノカミ)・助(スケ)・權助(ゴンノスケ)・以上奏任)・屬・御者・馬醫の職員ありて、馬匹の調習・飼養・車駕及び乘具の事を掌りし所。明治十九年設置。權頭は頭無き時、權助は助無き時に置かれしもの。■宮內省の一部局。頭(カミ)・勅任・主事・車馬監・調馬師・馬醫師(以上奏任)・馬醫(判任)・技師(奏任)・技手(判任)・調馬手(奏任)・馭手(奏任)・掌車・蹄鐵工長(以上准判任)の職員ありて、馬匹・車輛及び牧場に關する事務を掌る。

しゅーも 主喪【名】葬儀の主任。

しゅーもく 種目【名】種種の名目。

しゅーもく 撞木【名】■たたきがねを叩くもの。木にて作り、丁字形をなす。かねたたき。■釣鐘を撞く棒。

じゅーもく 樹木【名】たちき。き。

しゅもくーがた 撞木形【名】撞木の如き形。丁字形。

しゅもくーがひ 撞木貝・丁字貝【名】〔動〕斧足(フヅ)類に屬する軟體動物。介殼は、丁字形をなし、外面は灰白色又は黑色、內面は白色。內海に產す。

しゅもくーざめ 撞木鮫・雙髻鮫・梨頭魚【名】〔動〕鮫の一種。全身灰色にして、形極めて大きく、長さ二三丈に達し、頭部撞木狀をなす。その兩端に眼あり。春鰆は二基に分れ、前部のは小さく、後部のは小さし。八九月頃胎生し、一胎よく三四十尾を產む。分布廣く、暖海に產す。かせぶか。しゅもくぶか。しもくざめ。

（めざくもゆし）

しゅもくーしだ 撞木羊齒【名】〔植〕水龍骨(ノキシノブ)科に屬する多年生の草。山地に自生し、葉は地下の根莖より叢生し、短くして、一回羽狀複葉をなし、葉脚に近き部分に、左右各一小枝を分ち、同じく一回羽狀複葉をなす。じふもんじしだ。

しゅもくーぞり 撞木反【名】相撲(スマヒ)の手の一。雙方立上るや、相手の手先を取りながら、首を脇に入れて胸に附け、片手にて、高股を內より掬ひて、後へそり返すこと。じふもんじだすき。

しゅもくーづゑ 撞木杖【名】頭の撞木の形をなしたる杖。かせづゑ。

しゅもくーぶか 撞木鱶【名】〔動〕しゅもくざめ(撞木鮫)に同じ。

じゅもくーやく 樹木役【名】樹木に課する賦役。

しゅーもつ 腫物【名】腫瘍又は炎症のために、身體の一部に發生して、潮紅・膿脹・熱・痛等を伴ひ、膿を含めるもの。はれもの。できもの。おでき。「理。

しゅーもん 手紋【名】手のひらのあや。手

しゅーもん 朱門【名】■朱にて塗りたる門。■しゅもん(朱扉)に同じ。

しゅーもん 守門【名】門を守ること。

じゅーもん 儒門【名】儒者の家。

じゅーもん 呪文・咒文【名】まじなひに唱ふる文句。

じゅーもん 誦文【名】呪文を讀誦すること。枕草紙「鼻ひて、誦文する人」

しゅもんーてん 守門天【名】〔佛〕寺院の守護として、その門に安置する持國天と增長天と。この二天は、共に四天王に屬し、持國天は東方の天にして、東は四方の最初に呼ばるるより、四天王を代表せしめ、增長天は南方の天なれば、吾人の住する世界なる南洲守護の意にて置くといふ。

しゅーやう 腫瘍【名】〔醫〕身體の生育に不要なる、異常なる新生增殖物。組織は健康部のと同一なることあり、同一ならざることあり、また癌腫・肉腫のごとく、患者の生命に關する惡性のものと、ただその增大のために、周圍の組織壓迫せらるるに止まり、外科的に除去すれば、多くは再發せざる善性のものとあり。

しゅやう-ざん 首陽山【名】〔地〕支那山西省蒲洲府の府城の南三十淸里にある山。伯夷・叔齊の隱れしによりて有名なり。雪女五枚羽子板「章甫の冠を香に屈かれんより、首陽山に蕨餅を練り、汨羅に沈んで、江魚の腹中に葬れんには如かじ」

しゅやう-ぢやう 種羊場【名】緬羊(メンヤウ)の飼養・蕃殖を掌る官衙(クワンガ)。北海道空知(ソラチ)郡瀧川町に在り。場長・技師・技手の職員を置く。

しゅーやく 主藥【名】〔醫〕『獨 Hauptmittel』各種の調劑中、主たる効果を現すべき成分。

しゅーやく 主鑰【名】內藏寮の職員の一。寮の物品の出納(スヰタウ)を掌りしもの。大主鑰・少主鑰の二等に分れたり。「る者。

しゅーやくしや 受約者【名】契約に應じたる者。

しゅやーじん 守夜神【名】〔佛〕『梵 Yasuta-yaruti(婆珊婆演底)の譯語』佛陀守護の神。俗に夜間を守る神とし、惡夢の禁厭(マジナヒ)に效ありといふ。

しゅーやり 朱槍【名】柄を朱塗にせる槍。醒睡笑「二間半柄の朱槍二十本ばかり持ちたる中間(チウゲン)どもの」

しゅーゆ 茱萸【名】〔植〕さんしゅゆ(山茱萸)。

ごしゅゆ 吳茱萸【名】などの總稱。

しゅーゆ 須臾【副】少しの間。しばらく。しばし。暫時。

しゅゆーちや 茱萸茶【名】支那にて、重陽の節に茱萸(ゲ)を佩び、菊花の酒を飲む古俗あるより、禪林これに倣ひて、酒の代りに飲む茶。ぐみやち。

じゅゆーど 受用土【名】〔佛〕『報身如來の受用したまふ淨土なりとていふ』ほうど(報土)に同じ。

しゅーよ 手輿【名】たこし(手輿)に同じ。

じゅーよ 入輿【名】貴人の嫁入。こしいれ。

じゅーよ 授與【名】授け與ふること。

しゅーよう 主用【名】■主人の用事。しゅうよう。■主要なる用事。

じゅーよう 需用【名】じゅえう(需要)に同じ。

しゅようーし 主鷹司【名】古、兵部省に屬

し、正(カミ)・令史(リヤウシ)及び使部・直丁(ヂキテイ)の職員ありて、鷹犬を調習し、遊獵に供することを掌りし役所。鷹戸若干これに附屬したり。天平寶字八年に一旦廢止、延曆十五年に再び設置、貞觀以後は、藏人所(クラウドドコロ)にて、その職掌を扱ふこととなれり。

しゆ-よく 手浴【名】〔醫〕一部浴の一。手部のみ浸し浴するもの。これに冷手浴・温手浴の二種あり。(座浴・足浴等に對して)

じゆよ-けいさん 授與計算【名】〔商〕外國爲替の仕拂に於て、外國の貨幣を以て計算すること。

しゆら 修羅【名】■〔佛〕あしゆら(阿修羅)の略。太平記「修羅、帝釋(タイシヤク)の軍に負けて、藕花(グウケ)の穴に身を隱し」謠曲(盤)「執心却來の修羅の妄執、去っていく(行く)生く(生)田の名にしおへり」■しゆらぐるま(修羅車)の略。■石を載する船。ひらた。四森林にて伐採したる木材を搬出するに、數本の丸太を並べて、半月形の溝路を作り、これを接續延長して、木材の自重により、滑り落つるやうにする裝置。五しゆらば(修羅場)の略。

しゆら-とう 修羅闘爭【句】〔佛〕■阿修羅族が互に闘戰して血を流すこと。■悲慘なる戰闘の狀を、修羅の戰場に譬へていふ語。

しゆら-の-いくさ 修羅の軍(イクサ)【句】〔佛〕阿修羅王の帝釋(タイシヤク)天と合戰する軍兵。

しゆら-の-そら 修羅の蒼(ソラ)【句】〔佛〕しゆらばう(修羅場)に同じ。

しゆら-あふぎ 修羅扇【名】『阿修羅王、手にて、日輪を覆へりといふ故事に本づきていふとぞ』日の丸と月の丸とを畫きし扇。

しゆら-い 修禮【名】儀式の下稽古。

しゆら-い 集禮【名】諸雜禮。雜用。勘定。〔元祿頃の大阪の語〕「役。

しゆら-い 主禮【名】弔問の使を接待すること。

しゆら-い 周禮【名】〔書〕支那周代の官制を記したるもの。古くは周官といひ、漢の劉歆(キウキン)に至りて、始めて周禮と稱す。周公旦の制作と傳ふれども信ずべからず。秦の焚書の後、漢の文帝の時に至り、之を獲たれども、冬官一篇を缺く、即ち考工記を以て、補ひて、六篇とす。しうらい。

じゆ-らい 入來【名】來り訪ふことの敬語。おいり。おいで。光來。

しゆらい-ごみ 集禮込【名】集禮をこめたること。集禮ぐるみ。眞實伊勢物語「かくれもなき姉妹のしやれもの、どちらなりともお目つき次第に、泊は集禮ごみに五百づつといふ」

しゆらい-せん 集禮錢【名】諸色の代金。

しゆら-いた 修羅板【名】船筏を造るために、小船を幾艘も并べて、その上に敷く板。

しゆ-らう 朱廊【名】朱にて塗りたる廊。

じゆ-らう 壽老【名】壽命の長きこと、又その人。ながいき。

じゆ-らう 入牢【名】牢屋に入ること。ふるう。入獄。

じゆ-らうじん 壽老人【名】長壽を授くる神。長頭の老人の杖を携へ、玄鹿を伴へる像とす。福祿壽と同體異名の神にして、古くは福祿壽ありて、この神なしともいひ、また福祿壽の像を長頭に作るは、この神のを誤れるなりともいふ。

しゆら-かい 修羅界【名】〔佛〕しゆらだう(修羅道)に同じ。

じゆら-き 侏羅紀【名】〔地〕『英 Jurassic period この時代に生じたる地層は、佛蘭西とスヰスとの境なるジュラ(Jura)山脈の露出につきて研究せられしによりて名づく』地質時代中、中世代の中部なる一時期。三疊紀の上、白堊紀の下に位す。じゆらけい(侏羅系)參照。

じゆ-らく 壽樂【名】長壽と安樂と。

じゆ-らく 入洛【名】貴人の都に入ること。京都入。みやこいり。「じ。

じゆらく-どころ 聚樂御所【名】次條に同じ。

じゆらく-だい 聚樂第【名】豐臣秀吉が、京都の、東は大宮通より、西は千本通(センボンドホリ)まで、北は一條より、南は二條までの間の地に營みし第宅。天正十四年春より著手して、同十五年九月落成、秀吉大阪より移り住み、同十六年四月後陽成天皇の行幸あり。秀次關白職を襲ぐと同時に、又ここに住み、その自刃の後廢毀す。聚樂御所。

しゆら-くつ 修羅窟【名】〔佛〕阿修羅王の住める石窟。或は海岸・海底或は深山・幽谷に在りといひ、淸辯菩薩は安達羅國の修羅窟に入りて、彌勒(ミロク)の出世を待つと傳へらる。阿修羅宮。しやうべん(淸辯)參照。太平記「淸辯菩薩は、靑山の岩を劈き、修羅窟に入りたまひけり」に同じ。

じゆらく-やき 聚樂燒【名】らくやき(樂燒)

しゆら-ぐるま 修羅車【名】『阿修羅王の帝釋(タイシヤク)と戰ひて、これを動かしきといふより、大石・大木などを運搬する車。

じゆら-けい 侏羅系【名】〔地〕『英 Jurassic system じゆら(侏羅紀)を見よ』地質系統の一。地質時代中の侏羅紀の生成に係る地層の總稱。岩石は石灰石・砂岩・泥板岩等、植物は松柏科・蘇鐵科・羊齒(シダ)科の物多く、動物は珊瑚・軟體動物・[illegible]始祖鳥もこの系統中に始まる。「じ。

しゆら-しゆ 修羅趣【名】〔佛〕次條に同じ。

しゆら-だう 修羅道【名】〔佛〕六道の一。阿修羅族の居る世界。鬪諍を事とすといふ。修羅趣、また十界の一としては、修羅界といふ。太平記「或は餓鬼道の苦を生きながら受け、或は修羅道の奴と死せざる前になりぬらん、と歎かぬ人はなかりけり」

しゆら-おやう 修羅場【名】〔佛〕■阿修羅王の帝釋(タイシヤク)天と合戰する場所。■多人數の爭鬪する悲慘なる場所。修羅の巷(チマタ)。しゆらば。

しゆら-てたち 修羅出立【名】死して修羅道へ行かんとする身仕度。籠城反魂香「思ふ願が叶はずば、西所河原か舟岡へ直ぐに飛ばうと思ふ氣で、私がための修羅出立」

しゆらば 修羅場【名】■〔佛〕しゆらぢやう(修羅場)に同じ。■芝居又は講釋などにて、戰鬪或は烈しき鬪爭の場面。あれば。

しゆ-らん 酒亂【名】酒に醉ひて、荒れ狂ふこと。さかきちがひ。さかぐるひ。酒狂。

しゆ-らん 朱欄【名】朱塗の欄干。

しゆ-らん 朱蘭【名】〔植〕しゆん(紫蘭)に同じ。

しゆり 修理【名】■しうぜん(修繕)に同じ。著聞「堂を修理しけるに」■しゆりしき(修理職)の略。雙生隅田川「木工・修理の兩棟梁、大紋の露結びあげ」

しゆ-り 手裡【名】手理【名】しゆらん(手紋)に同じ。

しゆ-り 主吏【名】おもなる官吏。

しゆ-り 主理【名】■陸軍裁判所及び海軍裁判所の職員として、今の陸軍軍法會議における主理と同樣の事を掌りしもの。大・中・少の三等に分れたり。陸・海軍ともに明治五年に設置、同十五年に廢止せられたり。■海軍軍法會議の一員として、事件の審査をなし、及び會議に列りて、その意見書の趣意を說明し、判決書に署名捺印(イン)するを主なる職務とする奏任文官。

しゆり 侏離【名】『後漢書の南蠻傳に「語言侏離」とありて、註に「侏離蠻夷語聲」とあり』野蠻人の語聲を形容していふ語。言語を異にして、意味通ぜざること。

しゆり 首里【名】〔地〕琉球沖繩島にある區。那覇區の東一里半弱にあり。もと琉球王尙氏の城地にて、第六師團分營あり。

じゆり 賢吏【名】小役人。胥吏。

じゆり 受理【名】受附けて處理すること。

しゆり-うきゆうじやう 修理右宮城使【名】しゆりばうじやう(修理坊城使)を見よ。

しゆり-うばうじやう 修理右坊城使【名】しゆりばうじやう(修理坊城使)を見よ。

しゆり-きゆうじやう 修理宮城使【名】しゆりばうじやう(修理坊城使)を見よ。

しゆりえんな (梵 Suddhi-pāritāka)【名】〔佛〕『妙乘と譯す』ぶつけう(佛敎)の美稱。

しゆり-けん 手裏劍【名】手にて敵に投げつくる、長さ一尺前後の刀。穗先を我が方に向け、柄の方を敵に向けて、掌中に置き、拇指にて鎬(シノギ)を押へ、敵を目がけて擲てば、穗先飜り飛びて、敵を刺す。

しゆり-さきゆうじやう 修理左宮城使

【名】しゆりばうじやう(修理坊城使)を見よ。

しゆりさばうじやう-し 修理左坊城使【名】しゆりばうじやう(修理坊城使)を見よ。

しゆりしき 修理職【名】古、大夫(タイフ)・權大夫亮(ゲン)・大少進(ショウ)・屬(サクワン)・史生(シヤウジ)・算師の職員ありて、宮城等の營繕を掌りし役所。令外(リヤウゲ)の官なり。をさめつくるつかさ。

しゆりせつ 主理說【名】〔哲〕じゆんりろん(純理論)に同じ。

じゆりつ 樹立【名】■眞直に立つこと。眞直に立つること。■心定りて、世に立つこと。意志の確乎たること。■君主をもり立つること。「長官。」

しゆりのだいぶ 修理大夫【名】修理職の長官。

しゆりばうじやう-し 修理坊城使【名】王朝時代に、修理職以外に設置せられ、宮城の外郭左右の防城を修理することを掌りし令外(リヤウゲ)の役所。修理左坊城使と修理右坊城使とに分れ、各、長官一人、判官一人、主典等の職員を置く。仁壽二年木工(モク)寮に併せられしが、貞觀十五年舊に復し、延久三年更に修理宮城設置ありて、同じく左右に分れ、修理坊城使に准ぜしめられ、爾來、修理職の補助となりたり。

しゆりはんざく 周利槃特(梵Suddli-panthaka又Culla-pathaka)【名】〔人〕『淨路邊生又は小路と譯す』古の印度の僧。釋迦の弟子の中にて、第一の魯鈍者なりしが、忽然大悟して、阿羅漢果を得、後世、十六羅漢及び五百羅漢の一に列す。方丈記『住家(カ)は淨名居士の跡をけがせりといへども、持(モ)つ所はわづかに周利槃特が行にだに及ばず』

しゆりべつたう 修理別當【名】熊野・石清水(イハシミ)等の大社に在りて、神社の修理を專務とする社僧。

しゆりん 朱輪【名】朱塗の輪。

しゆりん 殊倫【名】■なみはづれてすぐれたること。■類を異にすること。

じゆりん 儒林【名】儒者の仲間。「名。

じゆりん-らう 儒林郎【名】正九位上の唐

しゆりやう 首領【名】■首(ビ)と領(エ)と。くび。■一團隊をなせる人人の中のかしら。おほあたま。領袖。頭首。頭目。〔主領〕

謠曲〈蝉丸〉「天狗の首領」

首領を保つ【句】『左傳の隱公三年の條に「若以二天夫之靈一得下保二首領一以沒上とあり』首を斬られずに濟む。

しゆりやう 銖鋼【名】■はかり目の銖、即ち二分五厘と鋼即ち二十四銖と。■些細なる量。錙銖。

しゆりやう 酒量【名】飲酒の分量。飲量。

じゆりやう 受領【名】■受けをさむること。■『國司の交替の際、國守が國衙の吏務を受領する義』古、地方諸國の政務を總掌せし者。諸國の長官。主としては守(カミ)なれども、守が遙任なる場合には、權守(ゴンノカミ)また大介(スケ)をもいふ。親王を國守として、太守と稱する上總・上野・常陸の三國の介(スケ)をもいひ、又それらの官職に任ぜらるることをもいへり。ずりやう。ずらう。盛衰記『子息仲綱受領して、伊豆國知行し、丹波には五箇の庄給はりて』

受領の擧(キヨ)【句】古、縣召除目(アガタメシノジモク)の時、公卿をして、諸國受領の人を推擧せしめしこと。公卿の擧。建武年中行事「受領の擧あり」

じゆりやう 鷲嶺【名】〔地〕りやうじゆせん(靈鷲山)に同じ。著聞『釋迦如來天竺に出でたまひけり。鷲嶺に月隱れ、鶴林に烟盡きて、一千四百八十年に當りて』

じゆりやう-しや 受領者【名】受領せる人。じゆりやうにん。

じゆりやう-しよ 受領書【名】次條に同じ。

じゆりやう-しよう 受領證【名】受領せる證據の書付。受領書。受領證書。

じゆりやう-しやうしよ 受領證書【名】前條に同じ。

じゆりやう-しやうへう 受領證票【名】受領せる證據として交付する證票。

じゆりやう-しよく 受領職【名】『じゆりやう(受領)(二)を見よ』德川時代に、官の許を得て、肥後守武藏守もしくは略して肥後・武藏などの名目を、自己の稱呼として用ひしこと。長町女腹切「下立賃(シヂチン)を堀河へ引廻したる角(カド)屋敷、刀屋石見何某とて、諸役御免の受領職」

じゆりやう-にん 受領人【名】じゆりやうしや(受領者)に同じ。

じゆりやう-ぼん 壽量品【名】〔書〕詳しくは「如來壽量品」といふ。法華經二十八品中の第十六品。釋迦如來の、久遠(ウヲン)の昔すでに成佛して、その壽量無數無量不可思議なるを說く。これを開迹(カイジヤク)顯本と稱し、一經中ここに始めて八相成道の垂迹(スヰジヤク)の化身(ケシン)を開きて、久遠實成(ジツジヤウ)の本身を顯せるなり。しよれつは勝劣派參照。太平記『六の卷の紐を解きて、壽量品を讀み』「に同じ。

じゆりやす-れき ジユリヤス曆【名】次條(英Julian calendar)【名】太陽曆の一。羅馬のジユリヤス・シイザア(Gaius Caesar)が命じて作らしめし曆。即ち平年を三百六十五日とし、四年目ごとに一日を加へて、閏年とするもの。グレゴリイ曆に後ること十二日、現時、希臘・露西亞の兩國にて採用せり。けぢざる曆。じゆりやす曆。

じゆりやん-れき ジユリヤン曆

しゆりよ 首虜【名】敵の首と捕虜と。

しゆりようごん-きやう 首楞嚴經【名】〔書〕『首楞嚴は梵Śūraṅgama(新譯には首楞伽摩と記す)健相・健行・一切事竟と譯し、佛所得の三昧をいふ』詳しくは「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」といふ。唐の般剌密帝の譯。十卷。祕密部に屬す。徒然『首楞嚴經を講じて那蘭陀寺と號す』

しゆりようごん-ゐん 首楞嚴院【名】比叡山横川(ヨカハ)にある寺院。「る力。

しゆりよく 主力【名】おもなる力。中樞な

しゆりよく 酒力【名】酒に醉ひて、豪氣の生ずること。

しゆりよく 朱綠【名】朱と綠と。

じゆりよく 呪力・咒力【名】まじなひの力。太平記『呪力を以て、水瓶の中に龍(リヨ)を籠めて』「(純理論)に同じ。

しゆり-ろん 主理論【名】〔哲〕じゆんりろん

しゆるゐ 種類【名】たぐひ。しな。種屬。

しゆるゐ 殊類【名】特殊なる種類。

しゆるゐ-にふぜい 酒類移入稅【名】臺灣の地方稅たる營業稅の一。販賣の目的を以て、內地より移入したる酒類に、石數に應じて課する月稅。

しゆるゐ-がいねん 種類概念【名】〔哲〕個體概念の綜合によりてなれる概念。例へば、机・本箱・椅子等を含める家具なる概念の如し。この概念は多くの經驗を重ね、事物に對して、種種の判斷を下す間に、自然に形作らる。(個體概念に對して)

しゆるゐ-さいむ 種類債務【名】〔法〕債務の目的物が、種類のみを以て指示せられたる債務。例へば米百俵といひて、いづれの米なるかを定めざる類。不特定物の債務。

しゆるゐ-ざうこくぜい 酒類造石稅【名】酒造稅則施行前、即ち明治二十九年まで北海道に行はれし稅。造酒の石高に應じて納めたるもの。

しゆるゐ-せいざうしや 酒類製造者【名】酒類製造の免許を受けし者。

しゆれい 主鈴【名】古、中務(ナカツカサ)省に屬し、少納言の命令を受けて、鈴印・傳符・飛驛の函鈴などを出納することを掌りし役。大主鈴・少主鈴の二等に分れたり。すずのつかさ。

しゆれい 守令【名】郡守と縣令と。

しゆれい 酒令【名】酒客が興に設くる、飲酒上の規則。

しゆれい 酒禮【名】酒宴の儀を整ふること。

しゆれい 酒醴【名】酒とあまざけと。

じゆれい 壽齡【名】ながいき。長命。

しゆれう 衆寮【名】寺にて、所化(ショケ)どもの居る部屋。奥の細道「秋風を聞きて衆寮に臥せば、曙の空近う讀經の聞ゆるままに」

しゆれふ 狩獵【名】鳥獸を獵すること。かり。

しゆれふ-きよく 主獵局【名】しゆれふきよく(主獵寮)の舊稱。

しゆれふきよく-ちやう 主獵局長【名】主獵局の長官、即ち現時の主獵頭(カミ)に當るもの。

しゆれふくわん 主獵官【名】主獵寮に屬

して、狩獵のことを掌る高等官。

しゆれふけん 狩獵權【名】〔法〕狩獵免狀を受けたる者の狩獵をなし得る權利。

しゆれふ-じだい 狩獵時代【名】〔經〕ぎよれふじだい(漁獵時代)に同じ。

しゆれふの-かみ 主獵頭【名】主獵寮の長官。勅任官とす。

しゆれふはふ 狩獵法【名】獵具獵法狩獵免許鳥獸保護及び罰則等を規定せる法律。

しゆれふ-めんきよぜい 狩獵免許稅【名】狩獵免狀を受くる者の納むべき免許稅。本人及びその家族の所得稅・地租・營業稅等の多少に依りて、三等に區別せらる。

しゆれふ-めんじやう 狩獵免狀【名】狩獵の免許狀。本人の出願に對し、地方長官下付す。甲乙兩種に分たれ、前者は銃器を使用せざる者、後者はこれを使用する者に下付す。銃獵免狀。

しゆれふ-れう 主獵寮【名】宮內省の一部局。頭(かみ)・主事・主獵官・獵場監守長・獵場監守・廳匠長等の職員ありて、狩獵及び獵場に關する事務を掌る所。舊稱、主獵局、又その長官を主獵局長といへり。

しゆ-れん 珠簾【名】■珠玉にて飾りたるすだれ。玉簾。■すだれ(簾)の美稱。

しゆ-れん 手練【名】業に手馴れて、巧みなること。練磨のてきは。

しゆ-れん 修練【名】しうれん(修練)に同じ。

しゆ-れん 酒筥【名】酒店の目じるしの旗。酒旗。

しゆ-ろ 手爐【名】てあぶり。手香爐。袖香爐。

しゆ-ろ 朱鷺【名】〔動〕とき(朱鷺)に同じ。

しゆ-ろ 棧櫚・棕櫚・棕梠【名】■〔植〕棧櫚科に屬する常綠喬木。高さ三四丈に達し、幹は直にして枝なく、葉は掌狀に分裂して、幹頭に叢生す。葉柄の本に、毛を纖りたるが如き纖(ク)圍繞して生ず。春の末、葉間に黃ばみたる苞出でて、穗狀の花を開く。材は床柱・欄干等に用ひて雅致あり。纖はよく水濕に堪へ、編みて繩・靴拭とすべく、刷毛(ハ)・篩の料にも供すべし。和名「棧櫚、一名、蒲葵、俗云、種魯」■紋所の一。棕櫚の葉の開きたる形、又はその一半を抱かはせたるものなど種種あり。「じ。

しゆ-ろろ 鐘樓【名】しようろう(鐘樓)に同じ。

しゆ-ろろ 酒樓【名】料理茶屋。料理屋。

しゆ-ろろ 朱樓【名】赤く塗りたる樓。太平記「朱樓紫殿」「る樓。

じゆ-ろろ 戍樓【名】警衞のために設置せる樓。

しゆろうだう 鐘樓堂【名】『樓といひ、又堂といふは、實は重言なり』しゆろう(鐘樓)に同じ。水鏡「元興寺の鐘樓堂より、鬼ありて、夜ごとに、鐘撞く人を食殺しぬ」

しゆ-ろ-がさ 棧櫚笠・棕櫚笠【名】晒したる棕櫚の葉にて編み造りたる笠。元祿の頃、薩摩國より産す。

しゆろ-くわ 棧櫚科・棕櫚科【名】〔植〕顯花植物被子類單子葉門の一科。棧櫚・棧櫚竹・蒲葵(ウチワ)・籐(カヅラ)・檳榔子・椰子などこれに屬し、主として熱帶に生ず。椰子樹科。

しゆろ-さう 棧櫚草・棕櫚草・藜蘆【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。山林の陰地に自生す。春、宿根より苗生じて、深綠色にして、縱に皺多き葉數箇叢生するさま、棧櫚に似、初夏、披針形の小葉互生し、紫黑色にして、六片の花蓋より成る小花、密綴して開く。有毒なれど、少量を用ふれば、溜飮などに効ありといふ。しころさう。しにあし。ししのくびき。ししのくびくさ。ししのくびのき。

しゆろ-ちく 棧櫚竹・棕櫚竹・棧竹・實竹【名】〔植〕棕櫚科に屬する常綠灌木。高さ一丈許に達し、株をなして叢生す。觀賞用に栽培せらるるものは高さ二三尺に過ぎず。葉は棕櫚に似たれども、裂片少なく、花實莖ともほぼ棕櫚に似たり。春夏の候、淡黃色の花を開く。もと暖地の產なり。

しゆろなは 棕櫚繩・棕櫚繩【名】棕櫚の毛にて綯(ナ)ひたる繩。

しゆろばうき 棕櫚箒・棕櫚帚【名】棕櫚の毛にて造りたる箒。

じゆわき 受話器【名】『英 telephone receiver』電話機の一部。電話を聽取る裝置。磁石を纏き銅線にて捲きたる線。通話者よりの電氣來りて輪に感ずるや、これに應せる振動板に微動を起し、原音波に相當する音聲聞ゆ。種類多し。(送話器に對して)

しゆ-わん 朱椀【名】朱ぬりの椀。

しゆ-わん 手腕【名】■かひな。うで。■「伎倆。うでまへ。技倆。

しゆわん-か 手腕家【名】腕まへのある人。

しゆ-ゐ 思惟【名】しゐ(思惟)に同じ。

しゆ-ゐ 主位【名】主たる位置。

しゆ-ゐ 首位【名】第一の位。第一の位置。

じゆ-ゐ 受遺【名】遺產又は遺物を受くること。遺贈を受くること。

しゆ-ゐき 殊域【名】外國。異域。

しゆゐ-くわんねん 主位觀念【名】〔哲〕ていくわんねん(固定觀念)に同じ。

じゆゐ-しや 受遺者【名】遺贈を受くる人。

じゆゐん 入院【名】〔佛〕しんざんしき(晉山式)に同じ。にふゐん(入院)參照。

しゆゐ 集會【名】しふくわい(集會)に同じ。諺曲(鐘引)「當寺の鐘供りに小さく候程に、今日集會をなし、鐘を大きに鑄させばやと存候」「る智慧。

しゆゐ 修慧【名】〔佛〕禪定を修めて得た智慧。

しゆゐ 衆會【名】衆徒の集會すること。諺曲(忠信)「衆會の御座敷とも存ぜず候ふ」

しゆゐ 守衛【名】■まもり。警固。■貴族院事務局又は衆議院事務局に屬し、守衛長・守衛番長の指揮の下に、院內の取締に從事する判任官。「じ。

じゆゐ-い 戍衛【名】ゑいじゆ(衞戍)[二]に同

しゆゐい-ちやう 守衛長【名】貴族院事務局又は衆議院事務局の職員。守衛番長以下を指揮して、院事の取締に任ずる判任官。

しゆゐい-ばんちやう 守衛番長【名】貴族院事務局又は衆議院事務局の職員。守衛長を助けて、守衛を指揮し、また守衛長事故ある時、その代理を勤むる判任官。

しゆゐ-しよ 集衛所【名】〔佛〕人人の集會する所。

しゆ-ゐん 主園【名】所有の莊園。平家「日本國に、平家の主園ならぬ所やある」

しゆ-をう 主翁【名】主人のおきな。

しゆ-をく 朱屋【名】■朱塗の家屋。■富貴の家の形容。朱門。(白屋に對して)

しゆ-をしき 朱折敷【名】朱塗の折敷。文武五人男「朱椀朱折敷、皆公平といふべきか」

しよ 書【名】■文字を書くこと。書法。習字。「書を學ぶ」■文字を書きたるもの。手跡。筆蹟。「書・書」■ふみ。ほん。書物。「多く書を藏す」■てがみ。書翰。■「書」しよきやう(書經)の略。「詩・書・禮・樂」

書は言を盡さず【句】『易經の繫辭上傳に「書不レ盡レ言、言不レ盡レ意」とあるに本づく』文字にては、十分に人の言をあらはすこと能はず。〔諺語〕

書は姓名を記すに足る【句】『史記の項羽本紀に「少時學レ書不レ成、去學レ劍、又不レ成、項梁怒レ之、籍曰、書足三以記二名姓一而已、劍一人敵、不レ足レ學」とあるに本づく』文字は我が姓名を書き得ればよし。〔諺語〕

書を學ぶは急流を泝(サカ)るが如し【句】『蘇軾の語に「學レ書如レ泝二急流一、用レ盡氣力不レ離二舊處一」とあるに本づく』習字の稽古の油斷すべからざる譬。

書を讀んで羊を亡(ナク)ふ【句】『「亡羊の嘆」を見よ』心の外界に馳せて、道念を失ふ譬。

書を信ずれば、書なきに如かず【句】『孟子の盡心下篇に「盡信レ書則不レ如レ無レ書、吾於二武成一取二二三策一而已矣」とあり。武成は書經の篇名にて、原文の「書」は書經の意なれども、普通には「一般の書籍の義として用ふ』書籍中の文辭にのみ囚はれ、その皮相をのみ讀みて、眞意を究むることなく、悉く妄信するは、弊害あり。〔諺語〕

書を學ぶは急流を泝るが如し

腹中の書を曝す【句】『世說の排調篇に出づ』支那晉の郝隆(カクリウ)、七月七日富家にて、衣帛を曝せるを見、屋外に出でて、日下に仰臥せしかば、人その故を問ひしに、我が腹中の書を曝すなりと答へし故事。

しよ 暑【名】■夏の暑きこと。暑熱。炎暑。■夏の極めて暑き頃。二十四節の一なる

小暑・大暑各十五日づつの總稱。小暑になるを、暑に入るといひ、大暑の終るを、暑が明くといふ。(寒に對して) ㊁夏の土用の十八日間。

しよ杵 【名】〔佛〕こんがうしよ(金剛杵)に同じ。 太平記「一人の金剛力士、杵を以て、この山を微塵のごとく打碎く」

金剛の杵 【句】〔佛〕こんがうしよ(金剛杵)に同じ。 太平記「那羅延が力にても動かしがたく、金剛の杵も、碎きがよくぞ見えたりける」

しよ署 【名】㊀役所。官署。公衙。 ㊁書きしるすこと。署名すること。

しよ緒 【名】絲のこぐち。いとぐち。

しよ緒に就く 【句】やや成立しかかる。「事業、漸く緒に就く」 【別】

しよ庶 【名】めかけばら。庶子。「嫡庶の」と。

しよ施與 【名】せよ(施與)に同じ。

しよ賜予 【名】たまふこと。たまはること。

しよ詩餘 【名】〔文〕『詩の附屬物の義。當時、詩に比して、文學上の餘技と見做されしによりて、この名あり』支那の歌曲の一。漢代の樂府(ガフ)より出で、唐代絕句の一變したるもの。元代には、雜劇・傳奇の中にこれを用ひ、曲中の主客共にその意中を言顯すにこれを以てし、音聲の美と節奏の巧とによりて、觀客の耳を喜ばしむるに至れり。一句の字數は長短一ならざれども、用字に平仄(ヒヤウソク)あるは、詩に異ならず。詞(シ)。塡詞。

しよ杵 【助數】鐘を撞きならす數を表はす語。「一杵の鐘聲」

しよ初 【接頭】物事のはじめなる意。「初學」「初緣」

しよ所 【接頭】云云する所の事の意。「所感」「所爲」「所藏」

しよ諸 【接頭】もろもろのといふ意。「諸國」「諸官省」

しよ諸 【接尾】漢字に添へて、貌詞を作るに用ふる語。「忽諸」「貌諸」

しよ所・處 【接尾】場所を示す語。「編輯所」

しよ署 【接尾】官省の小區分の名。「警察署」「大林區署」

じよ 恕【名】おもひやり。同情心。

じよ序 【名】㊀ついで。順序。秩序。 ㊁はし。いとぐち。 ㊂『爾雅に「序、緒也。宇亦作敍、言ニ其善敍ニ事理次第一有レ序、若ニ絲之緒一也」とあり』じよぶん。はしがき。 【敍】 類捨選「松色春久といふ事を講ぜられけるとき、序をたてまつりて」 ㊃〔音〕雅樂の緩急の拍子にて、初の起りの調子。 ㊄芝居の狂言の最初の幕。 今昔「心中に序にて作りし惡心の切(リ)で報いのくる來る時は」 ㊅『孟子の滕文公上篇に「設ニ爲庠序學校一以敎レ之、庠者養也、校者敎也、序者射也、夏曰レ校、殷曰レ序、周曰レ庠、學則三代共レ之。皆所ニ以明ニ人倫一也」とあり』まなびや。ふみや。學校。

序正(ジヨセイ)・流通(ルツウ) 【句】〔佛〕序分と正宗分と流通分と。さんぶんだん(三分段)參照。 河海抄「諸經の說相、みな序・正・流通の三段あり」

序・破・急(ジヨハキフ) 【句】㊀〔音〕『破は破碎の義にて、繁聲に至るをいふ』雅樂の序と破と急と、卽ち拍子の緩急。 ㊁始と中と終と。 八犬傳「花の物いふ序、破・急の節曲、比類なべて世の俳優人(ワザヲギ)どもは數ならずとて」 ㊂〔文〕俳諧百韻の心得。初表(ショヲモテ)は序の序、二の折までは序、三の折は破、名殘の折は急なること。

じ-じよ 時譽 【名】その時代の人人よりのほまれ。

じ-じよ 自餘・爾餘 【名】その外。これよりほか。

じよ如 【接尾】輕く漢字に添へて貌詞を作るに用ふる語。然。若。「突如」「自如」「躍如」 同じ。

しよ-あう 初鶯 【名】はつうぐひす(初鶯)に同じ。

しよ-あく 諸惡 【名】もろもろの惡事。諸惡莫作(サク)【句】〔佛〕『しよあくまさくをいけ(七佛通戒偈)を見よ』一切の惡業を行ふ勿れ。 著聞「また諸惡莫作。衆善(シユゼン)奉行(ブギヤウ)の文を銘に書かれたり」

しよ-あたり 暑中 【名】あつさあたり(暑中)に同じ。

しよ-あつ 阻遏・沮遏 【名】そあつ(阻遏)を見よ。

しよ-あん 書案 【名】㊀つくゑ。書几。 ㊁書物(カモツ)、又その下書(シタガキ)。

しよ-い 書意 【名】書面の意義。

しよ-い 初意 【名】はじめの意見。

しよ-い 暑衣 【名】布の帷子(カタビラ)。 圓入州古戰錄「暑衣・道服を相副へて賜はり」

しよ-いう 所由 【名】よるところ。もと。

しよ-いう 諸友 【名】多くの友達。

しよ-いう 所有 【名】㊀我が物となりをること。もちもの。所持。 ㊁〔法〕或物に對して、所有權を有すること、又その物。

しよいうけん 所有權 【名】〔法〕『羅Proprietas又Dominium』法令の範圍内に於て、自由に物の使用・收益及び處分などをなし得る權利。物權の一種にして、諸物の權利中、最も重要なる地位を占む。

しよいうけんしや 所有權者 【名】〔法〕所有權を有する人。所有者。所有人。所有主。

しよいうしや 所有者 【名】前條に同じ。

しよいうしゆ 所有主 【名】前條に同じ。

しよいうぜい 所有稅 【名】ざいさんぜい(財産稅)に同じ。(營利稅・使用稅に對して)

しよいうち 所有地 【名】その人の所有する土地。

しよいうにん 所有人 【名】しよいうしや(所有者)に同じ。

しよいう-ぬし 所有主 【名】前條に同じ。

しよいう-ひん 所有品 【名】所有する品。

しよいう-ぶつ 所有物 【名】所有する物件。

しよいうぶつしやうきやく-じゆんびきん 所有物償却準備金 【名】〔商〕『英Reserve Fund』簿記の勘定科目の一。所有物の代價を償却するために、その純益の一部を割きて積立つる金。

しよいうぶつ-めいさいちやう 所有物明細帳 【名】その所有となるべき動產・不動產に關する一切を記入して整理する帳簿。

しよいう-ぶぶん 所有部分 【名】〔法〕二人以上にて、一個の物を區分して所有する場合に、その各自の所有に屬する部分。

しよい-しよい 【感】犬などをけしかくる時の聲。〔薩摩國の方言〕

しよ-いちねん 初一念 【名】初に思ひ立ちたる一念。

しよ-いん 書院・書窗 【名】讀書に耽ること、又その人。書癡。

しよ-いん 書音 【名】手紙のたより。音信。 圓花間鶯士傳「山口へはたびたび書音して、光右衛門も一族同前のちなみ」

しよいりよう-かた 諸入用方 【名】江戸幕府の職制の一。下期定所の分課の一にて、何方に屬し、諸國の代官所・預所等の諸入用の調査を掌りしもの。

しよう 稱 【名】㊀となへ。よび名。 ㊁名聲。

しよう 證 【名】㊀しるし。しようこ。あかし。〔証〕 ㊁〔佛〕無漏(ムロ)の正智(シヤウヂ)の、よく所緣の眞理に契合すること。眞理を體得實證すること。さとること。證悟。證入。證得。內證。證覺。

しよう 承 【名】〔文〕しようく(承句)の略。「起承轉結」

しよう 衝 【名】㊀とほる道。衝路。 ㊁つきあたりの所。直接それに當る所。「その衝に當る」 ㊂かなめ。要所。 ㊃〔天〕『英Opposition』一の天體の黃經と太陽の黃經との差百八十度に等しくなりたる時の稱。月の衝のみは、特に望(ボウ)又は滿月と呼ぶ。

しよう 踵 【名】くびす(踵)に同じ。

しよう 踵を接す 【句】「踵(クビス)を接す」に同じ。

しよう 頌 【名】㊀盛德を稱(タタ)へ述ぶる詞。ほめことば。 ㊁〔文〕りくぎ(六義)を見よ。

しよう 鐘 【名】㊀八音の中、金屬樂器の一。今は傳はらず。つきがね。 ㊁かね。つりがね。

しよう 勝 【名】㊀爭にかつこと。かち。勝利。「勝敗」 ㊁すぐれたること。まさること。「勝劣」 ㊂地勢又は風景のすぐれたること、又その地。形勝。

しよう 試用 【名】ためしに用ふること。

しよう 施用 【名】ほどこし用ふること。

しよう 資用 【名】かかり。費用。經費。

しよう 支用 【名】錢・物などを支(カ)ち用ふること。

しよう 姿容【名】すがた。かたち。姿態。
しよう 使用【名】㊀用ふること。つかふこと。㊁〔法〕その用法に従ひて、物を用ふること。
しよう 私用【名】㊀わがための用事。私事。(公用に対して)㊁私事に使用すること。(官用・公用に対して)
しよう 私傭【名】私人のやとふこと。私人にやとはるること。(公傭に対して)
しよう 暑雨【名】暑さを催す雨。夏の炎天に降る雨。
しよう 諸有【名】〔佛〕もろもろの有(う)。有に三有・四有・七有・九有・二十五有等の別あるによりていふ。諸法。衆生(シュジョウ) 浄土和讃「十方諸有をすすめてぞ」 太平記「諸有の所得の心を離れて、清浄を修すべきに」
しよう 升【助数】㊀量の単位。合の十倍。斗の十分の一。㊁ます(合)㊂を見よ。升を以て石(こく)を量る【句】『淮南子に「使」築度二尭、是猶二以升量一レ石也」とあり。石は升よりも多量なるよりいふ』愚人が『賢者の心を推測するに譬へていふ。「矩・準・繩」
じよう 縄【名】すみなは(墨縄)に同じ。「規・
じよう 乗【名】㊀人の乗る物、即ち車・馬など。のりもの。 太平記「古、屈産の乗、項羽が騅、千里を翔る馬ありと雖も」 ㊁孟子に「晉之乗」とあり。載と同義にて、事を書載せたる物の意』記録。史書。㊂〔佛〕『梵Yāna(衍・野那)の譯語。人を乗せて、その単位に到達せしむる意』修行の法。実相を開悟する智慧。行法。佛判。 ㊃〔數〕じようはふ(乗法)の略。
じよう 判官【名】㊀古の四部官の一。次官(スケ)の次、主典(サカン)の上。太政官にては、少納言と辨とこれに相當し、その他、役所によりて、用字同じからず。即ち神祇官には祐、八省は丞、職(シキ)と坊とは進、寮は允、司・署は佑、彈正臺は忠、近衛府は將監、衛門府・兵衛府及び檢非違使は尉、國は掾、郡は主政、鎮守府は軍監、太宰府は監。 ㊁明治初年に設置せられたる職員。官により、文字同じからず。太政官には辨、神祇各省及び大學校には丞、彈正臺には忠、集議院・留守官・開拓使・按察使・宣教使には判官、寮には允、司には佑を用ひたり。
じよう 尉【名】㊀衛門府・兵衛府及び檢非違使の判官。 ㊁一説に丈の字の音より出でし説にて、じやうの假名たるべしと』老いたる男。翁。 ㊂能にて、老人の面の總稱。 ㊃木炭の、赤熱後、白き灰となりたるもの。小町踊(ヲドリ)「じようとなるや一夜白髪炭かしら」
尉と姥(ウバ)【句】播磨國高砂(タカサゴ)の老松の精が、白髪の老人夫婦となりて現れたりといふ謡曲「高砂」の故事に因りて、假作せるもの。翁と姥と共に能(ノウ)の衣裳を著け、落葉を掻く熊手を携へたる姿なるを常とし、繪にも描き、人形・彫刻にも造りて、婚姻・謡祭等の祝に用ふ。新版歌祭文「したが、鳥邊の無いかはり、世話事の尉と姥も新しい」
じよう 自用【名】自分の使用。
じよう 乗【助数】㊀車の數。「萬乗の國」 ㊁〔數〕同一の數を掛合はする回數。「二乗(自乗)」「三乗」「四乗」
しようあい 鍾愛【名】『愛情をその者一人の上に鍾(ソソ)むる義』めでいつくしむこと。鍾寵。寵愛。
しようあつ-き 昇壓機【名】『英Booster』回路の電壓を増大せしむる機。
じようあふぎ 尉扇【名】能(ノウ)にて、尉の假面(メン)を用ふる時に持つ扇。白骨を用ひ、「る文書。墨繪を書きたるもの。
しようあん 訟案【名】訴訟の主趣を記せる文書。
しようあん 承安【名】高倉天皇の御代の年號(紀元一八三一年—一八三四年)。
しようあん-だいさんのみや 承安第三宮【名】〔人〕これあきらしんわう(維明親王)に同じ。
じよう-いち 剰一【名】〔數〕『一を剰(ソソ)す義。甲數の某倍數と乙數の某倍數との差が一なる意』和算における一次方程式の解法。例へば甲數の某倍數が乙數の某倍數より一だけ大なる時、その兩倍數を算出する。
しよう-いつ 縦逸【名】きままにして、しまりのなきこと。放逸。放縦。
しよう-いん 證印【名】證據に押したる印。
しよう-いん 承引【名】うけひくこと。承知。承諾。
しよう-いん 勝因【名】〔佛〕殊勝なる善因。 菩薩「四八相値遇(グ)の勝因」「承引。
しよう-いん 承允【名】ゆるすこと。允許。
しよういん-じんじや 松陰神社【名】㊀武藏國荏原(エバラ)郡世田ケ谷村大字若林に鎮坐せる神社。祭神は吉田松陰。 ㊁長門國阿武郡椿郷東分(ヒガシブン)村大字新道、即ち松下村塾の域内に鎮坐せる縣社。祭神は同前。
しよういん-ぜい 證印税【名】地券書替の請求者が納むる租税。
しよう-うん 承運【名】『史記の高祖紀に「漢承二堯運一」とあり』まはりあはせを承紹ぐこと。紹運。 正統記「代と世とは、常の義差別なし。然れども、凡の承運とまことの纖體とを分別せんために書分けたり」
しよううん 松雲【名】〔人〕㊀佛工。名は元慶。通稱は九兵衛。京都の人。鐵眼(テツゲン)の弟子。江戸に來りて、五百羅漢を刻み、本所に羅漢寺を建つ。寛永七年歿す。年六十三。どゞやくらかんじ(五百羅漢寺)參照。 ㊁まへだつなのり(前田綱紀)の號。
しよう-えい 松影【名】松の樹のうつりたる影。まつかげ。「たふこと。
しよう-えい 誦詠・誦咏【名】讀文をよみうたふこと。
しよう-えう 鍾鎒【名】〔人〕支那三國時代の書家。字は元常。蜀の後主の建興八年歿す。しようわう(鍾王)參照。
しようえき-ち 承役地【名】〔法〕『英Dominant land』要役地のために利用せらるる土地。(要役地に對して)
しよう-えふ 松葉【名】松の葉。まつば。
しようえふ-めいしよわかしふ 松葉名所和歌集【名】〔書〕名所に關する和歌にて、類字名所集その他の書に載せざる歌を集めたるもの。十六卷。宗惠の選。
しよう-えん 松烟・松煙【名】松の如き、脂油に富める樹木を、空氣の流通不充分なる處にて燃燒せしめ、その煙を凝集したる、炭素の細微なる粉末。最も上等なるは、活版印肉・靴墨・文房用墨の製造等に用ひ、下等なるは、門柱・板屏等の塗抹に用ふ。㊁すみ(墨)㊀の異稱。松明(マツ)の烟。 ㊂すみ(墨)㊁の異稱。
しようえん-ずみ 松烟墨【名】松烟にて製したる墨。(油烟墨に對して)
しようえん-らく 承燕樂【名】雅樂の一。黄鐘(ワウシキ)調。大戸清上の作曲。
しようおう 承應【名】後光明天皇の御代の年號(紀元二三一二年—二三一四年)。
しよう-か 頌歌【名】功德を頌(ホ)めたふこと、又その歌。
しよう-か 證歌【名】證據となるべき歌。 太平記「名は同じくして、所は替れる證歌なり」
しよう-か 升遐・昇遐【名】『遐(カ)かなる天に升(ボ)る義』貴人の死去。登遐。
しよう-か 松下【名】松の木の下。松蔭。
しよう-が 勝槩【名】しようけい(勝景)に同じ。
じよう-かい 乗戒【名】〔佛〕乗即ち實相を開悟する智慧と、戒即ち身口(シンク)の惡を淨め除く制法と。
乗戒俱急(クキフ)【句】〔佛〕乗と戒との兩者を、熱心に修むること。大乗の眞の薩埵(サッタ)の修行狀態を言表はしたるもの。 太平記「乗戒俱急の僧」
かいきふ(戒急)-ごようきふ(乗急)參照。「じ。
しよう-かう 松嵩【名】しようし(松脂)に同じ。
しよう-かう 昇降【名】のぼりくだり。あがりおり。
しようかう 松江【名】〔地〕㊀支那江蘇省に在る府名。 ㊁支那の黄浦江の一部。同上の府境を流過する時の名。
松江の鱸(スヾキ)【句】『蘇軾の後赤壁賦に「今者薄暮、擧レ網得レ魚、巨口・細鱗、狀如二松江之鱸一」とあり。「鱸魚(ロギョ)の膾」參照』支那松江の名産なる鱸魚。松江の府境を貫流する黄浦江にて漁獲する魚。但し、鱸の字をすゞきと訓ずるは、實は誤にて、一種の淡水魚なり。
しよう-がう 稱號【名】㊀となへ。よびな。名目。稱呼。 ㊁うぢな。苗字。

じょうーがう 乗號【名】〔數〕『英Sign of multiplication』二つの數の積を求むる符號。一般には a×b 又は ab のごとく × を用ひ、また代數學にて、特に a.b のごとく . を用ふることあり。

しょうかうーき 昇降機【名】大建築物内にて、機械力によりて昇降せしめ得る裝置の總稱。例へばエスカレエタア・エレベエタア等の類。

しょうかうーぐち 昇降口【名】昇降の出入口。

しょうかうーけう 昇降橋【名】『英Lifting-bridge』船舶通行の際など、機械力によりて、全體を昇降せしめ得るやう構造せる橋。

しょうかうーせき 松香石【名】〔鑛〕黑耀石の一種。多くは鼠色にして、質脆く、吹管にて吹けば、玻璃となる。綠色の玻璃を製するに用ふ。

しょうかうーせき 承桁石【名】けたうけいし(桁受石)に同じ。

しょうかうーてん 昇交點【名】〔天〕『英Ascending node』交點の一。月遊星などが南半球より北半球に向ひて、通過する點。正交點。(降交點に對して)

しょうかうーほふしんわう 勝行法親王【名】〔人〕智仁(トヒ)親王の御子。後水尾天皇の御猶子。薙髪して、曼珠院に入り、のち天台座主となる。一乘寺中興の開基。元祿六年薨ず。年七十二。

しょうーかかく 使用價格【名】〔經〕いようかかく(有用價格)に同じ。(收益價格に對して)

しょうかく 證覺【名】〔佛〕しょうご(證悟)に同じ。

しょうかく 昇格【名】資格を昇すこと。

しょうーかく 衝角【名】〔兵〕『英Ram-head』軍艦の首部の水線下に突出せる鋼鐵の突角。敵艦の水線下なる非裝甲部を衝破るための裝置。もと大砲・水雷と共に軍艦の主要武器たりしかど、現今その必要を認めず、漸次廢せらるるに至れり。

しょうかく 勝覺【名】〔人〕高僧。源俊房の子。範俊・義範に就きて、眞言の奥義を究む。三寶院門跡の祖となる。天永三年雨を神泉苑に祈りて効あり。大治四年寂す。

しょうーがく 昇樂【名】〔佛〕法會の時、導師の高座に昇らんとするに當りて奏する音樂。「同じ。

しょうかく 乘客【名】じょうきゃく(乘客)に

しょうかそんじゅく 松下村塾【名】『村名の松本を、支那風に松下と呼變へしものにて、松陰の號もまたこの村名より出づ』吉田松陰の長門國阿武(アブ)郡椿郷東分(カツバキヒガシ)村の大字松本(マツモト)に開きし私塾。その地、もと松本村と呼び、萩町の東に位す。

しょうーがひげ 尉鬚【名】〔植〕ばくもんどう(麥門冬)を云ふ。〔關西の方言〕

しょうーかん 乘艦【名】艦船に搭乘すること、又その艦船。

じょうかん-しぶくわん 乘艦四文官【名】明治六年に設置せられたる海軍の軍醫・祕書主計・機關の四科の官吏。

しょうーき 聳起【名】そびえたつこと。そびえたたしむること。

しょうき 鍾馗・鐘馗【名】『事物起原に「開元中、明皇病レ瘧居二小殿一、夢二一小鬼一、韓二一足一、懸二一履於腰間一、鬚太眞紫香嚢、及拈二玉笛一吹レ之、頗喧擾、上叱レ之、曰臣虚耗也、上怒欲レ呼二武士一、見二一大鬼一、頂二破帽一、衣二藍袍一、束二角帶一、徑捉二小鬼一、以レ指刳二其目一、擘而啖レ之、上問爲レ誰、對曰臣終南進士鍾馗也、因二應舉不レ捷、觸二殿階一死、奉旨賜二綠袍一而葬、誓除二天下虚耗妖孽一、言竟、忽而疾愈、乃召二吳道士一圖レ之」とあるに本づく』■支那にては疫鬼を驅り、魔を除くといふ神。我が國にては、その像を五月幟に描き、又五月人形に作るを常とし、その像は、巨眼・多髯にして、黑色の衣冠を著け、長き靴を穿ち、右手に劍を執り、小鬼を摑める樣に造る。鐘馗大臣。■謠曲の一。支那終南山に住める人、都への道中、鐘馗の靈あらはれて、惡鬼を亡し、國を守らんとの誓をなす事を作れるもの。「じ。

しょうーき 誦記【名】きしょう(記誦)に同じ。

しょうーき 悚惕【名】ぞっとすること。

しょうき 【名】ざ(笊)を云ふ。〔上野國の方言〕

しょうぎ 證義【名】〔佛〕■論議の時、その問答の可否を判斷する役。一說に、證義は八講の時のみの稱にて、その他の論議には、延曆寺などにて、精義(セイギ)といふと。證誠(ショウ)。(公事根源)「證義・講師・聽衆などあり」■しょうぎしゃ(證義者)の略。經の際、その原文と譯文とを對照して、意義の相違なきや否やを調査する役。

しょうき 蒸氣【名】■液體の蒸發して生ずる氣體。ゆげ。蒸發氣。水蒸氣。汽氣。■じょうきせん(蒸氣船)の略。

じょうき-あつりよくけい 蒸氣壓力計【名】『英Steam-gauge』蒸氣の壓力を計る機械。汽壓計。あつりよくけい(壓力計)參照。

じょうきう 承久【名】順德天皇の御代の年號(紀元一八七九年—一八八一年)。

承久の亂【句】鎌倉の執權北條義時の專横を惡みて、承久三年後鳥羽上皇の、北條氏を滅さんと謀りたまひしより生ぜし亂。その結果、却りて幕軍のために、京師を攻落せられ、後鳥羽上皇は隱岐に、土御門上皇は土佐(後に阿波)に、順德天皇は佐渡に遷幸し給ひ、朝臣の誅責せられし者多かりき。

じょうきう-いくさものがたり 承久軍物語【名】〔書〕承久の亂を記したるもの。六卷。著者詳かならず。群書類從に收む。

じょうきう-き 承久記【名】〔書〕承久の亂の顚末を記せるもの。二卷。著者詳かならず。

じょうきう-ひやらんき 承久兵亂記【名】〔書〕承久の亂を記したるもの。著者詳かならず。纂群書類從に收む。

じょうき-かう 蒸氣坑【名】〔地〕『英Fumarole』地中より水蒸氣を噴出する所。火山地方に多し。

じょうき-がま 蒸氣釜【名】■きくわん(汽罐)に同じ。■獨逸の細菌學大家コッホ(R. Koch)の發明に係り、蒸氣によりて細菌を死滅せしむるに用ふる釜。「じ。

じょうき-きかい 蒸氣機械【名】次條に同じ。

じょうき-きくわん 蒸氣機關【名】『英Steam engine』英國人ワット(J. Watt)の發明したる、熱を仕事に變ぜしむる一の機械。即ち火熱にて、水を沸騰せしめ、これにより生じたる蒸氣の張力を利用し、適當の裝置を用ひて、運動を起さしめ、これを種種の機械に傳へて仕事をなさしむるもの。蒸發氣を生ぜしむる部分、即ち汽罐と、蒸發氣の張力より運動を生ぜしむる部分、即ち機關とより成る。用途によりて、船用と陸上用とに大別し、又、形態によりて、直立式・水平式に別たる。汽機。

しょうーきく 松菊【名】松と菊と。

じょうき-くわん 蒸氣管【名】きくわん(汽管)に同じ。

じょうき-くわん 蒸氣罐・蒸氣罐【名】きくわん(汽罐)に同じ。

しょうぎーしゃ 證義者【名】〔佛〕證義の役に當る人。「じ。

じょうきーしゃ 蒸氣車【名】きしゃ(汽車)に同じ。(明治初年頃の語)

じょうきーせうどく 蒸氣消毒【名】蒸氣にて蒸して消毒すること。煮沸しがたき物品に應用す。「同じ。

じょうきーせん 蒸氣船【名】きせん(汽船)に

じょうきーたあびん 蒸氣タアビン【名】『英Steam turbine』蒸氣の流動速度及び方向を漸次變換せしむるために生ずる動力を以て回轉を起す一種の蒸氣機關。種類多し。(水力をあびんに對して)

じょうきーだいじん 鍾馗大臣【名】しょうき(鍾馗)に同じ。

じょうきーつち 蒸氣鎚【名】『英Steam-hammer』蒸氣力を用ひて、重き鎚を迅速に上下して、鐵などを鍛錬する機。

じょうきーてつだう 蒸氣鐵道【名】きしゃ(汽車)に同じ。

じょうきーはっせいき 蒸氣發生器【名】『英Steam generator』きくわん(汽罐)に同じ。

じょうきーひげ 鍾馗髭【名】鍾馗の如く、ぼうぼうと生えたる髭。「等。

じょうーきふ 陞級【名】階級の上ること。昇

じょうーきふ 昇給【名】給料の上ること。

じょうーきふ 乘急【名】〔佛〕實相を開悟す

る智慧の發揮に熱心なること。(戒急·戒緩·乘緩に對して)「乘戒俱急」參照。 梁花「或は乘急の人、或は戒急の者、行のしなじなに從ひて、極樂の迎を得たり」

じょうき-ぽんぷ 蒸氣唧筒【名】『英Steam-pump』動力に蒸氣を用ふる唧筒。消火用を主とす。短時間内に多量の水を汽化せしむる必要あるを以て、汽鑵は銅にて造り、通常、蒸氣機關とポンプとを連接せしめて、同一の車臺上に据附く。

じょうきん 剩金【名】あまりの金。のこり金。剩餘金。

しょうきゃう 勝境【名】しょうち(勝地)[二]に同じ。

しょうぎゃう 勝行【名】(佛)波羅密多の舊内裏にありし殿舍の一。南面して、仁壽殿の後方、常寧殿の前方にありしもの。

じょうきゃく 乘客【名】汽車·汽船等、すべて車船などに乘る客。のりて。

じょうきゃく-ていねん 乘客定員【名】汽車·汽船又は電車などの客室の、廣さを標準として規定せられたる乘客の數。

じょうきゃく-てにもつ 乘客手荷物【名】[一]汽車·汽船等の乘客が携帶せる荷物。[二]鐵道規則に依り、無賃運送をなす乘客の手細荷物。

じょうきゃく-めいぼ 乘客名簿【名】商法の規定により汽船に備へおきて、その乘客の住所·氏名·年齡等を記入する帳簿。

しょう-きょ 松炬【名】たいまつ(松明)に同じ。

しょう-ぎょ 松魚【名】〔動〕かつを(松魚)に同じ。

じょうき-よく 蒸氣浴【名】『英Steam-bath』蒸氣の充たされたる浴室又は箱の中にて、身體を蒸し溫むること。

しょうぎょう 承議郎【名】正六位下の唐

しょうきょう 忽地笑【名】〔植〕石蒜(シャウサン)科に屬する多年生の草。葉は根生、叢生し、長くして平行脈を有し、葉枯れたる後、花莖抽で、秋季、黃色の花を開く。北地に自生す。

じょうき-りょく 蒸氣力【名】きりょく(汽力)に同じ。

じょうき-ろおらあ 蒸氣ロオラア【名】『英Steam roller』ロオラア[二]の、蒸氣力にて回轉する裝置のもの。

しょう-く 聳懼·悚懼·竦懼【名】おそれをののくこと。「を見よ。

しょう-く 承句【名】〔文〕「起承(キショウ)轉結」

しょう-く 勝區【名】景色の勝れたる區域。

じょう-く 冗句【名】不用なる文句。

じょう-く 繩矩【名】[一]すみなはと、さしがね。[二]きく(規矩)[二]に同じ。

じょう-ぐ 乘具【名】乘馬に必要なる用具、卽ち鞍鐙(アブ)·手綱など。

しょうくう 證空【名】〔人〕[一]淨土宗の僧。源親季入道證玄の子。字は善慧。京都の人。法然に師事すること二十年、京都西山(セイザン)の善峰寺及び粟生(アフ)の光明寺に住みて、敎門弘通を計り、寶治元年寂す。年七十一。寬政八年鑑知國師の謚號を勅賜せらる。選擇集密要決·曼陀羅註記等を著す。法流を西山(セイザン)派といふ。[二]鎌倉時代の眞言宗の僧。高野山に住む。傳不詳。

しょう-くみあひ 使用組合【名】生產組合の一。產業に必要なるものを、組合員に使用せしむるを目的とするもの。

しょう-ぐん 勝軍【名】[一]戰に勝つこと。勝利。太平記「須彌(シュ)の四方を領して、鬼門の方を守護し、摧伏の形を現じて、專ら勝軍の利を施したまふことは、毗沙門の德にしくは候ふべからず」[二]勝ちたる軍勢。

しょうぐん-じ 勝軍寺【名】河內國中河內郡久寶寺村の南龍華寺宇太子堂にある眞言宗の寺。椋樹山と號す。稱德太子物部守屋に克ちし後、建てられしもの。本堂に太子の植髮(ウエガミ)の像を安置す。俗稱、下(モ)の太子。

しょうぐん-おさめ 勝軍地藏【名】〔佛〕勝軍木動明王の四十八人の使者の中、第二十三に位する炎羅諸天王の稱。地藏菩薩が降伏の三昧に入りて、武裝せるものにて、身に甲冑を纏ひ、右手に錫杖を持ち、左拳に如意寶珠を載せて、胸の前に安じ、背に後光を負ひ、軍馬に跨れる姿に造り、昔はこれを祭りて、戰勝を祈れり。元亨釋書「鎭曰、我法中有二勝軍地藏·勝敵毘沙門一、我造二二像一供修耳」

しょうぐん-びしゃもん 勝軍毘沙門【名】〔佛〕毘沙門天を本尊として、戰勝を祈る修法。太平記「岩屋寺の衆徒、座さまざまに、勝軍毗沙門の法をぞ行ひける」

しょうぐん-ふどうみやうわう 勝軍不動明王【名】〔佛〕不動明王の、佛法修行の人を守るために、四十八人の使者を、種種の鬼王に化身せしめたるもの。

しょうぐん-ぼく 勝軍木【名】〔植〕ぬるで(勝軍木)に同じ。

じょうぐるま 自用車【名】じようしや(自用車)に同じ。

しょう-くわ 松花【名】松の花。太平記「西塔の黑谷といふ所に居をトめて、三衣を荷葉の秋の霜に重ね、一鉢を松華の朝の風に任せ給ひけるが」

しょう-くわ 松火【名】松を燃く火。たいまつ。まつ。

しょう-くわ 證果【名】〔佛〕『しよう(證)を見よ』佛敎の眞理を體得實證すること。佛法修行を成就すること。無漏の正智(シヤウ)。盡智·滅智果の尼を殺して、逆を犯し」

しょう-くわ 勝果【名】〔佛〕『勝(ス)ぐれたる證果の義』ぶっくわ(佛果)を、辟聞(ビヤクモン)·緣覺·菩薩の果に對していふ美稱。滿果。

しょう-くわ 昇華【名】〔化〕『英Sublimation』固體より液體の狀態を經ずして、直ちに氣化する現象。鹽化アンモニウム·樟腦などのごとく、融點と沸點との接近せる固體に起る現象にして、その氣體を冷却すれば、又直ちに固體となる。「同じ。

じょう-くわ 剩過【名】くわじょう(過剩)に

しょう-くわん 冗官【名】無用なる官又は

じょう-くわん 乘緩【名】〔佛〕實相を開悟する正智(シヤウ)を磨くに熱心ならぬこと。(乘急·戒緩に對して)

しょう-くわん-だう 承觀堂【名】豐樂(ブラク)院の八堂の一。東西二列に建並びし中の西方第二位に在りて、東方なる顯陽堂と相對せしもの。元日節會の時に、昇殿を得ざる者の席に充てられたり。

しょう-くわん 縱觀【名】じゅうくわん(縱觀)に同じ。

しょう-くわん 觀【名】じゅうくわん(縱觀)「官吏。

しょう-くわん 觀【名】〔佛〕實相を開悟する正智(シヤウ)を磨くに熱心ならぬこと。(乘急·戒緩に對して)

しょう-くわん-だう 承觀堂【名】豐樂(ブラク)院の八堂の一。東西二列に建並びし中の西方第二位に在りて、東方なる顯陽堂と相對せしもの。元日節會の時に、昇殿を得ざる者の席に充てられたり。

しょう-くわ-ゆわう 昇華硫黃【名】〔化〕硫黃を蒸溜して發生する蒸氣を、急に冷却して得る黃色の粉末。吸濕性あるを以て、往往微細の團塊をなす。主として精製硫黃を製するに用ふ。硫黃華。

しょう-けい 勝景【名】すぐれたる景色。佳景。「じ。

しょう-けい 憧憬【名】どうけい(憧憬)に同

しょう-けい 松桂【名】松と桂と。「ち。

しょう-けい 松徑【名】松の木のある小みち。

しょう-けい 鐘磬【名】つきがねとうちならし。

しょう-けい 鐘形【名】〔植〕しょうじゃう(鐘

○八八年)。正長元年崩ず。壽二十八。

しょうくわうみやう-ゐん 勝光明院【名】中古、山城國紀伊郡鳥羽村にありし寺。鳥羽上皇の勅願所。保延二年上皇の臨御ありて、親しく供養せられし頃は、堂宇の美を極めたりといふ。一名、鳥羽の御堂。

しょうくわ-せつ 昇華說【名】〔地〕『英Sublimation theory』鑛脈は地中より瓦斯體の昇りて凝結せしものなりといふ學說。古代にも唱へられたる說なれど、佛蘭西のデュロシエエ(Duroclier)の特に唱道せしもの。

しょうくわ-だう 松花堂【名】〔人〕せうじょう(昭乘)を見よ。

しょうくわだう-りう 松花堂流【名】書道の一派。松花堂昭乘を祖とす。瀧本流。せうじょう(昭乘)參照。

しょうくわん 隨官【名】官等を陞(ノボ)すること。官職を進むること。

しょう-くわん 縱觀【名】じゅうくわん(縱觀)に同じ。

じょう-くわん 冗官【名】無用なる官又は

じょう-くわん 乘緩【名】〔佛〕實相を開悟する正智(シヤウ)を磨くに熱心ならぬこと。(乘急·戒緩に對して)

しょうくわん-だう 承觀堂【名】豐樂(ブラク)院の八堂の一。東西二列に建並びし中の西方第二位に在りて、東方なる顯陽堂と相對せしもの。元日節會の時に、昇殿を得ざる者の席に充てられたり。

しょうくわん-だう-りう 松花堂流【名】書道の一派。松花堂昭乘を祖とす。瀧本流。せうじょう(昭乘)參照。

しょうくわん 隨官【名】官等を陞(ノボ)すること。官職を進むること。

しょう-くわん 縱觀【名】じゅうくわん(縱觀)に同じ。

じょう-くわん 冗官【名】無用なる官又は

じょう-くわん 乘緩【名】〔佛〕實相を開悟する正智(シヤウ)を磨くに熱心ならぬこと。(乘急·戒緩に對して)

しょうくわん-だう 承觀堂【名】豐樂(ブラク)院の八堂の一。東西二列に建並びし中の西方第二位に在りて、東方なる顯陽堂と相對せしもの。元日節會の時に、昇殿を得ざる者の席に充てられたり。

しょうくわ-ゆわう 昇華硫黃【名】〔化〕硫黃を蒸溜して發生する蒸氣を、急に冷却して得る黃色の粉末。吸濕性あるを以て、往往微細の團塊をなす。主として精製硫黃を製するに用ふ。硫黃華。

しょう-けい 勝景【名】すぐれたる景色。佳景。「じ。

しょう-けい 憧憬【名】どうけい(憧憬)に同

しょう-けい 松桂【名】松と桂と。「ち。

しょう-けい 松徑【名】松の木のある小みち。

しょう-けい 鐘磬【名】つきがねとうちならし。

しょう-けい 鐘形【名】〔植〕しょうじゃう(鐘

状)に同じ。

しょう-けい 承繼【名】㊀うけつぐこと。㊁〔法〕新權利の主體が、舊權利の主體の位置に代ること。

しょうけい-にん 承繼人【名】〔法〕如何なる原因に依るを問はず、他人の權利・義務を自身に引受けて、取得する人。一般承繼人と特定承繼人との別あり。

しょうけう 松喬【名】けうしょう(喬松)㊀に同じ。

松喬の壽【句】『漢書の王吉傳に見ゆ』「喬松の壽に同じ。」こと。

しょう-げき 衝激【名】烈しくつきあたること。突擊。

しょう-げき 衝撃【名】つきあたりて擊つ

しょうげつだう-こりう 松月堂古流【名】花道の一派。樒尾(シキミ)の明惠上人を祖とし、松月堂叡尊の花法を定めたるもの。

しょう-けん 證券【名】㊀てがた。證文。㊁〔法〕『獨 Wertpapier』債權を證明する證書、即ち法律上その債權の利用につき、その證書の占有を必要とするもの。いうかしょうけん(有價證權)參照。

しょう-けん 證權【名】『英 Authority』多數の人を信仰服從せしむる權威、又は典據。

しょう-けん 證驗【名】あかし。しるし。證據。

しょう-けん 證賢【名】〔人〕高僧。字は向阿。三井寺に出家し、淨花坊と號す。禮阿に就きて、淨業を究め、京都花園院に隱近し、のち淸淨花院を創す。講演に長じ、傍ら和歌を善くし、三部假名鈔を著す。正平十八年寂す。年八十三。

しょう-けん 使用權【名】〔法〕地人の所有の土地・物件などを使用する權利。

しょう-げん 證言【名】㊀言語を以て或事實を證明すること、又その言語。㊁證人の陳述したる言。

しょう-げん 縱言【名】ほしいままにいふこと。口にまかせていふこと。放言。

しょうげん 承元【名】土御門天皇の御代の年號(紀元一八六七年—一八七〇年)。

しょうけん-いうびんちよきん 證券郵便貯金【名】いうびんしょうけんちよきん(郵便證券貯金)に同じ。

しょうけん-いんし 證券印紙【名】收入印紙の發行せらるる前、政府より發行して、證券に貼らしめし印紙。

しょうげん-いんぜい 證券印稅【名】證券印紙を以て納むべき租稅。

しょうけん-かうふ-せいきうしよ 證券交付請求書【名】郵便貯金の預入が、郵便官署に保管を托しある證券の交付を受けんとする場合に差出す請求書。

しょうけん-こうさい 證券公債【名】公債募集の際、政府が證券を發行して交付するもの。現行のは、多くこの方法による。證券には、額面・利率・利拂期限・償還期限・番號・支拂の本位・支拂の基地等を記載す。

しょうけん-こうにふ-せいきうしよ 證券購入請求書【名】郵便貯金の預入が、その貯金を以て、證券を購入せんことを請求する場合に差出す請求書。

しょうけん-じ 松見寺【名】美濃國武儀(むぎ)郡廣見村にある臨濟宗の尼寺。集雲山と號す。如大尼の住せしを以て有名なり。

しょうけん-じゅんびはふ 證券準備法【名】『英 Documentary reserve』紙幣發行法の一。金銀貨幣又は地金を以てする代りに、政府の公債・株券その他の證券類を以て、引換準備として發行するもの。

しょうけん-しょうけん 證權證券【名】〔法〕『獨 Beweispapier又 Beweisurkunde』既存の權利を證明するために作成する證券。即ち株券・公債證書・社債券の類。證據證券。證明證券。(設權證券に對して)

しょうげん-せう 承元抄【名】〔書〕歌の風體を論じて、初學の菜とせしもの。一卷。藤原定家の著。

しょうけん-とりひきじよ 證券取引所【名】有價證券の賣買取引をなす取引所。

しょうけん-ばいきやく-せいきうしよ 證券賣却請求書【名】郵便貯金の預入が、郵便管署に保管を托せる證券を賣却せんことを請求する場合に差出す請求書。

しょうけん-ひきかへ-ばらひ 證券引換拂【名】〔商〕『英 Cash against document』商品の代價を支拂ふに、その商品の代りとなる船荷證券などの證券を受取ると同時に支拂ふ方法。

しょうけん-ほくわんかよひちやう 證券保管通帳【名】郵便證券貯金の預入に、郵便爲替管理所より交附する通帳。

しょうけん-ほくわん-げんぽ 證券保管原簿【名】郵便爲替貯金管理所に備へて、預入人の所有に係る保管證券の出入を登記する帳簿。

しょうけん-ほくわん-せいきうしよ 證券保管請求書【名】郵便貯金の預入が、自己の所有に係る證券の保管を郵便官署に請求せんとする場合に差出す請求書。

しょうけん-めん 證券面【名】證券の文面。

しょう-こ 鐘鼓【名】鐘と太鼓。

しょう-こ 稱呼【名】となへ。よびな。稱號。

しょう-こ 證據【名】或事實を證明する根據。しるし。あかし。中證。證左。宇治「何をしようこにて、かうはのたまふぞ」

證據に立つ【句】證人に立つ。

證據の出後(クレシオ)【句】「證文の出後」に同じ。〔諺語〕

しょう-ご 證悟【名】〔佛〕『しよう(證)㊀を見よ』實驗して迷を去り、悟を開くこと。正智(ウヂ)にて、眞理を證知すること。證覺。

じょう-ご 剩語【名】餘計なる言葉。むだごと。

じょう-ご 冗語【名】無用なる言葉。

しょうこ-あらため 證據改【名】證據を取調ぶること。檢證。

しょう-こう 昇汞【名】〔化〕えんくわだいにすゐぎん(鹽化第二水銀)の俗稱。

しょうこう-があぜ 昇汞ガアゼ【名】消毒材料の一。昇汞藥劑中に浸し、强く壓搾して乾したるガアゼ。

しょうこう-すゐ 昇汞水【名】昇汞を溶したる水。消毒用としては、二千倍以上に解くを普通とす。

しょうこう-せうどく 昇汞消毒【名】昇汞水を用ひて、消毒を施すこと。

しょうこう-ぢやう 昇汞錠【名】藥品の一。日本藥局方にては昇汞五〇分・クロオルナトリウム五〇分を混和し、赤色のタアル色素にて著色し、錠劑としたるもの。一箇中〇・五グラムの昇汞を含む。中性昇汞水を製するに使用せらる。

しょうこう-はつ 衝口發【名】〔書〕我が國の皇統・國號・年號・衣服・祭祀・國史・制度等に就き、諸書を引きて辨明せるもの。一卷。藤井貞幹の著。

しょうこう-よく 昇汞浴【名】〔醫〕稀薄一萬倍乃至五萬倍なる昇汞液中に浴すること。先天黴毒ある幼兒、皮膚病及び全身皮膚の消毒等に應用せらる。浴槽は木質のものを用ふ。

しょうこう-わた 昇汞綿【名】消毒材料の一。脫脂綿を昇汞藥劑中に浸したるもの。

しょうこ-かうべん 證據抗辯【名】〔法〕訴訟にて、一方の當事者が相手方の擧證に對してなす抗辯。

しょうこ-きん 證據金【名】㊀擔保として提供する金錢。㊁〔商〕買取引所賣買取引の責任を履行せざる時、損害賠償に供せんが爲に、當事者の雙方より取引所に納めしむる擔保品。

しょう-ごく 訟獄【名】『訟は財を爭ふ意、獄は罪を爭ふ意』うったへごと。裁判事件。獄訟。

しょうこ-けってい 證據決定【名】〔法〕證據を必要とする事實存在するとき、また證據方法の申出あるとき、當時者の辯論と分離し、特別の手續を以て、證據調を命ずる訴訟指揮上の命令。

しょうこ-さいばん 證據裁判【名】證據にもとづきて行ふ裁判。

しょうこ-しょうけん 證據證券【名】〔法〕

しょうこ-しょうけん 證權證券に同じ。

しょうこ-しょるゐ 證據書類【名】事實の證據となる書類。

しょうこ-しらべ 證據調【名】證據のとりしらべ。

しょうこ-だつ 證據立つ【動下二自】證據を示す。あかしを立つ。證明す。「と。

しょうこ-だて 證據立【名】證據立つること

じょう-こっぷん 蒸骨粉【名】肥料とする骨粉の蒸したるもの。生骨にては、粉砕・腐敗共に難きにより蒸すなり。

しょうこにん 證據人【名】事實を證據だつる人。あかしびと。證人。「得る手數。

しょうこほうほふ 證據方法【名】證據を

しょうこほんだん 證據判斷【名】〔法〕證據とすべき事項と、これに對する證據方法との關係を確定するため、各證據方法がその事實を證明するに足るべきや否やを、審理力を以て判斷すること。

しょうこ-ぶつ 證據物【名】次條に同じ。

しょうこ-ぶっけん 證據物件【名】〔法〕證據となる物件。證憑物件。證據物。

しょうこほぜん 證據保全【名】〔法〕『英Perpetuation of testimony』證據の紛失する恐あるか、又これを使用するに困難なりと思料するかの場合に、訴訟提起の前後を問はず、あらかじめ證據をなし置き、何時にても用ひらるる手續をなすこと。

しょう-こん 松根【名】松の根。

しょう-こん 勝金【名】〔佛〕えんぶだごん(閻浮提金)に同じ。

じょう-こん 乘根【名】〔數〕『英Root』或數の、その乘冪(じょうべき)に對する稱。例へば、nはanのn乘根なるが如し。(乘冪に對して)

しょうこんゆ 松根油【名】〔化〕松樹の根を蒸餾して得る油。テレピン油に似るを以て、混稱せらる。家具の拭掃・飄塵などに用ふ。

しょうこ-りょく 證據力【名】〔法〕證據に供するにつきての効力。

しょう-さ 證左【名】■しょうこ(證據)に同じ。■證人。證據人。

しょう-ざい 使用罪【名】〔法〕或物件を使用するによりて成立する犯罪。例へば他人の僞造せる官・公署の僞印を、情を知りて行使する類。

じょう-ざい 乘載【名】のすること。

しょう-ざいさん 使用財產【名】〔經〕ふせいさんてきざいさん(不生產的財產)に同じ。

しょうさい-ふぐ しょうさい河豚【名】〔動〕しばふぐ(鰏魚)に同じ。

しょう-さう 松窓・松窻【名】その前に、松の木のあるまど。「なは。

じょう-さく 繩索【名】細き繩と太き繩と。

しょうさく-き 縱削機【名】すろっちんぐましいんに同じ。

じょう-ざつ 冗雜【名】くだくだしく入りまじること、又その物。

しょう-さん 稱讚【名】ほめたたふること。稱美。賞讚。讚稱。

しょう-さん 勝算【名】勝利を得る心算。勝つべき見込。かちめ。

しょうさん 勝算【名】〔人〕高僧。俗姓は滋野(しげの)の京都の人。始め天台教を修めしが、後、眞言宗に歸す。一條天皇の寵を蒙る。寬弘八年寂す。年七十三。

しょう-ざん 松山【名】松の生えたる山。まつやま。

じょう-さん 蒸散【名】〔植〕じょうそうさよう(蒸騰作用)に同じ。

じょう-ざん 乘算【名】〔數〕かけざん(掛算)に同じ。

しょうさん-くわ 松杉科【名】〔植〕顯花植物、裸子類、松柏門の一科。喬木又は灌木、多く樹脂を含めり。松族・杉族・扁柏(ひば)族の三つに細別せられ、松・落葉松(からまつ)・針樅(もみ)・樅(つが)・樅(もみ)などは松族に、高野槇(こうやまき)・廣葉杉(ふろくすぎ)・臺灣杉は杉族に、羅漢柏(あすなろ)・梢楠木(くすのき)・側柏(かしわ)・絲杉・扁柏(ひば)・柏心(びゃくしん)などは扁柏族に屬す。

じょうさん-さよう 蒸散作用【名】〔植〕じょうそうさよう(蒸騰作用)に同じ。

しょうさんじゃうど-きゃう 稱讚淨土經【名】〔書〕次條の略。譯曲(曾經)「この山に籠りたまひつつ、稱讚淨土經、毎日讀誦(どくじゅ)したまひしが」

しょうさんじゃうど-ぶっせふじゅ-きゃう 稱讚淨土佛攝受經【名】〔書〕『淨土を稱讚すれば、佛が攝受する意』唐の玄奘三藏の譯述に係り、方等部に屬する佛經。一卷。

しょう-し 承嗣【名】うけつぐこと。あとつぎ。承襲。繼承。「じ。

しょう-し 松子【名】松のえだ。

しょう-し 松脂【名】まつやに。松膏。

しょう-じ 頌辭【名】ほめたたふることば。

しょう-じ 勝事【名】すぐれたる事。なみたらざることがら。平家「異なる勝事なれば、公卿僉議ありて」

しょう-じ 承仕【名】〔佛〕『承も仕(つか)ふる意、即ち命令を承(う)くる意』■法會の時、花籠(けこ)を執り、寺内の裝飾に與り、又遲參の僧侶の許へ催促に赴く等、社寺の雜役を勤むる卑しき役。妻帶なるも、出家なるもあり。承仕法師。そうじ。■髮を剃りて、仙洞、攝家などの雜役を勤め、後に法橋・法眼などに進むべきもの。■室町幕府の職制の一。剃髮にて、規式の際、殿中の裝飾を掌りしもの。「じ。

じょう-し 乘子【名】〔數〕いん(因子)に同じ。

じょう-し 縱囚【名】『縱はゆるしはなつ義』囚人を釋放して家に歸らしむること。

じょう-し 誦呪・誦咒【名】呪文(じゅもん)を誦すること。しょうじゅ。

じょう-し 乘舟【名】船に乘ること、又乘りたる船。

じょうし-もん 承秋門【名】豐樂(ぶらく)院十七門の一。西面せる三門の中央。應天門と承歡堂との渡殿の中央に位せしもの。

しょうしもん-ねん 承秋門院【名】〔人〕東山天皇の中宮。中御門天皇の准母。有栖川幸仁(ゆきひと)親王の長女。御名は幸子(さちこ)。享保五年崩ず。年四十一。

しょう-しき 鍾子期【名】〔人〕支那周代の楚の人。音を聞くに妙を得たりといふ。ちゅうし(知音)參照。

しょうし-くわうたく 松脂光澤【名】〔鑛〕『英Resinous lustre』琥珀・硫黃などの有する光澤。「さ。松子。

しょう-じつ 松實【名】松の實(み)。まつかさ。

しょう-じつ 勝日【名】五行家にて、五行の相剋する日、即ち木剋土・土剋水・水剋火・火剋金・金剋木といふ日。

しょう-しふ 誦習【名】讀みならふこと。

しょう-しふ 承襲【名】あとを承けつぐこと。承嗣。繼承。

しょうじ-ほふし 承仕法師【名】しょうじ(承仕)■に同じ。盛衰記「これは、當社の承仕法師にしてはべるが、…社頭にみあかし參らせんとて參るなり」徒然「遍照寺の承仕法師、池の鳥を日頃餌ひつけて」

じょう-しほん 自用資本【名】所有者自身が、直接自身の營業に使用する資本。(他用資本に對して)

しょう-しん 升進・昇進・陞進【名】官位などの進むこと。平家「一族の昇進六十餘人」

しょう-しん 衝心【名】〔醫〕かっけ(しょうしん(脚氣衝心)の略。「すること。

しょう-しん 悚神【名】恐れて、精神を竦動すること。

しょうしん 證眞【名】〔人〕天台宗の學僧。比叡山にありて、大藏經を閱すること十六度に及ぶ。後、東塔の華王院に移りて、大いに講說す。また高倉上皇の命に依りて、根本中堂に安居(あんご)の論議を批判せしことあり。寂年不詳。三大部私記その他の著述多し。

しょう-しん-ぶぎゃう 昇進奉行【名】室町幕府の職制の一。將軍宣下・任大臣・任大將の時、臨時に奉行中より補任せられて、庶事を處理せしもの。

しょうしん-ほふしんわう 承眞法親王【名】〔人〕有栖川職仁(もとひと)親王の御子。光格天皇の御猶子。俗名は惇德。戒を尊眞入道法親王に受けて、天台座主となり、牛車を許さる。天保十二年寂す。年五十五。

しょう-しゃ 勝者【名】勝利を得たる人。(敗者に對して)

しょう-しゃ 使用者【名】人を使用する人。

しょう-しゃ 自用車【名】自己の使用に充つるための車。

じょう-しゃ 自用者【名】自用に供する人。

じょう-しゃ 乘車【名】車に乘ること、又乘れる車。(下車に對して)

しょう-じゃう 勝上【名】松の木の上。

しょう-じゃう 丞相【名】『丞は承の義、相はたすくる義、合して君主の意を承(う)けて、これを助くる者の意』■古、支那にて、天子を輔けて、國政を總理せし官職。宰相。■執政の大臣。

しょうじゃう 勝情【名】山水の景勝を好む心。

しょうじゃう 證誠【名】〔佛〕しょうぢ(證義)㊀に同じ。

しょうじゃう 證狀【名】或事實の證明に供する書狀。

しょうじゃう 鐘狀【名】■大鐘(おほがね)の如き形。■〔植〕『英 Campanulate』夢花冠の、鐘のごとき形狀をなせるもの。鐘形。

じょうしゃう 丞相【名】じょうじゃう(丞相)に同じ。

じょうしゃう 繩牀・繩床【名】繩を張りたる、極めて粗造なる椅子。形は今の安樂椅子に似、禪徒の倚るもの。徒然「繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし」水鏡「繩床に端坐して、命をはりにしかば」

しょうじゃうじ 證誠寺【名】越前國今立郡橫江村字橫越にある眞宗の寺。山元派の本山。護念院と號し、三門徒の一たり。もと同國山元庄に在りて、宗祖親鸞の創建に成る。次いで親鸞の子善鸞これに住し、後、淨如、堂宇を再興し、山元山證誠寺の勅號を得たりしが、第八世道性の時、今の地に移り、明治十一年西本願寺より分れて、獨立す。

しょうじゃうじは 證誠寺派【名】〔佛〕さんげんは(山元派)に同じ。

しょうじゃうだいぼさつ 證誠大菩薩【名】〔佛〕『佛說阿彌陀經の中に、六方の如來の、各廣長舌を出して、阿彌陀如來の功德を稱揚し、證誠するを記せるに本づく』紀伊國熊野神社の祭神伊弉冊(いざなみ)尊を、兩部神道にて、阿彌陀佛の垂迹(すゐじゃく)なりとして唱へし敬稱。盛衰記「證誠大菩薩は、濟度菩薩の敎主、三身圓滿の覺王なり」

しょうじゃうだゑんけい 鐘狀楕圓形【名】〔植〕鐘形を帶びたる楕圓形。

しょうじゃうでん 證誠殿【名】紀伊國熊野神宮の內證誠大菩薩を祀れる神殿。保元「法皇、熊野へ御參詣あり、本宮證誠殿の御前にて、現當二世の御祈念ありしに」謠曲「遊行柳」「本宮證誠殿阿彌陀如來の誓にて」

じょうしゃうやくぶ 乘車切符【名】乘車のために、賃銀の受領及び乘車の權利を表明する切符。乘車券。

しょうじゃく 松爵【名】『ごたいふ(五太夫)㊀』『松の位』を見よ』五位の異稱。十訓「五品を松爵といふ、これなり」

じょうしゃく 繩尺【名】■すみなはと、ものさしと。■きく(規矩)㊀に同じ。

じょうしゃけん 乘車券【名】じょうしゃくぶ(乘車切符)に同じ。

しょうしゅ 稱首【名】『第一に稱する義』かしら。第一番。

しょうしゅゆ 松脂油【名】てれびんゆ(テレビン油)に同じ。

しょうじゅ 松樹【名】松の木。

松樹千年終に是れ朽つ【句】『權花(ごんくわ)一日の榮』を見よ。松は常綠木なれども、千年の後には朽つとの意』天下の物死せざるなき譬。謠語

しょうじゅ 誦呪・誦咒【名】しょうじゅ(誦呪)に同じ。

しょうじゅう 承從【名】『承(う)け從ふ義』さからはずに從ふこと。承順。

しょうじゅつ 稱述【名】言ひのぶること。

しょうじゅん 承順【名】じょうじゅう(承從)に同じ。

しょうしょ 誦書【名】聲を立てて、書を讀むこと。讀書。

しょうしょ 證書【名】■事實の證明に供するための書面。公正證書と私署證書とに分つ。■しょうけん(證券)に同じ。

しょうじょ 昇敍・陞敍【名】官位を陞せ進むること。

じょうしょ 蒸暑【名】むしあつきこと。海暑。蒸熱。海熱。

じょうしょ 烝庶【名】しょみん(庶民)㊀に同じ。

じょうしょう 悚悚・竦竦【貌】しょうぜん(悚然)に同じ。

しょうじょう 勝乘【名】〔佛〕だいじょう(大乘)に同じ。

じょうじょう 烝烝【貌】■物の盛んにおこるさま。■隨ひ行くさま。

じょうじょう 茸茸【貌】■草の生茂りたるさま。■小人の群り居るさま。

じょうじょう 繩繩【貌】■多きさま。■絕えざるさま。

しょうしょげんぼ 證書原簿【名】公證人が、公正證書作成の場合に、その番號・種類・作成の年月日及び嘱托人の住所・氏名等を記入する原簿。この帳簿は、記入前に於て、豫め所屬地方裁判所長の契印を受くべきものとす。

しょうしょさいけん 證書債權【名】〔法〕その存在及び範圍が專ら證書のみにより決定まる債權。例へば無記名債權・指圖債權の類。

しょうしょそしょう 證書訴訟【名】〔法〕『獨 Urkundenprozess』特別訴訟手續の一。一定の金額の支拂、その他の代替物もしくは有價證券の數量の給付を目的とする請求を起すとき、すべて證書によりて、その必要なる事實を證明し、簡易なる手續を以て訴訟を起すこと。

しょうしょひきかへばらひ 證書引換拂【名】〔商〕しょうけんひきかへばらひ(證券引換拂)に同じ。

しょうしょ-めん 證書面【名】證書の文面。

しょうす 頌す【動佐變他】言葉を用ひて、その德をほむ。

しょうす 誦す【動佐變他】聲を立ててよむ。となふ。じゅす。ずす。ずんず。誦讀す。

しょうす 證す【動佐變自】■證據立つ。あかす。證明す。■〔佛〕『しょう(證)㊁』を見よ』眞理をさとる。證悟す。「菩提(ぼだい)を證す」「無明の惑を斷じて、眞如を證す」

しょうす 稱す【動佐變他】■いふ。呼ぶ。となふ。■たたふ。賞す。褒む。

じょうず 稱す【動佐變他】前條㊀に同じ。風流誡年代記「高砂の都と稱ず」

じょうず 乘ず【動佐變他】掛算を行ふ。かけあはす。かく。

じょうず 乘ず【動佐變自】■のる。正統記「船に乘じたまひて、上總に至り」■かこつく。つけこむ。つけあがる。「機に乘ず」「弱點に乘ず」

じょう-すう 繩墨【名】『英 Multiplier』掛算の掛くる方の數。法。(被乘數に對して)

しょうすゐ 松翠【名】松のみどりの色。

じょうせい 證誠【名】しょうじゃう(證誠)に同じ。

しょうせい 鐘聲【名】かねのおと。

しょうせい 稱制【名】制を稱すること。「制を稱す」參照。

しょうぜい 使用稅【名】〔經〕各人がその財產を使用する事實に課する租稅。(營利稅・所有稅に對して)「所舊蹟。

しょうせき 勝蹟・勝跡【名】名勝・古蹟。名ぼそ。卑しき民の住居の形容にいふ。

しょうせき 蹤跡・蹤迹【名】■あしあと。あと。踪跡。盛衰記「三代の蹤跡ありといへども」■ゆくへ。ゆきがた。踪跡。■『春渚記聞に「往三靑州一蹤二跡之一」とあり』逃げたる人を追ひたづぬること。■事跡。形迹。

しょうせき 證跡・證迹【名】證據となる

じょうせき 乘積【名】〔數〕『英 Product』掛算をなして生じたる結果の數。積。

しょうせつ 稱說【名】のぶること。陳述。

しょうぜつ 勝絕【名】■最もすぐれたること。■〔音〕次條の略。

しょうぜつてう 勝絕調【名】〔音〕十二調子の一。漢名は夾鐘。鍵樂器にては、下卽ちへ音に相當す。徒然「その間に勝絕調を隔てたり」

しょうぜん 承前【名】前文を承(う)くること。前回に揭げたる文句より續くこと。

しょうぜん 聳然【貌】おそれて容(かたち)を改むるさま。

しょうぜん 悚然・竦然【貌】おそれて、ぞっとするさま。悚慄。

じょうせん 剩錢【名】■あまりの錢。■つりせん。つり。「りたる船。

じょうせん 乘船【名】船に乘ること。又乘りたる船。

じょうせんきっぷ 乘船切符【名】乘船のための賃金の受領及び乘船の權利を表明する切符。

しょうせんーたん 昇仙丹【名】きんかうたん（金霞丹）に同じ。
しょうーそ 訟訴【名】そしょう（訴訟）に同じ。
しょうーそ 勝訴【名】訴訟に勝つこと。かちくじ。（敗訴に對して）
しょうーそく 承足【名】幼少の天子が御倚子に就かせらるる時、足を承（う）くるための物。長さ一尺六寸、高さ・廣さ各五寸。
しょうそーさうぞく 承祖相續【名】〔法〕だいしふさうぞく（代襲相續）に同じ。
しょうそーしゃ 勝訴者【名】訟訴に勝ちたる人。（敗訴者に對して）
じょうーそん 仍孫【名】『仍は重なる義』昆孫の子。玄孫の曾孫。和名「仍孫、爾雅云、昆孫之子爲仍孫、仍重也」
じょうーた 冗多【名】くだくだしく多きこと。「を見よ。
しょうたい 承兌【名】〔人〕さいせう（西笑）
しょうーたいしゃく 使用貸借【名】〔法〕『英 Loans for use』無償にて使用・收益せる後に、相手に返還する約束にて、相手方より或物を受取りたる後に成立する契約。
しょうーだいぼだい 證大菩提【名】〔佛〕しょうぼだい（證菩提）に同じ。
しょうーたう 稱稻【名】すねこなう（出擧稻）に同じ。大學寮式「常陸國稱稻、五萬四千束」
しょうーたう 松濤【名】松風の音の、濤の音のごとく聞ゆるもの。乾濤。
しょうーたう 承當【名】うけつぐこと。繼承。太平記「直ちに承當し候はんずる事、恐らくは恥づべき人も候はねば」
しょうーだう 稱道【名】しゃうだう（唱道）に同じ。
しょうーだう 鐘堂【名】しゅだう（鐘樓）に同じ。
しょうーだう 證道【名】〔佛〕萬有の實相を證悟する道。
じょうーたう 乘稻【名】『乘は剩の省字として用ひしなるべし』正稅・公廨（くわい）などの外に剩（わ）れる稻。
しょうだう-か 證道歌【名】禪の證道を詠じたるもの。紙數數葉に過ぎざれども、文辭流麗、誦するに堪ふ。支那の眞覺大師玄覺、禪の第六祖慧能に會し、つひに禪に歸して作りしものといふ。
しょうたう-にん 承當人【名】しょうけいにん（承繼人）に同じ。
しょうーだく 承諾【名】聽入るること。うけひくこと。うべなふこと。承知。承引。
しょうだく-しゃ 承諾者【名】承諾せる人。
しょうだく-しょ 承諾書【名】承諾の旨を記したる書面。「と。賞歎。
しょうーたん 稱歎・稱嘆【名】ほめはやすこと。
じょうーだん 冗談・戯談【名】ふざけたる談話。むだばなし。じょうだんばなし。
じょうだん-ばなし 冗談話・戯談話【名】前條に同じ。
しょうーち 勝地【名】■形勝の地。太平記「都：桓武の聖代、この四神相應の地を選びて、…百王萬代の寶祚を修しおかれし勝地なれば」■よき土地。名所。勝境。勝區。榮花「殿のうちのありさましつらひ、なほ、こは、いかなりける勝地ならんと見えたり」
勝地、定主無し【句】『白居易の遊二雲居寺一贈二穆三十六地主一』と題する詩に「亂峯深處雲居路、共賞レ花行獨惜レ春、勝地本來無二定主一、大都山屬二愛レ山人一」とあるに本づく『土地の形勝に見る人人の占め得べきものにて、一人の占有すること能はぬものなり』（諺語）「語」
勝地に主無し【句】前條に同じ。（諺）
しょうーち 承知【名】■『三國志の蜀の費詩傳に「承二知消息一慨慕永歎」とあり』旨を承りて知ること。■しょうだく（承諾）に同じ。盛衰記「奉レ仰下知如レ件、諸國官二承知一」
承知之（の）助【句】承知を人名めかしていふ語。
承知の幕【句】承知せる事柄。
しょうーち 勝致【名】すぐれたる風致。
しょうーち 證智【名】〔佛〕證悟を得る正智。
しょうーお 聳峙【名】そびゆること。そばだつこと。
しょうーちく 松竹【名】松と竹と。松筠。
しょうちく-ばい 松竹梅【名】松と竹と梅と。「歲寒の三友」參照。
しょうちーじ 勝持寺【名】山城國乙訓（おとくに）郡大原野村にある天台宗の寺。役（えん）小角の開基。本尊は藥師如來。舊稱、大原（はら）寺。足利尊氏祈禱所に充てて、今の名に改め、織田・豐臣・德川の諸氏も相次いで諸堂を修補す。境内に西行の庵室あり。俗稱、花の寺。
しょうちーづく 承知盡【名・副】互に承知し居ること。
しょうちとくわい-へん 勝地吐懷篇【名】〔書〕類字名所集の歌の國國の相違、或は脫漏の名所、或は中古より誤れる地名などを論じたるもの。二卷。僧契沖の著。
しょうーちん 昇沈【名】■昇ることと沈むこととと。平家「當來の昇沈を顧みず」盛衰記「隔生卽忘（キャクシャウジン）とて、生死（シャウジ）道隔りぬれば、昇沈苦樂ことごとくに忘れ」■盛んなることと衰ふること。浮沈。
しょうーちん 承塵【名】『三輔決錄に「有レ鳩從二承塵上一、飛下二几前一」とあり』屋根裏より落つる塵埃を承くるために、板布などを張りたるもの。天井は卽ちその變化したるもの。**なげし**（長押）參照。和名承塵、施二於上一承レ塵土一也」
しょうーぢん 衝陣【名】敵に向ひて突擊する軍隊。太平記「四武の衝陣、堅を碎きて、百戰の勇力、變に應ぜしかば」
じょうーちゃう 冗長【名】無用の長物。いたづらに長たらしきこと。
しょうちゃうじゅーゐん 勝長壽院【名】源賴朝、父義朝の追福の爲に鎌倉大御堂谷の地に建てし寺。足利氏の頃廢絕し、今はその遺趾詳かならず。南御堂。金槐「三月末つ方、勝長壽院に詣でたりしに」
しょうちゃうじゅゐんぶぎゃう 勝長壽院奉行【名】鎌倉時代に、勝長壽院の寺務を掌りし役。
しょうぢゃうゐん 勝定院【名】〔人〕あしかがよしもち（足利義持）の諡號。
しょうーぢゆう 鐘頭【名】〔佛〕禪寺にて、一日四回、曉・昏・齋（とき）・入定の時の鳴鐘を撞く役。
じょうーぢょ 乘除【名】■掛けることと割ることと。乘法と除法と。■增すことと減ずることと。
しょうちよう 承澄【名】〔人〕畫僧。小川の僧正と號す。特に馬を畫くに巧にして、筆法、鳥羽僧正に似たり。建治・弘安頃の人。
しょうーちよう 鍾龍【名】めで愛すること。寵愛をあつむること。
しょうぢーゐ 誦持位【名】〔佛〕衆僧の讀經する時、過失を正し、又は經文の忘逸を察して、僧綱に訴へ告ぐることを掌る僧職。
しょうーてい 衝程【名】『英 stroke』汽筒（シリンダー）中に於けるピストンが、一端より他端に滑動する距離。
しょうーてい 訟廷【名】さいばんてい（裁判廷）に同じ。
じょうーてい 繩梯【名】なはばしご（繩梯子）に同じ。
しょうてい-きんすゐ 松亭金水【名】〔人〕江戸の小說家。通稱は中村源八。積翠道人と號す。爲永春水の門に入りて、人情本の作あり。讀本には尼子九牛傳・大岡仁政錄等あり。文久二年歿す。年六十八。
しょうてい-ぶん 鐘鼎文【名】支那古代の鐘・鼎・彝器（いき）に鑄又は鏨（きざ）りたる文字。古文・大篆の類。
しょうーてき 悚惕【名】おそれをののくこと。
しょうーてん 昇天【名】■天に昇ること。■〔基〕『英 Ascension』基督の磔刑の後、七日にして甦（よみがへ）りて、のち天に昇れること。
しょうーてん 昇殿【名】『唐書の禮樂志に「殿ノ升レ殿者詣二東西階一」とあり』中古以後、四位以上の者、また藏人（くらうど）は六位にても許されて、禁中の殿上に昇りしこと。これを許さるる時は、藏人別當勅を奉じて傳宣し、藏人頭（とう）、宣旨を書し、然る後慶賀拜舞を奏せしめ、昇殿の事終れば、日給簡（ひがうかん）に附記する習にて、これを許されしを、殿上人又は堂上人と呼び、然らざる者を、地下人（ぢげ）又は地下を呼びたり。上皇御所のを御院昇殿といひ、これに對して、禁中のを內昇殿（うちのぼり）と呼び、東宮御所の昇殿もあり。それぞれその聽許を經たりしが、後には內昇殿を許されし者は、他

の二者をも通じて許さるることとなりたり。**はんしようでん**(半昇殿)**げんじよう**(還昇)参照。千載「まだ小男に侍りけるとき、始めて昇殿申させ侍りけるを」

しよう-でん 承傳【名】承け傳ふること。

じよう-でん 乘田【名】**じようよでん**(剩餘田)に同じ。

しようてん-さい 昇天祭【名】〔基〕『Ascension Day』基督の復活後、昇天せるを祝する祭。復活後四十日目に昇天せりとの傳說により、復活祭後、四十日目に行ふ。神聖木曜日。昇天節。

しようてん-せつ 昇天節【名】〔基〕『Holy Thursday』前條に同じ。

しようてん-らく 承天樂【名】雅樂の一。壹越(ヨツ)調に屬す。

しよう-とう 昇等・陞等【名】等級の昇ること。

しよう-とう 升騰・昇騰【名】■空高くのぼること。■値段の高くなること。騰貴。

しよう-とう 竦動・悚動【名】ぞっとするほど心を動かすこと。

しよう-とう 聳動【名】おそれ動くこと。おどろかし動かすこと。

しよう-とう 衝動【名】〔哲〕『英Impulse』何等の目的を意識せず、善惡を思考せず、心的生活の一般系統と無關係に、單に外界の刺戟に應じて、迅速に動く行爲。例へば反射運動・本能等の類。

しよう-どう 鐘銅【名】『英Bell metal』青銅の一種。鐘・鈴などを鑄るに用ふるもの。銅百分の七十七乃至八十、錫二十乃至二十三より成り、間間少量の鉛・鐵・ニッケル等を混加するものあり。音響を出すため、その質堅硬なるを要す。

じよう-どう 承鐙【名】馬の旋毛(ツムジ)の一。脇腹の前にあるもの。「じ。

承鐙の肉(シシ)【句】**あぶみずり**(鐙摩)に同じ。

じよう-とう 蒸騰【名】(植)次條に同じ。

じようとう-さよう 蒸騰作用【名】(植)『英Transpiration』根より吸收したる水が、葉・枝・葉を通過して、外部に蒸發する作用。通發作用。蒸散作用。

しようどう-する-しや 衝動水車【名】水車の一。水の衝動によりて回轉するもの。

しやうどう-つばめ しやうどう燕【名】〔動〕燕屬中の小形なる鳥。尾は僅かに分叉せるのみ。海邊に群をなして飛翔し、濱岸の土砂に穴を穿ちて、産卵す。すなむぐり。すなむぐりつばめ。

しようどう-はふ 衝動法【名】〔醫〕『英Implantation』炎症治療法の一。局所の血行を旺盛ならしめ、組織細胞の機能を增さしめ、炎症物を驅除するもの。苞布(カバン)濕布繃帶を用ふる溫蒸法・溫浴法・按摩法及び水銀劑沃度丁幾(ヨオヂチンキ)を局所塗布料とし、沃度加里を內服藥とする類。

しよう-とく 頌德【名】功德を頌すること。

しよう-とく 稱德【名】『論語の憲問篇に「驥不レ稱二其力一、稱二其德一也」とあり』その物がその德に稱(カナ)ふこと。

しよう-とく 所得【名】**しよこく**(所得)に同じ。〔古語〕宇治「玉のぬしの男、しようとくしたりと思ひけるに惑ひとりて」

しよう-とく 證得【名】■〔佛〕**しようにふ**(證入)に同じ。■みだり心を動かさぬやうにすること。〔古語〕無名抄「人にゆるさるるほどになりたりとも、しようとくして、われは、きそくしたる歌よみたまふな」

しようとく 承德【名】堀河天皇の御代の年號(紀元一一七七年—一七五八年)。

しよう-とく 誦讀【名】そらよみ。よむこと。讀誦。

しようとく-くわんぎち 證得歡喜地【名】〔佛〕『歡喜の境地を證得する義』**しよっくわ**(證果)に同じ。

しようとく-てんわう 稱德天皇【名】〔人〕第四十八代の天皇。孝謙天皇の重祚。在位五年(紀元一四二五年—一四二九年)。神護景雲四年崩ず。壽五十三。

しようとく-ひ 頌德碑【名】功德をほめたたへて記せる牌。

しようとく-へう 頌德表【名】功德をほめたたへて奉る文書。

しよう-とつ 衝突【名】■つきあたること。■相互に背反すること。扞格(カンカク)。■〔理〕『英Impact』運動速度の異なる、もしくは一方は速度を有し、他の一方は靜止せる二物體が接觸したる瞬間に起る作用。

じよう-どの 尉殿【名】■**じよう**(尉)■の敬稱。■〔植〕**おきなぐさ**(翁草)■を云ふ。〔西國の方言〕

しようなん 勝南【名】〔地〕美作國の舊郡の一。明治三十三年勝北郡と合して、勝田(タウ)郡となる。

じよう-なん 拯難【名】『拯はすくふ義』**きうなん**(救難)に同じ。

じよう-にふ 證入【名】〔佛〕正智を以て、如實に眞理を證得すること。悟入。證得。

しよう-にん 證人【名】■**しようこにん**(證據人)に同じ。十調「この證人のために」■**ほしようにん**(保證人)に同じ。■〔法〕當事者以外の第三者にして、或見聞せる事實を法廷にて供述するために、裁判所より呼出され、宣誓の上、供述をなす人。■**ひとじち**(人質)に同じ。

しよう-にん 承認【名】『承知・認諾の義』異見なくして、承諾すること。

しよう-にん 使用人【名】■物又は人を使用する人。使用者。■他人に使用せらるる人。■**しやくにん**(商業使用人)の略。

しよう-にん 昇任・陞任【名】上級の官にのぼること。

しようにん-しよ 承認書【名】承認の旨を記したる書面。

しようにん-ぶぎやう 證人奉行【名】足利幕府の職制の一。判決の公平を保つために、對決に立合ひ、吟味陪席の奉行に偏頗なきやうにせしもの。今の檢事の如し。

しようにん-やしき 證人屋敷【名】『**しようにん**(證人)■を見よ』江戶幕府の時、諸侯の妻子を證人として留置きたる江戶屋敷。

しようにふ-せき 鐘乳石【名】〔鑛〕『英Dalmatite』石灰岩中に滲入せし水の炭酸石灰を溶解して、空洞壁より滴るる時、水分蒸發して方解石を生じ、次第に垂れさがりたるもの。つららいし。石のよだれ。いしのはな。いしのつらら。いはつつら。いしのちち。石の乳(チ)。**せきじゆん**(石筍)參照。

しようにふ-どう 鐘乳洞【名】『英Limestone cave』鐘乳石より成れる空洞。石灰洞。

しようによ 證如【名】〔人〕■高僧。一に勝如に作る。藤原佐通の子。證道に就きて顯密の教を學ぶ。貞觀八年寂す。年八十七。■眞宗の僧。本願寺第十代の主。名は光敎、光融の長子。後奈良天皇卽位の禮を行ばれし時、大內義隆資を獻じ、證如またこれを助けしため、二品親王の宣下を賜ふ。天文二十三年寂す。年三十九。

じよう-ねつ 蒸熱【名】**じようしよ**(蒸暑)に同じ。

しよう-ねん 稱念【名】〔佛〕口に佛號をとなへて、心に佛を念ずること。稱名と念佛と。心念・口唱(ヤク)。

しようねん-じ 稱念寺【名】越前國坂井郡長崎に在る時宗の寺。開基は遊行・他阿上人。往生院と號す。

しようは 衝破【名】つき破ること。突破。

じようば 乘馬【名】■馬に乘ること、又その人。■乘用に供する馬。のりうま。じようめ。

しようはい 勝敗【名】かちまけ。勝負。勝敗は兵家の常【句】「勝負は兵家の常」に同じ。〔諺語〕

しようはう 承保【名】白河天皇の御代の年號(紀元一一三四年—一一三六年)。

しようはうかんじん-しやうむ-わうだいじ-んわう(聖武天皇)に同じ。

しようはく 松柏【名】■松と柏と。■常磐木の稱。■節操を守りて變ぜぬこと。

しようは-の-さう 松柏の操【句】『南史に「與二松柏一比レ操」とあるに本づく』堅固なる節操。

しようはく-の-げ 松柏の下(モト)その草殖えず【句】『左傳に「鄭行人子羽曰、是謂二不宜一必代レ之昌、松柏之下、其草不レ殖」とあるに本づく』小なるものは、大なるものに勢力を奪取せらるるをいふ。

しようはく-の-しげり 松柏の茂(モ)【句】『詩經小雅の天保篇に「如二松柏之茂一」とあるに本づく』松や柏の鬱蒼と繁茂せる有樣。

しようはく-くわ 松柏科【名】(植)しようさ

んくわ(松杉科)に同じ。

しようはくるゐ 松柏類【名】〔植〕『英Coniferæ』顯花植物裸子類の一門。その特長は木本にして、莖幹は分枝し、導官は第二木質部に於て缺如す。單葉にして、全緣をなし、梳ね針形・披針形又は片狀なり。花は單性にして雌雄同株、花被なし。

じようば-せん 乘馬戰【名】〔兵〕騎兵が乘馬のまま交戰すること。(徒歩戰に對して)

じようば-たい 乘馬隊【名】騎馬の軍隊。

しようはた-じやう 勝幡城【名】尾張國海部(アマ)郡勝幡村大字勝幡にありて、織田信定の居りし城。

じようはつ 蒸發【名】〔理〕『英Evaporation又Vaporization』液體の、熱を受けて、表面より氣體と化する作用。

しようはつ-おん 蒸發の潛熱【句】〔理〕きくわねつ(氣化熱)に同じ。

しようはつ-ばつ 鑢拔【名】特別に高く鑒ゆる「こと。

じようはつ-き 蒸發氣【名】蒸發によりて生じたる氣體。ゆげ。蒸氣。

じようはつ-けい 蒸發計【名】『英Evaporimeter』氣象器械の一。水面よりの蒸發量を測定する器。通例銅製又は亞鉛製の圓筒の內面に白鑞(スズ)を引きたるもの。これに水を盛りて、平に地面に安置し、一定時の後、その水の減じたる量を計り、以てその時間內に於ける蒸發量を知る。

しようはつてんしよ 私用發電所【名】自家の需要のために設けたる發電所。

じようはつ-ねつ 蒸發熱【名】〔理〕きくわねつ(氣化熱)に同じ。

しようはふ 春法【名】檢見法の一。坪刈して得たる稻の穗を去りて籾にし、箕にて粃(シヒ)を簸(ヒ)り去ること。「ひかた。

しようはふ 使用法【名】使用の方法。用

しようばふ 承乏【名】『左傳の成公二年の條に「敢告不敏、摠レ官承レ乏」とあり。空乏を承(ウ)けて、暫くこれを補ふ義』官に就くことの謙稱。「に同じ。

じようはふ 乘法【名】〔數〕かけざん(掛算)

じようばへい 乘馬兵【名】乘馬の兵卒。

しようはん 鐘板【名】鐘と板木(ハンギ)と。奥の細道「鐘板鳴って、食堂(ジキダウ)に入る」

しようばん 證判【名】次條の略。

しようばん-じやう 證判狀【名】いけんじやう(一見狀)に同じ。

しようび 鍾美【名】『美を鍾(アツ)むる義。しようあい(鍾愛)參照』多くの美(ビ)き事の、一つの物の上にあつまれること。「讃。

しようび 稱美【名】ほめたたふること。稱

じようひ 冗費【名】無益なる入費。むだづかひ。冗用。

しようびん 鴇【名】〔動〕『そびの訛』かはせみ(川蟬)に同じ。「品。

じようひん 自用品【名】自用に供する物

しようひん 證憑【名】證明のよりどころとなること。證據。

しようひよう-いんめつざい 證憑湮滅罪【名】〔法〕他人の刑事被告事件に關する證憑を湮滅し、又は僞造・變造もしくは僞造・變造の證憑を使用するによりて成立する犯罪。

しようひよう-しよ 證憑書【名】證憑となる書面。證書。

しようひよう-しよるゐ 證憑書類【名】證憑となる書類。證據書類。

しようひよう-ぶつけん 證憑物件【名】證憑となる物件。證據物件。

しよう-ぶ 勝負【名】■しようはい(勝敗)に同じ。■かちまけを決すること。■しよぶ(勝負事)の略。

有る時勝負【句】たまたま資力を得て、冒險なる輸贏を大膽に決行すること。一六勝負。〔俚語〕

勝負は時の運【句】勝つも負くるも、ともにその時の運命なれば、人の力にては如何にともせんやうなし。〔諺語〕

勝負は兵家の常【句】『唐書の裴度傳に「帝曰、一勝一負、兵家常勢」とあるに本づく』かちまけは兵家のならひ。勝敗は兵家の常。

しよう-ぶ 鐘部【名】〔動〕水母(クラゲ)の、鐘狀をなせる部分、卽ちその體。

しよう-ふう 松風【名】松に吹く風。まつかぜ。松籟。松濤。

しようがは 勝武革【名】こやうぶかは(葛蒲革)に同じ。

しよう-ふく 承服・承伏【名】承知して服從すること。なつとく。

しようぶ-ごと 勝負事【名】■かちまけを爭ふ遊技。■かけごと。ばくち。

しようぶ-し 勝負師【名】ばくちうち(博打)に同じ。狂言(字彙人)「このあたりに隱れもない勝負師で御座る」

しようぶつ 稱佛【名】〔佛〕佛名を稱ふること。稱名。念佛。

しようぶ-づく 勝負盡【名】かちまけ次第にで決すること。丹波與作「正味で借った錢ではなし、數ばかりの勝負づく」

しようぶ-どく 勝負得【名】勝負事に勝ちて、賭(カケ)を得ること。狂言綱目「菜と勝負得をしたれば」

しようぶ-なし 勝負無【名】互に優劣の別なきこと。あひこ。「を爭ふこと。

しようぶ-まり 勝負鞠【名】蹴鞠にて、勝負

じようぶん 冗文【名】冗長なる文句。

しよう-へい 升平・昇平【名】『品字箋に「升平猶言二成平一、升平言二升斗之儲得レ平也、前漢梅福傳、民有二三年之儲一曰二升平一、又昇升也、日漸上升也、又昇平、皦日當レ空、六宇昇平矣」とあるに本づく』たいへい(太平)に同じ。

しよう-へい 勝兵【名】すぐれたる軍兵。

しよう-へい 承平【名】『漢書の食貨志に「今累世承平、家富吏民、訾數鉅萬」とあり。次次に太平を承くる義』太平の緻くこと。

しようへい 承平【名】朱雀天皇の朝の年號(紀元一五九一年—一五九八年)。

じよう-へい 冗兵【名】無益なる兵隊。

じよう-べい 蒸餅【名】■まんぢゆう(饅頭)に同じ。■ぱん(麵包)に同じ。

しよう-へう 證票【名】證據となるべき札。例へば受取證の類。

しようへう-れう 證票料【名】證票を受くるために支拂ふ料金。

しよう-べき 昇冪【名】〔數〕『英Ascending power』多項式の項又は文字を、次數の高きを先にし、低きを後にして排列すること。例へばa³b²−3a²b²+10ab³−b⁵をaの昇冪なりといふ類。(降冪に對して)

じようべき 乘冪【名】〔數〕べき(冪)に同じ。(乘根に對して)

じよう-へん 乘變【名】事變につけこむこと。

じようへん-せつたう 乘變竊盜【名】火災・水災などの變事に乘じてなす竊盜。

しようほう-らう 承奉郎【名】從八位上の唐名。

しようほく 勝北【名】〔地〕美作國の舊郡の一。■しようなん(勝南)參照。

じよう-ほく 繩墨【名】■すみなはと、その用に供する處と。■きく(規矩)[二]に同じ。

じよう-ぼく 濃墨【名】濃き色の墨。うす墨の反對。

しようぼだい 證菩提【名】〔佛〕『梵Anuttara-samyak-sambodhi(阿耨多羅三藐三菩提)の譯語』菩提を證得すること。佛道修業を成就すること。佛果を得ること。證大菩提。「頓證菩提」參照。

しようぼん 證本【名】證據とすべき書籍。

しようぼん 鐘梵【名】鐘聲と梵唄と。

しようま 升麻【名】〔植〕■みやましようま(深山升麻)の略。■あきからまつ(秋唐松)の異稱。

しようまい 春米【名】■うすづきたる白米。つきよね。■古、諸國にて春(ツ)きて、京都に輸送し、大炊(オホヒ)寮などに納めし白米。

しようまん 勝鬘【名】■〔書〕しようまんぎやう(勝鬘經)の略。盛衰記「法華・維摩・勝鬘等の三部の大乘」■しようまんゐん(勝鬘院)の略。「勝曼」 異途氷人「振返り見る勝鬘の愛染樣に愛敬を祈る芝居の子供衆や、道頓堀の色色や」「ること。

じよう-まん 冗漫【名】冗長にして、散漫なこと。

しようまん-あいぜんゑ 勝鬘愛染會・勝曼愛染會【名】大阪の勝鬘院にて、毎年六月一日に本尊愛染明王を開帳すること。愛染明王は、愛敬愛染の俗稱あるため、花柳界・芝居等に關係ある者の參詣多く、各自に紋所づき提灯一對を奉納する習慣あり。

しようまん-きやう 勝鬘經【名】〔書〕『梵 Śrīmālā devi simhanāma の譯語』詳しくは「勝鬘師子孔一乘大方便廣經」といふ。劉宋の求那跋摩(グナバルマ)三藏の譯。一卷。大寶積經中の第四十八勝鬘夫人會と同本異譯なるもの。勝鬘夫人の說示に係るといふ。二乘を破斥して、大乘の最も尊きものなることを說けるもの。次條參照。

しようまん-ぶにん 勝鬘夫人【名】〔人〕『梵 Śrīmālī(尸利摩維)の尸利を勝と譯し、摩維を夫人と譯せるもの』印度舍衛(シヤエ)國王波斯匿(パセノク)とその夫人摩利(マリ)との間に生れし一女。阿踰闍(アユヂヤ)國王友稱に嫁し、聰明にして、佛敎に歸依し、勝鬘經はその說示に係るといふ。一說には、假設の人物にして、その口を假りて、大乘の深義を說きしに過ぎずと。

しようまん-まつり 勝鬘祭勝曼祭【名】

しようまんあいぜんをう(勝鬘愛染會)に同じ。

しようまん-まゐり 勝鬘參·勝曼參【名】勝曼愛染會への參詣。愛染まゐり。心中又は氷の朔旦勝鬘まゐりのよね樣たち、駕籠がもどると云ふうちに」

しようまん-ゐん 勝鬘院·勝曼院【名】大阪市南區天王寺外、夕陽丘(ユフヒガヲカ)町にある天台宗の寺。四天王寺の末寺。本尊は愛染明王。聖德太子の勝鬘經の講讚を行ひし道場の址なりといふ。**しようまんあいぜんゐん**(勝鬘愛染會)參照。

じよう-みん 烝民【名】『烝は衆の義』しよみん(庶民)〔二〕に同じ。

しよう-みやう 稱名【名】〔佛〕【一】佛の名號を唱ふること。念佛。稱佛。【二】阿彌陀佛の名號を唱ふること。唱名。

しよう-みやう 證明【名】〔佛〕**しようめい**(證明)に同じ。盛衰記「七堂の三寶·四所明神、儻を垂れて、我が念を知見證明したまへ」

しようみやうじ 稱名寺【名】【一】武藏國久良岐(クラキ)郡金澤村に在る眞言律宗の寺。文永六年北條氏の一族なる金澤實時の本願に由り、その子顯時建立す。律僧妙性を開山とす。境內に金澤文庫あり。【二】下總國結城(ユフキ)郡結城町に在る眞宗の寺。新居山と號す。建保中、眞鸞の弟子眞佛の開基。本尊は阿彌陀如來。【三】三河國碧海(ヘキカイ)郡大濱町にある時宗の寺。延元四年僧解阿開基。德川氏の祖有親の遺跡を傳へて、有名なる道場なり。

しようみやうじ-どの 稱明寺殿【名】〔人〕**ほうじようさねとき**(北條實時)に同じ。

しようみやうじ-ぶんこ 稱名寺文庫【名】**かなざはぶんこ**(金澤文庫)に同じ。

しようみやう-しや 稱名者【名】稱名する者。善聞「功德最第一、六時稱名者」「名。

しようむ-らう 承務郎【名】從八位下の唐**じようむゐん** 乘務員【名】汽車電車などに關する職員の、常に車輛の上にて、職務に從事する者。卽ち機關手·運轉手·車掌などの類。

じよ-うん 曙雲【名】あけぼのの雲。曉雲。

じよう-め 乘馬【名】**じようば**(乘馬)〔二〕に同じ。

しよう-めい 證明【名】證據を立てて、理由·事情を明かにすること。あかし。

しよう-めい 鐘銘【名】鐘の銘。「じ。

しよう-めい 松明【名】**たいまつ**(松明)に同松明の役(エキ)【句】儀式の際、庭上にて、松明(マツミヤウ)を持つ役。

しようめい-しよ 證明書【名】證明の旨を記せる文書。

しようめい-しようけん 證明證券【名】〔法〕**しようけんしようけん**(證權證券)に同じ。

しようめいもん 承明門【名】平安城の舊內裏の內郭十二門の一。南面三門の中央、長樂門と永安門との間、建禮門の後方、紫宸殿の前方にあり。

しようめいもんゐん 承明門院【名】〔人〕**みなもとのありこ**(源在子)に同じ。

しよう-めう 勝妙【名】すぐれてたへなること。盛衰記「たとひ天上勝妙の樂(ガク)に誇るとも」

しよう-もん 證文【名】證據となるべき書類。契文(モン)。十訓「この家の證文など、質におきて、人の物を借りて」

證文の出後(アトヂオ)【句】手後(テヂオ)となりて、効力なきに至れる譬。證據の出しおくれ。〔諺語〕

じよう 生きた證文【句】その場に居合はせて、その事件を實際に知れる人を證人とするにつきていふ語。

しよう-もん 松門【名】松の立樹のおのづから門の形をなせるもの。謠曲「松門ひとり閉ぢて、年月を送り」

しようもん-がに しようもん蟹【名】〔動〕しほまねき(望潮)に同じ。「れ置く藏。

しようもん-ぐら 證文藏【名】證文類を入

しようもん-しらべかた 證文調方【名】江戸幕府の職制の一。下勘定所の一部代官又は諸役所等より差出したる會計の證文を精査して、調印することを掌りしもの。

しようもん-ち 證文地【名】江戶時代に由緒ある寺院に寄付せし田地。將軍家より寄贈に係るものは、御朱印地と呼びたり。

しよう-やう 稱揚【名】**しやうやう**(賞揚)に同じ。

じようやう-だいし 承陽大師【名】〔人〕だうげん(道元)の諡號。

しようよ 稱譽【名】ほめたたふること。ほめそやすこと。「言」

じようよ 【名】ちそう。饗應。〔日向國の方

しようよ 剩餘【名】【一】あまり。のこり。餘分。【二】〔數〕『英 Remainder』或數又は式を、他の數又は式にて除したる殘餘。

剩餘の定理【句】〔數〕除法を用ひずして、剩餘を求める定理。

じようよ 乘輿【名】『支那にては、もと天子以外にもいひしを、漢以來、狹義に用ひらるることとなれり。**しやが**(車駕)參照』天皇の乘りたまふ御車。車駕。「と。

しようよう 縱容【名】被害を默許すること。

しようよう 慫慂·從容【名】『揚子方言に「已不レ欲レ喜而旁人說レ之、不レ欲レ怒而旁人怒レ之、謂二之慫慂一、史記の衡山王傳に「日夜從容」とあり』勸めそやすこと。

じようよう 冗用【名】**じようひ**(冗費)に同じ。

しようよう 從容【貌】あわてず騷がず落ちつきたるさま。ゆったり。自若。

しようよう-ろく 從容錄【名】〔書〕『從容は萬松禪師の住せし燕京なる報恩寺內の庵號』天童宏智の頌古百則を評唱せるもの。六卷。宋の萬松禪師の著。

じよよき-ん 剩餘金【名】餘分の金。のこりの金。剩金。【二】に同じ。

じよよ-でん 剩餘田【名】**こうでん**(公田)

じよよ-はふ 剩餘法【名】〔哲〕『英 Method of residues』論理學者英人ミル(J. S. Mill)の歸納法の第四。一現象の中より、その現象に先だてる事柄の中の、その結果なりと、既往の研究によりて知られたる部分を除き去りて、その現象の殘れる部分は、先だてる事柄の中の殘部の結果なることを推知するもの。(類同法·差異法·相繼法に對して)「見よ。

しようら 初裏【名】〔文〕**しよをり**(初折)を

しよう-ら 松蘿【名】【一】〔植〕**さるをがせ**(松蘿)に同じ。【二】松にからまるかづら。

松蘿の契【句】『前條【二】の意より轉じていふ』男女の契。盛衰記「時賴人しれぬ見參して、……松羅の契色深く」

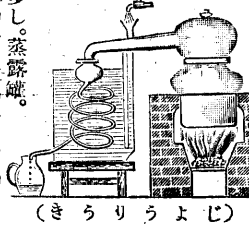
しよう-らい 松籟【名】**しようふう**(松風)に同じ。「同じ。

しよう-らん 縱覽【名】**じゆうらん**(縱覽)に同じ。

しよう-り 勝利【名】【一】相手に勝つこと。かち。【二】〔佛〕すぐれたる利益(リヤク)。從然「亡者の追善には、何事か勝利多き」

じようりう 蒸溜·蒸餾【名】〔理〕『英 Distillation』液體を熱して、蒸氣とならしめ、その冷凝したる滴を溜らすこと。(乾溜に對して)

じようりう-き 蒸溜器·蒸餾器【名】『英 Distillatories 又 Still』液體を蒸溜するに用ふる器。簡單なる方法にはレトルト·ランビキなどを用ひ、工業上等には、金屬製の複雜なる裝置を用ふること多し。蒸露罐。



(きうりうよじ)

しゅ(火酒)に同じ。

じょうりうすゐ 蒸溜水・蒸餾水【名】蒸溜せしめたる水。

じょうりうぶんせきはふ 蒸溜分析法・蒸餾分析法【名】〔理〕ぶんせきじょうりう(分別蒸溜)に同じ。

しょうーりつ 聳立【名】『立の字の音、正しくはりふ』そびえたつこと。「と。

しょうーりつ 悚慄【名】ふるひおそるること。

じょうーりつ 繩律【名】『繩を引きてただす義』のり。規則。

しょうーりふ 聳立【名】しょうりつ(聳立)を見よ。

しょうーりん 松林【名】松のはやし。まつばやし。

しょうりん-ゐん 勝林院【名】山城國愛宕(ギヤク)郡大原に在る天台宗の寺。三千院の北に位す。延暦寺の別院。長和二年寂源の開基。本尊は佛工康成の作の阿彌陀佛。

しょうーりやう 稱量(カウ)【名】『稱(カウ)り量る義』輕重・多寡をはかること、又そのもの。はかりめ。「に同じ。

しょうーりやう 承領(シヤウリヤウ)【名】りやうしょう(領承)に同じ。

じょうりやく 承曆【名】白河天皇の御代の年號(紀元一七三七年—一七四〇年)。

しょうりゅうじ-じやう 勝龍寺城【名】山城國乙訓(オトクニ)郡新神足(シンカタリ)村大字勝龍寺(又は青龍寺)にありしもの。畠山義就(ヨシナリ)細川藤孝等の居りしことあり。明智光秀の山崎戰敗の後、一時これに入りしが、支へ得ずして逃れ、遂に廢城となる。

しょうーりよう 升龍【名】『周禮の大人行に「載二大旆一日月升龍、降龍一」とあり』龍の天へ上るさまを描きたるもの。上り龍。

しょうれう 承了【名】れうしょう(了承)に同じ。

しょうーれう 使用料【名】〔法〕或物又は權利又は營造物などを使用せる對價として支拂ふ金。

しょうれつ 勝劣【名】■いうれつ(優劣)に同じ。太平記「何れを勝劣とも定めがたし」謠曲三笑「神前に供ふる御燈の光、山河・草木かがやき渡り、日夜の勝劣見えざりけり」■〔佛〕日蓮宗にて、法華經と他の一切經とを對比し、その優劣を討究批判すること。又、法華經二十八品中、後の十四品のは、前十四品に優越せりとする事をもいふ。

しょうれつーは 勝劣派【名】〔佛〕じふもんは(什門派)に同じ。

しょうーろ 松露【名】■松の葉におく露。■〔植〕菌の一種。春の末、海邊もしくは內地の松の下の砂中に生ず。形圓く、大きさ七八分、質軟かにて、初は白色なれど、大氣中に露出せしめおく時は、淡褐色となり、後、紅色を發す。生鮮なるを調理し、又、鹽漬・砂糖漬としても食ふ。くりしょろ。〔麥嘉〕

しょうーろ 衝路【名】■敵の攻寄せて來る路。■物事の多くあつまる場所。

じょうーろ 如雨露【名】じょろ(如露)に同じ。

しょうろあざみ 松露薊【名】〔植〕きつねあざみ(狐薊)に同じ。「に同じ。

しょうーろう 鐘樓【名】かねつきだう(鐘撞堂)

しょうろーかん 松露羹【名】古の菓子の一種。下學集「松露羹」

じょうろくわん 蒸露罐【名】じょうりうき(蒸溜器)に同じ。

しょうろーばん 承露盤【名】■『漢書の郊祀志に「武帝卽レ位、其後又作二柏梁銅柱、承露仙人掌之屬一」とありて、顏師古の註に「三輔故事云、建章宮承露盤、高二十丈、大七圍、以レ銅爲レ之、上有二仙人掌一承レ露、和二玉屑一飲レ之」とあり』支那漢の武帝が、建章宮に設けて、露を承けし銅製の盤。■『谷響集卷の一に「重重相輪、名二承露盤一、故傳中(高僧傳)云、承露金盤二十一重、鍊鐵角張盤、及鍊上皆有二金鐸一、承露盤或略云二露盤一」とあり』ろばん(露盤)に同じ。

じょうわ 承和【名】仁明天皇の御代の年號(紀元一四九四年—一五〇七年)。

承和の變【句】承和九年伴(ト)健岑(タケミネ)等、太子恒貞親王を奉じて、東國に去らんとせし事變。事漏れて、太子は廢せられ、健岑等は配流に處せられたり。

じょうーわ 冗話【名】むだばなし。無益の說話。冗談。

しょうーわう 鍾王【名】〔人〕支那の古の能書家なる鍾繇(ショウエウ)と王羲之と。「の略。

しょうわ-しやうほう 承和昌寶【名】次條をもいふ。

しょうわしやうほう-せん 承和昌寶錢【名】承和二年より十四年にかけて鑄造せし銅錢。大さと重量とに三種あれども、何れも面に「承和通寶」の文あり。

じょうわ-の-いろ 承和色【名】『承和の帝、卽ち仁明天皇が特に黃菊を愛せられしが名づくといふ』〔植〕きく(菊)の異稱。そがいろ。そがのいろ。〔古語〕

じょうわ-らく 承和樂【名】〔音〕雅樂の一。仁明天皇の承和年中、我が國にて新作せじもの。壹越(コツ)調に屬し、六人又は四人にて舞ひ、答舞には仁和樂を用ふ。

しょうーわ 稱唯【名】ねよう(唯稱)を見よ。

しょうーわ 松筠【名】『筠は竹の義』松と竹と。「松籟。

しょうーわん 松韻【名】松にあたる風の音。

じょうーわん 冗員【名】不用なる人員。

じょうわん 乘圓【名】〔人〕眞言宗の僧。俗姓は岡本、宇は朗然。晩に玄玄翁、また玄玄子と號す。大阪の人。和泉國五智山の開祖。傍ら書畫を善くす。寬文十三年寂す。年四十六。

しょうえ 所依【名】〔佛〕たよる所。よるところ。よりどころ。「じ。

しょうえき 諸役【名】しょやく(諸役)■に同

しょうえん 諸緣【名】〔佛〕諸種の緣。吾が心身に關する、すべてのほだし。いろいろの外界の關係。俚諺「生活・人事・技能・學問等の諸緣を止めよとこそ、摩訶止觀にも侍れ」

しょうえん 所緣【名】■〔佛〕人の心を動かす外界の現象。(能緣に對して)■ゆかり。緣。緣由。日本振袖初「蘇民が知邊の御勞とあれば、外ならぬ所緣もあり」

しょうえん 初緣【名】初めての緣組。初めての嫁入。(再緣に對して)

しょうえん-かんくわ 所緣感化【名】〔佛〕外界より受くる感化。

じょうおん 助音【名】■〔佛〕聲助(ショウジヨ)をなすこと。同音に歌ふこと。著聞「酒色の句を詠ず。極端(ゴク)並びに非職(ヒキ)知經助音す」■じょこん(助言)に同じ。平家「今生にて早捨てられ奉つたる身なれば、助音しても何かせん」「を見よ。

しょうおもて 初表【名】〔文〕しょおり(初折)に同じ。

しょおる 〈英 Show〉【名】かたかけ(肩掛)

しょおるーねんどお 〈英 Show-window〉【名】顧客の注意を引くために、商品を陳列せる店頭の硝子窓。うゐんど。「き。

しょーか 書家【名】文字を巧に書く人。てか

しょーか 書架【名】しょだな(書棚)に同じ。

しょーか 初夏【名】■夏のはじめ。■陰曆四月の稱。

しょーか 暑夏【名】暑さ夏の季節。

しょーか 諸家【名】多くの家門。しょけ。

しょーか 諸夏【名】『論語の八佾篇に「子曰夷狄之有レ君、不レ如二諸夏之無一」とあり』支那の中國の諸國。中華。「歌。

じょーか 序歌【名】〔文〕序詞■を有する和

しょーかう 初更【名】いっかう(一更)に同じ。

しょーかう 初校【名】最初の校正。(再校・三校などに對して)

しょーがう 初號【名】■號數を逐ふものの最初の番號。首號。■活字中の最大なるもの。くわうじ(活字)參照。

しょーがう 諸豪【名】多くの豪傑。群雄。

じょーかう 助考【名】生花(イケバナ)にて、木をなびけ、その枝に草を持たせて插すこと。八つの嫌ふべきことの一とす。

じょーかう 徐行【名】そろそろと進むこと。

じょーかう 徐航【名】船足をゆるくして航海すること。

しょーかうかい 初航海【名】しょこうかうかい(處女航海)に同じ。

しょーがえ 【名】しょんがえの略。吉野都女摘「さては野に咲く百合の花、しょがえ」

しょーかーほけいづ 諸家大系圖【名】〔書〕そんぴぶみやく(尊卑分脈)を見よ。

しょーかかり 諸掛【名】■諸種の入費。■〔商〕『英 Charges』實價上、原價以外に要する諸種の費用、卽ち運賃・諸稅・

各種保險料・解船(ハシ)賃・車馬賃・仲買手數料・郵便料・雜費などの類。

しよかかりごめ 諸掛込【名】〔商〕『英 free of charges』商品の代價に、諸掛をこめて計算すること。

しよかく 書閣【名】■しよだな(書棚)に同じ。

しよがく 所學【名】まなぶところ。學問。太平記「玄慧法師が許に所學して」

しよがく 初學【名】學問を初むること、又その人。うひまなび。

しよがくき 初學記【名】〔書〕初學者のために、支那の經史・文章の要を類集せるもの。三十卷。唐の徐堅等勅を奉じて撰す。

しよがくくん 初學訓【名】〔書〕人倫の教を平易に記せるもの。五卷。貝原益軒の著。益軒全集に收む。

しよがくしや 初學者【名】初學の人。

しよがくわかしき 初學和歌式【名】〔書〕詠歌の方法につき、初學の徒の心得べき事を記せるもの。七卷。有賀長伯の著。

しよかじんぶつし 諸家人物志【名】〔書〕儒家・醫家・歌學者・國學者・書畫家等の小傳に、各著述書目を記せるもの。五卷。池永豹の著。

しよかつ 所轄【名】『管轄する所の義』その管轄の範圍内にあること。

しよかつこうめい 諸葛孔明【名】〔人〕次條に同じ。

しよかつりやう 諸葛亮【名】〔人〕支那三國時代の蜀の名將。字は孔明。蜀主の知遇に感じて、後主を輔佐す。八陣の兵法を創む。建興五年自ら軍を率ゐて、魏を伐つ。兵を出すこと三度、同十二年五丈原に據りて、魏の將司馬懿と對陣中病みて歿す。年五十四。

しよかん 所感【名】『感ずる所の義』感じたる事がら。かんじ。所思。感想。

しよかん 暑寒【名】■かんしよ(寒暑)に同じ。■『暑と寒とを一度づつ經る義』一年間。春秋。歲月。

しよかん 初寒【名】はじめての寒さ。

しよかん 書函【名】書狀又は書籍をいれる函。書篋(ケフ)。

しよかん 書簡・書翰・書柬【名】てがみ。消息文。

しよかんし 書簡紙・書翰紙【名】書翰を書くに用ふる紙。はんきれ。書翰箋。

しよかんせん 書簡箋・書翰箋【名】前條に同じ。

しよかんひら 暑寒平【名】經(テ)に木綿絲、緯(ヨコ)に麻絲を用ひて交へ織りたる袴地。夏・冬共に使用せらるるによりて、名を得たり。

しよかんぶくろ 書簡袋・書翰袋【名】手紙を入れて送る袋。ふうじぶくろ。封筒。

しよかんぶん 書簡文・書翰文【名】手紙を書く時に用ふる文體。候文。

しよかんぶんたい 書簡文體・書翰文體【名】書簡文の文體。候文體。

しよき 所期【名】『もと期する所の事の義』あてにすること。豫期。期待。

しよき 初期【名】初期の時期。始期。

しよき 暑氣【名】暑中の熱さ。夏のあつさ。うんき。

しよき 書記【名】■書きしるすこと。記錄。■文書記錄を掌る役。かきやく。■諸種の官衙に配屬し、上官の指揮を承けて、文書・帳簿の記載その他の庶務に從事する判任官。例へば裁判所書記・郡書記の類。■文部省・督學局に置かれ、督學の指揮に從ひて、その事務を分擔せし判任待遇の職。明治六年設置、大・中・少の三等に分れ、同十年督學局と共に廢せらる。■海軍裁判所に置かれし判任官。明治五年設置、大・中・少の三等に分れ、同九年廢せらる。■禪寺にて、文書を掌る役。古くは書狀といひ、また內外に分ちて、內なるもの、即ち長老の往復の書狀を認むるを書狀者といひ、外なるを書記といふ。

しよき 書紀【名】〔書〕**にほんしよき**(日本書記)の略。

しよき 書几【名】つくゑ。書案。

しよき 書櫃【名】書籍を入るる箱。

しよき 初起【名】**しよはつ**(初發)に同じ。

しよき 初虧【名】〔天〕蝕にて、その虧けはじまること。

しよき 庶幾【名】■こひねがふこと。望み願ふこと。■ちかきこと。近似。

しよき 署記【名】姓名を書きしるすこと。署名。記名。

しよき あたり 暑氣中【名】あつさあたり(暑中に同じ。

しよきう 杵臼【名】きねとうす。

しよきう 杵臼の交【句】『書言故事に「後漢公孫穆來遊大學、無資糧、乃爲レ服傭爨(タキ)、與二吳祐一貧春、與語大驚、遂共定二交於杵春之間一とあると本づく』傭人の交。

しよきう 雎鳩【名】■〔動〕みさご(雎鳩)に同じ。■『みさごは、和して狎れぬ鳥なるよりいふ。**くわんしよ**(關雎)[一]參照』婦德高き婦人の譬。保元「關關たる雎鳩、君子の德をたすく」

しよきうひっとく 所求必得日【名】九星にて、何事にも吉なりといふ日。春は戌の日、夏は酉の日、秋は寅の日、冬は亥の日。

しよきかんれいもくろく 諸記勘例目錄【名】〔書〕禁中公事の、諸家の記錄に散在せるものを、搜索し易からしめんがために、事項を標し、記錄の名を擧げて、下に年號を註せるもの。五卷。撰者詳かならず。

しよきくわ 書記課【名】書記がその事務を取扱ふ所。

しよきくわん 書記官【名】■元老院・開拓使・各省・會計檢査院・統計院にありて、長官の命を受けて、その主務を幹理せし奏任官。大・少の二等あり、各等又正・權の別あり。明治八年に設置、同十九年に廢止せり。■各府縣に設けられ、府知事又は縣令を助けて、部內の行政事務を參判せし職。大・少の二等ありて、府には大・少共に任命し、縣には兩者の內、いづれかを置きたり。明治十年に設置、同十九年に廢止せり。■內閣・諸省・賞勳局・馬政局・拓殖局・樞密院・宮內省・帝國大學・製鐵所・總督府・貴族院事務局・衆議院事務局等に配屬せらるる奏任官。各省のは、大臣の命を承けて、大臣官房の事務を掌り、又は各局の事務を助く。その他は、所屬長官を補助して、その事務を分掌す。**しよき**(書記)[三]參照。

しよきくわん-ちやう 書記官長【名】部下の書記官を統轄する勅任官。內閣書記官長、衆議院書記官長・貴族院書記官長等の類。翰長。

しよきしふげ 書紀集解【名】〔書〕日本書紀を漢文にて註釋せるもの。字句の出典及び文字の釋義に力を注げり。二十卷。河村秀根の撰。

しよきせい 書記生【名】■明治十八年以前の外務省及び元老院の判任官。書記官に屬して、記錄などを掌れり。■大使館・領事館に附屬して、庶務を取扱ふ判任官。

しよきちやう 書記長【名】大審院・控訴院にて、書記課の事務を監督する奏任官。

しよきつ 初吉【名】『その月の初の吉日の義』ついたち。朔日。

しよきはらひ 暑氣拂【名】內服して、暑氣を拂ひのくること。「き等級。

しよきふ 初級【名】最初の等級。最も低

しよきふ 書笈【名】きふ(笈)[一]に同じ。

しよきほ 書記補【名】書記の事務を輔佐する職。例へば郵便局書記補などの類。

じよぎん 助吟【名】歌會にて、披講のとき詠吟者を補助する人。

しよきやう 蔗境【名】**しやきやう**(蔗境)の誤讀。

しよきやう 諸經【名】多くの經書又は經

しよきやう 書經【名】〔書〕支那の虞・夏・商・周四代の事蹟・文章を集載せるもの。孔子の編纂にかかり、凡そ百篇ありたり。もと單に書と稱し、のち尙書と呼稱し、五經の一に列せらるるに及び、書經の名起れり。今文・古文の二種あり。漢の孝文帝の時、晁錯(ソウ)の、濟南の伏生より殘缺二十八篇を學び得て、隸體に記しより、今文尙書の名起りしが、滅びて傳はらず。武帝の末年、魯の共王の、孔子の舊宅の壁中より得しものは、篇數三十四、文字蝌蚪(クワト)の古體なりしより、古文尙書の名を得。然るに元帝の時、豫章の內史梅賾、別に古文尙書を發見せりと稱して獻本し、欽定書となり、古文は傳はらざるに至れり。されど梅賾の古文は、僞作なること明かなり。書經の六體【句】書經の篇名中、典・謨

(ル)調誥(カウ)誓命の字の添へるもの。例へば堯典・舜典・皐陶謨(カウヨウ)・大禹謨・伊訓・大誥・康誥・甘誓・牧誓・顧命・文侯之命など。いづれも君臣勧戒の辭を記したるもの。

しょぎゃう 諸行【名】〔佛〕■『行は遷流(ルヽ)の義にて、因緣より生じて、三世を遷流するをいふ』一切の宇宙現象。すべての有爲(ヰ)法。■いろいろの修行。

諸行無常【句】〔佛〕『梵 Anicā vata saṃskārā の譯語』萬物は常に變轉して、暫くも常住せず。〔諺語〕平家「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常のひびきあり」

諸行無常の偈(ゲ)【句】〔佛〕我が國の伊呂波歌の本づく所となりし涅槃(ネハ)經の四句の偈。雪山偈(セツサンゲ)。いろはうた伊呂波歌參照。

しょぎゃう 所行【名】『行ふ所の意』しわざ。おこなひ。ふるまひ。

じょきょせい 徐居正【名】〔人〕朝鮮の學者。字は剛中。成宗の時、弘文館大提學たり。勅を奉じ、柳仁洪等と東國通鑑を撰す。弘治元年歿す。

しょきれう 書記料【名】書類を筆記する「料金。

しょく 食【名】■食ふこと、又その物。じき。食事。食物。■ふち。祿。秩祿。

食が細い【句】常に食量少なし。

食は民の本(モト)なり【句】『文子に「食者民之本也、民者國之基也、國者君之本也」とあるに本づく』食物は人民を養ふ根本なり。〔諺語〕

食を願はば器物(モノ)【句】食物を乞はんとするには、まづ器物を用意する必要あり。食(ケ)を乞はば器(ウツワ)。盛衰記「食を願はば器といふ下說の喩あり。君もとくとく國國・庄庄を分けたまはり候へ」

しょく 燭【名】■蠟燭の火。■ともしび。

しょく 燭に刻して、詩を爲(ツク)る【句】「燭寸の詩」を見よ。

燭を秉(ト)りて、夜遊ぶ【句】『文選の古詩「生年不レ滿レ百、常懷二千歲憂一、晝短苦二夜長一、何不二秉レ燭遊一、爲レ樂當レ及レ時、何能待二來茲一」とあるに本づく』好景の盡き易きを惜み、晝間の遊行を以て足れりとせず、夜中まで遊ぶ。

しょく 職【名】■分擔の事務、又はその事務を取扱ふ地位。つとめ。やくめ。職務。(古は、攝關・參議より、藏人所・檢非違使などの如く、令外(カゲ)にて、相當の位なきを職といひ、官と別ち、今は、同一の官にても、その執務の種類の異なるを職といひ、官には「任ず」、職には「補す」といふ。例へば軍人ならば、陸軍大尉・海軍大尉などは官、中隊長・大隊副官・砲術長・水雷長などは職なる類)■生計のためになす仕事。なりはひ。職業。今國語竇、職の中にも、鍛冶は由緒あるもの」■『史記の叔孫通傳に「使二人人奉レ職、四方輻湊一」とあり』みつぎもの。

しょく 食・蝕【名】〔天〕『英 Eclipse』天體が他の天體の裏面又は影に隱るる現象。普通には、日食と月食とをいへど、木星の影に、その衞星の隱るる等をもいへり。

日月の蝕の如し【句】「君子の過(アヤマチ)は日月の蝕の如し」を見よ。

しょく 蜀【名】■支那三國の一。今の四川省・雲南及び貴州三省の一部、北は陝西(セン)及び甘肅省の一部に亙りたる國。二世四十四年にして亡ぶ。蜀漢。■〔地〕今の支那四川省の雅稱。

蜀の棧道(サンダウ)【句】〔地〕支那四川省保寧府劉州の東北にある要害の地。劍閣より同府廣元縣を經て、陝西(セン)省の南部に通ずる道路。險難を以て有名なり。

蜀を望む【句】「隴を得て蜀を望む」を見よ。

しょく 軾・式【名】支那の古の馬車の前にある横木。車上の人、行人に敬禮の意を表するには、これに馮(ヨ)りて、伏す習なりき。とじきみ。

軾に伏す【句】『前條を見よ』軾す。

軾に馮(ヨ)る【句】前條に同じ。

しょく 祝【名】支那古代の木製樂器八音の一。帝嚳(カク)が共工を亡して造れるところといふ。箱狀をなせるものの中に、撞木狀の物を建て、左右に擊つ。當に敔(ギョ)と併せ用ふ。我が國にても、古は南河浦の曲に用ひたりといふ。

しょく 鐲【名】支那古代の金屬樂器の一。小鐘に似るもの。

しょく 穆【名】〔植〕五穀の一。後世の高粱にて、古、五穀中の首位に置かれたり。しゃ(社稷)參照。

しょく 卓【名】■『漢字の宋音』脚の高き机、また物を載する臺。蕪村「梅散るや螺鈿こぼるる卓(ショク)の上」■香の名。

しょく 贖【名】ぞく(贖)に同じ。

しょく 私欲・私慾【名】己れのみ利せんとする欲望。藤八拳杜鵑「助右衞門に知らさぬは、私慾あるに極つた」

しょく 嗜欲・嗜慾・耆欲【名】たしなみ好む情。すくごと。

しょく 思慾【名】思ひ欲すること。

しょく 翅翼【名】はね。つばさ。

しょく 初句【名】きく(起句)に同じ。

しょく 諸苦【名】もろもろのくるしみ。

しょく 燭【助動】しょくくわう(燭光)の略。「五千燭の電氣燈」

じょく 辱【名】■はづかしめ。はぢ。恥辱。

じょく 蓐【名】■しきもの。しとね。■しきわら。

■しきもの。しとね。ねどこ。〔褥〕

蓐に臥す【句】病みて床につく。

じょく 耳蓐【名】〔醫〕じかく(耳聲)に同じ。

しょくあたり 食當【名】食物に當りたる病。食傷。急性胃加多兒。「臨む醫師。

じょくいく 蓐醫・褥醫【名】婦人の産褥にあるは色澤純白にして、輕鬆なれども、夾雜物多きものは、純白ならず、且つ濕り又は潮解しやすし。食用として、日常生活に缺くべからざるのみならず、防腐劑に供せられ、工業上にては、鹽素化合物及びナトリウム化合物製造の原料となる。主として海水に含有せらるれど、岩鹽又は山鹽とて、土中より出づるものあり。しほ。鹽化なとりうむ。鹽化そちうむ。

しょくいく 職由【名】〔職〕『職として由る義』主としてそれに由ること。

じょくいう 辱友【名】『辱交の友の義』友を敬ひ、己れを卑下しての稱。

しょくいそぎ 食急【名】食事を急ぐこと。

しょくいそぎ 食急ぎ者の食いそぎ」

しょくいふ 食邑【名】りゃうぶん(領分)に同じ。

しょくいん 食飲【名】いんしょく(飲食)に同じ。

しょくいん 職印【名】〔法〕官吏・公吏が、職務上に用ふる印。即ち官印の外、公吏のをも含めての稱。官職・氏名又は官職のみを彫刻せるを、普通とす。

じょくいん 蓐茵・褥茵【名】しきもの。しとね。太平記「輕縑・褥茵の上に」

しょくぐう 處遇【名】處置と待遇と。

しょくえい 燭影【名】燭火に照らし出さるる物の影。

しょくえつ 食悅【名】美味にありつきて悅び食ふこと。傾城色三味線「まづ食悅だけの德なり、と世につれてさもしき心」

しょくえふかふちゅう 食葉甲蟲【名】〔動〕害蟲の一類。草木の葉を蝕害する鞘翅類の蟲類の總稱。種類甚だ多し。

しょくえん 食鹽【名】■鹽化ナトリウムにして、食用に供せらるるよりいふ』微細なる結晶をなし、可溶性にして鹹味あるもの。主成分はソヂウム及び鹽素なれども、普通品は、多少、鹽化加里・鹽化苦土・硫酸苦土・硫酸曹達等の夾雜物を有す。善良なるは色澤純白にして、輕鬆なれども、夾雜物多きものは、純白ならず、且つ濕り又は潮解しやすし。食用として、日常生活に缺くべからざるのみならず、防腐劑に供せられ、工業上にては、鹽素化合物及びナトリウム化合物製造の原料となる。主として海水に含有せらるれど、岩鹽又は山鹽とて、土中より出づるものあり。しほ。鹽化なとりうむ。鹽化そちうむ。

しょくえんぜい 食鹽稅【名】食鹽の消費高に賦課する租稅。惡稅の第一として數へらる。鹽稅。

しょくえんせんばい 食鹽專賣【名】政府が食鹽を獨占的に供給する事業。

しょくえんゆにふぜい 食鹽輸入稅【名】輸入食鹽に賦課する稅金。

しょくか 燭架【名】臘燭たて。燭臺。

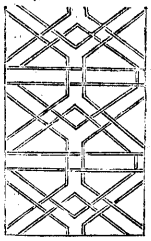
しょくかう 蜀江【名】■支那蜀(四川省)の成都附近を流るる川。楊子江の上流の一部。錦江。■次條の略。十訓「蜀江とて、錦洗ふ、と詩歌に作る所あり」

蜀江の錦【句】■往昔支那蜀國に產出せし錦。蜀の成都に濯錦といふ江あり、その水にて絲を晒して織りしためにこの名あり。蜀江。蜀錦。■京都西陣にて織出す蜀江模樣の錦。

じよく-から 辱交【名】『交を辱(カタジケナ)くする義』その人と交際あることの謙稱。

しよくかうがた 蜀江形【名】しよくかうもやう(蜀江模様)に同じ。

しよくかうくづし 蜀江崩【名】模様の一。切子(キリコ)形を圖案化せしめたるもの。下の圖を見よ。



(しづくうかくよし)

しよくかうのにしき 蜀江錦【名】〔動〕いぼたろふ(疣取蠟)に同じ。

しよくかうもやう 蜀江模様【名】京都西陣にて、錦に織出す切嵌(キリハメ)の摸様。蜀江がた。「うど。

しよく-かく 食客【名】ゐさふらう。かかりうど。

しよく-かく 色覺【名】〔醫〕『英Light sensation』視覺の一。ただ光の明暗に感ずるものにて、視覺中の原始的なるもの。(光覺に對して)

しよく-かく 觸覺【名】〔醫〕『英Cutaneous sensation 又 Touch sensation』感覺の一。觸覺器の感ずる官能。卽ち物に觸れて、その大小・形狀・硬軟・冷溫等を感ずるもの。壓覺と溫覺及び冷覺とに分てども、眞正に觸覺と呼ぶべきものは、壓覺に外ならず。觸感。觸感覺。感覺。

しよく-かく 觸角【名】〔動〕『羅Antennae』節足動物(蜘蛛類を除く)の頭部にある角だちたる感覺器。もと口器と等しく、運動の器官なる肢の、分業的に變形せるものにて、甲殼類は二對、その他は一對を有す。

しよくかく-き 觸覺器【名】〔醫〕五官の一。觸覺をつかさどるもの、卽ち皮膚及びこれに連續せる粘膜。觸器。觸感器。

しよくかくせいおんぞくかく 觸覺性音續覺【名】〔哲〕おんぞくかく(音續覺)を見よ。

しよく-がたき 職敵【名】同じ職業に從事する者の、互に忌嫌ふこと、又その相手。商賣がたき。「に同じ。

しよく-かん 觸感【名】〔醫〕しよくかく(觸覺)に同じ。

しよく-かん 蜀漢【名】しよく(蜀)[一]を見よ。

しよくかんかく 觸感覺【名】〔醫〕しよくかく(觸覺)に同じ。

しよくかんき 觸感器【名】〔醫〕しよくかき(觸覺器)に同じ。

しよく-き 食器【名】食事に用ふるうつは。膳・椀・皿・鍋・釜などの類。

しよく-き 食氣【名】食物を欲する心。くひけ。食思。食慾。

しよくき 蝕既【名】〔天〕日蝕・月蝕にて、太陽が太陰に遮られ、また太陰が、地球に遮られて全く見えざる時の稱。

しよく-き 續紀【名】〔書〕しよくにほんぎ(續日本紀)の略。

しよく-き 觸器【名】〔醫〕しよくかき(觸覺器)に同じ。

しよく-き 織機【名】はたおりの機械。

しよく-ぎ 職蟻【名】〔動〕蟻の雌蟲にして、生殖器の發達せざるもの。蟻群中、女王一四と雄蟻數匹との外は、すべてこれに屬し、翅なく、智力・筋力共に敏捷にして、巢を營み、食物を索めて貯藏する等の事に與る。巢中に越年したる女王と職蟻とは、春を待ちて巢を出で、雌は產卵して、職蟻これを保育す。しよくはう(職蜂)參照。

しよく-ぎう 食牛【名】[一]食用に供する牛。

[一]牛を食ふこと。

食牛の氣【句】『尸子に「虎豹之子、雖レ未レ成レ文、已有二食牛之氣一」とあるに本づく』幼少にして、已に大志あるをいふ。

しよく-きふ 職給【名】職務に對する給料。つとめのてあて。

しよく-きん 食禁【名】食ふことを禁忌すること、又食ふことを禁忌せられたる食物。

しよく-きん 贖金【名】損害をつぐのふ金。つぐのひきん。償金。

しよく-きん 蜀錦【名】「蜀江の錦」の略。

しよく-きり 燭切【名】しんきり(心切)に同じ。「食器。

しよく-ぐ 食具【名】食事に用ふる器具。

しよく-くわ 殖貨【名】くわしよく(貨殖)に同じ。

しよく-くわ 燭花【名】蠟燭の丁字(チヤウジ)。とうくわ(燈花)參照。

しよくくわ 食火【名】『山海經に「南方有二食火之國一、其人能食二火炭一」とあり』火を食ふこと。

しよく-くわい 食塊【名】〔醫〕食物の細片の唾液と混じ、舌の動作により、舌背にて、楕圓形の小塊となりたるもの。

しよく-ぐわい 職外【名】職權の範圍外。

しよく-くわう 燭光【助數】『英Candle power』燈火等の光度の單位。英國にては、鯨蠟にて造りたる徑八分の七インチなる蠟燭の、一時間に百二十グレエン(二瓦餘)づつ燃え、焰の高さ平均一インチ七五(四十五ミリメエトル)なる時の水平光度を一燭光とす。我が國も、この標本を採用せり。その他、種種の標準あり。燭。こうしやうしよくくわう(公稱燭光)參照。「を見よ。

しよく-くわう 屬纊【名】ぞくくわう(屬纊)に同じ。

しよく-くわん 觸官【名】〔醫〕しよくかき(觸覺器)に同じ。

しよく-くわん 職官【名】職と官と。官職。

しよく-くわん 食管【名】〔醫〕しよくだう(食道)に同じ。

しよくくわん-け 職官家【名】職官のことを專門に研究する家。

しよくくわん-し 職官志【名】〔書〕唐の六典に倣ひて、本朝官職の事を錄せるもの。六卷。蒲生秀實の著。

しよく-けい 贖刑【名】罰金を科する刑。

しよく-けい 食頃【名】食事を濟すほどの僅少なる時間。少時。

しよく-げき 觸激【名】物に觸れて激すること。「に同じ。

じよく-げつ 蓐月・褥月【名】うみづき(產月)に同じ。

しよく-げふ 職業【名】世わたりの家業。なりはひ。生業。職。

しよくげふ-せうかいじよ 職業紹介所【名】求職者に、現に需要ある職業を紹介するところ。

しよくげふてき-いんし 職業的陰私【名】〔法〕その職業上、他人の委託を受けたるために知り得たる祕密。

しよくげふてき-ぶんげふ 職業的分業【名】〔經〕三大分業の一。人、各、その從事する職業を以て、彼我互に交換し、以て各種の欲望を滿足せしむるもの。個人的分業。(場所的分業技術的分業に對して)

しよくげふびやう 職業病【名】職業に伴ひて特に起る病氣。例へば仕立屋の胃腸病、石炭坑夫の肺病の類。

しよく-けん 蜀犬【名】支那蜀の國の犬。次條參照。

蜀犬日に吠ゆ【句】『韓愈の書に「蜀中高霧重、見レ日時少、毎レ至二日出一則群犬疑而吠レ之也」とあるに本づく』支那蜀の國は、四面高き山にて圍まれ、爲に日の出遲く、日沒早し、その地の犬は、日を見れば怪んで吠ゆ、乃ち平凡人は非凡人の言行に疑を起すことの譬にいふ。

しよく-けん 職權【名】職務執行に於て許されたる權力。

しよく-げん 食言【名】『言を食(ハ)む義』約束を實行せぬこと。

しよく-げん 職原【名】官職の起源。

しよく-げん 嘱言【名】[一]ことづて。傳言。[二]後事を委囑すること、又その言。

しよくげん-くわいつう 職源會通【名】〔書〕舊制を考へ、證據を正して、職原鈔を解釋せるもの。十六卷。林春齋の撰。

しよく-けんげう 職檢挍【名】官官の一。元祿中杉山和一總檢挍となり、江戸に居住し、關東の盲人を支配せしより、京都に住して、關西の盲人を支配せるものの稱。

しよくけん-さうぎ 職權爭議【名】〔法〕しゆくわんけんさうぎ(主管權限爭議)に同じ。

しよくけん-しよぶん 職權處分【名】〔法〕さいりやうしよぶん(裁量處分)に同じ。

しよくげん-せう 職原鈔【名】〔書〕我が國の官職の故實と任途の事とを、漢文にて編述したるもの。二卷。北畠親房の著。

しよくげんせう-かしらがき 職原鈔首書【名】〔書〕職原鈔に首書したるもの。藤原惺窩(セイクワ)の著。五卷。

しよくげんせう-ききがき 職原鈔聞書【名】〔書〕林春齋の講莚に列なりて、聞書

せるもの。八卷。吉田幸庵の著。

しょくげんせうくかい 職原鈔句解【名】〔書〕職原鈔を解釋せるもの。十二卷。白井宗因の著。

しょくげんせうさんかう 職原鈔參考【名】〔書〕職原鈔を註解せるもの。讀人於雪子の著とあれど、その傳詳かならず。惺窩の首書に、諸說を加へたり。五卷。

しょくげんせうだいぜん 職原鈔大全【名】〔書〕職原鈔を集註せるもの。首卷には、職原鈔の起り・歷代官位冠の始・元服の次第・諸國釋奠・稅租・賦役・年給・內裏圖等を載せ、第一卷より第七卷までは本文、第八卷と第九卷とは、一條兼良(カネヨシ)と清原秀賢との說を追加せり。九卷。植木悅の編。

しょくげんせうつうかう 職原鈔通考【名】〔書〕漢文にて職原鈔を註せるもの。二十一卷。壺井義知の著。

しょくげんせうべんかう 職原鈔辨講【名】〔書〕職原抄に關する舊說を論破し、又その師壺井義知の說をも難じたる口授の筆記。二十卷。多田義俊の著。

しょくけんはふ 職權法【名】國家の機關の職務權限の分配を定めたる法規。

しょくけんらんようざい 職權濫用罪【名】〔法〕官吏もしくは公務員が、その職權の範圍を超えて、不法行爲の手段に供する罪。

しょくご 食後【名】食事の後。(食前に對して)

しょくこう 織工【名】織物を職とする工人。

しょくこう 職工【名】㊀しょくにん(職人)に同じ。㊁資本主に雇はれて働く職人。

しょくこう 職貢【名】職務と貢物と。

しょくこうがくかう 職工學校【名】職工を養成する學校。

しょくごうき 續後紀【名】〔書〕しょくにほんこうき(續日本後紀)の略。

しょくごうくみあひ 職工組合【名】ろうどうくみあひ(勞働組合)に同じ。

しょくこうちやう 職工長【名】職工㊁の中にて、頭だちたるもの。工長。職長。

しょくこうどうめい 職工同盟【名】ろうどうくみあひ(勞働組合)に同じ。

しょくこうら 蜀紅螺【名】〔動〕腹足類に屬する軟體動物。殼は歪める卵形にして、長さ二三寸。外面には褐色と白色との波紋ありて、光澤を有す。沖繩島に產す。「じ。

しょくごく 屬國【名】ぞくこく(屬國)に同じ。

しょくごなし 食ごなし【名】食ひたるものを消化せしむること、又そのためになす事。はらごなし。傾城酒吞童子「公時は只今夜食を喰うた食ごなし、變化も、鬼神も、惡人も一と粉に仕舞ふと駈出る」

しょくごのみ 食好【名】おのれの欲する食物を選みて食ふこと。凡童「夏痩やあした夕の食ごのみ」

しょくこん 蜀魂【名】『華陽國志に「帝禪」位於開明、升西山一隱焉、時適二月、子規鳥鳴、故蜀人悲二鳥鳴一也」と。帝は望帝なりといふ。また寰宇記に「蜀之後主、名杜宇、號二望帝一、讓二位鼈靈一、望帝自逃、後欲レ復レ位、不レ得死、化爲レ鵑、每二春月間一、晝夜悲鳴、蜀人聞レ之曰、我望帝魂也」とあるに本づく』〔動〕ほととぎす(時鳥)の異稱。蜀魂。

しょくこんてう 蜀魂鳥【名】〔動〕前條に同じ。

しょくさい 植栽【名】しょくさい(栽植)に同じ。

しょくさい 食采【名】知行の地。食邑。采邑。領地。

しょくざい 殖財【名】くわしょく(貨殖)に同じ。

しょくざい 贖罪【名】㊀〔法〕犯罪者がその被害人に對し、一定の財物を與へて、その罪を贖ひ、以て復讐刑を免るる事を得ること。㊁〔基〕『英Redemption』人間の罪業は、自力にては到底救ふこと能はざるに拘らず、某督の救世主の資格における代償の所行に由りて、救はるること。あがなひ。

しょくざいきん 贖罪金【名】罪を贖ふために拂ふ金錢。贖罪のために出す金。

しょくさう 蓆瘡・褥瘡【名】〔醫〕『羅Decubitus』長日月病牀にある時、一局部に持續的體重をなせるに由り生ずる瘡。主として薦骨部・大轉子・踵(クビス)などに發す。とこずれ。

しょくざう 蝕像【名】〔鑛〕『英Etching figure』結晶を藥品にて溶解する時、その面に生ずる凹凸の諸像。例へば方解石の完全劈開面が、鹽酸のために、三角形の微細なる窪を生ずる類。

しょくさん 殖產【名】生產物を殖すこと。

しょくさんきよく 殖產局【名】臺灣總督府民政部の一局。殖產のことを掌る所。

しょくさんきょくちやう 殖產局長【名】殖產局の長官たる高等官。

しょくさんくわうざん 穉山鑛山【名】〔地〕朝鮮忠淸南道の北方穉山郡に在る金鑛。京城の南方二十里。鐵道成歡驛の東。

しょくさんじん 蜀山人【名】〔人〕おほたなんぽ(太田南畝)を見よ。

しょくさんじんぜんしふ 蜀山人全集【名】〔書〕太田蜀山の著書を網羅したるもの。六卷。

しょくし 食指【名】人さし指。

食指動く【句】『左傳魯の宣公四年の條に「楚人獻二黿鄭靈公一、公子宋與二子家一將レ見、子公之食指動」とあるに本づく』㊀甘い物を食ふことを得る前兆。㊁欲望を遂げんとする念起る。ほしがる。

しょくし 食思【名】しょくき(食氣)に同じ。

しょくし 職司【名】職務として處理すべき事務。つとめ。役目。

しょくし 贖死【名】財物を出して、死罪をあがなふこと。

しょくじ 職事【名】職務上の事。仕事。

しょくじ 食時【名】㊀食事の時刻。㊁食事をなす程の時間。僅少の時間。

しょくじ 食事【名】飯など食ふこと。

しょくじ 食畔【名】くひもの。ゑ。

しょくじ 食次【名】料理のこんだて。

しょくじ 植字【名】活字をうゑ組むこと。うゑじ。くみ。

しょくじ 穡事【名】耕作の事。農事。「稼穡じよくしよく」

じょくじ 蓐兒・褥兒【名】ふとん(蒲團)の異

しょくしつさど 埴質砂土【名】〔農〕土壤の一種。粘土のやや多き砂土。

しょくしつじやうど 埴質壤土【名】〔農〕土壤の一種。埴土のやや多き壤土。

しょくじばん 植字板【名】活字を植ゑて組みたる板。活版。

しょくしん 觸脣・觸唇【名】〔動〕『英Labial palpi』しんぺん(脣鬚)に同じ。

しょくしん 觸診【名】〔醫〕診察方法の一。親しく患者の身體に觸れて、その感覺により、病狀を察知すること。

しょくじん 燭燼【名】蠟燭のもえさし。

しょくじん 穡人【名】のうふ(農夫)に同じ。

しょくじん 蝕甚食甚【名】〔天〕『英Maximum obscuration』日蝕・月蝕の最も高度に達すること。

しょくしん 織紝【名】機(ハタ)を織ること。

しょくしんき 觸神規【名】〔醫〕『獨Tastzirkel』觸覺の銳鈍及び部位神分布の狀態を計るに用ふるコンパス樣の器。

しょくしめい 職氏名【名】〔法〕官職と氏名と。

しょくしや 屬車【名】ぞくしや(屬車)に同じ。

しょくしや 織匠【名】はたおり。織物師。「に同じ。

しょくしやう 食傷【名】しょくあたり(食當)

しょくしやう 職掌【名】擔當の職務。つとめ。役目。

しょくしやう 拭淨【名】ぬぐひ淸むること。

しょくしやう 蓐傷・褥傷【名】とこずれ(床擦)に同じ。

しょくしやうがら 職掌柄【名】その職掌としての本分。その職によりて養成せられたる鑑識手腕。つとめがら。やくがら。

じょくじやう 蓐上・褥上【名】しとねの上。ふとんの上。茵上。

しょくしやく 燭尺【助數】『英Foot candle』照度の單位。一燭光の光源より一呎の距離に於ける乘直照度。光の强さは、距離の自乘に反比例す。

しょくしゅ 觸手【名】〔動〕『英Tentacles』下等動物に於ける、主として觸覺を掌る長

き肉質の器官。例へば腔腸動物の口の周圍に、四又は六の倍數をなして、車輻狀に存するもの。蝸牛の長短二對を具ふるもの(その長き方の尖端に眼あり)、蝦には八本、烏賊(イカ)には十本、頭端・口圍より發生して、吸盤を具ふるものの類。

しよくしゆ 觸鬚【名】〔動〕■『英Palp』下等動物の口邊に突起して、觸覺を司る器官。例へば蝦蟹の口邊上下兩顎に小形の突起をなして存するもの。蜘蛛の顎に存するもの等。■『英Barbel』魚類中の或種の口邊より生ずる觸手狀の器官。その最も著しきは、鯉・鮫(サメ)・泥鰌(ドジヨウ)などに存す。

(よしくよし)

しよくしゆ 贖取【名】あがなひかへすこと。

しよくじゆ 植樹【名】樹木を植うること。

しよくじゆ 飾緒【名】陸・海軍の將官、又は參謀官の右肩より右胸前に垂れたる金色の紐樣の裝飾。

じよくしよ 溽暑【名】■じようしよ(蒸暑)に同じ。■陰曆六月の異稱。

しよくしよく 食色【名】■『左傳の昭公十五年の條、又、孟子の告子上篇に「告子曰食色性也、仁内也非レ外也」とあり』飲食と女色と。■食物に困らぬ樣子。

しよくしよく 促織【名】〔動〕そくしよく(促織)に同じ。

しよくしよく 唧唧【貌】■秋の夜、蟲の鳴く聲の形容。■『木蘭詩に「唧唧復唧唧、木蘭當レ戸織」とあり』悲しみ泣く聲の形容。■『王維の青雀歌に「猶勝黄雀爭二上下一唧唧空倉復如何」とあり』雀又は鼠の鳴聲の形容。

しよくしよく 惻惻【貌】そくそく(惻惻)に同じ。

じよくしよく 蓐食褥食【名】朝早く、蓐中に在りて、食を攝(ト)ること。

じよくしよくさい 辱職罪【名】陸・海軍人にして、その特別の任務に違背せる不名譽の行爲をなす場合、又、軍人にして、從軍を免れ、又は危險なる任務を避くる目的にて、詐欺の行爲をなす場合の犯罪。

しよくじれうはふ 食餌療法【名】藥品のみにたよらず、日日の食物の性質・分量等に注意して、疾病を治療すること。

しよくす 屬す【動佐變自】ぞくす(屬す)に同じ。

しよくす 屬す【動佐變他】ぞくす(屬す)に同じ。

しよくす 囑す【動佐變他】■たのむ。託す。囑託す。■ことづく。傳言す。

しよくす 蝕す【動佐變自】■一の天體が、他の天體に蔽はれて見えず。■〔地〕雨露・雪などのために、土地・巖石などの削磨せらるること。

しよくす 蝕す【動佐變他】■蟲が食ふ。蟲ばみ。■〔天〕一の天體が、他の天體を遮り隱す。■〔地〕雨露・風・雪などの土地巖石などを削磨すること。

しよくす 食す【動佐變自】■食事をなす。■〔天〕しよくす(蝕す)に同じ。

しよくす 食す【動佐變他】■くらふ。くふ。はむ。■〔天〕しよくす(蝕す)に同じ。

しよくす 軾す【動佐變自】「軾に伏す」に同じ。

しよくすぐ 職過ぐ【動上二自】身分に相應せずよすぐ。浮世床「汝がごとき戯作者を、先生とは、職過ぎたり」

しよくすん 燭寸【名】次條を見よ。

燭寸の詩【句】『南史の王僧孺傳に「竟陵王子良、嘗夜集二學士一刻レ燭爲レ詩、四韻者、則刻二一寸一、以レ此爲レ率」とあり』蠟燭の一寸燃ゆる間に作る詩。

しよくせい 職制【名】勤め方のおきて。職務上の規定。

しよくせき 職責【名】職務上の責任。

じよくせき 蓐席・褥席【名】しとね。ふとん。

しよくせつ 觸接【名】■せつしよく(接觸)に同じ。■〔兵〕敵と視界に在ること。

しよくせつ 稷契【名】〔人〕支那唐虞の世の名臣なる稷と契と。「に同じ。

しよくせん 燭剪【名】しんきり(心切)に同

しよくせん 卓氈【名】卓を被ふに用ふる毛布。ていぶるかけ。「に同じ。

しよくせん 觸線【名】〔數〕せつせん(切線)に同じ。

しよくせん 食饌【名】■くひもの。■膳に具へたる食物。

しよくぜん 食前【名】■食事の前。(食後に對して)■食事の席の前方。

食前方丈【句】『孟子の盡心下篇に「食前方丈、侍妾數百人、我得レ志不レ爲也」とあるに本づく』列ねたる食物の、その席の前一丈四方に滿つるほど盛んなる料理。即ち山海の珍味の列ぶるを言ふ。

しよくぜん 食膳【名】ぜんぶ(膳部)に同じ。「ふるさま。

しよくぜん 色然【貌】驚きて、顏色を變

しよくせんがくかう 織染學校【名】實業學校の一。機織・染色に關する學術・技藝を教育する學校。

しよくせんし 織染史【名】織部令史(オリベノサクワン)の唐名。

しよくせんしよ 織染署【名】おりべのつかさ(織部司)の唐名。

しよくせんじよう 織染丞【名】織部佑(オリベノジヨウ)の唐名。

しよくせんれい 織染令【名】織部正(オリベノカミ)の唐名。

しよくぜめ 食攻【名】じきぜめ(食攻)に同じ。「素)に同じ。

しよくそ 食素【名】〔醫〕えいやうそ(營養素)に同じ。

しよくたい 食滯【名】しよくもたれ(食滯)に同じ。拜澤仁玉堂「腎虛と食滯はおれが持病だ」

しよくだい 燭臺【名】蠟燭を立てて點火する臺。らふそくたて。

しよくたいしき 飾隊式【名】くわんぺいしき(觀兵式)の舊稱。

しよくだう 食堂【名】食事する室。

しよくだう 食道【名】■『戰國策の趙國の條に「韓絕二食道一」とあり』りやうだう(糧道)に同じ。■〔動〕咽喉頭より胃までの間の、食物の通ふ管。人類のは全長二十乃至三十サンチメートル、食物嚥下(エンカ)の際は擴張して、中央部にては三乃至三・五サンメートル牢に達し、上部は、氣管と脊柱との間に在りて、身體の正中を下りたる後、左方に轉じ、遂に左氣管枝を交叉し、次いで脊柱を遠ざかり、少しく螺旋狀をなして、胸部大動脈の前部を走り、胃の噴門に達す。食物嚥下の際は、その筋層の作用により、蠕動(ペリスタルシス)運動を起して、漸次食塊を下方に送る。食管。

しよくだうがん 食道癌【名】〔醫〕『羅Carcinoma oesophagi』食道に生じたる癌腫。多く氣管枝と交叉する部、乃至噴門部に生じ、初め食物の嚥下に困み、遂に流動物を通過せしめ得るのみなるに至り、多くは飢餓のために斃る。

しよくだう-けふさく 食道狹窄【名】〔醫〕『羅Strictura oesophagi』嚥下困難となる病。原因は主に癌腫なれども、稀に炎症・梅毒・ヒステリイより來る。

しよくだう-つきれつしや 食堂附列車【名】食堂の附屬せる鐵道の列車。「つや。

しよくたく 色澤【名】色彩と光澤。いろ

しよくたく 食卓【名】食事に用ふる机の類。ちやぶだい。「に同じ。

しよくたく 屬託・囑託【名】ぞくたく(屬託)

しよくたくい 屬託醫・囑託醫【名】ぞくたくい(囑託醫)に同じ。

しよくたくいし 屬託醫師・囑託醫師【名】ぞくたくいし(囑託醫師)に同じ。

しよくたくきん 屬託金・囑託金【名】ぞくたくきん(屬託金)に同じ。

しよくたくさいばんしよ 屬託裁判所・囑託裁判所【名】ぞくたくさいばんしよ(囑託裁判所)に同じ。

しよくたくじけん 屬託事件・囑託事件【名】ぞくたくじけん(囑託事件)に同じ。

しよくたくしよ 屬託書・囑託書【名】ぞくたくしよ(囑託書)に同じ。

しよくたくみ 食巧【名】食物を得るに心を勞すること。轉「能(カ)なしの食だくみ」

しよくたくゐん 屬託員・囑託員【名】ぞくたくゐん(囑託員)に同じ。「に同じ。

しよくたたり 食滯【名】しよくたい(食滯)に同じ。

しよくだな 卓棚【名】〔建〕四十八棚の一。中央に机のごとく板を取附け、二本の束(カン)にて支へたるもの。連歌・和歌などを載するに用ふ。

しよくたん 燭炭【名】〔鑛〕『英 Candle coal』英國産にて、凝結力の最も強き一種の黑炭。

しよくぢ 初口【名】はじめ。はじまり。いとぐち。

しよくぢ 諸口【名】〔商〕簿記にて、貸借いづれか一方の勘定科目の二つ以上に亙れること。例へば借方は商品、貸方は現金と當座預金となる時、借方に商品、貸方に諸口と記す類。

じよくち 辱知【名】『知(ヂ)を辱(カタケ)くする義。じよくかう(辱交)參照』その人と知合なることの謙稱。しりあひ。

しよくちやう 職長【名】しよくこうかう(職工長)に同じ。

しよくちゆう 植蟲【名】〔動〕下等動物の一。數多集りて、植物の如き形の巢を造る小さき蟲。珊瑚蟲などの類。

じよくちゆう 蓐中・褥中【名】一ねどこのうち。褥裡。二びやうちゆう(病中)に同じ。

しよくちゆう-しよくぶつ 食蟲植物【名】〔植〕葉花などより一種の液を分泌する腺を有し、これに觸るる昆蟲、その他の小動物を捕捉してこれを溶し、その養分を吸收する植物の總稱。靱苞(カクハウ)・毛氈苔(ハウル)・狢藻(ナムモ)・狸藻(タヌキモ)科・猪籠草(カウボウ)科・狸藻科等に屬す。食肉植物。

しよくちゆう-るゐ 植蟲類【名】〔動〕さんごちゆうるゐ(珊瑚蟲類)に同じ。

しよくちゆう-るゐ 食蟲類【名】〔動〕哺乳類中の一目。概ね小獸にして、齧齒類に類似し、土中に穴居し、冬眠す。口吻は突出し、爪鋭く、土壤を穿つに適し、四肢短く、各五趾を有し、目・耳共に小なるを常とす。昆蟲・蠕蟲(ゼンチウ)などを食とし、又雜食するものあり。蝦(モグラ)・地鼠蝟(ハリネズミ)・麝香鼠など、これに屬す。

しよくしよ 織女【名】一機(ハタ)を織る女。はたおりむすめ。織婦。二〔天〕支那の天文における牛宿中の三星。西洋の天文學にては琴座に屬す。あさがほひめ。牧陰。たなばた(棚機)三參照。

しよくしよくせい 織女星【名】〔天〕前條二に同じ。

しよくでん 職田【名】支那にて、古、官吏に、その職に伴ひて賜はりし田地。(功田・位田に對して)しきでん(職田)參照。

しよくど 埴土【名】〔農〕『英 Clayey soil』粘土質の土壤。少なくとも、六割以上の粘土、四割以下の砂を含めるものにて、粘板岩・長石・雲母等に富む岩石の分解に因りて生ず。粘りて、耕すに困難にして、また燥けば龜裂し、水氣の浸透宜しからず。(壤土・砂土に對して)

しよくとう 卿筒【名】ぼんぶに同じ。

しよくどう 贖銅【名】一王朝時代に、銅を收めて罪をあがなはしめたること。二くわたい(過怠)三に同じ。

しよくとして 職として【副】むねとして。主として。もっぱら。

しよくとつ 觸突【名】ふれあたること。

しよくにく 食肉【名】一動物(殊に鳥獸)の肉を食ふこと。肉食。二『左傳の昭公四年の條に「其出入也時、食肉之祿、冰皆與焉」とあり』肉食することを得る家、即ち高官又は富貴の人の稱。

しよくにく-しよくぶつ 食肉植物【名】〔植〕『英 Carnivorous plants』しよくちやうしよくぶつ(食蟲植物)に同じ。

しよくにくるゐ 食肉類【名】〔動〕哺乳類の一目。概ね體形大きく、能く發達し、齒は三種具備し、特に犬齒强大にして鋭し。前肢は五指なれども、後肢は拇趾を缺くもの多く、指趾は各鉤爪を備ふ。獅子・虎・豹・狼・熊・犬・猫・海豹(アザラシ)・膃肭臍(ラツコイ)等これに屬す。鰭脚(ヒレアシ)類をも、この中に包含せしむることあり、又これを包含せざる食肉類を、趾行類と蹠行(カカト)類とに分つことあり。

しよくにほんき 續日本紀【名】〔書〕六國史の一。文武天皇の元年より、桓武天皇の延曆十年までの事を記せり。四十卷。菅野眞道・藤原繼繩等の、勅を奉じて撰びたるもの。續紀。

しよくにほんこうき 續日本後紀【名】〔書〕六國史の一。仁明天皇の天長十年より、嘉祥三年までの事を記せり。但し現存せる書は、缺けたる所多し。二十卷。藤原良房・伴(トモ)善男・春澄善繩(ヨシナハ)等の、文德天皇の遺志を奉じて撰べるもの。續後紀。

しよくにほんこうきうた-の-かい 續日本後紀歌解【名】〔書〕續日本後紀の歌を解釋せるもの。一卷。荒木田久老の著。一名、槻落葉(ツキオチバ)。

しよくにん 織紅【名】しよくじん(織紅)に同じ。

しよくにん 職人【名】手藝を以て、物を造るを業とする人。例へば大工・左官など。職工。

職人貧乏、人賓(ヒトヅマ)【句】「器用貧乏人賓」に同じ。「細工貧乏人賓」參照。〔諺語〕

しよくにん-うたあはせ 職人歌合【名】〔文〕歌合の一種。職人の歌合に擬して詠めるもの。月と戀とを題とす。建保職人歌合二條良基公職人歌合・甘露寺親長卿職人歌合・勸進聖職人歌合等あり。

しよくにん-づくし 職人盡【名】一悉く職人なること。二歌などに種種の職人を詠み入るること。

しよくにんづくし-うたあはせ 職人盡歌合【名】〔書〕月と戀とを題とし、番匠・鍛冶など、種種の職人の心になりて詠みたる歌を番へたるもの。判詞の次に畫圖あり。三卷。著者詳かならず。一名、七十一番職人歌合。

じよくねつ 濕熱【名】じようしよ(蒸暑)に同じ。

しよくのう 職能【名】職務上の能力。

しよくば 職場【名】仕事をするところ。

しよくばい 觸媒【名】〔化〕『英 Catalytic agent 又 Catalyser』自己には變化あらはれず、又、化學變化の原動力にも非ずして、自己に接する他物の化學變化の速度を、或は增進し或は減退せしむる媒助となるもの。例へば、二酸化マンガンが鹽酸カリウムの分解を容易にし、少量のヂアスタアゼが、その量これに數萬倍する澱粉の糖化を短時間に了らしむる類。また醱酵菌・バクテリヤ等の微生體は、卽ち生活せる觸媒に外ならず。而して、觸媒のこの作用を接觸作用といふ。接觸劑。

しよくばう 職方【名】『方內、卽ち國內を職(サバ)る義』支那にて、古昔、國中の地圖を掌りし官。

しよくばう 色貌【名】かほいろとかたち。と。

しよくばう 屬望【名】のぞみを付くること。

しよくはく 蜀魄【名】〔動〕しよくこん(蜀魂)に同じ。

しよくはつ 觸發【名】物にふれて發作すること。

しよくはつ-すゐらい 觸發水雷【名】『英 Contact mine』布設水雷の一。一度沈置するや、これに接觸する者あれば、直ちに爆發する裝置を有するもの。發火裝置の機械的に動作するものと、或元素又は化合物中互に相觸れて生ずる、化學力を借れるものとにより、機械觸發水雷・化學觸發水雷・電氣觸發水雷に分つ。自發水雷。(視發水雷に對して)

しよくばん 食麵麭【名】食事用にするパン、卽ち砂糖・餡などを加へざるもの。

しよくばん 觸蠻【名】次條を見よ。

觸蠻の爭【句】「蝸牛の角爭(ツノアラソ)ひ」に同じ。

しよくひ 食ヒ【名】食事用のさじ。

しよくひ 食費【名】食事の費用。

しよくび 式微【名】『詩經の邶風式微篇に「式微式微、胡不ヽ歸」とあるに本づく。微は衰微の義、式は發語の辭にて、「もつて」と訓ず』きはめて、衰微したること。しきび。

じよくひ 蓐被・褥被【名】しとねと、かいまきと。夜具。

しよくひん 食品【名】食料とする物。食料品。食物。食用品。

しよくふ 職婦【名】しよくぢよ(織女)一に同じ。

じよくふ 蓐婦・褥婦【名】さんじよくふ(産褥婦)に同じ。

しよくぶぎやう 職奉行【名】わかどしより(若年寄)に同じ。

しよくふく 職服【名】職務上著用すべき「制服。

しよくぶつ 植物【名】〔生〕生物の一。草・木・竹・菌・藻などの類の總稱。高等なるものは炭酸・水・鹽類の如き無機物を資りて、その營養に供し、概ね根・莖・葉等を有すれども、下等植物に至りては、動物と區別し難きものあり。(動物に對して)

しよくぶつ 贖物【名】あがなひのために

差出す物。あがもの。

しよくぶつ-かい 植物界【名】『英Vegetable Kingdom』自然界に於て、植物と名づくるものの範圍。

しよくぶつ-かいぼうがく 植物解剖學【名】〔植〕『英Anatomical botany又Phytotomy』植物學の一部。植物の内部の構造、殊に細胞・組織等の構造及び排列等を研究するもの。

しよくぶつ-がく 植物學【名】『英Botany』自然科學の一。植物の形態・生理・解剖・分類・分布・應用などを研究する學。本草學。

しよくぶつがくしや 植物學者【名】植物學に熟達せる人。

しよくぶつ-がん 植物岩【名】〔地〕『英Phytogenic rocks』植物體が變化して成りたる岩石。例へば硅藻土の類。

しよくぶつ-きさいがく 植物記載學【名】〔植〕『英Descriptive botany』植物學の一部。植物各個の形態を記載して、所屬を定むる學。

しよくぶつ-くけい 植物區系【名】〔植〕『羅Flora』一地方に產する植物の全種類を總括したる稱。**しよくぶつちりがく**(植物地理學)參照。

しよくぶつ-くわがく 植物化學【名】『英Phytochemistry』植物の生活現象を化學的に考究する學問。

しよくぶつ-けいたいがく 植物形態學【名】〔植〕『英Morphological botany』植物學の一部。植物體に於ける外部の形狀を攻究するもの。

しよくぶつ-けんさくわん 植物檢查官【名】植物檢查に任ずる高等官。植物檢查所長又は支所長もしくは所員これに當りて、所轄事務を掌る。

しよくぶつけんさくわん-ほ 植物檢查官補【名】植物檢查官の次位にある判任官。植物檢查所員として、事務に從事す。

しよくぶつけんさ-しよ 植物檢查所【名】農商務大臣管理の下に、植物の輸入・移入又は輸出移出に關する檢查・取締并びに病菌・害蟲の研究、及び調查の事務を掌る所。

しよくぶつ-ごうげ 植物象牙【名】『英Vegetable ivory』象牙椰子(ヤシ)の種子の胚乳。白色堅實にして、象牙に似たり。釦(ボタン)・洋傘の飾など、種種の器具製造用に供す。

しよくぶつ-しきそ 植物色素【名】〔化〕『英Phytochrome』植物體の色素。葉綠素・花色素・果實色素・根色素等の總稱。

しよくぶつしつ-せんゐ 植物質纖維【名】〔植〕『英Vegetable fibre』植物體の纖維組織を成す細長き細胞。

しよくぶつせいあぶら 植物性油【名】〔化〕『英Vegetable oil』植物體より壓搾又は抽出して得たる油。普通常温に於て液體なるもの。

しよくぶつせいあるかり 植物性阿爾加里【名】『英Vegetable alkali』たんさんかりうむ(炭酸加留母)に同じ。(鑛物性亞爾加里に對して)

しよくぶつせいくわん 植物性管【名】〔醫〕ないざうくわん(内臟管)に同じ。(動物性管に對して)

しよくぶつせいしきそ 植物性色素【名】植物性染料となる性分を有するもの。**しきそ**(色素)參照。

しよくぶつせいしぼう 植物性脂肪【名】橄欖・落花生・胡麻・胡桃(クルミ)・菜種(ナタネ)等の植物の果實又は種子より製したる脂肪。その液狀なるを植物性油といふ。(動物性脂肪に對して)

しよくぶつせいしんけいけいとう 植物性神經系統【名】〔醫〕植物性管内にありて、交感神經節を中樞部とし、脊柱の左右兩側に連結し、腦脊髓神經に連なる。末梢部は血管及び内臟に分布す。交感神經系統。(動物性神經系統に對して)

しよくぶつせいせんれう 植物性染料【名】植物より得たる染料。例へば紫根・鬘・紅花(ベニ)・刈安(カリヤス)・茜(アカネ)など。植物染料。(動物性染料・鑛物性染料に對して)

しよくぶつせいせんゐ 植物性纖維【名】織物の原料として、植物より得たる纖維。例へば木綿・麻など。(動物性纖維・鑛物性纖維に對して)

しよくぶつ-せいたいがく 植物生態學【名】〔植〕『英Ecological botany』植物學の一部。植物の生活狀態、殊に植物間相互の關係と、外圍の狀況に適應して、植物の生存する狀態とを研究するもの。

しよくぶつせい-ひれう 植物性肥料【名】植物を腐敗又は變形せしめて得たる肥料。例へば藁・木葉・草・豆腐粕・油粕など(動物性肥料・鑛物性肥料に對して)

しよくぶつ-せいりがく 植物生理學【名】〔植〕『英Physiological botany又Phytophysiology』植物學の一部。植物體の諸器官の作用を研究して、生活原理を考案するもの。

しよくぶつ-せんれう 植物染料【名】しよくぶつせいせんれう(植物性染料)に同じ。

しよくぶつ-たい 植物帶【名】〔地〕『英Botanical region』氣候の如何によりて生ずる植物の分布・異同を分ちたる地帶。水平的なる區分と、及び土地の高低に依る垂直的區分とあり。

しよくぶつ-ちりがく 植物地理學【名】『英Geographical botany又Phytogeography』植物學の一部。植物の地球上に分布・散在する狀態を調查するもの。植物區系の調查及びその成立の來歷につきての研究も、この學の範圍に屬す。植物分布學。

しよくぶつ-びやうりがく 植物病理學【名】〔植〕『英Vegetable pathology又Phytopathology』植物學の一部。諸般の植物、殊に有用植物を害する疾病の狀態・經過を始め、その治療・豫防・驅除の方法に至るまでを研究するもの。

しよくぶつ-ぶんぷ 植物分布【名】〔植〕『英Distribution of plants』植物が地球上各處に特殊の種類を生ずる狀態。その原因の主たるものは、温度と氣候となり。**しよくぶつたい**(植物帶)參照。

しよくぶつ-ぶんぷがく 植物分布學【名】〔植〕**しよくぶつちりがく**(植物地理學)に同じ。

しよくぶつ-ぶんるゐがく 植物分類學【名】〔植〕『英Systematic botany又Classification of plants』植物學の一部。植物の種類を蒐集して、これを類別し、その系統を攻究するもの。

しよくぶつ-ゆ 植物油【名】『英Vegetable oil』植物より搾取し、又は植物を原料として精製したる油。

しよくぶつ-ゑん 植物園【名】『英Botanical garden』各種の植物を培養して、主に學術上の研究に資せんとする目的の園圃。

しよく-ぶん 織文【名】■あやのある織物。■織出したる模樣。ありもやう。「じ。

しよく-ぶん 屬文【名】ぞくぶん(屬文)に同じ。

しよく-ぶん 蝕分・食分【名】〔天〕『英Digits又Degree of obscuration』蝕の度合。皆既を十分、中心まで缺けたるを五分とす。通常は食甚の時のを指す。「とめ。役目。

しよく-ぶん 職分【名】職事上の本分。つくもんづゑ(織文圖會)に同じ。

しよくぶん-づゑ 織文圖會【名】〔書〕しよくもんづゑ(織文圖會)に同じ。「に同じ。

しよくばち 職蜂【名】〔動〕こうばち(工蜂)に同じ。

しよく-ほう 食封【名】■食邑。封土。領地。■じきぶ(食封)を見よ。

しよく-ほう 食俸【名】ふち。食祿。

しよく-みん 植民・殖民【名】『蘭Volksplanting殖の字は我が國後世の使用に屬するを、支那にては知ってこの字を輸入使用するに至れり』他の未開地に、永久的移住をなす人、又はその行動。

しよくみん-ぎやうせい 植民行政・殖民行政【名】■植民地統治に對する本國の行政。■母國行政機關による直接行政。

しよくみんせいさく 植民政策・殖民政策【名】植民に對する國家の施設・經營。

しよくみんせいさくがく 植民政策學・殖民政策學【名】植民政策につきて研究する學。

しよくみん-ち 植民地・殖民地【名】植民する土地。植民の住む地。

しよくみんち-ぎやうせい 植民地行政・殖民地行政【名】植民地に關する行政。

しよくみんち-ぼうえき 植民地貿易・殖民地貿易【名】植民地と母國・諸外國若しくは他の植民地との間に行はるる通商貿易。

しよくみんてき-ほごこく 植民的保護國・殖民的保護國【名】獨立の主權を有する植民地にして、主權の行使は母國の制限を受くるもの。

しよく-む 職務【名】擔任する事務。職分に關する勤務。つとめ。役目。

しよくむ-こころえ 職務心得【名】㊀下級の機關に、一時上級の機關の職務を行はしむること。㊁職務を行ふに就きて心得置くべき事柄。

しよくむ-さいそく 職務細則【名】職務上の執行に關する細則。

しよくむ-しやうてい 職務章程【名】職務上の執行に關する規程。

しよくむ-はん 職務犯【名】〔法〕公務に職關して成立する犯罪。

しよくむ-ほう 職務俸【名】職務を擔當するにより、本俸以外に特に給せらるる俸給。例へば大學教授の講座擔任に對する講座給の類。(本俸に對して)

しよくん 諸君【代】同輩及びその以下に對しての第二人稱、又は第三人稱の敬稱。あなたがた。諸子。

しよ-ぐん 諸軍【名】もろもろの軍隊。

じよ-くん 敘勳・叙勳【名】勳等に敘し、勳章を下賜せらるること。

しよく-めい 燭明【名】蠟燭のあかり。

しよく-めい 續命【名】生命をつなぐこと。太平記「一家の續命、悉くこれ武恩にあらずといふ事なし」

じよく-めい 辱命【名】かたじけなき命令。

しよくめい-る 續命縷【名】くすだま(藥玉)に同じ。三代實錄「勅賜二大使已下、錄事以上、續命縷、品官已下菖蒲蓼一」

しよくめい-ゐん 續命院【名】古、旅行中、病に罹りたる者の、入院して療養せし所。

しよく-もく 屬目・囑目【名】『目を屬(ゾク)くる義』よく見ること。注目。「に同じ。

しよく-もたれ 食滯【名】しよくたい(食滯)に同じ。

しよく-もつ 食物【名】くひもの。おもの。じきもの。食品。

しよくもつ-ぜい 食物稅【名】食物の消費に課する稅金。例へば鹽稅・醬油稅等の類。

しよくもん-づ-ゑ 織文圖會【名】〔書〕織文に關せる圖會。狩衣の部一卷。女官の部一卷。織物の部一卷。松岡辰方(ときかた)の著。故實叢書に收む。

しよく-やう 色養【名】『晉書の潘岳傳に「膝下色養」とあり』親に仕ふるに、その命を待たず、その顏色を見て、その意を察し行ふこと。一說に、常にやさしき顏色を以て、父母を孝養すること。

しよく-やうじやう 食養生【名】くひやうじやう(食養生)に同じ。

しよく-やすみ 食休【名】食後の休息。じきやすみ。喪親が死んでも食休」

しよく-ゆ 食油【名】食用に使用する油。

しよく-よう 色容【名】ようしよく(容色)に同じ。

しよく-よう 食用【名】食物に用ふること、又その物。食料。

しよくよう-ひん 食用品【名】食用となる物品。食用物。食料品。食品。

しよくよう-ぶつ 食用物【名】前條に同じ。

しよくよく 食欲・食慾【名】食はんことを欲するこころ。くいぢ。くひけ。じきよく。食氣。

しよく-り 殖利【名】『利益を增殖する義』りしよく(利殖)に同じ。

じよく-り 蓐裡・褥裡【名】じよくぢゆう(蓐中)に同じ。「褥食。

しよく-りやう 食糧【名】食用にするかて。

しよく-りよく 燭力【名】『英Candle power』電燈などの光度。燭光。

しよくるゐ 燭涙【名】蠟燭より垂るる蠟を、涙に譬へていふ語。

じよく-れい 縟禮【名】要なき事にまで、儀式を貴ぶこと。繁瑣なる禮儀。「繁文縟禮」

しよく-れう 食料【名】㊀食物の原料。食物。㊁食物の料金。くひぶち。くひれう。

しよくれう-ひん 食料品【名】食料に供する品。食用品。食品。

しよく-れふ 職獵【名】職業にする獵。(遊獵に對して)

しよくれふ-めんじやう 職獵免狀【名】明治二十八年以前、職獵者に下付せし免狀。甲・乙の二種に分つ。銃器を使用せざる者には前者、銃器を使用する者には、後者を下附したり。(遊獵免狀に對して)

しよく-ろく 食祿【名】てあて。扶持。食俸。

しよく-わ 所課【名】㊀負課する所の物事。㊁考課すること。詮衡すること。

しよくわ 書畫【名】書と畫と。

書畫一致【句】〔美〕書道と畫道とは、精神と氣韻とを同じくすといふこと。

しよくわい 初會【名】㊀初めて催したる會合。㊁始めての面會。一見。㊂女郎の、或遊客に始めて相方となること。(うらなじみに對して)「深川新話」初會から帶紐解きの身の上咄といふ謎さ」

しよくわい 初回・初回【名】最初の一回。

しよくわい 所懷【名】おもひ。かんがへ。所感。所思。

しよくわい 書外【名】書面に記したることの以外。文面に載せざる事がら。

じよくわい 舒懷【名】じゆくわい(述懷)に同じ。

しよくわい-きやく 初會客【名】初會の客。遊女に初會にて逢ふ客。

しよくわい-くわい 書畫會【名】㊀書家・畫家が門弟その他を集めて、即席に揮毫せしむる會合。江戸末期より明治初年に亙りて多く行はれ、主催者の外、同業者亦來りて援助するを例とせり。(繪遊笑覽「近來書畫會、所所の料理茶屋に於て催すこと、四時絕ゆることなく、盛りに行はる。その卑俗なること、御法度の花會とて、小歌上るり、踊子供の名弘めに異ならず」㊁書畫を陳列して縱覽せしめ、また賣却する會合。

しよくわ-てふ 書畫帖【名】書畫を貼(ハ)りつけ、又は書きたる折手本。「じ。

しよく-わん 書卷【名】しよもつ(書物)に同

しよく-わん 所觀【名】〔佛〕觀じたる所の境。

しよくわん 所管【名】管理又は管轄する「所の事物。

しよくわん 初冠【名】『漢書の昭帝紀の註に「謂三初冠加二上服一也」とあり』初めて冠を加ふること。

しよく-わん 庶官【名】ひやくくわん(百官)に同じ。

しよく-ぐわん 初願【名】最初のねがひ。はじめての希望。「ひのすぢ。

しよく-ぐわん 所願【名】願ふ所の事物。ねがひ。

しよく-ぐわん 諸願【名】もろもろのねがひ。神佛へかくる多くの願。

じよく-ぐわん 敘官・叙官【名】官等に敘すること。任官。「綴舒。

じよく-ぐわん 舒緩【名】ゆるやかなること。

しよく-ぐわんけ 諸勸化【名】次條に同じ。

しよく-ぐわんじん 諸勸進【名】種種の勸化(クワ)、又これをなす人たち。ものもらひ。諸勸化。(異途出世「師走の果に、この如く、しよくわんじん諸あきうど、春とても、無いこと」

しよくわん-しや 所管社【名】式外(ガイ)の社にて、明治維新以後、直接、神宮に附屬するもの。即ち內宮の宮比(ミヤヒ)神・興玉(オキタマ)神、外宮の四至神・御酒殿神の類。

しよくわん-ちやう 所管廳【名】その事件を所管する官廳。

しよく-ゐ 職位【名】官職と官位と。

しよく-ゐ 卽位【名】そくゐ(卽位)に同じ。名目抄「卽位、ショクヰ」「役員。

しよく-ゐん 職員【名】職務を執行ふ人。

しよくゐん-くわいぎ 職員會議【名】職員の集りて開く會議。「に同じ。

しよくゐん-めいぼ 職員名簿【名】次條(一)に同じ。

しよくゐん-ろく 職員錄【名】㊀職員の姓名を記せる帳簿。職員名簿。㊁內閣印刷局にて、每年一回づつ編輯・發行する、全國諸官衙等の職員錄。官職・姓名・等級・俸給額等を記せり。

しよく-ゑ 觸穢【名】服忌・出產月經等、一切の不淨の、身に接し、目に觸れ、衣服飮食等に及ぶこと。古は、一定の期間、神事に携はることを許されざりき。けがれ。そくゑ。ゑ。「て)

しよ-け 庶家【名】庶出の家。(嫡家に對し

しよ-け 諸家【名】しよか(諸家)に同じ。

しよ-け 所化【名】㊀敎化せらるる者の義』僧侶の弟子。(能化に對して)徒然「所

化皆曼えざりしに」㊁化(ケ)したる所の者の義』ばけたるもの。井筒業平河内通ひ狐狸の所化か、と暫しが程こそ紛ひつれ」

しよげ【名】 しよげること。「雪女五枚羽子板」

「この抱付の上手女に抱かれて見たいと抱付けば、さすがの藤内しよげになり」

しよけい 諸兄【名】㊀多くの兄。兄たち。㊁多くの人を敬ひ親しみての稱。

しよけい 庶兄【名】妾の生みたる兄。

しよけい 書契【名】『易經の繫辭下傳に「上古結ノ繩而治、聖人易ノ之以ニ書契ニ」とあるに本づく。契は契約の義』木を刻み、その側に書して、事を約すること。文字を記したる手形。「正統記」震旦は、殊に書契を事とする國なれど、世界建立をいへること儘かならず」

しよけい 書藥【名】『藥はもと燈火を載する臺、轉じて燈火の義』讀書に用ふる燈火。

しよけい 處刑【名】刑罰に處すること。しおき。科罪。

しよけい 曙景【名】あけがたの景色。曉色。曙色。

しよけい 諸系【名】多くの系圖。あまたの系統。

しよけい 庶系【名】庶子の系統。嫡子にあらざる系圖。

しよけい 初經【名】その人の最初の月經。

しよけい 書藝【名】書道に於ける技藝。書きかた。「正統記」文章も巧みに、書藝も勝れたまへりし、宮城の東面の額も、御みづから書かしめたまひき」

しよげい 諸藝【名】種種の藝。「重雖ニ乎「若いわろの奇抜な、諸藝の心掛たのもしい」

じよけい 敍景・敍景【名】景色を、文章・詩歌にて敍ぶること。

しよけいこ-じよ 諸誓古所【名】相模國足柄下郡小田原寺町に在りし舊小田原藩の學校。文政五年藩主大久保忠眞の創立。後に集成館と稱し、明治四年に廢せり。

じよけい-し 敍景詩・敍景詩【名】(文)客觀の景色を敍したる詩歌。貧弱ながら、作者の主觀も含まれたるものにて、畢竟抒情詩の初歩なるものといふべし。

じよけい-ぶん 敍景文・敍景文【名】景色を敍したる文。

じよけう 助教【名】㊀敎師の職務を補助する役。㊁王朝時代の大學寮にて、博士を輔けし者。國子助敎。㊂大學校にて、少博士に次ぎ、生徒を敎試し、國史を修撰し奏任官。明治二年設置、同四年大學廢せられて文部省の置かるるやその職員となり、同五年廢せられたり。

じよ-けうじゆ 助敎授【名】帝國大學又は文部省直轄諸學校にて、敎授を助けて、授業及び實務に從事する職員。奏任もしくは判任。

じよけうゆ 助敎諭【名】師範學校・公立中學校・高等女學校・專門學校・實業學校などにて、敎諭を助けて、生徒を敎育する職員。

しよけ-かげふき 諸家家業記【名】〔書〕攝家家業・神祇道・陰陽道・儒門・和歌・筆道・琴・裝束等の諸家業を記せるもの。一卷。二條康道の著。

しよげ-かへる【動四自】「かへるは接尾語」甚しくしよげる。「の條文。

しよ-げき 書檄【名】檄文を書くこと、又そ

しよけ-ちふせつき 諸家知譜拙記【名】〔書〕公卿の系譜を、家家に分ちて記せるもの。五卷。速見房當の著。

しよ-けつ 處決【名】『處理・裁決の義』㊀事をさばくこと。判斷。處裁。㊁覺悟を定むること。處裁。

しよげつ 庶孼【名】庶出の子。庶子。

しよげつ 暑月【名】かき(夏季)に同じ。

しよげつ 初月【名】㊀しんげつ(新月)に同じ。㊁はじめの月。

じよげつ 如月【名】きさらぎ(著更衣)に同じ。

しよげつ-どり しよげ鳥【名】しよげたるさまの鷄。「慈八卦柱歷」「富限者の下邸をば兩隣中にはさまるしよげ鳥の浪人の巢のとりぶき屋根」千岡鐵「しこ踏鳴らす鐵が嶽。こなたはなほもしよげ鳥の、しほしほのぼる土俵の上」

しよ-げふ 所業【名】しわざ。おこなひ。ふるまひ。所行(シヨギヤウ)。

しよ-けん 所見【名】㊀見たるところの物事。㊁いけん(意見)に同じ。

しよ-けん 諸賢【名】㊀多くの賢人。㊁多くの人の敬稱。諸彥。「縣。

しよ-けん 諸縣【名】多くの縣。あまたの縣。

しよ-けん 初見【名】最初の會見。

しよ-けん 書見【名】書物を讀むこと。

しよ-けん 書劍【名】㊀書と劍と。㊁『陳子昂の送別出ニ塞詩ニ「平生閒ニ高義ニ書劍百夫雄」とあるに本づく』書生の生涯。

しよ-けん 諸彥【名】しよけん(諸賢)に同じ。

しよ-げん 緒言【名】論說のいとぐち。はしがき。まへがき。「じ。

しよ-げん 初弦【名】じやうげん(上弦)に同じ。

じよ-げん 助言【名】じよごん(助言)に同じ。

じよ-げん 序言【名】はしがき。序。緒言。

じよ-げん 如幻【名】まぼろしのごとくはかなきこと。

しよげん-こじ 書言故事【名】〔書〕支那の故事成語を部類解釋してその出典を揭げたるもの。十二卷。宋の胡繼宗の編。

しよげん-じかう 書言字考【名】〔書〕がふるだいせつようしふ(合類大節用集)に同じ。

しよげる【動下一自】 あてがはづれて、興がさむ。

しよげる 諸藝る【動下一自】いろいろの藝ごとをなす。興を催すごときことをなす。吉野都女藝「まづそれまでは、一杯あげてしよげるべい」

しよ-こ 書庫【名】書籍を入れ置く庫。しもつぐら。書樓。芸閣。

しよ-こ 書賈【名】しよし(書肆)に同じ。

しよ-こ 曙鼓【名】曉方に打つ太鼓の音。

しよ-こ 庶姑【名】しうとめ(姑)に同じ。

しよ-こ 諸孤【名】多くの孤兒。

じよ-ご 絮語【名】『じよせつ(絮說)を見よ』くどくどしき言葉。こまやかに語る言葉。

じよ-ご 助語【名】㊀じよごん(助言)に同じ。㊁じよどうし(助動詞)とじよどうし(助動詞)との總稱。㊂〔語〕じよし(助辭)㊁に同じ。

しよ-こう 諸公【名】多くの身分高き人人。

しよ-こう 諸侯【名】封建時代に、一定の封土を領し、その域内の人民を支配する人。大名。君侯。侯伯。

じよ-こう 助攻【名】補助して攻撃すること。又その攻撃。「じ。

しよ-こく 初刻【名】しよはん(初版)に同じ。

しよ-こく 諸國【名】方方の國。くにぐに。群國。

しよこく-そうつぶし 諸國總追捕使【名】源賴朝の朝廷に奏して、國國に總追捕使を置きし時、自らこれを總管する意にて呼びし稱號。もと正しき職名にはあらざれども、足利高氏もこれに補せられんことを乞ひしことあり、同直冬(タダフユ)またこれに補せられたり。日本國總追捕使。增鏡「賴朝、…諸國の總つぶしといふこと承りて、地頭職に、我が家のつはものどもをなし集めけり」

しよこく-ふかんでん-ふうすゐし 諸國不堪田風水使【名】古、朝廷より、諸國の不堪田と水災・風難に遭へる田とを巡察するために任命派遣せられし使。

しよこ-しよこ【說】 しよこしよこに同じ。淀鯉出世灑落「仁三郎忙しげにしよこしよこと立ちいで」

じよ-こつ 鋤骨【名】〔醫〕『羅Vomer』顏面骨の一。鼻腔中の中隔をなす。扁平にして斜菱形を作す。

しよこと-なし 爲事無し【形一】せうとなし(爲事無し)に同じ。藤梨毛「お前のつれちや、しよことがない」

しよ-こん 初婚【名】初めて結婚を行ふこと。(再婚に對して)「をさすこと。

しよ-こん 初獻【名】酒宴にて、先づ初に杯

しよ-こん 諸根【名】〔佛〕もろもろの根(ネ)。こん(根)〔一〕參照。

じよ-こん 如今【副】『如は輕く添へたる語』ただいま。いま。現今。

じよ-ごん 助言【名】傍より助けていふ言。じよげん。「蕃の門松」親だと思うて助言いふまい」

しよ-さ 所作【名】㊀『作(ナ)す所の意』わ

ざ。おこなひ。ふるまひ。所爲。十訓「道理さることなれども、したる所作もなくて」 ㊁身體のこなし。 ㊂をどり。舞。 ㊃しよさごと(所作事)の略。 ㊄〔佛〕身・口(ク)・意三業(ゴフ)の發動して造作せる所。(能作に對して)

しよさ 書佐 【名】かきやく。書記。

しよさい 書齋 【名】『齋は燕居の室の義』書を讀み、物を書く等のための部屋。學問所。

しよさい 處裁 【名】『處理・裁決の義』しよけつ(處決)に同じ。

しよさい 初妻 【名】初の妻。(後妻に對して) 新可笑記「此人初妻病死の後は」

しよさい 所在 【名】 ㊀ありか。あり場所。 ㊁ここかしこ。到るところ。所所在在。 ㊂しわざ。しごと。 傾城反魂香「人の見ぬ間に思ふほど、泣くをしよさいか、なさけなや」 丹波與作「所在こそおじやれなれ、お大名へも知られた關の小萬が父親を」 ㊃手近にあること。ありあはせ。 用明天皇職人鑑「塗師屋・檜物屋・指物屋・藥鑵屋などに至るまで、所在の得物をひきさげひきさげ」

じよさい 如才 【名】 ㊀いい加減になすこと。なほざり。 **じよさいなし**(如才無し)參照。心中刃は氷の朔日「命を助け、身を助け、姪ではなうて親ぢやもの、如才にせいといやっても、わしらに如才はないものを」 曾我會稽山「傾城の習よもや如才はいたすまじ」 ㊁ぬかり。迂闊。 菩花五大力「どうなりと、云うて下さんせいなあ。そこに如才が有らうか」

じよさい 助祭 【名】(基)『英Deacon』天主教に於ける僧位の第六階、即ち司祭の次、副助祭の一なるもの。

じよさい 怨罪 【名】罪を赦して問はぬこと。

じよさい 如在 【名】『論語の八佾篇に「祭如レ在、祭神如二神在一」とあるに本づく』神を祭るに、眼の前に神の在すが如く謹み敬ふこと。によさい。「如在の禮」

じよさい 助劑 【名】はいえんざい(媒染劑)に同じ。

しよさいこく 所在國 【名】その人又はその物の存在する國。

しよさいこくはふ 所在國法 【名】〔法〕その所在國に施行せらるる法令。

しよさいし 所在地 【名】その人又はその物の存在する地。

しよさいちはふ 所在地法 【名】〔法〕『羅 lex rei sitæ』物權の目的物の存在する土地に施行せらるる法則。動產及び不動產に關する物權、その他登記すべき權利につきては、その權利者の國籍の如何を問はず、これに從ふこと。國際私法の原則たり。

しよさいなし 所在無し 【形一】 ㊀ぬかりなし。ぬけめなし。氣が利く。 ㊁愛想「を見よ。

じよさいなし 如才無し 【形一】 ㊀ぬかりなし。ぬけめなし。氣が利く。 ㊁愛想「を見よ。

しよさいぬん 初齋院 【名】さいぐう(齋宮)の所在國に施行せらるる法令。

しよさう 書箱 【名】ほんばこ(本箱)に同じ。

しよさう 書窓・書窗 【名】 ㊀書齋のまど。鷄窓。 ㊁書齋。

しよさう 初霜 【名】はつしも(初霜)に同じ。

しよさう 汨裝 【名】そさう(汨喪)を見よ。

しよさう 所相 【名】〔語〕『英Passive voice』じゆどう(受動)に同じ。

しよざう 所藏 【名】わが所有物として、藏めてあること、又その物。所持。所有。

しよさく 初作 【名】はじめての作。最初の著作。

しよさく 諸作 【名】多くの作。多くの著「作。

しよさく 書册 【名】しよさつ(書册)を見よ。

しよさくる 所作くる 【動四自】所作をなす。仕事をなす。しよさる。 浮世親仁氣質「店へ出て、しよさくりてゐらるる所へ」

しよさごと 所作事 【名】 ㊀邦樂に合はせて演ずる舞踊。 ㊁踊を仕組みたる狂言。げいごと。所作。

しよさし 所作師 【名】所作事の巧なる人。

しよさつ 書册 【名】『册の字の音、正しくはさく』しよもつ(書籍)に同じ。

しよさつ 書札 【名】かきもの。かきつけ。てがみ。書紙。

しよさつれい 書札禮 【名】書札の形式等に關して規定せるもの。例へば官位・家格等により文言を變へ、又は眞・行・草の書方を異にする等の式法。書禮式。 東鑑「相二論書札禮一事」

しよさ-ぶたい 所作舞臺 【名】おきぶたい(置綱)。 盛衰記「祇園所司奏狀を獻る」

しよさむらひ 諸侍 【名】侍ども。武士たち。諸士。 狂言「禁野」「いのちが惜しくば、その刀、かみしも、小袖も、みな脫いでおこせ。しよさむらひの腰が、やらるるものか」

しよさん 初産 【名】うひさん(初産)に同じ。

しよさん 初參 【名】しんさん(新參)に同じ。 應仁別記「馬場といふ初參の者、勢數ありければ」

しよさん 書算 【名】書道と算數と。算筆。

しよさん 初三 【名】 ㊀その月初の第三日。 ㊁初三の月 【句】みかづき(三日月)に同じ。

しよさんち 初三の日 【句】月の初の第三の日。三日。

じよさん 助産 【名】『楓窓小牘に「從二助產朱婆婆塲外一得二銅器如レ壺」とあり』じよさんぷ(助產婦)に同じ。

しよさんてきしぜん 所產的自然 【名】〔哲〕『羅 Natura』汎神論的世界觀において、神と自然とを相卽せしめたる中の、創造せられたる方面。(能產的自然に對して)

じよさん-ぷ 助產婦 【名】さんば(產婆)に同じ。

しよさる 所作る 【動四自】しよさくる(所作くる)に同じ。 入奧人「ちよいとした茶番がありやす。ところで、野呂(ロ)が、一番しよさらうといふ存心だ」

しよし 諸士 【名】もろもろの人士。しよざむらひ。

しよし 諸子 【名】〔文〕『子はもと男兒の通稱、轉じて人の美稱、師の尊稱となり、更に轉じて、その著書を呼ぶに至れるもの』孔子・孟子以外、莊子・老子・韓非子などの如く、支那にて、一家の言を立てたる人の著、及びその學說の總稱。即ち四庫中の子部に屬するもの。 正徹記「經史の御學問の上にこの書を御覽じて、諸子等の雜文までなくともの御心なり」

諸子百家 【句】『百は多數の義』諸子のこらず。一家言を樹てたる人。

しよし 所司 【名】 ㊀武家時代の職制の一。鎌倉時代には侍所の次官、室町時代にはその長官(別當を置かぬことなりしため)。 ㊁僧侶の職名。上座・寺主・都維那の稱。三綱。 盛衰記「祇園所司奏狀を獻る」

しよし 書史 【名】 ㊀しよじやく。書物。 ㊁經書と歷史と。

しよし 諸司 【名】もろもろのつかさ。

諸司の奏 【句】王朝時代の節會(セチヱ)・七曜の御曆(ヨミノ)・腹赤(カラ)・氷魚(ヒヲ)等の總稱。

しよし 庶子 【名】 ㊀嫡子以外の子。 ㊁妾腹の子。庶出の子。醇子。庶孽。 ㊂〔法〕實子の一。私生子にして、父の認知を經たるもの。認知の屆出あると同時に、父の妻即ち嫡母に對しては、準血族として、又法定親子の關係を生ずれども、生母に對しては、なほ私生子たり。

しよし 處士 【名】『民間に處(ヲ)る士の義』仕官せぬ士。浪人。

しよし 處子 【名】しよぢよ(處女)に同じ。

しよし 諸子 【名】 ㊀同輩及びその以下の者に對する第二人稱の敬稱。あなたがた。諸君。 ㊁師がその弟子たちに對して呼ぶ第二人稱。

しよし 諸氏 【名】おのおの。各位。

しよし 諸史 【名】多くの歷史。

しよし 書肆 【名】書物を商ふ家。本屋。書林。書店。

しよし 書司 【名】ふみのつかさ(書司)に同じ。

しよし 書紙 【名】かきもの。書付。

しよし 書師 【名】書道に達したる人。てかき。書家。

しよし 書旨 【名】書面の主旨。文書の趣「旨。

しよし 書筒 【名】ほんばこ(本箱)に同じ。

しよし 初志 【名】最初のかんがへ。初のおもひたち。

しよし 所思 【名】思ふところ。かんがへ。

しよじ 諸事 【名】一つ一つの事柄。もろもろの事。種種の事がら。萬事。 心中宵庚申「諸事をこまかなけし芥子」

しよじ 庶事【名】いろいろの事柄。多くの事柄。諸事。萬事。

しよじ 處事【名】事を處理すること。

しよじ 諸寺【名】もろもろの寺。諸山。

しよじ 書辭【名】書面の文句。

じよじ 助詞【名】〔語〕てにをは(弖爾乎波)に同じ。

じよじ 序詞【名】■〔語〕枕詞に似て、或語句を言出さんがための前置として用ふる修飾の語。一句以上數句に及ぶ。例へば、「足引の山鳥の尾のしたり尾のながながし夜をひとりかもねむ」の上の句の類。■はしがき。序文。

じよじ 敍賜・叙賜【名】位階・勳等に敍し、勳章・年金等を賜ふこと。

じよじ 敍事・叙事【名】事實のままを述ぶること。

じよじ 序次【名】物の順序。ついで。次序。

じよじ 助辭【名】■〔語〕てにをは。助詞。■漢文中の矣焉於乎于などの如く、他の語に附屬して、その意味を助くる語。助語。助字。きよじ(虛字)參照。

しよじう 初秋【名】■秋のはじめ。■陰曆七月の異稱。孟秋。

しよじう 諸州【名】多くの州。くにぐに。

しよじう-めぐり 諸州廻【名】〔書〕五畿内及びその附近なる美濃・近江・越前・若狹・丹後・丹波・播磨・紀伊の國國の紀行。七卷。貝原益軒の著。

しよしがく 書史學【名】『英 Bibliography』書目・解題に關する學問。

しよしき 書式【名】慣例又は法則により、一定の型ある書きかた。證書・届書・願書等の書きさまの一定の制。

しよしき 諸色・諸式【名】種種の材料物品。諸品。「代玄」それは戀に責められ、これは思に沈み、諸色の限を辨へがたし」

しよしくげでん 諸司公廨田【名】王朝時代の不輸租田の一。乘田・官田を割きて充てたる、諸寮諸司の公廨田。

じよじ-し 敍事詩・叙事詩【名】〔文〕『英 Epic poetry 又 Descriptive poetry』客觀の事柄を主として敍したる詩。客觀詩。(抒情詩に對して)

しよじ-しきぶんでん 諸司職分田【名】王朝時代に、太宰帥(ソチ)・諸國守以下、史生(シジヤウ)に至るまでの者に給せし田地。帥十町より史生六段に至る。しきぶんでん(職分田)參照。

しよじ-だい 所司代【名】武家時代の職制の一。室町時代には、所司の家人が、その代官として事を執りしもの。織田氏より後は、本職の所司を置かず、所司代のみにて、禁裏の雜務を執らしめ、德川時代には、京都にこれを置きて、京都の警衛、西國諸侯の監督、及び諸般の政務を統べしめたり。太平記「高手小手にいましめて、侍所へ渡せば、所司代都築入道これを請取りて」

じよじ-たい 敍事體・叙事體【名】敍事を主とする文體。

しよじちに 初七日【名】■最初の七日間。■しよなのか(初七日)に同じ。增鏡「二十三日御初七日に大宮院御ぐしおろさる」

しよじちにち 初七日の忌【句】初七日の忌日。新顧忌。「と。

しよじつ 暑濕【名】暑くして濕氣あること。

しよじつ 書室【名】しよさい(書齋)に同じ。

しよじつ 初日【名】■あさひ。旭日。初陽。■その物事のはじめの日。しよにち。

しよじて 初仕手【名】まへして(前仕手)に同じ。

しよしてん 諸司田【名】王朝時代に、在官の諸司に充てて雜用に給せし田。公廨田(クデン)。

しよじな 諸品【名】種種の品。いろいろの物。しよしき。

しよしはっと 諸士法度【名】江戸時代の旗本に對する法度。寛永九年に發布す。九箇條より成り、その大旨、武家諸法度に同じく、同十二年二十三箇條に增加せられ、綱吉以後は廢して、武家諸法度に從へり。「の文。旗本法度。雜事條目。

じよじぶん 敍事文・叙事文【名】敍事體の事。初志。■未だその事に馴れぬこと、又その人。世なれぬこと、又その人。うぶ。未熟。「代男」その初心さ何ほど、やうやうこのほど、岡崎を覺えたる手つきして」■〔佛〕はじめて發心して、未だ深行を經ざること。

しよじん 書信【名】手紙にてのおとづれ。たより。雁信。「同じ。

しよじん 初審【名】〔法〕しんし(始審)に同じ。

しよじん 諸臣【名】もろもろの臣。多くの家來。群臣。

しよじん 諸神【名】もろもろの神。多くの神。群神。「代玄」通はせ文、…あだなる煙となすに、諸神書きこみし所は消えず」

しよじん 所信【名】信ずるところ。信條。

しよじん 諸人【名】多くの人。衆人。

しよじん 庶人【名】しよみん(庶民)に同じ。

しよじん 書人【名】「莊儀記に「劉秦姝、善臨二寫右軍蘭亭及西安帖一足レ奪レ眞、秦亦當時翰林書人也」とあり』しよか(書家)に同じ。

しよしん-こう 初心講【名】初心者の催す會。狂言(盜人連歌)「それがし、この頃若い衆と、初心講を結んで御座る」

しよしん-ぼ 書信簿【名】しよじやうひかへちやう(書狀控帳)に同じ。

しよしん-もの 初心者【名】初心なる人。世なれぬもの。うぶ。

しよしめる【動下一他】せしめるの訛。

しよしや 書寫【名】書寫すこと。宇當反古の落散りたるを拾ひあつめて、紙にすきて、經を書寫したてまつる」

しよしや 書寫【名】〔地〕しよしやさん(書寫山)の略。

しよしや 諸車【名】いろいろの車。「諸車「往來止」

しよしやう 所生【名】生れし所。盛衰記「所生の所に來って、親類・骨肉に守護せられ」

しよしやう 諸將【名】もろもろの大將。多くの大將。一尺。姫路市を距る西北一里半。山上、西

しよじやう 書狀【名】■しよかん(書簡)に同じ。■しよそ(書記)四を見よ。

じよしやう 如牆【名】牆の如く並ぶこと。

じよしやう 如上【名】前より述べ來れること。上述。

じよじやう 助成【名】じよせい(助成)に同じ。盛衰記「院中の御助成を思ひ立ちてあれ」

じよじやう 抒情・敍情【名】『抒は陳(ノ)ぶる義』自家の感想を述べあらはすこと。

じよじやう-し 抒情詩・敍情詩【名】〔文〕『英 Lyric poetry 抒は陳(ノ)ぶる義』自然又は人事に對して、作者の主觀即ち感想・氣分を抒(ノ)べたる詩。ぢよじやうし。主觀詩。(敍事詩に對して)

しよじやう-じしや 書狀侍者【名】しよき(書記)四を見よ。

しよじやう-ひかへちやう 書狀控帳【名】信書の發・受その年月日・要件等を記し置く帳簿。書信簿。

じよじやう-ぶん 抒情文・敍情文【名】自己の情を抒ぶるを主としたる主觀的の文章。(敍事文に對して)

じよしやう-るづう 序正流通【句】〔佛〕じよ(序)の條下を見よ。

じよじやく 書籍【名】つづりて册子となしたる文書。ほん。しよせき。書物。殺青。

じよしやく 敍爵・叙爵【名】■爵位に敍せらるること。■初めて、從五位下に敍せらるること。五位以上は勅授なりしにより、特にこの稱ありしなり。くらゐ(位)三。

じよゐ(敍位)參照。〔鎌倉・室町時代の語〕

しよじやくくわん 書籍館【名】■しよくわん(圖書館)に同じ。■明治五年博物局に設け、大學及び南校の圖書を藏め、閲覽せしめし所。同八年東京書籍館と改稱す。

しよじやく-めいすう 書籍名數【名】和漢書籍の標題の數字に係るものを纂め、各その名數を記せるもの。三卷。中村治重の著。

しよしや-ざん 書寫山【名】〔地〕播磨國飾磨(シカ)郡曾左(サ)村にある山。高さ一二二

國三十三所の第二十七番なる圓教寺あり。書寫は方俗「そさ」といふ。

しよしや-ほうへい 諸社奉幣【名】諸社を兼ぬる奉幣使を立てられ、幣帛を獻らること。(一社奉幣に對して)

しよ-しゆ 處守【名】(「處(ろ)りて守る義」きよしゆ(居守)に同じ。

しよ-しゆ 諸種【名】多くの種類。いろいろ。各種。

しよ-しゆ 書手【名】■『唐書に「選二五品以上子孫一爲二書手一」とあり』文字を書寫する人。寫字生。■一本御書所の主典。

しよ-じゆ 書儒【名】しよはかせ(書博士)の一唐名。

しよ-じゆ 諸儒【名】多くの儒者。

じよ-じゆ 助手【名】■他人の仕事を助くる人。(主に技術にいふ)■他人の技術・事務などを補助する職。帝國大學各學部の助手の類。

しよ-じゆう 諸宗【名】もろもろの宗旨。多くの所從。家來。平凡。

しよ-じゆう 所從【名】『從ふ所の人の義』

しよ-じゆう-けうだうしよく 諸宗教導職【名】明治の初年、僧侶にて、教導職を兼ねしもの。

しよ-しつ 庶出【名】妾腹より生るること、又その人。庶生。

しよ-じゆつ 所述【名】述ぶる所。

じよ-じゆつ 敍述・叙述【名】順序を追ひて述ぶること。

しよじゆつ-ご 敍述語・叙述語【名】〔語〕じゆつご(述語)に同じ。

しよじゆつ-ぶん 敍述文・叙述文【名】〔文〕敍述を主とせる文。例へば「家康大阪に入りて大いに賞罰を行ひ、景勝等の封邑を削り、功臣に加增す」の類。(感嘆文・疑問文・命令文に對して)

しよ-しゆん 初春【名】■春のはじめ。はつはる。春初。■陰暦正月の異稱。孟春。

しよ-じゆん 初旬【名】じやうじゆん(上旬)に同じ。

しよ-しよ 處暑【名】二十四氣の一。秋に屬し、陰暦にては七月中、陽暦にては八月二十三日頃に當る。

しよ-しよ 處處・所所【名】ところどころ。ここかしこ。はうばう。

しよ-しよ 諸處【名】多くの所。各處。

しよ-しよ 初敍・初叙【名】初めて位階・勳等に敍せらるること。

しよ-じよ 沮洳【名】■低くして、水にひたり易く、濕氣多きこと、又その土地。■ろうごく(牢獄)に同じ。

じよ-じよ 沮洳の場(ばば)【句】『文天祥の正氣歌に「哀哉沮洳場、爲二我安樂國一」とあり』ひとや。牢獄。

じよ-じよ 【名】『ぞの詞』さうり(草履)を云ふ。〔小供の語〕「しづしづ。

じよ-じよ 徐徐【貌】急がぬさま。そろそろ。

しよ-しよう 書證【名】〔法〕訴訟上或事實を證明するに足るべき事柄を記載せる書類を以て、擧證の一方法とすること。(人證などに對して)

しよ-しよう 所證【名】〔佛〕『證する所の義』さとり。證果。盛衰記「諸佛己心の所證なり」

しよ-しよく 黍稷【名】■きびと黄粱と。■ごこく(五穀)に同じ。

しよ-しよく 所職【名】『職とする所の義』任ぜられたる職。著聞集「義光は所職を辭し申して」

しよ-しよくにん 曙色【名】あけぼのの景色。曉色。曙景。

しよ-しよくにん 諸職人【名】多くの職人。鬼貫「花の頃扇插いたり諸職人」

しよす 處す【動佐變自】身を置く。をる。「世に處す」

しよす 處す【動佐變他】■おく。とどむ。「身を處す」■取計らふ。さばく。處置す。處分す。

しよす 書す【動佐變他】文字をかく。

しよす 署す【動佐變自】みづから姓名を記す。署名す。

じよす 敍す・叙す【動佐變他】■次第を分ち定む。ついづ。「序す」■官位を授け、又は進む。■次第を追ひて陳述す。のぶ。「序す」

じよす 恕す【動佐變他】思ひやりあはれみて許す。なだむ。

じよ-すうし 助數詞【名】〔語〕數詞の下に添へて、そのものを表はす語。一卷の卷、三箇の箇の類。

じよすゐ 如水【名】〔人〕くろだよしたか(黒田孝高)の雅號。

しよ-せい 所濟【名】『みつぎ濟(ざ)くる所の物の義』貢租を納むること、又その貢租。盛衰記「正稅・官物の所濟なければ」

しよ-せい 書生【名】■學業を習ふ者。學生。■食客となりて、暇あるごとに學問する若輩。

しよ-せい 書聖【名】能書の極度と認めらるる人。「じ。

しよ-せい 庶生【名】しよじやう(庶出)に同じ。

しよ-せい 庶政・諸政【名】多くの政事。もろもろの政治。

しよ-せい 庶姓【名】■もろもろの家系。■しよせい(庶族)(一)に同じ。

しよ-せい 所生【名】■その人の生みたる子。■『詩經大雅の文王篇に「夙興夜寐、無忝二爾所生一」とあり』おや。生みたる親。兩親。

しよ-せい 初生【名】初めて生るること。

しよ-せい 諸生【名】■多くの學生。■じゆしや(儒者)(一)に同じ。

しよ-せい 處生【名】『世に處する義。しよす(處す)參照』世をわたること。よすぎ。

じよ-せい 助勢【名】助けてなすこと。手つだひ。てだすけ。加勢。助力。「こと。

じよ-せい 助成【名】助けて成就せしむること。

しよせい-あがり 書生上【名】書生の生活をやめて、新に世に出でたるばかりの人。

しよせい-じ 初生兒【名】生後一週間までの間の小供。うひこ。

しよせい-じだい 書生時代【名】がくせいじだい(學生時代)に同じ。

しよせい-しばゐ 書生芝居【名】さうしばゐ(壯士芝居)に同じ。

しよせい-つうふう 助成通風【名】きやうあつうふう(强壓通風)に同じ。

しよせい-はいいう 書生俳優【名】さうしはいいう(壯士俳優)に同じ。

しよせい-ばかり 書生羽織【名】『主に書生の著るよりいふ』普通のよりも丈長く、膝より下に達する程に仕立てたる羽織。

じよせい-ひん 助成品【名】〔經〕肥料・藥劑などの如き、生產の原料品にはあらざれども、その補助として必要なる物。

しよせい-ぼつく 書生發句【名】しんぽんぱつく(新聞發句)に同じ。〔新派の起りたる當時の語〕

しよせい-やくしや 書生役者【名】さうしはいいう(壯士俳優)に同じ。

じよせい-やしき 助成屋敷【名】江戸時代の武家屋敷の一。「じ。

しよ-せき 書籍【名】しよじやく(書籍)に同じ。

しよ-せき 書跡【名】ひっせき(筆跡)に同じ。

しよ-せき 書尺【名】せきしよ(尺書)に同じ。

しよ-せき 庶績【名】もろもろの功績。

しよ-せつ 諸說【名】■多くの人の說。もろもろの主張。■多くの風說。

しよ-せつ 初雪【名】はつゆき(初雪)に同じ。

しよ-せつ 絮雪【名】『絮(ぢ)のごとく、雪のごとくに飛散する義』柳の花の形容。柳絮。

じよ-せつ 絮說【名】『絮(ぢ)のごとく續きて絕えざる義』くどくどと說くこと。

じよ-せつ 敍說・叙說【名】のべ、ときあかすこと。

じよせつ 如拙【名】〔人〕貴僧。文清と號す。九州の人。京都相國寺の亂芳軒に住み、畫を以て、足利氏の知遇を受く。支那北宗派の神髓を學びて、清新の趣味と技巧との畫風あり。

しよせつ-しや 所攝社【名】『攝する所の社の義』せつしや(攝社)に同じ。大神宮式「太神宮所攝社二十四座」

しよ-せん 諸仙【名】〔佛〕多くの仙人。もろもろの婆羅門淨行の者。謠曲「楊貴妃」「我も、そのかみは、上界の諸仙たるが、…假に人界に生れ來て」

しよ-せん 所詮【副】『詮ずる所の意。詮は事理を明かにする意』つまるところ。結局。

十劃「所詮は、おこなひは、何にてもあれ」

しよぜん 諸善【名】もろもろの善行。衆善(シュゼン)。

諸善奉行(ブガウ)【句】〔佛〕「衆善(シュゼン)奉行」に同じ。野守鏡「七佛みな諸善奉行、諸悪莫作(マクサ)と説きたまへる上は」

諸善萬行(マンギヤウ)【句】〔佛〕あらゆる善行。淨土和讃「諸善萬行ことごとく」

しよぜん 初禪【名】〔佛〕しよぜんてん(初禪天)に同じ。正統記「初禪の梵宮は、一四天下の廣さなり」

じよぜん 如船【名】うきぶくろ(浮袋)に同じ。

しよぜんてん 初禪天【名】〔佛〕色界(シキカイ)の四禪天の第一。梵衆・梵輔・大梵の三天に分れ、果報の福德に差異あり。

しよせんなし 所詮無し【形ク】かひなし。しやうがなし。沙石集「あやつばらは所詮なき者ぞ」

しよぜんぼんてん 初禪梵天【名】〔佛〕しよぜんてん(初禪天)に同じ。正統記「大火災といふこと起りて、色界の初禪梵天まで燒けぬ」

しよそ 書疏【名】てがみ。書狀。

しよそ 初祖【名】血統又は流派の初代。

じよそう 助奏【名】〔音〕音色の變化及び樂器の特性を利用する爲に、或樂器の他に、一箇もしくは箇數の他の樂器を用ひ、獨奏もしくは獨唱を助くる事。

しよそうぎ 初僧祇【名】〔佛〕第一の阿僧祇劫。菩薩行を修して佛となるに、三大阿僧祇劫の時間を要する中に、この第一の阿僧祇劫にて、十信・十住・十行・十廻向等の四十位を經といふ。この期間は、なほ凡夫の地位にして、煩惱を斷つに至らずといふ。ごじふにね(五十二位)參照。盛衰記「一見の新客は、初僧祇の功德を」

しよそーき 初祖忌【名】だるまき(達磨忌)に同じ。

しよそく 初足【名】病後などの初めての外出。若風邪かかる野末までの御初足、…ただ御歸宅と申せば」

しよぞく 所屬【名】從屬すること、又その「物。

しよぞく 庶族【名】■庶流の一族。庶姓。別家。■庶民。平民。「廳。

しよぞくーちやう 所屬廳【名】從屬する官

しよそつ 諸卒【名】多くの兵卒。

しよそん 庶孫【名】庶出のまご。

しよそん 書損【名】書きあやまり。書き「敬稱。そこなひ。

しよそん 諸尊【名】〔佛〕しよぶつ(諸佛)のへ。みこみ。太平記「これ程にいふかひなき御所存にて、天下の大事を思召したちけること」

しよぞんーなし 所存無し【形ク】思慮なし。よき考も出でず。太平記「誠に所存なげなる體、心淺くぞ見えたりける」

しよそんーべつぎやうーごまほふ 諸尊別行護摩法【名】〔佛〕『別行は合行に對する語』諸尊の個個に對して、別別に修する護摩供。著聞「三部の大法、諸尊別行護摩法を受け」

しよたい 諸隊【名】多くの隊。

しよたい 諸體【名】種種の體裁。

しよだい 書體【名】■文字の書方。書風。■漢字の種種の書方、即ち楷書・行書・草書・隷書などの類。

しよたいーくづし 所帶崩【名】一旦、夫婦となりて、所帶を持ちたる後、故ありて離別したる人。萬葉千載「大明のしよたいくづし、蘇蓮の和尙たち」

しよたいーじむ 所帶染む【動上二自】所帶を持ちたるため、一家としての生計、又は世間の交際に慣る。家庭のためを計らんとする心になる。

しよたいーだうぐ 所帶道具【名】一家を支ふるに日常必要なる諸具。世帶道具。

しよたいぶ 諸大夫【名】■中世以來、親王攝家・大臣家などの家司(ケイシ)に補せられ、恪勤(カクゴン)の功により、昇殿を許され、高官に進みし輩。四位・五位を極位とす。「柄。■五位の侍の通稱。朝散大夫。

しよたいぶーのー 諸大夫間【名】『諸大夫の詰所の義』舊京都皇居内の居室の一。節會その他の儀式の際、殿上人等の候所に充てられし所。宜秋門を入り、車寄を昇り、右方の廊の終端。虎間・鶴間・櫻間の三室あり、初は櫻間のみの稱なりしが、後には三室の總稱となれり。

しよたいぶーぼふし 諸大夫法師【名】門跡家の家司(ケイシ)。坊官。

しよたいみやう 諸大名【名】もろもろの大名。諸侯。

しよたいめん 初對面【名】初めての對面。「初會。

しよたいーもち 所帶持【名】一戸を構へて獨立の生計を立つること、又その人。身上持。生玉心中「彼奴は所帶持なれば、少しの取りかへもしてくれる」

しよたち 諸島【名】多くの島。

しよたち 初唐【名】〔文〕支那の唐の代を詩の盛衰變化の上より四つの時期に區分したるうちの初期。凡そ玄宗の開元の初頃までを稱し、王勃・楊炯(ケイ)・盧照鄰・駱賓(ヒン)王の四家、詩人として最も傑出す。(盛唐・中唐・晩唐に對して)

しよたう 蔗糖【名】しやたう(蔗糖)の誤讀。

しよたう 書刀【名】■『周禮の工記註に「今之書刀」とありて、疏に「至」漢、雖有二殘筆一仍有二書刀一」とあり』支那にて、古、文字を書く竹簡を削るに用ひし小刀。■紙を切る小刀。「法。筆道。

しよーだう 書道【名】文字を書く術の道。書法。筆道。

しよーだう 書堂【名】しよさい(書齋)に同じ。

しよーだう 諸道【名】もろもろの學藝。正統記「諸道に明かに、佛法の方までも暗からざりけるとぞ」

しよーだうぐ 諸道具【名】いろいろの道具。多くの道具。

しよだうぐーかりぶぎやう 諸道具借奉行【名】かりものぶぎやう(借物奉行)に同じ。

しよだうぐーぶぎやう 諸道具奉行【名】戰國時代に、諸國の大名又、德川時代の初期に、將軍の行旅の際、武器以外の雜具を沙汰せしむるために、臨時に任命せし役。

じよーだし 序出【名】書きはじめ。じよだいへおき。發端。

しよーだち 初太刀【名】はじめに切りかくる太刀。大鏡虎榊物語「我らがためにも舅の敵、掃部に初太刀を討たせたし」

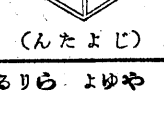
しよーだな 書棚【名】三棚の一。書物を載せおく棚。しよもつだな。書架。

しよたふーじやう 書答狀【名】鎌倉・室町兩時代に、原告の訴狀に對する被告の第一回の答狀。初問狀に對する最初の陳狀。支狀(シジヤウ)。初陳狀。初陳。たふじやう(答狀)參照。

しよだん 初段【名】■はじめの段。はじめの一きり。■碁・將棋・柔道などの技藝の階級の、最初のもの。

しよだん 處斷【名】■『處決・裁判の義』罪をさばくこと。裁斷。處決。

じよたん 助炭【名】火鉢又は爐などの上に掩ひて、火氣の逸散を防ぐ具。火器の大小に隨ひて、枠(ワク)を作り、紙を上部と左右背後の四面に張りて作る。



(んたよじ)

しよち 處置【名】■『處(ス)き置く義、即ちその所行に適合せる位置に定むる義』とりきむること。はからふこと。處理。

しよち 所知【名】■『知る所の地の義』しよりやう(所領)に同じ。當流小栗判官「おのれ所

知を押領す」「一。

しよ-ち 初地【名】〔佛〕菩薩乘の十地の第

しよ-ち 書癡・書痴【名】『唐書の竇威傳に「竇氏子弟皆喜レ武、獨威尚レ文、諸兄訕爲二書癡一」とあるに本づく』讀書に耽り、餘事に心を寄せざること。書婬。

しよ-ぢ 所持【名】わが物として持ちてあること。所有。

じよ-ぢ 舒遲【名】しづかにおそきこと。舒緩。

しよ-ぢ-いり 所知入【名】■にふぶ(入部)に同じ。義經記「急ぎ京上(ハせのぼ)して、所知入せん」■芝居の囃子(はやし)の名。大名の行列の出づる場などに用ひ、三挺の三昧線を用ふ。

しよ-ちう 書廚【名】■書物を入れ置く簞笥(たんす)。■『齊書の陸澄傳に「讀レ易三年、不レ解二文義一、欲レ撰二宋書一不レ成、王儉戲レ之曰、陸公書廚也」とあるに本づく』徒らに讀書して、その意義に通ぜざる者をいふ。ほんばこ。

しよ-ぢく 書軸【名】文字を書きたる掛物。

しよぢ-しや 所持者【名】所持する人。所持人。

しよ-ぢつ 書帙【名】■ちつ(帙)に同じ。

しよぢ-にん 所持人【名】しよぢしや(所持者)に同じ。

しよぢにん-ばらひ 所持人拂【名】〔商〕おさんにんばらひ(持參人拂)に同じ。

しよぢ-ひん 所持品【名】所持の物品。携帶又は所有せる品物。

しよぢ-ぶり 處置振【名】事柄を處置する樣子。物事をなす樣子。しよちぶり。

しよ-ぢん 初陳【名】しよたふじやう(初答狀)に同じ。

しよ-ぢん 諸塵【名】〔佛〕吾人の眞性を汚すもろもろの煩惱。五塵。

しよぢん-じやう 初陳狀【名】しよたふじやう(初答狀)に同じ。

しよ-ぢやう 所長【名】■官署の長。■長ずる事の義』ちやうしよ(長所)に同じ。

しよ-ぢやう 署長【名】署と名づくる官府の長。官署の長。

じよ-ぢやう 助長【名】■『孟子の公孫丑上篇に「勿レ助レ長二也、無レ若二宋人一然、宋人有下閔二其苗之不レ長而揠レ之者上芒然歸、謂二其人一曰今日病矣、予助二苗長一矣、其子趨而往視レ之、苗則槁矣、天下之不レ助二苗長一者寡矣、以爲無レ益而舍レ之者、不レ耘レ苗者也、助レ之長一揠レ苗者也、非二徒無一レ益、而又害レ之」とあるに本づく』速成を欲して、却りて事を害すること。■助力して發達せしむること。

じよ-ぢやう 助丁【名】しぢやう(廂丁)に同じ。

じよ-ぢやう 舒暢【名】のびのびすること。

じよぢやう-ぎやうせい 助長行政【名】〔法〕こうえきぎやうせい(公益行政)に同じ。

じよぢやう-じむ 助長事務【名】〔法〕助長行政の事務。

しよ-ぢやく 庶嫡【名】しよてき(庶嫡)に同じ。

しよ-ぢやく 暑中【名】■二十四氣の一。小暑と大暑との間の時期。(寒中に對して)■夏の暑さの盛んなる間。

しよ-ぢやう 書中【名】■書籍又は手紙の文句の中。■書面。手紙。雪女五枚羽子板「宗徒の郎黨一人にても討來らば、三千石は相違なしと、これ慥な書中到來す」

しよぢやう-きうか 暑中休暇【名】學校諸官省などにて、暑中に業を休むこと。なつやすみ。土用やすみ。暑中やすみ。

しよぢやう-やすみ 暑中休【名】前條に同じ。

しよ-おと 處女【名】『家に處(を)る女の義』未婚の女子。きむすめ。おぼこむすめ。をとめ。處子。

しよ-ぢよ 庶女【名】庶出の女子。

しよぢよ-えんぜつ 處女演說【名】その人の初めてなす演說。

しよぢよ-かうかい 處女航海【名】新に造りたる船のはじめての航海。初航海。

しよぢよ-けつじつ 處女結實【名】〔植〕たんねつじつ(單爲結實)に同じ。

しよぢよ-さく 處女作【名】その人の、初めて世に公にせる創作物。

しよぢよ-せいしよく 處女生殖【名】〔生〕『英 Parthenogenesis』たんねせいしよく(單爲生殖)に同じ。

しよぢよ-まく 處女膜【名】〔醫〕『英 Hymen』膣口の周邊をおほふ皺襞ある粘膜。月經又は交接によりて綻裂す。

しよぢよ-りん 處女林【名】げんせいりん(原生林)に同じ。

しよ-ぢり 芝居の囃子(はやし)の一。行列の時に用ふる三味線の相方。

しよ-つう 書通【名】書狀をかよはすこと。若鳳塵書通に心をお知らせ申すべしと思ひ込み」

しよ-つう 初通【名】初めて艶書を通はすこと。一代女「しよつうよりして、文章、命も取るほどに、次第次第に書きこしぬ」

しよ-つう 諸通【名】〔佛〕もろもろの神通。五通・六通など。

しよ-つ-きり 初切【名】■興行相撲にて、初に行ふ三番勝負。■物事の初。しよっぱな。

しよく 《英 Shock》【名】■感動。衝動。動搖。■〔醫〕反射的に誘發せらるる虛脫に似たる狀態。外傷によりて、知覺神經の廣き領域に強き震盪を及ぼす時、又、特殊神經の刺戟によりても發す。

しよ-づくゑ 書机【名】日本風の讀書用の机。ふみづくゑ。

しよ-っ-ちゆう 初中【副】終えず。つねに。始終。常住。〔東京の語〕

しよ-っ-つくばふ 【動四自】つくばふ(蹲ふ)を強めていふ語。丹波與作「辻にしよっつくばふて、思案中橋戀しさまさる」

しよっと 【名】〔動〕ほほじろ(頬白)に同じ。

しよっ-ぱい 鹹ばい【形】■『すっぱい(酸っぱい)を見よ』しほはゆし(鹹し)の訛。■世味酸たり。人情酷薄なり。「端。

しよっ-ぱな 初端【名】物事の始まり。發端。

しよって 初手【名】てはじめ。おこり。最初。端緒。夕霧阿波鳴渡「初手二度まではふる雪の、つみも恐れぬ無理起請」

しよ-てい 書體【名】しよたい(書體)に同じ。

しよ-てい 所體・處體【名】すがた。ふり。體裁。一代男「江戸風のしよていと申す。世之介樣それはそのまま、吉原のかの太夫さまにいきうつしといふ」

しよ-てい 渚汀【名】なぎさ。みぎは。

しよ-てい 初程【名】『梁雨軒詩話に「甌北詩、一彈指頃盛衰殊、曾記初程便乘レ繻」とあり』旅行の門出の事。

しよ-てい 諸亭【名】■多くの亭。■引附方又は問註所等の諸局。〔鎌倉時代の語〕庭訓往來「諸亭經廻、可レ申二圖師一也」

しよ-てい 諸庭【名】諸處の公卿の家門。太平記「いつしか諸庭の奉公人となり」

しよ-てい 諸亭賦分奉行【名】ふべつぶぎやう(賦別奉行)に同じ。

しよてい-ふべつぶぎやう 諸亭賦別奉行【名】前條に同じ。

しよ-てう 諸鳥【名】もろもろの鳥。多くの鳥。

しよてえ-もち 所帶持【名】しよたいもち(所帶持)の訛。浮世風呂「花を活けるの、琴を彈くのと、世帶もちのいらねえ事さ」

しよ-てき 庶嫡【名】庶出と嫡流と。庶子と嫡子と。しよちやく。

しよ-てつ 諸姪【名】姪の者たち。

しよ-てつ-ぺん 初天邊【名】■てっぺん(天邊)に同じ。■しよっぱな(初端)に同じ。

しよ-てん 所天【名】■『後漢書の梁竦傳に「適人而所天又殞」、晉の潘岳の寡婦賦序に「適レ人而所天又殞」とあり。天は人の仰ぎ賴む所なるより、天とする意にていふ』その人の仰ぎ賴む人、例へば臣より君、妻より夫を指していひ、又、友人を指していふ類。■をっと(夫)に同じ。

しよ-てん 曙天【名】あかつきの天。曉天。

しよ-てん 暑天【名】暑きそら。炎天。

しよ-てん 書典【名】書籍。經典。典籍。

しよ-てん 書店【名】書籍を商なふ家。本屋。書林。書賈。

しよ-てん 諸天【名】〔佛〕■もろもろの天

上界。てんじやう(天上)㊁さんがいしよてん(三界諸天)参照。㊂天上界のもろもろの神。天衆(シユ)。菜花「諸天、雲に乗りて遊戯(ゲ)し」謡曲(葵雀山)「諸天・氏の神も、まさに照覧あるべきなり」

しよてん 諸天善神【句】〔佛〕諸天㊀に屬する善神たち。太平記「諸天善神も納受したまふかとぞ見えし」

しよてん 所傳【名】『傳ふる所の事の義』ったへ。傳説。

しよでん 初傳【名】最初の傳授。

しよでん 書傳【名】古人の書傳へたるもの。古人の著したる書物。

じよてんき 如天記【名】〔書〕さんちやうき(三長記)に同じ。㊁を見よ。

しよてんく 諸天苦【名】〔佛〕じてく(五苦)

しよてんゆるし 初手許【名】諸藝傳授の最初の許。しよゆるし。はつゆるし。(中許・奥許に對して)

しよと 書蠹【名】きよ(蠹魚)に同じ。

しよと 胥徒【名】しより(胥吏)に同じ。

しよど 初度【名】㊀初の度。最初。第一回。㊁『屈原の離騒に「皇覽二揆予初度一兮、攝錫レ余以二嘉名一」とあり』たんじやうび(誕生日)に同じ。

しよとう 初等【名】初の等級。低き等級。

しよとう 初冬【名】㊀冬の初。㊁陰暦十月の異稱。孟冬。

しよとう 書燈【名】書を讀むともし火。書「檠。

しよとう 諸等【名】㊀多くの等級。㊁〔數〕しよとうすう(初等數)の略。

しよとう 所動【名】『英Passive voice』㊀はたらきかけらるること。うけみ。被動。受動。(能動に對して)㊁〔語〕うけみ(受身)に同じ。「こと。

じよとう 敍等・叙等【名】官等に敍すること。

しよとう-きかがく 初等幾何學【名】〔數〕『英Elementary geometry』初等平面幾何學と初等立體幾何學との總稱。(高等幾何學に對して)

しよとう-こくはふ 諸等化法【名】〔數〕諸等通法と諸等命法との總稱。

しよとう-けいいく 初等教育【名】簡易なる普通教育、即ち小學校の教育。(中等教育・高等教育に對して)

じよとうし 助動詞【名】〔語〕『英Auxiliary verb』動詞の下に添へて、その意味を助くる詞。例へば、「行きたり」「知りぬ」の「たり」「ぬ」の類。活助辭。

しよとう-すう 諸等數【名】〔數〕ふくめいすう(複名數)に同じ。

しよとう-つうはふ 諸等通法【名】〔數〕諸等數を單名數に化する算法。

しよとう-ふつうけういく 初等普通教育【名】普通教育の低きもの。初等教育。(高等普通教育に對して)

しよとう-へいめんきかがく 初等平面幾何學【名】〔數〕『英Elementary plane geometry』幾何學の一。點・直線・圓又はその集合より成る圓形の性質を攻究するもの。

しよとう-めいはふ 諸等命法【名】〔數〕單名數を諸等數に直す算法。

しよとうりつたいきかがく 初等立體幾何學【名】〔數〕『英Elementary solid geometry』幾何學の一。同一平面上にあらざる直線と直線と、また直線と平面と、また平面と平面との關係及び平面の集合して成る圓形の性質、並びに圓壔(エン)・圓錐(スイ)・球等の性質を研究するもの。

しよとく 所得【名】㊀己が得るところの物。わが物となる利益。しようとく。十訓「あはれ、しつる所得かな。…年頃不動尊の火燄を惡しう書けるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ」㊁利益。收入。

しよとく 書牘【名】『せきとく(尺牘)』を見よ』てがみ(手紙)に同じ。

しよとく 諸德【名】㊀種種の道德。㊁多くの高德なる僧侶。保元「御門徒の大衆は申すに及ばず、滿山の諸德」

しよとく-がく 所得額【名】所得金のたか。

しよとく-きん 所得金【名】收益の金。

しよとく-しんさゐゐん 所得審査委員【名】所得審査委員會の議員。收稅官中、大藏大臣の任命せる三人と、所得調査委員中より互選したる四人とを以て之に充つ。

しよとく-しんさゐゐん-くわい 所得審査委員會【名】稅務管理局に屬し、所得納稅義務者が、政府の通知したる所得金額に對し、不服を申出でし時、審査決議する機關。

しよとく-ぜい 所得稅【名】『英Income tax』直接國稅の一。各人一箇年の所得を標準として賦課するもの。

しよとく-ぜい-はふ 所得稅法【名】所得稅の徵收に關する事項を規定したる法律。明治二十年初めて公布。後、數回の改正を經たり。

しよとく-ぜい-ふかぜい 所得稅附加稅【名】地方稅の一。所得稅を納むる者の所得に課するもの。その稅率は北海道・府縣にては所得稅百分十以下、その他の公共團體にては百分の三十五以下。

しよとく-たい 書牘體【名】書牘の文體。我が國にては、普通に「候」を用ふ。候文體。書簡文體。尺牘體。

しよとく-てうさゐゐん 所得調査委員【名】所得調査委員會の議員。定員は五人。

しよとく-てうさゐゐん-くわい 所得調査委員會【名】各稅務署所轄内に置き、第三種所得稅、即ち法人の所得幷びに公債・社債の利子による所得に屬せざる所得金額を調査する委員會。

しよとく-ぶん 書牘文【名】手紙の文。書翰文。日用文。候文。

じよな 【名】〔動〕かはせみ(川蟬)を云ふ。(下總國の方言)

じよなぬか 初七日【名】人の死にし日より七日目にあたる日。佛事を修す。しよしちにち。しよなのか。

しよなのか 初七日【名】前條に同じ。

しよなん 庶男【名】庶出の男子。

じよなめき 【名】じよなめくこと、又その人。末摘花「江戸見物にじよなめきが立つてたれ」

じよなめく 【動四自】なまめかしくいやみなる樣子をなす。

じよに 【名】〔動〕かはせみ(川蟬)を云ふ。(美作國・備前國の方言)

しよにち 初日【名】興行物の初めての日。

しよにふひ 諸入費【名】いろいろの入費。諸入用。

しよにふよう 諸入用【名】前條に同じ。

しよにん 諸人【名】しよじん(諸人)に同じ。

しよにん 庶人【名】しよじん(庶人)に同じ。

しよにん 初姙【名】初めて姙娠すること。

しよにん 初任【名】初めて、その官職に任ぜらるること。

しよにん 【名】意地わるきこと。膝栗毛「勝手について飲みなさい。ええ、しよにんな男だ」

じよにん 敍任・叙任【名】位勳に敍し、官職に任ずること。

しよねつ 暑熱【名】夏のあつさ。炎暑。炎熱。

しよねん 所念【名】思ひ込みたること。「と。

しよねん 初念【名】初に思ひ込みたること。

しよねん 諸念【名】もろもろのおもひ。

しよねん 初年【名】はじめの年。第一年。

じよのくち 序口【名】㊀はじまり。發端。しよっぱな。㊁相撲の番附の五段目、即ち最下の段の地位、又その力士。

じよのまひ 序舞【名】㊀芝居の囃子(ハヤ)の一。御殿の場にて、主君に諫言するとき、又は人の出入する場合に用ふ。㊁能の舞の一。靜なる品位ある舞。羽衣・西行櫻等の如き太鼓を用ふるものと、江口・芭蕉等の如く用ひざるものとの二種あり。

しよのめい 疏銘【名】祈禱の旨を記したる書付に、願主の姓名を書きたるもの。

しよはう 諸方【名】もろもろの方角。あちこち。四方八方。

しよはう 處方【名】㊀處置の方法。手段。㊁病氣に應ずる藥劑の調合方。

しよばう 書房【名】『房は實の義』㊀しよさい(書齋)に同じ。㊁しよ(書肆)に同じ。

しよはう-がき 處方書【名】處方を記したる書付。

しよはう-がく 處方學【名】醫藥配合の方法、又は關係等を講究する學問。

しょほうせん 處方箋【名】醫師の處方を書きたる用紙。藥箋。

しょほかせ 書博士【名】王朝時代、大學寮にて、書道教授の任に當りし職。定員二人。ふんはかせ。「を見よ。

じょはきふ 序破急【句】じょ(序)の條下

しょはく 初魄【名】『こはく(死魄)を見よ』

みかづき(三日月)に同じ。

しょはつ 初發【名】しょほつ(初發)に同じ。

しょばつ 處罰【名】罪に處すること。科「罰。

じょばつ 序跋【名】序文と跋文と。題跋。

しょはふ 書法【名】■文字の書方。書道。筆法。■『左傳の宣公二年の條に「子曰、董狐古之良史也。書法不レ隱」とあり』文章の書方。

書法の家【句】書道を家業とする家柄。

世尊寺・持明院などの類。

じょはふ 助法【名】〔法〕けいしきはふ(形式法)に同じ。(主法に對して)

しょはん 所犯【名】犯罪。つみ。

しょはん 初犯【名】初めて罪を犯すこと。初ての犯罪。(一犯・三犯等に對して)

しょはん 初版【名】初度の印刷。第一版。初刻。原版。(二版・三版などに對して)

しょはん 初判【名】■はじめて分るること。■『日本書紀神代卷に「天地初判(アメツチハジメノトキ)」とあるよりいふとぞ』物ごとの始。最初。

しょはん 諸般【名】いろいろ。さまざま。かれこれ。百般。萬般。

しょばん 初番【名】■初の番。■はじめ

しょはらみつ 諸波羅蜜【名】〔佛〕もろもろの波羅蜜。六波羅蜜・十波羅蜜など。禁花「諸波羅蜜を說くと聞ゆ」

しょひ 諸費【名】もろもろの費用。諸入費。

しょひ 書費【名】書物を買ふ費用。

しょひ 書皮【名】書物の表紙。

しょひあげ 脊負上【名】おびあげ(帶擧)に同じ。「ぶく。

しょひこみ 脊負込【名】しょひこむこと。

しょひこむ 脊負込む【動四他】■多くの物を脊負ふ。■不必要なる又は價値なき物を引受く。

しょひつ 初筆【名】しょふで(初筆)に同じ。

じょひつ 敍筆・叙筆【名】敍述の筆づかひ。「加筆。

じょひつ 助筆【名】加筆して直すこと。

じょひなげ 脊負投【名】■相撲(スマヒ)の四十八手の一。相手の手を執り、その體を、わが脊に引敷せて投ぐるもの。おひなげ。■相手を誘導して、安心を與へて置きながら、突然からき目にあはすこと。

しょひん 諸品【名】多くの物品。諸物。

しょびやう 諸病【名】いろいろの病氣。萬病。

じょびやう 序病【名】痘疹(トウシン)の未だ外部に發せざるもの。じよやみ。

じょびらき 序開【名】■昔、一日の興行の始に、まづ脇狂言を了へて、次に演ぜし一幕物。見習の作者これを脚色し、稻荷町の役者、これを演じたり。■しょっぱな(初端)に同じ。

しょふ 諸父【名】父の兄弟たち、即ち伯父・叔父等の總稱。をぢ。(諸母に對して)

しょふ 脊負ふ【動四他】せおふ(脊負ふ)の訛。

脊負って立つ【句】自分一人に引受く。全部の責任を帶びて、從事す。

しょふ 所部【名】『部署する所の義』管轄の範圍。「體。

しょふう 書風【名】文字の書きざま。書

しょふく 初伏【名】三伏の一。夏至(ゲシ)の後三十日間。(中伏・末伏に對して)「じ。

しょふく 書幅【名】しょおく(書軸)に同

じょふじん 如婦人【名】にょふじん(如婦人)に同じ。

しょふつ 煮沸【名】しゃふつ(煮沸)に同

しょふつ 庶物諸物【名】もろもろの物。

しょふつ 諸佛【名】もろもろの佛。正統紀「三業(サンゴフ)に邪なくして、內外眞正なるを、諸佛出世の本懷とす」

しょふつ-しゆうはい 庶物崇拜【名】『英Fetish』木片・石塊・石器・羽毛等の庶物を、或はこれに神靈宿れりとし、或は神の標號なりとして崇拜すること。拜物敎。

しょふつすうはい 庶物崇拜【名】前條に同じ。

しょふつせうどく 煮沸消毒【名】物品を煮沸して消毒すること。

しょふつるゐさん 庶物類纂【名】〔書〕博物を二十三屬に分ち、凡そ二千七百二十三種を收め、古今の群書に徵して、その名稱・異名・形狀・產地・性質・效用等を詳かに記せるもの。七百六十四卷。稻生若水の著。

しょふで 初筆【名】■最初に書きしるすこと。筆頭。初筆(ショヒツ)。■かきだし(書出)に同じ。

しょぶん 處分【名】『處(ショ)き分つ義』■物事を取りきむること。とりはからひ。處置。處理。■〔法〕『英Dispose』特定の場合に、特定の人に對して、法規を適用する行政行爲。■〔法〕或物又は事に對する私人の實際上の處置。

しょぶん 所分【名】ちぎやう。家督。集抄「この人親のしょぶんを、故なく、人におしとられて」「段を見よ。

じょぶん 序分【名】〔佛〕さんぶんだん(三分

じょぶん 序文・敍文【名】序の文章。はしがきの文章。はしがき。

しょぶん-かうね 處分行爲【名】〔法〕『英Act of disposition』或物又は權利を破棄し、拋棄し、讓渡する等の事をなす根本的行爲。(管理行爲に對して)

しょぶん-けん 處分權【名】處分をなす權利又は權限。

しょぶん-しょ 處分書【名】官廳が特定の人に處分を命ずる文書。

しょぶん-ちやう 處分帳【名】武家時代に、人夫の人數を記せる帳簿。

しょぶん-なげ 處分投【名】〔商〕證據金・追徵金等の延滯又は不納の場合に、取引所又は客の注文を受けて取扱ひたる仲買人が、その取引したる玉(ギョク)を處分するために、市場に投出すこと。「取引所の語」

しょぶん-のうりよく 處分能力【名】〔法〕『英Capacity of management』處分行爲をなし得べき法律上の能力。(管理能力に對して)

しょぶんれい 處分令【名】〔法〕命令の一。國家が處分を命令又は禁止すること。

しょへき 書癖【名】書を好むくせ。

しょへん 初篇【名】書物のはじめの篇。初卷。(後編・前編・中編などに對して)

しょへん 所變【名】〔佛〕『變化(ヘンゲ)したる所の義』げん(化現)に同じ。謠曲(花月)「楊柳觀音の御所變にてましますかと、皆人手を合はせ」

しょべん 處辨【名】『處(ショ)き辨(ベン)つ義』しょち(處置)に同じ。

しょべる (英Shovel)【名】しやべるに同じ。

しょほ 書鋪・書舖【名】しょりん(書林)に同じ。

しょほ 初步【名】手はじめ。はじめ。初學。

しょぼ 庶母【名】『禰雅に「父之妾爲二庶母一」とあり』父の妾。

しょぼ 書簿【名】ぼしょ(簿書)に同じ。

しょぼ 諸母【名】伯母・叔母の總稱。をば。(諸父に對して)「步。

じょほ 徐步【名】徐かにあるくこと。緩

じょほ 敍補・叙補【名】官に敍し、職に補すること。「木。

しょぼく 諸木【名】いろいろの樹木。萬

じょぼく 如木【名】『白張强(ジバリ)て、木の如くなりとていふ』白張(シラハリ)を著、履、傘などを持ちて公家(クゲ)の供をせしもの。

しょぼくさ 【貌】雨露などに濡れたるさま。じとじと。

しょぼくなし 【形一】しほたれたり。

しょぼしょぼ 【貌】■小雨のゆるくつづけて降るさま。そぼそぼ。■雨などに濡れそぼつさま。■年老いて、目の衰へたるさま。■老衰のさま。

しょぼしょぼあめ しょぼしょぼ雨【名】しょぼしょぼ降る小雨。

しょぼ-たれる 【動下一自】そぼたる(そぼたる)に同じ。「よはつ。

しょぼつ 初發【名】初り。おこり。最初。し

しょほっしん 初發心【名】しょほち(新發意)に同じ。謡曲(熊坂)「この僧は、未だ初發心の者にて候ふが」

しょぼぬる しょぼ濡る【動ト二自】そぼぬる(そぼ濡る)に同じ。狂言(花子)「こけ猿めが、雨にしょぼぬれて」

しょほふ 諸法【名】〔佛〕宇宙間のあらゆる物。森羅萬象。諸有(シヨウ)。諸行(シヨウギヤウ)。萬法(マンポフ)。

諸法皆空(カイクウ)【句】〔佛〕諸法はもと因緣より生じたるものなれば、一も實性あることなし。即ち三諦(タイ)中の空諦。

諸法實相【句】〔佛〕『法華經の方便品に出でたる語』諸方は因緣より生じたる權(カリ)のものなれども、何れも佛性を具へたるものとして觀ずれば、又そのままに眞實の相なり。即ち佛教における究極の眞理を示す語にて、眞如・法性(ホツシヤウ)などの語も、畢竟これと同一の義に歸す。三諦(タイ)即是。謡曲(芭蕉)「草木・國土・有情(ウジヤウ)・非情も、皆これ諸法實相の」

諸法は心の所作(シヨサ)【句】〔佛〕一切の諸法は、すべて主觀的產物なり。萬法唯心(ユイシンジヨウ)。三界唯心。〔誹語〕謡曲(放下僧)「明月清風ただ同性の内にあれば、諸法を心の所作として」

しょぼん 序品【名】〔佛〕Ⅰ經中、一部の序となる部分。Ⅱ〔書〕法華經二十八品の中の第一。釋迦が法華經を說く序緣を述ぶ。〔樂花〕「法華經の序品は、五の御方と定めたまひて」

しょまい 糯米【名】くましね(粳米)に同じ。

しょまう 所望【名】ねがひ。このみ。希望。〔著聞〕「そもそも所望の事のさふらふを、申し出さんと」

じょまく 序幕【名】Ⅰくちまく(口幕)に同じ。Ⅱ事物のはじまり。しょっぱな。

しょみん 庶民【名】Ⅰもろもろの民。市井の臣。庶人。人民。衆民。Ⅱ身分の無き民。庶人。衆庶。烝民。

しょみん-けういく 庶民教育【名】しゃくわいけういく(社會教育)Ⅱに同じ。

しょみん-ゐん 庶民院【名】『英House of Commons』兩院制度にて、庶民の公選したる議員を以て組織する議院。下院。衆議院。

しょむ 所務【名】Ⅰつとめむき。やくめ。Ⅱ所と名づくる役所の事務。Ⅲしょやく(所役)Ⅱに同じ。

しょむ 署務【名】署と名づくる役所の事務。

しょむ 庶務【名】特別の名目なき事務。一般雜多の仕事。

しょむ 處務【名】事務の處理、又は處理すべき事務。

しょむきてい 處務規程【名】處務上の規則。

しょむさいそく 處務細則【名】處務上の細則。

しょむざた 所務沙汰【名】所領に關せる裁判。〔鎌倉時代の語〕

しょむし 庶務司【名】明治の初年、民部省に屬し、知司事・判司事・權判司事の職員ありて、戸籍・濟貧・養老等のことを掌りし役所。同二年に設置、同七年に廢せられたり。

しょむづかし【形シク】いやにむづかし。しむづかし。浮世床「しょむづかしい事を云ったもんだらう」

しょむぶぎやう 所務奉行【名】かんぢやうぶぎやう(勘定奉行)の舊稱。

じょめん 絨【名】德川時代の舶來の毛織物の一。羅紗類の少し下品なるもの。

しょめんがえ【感】『爲替(カハセ)が無いの訛』じれったく、又いまいましく思ふ時などに發する聲。〔德川時代の語〕

しょん-じり しょん尻【名】怪物などが出づとて、妄りに恐ること、又その人。怯懦。

しょんずゐ 祥瑞【名】『漢字の宋音』しやうずゐ(祥瑞)を見よ。

じょん-ばらこ 【動】めだか(目高)を云ふ。〔羽後國最上(モガミ)の方言〕

じょん-ぶる (英John Bull)【名】『John Arbuthnotが西暦一七一二年に著したる書History of John Bull より出でしものといふ』英國人の綽號。

しょん-べん 小便【名】せうべん(小便)の訛。

しょんぼけ【名】小便をけ。小便所。〔駿河國常陸國及び下總國の方言〕

しょん-ぼり【貌】極めてわびしくさびしげなるさま。悄然。川中島合戰「跡には夫婦しょんぼりと、身を悔みたるかこち泣き」

しょんめい 署名【名】姓名を記すこと。署記。記名。

しょんめい 書名【名】書物の名稱。

しょんめい 初名【名】はじめの名。「命。

じょんめい 助命【名】命を助くること。救

しょんめい-しゃ 署名者【名】署名せる人。〃署名人。記名者。

じょんめい-てんわう 舒明天皇【名】〔人〕第三十四代の天皇。御名は田村(タムラ)。また息長足日廣額(オキナガタラシヒロヌカ)天皇。敏達天皇の皇孫。押阪彦人大兄(オサカヒコヒトオホエ)皇子の第一子。母は糠手姫皇女。在位十三年(紀元一二八九年―一三〇一年)にして崩ず。壽四十九。

しょめい-にん 署名人【名】しょめいしゃ(署名者)に同じ。

しょめい-ひろう 疏銘披露【名】祈禱の意趣を記したる文書に、願主の姓名を書きあらはすこと。

しょーめん 煮麺【名】にうめん(煮麺)に同じ。

しょーめん 書面【名】Ⅰ手がみの文面。Ⅱてがみ。書狀。

じょーめん 恕免【名】ゆるすこと。宥恕。

しょめん-けいやく 書面契約【名】〔法〕書面の作成を契約成立の要件とする契約。(口頭契約に對して)

しょめん-しんり 書面審理【名】〔法〕當事者の提出したる書面によりて行ふ裁判所の審理。(口頭審理に對して)

しょめん-ゐにん 書面委任【名】〔法〕『獨Schriftliche Vollmacht』委任者が、書面を以て、委任の意思を表示すること。(口頭委任に對して)

しょーもく 書目【名】書籍の名目。

しょもく-たふもん 書目答問【名】〔書〕初學者の讀むべき書籍を、經・史・子・集の四部に分ち、更に細目に配屬せしめて、各書の卷數・著者及び刻本の善惡等を示したる漢籍案内書。四卷。支那清朝の張之洞の著。

しょもし【名】Ⅰしゃもんし(唱門師)の訛。Ⅱ古、正月に左儀長(サギチヤウ)をはやす時、赤熊をかぶりし役人。

しょーもつ 書物【名】綴りて册子としたる文書。ふみ。ほん。書籍。載籍。〔同じ。

しょもつ-くら 書物庫【名】しょこ(書庫)に

しょもつ-げい 書物藝【名】Ⅰ書物により習ひ覺えたる藝。Ⅱ實際の役に立たぬ藝。はたけすゐれん。

しょもつ-だな 書物棚【名】しょだな(書棚)に同じ。〔に同じ。

しょもつ-ばこ 書物箱【名】ほんばこ(本箱)

しょもつ-ぶぎやう 書物奉行【名】江戸幕府の職制の一。若年寄の配下にありて、文庫を管し、圖書の保管出納を掌りし定員初は四人、後に、五人・六人等に增員せりかきものぶぎやう。

しょもん-じやう 初問狀【名】鎌倉・室町兩時代に、原告の最初に提出せし訴狀。本解狀(ホンゲジヤウ)。申狀(マヲシジヤウ)。もんじやう(問狀)及び「三問三答の訴陳狀」參照。

しょや 初夜【名】Ⅰ古は、前夜の夜半より今朝まで、後には、夕方より夜半まで。(後夜に對して)Ⅱ六時の一。戌の刻。初更。甲夜。こや。(中夜・後夜に對して)Ⅲ〔佛〕前項の初夜に行ふ看經(カンキン)。こや。Ⅳ〔佛〕次條の略。『九重・黒谷の初夜聞く月の野川かな』

しょや 初夜の鐘【句】〔佛〕初夜の勤行(ゴンギヤウ)を報ずる鐘。著聞「初夜の鐘は撞きぬるか」

しょや 庄屋【名】しやうや(庄屋)の訛。

しょやう 初陽【名】あさひ。旭日。初日。

しょやく 諸役【名】Ⅰ種種の役目又は職。Ⅱ種種の雜稅、又は人夫に出づること。諸役御免(ゴメン)【句】江戸時代、武家の御用を承りたるものが、課役一切を免ぜらるること。

しょやく 所役【名】Ⅰ役目とする事務。東鑑「如此所役者」Ⅱ田租以外の雜稅。所務。「武家時代の語」東鑑「御造營所役事」

じょやく 助役【名】Ⅰ市町村會に於て、一

定の年齢以上の者より選任せられて、市町村長を補助する市町村吏員。市のは有給吏員にして、市参事會の組成分子をなし、任期六箇年、定員は東京三人、京都大阪各二人、町村のは任期四個年、定員は普通一人なり。㊁鐵道の停車場に在りて、驛長を助け、又は驛長の代理をなすもの。

しょやくにん 諸役人【名】もろもろの役人。

しょやーわき 庄屋脇【名】しょうやわき(庄屋脇)の訛。

しょよ 鰌【名】〔動〕どぢやう(鰌)を云ふ。〔飛驒國の方言〕

しょよ 緒餘【名】『莊子の讓王篇に「道之眞以治レ身、其緒餘以爲二國家一、其土苴以治二天下一」とあり』殘餘。あまり。すること。

しょよう 所用【名】㊀用ふるところ。用ふる物事。㊁用むき。用事。〔大磯虎稚物語〕

じょよう 敍用・叙用【名】官職を授けて使用すること。舉用。〔太平記〕

しょよかん 薯蕷羹【名】自然薯を擂(ス)り、道明寺と饂飩粉と砂糖とを加へて蒸したる菓子。薯の羊羹。

しょよまんぢゅう 薯蕷饅頭【名】㊀自然薯を擂(ス)り、餡を包みて蒸したる菓子。㊁そばまんぢゅう(蕎麥饅頭)に同じ。

しょーらう 所勞【名】いたづき。わづらひ。病氣。〔類政策〕「大事なる所勞ありて、人して書かせてつかはしける」「のおい。

しょーらう 初老【名】四十歳の異稱。はじめじょーらう 助老【名】老僧坐禪の時、疲るれば脊を掛けて休むに用ふる脇息に似たる具。じょろ。〔平治〕「大師坐禪に、御胸痛きとき、これを以て押ふ。おさふれば止む。助老と、これをいふ」「たるもの。

しより 紕【名】織物の名。りゆうもんに似

しより 書吏【名】㊀庶務を取扱ふ屬吏。書記。㊁王朝時代に、昔、四品以上の親王家及び三位以上の人に仕へて、文案の起稿。筆錄を掌りし役。大少の二等に分れたり。

しより 處理【名】〔處(ス)き理(リ)むる義〕『處(ス)き理(リ)』さばくこと。處置。處分。「人。胥徒。

しより 胥吏【名】地位の低き役人。小役

しより 黍離【名】亡國の址(アト)に黍などの生ひ茂りてあること。

黍離の嘆(ナゲキ)【句】『詩經王風の黍離篇に「彼黍離離、彼稷苗、行邁靡靡、中心搖搖、知レ我者、謂二我心憂一、不レ知レ我者、謂二我心何求一、悠悠蒼天、此何人哉」とあるに本づく』國亡びて、その城跡に、黍の離離たるを見て起す嘆。

しよりう 諸流【名】㊀多くの水流。㊁多くの流派。「家の家系。

しよりう 庶流【名】㊀庶子の系統。㊁別

じよりう 敍留・叙留【名】位のみ昇りて、官職はそのままに止まれること。〔鎌倉時代の語〕「じ。

じよーりき 助力【名】じょりょく(助力)に同じ。

しより-しより【貌】しやりしやりに同じ。今宮心卑「口中のしよりしよりしたる雀すし」

じより-じより【貌】ぞりぞりに同じ。狂言「路遠方主「さらば剃りませう、三歸五戒を授けたり、南無歸依僧歸依法歸依佛」じよりじより」

しよりま【名】〔植〕ひめしだ(姫羊齒)に同じ。

しよーりん 書林【名】㊀『揚雄の「今朝廷純仁、遵レ道顯レ義、並包二書林一」とあるに本づく』書物を商ふ家。書店。書舗。㊁書籍の多くある處。

じよーりん 如輪【名】㊀じょりんもく(如輪目)に同じ。㊁〔動〕頬白と同類の小禽。體の上半は主に茶・黑及び灰の雜色、下半は淡茶を帶べる灰色。喉の邊に多少の黑色あり。大・小二種ありて、大如輪は白色の頸環あり、小如輪は稍小形にて、頸に白環なし。腰は柿色なり。雄は夏季黑色に變ず。故に「なべかむり」ともいふあり。

じよーりん【名】じょれん(鋤簾)の訛。

じよりん-もく 如輪目・如鱗目【名】年輪又は鱗の如き文をなす木目。じよりん。(欅・樟の材にいふ)〔嶋翁道話〕「窓は下地(シタ)窓、ふみ板は欅のじよりんもく」

しよーれい 杵鈴【名】こんがうれい(金剛鈴)に

さ。新涼。

しよりやう 所領【名】領有せる土地。領

しよりやう-やく 所領役【名】ちぎやうやく(知行役)に同じ。

しよりよう 諸陵【名】多くの陵(ミサヽギ)。

しよりよう-がかり 諸陵掛【名】敎部省に屬して、御陵墓地等の事を掌りし役所。

しよりよう-し 諸陵司【名】しょりょうれう(諸陵寮)を見よ。

しよりよう-れう 諸陵寮【名】㊀古、治部省に屬し、頭(カミ)・助・大小允(ジョウ)・大小屬(サクワン)・史生(シヤウジ)及び土部(ベ)、使部直丁(チヤウ)等の職員ありて、山陵皇親外戚の墓を管し、陵の名籍を管し、璽を祭り、喪葬等を掌りし役所。もと諸陵司と呼び、職員の名稱も正(カミ)・佑(スケ)・令吏(サクワン)なりしを、天平元年改稱したり。みささぎのつかさ。㊁宮内省の一局。頭(カミ)・勅任、主事(奏任)、陵墓名譽守長(奏任待遇の名譽職)、陵墓守長(准判任)、陵墓守部(名譽職又は有給にて、前者は准判任、後者は判任待遇)の職員ありて、歷代陵墓の管理・調査及び修營に關する事務を掌る。もと明治二年、神祇官中に設置せられ、同四年に廢止、十九年再び宮内省の一寮として設置せられ、頭(カミ)・權頭(ゴンノカミ)・助(スケ)・權助・守長・守部の職員これに屬せしを、後、現制に改めらる。

しよりよう-ろくじ 諸陵祿事【名】諸陵屬(ショクサクワンジョウ)の唐名。

じよーりよく 助力【名】たすけ。すくひ。じょりき。加勢。

しより-り【貌】じやりりに同じ。俳諧新選(自芽)「麥の穗のしよりと秋を含みけり」

しよるゐ 庶類【名】㊀いろいろの種類。㊁ぐんるゐ(群類)に同じ。

しよるゐ 書類【名】文字にて書記したるものの總稱。

しよーれい 書例【名】しょしき(書式)に同じ。

しよーれい 諸禮【名】㊀種種の禮式・禮儀作法。㊁昔、親王・攝家を初め、寺僧・社人・醫師等の贄(ニヘ)を獻じて、私かに行ひたる年始の禮。

しよーれい 庶隷【名】㊀庶民の官員。

じよーれう 庶僚【名】もろもろの官員。

じよーれう 敍料・叙料【名】しゃくれう(爵料)に同じ。

じよーれつ 序列【名】㊀順序を追ひて列ぶこと。㊁〔兵〕軍隊の各部隊が、作戰その他の行動のために定むる列位の順。㊂次第。順序。

じよれん 鋤簾【名】土砂を掻寄する具。竹にて箕の如く編み、その端に金具を添へ、長き柄を附けたるもの。

(んれよじ)

じよれん 如簾【名】蘆の莖にて編みたる小さき簾。食器の上に覆ふもの。

しよろ 諸漏【名】〔佛〕もろもろの煩惱。

じよろ 助老【名】じょらう(助老)の訛。狂言惡坊「案じ柱のじよろといふ物ざや」

じよろ 如露【名】庭園又は植木等に水を灌(ソソ)ぐに用ふる小具。主に鐵葉にて製し、蓮の實狀の撒水口を通して、水を撒くもの。じょうろ。

しよろ 書樓【名】㊀讀書する場所と定めたる樓。書堂。書屋。㊁じょこ(書庫)に同じ。

しよろく 書麓【名】㊀ほんばこ(本箱)㊀に同じ。㊁『晉書の劉柳傳に「右丞傅廸厲讀書、而不レ解二其義一、柳讀二老子一而已、廸每輕レ之、柳曰、卿讀書雖レ多、而無二所レ解、可レ謂二書麓一矣」、また圓機活法に「李邕語二貫古今一、然不レ能レ屬レ文、故時號曰二書麓一」とあるに本づく』ほんばこ(本箱)㊁に同じ。

しよろ-しよろ【貌】ちよろちよろ㊀に同じ。

しよろしよろ-がは しよろしよろ川【名】ちよろちよろがは(ちよろちよろ川)に同じ。賀古敎信七墓廻「絕えぬ涙のしよろしよろ川の、これぞ三途と一足に、飛田の墓にぞつき給ふ」

しよろしよろ-みづ しよろしよろ水【名】ちよろちよろみづ(ちよろちよろ水)に同じ。猿蓑「しよろしよろ水に蘭のそよぐらん」

しよろん 書論【名】㊀書籍に書きたる議論。㊁書法の論。「論。

しよろん 緒論【名】最初に書く議論。序

じよろん 序論【名】前條に同じ。

じよろーもく【名】〔植〕褐色藻類に屬する海藻。長さ七八寸乃至二三尺。扁平にして左右に分岐し、葉は深く羽狀に裂く。淺海に自生す。

しよわう 諸王【名】一多くの王。二皇子・皇孫の、親王の宣下をも得給はず、又、姓を賜りて、臣籍に入り給ふこともなきもの。正統記「唐の則天皇后は、…中宗睿宗もわが生みたまひしかども、捨てて諸王として、自のやから武氏の輩を以て、國を傳へしめんとさへしたまひき」

しよーわけ 諸譯・諸分【名】一こまごまし き必要なる箇條。二込入りたる魂膽。〔德川時代の語〕一代女「身のまはりは、仕著(しきせ)の外、それぞれに知音を持つて、その人に貰ふこと、世間晴れての諸分なり」

しよーね 暑威【名】夏の烈しき暑さ。炎威。

しよーね 所爲【名】しわざ。ふるまひ。

しよーね 初位【名】一そ(初位)を見よ。二明治二年設けられたる最下級の位。大・少の二あり。同四年廢せらる。三〔佛〕しよち(初地)に同じ。

しよーね 書幃【名】書齋の出入口に用ふる「幕。

しよーね 書幃【名】書齋のとばり。

じよーね 敍位・叙位【名】一位に敍すること。二古、正月五・六日頃、宮中にて行はれたる公事。五位以上の位を勅授せらるるもの。じよしやく(敍爵)によによ(女敍位)參照。拾遺敍位の頃、ある所に、人人まかりあひて」

じよねにふない 敍位入内・叙位入内【名】にふない(入内)に同じ。

しよーねん 書院【名】一支那にて、講書講學の場所。書齋。學校。學院。二寺院の學問所。もと支那風を傳へたるなり。三『武家にも、坐禪など行ふ者ありて、書院を設け、そこにて客に對面せしより云ふ』武家に於ける書院造の座敷。(書院床)の略。

しよーねん 署員【名】署と名づくる官署に勤務する人。

しよーねん 所員【名】所と名づくる官署に

しよねん-けぬき 書院鑢【名】昔、鑢にて髭を作る習なりし時代に、書院(二)の烟草盆に添へおきし鑢。(御伽名代紙子)書院鑢で、生えもせぬ髭ぬきながら」

しよねん-し 書院紙【名】『もと書院の障子は、この紙にて張りしよりの名なるべしといふ』こなほし(小直)(二)に同じ。

しよねん-すずり 書院硯【名】書院(二)に備へおく硯。一代男「四尺の長机に書院硯・筆掛・香箱さまざまの唐物(からもの)道具」

しよねん-だな 書院棚【名】あかりどこ(明床)に同じ。

しよねん-づくり 書院造【名】建築法の一樣式。梁間長くして、敷居・鴨居を取据ゑ、遣戸を用ひ、玄關・床の間・杉戸・雨戸・上段の間等を有する構造。寢殿造に次いで、武家以後漸次に行はれしものにて、現今の建築もその系統を引けるものなり。

しよねん-どこ 書院床【名】〔建〕あかりどこ(明床)に同じ。

しよねん-ばしら 書院柱【名】〔建〕明床(あかりどこ)の外方の柱。

しよねん-ばん 書院番【名】江戸幕府の職制の一。小姓組番と併せて、兩御番と稱す。將軍に扈從(こしよう)し、諸門の警衛、儀場の周旋を掌る。また府内を巡邏し、或は諸國巡覩に派せらるる事あり、若年寄の管下に屬し、番頭及び組頭等の職を置き、番衆を統括せしむ。

しよねんばん-がしら 書院番頭【名】江戸幕府の職制の一。書院番の長。

しよねんばん-くみがしら 書院番組頭【名】江戸幕府の職制の一。書院番頭に次ぎしもの。

しよねん-まど 書院窓・書院窗【名】〔建〕明床(あかりどこ)の窓。

しよねん-みの 書院美濃【名】『しよねんし(書院紙)を見よ』こなほし(小直)(二)に同じ。

しよーゑ 初會【名】法會(ほふゑ)の初度。「じ。

しよーゑい 諸衛【名】ろくゑふ(六衛府)に同じ。

じよゑん 助援【名】ゑんじよ(援助)に同じ。

しよをく 書屋【名】讀書のために設けたる家。書齋。書堂。

しよーをり 初折【名】〔文〕連句にて、一卷を二折以上に分つ、その初の一折。その表を初表(しよひやう)、その裏を初裏(しより)といふ。百韻にては、初表八句、初裏十四句、歌仙にては初表六句、初裏十二句となる。

しら 白【名】作り飾らぬこと。きぢ。まじめ。正氣。

しらを切る【句】知らぬ振をす。浮世床「すぐに、無臺をぶんまはして、仙行の分で、しらを切り」

しら【名】日本形漁船を濱邊に引揚ぐる時に使用する轉子(ころ)。ころ。

しら 白【接頭】一白き意。「しら玉」「しら梅」二木地のままにして、飾を加へぬ意。「しら木」

しら 知ら【句】しる(知る)の條下を見よ。

しら 盜【名】『しらなみ(白波)(二)の略轉か』ぬすびと・盜人を云ふ。(東海道中國・四國及び美作國の方言)

しらーあかげ 白赤毛・白髭【名】馬の毛色の一。薄色の栗毛の類。

しらあかげざめ 白赤毛鮫・白髭魚【名】馬の毛色の一。白鹿毛の、兩眼白きもの。

しらーあしげ 白葦毛【名】馬の毛色の一。白毛の多くまじりたる葦毛。

しらーあへ 白韲・白和【名】胡桃(くるみ)の果と白胡麻と白味噌と、又胡桃の代りに、豆腐を擂(す)りまぜたるものにて、肉又は菜をあへたる料理。(黑韲に對して)

しらあへーみそ 白韲味噌【名】白胡麻に白味噌・豆腐等を擂りまぜて製したる料理。

しらーあや 白綾【名】白色のあやぎぬ。日本振袖始「白綾の步障を中に押しいづれば」

しらあや-をどし 白綾絨【名】鎧の縅の一種。白綾を細く畳みて縅したるもの。太平記「白綾縅の鎧一領」

しらーあり 白蟻【名】〔動〕蟻の一種。體黃色をなし、木材の內部に巢を營みて、大害をなす。

しらーあわ 白泡【名】白き泡。糠袋拾遺「みよしの龍のしらあわおちたぎり吹けども風の讋もきこえず」

白泡嘴ます【句】馬の口より白き泡を出して勇むさま。

しらーあを 白青【名】うす青。あさぎ。

しらい 子來【名】『子が親を慕ひて寄りくる如くに來る義。詩經の大雅蕩蕩篇に「經始勿亟、庶民子來」とあり』喜び慕ひて來ること。「子來の民」

しらい 賜賚【名】ぬい(賚賜)に同じ。

じらい 爾來【副】その時以來。爾後。

しらいし 白石【名】〔地〕磐城國刈田郡にある町。佐井廣瀨二川の交會點。鐵道東北本線の一驛。伊達氏の家老片倉氏の舊領地。

しらいし-やき 白石燒【名】肥前國三養基(みやき)郡より製出する磁器。支那萬曆赤繪に摸倣せしもの。

しらいと 白絲【名】染めぬ、白きままの絲。二きいと(生絲)に同じ。〔江戸時代の語〕三しらいともち(白絲餅)の略。四そうめん(索麵)を云ふ。〔女の語〕五しらたき(白瀧)(二)に同じ。

しらいと-さう 白絲草・鴉葱【名】〔植〕百合(ゆり)科に屬する多年生の草。高一尺位に達する長卵形の葉にて、地下の莖より叢生す。その中央より花莖を出し、上部に白色花を生ず。山地に自生す。

しらいと-ざき 白絲岬【名】〔地〕北海道後志國島牧郡に在る岬。

しらいと-ねぎ 白絲葱【名】葱の白根を輕く煤でて、細く割きたる料理。

しらいと-の 白絲の【枕】絲は縒(よ)りて作るものなるより、よりにかけていふ。後撰「ふしなくて君がたえにしらし絲のよりつきがたきものにぞありける」

しらいと-の-たき 白絲瀑【名】〔地〕富士山西麓の瀧。駿河國富士郡白糸村大字原にあり、高さ八十七尺、幅四百尺の懸崖より落下す。

しらいと-の-はま 白絲濱【名】〔地〕あまのはしだて(天橋立)の別稱。

しらいと-もち 白絲餅【名】掛絲(かけいと)の如く捩りたるしんこの餅。しらいと。しらいともどき。

しらいと-もどき 白絲擬【名】前條に同じ。

しらいと-わっぷ 白絲割符【名】江戸時代に、輸入の生絲を專賣する許可證。

しらいとわっぷ-にん 白絲割賦人【名】江戸時代に、輸入の唐絲を專賣する許可を得たる商人。

しらいとをどし 白絲縅【名】鎧の縅の一種。白き絲を用ひたるもの。狂言(ひめのり)「白絲縅の腹卷に、白柄の長刀かいこうで」

しらいは 白岩【名】〔地〕羽前國西村山郡にある町。寒河江(さがえ)川に沿ひ、庄内地方に通ずる六十里越の要路に當る。

じらいや-がうけつものがたり 自來也豪傑譚【名】〔書〕草雙紙の一。支那小說の我來也より出でし、感和亭鬼武の「自來也說話」を飜案せしもの。初篇より十一篇迄は美圖垣笑顏の作にて、十二篇より四十二篇までは柳水亭種清續筆せしが、完結に至らず。三すくみと云ふ蟲拳(むしけん)により、自來也は蝦蟇、勇婦綱手は恬蝙(ナメジ)の妖術を使ひ、大蛇の術を用ひて、殘虐を逞くする山賊大蛇丸を退治すといふ趣向なり。

しらう 死糧【名】しにがて(死粮)を見よ。

しらう 私勞【名】公(おほやけ)ならぬ骨折。私のはたらき。

しらう 四郎【名】しなん(四男)に同じ。

しらう 司郎【名】せうべん(少辯)の唐名。

じらう 次郎・二郎【名】〓じなん(次男)に同じ。〓男女に拘らず、二番目の子。〓多くある物の中の第二位。

じらう-くわじや 次郎冠者【名】たらうくわじや(太郎冠者)を見よ。狂言三本柱「なんじを呼び出す事、別の事でない。少し言附くる事がある。次郎くわじや、三郎くわじやも呼べ」

しらうし 紙老鴟【名】たこ(紙鳶)の異稱。和名抄「辨色立成云、紙老鴟、此間云、凧老之、以レ紙爲二鴟形一、乘レ風能飛、一云紙鳶」

しらうちてのかさ 白打出笠【名】しろうちてのかさ(白打出笠)を見よ。「の唐名。

しらう-ちゆう 司郎中【名】ちゆうべん(中辯)

しらうと 素人【名】『しらびと(素人)の音便』しろうと(素人)に同じ。

じらうぼう 次郎坊【名】天狗の一。謠曲(花月)「さて、京近き山山、愛宕(あたご)の山の太郎坊、平野の峰の次郎坊」

しらうめ 白梅【名】〓〔植〕梅の一種。白き花を開くもの。はくばい。(紅梅に對して)〓ひとへうめ(一重梅)〓に同じ。

しらうめ-かん 白梅羹【名】寄物(よせもの)の一。隱元豆をよく煮て裏濾(うらごし)にかけ、寒天に淡紅を加へて固めたるもの。

しらうり 白瓜【名】〔植〕しろうり(白瓜)に同じ。〔古語〕小大君集「ありどころこまかにいづらしらうりのつらを尋ねてわれならさなん」

しらうを 白魚・銀魚・鱠殘魚【名】〔動〕硬骨類に屬する魚。長さ二三寸。嘴尖りて、身は圓く細長く、殆と鱗なく、透明なり。二三月の候河川に溯り、淡鹹水の河底の砂礫或は藻に產卵す。一尾にて二千顆を產出す、稚魚は海に下り、一箇年にて、一寸餘に達す。しらを。

しらうを-めし 白魚飯【名】白魚に少し鹽を振りおき、飯の火を引く頃炊きまぜたる飯。清汁(すまし)に青海苔、葵(ふたば)の香料を添へて食す。

しらえ 白柄【名】槍・長刀などの柄の、白木のままなるもの。繪本太閤記「しらえの長刀かいこんで」

しらおい 白老【名】〔地〕〓贍振國八郡の一。室蘭支廳の管轄。〓贍振國白老郡の村。室蘭の東北約十一里。岩見澤・室蘭間の鐵道の一驛。

しらが 【名】『しらかみ(白髮)の略とも、しらかみ(白紙)の略ともいふ』ゆふ(木綿)の異稱。(古語)萬葉「白香(しらか)著け我が裳の裾にいはひて待たむ」

しらが 白髮【名】『しらがみ(白髮)の略』〓年老いて、白くなりたる頭髮。しろかみ。鶴髮。後撰「年ごとにしらがの數をますかがみ見るにぞ雪の友を知りける」〓しらがかつら(白髮鬘)の略。〓昔、小供の髮置の祝に、その小供の長壽を祝すとて、頭に戴かしめし帽子。絓絲(イトガシ)つみ綿・麻苧などにて、白髮の垂れたるさまに作りたるもの。祝の前日、髮置の親よりこれを廣蓋(ひろぶた)に据ゑ、紙に包める小松・山橘を添へて進むる習なりき。しらがわた。〓婚禮の贈物に用ふる麻。〔志良賀〕

しらが-あたま 白髮頭【名】白髮の生えたるあたま。しらがつぶり。「同じ。

しらが-いと 白髮絲【名】すがいと(絓絲)に同じ。

しらが-おやじ 白髮親父【名】白髮頭のおやぢ。老いて白髮の生ひたる親父。今國姓爺」あとな白髮親父の切られて惜しげもない年配」

しらが-かづら 白髮鬘【名】芝居の鬘の一。白髮なるもの。しらが。

しらが-き 白柿【名】〓熟しても、赤く色づかぬ柿の實。〓しろがき(白柿)に同じ。

しらがくび 白髮首【名】白髮の生ひてある首。老人の首。

しらが-げ 白鹿毛・驃【名】馬の毛色の一。全體、帶黃淡褐色にして、四肢の帶黃白色なるもの。和名驃、漢語抄云、驃馬、白鹿毛也」

しらが-ごけ 白髮苔【名】〔植〕しらごけ(白苔)に同じ。

しらが-こぶ 白髮昆布【名】極めて細く刻みて、恰も白髮の如くしたる昆布。

しらが-さね 白襲【名】襲の色目の一。表も裏も白きもの。上も下も白きかさね。古、四月と十月との更衣(ころもがへ)の時、及び冬より春にかけて著用したり。枕「すさまじきもの、八月のしらがさね」

しらがさんばつ 白髮散髮【名】芝居の鬘の一。散髮にして、白髮なるもの。

しらが-し 白檀【名】〔植〕〓くろがし(黑樫)の異稱。〓ほそばがし(粉櫨)の異稱。

しらが-すす 白糟・酵【名】白きかす。白酒の類にて、饅頭の皮を作るなどに用ふ。〔古語〕和名酵、和名、之良加須、白酒甘也、今俗作二饅頭一所レ用、今人所レ飲甘酒當レ是」

しらかす 白かす【動四他】しらけさす。興をさます。氣をそこなふ。十訓「人をしらかし、その座をさますなり」

じらかす 【動四他】じらすに同じ。

しらが-ぞめ 白髮染【名】毛髮を褐色又は黑色に染むる藥劑。

しらが-たらう 白髮太郎・楓蛾・樟蠶蛾【名】〔動〕鱗翅(りんし)類に屬する昆蟲。蛾の一種。體長一寸前後、翅大きく、前翅には灰色の半月形の紋一箇、及び雲紋一條、後翅には蛇目形の斑、及びこれを夾める三條の波線とを有す。幼蟲は淡綠色にして、一面に白き長毛生じ、透俵(すかしだはら)と呼び、黃色籠形の繭を作る。蛾は樟・胡桃(くるみ)・栗等の害蟲なれども、天蠶(てんさん)の材料となる。てぐすてふ。てぐすむし。

しらが-づく 白髮附く【枕】木綿は、白髮に似たるより、ゆふ(木綿)にかけていふ。一說に、しらかみ(白紙)にて、白紙を添へ附くる木綿の意にて、枕詞にあらずと。萬葉「しらがづくゆふは花かもことこそはいつのまさかもつね忘られぬ」

しらが-つぶり 白髮頭【名】しらがあたま(白髮頭)に同じ。井筒業平河内通「あの祖母樣の白髮つぶり」

しらが-なもの 白金物【名】銀の金具。謠曲(鉢木)「しらがなもの打つたる絲毛の具足」

しらかね-し 白銀師・銀師【名】しろがねし(白銀師)に同じ。

しらが-の-すめらみこと 白髮天皇【名】〔人〕せいねいてんわう(淸寧天皇)に同じ。

しらかは 白河【名】〓〔地〕古の陸奥國の舊都の一。ほぼ今の磐城國の東白河・西白河・石川の三郡に亙りし地。〓〔地〕磐城國白河郡にある町。阿部氏の舊藩地。古來、關東より奥州に入る一門戸として重要視せられ、その東南の古關(せき)村は白河關の遺址として知らる。〓しらかはゆふき(白河結城)を見よ。〓〔地〕京都の鴨川以東、東山との間の地域の古稱。六波羅などもその範圍に屬せしものの如く、また南白河・北白河の名も見えたれども、後世、北白河のみ白河の名を專にし、白河殿・六勝寺等の所在地として名高く、京白河と連稱せらる。今はその濠域の一部に、白川村の名殘れり。方丈記「川原、白河・西ノ京、もろもろの邊地」平治「兵ども、京白河に充滿ち

たり」

しらーかは 白川【名】〔地〕Ⅰ肥後國にある川。水源は阿蘇山、西流して熊本市の東南を過ぎ、島原灣に入る。長さ約十五里。Ⅱ筑前國にある川。水源は筑紫郡二日市村にして、御笠川に合す。後撰「年ふれば我が黒髪も白川のみづはぐむまで老いにけるかな」（一説には、この歌のは肥後國白川なりと）Ⅲ山城國愛宕(オタギ)郡にある嶽川。水源は比叡山の南白河越にして、如意の水を、合はせ、白川村に至りて南折し南禪寺の西より右折して、加茂川に入る。白川石の産出地にして、河底もこの石より成り、水色白きがごとく見ゆるより、この名あり。**しらかはよふね**(白河夜船)参照。古今「しらかはの知らずともいはじ底清み流れて世にたえんと思へば」

しらかはいし(白川石)の略。Ⅰ〔地〕飛騨國大野郡の西北部に在る、加賀及び越中に境する一帯の村落の總稱。往時より、大家族制行はれしを以て名あり。Ⅱ姓氏の一。本性源氏(華山)。代代神祇伯たりし家、また伯家といふ。その始祖延信王は華山天皇の皇子清仁親王の子。萬壽二年源朝臣の姓を賜はり、臣籍に列せしが、神祇伯に任ぜらるるに及んで、王の號を稱し、皇族待遇となる。明治維新後、子爵を授けらる。

しらーかば 白樺【名】〔植〕**しらかんば**(白樺)に同じ。

しらかは-あみだだう-ごしよ 白河阿彌陀堂御所【名】**しらかはのいづみどの**(白河泉殿)に同じ。

しらかは-いし 白川石【名】山城國愛宕(オタギ)郡白川村の山中より産出する花崗岩。色白く、質堅くして、橋又は敷石などに用ふ。しらかは。雍州府志「白川山、凡斯山之、地中悉白石也、世所謂白川石是也、村中石工以二斧鑿一斫レ之」

しらかは-おしのこうぢ-どの 白河押小路殿【名】美福門院の住み給ひし處。山城國愛宕(オタギ)郡に在りて、もと鳥羽法皇のおはせし處なり。

しらかは-おほひみかど-どの 白河大炊御門殿【名】次條に同じ。

しらかは-きたどの 白河北殿【名】保元元年崇徳天皇の、源爲義以下の武臣を集めて事を擧げさせられし處。その址は、京都市下京區東丸太町熊野神社の邊なるべしといふ。別稱、白河大炊御門殿、千體阿彌陀堂の御所、棧敷殿。

しらかは-ぐち 白河口【名】〔地〕磐城國白河郡白河町より奥州への入口。

しらかは-ごえ 白河越【名】〔地〕**しがやま**(志賀山)を見よ。

しらかは-こじやう 白河古城【名】磐城國西白河郡大沼村字搦山(カラメ)にありて、白河結城氏の根據たりし城。正應二年結城祐廣の築く所。その子宗廣は、吉野朝の忠臣なりしが、興國中、孫親朝は、賊に降りて、鎮守府の兵を沮む。足利氏の末、白河結城氏、嗣絶え、支族小峰義親、小峰城(今の白河城)に居ながら、本宗を承けて、白河氏を稱す。別稱、からめ城。**しらかはゆふき**(白河結城)参照。

しらかは-さいこ 白河柴胡【名】〔植〕**ほたるさう**(螢草)に同じ。

しらかは-じやう 白河城【名】磐城國西白河町の北方にありて、白河古城の結城氏の支族小峰氏の據りし城。結城氏、嗣絶ゆるに及び、その支族小峰義親、この城にありながら、本宗を承けて白河氏を稱せしが、天正十八年、豊臣秀吉の東征に會して、封を奪はれ、關一政代り封ぜられ、徳川氏に至り、丹波・松平諸氏の易封あり。文政以後は、阿部氏世領す。別稱、小峰城。

しらかは-せんぬん 白河仙院【名】**しらかはどの**(白河殿)Ⅱを見よ。

しらかは-てん 白河殿【名】**しらかはどの**(白河殿)Ⅱに同じ。

しらかは-てんわう 白河天皇【名】〔人〕第七十二代の天皇。御名は貞仁(サダヒト)。後三條天皇第一の皇子。御母は贈皇太后藤原茂子。在位十四年(紀元一七三三年—一七四二年)。大治四年崩ず。壽七十七。

しらかは-どの 白河殿【名】Ⅰ藤原長房以後の別業たりし處。歴朝の皇太后多くここにおはせしより、白河仙院ともいへり。白河天皇これを離宮となし(白河離宮、また白河院)後、法勝寺とす。爾後、數朝の間に、尊勝・最勝・圓勝・成勝・延勝の諸寺、相ついで並び立ちて、壯觀を極め、併せて六勝寺と稱す。法勝寺は、應仁以後、廢滅し、他寺は、承久に燒亡す。白川御所。白河院。Ⅱ〔人〕**ふぢはらよしふさ**(藤原長房)に同じ。Ⅲ**しらかはのいづみどの**(白河泉殿)【名】白河法皇の御所。山城國愛宕(オタギ)郡聖護院村にありしもの。白河阿彌陀堂御所。

しらかは-の-ごしよ 白川御所【名】**しらかはどの**(白川殿)Ⅱに同じ。著聞「法勝寺の西門より御車を挽入れて、花のもとに立てられけり。その後、白川の御所へ入御ありて、和歌を講ぜられける」

しらかは-の-せき 白河關【名】〔地〕古、岩代國白河郡古關(コセキ)村大字旗宿(ハタジク)の邊に置かれし關。設置年代は承和二年の官符にその年を距ること四百餘年と見えたり。**しらかは**(白河)Ⅱ参照。拾遺「たよりあらばいかで都につげやらん今日白河の關は越えぬと」

しらかは-の-みささぎ 白川陵【名】**かさまやまのみささぎ**(笠間山陵)に同じ。

しらかば-の-みささぎ 白河陵【名】文徳天皇の皇后藤原明子の陵。山城國愛宕(オタギ)郡上粟田に在り。

しらかは-の-ゐん 白河院【名】**しらかはどの**(白河殿)Ⅱに同じ。康平記「康平三年三月廿五日甲午、行二幸白河院一、爲朝觀二仙院一便覽二林池勝槩一也」

しらかは-ばうふう 白河防風【名】〔植〕**やまにんじん**(山人參)に同じ。

しらかは-ゆふき 白河結城【名】姓氏の一。下總國の結城氏の支族。本家と區別するために、地名を冠らせて呼びしもの。**しらかはごじやう**(白河古城)**-しらかはじやう**(白河城)参照。

しらかは-ゆふきもんじよ 白河結城文書【名】白河結城氏に關する古文書。林家の藏本。水戸光圀の大日本史修撰の際、家臣を遣りて寫さしめしもの十餘通(林家のと合せて約百通)、白河侯の文學廣瀬典・仙臺の白河氏所傳のもの二百餘通、秋田白河氏所傳のもの五十餘通、合はせて二百六十餘通の總稱。

しらかは-よふね 白河夜船【名】『京都の有樣を知りたるふりせし者の、白河はと問はれて、夜船にて通りしゆゑ知らずと答へきといふ故事(毛吹草に見ゆ)によりていふとぞ。問者の白河は**しらかは**(白河)Ⅳの意なるを、川の名と思ひ誤りて答へしなり』熟睡して、何も知らずに過すこと。小町踊(後撰)「雪の夜の月は白川夜船かな」犬子集(重頼)「白河を通ふ夜船や空の月」

しらかはらくをう 白河樂翁【名】〔人〕**まつだひらさだのぶ**(松平定信)に同じ。

しらーかはらげ 白河原毛・白駱【名】馬の毛色の一。河原毛の白きもの。太平記「白葦毛・白瓦毛」

しらかはりきゆう 白河離宮【名】**しらかはどの**(白河殿)Ⅱを見よ。

しらーかひ 白貝【名】〔動〕蛤(ハマグリ)の一種。昔、大嘗(ダイジヤウ)の時などに用ひしもの。

しらがひげ 白髭髭【名】白き口ひげ。しらひげ。平家女護島「齋藤別當實盛、白髪髭くひそらし」

しらが-ひろくにおしわか-やまとねこの-すめらみこと 白髪廣國押稚日本根子天皇【名】〔人〕**せいねいてんわう**(清寧天皇)に同じ。

しらがふ【接尾】目立つ。知らるるやうにす。「古語」枕「常に見えしらがひてありく」宇治「這ひしらがひて」

しらーかべ 白壁【名】漆喰(シツクヒ)はて白く塗りたる壁。粉壁。立派なる褥の家の形容にいふこと多し。「江戸中白壁」参照。俳諧古選「越人」「見返れば白壁いやしタがすみ」

しらかべーづくり 白壁造【名】白壁に塗りたる建築、又その家。前條参照。浮世風呂「世界中が白壁造だ」

しらかべーてんわう 白壁天皇【名】〔人〕**くわうにんてんわう**(光仁天皇)に同じ。

しらがーまじり 白髪交【名】黒き髪に白髪のまじりて生ふること。斑白。俳諧新選「里梟「夕月の白髪まじりや絲すすき」

しらがーまつ 白髪松【名】〔植〕赤松の一變種。葉の半面粉白色なるもの。

しらしらかみ 白髪【名】しらが(白髪)㊀に同じ。〔古語〕萬葉「黒髪のしらかみまでと結びてし心一つを解かめやも」

しらしらかみ 白紙【名】㊀白き紙。㊁未だ物を書かぬ紙。しらつかみ。

しらしらかみ 白紙から【句】「鰯の頭も信心から」に同じ。〔諺語〕

しらしらかみざき 白神岬【名】〔地〕渡島國松前郡福山港の東に在る岬。津輕海峡の西口(一に松前海峡)を隔てて、陸奥龍飛(タッピ)崎に對す。

しらしらかみてがた 白紙手形【名】後日、適宜に金額を増加せんがため、金額金主等を記入せずして、借用者の捺印のみを求むる手段に出でたる借用證書。江戸時代に、嚴禁せられしに拘らず、私かに行はれたり。

しらしらかみのいそ 白神磯【名】〔地〕しらさき(白崎)に同じ。萬葉「由良の崎しほひにけらし白神の磯のうらみをあへて潸ぎとよむ」

しらしらかみやき 白上燒【名】石見國美濃郡白上より産出する磁器。長門國阿武郡小畑村野田庄太・同元藏の兩人この村に來り、硅石を發見し、雲石二州に磁器なきを以て、萬延三年新に創始せるもの。青花磁器にして、釉料はこの國小畑より採取す。

しらしらかんば 白樺・樺木【名】〔植〕樺木科に屬する落葉喬木。高さ六七十尺に達す。樹皮は白色にて脆落し易し。葉は卵形にて尖り、長き葉柄互生す。花は單性雌雄花共に同穗に生じ、穗狀花序をなす。木材は器具に、樹皮は燃料に供す。かには。かにはざくら。かば。かばのき。かんば。かんばざくら。しらかば。しろざくら。

しらしらかんばくわ 樺木科【名】〔植〕顯花植物雙子葉離瓣花區の一科。喬木また灌木。北半球に分布し、有用のもの多し。白樺赤楊(ハンノキ)・榛(ハシバミ)・いぬあさご・あさご等、これに屬す。かばのきくわくわぼくこわ。

しらしらかゆ 白粥【名】他の物を交ぜぬ白米のみの粥。(茶粥・餅粥などに對して)仲文集「しら雪のふれるあしたのしらかゆはいとよくにたるものにぞありける」傳家奇人談「中椀に白粥滿てり十三夜」

しらしらがわた 白髪綿【名】しらが(白髪)㊁に同じ。

しらしらき 白木【名】㊀あら皮を去り、白く削りたるままにて、塗飾らぬ材木。著聞「白木の御椅子」㊁大戟(ダイゲキ)科に屬する落葉小喬木。山地に自生す。雌雄同株にて、葉は殆ど全緣にして、鋭尖頭を有する廣楕圓形もしくは廣卵形をなし、その色淡綠にして、托葉を有す。材は白色にして、輕く軟く、概ね燐寸の軸木に用ひられ、また種子よりは油を採りて、鐵器に塗るに用ひ、實は形圓くして、中に仁滿ち、煮(ニ)りて食すべし。その他用途廣し。こくどのくわし。

しらしらきのゆみ 白木の弓【句】漆を塗らず白木のままにて造り、藤にて三箇處を捲ける弓。射的用のには白弦を張る。又この弓の古びて赤ばめるを、色木とも呼ぶ。太平記「白木の弓の、ほこ短かには見えけれども」去來「秋風や白木の弓に弦張らん」

しらしらぎ 新羅【名】〔地〕辰韓の一部。今の慶尚北道なる慶州より起りて、百濟(クダラ)・高句麗(コウクリ)を滅し、日本の勢力を半島より驅逐し、遂に朝鮮を一統して、隋唐に恭事せしが、後、高麗起るに及びて、亡びたり。うせん(朝鮮)參照。「りし樂。

しらしらぎがく 新羅樂【名】新羅國より傳はりし雅樂。

しらしらぎがくし 新羅樂師【名】古の雅樂寮の職員。學生に新羅樂を敎授せしもの。

しらしらきがふし 白木合子【名】漆を塗らざる、白木のままなる合子。

しらしらぎく 白菊【名】㊀白き花の開く菊。古今「心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせるしらぎくの花」㊁きく(菊)㊁に同じ。㊂名香の一。五人女「こぶくめの袖をかざしるに「白菊などいへる留木(キトメ)のうつり香、どうもならぬに打惱み」一代女「慣るれば、人燒く匂も、白菊といへる伽羅にかはらず」

しらしらぎくすひもの 白菊吸物【名】豆腐を一寸四方に切り、後、十文字に細かに切りかけ、椀に入れて、清汁(スマシ)を注ぎ入るれば、開きて菊の花の如き形をなすよりいふ。

しらしらきごし 白木輿【名】㊀白木にて造りたる輿。昔、親王・攝家・清華・大臣の用ひしもの。しろごし。㊁葬送に用ひし白木造の輿。しろごし。

しらしらぎごと 新羅琴【名】『新羅國より渡來せしよりいふかといふ』箏に似て、すこし小さき樂器。十二絃を張り、これに甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸及び天・地の名目を附す。

しらしらぎし 白雉・白鵄【名】〔動〕鶉鷄類に屬する一種の鳥。雉屬に似たり。南支那に產す。その形金鷄鳥に類し、稍大なり。顏部は不毛にて朱面を呈し、頭上に黑紫色の冠毛あり。尾は頗る長。羽毛美なるため、往往飼育せらる。

しらしらきちやうめん 白几帳面【名・副】『きちやうめん(几帳面)㊁を强めていふ語』まじめなること。膝栗毛「しらきちやうめんの旅人だ」

しらしらきづくり 白木造【名】白木のまま、漆など塗らずに造ること、又その物。

しらしらきぬ 白絹【名】色を染めざる白色の絹。伊勢「石のおもてにしらきぬに岩を裹めらんやうになんありける」

しらしらきぶね 新羅船【名】新羅の國の船。

しらしらきよぼろ 新羅仕丁【名】新羅國より貢せし仕丁なるべし。〔古語〕紀「新羅仕丁八人」

しらしらぎり 白桐【名】〔植〕きり(桐)に同じ。

しらしらぎる 白ぎる【動四自】白みてあり。一說に、白く黃ばみてあり。〔古語〕源氏「紫のしらぎり見ゆるあられぢの御小うちぎと、よき御ころもばこに入れて」

しらしらきをの 新羅斧【名】新羅の國にて作れる斧、またその斧の形にならひて作れる斧。〔古語〕萬葉「はしだての熊來(クマク)のやらにしらきをのおとし入れ」

しらしらく 絲絡【名】いとまき(絲卷)㊀に同じ。

しらしらく 刺腊【名】〔醫〕漢方にて、手足の動脈を刺して、惡血を取ること。

しらしらく 白く【動下二自】㊀白くなる。萬葉「黑かりし髮もしらけぬ」㊁眞色になる。しらむ。十訓「言うるはしく云はれけり。實方はしらけて逃げにけり」㊂興冷(サ)む。冥途飛脚「酒もしらけてさめにけり」

しらしらぐ 白ぐ・精ぐ【動下二他】㊀白くなす。磨きて麗しくす。盛衰「よねしらげたり」㊁むちうつ。

しらしらくきな 白莖菜・春菜【名】〔植〕白菜の一變種。葉の細長きもの。しろくきな。

しらしらくし 白櫛【名】木地のままにて、塗らざる櫛。保元「白櫛をぞ差したりける」

しらしらくじ 白闥【名】からくじ(空閨)に同じ。

しらしらくち 白口【名】かうぞうな(楮綱)に同じ。

しらしらくち 獼猴桃【名】〔植〕しらくちづる(獼猴桃)の略。

しらしらぐち 【名】〔動〕『くち(鋭)㊀を見よ』鰹(ソ)の稚く小きもの。おきあぢ。

しらしらくちづる 獼猴桃【名】〔植〕獼猴桃科に屬する落葉灌木。山地に自生し、蔓莖を生じて、他物に纏ふ。葉は隋圓形又は心臟形にして、鋭尖頭と鋭鋸齒とを有し、初夏白色の花を開く。果實は漿果にして、甘味を有し、樹皮は繩となり、材は器具用に供せらる。いぬなし。しらくち。しらくちももこくは。ごかご。さるなし。やぶなし。

しらしらくちづるくわ 獼猴桃科【名】〔植〕顯花植物雙子葉類・離瓣花區の一科。喬木・灌木又は草本にて、往往他物に纏ふ。獼猴桃・木天蓼(マタタビ)・枇杷葉木(ヒハバ)等、これに屬す。さるなしくわ。一名、木天蓼(マタタビ)科。

しらしらくちもも 獼猴桃【名】〔植〕しらくちづる(獼猴桃)に同じ。

しらしらくび 白首【名】しろくび(白首)に同じ。

しらしらくぼ 白くぼ【名】次條㊁に同じ。

しらしらくも 白雲【名】㊀白く見ゆる雲。はくうん。㊁皮膚病の一種。原因は一種の黴菌にして、多くは小供の頭部に生ず。皮膚、紅色となり、痒くして、不快の臭氣を放ち、毛髮脫落し、傳染しやすし。白癬。白禿瘡。

しらしらくものやど 白雲の宿【句】白雲のかかれる山中の宿。

しらしらくもあたま 白雲頭・白癬【名】白雲

㊁の生じたる頭。浮世床「白雲天窓の郷在者のへちむくり野郎」

しらくも-ぐさ 白雲草【名】〔植〕まつ(松)の異稱。「女の語」

しらくも-の 白雲の【枕】■白雲は風に吹かれて、切れ切れに絶えやすきものなるより、たえ(絶え)にかけていふ。古今「風吹けば峯にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」■白雲は峯などより立ちのぼるものなるより、たつ(立つ)にかけていふ。古今「をしむかな戀ひしきものを白雲のたちなん後は何ごころせん」■白雲はおぼつかなきものなるより、おぼにかけていふ。後撰「たえぬると見ればあひぬる白雲のいとおぼよそに思はずもがな」

しらくも-やま 白雲山【名】〔地〕■山城國愛宕(アタゴ)山の頂上の別稱。■常陸國筑波郡にありといふ山。飛鳥集「しらくものやまべはるかにきこゆるをなどか月だかくいでたちをする」

しらくら 白暗【名】ごまかし。瞹昧 潮來嬉誌「勿體(モイ)ねえ。神まゐりに來て、そんなしらくらが、なるものか」

しらくりげ 白栗毛・黃騮【名】馬の毛色の一。栗毛の色薄くして黃ばみたるもの。著聞「白栗毛なる馬」

しらげ 白精【名】■しらぐること。磨きて、麗しくなすこと。■すぐれたること。

しらげ 白毛【名】『白き毛あるによりていふ』駁皮の下部。

しらげ-うた 後擧歌【名】『しりあげ歌の約といふ』太古の樂曲の名目。末の方を、高き節にてうたひしものならんといふ。〔古語〕記「こは志良宜歌(シラゲ)なり」

しらげ-かんな 精鉋【名】仕上に用ふる、刃の薄き鉋。

しらげ-がや 白毛茅【名】〔植〕禾本科に屬する多年生の草。舶來の牧草。莖の高さ二尺、柔毛密生して、淡綠色を呈す。葉は細長く、花は小穗狀をなし、夏季、淡綠色を呈す。

しらげ-しろ 精代【名】玄米を搗きて白くする手間代。〔古語〕江次第抄「二合精代」

しらげ-つはもの 精兵【名】せいへい(精兵)に同じ。〔古語〕

しらげ-よね 精米【名】せいまい(精米)に同じ。和名「粺米、之良介與禰、精米也」

しらこ 白子【名】〔地〕『四樂(シラク)ともいひ、もとしらぎ(新羅)の轉訛にて、天平寶字中、その歸化人を置きしに本づく』武藏國北足立(アダチ)郡にある町。板橋町へ二里。

しらこ 白子【名】■頭髮・眉毛など、生れながらに白く、全身白色又は白茶色なる人。しろっこ。■魚の精液の、體内にありて、乳白色の塊狀をなせるもの。放出期には、流動體となりて射出せらる。

しらこ-どかし 【名】おためごかし(御爲ごかし)に同じ。〔元祿時代の語〕心中二枚繪草子「涙ぢていだせし鼻紙の、しらごかしこそ笑止なれ」

しらこ-どけ 白苔・白龍鬚【名】〔植〕地衣類なる松蘿(ショウラ)の一種。深山老樹の枝上に叢生す。色白くして、絲の如し。長さ二三寸、軟かにして切れやすし。しらがごけ。「りなどせざる輿。ほや。

しらこし 白輿【名】木地のままにして、塗らざる輿。

しらこしや 白輿屋【名】棺を賣る家。

しらこしらへ 白拵【名】矢の造方の、白篦(シラノ)に白羽を附けたるもの。會我「鶴のもと白にて矧いだる、しらこしらへの白矢、はず高に負ひなし」

しらこそで 白小袖【名】しろこそで(白小袖)に同じ。

しらこばと 白子鳩【名】〔動〕雉鳩の一種。頭頸及び下面は一體に灰白色にして少し赤味を帶び、脊は尾に至るまで灰褐色に近し。後頭に黑の半輪環あり、故に數珠掛鳩ともいふ。主に夏季に多く、冬季は南國に去るといふ。

しらごゑ 白聲【名】普通ならぬ聲。かなきり聲。若風音「風吹けば沖つ白聲にして諷ひ出して」

しらざうぞく 白裝束【名】しろしやうぞく(白裝束)に同じ。〔古語〕桑茶「をかしきしらさうぞくどもの、さまざまなるは」

しらさき 白崎【名】〔地〕紀伊國日高郡にある岬。由良灣の西北端に突出す。石灰石より成り、白色を呈す。由りてこの名あり。しらかみのいそ。

しらさぎ 白鷺【名】■〔動〕羽色の白き鷺類の總稱。萬葉「池上の力士舞かも白鷺のほこ喰ひもちて飛びわたるらむ」■かぶろ(禿)の異稱。〔江戸吉原の語〕■〔動〕わかさぎ(若鷺)を云ふ。〔出雲國の方言〕

しらさぎも 白雲【名】しらくも(白雲)■に同じ。〔古語〕夫木「天の原よこぎりわたるしらさぎ雲月にもまがふ早くけれかし」

しらさは 白澤【名】〔地〕羽後國北秋田郡矢立村の大字。鐵道奥羽線の一驛。大館へ二里餘。山間の僻地なれども、小坂(コサカ)鑛山の貨物の集積地として有名なり。

しらさはぎく 白澤菊【名】〔植〕さはしろぎく(澤白菊)に同じ。

しらさめ 白佐目【名】さめ馬の白きもの。太平記「白葦毛・白河原毛・白佐目、掲毛(ゲヲ)なる馬」

しらさや 白鞘・素鞘【名】白木のままなる鞘。

しらさや-まき 白鞘卷【名】金具などを銀にて包みたる鞘卷の刀。

しらし 【名】がふひやく(合白)に同じ。〔大阪堂島の德川時代の語〕

しらしげどう 白重籐【名】重籐の弓の一種。籐を卷きたる部分、卽ち黑漆を塗らぬ部分の最も多きもの。

しらしぼり 白搾【名】次條の略。(黑搾に對して)俗曲「遊行淨瑠璃」「お染とて、年は二八の細眉に、內の子飼の久松と、忍び忍びの寢油を、親達や夢にもしら搾」

白搾の油【句】白胡麻より製したる胡麻油。しらしぼり。しろしぼり。(「黑搾の油」に對して)

しらしめ 知らしめ【名】知らするための事柄。しるしとして現るる兆。心中及は氷の朔日「私が佛にうけられず、願のかなはぬしらしめ」

しらしめす 知食す【動四他】『四段活用のしらす(知らす)に敬語の接尾語めすの添へるもの』しろしめす(知食す)に同じ。〔古語〕萬葉「あしはらの水穗の國をあまくだりしらしめしけるすめろぎの」

しらしめぢ 白占地【名】〔植〕しめぢ(占地)に同じ。

しらしら 白白【貌】あかるきさま。夜の明けゆくさま。公任集「しらしらとしらけたる夜の月影に雪掻分けて梅の花折る」著聞「夜もあけて、しらしらとなりにければ」

しらしら 白白【貌】■興さめたるさま。■何げなきさま。そしらぬさま。

しらしら-あけ 白白明【名】しらしらと夜の明くる頃。拂曉。

しらしらし 白白し【形二】■いかにも白し。明かなり。重之集「よそにふるものとこそ見め白雪のしらしらしくもおもほゆるかな」■あらはなり。興なし。しらけてあり。枕「いみじくびびしくをかしき君達も、ずるじんなきは、いとしらしらし」■知りながら、知らぬさまを裝ひてあり。

しらす 白洲【名】■白き砂の洲。〔白砂〕萬代「ありあけの月かげ高みなにはがた沖のしらすに千鳥鳴くなり」■神社の廣前又は玄關の前などの、白砂を敷きてある處。(神社のには敬語のおを添へていふ)芭蕉「貞享五年きさらぎの末、伊勢に詣づ。われ、御しらすの土を踏むこと、既に五たびに及びぺりぬ」■訴訟を裁斷し、又は罪人を糺問する場所。御しらす。御庭。

しらす 白子【名】■〔動〕いさざ(鮫)に同じ。

しらす 白須・白洲【名】〔地〕甲斐國北巨摩(コマ)郡管原村字臺ケ原驛の北に在る地。白砂・青松連なりて、恰も海濱の如し。

しらす 知らす【動四他】知りたまふ。治めたまふ。領したまふ。しろす。〔古語〕續紀「神祖高岐・神祖美命のあがみまの知らさむを寸國あめの下と」

しらす 知らす【動下二他】■『すは敬語の助動詞』前條に同じ。〔古語〕桑茶「一條殿をば、今は女院こそは知らせたまへ」■『しる(知る)の使役形』他の知るやうにす。通知す。報告す。桑茶「立ちかされ見すべき樣も知らせねば鐘の音にて來つとしらなん」「やうになす。ごらかす。

じらす 【動四他】氣をいらだたしむ。じらる

しらすか 白須賀【名】〔地〕遠江國濱名郡にある町。海に臨む。鷲津町の西南一里。舊東海道五十三驛の一。潮見坂の勝あり。

しらずがほ 不知顔【名】與り知らぬさまを裝ふ容子。しらぬかほ。知顔に對して）後撰「うらむれど戀ふれど君が世とともに知らず顔にてつれなかるらん」

しらすぎ 白杉戸【名】木地のままにて塗らざる杉戸。

しらすげ 白菅【名】〔植〕莎草科に屬する草本。高さ二三尺、葉は互生し、細長く尖り、三縱列に排列し、平行脈を有す。花は單性、穗狀花序をなし、莖の頂にある花序は雄花、下部にあるものは雌花なり。圓柱狀をなす。帶白色の柄を有す。

しらすげの 白菅の【枕】眞野といふ地は菅の名所なるより、まのにかけていふ。一說に、菅は節のあるものなるより、節と節との間の意にて、まにかけていふと。月詣集「むかしこれたがすみしともしらすげのまのの萩はら秋は忘れず」

しらずさんてん 不知三點【名】〔文〕俳諧の點附をなすに、意義不明の句ある時、三點にすること。

しらずしらず 不知不識【副】考へずに。偶然に。おもはず。

しらすたつくり 白子田作【名】〔動〕『鮒の一名をしらすといひ田作（ツクリ）即ち鱵（ハエ）に似たるよりいふなるべし』いさざ（鮒）に同じ。

しらすな 白砂【名】白き砂。しろまなご。六帖「ももしきの庭にかきしくしらすなのされたりきとも思はざりしを」

しらずながら 不知乍【副】知らぬままに。わからぬながらに。玉葉「橘柱それとばかりも見るべきに知らずながらも過ぎにけるかな」

しらすふこ 【名】〔動〕いさざ（鮒）に同じ。

しらすばしご 白洲梯子【名】さんだん（三段）に同じ。

しらずぼし 白子乾【名】鮒（ブナ）の乾したるもの。ちりめんぼし。たたみいわし（疊鰯）參照。

しらすみ 白墨【名】胡粉を練固めたる白色の繪具。

しらずよみ 不知詠【名】知らず顏にて歌を詠むこと。伊勢「男、知らずよみによみけり」

しらすり 白磨【名】銀にて造り磨りて、白く光らせたるもの。太平記「白磨の銀筈の大中黑の矢」

しらせ 爲知【名】つげ知らすること。報知。通知。きざし。前兆。芝居にて、幕明の相圖に樂屋にて打つ木。

しらせがい 爲知貝【名】こもち（子持）に同じ。

しらせぶみ 爲知文【名】先方へ知らする書面。通知書。賀古鞆音七番廻「今日の一座の知らせ文、明日を賴みの屆文」

しらた 白木賣【名】『白板（イタ）又は白肌（ハダ）の略なるべしといふ』へんさい（邊材）に同じ。赤みに對して）

しらだいす 白大衆【名】官位なき僧侶ども。平家「神人・宮仕（ジニ）しら大衆・專當滿ち滿ちて、いくらと云ふ數を知らず」

しらたいふ 白太夫【名】北野天滿宮の攝社に祀られたる神。もとは、伊勢の神主渡會（ワタラヒ）春彥とて、菅原道眞と親しかりし者といふ。謠曲（道成寺）「我れは、天神のおん使、名をば、誰れとかしら太夫の」操人形の頭の品目。手習鑑の白太夫より始るを以て、この名あり。

しらたか 白鷹【名】〔動〕猛禽（ハヤブサ）類に屬する鳥。身長二尺、上面は蒼灰色、下面は白色、黑き橫列點あり。極北に產し、我が國には稀なり。

しらたき 白瀧【名】白く見えて落つる瀧。白糸。糸蒟蒻の粉末を水にて捏ね、細くつきて、沸湯中に放ちて製したるもの。絲蒟蒻よりも細くして、色白し。

しらたけ 白竹【名】磨きて白くしたる竹。

しらたけおさへ 白竹押【名】白竹をわたして、物のおさへとすること。鳩翁道話「戶は檜木（ヒキ）の長へぎ、白竹おさへ」

しらたけ 白茸【名】蕈の一。色白きもの。

しらたち 白太刀【名】禮儀に用ふる太刀。目貫に家の紋などを附け、鞘・鞘ともに、銀にて包みし太刀。菖蒲革の帶取を附く。

しらたづ 白鶴【名】〔動〕しろつる（白鶴）に同じ。〔古語〕兼輔集「しらたづのあまの原より飛びつるは遠き心を知れるなるべし」

しらたて 白楯【名】白木造の楯なるべし。紀「白楯、シラタテ」

しらたに 白谷【名】〔地〕丹波國にありといふ谷。名寄「あやのひくしらたにみづの底ふかみながき千とせのはじめなりけり」

しらたふぐ 【名】〔動〕河豚の一種。近海に棲息し、背部は平滑にして綠色を帶び、側部も平滑にして銀色、腹部は白くして、夥多の小棘を生ず。

しらたへ 白栲・白妙【名】しろたへ（白妙）に同じ。紀竟宴「佛すらみかどかしこみしらたへの波かきわけて來ませるものを」

しらたま 白玉【名】白く美しき玉。しんじゅ（眞珠）に同じ。〔古語〕紀「眞珠、シラタマ」あはび（鮑）の異稱。しらたまの粉に水を加へて捏ね、指頭大の丸として煮、更に水に冷して、砂糖を加へて食ふもの。〔植〕しらたまつばき（白玉椿）の略。しろもの に同じ。〔植〕稻の一品種。米質佳良。畿內・中國地方に栽培せられ、主に統前地方に產す。芒なく、形圓く、大粒にて、腹白く、大形なるを以てこの名あり。

しらたまこ 白玉粉【名】しらたまのこ（白玉粉）に同じ。

しらたまさう 白玉草・鶴草【名】〔植〕石竹科に屬する多年生の草。近年舶來せるものにて、觀賞用に供せらる。莖の高さ二三尺。葉は卵形又は卵狀披針形にして、對生し、莖も葉も白色を帶ぶ。夏季に白色の花を開く。

しらたまつばき 白玉椿【名】〔植〕椿の一種。花瓣白きもの。しらたま。僧馬藁「高砂のをのへに立てる白玉椿」

しらたまの 白玉の【枕】白玉の美しきを、わが子をうつくしむに譬へて、わがこにかけていふ。萬葉「しらたまのわが戀ふる日はあかぼしのあくるあしたはしきたへの床のべ去らず」

しらたまのき 【名】〔植〕しろもの に同じ。

しらたまのこ 白玉粉【名】餅米六分と粳米四分との割合に雜ぜたるをよく洗ひ、寒中三十日間、每日冷水を注ぎて洗滌し、日に乾して挽きたる粉末。白玉に製し、又は汁粉の實、餡ころ餅の心（ジン）、餅菓子の皮に用ひて、食用に供す。

しらたまばうき 白玉箒【名】〔植〕たむらさう（田村草）に同じ。

しらたまひめ 白玉姬【名】かすみ（霞）の異名なりといふ。〔古語〕秘藏抄「春山にしらたまひめの立つときは見まくほしげに花をこそこめ」

しらたまゆり 白玉百合【名】〔植〕百合（ユリ）科に屬する多年生の草。園圃に栽培し、地下の黃色なる鱗莖を食用に供す。葉は廣披針形、夏日白色の花を開く。いろかのこゆり。しろかのこゆり。かのこゆり（鹿子百合）に同じ。

しらたみ 疱【名】せんき（疱氣）に同じ。〔古語〕和名「疱、阿太波良、一云、之良太美、腹急痛也」

しらため 疱【名】前條に同じ。名義抄「疱、シラタメ・シラタミ・アタハラ」

しらち 仕埒【名】『仕は爲（シ）の義』とりかたづけ。處置。

しらち 白血【名】こしけの類。子宮より、無色の液の下る婦人病。

しらつ 白地【名】陶器又は瓦などの、未だ燒かぬもの。紙などの、未だ何等の書畫を書かず、又は印章などを捺（オ）してあらぬもの。しらちむすめ（白地娘）の略。『白地にて、素燒（キヤキ）なる物の義』すりばち（擂鉢）を云ふ。〔西國・下總國・常陸國の方言〕

しらつ-うらがき 白地裏書【名】〔商〕『英 Indorsement in blank』裏書をするに、裏書讓渡人の記名捺印（オシ）のみありて、裏書讓受人の氏名・地名等を記載せざるもの。

しらつ-こぎって 白地小切手【名】〔商〕『英 Blank cheque』振出の際、他日他人をして補充せしむる意思を以て、金額等の用件

を記入せずして、振出人の署名のみある小切手。

しらぢ-さいさんゆづりわたし 白地財産讓渡【名】〔商〕『英Blank transfer』讓渡證書又は讓渡株券に、讓受人の氏名を記入せずして、財産の讓渡をなすこと。

しらぢしき-うらがき 白地式裏書【名】〔商〕しらぢうらがき(白地裏書)に同じ。

しらぢしき-てがた 白地式手形【名】〔商〕次條に同じ。

しらぢ-てがた 白地手形【名】〔商〕『英Blank signature』手形に記載すべき要件を、他日他人に補充せしむる意志にて、故らに記入せずして發行したるもの。我が商法に明文なきも、有効とするを通說とす。その効力發生の時期は、或は手形要件の當初に遡りて既に有効なりとし、或は手形要件の補充完備せる際、初めて効力を生ずと論ずれども、我が大審院は、後說を採れり。

しらぢ-ふりだし 白地振出【名】〔商〕後日、追記する意志にて、要件を具備せざるままの手形を署名して振出すこと。

しらぢ-むすめ 白地娘【名】きむすめ。しらぢ。處女。風俗文選「白地の娘御も、傾國の風俗を見習ひ」

しら-ちや 白茶【名】㊀次條の略。㊁茶の上品なるもの。尤草紙「大切なるものの品品…白茶」

しらちや-いろ 白茶色【名】茶色の極めて淡くして、少し白ばめる茶色。白茶。

しらちや-うら 白茶裏【名】白茶色の織物を、裏地に用ひたるもの。天の網島「きやう縮緬の、あすは無い夫の命しら茶裏」

しらちやける 白茶ける【動下一自】褪(サ)めて、白茶色に變る。

しら-つが 白栂【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しらつか-ぐみ 白柄組【名】よしやぐみ(吉屋組)に同じ。

しらつか-ぱっぱ 白柄ぱっぱ【名】白柄組の者どもの用ひし刀の、白柄卷にて花やかなるさまの形容。俗謠(土手節)「白柄ぱっぱの大小、よしや風の擱みざし」

しら-っ-かみ 白紙"【名】しらかみ(白紙)の音便。

しら-つきげ 白月毛【名】馬の毛色の一。月毛の少し白ばめるもの。平家「西樓といふ白月毛なる馬にぞ乘ったりける。」

しら-っ-こ 白子【名】しらこ(白子)に同じ。

しら-つち 白土【名】㊀色白き土。和名「堊、白土也、之良豆知」㊁〔鑛〕色白く、土に似て堅く、碎きて粉なし、磁器を燒くに用ふるもの。いまりづち(伊萬里土)・みがきずな(磨砂)參照。㊂しっくい(漆喰)に同じ。

しらっちやける 白茶ける【動下一自】しらちやける(白茶ける)の音便。

しら-つつじ 白躑躅【名】しろつつじ(白躑躅)に同じ。

しらっぷ (英Syrup)【名】しろっぷに同じ。

じらっふ (英Giraffe)【名】〔動〕きりん(麒麟)㊁に同じ。

しら-つゆ 白露【名】白く見ゆる露。

しらつゆ-の 白露の【枕】露は消えやすきものなるより、きえの約なるけにかけていふ。萬葉「くれにおきてあしたは消ゆる白露の消(ケ)ぬべき戀もわれはするかも」

しら-つる 白鶴【名】白き翼の鶴。しらたづ。壬二「霜がれのあしまに立てるしらつるの知らず幾世の年は經ぬらん」

しら-つるばみ 白橡【名】㊀あをしらつるばみ(青白橡)に同じ。㊁あかしらつるばみ(赤白橡)に同じ。空穗「青きしらつるばみのからきぬ重ねたる女のよそひ」

しら-と 白砥【名】淡白色を帶びたる砥石。合砥(アハセド)と粗砥(アラト)との間に用ふるもの。伊豫國宇和島産を上質とす。

しら-とう 白籐【名】弓を卷きたる籐の、漆にて塗らざるもの。(塗籐に對して)曾我「鷹の羽にてはぎたりし、大の鹿矢、白籐の弓を持ち」

しらと-ほふ 志良登保布【名】をにひたやまにかけていふ。その意明かならず。一說に、ほふはほる(掘る)の誤にて、白砥を掘る義にて言ひつづけたるなりと。萬葉「しらとほふをにひたやまのもる山のうらがれせななとこはにもがも」

しらと-ゆき【名】たき(瀑)の異名なりといふ。〔古語〕

しら-とり 白鳥【名】㊀毛色の白き鳥。白鳥(ハクテウ)。㊁〔動〕さぎ(鷺)の異稱。㊂〔動〕はくてう(白鳥)㊁に同じ。㊃羽毛の白き鷺。平治「白篦(シラノ)に、白鳥の羽にてはぎたる箭負ひ」

しら-とりげ 白鳥毛【名】白色の鳥毛。藍摩歌「獨樂形(コマナリ)の白鳥毛」

しらとり-の 白鳥の【枕】㊀鷺は翅の白き鳥なるより、さぎ(鷺)にかけていふ。萬葉「しらとりのさぎさか山の松蔭に宿りてゆかな夜もふけゆくを」㊁鳥の飛ぶといふ意にて、とば(鳥羽)にかけていふ。萬葉「しらとりのとば山松の待ちつつぞわが戀ひわたるこの月頃を」

しらとり-の-せき 白鳥關【名】〔地〕きのせき(紀關)に同じ。

しらとり-の-みささぎ 白鳥陵【名】日本武尊の御陵。尊伊勢國に薨じて、能褒野(ノボ)に葬り奉りしに、白鳥に化して飛びゆき、大和國琴彈原(コトヒキノハラ)に止まり給ひしかば、ここに陵を造りしに、又飛びゆきて、河内國古市(フルイチ)邑に止まり給ひしによりて、又ここにも陵を造りしに、白鳥天上に翔り去れりと傳へ、今も二箇所に分れ存す。琴彈原は今の南葛城(ミナミカツラギ)郡秋津村大字富田、古市邑は南河内郡古市村大字輕墓(カルハカ)にて、輕墓は即ち假墓の義なりともいふ。

しら-なは 白繩【名】鵜川などにて、魚の逃ぐるを防ぐため、周邊に曳きまはす繩。〔古語〕散木「ますらをは鵜川の瀨瀨に鮎とると引くしらなはのたえずもあるかな」

しら-なみ 白波【名】㊀白く立つ波。銀濤。白波(ハクハ)。白浪(ハクラウ)。萬葉「わたつみのおきつしらなみたつた山いつかこえなむいもがあたり見む」㊁『はくは(白波)の直譯』盜賊の異稱。〔白浪〕太平記「沖の上には海賊多くして、舟人白浪の難を去りかねたり」㊂〔動〕えそ(鱠)を云ふ。〔女の語〕㊃きざみするめ(刻鯣)に同じ。㊄紋所の一。下の圖を見よ。

(五みならし)

しらなみ-の傳【句】能(ノウ)の船辨慶の替(カヘ)の形(カタ)。金剛流にて祕事とす。

しらなみ-ごにんをとこ 白浪五人男【名】脚本の一。本外題は「青砥稿花紅彩畫(アヲトザウシハナノニシキエ)」。辨天小僧・南鄕力丸・忠信利平・赤星重三・日本駄右衞門の五人の白浪の事を仕組めるもの。五幕中濱松屋見世の場、稻瀨川勢揃の場、最も人に知らる。河竹默阿彌の作。

しらなみ-の 白波の・白浪の【枕】白波は沖より岸に寄り、又寄せては返るものなるより、よる・かへるにかけていふ。後撰「しらなみのよるよる岸にたちよりてねもみしものをすみのえの松」同「住の江の松にたちよる白波のかへるをりにや音は泣かるらん」

しらなみ-もの 白波物・白浪物【名】脚本小說・講談等の盜賊を主人公とせるもの。

しら-に 白煮【名】醬油を用ひず、鹽にて煮たるもの。うしほに。

しら-にぎて 白幣【名】白きにぎて。穀(カヂ)の皮を織りて造る。(青和幣に對して)紀「白丹寸手、シラニギテ」

しらぬ-がほ 不知顏【名】しらずがほ(不知顏)に同じ。榮花「いざいと知らぬがほなるはわろし」

しらぬ-が-ほとけ 知らぬが佛【句】しる(知る)の條下を見よ。

しらぬ-の 白布【名】しろぬの(白布)に同じ。平家「弓袋の料にとて、白布五十端」

しら-ぬ-ひ 不知火【名】舊曆七月晦日の夜、肥前・肥後の海上に無數に現る火光。古來、海中龍神の出す燈明なりと言傳ふ。實は海中の動・植物より發する燐の閃火ならんといふも、詳ならず。筑紫の不知火。

しらぬひ-くわうゑもん 不知火光右衞門【名】〔人〕横綱力士の第八世。肥後國菊池郡陣內村に生る。江戶に出て、力士となり、殿(シンガリ)と稱し、肥後侯の抱となる。文久年間横綱免許を受く。容貌美なりしために、人氣大なり。明治十二年歿す。年五十五。

しらぬひ-だくらゑもん 不知火諾右衞門【名】〔人〕横綱力士の第五世。肥後國宇土郡轟(ドドロキ)村の人。肥後侯の抱力士たり。天保十一年横綱免許を受け、安政元年歿す。年五十四。

しらぬひの 不知火の【枕】景行天皇筑紫におはして、海上を渡りたまへるとき、夜暗くして行く先知れざるに、今の肥前・肥後のあたりに火の燃ゆるを見給ひて、その國を火の國と名づけたまひし故事によりて、つくしにかけていふ。萬葉「しらぬひつくしの綿は身につけて未だはきねど暖かに見ゆ」

しらぬひものがたり 白縫物語【名】〔書〕『九州地方の事蹟を材料とせしより、しらぬひ(不知火)と同音なる白縫を題號とせしもの』筑前領主菊池家の騒動より筆を起し、豐後臼杵(ウス)城主大友宗麟(ムネシゲ)の女若菜姫が蜘蛛の妖術を行ひて、父の仇を報ぜんとする事を作りたる草雙紙。天草一揆と黒田騒動とを混合して脚色せるもの。初篇より三十五篇まで柳下亭種員の作、三十六篇より二世柳亭種彦の作、六十六篇は種清の作にして、未完結のまま終れり。

しらぬり 白塗【名】銀を燒きつけたるものといふ。(古語)萬葉「鷹はしも數多あれどもやかたをのあが大くろにしらぬりの鈴とりつけて」

しらーね 白根【名】植物の根又は莖の、土中にありて、白色なる部分。六帖「人知れず物おもふときは難波なる葦のしらねの知られやはする」

しらーね 白寢【名】ひとりね。いたづらぶし。(古語)夫木「つくし船うらみを積みて宿るには あしやにねてもしらねをぞする」

しらねあふひ 白根葵【名】〔植〕『白根山(一)に生ずるによりて得たる名』毛茛(キンポウゲ)科に屬する多年生の草。高さ二尺に達す。葉は壯大にして掌狀に分裂し、鋸齒を有し、莖に細毛あり。夏季花瓣無く、青紫色なる四片の萼を有する大なる美花を開く。我が國の特産にして、本州及び四國の陰地に自生し、觀賞用として栽培せらる。

しらねがたけ 白根嶽【名】〔地〕はくさん(白山)に同じ。狹衣(物語)「紙衾(カミブスマ)かたけて(しらねがたけを)行くへかな」

しらねさん 白根山【名】〔地〕(一)甲斐國の西境にある山。赤石山脈中、甲・駿・信三國の境界より東に向ひ、一條の分水嶺南に折れて、赤石山と平行するもの。最北の峰を北嶽(最高一〇三九五尺)と稱し、南に中嶽・南嶽相連なり、南北直徑四五里に達せり。一名、白嶺・甲斐ヶ嶺。(二)日光火山脈中唯一の活火山。高さ七五四四尺、舊時は屢噴火せしが、明治二十二年降灰せし以後、全く靜止す。一名、日光白根。(三)上野國吾妻郡と信濃國上高井郡とに跨る火山。高さ七四三五尺、山の東麓に草津温泉あり。一名、草津白根。

しらねーせんきゆう 白根川芎【名】〔植〕やませんきゆう(山川芎)に同じ。

しらねーにんじん 白根人參【名】〔植〕繖形(サンケイ)科に屬する多年生の草。日光山・白山等に自生し、園藝して觀賞用に供せらる。葉は根生、二三回羽狀複葉をなし、夏日、白色の小花密集して開く。

しらーの 白篦【名】しろの(白篦)に同じ。

しらーは 白刃【名】はくじん(白刃)に同じ。

しらーは 白齒【名】(一)齒黑(ハグロ)せぬ齒。皎齒。浦島年代記「閨の戸出づる小娘の、白齒の雪や振袖に梅の香包む年ばいも」(二)『昔女は、嫁入りせぬ内は、齒ぐろめせぬよりいふ』未婚の女。處女。(俚語)「白羽の矢、眞額(マビタイ)のはづれ、眉間(ミケン)の眞中にあたる」

しらーは 白羽【名】眞白なる矢羽。太平記「白羽の矢が立つ【句】見込まれて、犧牲者と定められる。

しらはかうじ 白羽柑子【名】〔植〕密柑の一品種。遠江國濱名郡白脇村大字白羽の名產。

しらーはぎ 白萩【名】〔植〕(一)白き花を開く萩。(二)ぬまはぎを沼虎尾(ヌマトラノオ)に同じ。(三)いぬはぎ(犬萩)に同じ。(四)こがんぴ(小雁皮)を云ふ。(薩摩國の方言)

しらーはぎ 白脛【名】肌の白き脛。

しらはーぐさ 白葉草【名】〔植〕ちがや(白茅)に同じ。

しらばくれる 【動下一自】飽くまで知らぬふりを裝ふ。しらを切る。

しらーばけ 【名】じやうだん。戯言。

しらーはし 白箸【名】白木(シラキ)の箸。

しらはしなり 【名】〔植〕めうりのきに同じ。

しらはしーのき 白旗【名】白き旗。昔は、主に源家の用ひしもの。今は降服の意を表すものとして、軍陣に用ひらる。白旗(シラハタ)。

しらーはだ 白肌【名】しろはだ(白膚)に同じ。和名抄「白膚、一名、白電、之良波太、人面及身頸、皮肉色變レ白、亦不二痛癢一者也」

しらーはたけ 白癩【名】前條に同じ。字鏡「葉癩、シラハタケ」

しらはたーじやう 白旗城【名】播磨國赤穗郡赤松村の東方白旗山上に在りし赤松氏の城。創業の年代明かならず。赤松氏、平時は赤松村に居り、事あるに臨みて、この城に據るを常としたり。

しらはたは 白旗派【名】〔佛〕ちんぜいは(鎭西派)を見よ。

しらはたやま 白旗山【名】〔地〕(一)しらはたじやう(白旗城)を見よ。(二)相模國鎌倉の壽福寺の西にある山。その附近における最高の山にして、高さ三〇〇尺餘。源義家奥州征伐の途、この山に源氏の白旗を樹てて、戰捷を祈りしによりて得し名なりといふ。一名、源氏山・旗立山。

しらはと 白鳩【名】〔動〕白き色の鳩。源氏十二段草子島巻「むら杉に、白鳩の群れゐて遊ぶもろつばさ」

しらはひ 白灰【名】白き灰水。あく。堀次郎「はらはらと露のしらはひさしつるは時雨の雨ぞ上染はする」

しらはへ 【名】(一)六月頃吹く西南風。(畿內・中國邊の船人の語)(二)五月雨の晴るる頃より吹く南の風。(志摩國鳥羽及び伊豆國の船人の語)

しらはま 白濱【名】白き砂の濱。萬葉「あり通ひ見ますもしるし清き白濱」

しらはまーじやう 白濱城【名】文安中、里見義實の安房國安房郡白濱村に築きし城。白濱郡は野島ヶ崎の邊に在り。城趾の地、今も舘別・大庭などの地名を存す。

しらはまーなみ 白濱浪【名】白濱の波。萬葉「たくひれの白濱波のよりもあへずあらぶる妹に戀ひつつぞをる」

しらばむ 白ばむ【動四自】白くなる。白く色づく。

しらはむすめ 白齒娘【名】鐵漿(カネ)を附けざる娘。未婚の女。處女。

しらーばやし 白囃子【名】芝居にて、擊劍・相撲(スマヒ)又は奴の水を打つ幕開(マクアキ)などに用ふる鳴りもの。みづうち。

しらーはり 白張【名】(一)糊をこはく仕立てたる白布の狩衣。官人の奴僕などの著用せしもの。布の淨衣(ジヤウエ)。はくちやう。しらはりしやうぞく。(二)しらはりぢやうちん(白張提燈)の略。

しらーはり 白針【名】縫方拙きため、絎目(クケメ)の表に絲のあらはるること。

しらはりーしやうぞく 白針裝束【名】しらはり(白張)(二)に同じ。

しらはりーぢやうちん 白張提燈【名】葬禮などの時に用ふる、白き提燈。しらはり。

しらび 白檜【名】〔植〕(一)しらびそ(白檜曾)の略。(二)あすなろ(翌檜)に同じ。

しらひげ 白髭【名】(一)白色の鬚。白くなりたるひげ。萬葉「ちちのみの父のみことはたくづぬのしらひげの上ゆ涙垂り」(二)謠曲の一。近江國なる白髭明神の緣起を作れるもの。

しらひげさう 白髭草【名】〔植〕虎耳草(シユセキサウ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。葉は根生、夏日白色・五瓣の花を開く。花瓣の緣邊こまかに深裂して美なり。はくさんなでしこ。はなつづみ。はななでしこ。

しらひげーじんじや 白髭神社【名】(一)しらひげみやうじん(白髭明神)に同じ。(二)東京隅田川の邊、寺島村に鎭坐せる神社。天曆年間近江より分祀せるものにて、祭神は猿田彦命なりといふ。

しらひげーづら 白鬚頬【名】「る頬。白鬚の生えたる頬。

しらひげみやうじん 白髭明神【名】近江國比良山の麓なる滋賀郡小松村大字鵜川にある神社。垂仁天皇の二十七年創建。祭神は猿田彦命。

しらーびそ 白檜曾・白檜・小龍仙【名】松

杉科に屬する常綠喬木。我が國各地の山野に産し、高さ七八丈、周圍八尺に達す。樹皮平滑にして、黃褐色を呈し、灰色の斑點あり。葉は檜のに似たり。雌雄同株にて、圓柱狀の毬果を結び、材もその質檜のに似たれど、輕軟にして裂けやすく、器具又は製紙原料とす。えぞもみ。くろき。しらび。しらもみ。たけつが。あをひば。だけつが。あをつが。しらつが。こりゆうせん。たふのをもみ。りゆうせん。

しらびたい 白檜帶【名】〔地〕我が國植物帶區分法の四帶の中、低き方より數へて第四位、卽ち、山毛欅帶の上に位するもの。中央山脈にては、五六十尺以上これに屬し、白檜・檜松・蝦夷松・青森檜松等の自然林あり。檜松帶ともいふ。又この上に更に一帶を設けて、偃松帶の名を與ふる區分法もあり。寒帶林。

しらびと 素人【名】しろうと(素人)に同じ。〔古語〕著聞「ただのしらびとが、强盜とみづから名のりて、命をまかせて參らせて、何のせんか候ふべき」

しらーびと 白人【名】しろなまづのある人。白はだなる人。しろびと。〔古語〕「しらびとこくみ」已が母犯せる罪」

しらーひめ 白姫【名】冬を司るといふ女神。春の佐保姫、秋の立田姫の類。〔古語〕

しらーひも 白紐【名】色の白き紐。白色の絲にて組みたる紐。萬葉「春山のさきのたをりにわかなつむいもがしらひも見らくしよしも」

しらーびやうし 白拍子【名】『白き水干を著用せしより白拍子の名ありともいへど、延年舞の唱歌にも、相亂拍子・水白拍子などの名目見えたれば、もと拍子の名より起りしなるべし』遊女などの舞ひし一種の舞、又その遊女。もと水干に立烏帽子を著、白鞘卷の太刀を佩きて舞ひたる故、男舞ともいひ、後には水干のみにて舞へり。鳥羽天皇の御時、島の千歳・和歌の前の二人の遊女が舞ひそめしなりとも、又は藤原通憲の、磯の禪師に舞はしめしが始なりともいふ。平家「白拍子の上手、妓王・妓女」

(一)しらやびらし)

しらーびやうし 白拍子【名】(藝妓)に同じ。

しらびわけ 白日別【名】〔地〕つくし(筑紫)に同じ。〔古語〕

しらーふ 白面【名】酒に醉はぬ時。浮世風呂「暮れ紅顏の醉客も、朝湯にしらふとなるが如く」

しらーふ 白斑【名】白きまだら。萬葉「枕つくつまやのうちにとぐらゆひするてぞわが飼ふましらふの鷹」

しらふ【接尾】 互に事をなしあふ意。しろふ。〔古語〕和名「無、豆岐之良比」 住吉「はぢしらひたる姿」

しらぶ【名】 小さき鰒(あわび)。〔土佐國の方言〕

しらぶ 調ぶ【動下二他】 音律の調子を合はせととなふ。源氏「物のねどもをしらべあはせて、あそびたまふ」 音樂を奏す。かなづ。 言葉に調子をつく。 照らし合はせて考ふ。點檢す。調査す。 吟味をなす。糾(ただ)す。 さがす。たづぬ。搜索す。

じらふ (英Giraffe)【名】〔動〕きりん(麒麟)に同じ。

しらーぶか 白鰹【名】〔動〕ふかの一種。色白きもの。

しらーふくりん 白覆輪・白輻輪【名】しろくりん(白覆輪)に同じ。

しらーふぢ 白藤【名】白色の花を開く藤。 襲(かさね)の色目の一。表は薄紫、裏は濃紫なるもの。三四月の頃用ふ。 かんざう(甘草)の異稱。

しらぶる (英Syllable)【名】〔語〕父音と母音との相合して成りたる音。綴音(せつおん)。合成音。音節。熟音。

しらべ 調【名】 音の調子を合はせととのふること。 詩歌・音樂などの調子。六帖「ときはなる松のしらべにひく琴は緒ごとに君は千とせとぞなる」 照らし合はせて比ぶること。點檢。調査。 ぎんみ。せんぎ。 絲くり車の絃。 しらべのを(調緒)の略。室町千疊敷「浪の鼓のしらべもとけて、一筋ならぬ二筋三筋」 しらべおび(調帶)の略。 つけたて(附立)に同じ。五箇(かこ)の調【句】〔音〕琴にて、搔手(かきて)・片乘(かたのり)・水宇瓶(すいうびん)・蒼海波(さうかいは)・雁鳴(がんめい)の五種の調べ方。五箇の聲。源氏「きんは五箇のしらべ」

しらべーいと 調絲【名】紡錘にかけて、絲繰車の周圍に纏ひたる絲。車の廻轉に連れて、他の車輪に動力を傳ふ。はやいと。はやを。

しらべーおび 調帶【名】『英Belt』調車の回轉面と相觸れしめて生ずる摩擦によりて、その運動を傳達する帶狀の紐。皮革製・麻布製・綿布製等もあり。しらべ。

しらべーがは 調革【名】『英Leather belt』皮革(主として牛皮)製の調帶。前條及び次條參照。

しらべーぐるま 調車【名】『英Pulley』調革によりて、動力を傳送する裝置の車。

しらべーたい 白檜帶【名】〔地〕しらびたい(白檜帶)に同じ。

しらべーなは 調繩【名】『英Rope』調帶と同じく滑車・齒車などと併せ用ひて運動を傳達する繩。主に綿線を用ふれども、鐵山用には針金繩を用ふることあり。

しらべーのを 調緒【名】鼓の兩面の皮の緣に貫きかがり、胴に引附けて纏ふ紐。鼓を打つ時、手にて緩めつ締めつして、調子を助くるに用ふ。

しらべーやく 調役【名】取調を行ふ役目。審査官。審問官。

しらーほ 【名】漉返(すきかへ)しの白き紙。〔江戸〕

しらーほ 白穗【名】稻穗の病の一種。穗、帶白色となりて、秕(しひ)を結ぶ。

しらーぼ 【名】樹木に花の如く附きたる霜をいふ。〔東北の方言〕

しらーほし 白星【名】しらぼしのかぶと(白星兜)に同じ。

しらーぼし 白乾【名】魚肉・野菜などを、そのまま干したるもの。すぼし。 鮭鱒・鮭のしらぼし、なでふ事かあらん。鮎のしらぼしはまゐらぬかは」

しらぼしーのーかぶと 白星兜【名】兜(かぶと)の鉢に打ちたる鋲(びやう)の、銀又は白鑞(しろめ)にて造れるもの。しらほし。平家「白星の兜に鍬形打ったるを」保元「上折したる烏帽子の上に、しらぼしの兜を著」

(とぶかのしぼらし)

しらーほね 【名】鳥の羽の名所。

しらほねーぐら 白骨鞍【名】白木のままにて、漆を塗らざる鞍。七一雜人歌合「いかにしてまつ人口に乘りぬらんしらほねぐらのぬる(塗る・寢る)夜なき身に」

しらほまつ しらほ松【名】〔植〕くろまつ(黑松)に同じ。

しらーほろ 白母衣【名】しろほろ(白母衣)に同じ。

しらまかす 白まかす【動四他】しらます(白ます)に同じ。〔古語〕山家「山里の心の夢にまどひをれば吹きしらまかす風の音かな」

しらまきーゆみ 白卷弓【名】黑塗の弓に白き籐(とう)を卷きたる重籐(しげどう)。流鏑馬(やぶさめ)に用ふ。しらまゆみ。

しらます 白ます【動四他】 むやうにす。興をさます。 勢を挫く。まけ色になす。しらまかす。〔古語〕平家「長門本」「これをしらまさじと、平家の方より」

しらまなご 白砂【名】しろすな(白砂)に同じ。〔古語〕萬葉「しらまなご清き渚邊はゆきかへり見れどもあかず」

しらまゆみ 白檀弓・白眞弓【名】まゆみの白木のままにて造りたる丸木弓。

しらまゆみ 白檀弓・白眞弓【枕】弓は絃を張り、引き又は矢を射るに用ふるものなるより、はる・ひいにかけていふ。萬葉「しらまゆみ今はる山にゆく雲のゆきやわかれむ戀しきものを」同「しらまゆみひだの細江のすがどりの妹にこふれやいをねかねつる」同「しらまゆみいそべの山のときはなるいのちならばや戀ひつつをらむ」

しらみ 虱・蝨・衣蝨【名】〔動〕有吻(ふんかう)類に屬する昆蟲。極めて小さく、色白く、微毛體面に生ず、六脚と二つの觸角とあり。口

器は刺螫部(シカ)と吸收部とより成る。人體又は獸類に寄生して、血を吸ふ。一頭の雌は五六十顆の卵を産み、一週間ほどを經れば孵化し、十八九日の後は老成す。牛風子。和名「蝨、之良美、齧レ人蟲也」

虱に故郷なし【句】 虱は人より人に轉轉して、本居の知り難きこと。〔諺語〕

虱の息(イキ)も忌利(リキ)天【句】 『忉利(リキ)に通るの意を兼ぬ』一念の力の恐るべきことの譬。蚤の息も天。〔諺語〕

虱の皮を槍で剝(ハ)ぐ【句】 「雞を割くに牛刀を用ふ」に同じ。〔諺語〕

虱を捫(ネヒ)て、當世を論ず【句】 『晉書の苻堅載記に「王猛字景略、隱二於華陰山一、桓溫入レ關、猛被レ褐而詣レ之、一面談二當世之事一、捫レ虱而言、旁若二無レ人一」とあるに本づく』旁若無人の態度をいふ。

口中の虱【句】 『韓非子の內儲上篇に「以臨二東陽一、則邯鄲中虱也」とあるに本づく。たやすくつぶし得るものなるよりいふ』極めて危く亡びやすきさまの譬。

しらみ-とま 虱胡麻【名】〔植〕 あま(亞麻)に同じ。

しらみ-ころし 虱殺【名】 ■片端より殘らず片附くること。■〔植〕ちかぶ(鳥頭)に同じ。

しらみづ 白水【名】 白く濁れる水。

しらみづ-あみだだう 白水阿彌陀堂【名】 磐城國石城(イハキ)郡內郷(カヂ)村にある寺。正曆元年國主岩城則通が後室德尼(藤原清衡の女)のために、中尊寺の金色堂に擬して造りしものといふ。本堂の內部は剝落甚しきも、平安朝末期の極彩色裝飾を傳ふ。

しらみね 白峯・白峰【名】〔地〕あやのまつやま(綾松山)を見よ。

しらみねぐう 白峰宮【名】 京都市上京區飛鳥井(アスカヰ)町に在る官幣中社。祭神は淳仁・崇德の二帝。祭日は九月二十一日。

しらみね-じんじゃ 白峰神社【名】 讃岐國白峰陵の側に在る縣社。祭神は崇德上皇。明治十一年同國金刀比羅(コトヒラ)神社の攝社として設置せらる。

しらみね-のみささぎ 白峰陵【名】 崇德天皇の御陵。讃岐國綾歌(アヤウタ)郡松山村白峯(ホノヲ)寺の西北隅にあり。一名、讃岐の陵。

しらみ-ひも 虱紐【名】 藥を塗り、虱を除くため、肌に締むる細紐。江戸時代より、日本橋小傳馬町辛手(テツ)屋にて發賣せり。江戸生艶氣樺燒「どこの女郎衆か、しらみひも、結ぶの神もあちらむかさんしよ」

しらみ-ぼん 虱本【名】 『文字の細小なるより名づく』元祿時代江戸・京阪にて出板せし繪入の歌舞伎狂言本又は淨瑠璃丸本。半紙十枚乃至十六枚より成り、半紙に凡そ十六七行、全部假名にて書き、插畫三四葉を加へ、主として讀むために作りしもの。

しらむ 白む【動四自】 ■白くなる。明るくなる。夫木「明けしらむ沖のはややや强からし生田(イクタ)の磯に寄する友舟」■されて艷氣(ケ)矢す。金瓶「この琴どもをばいかで作りしぞ、手ふれて久しくなりぬるに、聲もしらまず」■勢衰ふ。しらく。盛衰記「平家の大將これを見て、橋の手こそ白みて見ゆれ、返し合はせよ返し合はせよ、と下知しければ」

しらむ 調む【動下二他】 しらぶ(調ぶ)に同じ。〔古語〕 拾「さやうの物をきりしらめたるにと宣はするに、又笑ひぬ」

しらむ-むし 白蒸【名】 小豆を入れずに、白く炊ぎたる强飯。

しらむ-むし 白蟲【名】〔動〕しらみ(虱)に同じ。〔古語〕 續古事談「懷より、しらむしを取りいだして」

しらん 紫蘭・朱蘭・白及【名】〔植〕■蘭科に屬する多年生の草。高さ一二尺、葉は廣披針形にて平行脈を有す。夏、葉間より花莖を抽き、總狀花序をなして、白または紫紅色の花を開く。かがみ。薫蘭。■『花の色紫なるよりいふ』ふぢばかま(藤袴)に同じ。

しらん 芝蘭【名】 靈芝と蘭(カヲリ)と。芝蘭の室に入る【句】 「善人と居れば芝蘭の室に入るが如し」を見よ。

芝蘭の契(チギ)【句】 『「善人と居れば芝蘭の室に入るが如し」を見よ』善き感化を受くる交。『芝蘭の友』『金蘭の契』參照。源平布引瀧「かの芝蘭の契の袂には」

芝蘭の友【句】 前條を見よ。右大將鎌倉實記「芝蘭の友も面を背け、笑の中に刃を研ぐ世の中」

芝蘭・玉樹・庭堦に生ず【句】 『晉書の謝安傳に「玄答曰、譬如二芝蘭・玉樹一、欲レ使二其生一於庭堦一耳」とあり』人材多く一門に出づ。

しらん 知らん【句】 しる(知る)の條下を見よ。

しらん-かほ 不知顏【名】 しらぬがほ(不知顏)の訛。

しらん-め 白目【名】 重量二百三十匁の稱。江戸時代に、專ら藥舖にて用ひたり。輪目(ワ)。

しらん-め 白眼【名】 しろめ(白眼)の轉。〔古語〕 竹取「御眼はしらめにて伏したまへり」

しらん-も 白漢【名】 白く曝したるおごのり。

しらん-も 仙藥【名】〔植〕 紅色藻類に屬する食用海藻。沿海に自生し、體は圓柱狀をなして、徑一分ばかり、黃綠色半透明にして、分枝す。

しらん-もち 白餅【名】 しろもち(白餅)に同じ。

しらん-もみ 白樅【名】〔植〕 しらびそ(白檜曾)の咲く。

しらん-もも 白桃【名】〔植〕 桃の一種。白き花に同じ。

しらん-やき 白燒【名】 魚肉を、鹽・醬油などを附けずに燒くこと。

しらん-やま 白山【名】〔地〕 はくさん(白山)に同じ。 古今「よそにのみ戀ひやわたらんしらやまの雪見るべくも知らぬわが身は」

しらやま-ぎく 白山菊・東風菜【名】〔植〕 菊科に屬する多年生の草。山野に自生す。高さ四五尺に達し、葉は下部のものは廣くして、三角形をなし、上部のものは狹くして尖り、共に鋸齒あり。夏、頭狀花序の白花咲く。

しらやま-じんじゃ 白山神社【名】 加賀國白山の絕頂御前(ゴゼ)嶽に鎭坐せる國幣小社。白山比咩(ヒメ)の神を祭る。舊稱白山本宮また妙理大權現と稱す。養老三年僧泰澄開山して、祠を此處に建立せりと傳ふ。壽永二年木曾義仲社殿を再建せり。

しらやまどり 白山雞【名】 白き羽毛を有する山雞。起「白山雞、シラヤマドリ」

しらやまひめ-じんじゃ 白山比咩神社【名】 加賀國石川郡河內村大字三宮に鎭坐せる國幣小社。祭神は白山比咩神。奥宮なる白山神社の位置の登拜に不便なるために設けしもの。五月六日を祭日とす。

しらゆ 白湯【名】 さゆ(白湯)に同じ。

しらゆき 白雪【名】 ゆき(雪)に同じ。

しらゆふ 白木綿【名】 白きゆふ。玉葉「見わたせば白木綿かけて咲きにけり神岡山の初櫻花」

しらゆふなみ 白木綿波【名】 白ゆふの靡くさまを、波に譬へていふ語。續後拾遺「卯の花の咲散る頃や初瀨川しらゆふなみも岸をこゆらん」

しらゆふばな 白木綿花【名】 ゆふにて造りたる造花。ゆふばな。萬葉「山高みしらゆふばなに落ちたぎつたきのかうちは見れどあかぬかも」

しらよね 白米【名】 はくまい(白米)に同じ。

しらよもぎ 白蒿【名】〔植〕 しろよもぎ(白蒿)に同じ。

しらら-か 白らか【貌】 白きさま。明らかなるさま。名義抄「白皙、シララカナリ」

しらら-のはま 白良濱【名】〔地〕 伊勢國にある濱。名寄「はるばるとしららのはまの白貝は夏さへふれる雪かとぞみる」

しらわ-かうじ 白輪柑子【名】〔植〕 『遠江國敷智(フチ)郡白輪より產するよりいふ』柑子の一種。形、柑子よりやや大きく、薄黃色を呈して、光澤あり。味甘くして、蜜柑の如し。

しらわらひ 痴笑【名】 あざわらふこと。しれわらひ。嘲笑。

しらゐ-じゃう 白井城【名】 上野國群馬郡長國村大字白井に在りし古城。康元中長尾氏ここに築きて、子孫に傳へ、天正十八年豐臣秀吉のために陷れられたり。

しらゐなほかた 白井直賢【名】〔人〕 京都の畫家。字は子齊、通稱は仲八郎、文擧と號す。圓山應擧の門人。よく鼠を畫く。寛政頃の人。

しらを 白繪【名】 しろゑ(白繪)に同じ。

しらを 白魚【名】〔動〕 しらうを(白魚)の略。

しらを 白雄【名】〔人〕 かやしらを(加舍白雄)

を見よ。

しらをきる 白を切る【句】しら(白)の條下「を見よ。

しり 尻【名】■坐する時、踵にて支ふるところ。かくれ。おかま。ゐさひ。ゐしき。けつ。「臀」和名「尻之利。臀也」■『衣(キ)の尻』を見よ』衣の裾(スソ)。下襲(シタガサネ)の裾(スソ)。源氏「えび染の下がさね、しりいと長くひきて」■あと。のち。後方。源氏「小君御車のしりにて、二條院におはしましぬ」四物のすゑ。末端。五物事の結末。くくり。餘波。續軍記「御臺の難儀を救ふため、ぼっ散らすばかりでよいに、ああ、死んだりや、しりがむづかしい」六苦情。いひぐさ。尻暖まる【句】永く同一の場所に奉職。奉公などして落付く。

尻出づる病【句】だっこう(脫肛)に同じ。〔古語〕和名「脫肛、之利以豆流夜萬比、肛門脫出也。久痢、則大腸虛冷所爲也」

尻重し【句】『しりおも(尻重)を見よ』立ちはたらくこと、活潑ならず。

尻隱さず【句】「頭(カウ)隱して尻隱さず」を見よ。

尻から這入(ハイ)る【句】不義理のために顏むけのできぬ人の家に、怖づ怖づ入込むさまにいふ語。

尻が來る【句】過をしかけたるあとにて、先方よりいひぐさを言はる。

尻輕し【句】『しりがる(尻輕)を見よ』■立ちはたらくこと、活潑なり。俳諧新選之房「からじりに尻輕き身の袷かな」■擧動かるがるし。ざっかけなし。■淫奔なり。多淫なり。(女にいふ)

尻が据(ス)る【句】おちつく。安心す。(多くは打消の形に用ふ)鬼貫「日南(ヒナ)にも尻のすわらぬ猫の妻」

尻が長い【句】『しりなが(尻長)を見よ』

長居(ヰ)をする癖あり。「露顯す。

尻が剝ける【句】包みかくしたること尻が早い【句】「尻輕し」に同じ。

尻から抜ける【句】『しりぬけ(尻抜)を見よ』■見聞きなどしても、直ちに忘る。燕石「學問は尻から抜ける螢かな」

尻から燒けて來るやう【句】あわて騒ぐさまにいふ語。

尻に帆を上げる【句】一散に逃去る。

尻に帆を掛く【句】逃げる仕度をす。鳩翁道話「尻に帆掛けて、遊所がよひ」世間娘氣質「辻駕籠打乘り、尻に帆掛けて、親里へ歸り」「譬。

尻に目藥【句】見當ちがひの事をなす

尻全し【句】度胸すわりたり。「鎌倉時代の語」曾我「和田小太郎は、弓勢も矢束(ヤヅカ)もはしたなく、尻全く候ふ」

尻を食(ク)へ【句】相手を罵りて、不承諾の意を示すにいふ語。

尻を据ゑる【句】容易に立ちあがらず。長居す。神輿(シンヨ)を据う。

尻を突く【句】おだつ。煽動す。

尻を突(ツ)く【句】前條に同じ。

尻を抓(ツネ)る【句】尻をつまみ、又はつまみてねぢる。道行く女に戲るる時、又は忘れたることを思ひだすためといふ。五人女「老いたる姿をかづかす白き帷子(カタビラ)に、黑き帶の結び目を、當風にあぢはやれども、かりそめに我が尻つめる人もなく、女は若きうちの物ぞと、すこしは昔の思はれ、口惜しくて歸るに」

尻を拭ふ【句】『しりぬぐひ(尻拭)を見よ』人の失敗の後を始末す。入笑人「年中おれに尻をぬぐはせて居ながら」「じ。

尻を端折る【句】はしをる(端折る)に同

尻を割る【句】秘密の惡事をあばく。

尻から燒けて來るやう【句】あわて騒ぐさまにいふ語。

尻が割れる【句】ひそかに行ひたる惡事などに鑑みて、將來に於ける自身の立場に注意すること。〔諺語〕

尻こそばゆし【句】心とがめて、何となく落附かず。卷花五六力「龍虎の呼子(ヨビ)、三五衞がお國で盜み所持すれば、今宵の騷動尻こそばゆく」「じ。

尻でも食(ク)へ【句】「尻を食へに同

尻に礙臼(ヒキウス)【句】『尻に白を附けたるがごとしとの義』尻重(シヂウ)なること。

尻に敷く【句】妻が夫を輕蔑す。

尻に附く【句】人の配下に附く。

尻に火が附く【句】事の切迫するさまにいふ語。

尻が割れる【句】ひそかに行ひたる惡事などに鑑みて、將來に於ける自身の立場に注意すること。〔諺語〕

御尻の用心、御用心【句】小供の遊に「今日は二十八日、御尻の用心御用心」といひつつ、油斷をうかがひて、他の小供の尻をまくること。「の利益。

しり 私利【名】わがための利益。自分一己の利。

しり 梓里【名】『詩經の小雅小弁篇に「維桑與梓、必恭敬止、靡ニ瞻匪ニ父、靡ニ依匪ニ母ニ」とあるに本づく』ふるさと。故郷。

しり 至理【名】至極なる道理。

しり 支離【名】工合よく合はぬこと。はなればなれ。

支離滅裂【句】はなればなれになりて次第の立たぬこと。

しり 尸利【名】『禮記の表記篇に「事レ君近而不レ諫、則是尸利也」とあるに本づく』事を勉めすして、利のみを主とすること。

しり 市利【名】市場にて獲る利益。

しり 司理【名】『白氏六帖に「則云、魏置ニ理曹掾一、蓋法曹也、卽今司理之任、…主ニ禁繫訊獄ニ」とあり』今の司法官に當る。

しり 尻【助數】矢羽を數ふるに用ふる語。大鷲の尾羽は十四枚、小鷲の尾羽は十二枚を以て一尻とす。

じり 事理【名】■事のすぢみち。事のわけ。■しわざとその道理と。■〔佛〕事卽ち諸法流轉(シテン)の有爲(ウヰ)法と理卽ち不生(フシヤウ)不滅の無爲法と。事物の相と眞如の理體と。現象と本體と。

事理二ならず【句】〔佛〕次條に同じ。〔諺語〕徒然「事理もとより二ならず。外相(ゲサウ)もしそむかざれば、內證かならず熟す」

事理不二(フニ)【句】〔佛〕現象と本體とは二にして一實は差別なし。〔諺語〕

じり 自利【名】■みづから利すること。自己の利益。■〔佛〕聲聞(シヤウモン)の行(ギヤウ)、卽ち自身の轉迷開悟を得たるのみにて、未だこれを他人に及ぼすまでの域に達せざるもの。自行(ジギヤウ)。(利他に對して)

自利・利他【句】〔佛〕諸佛菩薩の行(ギヤウ)、卽ち自身の轉迷開悟を得たる上に、なほ他人をも敎化して、その域に進ましむるに至れるもの。自行化他(ケダ)。

しり-あがり 尻上【名】■しりの方のあがること。しりっぱね。(尻下に對して)■語尾の音調を高めること。

しりあげ-むし 尻擧蟲【名】〔動〕『尾端を擧ぐる性あるが故に、この名あり』鱗翅(シウ)類に屬する昆蟲。幼蟲は、紫黑色を呈して、紫綠を交へ、黃毛を密生す。尾端を擧ぐる性あり。薔薇科植物の葉を食害す。

しり-あし 尻足・後足【名】あとあし(後足)に同じ。

尻足を踏む【句】しりごみす。蹉跌す。二の足を踏む。盛衰記「判官は組んでは不レ叶と思ひて、尻足踏んでぞやすらひける」

しり-あて 尻當【名】衣服の、尻の當る部分の裏に、別に縫附けたる布帛。いしきあて。

しり-あひ 知合【名】知合ふこと、又その人。知人。

しりう 支流【名】■枝ながれの川。分流。■分れの家系又は流派。分家。分派。

しりう 士流【名】士人の社會。

しりう 細流【名】『細は細衣(ホソギヌ)の義』僧個の社會。細徒。細林。

じりう 時流【名】『南史の蔡廓傳に「年位輕、而時流所ニ推重ニ」とあり』當今一般の人人。■今日の風潮。當世の傾向。

しりうごつ 後言つ【動四自】しりうごとをいふ。陰にてそしる。〔古語〕紫式部日記「昔は經讀むをだに、人は制しき、としりうごちいふを聞きはべるにも」

しりうごと 後言【名】『後(ウ)言(ト)の音便』かげにて譏ること。かげごと。かげぐち。〔古語〕源氏「あなむくつけきしりうごとや、ほのきこしめしつらん」

じりう 磁流【名】〔理〕『英 Magnetic current』磁氣が磁路を傳はりて流動すること。磁流の強さ【句】〔理〕起磁力の作用によりて、磁路のうちに生ずる指力線の數。

しりう-せん 支流錢【名】寛永銅錢の一。寛永十三年後に鑄造せしもの。徑約八分。

しりうたぐ 蹴ぐ【動下二他】『尻打上ぐの義』尻を掛く。腰を掛く。箕踞。〔古語〕紀「蹴二坐胡床一、シリウタゲテ」

しりうち 尻内【名】陸奥國三戸(サンノヘ)郡上長苗代(カミナハシロ)村の大字。八戸(ハチノヘ)町の西方三哩半。鐵道東北本線の一驛。湊町への八戸支線の分岐點。

しりうちまつり 尻打祭【名】越中國婦負(ネヒ)郡鵜坂神社にて行ふ祭。一鄉の婦女を集め、神主神前に祝詞を奏するや、各その年に觸れし男の數を自せしめ、その數程杖にて打つ。女これを隱せば、神罰ありと信ぜらる。

じりうてっくわう 磁硫鐵鑛【名】〔鑛〕『英Pyrrhotite』鐵及び硫黄より成る鑛物。六結晶をなして產すること少なく、普通には塊狀をなす。銅黄色乃至銅赤色にして、金屬光を有す。

しりうど 知人【名】しりびと(知人)の音便。〔古語〕枕「つき人のしりうどなどは、らたくおぼえて」

しりうま 尻馬【名】次條を見よ。

尻馬に乘る【句】一人の乘りたる馬の後の方に乘る。二人のあとにつきて、物事をなす。

しりえだ 尻枝【名】馬の後足。

しりおし 尻押【名】一坂路を登りゆく時などに、前なる人の尻を押して助くること。二背後にありて助け又は煽(アヲ)つること、又その人。

しりおも 尻重【名】『尻重し』を見よ』

一たやすく立ちあがらぬこと。二動作の輕快ならぬこと。動作の鈍きこと。三せきり(赤痢)及びびやくり(白痢)に同じ。〔古語〕和名「重下、之利於毛、今所謂赤白痢也。言令二下部疼重一故以名レ之」

しりおい 鞦【名】『次條の音便』三がいの一。馬の尻より鞍の方に掛くる組緒。しりがき。

しりがき 鞦【名】『尻掛の義』前條に同じ。〔古語〕和名「鞦、之利加岐」

(いがりし)

しりかくし 尻隱【名】己の過を隱しおほふこと。

しりかけ 尻掛【名】次條の略。

しりかけづな 尻掛綱・後懸綱【名】一舵の尾にかけて、艫床(コドコ)に留むる綱。をかけ。かぢひかへづな。二てんまこみづな(傳馬込綱)に同じ。

しりかせ 尻枷【名】唐鋤の名稱。牛馬に觸るる枷をいふ。

しりがな 尻假名【名】すてがな(捨假名)に同じ。

しりかぶと 尻かぶと【名】しりたぶ(尻膕)を云ふ。〔豐後國の方言〕

しりがほ 知顏【名】知りて居る顏つき。(知らず顏に對して)十訓「知らざる事を、しりがほにもてなさず」

しりからげ 尻紮【名】著物の裾を、帶にはさむこと。しりばしより。一代女「やれ、この領城町とや、見ずには通らじ、と尻からげをおろし」

しりがる 尻輕【名】『尻輕し』を見よ』一動作の活潑なること。二擧止動作のかるがるしきこと。一代女「今ときの娘、さかしくなりて、なかうどをもどかしく、身ごしらへとり急ぎ、乘物待ちかね、尻がるに乘移りて」三女の婬奔なること。

しりがるをんな 尻輕女【名】しりがるなる女。婬奔なる女。

じりき 自力【名】一他より助を借らぬ、自己のみの力。(他力に對して)二(佛)自己の作善修行の効力(キヤウリキ)によりて、悟道を得んとすること。(他力に對して)

じーりき 事力【名】じりよく(事力)を見よ。

じりきけう 自力教【名】〔佛〕自己の力を用ひて、佛果を求むることを教ふる法門。自力門。聖道門。難行(ナンギヤウ)道。(他力教に對して)

じりきーしゅう 自力宗【名】〔佛〕自力教を主とする宗門。即ち天台宗・華嚴宗・眞言宗・禪宗の類。(他力宗に對して)

じりきーねんぶつ 自力念佛【名】〔佛〕念佛の功德を淨土に廻向(エカウ)して、往生せんとすること。(他力念佛に對して)

じりきーほふもん 自力法門【名】〔佛〕じりきけう(自力教)に同じ。

じりきもん 自力門【名】〔佛〕じりきけう(自力教)に同じ。(他力門に對して)

しりきり 尻切【名】しりきれ(尻切)に同じ。

しりきりーがな 尻切寄居蟲【名】〔動〕『がうなはやどがりの別稱。その體の後半部痩せて小さきより、尻切といふなるべし』やどがり(寄居蟲)に同じ。

しりきりとんぼ 尻切蜻蛉【名】物事の始ありて終なき譬。

しりきりばんてん 尻切半纏【名】その裾が尻の邊に達するほどの短き半纏。

しりきれ 尻切【名】次條(一)の略。參照「しりきれのやれたるはきて」

しりきれざうり 尻切草履【名】一尻の方の切れたる如く造る藁草履。くつきり。しきり。しきれ。あしなか。二古くなりて、鍾の方の切れし草履。

しりぐさ 尻草【名】〔植〕みつかさ(三稜)に同じといへど、詳かならず。〔古語〕萬葉「みなと葦にまじれる草のしりぐさの人みな知りぬわがした思ひ」

しりくせ 尻癖【名】一大小便をもらすなどの癖。二情事に關するわろき癖。みだらなる癖。浮世床「もちろん、亭主の尻癖が悪いとは云ひながら」

しりくち 後口【名】後方と前方と。うしろと前と。あとさき。しりさき。枕「それに懷きて尼の車、しり口より、すゐさうのずず、うすずみのけさ・きぬなどいみじくて」

しりくべーなは 注連【名】次條に同じ。〔古語〕和名注連、之利久倍奈波」

しりくめーなは 尻久米繩・注連【名】『しりは本(モト)、くめは籠(コ)の義にて、藁のもとを切らぬ意。一說に、著(ク)く見え繩の義なりと』古、藁を引きわたして區劃とし、そのうちに入るを禁ずる標(シルシ)としたもの。後清淨にする意にて、神前に引渡し、又は新年等の飾に用ふ。しめなは。しとたち。

しりくらいーくわんおん 後暗觀音【名】『尻食(シリクラ)觀音とも書き、本義明かならねども、一說に、藥師の緣日は八日にて、その前日は卽ち七日、また地藏の緣日は二十四日にて、その後日は、卽ち二十五日なるより、古の諺に、暗夜のことを、藥師の前、地藏の後といへり。きて尻暗いとは、地藏の後といふに同じく、六觀音の緣日を、十八日より二十三日までの日數に配當して、その緣日の後は暗夜にて、暗しといふことなりとも、また兎は前足短く、後足長きが故に、坂路の上りは易く、下りは困難なるが故に、下る時は南無觀世音と唱へ、上りは得手なれば、前の恩を忘れて、尻食らへ觀音と罵りつつ上るなりともいふ』一くわんおん(觀音)に同じ。二恩を仇にして返すこと。

しりくらし 後暗【形一】うしろぐらし(後暗)に同じ。

しりくらひーくわんおん 尻食觀音【名】しりくらいくわんおん(後暗觀音)を見よ。

しりけ 知氣【名】知りたる樣子。著聞「我れを笑ふとは知りげもなくて」

しりげ 尻毛【名】尻に生じたる毛。

尻毛を抜く【句】油斷に乘じて、からき目を見しむ。

しりげた 尻下駄【名】うまげた(馬下駄)に同じ。

しりけた 尻桁【名】尻の出張りたる部分。一代女「時代(ヤウ)ればとて、今時の女、尻桁に掛けたる端紫(ハシタ)の鹿子帶、目にしみわたりて、さりとてはいや風なり」

しりけん 手裏劍【名】しゅりけん(手裏劍)の訛。

しりーこけ 尻轉【名】帶などを尻のさきの方へ結ぶこと。

しりーこし 尻腰【名】こし(腰)二に同じ。

しりーこそばゆし 尻こそばゆし【句】しり(尻)の條下を見よ。

しりごだま 尻子玉【名】昔、肛門の蓋なりと想像したる物。河童(カツパ)はこれを拔取る性ありと、言傳へたり。

しりーこぶた 尻小端【名】しりたぶ(尻膕)に同じ。豐生嗣田川「九寸五分するりと拔いて直と突出し、太股を突かうか…尻こぶたを突かうか」

しりーこぶら 尻膕【名】前條に同じ。

しりごみ 後込【名】しりごむこと。あとじさり。大鏡「さしもの猛虎、毛を伏せて、

じりじりとしりごみす」

しり-ごむ 後込む【動四自】しりごみをなす。逡巡す。

しり-ごゑ 尻聲【名】あとを引く聲。聲のをはり。芭蕉「ひいと鳴く尻聲悲し夜の鹿」同「船頭の尻聲悲し秋のくれ」

しり-さがり 尻下【名】尻の方のさがること。尻の方へ下ること。(尻あがりに對して) 國姓爺「尻さがりに引入る」

しり-さき 後前【名】まへうしろ。あとさき。ぜんご。しりくち。撰集抄「人しりさきに立ちて、笑ひなぶりけり」

しり-さし 尻刺【名】遣戸の尻に刺して、明かぬやうにするもの。しんざし。類政集「聲ばかり通ふやりどのしりざしをなほたのまぬか無き心地する」

しり-さま 後方【名】うしろの方。あとの方。しりへ。

しり-さや 尻鞘【名】毛皮・韋又は布にて製し、太刀の鞘を包むに用ふるもの。濕氣を防ぐために施すといふ。しんざや。しざや。保元「三尺五寸の太刀に、熊の皮の尻鞘入れ」

しり-さら 尻皿・後盤【名】盃を載する臺。和名「臺子、志利佐良」

じり-しゅぎ 自利主義【名】(哲) りこしゅぎ(利己主義)に同じ。

じり-じり【副】 一 徐徐に押進むさま。じりじり。心中萬年草「九兵衛もじりじりと、門の方へあとしさり」 二 癇癪を起して悶ゆるさま。

しり-すぼまり 尻窄【名】 一 尻の方の細くすぼみたること、又その物。 二 始に勢よくして、終に衰ふること。

しり-すゑ 尻居【名】椀の下に据ゑおく小壺。形、平茶臺(ヒラヂヤダイ)に似たるもの。明月記「已上樣器有二尻居一」

しり-ぞく 退く【動四自】 一 後(シリ)へ退(ソ)くの義』後の方へひき下がる。下の方にくしぞく。しさる。 二 まかる。歸る。 三 職務などを辭す。源氏「しりぞきて、とがなしとこそ、昔のさかしき人もいひおきけれ」 四 (りくだる。謙遜す。

しり-ぞく 退く【動下二他】『後(シリ)へ退(ソ)くの義』 一 うしろへひき下がらす。引かす。さく。 二 追ひやる。おひかへす。 三 遠ざけて用ひず。[反く] 四 現地位よりくだす。おとす。[反く] 五 ことわる。謝絶す。

しり-たがひ 尻違【名】觿の一部の名。

しり-だこ 臀胝【名】猿の臀部に存する、皮厚き無毛の部分。樹上に坐する際、その摩擦を防ぐ効あり。

しり-だすき 尻繦【名】痩せたるものをいふ。

しりたたき-まつり 尻叩祭【名】いはくらまつり(岩倉祭)を見よ。

しり-だな 尻棚【名】けだな(下衆棚)に同じ。

しり-たぶら 尻膨・尻【名】臀の肉。しりこぶた。しりこぶら。[古語] 字鏡集「尻、シリタブラ」

しり-たむら 尻膨・尻【名】前條の轉。[古語] 和名「尻片之利太无良、今鳥獸之尻也」

しりつ 私立【名】『立の字の音、正しくはりふ』一私人にて設立し維持すること。(官立・公立に對して)

しりつ 市立【名】『立の字の音、正しくはりふ』市にて設立し維持すること。

しりつ 詩律【名】詩を作る規則。詩の音。

じりつ 自律【名】みづから身を律すること。自己の欲情を制すること。自則。

じりつ 自立【名】『立の字の音、正しくはりふ』自力にて立つこと。いっぽんだち。

じりつ 而立【名】『論語の爲政篇に「吾十有五而志二于學一、三十而立」とあり。立の字の音、正しくはりふ』三十歳の異稱。

しりつ-がくかう 私立校【名】次條の略。

しりつ-がくかう 私立學校【名】一私人の力にて設立し維持する學校。私立校。(官立學校・公立學校に對して)

しりつ-ぎんかう 私立銀行【名】一私人又は團體の設立・經營する銀行。(國立銀行に對して)

しりつき 尻付【名】尻の恰好。

しりつけ 尻附【名】しづけ(尻附)に同じ。

しりつけこうま-のほそめ 尻付小馬の細目【句】ほそめ(細目)の條下を見よ。

しりつ-こけ 尻轉【名】しりこけ(尻轉)の音便。

しりつ-ど 後戸【名】『つは領格の助辭』しりの方の戸。(前つ戸に對して)[古語] 記「しりつどよいゆきたがひ」[同じ。

しりつな 尻綱【名】さしさしなは(差差繩)に(尻端折)の誂。

しりつ-ばしより 尻端折【名】しりはしをり

しりつ-ばね 尻跳【名】 一 しりあがり(尻上)に同じ。 二 腹物(ハラモノ)の尻に附きたる泥などの衣服にはねあがること。「尻っ跳が上がる」 三 物價の相場が、後になるほど高値になること。[便。

しりつ-べた 尻邊【名】しりべた(尻邊)の音便。

しりつ-ぽ 尻尾【名】『しりを(尻尾)の誂』しっぽ(尻尾)に同じ。

しりつ-みかど 後門【名】『つは領格の助辭』後方の門口。うしろ口。[古語] 記「後門、シリツミカド」[門]に同じ。

しりつ-むじ 尻旋毛【名】こうさうもん(後喪門)に同じ。

しりつ-わ 尻輪【名】『つは領格の助辭』しづわ(後輪)に同じ。

しりど 尻戸・後戸【名】後方にある戸。

しりどう 尻銅【名】〔鑛〕銅鑛熔錬の際、爐の底部に殘る粗銅。殊に銅鉱(ドウ)再製煉の時、これを得るを常とす。

しりとり 尻取【名】多人數集り、順次に他人の語の最後の音を取りて、更に他の語に言ひつづくる遊戯。例へば、一人がたかといへば、他の一人がかめといひ、また他の一人がめじろといひつづくるが如し。

しりとり-もんく 尻取文句【名】尻取にいふ文句。

しりなが 尻長【名】『「尻が長い」を見よ』長居(ナガヰ)すること。ながっちり。

しりながえ 後轅【名】こびのを(轅尾)に同じ。[古語] 大鏡「殿上人は、御車のしり、ながえのかたに候ひたまふ」

しりぬく 知抜く【動四他】よく知る。よく明らむ。委しく知る。熟知す。

しりぬぐひ 尻拭【名】『「尻を拭ふ」を見よ』人の仕損じたるあとを治めととのふること。

しりぬけ 尻抜【名】『「尻から抜ける」を見よ』 一 見るもの聞くものにつけて、直ちに忘るること。 二 物事のまとまりのつかぬ事跡。仕末のつかぬ事。

しりぬけ 尻抜(スジリ)【句】『尻抜とは、魚を呑込みても、ただちに尻へ抜け去る意』よく物忘れすること、又その人。

しりぬけ-の-ほね 尻骨【名】腰部の骨。名義抄「髁、シリノホネ」

しりぬけ-の-やまひ 尻病【名】ち(痔)に同じ。

しりはしをり 尻端折【名】『「尻を端折る」を見よ』衣の裾をかかげて、帶に插むこと。しりっぱしより。

しりはな 尻鼻【名】尻と鼻と。一説に、尻のさきといふ意ならんと。宇治「その男がしりはな、血あゆばかり、必ず蹴たまへ」

しりばや 尻早【名】うしろの方より急(キビ)立てられて進むこと。蜻蛉「さきなる車は尻ばやに追はれて、人人わびにたり」

しりはら 尻腹【名】あさばら(後腹)[二]に同じ。[古語] 和名「新撰要方云、婦人産後腹痛、俗云二之利波良一」

しりばり-ぶろ 尻張風爐【名】茶道にて、湯を沸す風爐の一。

しりび 後火【名】 一 風上の方へ燒け移る火。 二 火災の燃えひろがりたる末。

しりび 後干【名】末の弱くなること。歌の結句の力弱きこと。[古語] 源氏「すぐせのひく方にて、なほなほしきことにありありて靡く、いとしりびに、人わろきことぞや」

しりびかし 後引かし【形二】前へ押進むべき物を、反對にあとへ引きよせたく思ふ。[古語] 萬葉「あしがりのあきなの山のひこ船のしりびかしもよこはこがたに」

しりびき 尻引【名】乘れる馬を後方へ引下らしむること。[馬術の語]

しりひき-むし 尻引蟲【名】[動] あぶさし(後退)[二]に同じ。

しりびと 知人【名】知合の人。しりうど。

しりびれ 臀鰭【名】魚類の肛門の後にあ

る鰭。

しりふかず 尻不拭【名】あと始末をせぬこと、又その人。

しりぶくら 尻膨【名】茶壺の一種。肩はやや肩衝(カタツキ)に似て、下部に至るに従ひて膨みたるもの。

しりぶさ 尻房【名】次條に同じ。〔古語〕字鏡「臀。尻不佐」

しりぶた 尻蓋【名】**しりたぶら**(尻臗)に同じ。〔古語〕字鏡「屪、シリブタ」

しりぶり 痞【名】**りびやう**(痢病)に同じ。〔古語〕字鏡「痞。痢病也。尻夫利」

しりぶり 後振【名】うしろ姿。うしろつき。〔古語〕萬葉「里人の見るめはづかしさぶる子にさとはす君がみやでしりぶり」

しりへ 後方・後【名】『尻方の義にて、目方(メカタ)の義なる、前に對せしめたる語なりといふ』あとのかた。うしろ。

後に瞠若たらしむ【句】『だうじやく(瞠若)を見よ』後方に引下りて、目を見張るほどに驚き感ぜしむ。

後の園【句】**こうゑん**(後園)に同じ。〔古語〕夫木「後園若菜。かたくなやしりへの園に若菜つみかがまりありく翁婆よ」

後の庭【句】**こうきゆう**(後宮)に同じ。〔古語〕赤染衛門集「すべらぎのしりへの庭の石こそは拾ふ心ありあゆがさで取れ」

後の政【句】後宮の政事。皇后のなしたまふ御しわざ。〔古語〕續紀「於二天下政宜一而、獨知倍伎物不レ有、必毋斯理幣能政(シルベノマツリ)有倍之」

後の宮【句】**こうきゆう**(後宮)に同じ。

しりへさま 後方【名】うしろの方。〔古語〕源氏「しりへざまにねざりしぞきて」

しりべし 後志【名】〔地〕北海道十一國の一。小樽區及び久遠(クドウ)・奥尻(オクシリ)・太櫓(フトロ)・瀬棚・島牧・壽都(スッ)・歌棄(ウタスツ)・磯谷・岩内(イハナイ)・古宇(フルウ)・積丹(シヤコタン)・美國(ビクニ)・古平(フルビラ)・餘市・忍路(オショロ)・高島・小樽の十七郡よりなる。久遠以下の四郡は檜山支廳、島牧以下の十三郡は、後志支廳の所管とす。

しりべしがは 後志川【名】〔地〕北海道五大川の一。源を石狩・膽振兩國界の漁嶽(イサツ)山脈に發し、後志山の麓を繞り、後志國磯谷(イソヤ)郡尻別(シリベツ)村に至りて、海に入る。長さ三十六里半。一名、尻別川。

しりべしにっき 後方羊蹄日記【名】〔書〕安政五年、蝦夷後方羊蹄に至りし時の地誌上の日記。一卷。松浦武四郎の著。

しりべしやま 後志山・後方羊蹄山【名】〔地〕膽振國虻田(アブタ)郡にある休火山。高さ六、二四七尺。山容秀拔にして、蝦夷富士の名あり。

しりべた 尻邊【名】しり(尻)㊀に同じ。〔俚語〕蕪村「行く春の尻べた掃ふ落花かな」

しりべつがは 尻別川【名】〔地〕**しりべしがは**(後志川)に同じ。

しりへて 後手【名】うしろて(後手)㊁に同じ。〔古語〕參考「繩をつけて、しりへに縛り」

しりぼね 尻骨【名】尻の骨。字治「碁盤の足のいかりさしあがりたるに、しりぼねを荒うつきて」

しりまひ 尻舞【名】人の後に立ちて、物事をすること。人のまねをすること。〔古語〕盛衰記「さしもの名人の、思ひかけず、尼公の尻舞して、晴の振舞こそ人ならぬ」

しりむた 尻むた【名】**しりたぶら**(尻臗)に同じ。〔古語〕

しりん 四隣【名】㊀四方の隣。あたり近所。㊁前後・左右の人人。

しりん 詞林【名】『林は數の多き譬』㊀詩文を集めたる書。㊁詩人・文士の社會。文壇。文界。

しりん 士林【名】士たる身分の社會。

しりん 綱林【名】〔佛〕『林は數の多き譬』しりう(綱流)に同じ。盛衰記「凡そ綱林の乙甲をあらはすは、則ち是れ兄弟の諍なり」〔略〕

しりん 私林【名】私有の林。

しりん 尸林【名】〔佛〕**しだりん**(尸陀林)の略。

しりん 支輪【名】〔建〕斜に上下をなせる二つの横木の間に、支柱として設けたる竪の木。

しりん 施林【名】〔佛〕**やさう**(野葬)㊁に同じ。

しりん (英 Cylinder escapement の略)【名】特殊の裝置ある懐中時計の機械の一。圓錐形の小鋼鐵管の回轉により、齒車を規則的に進行せしむるもの。

しりん 絲綸【名】**りんし**(綸旨)に同じ。東鑑「殊被レ下二絲綸一畢」

しりん 四輪【名】〔佛〕大地下に在りて、世界を擔(モ)ぐといふ四種の大輪、即ち金輪(コンリン)・水輪・風輪・空輪。

じりん 字林【名】多くの文字を集め、又はこれに解釋を施したるもの。

じりん 辭林【名】『林は數の多き譬』じしよ(辭書)に同じ。「よ。

しりんぐ (英 Shilling)【助數】しるりんぐを見よ。

しりん-さいえふ 詞林采葉【名】〔書〕萬葉集の中の名所・枕詞・故事等を註せるもの。十卷。僧由阿の著。

しりん-しや 四輪車【名】四つの輪を有する車。

しりんだあ (英 Cylinder)【名】種種の機械の中に裝置しある圓筒。しりんどる。汽筒。

しりんどる (英 Cylinder)【名】前條に同じ。

しりんわう 四輪王【名】〔佛〕てんりんわう(轉輪王)を見よ。

しりーめ 後目・尻目【名】㊀怨恨・輕蔑等の心を抱く時など、目尻の方に瞳をよせて見ること。ながしめ。源氏「いとねたげなるしりめなり」㊁目尻の方より見ゆる範圍に入りくること。今國姓爺「睨んでくれんと、頭の上に立ちかかり、睨む尻目に母の苦痛」

尻目に掛く【句】輕蔑の意にて、尻目に見る。醒睡笑「尻目に掛けて、さらぬ顏にて通りけるが」

尻目を使ふ【句】しりめにて物を見る。

しりめ-づかひ 尻目遣【名】しりめをつかふこと。

しりーもぐり 尻潛【名】一たび敗へたる事などを、直ちに忘ること。しりぬけ。

しりーもち 尻餅【名】昔、江戸の習俗に、小供生れて一歳に滿たずして歩ける時、搗きし祝の餅。次條參照。

尻餅を搗く【句】㊀喜びて小をどりする意ならんといふ。毛吹草「面白と尻餅つき(搗月)の跳かな」㊁後方へ倒れて、腰をつく。

しりやう 思量【名】思ひはかること。思慮。

しりやう 資糧【名】道中の用に供するかて。

しりやう 私領【名】㊀私の領分。㊁大小名の領地。(天領に對して)

しりやう 死靈【名】死人の魂の、人に憑りて、禍するもの。惡靈。

じりやう 寺領【名】寺の領地。

じりやうち 寺領地【名】寺院の領せる土地。

じりやく 資略【名】天性才略あること。

しりやく 誌略【名】簡略に記したる記錄。

しりやく 史略【名】簡略に記したる歷史。

しりやけざる 尻燒猿【名】『尻に火が附く』を見よ』落ちつかぬ人を嘲りていふ語。ちよこざい。

しりや-さき 尻矢崎・尻屋岬【名】〔地〕陸奥國下北半島の東北角。津輕海峽の東口角たり。北北東に向ひて突出すること二里餘。

しりよ 思慮【名】かんがへ。おもんばかり。思考。吉野忠信「元來浮氣の思慮なしざし。

しりよ 志慮【名】おもんばかり。こころ

しりよ 師旅【名】『師も旅も、支那古代の軍隊の人員の數を示す語』㊀ぐんたい(軍隊)に同じ。㊁へいえき(兵役)に同じ。

しりよく 士力【名】士の氣力。士氣。鎌田兵衛名所盃「良將の軍を統ぶるや、惠を推し、恩を施し、士力日日に新にして、戰ふこと風の發するが如く」

しりよく 資力【名】資本の金。財產の能力。

しりよく 死力【名】死をも厭はずして出す力。必死の力。

しりよく 視力【名】眼にて物を見る力。眼力。

しりよく 四綠【名】しろく(四綠)を見よ。

じりよく 事力【名】㊀古、太宰帥(ダザイノカミ)及び國守に對して、その職分田耕作の必要上、朝廷より貸與せし耕民。㊁王朝時代に、天皇より地方官に賜はりし舍人。

じりよく 磁力【名】〔理〕『英 Magnetic force』磁氣に基く力、即ち磁極の同名の者が相斥け、異名の者が相引く力。極に近づく

に従ひて大にして、そのCGS式絶對單位をガウスと呼ぶ。磁氣力。

磁力の強さ【句】〔理〕磁界内の一點において、單位磁氣に働く力。磁界の強さ。磁場の強さ。

磁力の場(ば)【句】〔理〕じばやう(磁場)に同じ。

じりよく-けい 磁力計【名】『英 Magnetometer』磁力の強さを計る器械。

じりよく-せん 指力線【名】〔理〕『英 Lines of force』磁場又は電場に於て、磁力又は電力の作用に依りて、物體の動くべき徑路。即ち磁場又は電場の各點において、磁力又は電力の方向に引ける極めて短き線の相連なりて成すべき想像上の曲線。次條及びでんきじりよくせん(電氣指力線)參照。

じりよく-せん 磁力線【名】〔理〕『英 Lines of magnetic force』磁場に於ける磁力の方向を示す線、即ち磁力の指力線。棒磁石の近傍の各所に小磁石を置けば、各の磁針は各の點における磁力の方向に從ひて靜止し、また強き磁石の上に硝子板を載せ、その上に鐵粉を散布して輕く板を叩けば、鐵粉は磁力の方向に連絡し、指力線とほぼ一致せる無數の曲線を作る等によりて、これを實驗的に知ることを得。磁氣指力線。じろ(磁路)參照。

じりよく-せんくわうはふ 磁力選鑛法【名】鑛物の磁氣に對する性質の差異に依りて選別する法。

しりよく-ほしようれう 資力保證料【名】〔商〕うりさしりよくほしようれう(賣先資力保證料)の略。

しりより-くち-より-こく-やまひ 尻より口よりこく病【名】くわくらん(霍亂)に同じ。和名「霍亂、利與理久智與理古久夜萬比」

じりり-じりり【貌】じりじりに同じ。蟹牛隅田川「じりりじりりとつけまはせば、身をひやし、身をちぢめ」

しりわ 尻輪【名】しつわ(後輪)に同じ。傳元「鐙の草摺の尻輪懸けて、矢先三寸餘り

ぞ射通したる」

しりわ 尻居【名】尻餅をつくこと。著聞「高遠その轡を持ちながら、しりゐにまろびぬ」

しりを 尻尾【名】しっぽ(尻尾)に同じ。

しる 汁【名】■物よりしみいで、又は物を搾りて、取りたる液。■酒。祝詞「廷の腹みてなべて、汁にも穎にも、稱辭竟へまつらむ」■すひもの。つゆ。■みそしる(味噌汁)の略。■しるこう(汁講)の略。

汁の汁【句】饗應の時、本膳の汁を吸ひて、直ちに二の膳・三の膳の汁を吸ふこと。

汁の物【句】しるもの(汁物)に同じ。

しる 煮【句】共にたくむ。〔俚語〕

旨(うま)い汁を吸ふ【句】他人と他人との間に立ちて、獨り勿に利益を占む。

しる 醐【名】『前條の語の意の轉』うすき酒。〔古語〕和名醐、之流、一云三毛曾呂、酒薄也」

しる 繩流【名】〔佛〕しりう(繩流)に同じ。

しる 知る【動四他】■さとる。こころう。みとも。〔識る〕■交りて親しむ。千載「もとしりて侍りける男の、こと人に物申すときゝて」■すべをさむ。つかさどる。統治す。領す。しらす(知らす)・しろす(知ろす)・しらしめす(知食す)參照。〔古語〕源氏「兵部卿の宮の北の方こそは、しり給ふべければ」

知った同志は涼しい【句】親密に交際して、氣心の知れたる人は、互に心もちがよし。〔諺語〕

知った中は涼しい【名】前條に同じ。

知ら【句】「知らん」の略。「行ったかしら」「降るかしら」

知らざるを知らずせよ、これ知れるなり【句】『論語の爲政篇に「子曰、由誨二女知レ之乎、知レ之爲レ知レ之、不レ知爲レ不レ知、是知也」とあるに本づく』知らぬことは知りたるふりをせずして、知らずとするがよし。〔諺語〕

知らずば人に問へ【句】知らぬことは、恥づることなく、人に教を乞ふべし。

知らに【句】知らずに。知らずして。〔古語〕萬葉「いはむすべせんすべしらに」

知らぬ顔【句】心付かぬやうす。

知らぬが佛(ほとけ)【句】何事も知らざれば煩惱も起らず。見ぬ事清し。〔諺語〕

知らぬ顔の半兵衛【句】なにげなき顔して取りすますこと。〔諺語〕

知らぬ神に祟(たた)なし【句】何事にも初より關係せざれば、後に累(つみ)なし。さはらぬ神に祟なし。〔諺語〕

知らぬ京物語【句】「見ぬ京物語」に同じ。〔諺語〕

知らぬ米商(こめあき)より、知った糠商(ぬかあき)【句】次條に同じ。〔諺語〕

知らぬ佛より、馴染(なじみ)の鬼【句】馴染たるものは惡しくとも、知らぬものより善きことの譬。

知らぬ世【句】■見知らぬ世界・見知らぬ國。■見知らぬ過去の世。

知らん【句】知るの將然言。「行くかしらん」「降るかしらん」

知る所【句】所領の地。知行所。〔古語〕伊勢「津の國に知る所ありけるに」

知る人【句】しりびと(知人)に同じ。字治「後は、常に行通ひつつ、知る人になんなりにける」

知る者は言はず、言ふ者は知らず【句】『老子に「知者不レ言、言者不レ知」とあり』能く知りたるものは狼狽に多く語らず、知らざるものは却りて喋喋と語るものなり。〔諺語〕

知る由して【句】知る所(即ち知行所)のある由にて。〔古語〕伊勢「昔、男うひかうぶりして、奈良の京春日の里に知るよしして、狩にいにけり」

素知らぬ【句】すこしも知らず。「そしらぬけひ」「そしらぬ顏」

自(みづか)ら知るの明(めい)【句】『老子の第三十三章に「知人者智、自知者明」とあり』おのれを自覺する才識。

しる 知る【動下二自】他よりわが事を知らる。拾遺「春の野にあさる雉子のつまごひに己がありかを人に知れつつ」

知れた【句】たかの知れたる。恐るるに足らぬ。狂言「蟹山伏」きやつは、しれた蟹ぢやは」

知れた事【句】說明するまでもなき事なり。狂言「盜人」それは奇麗でよからうが、貸代はなんぼ取るのぢや。△しれた事、一度が八文よ」

しる 【動下二自】たはむる(戯る)に同じ。〔豐後國の方言〕

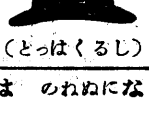
しる-あめ 汁飴【名】みづあめ(水飴)を云ふ。〔西の方言〕

じるい 【形】『しるの訛』道路が乾かず。〔關畿内の方言〕

しるえっと (佛 Silhouette)【名】しるあつとに同じ。

しる-がゆ 汁粥【名】かゆ(粥)に同じ。(かた粥に對して)〔古語〕和名「粥、之留加由、薄糜也」

しるくはっと 絹帽(英 Silk-hat)【名】西洋風の男子の禮式用帽子。圓筒形にて、上部に至るに隨ひ、次第に開き、高さ五寸位に及ぶ。鍔(つば)の反(そり)には、圓線・方線等あり。地質は黑き絹織の光澤あるものを用ふ。



(とっはくるし)

しるけし 著けし【形二】しるし(著し)に同じ。〔古語〕萬葉「かみなびのあさしぬ原のをみなへしなべる君が靡のしるけく」

しるけっと 擬絹絲(英 Silket)【名】絹絲を苛性曹達液にて處理し、水洗したる後、更に硫酸の稀薄液に入れて濯ぎ、後又よく水洗したるもの。絹狀光澤を有し、染料(殊に直接染料)に對する吸收力增加するが故に、上等の綿(わた)織物の原料として用ひらる。英人マアサア(J. Mercer)の發明に係る。

しるけっと-いと シルケット絲【名】前條に同じ。

しる-こ 汁粉【名】しるこもち(汁粉餅)の略。

しる-こう 汁講【名】來客おのおの飯を面桶(めんつう)などに入れて携へ來り、亭主はただ汁一種のみを、鍋の儘に座敷に持出でて供する會食。平安朝中期に流行せし饗次(きやうじ)の餘風にして、質素を旨とせし時代に行はれたり。

じるこにうむ（英Zirconium）【名】【化】稀有元素の一。ジルコンに含まるるもの。その弗素カリウム化合物をアルミニウムと共に高温度に熱し、還元して製すれば、銀灰色葉狀結晶の金屬となりて出で、またナトリウムにて還元すれば、黒色非晶形の粉末となる。この粉末狀ジルコニウムは、水に入りて膠溶を作す性あり。然し結晶せるジルコニウムは溶解し難く、また化學耐性強く、高温度にて、初めて他物と化合す。

しるこぼし 汁溢【名】下掃除を運搬する船。こえとろぶね。〔八笑人〕三園のがん木に、しるこぼしが一艘ついて居やす」

じるこん（英Zircon）【名】【鑛】ジルコン土と硅酸とより成る鑛石。結晶は正方晶系に屬し、小柱狀をなす。硬度は七五。透明又は半透明にして、灰色・褐色等を呈し、赤くして美しきは、裝飾用に供せらる。シイロン（Ceylon）島・ウラル（Ural）山脈等、また我が國にては臺灣基隆（キイ）附近の河中に産すれども、極めて稀なり。

しるこもち 汁粉餅【名】餡を煮て、汁となし、それに餅を入れたる食品。しるこ。古今百馬鹿「汁粉餅を食ひに往かうと誘ふ」

しるし 印・標・徴【名】一見分くるための特異なる形象。めじるし。二證據となるもの。あかし。三紋所。徽號。徽章。又それを附けたる旗などの類。門出八島「しるしばかりを立てたるは、旗下の母衣大將熊谷殿の陣所なり」四物事の前兆。きざし。そのやうす。けはひ。五きまり。げん。六かひのあること。萬葉「み民われ生けるしるしありあめつちのさかゆる時にあへらく思へば」八くび。首級。

しるし 標の石【句】はかじるし。墓碑。銕砂加留多「法名つけば死人なり、おもりの石はしるしの石」

しるし 標の帶【句】いはたおび（祝帶）に同じ。源氏「かのはちたまふしるしの帶のひきゆはれたるほど」

しるし 標の烟【句】烽火の烟・のろし。狼烟。〔古語〕新勅撰「淡路島しるしのけぶり見せわびて霞をいとふ須磨の浦人」

しるし 標の棹【句】古、雪降る時、さしおきて、その積りゆく深さを測りし棹。〔古語〕山家「ねわたしにしるしのさをやたてつらんこひの持ちつる越（コシ）の中山」

しるし 標の杉【句】『古今集の「わが庵は三輪の山本こしくばとぶらひ來ませ杉立てる門（カド）」といふ歌より出でたる語』訪ひに行く家の門のしるし。〔古語〕狹衣「たづねみるしるしの杉もまがひつつなほかみ山に身やまどひなん」

しるし 標の鈴【句】鷹狩の時、鷹に結び附けて、標とせし鈴。

しるし 標の太刀【句】古、征討の折、天皇より大將軍に賜ふ太刀。標の劍。

しるし 標の劍【句】前條に同じ。

しるし 印・璽【名】一おして。印（イン）。紀「跪上二天皇之璽一（シヂ）」二三種の神器の中の神璽。

しるし 璽の箱【句】神璽を納むる箱。續古事談「しるしの箱のからげを解きて、明けんとしたまひければ」

しるし 記・誌【名】記すこと、また記したるもの。記錄。

しるし 著し【形一】明らかなり。きはだちてあり。あらはなり。いちぢるし。しるけし。萬葉「雲だにもしるくし立たばなぐさめに見つつしをらむただにあふまで」

しるし 【形一】泥深し。ぬかりてあり。宗五大草紙「道のしるき時は、…沓をはくべし」

しるし 印【接尾】事物の名の頭の音に添へて、その事物を隱語的にいふに用ふる語。「まるじるし（金錢）」「きじるし（氣狂）」などの類。

しるしがね 印金【名】昔、行はれし金と錢との空相場、又これを利用せし取引。

しるしちやう 首帳【名】くびちやう（首帳）に同じ。甲陽軍鑑「百七十二のしるし帳をもつて、同じ子の時、勝時をとりおこなひたまふ」

しるしづけ 印附【名】印を附くること。印附の環（ワ）【句】帶胴金の所にありて、槍印を附くる環。領城島原蜂谷戰「七郎は印つけの環をかけて握つたり」

しるしばかり 印許【副】いささか。しばし。わざとばかり。源氏「小鳥、しるしばかりひきつけさせたる萩の枝など、つとにして」「旋。

しるしばた 標旗【名】目じるしに立つる山本こしくばとぶらひ來ませ杉立てる門（カド）」といふ歌より出でたる語』訪ひに行く家の門のしるし。〔古語〕狹衣「たづねみるしるしの杉もまがひつつなほかみ山に身やまどひなん」

しるしばんてん 印半纏【名】紺木綿にて仕立て、襟には屋號又は會社名等を、背の中央には種種工夫を凝したる崩模様を染抜きたる半纏。

しるしばり 印針【名】形、唐針に似て、それよりも品質良く、製作も丁寧なる縫針。事ら仕立屋にて用ふ。「ふだ。

しるしふだ 標榜【名】目じるしに用ふる

しるしもくろく 首目錄【名】くびちやう（首帳）に同じ。

しるしもの 標物【名】證とすべき物。紀「表物、シルシモノ」

しるす 記す【名】一書きつく。記錄す。「誌す・識す」源氏「何事も、人にことなるけぢめをば、しるし傳ふべきなり」二心に覺えおく。記憶す。記す。

しるす 標す・徴す【動四他】一目じるしとす。名義抄「標、シルス」二前兆となる。兆候を示す。

しるすーつかさ 外記【名】げき（外記）に同じ。和名、大外記、於保伊之流須豆加佐」

しるたにごえ 滑谷越・濇谷越【名】【地】『山經常に濕へるによりて、滑谷の名ありといふ』京都の五條橋より阿彌陀峯の北、清水（キヨミヅ）の南なる山徑を經て、山科（ヤマシナ）に出づる通路。古稱、久良岐路（クラキヂ）・苦集滅道（クジメツダウ）。今は又訛りて、濕谷（シヅタニ）越といふ。

しるたにーやき 滑谷燒【名】京燒の一種。滑谷にて燒きたるもの。世に稀にして、窯（カマ）の所在も明かならず。

しるーへ 後方【名】しりへ（後方）に同じ。〔東國の古の方言〕萬葉「ゆこさきに浪なゐらひしるへには子をら妻をら置きてらも來（キ）ぬ」

しるーべ 導【名】『知方の義』一みちびき。指南。案内。源氏「うばそくがおこなふ道をしるべにて來（コ）ん世も深きちぎりたがふな」二行く道の案内、又その案内する人。みちしるべ。導者。鄉導。曾我扇八景「この虎御前を賴み、十郎樣へ申込み、御勘當の詫事のしるべのためと逢初め」

しるーべ 知邊【名】知合の人。親しき人。

しるーべがほ 導顏【名】案内せんとするがごとき樣子。十六夜濱千鳥いと多く先立ちて行くも、しるべ顏なるここちして」

しるまし 【名】怪しき前兆。〔古語〕起怪、シルマシ」

しるーもの 汁物【名】あつもの。つゆもの。汁の物。盃もてくるや遲きと、しるものとりて、みな飯みて」

しるりんぐ 志（英Shilling）【助數】『しりんぐの訛』英國の金額の單位。一磅（ポンド）の二十分の一。我が國の約四十八錢八厘に當る。

しるりやき 志留利亞紀（英Silurian Period）【名】【地】『古、主として、英國の一部なる南ウエルス（Wales）に住せし民族シルレス（Silres）の名に基く名稱』地質時代の一。古生代中、寒武利亞（カンブリア）紀と泥盆（デボン）紀との中間に位す。次條參照。

しるりやけい 志留利亞系（英Silurian system）【名】【地】地質系統の一。シルリヤ紀に生成せる地層の總稱。粘板岩などこの紀に屬し、植物は海藻類のみにて、動物は軟體動物・珊瑚・筆具などあり。魚類もこの紀に始めて現れたるを認む。

しるーわん 汁椀【名】汁物などを盛るための椀。醒睡笑「ちご、しるわんに酒を受けられたり」

しるゐ 士類【名】士人の一類。士人のなかま。

しるゐ 支類【名】支族の一類。支黨。

しるゐ 齒類【名】『齒は、よはひ（齒す）を見よ』なかま。同族。

しるえっと（佛Silhouette）【名】〔美〕『西曆一七五九年の佛國の大藏大臣シルエット（E. Silhouette）の名に基けるもの。當時同國の財政窮乏のため、氏は極端な勘儉主義を鼓吹し、肖像畫の如きも、壁面に映じたる影を黑く染むるが最も經濟的なりと唱へ、一時流行せしによりていふ』一明るき地（ヂ）の上に、影法師のごとく黑く輪廓のみを現はしたる描畫、又は肖像畫。肖像畫にありては、その描法には側面

をあらはすが最も適當なるより、特にこれを用ふ。㊁光線を受けをる物體の投じたる陰の輪廓。

しれ 痴・癡【名】しれたること。馬鹿らしさ。落窪「その夜はしれも見えで、火のほのぐらきに」

しれい 【名】〔植〕しびとばな(死人花)を云ふ。〔土佐國の方言〕

しれい 指令【名】㊀さしづ。いひつけ。命令。㊁〔法〕上級官廳より下級官廳に發する訓令。

しれい 司令【名】軍隊又は艦隊を指揮統率する職。

しれい 使令【名】指圖して使役すること。

しれい 四靈【名】『禮記の禮運篇に「何謂二四靈一、麟・鳳・龜・龍、謂二之四靈一」とあるに本づく』麟・鳳・龜・龍の併稱。「祭」に同じ。

しれい 四禮【名】くわんこんさうさい(冠婚葬祭)に同じ。

しれい 詩禮【名】詩と禮と。詩禮の訓【句】『論語の季氏篇に「陳亢問二伯魚一曰、子亦有二異聞一乎、對曰、未也、嘗獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ詩乎、對曰、未也、不レ學レ詩無二以言一、鯉退而學レ詩、他日又獨立、鯉趨而過レ庭、曰學レ禮乎、對曰未也、不レ學レ禮、無二以立一、鯉退而學レ禮、聞斯二者一、陳亢退而喜曰、問レ一得レ三、聞レ詩聞レ禮、又聞二君子之遠二其子一也一」とあり』子が父の教を受くるをいふ。

しれい 齒齡【名】よはひ。とし。

しれい 砥礪【名】『砥も礪も、物を研ぐに用ふるものにて、砥は礪よりも一層緻密なるもの』㊀さいし(砥石)に同じ。㊁みがくこと。

じーれい 辭令【名】㊀ことばの言ひまはし。應對又は文章のあや。言葉づかひ。「辭令に巧(たく)みなり」㊁じれいしよ(辭令書)の略。

じーれい 時令【名】一年間の季節に應じて行ふべき政事・儀式などを、法令にて定めたるもの。年中の行事。月令。

じれい 事例【名】事の前例。

しれい-くわん 司令官【名】陸軍にては、平時は要塞・聯隊區・警備隊、戰時には一軍又は兵站部等、海軍にありては、要港部・艦隊及び防備隊の司令に任ずる官職。

じれい-しよ 辭令書【名】官に任じ、職に補する時、また官吏の辭職を許す時などに交付する文書。辭令。

しれい-たふ 司令塔【名】『英 Conning tower』軍艦にて、戰時にその艦又は艦隊の司令者、及びその司令・運用・信號等の諸裝置を保護するため、厚き甲鐵を以て、周圍と頂とを鎧ひたる艦橋上の一室。大艦にありては、前後の兩艦橋に設け、前部を單に司令塔といひ、後者は、防禦やや薄弱にして、後部司令塔又は觀察塔と稱せらる。

しれい-ちやうくわん 司令長官【名】海軍にて、各鎮守府と各艦隊との指揮・統率を司る職。大將又は中將を以て親補せらる。艦隊にありては、その司令官の上に立ちて、更に廣き範圍の司令に任ず。

しれい-ぶ 司令部【名】陸軍にて、各種の司令官又は師團長・旅團長の、その事務を執りて、その所管を統飾する所。卽ち旅團司令部・師團司令部・軍司令部・要塞司令部・聯隊區司令部・兵站(へいたん)司令部等。

しれい-ふくくわん 司令副官【名】明治四年に、陸軍の各鎮臺に設置せし職員。

しれい-りう 司令旒【名】海軍旗章の一。驅逐司令又は水雷艇隊司令が指揮權を帶びて乘艇したる時、檣頭又は艇首の旗竿に掲ぐる燕尾開裂旗。紅地に白の日章と四箇の光線とを畫く。

しーれう 思料【名】考ふること。思ひはかること。思量。

しーれう 資料【名】主要なる材料。もと。もとで。原料。

しーれう 飼料【名】かひれう(飼料)に同じ。

しーれう 詩料【名】詩の材料。

しーれう 史料【名】歷史を編成する材料。

しーれう 使料【名】つかひれう。

しーれう 試料【名】試金用に供する鑛石。卽ち分析試驗を行ふ爲に使用する鑛石の一部分。

しーれう 紙料【名】紙の原料たる植物性纖維を煮沸して打碎き、搗きほぐし、直ちに紙を抄(す)き得るまでになしたるもの。ぱるぷ參照。

しれう-へんさん-がかり 史料編纂掛【名】東京帝國大學文學部内に在りて、大日本史料・大日本古文書の編纂出版及び全國に在る史料の副本作製の事業をなす所。明治二十八年史誌編纂掛を復舊改名したるもの。史料編纂官・史料編纂官補・史料編纂書記を置く。

しれう-へんさん-くわん 史料編纂官【名】東京帝國大學文學部内・史料編纂掛の職員。大日本史料・大日本古文書等を編纂する高等官。

しれう-へんさん-くわん-ほ 史料編纂官補【名】東京帝國大學文學部内、史料編纂掛の職員。史料編纂官の事務を補助する判任官。

しれう-へんしふ-こくしかうせい-きよく 史料編輯國史校正局【名】明治二年三月設け、史料の編纂及び六國史の校正を掌らしめし所。同年五月昌平校中に移し、翌月昌平校を大學と改稱するに及びて、その所管となる。同年十月國史編輯局と改稱し、漢文を以て國史を編輯する事となり、後廢止せられたり。

しれがまし 痴がまし【形二】痴れたる容子なり。おろかし。「古語」源氏「世の中のしれがましき名を取りしかど」

しーれき 私曆【名】中古、朝廷の頒曆の中絕せる時、民間にて編みし曆。伊豆の三島曆・武藏の大宮曆・奥州の南部曆などこれなり。「唐名。

しーれき 司曆【名】れきはかせ(曆博士)等の(司曆)に同じ。

しれき-しやうはう 司曆正保【名】しれき(司曆)に同じ。

しれ-ごと 痴事【名】おろかなる事柄。ばかげたる出來事。著聞「かかるしれごとする者ども、かやうにためすぞ」

しれ-ごと 痴言【名】おろかしき言葉。たはごと。字當「しれごといふかたるかな」

じれ-こむ じれ込む【動四自】甚しくじれる。せぎこむ。

しれ-じれ 痴痴【貌】甚しく痴れたるさま。「古語」甚しれじれとうち笑みて、ともかくもいはで走りにけり」

しれ-じれし 痴痴し【形二】甚しく痴れたる容子なり。はなはだ愚からし。「古語」源氏「思ひもよらざりけることよと、しれじれしき心地す」「見よ。

しれた 知れた【句】しる(知る)の條下をじれだす じれ出す【動四自】じれて怒りだす。浮世風呂「じれ出しなさるだらうかと思って」

しーれつ 齒列【名】㊀齒のならび。齒なみ。㊁齒の並ぶ如くならぶこと。「じ。

じーれつ 耳裂【名】〔植〕せんれつ(淺裂)に同じ。

じれったがる 【動四自】じれったく思ふ。

じれったし 【形二】『たしは接尾語』わが思のままにならずして、腹だたし。

じれったむすび じれった結【名】女の髮の結ひ方の一。町方の女の、髮を洗ひたる時などに、結ひしもの。

(じれったむすび)

しれとこざき 知床岬【名】〔地〕㊀北海道北見の國の東北に突出せる半島の尖端の岬。㊁樺太の南端、太平洋に突出する岬。亞庭灣を形成す。

しれとこはんたう 知床半島【名】〔地〕北海道北見國の東北に突出せる半島。長さ十五里餘。

しれ-ばむ 痴ばむ【動四自】愚からしく見ゆ。「古語」榮花「美しき御心ならで、うたて、ひがひがしくしればみて」

しれ-びと 痴人【名】愚かなる人。ばかもの。あはう。しれもの。

しーれん 思戀【名】戀しく思ふこと。

しーれん 試鍊【名】試驗的に鍊ること。

しれん 師鍊【名】〔人〕こくわんしれん(虎關師鍊)に同じ。

しれ-もの 痴者【名】㊀しれびと(痴人)に同じ。源氏「中將なにがしは、しれもののものがたりせんとて」㊁油斷のならぬ者。平當「しれものかなとて、馬の口に取附くところを、同じ樣に斬りたまへば」

しれもの-ぐるひ 痴者狂【名】ばかものにて、氣ちがひじみたること、又その人。字

道「えもいはぬしれものぐるひとは知れたりつれど」

しれ-ゆく 痴行く【動四自】次第に愚かになりて行く。〔古語〕源氏「子のおとなぶるに、親のたちかはりしれゆく事は」

じれる 【動下一自】わが心のままにならぬを悶(モダ)へ怒る。悶へ腹だつ。焦燥す。

しれ-わらひ 痴笑【名】痴れたる様をなして笑ふこと。しらわらひ。〔古語〕義経記「あの法師、われらを打たんとて、こなたをまもらへ、しれわらひしてあるは、ただごとならず」

しろ 白【名】一白き色。雪の如き色。二碁石の色白き方。三しろがね(銀)の略。増鏡「しろの御太刀」四〔植〕しらびそ(白檜曾)の異稱。

しろ 代【名】一物事の材料となる物。紀「爲二禮幣(ヰヤツカ)一」二かはり。代理。拾遺「鶯の鳴かんしろにはわれぞ泣く花のにほひやしばしとまると」三品物の代りとして渡す金錢。あたひ。代價。代金。四田。田地。〔古語〕紀「田地、シロ」

しろ 城【名】敵の來襲に備へんが爲に設備せる建造物。近代のものは、主將の居所を本丸又は本城といひ、これに附隨せる建物を、近きを二の丸、それに次ぐを三の丸といひ、その間を垣・堀等を以て隔てて、防禦に易からしめ、更に全郭の周圍には、高き垣・深き濠(ホリ)を構ふるを常とす。増鏡「正成は、金剛山千早といふところに、いかめしき城を

（しろ）

こしらへて」

しろ 詰の城【句】ほんまる(本丸)に同じ。潘輸譜「眞先に詰の城に攻入って」

しろ 質【名】ぬくわう。氣質。〔古語〕宇治「大太郎がとられて、武者のしろのおそろしき由を語りけるなり」

しろ 支路【名】本道よりわかれたる路。えだみち。岐路。

しろ 仕路【名】官職にありつく手順。

しろ 子路【名】〔人〕孔門の十哲の一。名は仲由。字は小路、一に季路ともいふ。剛勇にして信直なり。敬王の四十年その難に死す。

しろ 代【助數】田租の稻の束積、又は田地の單位。一代は即ち一束にて、大寶令の制には、一段即ち三百六十歩(今以前は一段を二百五十歩としたり)につき、五十代の稻を穫るものと算定せり。〔古語〕萬葉「しかとあらず五百しろ小田を刈りみだりたぶせにをれば都し思ほゆ」紀四萬餘頃(ヨロヅシロ)之田」

しろ 白【接頭】一白き意。しら。〔古語〕「白砂糖」二飾なき意。しら。「白覆輪の鞍」

しろ 代【接尾】その料となすもの、又そのために特に設け置く場所。「のりしろ」「鑄掛代」

じろ 磁路【名】〔理〕『英 Magnetic circuit』磁力線の一束の通ずる全路。これをなす物質は通常鐵なれども、その一部分に空氣の間隙あることあり。磁氣の廻路。磁氣輪道。

でんろ(電路)參照。

しろ-あうむ 白鸚鵡【名】〔動〕鸚鵡の一種。最も普通なるもの。全身白色にして、脚は灰黑色を呈す。嘴は闊大にして、上嘴は先端鉤曲し、頂上に毛冠ありて聳ゆ。よく人語を眞似るにより、籠鳥として愛玩せらる。「じ。

しろ-あかざ 白藜【名】〔植〕あかざ(藜)に同

しろ-あしげ 白葦毛・白蘆毛【名】馬の毛色の一。葦毛の白みがちなるもの。

しろ-あおさし 白鶺鴒【名】〔動〕游禽(キウ)類に屬する鳥。翼の長さ七寸ばかり。全體黑く、嘴は灰色、脚は暗黑色にして、ただ眼の周圍(マハリ)に深き黃色の蹼(カキカ)を有す。

しろ-あづき 白小豆【名】〔植〕赤小豆の一種。實の色白きもの。菓子の白餡また洗粉とする故に、しやぼん豆ともいふ。

しろ-あと 城跡・城址【名】かつて、城の在りし處。

しろ-あぶみ 白鐙【名】鉸具(カク)より鳩胸まで銀にて薄く張りたる鐙。「る油。

しろ-あぶら 白油【名】白胡麻より取りたる油。

しろ-あん 白餡【名】菓子の餡の色白きもの。白小豆(ササゲ)・蠶豆(ソラマメ)などにて製す。

しろあん-じるこ 白餡汁粉【名】白餡にてつくりたる汁粉。

しろ-あんず 白杏【名】〔植〕杏の一種。花は白色にして、果實も成熟すれば、白色となるもの。

しろ-あり 白蟻【名】〔動〕白蟻科に屬する害蟲。その形體・生活狀態全く普通の蟻と酷似すれども、全く別科目に屬し、むしろ蜻蛉(カガ)の如く翅あり。常に群棲し、木材の中に蝕入して、枯死せしむ。その他建築物を害する事大なり。我が國にても各地に產すれども、臺灣地方に多し。

しろ-あわ 白泡・白沫【名】一白き水の泡。二口中より出す白きあわ。

白泡噛ます【句】馬の勇み立ちて白泡を吹く貌。太平記「手綱かいくり、馬に白沫かませ控へたり」

しろ-あを 白藍【名】一うすき鐙色。みづいろ。二藍靛を還元して得る白色の結晶質。アルカリ液に溶解し、藍染に用ふ。

しろ-あを 白青【名】一前條(一)に同じ。二襲(キ)の色目の一。表・裏共に薄花田なるもの。

しろ-あを 白襖【名】表裏ともに白き狩衣(キヌ)。著聞「なえらかなる白襖着て」

しろ-いし 白石【名】一白き色の石。二碁石の白き方。(黑石に對して)

しろいし 白石【名】〔地〕磐城國刈田郡に在る町。伊達氏の重臣片倉氏の舊城地。陸羽街道の要衝にして、鐵道東北本線の一驛。

しろいしじやう 石白城【名】陸前國刈田郡白石町の西方に在りし城。白石氏の創築。のち蒲生氏・上杉氏に屬し、慶長七年片倉景綱入城し、子孫相繼ぎて維新に及べり。

しろいし-やき 白石燒【名】肥後國白石の地にて製する陶器。安政年間に初まりて今に及ぶ。圖樣の美を以て多く輸出せらる。

しろ-いただき 白頂【名】しろたへがみ(白髮)に同じ。

しろ-いちじゆく 白無花【名】〔植〕無花果の一品種。樹枝短少、葉も小さく、實は熟して白くなり、食ふべし。

しろ-いと 白絲【名】白き絲。染めぬ絲。

しろいと-あやいと 白絲赤絲【名】次條に同じ。

しろいと-かたあか 白絲肩赤【名】しろいとわたあか(白絲肩赤)に同じ。

しろいと-さう 白絲草【名】〔植〕しらいとさう(白絲草)に同じ。

しろいと-つまとり 白絲褄取【名】鎧の白絲縅にて褄取りたるもの。

しろいと-わたあか 白絲肩赤【名】わたしろをどし(肩白縅)に同じ。

しろいと-をどし 白絲縅【名】鎧の縅の一。白き絲にてをどせるもの。

しろ-いぬ 白犬【名】白き毛色の犬。

白犬に噛まれて、灰汁(アク)に怖ぢる【句】「黑犬に咬まれて灰汁の垂滓に怖ぢる」に同じ。

しろ-いも 白芋【名】〔植〕薩摩芋の一品種。皮の色白く、又は微紅色にて、生(ナマ)の時は肉白く、煮れば黃色となる。

しろ-いもじ 白湯文字【名】しろゆもじ(白湯文字)に同じ。

しろいもの 白粉【名】『しろきもの(白物)の音便』おしろい(白粉)に同じ。〔古語〕榮花「顏には、べにしろいもの附けたらんやうなり」

しろいものうり 白粉賣【名】おしろいを賣りあるく商人。七二職人歌合「しろいものうり。戀すとや人の見るらんおしろいのき

はづくまでに流す涙を」

じーろう 耳漏【名】みみだれ(耳垂)に同じ。

しろーうさぎ 白兎【名】〔動〕あちこうさぎ(越後兎)に同じ。

しろーうすやう 白薄様【名】一白き薄様の紙。二「仙女の衣の透りて美しき様は、薄様の紙に似たるよりいふ」古、五節(ゴセチ)の舞の時、舞手をはやしたる語。右京大夫集「霜にさゆるしろうすやうの聲聞けばありし雲井ぞまづおぼえける」

しろーうち 城内【名】城のうち。城中。城内(ジャウナイ)。

しろーうちて 白打出【名】「白とは、古きは白からざるよりいひ、打出は造り出すをいふ」新に作りたること。盛衰記「白打出の笠を著て、眉目(ビモク)もかたちも優なりけり」

しろーうつぎ 白溲疏【名】〔植〕こごめうつぎ(小米溲疏)二に同じ。

しろーうと 素人【名】一その物事に經驗なき人、又は未熟なる人。しろと。(黒人(クロビト)に對して)二藝妓・娼妓・賓奉婦等に對して、普通の女。しろと。(商賣人に對して)

しろうとぎだいふ 素人義太夫【名】その專門家にあらざる人の語る義太夫。

しろうときやうげん 素人狂言【名】役者にあらざる素人の催し行ふ狂言。

しろうとげい 素人藝【名】一本職にあらざる素人の藝。二未熟なる藝。つたなき藝。

しろうとげしゆく 素人下宿【名】普通の家にて、食料室料等を得て、他人を止宿せしむること、又その家。

しろうとしばゐ 素人芝居【名】俳優にあらざるもののなす芝居。機嚢栗毛「この宿(シュク)に素人芝居があると見えて」

しろうとばなれ 素人離【名】素人にてありながら、その技倆は專門家に劣らぬほどに巧なること。「素人離のした藝」

しろうとひやう 素人評【名】げばひやう(下馬評)二に同じ。

しろうとーめ 素人目【名】局外のものの見るところ。專門家にあらざるものの見地。若風俗「色色の模様好み、素人目にはあだに見るらん」

しろうとーや 素人屋【名】堅氣(カタギ)の人の家。(商賣屋に對して)

しろうとやど 素人宿【名】口入宿にあらずして、奉公人の周旋をなす家。(江戸時代の語)

しろうとーゑ 素人繪【名】貴家ならぬ人の描きたる繪。一代女「幟は、紙をつぎて、素人繪を頼み」

しろうとをんな 素人女【名】藝妓娼妓にあらざる女。良家の女。しろとをんな。

しろーうのはな 白卯花【名】〔植〕うつぎ(溲疏)に同じ。

しろーうま 白馬【名】一白毛色の馬。白馬(アヲウマ)。二にごりざけ(濁酒)に同じ。升鯉濁白醪、白馬と聞いちやあ氣がわるいの、節分の御祝儀に、三合ばかりおくれな」

しろーうんも 白雲母【名】〔鑛〕雲母の一種。硅酸鐵物にて、その用途最も廣し。煖爐の窓障子、瓦斯ランプの火屋、電氣絶緣體或はダイナマイト製造の際、粉末としてグリスリンを吸收せしむる用に供せらる。本邦にては、主に近江・甲斐・美濃・常陸・三河等に產し、外國にては、英・佛・米及び露に多く產す。(黒雲母に對して)

しろーうり 白瓜・越瓜【名】甜瓜(マクワウリ)の變種。葉及び花は甜瓜に酷似す。果實は帶綠白色なる長楕圓形の漿果にして、疣(イボ)なく、甜瓜に比して、甘味少なし。秋の初に熟す。糟漬・鹽漬などとし、又、生にても食ふ。あさうり。あほしまうり。うり。〔越瓜・菜瓜〕一代女「はあ、淺瓜(アサウリ)・淺瓜、見るも今年の初物」

しろうるり 【名】徒然草の中に見え、世に無き物の名をことさらに口に任せて言出せる語。(或はいふ。白う瑠璃にて、瑠璃玉に白きはなければ、かくいへるならんと)徒然「この僧都、ある法師を見て、しろうるりといふ名を附けたり。しろうるりとは何物ぞと、人の問ひければ、さるものを我れも知らず、若しあらましかば、この僧の顏に似てん、とぞいひける」

しろーうを 白魚【名】〔動〕しらうを(白魚)を云ふ。〔筑後國の方言〕

しろーえび 白蝦【名】〔動〕しばえび(芝蝦)に同じ。「の俗稱。

しろーえんせう 白煙硝【名】せうせき(硝石)

しろーえり 白襟【名】一白き色の襟。二補祥下著などの襟の白き服裝。

白襟紋附(モンツキ)【句】前條二を著、なほ紋所の衣服を著ること。近代の婦人の正服とせらる。

しろーおとり 白御鳥【名】きじ(雉)の異稱。〔女の語〕

しろーかうぢ 白麹【名】米にて製したる白き色のかうぢ。

しろーかき 代掻【名】〔農〕田植のための整地。耕起したる田に水を濺ぎ入れて、土壤を碎き、その地面をならすこと。

しろーがき 白柿【名】ころがき(白柿)に同じ。

しろかきうま 代掻馬【名】機械を附けて、代掻をなすに使役する馬。

しろかきむし 代掻蟲【名】〔動〕まひまひむし(蝸牛)を云ふ。〔四國の方言〕

しろーかげ 白鹿毛【名】しらかげ(白鹿毛)に同じ。「同じ。

しろーがし 白樫【名】〔植〕しらがし(白樫)に同じ。

しろーがすり 白飛白・白絣【名】白地に絣又は黒の飛白をあらはしたる布。

しろーがたな 白刀【名】金具を銀にて飾れる刀。鶉鷸合壁「白刀に白骨の扇さし添へて」「同じ。

しろーかつら 白桂【名】〔植〕かつら(桂)二に同じ。

しろーかづら 白葛【名】〔植〕しらくづら(蘰猴桃)に同じ。

しろーがね 銀【名】一(鑛)「白金の義。但し今は白金の文字、はくきんと音讀して、プラチナの譯名に用ふ」ぎん(銀)に同じ。和名「爾雅云、白金、謂二之銀一、其美者謂二之鏄一、之路加禰」二銀にて造りたる貨幣。異稱銀一分小判や、しろかねに、翼のあるが如くなり」三しろがねいろ(銀色)の略。四ぎんいろ(銀泥)に同じ。「ぎんいろ。

しろかねーいろ 銀色【名】銀の如く光る色。

しろがねーぐつわ 銀轡【名】鐵にて造り、銀にて包める轡。

しろがねーざいく 白銀細工【名】銀にて細工をなすこと、又その人。一代女「草臥る客の棒組、客は白銀細工の氣晴し、屋根葺の雨日和に申合はせて」

しろがねさう 銀草【名】〔植〕毛茛(カラガヘ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ數寸。根葉は長き葉柄を有し、花莖は葉間よりぬきんで、春夏の交、白色の花を開く。「の。

しろがねし 銀師【名】銀の細工をなすもの。

しろがねーづくり 銀作・根造【名】銀にて製し、又は裝飾したるもの。ぎんづくり。

銀作の太刀【句】銀にて裝飾したる太刀。白太刀。銀劍。

しろかのこゆり 白鹿子百合【名】〔植〕しらたまゆり(白玉百合)に同じ。

しろかは 白革【名】白きもみ革。

しろかはや 白皮屋【名】生皮を革(カハ)に精製する職人。

しろかはらけ 白土器【名】白く燒きたるもの。

しろかはらげ 白河原毛・白瓦毛【名】馬の毛色の一。白ばみたる河原毛なるもの。

しろがふ 代替ふ【動下二他】賣りて、金にす。賣上げたる錢にて買ふ。しろなす。風俗文選「柿の木、四十本あり。五とせ、六とせ經ぬれど、このみも持來らず、代替ふるわざも聞かねば」同出口の市に、米としろがへて、小袋の首を括る」

しろかべーやき 白壁燒【名】肥前國三養基(ミヤキ)郡白壁村より產する陶器。寛政二年柳谷判平なる者、天草石を移入して開業すといふ。文政の頃、武富某大いに改良を加へ、明治初年に輸出品錦繪付を製せり。

しろがまへ 城構【名】城をかまふること。城郭を築くこと。盛衰記「矢作(ヤハギ)河の東の岸に城構して、陣を取る」

しろーかみ 白髪【名】しらが(白髪)二に同じ。「古語」萬葉「黒髪にしろかみまじり生ふるまでかかる戀にはまたあはなくに」

しろーかみこ 白紙衣【名】かみこ(紙子)を見よ。

しろ-かんざくら 白寒櫻【名】〔植〕寒櫻の一種。花の淡紅色又は殆ど白色なるもの。（緋寒櫻に對して）

しろ-かもめ 白鷗【名】〔動〕游禽類に屬する鳥。我が國中部以北の沿岸に産す。全身純白色。嘴は黃色、脚は淡赤色を呈す。

しろ-がよひ 城通【名】おしろかよひぶね（御城通船）の略。

しろ-からし 白芥子【名】〔植〕十字科に屬する一年生又は二年生の草本。粉末となし、香辛料に用ひ、又は藥用に供す。えどからし。きくばがらし。

しろ-からす 白烏【名】色の白き烏。あり得べからざることの譬。「烏の頭白く、馬角を生ず」參照。狂言「骨皮」「天狗の酸干、海の底の白烏」

しろ-き 白酒【名】大嘗會などに用ふる、一種白色の酒。（黑酒に對して）〔古語〕萬葉「あめつちと等しきまでに萬代に仕へまつらむくろきしろきを」

しろ-ぎく 白菊【名】しらぎく（白菊）に同じ。榮花「こがね・しろがね・きぎく・しろぎくにて二つなり」

しろきくこん 白九獻【名】ねりざけ（煉酒）を云ふ。〔女の語〕

しろ-きす 白鱚【名】〔動〕鱚の一種。色白くして、形やや圓く、且つ肥え、長さ六七寸に及ぶ。味淡泊にして、美味なり。うみぎす。まぎす。

しろ-ぎつね 白狐【名】〔動〕我が國千島以北に棲息する狐。形狐に似て、夏期は灰色又は褐色を呈し、冬期に至りて、純白となる。北極狐。

しろ-ぎっぷ 白切符【名】汽車の一等の乘車券。

しろ-ぎぬ 白衣【名】㊀白き色の衣。びゃくえ。㊁『こえ（黑衣）を見よ』僧ならぬ人。〔古語〕起「繒素、シロキヌ」

しろ-きび 白黍・苞【名】〔植〕黍の一品種。その實、白色を呈す。

しろきもの 白粉【名】おしろい（白粉）に同じ。〔古語〕增鏡「しろきものつくる事やあるなど、ふるき人うちささめき」

しろ-くち 白口【名】しらくち（白口）に同じ。

しろ-ぐち 白ぐち【名】〔動〕しらぐち（白ぐち）に同じ。

しろくちやう 四六挺【名】にふしろやうだて（二十四挺立）に同じ。

しろ-くぢら 白鯨【名】小鯨より取りたる鯨鬚。色白くして美しく、汗衫などに編む。

しろ-ぐづな 白ぐづな【名】〔動〕甘鯛の變種。東海及び西海の近海にて、波靜なる海底に棲息す。主に秋末より冬期に亙り、釣獲され、味美なり。

しろ-ぐつわ 白轡【名】白くみがきたる轡。平家「白ぐつわはげ、白泡噛ませて」

しろくつめ 四六出目【名】江戸時代に、年貢米四斗（即ち一俵）ごとに、更に六升の出目米を納めしこと。幕府の直轄地、特に上野國郡馬郡の各村に行はれたり。

しろくにばいばん 四六二倍判【名】次條に同じ。

しろくばいばん 四六倍判【名】書物の大きさの、四六版の倍大のもの、即ち縱約一尺二寸、橫約八寸のもの。四六二倍判。

しろくばん 四六判・四六版【名】洋裝の書物の大きさの名。縱約六寸、橫約四寸のもの。又それを得べき大判の西洋紙、即ち縱三尺六寸、橫二尺六寸のもの、之れを三十二分して、四六版の大さを得。

しろくはんさい 四六半截【名】『截の字の音、正しくはせつ』洋裝書物の大きさの名。四六版の半分の大きさのもの。

しろ-くび 白首【名】白粉をよそほひ、客に媚を呈する茶屋女、又は淫賣婦。

しろくぶん 四六文【名】〔文〕漢文の一體。主として、四字・六字の句を用ひて、對句を排列し、聲律を重んじたる綺麗なる文。六朝時代に盛んに行はれ、後世の謂はゆる時文もこれに依れり。四六駢儷文。四六。

しろくへんれいたい 四六駢儷體【名】〔文〕『駢は陳列、儷も偶ぶ義』前條に同じ。

しろ-ぐま 白熊【名】〔動〕熊の一種。大きさ八九尺に達し、毛は純白色にして、性勇猛、海獸鳥魚の類を捕へ食ふ。牝は冬眠すれども、牡は然らず。寒帶地方の海岸に棲息す。北極熊。

しろくみせ 四六店・四六見世【名】寬永、天明の頃、深川の佃町松代町邊にありし娼家。夜は四百文、晝は六百文にて遊ばしめたりといふ。あひるみせ。四六。わらせ裏おきやあがれ、ついぞ四六みせへも行った事がなくって、居續すも、すさまじい」

しろくめんたい 四六面體【名】〔鑛〕等軸晶系の完面體。六面體の各面に、四個の三角形の面を置きたる形體。

しろ-ぐら 代鞍【名】くらぐら（草鞍）に同じ。

しろ-ぐら 白鞍【名】㊀白覆輪の鞍。銀の錢鞍。平家「飛鹿毛といふ馬に、白鞍置いて」㊁しらほねぐら（白骨鞍）に同じ。

しろ-くりげ 白栗毛・黃騮【名】しらくりげ（白栗毛）に同じ。

しろ-ぐるま 代車【名】代掻に用ふる器。多數の車輪より成り、牛馬をして、田の中を引廻らしむ。

しろ-くれなゐ 白紅【名】半ば白く、半ば赤く、染分けたる水引。古は奥女中の用ひしもの。今は普通に用ふ。みづひき（水引）參照。

しろ-くろ 白黑【名】㊀白と黑と。白色と黑色。こくびゃく。㊁是と非と。善と惡と。白黑になる【句】物ごとの混亂するさまにいふ語。

しろ-ぐわゐ 白慈姑【名】〔植〕くわゐ（慈姑）㊀に同じ。（黑慈姑に對して）

しろ-げ 白毛【名】白き色の毛。

しろ-こ 白子【名】しらこ（白子）に同じ。

しろこ 白子【名】〔地〕伊勢國河藝郡に在る町、船乘業者多く、當國物產の重要積出地なり。

しろ-こ 汁粉【名】しるこ（汁粉）の轉訛。

しろ-ごし 白輿【名】しらきごし（白木輿）に同じ。

しろ-こそで 白小袖【名】白き小袖。白無地の小袖。（色小袖に對して）

しろ-ごぼう 白牛蒡【名】〔植〕もりぐだいこん（守口大根）に同じ。

しろこばば 白粉婆【名】〔動〕雨降らんとする時、出でて飛びまはる蟲。おしろいをつけたるが如しといふ。

しろ-ごま 白胡麻【名】㊀〔植〕胡麻の一種。實の白きもの。（黑胡麻に對して）㊁ごま（胡麻）㊁を見よ。

しろ-ごめ 白米【名】白き米。しらよね。はくまい。「同じ。

しろ-さ 白鷺【名】〔植〕あをあかざ（青藜）に同じ。

しろ-さくら 代作鞍【名】くさぐら（草鞍）に同じ。

しろ-ざくら 白櫻【名】㊀〔植〕いぬざくら（犬櫻）に同じ。㊁〔植〕しろほねざくら（白骨櫻）に同じ。

じ。㊁襲(カサネ)の色目の一。表も裏も白きもの。また裏は紫ともいふ。春用ふ。

しろ-さくらがはさう 白櫻川草【名】〔植〕かのこさう(鹿子草)に同じ。

しろ-ざけ 白酒【名】餅米を蒸して、味醂を加へ、麹(クルキ)にて磨りつぶしたる飲料物。色白くして、甚だ濃く、多くは上巳(ジャウシ)の雛遊に用ふ。山川・初霜等の銘あるもの、古來著名なり。

しろざけ-うり 白酒賣【名】白酒を商ふ人。

粽猿蓑(支考)「臘夜を白酒賣の名殘かな」

しろ-さたう 白砂糖【名】純白に精製したる砂糖。三盆。(黒砂糖に對して)

しろ-さつき 白杜鵑花【名】〔植〕躑躅の一種。形杜鵑花に似て大きく、花の色は、白色又は淡紫を呈し、粘液を分泌す。

しろ-ざつま 白薩摩【名】さつまがすり(薩摩飛白)を見よ。

しろ-さんご 白珊瑚【名】〔動〕うみやなぎ(海柳)㊁に同じ。

しろ-さんとめ 白棧留【名】純白色なる棧留革。

しろ-ざめ 白鮫・鮖鯊【名】〔動〕軟骨類に屬する魚。各地の沿海に產す。體長五六尺。全身淡灰色にして、吻頭尖りて伸長し、肉は食ふべし。しろぶか。まなぐ。むぎがらざめ。ほしざめ。まなぞを。

しろ-さやまき 白鞘卷【名】鞘纏(マキ)などに銀の金具を施したる鞘卷。平家「白鞘卷をさいて舞ひければ」

じろざゑもん-びな 次郎左衛門雛【名】雛人形の一。江戸時代の京都の人、雛屋次郎左衛門の造りたるもの。「り。

しろし 白し【形一】雪の色の如し。白色なり。

しろし 著し【形二】しるし(著し)に同じ。

【古語】宰町千疊敷「誰が目にしろきねりの下著」

しろ-じそ 白紫蘇【名】(植)えごま(荏胡麻)に同じ。

しろ-した 白下【名】『白砂糖の下地の義』甘蔗を搾りて滴らせたるもの。白砂糖の原料に用ふ。

しろ-しっくい 白漆喰【名】白色の漆喰、即ち二盆目にて飾ひし石灰・蠣灰・生布海苔及び上濱苧(ハマヲ)を混じ、これに繪具を交へざるもの。上塗に用ふ。

しろ-して 白四出【名】〔植〕いぬして(犬四出)に同じ。

しろ-じない 白じない【名】〔動〕ころはら(白腹)に同じ。

しろ-しぼり 白搾【名】こらしぼり(白搾)に同じ。

しろしめす 知食す【動四他】『めすは接尾語』㊀知りたまふ。しろす。源氏「ここにも、若ししろしめす事や侍りつらん」㊁占めたまふ。治めたまふ。しらす。しろす。祝詞「よもつ國を、やすくにと、たひらけくしろしめすゆゑ」

しろじやうえ 白淨衣【名】純白なる淨衣。盛衰記「白淨衣に立烏帽子著たる老翁」

しろ-しやうぞく 白裝束【名】白地の裝束。古は產室にて著用し、後世は多く凶時に用ふ。榮花「しろしやうぞくどもの、さまざまなるは、ただすみゑの心地して」

しろ-しやくなげ 白石南【名】〔植〕はくさんしやくなげ(白山石南)に同じ。

しろ-しよゐん 白書院【名】〔建〕『書院造にて總て檜柾目材を用ひて造り、天井の棧・障子の緣に至るまで、一切塗物を用ひざるよりいふ』江戸幕府及び諸侯の城中の間席。江戸城のは本丸の表の西側にありて、中庭を隔てて黒書院に接し、上殿の間は連歌の間、下段の間の東は帝鑑の間とす。將軍宣下の大禮、その他表立ちたる幕府の儀式は、總て此所に於てせり。くろしよゐん(黒書院)參照。

しろ-じるし 白標【名】白色の目じるし。

しろ-じろ 白白【貌】いかにも白きさま。

じろ-じろ 【貌】注目して見まはすさま。注意して繁く見るさま。じろりじろり。

しろ-す 白酢【名】うめず(梅酢)を見よ。

しろ-す 白醋【名】水氣を去りたる豆腐と、炒(イ)りたる白胡麻とを擂(ス)混ぜ、醋にて延ばしたるもの。

しろす 知す【動四他】㊀しる(知る)㊁の敬語。しろしめす。(古語)㊁しる(知る)㊂の敬語。しらす。しろしめす。(古語)

新可笑記「この人等は、池田山奥にて、白炭燒きてわづかの煙立てしが」

白炭の忠知(タヾトモ)【句】(人)『白炭や燒かぬ昔の雪の枝』といふ句によりていふ』神野忠知の異稱。

しろ-すもも 白李【名】〔植〕李の一種。果實成熟して、淡紅色に黄色を帶び、味美なるもの。

しろ-すゐくわ 白西瓜【名】〔植〕西瓜の一種。果實球形にして、大きさ中等、表皮白く、肉紅に、種子も赤色なるもの。

しろ-せきれい 白鶺鴒【名】〔動〕鶺鴒の一種。全身白し。北海道以北に繁殖し、秋に至りて、南方に移る。

しろ-ぜめ 城攻【名】城を攻むること。

しろ-ぜり 白芹【名】〔植〕芹の一種。莖の色白く、葉も葉も赤芹よりやや小さく、味劣る。はたぜり。をかぜり。(赤芹に對して)

しろ-ぞこひ 白内障【名】〔醫〕はくないしやう(白内障)に同じ

しろ-そね 白そね【名】〔植〕いぬして(犬四出)に同じ。

しろ-たうがき 白唐柿【名】〔植〕いちじゆく(無花果)に同じ。

しろたへの 白妙の・白栲の【枕】㊀しろたへは白き布にて、普通の衣類の材料とせられしより、衣・袖・袂・紐・帶・襷(タスキ)・領巾(ヒレ)などにかけていふ。萬葉「春すぎて夏來たるらししろたへのころもほしたり天のかぐ山」同「しろたへのたすきをかけまそかがみ手にとりもちて」同「いざ子どもかしひのかたにしろたへのそでさへ濡れて朝菜摘みてむ」同「白妙の袂をわかれにきびにし家ゆも出でて」同を垣つの麻をひきほし妹なねがつくりきせけむ白細(シロタヘ)のひもをも解かず」同「さねそめていくたもあらねば白栲の帶こふべしや戀も盡きねば」同「かぎろひの燃ゆる荒野に白妙のあまひれがくり」㊁しろたへは衣類に緣あり、また古の衣に藤衣(フヂゴロモ)また略して、單に藤といふものあるより、ふぢ(藤)にかけていふ。**あらたへの**荒妙の)參照。萬葉「しろたへの藤江のうらにいさりするあまとや見らむ旅ゆくわれを」㊂しろたへは白きものなるより、くも(雲)・ゆき(雪)にかけていふ。壬二集「春といへば花かとぞ見るしろたへの雲にまがへる峯の松原」新拾遺「ささ浪やうちいでて見ればしろたへの雪をかけたる瀨田の長橋」

しろ-だも 白だも【名】〔植〕樟(クス)科に屬する常綠喬木。暖地に自生す。高さ三四丈。樹皮平滑にして、緑黒色を帶び、葉は全緣長卵形をなし、裏面に白色の細毛密生す。秋季、黄白色の小花むらがり開く。材は器具用又は薪炭用に供せられ、果實は燈火用の油を搾取す。くろつつ。

じろたらうばな 次郎太郎花【名】〔植〕さぎごけ(鷺苔)異稱。

しろ-たれ 白垂【名】龍(ケ)の頭裝の一。頭より垂るる白毛の、白髪に擬するもの。西行櫻・雨月なんどの仕手に用ふ。

しろ-ぢ 白地【名】㊀地質の白きこと、又その白き生地。㊁白き地質の織物。

しろ-ぢさ 白萵苣【名】ちさの一種。普通のちさに似て、葉の裏やや白ばみたるもの。

しろぢ-せきじゅじき 白地赤十字旗【名】海軍の第二種旗章の一。海軍病院又は病院船又はそれに附屬する物品を運送する船。

車等に掲ぐるもの。この旗を掲げたる船舶は捕獲することを得ざるものとす。

しろ-ちゃ 白茶【名】灰汁(アク)に漬さず、蒸し熟して焙(ア)りたる上等の茶。卯月の潤魚「但しは白の白茶か、風呂で焼(ク)いた煎じ茶か」

しろ-ぢょうちん 白提燈【名】白張(ハリ)の船頭深話「白絹子の長襦袢、白ちりのゆもじにて、樹守の紐を見せるなどは、至って嬢と見えて、五分もすかぬこしらへ」

しろ-ちりめん 白縮緬【名】白き色の縮緬。

しろ-つが 白栂【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しろ-つき 代附【名】『價の附きたる刀の義』刀劍の位附を定むる標準價格。黄金を以てすれば金何枚、錢を以てすれば錢何貫文と記す。

しろ-つき 白搗【名】搗きてしらぐること。五人女「白突三升五合ほど、鰹節一つ」

しろ-つき 代突【名】『しろ(代)四を見よ』

しろ-つきげ 白月毛【名】馬の毛色の一。月毛の白みがちなるもの。

しろ-っこ 白子【名】しろこ(白子)の音便。

しろ-つつじ 白躑躅【名】一〔植〕ごえふつつじ(五葉躑躅)に同じ。二襲(カサネ)の色目の一。表白く、裏紫なるもの。春用ふ。

しろっぷ 果蜜(佛 Sirop 英 Syrup 又 Strup)【名】『しゃりべつ(舍利別)と同一の語源より出づ』果實より製したる糖蜜。果物を、水氣を附けずに皮を剝き、ざらめ糖又は角砂糖を振りかけて、半日ほど置き、火にかけて浮ぶあくを去り、なほ一時間ほど煮れば、果物はジャムとなり、煮汁はシロップとなる。清涼飲料に香味を添ふるに用ふ。

しろ-っぽし 白っぽし【形】『ぽしは接尾語』一白ばみてあり。二ありふれてあり。價値少なし。三しろうとくさし。浮世風呂「隈るどりだけ古風で素(シ)っぽい」

しろ-づめ 城詰【名】城中に詰め居ること。堀川波の鼓「お國に居ては毎日の御城詰」

しろ-つめぐさ 白塡草【名】〔植〕『白とは花の色によりていひ、單に塡草ともいふ』豆(マメ)科に屬する宿根草。莖は地上に匍匐し、葉は掌狀複葉にして、三小葉より成り、初夏白色の小蝶形花を開く。牧草又は肥料に佳し。おらんだげんげ。おらんだれんげ。

しろ-づる 白弦【名】藥煉(ネリ)にて塗りて作れる弓弦。今川大雙紙「ぬり弓に白弦をかけべからず」

しろ-づる 白鶴【名】〔動〕鶴の一種。全身白くして、形大きく、翼の端やや黒く、頂より眼の周圍、及び嘴・脚は淡紅色なり。繁殖地はシベリヤ東部地方にて、我が國へは東北地方にのみ來る。そでづる。そでづる。

しろ-て 白手【名】白き釉(ウワグ)をかけたる磁器。(錦手・金襴手・染附などに對して)

しろ-てふ 白蝶・粉蝶【名】〔動〕鱗翅(シ)類に屬する昆蟲、體細長にして、大なる白色の翅を有す。前翅の尖端に黒褐色の斑紋あり、外緣に近く二箇の黒點を有し、後翅に一箇の黒斑あり、その幼蟲を蝲蛄(ムシ)といふ。この幼蟲は、野菜の葉を食害す。

しろ-と 白砥【名】しらと(白砥)を見よ。

しろ-と 素人【名】しろうと(素人)に同じ。

しろ-とり 白鳥【名】〔動〕一しろとり(白鳥)に同じ。二ほととぎす(杜鵑)の異稱。

しろ-とり 城取【名】城をかまへ設くること。甲陽軍鑑「殊更、城どり陣取、一切の軍法をよく鍛錬いたす」

しろ-とりげ 白鳥毛【名】しらとりげ(白鳥毛)に同じ。

しろと-をんな 素人女【名】しろうとをんな(素人女)に同じ。若風俗「女の風俗も、しろと女よりは見よげに」

しろ-な 白菜【名】〔植〕一あぶらなの一種。葉柄短くして白く、葉身は稍黄色を帶び、皺縮して翹葉狀をなすもの。二いんげんまめ(菜豆)に同じ。三たうな(菘)に同じ。

しろ-なす 白茄子【名】〔植〕しろなすび(白茄子)に同じ。

しろ-なす 代爲す【動四他】うりしろなす(賣代爲す)に同じ。狂言「賣かづき」「わどりよが嫁入の時、持っておりやった手箱をしろなさしませ。わらはが手箱が、今までござらうか。それは、疾うしろなしました」

しろ-なすび 白茄子【名】〔植〕なすびの一種。實の色白くして、大なるもの。銀茄。

しろ-なでしこ 白撫子【名】一〔植〕撫子の一種。花の色白きもの。二襲(カサネ)の色目の一。表は白、裏は蘇芳(スオウ)。夏用ふ。

しろ-なまづ 白癜【名】皮膚病の一種。なまづの白色をなせるもの。しらばだ。しらはたけ。(黒癜に對して)

しろ-なまり 白鉛【名】一〔鑛〕すず(錫)に同じ。(黒鉛に對して)二〔化〕しろめ(白鑞)に同じ。

しろ-なめ 白滑【名】次條の略。

しろ-なめし 白滑【名】次條の略。

しろ-なめしがは 白滑革【名】染色せざるなめしがは。白くやや黄色を帶ぶ。あらかは。しろなめし。しろなめし。

しろ-なんてん 白南天竹【名】〔植〕南天竹の一種。實の白きもの。

しろ-ならし 代均【名】『しろ(代)四を見よ』

えぶり(杁)二に同じ。

しろ-に 白煮【名】醬油を用ひず、食鹽鰹節煮出汁及び味醂を加へて煮ること。

しろ-にぎて 白和幣【名】しらにぎて(白和幣)を見よ。

しろ-にせ 白似【名】しらじらしく似ること。御伽名代紙衣「且那の風を移せば、たれか、しろにせの大臣と思ふべき」

しろ-ぬし 代主【名】謠曲の一。葛城明神の神德を述べ作れるもの。古名、葛城鴨。

しろ-ぬの 白布【名】晒して、白くなしたる布。白布の布。七一職人歌合「しろぬのうり。しろぬのめせ、なう、はたばりも尺もよく候ふは」

しろ-ぬめ 白絖【名】白色のぬめ。一代男「白ぬめの著物(モノ)給はり」

しろ-ぬり 白塗【名】白色に塗ること、又その塗りたるもの。

しろ-ね 白根【名】〔植〕一唇形(シン)科に屬する多年生の草。高さ三四尺、方莖にして、葉は鋸齒を有し、銳頭長楕圓形。夏秋の頃、葉腋に小唇形花を叢生す。濕地に生じ、根莖は食すべし。二ねぎ(葱)を云ふ。〔女の語〕

しろね 白根【名】〔地〕越後國中蒲原(ナカカンバラ)郡にある町。新潟市の南約六里。三國街道の一驛。

しろ-ねぎ 白葱【名】〔植〕大葱を耕作法によりて、白き部分を極めて長大ならしめたるもの。

しろねっ-ぐさ 白根草【名】〔植〕せり(芹)に同じ。藏玉集「瀬瀬に立つ浪とて花よ白根草摘む我が袖に雪は降りつつ」

しろ-ねずみ 白鼠【名】一〔動〕鼠の一種。毛色の白きもの。ぎんねずみ。「銀鼠」(黒鼠に對して)二『主人を大黒に比し、大黒の使はしめは白色の鼠なりといふによりていふ。だいこくはしら(大黒柱)三參照』その家の役に立つ老功の人。くろねずみ(黒鼠)二參照。

しろ-ねり 白練【名】一著色せざる練絹。帷子などの裏地に用ふ。二龍(ノ)の衣裳の一。翁などの著附に用ふ。

しろ-ねりやうかん 白煉羊羹【名】白寒天・白小豆・ざらめ糖などを煉合はせて製したる羊羹。

しろ-の 白篦【名】矢竹の、漆を塗らず、又焦しもせぬもの。平造白篦に、白鳥の羽にてはぎたる矢負ひ」

しろ-の-き 【名】〔植〕しらびそ(白檜曾)に同じ。

しろ-の-たち 白太刀【名】銀にて作れる太刀。增鏡「院の御分、御小直衣皆具、夜の御衾、しろのおんたち、御馬二疋」

しろ-のり 城乘【名】敵の城に乘入ること。城乘三段【句】昔、城乘の軍功中、大手(オホテ)の虎口乘を上とし、搦手(カラメテ)の虎口乘を次とし、下乘を下とせしこと。

しろ-はう 白保【名】紙の一種。石灰などを加へて漉きたる、色やや白き淺草紙。

じろばう-たろばう 次郎坊太郎坊【名】〔植〕『じろんぼ(次郎坊)を見よ』すみれ(菫)二を云ふ。〔大和國・伊豆國の小供の語〕

しろ-はえ 白映【名】小雨の降りながら、折折晴れんとする空模樣。(くろ映に對して)

しろ-はえ 白鮠【名】〔動〕はえ(鮠)に同じ。

しろ-はちまき 白鉢卷【名】白色の鉢卷。

(色鉢巻に對して)

しろ-ばな 白花【名】一種の植物の中、白色の花の咲くもの。

しろばな-いはな 白花岩菜【名】〔植〕いはたばこ(岩烟草)に同じ。

しろばな-えんれいさう 白花延齢草【名】〔植〕百合(ユリ)科に屬する多年生の草。陰濕の地に自生す。葉は廣卵形、夏季に白色の花を開く。果實は圓錐形の漿果。

しろばな-しもつけ 白花繍線菊【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する落葉灌木。我が國北部の山地に自生す。葉は長卵形又は楕圓形。緣邊に毛茸(コマウ)を有す。花は小さくして白し。

しろばなすみれ 白花菫【名】〔植〕菫菜(スミレ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。高さ三四寸。葉は長卵形又は長楕圓形、夏季、白色の花を開く。觀賞用に供せらる。

しろばなぜんこ 白花前胡【名】〔植〕のだけ(前胡)に同じ。

しろばなたんぽぽ 白花蒲公英【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。原野に自生す。葉は根生、蒲公英に似て淡綠色、花の色白く、春開く。

しろばな-の-こめつつじ 白花米躑躅【名】〔植〕石南(シャクナゲ)科に屬する落葉灌木。深山に自生す。幹の高さ數尺に達す。葉は楕圓形、初夏に白色の小花を開く。

しろばな-の-はんしようづる 白花半鐘蔓【名】〔植〕毛茛(シウガウ)科に屬する多年生の草。山地に自生す。蔓莖にて、他物に纏はる。葉は三出複葉。四五月頃、白色の萼を有する花を開く。

しろばな-の-へびいちご 白花蛇苺【名】〔植〕薔薇(バラ)科に屬する多年生の草。高山に自生す。莖は横臥し、葉は小三葉より成り、春夏の交、白色の花を開く。果實は食ふべし。

しろばな-の-むしよけぎく 白花除蟲菊【名】〔植〕菊科に屬する多年生の草。原産地は塊太利。高さ二三尺。葉は羽狀。五六月の頃、白色の花を開く。花は驅蟲劑に用ひらる。だるましやぎく。

しろばな-の-ゆふげしやう 白花夕化粧【名】〔植〕柳葉菜(ヤナギサウ)科に屬する一二年生の草。原産地はメキシコ。高さ二尺。葉は卵形又は楕圓形。花は紅紫色にして、晝間開き、夜間閉づ。觀賞用とす。

しろ-ばむ 白ばむ【動四自】白く色つく。白色になる。

しろ-ぱん 白麺包【名】小麥粉にて製したる、普通の麺包。(黒麺包に對して)

しろ-はら 白腹【名】〔動〕燕雀(ツバメ)類に屬する鳥。鵯(ツグミ)の類。赤腹に酷似し、ただ胸部と腹部との灰白色なるもの。秋季我が國に來る。繁殖地はシベリア地方なりといふ。やぶつぐみ。ちやつぐみ。

しろ-びいる 白麥酒【名】普通の褐色なるものよりも、更に色淡き麥酒。多量の炭酸瓦斯を含有せるが故に、泡立つこと甚だ強し。(黒麥酒に對して)

しろびかり 白光【名】白く光る光彩。

しろびし 白菱【名】〔植〕はまびし(濱菱)に同じ。

しろびたひ 白額【名】ほしづき(星月)に同じ。

しろびと 白人【名】しらびと(白人)に同じ。

しろびは 白枇杷【名】〔植〕枇杷の一品種。幹の皮に白粉あるもの。

しろ-びより 白日和【名】四月の日より。おほせびより。

しろふ【接尾】しらふに同じ。(古語)源氏「いひしろひ侍りかど、まことには、かはるべきこととともおもうたまへずながら」

しろ-ふか 白鱶【名】〔動〕しろざめ(白鮫)に同じ。

しろ-ふくりん 白覆輪【名】ぎんぶくりん(銀覆輪)に同じ。保元「連錢葦毛なる馬に、白覆輪の鞍いてぞ乘られける」太平記「白覆輪の鎧」同「白覆輪の太刀」

しろ-ふくろふ 白梟【名】〔動〕梟の一種。形普通のに似て、冬期に入れば羽毛白色に變じ、紫斑點あるもの。主に北海道及びその附近に棲息す。羽は楊弓の箭羽などに用ふ。

しろ-ぶだう 白葡萄・水晶葡萄【名】〔植〕葡萄の一品種。その果實の淡白色を呈するもの。

しろ-ぶだうしゆ 白葡萄酒【名】白葡萄の果皮、その他の搾粕を除き、果液のみにて釀造したる、淡黄色なる葡萄酒。はくぶだうしゆ。

しろ-ふぢ 白藤【名】〔植〕しらふぢ(白藤)に同じ。

しろ-ぶち 白斑【名】白色のぶち。白きまだら。

しろ-ぶな 白楡【名】〔植〕殻斗(カクト)科に屬する落葉喬木。各地の山野に自生す。高さ七八十尺、周圍十尺に達す。葉は互生し、卵形にして、毛を有す。花は單性にして、雌花と雄花とは同樣に生ず。果實は堅くして、刺毛を有する殻斗内にあり。木材は器具・薪炭の料となり、種子は油を搾取して、食用及び燈用となる。(黒楡に對して)

しろ-べ 【名】〔植〕しらべ(白檜曾)に同じ。

しろべゑ 四郎兵衛【名】江戸吉原遊廓の大門の側に居りし番人。色男十人三文、花の巷の落花狼藉者と、四郎兵衛顔もせず、番所より出で、散散打擲するに」

しろ-ぼけ 白木瓜【名】〔植〕木瓜の一品種。花の色白きもの。

しろ-ぼたん 白牡丹【名】牡丹の一品種。花の色の白きもの。はくぼたん。浦島年代記「白牡丹の蕊に紅牡丹の穗を接ぐに」

しろ-ぼや 白海鞘【名】〔動〕海鞘(カイセウ)類に屬する被嚢動物。體やや細長くして色白く、觸手は分岐せず。

しろ-ぼり 城壕【名】城の周圍の堀。城壕(ジヤウガウ)。

しろ-ぼろ 白母衣【名】白地のほろ。太平記「白母衣懸けて、鹿毛(カゲ)なる馬に乘ったる武者一騎」

しろ-まい 城米【名】城中に貯へたる米。城米(ジヤウマイ)。信長記「御城米を被レ出御商買の由」

しろ-まく 白幕【名】白地の幕。

しろ-まくは 白甜瓜【名】〔植〕ぎんまくは(銀甜瓜)に同じ。

しろ-まつ 白松【名】〔植〕くろまつ(黒松)「に同じ。

しろ-まなこ 百眼【名】しろめ(白眼)に同じ。字鏡集「眼、シロマナコ」

しろ-まめ 白豆【名】〔植〕萱(マメ)科に屬する一年生の草。大豆の一種。花は帶紫色又は白色にして、葉葉に毛を有す。種子は食用に供し、味噌・醤油の原料となり、葉莖は家畜の飼料に供す。

しろ-まゆ 白繭【名】繭の色白くして、やや青味を帶びたるもの。(黄繭に對して)

しろ-み 白身【名】■しらた(白太)に同じ。■肉などの色白き部分。■卵の中の、黄身を包める白き液。蛋白。「じ。

しろ-み 白鑞【名】白味【名】しろめ(白鑞)に同じ。

しろ-みがき 白磨【名】■白く磨くこと、又その磨きたるもの。日本武尊吾妻鑑「白磨の鏑、白泡に血を交ぜ」■犬追物にて、正式に射手の射樣を守ること。

しろみ-ぐさ 白見草【名】■『貌見草(カホミグサ)の宛字「貌」の誤ならんといふ』あやめ(白蓂)の異稱。〔古語〕■さといも(里芋)に同じ。

しろ-みそ 白味噌【名】色白くして、味の甘き味噌。その製法、常のに似て、ただ豆の皮を去り、米麹を加へ、食鹽の量を少なくして釀製し、又は赤味噌に、多分の麹と甘酒とを加へても製す。鹽分少なきため、永く貯藏すること能はず。

しろみそ-じる 白味噌汁【名】白味噌にて調理したる汁物。

しろ-みつ 白蜜【名】■『砂糖蜜と區別していふ』はちみつ(蜂蜜)に同じ。

しろ-みづ 白水【名】米をとぎたる水。色白く濁れり、物の垢を洗ひ去るなどに用ふ。

しろみ-ばしる 白味走る【動四自】しらばむ(白ばむ)に同じ。

しろ-みりん 白味淋【名】赤味を帶びざる味淋。(赤味淋に對して)

しろむ 白む【動四自】■白くなる。狭衣「女郎花色かはり、尾花の袖もしろみわたりつつ」■興さむ。たちろぐ。躊躇す。世世嘉遇「左右なく討たれん樣もなし、雙方しろみて扣へたり」

しろむ 白む【動下二他】白くなす。苧やがて常陸の介と附けたり。きぬもしろめず、おなじすすけにてあれば、いづちやりにけんなどにくむに」

しろむ【動下二他】 おししぼる。しめる。和名油、…胡麻熟、已收子、蒸レ之搾押、俗語云、之路無、然則乃得レ出レ油」

しろ-むく 白無垢【名】 上著も下著も白色なる絹の衣服。また表裏とも白にて、他の色を雑へざる衣服。賀古郡傳七基廻「乙女櫻の小忌衣、肌に白無垢」

白無垢鐵火(ナベ)【句】 表面は温和に見えて、心は殘忍猛惡なること。

しろ-むま 白馬【名】 しろうま(白馬)に同じ。

しろ-むら【名】〔植〕 ときみづき(鐵辦花)に同じ。

しろ-ろん 至論【名】 至極の論。

しろ-ろん 私論【名】 わたくしの論。公ならぬ論。

しろ-ろん 史論【名】 歴史に關したる論。

しろ-ろん 詩論【名】 詩につきての論。

しろ-ろん 詞論【名】〔語〕『英 Analysis』文典の一部。單語の種類及びその各種の單語の性質などを論ずるもの。(文章論などに對して)

じろ-ろん 時論【名】 ■時事に關する論。 ■その時の輿論。

じろん-ぼ 次郎坊【名】〔植〕『じろばうたろばう(次郎坊太郎坊)を見よ』 **すみれ(菫)**[一]に同じ。

しろ-め 白眼【名】 眼球の白き部分。しろまなこ。しろめだま。しらめ。

しろ-め 白鑞【名】〔化〕 鉛と錫との合金。融解點低く、ブリキ・トタンの細工に鑞附をなし、又は銅製の食器の內面に塗りて、その酸化と臭とを防ぐなどに用ふ。しろみ。しろなまり。びやくらふ。 **はんだ(半田鑞)**參照。

しろめ-せん 之呂女錢【名】 江戸時代の錢貨の一。元文四年江戸深川の平野新田にて造りしもの。鉛・鐵を混和して鑄たりといふ。銅色白ばみ、徑八分・重さ八分。

しろ-めだま 白眼玉【名】 しろめ(白眼)に同じ。

しろ-めまつ 白女松【名】〔植〕 くろまつ(黑松)に同じ。

しろ-もぐさ 白艾【名】 もぐさ(艾)[二]に同じ。 檜狩叙本地「衆の杵は男を表し、柳の白は女を表し、陰陽和合に搗きぬく揉みぬく白艾」

しろ-もじ 白文字【名】〔植〕 樟(クスノキ)科に屬する落葉灌木。枸樟(モクビ)の類。山地に自生す。幹の高さ一丈餘。葉は全緣廣楕圓形にして、通常三深裂す。春季、淡黃色なる雌雄異株の花を開く。はたうこん。

しろ-もち 白餅【名】 搗き又は燒きたるままにて、醬油・餡などを附けざる餅。

しろ-もち 城持【名】 次條に同じ。

しろもち-だいみやう 城持大名【名】 領地內に、城を有せし大名。しろもち。城主。

しろ-もと 城本【名】 城のある所。薩摩歌「御城本は但馬國、京の屋敷は千木通り」

しろ-もの 代物【名】 ■貨物の代金。 ■人を卑しめていふ語。にんげん。たま。 ■むすめ(娘)を云ふ。〔信濃國豐後國の方言〕

しろ-もの 白物【名】 ■しろ(豆腐)[一]を云ふ。〔女の語〕 ■とうふ(豆腐)を云ふ。〔女の語〕

しろもの-かへ 代物替【名】 ■貨物と貨物との交換。物物交換。〔江戸時代の語〕 ■江戸時代、長崎に行はれし舶來品の交易。

しろ-もみ 白樅【名】〔植〕 ■いらもみ(刺樅)に同じ。 ■しらび(白檜實)に同じ。

しろもんばびやう 白紋羽病【名】 桑樹に生ずる病。原因は菌類の寄生。根は白色線狀物に包被せられて腐蝕し、終に全樹を枯死せしむ。

しろ-もめん 白木綿【名】 白の木綿絲にて織りたる織物。

しろ-もも 白桃・銀桃【名】〔植〕 桃の一種。水蜜桃の晩種に屬し、實の形扁圓にして、中央少し凹み、皮は黃綠色に紅斑を交へ、肉は淡紅色にて、味頗る佳し。

しろ-やくさう 白八雲草【名】〔植〕 **きせわたさう(著綿草)**に同じ。

しろ-やしほ 白八汐【名】〔植〕 ごえふつつじ(五葉躑躅)に同じ。

しろ-やま 城山【名】 ■昔、城砦のありし山または岡阜。 ■〔地〕薩摩國鹿兒島市の西北にある山丘。懸崖削立し、島津氏の城地はこれを背にして築かれしものにて、山の背後なる岩崎谷は、藥研狀に凹みて、彈丸達せず、西南の亂に、賊魁西鄉隆盛等の最後に據守して、戰歿せし處なり。

しろ-やまぶき 白山吹・雞麻【名】〔植〕 薔薇(バラ)科に屬する落葉灌木。高さ四五尺。葉は卵形にして鋸齒あり。初夏白色の花を開く。觀賞用に供せらる。

しろ-ゆもじ 白湯文字【名】『素人(シロウト)にて、密かに淫賣をなすものをいひしよりいふ。遊女の赤湯文字なるに對して、素人は多く白湯文字をなせしなり』京都大阪にありし、下等なる淫賣婦。

しろ-よめな 白嫁菜・白雞兒腸【名】〔植〕 菊科に屬する多年生の草。山野に自生す。莖の高さ二三尺。葉は廣披針形。夏日白色の花を開く。觀賞用に供せらる。

しろ-よもぎ 白蒿【名】〔植〕 菊科に屬する多年生の草。高さ二三尺に達す。葉は互生し、長卵形にして、羽狀に分裂す。下面に白色の毛を密生す。花は筒狀花冠を有し、頭狀花序に排列す。嫩葉は食用に供す。からよもぎ。和名「白蒿」一名、蘩蘆蒿、市路與毛木。一云、加波良與毛木」

じろり【副】 眼を動かして一目見るさま。薩摩歌「お寢間の方をじろりと見て、ほんに切麥でさへこのお情」

しろ-れんぐわ 白煉瓦【名】 たいくわれんぐわ(耐火煉瓦)に同じ。(赤煉瓦に對して)

しろ-われもかう 白地楡【名】〔植〕 薔薇(ばら)科に屬する多年生の草。水濕の山野に自生す。高さ三四尺。葉は羽狀複葉。秋季白色にして、微紅を帶べる花、穗狀花序をなして開く。

しろゐ-じやう 白井城【名】 上野國群馬郡長尾村字白井にありし長尾氏の居城。天正十八年豐臣秀吉小田原征伐の時、政景據守して加越軍に抗せしも、城遂に陷り、長尾氏亡ぶ。德川家康江戸入國の初、本田廣孝に與へ、慶長六年その子康重三河岡崎に移封せしため、廢城となりぬ。

しろゐ 白絵【名】 しらゐ(白絵)に同じ。 增鏡「しろゐの五尺のびやうぶ」

しろゐ-ぐるま 白絵車【名】『その物見板は、黑漆地に胡粉を用ひて白く畫きたればいふ』文車(フグルマ)の一。老人の乘るもの。

しろ-ゐんどう 白豌豆【名】〔植〕 豌豆の一種。花の色の白きもの。(赤豌豆に對して)(古語)

しろ-を 白魚【名】〔動〕 しらうを(白魚)に同じ。(古語)

しろ-をだまき 白綫斗菜【名】〔植〕 綫斗菜(アキノキリンサウ)の一變種。花の色の白きもの。

しわ 皺・皺【名】 皮膚・紙・布帛などの緩みて、折れ重なりたる筋目の縮みよれたるもの。和名「皺、之和、皮細起也」

皺かく【句】 「皺寄る」に同じ。(古語) 萬葉「くれなゐのおもての上にいづくゆかしわかきたりし」

皺伸ぶ【句】 「皺を伸す」に同じ。(古語)

皺寄る【句】 皺生す。しわむ。しわだつ。しわむ。

皺を伸(ノ)す【句】 『しわのばし(皺伸)を見よ』 老人、氣ばらしをなす。

波の皺【句】 ささなみ。波紋。古今「波の皺にやおぼほれん」 曾我會稽山「用捨もなみ(無み・波)の皺腕も」

しわ 詩話【名】 詩歌に關する話。

しわ 視話【名】 しわはふ(視話法)に同じ。

しわ 史話【名】 歴史に關する話。

しわ 私話【名】 私事に關する話。ないしよばなし。

しわ 私和【名】 表沙汰とせずに、雙方示談にて、事を濟ますこと。和談。內濟。

しわあらめ 皺荒布【名】〔植〕 かぢめ(搗布)に同じ。

しわう 嗣王【名】 世を嗣ぎたる王。

しわう 四王【名】〔佛〕 してんわう(四天王)に同じ。 十訓「帝釋四王龍神八部所も無く充ち滿てり」

しわう 雌黃【名】 ■〔植〕 金絲桃(リュウキュウ)科に屬する喬木。東印度・暹羅に自生す。高さ五六十尺に達す。葉は長卵形にて對生し、花は單性漿果を結ぶ。樹皮を傷けて得る黃色護謨の樹脂を、藤黃と稱し、峻下劑に用ふ。又、繪具に用ふ。きわう。 藤黃海藤 ■〔化〕 硫黃と砒素との化合物。三硫化砒素の一。色黃にして、光あり。藥または、繪具などに用ふ。人工によりても製す

ること得。これに對して、天然のを石雌黄(シヤウ)といふ。きわう。石黄(ワウキ)。雄黄(ワウユウ)。和名「雌黄、一名金液、雌黄、俗音之王」 ㊁日本繪具の一。鑛物の雌黄に似せて、前前項の樹脂より製出したる、黄赤色なるもの。草雌黄。 ㊂『古支那にては、書册に黄色の紙を用ひしより、文字を寫して誤ある場合に、前項の雌黄にて塗抹して改めよりいふ』文章を添削すること。

雌黄を加ふ【句】他人の詩歌、文章を添削す。朱を加ふ。

口中の雌黄【句】『支那、晉の王衍が古文を改竄したるを、世人の評せし語』古人または他人の文章を改竄すること。

しわう 死王【名】〔佛〕『人の死命を司るよりいふ』えんまわう(閻魔王)に同じ。

しわう 四王【名】〔佛〕しわうてん(四王天)の略。 曾我五人兄弟「慈海の四王・切利天」

しわう 使王【名】「四姓の使」を見よ。

しわうて 皺腕【名】老いて皺の寄りたる腕。 曾我會稽山「用捨もなみ(無み・波)の皺腕も、共に折れよ、と打立て打立て」

じわうてつくわう 磁黄鐵鑛【名】〔鑛〕成分は鐵の硫化物。青銅黄色にして、多くは塊狀をなし、微かに磁力を感ず。製鐵の原料には用ひられず。

しわうてん 四王天【名】〔佛〕 ㊀しでんわうてん(四天王天)に同じ。 御文章「これ、人間の五十年をかんがへみるに、四王天といへる天の一日・一夜にあひ當れり。またこの四王天の五十年をもて、等活地獄の一日・一夜とするなり」 ㊁しでんわう(四天王)に同じ。

しわうてん 四王院【名】さいだいじ(西大寺)に同じ。

しわうおやぢ 皺親仁【名】老いて皺の寄りたる老父。 浦島年代記「七世の孫は、七十餘の皺親仁」

しわがしら 皺頭【名】老いて皺の寄りたる首。 手習鑑「强慾非道の皺頭と、水もたまらず打落す」

しわかぶ 吝嗇【名】しはかぶ(吝嗇)の訛。

四天王大通仕立、綱は少少しわ株にて、茶屋へも行かず、ぶらぶらと、素見に紛れ歩きしが」

しわがる 皺枯る【動下二自】しはがる(嗄る)の誤。 頓坂酒呑童子「身の程知らぬ高聲も、毘(ツク)上りに皺枯れて」

しわがれごゑ 皺枯聲【名】しはがれごゑ(嗄聲)の誤。 枹狩錄本地「白挽く如き皺枯聲」

しわく 仕分く【動下二他】『仕は爲(シ)の義』それぞれに別つ。區別す。分類す。類別す。

しわく 思惑【名】〔佛〕證果を得るにつきての二つの惑の一。理智の上よりその正しからざることは悟りながら、感情のために容易に避くること能はざる惑。即ち貪・瞋の三惑など。見惑と相合して、煩惱(ナウ)の本質を成す。けんじ(見思)參照。

九十一品(クジフイツ)の思惑【句】〔佛〕思惑に三界の別を立て、欲界の一地、色界の四禪、無色界の四定、即ち合はせて九地とし、この九地の惑を上・中・下の三品とし、更にその二に三品を分ち、都合八十一品の思惑ありと爲すことあれば、九十一は、八十一の誤なるべしといふ。 爲憲合璧「九十一品のおもわく」

しわくた 皺くた【貌】次條に同じ。

しわくちや 皺くちや【貌】紙布・絹布などの、甚しく皺の寄りてあるさま。しわくた。

しわぐむ 皺組む【動四他】「皺寄る」に同じ。 住吉「しわぐみ、にくさげなる顏して、ほほゑみて」

しわけ 仕分・仕譯【名】『仕は爲(シ)の義』 ㊀しわくること。區分。區別。 ㊁〔商〕簿記にて、勘定科目を定めて、各種の取引を貸借に仕分くること。

しわけにっきちやう 仕分帳・仕譯帳【名】日記帳と元帳との間に使用する帳簿にて、日記帳に附込まれたる事項を、取引の勘定科目に仕分け、更にこれを貸借に振分け、その金額を、各貸借の部に記入して、元帳への轉記に便するもの。仕譯簿。

しわけにっきちやう 仕分日記帳・仕譯日記帳【名】日記帳と仕譯帳とを合はせたる一の帳簿。即ち日日の取引を仕譯して、日記を附せるもの。仕譯日記簿。

しわけにっきぼ 仕分日記簿・仕譯日記簿【名】前條に同じ。

しわけぼ 仕分簿・仕譯簿【名】しわけちやう(仕分帳)に同じ。

しわざ 仕業【名】『仕は爲(シ)の義』わざ。なすこと。所爲。 源氏「いと心なき人のしわざにも侍るかな」

しわし 吝し【形ク】しはし(吝し)に同じ。

しわじよう 皺尉【名】能樂の假面(メン)の尉の一種。眉間に八字の皺あるもの。「輪藏」「老松」・「白樂天」・「遊行櫻」・「西行櫻」等の曲に用ふ。

しわしわ 撓撓【貌】物のしわるさま。 蟻通大臣甘露雨「野の宮近き黒木の御所、小柴垣仕渡して」

しわたす 仕渡す【動四他】長く造り構ふ。「じ。

しわだつ 皺立つ【動四自】「皺寄る」に同じ。

しわだらけ 皺だらけ【名】皺の多きこと。

しわおい 皺爺【名】老いて皺の寄りたる爺。 國姓爺「この皺爺が命一つに仕損ぜしと言はれて」

しわて 皺手【名】老いて皺の寄りたる手。 芭蕉「灌佛や皺手合はする數珠の音」

しわのばし 皺伸【名】『皺を伸す』を見よ』老人の、氣晴しをなすこと。「肌。

しわはだ 皺肌【名】老いて皺の寄りたる肌。

しわはふ 視話法【名】『英 Visible Speech』言語を發する際に於ける口腔内及び喉頭等の狀態を、簡單なる圖式的符號によりて表はし、この符號に依れば、發音運動を實際に視ると同樣の効果を與へ、發音法の習得に便せしめんとする一種の記號組織。

しわはふ 指話法【名】『獨 Finger-sprache』啞又は聾と話をかはすために、指文字に代用する方法。

しわばら 皺腹【名】 ㊀老いて皺の寄りたる腹。 おいばら。 ㊁年老いて切腹すること。 吉野忠臣「これにて皺腹仕り、再び御所へは歸らじ」

皺腹を掻く【句】年寄りて切腹す。

しわひとで 皺人手【名】〔動〕枝を五つに分ちたる狀、蔓の如くなるひとで。

しわぶ 爲佗ぶ【動上二他】扱ひなやむ。爲すに苦しむ。〔古語〕 宇治「あまりにまもられて、しわびて」

しわむ 皺む【動四自】「皺寄る」に同じ。〔古語〕 萬葉「若かりし肌もしわみぬ黒かりし髪も白けぬ」

しわむ 皺む【動下二他】しわむやうにす。皺を寄らしむ。〔古語〕

しわんぼう 吝嗇坊【名】しはんぼう(吝嗇坊)に同じ。 蘆葦叢「餅つく臼・杵持たずに、晒し白を兼ねるほどなしわんぼう」

しわんぼ 吝嗇坊【名】前條の訛。

しわよる 皺寄る【動四自】しわ(皺)の條下を見よ。

じわり【貌】じほりに同じ。

じわる 撓る【動四自】たわみまがる。たわむ。しなふ。 俗謡「船頭かはいや音戸(ド)の瀬戸で一丈五尺の艪がしわる」

しわ 思惟【名】 ㊀思量し、分別すること。かんがへ・思ふこと。 ㊁〔哲〕『英 thinking』精神の統一作用。即ち經驗によりて學びたる事實を比較して、その間に存する關係を定め、これによりて未だ經驗せざる境涯に至らんとする作用。概念・判斷・推理の三作用を含む。思考。思考作用。しさう(思想)參照。

思惟の原理【句】〔哲〕『英 Principles of thinking』「思想の原理」に同じ。

思惟の三法則【句】〔哲〕「思想の三法則」に同じ。

しゐ 尸位【名】 ㊀古、支那にて、祖先を祭る時、その血統を受けたる者が、假に神のかたしろとなりしこと、又その人の座席。 ㊁『孝經の註に「見レ可レ諫而不レ諫、謂二之尸位一」とあり』その職にありて、その責任を盡さざること。才德無くして、位にあること。尸官。尸祿。

尸位・素餐(ソサン)【句】『漢書の朱雲傳に「今朝廷大臣、上不レ能レ匡レ主、下無二以益一レ民、皆尸位素餐」とあるに本づく』役にも立たずに、その位に居て、祿を食む

こと。

しゐ 施爲【名】しかう(施行)に同じ。

しゐ 師位【名】淳仁天皇の天平寶字四年に始めて設けられたる大法師位・法師位・滿位修業位の四つの僧位。

しゐ 示威【名】威力を示すこと。威勢を張ること。

しゐ 四維【名】一乾(イヌヰ)・坤(ヒツジサル)・艮(ウシトラ)・巽(タツミ)の四隅。太平記「東西南北・四維・上下に充滿して」二『管子に「何謂二四維一、一曰禮、二曰義、三曰廉、四曰恥」、同書の牧民篇に「禮義・廉恥・是二謂四維一、四維不レ張、國乃滅亡」とあり。維は國家を維持する者の義』禮義・廉恥の四つの德。

しゐ 四位【名】くゐゐ(位)を見よ。

四位の諸大夫(シヨダイフ)【句】四位にて、昇殿を許されざる人。

四位の少將【句】四位に敍せられたる近衞の少將。

じゐ 辭彙【名】じゐ(辭書)に同じ。

じゐ 字彙【名】一じゐ(字書)に同じ。二『書』支那明の梅膺祚の編める漢字の字書。十二集に分ちて、順次に十二支を各集に題し、その外に首尾二卷を添へたり。

じゐ 次位【名】つぎの地位。二番目。

じゐ 磁位【名】〔理〕『英 Magnetic potential』磁界内の一點に單位の陽磁氣を置き、磁界に影響なきものとしたる時、磁界が此の單位陽磁氣を無限遠距離の點に運ぶために磁界のなす仕事。

しゐうんどう 示威運動【名】『英 Demonstration』威力を示すための運動。

しゐぎ 四威儀【名】〔佛〕しぎ(四儀)に同じ。

しゐぎゃう 念佛・讀經・四威儀を破ることなかれ」

しゐしゅ 思惟修【名】〔佛〕ぜん(禪)の譯語。

しゐち 視位置【名】〔天〕『英 Apparent place』眞赤道に對する地心位置、即ち歲差・章動光行差及び恒星にありては、年週・視差を算入せる天體の赤經赤緯。

しゐねん 四顧【名】一顧の四つならぶ詩。律詩。源氏「博士の人人はしゐん、ただの人は、おとどをはじめ奉りて、ぜく作りたまふ」二しせい(四聲)に同じ。

しゐん 詩韻【名】詩の韻字。「じ。

しゐん 子韻【名】〔語〕しいん(子音)に同じ。

しゐん 子院【名】本寺に附屬する諸寺。寺中。塔頭(タツチウ)。

しゐん 市尹【名】いちのつかさ。市長。

じゐん 次韻【名】『韻に次する義』和韻の一。原詩の韻字と同一の韻字を、順序も變へず、そのままに用ふるもの。

じゐん 寺院【名】てら(寺)に同じ。

しゐんがくゐ 詩韻含英【名】〔書〕佩文韻府を準據として、韻字を排列し、その熟語をも擧げ、古韻・通韻等をも示せるもの。十八卷。清の劉文蔚の編。

じゐんほふ 寺院法【名】〔法〕『獨 Kirchenrecht』宗教團體に關する公法。

じゐんます 寺院升【名】寺院にて專用する枡。その寺に依りて一樣ならず。山門枡・正傳寺枡・長講枡及び鐵枡等の稱あり。

じゐんれう 寺院寮【名】民部省の一寮。寺院に關する事務を掌りし所。明治三年に設置、同四年に廢止せられたり。

じゐりょく 自爲力【名】〔哲〕心意が、外物に對して、營役し、且つその上に、作用を及ぼす力。

しゐゐん 市委員【名】市行政事務の一部を分掌する委員。市參事會員又は市會議員を以て、これに充つ。

しゐ 四衞【名】しゑふ(四衞府)に同じ。

じゑ 慈慧【名】〔人〕りゃうげん(良源)に同じ。十訓「慈慧この事を聞きて、憤りて起請を書きて、三塔に披露せられける」

じゑい 自衞【名】自己の勢力・體力を以て、害を除き、防衞すること。

じゑい 侍衞【名】貴人の側を守ること、又その人。

じゑいけん 自衞權【名】〔法〕一國家がその力によりて、自己の存在・獨立を防衞する權。二人が自己の力によりて、その生命・身體を防衞する權。正當防衞權の類。

しゑい 四衞【名】しゑふ(四衞府)に同じ。

しゑふ 四衞二府【句】ろくゑふ(六衞府)に同じ。

じゑいれんたい 侍衞聯隊【名】舊幕國の近衞兵。すべて徴兵なりき。

じゑだいし 慈慧大師【名】〔人〕じゑ(慈慧)を見よ。

しゑふ 四衞府【名】左右の近衞府と左右の兵衞府との併稱。

しゑん 四遠【名】四方の遠き所。

しゑん 紫鴛【名】羽毛の紫色なるをしどり。平家「紫鴛白鷗逍遙す」

しゑん 私怨【名】私事に就きての恨。私のうらみ。

じゑん 自園【名】自分の庭。自家の園圃。

じゑん 慈圓【名】〔人〕じちゑん(慈鎭)を見よ。

しゑん 慈圓【名】〔人〕じちゑん(慈鎭)を見よ。

しゑんや 【感】數息するの聲。ままよ。よしや。「古語」萬葉「たまちはふ神もわれをばうつてこそしゑや命の惜しけくもなし」

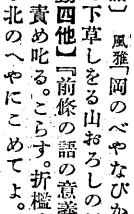
しをさめ 爲納【名】事を爲すをはり。最後の仕事。しじまひ。淺草出世瀧鑒「御奉公のしをさめと存じ立つたる所に」

しをしを 萎萎・悄悄【貌】氣を落して、勢なくなれるさま。

しをに 紫苑【名】一〔植〕しをん(紫苑)に同じ。「古語」和名「紫苑、一名紫菀、和名能之、俗云、之乎邇」二襲(カサネ)の色目の一。表は薄色にて、裏は青。三奴袴などの薄紫色。秋に用ふ。「四苑」を見よ。

しをん 四苑・四園【名】〔佛〕「帝釋(タイシヤク)の

しをん 紫苑【名】一〔植〕菊科に屬する多年生の草。春、舊根より叢生す。葉は形細長く、表は粗く、夏七八尺の莖を出でて、秋淡紫色の舌狀花と黃色の筒狀花とより成る頭狀花序の花を開き、觀賞用に供せらる。きをん。二しをに(紫苑)一二に同じ。



(一)んをし)

しをんいろ 紫苑色【名】前條一に同じ。襲色「しをん色に朽葉の御衣(オン)など奉れり」

しをらし 【形二】穩かにつつしみてあり。

しをり 栞・枝折【名】一山に入る時、木の枝を折りかけて、歸路のしるしとすること。「古語」六帖「しをりしてゆかましものをあひづ山入るよりまどふ道と知りせば」二『西行法師の「吉野山こぞのしをりの道變へてまだ見ぬかたの花をたづねん」といふ歌より出づといふ』厚紙又は薄き木片などにて造り、讀みさしたる書物の隔に目じるしとして插むもの。けふさん(夾算)參照。三しるべ。案内。四城郭の名目の一。堞目ならんといふ。太閤記「追立て追立て、三の丸しをり際まで追入りしかども」五(動)まんぼう(鑛車魚)に同じ。六しをりど(枝折戸)の略。

しをり 【名】くり(繰)二を見よ。

しをりがき 枝折垣【名】木の枝を折りかけて造れる垣。をりかけがき。

しをりど 柴折戸【名】一木の枝又は割竹などにて造れる、假の扉。しをり。二神社の拜殿等に設けたる扉。

しをりとめ しをり留【名】能(ヨ)にて、泣く形として仕手の留むる形。「隅田川」「景清」の類にあり。

しをる 萎る・枝折る【動四自】しをり一をなす。しるべす。案内す。「古語」「世にはしをらで入りし奥山に何とて人の尋ね來つらん」

しをる 萎る【動下二自】一折れかがむ。ゆがみ曲る。撓む。萬葉「ことしげみあひとはざるに梅の花雪にしをれて移らはむかも」二氣を落し、力弱る。しをしをとす。

しをる 萎る【動四他】しをれしむ。撓ましむ。「古語」風雅「岡のべやなびかぬ松は靡をなして下草しをる山おろしの風」

しをる 【動四他】『前條の語の意義の轉じたるもの』貫め叱る。こらす。折檻す。「古語」落葉「この北のへやにこめてよ。物なくれそ。しをり殺してよ」

しをれ-あし 萎草【名】しをれたる草。堀太「霜枯の野べのほとりのしをれ草は行きかふ駒もすさめざりけり」

しをれ-ば 萎葉【名】草木の萎れたる葉。夫木「みぎはなる蘆のしをれば吹きさやぎ氷もよほす眞野の濱かぜ」